岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂A遺跡
足守川加茂B遺跡
足守川矢部南向遺跡

（本 文）

１９９５年３月

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂A遺跡
足守川加茂B遺跡
足守川矢部南向遺跡

（本 文）

１９９５年３月

岡山県教育委員会

1．遺跡の遠景（日差山から）

１．足守川加茂Ａ遺跡第１調査区土層断面（南西から）

２．足守川加茂Ｂ遺跡土層断面（西から）

1．足守川加茂 B 遺跡貝塚 1　検出状況（西から）

2．足守川矢部南向遺跡　遺構検出状況（南から）

1．足守川矢部南向遺跡土壙72 遺物検出状況（東から）

2．足守川矢部南向遺跡竪穴住居62 遺物検出状況（北東から）

１．足守川矢部南向遺跡竪穴住居37 出土特殊器台

２．足守川矢部南向遺跡竪穴住居48 出土小銅鐸

1．足守川加茂 B 遺跡
土壙84 出土櫛歯文鏡

2．足守川加茂 B 遺跡
竪穴住居88 出土蕨手状渦文鏡

3．足守川加茂 B 遺跡
貝塚 1 出土銅鏃

１．足守川加茂Ａ遺跡竪穴住居14 出土線刻土器（１／１）

２．足守川加茂Ａ遺跡包含層 出土線刻土器（１／１）

1．足守川加茂 B 遺跡貝塚 1　出土卜骨

2．足守川加茂 B 遺跡土壙35　出土卜骨

１．足守川矢部南向遺跡　出土陶磁器

序

本報告書には、岡山市と総社市の南部地域をほぼ南北に流れる足守川の河川改修事業計画に伴う足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡・足守川矢部南向遺跡の発掘調査の結果を収めました。

この発掘調査は、足守川の河川改修事業の実施に先立って、事業予定範囲内における遺跡の範囲確認調査と、この結果確認された遺跡の全面を対象として実施したものです。

調査の結果、上記３遺跡は弥生時代中期から中・近世にかけての集落遺跡であることが判明しました。とりわけ弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては竪穴住居などの遺構が密集しており、楯築弥生墳丘墓をはじめ周辺の丘陵に所在する墳丘墓との関連性など、足守川地域の地域史を知るうえにおいてきわめて重要な資料を得ることができました。

本報告書が、文化財の保護・保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料として広く役立つならば望外の幸いと存じます。

最後に、発掘調査および報告書の作成に当たっては、足守川河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員ならびに岡山県土木部河川課をはじめ関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩之助

例　　言

1．本書は、足守川河川改修工事に伴い岡山県土木部河川課の委託を受けて、岡山県教育委員会文化課・岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が実施した足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡・足守川矢部南向遺跡の調査報告書である。

2．調査対象地は、足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡が岡山県岡山市加茂、足守川矢部南向遺跡が倉敷市矢部に所在した。

3．調査期間は、下記のとおりである。

足守川加茂Ａ遺跡

確認調査　　昭和60年５月

本調査　　（一次）昭和57年１月～昭和57年３月

（二次）昭和60年９月～昭和61年１月

足守川加茂Ｂ遺跡

確認調査　　昭和56年10月～昭和57年３月

本調査　　昭和57年８月～昭和60年８月

足守川矢部南向遺跡

確認調査　　昭和60年５月

本調査　　（一次）昭和55年２月～昭和55年３月

（二次）昭和55年４月～昭和55年５月

（三次）昭和61年４月～昭和63年12月

4．発掘調査および報告書作成にあたっては、足守川河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の御指導と御助言を得た。記して深く感謝の意を表する次第である。

鎌木義昌	（岡山理科大学）	昭和57年８月～平成３年２月
近藤義郎	（岡山大学）	昭和57年８月～平成３年３月
水内昌康	（岡山県文化財保護審議会委員）	昭和57年８月～平成７年３月
稲田孝司	（岡山大学）	昭和57年８月～平成７年３月
出宮徳尚	（岡山市教育委員会）	昭和57年８月～平成７年３月
村上幸雄	（総社市教育委員会）	昭和57年８月～平成３年３月
間壁忠彦	（倉敷考古館）	平成３年４月～平成７年３月
西川　宏	（山陽女子高校）	平成５年４月～平成７年３月
小林博昭	（岡山理科大学）	平成５年４月～平成７年３月

5．発掘調査は、昭和59年10月までを岡山県教育委員会文化課が、以後を文化財センターが実施した。調査は、足守川加茂Ａ遺跡の一次を松本和男が、二次を山磨康平・島崎　東が行った。足守川加茂Ｂ遺跡は、山磨・平井泰男・光永真一・島崎が担当した。足守川矢部南向遺跡は、一次を松本・江見正己が、二次を江見・島崎が担当した。

6．遺物の分析・鑑定・同定については、下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに報告文を頂戴した。

鉛同位体比分析	馬淵久夫（作陽短期大学）
	平尾良光（東京国立文化財研究所）
	榎本淳子
朱分析	本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）
	成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）
石材鑑定	妹尾　護（吉備国際大学）
胎土分析	白石　純（岡山理科大学）
貝・動物遺体鑑定	金子浩昌（早稲田大学）
陶磁器鑑定	大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

7．本報告書の作成にあたっては、平成３年４月から平成７年３月まで文化財センターにおいて、遺構図面および遺物の整理作業を実施した。遺構・遺物の浄書は各担当者が行い、主に足守川矢部南向遺跡の遺物写真撮影は政田　孝氏に依頼した。

8．本書の編集・構成は、足守川加茂Ａ遺跡を島崎、足守川加茂Ｂ遺跡を光永、足守川矢部南向遺跡を江見がおこない、全体を島崎がまとめた。

9．本文の執筆には、文化財センター河本　清・松本・山磨・江見・島崎・光永が分担してあたった。文責は、各担当文末ごとに記した。

10．本書に用いた高度は海抜高であり、方位は磁北である。

11．第２図は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「岡山南部」・「総社東部」を複製し、加筆したものである。

12．出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）において保管している。

凡　　例

1．本報告書に収載された遺跡は、調査時期によって呼称方法が異なったため１遺跡に複数の名称が存在した。ここでは、これを統一するために頭に事業名である足守川を冠し、足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡・足守川矢部南向遺跡と呼称する。

2．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を明記している。

遺構

竪穴住居　１／60

掘立柱建物　１／60

土壙・土壙墓・井戸・土器棺・溝断面　１／30

遺物

土器　１／４　土製品　１／３　石器・石製品　１／２　鉄器・青銅製品　１／２

骨角器　１／２　玉類　１／１、２／３

3．遺物番号は、材質を示すため土器以外のものについて下記の略号を番号の前に付した。

石器・石製品・石材：Ｓ　鉄器・鉄製品・青銅製品：Ｍ　土製品：Ｃ　骨角器：Ｂ

ただし、玉類についてはその材質によりＳ・ＧもしくはＣで示した。

総 目 次

Ⅰ．遺跡の環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の経緯 …… 7
1　発掘調査の契機および経過 …… 7
2　調査体制 …… 14
3　調査日誌抄 …… 22
Ⅲ．調査の概要 …… 24
1　調査の方法と概要 …… 24
2　時代・時期区分について …… 29
Ⅳ．発掘調査報告 …… 31
1．足守川加茂Ａ遺跡 …… 31
第１章　遺跡の概要 …… 33
第２章　調査の概要 …… 39
第１節　弥生時代後期前半の遺構・遺物 …… 39
第２節　弥生時代後期後半の遺構・遺物 …… 47
第３節　古墳時代前半の遺構・遺物 …… 99
第４節　古墳時代後半～古代の遺構・遺物 …… 206
第５節　中世の遺構・遺物 …… 207
第６節　近世の遺構 …… 209
第７節　結語 …… 211
2．足守川加茂Ｂ遺跡 …… 213
第１章　遺跡の概要 …… 215
第２章　調査の概要 …… 220
第１節　弥生時代中期の遺構・遺物 …… 220
第２節　弥生時代後期前半の遺構・遺物 …… 231
第３節　弥生時代後期後半の遺構・遺物 …… 337
第４節　古墳時代前半の遺構・遺物 …… 483
第５節　古墳時代後半の遺構・遺物 …… 636
第６節　古代以降の遺構・遺物 …… 644

第７節　結語 ……648
３．足守川矢部南向遺跡 ……651
第１章　遺跡の概要 ……653
第２章　調査の概要 ……658
第１節　弥生時代中期の遺構・遺物 ……658
第２節　弥生時代後期前半の遺構・遺物 ……675・676
第３節　弥生時代後期後半の遺構・遺物 ……779・780
第４節　古墳時代前半の遺構・遺物 ……892
第５節　古墳時代後半～古代の遺構・遺物 ……987・988
第６節　中世以降の遺構・遺物 ……1015・1016
第７節　結語 ……1060
付載１．　足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡、足守川矢部南向遺跡出土土器の胎土分析 ……1117
付載２．　足守川遺跡群出土の青銅器の鉛同位対比について ……1126
付載３．　足守川遺跡群出土の石杵と土器に付着の赤色顔料について ……1135
付載４．　岡山県足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡出土の動物遺体と骨角製品 ……1143

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ図目次

第１図　遺跡位置図（1/150,000）……１
第２図　周辺遺跡分布図（1/74,000）……２
第３図　足守川流域自然地形図（1/30,000）
……９・10
第４図　調査区位置図（1/5,000）……11
第５図　調査遺跡位置図（1/3,000）……12
第６図　足守川加茂Ａ遺跡トレンチ配置図
（1/1,500）……25
第７図　足守川矢部南向遺跡トレンチ配置図
（1/1,500）……26
第８図　遺跡周辺の現状地形及び遺跡位置図
（1/10,000）……27

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ表目次

表１．編年対比表……30

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版１
１．遺跡の遠景（日差山から）
巻頭カラー図版２
１．足守川加茂Ａ遺跡第１調査区土層断面（南西から）
２．足守川加茂Ｂ遺跡土層断面（西から）
巻頭カラー図版３
１．足守川加茂Ｂ遺跡貝塚１　検出状況（西から）
２．足守川矢部南向遺跡　遺構検出状況（南から）
巻頭カラー図版４
１．足守川矢部南向遺跡土壙72　遺物検出状況（東から）
２．足守川矢部南向遺跡竪穴住居62　遺物検出状況（北東から）
巻頭カラー図版５
１．足守川矢部南向遺跡竪穴住居37　出土特殊器台
２．足守川矢部南向遺跡竪穴住居48　出土小銅鐸
巻頭カラー図版６
１．足守川加茂Ｂ遺跡土壙84　出土櫛歯文鏡
２．足守川加茂Ｂ遺跡竪穴住居88　出土蕨手状渦文鏡

巻頭カラー図版７

１．足守川加茂Ａ遺跡竪穴住居14 出土線刻土器（１／１）

２．足守川加茂Ａ遺跡包含層 出土線刻土器（１／１）

巻頭カラー図版８

１．足守川加茂Ｂ遺跡貝塚１ 出土卜骨

２．足守川加茂Ｂ遺跡土壙35 出土卜骨

巻頭カラー図版９

１．足守川矢部南向遺跡 出土陶磁器

Ⅳ．１．足守川加茂Ａ遺跡図目次

第１図　足守川加茂Ａ遺跡周辺地形及び調査区配置図（1/2,000）……34

第２図　足守川加茂Ａ遺跡検出遺構全体図（1/600）……35

第３図　第１調査区東壁土層断面図（≒1/120）・(1/60)……36

第４図　第２調査区東壁土層断面図（1/120）……37

第５図　第２調査区東壁土層断面柱状図（1/60）……38

第６図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）……39

第７図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/4）……40

第８図　弥生時代後期前半検出遺構全体図（1/200）……41・42

第９図　土壙２（1/30）……43

第10図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4）……44

第11図　包含層出土遺物①（1/4）……45

第12図　包含層出土遺物②（1/4・1/2）…46

第13図　竪穴住居２（1/60）・床面遺物検出状況（1/30）……47

第14図　竪穴住居２床面据え置き土器土層断面（1/30）・出土遺物①（1/4）……48

第15図　弥生時代後期後半検出遺構全体図（1/200）……49・50

第16図　竪穴住居２出土遺物②（1/4）…51

第17図　竪穴住居２出土遺物③（1/4）…52

第18図　竪穴住居２出土遺物④（1/4）…53

第19図　竪穴住居３（1/60）……53

第20図　竪穴住居４（1/60）……54

第21図　竪穴住居５・６（1/60）……54

第22図　竪穴住居７・８（1/60）……55

第23図　竪穴住居７・８（1/60）……56

第24図　竪穴住居７出土遺物（1/4）……57

第25図　竪穴住居９（1/60）・出土遺物（1/4）……58

第26図　竪穴住居10（1/60）……59

第27図　竪穴住居10出土遺物（1/4）……60

第28図　竪穴住居11（1/60）……61

第29図　竪穴住居11出土遺物①（1/4）…62
第30図　竪穴住居11出土遺物②（1/4）…63
第31図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/4）……63
第32図　竪穴住居13（1/60）……64
第33図　竪穴住居13出土遺物（1/4）……65
第34図　竪穴住居14（1/60）……66
第35図　竪穴住居14出土遺物①（1/4）…67
第36図　竪穴住居14出土遺物②（1/4・1/2）……68
第37図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物（1/4・1/1）……69
第38図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物（1/4）……70
第39図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）……71
第40図　竪穴住居17・18・19・32（1/120）……72
第41図　竪穴住居18（1/60）・出土遺物（1/4）……73
第42図　竪穴住居19（1/60）……74
第43図　竪穴住居19出土遺物①（1/4・1/3）……76
第44図　竪穴住居19出土遺物②（1/4）…77
第45図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）……78
第46図　土壙4（1/30）・出土遺物（1/4）……79
第47図　土壙5（1/30）・出土遺物（1/4）……79
第48図　土壙6（1/30）・出土遺物（1/4）……80
第49図　土壙7（1/30）・出土遺物（1/4）……81
第50図　土壙8（1/30）・出土遺物①（1/4）……81
第51図　土壙8出土遺物②（1/4）……82
第52図　土壙9（1/30）……82
第53図　土壙9出土遺物①（1/4）……84
第54図　土壙9出土遺物②（1/4）……85
第55図　土壙9出土遺物③（1/2・1/1・1/4）……86
第56図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/4）……87
第57図　土壙11（1/30）・出土遺物（1/4）……88
第58図　土壙12（1/30）・出土遺物（1/4）……88
第59図　土壙13（1/30）・出土遺物（1/4）……89
第60図　土壙14（1/30）・出土遺物（1/4）……90
第61図　土壙15（1/30）・出土遺物（1/4）……91
第62図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）……91
第63図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/4）……92
第64図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）……92
第65図　包含層出土遺物①（1/4）……93
第66図　包含層出土遺物②（1/4）……95
第67図　包含層出土遺物③（1/1・1/4）…96
第68図　包含層出土遺物④（1/3）……97

第69図　包含層出土遺物⑤（1/3）……98
第70図　竪穴住居21（1/60）……99
第71図　竪穴住居21覆土上層遺物堆積状況（1/30）……101
第72図　竪穴住居21出土遺物①（1/4）…102
第73図　古墳時代前半検出遺構全体図（1/200）……103・104
第74図　竪穴住居21出土遺物②（1/4）…105
第75図　竪穴住居21出土遺物③（1/4）…106
第76図　竪穴住居21出土遺物④（1/4）…107
第77図　竪穴住居21出土遺物⑤（1/4）…108
第78図　竪穴住居21出土遺物⑥（1/4）…109
第79図　竪穴住居21出土遺物⑦（1/4）…110
第80図　竪穴住居21出土遺物⑧（1/4）…111
第81図　竪穴住居21出土遺物⑨（1/4）…112
第82図　竪穴住居21出土遺物⑩（1/4）…113
第83図　竪穴住居21出土遺物⑪（1/4）…114
第84図　竪穴住居21出土遺物⑫（1/4）…115
第85図　竪穴住居21出土遺物⑬（1/4）…116
第86図　竪穴住居21出土遺物⑭（1/3）…117
第87図　竪穴住居22（1/60）……118
第88図　竪穴住居22出土遺物①（1/4）…119
第89図　竪穴住居22出土遺物②（1/4）…120
第90図　竪穴住居23（1/60）……122
第91図　竪穴住居23出土遺物①（1/4）…123
第92図　竪穴住居23出土遺物②（1/4）…124
第93図　竪穴住居24（1/60）・出土遺物①（1/2）……125
第94図　竪穴住居24出土遺物②（1/4）…126
第95図　竪穴住居25（1/120）・出土遺物（1/4）……127
第96図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物①（1/3・1/4）……128
第97図　竪穴住居26出土遺物②（1/4）…129
第98図　竪穴住居26出土遺物③（1/4）…130
第99図　竪穴住居26出土遺物④（1/4）…131
第100図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物（1/4）……132
第101図　竪穴住居28・29・30（1/60）…133
第102図　竪穴住居28（1/60）……134
第103図　竪穴住居28出土遺物①（1/4）…135
第104図　竪穴住居28出土遺物②（1/4・1/1）……136
第105図　竪穴住居29（1/60）……136
第106図　竪穴住居15・29・31土層断面（1/120）……137
第107図　竪穴住居29出土遺物（1/4・1/3）……138
第108図　竪穴住居30（1/60）……139
第109図　竪穴住居30出土遺物①（1/4）…141
第110図　竪穴住居30出土遺物②（1/4）…142
第111図　竪穴住居30出土遺物③（1/4）…143
第112図　竪穴住居30出土遺物④（1/4）…144
第113図　竪穴住居30出土遺物⑤（1/4）…145
第114図　竪穴住居30出土遺物⑥（1/4）…146
第115図　竪穴住居30出土遺物⑦（1/4）…147
第116図　竪穴住居30出土遺物⑧（1/4）…148
第117図　竪穴住居30出土遺物⑨（1/4）…149
第118図　竪穴住居30出土遺物⑩（1/4）…150
第119図　竪穴住居30出土遺物⑪（1/4）…151
第120図　竪穴住居30出土遺物⑫（1/3）…152
第121図　竪穴住居31（1/60）・出土遺物①（1/2）……153
第122図　竪穴住居31出土遺物②（1/4）…154

第123図　竪穴住居32（1/60）……155
第124図　竪穴住居32出土遺物①（1/4）…156
第125図　竪穴住居32出土遺物②（1/4・1/2）
……157
第126図　竪穴住居33（1/60・1/80）……158
第127図　竪穴住居33（1/60）……159
第128図　竪穴住居33出土遺物（1/4）…160
第129図　竪穴住居33内土壙（1/30）・出土
遺物（1/4）……161
第130図　竪穴住居34（1/60）……162
第131図　竪穴住居35（1/60）……162
第132図　竪穴住居35出土遺物（1/4）…163
第133図　土壙19（1/30）・出土遺物（1/4）
……164
第134図　土壙20（1/30）・出土遺物（1/4）
……164
第135図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4）
……165
第136図　土壙22（1/30）・出土遺物（1/4・1/1）
……166
第137図　土壙23（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）
……167
第138図　土壙24（1/30）……167
第139図　土壙24出土遺物①（1/4）……168
第140図　土壙24出土遺物②（1/4）……169
第141図　土壙24出土遺物③（1/4）……170
第142図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）
……170
第143図　土壙26（1/30）・出土遺物（1/4）
……171
第144図　土壙27（1/30）・出土遺物（1/4）
……171
第145図　土壙28（1/30）・出土遺物（1/4）
……172
第146図　土壙29（1/30）・出土遺物（1/4）
……172
第147図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）
……173
第148図　土壙31（1/30）……174
第149図　土壙32（1/30）……174
第150図　土壙33（1/30）……174
第151図　土壙34（1/30）・出土遺物（1/4）
……175
第152図　土壙35（1/30）……175
第153図　溝1・2・3・4（1/60）・溝1
出土遺物（1/4）……176
第154図　貝層出土遺物（1/2）……177
第155図　土器溜り出土遺物①（1/1・1/3）
……181
第156図　土器溜り出土遺物②（1/4）……182
第157図　土器溜り出土遺物③（1/4）……183
第158図　土器溜り出土遺物④（1/4）……184
第159図　土器溜り出土遺物⑤（1/4）……185
第160図　土器溜り出土遺物⑥（1/4）……186
第161図　土器溜り出土遺物⑦（1/4）……187
第162図　土器溜り出土遺物⑧（1/4）……188
第163図　土器溜り出土遺物⑨（1/4）……189
第164図　土器溜り出土遺物⑩（1/4）……190
第165図　土器溜り出土遺物⑪（1/4）……191
第166図　土器溜り出土遺物⑫（1/4）……192
第167図　土器溜り出土遺物⑬（1/4）……193
第168図　土器溜り出土遺物⑭（1/4）……194
第169図　土器溜り出土遺物⑮（1/4）……195
第170図　土器溜り出土遺物⑯（1/4）……196

第171図　土器溜り出土遺物⑰（1/4）……197
第172図　土器溜り出土遺物⑱（1/4）……198
第173図　包含層出土遺物①（1/2・1/4）…199
第174図　包含層出土遺物②（1/4）……201
第175図　包含層出土遺物③（1/4）……202
第176図　包含層出土遺物④（1/4）……203
第177図　包含層出土遺物⑤（1/4）……204
第178図　包含層出土遺物⑥（1/4・1/2）…205
第179図　土壙36（1/30）……206
第180図　包含層出土遺物（1/4）……206
第181図　中世検出遺構全体図（1/200）…207
第182図　土壙37（1/30）・出土遺物（1/4）
……207
第183図　土壙38（1/30）……208
第184図　土壙39（1/30）……208
第185図　溝5（1/30）……208
第186図　溝6・7（1/30）……208
第187図　水田遺構全体図（1/400）……209
第188図　第3調査区南端部土層断面図
（1/60）……210

足守川加茂A遺跡遺構・遺物一覧目次

1　竪穴住居……1075
2　土壙……1076
3　石器・石製品……1077
4　金属器……1078
5　土製品……1078
6　玉類……1079

足守川加茂A遺跡写真図版目次

写真図版1
1．第2調査区遠景（北から）
2．第2・3調査区遠景（北から）
写真図版2
1．第1調査区調査前状況（北から）
2．第1調査区全景（北から）
写真図版3
1．第1調査区全景（南から）
2．第1調査区東壁土層断面（北西から）
写真図版4
1．第2調査区全景（北から）
2．第3調査区全景（東から）
写真図版5
1．竪穴住居2（南東から）
2．竪穴住居2 床面据え置き壺検出状況
（南から）
写真図版6
1．竪穴住居7・8（東から）
2．竪穴住居10（南西から）
写真図版7
1．竪穴住居11（南西から）
2．竪穴住居13（北東から）
写真図版8
1．竪穴住居17・18・19・32（北から）
2．竪穴住居17 埋土状況（東から）
写真図版9

1．竪穴住居21（南から）
2．竪穴住居21 覆土上層遺物堆積状況（東から）
写真図版10
1．竪穴住居21 覆土上層遺物検出状況（北から）
2．竪穴住居21 覆土上層遺物検出状況
写真図版11
1．竪穴住居21 土層断面（西から）
2．竪穴住居22・23（南から）
写真図版12
1．竪穴住居22・23 土層断面（西から）
2．竪穴住居22（東から）
写真図版13
1．竪穴住居23（東から）
2．竪穴住居24（東から）
写真図版14
1．竪穴住居25・26（東から）
2．竪穴住居25 遺物出土状況（東から）
写真図版15
1．竪穴住居14・29・30・31（南から）
2．竪穴住居14・31（西から）
写真図版16
1．竪穴住居27（南東から）
2．竪穴住居30（南から）
写真図版17
1．竪穴住居30（西から）
2．竪穴住居30 遺物検出状況（北から）
写真図版18
1．竪穴住居31（南西から）
2．竪穴住居32（南西から）
写真図版19
1．竪穴住居33（北西から）
2．竪穴住居33内土壙 遺物検出状況（南から）
写真図版20
1．竪穴住居35 検出状況（北から）
2．貝層 検出状況（南から）
写真図版21
1．土器溜り 検出状況（西から）
2．近世水田 検出状況（南から）
写真図版22
1．近世水田畦畔 検出状況（西から）
2．近世水田 検出状況（南から）
写真図版23
1．近世水田 検出状況（南から）
2．第3調査区土層断面（北から）
写真図版24
1．第1調査区調査風景（北から）
2．第2調査区調査風景（南から）
写真図版25
1．第2調査区調査風景（南西から）
2．第3調査区調査風景（南から）
写真図版26
出土遺物① 弥生土器
写真図版27
出土遺物② 弥生土器・土師器
写真図版28
出土遺物③ 土師器
写真図版29
出土遺物④ 土師器
写真図版30

出土遺物⑤ 土師器
写真図版31
出土遺物⑥ 土師器
写真図版32
出土遺物⑦ 石器・石製品
写真図版33
出土遺物⑧ 石製品
写真図版34
出土遺物⑨ 鉄器・青銅製品
写真図版35
1．竪穴住居23 出土水晶
2．貝層 出土骨角器

Ⅳ．2．足守川加茂Ｂ遺跡図目次

第１図　調査地周辺地形図（1/2,000）…215
第２図　グリッド設定図（1/800）……216
第３図　弥生時代中期後半～古墳時代前半遺構全体図（1/300）……217・218
第４図　Ｄライン土層断面（垂直1/60、水平1/120）……219
第５図　竪穴住居１（1/60）……220
第６図　竪穴住居１出土遺物（1/4）……221
第７図　竪穴住居２（1/60）……222
第８図　竪穴住居２出土遺物（1/4・1/2）……223
第９図　土壙１（1/30）・出土遺物①（1/4）……224
第10図　土壙１出土遺物②（1/4）……225
第11図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4）……226
第12図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4）……227
第13図　土壙４（1/30）……227
第14図　土壙４出土遺物（1/4）……228
第15図　土壙５（1/30）・出土遺物（1/4）……228
第16図　弥生時代中期後半～後期前半遺構配置図（1/300）……229・230
第17図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物（1/4）……231
第18図　竪穴住居４・５・６・20・21（1/60）……232
第19図　竪穴住居４（1/60）……233
第20図　竪穴住居４出土遺物（1/4・1/2）……234
第21図　竪穴住居５（1/60）・出土遺物（1/4）……235
第22図　竪穴住居６（1/60）・出土遺物①（1/4）……236
第23図　竪穴住居６Ａ（上）・６Ｂ（下）（1/60）・竪穴住居６出土遺物②（1/2）……237
第24図　竪穴住居７（1/60）……238
第25図　竪穴住居７ 床面検出状況（1/80）・出土遺物（1/3・1/4）……239
第26図　竪穴住居８（1/60）……240
第27図　竪穴住居８Ａ（1/80）・竪穴住居８出土遺物①（1/4）……241
第28図　竪穴住居８Ｂ（1/80）・竪穴住居８出土遺物②（1/2）……242

第29図　竪穴住居８Ｃ（1/80）……243
第30図　竪穴住居９（1/60）……244
第31図　竪穴住居９出土遺物①（1/4）…245
第32図　竪穴住居９出土遺物②（1/3・1/2）
……246
第33図　竪穴住居10（1/60）……247
第34図　竪穴住居10出土遺物（1/4・1/2）
……248
第35図　竪穴住居11（1/60）・出土遺物
（1/4）……248
第36図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物
（1/2・1/4）……249
第37図　竪穴住居13（1/60）……250
第38図　竪穴住居13出土遺物①（1/4）…251
第39図　竪穴住居13出土遺物②（1/4・1/2）
……252
第40図　竪穴住居14（1/60）・出土遺物
（1/4）……253
第41図　竪穴住居15（1/60）……253
第42図　竪穴住居15出土遺物（1/4）……254
第43図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物①
（1/4）……255
第44図　竪穴住居16出土遺物②（1/2）…256
第45図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物
（1/4）……256
第46図　土器棺１（1/30）・出土遺物（1/4）
……257
第47図　土壙墓１（1/30）……258
第48図　土壙墓２（1/30）・出土遺物（1/4）
……258
第49図　土壙６（1/30）・出土遺物①（1/4）
……259
第50図　土壙６出土遺物②（1/4）……260
第51図　土壙６出土遺物③（1/4）……261
第52図　土壙６出土遺物④（1/4）……262
第53図　土壙６出土遺物⑤（1/4）……263
第54図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/4）
……264
第55図　土壙８（1/30）・出土遺物（1/4）
……265
第56図　土壙９（1/30）……265
第57図　土壙９出土遺物（1/4）……266
第58図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/4）
……266
第59図　土壙11（1/30）・出土遺物（1/4）
……267
第60図　土壙12（左）・13（右）（1/30）
……267
第61図　土壙13出土遺物（1/4）……268
第62図　土壙14（1/30）・出土遺物（1/2）
……268
第63図　土壙15（1/30）・出土遺物（1/4）
……269
第64図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）
……269
第65図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/4）
……270
第66図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）
……270
第67図　土壙19（1/30）・出土遺物（1/4）
……271
第68図　土壙20（1/30）・出土遺物①（1/2）
……271
第69図　土壙20出土遺物②（1/4）……272

第70図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4・1/2・1/1）……272
第71図　土壙22（1/30）……273
第72図　土壙23（1/30）・出土遺物（1/4）……273
第73図　土壙24（1/30）・出土遺物（1/4）……274
第74図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）……275
第75図　土壙26（1/30）……275
第76図　土壙27（1/30）・出土遺物（1/4）……276
第77図　土壙28（1/30）・出土遺物（1/4）……276
第78図　土壙29（1/30）・出土遺物（1/4）……277
第79図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）……277
第80図　土壙31（1/30）・出土遺物（1/4）……278
第81図　土壙32（1/30）・出土遺物（1/4）……279
第82図　土壙33（1/30）・出土遺物①（1/6）……279
第83図　土壙33出土遺物②（1/4）……280
第84図　土壙34（1/30）・出土遺物（1/4）……281
第85図　土壙35（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）……281
第86図　土壙36（1/30）……282
第87図　土壙36出土遺物（1/4）……283
第88図　土壙37出土遺物（1/4・1/2）…284
第89図　土壙38（1/30）・出土遺物（1/4）……285
第90図　土壙39（1/30）……285
第91図　土壙40（1/30）・出土遺物（1/4）……285
第92図　土壙41（1/30）……286
第93図　土壙42（1/30）……286
第94図　土壙43（1/30）・出土遺物①（1/2）……286
第95図　土壙43出土遺物②（1/4）……287
第96図　土壙44（1/30）……287
第97図　土壙45（1/30）・出土遺物（1/4）……288
第98図　土壙46（1/30）・出土遺物①（1/3）……288
第99図　土壙47（1/30）……288
第100図　土壙46出土遺物②（1/4）……289
第101図　土壙47出土遺物（1/4）……290
第102図　土壙48（1/30）・出土遺物（1/4）……290
第103図　土壙49（1/30）・出土遺物（1/4）……291
第104図　土壙50（1/30）・出土遺物①（1/4）……291
第105図　土壙50出土遺物②（1/4）……292
第106図　土壙50出土遺物③（1/4）……293
第107図　土壙51（1/30）……294
第108図　土壙51出土遺物（1/4・1/3）…295
第109図　土壙52（左）・53（右）（1/30）……295
第110図　貝塚1（1/60）……296
第111図　貝塚1土層断面（1/60）……297

第112図　貝塚1出土遺物①（1/4）……298
第113図　貝塚1出土遺物②（1/4）……299
第114図　貝塚1出土遺物③（1/4）……300
第115図　貝塚1出土遺物④（1/4）……301
第116図　貝塚1出土遺物⑤（1/4）……302
第117図　貝塚1出土遺物⑥（1/4）……303
第118図　貝塚1出土遺物⑦（1/4）……304
第119図　貝塚1出土遺物⑧（1/4）……305
第120図　貝塚1出土遺物⑨（1/4）……306
第121図　貝塚1出土遺物⑩（1/4）……307
第122図　貝塚1出土遺物⑪（1/4）……308
第123図　貝塚1出土遺物⑫（1/4）……309
第124図　貝塚1出土遺物⑬（1/4）……310
第125図　貝塚1出土遺物⑭（1/4）……311
第126図　貝塚1出土遺物⑮（1/4）……312
第127図　貝塚1出土遺物⑯（1/4）……313
第128図　貝塚1出土遺物⑰（1/4）……314
第129図　貝塚1出土遺物⑱（1/4）……315
第130図　貝塚1出土遺物⑲（1/4）……316
第131図　貝塚1出土遺物⑳（1/4）……317
第132図　貝塚1出土遺物㉑（1/4）……318
第133図　貝塚1出土遺物㉒（1/4）……319
第134図　貝塚1出土遺物㉓（1/4）……320
第135図　貝塚1出土遺物㉔（1/4）……321
第136図　貝塚1出土遺物㉕（1/4）……322
第137図　貝塚1出土遺物㉖（1/2）……323
第138図　貝塚1出土遺物㉗（1/2）……324
第139図　貝塚1出土遺物㉘（1/2）……325
第140図　貝塚1出土遺物㉙（1/2）……326
第141図　遺構に伴わない遺物①（1/2）…329
第142図　遺構に伴わない遺物②（1/2）…330
第143図　遺構に伴わない遺物③（1/2）…331
第144図　遺構に伴わない遺物④（1/2）…332
第145図　遺構に伴わない遺物⑤（1/3）…333
第146図　遺構に伴わない遺物⑥（1/3）…334
第147図　遺構に伴わない遺物⑦（1/3）…335
第148図　遺構に伴わない遺物⑧（1/3）…336
第149図　竪穴住居18（1/60）……337
第150図　竪穴住居18A（左上）・18B（左下）（1/80）・出土遺物（1/4）……338
第151図　弥生時代後期後半遺構配置図（1/300）……339・340
第152図　竪穴住居19（1/60）……341
第153図　竪穴住居19出土遺物①（1/4）…342
第154図　竪穴住居19出土遺物②（1/4）…343
第155図　竪穴住居19出土遺物③（1/4）…344
第156図　竪穴住居19出土遺物④（1/2・1/3）……345
第157図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物（1/4）……346
第158図　竪穴住居21（1/60）・出土遺物（1/4）……347
第159図　竪穴住居22（1/60）・出土遺物（1/3・1/2・1/4）……348
第160図　竪穴住居23（1/60）・出土遺物①（1/2）……349
第161図　竪穴住居23出土遺物②（1/4）…350
第162図　竪穴住居24（左上）（1/60）・24A（下左）・24B（下右）（1/80）・出土遺物（1/4）……351
第163図　竪穴住居25（1/60）……352
第164図　竪穴住居25A（上）・25B（下）（1/80）……353

第165図　竪穴住居25出土遺物①（1/4・1/2）……354
第166図　竪穴住居25出土遺物②（1/3・1/1・1/2）……355
第167図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物（1/4）……356
第168図　竪穴住居26A（上）・26B（下）（1/80）……357
第169図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物①（1/4）……358
第170図　竪穴住居27出土遺物②（1/2・1/1）……359
第171図　竪穴住居28（1/60）・出土遺物①（1/4）……360
第172図　竪穴住居28A（上）・28B（下左）（1/80）・出土遺物②（1/3）　361
第173図　竪穴住居28出土遺物③（1/2）…362
第174図　竪穴住居29（1/60）・出土遺物（1/4）……362
第175図　竪穴住居30（1/60）・出土遺物①（1/3）……363
第176図　竪穴住居30A（上）・30B（下）（1/80）……364
第177図　竪穴住居30出土遺物②（1/4）…365
第178図　竪穴住居31（1/60）・出土遺物①（1/2・1/3）……366
第179図　竪穴住居31出土遺物②（1/4）…367
第180図　竪穴住居32（1/60）・出土遺物（1/4）……367
第181図　竪穴住居33（1/60）……368
第182図　竪穴住居33出土遺物（1/4）　…369
第183図　竪穴住居34（1/60）……370
第184図　竪穴住居34出土遺物（1/4・1/3）……371
第185図　竪穴住居35（1/60）・出土遺物①（1/2）……372
第186図　竪穴住居35A（左）・35B（右）（1/80）……373
第187図　竪穴住居35出土遺物②（1/4）…374
第188図　竪穴住居36（1/60）・出土遺物①（1/2）……375
第189図　竪穴住居36出土遺物②（1/4）…376
第190図　竪穴住居37（1/60）……377
第191図　竪穴住居37A（1/60）……378
第192図　竪穴住居37B（1/60）……379
第193図　竪穴住居37出土遺物①（1/4・1/2）……380
第194図　竪穴住居37出土遺物②（1/2）…381
第195図　竪穴住居38（1/60）・出土遺物①（1/2）……382
第196図　竪穴住居38出土遺物②（1/4）…383
第197図　竪穴住居38出土遺物③（1/4）…384
第198図　竪穴住居39～42・88～90（1/80）……385
第199図　竪穴住居39（1/60）……386
第200図　竪穴住居40（1/60）……387
第201図　竪穴住居40出土遺物（1/4・1/2）……388
第202図　竪穴住居41出土遺物（1/4・1/2）……389
第203図　竪穴住居42（1/60）……389
第204図　竪穴住居42出土遺物（1/4・1/2）……390
第205図　竪穴住居43（1/60）・出土遺物

(1/4) ……391
第206図　竪穴住居44（1/60）・出土遺物
(1/4) ……392
第207図　井戸１（1/30）・出土遺物①
(1/1) ……393
第208図　井戸１出土遺物②（1/4）……394
第209図　井戸１出土遺物③（1/4）……395
第210図　土器棺２（1/30）・出土遺物
(1/4) ……396
第211図　土器棺３（1/30）・出土遺物
(1/4) ……397
第212図　土壙54（1/30）・出土遺物
(1/4・1/3) ……398
第213図　土壙55（1/30）……399
第214図　土壙55出土遺物（1/4）……400
第215図　土壙56（1/30）……400
第216図　土壙57（1/30）・出土遺物①
(1/4) ……401
第217図　土壙57出土遺物②（1/4）……402
第218図　土壙57出土遺物③（1/4）……403
第219図　土壙58（1/30）……404
第220図　土壙58出土遺物①（1/4）……405
第221図　土壙58出土遺物②（1/4）……406
第222図　土壙58出土遺物③（1/4）……407
第223図　土壙58出土遺物④（1/4）……408
第224図　土壙59（1/30）……408
第225図　土壙59出土遺物（1/4）……409
第226図　土壙60（1/30）……410
第227図　土壙61（1/30）……410
第228図　土壙62（1/30）・出土遺物①
(1/2) ……411
第229図　土壙62出土遺物②（1/4）……412
第230図　土壙63（1/30）・出土遺物
(1/4・1/2・1/3) ……413
第231図　土壙64（1/30）・出土遺物（1/4）
……414
第232図　土壙65（1/30）・出土遺物①
(1/4) ……415
第233図　土壙65出土遺物②（1/4）……416
第234図　土壙65出土遺物③（1/4）……417
第235図　土壙66（1/30）・出土遺物（1/4）
……418
第236図　土壙67（1/30）・出土遺物（1/4）
……419
第237図　土壙68（1/30）・出土遺物（1/4）
……420
第238図　土壙69（1/30）……421
第239図　土壙69出土遺物（1/4）……422
第240図　土壙70（1/30）・出土遺物（1/4）
……423
第241図　土壙71（1/30）……424
第242図　土壙71出土遺物（1/4）……425
第243図　土壙72（1/30）・出土遺物（1/4）
……425
第244図　土壙73（1/30）・出土遺物（1/4）
……426
第245図　土壙74（1/30）……426
第246図　土壙74出土遺物（1/4）……427
第247図　土壙75（1/30）・出土遺物
(1/4・1/2) ……428
第248図　土壙76（1/30）……429
第249図　土壙77（1/30）……429
第250図　土壙76出土遺物①（1/4）……430
第251図　土壙76出土遺物②（1/4）……431

第252図　土壙78（1/30）・出土遺物（1/4）……431
第253図　土壙79（1/30）……432
第254図　土壙80（1/30）・出土遺物（1/4）……432
第255図　土壙81（1/30）・出土遺物（1/4）……433
第256図　土壙82（1/30）・出土遺物（1/4）……433
第257図　土壙83（1/30）・出土遺物（1/4）……434
第258図　土壙84（1/30）……434
第259図　土壙84出土遺物（1/1）……435
第260図　土壙85（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）……436
第261図　土壙86（1/30）・出土遺物（1/4）……437
第262図　土壙87（1/30）……437
第263図　土壙87出土遺物（1/4）……438
第264図　土壙88（1/30）……438
第265図　土壙88出土遺物①（1/4）……439
第266図　土壙88出土遺物②（1/4・1/3）440
第267図　土壙89（1/30）・出土遺物（1/4）……441
第268図　土壙90（1/30）……442
第269図　土壙91（1/30）・出土遺物（1/4）……442
第270図　土壙92（1/30）・出土遺物（1/2）……442
第271図　土壙93（1/30）……443
第272図　土壙94（1/30）……443
第273図　土壙95（上）・96（下左）・97（下右）（1/30）……444
第274図　土壙98（上左）・99（上右）（1/30）・出土遺物（1/4）…445
第275図　土壙100（1/30）・出土遺物（1/4）……446
第276図　土壙101（1/30）・出土遺物（1/4）……446
第277図　土壙102（1/30）……447
第278図　土壙102出土遺物（1/4）……448
第279図　土壙103（1/30）・出土遺物（1/4）……449
第280図　土壙104（1/30）・出土遺物（1/4）……449
第281図　土壙105（1/30）・出土遺物（1/4）……450
第282図　土壙106（1/30）・出土遺物（1/4）……450
第283図　土壙107（1/30）・出土遺物（1/2）……451
第284図　土壙108（1/30）・出土遺物①（1/2）……451
第285図　土壙108出土遺物②（1/4）……452
第286図　土壙109（1/30）・出土遺物（1/4）……453
第287図　土壙110（1/30）・出土遺物（1/4）……454
第288図　土壙111（1/30）……454
第289図　土壙111出土遺物（1/4）……455
第290図　土壙112（1/30）・出土遺物（1/2）……455
第291図　土壙113（1/30）・出土遺物①（1/1）……456

第292図　土壙113出土遺物②（1/4）……457
第293図　土壙114（1/30）・出土遺物
（1/4）……458
第294図　土壙115（1/30）・出土遺物
（1/2）……459
第295図　土壙116（1/30）・出土遺物
（1/4）……459
第296図　土壙117（1/30）・出土遺物
（1/4）……460
第297図　土壙118（1/30）……460
第298図　土壙118出土遺物（1/4）……461
第299図　土壙119（1/30）・出土遺物
（1/4・1/2）……461
第300図　土壙120（1/30）・出土遺物
（1/4）……462
第301図　土壙121（1/30）……462
第302図　土壙122（1/30）・出土遺物
（1/4）……463
第303図　土壙123（1/30）・出土遺物
（1/2）……464
第304図　土壙124（1/30）・出土遺物
（1/4）……464
第305図　土壙125（1/30）・出土遺物①
（1/3）……465
第306図　土壙125出土遺物②（1/4）……466
第307図　土壙126（1/30）……466
第308図　土壙126出土遺物①（1/4）……467
第309図　土壙126出土遺物②（1/4）……468
第310図　土壙126出土遺物③（1/4）……469
第311図　土壙126出土遺物④（1/4）……470
第312図　土壙127（1/30）……470
第313図　土壙128（1/30）……471
第314図　土壙129（1/30）・出土遺物
（1/4）……471
第315図　土壙130（1/30）・出土遺物
（1/4）……472
第316図　土壙131（1/30）・出土遺物
（1/4）……472
第317図　土壙132（1/30）・出土遺物
（1/4）……473
第318図　土壙133（1/30）・出土遺物
（1/4）……473
第319図　土壙134（1/30）・出土遺物
（1/4）……474
第320図　土器溜り1出土遺物①（1/4）…476
第321図　土器溜り1出土遺物②（1/4）…477
第322図　土器溜り1出土遺物③（1/4）…478
第323図　土器溜り1出土遺物④（1/4）…479
第324図　土器溜り1出土遺物⑤（1/4）…480
第325図　土器溜り1出土遺物⑥（1/4）…481
第326図　土器溜り1出土遺物⑦
（1/3・1/2）……482
第327図　竪穴住居45（1/60）……483
第328図　竪穴住居45A（1/80）……484
第329図　古墳時代前半遺構配置図（1/300）
……485・486
第330図　竪穴住居45B（上）・45C（下）
（1/80）……487
第331図　竪穴住居45出土遺物①（1/4）…488
第332図　竪穴住居45出土遺物②（1/4）…489
第333図　竪穴住居45出土遺物③（1/4）…490
第334図　竪穴住居45出土遺物④
（1/3・1/2）……491
第335図　竪穴住居46（1/60）・出土遺物①

(1/2) ……492
第336図　竪穴住居46出土遺物②(1/4) …493
第337図　竪穴住居46出土遺物③(1/4) …494
第338図　竪穴住居47 (1/60) ……494
第339図　竪穴住居47A (上)・47B (中)
(1/80) ・出土遺物① (1/2) …495
第340図　竪穴住居47出土遺物② (1/4) …496
第341図　竪穴住居48 (1/60) ……497
第342図　竪穴住居49 (1/60) ・竪穴住居48・
49出土遺物① (1/2・1/3) ……498
第343図　竪穴住居49A (上)・49B (下)
(1/80) ……499
第344図　竪穴住居48・49出土遺物② (1/4)
……500
第345図　竪穴住居48・49出土遺物③ (1/4)
……501
第346図　竪穴住居48・49出土遺物④ (1/4)
……502
第347図　竪穴住居50 (1/60) ・出土遺物①
(1/2) ……503
第348図　竪穴住居50出土遺物② (1/4)…504
第349図　竪穴住居50出土遺物③ (1/4)…505
第350図　竪穴住居51 (1/60) ・出土遺物
(1/4) ……505
第351図　竪穴住居52 (1/60) ……506
第352図　竪穴住居52出土遺物① (1/4)…507
第353図　竪穴住居52出土遺物②
(1/3・1/2) ……508
第354図　竪穴住居53 (1/60) ……508
第355図　竪穴住居53出土遺物 (1/4・1/2)
……509
第356図　竪穴住居54 (1/60) ……509
第357図　竪穴住居55 (1/60) ……510
第358図　竪穴住居56 (1/60) ……511
第359図　竪穴住居57 (1/60) ……511
第360図　竪穴住居58 (左)・59 (右)
(1/60) ……512
第361図　竪穴住居60 (1/60) ……513
第362図　竪穴住居60出土遺物 (1/4・1/3)
……514
第363図　竪穴住居61 (1/60) ・出土遺物
(1/4・1/1) ……515
第364図　竪穴住居62 (1/60) ……516
第365図　竪穴住居63 (1/60) ・出土遺物①
(1/4) ……517
第366図　竪穴住居63出土遺物② (1/4) …518
第367図　竪穴住居63出土遺物③ (1/3) …519
第368図　竪穴住居64 (1/60) ・出土遺物
(1/4・1/3) ……520
第369図　竪穴住居65 (1/60) ・出土遺物
(1/4) ……521
第370図　竪穴住居66 (1/60) ……521
第371図　竪穴住居67 (1/60) ・出土遺物
(1/2) ……522
第372図　竪穴住居68 (1/60) ……523
第373図　竪穴住居68出土遺物① (1/4)…524
第374図　竪穴住居68出土遺物②
(1/3・1/2) ……525
第375図　竪穴住居69 (1/60) ……525
第376図　竪穴住居69出土遺物
(1/4・1/3・1/2) ……526
第377図　竪穴住居70 (1/60) ……527
第378図　竪穴住居70出土遺物 (1/4・1/2)
……528

第379図　竪穴住居71（1/60）……529
第380図　竪穴住居71A（上）・71B（中）（1/80）・出土遺物（1/3・1/4）……530
第381図　竪穴住居72（1/60）・出土遺物（1/4）……531
第382図　竪穴住居73（1/60）……532
第383図　竪穴住居73A（上）・73B（下左）・73C（下右）(1/80)……533
第384図　竪穴住居73A出土遺物（1/4・1/2）……534
第385図　竪穴住居73B出土遺物（1/4・1/1・1/2）……535
第386図　竪穴住居73C出土遺物（1/4・1/2）……536
第387図　竪穴住居74（1/60）・出土遺物（1/4）……537
第388図　竪穴住居75（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）……538
第389図　竪穴住居76（1/60）……539
第390図　竪穴住居76A（上）・76B（下）（1/80）……540
第391図　竪穴住居76出土遺物①（1/4）……541
第392図　竪穴住居76出土遺物②（1/4・1/3・1/2）……542
第393図　竪穴住居77A（上）・77B（下）（1/60）・出土遺物（1/4）…543
第394図　竪穴住居78（1/60）……544
第395図　竪穴住居78出土遺物①（1/4）…545
第396図　竪穴住居78出土遺物②（1/4・1/2）……546
第397図　竪穴住居79A（1/60）……546
第398図　竪穴住居79B（1/60）・竪穴住居79出土遺物（1/2・1/4）……547
第399図　竪穴住居80（1/60）・出土遺物（1/4）……548
第400図　竪穴住居81（1/60）・出土遺物（1/4）……549
第401図　竪穴住居82（1/60）・出土遺物（1/4）……550
第402図　竪穴住居83（1/60）・出土遺物（1/3）……551
第403図　竪穴住居84（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）……552
第404図　竪穴住居85（1/60）……552
第405図　竪穴住居86（1/60）・出土遺物①（1/4）……553
第406図　竪穴住居86A（上左）・86B（上右）(1/80)・出土遺物②（1/2）……554
第407図　竪穴住居87（1/60）・出土遺物①（1/2）……555
第408図　竪穴住居87出土遺物②（1/4）…556
第409図　竪穴住居88（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）……557
第410図　竪穴住居89（1/60）……558
第411図　竪穴住居89出土遺物①（1/4）…559
第412図　竪穴住居89出土遺物②（1/4・1/2・1/1）……560
第413図　竪穴住居90（1/60）……561
第414図　竪穴住居90出土遺物①（1/4）…562
第415図　竪穴住居90出土遺物②

(1/3・1/2) ……563
第416図　竪穴住居91（1/60）……563
第417図　竪穴住居91出土遺物（1/4）…564
第418図　竪穴住居92（1/60）……565
第419図　竪穴住居92出土遺物
(1/4・1/2) ……566
第420図　竪穴住居93（1/60）……567
第421図　竪穴住居93出土遺物①（1/4）…568
第422図　竪穴住居93出土遺物②（1/4）…569
第423図　竪穴住居93出土遺物③
(1/4・1/3・1/1) ……570
第424図　竪穴住居94（1/60）……571
第425図　竪穴住居94出土遺物（1/4）…572
第426図　竪穴住居95～100（1/80）……573
第427図　竪穴住居95（1/60）・出土遺物①
(1/4) ……574
第428図　竪穴住居95出土遺物②
(1/3・1/2) ……575
第429図　竪穴住居96（1/60）・出土遺物
(1/3・1/2・1/4) ……576
第430図　竪穴住居97（1/60）……577
第431図　竪穴住居97出土遺物（1/4）…578
第432図　竪穴住居98（1/60）・出土遺物
(1/4) ……579
第433図　竪穴住居99（1/60）……580
第434図　竪穴住居100（1/60）・出土遺物
(1/4) ……581
第435図　竪穴住居101（1/60）・出土遺物
(1/4・1/3) ……582
第436図　竪穴住居102（1/60）……583
第437図　竪穴住居103～105（1/60）・出土
遺物（1/3）……584
第438図　竪穴住居103（1/60）……585
第439図　竪穴住居103出土遺物（1/4・1/2）
……586
第440図　竪穴住居104（1/60）・出土遺物
(1/2・1/4) ……587
第441図　竪穴住居105（1/60）・出土遺物
(1/4) ……588
第442図　竪穴住居106（1/60）・出土遺物①
(1/2) ……589
第443図　竪穴住居106出土遺物②（1/4）
……590
第444図　竪穴住居107（1/60）……591
第445図　竪穴住居107出土遺物
(1/4・1/2・1/3) ……592
第446図　土壙135（1/30）……593
第447図　土壙136（1/30）・出土遺物
(1/4・1/2) ……593
第448図　土壙137（1/30）・出土遺物
(1/4) ……594
第449図　土壙138（1/30）・出土遺物
(1/2) ……594
第450図　土壙139出土遺物（1/4・1/2）…595
第451図　土壙140（1/30）・出土遺物
(1/4) ……595
第452図　土壙141（左）・142（右）(1/30)
……596
第453図　土壙142出土遺物（1/4）……597
第454図　土壙143出土遺物（1/4・1/2）…598
第455図　土器溜り2（1/60）……598
第456図　土器溜り2出土遺物①（1/4）…599
第457図　土器溜り2出土遺物②（1/4）…600
第458図　土器溜り2出土遺物③（1/4）…601

第459図　土器溜り２出土遺物④（1/4）…602
第460図　土器溜り２出土遺物⑤（1/4）…603
第461図　土器溜り２出土遺物⑥（1/4）…604
第462図　土器溜り２出土遺物⑦（1/4）…605
第463図　土器溜り２出土遺物⑧（1/4）…606
第464図　土器溜り２出土遺物⑨（1/3）…607
第465図　斜面堆積土層断面（1/60）……608
第466図　斜面堆積出土遺物①（1/4）……617
第467図　斜面堆積出土遺物②（1/4）……618
第468図　斜面堆積出土遺物③（1/4）……619
第469図　斜面堆積出土遺物④（1/4）……620
第470図　斜面堆積出土遺物⑤（1/4）……621
第471図　斜面堆積出土遺物⑥（1/4）……622
第472図　斜面堆積出土遺物⑦（1/4）……623
第473図　斜面堆積出土遺物⑧（1/4）……624
第474図　斜面堆積出土遺物⑨（1/4）……625
第475図　斜面堆積出土遺物⑩（1/4）……626
第476図　斜面堆積出土遺物⑪（1/4）……627
第477図　斜面堆積出土遺物⑫（1/3・1/2）
……628
第478図　遺構に伴わない遺物①
（1/1・1/2）……629
第479図　遺構に伴わない遺物②（1/2）…630
第480図　遺構に伴わない遺物③（1/2）…631
第481図　遺構に伴わない遺物④（1/2）…632
第482図　遺構に伴わない遺物⑤（1/2）…633
第483図　遺構に伴わない遺物⑥（1/2）…634
第484図　遺構に伴わない遺物⑦（1/1）…635
第485図　古墳時代後半以降遺構配置図
（1/300）……637・638
第486図　竪穴住居108（1/60）・出土遺物①
（1/4）……639
第487図　竪穴住居108出土遺物②（1/2）
……640
第488図　竪穴住居109（1/60）……640
第489図　竪穴住居109出土遺物①
（1/4）……641
第490図　竪穴住居109出土遺物②
（1/2・1/1・1/3）……642
第491図　竪穴住居110出土遺物（1/4・1/2）
……642
第492図　竪穴住居111（1/60）・出土遺物
（1/4）……643
第493図　掘立柱建物１（1/60）……644
第494図　土壙144（1/30）・出土遺物（1/2）
……646
第495図　溝群断面（1/30）……647
第496図　溝群出土遺物（1/2）……647
第497図　時期別主要遺構配置図（1/1,000）
……649

足守川加茂Ｂ遺跡表目次

表１　手焙形土器編年表……615・616

足守川加茂Ｂ遺跡遺構・遺物一覧目次

1　竪穴住居……1079
2　土壙……1082
3　石器・石製品……1088
4　金属器……1091
5　土製品……1095
6　玉類……1096

足守川加茂Ｂ遺跡写真図版目次

写真図版36
1．足守川加茂Ｂ遺跡　遠景（南西から）
2．調査前の状況（南から）
写真図版37
1．８Ｂｃ区調査風景（北東から）
2．８Ｂｃ区調査風景（南東から）
写真図版38
1．土壙１　断面（東から）
2．土壙２　貝殻検出状況（北西から）
写真図版39
1．竪穴住居２　遺物出土状況（南から）
2．竪穴住居７　炭化材検出状況（東から）
写真図版40
1．竪穴住居７・８・９（東から）
2．竪穴住居12（南から）
写真図版41
1．竪穴住居13　遺物出土状況（北から）
2．竪穴住居13（北から）
写真図版42
1．竪穴住居16（南西から）
2．土器棺１（北から）
写真図版43
1．土壙墓１　頭骨近景（東から）
2．土壙墓２　人骨検出状況（西から）
写真図版44
1．土壙６　遺物出土状況（南西から）
2．土壙14　貝殻出土状況（南東から）
写真図版45
1．土壙33　遺物出土状況（西から）
2．土壙41（東から）
写真図版46
1．土壙43（東から）
2．土壙50　遺物出土状況（南東から）
写真図版47
1．貝塚１（西から）
2．貝塚１（南東から）
写真図版48
1．貝塚１　遺物出土状況（北西から）
2．貝塚１　卜骨（Ｂ３）出土状況（北西から）
写真図版49
1．貝塚１　東西断面（北から）
2．貝塚１　南北断面北半（西から）
写真図版50
1．貝塚１　南北断面南半（西から）
2．貝塚１　南北断面南半土器検出状況（西から）
写真図版51

1．竪穴住居18（西から）
2．竪穴住居19 遺物出土状況（北東から）
写真図版52
1．竪穴住居23（北から）
2．竪穴住居25（南東から）
写真図版53
1．竪穴住居27（西から）
2．竪穴住居28（南から）
写真図版54
1．竪穴住居30・31（南東から）
2．竪穴住居35（北西から）
写真図版55
1．竪穴住居36（北から）
2．竪穴住居38（北西から）
写真図版56
1．竪穴住居37A 床面検出状況（北から）
2．竪穴住居37（北から）
写真図版57
1．井戸1 遺物出土状況（南から）
2．土器棺2（南東から）
写真図版58
1．土壙55（東から）
2．土壙57 遺物出土状況（北東から）
写真図版59
1．土壙58 遺物出土状況（北東から）
2．土壙59 遺物出土状況（北西から）
写真図版60
1．土壙64 遺物出土状況（東から）
2．土壙65 遺物出土状況（北西から）
写真図版61
1．土壙67（東から）
2．土壙68（南東から）
写真図版62
1．土壙69（南東から）
2．土壙70（南から）
写真図版63
1．土壙71南半 遺物出土状況（北から）
2．土壙74 遺物出土状況（北西から）
写真図版64
1．土壙84（北から）
2．土壙84 鏡（M28）出土状況（北東から）
写真図版65
1．土壙90 貝殻検出状況（北東から）
2．土壙109 遺物出土状況（東から）
写真図版66
1．土壙126 遺物出土状況（南から）
2．土器溜り1 遺物出土状況（北東から）
写真図版67
1．竪穴住居46（西から）
2．竪穴住居53 東半（南西から）
写真図版68
1．竪穴住居50・51（東から）
2．竪穴住居50方形土壙 遺物出土状況（北から）
写真図版69
1．竪穴住居60（南東から）
2．竪穴住居68 床面検出状況（北東から）
写真図版70
1．竪穴住居70 床面検出状況（南西から）
2．竪穴住居76 床面検出状況（北東から）
写真図版71
1．竪穴住居78（北東から）
2．竪穴住居77・78・79（北東から）

写真図版72
1．竪穴住居86A（南から）
2．竪穴住居86B（南から）
写真図版73
1．竪穴住居89（東から）
2．竪穴住居89 鏡(M60)出土状況（南東から）
写真図版74
1．竪穴住居91・92（北東から）
2．竪穴住居94～100（北から）
写真図版75
1．竪穴住居93 床面検出状況（北から）
2．竪穴住居93（北から）
写真図版76
1．竪穴住居101（西から）
2．竪穴住居102（北東から）
写真図版77
1．竪穴住居103（北東から）
2．竪穴住居107（西から）
写真図版78
1．土器溜り2 遺物出土状況（南東から）
2．斜面堆積 遺物出土状況(1)（南から）
写真図版79
1．斜面堆積 遺物出土状況(2)（西から）
2．斜面堆積 遺物出土状況(3)（南東から）
写真図版80
1．竪穴住居109 床面検出状況（南から）
2．竪穴住居111（北東から）
写真図版81
1．10C～9C区 溝群（北から）
2．9C区 溝群（南東から）
写真図版82
出土遺物① 弥生土器
写真図版83
出土遺物② 弥生土器
写真図版84
出土遺物③ 弥生土器
写真図版85
出土遺物④ 弥生土器
写真図版86
出土遺物⑤ 弥生土器
写真図版87
出土遺物⑥ 土師器
写真図版88
出土遺物⑦ 土師器
写真図版89
出土遺物⑧ 土師器
写真図版90
出土遺物⑨ 手焙形土器
写真図版91
出土遺物⑩ 土製品
写真図版92
出土遺物⑪ 分銅形土製品・玉類
写真図版93
出土遺物⑫ 打製石器
写真図版94
出土遺物⑬ 石製品
写真図版95
出土遺物⑭ 磨製石器・石製品
写真図版96
出土遺物⑮ 鉄器
写真図版97
出土遺物⑯ 鉄器
写真図版98

出土遺物⑰ 鉄器
写真図版99
出土遺物⑱ 卜骨・角器
写真図版100
出土遺物⑲ 卜骨・角器

Ⅳ．3．足守川矢部南向遺跡図目次

第１図　足守川矢部南向遺跡周辺地形図（1/2,000）……654
第２図　調査区設定および遺跡縦断図（1/1,500）……655
第３図　遺構全体図（1/500）……656
第４図　微高地北斜面断面図（1/80）…657
第５図　６ライン横断面図（1/100）……657
第６図　竪穴住居１（1/60）……658
第７図　弥生時代中期遺構全体図（1/300）……659・660
第８図　竪穴住居１出土遺物（1/4・1/2）……661
第９図　竪穴住居２（1/60）……662
第10図　竪穴住居２出土遺物①（1/2・1/4）……663
第11図　竪穴住居２出土遺物②（1/2）…664
第12図　竪穴住居２出土遺物③（1/2）…665
第13図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）……666
第14図　竪穴住居３出土遺物②（1/2）…667
第15図　竪穴住居４（1/60）・出土遺物（1/4）……668
第16図　掘立柱建物１（1/80）……669
第17図　掘立柱建物１出土遺物（1/4）…670
第18図　掘立柱建物２（1/80）……670
第19図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）……671
第20図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）……672
第21図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4）……672
第22図　土壙４（1/30）・出土遺物（1/4）……673
第23図　溝１（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）……674
第24図　弥生時代後期前半遺構全体図（1/300）……675・676
第25図　竪穴住居５（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）……677
第26図　竪穴住居６（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）……678
第27図　竪穴住居７（1/60）……679
第28図　竪穴住居７出土遺物（1/4）……680
第29図　竪穴住居８（1/60）・出土遺物（1/4）……680
第30図　竪穴住居９（1/60）・出土遺物①（1/4）……681
第31図　竪穴住居９出土遺物②（1/4・1/2）……682
第32図　竪穴住居10（1/60）……683
第33図　竪穴住居10出土遺物①（1/2・1/4）……684

第34図　竪穴住居10出土遺物②（1/4）…685
第35図　竪穴住居11（1/60）・出土遺物
（1/4・1/2）……686
第36図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物
（1/3・1/2・1/4）……687
第37図　竪穴住居13（1/60）……688
第38図　竪穴住居13出土遺物①（1/4）…689
第39図　竪穴住居13出土遺物②（1/2）…690
第40図　竪穴住居14（1/60）……691
第41図　竪穴住居14出土遺物（1/4）……692
第42図　竪穴住居15（1/60）……693
第43図　竪穴住居15A（上）・15B（下）
（1/100）……694
第44図　竪穴住居15出土遺物①（1/2・1/3）
……694
第45図　竪穴住居15出土遺物②（1/4）…695
第46図　竪穴住居15出土遺物③（1/4）…696
第47図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物
（1/4）……697
第48図　竪穴住居17（1/30）……698
第49図　竪穴住居17出土遺物（1/4）……699
第50図　竪穴住居18（1/60）……699
第51図　竪穴住居18出土遺物（1/4）……700
第52図　竪穴住居19（1/60）・出土遺物①
（1/2）……701
第53図　竪穴住居19出土遺物②（1/4）…702
第54図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物
（1/2・1/4）……703
第55図　竪穴住居21（1/60）……704
第56図　竪穴住居21出土遺物
（1/4・2/3・1/2・1/3）……705
第57図　竪穴住居22（1/80）……706
第58図　竪穴住居22A（左）・22B（右）
（1/100）……707
第59図　竪穴住居22出土遺物①（1/4）…707
第60図　竪穴住居22出土遺物②
（1/2・1/3・1/4）……708
第61図　竪穴住居22出土遺物③（1/4）…709
第62図　竪穴住居22出土遺物④（1/4）…710
第63図　竪穴住居23（1/60）……711
第64図　竪穴住居23出土遺物（1/4・1/2）
……712
第65図　竪穴住居24（1/60）……712
第66図　竪穴住居24出土遺物（1/4）……713
第67図　竪穴住居25（1/60）・出土遺物
（1/4）……714
第68図　竪穴住居26（1/60）……715
第69図　竪穴住居26出土遺物
（1/2・2/3・1/4）……716
第70図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物
（1/4）……717
第71図　竪穴住居28（上）・29（下）
（1/60）……718
第72図　竪穴住居29出土遺物
（1/4・1/3・1/2）……719
第73図　井戸1（1/30）・出土遺物（1/4）
……720
第74図　土壙5（1/30）……721
第75図　土壙6（1/30）・出土遺物①
（1/4）……721
第76図　土壙6出土遺物②（1/4）……722
第77図　土壙7（1/30）・出土遺物（1/4）
……723
第78図　土壙8（1/30）・出土遺物（1/4）

……723
第79図　土壙９（1/30）・出土遺物①（1/2・1/4）……724
第80図　土壙９出土遺物②（1/4）……725
第81図　土壙９出土遺物③（1/4）……726
第82図　土壙10（1/30）・出土遺物①（1/4）……727
第83図　土壙10出土遺物②（1/3・1/2）…728
第84図　土壙11（1/30）……728
第85図　土壙11出土遺物①（1/4）……729
第86図　土壙11出土遺物②（1/4・1/2・1/3）……730
第87図　土壙12（1/30）・出土遺物（1/4）……731
第88図　土壙13（1/30）・出土遺物①（1/3）……731
第89図　土壙13出土遺物②（1/4）……732
第90図　土壙14（1/30）……732
第91図　土壙14出土遺物（1/4）……733
第92図　土壙15（1/30）……734
第93図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）……734
第94図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/4）……735
第95図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）……736
第96図　土壙19（1/30）……736
第97図　土壙19出土遺物（1/4）……737
第98図　土壙20（1/30）……737
第99図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4）……738
第100図　土壙22（1/30）・出土遺物（1/4）……738
第101図　土壙23（1/30）・出土遺物（1/4）……739
第102図　土壙24（1/30）・出土遺物（1/4）……739
第103図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）……740
第104図　土壙26（1/30）・出土遺物（1/4）……741
第105図　土壙27（1/30）……741
第106図　土壙27出土遺物（1/4・1/2）…742
第107図　土壙28（1/30）・出土遺物（1/4）……743
第108図　土壙29（1/30）……743
第109図　土壙29出土遺物（1/4）……744
第110図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）……745
第111図　土壙31（1/20）……745
第112図　土壙31出土遺物（1/4）……746
第113図　土壙32（1/30）……746
第114図　土壙32出土遺物①（1/4）……747
第115図　土壙32出土遺物②（1/4）……748
第116図　土壙33（1/30）・出土遺物①（1/4・1/2）……749
第117図　土壙33出土遺物②（1/4）……750
第118図　土壙34（1/30）……750
第119図　土壙34出土遺物（1/4・1/3）…751
第120図　土壙35（1/30）……751
第121図　土壙35出土遺物（1/4・1/2）…752
第122図　土壙36（1/30）・出土遺物（1/4）……753
第123図　土壙37（1/30）・出土遺物（1/4）

……753
第124図　土壙38（1/30）・出土遺物（1/4）
……754
第125図　土壙39（1/30）・出土遺物（1/4）
……755
第126図　土壙40（1/30）……755
第127図　土壙41（1/30）……756
第128図　土壙42（1/30）……756
第129図　土壙43（1/30）……757
第130図　土壙43出土遺物①（1/4）……758
第131図　土壙43出土遺物②（1/4・1/2）
……759
第132図　土壙43出土遺物③（1/2・1/3）
……760
第133図　土壙44（1/30）・出土遺物（1/4）
……761
第134図　土壙45（1/30）・出土遺物（1/4）
……761
第135図　土壙46（1/30）……762
第136図　土壙47（1/30）・出土遺物（1/4）
……762
第137図　土壙48（1/30）……763
第138図　土壙48出土遺物①（1/2・1/4）…764
第139図　土壙48出土遺物②（1/4）……765
第140図　土壙48出土遺物③（1/4）……766
第141図　土壙49（1/30）・出土遺物（1/4）
……767
第142図　土壙50（1/30）・出土遺物（1/4）
……767
第143図　土壙51（1/30）・出土遺物①
（1/4）……768
第144図　土壙51出土遺物②（1/4）……769
第145図　土壙51出土遺物③（1/4）……770
第146図　土壙51出土遺物④（1/4）……771
第147図　土壙52（1/30）……772
第148図　土壙53（1/30）……773
第149図　土壙54（1/30）……773
第150図　土壙55（1/30）・出土遺物
（1/4・1/2）……774
第151図　包含層出土遺物①（1/3・1/2）…775
第152図　包含層出土遺物②（1/2）……776
第153図　包含層出土遺物③（1/2）……777
第154図　包含層出土遺物④（1/2）……778
第155図　弥生時代後期後半遺構全体図
（1/300）……779・780
第156図　竪穴住居30（1/60）……781
第157図　竪穴住居30出土遺物①（1/4）…782
第158図　竪穴住居30出土遺物②
（1/2・1/3・1/4）……783
第159図　竪穴住居31（1/60）……784
第160図　竪穴住居31出土遺物（1/4・2/3）
……785
第161図　竪穴住居32（1/60）・出土遺物
（1/2・1/4）……786
第162図　竪穴住居33～36（1/80）……787
第163図　竪穴住居33（1/60）・出土遺物
（1/4）……787
第164図　竪穴住居34（1/60）……788
第165図　竪穴住居34出土遺物（1/4）…789
第166図　竪穴住居35（1/60）……790
第167図　竪穴住居36（1/60）……790
第168図　竪穴住居35出土遺物（1/4・1/3）
……791
第169図　竪穴住居37（1/60）……792

第170図　竪穴住居37出土遺物（1/3・1/4）……793
第171図　竪穴住居37上層出土遺物①（1/5・1/4・1/3）……797
第172図　竪穴住居37上層出土遺物②（1/4）……798
第173図　竪穴住居37上層出土遺物③（1/4）……799
第174図　竪穴住居37上層出土遺物④（1/4）……800
第175図　竪穴住居37上層出土遺物⑤（1/4）……801
第176図　竪穴住居37上層出土遺物⑥（1/4）……802
第177図　竪穴住居37上層出土遺物⑦（1/4）……803
第178図　竪穴住居37上層出土遺物⑧（1/4）……804
第179図　竪穴住居37上層出土遺物⑨（1/4）……805
第180図　竪穴住居37上層出土遺物⑩（1/4）……806
第181図　竪穴住居37上層出土遺物⑪（1/4）……807
第182図　竪穴住居37上層出土遺物⑫（1/4・1/3）……808
第183図　竪穴住居38（1/60）……809
第184図　竪穴住居38出土遺物（1/4）…810
第185図　竪穴住居39（1/80）……810
第186図　竪穴住居39出土遺物（1/4・2/3）……811
第187図　竪穴住居40(1/80)出土遺物①（1/2)……812
第188図　竪穴住居40出土遺物②（1/4)…813
第189図　竪穴住居41（1/60）……814
第190図　竪穴住居41出土遺物（1/4・1/3）……815
第191図　竪穴住居42（1/60）……816
第192図　竪穴住居42A（上）・42B（下）（1/100）……817
第193図　竪穴住居42出土遺物（1/4）…818
第194図　竪穴住居43（1/60）・出土遺物①（2/3・1/3・1/2）……819
第195図　竪穴住居43出土遺物②（1/4)…820
第196図　竪穴住居44（1/60）……821
第197図　竪穴住居44A（左）・44B（右）（1/100）……822
第198図　竪穴住居44出土遺物①（1/2・2/3）……822
第199図　竪穴住居44出土遺物②（1/4)…823
第200図　竪穴住居45（1/60）……824
第201図　竪穴住居45出土遺物（1/3・1/4）……825
第202図　竪穴住居46～48（1/80）……826
第203図　竪穴住居46（1/60）・出土遺物①（2/3・1/3・1/4）……827
第204図　竪穴住居46出土遺物②（1/2)…828
第205図　竪穴住居47（1/60）・出土遺物（1/4）……828
第206図　竪穴住居48（1/60）……829
第207図　竪穴住居48小銅鐸埋納土壙（1/4）・出土遺物（1/2)……830
第208図　竪穴住居48出土遺物（1/4）…831
第209図　竪穴住居49（1/60）……832

第210図　竪穴住居50（1/60）……833
第211図　竪穴住居50出土遺物
（2/3・1/2・1/4）……834
第212図　土器棺1（1/20）・出土遺物
（1/4）……835
第213図　土器棺2（1/20）・出土遺物
（1/4）……836
第214図　土壙56（1/30）……837
第215図　土壙57（1/30）・出土遺物
（1/4・1/2）……837
第216図　土壙58（1/30）……838
第217図　土壙59（1/30）……838
第218図　土壙59出土遺物①（1/4）……839
第219図　土壙59出土遺物②（1/4）……840
第220図　土壙60（1/30）……841
第221図　土壙61（1/30）・出土遺物（1/4）
……841
第222図　土壙62（1/30）・出土遺物（1/4）
……842
第223図　土壙63（1/30）・出土遺物（1/4）
……843
第224図　土壙64（1/30）・出土遺物（1/4）
……844
第225図　土壙65（1/30）……845
第226図　土壙66（1/30）・出土遺物
（1/2・1/4）……845
第227図　土壙67（1/30）・出土遺物（1/4）
……846
第228図　土壙68（1/30）・出土遺物（1/4）
……846
第229図　土壙69（1/30）・出土遺物（1/4）
……847
第230図　土壙70（1/30）・出土遺物（1/4）
……848
第231図　土壙71（1/30）……848
第232図　土壙72（1/30）……850
第233図　土壙72出土遺物①（1/4・1/2）
……851
第234図　土壙72出土遺物②（1/4）……852
第235図　土壙72出土遺物③（1/4）……853
第236図　土壙72出土遺物④（1/4）……854
第237図　土壙72出土遺物⑤（1/4）……855
第238図　土壙72出土遺物⑥（1/4）……856
第239図　土壙72出土遺物⑦（1/4）……857
第240図　土壙72出土遺物⑧（1/4）……858
第241図　土壙72出土遺物⑨（1/4）……859
第242図　土壙72出土遺物⑩（1/4）……860
第243図　土壙72出土遺物⑪（1/4）……861
第244図　土壙72出土遺物⑫（1/4）……862
第245図　土壙72出土遺物⑬（1/4）……863
第246図　土壙72出土遺物⑭（1/4）……864
第247図　土壙72出土遺物⑮（1/4）……865
第248図　土壙72出土遺物⑯（1/4）……866
第249図　土壙72出土遺物⑰（1/4）……867
第250図　土壙72出土遺物⑱（1/4）……868
第251図　土壙72出土遺物⑲（1/4）……869
第252図　土壙72出土遺物⑳（1/4）……870
第253図　土壙72出土遺物㉑（1/4）……871
第254図　土壙72出土遺物㉒（1/4）……872
第255図　土壙73（1/30）・出土遺物（1/4）
……873
第256図　土壙74（1/30）・出土遺物（1/4）
……874
第257図　土壙75（1/30）・出土遺物（1/4）

……875
第258図　土壙76（1/30）……875
第259図　土壙76出土遺物（1/4）……876
第260図　土壙77（1/30）・出土遺物①
（1/2）……876
第261図　土壙77出土遺物②（1/4）……877
第262図　土壙78（1/30）・出土遺物（1/4）
……877
第263図　土壙79（1/30）……878
第264図　土壙80（1/30）・出土遺物（1/4）
……878
第265図　土壙81（1/30）・出土遺物（1/4）
……879
第266図　土壙82（1/30）・出土遺物（1/4）
……880
第267図　土壙83（1/30）……880
第268図　土壙83出土遺物（1/4）……881
第269図　土壙84（1/30）……881
第270図　土壙85（1/30）・出土遺物
（1/4・1/3）……882
第271図　土壙86（1/30）・出土遺物（1/4）
……883
第272図　土壙87（1/30）……883
第273図　土壙87出土遺物（1/4）……884
第274図　土壙88（1/30）……884
第275図　土壙88出土遺物（1/4）……885
第276図　土壙89（1/30）・出土遺物①
（1/2）……885
第277図　土壙89出土遺物②（1/4・1/3）
……886
第278図　土壙89出土遺物③（1/4）……887
第279図　土壙90（1/30）・出土遺物（1/4）
……888
第280図　土壙91（1/30）・出土遺物（1/4）
……888
第281図　土壙92（1/30）・出土遺物（1/4）
……889
第282図　土壙93（1/30）……890
第283図　土壙94（1/30）……890
第284図　包含層遺物（1/4・1/3）……891
第285図　古墳時代前半遺構全体図（1/300）
……893・894
第286図　竪穴住居51（1/60）……895
第287図　竪穴住居51内土壙（1/30）……896
第288図　竪穴住居51A（左）・51B（右）
（1/100）……896
第289図　竪穴住居51出土遺物①（1/4）…897
第290図　竪穴住居51出土遺物②（1/4）…898
第291図　竪穴住居51出土遺物③
（1/4・1/2・2/3・1/3）……899
第292図　竪穴住居52（1/60）……900
第293図　竪穴住居52出土遺物
（1/2・1/3・1/4）……901
第294図　竪穴住居53（1/60）……902
第295図　竪穴住居53出土遺物
（1/4・1/2・1/3）……903
第296図　竪穴住居54（1/60・1/30）……904
第297図　竪穴住居54出土遺物①
（1/4・1/2）……905
第298図　竪穴住居54出土遺物②
（1/2・1/3）……906
第299図　竪穴住居55（1/60）……907
第300図　竪穴住居55出土遺物①
（1/3・1/2）……908

第301図　竪穴住居55出土遺物②（1/4）…909
第302図　竪穴住居55出土遺物③（1/4）…910
第303図　竪穴住居55出土遺物④（1/4）…911
第304図　竪穴住居56（1/80）……912
第305図　竪穴住居56出土遺物
（1/2・1/3・1/4）……913
第306図　竪穴住居57（1/60）……914
第307図　竪穴住居57出土遺物①（1/4）…915
第308図　竪穴住居57出土遺物②
（1/4・1/2・1/3）……916
第309図　竪穴住居58（1/60）……917
第310図　竪穴住居58出土遺物（1/4）…918
第311図　竪穴住居59（1/60）・出土遺物
（1/4）……919
第312図　竪穴住居60①（1/80）……920
第313図　竪穴住居60②（1/60）……921
第314図　竪穴住居60上層出土遺物①（1/4）
……922
第315図　竪穴住居60上層出土遺物②（1/4）
……923
第316図　竪穴住居60上層出土遺物③（1/4）
……924
第317図　竪穴住居60上層出土遺物④（1/4・
1/3）……925
第318図　竪穴住居60上層出土遺物⑤（1/4）
……926
第319図　竪穴住居60下層出土遺物①（1/4）
……927
第320図　竪穴住居60下層出土遺物②（1/4・
1/3）
……928
第321図　竪穴住居60柱穴および中央穴出土
遺物（1/3・1/4）
……929
第322図　竪穴住居60貼床出土遺物（1/4）
……930
第323図　竪穴住居61（1/60）……931
第324図　竪穴住居61出土遺物①（1/4）…932
第325図　竪穴住居61出土遺物②
（1/4・1/3）……933
第326図　竪穴住居62（1/60）……934
第327図　竪穴住居62出土遺物①（1/4）…935
第328図　竪穴住居62出土遺物②
（1/2・2/3・1/3）……936
第329図　竪穴住居62上層出土遺物①（1/4）
……937
第330図　竪穴住居62上層出土遺物②（1/4）
……938
第331図　竪穴住居62上層出土遺物③（1/4）
……939
第332図　竪穴住居62上層出土遺物④（1/4）
……940
第333図　竪穴住居62上層出土遺物⑤（1/4）
……941
第334図　竪穴住居62上層出土遺物⑥（1/4）
……942
第335図　竪穴住居62上層出土遺物⑦（1/4）
……943
第336図　竪穴住居62上層出土遺物⑧（1/4）
……944
第337図　竪穴住居62上層出土遺物⑨（1/4）
……945
第338図　竪穴住居62上層出土遺物⑩（1/4）
……946

第339図　竪穴住居62上層出土遺物⑪（1/4）……947
第340図　竪穴住居62上層出土遺物⑫（1/4）……948
第341図　竪穴住居62上層出土遺物⑬（1/4）……949
第342図　竪穴住居62上層出土遺物⑭（1/4）……950
第343図　竪穴住居62上層出土遺物⑮（1/4）……951
第344図　竪穴住居62上層出土遺物⑯（1/4）……952
第345図　竪穴住居62上層出土遺物⑰（1/4）……953
第346図　竪穴住居62上層出土遺物⑱（1/4）……954
第347図　竪穴住居62上層出土遺物⑲（1/4）……955
第348図　竪穴住居62上層出土遺物⑳（1/4）……956
第349図　竪穴住居63（1/60）……957
第350図　竪穴住居63A（左）・63B（右）（1/100）……958
第351図　竪穴住居63出土遺物①（1/4）…958
第352図　竪穴住居63出土遺物②（1/2・1/3）……959
第353図　竪穴住居64（1/60）……959
第354図　竪穴住居64出土遺物（1/4・1/2）……960
第355図　竪穴住居65（1/60）……961
第356図　竪穴住居65出土遺物（1/4）…962
第357図　竪穴住居66（1/60）……963
第358図　竪穴住居66上層出土遺物（1/4・1/3）……964
第359図　竪穴住居66下層出土遺物①（1/4）……965
第360図　竪穴住居66下層出土遺物②（1/4）……966
第361図　竪穴住居66柱穴および貼床出土遺物（1/4）……967
第362図　竪穴住居67（右）・68（左）（1/60）……968
第363図　竪穴住居67出土遺物①（1/4）…968
第364図　竪穴住居67出土遺物②（1/4）…969
第365図　土壙95（1/30）・出土遺物（1/4）……970
第366図　土壙96（1/30）・出土遺物（1/4）……970
第367図　土壙97（1/30）・出土遺物（1/4）……971
第368図　土壙98（1/30）……971
第369図　土壙98出土遺物（1/4）……972
第370図　土壙99（1/30）……972
第371図　土壙99出土遺物①（1/3）……973
第372図　土壙99出土遺物②（1/3）……974
第373図　土壙100（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）……975
第374図　土壙101（1/30）・出土遺物（1/4）……976
第375図　土壙102（1/30）……976
第376図　土壙102出土遺物（1/4）……977
第377図　土壙103（1/30）・出土遺物（1/4）……977
第378図　土壙104（1/30）・出土遺物（1/4）

……978
第379図　土壙105（1/30）・出土遺物（1/4）
……978
第380図　土壙106（1/30）・出土遺物（1/4）
……979
第381図　土壙107（1/30）・出土遺物（1/4）
……980
第382図　土器溜り1出土遺物（1/4）…980
第383図　土器溜り2出土遺物
（1/2・1/3・1/4）……981
第384図　包含層出土遺物①（2/3）……982
第385図　包含層出土遺物②（1/2）……983
第386図　包含層出土遺物③（1/4）……984
第387図　包含層出土遺物④（1/2）……985
第388図　包含層出土遺物⑤（1/3）……986
第389図　古墳時代後半～古代遺構全体図
（1/300）……987・988
第390図　竪穴住居69（1/60）……989
第391図　竪穴住居69出土遺物①
（1/4・1/3）……990
第392図　竪穴住居69出土遺物②（1/4）…991
第393図　竪穴住居70（1/30・1/80）……992
第394図　竪穴住居70出土遺物①（1/4）…993
第395図　竪穴住居70出土遺物②（1/4）…994
第396図　竪穴住居71（1/60）・出土遺物
（1/4）……995
第397図　竪穴住居72（1/60）……996
第398図　竪穴住居72出土遺物（1/4）…997
第399図　竪穴住居73（1/60）・出土遺物
（1/4）……997
第400図　竪穴住居74（1/60）・出土遺物
（1/2）……998
第401図　竪穴住居75（1/60）・出土遺物
（1/4）……999
第402図　竪穴住居76（1/60）・出土遺物
（1/2）……1000
第403図　掘立柱建物3（1/80）……1001
第404図　掘立柱建物4（左）・5（右）
（1/80）・出土遺物（1/2）…1002
第405図　掘立柱建物6（1/80）……1003
第406図　掘立柱建物7（1/80）……1004
第407図　掘立柱建物8（1/80）……1004
第408図　掘立柱建物9（1/80）・出土遺物
（1/2）……1005
第409図　掘立柱建物10（1/80）……1006
第410図　土壙108（1/30）・出土遺物
（1/4）……1006
第411図　土壙109（1/30）……1007
第412図　溝2（1/30）・出土遺物①（1/2）
……1007
第413図　溝2出土遺物②（1/4）……1008
第414図　溝3（1/30）・出土遺物（1/4）
……1009
第415図　溝4（1/30）・出土遺物
（1/4・1/2）……1009
第416図　溝5（1/30）・出土遺物（1/4）
……1010
第417図　溝6（1/30）・出土遺物
（1/4・1/2）……1010
第418図　溝7（1/30）……1011
第419図　溝8A（左）・8B（右）
（1/30）・出土遺物（1/4）…1011
第420図　包含層出土遺物①
（1/3・1/4・1/2）……1012

第421図　包含層出土遺物②（1/4）……1013
第422図　包含層出土遺物③（1/4）……1014
第423図　中世以降の柱穴群（1/300）
……1015・1016
第424図　中世以降の遺構全体図（1/300）
……1017・1018
第425図　掘立柱建物11（1/80）……1019
第426図　掘立柱建物12（1/80）……1019
第427図　掘立柱建物13（1/80）……1020
第428図　掘立柱建物14（1/80）……1020
第429図　掘立柱建物15（1/80）……1021
第430図　掘立柱建物16（1/80）……1021
第431図　掘立柱建物17（1/80）……1022
第432図　掘立柱建物18（1/80）……1022
第433図　炉1（左）・炉2（右）（1/30）
……1023
第434図　土壙墓1（1/30）……1024
第435図　土壙墓2（1/30）……1024
第436図　土壙墓3（1/30）……1024
第437図　土壙墓4（1/30）……1024
第438図　土壙墓5（1/30）・出土遺物
（1/4）……1025
第439図　土壙墓6（1/30）・出土遺物
（1/4・1/3）……1026
第440図　土壙墓7（1/30）・出土遺物
（1/4）……1026
第441図　土壙110（1/30）・出土遺物
（1/4・1/3・1/2）……1027
第442図　土壙111（1/30）……1028
第443図　土壙112（1/30）……1028
第444図　土壙113（1/30）……1029
第445図　土壙113出土遺物（1/4・1/3）
……1030
第446図　土壙114（1/30）・出土遺物
（1/4）……1030
第447図　土壙115（1/30）・出土遺物
（1/3・1/4）……1031
第448図　土壙116（1/30）・出土遺物
（1/4）……1032
第449図　土壙117（1/30）・出土遺物①
（1/4）……1032
第450図　土壙117出土遺物②（1/2）…1033
第451図　土壙118（1/30）・出土遺物
（1/3）……1033
第452図　土壙119出土遺物（1/4・1/3）…1033
第453図　土壙120（上）・121（下）（1/30）・
出土遺物（1/3・1/2）……1034
第454図　土壙122（1/30）・出土遺物
（1/4）……1035
第455図　溝9（1/40）……1035
第456図　溝9出土遺物①（1/4・1/3）…1036
第457図　溝9出土遺物②（1/4）……1037
第458図　溝10（1/30）・出土遺物
（1/3・1/2・1/4）……1038
第459図　溝10～20（1/120）……1039
第460図　溝13～16（1/30）……1040
第461図　溝15出土遺物（1/4・1/3）…1040
第462図　溝16～20（1/30）……1041
第463図　溝16出土遺物①（1/4・1/3）…1042
第464図　溝16出土遺物②（1/2・1/3・1/4）
……1043
第465図　溝17出土遺物（1/3）……1044
第466図　溝18出土遺物（1/4・1/3・1/2）
……1044

第467図　溝20出土遺物（1/3・1/4・1/2）……1045
第468図　溝21（1/30）……1045
第469図　溝22（1/30）……1045
第470図　溝23（1/30）……1046
第471図　溝27（1/30）・出土遺物（1/3）……1046
第472図　溝29（1/30）・出土遺物①（1/2・1/3）……1046
第473図　溝29出土遺物②（1/4）……1047
第474図　溝30（1/30）・出土遺物①（1/4・1/2）……1048
第475図　溝30出土遺物②（1/2）……1049
第476図　溝31（左）・溝32（右）（1/30）……1049
第477図　溝33（1/30）・出土遺物（1/4）……1050
第478図　溝34（1/30）……1050
第479図　溝35（1/30）……1050
第480図　溝36（1/30）・溝35・36出土遺物（1/4）……1051
第481図　溝37（1/30）……1052
第482図　溝38（左）・溝39（右）（1/30）……1052
第483図　溝40・41（1/30）……1052
第484図　溝42（1/30）……1052
第485図　溝40出土遺物（1/4）……1053
第486図　溝40出土遺物（1/4）……1054
第487図　包含層出土遺物①（1/3）……1055
第488図　包含層出土遺物②（1/3・1/2・1/4）……1056
第489図　包含層出土遺物③（1/3）……1057
第490図　包含層出土遺物④（1/2）……1058
第491図　包含層出土遺物⑤（1/2）……1059
第492図　住居変遷図①（1/1000）……1061
第493図　住居変遷図②（1/1000）……1063
第494図　中世溝全体図（1/1000）……1064
第495図　羽柴勢・毛利勢布陣図……1064
第496図　足守川矢部南向遺跡古墳時代前半の土器（1/12）……1069・1070

足守川矢部南向遺跡表目次

表1　器種別構成表……857
表2　甕分類表……857
表3　高杯分類表……863
表4　鉢分類表……866
表5　器種別構成表……936
表6　甕分類表……946
表7　高杯分類表……946
表8　鉢分類表……955

足守川矢部南向遺跡遺構・遺物一覧目次

1　竪穴住居……1097
2　掘立柱建物……1099
3　土壙……1100
4　石器・石製品……1105

5　金属器……1108
6　土製品……1111
7　玉類……1115

足守川矢部南向遺跡写真図版目次

写真図版101
1．遺跡遠景（南から）昭和56年撮影
2．遺跡遠景（北西から）昭和61年撮影
写真図版102
1．8A区調査開始（北西から）
2．3A区全景（北西から）
写真図版103
1．3B区全景（南東から）
2．5B区全景（南東から）
写真図版104
1．7B区全景（南東から）
2．8A区全景（南東から）
写真図版105
1．竪穴住居1（北東から）
2．竪穴住居2・3（南西から）
写真図版106
1．掘立柱建物1・2（南東から）
2．溝1（西から）
写真図版107
1．竪穴住居6（南から）
2．竪穴住居7・左上　竪穴住居30・右竪穴住居56（南東から）
写真図版108
1．竪穴住居9南部床面検出状況（南西から）
2．竪穴住居10（西から）
写真図版109
1．竪穴住居15（南から）
2．竪穴住居15柱穴遺物出土状況（南西から）
写真図版110
1．竪穴住居19（西から）
2．竪穴住居21（南から）
写真図版111
1．竪穴住居22遺物出土状況（東から）
2．竪穴住居22（東から）
写真図版112
1．竪穴住居23（北東から）
2．竪穴住居26（北東から）
写真図版113
1．土壙6（南西から）
2．土壙9（南から）
写真図版114
1．土壙14（北東から）
2．9B区土壙群（東から）
写真図版115
1．土壙48（西から）
2．土壙51（北西から）
写真図版116
1．竪穴住居30（南から）
2．竪穴住居32（北東から）
写真図版117
1．竪穴住居37上層遺物堆積状況（南西から）

2．竪穴住居39（南から）
写真図版118
1．竪穴住居40（南から）
2．竪穴住居44（東から）
写真図版119
1．竪穴住居46～48（北西から）
2．竪穴住居48小銅鐸出土状況（北から）
写真図版120
1．竪穴住居49（東から）
2．竪穴住居50（南東から）
写真図版121
1．土器棺１（西から）
2．土器棺２（北西から）
写真図版122
1．土壙59（南東から）
2．土壙62（南から）
写真図版123
1．土壙72遺物出土状況（南東から）
2．土壙72堆積状況（南東から）
写真図版124
1．土壙75（北から）
2．土壙80（東から）
写真図版125
1．土壙81（北西から）
2．土壙87（南西から）
写真図版126
1．土壙89（南から）
2．土壙90（北東から）
写真図版127
1．竪穴住居51（南から）
2．竪穴住居53（西から）
写真図版128
1．竪穴住居54（北西から）
2．竪穴住居55（南から）
写真図版129
1．竪穴住居57（東から）
2．竪穴住居57床面遺物出土状況（南東から）
写真図版130
1．竪穴住居58（南東から）
2．竪穴住居60（北東から）
写真図版131
1．竪穴住居62遺物堆積状況（東から）
2．竪穴住居62（西から）
写真図版132
1．竪穴住居63（東から）
2．竪穴住居66（北から）
写真図版133
1．土壙99（西から）
2．土壙105（北西から）
写真図版134
1．竪穴住居69（北東から）
2．竪穴住居76（南から）
写真図版135
1．掘立柱建物４～６および溝４（南東から）
2．掘立柱建物４・５（東から）
写真図版136
1．掘立柱建物６（南東から）
2．掘立柱建物８・９および溝５・６（北東から）
写真図版137
1．掘立柱建物８（北東から）
2．掘立柱建物９（北西から）

写真図版138
1．土壙109（南西から）
2．溝２（北から）
写真図版139
1．土壙墓５（南から）
2．土壙墓６（南東から）
写真図版140
1．土壙113（西から）
2．土壙115（東から）
写真図版141
1．土壙120・121（西から）
2．溝９（北東から）
写真図版142
1．６Ｂ区中世溝群（東から）
2．溝29・30（南から）
写真図版143
1．４Ｂ区住居群調査風景（南東から）
2．４Ｂ区竪穴住居62調査風景（北西から）
写真図版144
竪穴住居15・土壙６・土壙９・土壙10・土壙17出土遺物
写真図版145
土壙14・土壙27・土壙33出土遺物
写真図版146
土壙35・土壙38・竪穴住居30出土遺物①
写真図版147
竪穴住居30出土遺物②・竪穴住居48・土器棺１出土遺物
写真図版148
土壙72①出土遺物
写真図版149
土壙72②出土遺物
写真図版150
土壙72③出土遺物
写真図版151
土壙72④出土遺物
写真図版152
土壙72⑤出土遺物
写真図版153
土壙72⑥出土遺物
写真図版154
土壙72⑦出土遺物
写真図版115
土壙72⑧出土遺物
写真図版156
土壙72⑨出土遺物
写真図版157
土壙73・土壙76・土壙77・土壙80・土壙89・土壙91出土遺物
写真図版158
竪穴住居55出土遺物
写真図版159
竪穴住居上層①出土遺物
写真図版160
竪穴住居上層②出土遺物
写真図版161
竪穴住居上層③出土遺物
写真図版162
竪穴住居上層④出土遺物
写真図版163
竪穴住居上層⑤出土遺物
写真図版164
竪穴住居上層⑥出土遺物

写真図版165
竪穴住居上層⑦・土壙96・土壙100・土壙104出土遺物
写真図版166
竪穴住居70・竪穴住居72・溝２出土遺物
写真図版167
石器①
写真図版168
石器②
写真図版169
砥石・土製品①・玉類①
写真図版170
玉類②・土製品②
写真図版171
瓦・硯
写真図版172
金属器①
写真図版173
金属器②
写真図版174
金属器③

Ⅰ．遺跡の環境

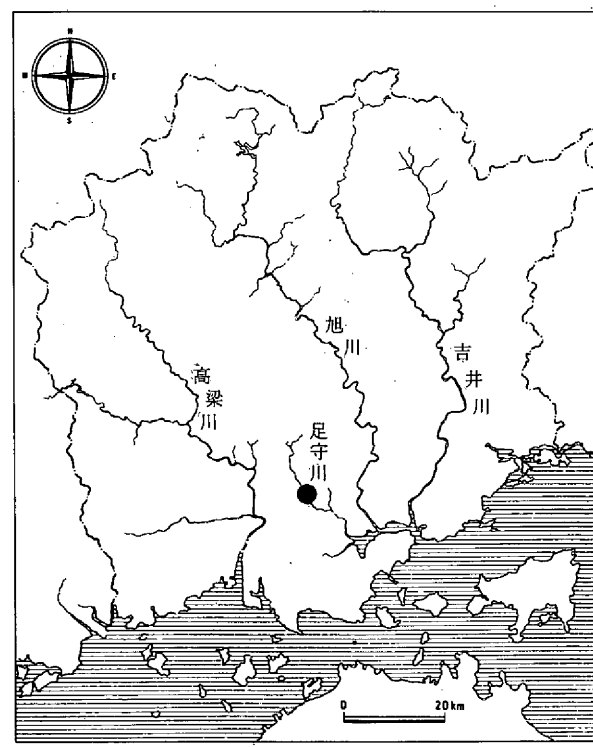
1　地理的環境

足守川遺跡群は、岡山県岡山市加茂と倉敷市矢部にまたがって所在する。

岡山県をほぼ南北に流走する高梁川・旭川・吉井川の県下三大河川は、いずれも中国山地に源を発し、吉備高原を南貫流ののち瀬戸内海へと流れを注ぐ、この過程において県南部地域においては支流の中小河川とともに肥沃な沖積平野を形成している。

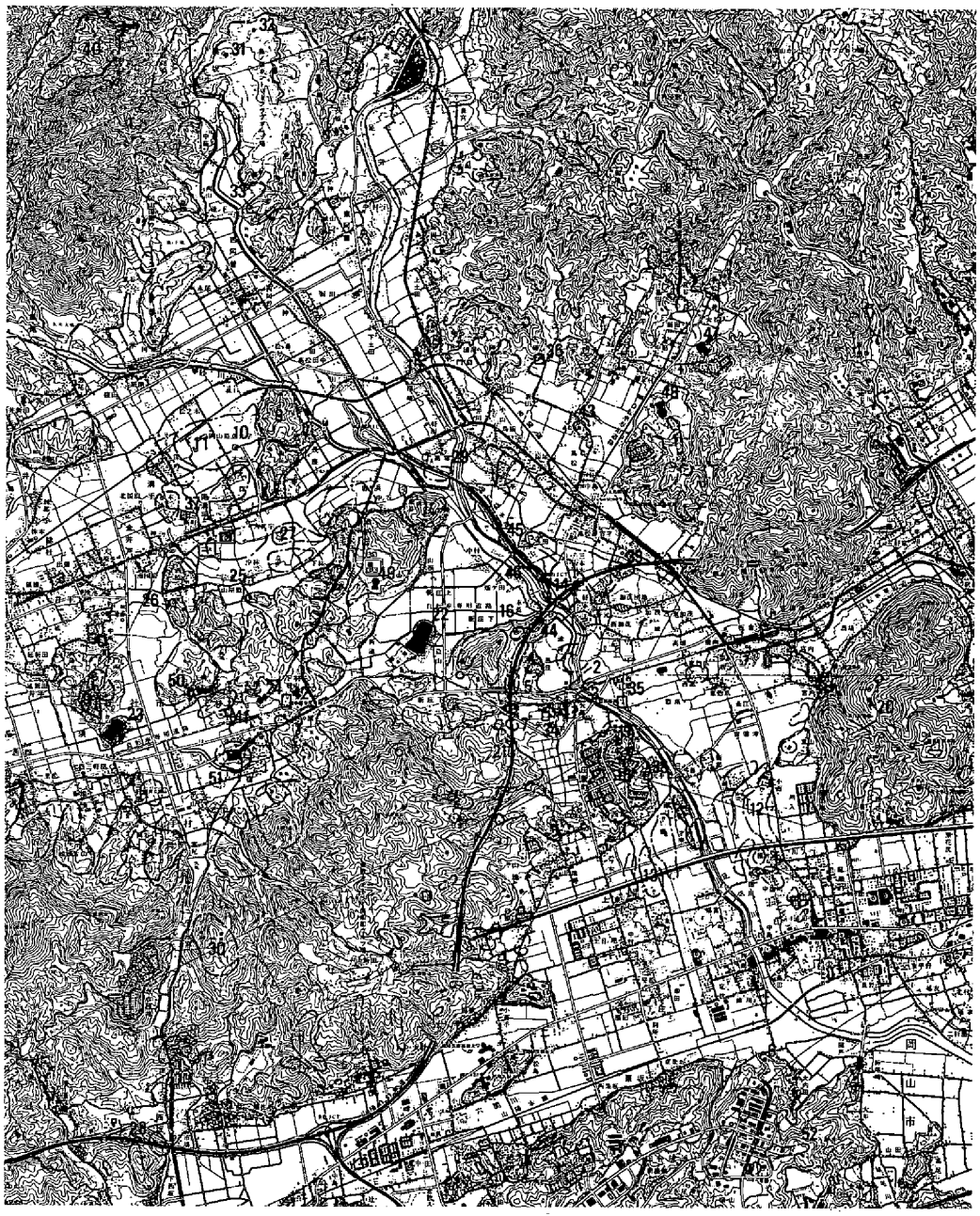
こうした岡山平野にあって特に西部に位置する高梁川と中央部の旭川とのほぼ中間地点である岡山市吉備津と倉敷市の東、倉敷市矢部から倉敷市上東にかけての足守川低地と、山手村・総社市地域を中心とした総社低地の一帯は、北背後には吉備高原へと連なる標高200～500m級の山塊がひかえ、一方平野部には沖積部と標高100m未満の低位丘陵が断続する瀬戸内丘陵の展開する独特な景観をみせる。

吉備高原に源を発する足守川は、流域毎に名称を変更する。源流としての広面川・日近川が岡山市大井で合流して足守川となり、やがて山間部をぬけ沖積平野にはいると前川、さらに血吸川・砂川等、鬼城山・登龍山山系に源を発する小河川と合流して流路域を拡大する。ところが足守川自体はその後、下流の岡山市平田において笹ケ瀬川と合流してからは笹ケ瀬川に吸収され、瀬戸内海にその流れを注ぐ。この間とくに沖積平野部にあっては、今日数多くの河道の痕跡が認められ、いかに河川氾濫が頻繁にあったかが窺われる。今日の足守川としての流路は、近世以降に定着したものである。



第１図　遺跡位置図（1/150,000）

足守川遺跡群は、西に日差山、東に中山等の山地・丘陵群に挟まれた



1．足守川加茂Ａ遺跡
2．足守川加茂Ｂ遺跡
3．足守川矢部南向遺跡
4．黒住遺跡
5．前池内遺跡
6．大内田貝塚
7．矢部奥田遺跡
8．関戸貝塚
9．長良山遺跡
10．窪木遺跡
11．南溝手遺跡
12．川入遺跡
13．上東遺跡
14．津寺遺跡
15．生石神社境内弥生墳丘墓
16．雲山鳥打弥生墳丘墓群
17．鯉食神社弥生墳丘墓
18．女男岩弥生墳丘墓
19．楯築弥生墳丘墓
20．中山茶臼山古墳
21．大塚古墳
22．造山古墳
23．作山古墳
24．こうもり塚古墳
25．亀山塚古墳
26．緑山８号墳
27．窪木薬師遺跡
28．宮生小学校裏山遺跡
29．高塚遺跡
30．狸岩山古墳群
31．千引かなくろ谷製鉄遺跡
32．千引遺跡
33．随庵古墳
34．矢部廃寺
35．惣爪廃寺
36．大崎廃寺
37．栢寺廃寺
38．日畑赤井廃寺
39．政所遺跡
40．鬼ノ城
41．備中国分寺
42．備中国分尼寺
43．高松城
44．甫崎天神山遺跡
45．津寺遺跡土壌山調査区
46．津寺遺跡丸田調査区
47．平山小造山古墳
48．佐古田堂山古墳
49．小造山古墳
50．江崎古墳
51．宿寺山古墳
52．奥坂遺跡
53．王墓山古墳

第２図　周辺遺跡分布図（1/74,000）

足守川低地の西側に位置する。足守川の河川改修工事に先立つ確認調査によって、その存在と範囲が確認された。上流から足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡である。

調査対象地区は、地形的にいずれも足守川左岸の東側から派生すると考えられる三つの微高地の西側端部にあたると考えられる。微高地間の距離は、それぞれに50～100mを測り、指呼の間に所在する。

2　歴史的環境

遺跡の所在する岡山市加茂及び倉敷市矢部の地域は、旧国名でいう備中国に相当し「吉備」の中国として、また考古学的にも弥生時代以降古代にかけての著名な遺跡が数多く密集する地域性から、「吉備」の中枢地域として広く一般にも認識されている。また、こうしたなか足守川の川底からは過去において多量の土器の出土が伝えられ、地元の古老からは当時の様子をきくことが出来る。現在、吉備考古館に「足守川川底出土」として展示されている土器がまさにその土器であろう。

以下、足守川遺跡群を取り巻く歴史的環境について、時代毎に概述してみよう。

本遺跡周辺において現在最古の遺跡としては、ナイフ形石器を出土させた総社市浅尾(あさお)遺跡[1]・宝福寺裏山(ほうふくじうらやま)遺跡[2]など旧石器時代遺跡の散在が確認され、ナイフ形石器の単独出土も最近の山陽自動車道建設に伴う調査によって黒住遺跡[3]・前池内遺跡[4]等で確認されている。

縄文時代は、これまで大内田貝塚・矢部貝塚・関戸貝塚の存在が知られるにすぎなかったが、最近の山陽自動車道建設に伴う調査により、矢部奥田(やべおくだ)遺跡[5]・黒住遺跡などで遺構の明瞭なものは確認できないが、縄文土器の出土が知られる。中でも矢部奥田遺跡からは山形の押型文土器が出土し、長良山遺跡[6]・真壁(まかべ)遺跡[7]とともに早期に位置づけられる。この他にも後期以降の遺跡の存在が判明しつつある。南溝手(みなみみぞて)遺跡出土の後期末の土器片にイネの籾痕跡の確認[8]は、当該地域はもとより日本の稲作起源を考えるうえでの重要な資料を提供したといえよう。

弥生時代は、前期の遺構・遺物が南溝手遺跡・真壁遺跡において、また遺物の検出が川入(かわいり)遺跡[9]・上東遺跡[10]等でなされており、当該期には既に安定した微高地での定住が認められる。特に南溝手遺跡においては、朝鮮半島との交流を窺わせる松菊里型の竪穴住居等の遺構も確認されることから、比較的早くから文化の基盤形成がなされていたことが知られる。

その後、中期以降は遺跡数が増加傾向をしめし、さらに集落規模の拡大が看取される。そのピークは後期段階にあったようで本遺跡群はもとより、津寺(つでら)遺跡・上東遺跡などは当該地域を代表する集落の一つといえる。こうした背景としては、岡山市の百間川遺跡群での集落の在り方にも窺われるように、沖積平野での可耕地の増加が要因の一つにあげられる。総社平野においても、真壁遺跡からは微高地端部において二十数状の灌漑用水路が検出されており、当該期

の水田経営の一端を物語る事象といえる。おそらくは今日みる水田景観とさほど変わらない、統括的な土地利用がなされていたものと考えられ、これに伴って集落規模も拡大傾向にあったものと推測される。そして、そこに首長の台頭があることは言うまでもないことである。この結果として出現するのが吉備の場合、墳丘墓と呼ばれる弥生時代の墓である。本遺跡をとりまく丘陵端部には、宮山(みややま)弥生墳墓群[11]・生石(おいし)神社境内弥生墳丘墓・雲山鳥打弥生墳丘墓群[12]・鯉喰(こいくい)神社弥生墳丘墓・女男岩弥生墳丘墓[13]等が所在し、特殊器台形土器・同壺形土器と相俟って特異な地域性を強調させる。そして、これら弥生墳丘墓の頂点に位置づけられるのが楯築(たてつき)弥生墳丘墓[14]といえる。

古墳時代になると前方後円墳を中心として各地で造墓活動が盛んとなるが、当該地域も例外ではない。周辺の山塊・丘陵には初現期の古墳が所在する。中山茶臼山古墳[15]・大坐古墳[16]には特殊器台形埴輪の存在が知られ、先進性の一端が窺われる。その後5世紀代の造山古墳（350m）・作山古墳（286m）等をはじめとする大古墳の在り方[17]には、畿内に拮抗もしくは凌駕した地域性が看取される。その後6世紀後半段階になると当該地域においても中小古墳の爆発的な増加が見られるが、こうした中こうもり塚古墳[18]・亀山塚古墳[19]・緑山8号墳[20]等全国的に見ても巨大な横穴式石室を内部主体とする古墳の当該地域への集中、さらには破壊されて墳丘は現存しないが主体部には浪形石の組合式石棺を有し四仏四獣鏡をはじめとする豊富な出土遺物で著名な王墓山古墳[21]の存在が知られる。一方、当該地域には造山古墳・作山古墳の被葬者の生前での権力を背景に新たな文化が流入する。5世紀前半頃にみられる須恵器生産・鉄器製作等の新技術であり、竪穴住居への竈等の採用に窺われる新たな生活様式の導入である。前者の須恵器は初期須恵器として陶質土器との識別に困難を伴うが、両者にはさらに後者の鉄器・竈等とも共通した在り方を示し、窪木薬師(くぼきやくし)遺跡[22]・菅生(すごう)小学校裏山遺跡[23]・高塚(たかつか)遺跡[24]等においてその存在を知ることが出来る。また、これと共通して興味深い遺跡に狸岩山古墳群の存在が挙げられる。狸岩山古墳群は、集石墳5基から構成された古墳群で、菅生小学校裏山遺跡から北接の標高200～300m級の連山を経て総社平野へとぬけるルート沿いに単独で所在する。現在のところ県下に類例はみられず、朝鮮半島との関連性が示唆される。さらに、古墳以外にも総社平野北接の山麓部においては、6世紀後半～7世紀にかけて千引(せんびき)かなくろ谷製鉄遺跡・千引遺跡等の製鉄遺跡の存在が最近の調査事例から知られる[25]。また、鉄鋌が出土した窪木薬師遺跡、5世紀後半の鍛冶道具の副葬で知られる随庵(ずいあん)古墳[26]の存在等からも、5世紀前半以降中・近世に至るまで継続した吉備の基幹産業の足跡を当該地方において窺い知ることができる。

その後律令体制下になると、首長層の地域支配の手段としての対象は専ら寺院の建立に力を注ぐようになる。これを傍証するかのように各地に寺院跡が数多く所在する。また当該地域には旧山陽道の存在が想定され、これに近接して「津峴駅家」とされる矢部廃寺、さらには惣爪

廃寺が所在する。これを含め、当該平野には、現在７廃寺の存在が知られる。中でも大崎廃寺・栢寺廃寺・日畑赤井廃寺等は、素弁瓦を伴い白鳳時代に位置づけられる[27]。また、最近の調査事例によると津寺遺跡[28]・政所遺跡[29]・足守川矢部南向遺跡[30]・南溝手遺跡・川入遺跡[31]等から、相次いで瓦の出土と複数の掘立柱建物の存在が知られる。中でも前二者の津寺遺跡・政所遺跡から出土した飛鳥瓦は、奈良県奥山久米寺の軒丸瓦との同笵関係が注目される。また津寺遺跡からは築地溝に区画された掘立柱建物群とこれら施設を水害から守るための護岸施設の存在が確認されており、施設の性格はもとより当時の土木技術の水準の高さを垣間見ることができた。また背後の標高約400mの鬼ノ城山山頂には朝鮮式山城として位置づけられる鬼ノ城[32]が所在し、一層平野部での一連の寺院跡・国府・国分寺・国分尼寺等と相俟って当該地域の重要性を浮き彫りにする。

なお、総社平野に所在する備中国府・国分寺・国分尼寺のうち国府については想定地域内での確認調査が実施されたものの、現在までのところ場所を特定させるだけの遺構・遺物は確認されていない。

中世当該地方は、主に南北朝時代を背景とする福山城合戦と戦国時代を背景とする高松城の水攻めに関連して歴史上しばしば登場する。本遺跡の周辺では特に後者の高松城の水攻めに関連した城跡が少なくない。山陽自動車道建設に伴って調査された甫崎天神山遺跡[33]は、水攻めに際して毛利方の布陣した「天神山城」として史料中にも見られる。なお、山陽自動車道建設に伴う調査によって、津寺遺跡土筆山調査区[34]・同丸田調査区[35]からは集落並びに鍛冶工人の墓の存在が確認されている。（島崎　東）

註

(1) 鎌木義昌・小林博昭「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編さん委員会　1987年
(2) 鎌木義昌・小林博昭「宝福寺裏山遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編さん委員会　1987年
(3) 正岡睦夫ほか「黒住遺跡・雲山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　岡山県教育委員会　1994年
(4) 中野雅美ほか「前池内遺跡」ほか『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　岡山県教育委員会　1994年
(5) 高畑知功ほか「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　岡山県教育委員会　1993年
(6) 村上幸雄「長良山遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編さん委員会　1987年
(7) 高田明人「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編さん委員会　1987年
(8) 平井泰男ほか「岡山県立大学建設に伴う窪木遺跡・南溝手遺跡の調査終了」『所報吉備』第14号　岡山県古代吉備文化財センター　1993年
(9) 正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第２集　岡山県教育委員会　1974年
(10) 伊藤　晃ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第２集　岡山県教育委員会　1974年
(11) 高橋　護「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編　総社市史編さん委員会　1974年
(12) 近藤義郎「雲山鳥打弥生墳丘墓群」『岡山県史』考古資料　岡山県史編纂委員会　1986年

(13) 間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10集　倉敷考古館研究集報　1974年
(14) 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会　1992年
(15) 近藤義郎「最古の前方後円墳」『吉備の考古学』福武書店　1987年
(16) 春成秀爾ほか「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集　国立歴史民俗博物館　1984年
(17) 葛原克人「大古墳」『吉備の考古学』福武書店　1987年
(18) a．近藤義郎「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編　総社市史編さん委員会　1987年
b．葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35　岡山県教育委員会　1979年
(19) 現在墳丘および石室は土取りによりほとんど破壊されている。破壊前の状況については、岡山大学考古学研究部『三須丘陵遺跡分布調査報告』1976年によると、墳丘は径36mで横穴式石室の玄室長約７m・幅2.5mを測る古墳であることが知られる。
(20) 近藤義郎・北條芳隆『緑山古墳群』総社市文化振興財団　1987年
(21) 山本雅靖・間壁忠彦「王墓山古墳（赤井西古墳群）」『倉敷市考古館研究集報』第10号　倉敷考古館　1974年
(22) 島崎　東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　岡山県教育委員会　1993年
(23) 中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81　岡山県教育委員会　1993年
(24) 浅倉秀昭ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会　1990年
(25) 武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』１　総社市教育委員会　1991年
(26) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子『総社市随庵古墳』　総社市教育委員会　1965年
(27) 岡本寛久「初期寺院と瓦」『吉備の考古学』福武書店　1987年
(28) 高畑知功ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19　岡山県教育委員会　1989年
(29) 松本和男ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』21　岡山県教育委員会　1991年
(30) 江見正己ほか「足守川河川改修工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19　岡山県教育委員会　1989年
(31) 正岡睦夫ほか「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第２集　岡山県教育委員会　1974年
(32) 坪井清足ほか『鬼ノ城』　鬼ノ城学術調査委員会　1980年
(33) 柴田英樹ほか「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　岡山県教育委員会　1994年
(34) 松本和男ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　岡山県教育委員会　1994年
(35) 岡田　博ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　岡山県教育委員会　1994年

Ⅱ．調 査 の 経 緯

1 発掘調査の契機および経過

1．調査委員会調査に至るまでの経緯

足守川は、吉備高原の南端で、その源を発する二級河川笹ケ瀬川の支流である。岡山県が管理する河川管理上の始点は、左岸が岡山市川原字黒谷1997番地先であり、右岸は岡山市東山内字中タキ1776番地の１地先となっている。いずれにしろ、足守川は上流部の黒谷ダムをへて、中小の枝河川を集めて南下し、岡山市足守下では一部の区間で総社市の境界を流れ、また、岡山市高塚付近では前川、砂川、血吸川を集めて水量を増し、当該遺跡の所在する倉敷市矢部から岡山市川入近くまでは倉敷市域を流れ、さらに、流路を東南にとって岡山市今保で笹ケ瀬川に合流する流程24.4kmの中小河川である。笹ケ瀬川本流となった流路は、ゆるやかに蛇行しながら再び南流して、岡山市浦安地先で児島湖に注ぎ込むのである。足守川は、また、主として岡山県南部の風化のいちじるしい花崗岩地帯からなる山々の谷頭を起点とし、加えて流程の短い中小河川を集めて平野部を流れているため、河床は常に高まり岡山平野でも著名な天井川を形成している。このため1582年（天正10）の羽柴秀吉の備中高松城の水攻めを例に出すまでもなく、上流での雨は短時間で水かさを増し、流域住民の生活をおびやかしてきたのである。このため足守川の河川改修工事は長年の課題であった。

昭和54年12月にいたり、当時、岡山県教育委員会文化課文化財二係のデスクに席をおいていた松本和男の所に、都窪郡山手村在住の臼田某氏から倉敷市矢部の足守川工事現場で、土器片らしいものを採集しているとの知らせを受けた。しかし、年末、年始のあわただしい中で係としても適切な対応がとれないままになっていた。

昭和55年１月21日に倉敷市教育委員会から、足守川の改修工事中である倉敷市矢部地内において、大量の土器片が出土したとの報告が岡山県教育委員会にあった。このため岡山県教育委員会文化課・倉敷市教育委員会文化課ならびに工事主体者である倉敷地方振興局の担当職員が現地をおとずれ、遺跡の実態を調査した。現地は旧矢部橋の左岸下流部にあたる箇所で、工事は現存する堤防の外側に新たに築堤する護岸部と、農業用水路の付け替え工事を起工していたのである。遺跡はこれら工事中に発見された、新規の遺跡であることが判明した。しかも、土層断面の観察による土器包含状況は、弥生後期を中心とした時期の密度の濃い包含層であることが予測されたのみならず、付近は極めて安定した微高地が拡がっていることも知られた。このため、遺跡保存の立場から工事との調整をめぐって、三者協議がもたれた。その結果、築堤

護岸工事区（240㎡）と県道改良工事高松・下庄線の左岸橋脚台区（120㎡）、ならびに用水路の付替え区（110㎡）については、昭和55年６月の出水期までに発掘調査を終了し、しかも工事を完了しなければならない、という厳しい条件であったが、調査を実施することとした。

そこで急遽、「足守川河川改修等建設工事に伴う文化財調査委員会」（資料１）を組織し、倉敷地方振興局と委託契約を締結の後、知事名による「遺跡の工事中発見届」の提出をまって発掘調査を実施することとした。

この第１次調査ともいうべき発掘調査の具体的事項は次のとおりである。

１．遺跡名　矢部南向遺跡

２．調査担当者　松本和男

３．調査期間　昭和55年２月４日から同年３月22日

２．第２次調査

第１次調査は、当初左岸橋脚台調査区、築堤護岸調査区、農業用水路調査区の三か所を昭和55年３月末までに終了させる予定で、まず、左岸橋脚台区から調査実施に入った。ところが遺跡は、今まで岡山県教育委員会の調査では経験したことがないほど、遺構の密度が濃い上、切り合い関係の複雑さもからんで、調査は予想以上に遅れた。昭和55年３月22日までに調査が終了できたのは左岸橋脚台調査区のみであった。

そこで、年度も押しせまった昭和55年３月28日に、再度、倉敷地方振興局と協議し、残りの２調査区は次年度の４月当初から早急に調査することで、双方了解した。特に、工事主体者である倉敷地方振興局としては、築堤護岸の工期

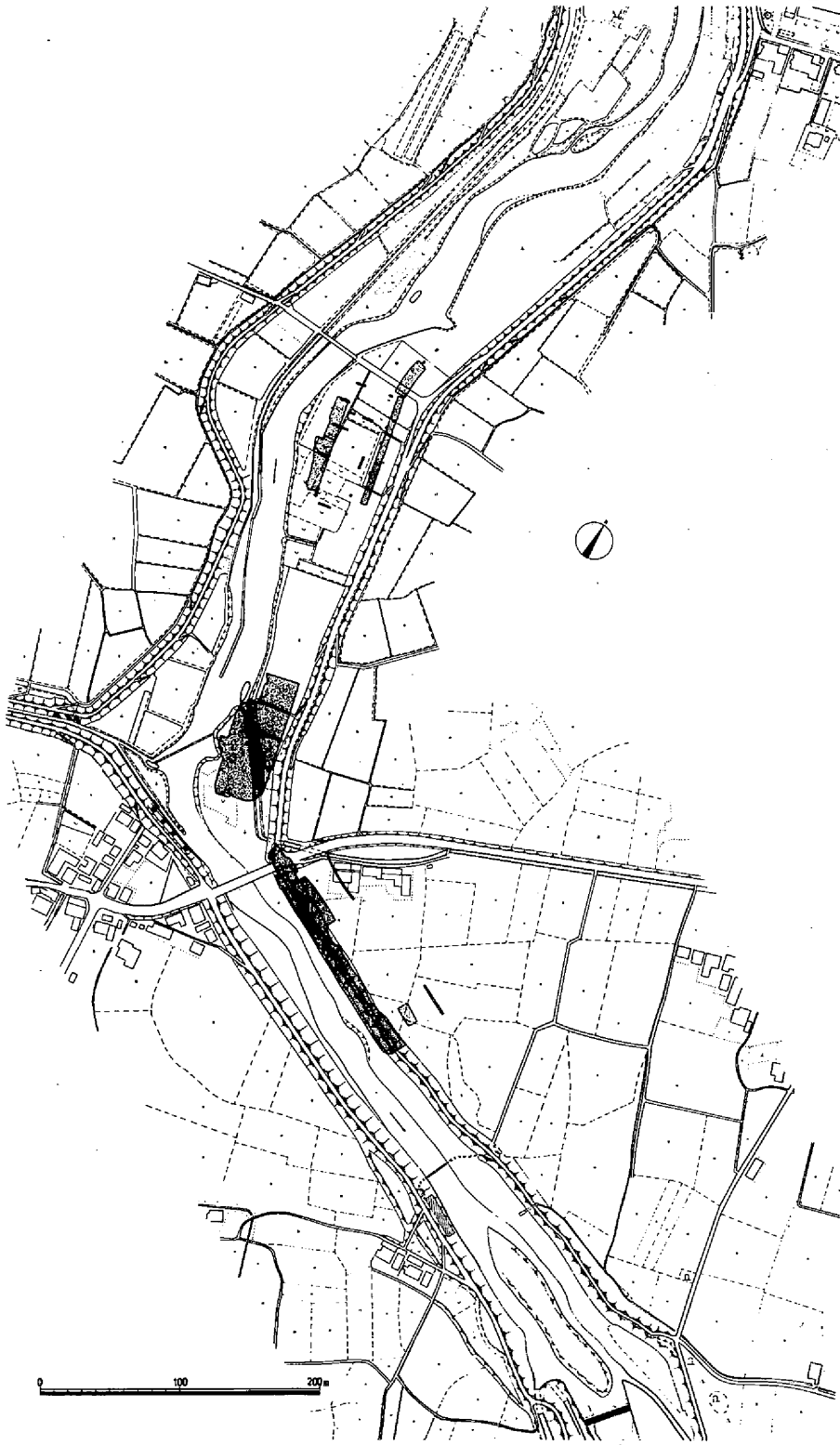
資料１　足守川河川改修等建設工事に伴う文化財調査委員会

役職名	氏名	所属
委員長	近藤　信司	岡山県教育庁文化課長
副委員長	秋岡　久之	倉敷市教育委員会文化課長
委員	吉光　一修	岡山県教育庁文化課長補佐
（調査員）	谷田　正章	倉敷市教育委員会文化課長補佐
	光吉　勝彦	岡山県教育庁文化課文化財主幹
	河本　清	〃　文化財二係長
	松本　和男	〃　文化財保護主事
	柳瀬　昭彦	〃　〃
	平井　勝	〃　〃
	岡本　寛久	〃　〃
監事	武田　俊宏	倉敷市教育委員会文化課文化財係長
	古屋野頌司	岡山県倉敷地方振興局建設部工務第一課第二係長

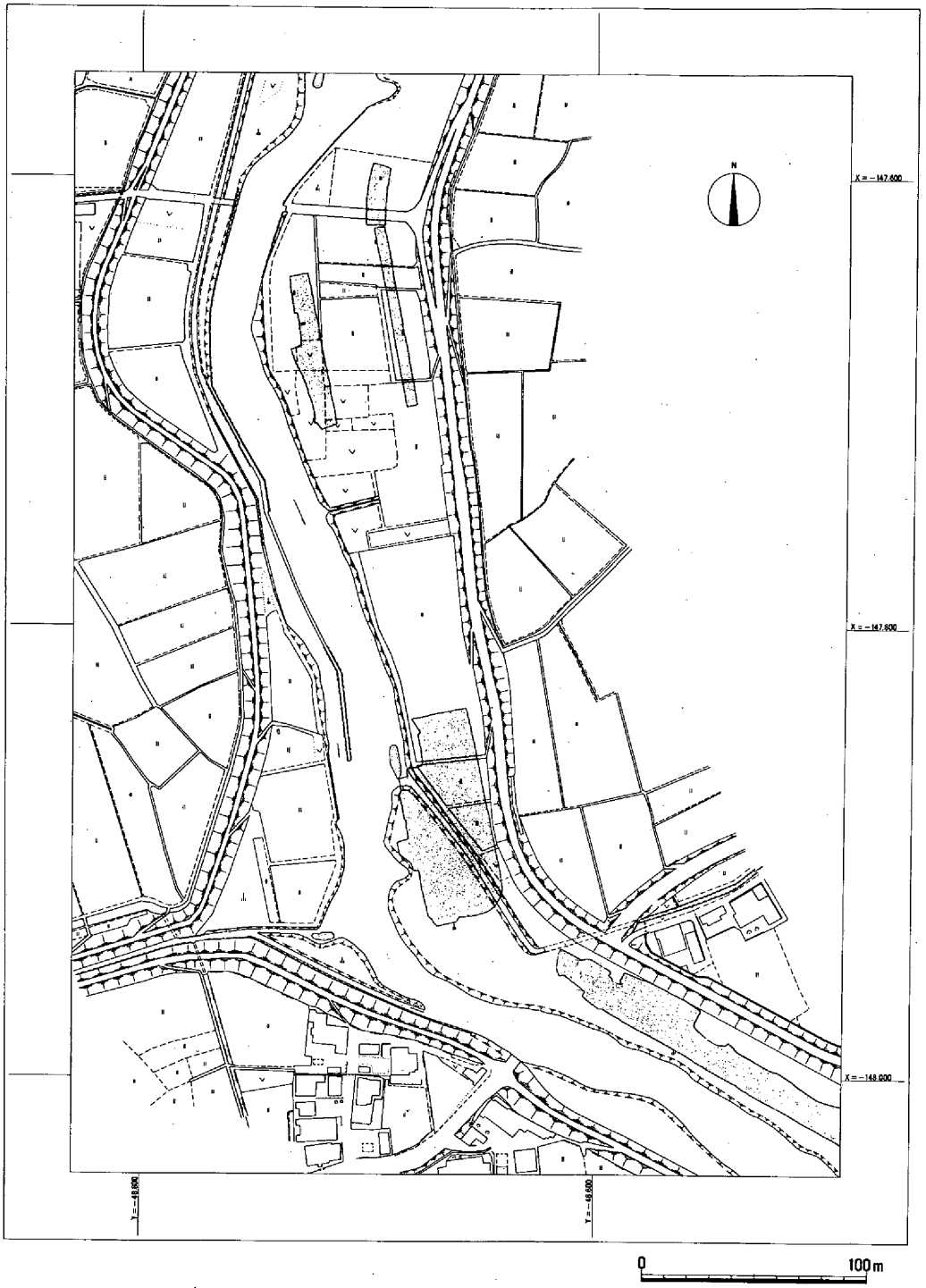
事務局

役職名	氏名	所属
事務局長	吉光　一修	岡山県教育庁文化課長補佐
事務局次長	西田　聰一	岡山県教育庁文化課主幹
事務局員	田中　建治 （林　正人）	岡山県教育庁文化課主任

第３図　足守川流域自然地形図（1/30,000）



第4図　調査区位置図（1/5,000）



第５図　調査遺跡位置図（1/3,000）

は最低１ケ月間が必要とされるので、６月の出水期から逆算すると、当然のこととはいえ４月末には、調査を完了してほしいとの強い要望がだされた。このため文化課は新年度体制となる４月から調査員を増員して２名とし、昭和55年４月１日から現地調査を再開した。この期間の調査を第２次調査とよぶことにする。

第２次調査の築堤護岸調査区（240㎡）は、またしても予想に反して、遺構密度の濃さや、大量の土器からなる包含層は、先の左岸橋脚台調査区をはるかにしのぐものであった。その上、想像を越える出水等によって作業能力は著しく低下したが、調査担当者松本和男・江見正己両名の５月連休返上の調査により、ようやく連休あけに完了することができた。また、農業用水路調査区（110㎡）は調査範囲が狭いため土層断面の観察が中心となった。こうして矢部南向遺跡の緊急対応の発掘調査は昭和55年５月初旬で完了させた。さらにコンテナ箱200箱を超えた出土遺物の洗浄は、９月30日に終了した。

３．全面調査に至る経緯

昭和56年にいたり、河川改修工事に伴って新たに計画されている橋梁部について、急遽確認調査が要請され、同年８月２、３日に江見正己によって実施した。調査箇所は上流部から甫崎橋・黒住橋・矢部橋の三橋の予定地付近の調査であった。さらに、再び工事立会中に発見された、のちの足守川加茂Ａ遺跡となる地区の左岸護岸工事区内（幅３ｍ、長さ50ｍ）の緊急調査を昭和57年１月７日から同３月末まで松本が実施した。

合わせて、県道改良工事高松・下庄線の右岸部や県道改良工事清音・真金線の新矢部橋の橋脚部３か所、左岸アバット部の確認調査や立会調査を昭和56年12月に松本和男・平井勝が行うなど、継続的に工事との調整を計りながら対応してきた。しかしながら、河川課との協議の中で当該遺跡の所在する倉敷市矢部付近は足守川流域の中でも河川幅は最狭少部であり、改修工事としても大規模な工事となる上、早急に改修する必要があることが指摘されてきた。これら工事との調整を計るには河川敷内の確認調査がまず急がれた。

そこで昭和57年３月25日、26日に岡山市加茂から倉敷市矢部に至る河川敷内の左岸に中洲状に残されている、南北に長い原野の確認調査を柳瀬昭彦によって実施した。その結果、上流部から岡山市足守川加茂Ａ遺跡3,500㎡以上、同足守川加茂Ｂ遺跡2,200㎡、倉敷市足守川矢部南向遺跡3,300㎡など、総面積9,000㎡以上の遺跡が河川敷内に残されていることが判明した。

これら一連の緊急調査や範囲確認調査の結果をもとに、岡山県土木部河川課と総括的な協議を行い、これらの遺跡については、今後継続して専任する調査体制で、全面発掘調査を実施していくこととした。そして、昭和57年８月より調査員２名により足守川加茂Ｂ遺跡から全面発掘調査を開始したのである。

（河本　清）

2　調査体制

1．足守川河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

近藤義郎（岡山大学名誉教授）
（岡山県文化財保護審議会委員）
水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
村上幸雄（総社市教育委員会）
間壁忠彦（倉敷考古館）
小林博昭（岡山理科大学教授）
鎌木義昌（岡山理科大学教授）
（岡山県文化財保護審議会委員）
稲田孝司（岡山大学教授）
出宮徳尚（岡山市教育委員会）
西川　宏（山陽女子高校）

2．発掘調査

昭和54年度（1979年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	近藤信司	課長補佐	吉光一修
文化財主幹	光吉勝彦	文化財二係長	河本　清
文化財保護主事	松本和男（調査担当）	文化財保護主事	柳瀬昭彦
文化財保護主事	平井　勝	文化財保護主事	岡本寛久

昭和55年度（1980年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	近藤信司	課長補佐	吉光一修
文化財二係長	河本　清	主　　任	田中建治
文化財保護主事	松本和男（調査担当）	文化財保護主事	柳瀬昭彦
文化財保護主事	平井　勝	文化財保護主事	江見正己

昭和56年度（1981年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	早田憲治	課長代理	吉光一修
埋蔵文化財係長	河本　清	主　　任	田中建治
文化財保護主査	松本和男（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦
文化財保護主事	平井　勝	文化財保護主事	江見正己

昭和57年度（1982年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
埋蔵文化財係長	河本　清	主　　任	田中建治
主　　任	遠藤勇次	文化財保護主査	松本和男（調査担当）
文化財保護主査	岡田　博	文化財保護主事	江見正己
文化財保護主事	中野雅美		

岡山県教育庁文化課分室

文化財主幹	高原健郎	主　　事	石井　茂
文化財保護主査	山磨康平（調査担当）	文化財保護主事	平井泰男（調査担当）
文化財保護主事	光永真一（調査担当）		

昭和58年度（1983年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
課長代理	吉本唯弘	課長補佐（埋蔵文化財係長）	河本　清
主　　任	遠藤勇次	文化財保護主査	松本和男
文化財保護主査	岡田　博	文化財保護主事	浅倉秀昭
文化財保護主事	福田正継	文化財保護主事	中野雅美

岡山県教育庁文化課分室

文化財主幹	高原健郎	主　　事	楢原充二
文化財保護主査	山磨康平（調査担当）	文化財保護主事	光永真一（調査担当）

昭和59年度（1984年４月１日～10月31日）

岡山県教育庁文化課

課　　長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	課長補佐（埋蔵文化財二係長）	河本　清
主　　任	遠藤勇次		
文化財保護主査	松本和男	文化財保護主査	岡田　博
文化財保護主査	高畑知功	文化財保護主査	二宮治夫
文化財保護主事	光永真一		

岡山県教育庁文化課分室

参　事	橋本泰夫	文化財主幹	佐々木清
主　任	古瀬　宏	主　事	楢原充二
文化財保護主査	山磨康平（調査担当）	文化財保護主事	島崎　東（調査担当）

昭和59年度（1984年11月1日～1985年3月31日）

岡山県教育庁文化課

課　長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	課長補佐（埋蔵文化財係長）	河本　清
主　任	遠藤勇次（兼）	文化財保護主査	岡田　博
文化財保護主事	光永真一		

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	松元昭憲（兼）	次　長	橋本泰夫
総務課長	佐々木清	主　任	遠藤勇次
主　任	古瀬　宏	主　事	楢原充二
調査課長	河本　清（兼）	文化財保護主査	山磨康平（調査担当）
文化財保護主事	島崎　東（調査担当）		

昭和60年度（1985年4月1日～6月30日）

岡山県教育庁文化課

課　長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	埋蔵文化財係長	正岡睦夫
主　任	遠藤勇次（兼）	文化財保護主査	松本和男（兼）
文化財保護主事	光永真一		

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	松元昭憲（兼）	次　長	橋本泰夫
総務課長	佐々木清	主　任	遠藤勇次
主　任	花本静夫	主　事	楢原充二
調査課長	河本　清	文化財保護主査	山磨康平（調査担当）
文化財保護主事	島崎　東（調査担当）		

昭和60年度（1985年７月１日～1986年３月31日）

岡山県教育庁文化課

課　　長	松元昭憲（～12月15日）		
	高橋誠記（12月16日～）		
課長代理	逸見英邦	課長代理	吉本唯弘
埋蔵文化財係長	正岡睦夫	主　　査	遠藤勇次（兼）
文化財保護主査	松本和男（兼）	文化財保護主事	光永真一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	松元昭憲（兼）（～12月15日）		
	高橋誠記（兼）（12月16日～）		
次　　長	橋本泰夫	総務課長	佐々木清
主　　査	遠藤勇次	主　　任	花本静夫
主　　事	楢原充二		
調査課長	河本　清	文化財保護主査	山磨康平（調査担当）
文化財保護主事	島崎　東（調査担当）		

昭和61年度（1986年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	高橋誠記	課長代理	逸見英邦
埋蔵文化財係長	正岡睦夫	主　　任	二宮秀博
文化財保護主査	山磨康平（兼）	文化財保護主事	光永真一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	橋本泰夫	総務課長	佐々木清
主　　査	遠藤勇次	主　　任	花本静夫
調査課長	河本　清	文化財保護主任	江見正己（調査担当）
文化財保護主事	島崎　東（調査担当）		

昭和62年度（1987年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	高橋誠記（～12月15日）		
	吉尾啓介（12月16日～）		
課長代理	河野　衛	課長補佐 （埋蔵文化財係長）	伊藤　晃

主　　査　　藤川洋二　　文化財保護主事　　光永真一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　橋本泰夫　　総務課長　　佐々木清

総務主幹　　藤本信康　　主　　任　　花本静夫

主　　任　　岡田祥司

調査第一課長　　河本　清　　文化財保護主査　　井上　弘
（調査第一課第一係長）

文化財保護主任　　江見正己（調査担当）　　文化財保護主事　　島崎　東（調査担当）

昭和63年度（1988年）

岡山県教育庁文化課

課　　長　　吉尾啓介　　課長代理　　河野　衛

課長補佐　　伊藤　晃　　主　　査　　藤川洋二
（埋蔵文化財係長）

文化財保護主事　　宇垣匡雅

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　水田　稔　　総務課長　　佐々木清

総務主幹　　藤本信康　　主　　任　　花本静夫

主　　任　　岡田祥司　　主　　任　　片山淳司

調査第一課長　　河本　清　　課長補佐　　井上　弘
（調査第一課第一係長）

文化財保護主任　　江見正己（調査担当）　　文化財保護主事　　島崎　東（調査担当）

3．報告書作成

平成３年度（1991年）

岡山県教育庁文化課

課　　長　　鬼澤佳弘　　課長代理　　大橋義則

課長補佐　　柳瀬昭彦　　主　　査　　時長　勇
（埋蔵文化財係長）

文化財保護主事　　宇垣匡雅

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　横山常實　　次　　長　　河本　清

総務課長	藤本信康	課長補佐（総務係長）	小西親男
主　査	平松郁男（～1月）	主　査	石井　茂（2月～）
主　任	坂本英幸		
調査第一課長	葛原克人	調査第一課第二係長	山磨康平（整理担当）
文化財保護主査	江見正己（整理担当）		

平成4年度（1992年）

岡山県教育庁文化課

課　長	渡辺淳平	課長代理	大橋義則
課長補佐（埋蔵文化財係長）	柳瀬昭彦	主　査	時長　勇
文化財保護主事	宇垣匡雅		

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山常實	次　長	河本　清
総務課長	藤本信康	課長補佐（総務係長）	小西親男
主　査	石井　茂	主　任	坂本英幸
文化財保護参事（調査第一課長）	葛原克人	文化財保護主幹	松本和男（整理担当）
課長補佐（調査第一課第一係長）	高畑知功	文化財保護主査	江見正己（整理担当）
文化財保護主任	光永真一（整理担当）		

平成5年度（1993年）

岡山県教育庁文化課

課　長	渡辺淳平	課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑知功	主　査	時長　勇
文化財保護主事	亀山行雄		

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山常實	次　長	葛原克人

総務課長	北原　求	課長補佐 （総務係長）	小西親男
主　　査	石井　茂	主　　査	石井善晴
主　　任	三宅秀吉		
調査第一課長	正岡睦夫	課長補佐 （調査第一課第一係長）	松本和男（整理担当）
課長補佐 （調査第一課第二係長）	山磨康平	文化財保護主査	島崎　東（整理担当）
文化財保護主査	光永真一（整理担当）		

平成６年度（1994年）

岡山県教育庁文化課

課　　長	大場　淳	課長代理	松井新一
課長補佐 （埋蔵文化財係長）	高畑知功	主　　任	若林一憲
文化財保護主事	柴田英樹		

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	河本　清	次　　長	葛原克人
総務課長	丸尾洋幸	課長補佐 （総務係長）	杉田卓美
主　　査	石井善晴	主　　任	三宅秀吉
調査第一課長	正岡睦夫	課長補佐 （調査第一課第一係長）	松本和男
文化財保護主査	島崎　東（整理担当）	文化財保護主査	光永真一（整理担当）

発掘作業

森田精一　則武　茂　和田照忠　畑中三郎　後谷幸生　土師　稔　赤木賢三　古谷中雄
大森政夫　多田義男　安田　勇　渡辺　昇　安藤満孝　高坂義視　岩田　稔　岩田栄市
高谷宏三　古谷美津子　川上静恵　林　末子　岸　美弥子　岸　紀子　坪井俊子
坪井　栄　引田　都　栗坂満須子　近藤英子　小西洋子　和田美保子　栗原　栄
小郷利幸（現 津山市教育委員会）　武田恭彰（現 総社市教育委員会）
馬場昌一（現 邑久町教育委員会）

整理事務

横田宗子　光森貞子　坂本洋子

整理作業（現地）

別所昌美　多田昌代　多田英子　大山幸子　林　文子　横田光子　肥田妙子　石井孝子
森田洋子　林　康子　多田晴美　内藤益子

遺物実測（現地）

埴岡美矢　安井友恵　西本尚美　阿部典子

整理作業（センター）

横溝節子　大西信子　山形五美　森田洋子　芳谷綾子　小西洋子　坪井婦美

鉄器処理

佐久山史子　斎藤直子

遺物実測（センター）

平井典子　松井政子　埴岡美矢　安井友恵　山本千恵子　西本尚美　三垣佐知子
阿部典子　高田師子　峠田秀子　吉田邦子　松尾和子　伊原史子　藤原恵美　村岡雅子

トレース

田中淑子　田中毎美　永田知奈美　中野晴美

遺物写真撮影　　**清書他**

米戸典子　　谷井美幸　久山　泉　守安淑子　森安雅子　犬飼祐紀子

なお、対策委員会の委員の方々以外にも発掘調査期間中岡山県内外の数多くの研究者の方々から大変貴重な御指導を得ることができましたが、特に小田富士雄　武末純一　赤塚次郎の三氏からは出土遺物について有益な御指導・御教示を得ることができました。また調査遂行については、楠強　森田精一の各氏からは多大な御協力を得ることができました。記して厚く感謝の意を表します。

3　調査日誌抄

昭和55年１月　倉敷市矢部で足守川河川改修工事中、遺跡確認。
２月　足守川矢部南向遺跡第１次調査開始。
３月　足守川矢部南向遺跡第１次調査終了。
４月　足守川矢部南向遺跡第２次調査開始。
５月　足守川矢部南向遺跡第２次調査終了。
昭和56年10月　足守川加茂Ｂ遺跡橋脚部及び範囲確認調査開始。
昭和57年１月　足守川加茂Ａ遺跡第１次調査開始。
３月　足守川加茂Ａ遺跡第１次調査終了。
３月　足守川加茂Ｂ遺跡橋脚部及び範囲確認調査終了。
８月　足守川加茂Ｂ遺跡調査開始。
昭和58年６月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
足守川の増水により調査区冠水。
９月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
足守川の増水により調査区冠水。
12月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
昭和59年３月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
６月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
９Ｂ調査区全体写真撮影。
11月　竪穴住居88内より鏡（蕨手状渦文鏡）出土。
昭和60年２月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
３月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
４月　足守川の増水により調査区冠水。
５月　足守川加茂Ａ遺跡・足守川矢部南向遺跡範囲確認調査開始。
６月　足守川加茂Ａ遺跡・足守川矢部南向遺跡範囲確認調査終了。
７月　足守川加茂Ｂ遺跡対策委員会開催。
８月　足守川加茂Ｂ遺跡調査終了。
９月　足守川加茂Ａ遺跡第２次調査（護岸調査区）開始。
足守川加茂Ａ遺跡第２次調査（低水路調査区）開始。
10月　足守川加茂Ａ遺跡対策委員会開催。
足守川加茂Ａ遺跡第２次調査（低水路調査区）終了。

昭和61年１月　足守川加茂Ａ遺跡対策委員会開催。
　　足守川加茂Ａ遺跡第２次調査（護岸調査区）終了。
４月　足守川矢部南向遺跡第３次調査開始。
７月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
10月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
昭和62年３月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
７月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
９月　竪穴住居48床面直下より小銅鐸出土。
昭和63年２月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
３月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
５月　調査区全体写真撮影。
６月　足守川増水により調査区冠水。
８月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
10月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
11月　調査区全体写真撮影。
12月　足守川矢部南向遺跡対策委員会開催。
　　足守川矢部南向遺跡第３次調査終了。

Ⅲ. 調 査 の 概 要

1　調査の方法と概要

ここで報告する足守川加茂Ａ遺跡、足守川加茂Ｂ遺跡、足守川矢部南向遺跡の３遺跡は、調査の契機が河川改修とあって、調査の対象地域はいずれも左右の土手に挟まれた河川敷内に所在していた。したがって、調査方法も通常の沖積平野の場合と異なり、絶えず足守川の増水による調査区の冠水、さらには調査途中での地下からの湧水等不測の事態を想定しての調査方法を取らざるを得なかった。また、調査区内出土遺構の実測に際しての調査基本グリッドの設定についても、各調査区毎の工事工程・地形的な相違等から、国土座標軸に則った設定によらない、その場の状況に応じた方法を取らざるを得なかった。したがって、第４図に示した各調査遺跡の位置図については、後日国土座標のなかに各調査遺跡の位置と範囲を入れたもので、若干の誤差は存在する。

足守川加茂Ｂ遺跡は、北に足守川加茂Ａ遺跡、南に足守川矢部南向遺跡の立地する二つの微高地に挟まれた微高地を立地基盤とする。調査の対象となったのは、左右の土手に挟まれた舌状を呈する約2,800㎡を測る、僅かに中洲状に残された微高地であった。

調査は、工事工程との関係から先ず樋門及び護岸予定地区に想定される上流部から着手した。しかし、調査工程については、当初調査区を斜めに分断する農業用水を切れない事情等から、また度重なる増水による調査区の冠水に備えての調査区範囲設定の制限等により、調査区の全面調査には着手出来ず、変則的な調査を余儀無くされた。

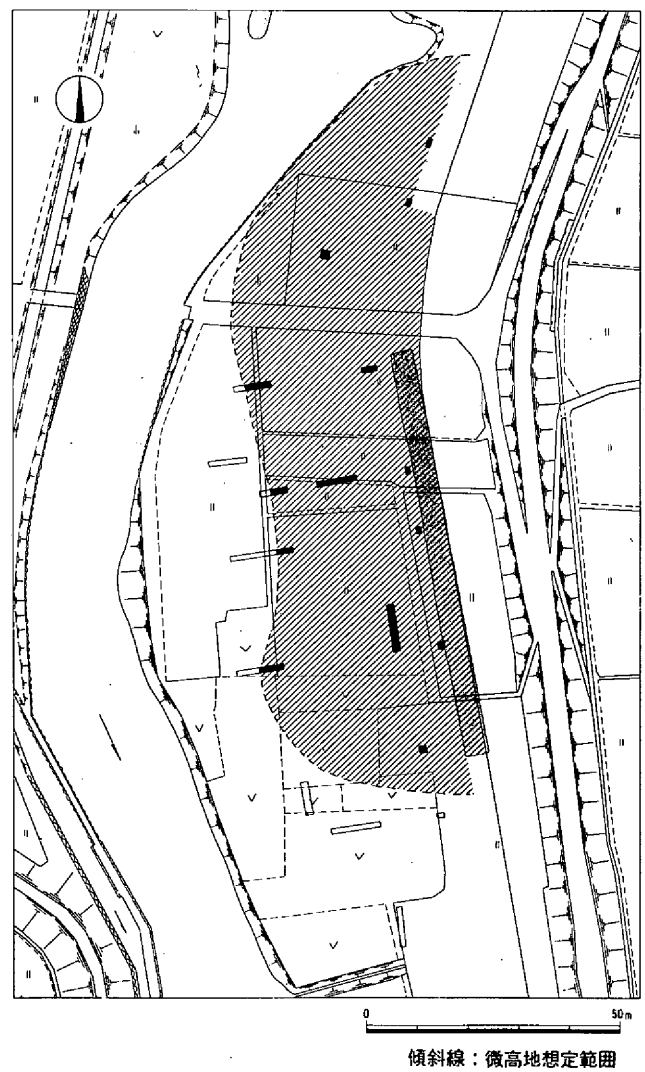
調査を実施するに際しての調査区設定の基本軸については、調査区東側に当時存在していた南北に伸びる土手道の主軸に平行するラインを利用し、これを基軸として調査区を方眼に区割設定し、年度毎に調査を下流方向へと継続した。

足守川加茂Ａ遺跡は、昭和57年護岸擁壁工事に伴って、対象となる約５×80m部分について調査を実施し、その後足守川加茂Ｂ遺跡終了後の昭和60年から前回調査以北の護岸擁壁部分及び河川内に舌状に残存する中洲が調査の対象とされた。ところが、これを実施するについてはそれまでの足守川加茂Ｂ遺跡における調査の進捗状況等をふまえての策定段階で極めて困難であると判断された。これについては、河川課と協議を行い、河川課によって足守川の下流域における河川の流量計算がなされ、改修計画の見直しが行われた。この結果、低水路部分については必要最少限度の平面掘削で通水計画に支障がないことが判明し、すべて改修の対象とする従前の計画案は撤回された。また文化財センターとしてもこれに合わせて対象地域に広がる微高地の確認調査を再度実施し、微高地範囲の確定を行った。この結果をもとに昭和60年８月に

開催された対策委員会において、足守川加茂Ａ遺跡の保存計画に関する議題が扱われた。これにより平面掘削部分は基本的に微高地を避けた地域、即ち足守川左岸の新設護岸肩口から西側に35mを測ったライン以西の確認調査の結果微高地の確認できない部分について、しかも護岸の海抜高よりマイナス1.5mの部分についてのみを調査の対象とすることで決定された。したがって調査は、昭和57年に実施した護岸擁壁工事部分以北の残り約25m部分と低水路調査区の一部に限定されることとなり、後者の下層に存在が予想される中世以前の遺構の保存措置が図られることとなった。結果的に低水路調査区の調査は、近世の水田のみが調査の対象となった。なお、その際下層での遺構の有無を確認するために部分的にではあるが３か所にトレンチを入れ、明瞭ではないが溝状の遺構の存在を確認して調査を終了した。

足守川矢部南向遺跡は、足守川加茂Ｂ遺跡の終了後の昭和61年から昭和63年までの３か年間調査を実施した。調査対象となる部分は、足守川の旧土手部分に相当し、新土手完成後は土手の上部が削平を受けた状態で河川内に幅約20m長さ約180mの舌状を呈する中洲として残されていた。調査の対象となるこの部分については、昭和56年と昭和60年の２回にわたってトレンチによる遺構の有無、もしくは遺跡の範囲の確認調査を実施した。この結果、調査の対象は中洲東側において微高地の落ちが確認されたものの遺構の遺存状態は良好で、対象面積も3,700m²に及ぶことが判明した。

調査区が足守川の旧土手の下に残された長方形状を呈する微

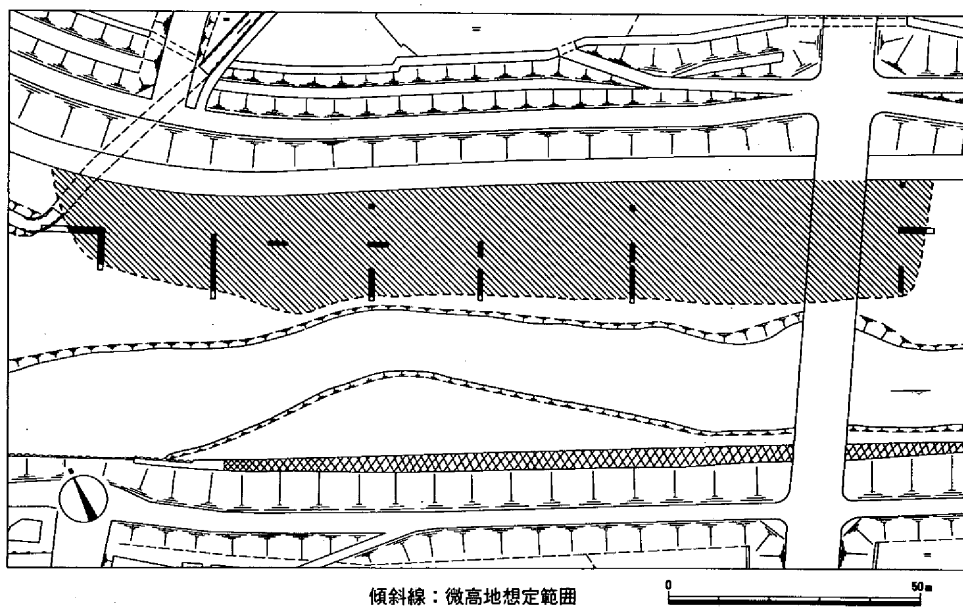


第６図　足守川加茂Ａ遺跡トレンチ配置図（1/1,500）

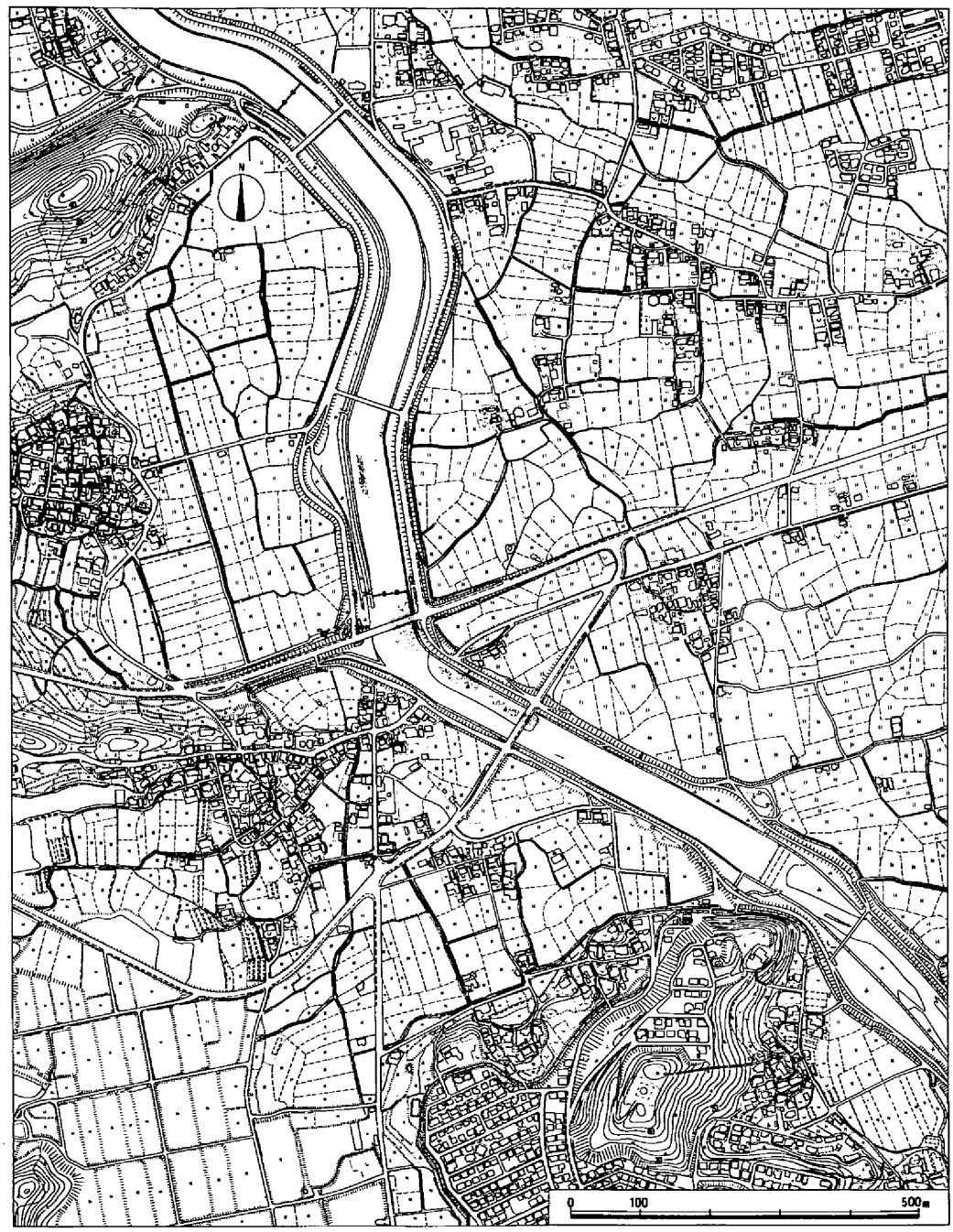
高地ということで、調査区は足守川加茂Ｂ遺跡の主軸から東に振って、しかもその軸線が足守川矢部南向遺跡に接した護岸に平行するように調整を行った。この結果、足守川矢部南向遺跡のグリッドは足守川加茂Ｂ遺跡で設定した基軸から東に119度振った軸線を中心軸としたものに設定した。

調査は、前回調査の足守川加茂Ｂ遺跡での増水による調査区の冠水等の教訓から、上流部から３か年計画で着手した。

以上３遺跡について調査方法等概述したが共通しての問題点も少なくなかった。先ず、自然的要因としての遺跡の立地に起因すると思われる調査の進展の遅れである。これは、調査対象となる遺構・遺物の予想を上回る密度と相俟って、遺構の存在が足守川の川面以下のレベルにあり、さらに遺構の立地する基盤が基本的に砂であったこと等により、たえず地下からの湧水及び砂の吹き出しによる地面の陥没に見舞われ、調査方法もそれらに即応できる態勢で挑まざるを得なかった。また遺構によっては、途中で調査不能となる事態も多く、残念ながら特に深い柱穴については完掘できないものも存在した。次に、これも前者同様自然的要因であるが、足守川上流域での降雨に伴う増水による調査区の度重なる冠水・土砂の流入堆積等により、たえず調査が後戻り状態に見舞われたことである。そのつど排水・排土を行い復旧させるまでに相当な日数が必要となった。また、これを防ぐために調査区から排出される排土を利用しての土納積みによる調査区周囲へ土手の構築、さらには水の流入による壁の崩落を防ぐための擁護



第７図　足守川矢部南向遺跡トレンチ配置図（1/1,500）



（1988年）

第８図　遺跡周辺の現状地形及び遺跡位置図（1/10,000）

パネルの設置をする等、予防措置にも通常の遺跡調査以上に時間が費やされた。　（島崎）

1．足守川加茂Ｂ遺跡
作業風景（８Ｂ区）

2．足守川加茂Ｂ遺跡
足守川増水状況
昭和60年６月25日
未明からの降雨により
足守川増水、現場冠水

3．足守川加茂Ｂ遺跡
現場水没状況
（８Ｂ・Ｃ区）
昭和60年６月26日

2．時代・時期区分について

当遺跡群からは弥生時代中期～近世に至る遺物総数4300箱が出土しており、その大半は弥生時代後期から古墳時代前半にかけてのものが占めた。当該時期の編年について高橋護氏は県下全域を対象に、昭和55年に10期29型式にわたる細分試案[(1)]を提示して以来、幾度か補充・再整理[(2)]を行っており、また近年、高橋試案を踏まえつつ高畑知功氏によって備中地域の弥生時代編年[(3)]が紹介されてもいる。そうしたなかで、高橋氏の一連の研究成果は編年試案に関する根拠が明瞭に示されているわけでなく、むしろ卓抜した先見性に負うところが多い。にもかかわらず、年毎に増加する新資料の整理にあたった調査者によって、皮肉にも高橋編年が追認される結果となっている。

一方、当遺跡群の南方約２kmには上東遺跡が所在する。上東遺跡は昭和14年、鎌木義昌氏・坪井清足氏によって資料紹介[(4)]がなされて以来、当地域の標識遺跡として広く知られる所となった。しかしながら遺跡の実態は不明な点が多く、昭和45年以降の県教委による新幹線建設に伴う発掘調査[(5)]まで待たなければならなかった。その結果、柳瀬昭彦氏・伊藤晃氏は比較的まとまりのある遺構出土土器を中心に、上東式～亀川上層と弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器の変遷を明らかにし、その後、柳瀬氏は昭和50年に実施された都市計画道路建設に伴う発掘調査資料を補充し体系付けた[(6)]。また、上東遺跡の北部に当たる王墓山丘陵では昭和46年、倉敷考古館が中心となって組織された文化財調査委員会によって発掘調査がなされ、そのなかで、間壁忠彦氏・間壁葭子氏は形式名の混乱を避けるため、従来から最も知られる上東式・酒津式にプロトあるいはエピを付した形式分類[(7)]を行っている。

本来なら、足守川遺跡群の中で整理分類し、独自の編年案を基に他遺跡との併行関係を導き出すことが筋道ではあるが、当書では敢えて混乱を避け、上東・川入の編年に従うことにし、編年対比表を付した。

なお、足守川遺跡群の周辺丘陵上には楯築弥生墳丘墓[(8)]をはじめ、前期古墳に継続していく墳墓群の多く知られる一帯でもあり、土器の伴う墳墓の幾つかを表に組み込んだ。墳墓群の時期においては調査者の時期と齟齬するものもあるが、全て筆者の独断で挿入したものであることをお断りしておきたい。

（江見正己）

註

(1) 高橋護「弥生土器－山陽１～２」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・180号　ニューサイエンス社　1980

(2) 高橋護「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館研究報告　第７号』岡山県立博物館　1986
高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告　第９号』岡山県立博物館　1988

(3) 高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社　1992

(4) 鎌木義昌・坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器聚成図録』 1939

(5) 伊藤晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会 1974

(6) 柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977

(7) 間壁忠彦・間壁葭子「V 女男岩・辻山田遺跡の問題点」『倉敷考古館集報 第10号』 倉敷考古館 1974

(8) 近藤義郎他『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992

(9) 江見正己「時期区分について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会 1980

(10) 「甫崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994

(11) 宇垣匡雅他「集成篇 2．特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究（上）』山陽新聞社 1992

(12) 「郷境墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994

(13) 「矢部古墳群B」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 岡山県教育委員会 1993

表1．編年対比表

		川入・上東(6)	周辺墳墓群	百間川(9)	高畑編年(3)	高橋編年(2)
弥生時代後期	上東	上東・鬼川市Ⅰ	甫崎天神山(10) 土壙墓群A・B	百・後・Ⅰ	V－1	上東式古1
						上東式古2
						上東式古3
		上東・鬼川市Ⅱ		百・後・Ⅱ	V－2	上東式古4
					V－3	上東式古1
					V－4	上東式古2
		上東・鬼川市Ⅲ	雲山鳥打3号(11) 雲山鳥打1号 楯築(8)	百・後・Ⅲ	V－5	上東式古3
						上東式古4
		才ノ町Ⅰ	女男岩(7)	百・後・Ⅳ		Ⅸ－a
	酒津	才ノ町Ⅱ	↓			Ⅸ－b
						Ⅸ－c
古墳時代		下田所	辻山田(7) ↓	百・古・Ⅰ		X－a
	王泊六層					X－b
			郷境墳墓群(12) 矢部古墳群B(13)			X－c
		亀川上層	↓ ↓	百・古・Ⅱ		X－d
						X－e
		川入・大溝上層		百・古・Ⅲ		

Ⅳ. 発掘調査報告

1. 足守川加茂A遺跡

第１章　遺跡の概要

調査の対象となった地区は、足守川の左右両岸の堤防に挟まれた河川敷内にあって、足守川の蛇行により大きく膨らんだ舌状に残された中洲であった。また、この地点は足守川の水面とも比高差がない、ひとたび洪水に見舞われた際には川幅は左右両岸の堤防にまで広がり、中洲はたえず川底となるといった地形であった。一方、左右の堤防の外はほとんど全面が水田として耕地化がなされており、微高地・旧河道等の判別もままならない状態にあった。したがって、現状での微高地・旧河道等の復元は極めて困難な状況であった。

調査の対象は、左岸の低水路擁護壁部分（第１・２調査区）と流水路掘削部分（第３調査区）とであった。

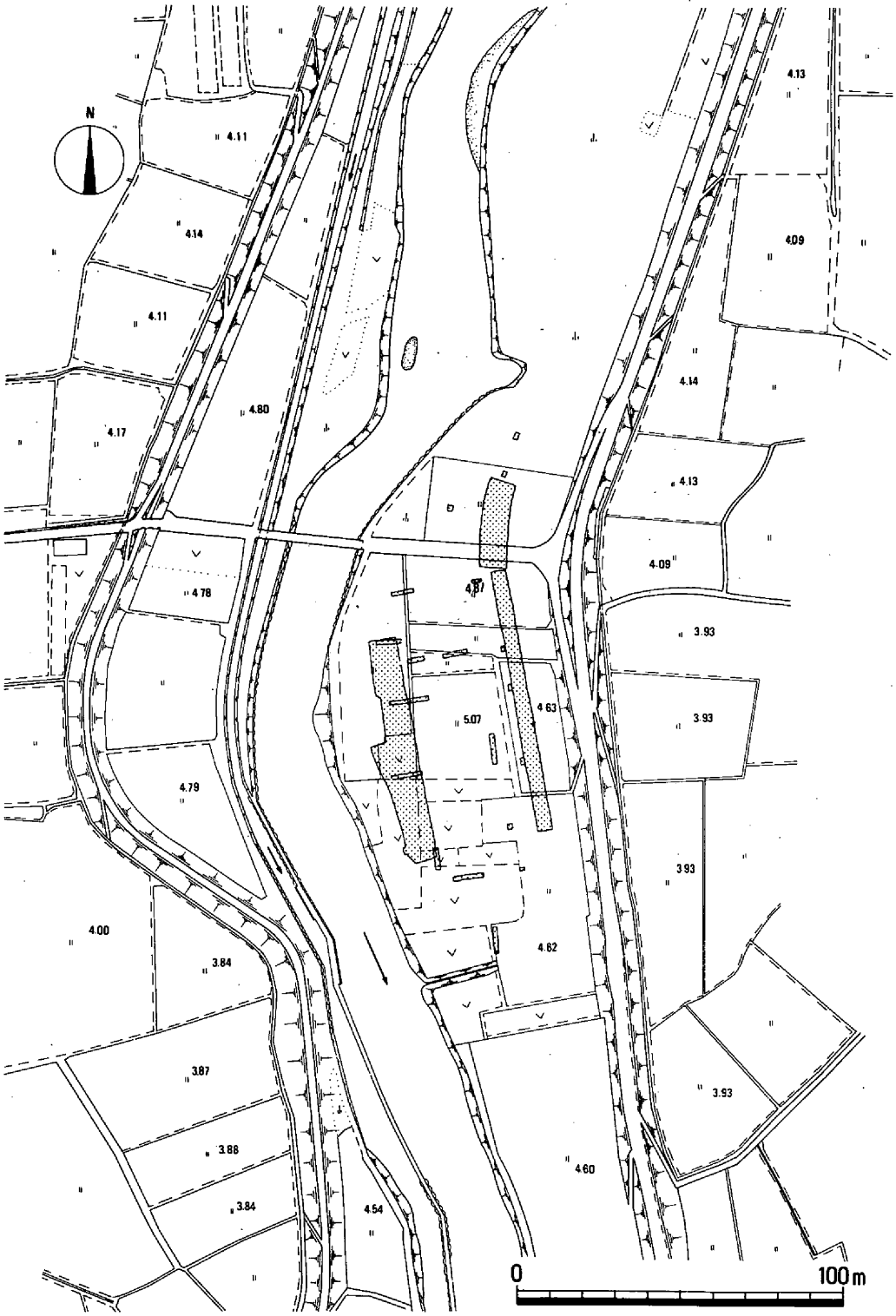
調査の結果、前者については微高地を立地基盤とする集落の存在を、一方後者は調査の性格が遺跡保存を前提に行ったものであり、海抜3.50m以下に所在する遺構については調査を実施しなかった。これにより東からの微高地の広がりについてはその落ちを確認したものの、遺構の在り方等についての詳細は確認出来なかった。

地形的には、足守川加茂Ａ遺跡は東側から派生してきた微高地を立地基盤とするが、河川内ではこの微高地は北・西・南側は徐々に低位部へと落ち、舌状を呈することが判明した。ただし、周辺の地形についての詳細は明確でなく、わずかに下流約100mに所在する足守川加茂Ｂ遺跡で再び微高地の存在が知られるにすぎない。

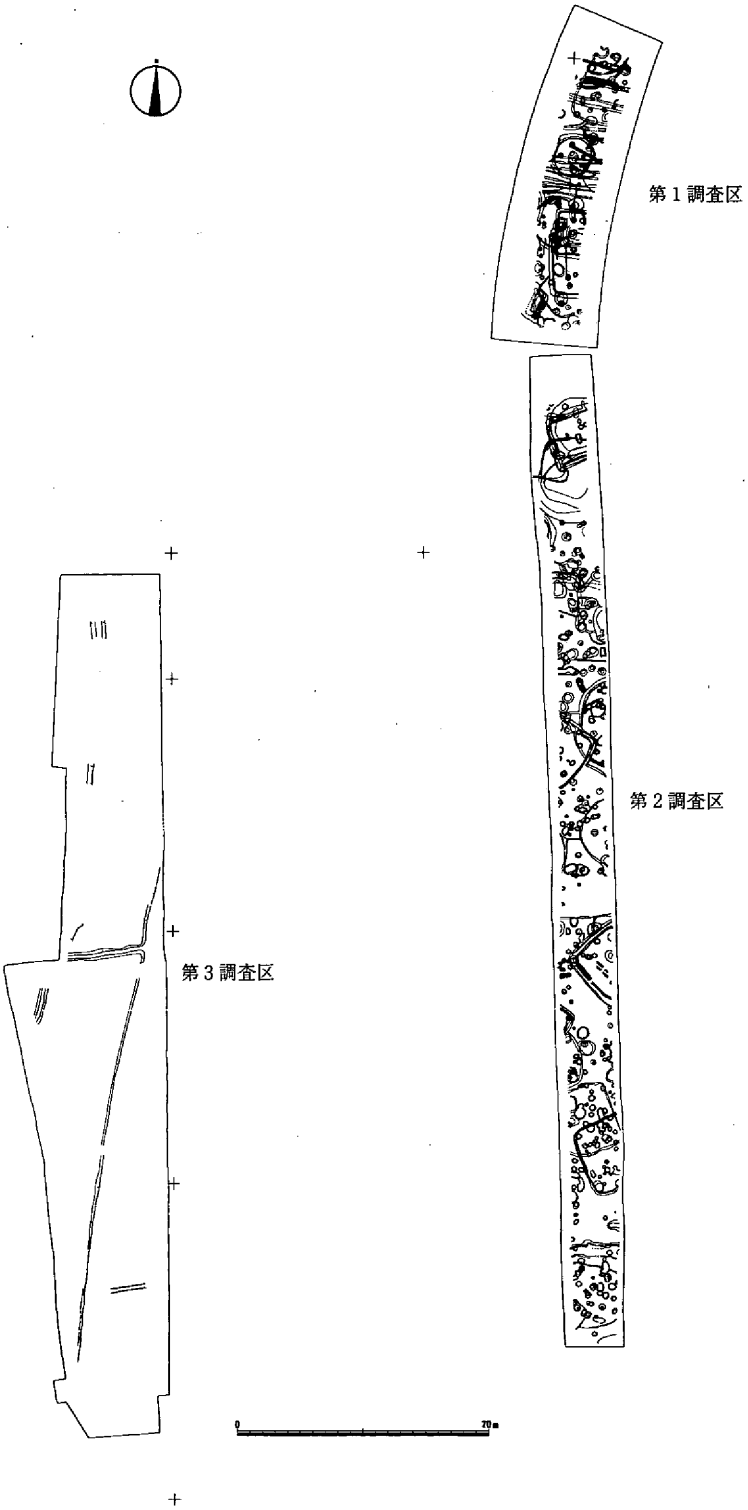
足守川加茂Ａ遺跡は低水路擁護壁部分（第１・２調査区）では、比較的粘性の強い基盤が遺構の切り合いで明確でないが、北端でおよそ海抜2.80mから南端で海抜2.50mまでの高低差をもちながら広がり、これを基盤として先ず弥生時代後期前半の竪穴住居等が構築されていた。その後弥生時代後期後半になると竪穴住居の検出面は若干高位で検出され、第１調査区で海抜3.20m、第２調査区で2.70mを計測する。注目されるのは、古墳時代初頭段階における洪水砂の堆積であろう。洪水砂は、中でも亀川上層段階の遺構を中心として比較的厚い堆積を見せており、集落全体を広く覆っていたものと推測される。

一方、第３調査区は上記した通り下層に展開する近世以前の遺構について調査を行っていないため、低水路擁護壁部分との比較検討は出来ない。確認されたのは、わずかに微高地の落ちと時期不明の溝の存在が確認されたにすぎない。また、全体的な状況として地形は足守川北上流から南下流方向にゆるやかに下がっており、微高地端部に関して言及すれば遺構の在り方は低水路擁護壁部分調査区ほどの密集はしていないものと推測された。　（島崎）

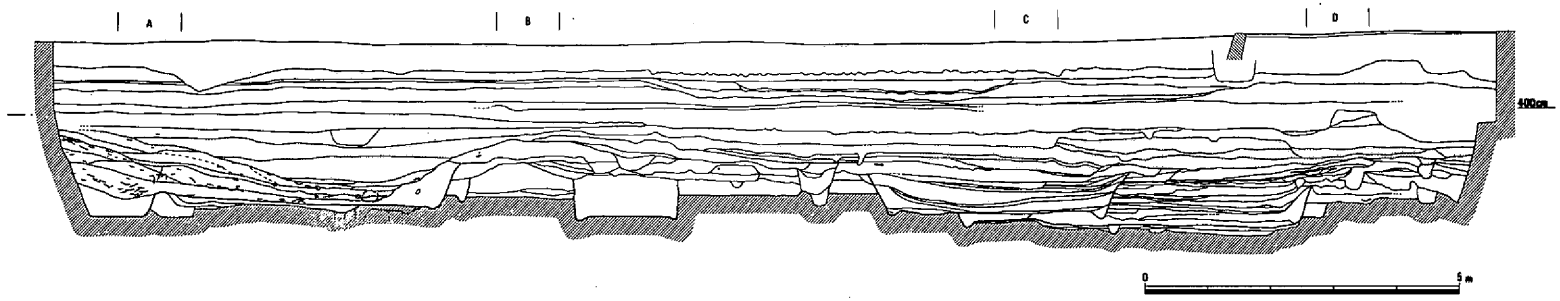
1．足守川加茂Ａ遺跡

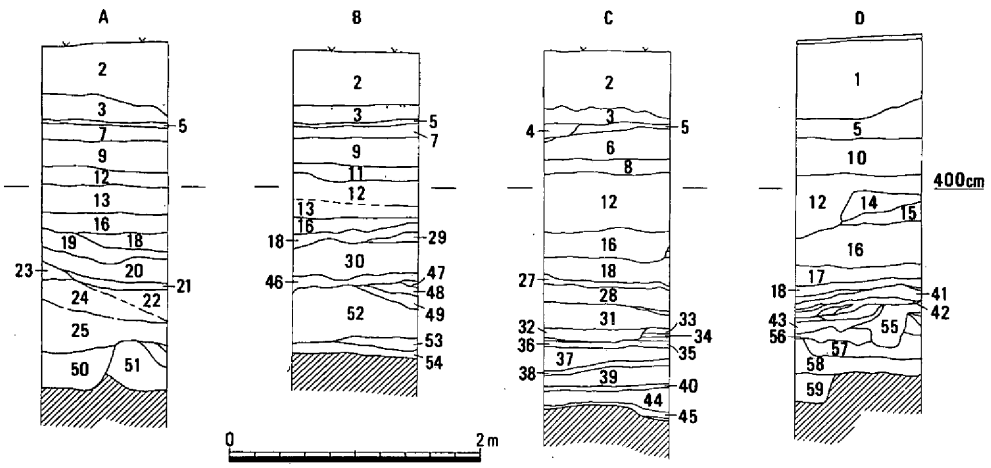


第１図　足守川加茂Ａ遺跡周辺地形及び調査区配置図（1/2,000）



第２図　足守川加茂Ａ遺跡検出遺構全体図（1/600）

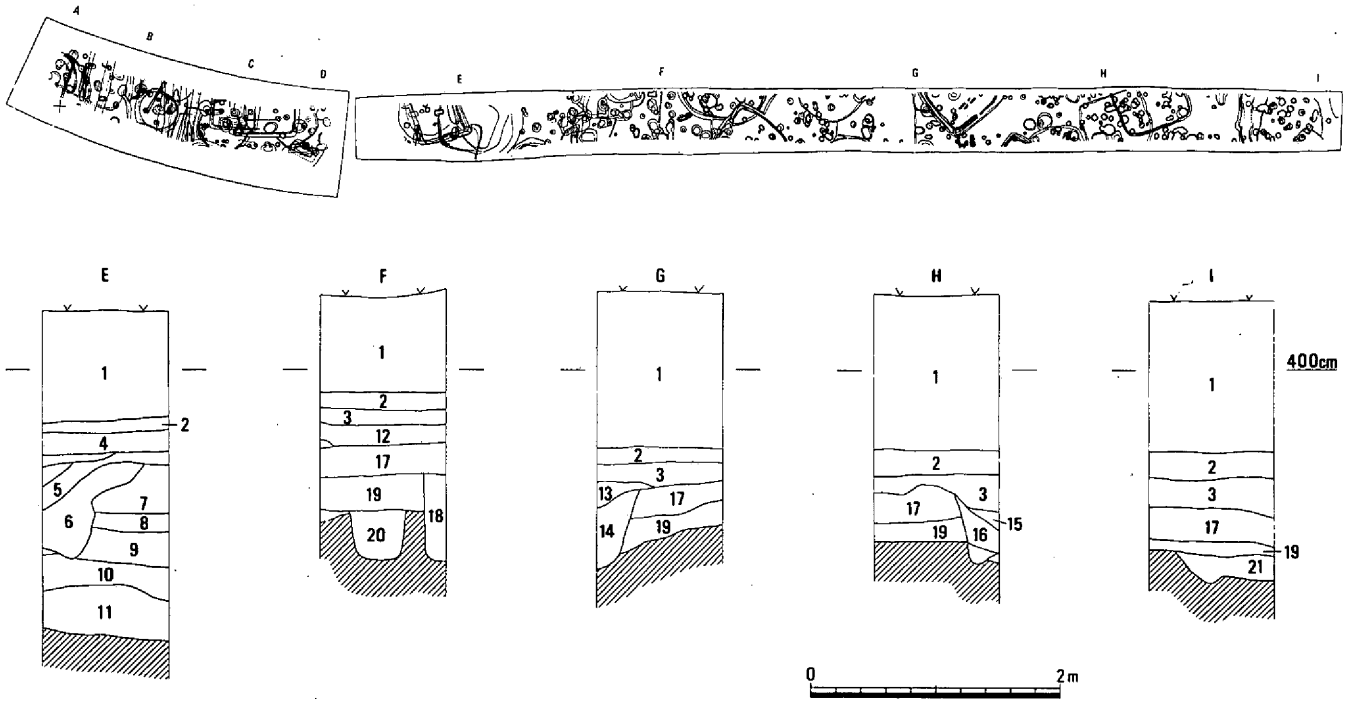




1．盛土
2．盛土
3．暗灰色砂
4．淡黄灰色砂
5．明灰黄色砂
6．淡灰黄色砂
7．淡茶灰色砂
8．灰黄色砂
9．淡灰茶色土（含、マンガン粒）
10．灰黄色砂
11．黄灰色砂
12．黄灰色砂
13．淡茶色砂（黄灰色砂に茶色土が入る）
14．灰黄色砂質土
15．淡茶色砂
16．茶色土（砂質土）
17．黄灰色砂
18．黄灰色砂
19．灰黄色砂
20．黒茶灰色
21．灰色砂
22．淡灰緑色土
23．灰茶色土
24．灰黄緑色粘色土
25．暗灰緑色土
26．暗灰茶色土
27．茶灰色砂
28．黄灰色砂
29．暗茶色土
30．暗茶色土
31．灰黄色土
32．灰色土
33．黄褐色粘土
34．黒灰色土
35．明灰褐色土
36．暗灰色土
37．灰黄色土
38．黒灰色土
39．暗灰黄色土（砂質）
40．黄色粘土（貼床）
41．黒灰色土（含、焼土）
42．暗灰色土
43．暗灰色土
44．暗灰黄色土（粘質）
45．黄灰色粘土（貼床）
46．淡茶灰色土
47．黄灰色土
48．暗灰茶色土（竪穴住居１）
49．黄灰茶色土
50．暗灰黄色土
51．黒灰黄色土
52．暗灰色土
53．灰黄色土
54．灰黄色土（含、焼土塊多）
55．暗灰茶色土（含、焼土塊）
56．暗灰褐色土
57．灰黄色土
58．灰橙色土（含、焼土）
59．灰黄色土（竪穴住居23）

第３図　第１調査区東壁土層断面図（≒1/120）・(1/60)

第４図　第２調査区東壁土層断面図（1/120）



1．黄灰色微砂土
2．茶褐色粘質土（混、微砂）
3．灰茶褐色粘質土（混、微砂、上層に比べて微砂が多い）
4．暗茶褐色微砂
5．灰色粘質土（灰）
6．暗灰緑色粘質微砂混土
7．黒褐色粘質土
8．暗黄褐色微砂
9．暗黄褐色粘質微砂混土（含、炭）
10．暗灰色微砂（含、炭）
11．黒色粘質微砂混土
12．黄茶色微砂
13．灰黄白色細砂
14．黒色土層（含、炭、焼土多）
15．灰色微砂混土
16．暗灰色粘質土（含、炭）
17．黒灰色粘質土
18．暗褐色微砂（含、炭、焼土）
19．茶褐色微砂混土（含、炭）
20．茶褐色微砂
21．暗茶灰色粘質土（微砂）（竪穴住居35）

第5図　第2調査区東壁土層断面柱状図（1/60）

第２章　調査の概要

第１節　弥生時代後期前半の遺構・遺物

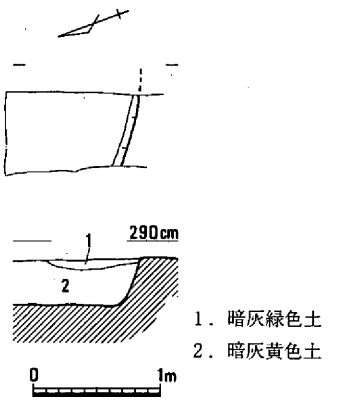
(1)　竪穴住居

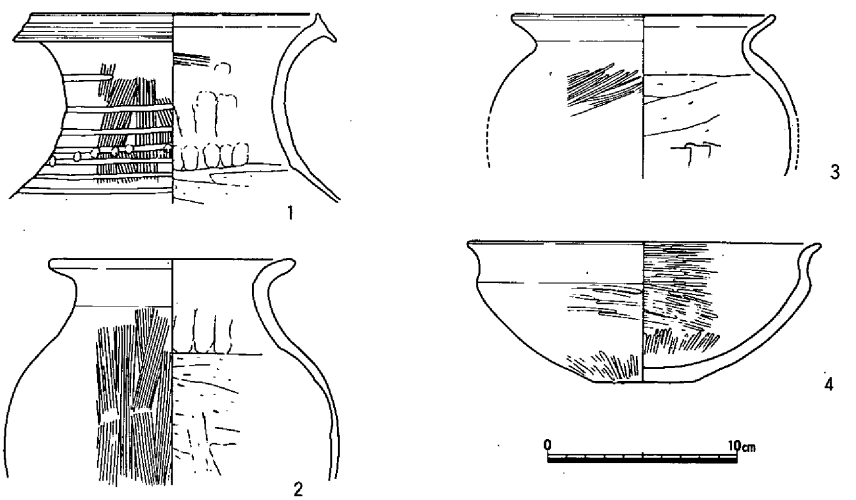
竪穴住居１（第６・８図）

住居は、第１調査区の北西端部において竪穴住居２・４によって切られ、検出できたのは僅かに壁と床面の一部にすぎない。

海抜2.80ｍにおいて平面の確認がなされ、床面は検出面より35㎝の深さで比較的容易に検出出来た。ただし柱穴については、候補となるものが見当たらなく不明である。住居の平面形態については、保存状況が良くないため、これにより全体像の復元は困難である。ただし、時期的に出土遺物が弥生時代後期前半を示すことで円形が推測される。

出土遺物は、上記した時期の土器が僅かに確認され、４点が実測できたにすぎない。　（島崎）





第６図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）

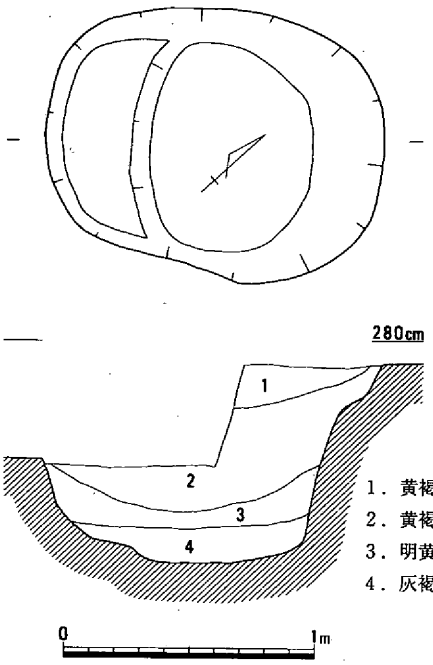
(2) 土壙

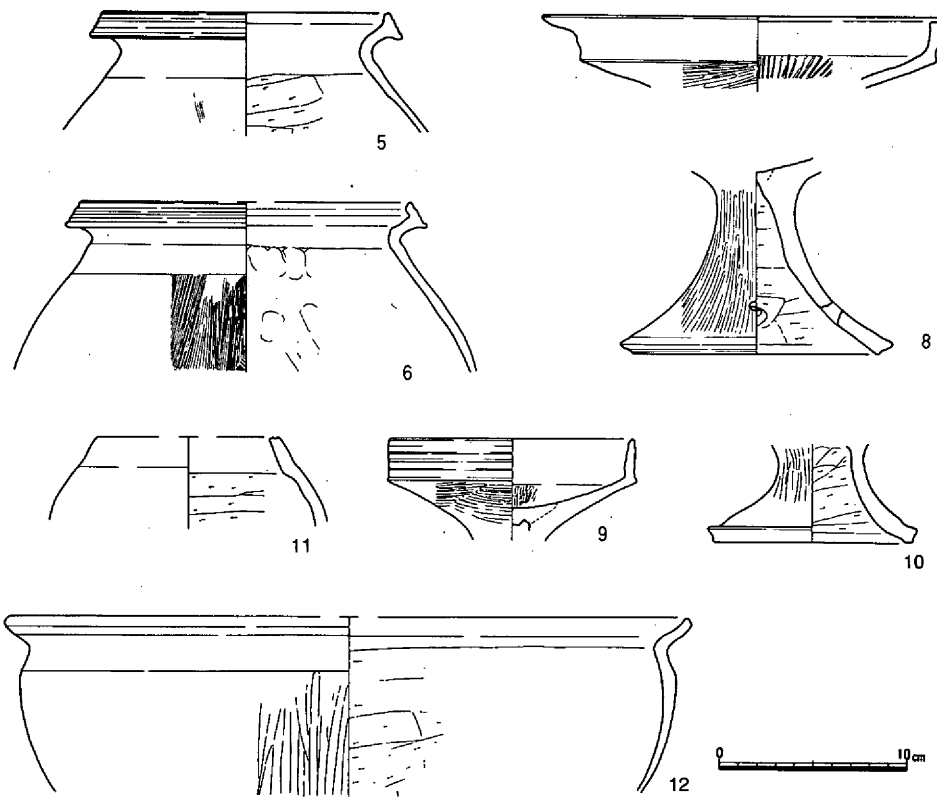
土壙1（第7・8図）

第1調査区のほぼ中央部において竪穴住居10にその上面約1／2が切られた状態で検出された。竪穴住居10との切り合いにより平面形が若干変形しているが、おおむね楕円形であったと考えられる。

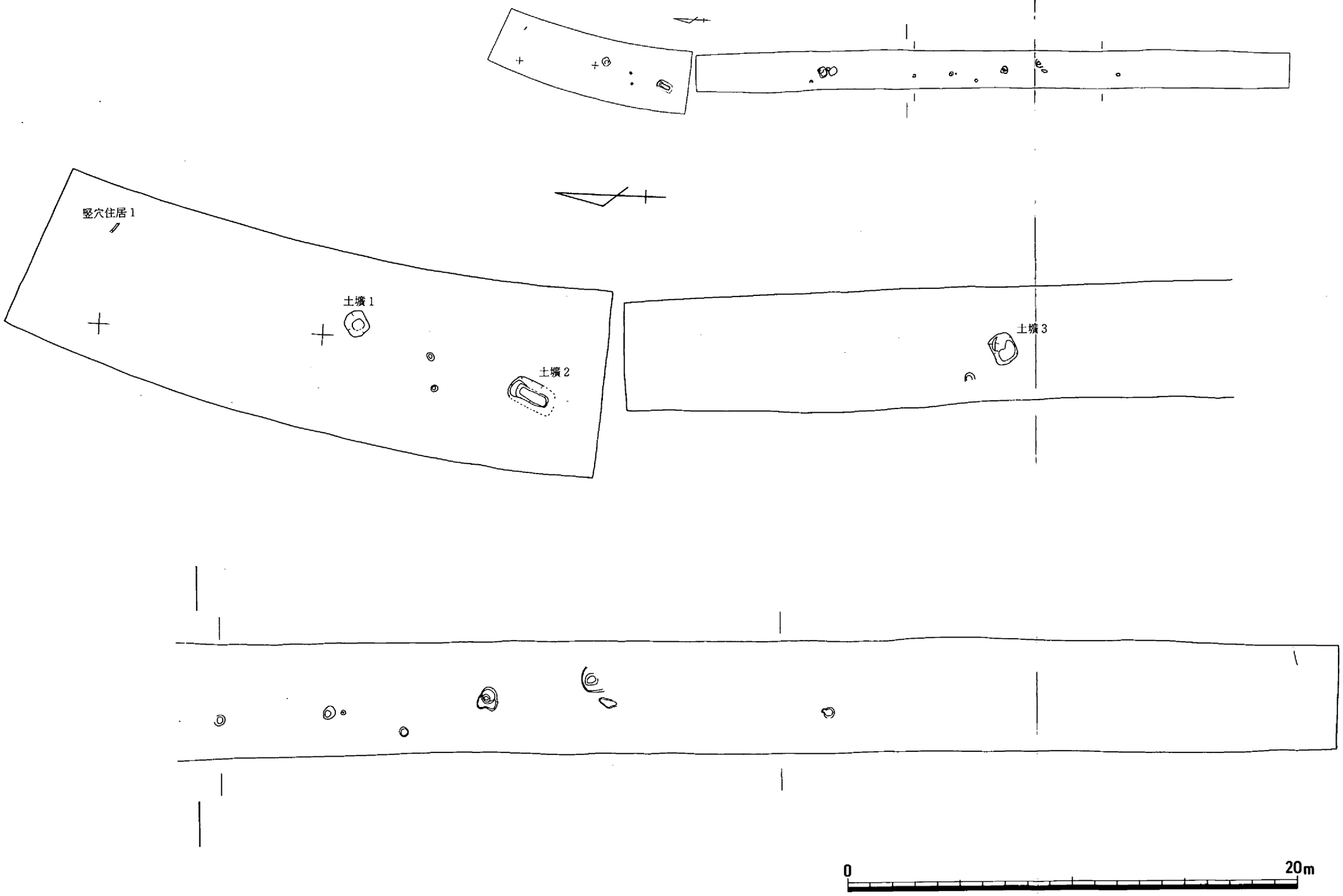
規模は、長軸1.40m、短軸1.10mで検出面からの深さ80cmを測った。平面の海抜高は、2.70mであった。

土壙は、大きく4層の土砂に





第7図　土壙1（1/30）・出土遺物（1/4）



第８図　弥生時代後期前半期検出遺構全体図（1/200）

より埋没しており、第１層のみ微砂質で以下はすべて粘質土による堆積を示していた。

出土遺物は、いずれも小片の状態で検出されたもので、完形品の出土は見られなかった。図化された土器は、甕５・６、高杯７・８・９、台付鉢10、鉢12の４器種である。11は、小片で器種の特定は出来ない。

時期は、弥生時代後期前半に比定されよう。

土壙２（第８・９図）

第１調査区の南西隅において海抜2.30ｍで検出された。側溝に西と南側が切られており全体像は明瞭でないが底部が遺存することで復元は可能である。

土壙は、長軸2.10ｍ、幅1.20ｍで、平面隅丸長方形が復元される。壙内は、その中段にテラス状の段がつくられており、その規模は長軸で1.53ｍ、幅60cm、深さ25cmを測った。

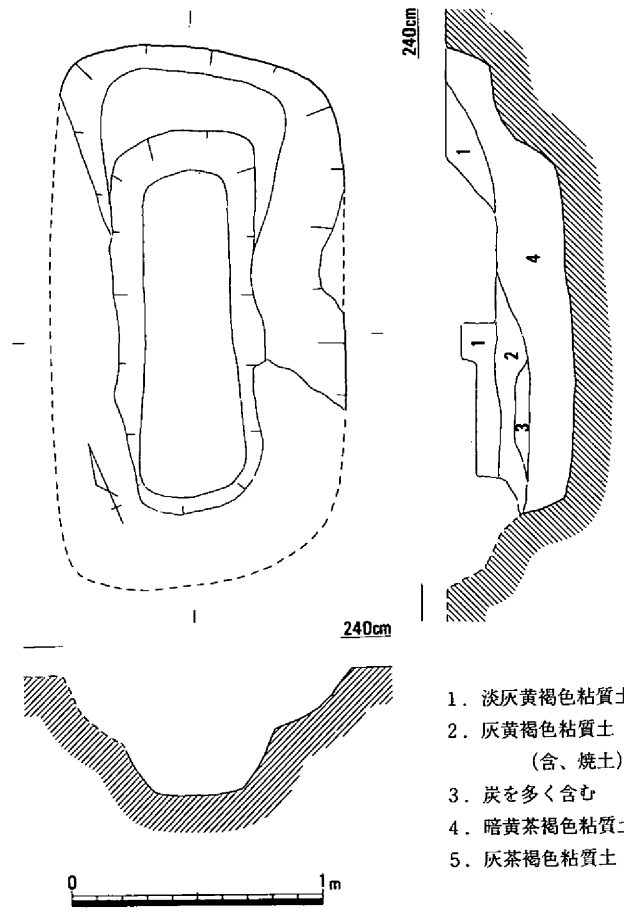
壙内の埋積は、大きく２層と考えられ、いずれも粘性の強い土であった。

出土遺物は、図化できない小片が見られた程度で、時期の位置づけを明瞭に示唆するものはない。小片の胎土の状態から、ここでは弥生時代後期前半に位置づけた。

土壙の性格は不明であるが、形態的な特徴から土壙墓の可能性を残しておきたい。　　（島崎）

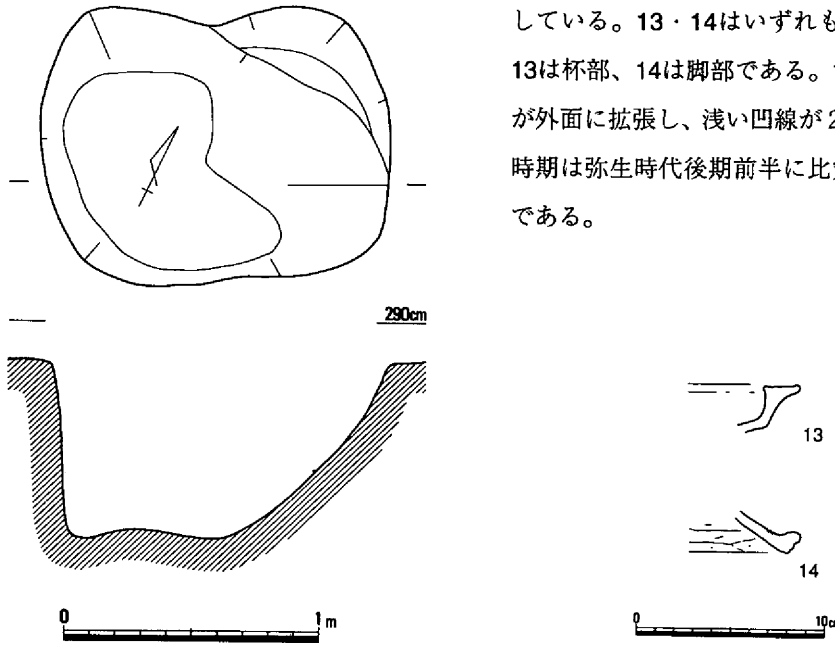
土壙３（第８・10図）

第２調査区の北端近くで検出された遺構である。土壙25に切られている。土壙の規模は長径1.38ｍ、短径1.01ｍの不整形な長方形を呈し、深さは検出面から約70cm程を測る。掘り方は西



第９図　土壙２（1/30）

出土遺物は少量の弥生土器13・14が出土している。13・14はいずれも高杯である。13は杯部、14は脚部である。13は口縁端部が外面に拡張し、浅い凹線が2条みられる。時期は弥生時代後期前半に比定されるものである。（松本和男）



第10図　土壙3（1/30）・出土遺物（1/4）

(3) 包含層出土遺物（第11・12図）

弥生時代後期前半に比定された遺構は第8図に示した状況で、その他の時期に比較した際、散在的といえよう。したがって、遺構に伴わない遺物は多くない。

器種は、壺15～20、甕21、高杯22～27、飾り高杯28、鉢29、その他に石器としては、スクレイパーS1、石包丁S2がある。

壺は、長頸壺15・16・18と短頸壺17・18・19・20があり、15の口縁部外面には線刻による鋸歯文が施されていた。

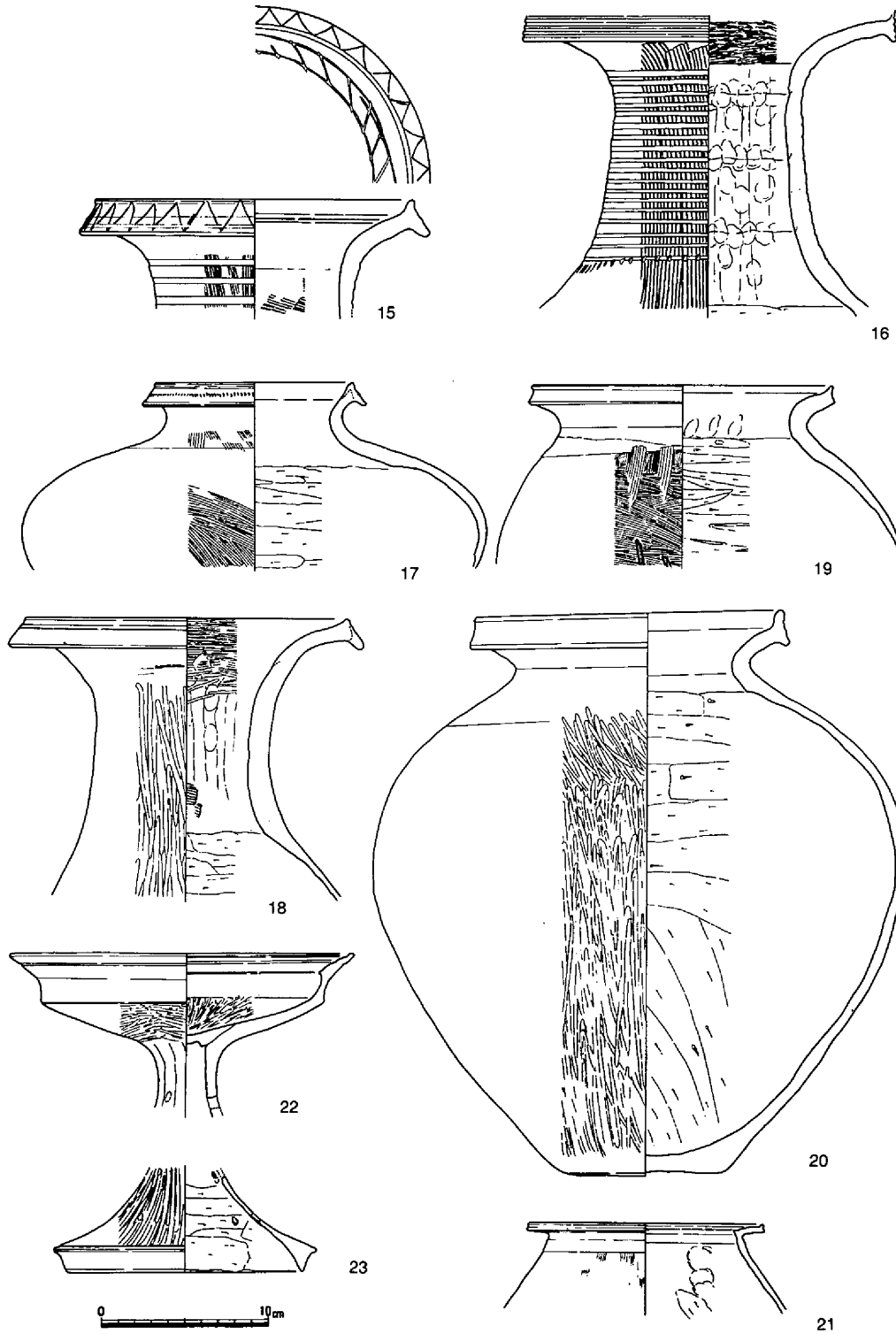
甕21は、在地産のものでなく胎土に角閃石を多量に含み、讃岐地方からの搬入品と考えるものである。時期的な位置づけは明確でない。

高杯は、備中的な様相をもったもの22・23と、備前的なもの24がある。25～27は、上東・鬼川市Ⅰ式に比定され、22～24に比較して古相を示す。

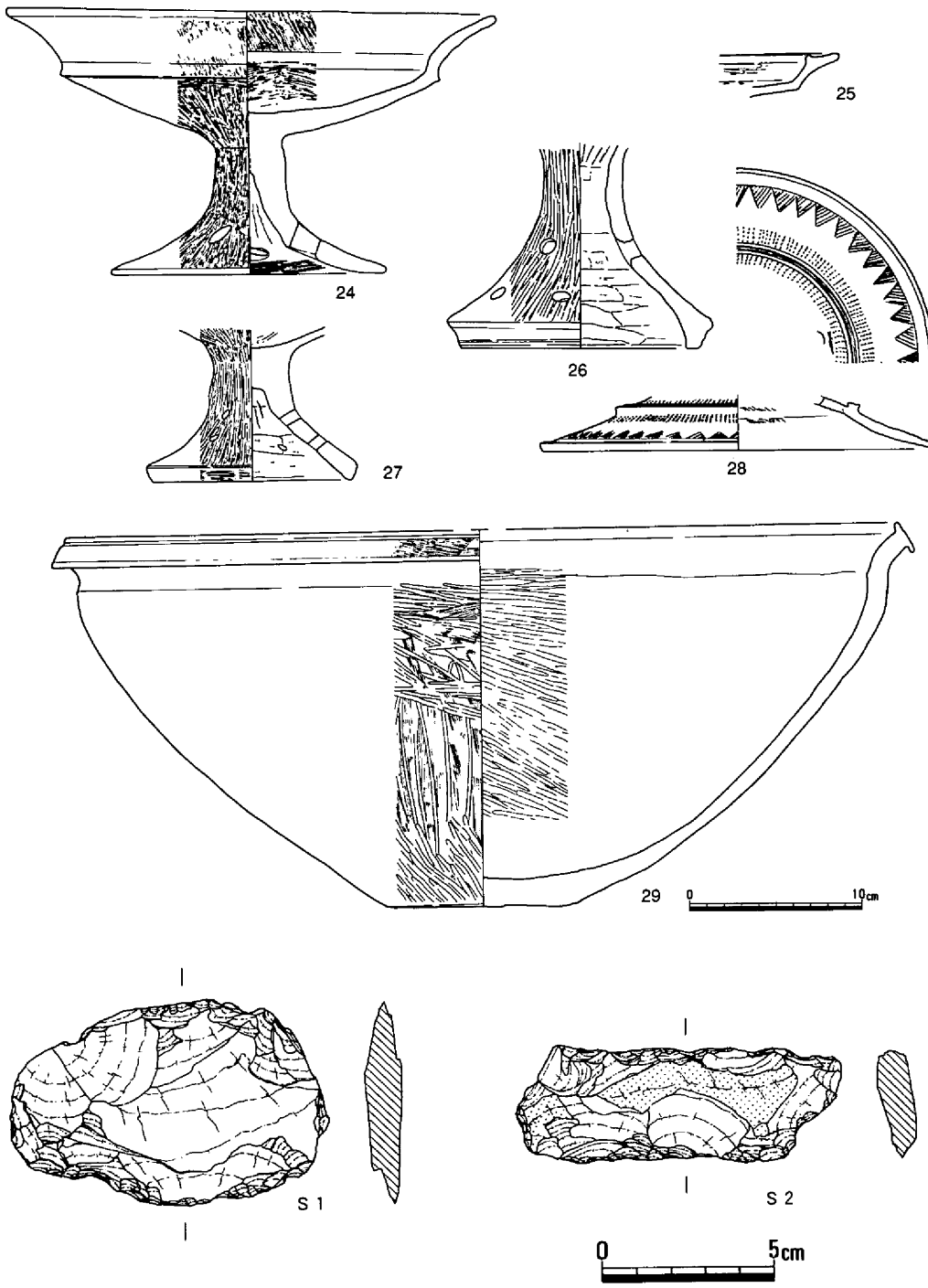
飾り高杯28は、胎土が精選されており、新相を示す。

鉢29は、口径48cm、深さ20cmを測る比較的大型品である。内面の底部付近には、砂粒の移動痕跡中に朱の遺存が確認された。朱の生産の工程に関係したことを示唆させる遺物である。

石器は、いずれもサヌカイト製品である。石包丁は、両端が部分欠損するが長期にわたる使用を珪酸による磨耗痕がよくこれを示している。（島崎）



第11図　包含層出土遺物①（1/4）



第12図　包含層出土遺物②（1/4・1/2）

第２節　弥生時代後期後半の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居２（第13～18図、写真図版５）

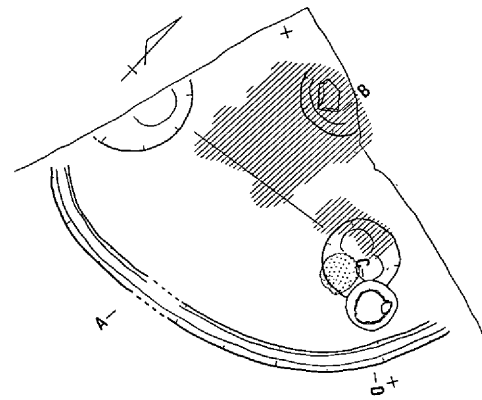
第１調査区の北西隅において基盤直上の海抜2.60ｍで検出された。床面直上の覆土中には、比較的面的なまとまりをもった土器の堆積が検出された。また当初それらと一連の堆積と考えていた土器の一点が、住居造成段階から据え置かれた状態で検出された。即ち、土器30は、貼床としての粘土が土器に密着状態にあり、貼床除去後はじめて据え置くための浅い掘り方が検出された。ただし、この壺は検出段階にみられた肩部付近での水平状態での上部欠損が当該期になされたものかどうかは判然としない。

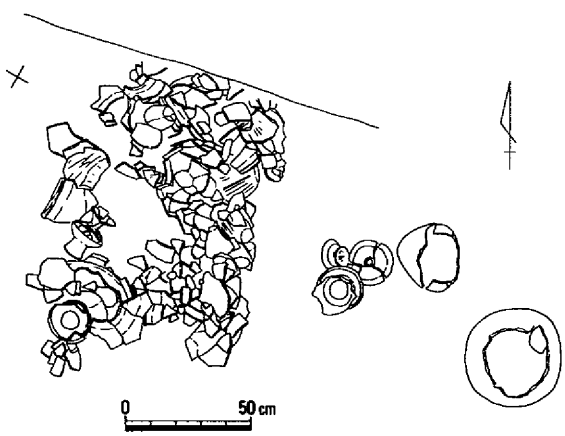
住居は、全体の約１／４程度の遺存状況であった。したがって、全体像についての言及には限度があろう。

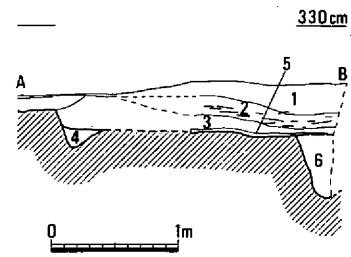
平面は、検出面での肩および床面での壁体溝のラインが弧状を示すことで、またこれと柱穴との位置関係を勘案すれば、直径５ｍ前後の円形住居にあったとして差支えないと考える。

床面は、平面検出面から深さ40㎝にあり、断面観察によると粘土による約３㎝程の厚さで床が貼られていた。

柱穴は、周辺に数多く検出されたが、候補







1．灰黄色土（粘土と砂の互層）
2．灰色土
3．淡灰色砂
4．灰黄色粘質土
5．炭の堆積（床面）
6．黄灰色砂

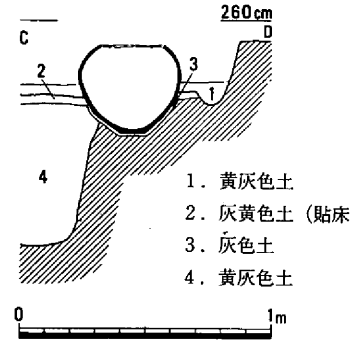
第13図　竪穴住居２（1/60）・床面遺物検出状況（1/30）

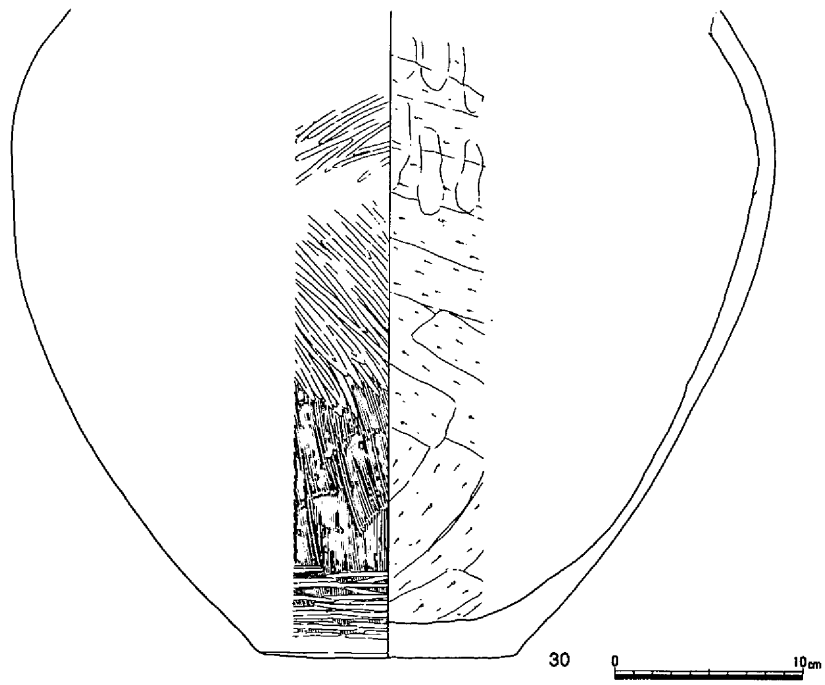
となるものは2本である。調査範囲の限界から本来の主柱穴の数は不明であるがここでは状況から4本が想定される。また柱穴は、掘り方の検出がなされたのみで柱痕の確認はなされていない。

出土遺物は、床面に据え置かれた壺30をはじめとして壺、甕、高杯、鉢等の器種が確認された。

壺には、長頸壺31・32と短頸壺33・34・36があり、前者には胎土中に角閃石を含み外面丹塗りのもの32と角閃石は含むものの丹の塗られていないもの31、後者においては角閃石を胎土中に多く含み外面丹塗りのもの33・36の存在が認められた。

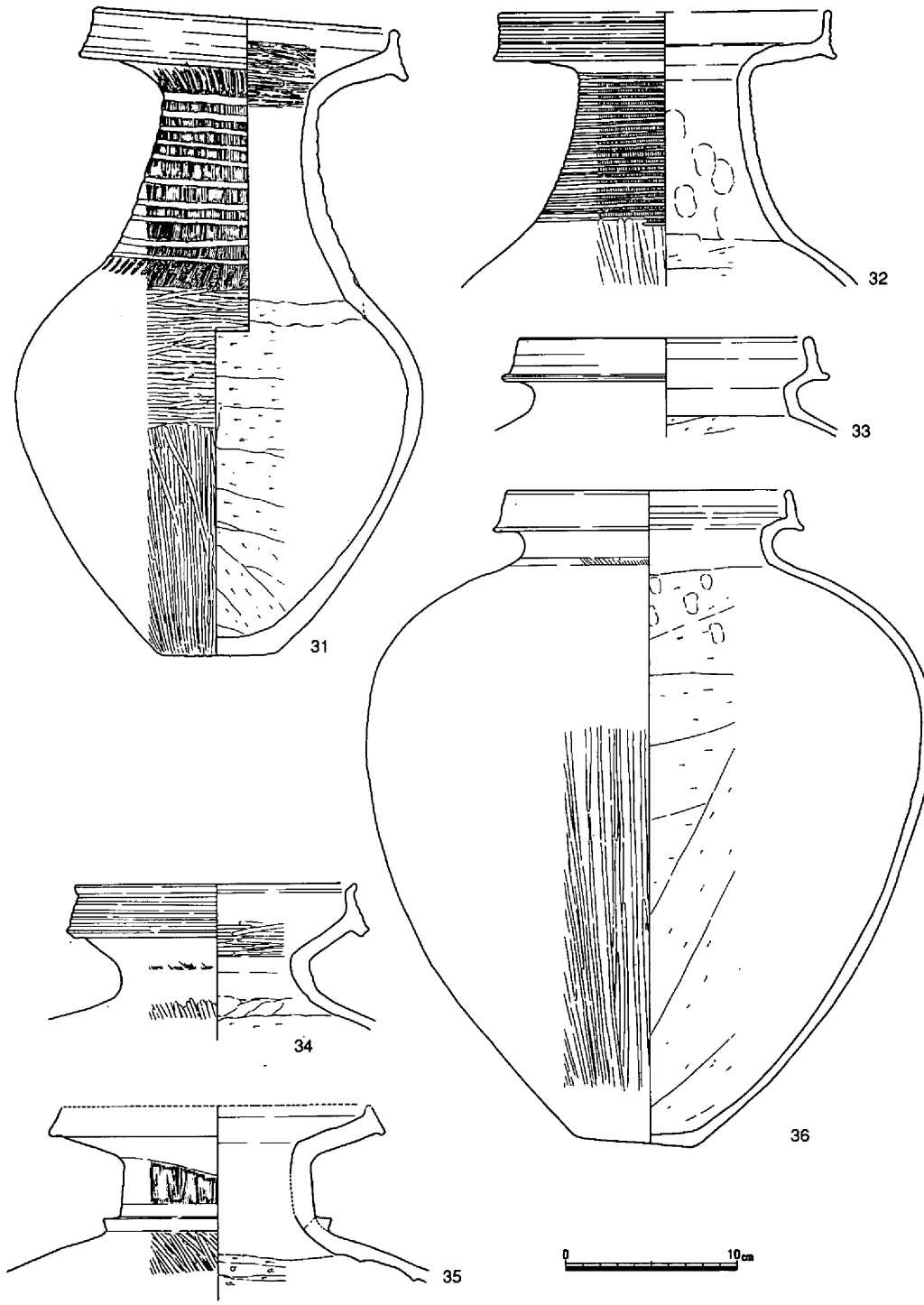
甕は、いずれも器壁が薄く仕上げられ口縁部を長く上方に拡張させ、底部は平底をみせる。



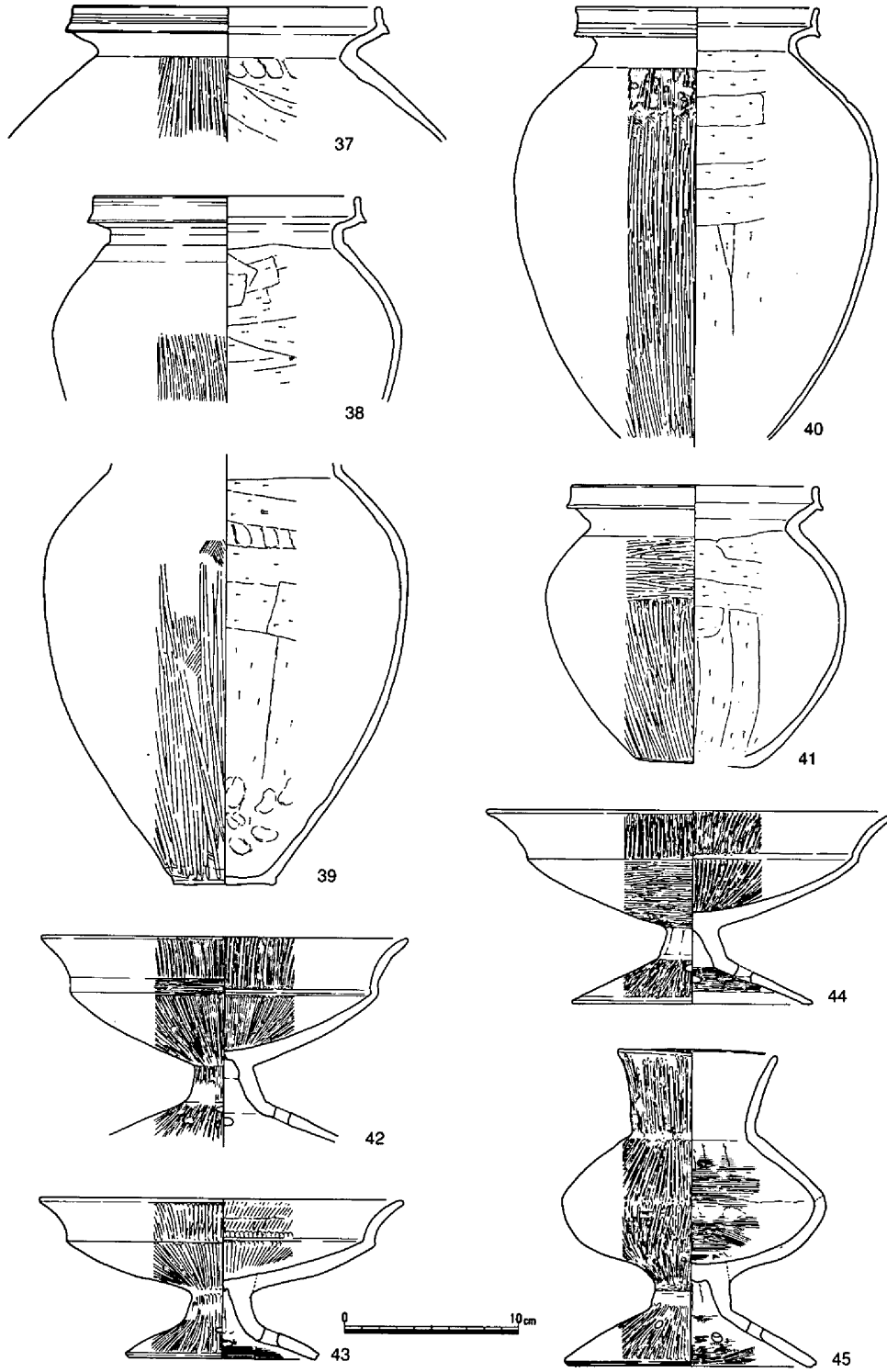


第14図　竪穴住居2床面据え置き土器土層断面（1/30）・出土遺物①（1/4）

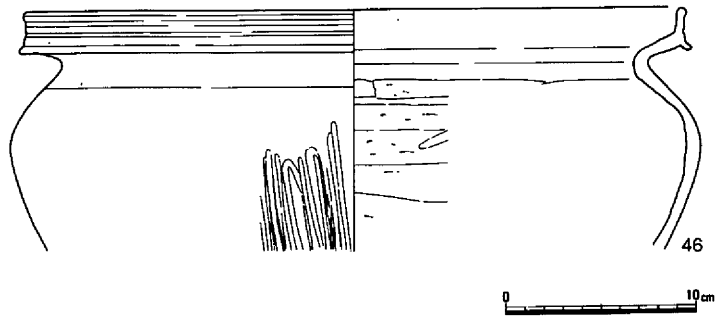
第15図　弥生時代後期後半検出遺構全体図（1/200）



第16図　竪穴住居２出土遺物②（1/4）



第17図　竪穴住居２出土遺物③（1/4）



第18図　竪穴住居２出土遺物④（1/4）

高杯42・43・44は、口径が大型のものが多く、口縁部はまだ短かく外反するものであるが、脚はすでに短脚化傾向を示しており、胎土も水漉粘土を用いている。

鉢には小型41と大型46とがあり、いずれも甕同様に口縁端部の上方への拡張を見せるものである。

脚付直口壺45は、高杯同様に短脚化した脚と頸部の比較的短い壺が一体化したものである。胎土は、水漉粘土が用いられている。

以上の土器の型式から住居の時期は、およそ弥生時代後期後半に比定される。

竪穴住居３（第15・19図）

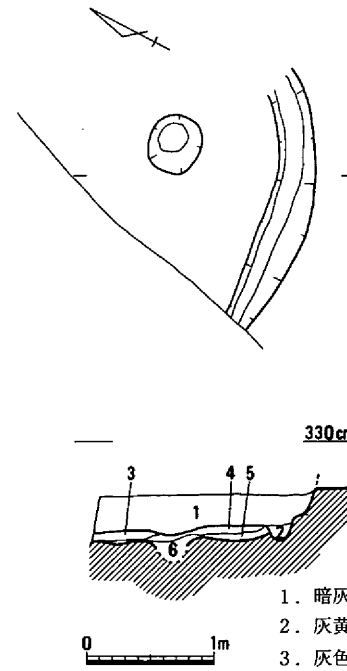
第１調査区において竪穴住居２の南側約４ｍの地点で検出された。

海抜2.90ｍで竪穴住居21・４・５・６に切られた状態で検出された。全体的な遺存状態は不良で、図化できたのはわずかに壁体溝と柱穴１本にすぎない。

住居は、平面検出面から床面までの深さ25～30cmを測り比較的覆土の厚い遺存をみせるが床が面として確認されたのは、わずかに16㎡程度にすぎない。したがって、住居の平面形はもちろんのこと柱穴・中央穴等の状況については言及出来ない。

床面は、平面検出面から約2.5cm掘り下げた所に厚さ５cm前後に粘土が貼り付けられて形成されていた。

出土遺物については、遺構の遺存状況から



第19図　竪穴住居３（1/60）

も予想されたことであるが、図化可能な土器は存在しなかった。ただし、時期の位置づけの参考となる土器片は若干であるが見られ、これによるとおよそ弥生時代後期後半に比定される。

竪穴住居4（第15・20図）

第1調査区の北西部、竪穴住居2の南側に一部竪穴住居2と重複した状態で検出された。

平面は、海抜約2.45mにおいて肩が検出され、その下層約10cmの床面において壁体溝が弧状を呈して検出された。2条の壁体溝の存在で住居2軒の重複とも考えられるが、ここでは明確な床面等が確認されなかったことで1軒の住居として扱った。

時期は、土器の図化は出来なかったものの一応弥生時代後期後半の範疇で差支えないものと考える。

竪穴住居5（第15・21図）

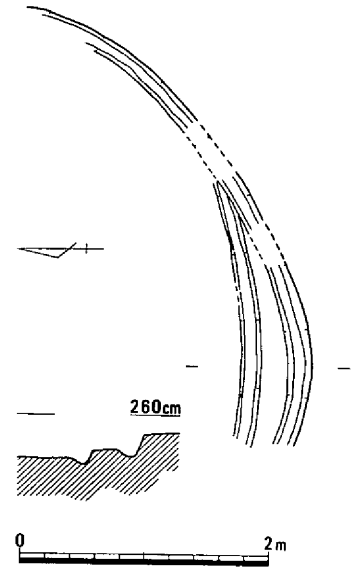
第1調査区の北側において竪穴住居21に北のほとんどが、竪穴住居3に西側が切られた状態で検出された。したがって遺存するのは、わずかに肩と覆土の一部にすぎない。

住居は、海抜3.10mで平面比較的直線ぎみのラインを呈する肩が検出された。床面は、検出面から約25cm下層にみられた。ただし柱穴の確認は出来なかった。

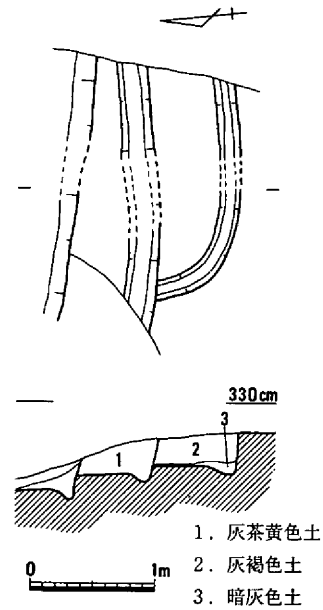
時期は、出土した土器片、住居の切り合い等を手掛かりに一応弥生時代後期後半の範疇で理解した。

竪穴住居6（第15・21図）

第1調査区の北側、前述の竪穴住居5に切られて検出された。平面検出面から約25cmの覆土を隔てて床面と壁体溝の検出がなされたが、住居の規模・性格等の詳細が言及できるものではなかった。したがって、時期は判然としない。状況から一応弥生時代後期後半に位置づけた。



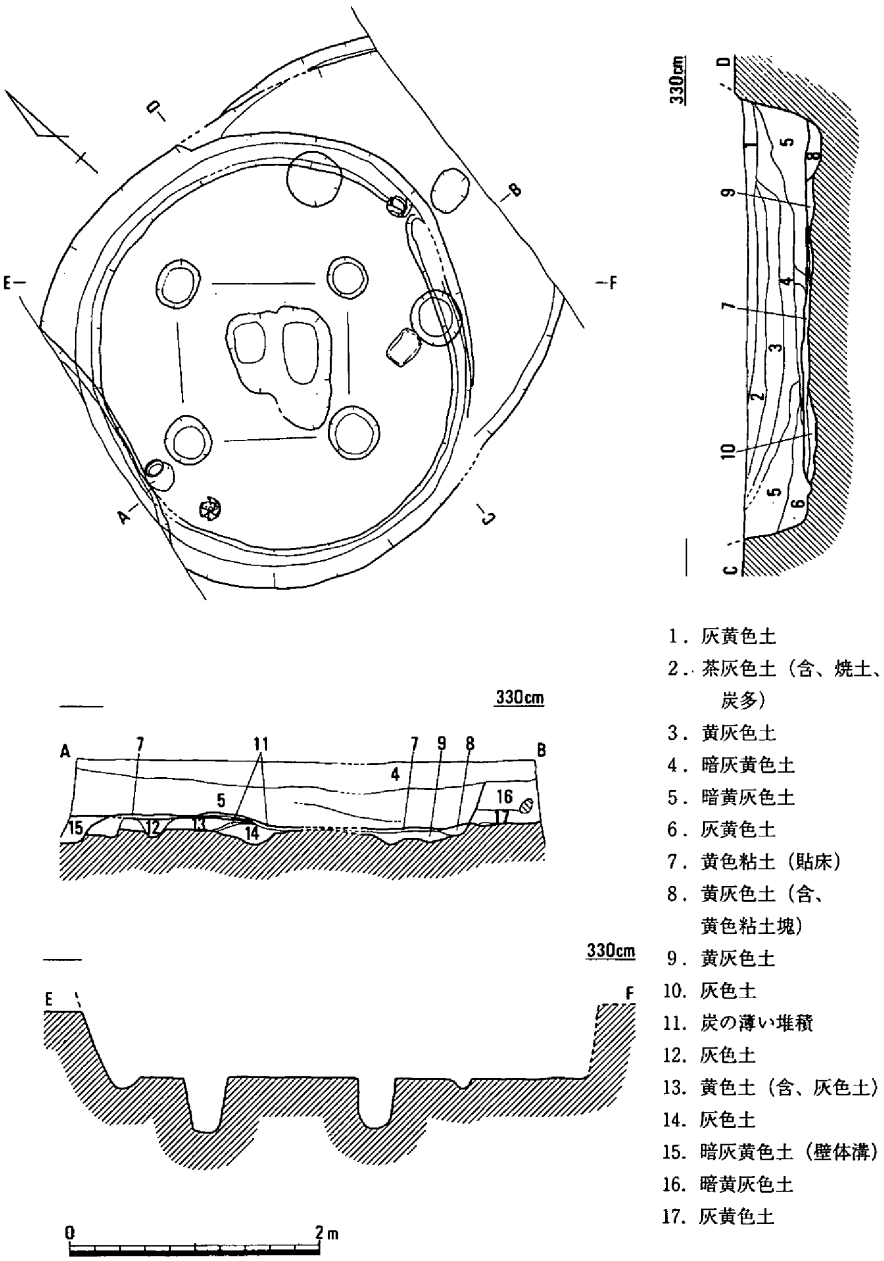
第20図　竪穴住居4（1/60）



第21図　竪穴住居5・6（1/60）

竪穴住居７（第15・22～24、写真図版６）

第１調査区のほぼ中央部において３軒の住居の重複として検出された。ただし、西側１軒は調査時の側溝によって切られ、わずかに肩のラインを示しただけで詳細は不明であった。



1．灰黄色土
2．茶灰色土（含、焼土、炭多）
3．黄灰色土
4．暗灰黄色土
5．暗黄灰色土
6．灰黄色土
7．黄色粘土（貼床）
8．黄灰色土（含、黄色粘土塊）
9．黄灰色土
10．灰色土
11．炭の薄い堆積
12．灰色土
13．黄色土（含、灰色土）
14．灰色土
15．暗灰黄色土（壁体溝）
16．暗黄灰色土
17．灰黄色土

第22図　竪穴住居７・８（1/60）

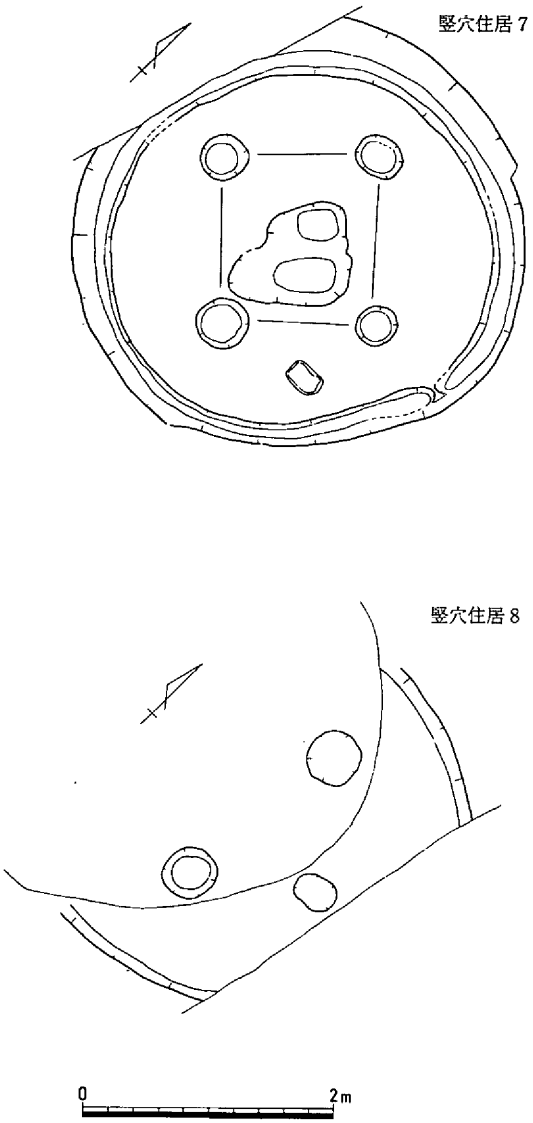
住居は、竪穴住居８の埋没後これをほぼその中央付近で切って構築されたものである。

平面は、海抜2.90ｍにおいて円形に検出された。規模は、南北方向で3.60ｍを測り、西側一部他の住居に切られ明確でないが東西約3.50ｍが復元される。

床面は、平面検出面から55㎝下層において、基盤掘削面を造成の後、約３㎝の厚さに粘土が貼られ床面が形成されていた。

柱穴は、４本がそれぞれに1.20～1.25ｍの芯心距離をもって検出された。規模は、掘り方の径30～40㎝で深さ40㎝が計測された。柱は、柱穴断面中において径15㎝前後の柱痕跡が確認された。

中央施設には、床面中央部において柱の並びに平行して大・小２基の土壙があり、両者間に切り合いが認められなかったことで、共存していたと考えられた。規模は、大きい方が長軸95㎝、深さ11㎝、小が長軸63㎝、深さ22㎝を測った。その他には長さ30㎝、幅20㎝大の石が作業台として置かれていた。

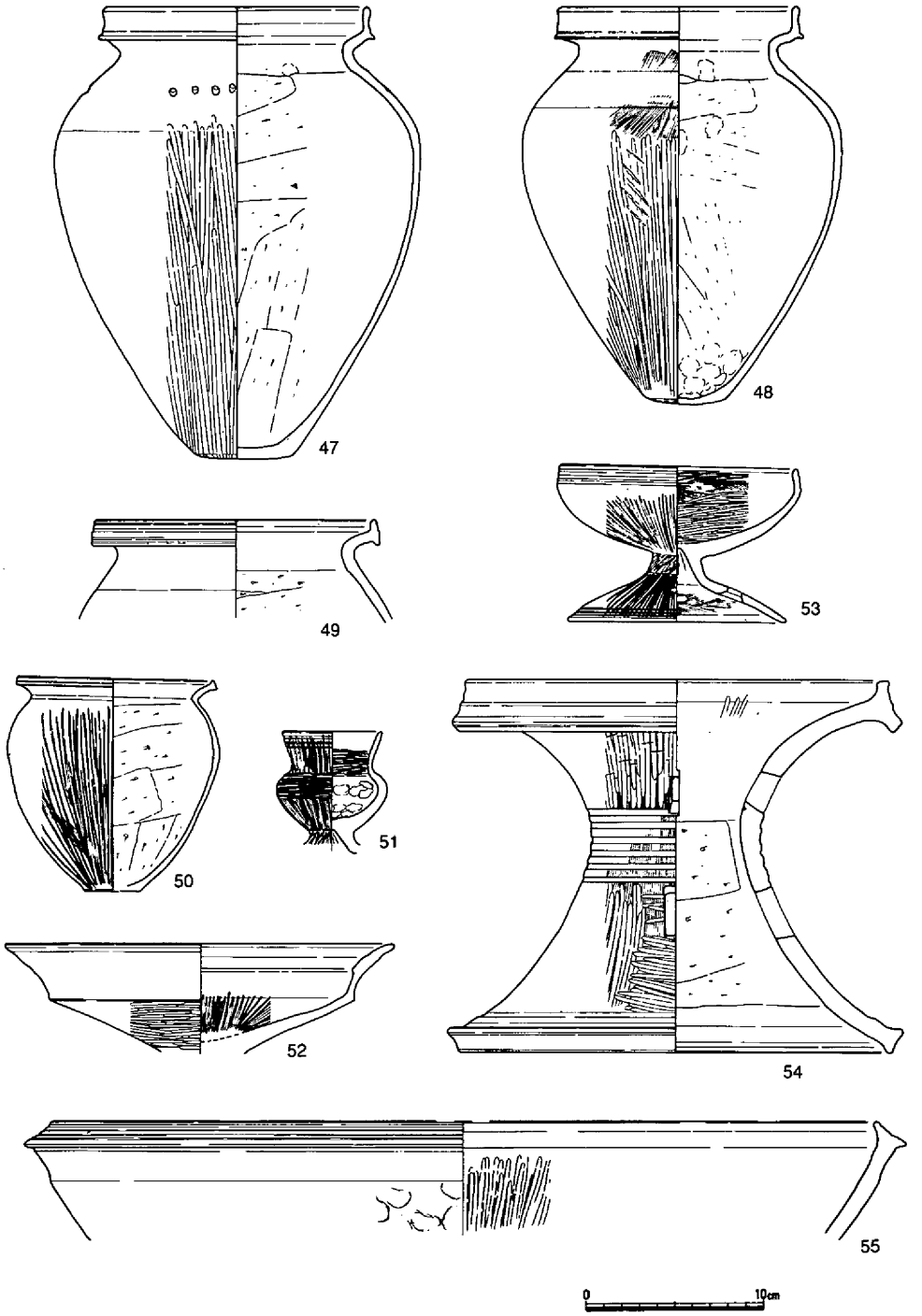


第23図　竪穴住居７・８（1/60）

出土遺物には、甕、鉢、高杯、器台があるが、時期的には新旧入り交じって検出された。住居に伴う遺物は、甕47・48、脚付壺51、高杯53があげられる。これによると住居の時期は、弥生時代後期後半に位置づけられる。

竪穴住居８（第15・22・23図、写真図版６）

竪穴住居７に切られて検出された住居である。調査区が狭く、住居との切り合いで構造につ



第24図　竪穴住居７出土遺物（1/4）

いては明確には出来なかった。

住居は、海抜2.90mにおいて平面弧状を呈する肩のラインが検出された。規模は、これを切った竪穴住居7と同規模にあったと考えられ、およそ直径3.30m前後にあったと推測された。

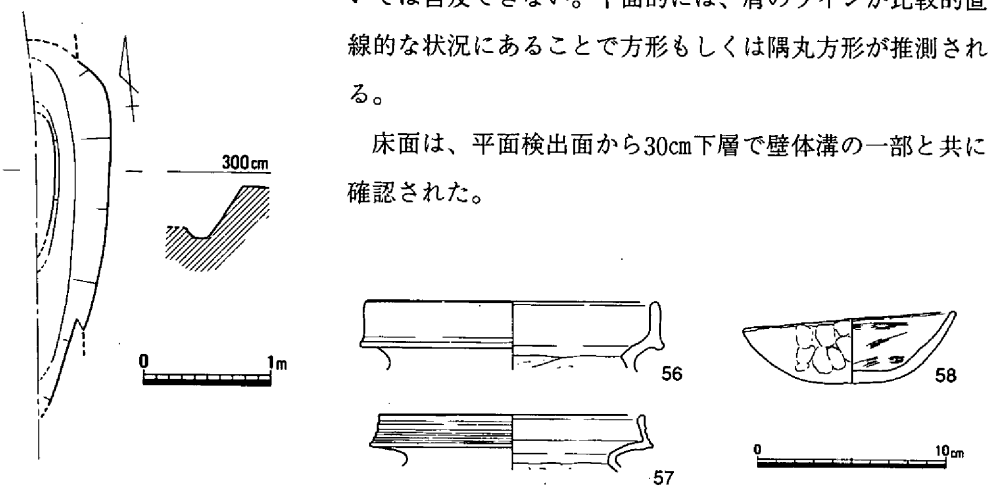
床面は、平面検出面から約50cm下層において確認された。しかし、壁体溝、柱穴等明瞭な状態での確認はなされておらず、この住居を構成した柱の数についても明確にできなかった。検出できた2本の柱穴は、掘り方の径40～45cmで深さ41cmのもので、断面には直径15cm程度の柱痕跡がみられた。

出土遺物は、土器の小片があった程度で図化可能なものはなかった。したがって住居の時期についての言及は明確にはできないが、あえて推測すれば弥生時代後期後半の範疇として差支えないと考える。

竪穴住居9（第15・25図）

第1調査区のほぼ中央部西側において後述の竪穴住居10の西側一部を切って構築されていた。住居は、平面が海抜2.90mで検出されたものの、遺存状態が良くなかったことで詳細については言及できない。平面的には、肩のラインが比較的直線的な状況にあることで方形もしくは隅丸方形が推測される。

床面は、平面検出面から30cm下層で壁体溝の一部と共に確認された。



第25図　竪穴住居9（1/60）・出土遺物（1/4）

出土遺物は、甕の小片および小型の浅鉢の3点が出土したにすぎないが、特徴として甕56・57は口縁部を上方に長く拡張し、57外面にはヘラ描による沈線文57が施されている。この特徴は型式的にみて、上東・才ノ町式段階に位置づけられる。したがって住居の時期としては、弥生時代後期後半の中でもほとんど終末段階とすることができよう。

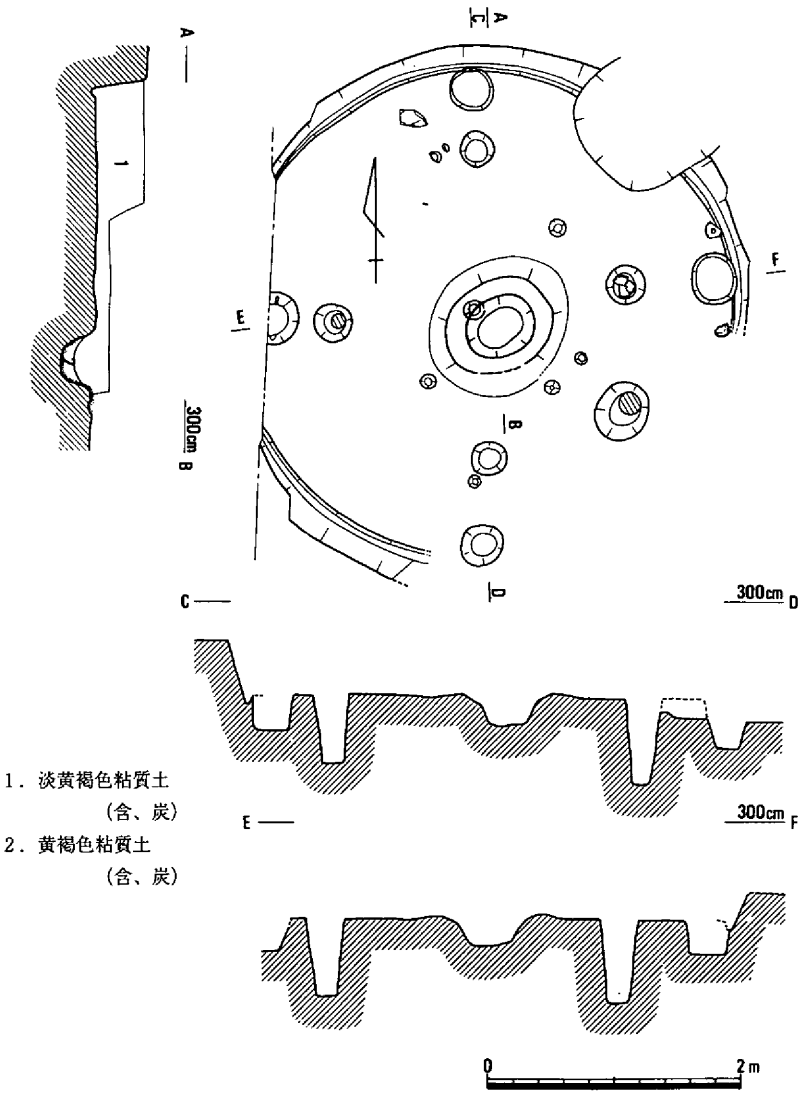
竪穴住居10（第15・26・27図、写真図版6）

第1調査区の中央部で前述の竪穴住居9に西側の一部を、後述する古墳時代の竪穴住居22・23によって南側の一部が切られた状態で検出された。

海抜2.70ｍで検出されたこの住居は、遺存状態は決して良くないがほぼ正円形の平面形に復元される。

規模は南北方向でおよそ4.40ｍが推測された。また平面検出面から床面までの深さは最大で45cmを測り、床面からは柱穴・中央穴・壁体溝が比較的良好な状態で検出された。

柱穴は、径約30cmで深さ60～70cmと比較的しっかりとした４本が東西・南北方向に対角線をもち、さらにその対角線上約50～60cm外側にこれに関係するかの状況でさらに４本の柱穴が確認された。大きさは、径30～50cmと内側のものに比較して大きい。ところが深さはいずれも床



第26図　竪穴住居10（1/60）

面から30cm程度と前者に比較して浅い。

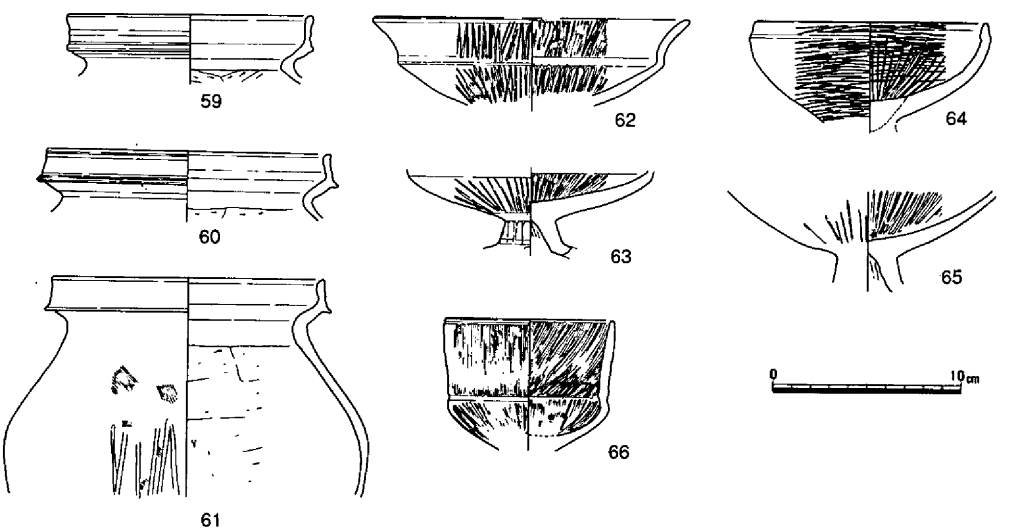
以上、基本的にこの住居は４本の主柱で構成されるが、その外側にはさらに４本の柱の存在が予想され、特異な住居構造をみせる。柱穴の中には、直径10～20cmの柱痕跡を見せるものもある。内側に見られる柱穴の距離は、芯心でおよそ1.60～1.70ｍを測り、外側の柱穴との距離は最短で50cm、最長で70cmを計測する。

中央穴は、住居の中央部において床面からの深さ20cmを測り、長軸約50cm、幅約40cmの楕円形の土壙と、この上部周沿に幅20～25cmで高さ５cm程度に粘土を土手状に巡らしたもので、壙内には炭を含んだ粘質土の流入堆積がみられた。また、この周辺にも炭の面的な広がりが認められた。ただし、この中央穴を含めた床面全体において火を焚いた痕跡を示す被熱面の確認はなされなかった。

なおこの住居は、覆土が約40cmと比較的厚い堆積を見せているものの、層序に複雑な堆積状況は認められず、淡黄褐色粘質土ただ１層である点において、廃絶後自然に徐々に埋没したものとは考えられない。むしろ一時に何等かの意図で廃絶後埋められたと推測される。

出土遺物は、覆土中と床面において少量ながら土器の出土が認められた。土器は、甕、高杯、脚付小型壺と器種も少なく量も僅かである。甕59・60・61は、いずれも口縁部を上方に長く拡張するものの外面に沈線が施されない点において、また高杯62・63・64は小型化と脚部短脚化傾向にあることで、型式的にはいずれも上東・鬼川市Ⅲ式に比定される。

住居の時期は、以上の点から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第27図　竪穴住居10出土遺物（1/4）

竪穴住居11（第15・28・29・30図、写真図版７）

第１調査区の中央やや南よりにおいて、竪穴住居10の埋没後そのほぼ上面に掘開・構築された住居である。ただし、竪穴住居11は廃絶埋没後、古墳時代の竪穴住居22・23により切られてしまいその結果遺存状況としては僅かに住居の約１／４北東隅が検出されたにすぎない。

住居は、海抜3.00m前後のレベルにおいて先ず土器の比較的多量な、ほとんど１か所への集中によりその存在が確認された。

検出された住居は、東西・南北方向を基調とした、肩を比較的直線的に伸ばすもので、全体についての詳細は不鮮明ながらおおむね方形もしくは長方形の平面形態であったものと推測される。

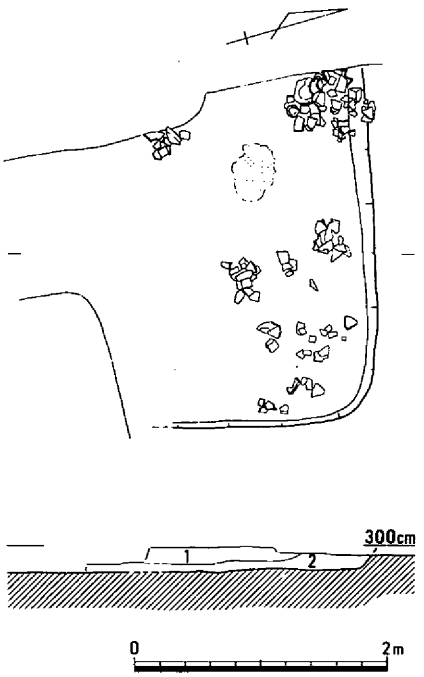
住居は、床面および覆土中に比較的まとまった状態で土器の一括遺存を確認したが、住居に伴う壁体溝・柱穴等の検出はできなかった。ただし、住居北側の床面の一部において赤褐色に被熱した火所と考えられる焼土が面として確認された。規模は、長さ50cm、幅30cmを測り、楕円形を呈するものであった。また、この他にも床面からは小規模ながら被熱面が見られ、これには小片ながら獣骨の共伴も認められた。

出土遺物には、壺、甕、高杯、鉢、台付鉢の器種が認められた。

壺67は、直立する短頸壺で外面肩部にはタテハケの後横方向にハケメ調整が施されている。68は、上半部を欠くが外面には斜め方向のタタキ痕跡が見られる。

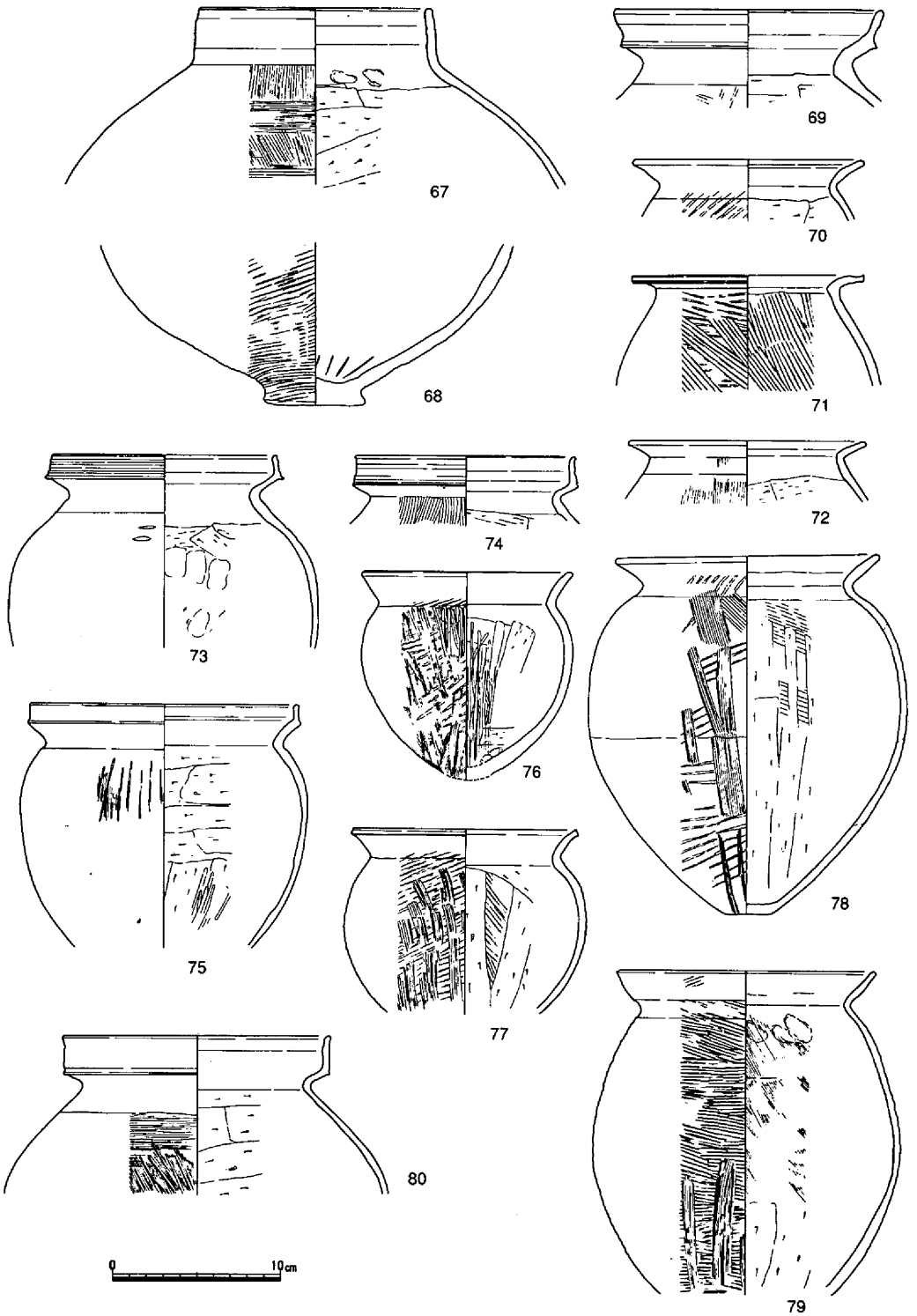
甕には、在地産と考えられる口縁部を上方に拡張したもの73・74・75と口縁部が断面「く」字状で体部外面にタタキを残すもの70・71・76・77・78・79の大きく２者の共伴が見られた。80は、口縁部を上方に長く拡張し、外面肩部には横方向にハケメが施されている。胎土も全体に白色を基調とする等、山陰地方からの搬入品の可能性を示唆している。

高杯81は、口縁部が僅かながら長くなり、内外面ともに丁寧な横方向のヘラミガキが施される。82は、内湾気味の受部に比較的長く外反する口縁部を有し、受部面

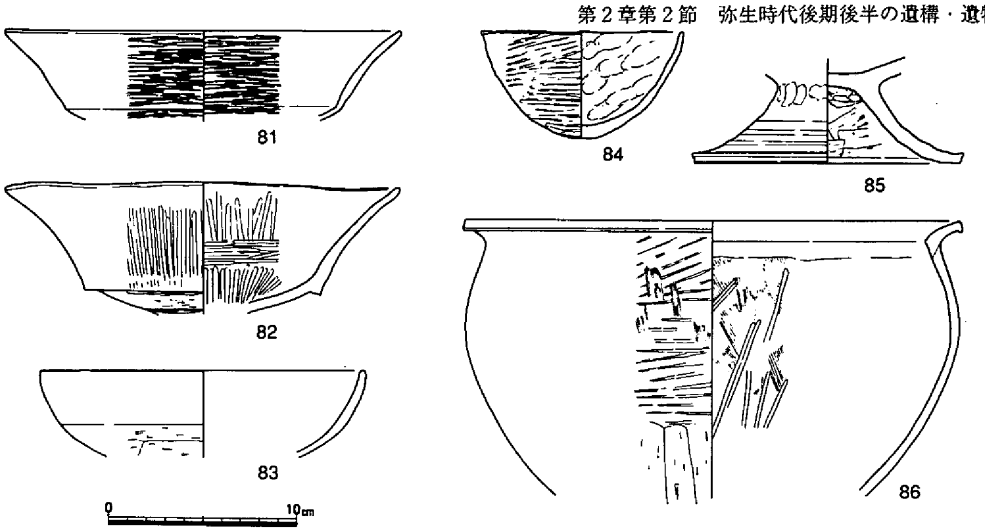


1．黄色粘質土　　2．暗茶褐色粘質土

第28図　竪穴住居11（1/60）



第29図　竪穴住居11出土遺物①（1/4）



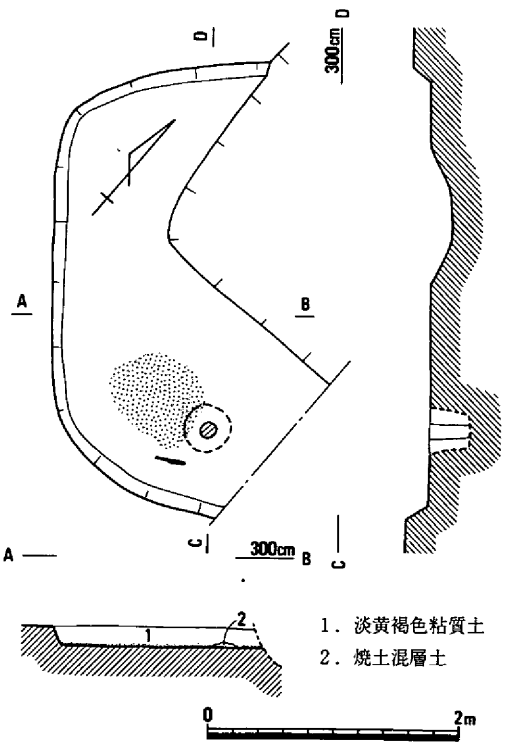
第30図　竪穴住居11出土遺物②（1/4）

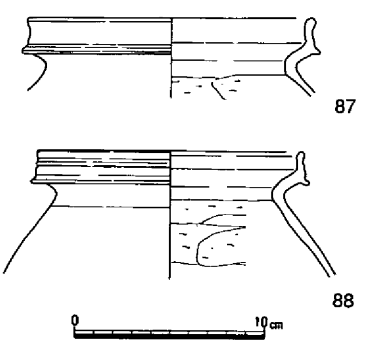
にはヘラによるケズリ調整が観察された。

鉢83は、底部外面にヘラケズリによる調整が見られ、新相を示す。84・86は、いずれも外面にタタキを残す。85は、胎土中に角閃石と雲母を含む。

以上の土器の在り方から竪穴住居11の時期は、83の在り方に若干の疑念はあるもののその他の土器型式が、才ノ町段階に比定されることで弥生時代後期後半の範疇で考えたい。

竪穴住居12（第15・31図）





第31図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居12は、第1調査区の南端部付近に位置する。

住居は、北西部分を古墳時代の竪穴住居23に切られた状態で、海抜2.45mで平面が検出された。遺構の遺存状態は不良で全体像は判然としないが、遺存する状況から推測される構造は隅丸方形もしくは隅丸長方形が考えられる。

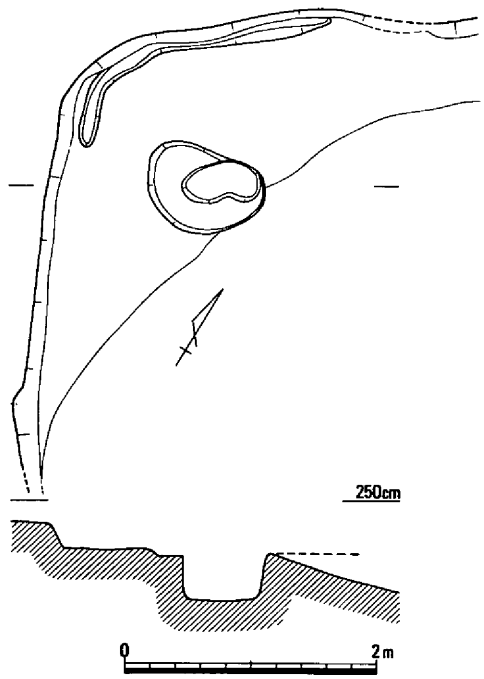
床面には、壁体溝が見られず、柱穴も僅かに1本が検出できたにすぎない。床面には、全体に炭の堆積が、また南側コーナー部分には焼土と炭の集中が認められた。

時期は、出土した2点の甕が才ノ町段階に比定され、おおむね弥生時代後期後半への位置づけがなされよう。（島崎）

竪穴住居13（第15・32・33図、写真図版7）

第2調査区の北端で検出された住居である。本遺構は竪穴住居24・25・26に切られており、検出されたのは住居の北東コーナー部分のみである。規模は不明であるが、1辺が約4～5mの隅丸方形を呈する住居であったと思われる。遺構は海抜2.3mで検出され、壁高は床面から約20cmを測り、全体に保存状態が悪い。

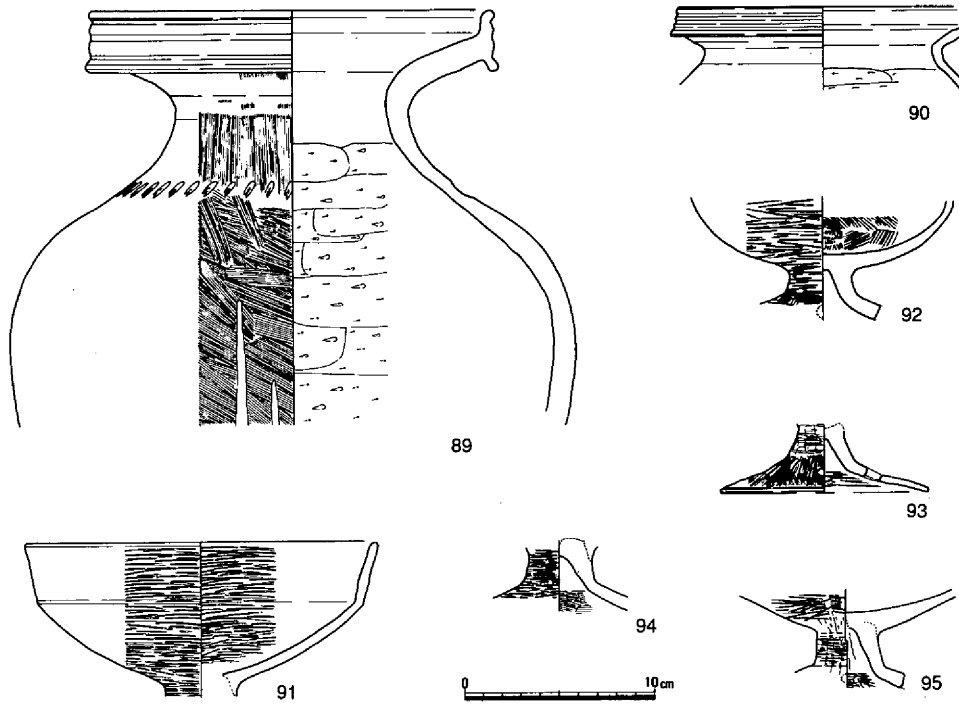
遺物の出土量は多くはないが、床面上で弥生土器が出土している。89は壺、90は甕、91～95は高杯である。89は口径20.8cmを測る。口縁部外面には3条の凹線文がみられ、胴部外面にはヘラミガキがみられる。胴部外面にはタテ方向のハケメが施され、胴下半部にはヘラミガキがみられる。内面にはヨコ方向のヘラケズリがみられる。90は口径15.2cmを測る。口縁端部は上に拡張し、やや内傾するが、外面には3条の凹線文がみられる。91は口径18.5cmを測り、器壁内外面にはヨコ方向のヘラミガキ調整がなされている。色調は橙色を呈する。出土遺物からみて弥生時代後期後半の時期（才ノ町）に比定される。



第32図　竪穴住居13（1/60）

竪穴住居14（第15・34～36図）

第2調査区のほぼ中央部で、竪穴住居30と切り合う状態で検出された住居である。床面レベルは竪穴住居30より20cm程低い。検出された遺構



第33図　竪穴住居13出土遺物（1/4）

レベルは海抜2.4ｍで、遺構全体の約１／２弱であり、大部分は調査区外となる。平面プランは西と北側にコーナーが認められることから、隅丸方形の竪穴住居が復元可能であり、その規模は長径約４ｍ短径3.5ｍ、の住居であったと考えられる。

住居は海抜2.4ｍで検出され、壁高は床面から約20㎝を測り、保存状態は悪い。床面には住居に伴う遺構としては柱穴のみである。この柱穴掘り方は径60㎝、深さ55㎝を測る。恐らく、４本柱で構成されるうちの１本と思われる。断面観察によると、埋土は黒褐色の粘質土であり、床面には貼床層が認められている。

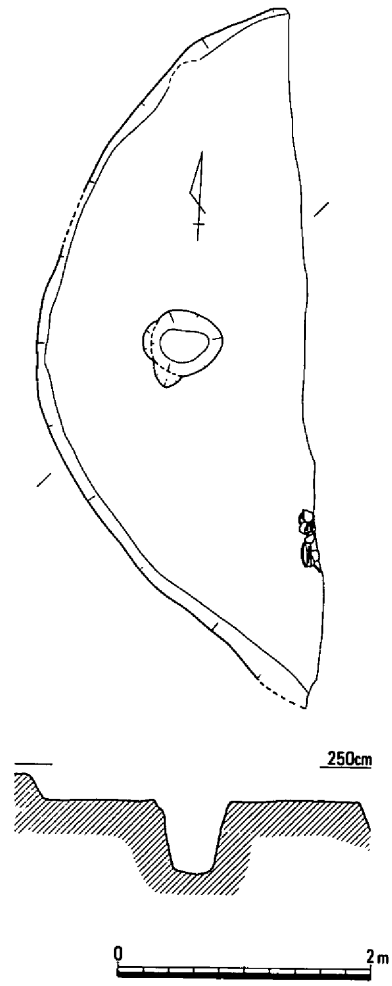
遺物は床面直上及び貼床面においてかなり多量の土器が出土している。床面直上においては96・97・116が出土した。96は口径19㎝の高杯である。内外面とも横方向のヘラミガキ調整がなされている。胎土には砂粒がみられない。97は口径16㎝の甕である。口縁外面には４条の沈線が施され、胴部内面は横方向のヘラケズリがみられる。116は器台の胴部破片である。大きさは10×12㎝程で、この破片の左右には方形の透し穴のヘラ痕跡が認められる。外面には縦方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキがなされている。このような器面調整がなされた後に、２個体の線刻絵画と凹線文が施されている。器壁内面は縦方向のヘラケズリがみられる。胎土内には長石、雲母がみられる。色調は外面が橙色、内面はにぶい赤褐色、断面は褐灰色を呈している。

２個体の線刻絵画は、いづれも鋭利なヘラ状工具によって描かれている。

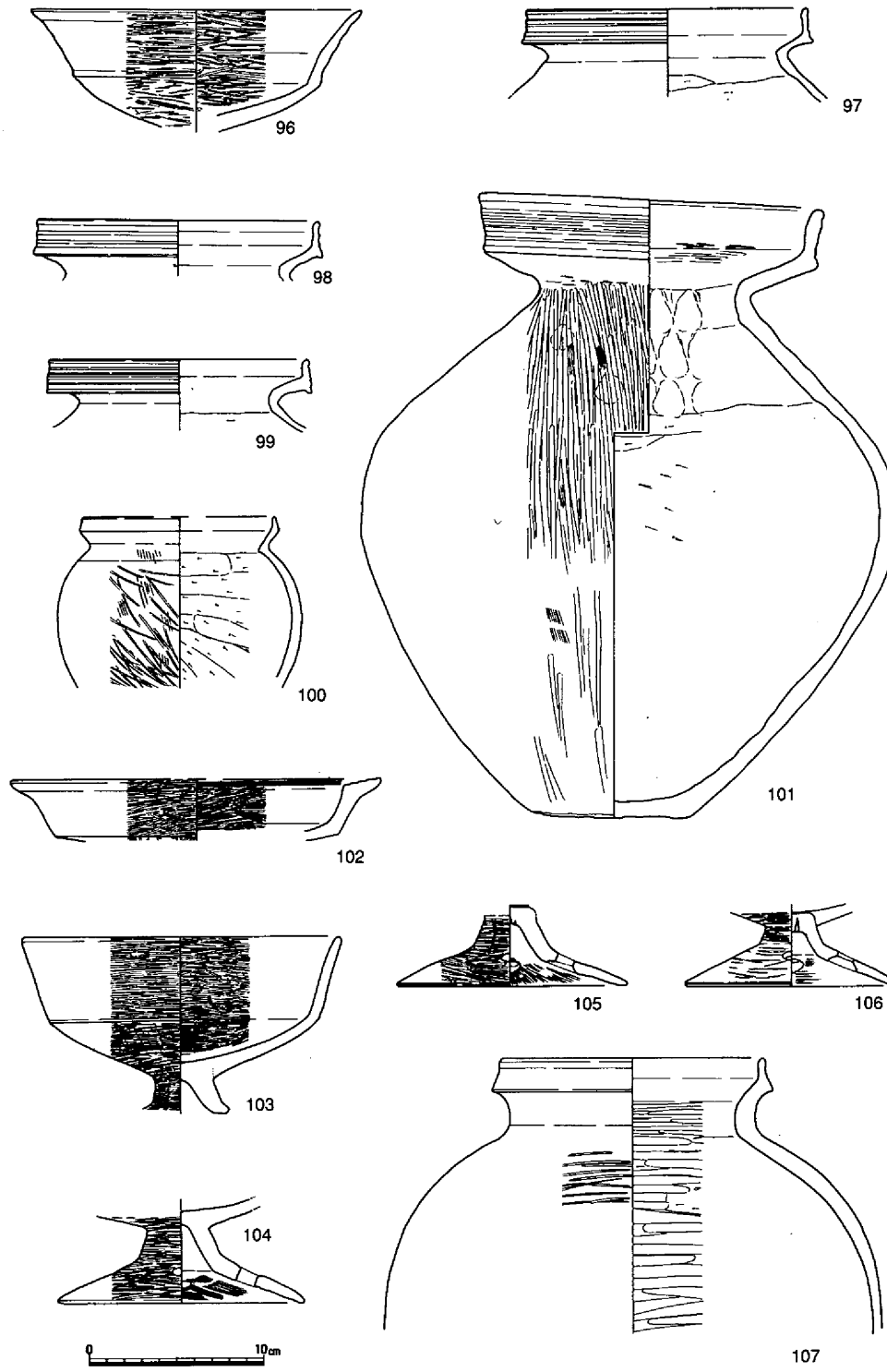
中央に描かれた絵画は、頭部をハート形に表現され、顔面には細長い目と口を描いている。胴部は四つ足動物の形態を呈し、前後の足と尻尾、鱗らしきものが表現されるという全体には抽象化された絵画ということができる。このように、顔は人面を表し、胴部を蛇、竜もしくは獣を表現した可能性があることから、「人面蛇体」、「蛇体人面文」あるいは「人面獣」絵画土器と呼ばれてきたが、ここでは、人面に竜体を表現する線刻画としておきたい。

上部に描かれた線刻絵画は欠損しているため、全容は不明であるが、前足、後足及び尻尾のようなものが表現されていることから、鹿の可能性をもつものである。

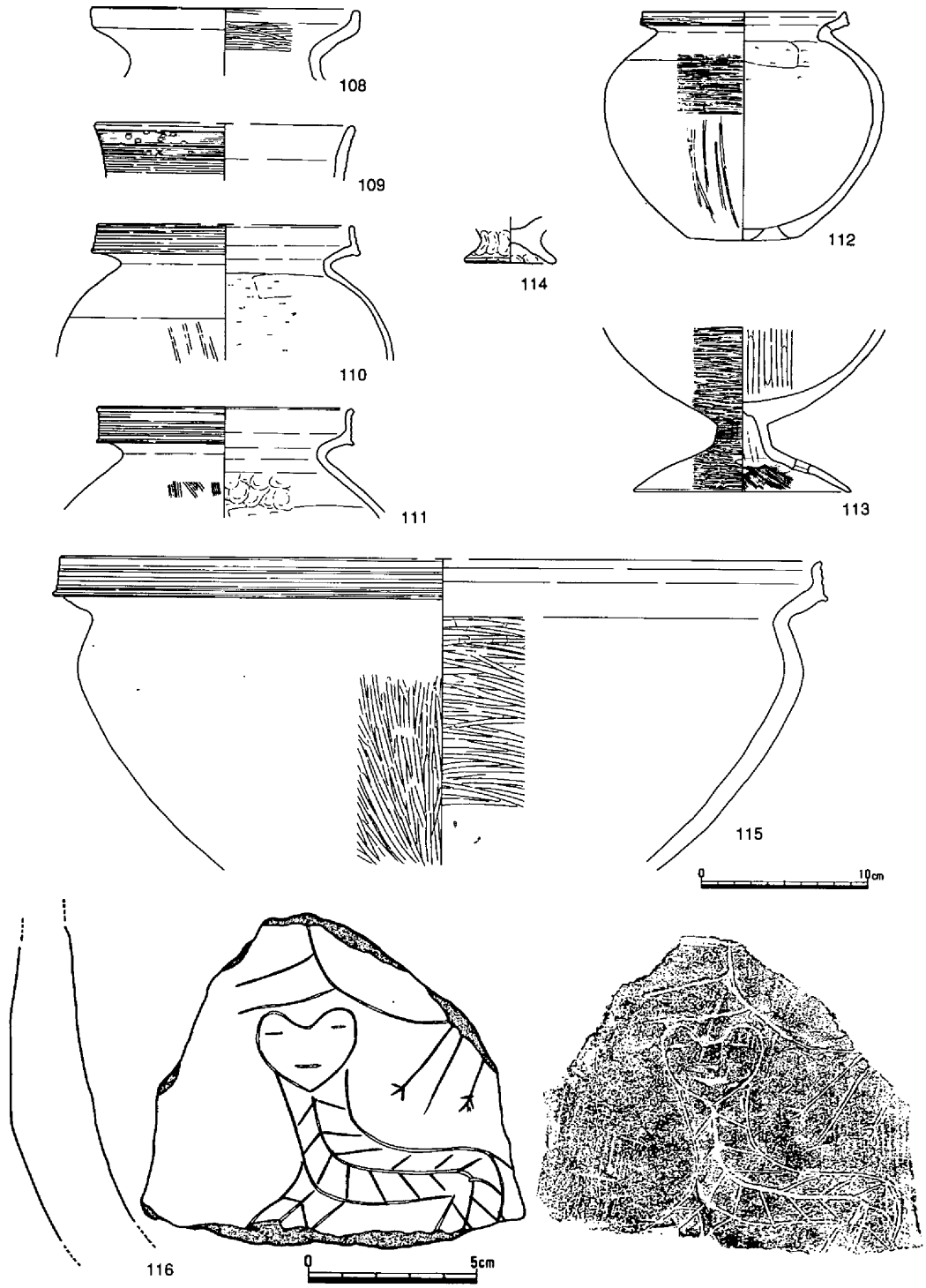
貼床面からの土器は甕98～100・110～112、壺101・107～109、高杯102～106、製塩土器114、鉢115がある。甕には口径、器高によって大小の２種類に大別できる。100は口径11cmを測る。口縁は内傾する。胴部外面には縦方向のハケナデの後、斜め方向のヘラミガキが部分的にみられる。内面はヘラケズリである。112は口径12.1cm、器高13.7cm、底部径6.4cmを測る。口縁部には２条の退化した凹線がある。胴部外面には２種類の調整がみられる。すなわち、上半部には横方向の細いヘラミガキ、下半部には縦方向のヘラミガキがみられる。なお、底部には焼成後の穿孔があり、胴部外面には黒斑と媒の付着がみられた。98は口径16.2cmを測る。口縁部は上方に拡張し、外面には５条の沈線がみられる。99は口径14.8cmを測る。口縁部は上方に垂直にのび、外面には５条の沈線がみられる。110は口径15.0cmを測り、口縁部は内傾し、外面には４条の浅い沈線がめぐる。頸部付近の外面にはヨコナデ、胴下半部には縦方向のヘラミガキ調整がみられる。内面には横方向のヘラケズリ後のナデ調整がみられる。111は口径15.0cmを測る。口縁部は上方に拡張し、端部はやや外反する。外面には６条の沈線がみられる。胴部外面には縦、斜め方向のハケメが、内面の頸



第34図　竪穴住居14（1/60）

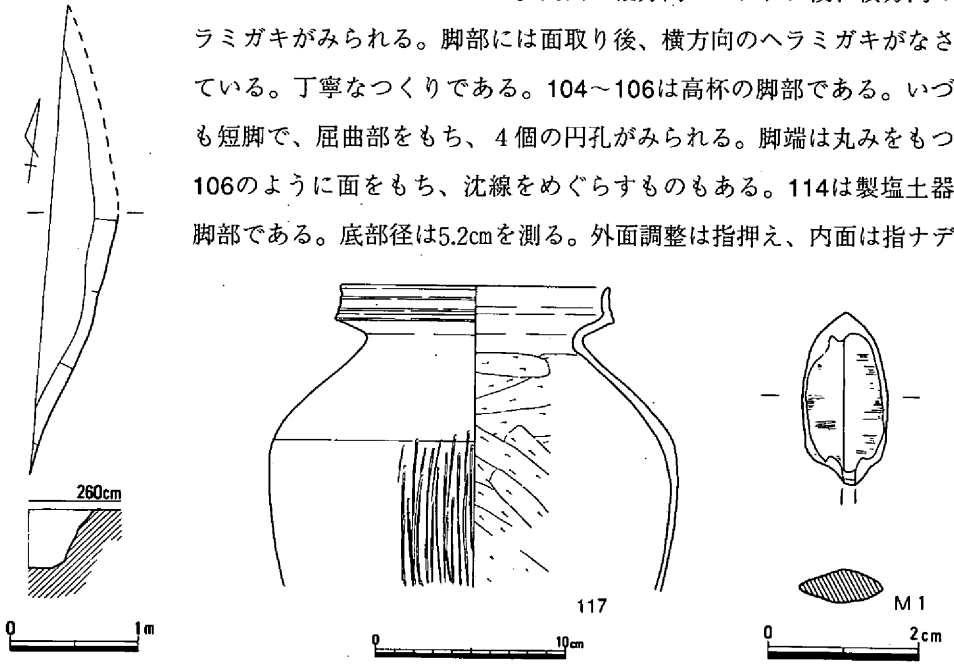


第35図　竪穴住居14出土遺物①（1/4）



第36図　竪穴住居14出土遺物②（1/4・1/2）

部近くは指押えの圧痕、下半部には横方向のヘラケズリがみられる。色調は外面がにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。101は口縁部が上方に外反しながら拡張する複合口縁の壺である。口径は18.8cm、器高35.8cm、底部径8.9cmで胴部の最大径は30.5cmを測る。口縁部外面には５条の浅い沈線がめぐる。胴部外面では、上半部がハケナデ後に縦方向のヘラミガキがなされ、所々に指押え痕がみられる。下半部は器壁が剥離しているが、縦方向のヘラミガキがみられる。胴部内面は、頸部付近において指ナデが、下半部には横方向のヘラケズリがみられる。なお、胴部中位から底部にかけて黒斑がみられる。ほぼ完形品である。107は口径14.8cmを測る。口縁部は上方に拡張するが内傾する複合口縁の壺である。胴部外面には横方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラケズリがみられる。胴下半部に煤が付着している。108は口径15.8cmを測る。口縁は上方に拡張する。外面はナデによる調整が、内面にはヘラミガキによる調整がなされている。高杯は杯部の形態から２種類みられる。102は口径21.2cmを測る。杯部から稜をもって外反しながら立上がり、外方向に拡張し、平坦部には浅い４条の凹線文がみられる。内外面にはヘラミガキがみられる。なお、内面には丹塗りが施されている。103は口径19.2cmを測る高杯である。杯部から稜をもって立上がるが、あまり外反しない。口縁部立上がりの高さが受部に比べて高い。脚部は短脚で屈曲部をもち、２個の円孔がみられる。恐らく４孔と思われる。口縁部の内外面は横方向のヘラミガキが、受部の外面は縦方向のヘラミガキの後、横方向のヘラミガキがなされている。内面は縦方向のハケナデ後、横方向のヘラミガキがみられる。脚部には面取り後、横方向のヘラミガキがなされている。丁寧なつくりである。104～106は高杯の脚部である。いづれも短脚で、屈曲部をもち、４個の円孔がみられる。脚端は丸みをもつが、106のように面をもち、沈線をめぐらすものもある。114は製塩土器の脚部である。底部径は5.2cmを測る。外面調整は指押え、内面は指ナデで



第37図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物（1/4・1/1）

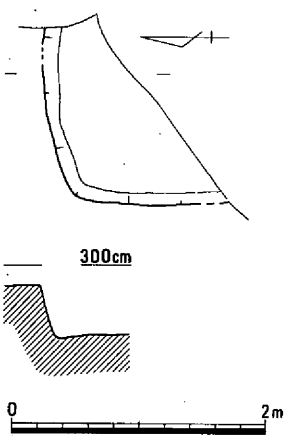
ある。色調は内外面とも淡橙色を呈する。115は口径45.4cm、胴部最大径43.5cmを測る大型の鉢である。口縁部は上方に拡張するが、やや内傾する。外面には５条の浅い沈線がみられる。胴部外面の調整はヨコナデと縦方向のヘラミガキが、内面は指押えとヘラケズリの後に横方向のヘラミガキがみられる。

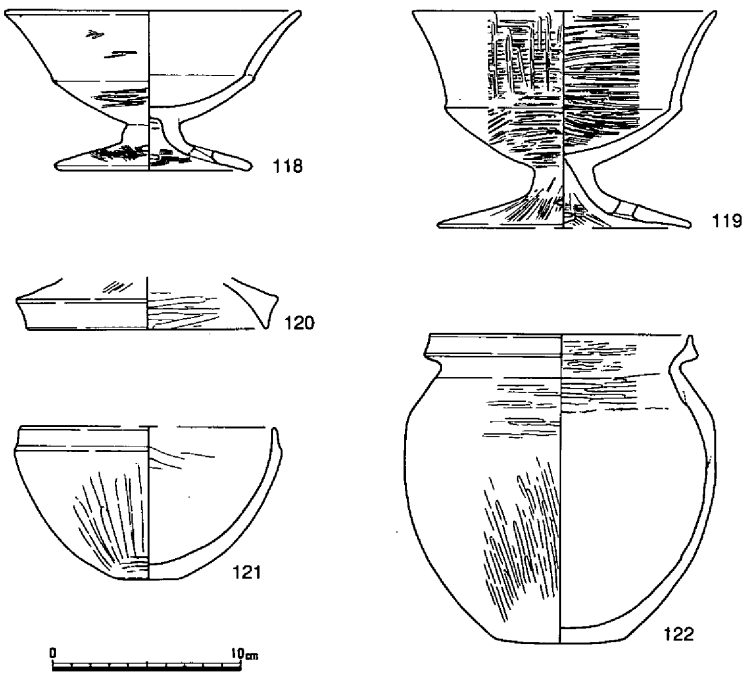
これらの土器からこの住居の年代は弥生時代後期終末の才ノ町段階のものと思われる。

竪穴住居15（第15・37図）

第２調査区の中央部で、竪穴住居30と切り合う状態で検出された住居である。床面レベルは竪穴住居30より30cm程低い。検出された住居はコーナー部分のみであり、大部分が調査区外となる。平面プランからみて、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。遺構検出レベルは海抜2.5mで、壁高は床面から45cmを測る。床面及び土層断面では壁体溝はみとめられなかった。

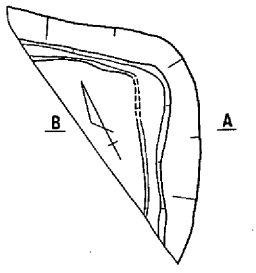
遺物は甕117と銅鏃Ｍ１が出土している。117は口径14.0cmを測る。口縁端部は上方に拡張し、外面には浅い凹線文が３条みられる。胴部外面の調整は、上半部でヨ





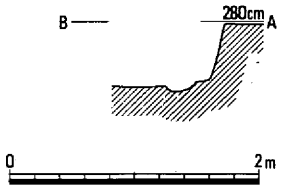
第38図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物（1/4）

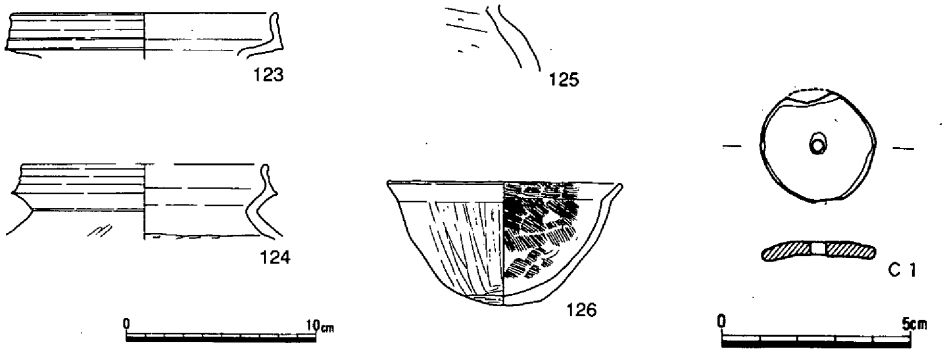
コナデ、下半部は縦方向のヘラミガキがみられる。内面の上半部は横方向のヘラケズリ、下半部は斜め方向のヘラケズリがみられる。色調はにぶい橙色を呈する。Ｍ１は銅質があまり良くないが、鏃身には鎬がみられる。最大長は23㎜、最大幅11㎜、最大厚４㎜、重さ3,105ｇを測り、色調は明緑色を呈する。時期は弥生時代後期終末の才ノ町段階に位置づけられる。



竪穴住居16（第15・38図）

第２調査区の中央部で、竪穴住居31に切られる状態で検出された住居である。床面レベルは竪穴住居31より10cm程高い。検出されたのはコーナー部分のみであり、大部分は調査区外に存在する。平面プランからみて、方形を呈する





第39図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

が、規模は不明である。遺構の検出レベルは海抜2.85ｍで、壁高は床面から35cmを測る。床面及び土層断面では壁体溝はみられない。

遺物は高杯118～120、鉢121、122が床面直上で出土している。118・119の口縁部は杯から稜をもって外反しながら立上がる。脚部はいづれも短脚で屈曲部をもち、４個の円孔をもつものと思われる。器壁の内外面には丁寧なヘラミガキによる調整がみられる。120は胎土中に金雲母を含み、特殊器台などと同じ色調をするものである。外面は丹塗りである。121は口径13.4cm、器高8.1cm、底径3.4cmを測り、胎土中に少量の金雲母を含む鉢である。122は口径13.8cm、器高16.4cm、底径6.6cmを測り、胎土中に長石、石英、角閃石を多く含む小型の鉢である。時期は弥生時代後期終末の才ノ町段階に位置づけられる。

竪穴住居17（第15・39図、写真図版８）

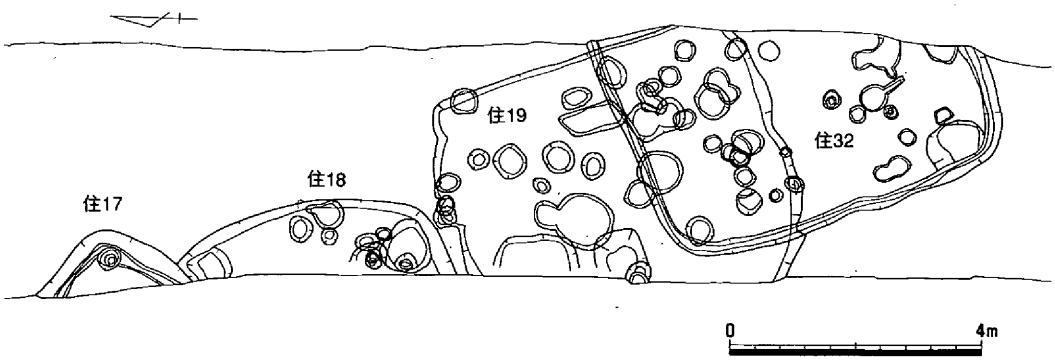
第２調査区の中央よりやや南で、竪穴住居18と切り合う状態で検出された住居である。床面レベルは竪穴住居18より５cm程高い。検出されたのはコーナー部分であり、大部分は調査区外となる。平面プランからみて、方形を呈するものと思われるが、規模は不明である。遺構の検出レベルは海抜2.8mで、壁高は床面から約50cmを測る。床面の壁沿いには壁体溝がみられる。

遺物は床面から、甕123・124、壺125、鉢126、土製紡錘車Ｃ１が出土した。甕は口縁部が上方に拡張するが、やや内傾し、外面には浅い凹線文がみられる。125は壺の頸部である。胎土中に金雲母、石英が多量に含まれ、外面には丹塗りが施されている。Ｃ１は最大径3.0cm、最大厚0.4cmを測り、重さ4.04ｇを測る。時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

竪穴住居18（第15・41図、写真図版８）

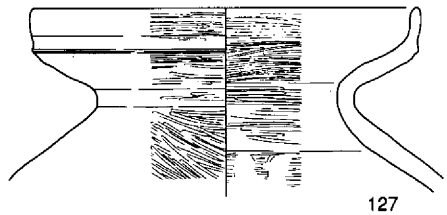
第２調査区の中央よりやや南で、竪穴住居17と切り合う状態で検出された住居である。検出されたのは約１／４程である。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は１辺が約４ｍである。遺構の検出レベルは海抜2.5mで、壁高は床面から約25cmを測る。床面及び土層断面において壁体溝は確認されなかったが、住居に伴う遺構としては柱穴がある。柱穴掘り方は径25cm、深さは53cmを測り、埋土は黒褐色の粘質土である。

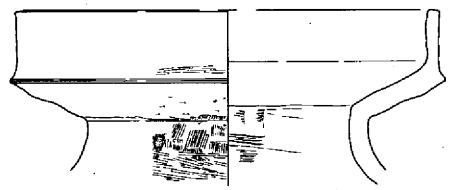
遺物は壺127～129、高杯130、甕131が床面から出土している。127の口縁部は短い頸部から鋭く外反し、さらに上方に伸びる。外面は横方向のヘラミガキを施した後、ヨコナデがみられる。頸部下には斜め方向のヘラミガキがみられた。内面は指ナデを施した後、ヘラミガキとヘラケズリがなされている。128の口縁部は「ハ」字状に開く頸部から外反し、さらに上方に拡張する複合口縁である。口縁の外面は横ナデを施すが、ヘラミガキが若干みられる。頸部はヘラケズリ、下半にはハケによる調整、横方向のヘラミガキがなされている。頸部内面はハケ状工具による調整がみられる。129は短い頸部から外反して上方に拡張する複合口縁の壺である。頸部外面はヘラミガキ、内面にはヘラケズリが施されている。130は内外面とも丁寧なヘ

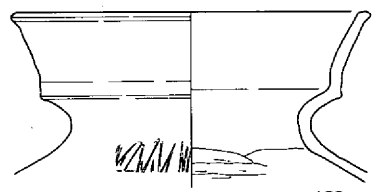


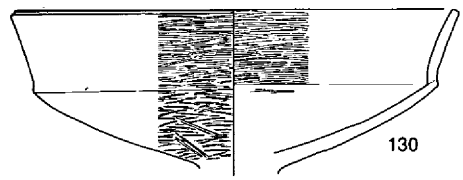
第40図　竪穴住居17・18・19・32（1/120）

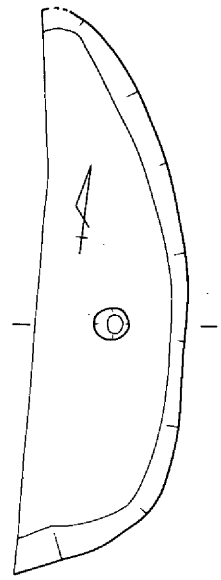
ラミガキの調整が施されている。胎土は水漉粘土を使用している。131の口縁部は外反し、複合口縁を呈する。胴部外面には斜め方向のハケによる調整が施され、内面上半は横方向のヘラケズリ、底部付近は縦方向のヘラケズリが施されている。127は周辺地域、131は山陰地方からの搬入品と思われる。遺物は古墳時代初頭のものが大部分であるが、遺構の切り合い関係などからみて、弥生時代終末の才ノ町段階に位置づけられると思われる。

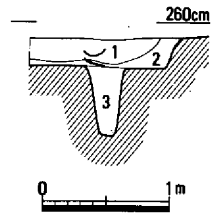




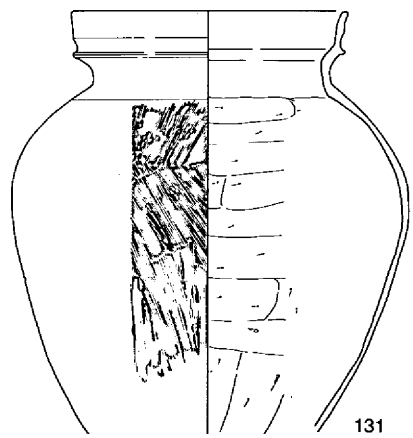








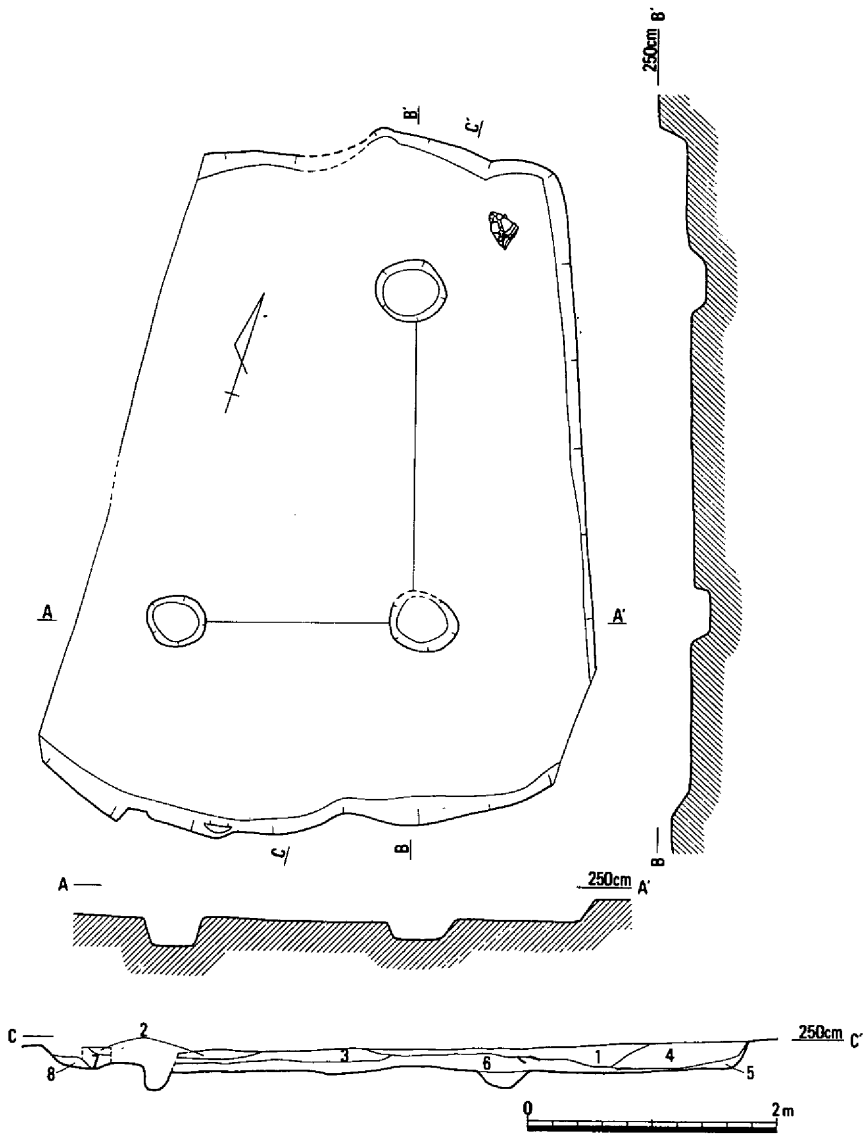
1．暗灰黄色粘質土
2．暗黄褐色粘質微砂
3．黒褐色土



第41図　竪穴住居18（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居19（第15・42～44図、写真図版８）

第２調査区の中央よりやや南で、竪穴住居32に切られる状態で検出された住居である。検出されたのは約２／３程である。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は１辺が約4.5m程である。遺構の検出レベルは海抜2.4mで、壁高は床面から約20cmを測る。埋土は７層に区分されるが、灰黄色と暗灰色粘質土に大別される。住居に伴う遺構としては柱穴３本が検出されて



1．灰黄色粘質土　　4．暗黄褐色粘質土
2．暗黄褐色粘質土　　5．暗褐色粘質土　　7．暗灰色粘質土
3．灰黄色微砂混り土　　6．暗灰黄色微砂混り土　　8．暗灰色粘質微砂混り土

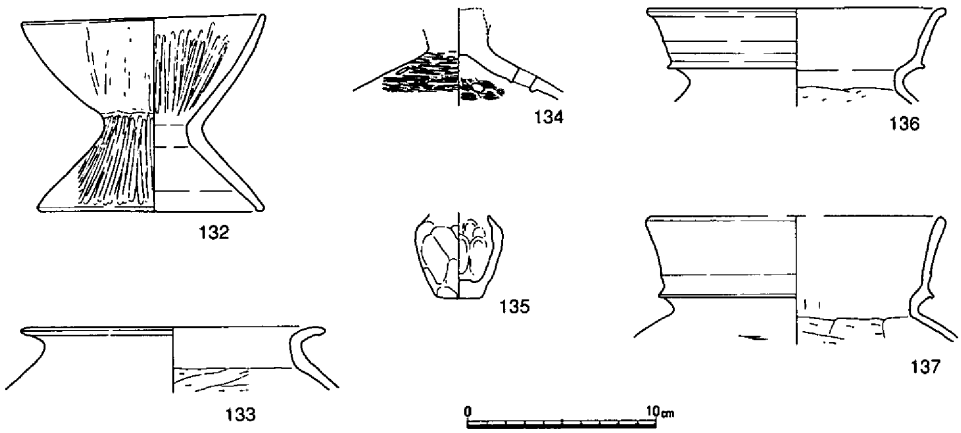
第42図　竪穴住居19（1/60）

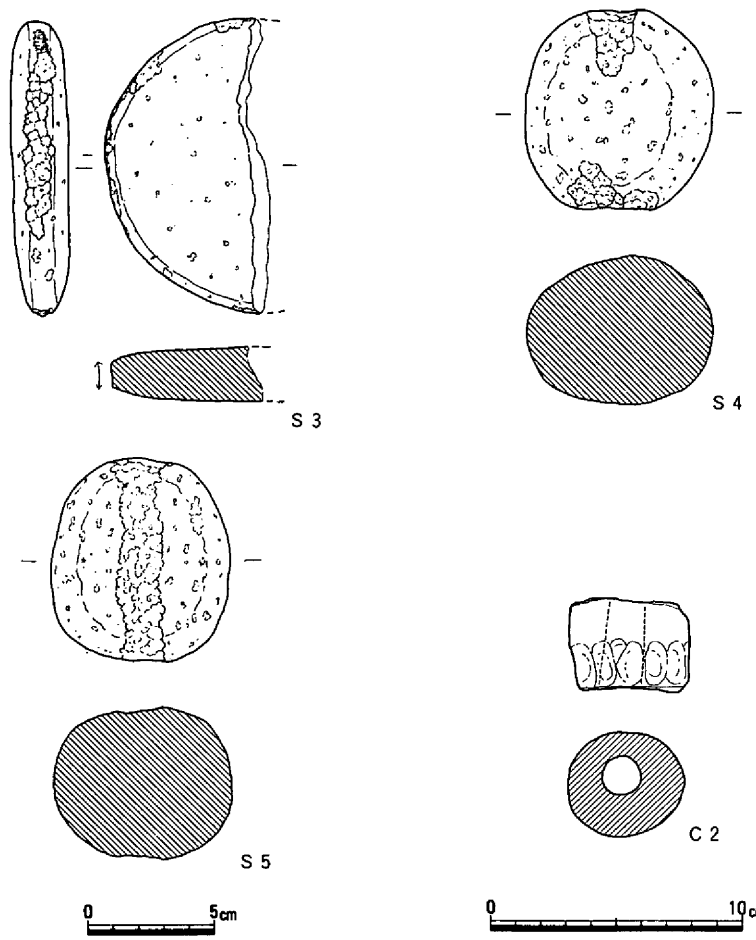
いるが、４本柱で構成される竪穴住居と思われる。検出された柱穴掘り方は40×50cm程で、深さは15～20cmと浅く、柱痕跡は確認することができなかった。なお、床面及び土層断面において壁体溝の確認はできなかった。

遺物は床面の上、下層において出土している。主な下層遺物としては、器台132、甕133・153～156、高杯134、ミニチュア土器135、壺136・137がある。132は「く」字状に上下に開く受部と脚部をもつもので、受部の内外面は縦のヘラミガキが施され、脚部外面は縦のヘラミガキ、内面は横のナデ調整がみられる。133の口縁部は頸部から急に外反する。外面はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリが施されている。136・137は複合口縁を呈する壺で、136の口縁端部はやや外反する。137の胴部外面にはハケ調整が一部みられ、内面は横のヘラケズリが施されている。153～156は口縁端部が上方に拡張するが内傾する。外面には５条の凹線文がある。胴部外面はヘラミガキ調整のもの153・154・156とハケナデ調整のもの155があり、内面はヘラケズリ調整がされている。

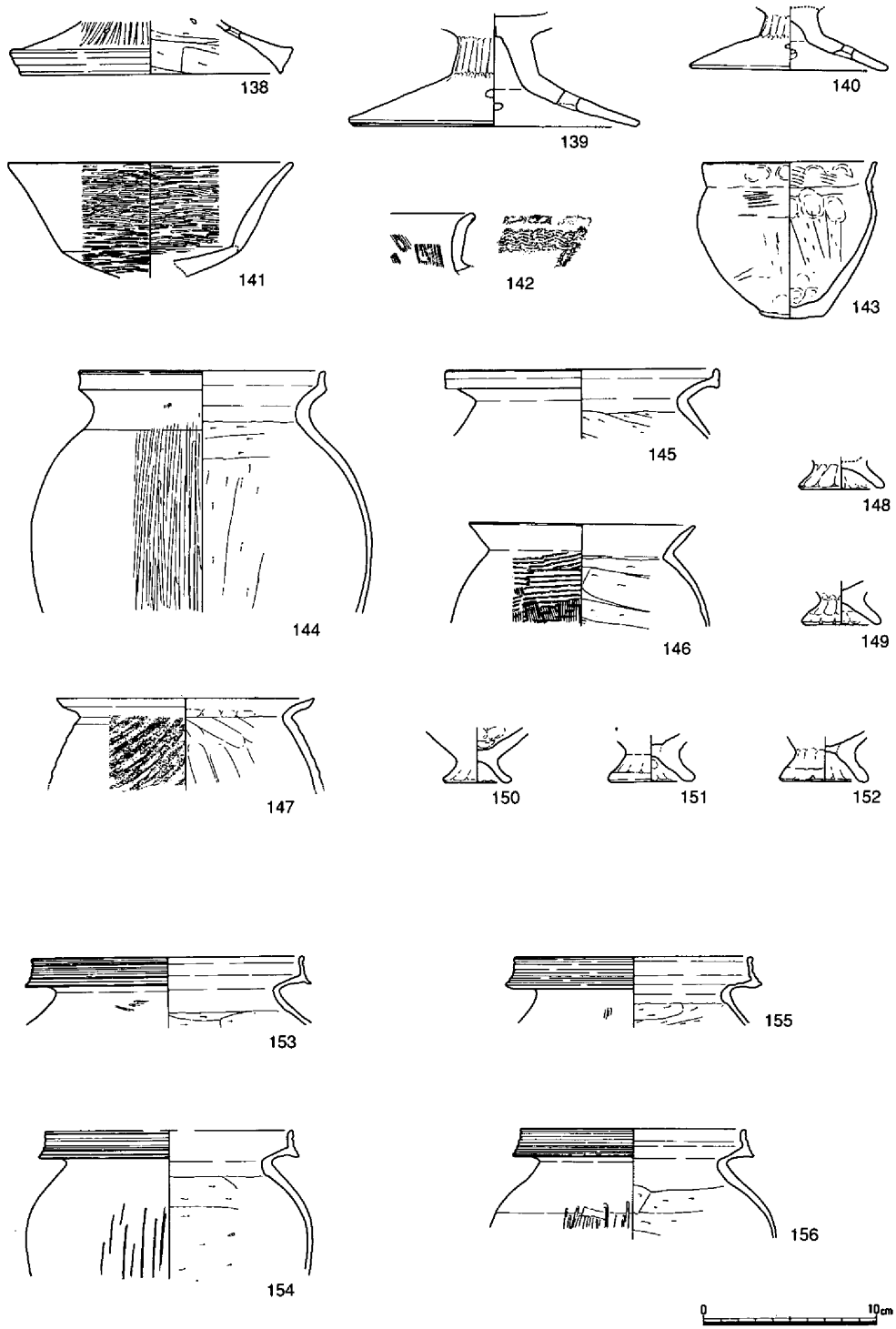
床面上層からは石器、土器、土製品が出土している。石器はＳ３が敲石、Ｓ４・Ｓ５が石錘である。石錘は有溝のものと両端を加工しただけのものの２種類で、その重量は約50ｇである。Ｃ２は有孔の土錘で、重量は92.5ｇである。土器は高杯138～141、壺142、鉢143、甕144・147、製塩土器148～152などが出土している。138は高杯の脚部で、脚端は面となり、浅い凹線がみられる。外面はヘラミガキ、内面は横のヘラケズリ調整がみられる。円孔は下段に３個、上段に３個が穿たれていたようである。なお、外面は丹塗りされている。139・140は短脚で屈曲部をもち、４個の円孔が穿たれている。脚柱外面はヘラ状工具による面取りが施され、裾部はヘラミガキ調整がなされている。141は口縁部が斜め外方にほぼ真直ぐに延びるもので、内外面は横のヘラミガキ調整が丁寧になされている。142の外面はハケナデ後に櫛描の波状文を施し、その上に鋸歯文を描いている。端部には部分的に刺突文がみられる。内面はハケナデ調整がなされている。甕は口縁部の形態から２種類に分けられる。144・145は「く」字状に外反する口縁部から端部をわずかに上方に拡張し、丸くおさめている。144の胴部外面は縦のヘラミガキ、内面は横のヘラケズリ調整が行われている。146は「く」字状に外反する口縁部をそのまま丸くおさめる。胴部外面は横のタタキが行なわれ、下半部はさらに縦のハケメによる調整がみられる。内面は横のヘラケズリである。147も146と同じ形態をとるが、口縁端部がわずかに斜め上方に拡張し、鋭くおさめている。胴部外面は斜め方向のタタキ、内面は指押えとナデによる調整がなされている。

このように、住居内からは弥生時代後期前半、後半、古墳時代前半期の遺物が出土しているが、遺構の切り合い関係、遺構平面プランなどからみて弥生時代後期終末の時期に位置づけられるものと考えられる。





第43図　竪穴住居19出土遺物①（1/4・1/3）

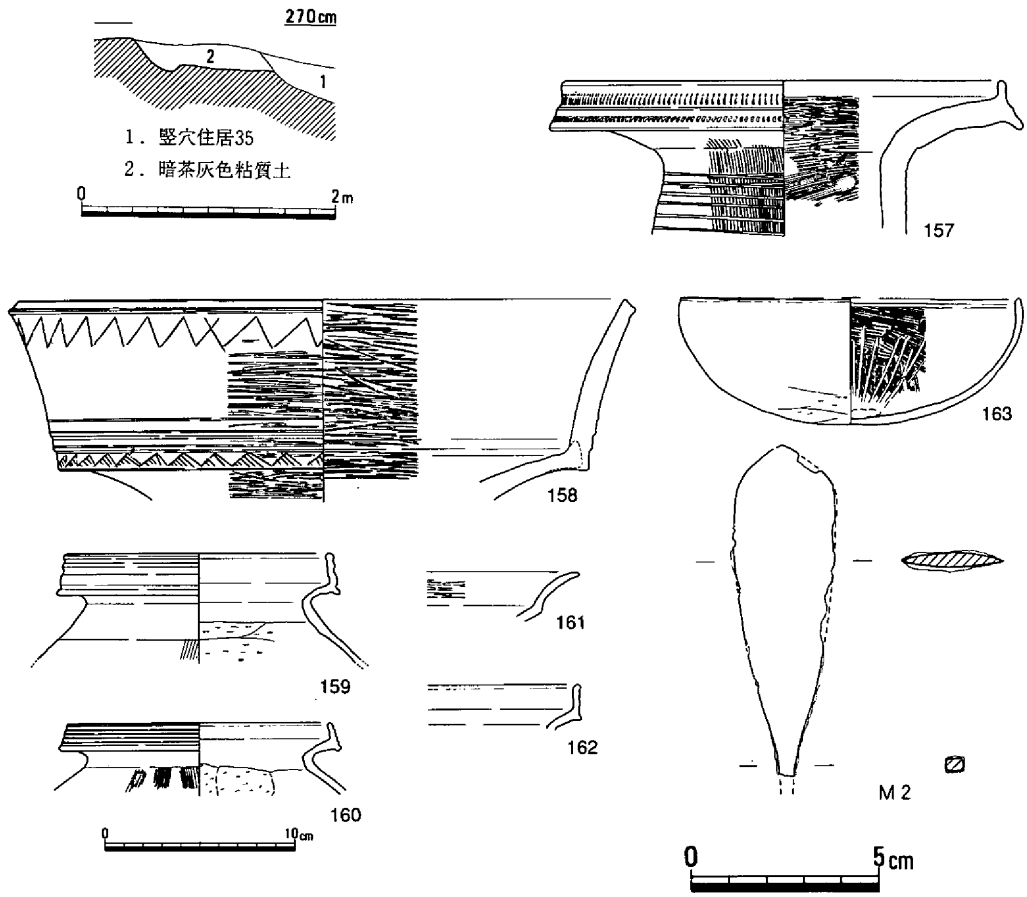


第44図　竪穴住居19出土遺物②（1/4）

竪穴住居20（第15・45図）

第2調査区の南端部で、竪穴住居33、35に切られる状態で検出されたため、遺構の平面プラン、規模は不明である。

遺物は床面から高杯161、甕159・160・162、鉢163、壺157・158が出土している。高杯は口縁が外に大きく開き、外面は縦のヘラミガキがみられる。甕は口縁端部が上方に拡張するが内傾する。157は長頸壺である。口縁端部はわずかに上下に拡張する。口縁部には2列の刺突文がめぐる。頸部外面は縦のハケナデ調整後沈線をめぐらす。沈線は左回りで施されている。内面は上半部が横のヘラミガキ、下半部は横のハケナデ調整がされている。158は口径32cmを測り、いわゆる複合口縁を呈する壺である。口縁部はやや斜め上方に延び、端部は面をもつ。外面は横のヘラミガキ調整後、上部に山形文、下部に鋸歯文をめぐらす。内面は横のヘラミガキ、頸部内面は横ナデ調整がみられる。M2は鉄鏃である。時期は遺物からみて弥生時代後期終末の才ノ町段階に位置づけられるものと考えられる。（松本）



第45図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

(2)　土壙

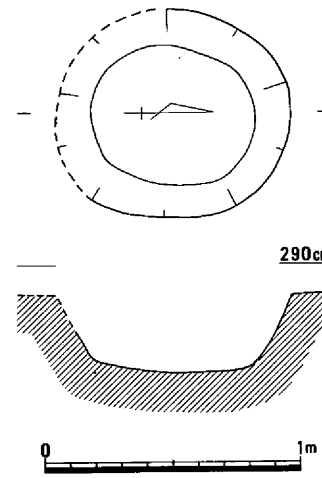
土壙４（第15・46図）

第１調査区の中央やや北寄りに位置する。竪穴住居８に南側の一部が切られた状態で検出された。

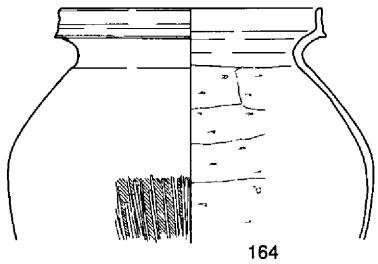
平面形は、長軸90cm、幅82cmの楕円形に復元され、検出面からの深さ30cmを測った。

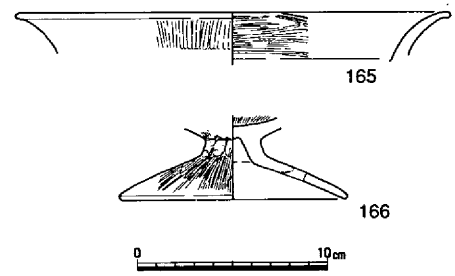
出土遺物は、小破片であるが甕、高杯が確認された。

時期は、土器が上東・鬼川市Ⅲ式に比定されることで、弥生時代後期後半への位置づけができる。



土壙５（第15・47図）



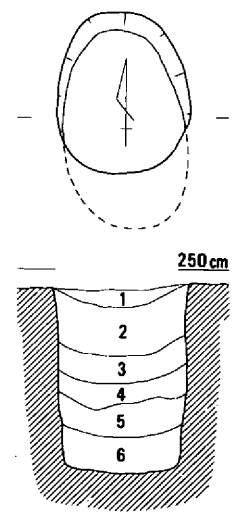


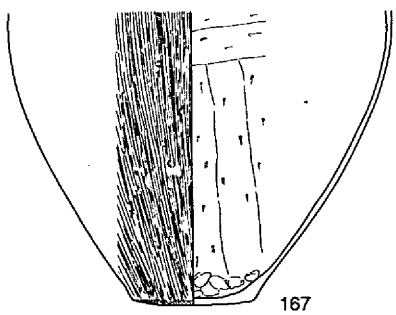
第46図　土壙４（1/30）・出土遺物（1/4）

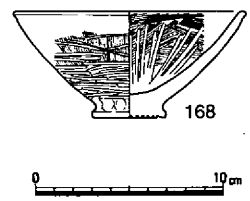
第１調査区の南端部において一部調査区外にかかって検出された。

平面的には南北に長い楕円形を呈し、ほぼ垂直に壙底へと壁を落とすものである。

出土遺物には、甕、鉢がみられ、時期的には弥生時代後期後半に比定されよう。　（島崎）







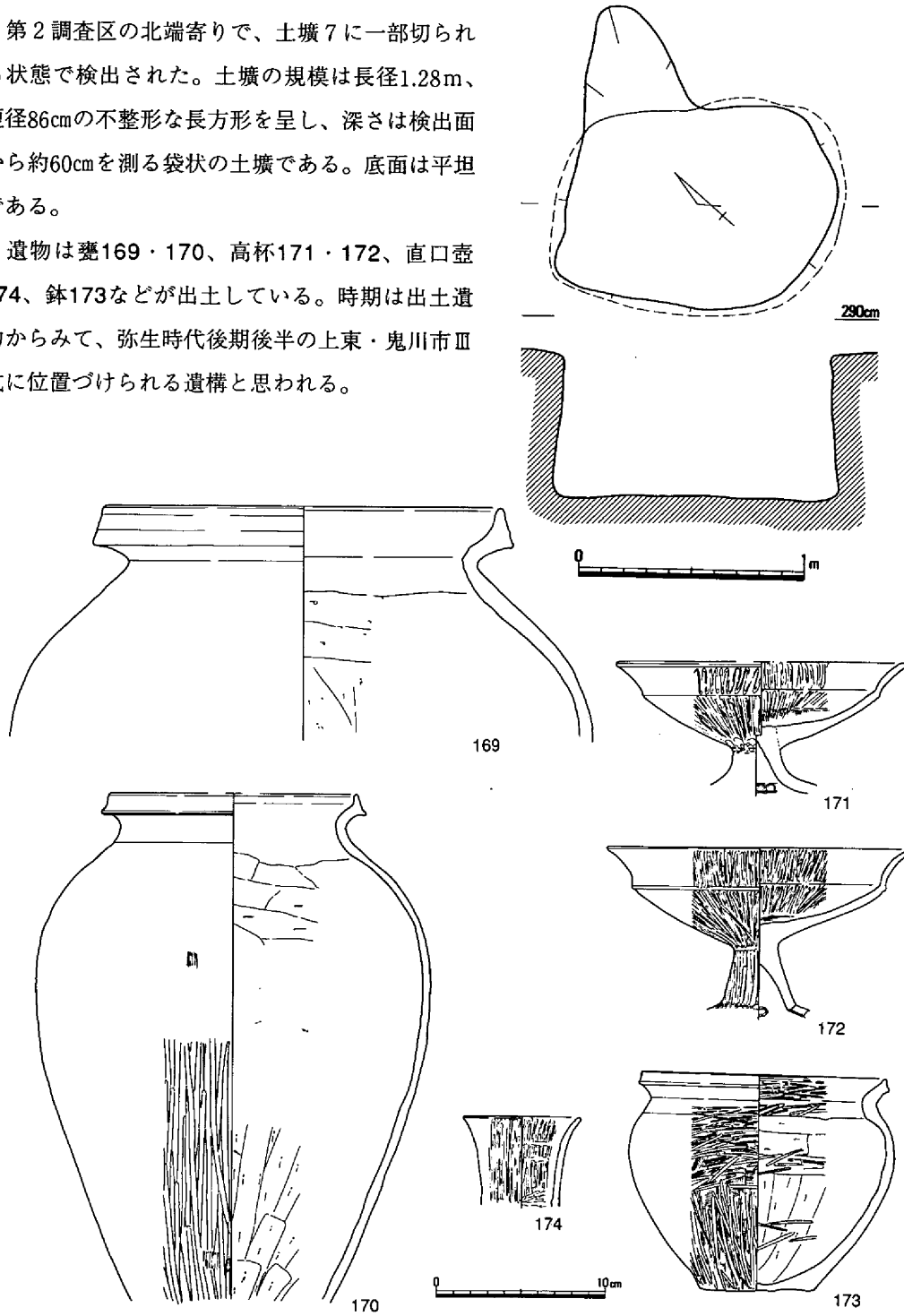
1．灰褐色土
2．灰茶褐色土
3．黄褐色土
4．茶色土　　5．暗茶褐色粘質土　　6．黄茶褐色土

第47図　土壙５（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙６（第15・48図）

第２調査区の北端寄りで、土壙７に一部切られる状態で検出された。土壙の規模は長径1.28m、短径86cmの不整形な長方形を呈し、深さは検出面から約60cmを測る袋状の土壙である。底面は平坦である。

遺物は甕169・170、高杯171・172、直口壺174、鉢173などが出土している。時期は出土遺物からみて、弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられる遺構と思われる。

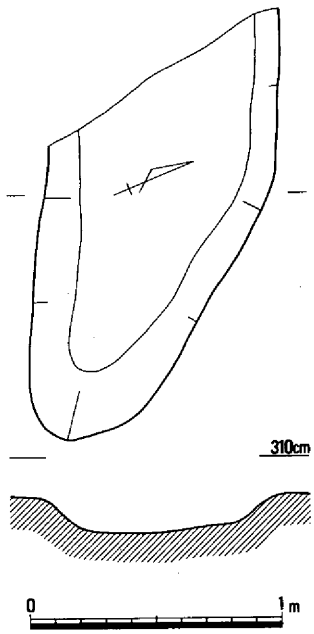


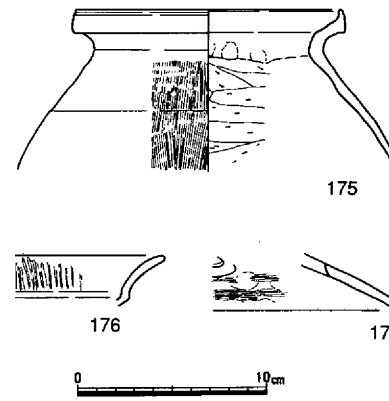
第48図　土壙６（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙７（第15・49図）

土壙６を切っている遺構である。約１／２程が調査区外となるため、規模は不明であるが、深さは検出面から約15cmを測る長楕円形のものである。

遺物は甕175、高杯176・177が出土している。時



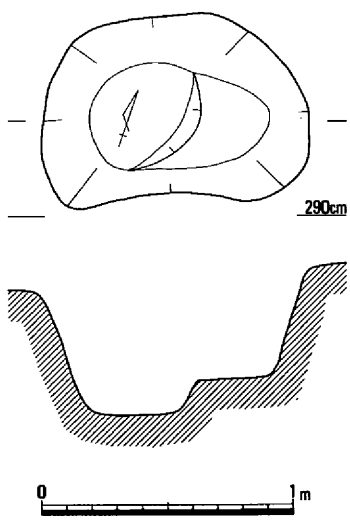


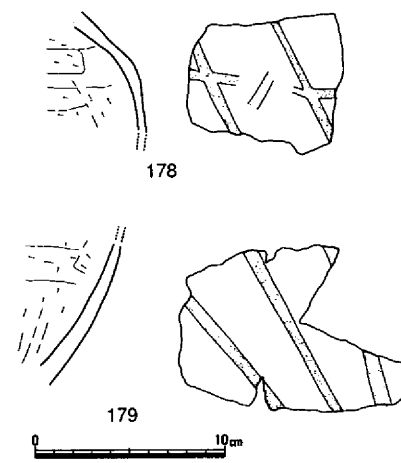
第49図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/4）

期は遺物からみて、弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられる。

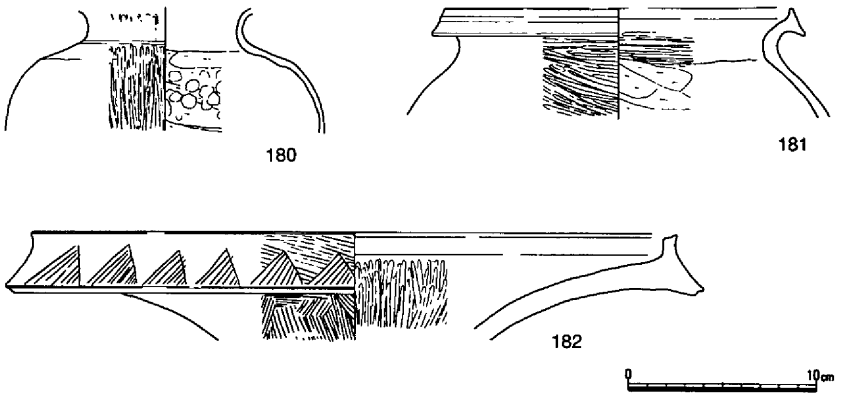
土壙８（第15・50図）

土壙９の北隣りに位置する。土壙の規模は長辺1.05m、短辺68cmの不整形な長方形を呈し、底面がほぼ中央部で段差をもつ。深さは検出面から最深部で約50cmを測る。





第50図　土壙８（1/30）・出土遺物①（1/4）

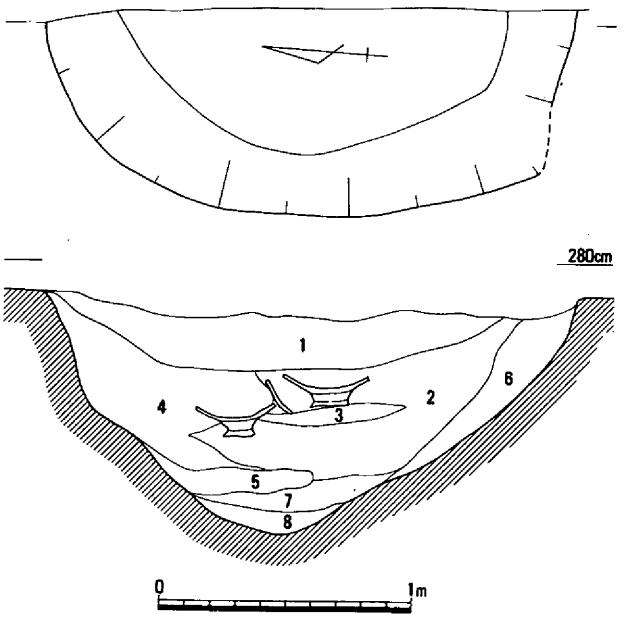


第51図　土壙８出土遺物②（1/4）

遺物は甕178・179・181、壺180、器台182が出土している。なお、178と179は同一個体と思われる。時期は遺物からみて、弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられるものと思われる。

土壙９（第15・52～55図）

第２調査区の中央より北、土壙８、11などが検出された場所である。これらの土壙が検出された範囲は比較的に土壙が集中しているが、その中でも特に大きな土壙であった。この土壙の大部分は調査区外となるため、規模、形態が正確にはわからないが、調査範囲内における規模は長径2.10m、短径80cmを測るが、実際はまだ大きな遺構であったと思われる。深さは検出面

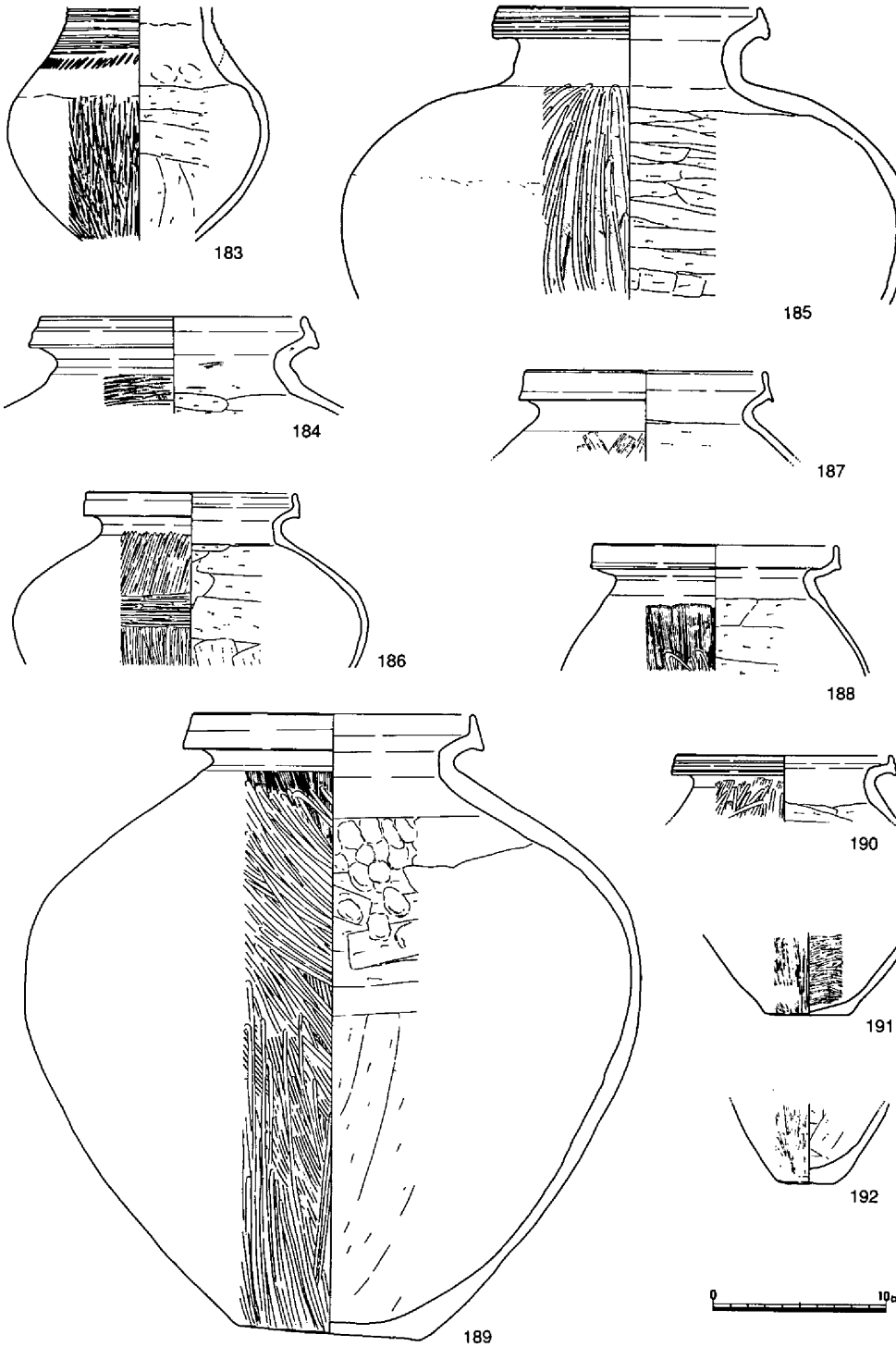


第52図　土壙９（1/30）

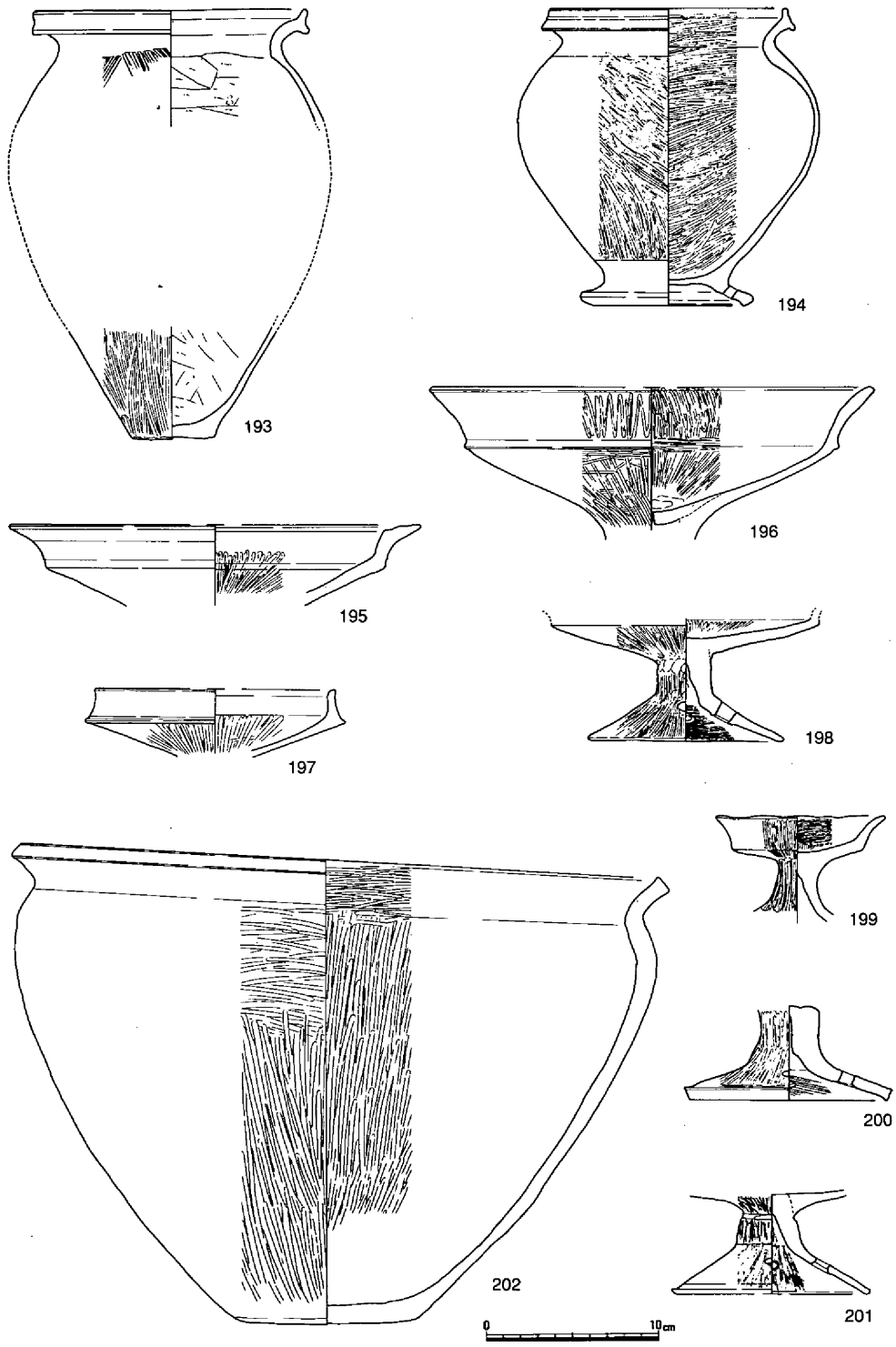
から最深部までが約1.00ｍを測り、平面形は恐らく隅丸方形を呈するものと思われる。埋土は大きく８層に区分され、最上層には暗黄褐色の細砂がみられた。断面観察によれば、貝層は上層貝層（第２層）と下層貝層（第７層）に分離でき、上層貝層ではヤマトシジミ、ハイガイが多量に堆積し、下層貝層ではヤマトシジミと少量のハイガイのみであった。遺物は土器、石器が出土しているが、下層貝塚に比べて、上層貝層内で圧倒的に多く出土している。

上層出土は壺183～186・189、甕187・188・190～194、高杯195・196～198・201、器台197、鉢202、石槍Ｓ６、管玉Ｓ７などがある。183は長頸壺である。口縁部、底部が欠損しているが、頸部には８条の沈線がめぐり、その下部にはヘラ状工具による刺突をめぐらしている。頸部内面は横ナデ及び指オサエ、胴部外面は縦のヘラミガキ、内面は横のヘラケズリ、底部付近は縦のヘラケズリによる調整がなされている。なお、胴部外面には黒斑がみられる。184～186・189は短頸の壺である。185は「く」字状に外反した口縁部から端部を上、下ともわずかに拡張し、肩が大きく張る器形である。口縁端面には５条の櫛描沈線がめぐる。胴部外面はハケナデの後、縦のヘラミガキ、内面は横のヘラケズリにる調整がみられる。胴部上半には黒斑がみられる。189は口径15.9cm、底径10.4cm、器高36.0cm、胴部最大径35cmを測る壺である。形態は「く」字状に外反した口縁部から端部を上方に1.5cm程拡張し、下方はわずか拡張し、肩が胴部中央で大きく張るものである。口縁端面は横ナデ、頸部外面は縦のハケメがなされ、胴部外面はハケによる調整後、斜めと縦のヘラミガキが施されている。内面の胴部上位は指押え、中位は横のヘラケズリ、下位は縦のヘラケズリによる調整である。底部外面もヘラミガキである。なお、胴部下半に黒斑がみられる。甕は無台のものと194のような台付のものの二種類がみられ、口縁部の形態からは187と188と193の３形態がみられる。194は「く」字状に外反した口縁部から端部を上、下方にわずかに拡張する。胴部内外面は横、斜めのヘラミガキによる調整が丁寧になされている。なお、台部には２個の円孔がみられる。高杯は口縁部の形態から３種類あり、脚部は長脚のもの196と短脚に分類される。196は口径25.2cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は丸く収める。口縁部と杯部の境は稜をもつ。口縁部外面は波状のヘラミガキ、杯部上位には横のヘラミガキ、下位は縦のヘラミガキによる調整がみられる。口縁部内面は波状のヘラミガキ、杯部上位は横のヘラミガキ、下位は放射状のヘラミガキが施されている。197は口径14cmの小型器台と思われる。口縁端部には浅い１条の条線がめぐる。外面は縦のハケナデ後にヘラミガキ、内面も縦のヘラミガキが施されている。胎土内には金雲母が多量に含まれている。また、外面は丹塗りである。Ｓ６は先端部が折損している石槍である。剥片から製作されたもので、両面と両側縁に調整がみられる。Ｓ７は全長3.1cm、厚さ0.9cmの碧玉製の管玉であり、穿孔は片方からのみ実施している。

下層貝層出土の遺物には、壺203・204、器台205、高杯206～209、鉢210、壺211などがある。

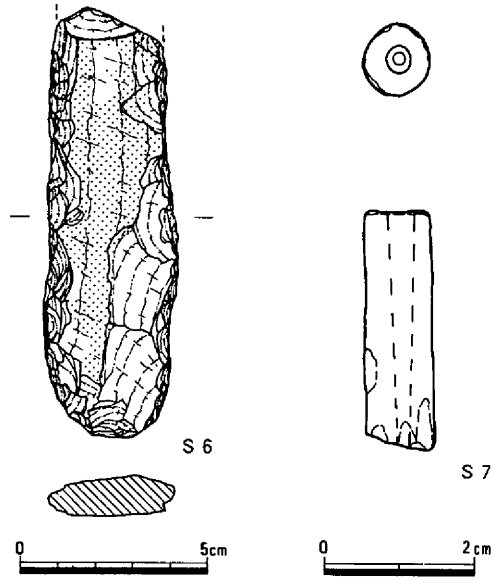


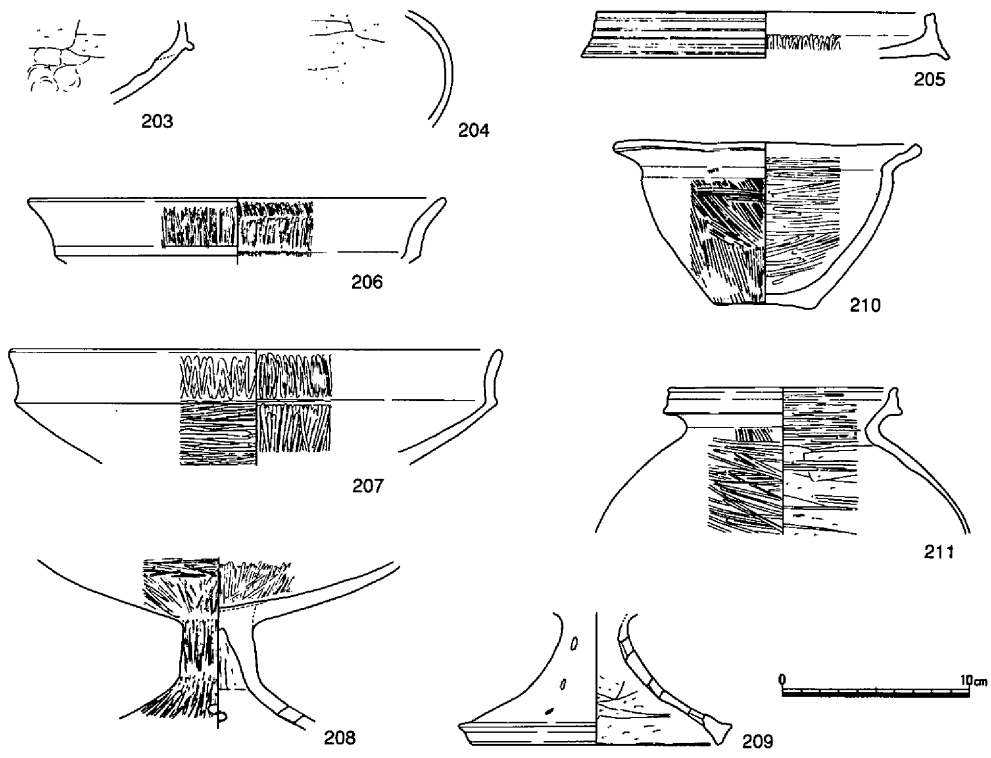
第53図　土壙9出土遺物①（1/4）



第54図　土壙９出土遺物②（1/4）

203には突帯が1条みられ、外面は丹塗りである。胎土内には金雲母がみられるが、204に比較すれば少ない。204は外面が丹塗りで、胎土内に多量の金雲母を含む。203・204とも脚付の長頸壺である。205は口径19.8cmを測る小型器台である。口縁端面には5条の凹線がめぐり、内外面とも丹塗りである。なお、胎土内には少量の金雲母が含まれている。高杯は弥生時代後期前半と後期後半の2種類がある。206～208は口縁部が大きく外反し、端部を丸く収め、口縁部と杯部の境には稜をもつ。211は口径12cmを測る。口縁部は上、下に拡張するが、下方はわずか



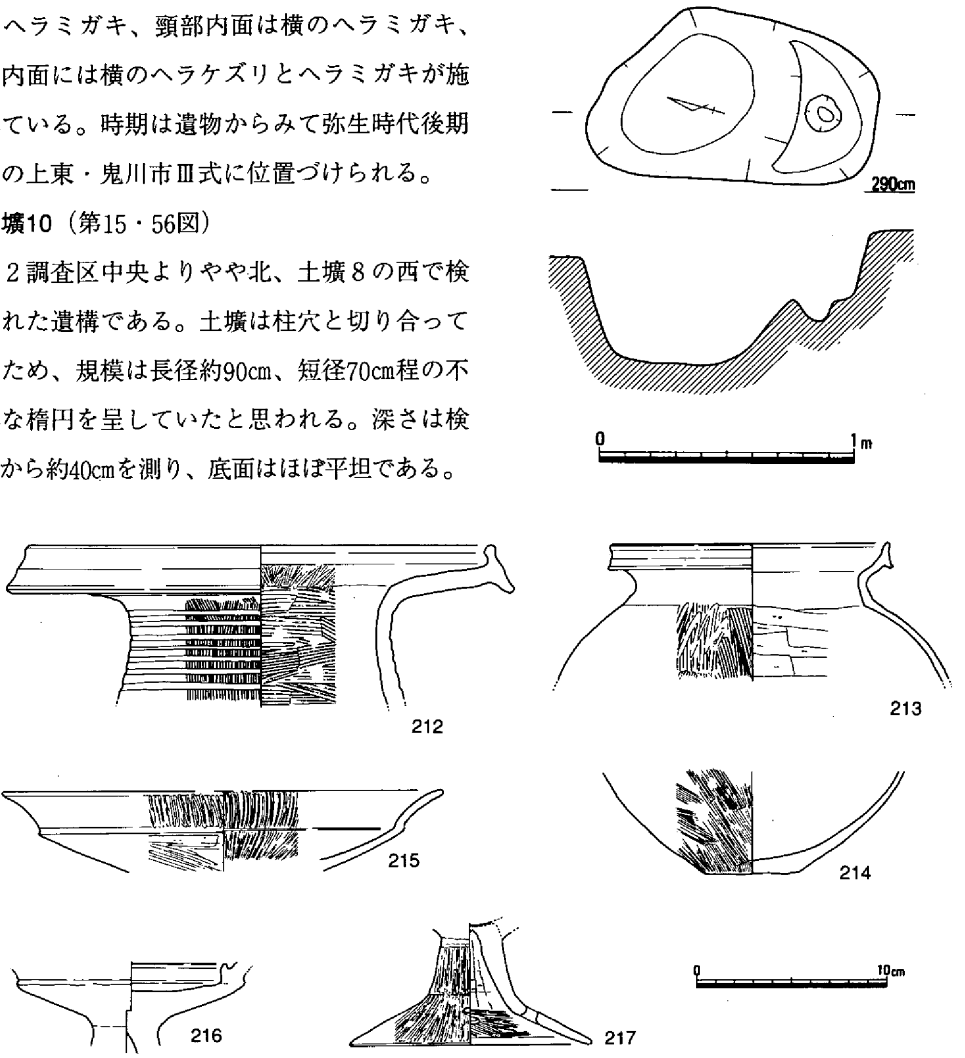


第55図　土壙9出土遺物③（1/2・1/1・1/4）

である。胴部外面は縦のハケナデの後、横、斜めのヘラミガキ、頸部内面は横のヘラミガキ、胴部内面には横のヘラケズリとヘラミガキが施されている。時期は遺物からみて弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられる。

土壙10（第15・56図）

第２調査区中央よりやや北、土壙８の西で検出された遺構である。土壙は柱穴と切り合っているため、規模は長径約90cm、短径70cm程の不整形な楕円を呈していたと思われる。深さは検出面から約40cmを測り、底面はほぼ平坦である。

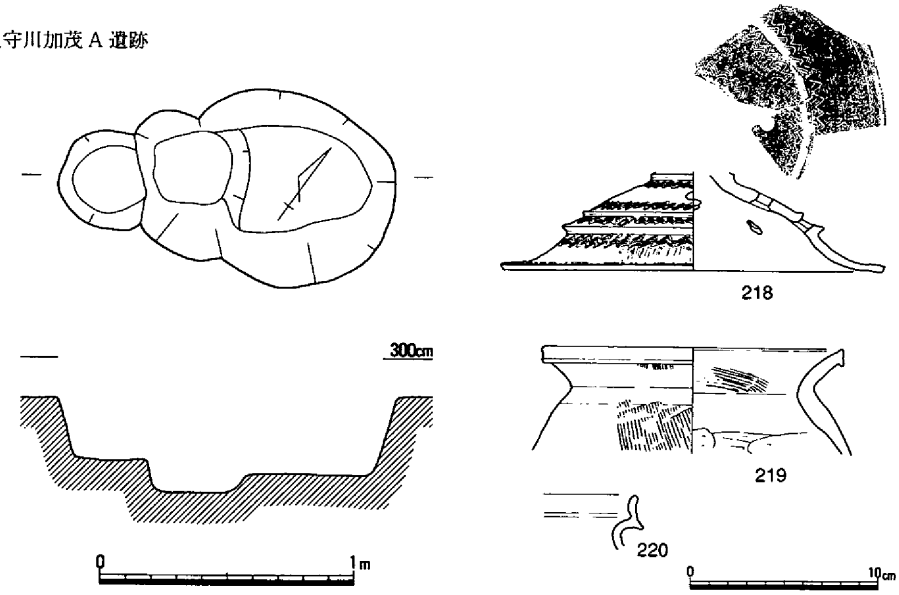


第56図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/4）

遺物は壺212、甕213・214、高杯215～217などが出土している。212は長頸壺で、口縁端部は上下に拡張するものである。端面にはナデによる調整、頸部外面には縦のハケメを施し、さらに等間隔に凹線を入れている。215は口径23.2cmを測る高杯である。口縁部が斜め上方に外反して立ちあがる杯部である。水漉粘土を使用している。216は杯部内面に段を有するもので、小形器台の可能性もある。時期は弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられる。

土壙11（第15・57図）

土壙12の東に位置する。土壙は柱穴と切り合う状態で検出されたが、長径約80cm、短径70cm



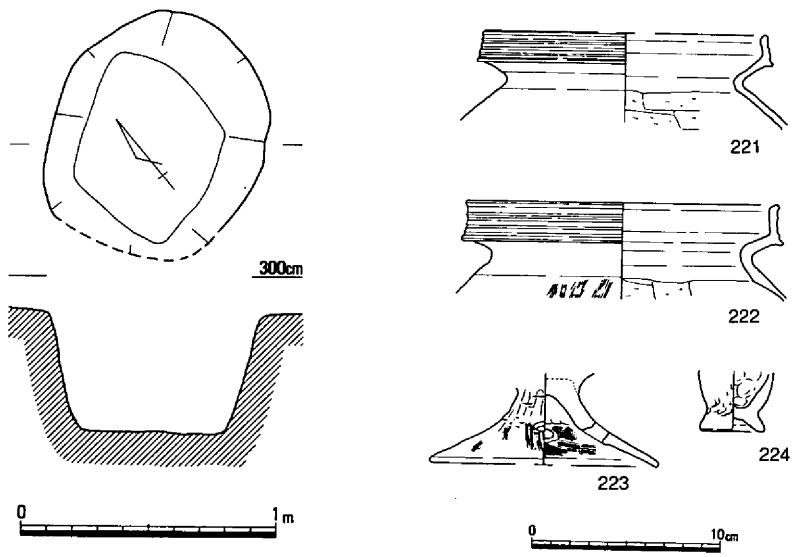
第57図　土壙11（1/30）・出土遺物（1/4）

の楕円形を呈する。深さは検出面から約30cmを測り、底面は平坦である。

遺物は装飾付の高杯218、甕219・220が出土している。218は脚裾部で、円孔が上、下段に4個ずつ穿たれている。外面には1単位が5条の櫛描波状文が描かれている。胎土内には長石、角閃石、雲母などが多量に含まれている。時期は遺物からみて、弥生時代後期後半から終末の段階に位置づけられる遺構と思われる。

土壙12（第15・58図）

土壙14の北東で検出された遺構である。土壙の規模は長径が約1.00m、短径80cmを測る不整



第58図　土壙12（1/30）・出土遺物（1/4）

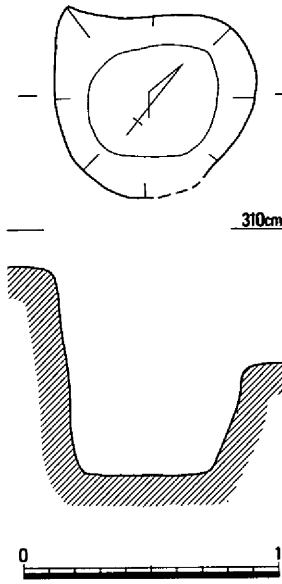
形な楕円形を呈する。深さは検出面から約50cmで、底面は平坦。

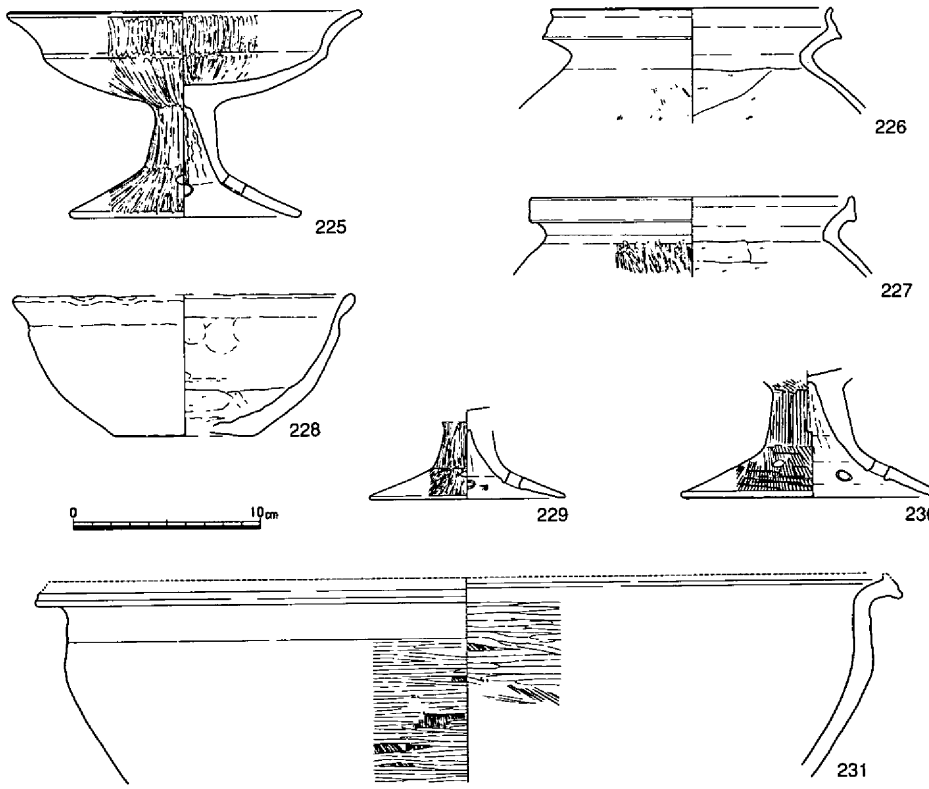
遺物は甕221・222、高杯223、手捏土器224が出土している。時期は出土遺物からみて弥生時代後期終末の才ノ町段階に位置づけられる。

土壙13（第15・59図）

第２調査区の中央よりやや北側で検出された。土壙の規模は長径80cm、短径70cmを測り、平面形は不整形な円形を呈している。深さは検出面から80cmで、底面は平坦である。掘り方もほぼ垂直に近いものである。

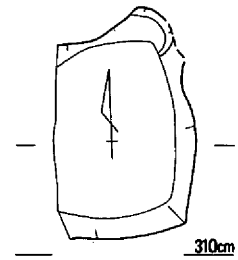
遺物は高杯225・229・230、甕226・227、鉢228・231が出土している。225は口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。杯部はやや湾曲し浅く、口縁部と杯部との境に稜をもつ。脚柱はやや短脚で、屈曲部をもち、４個の円孔が穿たれている。

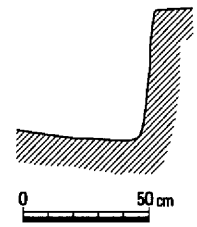




第59図　土壙13（1/30）・出土遺物（1/4）

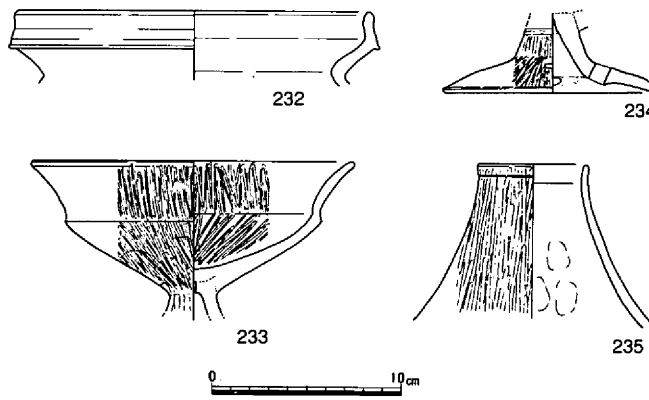
脚部内面以外は全て縦のヘラミガキによる調整がみられる。脚部内面にはシボリ痕跡がみられる。231は推定口径44.0cmを測る大型の鉢である。口縁端部は欠損しているが、口縁は短く、端面には退化凹線をめぐらすものである。胴部内外面はハケナデ後に横のヘラミガキ調整がみられる。時期は遺物からみて、弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられる。





土壙14（第15・60図）

土壙15の北隣りに位置する。土壙は調査区外に延びるが、1辺が80cmの正方形を呈する遺構と思われる。深さは検出面から約50cmを測るが、底面中央が高くなる上底となっている。掘り方はほぼ垂直である。遺物は甕232、高杯233・234、直口壺235が出土している。時期は遺物からみて、弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に位置づけられる。



第60図　土壙14（1/30）・出土遺物（1/4）

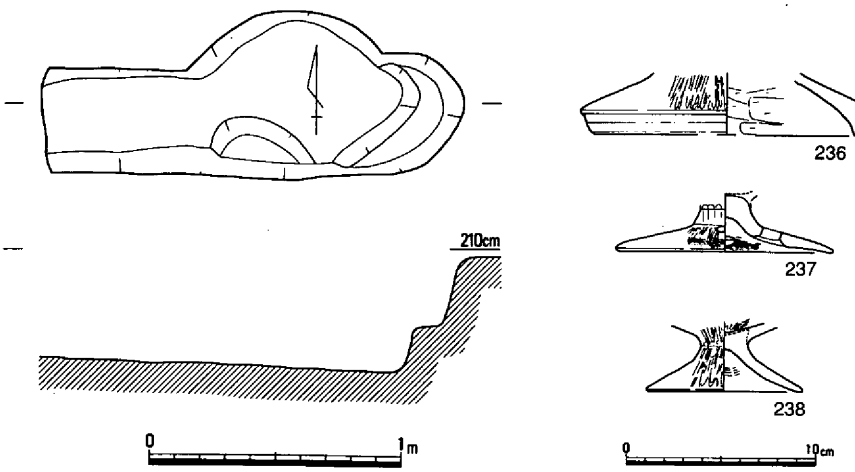
土壙15（第15・61図）

土壙14の南隣りに位置する。土壙は調査区外に延びるが、短径40cmを測る長方形の遺構と思われる。深さは検出面から40cmで、底面は平坦である。

遺物は高杯などが出土した。237は短脚である。236は小型器台の脚部の可能性がある。時期は遺物からみて弥生時代後期後半に位置づけられる。

土壙16（第15・62図）

第2調査区の中央よりやや南、竪穴住居19の上層で検出された。土壙は調査区外に延びるが、短径は80cmを測る長方形の遺構と思われる。深さは検出面から約28cmで、底面が平坦になる。

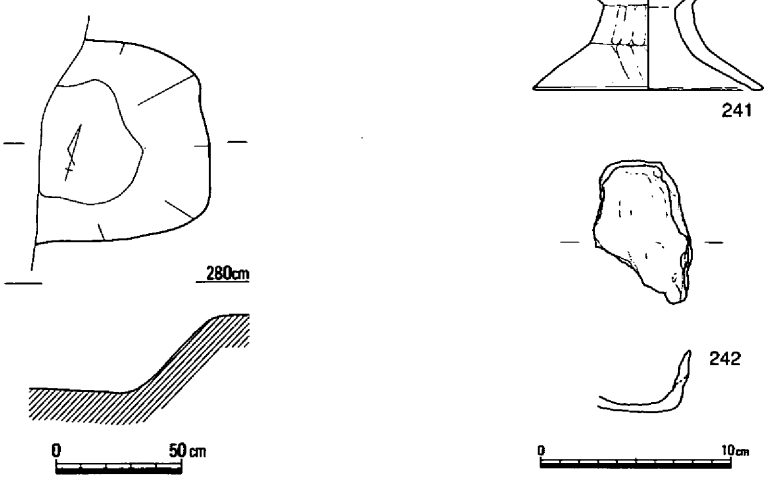


第61図　土壙15（1/30）・出土遺物（1/4）

遺物は壺239、甕240、器台241、手捏土器242がある。241の器台部は「ハ」字状にゆるやかに広がる。242は手捏の皿形を呈するもので、口縁部は波状になっている。時期は遺物からみて弥生時代後期終末の才ノ町段階に位置づけられるものと思われる。

土壙17（第15・63図）

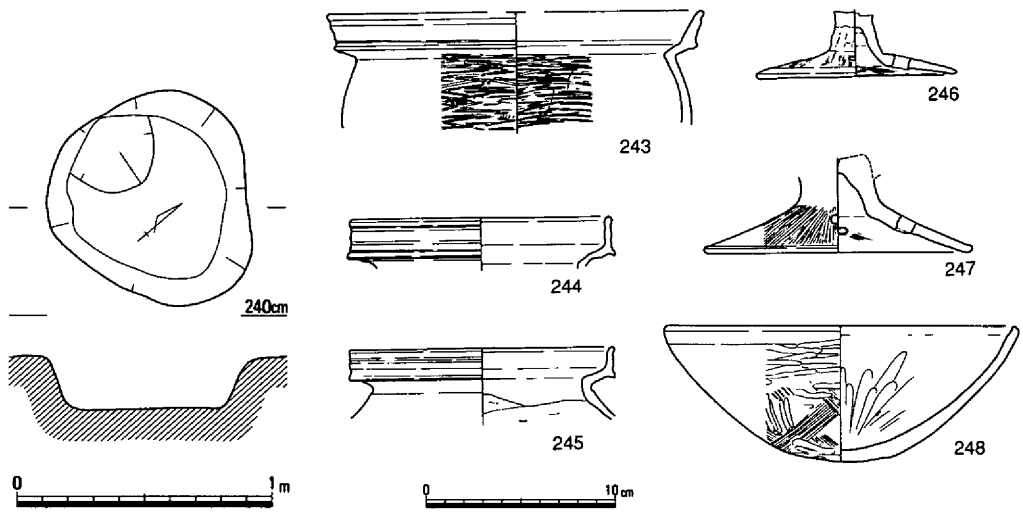
第２調査区の中央よりやや南で、竪穴住居18の下層で検出された。土壙の規模は長径90cm、短径80cmの不



第62図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）

整形な楕円形を呈し、深さは検出面から20cmを測る。底面は柱穴に切られているが、平坦である。

遺物は鉢243・248、甕244・245、高杯246・247が出土している。時期は遺物からみて、弥生時代後期終末の段階に位置づけられる。

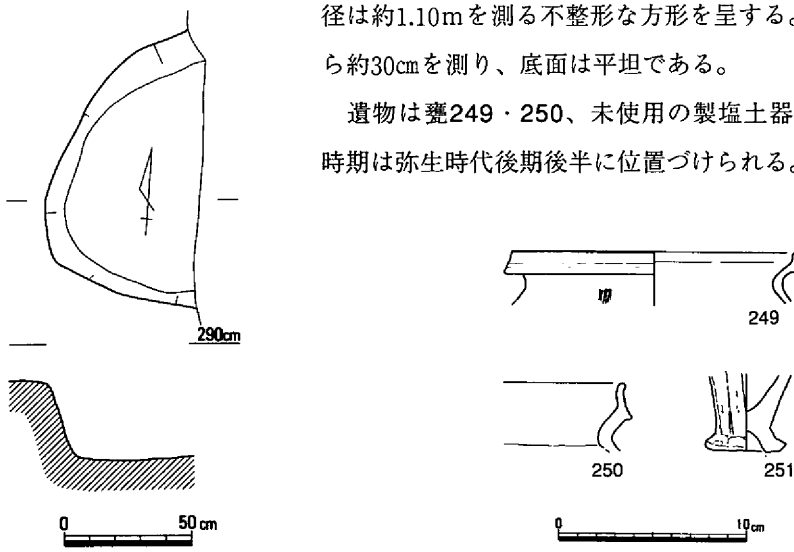


第63図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙18（第15・64図）

竪穴住居19の北で検出された。約1／2程が調査区外となるため、規模は不明であるが、長径は約1.10mを測る不整形な方形を呈する。深さは検出面から約30cmを測り、底面は平坦である。

遺物は甕249・250、未使用の製塩土器が出土している。時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。　（松本）



第64図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）

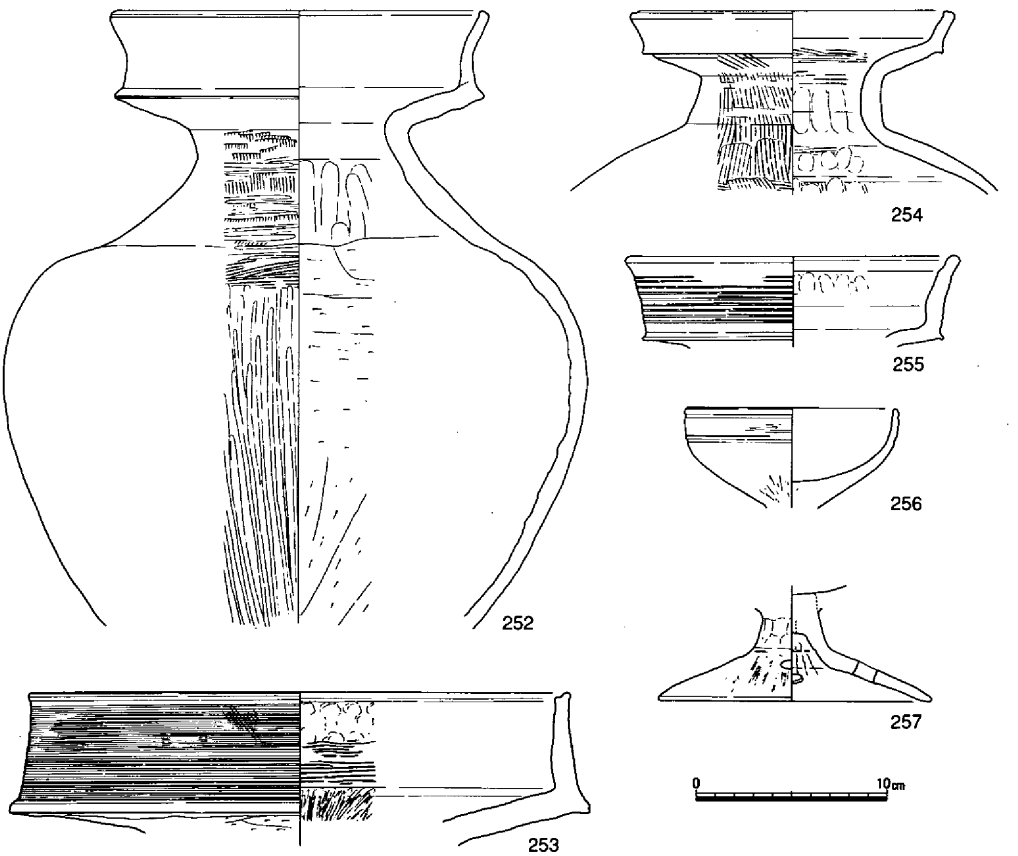
(3) 包含層出土の遺物（第65～68図）

弥生時代後半後期の遺構に伴わない遺物としては、掲載困難な程の多量の壺、甕、高杯、鉢、器台等の土器と石器・石製品が存在したが、ここでは注目される遺物を中心に報告する。

壺には、それまでの長頸壺の系譜化にあって口縁部がさらに一段と長く拡張したもの252、在地の系譜にみられない254・255、さらには特殊壺253の存在が認められた。254は内面にヘラケズリが見られずハケメ調整がなされており、胎土中には雲母の混和が見られた。255は口縁部外面にヘラによる沈線が丁寧に巡らされ、胎土中には角閃石・雲母の混和が認められた。いずれも搬入品の可能性が高いと考える。253は、口縁部端部が上に長く拡張したもので、外面には単位不明ながらヘラ描きによる沈線が全面にわたって施され、さらに内・外面には丹が塗られていた。また特殊壺を根拠づける角閃石の混和が胎土中において確認された。

甕は、胴部外面にタタキを残すものがあり、260には欠損するものの口縁部の一部に注ぎ口状に段痕跡が見られる。

高杯は、全体に大きさが縮小傾向にあり、脚部支柱も短脚化している。



第65図　包含層出土遺物①（1/4）

鉢には、大・小の器種が見られた。比較的中位の部類に属すと見られる261・262は底部の形状の違いにより新旧が認められる。262は、底部平底で口縁部は端部を上方に拡張し、261より型式的に古いものである。口縁部内面の一部に注ぎ口状の浅い溝が見られた。注目されるのは、内面に朱の遺存が砂粒の移動痕跡中に微量ながら看取され、この鉢が水銀朱の生産にかかわっていたことが知られる。この胎土中には、長石の他に角閃石の混和が見られた。土器は比較的丁寧に作られており内・外面にはヘラミガキによる丁寧な調整が認められた。261は、口縁端部の上方への拡張はないが、底部は平底をとどめないことで、262より後出である。小型の263は、口縁端部を拡張するが底部は丸い。底部には、外面からの穿孔が認められ、円形の穴が開けられていた。264の胎土中には、雲母と角閃石の混和が見られた。

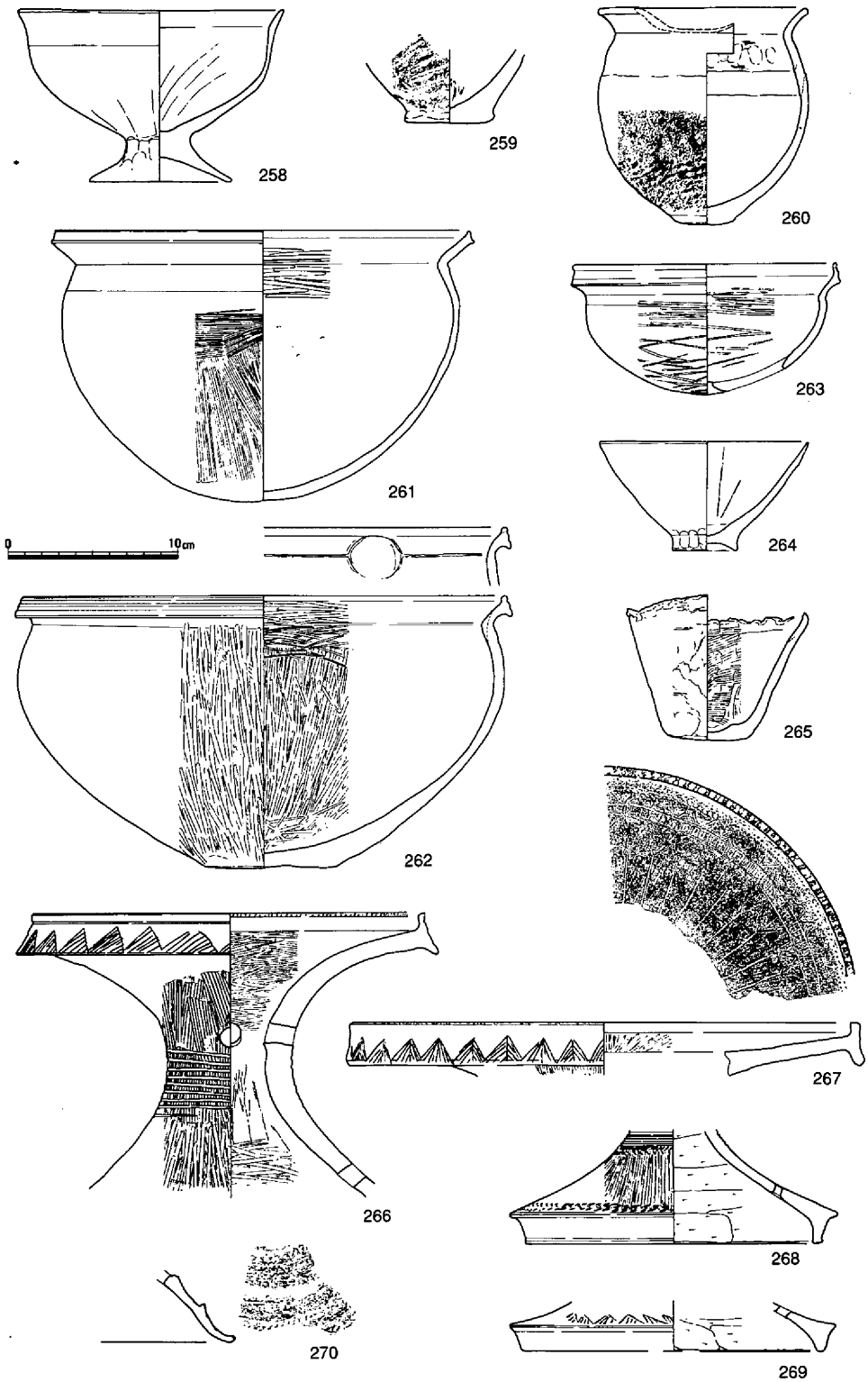
器台は、普通器台と小型で胎土中に雲母の混和および外面への丹の塗布がなされているものの存在が見られた。266は、普通器台の中でも小型の部類に属するものの、口縁部外面には線刻による鋸歯文が巡らされていた。267は、口縁部の遺存でしかないため全体の形状は不明である。比較的水平気味に外への拡張部への線刻文と上・下に拡張した口縁端部は、器台としての在り方ではなく、飾り高杯として分類されるものかも知れない。268・269は、脚端部の文様は異なるものの内面ヘラケズリ、外面には丹が塗布されるなど器形的には同一のものと考える。胎土中にも雲母を含む点で共通する。270は、脚部の一部で全体像は不明である。端部及び各稜線には刺突文が、またその間には竹管による文様が施されている。

高杯272～274は、第2調査区において一括で出土したものである。いずれも水漉しによる精製粘土を胎土として用いており、形態の差こそあれ同型式の範疇で理解されるものである。

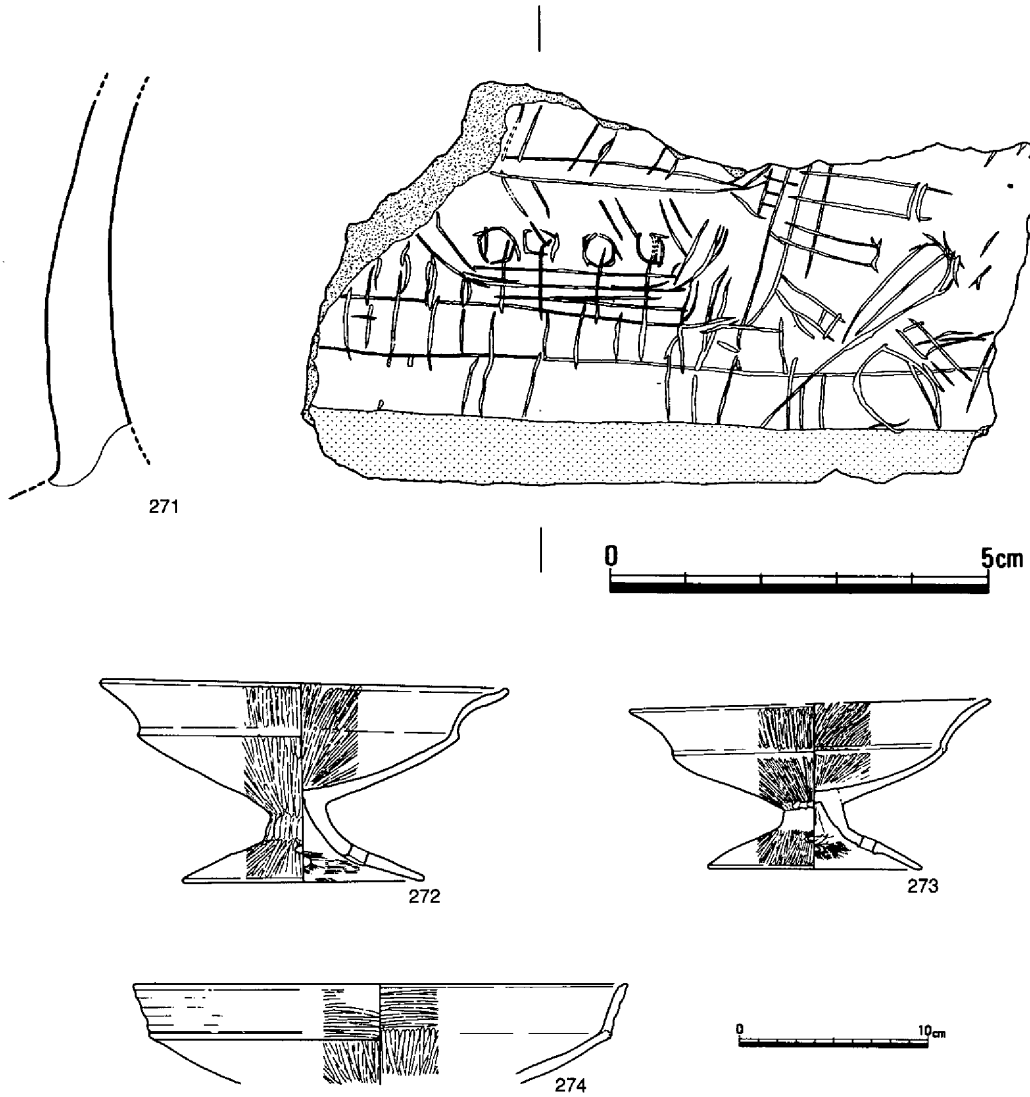
271は、壺の口縁部で端部が上方に長く拡張した部分である。外面には、ヘラ状工具により線刻絵画が描かれている。土器片は、両端部への展開は予想されるものの、上・下に関してはいずれも端部に近く、絵自体の上・下方向へのさらなる展開はないと考えられる。

絵は、直線と曲線の組み合わせにより意匠を凝らしたものであるが、絵画の意図する内容については明確でないが、おおよその検討は可能であろう。

下方に直線文が1本土器接合面に平行して見られ、これより上方にさらに1本が平行してあり、ただしこれは途中でなくなり、なくなった所からは上方に、直線文は口縁部方向への展開を見せる。さらにそれら直線文で囲まれた部分には、2本の平行する直線文とこれを基軸に2本1単位の短い平行線が斜め方向に、あたかも棟木と垂木の関係を、さらにこれらと関係し合うかのように直線文の配列が見られる。また、この直線文に挟まれた区画外には、下端部に平行する直線文にたいして斜め方向に直線が描かれその上端部には翳を彷彿とさせる膨らみが弧線で描かれている。なお、この線刻文には船を描いたとする考えも存在する。土器中央やや左付近において4つの円とこれより縦方向にほぼ等間隔にみられる短い線刻が人と櫂の在り方を



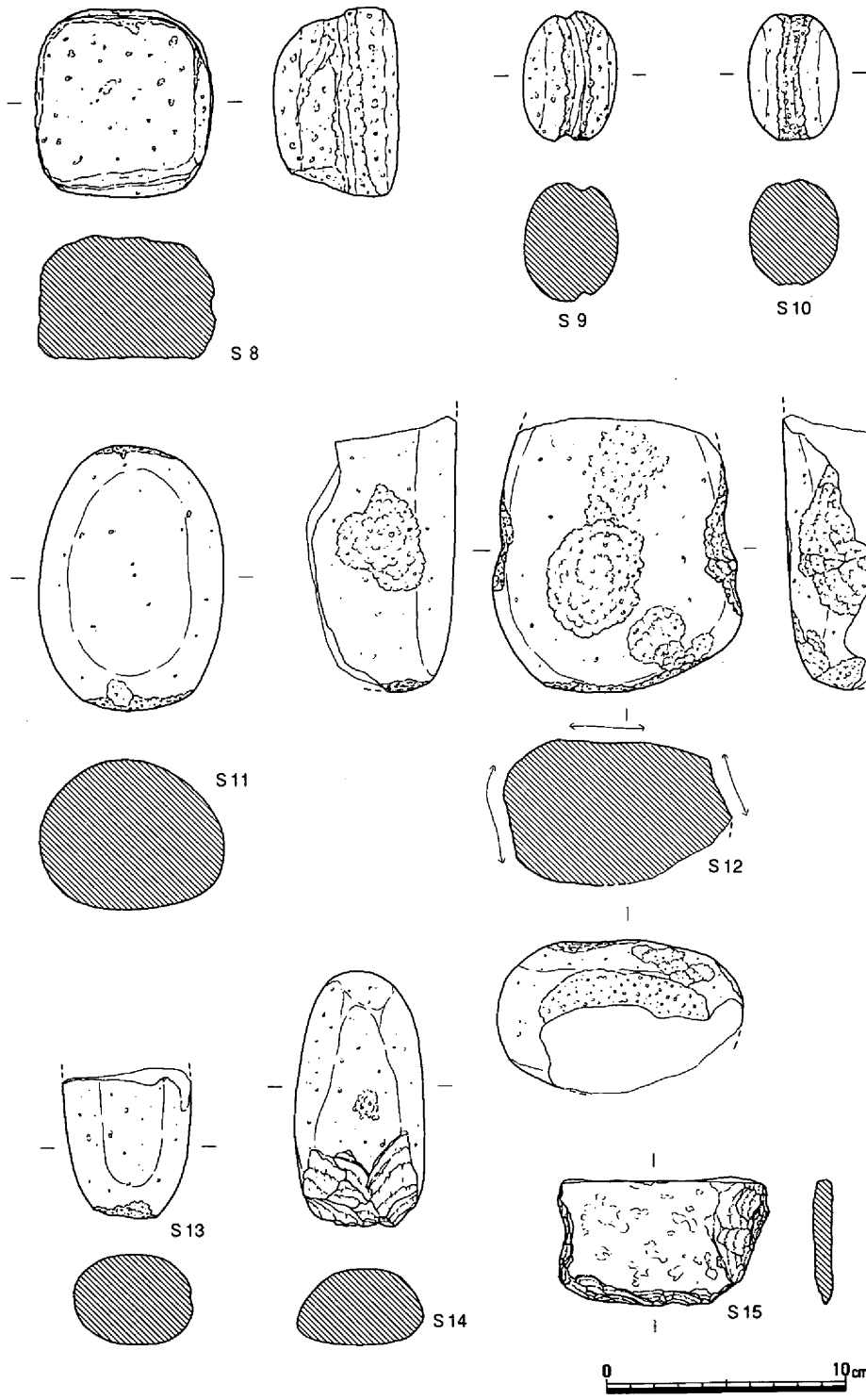
第66図　包合層出土遺物②（1/4）



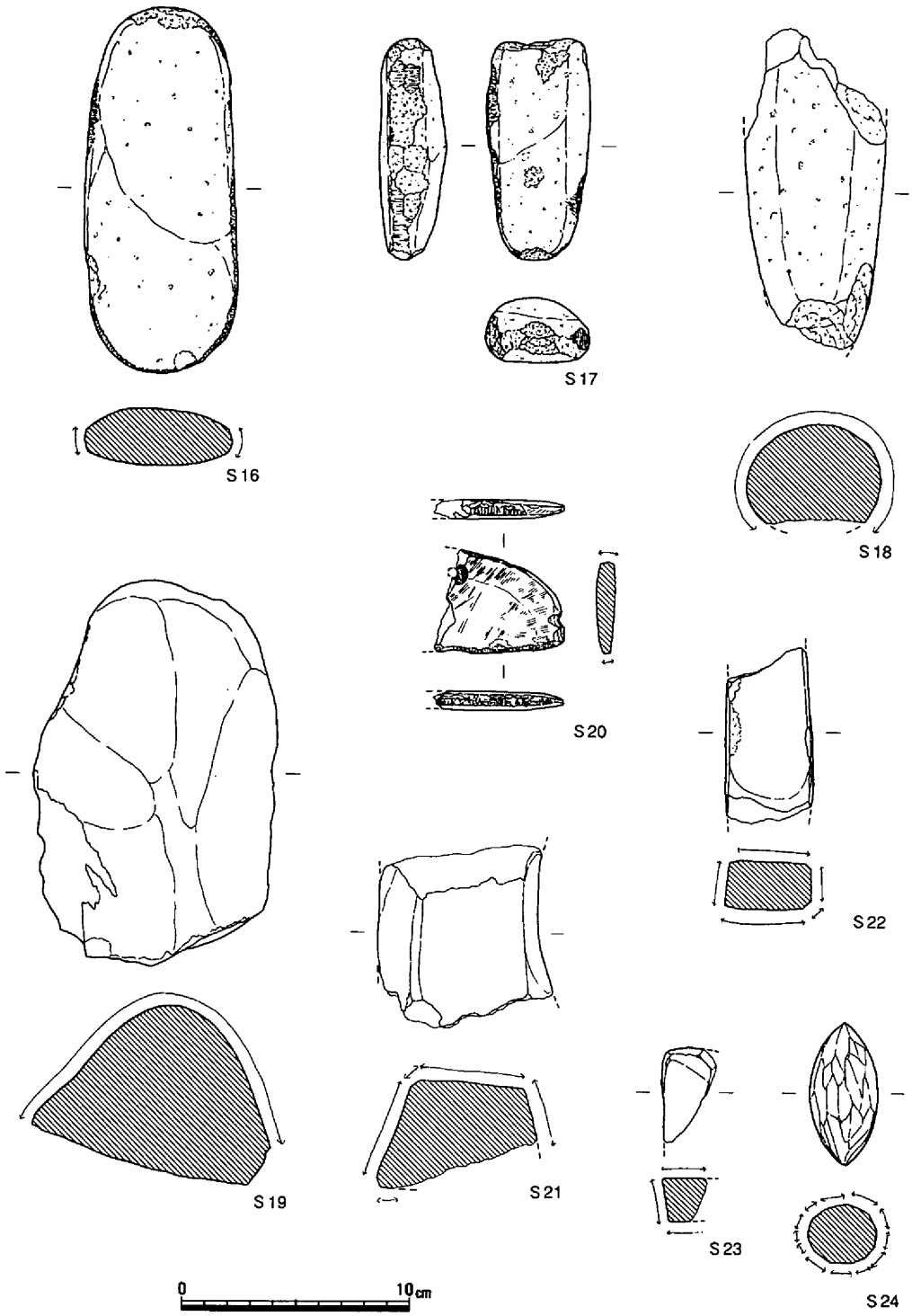
第67図　包合層出土遺物③（1/1・1/4）

示すとするものである。

石器・石製品は、いずれもが包含層出土資料とあって、本来帰属する時期については不明である。器種には、石錘Ｓ７～９、敲石Ｓ10～13・15～16、石包丁Ｓ14・19、砥石Ｓ18・20～22、投弾Ｓ23等があげられる。注目されるのは、Ｓ18の砥石とＳ23の投弾であろう。前者は、玄武岩の自然石を截断した後、截断面を底として置き、自然面を使用していたと考えられ、ほぼ全面に使用痕としての光沢が見られる。対象製品は、皮であろうか。投弾は、前面に細かな面取りによる加工痕跡が見られる。（島崎）



第68図　包合層出土遺物④（1/3）



第69図　包合層出土遺物⑤（1/3）

第３節　古墳時代前半の遺構・遺物

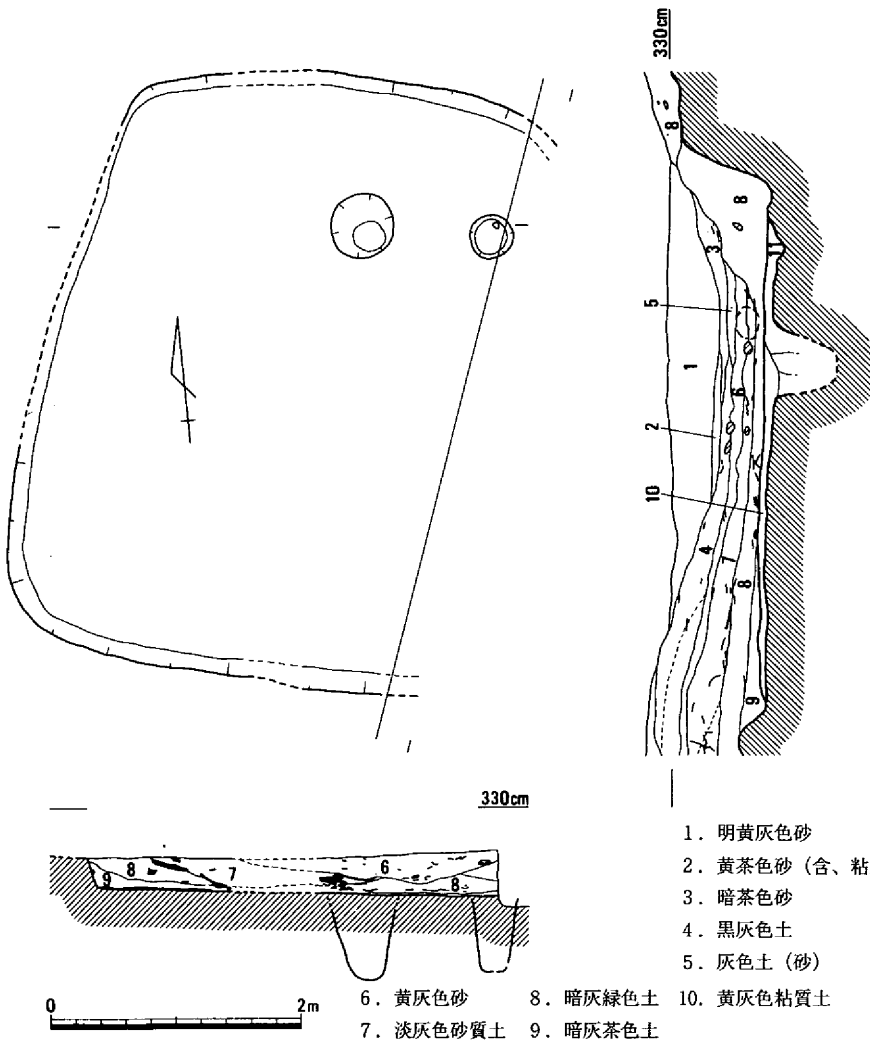
(1)　竪穴住居

竪穴住居21（第70～86図、写真図版９～11）

第１調査区の北端部において覆土上層に多量の土器を伴って検出された。

住居は、海抜3.30mで平面の一部が確認され、それより70cm下で床面の検出がなされた。

床面からは壁体溝・柱穴等の検出は出来ず、僅かに土層断面中において黄灰色粘土による貼床の存在と柱穴の１本が確認された程度であった。



第70図　竪穴住居21（1/60）

住居の平面形は、東側が調査区外にかかっていたことで判然としないが、およそ隅丸方形を基調とするものと推測される。規模は、南北方向で4.85mを測った。

出土遺物としては、覆土中で検出された多量の土器がある。ただしこれは、住居生活面に直接伴った土器ではなく、実際は住居が廃絶された後しばらくして洪水による堆積と考えられる砂に混じって流入・集積したと考えられるものであるが、住居床面出土の土器と何ら型式的に問題がないと思われるので、あえて掲載する。

遺物には、壺、甕、高杯、鉢、器台等の各種土器と、その他に石製品が共伴する。

壺275・276・283・284・292は、二重の口縁部と最大径を胴部下半にもつ点に特徴づけられる。293は、色調が白色で在地産のものとは質感が異なり、他地域からの搬入品の可能性が高い。胴部外面には籠目痕跡と補修痕跡が確認される。287～290・307は、胎土中に角閃石・雲母等を多く含み、形態的にも他地域からの搬入品と考えられる。300・301・308は、胴部外面にタタキ痕跡を残す。301は、胎土中に角閃石を含む。277・278・285・286は、断面「く」字状に外方に広がる口縁部を持つ。309は、円形の胴部に「く」字に外反する口縁部をもち、口唇部付近でさらに外側に折り曲げるといった特徴を示す。

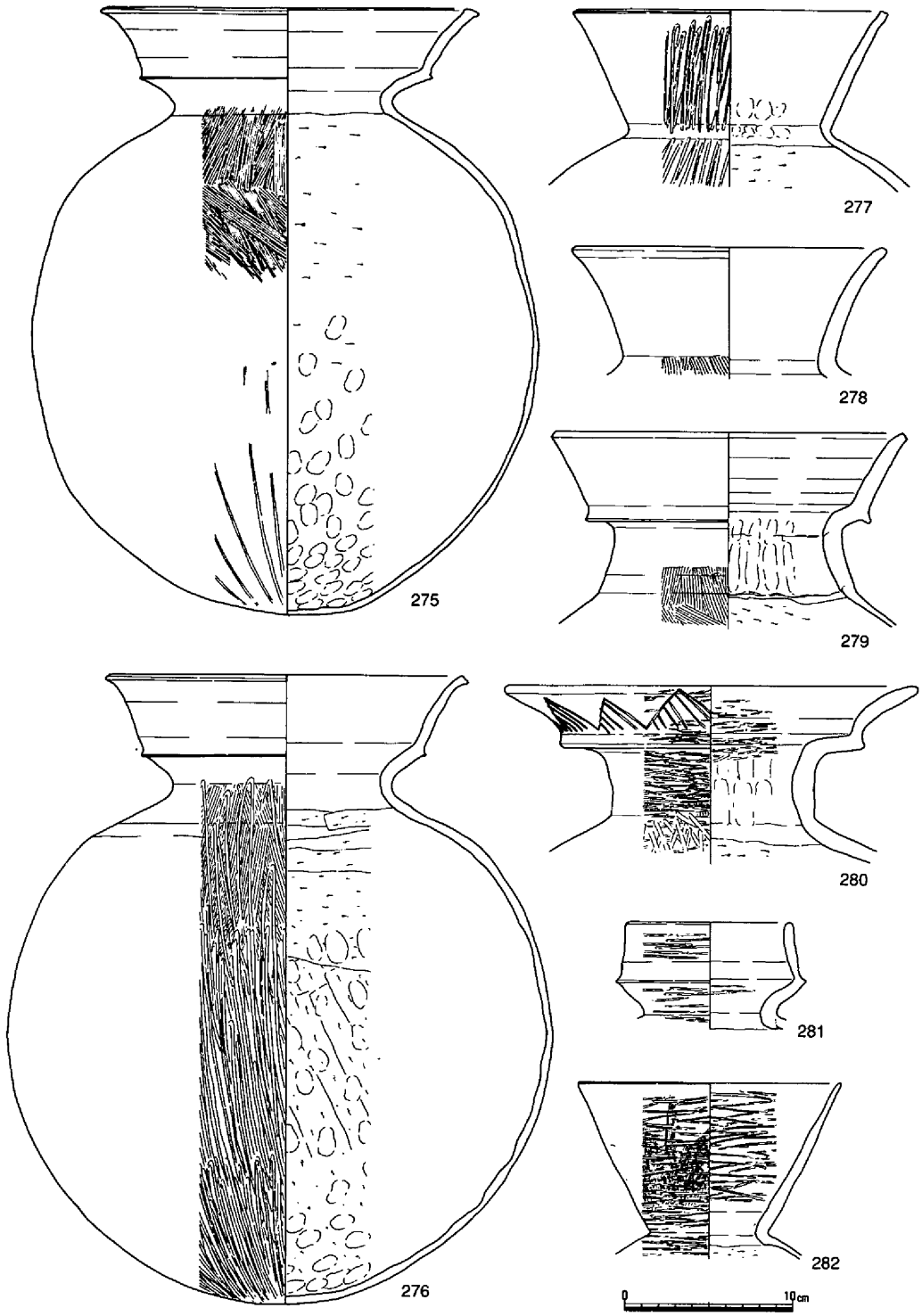
甕は、口縁部を上方に長く拡張した後外面に櫛描沈線を施すもの310～328と、口縁部の断面が「く」字形態をとるもの329～341、さらには「Ｓ」字状の口縁をもち底部に脚を有する東海系の甕も確認された。331は、内面ヘラケズリにより薄く仕上げられ、胎土中には雲母の混和が顕著に認められた。332は、内面ヘラケズリが一部に施されるものの上半部には粗いハケメが残っている。胎土中には、角閃石・雲母の混和が多く見られ、他地域からの搬入品であろう。340・341は、いずれも胎土が同じで淡白色を呈する。胎土中には、籾痕の存在が多く確認された。

高杯は、その器形から345・348・352・354・358の５種類に代表される。いずれも精製された粘土と、脚部の穿孔数の４から３への減少化傾向に特徴づけられる。

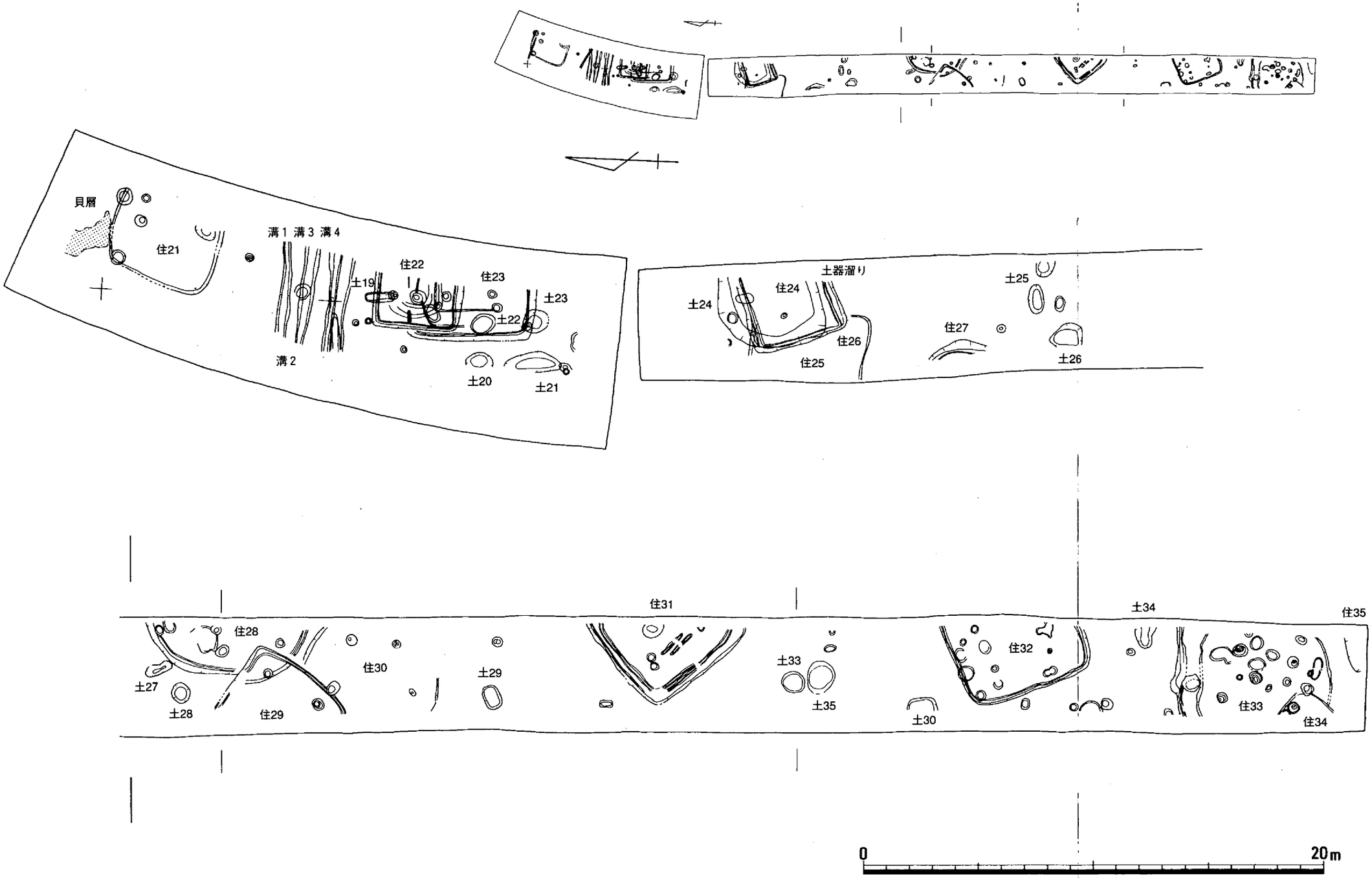
鉢は、壺275・甕314に代表される器種と胎土・調整が共通した技法である360タイプと364タイプの比較的大型のものと、370に代表される小型で浅い器種が認められる。前者は、複合した口縁部と肥大化した底部を特徴とする。後者は、前者の大型鉢とも胎土が共通し、底部外面にヘラによる調整を特徴とする。380は、浅い鉢に小さい脚が付くもので山陰地方に多く見られる。

器台は、いずれも当該地方において普遍的に見られるものでなく、山陰地方の鼓形器台として認識されるものである。381を除いては内・外面に丹の塗布が見られた。

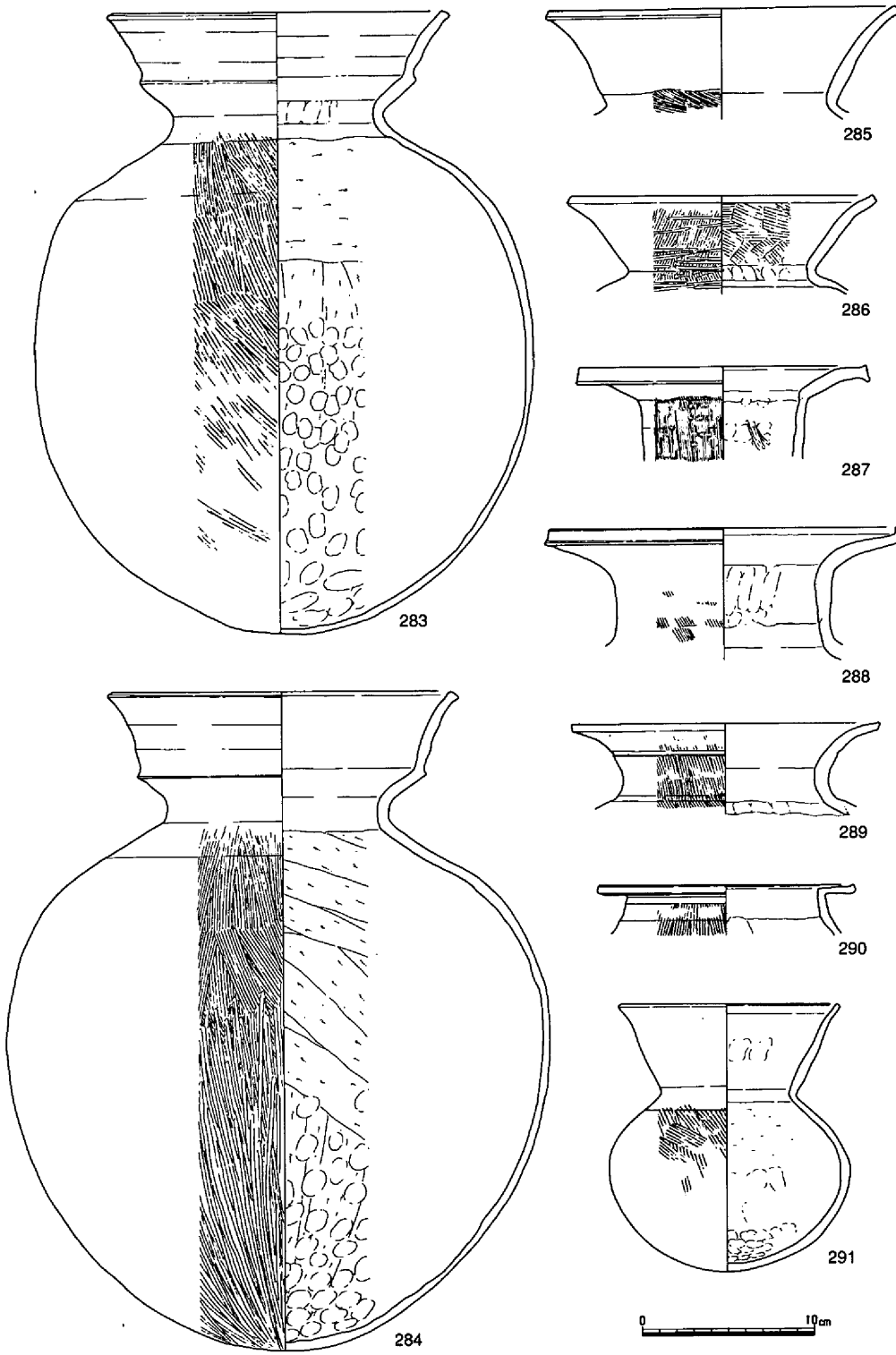
第71図　竪穴住居21覆土上層遺物堆積状況（1/30）



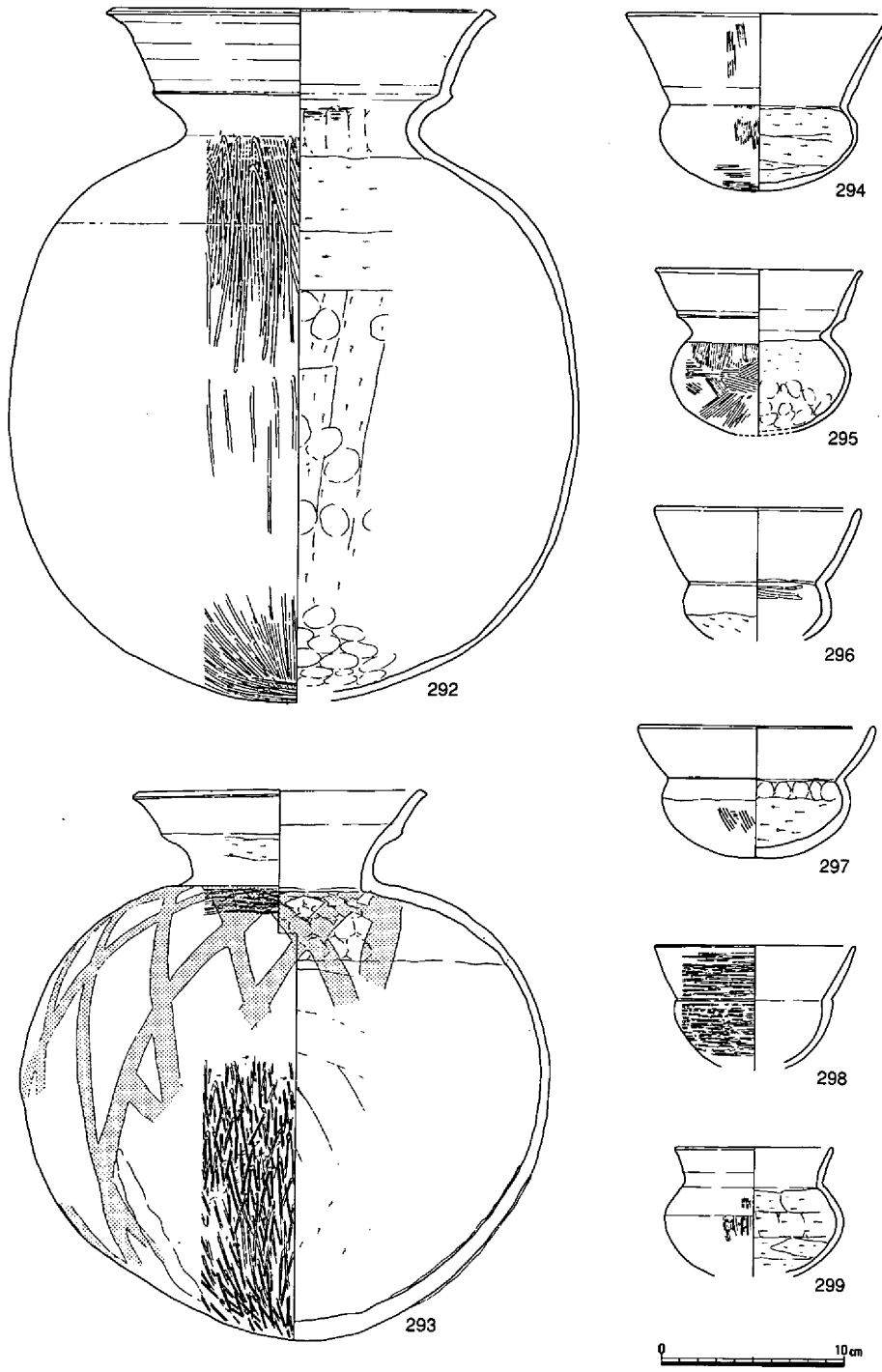
第72図　竪穴住居21出土遺物①（1/4）



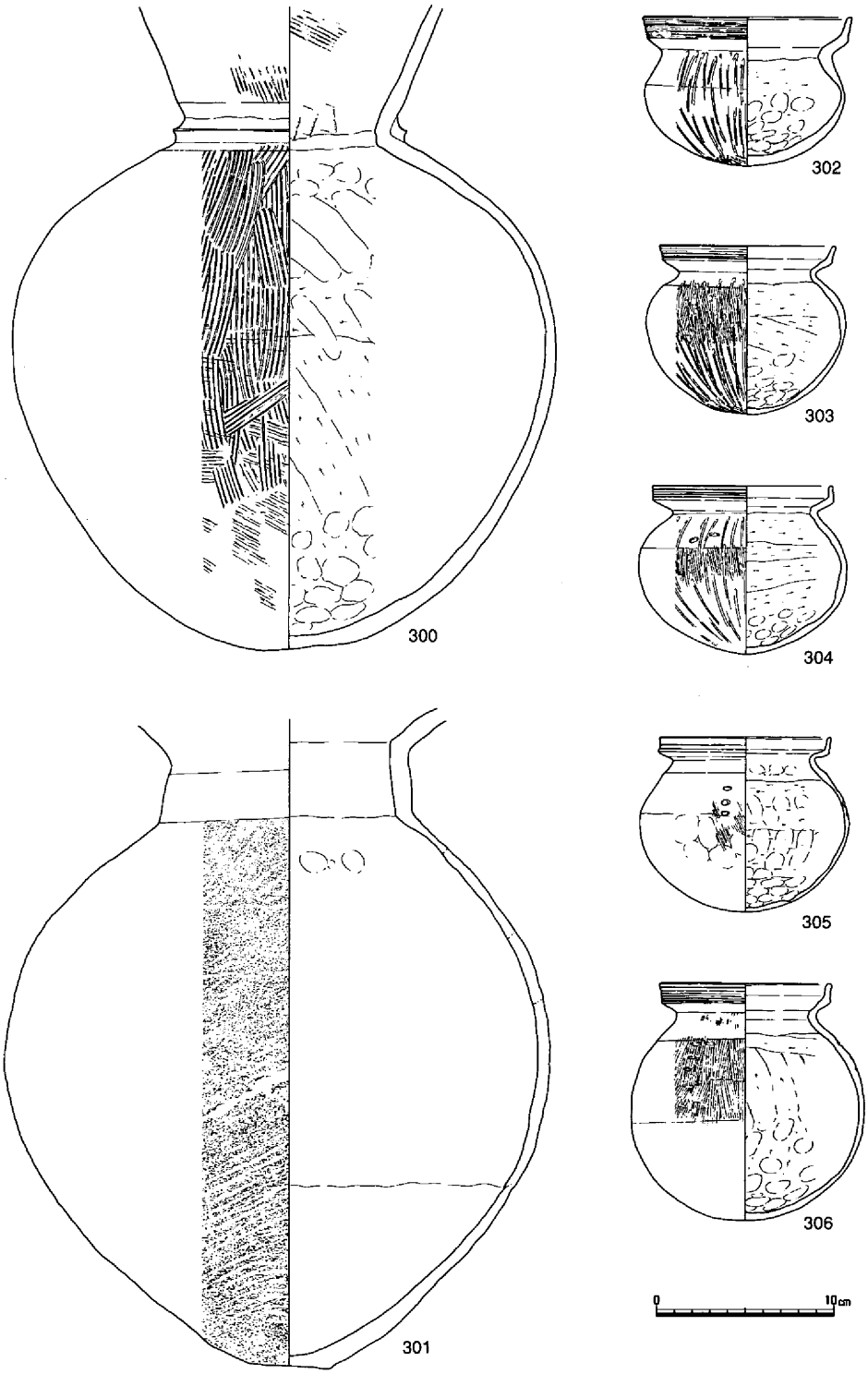
第73図　古墳時代前半期検出遺構全体図（1/200）



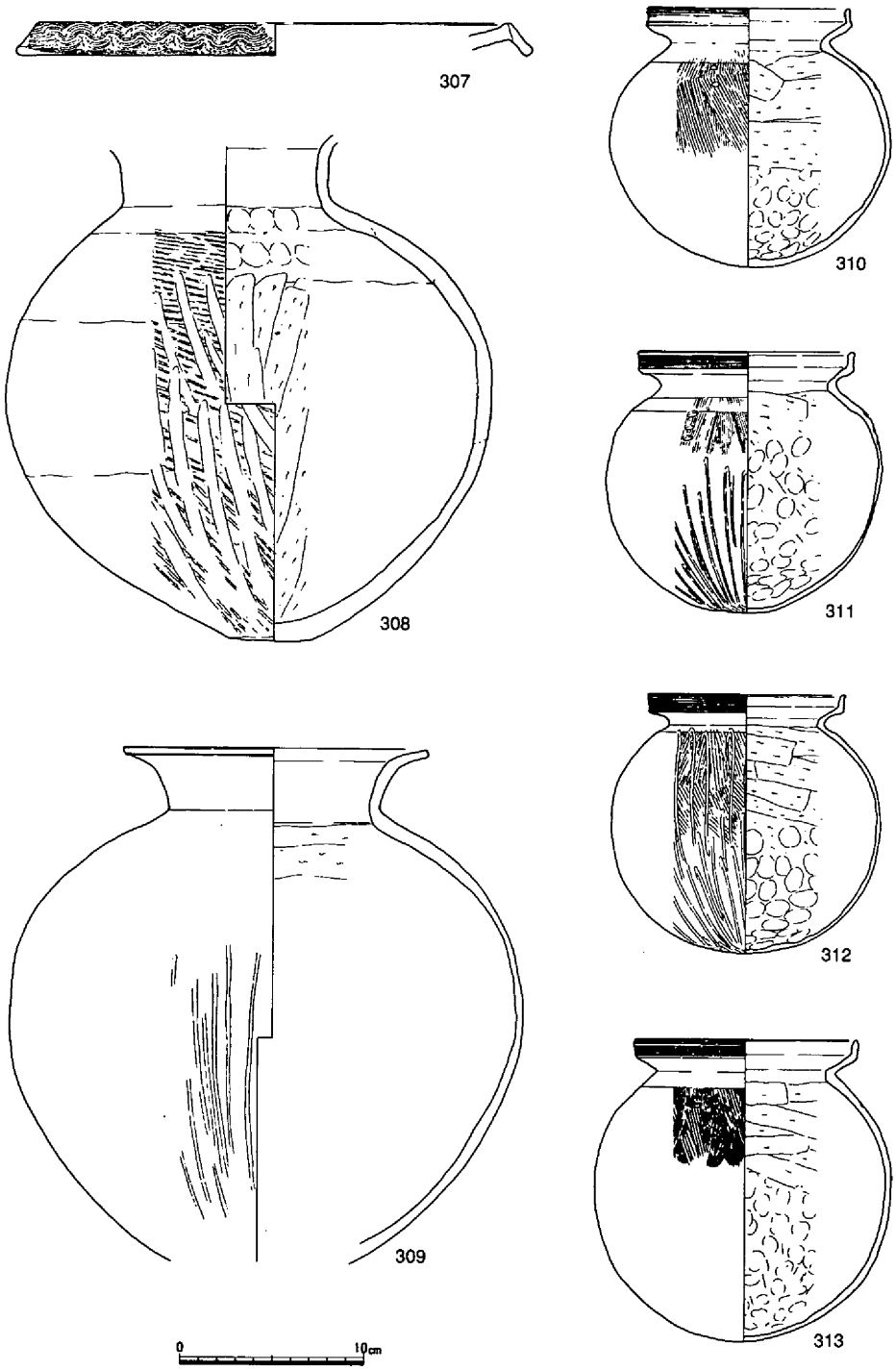
第74図　竪穴住居21出土遺物②（1/4）



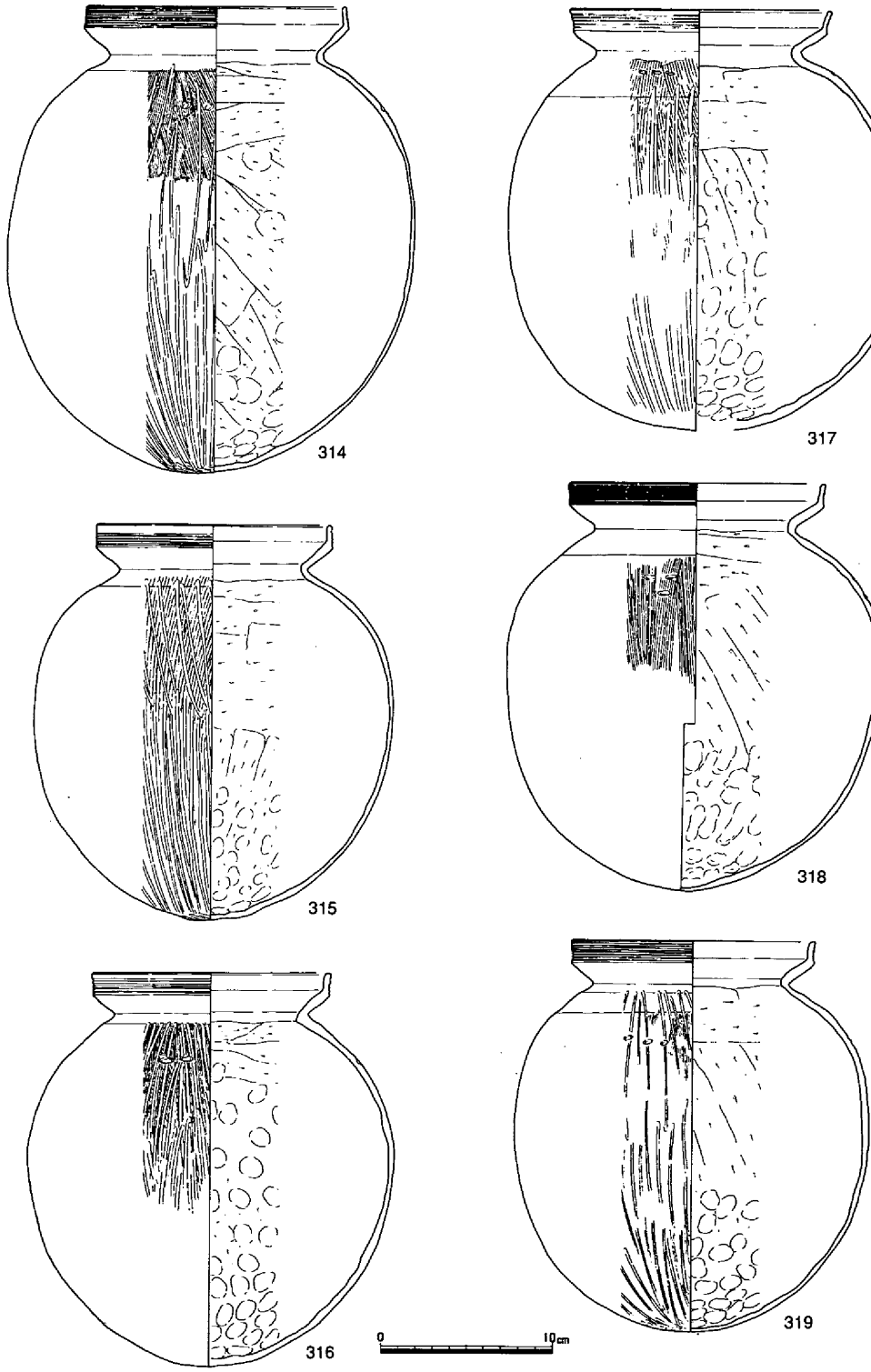
第75図　竪穴住居21出土遺物③（1/4）



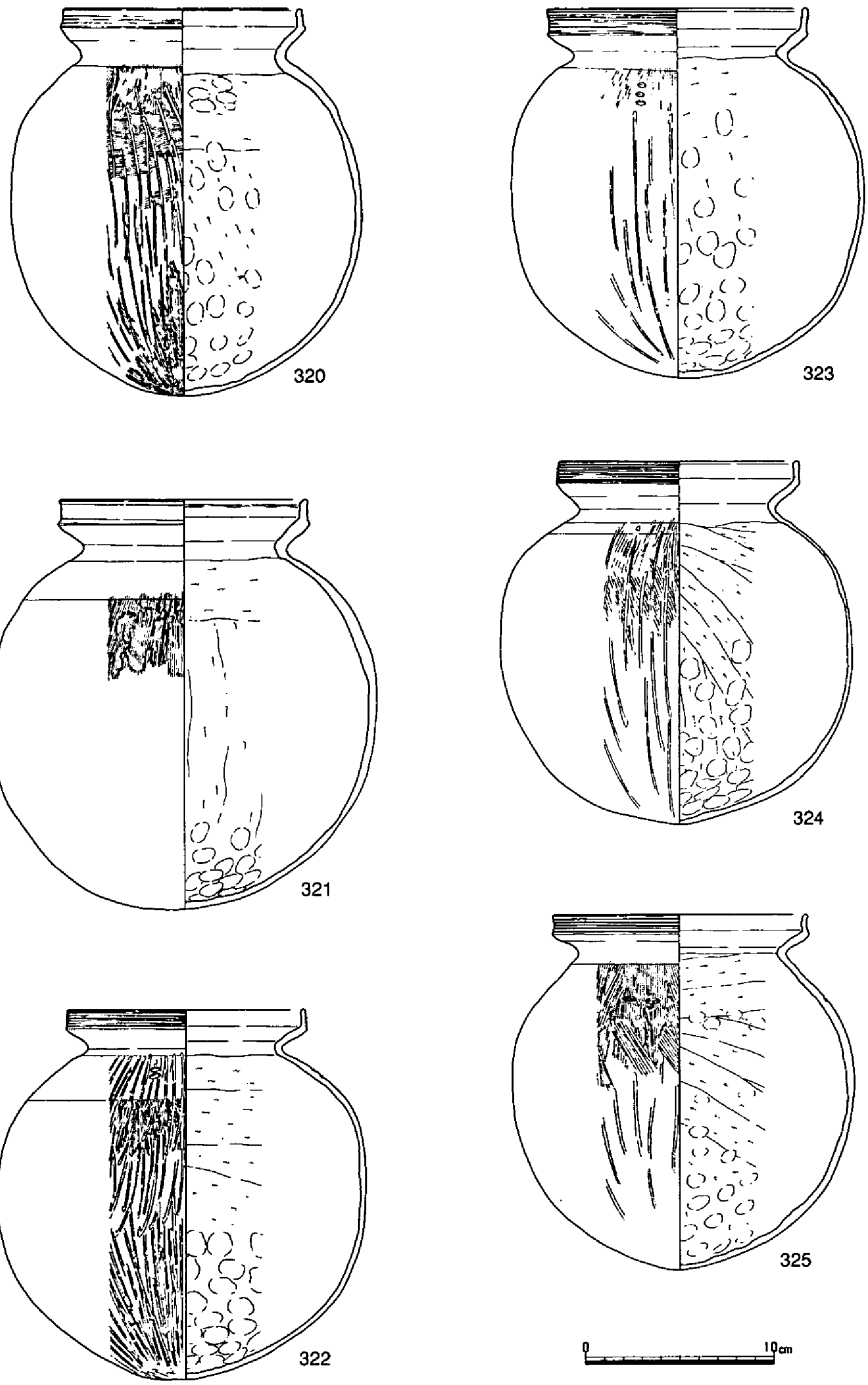
第76図　竪穴住居21出土遺物④（1/4）



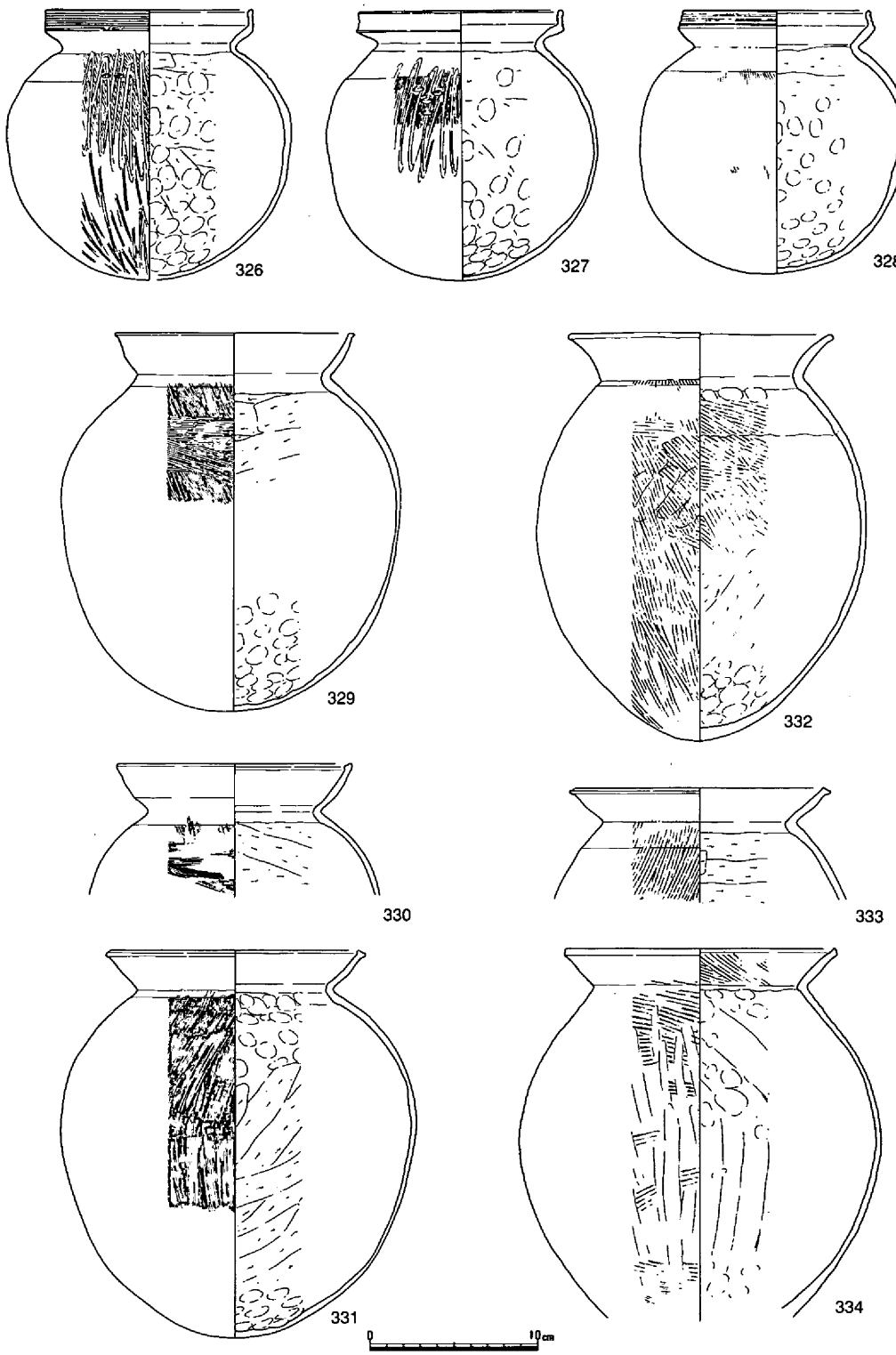
第77図　竪穴住居21出土遺物⑤（1/4）



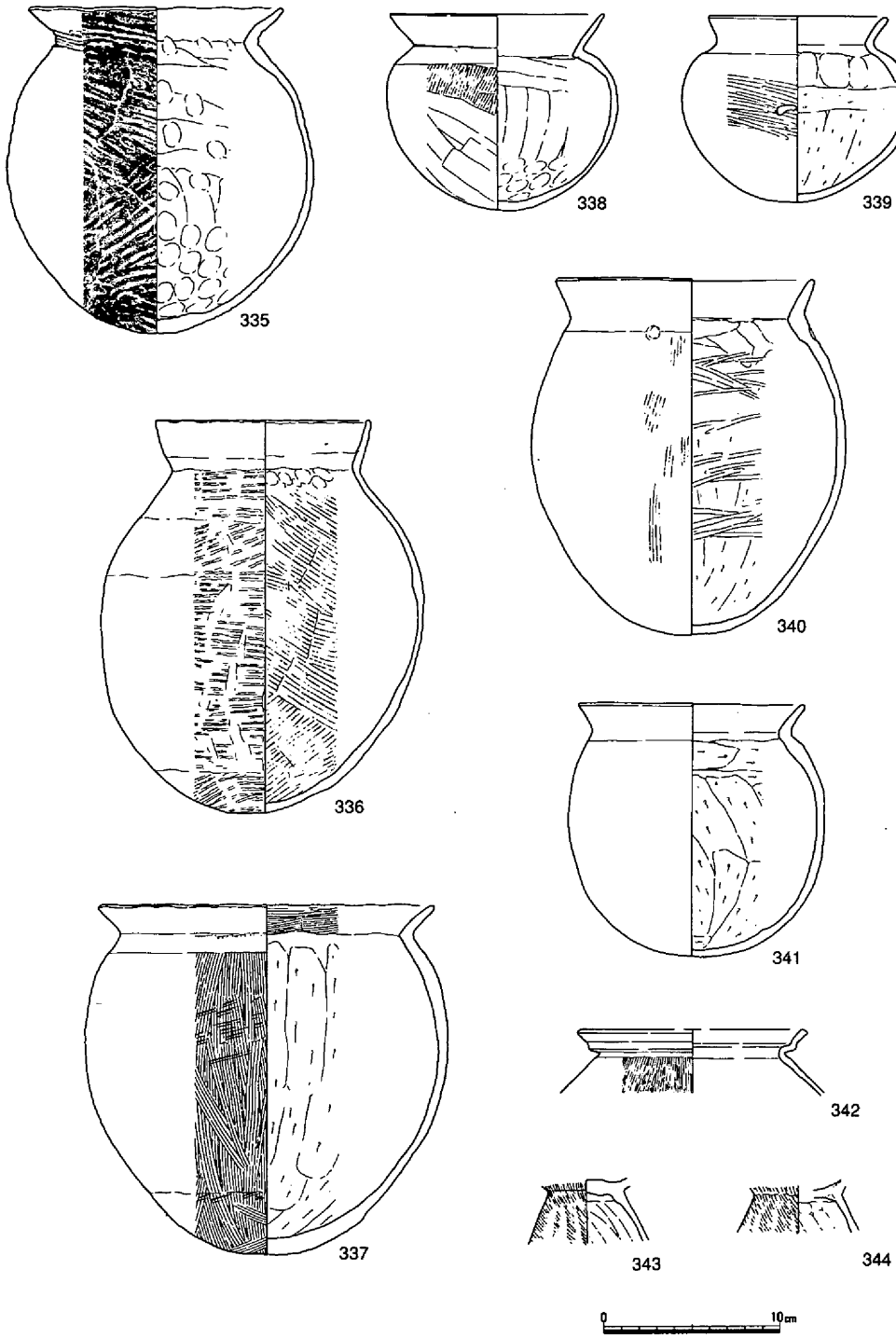
第78図　竪穴住居21出土遺物⑥（1/4）



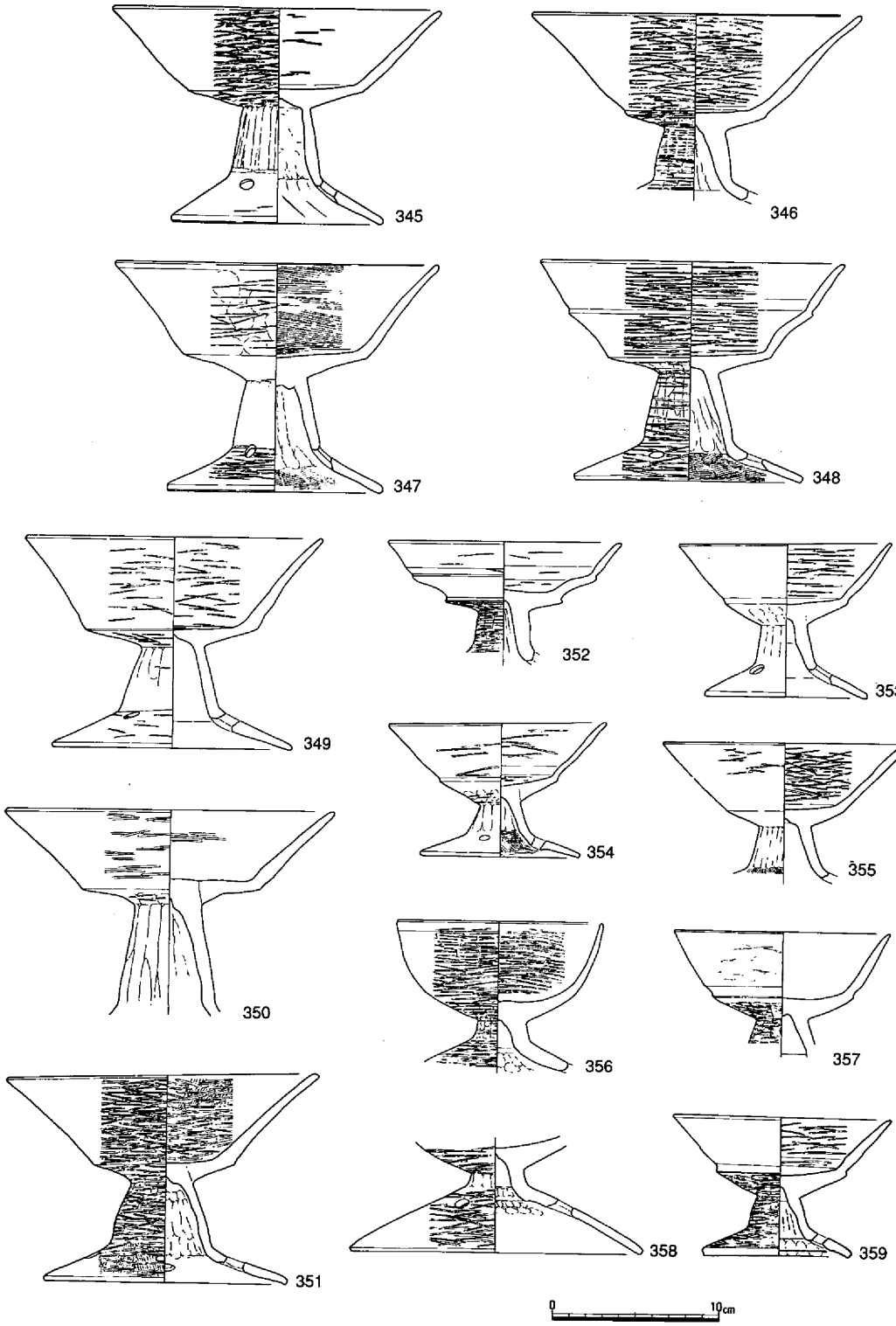
第79図　竪穴住居21出土遺物⑦（1/4）



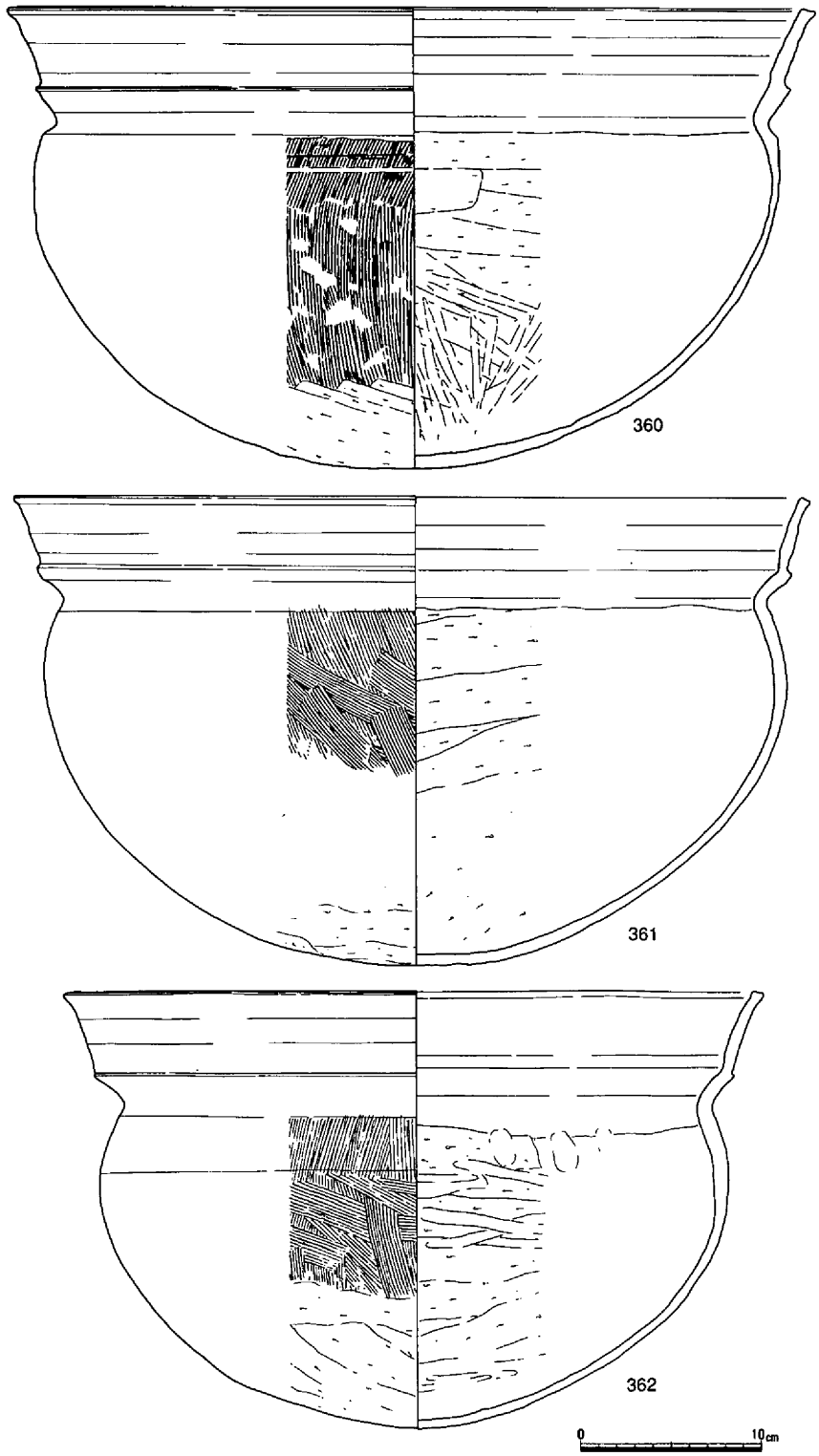
第80図　竪穴住居21出土遺物⑧（1/4）



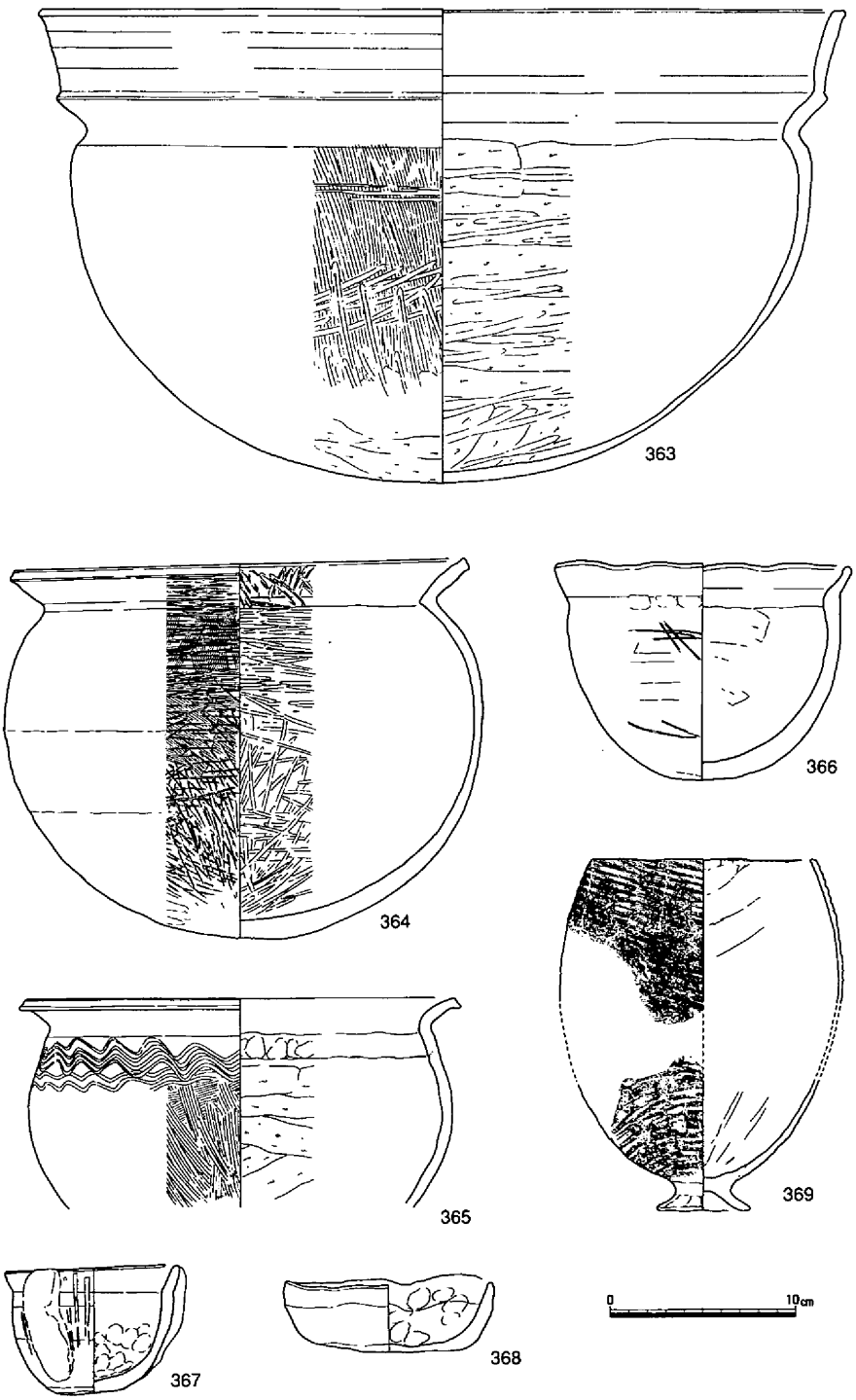
第81図　竪穴住居21出土遺物⑨（1/4）



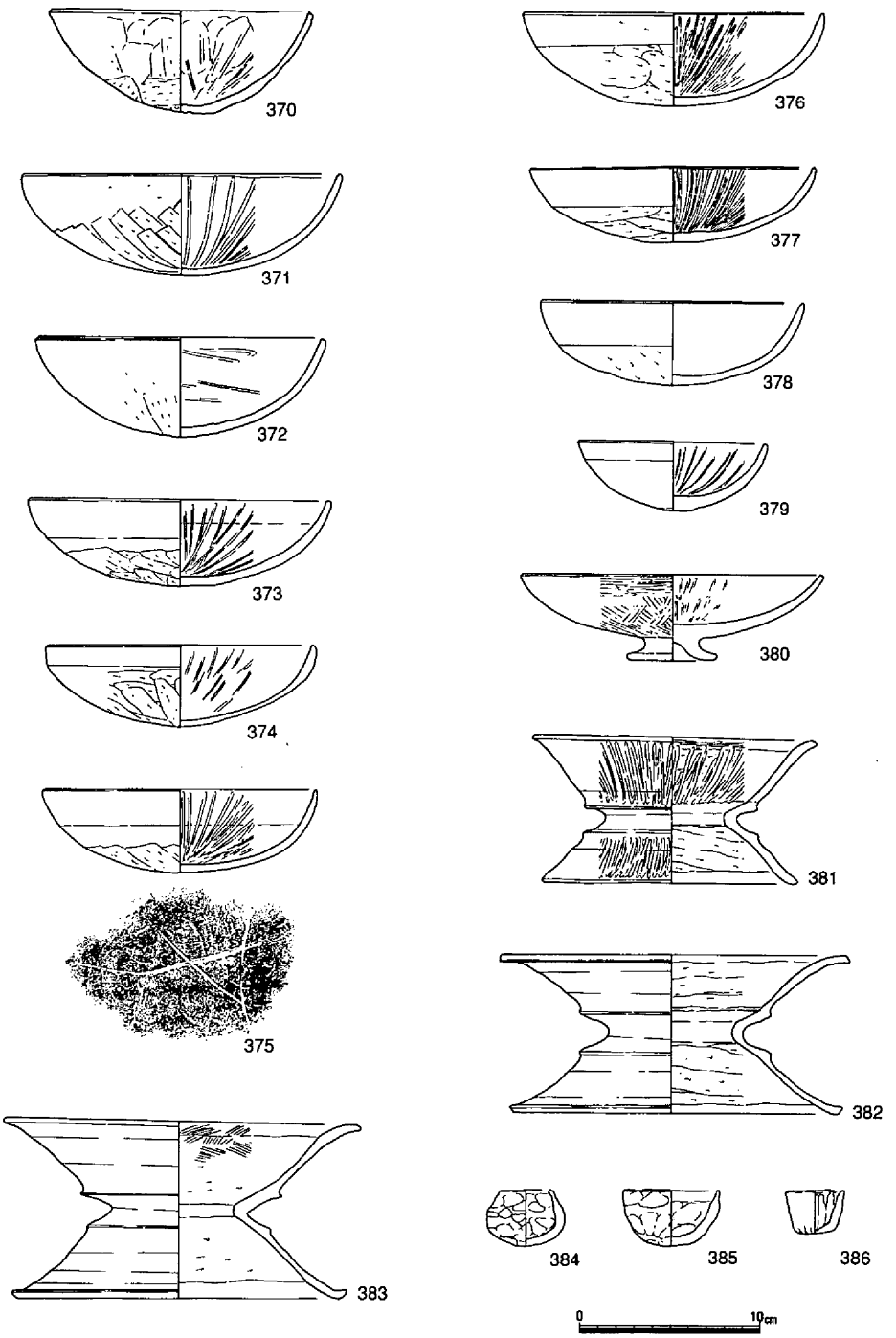
第82図　竪穴住居21出土遺物⑩（1/4）



第83図　竪穴住居21出土遺物①（1/4）



第84図　竪穴住居21出土遺物⑫（1/4）

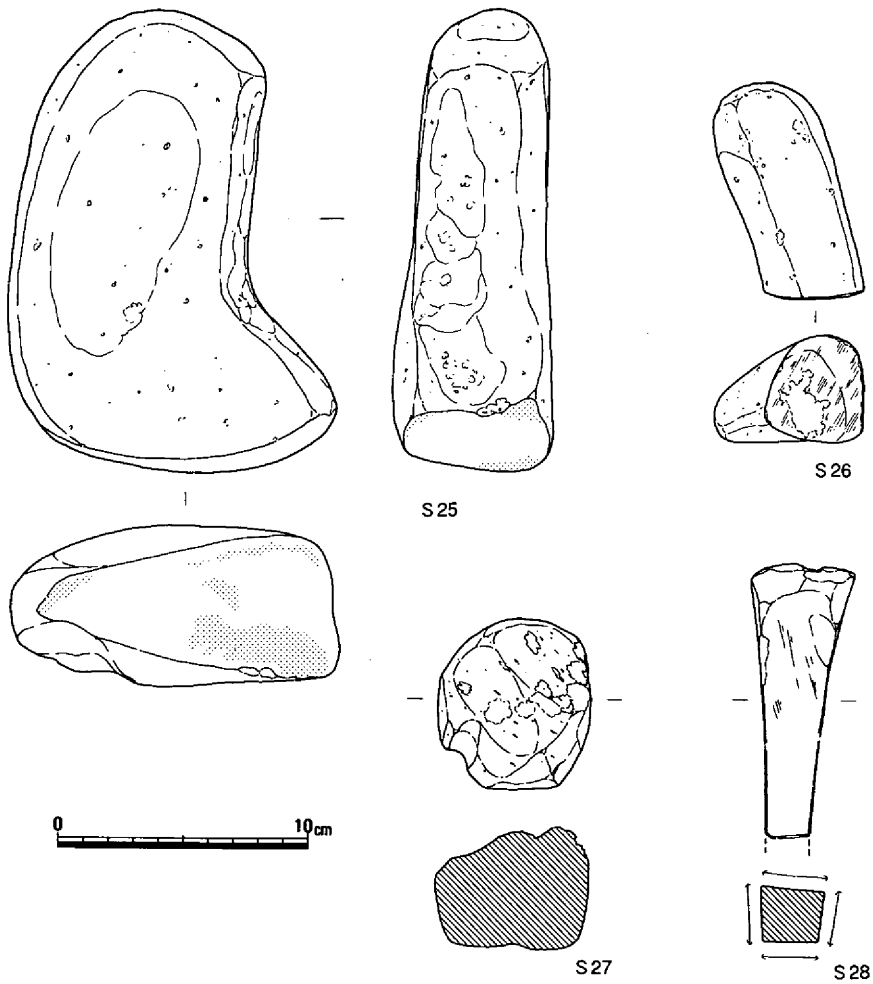


第85図　竪穴住居21出土遺物⑬（1/4）

石製品としては、朱の精製段階で使用されたと考えられる石杵が２点と砥石、軽石が出土した。石杵は、比較的大型で「Ｌ」字状を呈したものＳ25と細長い棒状のものＳ26とがある。前者は、花崗岩の自然石を一部加工して「Ｌ」字状に整形されており、底面には使用痕跡としての「面」と、使用を物語る赤色顔料の遺存が認められた。後者は、斑岩で比較的長い河原石を途中で切断したもので、切断面を面として使用していた。そこには使用痕跡としての擦痕と僅かながら赤色顔料の遺存が確認された。

Ｓ27は、軽石を不定形ながら円形にちかく加工整形したものである。Ｓ28は、凝灰岩製の砥石で、縦方向の４面はすべて使用されていた。

時期は、共伴する土器の型式から亀川上層段階に比定されることで、古墳時代前半に位置づけられる。



第86図　竪穴住居21出土遺物⑭（1/3）

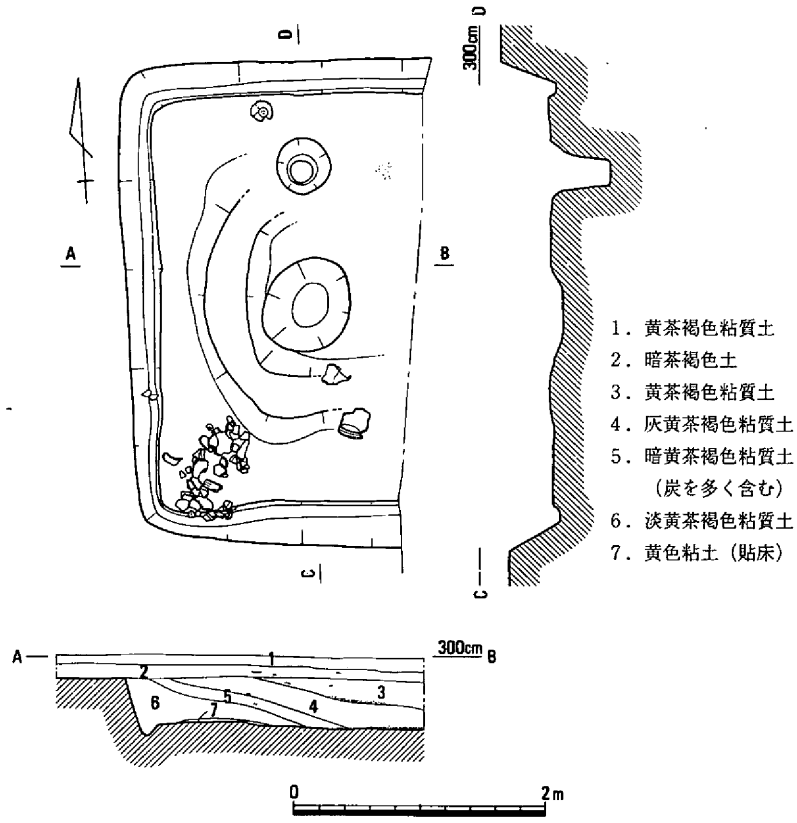
竪穴住居22（第73・87～89図、写真図版11・12）

第1調査区南半部で検出された。後述の竪穴住居23とは切り合い関係にあり、竪穴住居23埋没後、これを切っての構築が確認された。

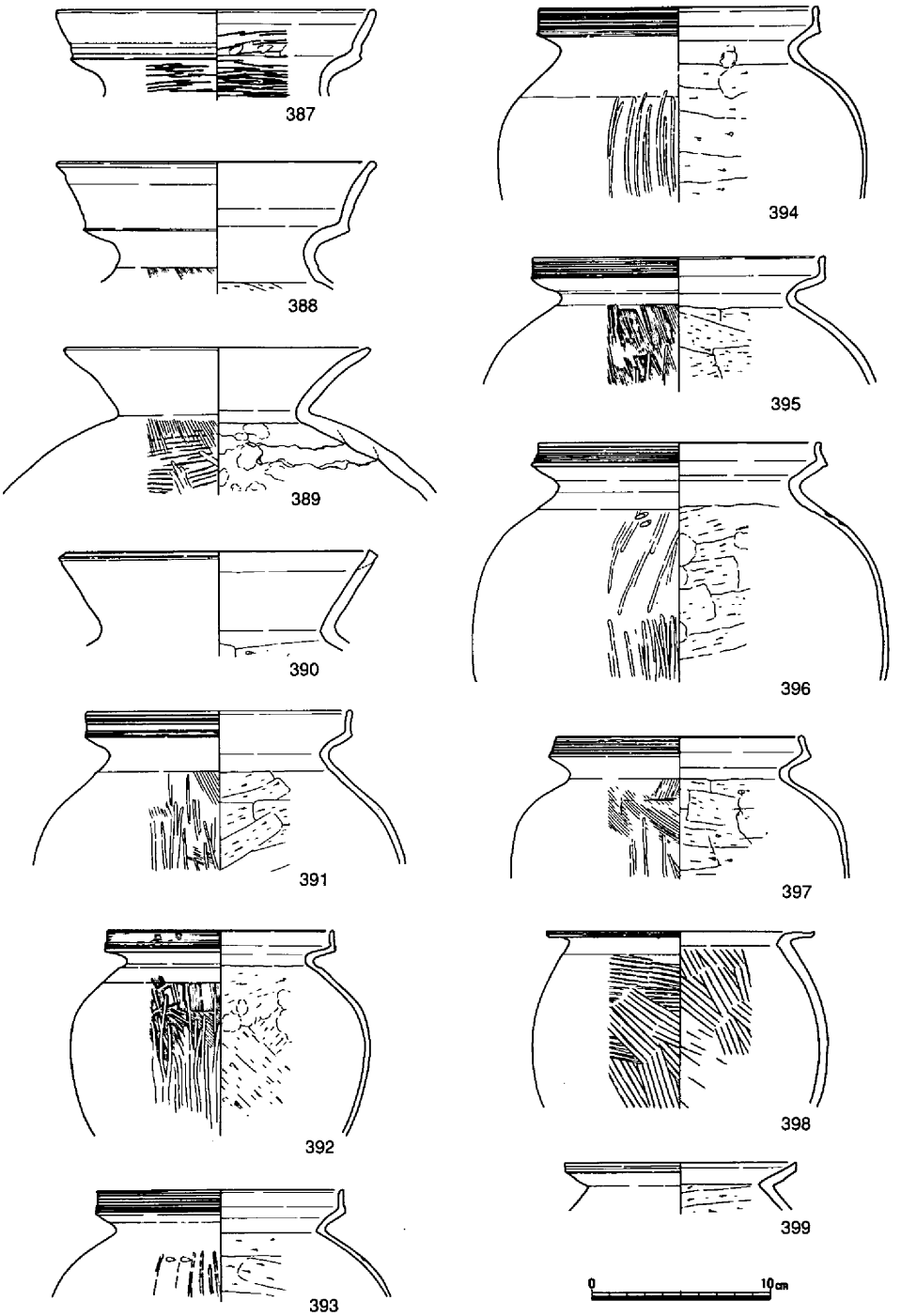
住居は、調査区の東側調査区外にかかっていたことで、規模についての詳細は不明である。調査区内での検出部分からは、一辺の最大長3.90mが計測され、およそ平面的にはこれを前後した規模での方形もしくは長方形プランが想定されよう。

床面からは、壁体溝、柱穴、中央穴が検出された。中央穴は、床面検出面中央部において長軸75cm、幅65cm、深さ10cmと比較的浅い窪み状に検出された。また、この周辺には微地形ながらこの中央穴を取り囲む状況で床面との比高約5cm程度の高まりをもった土手の存在が確認された。柱穴は、北側で1本が確認されたが、対になる柱穴は検出出来なかった。

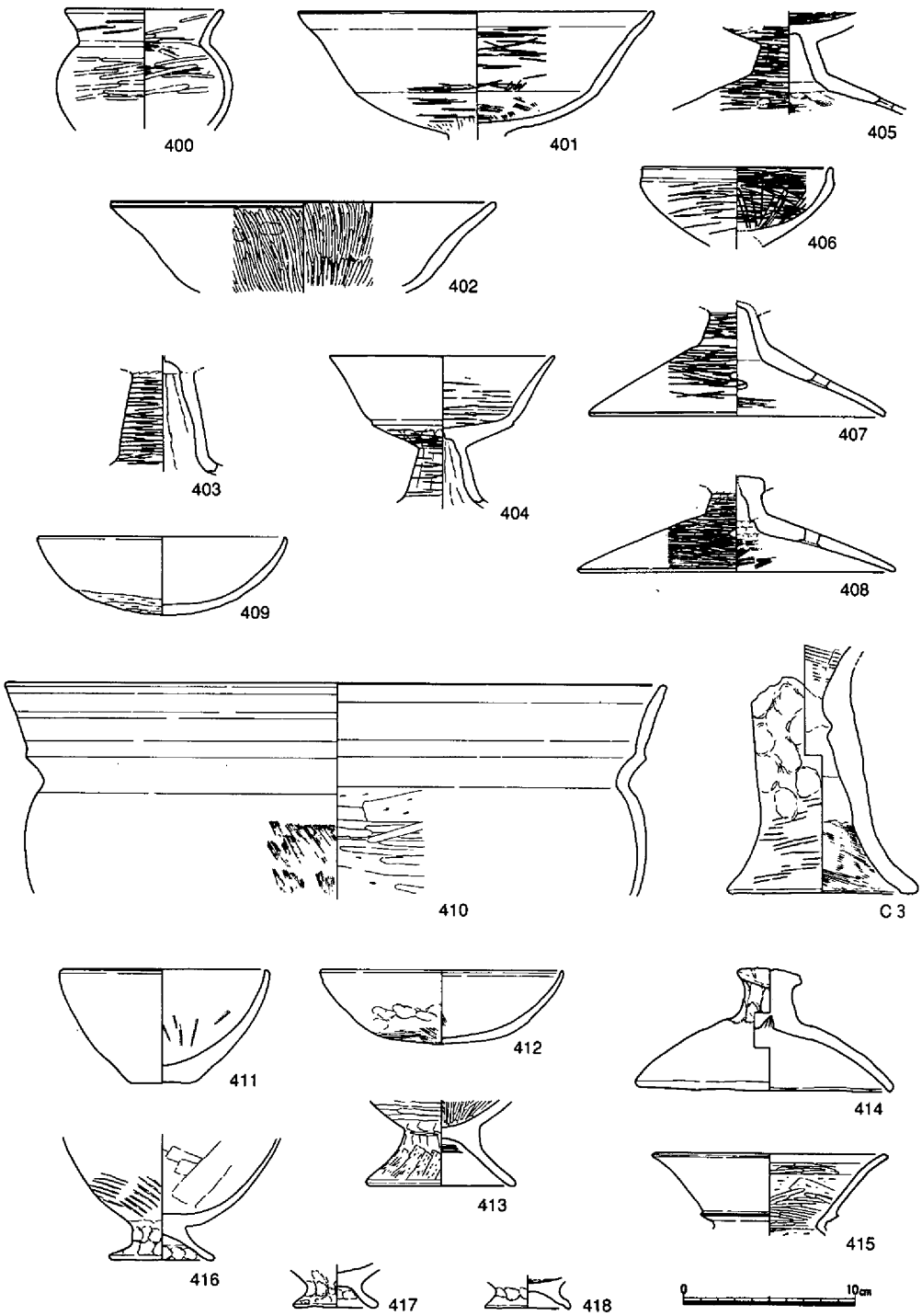
出土遺物は、床面南西隅に特に集中して検出された。器種には、壺、甕、高杯、鉢、器台等が見られる。



第87図　竪穴住居22（1/60）



第88図　竪穴住居22出土遺物①（1/4）



第89図　竪穴住居22出土遺物②（1/4）

壺は、二重口縁のものと断面「く」字状のものの２種類がある。後者の389は、390と同じく胎土中に角閃石を多く含むもので、外面にはタタキ痕跡を内面には粘土紐の接合痕跡を明瞭に残す。

甕は、在地産の口縁外面に櫛描沈線の施されたものと、断面「く」字状を呈するものの２種類が見られる。398は、胴部外面にタタキと粗いハケメ調整を残した器形で、胎土中に角閃石の混和が認められる。

高杯は、水漉粘土を胎土とする当該地域の土器の中にあって、402には雲母が含まれていた。

鉢には、大型で二重口縁と丸底の底部をもったもの410と小型で浅いものがある。また、台付きの鉢は413を除きいずれも製塩土器である。

蓋414は、高杯の脚部の在り方を見せるものであるが裾部への穿孔は施されず、また脚部支柱部分の調整に押圧・ナデ等の技法が見られた。胎土中には、雲母の混和が見られる。

器台415は、内面ヘラケズリの後ヘラミガキ調整が施される。

土器以外には、Ｃ３とした土製支脚がある。本来当該地方の生活様式に伴わない遺物で、他地方からの搬入品と考える。

時期は、土器が亀川上層段階と考えられ、古墳時代前半への位置づけがなされよう。

竪穴住居23（第73・90～92図）

第１調査区の南側において竪穴住居12・22と重複し、竪穴住居12を切り、竪穴住居22に切られるといった状態で検出された。

住居は、竪穴住居22と同様全体の約１／２が調査区外にあって、調査出来なかったことで詳細については言及出来ない。検出状況から判断すると一辺の長さ5.70ｍを前後した方形もしくは長方形の平面形が推測される。

床面からは、ベッド状の高まり、柱穴、壁体溝、砂利の集積が検出された。

ベッド状の高まりは、南側で明瞭でないが壁体溝からおよそ１ｍの間隔をおいて、各柱穴に並び沿うかのようにベッドの端部が形成されていた。

柱穴は、２本が検出されたにすぎないが、いずれも柱痕を残すものであった。規模は、掘り方の径が30～40㎝で深さ60㎝を前後するものであった。

砂利は、住居の南側にあっておそらく柱穴間のほぼ中央部に位置すると考えられ、また砂利は敷きつめられたかの状況で、しかも範囲の確認は出来なかったものの面としての広がりが認められた。砂利は、住居内への出入口に伴った土間としての性格が推測される。

出土遺物は、在地産の器種が多く見られた中にあって他地方からの搬入品と考えられるものも認められた。

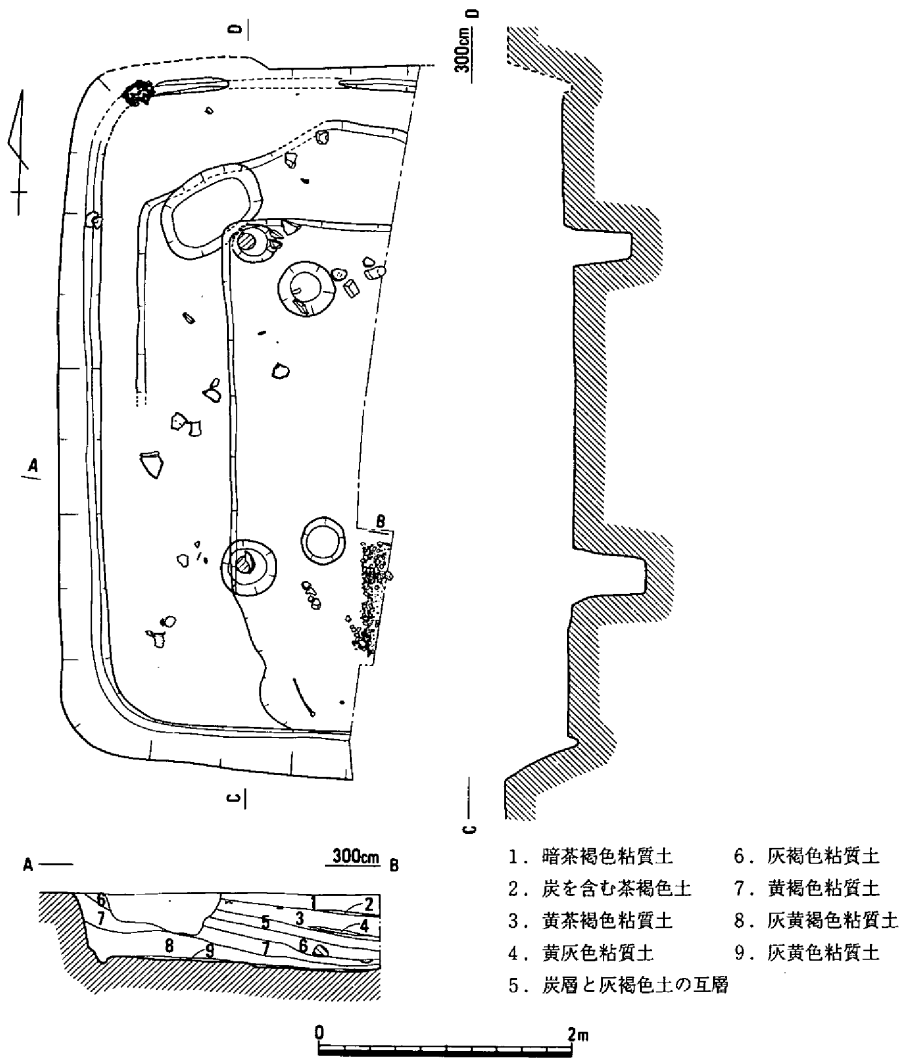
壺420は、内・外面にハケメ調整が認められ、胎土中には角閃石・雲母が包含される。

高杯427は、形態的には在地のものと変わらないが、胎土中に角閃石・雲母を含む点において他地域からの搬入品としての可能性が高い。

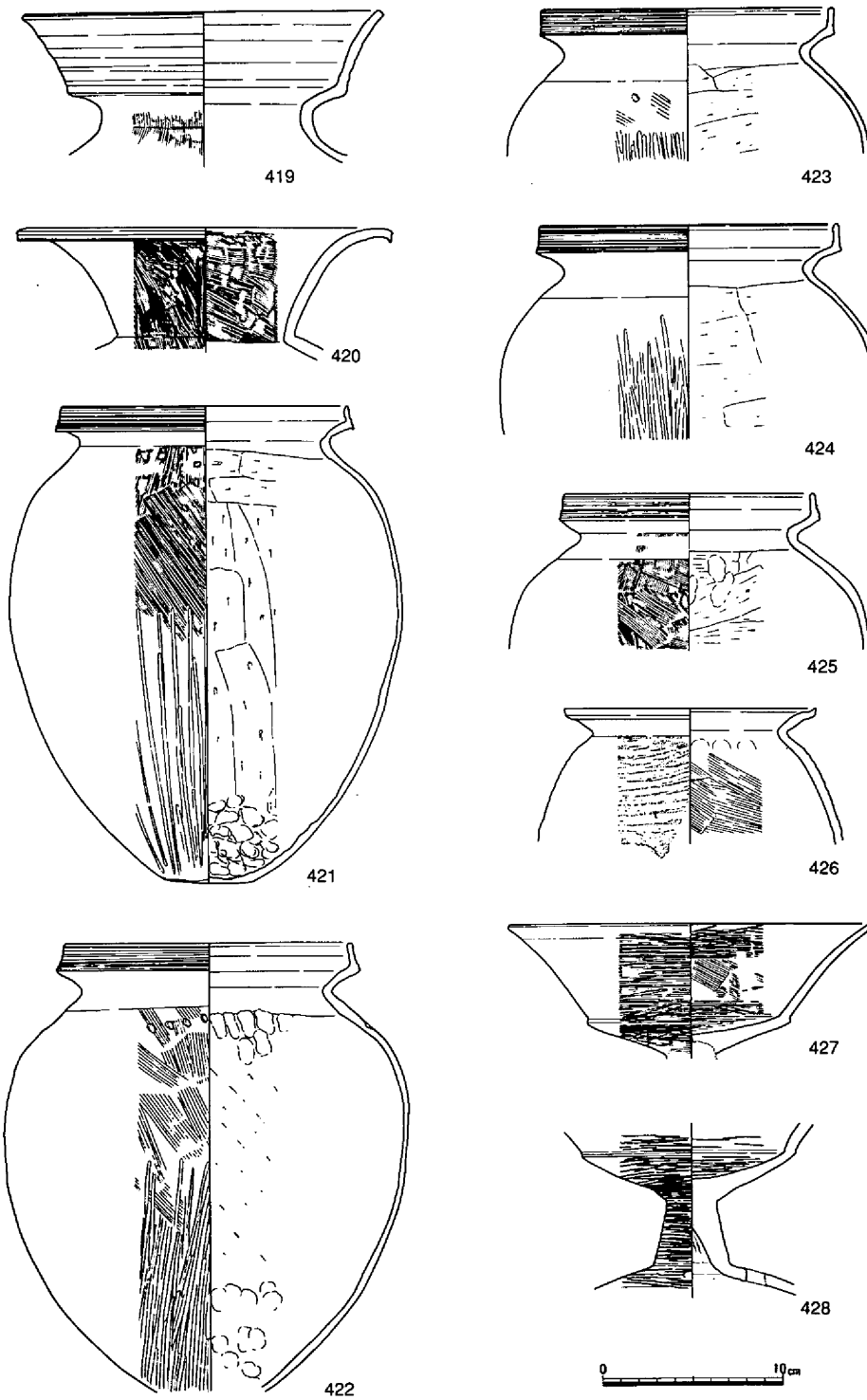
鉢には、大型と小型製品が見られるが、概して大型の製品440・441に雲母と角閃石の混和が多く認められた。

器台は、口径12cm、器高13.5cmを測るもので、上下対象に近い形状を示すもので、杯部内面には丁寧なヘラミガキが施されていた。

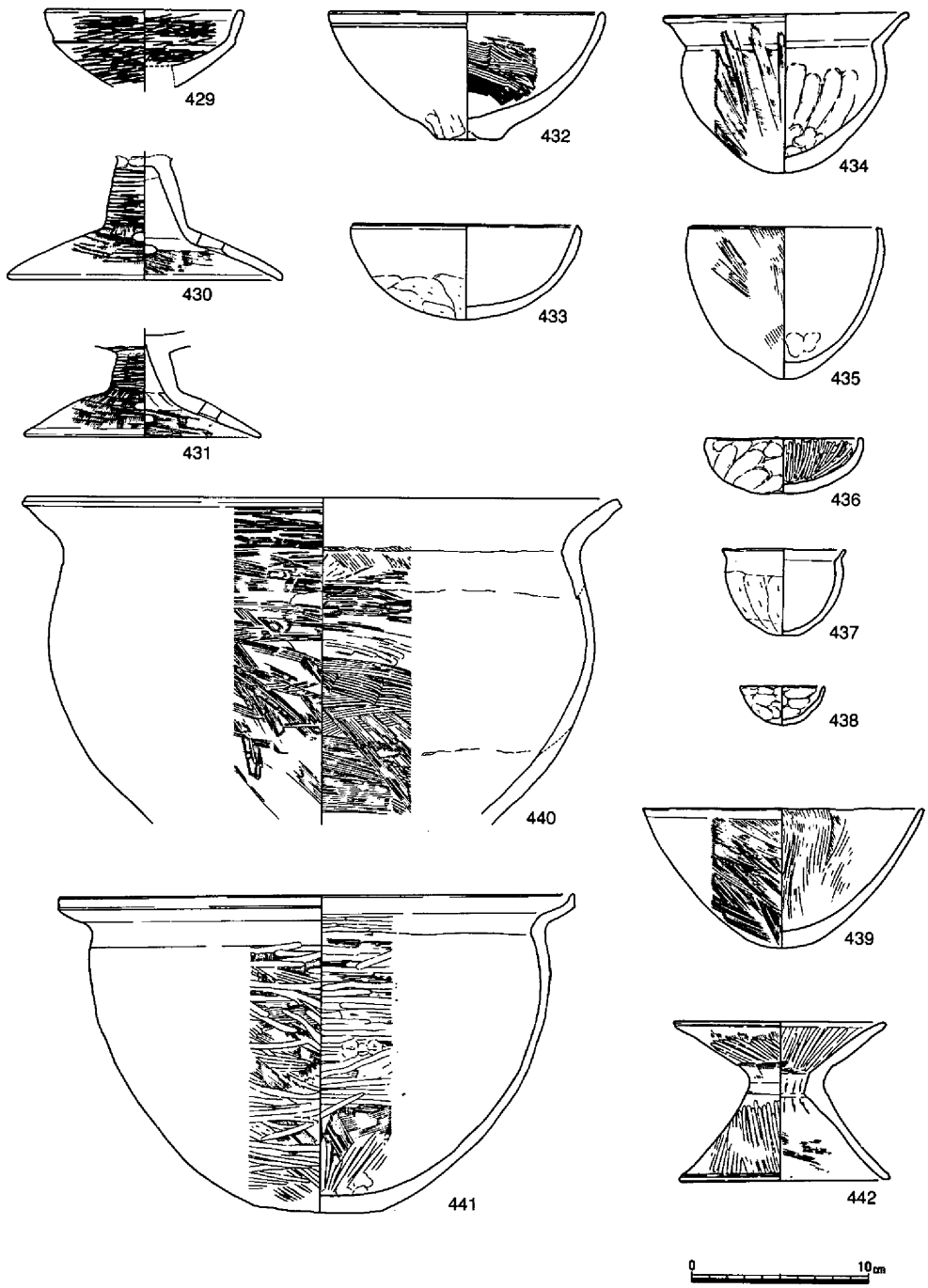
時期は、甕421に見られる底部ヘラミガキ調整の存在および高杯が脚柱部内面が中空状態にないことで下田所段階に比定される。（島崎）



第90図　竪穴住居23（1/60）



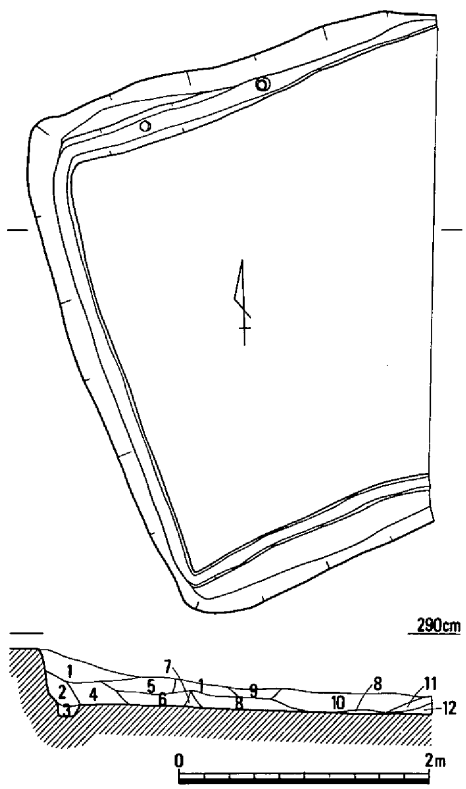
第91図　竪穴住居23出土遺物①（1/4）



第92図　竪穴住居23出土遺物②（1/4）

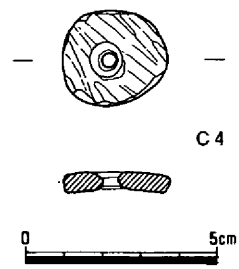
竪穴住居24（第73・93・94図、写真図版13）

第２調査区の北端で検出された住居である。竪穴住居25などと切り合う状態で検出されている。遺構は全体の約３／４程が調査区内となるため、ほぼ全容が判明した。平面形は方形を呈し、その規模は１辺が約４ｍである。遺構の検出レベルは海抜2.8ｍで、壁高は床面から約30cmを測る。埋土は土層断面から12層に区分され、灰褐色や黄褐色系の粘質土で埋まり、床面近くでは、灰や焼土がみられた。住居内には幅約10cm、深さ約10cm前後の壁体溝が周沿にめぐる。なお、本住居に伴う柱穴は確認することができなかったが、４本柱で構成されるものと思われる。



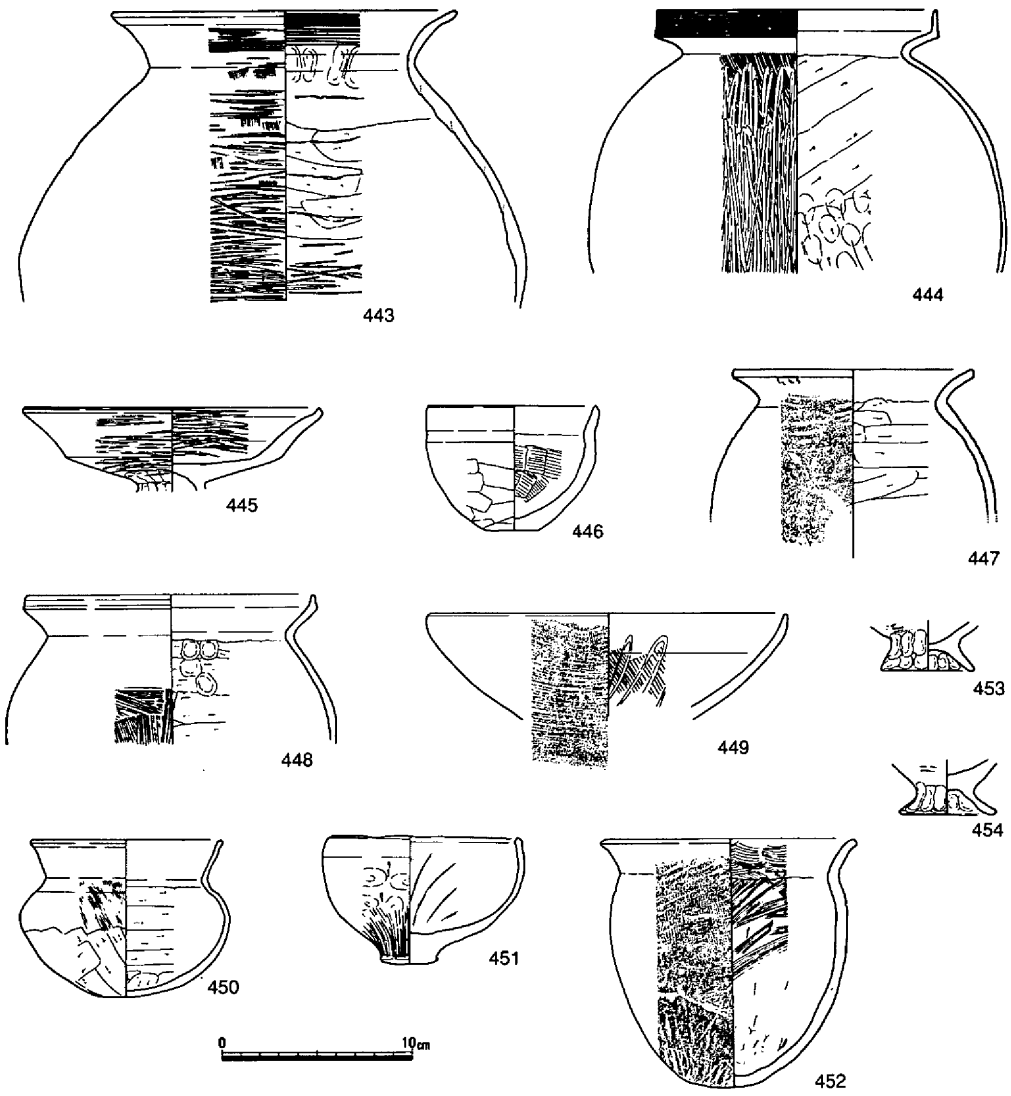
1．暗黄褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．暗黄褐色粘質土
4．〃
5．暗灰褐色粘質土
6．〃　（含、焼土塊）
7．暗黄褐色粘質土
8．暗灰褐色粘質土
9．〃　（含、炭・灰）
10．暗黄褐色粘質土
11．〃　（含、焼土）
12．〃

遺物は床面の上層、下層、壁体溝などから出土している。上層からは壺443、甕444・447、小型器台445、鉢446が出土している。443は口径17.8cmを測る。「く」字状に外反する口縁部をそのまま丸く収め、胴部外面には縦のハケナデの後、横のヘラミガキが、内面は指ナデ後、横のヘラゲズリとヘラミガキ調整が施されている。445は口径15.4cmを測る。小さな杯部からわずかに上方に開く口縁部であり、端部はわずかに内傾する。端面には浅い１条の沈線がめぐり、杯部内外面には丁寧な横のヘラミガキを行なっている。水漉粘土を使用する。447は「く」字状の口縁をもつ小型の甕である。口縁



第93図　竪穴住居24（1/60）・出土遺物①（1/2）

端部は丸く収め、胴部外面は横のタタキの後、ハケによる調整が施されている。内面は横のヘラケズリである。床面の下層では、甕448、鉢449、製塩土器453・454が出土している。449は口径18.8cmを測り、胴部外面には縦のタタキが、内面には斜めのハケ調整後に放射状にヘラミガキが施されている。453・454は製塩に使用された土器の脚部である。内外面は指押えとナデによる調整が、胴部外面にはタタキがみられる。壁体溝からは坩450、鉢451、住居には伴わない柱穴内から小型の甕452が出土している。450は口径9.95cm、器高8.3cm、胴部最大径10.95cmを測るほぼ定形の土器である。胴部外面は上部が斜めのハケ調整、下部が斜めのヘラケズリ、内面は横のヘラケズリによる調整がなされている。451は口径9.7cm、器高6.75cmを測



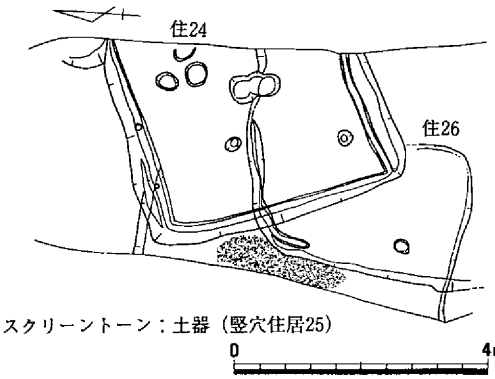
第94図　竪穴住居24出土遺物②（1/4）

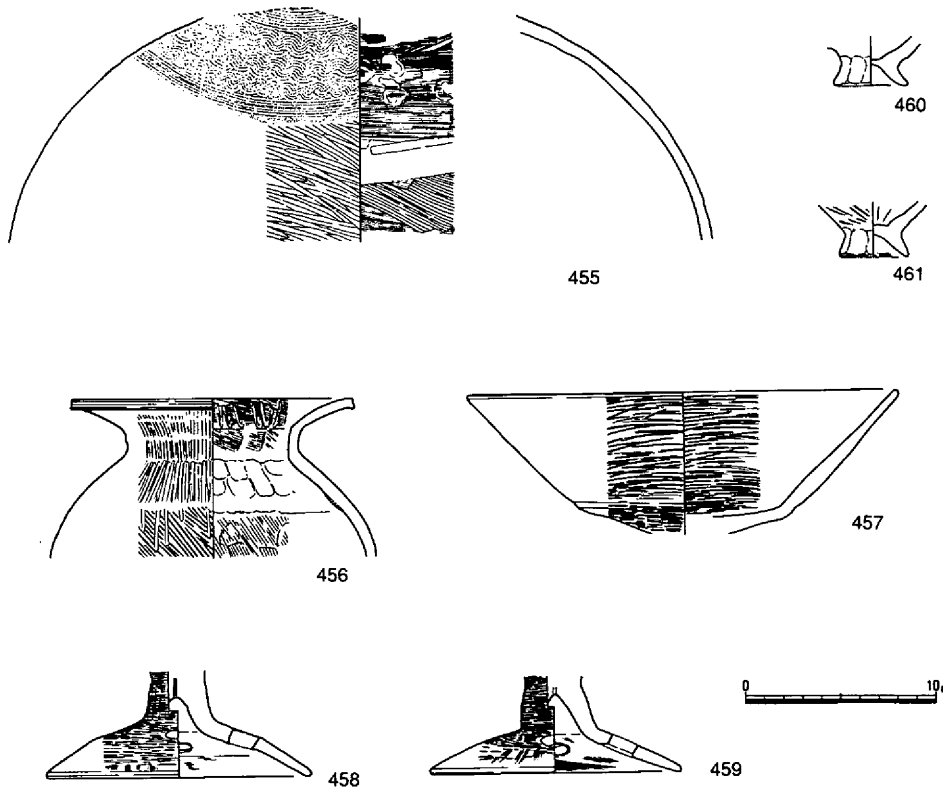
るほぼ完形の小型の鉢である。胴部外面は上部が指押え、下部が縦のハケナデによる調整がみられる。内面はハケによる底部からの掻き揚げによる調整がみられる。貼床面からは土製の紡錘車Ｃ４が出土している。最大径2.7cm、厚さ4.5mm、重量3.9ｇを測り、完形品である。

遺物は弥生時代後期後半のものもあるが、下田所段階のものがあるため古墳時代初頭に位置づけられる遺構である。

竪穴住居25(第73･95図、写真図版14)

第２調査区の北端で、竪穴住居24、26などと切り合う関係の住居であるが、複雑な切り合いのため、住居プラン及び床面の検出はできなかった。かろうじて、西側の土層断面用の土手において確認した結果、１辺が約５ｍ程





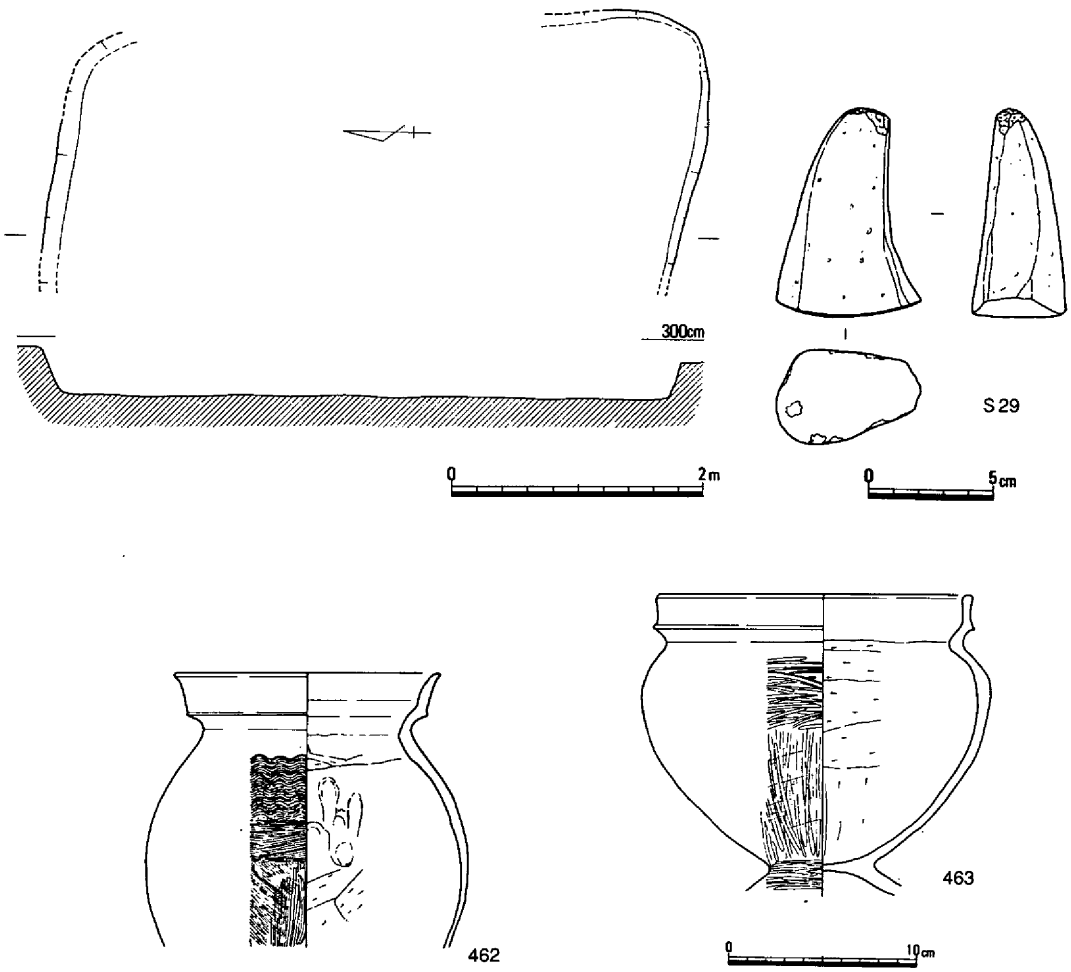
第95図　竪穴住居25（1/120）・出土遺物(1/4)

で、壁体溝をもつ方形の竪穴住居を推定することができた。床面のレベルは海抜2.8mで、壁高は床面から約30cmである。

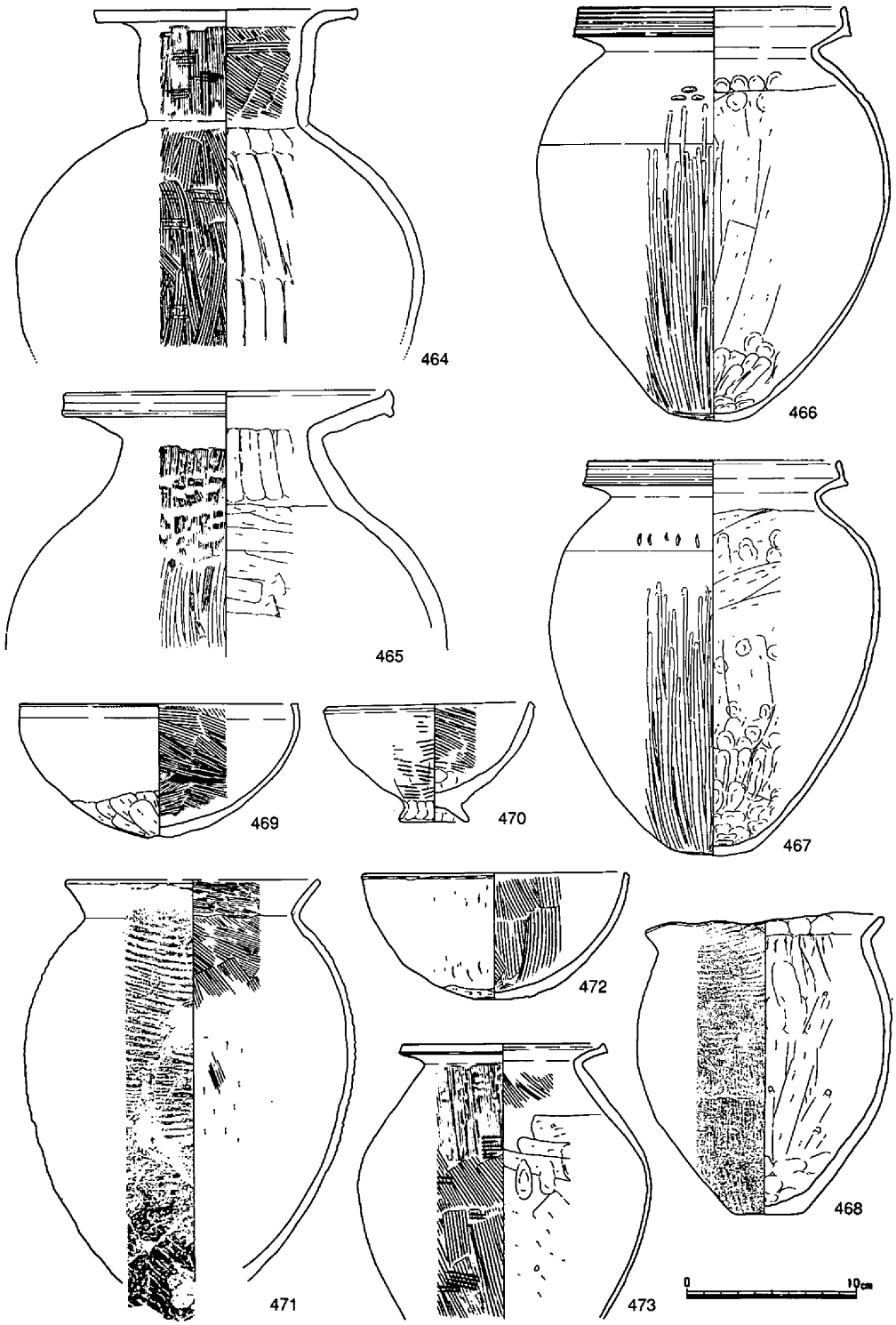
遺物は床面から壺455・456、高杯457～459、製塩土器460・461などが出土している。455は大型の壺胴部である。外面上部にはヘラ描き沈線文や櫛描波状文による装飾が、下部はハケナデの後に斜め、横のヘラミガキに調整がなされている。内面は一部に押圧痕がみえるが、斜めのハケナデ調整がされている。なお、内面には丹塗りが部分的にみられる。時期は遺物からみて、下田所期に比定される古墳時代初頭に位置する遺構と思われる。

竪穴住居26（第73・96～99図、写真図版14）

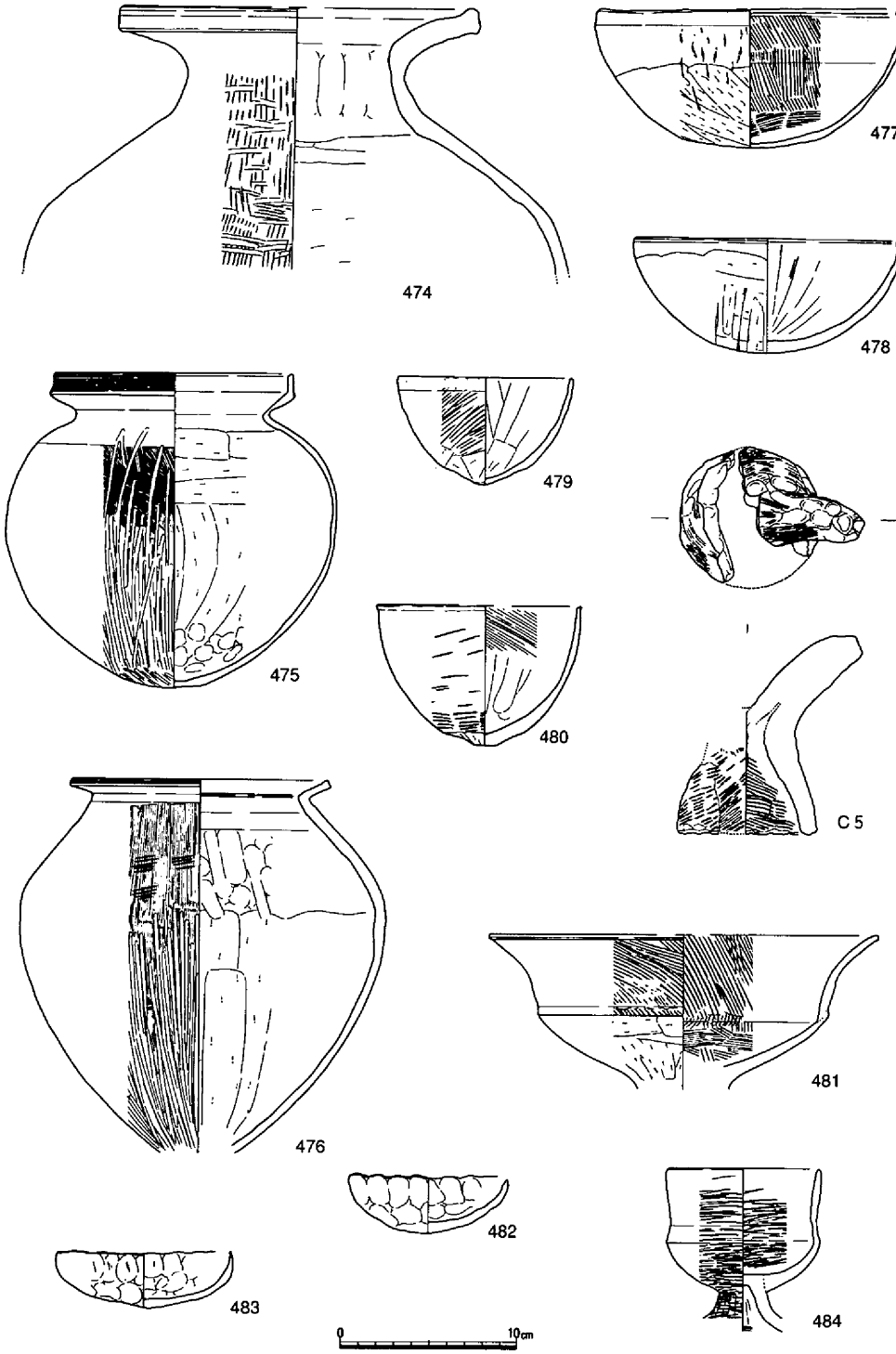
第2調査区の北端で、竪穴住居24、25などと切り合っているため、遺構の保存状態はあまり良くない。また、住居の約1／2程が調査区外となるが、ほぼ全容は判明した。この住居の平



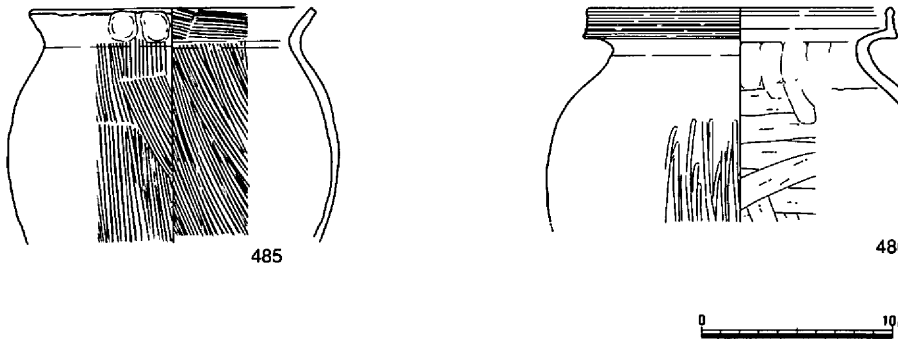
第96図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物①（1/3・1/4）



第97図　竪穴住居26出土遺物②（1/4）



第98図　竪穴住居26出土遺物③（1/4）

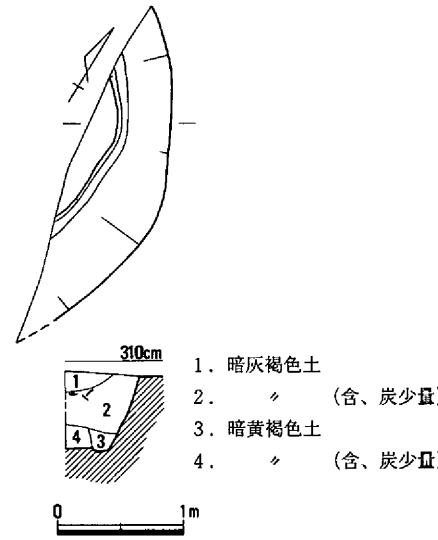


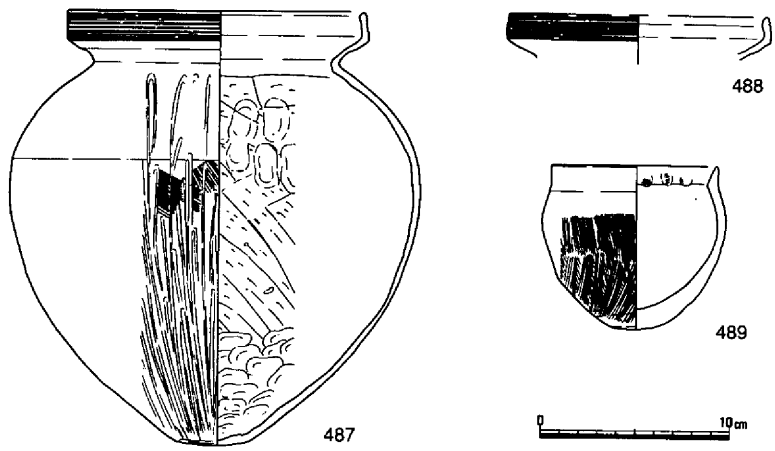
第99図　竪穴住居26出土遺物④（1/4）

面は方形を呈し、その規模は１辺が約５ｍである。遺構の検出レベルは海抜2.8ｍで、壁高は床面から約30㎝を測る。この住居は竪穴住居25の下層に位置し、埋土は暗灰褐色や暗灰黄色の粘質土などである。床面には約10㎝厚の暗灰色粘質土が貼床となっていた。なお、住居に伴う遺構は検出されず、土層断面観察においても、壁体溝などは確認できなかった。

遺物は多量に出土したが、ここに掲載したものは床面上層、床面に付着した状態で一括出土したもの、そして、貼床層除去後に検出されたピット内出土のものである。床面に付着した土器は壺464・465、甕462・463・466～468・471・473、鉢469・470・472・482・483、脚付坩484である。464は口径15.6㎝を測り、口縁部は直立する頸部から外反し、端部はつまみあげている。頸部外面はタタキの後、縦のハケ調整、内面は斜めのハケ調整が施されている。胴部外面にはタタキの後、縦、斜めのハケ調整、内面は指ナデによる調整がみられる。465は口径19.3㎝を測る。口縁部は「ハ」字状に開く頸部から、屈曲し斜め上方に伸びる。口縁端部は上方にやや拡張する。頸部外面は縦のハケ調整、内面は指ナデによる調整が施されている。胴部外面はハケナデの後、縦のヘラミガキ調整、内面には横のヘラケズリがみられる。甕は５種類のタイプがある。462は口縁部が外反し、複合口縁を呈する。胴部外面は上部が櫛描波状文、下部は縦、斜めのハケ調整、内面にはヘラケズリと指ナデ調整が施され、山陰系の土器と思われる。463は口縁部が上方に立ち上がり、複合口縁を呈する台付の甕である。胴部の上半には横のヘラミガキ、下半には縦のヘラミガキ調整がみられる。内面はヘラケズリがみられるが、頸部まで磨滅している。なお、外面全体には丹塗りが施されており、また、頸部以外には煤が付着している。内面には朱と思われる痕跡が部分的にみられる。このことから、本住居内出土の石杵Ｓ28とともに、何らかの関係をもつ土器と考えられる。466・467は「く」字状に屈曲する口縁部から端部を上方に拡張し、丸く収める。端面には凹線がめぐる。胴部外面は縦のヘラミガキ、内面には上部が指押え、中部が縦のヘラケズリ、底部付近は指押えによる調整が施されている。468・471は「く」字状に外反する口縁部をそのまま丸く収める。468の外面はタ

タキの後にハケによる調整が施されるが、下半部は特に丁寧なハケ調整となっている。内面はヘラケズリの後、指押え、指ナデがみられる。口径13.9cm、器高18.0cm、底径4.1cmの小形の甕である。471の胴部外面は横のタタキが下半部までみられ、底部近くはタタキの後に縦のハケナデ調整がみられる。内面は上部が斜めのハケナデ、中部をハケナデ後に指ナデ、下部はヘラケズリ調整と3分割されている。なお、外面には煤が付着している。473は「く」字に屈曲する口縁部の端部をわずかに拡張させる。胴部外面はタタキの後に、縦横、斜めのハケナデ調整を施している。内面は上





第100図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物（1/4）

部がハケナデ、中～下部はヘラケズリと指ナデによる調整がみられる。鉢は口径、器高の高いもの469・472と台付のもの470、小型の手捏タイプのもの482・483の3種類がある。469・472は外面はナデ、底部がヘラケズリであり、内面はいづれもハケナデによる調整である。484は杯部から口縁がほぼ垂直に伸び、端部を丸く収める。器壁の内外面は丁寧なヘラミガキ調整がなされている。胎土は水漉粘土を使用している。S28はL字状を呈する石杵である。上部に握りをつくり、下部は緩い円形のカーブを持つ磨面となっている。この磨面には長側辺に併行な擦痕が全面に認められ、研磨されたような状態を呈していた。赤色顔料は凹部に付着残存しており、付載で述べているように朱専用の石杵と考えられる。最大長は8.6cm、最大幅5.7

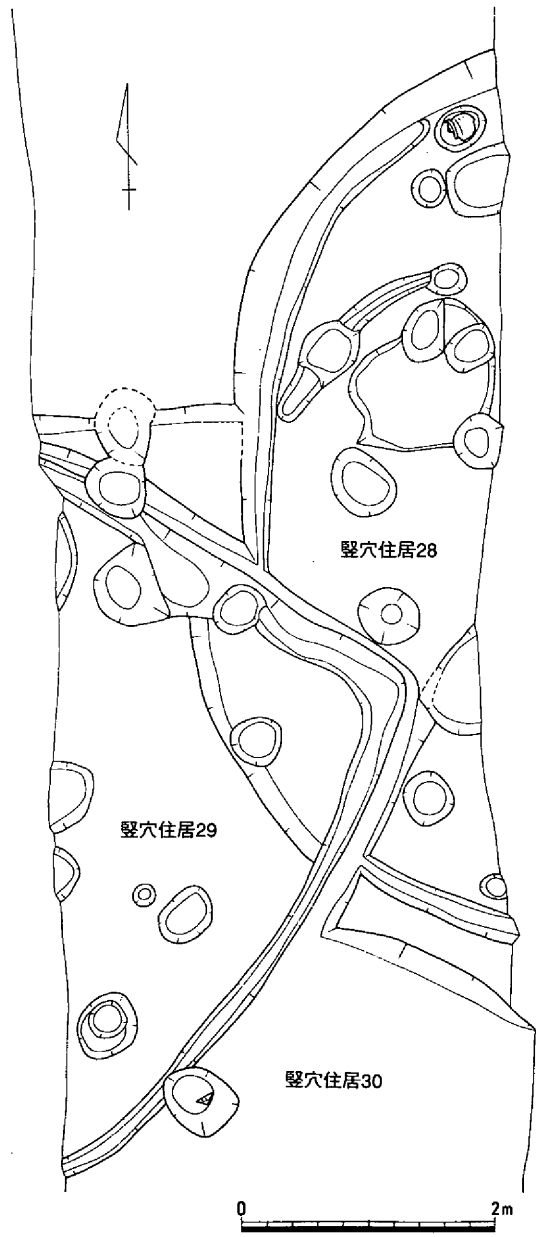
cm、最大厚3.8cm、重量178.8ｇを測り、石材は細粒閃緑岩である。貼床層除去後に検出されたピット内からは、甕485・486が出土している。これらは、口縁部を「く」字状に外反するだけと端部をさらに上方に拡張するものの２種類がある。

床面上層からは、壺474、甕475・476、鉢477～480、土製支脚Ｃ５、高杯481などが出土している。474は「く」字状に外反し、端部はわずかに上方に拡張する。器壁外面はハケ調整の後、ヘラミガキがみられる。内面は頸部は指ナデ、胴部はヘラケズリによる調整がみられる。475は口縁部が「く」字状に屈曲し、さらに上方、やや内傾しながら立ち上がる。胴部は球形で、底部はかすかに平底である。口縁端面には８条のヘラ描沈線文がめぐる。胴部外面は上部がハケ調整後のヘラミガキ、下半部は縦のヘラミガキを施している。内面はヘラケズリをするが、底部は指頭圧痕がみられる。

時期は弥生時代後期後半の遺物もみられるが、下田所段階の遺物が床面から出土しているため、古墳時代初頭の遺構と考えられる。

竪穴住居27(第73･100図､写真図版16)

第２調査区の北端で、住居のコーナー部分のみが検出された。規模は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。遺構の検出レベルは海抜2.9ｍで、壁高は床面から約60cmを測る。埋土は暗灰褐色の粘質土が２層みられ、床面には約15cm厚の



第101図　竪穴住居28・29・30（1/60）

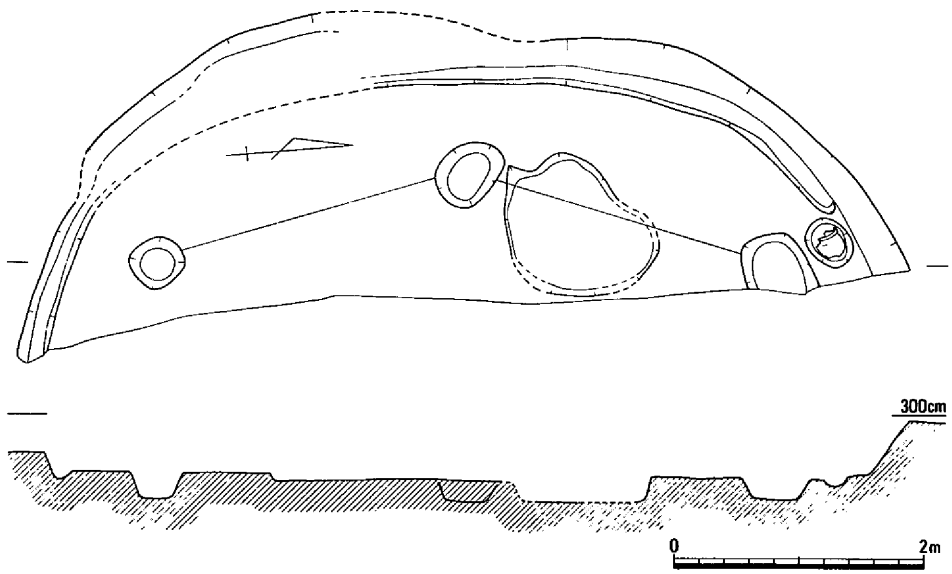
暗茶褐色粘質土が貼床となっていた。また、住居に伴う遺構としては、幅約10～20cm、深さ約15cm程の壁体溝が検出された。

遺物は床面上層と下層で出土している。下層では487の甕が出土した。487は口縁部が「く」字に屈曲し、さらに上方、やや内傾しながら立ち上がる。胴部は倒卵型で、底部はわずかに平底の面影を残す。口縁端面には櫛描沈線文がめぐる。時期は遺物が下田所期のものと思われることからみて、古墳時代初頭に位置づけられるものである。

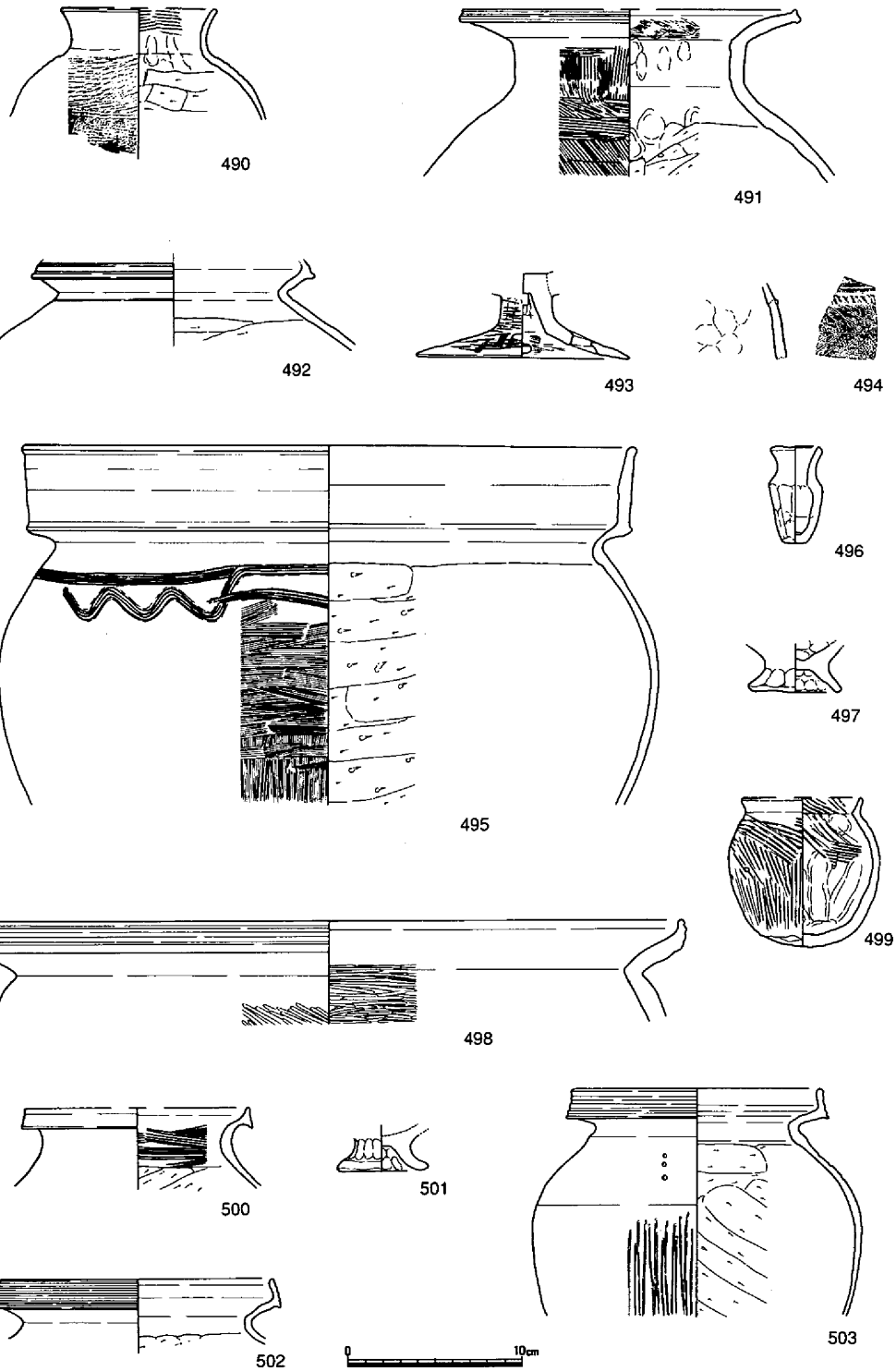
竪穴住居28（第73・101～104図）

第2調査区の中央部よりやや北で検出された遺構で、竪穴住居29・30と切り合う状態であった。また、遺構の約2／3程が調査区外となるため規模等は正確に確認できなかったが、直径が約7mの楕円形の住居と思われる。遺構の検出レベルは海抜2.95mで、壁高は床面から約40cmを測る。住居には幅15～20cm、深さ約10cm程の壁体溝がめぐり、床面には柱穴、ピット状遺構などが認められた。柱穴の配置からみて、この住居は6～7本の柱で構成されるものと思われる。柱穴掘り方は40～50cm程で、深さは約20cmの浅いものであった。埋土は上層が暗茶褐色粘質土、下層は暗灰色微砂混り土であり、床面直上の土層である。

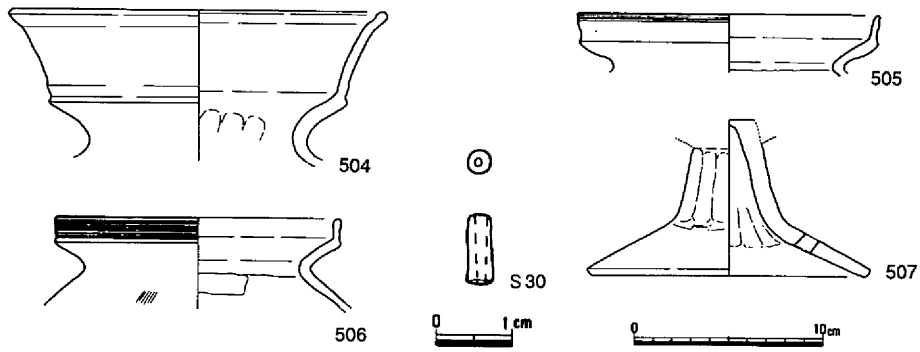
遺物は床面上層で甕490がある。490の口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く収める。胴部外面はタタキの後、ナデ調整、内面は頸部が指ナデ、胴部はヘラケズリ調整が施されている。胎土内には金雲母がかなり多く含まれている。床面下層では壺491、甕492、高杯493、手焙形土器494、鉢495・496、製塩土器497がある。491はほぼ直立する短頸をもつもので、口縁部はゆるやかに外反し、端部をわずか上方に拡張する。端面には退化した凹線がめぐる。器



第102図　竪穴住居28（1/60）

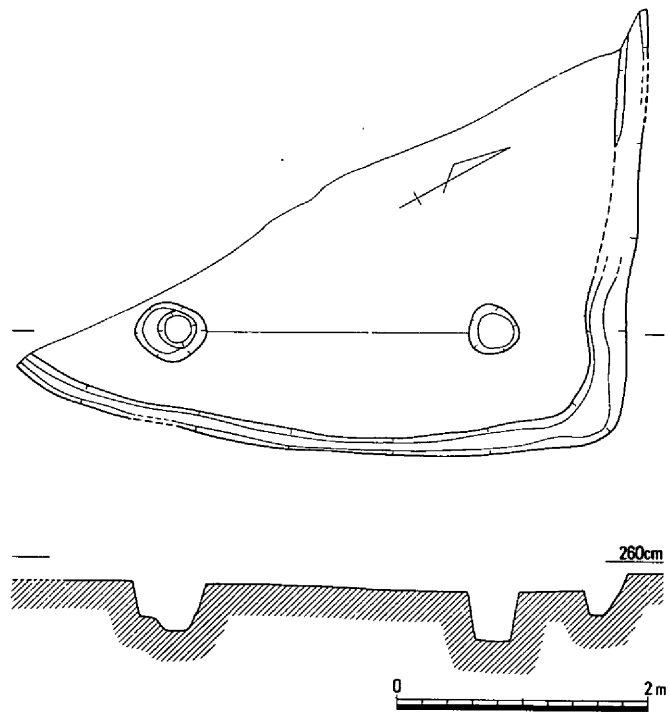


第103図　竪穴住居28出土遺物①（1/4）



第104図　竪穴住居28出土遺物②（1/4・1/1）

壁外面はハケ調整、内面は頸部が指ナデ、胴部が指押えとヘラケズリによる調整が施されている。493は短脚の脚柱部である。裾部は屈曲して、「ハ」字状に開く。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整がみられる。円孔が裾部に4個みられる。494は手焙形土器の鉢部の頸部片である。上部には刻み目の突帯が1条みられ、突帯の下にはヘラ描きの綾杉文が描かれている。胎土内には雲母が多くみられる。495の口縁部は「く」字状に開き、さらに上方に拡張する複合口縁を呈する大形の鉢である。胴部外面の頸部付近は櫛描沈線文がめぐり、それより下位は横と縦のハケ調整が施されている。内面は横のヘラケズリがみられる。壁体溝内からは小型の鉢499が出土している。口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く収める。胴部外面は斜め、横のハケ調整内面は指ナデ調整であるが、頸部付近はさらにハケ調整を加えている。ピットからは鉢498、甕500・502、製塩土器501



第105図　竪穴住居29（1/60）

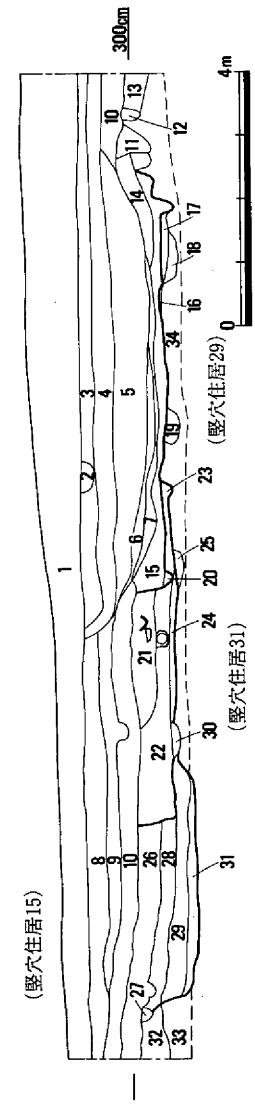
が出土している。498は口径40.1cmを測る大型の鉢である。「く」字状に外反し、端部はわずか上方に拡張する。端面には３条の沈線文がめぐり、胴部内外面ともヘラミガキ調整がみられる。柱穴内出土のものは、直接この住居と関係がないものと思われるが、甕503・505・506、壺504、高杯507、管玉Ｓ30が出土している。Ｓ30は碧玉製である。

時期は亀川上層に比定されるものが認められることから、古墳時代前半のものと思われる。

竪穴住居29（第73・105・107図、写真図版15）

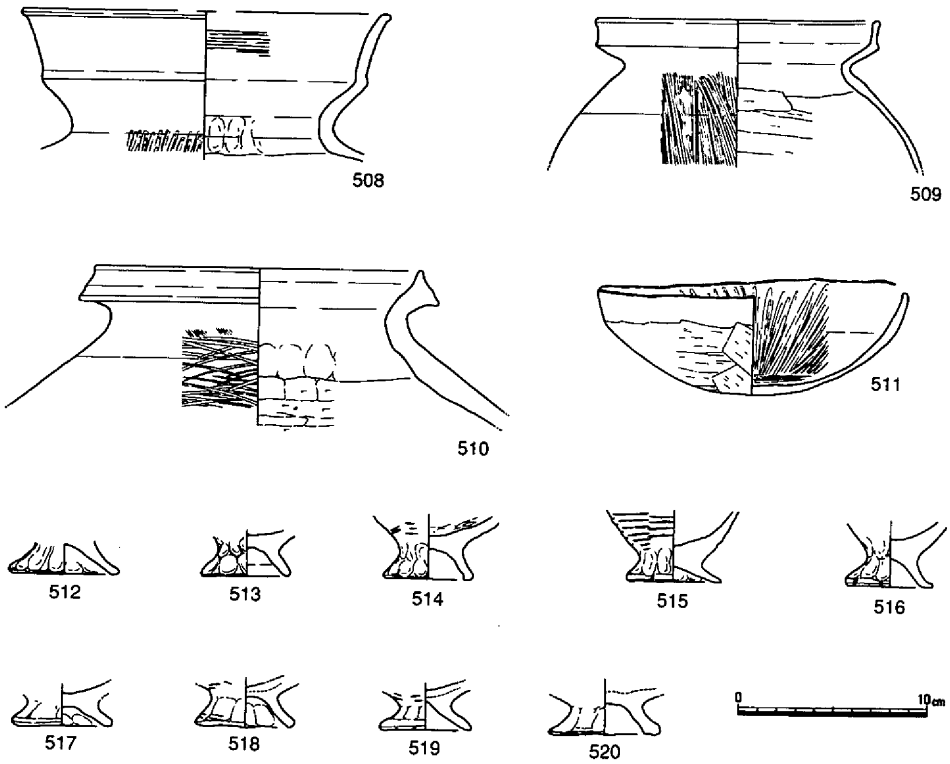
竪穴住居28・30と切り合う状態で検出された遺構である。遺構の約１／２は調査区外となるが、竪穴住居28の下位で検出された。住居の規模は１辺が約５ｍの方形を呈するものである。遺構の検出レベルは海抜2.5ｍで、壁高は床面から約10cmを測る。住居内には幅10～20cm、深さ約10～20cm程の壁体溝がめぐり、検出された２本の柱穴配置からみて、恐らく４本柱で構成される竪穴住居と思われる。柱穴の掘り方は40cm、深さ35cmを測る。埋土は黒色土、暗黄褐色の微砂混り土があり、床面下には10cm厚の貼床層が認められた。

遺物は床面下層、ほぼ貼床付近で出土している。508・510は壺、509は甕、511は鉢、512～520は製塩土器である。508は複合口縁となるもので、口縁の内外面はハケナデ調整、胴部外面はヘラミガキ、頸部内面は指ナデ、胴部内面はヘラケズリによる調整がなされている。510の口縁部は「く」字状に外反し、端部はわずか上方に拡張する。胴部外面はヘラミガキ、内面は指押えとヘラケズリが施されている。509の口縁部は「く」字状に外反し、端部は上方に拡張する。口縁部の内外面は横ナデ、胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリが施されている。製塩土器は胴部外面は叩き、内面は指ナデ調整がなされている。いづれも、内

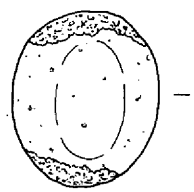


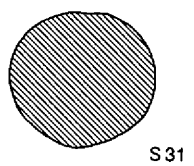
1. 黄灰色微砂
2. 黒褐色粘質土
3. 茶褐色粘質微砂
4. 黄褐色粘質微砂
5. 黄褐色細砂
6. 黄褐色微砂
7. 黄褐色粘質土
8. 灰茶褐色粘質土
9. 茶褐色微砂
10. 黒褐色粘質土
11. 暗褐色粘質微砂
12. 黒色微砂
13. 暗黄褐色微砂
14. 黄茶褐色土
15. 暗褐色粘質土
16. 暗黄褐色粘質微砂
17. 黄褐色粘質微砂
18. 暗褐色粘質土
19. 黒色土
20. 暗灰褐色粘質微砂
21. 暗褐色粘質土
22. 暗褐色粘質微砂
23. 暗黄褐色粘質微砂
24. 黄茶褐色粘質微砂
25. 黒色粘質土
26. 暗茶褐色粘質土
27. 黒褐色粘質土
28. 暗茶褐色粘質土
29. 暗灰褐色粘質土
30. 暗灰色粘質微砂
31. 暗黄褐色粘質土
32. 茶褐色粘質微砂
33. 灰茶褐色粘質土
34. 砂層

第106図　竪穴住居15・29・31土層断面図（1/120）



第107図　竪穴住居29出土遺物（1/4・1/3）





外面とも赤褐色を呈している。S31は敲石である。両端に使用痕がみられる。重量は175.9ｇを測り、石材は流紋岩である。

時期は切り合い関係、遺物からみて、亀川上層期の遺構と思われる。

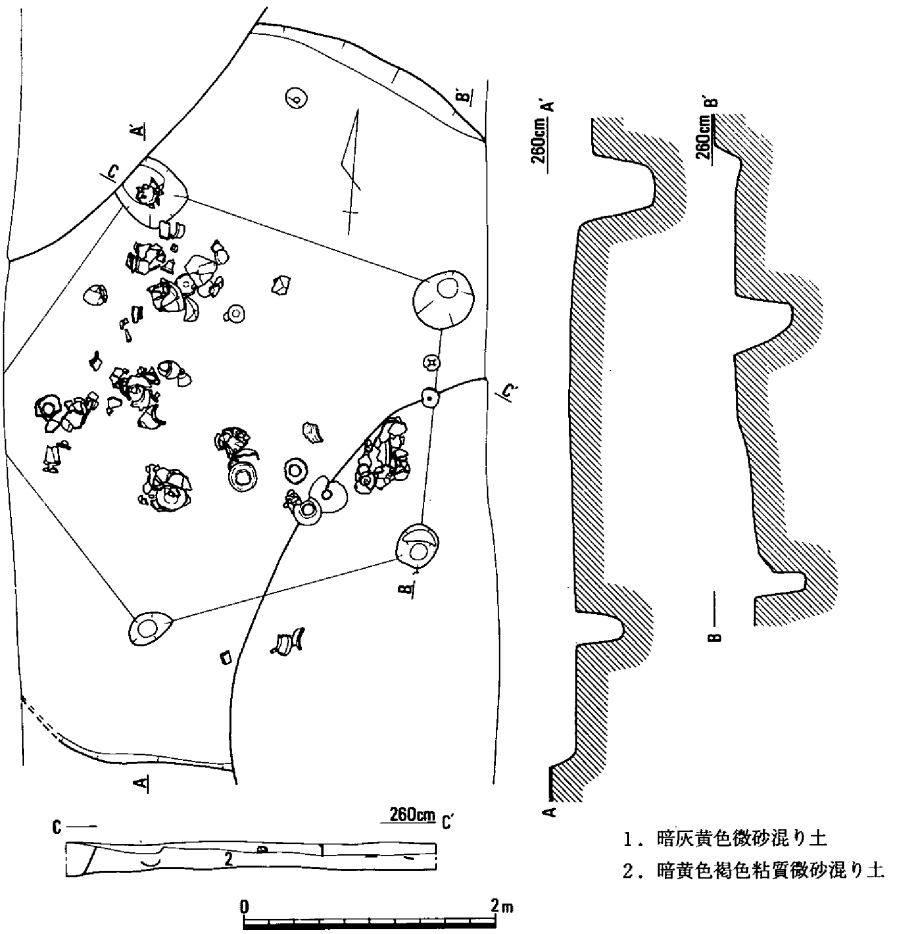
竪穴住居30（第73・108～120図、写真図版15・16・17）

第２調査区のほぼ中央部に位置し、竪穴住居29と切り合う遺構である。したがって、遺構の規模、平面形は断定できないが、直径約６ｍ程の隅丸方形を呈するものと思われる。遺構の検出レベルは海抜2.6ｍで、壁高は床面から約20㎝を測る。住居内には壁体溝は確認されなかったが、住居に伴うと推測される柱穴が４本検出されているが、柱穴の配置からみて５本柱の竪穴住居を想定することができる。柱穴掘り方は35～60㎝、深さは38～53㎝を測る。

遺物は床面中央付近一帯に散乱する状態で出土した。土器は壺521～541、甕542～561、563～580、鉢562、581～587、616～618、高杯591～611、脚付直口壺612、器台609・610、

製塩土器615～618、土製支脚Ｃ６、手焙形土器619～621、石器は砥石Ｓ32、石錘Ｓ33、石杵Ｓ34、軽石Ｓ35などがある。

壺は口縁部が複合口縁になるものとそうでないものの２種類がある。521は複合口縁を呈し、胴部外面はハケナデ、内面は頸部付近が指ナデ、下部はヘラケズリである。522も複合口縁を呈し、直立する頸部から「く」字状に外反するもので、頸部と胴部の境には刻み目の突帯を持つ。器壁外面はヘラミガキ、口縁部内面には櫛描波状文、頸部はヘラミガキ調整である。胎土内には中量の雲母がみられる。524の口縁部は「く」字状に折れ曲る。外面はハケナデ、内面は口縁部がハケナデ、胴部上半は指頭圧痕のうえにハケナデがみられ、下半はヘラケズリがみられる。口縁部と胴部には黒斑がみられる。527は口縁端部が欠損するが、「く」字状に大きく外反し、胴部は球形化するものである。外面はハケナデ、内面は口縁部がハケ、指ナデ、頸部以下を指ナデ仕上げである。528は頸部から鋭く屈曲し、斜め上方に伸びるが、端部はやや



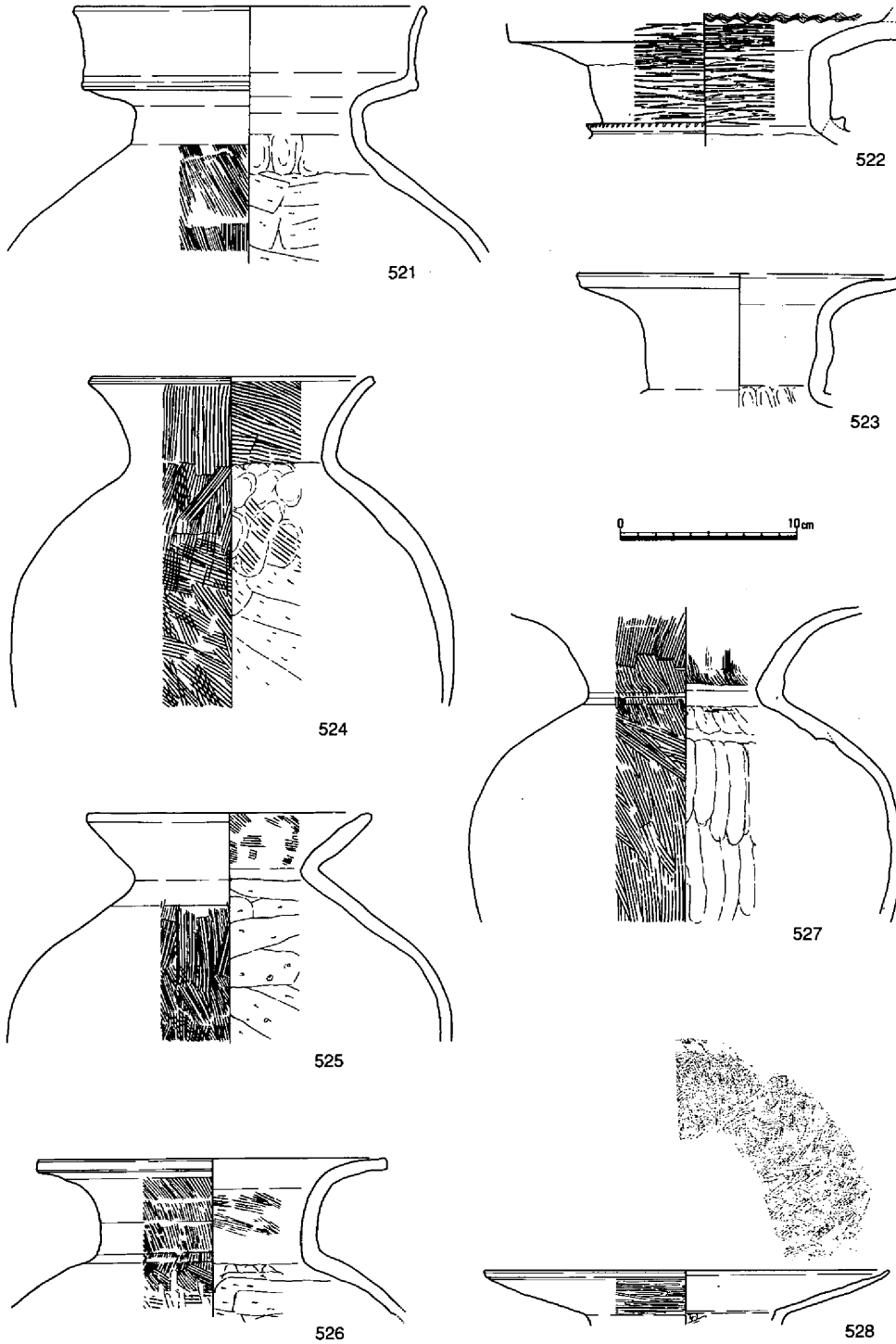
第108図　竪穴住居30（1/60）

上方に拡張する。端面下には、浅い1条の沈線がめぐる。外面には丁寧なヘラミガキ、内面は櫛描波状文、頸部は縦のヘラミガキがみられる。534は複合口縁を呈し、口縁部外面には上、下2段の櫛描波状文が施されている。下段の櫛描波状文のうえには、竹管文を施した円形浮文がみられる。内面は端部に櫛描波状文、その下に縦のヘラミガキ調整がみられる。

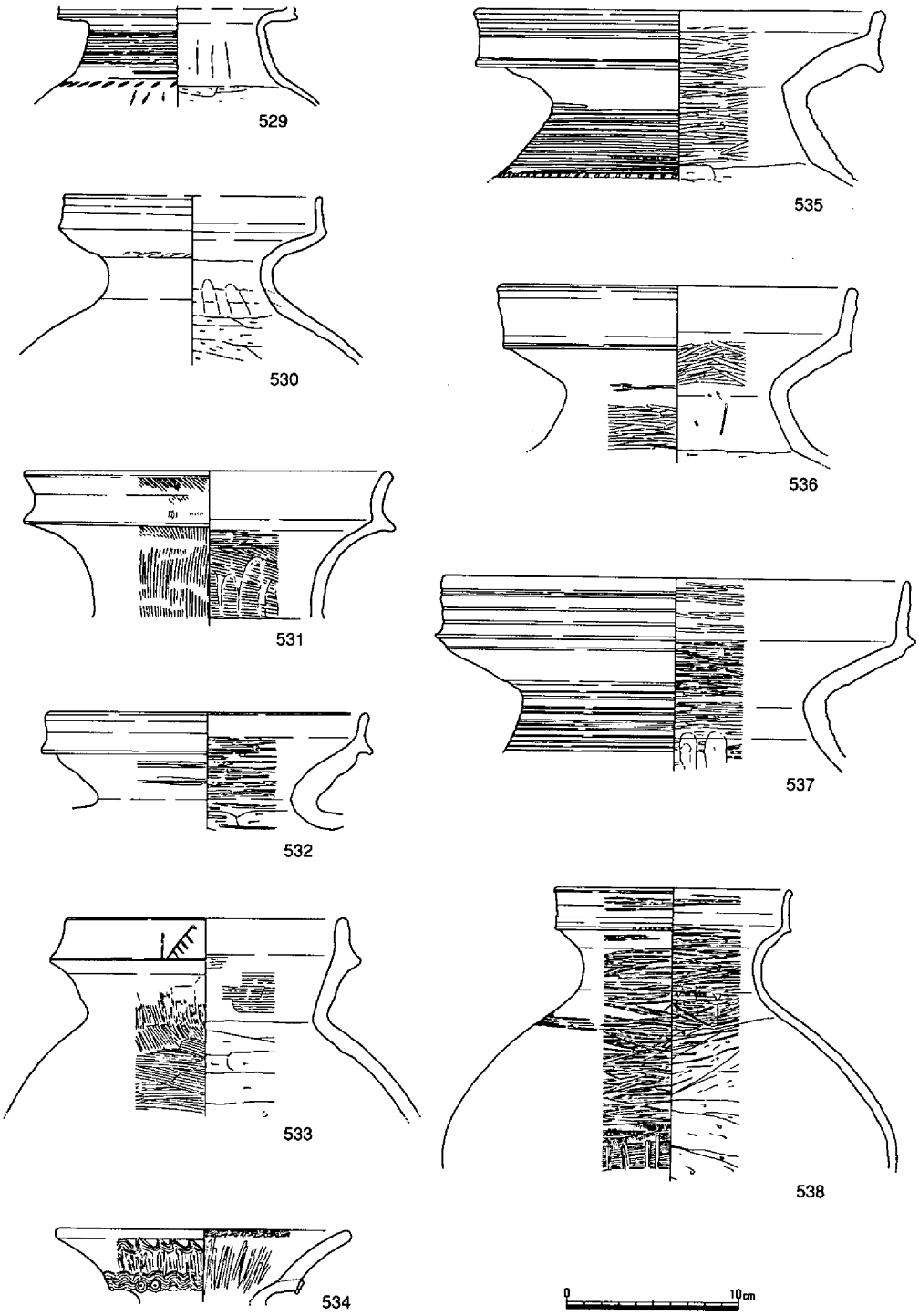
甕は「く」字状に外反する口縁部から、さらに上方に端部が拡張するもの542～555・559・566～571と「く」字状にだけ外反するもの560・561・563～565・572・574～580の2つに大別される。さらに、前者は口縁端面が凹線、ヘラ描沈線、櫛描平行沈線文をめぐらすものとヨコナデ仕上げの土器に細分できるが、櫛描平行沈線文をめぐらす土器の比率は極めて少ない。552は口縁端面に8条の櫛描平行沈線文がめぐる。胴部外面はハケナデ後、縦のヘラミガキが施され、内面にはヨコナデ、縦、横のヘラケズリが施され、底部には指押し調整による指頭圧痕がみられる。底部はわずかに平底が残り、焼成後の穿孔がみられる。なお、器壁外面には吹きこぼれの痕跡がみられる。「く」字状に外反する甕は、器壁外面をハケナデ仕上をするものとタタキの調整をするものに大別できる。なお、タタキ調整には左下りと右下りのものがある。565は口縁の内外面がヨコナデ、胴部外面は左下りのタタキ調整、内面は指ナデと板状工具によるナデ仕上げがなされている。なお、胎土内には金雲母が多量に含まれている。578は口縁部の内外面がハケナデ、胴部外面には縦、横のハケナデ、内面は頸部近くに指押えがみられるが、大部分はヘラケズリによる調整が施されている。572の器壁外面はタタキ調整後、ハケナデを行なっているが、底部付近にはタタキメがかなり残る土器である。

鉢は小型と大型の2種類があり、小型はさらに無台と台付に区分できる。小型の鉢では、583のように、器壁外面に1部丹塗り痕跡が認められるものもある。

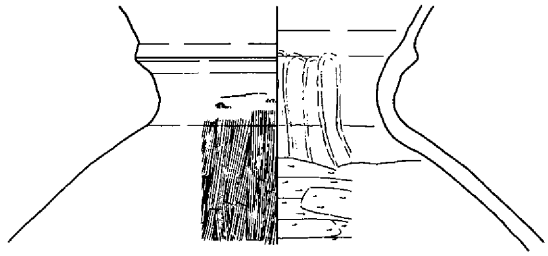
高杯は588のような大型のものと小型に大別され、小型はさらに細分できる。杯部の形態からみれば、589～592・594は口縁部が斜め上方に著しく延び、杯部は浅く、稜線をもつ。脚部は短く、屈曲して「ハ」字状に広がる裾部をもち、裾部には円孔が4個みられる。そして、杯部の内外面は丁寧なヘラミガキ調整が施されている。胎土は水簸粘土を使用する。593は杯部が椀形の形態を呈するものである。595・596は口縁部が大きく外反するもので、杯部が2段となる形態の高杯である。596の内外面には櫛描波状文とヘラミガキ調整が施されている。なお、胎土内にはわずかに金雲母が含まれている。609・610は小型の器台である。いづれも、受部が浅い皿状を呈し、脚部はラッパ状に開くものである。609の受部は内外面が丁寧なヘラミガキ、脚部は外面がハケナデ後にヘラミガキ、内面はハケナデ後に端部をヨコナデ仕上げしている。なお、円孔が4個みられる。水簸粘土を使用する。610は剥離がみられるが、器壁の内外面はヘラミガキによる調整と思われる。脚部内面にはシボリ痕跡がみられる。なお、脚部には楕円形の穿孔が4個みられる。

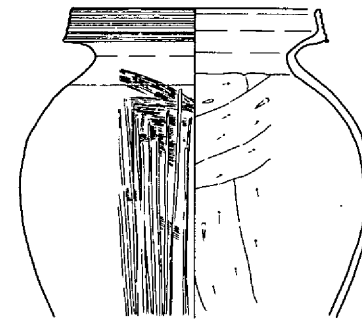


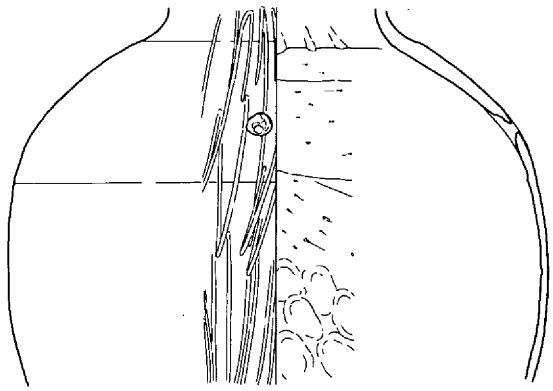
第109図　竪穴住居30出土遺物①（1/4）

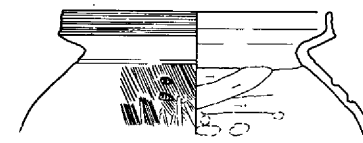


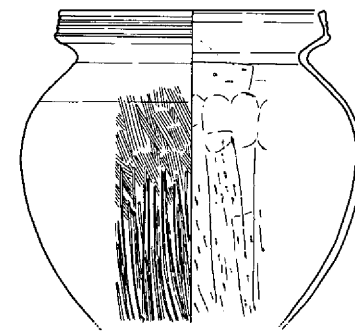
第110図　竪穴住居30出土遺物②（1/4）


539

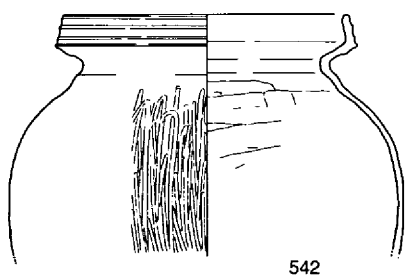

543

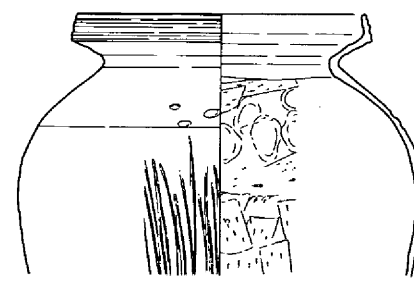

540

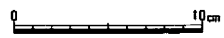

544


545

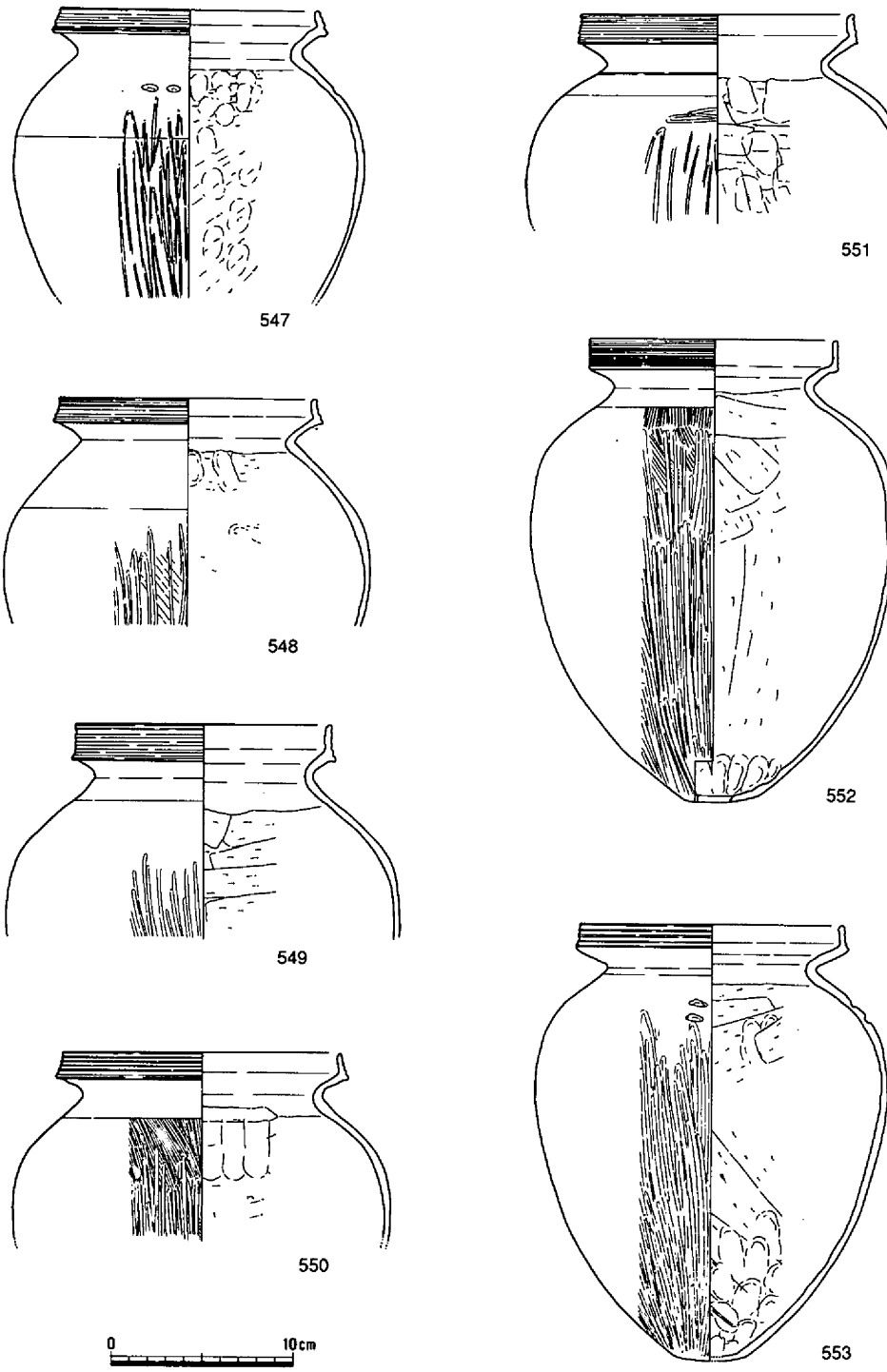
541


542

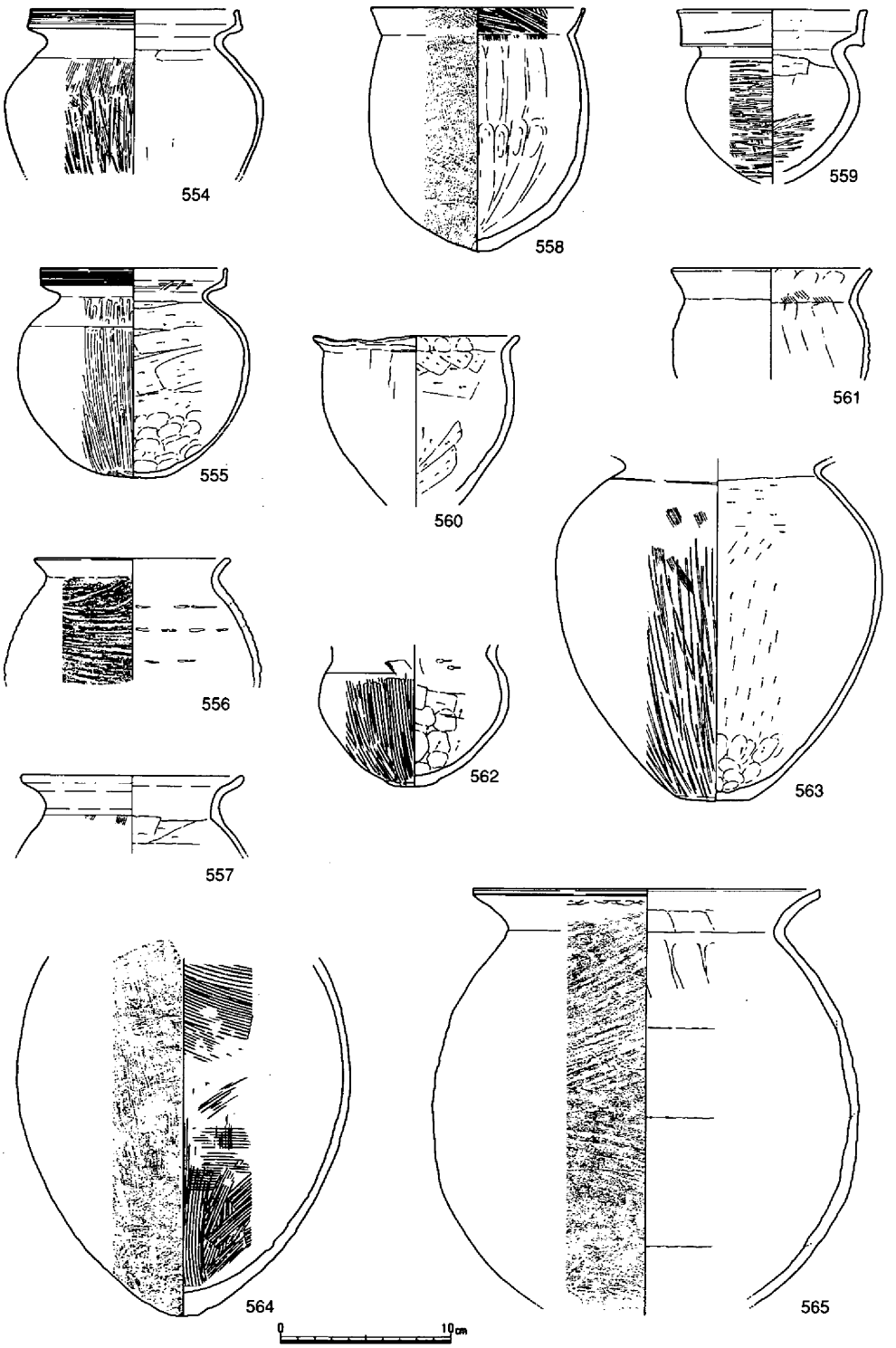

546



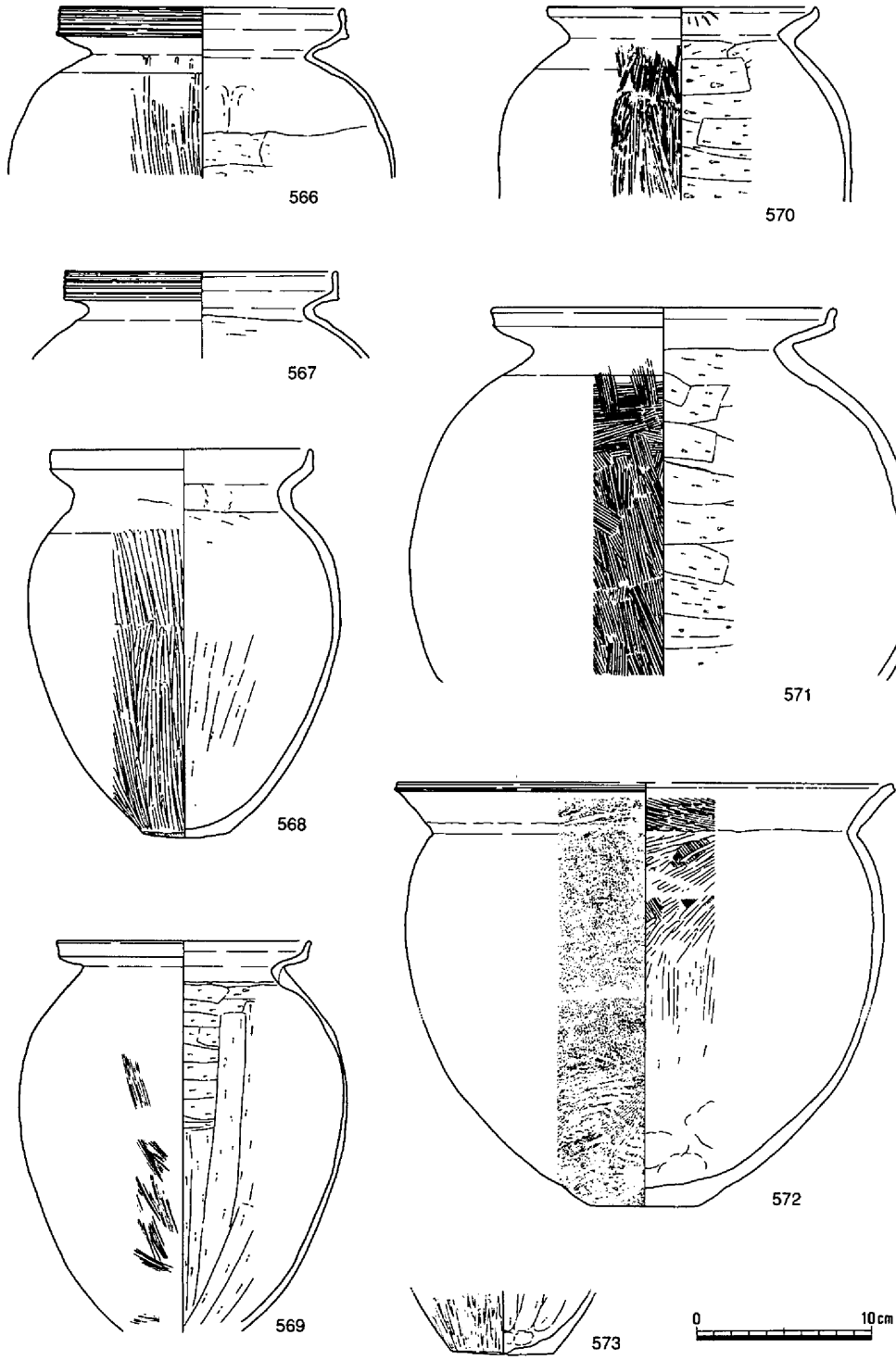
第111図　竪穴住居30出土遺物③（1/4）



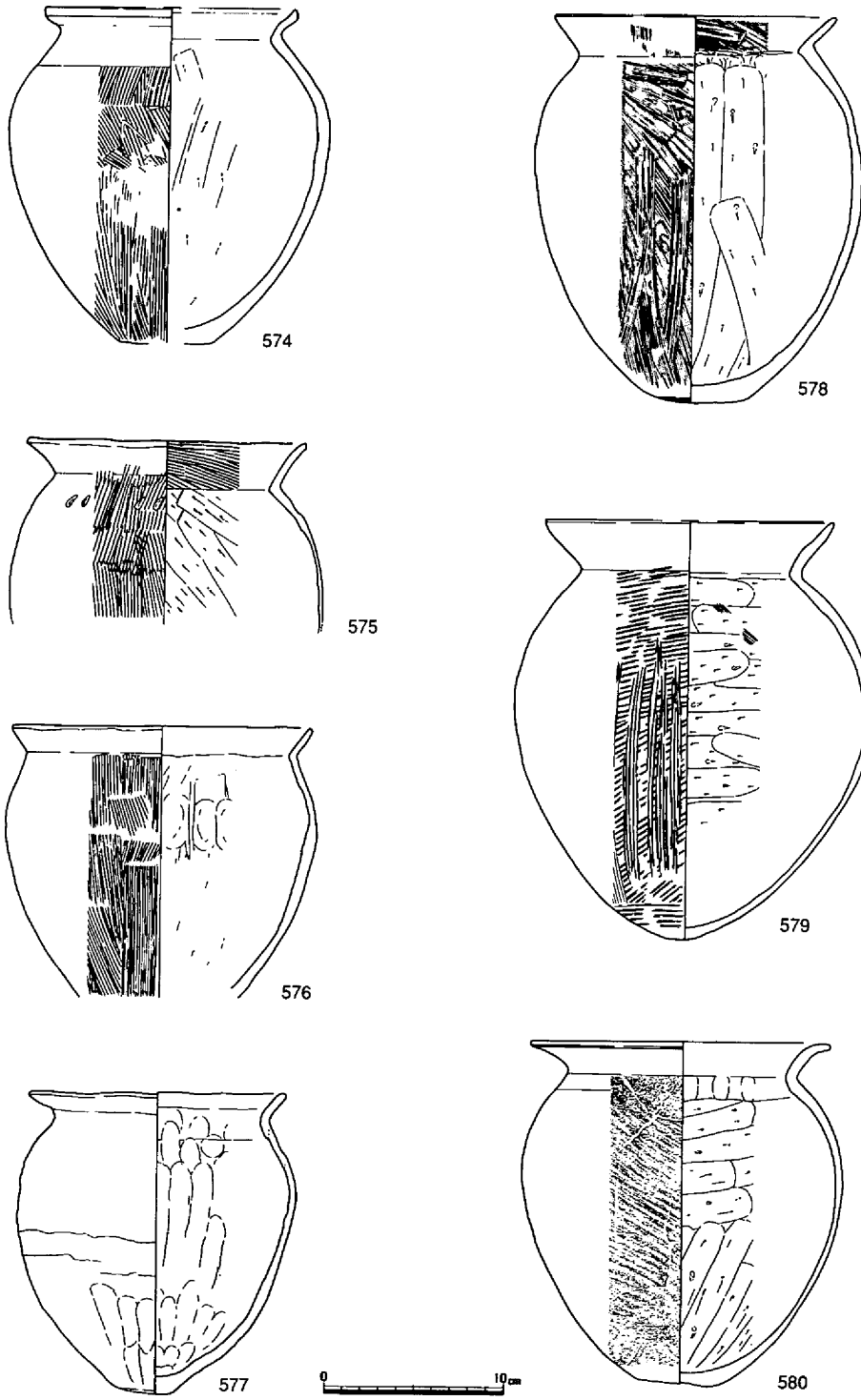
第112図　竪穴住居30出土遺物④（1/4）



第113図　竪穴住居30出土遺物⑤（1/4）

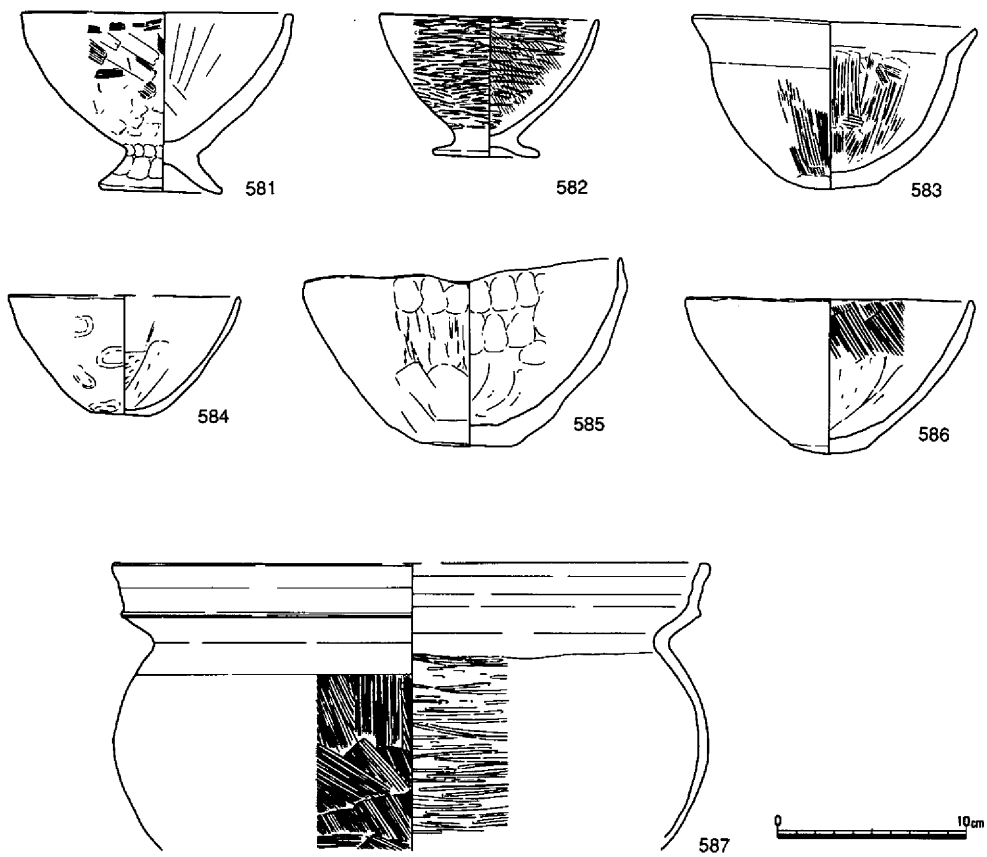


第114図　竪穴住居30出土遺物⑥（1/4）

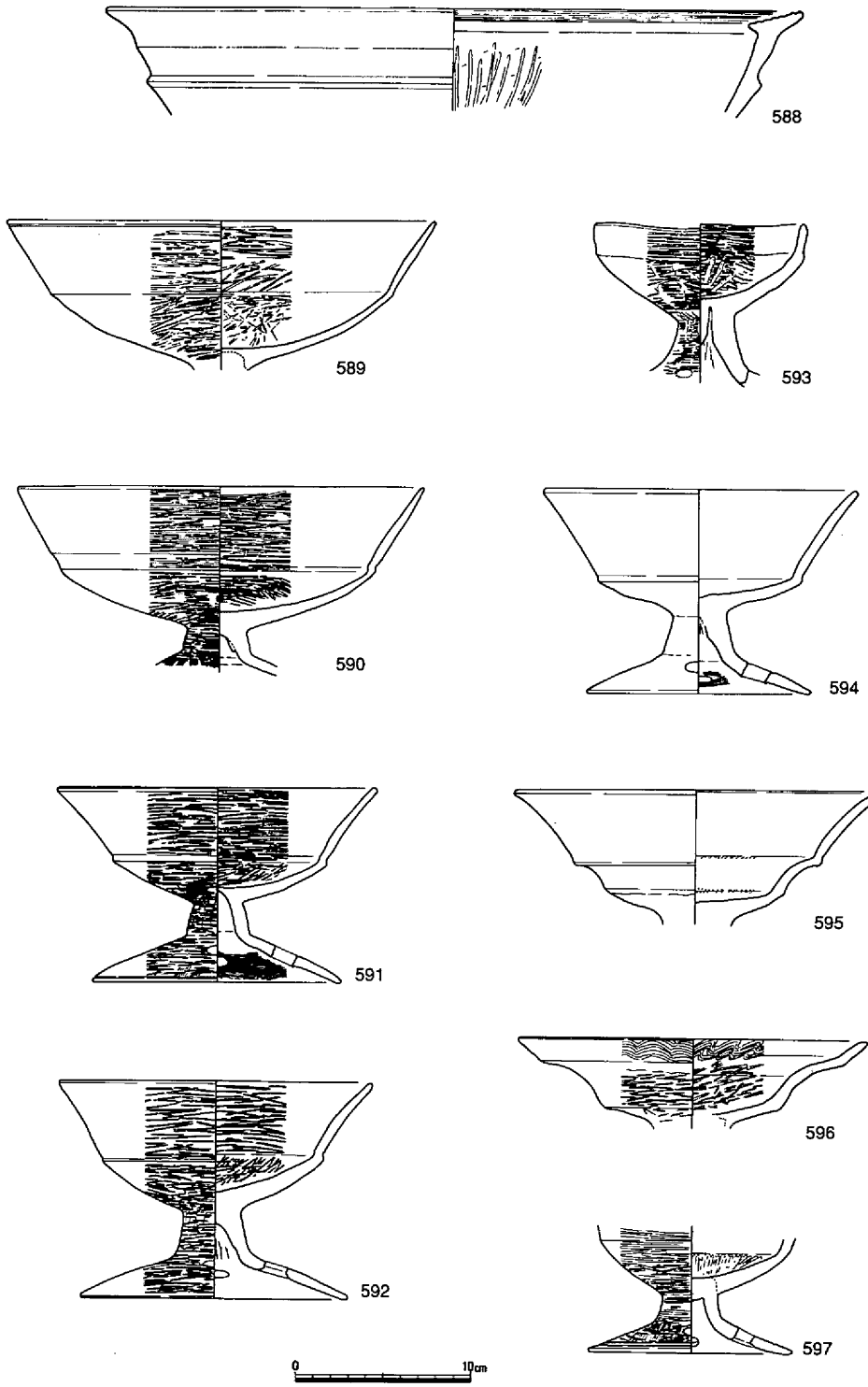


第115図　竪穴住居30出土遺物⑦（1/4）

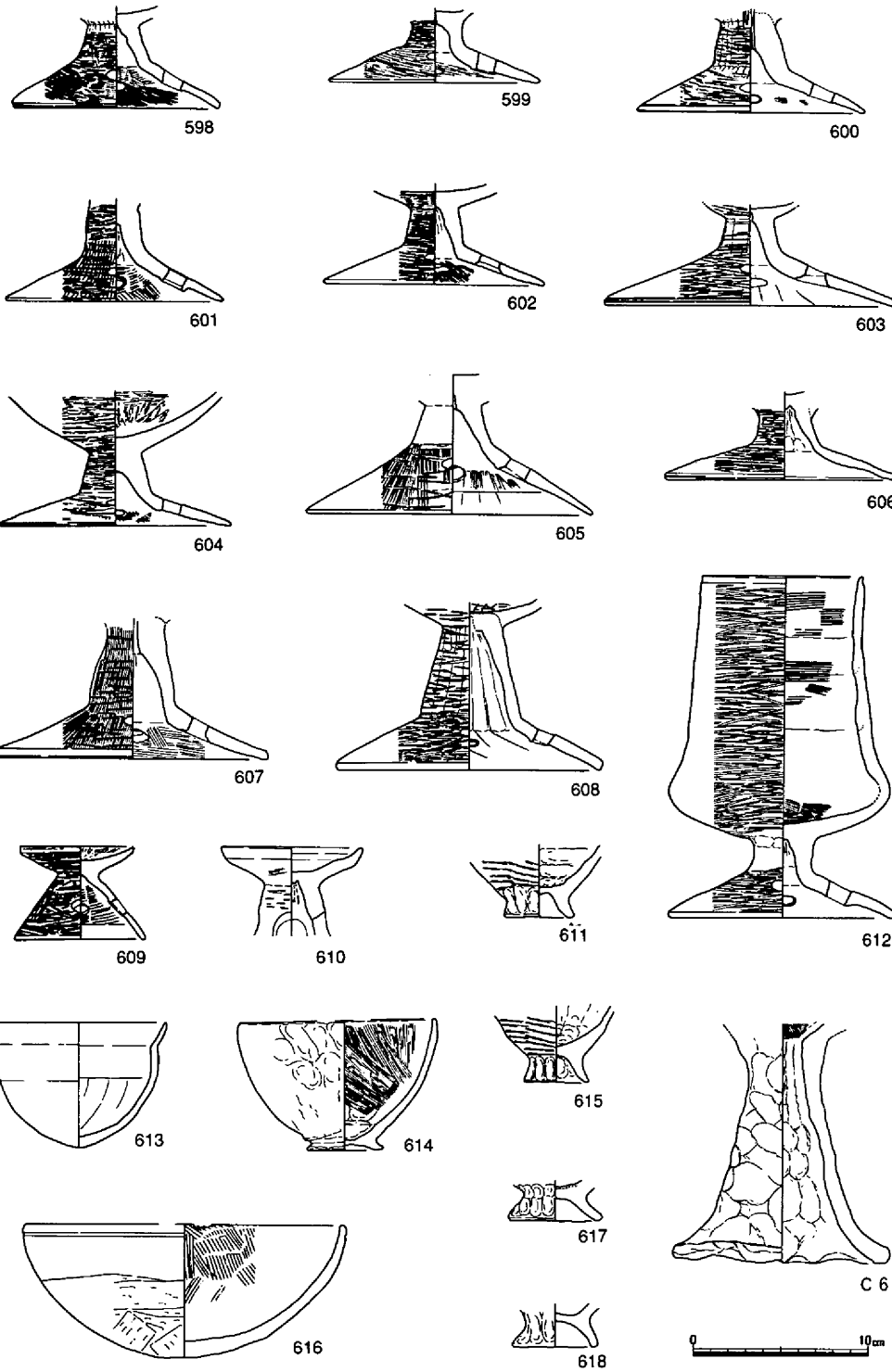
手焙形土器は3個出土している。619は台付で、口径13.7cm、鉢部器高12.0cm、全器高21.7cm、台径13.0cmを測る。鉢部の口縁はヨコナデによって仕上げられている。胴部上半は丁寧なヘラミガキ、下半はハケナデとヘラミガキがわずかにみられる。内面は指押えによる調整後、底部近くはヘラケズリを施している。覆部は鉢部の口縁端部とぴったり接合し、接合面には指押えとヨコナデがみられる。覆部外面はハケナデ後にヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整がみられる。また、覆部の拡張帯には櫛描波状文が施されている。胎土内には雲母もかなり含む、橙色を呈するほぼ完形の土器である。620は口径13.8cm、鉢部器高11.7cm、全器高16.3cmを測る底部が平底となる土器である。鉢部口縁はヨコナデ、胴部内外面はハケ調整後、ナデ仕上げである。覆部は鉢部の口縁端部とぴったり接合させ、接合面をヨコナデしている。覆部外面はナデ調整、内面は指頭圧痕がみられる。621は覆部が欠損するが、口径18.2cm、鉢部器高10.7cmを測る。鉢部外面はタタキの後にナデ仕上げ、内面はヘラケズリとナデが底部にみられる。覆部は鉢部の口縁端部とぴったり接合する。外面はナデ調整後にハケ仕上げ、内面はヘラケズリがみられ



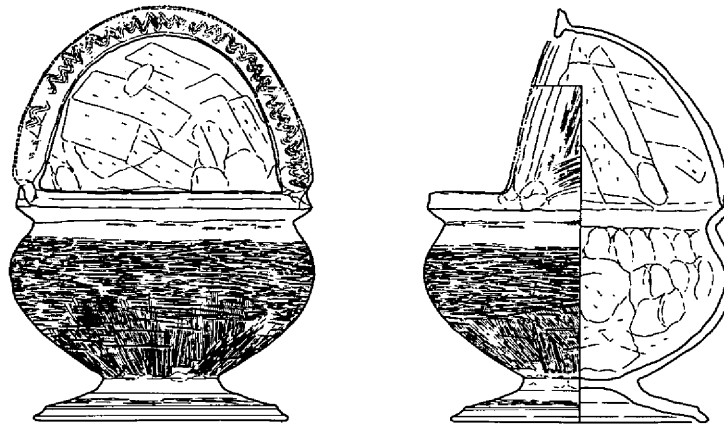
第116図　竪穴住居30出土遺物⑧（1/4）



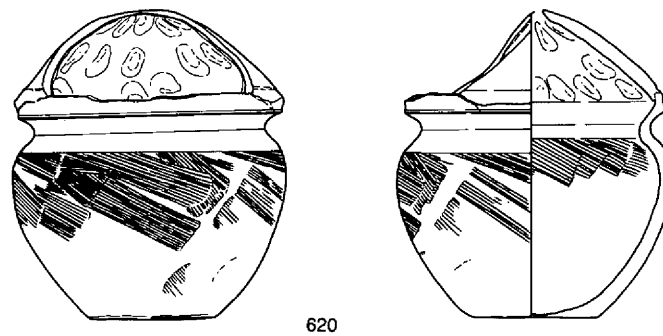
第117図　竪穴住居30出土遺物⑨（1/4）



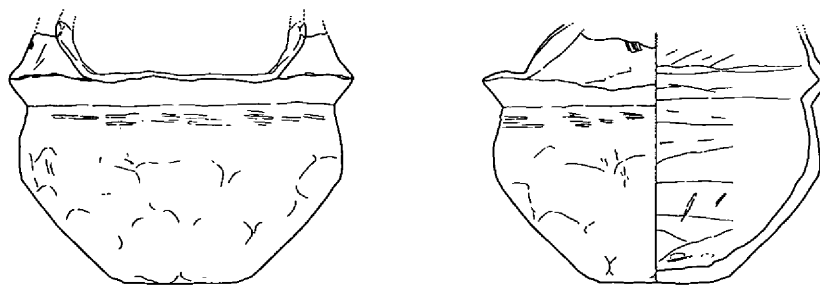
第118図　竪穴住居30出土遺物⑩（1/4）



619



620



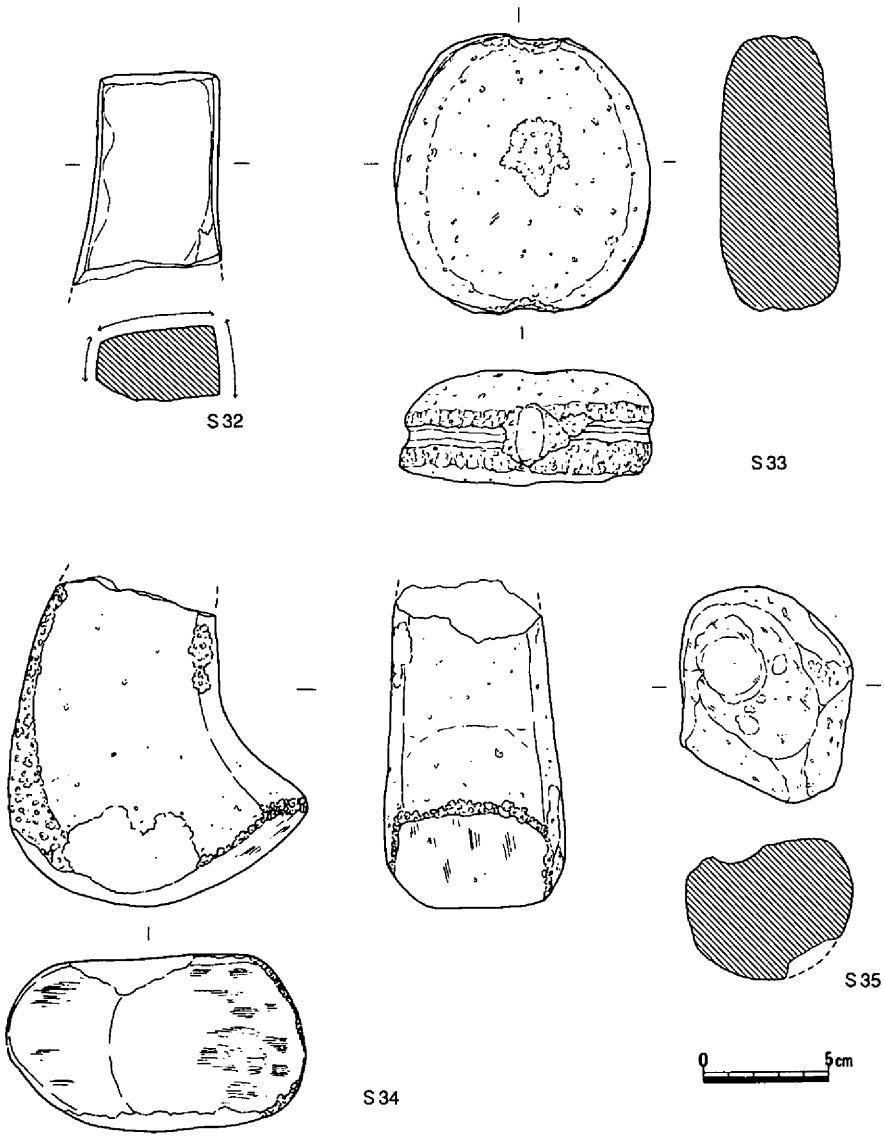
621

0　10cm

第119図　竪穴住居30出土遺物⑪（1/4）

る。なお、底部は平底である。

石器ではＬ字状石杵Ｓ34が注目される。握部は折損しているが、下部には緩い円形のカーブをもつ磨面がみられる。磨面には長側辺に併行な擦痕がほぼ全面に認められた。赤色顔料は磨面の両端部の擦痕凹部に付着していた。付載で報告されているように、検査の結果、ベンガラ粒子を確認していることは注目すべき事実である。なお、石材は角閃石玢岩である。時期は遺構の切り合関係、遺物からみて、下田所期に比定されるもので古墳時代初頭に位置づけられる。



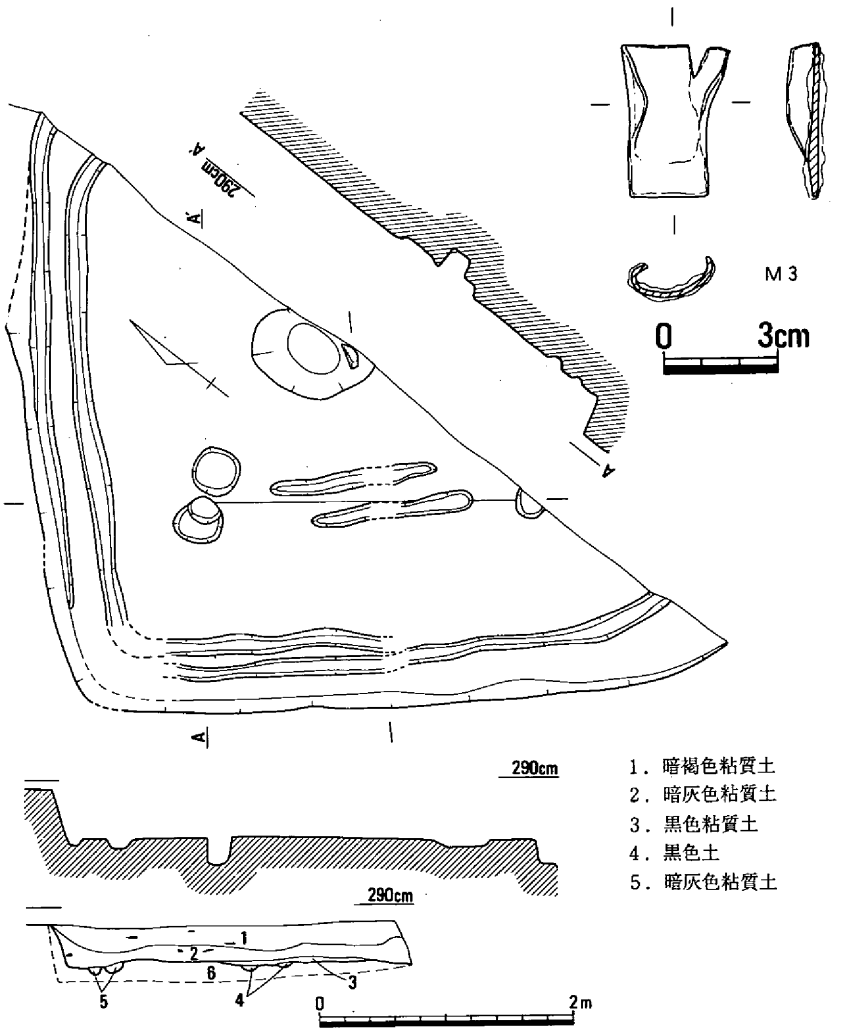
第120図　竪穴住居30出土遺物⑫（1/3）

竪穴住居31（第73・121・122図、写真図版15・18）

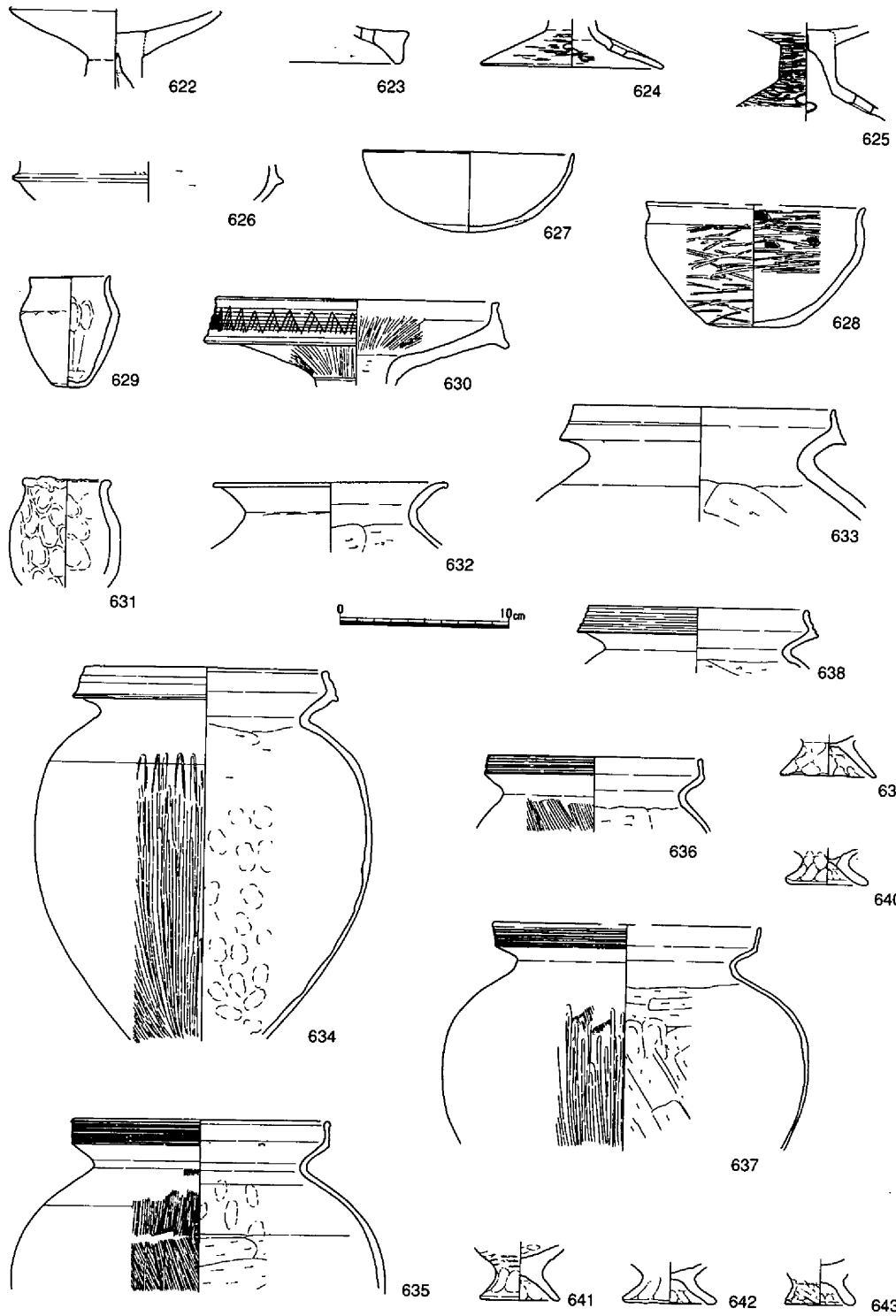
第２調査区のほぼ中央部で検出された。遺構の１／２は調査区外となるが、規模は１辺が約５ｍの方形を呈するものである。遺構の検出レベルは海抜2.8ｍで、壁高は床面から約35cmを測る。住居内には２条の壁体溝がめぐることから、１回拡張されていることが判明した。

遺物は床面上層から、高杯、壺、器台、鉢、甕、ミニチュア土器、製塩土器などが出土した。626は外面に丹塗りが施された壺である。また、623・626の胎土内には金雲母が多量に含まれている。Ｍ３は小型の鉄斧である。最大長4.3cm、最大幅2.9cm、重さ13.11ｇを測る。

土器は弥生後期のものがあるが、古墳時代初頭（下田所期）に位置づけられるものと思われる。



第121図　竪穴住居31（1/60）・出土遺物①（1/2）

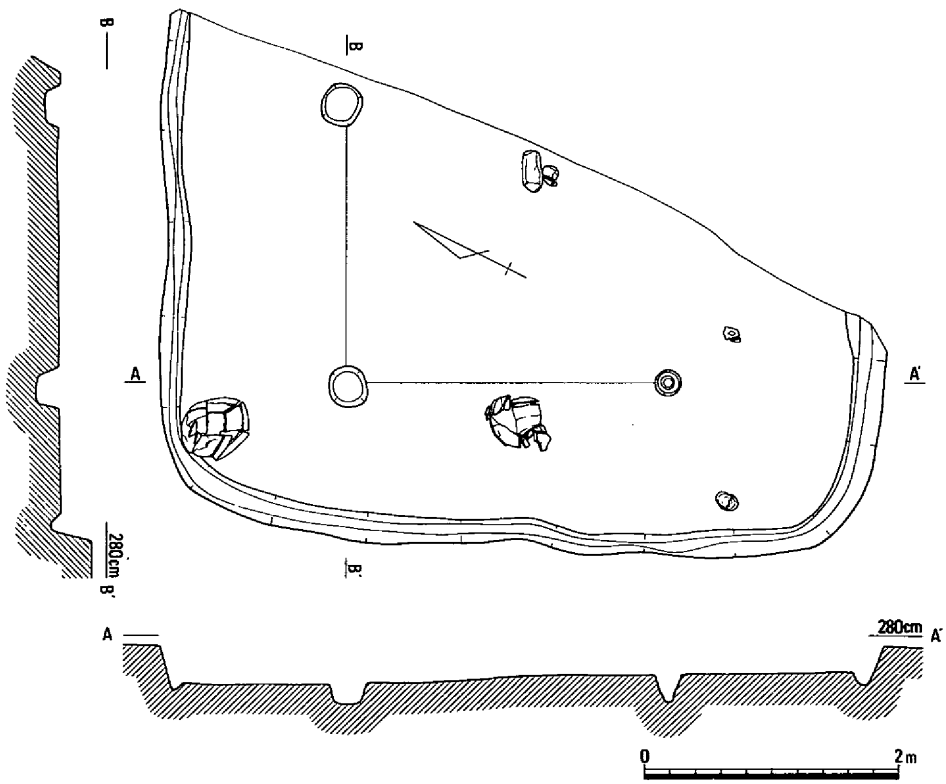


第122図　竪穴住居31出土遺物②（1/4）

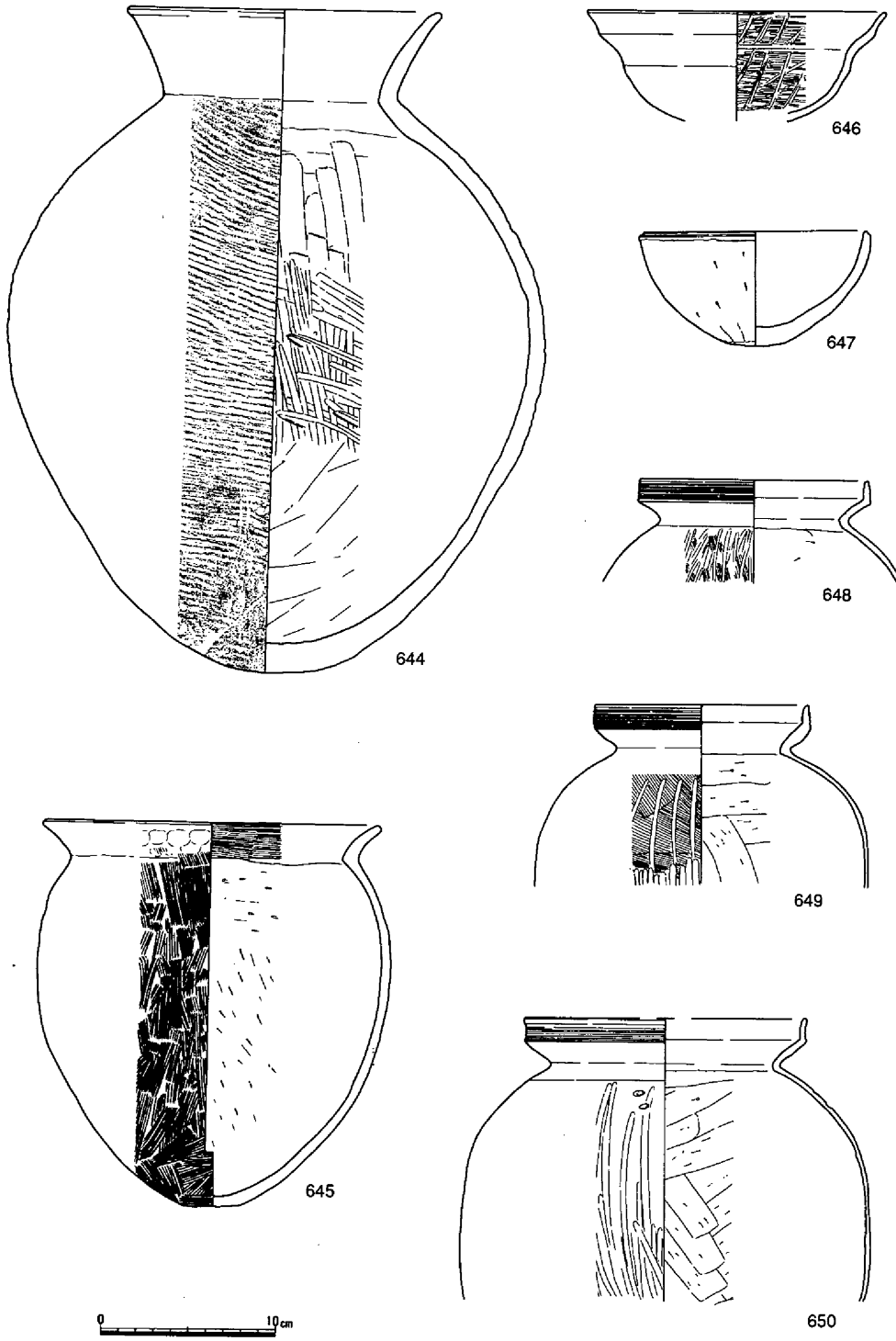
竪穴住居32（第73・123～125図、写真図版18）

第２調査区の南端近く、竪穴住居19と切り合う遺構である。遺構の１／３は調査区外となるが、規模は１辺が約5.5mの方形を呈するものである。遺構の検出レベルは海抜2.7mで、壁高は床面から約20cmを測る。住居内には幅約20cm、深さ約10cmの壁体溝が周囲をめぐり、柱穴が３個検出されているが、４本柱で構成される竪穴住居と思われる。柱穴の掘り方、深さとも大きくない。

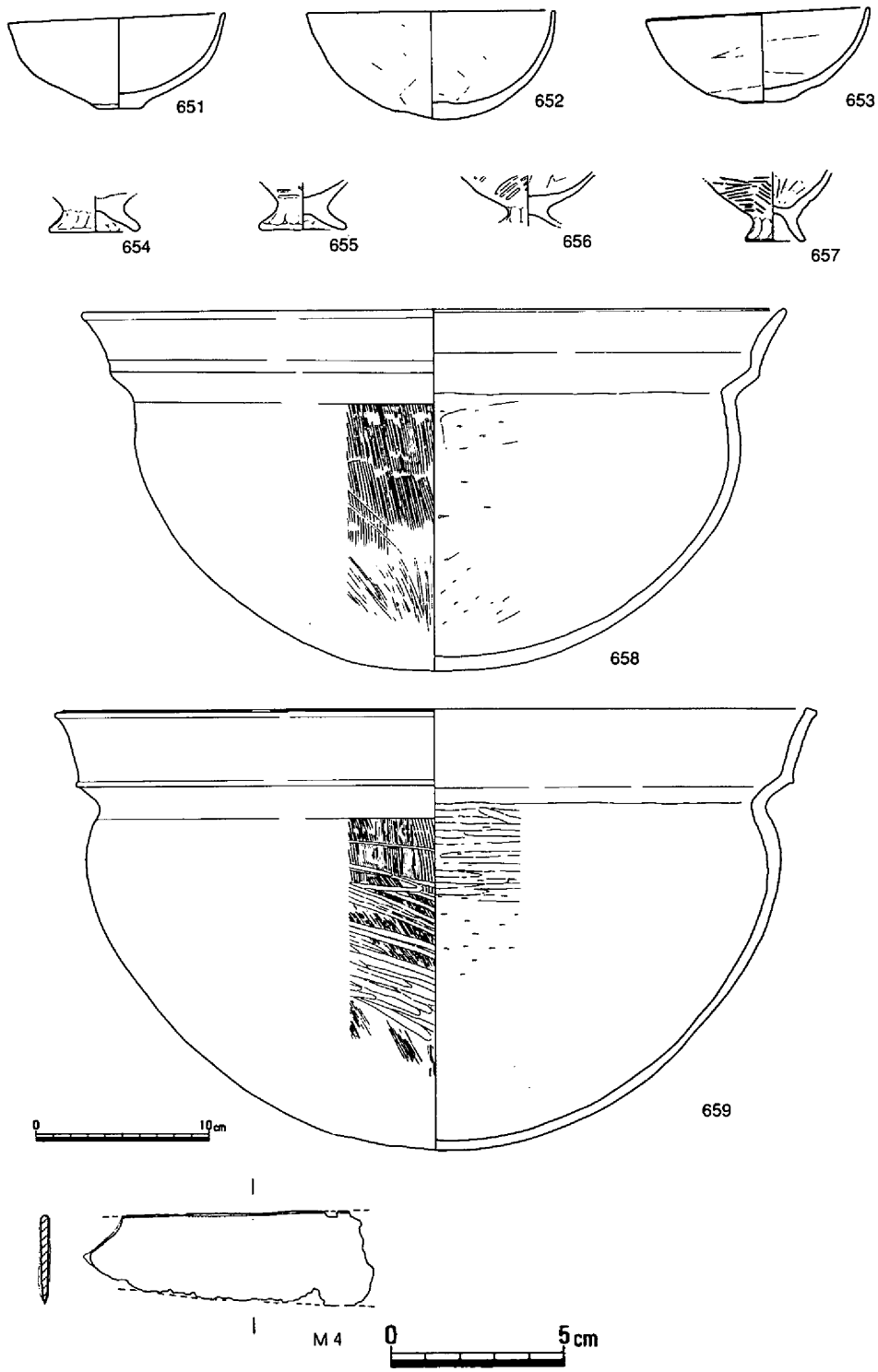
遺物は床面付着のものと、直上で出土したものに大別される。床面付着のものとしては、甕644、小型の鉢647・652・653、大型の鉢658・659がある。床面直上からは、壺、甕、高杯、鉢、製塩土器と鉄器が出土している。644は「く」字状に外反し、端部を丸く収める口縁部で、胴部最大径が中央にある、わずかに平底が残るものである。胴部外面にはやや右下りのタタキメが、底部付近はその上にヘラミガキによる調整が施されている。658・659は複合口縁を呈する大型の鉢である。胴部外面はハケナデ後、ヘラミガキによる仕上げがなされている。内面は658がヘラケズリ、659がヘラミガキとヘラケズリ調整である。Ｍ４は両端部が折損しているため不明であるが、鎌と思われる。時期は古墳時代前半に位置づけられる遺構である。



第123図　竪穴住居32（1/60）



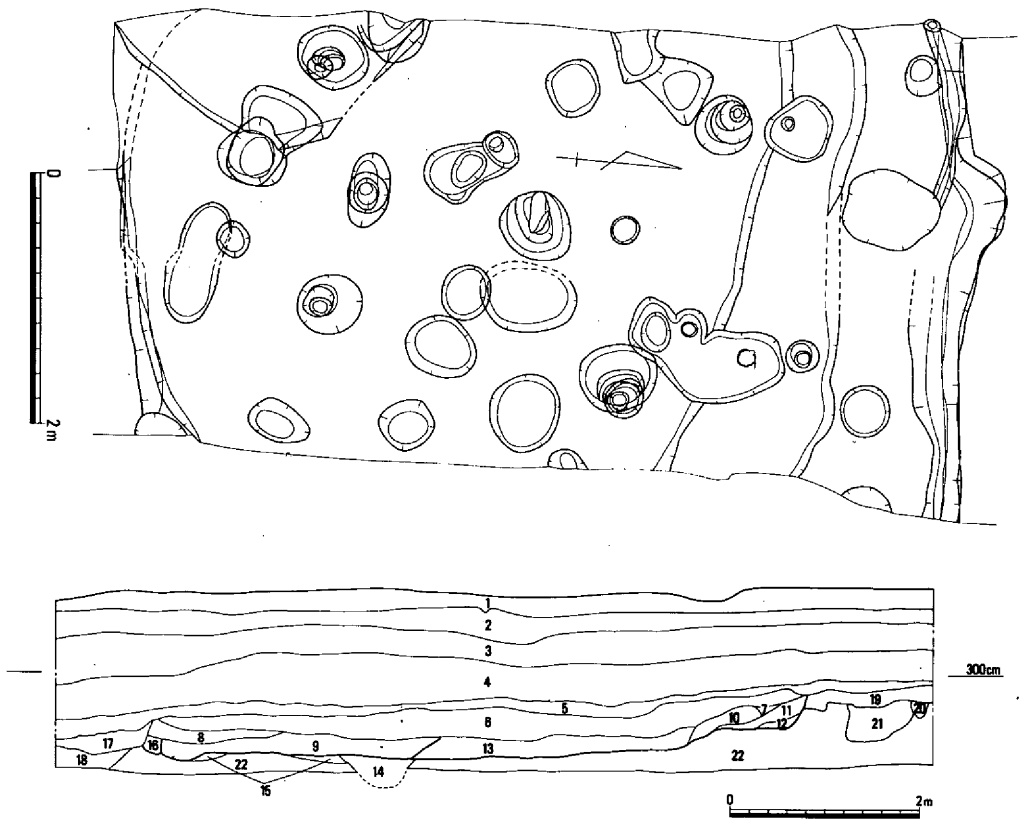
第124図　竪穴住居32出土遺物①（1/4）



第125図　竪穴住居32出土遺物②（1/4・1/2）

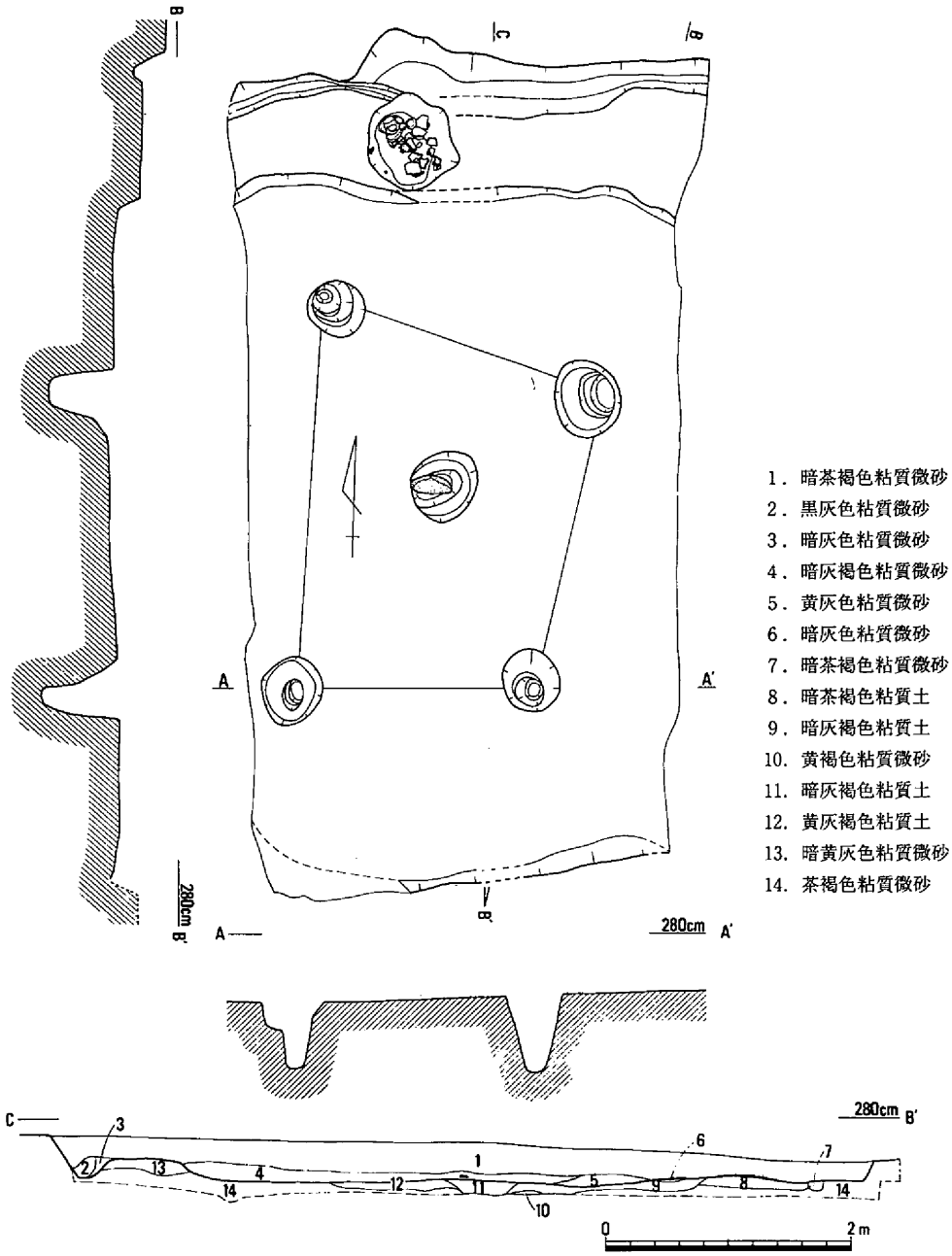
竪穴住居33（第73・126～129図、写真図版19）

第２調査区の南端、竪穴住居20・34などと切り合う遺構である。検出された住居は両側辺が調査区外となるため、遺構の規模は正確に計測することができない。ただ、検出された平面形からみて方形を呈するものと推察される。遺構の検出レベルは海抜2.7mであるが、２～３回の建て替えがあると思われたが、上層での住居は平面、土層断面においても確認することができなかったが、下層においては、北コーナーのみベッド状遺構を伴う住居を確認できた。検出面からの壁高はベッド状遺構までが約20cm、床面までが約35cmを測る。住居内には、床面中央部に円礫を含むピット、若干不規則な配置の４本の柱穴が検出されている。また、ベッド状遺構には70cm×70cmの規模で、深さ約10cmの不整形な方形を呈する土壙が検出されている。また、



1．暗灰色微砂　7．灰色微砂　13．暗灰色土　19．暗褐色粘質土
2．茶褐色粘質土　8．暗灰褐色粘質土　14．暗灰色粘質土　20．暗茶褐色粘質土
3．灰褐色粘質土　9．暗灰色粘質土　15．暗黄褐色粘質土　21．暗黄褐色粘質土
4．灰茶褐色粘質土　10．黒色土　16．暗灰褐色粘質土　22．黄褐色粘質土
5．黒褐色粘質土　11．暗灰色粘質土　17．暗褐色粘質土
6．暗灰色粘質微砂　12．灰色粘質微砂　18．黒色粘質土

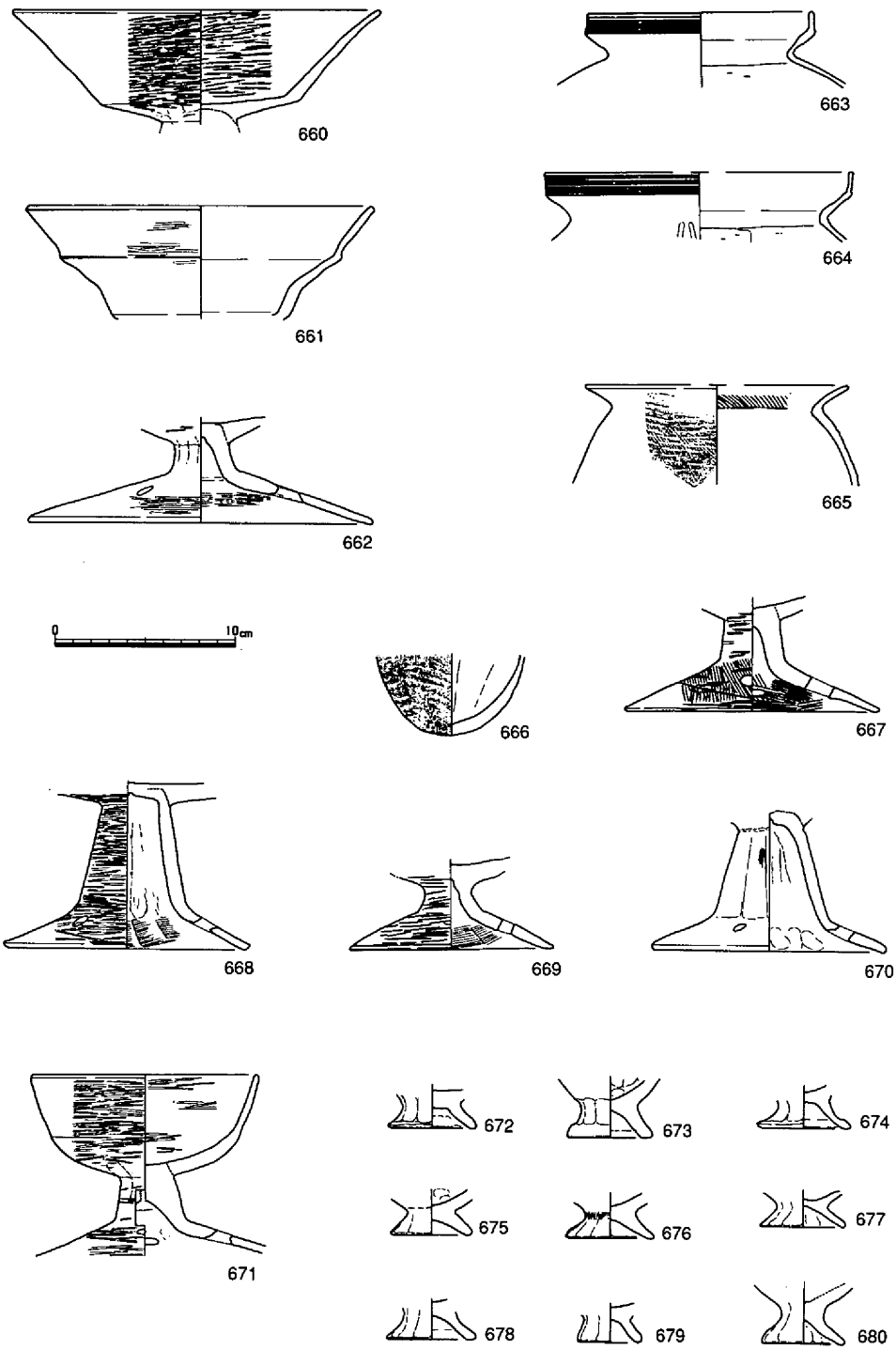
第126図　竪穴住居33（1/60・1/80）



第127図　竪穴住居33（1/60）

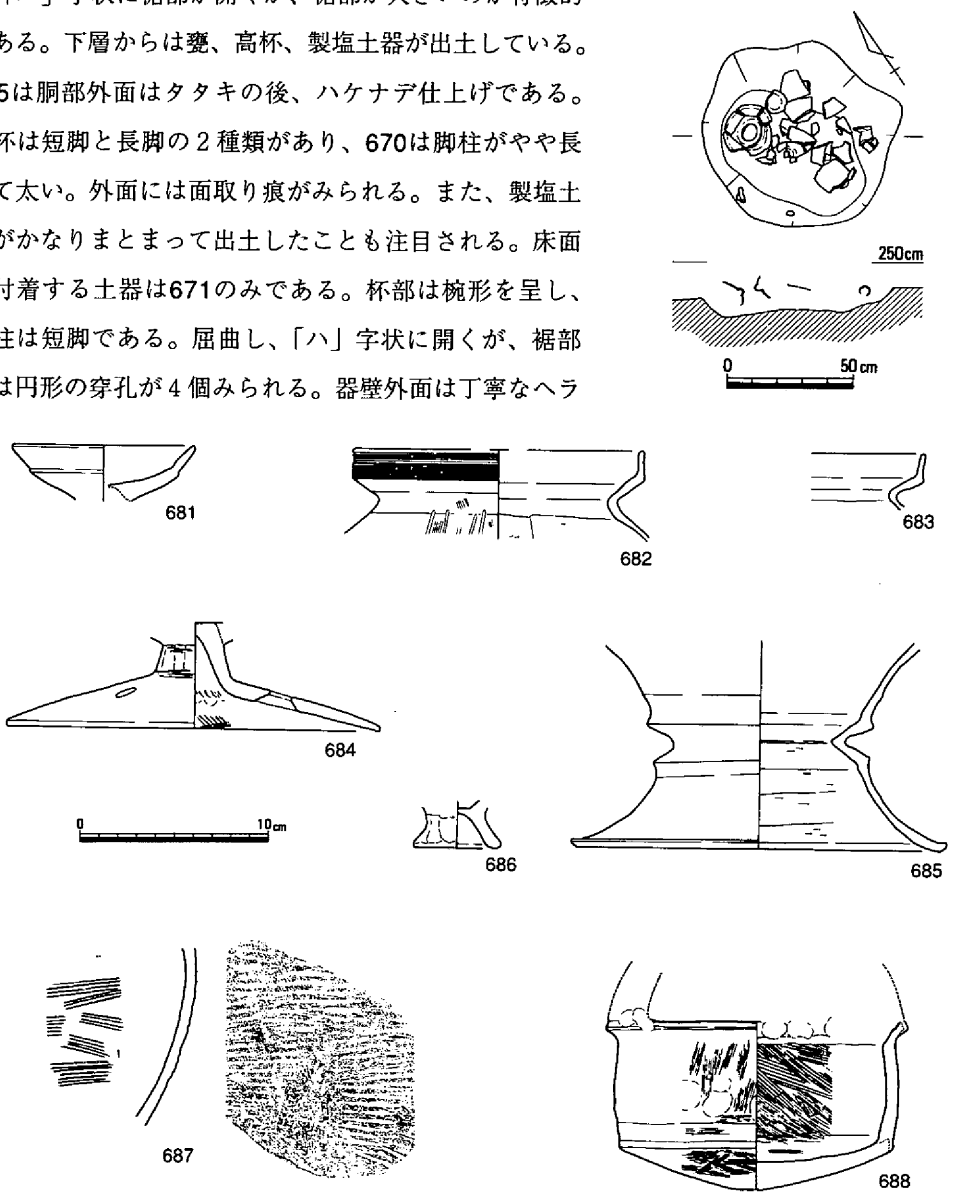
る。また、ベッド状遺構と壁の間には、幅５～15cm、深さ４～８cmの壁体溝がめぐっている。

遺物は床面上層、下層（床面直上）、床面に付着した土器と土壙内出土がある。床面上層か



第128図　竪穴住居33出土遺物（1/4）

らは高杯、甕などがある。662は脚柱部が短く、屈曲して「ハ」字状に裾部が開くが、裾部が大きいのが特徴的である。下層からは甕、高杯、製塩土器が出土している。665は胴部外面はタタキの後、ハケナデ仕上げである。高杯は短脚と長脚の２種類があり、670は脚柱がやや長くて太い。外面には面取り痕がみられる。また、製塩土器がかなりまとまって出土したことも注目される。床面に付着する土器は671のみである。杯部は椀形を呈し、脚柱は短脚である。屈曲し、「ハ」字状に開くが、裾部には円形の穿孔が４個みられる。器壁外面は丁寧なヘラ

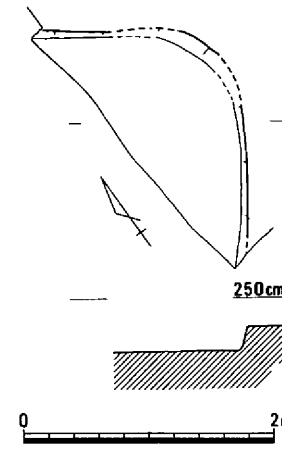


第129図　竪穴住居33内土壙（1/30）・出土遺物（1/4）

ミガキが施されている。なお、口縁端部には浅い１条の沈線がめぐる。水漉粘土を使用する。

住居の土壙内からは器台681・685、甕682・683、高杯684、製塩土器686、壺687が出土している。681は小型の器台である。器壁が剥離しているため調整は不明である。684は短脚の脚柱部である。「ハ」字状に外反し、裾部は大きく開くものである。脚柱の外面には面取りの

痕跡がみられるが、ヘラミガキによる仕上げがなされている。なお、裾部には3個の円孔が穿たれていたものと思われる。胎土は水漉粘土を使用する。685は鼓形器台である。口縁部が欠損するが、器受部は斜め外方に反りをもって延びる。筒部は短くて、鋭く屈曲する。器台部は「ハ」字状にやや反りをもって広がり、端部は外方へやや拡張する。外面はヨコナデ、内面は器受部が工具によるヨコナデ、器台部はヘラケズリとヨコナデ仕上げがみられる。器壁外面は全面を丹塗り、器受部の内面にも全面に丹塗りがみられる。なお、胎土内に雲母がわずかに含まれている。688は柱穴内出土の手焙形土器である。覆部が欠損し、鉢部のみである。覆部と鉢部の口縁端部はぴったりと接合するもので、接合面には指押えによる仕上げがなされている。鉢部の内外面はハケナデ仕上げであるが、外面にはヨコナデ調整も部分的にみられる。なお、底部はわずかながら、平底が残るものである。時期は、遺物が亀川上層期に比定されることから、古墳時代前半に位置するものと思われる。



第130図　竪穴住居34（1/60）

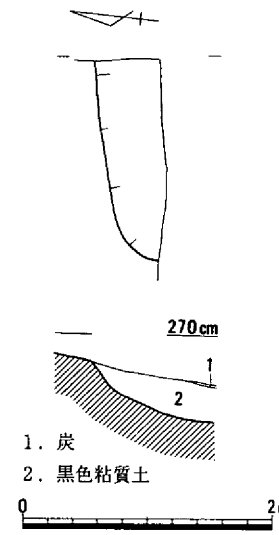
竪穴住居34（第73・130図）

竪穴住居34を切る遺構である。住居のコーナーだけであるため、規模不明であるが、平面形は方形を呈する。遺構検出レベルは海抜2.3mである。出土遺物はないが、古墳時代前半期の遺構と考えられる。

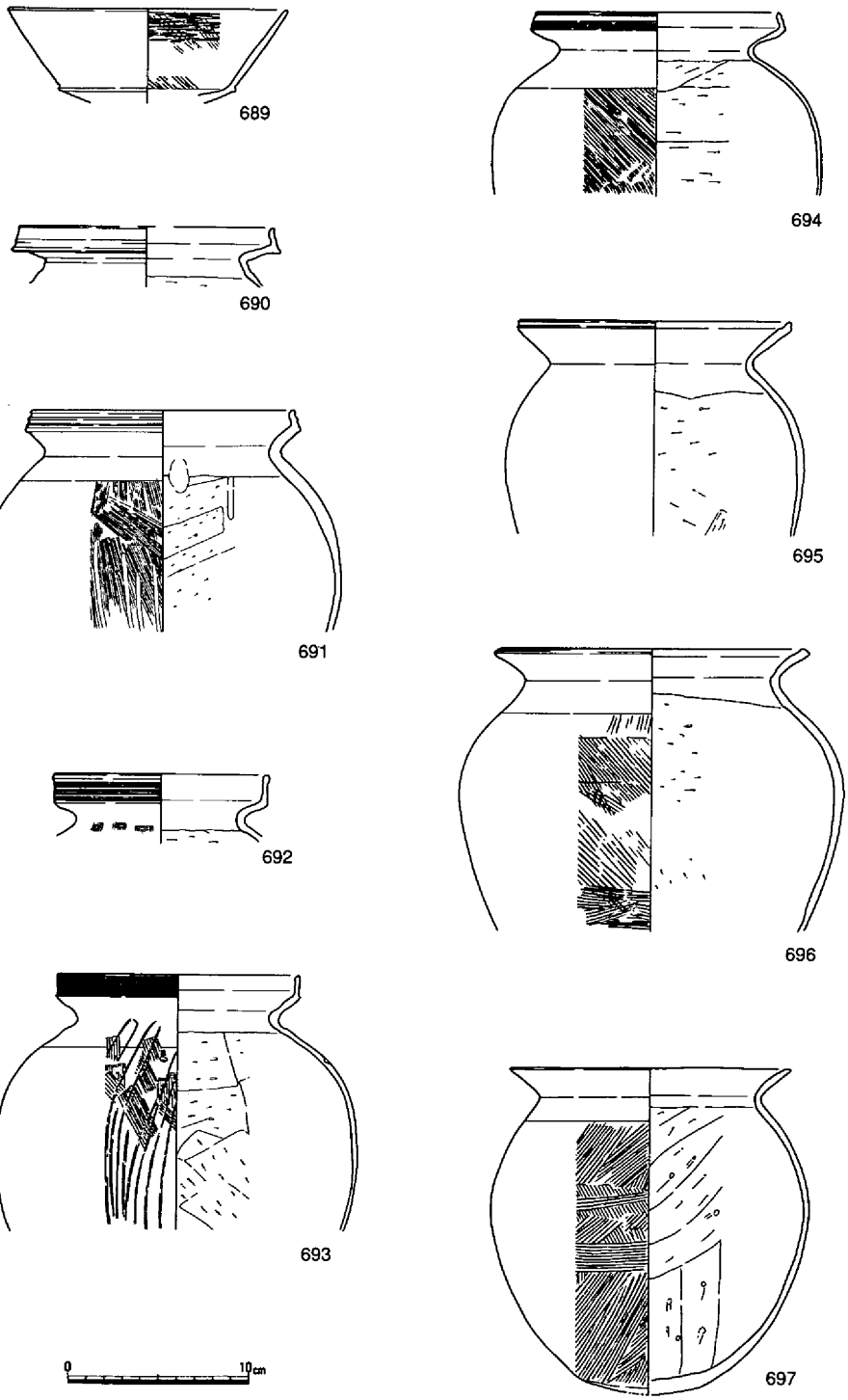
竪穴住居35（第73・131・132図、写真図版20）

第2調査区の最南端で検出された遺構で、竪穴住居20と切り合うものである。住居のコーナー部分だけであるため、規模不明であるが、方形を呈するものと思われる。遺構検出レベルは海抜2.5mである。遺物はわずかな面積の中の埋土層から、高杯689、甕690～697が出土した。甕は口縁部の形態から、大きく2つに大別されるが、さらに、各種のタイプがみられる。

時期は遺物、土層からみて、下田所期に比定され、古墳時代初頭の遺構と考えられる。　（松本）



第131図　竪穴住居35（1/60）



第132図　竪穴住居35出土遺物（1/4）

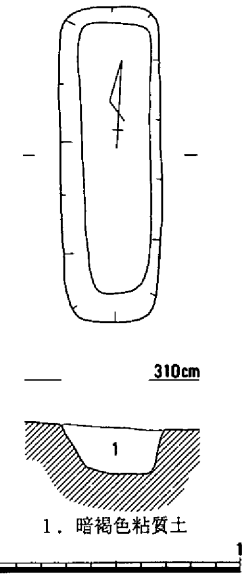
(2) 土壙

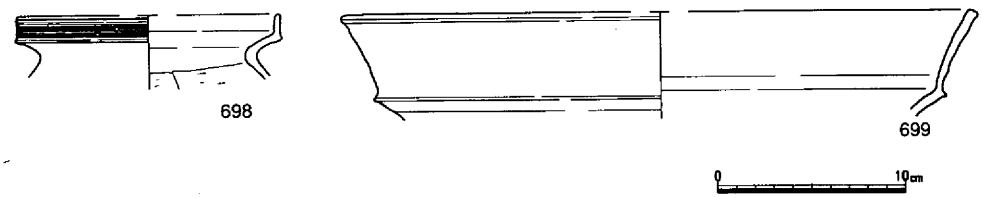
土壙19（第73・133図）

第1調査区の中央付近において竪穴住居22埋没後、これを切った状態で検出された。

土壙は、平面隅丸長方形を呈するものであった。規模は長軸1.25m、幅40cm、深さ20cmを測り、壙内には暗褐色粘質土が1層埋積していた。

出土遺物には、小片の甕、鉢等の土器が散見されたにすぎず、時期についての詳細は判然としない。ただし、伴出した土器片の型式に大きく時期差が認められないことで、土壙の時期としては古墳時代初頭段階への位置づけがなされて差支えないものと考える。





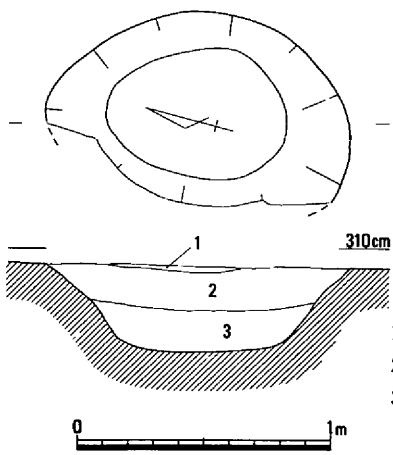
第133図　土壙19（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙20（第73・134図）

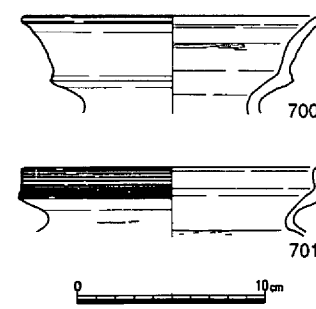
第1調査区の南半部分で一部側溝に切られて検出された。おおむね楕円形を呈するもので、長軸1.20m、深さ34cmを測った。

土壙の埋積状況は、3層の堆積が認められるがいずれの層にも炭の包含が認められた。

出土遺物は、壺と甕の小破片が検出されたの



1．灰茶褐色粘質土
2．暗褐色粘質土（含、炭）
3．暗黒褐色粘質土（含、炭）



第134図　土壙20（1/30）・出土遺物（1/4）

みで、土壙の時期を決定するには資料不足の感は否めない。あえてこれを参考に土壙の時期を推測すれば、およそ古墳時代初頭への位置づけがなされよう。

土壙21（第73・135図）

第１調査区のほぼ南端部分において、前述の土壙20の南約50cmに近接した位置で検出された。

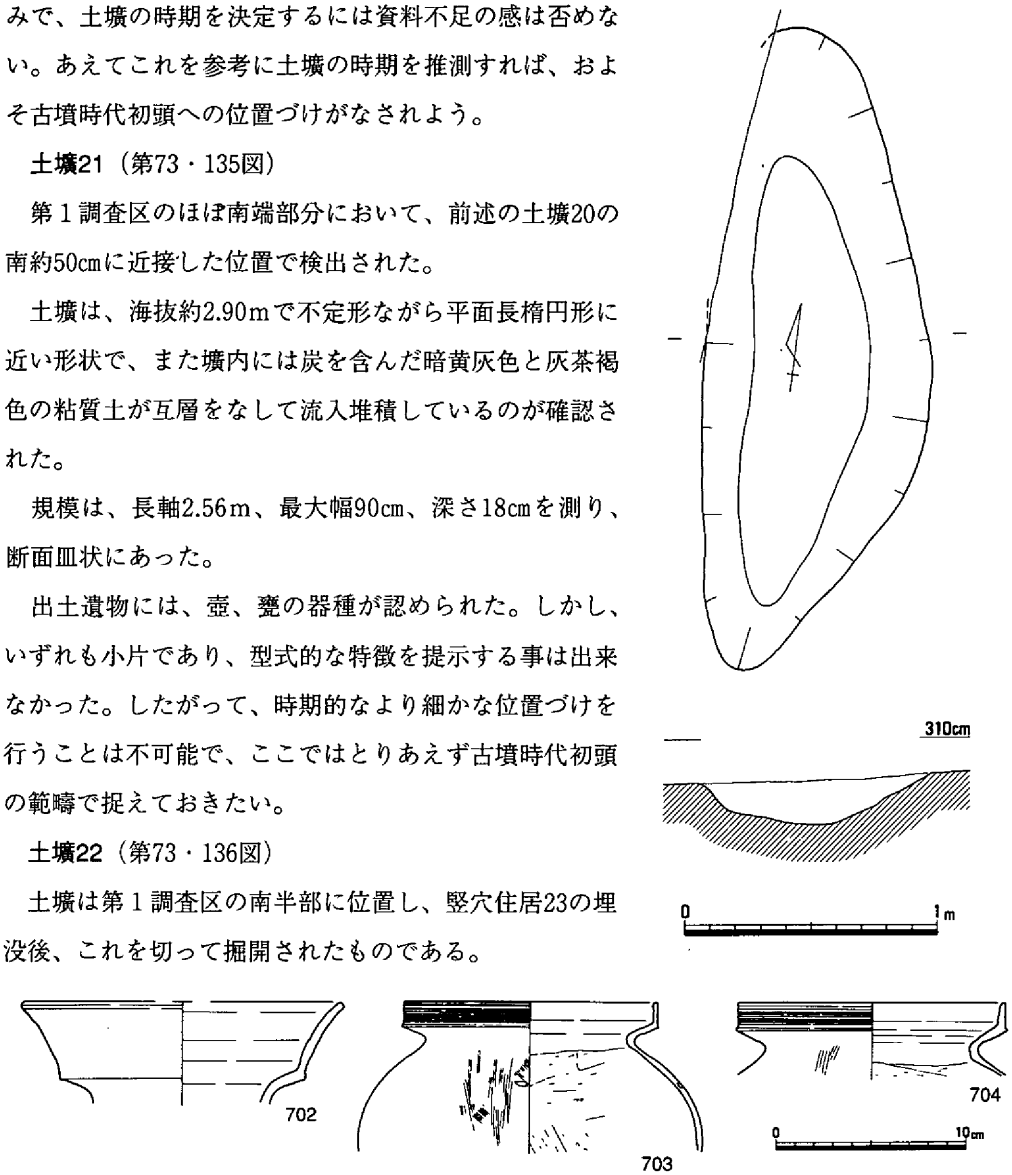
土壙は、海抜約2.90ｍで不定形ながら平面長楕円形に近い形状で、また壙内には炭を含んだ暗黄灰色と灰茶褐色の粘質土が互層をなして流入堆積しているのが確認された。

規模は、長軸2.56ｍ、最大幅90cm、深さ18cmを測り、断面皿状にあった。

出土遺物には、壺、甕の器種が認められた。しかし、いずれも小片であり、型式的な特徴を提示する事は出来なかった。したがって、時期的なより細かな位置づけを行うことは不可能で、ここではとりあえず古墳時代初頭の範疇で捉えておきたい。

土壙22（第73・136図）

土壙は第１調査区の南半部に位置し、竪穴住居23の埋没後、これを切って掘開されたものである。



第135図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙は、海抜約2.90ｍで楕円形の平面形が検出され、長軸1.12ｍ、幅90cmが計測された。

壙内には、最下層に炭を含んだ暗黒色土が約20cmの堆積をみせ、上層には灰黄色を基調とする堆積土が見られた。４層からなる埋積土除去後、検出面から約35cmの位置で壙底の確認がなされた。

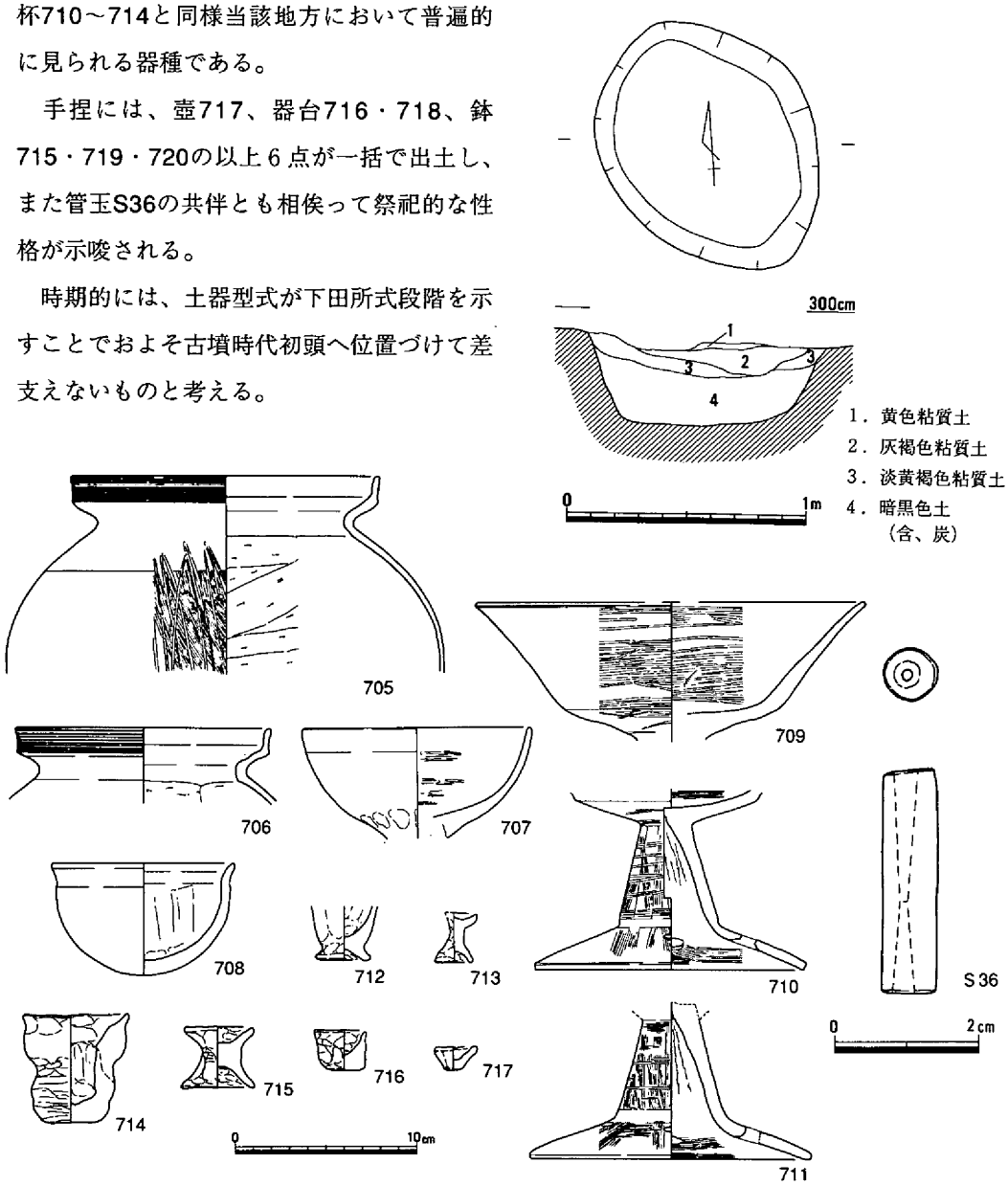
出土遺物には、甕、高杯、鉢、手捏等の土器の他、碧玉製の管玉が１点見られた。

甕は、いずれも上方に長く拡張した口縁部外面に櫛描による沈線が施されたものであり、高

杯710～714と同様当該地方において普遍的に見られる器種である。

手捏には、壺717、器台716・718、鉢715・719・720の以上6点が一括で出土し、また管玉S36の共伴とも相俟って祭祀的な性格が示唆される。

時期的には、土器型式が下田所式段階を示すことでおよそ古墳時代初頭へ位置づけて差支えないものと考える。



第136図　土壙22（1/30）・出土遺物（1/4・1/1）

土壙23（第73・137図）

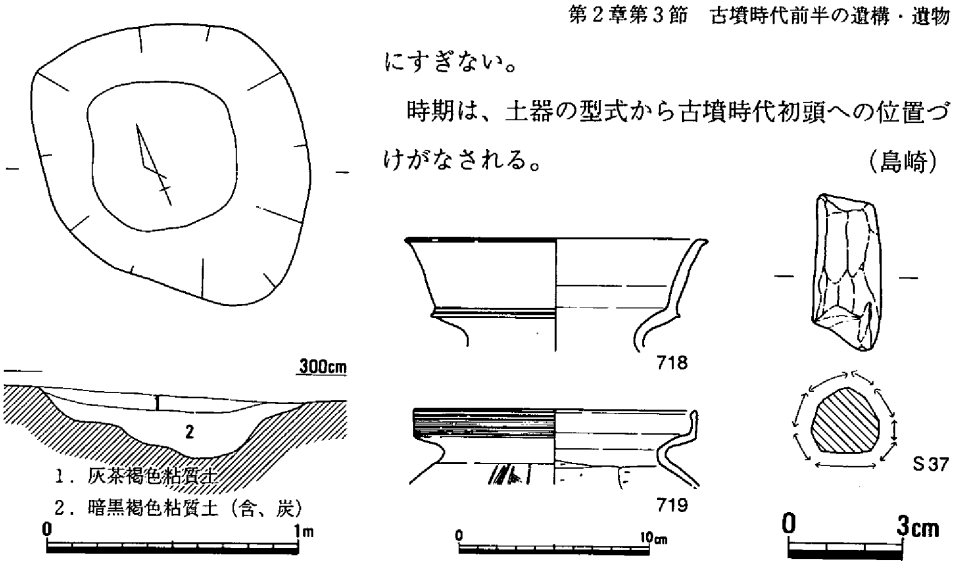
第1調査区の南端部分において土壙21の東約1mに近接して所在し、竪穴住居23の埋没後これを切っての掘開が確認された。

平面は不定形な楕円形を呈し、壙底も一様でなく検出面からの深さ最深部で23cmを測った。

出土遺物には、土器片と1点器種不明ながら外面に加工痕跡を有する石製品S37が見られた

にすぎない。

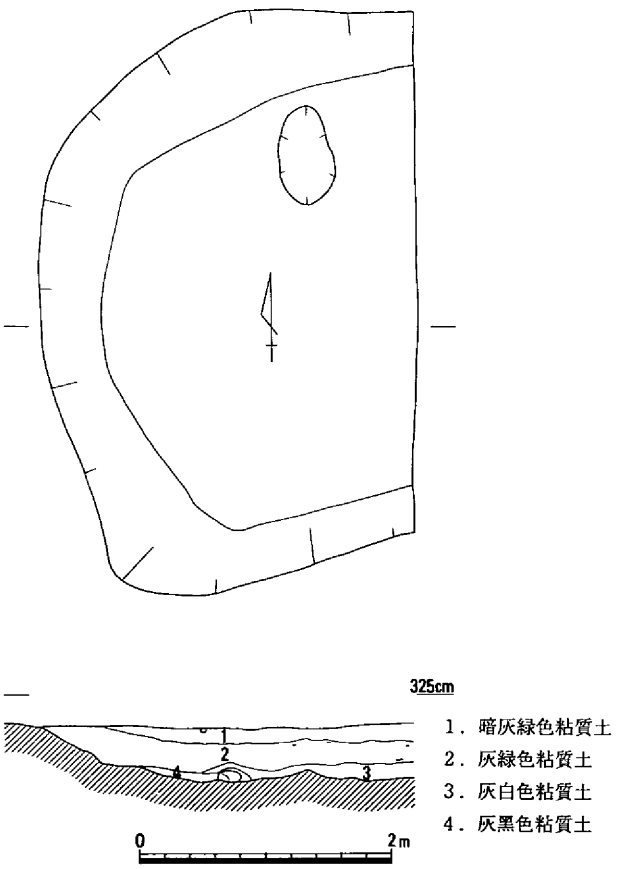
時期は、土器の型式から古墳時代初頭への位置づけがなされる。　（島崎）



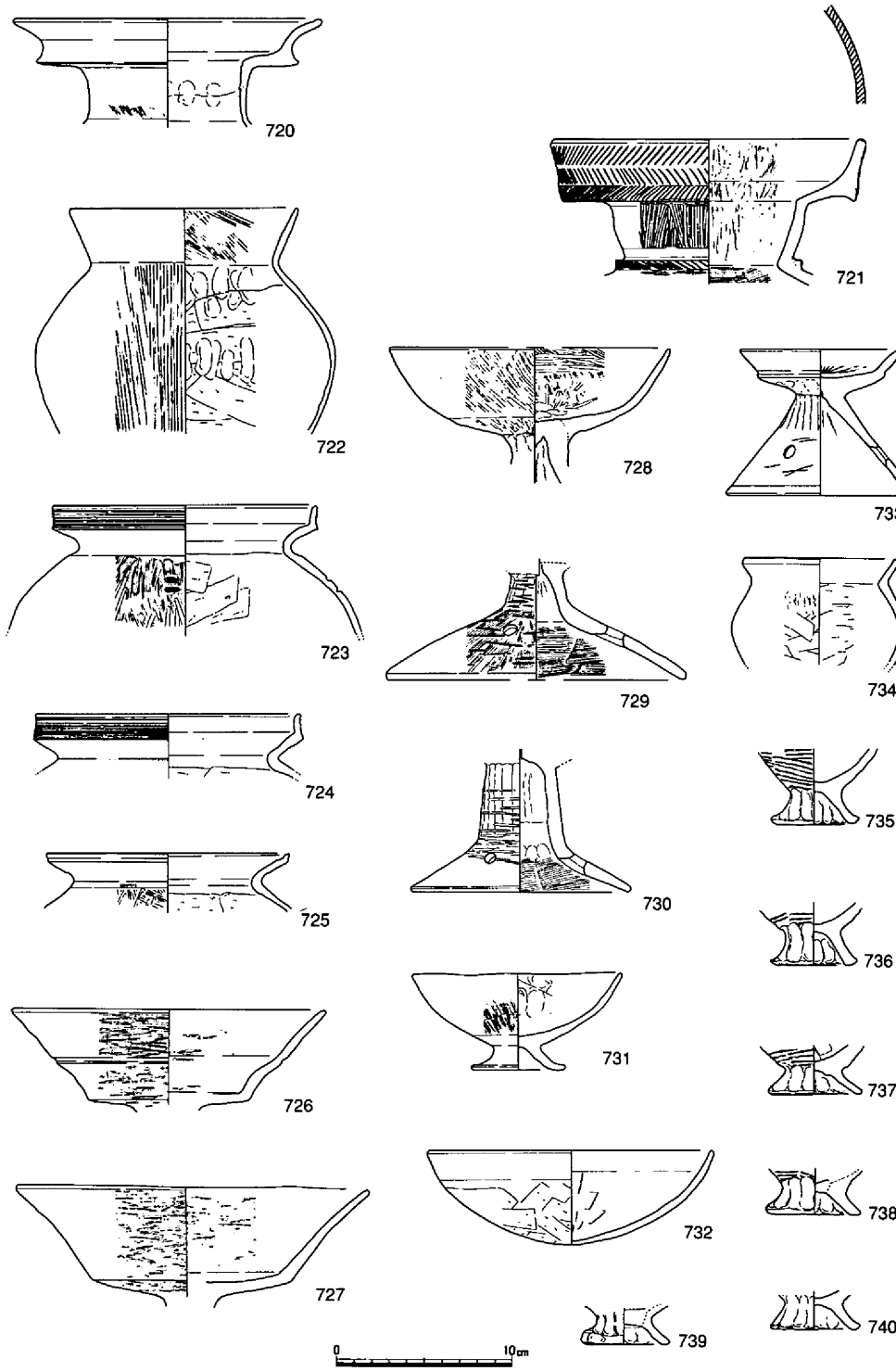
第137図　土壙23（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙24(第73・138～141図)

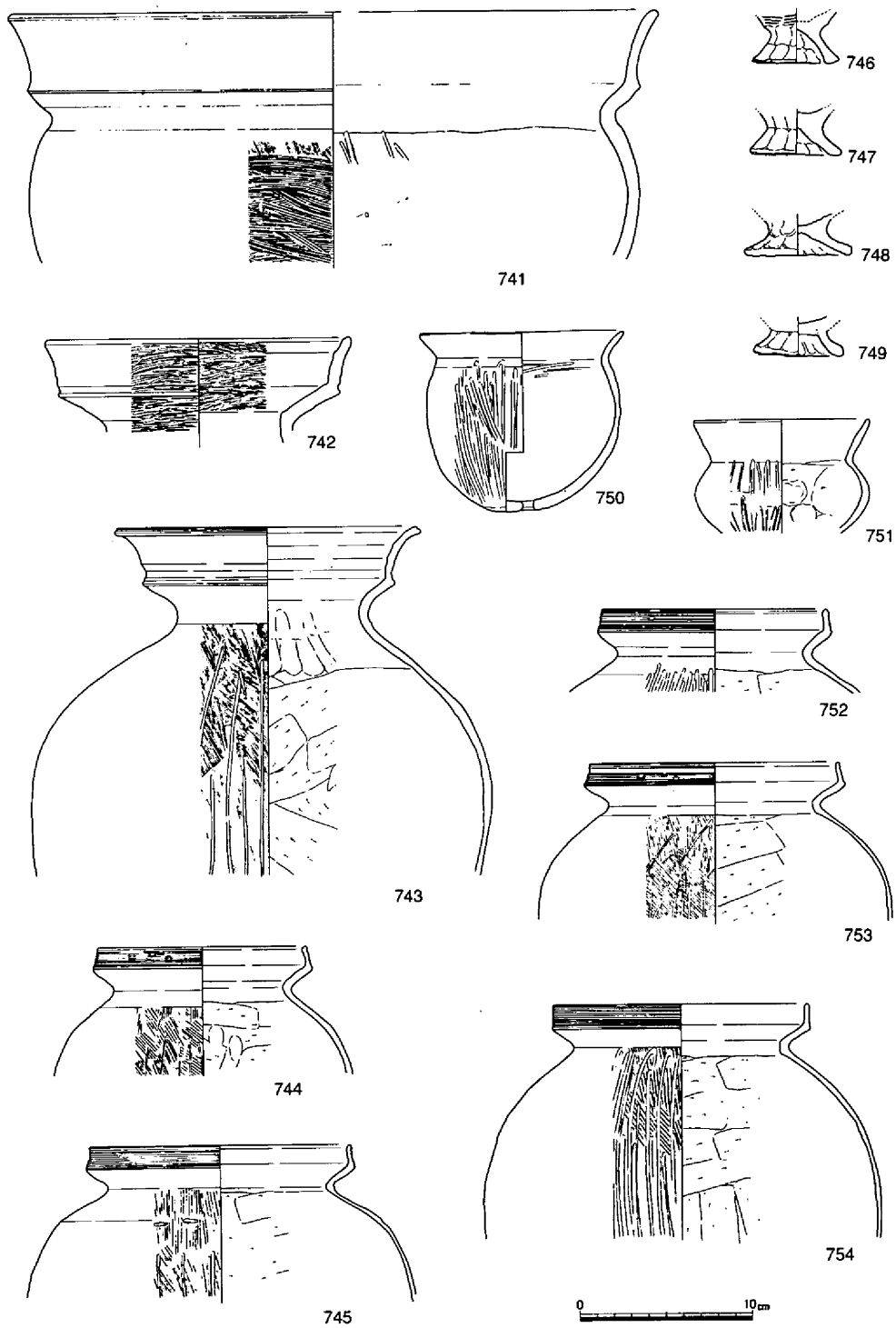
第２調査区の北端、竪穴住居13・24・25と切り合う遺構である。遺構の約１／２は調査区外となるが、長径2.2m、短径不明の不整形な方形にあると思われる。深さは検出面から約32cmで、底面は凸凹がみられる。埋土は４層に区分され、遺物は第２、３層内から出土した。第２層からは壺720・721、甕722～725、高杯726～730、鉢731・732・734・741、器台733、製塩土器735～740がある。第３層からは壺742・743、甕744・745、752～755、高杯756～759、鉢750・760、坩751、製塩土器746～749が出土している。721の口縁部は複合



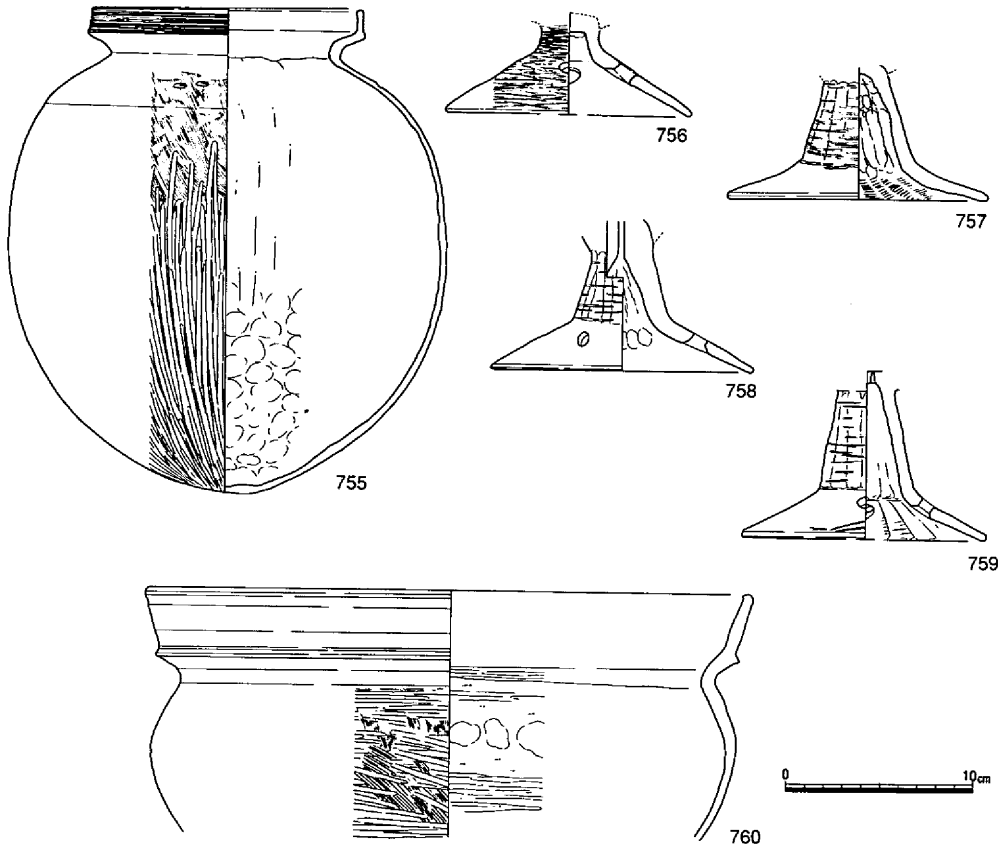
第138図　土壙24（1/30）



第139図　土壙24出土遺物①（1/4）

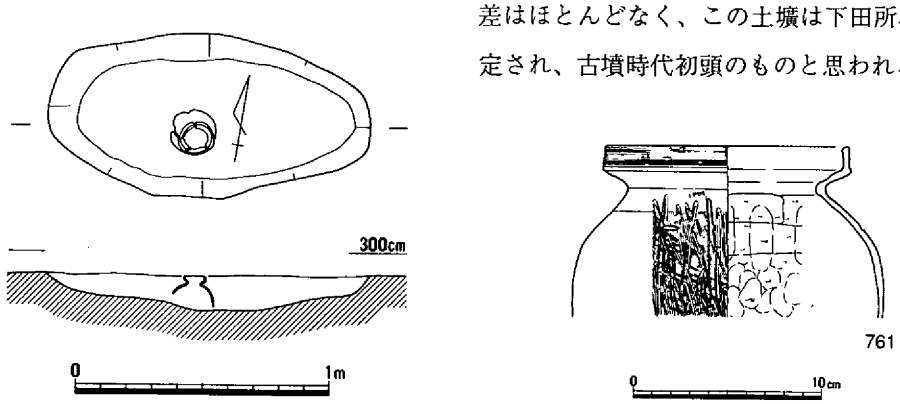


第140図　土壙24出土遺物②（1/4）



第141図　土壙24出土遺物③（1/4）

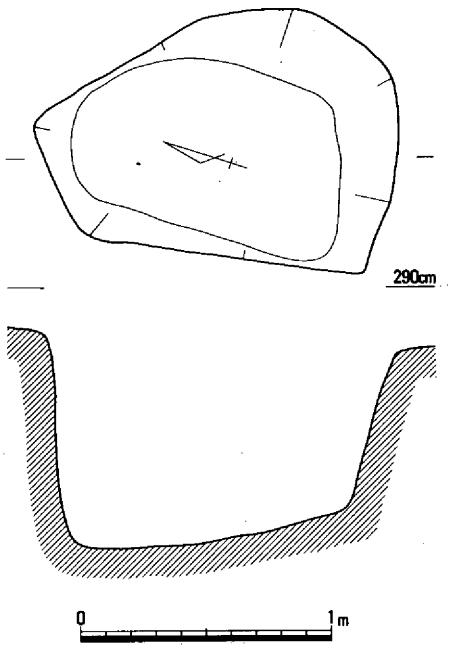
口縁を呈し、頸部に凸帯を１条めぐらす。口縁部外面には刺突文による綾杉文様が描かれ、端面と凸帯にも刺突文が施されている。頸部外面はハケナデ、内面は口縁部から頸部までが縦のヘラミガキ、胴部は横のハケナデによる調整が施されている。このように、２、３層とも時期差はほとんどなく、この土壙は下田所段階に比定され、古墳時代初頭のものと思われる。

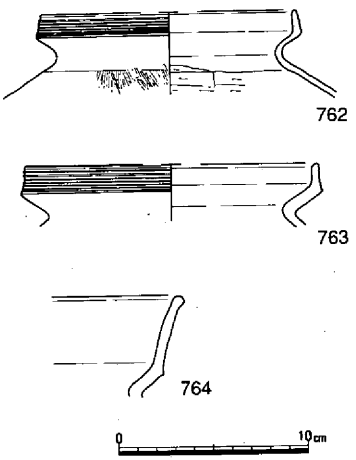


第142図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙25（第73・142図）

土壙３の上層で検出された遺構である。土壙の規模は長径1.26m、短径56cm、深さ14cmを測る。平面は長楕円形を呈し、底面は平坦ではなく、ゆるやかな凹凸をもつ。遺物は底面付近から、甕761が出土した。時期は古墳時代初頭のものと思われる。

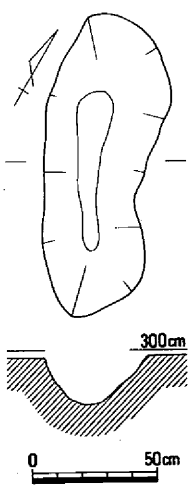


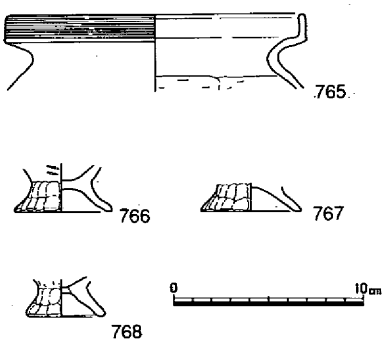


第143図　土壙26（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙26（第73・143図）

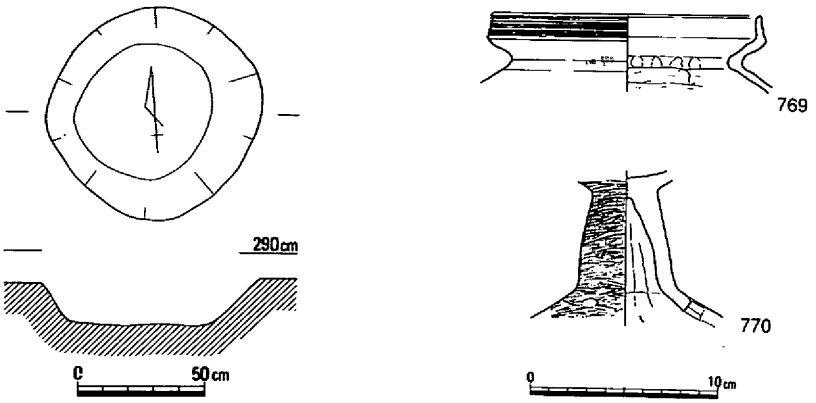
竪穴住居27のやや南、土壙６・32に近接する位置で検出された。土壙の規模は長径1.45m、短径1.00m、深さ約80cmを測る。平面は北東部がやや不整形ではあるが、方形を





第144図　土壙27（1/30）・出土遺物（1/4）

呈するものである。底面は南がやや高くなるものであり、掘り方は急角度である。遺物は甕762・763、壺764が出土している。甕の口縁端面には櫛描平行沈線文がめぐる。壺は複合口縁

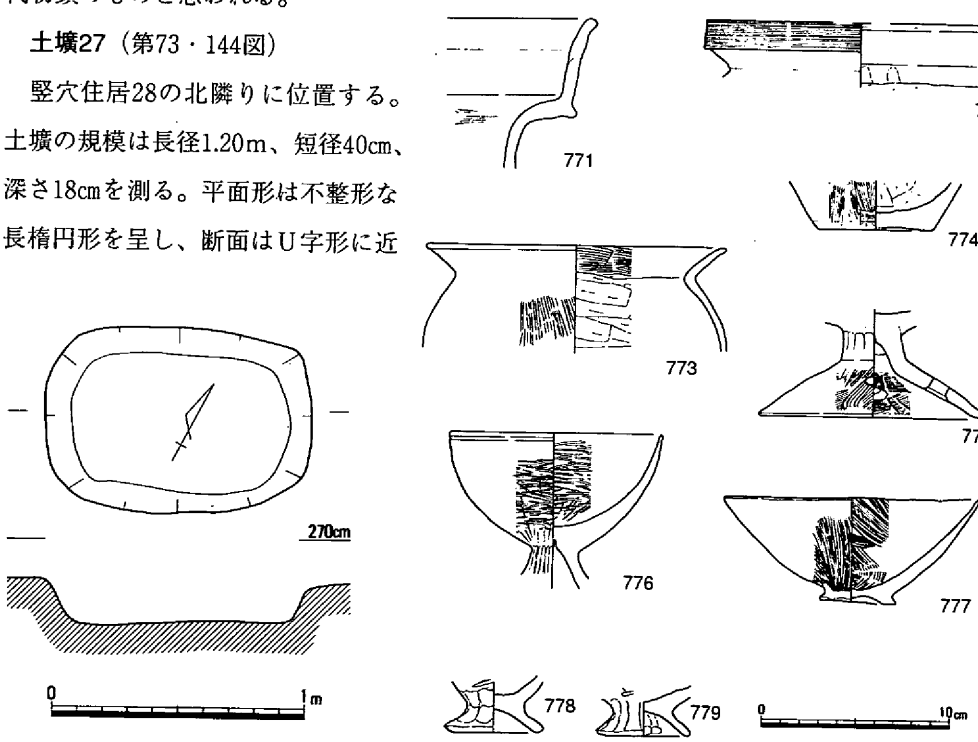


第145図　土壙28（1/30）・出土遺物（1/4）

を呈するものである。時期は古墳時代初頭のものと思われる。

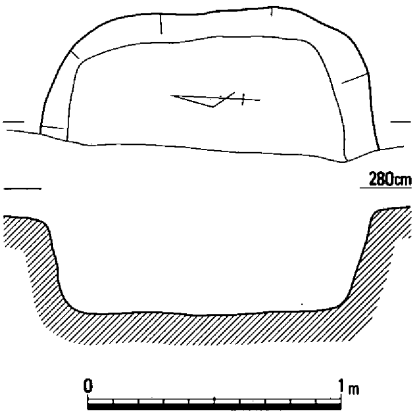
土壙27（第73・144図）

竪穴住居28の北隣りに位置する。土壙の規模は長径1.20m、短径40cm、深さ18cmを測る。平面形は不整形な長楕円形を呈し、断面はU字形に近



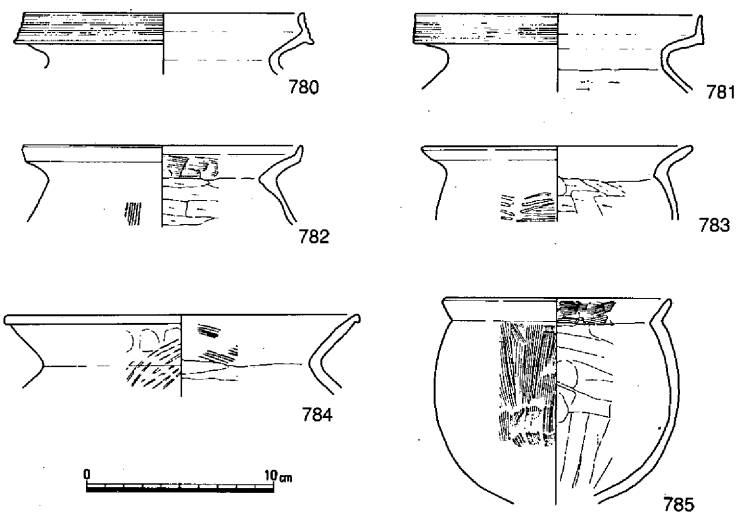
第146図　土壙29（1/30）・出土遺物（1/4）

い。遺物は埋土内から、甕765、製塩土器766～768が出土した。時期は遺物からみて、古墳時代初頭のものと思われる。



土壙28（第73・145図）

土壙31の北隣りに位置する。土壙の規模は直径80cm、深さは検出面から約18cmを測る。平面形は円形を呈し、底面は平坦である。遺物は埋土内から甕769、高杯が出土している。時期は古墳時代初頭のものと思われる。



第147図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）

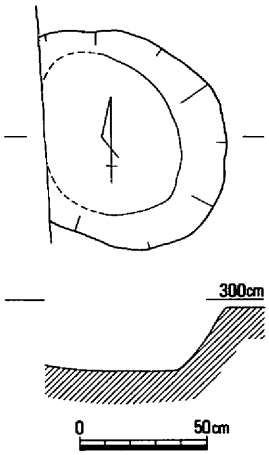
土壙29（第73・146図）

竪穴住居15の東隣りに位置する遺構である。土壙の規模は長径1.05m、短径74cmの長方形を呈する。深さは検出面から約18cmを測り、底面は平坦である。掘り方はやや緩かな角度である。

遺物は埋土内から、壺771、甕772～774、高杯775・776、鉢777、製塩土器などが出土している。時期は、古墳時代初頭に位置づけられる遺構と思われる。

土壙30（第73・147図）

土壙16の北隣りに位置する。約１／２程が調査区外となるが、規模は１辺が約1.35mの方形を呈するものと思われる。深さは40cmを測り、底面は平坦である。遺物は甕780～785が出土している。形態・調整法とも全て異なる土器である。時期は古墳時代初頭のものと思われる。



第148図　土壙31（1/30）

土壙31（第73・148図）

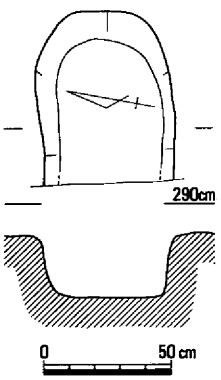
土壙28の南隣りに位置する。規模は長径1.00m、短径80cmの楕円形で、深さ24cmの底面が平坦なものである。時期は古墳時代初頭頃と思われる。

土壙32（第73・149図）

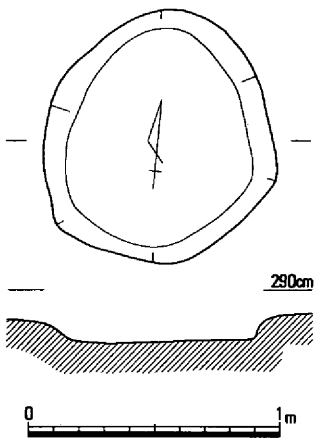
土壙26の北隣りに位置する。規模は不明であるが、長方形を呈すると思われる。底面は平坦である。遺物は無いが、古墳時代前半頃のものと思われる。

土壙33（第73・150図）

土壙35の北隣りに位置する。土壙の規模は長径1.00m、短径90cmの楕円形を呈し、深さは検出面から10cmを測る。底面は平坦である。図示する遺物はないが、古墳時代前半頃の遺構と思われる。



第149図　土壙32（1/30）



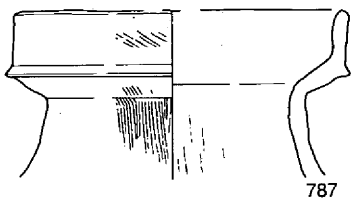
第150図　土壙33（1/30）

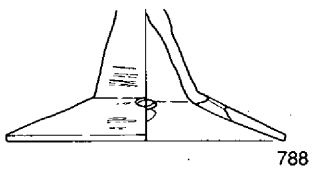
土壙34（第73・151図）

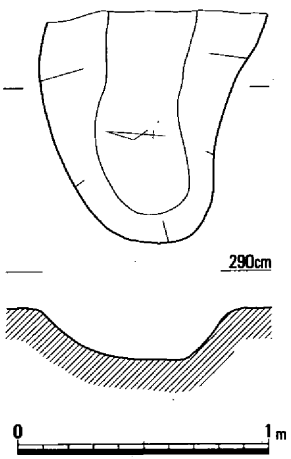
第2調査区の南端、竪穴住居33の近くで検出された遺構である。遺構は調査区外にもあるため、規模は不明であるが、現状での規模は長径90cm、短径70cm程を測り、深さは検出面から約20cmを測る不整形な長楕円形を呈する遺構と思われる。

遺物は埋土内から、壺786・787、高杯788が出土している。786は頸部に一条の凸帯をめぐらし、ヘラ描の格子文様を施す。外面には斜めのハケナデ、内面はハケナデ後、ヘラミガキが

施されている。787の口縁部は「ハ」字状に開く頸部から外反し、外上方に拡張する。また、斜下方にもわずかに拡張する複合口縁を呈する

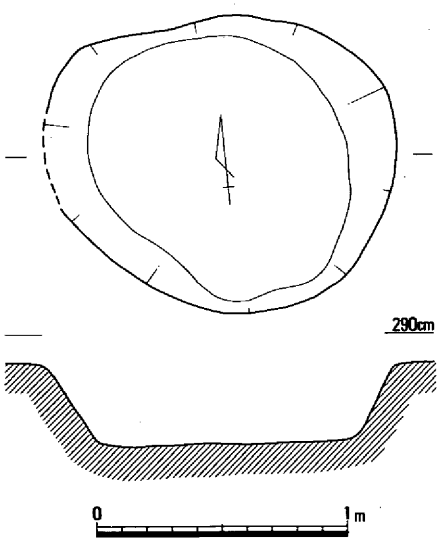






第151図　土壙34（1/30）・出土遺物（1/4）

ものである。外面はハケナデとナデ仕上げ、内面はナデによる調整がみられる。788は脚柱が短脚で、裾部は「ハ」字状に開く。なお、裾部には円形の穿孔が４か所みられる。時期は下田所期の遺物があることからみて、古墳時代初頭のものと思われる。



第152図　土壙35（1/30）

土壙35（第73・152図）

竪穴住居18の東隣りに位置し、切り合う遺構である。土壙の規模は長径約1.40m、短径1.20mの不整形な楕円形を呈し、深さは検出面から30cmを測る。掘り方はゆるやかな角度で掘られているが、底面は平坦である。

出土遺物は図示するものがないが、古墳時代前半頃の時期と推察される。

（松本）

(3) 溝

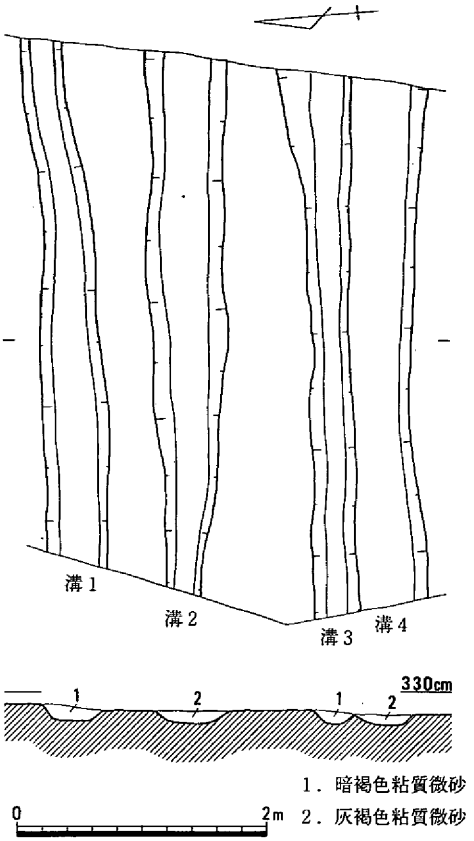
溝１～４（第73・153図）

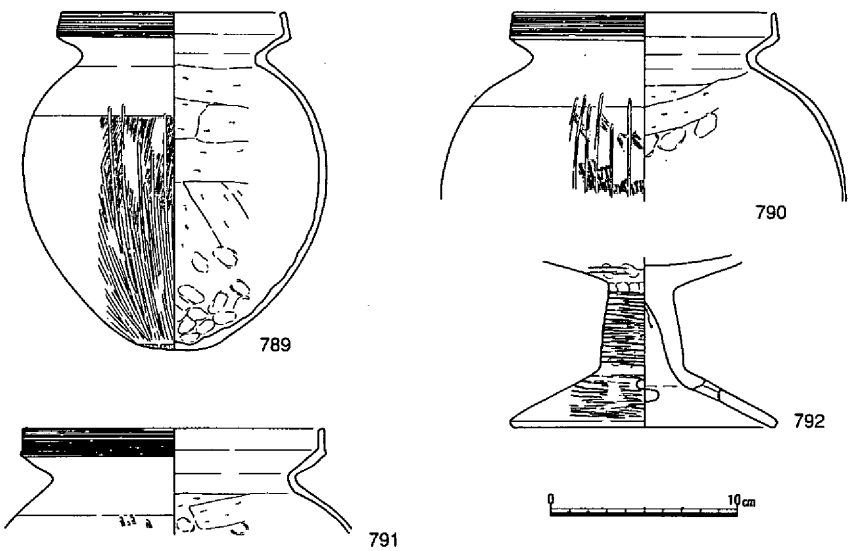
第１調査区のほぼ中央部において東西方向に平行して見られた。

規模は、いずれも検出面での幅20～30cmを前後するもので、深さも10～15cmと浅い。

溝の所在する地点は、およそ海抜3.20mを測り調査区のなかでも比較的高い位置にあり、この地点をピークに南に向けて徐々に当該期の検出遺構面の海抜高が低くなる。これは、即ち溝は排水路としてではなく用水路としての機能を果たしていたと推測される。

出土遺物は、特に溝１から数多くの土器の出土が認められ、他の溝からも甕、高杯を中心とする土器の存在が確認された。なかでも溝１に伴った甕789、高杯792は、型式的に下田所段階の特徴をよく示し、時期的に古墳時代初頭に比定されるものである。（島崎）



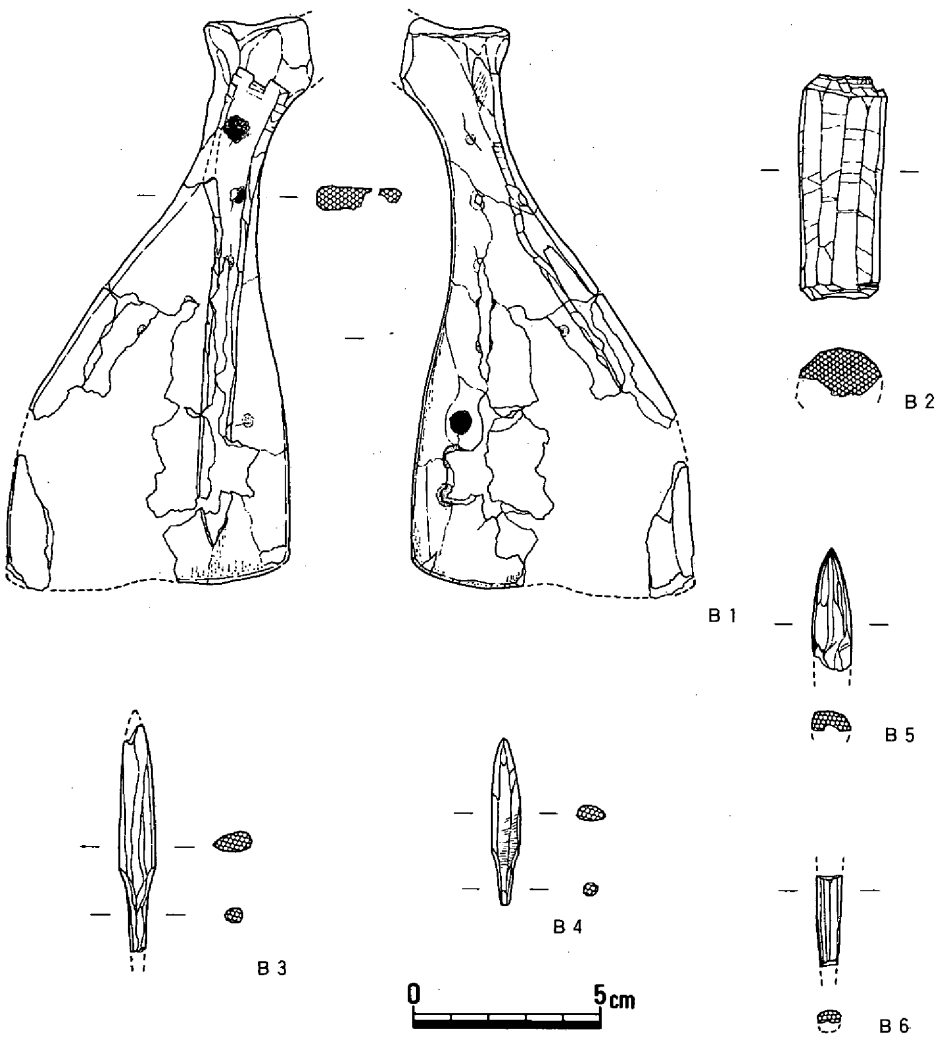


第153図　溝１・２・３・４（1/60）・溝１出土遺物（1/4）

(4)　**貝層出土遺物**（第73・154図、写真図版20）

第１調査区の北端部に所在する竪穴住居21の上層には、北側からと考えられる古墳時代初頭の土器を多量に含んだ土砂の緩やかな斜面堆積が認められた。このなかにあって、粗密はあるものの貝層としての堆積状況を見せる部分も確認された。平面で検出された貝の集積状況のなかで最もよく集中し規模の広いものは、東西１ｍ、南北２ｍで北から南にかけて約37㎝の比高差をもったものが厚さ約10㎝確認された。

貝の量は、水洗の結果合計15,973ｇが計測された。種類は、シジミ、ハイガイ、カキ等の他マキ貝が分類された。量的にはシジミが最も多く9,912ｇ（62.0％）、次にハイガイの5,698ｇ



第154図　貝層出土遺物（1/2）

(35.6%)、カキの340ｇ（0.02%）を計った。

一方、貝層からは貝の他に獣骨の存在が認められ、中には卜骨、骨鏃、未製品等が散見された。

Ｂ１は、シカ左側肩甲骨であるが残存状況は良くない。肩甲骨は、間節窩から先端までの長さ約15cmが計測された。内・外面には、焼灼痕が認められ卜骨と認定された。遺存部分が多くなく不明瞭である。外面の焼灼痕は、間節窩近くで３か所、内面には下端部近くに３か所が確認された。焼灼痕は、中心が黒色で周辺が茶褐色に変色・収縮し、一部に火拆・剝離が認められた。

Ｂ２は、鹿角の一部を上下両端を長さ６cm位に切断し、面的にも比較的丁寧な面取りが約５㎜幅でなされていた。全面の遺存がなく不明ながら直径2.2cmが推測される。切断・加工・整形には鋭利な鉄器でなされたとみられ、面および断面などの状況はシャープである。

Ｂ３は、中茎と先端の一部欠損はあるものの比較的保存状況の良い物である。鏃身は、長さ約５cm、厚さ５㎜、幅１cmを計る。全面いずれも丁寧に調整され、調整痕跡としての鋭い工具によると思われる面取り痕跡が認められた。

Ｂ４は、全長5.4cmを計る。先端から中茎までの長さ4.5cmと短いことで鏃と認識されるものである。鏃身は、先端部分を鋭利に仕上げ、全体が面取り整形がなされていた。それぞれの面には整形の際の擦痕がよく残り観察される。鏃身部の最大幅８㎜、厚さ４㎜、中茎の径３㎜を測る。

Ｂ５は、鏃身もしくはヤスの頭部分と考えられ、先端部分は鉄器で整形されたと考えられる。最大幅１cmを計った。

Ｂ６は、上・下が欠損しているため明確に出来ないが、遺存する面はすべて面取りによる整形がなされた痕跡がみられ、鏃もしくはヤスと推測される。（島崎）

(5)　土器溜り（第73・155～172図、写真図版21）

第２調査区の北半部において竪穴住居24～26が位置するその上層で検出面直下の海抜3.40ｍから海抜3.00ｍまでの間で多量の一括土器の存在が検出された。ただしこの土器溜りは、相当量が調査区外にかかっていたため全ての土器を取りあげの対象としたのではなく、取り上げは一部側溝周辺のものに限定された。土器溜りからは、土器以外に銅製品１点と鉄剣１本が伴出している。

土器は、時期の異なるものを多少含むものの全体的には、古墳時代初頭段階に比定される内容を示す。ただし量的に膨大であっても、ここに図化・掲載できたものはその内の一部にすぎない。

代表的な器種としては、壺、甕、高杯、鉢、器台が見られる。

壺は、弥生時代後期初頭の803、804にみられる在地産の長頸壺の系譜下に位置づけられる806の他は、他地域からの搬入品が多く見られ、それぞれに多彩な内容をみせる。

793は、外面にタタキ痕跡を残し、内面にはハケ目調整の後下半部についてヘラケズリにより調整がなされている。胎土中に角閃石・雲母を多く含む点において他地域からの搬入品としての可能性が考えられる。812は、外面にタタキ痕跡を一部に残し、胎土中には雲母を多く含む。805は、内面ヘラケズリの後この器種にあっては珍しくヘラミガキが横方向に施され、外面には使用に際してのものと考える籠目痕跡が部分的ながら観察される。807～809、835は、外面に丹の塗布が認められた。814は、外面肩部に櫛描による２本の沈線文とその間の櫛描波状文が施され、さらに口縁部の在り方、胎土中への長石、角閃石等の包含等により畿内系の土器と考えられる。812は、823・824・841・941と同様に胎土中に雲母・角閃石を含み、色調も橙色系統と共通しており、讃岐地方の下川津Ｂ類土器に比定されるものである。824は、外面タタキの後粗いハケメがなされ内面もナデとハケメによる調整が確認された。841は、頸部以下を欠損するため詳細は不明であるが、２つに大きく割れた破片に対して４か所に２孔一対による穿孔補修が認められた。

834は、長頸の壺を呈するが、調整は在地のものとは異なり、内・外面ハケを中心とした調整がなされる。他地域からの搬入品の可能性が高い。839は、口縁部を欠損するため形態的に判然としないが、内面のハケメ調整、外面タタキの後ハケメ調整および底部穿孔の状況は、これも他地域で生産され当該地方へ搬入されたものであろう。842は、外面粗いハケ調整の後ミガキによる仕上げ、内面は外面同様に粗めのハケメが残る。色調が灰白色を呈すること等、先述した「Ｓ」字口縁の甕と同じく東海地方からの搬入品と考える。944は、口縁端部が内傾気味に長く拡張をみせるものである。胎土中には雲母・角閃石を中心に多く含む。945は、胎土が水漉し状に砂粒の包含を見せないもので、外面にはタタキ痕跡が、内面にはナデによる調整

が認められる。951は、外面底部に粗いヘラケズリが残り、内面にはヘラケズリの後部分的に不定方向のナデが見られる。950は、口縁部が特徴的に複合する。内面にはヘラケズリの後ナデが施されている。なお、中には胴部に外から穿孔されているのが数多く見られた。

壺の中には、胴部に穿孔のあるものが比較的多く確認される。820・822・823である。いずれもが焼成後、ある段階で外面から内側方向に向けて穿孔されたことが知られる。ただし、839に認められる底部穿孔の在り方は、前者が祭祀的であるのに対して甑としてより生活に密着した在り方を示すものである。

甕は、内面ヘラケズリ技法により器壁が薄く仕上げられ、上方に拡張した口縁部とその外面に櫛描沈線文が施されたものを中心とする。吉備地方南部において当該期普遍的に見られる型式である。ただし、これまでこの器種には多く確認されていないタタキによる技法の痕跡が850、852・855・881等で部分的ではあるが確認され、この種の甕にも整形段階でタタキ技法が用いられていたことが窺われた。胎土中には、長石・石英を中心としたものが主流を占めるが、土器によってはそれら長石・石英以外に角閃石・雲母を多量に含むもの850・851・852・854・859・879・880・884も散見された。また、土器によっては胴部に穿孔の存在が849・855・859・885等において認められ、この傾向はこの種の甕以外にも外面にタタキを残した甕949の一部にも窺われた。穿孔は、いずれも焼成後に行われたもので外側から内側方向へ開けられていた。

高杯は、ほとんどが水漉粘土を胎土とする中にあって、865・867・893・894・892・907・908等には長石・石英・雲母・角閃石等の包含が見られた。傾向として在地製品と他地域からの搬入製品の違いを反映したものであろうか。特に、雲母を多く含む893・897・908等については、その感が強い。形態的には、868・910・895・892・897・899等が代表的な型式である。また脚部への穿孔数も4個から3個へと省略化が認められる。894は、形態的にもまた制作技法からみても在地のものとは判断されない。即ち、ゆるやかに内湾気味に斜め上方へと立ち上がる口縁部と、脚部内面には横方向のヘラケズリが認められる点である。

鉢には、大型で二重口縁と外面ヘラケズリによって特徴づけられる960と、口径13～16cmを前後する小型品が見られる。後者は、さらに器形・胎土等の違いによって細分される。口縁部の径に対して深さがこれと同規模か勝るもの932～937、口径が大きくて深さが浅いもの826・828～831・938・939である。さらに後者の場合おおむね外面にヘラケズリによる調整がなされることが多い。

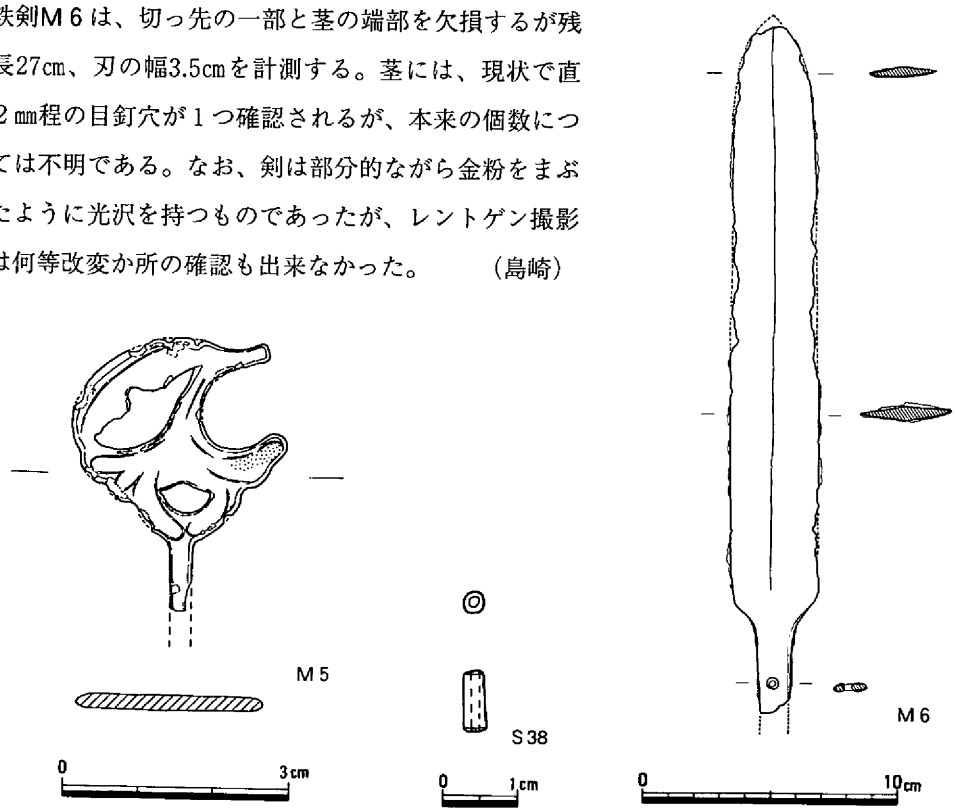
器台は、874・875～878・916～928等に見られる様にいずれも小型品である。胎土および器形的に在地でよくみられる874・922～928を除いてはいずれも鼓形を呈するものである。脚部内面ヘラケズリと口縁部内面ヘラミガキ、さらに916・917を除くものについてはほぼ全面

にわたって丹の塗布が確認された。916・917は、いずれも内外断面が灰白色を呈し、山陰甕の特徴ともよく符合する。874は、器形的には高杯を示すものの杯部中央部に脚部に貫通した穿孔が焼成前に開けられていた。胎土は929に角閃石が多く含まれていたが、他はいずれも水漉粘土である。

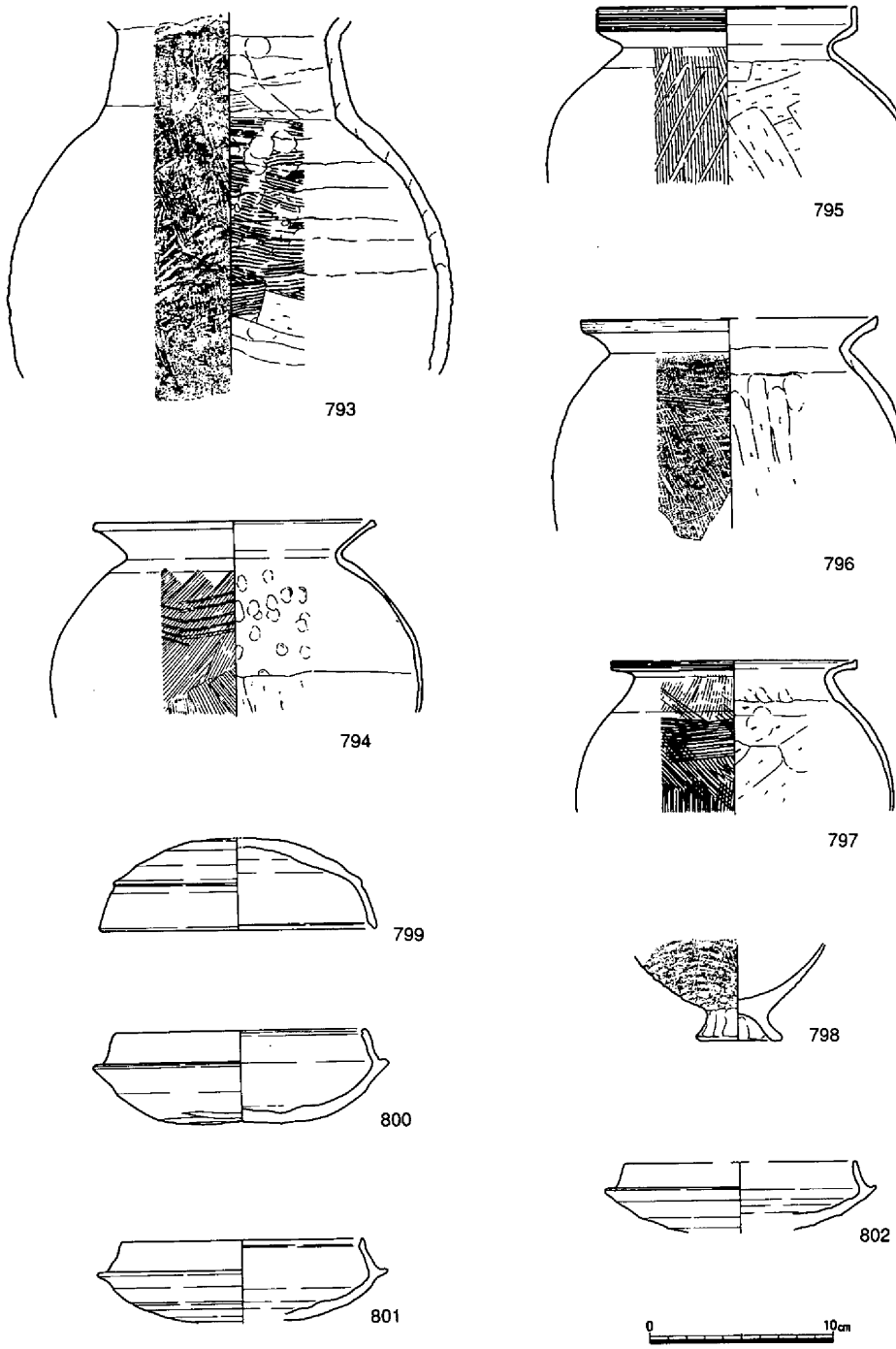
手焙形土器914・915は、いずれも鉢を母体としたものに天井部を片側方向に被せた形状を示す。914は、胴部内外面がヘラケズリ調整がなされ、内面にミガキを認めない。胎土中には石英・角閃石・雲母を多く含む。915は、914と同じく外面胴部にヘラケズリによる調整が粗く残され特徴的である。915の場合天井部および窓は、鉢口縁部の全体の約１／３程度に鉢口縁部を見せ、高さ10cmで他は天井部分の粘土で覆われている。なお、内面には被熱痕跡および煤等の遺存は確認されなかった。

銅製品Ｍ５は、土器中に１点単独で検出された。最長3.6cm、幅2.9cm、厚さ２㎜を計る比較的小さなものである。下位部茎状のところで欠損か所が確認されるのみで、他の部分については欠損等の痕跡は見られなかった。表裏には毛彫りによる文様が認められるが、性格は不明である。何等かの青銅製装飾具の透かしの一部であった可能性が高い。

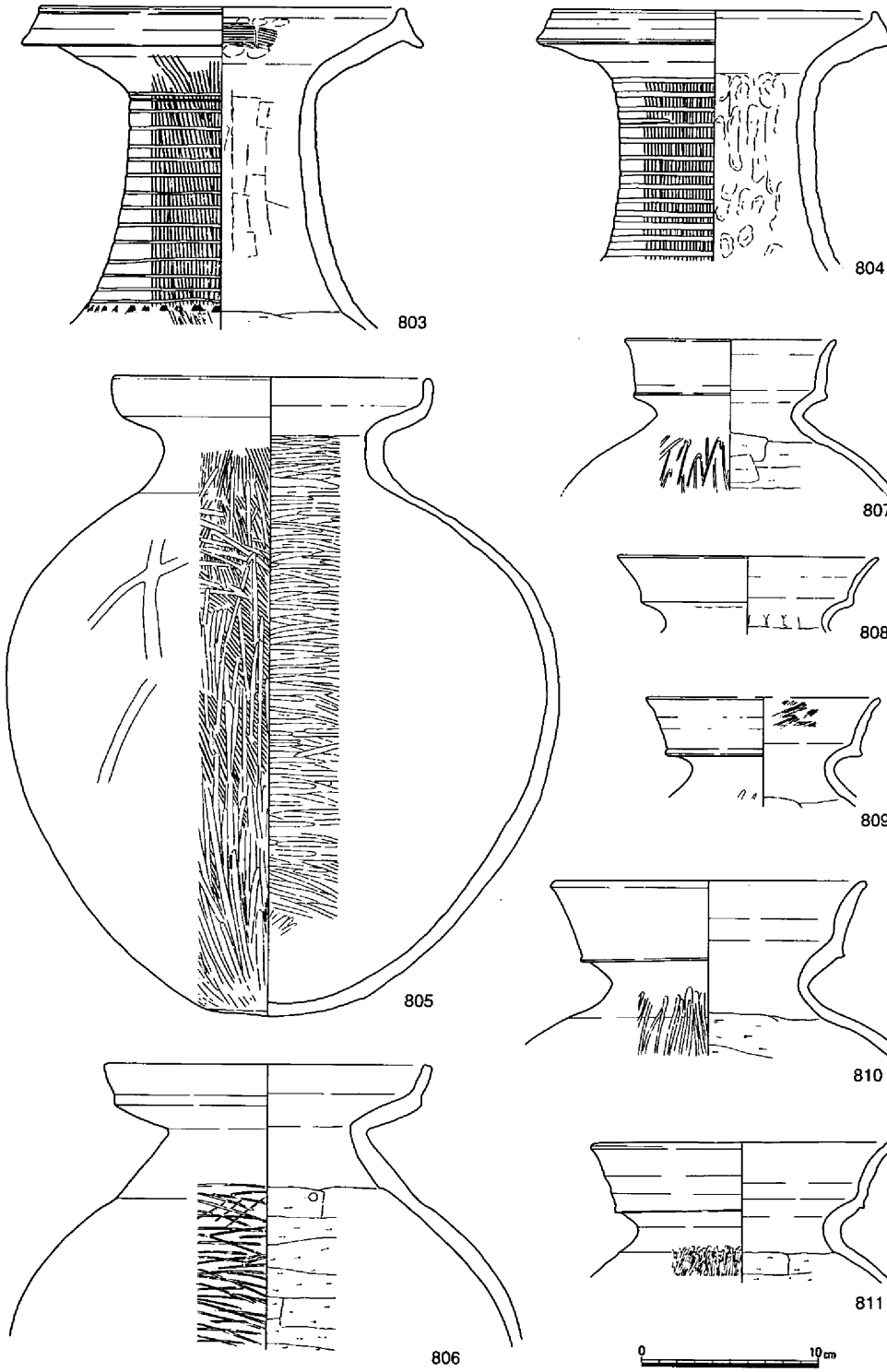
鉄剣Ｍ６は、切っ先の一部と茎の端部を欠損するが残存長27cm、刃の幅3.5cmを計測する。茎には、現状で直径２㎜程の目釘穴が１つ確認されるが、本来の個数については不明である。なお、剣は部分的ながら金粉をまぶしたように光沢を持つものであったが、レントゲン撮影では何等改変か所の確認も出来なかった。　（島崎）



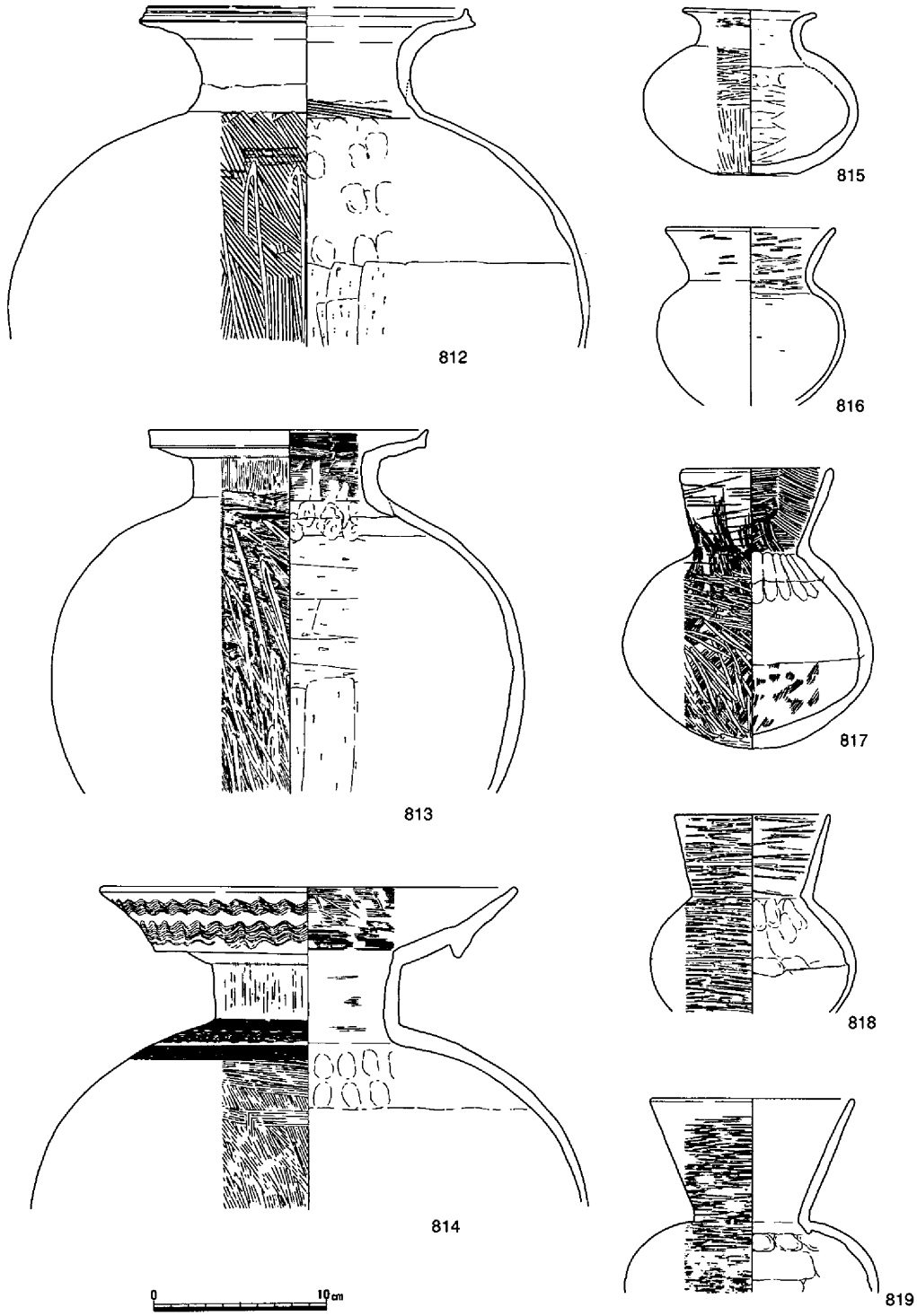
第155図　土器溜り出土遺物①（1/1・1/3）



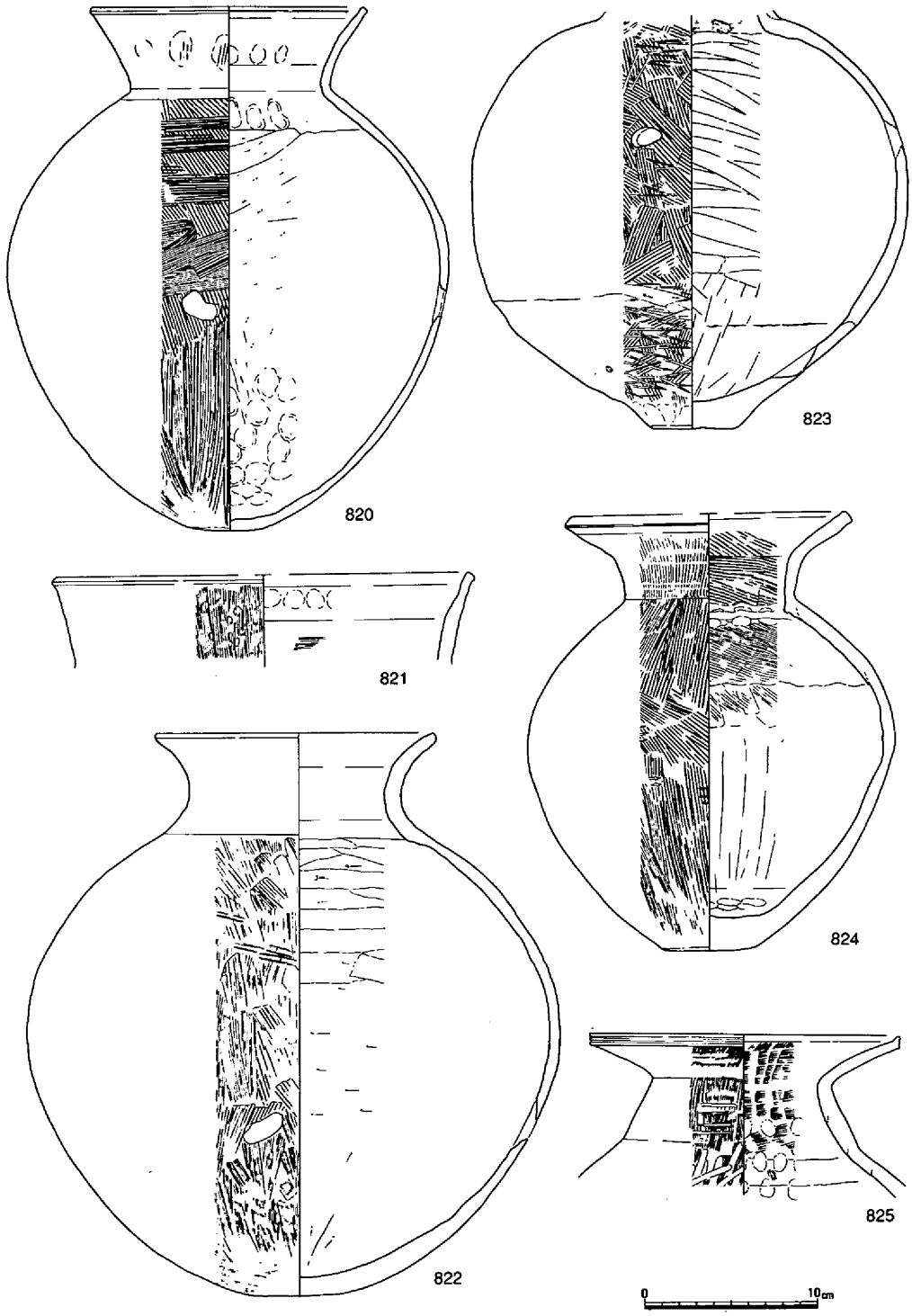
第156図　土器溜り出土遺物②（1/4）



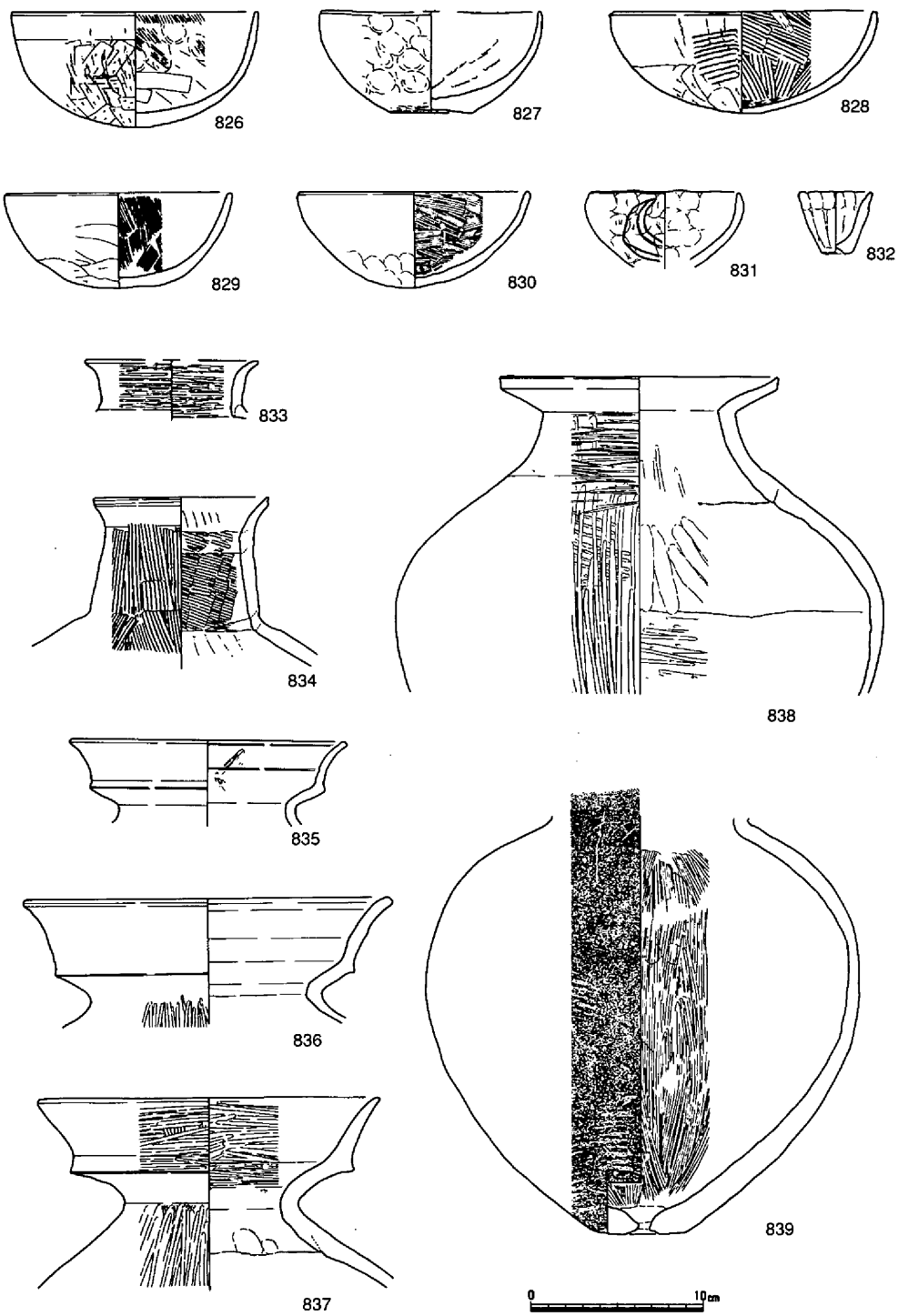
第157図　土器溜り出土遺物③（1/4）



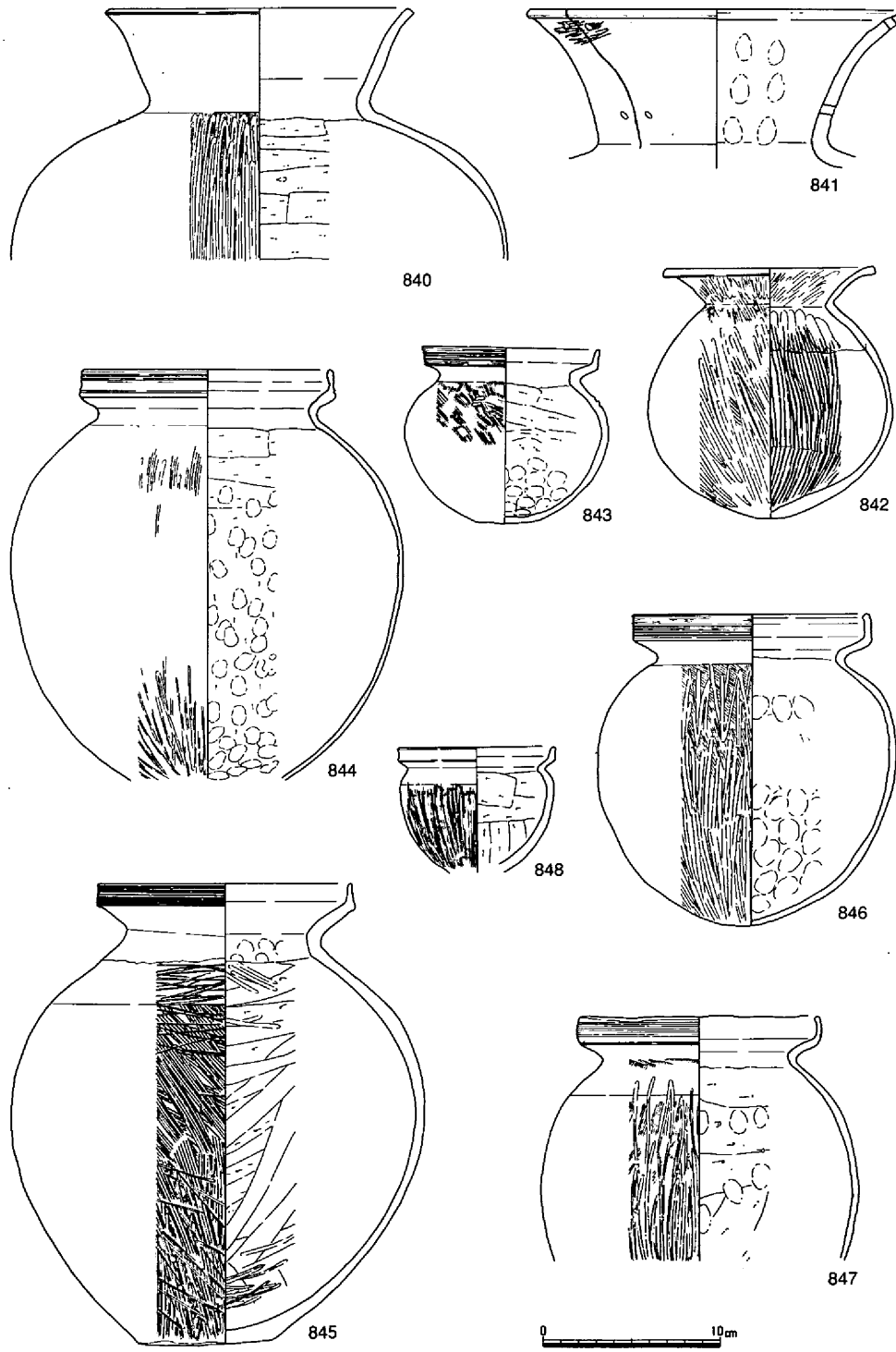
第158図　土器溜り出土遺物④（1/4）



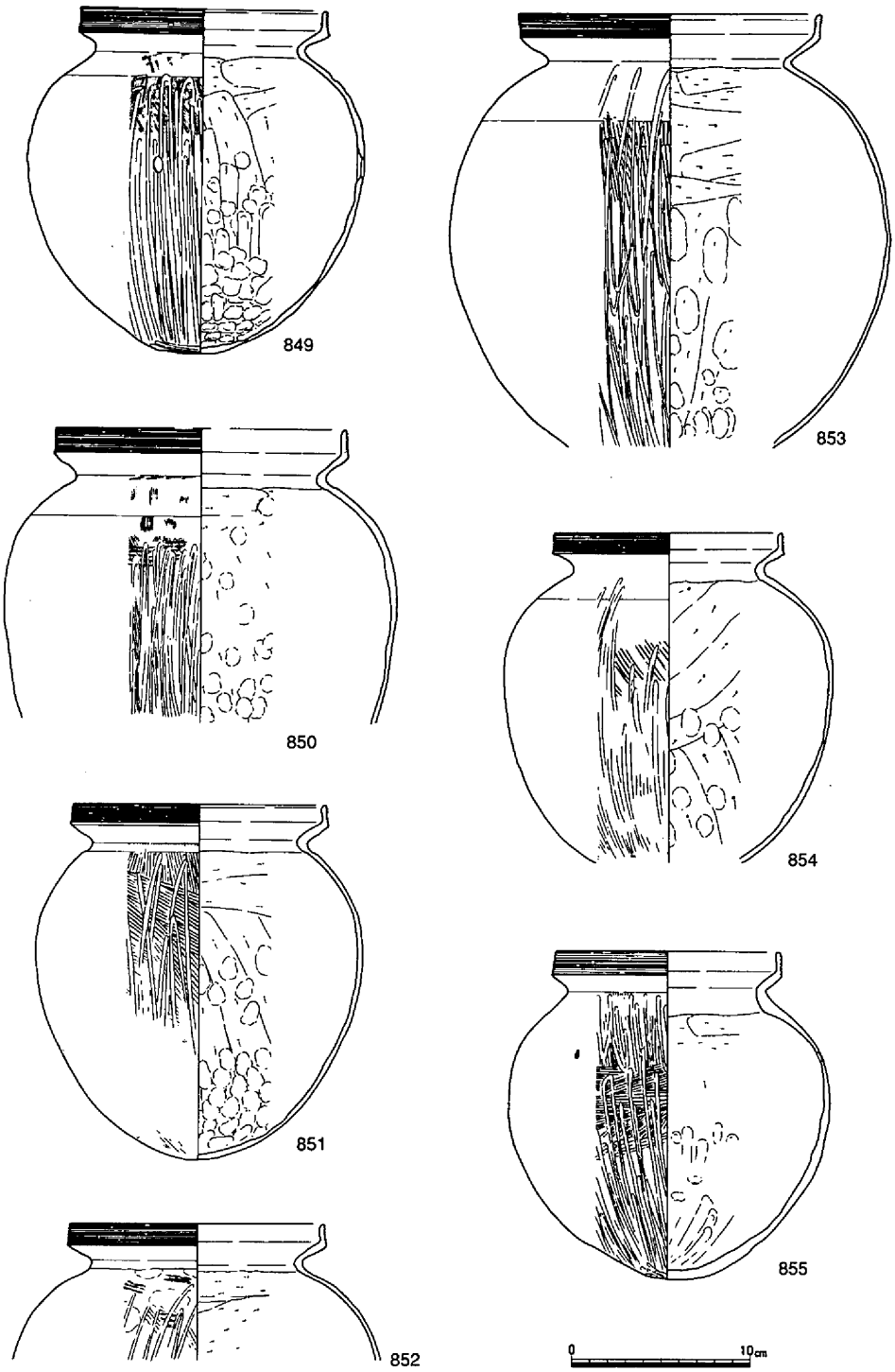
第159図　土器溜り出土遺物⑤（1/4）



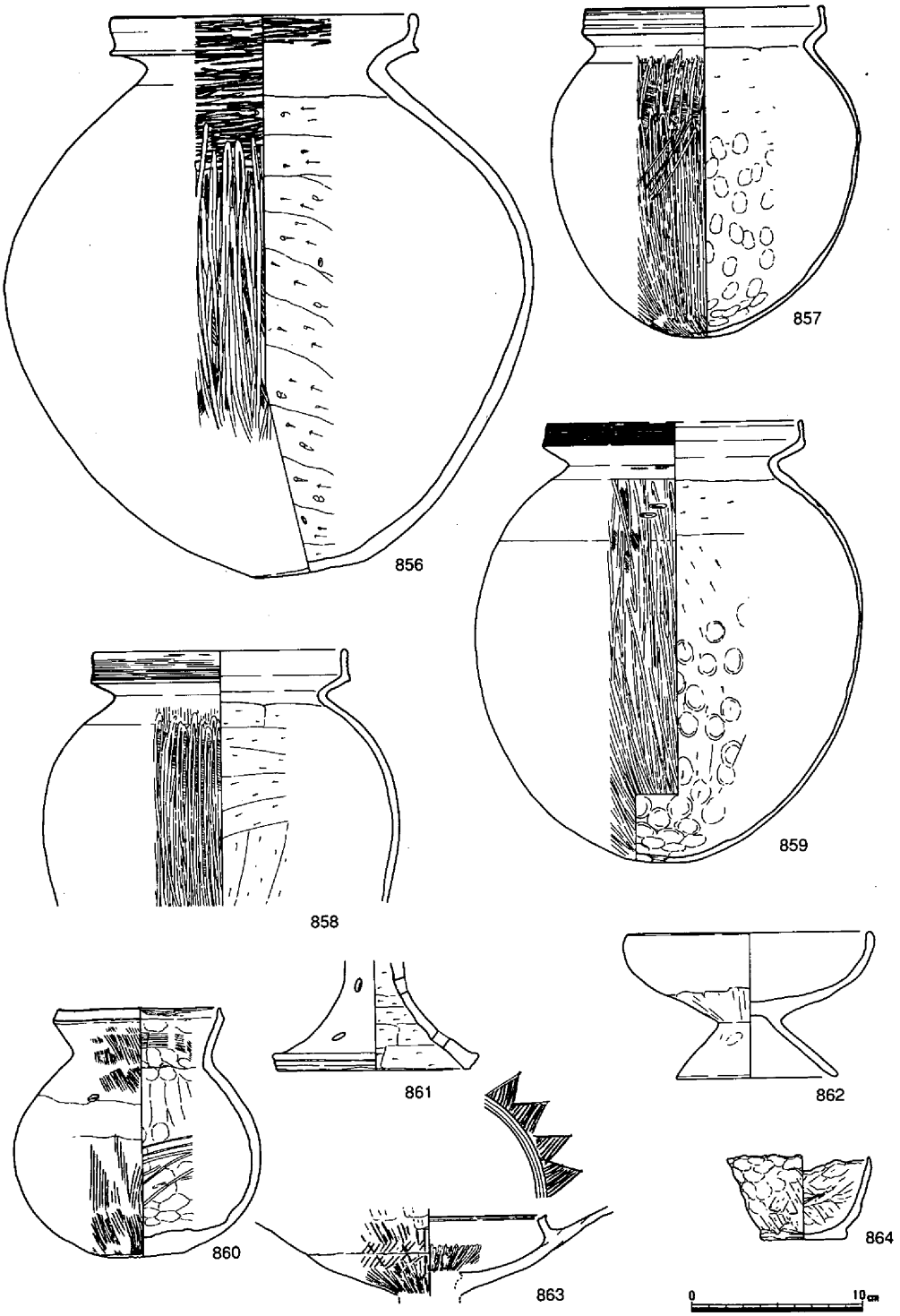
第160図　土器溜り出土遺物⑥（1/4）



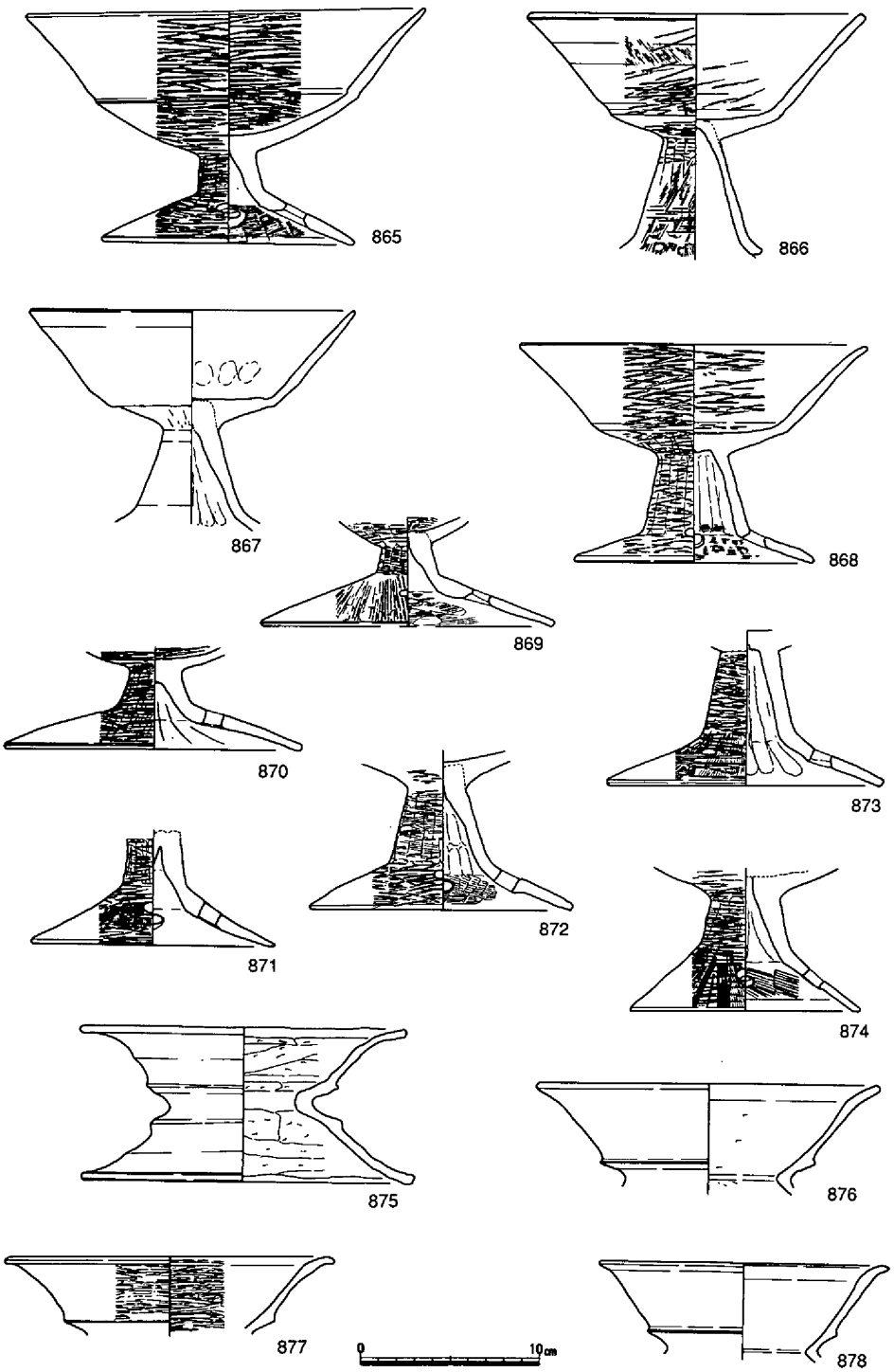
第161図　土器溜り出土遺物⑦（1/4）



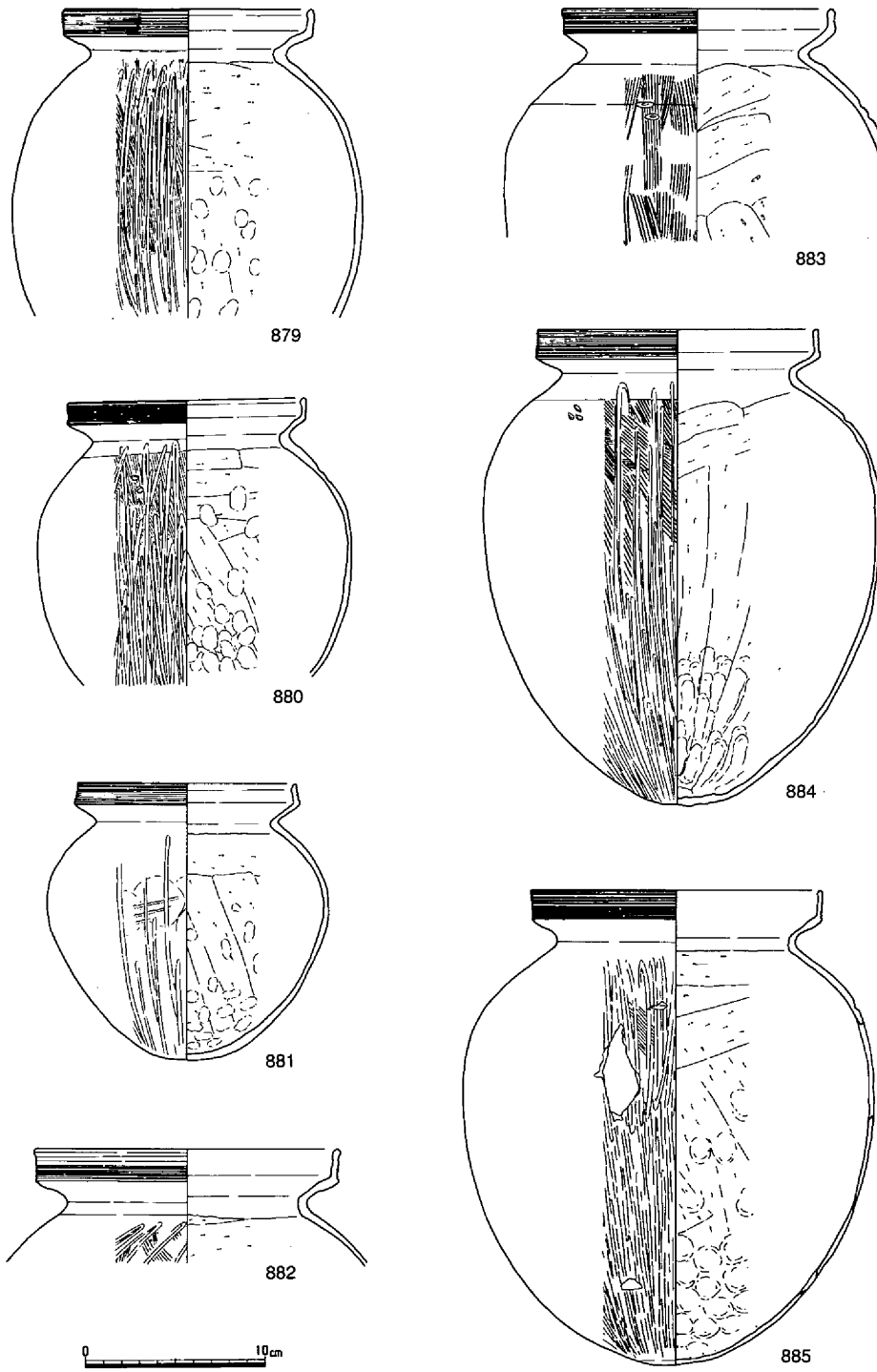
第162図　土器溜り出土遺物⑧（1/4）



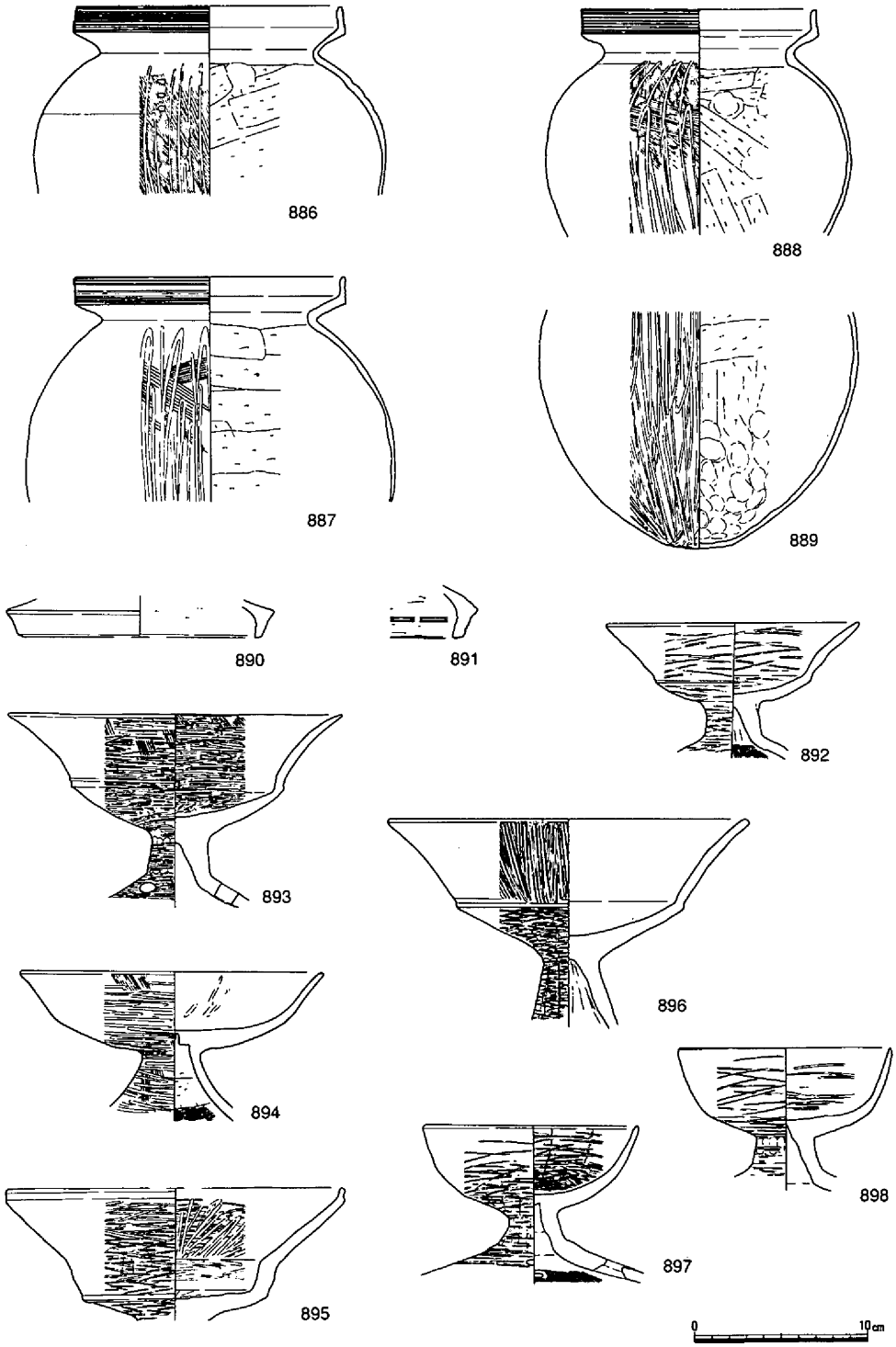
第163図　土器溜り出土遺物⑨（1/4）



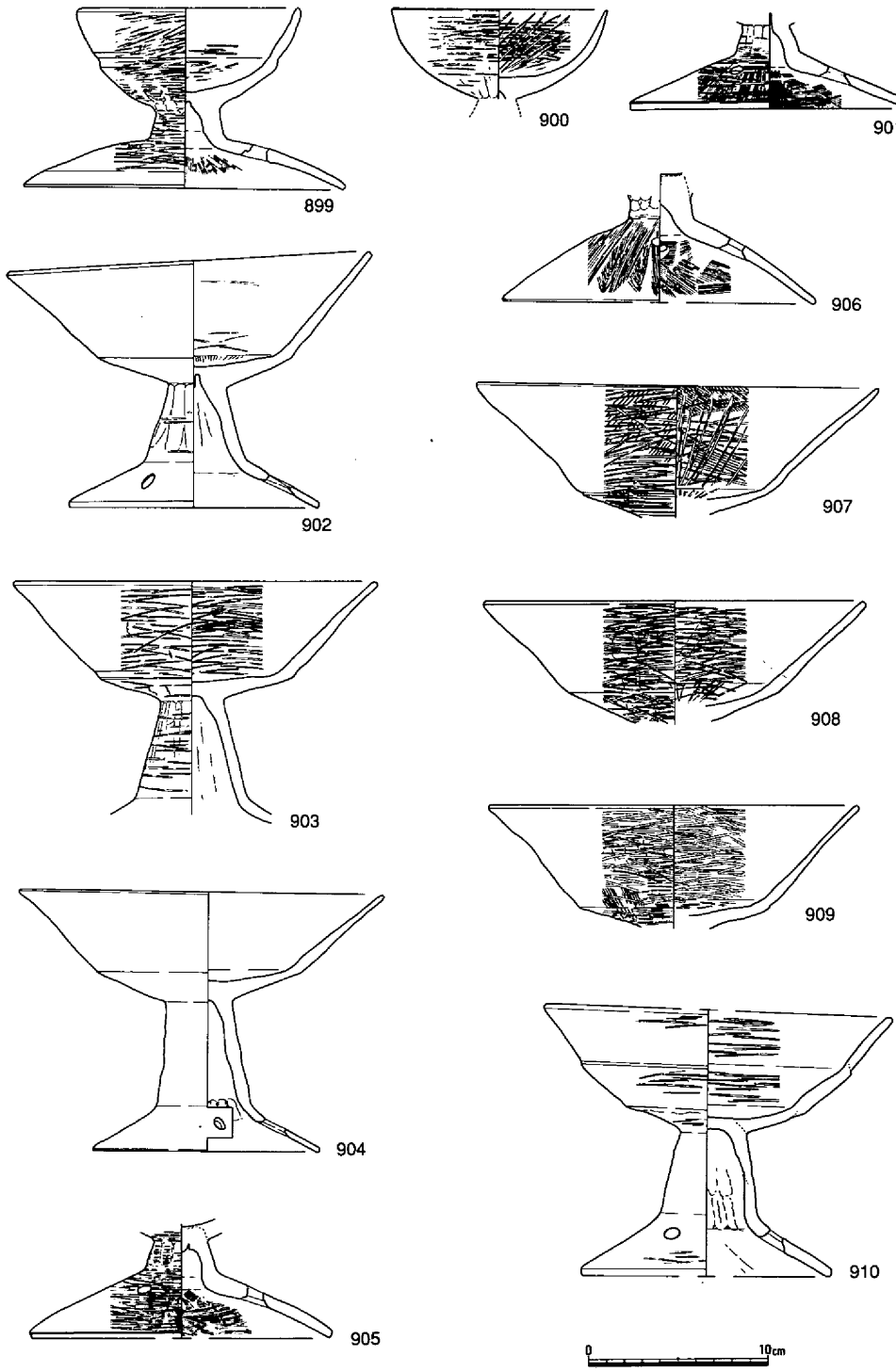
第164図　土器溜り出土遺物⑩（1/4）



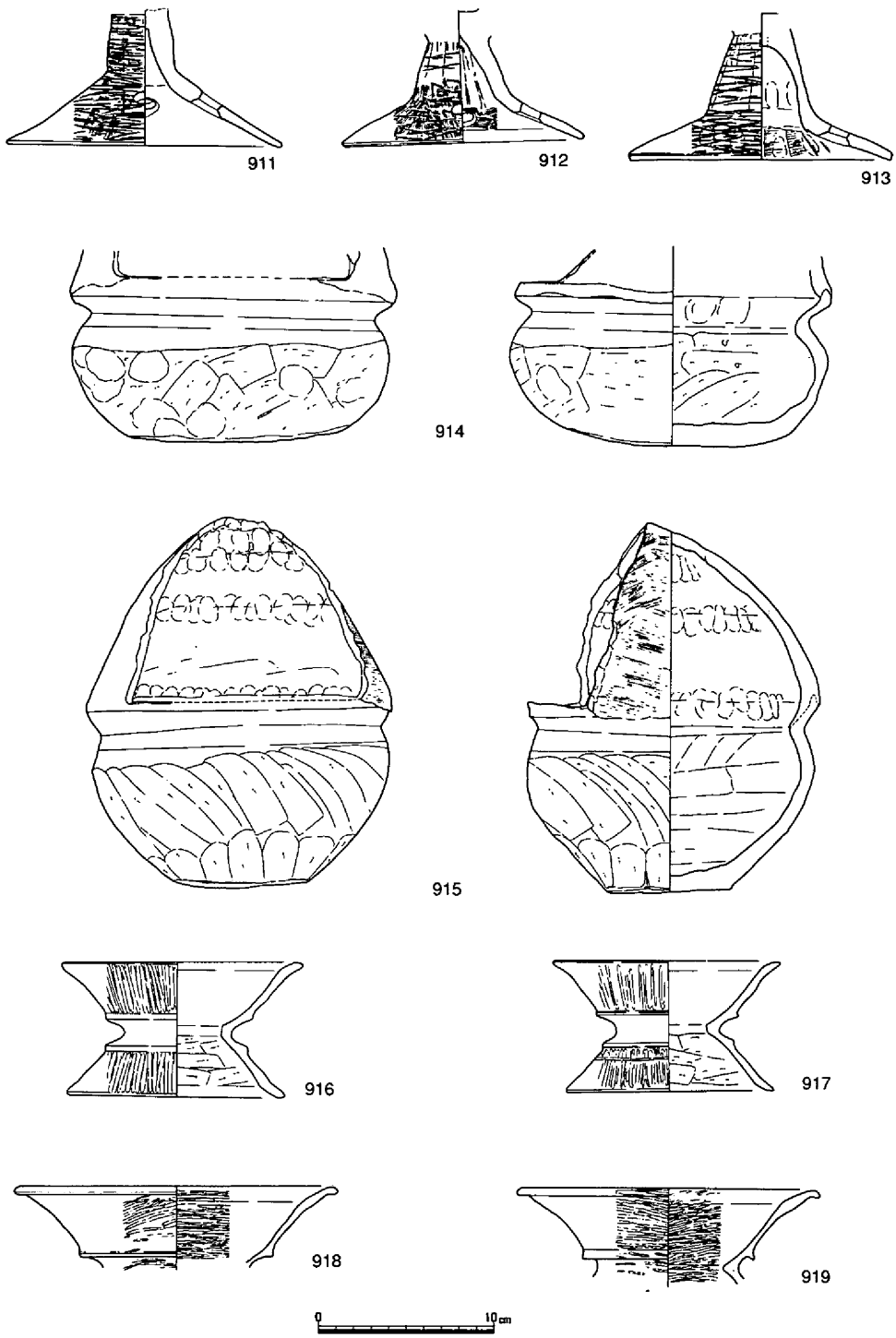
第165図　土器溜り出土遺物⑪（1/4）



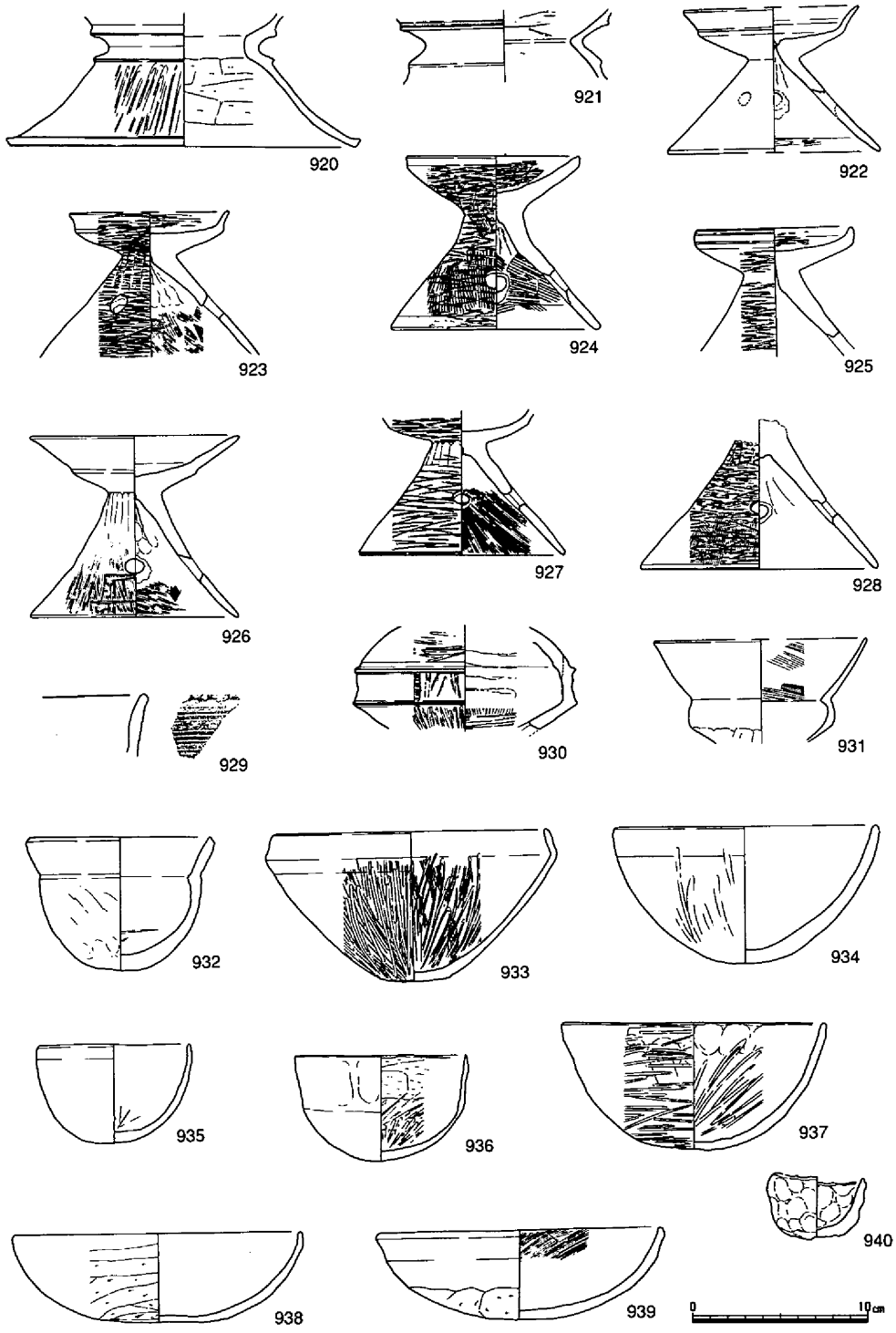
第166図　土器溜り出土遺物⑫（1/4）



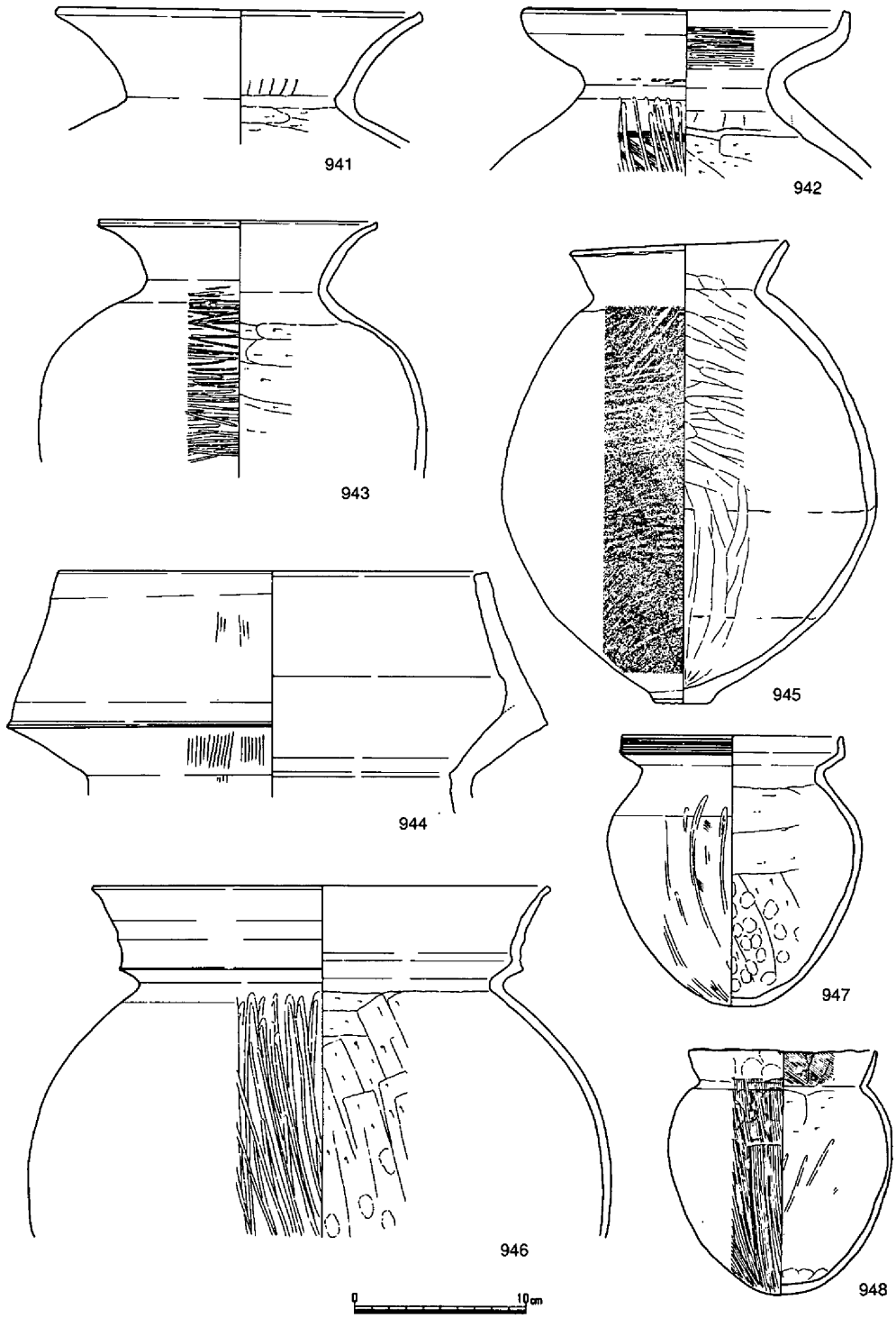
第167図　土器溜り出土遺物⑬（1/4）



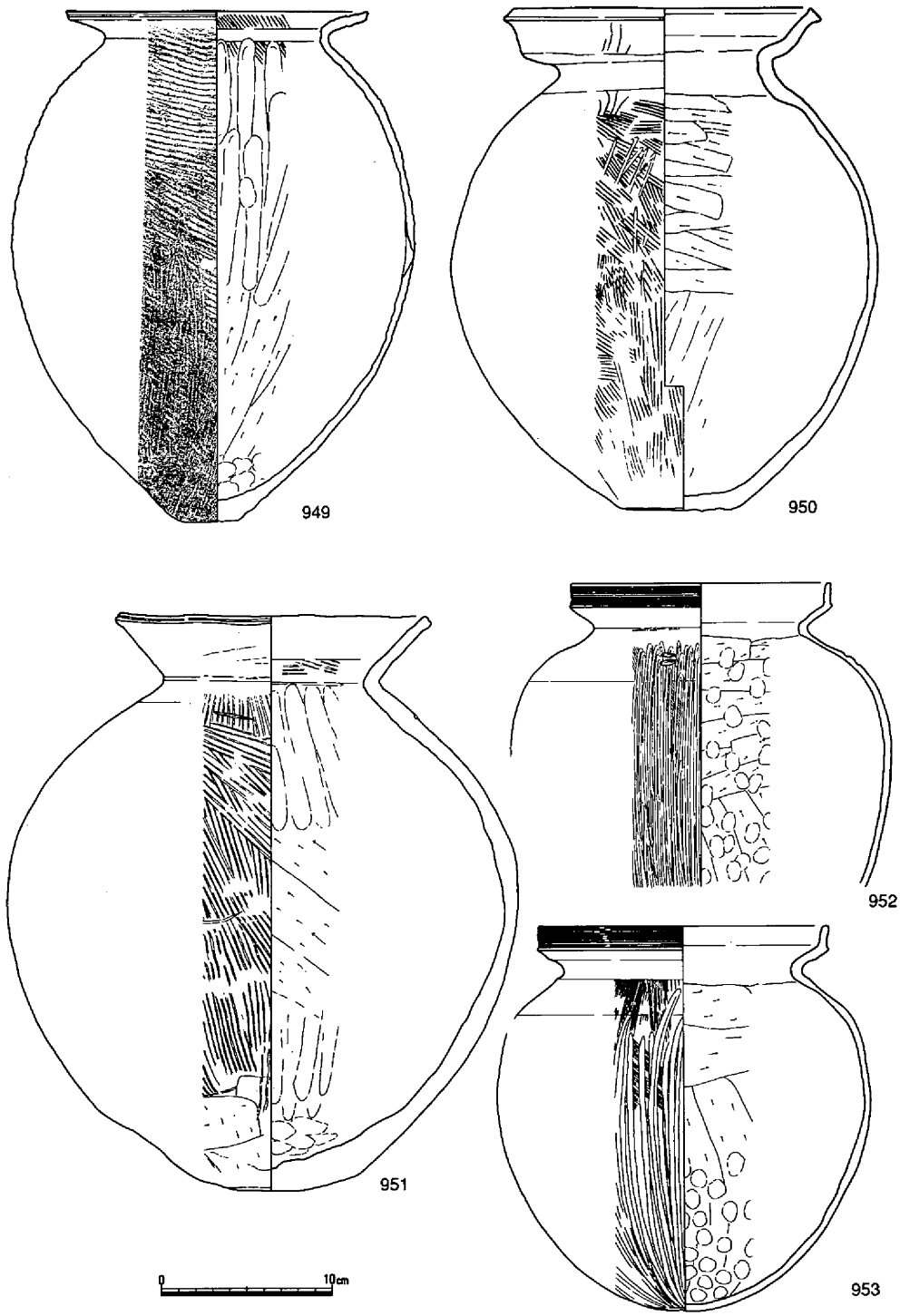
第168図　土器溜り出土遺物⑭（1/4）



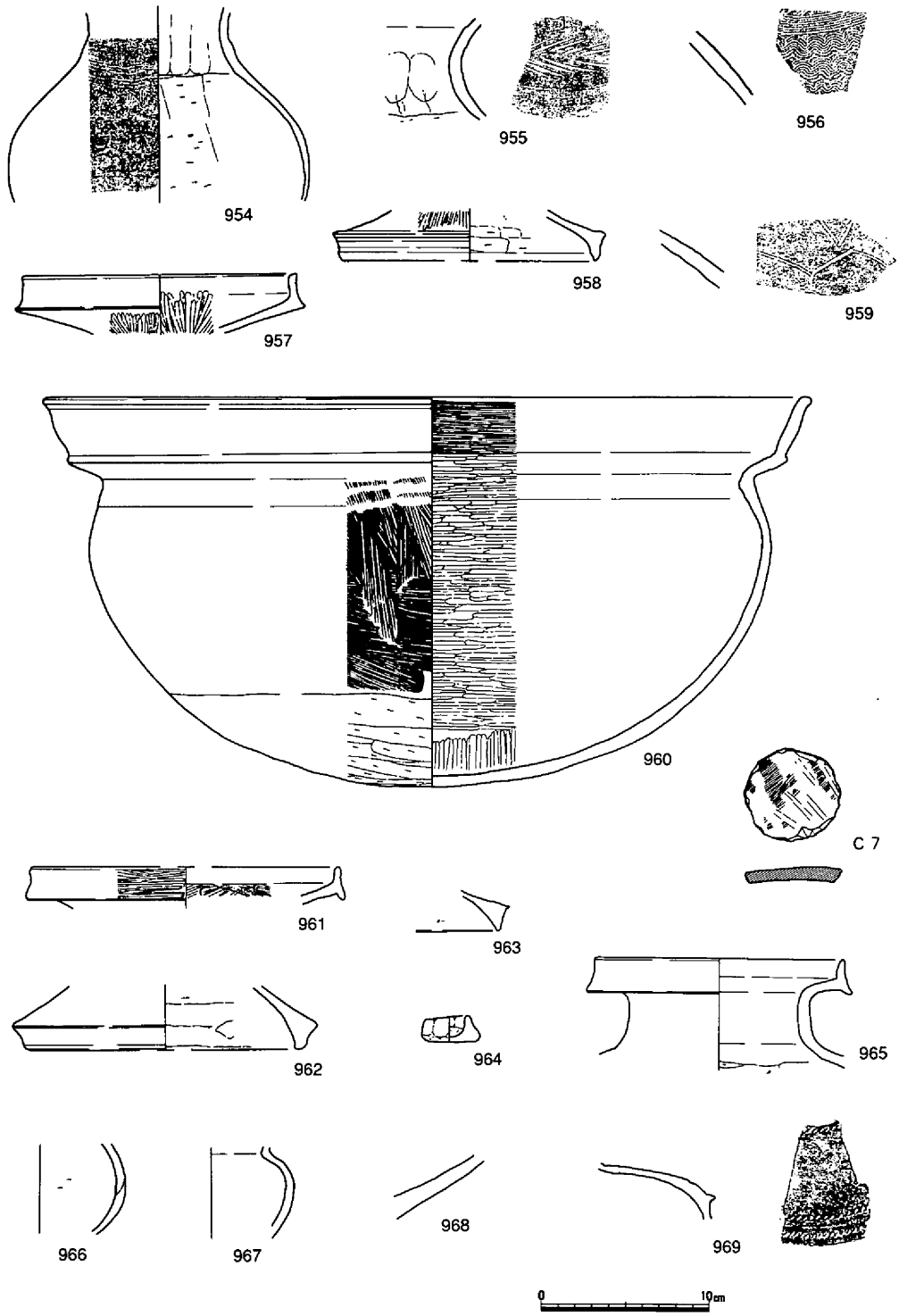
第169図　土器溜り出土遺物⑮（1/4）



第170図　土器溜り出土遺物⑯（1/4）



第171図　土器溜り出土遺物⑰（1/4）



第172図　土器溜り出土遺物⑱（1/4）

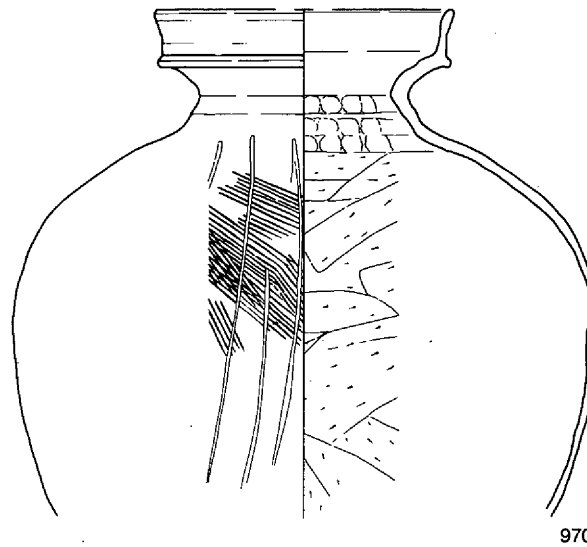
(6) **包含層出土の遺物**（第173～178図）

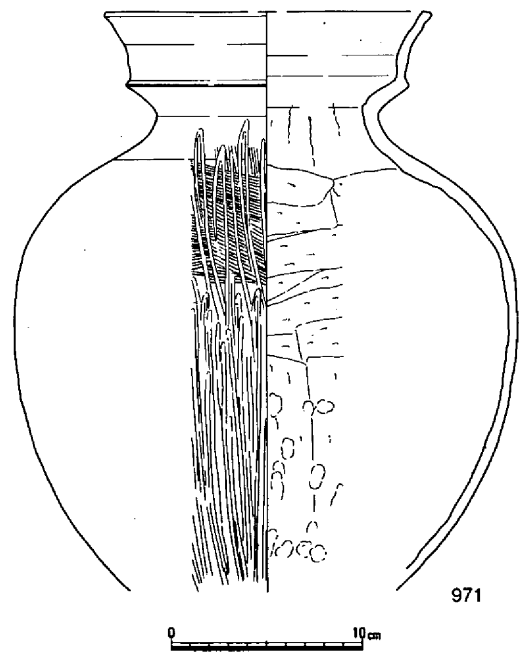
古墳時代前半期段階において遺構に伴わない遺物には、多量の土器をはじめとして石製品、土製品、鉄製品があげられる。

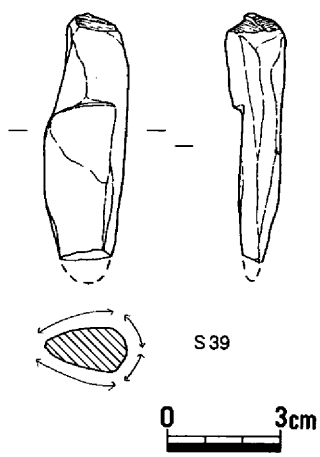
土器は、壺、甕、高杯、鉢、器台、手焙形土器、さらには小型の手捏製品が見られる。

壺は、在地産と考えられる970～972等の一群以外に一般に在地において多く見られない器形のものが抽出される。

前者については、短い頸部に軽く屈曲した後にさらに長く外方に伸びた口縁部および比較的明瞭な稜線を特徴とするものである。胴部外面には、板状工具による調整の後、ヘラ状工具で縦方向に反復したミガキが施されていた。内面は、ヘラケズリにより相当薄く器







第173図　包含層出土遺物①（1/2・1/4）

壁が仕上げられているのが確認された。973は、前者と同じく二重口縁をもった壺であるが、形態的に在地においてあまり見られない。974～976は、比較的長く立ち上がった頸部に大きく斜め上方に伸びた口縁部を有するもので、肩部外面には櫛描きによる波状文等の装飾が付けられている。畿内地方からの搬入品であろう。977は、長い頸部から直接外反する口縁部へとつながる形状を見せるもので、外面には斜め方向のタタキが粗く残されている。胎土中には長石の他雲母を含む。978は、途中でやや膨らみをもった直立気味の頸部に僅かに外反する口縁部をみせる。胴部外面ハケメで内面ヘラケズリ調整は在地に一般的にみられる技法であるが、器形的には在地に見られない。胎土中には長石を中心とし、これに雲母が含まれる。979は、西部瀬戸内地方からの搬入品と考える。980・981は、いずれも頸部との接点から頸部・口縁部にかけて大きく外反するものであり、胎土中には角閃石・雲母が多く含まれる。

甕は、これも壺と同様に在地産と他地方からの搬入品に分類される。前者は、形状の違い、同じ形状であっても大きさの違いなどによって細分される。形状の違いは、即ち時期差に言い換えられる。982～983・985・986・991は、僅かに上方に立上がった口縁端部外面には櫛描文が施され、体部最大径を肩部におきそこから底部へと径を減少させる。そして底部にはまだ平底が意識された形状および調整が見られる。一方、これに対して984・987～989・992は、口縁部の形状および調整は同じでも体部の在り方において著しく相違点が見られる。体部における最大径の底部近くへの移動であり、縦方向のヘラミガキ調整の省略化傾向もしくは省略である。土器型式での下田所式と亀川上層式の差である。搬入品については、外面にタタキを残し内面がヘラケズリ調整でない、ハケメ・ナデ等による調整を指標にみた場合、ここでも抽出される。990は、小片のため判然としないが、口縁部が受口状を呈している。993～995は、「く」字状の口縁部をもったもので、外面にはタタキ痕跡が粗く残る。内面は、993が押圧とナデ、994が比較的粗いハケメである。995は、ケズリ後押圧およびナデとなっている。996は、内面にヘラケズリ、外面に部分的に横方向のハケメが見られるが判然としない。

高杯は、いずれもが水漉しされた粘土を胎土として使用したものである。

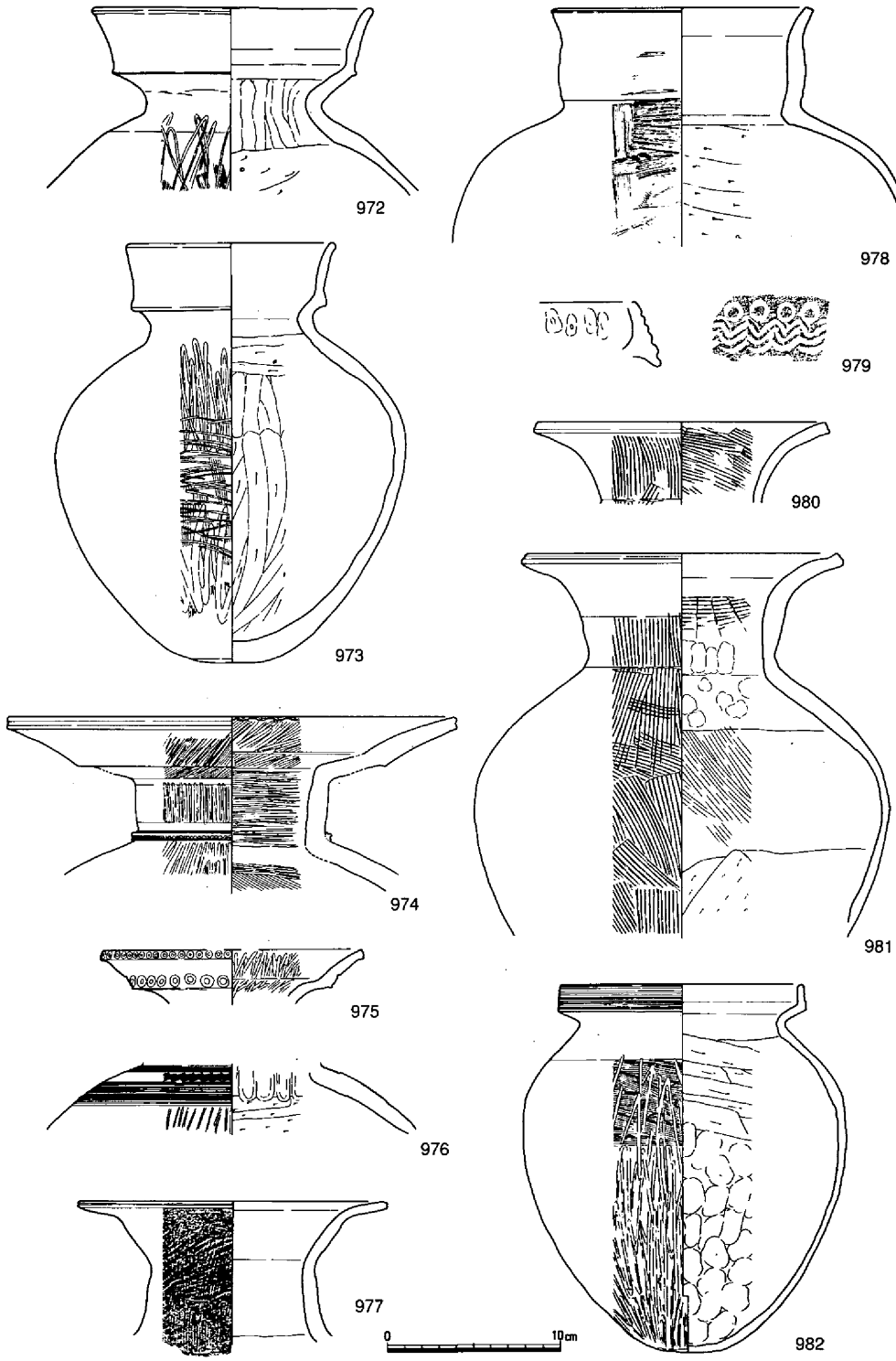
鉢は、大型製品と小型製品が見られる。前者は、口縁部が二重になったもので同時期の壺、甕に共通した在り方をみせる。後者は、器壁が比較的薄く仕上げられたものである。

器台は、1011を除く1012～1015が山陰地方特有の鼓形を呈し、外面には丹が塗られていた。

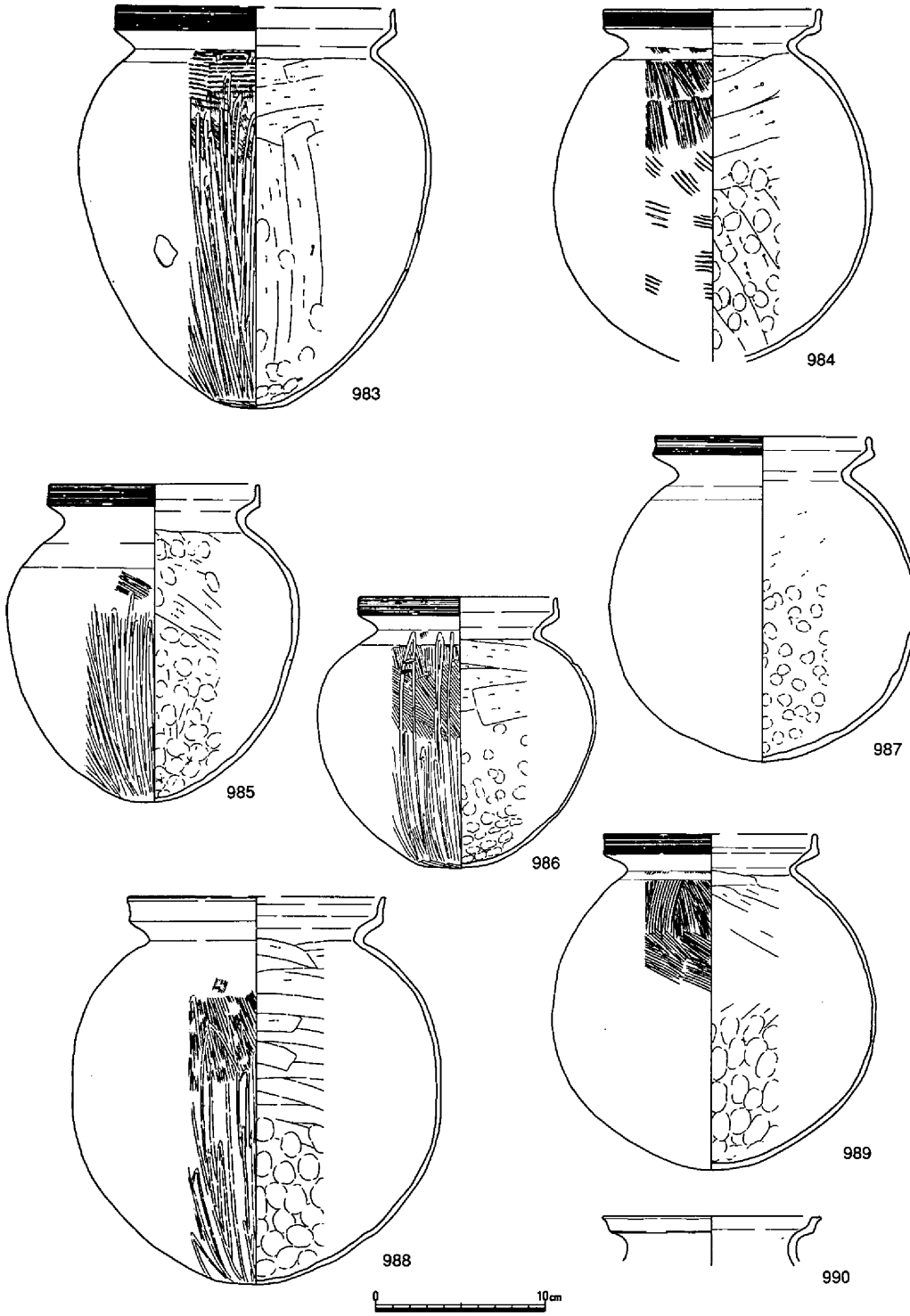
手焙形土器は、覆部の一部にすぎないが端部を上下に拡張して得られた面には２条の粘土の貼り付けによる加飾が認められる。

石製品Ｓ39は、斑岩を全面加工したもので、一辺を切断し他の部分に刀子状に刃を削り出している。土製品には、支脚Ｃ９が見られる。

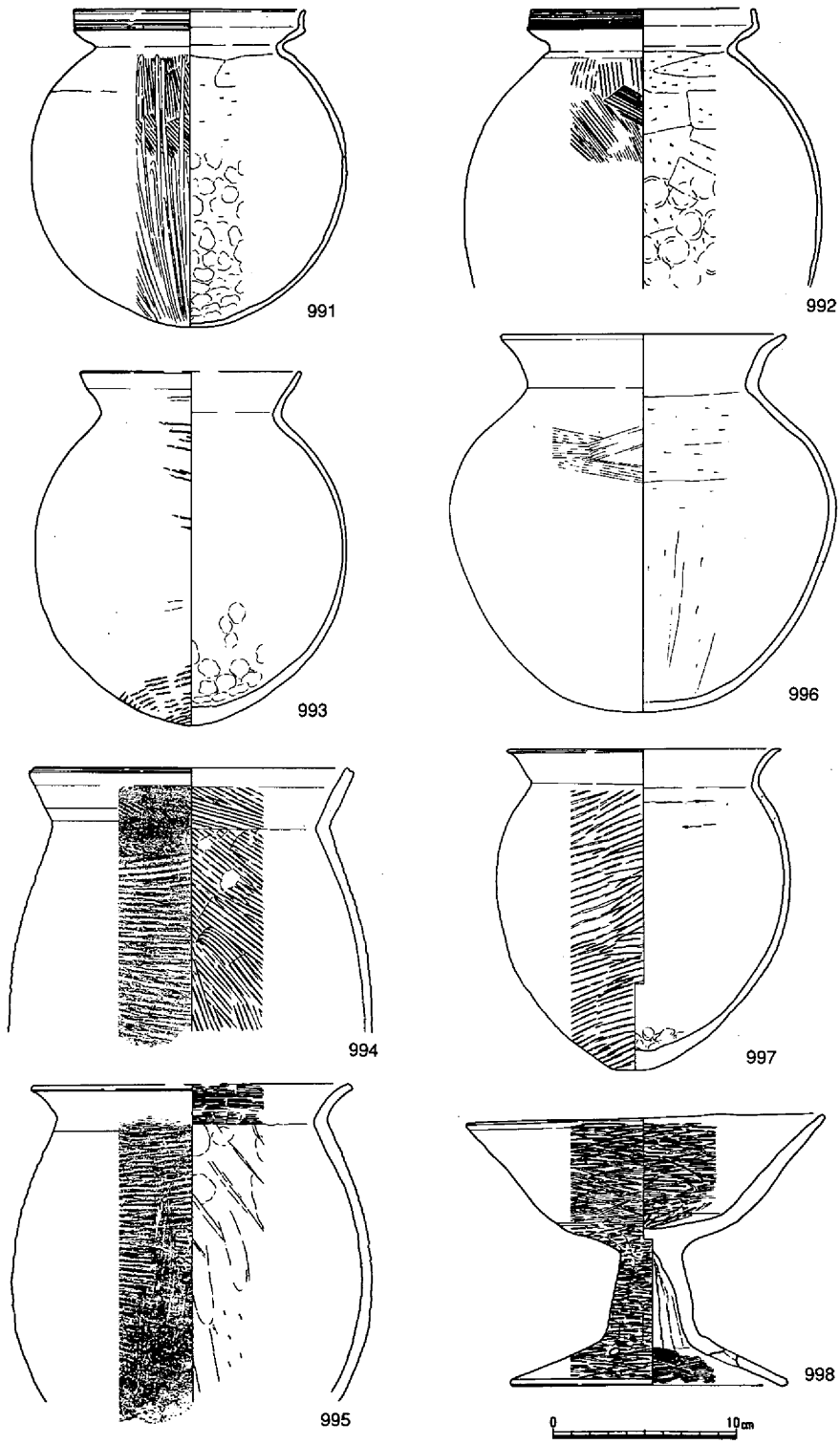
鉄製品Ｍ７は、鎌で折り返し部を欠損する。　（島崎）



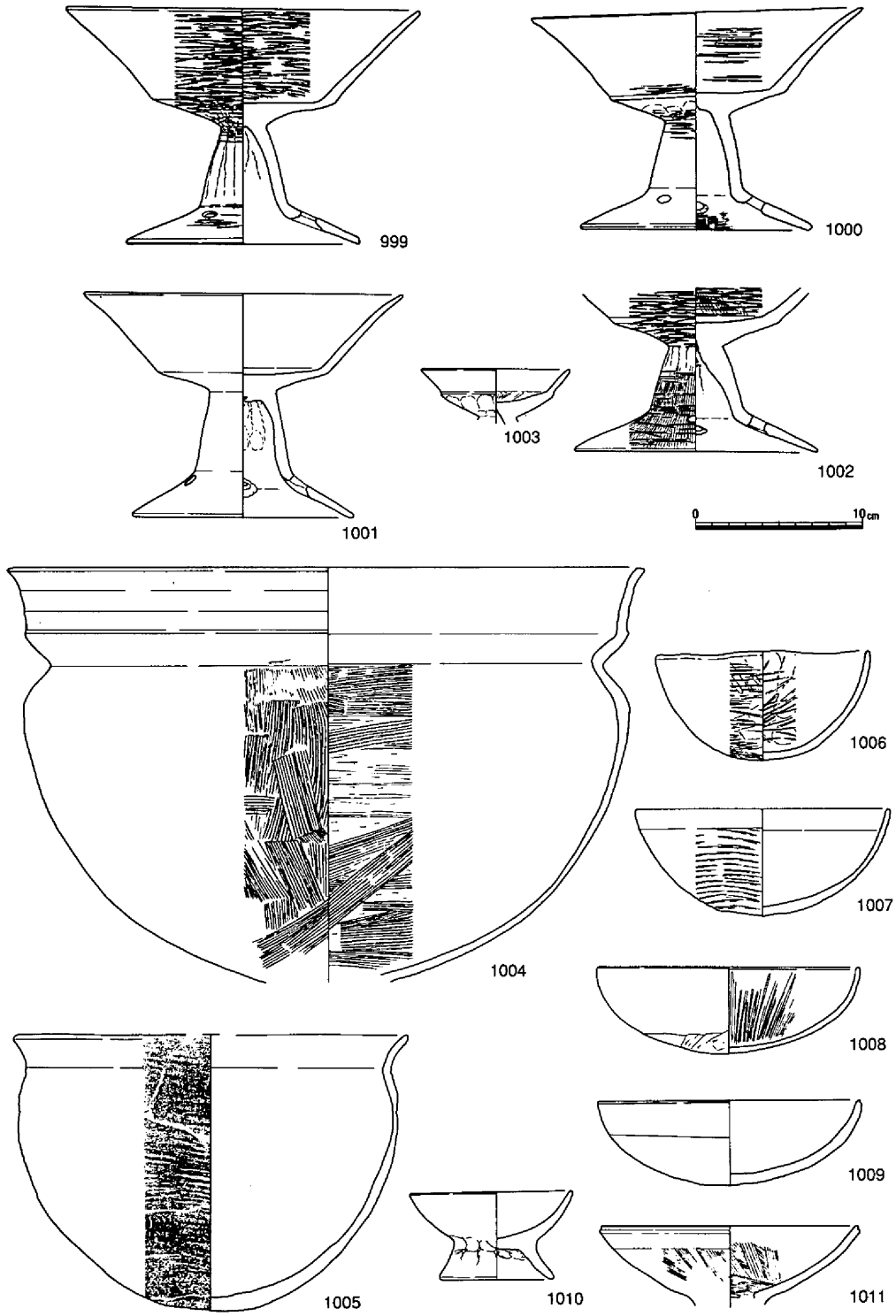
第174図　包合層出土遺物②（1/4）



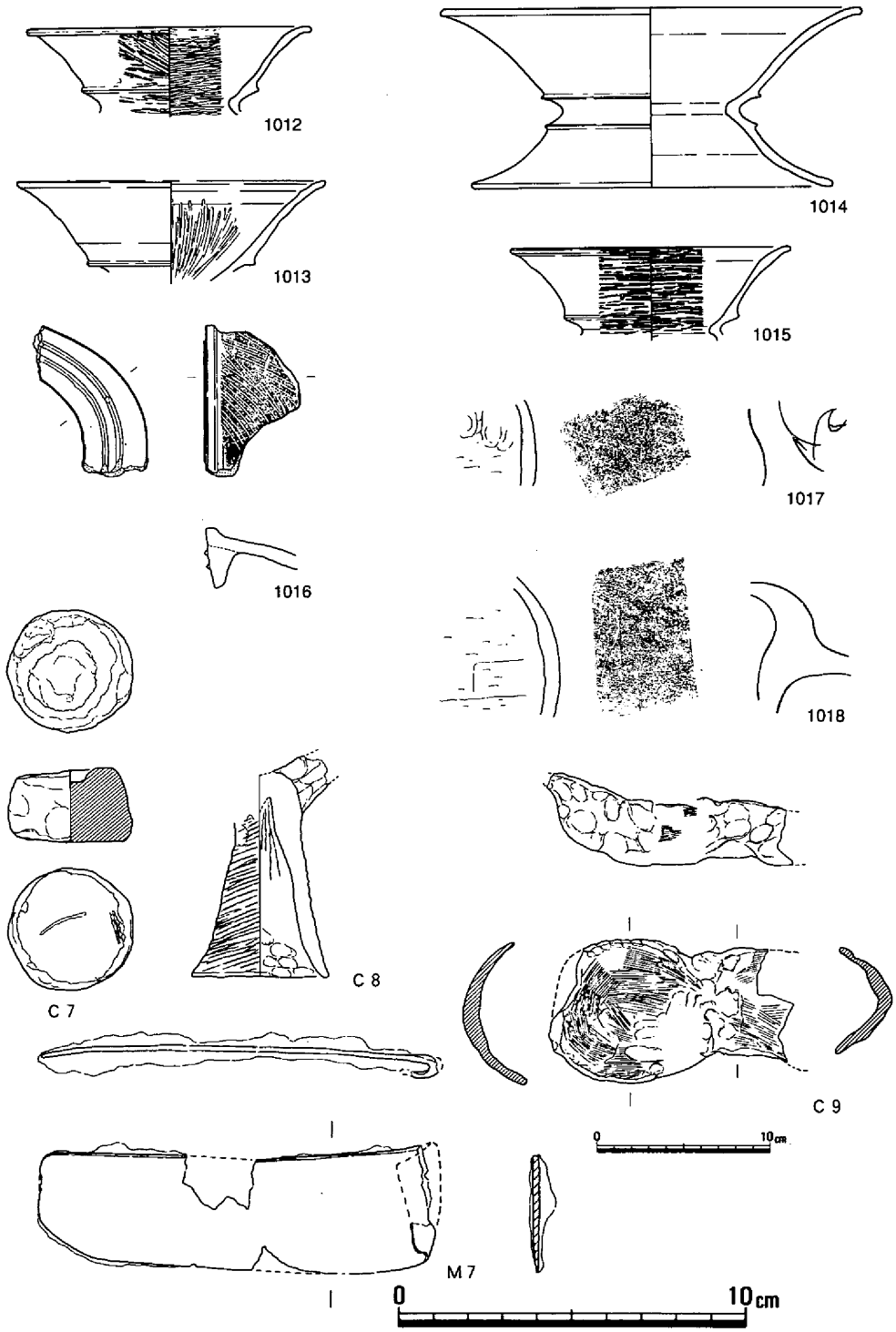
第175図　包合層出土遺物③（1/4）



第176図　包合層出土遺物④（1/4）



第177図　包合層出土遺物⑤（1/4）



第178図　包合層出土遺物⑥（1/4・1/2）

第4節　古墳時代後半期～古代の遺構・遺物

(1)　土壙

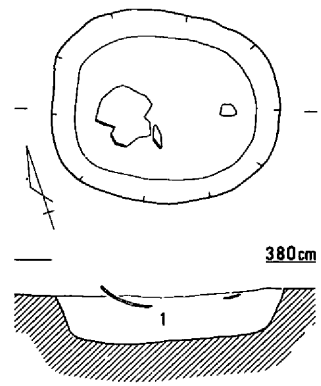
土壙36（第179・181図）

第1調査区の北半部において海抜3.70mで平面の確認がなされた。平面形は、楕円形を呈し、規模は長軸1.30m、幅65cm、検出面からの深さ16cmを測った。

壙内からは、埋積土中に焼土の混入が多く認められた。

出土遺物としては、土師器の甕の胴部片が1点みられたが、時期を明示させるものではなかった。

胎土の状況から判断すると、古墳時代後期後半期のおおむね6世紀前半頃のものと認識された。

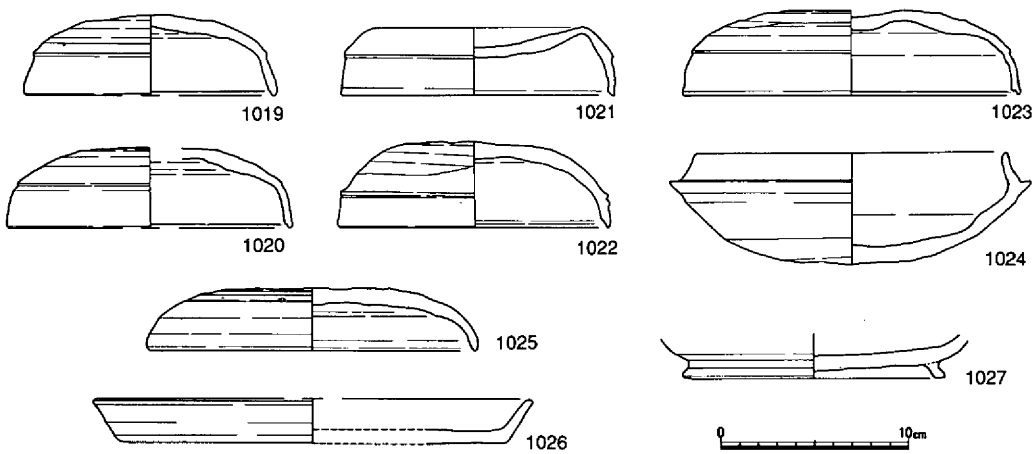


第179図　土壙36（1/30）

(2)　包含層出土遺物（第180図）

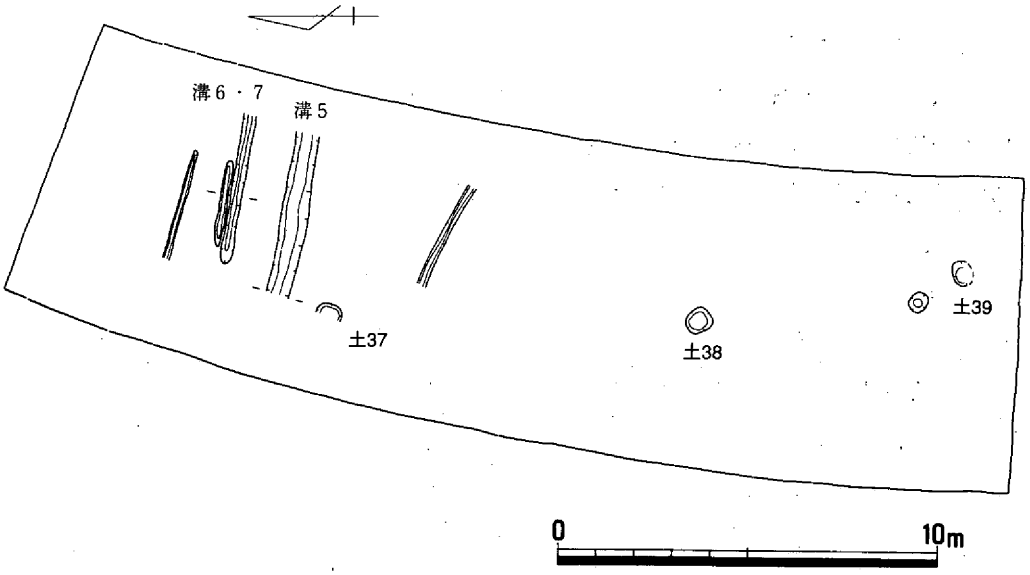
須恵器の杯身・杯蓋等の存在が散見された程度で量的には多くなかった。

中には杯身に高台をもつもの等、奈良時代に比定される土器の存在が調査区の中でも第1調査区の北側に多く認められた。調査区の北約1kmに所在する津寺遺跡から検出された一連の役所的な古代遺構との関連が示唆される。　　（島崎）



第180図　包含層出土遺物（1/4）

第５節　中世の遺構・遺物



第181図　中世検出遺構全体図（1/200）

(1)　土壙

土壙37（第181・182図）

第１調査区の北側において西側約１／３が調査区外に跨がって検出された。推定される平面形は、円形でおそらく径70cm前後の規模にあったものと考えられる。検出面からの深さは23cmを計測した。

出土遺物には、土師器、須恵器等の小破片が認められた。

時期は、14世紀頃に比定されよう。

土壙38（第181・183図）

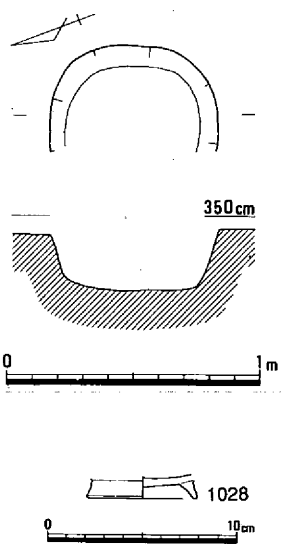
第１調査区の南半部において海抜3.55mで検出された。

平面形は不定形ながら隅丸方形を、また断面浅い皿状を呈する土壙であった。規模は、長辺68cm、単辺65cm、深さ６cmを測った。

時期は、出土遺物がなかったことで判然としないが、状況から土壙37とほぼ同時期として認識される。

土壙39（第181・184図）

第１調査区南端部に検出された土壙で、南側一部が側溝で



第182図　土壙37（1/30）
・出土遺物（1/4）

切られていた。

平面形は、東西方向に長い長楕円を呈し、長軸70cm、幅50cm、深さ10cmが推測された。

出土遺物は、土器の細片が認められるにすぎず、時期判断の明確な目安となる遺物は検出出来なかった。ここでは埋積土の状況によりおよそ中世としての位置づけを考えたい。（島崎）

(2) 溝

溝５（第181・185図）

第１調査区北半部において調査区に直交した、東西方向に伸びる溝である。

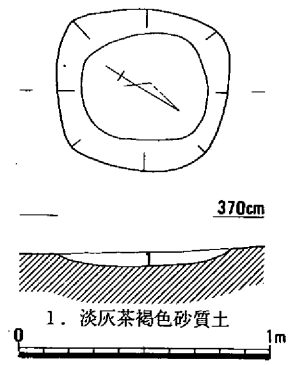
平面の検出は、海抜3.80ｍでなされた。規模は、幅80cmで深さ25cmを測り、断面形態は逆台形を呈する。

時期は、溝に伴う遺物が細片で図化出来なかったが、土師質椀の存在が確認されたことで、上述の土壙37と同様中世と考えられる。

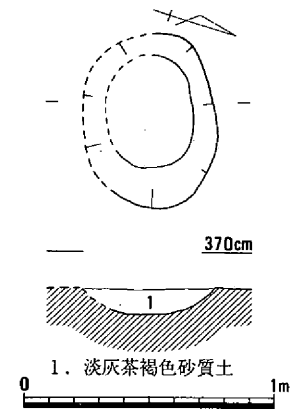
溝６・７（第181・186図）

第１調査区北半部に位置する。溝５の北約２ｍに近接して検出された。検出面の海抜は3.70ｍで、２条が密接した状態で検出された。本来の溝掘開面はさらに上位にあったものと思われる。

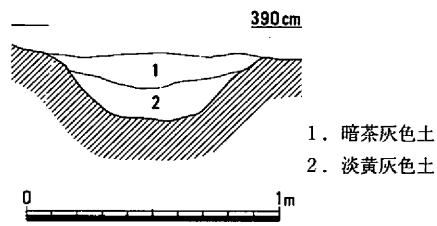
いずれの溝からも遺物の明確な検出はなされず、時期の詳細は不明である。但し、埋積土の状況から判断するかぎり、中世段階に比定されよう。（島崎）



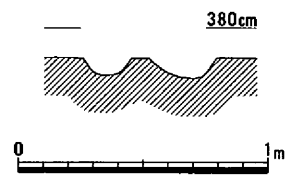
第183図　土壙38（1/30）



第184図　土壙39（1/30）



第185図　溝５（1/30）



第186図　溝６・７（1/30）

第６節　近世の遺構

近世の遺構は、第３調査区においてのみ検出された。

足守川加茂Ａ遺跡における当初の調査計画によれば低位部改修掘削部分は全面を調査の対象としたが、調査の見直し段階で全面調査は回避され、擁壁工事部分と低位部改修掘削部分のうちの一部が調査の対象となった。

第３調査区は、このうちの低位部改修掘削部分の一部調査区である。しかも、削平の深度がおよそ海抜3.30ｍまでと浅いことで、調査の対象は近世の水田に限定された。

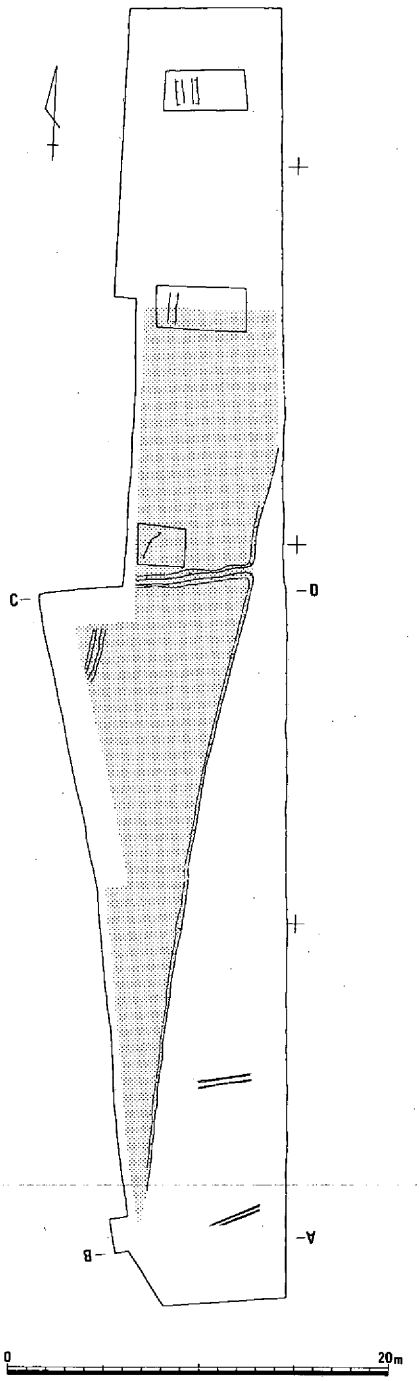
水田は、南北68ｍを測る第３調査区のなかにあって、東から派生してきた微高地をおよそ南北方向の肩を境に西側を一段低く掘開・削平して耕地面を形成していた。

水田としての耕地化は、海抜3.65ｍで西側にむけての掘開および削平が土層断面（第188図）において水田の肩より約60㎝下層に整地面が確認された。

水田層は、整地面より約15㎝の厚さに遺存していた。

この水田は、水田層上層に部分グライ化はみせるものの基本的に砂質土の堆積が見られ、洪水によるものと推測された。

堆積砂除去後水田には、南北方向にのびた肩に直交する状態に畦畔１本が取り付いているのが確認された。またこの畦畔は西に約８ｍの所で分岐し、水田の肩のラインに平行した方向に畦畔１本が検出された。しかし、水田の肩に直接取り付いた畦畔から南部分については、少な



スクリーントーン：水田

第187図　第３調査区水田遺構全体図（1/400）

くとも34ｍまでの区間には存在が認められず、水田自体は南北方向に長い長方形の区画形態にあったことが推測された。

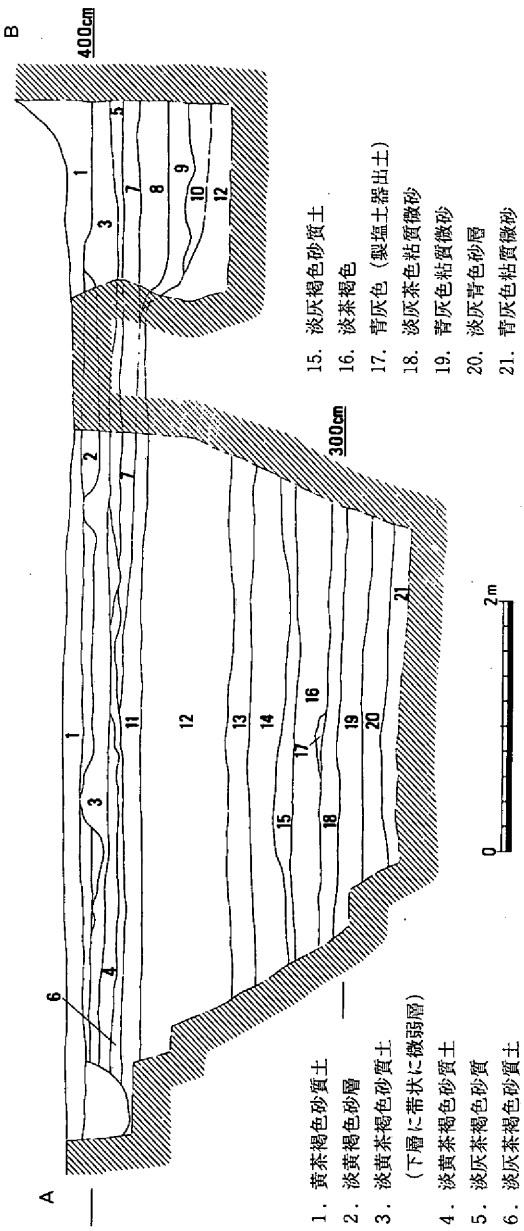
畦畔は、下端幅60～70cm、上端幅約30cmと幅は比較的広く、高さは約10cm程度と低いものであった。

畦畔の断面は２層よりなり、上層に鉄・マンガンを多く含んだ淡茶色粘質砂が、下層には灰黄色粘質砂が認められた。

水田の時期は、土器の出土が備前焼の小破片１点のみで判然としないのであるが、おおよそ近世として差支えないものと推測される。

なお、予定調査終了後対象となった地点での下層の状況を知るべく３か所についてトレンチによる確認調査を実施した。

これによると下層には、土器の出土がなかったことで断言はできないが、溝状の遺構が確認されたことで第１・第２調査区程度ではないにせよ近世以前の遺構の存在が推測された。（島崎）



第188図　第３調査区南端部土層断面図（1/60）

第7節　結　　語

現在の足守川左岸に展開する遺跡の在り方は、近年岡山県教育委員会による山陽自動車道建設[1]、県道三本木線建設[2]に伴う調査や岡山市教育委員会による三手幼稚園建設[3]、加茂小学校改築[4]に伴う調査などによって遺跡の実態が明らかになりつつある。特に岡山市加茂を中心とする遺跡の在り方をみると、弥生～奈良時代の遺構が多数検出されており、また重要な成果を得ているのである。

加茂A遺跡は、これらの遺跡に近接する位置にあることから、密接に関連するものと思われる。ここでは、確認された成果をもとに本遺跡の性格をまとめてみたい。

1．遺構の変遷について

足守川加茂A遺跡は、おおよそ現在の黒住橋が架かる位置である。調査対象地区は足守川左岸の低水路擁護壁部分（第1、2調査区）と流水路掘削部分（第3調査区）の2地点であり、調査は大規模な遺跡に長大なトレンチを設定するようなものであった。

調査の結果、本遺跡は微高地を立地基盤とする集落であり、竪穴住居、土壙など数多くの遺構が検出された。調査に先立つ確認調査、立会などによって、今回の調査区の北、西、南は微高地が徐々に下がっていくことを確認しているため、遺跡の中心はやや東になると想定された。本遺跡で最も古い遺構の時期は弥生時代後期前半であるが、遺構数は極めて少なく、居住区域としての本格的な利用が未だなされていなかった。後期後半段階になると遺構数は増加し、古墳時代初頭～前半期に遺構数がピークに達する。しかしながら、亀川上層期の大洪水によって集落が廃絶し、古墳時代後半までは遺構が存在せず、古墳時代後半以降になって土壙、溝、水田等の遺構がみられるようになるが、住居は確認されていないため、古墳時代後半以降は居住区域として利用されなかったようである。

2．遺物について

本遺跡では土器を含め多種多様の遺物が出土している。とりわけ、遺物の量では弥生終末～古墳時代前半期の土器が他を凌駕するが、なかでも絵画土器、石杵、青銅製品、卜骨は注目される遺物である。

絵画土器は2点116・271が出土している。116は竪穴住居14の床面直上、271は包含層から出土した。116は弥生時代後期後半の器台片で、線刻文様構成については、前節において詳述したが、出土例からみて、胴部文様は竜を表現しているものと思われる。271は複合口縁を呈する弥生時代終末期の壺の口縁部に描かれたものである。116と同様に複数の文様構成がみられるが、全ての表現意図の解明は困難であるが、上方には家もしくは船、櫂などを表現してい

ることが確認できる。船とするならば、船体両端の舳先は左右が反る、いわゆるゴンドラ形の小船である。石杵は4点出土している。いづれも、竪穴住居内から出土しており、時期は下田所期、亀川上層期のものである。付載所見によれば、水銀朱、ベンガラ用の2種類の石杵であったことが判明している。また、内面に朱が付着している土器（大型の鉢）が出土していることから、この集落での赤色顔料の製造、使用が明らかとなった。青銅器M5は古墳時代初頭の土器溜まりから出土した遺物である。外面には毛彫り状の文様が施される特異な遺物で、形態からみて青銅製の装身具あるいは祭祀用具の一部の可能性をもち、技法とともに用途、性格は不明である。卜骨は竪穴住居21の上層に古墳時代初頭の土器とともに堆積した貝層内から出土した。鹿の肩甲骨で、表面には6か所の焼灼痕が認められた。卜骨による農作物の農凶など各種吉凶を占っていたことが伺える。

このように、本遺跡では祭祀をもとり行なう集落の一端を明らかにすることができたが、足守川加茂B遺跡などともに、弥生時代後期後半～古墳時代前半期はこの地域における拠点的な集落として存在していたものと思われる。（松本）

註

(1) 昭和62年度～平成2年度にかけて、発掘調査を実施した。調査結果については、順次報告書が刊行されている。
岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90」　1994年3月
「岡山県埋蔵文化財報告」19　1989年、同20　1990年、同21　1991年

(2) 「岡山県埋蔵文化財報告」22　1992年、同23　1993年、同24　1994年

(3) 岡山市遺跡調査団　「三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告」　岡山市教育委員会　1981年

(4) 昭和62年度に発掘調査を実施。報告書未刊。弥生時代後期～室町時代の遺構が検出されている。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂A遺跡

（本　　文）

１９９５年３月20日 印 刷
１９９５年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　岡 山 県 教 育 委 員 会
印刷　旭 総 合 印 刷 株 式 会 社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂Ｂ遺跡

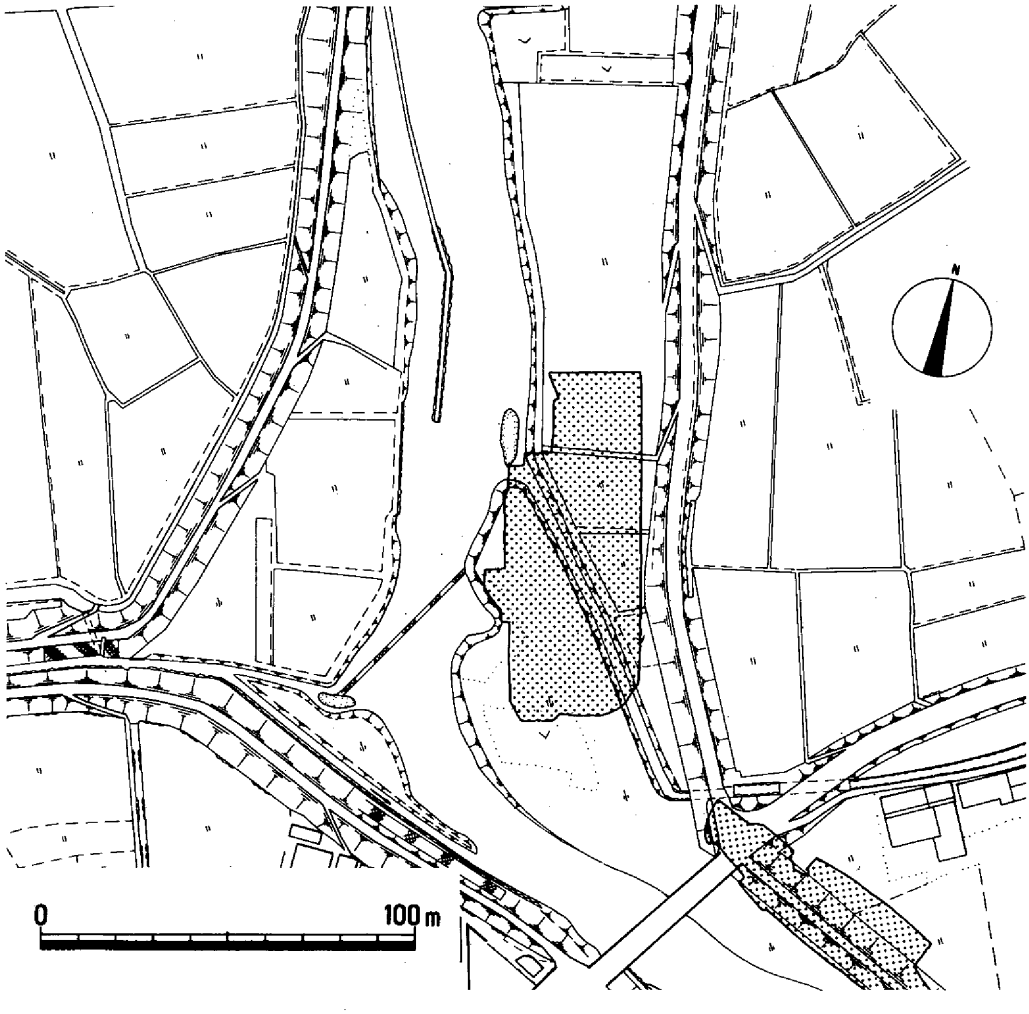
１９９５年３月

岡山県教育委員会

2. 足守川加茂Ｂ遺跡

第１章　遺跡の概要

足守川加茂Ｂ遺跡の発掘調査は、第１図に示す約2,800㎡を調査対象とした。調査範囲を設定するに際して、南北については、確認調査においてこの範囲の南北それぞれに低位部の状況が認められたことで限定し、東については護岸工事による掘削の及ぶ範囲までとした。西については、調査範囲を保護するために現足守川との境に土手を残さざるをえなかったもので、本来の微高地はさらに西へのびていたものと考えられる。足守川の川底で弥生土器が採集されたという記録もこれを裏付けるものであろう。

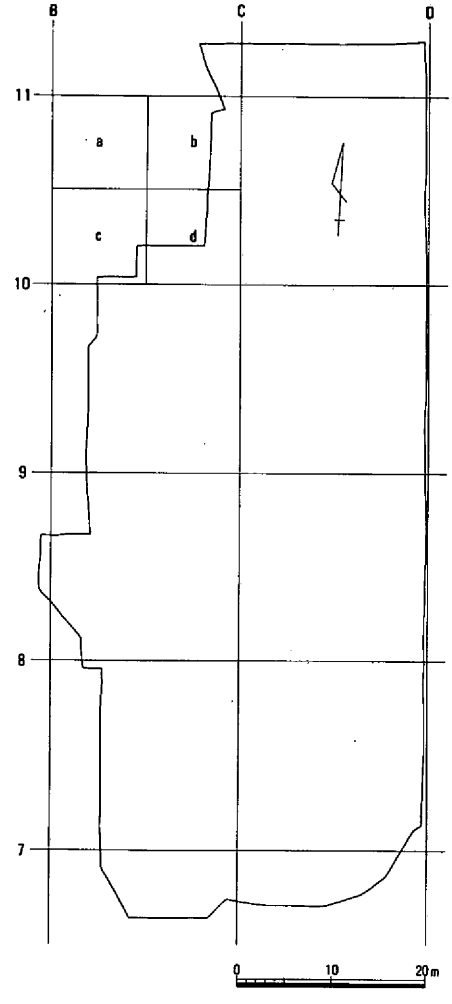


第１図　調査地周辺地形図（1/2,000）

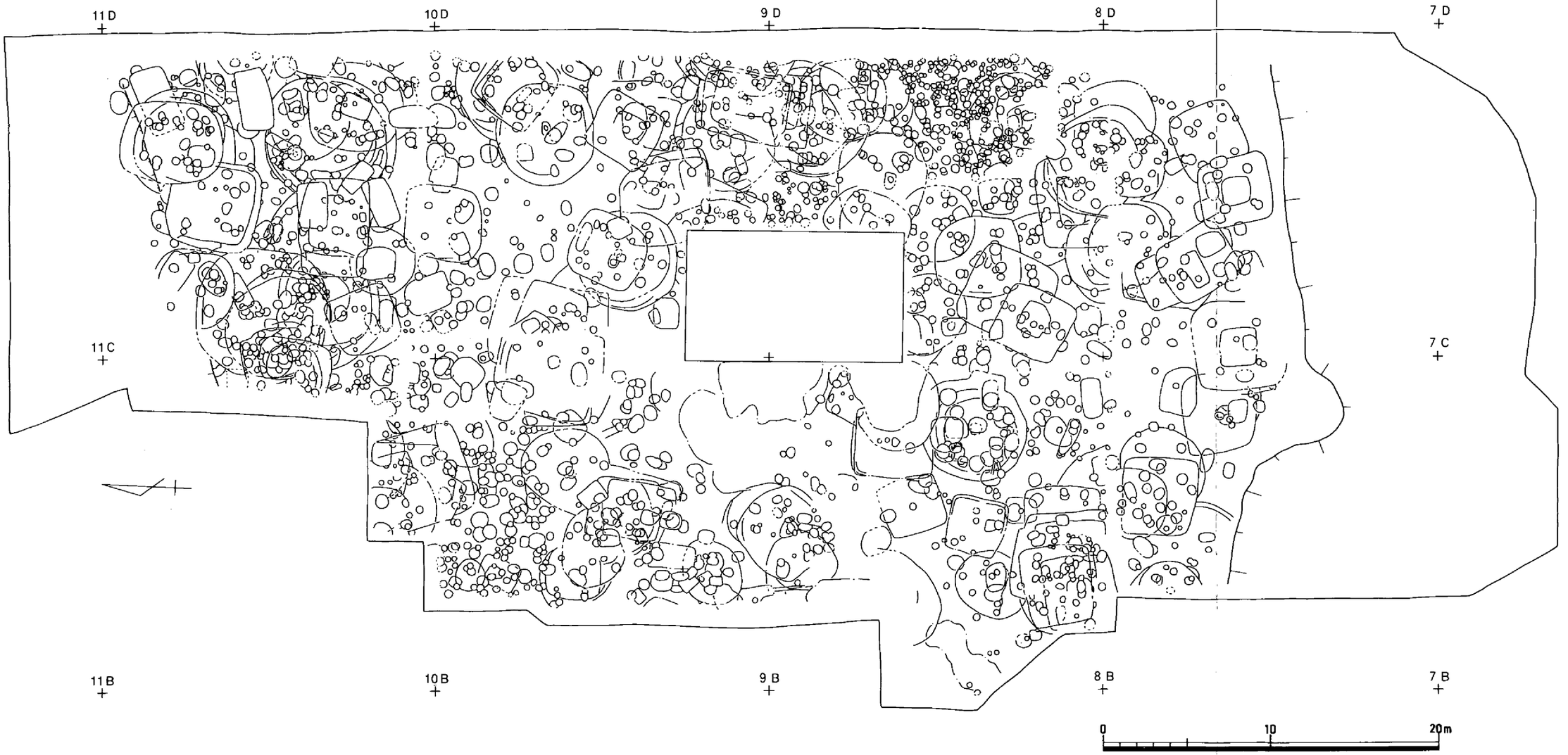
この調査範囲に対して、第２図に示すように、20m単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は北西の交点を用いている。さらに一つのグリッドをａ～ｄの四つの小区に分けた。したがって、一つの小区の面積は100㎡になる。

第４図には、ほぼＤラインに相当する調査区東側壁の土層断面を掲載している。海抜高４ｍから4.2m前後が調査時の表土上面となる。海抜高３ｍを上下する土層に斜線を入れたものが古墳時代前半の包含層である。これより上層、表土までの間は各時期の水田利用を示す水田土壌・畦畔・溝等の堆積状況を示している。確認調査の段階で、発掘調査対象範囲にこの包含層が広がり、なおかつこれより上層では遺構がほとんど検出できなかったため、発掘調査に先立ってこの面までを重機によって除去した。古墳時代前半の包含層は、11ラインより北では後の洪水によって削られており、図示範囲より南の状況については、第２章第４節で後述するところの斜面堆積へと続き、第465図第２層がこれに相当する。この第465図に示されるように、調査区南で確認される微高地の下がりは旧地形を示すものであり、基盤層上面での比高差は80cmを超える。この低位部は水田としての利用が想定され、第465図第４・５層にその可能性が求められるところであるが、調査時には湧水のためにその確証を得るには至らなかった。

この古墳時代前半の包含層より下層で検出された遺構を網羅したのが第３図である。中央部の長方形の空白部分は、発掘調査時には橋脚によって既に失われていた箇所である。11Ｃ区における微高地北端の状況は、竪穴住居の北辺が失われるなどに示されるように、前述のとおり後の洪水によって削られたものであり、その時期は古墳時代以降ということになる。８Ｂ・Ｃ区に見られる下がりは、さらに西へ続いている状況を示しており、調査区西側壁添いの遺構の在り方もこれを指示するものである。南北幅約65mの微高地が残っていたことになるが、その基盤層の土質は均一ではなく、平面的には東西方向の縞状に変化している。



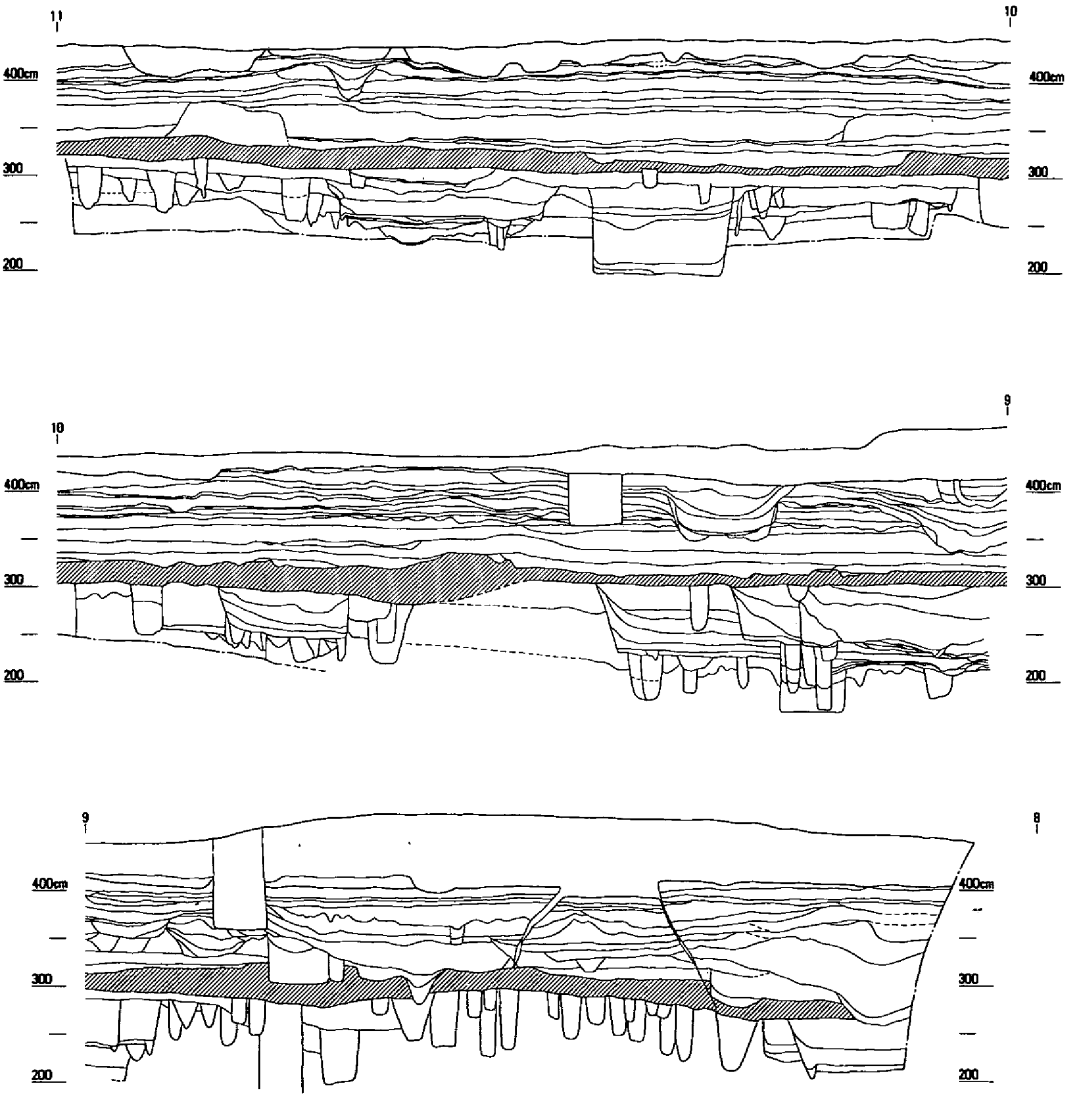
第２図　グリッド設定図（1/800）



第３図　弥生時代中期後半～古墳時代前半遺構全体図（1/300）

すなわち、南北両端に粘質の強い部分があり、その中間部分は砂質が強くなっている。これを断面として捉えると、北に高く南へ傾斜する砂質土と粘質土の互層とみなすことができる。

第３図に示した遺構は、時期的には弥生時代中期後半から古墳時代前半までのものである。次章ではこれを各時期ごとに分けて掲載し、記述していくが、柱穴については、竪穴住居の柱を構成すると認識できたものの他は、掘立柱建物としてまとまるものも確認できておらず、個別に時期を限定しがたいため省略している。　（光永真一）



斜線は古墳時代前半包含層

第４図　Ｄライン土層断面（垂直1/60、水平1/120）

第２章　調査の概要

第１節　弥生時代中期の遺構・遺物

(1)　概要

第16図に掲載した遺構のうち、この時期に属する遺構としては、竪穴住居２軒、土壙５基が検出されている。いずれも中期の後半に比定され、遺物にもこれを遡るものはほとんど見られない。分布状況をみると、竪穴住居は11Ｃ区に位置し、土壙も11Ｂ区、10Ｃ区までの微高地北部に集中しており、安定した粘質土が基盤の部分を選んでいる状況とも考えられる。この時期の微高地北端がより北へ広がっていた可能性はあるものの、集落の本体が調査区の東外側に存在することが想定できる。竪穴住居はいずれも全容が不明であるが、円形ないし隅丸方形と考えられるものである。土壙２は、その遺構形態とともに貝殻で埋まっていた状況も特殊である。土壙１は、形状は袋状土壙に近しいが、後期の袋状土壙とは区別される。　（光永）

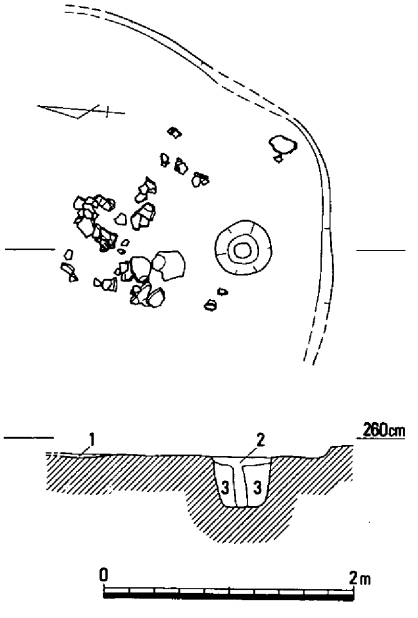
(2)　竪穴住居

竪穴住居１（第５・６・16図）

11Ｃｂ区に位置し、北半を竪穴住居45、西半を竪穴住居46にそれぞれ削られ、南東部側壁の一部を土壙１に削られている。

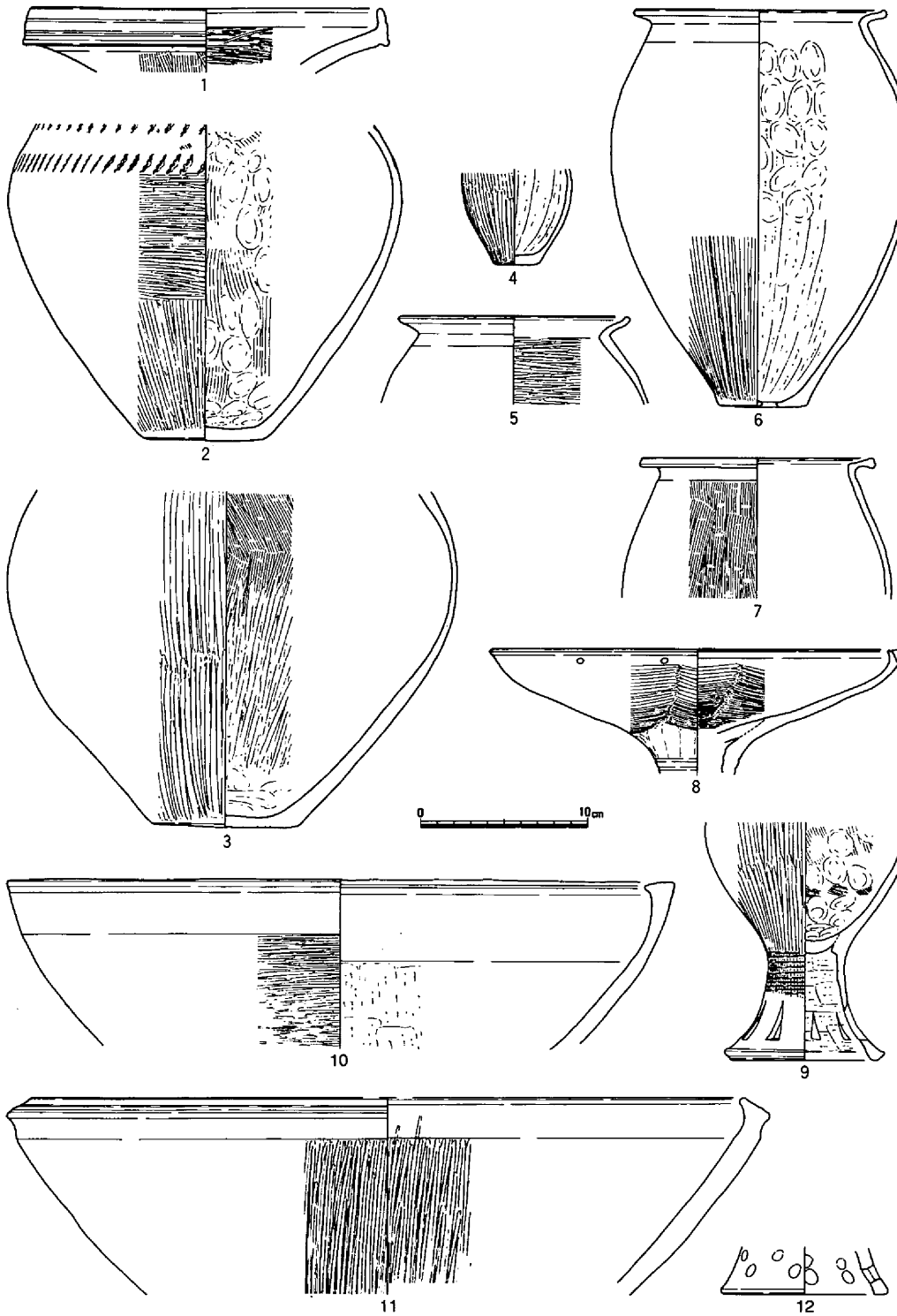
平面形は隅丸方形と考えられ、南東隅部が残存している。側壁から40cm内側で、掘り方円形の柱穴１本を検出しているが、柱構造は不明である。海抜高2.46ｍの床面中央部で焼土が認められ、ここに火処が設けられていたことが想定される。壁体溝は検出されず、その他の住居内構造も確認されなかった。

遺物は床面直上からの出土であり、弥生土器の壺１～３、小形壺４、甕５・７、甑６、高杯８・９、鉢10・11等がある。３・６の胴部内面下半にはヘラケズリが施されているが、上半部は指オサエあるいはハケメであり、５にあってはヘラミ



1．焼土
2．灰色粘土
3．淡黄色粘土（含、淡黄色細砂）

第５図　竪穴住居１（1/60）



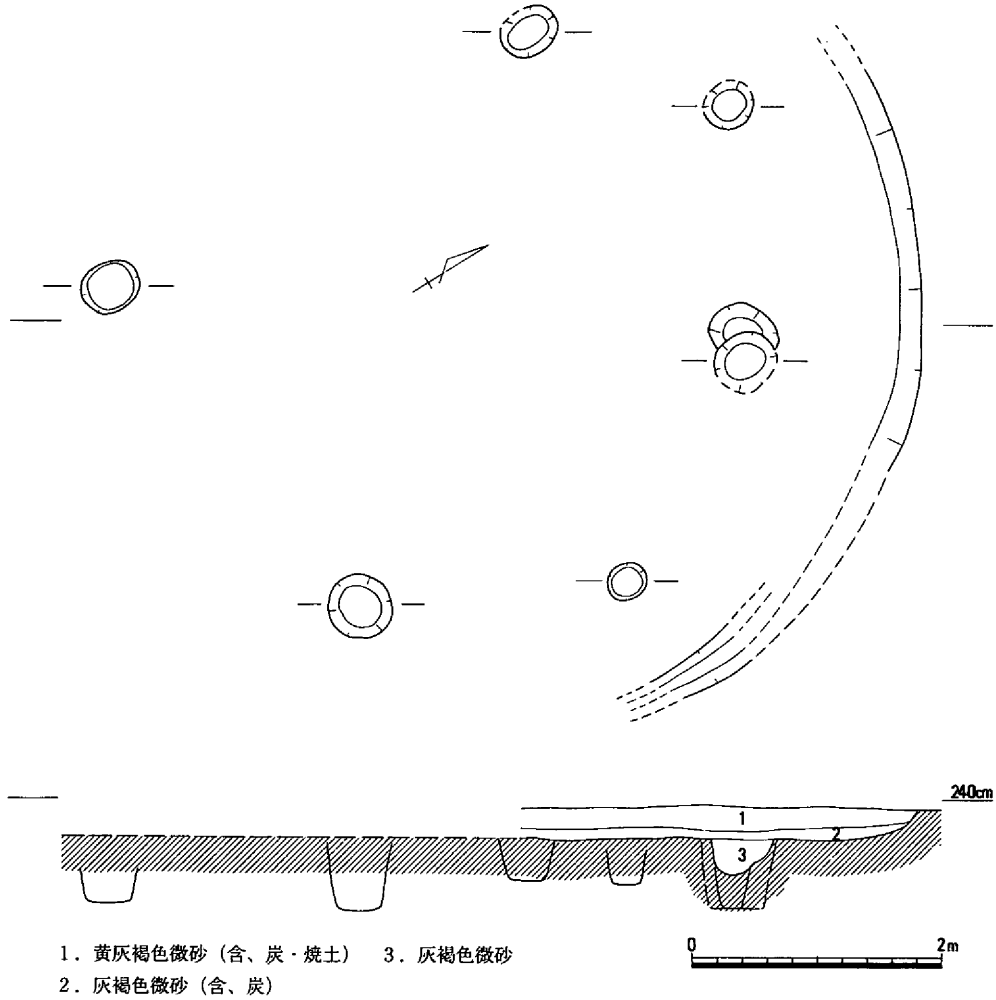
第６図　竪穴住居１出土遺物（1/4）

ガキが施されている。８・９には円盤充填技法が用いられ、脚部外面には８に凹線、９に沈線が施されている。12は器台ないし台付鉢等の台部と考えられる。１・10・11に混入の疑いが残るものの、菰池式の新段階併行で、時期は弥生時代中期後半に比定される。

竪穴住居２（第７・８・16図、写真図版39）

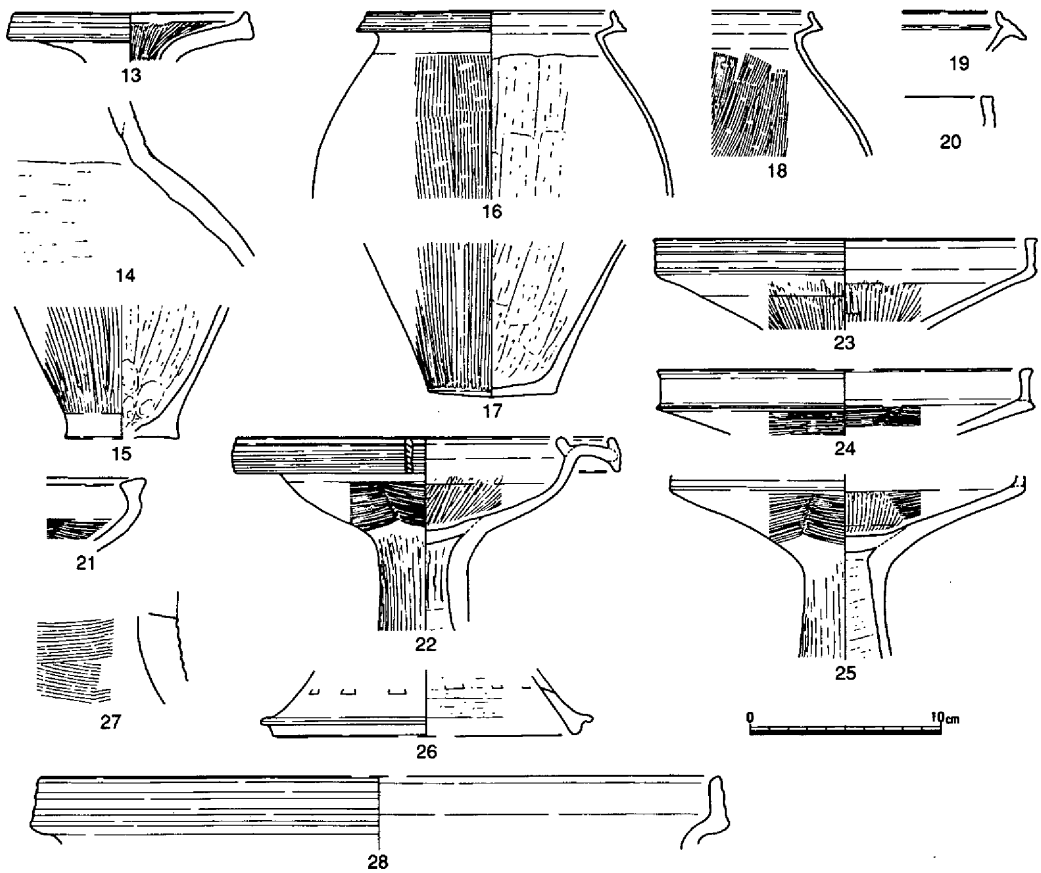
11Ｃｃ区に位置し、南東部を竪穴住居８に、西半を竪穴住居４・６にそれぞれ削られ、南端についても竪穴住居19に削られて不明である。

平面形は円形ないし隅丸方形と想定されるが、規模は不明である。深さ25cm程度の遺存状況で、床面は海抜高2.46m前後でほぼ平坦である。柱穴は６本を検出しているが、柱構造は８本柱と考えられる。柱掘り方は長径33～53cmの楕円形で、深さは35～58cmである。柱穴は側壁か

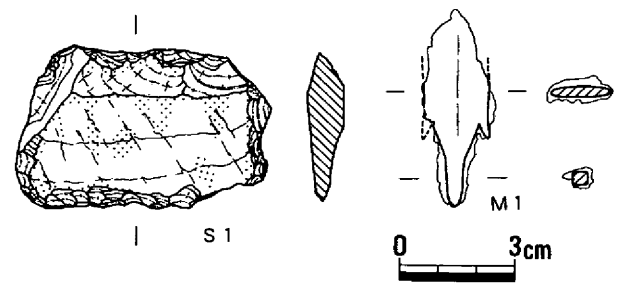


１．黄灰褐色微砂（含、炭・焼土）　３．灰褐色微砂
２．灰褐色微砂（含、炭）

第７図　竪穴住居２（1/60）



第８図　竪穴住居２
出土遺物（1/4・1/2）



ら90～110cm離れて位置し、柱間は1.7～2.0mである。東辺の一部で壁体溝を検出した他は、中央穴その他の住居内構造については不明である。

出土遺物には、弥生土器の壺13・14、甕15～19、高杯20～26、鉢28、器台27の他に、サヌカイト製の石包丁Ｓ１、鉄鏃Ｍ１等がある。甕の体部内面上半については、16ではヘラケズリが頸部にまで及び、18ではハケメが施されている。高杯22・25には円盤充填技法が用いられており、杯部の形状については、20・23～25の杯部から口縁部が直立するものと、21・22のように杯部から曲線的に立上がるものがある。

これらにより、時期は弥生時代中期後半に比定される。　（光永）

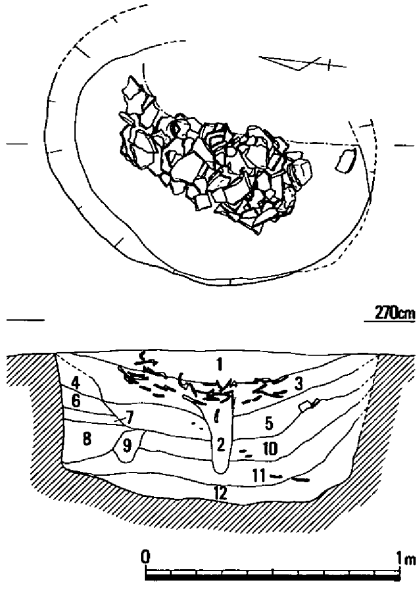
(3) 土壙

土壙１（第９・10・16図、写真図版38）

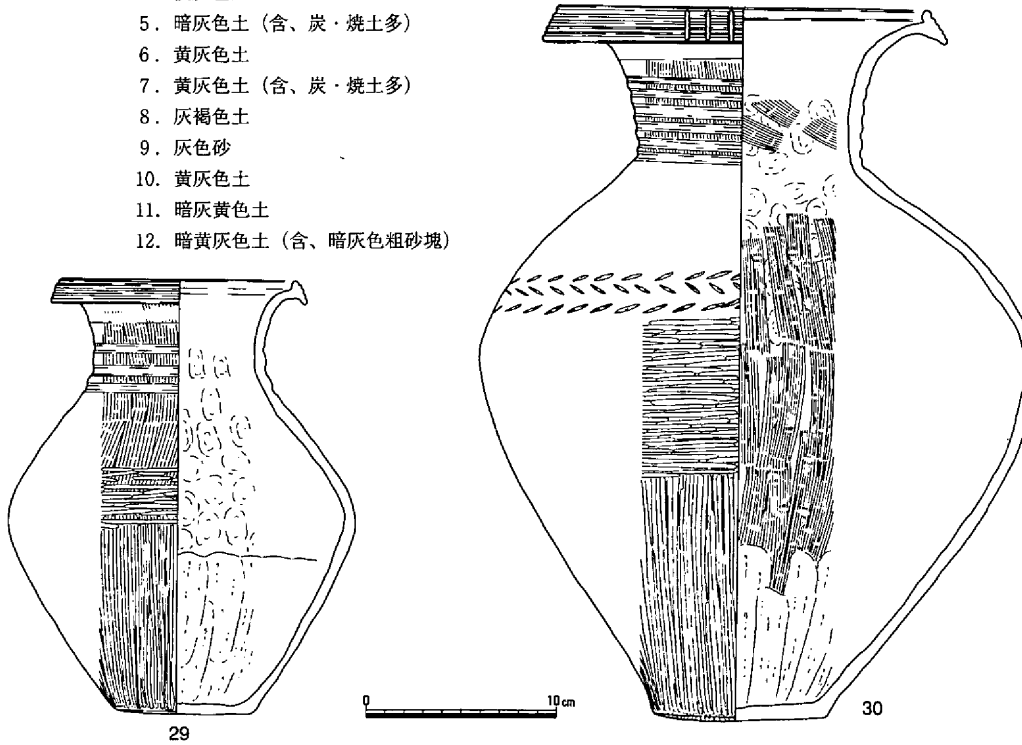
11Ｃｂ区において西側で竪穴住居１を切り、東側で後期後半の土壙55によって切られた状態で検出された。長軸長1.32ｍを測り平面楕円形を呈するもので、検出面から壙底までは比較的垂直もしくは部分逆斜傾した状態の壁を有することで袋状土壙とも考えられたが明確でない。深さ約60㎝を測る壙内には中層以上に比較的炭と焼土塊の包含された土砂の堆積が多くみられ、さらに埋積のほとんど終了段階で土器の一括廃棄が確認された。

土器には、壺、甕、高杯等の器種がみられ、なかには完形に復元される土器が高い比率でみられた。

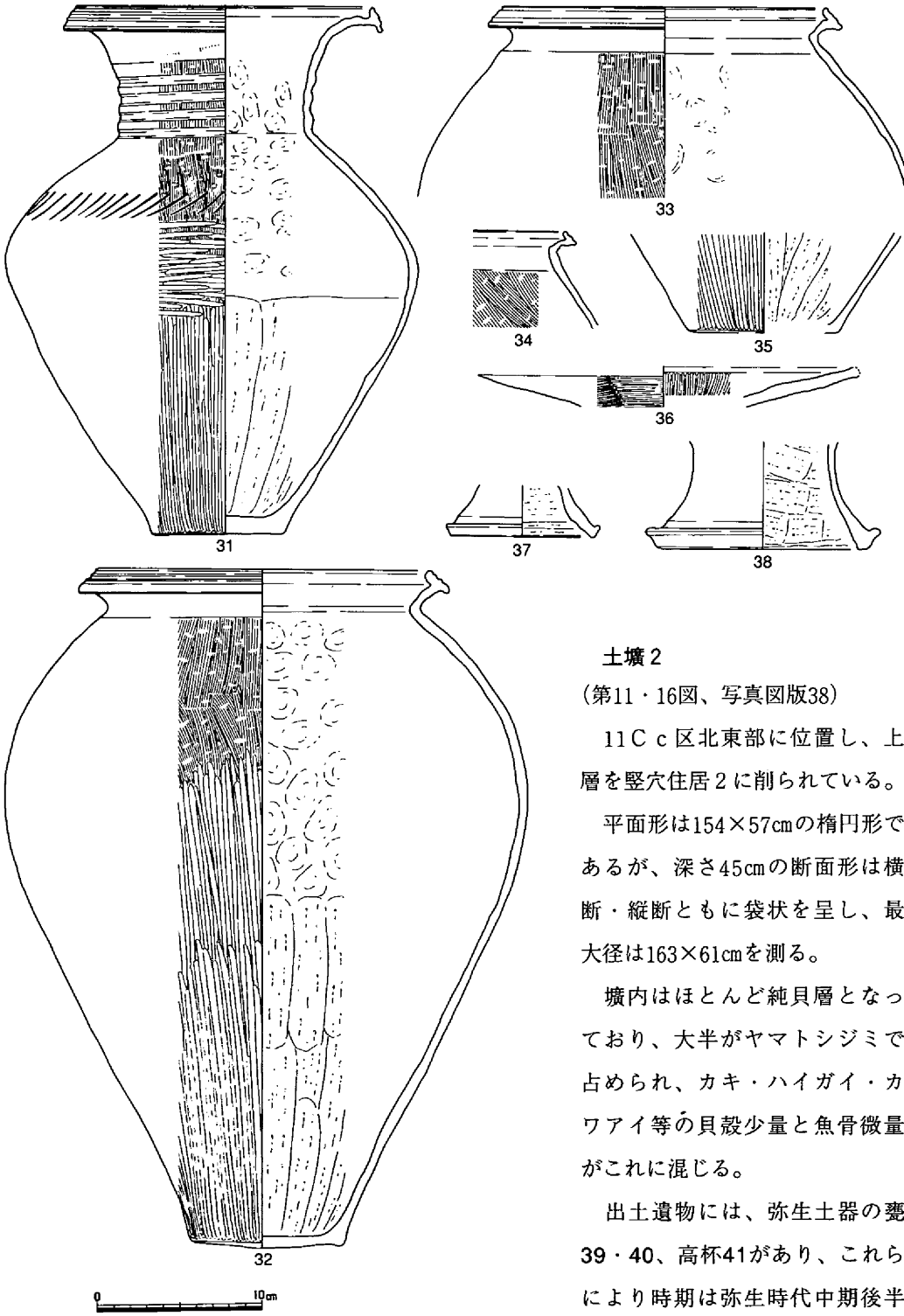
時期は、土器型式が仁伍式の特徴に酷似することで中期後半に比定されよう。（島崎）



1．淡灰色土
2．暗灰黄色土
3．黒灰褐色土（含、炭・焼土多）
4．淡灰色土
5．暗灰色土（含、炭・焼土多）
6．黄灰色土
7．黄灰色土（含、炭・焼土多）
8．灰褐色土
9．灰色砂
10．黄灰色土
11．暗灰黄色土
12．暗黄灰色土（含、暗灰色粗砂塊）



第９図　土壙１（1/30）・出土遺物①（1/4）



第10図　土壙１出土遺物②（1/4）

土壙２

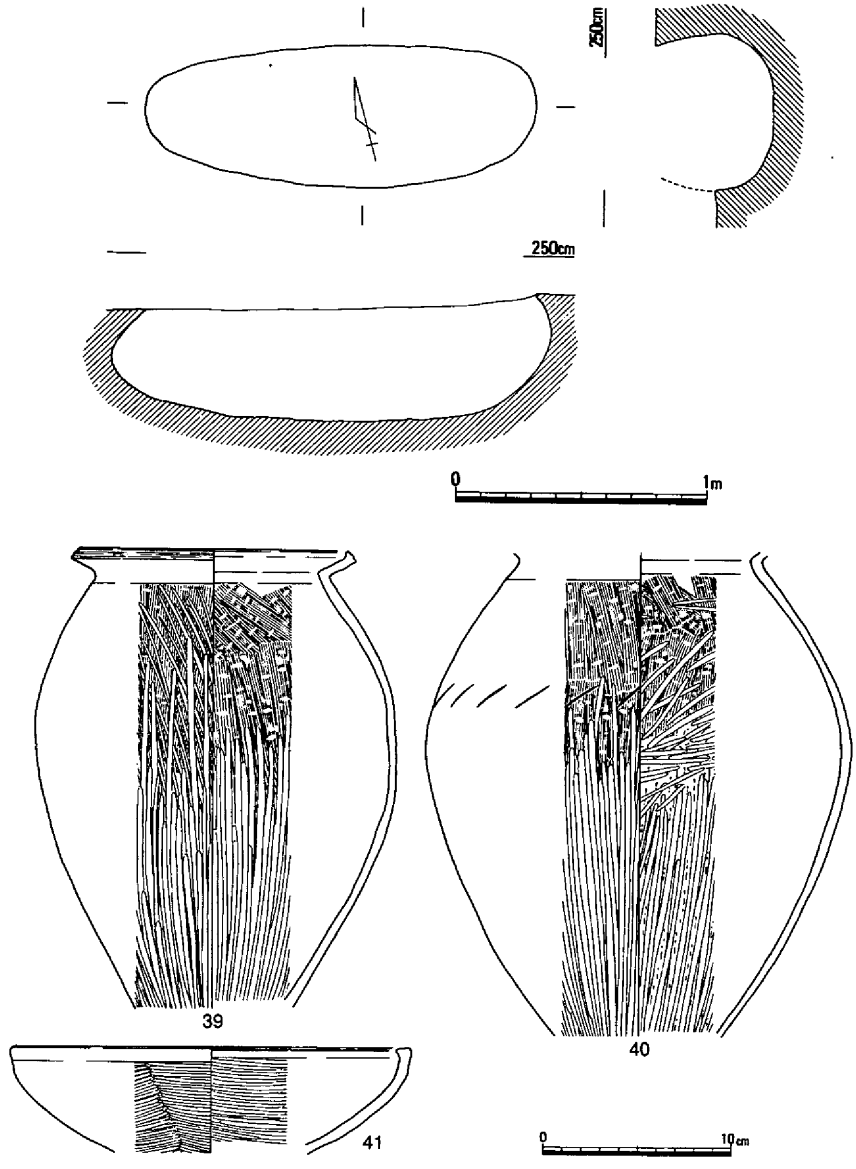
（第11・16図、写真図版38）

11Ｃｃ区北東部に位置し、上層を竪穴住居２に削られている。

平面形は154×57cmの楕円形であるが、深さ45cmの断面形は横断・縦断ともに袋状を呈し、最大径は163×61cmを測る。

壙内はほとんど純貝層となっており、大半がヤマトシジミで占められ、カキ・ハイガイ・カワアイ等の貝殻少量と魚骨微量がこれに混じる。

出土遺物には、弥生土器の甕39・40、高杯41があり、これらにより時期は弥生時代中期後半に比定される。

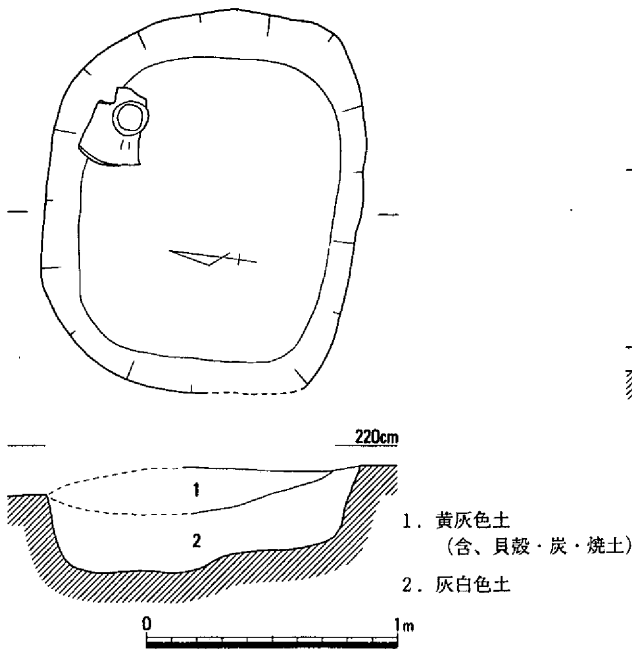


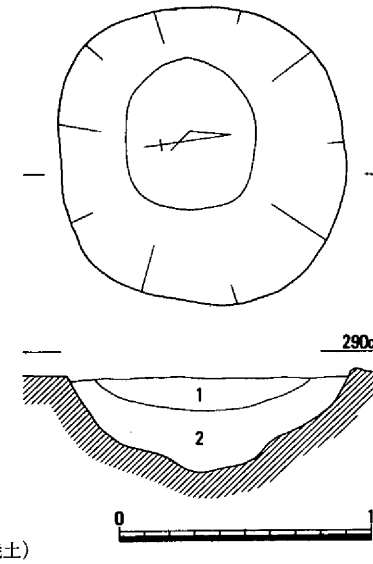
第11図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙３（第12・16図）

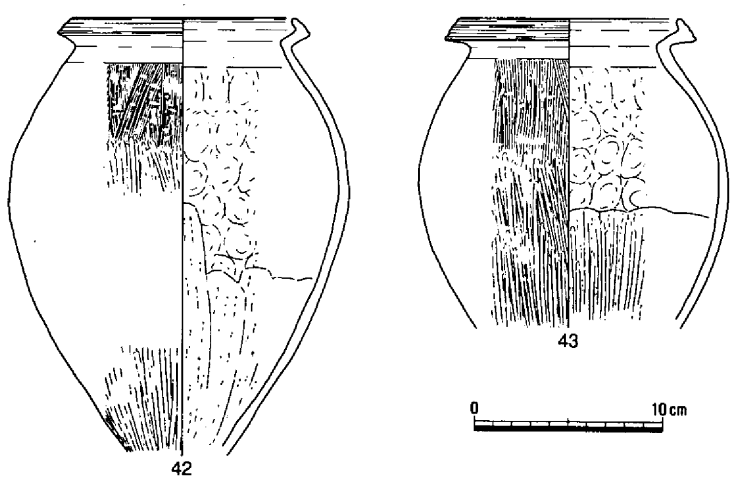
11Ｂｄ区中央部に位置し、竪穴住居３に上層を削られている。

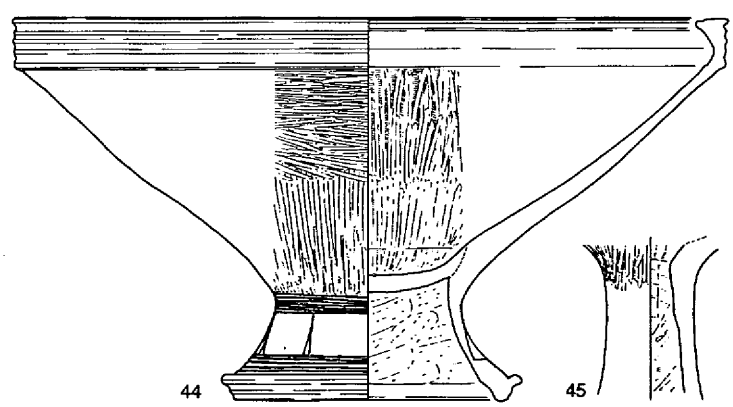
平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長1.52m、短軸長1.26mをそれぞれ測り、深さ41cmの断面形は逆台形で、やや凹凸のある底面の海抜高は1.74mである。埋土のうち、第１層には炭・焼土とともに貝殻が含まれている。出土遺物には弥生土器の甕42・43、高杯45、台付鉢44があり、これらにより、時期は弥生時代中期後半に比定される。





第13図　土壙４（1/30）





第12図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4）

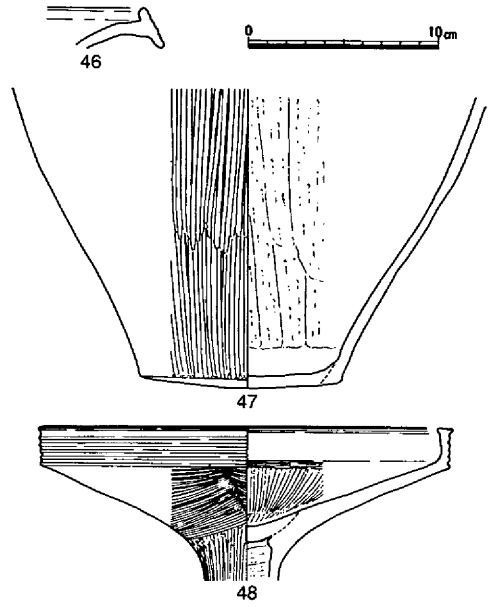
土壙４

（第13・14・16図）

10Ｃａ区南東部に位置し、土壙24との距離1.1ｍである。

平面形は径1.13ｍ前後の円形を呈し、深さ37㎝の断面形は椀形である。

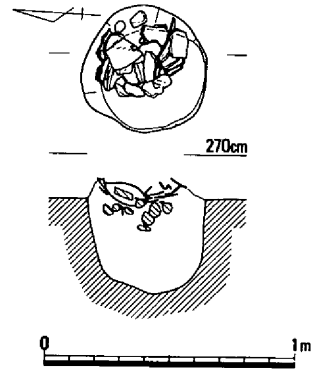
出土遺物には弥生土器の壺46、甕47、高杯48があり、時期は弥生時代中期後半に比定される。



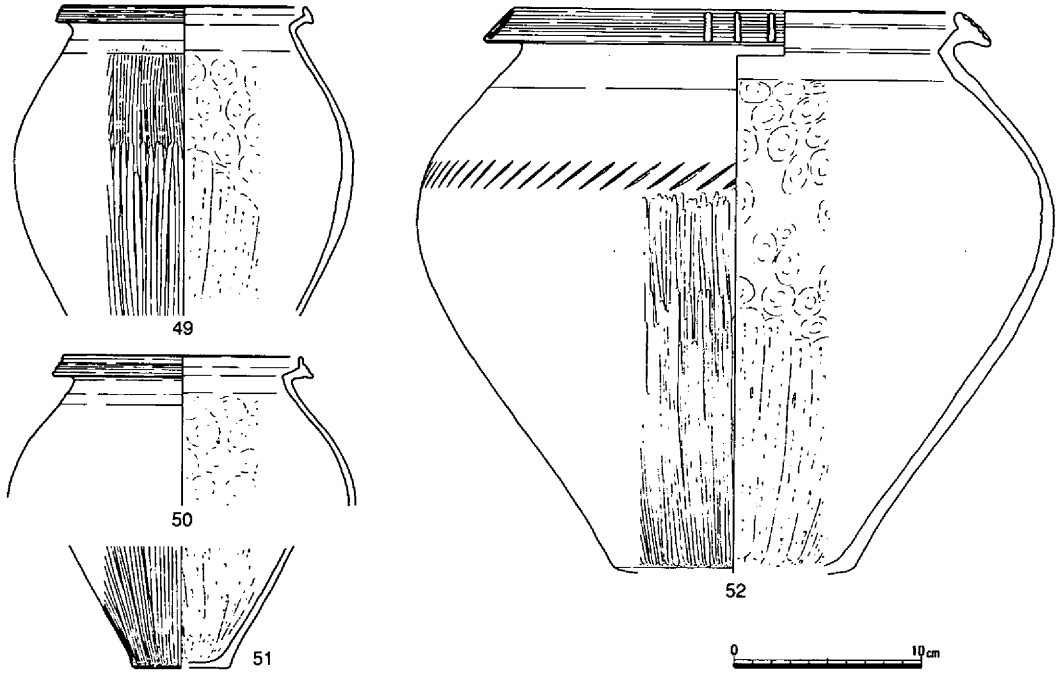
第14図　土壙４出土遺物（1/4）

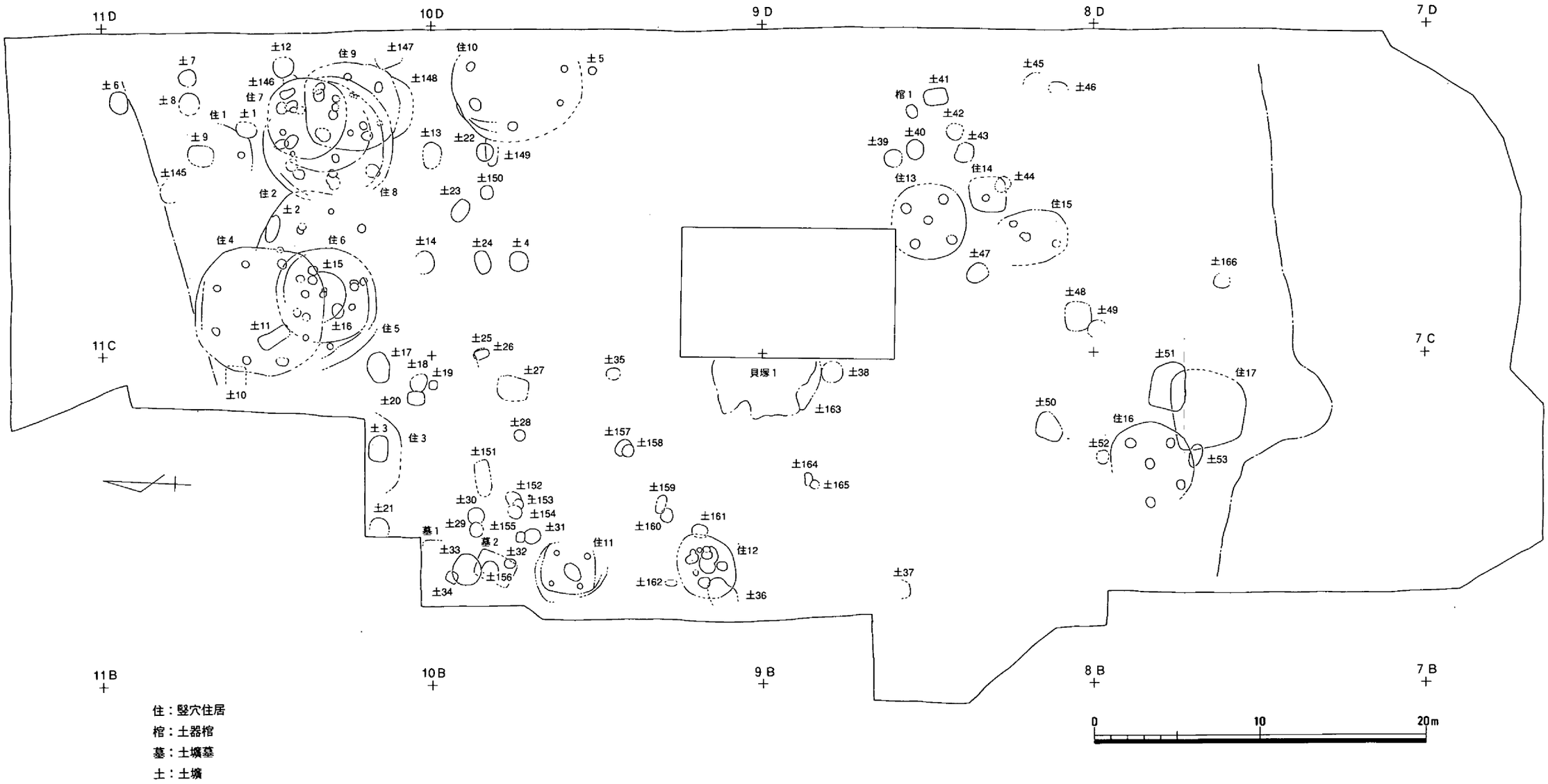
土壙５（第15・16図）

10Ｃｂ区南東隅に位置し、竪穴住居10に近接する。平面形は径51cm前後の円形で、深さ37cmの埋土の上層で、弥生土器が円礫とともに集中して出土した。49～52はいずれも甕で、胴部内面下半にヘラケズリが施されている。これらにより、時期は弥生時代中期後半に求められる。　　（光永）



第15図　土壙５（1/30）・出土遺物（1/4）





第16図　弥生時代中期後半～後期前半遺構配置図（1/300）

第２節　弥生時代後期前半の遺構・遺物

(1) 概要

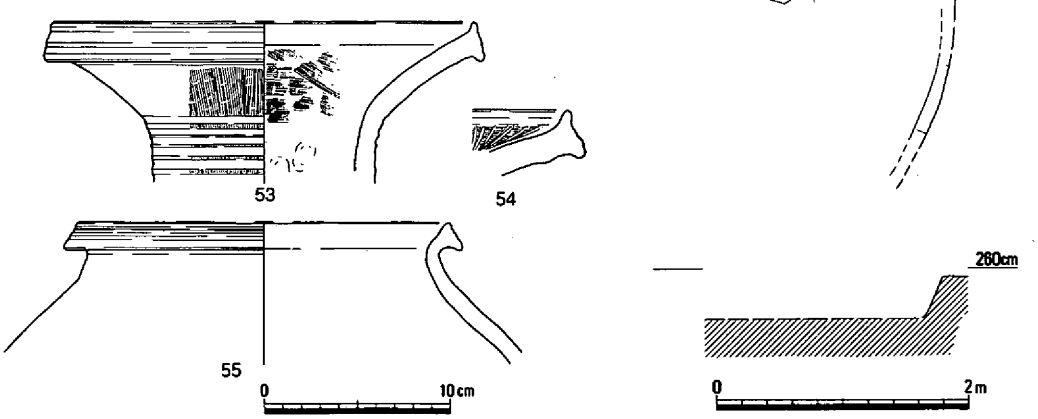
第16図に示す遺構のうち、竪穴住居３～16の14軒、土壙６～53・145～166の70基と、土壙墓１・２の２基、土器棺１の１基に加えて、貝塚１がこの時期に属するものである。遺構の分布は微高地南半にも及び、調査範囲の西側へも広がっていた状況が見られる。一方、中央東寄りの部分は空白地となっており、その西側に貝塚が所在することが注目される。貝塚は橋脚部分への立会い調査でも確認されている。竪穴住居は平面形が隅丸方形のものが多く、貝塚を挟んで南北２群に分けられ、北群には竪穴住居４・８・10の大形住居が所在する。土壙70基のうちの14基が袋状土壙で、その分布は11Ｃ区周辺と９Ｃ区の２群に分けられる。土壙墓は北西部に位置し、土器棺は南の袋状土壙群に近い９Ｃｂ区に位置している。竪穴住居４、土壙６の立地からはこの時期にも微高地北端がより北にあったことが窺われ、遺構の分布も粘質土が基盤となる部分を選んで占地する状況を示している。　（光永）

(2) 竪穴住居

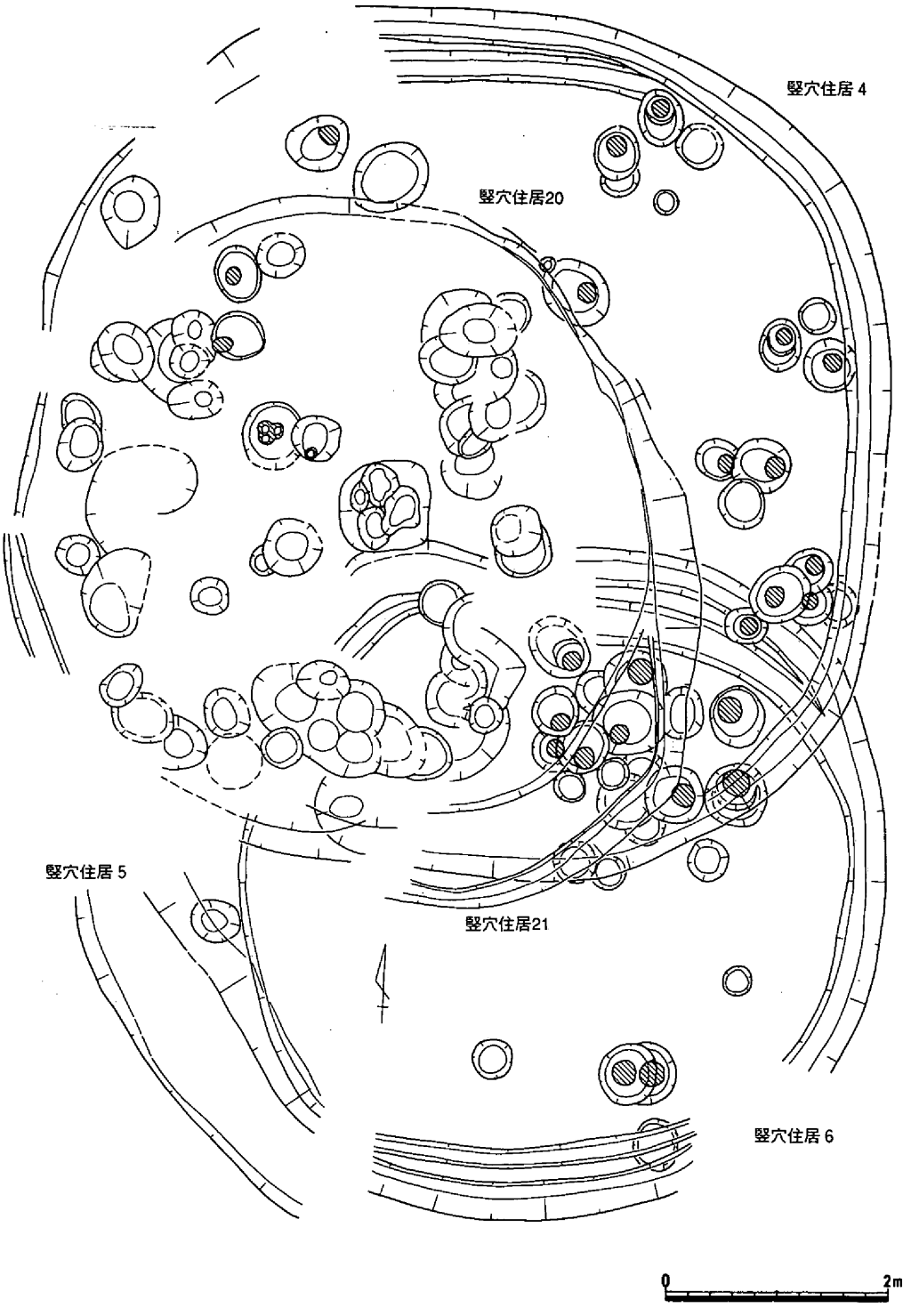
竪穴住居３（第16・17図）

11Ｂｄ区南西部に位置し、北半を調査区外に置くが、土壙３を削り、西半を竪穴住居22、土壙76に削られている。竪穴住居５との距離は約４ｍである。

平面形は円形と想定されるが、規模は不明であり、海抜高2.2ｍの床面まで深さ33㎝が残る。柱穴は確認できず、柱構造も不明であるが、焼失による幅15㎝程度の炭化材が床面に残っていた。また、床面に炭の集中する範



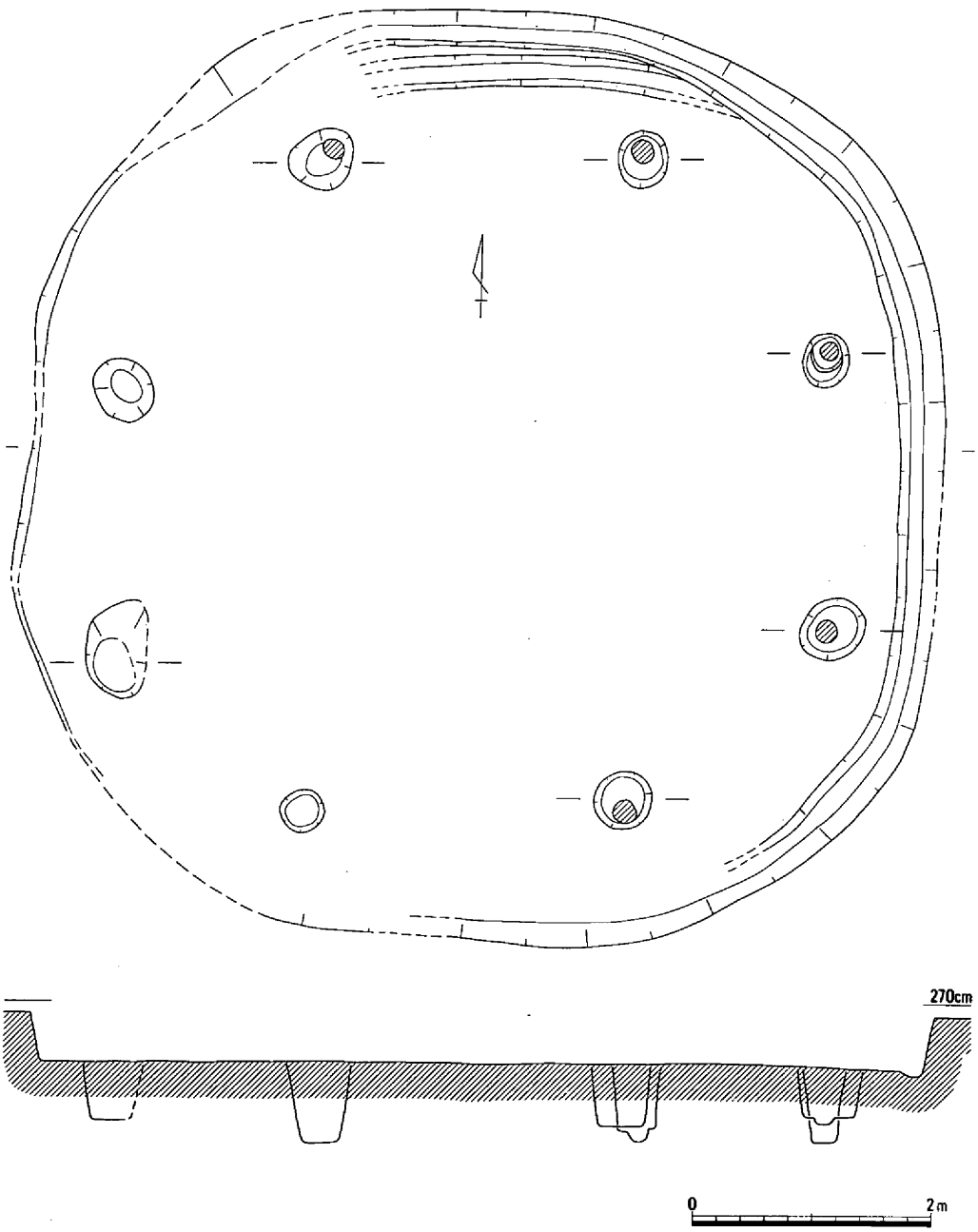
第17図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物（1/4）



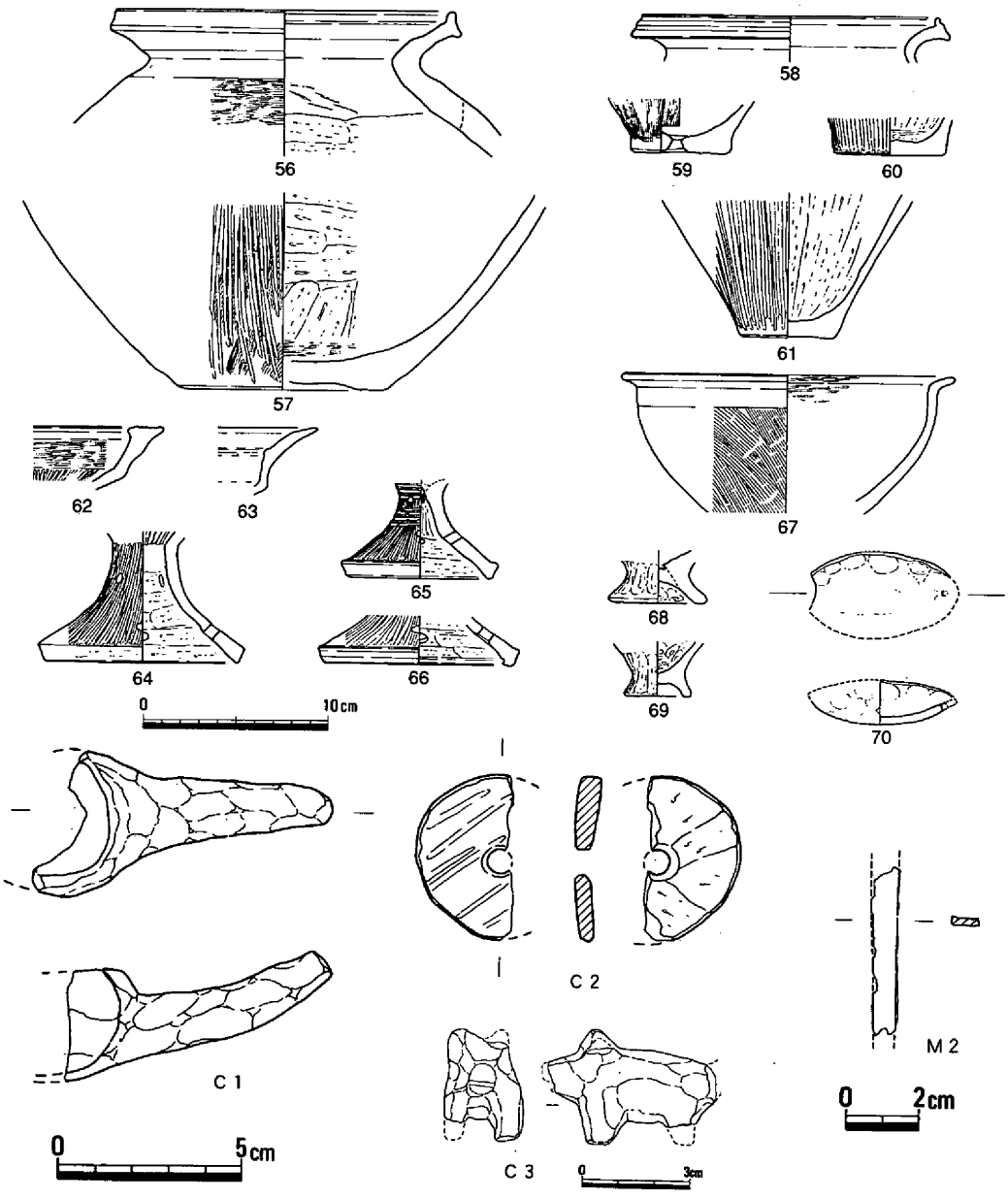
第18図　竪穴住居４・５・６・20・21（1/60）

囲が認められ、この北西側に中央施設が設けられていた可能性がある。壁際では台石と考えられる石を検出したが、壁体溝は認められない。

出土遺物には、弥生土器の壺53・54、甕55等があり、これらにより時期は弥生時代後期前半に比定される。



第19図　竪穴住居４（1/60）



第20図　竪穴住居４ 出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居４（第16・18～20図）

11Ｃａ区から11Ｃｃ区にかけて位置し、竪穴住居２・５・６、土壙10・15を削り、竪穴住居20・21、土壙11に削られている。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸長7.78m、短軸長7.75mを測る。深さ42cmが残る側壁はほぼ直立し、東半では幅25cm、深さ５cm程度の壁体溝を検出している。床面はほぼ平坦で、海抜高

2.15m前後を測り、床面積は42㎡である。柱構造は８本柱であり、柱掘り方は長径36～83cmの平面形楕円形で、深さ47～67cmを測り、側壁との距離は25～95cmである。中央施設の想定される位置には、竪穴住居20の柱穴等が重複しており、確定するには至らない。この他の住居内構造は確認されていないが、北辺において内側に別な壁体溝を確認しており、１回以上の建替えが想定される。

出土遺物には、弥生土器の壺56・57、甕58・60・61、甑59、高杯62～66、鉢67、製塩土器68・69などの他に、瓢形土製品Ｃ１、土器片転用紡錘車Ｃ２、動物形土製品Ｃ３、鉄器Ｍ２がある。70は手捏ねであり、一端を抉り、他端に孔を穿っている。

これらにより、時期は弥生時代後期前半に比定される。

竪穴住居５（第16・18・21図）

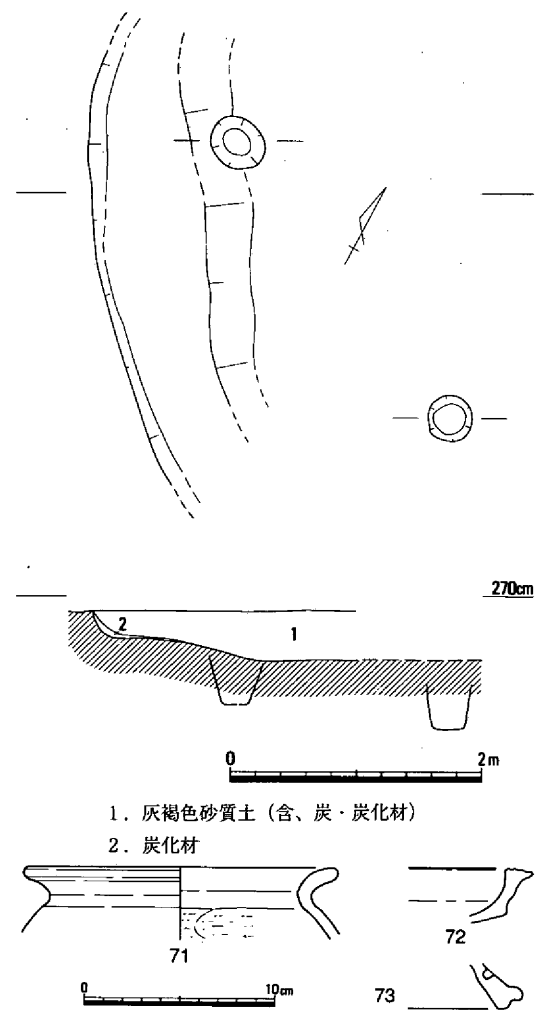
11Ｃｃ区に位置して、東半を竪穴住居６に、北半を竪穴住居４にそれぞれ削られている。このため、平面形は隅丸方形と想定されるが、規模は不明であり、深さ39cmが残るのみである。柱構造は４本柱と考えられ、２本を検出した。壁体溝は認められないが、側壁から50～80cmの間が海抜高2.19mの床面よりも約15cm高いベッド状になっている。中央施設その他の住居内構造については不明である。弥生土器の甕71、高杯72・73の出土により、時期は弥生時代後期前半に比定される。

竪穴住居６（第16・18・22・23図）

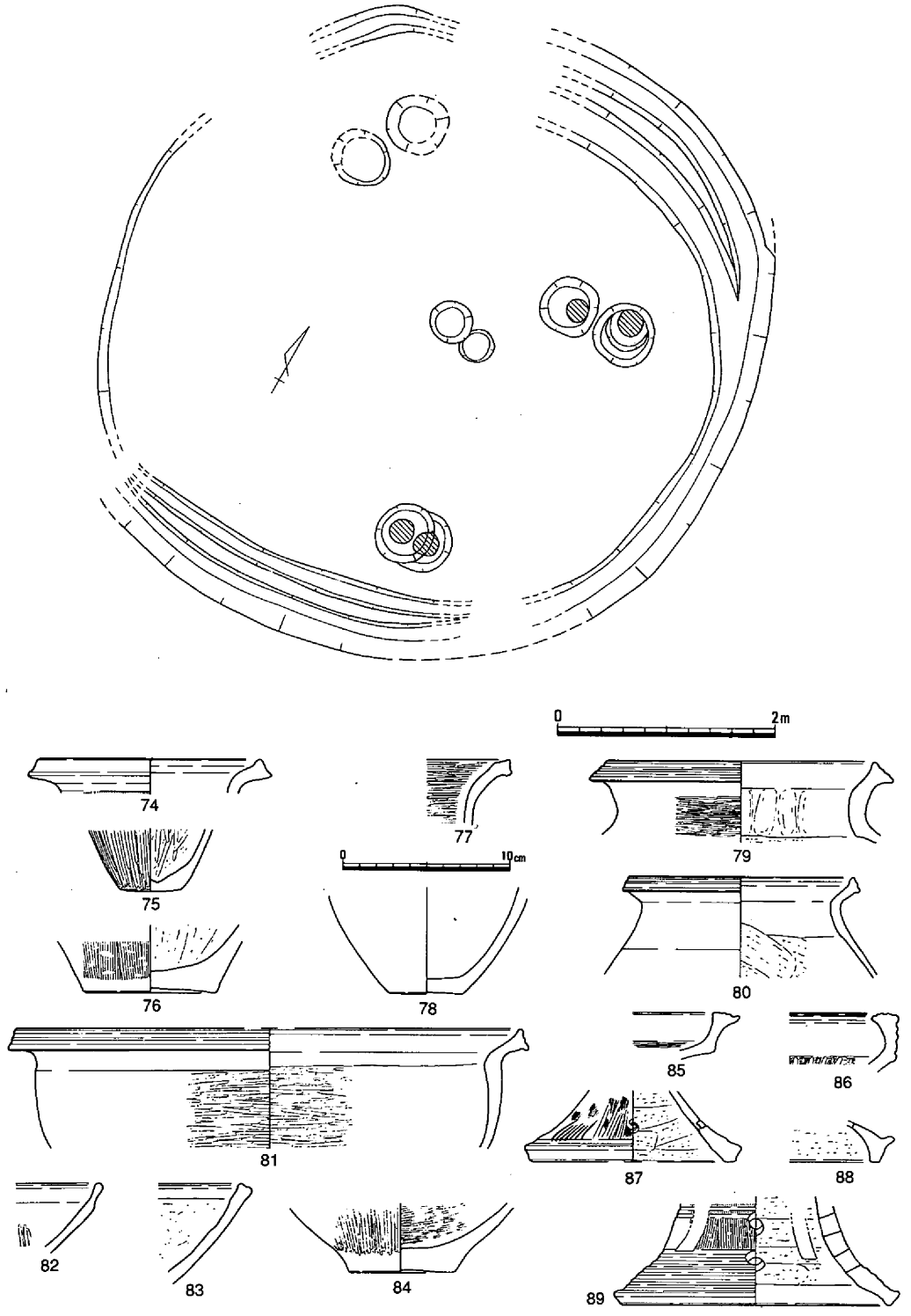
11Ｃｃ区に位置し、竪穴住居５、土壙16を削り、竪穴住居４、土壙15に削られる。

１回の建替えが行なわれており、新段階を６Ａ、旧段階を６Ｂとする。

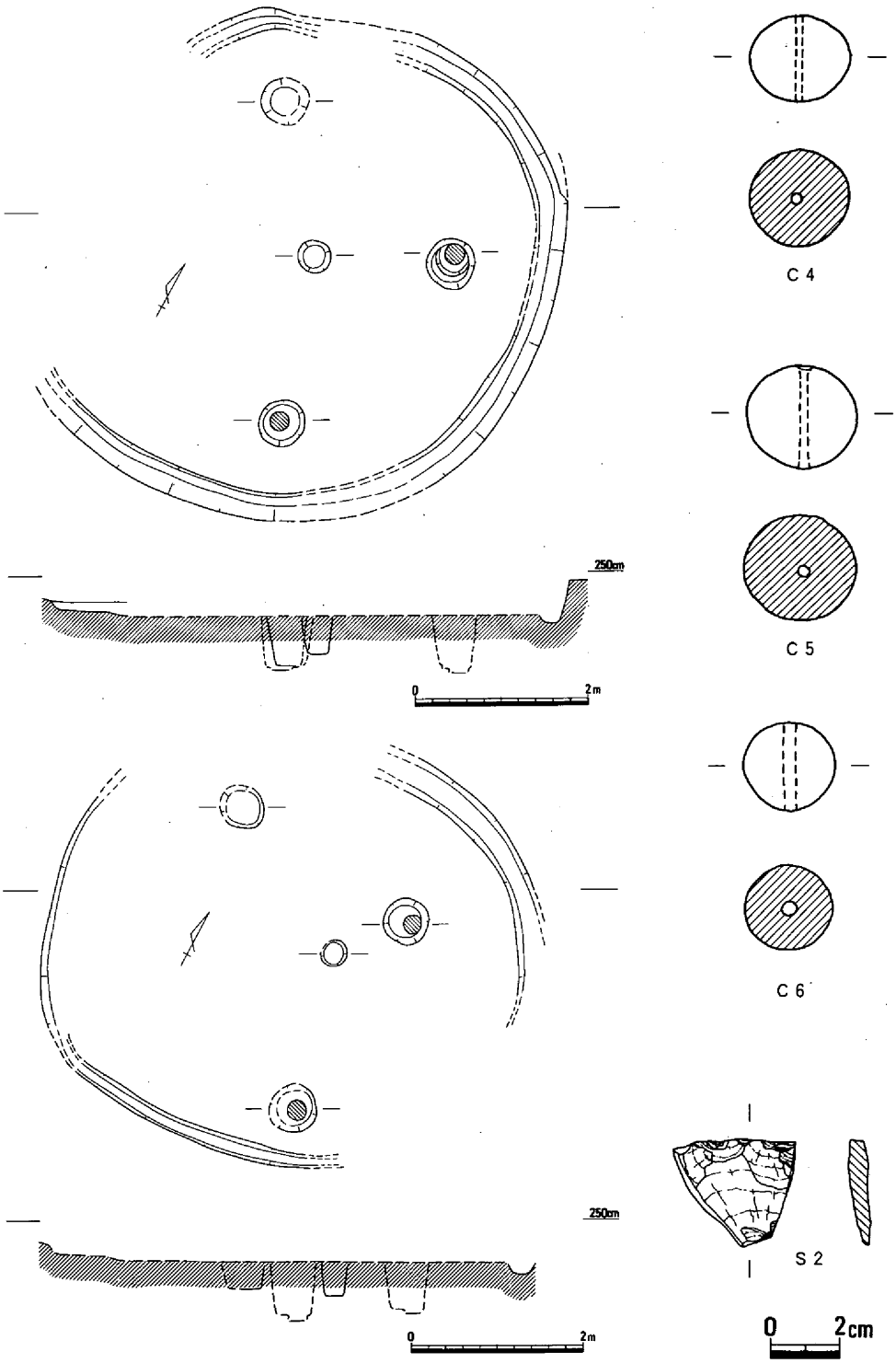
竪穴住居６Ａは、平面形隅丸方形で、長軸長5.92mを測り、壁体溝が全周していたと想定される。４本柱のうち３本を検出しており、海抜高2.02mの床面ほぼ中央に径27cm、深さ53cmの中央穴が位置する。竪穴



第21図　竪穴住居５（1/60）・出土遺物（1/4）



第22図　竪穴住居６（1/60）・出土遺物①（1/4）



第23図　竪穴住居６Ａ（上）・６Ｂ（下）(1/60) ・竪穴住居６ 出土遺物②（(1/2)

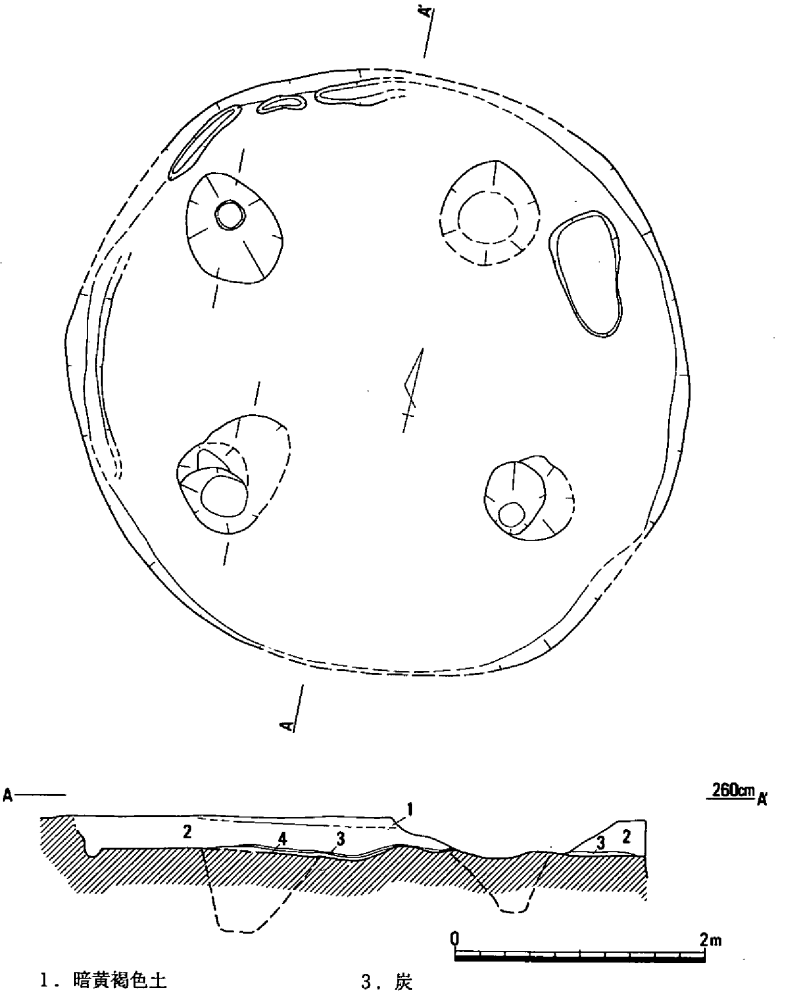
住居６Ｂは、北辺と南辺において壁体溝が６Ａの内側で検出されており、短軸長で4.99ｍを測る。柱構造は４本柱で、そのうちの３本を検出しており、柱間は1.9ｍである。中央穴はやや北東寄りに位置し、径25㎝、深さ30㎝を測る。

弥生土器の壺74～77・79、甕78・80、高杯85～88、鉢81～84、器台89、土錘Ｃ４～６、サヌカイト製の楔形石器Ｓ２等の出土により、時期は弥生時代後期前半に比定される。

竪穴住居７（第16・24・25図、写真図版39・40）

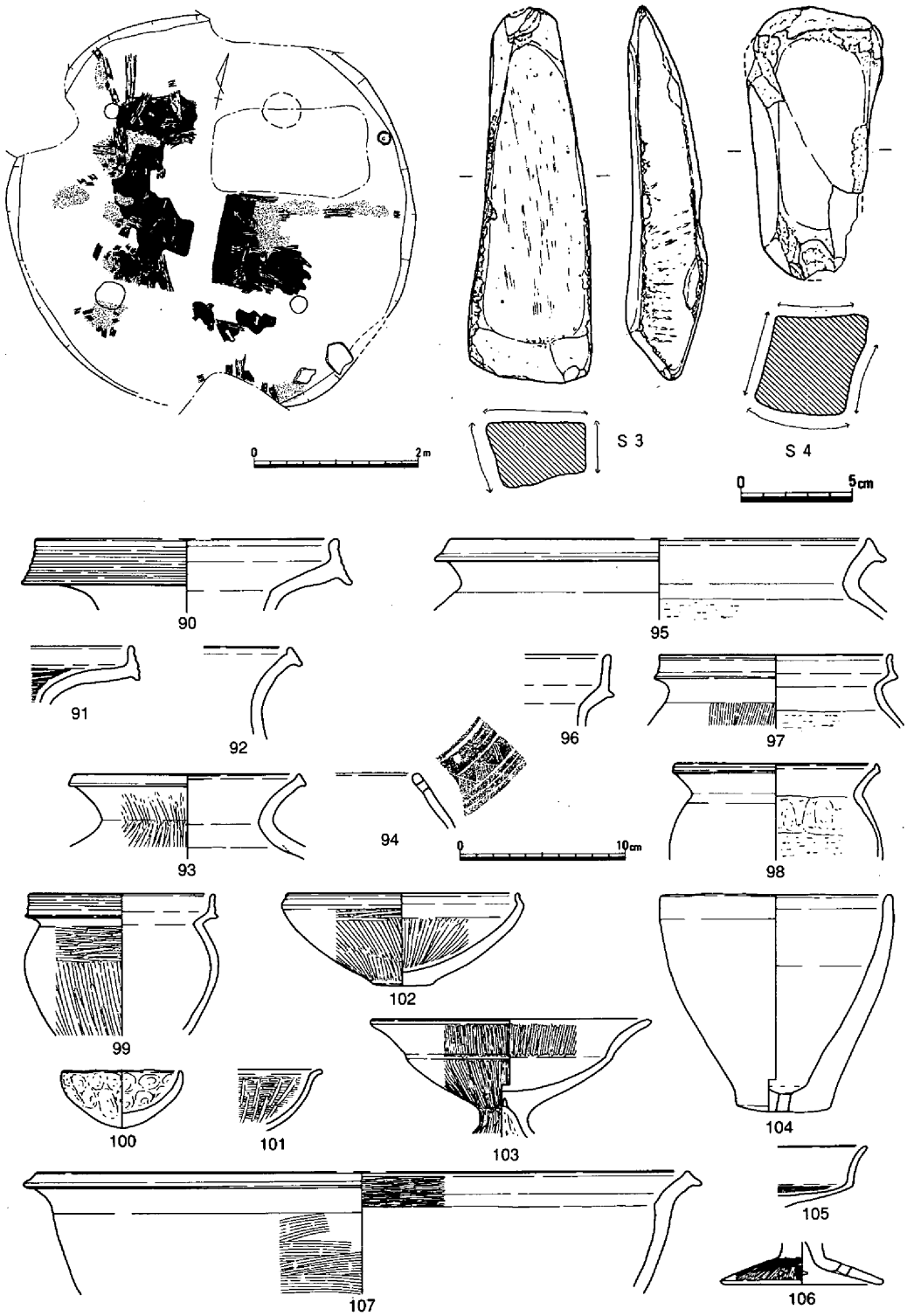
11Ｃｄ区に位置し、竪穴住居８・９、土壙146を削り、土壙55・61・62・64～66に削られる。

平面形は円形で、長軸長5.3m、短軸長4.99ｍを測り、床面積は17.3㎡となる。壁体溝は西辺から北辺にかけて断続的に検出されているが、本来は全周していたものと考えられる。柱構造は４本柱で、柱間は2.2ｍ前後と想定される。柱掘り方は平面楕円形で長径57～95㎝、深さ45～65㎝を測り、側壁からの距離は55～65㎝である。焼失により、床面に炭・焼土とともに炭化材が遺存するが、家屋構造の復元はできない。炭化材等の遺存状況は、中央部が比較的良好で、縁辺部では希薄である。南東部で台石を、北東部で浅い土壙をそれぞれ検出したが、中央施設は明確にできなかった。



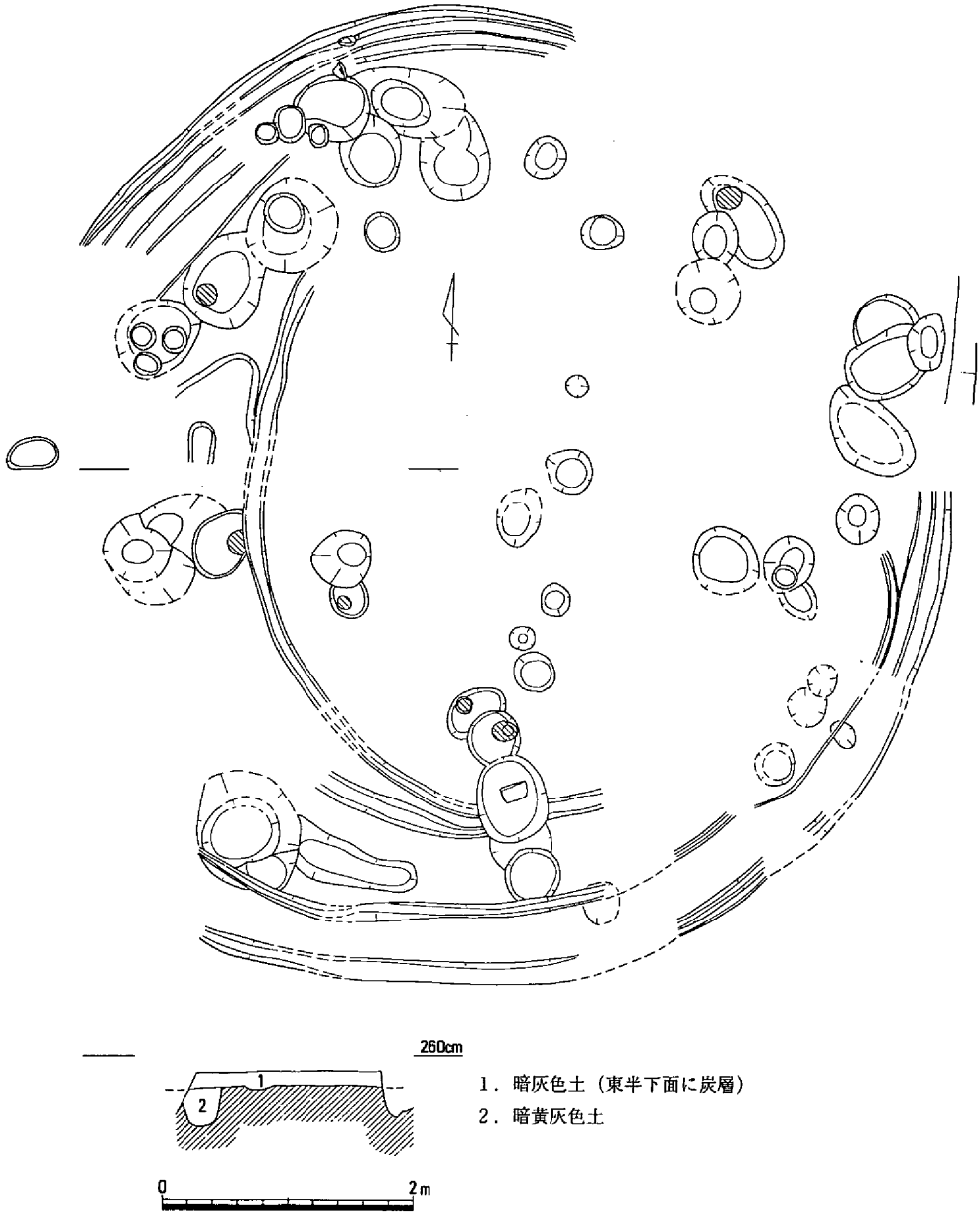
1．暗黄褐色土　　3．炭
2．暗黄褐色土（含、炭・炭化材）　4．暗黄褐色土（含、暗黄灰色土塊）

第24図　竪穴住居７（1/60）



第25図　竪穴住居７　床面検出状況（1/80）・出土遺物（1/3・1/4）

出土遺物には、弥生土器の壺・甕・甑・高杯・鉢等の他に、砥石がある。104は内外面ともナデ仕上げで、底部穿孔は焼成前に行われており、体部外面下半に煤が付着している。壺90・96、甕97、鉢99等における口縁部の立上がり方、あるいは高杯103・106の短脚化は後期後半の特徴を示しており、時期については周辺遺構との関係から後期前半に位置づけるが、後期後半に下る可能性を含んでいる。



第26図　竪穴住居８（1/60）

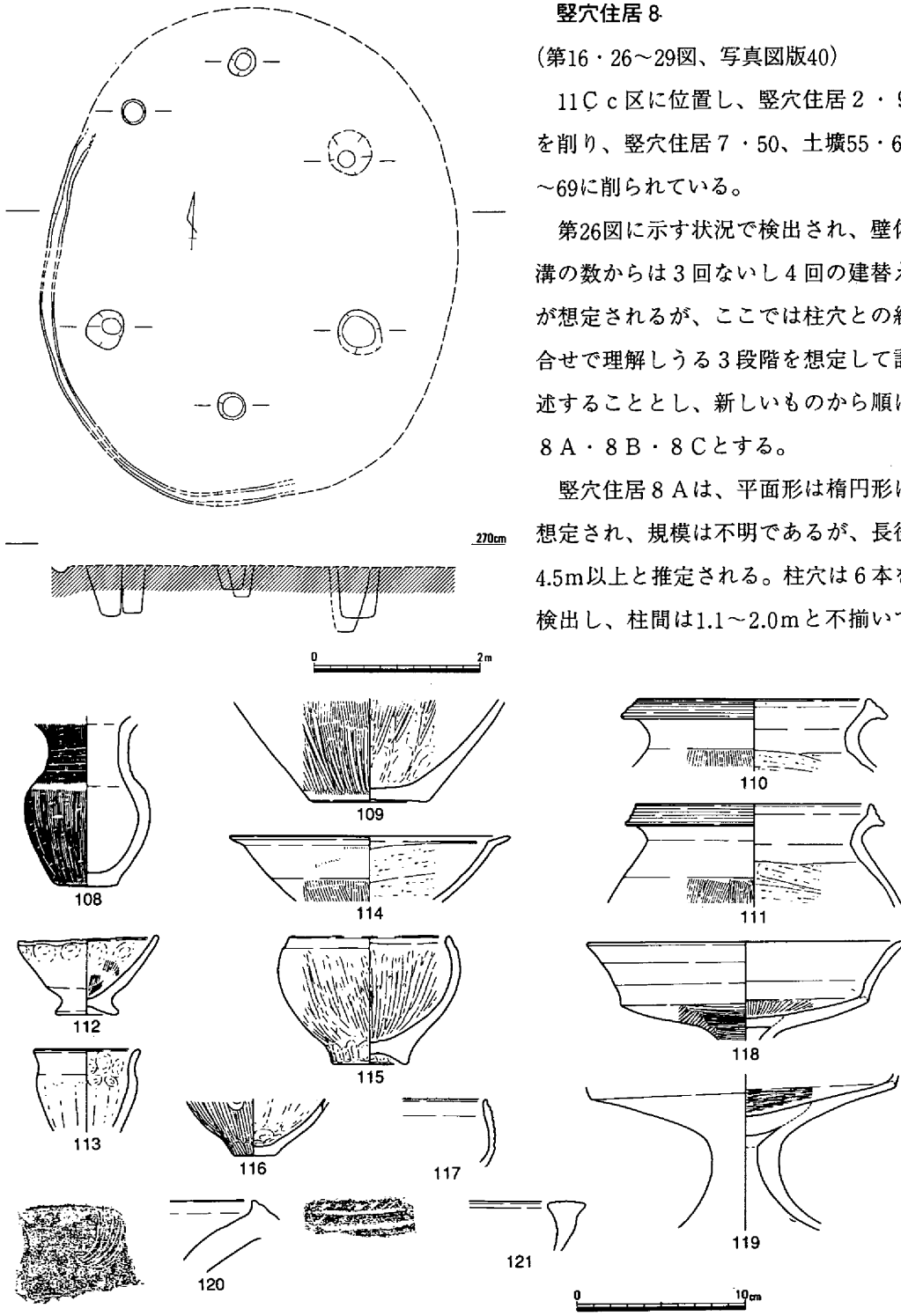
竪穴住居８

（第16・26～29図、写真図版40）

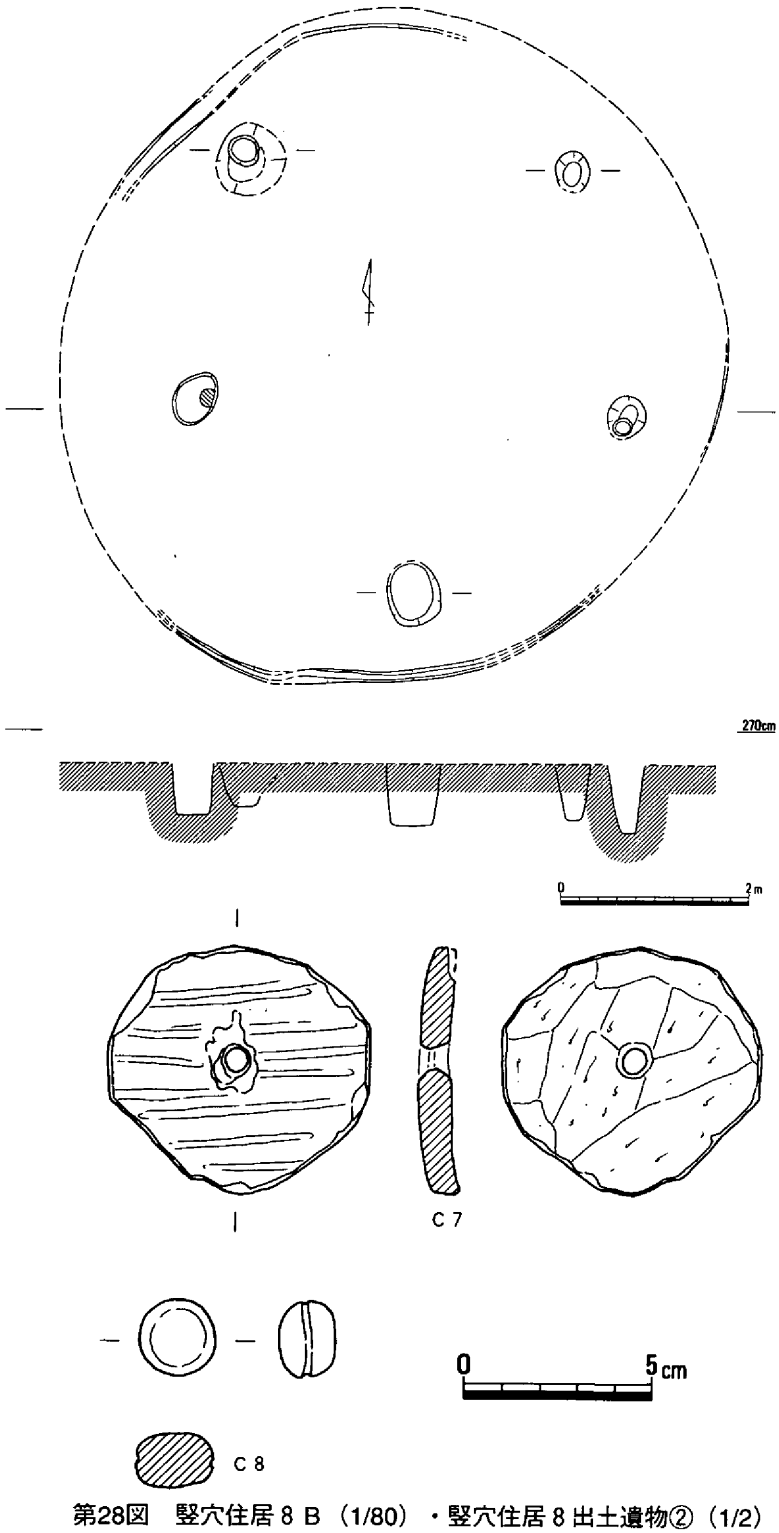
11Ｃｃ区に位置し、竪穴住居２・９を削り、竪穴住居７・50、土壙55・61～69に削られている。

第26図に示す状況で検出され、壁体溝の数からは３回ないし４回の建替えが想定されるが、ここでは柱穴との組合せで理解しうる３段階を想定して記述することとし、新しいものから順に８Ａ・８Ｂ・８Ｃとする。

竪穴住居８Ａは、平面形は楕円形に想定され、規模は不明であるが、長径4.5m以上と推定される。柱穴は６本を検出し、柱間は1.1～2.0ｍと不揃いで



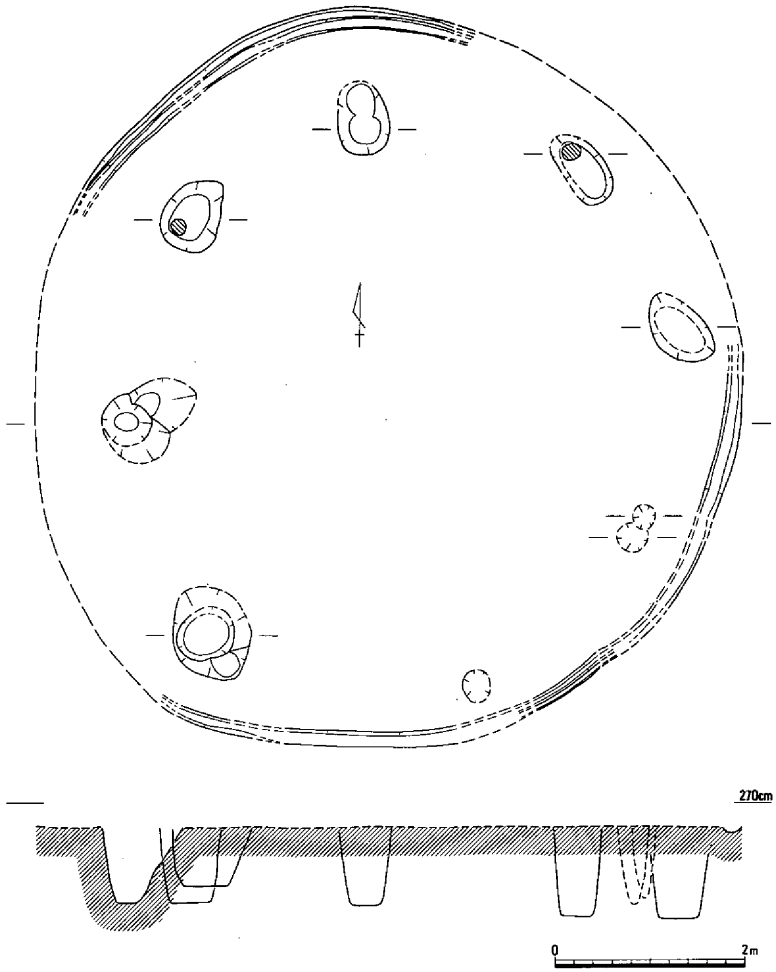
第27図　竪穴住居８Ａ（1/80）・竪穴住居８出土遺物①（1/4）



第28図　竪穴住居８Ｂ（1/80）・竪穴住居８出土遺物②（1/2）

ある。柱掘り方は長径23～40cmの楕円形で、深さは20～60cmを測り、壁体溝からの距離27～63cmに位置する。床面の海抜高は2.36ｍで、中央穴その他の住居内構造については不明である。新しい段階の８Ａであるが、８Ｂ・８Ｃより規模が小さく、継続しての建替えというよりは、別途に建直したと考えるべきかもしれない。

竪穴住居８Ｂの平面形は不整な円形に復元され、長径約7.35m、短径約6.91ｍと推定される。柱構造は５本柱と考えられ、柱間は2.0～2.6ｍを測る。柱掘り方は、長径30～58cmの楕円形で、深さ35～55cm、壁体溝との距離20～50cm



第29図　竪穴住居８Ｃ（1/80）

である。５本のうちの３本で、柱痕跡が確認された。中央穴その他の住居内構造については不明である。

なお、８Ａと８Ｂの壁体溝の間には、１条ないし２条の壁体溝および側壁の肩と考えられる遺構が検出されている他、８Ｂ南東部の壁体溝を削る壁体溝も見られるが、これらについてはいずれも柱穴との組合せを想定することができなかった。

竪穴住居８Ｃの平面形は円形に想定され、長径7.89ｍ、短径約7.5ｍで、床面積は40.6㎡前後となる。柱構造は８本柱に復元することができ、柱間は1.7～2.2ｍを測る。柱掘り方は長径25～65㎝の楕円形で、深さ45～74㎝、壁体溝との距離15～45㎝である。２本で柱痕跡を確認した他に、４本で重複が見られる。中央穴その他の住居内構造については不明である。

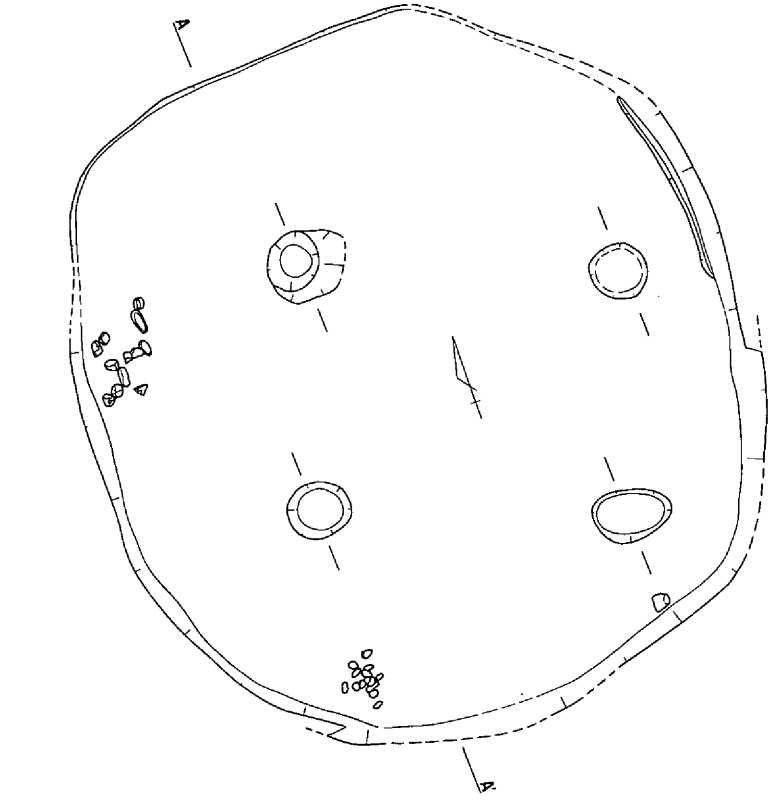
これらの床面は同一の面で検出しており、遺物についても各段階に分けて取り上げることはできていないが、弥生土器の壺109、小形壺108、甕110・111、高杯118・119、鉢113・114・116・117・121、台付鉢112・115、器台120、土器片転用紡錘車Ｃ７、土錘Ｃ８等が出土している。高杯には円盤充填技法が用いられており、甕の体部内面はヘラケズリが頸部にまで及んでいる。115の外面には彩文風の丹塗りが施され、116の穿孔は焼成後になされている。

時期は弥生時代後期前半（上東・鬼川市Ⅱ式併行）と考えられる。

竪穴住居９（第16・30～32図、写真図版40）

11Ｃｃ区に位置し、竪穴住居７・８、土壙147に削られ、土壙148を削っている。

平面形は隅丸方形で、長軸長5.71ｍ、短軸長5.25ｍをそれぞれ測り、床面積は23㎡である。検出面からの深さ38㎝が残り、側壁は直立に近く、床面は海抜高2.07ｍ前後でほぼ平坦である。壁体溝は東辺の一部において検出された他、断面の観察では西辺にも想定される。柱構造は４本柱で、柱間は2.0～2.6ｍを測り、主軸を東西に置くが、平面形から想定される主軸方向とは異なる。柱掘り方は長径45～65㎝の楕円形で、深さは27～40㎝、側壁との距離は45～150㎝を測る。床面の一部に微砂の散布がみられた他、北西部および南西部の側壁近くで、円礫の集中



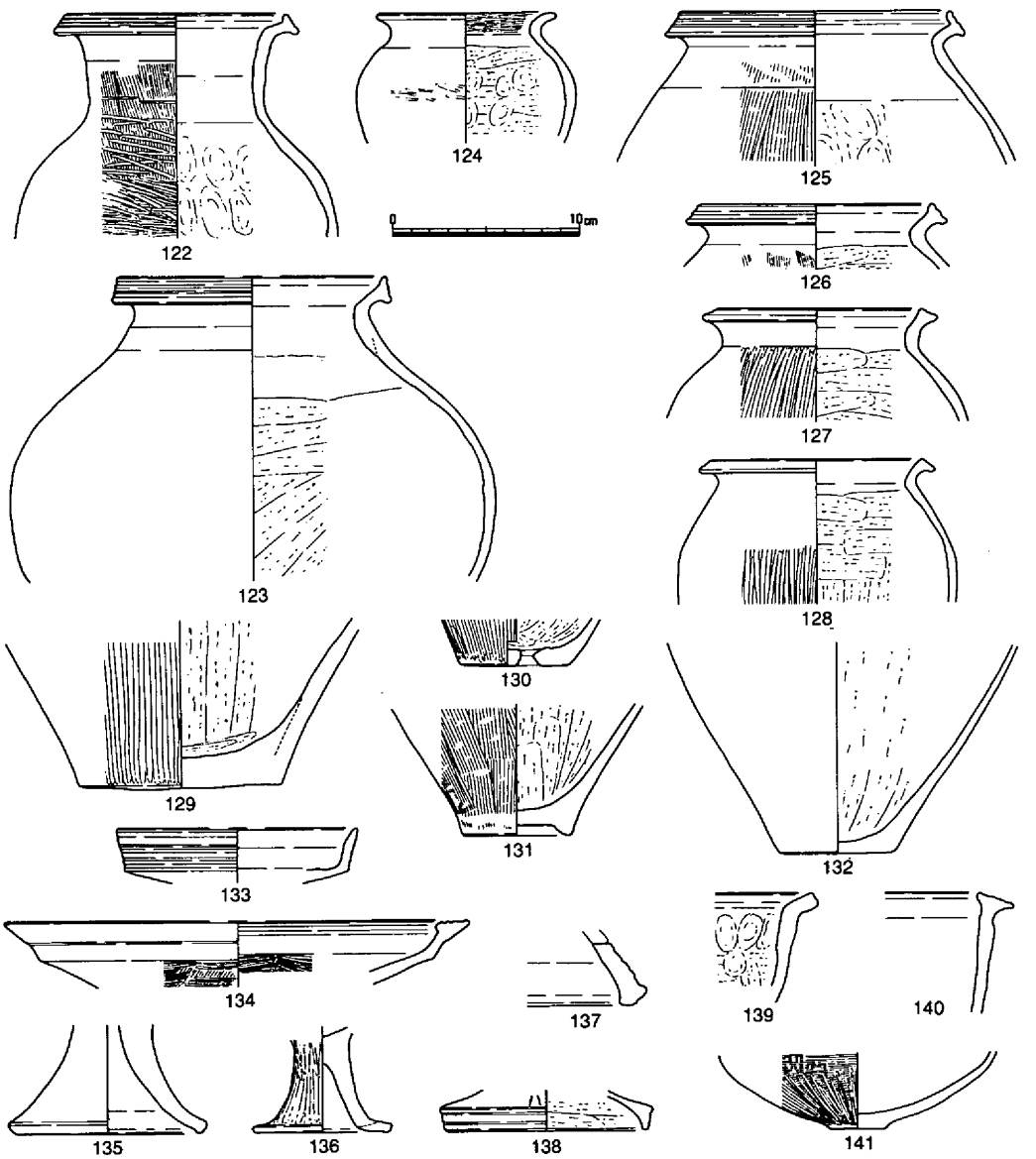
1．暗黄褐色土　　4．暗黄灰色土
2．暗灰色土（含、炭）　5．暗灰色砂
3．暗黄灰色土塊　　6．暗黄灰色土（下面に砂層）　7．暗黄灰色砂（下面に砂層）

第30図　竪穴住居９（1/60）

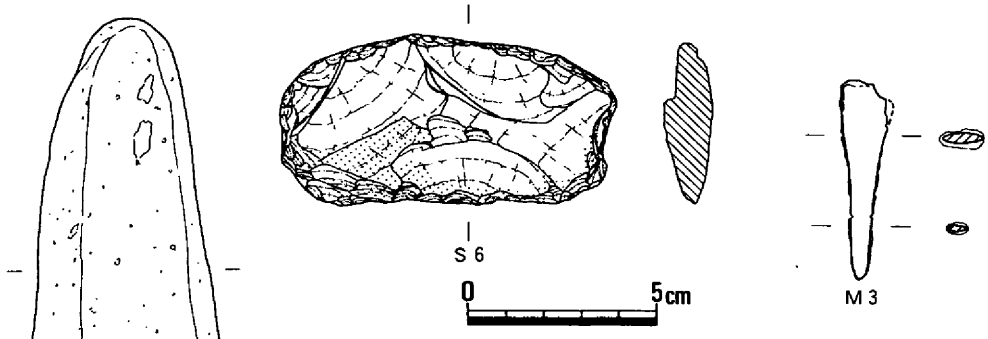
する箇所が認められた。中央穴その他の住居内構造は不明である。

出土遺物には、弥生土器の長頸壺122、壺123・124、甕125～129・131・132、甑130、高杯133～136、鉢139～141、器台137・138等の他に、敲石Ｓ５、サヌカイト製の石包丁Ｓ６、鉄鏃Ｍ３がある。122の頸部は口縁部に向かって開いており、体部内面上半は指頭圧痕を残している。138の外面には丹塗りが施されている。

時期は弥生時代後期前半に比定される。



第31図　竪穴住居９出土遺物①（1/4）



第32図　竪穴住居９出土遺物②（1/3・1/2）

竪穴住居10（第16・33・34図）

10Ｃｂ区に位置し、東辺を調査区外に置く。土壙149を削り、南半を竪穴住居25・60に削られている。

平面形は円形と想定されるが、規模は南北方向での径7.86ｍが知られるのみである。検出面からの深さ35㎝が残り、側壁はほぼ直立して、床面の海抜高は2.43ｍである。北西部において２条の壁体溝を検出しており、１回の建替えが想定されるが、柱構造を復元できたのは第33図に示すもののみである。５本の柱穴を検出しており、６本柱と想定される。柱間は2.2～3.1ｍで、側壁との距離は70㎝前後を測り、柱掘り方は長径36～80㎝の楕円形である。中央穴等の住居内構造は不明であるが、北西部の側壁添いに台石とも考えられる角礫を検出している。

出土遺物には、弥生土器の甕142・143・146、高杯147・148、鉢144、台付鉢145、土器片転用紡錘車Ｃ９等がある。143の口縁部は下端が横方向へ摘み出されており、145は手捏ね土器である。146・148には後期後半の特徴が見られるが、周辺の遺構との関係から弥生時代後期前半に属する遺構と考える。

竪穴住居11（第16・35図）

10Ｂａ区に位置し、竪穴住居71、土壙189に削られている。

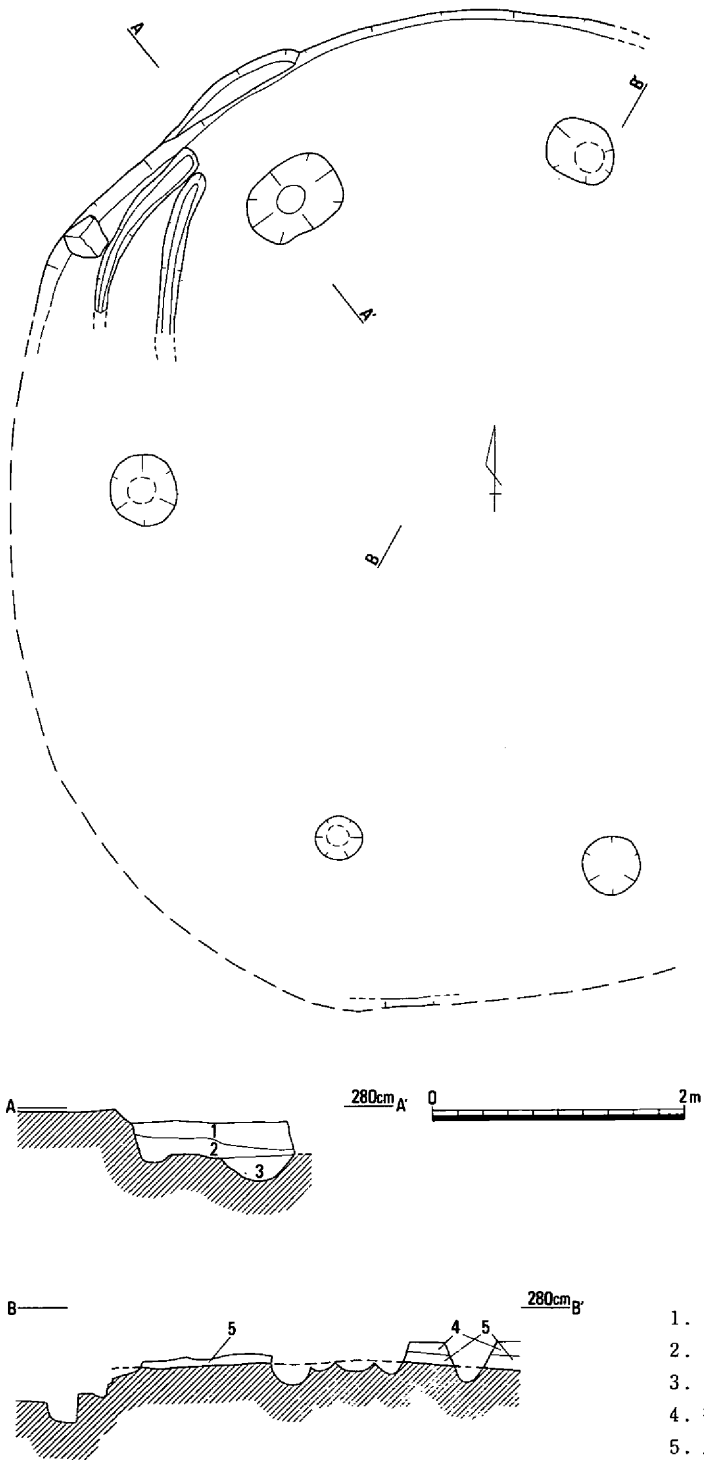
平面形は不整な隅丸方形を呈するが、南東部の輪郭が不明であり、南北方向の長軸長4.28ｍが知られるのみである。この不明瞭な輪郭の内側に、南北長3.28ｍを測る平面形方形の段があり、海抜高2.51ｍの床面まで約10㎝下がっている。側壁からこの段までの間がベッド状遺構と考えられ、幅は最大50㎝となる。壁体溝は確認されていない。柱穴は４本を検出しており、柱間は1.8～2.0ｍで主軸は東西に置かれるが、これは平面形から想定される主軸方向と異なる。柱掘り方は径35㎝前後の円形で、深さは10～40㎝と不揃いである。中央施設と考えられる土壙

は120×80×12cmの平面形楕円形で、南西方向に灰の掻き出しを伴い、南肩口には台石と考えられる角礫がある。この他の住居内構造については不明である。

床面およびベッド上には、焼失に伴う炭化材が残っており、幅15cmを測る部分もある。また、北東の柱穴脇の床面と、南西部の段部分には焼土化した箇所が認められる。

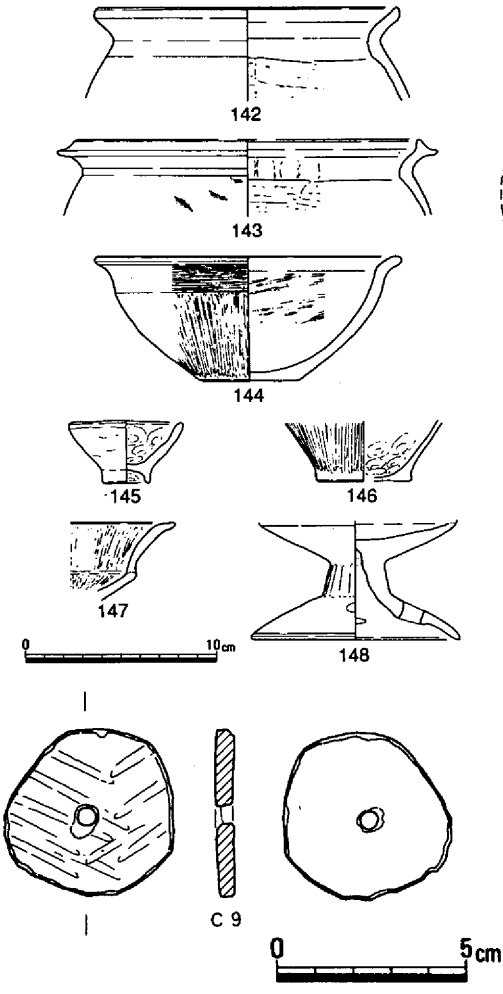
出土遺物には、弥生土器の壺150、小形壺149、鉢151～153、小形鉢154、器台155がある。150の口縁部には３条の凹線が巡り、胴部外面はヘラミガキされている。149・154はミニチュアの範疇に入るものである。156は混入と思われる。

これらにより、時期は弥生時代後期前半に比定される。



1．暗灰褐色砂質土
2．暗灰色砂質土
3．暗褐灰色砂
4．褐灰色砂（含、炭）
5．灰褐色砂（含、灰黄色土小塊）

第33図　竪穴住居10（1/60）

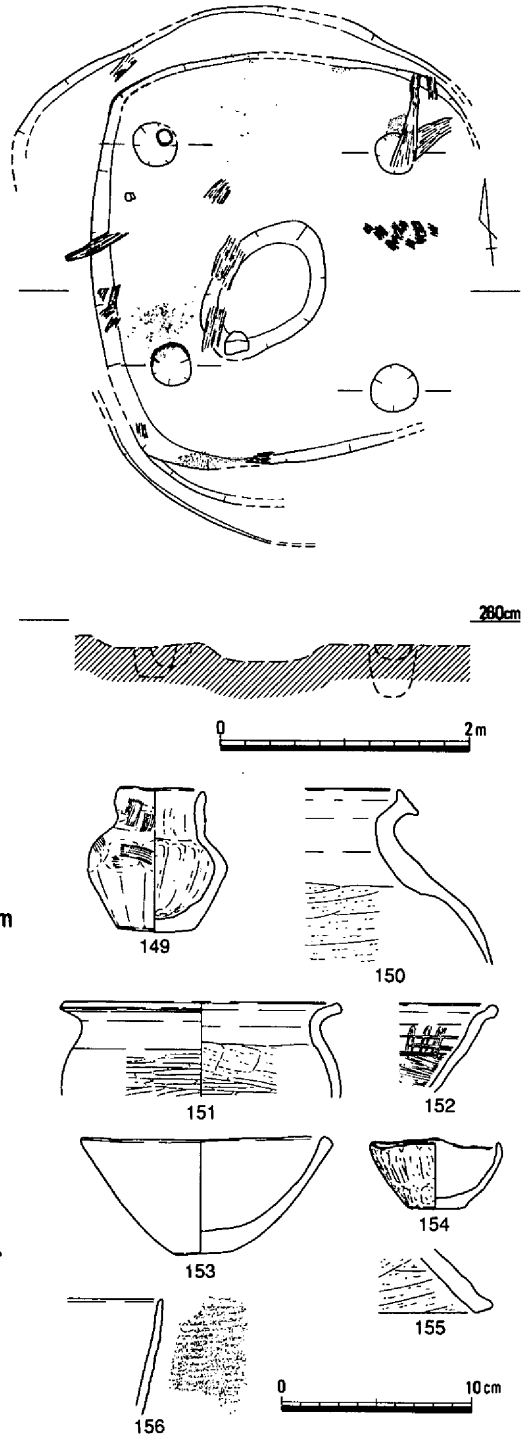


第34図　竪穴住居10出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居12（第16・36図）

10Ｂｃ区に位置し、土壙36・161を削り、土壙103に削られる。

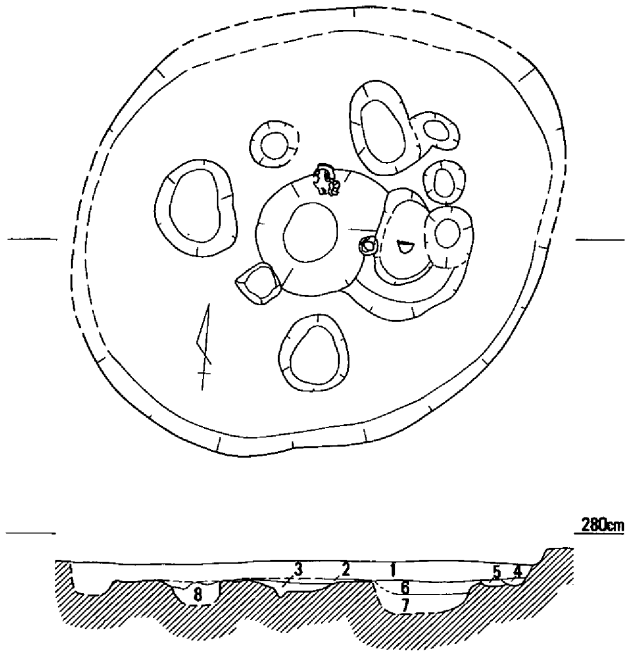
平面形は楕円形を呈し、長径3.77ｍ、短径3.47ｍを測り、床面積は9.3㎡程度に復元される。側壁はやや外傾しており、壁体溝は平面的には確認されなかったが、断面観察では可能性を残している。床面で検出された柱穴・土壙は第36図のとおりであり、柱構造を限定しかねるが、４本柱の可能性が高く、その場合の柱間は1.0

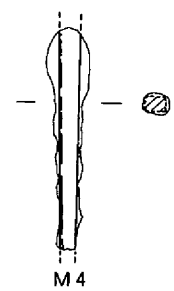


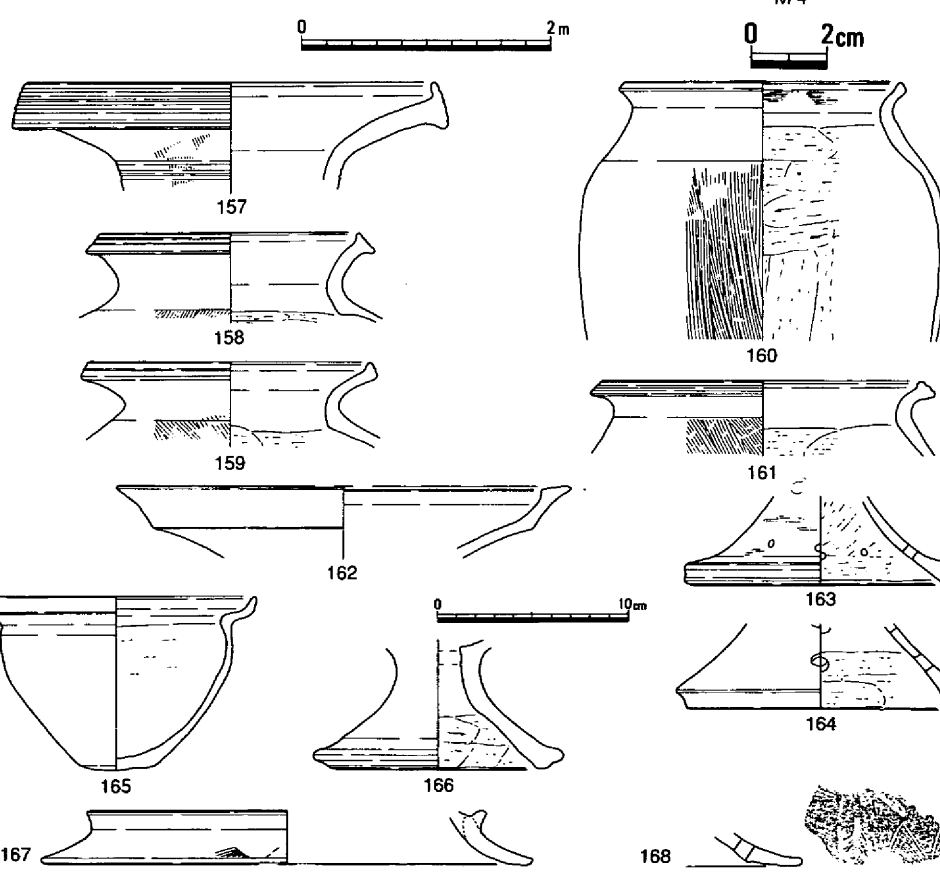
第35図　竪穴住居11（1/60）・出土遺物（1/4）

第36図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）

1．黒茶褐色土（含、炭）
2．黒茶色土（含、炭）
3．淡黄茶色土
4．暗茶褐色土（含、暗灰色土）
5．黒灰色土（含、暗黄褐色土塊）
6．黒茶褐色土
7．暗黄茶褐色土
8．暗茶黄褐色土（含、灰色土塊）







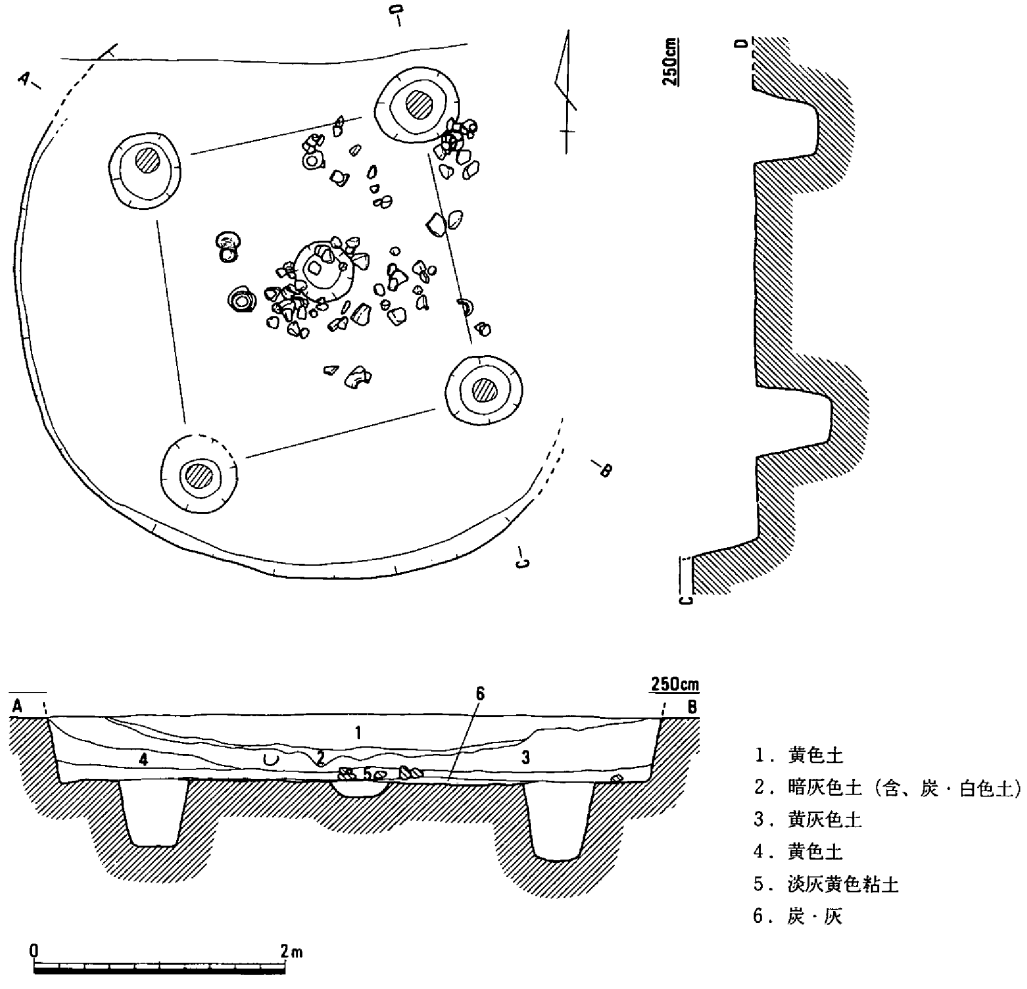
～1.7ｍとなり、主軸は北東から南西に置かれることとなる。中央穴に相当すると考えられる土壙は浅く、上層に炭が堆積しており、その南西肩口には台石がのっている。

出土遺物には、弥生土器の壺157、甕158～161、高杯162～164・166、装飾高杯167・168、鉢165等の他に、鉄鏃Ｍ４がある。164の外面は丹塗り、167・168の裾部には鋸歯文が施される。

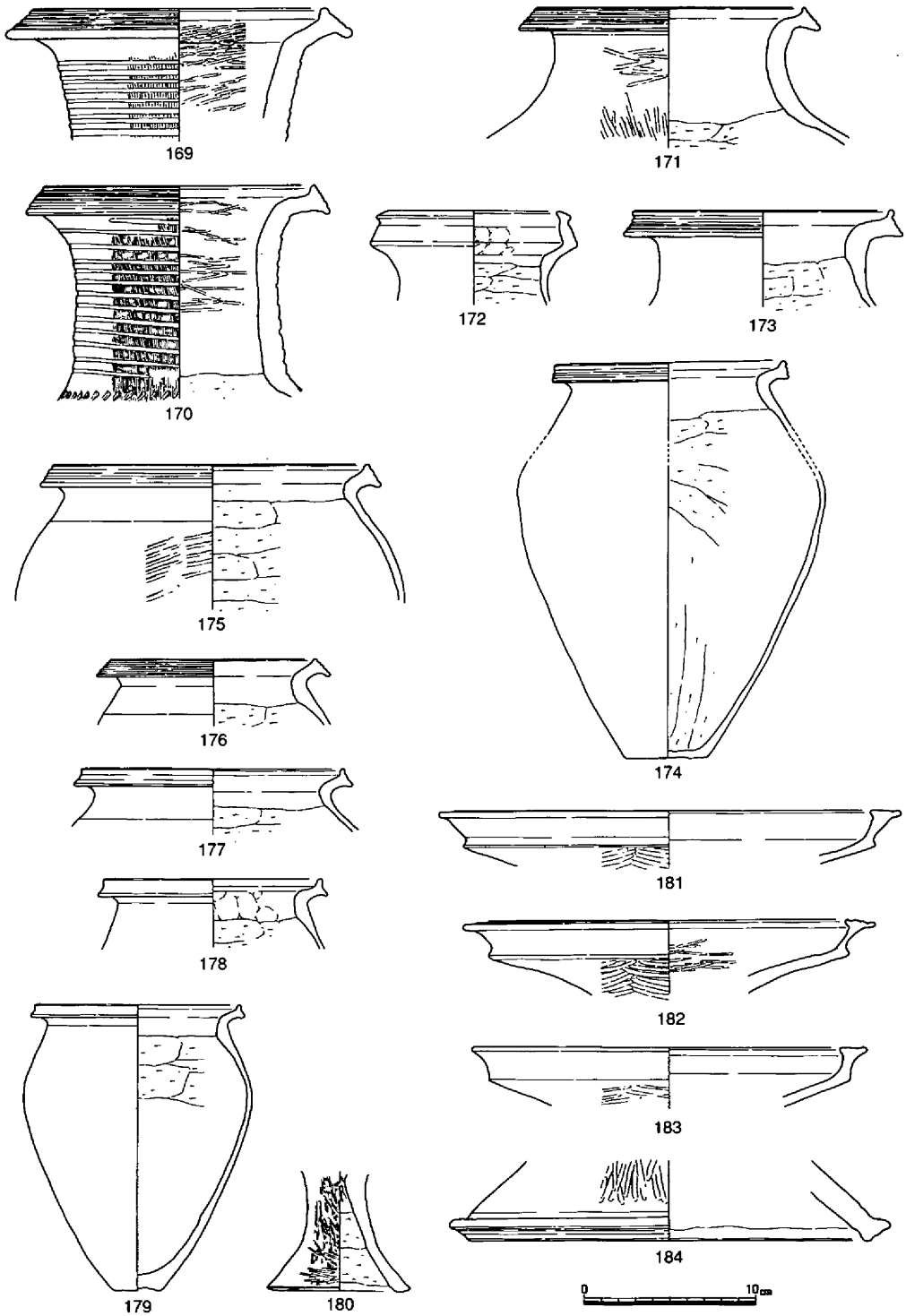
時期は、弥生時代後期前半に比定される。（光永）

竪穴住居13（第16・37～39図、写真図版41）

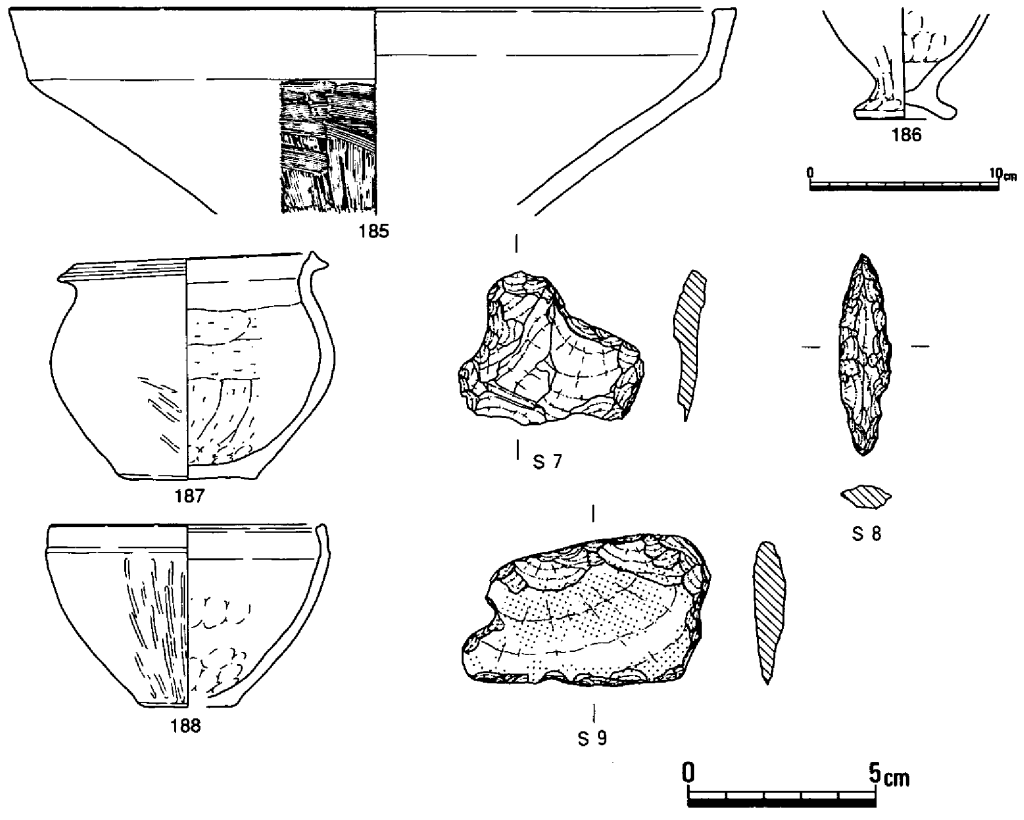
９Ｃ区のほぼ中央部分において検出された住居であるが、北東部分は調査年次が異なったことで側溝等に切られ、完全な状態での検出は出来なかった。当該微高地のなかにあっては比較的しっかりとした基盤上を掘開の後構築されたもので、平面規模径約５ｍを測る円形住居であった。床面は検出面から約50㎝掘り下げたところで検出され、およそ東西南北に４本の柱穴と



第37図　竪穴住居13（1/60）



第38図　竪穴住居13出土遺物①（1/4）



第39図　竪穴住居13 出土遺物②（1/4・1/2）

その中央に径約50cm、深さ12cmの円形を呈する中央穴の存在が確認され、さらにこの中央部の周辺には土器片・小石等の平面的な散在が認められた。柱穴は、平面約60cm前後、深さ50～60cmの規模をみせるものであった。なお壁体溝の存在の有無については確認出来なかった。

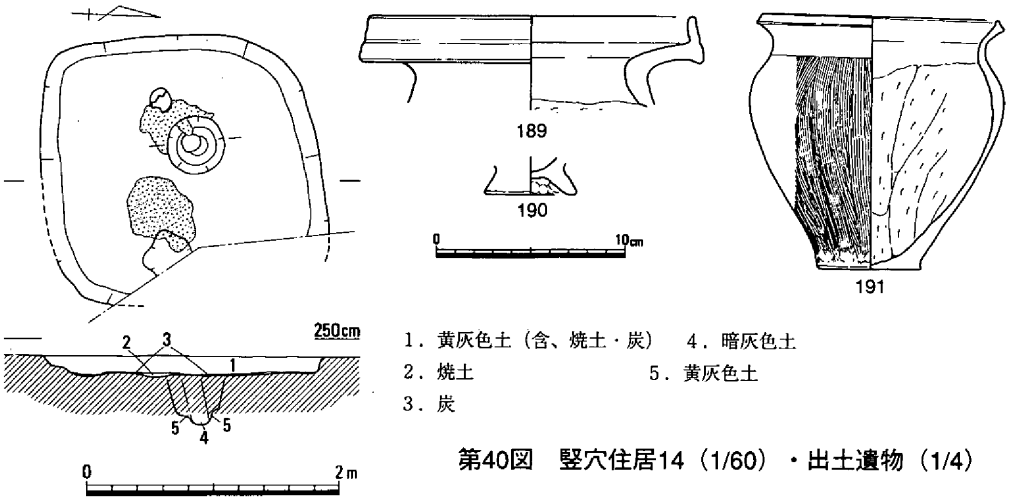
出土遺物は、床面に接した状態で壺、甕、高杯、鉢、器台等の土器と石匙、石鏃、石包丁等の石器がみられた。

土器は、長頸壺の頸部は直立もしくは逆「ハ」字状を、高杯の口縁部立上がり上端部は平坦面を有する段階のもので、型式的には上東・鬼川市Ⅰ式併行と考えられるものであった。

なお、ここに図化は出来なかったが、この住居からは土壙40出土の壺418と同一個体に接合される資料が出土しており、同時性が看取された。

竪穴住居14（第16・40図）

９Ｃ区にあって竪穴住居13の南約50cmに隣接して検出された隅丸方形を呈する遺構である。当初その規模から土壙として認識されたが、検出面から約15cmの深さで認められた底面には、１本ながら柱穴の存在と被熱面さらに炭の広がり等の存在が確認され、住居と認定した。規模



第40図　竪穴住居14（1/60）・出土遺物（1/4）

は、およそ東西・南北方向に約２ｍ前後の一辺を有するもので、一般的な竪穴住居の規模とは比較にならないくらい小規模であった。

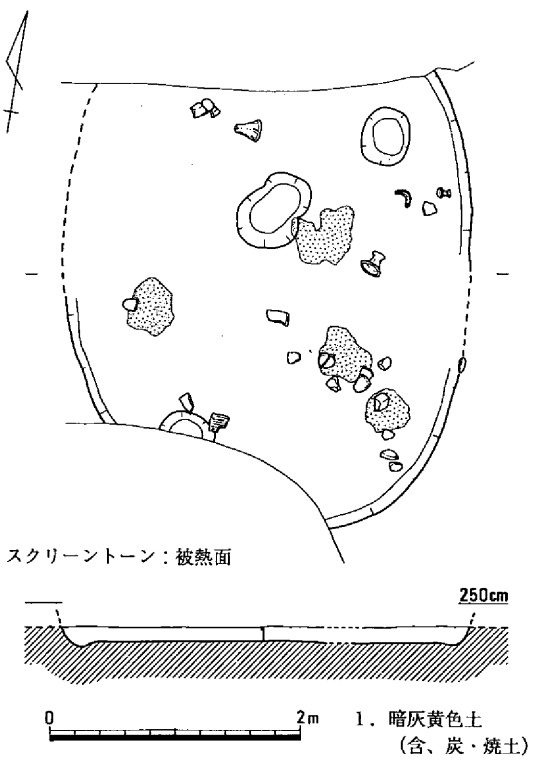
出土遺物には、壺、甕、台付鉢等の器種が確認され、そのなかの甕191が上東・鬼川市Ⅱ式に併行することで時期は後期前半へ位置づけられよう。

竪穴住居15（第16・41・42図）

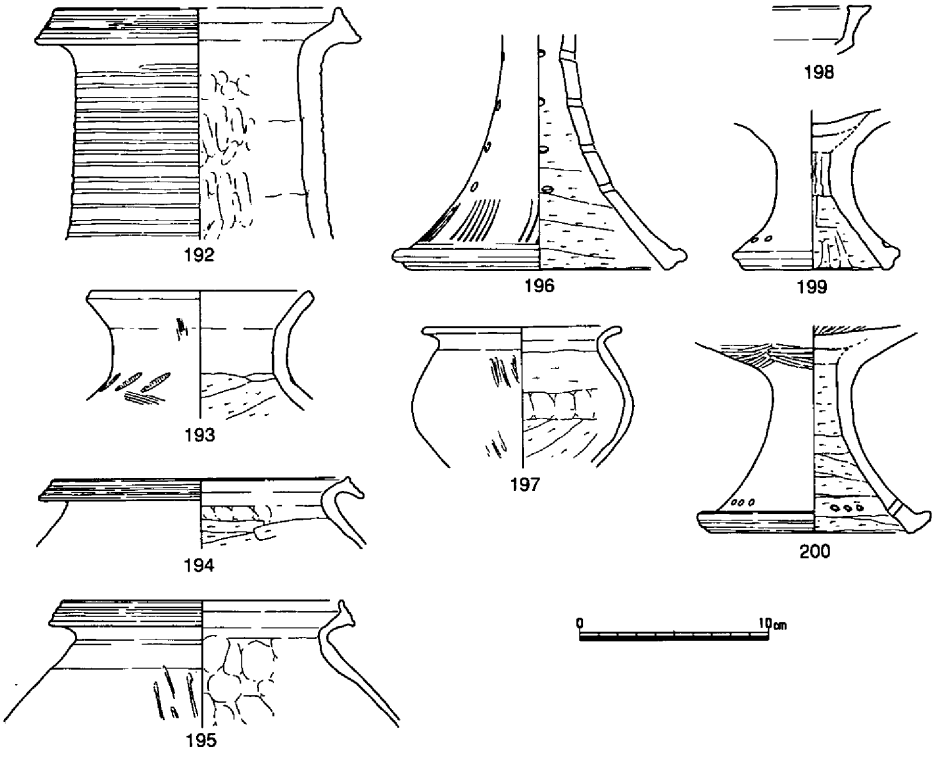
９Ｃ区において竪穴住居14南西約50cmに近接した位置に北西部が古墳時代の竪穴住居91・92によって、南側が竪穴住居95・99によって切られた状態で検出された。平面は、状況からおそらく長軸長４ｍ前後で、幅3.20ｍを測る楕円形を呈する住居であったことが推測される。

床面には住居に伴う柱穴の確認は出来なかったが、不明確な柱穴と４か所に被熱面の存在、さらに土器片の遺存が確認された。ただし、壁体溝の存在については明確な状態での確認ができなかった。

出土遺物には、壺、甕、高杯、鉢等の器種がみられた。長頸壺の頸部は垂直気味に長く、高杯の口縁立上がり部は外方に拡張を見せないもので、型式的には上東・鬼川



第41図　竪穴住居15（1/60）



第42図　竪穴住居15出土遺物（1/4）

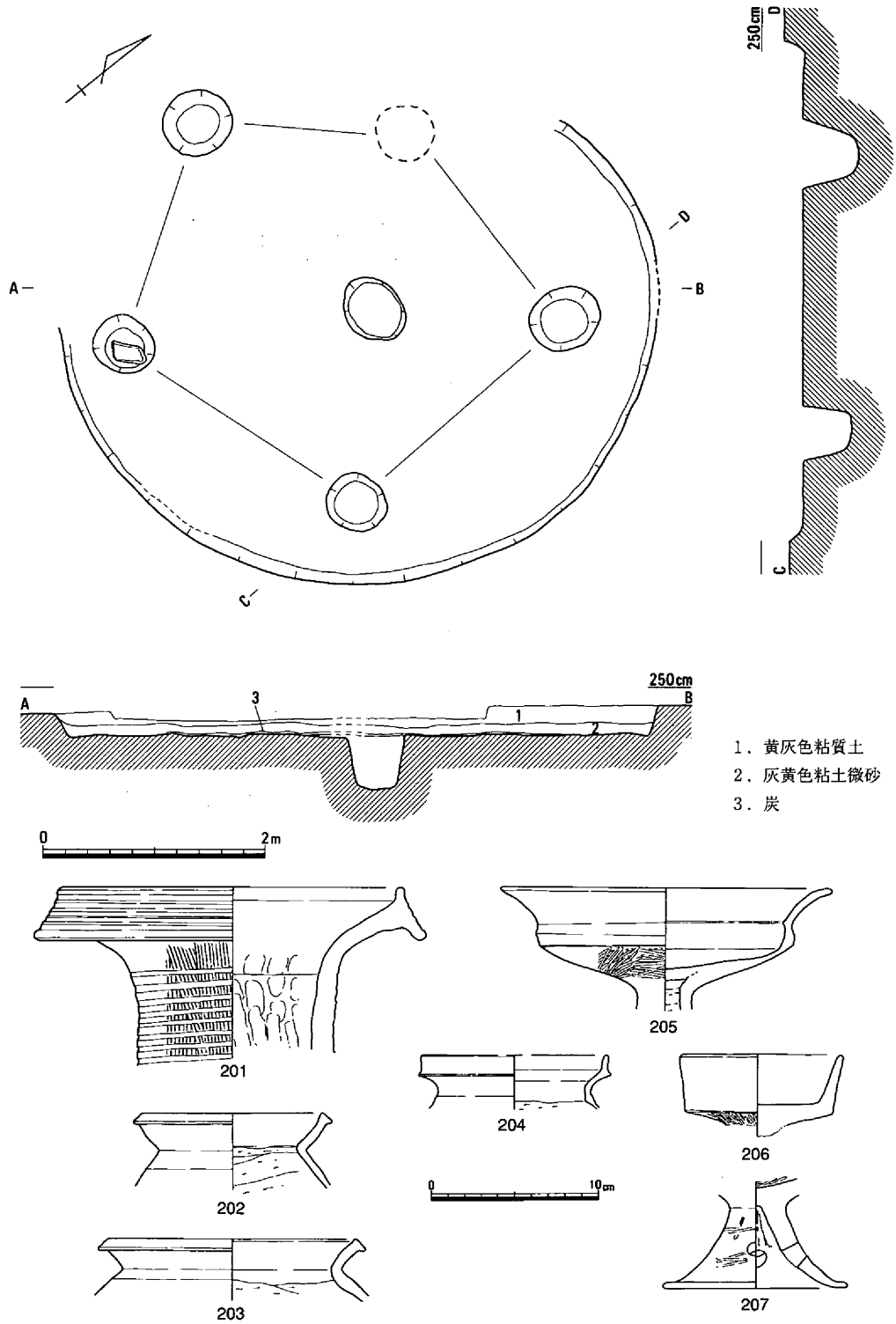
市Ⅰ式併行と考えられるものである。

竪穴住居16（第16・43・44図、写真図版42）

８Ｂａ区と８Ｂｂ区に跨がった位置において弥生時代後期後半の竪穴住居43と古墳時代前半期の竪穴住居107によって切られ、その北東部分の上半部覆土が削除された状態で検出された。平面は、遺存部分の長軸長5.40ｍを測る楕円形が推測された。床面には、中央部に炭の広がりと柱穴・中央穴等の存在が確認されたが、壁体溝については検出できなかった。柱穴は、４本が芯心距離2.00～2.50ｍでそれぞれに鈍角をなした位置関係で検出され、これにより主柱穴５本が想定された。柱穴は、いずれも径50cm以上で40～50cmの深さの掘り方を有するもので、南端の柱穴には礎石の遺存が確認された。中央穴は、ほぼ柱穴と同じ規模で検出された。

出土遺物には、性格不明の土製品１点と土器が少量検出された程度で、器種としても壺、甕、高杯が確認されたにすぎない。全体的に上東・鬼川市Ⅱ式併行段階と考えられるが、甕204は、一見口縁部が長く上部に拡張を見せる等新しい様相を示すものであった。しかし、その甕は胎土中に角閃石を多く含み、内・外面には丹が施される等の特徴から備中西部地域の土器と判断されることで、共伴して差支えない土器と考える。

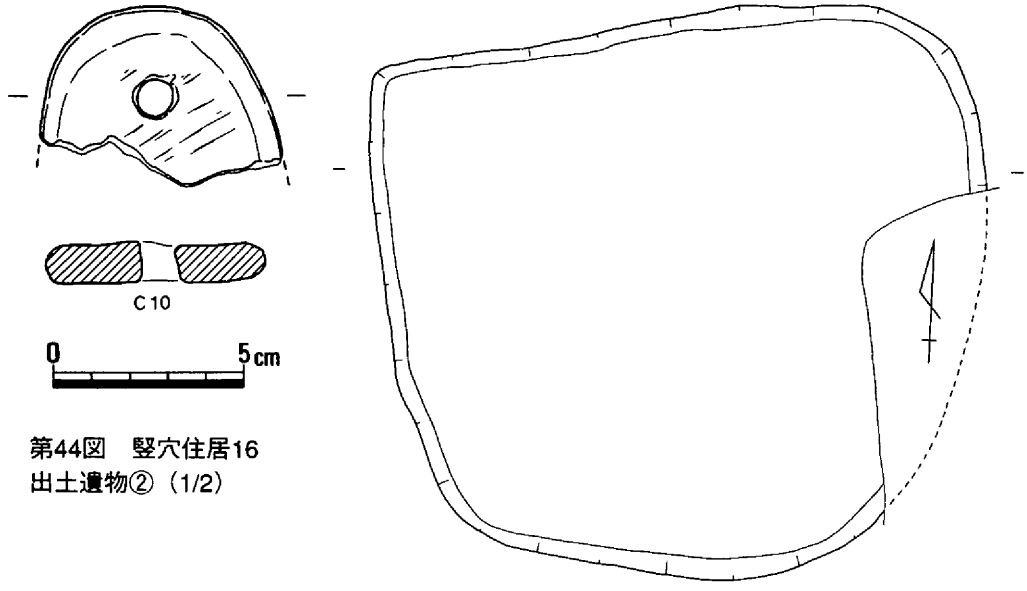
竪穴住居17（第16・45図）



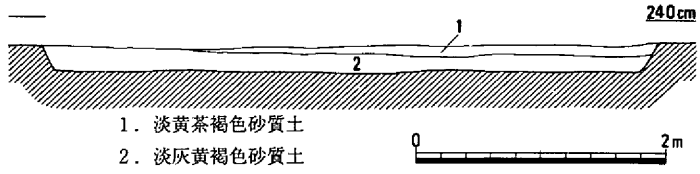
第43図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物①（1/4）

2．足守川加茂Ｂ遺跡

８Ｂｂ区において検出された平面不整隅丸方形を呈する住居である。検出面から約20cm下層で比較的平坦な床面が検出されたが、そこには柱穴、壁体溝、中央穴等付属施設の検出が全く出来なく、当初住居としての可能性の否定要因にあげられた。しかし、規模と水平面を呈する底部等の状況は、住居として差支えないと考える。遺物には、他地域からの搬入と考える壺209を含み、時期的には明確ではないがおよそ後期の範疇で理解されよう。　　（島崎）

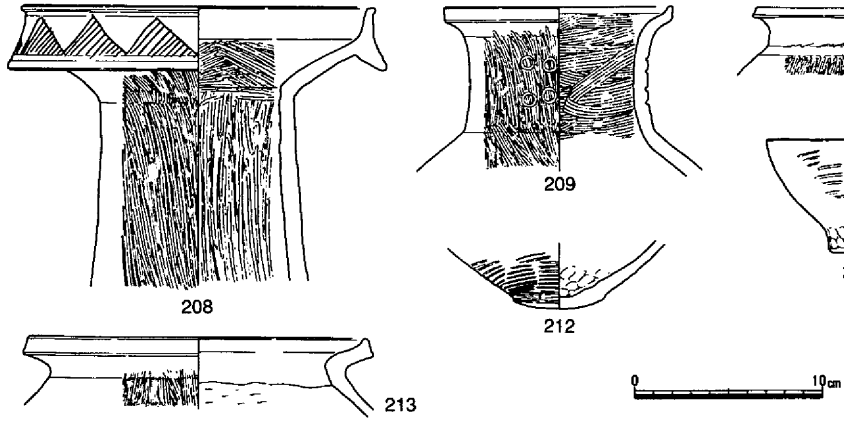


第44図　竪穴住居16
出土遺物②（1/2）



1．淡黄茶褐色砂質土
2．淡灰黄褐色砂質土

第45図　竪穴住居17
（1/60）・出土遺物（1/4）



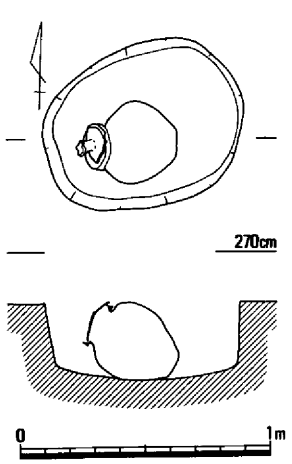
(3)　土器棺

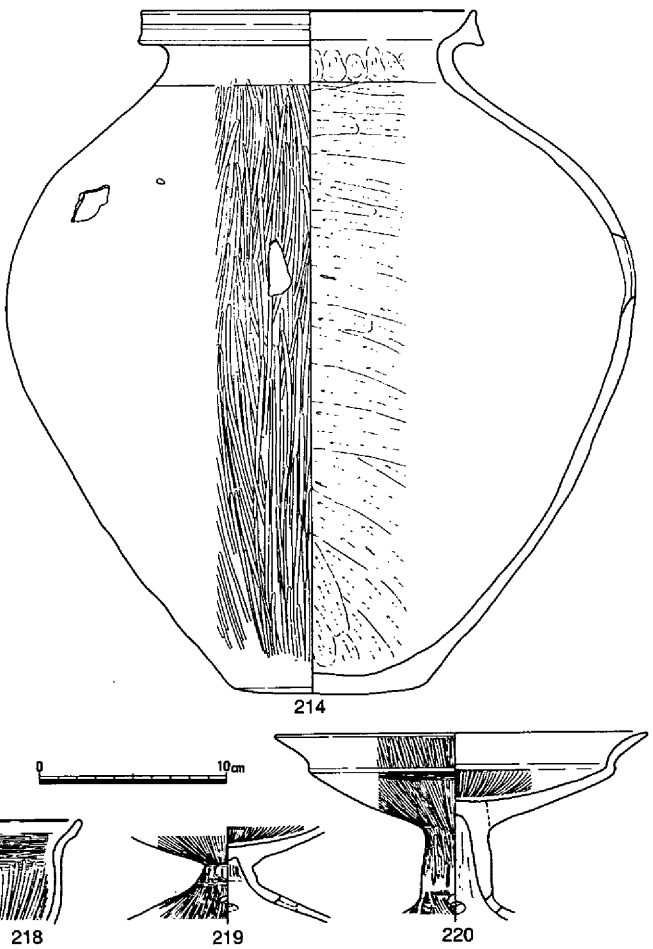
土器棺１（第16・46図、写真図版42）

９Ｃｃ区南部に位置し、土壙39～41に近接し、竪穴住居13との距離４ｍを測る。

墓壙の平面形は楕円形を呈し、長径79cm、短径63cm、深さ30cmをそれぞれ測る。海抜高2.2ｍの底面はほぼ平坦である。この墓壙の西寄りに、弥生土器の壺214が口縁部を西に向けて胴部下半を底面に接地させる形で傾いて据えられていた。その口縁部には、脚裾部を打ち欠いた弥生土器の高杯220が杯部を下にして蓋として用いられている。壺内の堆積土には、人骨等の遺存はなく、副葬品も検出されなかった。

214の胴部には、焼成後にあけられた大小３個の孔が見られるが、口縁部への打ち欠きは認められない。埋土には219等の混入も見られるが、214・220により、時期は弥生時代後期前半（上東・鬼川市Ⅱ式併行）に比定される。（光永）





第46図　土器棺１（1/30）・出土遺物（1/4）

(4) 土壙墓

土壙墓１（第16・47図、写真図版43）

11Ｂｃ区に位置し、土壙墓２との距離は１ｍ以内と考えられる。

墓壙については、北東隅と考えられる部分が検出されたのみで、規模は不明であるが、人骨の残る範囲からは、90×50cm以上に想定される。

人骨の遺存状態は悪いが、頭骨と下肢骨と考えられる部位が残っている。下肢骨は、膝を西に向けて折り曲げた状態を示しており、背骨を東に置いていたと考えられる。性別・年令等は不詳であるが、成人の可能性が高い。

遺物は出土していないが、土壙墓２と同時期と考えられる。

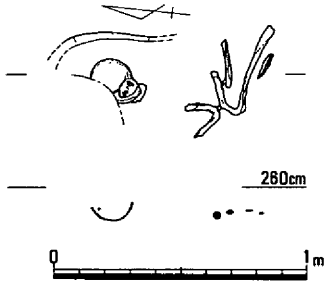
土壙墓２（第16・48図、写真図版43）

10Ｂａ区に位置し、土壙32・33・156に削られている。

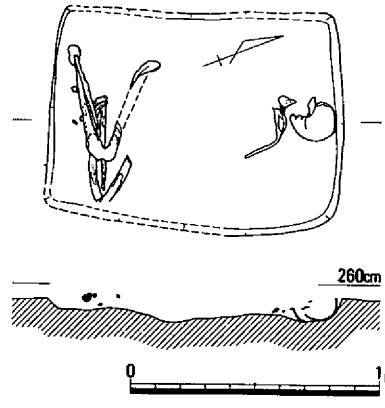
墓壙の平面形は長方形で、長軸長118cm、短軸長89cm、深さ10cmをそれぞれ測る。底面の海抜高は2.5m前後で、やや凹凸がある。

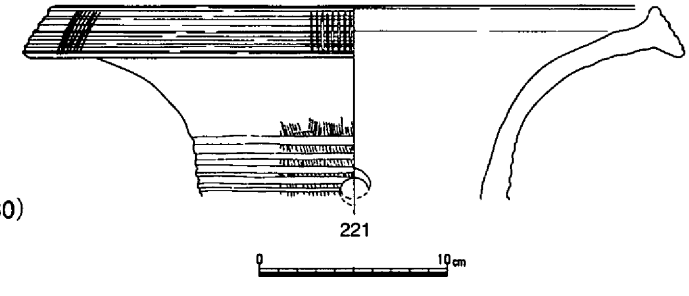
墓壙内の北端に頭骨と若干の骨が残り、南半に膝を東に向けて折り曲げた状態の下肢骨が検出された。骨の遺存状態は脆弱で、取り上げは困難であったため、性別・年令等の考察を加えることはできなかったが、略測で身長140cm以上には復元でき、成人の可能性が高い。

弥生土器の器台221が出土しており、時期は弥生時代後期前半に求められる。　（光永）



第47図　土壙墓１（1/30）





第48図　土壙墓２（1/30）
・出土遺物（1/4）

(5)　土壙

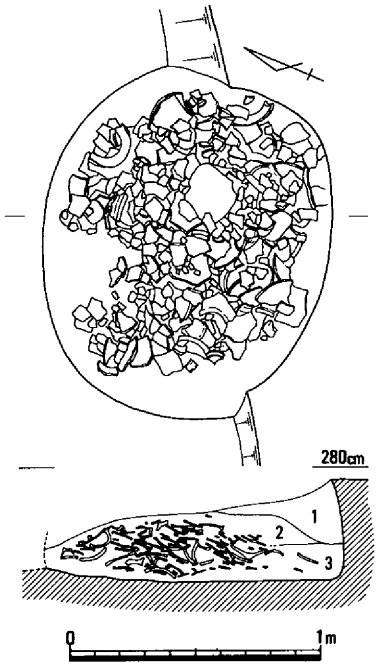
土壙６（第16・49～53図、写真図版44）

11Ｃｂ区北部に位置して、上層を北へ向けての下がりに削られ、土壙７・８との距離は約４ｍである。

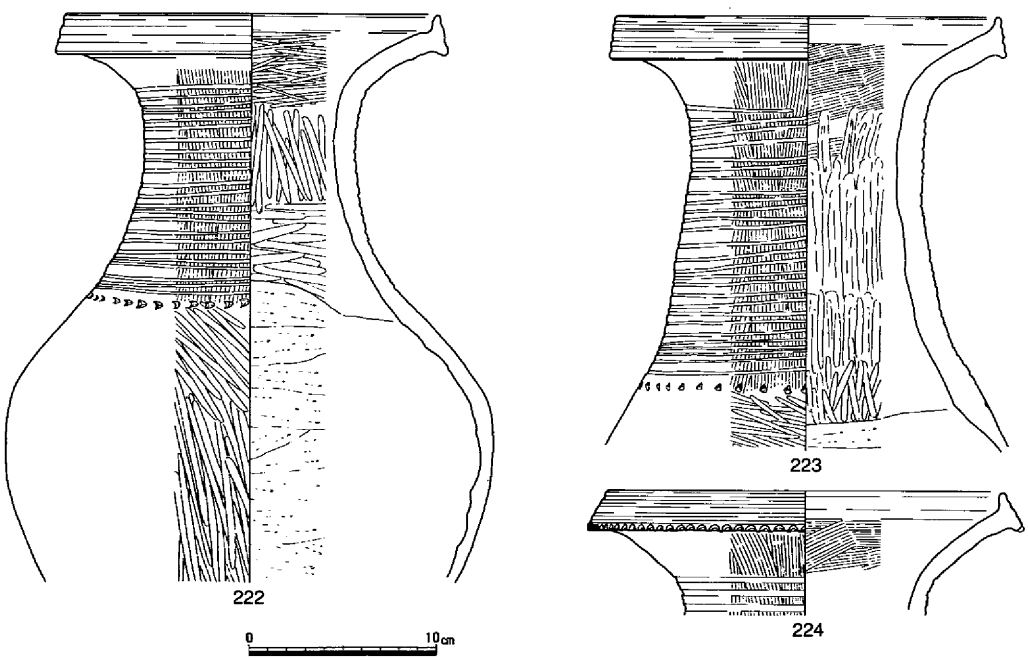
袋状土壙であり、平面形は楕円形と想定されるが、検出面においては最大長径1.2ｍが知られるのみである。南辺においては、内傾する側壁が深さ40㎝まで残っており、海抜高2.35ｍを測る底面はほぼ平坦で、規模は長径1.42ｍ、短径1.15ｍをそれぞれ測る。

埋土は３層に分けられ、第２・３層から炭・焼土とともに多量の弥生土器が出土している。

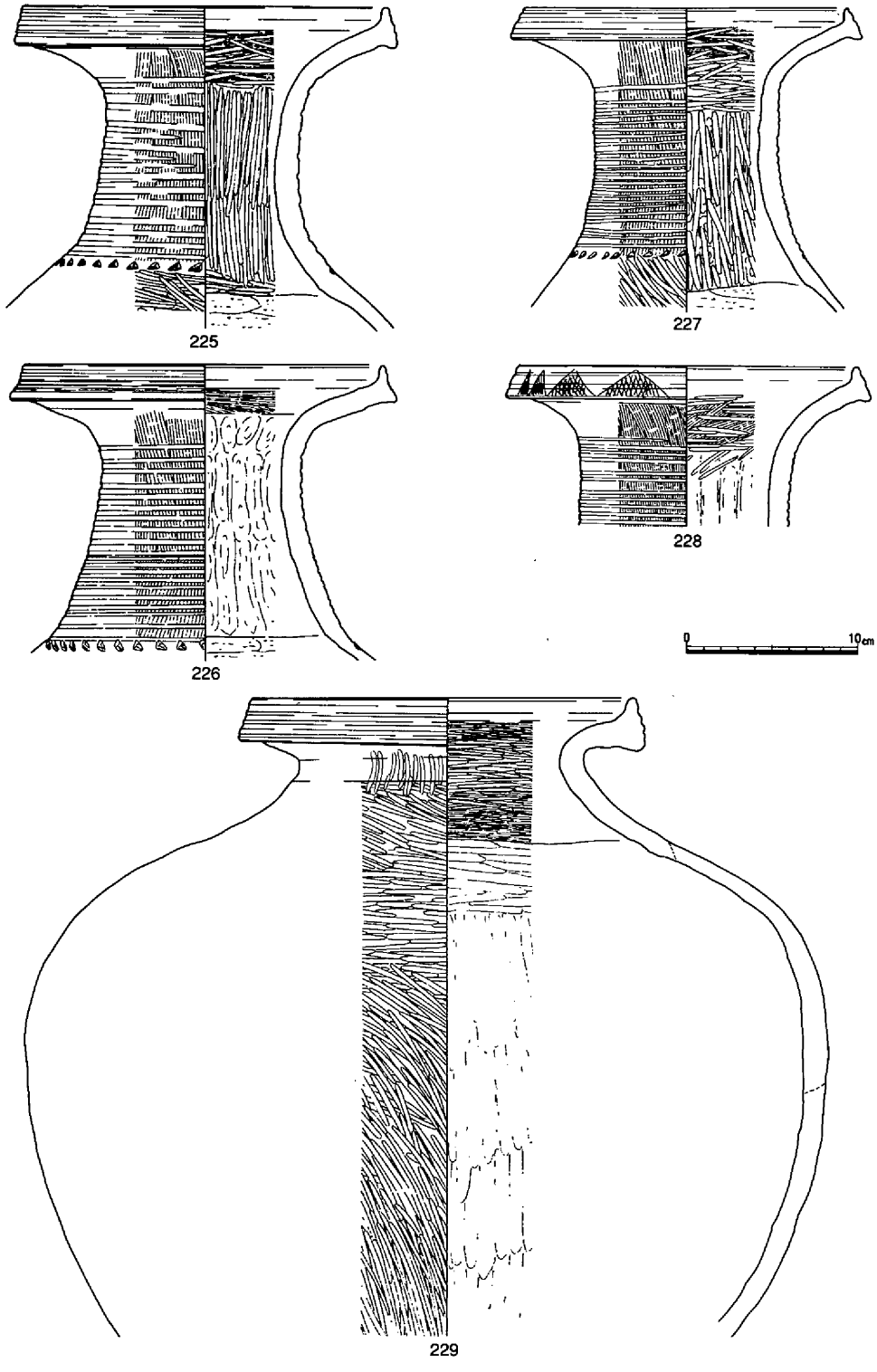
長頸壺222～228、壺229～236・239、甕237・238・240・241、高杯242、鉢243～247等があり、長頸壺の口縁部には凹線が、頸部外面にはハケメ後に沈線がそれぞれ巡らされている。頸部の内面はヘラミガキされるものが多く、これは壺においても229・230・236・239において見られる。高杯の脚部は差し込みによる



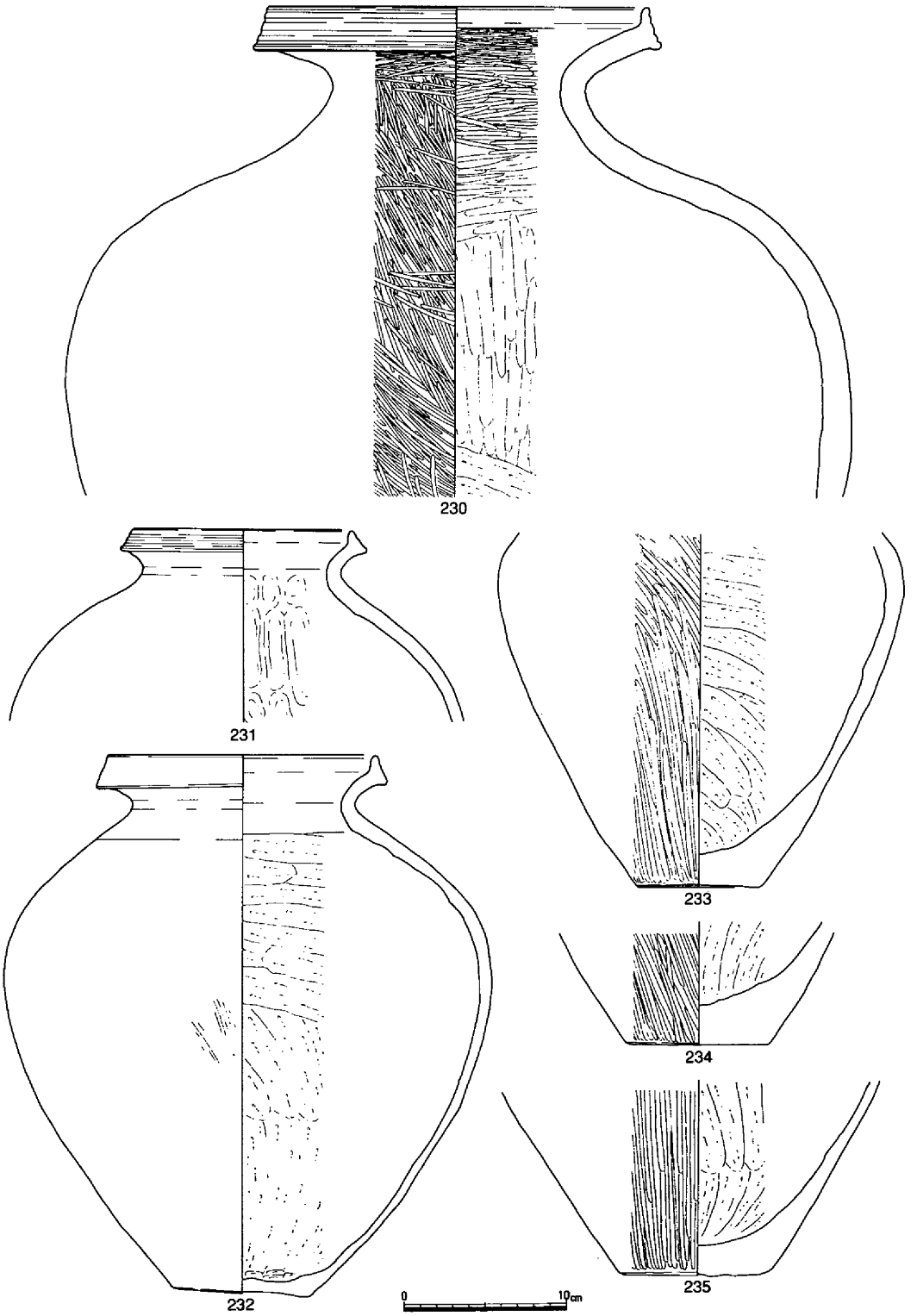
1．淡褐灰色細砂
2．褐灰色砂質土（含、炭・焼土）
3．灰色細砂



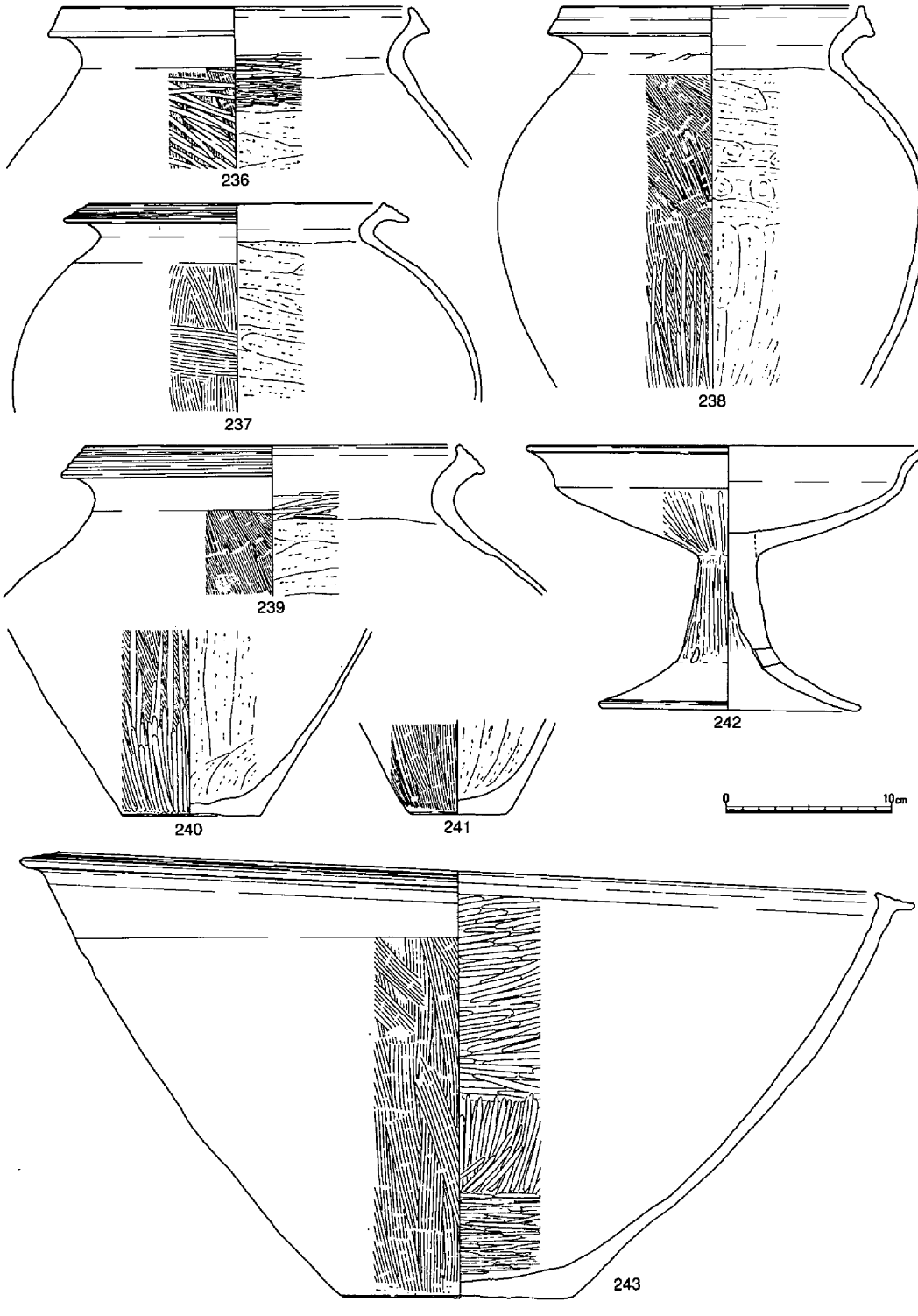
第49図　土壙６（1/30）・出土遺物①（1/4）



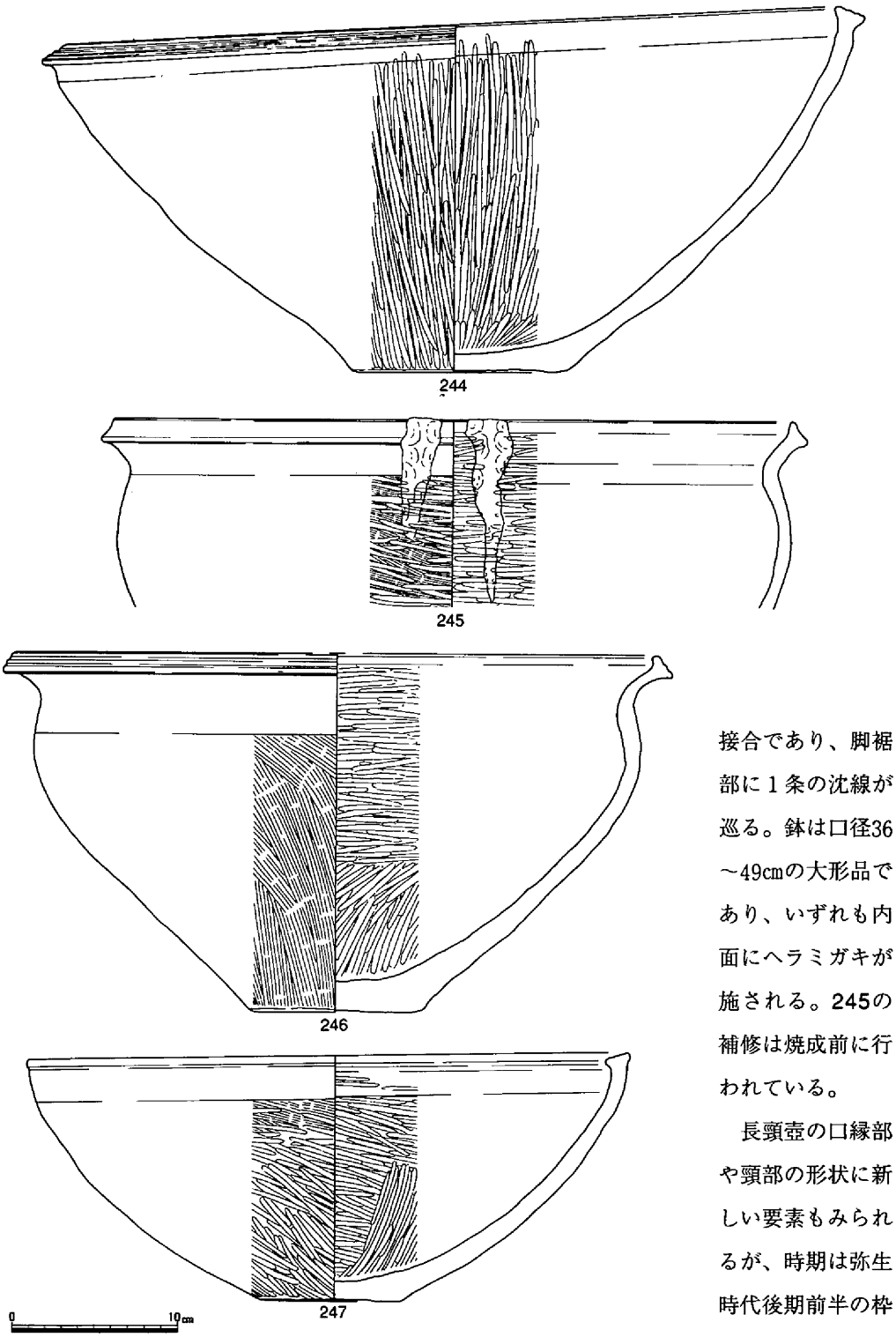
第50図　土壙６出土遺物②（1/4）



第51図　土壙６出土遺物③（1/4）



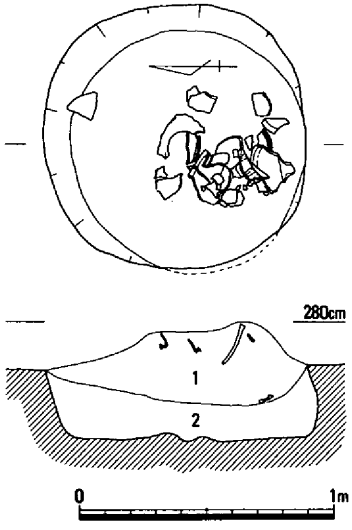
第52図　土壙６出土遺物④（1/4）



第53図　土壙６出土遺物⑤（1/4）

接合であり、脚裾部に１条の沈線が巡る。鉢は口径36～49cmの大形品であり、いずれも内面にヘラミガキが施される。245の補修は焼成前に行われている。

長頸壺の口縁部や頸部の形状に新しい要素もみられるが、時期は弥生時代後期前半の枠で捉えられる。



土壙７（第16・54図）

11Ｃｂ区に位置し、土壙８の他、竪穴住居14、土壙54に近接している。

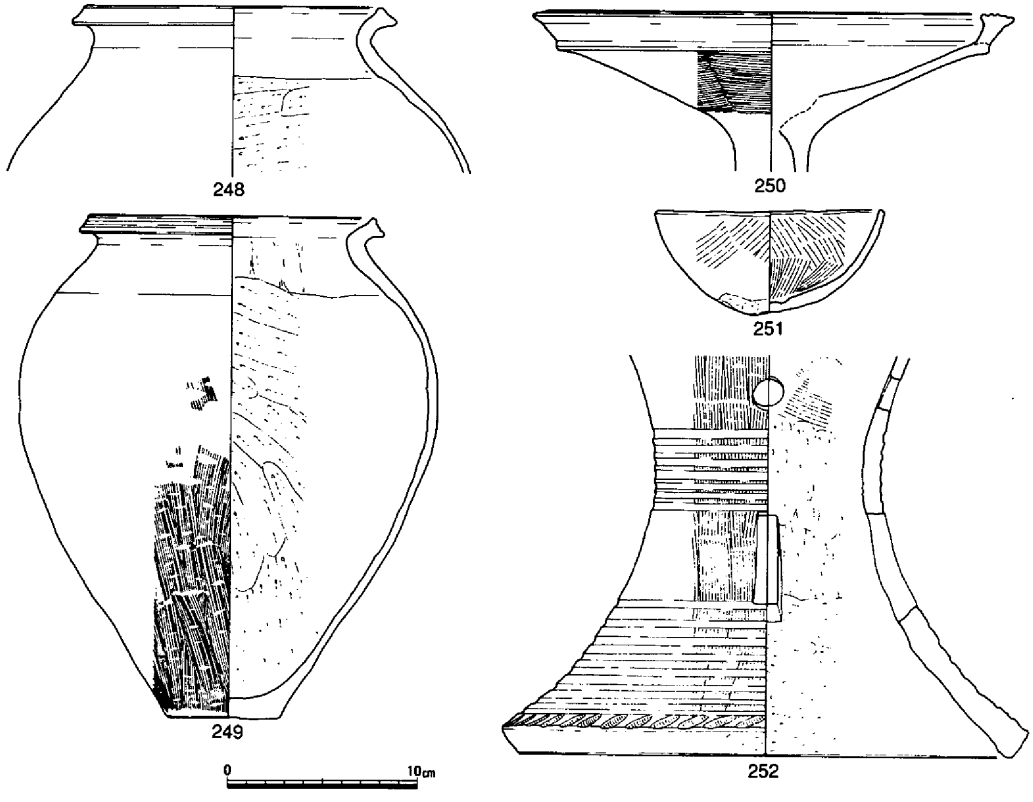
平面形は円形で、検出面での最大径1.05ｍを測る。北から東の側壁はやや外傾するが、南西部の側壁は内傾しており、袋状土壙と考えられる。底面は径93㎝の円形で、海抜高2.35ｍでほぼ平坦である。

埋土は２層に分けられ、いずれにも炭・焼土を含むが、第１層に多く、弥生土器の甕248・249、高杯250、鉢251、器台252もこれに含まれる。251に混入の疑いが残るが、上東・鬼川市Ⅰ式併行と考えられる。

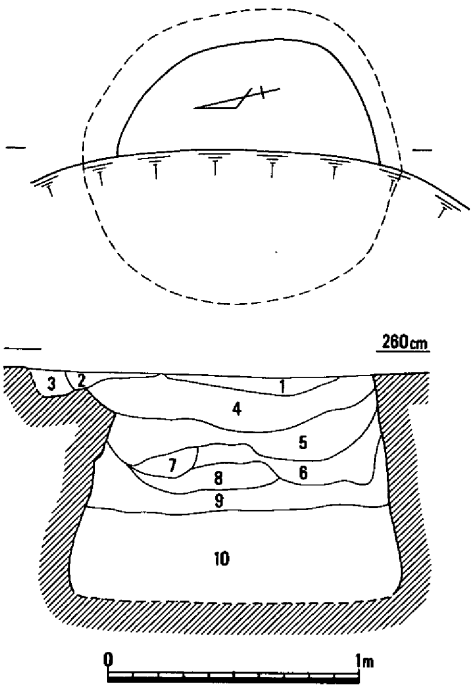
土壙８（第16・55図）

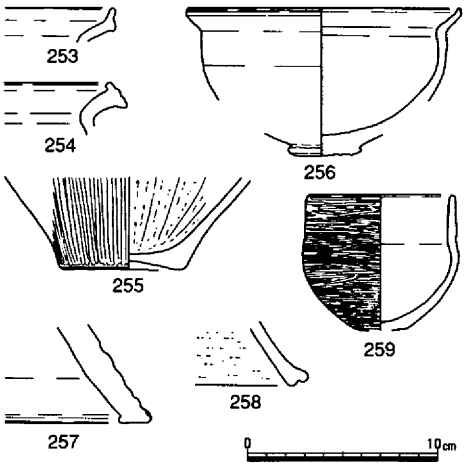
11Ｃｂ区に位置し、西半を竪穴住居45に削られている。

平面形は検出面での最大径1.04ｍを測る円形で、深さ90



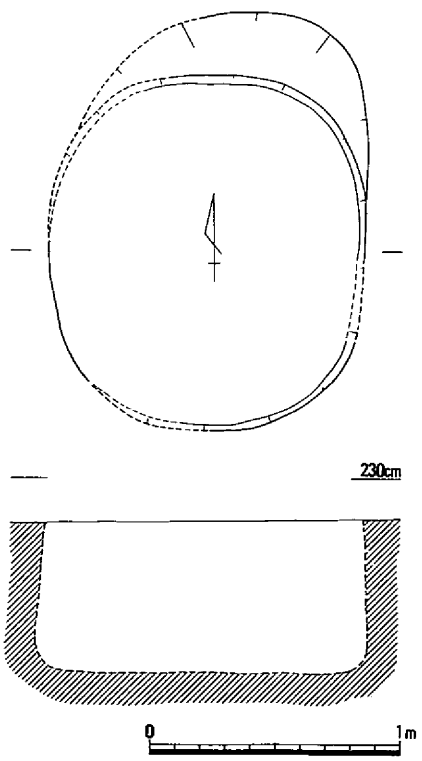
第54図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/4）





1．淡灰褐色微砂
2．灰褐色微砂
3．黄灰褐色土
4．暗黄橙色粘質土
5．灰褐色細砂（含、炭・灰・黄橙色土塊）
6．褐灰色細砂（含、炭・黄橙色土塊）
7．灰褐色土
8．褐色細砂
9．淡褐灰色細砂
10．黄灰色細砂（含、炭・灰色粘土塊）

第55図　土壙８（1/30）・出土遺物（1/4）



第56図　土壙９（1/30）

cmの断面形が台形を呈する袋状土壙である。海抜高1.7mでほぼ平坦な底面は、径1.25mの円形である。埋土は10層に分けられ、259に後半に下る要素を含むものの、他の弥生土器の特徴と遺構の形状から、弥生時代後期前半に比定される。

土壙９（第16・56・57図）

11Ｃｂ区西部に位置し、上層を竪穴住居45に削られている。

平面形は楕円形を呈し、北辺での肩の崩れを除くと、1.41×1.26×0.6mの規模である。側壁はほぼ直立し、海抜高1.53mでほぼ平坦な底面は、1.35×1.20mの円形である。

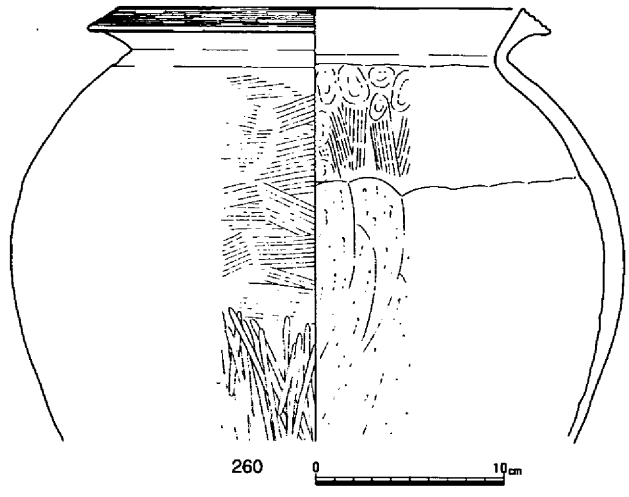
弥生土器の甕260が出土しており、上東・鬼川市Ⅰ式併行期に比定される。

土壙10（第16・58図）

11Ｂｂ区に位置し、竪穴住居4に削られている。

調査時に砂質の基盤層で湧水が激しかったために詳細が不明であるが、平面形は長方形と考えられる。規模は短軸長1.25mと底面の海抜高1.93mを測りえたのみである。

埋土には多量の炭化米を含んでおり、弥生土器の壺261・264・265、甕262・263がこれに伴っている。これらにより、時期は弥生時代後期前半に比定される。



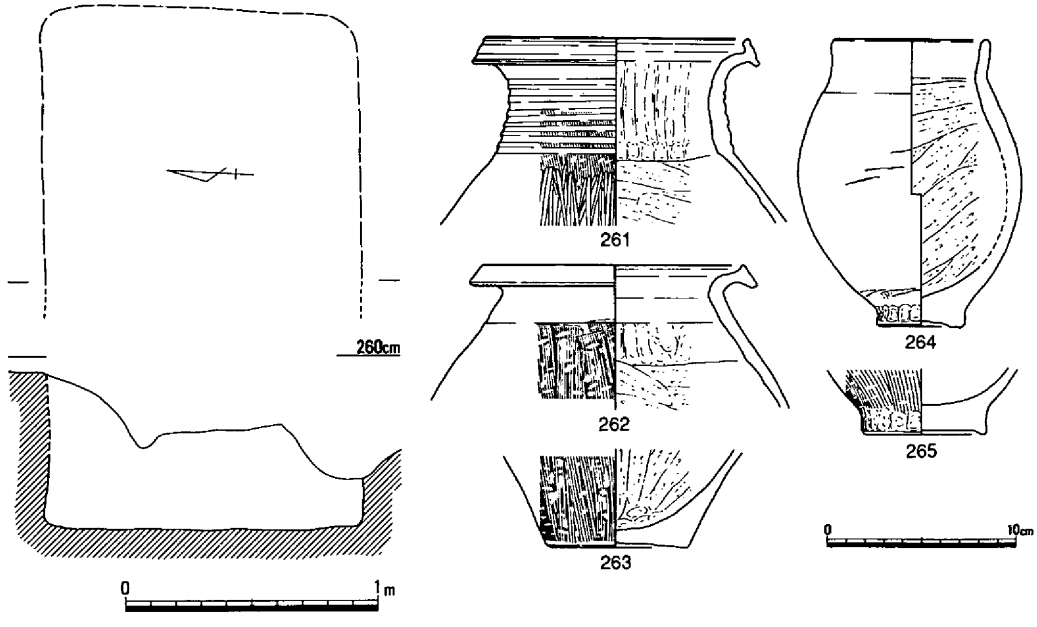
第57図　土壙９出土遺物（1/4）

土壙11（第16・59図）

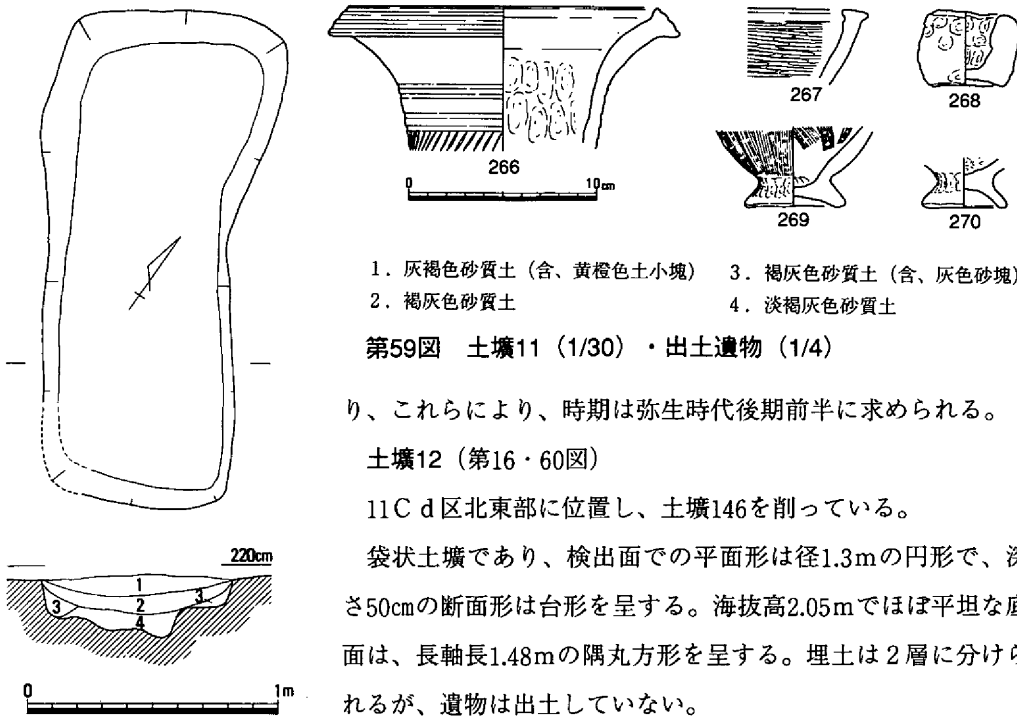
11Ｃｃ区に位置し、竪穴住居4を削っている。

平面形は不整な長方形で、長軸長198cm、短軸長75cmを測る。海抜高1.92mの底面は凹凸があり、178×68cmの不整な長方形を呈する。埋土は4層に分けられるが、特徴はない。

出土遺物には、弥生土器の壺266、鉢267、台付鉢269、手捏ね土器268、製塩土器270等があ



第58図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/4）



1．灰褐色砂質土（含、黄橙色土小塊）
2．褐灰色砂質土
3．褐灰色砂質土（含、灰色砂塊）
4．淡褐灰色砂質土

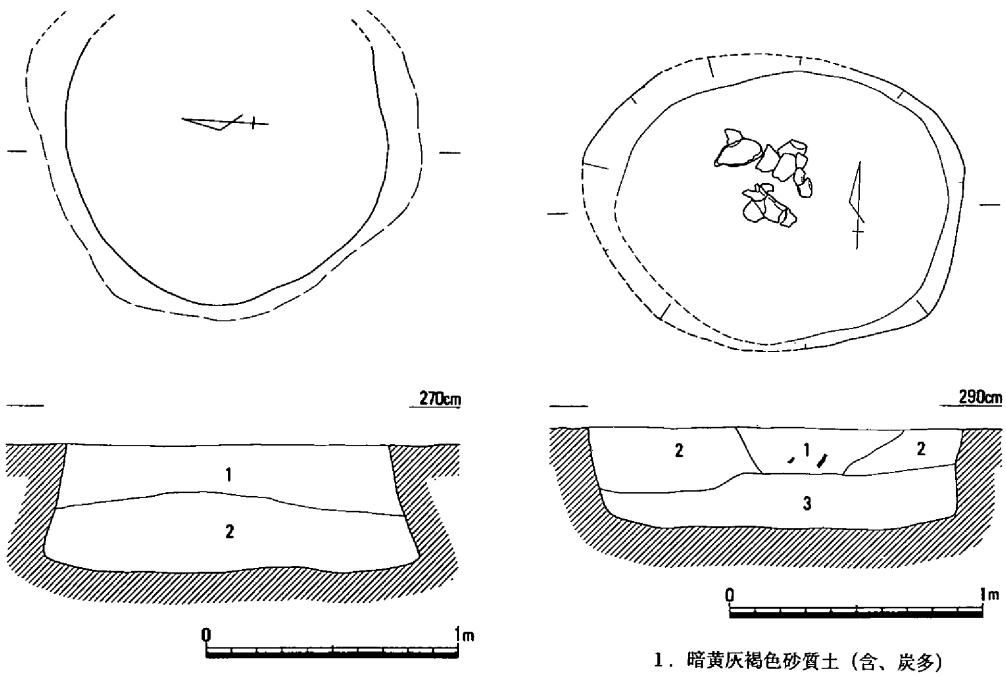
第59図　土壙11（1/30）・出土遺物（1/4）

り、これらにより、時期は弥生時代後期前半に求められる。

土壙12（第16・60図）

11Ｃｄ区北東部に位置し、土壙146を削っている。

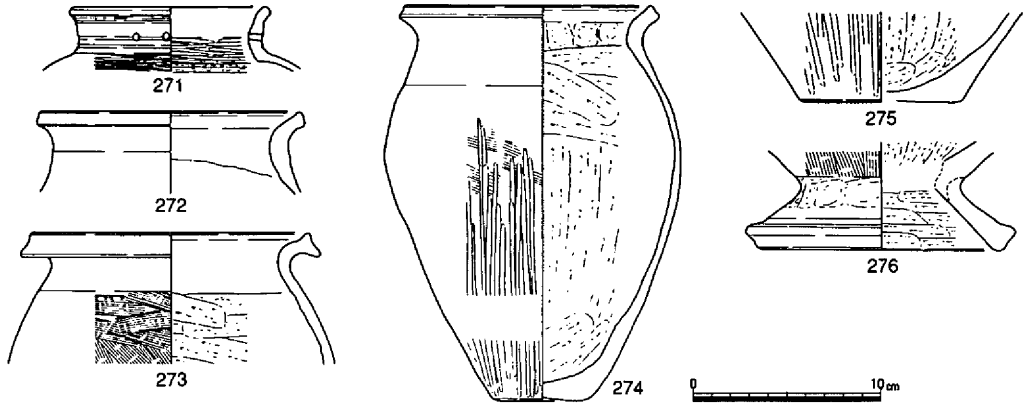
袋状土壙であり、検出面での平面形は径1.3ｍの円形で、深さ50㎝の断面形は台形を呈する。海抜高2.05ｍでほぼ平坦な底面は、長軸長1.48ｍの隅丸方形を呈する。埋土は２層に分けられるが、遺物は出土していない。



1．灰色粗砂・褐灰色粘質砂（互層）
2．灰色粗砂（含、炭）

1．暗黄灰褐色砂質土（含、炭多）
2．黄灰褐色砂質土（含、炭）
3．暗茶灰色粘質土

第60図　土壙12（左）・13（右）（1/30）



第61図　土壙13出土遺物（1/4）

土壙13（第16・60・61図）

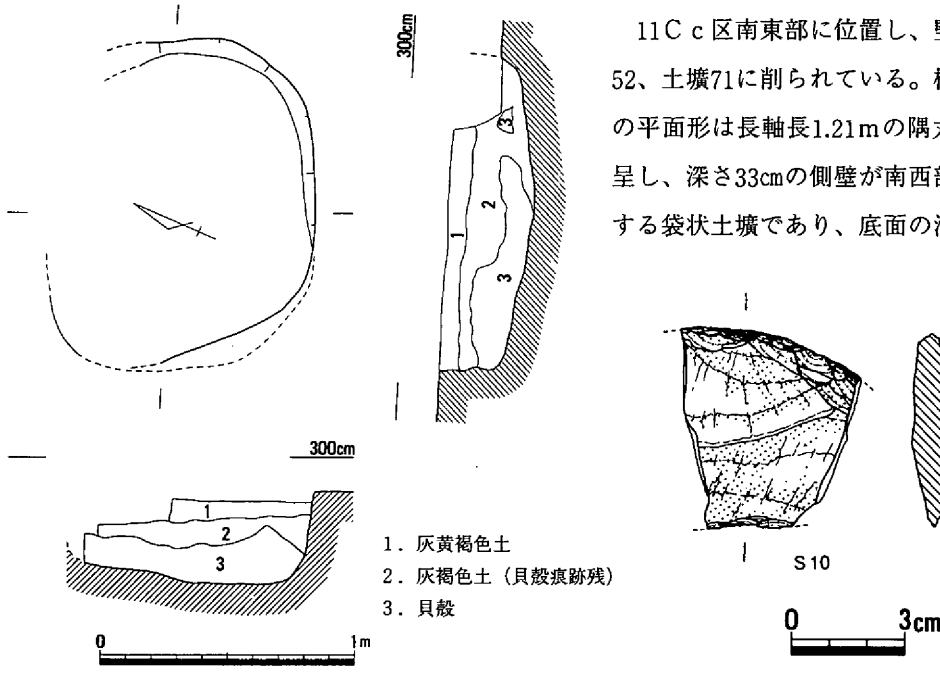
10Ｃｂ区から11Ｃｄ区にかけて位置し、土壙79に削られている。

平面形は楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.15mをそれぞれ測る。深さ40cmの側壁はやや外傾し、海抜高2.42mでほぼ平坦な底面は、1.29×1.05mの楕円形である。

埋土は３層に分けられ、炭を多く含む第１層から、弥生土器の甕274が一括出土した他に、壺271、甕272・273・275、台付鉢276等があり、時期は弥生時代後期前半に比定される。

土壙14（第16・62図、写真図版44）

11Ｃｃ区南東部に位置し、竪穴住居52、土壙71に削られている。検出面での平面形は長軸長1.21mの隅丸方形を呈し、深さ33cmの側壁が南西部で内傾する袋状土壙であり、底面の海抜高は

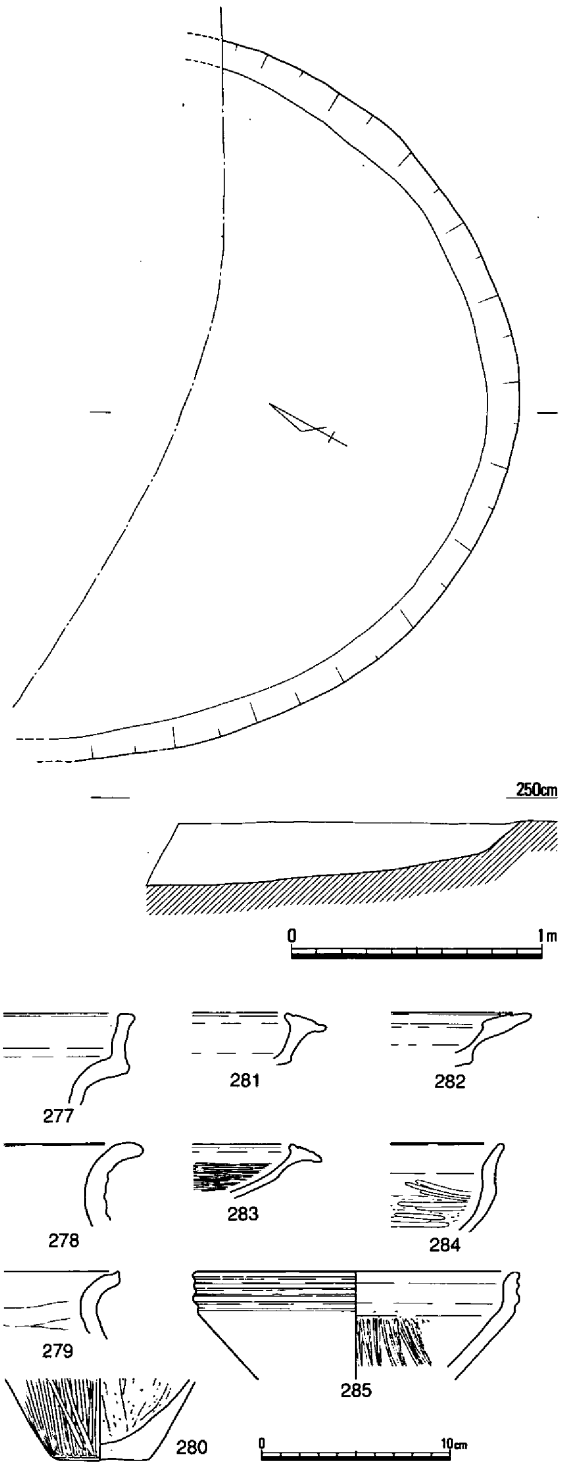


第62図　土壙14（1/30）・出土遺物（1/2）

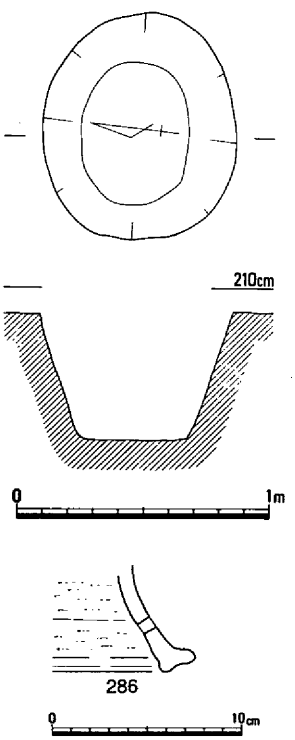
2.5mである。埋土第３層からヤマトシジミを主とする多量の貝殻が出土した他、第２層にも貝殻の痕跡が認められた。土器の出土は無いが、サヌカイト製の石包丁S10が出土している。時期は弥生時代後期前半と考えられる。

土壙15（第16・63図）

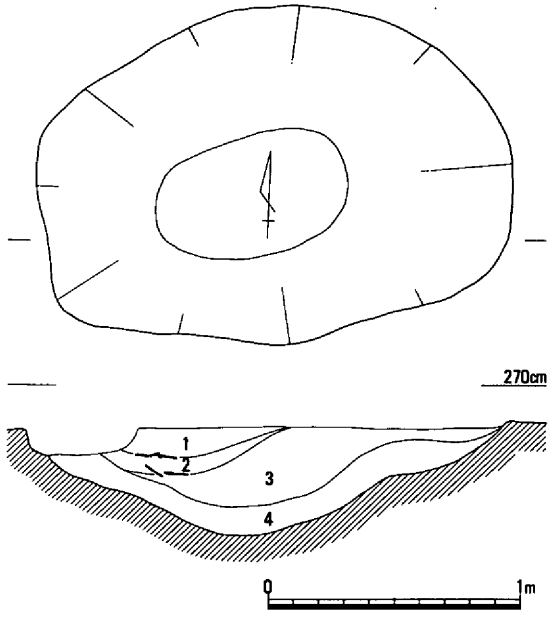
11Ｃｃ区に位置し、北半を竪穴住居４に削られている。平面形は円形と想定され、現存最大径2.95mを測る。側壁は外傾し、底面は北へゆるく傾斜している。弥生土器の壺277～280、高杯281～283、鉢284・285等が出土しており、時期は弥生時代後期前半に比定される。

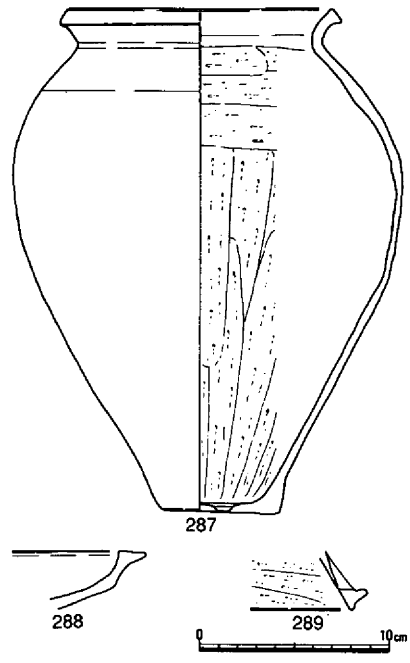


第63図　土壙15（1/30）・出土遺物（1/4）



第64図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）





1．淡茶褐色細砂　　3．淡茶褐色粘質微砂
2．褐灰色粘質微砂（含、灰）　4．黄灰褐色粗砂

第65図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙16（第16・64図）

11Ｃｃ区北部に位置し、竪穴住居６、土壙15に削られている。

平面形は楕円形を呈し、規模は89×76×50cmで、底面の海抜高は1.52mである。

弥生土器の高杯286が出土しており、時期は弥生時代後期前半に比定される。

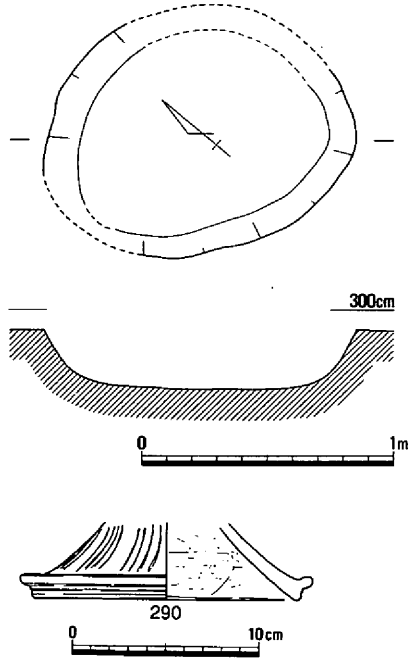
土壙17（第16・65図）

11Ｂｄ区南東部に位置し、竪穴住居５に近接する。

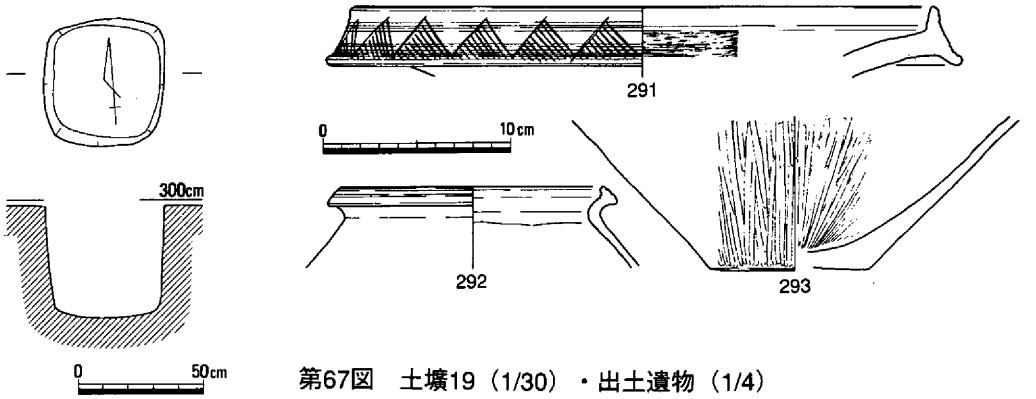
平面形は不整な楕円形を呈し、長径1.88m、短径1.35mをそれぞれ測り、二段に掘られて深さ43cmで海抜高2.12mの底面に至る。

埋土は４層に分けられ、灰を含む第２層から、弥生土器の甕287、高杯288・289が出土している。289には三角形の透かし孔が刻まれている。

時期は弥生時代後期前半に比定される。



第66図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）



第67図　土壙19（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙18（第16・66図）

11Ｂｄ区南東部に位置し、土壙20・75・171に削られている。

平面形は楕円形で、長径123cm、短径99cmをそれぞれ測り、深さ24cmで海抜高2.7ｍのほぼ平坦な底面に達する。

弥生土器の高杯290の脚部外面には４条１対のヘラ描弧線が刻まれ、脚端部には２条の凹線が巡っている。これにより、時期は弥生時代後期前半に求められる。

土壙19（第16・67図）

10Ｂｂ区北東部に位置し、土壙18・20に近接する。

平面形は方形で、１辺48～51cmを測り、深さ44cmの側壁はほぼ直立する。底面の海抜高は2.54ｍで、ほぼ平坦である。

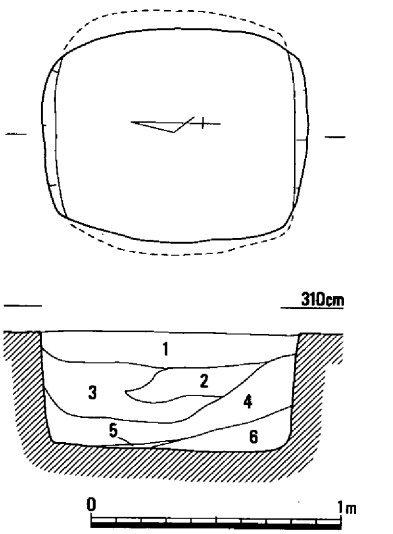
出土遺物には、弥生土器の甕292、鉢293、器台291がある。291の口縁部にはヘラ描沈線による鋸歯文が巡らされている。

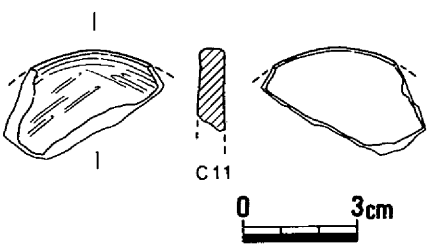
時期は弥生時代後期前半に求められる。

土壙20（第16・68・69図）

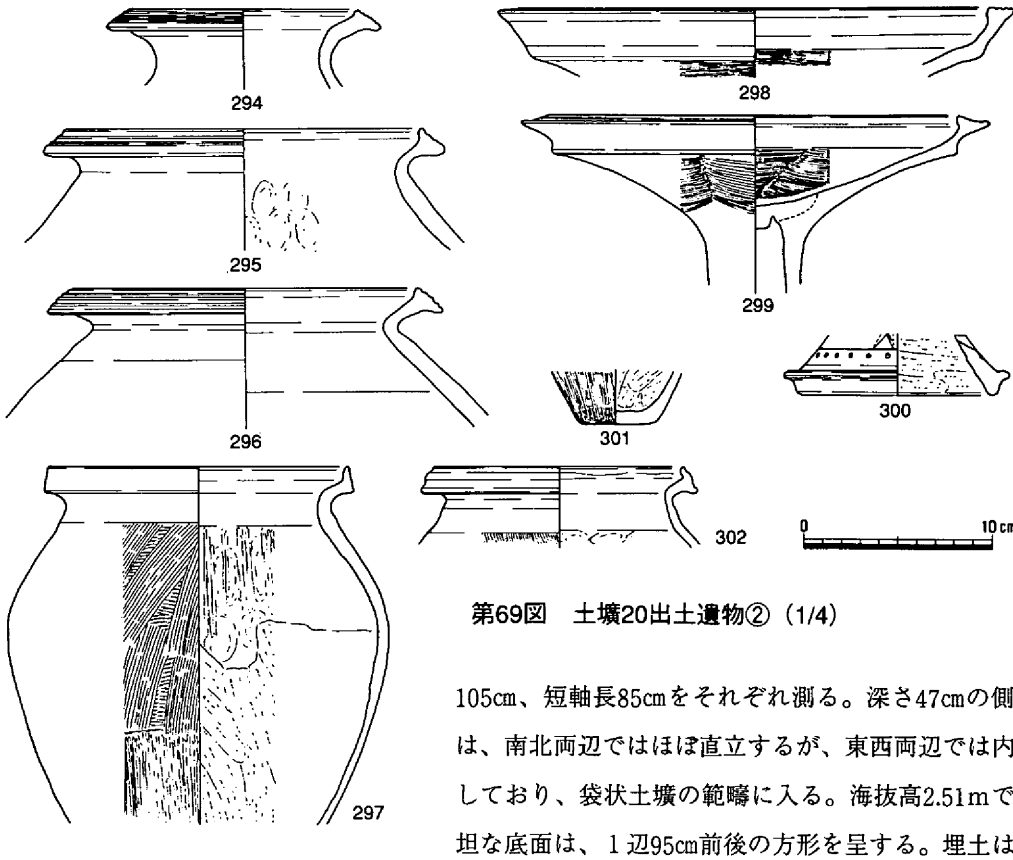
11Ｂｄ区に位置し、土壙18を削っている。

検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長



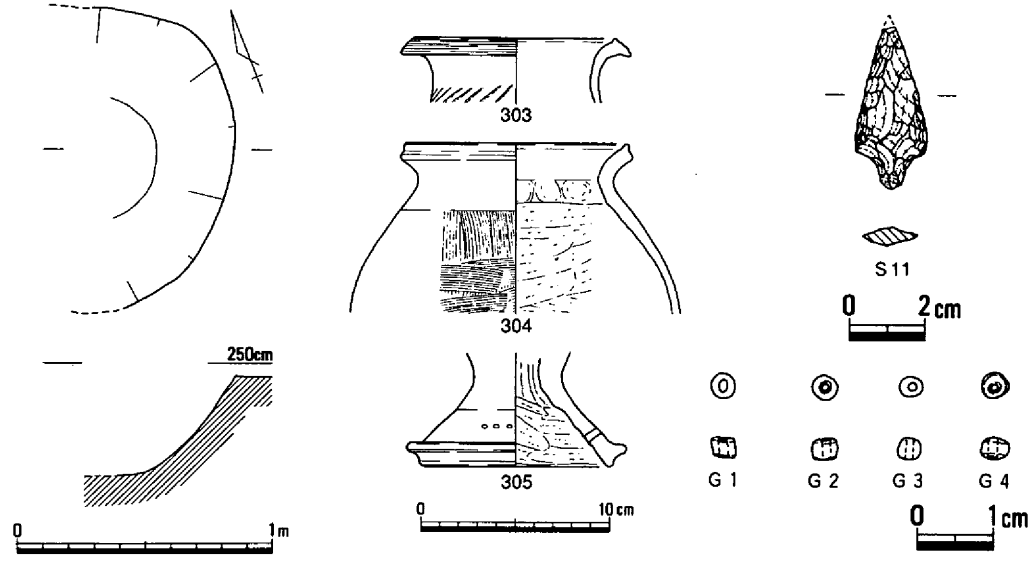


第68図　土壙20（1/30）・出土遺物①（1/2）



第69図　土壙20出土遺物②（1/4）

105cm、短軸長85cmをそれぞれ測る。深さ47cmの側壁は、南北両辺ではほぼ直立するが、東西両辺では内傾しており、袋状土壙の範疇に入る。海抜高2.51mで平坦な底面は、１辺95cm前後の方形を呈する。埋土は６層に分けられ、第５層は炭の堆積で、第６層にはヤマ



第70図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4・1/2・1/1）

トシジミ・カキ・カワアイ等の貝殻が堆積していた。

出土遺物には、弥生土器の壺294、甕295～297・301・302、高杯298～300、分銅形土製品C11等があり、300には西部瀬戸内系の矢羽形の透かし孔が見られる。297の口縁端部は上方へ立ち上がるが、体部内面のヘラケズリは上半へ及ばず、上半にはヘラミガキが見られる。

土壙21（第16・70図）

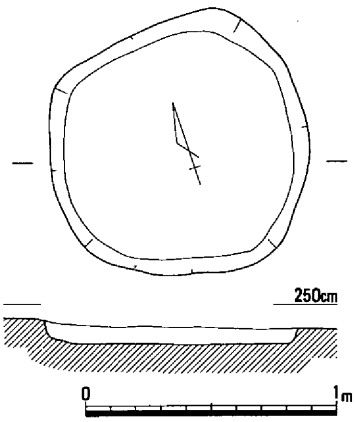
11Bc区南東部に位置し、西端を調査区外に置く。平面形は円形ないし楕円形と想定されるが、最大径1.2mが知られるのみである。深さは41cmが残り、底面の海抜高は2.07mである。出土遺物には、弥生土器の壺303、甕304、高杯305の他に、サヌカイト製の石鏃S11、ガラス玉G１～４があり、時期は弥生時代後期前半である。

土壙22（第16・71図）

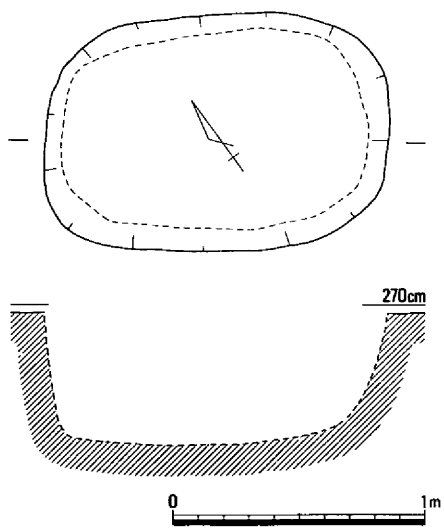
10Cb区西部に位置し、土壙149を削っている。

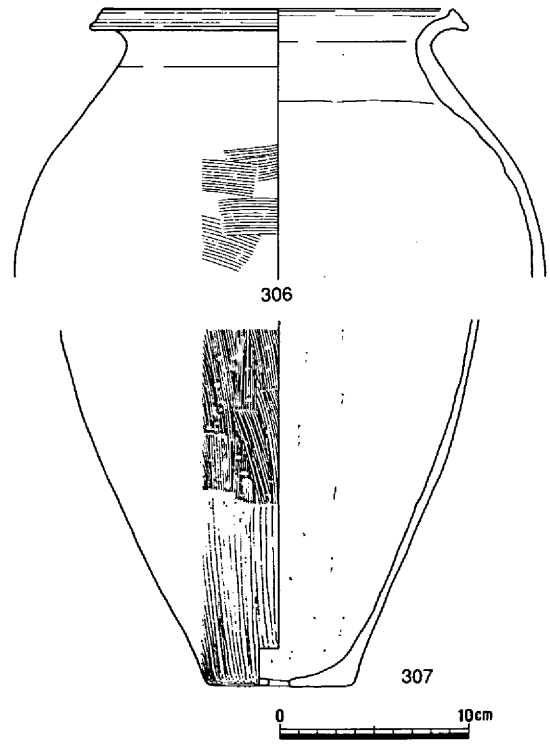
平面形は1.06×1.02mの不整な円形で、深さ７cmが残るのみであり、海抜高2.35mの底面はほぼ平坦である。袋状土壙の底部付近が残存したものと考えられる。

遺物は出土していない。

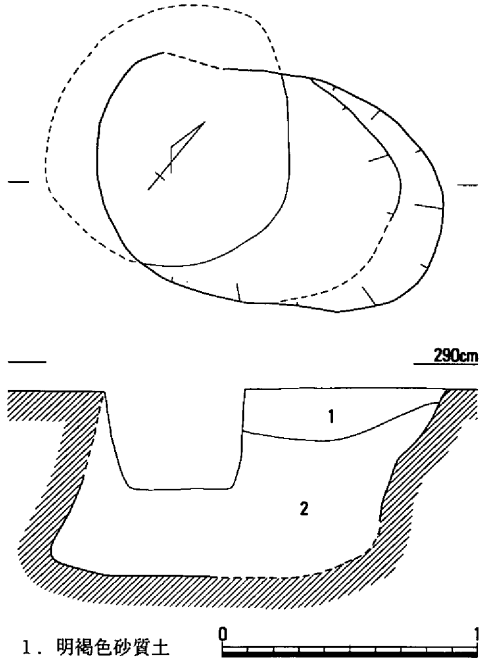


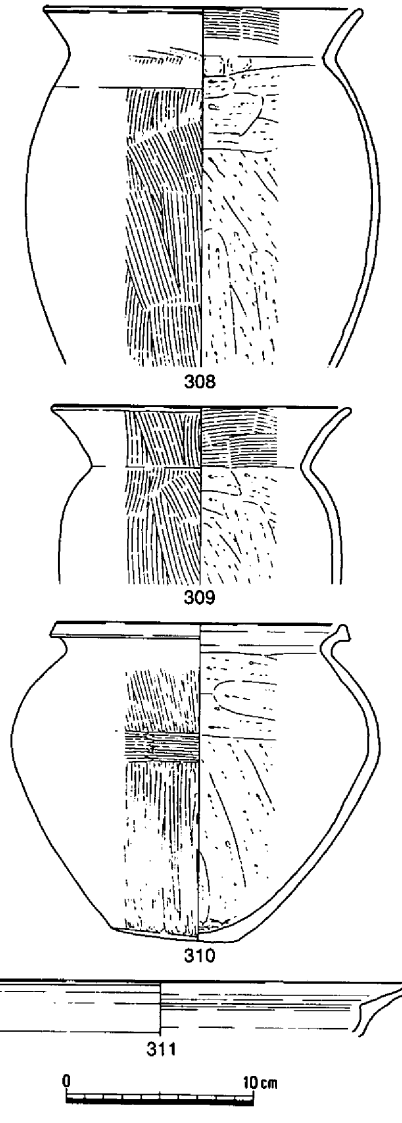
第71図　土壙22（1/30）





第72図　土壙23（1/30）・出土遺物（1/4）





第73図　土壙24（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙23（第16・72図）

10Ｃａ区北東部に位置し、上層を竪穴住居52に削られている。

平面形は隅丸長方形で、長軸長135cm、短軸長93cmを測り、調査時の湧水のために底面を明らかにできていないが、海抜高2.18m前後である。

出土遺物には、弥生土器の甕306、甑307があり、これらにより、時期は弥生時代後期前半に比定される。

土壙24（第16・73図）

10Ｃａ区北東部に位置し、土壙４・14に近接する。検出された平面形は140×91cmの楕円形であるが、深さ75cmの側壁のうちの西半は内傾していて袋状土壙とみなすことができ、開口部の東半分は肩口が崩れた状況を示すものかもしれない。海抜高2.04mの底面は108×97cmの楕円形を呈する。出土遺物のうち甕308・309に混入の可能性があるが、甕310、高杯311の示す特徴と、遺構の形状から、時期は弥生時代後期前半に求められる。

土壙25（第16・74図）

10Ｂｂ区北東部に位置して、土壙26を削り、南半を竪穴住居62に削られている。平面形は北東部に隅丸を呈する部分を検出したのみであり、規模についても不明である。出土遺物には弥生土器の甕312、高杯313・314がある。312の内面は底部と体部上半に指頭圧痕を残して、下半のみヘラケズリされている。時期は、高杯から弥生時代後期前半に比定される。

土壙26（第16・75図）

10Ｂｂ区で土壙25の下層に位置する。

検出された平面形は楕円形を呈し、長径140cm、短径91cmをそれぞれ測る。深さ10cmが残っており、その中央部の30×15cmの範囲に貝殻の堆積が認められた。

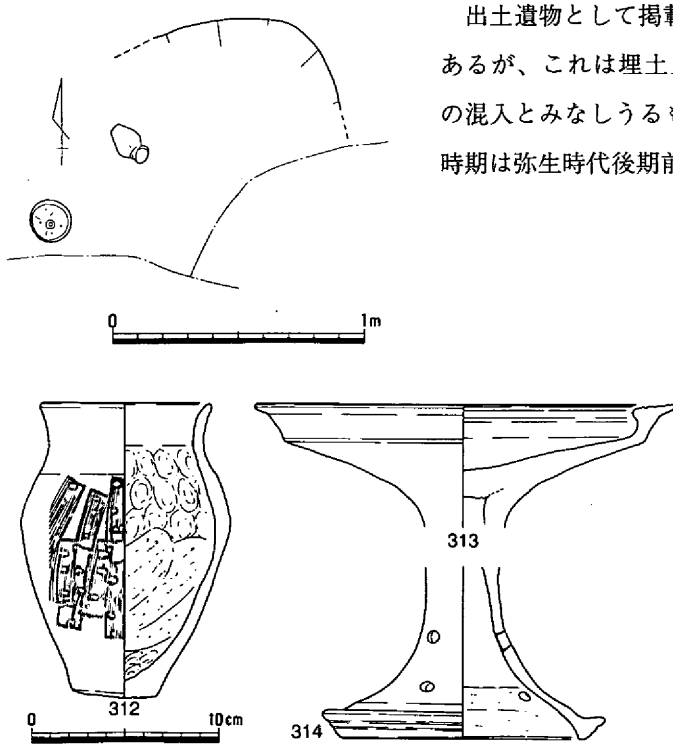
土器は出土していない。

土壙27（第16・76図）

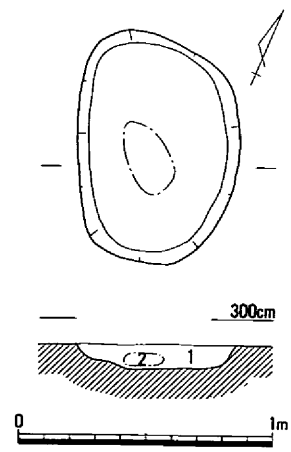
10Ｂｂ区東部に位置し、竪穴住居61、土壙88に削られている。

検出された平面形は隅丸長方形を呈し、1.91×1.61ｍの規模で、北半は海抜高2.63ｍ前後で平坦な底面であるが、南西隅に段をもち、南東隅は63×57cmの範囲がさらに17cmほど低くなっている。

出土遺物として掲載したのは手焙形土器315のみであるが、これは埋土上層からの出土であり、埋没後の混入とみなしうるもので、周辺遺構との関係から、時期は弥生時代後期前半以降として扱いたい。



第74図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）



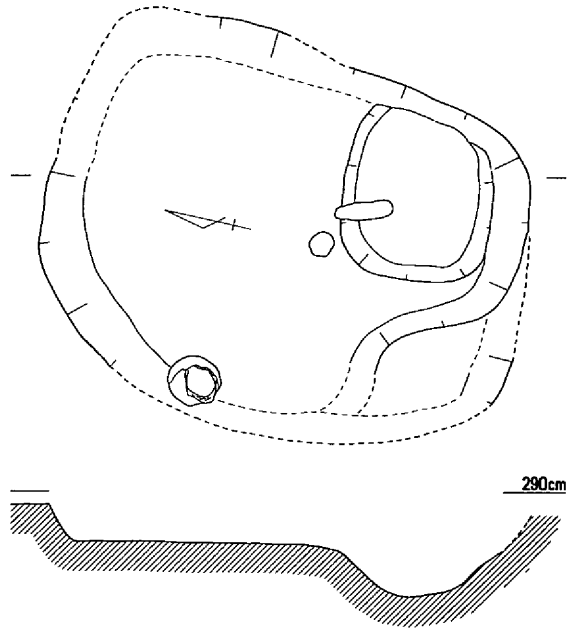
第75図　土壙26（1/30）

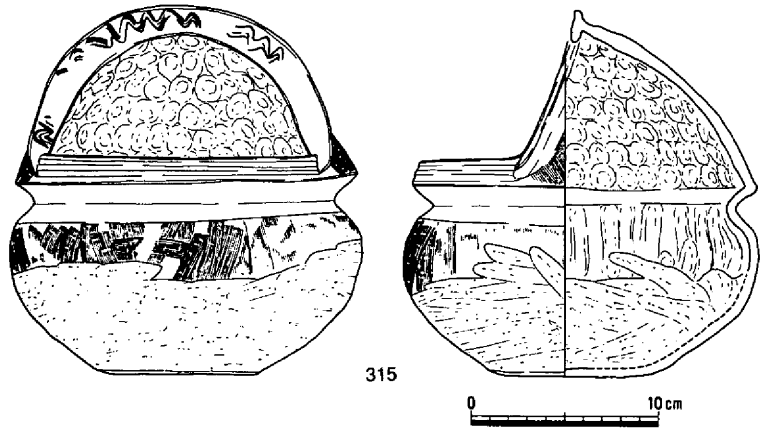
土壙28（第16・77図）

10Ｂｂ区中央部に位置し、土壙27・151に近接している。平面形は径70cm前後の円形で、深さは不詳である。弥生土器の甕316～321、高杯322～325が出土しており、高杯の脚部はいずれも差し込みによる接合である。時期は弥生時代後期前半に比定される。

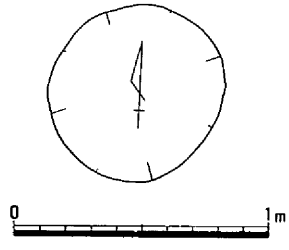
土壙29（第16・78図）

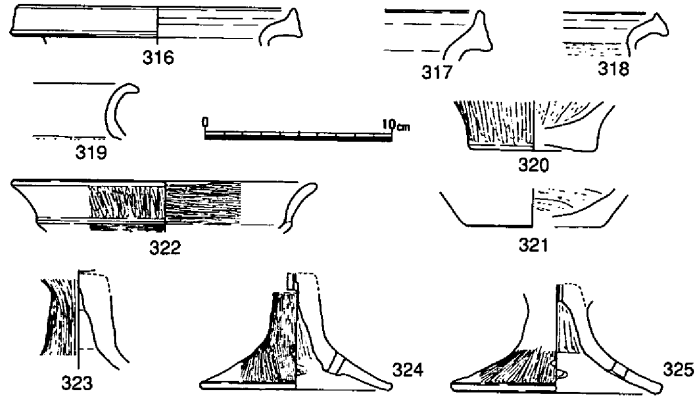
10Ｂａ区北東部に位置して、土壙30を削り、土壙91に削られている。平面形は85×81cmの楕円形を呈し、深さ48cmの断面形は逆台形である。海抜高2.42ｍの底面は、53×44cmの楕円形を呈する。出土遺物には、弥生土器の甕326～329、高杯330



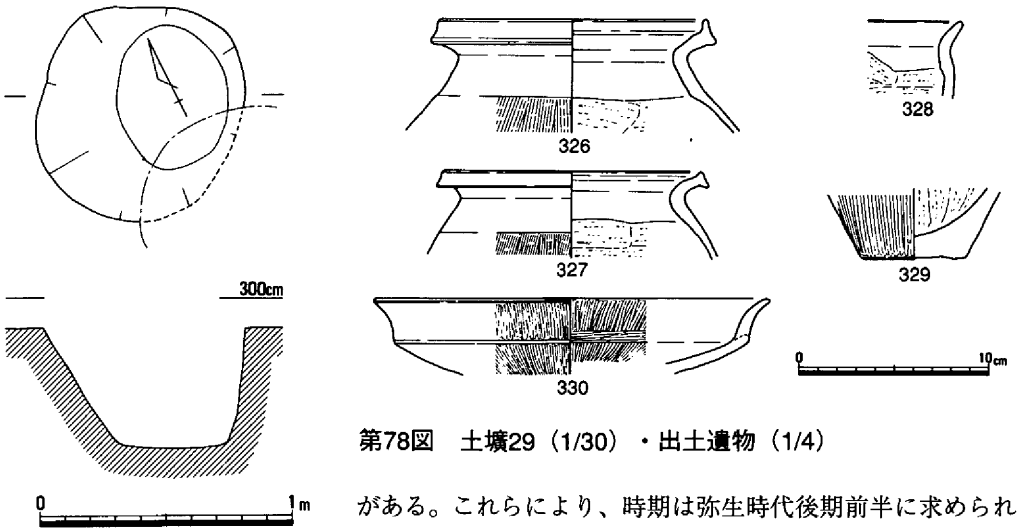


第76図　土壙27（1/30）・出土遺物（1/4）





第77図　土壙28（1/30）・出土遺物（1/4）

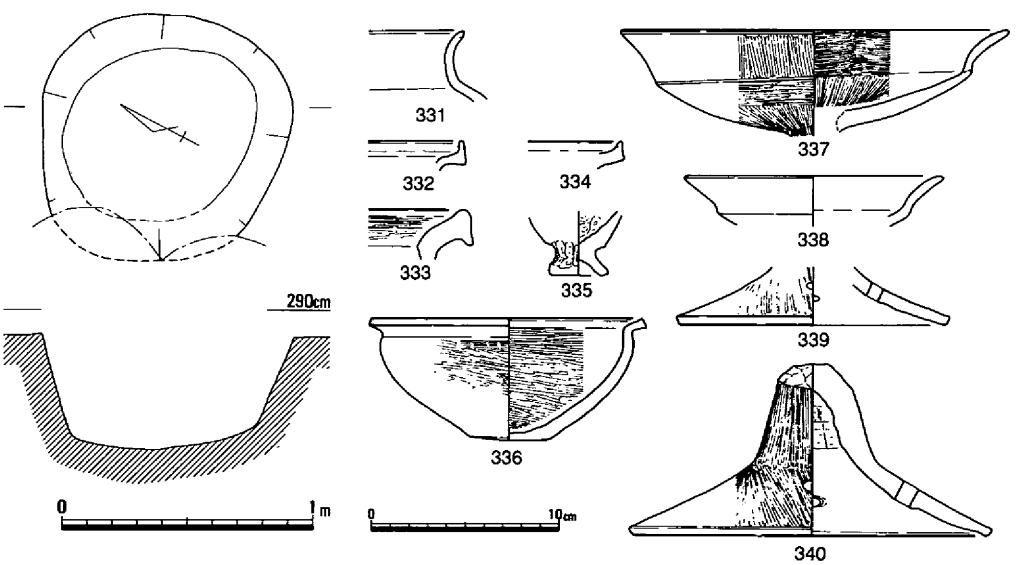


第78図　土壙29（1/30）・出土遺物（1/4）

がある。これらにより、時期は弥生時代後期前半に求められる。

土壙30（第16・79図）

10Ｂａ区北東部に位置し、西端を土壙29・91に削られている。平面形は径1.0ｍの不整な円形を呈し、深さ45㎝の側壁はやや外傾している。出土遺物には、弥生土器の壺331、甕332・334、高杯337～340、鉢333・336、製塩土器335等がある。340は蓋に転用されており、脚裾部の内外面に煤が付着している。337は脚部を差し込むものである。335は内外面ともナデによる仕上げである。時期は、弥生時代後期前半に比定される。



第79図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙31（第16・80図）

10Ｂａ区南東部に位置し、土壙155に削られている。

平面形は楕円形を呈し、長径110cm、短径91cmをそれぞれ測り、深さ44cmの側壁はやや外傾して、海抜高2.4ｍのほぼ平坦な底面に至る。

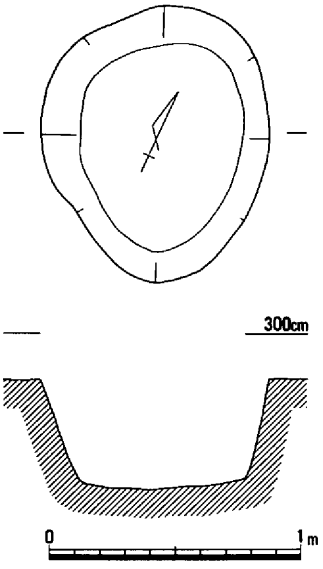
出土遺物には、弥生土器の長頸壺341～345、甕346～350、高杯351～354等がある。341・345とも肩部から頸部へ段をもたずに移行し、頸部は口縁部へ向って開いている。353の外面には竹管文が見られる。

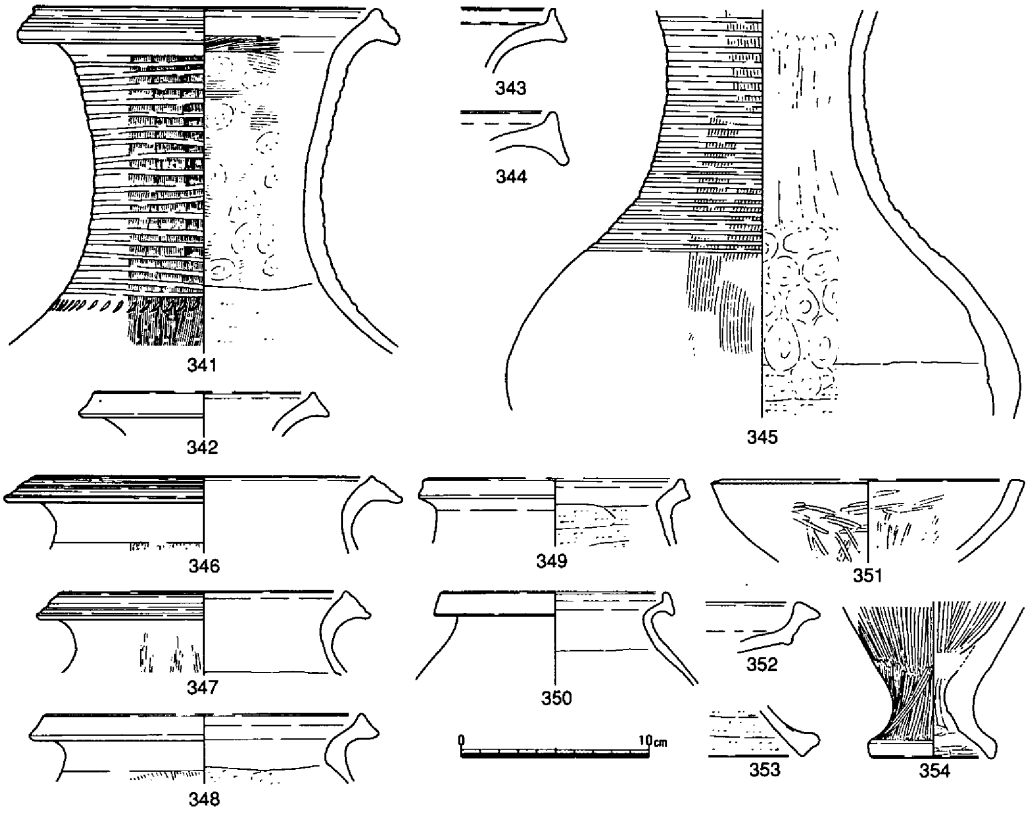
時期は、弥生時代後期前半に比定される。

土壙32（第16・81図）

10Ｂａ区中央部に位置し、土壙墓２を削っている。

平面形は74×53cmの楕円形で、深さ21cmの側壁はやや外





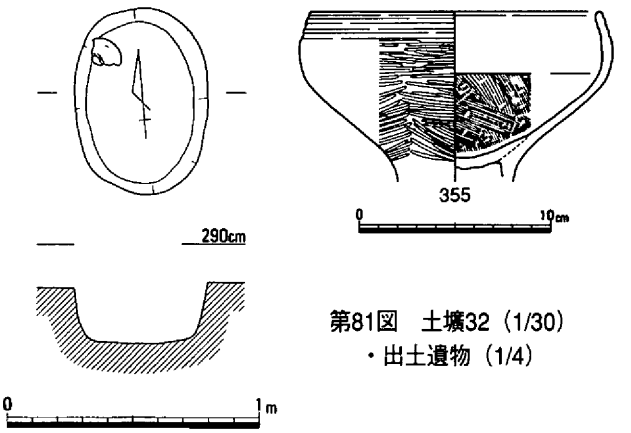
第80図　土壙31（1/30）・出土遺物（1/4）

傾して、海抜高2.53ｍの底面に至る。円盤充填技法を用いた弥生土器の高杯355が出土しており、時期は弥生時代後期前半に比定される。

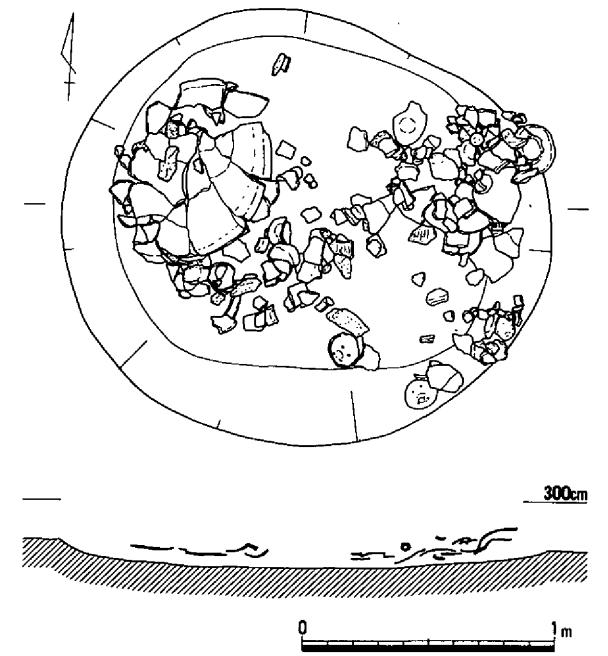
土壙33

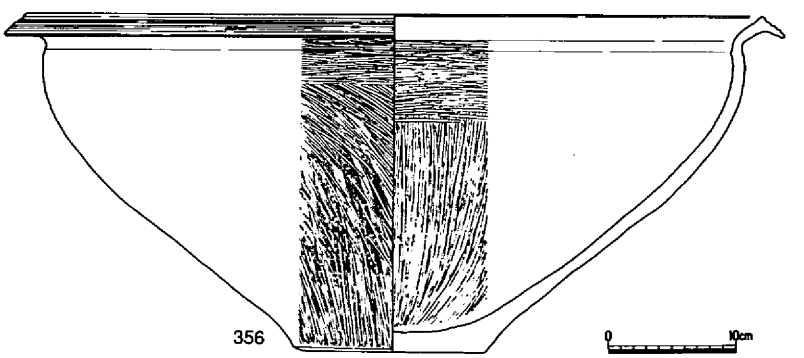
（第16・82・83図、写真図版45）

10Ｂａ区北部に位置し、土壙墓２、土壙34・156を削っている。平面形は楕円形で、検出された規模は1.93×1.73×0.1ｍである。遺物は検出面より高い位置でも出土しており、弥生土器の長頸壺357～361、甕362～365・367、甑366、高杯368～370・372～374、鉢356・371等がある。時期は、356の出土状況等から弥生時代後期前半に比定されるが、357にみられる口縁端部の立上がりや頸部の形状、あるいは367の体部下半の丸みをもった形状は、後期後半の特徴を示すものであり、ここまで下る可能性もある。

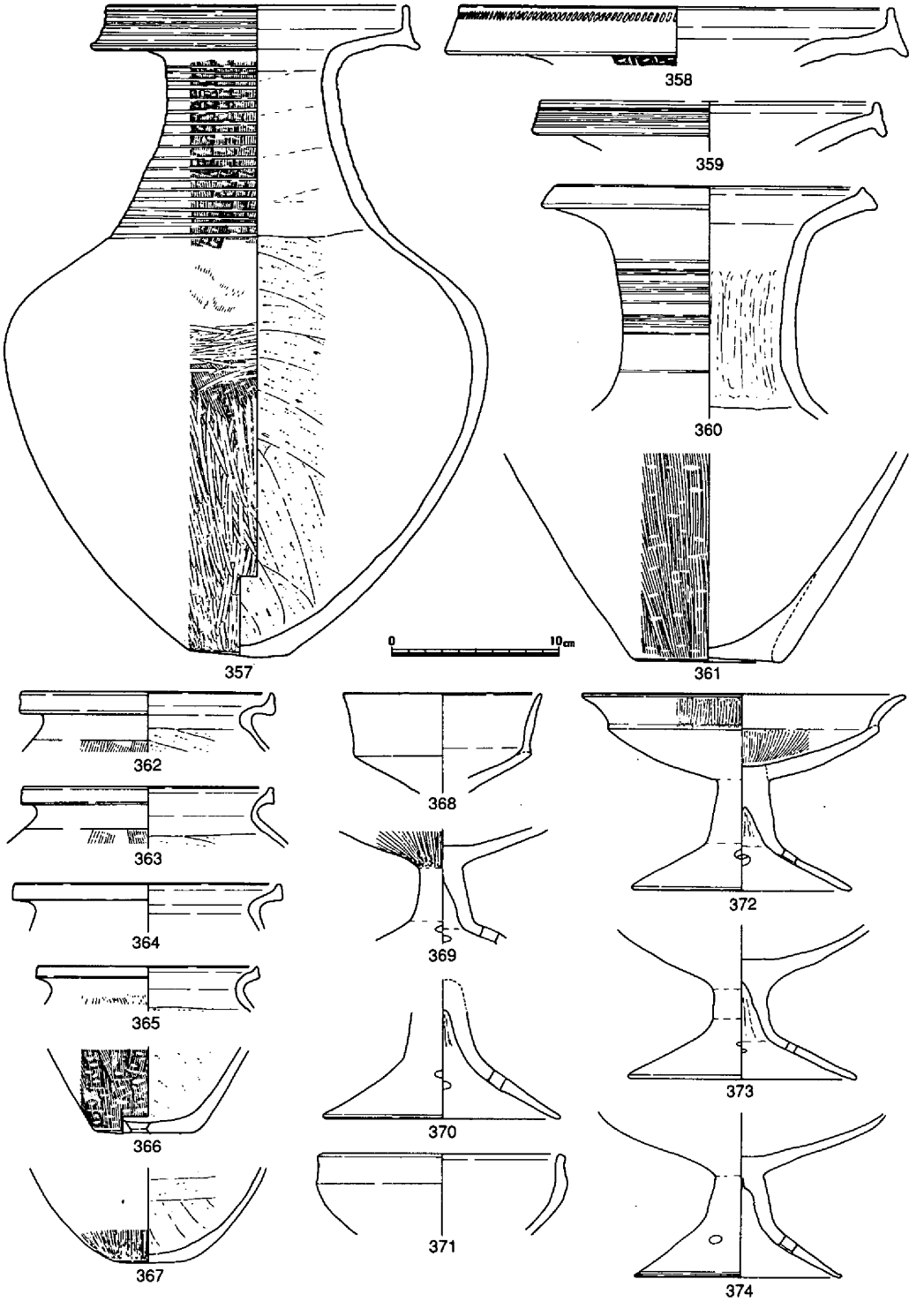


第81図　土壙32（1/30）・出土遺物（1/4）

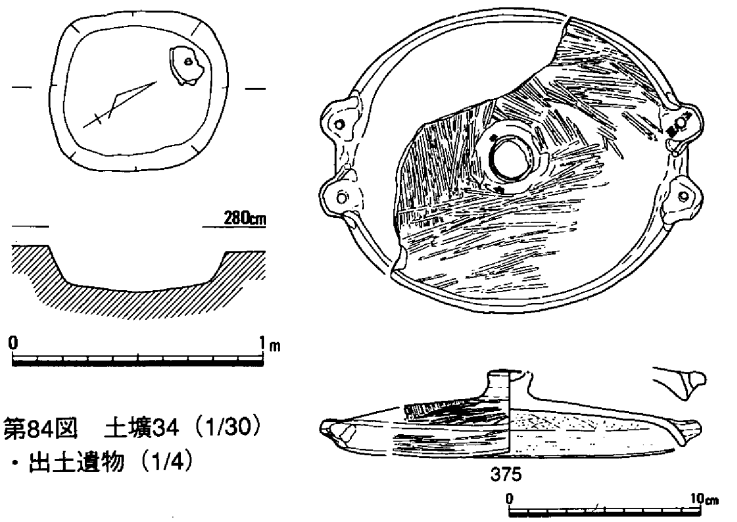




第82図　土壙33（1/30）・出土遺物①（1/6）



第83図　土壙33出土遺物②（1/4）



第84図　土壙34（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙34（第16・84図）

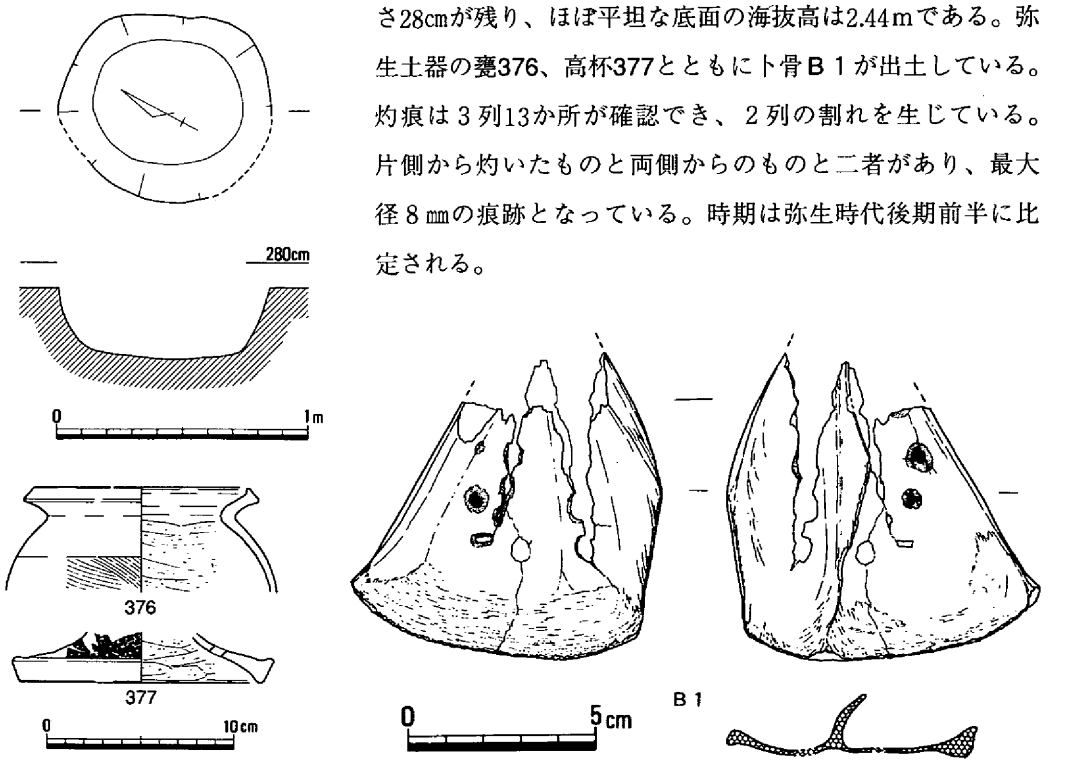
10Ｂａ区北西部に位置し、土壙33に削られる。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長71cm、短軸長64cmをそれぞれ測る。深さ17cmが残り、底面の海抜高は2.27mである。

蓋375は、平面形が楕円形に復元され、短辺に２個１対の突起に紐通し孔をあけ、中央につまみを貼りつけている。時期は、周辺の遺構との関係から弥生時代後期前半に比定される。

土壙35（第16・85図、写真図版99・100）

10Ｂｄ区北東部に位置し、貝塚１との距離5.5mを測る。平面形は85×74cmの楕円形で、深さ28cmが残り、ほぼ平坦な底面の海抜高は2.44mである。弥生土器の甕376、高杯377とともに卜骨Ｂ１が出土している。灼痕は３列13か所が確認でき、２列の割れを生じている。片側から灼いたものと両側からのものと二者があり、最大径８㎜の痕跡となっている。時期は弥生時代後期前半に比定される。



第85図　土壙35（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙36（第16・86・87図）

10Ｂｃ区南部に位置し、竪穴住居12に削られ、西端を調査区外に置く。

平面形は不整な楕円形と想定されるが、北東部の浅い掘り込みを除いて、南北方向の最大径1.38ｍが知られるのみである。

出土遺物には、弥生土器の壺378・383、甕379～382・384～390、高杯391～393、鉢397、器台394～396等がある。口縁部をみると、378～380・382を除いて凹線が巡らされており、壺・甕の体部内面のヘラケズリは頸部下端にまで及んでいる。392の脚部外面、394の口縁部にはそれぞれヘラ描沈線文が施されている。

時期は、弥生時代後期前半（上東・鬼川市Ⅰ式併行）に比定される。（光永）

土壙37（第16・88図）

９Ｂａ区において検出されたものの、後世の攪乱等によりその約１／２が切られ、不明瞭な状態であった。したがって、遺構の位置は示されるものの詳細図面については割愛した。

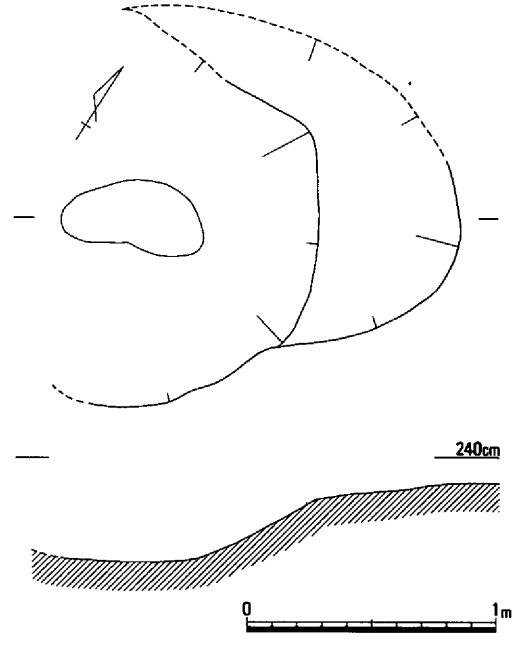
出土した遺物には、壺、甕、高杯、鉢、器台、甑、蓋等の土器の他、鉄器が１点確認された。壺398・399はいずれも短頸で口縁端部を比較的長く拡張し、外面には深い凹線文が施される。高杯は、407・408と409の両型式の共伴事例として一つに地域性を示唆させるものである。甑403は、焼成前の底部穿孔がなされ、内面には粗いハケによる調整がみられる。甑の位置づけが明瞭でないが時期的には後期前半の範疇に属するものであろう。（島崎）

土壙38（第16・89図）

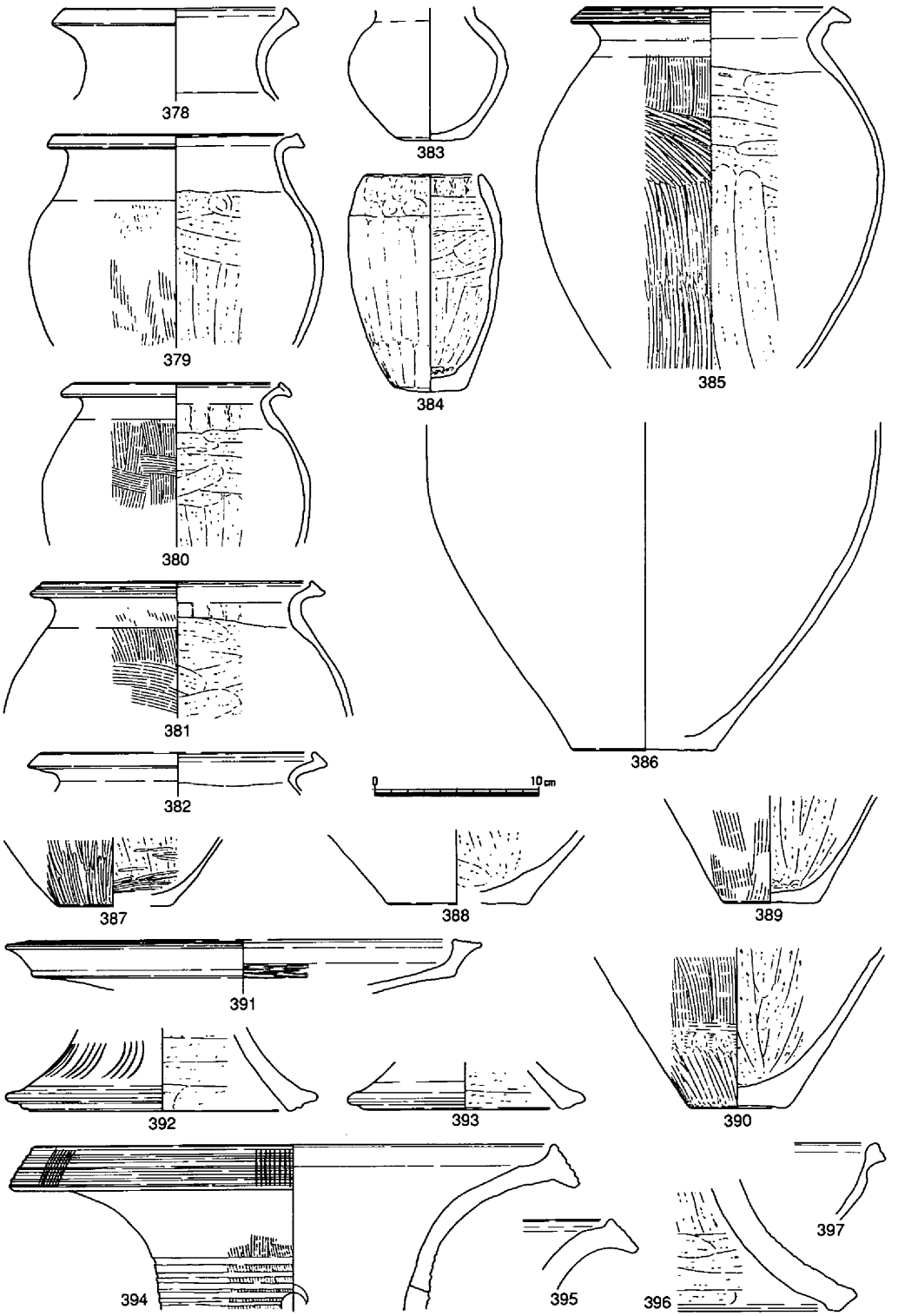
９Ｂｂ区東部に位置し、土壙163と接する。平面形は不整な円形に想定され、南北方向の径1.24ｍを測る。深さ33㎝の埋土は３層に分けられ、第２層には炭・焼土が含まれる。弥生土器の壺414、甕415・416、高杯417が出土しており、時期は弥生時代後期前半に比定される。

土壙39（第16・90図）

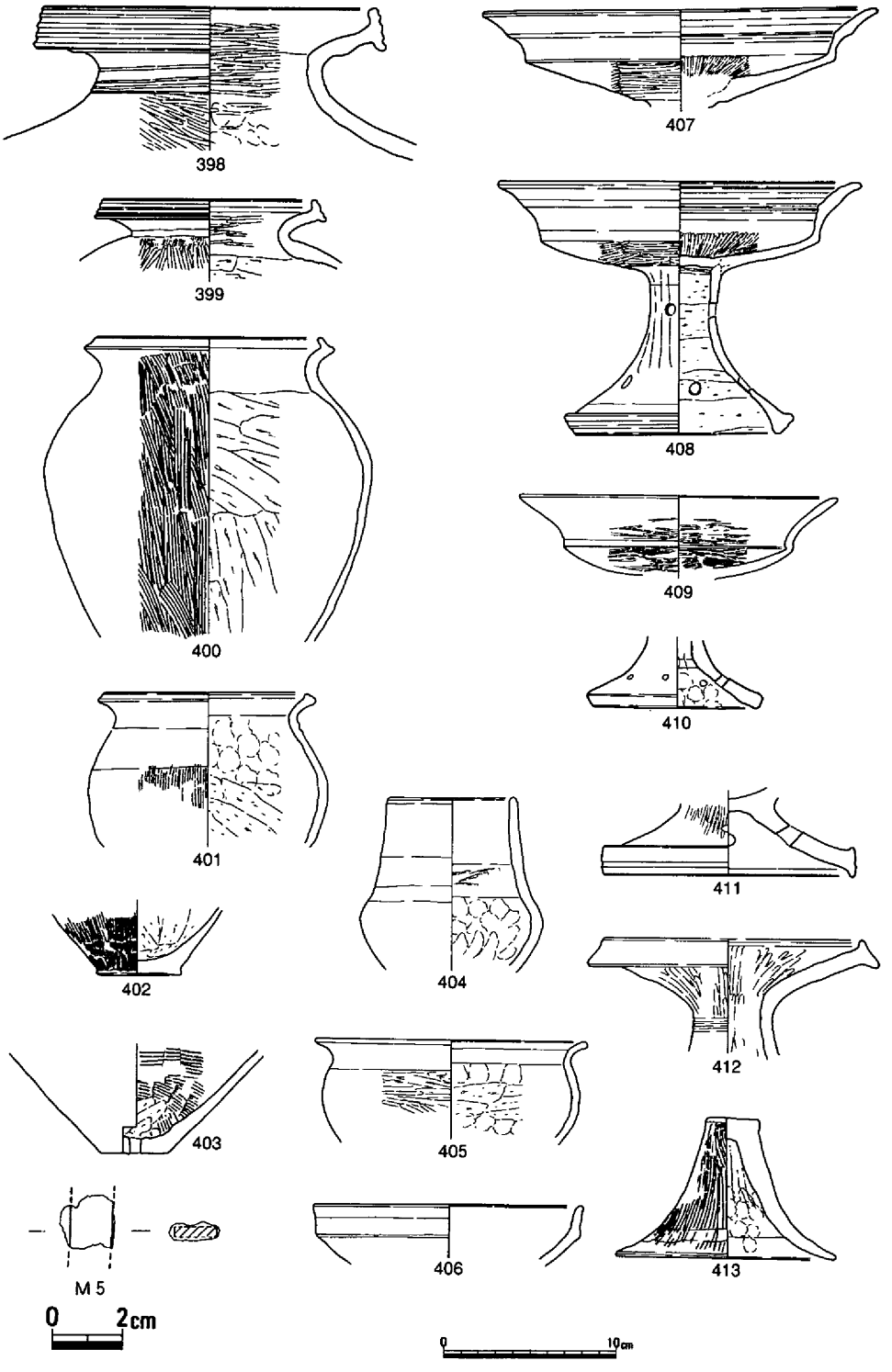
９Ｃｂ区南西部に位置し、上層を竪穴住居33に削られる。平面形は径1.06～1.10ｍの円形で、深さ７㎝が残り、海抜高1.93ｍの底面はほぼ平坦である。袋状土壙の底部とみなすことができ、遺物は出土していないが、弥生時代後期前半と考えられる。



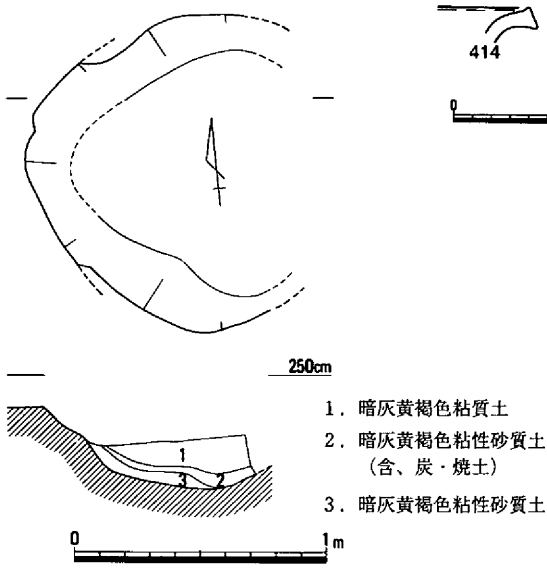
第86図　土壙36（1/30）

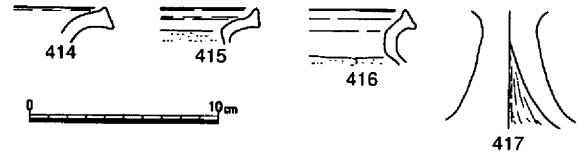


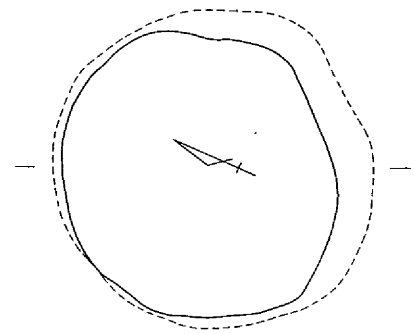
第87図　土壙36出土遺物（1/4）

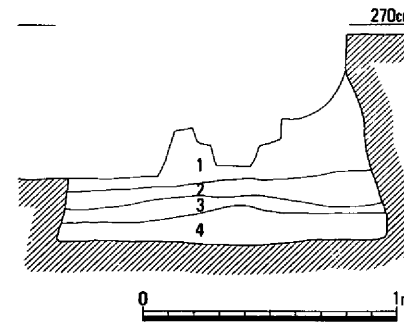


第88図　土壙37出土遺物（1/4・1/2）







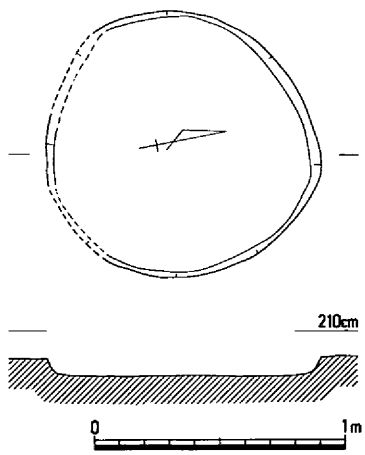


1．黄灰褐色砂（含、炭）
2．灰褐色砂（含、炭）
3．褐灰色砂
4．灰褐色砂（含、灰色粘質微砂塊多）

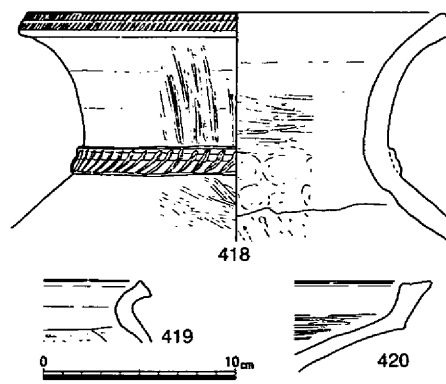
第89図　土壙38（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙40（第16・91図）

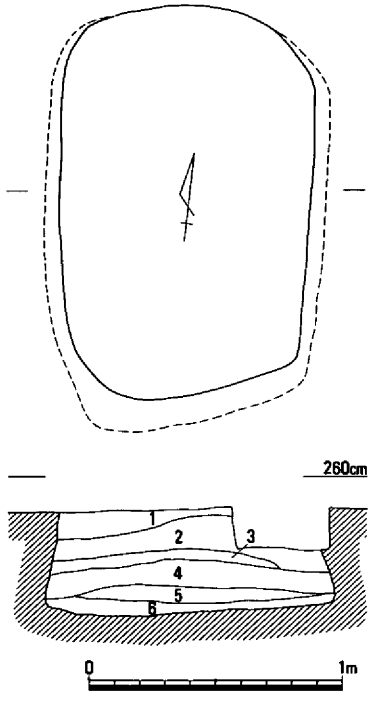
９Ｃｂ区南西部に位置し、北半を竪穴住居33に削られた袋状土壙である。検出面での平面形は1.19×1.04ｍの楕円形を呈するが、深さ84㎝の側壁は内傾しており、海抜高1.85ｍの底面は最大径1.27ｍの円形である。弥生土器の壺418、甕419、高杯420等の出土により、弥生時代後期前半に比定される。



第90図　土壙39（1/30）

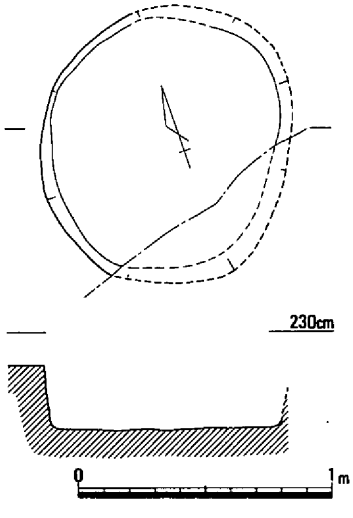


第91図　土壙40（1/30）・出土遺物（1/4）



1．灰褐色砂（含、炭・黄褐色砂塊）
2．暗灰褐色砂（含、炭多、黄褐色砂塊）
3．暗灰褐色砂（含、炭・灰色粗砂塊）
4．灰褐色砂
（含、灰色粘質微砂塊・炭・灰多）
5．褐灰色砂（含、黄褐色砂塊・炭多）
6．灰色粗砂（含、暗褐灰色砂塊多、炭）

第92図　土壙41（1/30）



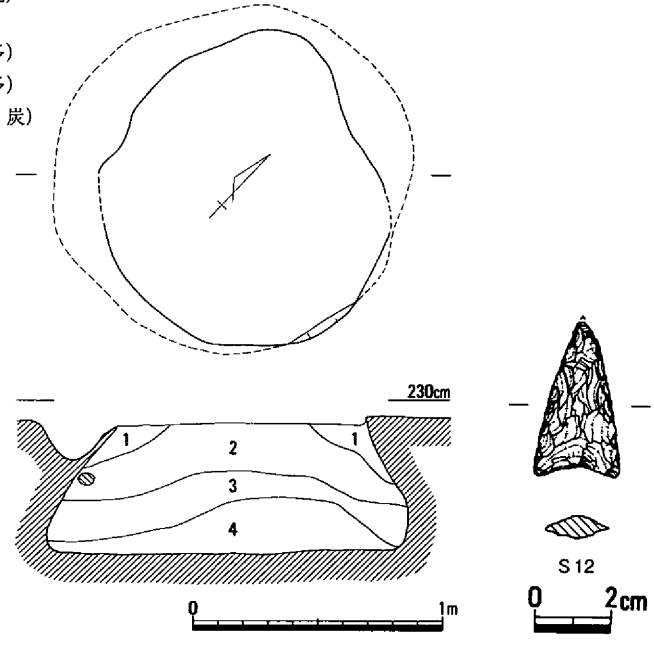
第93図　土壙42（1/30）

土壙41（第16・92図、写真図版45）

９Ｃｄ区北部に位置し、土器棺１、土壙42に近接している。検出された平面形は1.57×0.99ｍの隅丸長方形であるが、深さ42㎝の側壁が内傾する袋状土壙であり、海抜高2.06ｍで平坦な底面は、1.63×1.11ｍの隅丸長方形を呈する。埋土は10層に分けられて凸レンズ状に堆積しており、第４・５層に炭・灰が多い。遺物は出土していないが、弥生時代後期前半で捉えられる。

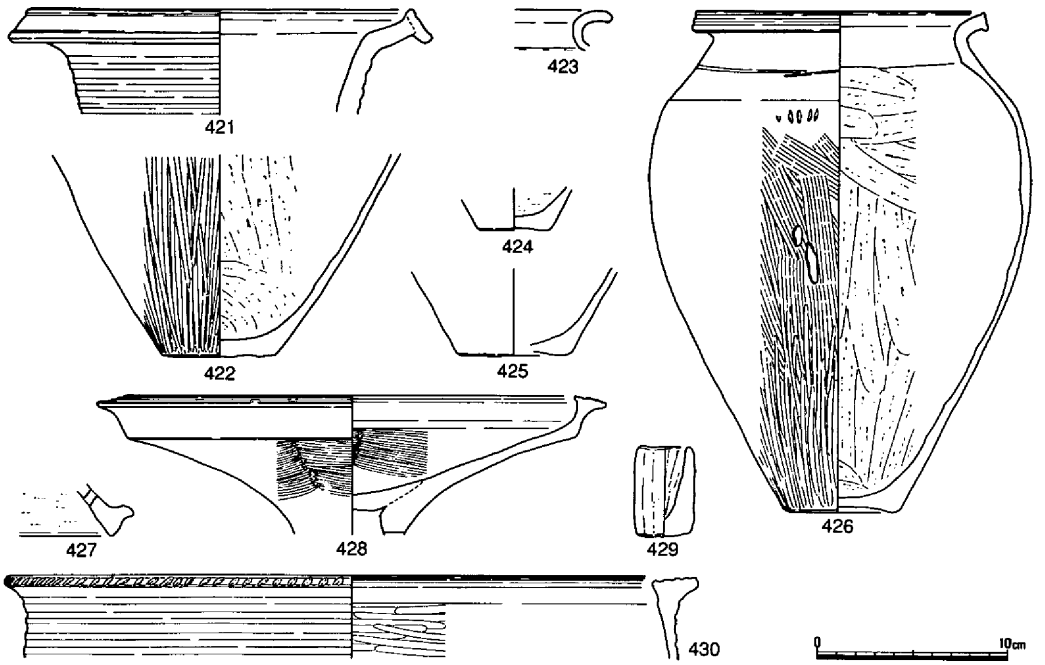
土壙42（第16・93図）

９Ｃｄ区北部に位置し、南端を竪穴住居35に削られている。平面形は楕円形と想定されるが、規模は確定しがたく、海抜高1.93ｍで平坦な底面において短径89㎝が知られるのみである。深さ23㎝が残る側壁はほぼ直立しており、袋状土壙とは断定しかねる。遺物は出土していない。



1．明灰褐色砂
2．灰褐色砂（含、炭・灰多）
3．灰色粗砂（含、炭・灰・焼土多）
4．灰色粗砂（含、灰色粘質微砂塊多）

第94図　土壙43（1/30）・出土遺物①（1/2）



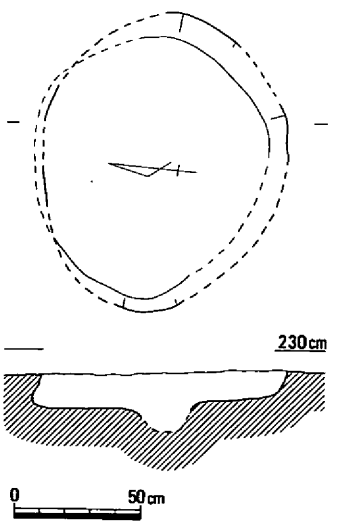
第95図　土壙43出土遺物②（1/4）

土壙43（第16・94・95図、写真図版46）

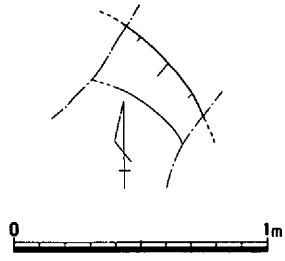
９Ｃｄ区北西部に位置し、上層を竪穴住居35に削られている。袋状土壙であり、検出された平面形は1.23×1.18ｍの不整な円形であるが、深さ54㎝の側壁は内傾し、海抜高1.72ｍで平坦な底面は、1.32×1.43ｍの不整な円形を呈する。埋土は４層に分けられ、凸レンズ状に堆積しており、第２・３層には炭・焼土が多い。出土遺物には弥生土器の長頸壺421、甕422～426、高杯427・428、鉢430、手捏ね土器429、サヌカイト製の石鏃Ｓ12等があり、426の肩部外面には５個の刺突が並ぶ。時期は弥生時代後期前半に求められる。（光永）

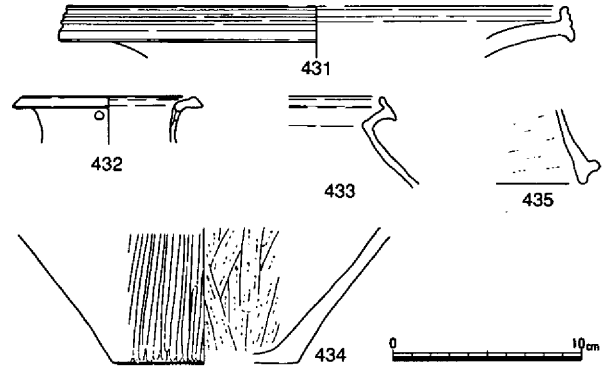
土壙44（第16・96図）

９Ｃｄ区において竪穴住居14に切られた状態で検出された。部分的な状態で検出されたことで明瞭でないがおよそ長軸長1.19ｍ、幅96㎝を測る、平面楕円形の土壙が復元される。土壙の遺存度は不良で、検出面から壙底までの深さ約15㎝程度であった。断面一部袋状を呈することで、本来袋状土壙であった可能性が高いと考える。　（島崎）



第96図　土壙44（1/30）





第97図　土壙45（1/30）
・出土遺物（1/4）

土壙45（第16・97図）

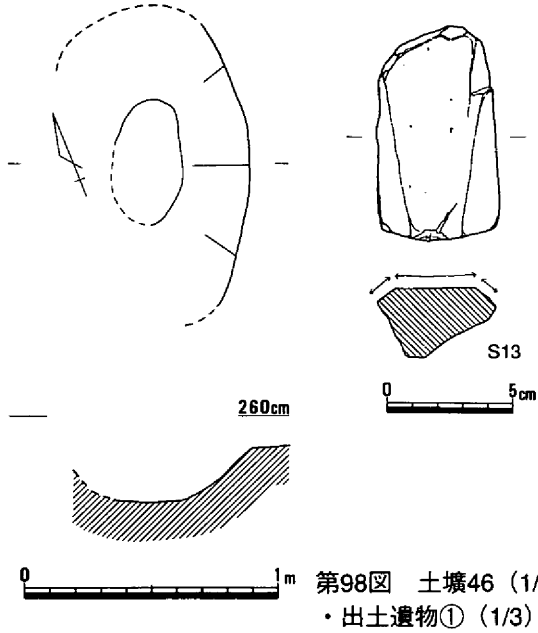
９Ｂｄ区南東部に位置し、竪穴住居35・84に削られており、形状・規模ともに不詳である。

出土遺物には、弥生土器の壺431・432、甕433・434、高杯435等がある。432の頸部の穿孔は焼成後に行われている。

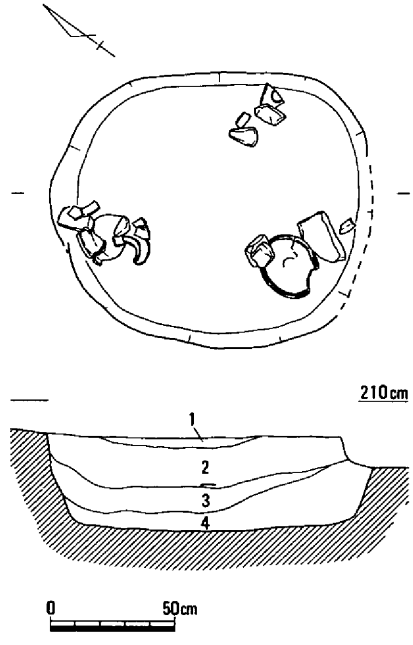
時期については、弥生時代中期後半から後期前半に比定される。　（光永）

土壙46（第16・98・100図）

９Ｃｄ区の調査区際において壙内に多量の土器が堆積した状態で検出された。側溝等により部分的に切られていたため全体についての詳細は判然としないが、

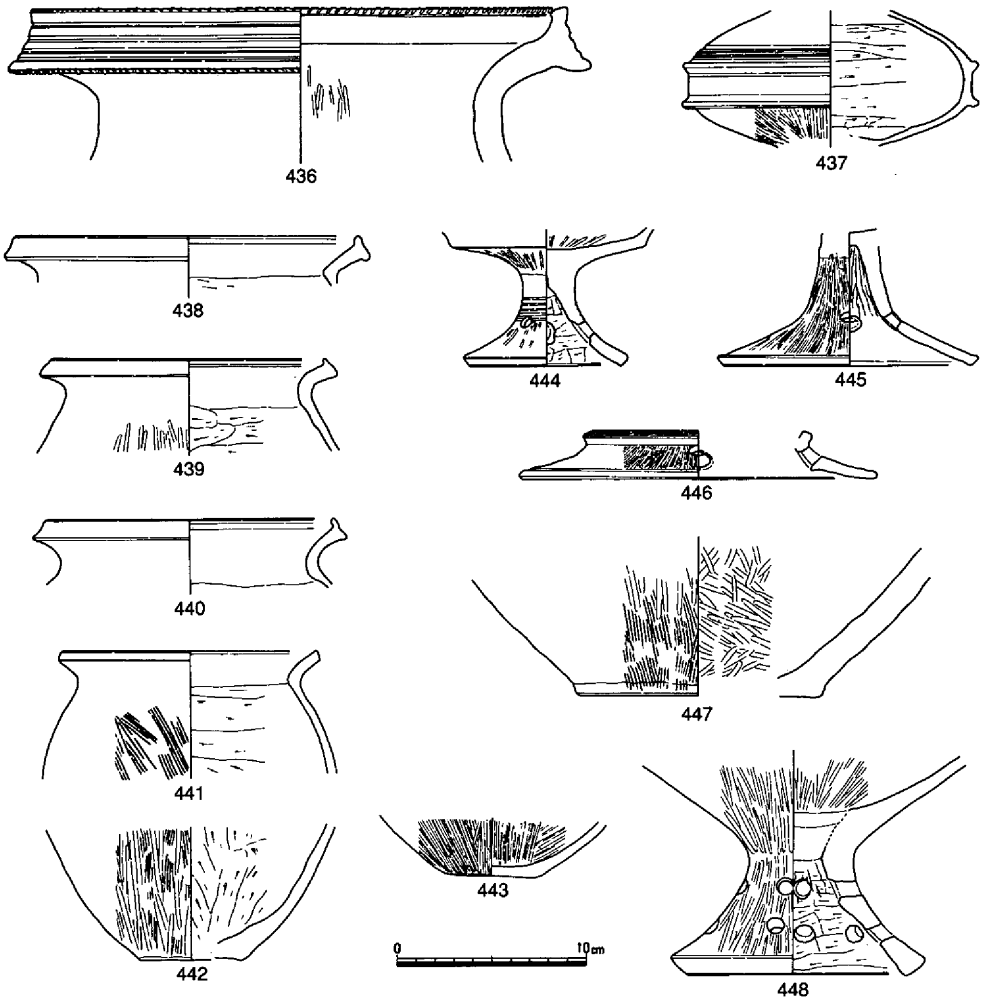


第98図　土壙46（1/30）
・出土遺物①（1/3）



1．炭・焼土塊
2．灰黄色土（含、炭・焼土）
3．黄灰色土
4．淡灰黄色土

第99図　土壙47（1/30）



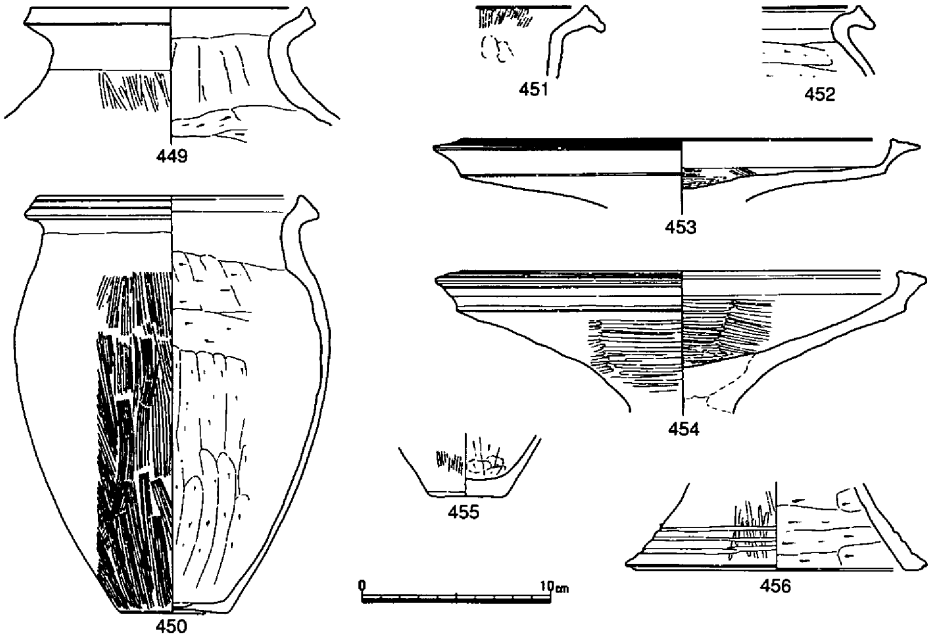
第100図　土壙46出土遺物②（1/4）

およそ長楕円形であったものと推測される。

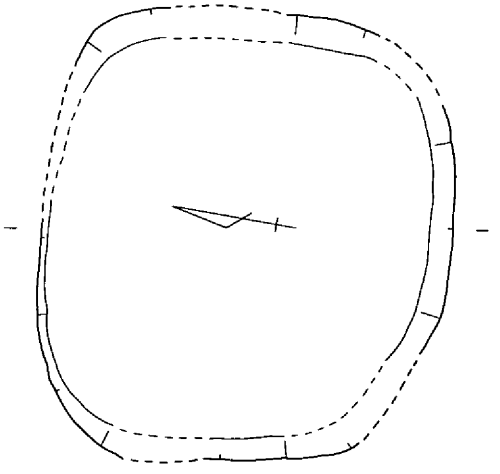
出土遺物には、土器の他砥石が１点確認された。土器には、壺、甕、脚付長頸壺、飾り高杯、鉢、台付鉢等の器種が見られ、なかには脚付長頸壺437のように胎土中に雲母を含み、外面には丹が塗られていたものも散見される。

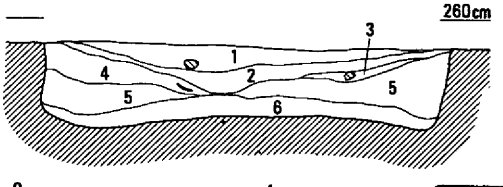
土壙47（第16・99・101図）

９Ｃｃ区に所在した古墳時代の竪穴住居93の床面下層において検出された。平面は、長軸長1.29ｍ、幅1.09ｍを測る楕円形を呈し、検出面からの深さ約37㎝を測った。土壙には、壙内埋積土上層に炭・焼土塊を包含した土砂の堆積とこれに混じった状態で土器の遺存が確認された。土器は、いずれも上東・鬼川市Ⅰ併行のものに比定され、時期的には後期前半の範疇で理解される。状況から本来の開口部はさらに上位にある袋状を呈する土壙であったと推測する。



第101図　土壙47出土遺物（1/4）



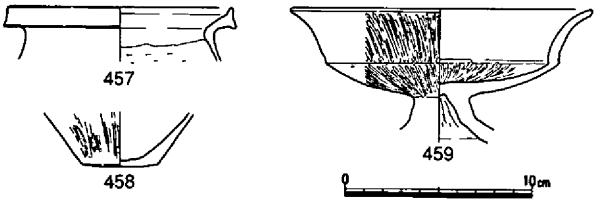


土壙48（第16・102図）

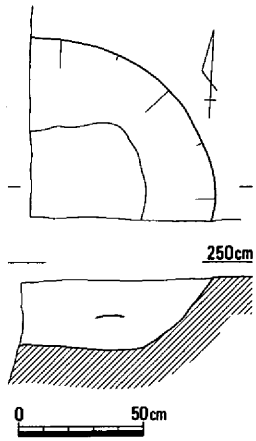
９Ｃｃ区で北東部を古墳時代の竪穴住居91によって切られた状態で検出された平面隅丸方形を呈する土壙である。断面は検出面から溝底へと至る壁がほぼ垂直気味に見られ、土砂の堆積も上位に炭と焼土を多く含んだ堆積を見せるものであった。

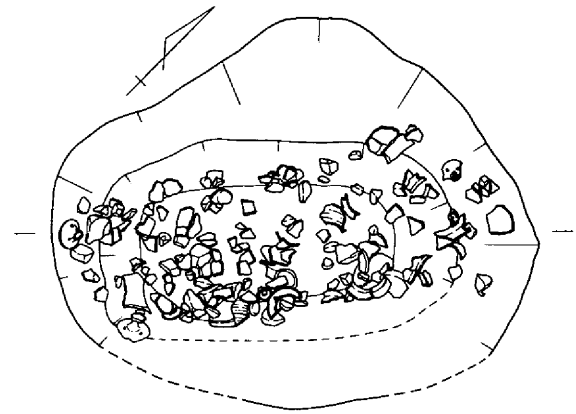
遺物には、甕、高杯等が見られた。これにより後期前半への位置づけが考えられる。

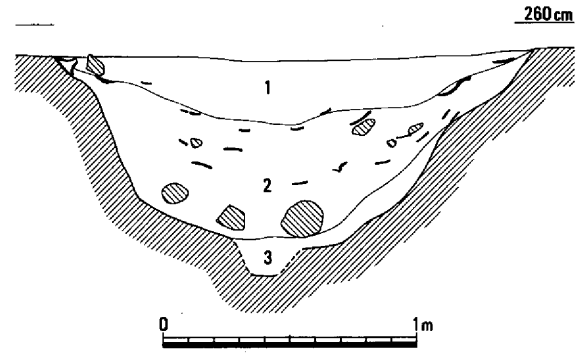
1．黄灰色土
2．暗灰色土（含、炭・焼土多）
3．炭
4．黄色土
5．黄灰色土
6．暗灰色土

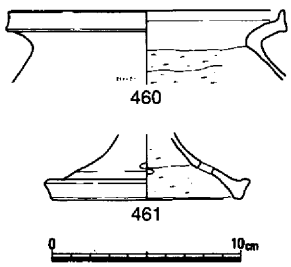


第102図　土壙48（1/30）
・出土遺物（1/4）



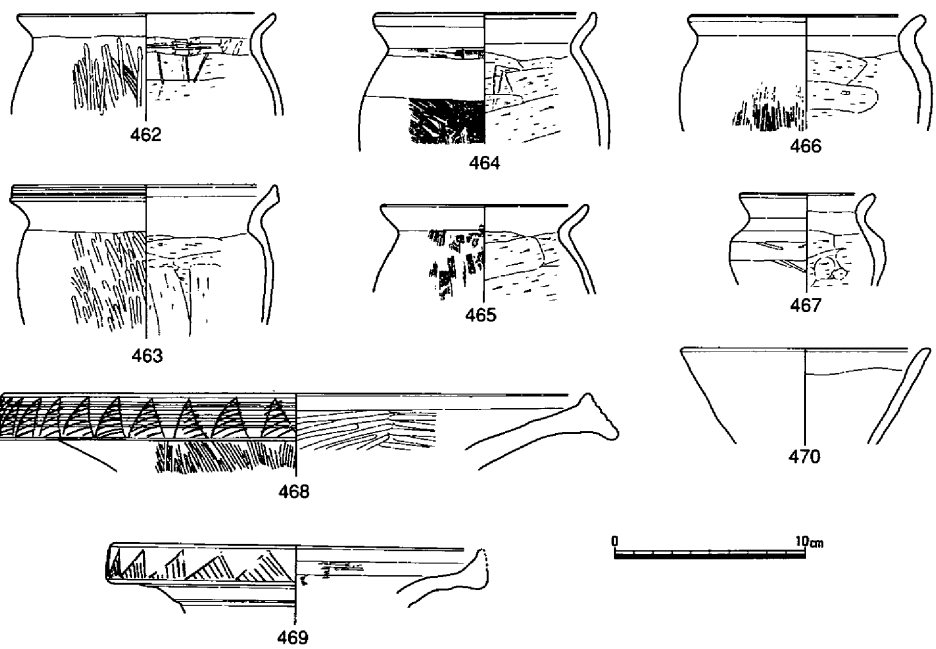




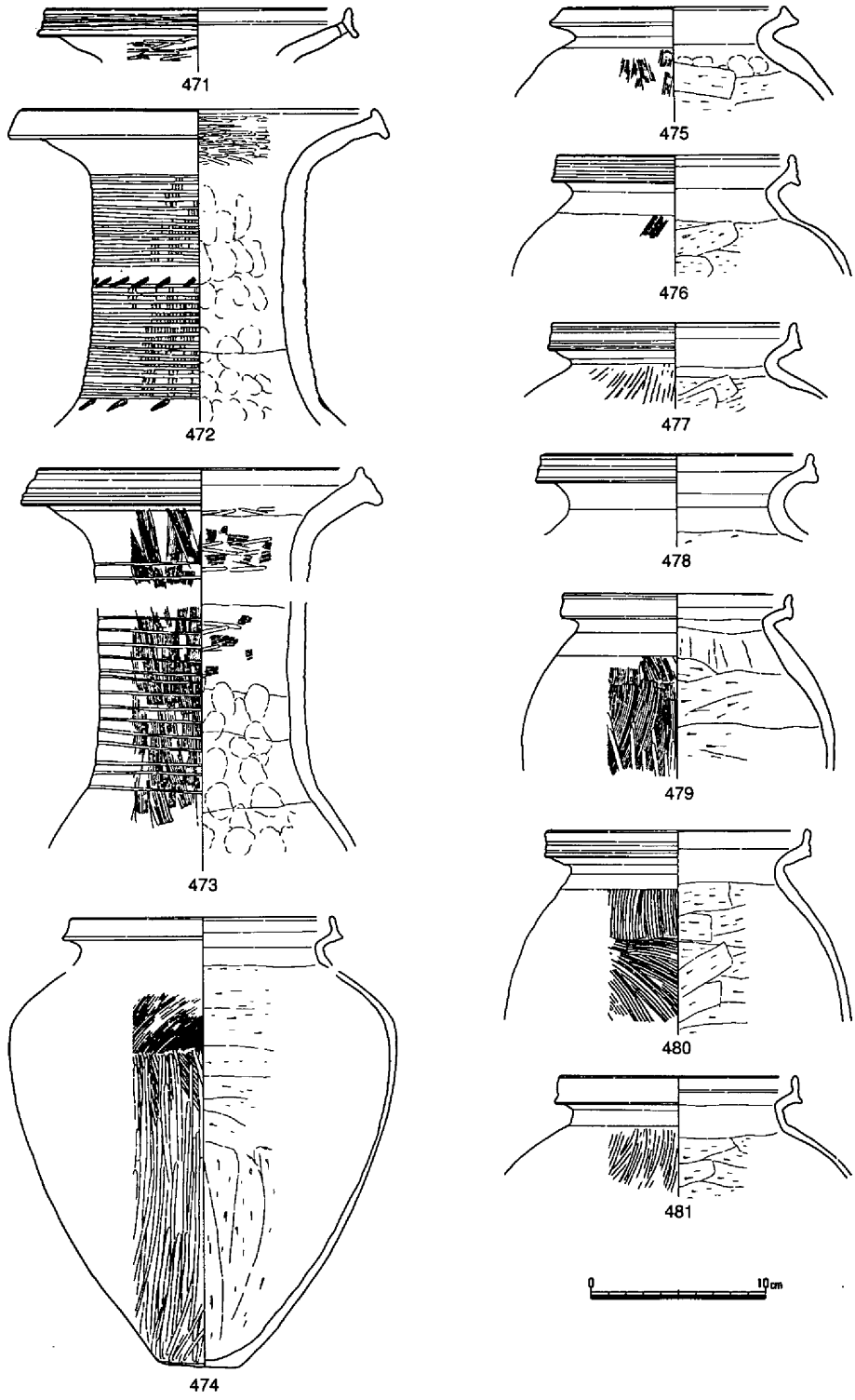


第103図　土壙49（1/30）
・出土遺物（1/4）

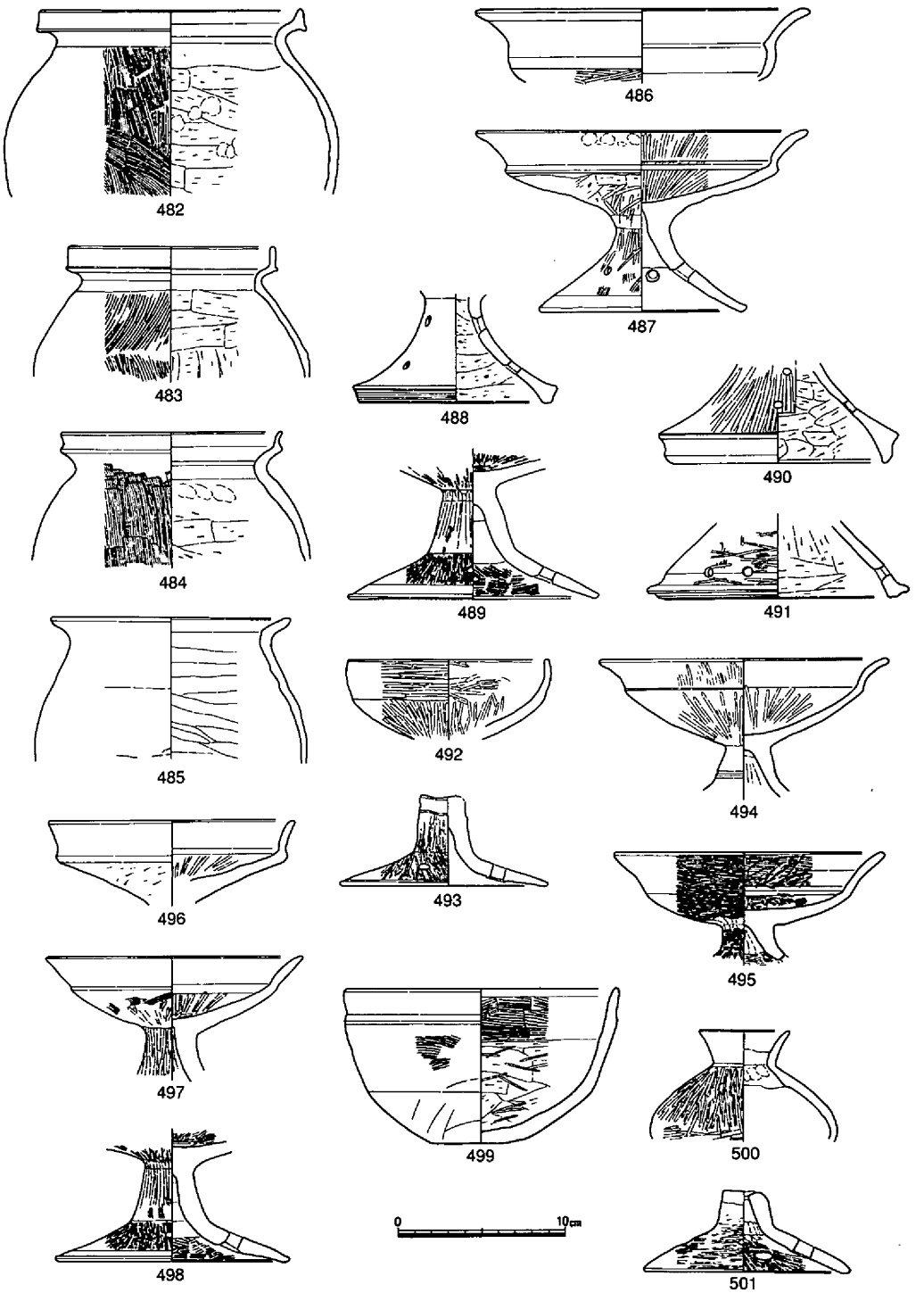
1．黄茶灰色砂質土　2．暗灰黄色砂質土　3．黄灰色砂



第104図　土壙50（1/30）・出土遺物①（1/4）



第105図　土壙50出土遺物②（1/4）



第106図　土壙50出土遺物③（1/4）

土壙49（第16・103図）

先述の土壙48を一部切って掘開された土壙である。南と西側が側溝により切られていたため形状および規模については明確ではない。検出面から壙底までは約27cmと浅く、埋積土も１層のみであった。時期は、出土した土器によりおよそ後期前半に位置づけられるものである。

土壙50（第16・104～106図、写真図版46）

９Ｂｄ区において検出された平面楕円形を呈する土壙で、長軸長1.90m、幅1.55mの規模を測ったが上位部とくに北側部分は変形しており、本来幅1.30m前後にあったものと考える。壙底は、断面でみると皿状を呈しており、中央部に浅い窪みが遺存する他全体的に斜面を形成しており、平坦な面は見られなかった。壙内には特に中層以上には比較的多くの土器片が流れ込んだ状況で堆積しているのが確認された。一部に相当の形に復元される土器も散見されたが、多くは破片でしかも土壙本来の時期をはずれた年代観を示すものであった。

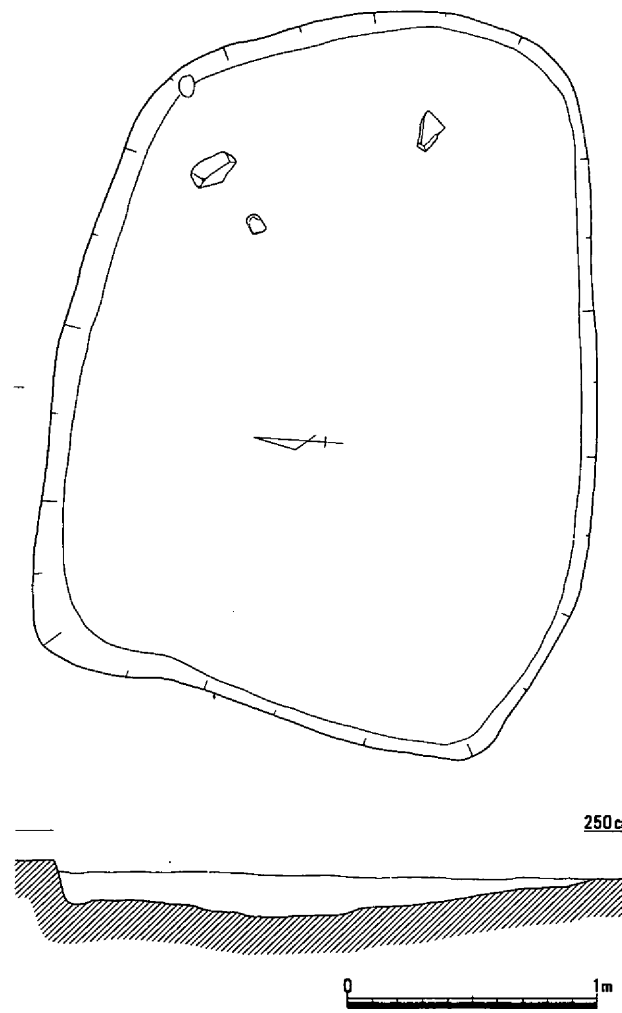
土器には、胎土中に角閃石・雲母を多く含んだ、一見特殊器台の胎土に酷似した様相を呈する甕474・481、高杯490が見られた。

土壙51（第16・107・108図）

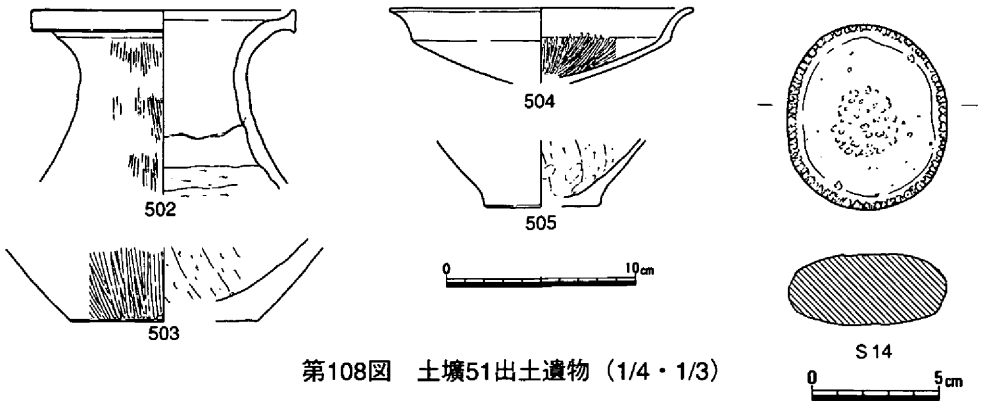
８Ｂｂ区で長軸長2.90m、幅2.18mの平面規模を測り、不整形な隅丸方形を呈する土壙であった。壙底も一定でなかった。

出土遺物には、少量の土器と周辺部に敲打痕跡をよく残す敲石１点が確認されたにすぎない。

時期的には、土器が上東・鬼川市Ⅱ併行と考えられ、後期前半に位置づけられよう。



第107図　土壙51（1/30）



第108図　土壙51出土遺物（1/4・1/3）

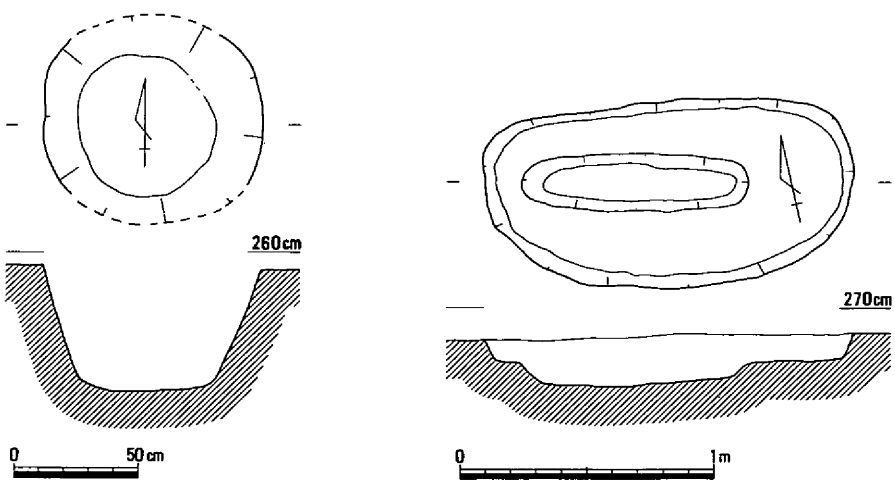
土壙52（第16・109図）

８Ｂｂ区において竪穴住居16の北側に接した状態で検出されたが、壙内には土器をはじめとする遺物の遺存が認められなかったことで性格等についての詳細は明瞭でない。ただし、検出状況、周辺に所在するその他の遺構との関係からおよそ後期前半の範疇に属するものと理解したい。

土壙53（第16・109図）

８Ｂｂ区で竪穴住居16および竪穴住居17の一部と切合った状態で検出された。長軸長1.44m、幅74cmの規模で平面長楕円形を呈する土壙であった。検出面から約10cm下がり一度壙底を造った後さらに９cmの深さに壙底の一部を窪ませた状況を見せるものであった。

出土遺物が検出されなかったことで時期・性格等についての詳細は判然としないが、状況等からおおむね後期前半への位置づけが推測されよう。　（島崎）



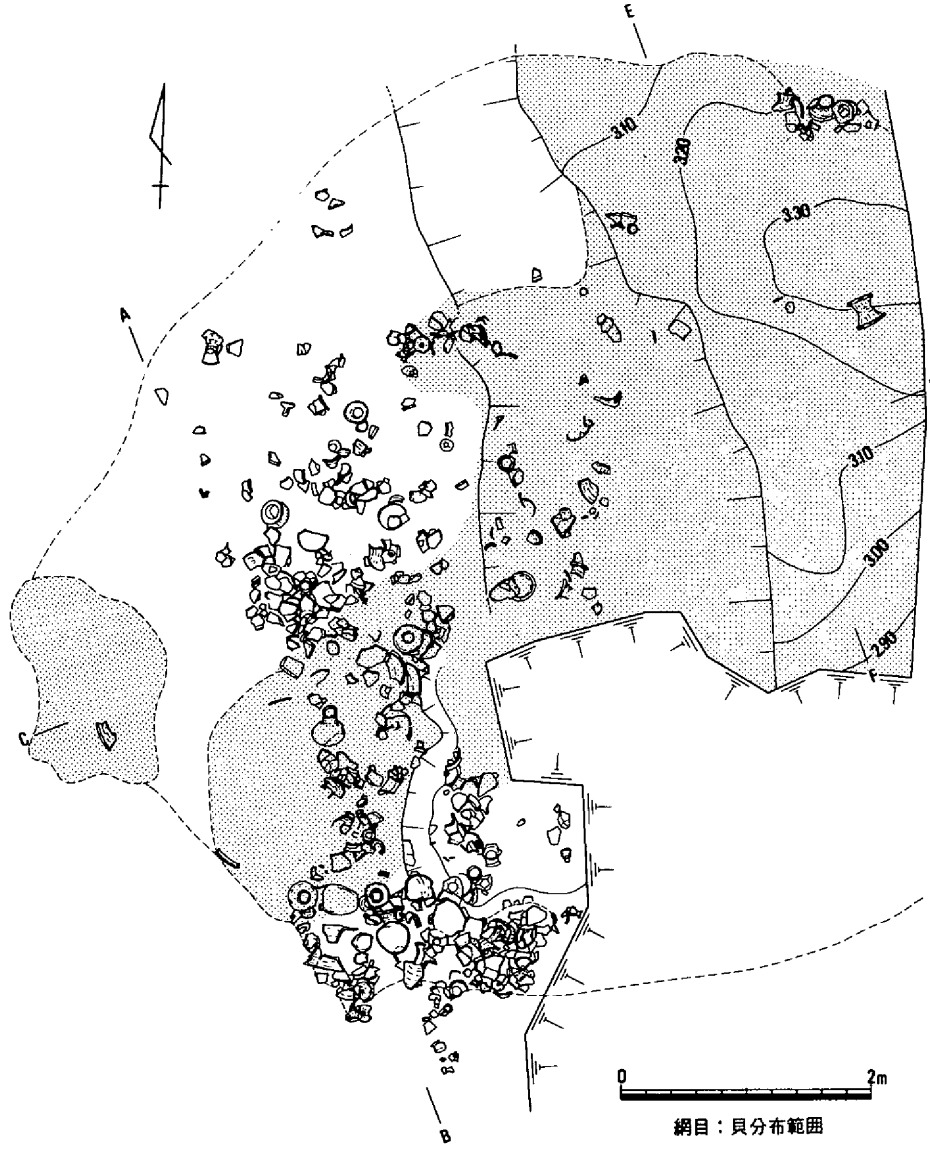
第109図　土壙52（左）・53（右）（1/30）

(6) 貝塚

貝塚１（第16・110～140図、写真図版47～50・99・100）

１）立地と規模

足守川加茂Ｂ遺跡は、備中南部の足守川中流域の沖積地に形成された微高地上に位置する集落遺跡の一つである。沖積地の微高地群に形成された遺跡には貝塚の形成もしくは貝類の散布が確認されたものが発掘調査や分布調査において徐々にではあるが増加している。近くては、下流約500ｍの惣爪廃寺の位置する微高地や、上東遺跡との中間付近に位置する新邸遺跡にお



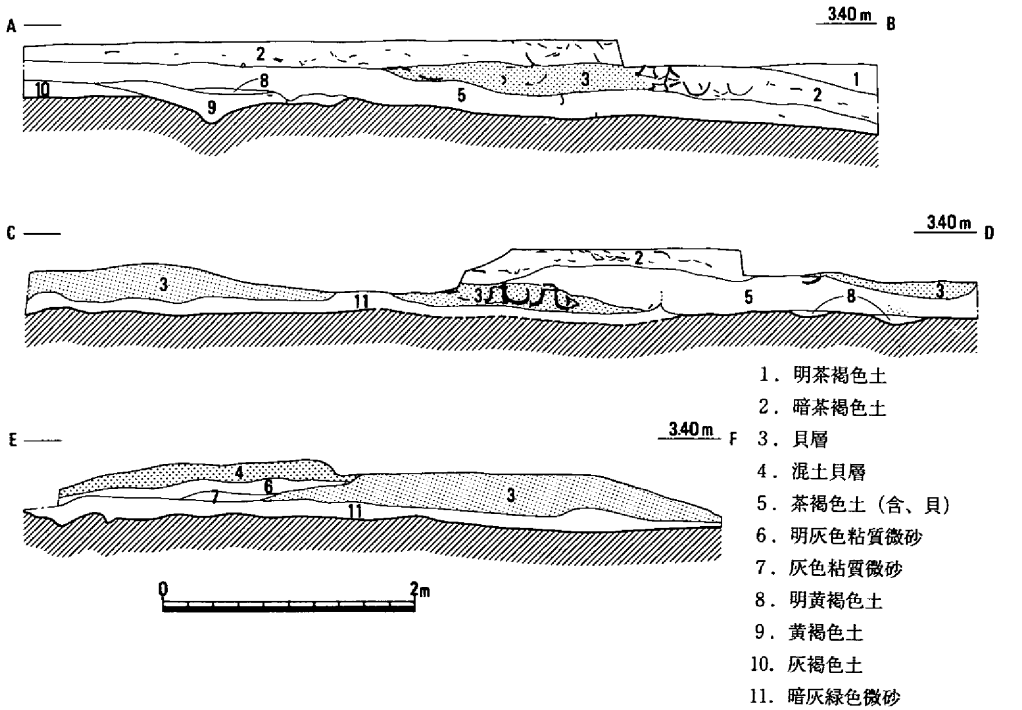
第110図　貝塚１（1/60）

いても弥生時代の貝塚や貝の散布が確認されている。足守川加茂Ｂ遺跡の立地する微高地は、周辺部の古地形の復元と河川改修や道路改修に伴う周辺の立ち会い調査から推定すると北東から南西に最大幅70m、長さ300mのやや細長い形状をなし、今回の河川敷内の調査部分は、形成された微高地の南西端にあたると考えられる。

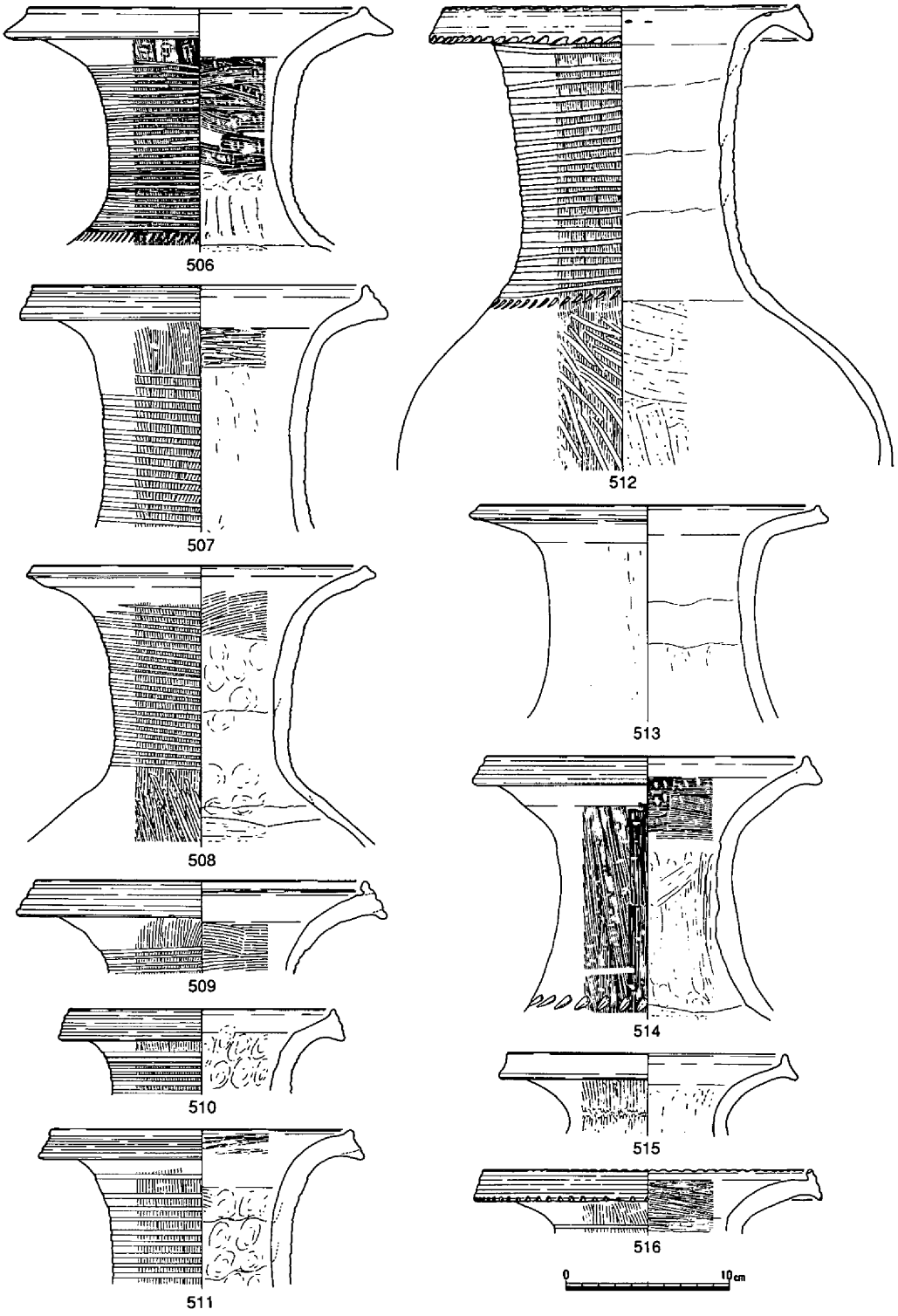
検出した貝塚は、足守川加茂Ｂ遺跡の河川敷内調査区の南北70mを測る微高地のほぼ中央に位置している。他の貝類の大半の出土が土壙等の埋土内からの出土であるのに対して当貝塚は微高地の基盤層面に盛り上げられた状況を呈していた。ただ貝塚のほぼ中央を南北に用水路が掘削されていたことや貝塚の東端が新矢部橋の橋脚位置にあたったため、本格調査時には既に橋脚が設置され消失していたことと南側の一部がおそらく橋脚工事に伴うと思われる大きな攪乱を受けていたことにより貝塚の全体像は把握できなかったものの、南北7.5m、東西10m程度の小規模なものと想定される。

２）検出状況

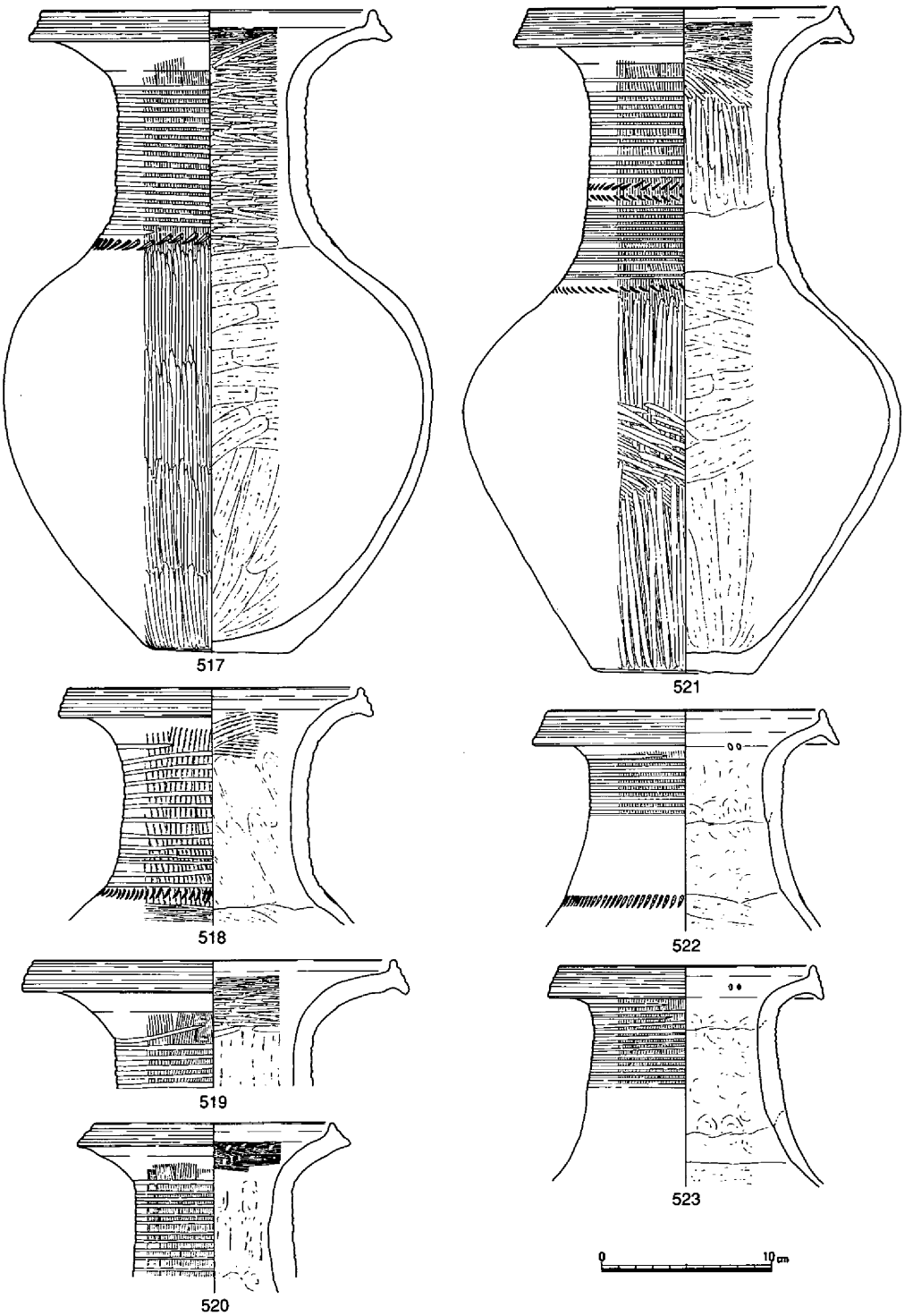
貝塚を検出した付近は、調査区の中央をほぼ南北に横断する用水路が設置されていたために用水路を残し西側の調査を北から先行して行い、用水のつけ換えが完了した後に用水路下の調査にかかった。したがって用水路下の調査を開始した時点では用水路西側の調査区はかなり調査が進行し、既に貝塚の西端の一部の貝殻の堆積層を検出する深さまで掘り下げていたが、用



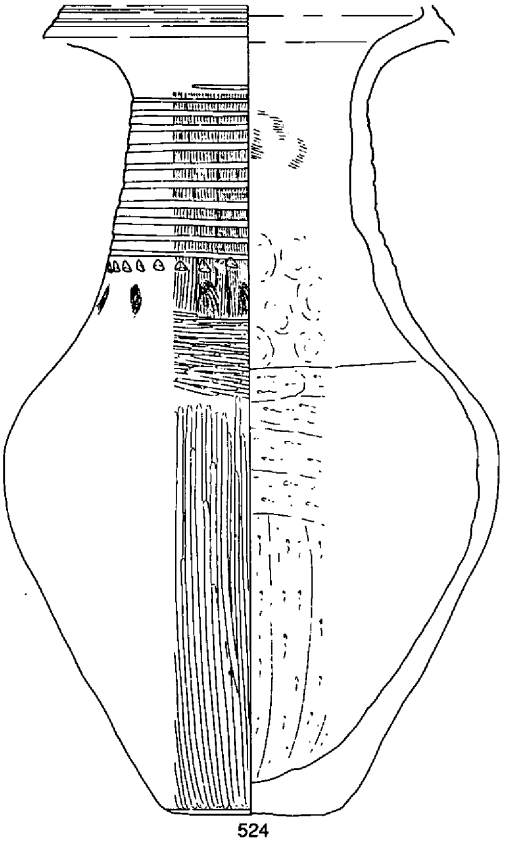
第111図　貝塚１土層断面（1/60）

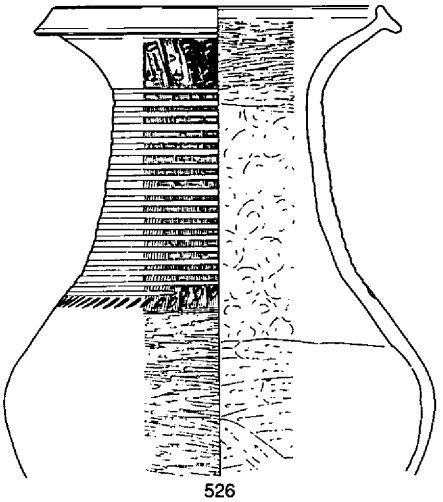


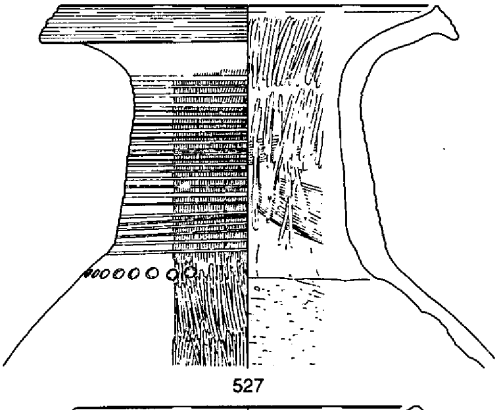
第112図　貝塚１出土遺物①（1/4）

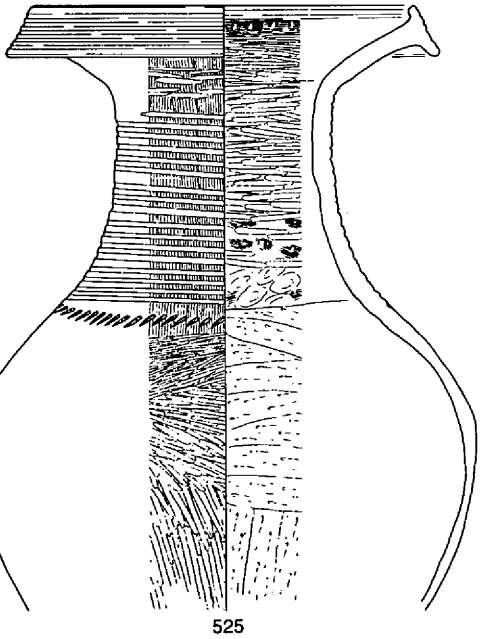


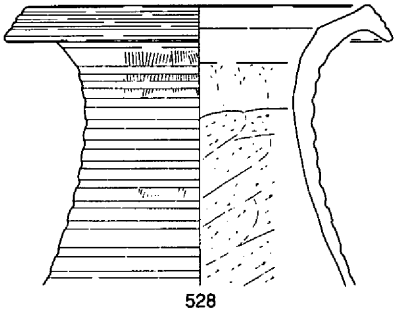
第113図　貝塚１出土遺物②（1/4）

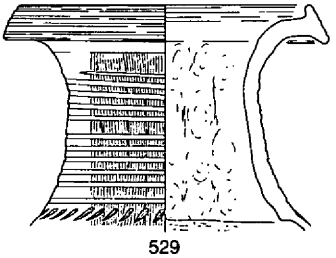

524

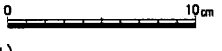

526


527

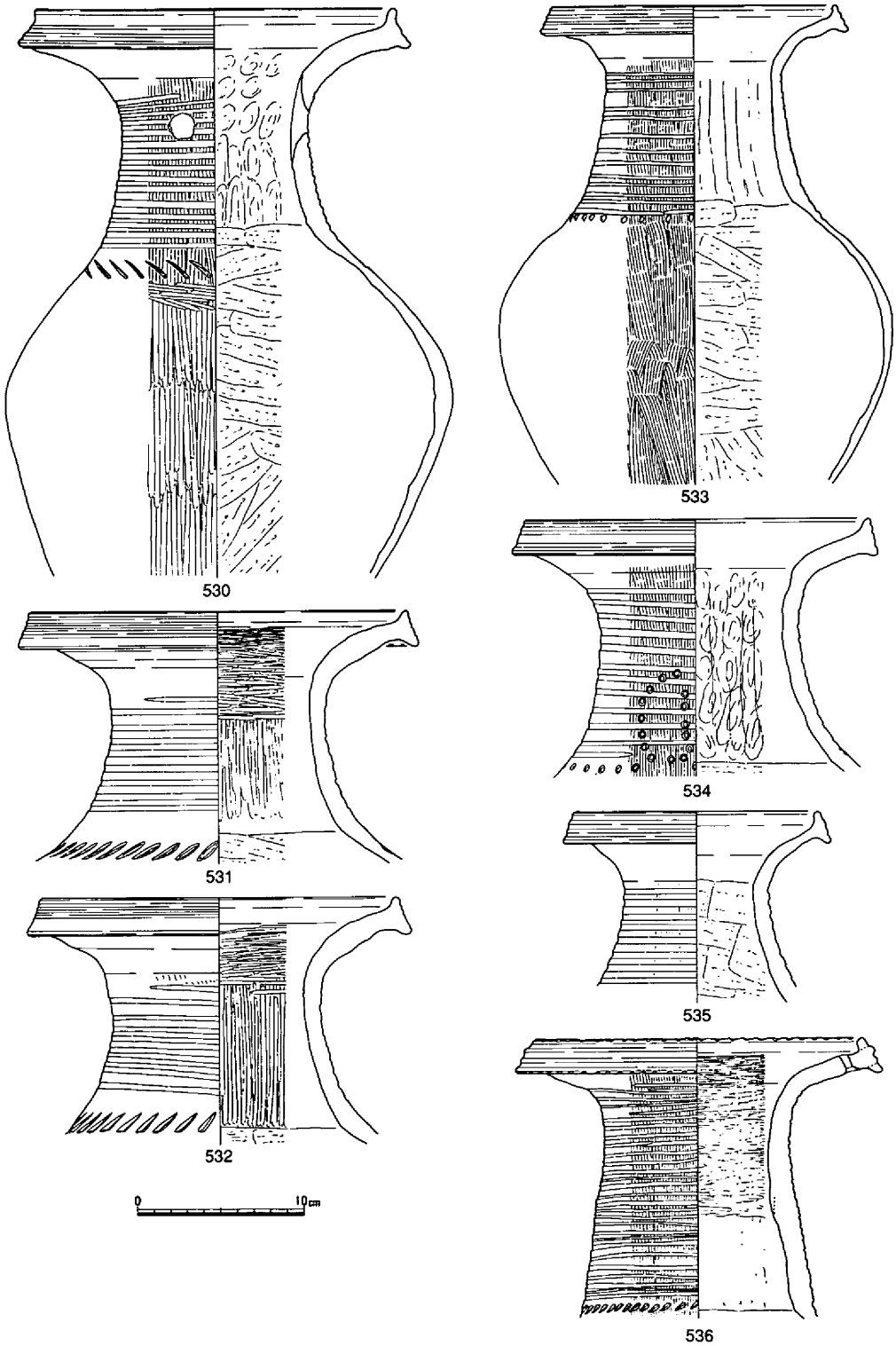

525


528

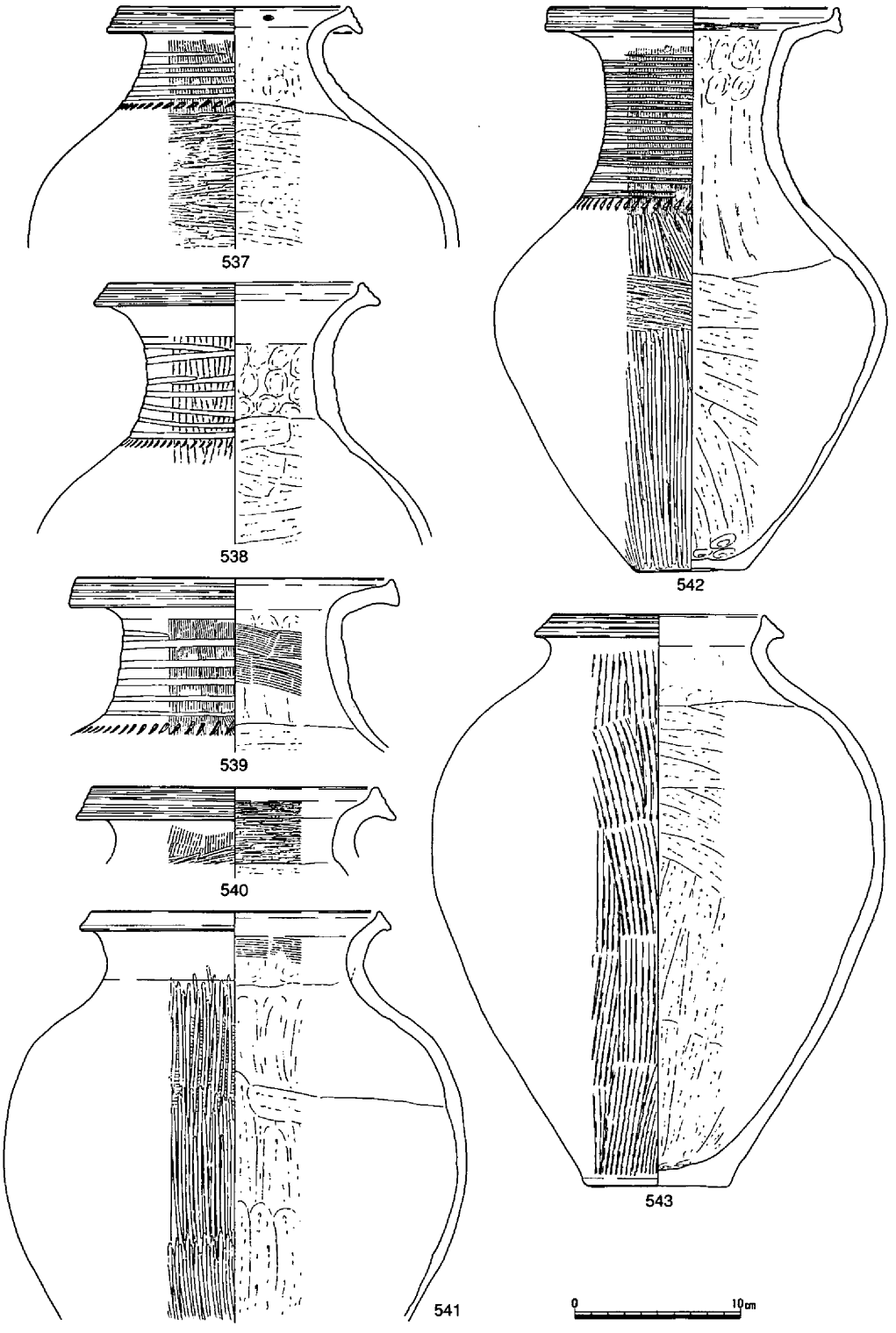

529



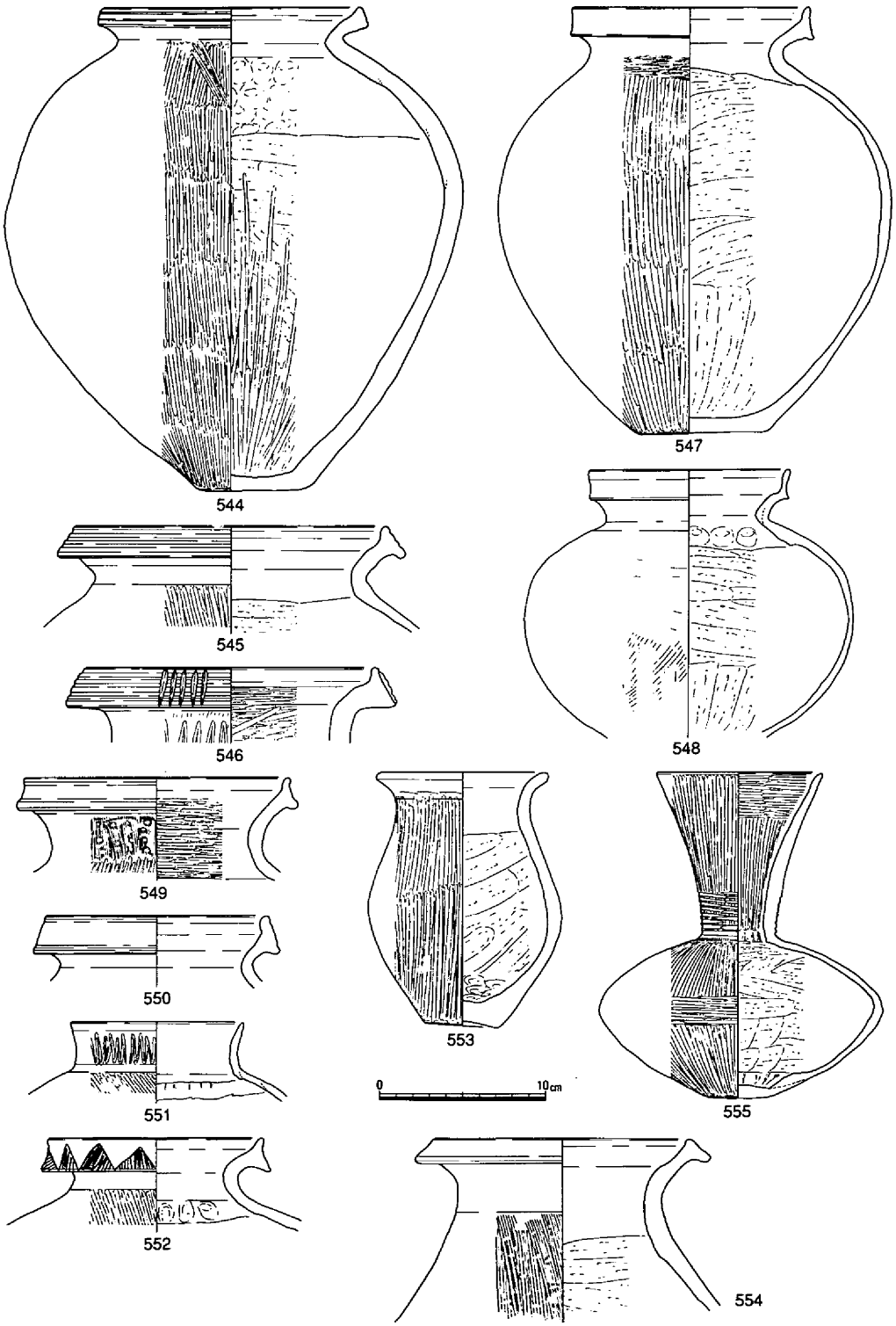
第114図　貝塚１出土遺物③（1/4）



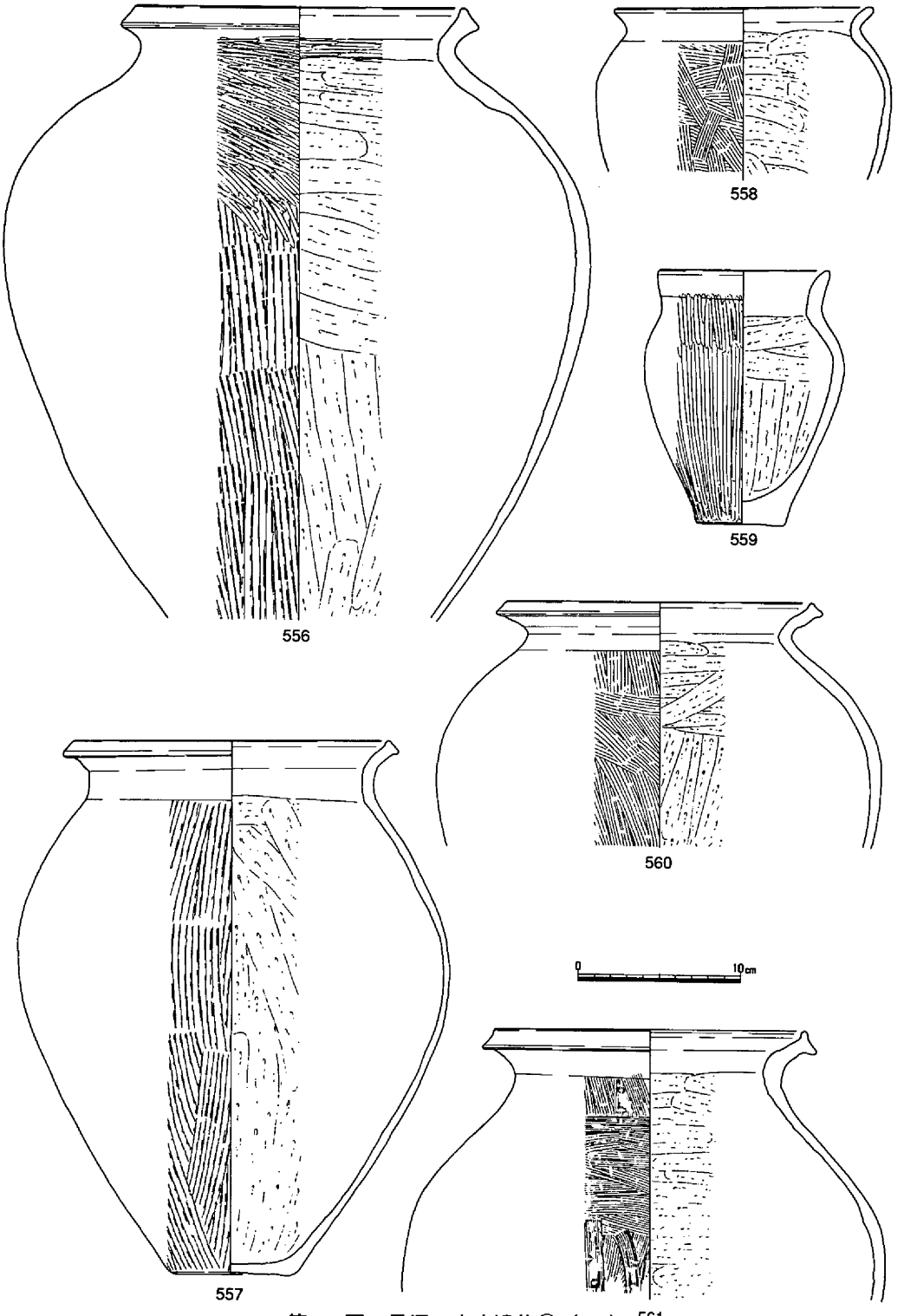
第115図　貝塚１出土遺物④（1/4）



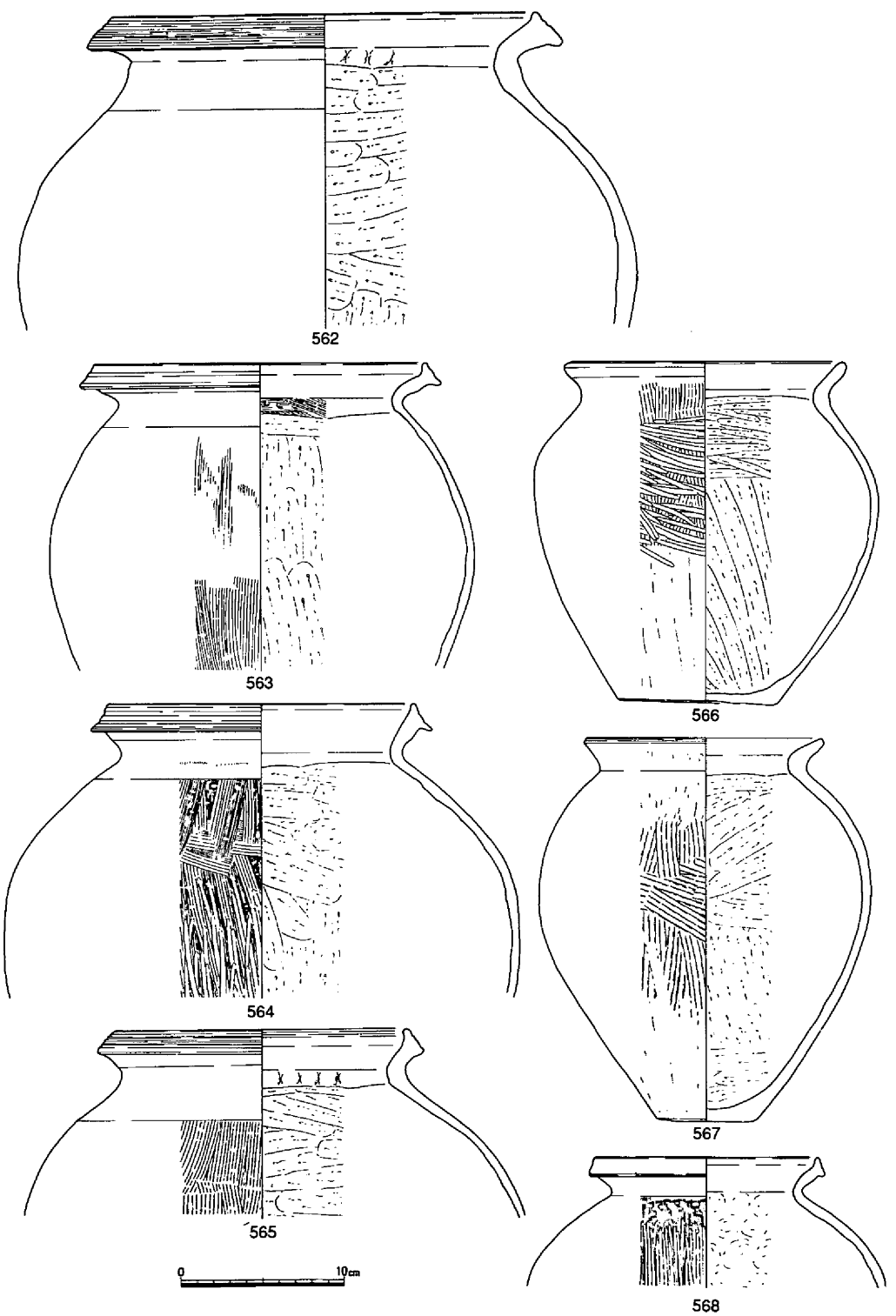
第116図　貝塚１出土遺物⑤（1/4）



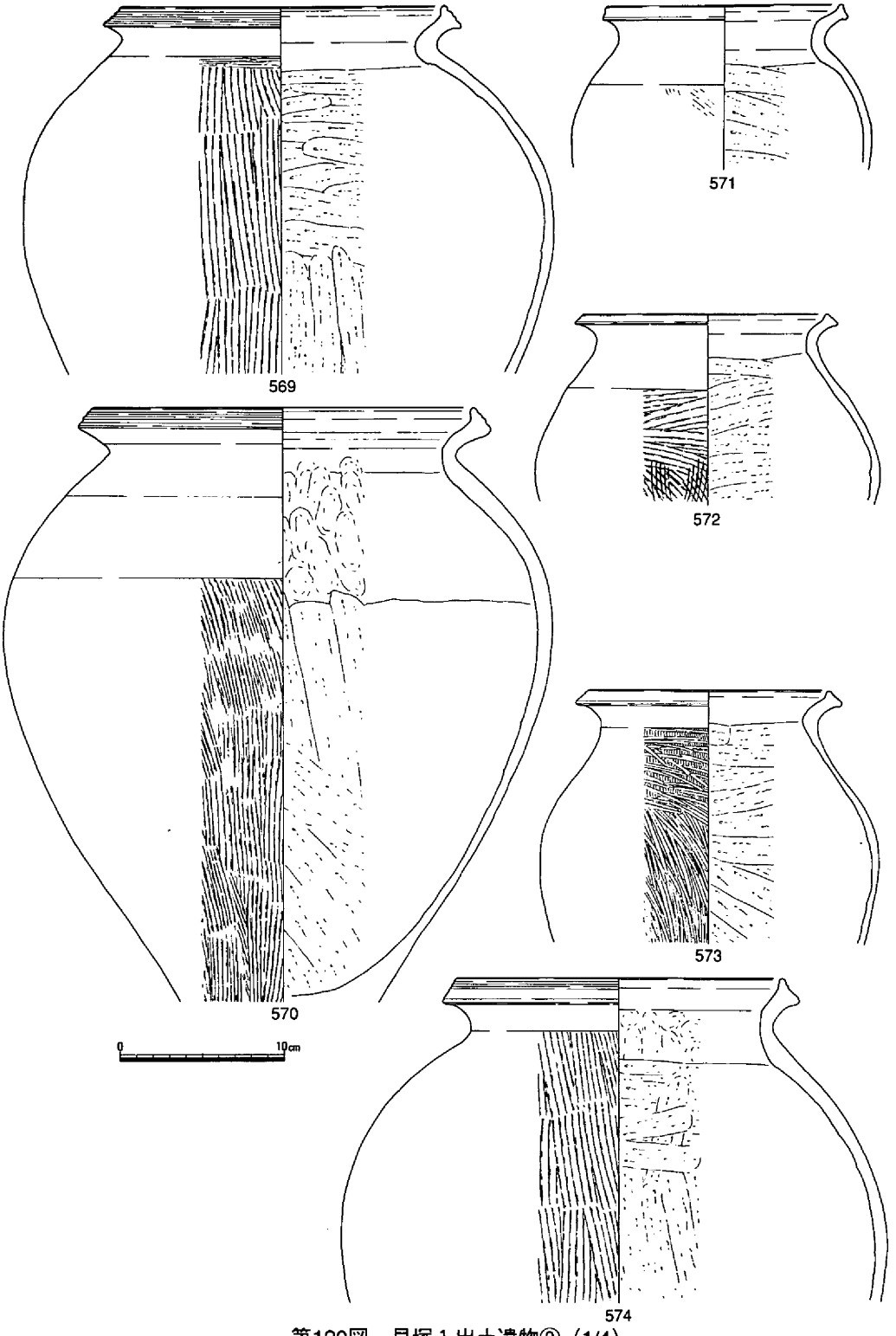
第117図　貝塚１出土遺物⑥（1/4）



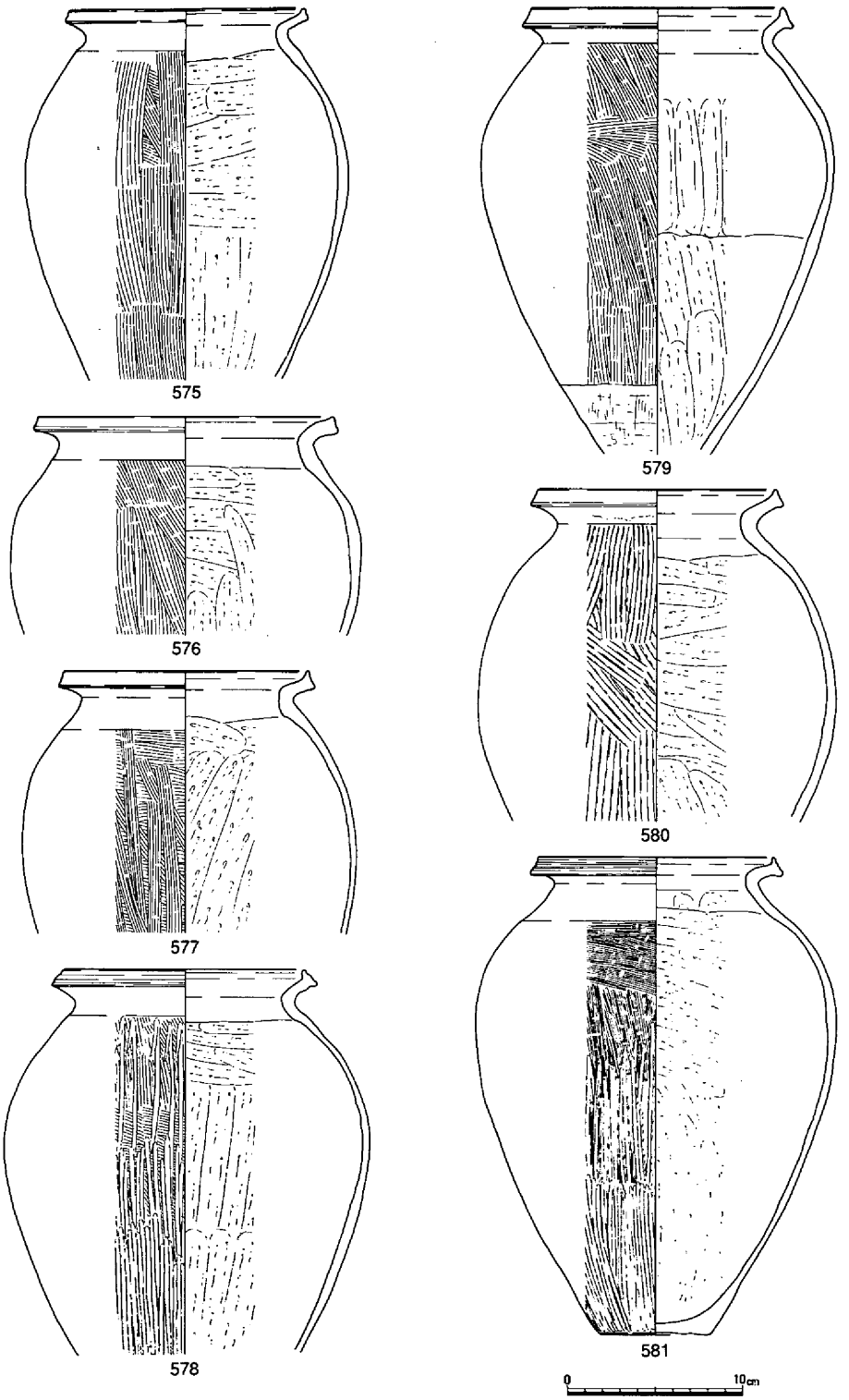
第118図　貝塚１出土遺物⑦（1/4）



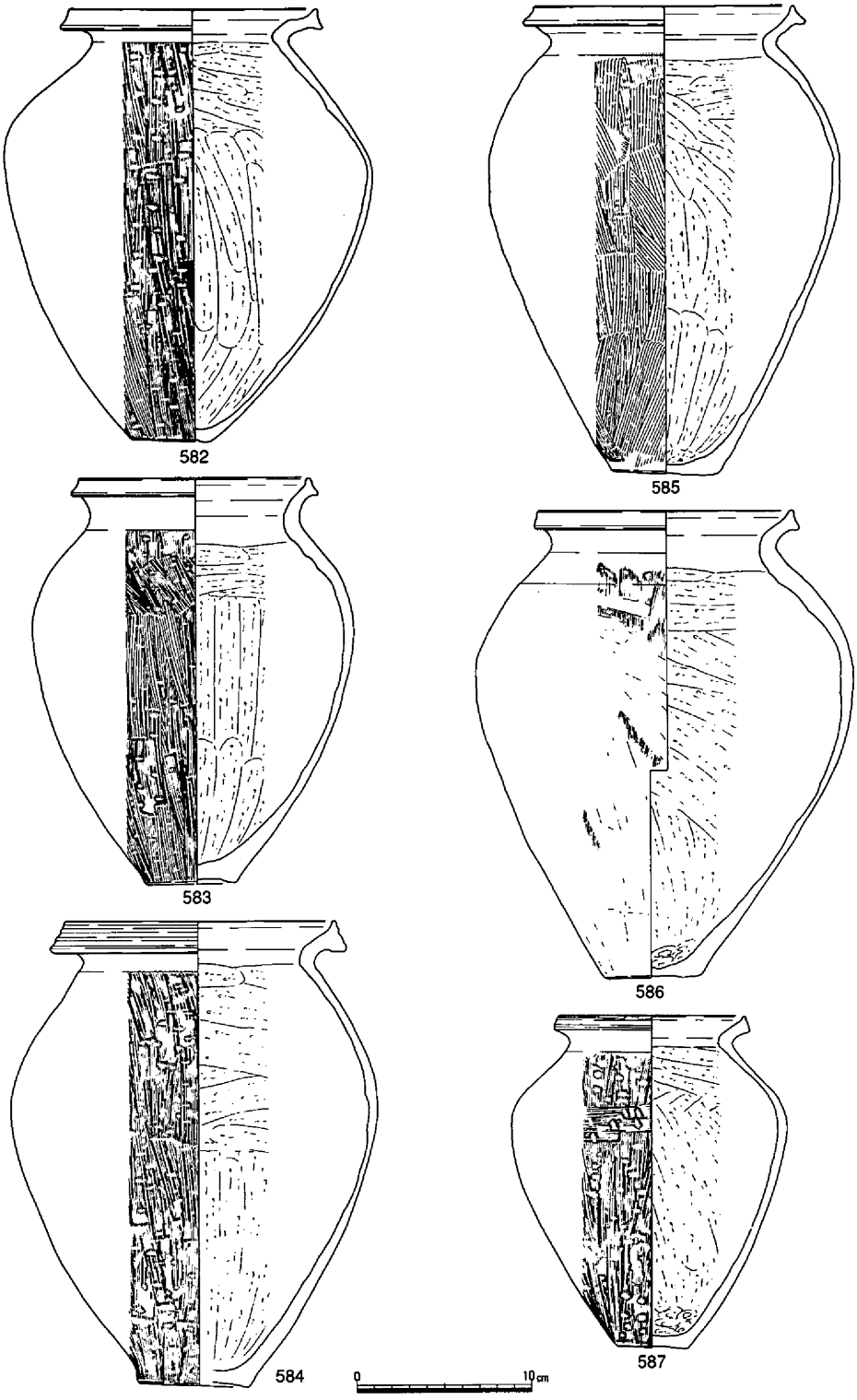
第119図　貝塚１出土遺物⑧（1/4）



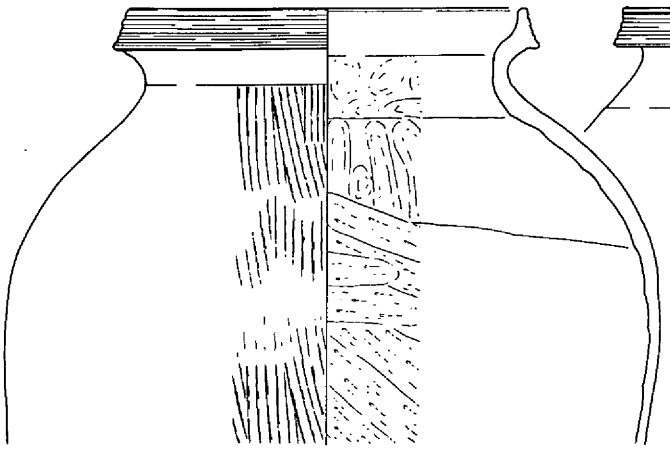
第120図　貝塚１出土遺物⑨（1/4）



第121図　貝塚１出土遺物⑩（1/4）

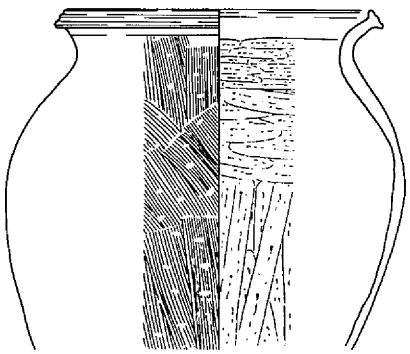


第122図　貝塚１出土遺物⑪（1/4）

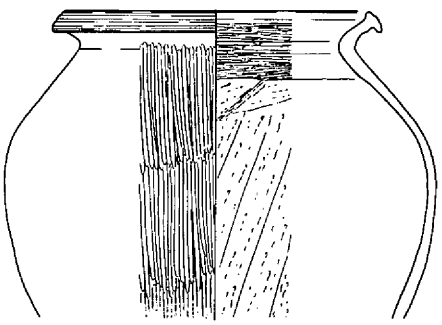


589

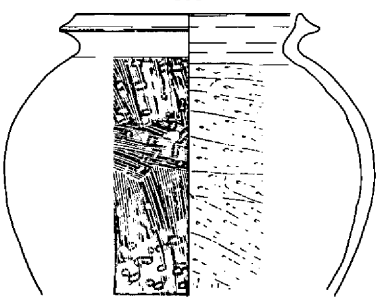
588



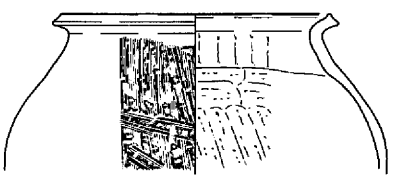
590



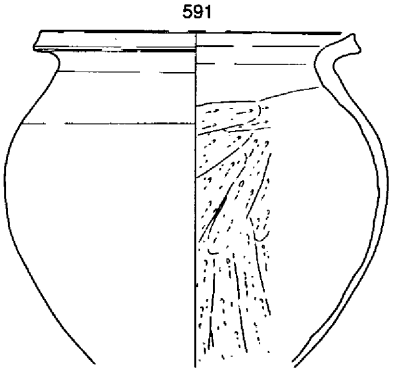
593



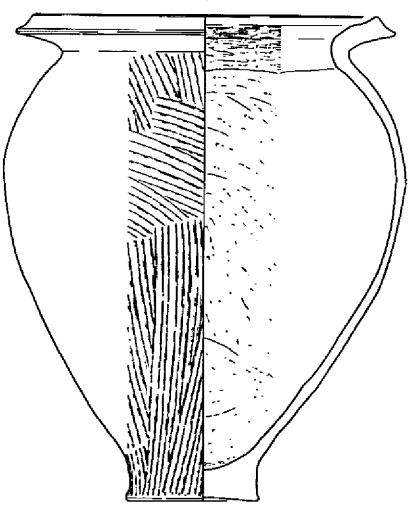
591



594

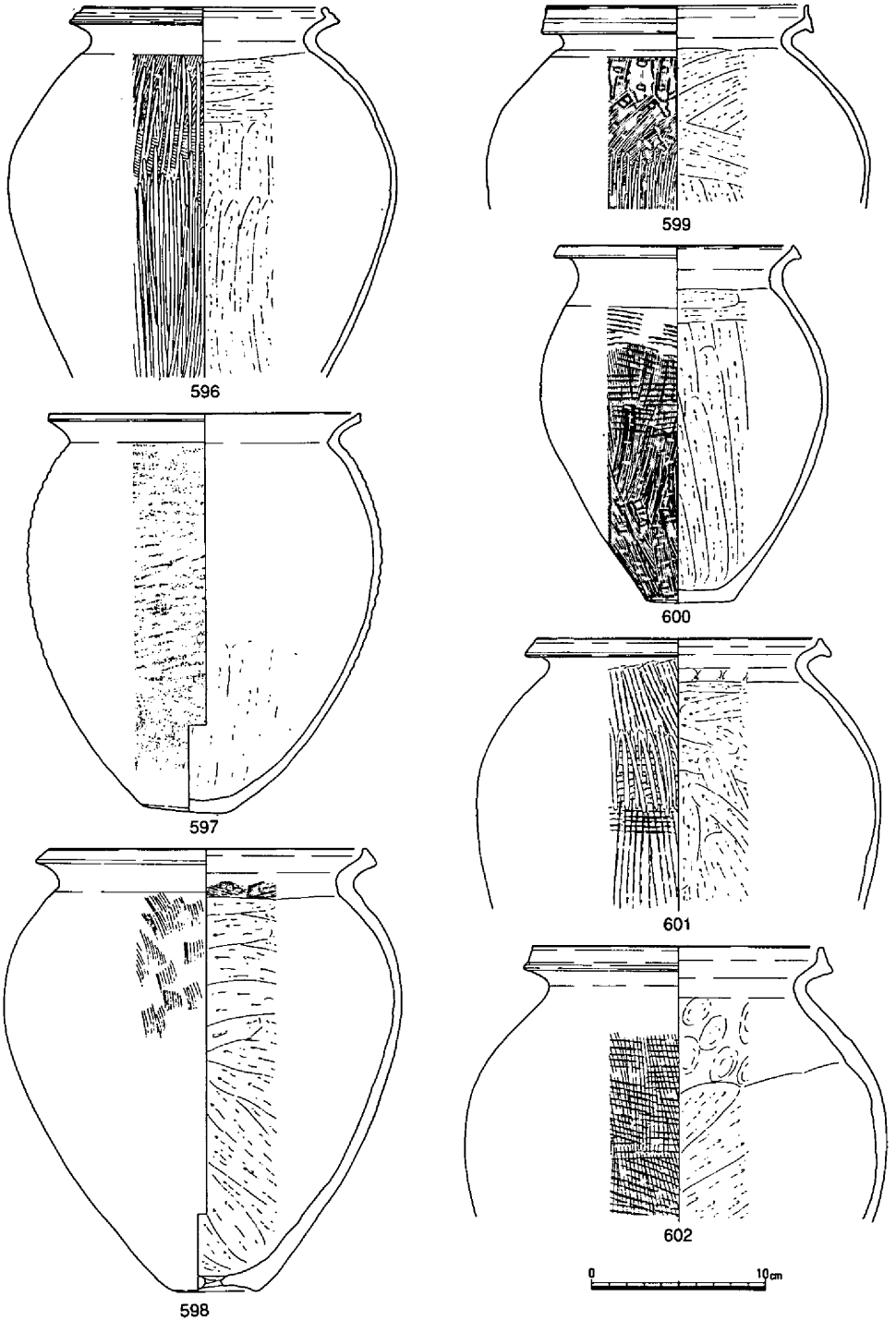


592

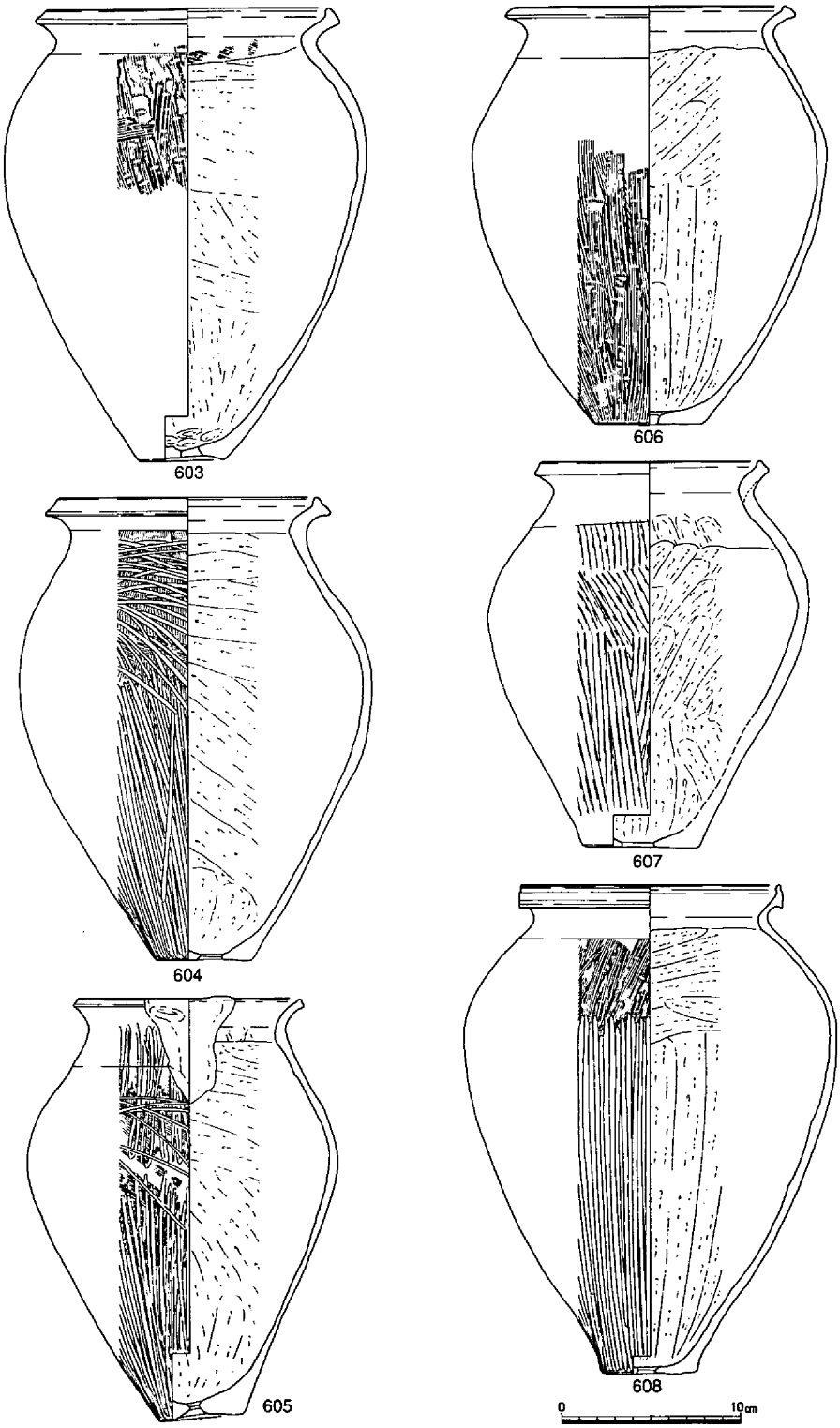


595

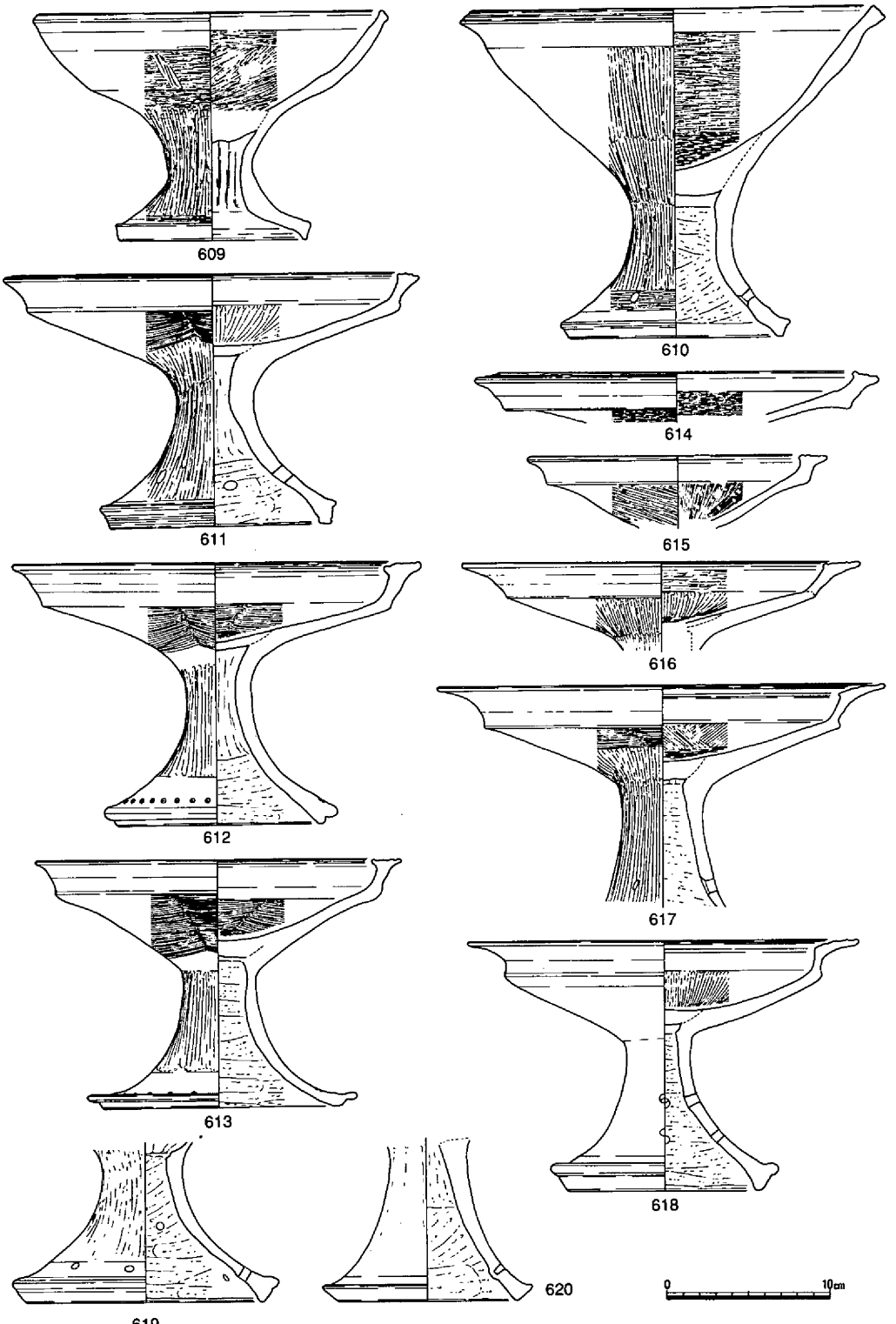
第123図　貝塚１出土遺物⑫（1/4）



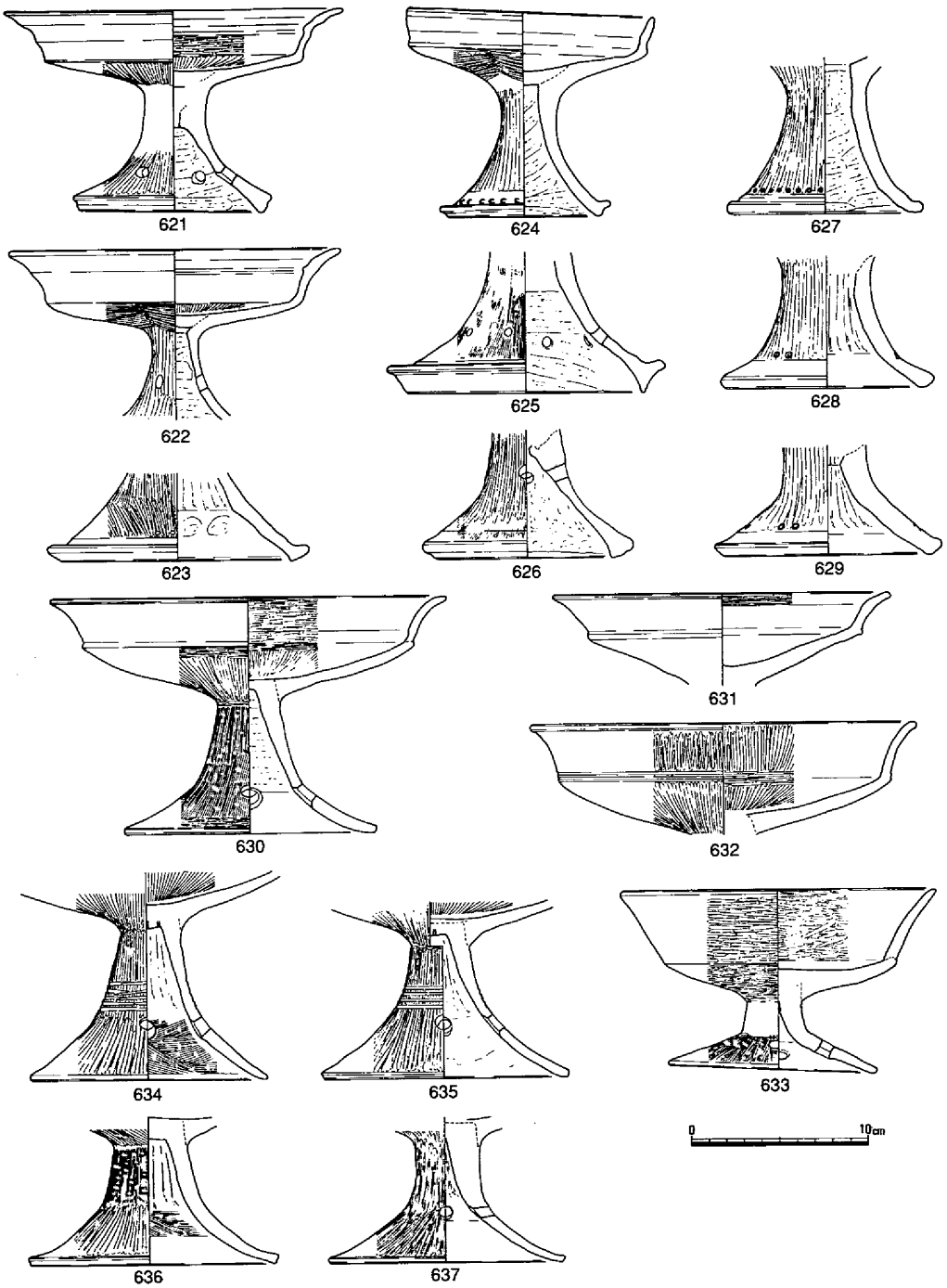
第124図　貝塚１出土遺物⑬（1/4）



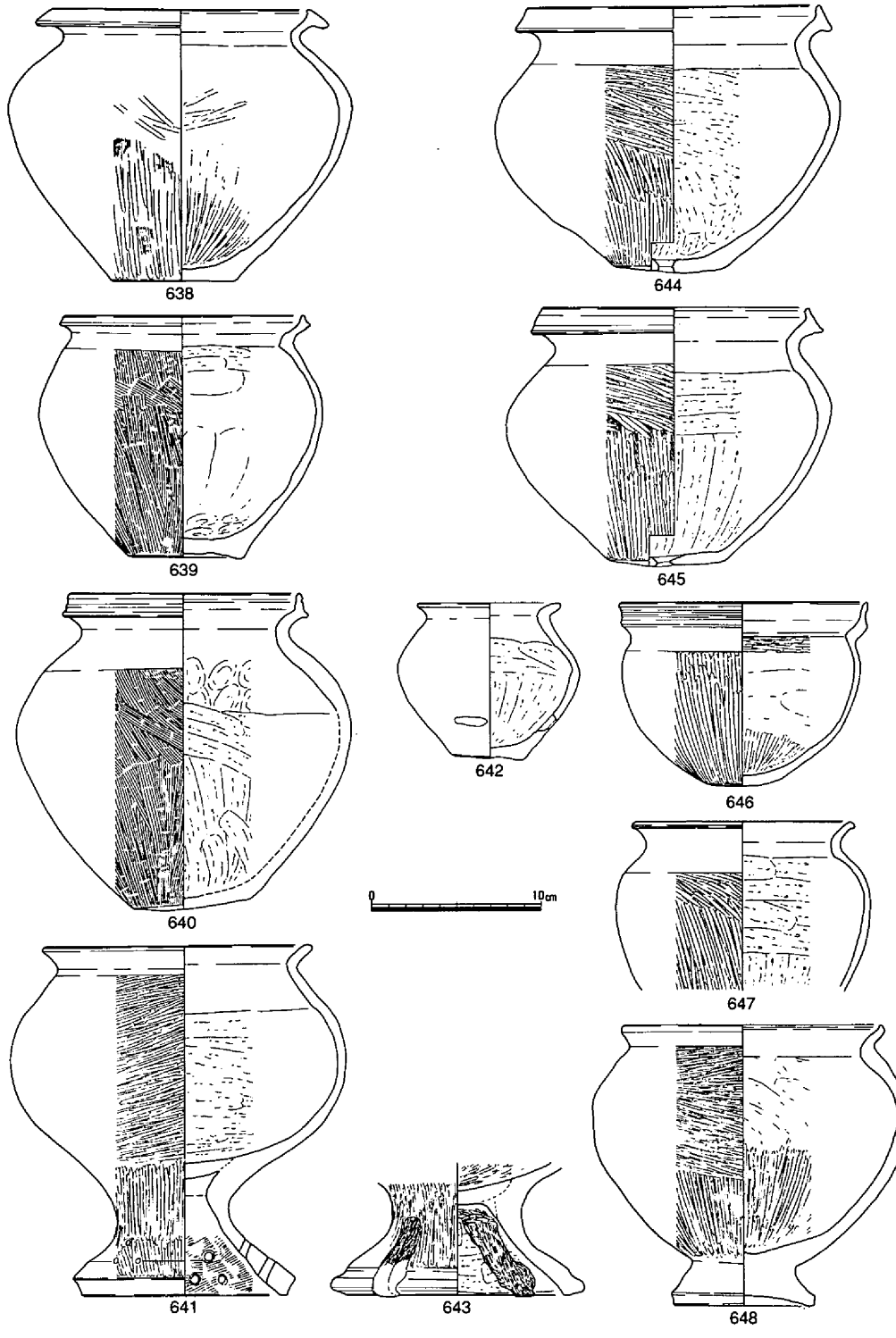
第125図　貝塚１出土遺物⑭（1/4）



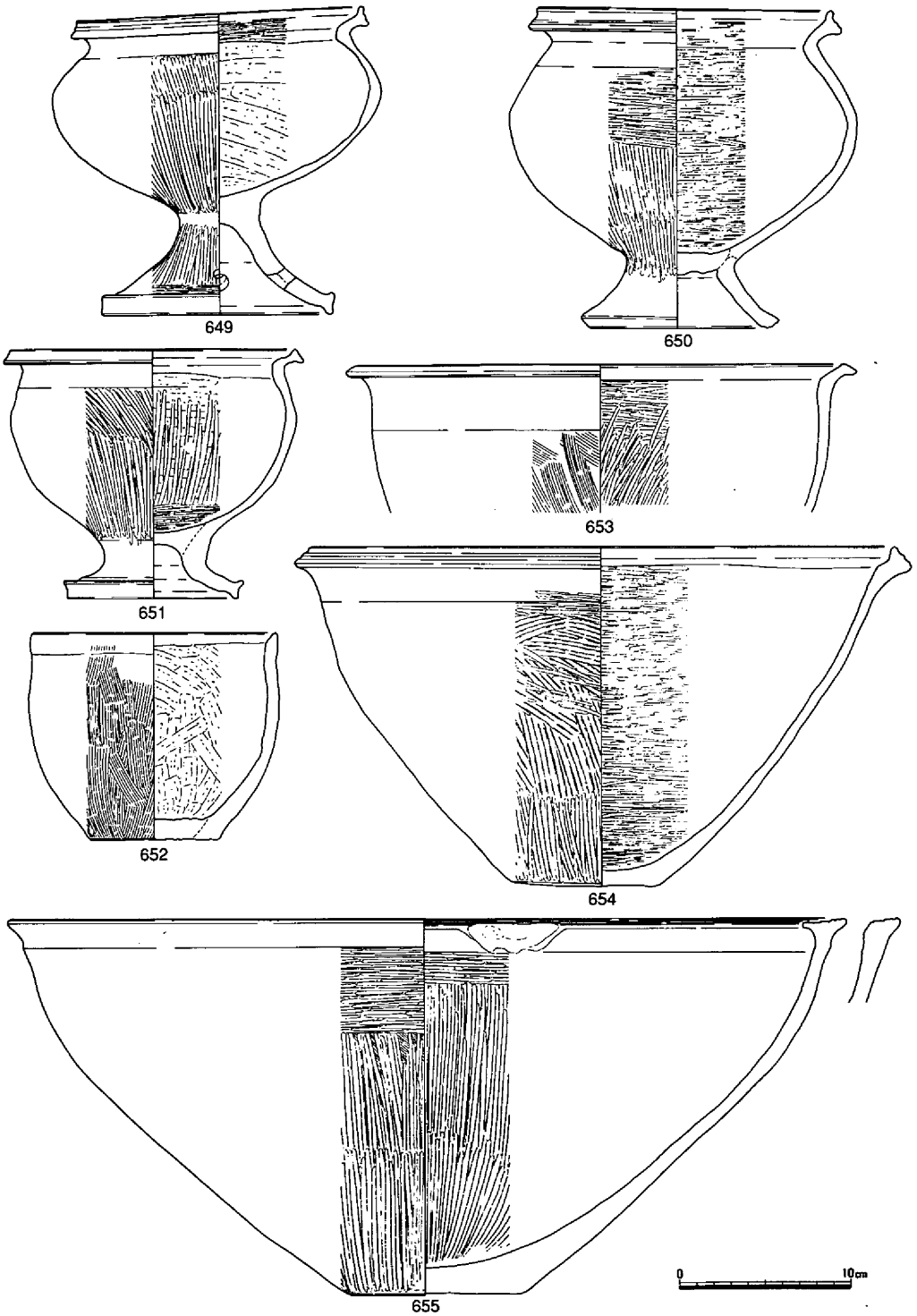
第126図　貝塚１出土遺物⑮（1/4）



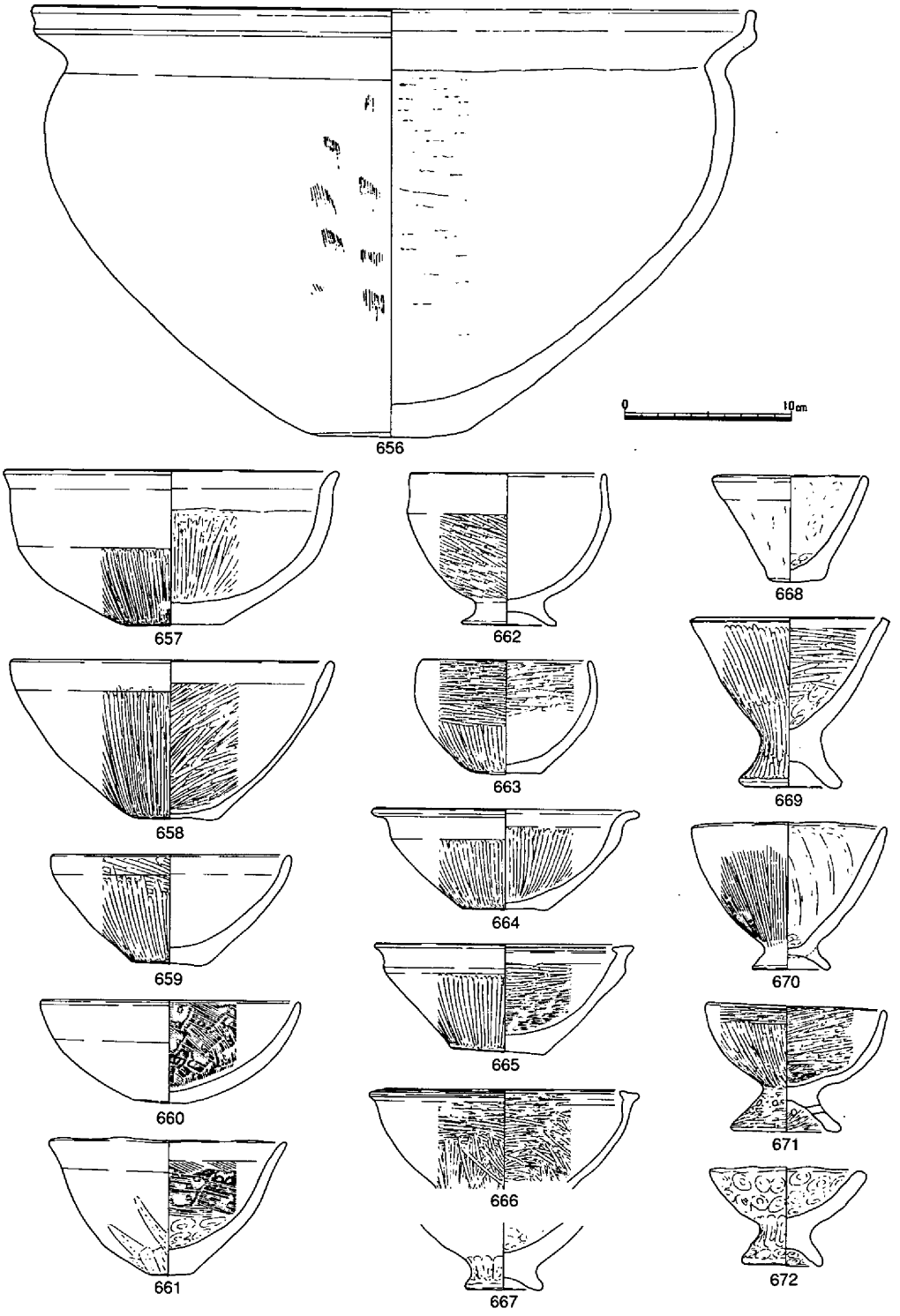
第127図　貝塚１出土遺物⑯（1/4）



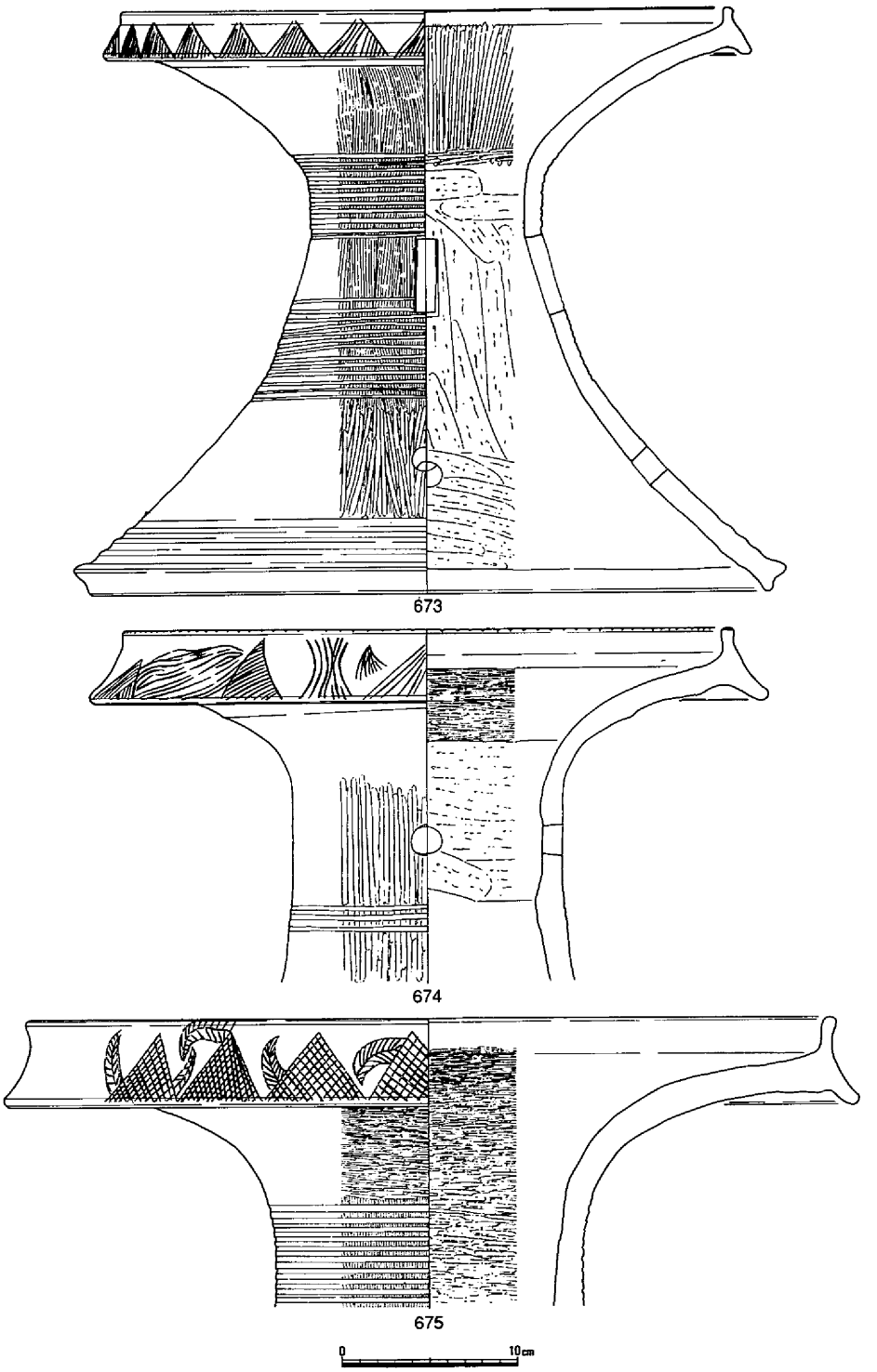
第128図　貝塚１出土遺物⑰（1/4）



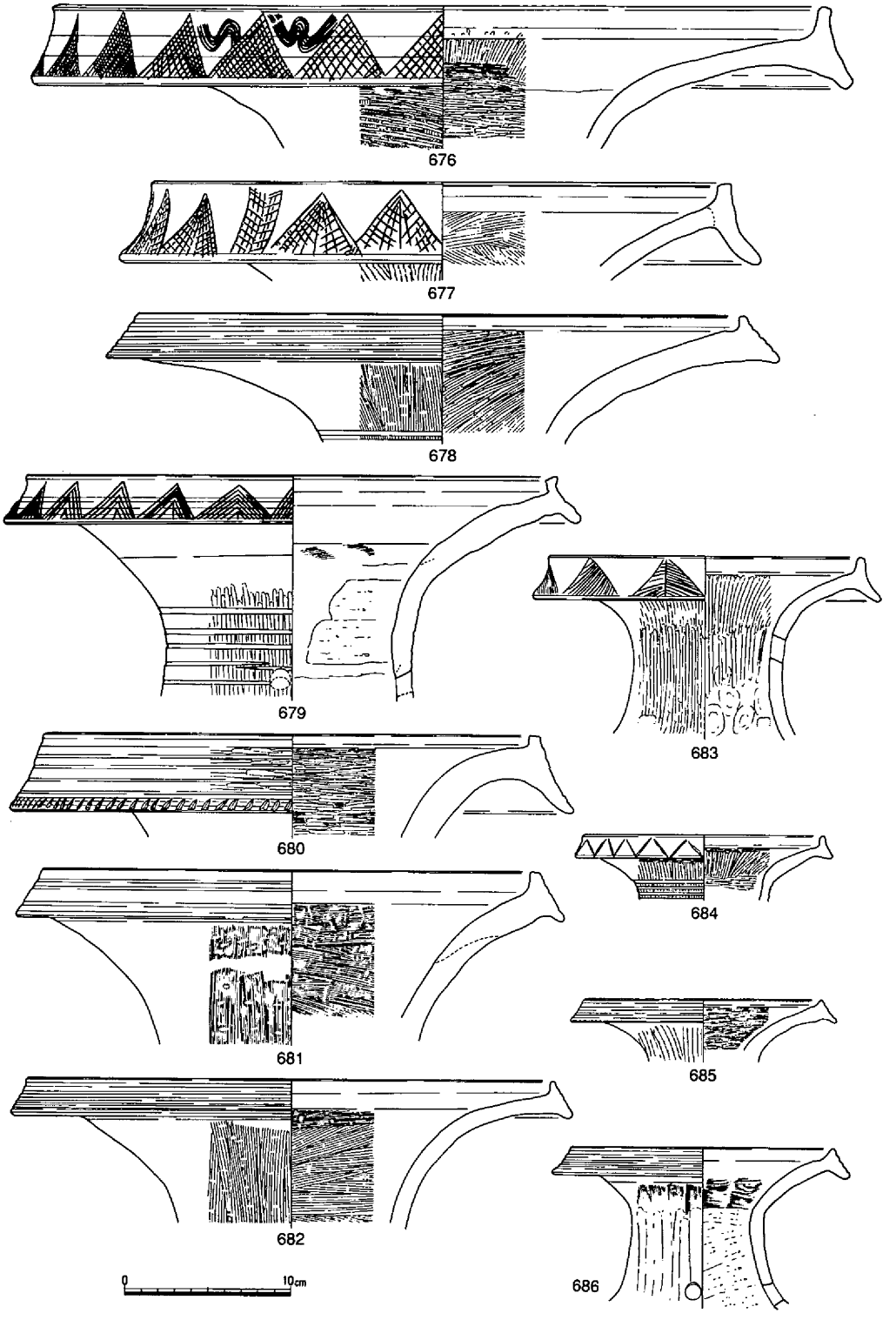
第129図　貝塚１出土遺物⑱（1/4）



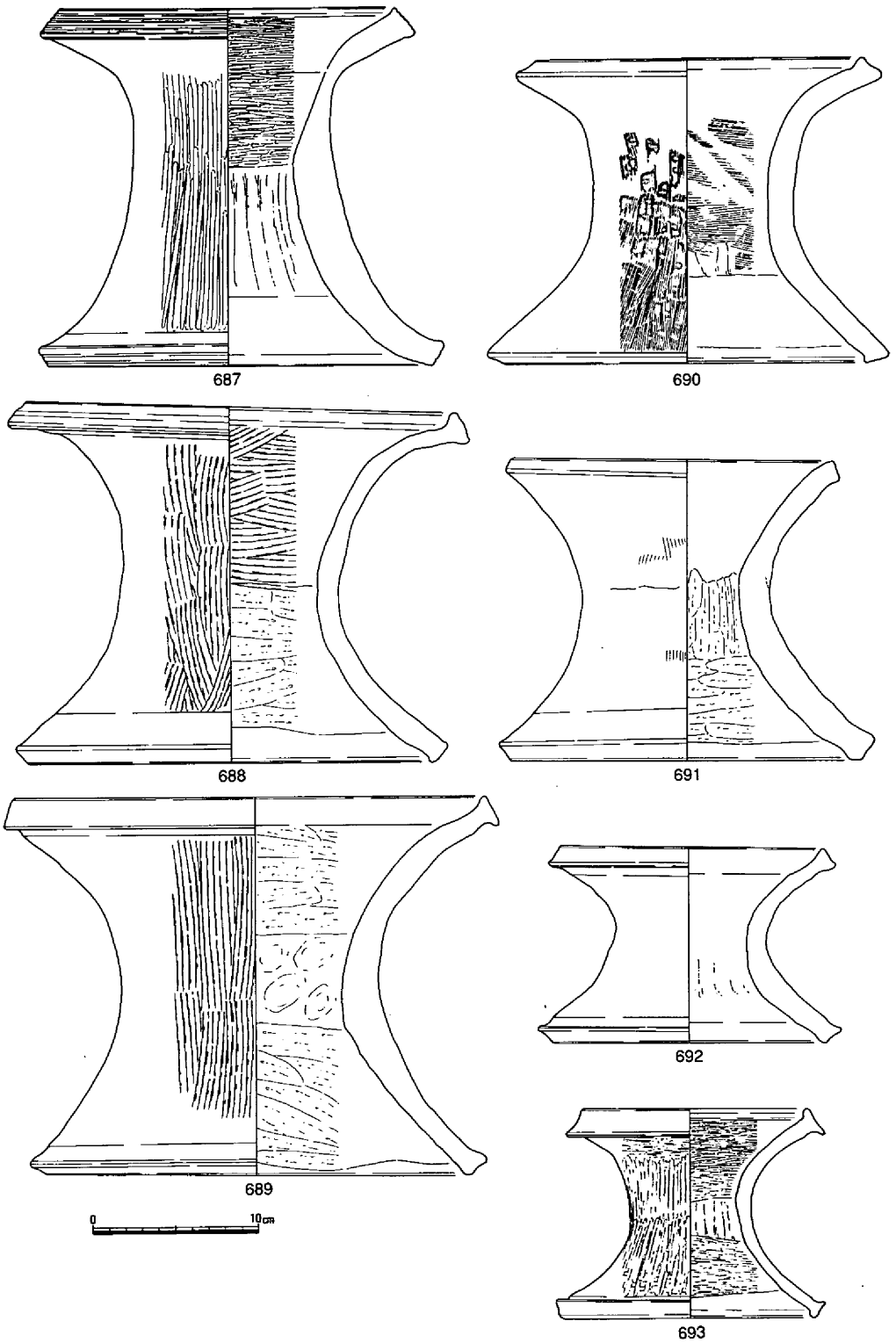
第130図　貝塚１出土遺物⑲（1/4）



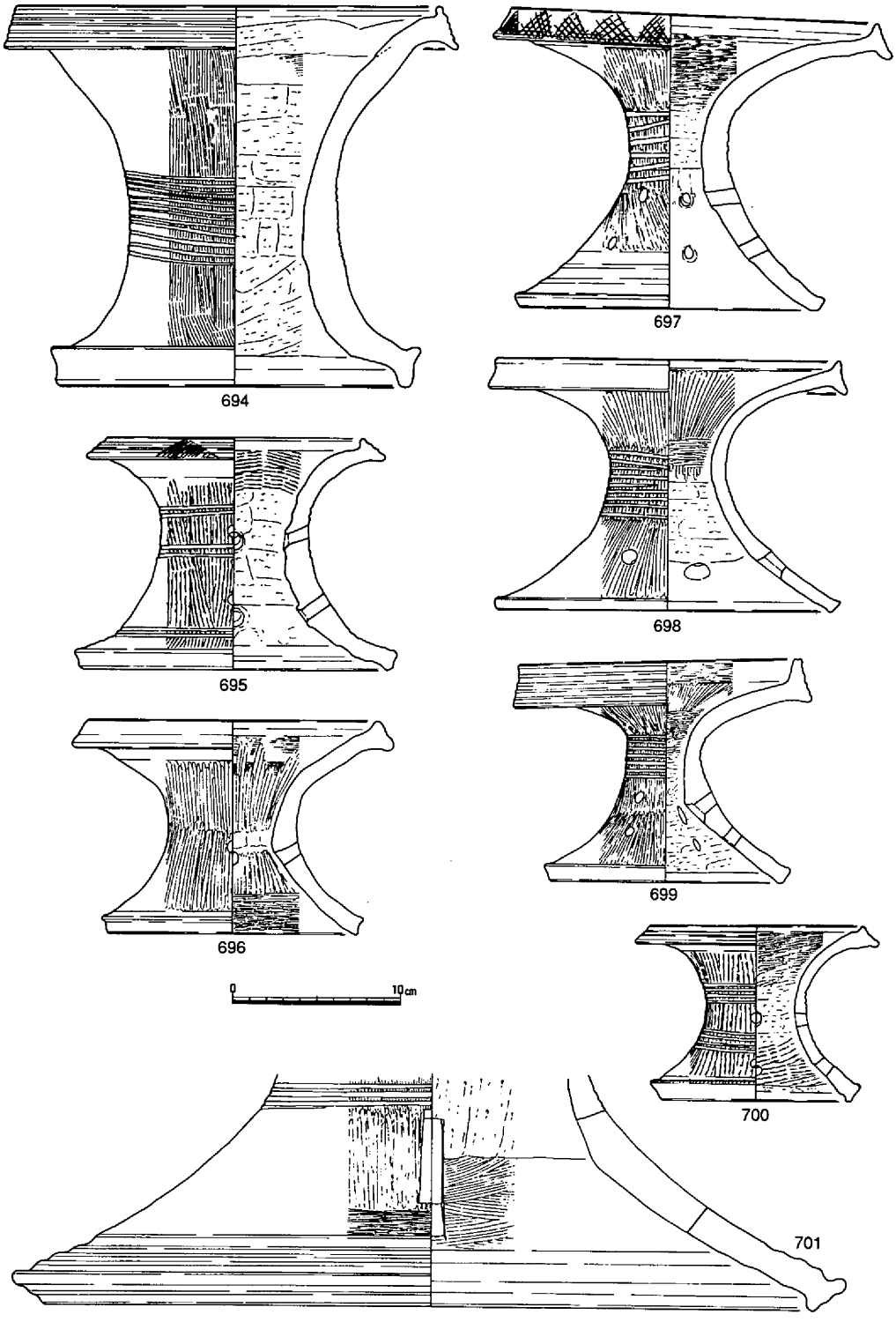
第131図　貝塚１出土遺物⑳（1/4）



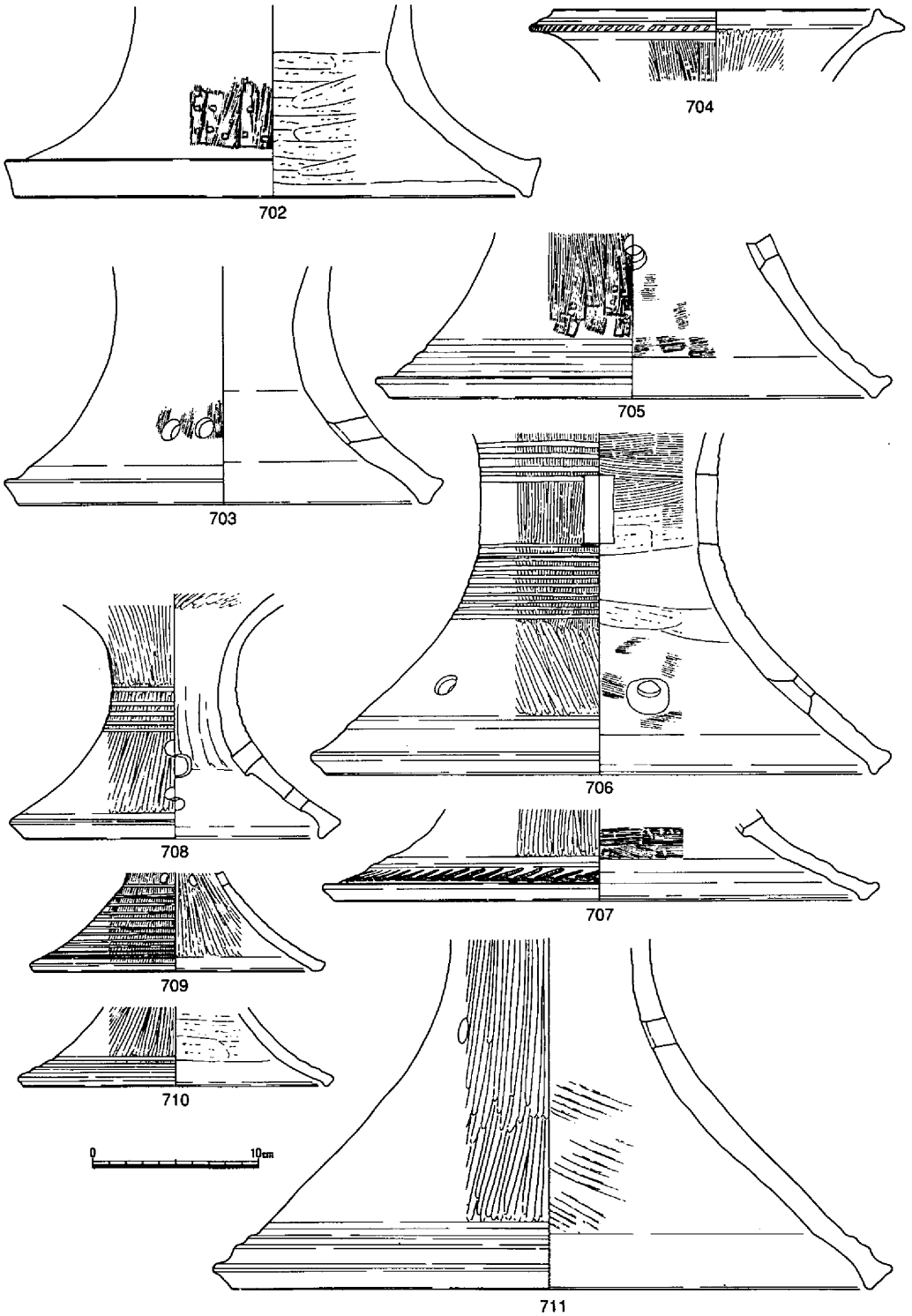
第132図　貝塚１出土遺物㉑（1/4）



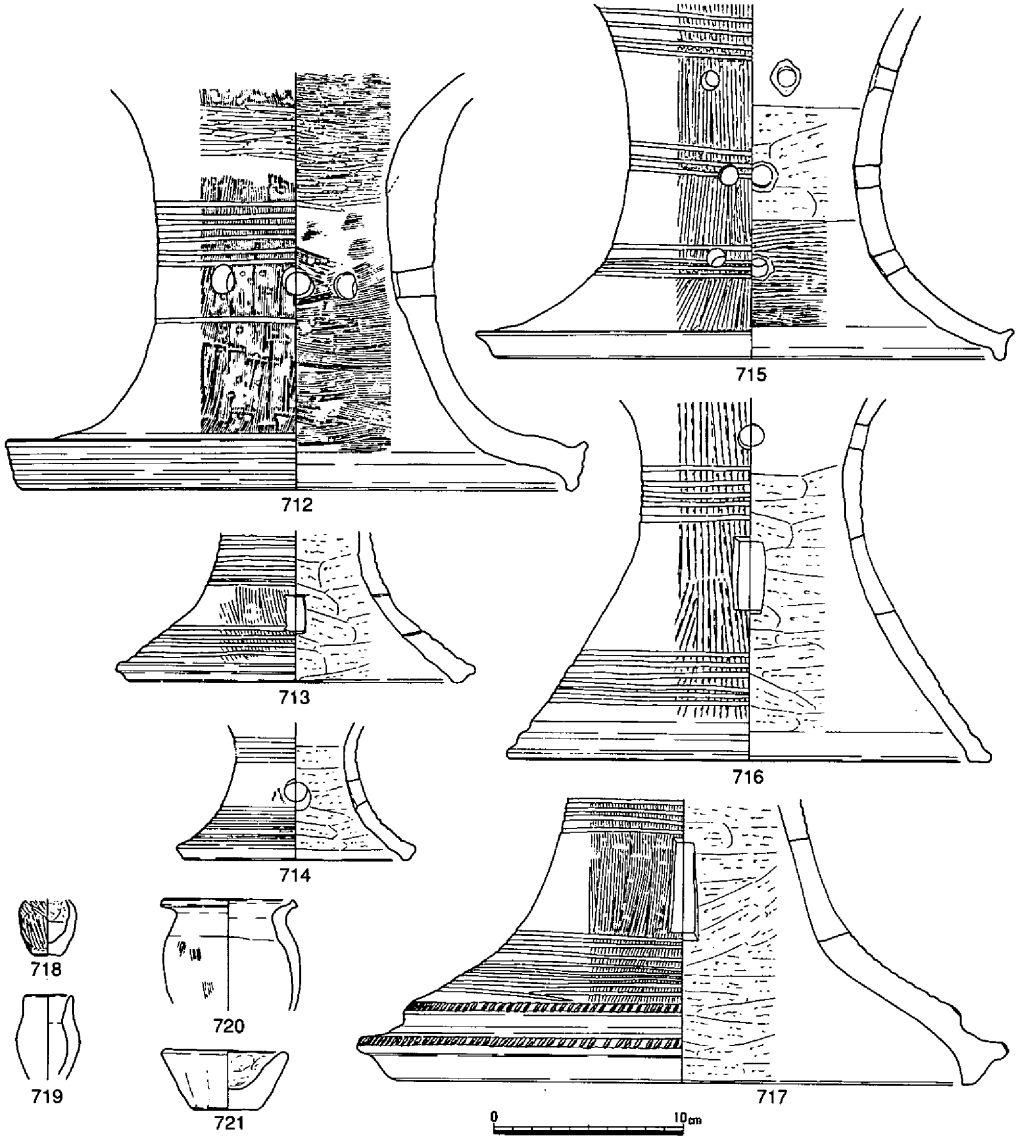
第133図　貝塚１出土遺物㉒（1/4）



第134図　貝塚１出土遺物㉓（1/4）



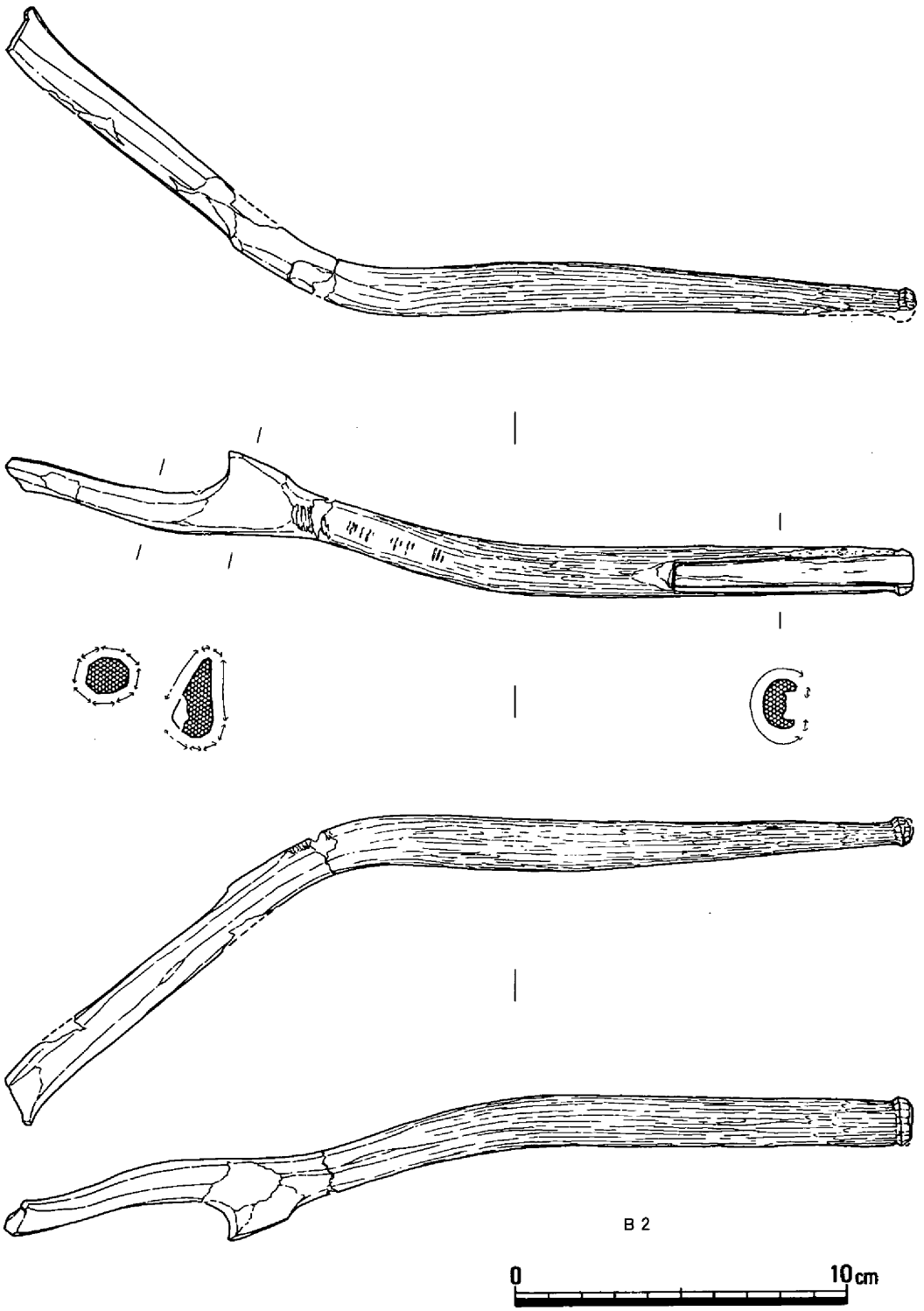
第135図　貝塚１出土遺物㉔（1/4）



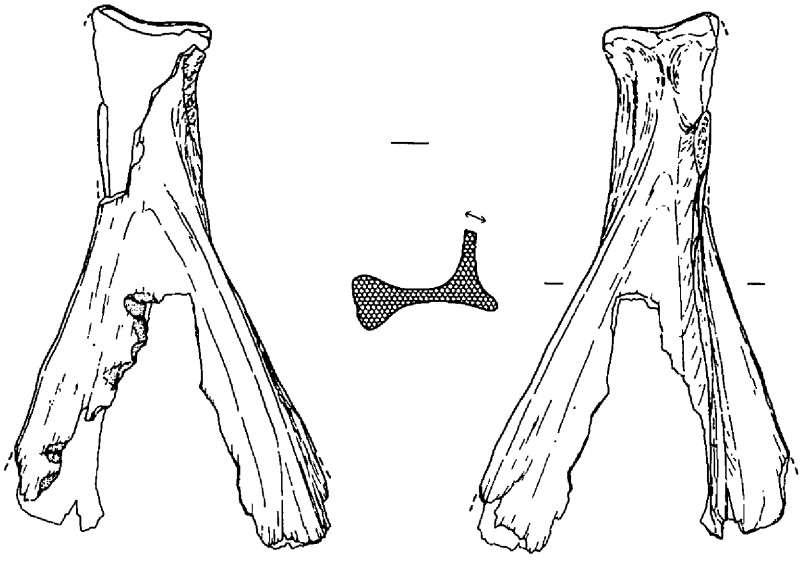
第136図　貝塚１出土遺物㉕（1/4）

水路の下に広範囲に広がるとは予想していなかった。

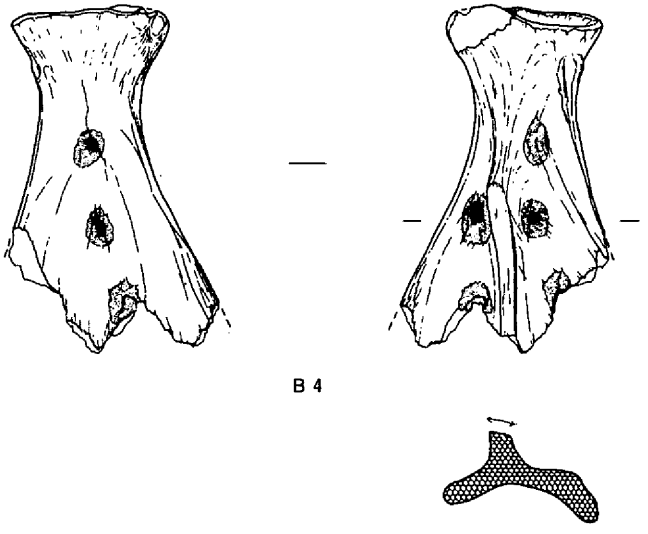
その後、用水底面の清掃と水路両側に残していた土手の除去に取り掛かると徐々に貝殻の散布が認められ始めた。しかし、用水路の設置や橋脚の工事によりかなり貝層が削平や攪乱を受けていたために貝塚の残存状況と広がりを把握する必要があった。そのため貝層の確認できる深さまで先ず掘り下げることとした。したがって土層断面の設置は、北西付近の貝層の最も存在状況の良い貝塚の広がりを確認した後に設置したため貝層上面までの層位が充分には観察できていない。土層断面は、貝塚の広がりの中央のほぼ東西と用水路跡を挟んで東側と西側に南



第137図　貝塚１出土遺物㉖（1/2）



Ｂ３



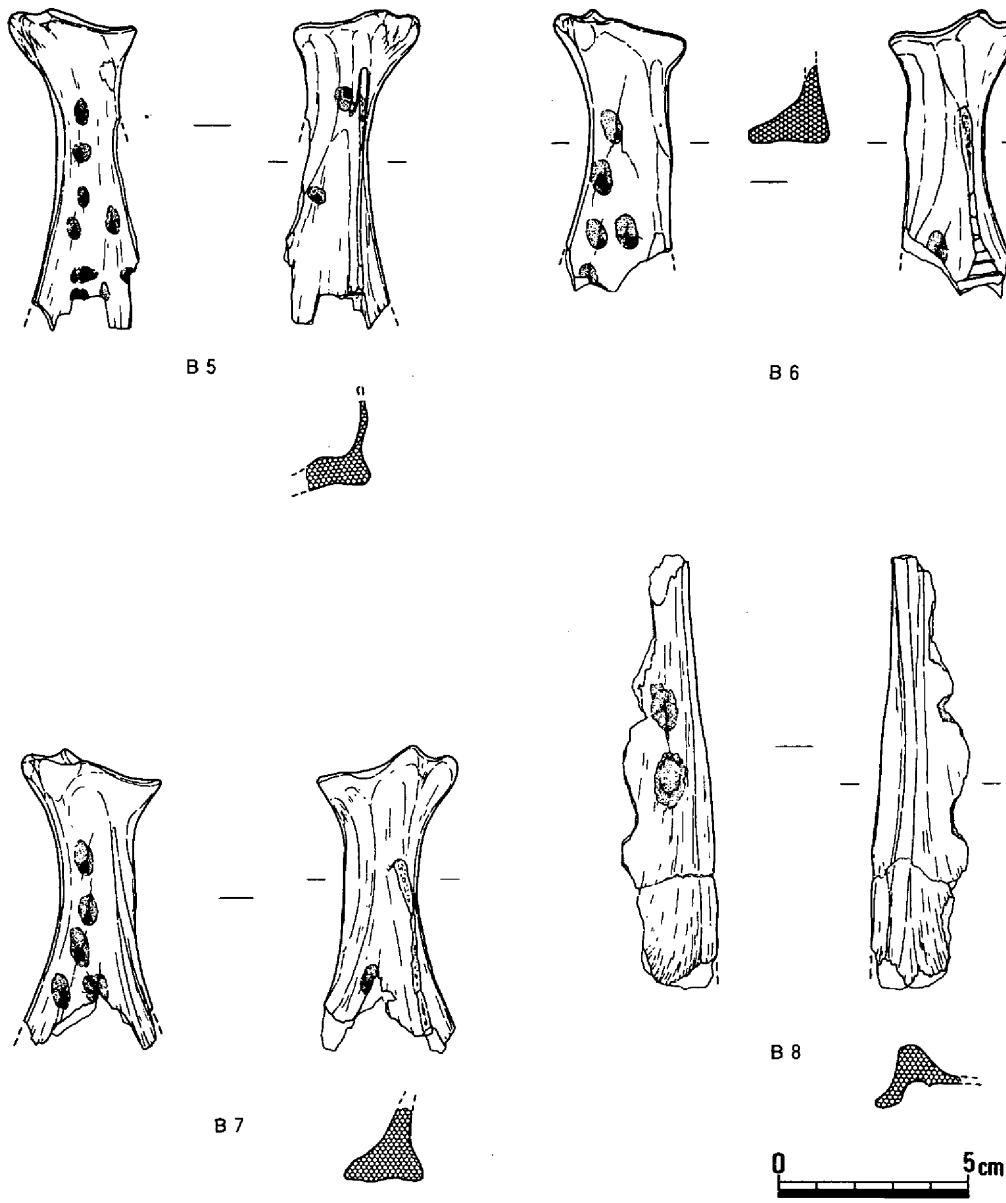
Ｂ４

第138図　貝塚１出土遺物㉗（1/2）

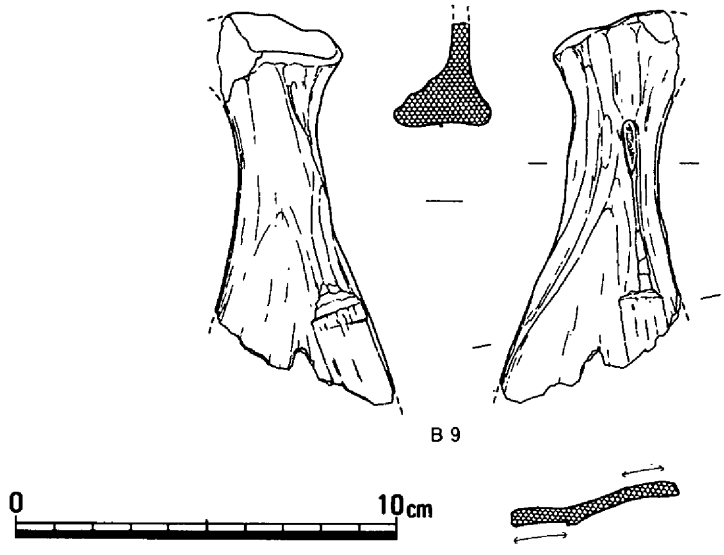
北方向にそれぞれ１本の合計３本の観察用畦畔を設置した。

３）遺物の出土状況と貝層

第110図に掲載の平面図は、貝層面と土器片の散布状況を現したものである。貝層の濃密な広がりは、大きく分けると３か所である。最も小規模な西端の貝層の規模は南北1.8m、東西



第139図　貝塚１出土遺物㉘（1/2）



第140図　貝塚１出土遺物㉙（1/2）

1.2m、厚さ７cmである。この東側に広がる貝層は、若干後世の攪乱を受けているが南北3.5m、東西1.5m、最大厚さ22cmである。ただ両貝層の下層にあたる茶褐色土層にも貝を含んでいる。この貝層の上層にあたる暗茶褐色土層には大量の大形土器片を含んでおり、南北約６mの範囲に貝層面を覆うように散布が認められた。

最も大きな広がりの貝層は、東半部の大半である。ただ橋脚位置や南側が攪乱を受け削平されたところが多く検出範囲は東西４m、南北５m程である。最大厚さは32cmの純貝層を検出している。平面図の東端の貝層面に等高線を記入した付近が最も良好に残存している場所である。海抜3.3mの等高線の範囲が最も高く盛り上がっており、この付近より北側と南側に向かって徐々に貝の堆積層も薄くなり下降している。

なお、東側の南北断面の観察では、第３・４層の貝層の間に貝を含まない薄い間層を挟んだ状況が認められ、平面では確認できなかった新旧の堆積が判明した。

貝塚に埋没していた旧地形は、海抜約2.8mを測る微高地の基盤層でほぼ平坦であった。基盤面には、貝塚形成以前の明瞭な遺構は検出されなかった。

４）動物遺存体の選別

貝層の掘り下げは、用水跡で東西に二分しさらに土層観察用の畦を境に東西南北に区分けし下部まで一括して掘り下げ全面採取を行った。ただ断面観察の畦で判明した分層では、畦除去の時に細分して取り上げている。

水洗選別は、充分に採取土を乾燥させた後に再度水に浸し溶かした状態で行った方がよいも

のの時間的な制約で不十分なまま水洗選別を行ったものもある。ただ採取土が砂質に富む土質であったために比較的水に溶け易く選別は容易であった。選別に使用したふるいが４㎜の網目のものであったために網目に掛からずに通過した資料もかなりあったものと思われる。

選別した獣、魚骨等の遺存体については、獣骨とその外の骨に大きく分類し、復元を行った後に同定を依頼した。貝類については、総数が整理箱に43箱（長54cm×幅34cm×深さ15cm）にのぼった。貝類の分類は、全て終了したものの統計処理については、総量の約10％にあたる６箱を選び行った。貝の種類は、ヤマトシジミが数量で８割以上を占め、ついでマガキ、ハイガイの３種類で大半を占めている。

動物遺体の同定等については、早稲田大学の金子浩昌氏にご指導を仰ぎ、報告文（附載）をいただいた。

５）出土土器外

貝塚出土の土器は、整理箱150箱にのぼる大量の土器片が出土している。純貝層中から出土の土器片や貝を含まない土器片が主体の埋土等に分類が可能であるが細かな分層発掘を行っていないために土器類は器種別に全体の器形が判別できるものを主体に掲載した。

器種は、壺、甕、高杯、鉢、器台等が見られ、特に器台の種類が豊富であった。若干後出のもの（**599・633等**）も認められるが、頸部に沈線をもつ長頸壺と大形の器台が出土する上東・鬼川市Ⅱ式期とその前後の時期の範中に入るものが大半である。器形の変化が顕著な高杯は杯部端部に凹線文を施し幅の狭い端面から徐々に端部が伸びる過度期の器形から完全に外反する杯部の変化の様相がたどれる。脚部も完全に短脚化する以前のものが中心である。

外に、未加工の銅鏃、石器（砥石、石錘等）、土製品（土錘、紡錘車、分銅形土製品等）、鉄製品等が出土している。（別項目に掲載）

６）骨角製品

卜骨７点と鹿角の加工品が出土している。いずれも貝層および貝塚の堆積土中からの出土である。詳細な記述は附載の金子昌浩氏の報告文に委ね、本項目では概略を述べることとする。

出土した卜骨７点（第138～140図）は、イノシシとシカの肩甲骨を使用し明瞭に灼痕が黒く残るものと薄く茶色に焦げたものが認められる。灼痕は肩甲骨の両面に複数認められるものが多くＢ４では合計８か所にみとめられた。Ｂ５・６のように良く亀裂が入ったものもある。ただ貫通した痕は少ない。また、Ｂ４・６・７・９の肩甲骨には、肩甲棘などを鋭利な刃物で削り取り平坦にした痕跡が認められる。

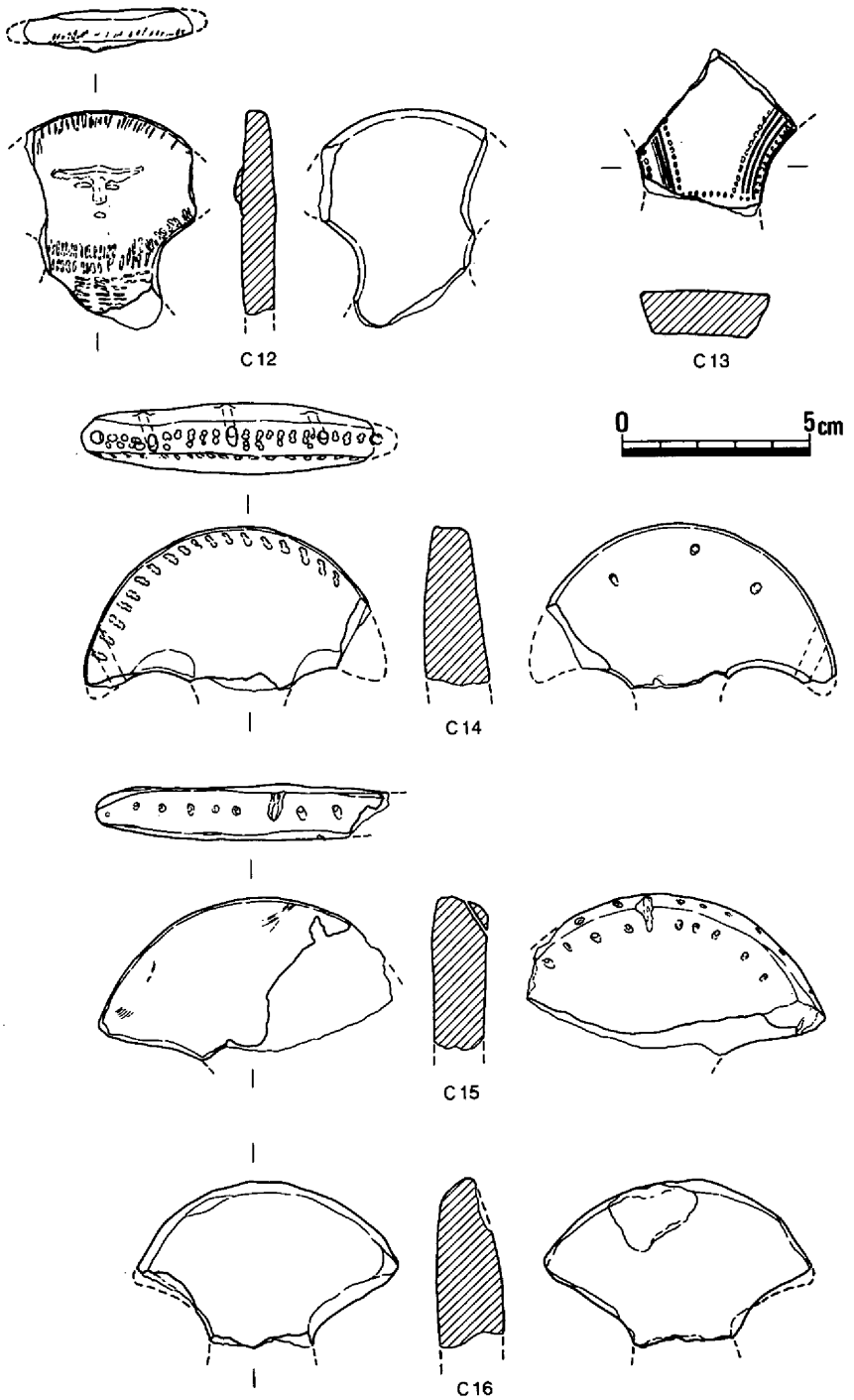
Ｂ２（第137図）は、鹿角の加工品で全長27.5cmを測り、一端に長さ7.2cm、幅８㎜、深さ３㎜の細長い溝が彫り込まれている。全面に削った痕跡があり、角先端部には面取りの加工がある。鉄製刀子などの柄の可能性もある。　（山磨）

(7) **遺構に伴わない遺物**（第141～148図）

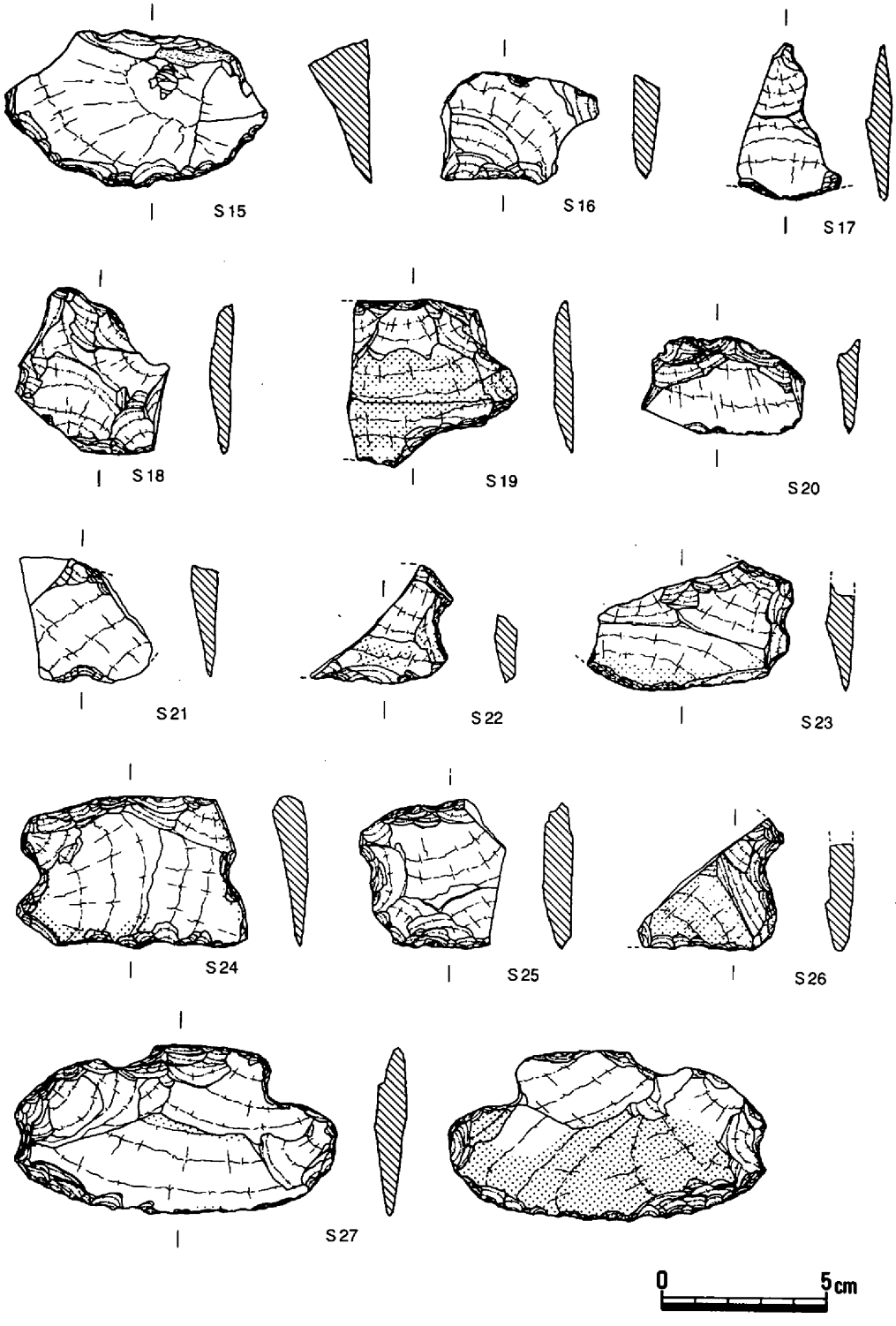
ここで遺構に伴わない遺物としたものについては、その出土状況が、いわゆる包含層出土のものの他に、複数の竪穴住居が重複して検出された際にその相互の関係が特定できない上層で取り上げられたもの、遺物の特徴から想定される時期とは異なる時期の遺構に混入していたもの等も含まれている。また、この条件に相当する土器については、その数量が非常に多量であるため省略している。

第141図には、分銅形土製品を掲載している。Ｃ13・16は貝塚１周辺から、Ｃ15は土器溜り１周辺からの出土であり、Ｃ12・14は10Ｂ区の包含層からの出土である。Ｃ12は、上半部両端と下半部を欠いているが、上半部に顔面表現をもつものである。表裏両面および各端面はオサエ・ナデによって仕上げられ、眉と鼻が隆起し、目と口が刺突されている。長さ３㎜程度の線状の刺突文が上端面と表面上半では縦に、表面下半では横に施されており、前者は毛髪と顎髭の表現にも見える。全面に丹塗りされており、上端部に孔はみられない。Ｃ13は上半部から胴部の一部が残るのみであるが、丁寧に仕上げられ、端面も明瞭な面をもっている。表面には眉状櫛描文が抉りに添って施され、その両側に列点状の刺突文が並び、胴部ではこれが１列横断している。色調・焼成からも弥生時代中期に比定されるものである。Ｃ14は上半部の一端と下半部を欠いている。オサエとナデによって厚手に作られ、全面に丹塗りされている。表面上端と上端面に３孔一対の刺突文が並び、上端面から裏面への貫通孔が３孔、上端面から抉り部端面への貫通孔２孔が認められる。Ｃ15は上半部の一端と下半部を欠いている。裏面側に若干反っており、上端面は面をもつ。表面の剥離が顕著であるが、表面の上端部には櫛描による重弧文が施され、抉り部に添って、眉状櫛描文が想定される。上端面から裏面への貫通孔が並び、端部では上端面から抉り部端面への貫通孔が１孔認められる。Ｃ16は上半部の一端と下半部を欠いている。オサエとナデによって上端部より胴部を厚く作られており、表裏両面をヘラミガキし、全面に丹塗りしているのみで、文様は認められない。

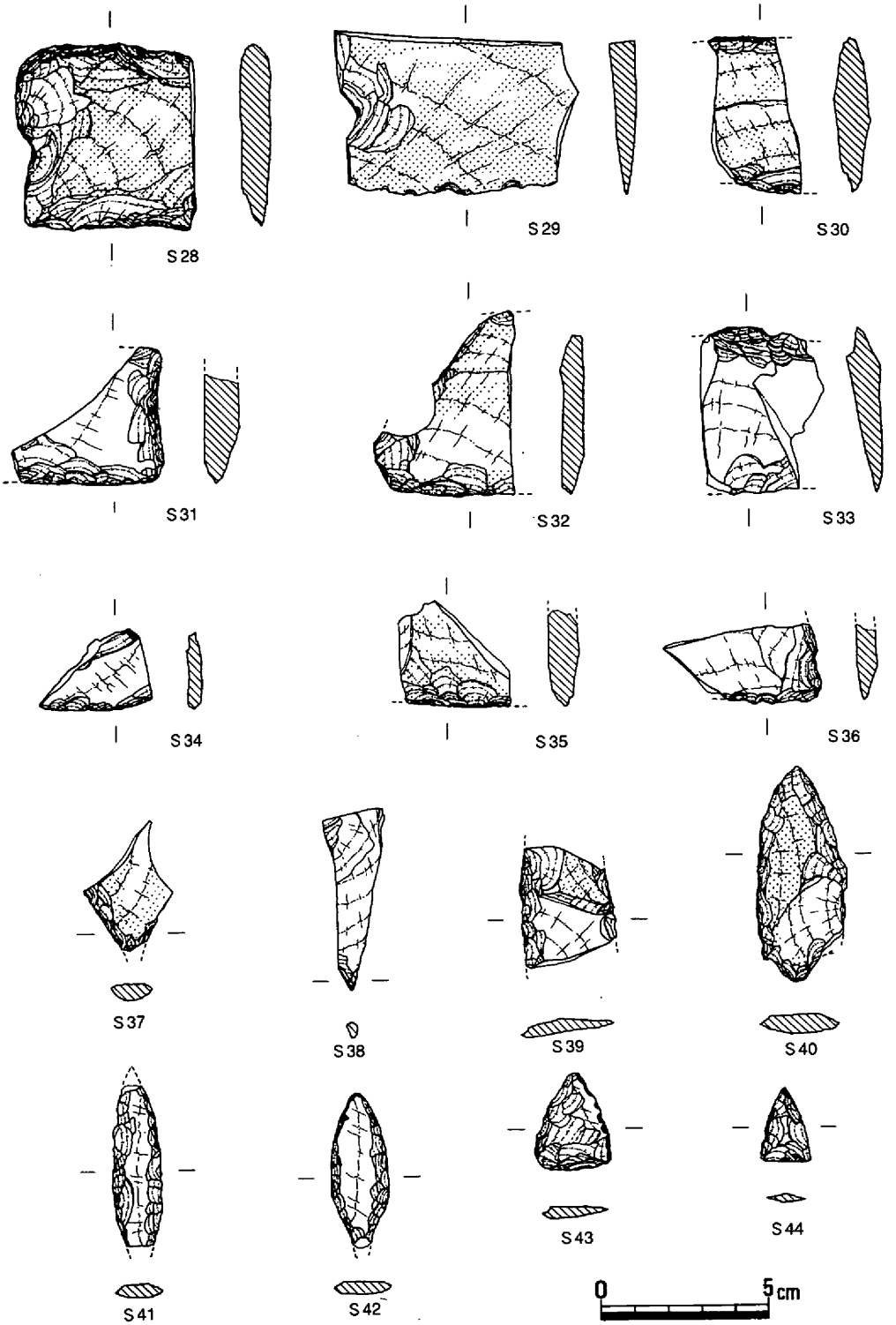
第142～144図は、打製石器である。このうち、Ｓ46・47が緑色片岩製である他は、すべて石材はサヌカイトである。器種については、スクレイパー、エンドスクレイパー、石錐、小形石斧、石鏃、石包丁等の工具・農具の他に、石槍、石鏃の武器・狩猟具もある。Ｓ15～19・21・34がスクレイパー、Ｓ20がエンドスクレイパーである。このうち、Ｓ19は石包丁片を転用しており、表面に石包丁としての使用時に付着したと思われる珪酸が認められる。いずれも刃部への浅い細部調整がなされている。Ｓ22～33・35・36は石包丁で、完形品と考えられるのはＳ24・27・29の３点のみである。網目をかけて表現している範囲は、使用による摩滅と珪酸の付着に伴う光沢痕の認められる箇所である。Ｓ23・27で外湾している他は、刃部は直線的であり、基本的に両刃としての細部調整がなされている。完形品のうち、Ｓ29は一端の抉りは明



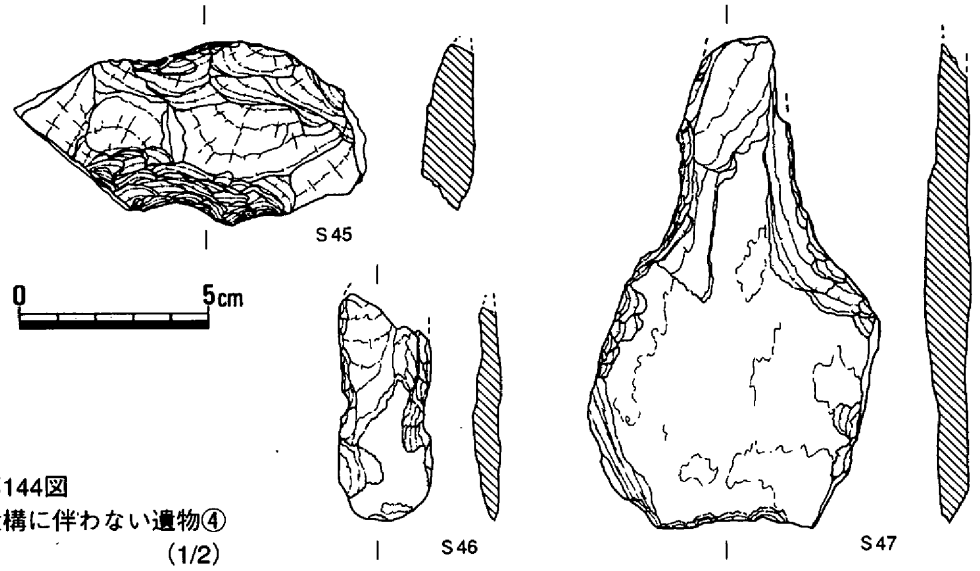
第141図　遺構に伴わない遺物①（1/2）



第142図　遺構に伴わない遺物②（1/2）



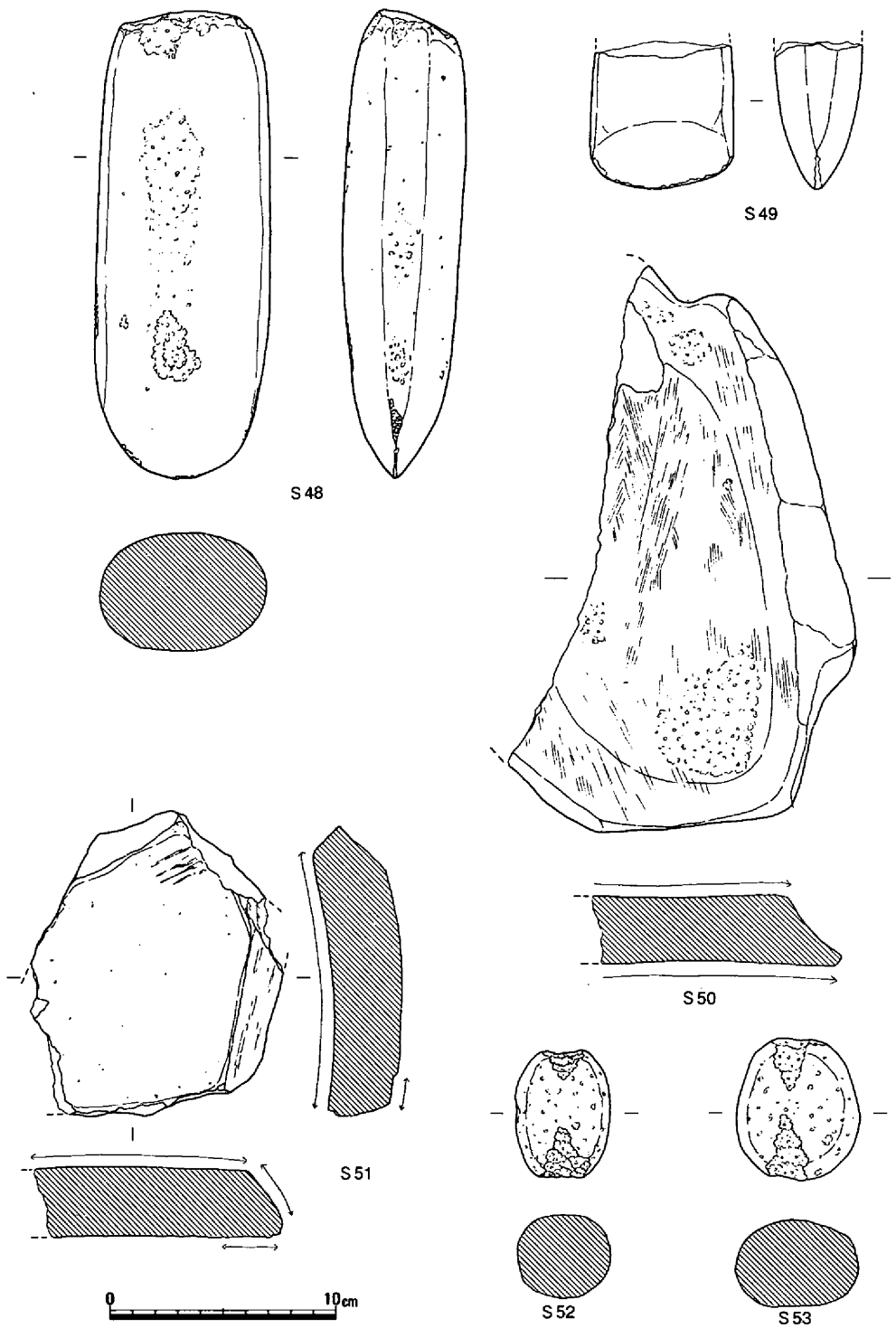
第143図　遺構に伴わない遺物③（1/2）



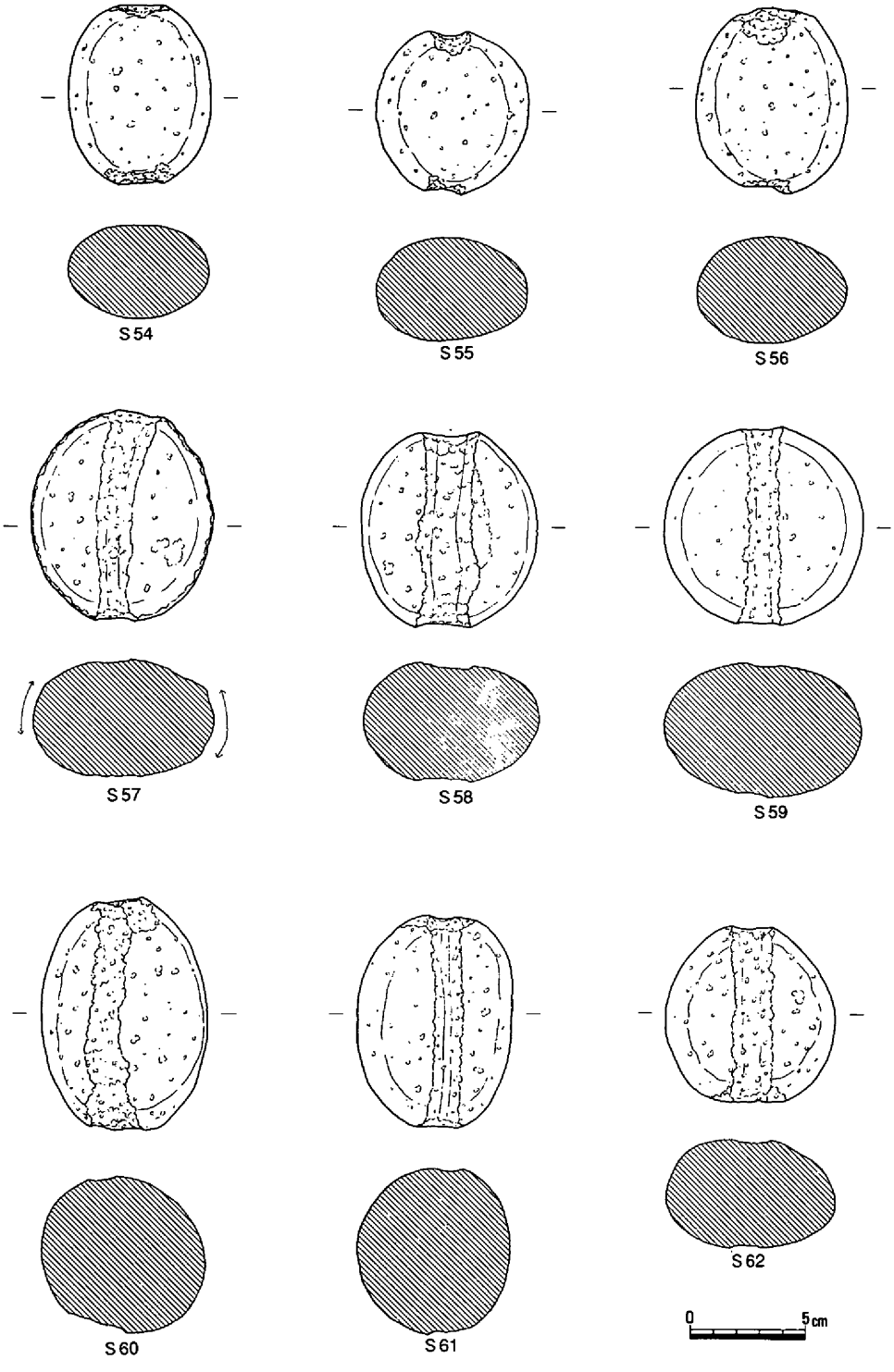
第144図
遺構に伴わない遺物④
(1/2)

瞭であるが、他端には細部調整されていない突起部があるためか抉りが認められない。S24では両端に抉りがあり、背部は敲打されている。S27では一端は通常の抉りで、他端は背部の端部を大きく抉っており、その他に背部中央にも抉りが見られる。光沢痕は片面に広く認められる。石錐のうち、S37は刃部を欠いて基部のみであるが摩滅しており、完形のS38では刃部に使用痕が残っている。S46は小形石斧で、刃部は両刃の両面とも摩滅しており、体部の両側に抉りが見られる。S47は石鏃で、やや内湾気味の刃部は両刃に細部調整され、基部は両側を抉って細く作られている。S45は石核と考えられる。S39・40は石槍で、ともに側面は摩滅しており、S40はほぼ完形をとどめている。小さな凸基が作られ、両側縁が両刃に細部調整されている。S41～44は石鏃で、S41・42は凸基、S43・44は平基である。前者の鏃身は柳葉形で、両側縁が両刃に細部調整されている。後者も両刃に細部調整されている。

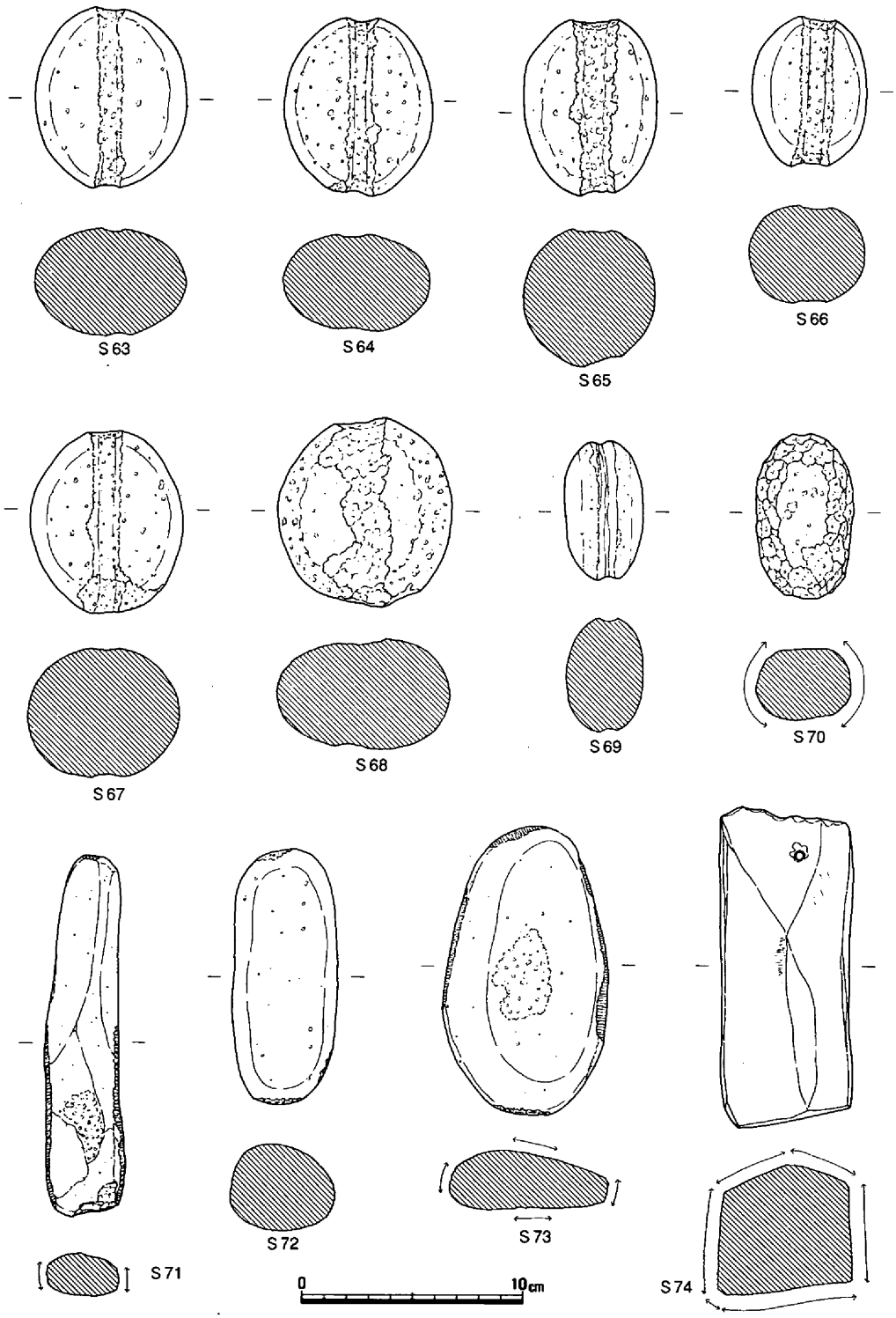
S48・49・75は磨製の太型蛤刃石斧であり、S48は完形品である。石材は、S48・75が安山岩、S49が変斑糲岩である。いずれも体部側縁は平行し、基部は平基で、刃部はS48が弧状を呈し、S49は直線的である。S50・51・74・76・77は砥石である。S50は大形品で、おそらく1／3から1／2を欠いているものと思われる。石材は流紋岩で、平らな2面が使用されており、擦痕の残る使用によって中央部が浅くくぼんでいる。S51も流紋岩製で、3面が使用されている。主たる使用面と側面の使用面には浅い溝状の使用痕が見られ、主たる使用面は浅く湾曲している。S74も流紋岩製で、断面五角形ないし六角形に整形され、やや薄く仕上げられている一端の近くに、紐通し穴と考えられる径3㎜の貫通孔が1孔穿たれている。両端面をのぞく各側面が使用されており、長軸に対して斜めおよび横方向の擦痕が観察される。S76は



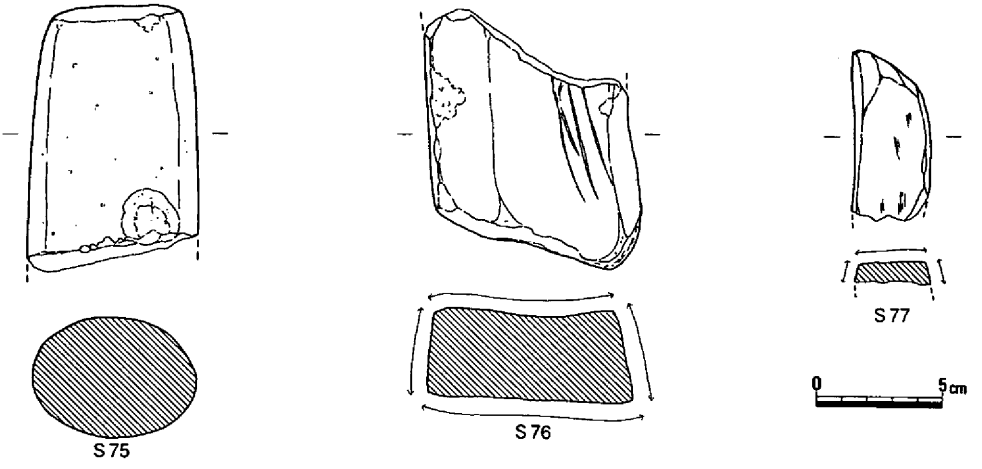
第145図　遺構に伴わない遺物⑤（1/3）

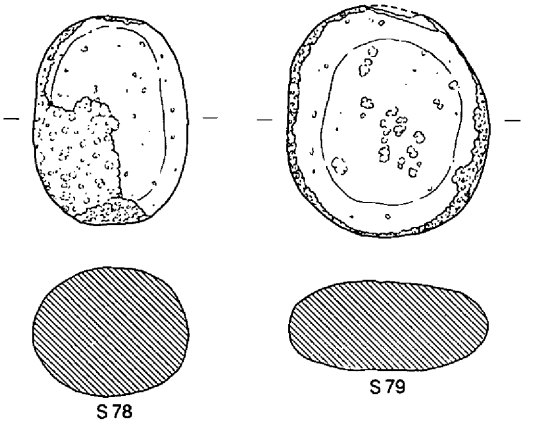


第146図　遺構に伴わない遺物⑥（1/3）



第147図　遺構に伴わない遺物⑦（1/3）





第148図　遺構に伴わない遺物⑧（1/3）

半花崗岩製で、欠損しているが、４面が使用されており、長軸方向の浅い溝状の使用痕が認められる。Ｓ77は小形品で、長軸方向に縦に剥離しているが、３面が使用されている。Ｓ52～69は石錘である。石材には、石英斑岩・花崗岩が多く使われている。Ｓ52～56は、両端が打ちかかれて抉りとされているもので、Ｓ52・53では抉りが溝状にのびている。Ｓ57～68は、溝が１条全周するもので、いずれも長軸方向に平行している。このうち、Ｓ60・61・65・69では、側面に相当する部分に溝が巡らされている。Ｓ70～73・78・79は敲石である。石材は各々別であり、端面・側面が敲打調整されたのちに使用されている。その重量は、Ｓ70・71が200ｇ未満である他は、300ｇを超えている。　（光永）

第３節　弥生時代後期後半の遺構・遺物

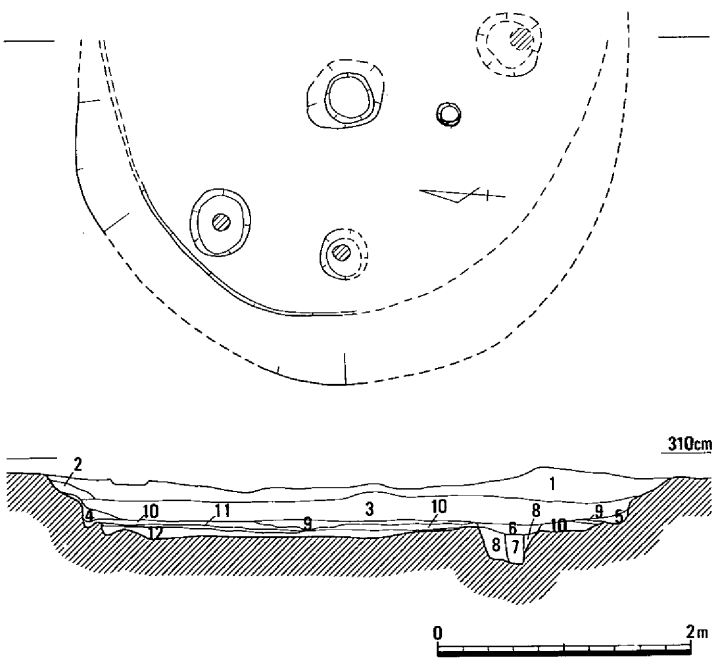
(1)　概要

この時期に属する遺構は、第151図に示しており、竪穴住居27軒、井戸１基、土器棺２基、土壙146基、土器溜り１か所である。竪穴住居は微高地上の全体に分布しているが、やや南半に集中している。平面形態は隅丸方形ないし円形が主であるが、造出しをもつものが１軒あり、注目される。微高地南西部で検出された井戸は、他の時期も含めて唯一確認されたものである。土器棺はそれぞれ単独に竪穴住居の近くで検出されている。後期前半に見られた袋状土壙に代わって、箱形に掘られた長方形土壙の存在が注目され、146基の土壙のうち43基がこれに分類される。その分布は微高地全体に及ぶが、特に11Ｃ区を中心とする北東部に集中しているようで、この地域は後期前半に袋状土壙が集中していた範囲と重複する。橋脚の西部分に空白部分があるが、この部分には後期前半につくられた貝塚が、除去される事無くそのまま占地していたようである。　（光永）

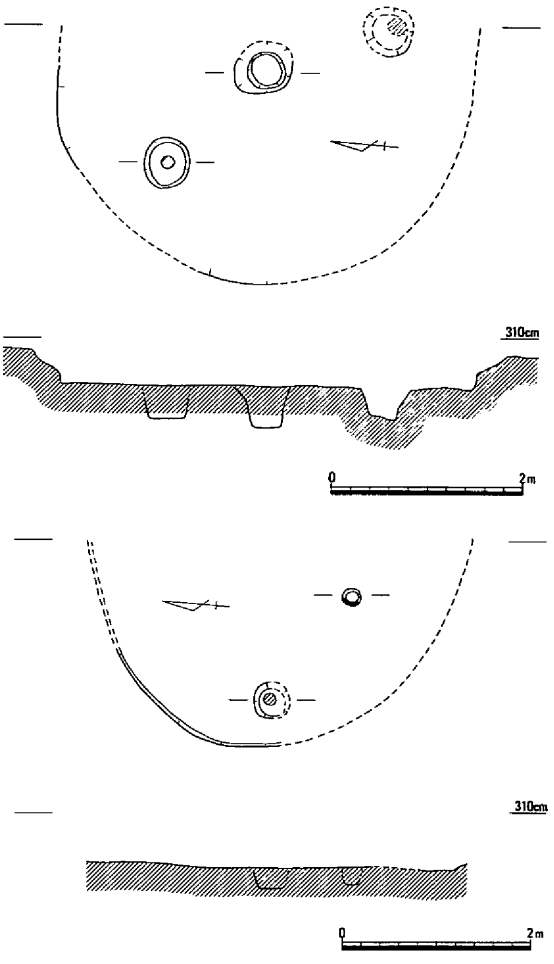
(2)　竪穴住居

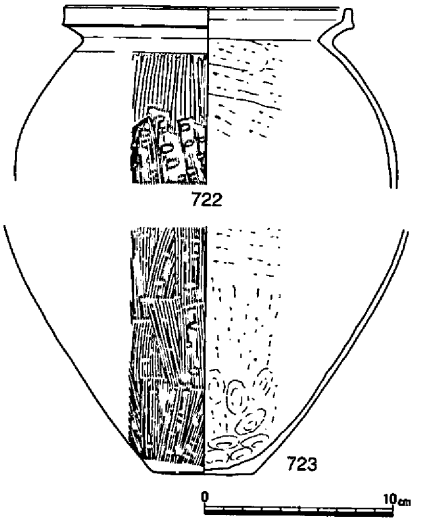
竪穴住居18（第149～151図）

11Ｃｂ区において２軒の竪穴住居が重複した状態で検出された。しかし、東側半分が調査区外にかかっていたため、住居の全貌についての詳細は得ることができなかった。



第149図　竪穴住居18（1/60）





第150図　竪穴住居18Ａ（左上）・18Ｂ（左下）（1/80）・出土遺物（1/4）

検出された住居は、推定径4.50ｍを前後するもの（竪穴住居18Ａ）と、その床面下層において推定径4.20ｍ前後の規模のもの（竪穴住居18Ｂ）があった。

竪穴住居18Ａは海抜約3.00ｍで検出され、床面からは柱穴２本と中央穴、さらに断面で壁体溝の存在が確認された。柱穴は、径約15cm程度の柱痕跡を見せるもので、さらに数本の柱穴が床面に遺存していたであろうが、基盤状況が不良でその存在については明確に出来なかった。これについては下層の住居も同様であった。中央穴は、径55cm前後で深さ43cmを測った。

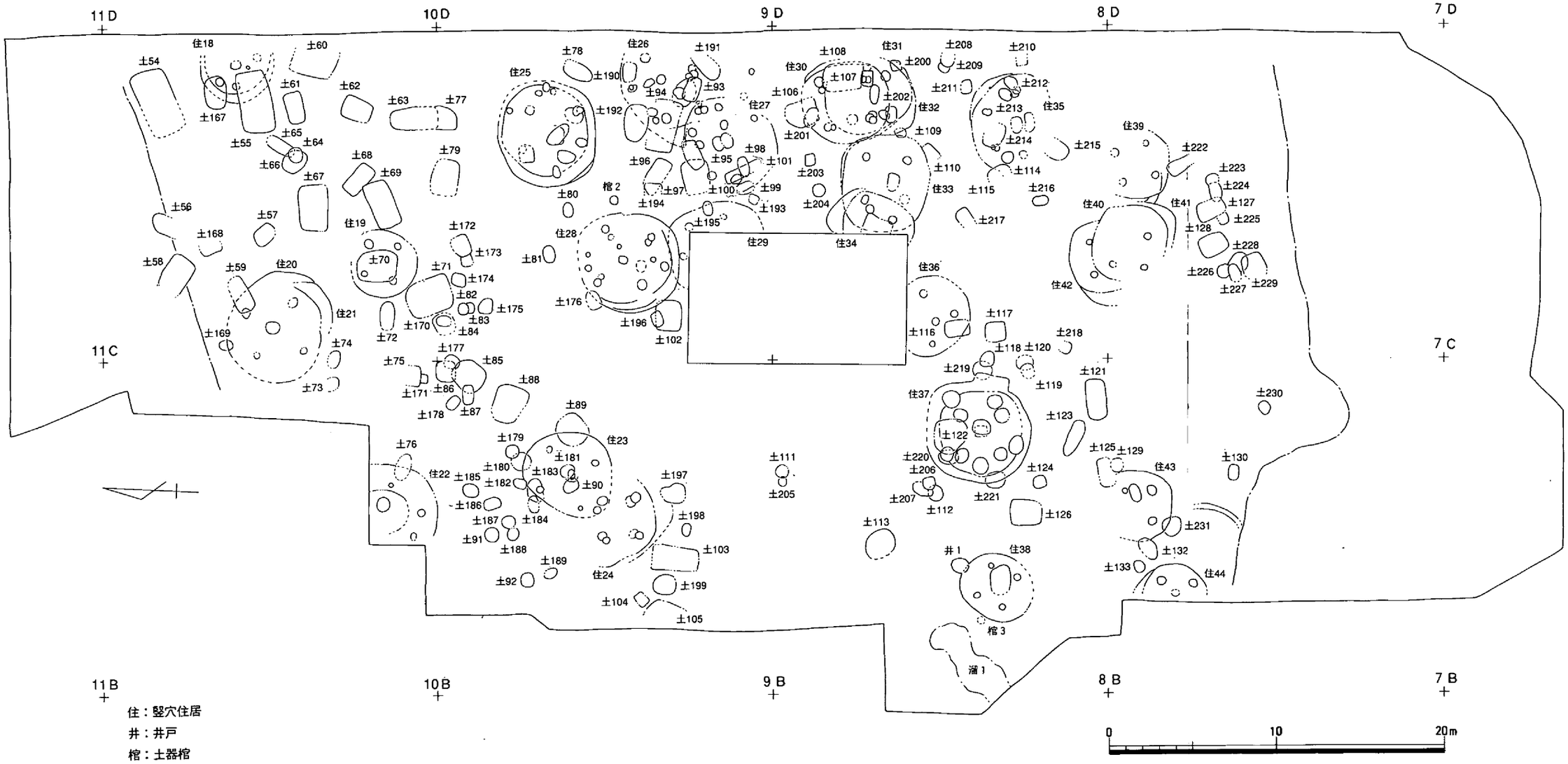
竪穴住居18Ｂは、竪穴住居18Ａ床面下層約10cmで検出された。遺存状態が不良で判然としないものでわずかに柱穴２本が確認されたにすぎない。

時期は、竪穴住居18Ａ出土の甕**722**が上東・鬼川市Ⅲ併行に比定される。（島崎）

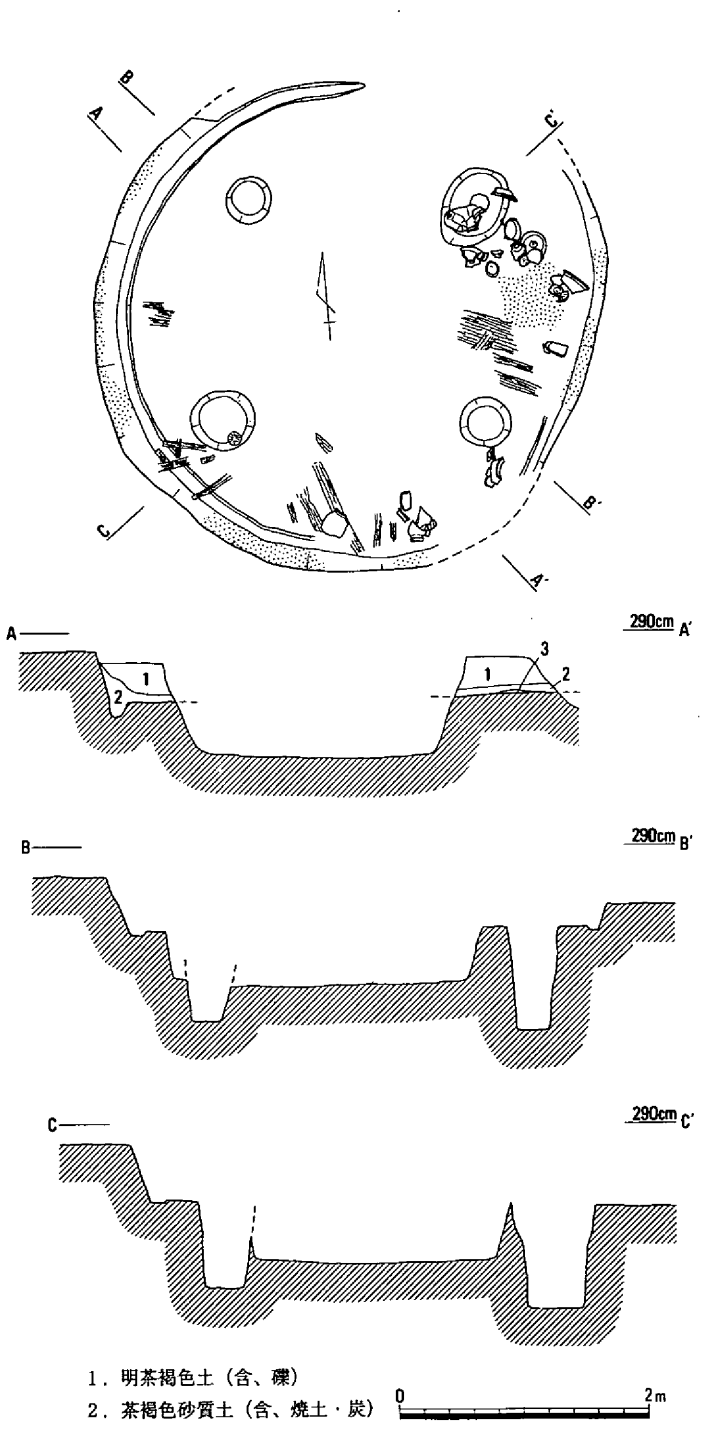
竪穴住居19（第151～156図、写真図版51）

11Ｃｃ区北東部に位置し、竪穴住居５を削り、中央部を大きく土壙70に削られている他、竪穴住居50～53に削られている。

平面形は隅丸方形を呈して、長軸長4.2ｍ、短軸長3.9ｍをそれぞれ測り、床面積は11.2㎡となる。深さ40cmの側壁はやや外傾しており、幅10cm程度の壁体溝が全周していたものと考えら



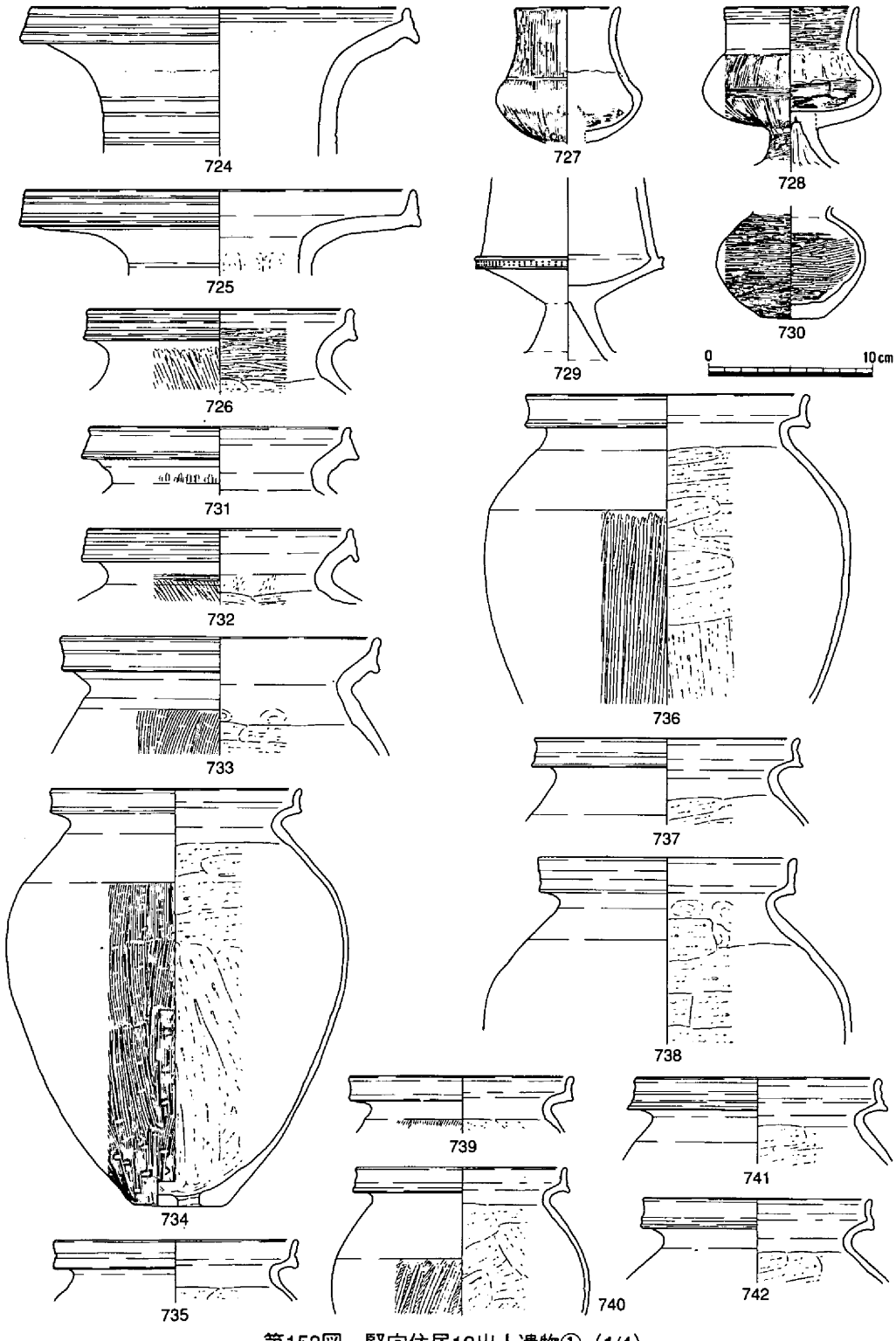
第151図　弥生時代後期後半遺構配置図（1/300）



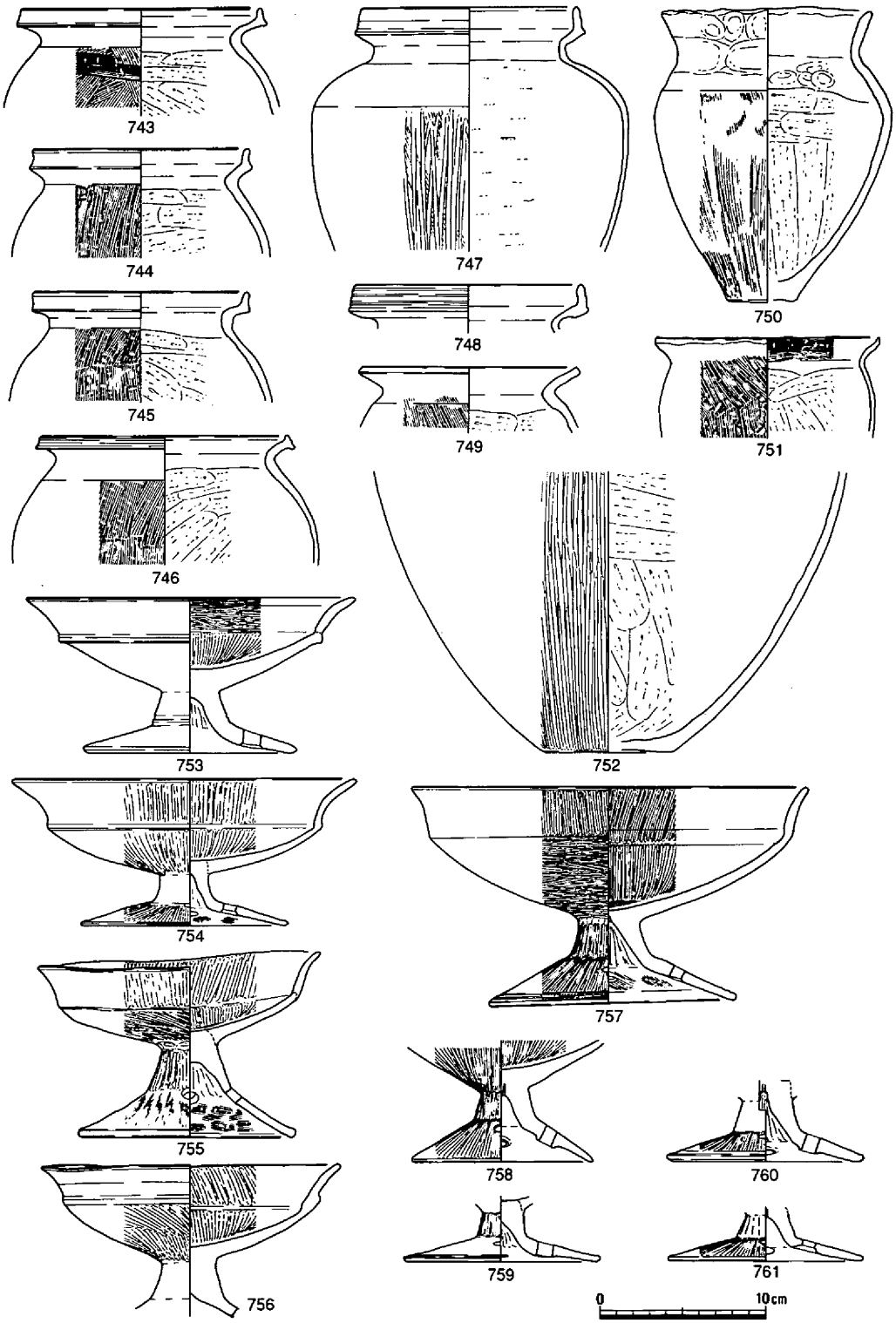
第152図　竪穴住居19（1/60）

れる。床面の海抜高は2.35mである。柱構造は４本柱で、柱間は1.8～1.9mを測り、主軸を東西に置く。柱掘り方は、長径37～65cmの楕円形で、深さは65～80cmであり、側壁との距離は20～40cmを測る。中央穴は土壙70に削られていて不明である。３層に分けられる埋土のうち第２層では、焼失に伴う炭化材・焼土等が検出されており、側壁と東部の床面には熱影響を受けた箇所が認められる。

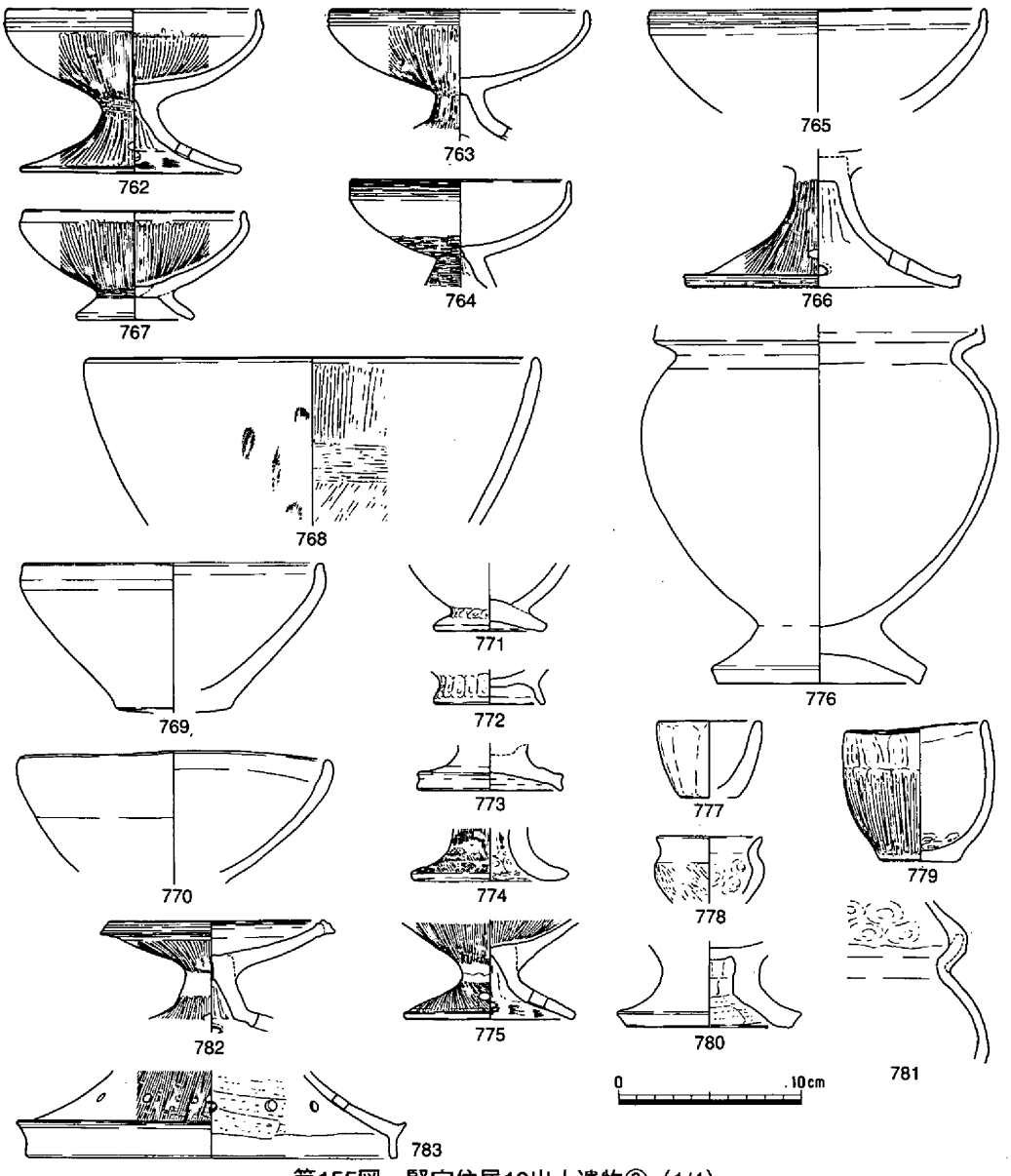
出土遺物には、弥生土器の長頸壺・壺・脚付直口壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・器台・手焙形土器等のほかに、石包丁・スクレイパー・敲石がある。甕の口縁端部は上方へ摘み上げられるものが多く、外面に退化凹線が巡らされるものもみられる。高杯は短脚化し、深い杯部から口縁部が外反するものと口縁部が内湾して終わるものの二者がある。古い要素をもつものも散見されるが、総体としては上東・鬼川市Ⅲ式の範疇に入るものと思われる。



第153図　竪穴住居19出土遺物①（1/4）



第154図　竪穴住居19出土遺物②（1/4）

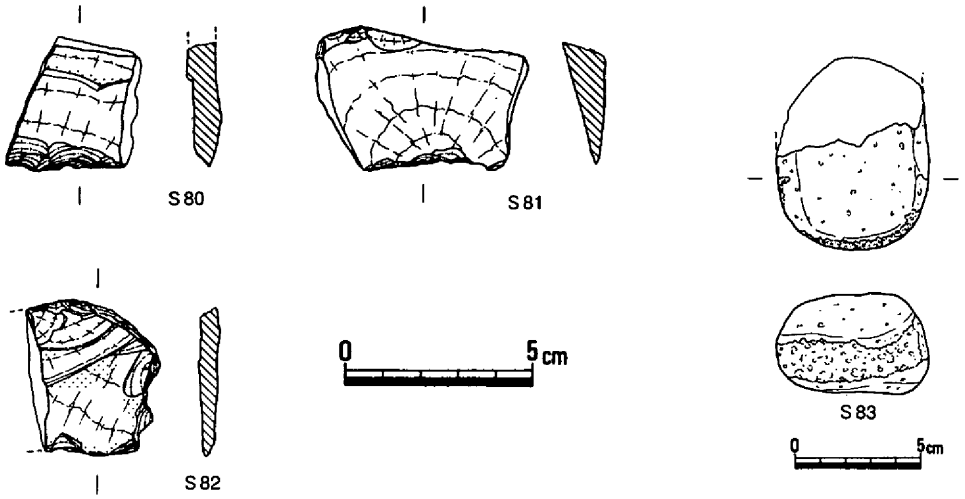


第155図　竪穴住居19出土遺物③（1/4）

竪穴住居20（第18・151・157図）

11Ｃ区西端から11Ｂ区にかけて位置し、竪穴住居21・48・49、土壙59に削られ、竪穴住居４・５、土壙169を削っている。

平面形は不整な円形を呈して、長径6.07m、短径5.73mを測り、床面積は24.4㎡となる。側壁はほぼ直立する部分とやや外傾する部分があり、最大深さ32cmが残る。海抜高2.28mの床面はほぼ平坦で、壁体溝は検出されなかった。柱構造は４本柱であり、柱間は2.5～3.1mを測り、



第156図　竪穴住居19出土遺物④（1/2・1/3）

主軸を東西に置く。柱掘り方は長径43～67cmの楕円形で、深さは40～65cmであり、側壁との距離は25～45cmを測る。中央穴は、１辺80cmの方形を呈し、深さ45cmの底部は三つに分かれる。中央穴の埋土には、炭・灰・焼土が多く含まれている。この他の住居内構造については不明である。

出土遺物には、弥生土器の壺784、甕792～795、高杯785～787・791、脚付鉢788、台付鉢789・790等がある。795の体部外面はタタキメによる調整である。787・788・791はいずれも短脚で、786～789・791には水漉粘土が用いられている。

時期は弥生時代後期後半（オノ町Ⅰ～Ⅱ式併行）に比定される。

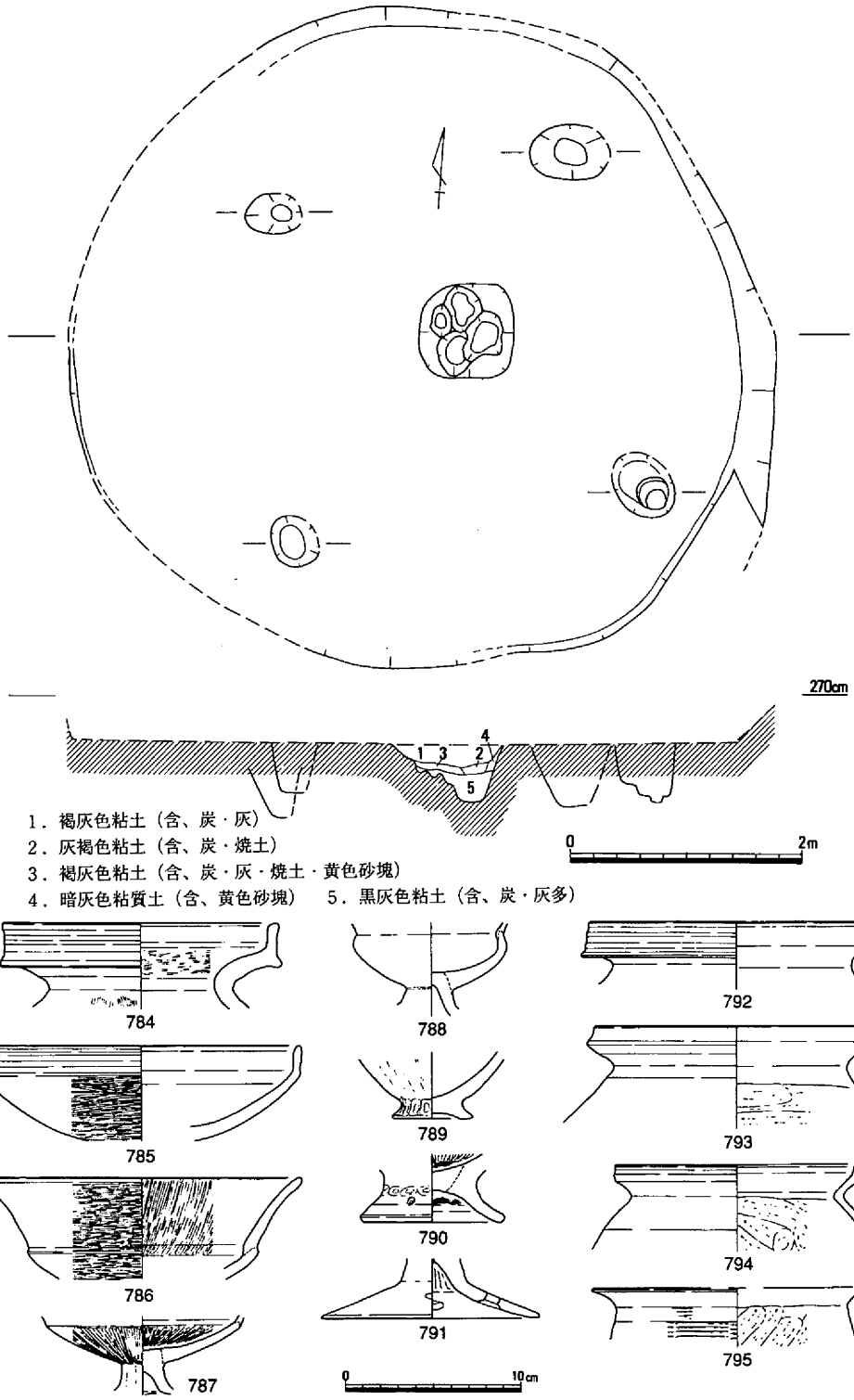
竪穴住居21（第18・151・158図）

11Ｃｃ区北部に位置し、竪穴住居５・20を削り、竪穴住居53に削られる。

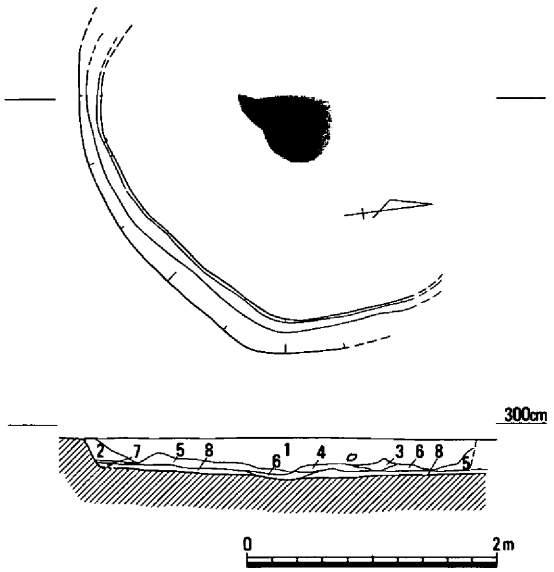
平面形は不整な円形と想定されるが、南東部分が検出できたのみであり、北西部分は竪穴住居20との重複のために不明瞭で、全体の構造・規模を明らかにすることができなかった。計測しうる最大径は3.35ｍである。深さ32cmが残る側壁は外傾しており、幅10～15cm程度の壁体溝が全周していたと考えられる。海抜高2.37ｍの床面は貼床されており、ほぼ平坦である。中央穴は60×43cmの楕円形を呈し、深さは９cm程度と浅いが、その周辺も含めて炭の堆積が認められ、埋土の第６層がこれに相当する。柱穴は検出できず、柱構造は不明である。その他の住居内構造についても不明である。埋土の下層には、炭・焼土が多く含まれている。

出土遺物には、弥生土器の甕796、高杯797、鉢798～800、台付鉢802～804、手捏ね土器801・805等がある。797は水漉粘土製で、透し孔は３孔である。

時期は、弥生時代後期後半（オノ町Ⅰ～Ⅱ式併行）に比定される。

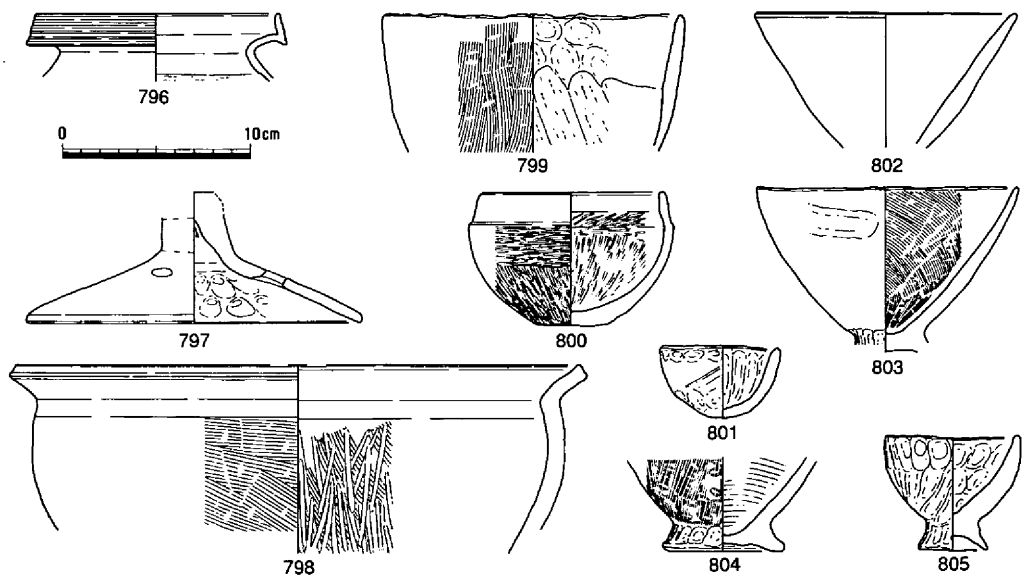


第157図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物（1/4）



第158図　竪穴住居21（1/60）・出土遺物（1/4）

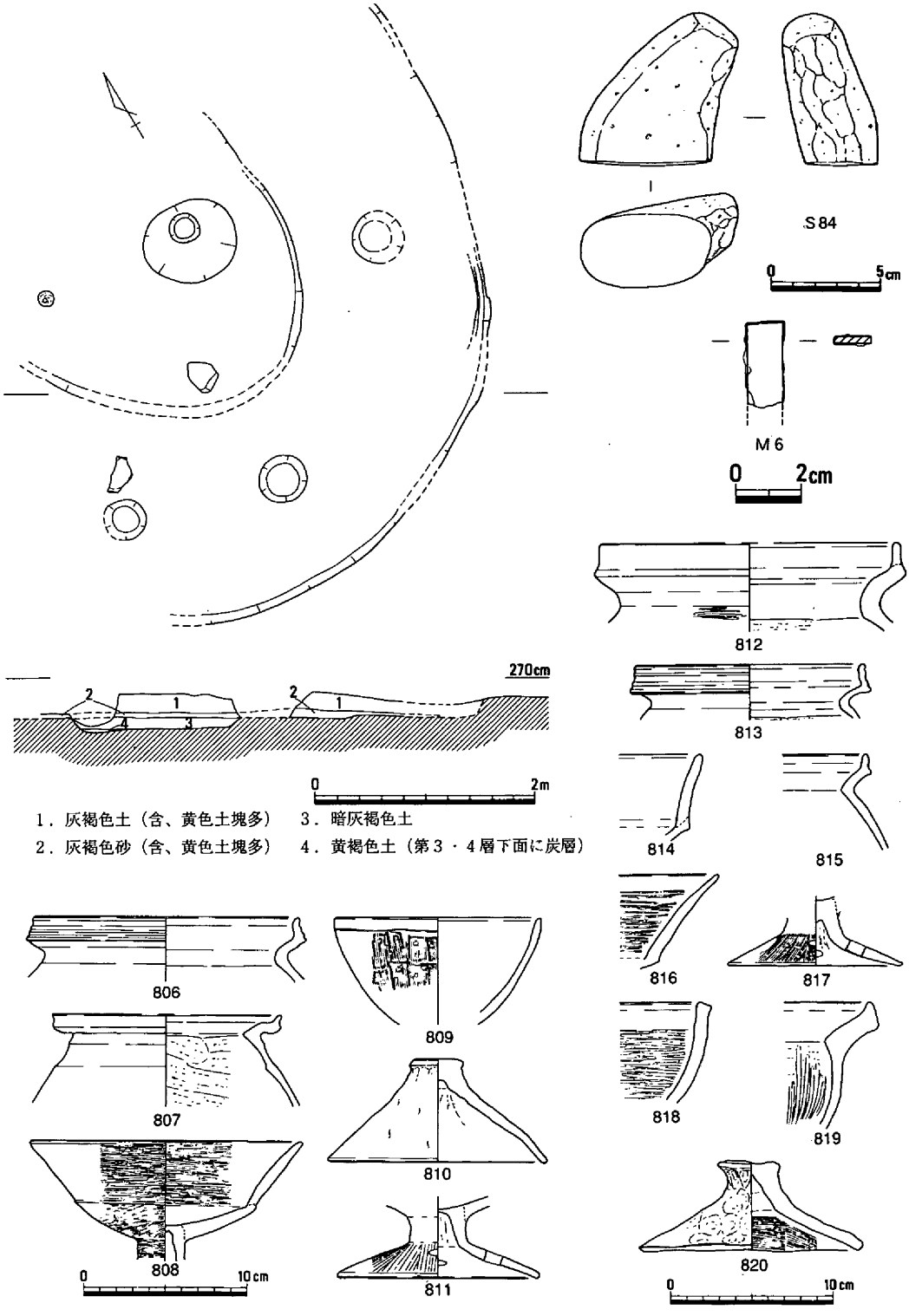
1．茶褐色砂質土
2．焼土
3．暗茶褐色砂質土（含、炭・焼土）
4．赤黒褐色砂質土（含、炭・焼土）
5．暗茶褐色砂質土（含、焼土）
6．炭
7．暗茶褐色砂質土（含、焼土）
8．黄褐色砂質土（貼床）



竪穴住居22（第151・159図）

11Ｂ区南部に位置して、北半を調査区外に置き、竪穴住居55、土壙76等に削られている。

平面形は円形と想定されるが、規模は不明であり、計測しうる最大径は5.95ｍである。深さ15㎝が残る側壁はほぼ直立し、南東部の一部で幅７㎝程度の壁体溝が検出されている。側壁から1.55～1.75ｍの幅でベッド状遺構となっており、海抜高2.22ｍを測る中央の床面との比高は８㎝前後である。柱穴は３本を検出しており、柱間は1.5ｍと2.4ｍを測る。柱構造は不明であるが、８本柱と想定することもできる。柱掘り方は径37～50㎝の円形で、側壁との距離は50～



1．灰褐色土（含、黄色土塊多）　3．暗灰褐色土
2．灰褐色砂（含、黄色土塊多）　4．黄褐色土（第3・4層下面に炭層）

第159図　竪穴住居22（1/60）・出土遺物（1/3・1/2・1/4）

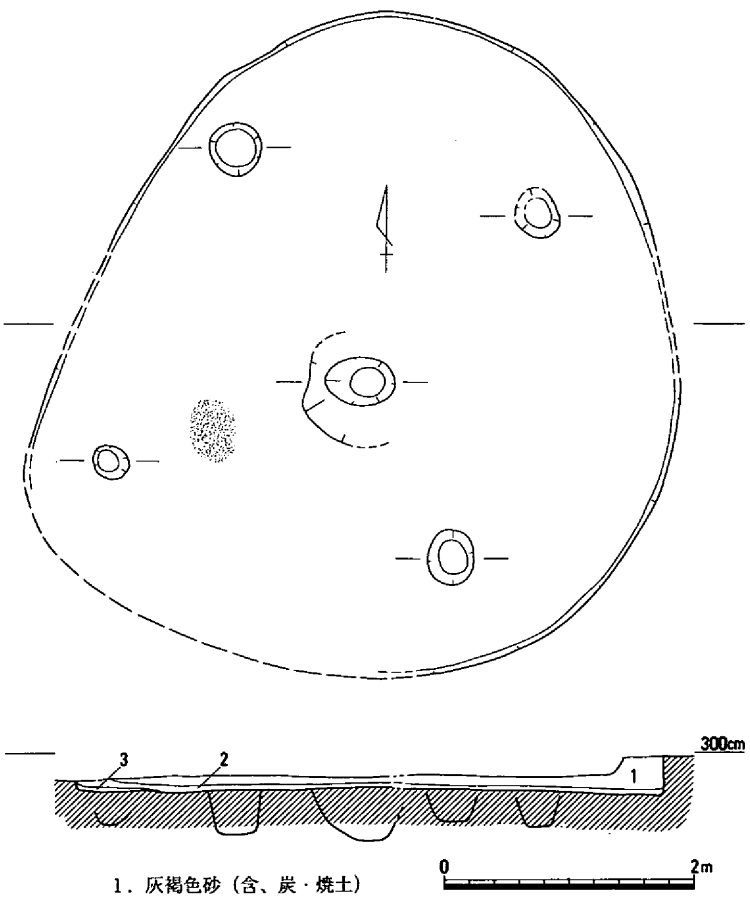
70cmである。中央部では、86×75cmの楕円形を呈する中央穴の他に台石を検出している。埋土は４層に分けられ、第３・４層下面には炭層が認められる。

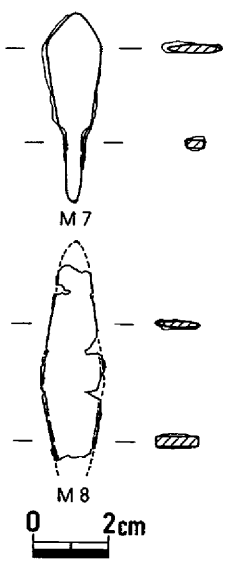
出土遺物のうち、弥生土器の甕806・807、高杯808・811、鉢809、蓋810および石杵Ｓ84が中央部からの出土であり、弥生土器の甕812～815、高杯816・817、鉢818・819、蓋820および鉄器Ｍ６は第１・２層からの出土である。Ｓ84は辰砂精製用具と考えられ、使用面は非常に平滑で側面には朱の付着が認められる。

竪穴住居23（第151・160・161図、写真図版52）

10Ｂｂ区南西部に位置し、土壙89・180・183を削り、土壙90・181・182に削られている。

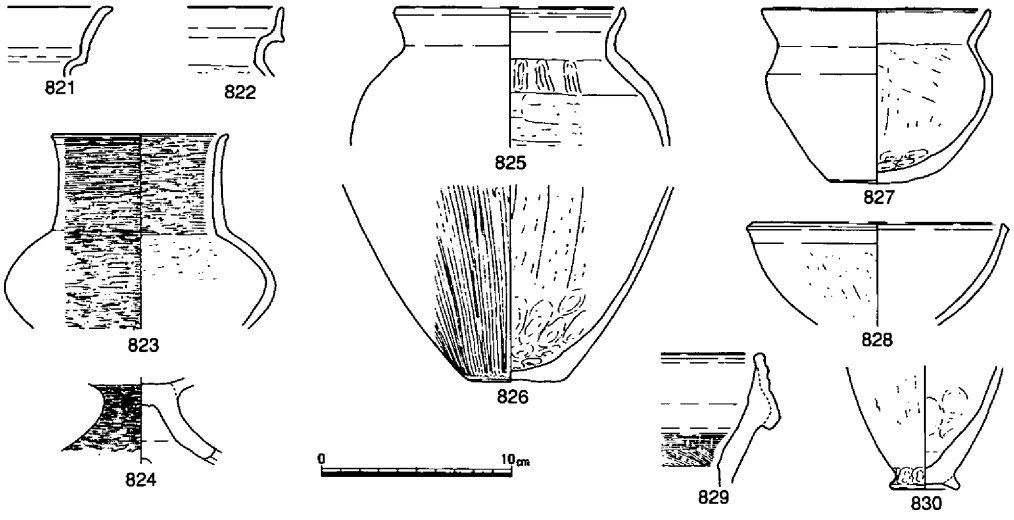
平面形は不整な円形を呈し、長径5.3m、短径4.77mをそれぞれ測る。深さ30cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されていない。床面の海抜高は2.67mを測り、ほぼ平坦である。４本の柱穴を検出しており、柱間は2.5～2.9mで、主軸を南北に置いている。柱掘り方は、長径30～40cmの楕円形で、深さ25～35cmを測





1．灰褐色砂（含、炭・焼土）
2．暗灰褐色砂（含、炭多、灰色粘土）
3．暗灰褐色砂

第160図　竪穴住居23（1/60）・出土遺物①（1/2）



第161図　竪穴住居23出土遺物②（1/4）

り、側壁との距離は17～60cmである。中央穴は床面での平面形が不明であるが、径70cm以上の不整な円形と考えられ、深さ40cmを測る。中央穴と南東の柱穴の中間で50×30cmの規模を測る焼土面が検出されている他は、住居内構造については不明である。

出土遺物には、弥生土器の壺822、脚付直口壺823・824、甕825・826、鉢827～829、台付鉢830の他に、鉄鏃Ｍ７、鉋Ｍ８が出土している。822の外面から頸部内面、823の内外面、824の外面にはそれぞれ丹塗りがなされている。822は非在地系、821は混入と考えられる。

竪穴住居24（第151・162図）

10Ｂｃ区北東部に位置し、上層を竪穴住居71等の古墳時代前半の遺構に削られている。柱穴の重複により、１回の建替えが想定され、新段階を24Ａ、古段階を24Ｂとする。

竪穴住居24Ａは、平面形は不整な円形と想定されるが、規模は不明である。床面の海抜高は2.36m前後と考えられ、壁体溝は検出されていない。柱穴は４本が検出されており、柱間は2.0～2.4mで、主軸を東西に置いている。柱掘り方は長径42～70cmの楕円形で、深さは10～34cmが残るのみであり、側壁との距離は66cmを測る。中央穴その他については不明である。

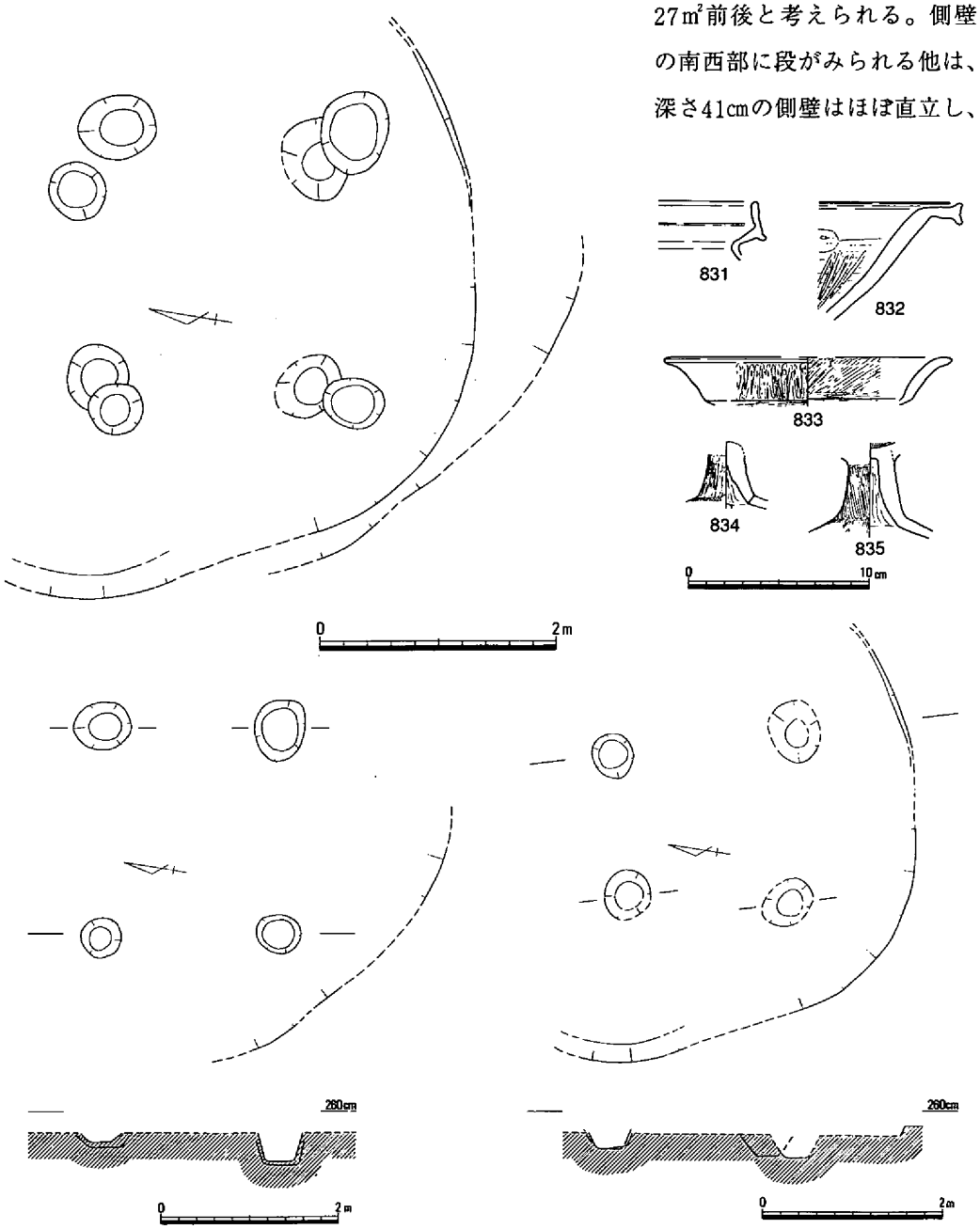
竪穴住居24Ｂは、平面形は隅丸方形に想定され、規模は１辺4.8m以上に復元される。床面の海抜高は2.36m前後と想定され、壁体溝は検出されていない。柱穴は４本が検出されているが、そのうち３本は竪穴住居24Ａの柱穴に削られている。柱間は1.6～2.0mを測り、主軸を南北に置いている。柱掘り方は、長径50～66cmの楕円形で、深さ14～24cmを測り、側壁との距離は80～135cmである。中央穴その他の住居内構造は不明である。

出土遺物には、弥生土器の甕831、高杯833～835、鉢832があり、時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

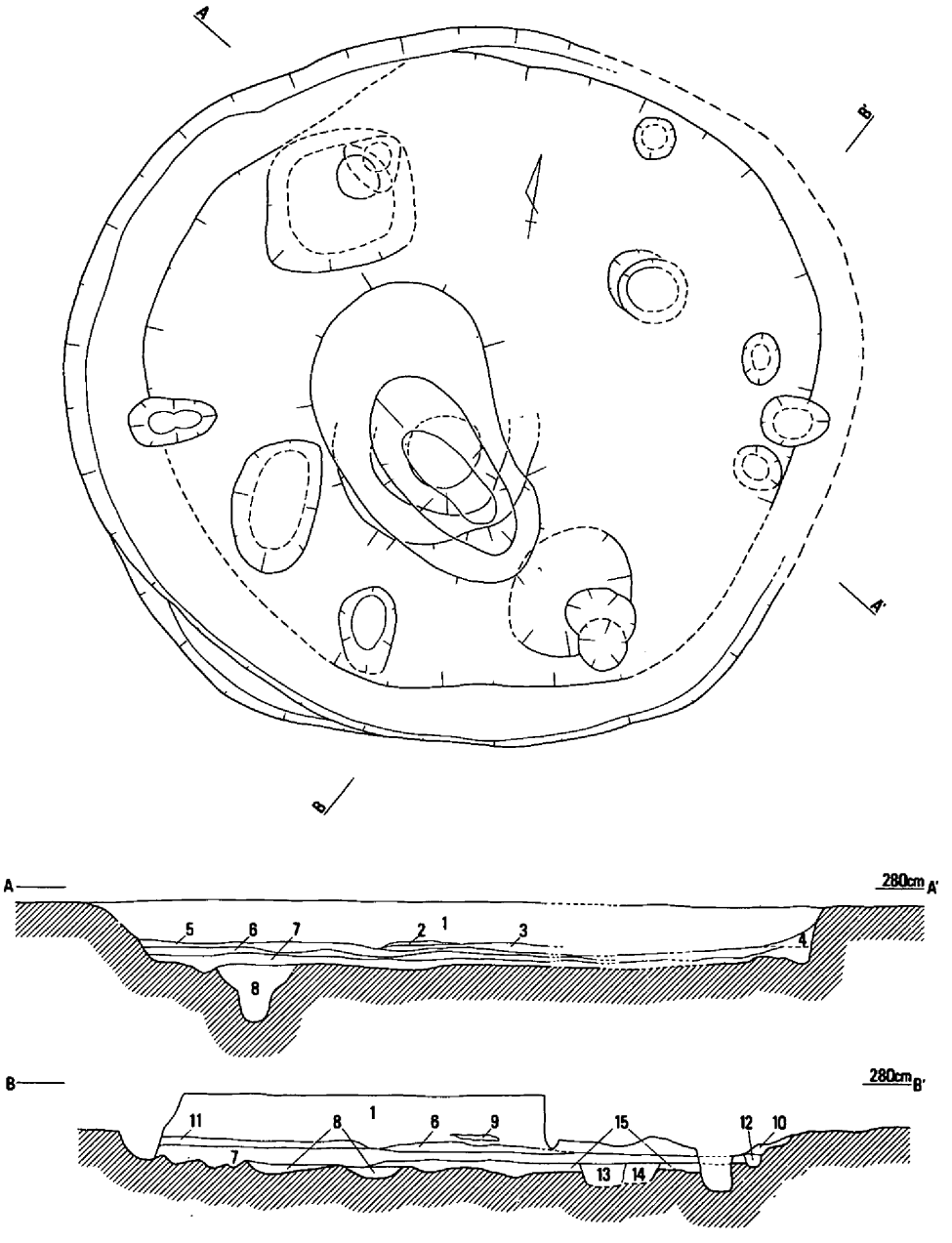
竪穴住居25（第151・163～166図、写真図版52）

10Ｃｂ区南部に位置し、竪穴住居10、土壙149を削り、竪穴住居60・68に削られている。１回の建替えが行われており、新段階を25Ａ、古段階を25Ｂとする。

竪穴住居25Ａは、平面形は不整な円形に復元され、短径5.9ｍ、推定長径6.4ｍで、床面積は27㎡前後と考えられる。側壁の南西部に段がみられる他は、深さ41㎝の側壁はほぼ直立し、

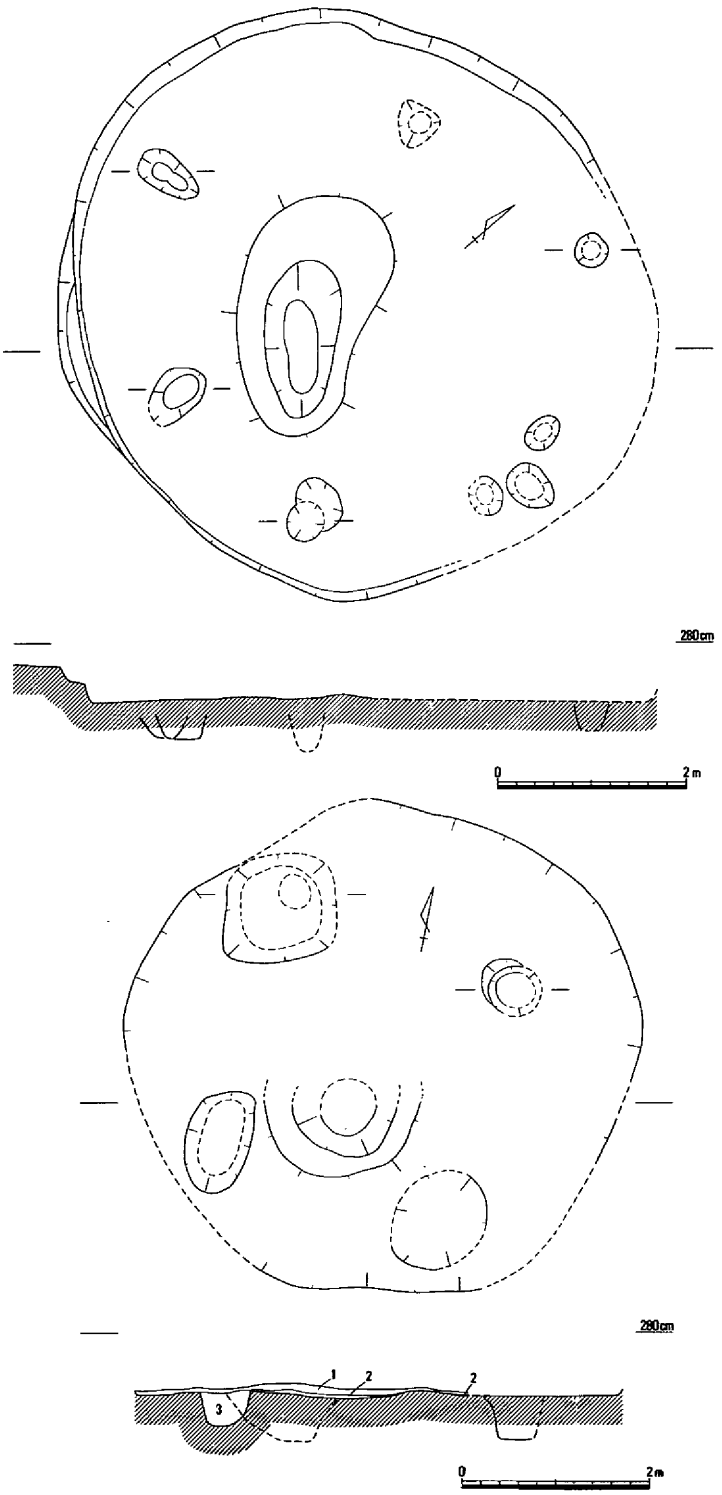


第162図　竪穴住居24（左上）（1/60）・24Ａ（下左）・24Ｂ（下右）（1/80）・出土遺物（1/4）



1．淡灰褐色粘土（含、土器片多、淡灰褐色細砂）
2．炭・焼土
3．灰褐色粘土（含、灰褐色細砂・焼土）
4．灰褐色粘土（含、灰褐色細砂・炭）
5．灰色粘土（含、灰色細砂）
6．灰白色細砂（含、黄橙色粘土塊）
7．灰白色粘土（含、灰白色細砂）
8．淡灰色粗砂（含、炭）
9．炭
10．暗灰色砂（含、炭）
11．淡灰色粘土（含、淡灰色細砂）
12．暗褐灰色砂（含、炭・灰色砂塊）
13．暗灰色砂（含、黄褐灰色砂塊）
14．暗灰色砂（含、黄褐灰色砂塊多）
15．暗褐灰色砂（含、炭）

第163図　竪穴住居25（1/60）



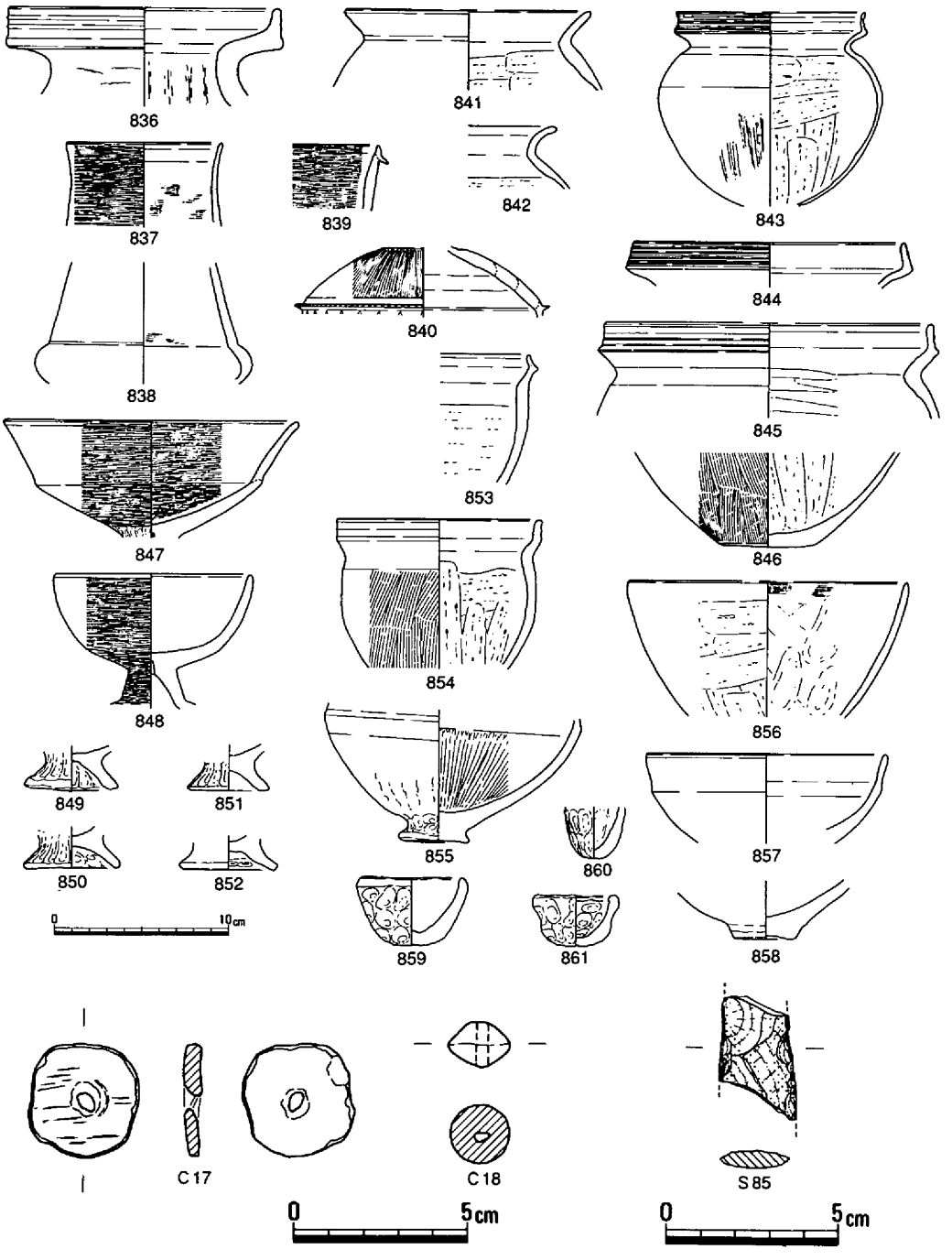
1．淡茶灰色砂　2．炭　3．淡灰褐色砂

第164図　竪穴住居25Ａ（上）・25Ｂ（下）(1/80)

壁体溝は検出されていない。柱構造は６本柱と考えられ、一部に複数の候補があるが、柱間は1.9～2.8mと想定される。中央施設は、2.55×1.5mの土手状に高まった内側が170×80×４cmの楕円形にくぼめられたもので、炭が堆積している。

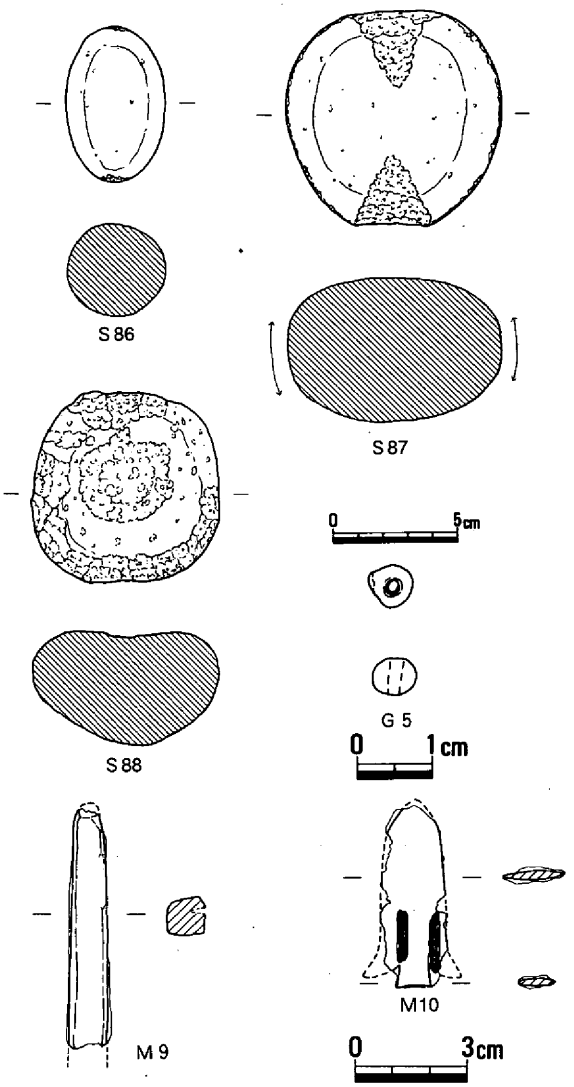
竪穴住居25Ｂは、5.3×5.24mの不整な円形を呈し、深さ６cmで海抜高2.13mの床面に至る。柱穴は４本が検出され、柱間は2.5～3.0mと想定される。中央施設は最大径1.63mを測る土手状の高まりの内側に、１辺1.04m、深さ５cm程度に作られている。壁体溝その他については不明である。

出土遺物には、弥生土器の壺・脚付直口壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・手捏ね土器・製塩土器の他に、土器片転用紡錘車・土錘、石槍・敲石・石錘、ガラス玉、鉄鏃等がある。このうち、843・844・848には新しい要素が見られ、混入の可能性



第165図　竪穴住居25出土遺物①（1/4・1/2）

を残すものとして、周辺遺構との関係からは、遺構の時期は弥生時代後期後半に属するものとして扱われる。



第166図　竪穴住居25出土遺物②（1/3・1/1・1/2）

竪穴住居26（第151・167・168図）

10Ｃｄ区に位置して、東半を調査区外に置き、竪穴住居27その他や、土壙93等に削られているため、第167図に示す状況で検出され、これを新段階の26Ａと古段階の26Ｂの二段階に整理した。

竪穴住居26Ａは、平面形は径９ｍ程度の円形に想定され、北端で深さ24cmが残る側壁はほぼ直立して海抜高2.34ｍの床面に達し、壁体溝は確認されなかった。７本の柱穴がこれに伴うと考えられ、柱構造は９ないし10本柱と考えられる。柱間は1.5～2.4ｍで、側壁との距離40～80cmと想定される。柱掘り方は長径35～66cmの楕円形で、深さは16～50cmである。中央穴は75×50×46cmの規模で、楕円形を呈する。中央穴の北東に台石を検出した他は、住居内構造については不明である。埋土は３層に分けられ、炭・焼土を含んでいる。

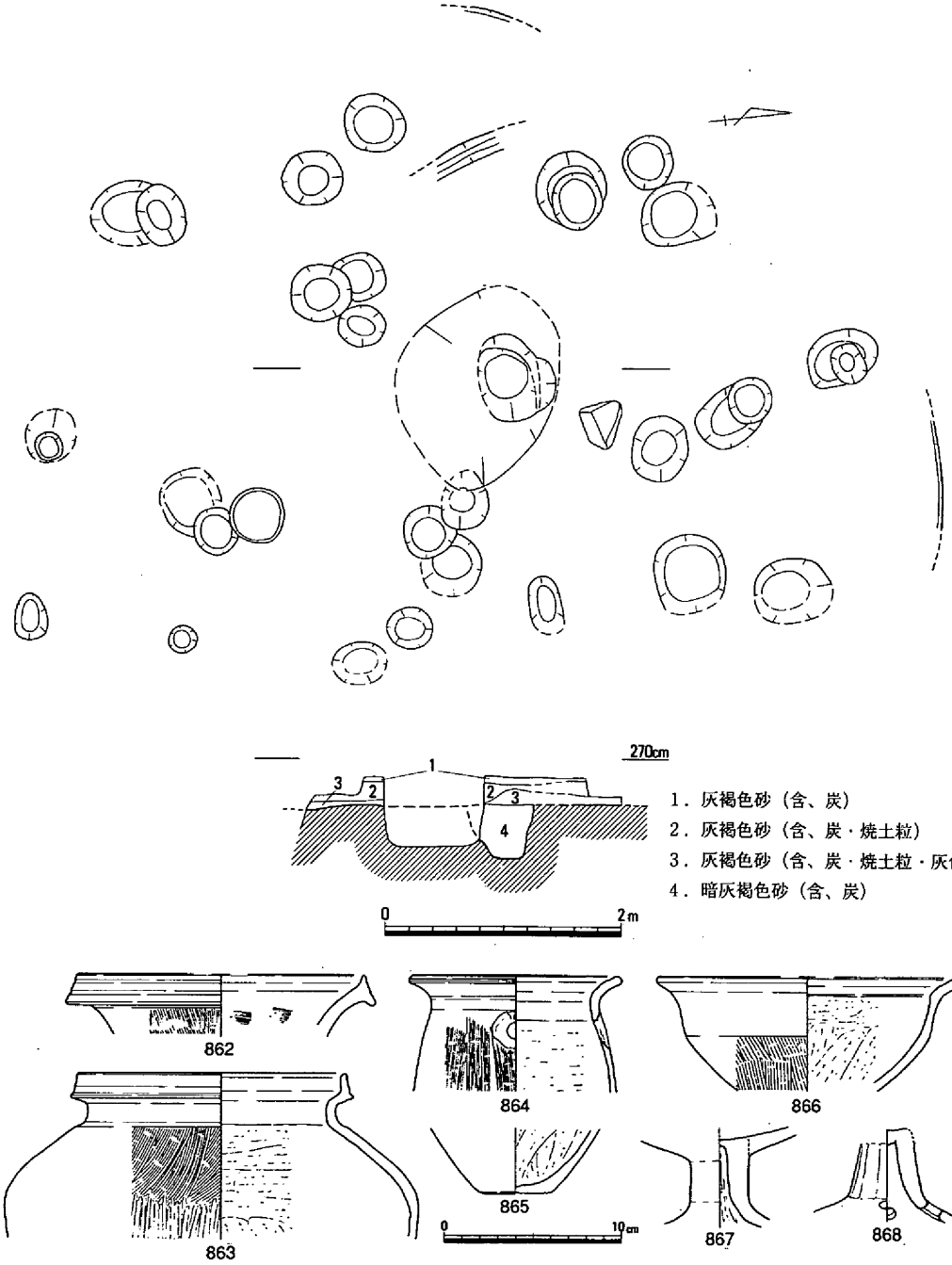
竪穴住居26Ｂは、第168図に示す状況に理解でき、平面形・規模ともに不明であるが、柱構造は４本柱と考えられて、その場合２回の建替えが行われたことが想定される。柱間はいずれにしても2.0mを超えるものと想定される。柱掘り方は長径35～60cmの楕円形で、深さ30～50cmを測り、中央穴を伴っている。

弥生土器の壺862、甕863～865、高杯867・868、鉢866が出土しており、時期は弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

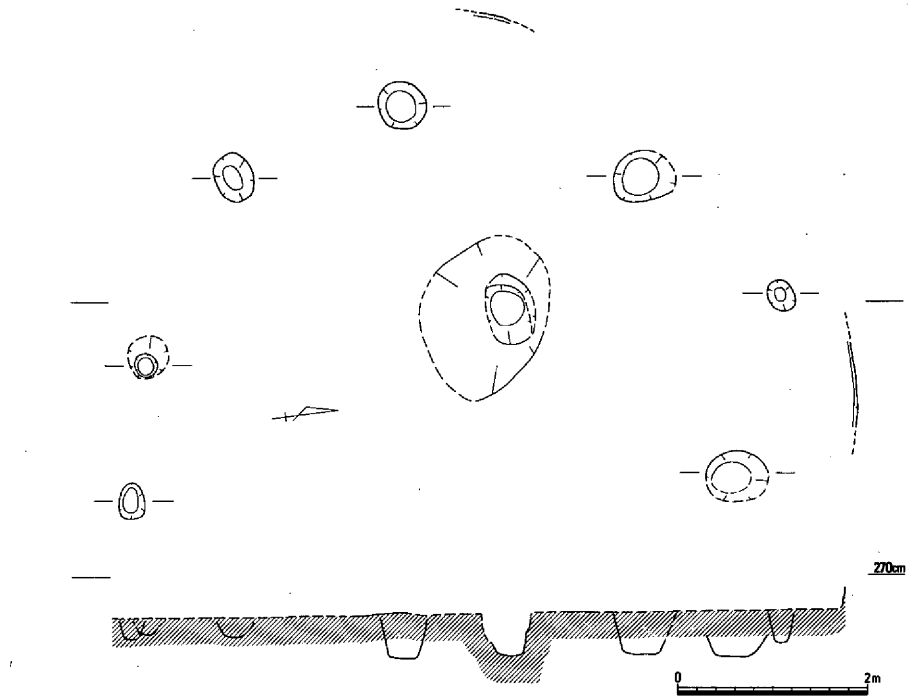
竪穴住居27（第151・169・170図、写真図版53）

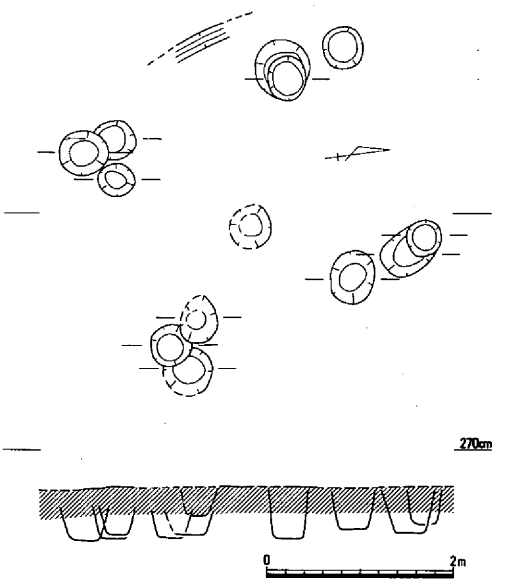
10Ｃｄ区南部に位置し、竪穴住居26、土壙101を削り、竪穴住居67・69・73・76、土壙95・97～100に削られている。

平面形は円形と想定され、最大径5.92mを測る。深さ26cmが残る側壁はほぼ直立し、床面の海抜高は2.25mで、幅15～20cmの壁体溝が全周している。北東部では内側に重複してもう1条の壁体溝が検出されており、中央穴が重複することからも、1回の建替えが考えられる。柱穴



第167図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物（1/4）

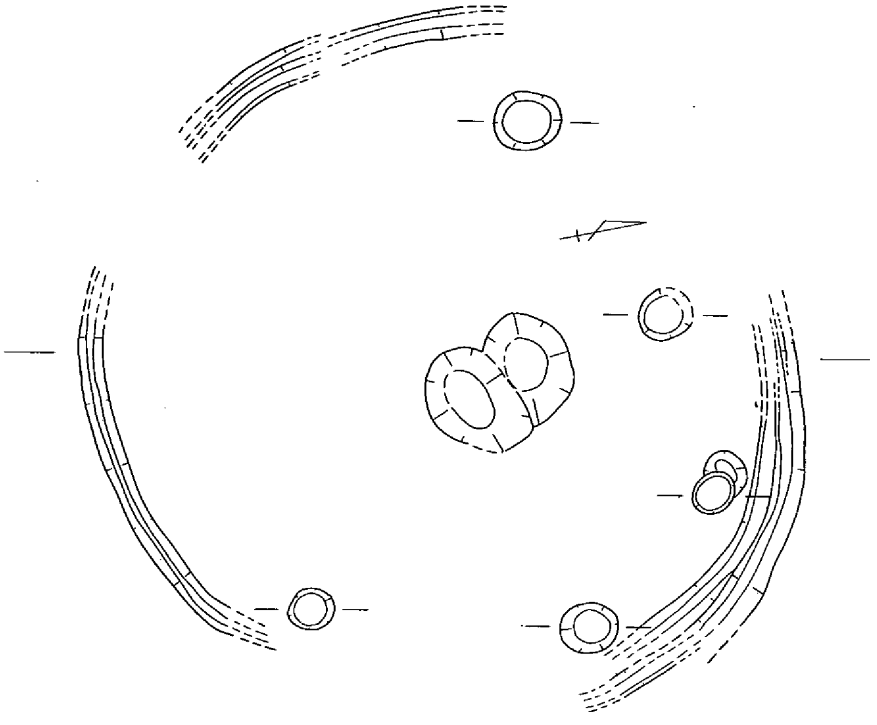




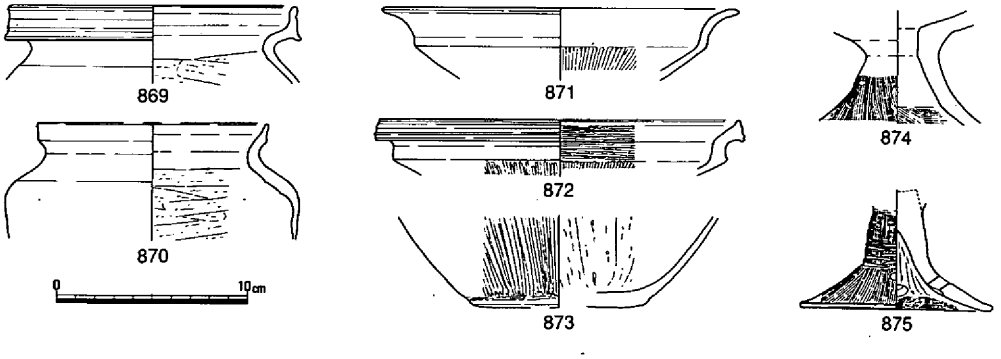
第168図　竪穴住居26A(上)・26B(下)(1/80)

は５本を検出しており、柱間は1.6～2.2ｍを測って、７本柱と想定される。柱掘り方は長径35～55㎝の楕円形で、深さ33～63㎝を測り、側壁との距離は20～40㎝である。中央穴は平面形楕円形を呈し、93×66×31㎝の規模を測り、古段階の中央穴も長径90㎝の楕円形で、同程度のものである。この中央穴の西側では、1.4×1.0ｍ程度の楕円形の範囲が３㎝ほどくぼみ、ここに炭化物の堆積が認められた。６層に分けられる埋土のうち、第２・４層には炭・焼土が多く含まれている。

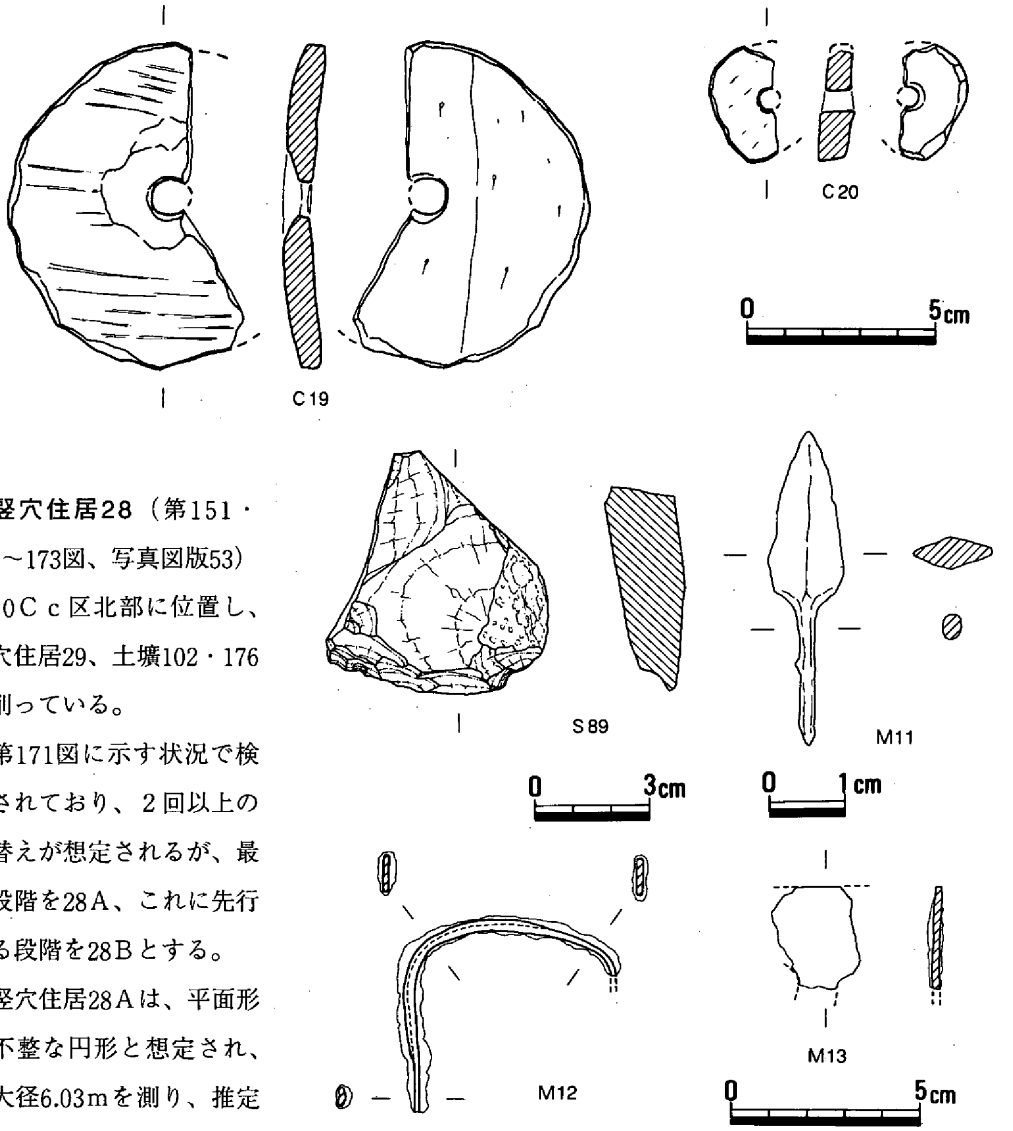
出土遺物には、弥生土器の甕869・870・873、高杯871・874・875、鉢872の他に、土器片転用紡錘車Ｃ19・20、サヌカイト製のエンドスクレイパーＳ89、銅鏃M11、鉇M12、鉄器M13等がある。Ｃ20は高杯の脚部を転用したものと考えられ、焼成前に穿孔されている。土器には、872に他地域系のものもみられるが、上東・鬼川市Ⅲ式として扱われる。



1．灰褐色砂
2．暗灰褐色砂（含、焼土・炭多）
3．灰褐色砂（含、炭・焼土）
4．暗灰褐色砂（含、焼土・炭多）
5．炭化物
6．灰色砂
7．暗灰褐色砂
8．灰褐色砂



第169図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物①（1/4）



第170図　竪穴住居27出土遺物②（1/2・1/1）

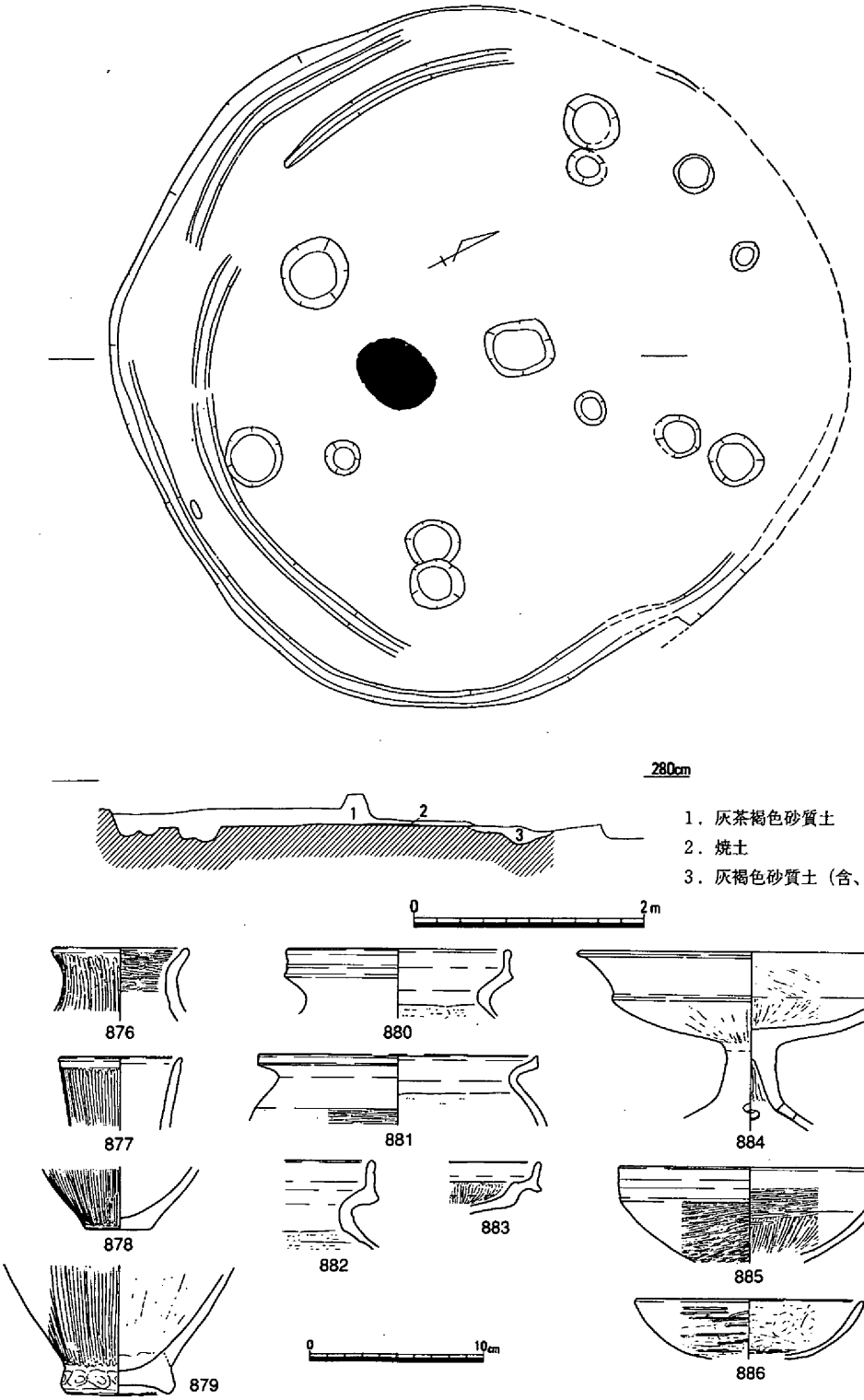
竪穴住居28（第151・171～173図、写真図版53）

10Ｃｃ区北部に位置し、竪穴住居29、土壙102・176を削っている。

第171図に示す状況で検出されており、２回以上の建替えが想定されるが、最終段階を28Ａ、これに先行する段階を28Ｂとする。

竪穴住居28Ａは、平面形は不整な円形と想定され、最大径6.03ｍを測り、推定床面積は27.7㎡である。深さ32㎝が残る側壁はやや外傾し、海抜高2.38ｍの床面では東部から南部にかけて壁体溝が検出されている。柱穴は６本を検出しており、柱間は1.7～2.8ｍで、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は、長径28～62㎝の楕円形で、深さ22～58㎝を測り、側壁との距離は45～70㎝である。中央穴は58×46×15㎝の隅丸方形で、南45㎝に70×55㎝の範囲で炭の堆積が認められる。

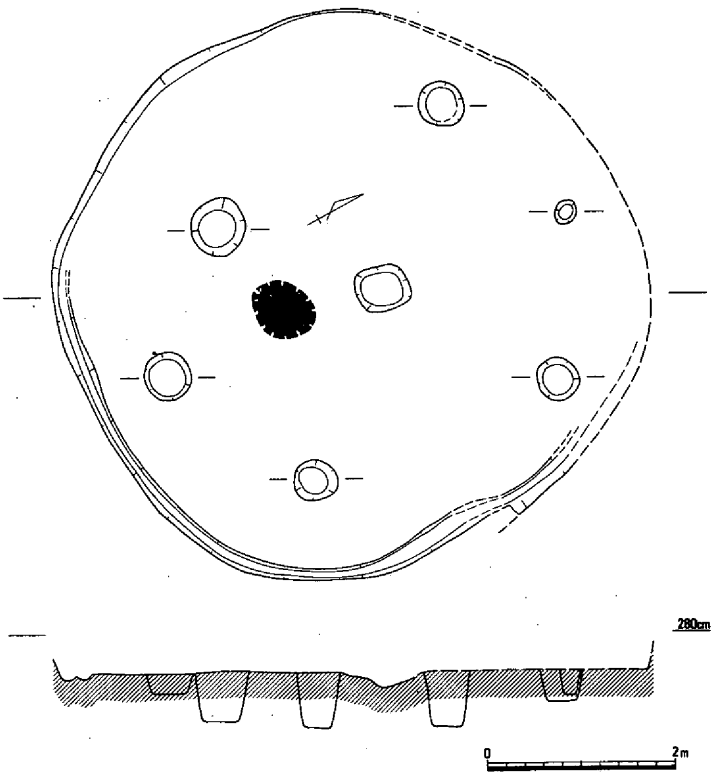
竪穴住居28Ｂは、平面形は円形と想定され、最大径5.35ｍを測る。西半部分では壁体溝が２条検出されており、１回の建替えが想定される。４本柱のうち１本は28Ａとの共有を想定せざるをえないが、柱間は2.4～2.5ｍを測る。柱掘り方は長径35～42㎝の楕円形で、深さは35～52

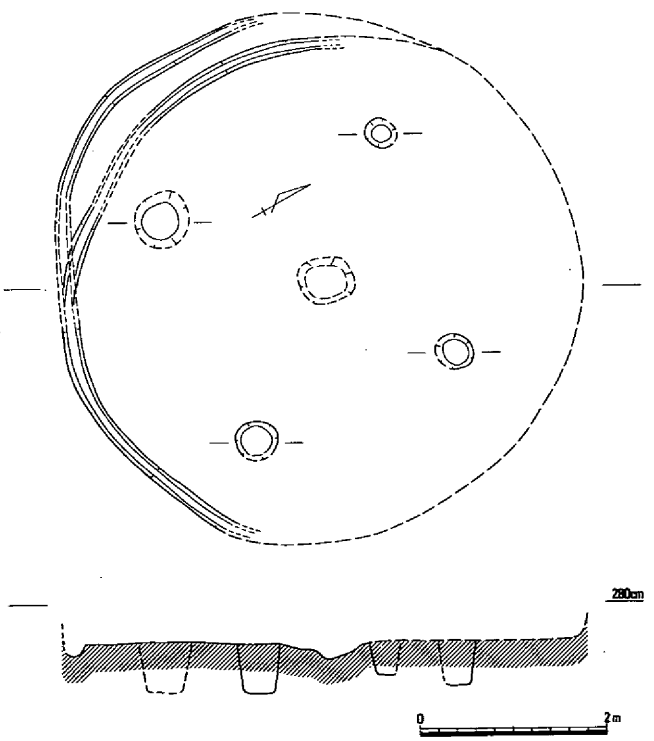


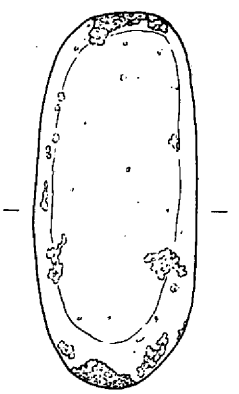
第171図　竪穴住居28（1/60）・出土遺物①（1/4）

cmを測り、側壁との距離は60cm程度となる。

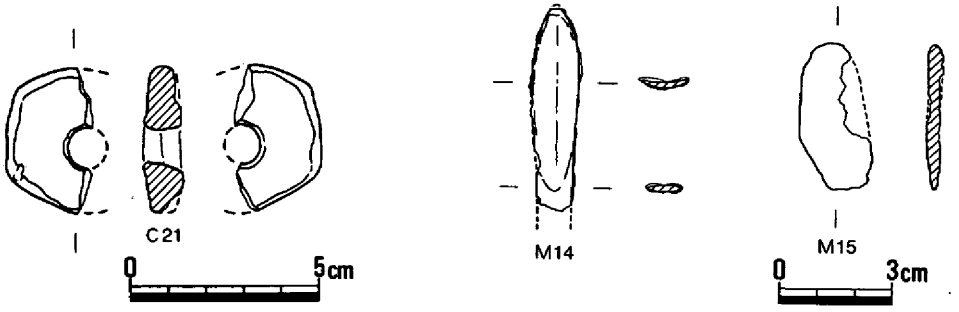
出土遺物には、弥生土器の壺878・879、小形壺876、直口壺877、甕880～882、高杯884、鉢883・885・886等の他に、土製紡錘車C21、敲石S88、鋤M14、鉄器M15がある。883は内外面丹塗りされており、他地域系のものと考えられる。時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。



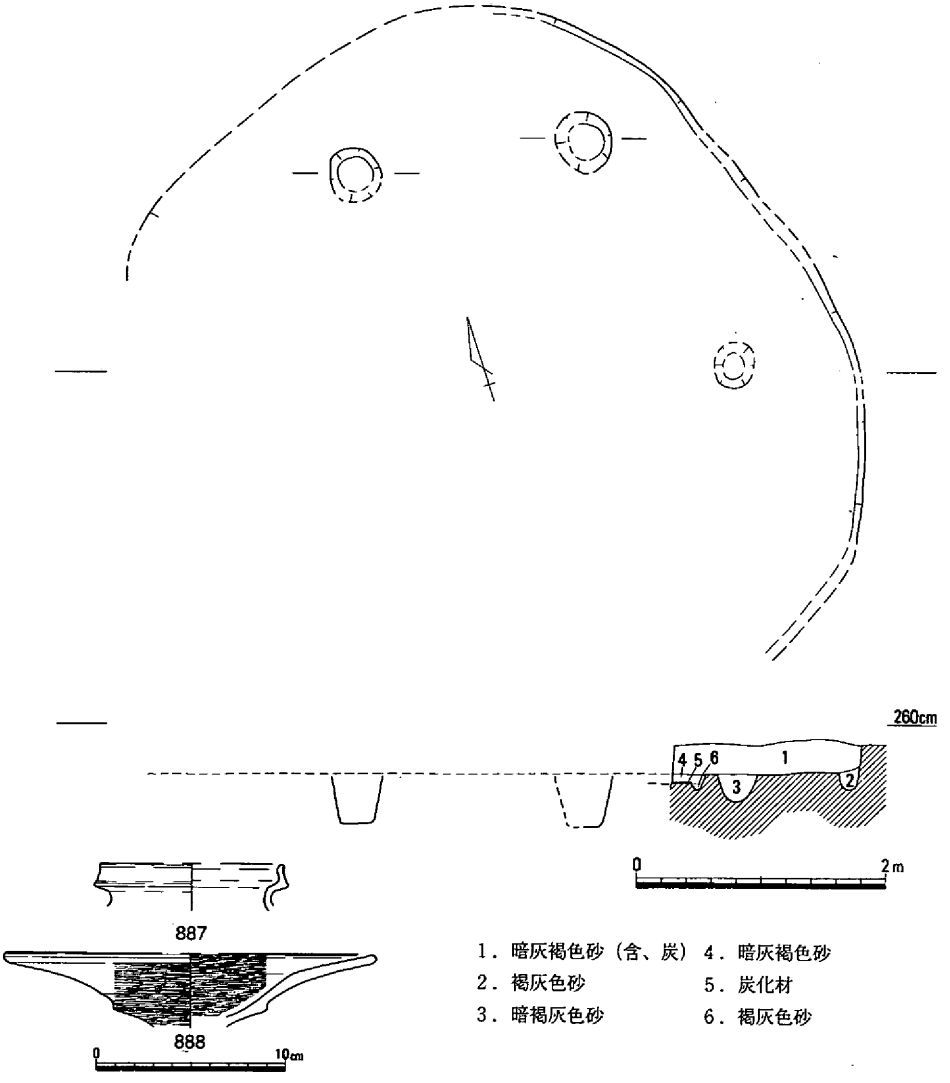




第172図　竪穴住居28A（上）
・28B（下左）（1/80）
・出土遺物②（1/3）



第173図　竪穴住居28出土遺物③（1/2）



第174図　竪穴住居29（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居29（第151・174図）

10Ｃｃ区南東部に位置し、南西部の大半を橋脚によって失っていた。竪穴住居28・67・69、土壙195に削られている。

平面形は隅丸方形に想定され、長軸長６ｍ前後に復元される。深さ26cmが残る側壁はほぼ直立し、床面の海抜高は2.22ｍを測る。壁体溝は平面的には検出できなかったが、断面観察では幅15cm、深さ12cm程度に想定される。柱穴は３本を検出しており、柱構造は６本柱と考えられて、柱間は1.85ｍと2.1ｍである。柱掘り方は長径35～50cmの楕円形で、深さ20～42cmを測る。中央穴その他の住居内構造については不明である。

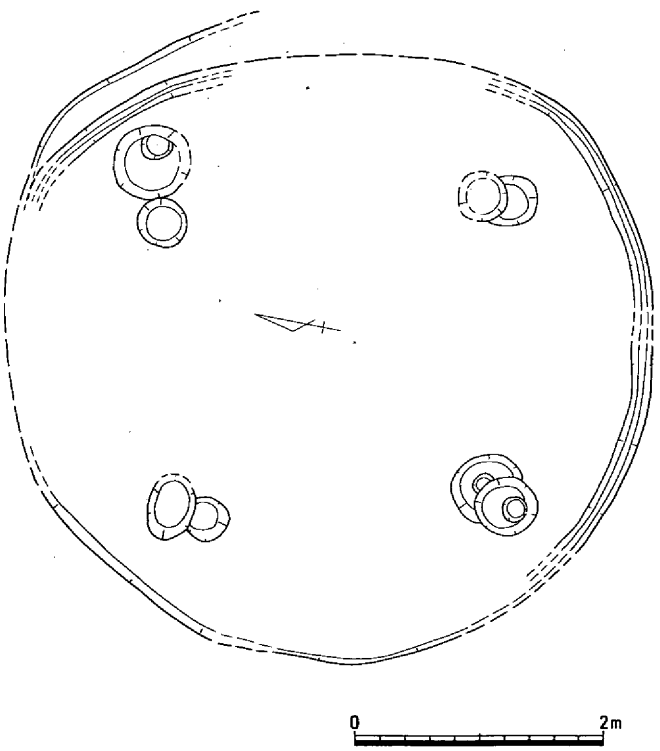
断面観察によれば、南東部の側壁から約1.2ｍ内側に、床面海抜高2.15ｍ前後で壁体溝を伴う竪穴住居の存在が確認されているが、平面的には検出できておらず、構造・規模ともに不明である。竪穴住居29の古段階と考えられる。

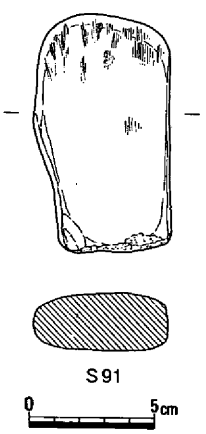
弥生土器の甕887、高杯888が出土しており、時期は弥生時代後期後半に求められる。

竪穴住居30（第151・175～177図、写真図版54）

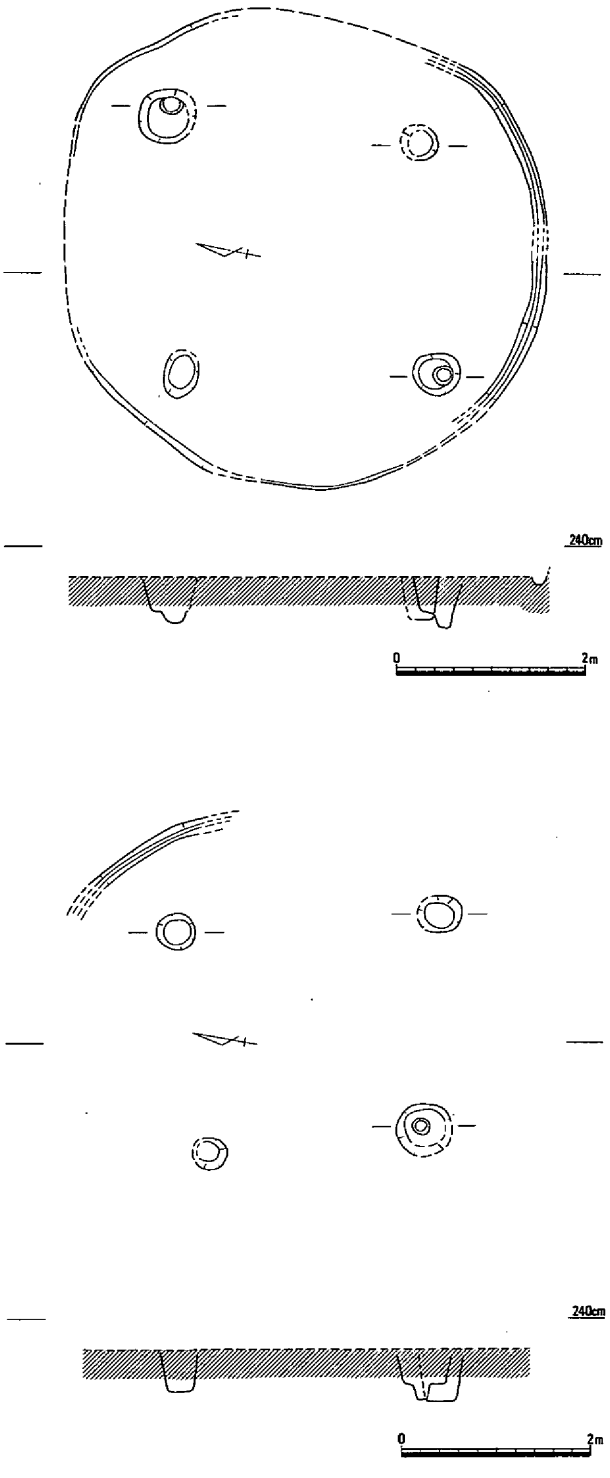
９Ｃｂ区に位置し、竪穴住居73・76、土壙107・108に削られ、竪穴住居31～33、土壙106・201・202を削っている。１回の建替えが行われており、新段階を30Ａ、古段階を30Ｂとする。

竪穴住居30Ａは、不整な円形を呈し、最大径5.2ｍを測り、床面積は19.9㎡に復元される。深さ10cmが残る側壁はほぼ直立し、床面の海抜高は2.08ｍである。南部で





第175図　竪穴住居30（1/60）・出土遺物①（1/3）

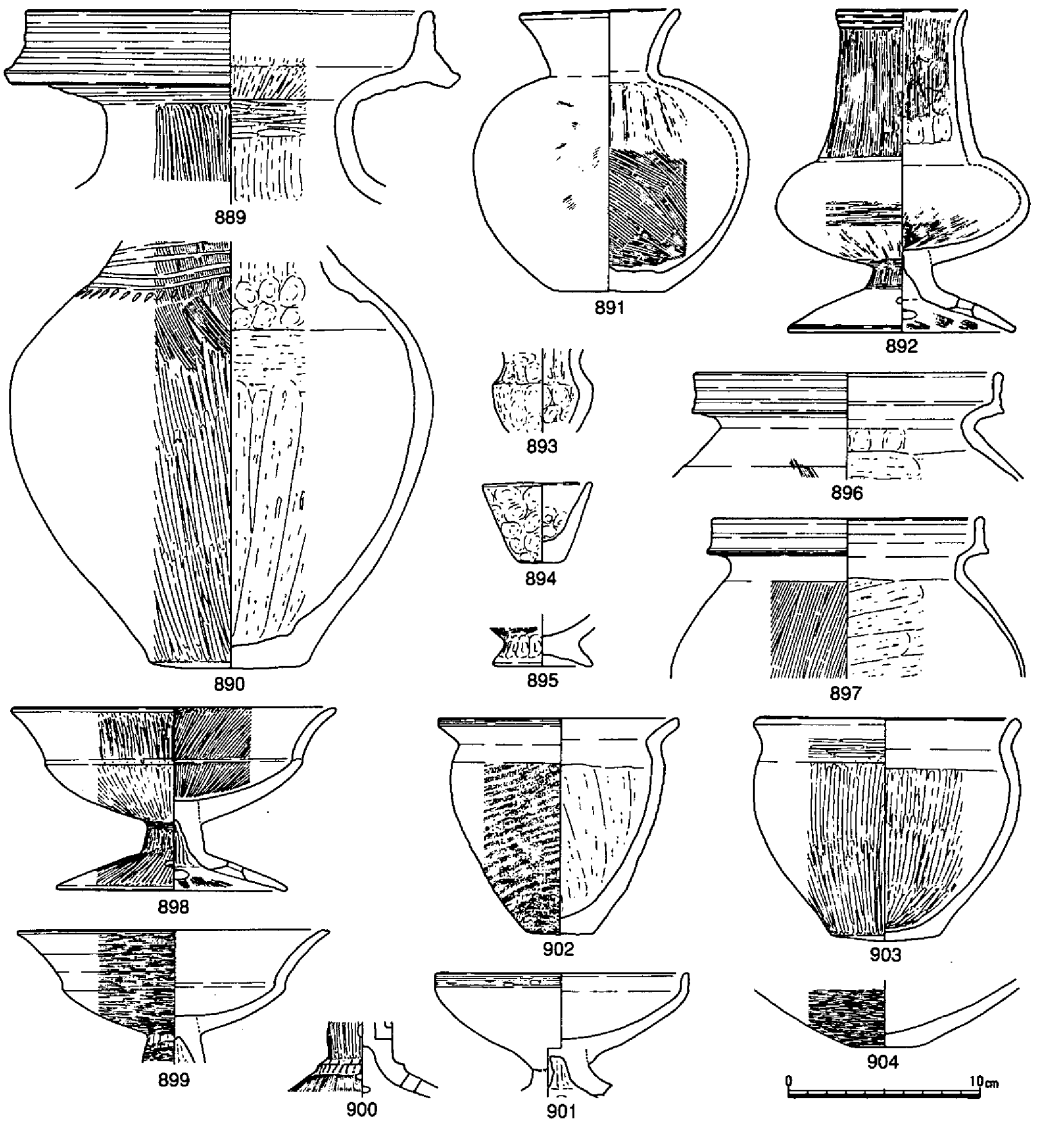


第176図　竪穴住居30Ａ（上）・30Ｂ（下）（1/80）

は幅15cm、深さ10cm程度の壁体溝が検出されている。柱穴は４本を検出しており、柱間は2.4～2.8mで、主軸を南北に置く。この内の２本で柱痕跡を確認しており、柱掘り方は、長径40～56cmの楕円形で、深さ45～52cmを測り、側壁との距離は30～60cmである。中央穴その他の住居内構造は不明である。

竪穴住居30Ｂは、平面形は隅丸方形と想定され、北東部で壁体溝を検出しているが、全体の規模は不明である。４本の柱穴を検出しており、柱間は2.3～2.8mで、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は、長径35～58cmの楕円形を呈し、深さは42～54cmで、側壁との距離は60cmである。中央穴その他の住居内構造は確認されていない。

出土遺物には、弥生土器の長頸壺889・890、壺891、脚付直口壺892、甕896・897・902、高杯898・899・901、装飾高杯900、鉢903・904、手捏ね土器893・894、製塩土器895の他に、敲石Ｓ91がある。甕の口縁端部はほぼ直立して外面に退化凹線がみられ、短脚の高杯では、898・899に口縁部の短い外反がみられるなど、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

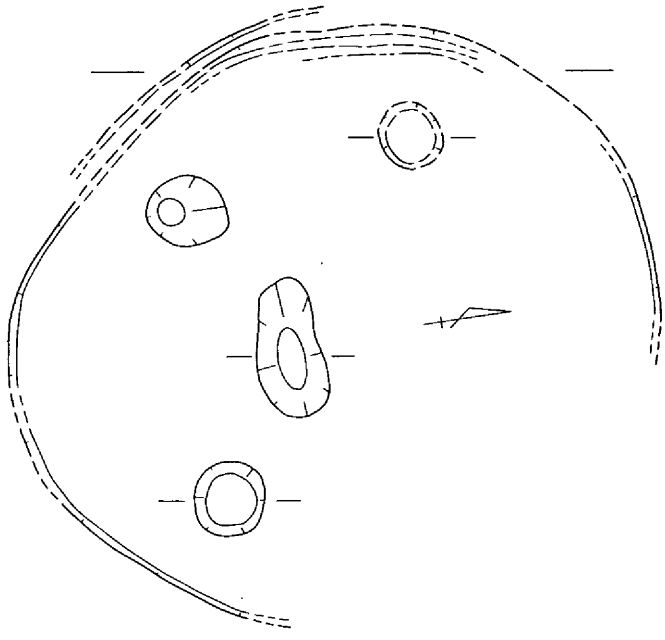


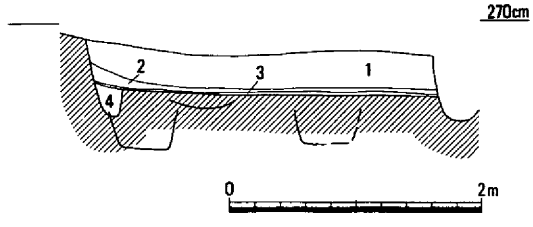
第177図　竪穴住居30出土遺物②（1/4）

竪穴住居31（第151・178・179図、写真図版54）

９Ｃｂ区に位置し、竪穴住居30、土壙107・108・202に削られ、竪穴住居32、土壙200を削っている。

平面形は隅丸方形と想定され、長軸長4.87ｍを測る。深さ46㎝が残る側壁はほぼ直立し、貼床された床面の海抜高は2.11ｍである。西隅部では壁体溝を検出しているが、側壁よりも５㎝以上内側に離れている。柱構造は４本柱と考えられ、３本を検出している。柱間は2.0ｍと2.4ｍで、主軸を東西に置くが、これは平面形から想定される主軸と大きくずれている。柱掘り方



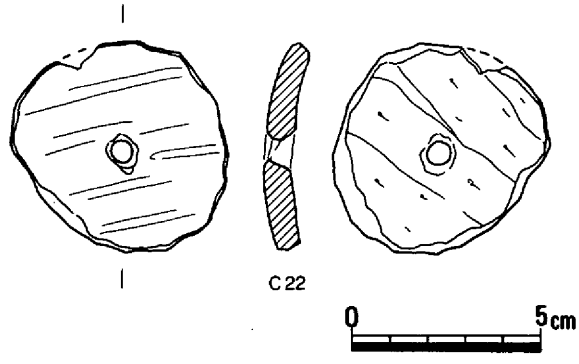


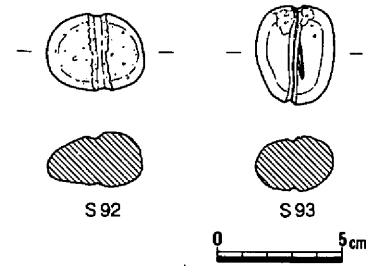
1．暗灰褐色砂（含、黄褐色土小塊多）
2．褐灰色砂（含、炭・灰・焼土多）
3．褐灰色砂（含、淡黄褐色砂小塊多、貼床）
4．暗灰褐色砂（含、淡黄褐色砂小塊）

は長径58～66cmの楕円形で、深さ38～45cmを測り、側壁との距離は40～50cm程度である。中央穴は平面形楕円形を呈し、108×35×７cmの規模である。その他の住居内構造については不明である。２層に分けられる埋土のうちの下層には炭・灰・焼土が多く含まれている。

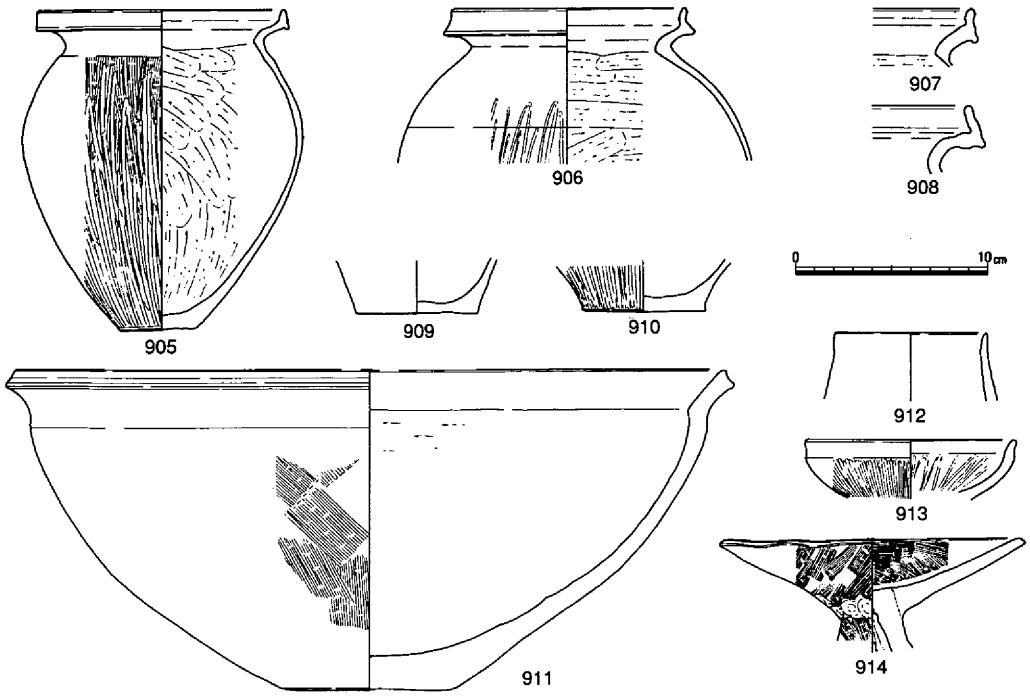
出土遺物には、弥生土器の直口壺912、甕905～910、高杯913・914、鉢911の他に、土器片転用紡錘車Ｃ22、石錘Ｓ92・93等がある。甕の口縁端部はいずれも上方へ摘み上げられており、体部外面には縦方向のヘラミガキが施されている。914は差し込みによって接合されていて、内外面ともハケメ調整で終わっている。

時期は、弥生時代後期後半に比定される。

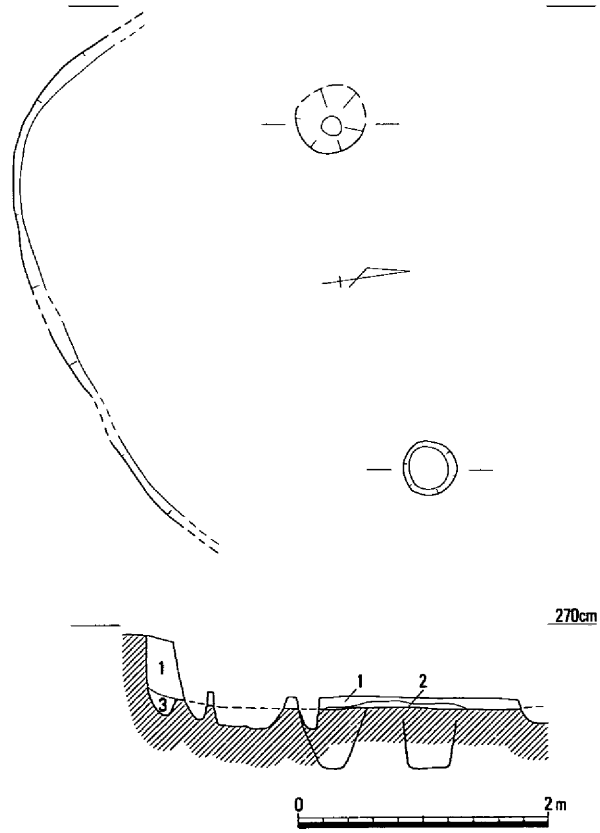


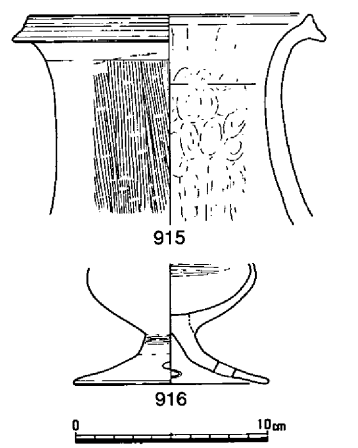


第178図　竪穴住居31（1/60）・出土遺物①（1/2・1/3）



第179図　竪穴住居31
出土遺物②（1/4）





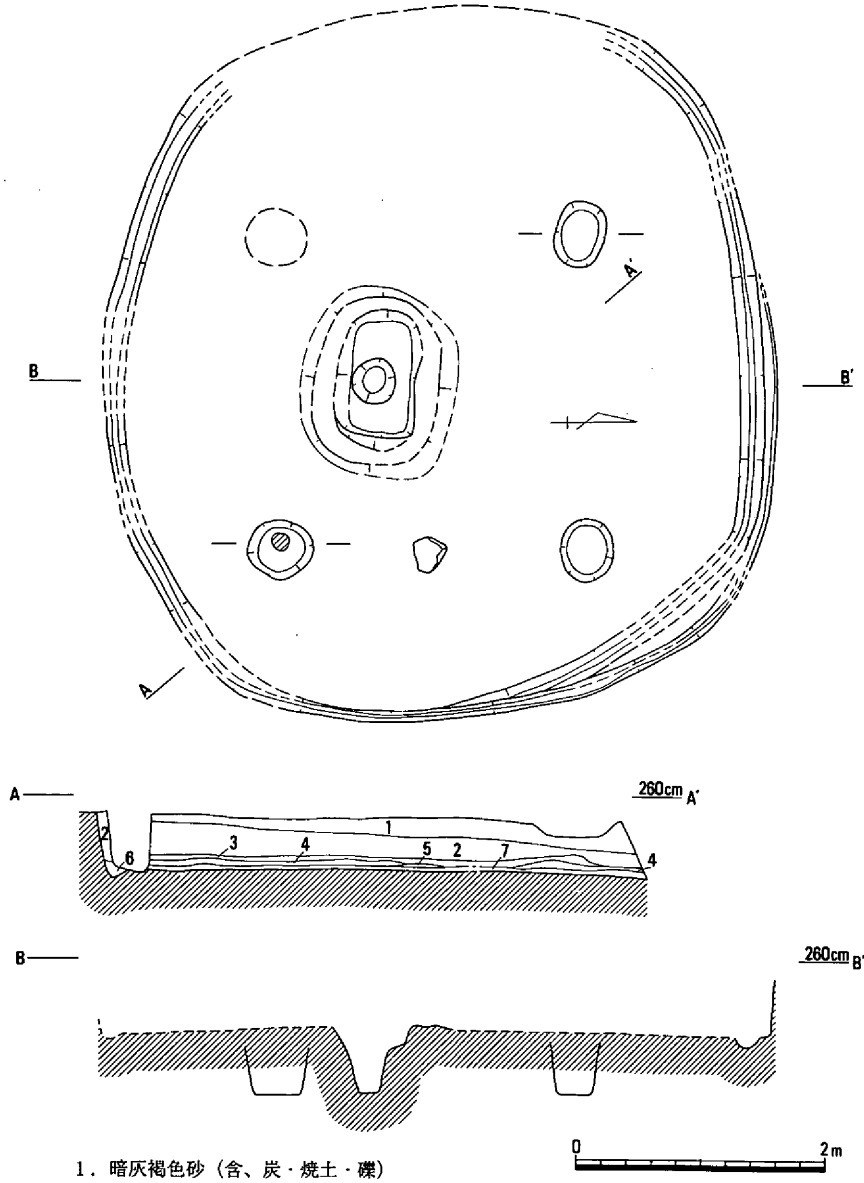
1．暗灰褐色砂（含、炭・焼土）
2．黄褐色砂質土
3．暗灰褐色砂（含、淡黄褐色砂小塊多）

第180図　竪穴住居32（1/60）
・出土遺物（1/4）

竪穴住居32（第151・180図）

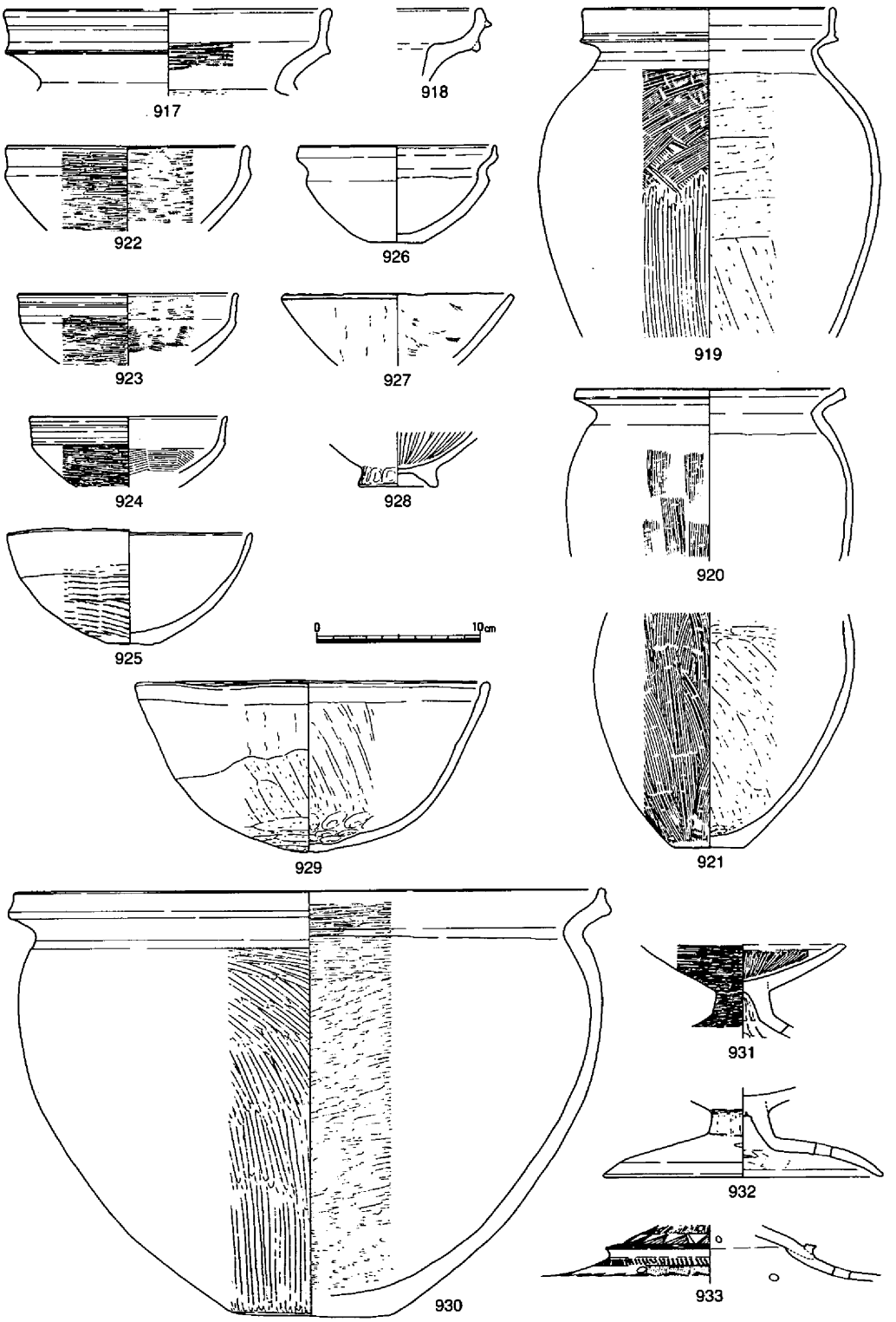
９Ｃｂ区に位置し、竪穴住居30・31・33、土壙109・200に削られている。

平面形は隅丸方形と想定されるが、規模は不明である。最大深さ57cmが残る側壁はほぼ直立し、床面の海抜高は2.05ｍである。柱穴は２本を検出し、柱間は2.8ｍを測るが、側壁からの



1．暗灰褐色砂（含、炭・焼土・礫）
2．灰褐色砂（含、黄褐色砂小塊多、炭・焼土）
3．暗褐灰色砂（含、炭・焼土多）
4．褐灰色砂（含、黄褐色微砂塊多）
5．褐灰色砂（含、炭化材多）
6．暗褐灰色砂（含、黄褐色砂小塊・炭多）
7．黄褐色微砂塊

第181図　竪穴住居33（1/60）



第182図　竪穴住居33出土遺物（1/4）

距離は2.2ｍであり、柱構造は２本柱と考えられる。柱掘り方は、径42cmと55cmの円形で、深さは45cm前後を測る。中央穴その他の住居内構造は不明である。２層に分けられる埋土のうちの上層には、炭・焼土が含まれている。

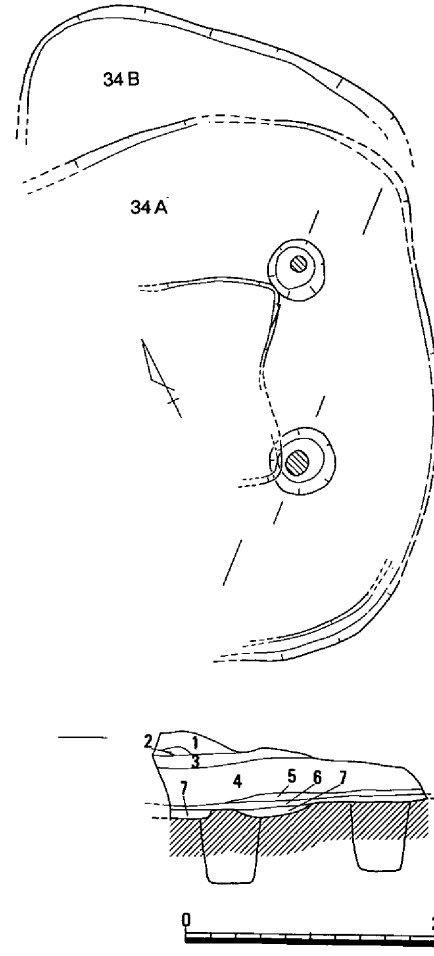
弥生土器の長頸壺915、脚付直口壺916が出土しており、915の頸部外面はハケメ調整され、沈線は認められない。時期は、弥生時代後期後半に比定される。

竪穴住居33（第151・181・182図）

９Ｃ区北半中央部に位置し、竪穴住居32、土壙110を削り、竪穴住居30・34、土壙109に削られている。

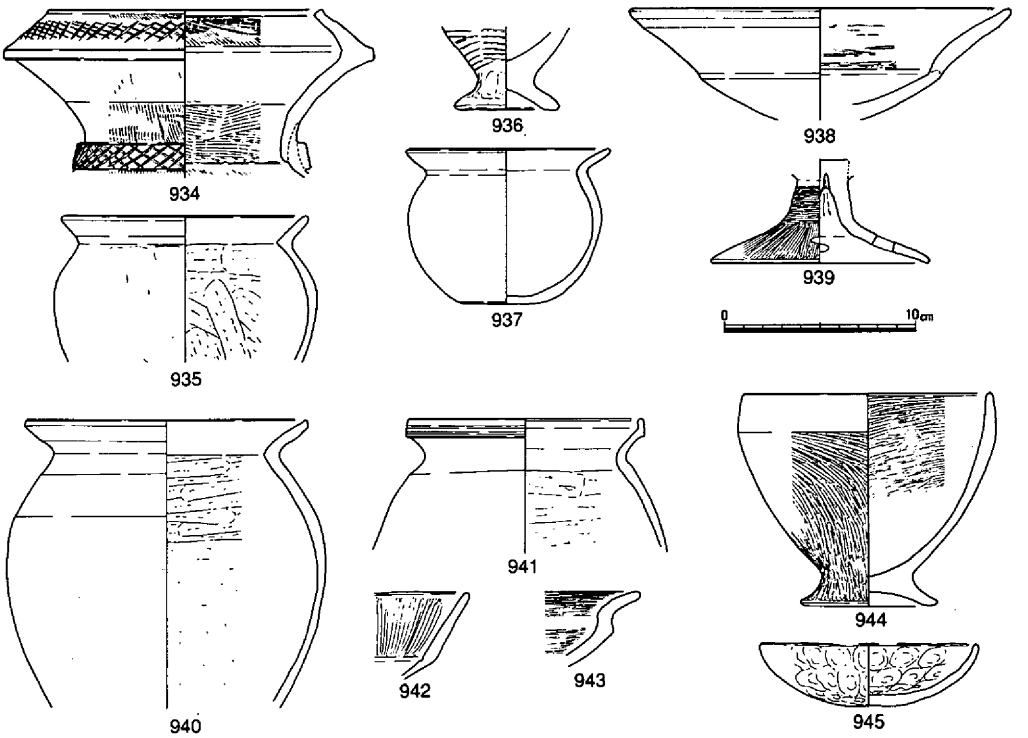
平面形は隅丸方形と想定され、短軸長5.34ｍを測る。深さ最大46cmが残る側壁は直立しており、壁体溝が全周する。壁体溝は北東部において２条が検出されており、１回の建替えが行われたことが想定される。貼床された床面の海抜高は2.0ｍである。柱構造は４本柱と考えられ、３本を検出したが、そのうちの１本には柱痕跡が認められる。柱間は2.4～2.5ｍと想定され、主軸を東西方向に置いている。柱掘り方は、長径50cmの楕円形で、深さは50cmを測り、側壁との距離は60～90cmである。中央穴は、135×98cmの範囲が床面より３cm程度高い土手状部分の内側を、100×63×15cmの規模で長方形に掘りくぼめ、さらにその中に37×34×33cmの楕円形の掘り込みがなされている。この中央穴の東50cmの床面で台石が検出されている他は、住居内構造は不明である。５層に分けられる埋土に炭・焼土が多く含まれている他、床面上の第５層には炭化材も多く見られ、焼失の可能性がある。

出土遺物には、弥生土器の壺917・918、甕919～921、高杯931・932、装飾高杯933、鉢

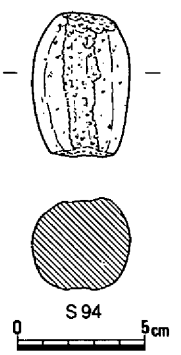


1．暗褐灰色砂（含、炭・製塩土器多）
2．灰黄色粘土
3．褐灰色砂（含、炭・製塩土器多）
4．灰褐色砂（含、黄褐色砂塊・炭多）
5．灰褐色砂（含、黄褐色砂塊多）
6．黄褐色細砂（含、炭・褐灰色砂塊）
7．灰褐色砂

第183図　竪穴住居34（1/60）



第184図　竪穴住居34出土遺物（1/4・1/3）



922～927・929・930、台付鉢928等がある。918は内湾して立ち上がる口縁部外面に2条の突帯が貼り付けられており、壷と考えたが器種も断定しがたく、類例の求めがたいものである。922～924・926・931には水漉粘土が用いられており、932の脚部は内湾して膨らみをもっている。923・924の口縁部に新しく位置づけられる要素をもつが、全体としてはオノ町式併行として捉えうるものと思われる。

竪穴住居34（第151・183・184図）

9Ca区東部に位置し、西半を橋脚によって失っており、竪穴住居33を削っている。1回の建替えが行われており、新段階を34A、古段階を34Bとする。

竪穴住居34Aは、平面形は隅丸方形と想定され、南北長4.32mを測る。深さ25cm程度が残る側壁はほぼ直立し、南隅では幅12cm前後の壁体溝を検出している。側壁から1.1～1.3mの間はベッド状遺構となっており、海抜高2.15mである。中央部の床面は最大幅1.6mを測る方形の範囲で、その北東・南東の角部で柱穴を検出している。柱構造は4本柱と考えられ、柱痕跡に示される柱間は1.6mを測る。柱掘り方は径48～52cmの円形で、深さは55～58cmであり、側壁との距離は80cm前後である。中央穴その他の住居内構造については不明である。

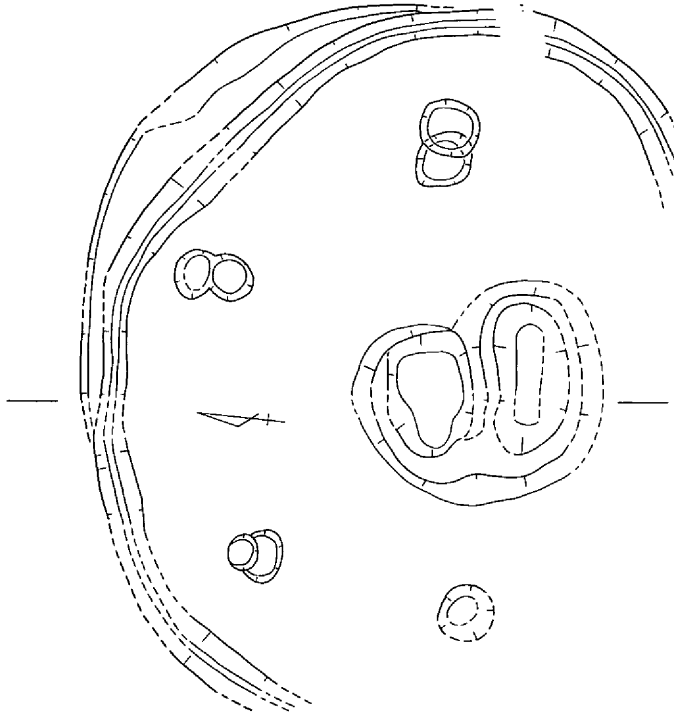
竪穴住居34Ｂは34Ａの北東側に残存しており、平面形は隅丸方形に想定されるが、最大長3.05ｍが知られるのみである。床面は34Ａとほぼ同じ高さで、壁体溝は検出されていない。柱穴その他の住居内構造については不明である。

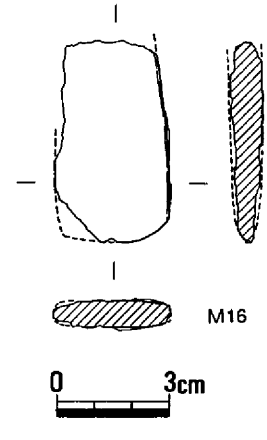
出土遺物のうち、弥生土器の壺（安国寺式）934、甕935、高杯938・939、鉢937、製塩土器936と石錘Ｓ94が34Ａに、甕940・941、高杯942、鉢943・945、台付鉢944が34Ｂにそれぞれ伴うもので、時期は弥生時代後期後半（オノ町式併行）に求められる。

竪穴住居35（第151・185～187図、写真図版54）

９Ｃｄ区に位置し、土壙42・43・45を削り、竪穴住居86、土壙114・212～214に削られている。１回の建替えが行われており、新段階を35Ａ、古段階を35Ｂとする。

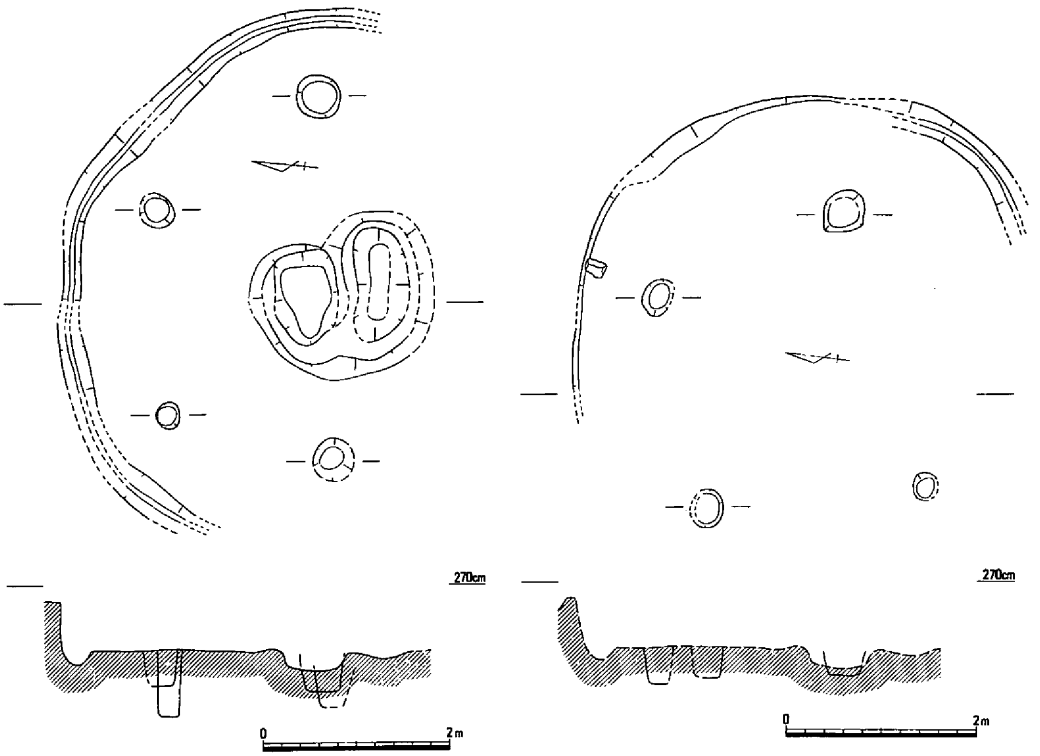
竪穴住居35Ａは、平面形は隅丸方形ないし不整な円形と想定され、最大長5.82ｍを測り、壁体溝が巡らされている。床面の海抜高は2.0ｍで、４本の柱穴が検出され、柱間は1.8～2.2ｍを測って６本柱と考えられる。





1．灰褐色砂
2．灰褐色砂（Mn）
3．灰褐色砂
（含、炭・灰・焼土多）
4．灰褐色砂（Mn）
5．暗灰色粘質微砂（含、炭）
6．炭

第185図　竪穴住居35（1/60）・出土遺物①（1/2）



第186図　竪穴住居35Ａ（左）・35Ｂ（右）（1/80）

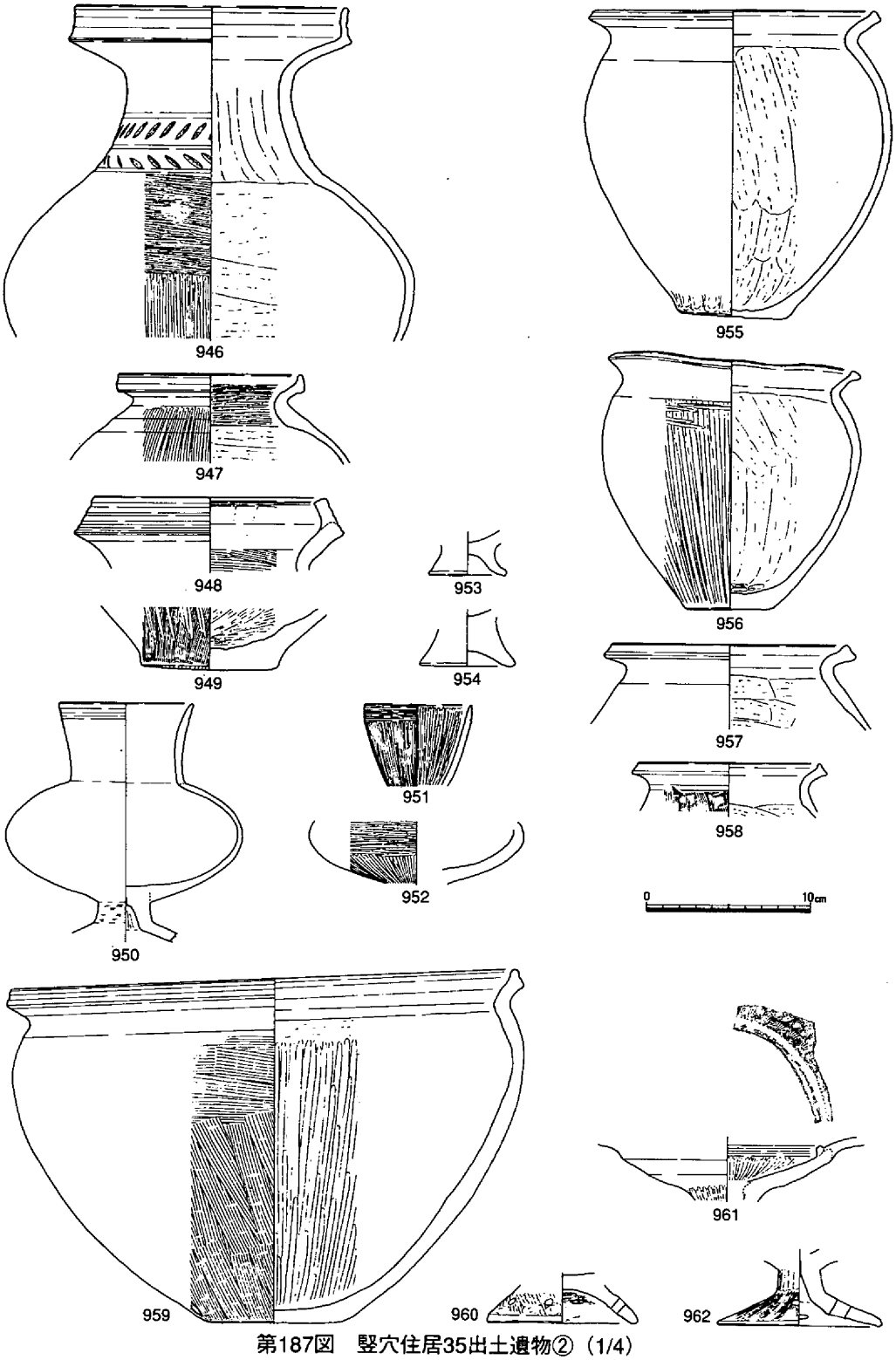
柱掘り方は、長径30～50cmの楕円形で深さ35～70cmを測り、側壁との距離は50cm程度である。中央施設は、土手状遺構に囲まれて、100×70×24cmの不整長方形を呈し、その南に接して同じく土手状遺構に囲まれた120×65×５cmの浅い土壙が付属する。

竪穴住居35Ｂは、平面形は隅丸方形に想定されるが、最大短軸長4.2m程度が知られるのみである。南東部で壁体溝が検出されており、柱構造は４本柱で、柱間は2.0～3.0mを測り、主軸を東西に置いている。柱掘り方は、長径30～52cmの楕円形で、深さ30～42cmを測り、側壁との距離は60～80cmである。中央穴その他の住居内構造は不明である。

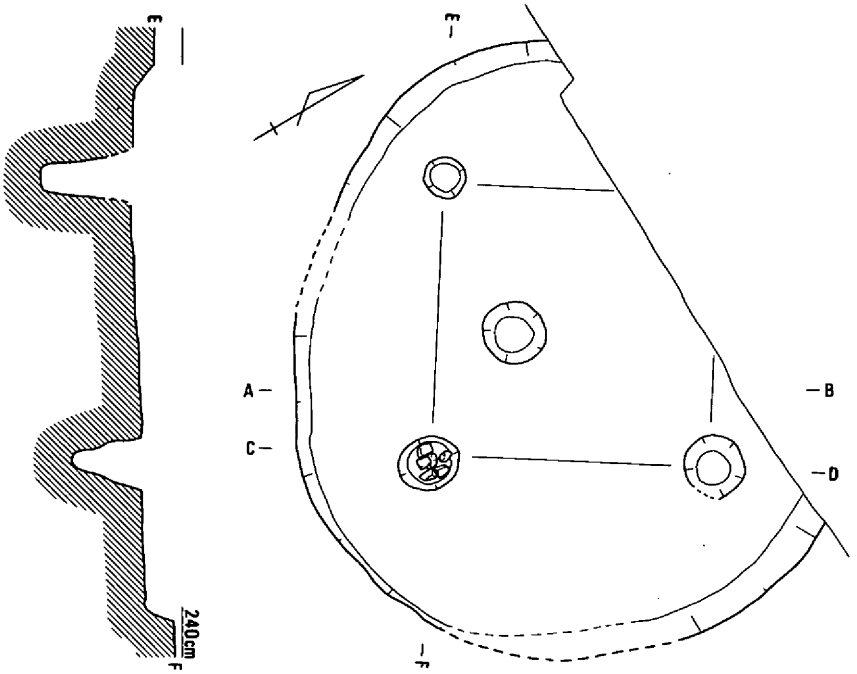
出土遺物には、弥生土器の壺946～949、脚付直口壺950～952、甕955～958、高杯961・962、鉢959、台付鉢953・954・960、板状鉄斧M16がある。946・948に西部瀬戸内系の要素が認められるが、時期は上東・鬼川市Ⅲ式併行期として捉えられる。（光永）

竪穴住居36（第151・188・189図、写真図版55）

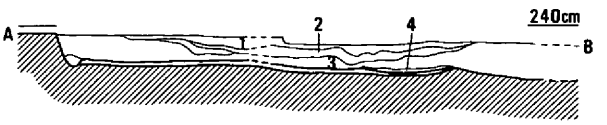
９Ｃａ・ｄ区において存在が確認された住居であるが、橋脚基礎により北側の約１／３が切られており、明確な状態で検出できなかった。床面は検出面から約25cmの深さにおいてほぼ水平を呈する面と３本の柱穴、さらに中央穴を検出した。ただし壁体溝の有無については確認出来なかった。

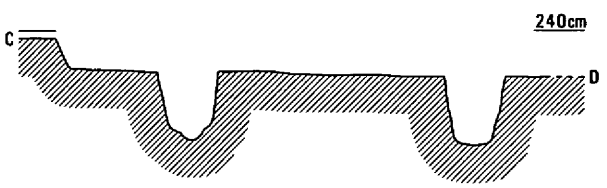


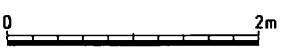
第187図　竪穴住居35出土遺物②（1/4）

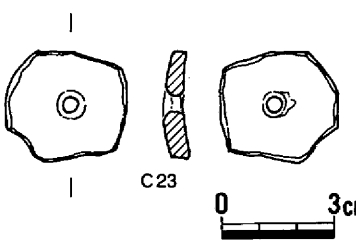


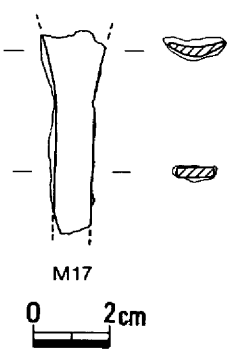
1．灰黄色土
2．炭
3．黄灰色土（含、炭多）
4．暗灰色土



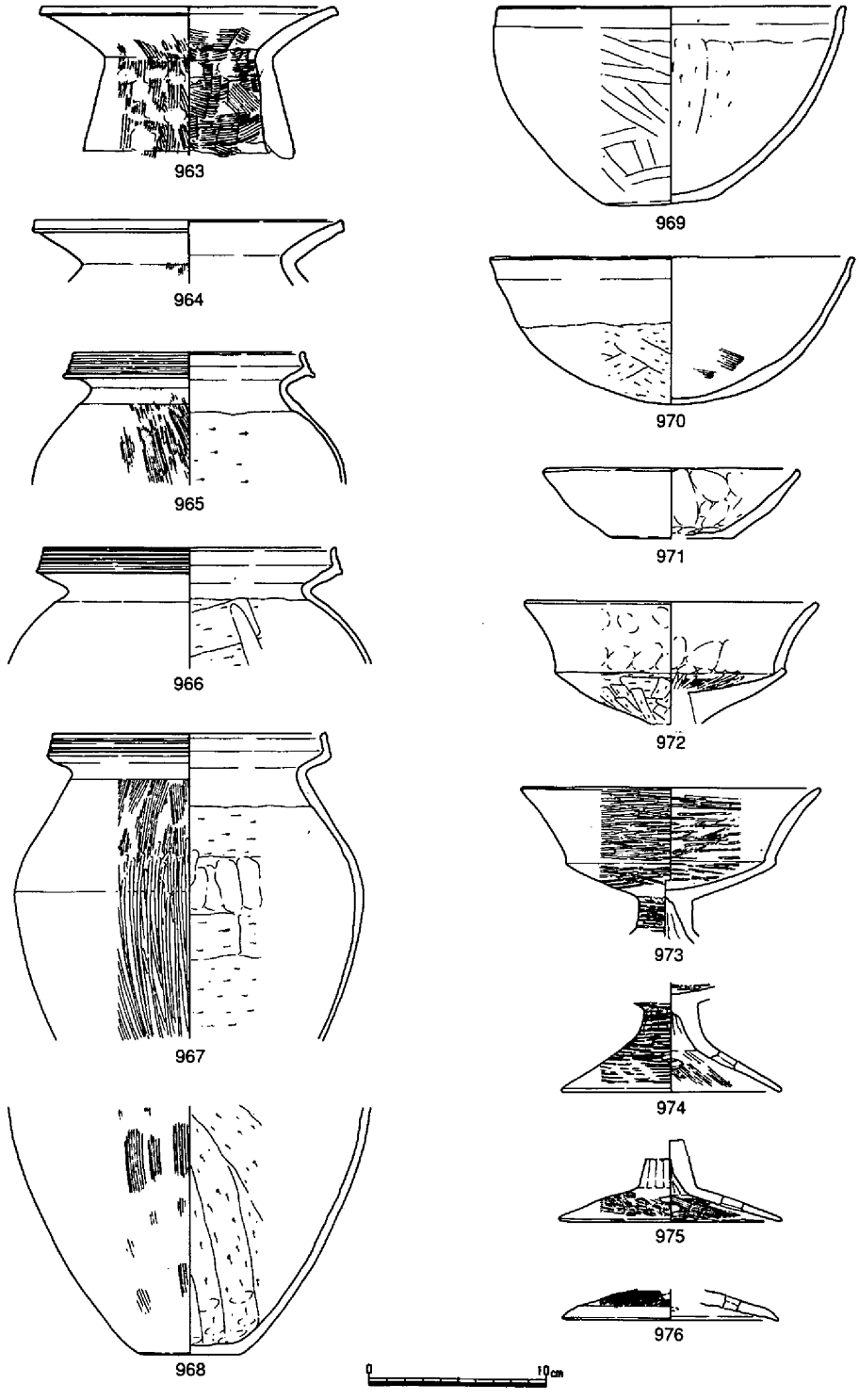




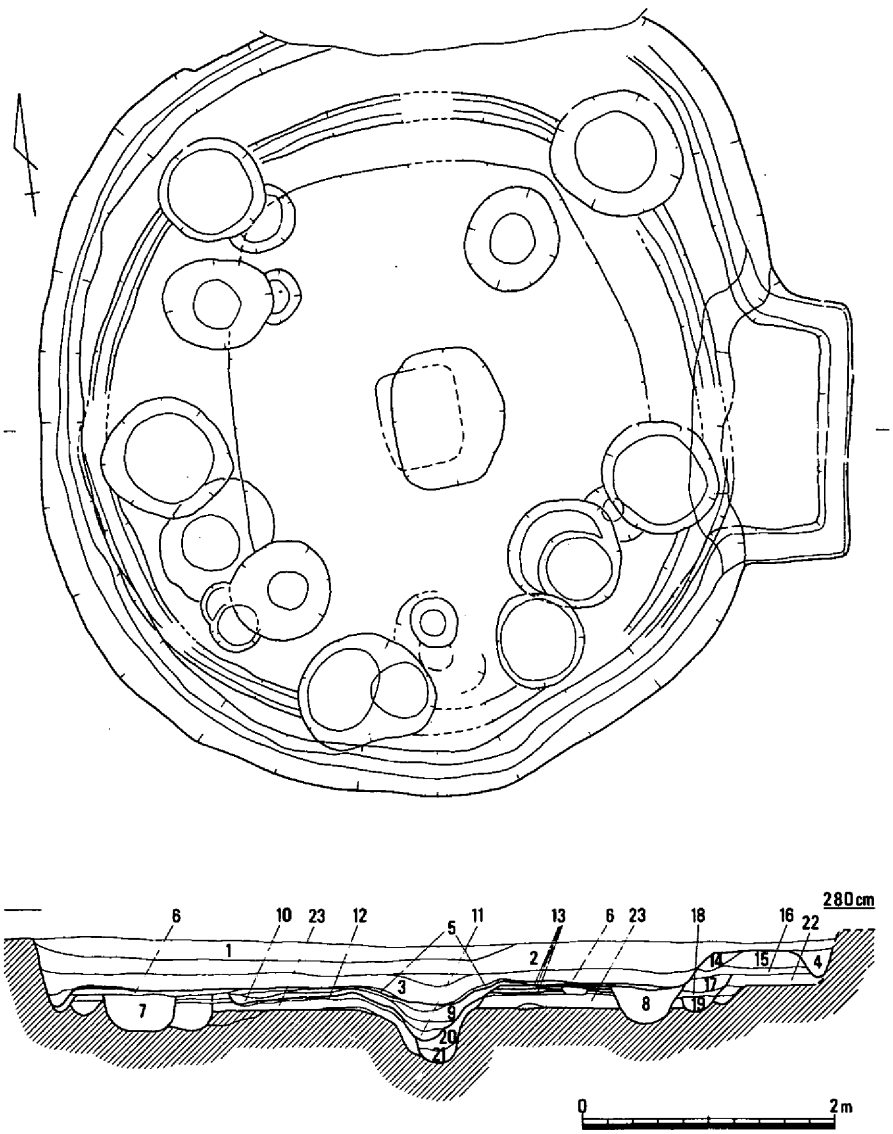




第188図　竪穴住居36（1/60）・出土遺物①（1/2）

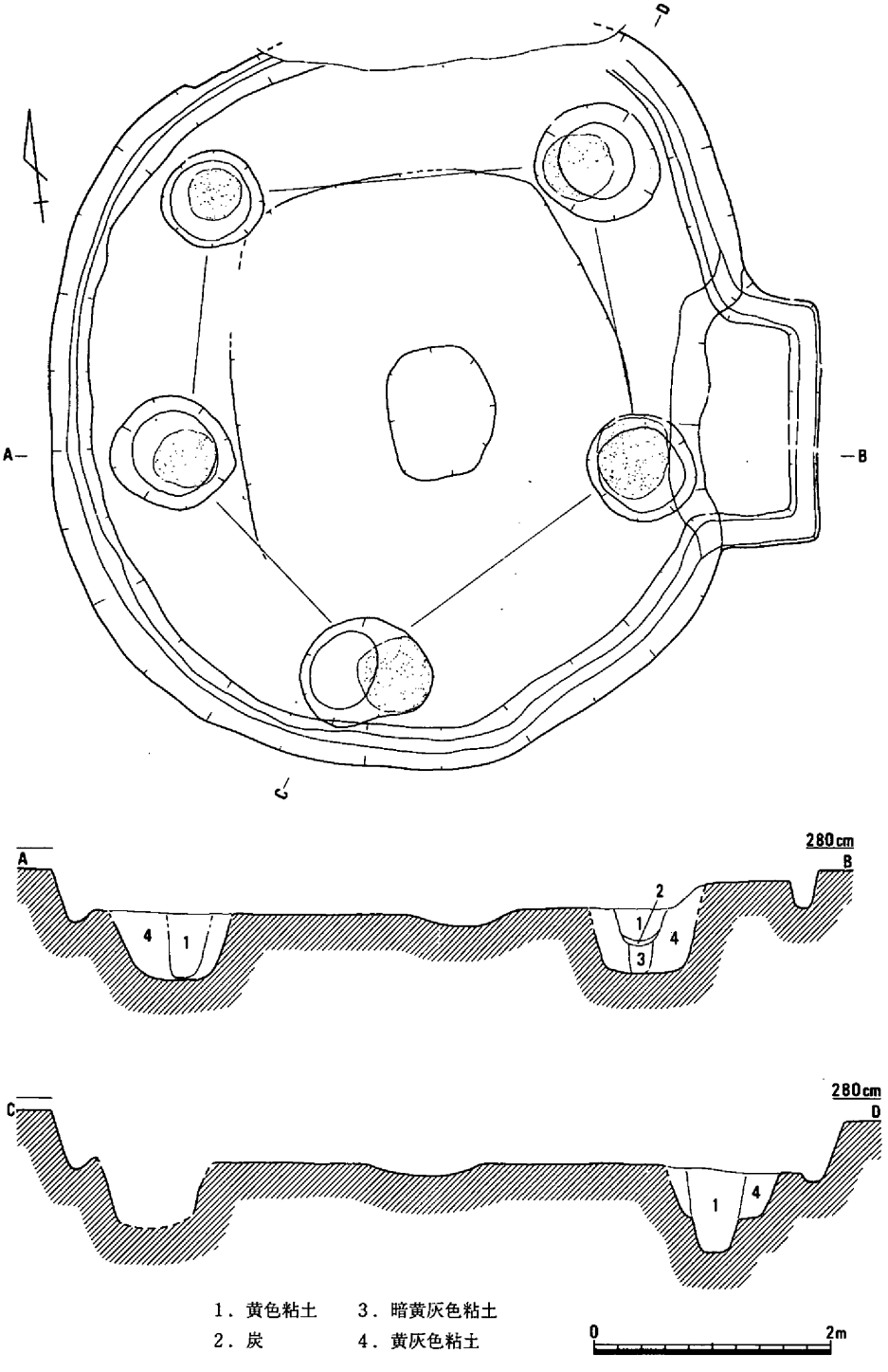


第189図　竪穴住居36出土遺物②（1/4）

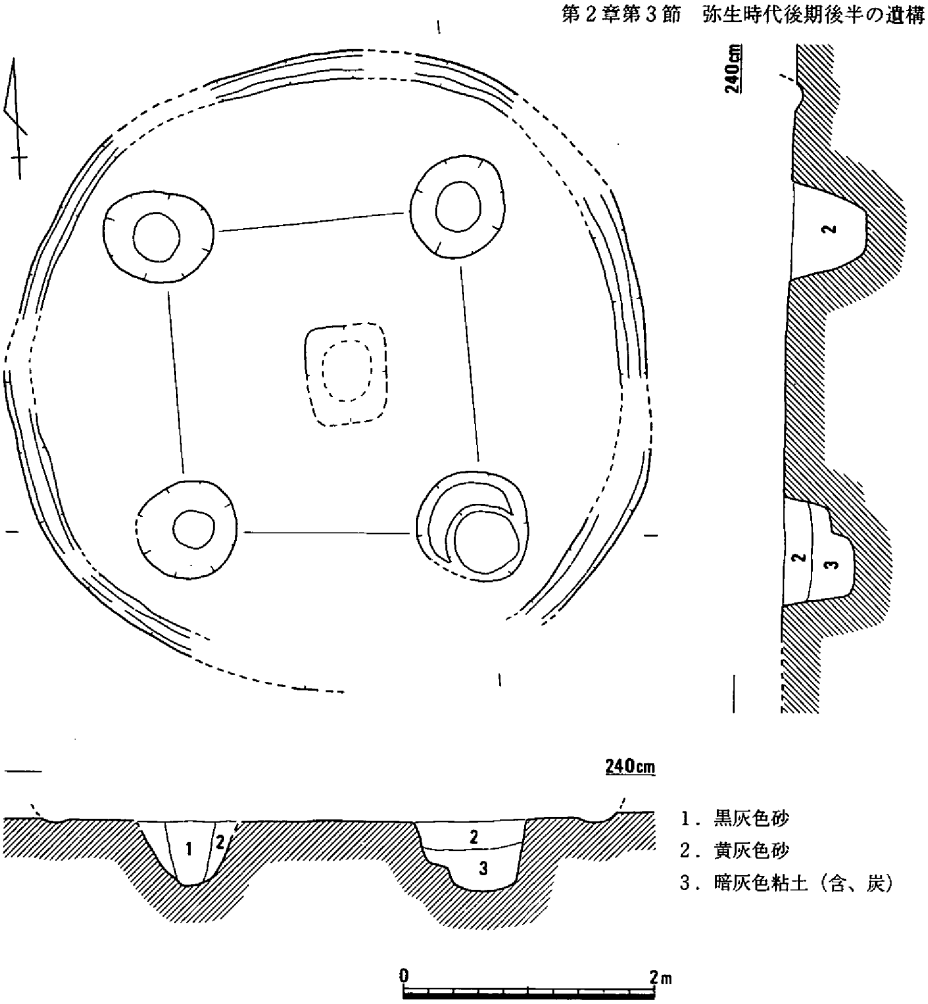


1．黄灰色粘土
2．灰色粘質土
3．暗灰黄色粘質砂
4．暗灰色土
5．炭
6．黄色土
7．黄灰色粘土
8．黄灰色粘土
9．炭・焼土塊
10．黄色粘土
11．炭
12．炭
13．黄色粘土
14．黄色土塊多
15．黄色土塊
16．灰黄色土
17．暗灰黄色土
18．明黄色土
19．暗灰褐色土
20．黄灰色土
21．炭
22．暗灰色土
23．暗黄色土

第190図　竪穴住居37（1/60）



第191図　竪穴住居37Ａ（1/60）



第192図　竪穴住居37Ｂ（1/60）

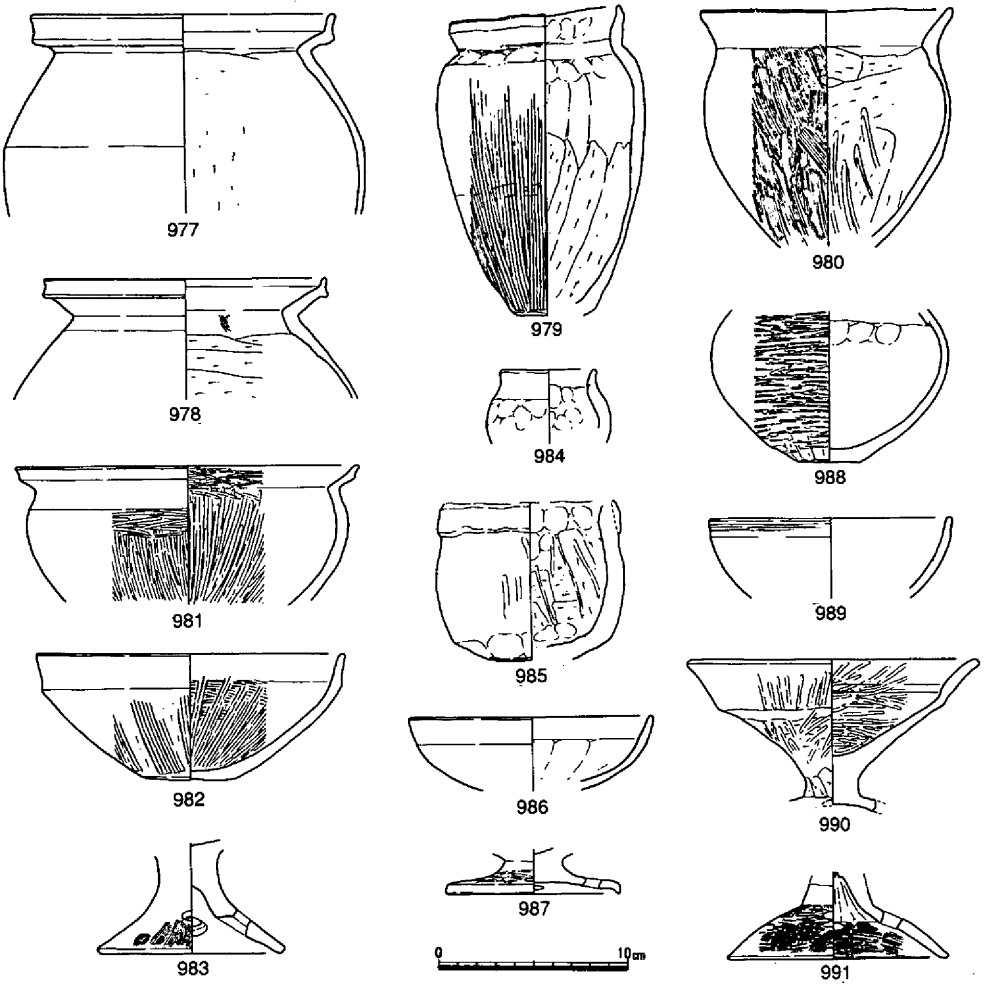
柱穴は、径30～40cm、深さ50～70cmのものでそれぞれ2.20mの芯心距離をもって見られた。

住居は、覆土の第２層に炭と焼土塊の互層が比較的厚い堆積を見せており、埋没過程で周辺から排出された焼土塊の投棄がなされたようである。

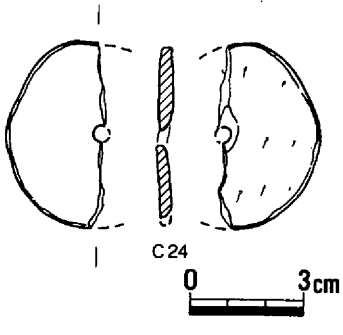
出土遺物には、壺、甕、高杯、鉢等の土器類と土製紡錘車、鋤が確認された。甕の口縁部外面にはヘラ描きによると見られる沈線文965と一部櫛描きによる沈線文966・967の２者の共存が見られた。高杯は、脚部の短脚化に反比例して口縁部の外方への伸びが外反気味に長くなる。こうした特徴はオノ町Ⅱから下田所の段階によく見られるものであるが、ただ底部はまだ平底を呈していることで、後期後半の範疇に位置づけられよう。

竪穴住居37（第151・190～194図、写真図版56）

９Ｂｂ・ｄ区において海抜2.55mで平面の検出がなされた。北側の一部が地下水の湧水によ



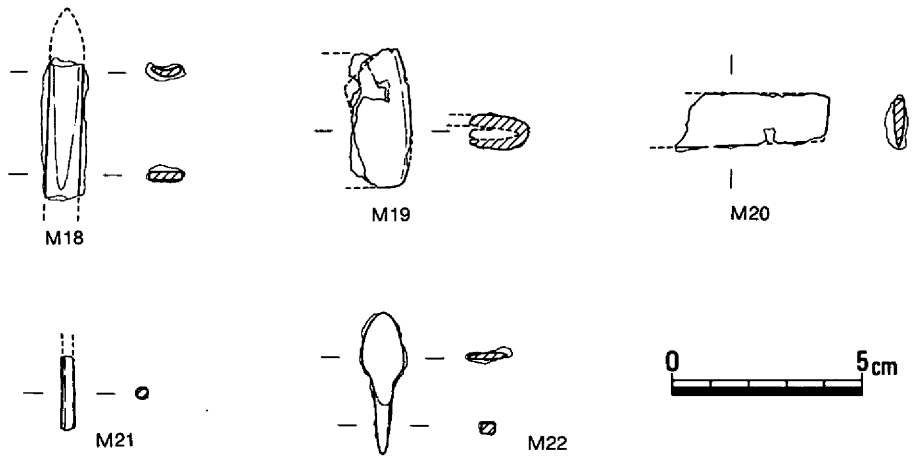
第193図　竪穴住居37出土遺物①（1/4・1/2）



る浸蝕で崩落していたが、基本的にはおよそ長軸長6.65m、幅5.77mを測る楕円形プランの住居で、これには東側の一部に長さ約２m、幅60～80cmを測る長方形の造出しが取り付いた形状を示すものであった。

調査の結果、この住居には床面下層にさらに１軒の住居が中央穴を共有するかの状況で存在することが判明した。おそらく建て増しによる拡張と考えられ、時間的な隔たりはないと認識する。したがって、この新旧の住居をそれぞれ竪穴住居37Ａ・竪穴住居37Ｂとして、以下に概要説明を行う。

竪穴住居37Ａは、先述したとおり楕円形の住居東側に長方形の造出しをもったもので、５本の柱によって構成されていた。造出しは、壁際「コ」字状に壁体溝を廻らせ、幅約１mの平坦



第194図　竪穴住居37出土遺物②（1/2）

面を版築状に形成したもので、床面との比高差約20cmを有する。柱穴は、径80～100cm、深さ50～70cm規模の掘り方のものが５本、2.00mから3.00mの柱間をもって検出された。中央穴は楕円形で長さ1.10m、幅90cmで深さ約10cm程度の浅いものであった。被熱面は確認されなかったが、中央穴周辺には焼土塊と炭の広がりが認められた。なお、５本の柱穴に囲まれた状況で不明瞭ながら落ちが部分的に認められた。ベッド状の高まりであった可能性も考えられる。

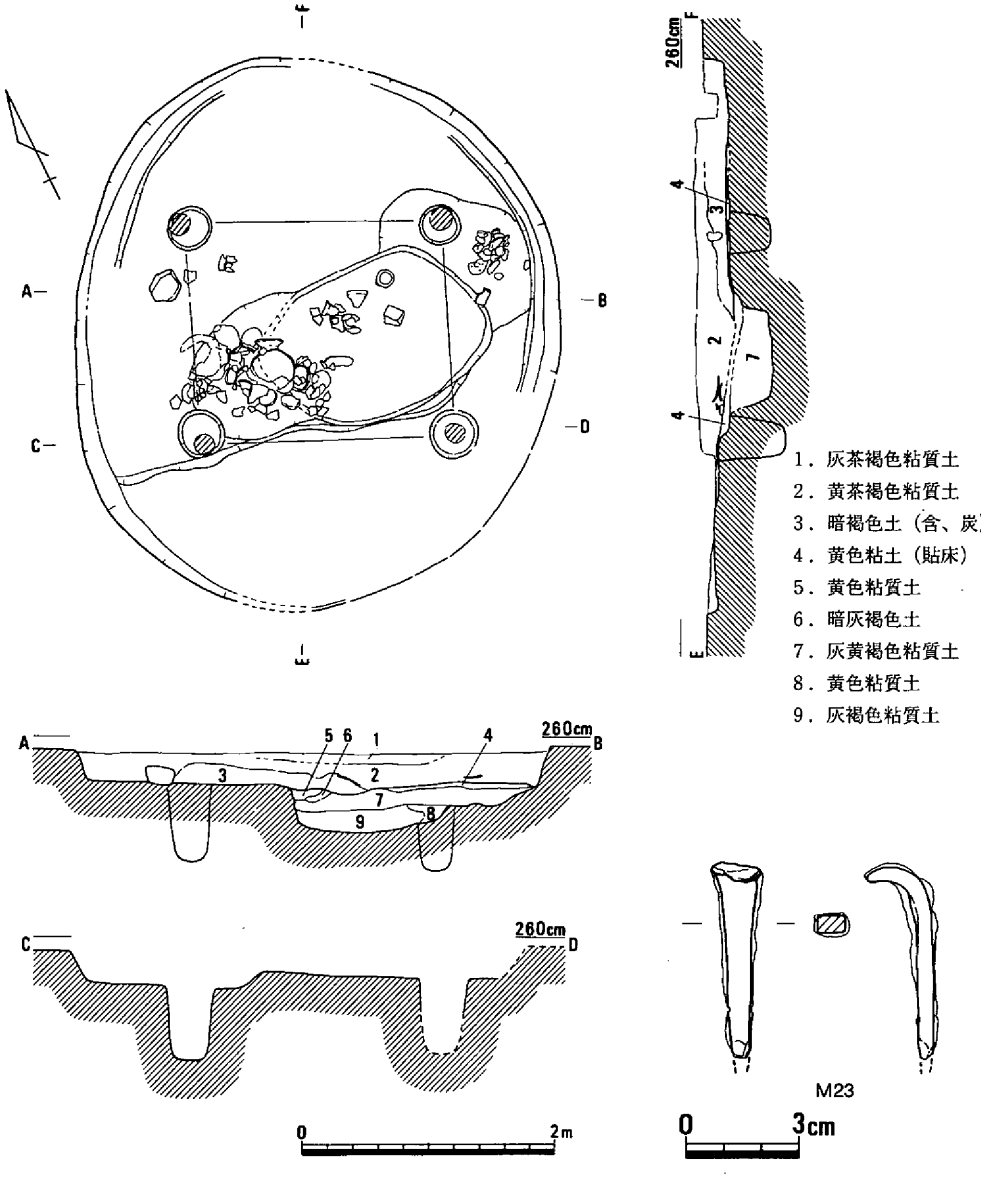
竪穴住居37Ｂは、37Ａの床面約10cm下層で検出されたもので、壁体溝、柱穴、中央穴等の遺存が確認された。規模はおよそ5.10mを測り、平面形は円形であった。柱穴は４本がそれぞれに芯心で2.30～2.50mの距離を測った。

なお、中央部において竪穴住居37Ａと37Ｂとの床面の間には２～３枚の貼床とこれに伴っての炭の堆積が認められ、部分的な床面の修復が窺われた。

出土遺物としては、竪穴住居37Ａの床面および柱穴内に遺存していた少量の土器と金属器があげられる。土器には、壺、甕、高杯、鉢等の器種が認められ、それは型式的には才ノ町Ⅰ併行期のものに比定されることで、後期後半の範疇での位置づけが考えられる。

竪穴住居38（第151・195～197図、写真図版55）

９Ｂｄ区において海抜約2.50mで平面楕円形を呈する住居として検出された。規模は、長軸長4.40m、幅3.82mを測った。床面には、南側に全体の約１／３程度のベッド状を呈する高位面とその北側に低位面の存在が知られた。平面検出面からの深さは、高位面で15～20cmを、低位面で25～30cmを測って検出された。また中央部分において性格不明ながら不整形な落ち込みとそれに入れられた状況で数多くの土器の存在が確認された。そのほか床面からは、柱穴４本と不明瞭ながら壁体溝の存在が認められた。柱穴は、長軸方向が芯心で約1.70～1.80m、短軸

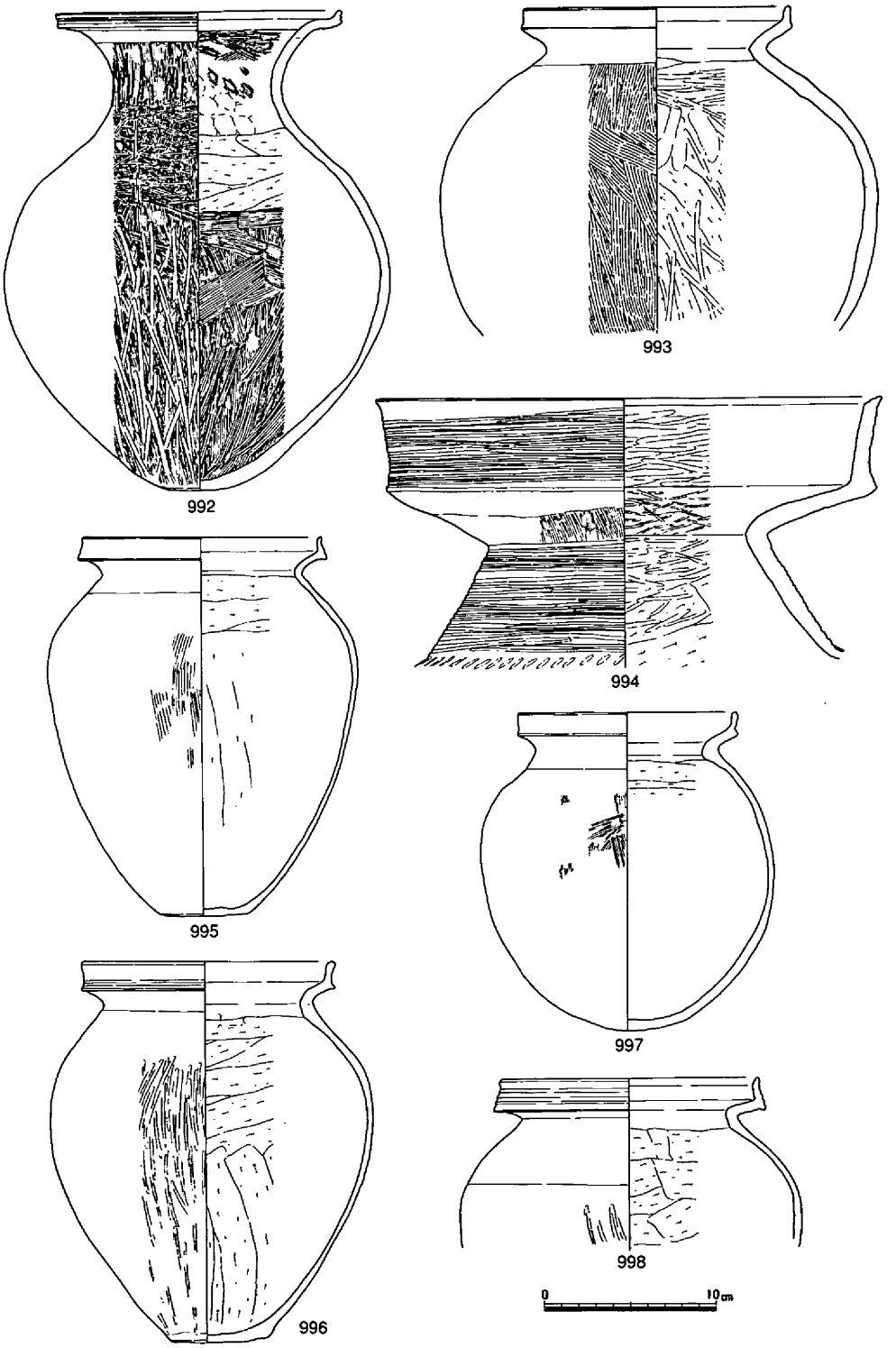


第195図　竪穴住居38（1/60）・出土遺物①（1/2）

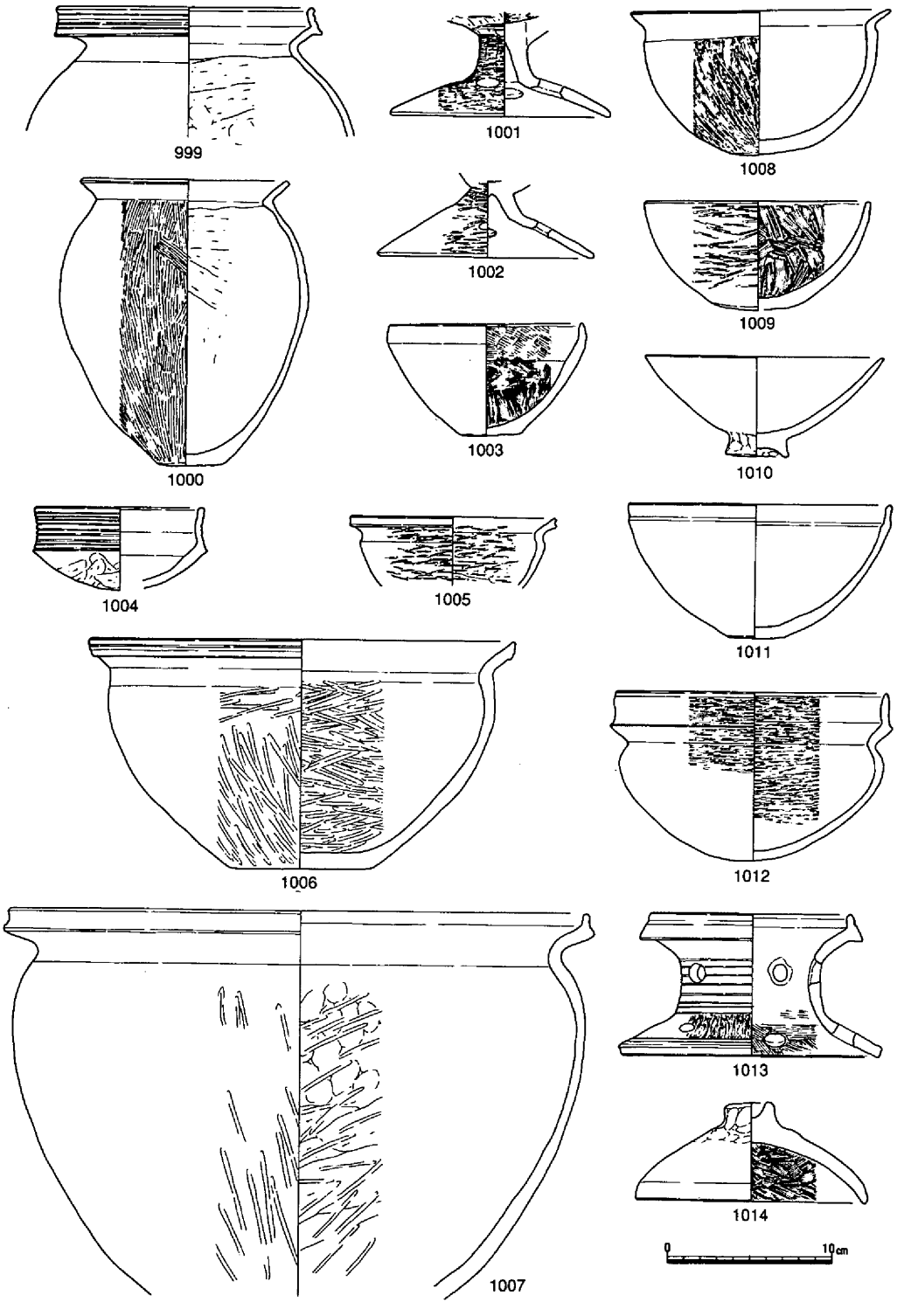
方向で約2.00mと住居平面と柱穴の在り方が逆の現象を見せるものであった。

出土遺物には、比較的まとまりをもった土器と鉄器１点M23が確認された。土器には内面ヘラケズリの後ハケメ調整が施された長頸壺992、胎土中に雲母を多く混和し、口縁部を長く上方に拡張した後頸部を含め細かなヘラ描き沈線で施文された壺994を含み、さらに備後南部地域によく見られる直立する口縁部をもった鉢1004も見られた。

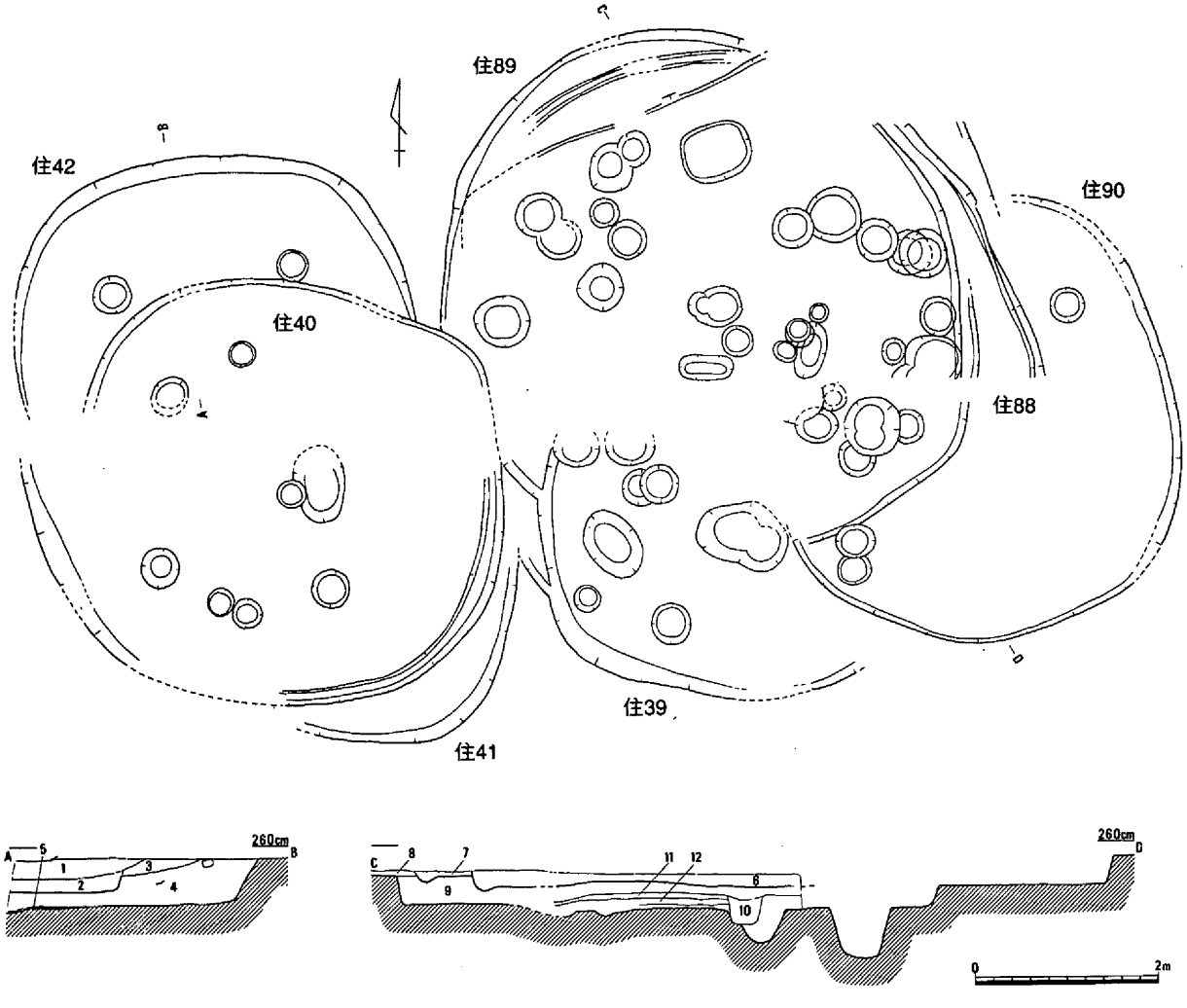
時期は、判然としないがおおむね才ノ町Ⅱ式併行期への位置づけが考えられる。



第196図　竪穴住居38出土遺物②（1/4）

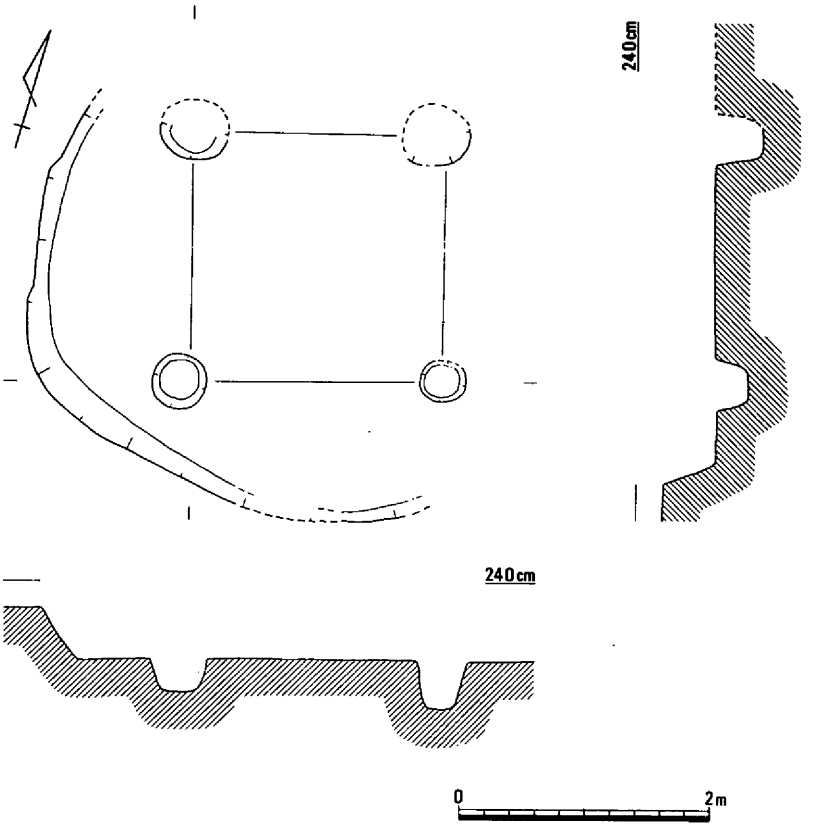


第197図　竪穴住居38出土遺物③（1/4）



1．明茶褐色粘質土
2．暗褐色粘質土（含、炭多）
3．暗褐色粘質土
4．灰黄褐色粘質土
5．炭
6．灰褐色土
7．明黄褐色土
8．淡黄褐色土
9．黄褐色土
10．灰黄褐色土（含、炭）
11．灰褐色土
12．明黄色土（貼床）

第198図
竪穴住居39～42・88～90（1/80）



第199図　竪穴住居39（1/60）

竪穴住居39（第151・198・199図）

９Ｂｄ区から８Ｂａ・ｂ区にかけての比較的狭い範囲内に弥生時代後期後半から古墳時代前半までの住居が７軒縦横に重複して所在しているのが確認された。ところが、密な重複状況と相俟ってこの地点が調査区境であったことで側溝・土手等が東西方向にこれら住居群の中央部をほぼ横断するような状況で掘開・残存し、それぞれの住居が同一面で同時に調査できなかった。これにより住居間の関係は一層複雑なものとなり、それぞれの住居の検出および全体像の把握により困難を来した。また、調査時には地下水の湧水とこれに付随すると考えられる土砂の液状化様の現象により調査不可能な状態にあった。

竪穴住居39は、こうした重複住居群のなかにあって最古に位置づけられるものである。ただし、検出されたのは南側に弧状にめぐる肩と壁の一部と柱穴にすぎなかった。床面、壁体溝、中央穴については湧水事情等で検出はおろか断片的な確認すら出来なかった。わずかに検出された４本の柱穴は、検出面からの深さ約25～35cmを測るものであった。

時期については、遺物の出土が見られなかったことで明確ではないが、古墳時代の竪穴住居

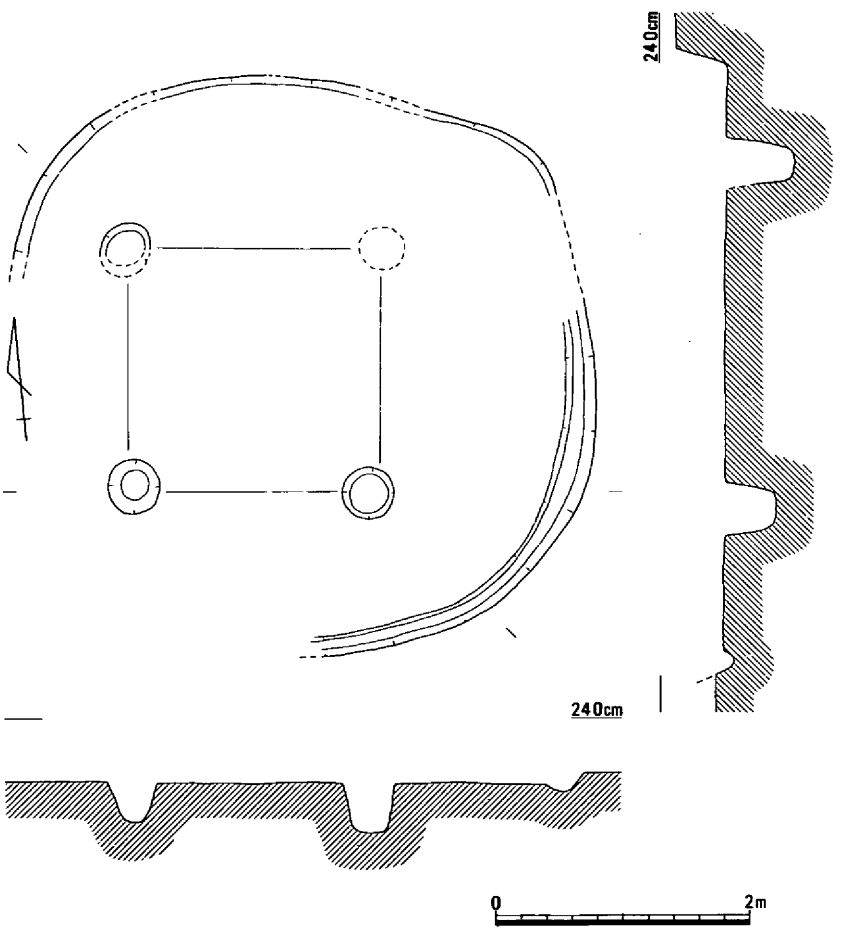
100・101に切られた状態で、また近接する弥生時代後期後半の竪穴住居40とほぼ同一面で検出されたことによって、およそ後期後半への位置づけが推測された。

竪穴住居40（第151・198・200・201図）

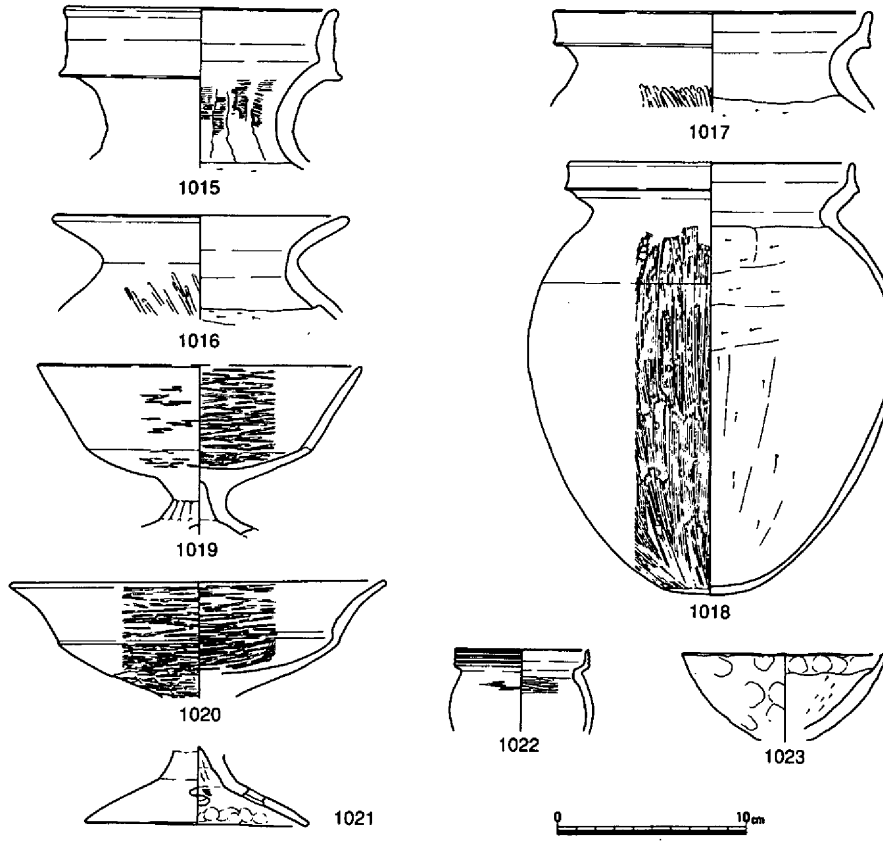
竪穴住居39の西約40cmに近接した位置に検出された。規模については検出面がそれぞれの部分で異なるため明確にできないが、遺存部分から推測すればおよそ長軸長4.60m、幅4.55mが考えられる。平面隅丸方形を呈する住居である。

床面と思われるレベルからは柱穴と壁体溝の一部が検出された。柱穴は東西・南北方向に4本が、径40～50cm、深さ30～50cmの規模で見られた。柱穴の芯心距離は、住居の長軸・短軸の在り方に合った様相を見せ、長軸側で2.00m、短軸側で1.80mを測った。

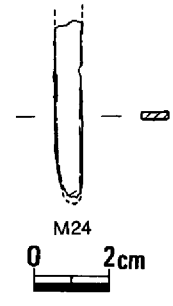
出土遺物は、床面に遺存した状態のものは見られず、ほとんどが覆土中からの出土であった。土器には、壺1015・1016、甕1017・1018、高杯1019～1021、鉢1022・1023等の器種が見られ



第200図　竪穴住居40（1/60）



第201図　竪穴住居40出土遺物（1/4・1/2）

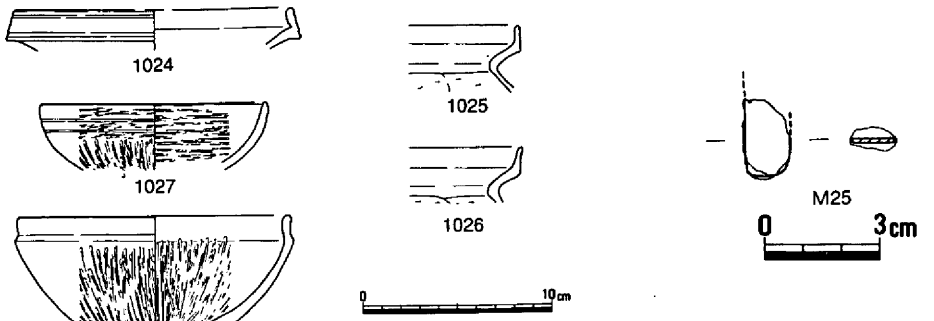


た。壺1015は、長頸壺であるが口縁端部を相当上部に拡張したもので当該地域には多く見られない器種である。1016は、おそらく「ハ」字状の頸部を有する壺と考えられ、外面にはヘラミガキが施されていた。甕は、底部の在り方が平底から丸底への移行形態を示すものの、口縁端部をわずかに拡張した程度である。高杯は、いずれも脚部が短脚化し、口縁部は逆に長く伸びる傾向を示すものである。鉢は、小型品である。1022は、精選された粘土を胎土とする。型式的には、オノ町段階のものに類似するものと考えられる。したがって、時期的には後期後半へ位置づけられよう。

竪穴住居41（第151・198・202図）

竪穴住居40の南東側で検出されたが、遺構の遺存状況が不良でわずかに弧状を呈する肩と床面状の平坦面が検出面から約26cmの比高差をもって検出された程度で、詳細については不明である。したがって、検出遺構についての詳細図は割愛した。

出土遺物としては、小片ながら甕、鉢の土器と不明鉄器が１点検出された。甕1024が床面



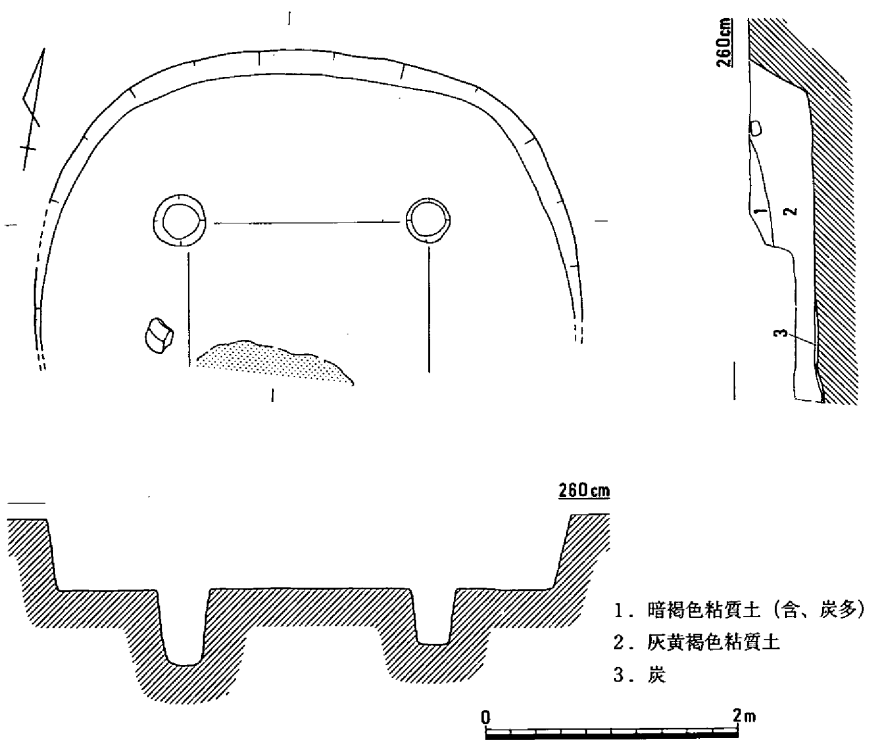
第202図　竪穴住居41出土遺物（1/4・1/2）

から出土した他はいずれも覆土中からの出土である。鉢1028は、覆土中とはいえほぼ完全な状態での遺存とあって、本来住居に伴っていた可能性が高いと考える。甕1025と1026は古墳時代段階での混入と考える。

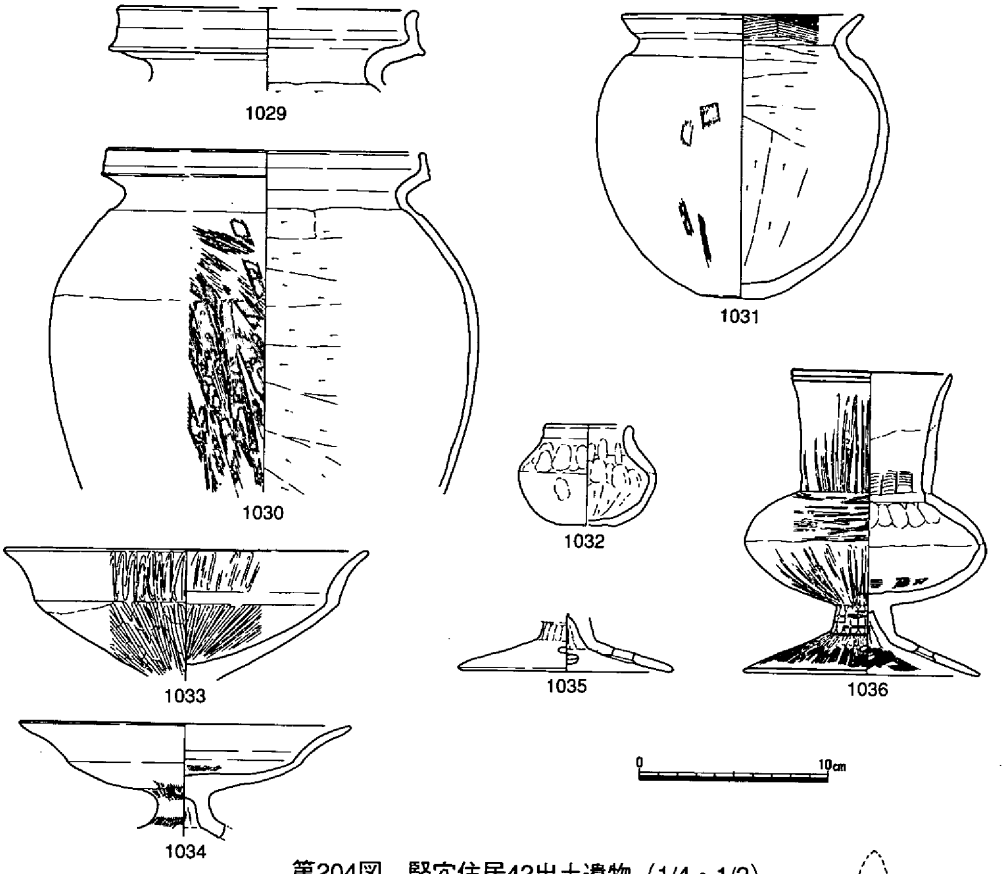
時期は、甕1024がオノ町Ⅰ併行と推測されることで、後期後半に位置づけられよう。

竪穴住居42（第151・198・203・204図）

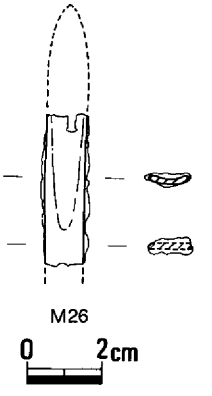
竪穴住居40の北側において住居の１／２以上が竪穴住居40によって切られた状況で検出された。



第203図　竪穴住居42（1/60）



第204図　竪穴住居42出土遺物（1/4・1/2）



竪穴住居40による掘削は床面に達せず覆土中で止まり、床面への影響は見られなかったが、先述したように側溝・土手による掘開および残存等で住居南側部分の追及がまったく不可能な状態であった。

検出できたのは、おもに柱穴２本と住居中央と考えられる部分の床面からは炭の広がりが、さらにその広がり西側で作業台としての角礫の遺存である。壁体溝は、平面・断面においても確認されなかった。

柱穴は、およそ東西方向に径35～40cm、深さ40～60cmを測る２本の柱穴が約2.00mの芯心距離をもって見られたことで４本と想定される。

住居埋積状況は、最上層に炭を多く含んだ粘質土の存在が見られるが、全体的には単層で埋積が完了しておりおそらく一時に意図的に埋没させられたものと考える。

住居内からは、土器８点と鉄器１点が検出された。土器は、短頸壺1029と甕1030には口縁部を拡張した程度でまだヘラ描沈線は見られず、高杯は口縁部の外面への拡張がまだ顕在化していない段階である。鉄器は、先端部を欠損するが先端近くの断面がレンズ状を呈しているこ

とで鉋と認識した。

時期的には、土器がオノ町Ⅰ併行と考えられることで、後期後半に位置づけられよう。

竪穴住居43

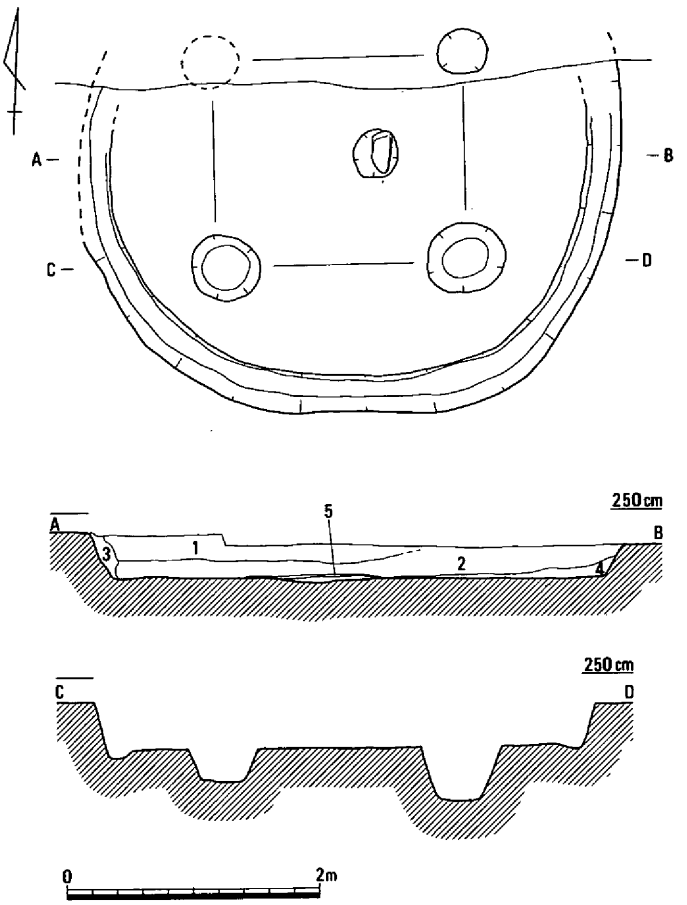
(第151・198・205図)

９Ｃａ・ｂ区に跨がった位置で、北側が調査時の側溝および土手によって一部検出出来なかった住居である。検出できたのは全体のおよそ２／３であった。

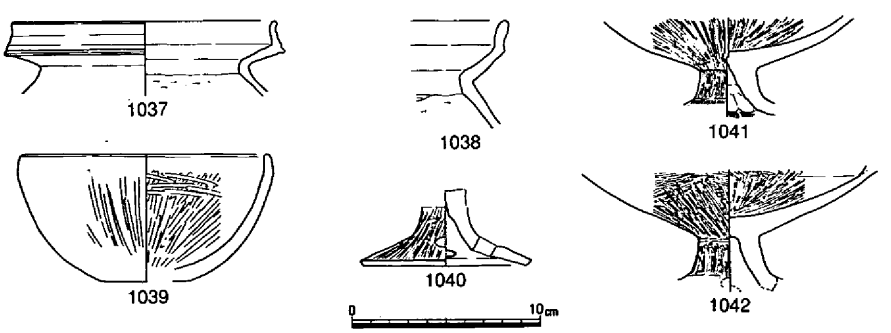
住居は、海抜2.35ｍで平面が検出され、平面規模は長軸長でおよそ4.20ｍの径を有するもので、平面円形を呈するものであった。

床面は、検出面から約35㎝下層で見られ、床面からは柱穴、壁体溝、中央穴等の遺存が確認された。

柱穴は、先述の竪穴住居



1．黄色砂質土
2．灰黄色砂質土
3．灰黄色粘質土（含、炭・焼土）
4．灰黄色砂質土（含、焼土塊）
5．炭



第205図　竪穴住居43（1/60）・出土遺物（1/4）

37Ｂ・39・40と同様に東西・南北方向に主軸を有するもので、径40～60cm規模の掘り方で東西2.00m、南北約1.60mの芯心距離を測った。中央穴は、住居のほぼ中央部において径約35cmを測る窪み状に検出され、中には長さ30cm大の角礫が入れられてあった。また、この周辺には焼土塊と灰の散在が認められたが、被熱面の存在については確認出来なかった。

出土遺物としては、小片ながら甕、高杯、鉢等の器種が確認された程度であった。甕1037は、口縁部を上方に拡張するもののヘラ描沈線は施されず、高杯も杯部の在り方が直線的でなく長く緩やかな弧を描く点等から型式的には上東・鬼川市Ⅲ式併行として差支えないものと考える。

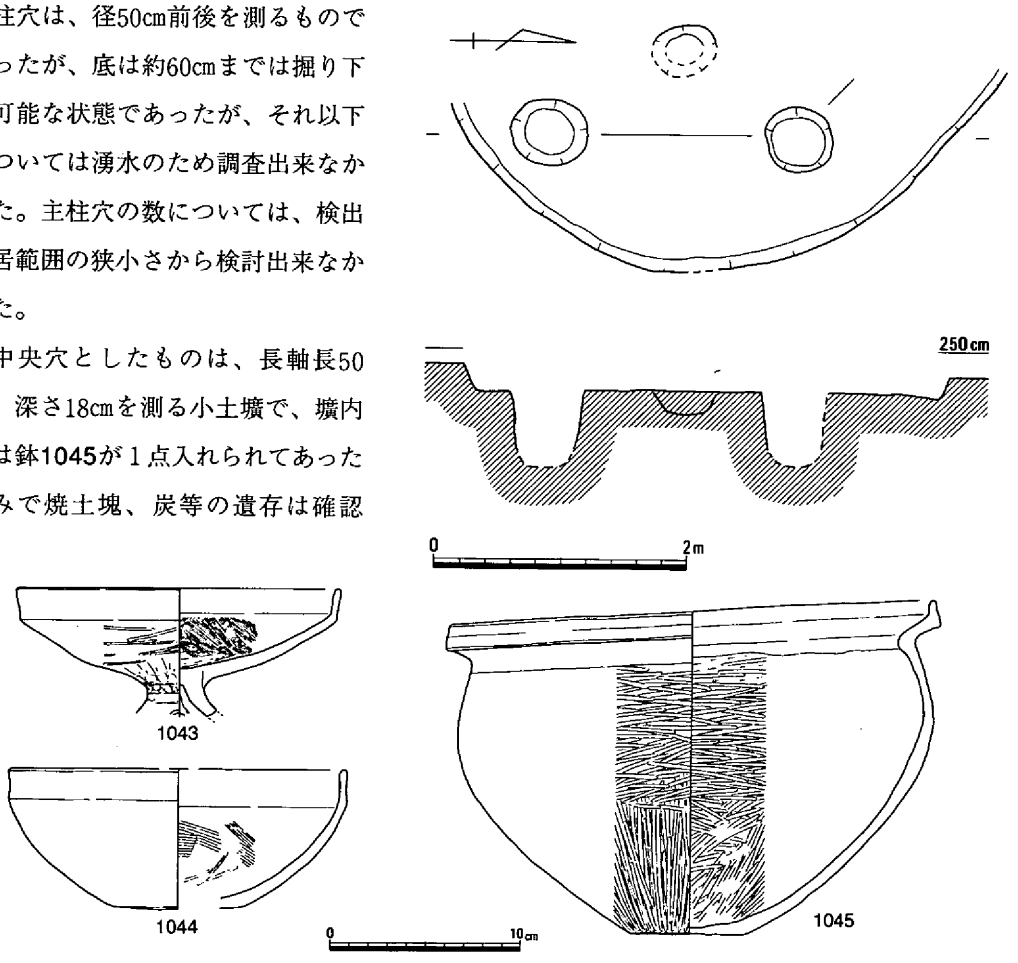
竪穴住居44（第151・206図）

８Ｂａ区において西側調査区外に大部分がかかった状態でその約１／３程度が検出された。

住居からは弧状を呈する肩口と検出面から約20cm下層で床面が、またその床面からは柱穴・中央穴の存在が確認された。ただし壁体溝については検出出来なかった。

柱穴は、径50cm前後を測るものであったが、底は約60cmまでは掘り下げ可能な状態であったが、それ以下については湧水のため調査出来なかった。主柱穴の数については、検出住居範囲の狭小さから検討出来なかった。

中央穴としたものは、長軸長50cm、深さ18cmを測る小土壙で、壙内には鉢1045が１点入れられてあったのみで焼土塊、炭等の遺存は確認



第206図　竪穴住居44（1/60）・出土遺物（1/4）

されなかった。

出土遺物としては、この他高杯1043と鉢1044が覆土中から出土した程度であった。高杯は、脚柱部は短脚で杯受部がまだ長く内湾を見せるものであった。鉢1045は、口縁端部を上方に拡張させ、体部内外面および平底を呈する底部外面には丁寧なヘラミガキが施されてあった。

時期的には、土器が上東・鬼川市Ⅲ式のものに類似することで、およそ後期後半への位置づけが考えられるものである。（島崎）

(3)　井戸

井戸１（第151・207～209図、写真図版57）

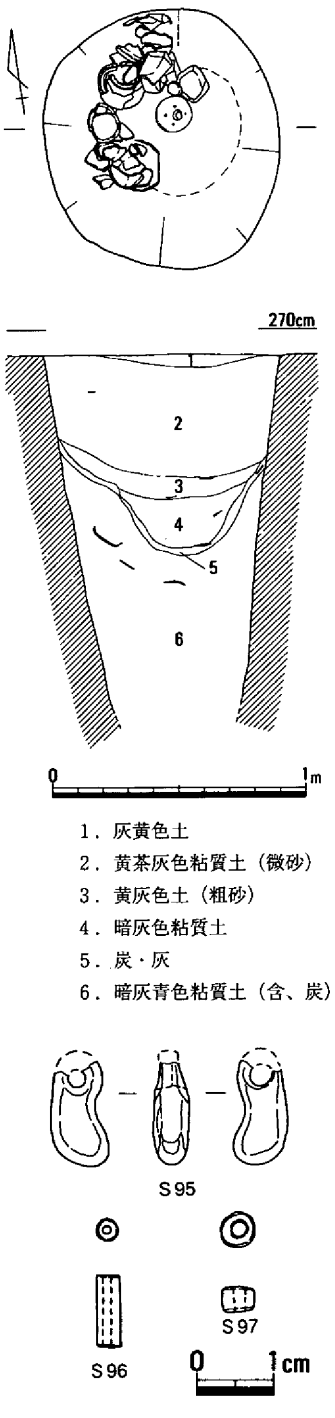
９Ｂｃ区において竪穴住居38と一部重複し、これを切った状況で検出された。

平面の検出は海抜2.60ｍにおいてなされ、規模は南北方向の長軸長で1.03ｍ、幅91㎝を測る、平面楕円形を呈するものであった。掘り下げ途中で地下水の湧水および砂の吹き出し等により調査の中断を余儀無くされたため、本来の深さについては不明であるが、検出面からおよそ1.50ｍまでは確認された。状況から井戸として認識されるものである。

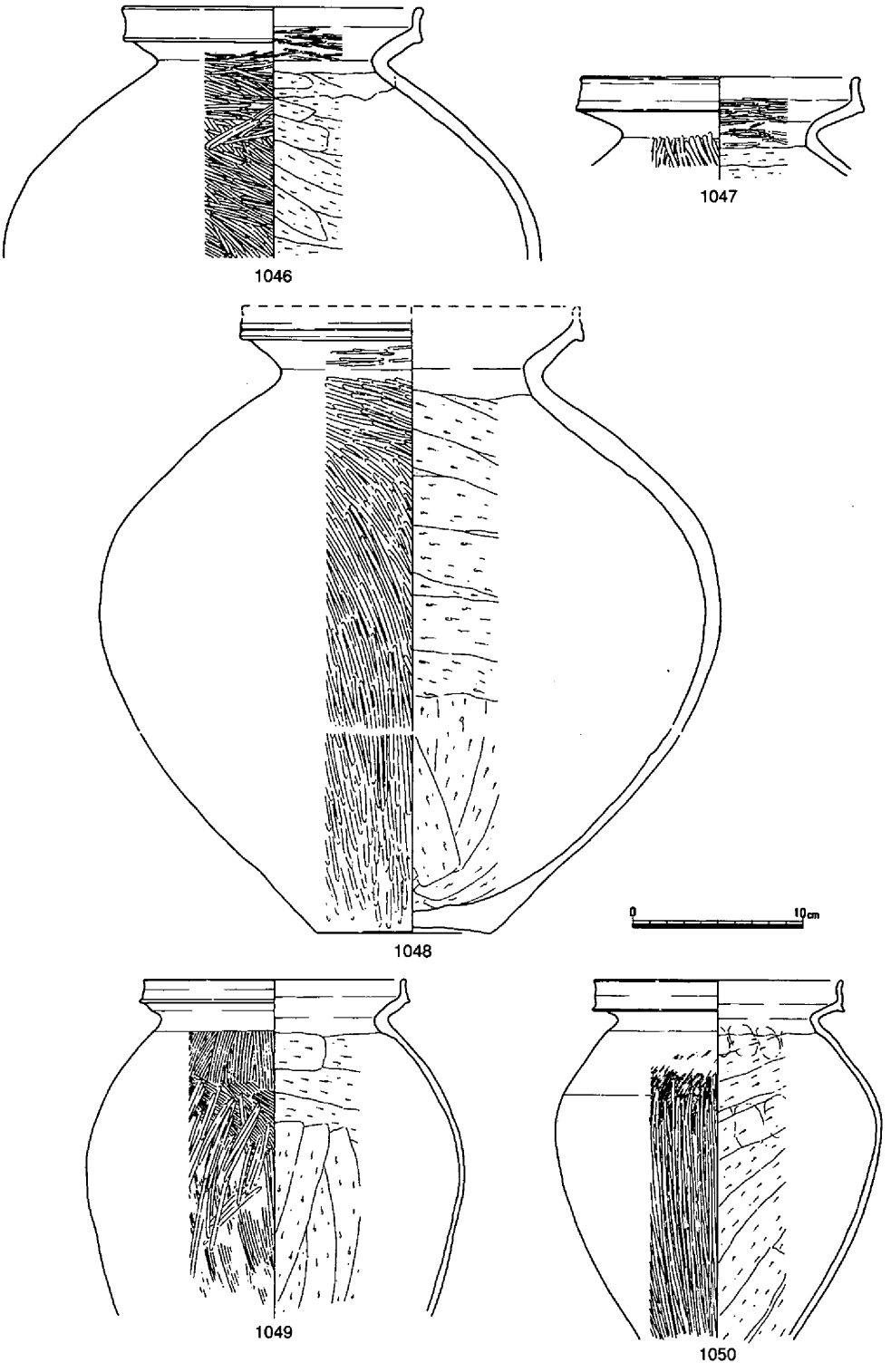
壙内には、下層にグライ化の進行した粘質土の埋積が、中層の第５層には窪み状に約２～３㎝幅で炭と灰の堆積が、さらにその上層第２層と第３層には微砂と粗砂の堆積が第４層を挟んだ状況で見られた。土器は、そのうち第６層上部に比較的まとまった状況で遺存していた。

出土遺物には、多量の土器の他、玉類が３点検出された。

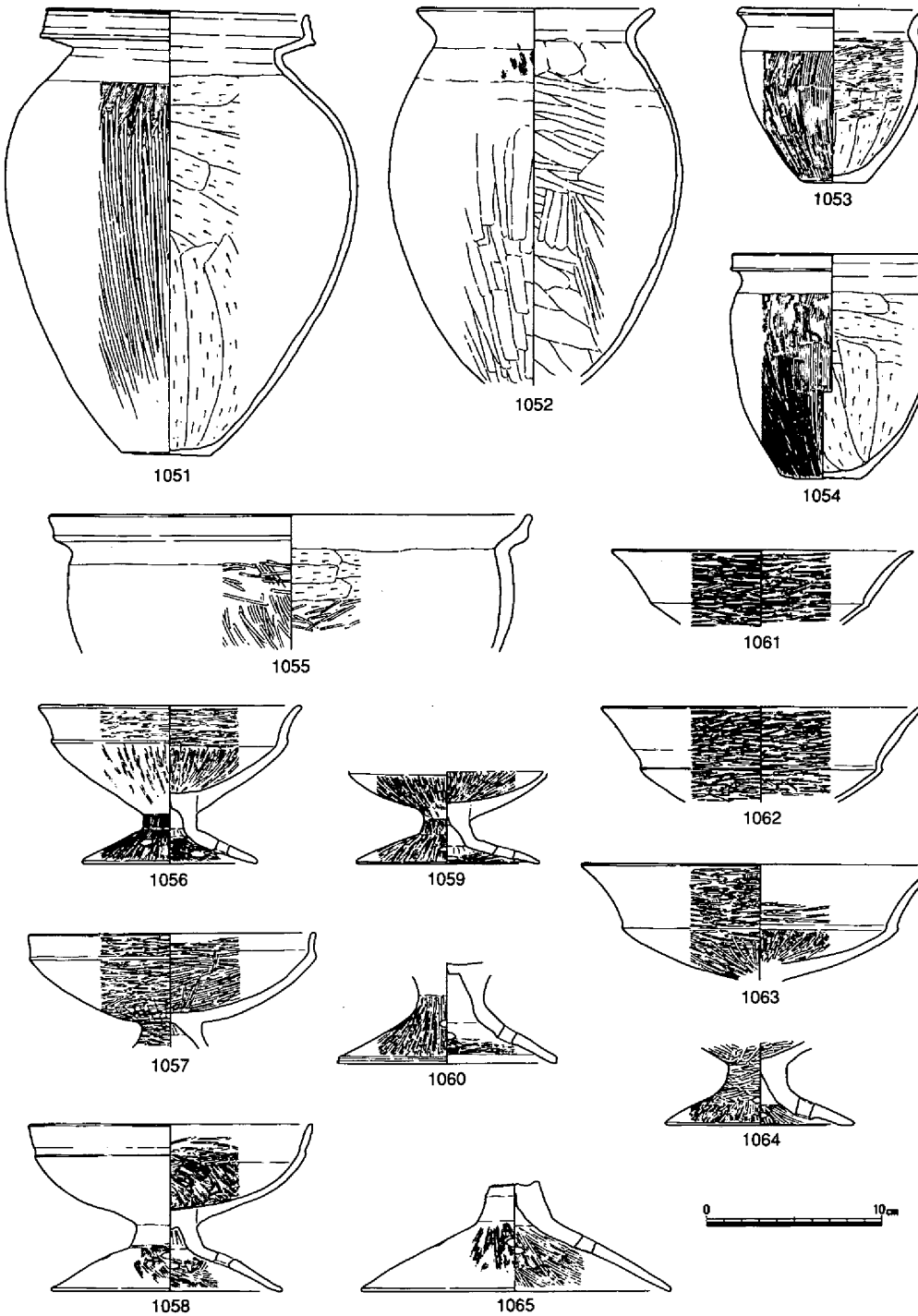
土器には、壺、甕、高杯、鉢等の器種が認められた。壺、甕の口縁部はいずれも比較的上方に拡張をみせるものの外面にはまだヘラ描沈線文が施されず、高杯は短脚で杯受部に対して口縁部長がまだ短いといった特徴をみせるものであった。型式的には、オノ町Ⅰ式併行と考えられ、時期的には後期後半に位置づけられる。（島崎）



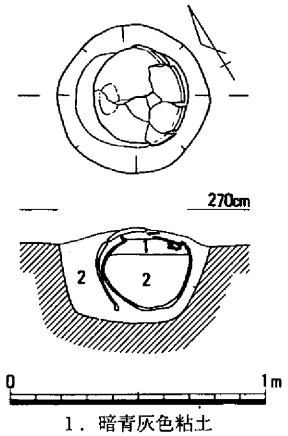
第207図　井戸１（1/30）・出土遺物①（1/1）

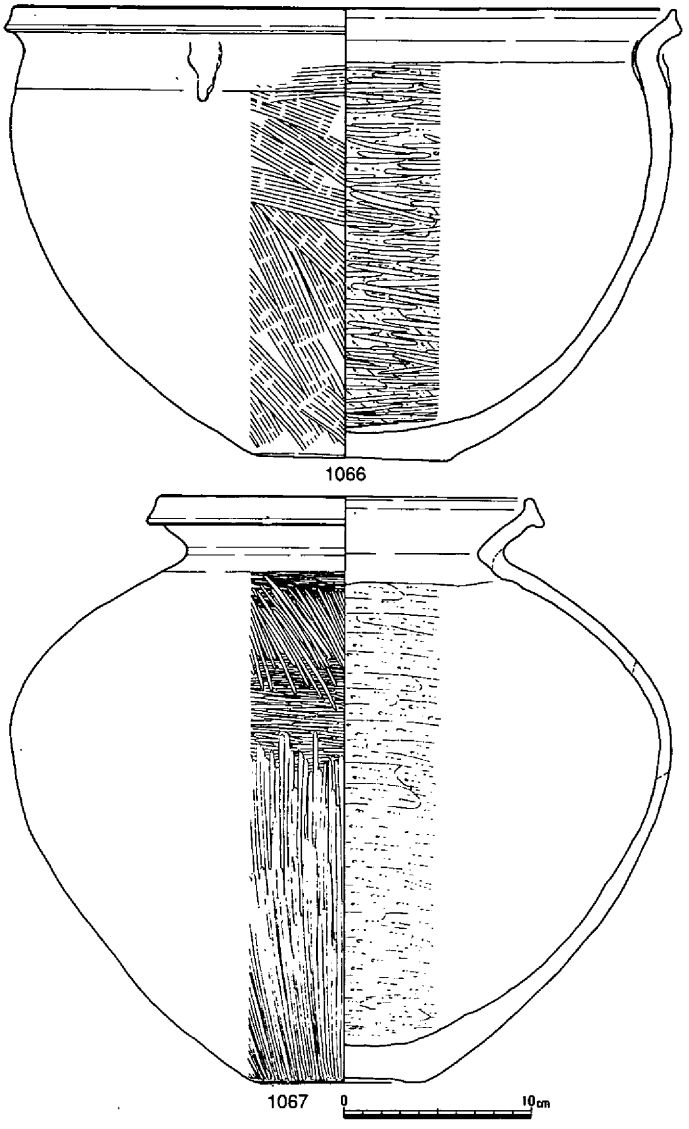


第208図　井戸１出土遺物②（1/4）



第209図　井戸１出土遺物③（1/4）





第210図　土器棺２（1/30）・出土遺物（1/4）

(4)　土器棺

土器棺２（第151・210図、写真図版57）

10Ｃｃ区北東部に位置して、竪穴住居25・28の中間で土壙96・194に近接している。

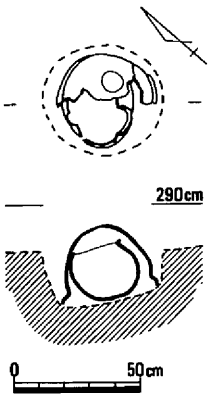
墓壙は、平面形円形を呈し、径60cmで深さ30cmを測る。埋土は灰褐色砂で、棺内部上層には暗青灰色粘土が堆積していた。

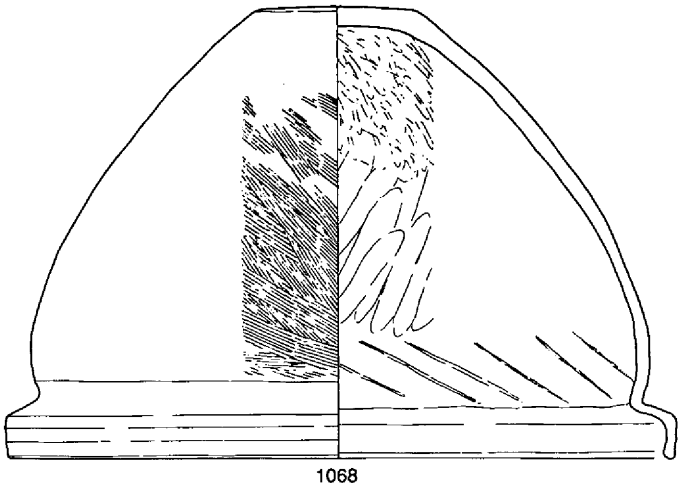
墓壙内には弥生土器の壺1067が口縁部の過半を打ち欠いて据えられ、この上に鉢1066が西に傾いて蓋として載っており、口縁部の下端は壙底に達している。1066は、内面がヘラケズリの後に横方向にヘラミガキされており、口縁部には補修痕がみられる。1067の内面は横方向にヘラケズリされ、体部外面はヘラミガキされている。

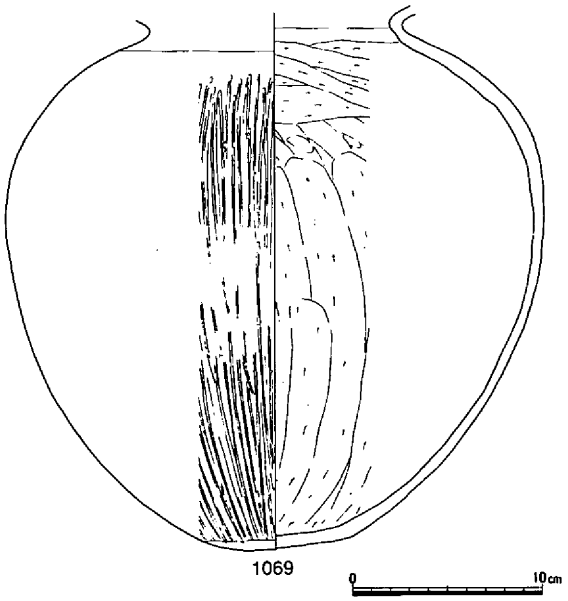
時期は、弥生時代後期後半に比定される。（光永）

土器棺３（第151・211図）

９Ｂｃ区で土器溜り１検出途中の海抜2.60mにおいて壺を棺身とし、それを大型の鉢で蓋をしているのが確認された。ただし、掘り方については精査を行ったにも拘らず検出できなかっ







第211図　土器棺３（1/30）・出土遺物（1/4）

た。壺は頸部以上を打ち欠き棺身とし、その上に棺身がほとんど見えない状態にまで鉢を逆にして被せたものであった。棺身の壺には土砂の流入が見られ、この流入土の洗浄をおこなったが骨片および歯等の遺存は確認出来なかった。

時期は、壺が口縁部を欠くため明瞭でないが完形の鉢は口縁部を長く拡張させるもので、およそオノ町式併行として差支えないと考える。　（鳥崎）

(5)　土壙

土壙54（第151・212図）

11Ｃｂ区北東部に位置する長方形土壙で、西半を竪穴住居45に削られている。

平面形は長方形で、長軸長3.98m、短軸長2.05mを測る。深さ80cmが残る側壁は、直立ないしやや外傾して、海抜高2.1m前後でほぼ平坦な底面に至る。底面の幅は 1.8m である。西半部分については、深さ約20cm程度が遺存していたが、調査時の湧水のために詳細不明である。埋土は黄灰褐色砂質土の１層で、炭・焼土を含んでいる。

出土遺物には、弥生土器の鉢1070、敲石Ｓ98があり、1070は内外面ともヘラミガキされて

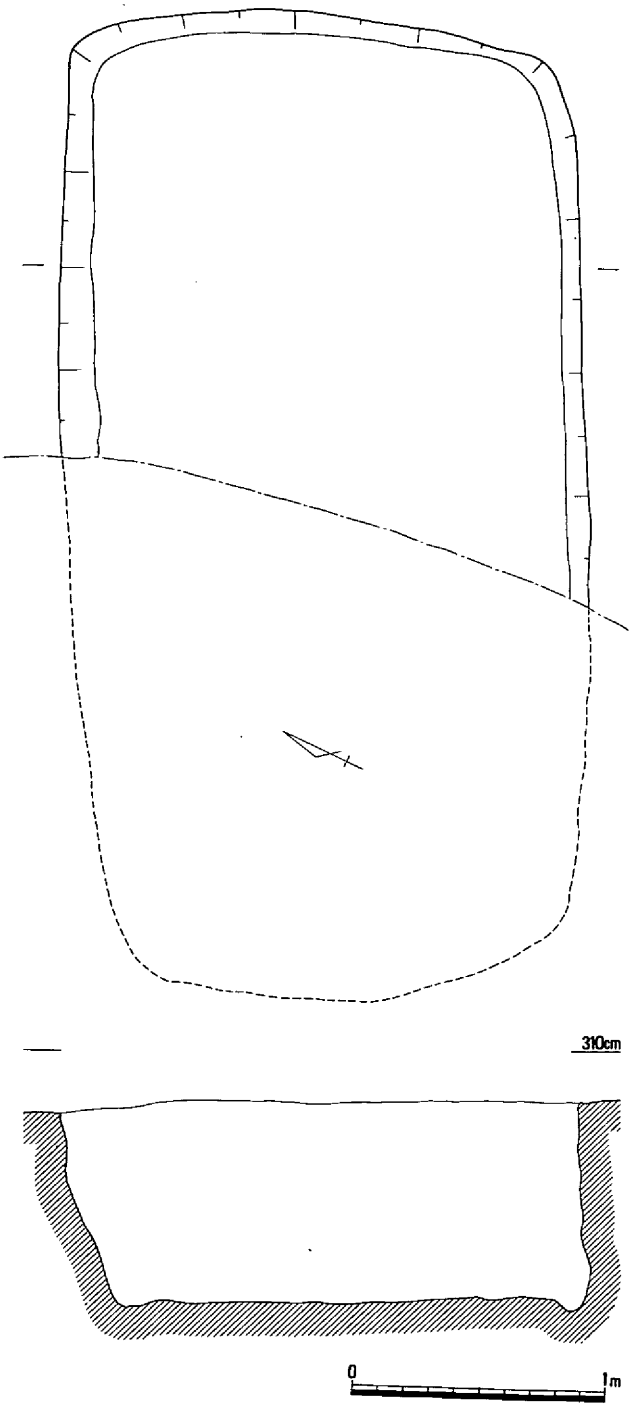
いる。

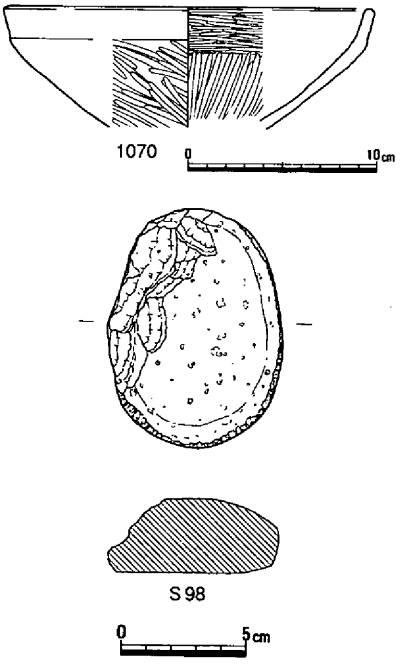
時期は、弥生時代後期後半に比定される。

土壙55（第151・213・214図、写真図版58）

11Ｃｂ区南東部に位置する長方形土壙で、竪穴住居18を削っている。

検出面での平面形は長方形で、長軸長3.73m、短軸長1.9mをそれぞれ測り、深さ45cmが残る側壁はやや外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦で、海抜高2.07mを測り、3.51×1.73mの長方形を呈する。埋土は８層に分けられ、中央部がくぼむ堆積状況を示して、





第212図　土壙54（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

第１・２層下面で部分的に炭の堆積が認められる他、第５層にも炭が多く含まれている。

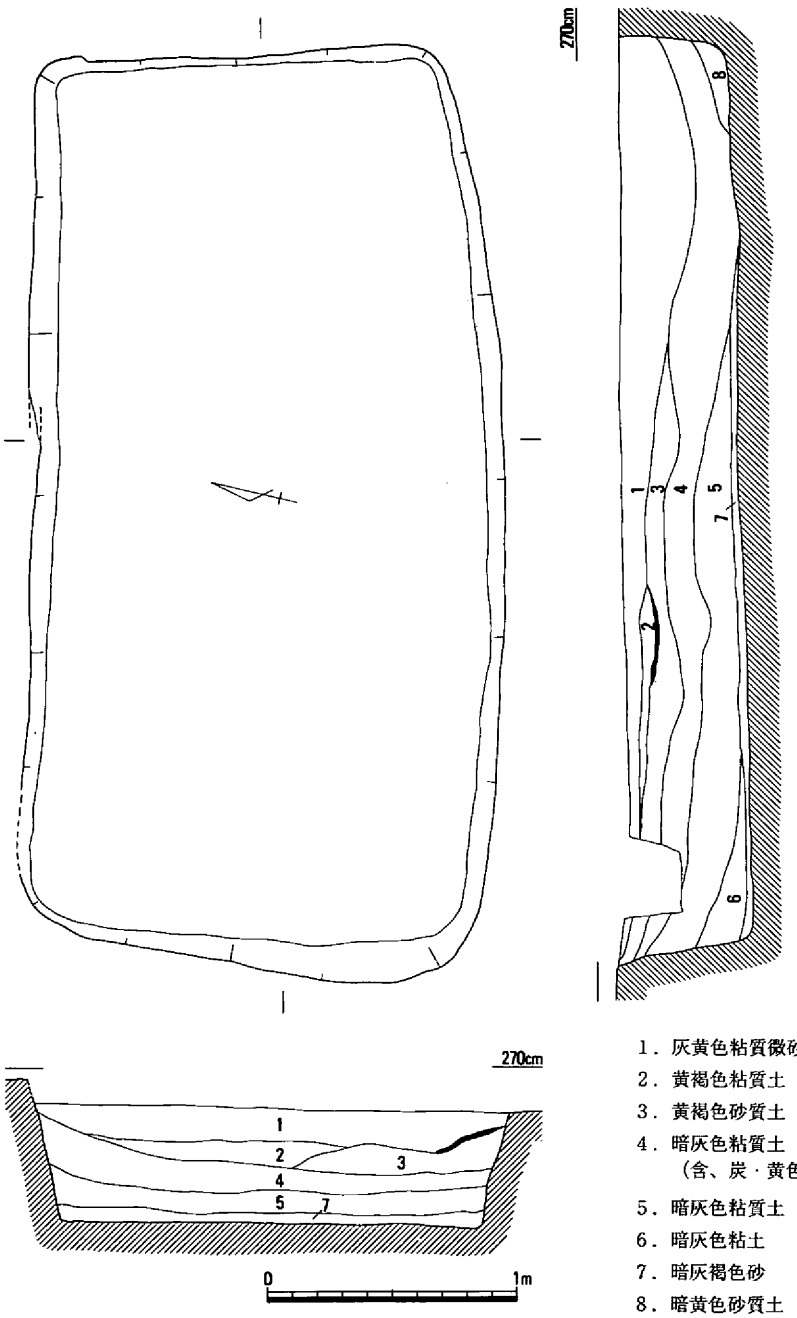
弥生土器の壺1071・1072、甕1073・1074、高杯1078、鉢1075～1077等が出土している。1072には水漉粘土が用いられており、頸部外面はヘラミガキされている。これらの遺物は、弥生時代後期でも古い様相を示すものであるが、遺構についてはその形状から後半に属するものと考えられる。

土壙56

（第151・215図）

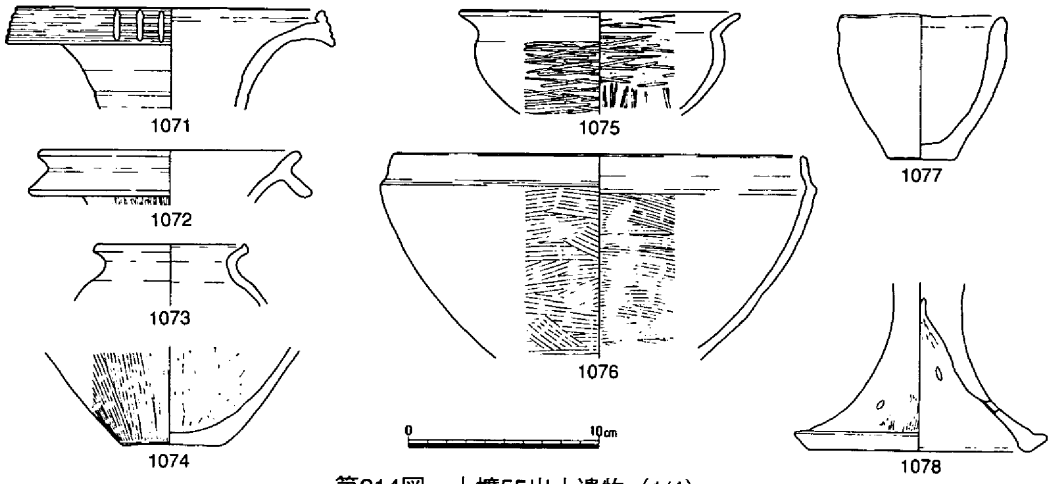
11Ｃａ区に位置し、南半を竪穴住居46に削られている。

平面形は楕円形と想定され、短径1.07ｍ、最大長径1.4ｍを測る。深さ15㎝が残り、断面形は皿形を呈する。海抜高2.45ｍの底面はほぼ平坦



1．灰黄色粘質微砂
2．黄褐色粘質土
3．黄褐色砂質土
4．暗灰色粘質土
（含、炭・黄色粘土塊）
5．暗灰色粘質土（含、炭多）
6．暗灰色粘土
7．暗灰褐色砂
8．暗黄色砂質土

第213図　土壙55（1/30）



第214図　土壙55出土遺物（1/4）

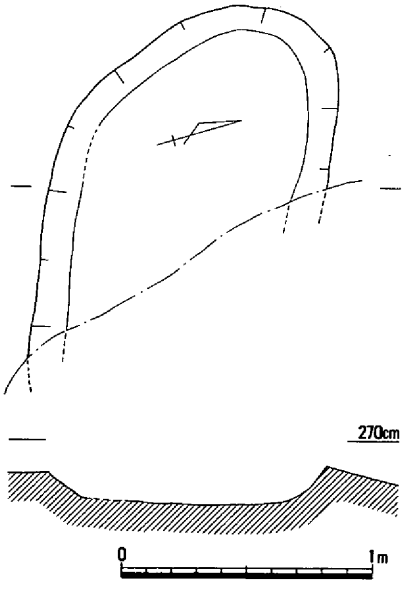
で、短径83cmを測る。遺物は出土していない。

土壙57（第151・216～218図、写真図版58）

11Ｃａ区南東部に位置し、竪穴住居２、土壙２を削り、竪穴住居46に削られている。

検出された平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長1.44ｍ、短軸長1.05ｍをそれぞれ測る。深さ35cmの側壁は外傾し、断面形は逆台形を呈する。海抜高2.56ｍの底面はほぼ平坦で、隅丸長方形を呈し、118×86cmの規模である。

埋土は、基本的には炭・焼土を含んだ黄灰褐色砂質土であるが、そのうちの下半部で南東方向に高い土器の堆積が顕著であり、その下層には角礫も含まれている。土器片も大形の破片が多く、一括して廃棄された状況を示している。



第215図　土壙56（1/30）

出土した弥生土器には、壺1079・1083～1085、甕1080～1082・1086～1098、高杯1102・1103、鉢1099・1100、台付鉢1101等がある。壺は口縁端部が直立し、外面がヘラミガキされるもので、厚手に作られた胴部の形状は三者三様である。甕のうち、1080～1086は体部外面にハケメ調整後ヘラミガキを施し、口縁部外面に退化凹線が巡るものであるが、口縁部はやや内傾している。肩は高い位置で比較的張っており、1096にやや底部の丸みが見られるが、1094・1095・1097・1098はいずれも平底で、内面に指オサエの痕跡を残している。1080の肩部外面には籾粒大

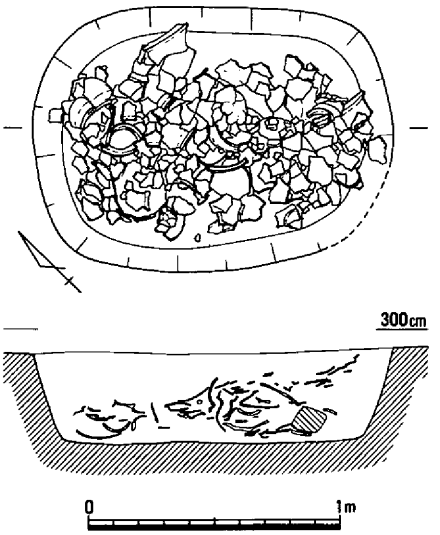
の刺突２個が縦に並んで焼成前に施されている。高杯には水漉粘土が用いられ、短脚である。杯部の形態には二者があり、1103の口縁部は外反していない。鉢はいずれも大形品で、内外面ともヘラミガキされている。

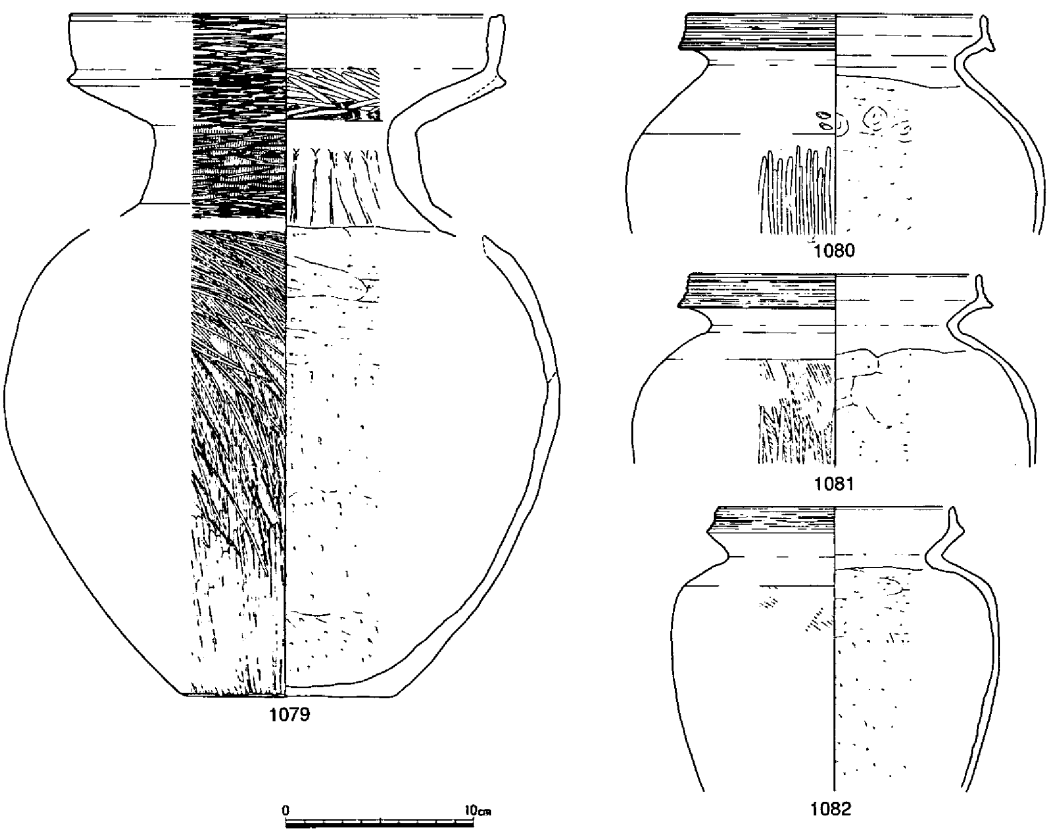
時期は、弥生時代後期後半（オノ町Ⅰ式併行）に比定される。

土壙58（第151・219～223図、写真図版59）

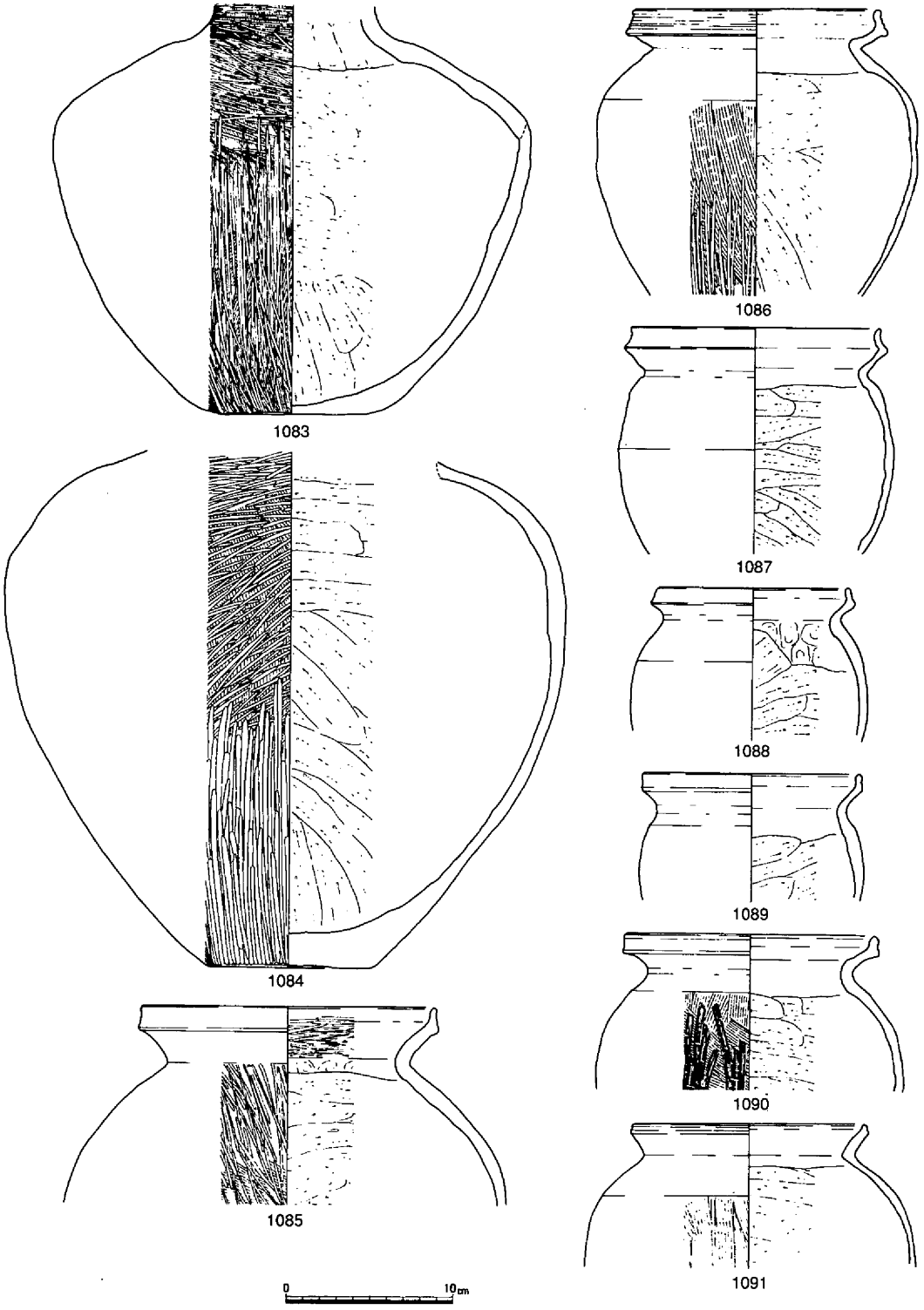
11Ｃａ区中央部に位置し、北端を北方向への微高地下がりによって失っている。上層を竪穴住居47に削られ、土壙56・168が近接する。

検出された平面形は隅丸長方形と想定され、短軸長1.65ｍで、最大長軸長2.12ｍを測る。深さ38cm

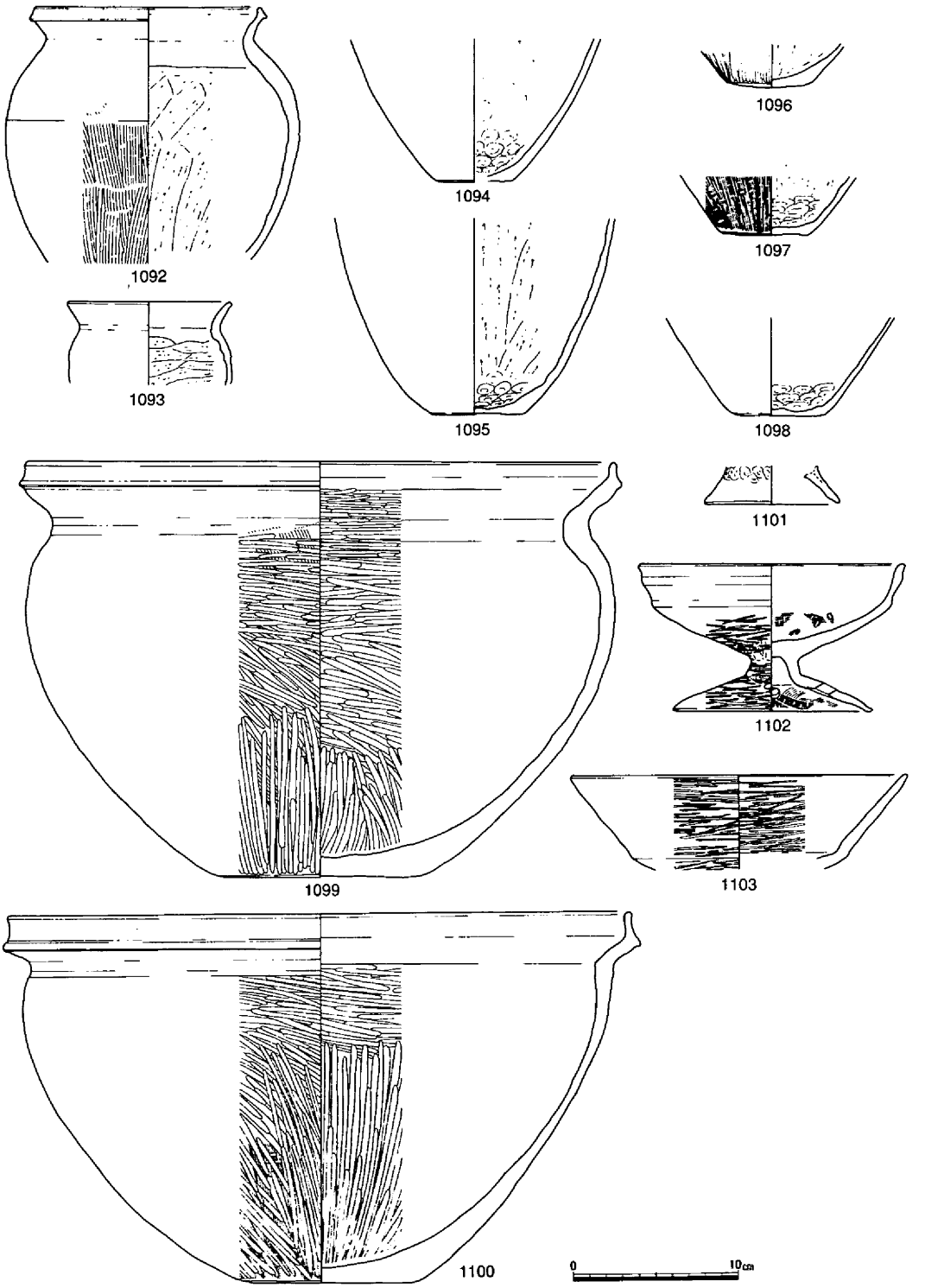




第216図　土壙57（1/30）・出土遺物①（1/4）



第217図　土壙57出土遺物②（1/4）



第218図　土壙57出土遺物③（1/4）

が残る側壁は直立からやや外傾しており、断面形は皿形を呈する。海抜高1.98mの底面はほぼ平坦で、短軸長1.56m、最大長軸長2.06mの長方形を呈する。長方形土壙の範疇に含まれるものである。埋土は炭・焼土を含む黄灰褐色粘質微砂で、下層ほど粘質が強く、底面から15cm以上高い位置から完形に近い大形破片を含む弥生土器が一括出土している。

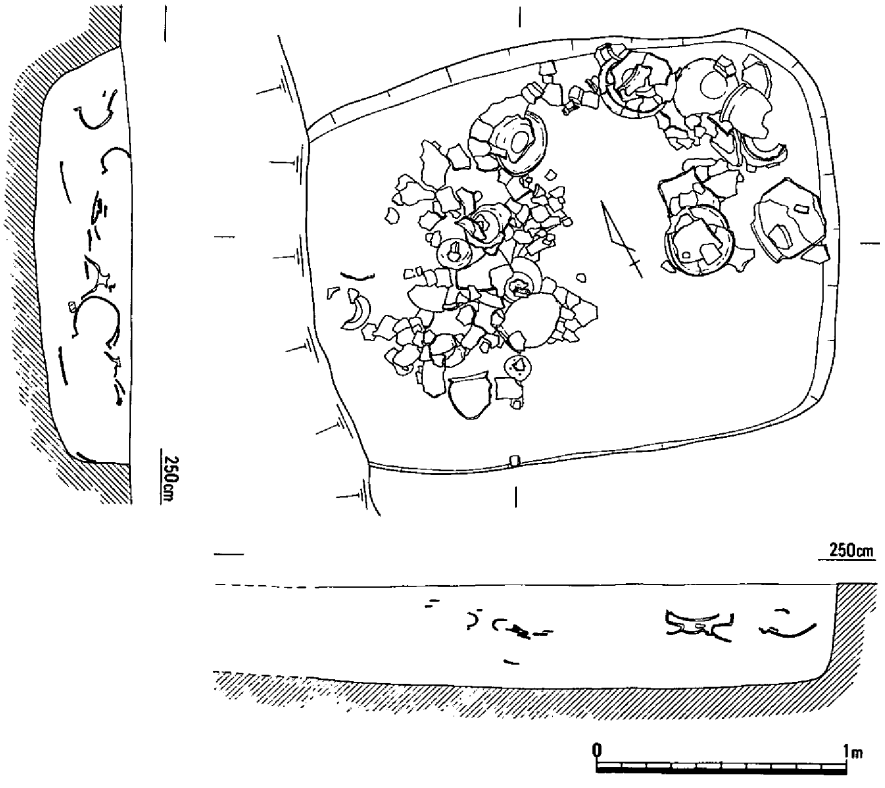
弥生土器には、壺1104～1113、長頸壺1117、脚付直口壺1136・1137、甕1114～1116・1118～1120、高杯1131～1135、鉢1121・1122・1125～1130、台付鉢1123、手捏ね土器1124等がある。壺については、1117が古い様相を示すのに対して、1105・1106では口縁部が頸部から急角度で開き、端部には外反の傾向が見える。甕の1119にはやや内傾する口縁部外面に退化凹線が巡らされており、1118の外面はタタキメ調整である。高杯・脚付直口壺には水漉粘土が用いられ、高杯は短脚で、口縁部は外反が少なく斜め上方に立ち上がる。

時期は弥生時代後期後半（オノ町Ⅰ～Ⅱ式併行）に比定される。

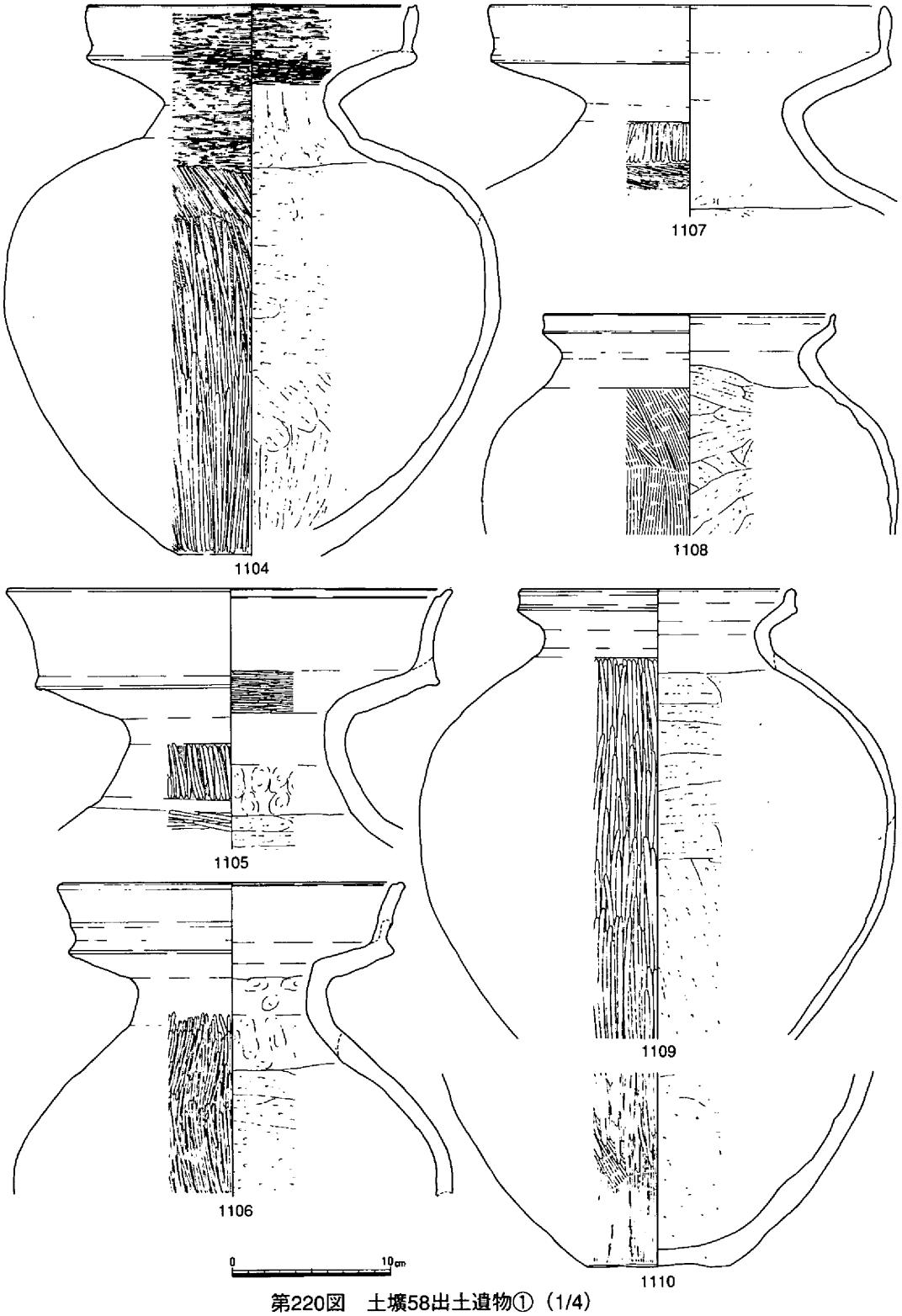
土壙59（第151・224・225図、写真図版59）

11Ｃａ区南部に位置し、竪穴住居４・20を削り、北隅を竪穴住居47に削られている。

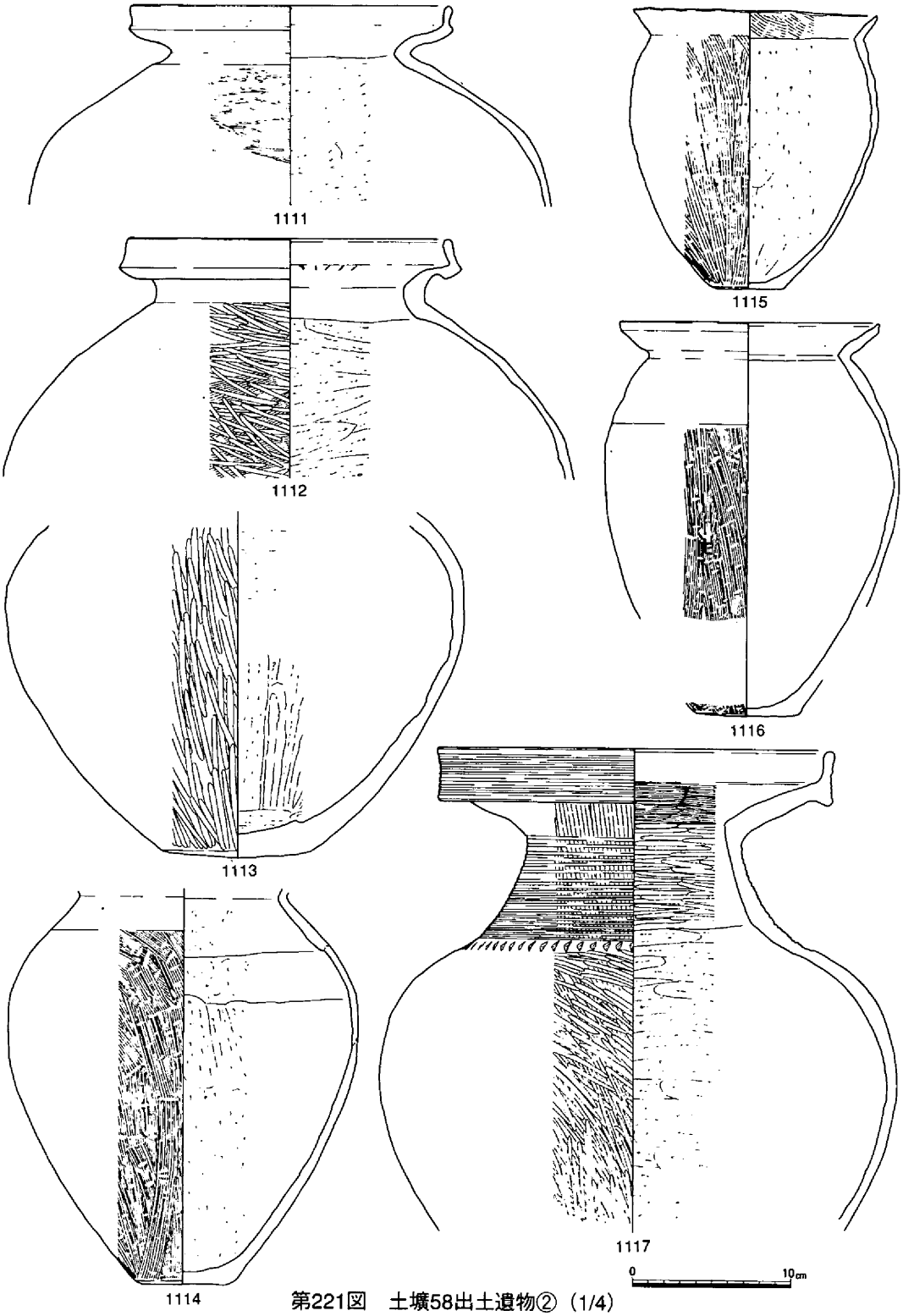
平面形は長方形に復元され、長軸長2.23m、短軸長1.1mを測り、深さ13cmが残る側壁はやや外傾し、断面形は皿形を呈する。海抜高2.62mで平坦な底面は、2.06×0.92mの長方形を呈し、



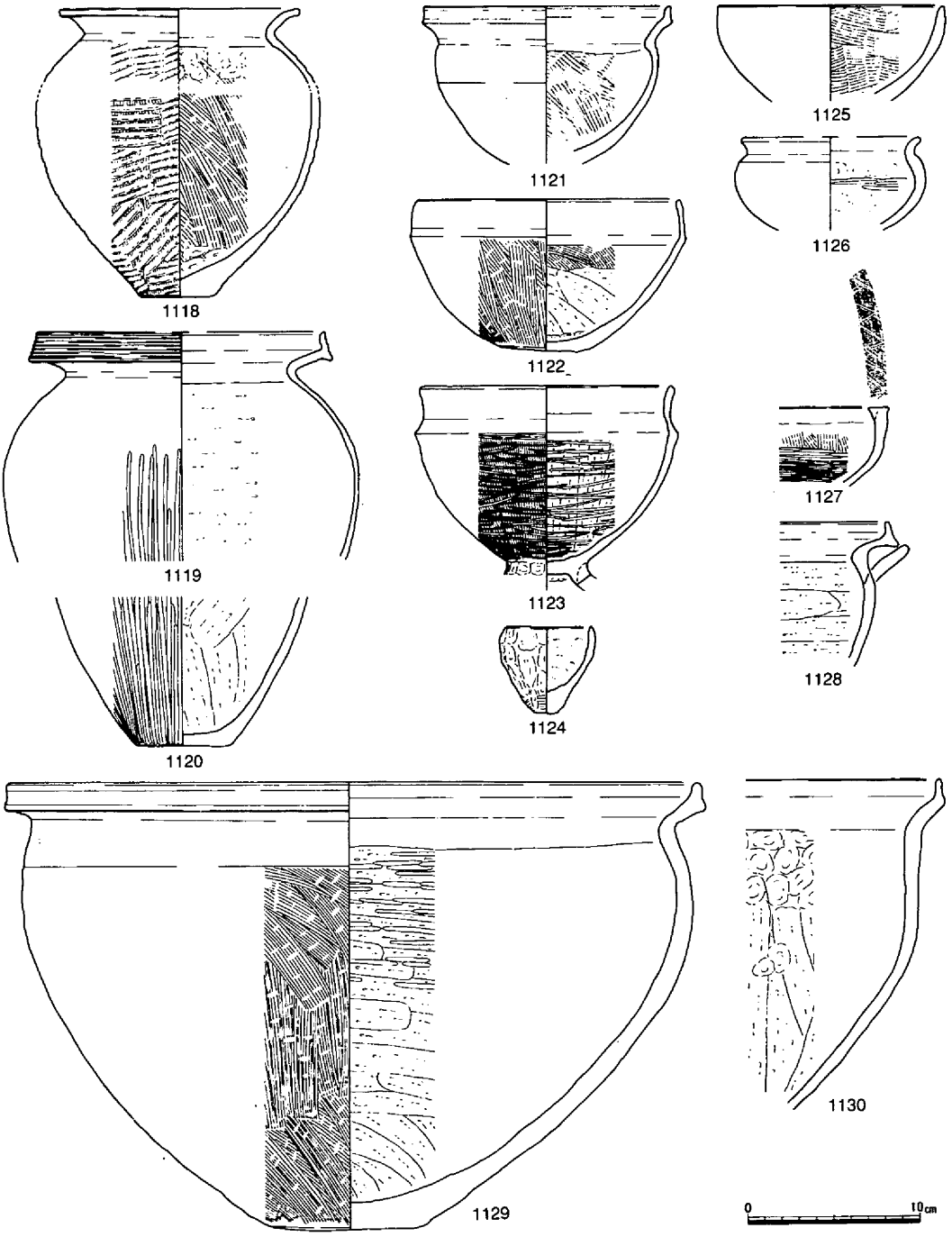
第219図　土壙58（1/30）



第220図　土壙58出土遺物①（1/4）

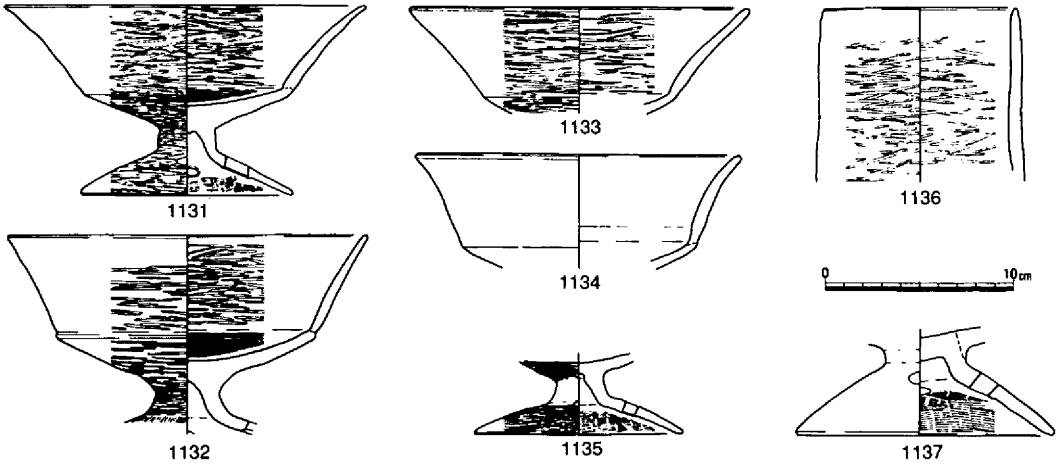


第221図　土壙58出土遺物②（1/4）



第222図　土壙58出土遺物③（1/4）

長方形土壙とみなしうる。埋土は暗黄灰褐色砂質土で、中央部で長軸方向に沿って弥生土器の大形片が集中していた。



第223図　土壙58出土遺物④（1/4）

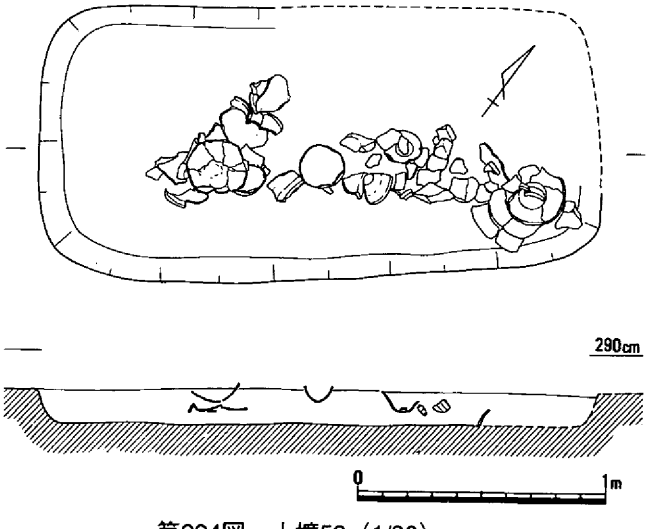
弥生土器には、壺1138・1139、甕1140～1144、高杯1145・1146、鉢1147等がある。1138の口縁端部はほぼ直立しており、1139も同様である。甕のうち、1144は讃岐系土器であり、1140の口縁端部は上方に摘み上げられている。1145～1147には水漉粘土が用いられており、高杯は短脚で、杯部には深い杯部から口縁部が直立するものと、浅い杯部から口縁部が斜め上方にやや外反するものの二つの形態が見られる。

時期は、弥生時代後期後半（オノ町Ⅱ式併行）に比定される。

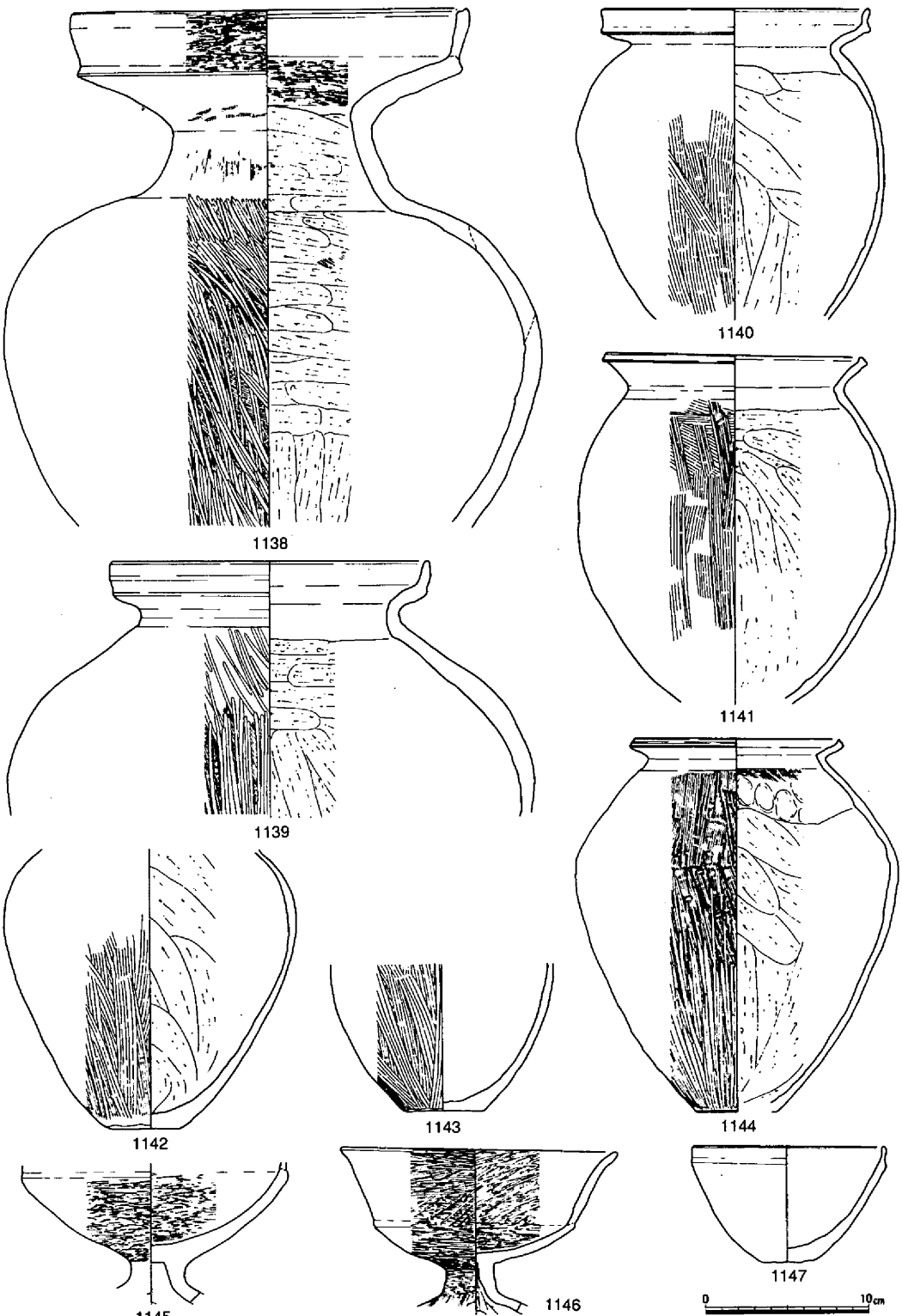
土壙60（第151・226図）

11Ｃｄ区北東部に位置して東端を調査区外に置き、竪穴住居９、土壙12を削っている。

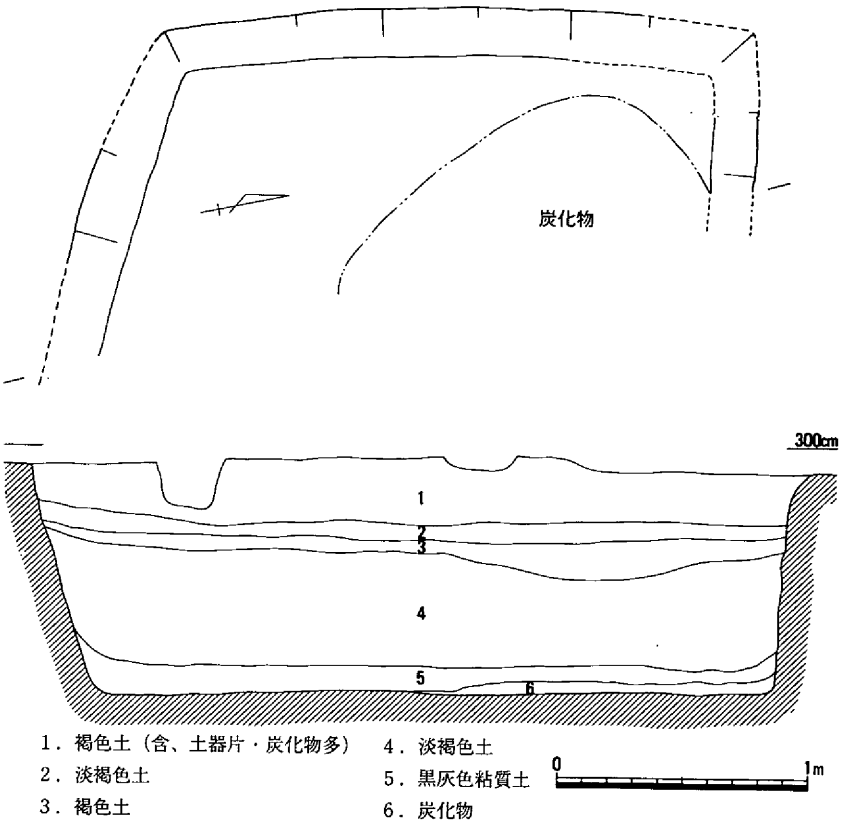
平面形は長方形と想定され、長軸長2.61ｍ、最大短軸長1.45ｍを測る。深さ90㎝が残る側壁はやや外傾しており、海抜高2.09ｍの底面はほぼ平坦で、長軸長2.23ｍを測る。６層に分けられる埋土のうち、第６層は炭化物の堆積層で、底面の北半に厚さ５㎝以下で広がっていた。第１層にも土器片とともに炭化物が多く含まれていたが、土器片は小片が多く、図示するには至らなかった。長方形土壙として理解される。



第224図　土壙59（1/30）



第225図　土壙59出土遺物（1/4）

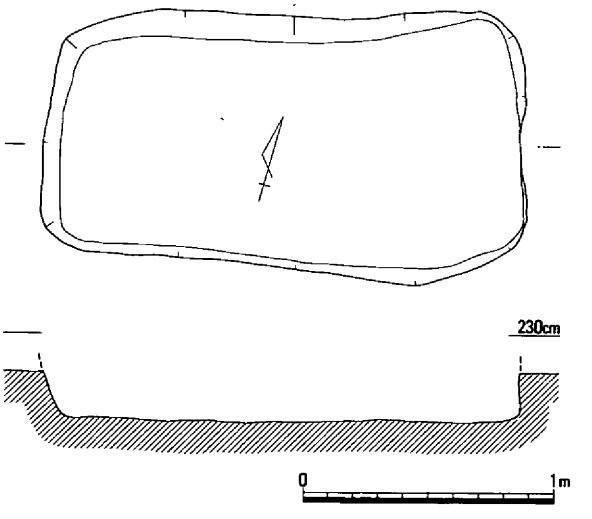


第226図　土壙60（1/30）

土壙61（第151・227図）

11Ｃｄ区北部に位置し、竪穴住居７を削っている。

検出された平面形は不整な長方形を呈し、長軸長1.9m、短軸長1.01mをそれぞれ測る。深さ20cmが残る側壁は直立からやや外傾して、海抜高1.96mのほぼ平坦な底面に至る。竪穴住居９の床面において平面形を確定したためにこの数値になっているが、もとの深さは58cm以上に復元され、長方形土壙とみなしうる。時期は弥生時代後期後半と考えられる。



第227図　土壙61（1/30）

土壙62（第151・228・229図）

11Ｃｄ区中央部に位置する長方形土壙で、竪穴住居７～９を削っている。

検出された平面形は長方形を呈し、長軸長1.85m、短軸長1.35mをそれぞれ測る。東辺で深さ55cmが残る側壁はやや外傾し、海抜高1.91mでほぼ平坦な底面に至る。底面も長方形で、規模は1.65×1.17mを測る。埋土は５層に分けられ、第２層から弥生土器の大形片が出土している。

出土遺物には、弥生土器の壺1148、甕1149～1153、高杯1154～1157等の他に、鉄鏃M27がある。壺1148の口縁部はやや内傾しながら上方に拡張され、外面には退化凹線が認められる。甕の口縁部も上方に拡張されて、1152の外面には退化凹線が巡らされており。1152・1153の頸部外面には、２個の刺突が縦に並んで施されている。高杯には水漉粘土が用いられ、口縁部が外反するものと上方に立ち上がって外面に退化凹線をもつものとがある。

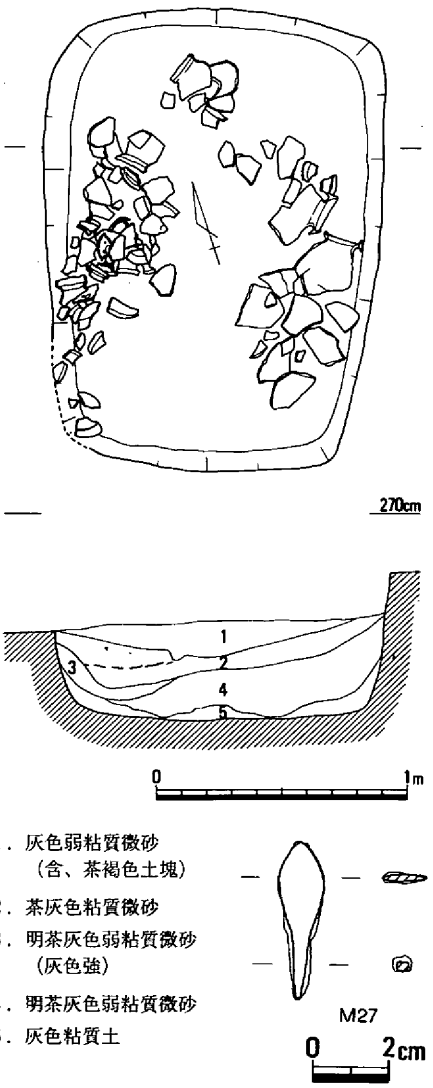
時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

土壙63（第151・230図）

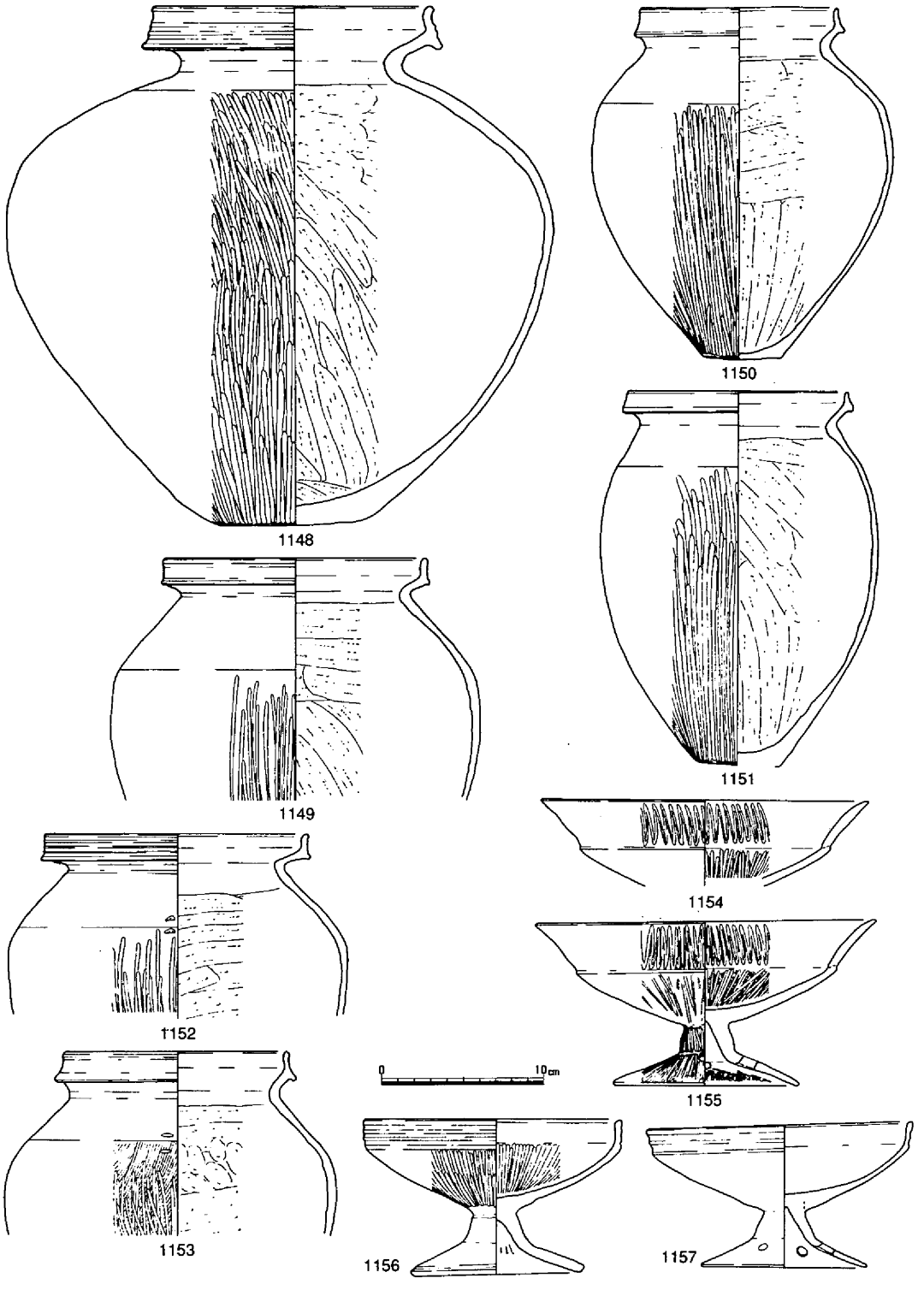
11Ｃｄ区南部に位置し、竪穴住居８・９、土壙77・148を削っている。

北端に明瞭な角が認められず、南半についても土壙77との重複のために輪郭を明瞭にできていないが、平面形は第230図に復元され、長方形土壙の範疇に属するものと考えられる。規模は、復元長軸長2.89m、短軸長1.35mをそれぞれ測り、深さ50cmの側壁は外傾している。海抜高2.05mの底面はほぼ平坦で、幅1.21mを測る。埋土は４層に分けられ、底面直上の第４層に炭・弥生土器片が含まれる。

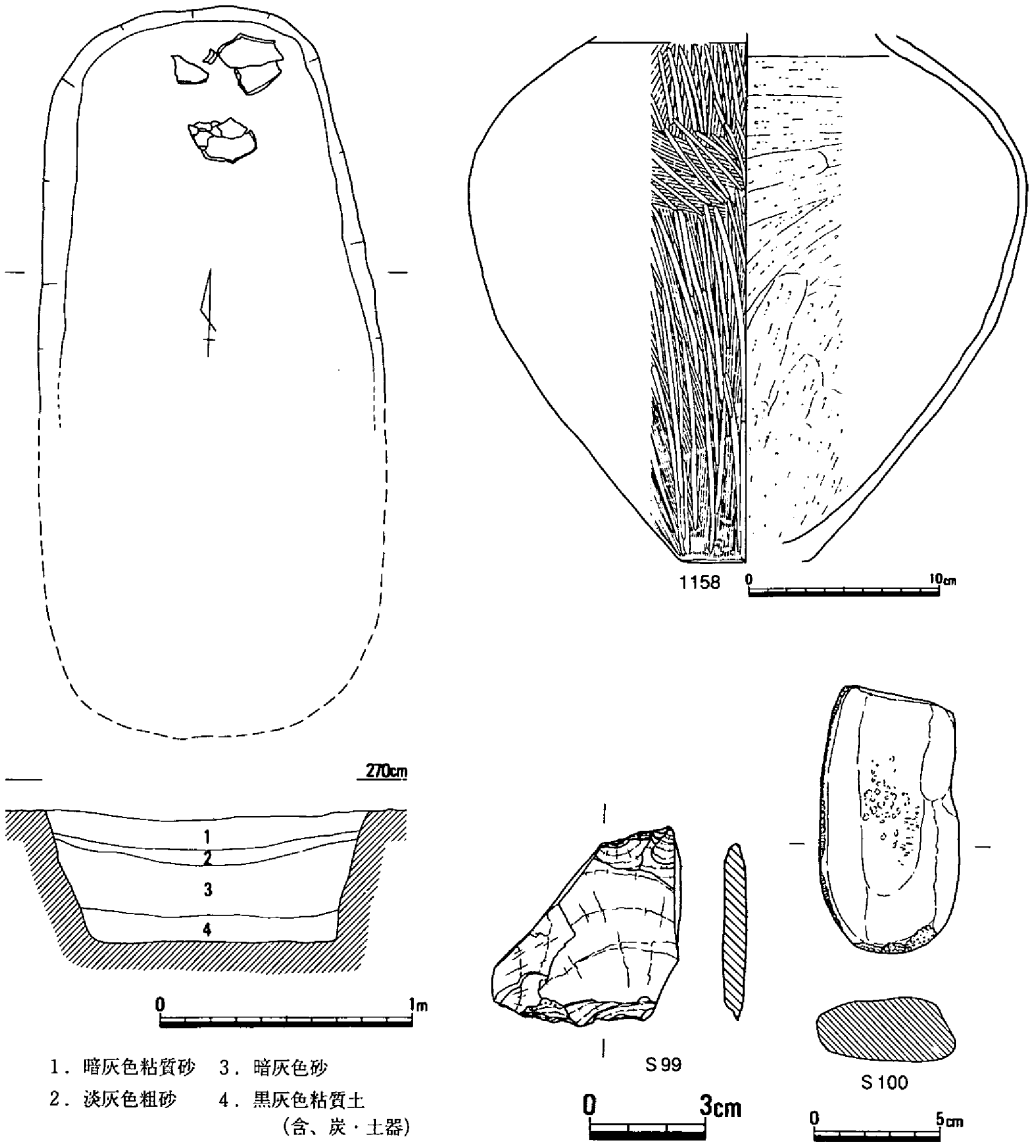
出土遺物には、弥生土器の壺1158、サヌカイト製のスクレイパーＳ99、安山岩製の敲石Ｓ100等がある。1158は倒卵形の体部で、肩はよく張っており、外面はハケメ後にヘラミガキが施されている。時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。



第228図　土壙62（1/30）・出土遺物①（1/2）



第229図　土壙62出土遺物②（1/4）



第230図　土壙63（1/30）・出土遺物（1/4・1/2・1/3）

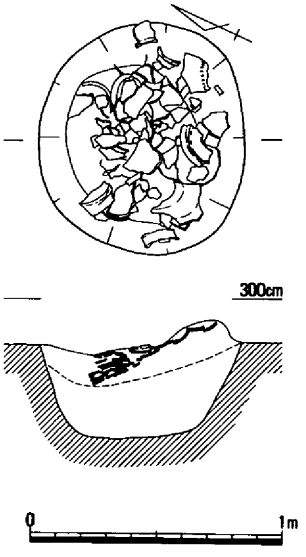
土壙64（第151・231図、写真図版60）

11Ｃｄ区北西部に位置し、竪穴住居７北西部上層で土壙65・66を削っている。

平面形は楕円形で、長径92cm、短径81cmをそれぞれ測る。側壁は外傾して深さ36cmの断面形は逆台形を呈し、海抜高2.45ｍの底面は60×50cmの楕円形である。埋土は黄灰褐色砂質土で、底面から20cm以上高い位置で弥生土器の大形片がまとまって出土している。

出土した弥生土器には、壺1159、甕1160～1164、高杯1165・1166等がある。1159は、「ハ」字状にすぼまる頸部から口縁部が急角度に外へ開き、その端部は上方へ直立して拡張されてい

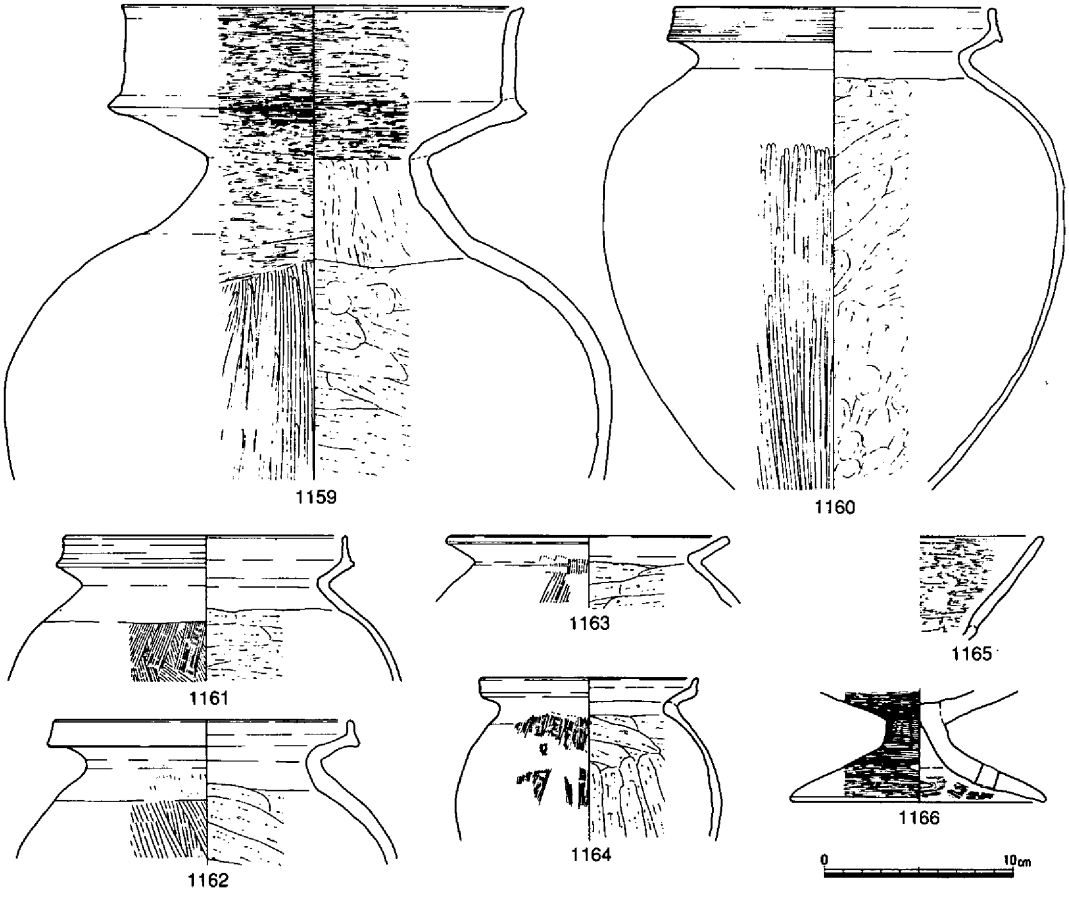
る。口縁端部上面には１条の沈線が巡り、口縁部内外面とも横方向に丁寧なヘラミガキが施されている。1160の口縁部外面には退化凹線が見られ、体部内面下端には指頭圧痕が残る。高杯には水漉粘土が用いられ、1165は外反せずに斜め上方に立ち上がる。時期は、弥生時代後期後半（オノ町式併行）として捉えられる。



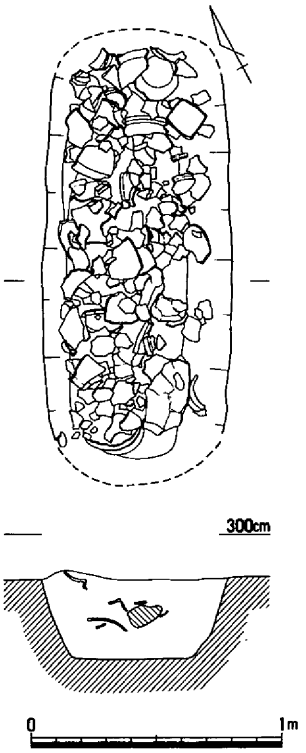
土壙65（第151・232～234図、写真図版60）

11Ｃｄ区北西部に位置し、竪穴住居７・８、土壙66を削り、土壙64に削られている。

弥生土器の大形片が集中する範囲に対して土壙の存在を想定して調査したため、南北両端が明瞭でないが、平面形は長方形と想定され、復元長軸長約1.80m、短軸長75cmを測る。深さ31



第231図　土壙64（1/30）・出土遺物（1/4）



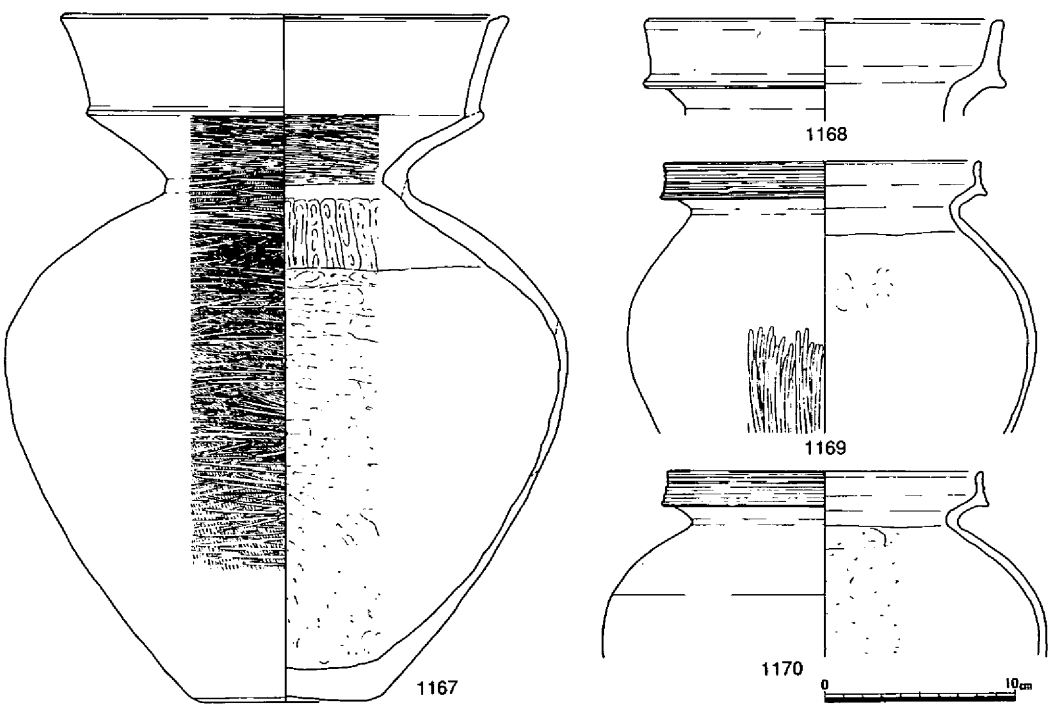
cmが残る側壁は外傾し、断面形は逆台形を呈する。底面の海抜高は2.5mで、ほぼ平坦である。埋土は炭・焼土を含む淡黄灰褐色砂質土で、角礫を含む土器片は底面から10cm以上高い位置に集中していた。

弥生土器には、壺1167・1168、小形壺1189、甕1169～1188、高杯1190・1191、鉢1192～1198等がある。1167は、頸部からすぐに口縁部が開き、口縁端部はやや外傾して上方に拡張されている。甕のうち1169～1179は口縁部外面に退化凹線が見られ、いずれも口縁部下端が斜め下方へ突出している。1190・1191・1197・1198には水漉粘土が用いられている。1197の口縁部は新しい様相を示すものとも考えられるが、全体としては才ノ町Ⅰ式併行期として捉えられる。

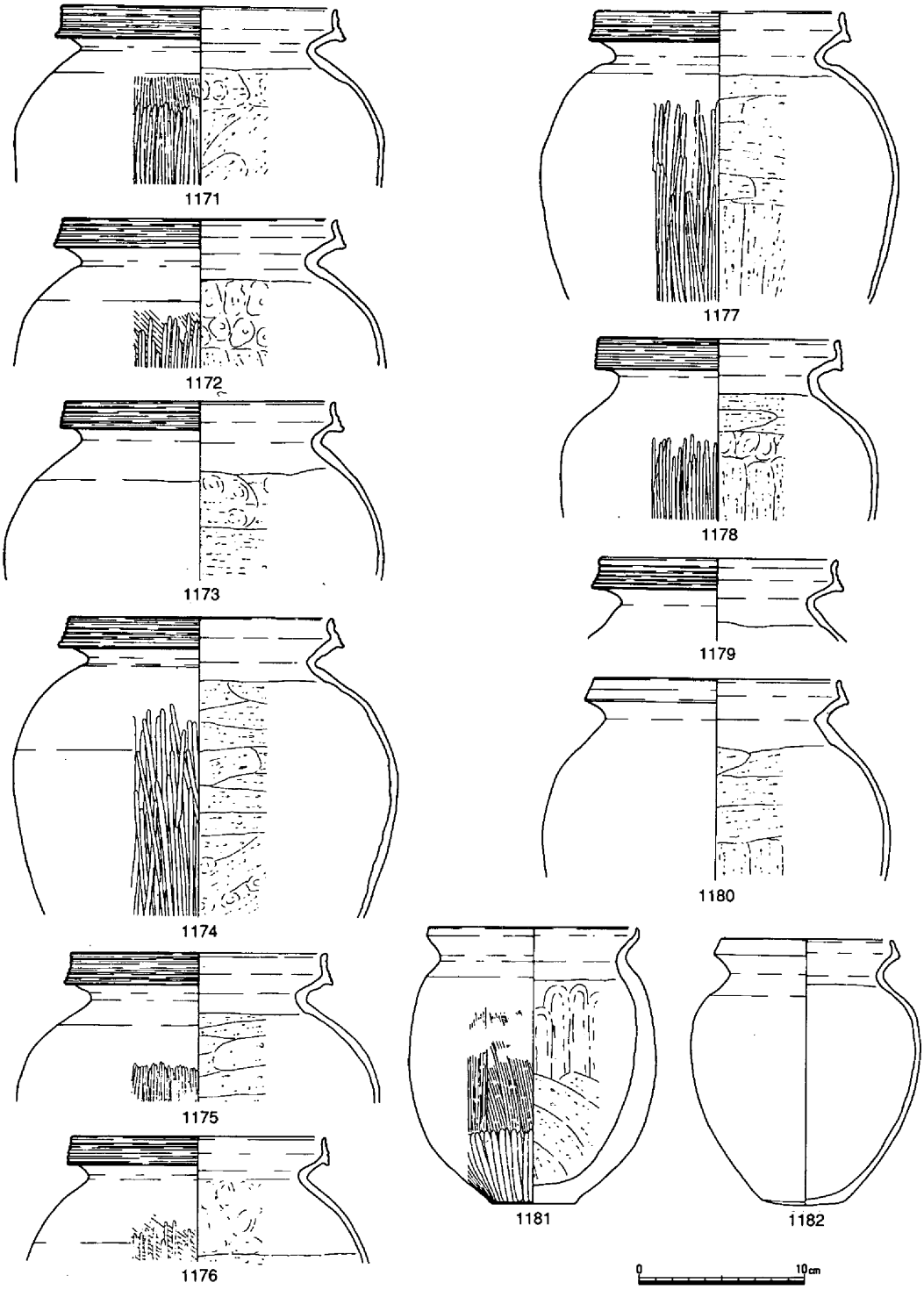
土壙66（第151・235図）

11Ｃｄ区北西部に位置し、竪穴住居７・８を削り、土壙64・65に削られている。

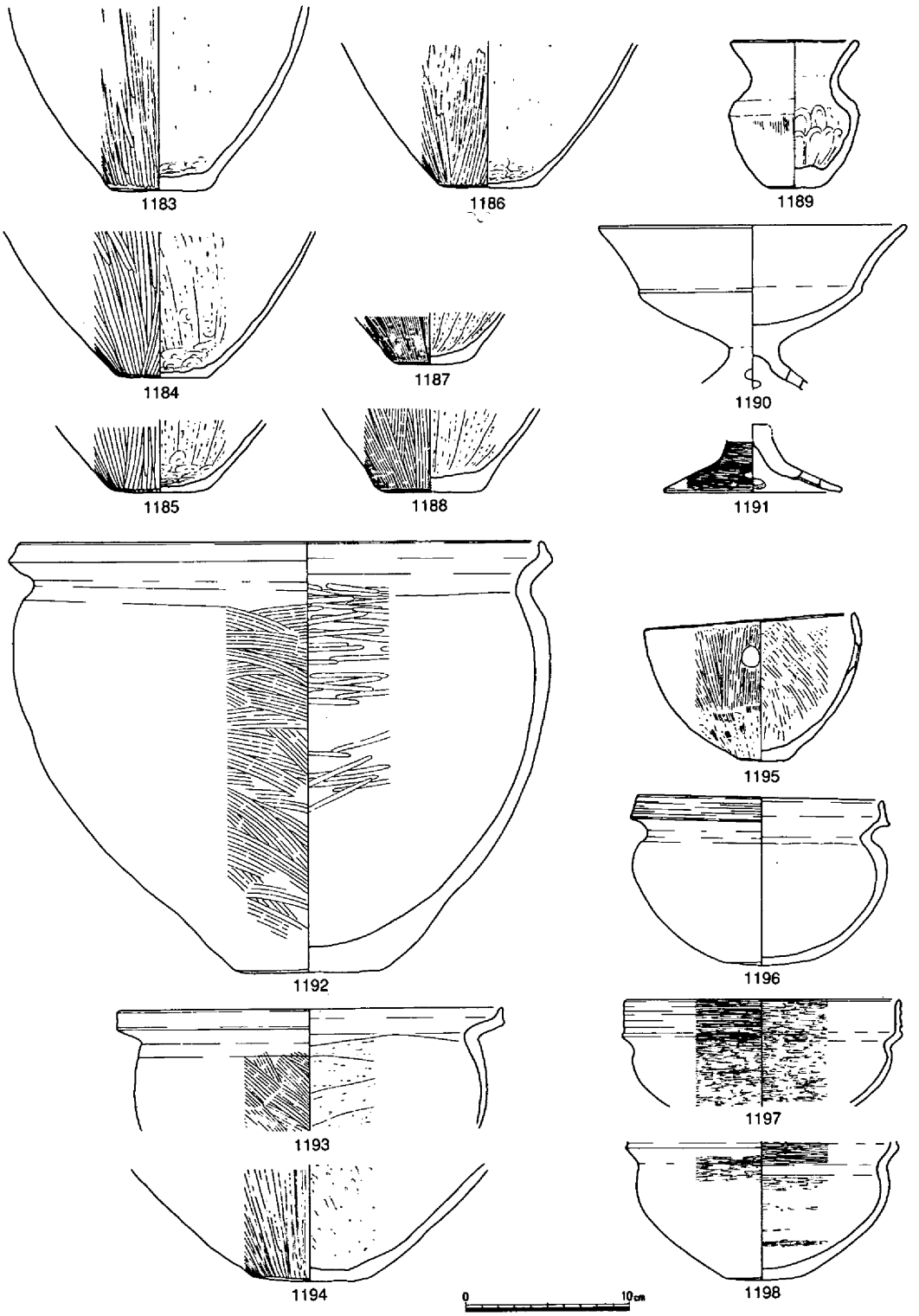
２段に掘られており、検出面での平面形は1.55×1.2mの不整



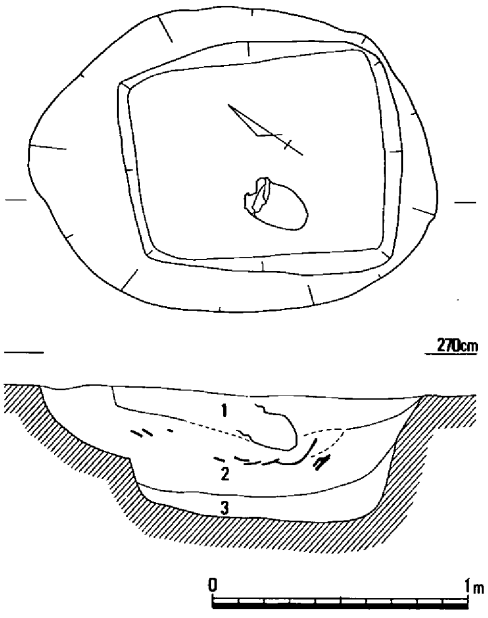
第232図　土壙65（1/30）・出土遺物①（1/4）



第233図　土壙65出土遺物②（1/4）



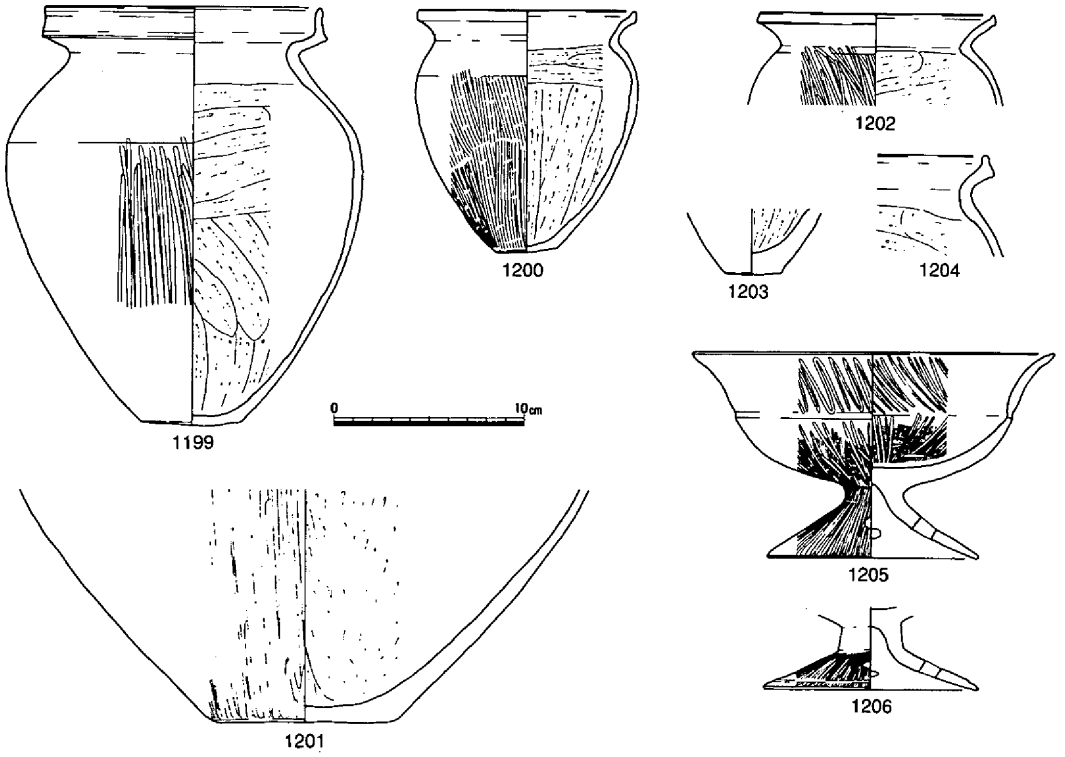
第234図　土壙65出土遺物③（1/4）



1．黄褐灰色砂質土　3．暗灰褐色粘質微砂
2．灰褐色粘質微砂

な楕円形を呈して、深さ25cm程度まで緩やかに下がる。下段は平面形長方形を呈して、長軸長108cm、短軸長91cmをそれぞれ測り、深さ15～30cmの側壁はやや外傾している。海抜高2.07mの底面は、97×78cmの長方形で、北から南へやや傾斜している。３層に分けられる埋土のうち、第２層上層から弥生土器の大形片が出土している。

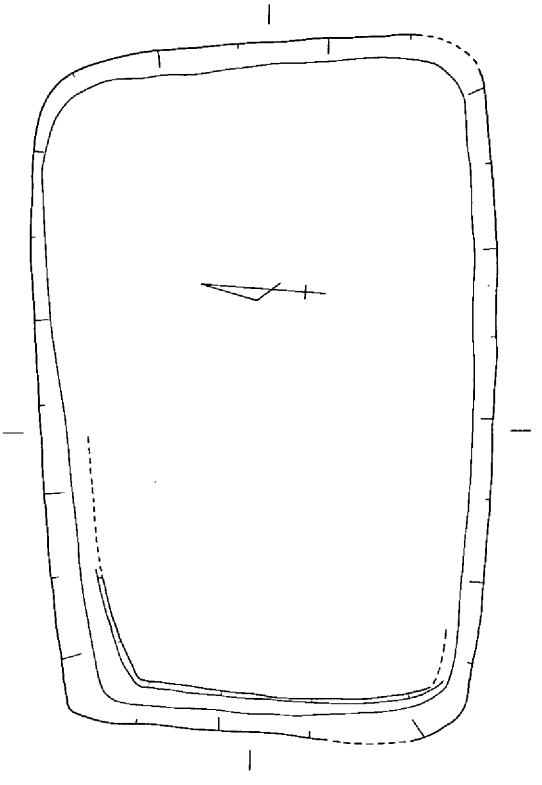
弥生土器には、壺1201、小形壺1203、甕1199・1200・1202・1204、高杯1205・1206等がある。1199の口縁端部は直立し、他の甕も上方へ摘まれている。1205は、深い杯部から口縁部が外反して立ち上がり、短い脚柱部から裾部へ広がる。上東・鬼川市Ⅲ式併行と考えられる。

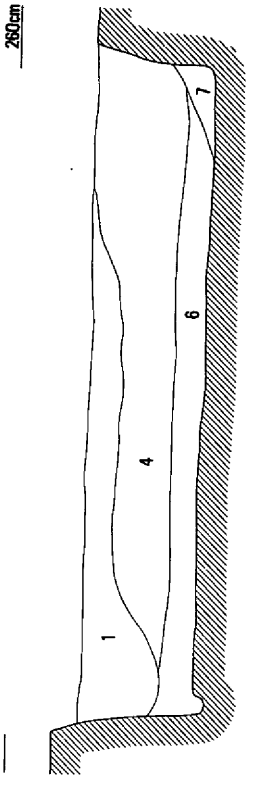


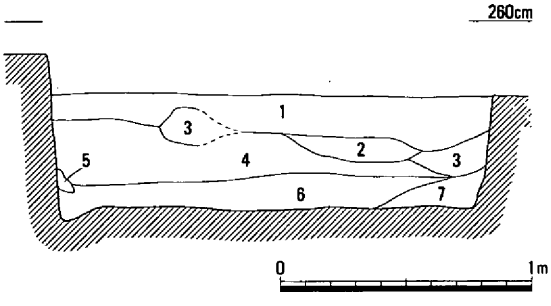
第235図　土壙66（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙67（第151・236図、写真図版61）

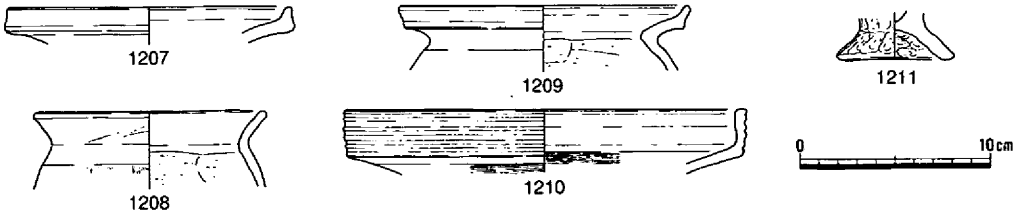
11Ｃｃ区北東部に位置する長方形土壙で、竪穴住居２・８を削り、竪穴住居50に削られている。







1．茶褐色砂質土
（含、黄褐色砂質土多）
2．明茶褐色土
3．暗茶褐色土
4．茶褐色砂質土
5．灰色砂
6．青灰褐色砂質土
7．青灰茶褐色土



第236図　土壙67（1/30）・出土遺物（1/4）

2．足守川加茂Ｂ遺跡

平面形は長方形で、長軸長2.73m、短軸長1.8mをそれぞれ測り、深さ62cmが残る側壁は直立からやや外傾している。底面は海抜高1.88m前後でほぼ平坦であり、2.57×1.69mの長方形を呈する。西辺から北辺の一部にかけて、側壁裾に幅８～15cm、深さ５cm程度を測る溝状の遺構が検出されたが、全周してはいないようである。埋土は７層に分けられ、第１・４層が厚く全体に堆積し、第２・３・５層は部分的に認められる。

出土遺物には、弥生土器の壺1207、甕1208・1209、高杯1210、製塩土器1211等があり、時期は弥生時代後期後半に比定される。

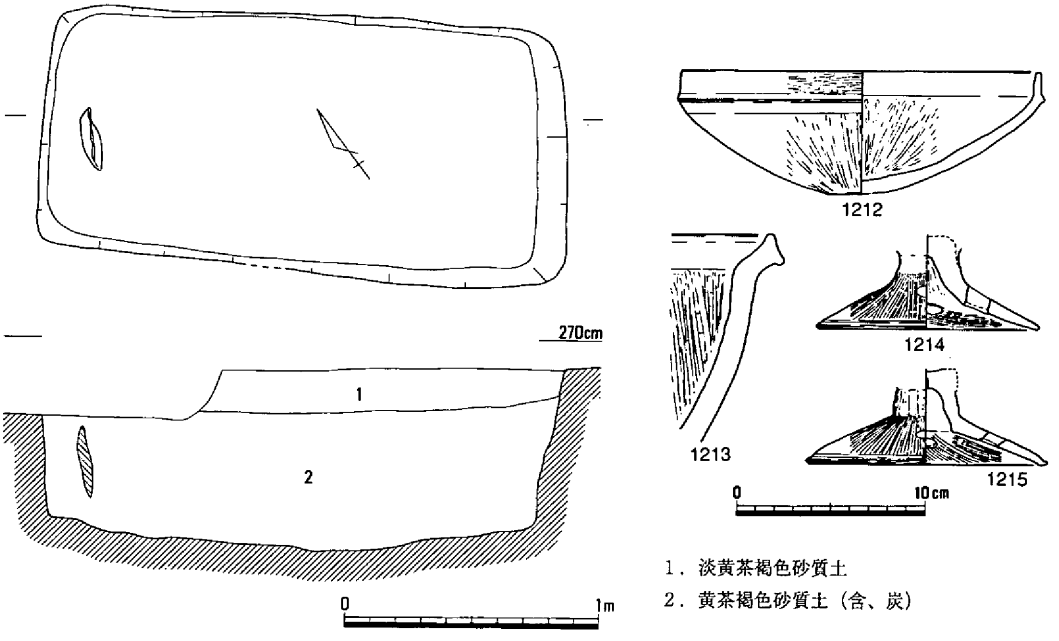
土壙68（第151・237図、写真図版61）

11Ｃｄ区北西部に位置する長方形土壙で、竪穴住居50、土壙69に削られ、竪穴住居８を削っている。

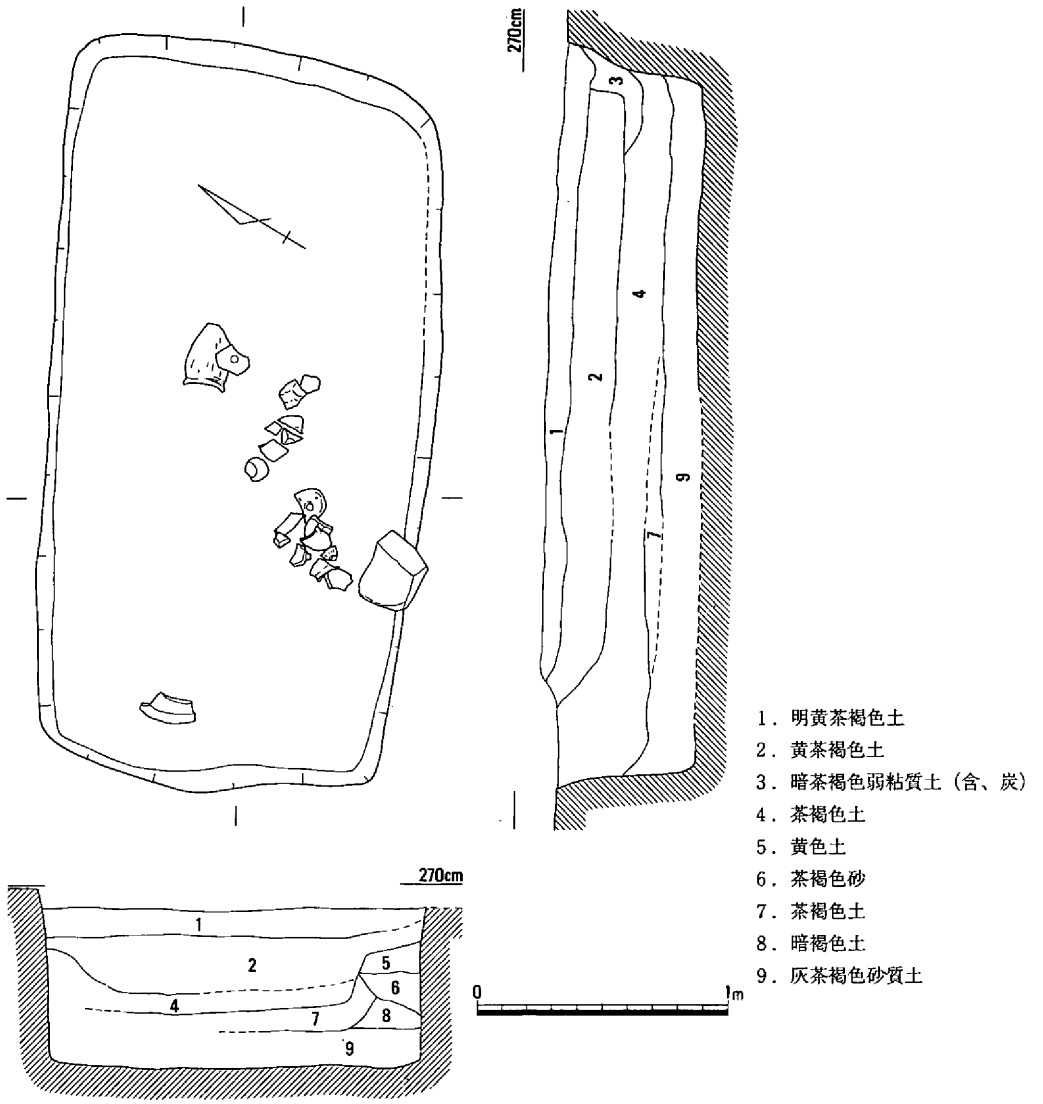
平面形は長方形で、長軸長2.05m、短軸長1.03mをそれぞれ測り、深さ71cmが残る側壁は直立からやや外傾する。海抜高1.88mの底面は中央部がややくぼんでおり、1.93×0.95mの長方形を呈する。埋土は２層に分けられ、炭を含んで厚く堆積する第２層の北西端近くでは、底面から８cm浮いて平石が立った状態で検出された。

出土遺物には、弥生土器の高杯1214・1215、鉢1212・1213等がある。1212・1214・1215には水漉粘土が用いられている。

時期は弥生時代後期後半（オノ町式併行）に比定される。



第237図　土壙68（1/30）・出土遺物（1/4）



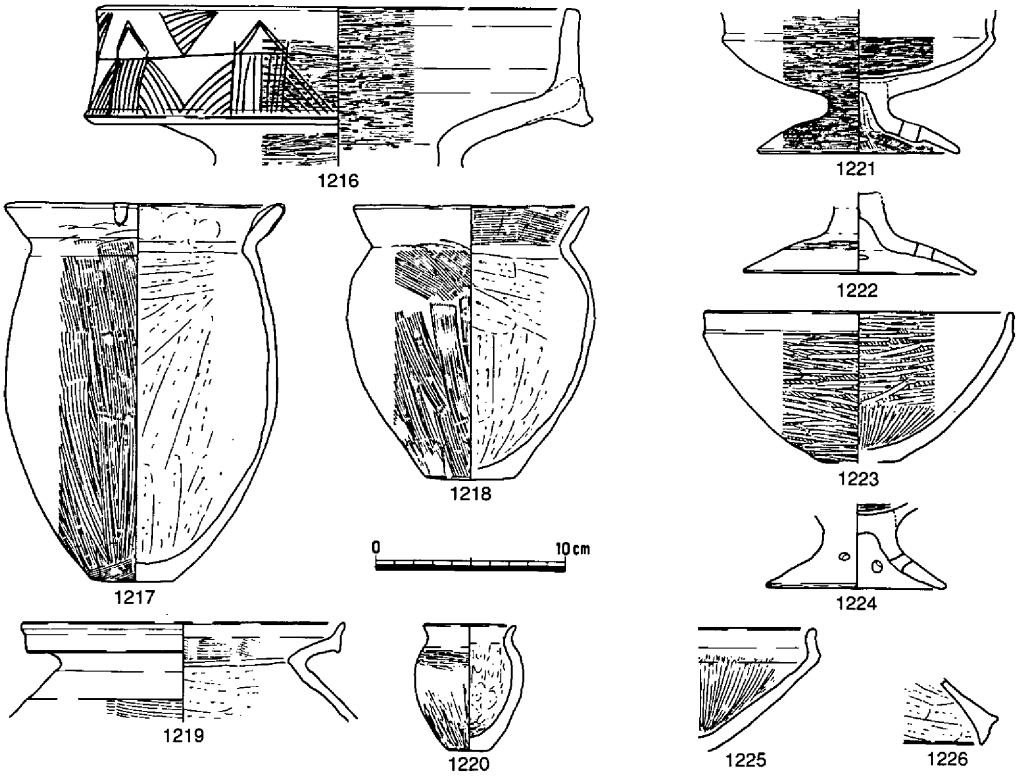
第238図　土壙69（1/30）

土壙69（第151・238・239図、写真図版62）

11Ｃｃ区東端に位置する長方形土壙で、竪穴住居８、土壙68を削り、竪穴住居19に東接して、竪穴住居50に削られている。

平面形は長方形で、長軸長2.95m、短軸長1.52mをそれぞれ測り、深さ61cmが残る側壁はほぼ直立して、上端がやや外傾する。海抜高1.98mの底面はほぼ平坦で、2.65×1.43mの長方形を呈する。埋土は９層に分けられ、最上層から弥生土器の大形片が出土している。

弥生土器には、壺1216、甕1217～1219、高杯1221・1222、鉢1223・1225、台付鉢1224、器台1226、ミニチュアの甕1220等がある。1216の口縁部外面には、ヘラ描沈線による線刻が上



第239図　土壙69出土遺物（1/4）

下二段に分けて施されている。高杯は短脚で、水漉粘土が用いられ、1221は深い杯部から口縁部が直立している。1226は混入とみなして、その他の土器についてはオノ町式併行として捉えられる。

土壙70（第151・240図、写真図版62）

11Ｃｃ区中央部に位置する長方形土壙で、竪穴住居19を削り、竪穴住居50・51に削られる。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長2.35m、短軸長1.92mをそれぞれ測る。深さ45cmが残り、77cm以上はあったと想定される側壁は直立からやや外傾し、海抜高1.89mの底面は中央部が浅くくぼんで、2.26×1.77mの隅丸方形を呈する。埋土は暗茶褐色砂質土である。

出土遺物には、弥生土器の壺1227・1228、脚付直口壺1239、甕1229・1230・1232～1235、鉢1236、台付鉢1237・1238；ミニチュアの甕1231、製塩土器1240等があり、時期は弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

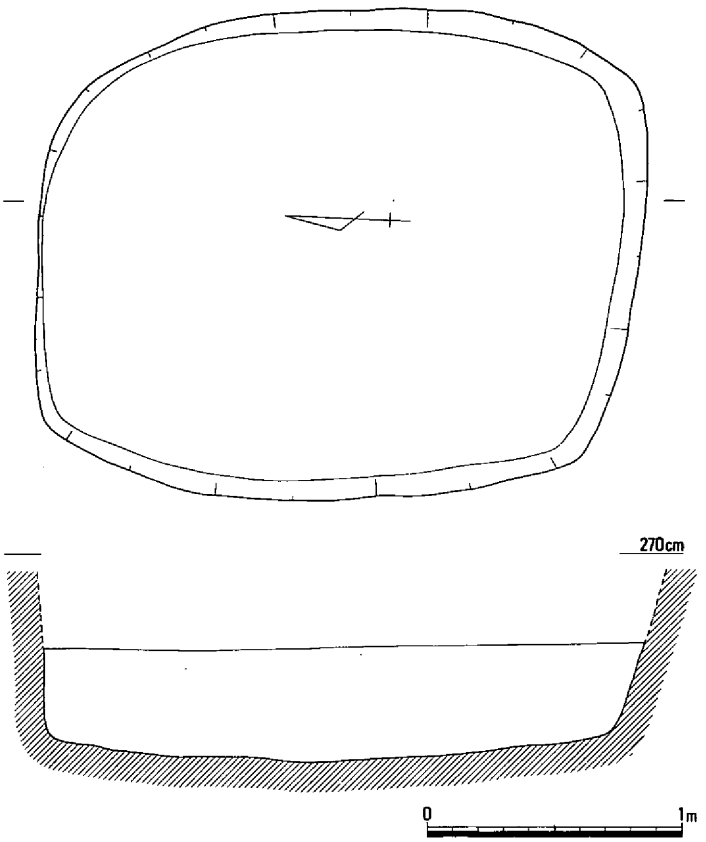
土壙71（第151・241・242図、写真図版63）

11Ｃｃ区南部に位置する長方形土壙で、竪穴住居19に南接し、土壙14を削っている。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長2.7m、短軸長2.1mをそれぞれ測る。深さ44cmが残る側

壁は外傾し、海抜高2.57ｍの底面はほぼ平坦で、2.60×1.88ｍの隅丸長方形を呈する。埋土は３層に分けられ、底面直上の第３層から角礫とともに弥生土器が出土している。

弥生土器には、長頸壺1241・1242、脚付直口壺1243、甕1244～1247、高杯1248、鉢1249・1251、台付鉢1250がある。1247は、口縁部が斜め上方に拡張されてヨコナデされており、山陰系の土器と考えられる。1245には水漉粘土が用いられてい



第240図　土壙70（1/30）・出土遺物（1/4）

る。1248は短脚で縦方向にヘラミガキされ、裾端部に２条の沈線が巡る。

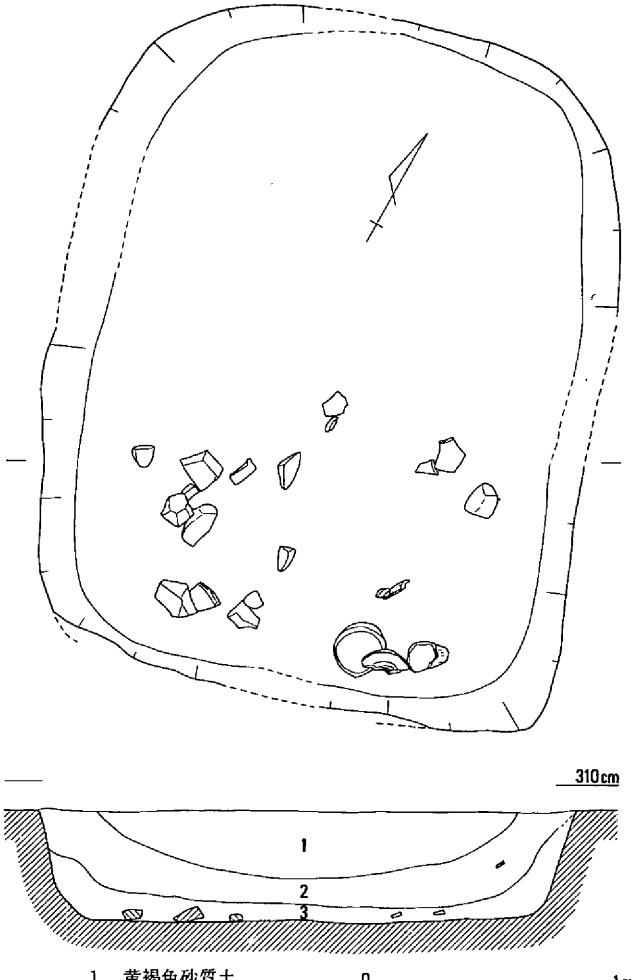
時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

土壙72（第151・243図）

11Ｃｃ区西部に位置し、上層を竪穴住居53に削られている。

西端を調査時の側溝によって失っており、規模を明確にできないが、平面形は隅丸長方形と考えられ、最大長軸長148cm、短軸長83cmを測る。深さ18cmが残る側壁は外傾し、海抜高2.38ｍの底面は短軸長76cmの隅丸長方形を呈する。埋土は茶褐色砂質土で、中央部では底面から浮いた状態で弥生土器の大形片がまとまって出土している。

弥生土器には、甕1252・1253、高杯1254、鉢1255・1256等がある。1252は肩がよく張って体部外面には縦方向のヘラミガキが施され、ほぼ直立する口縁部外面には退化凹線が巡る。1255には水漉粘土が用いられている。時期は、弥生時代後期後半（オノ町Ⅰ式併行）に比定される。



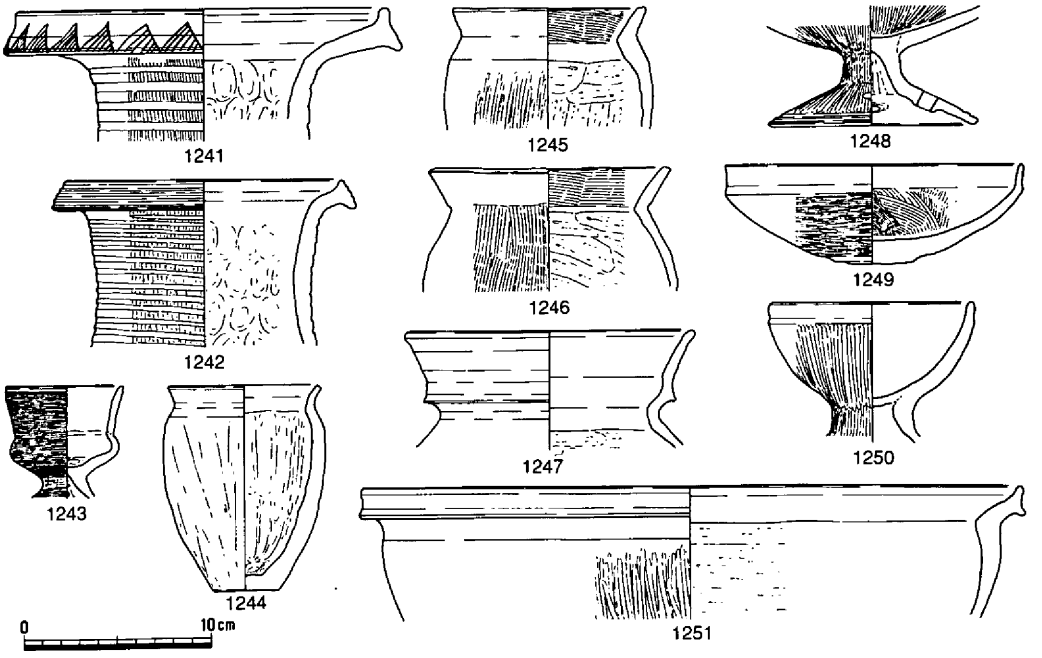
第241図　土壙71（1/30）

土壙73（第151・244図）

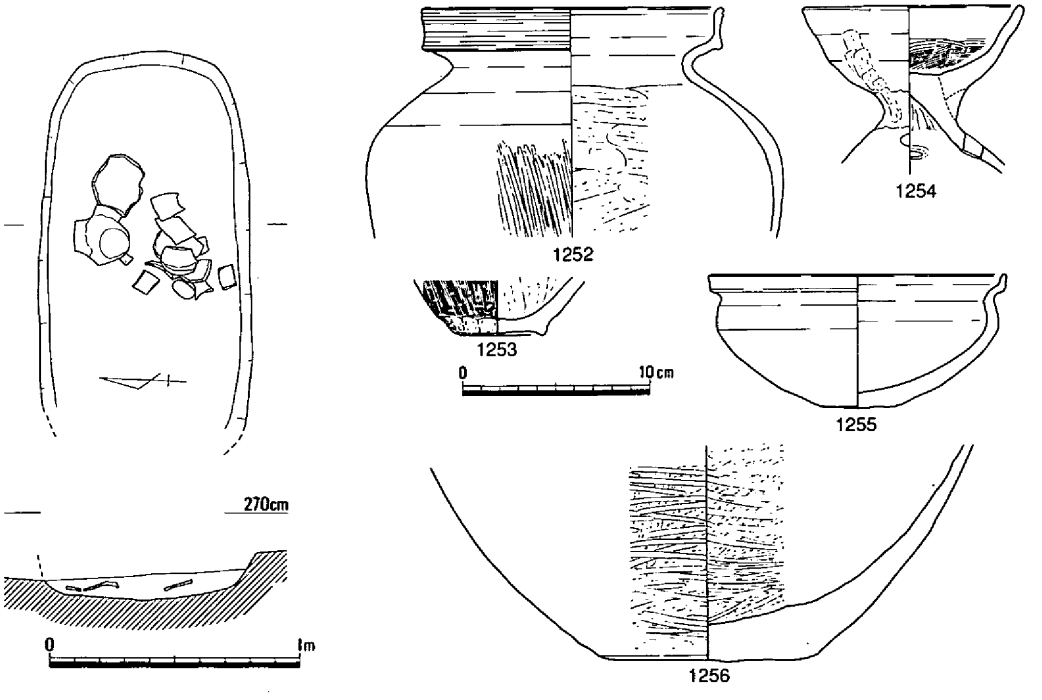
11Ｂｄ区北東部に位置し、北端を竪穴住居48に削られる。

平面形は楕円形と想定され、長径95cm、復元短径78cmをそれぞれ測る。深さ８cmが残る側壁はやや外傾し、海抜高2.55ｍの底面は北へやや傾斜している。埋土は炭を多く含む灰褐色砂質土で、底面から10cm以上高い位置で弥生土器が出土している。

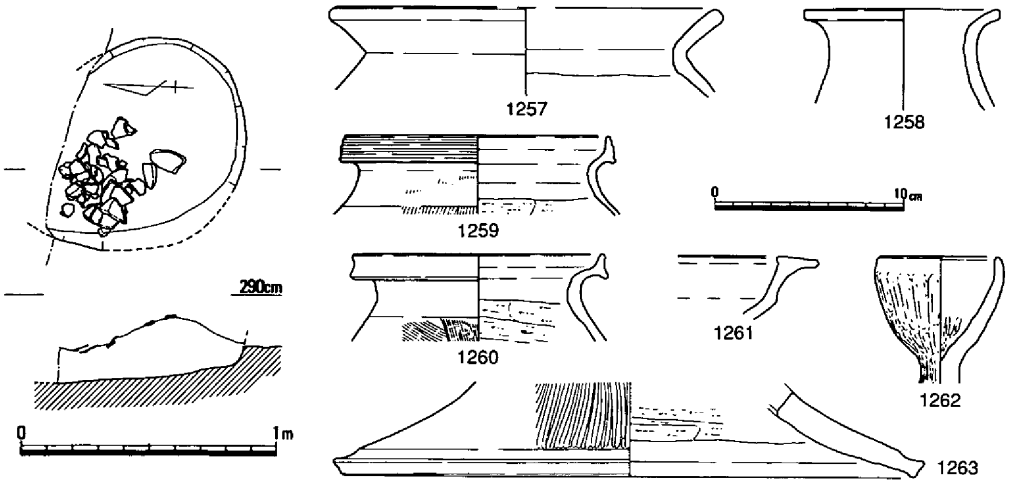
弥生土器には、壺1258、甕1257・1259・1260、高杯1261、台付鉢1262、器台1263がある。1259の口縁部外面には４条の



第242図　土壙71出土遺物（1/4）



第243図　土壙72（1/30）・出土遺物（1/4）



第244図　土壙73（1/30）・出土遺物（1/4）

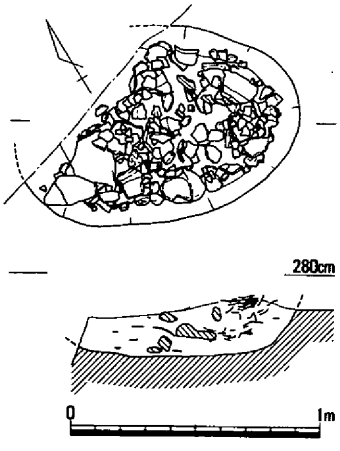
退化凹線が巡っており、1263には円形の透し孔が認められるが、孔数は不明である。1261・1263等に古い様相もみえるが、時期は、弥生時代後期後半に求められる。

土壙74（第151・245・246図、写真図版63）

11Ｃｃ区西端に位置して、竪穴住居５を削り、竪穴住居48に削られている。

北端を失っているが、平面形は楕円形と想定され、復元長径115cm、短径78cmを測る。深さ19cmの側壁は外傾しており、海抜高2.6mの底面は復元長径90cm、短径58cmの楕円形である。埋土は炭を多く含む灰褐色砂質土で、これに角礫とともに多量の弥生土器片が含まれている。

弥生土器には、壺1264、甕1265～1277、高杯1280、鉢1278、小形鉢1279等がある。壺・甕ともに体部の調整は、内面ヘラケズリ、外面縦方向のハケメが主であるが、1266内面はハケメ調整である。体部外面に縦方向のヘラミガキが施されているのは、1264・1268・1276である。口縁端部については、上方へ摘み上げる傾向が見られ、1264・1270では口縁部外面に退化凹線が見られる。1280は短脚で、口縁部外面に凹線が巡らされている。時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

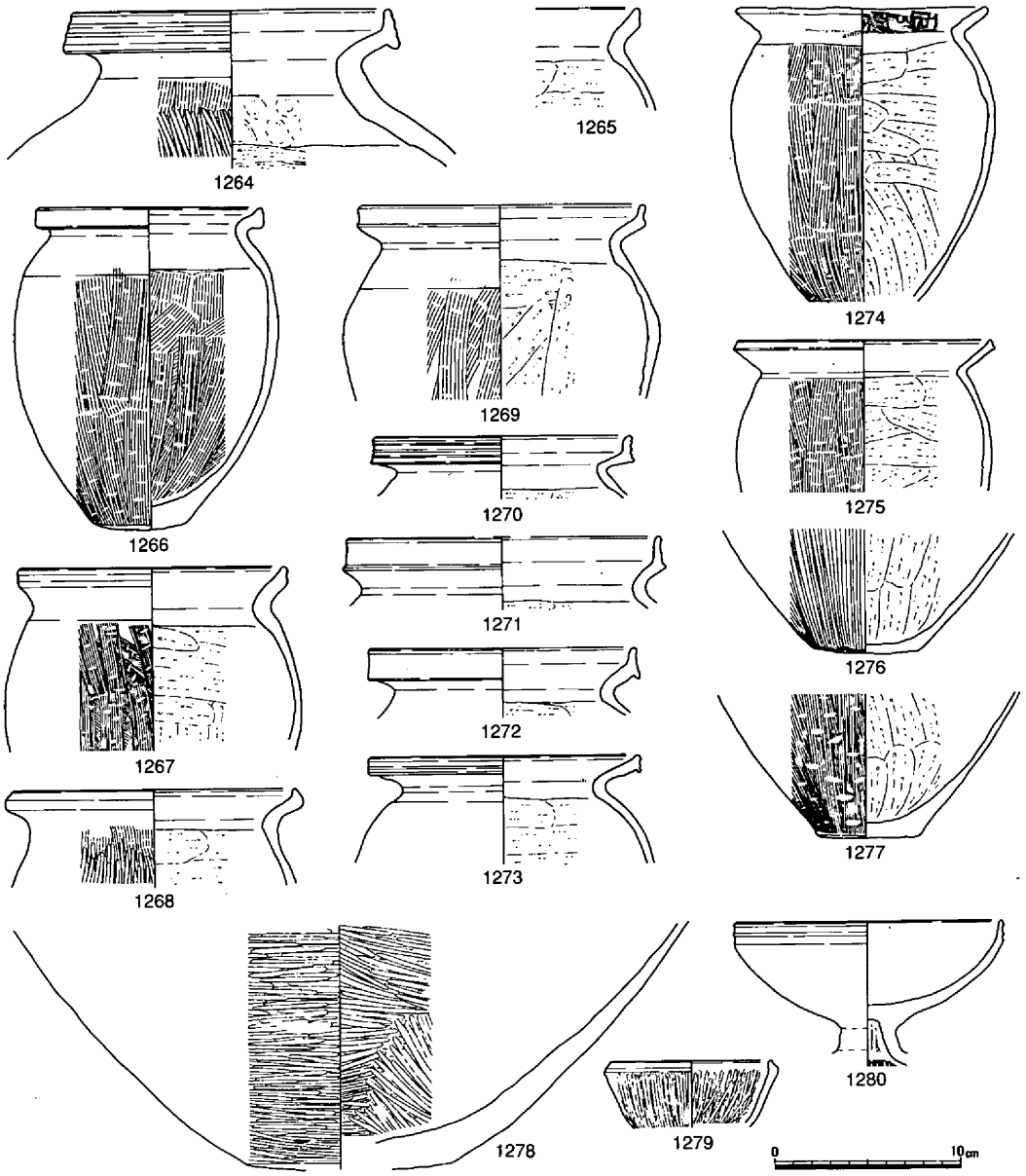


第245図　土壙74（1/30）

土壙75（第151・247図）

11Ｂｄ区南東部に位置し、土壙171を削る。

調査手順の関係で北半を明確にできていないが、平面形は方形ないし長方形と考えられ、東西長1.26mを測る。深さ46cmを測る側壁はほぼ直立しており、長方形土壙の範疇



第246図　土壙74出土遺物（1/4）

に含めうるものである。海抜高2.47～2.58mの底面は西へ向かって傾斜しており、東西長1.15mを測る。

出土遺物には、弥生土器の甕1281、高杯1282、鉢1283のほかに、分銅形土製品C25があり、1281・1282は底面での出土である。C25は混入であるが、列点文とヘラ描沈線によって加飾されており、上端側面から裏面に貫通孔が施されている。1282は短脚で、やや深い杯部から口

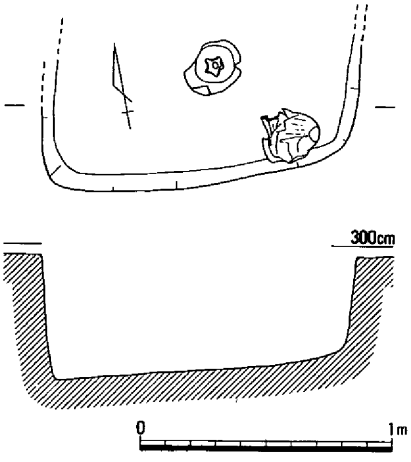
縁部が外反して立ち上がり、時期は弥生時代後期後半（オノ町Ⅰ式併行）に求められる。

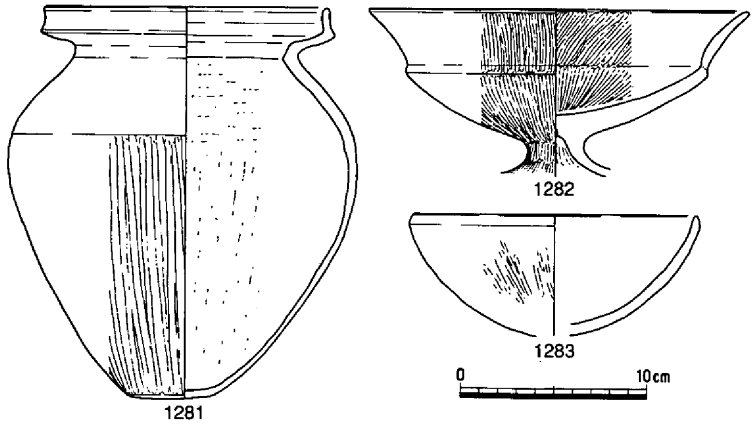
土壙76（第151・248・250・251図）

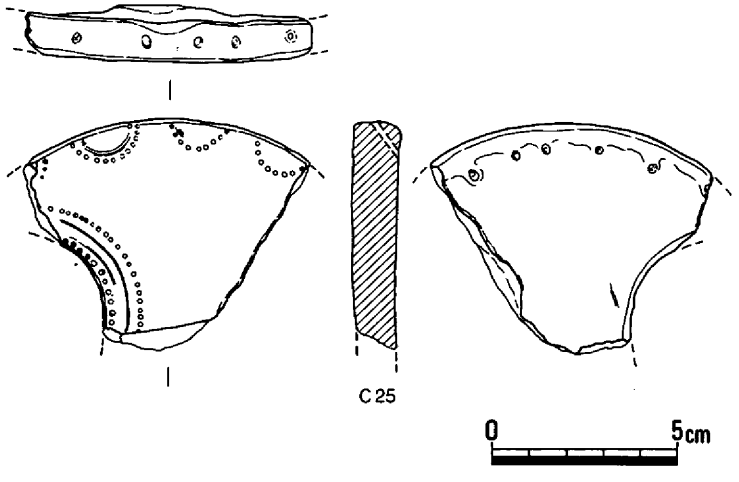
11Ｂｄ区南西部に位置し、竪穴住居22を削り、竪穴住居55・59に削られている。

重複する遺構埋土の中で平面形の確定が困難であったが、遺物の集中状況から、165×83×20cm程度の規模の楕円形に復元される。

出土遺物には、壺1284、甕1286～1290、小形甕1285、高杯1291～1298、鉢1299～1302･1305、台付鉢1303・1304等がある。高杯は短脚であり、杯部に







第247図　土壙75（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

ついてみていくと、1291・1296は杯部が深く径も大きいもので、短い口縁部がやや外反しながら急角度に立ち上がる。これに対して、他は浅い杯部から深い口縁部がやや外反しながら斜め上方へ立ち上がるもので、1298はほとんど外反しない。前者がオノ町Ⅰ式に、後者がオノ町Ⅱ式にそれぞれ比定されるものであり、鉢1305に新しく位置づけうる様相も見られるが、弥生時代後期後半（オノ町Ⅱ式併行）として据えられる。

土壙77（第151・249図）

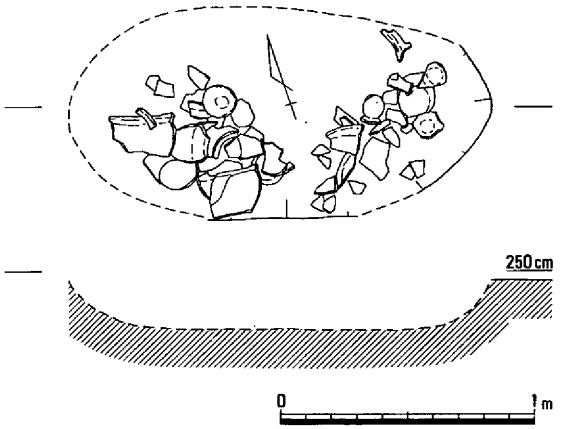
10Ｃｂ区に位置し、北端を土壙63に削られている。

平面形は不整な楕円形と想定され、復元長径1.8ｍ、短径1.4ｍを測る。２段に掘られており、上段の側壁は緩い傾斜で下がり、下段の側壁は直立に近くやや外傾している。底面は北から南へ傾斜して、南端で海抜高2.09ｍを測り、最大幅75㎝の不整な長方形を呈する。埋土は６層に分けられるが、遺物は出土していない。

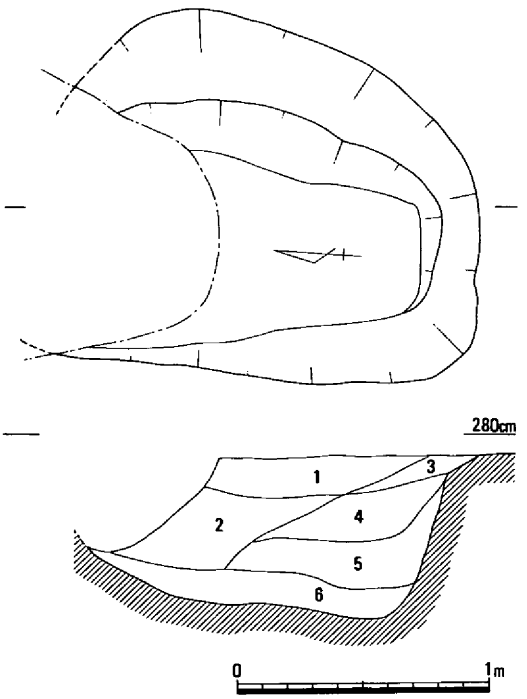
土壙78（第151・252図）

10Ｃｂ区南東部に位置し、竪穴住居25に近接している。

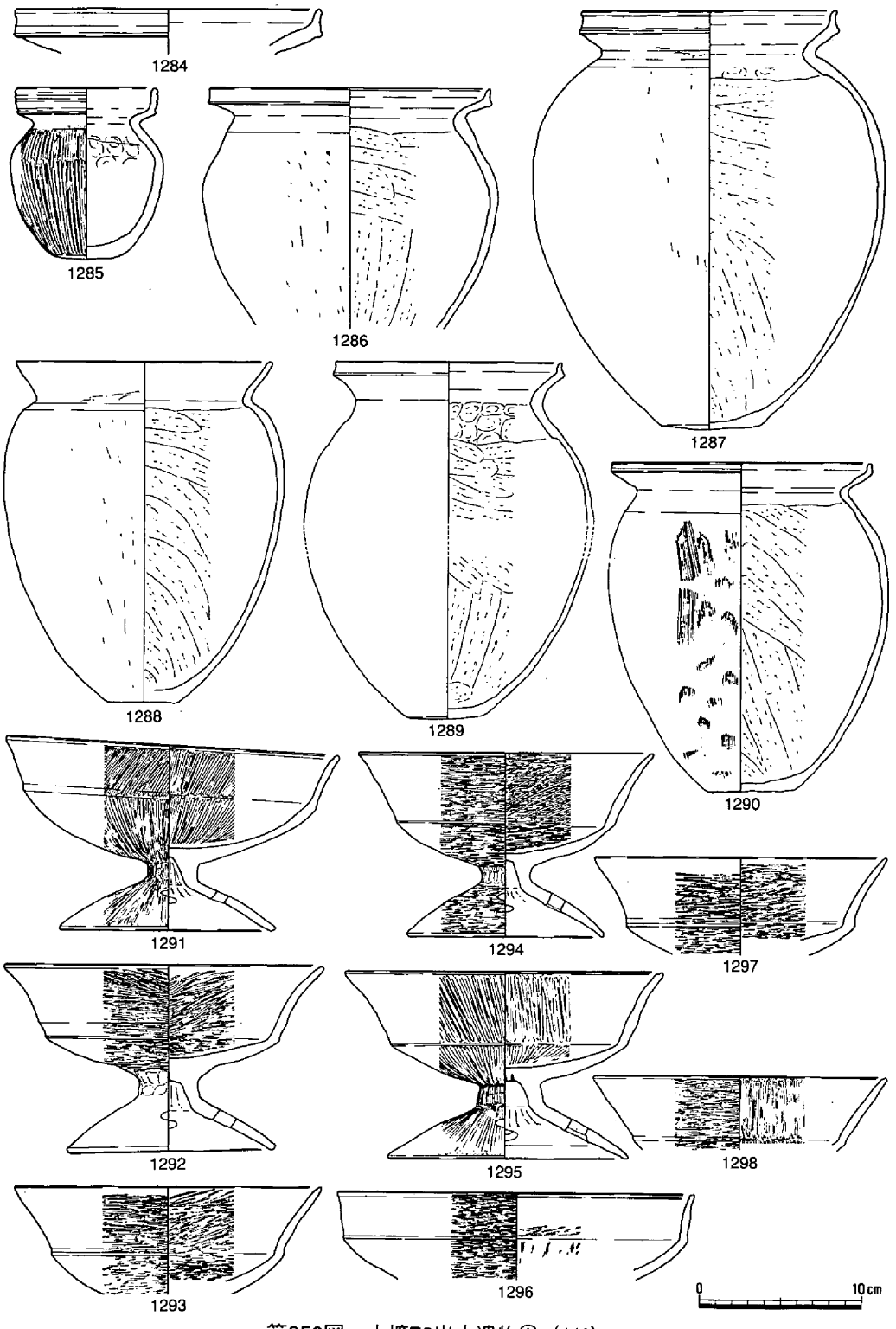
北東隅を調査時の側溝で欠いているが、平面形は楕円形を呈し、長径172㎝、短径93㎝をそれぞれ測る。深さ33㎝の断面形は凸レンズ状を呈し、海抜高2.27ｍの底面は、121×55㎝の楕円



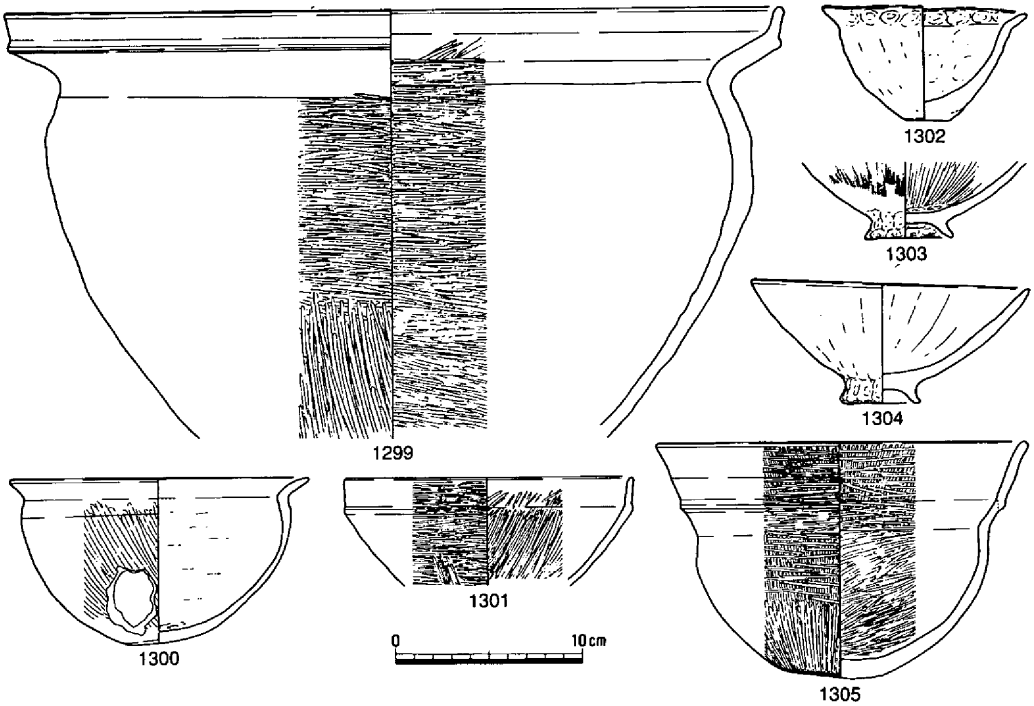
第248図　土壙76（1/30）



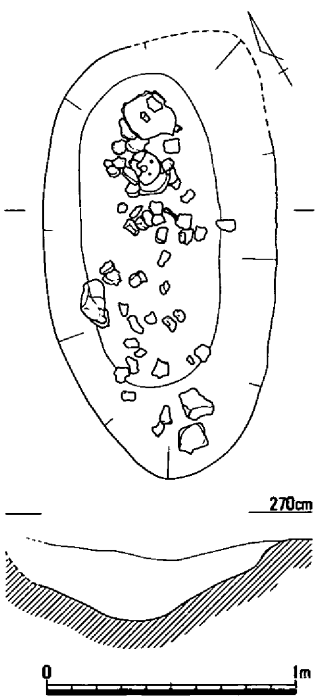
第249図　土壙77（1/30）



第250図　土壙76出土遺物①（1/4）



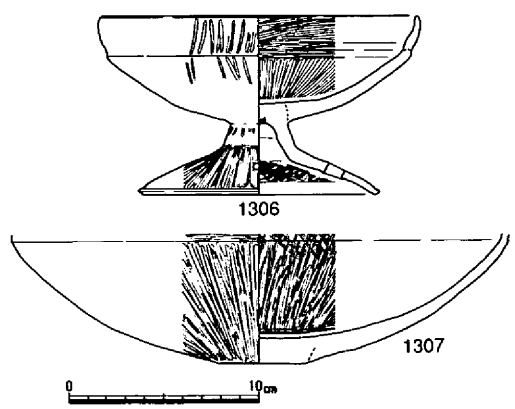
第251図　土壙76出土遺物②（1/4）



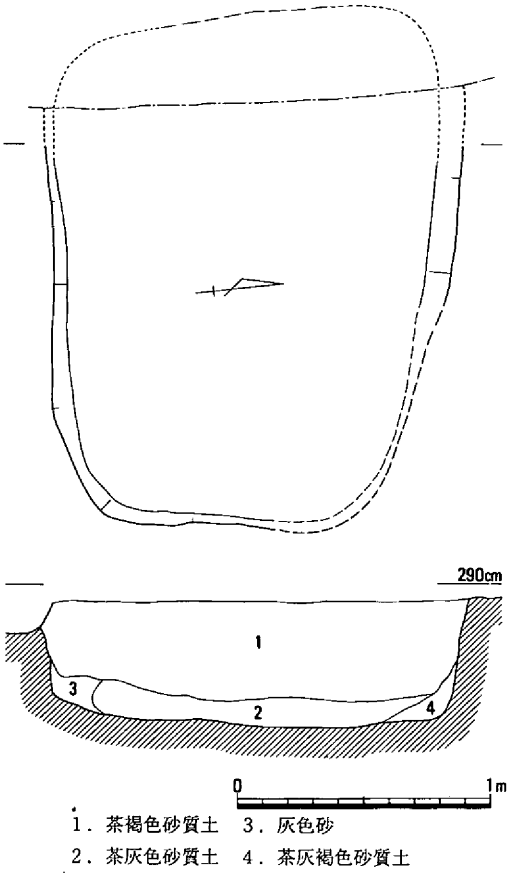
形である。

埋土は灰色細砂粘土で、上層から多数の角礫・円礫とともに弥生土器の高杯1306、鉢1307等が出土している。1306は短脚で、深い杯部から口縁部が上端を内湾させながら立ち上がっており、脚裾部には凹線１条が巡らされている。

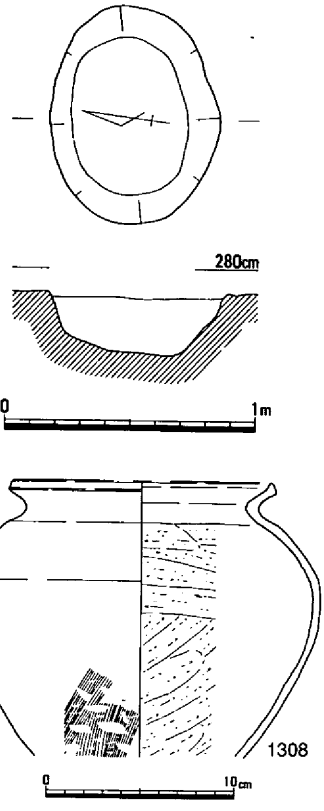
時期は、弥生時代後期後半に比定される。



第252図　土壙78（1/30）・出土遺物（1/4）



第253図　土壙79（1/30）



第254図　土壙80（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙79（第151・253図）

10Ｃｂ区北西隅に位置する長方形土壙で、土壙13を削り、竪穴住居52に削られている。

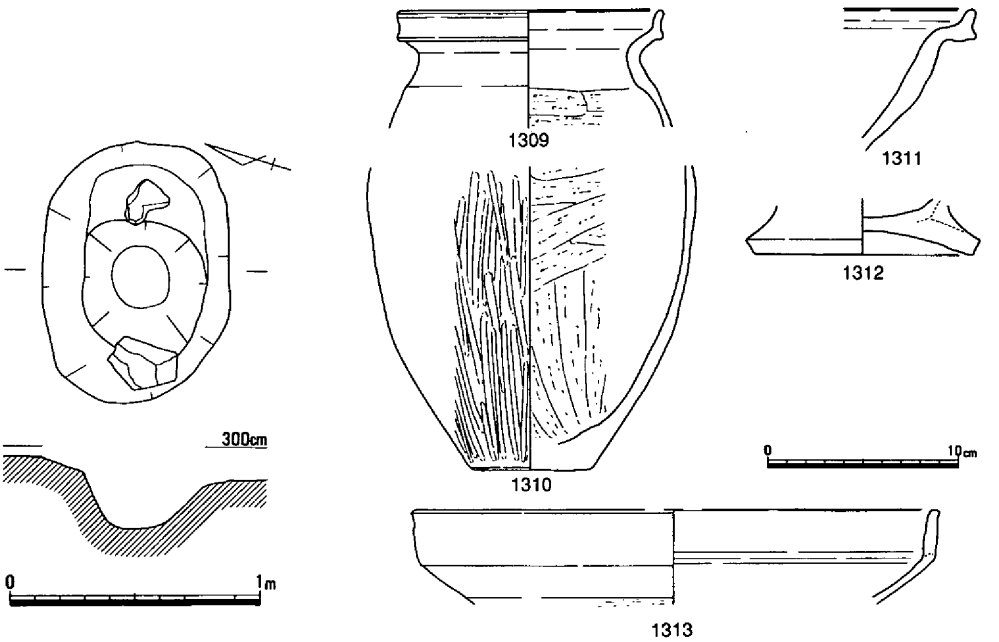
西端を竪穴住居52によって失っているが、平面形は隅丸長方形に復元され、短軸長1.6ｍを測る。深さ50cmが残る側壁は、下半が直立に近く、上半でやや外傾する。底面の海抜高は2.35ｍで、南から北へやや傾斜しており、2.02×1.5ｍの隅丸長方形を呈する。埋土は４層に分けられ、第１層が厚い。

遺物は出土していないが、遺構の形態から弥生時代後期後半に比定しうる。

土壙80（第151・254図）

10Ｃａ区南東部に位置し、竪穴住居25・28の中間に所在する。

平面形は楕円形を呈し、長径87cm、短径67cmをそれぞれ測る。深さ22cmが残る側壁は外傾しており、海抜高2.47ｍの底面は61×45cmの楕円形を呈する。埋土は、炭を含む淡黄茶褐色土である。



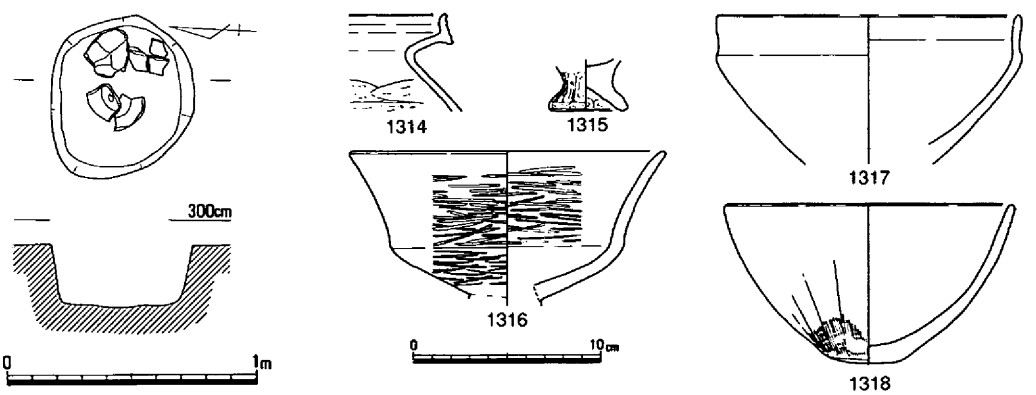
第255図　土壙81（1/30）・出土遺物（1/4）

出土遺物としては弥生土器の甕1308があり、これにより、時期は弥生時代後期後半に求められる。

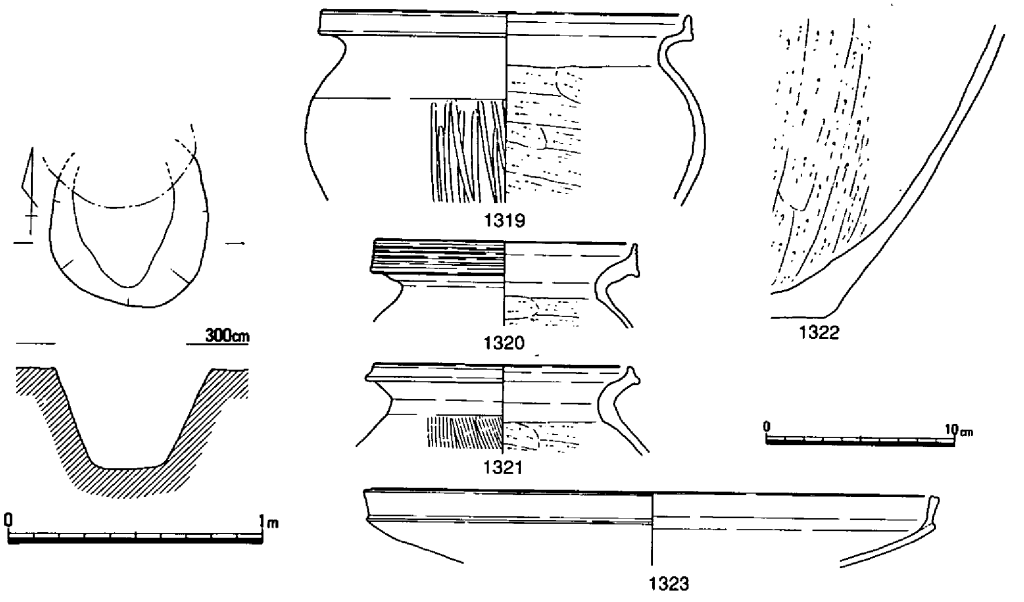
土壙81（第151・255図）

10Ｃａ区南東部に位置し、竪穴住居28に近接している。

平面形は楕円形を呈し、長径103cm、短径74cmをそれぞれ測る。２段に掘られており、東半に浅い段を残して、西半が深く掘られている。下段の底面は、海抜高2.7ｍで、径22cm程度の円形である。上段の東西両端近くで、それぞれ角礫が出土している。



第256図　土壙82（1/30）・出土遺物（1/4）



第257図　土壙83（1/30）・出土遺物（1/4）

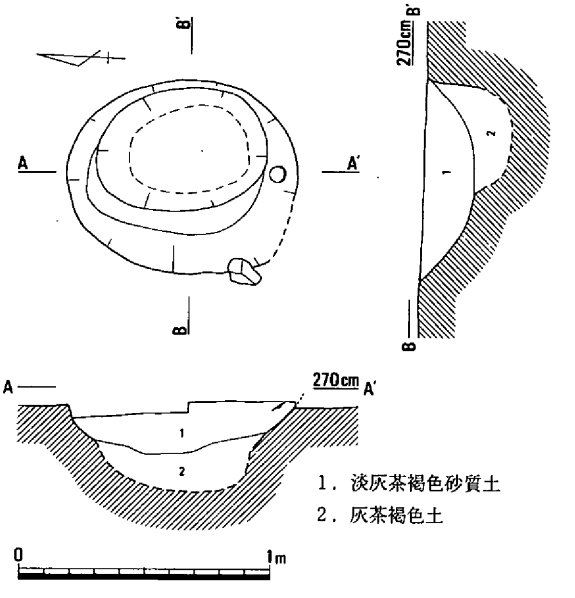
出土遺物には、弥生土器の甕1309・1310、鉢1311・1313、台付鉢1312等があり、時期は弥生時代後期後半に求められる。

土壙82（第151・256図）

10Ｃａ区北西部に位置し、土壙83を削っている。

平面形は楕円形を呈し、長径61cm、短径57cmをそれぞれ測る。深さ25cmが残る側壁はやや外傾しており、断面形は矩形を呈する。海抜高2.67mでほぼ平坦な底面は、54×47cmの楕円形を呈する。底面からやや浮いて弥生土器の大形片が出土している。

弥生土器には、甕1314、高杯1316、鉢1317・1318、製塩土器1315がある。1314の口縁部外面には退化凹線が巡る。1316～1318には水漉粘土が用いられ、1316の口縁部は深く、やや外反している。時期は弥生時代後期後半（オノ町Ⅱ式併行）に比定される。



第258図　土壙84（1/30）

第259図　土壙84出土遺物（1/1）

土壙83（第151・257図）

10Ｃａ区北西部に位置し、北端を土壙82に削られている。平面形は楕円形と想定され、復元長軸長70cm、短軸長61cmを測る。深さ40cmが残る側壁は外傾しており、断面形は逆台形を呈する。海抜高2.51ｍの底面は短径39cmの楕円形に復元される。

出土遺物には、弥生土器の甕1319～1322、鉢1323等がある。

時期は、弥生時代後期後半に比定される。　（光永）

土壙84

（第151・258・259図、写真図版64）

調査区の中央やや北東の最終基盤層で検出した土壙である。平面形は楕円形を呈し、長径92cm、短径77cm、深さ35cmを測る。掘り方は西側では、緩やかな傾斜をなすが、東側では、急角度の掘り方となる。埋土は２層に分離でき、上層の淡灰茶褐色の砂質土から小型銅鏡が出土している。下層は灰茶褐色を呈すが底面が明瞭に確認できなかった。

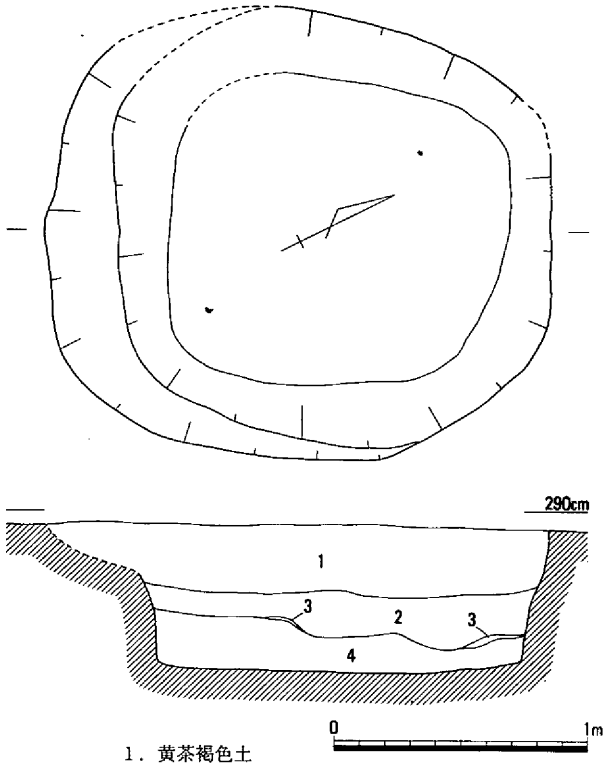
出土した鏡は、土壙掘り方の南側上層埋土中からの出土で、土壙内に落ち込むように鏡表面を上にして検出された。直径6.7cmの櫛歯文鏡の完存品である。縁は、平縁で幅1.5cm、縁厚６㎜で端部は摩滅し丸くなっている。外区は、斜行の櫛歯文帯である。内区は、８か所に擬銘文を

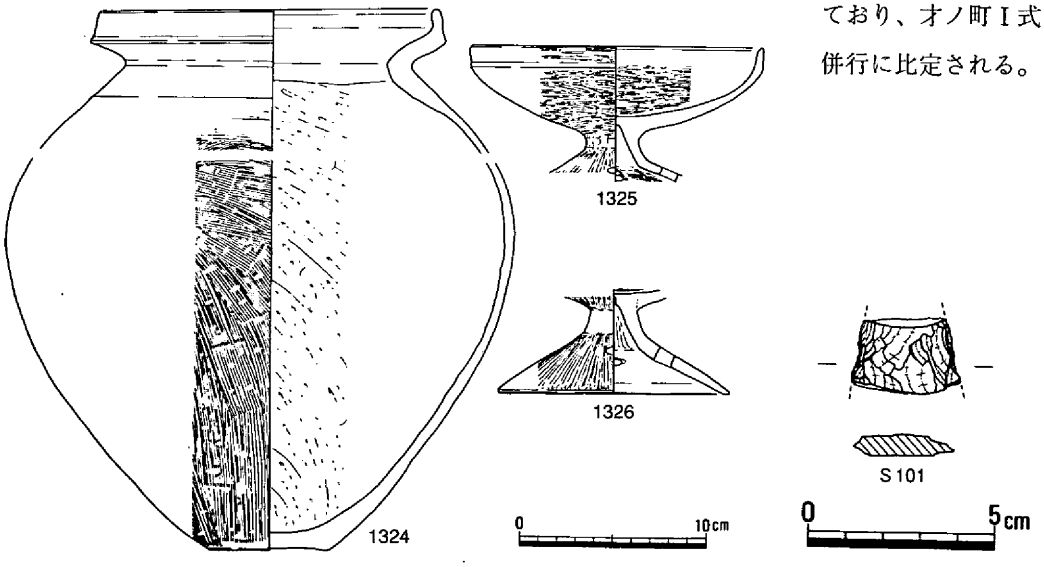
施している。紐径2.5cm、紐厚９㎜である。重量は32.5ｇである。

鏡以外の出土遺物は、弥生土器の細片のみで時期の確定が困難であるが、遺構の切り合い等から弥生時代後期後半と想定される。（山磨康平）

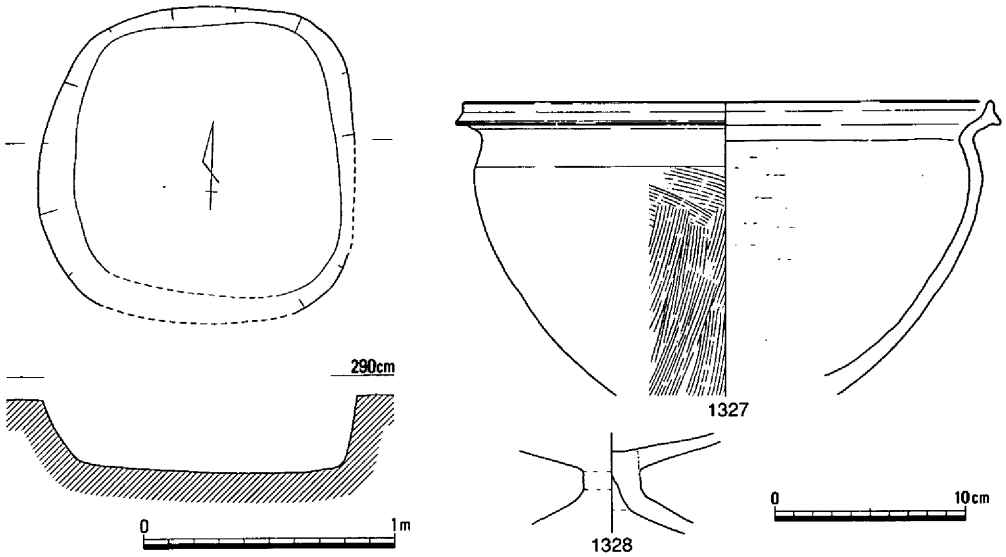
土壙85（第151・260図）

10Ｂｂ区北東隅に位置し、土壙86・177を削り、土壙87に削られている。平面形は1.95×1.78mの隅丸方形で、南西隅から東辺にかけて肩口が崩れており、深さ58cmの側壁は外傾しているが、長方形土壙とみなしうる。海抜高2.37mで平坦な底面は、1.33×1.23mの隅丸方形である。弥生土器の甕1324、高杯1325・1326やサヌカイト製石槍Ｓ101が出土しており、オノ町Ⅰ式併行に比定される。





第260図　土壙85（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）



第261図　土壙86（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙86（第151・261図）

10Ｂｂ区北東隅に位置し、土壙85に削られ、土壙177を削っている。

平面形は隅丸方形に復元され、東西長1.25m、復元南北長1.25mを測る。深さ30cmが残る側壁は外傾しており、断面形は逆台形を呈する。海抜高2.44mを測る底面は、やや東へ傾斜しており、1.07×1.05mの隅丸方形を呈する。

出土遺物には、弥生土器の高杯1328、鉢1327等がある。1328には水漉粘土が用いられており、脚部に円孔を有する。

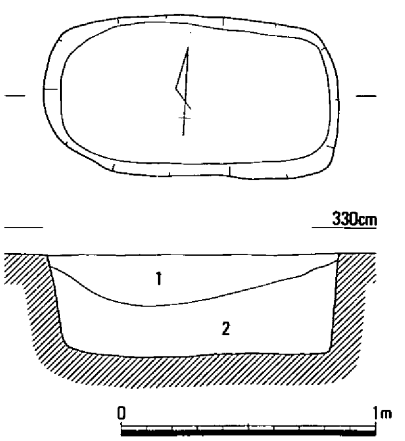
時期は、弥生時代後期後半に求められる。

土壙87（第151・262・263図）

10Ｂｂ区北東部に位置し、土壙85を削っている。

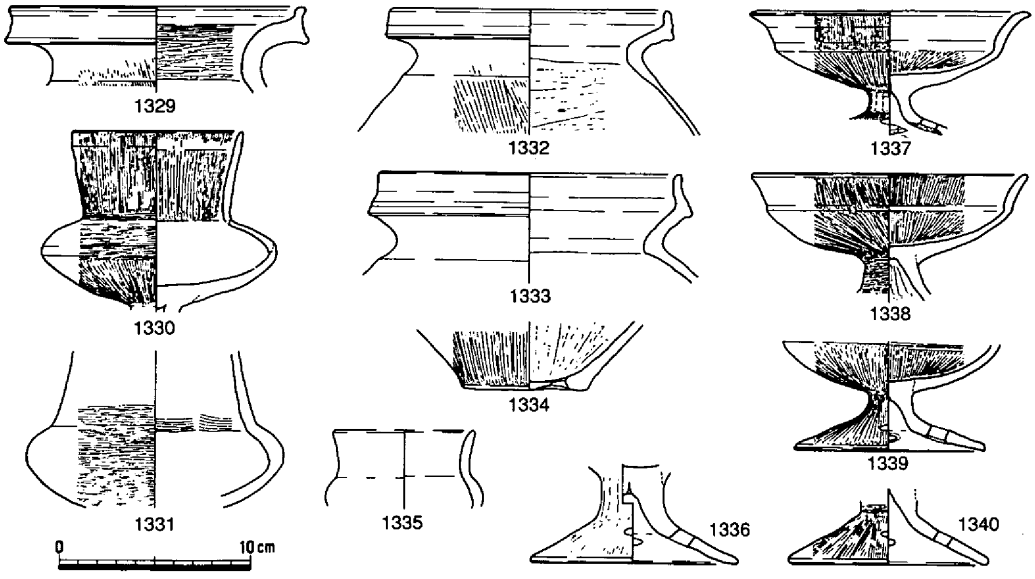
平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長116cm、短軸長63cmをそれぞれ測る。深さ40cmの側壁はほぼ直立し、小形の長方形土壙ともみなしうる。海抜高2.81mの底面はほぼ平坦で、105×55cmの隅丸長方形を呈する。

出土遺物には、弥生土器の壺1329、脚付直口壺1330・1331・1335・1336、甕1332・1333、甑1334、高杯1337～1340等があり、脚付直口壺・高



1．灰茶褐色砂質土
2．茶褐色砂質土

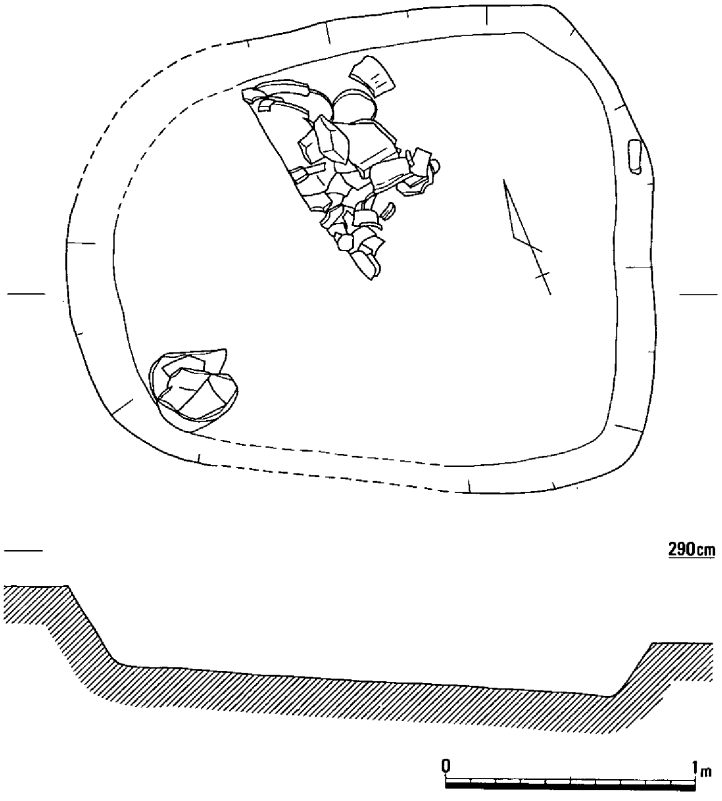
第262図　土壙87（1/30）



第263図　土壙87出土遺物（1/4）

杯には水漉粘土が用いられている。高杯はいずれも短脚で、1337・1338の口縁部は外反しながら短く斜め上方に立ち上がっており、厚みをもっている。脚付直口壺のうち、1335は小形で口縁部も低い。1330は体部が扁平で、口縁部は頸部から逆「ハ」字状に外傾する。これに対して、1331は頸部径が大きく、口縁部は内傾する。

時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

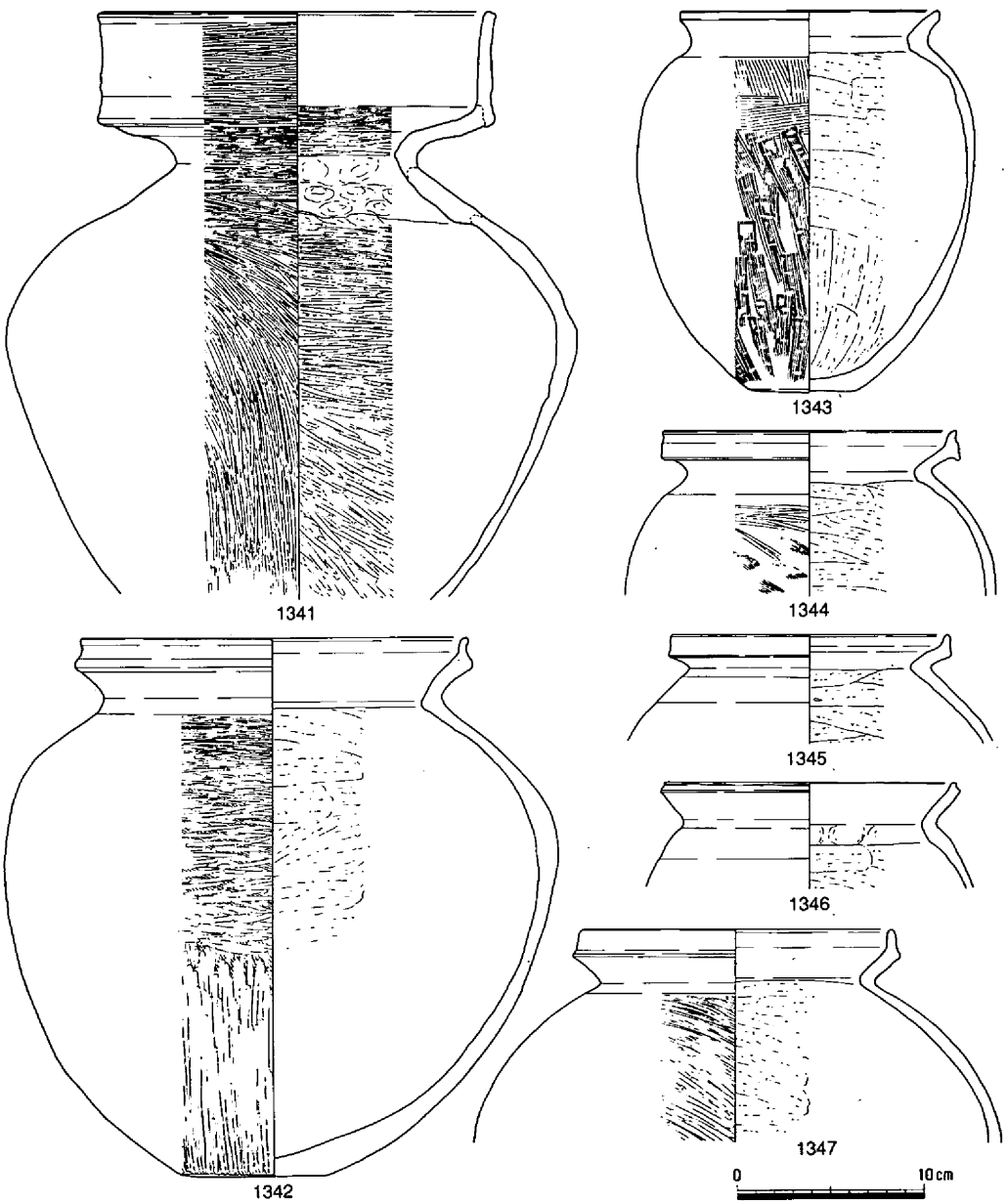


第264図　土壙88（1/30）

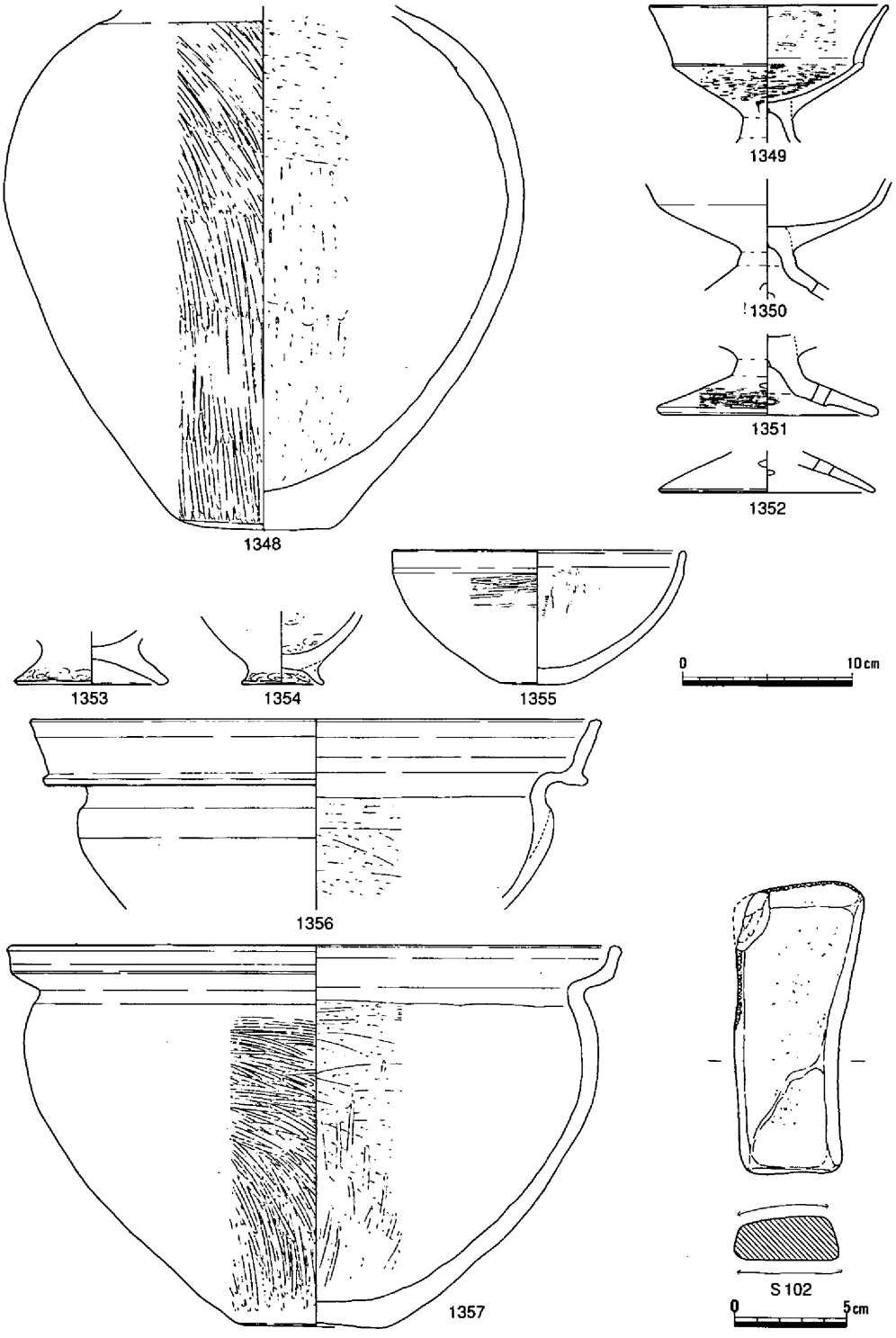
土壙88（第151・264～266図）

10Ｂｂ区北東部に位置し、土壙27を削り、竪穴住居62に削られている。

平面形は不整な長方形を呈し、長軸長2.32ｍ、短軸長1.94ｍを測る。深さ30㎝が残る側壁は外傾し、平坦な底面は西から東へ傾斜して、東端での海抜高2.36ｍを測り、1.99×1.7ｍの不整な長方形を呈する。西半で弥生土器の大形片がまとまって出土している。



第265図　土壙88出土遺物①（1/4）



第266図　土壙88出土遺物②（1/4・1/3）

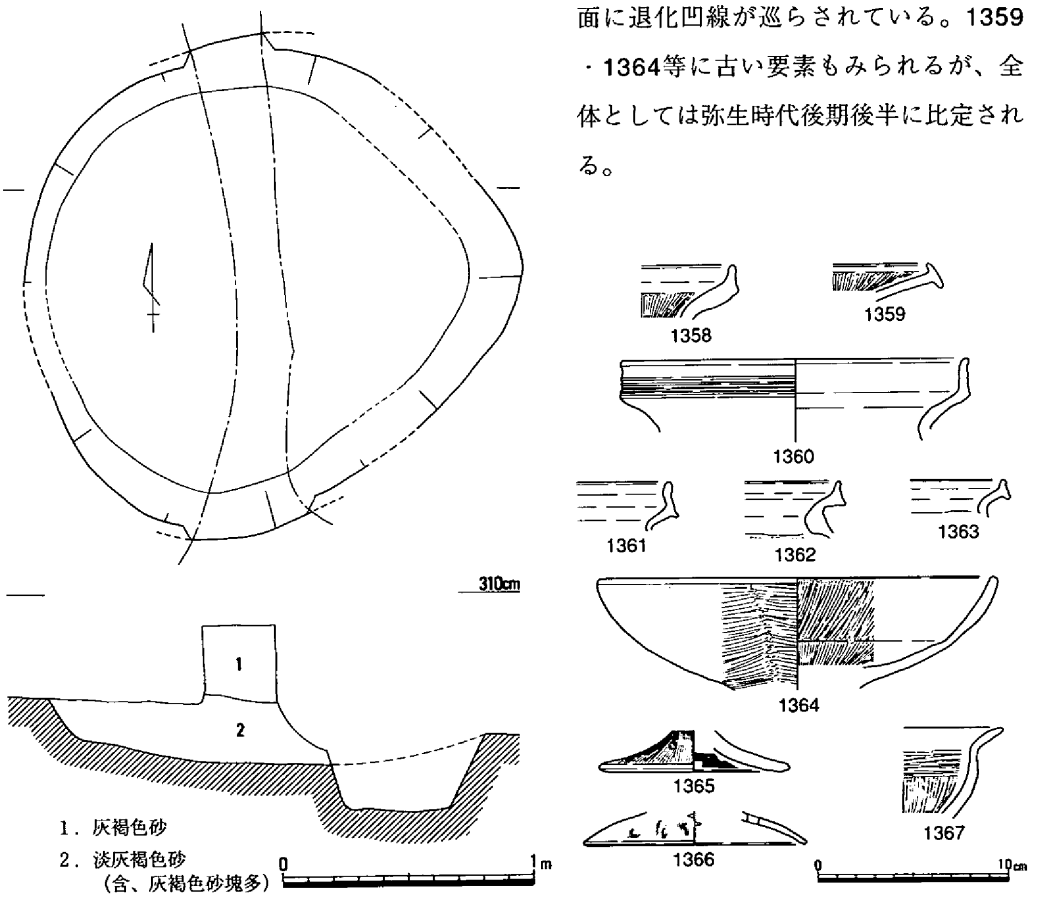
出土遺物には、弥生土器の壺1341、甕1342～1348、高杯1349～1352、鉢1355～1357、台付鉢1353・1354等の他に、玄武岩製の砥石Ｓ102、炭化米がある。1341は、頸部から急角度で開く口縁部の端部が高く直立して上方へ拡張しており、体部内面もヘラケズリ後にヘラミガキされている。1356の口縁部は大きく外反し、端部が斜め上方へ拡張されており、新しく位置づけられる様相を示すが、全体としてはオノ町Ⅰ式併行として据えられる。

土壙89（第151・267図）

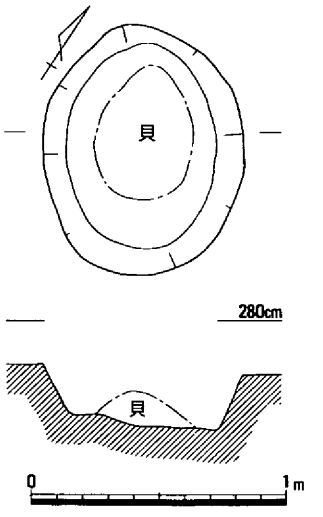
10Ｂｂ区南部に位置して、西半を竪穴住居23に、東半を竪穴住居62・65にそれぞれ大きく削られている。

平面形は楕円形を呈し、長径1.96m、短径1.75mをそれぞれ測る。深さ最大55cmが残る側壁は外傾し、底面は中央部が浅くくぼんで海抜高2.45mを測り、1.68×1.53mの楕円形を呈する。

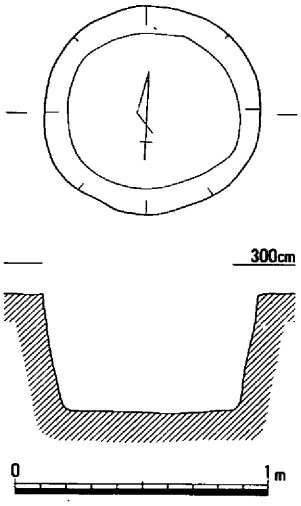
出土遺物には、弥生土器の壺1358・1359、甕1360～1363、高杯1364～1366、鉢1367がある。1360は口縁端部がほぼ直立し、外面に退化凹線が巡らされている。1359・1364等に古い要素もみられるが、全体としては弥生時代後期後半に比定される。

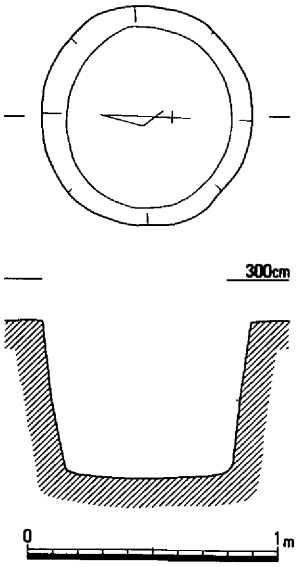


第267図　土壙89（1/30）・出土遺物（1/4）



第268図　土壙90（1/30）



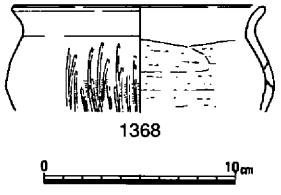


土壙90（第151・268図、写真図版65）

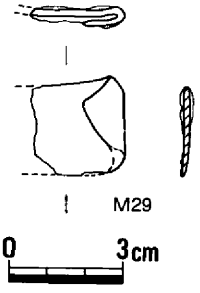
10Ｂｂ区南西部に位置し、竪穴住居23を削り、土壙181に西接する。

平面形は楕円形を呈し、長径100cm、短径78cmを測る。深さ22cmが残る側壁は外傾して、断面形は逆台形である。81×58cmの楕円形を呈する底面は、やや東へ傾斜しており、海抜高2.33mである。その中央部には、53×37cmの楕円形の範囲に厚さ15cmに及ぶ貝殻の堆積が認められた。貝の種類は、ほとんどがヤマトシジミである。

土器は出土していないが、竪穴住居23との関係から、弥生時代後期後半に比定される。



第269図　土壙91（1/30）
・出土遺物（1/4）



第270図　土壙92（1/30）
・出土遺物（1/2）

土壙91（第151・269図）

10Ｂａ区北東部に位置し、土壙29・30を削っている。

平面形は円形で、径84～85cmを測り、深さ48cmが残る側壁はやや外傾して、断面形は矩形を呈する。海抜高2.42mでほぼ平坦な底面は、75×61cmの楕円形を呈する。

出土遺物には、弥生土器の鉢1368があり、外面を縦方向にヘラミガキされた体部には、焼成後に穿孔がなされている。

時期は、弥生時代後期後半に比定される。

土壙92（第151・270図）

10Ｂａ区中央部に位置して、土壙墓２を削り、土壙189に近接している。

平面形は円形で、径84～88cmを測り、深さ63cmの側壁はやや外傾して、断面形は矩形を呈する。海抜高2.33ｍの底面はほぼ平坦で、71×65cmの楕円形を呈する。

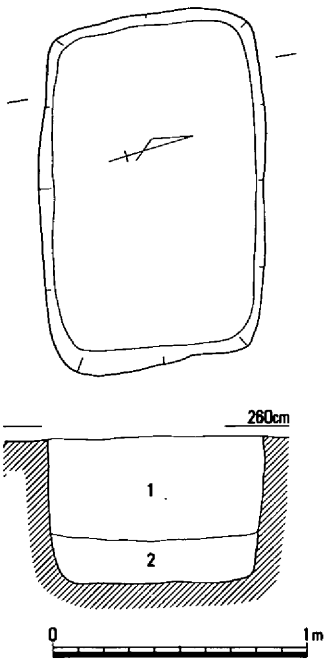
出土遺物には、摘鎌M29がある。幅24.5㎜で、一端を10.5㎜内側に折り返している。時期は、周辺の遺構との関係から、弥生時代後期後半に比定される。

土壙93（第151・271図）

10Ｃｄ区中央部に位置し、竪穴住居26を削っている。

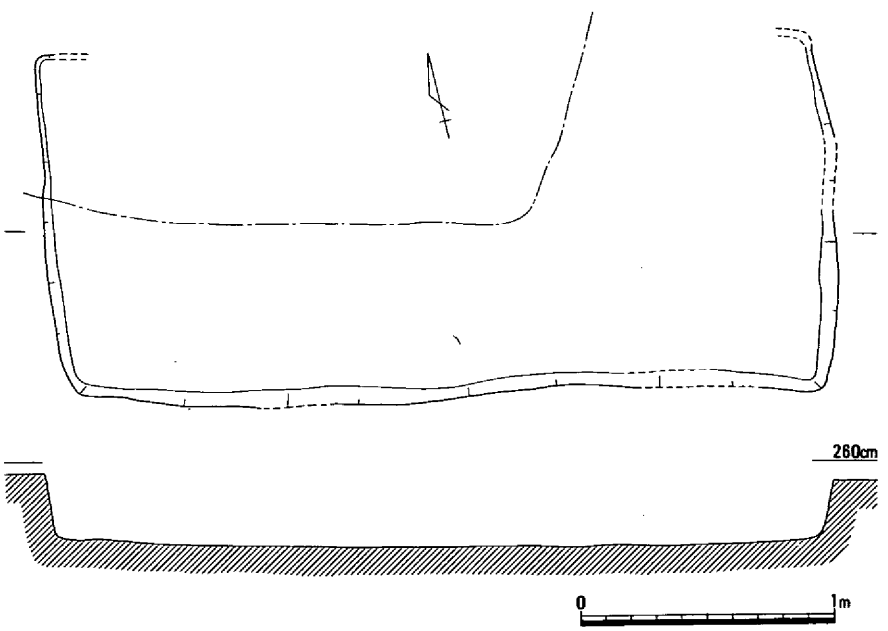
平面形は長方形を呈し、長軸長140cm、短軸長88cmをそれぞれ測り、深さ58cmが残る側壁はほぼ直立している。海抜高２.0ｍでほぼ平坦な底面は、125×79cmの長方形を呈する。埋土は２層に分けられ、炭・焼土を含んでいる。

小形の長方形土壙であり、竪穴住居26との関係からも、弥生時代後期後半に比定される。



1．褐色砂・褐灰色砂・灰色砂〈互層〉（含、炭・焼土）
2．褐灰色粗砂（含、炭・灰褐色砂小塊）

第271図　土壙93（1/30）



第272図　土壙94（1/30）

土壙94（第151・272図）

10Ｃｄ区北部に位置し、竪穴住居26を削り、竪穴住居68に削られている。

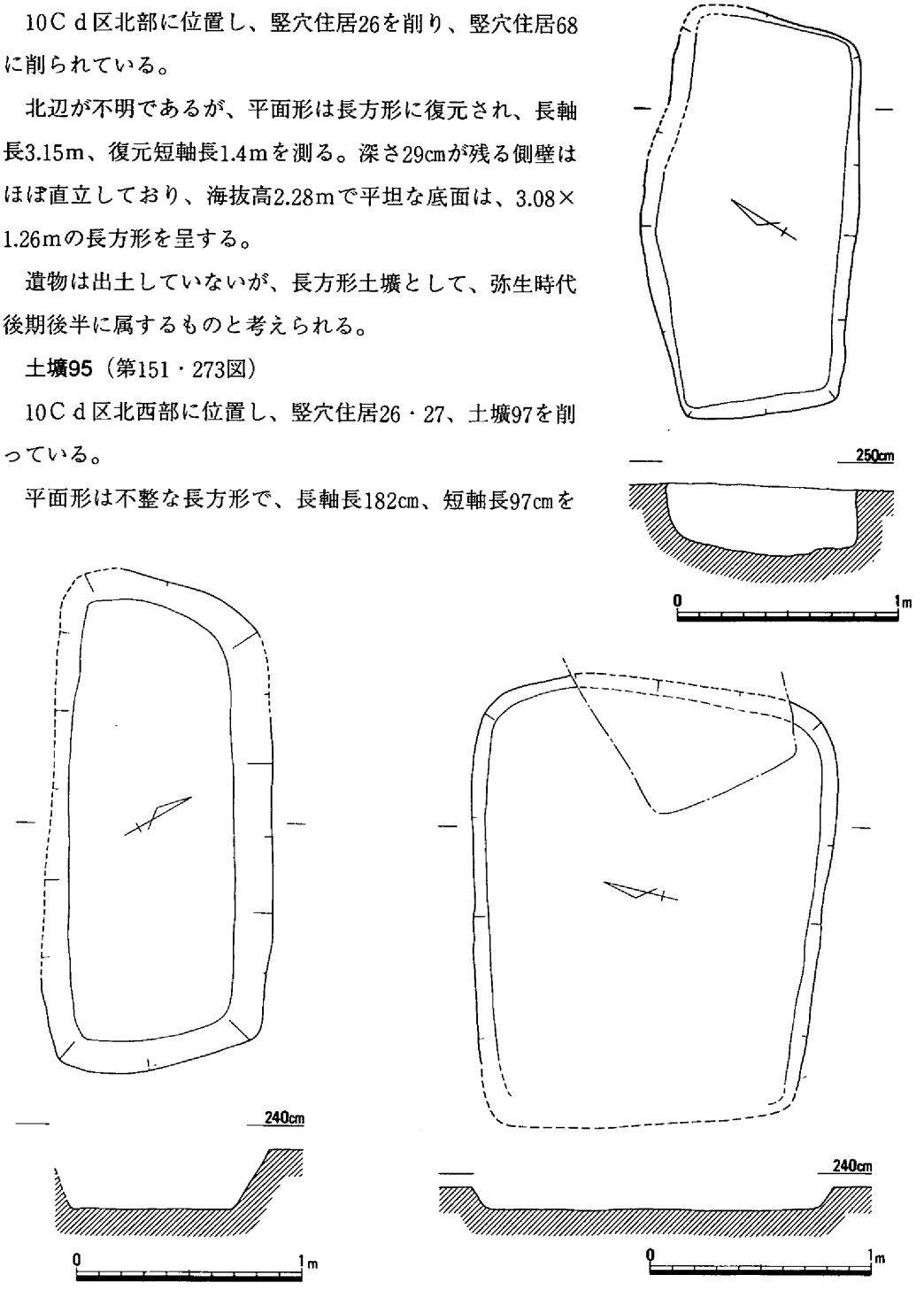
北辺が不明であるが、平面形は長方形に復元され、長軸長3.15m、復元短軸長1.4mを測る。深さ29cmが残る側壁はほぼ直立しており、海抜高2.28mで平坦な底面は、3.08×1.26mの長方形を呈する。

遺物は出土していないが、長方形土壙として、弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

土壙95（第151・273図）

10Ｃｄ区北西部に位置し、竪穴住居26・27、土壙97を削っている。

平面形は不整な長方形で、長軸長182cm、短軸長97cmを



第273図　土壙95（上）・96（下左）・97（下右）（1/30）

測り、31cmが残る側壁は直立に近い。底面は175×81cmの不整な長方形を呈し、北から南へやや傾斜して、南での海抜高2.1ｍを測る。

遺物は出土していないが、長方形土壙に含まれるものかもしれない。

土壙96（第151・273図）

10Ｃｄ区北西部に位置し、西端を土壙194に削られている。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長2.27ｍ　短軸長98cmを測る。深さ27cmが残る側壁は外傾しており、断面形は逆台形を呈する。2.0×0.72ｍの台形を呈する底面は、海抜高2.03ｍで平坦である。

遺物は出土していないが、長方形土壙の範疇に入るものである。

土壙97（第151・273図）

10Ｃｄ区西部に位置し、竪穴住居27を削り、竪穴住居67、土壙95に削られている。

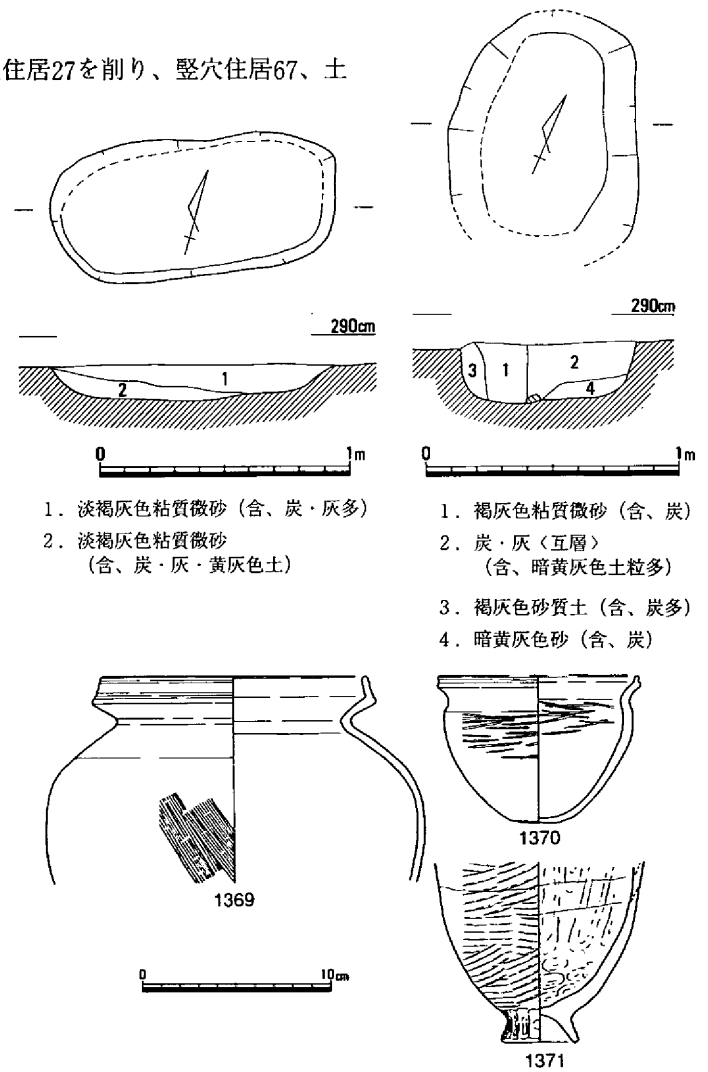
西端を明確にできていないが、平面形は長方形に復元され、最大長軸長1.75ｍ短軸長1.63ｍを測る。深さ11cmが残る側壁は外傾しており、断面形は皿形を呈する。海抜高2.14ｍの底面は平坦で、短軸長1.5ｍの長方形である。

時期は、竪穴住居27・67との関係から、弥生時代後期後半に比定しうる。

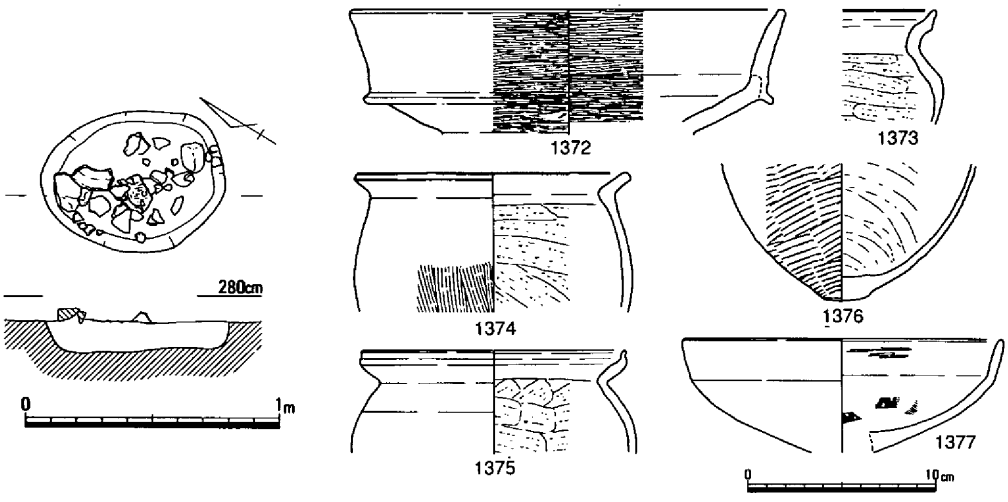
土壙98（第151・274図）

10Ｃｄ区南西部に位置して、竪穴住居27、土壙101を削っている。

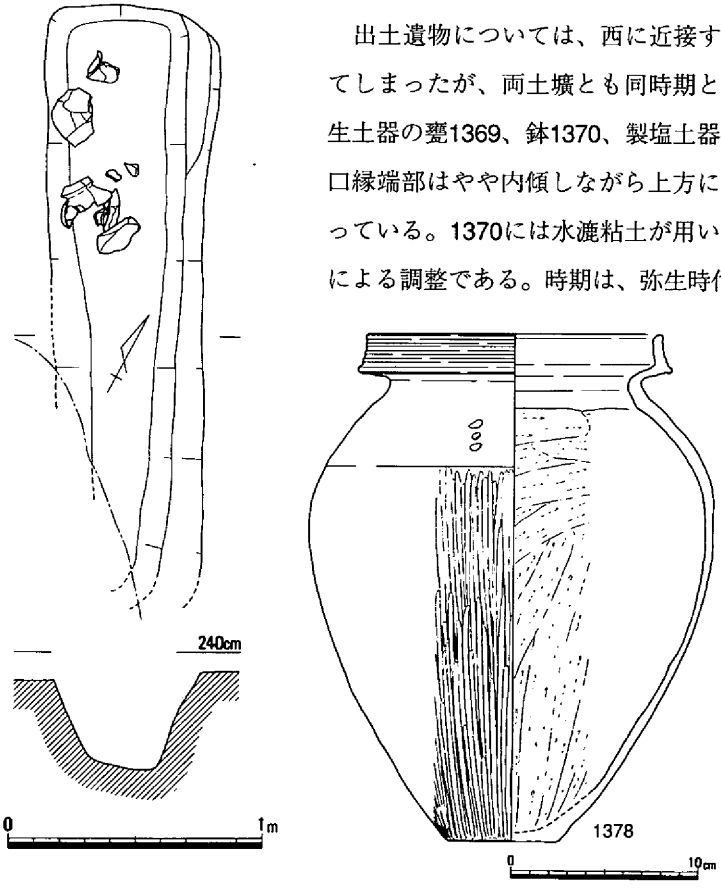
平面形は楕円形で、長径114cm、短径54cmをそれぞれ測り、深さ14cmの側壁は外傾して、断面形は皿形を



第274図　土壙98（上左）・99（上右）（1/30）・出土遺物（1/4）



第275図　土壙100（1/30）・出土遺物（1/4）



第276図　土壙101（1/30）・出土遺物（1/4）

呈する。埋土は２層に分けられ、炭・灰を含んでいる。

出土遺物については、西に近接する土壙99と取り上げが重複してしまったが、両土壙とも同時期と考えられるので掲載する。弥生土器の甕1369、鉢1370、製塩土器1371が出土しており、1369の口縁端部はやや内傾しながら上方に拡張し、外面に退化凹線が残っている。1370には水漉粘土が用いられ、1371の外面はタタキメによる調整である。時期は、弥生時代後期後半に求められる。

土壙99（第151・274図）

10Ｃｄ区南西部に位置し、竪穴住居27を削っている。

南北両端を欠いているが、平面形は楕円形と想定され、復元長径100cm、短径74cmを測る。深さ22cmが残り、断面形は皿形で、底面の海抜高は2.57mである。埋土は柱穴状に４層に分けられ、炭・灰を多く含んでいる。

土壙100（第151・275図）

10Ｃｄ区南西部に位置し、土壙98に北接して、竪穴住居27、土壙101を削っている。

平面形は楕円形を呈し、長径71cm、短径57cmをそれぞれ測る。深さ12cmが残る側壁はやや外傾して、断面形は皿形を呈する。底面の海抜高は2.59ｍでほぼ平坦であり、52×45cmの楕円形を呈する。検出面において、角礫とともに弥生土器片が出土している。

弥生土器には、壺1372、甕1373～1376、高杯1377等がある。1372は、口縁端部がやや外反しながら上方に拡張されている。1377は深い杯部から口縁部がやや外傾して立ち上がるもので、水漉粘土が用いられている。時期は、オノ町式併行期に比定される。

土壙101（第151・276図）

10Ｃｄ区南西部に位置し、竪穴住居27を削り、土壙98・100に削られている。

南端を欠いているが、平面形は長方形と想定され、最大長軸長2.27ｍ、短軸長62cmを測る。深さ49cmが残る側壁は外傾し、東辺は２段に外傾する。海抜高1.92ｍの底面は長方形を呈し、最大長軸長2.19ｍ、短軸長40cmを測る。壙内の北半では、底面から20cm以上高い位置で弥生土器と角礫が出土している。

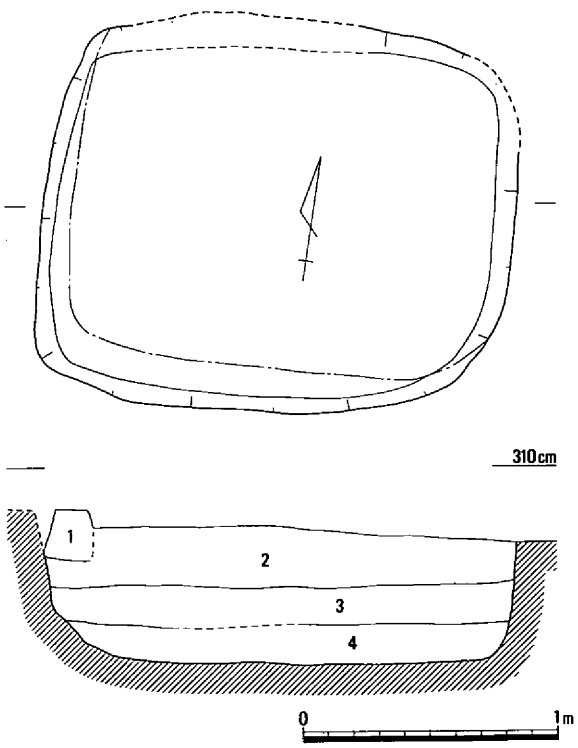
甕1378は口縁端部がやや内傾しながら立ち上がり、外面に退化凹線を巡らせて、肩部外面に３個の刺突が見られる。弥生時代後期後半（オノ町Ｉ式併行）に比定される。

土壙102（第151・277・278図）

10Ｃｃ区北西部に位置する長方形土壙で、竪穴住居28、土壙196に削られている。

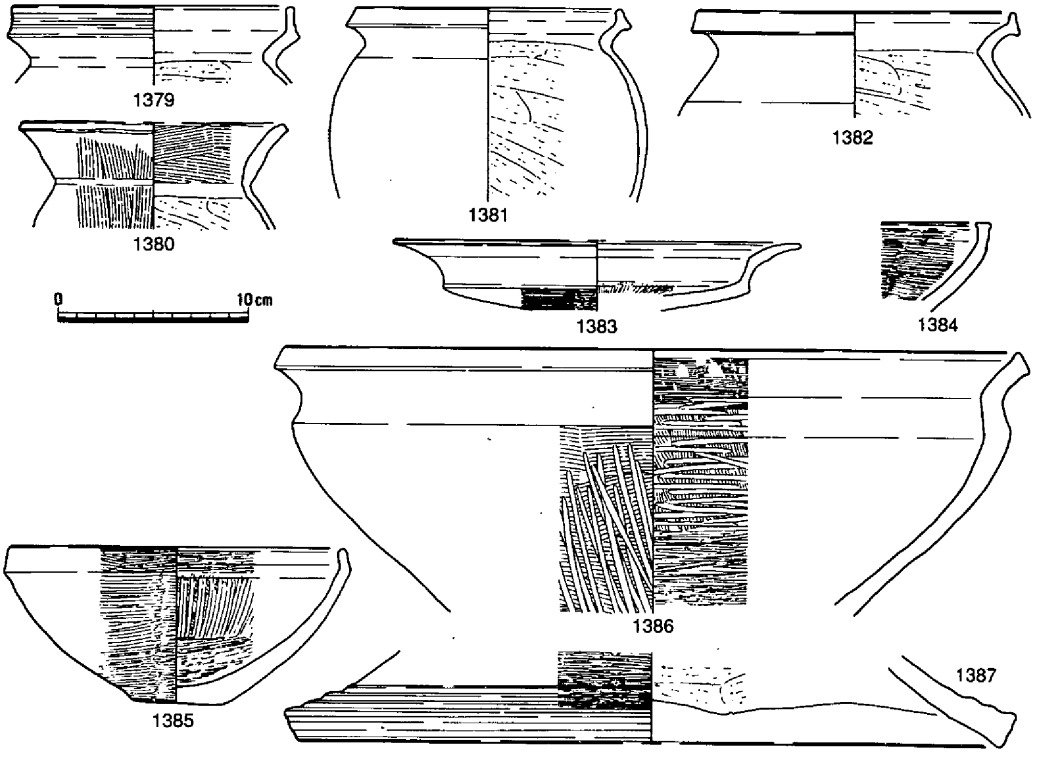
平面形は長方形で、長軸長1.85ｍ、短軸長1.54ｍを測り、深さ54cmが残る側壁はほぼ直立するが、下端が丸く納まっている。海抜高2.34ｍの底面はほぼ平坦で、1.72×1.3ｍの長方形である。４層に分けられる埋土のうち、第１層は西・南肩口で帯状に検出された。

出土遺物には、弥生土器の甕1379



1．黄色土　　3．灰褐色砂質土
2．茶褐色砂質土　　4．淡灰褐色土（混砂）

第277図　土壙102（1/30）



第278図　土壙102出土遺物（1/4）

～1382、高杯1383、鉢1384～1386、器台1387等がある。1383・1387は混入とみなして、時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。

土壙103（第151・279図）

10Ｂｃ区北東部に位置し、竪穴住居12を削り、竪穴住居71、土壙137・239に削られている。

平面形は長方形で、長軸長2.79m、短軸長1.47mを測る。調査記録の不備で海抜高等は不詳であるが、側壁はほぼ直立しており、長方形土壙の範疇に入る。底面の南半には、124×67cmの不整楕円形を呈するくぼみが認められる。

出土遺物には、弥生土器の鉢1388・1390、製塩土器1389等がある。1388は水漉粘土で作られ、口縁部上端に沈線１条が巡る。1389の体部外面にはタタキメが見られる。

時期は、弥生時代後期後半に比定される。

土壙104（第151・280図）

10Ｂｃ区北部に位置し、土壙105に近接し、土壙240に削られている。

平面形は長方形を呈し、長軸長83cm、短軸長63cmをそれぞれ測る。深さ34cmが残る側壁はほぼ直立し、断面形は矩形を呈する。海抜高2.68mでほぼ平坦な底面は、長軸長73cm、短軸長56

cmの長方形を呈する。遺構形状からは、小形の長方形土壙とも呼びうるものである。埋土は炭を含む暗灰褐色砂で、底面から弥生土器小片が出土している。

埋土上層から高杯1392、鉢1391が出土しているが、1392は土師器とみなされるもので、遺構の時期についても、埋没は古墳時代前半まで下る可能性を残している。

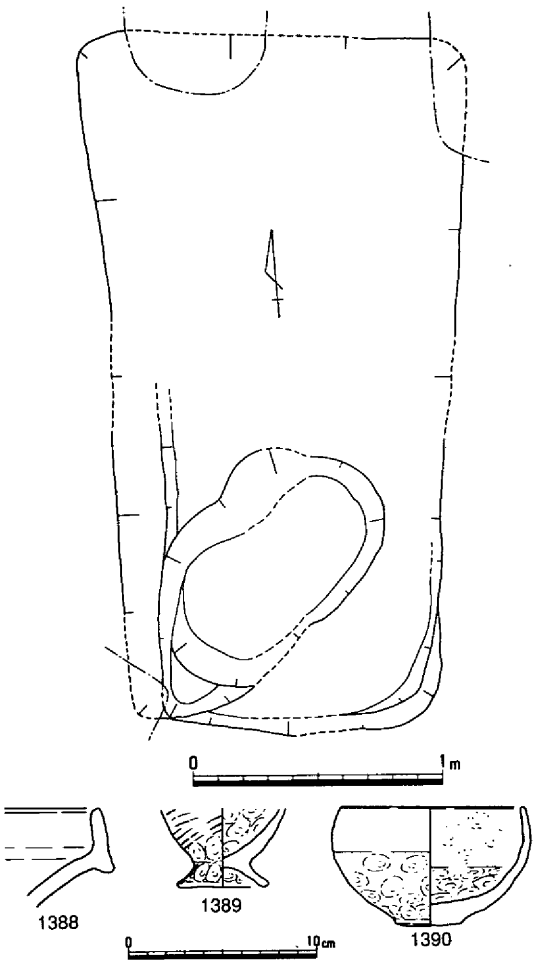
土壙105（第151・281図）

10Ｂｃ区北部に位置して、西半を調査区外に置き、土壙104・199に近接している。

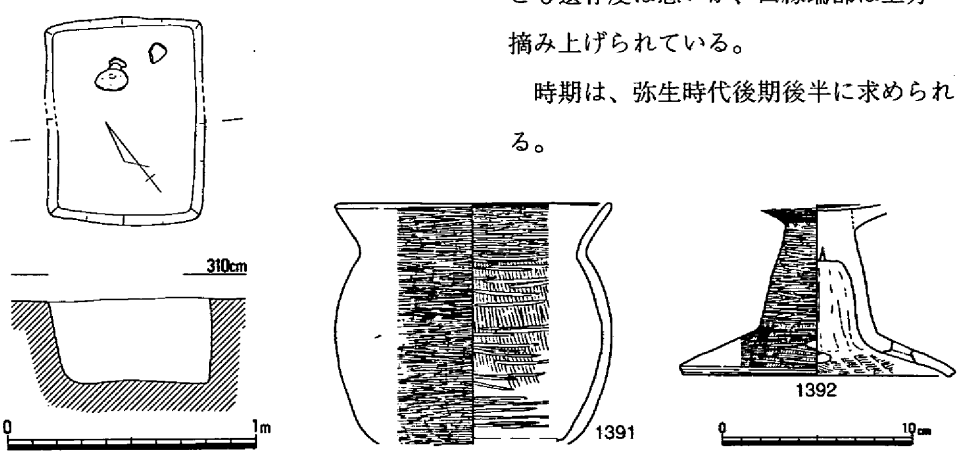
平面形は、不整な長方形かと想定されるが、規模は不明である。深さ32cmが残る側壁はやや外傾し、側壁下端で海抜高2.65ｍを測る底面は、東へやや傾斜している。

出土遺物には、弥生土器の壺1393、甕1394、鉢1395等がある。1395の外面はヘラケズリされている。1393・1394とも遺存度は悪いが、口縁端部は上方へ摘み上げられている。

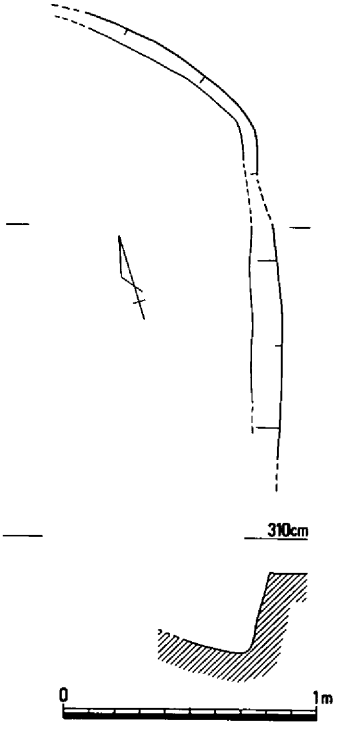
時期は、弥生時代後期後半に求められる。

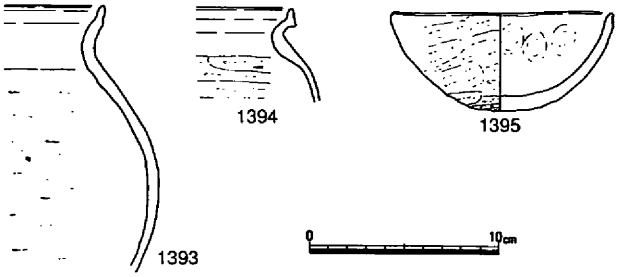


第279図　土壙103（1/30）・出土遺物（1/4）



第280図　土壙104（1/30）・出土遺物（1/4）





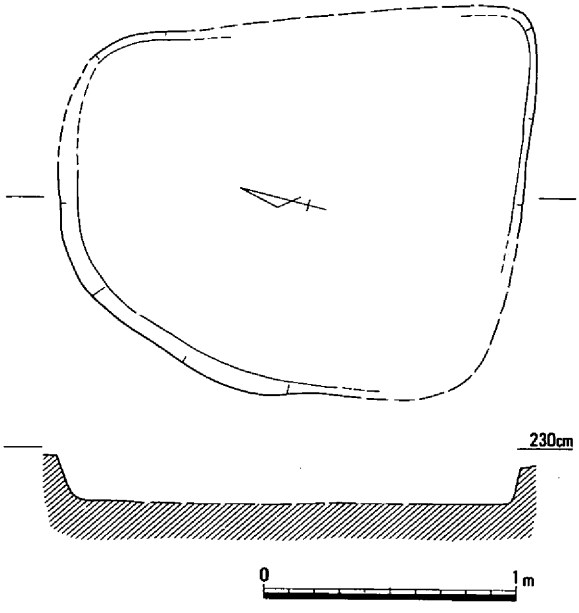
第281図　土壙105（1/30）・出土遺物（1/4）

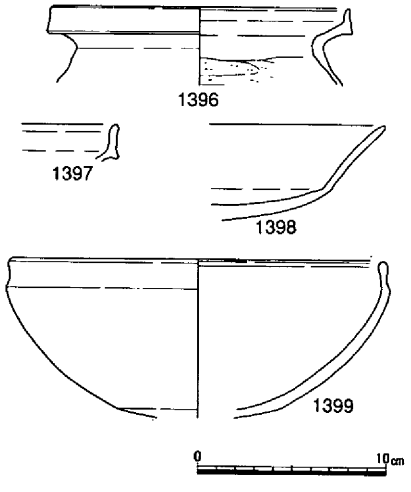
土壙106（第151・282図）

９Ｃｂ区北部に位置し、竪穴住居30を削り、竪穴住居73・76、土壙201に削られている。

平面形は不整な長方形で、長軸長1.83m、復元短軸長1.5mをそれぞれ測る。深さ17cmが残る側壁はやや外傾し、断面形は皿形を呈する。海抜高2.09mの底面はほぼ平坦で、長軸長1.71mの不整な長方形を呈する。

出土遺物には、弥生土器の甕1396・1397、高杯1398、鉢1399等がある。1398・1399には水漉粘土が用いられており、1398の口縁部はやや外反している。時期は、弥生時代後期後半（オノ町式併行）に求められる。





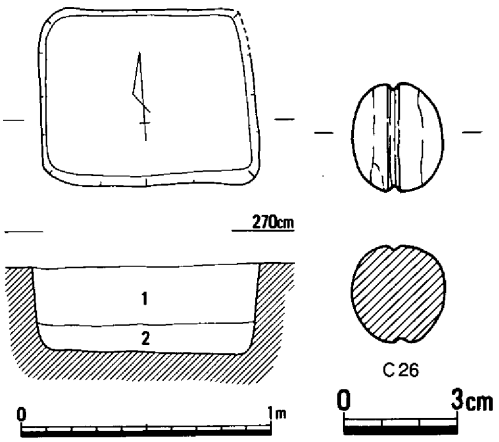
第282図　土壙106（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙107（第151・283図）

９Ｃｂ区東部に位置し、竪穴住居30・31、土壙108を削っている。

平面形は長方形を呈し、長軸長86cm、短軸長70cmをそれぞれ測る。深さ34cmが残る側壁はほぼ直立し、海抜高2.22ｍの底面はほぼ平坦で、81×62cmの長方形である。遺構の形状からは、小形の長方形土壙とも呼びうるものである。埋土は２層に分けられ、第１層には炭が含まれている。

出土遺物には、土錘Ｃ26があり、周辺の遺構との関係から、弥生時代後期後半に属するものと考えられる。



1．灰褐色砂（含、炭）
2．灰褐色砂（含、黄褐灰色砂小塊多）

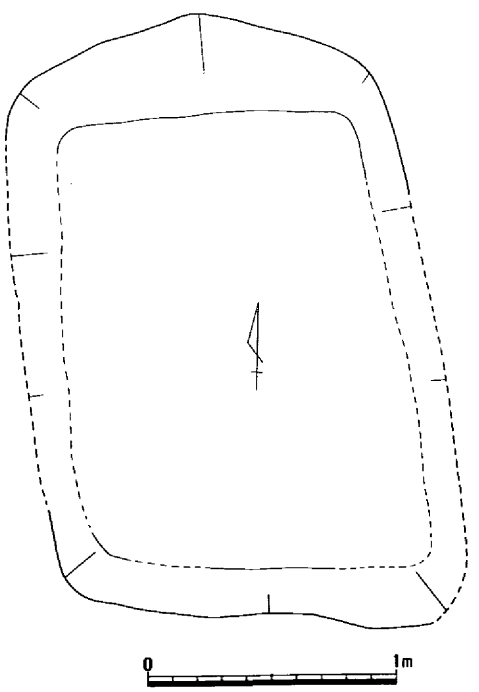
第283図　土壙107（1/30）・出土遺物（1/2）

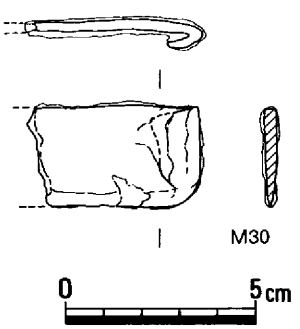
土壙108（第151・284・285図）

９Ｃｂ区東部に位置し、竪穴住居30・31を削り、竪穴住居76、土壙107に削られている。

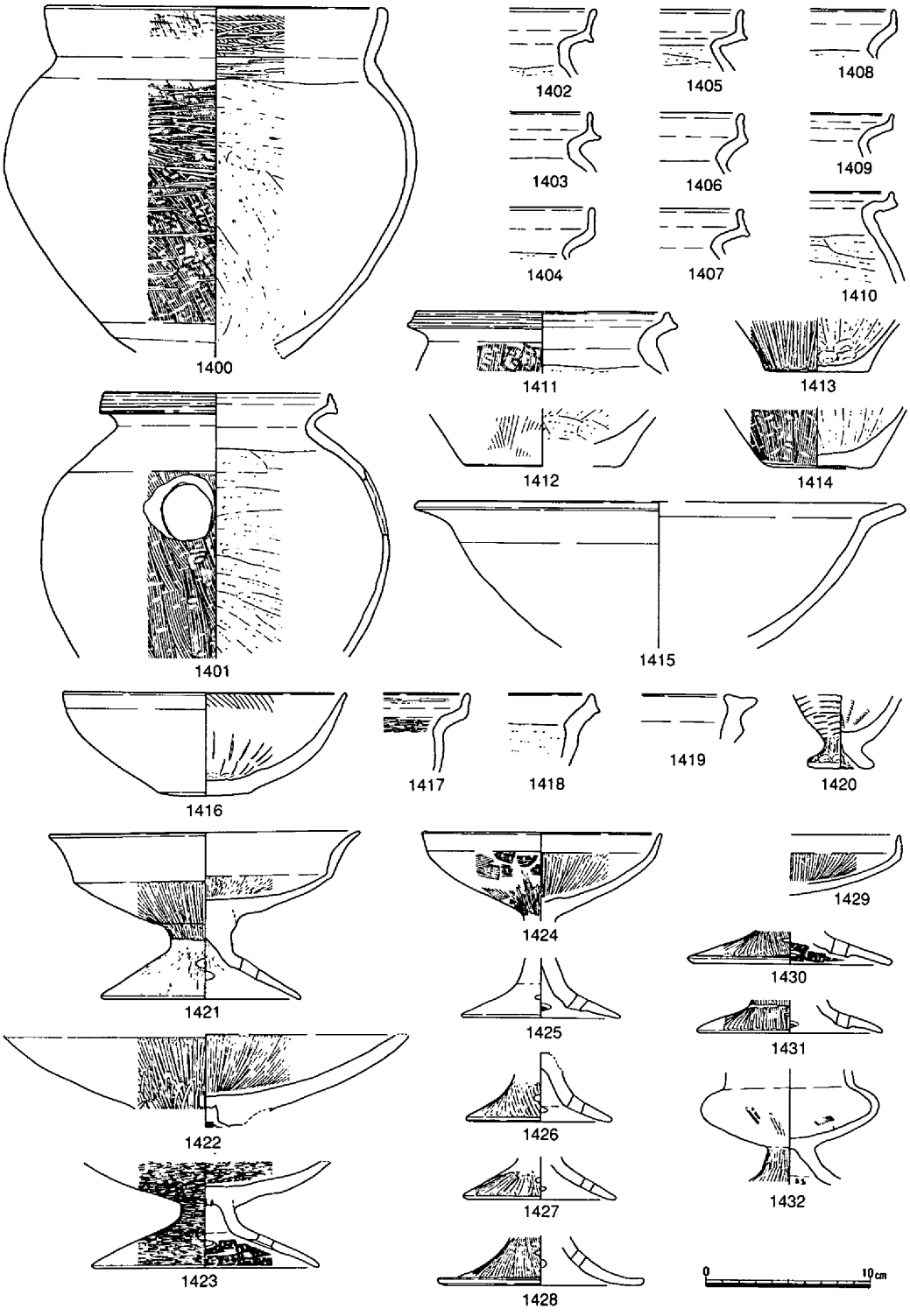
平面形は不整な長方形を呈し、長軸長2.41ｍ、短軸長1.64ｍをそれぞれ測る。調査時の手違いのため海抜高に関する記録が不明であるが、側壁はやや外傾しており、遺構の形状・規模からは長方形土壙の範疇に入る。

出土遺物のうち、弥生土器には脚付直口壺1432、甕1401～1414、高杯1421～1431、鉢1415～1419、台付鉢1400、製塩土器1420があり、他に摘鎌M30がある。甕の口縁部は、基本的に端部が上方に摘み上げられており、1405





第284図　土壙108（1/30）・出土遺物①（1/2）



第285図　土壙108出土遺物②（1/4）

～1407の外面には退化凹線が巡らされている。1401体部の穿孔は焼成後である。高杯は短脚で、1421の口縁部は外反し、1424・1429では上方にのびて終わっている。

時期は、弥生時代後期後半に求められる。

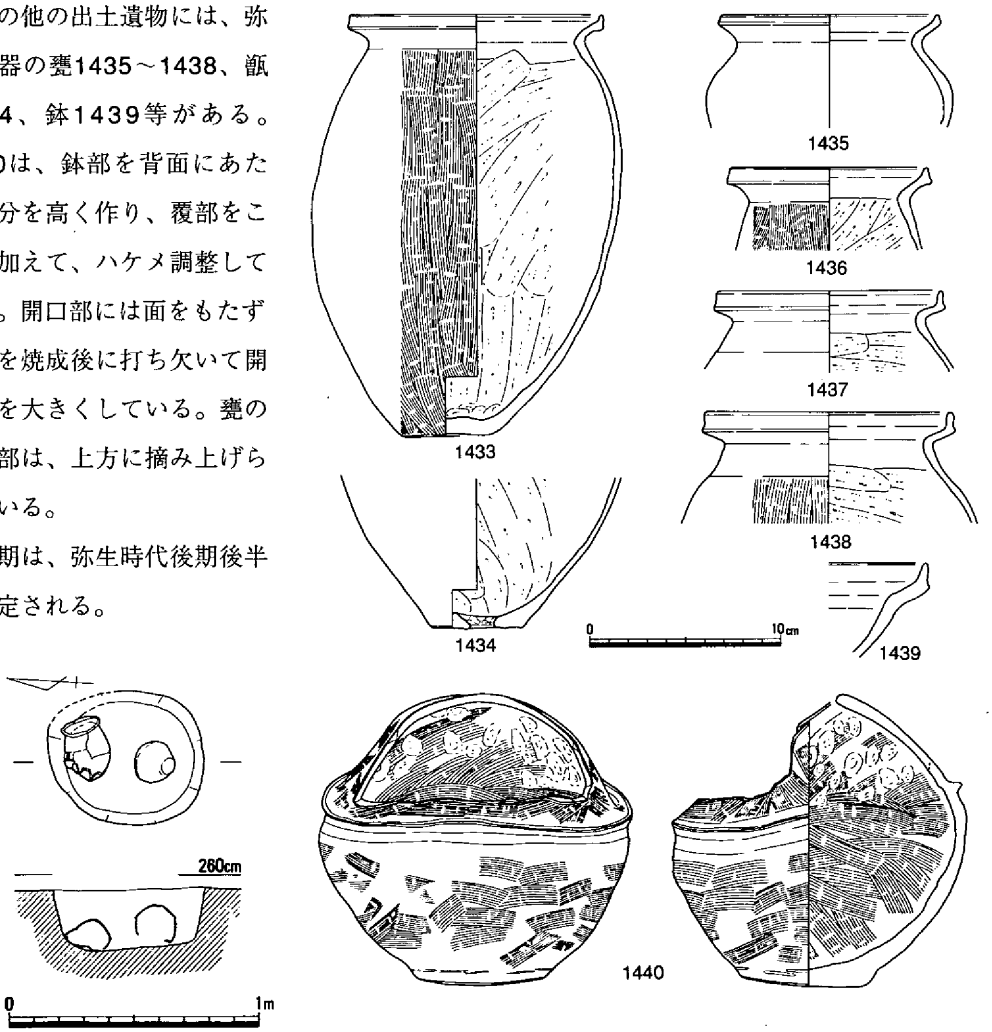
土壙109（第151・286図、写真図版65）

９Ｃｂ区南部に位置し、竪穴住居32・33を削っている。

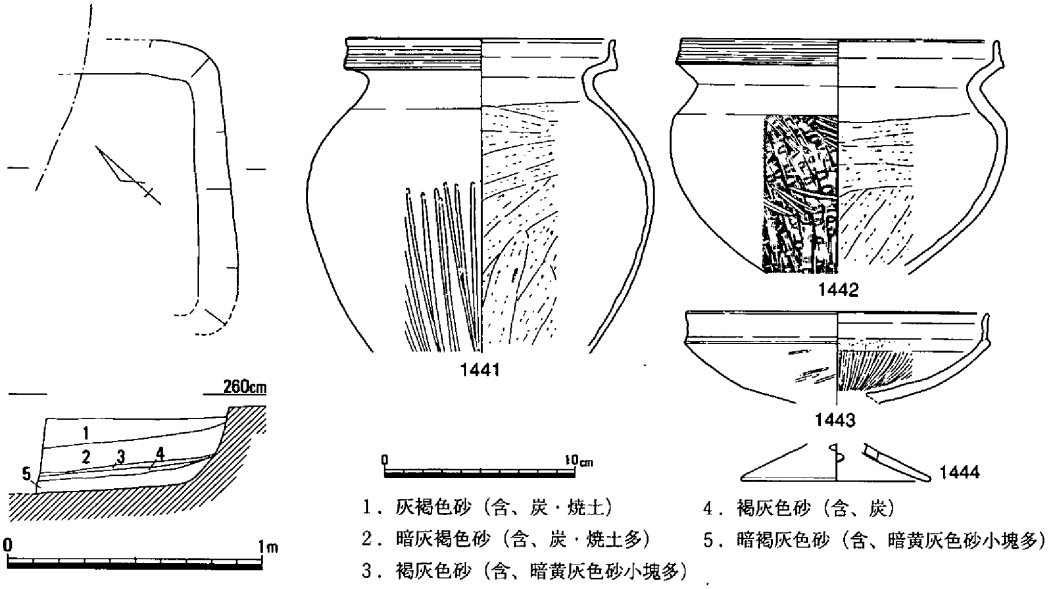
平面形は楕円形を呈し、長径62cm、短径53cmをそれぞれ測り、深さ23cmが残る側壁は直立に近く、断面形は矩形を呈する。海抜高2.32ｍの底面はほぼ平坦で、51×43cmの楕円形である。埋土は、炭・灰・焼土を多く含む暗灰褐色砂で、底面上で弥生土器の甕1433、手焙形土器1440が出土している。

その他の出土遺物には、弥生土器の甕1435～1438、甑1434、鉢1439等がある。1440は、鉢部を背面にあたる部分を高く作り、覆部をこれに加えて、ハケメ調整している。開口部には面をもたず両端を焼成後に打ち欠いて開口幅を大きくしている。甕の口縁部は、上方に摘み上げられている。

時期は、弥生時代後期後半に比定される。



第286図　土壙109（1/30）・出土遺物（1/4）



第287図　土壙110（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙110（第151・287図）

９Ｃｂ区南西部に位置し、土壙40を削り、竪穴住居33に削られている。

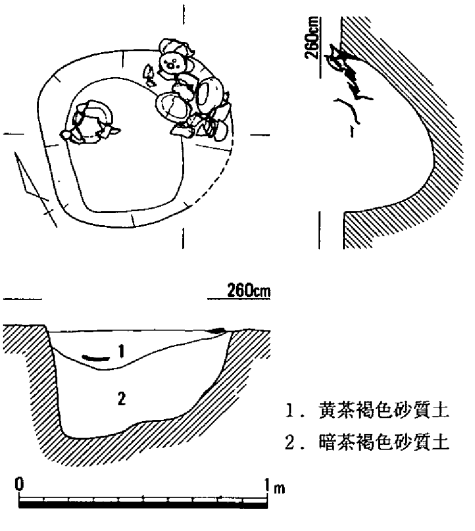
南東辺から北東辺の一部を検出したのみで全容が不詳であるが、平面形は方形ないし長方形と想定される。深さ35cmが残る側壁は下半が外傾し、海抜高2.21ｍの底面はほぼ平坦で、遺構の形状は長方形土壙の範疇に入るものである。５層に分けられる埋土のうち、上層には炭・焼土が多く含まれている。

弥生土器の甕1441、高杯1443・1444、鉢1442が出土しており、時期は、弥生時代後期後半（才ノ町式併行）に比定される。

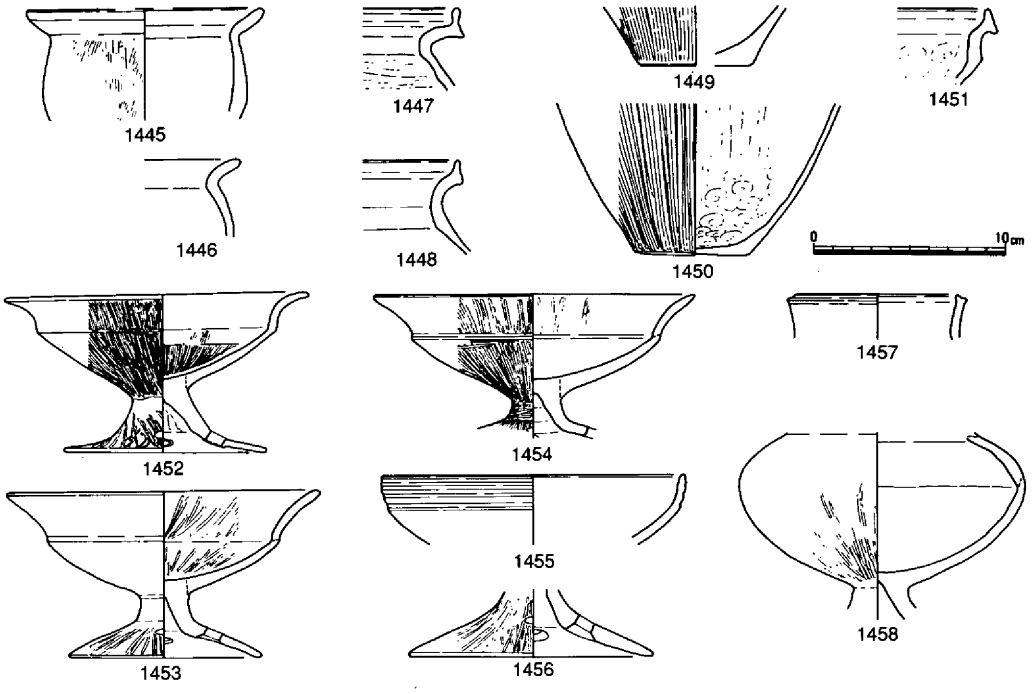
土壙111（第151・288・289図）

９Ｂｂ区北西隅に位置し、土壙205を削っている。

平面形は楕円形を呈し、長径77cm、短径70cmをそれぞれ測る。深さ45cmの断面形は椀形で、海抜高2.05ｍを測る底面は、52×46cmの楕円形を呈する。２層に分けられる埋土のうちの上層からは、弥生土器がまとまって出土している。



第288図　土壙111（1/30）



第289図　土壙111出土遺物（1/4）

出土した弥生土器には、脚付直口壺1457・1458、甕1445～1450、高杯1452～1456、鉢1451等がある。高杯はいずれも短脚であり、その口縁部には、杯部から屈曲して短く外反する1452～1454と、やや内湾しながら立ち上がって外面に凹線が巡る1455の二者がある。

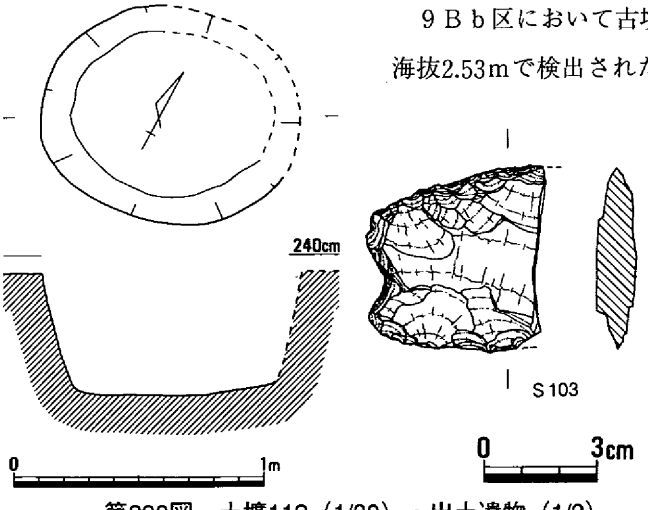
時期は、弥生時代後期後半（上東・鬼川市Ⅲ式併行）に比定される。　（光永）

土壙112（第151・290図）

９Ｂｂ区において古墳時代の竪穴住居84の床面除去後、海抜2.53ｍで検出された。北西部が土壙207によって一部切られた状態で確認された。

長軸1.03ｍ、幅85㎝を測る平面楕円形を呈し、壙底は検出面から約49㎝の深さにあった。壁面はほぼ垂直気味に壙底へと落ちるもので、断面逆台形を呈する。

出土遺物は、サヌカイト製の石包丁が１点検出されたの



第290図　土壙112（1/30）・出土遺物（1/2）

みで、土器の出土は見られなかった。

時期は、土器を伴わなかったことで明瞭でないが、竪穴住居84および土壙207との切り合い関係によりおよそ後期後半の範疇で理解されるものである。

土壙113（第151・291・293図）

９Ｂａ区に位置するが調査区境に所在していたため同一面での検出ではなく、調査年次を違えて検出された土壙である。

平面形は、西側の一部が後世の攪乱により切られているが長軸長2.10m、幅1.56mを測る楕円形を呈するものであった。ただし規模に比較して壙底は浅く、検出面からの最深30cmを測る程度で、断面皿状に検出された。壙内には、壙底に密着した状態で焼土と炭化米を含んだ層の存在と中層には土器の包含が確認された。

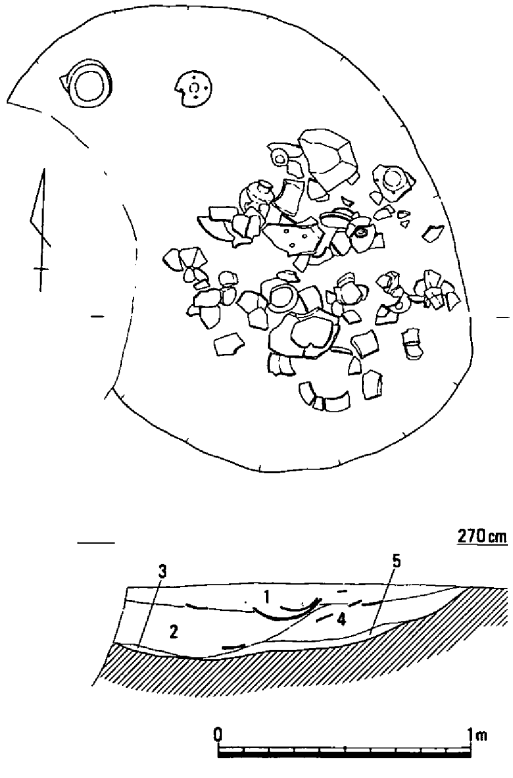
出土遺物には、古墳時代の紛れ込みと考えられる２点の滑石製の臼玉と土器が見られた。土器には、壺、甕、高杯、鉢、脚付直口壺等の器種が見られた。壺と甕はいずれも口縁端部を長く上方に拡張し、高杯の口縁部も直線的な長い伸びを見せるものであった。型式的には、才ノ町式段階に比定して差支えないと考える。（島崎）

土壙114（第151・293図）

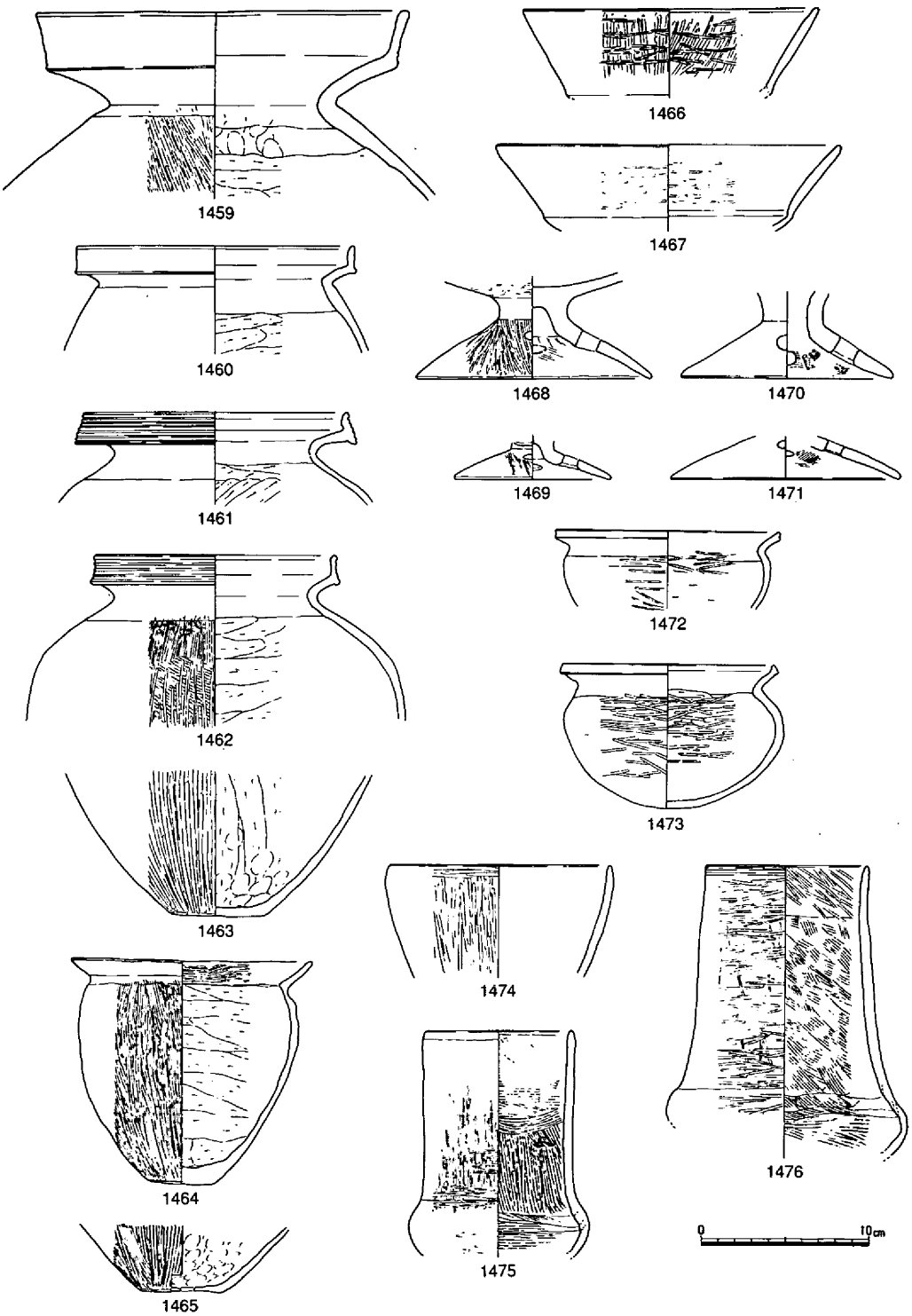
９Ｃｄ区北西部に位置し、土壙115に近接して、竪穴住居35を削っている。

平面形は径64～65cmの円形で、深さ48cmを測る側壁は下半が内傾し、上半がほぼ直立して、袋状土壙の範疇に入る。海抜高２mの底面は中央部が浅くくぼんで、72×64cmの楕円形を呈する。３層に分けられる埋土のうち、第２層には炭・灰・焼土が多く含まれ、角礫も出土している。

出土遺物には、弥生土器の脚付直口壺



第291図　土壙113（1/30）・出土遺物①（1/1）



第292図　土壙113出土遺物②（1/4）

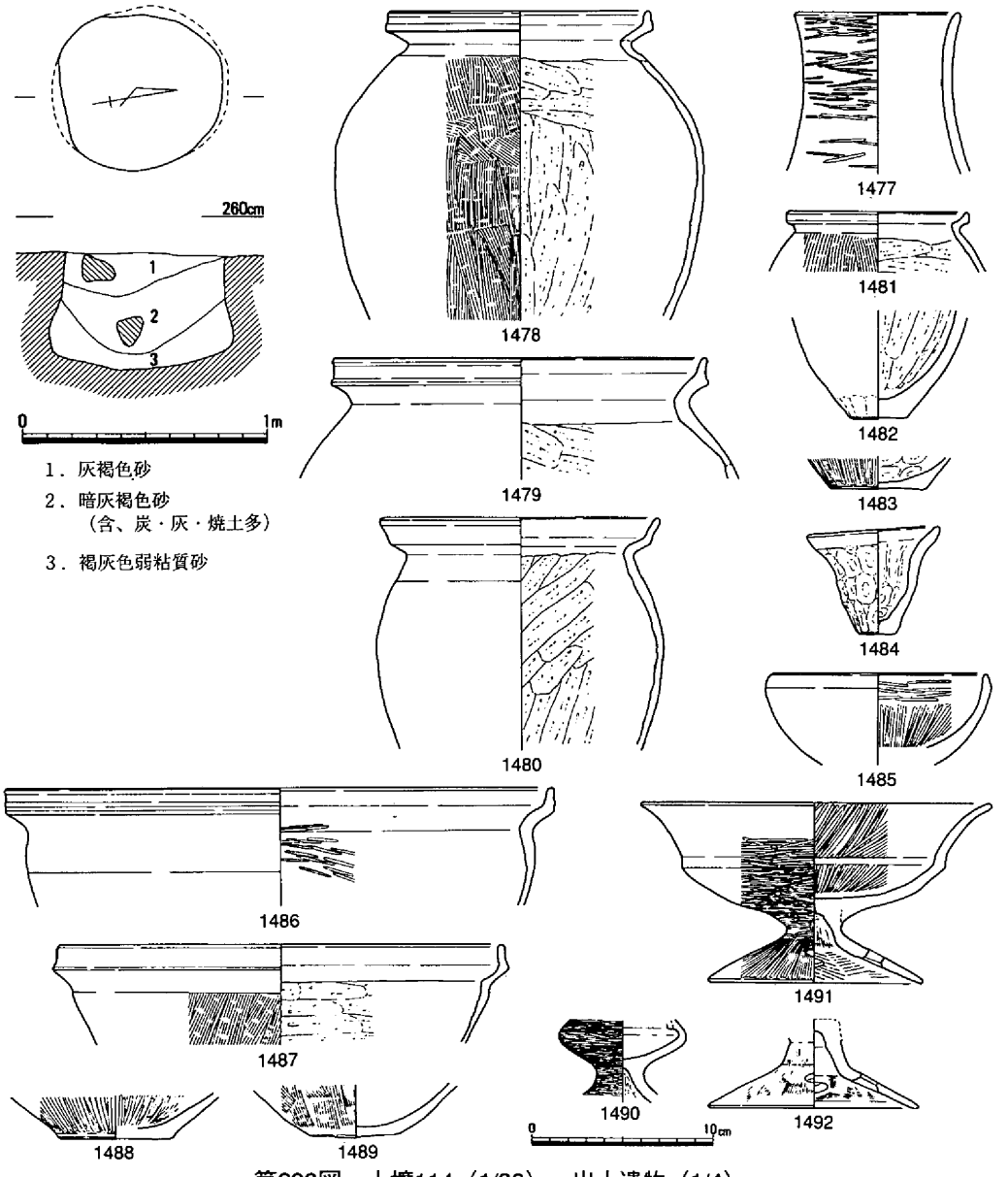
1477、小形脚付直口壺1490、甕1478～1483、高杯1491・1492、鉢1485～1489、甕形手捏ね土器1484等がある。高杯は短脚で、1491の口縁部はやや外反しながら大きく開いている。

時期は、弥生時代後期後半（オノ町式併行）に比定される。

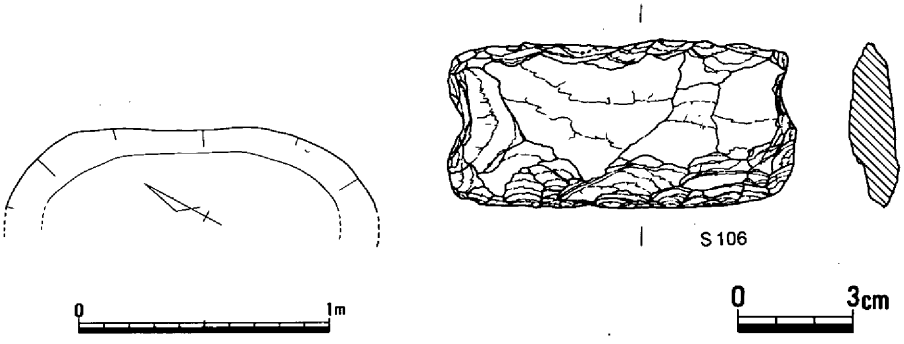
土壙115（第151・294図）

９Ｃｄ区北西部に位置し、土壙114に近接して、竪穴住居35を削っている。

西半を調査時の側溝で失っており、全容は明らかでないが、平面形は楕円形と想定され、復



第293図　土壙114（1/30）・出土遺物（1/4）



第294図　土壙115（1/30）・出土遺物（1/2）

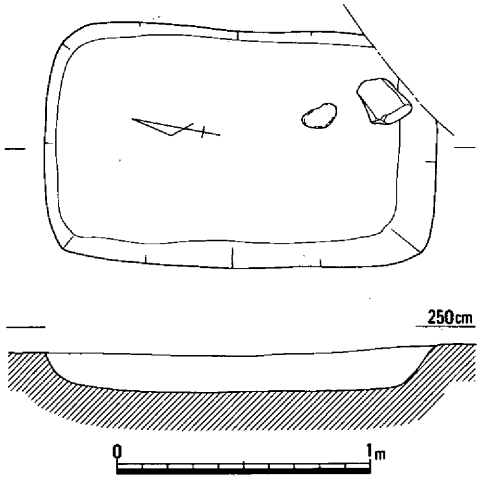
元長軸長1.5ｍを測る。調査時の記録の不備で海抜高が不詳であるが、側壁は外傾しており、楕円形と想定される底面の長軸長は1.2ｍである。

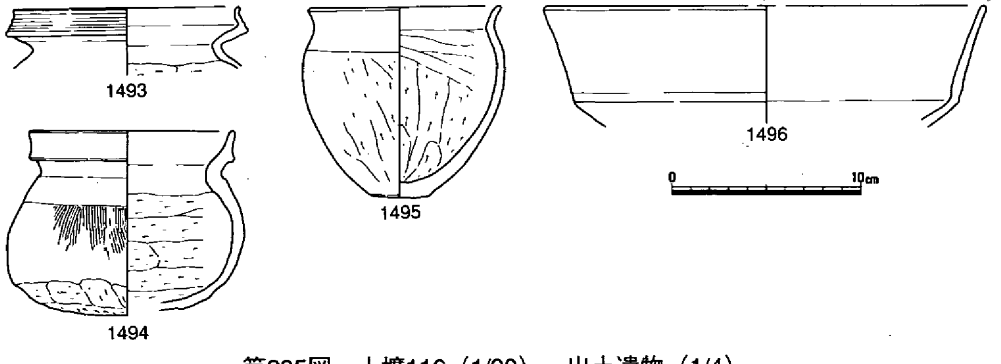
出土遺物には、サヌカイト製の石包丁Ｓ106があるが、時期を示す土器の出土はない。周辺の遺構との関係から、弥生時代後期後半に比定される。（光永）

土壙116（第151・295図）

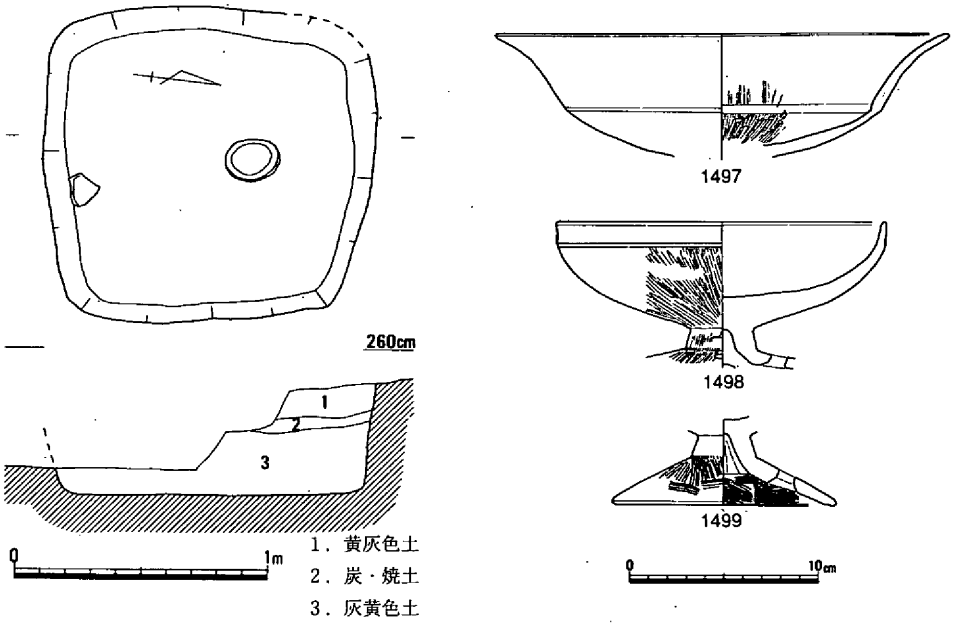
９Ｃｃ区において南東部が古墳時代の竪穴住居92によって一部切られた状態で海抜2.45ｍで検出された。規模は、長軸1.54ｍ、幅94㎝を測り、平面長方形を呈する土壙であった。ただし、検出面からの深さが15㎝程度と浅く、壁面も比較的緩やかに壙底へと続くことで、長方形土壙とは若干異なった様相を見せる。

壙内には、南東部底面上に長さ約20㎝の角





第295図　土壙116（1/30）・出土遺物（1/4）



第296図　土壙117（1/30）・出土遺物（1/4）

礫と15cm程の河原石の遺存が認められた程度であった。

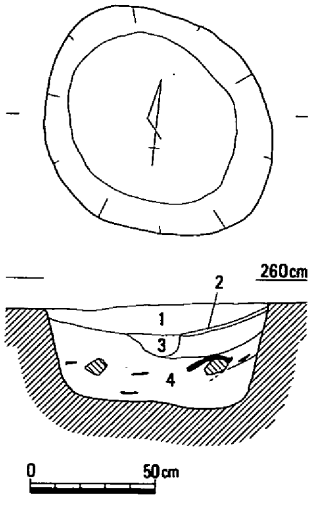
遺物は、覆土中から甕、鉢、高杯が検出された。甕1493は、拡張された口縁部外面にヘラ描きによる沈線文が施されており、およそ才ノ町式併行と考えられる。

土壙117（第151・296図）

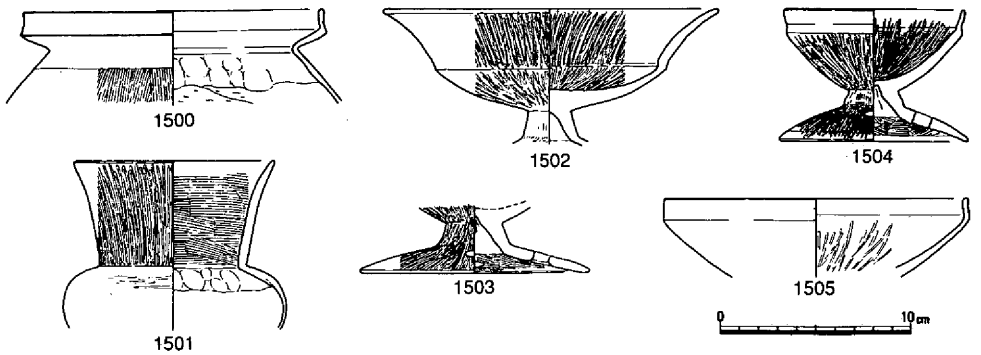
９Ｃｃ区で上部を古墳時代の竪穴住居91および竪穴住居92によって切られた状況で検出された。規模は検出面で長軸長1.30m、幅1.25m、深さ42cmを測り、平面方形を呈し、さらに壁は検出面からほぼ垂直気味に壙底へと落ち、壙底は水平面を有するものであった。

壙内は、基盤層とほぼ同質の土で埋没が認められたが、壙底から約25cm上層には炭と焼土塊による間層が約５cm程の堆積を見せていた。こうした壙内埋積状況は、周辺に所在をみせる長方形土壙とは若干様相が異なるようである。

出土遺物には、壙底についた状態での高杯1498と埋積土中から２点の高杯が確認されている。



第297図　土壙118（1/30）



第298図　土壙118出土遺物（1/4）

時期的には、高杯1497が若干古相をみせるが、他の２点と共に上東・鬼川市Ⅲ式併行として理解されるものである。

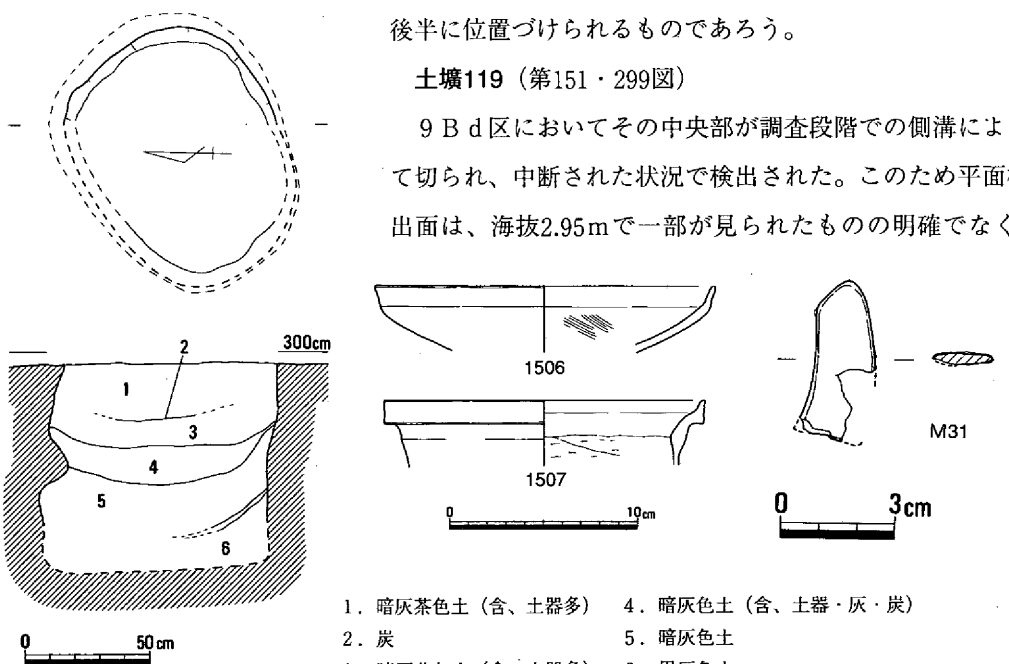
土壙118（第151・297・298図）

９Ｂｄ・９Ｃｃ区の境部分に所在が確認された。平面は、長軸長101cm、幅86cmの規模で、楕円形を呈し、検出面から壙底までの深さ34～40cmを測った。壙内には、同規模の土壙に比べて比較的多くの土器片の遺存と、これに混じった状態で角礫等の包含も認められた。

出土した土器には、壺、甕、高杯、鉢の器種が見られた。甕1500、壺1501に新しい様相をみとめるが他の高杯1502～1504、鉢1505はいずれも後期後半に位置づけられるものであろう。

土壙119（第151・299図）

９Ｂｄ区においてその中央部が調査段階での側溝によって切られ、中断された状況で検出された。このため平面検出面は、海抜2.95ｍで一部が見られたものの明確でなく、



1．暗灰茶色土（含、土器多）　4．暗灰色土（含、土器・灰・炭）
2．炭　5．暗灰色土
3．暗灰黄色土（含、土器多）　6．黒灰色土

第299図　土壙119（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

およそ隅丸方形であったものと推測された。壙底までの深さは約81cmを計測したが、これも湧水により明確性を欠く。

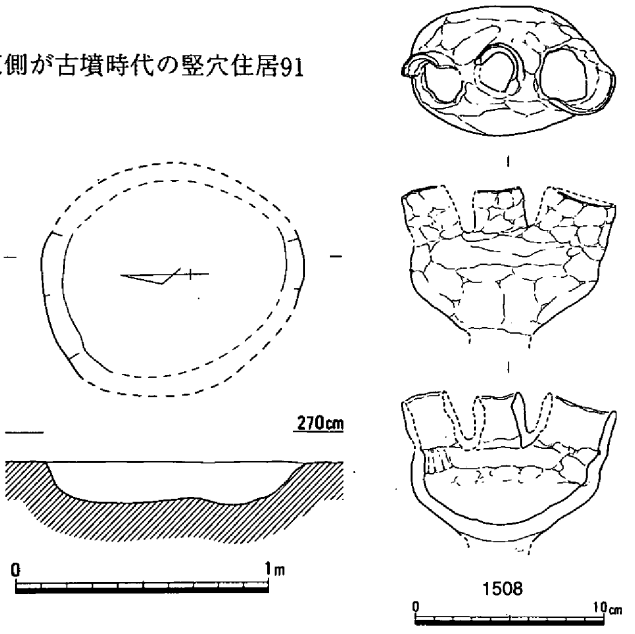
出土遺物には、少量の土器片と不明鉄器が１点散見されたにすぎない。土器は、高杯と鉢でおよそ後期後半の範疇で理解されるものである。

土壙120（第151・300図）

９Ｂｄ区で西側が土壙119に、東側が古墳時代の竪穴住居91によって切られた状態で検出された。遺存部分での長軸長は1.04ｍを測り、およそ平面楕円形であったと推測される。深さは、検出面から約16cmと浅く、壙底も一定でなかった。

出土した遺物は、手捏ねによる異形の脚付壺**1508**が１点見られた程度で、他には認められなかった。

時期は、後期後半の範疇として差支えないと考える。

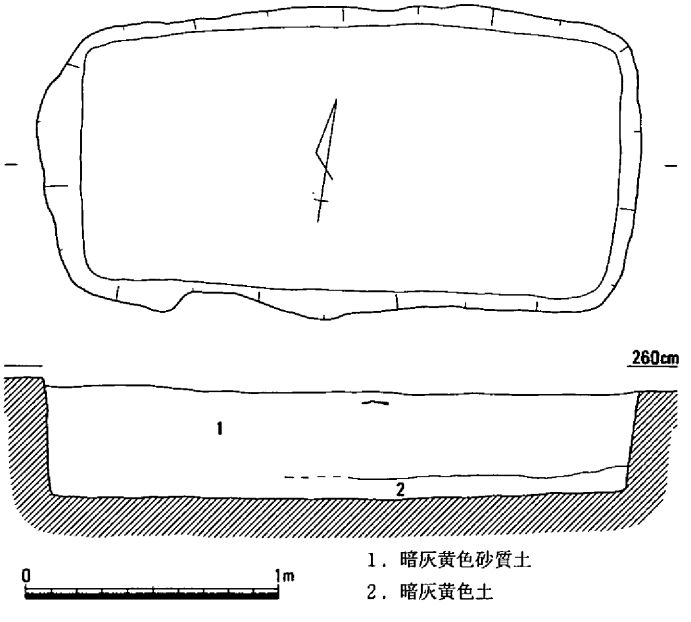


第300図　土壙120（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙121（第151・301図）

９Ｂｄ区で海抜2.55ｍで検出された土壙である。砂質の基盤を掘開して掘られており、平面形はほぼ東西・南北方向を基調とし、長方形を呈するものであった。規模は、長軸長2.38ｍ、幅1.21ｍで検出面からの深さ42cmを測った。壁は垂直に近い状態で壙底へと落ちる。

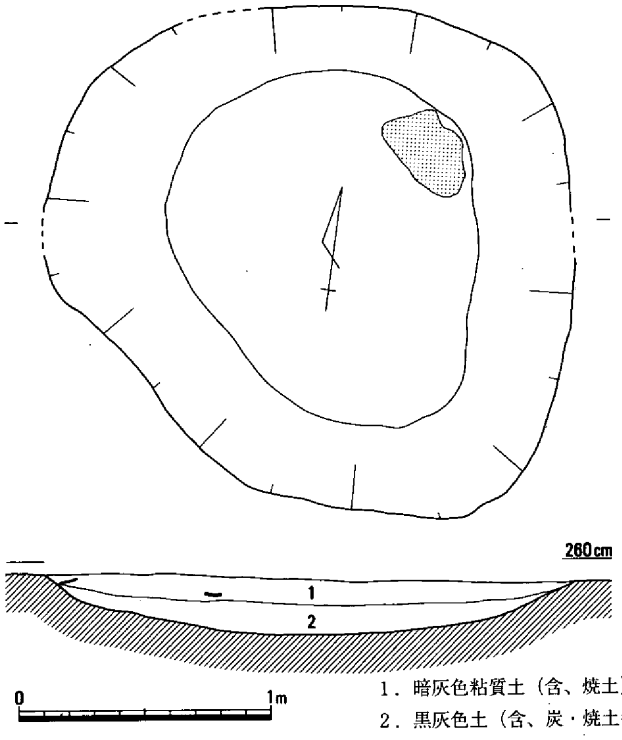
壙内への土砂の埋積状況は、壙底直上約８cmにわず



第301図　土壙121（1/30）

かな違いが粘質土と砂質土の差としてあるものの基本的には１層と見られ、自然堆積による埋没ではなく、意図的な埋没が窺われた。

時期については、土器をはじめとする遺物の出土がまったく認められなかったことで明瞭にできないが、他に多く所在する長方形土壙の時期的な在り方、埋積土の状況等から考えておよそ後期後半の範疇に時期設定して差支えないと考える。



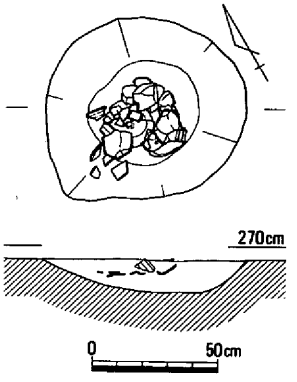
第302図　土壙122（1/30）・出土遺物（1/4）

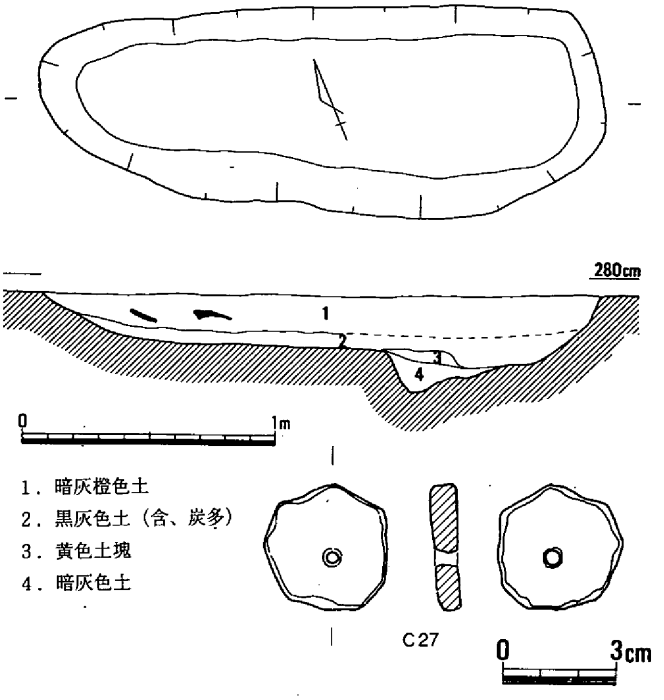
土壙122（第151・302図）

９Ｂｄ区において竪穴住居37床面掘り下げ後の海抜約2.55ｍで検出された。北・東・南側に直線的な伸びをみせる肩口の存在が認められるものの、西側は不整形であった。規模は、南北方向で約1.97ｍ、東西で2.08ｍを測った。検出面からの深さは、比較的浅いもので最深部で約20㎝を測った。断面は、皿状を呈するものであった。

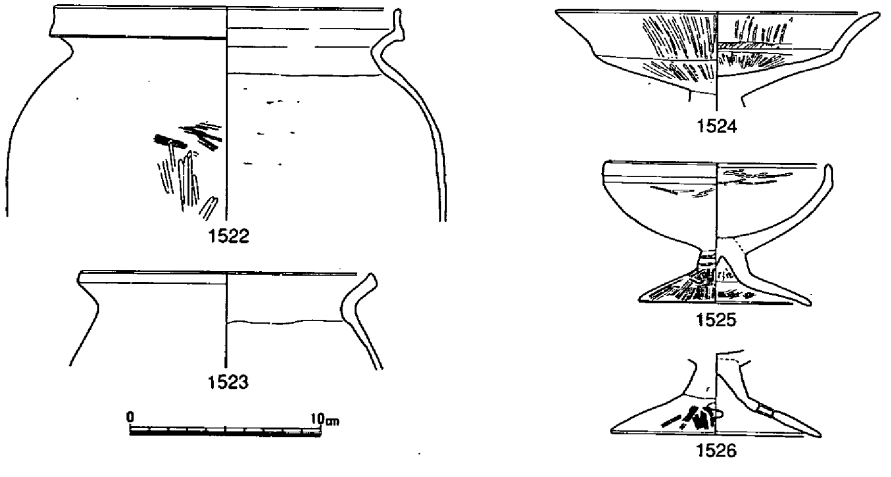
北東側の壙底部には、長さ40㎝、幅25㎝程度の被熱面の広がりが認められ、埋積土中にも多くの焼土塊と炭の包含が認められた。

時期は、出土した土器がい





第303図　土壙123（1/30）・出土遺物（1/2）



第304図　土壙124（1/30）・出土遺物（1/4）

ずれも才ノ町式併行に比定されることで、後期後半の範疇で理解されよう。

土壙123（第151・303図）

９Ｂｄ区で土壙121の北西約50cmに近接した位置に所在が確認された。検出面は、海抜2.70ｍと土壙121より約15cm高い。平面的には、長軸長2.22ｍ、幅83cmを測る長楕円形を呈する土壙であった。

出土遺物には、僅か１点の土製紡錘車の存在が確認されたのみであった。したがって、時期については明確にできない。ただし、周辺に所在する土壙および壙内埋積状況等から判断する限りにおいて後期後半の範疇に理解されよう。

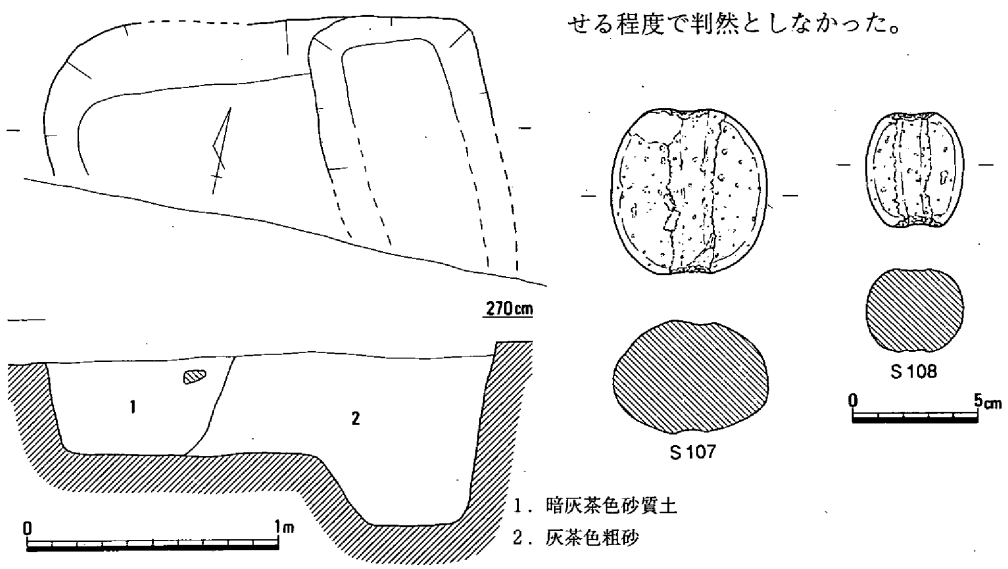
土壙124（第151・304図）

９Ｂｄ区で土壙123の北西約2.00ｍの地点に所在が確認された土壙である。検出面は、海抜2.65ｍで平面不整円形を呈し、長軸長78cm、幅71cm、検出面からの最深部での深さ約12cmの規模を測った。

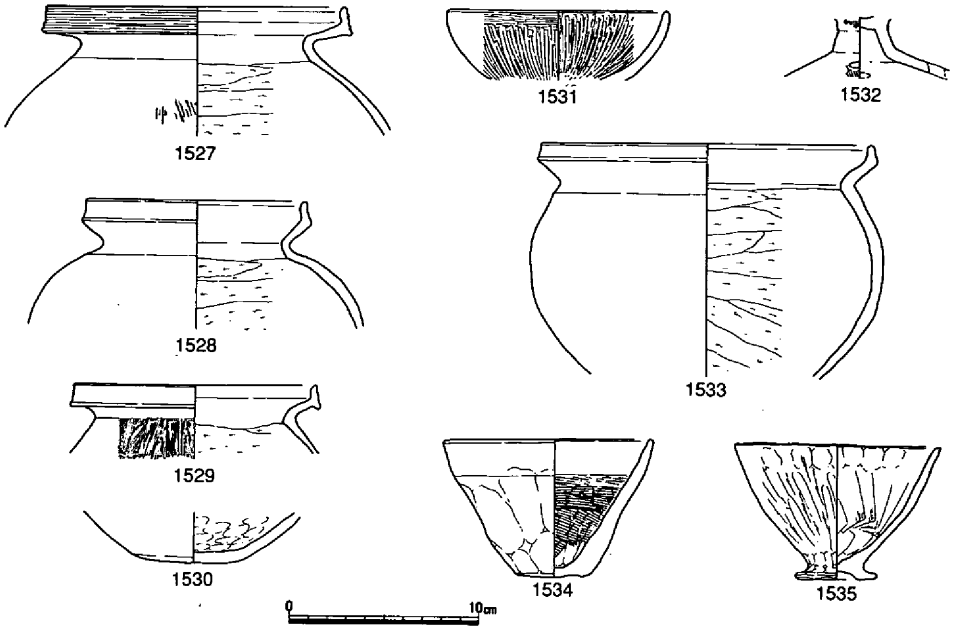
壙内ほぼ中央部中層には、小破片ながら土器の遺存が認められた。土器には、甕、高杯が見られ、甕**1523**の拡張を見せない口縁端部の在り方を除いてはいずれも後期後半の範疇に位置づけられる上東・鬼川市Ⅲ式併行段階に多く見られる特徴を示す。

土壙125（第151・305・306図）

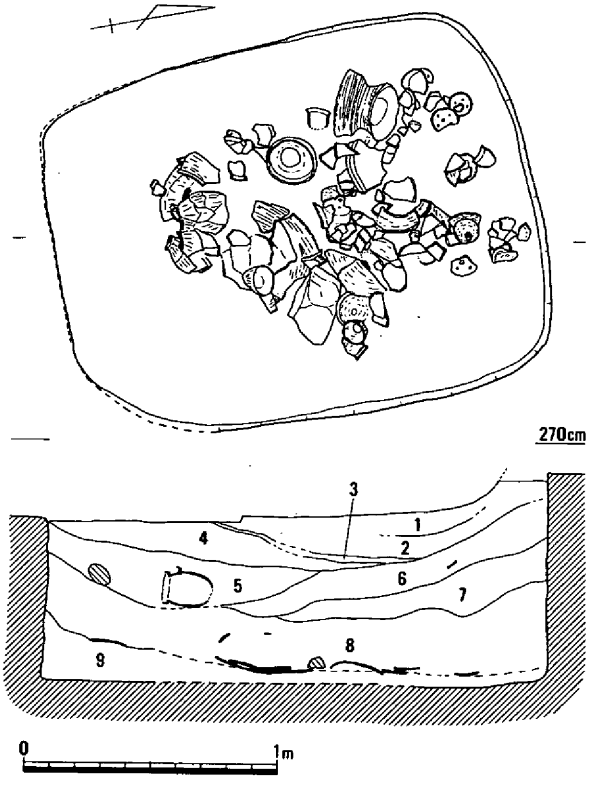
９Ｂｄ区において遺存が確認されたものの調査時の側溝により、南側約１／２程が切られ、全体像の検出までは出来なかった。基本的には、方形を基調としたプランを見せる土壙であろうが、北と東側で肩が直線的な一辺を見せる程度で判然としなかった。



第305図　土壙125（1/30）・出土遺物①（1/3）



第306図　土壙125出土遺物②（1/4）



出土遺物には、２点の石錘と土器の小片が見られた程度であった。

土器には、甕1527～1530、高杯1531・1532、鉢1533～1535の器種が確認された。甕の口縁部拡張の程度とその外面に施されたヘラ描沈線の有無、また高杯の脚部の在り方、さらには小型鉢1534・1535の共伴よって、時期は後期後半の範疇に位置づけて差支えないと考える。

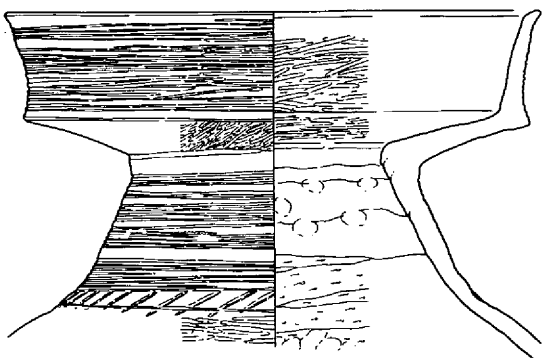
1．茶色土
2．明茶褐色土
3．炭
4．茶色土
5．灰茶色土
6．灰褐色土
7．明黄褐色土
8．黄茶褐色土（含、炭化米多）
9．灰黄褐色土（含、炭化米）

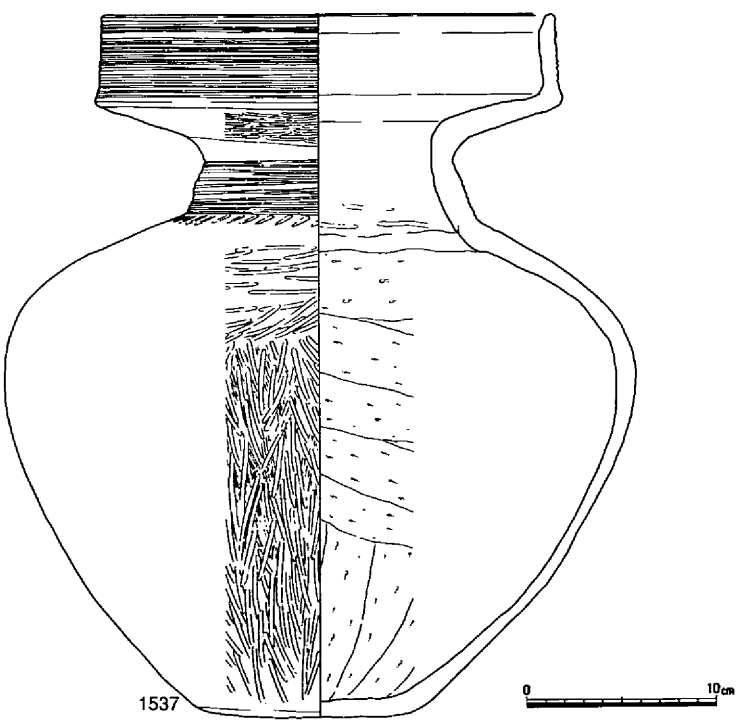
第307図　土壙126（1/30）

土壙126（第151・307～311図、写真図版66）

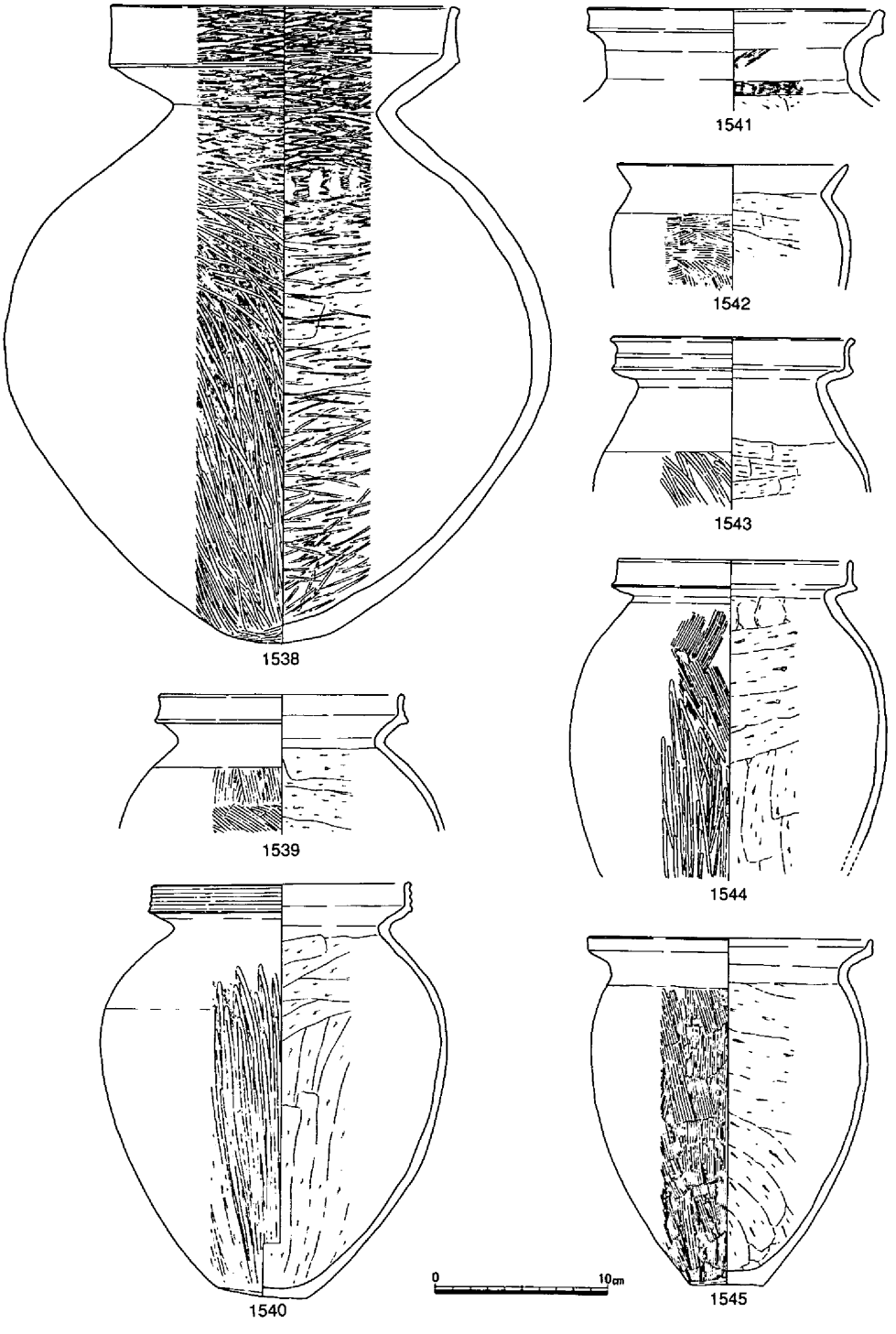
９Ｂｄ区において北・南側上層の一部が古墳時代の竪穴住居94・97によって削平されていたが、海抜約2.60ｍでおよそ東西1.50ｍ、南北1.90ｍの規模で平面隅丸長方形を呈する土壙の存在が判明した。検出面から壙底までは最深部で約82㎝を測り、およそ水平に形成された底面と検出面からほぼ垂直に壙底へと続く壁面が検出された。

壙内には、各種土層がレンズ状を呈した状況で埋積しており、第８層を中心に土器の一括遺存が、また第８・９層の黄色を基調とした粘質土中からは炭化米とガラス滓の抽出が土壌を水

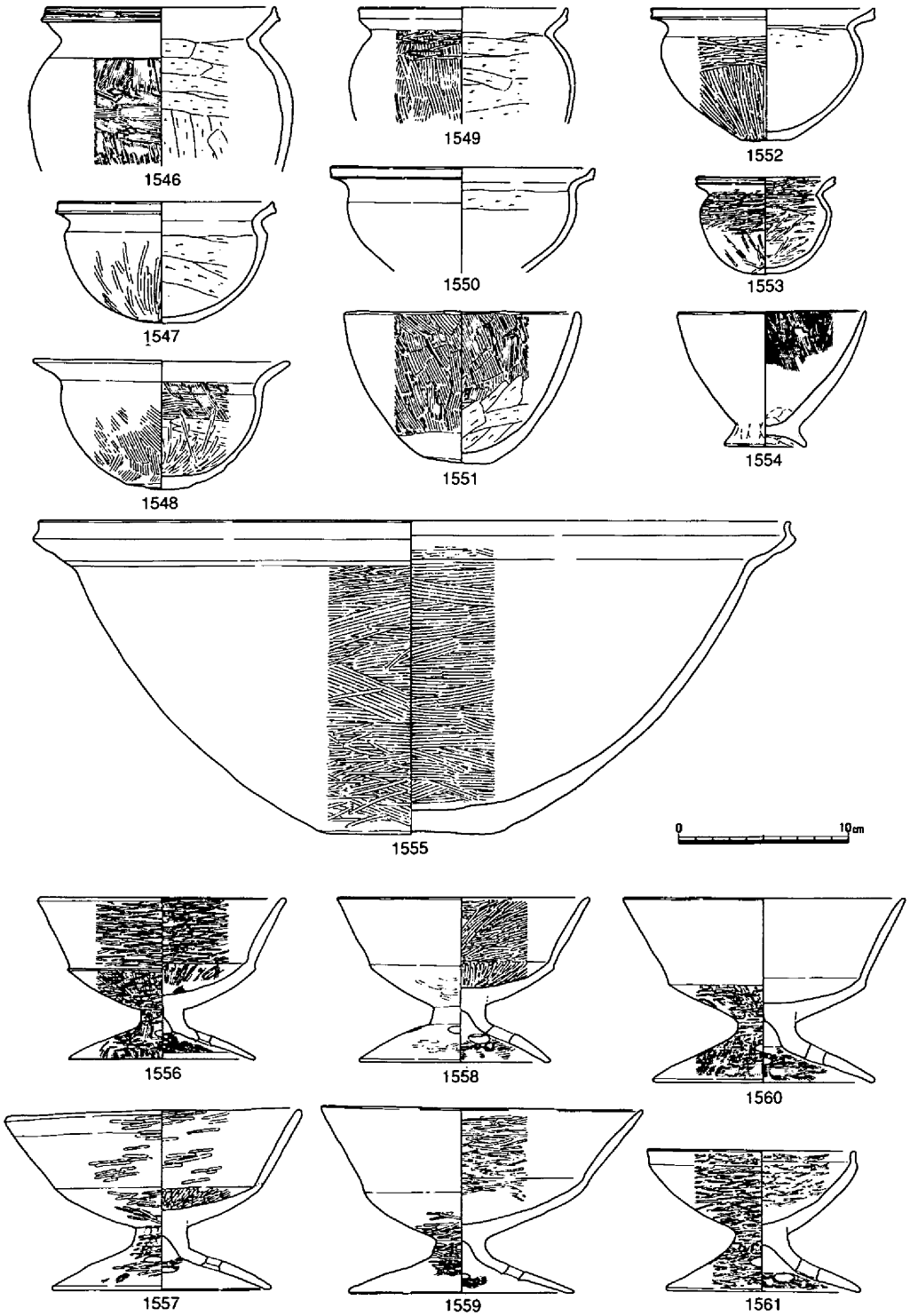




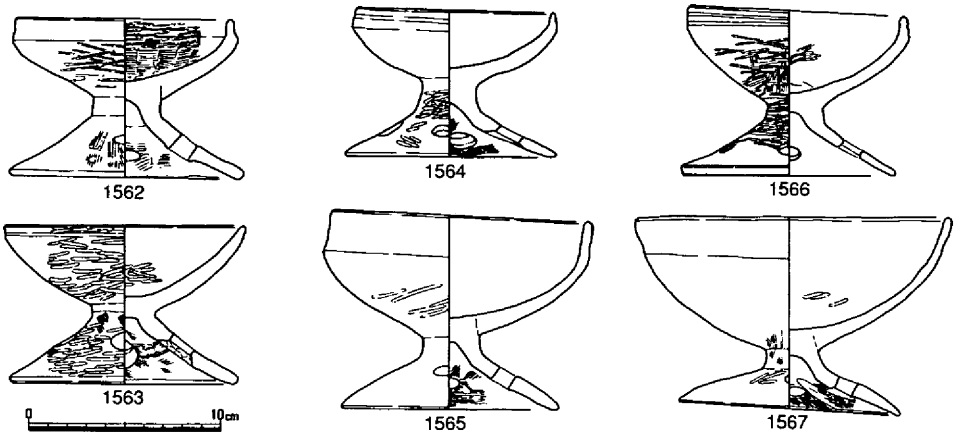
第308図　土壙126出土遺物①（1/4）



第309図　土壙126出土遺物②（1/4）



第310図　土壙126出土遺物③（1/4）

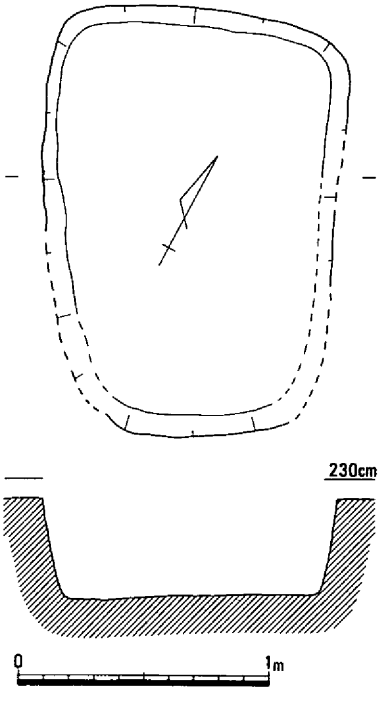


第311図　土壙126出土遺物④（1/4）

洗することによって得られた。

出土した土器は、壺1536～1538・1541、甕1539・1540・1542～1546・1549、鉢1547・1548・1550～1555、高杯1556～1567等の器種に分類される。大半のものが普遍的に見られる器種であったが、壺1536・1537は長頸で口縁端部を長く上方に拡張した形状を示し、その外面にはヘラ描きによる沈線を多重に巡らせる等、一見特殊壺を窺わせるものであった。しかし、特殊壺を定義する胎土中に多量の角閃石の混和、外面に赤色顔料の塗布等は認められなかった。なお、1536は破砕後肩部の粘土紐接合部分で調整されており、器台としての転用の可能性を示唆させる。また、壺1538も比較的丁寧な調整が見られ、内面ヘラケズリの後ヘラミガキが施されていた。甕は、口頸部「く」字状のものと口縁端部を長く拡張したものの２者が認められ、後者はさらに外面にヘラ描沈線文の有無で分類される。鉢には大型品と小型品とがあり、ここでは小型の占める比率が高く、銘々器の在り方が注目された。高杯は口縁部の在り方によって、口縁部を長く外方に伸ばすものと端部を短く立ち上げるのみの２種類が認められたが、いずれも脚柱部はまだ短いものであった。

時期的には、壺、甕の一部器種にヘラ描沈線文の存在が認められることで、型式的に才ノ町Ⅱ式併行段階と推測されよう。



第312図　土壙127（1/30）

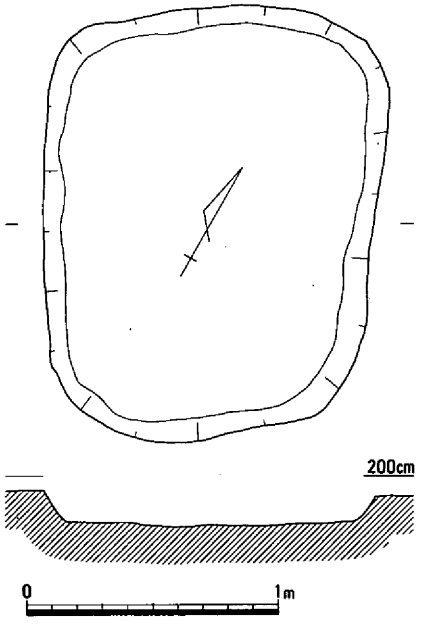
土壙127（第151・312図）

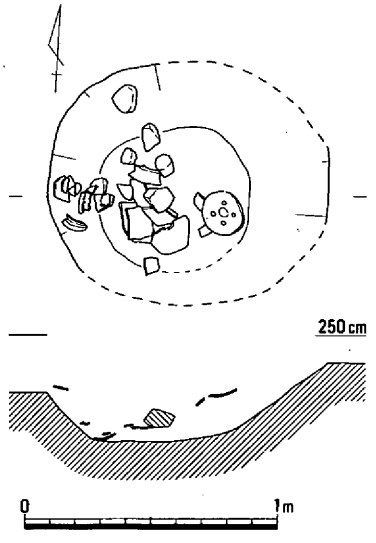
８Ｃａ区において古墳時代の竪穴住居101床面下層で検出された、長軸1.71m、幅1.15mを計測する平面長方形を呈する土壙である。検出面から壙底まではほぼ垂直な壁と、壙底も水平な面を見せるものであった。

時期は、土器の出土が見られなかったことで明確ではないが、おおよそ他の長方形土壙と同時共存と考えたい。

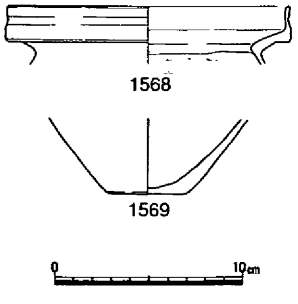
土壙128（第151・313図）

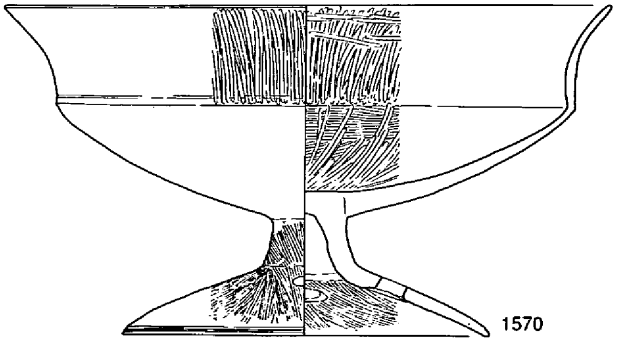
８Ｃａ区で古墳時代の竪穴住居106の下層において土壙127の西約１ｍに近接して検出された。土壙127に酷似した在り方を見せるもので、長軸長1.73m、幅1.31ｍを測る長方形土壙であった。





第313図　土壙128（1/30）





第314図　土壙129（1/30）・出土遺物（1/4）

時期は、遺物の出土が見られなかったことで判然としないが、土壙127等周辺に所在する遺構との関係からおよそ後期後半への位置づけが妥当と考える。

土壙129（第151・314図）

８Ｂｂ区で調査時に土層断面観察用の土手として残した部分での検出であったため、北に近接する土壙125との切合いについては不明である。平面は楕円形を呈し、規模は長軸長1.10m、幅97cmを測った。壙内からは土器片と小石の散在が認められたにすぎない。

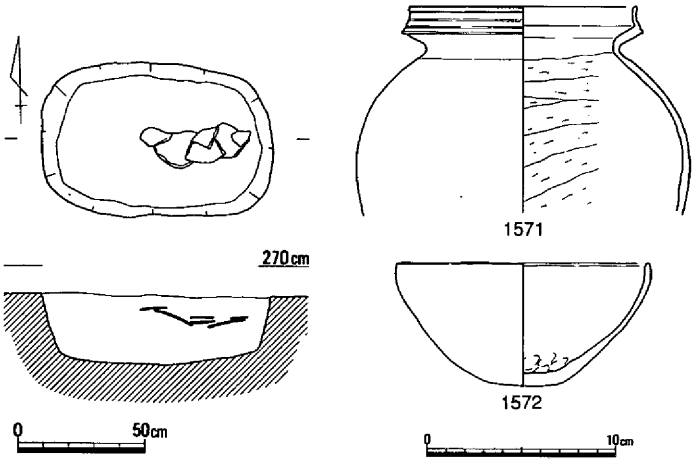
土器は、甕と高杯が図化された。甕は口縁端部を長く拡張し、高杯は全体に作りが大型であった。ただし脚部と口縁部等の在り方については当該期の高杯と何等変わらないもので、およそ上東・鬼川市Ⅲ併行と考えられる。

土壙130（第151・315図）

８Ｂｂ区において竪穴住居43の南約１ｍの地点に所在が確認された。長軸長91cm、幅60cm、検出面からの深さ27cmと比較的小規模な土壙で、平面隅丸長方形を見せるものであった。

壙内には、中層に甕、鉢等の土器片の堆積が確認された程度であった。

甕は、口縁端部を長く上方に拡張し、外面にはヘラ描きによる沈線文を巡らせており、型式的に才ノ町Ⅱ式併行と認識されるものであろう。

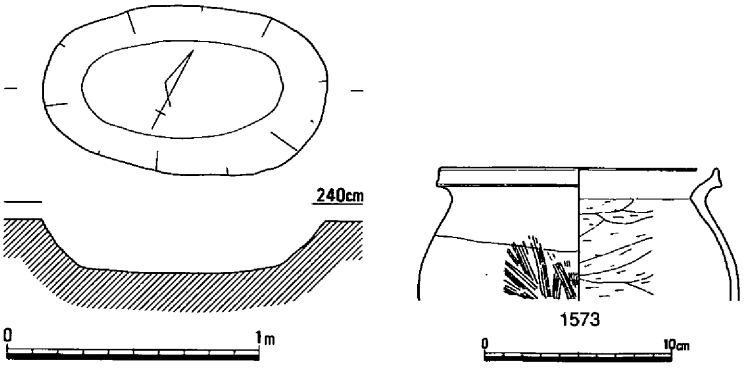


第315図　土壙130（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙131

（第151・316図）

８Ｂｄ区に所在をみせた竪穴住居43の覆土上層を掘り込んだ状態で検出された土壙であ



第316図　土壙131（1/30）・出土遺物（1/4）

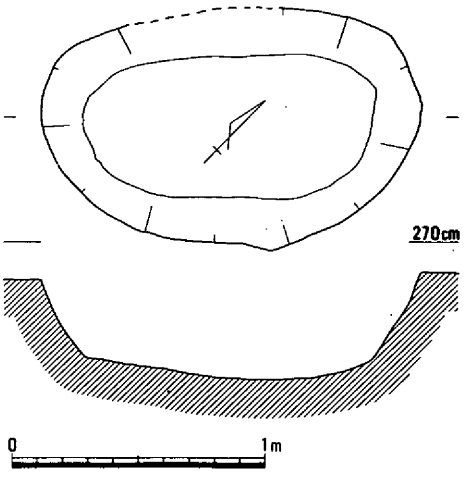
る。海抜2.35mの検出面での規模は、長軸長1.13m、幅67cm、検出面からの深さ21cmを測った。

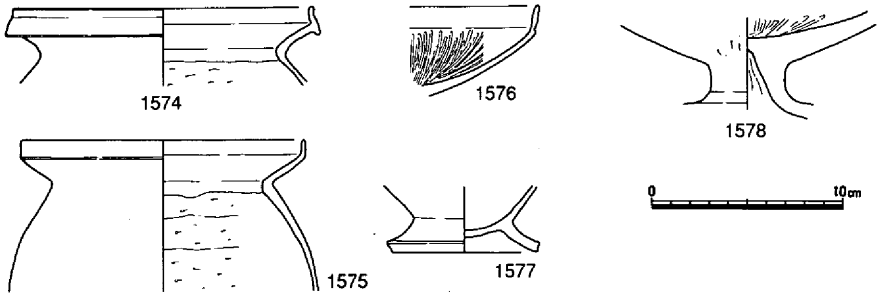
出土遺物は、甕が１点検出されたにすぎず、時期についての詳細は不明である。

土壙132（第151・317図）

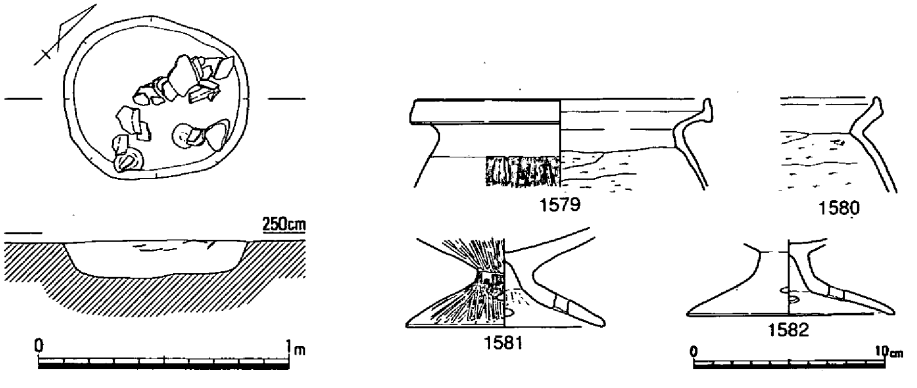
８Ｂａ区の竪穴住居43と一部切合った状態で検出された。長軸長1.49m、幅93cm、検出面からの深さ41cmの規模を見せるものであった。壁から壙底にかけては比較的緩やかな撓み状を呈していた。

壙内からは、土器の小片が散見された程度であった。土器には、甕、高杯、台付鉢等の器種が見られた。甕は、口縁端部を上方に拡張するものである。また、高杯は短脚であるが口縁部に対する受部の長さの割合はまだ受部のほうが勝っており、上東・鬼川市Ⅲ式併行と判断される。





第317図　土壙132（1/30）・出土遺物（1/4）



第318図　土壙133（1/30）・出土遺物（1/4）

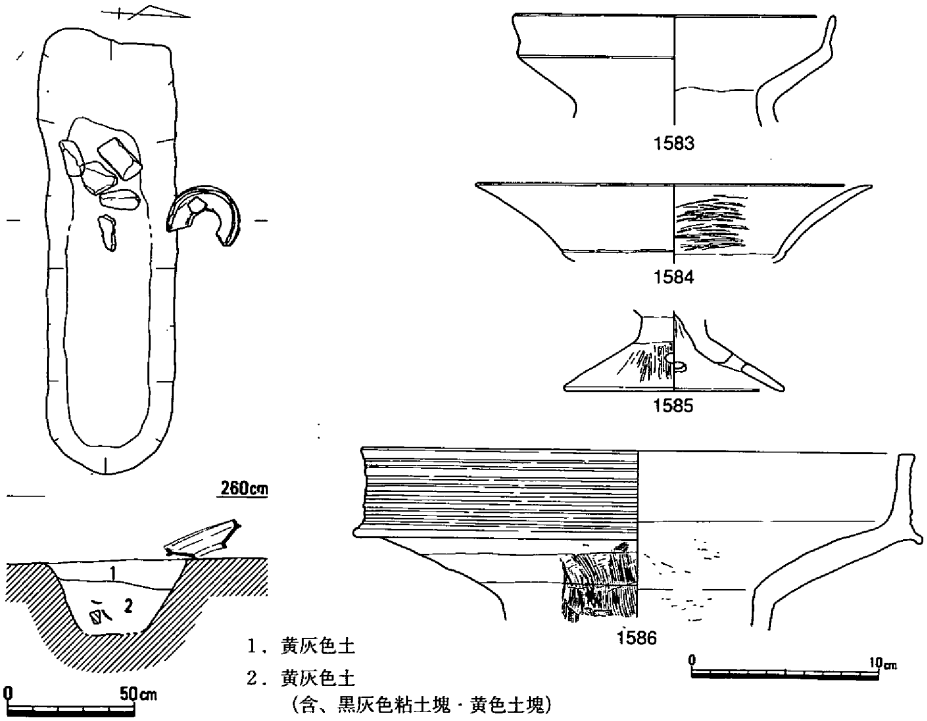
土壙133（第151・318図）

８Ｂａ区において竪穴住居43と44の間に挟まれた位置に、海抜2.45ｍで検出された。長軸長74㎝、幅64㎝を測り、平面楕円形を呈する比較的小規模な土壙であった。

壙内には、暗灰黄色を呈する土砂が１層埋積しており、この上層には土器片の堆積が見られた。土器には、甕、高杯の器種が認められた。甕は口縁部をわずかに拡張する程度で、高杯も短脚ながら杯受部は長く、上東・鬼川市Ⅲ式の様相を見せるものであった。

土壙134（第319図）

全体図に位置を落とすことが出来なかったが、８Ｃｂ区と８Ｃｄ区に跨がった所で、微高地の下がり斜面に近い位置で検出された土壙である。長軸長1.73ｍ、幅50㎝と平面隅丸長方形を呈し、検出面から壙底までの深さ約29㎝を測った。壙内からは、僅かな土器片の包含と西側にかたまった状態で角礫５個の遺存が確認された程度であった。なお、検出面肩口からは特殊壺が１点検出されたが土壙との関係については判然としない。壙内出土の土器は、高杯の口縁部が相当の拡張を見せ、壺の口縁端部の在り方も上東・鬼川市Ⅲまで遡らないものと考える。特殊壺は、口縁立上がりを長くほぼ垂直に拡張し、外面にはヘラ描きによる沈線文が巡らされていた。また胎土中には角閃石を多量に含み、内・外面に赤色顔料の塗布が認められた。（島崎）



第319図　土壙134（1/30）・出土遺物（1/4）

(6)　土器溜り

土器溜り１（第151・320～326図、写真図版66）

９Ｂａ区と９Ｂｃ区に跨がった状態で弥生時代後期前半から古墳時代前半までの時期差をもった多量の土器が最大長５ｍ、幅２ｍ前後の範囲に溜り状を呈して検出された。面的な検出の発端は、海抜2.90ｍにおいてであり、以下海抜2.60ｍまでの約30㎝の幅に集中した様相を見せた。土器溜り下層には、遺構の密集度が著しい当該調査区にあっては例外的に竪穴住居・土壙等の所在がまったく見られないことで、この地点はおそらく貝塚１と同様弥生時代を中心に古墳時代前半までの間土器廃棄場としての役割を果たしていたものと考える。傾向としては西側に弥生時代が多く、東側に古墳時代の土器が見られ、順次変遷の状況が窺われた。

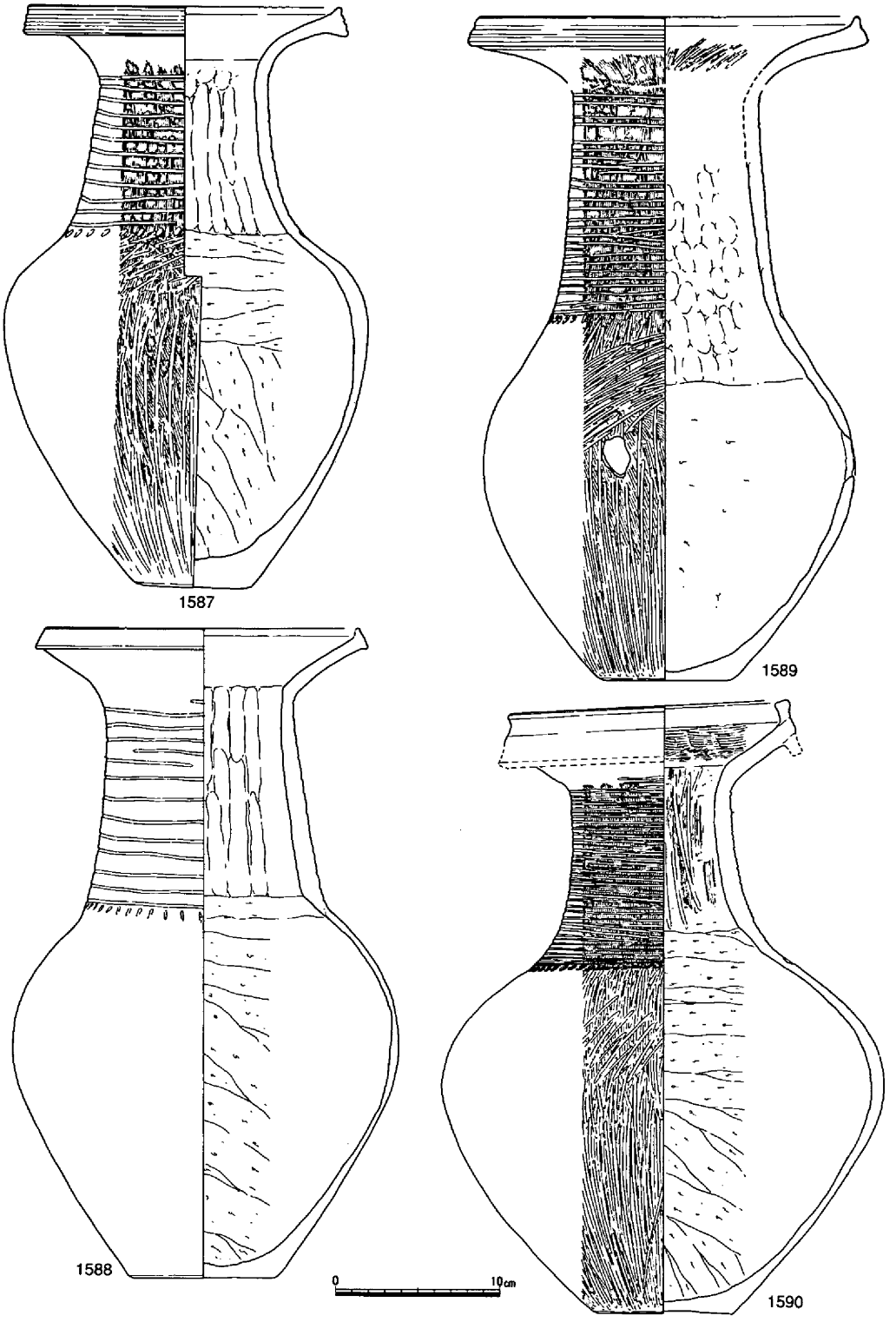
出土した土器は、破片が多い中、完全な状態の土器も多く検出された。ここでは後者の比較的遺存状況の良好な土器を中心に抽出した。

壺には、長頸と短頸とがあり、長頸壺は頸部が長く直立に近いもので外面にはヘラ描沈線を１本もしくは３本単位で完結的に巡らせるもの1589・1590と螺旋状に巡らせるもの、さらには施文を見せない器種等が認められた。これはさらに口縁端部の拡張度によって型式分類も可能で、概して拡張する程新しい傾向を示すとされる。ただし1590に関しては頸部と胴部との在り方は古相を示すものと考える。こうした中、1593と1596は形態的に非在地系と考える。短頸壺についても傾向としては口縁部の拡張・調整の程度等の違いによって型式差の抽出は比較的容易で、1597・1598は上東・鬼川市Ⅱ式、1599はオノ町Ⅰ式、1602はオノ町Ⅱ式併行にそれぞれ比定される。1600は口縁端部を拡張し、外面の稜線が鋭角的であることで備中西北部地域に多く分布を見るものである。1603も判然としないが同地域であろう。古墳時代の壺には、1625～1629が挙げられる。1625は、頸部にヘラ描きによる線刻が認められ、型式的には讃岐地方に多い土器である。1629はきわめて歪な胴部を有するもので、在地には見られない土器である。1627は、内傾気味に上方へと伸びる口頸部を有し、東海地方の内彎口頸壺を彷彿とさせるが、胎土には水漉粘土が用いられている。

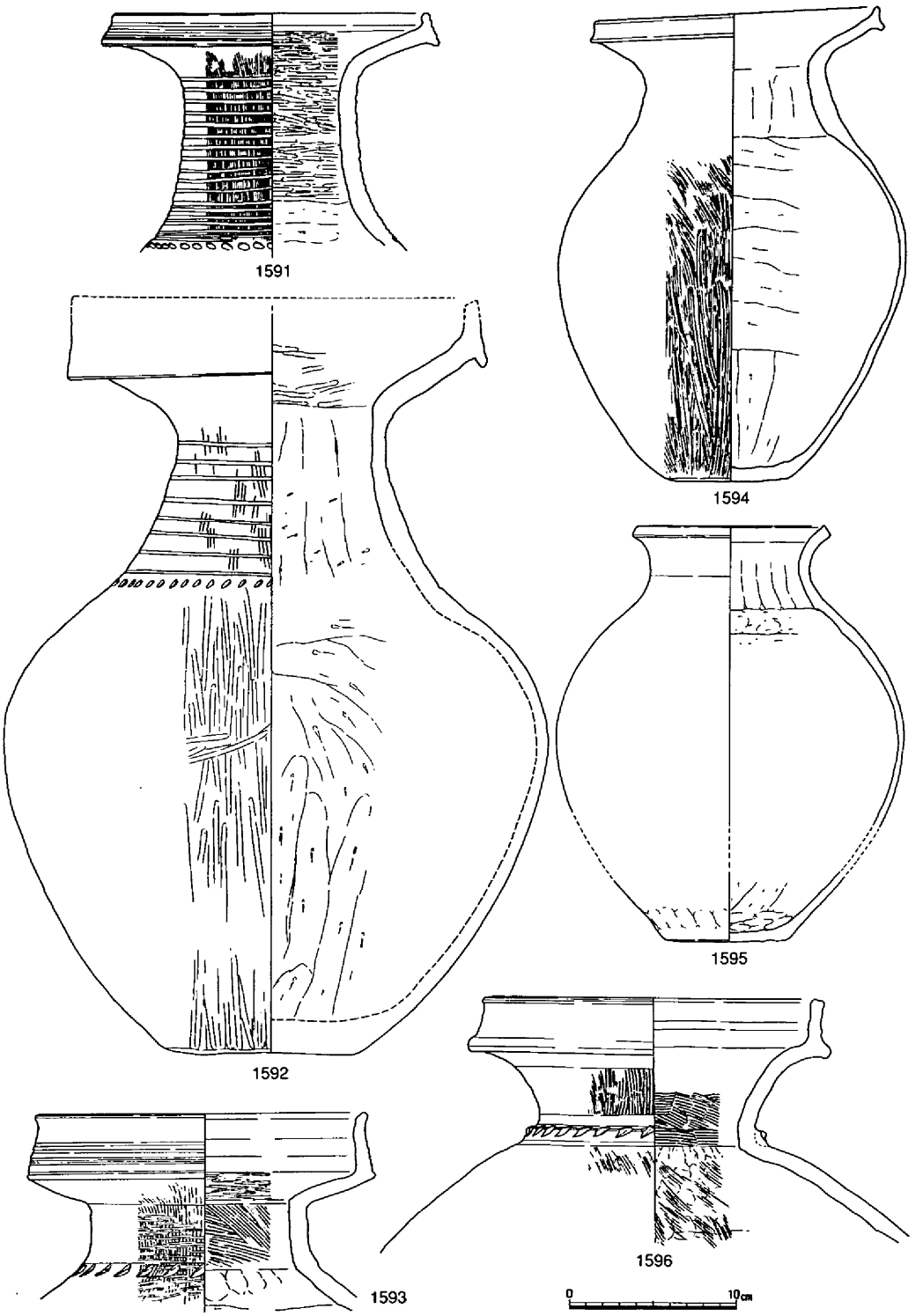
甕は、３点を掲載した。1604は、小型に分類されるもので底部中央には焼成後の穿孔と底部外面には煤の付着を見ることができる。1606は古墳時代初頭に位置づけられる下田所式併行に比定される甕である。外面剥落して判然としないが、口縁部外面には櫛描沈線の痕跡が確認される。1605は、外面にタタキの後ハケメ調整がなされ、内面にはナデ調整が見られた。

高杯1607～1611は、上東・鬼川市Ⅱから同Ⅲ式にかけてのもので、脚柱部は長脚から短脚化傾向を見せる。1610は、胎土が水漉粘土でこの中にあっては新相を示す。

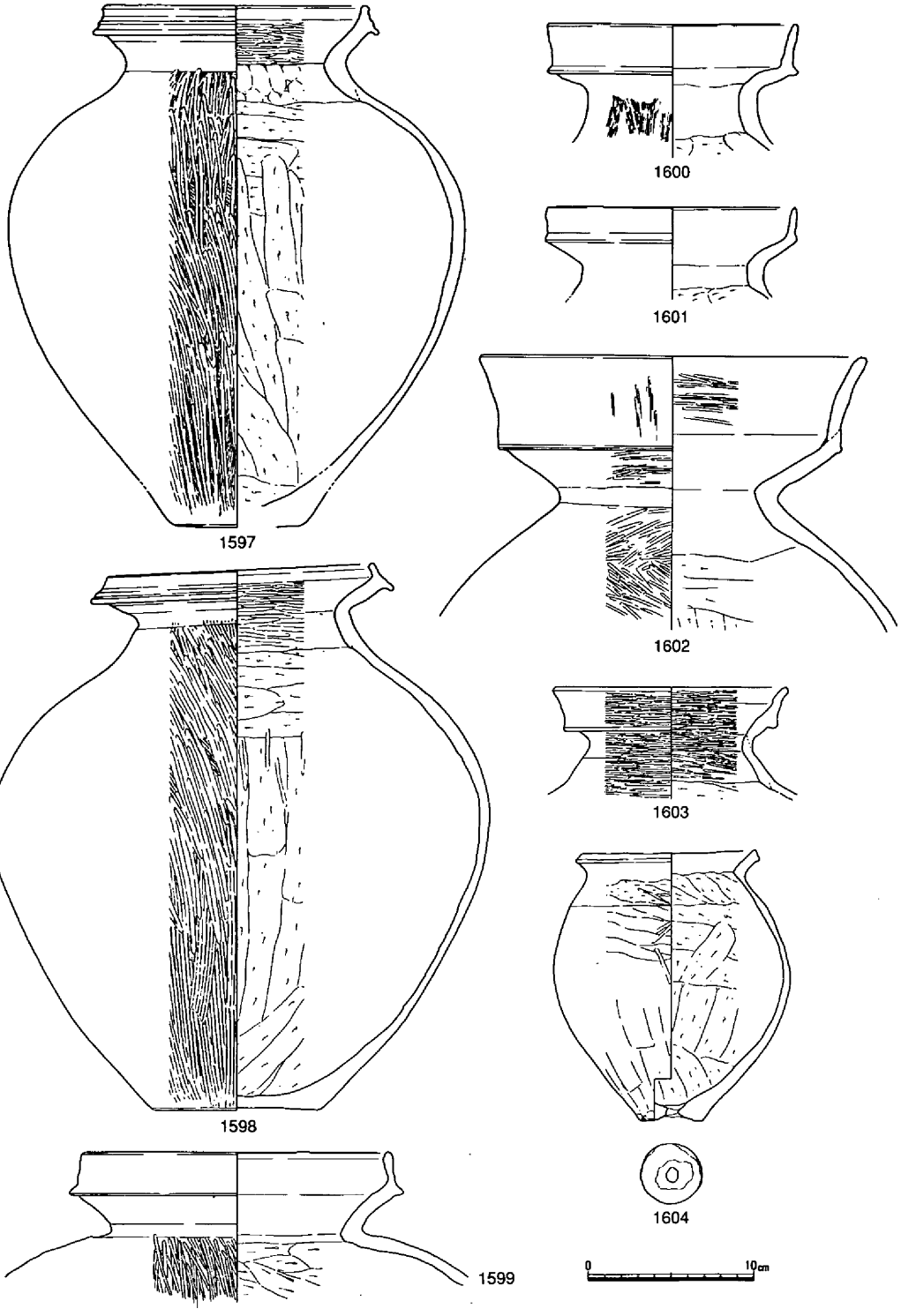
鉢は、上東・鬼川市Ⅱ式併行の大型鉢1612の他は概して小型品である。1612は、体部最大径の所に径３㎝を測る円形の突起を左右一対取り付けたもので、内外面ともに丁寧なヘラミガ



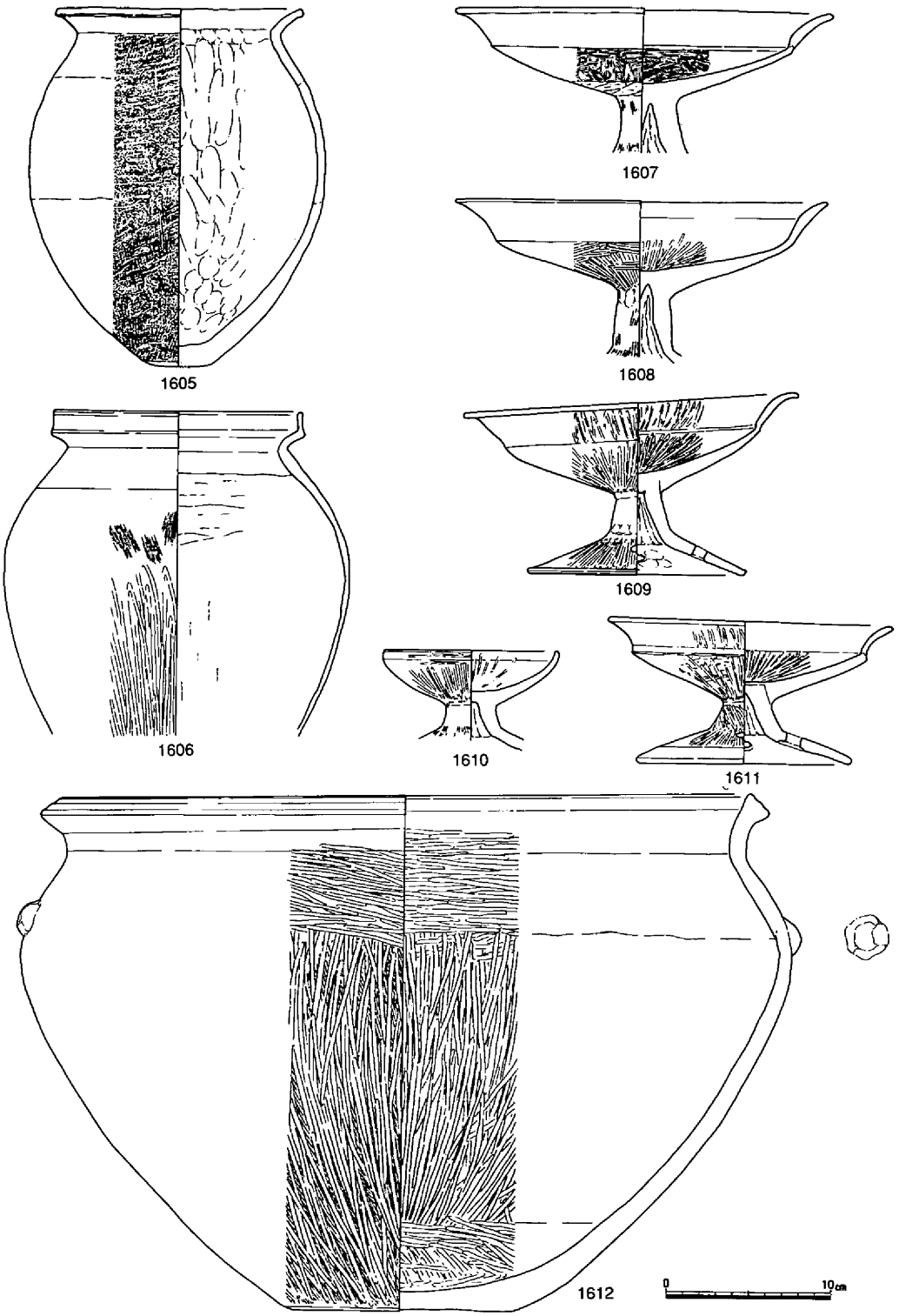
第320図　土器溜り１出土遺物①（1/4）



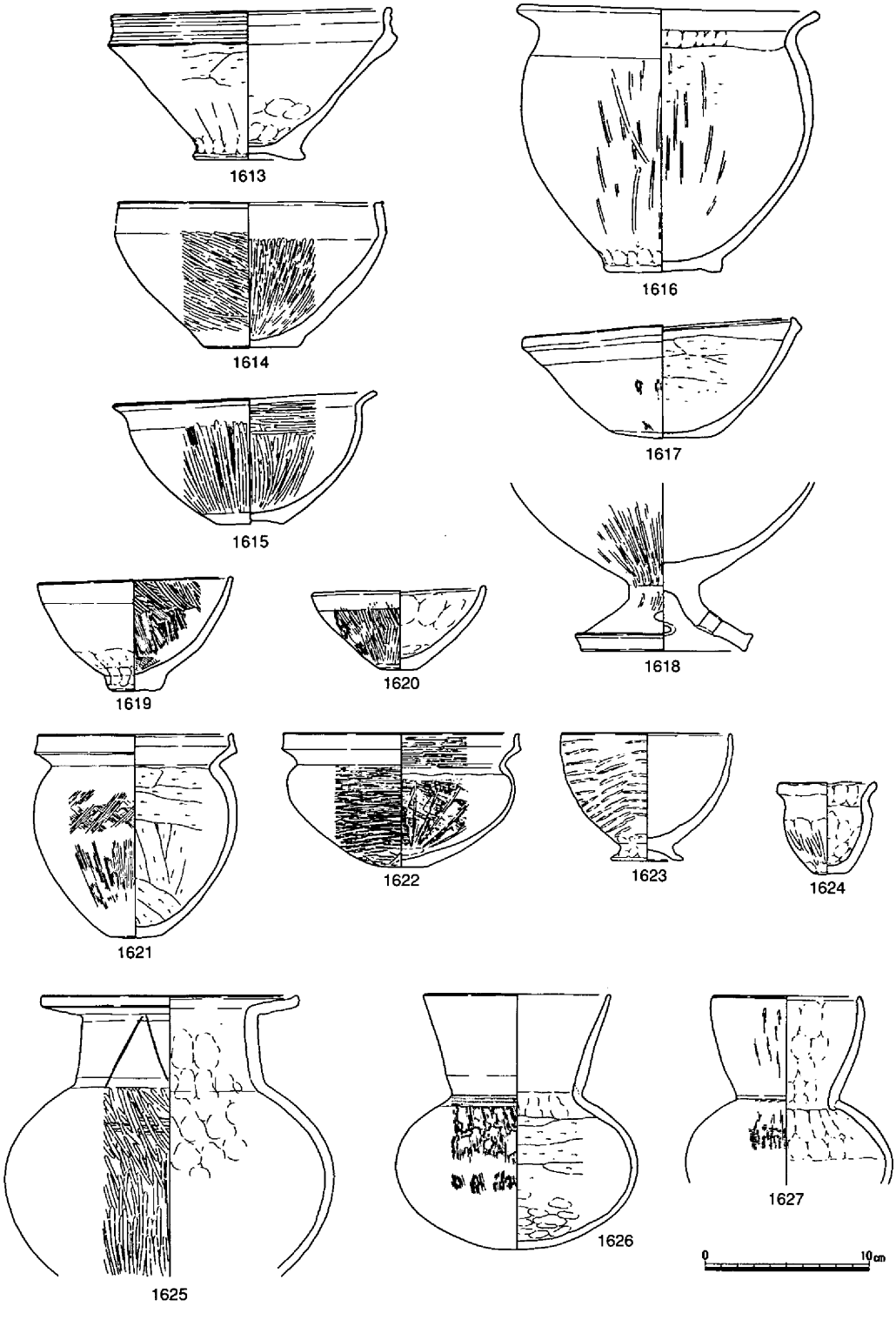
第321図　土器溜り１出土遺物②（1/4）



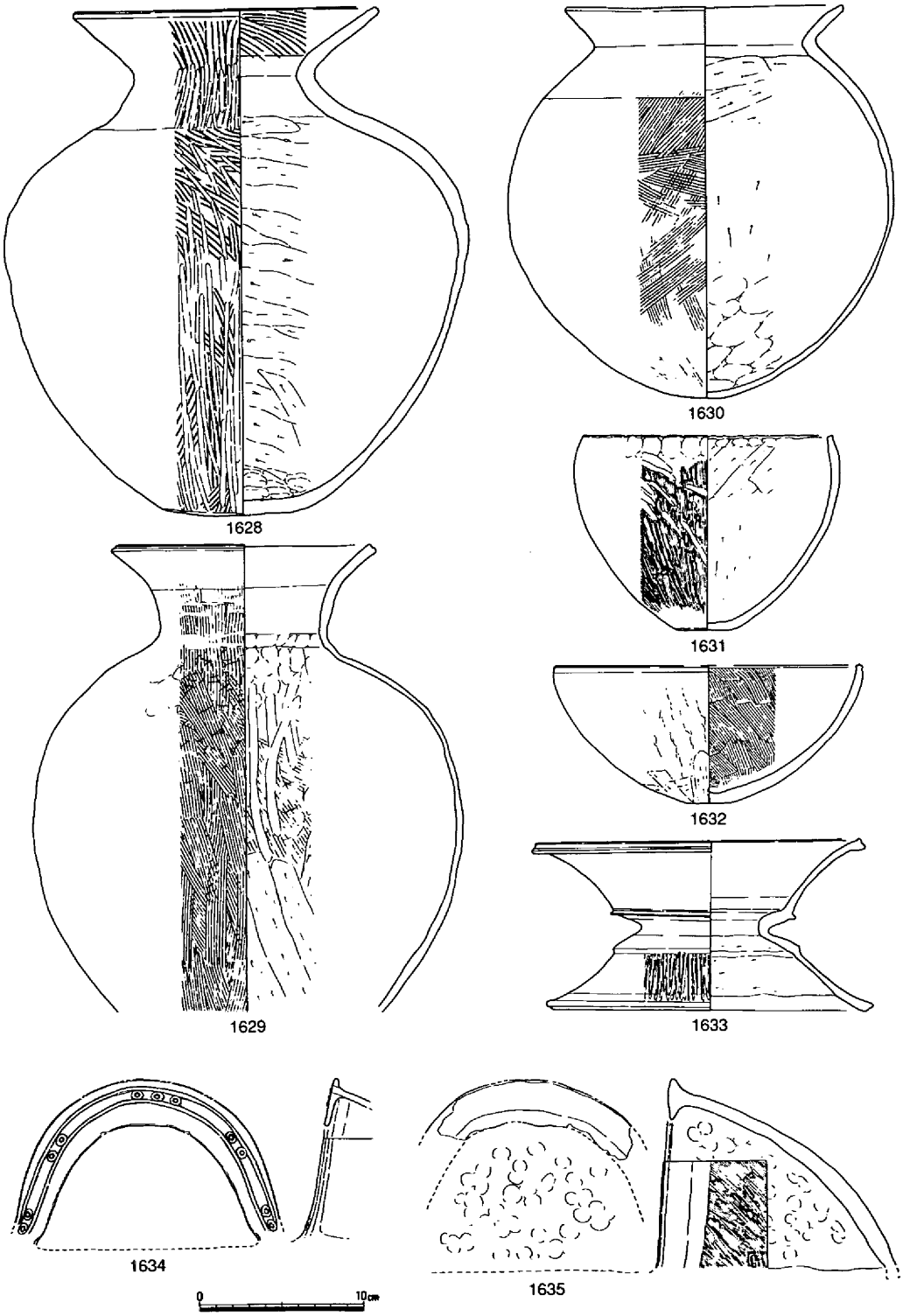
第322図　土器溜り１出土遺物③（1/4）



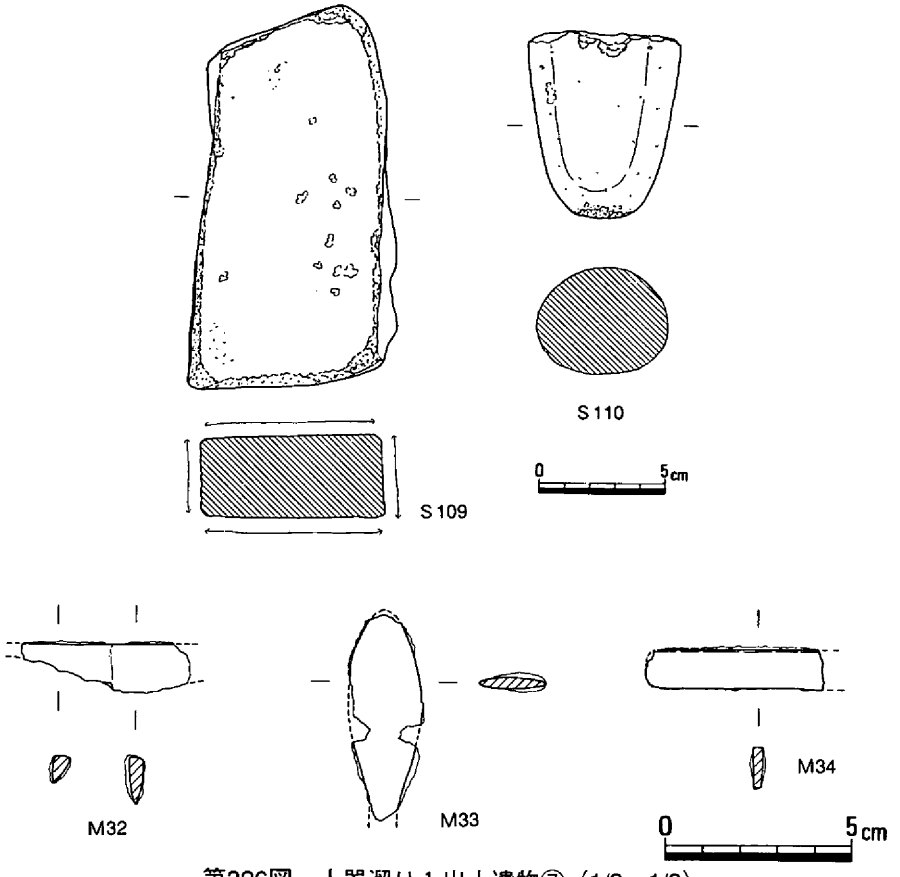
第323図　土器溜り１出土遺物④（1/4）



第324図　土器溜り１出土遺物⑤（1/4）



第325図　土器溜り１出土遺物⑥（1/4）



第326図　土器溜り１出土遺物⑦（1/3・1/2）

キが施されていた。小型品は、底部平底を呈するものから丸底に近い状態のものまで見られ、前者の鉢1613・1614・1617はいずれも口縁端部が拡張を見せず、胎土中にも砂粒を比較的多く含む。1613は、口縁部を直立させその外面に凹線文を施したもので、在地産の器種に類例はなく備後南部地域からの搬入と考えられる土器である。1621・1622は、器形に若干の違いはあるものの口縁端部の拡張は同程度になされており、1615・1619・1620等とともにオノ町Ⅰ式の範疇に位置づけられる。台付鉢1618は、台の端部に古相を見せるが胎土には水漉粘土が用いられており新相を示す。1631・1632は、底部外面にヘラケズリによる器面調整が見られる等基本的に丸底が意識されており、古墳時代初頭段階に位置づけられる。

鼓形器台1633は、形態的に山陰地方に多く見られる形状を見せるものであるが、胎土は水漉粘土が用いられ、内外面には赤色顔料の塗布は確認されなかった。

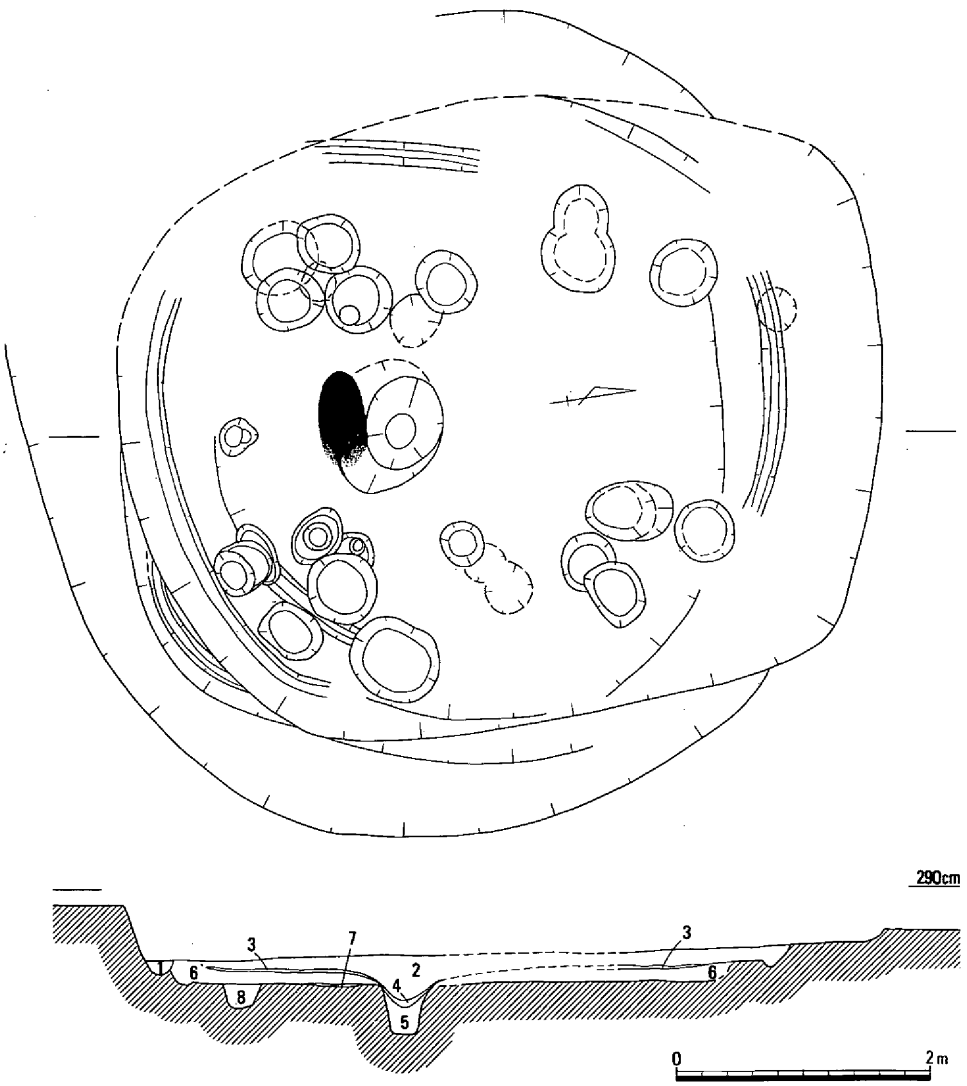
手焙形土器1634・1635は、いずれも覆部で口縁端部を上下に拡張し、1634には棒状と円形の浮文が貼付されていた。時期については加飾化傾向から下田所以降と考える。

土器以外には、砥石、敲石、刀子、鉄鏃、不明鉄器等が検出されている。　（島崎）

第４節　古墳時代前半の遺構・遺物

(1)　概要

この時期に属する遺構は、第329図に示すように、竪穴住居63軒、土壙32基、土器溜り１か所である。竪穴住居は微高地上の全域に分布しており、平面形は方形ないし長方形を呈するも



1．暗褐色砂質土（含、炭・焼土）
2．暗灰褐色砂質土（含、炭・焼土）
3．暗灰色砂質土（含、炭・焼土、貼床）
4．炭
5．灰
6．暗黄灰色粘質土（含、炭・焼土）
7．炭
8．暗灰褐色砂質土

第327図　竪穴住居45（1/60）

のが主となり、円形ないし楕円形を呈するものが若干見られる。土壙は10Ｂｃ区周辺に集中しており、弥生時代後期に比べて数も少ないが、明確に時期を限定できないままに弥生時代後期後半としたものの中に、古墳時代初頭に下るものが含まれている可能性を残している。竪穴住居47の北端が削られている状況に示されるように、この時期にも微高地北端はより北に広がっていたものと思われる一方、当時の地形をとどめると考えられる微高地南端でも、肩口の近くまで竪穴住居が作られている。また、集落は調査区の東西それぞれに広がりが続いていたことが想定される。微高地南側の低位部では、弥生時代以降の水田経営が想定されるところであるが、この時期も含めて確認されなかった。（光永）

(2) 竪穴住居

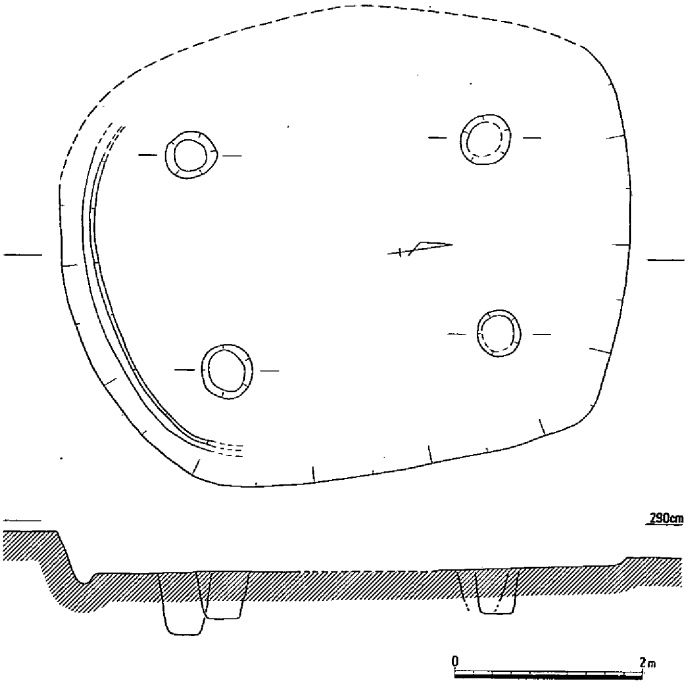
竪穴住居45（第327～334図）

11Ｃｂ区に位置し、竪穴住居１・46、土壙８・９・54・145を削っている。

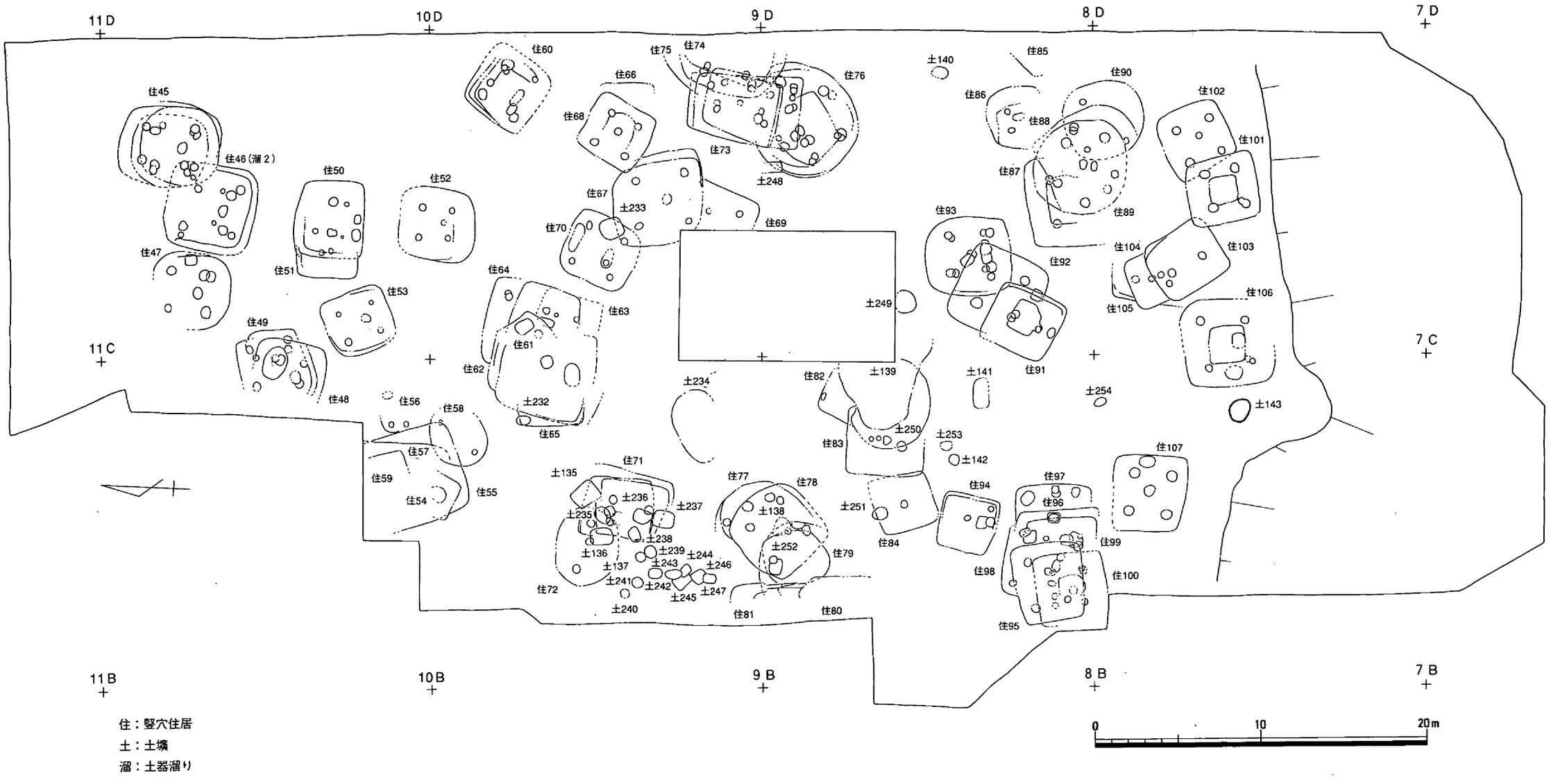
第327図に示す状況で検出されており、これを壁体溝・柱穴等の関係から３段階に分けて、新しいものから順に45Ａ・45Ｂ・45Ｃとする。

竪穴住居45Ａは、西辺が不詳であるが、平面形は隅丸長方形と想定され、長軸長6.02m、復元短軸長4.94mを測る。南辺において深さ51cmが残る側壁はやや外傾し、南辺では幅20cm程度の壁体溝を検出している。海抜高2.3mの床面はほぼ平坦で、復元床面積は20.8㎡となる。４本柱で、柱間は2.1～3.2mを測り、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は長径48～58cmの楕円形で、深さは47～66cmを測り、側壁との距離は約60cmである。中央穴その他の住居内構造は不明である。

竪穴住居45Ｂは、東辺と南西部が不詳であるが、平面形は隅丸方形と想定されて、南北長4.75m、復元東西長4.4mを測り、復元床面積は15.6㎡である。北辺および南東部で幅15cm程度の壁体溝を検出している。

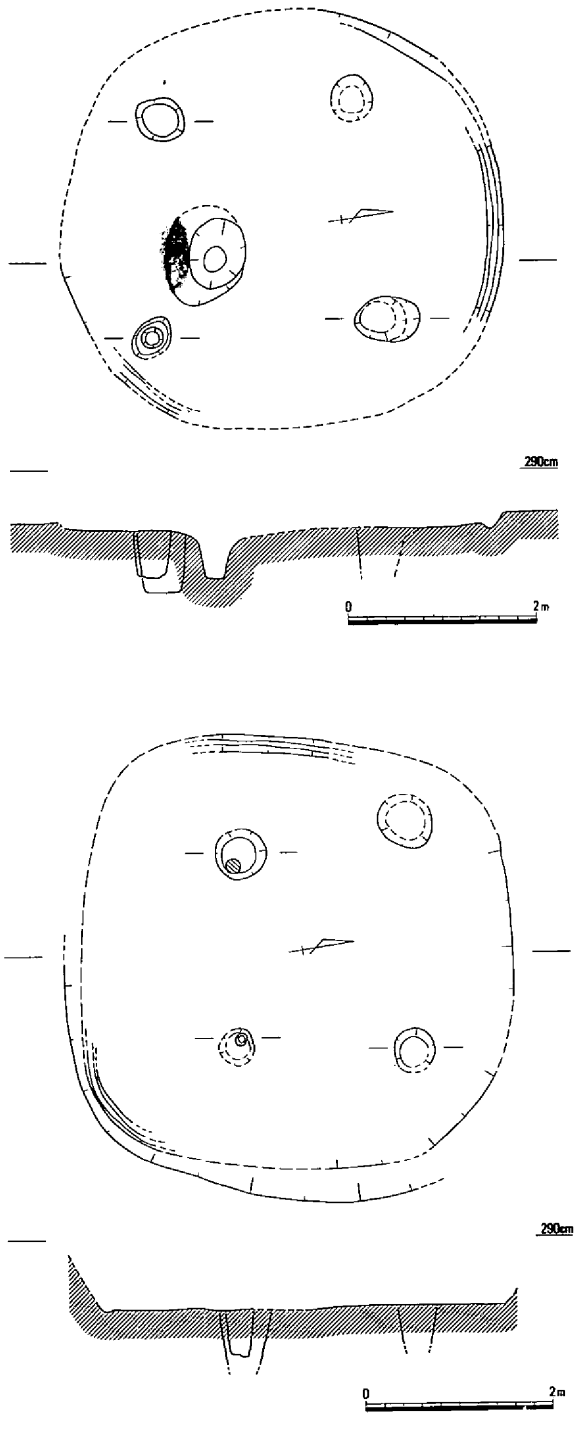


第328図　竪穴住居45Ａ（1/80）



住：竪穴住居
土：土壙
溜：土器溜り

第329図　古墳時代前半遺構配置図（1/300）

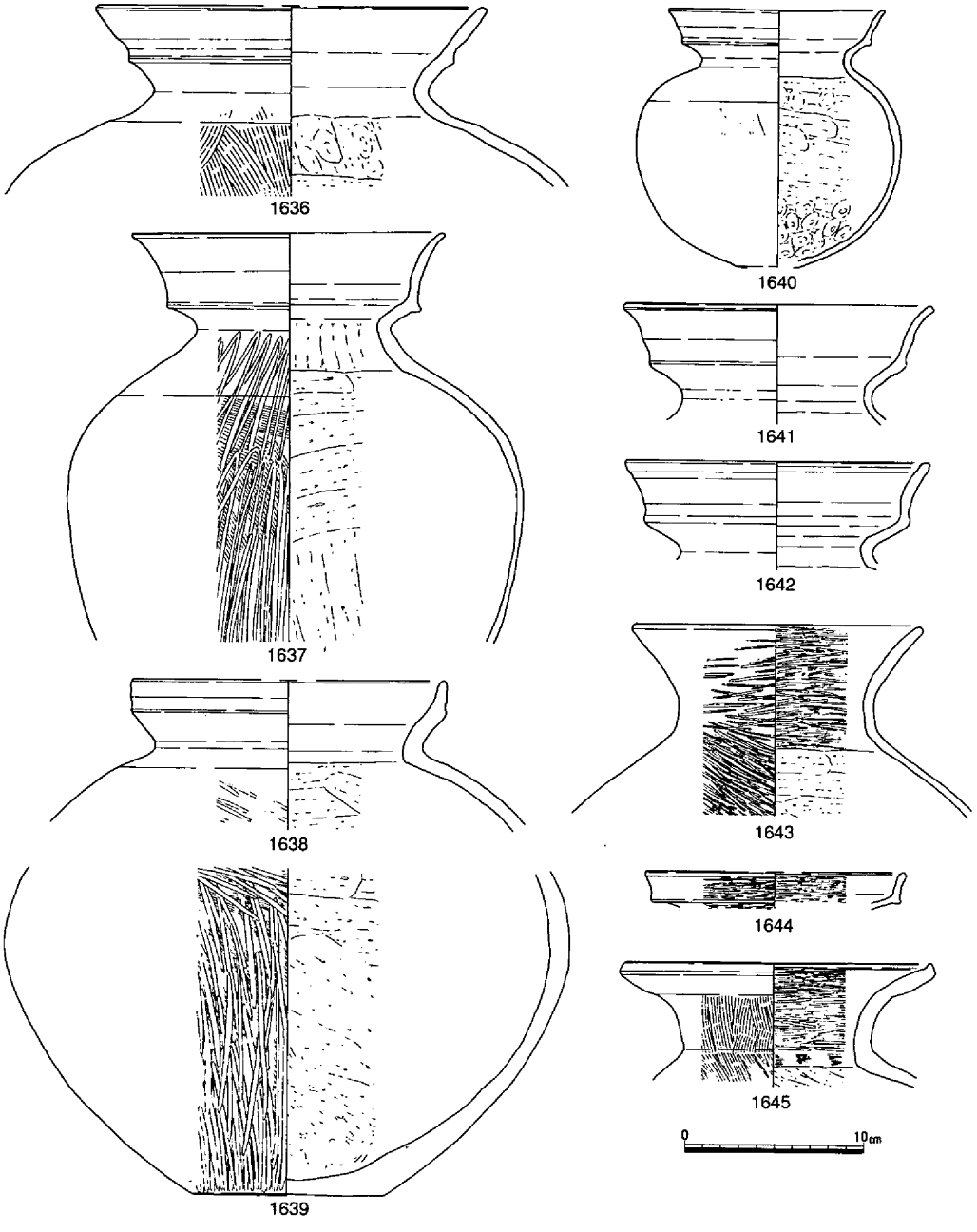


第330図　竪穴住居45Ｂ（上）・45Ｃ（下）（1/80）

海抜高2.22ｍの床面はほぼ平坦で、中央やや南寄りに平面形楕円形の中央穴が位置する。長径67㎝、短径59㎝、深さ50㎝で、南肩口に灰の掻き出しが見られる。柱構造は４本柱であり、柱間は2.1～2.5ｍを測って、主軸は南北方向に置かれる。柱掘り方は、長径55～73㎝の楕円形で、深さは50～66㎝を測り、側壁との距離は25～40㎝である。その他の住居内構造については不明である。

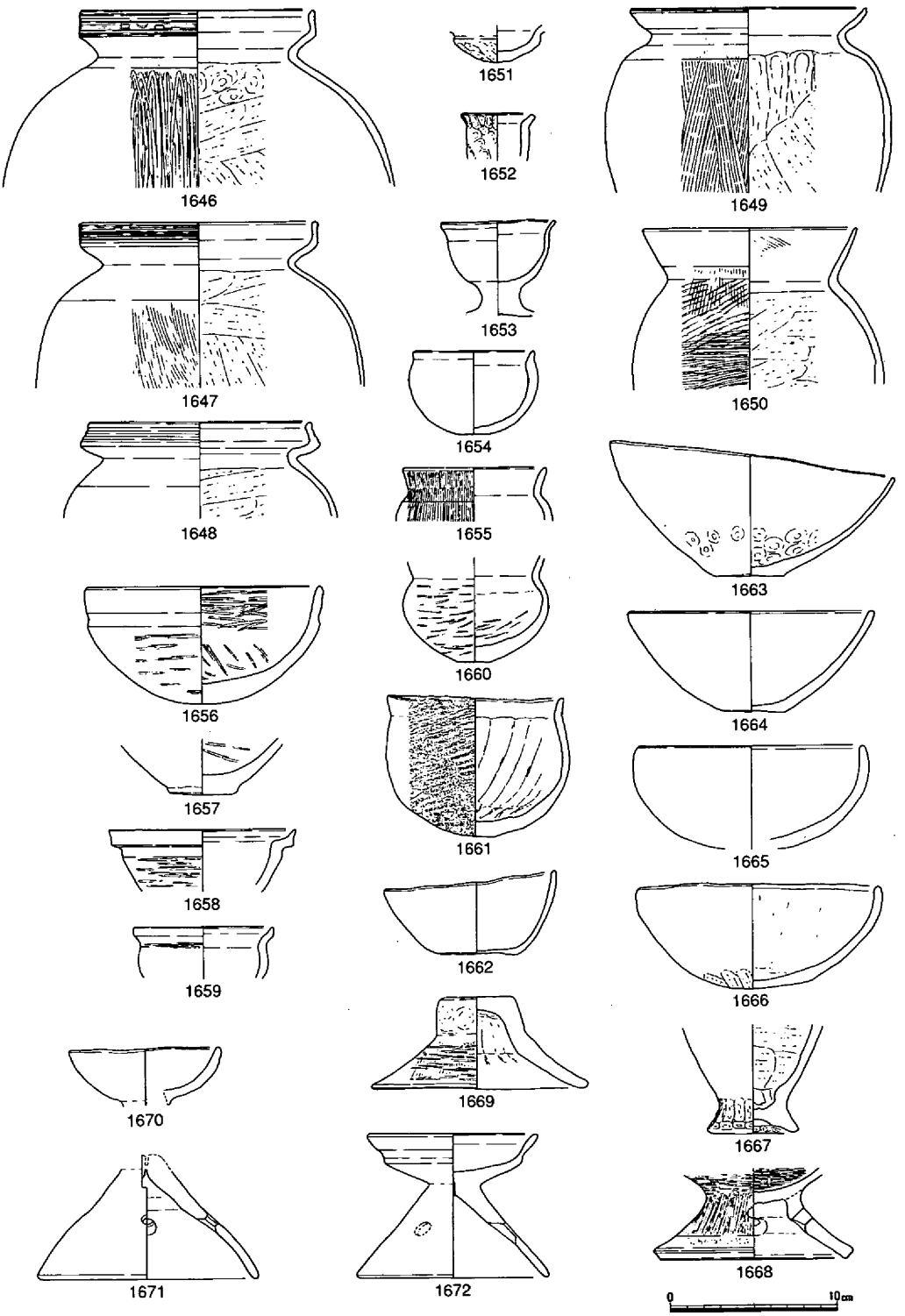
竪穴住居45Ｃは、平面形は隅丸方形と想定され、長軸長4.86ｍ、短軸長4.78ｍを測り、復元床面積は17.5㎡である。西辺および南東部で幅10～18㎝の壁体溝を検出している。４本柱で、柱間は1.8～2.4ｍを測り、主軸を東西方向に置いている。柱掘り方は長径48～62㎝の楕円形で、深さ50㎝以上である。中央穴その他の住居内構造は不明である。

出土遺物には、壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・器台・蓋・手捏ね土器・製塩土器等の土器のほかに、砥石Ｓ111・112、石錘Ｓ113、敲石Ｓ114、鉄器M35がある。1636～1642は複合口縁の壺であるが、1641・1642では頸部から口縁部への屈曲部が丸みをもっている。甕1646～1648の口縁部外面には櫛描沈線が巡らされている。高杯には短脚と長脚があり、前者の杯部には椀形の1678・1679が

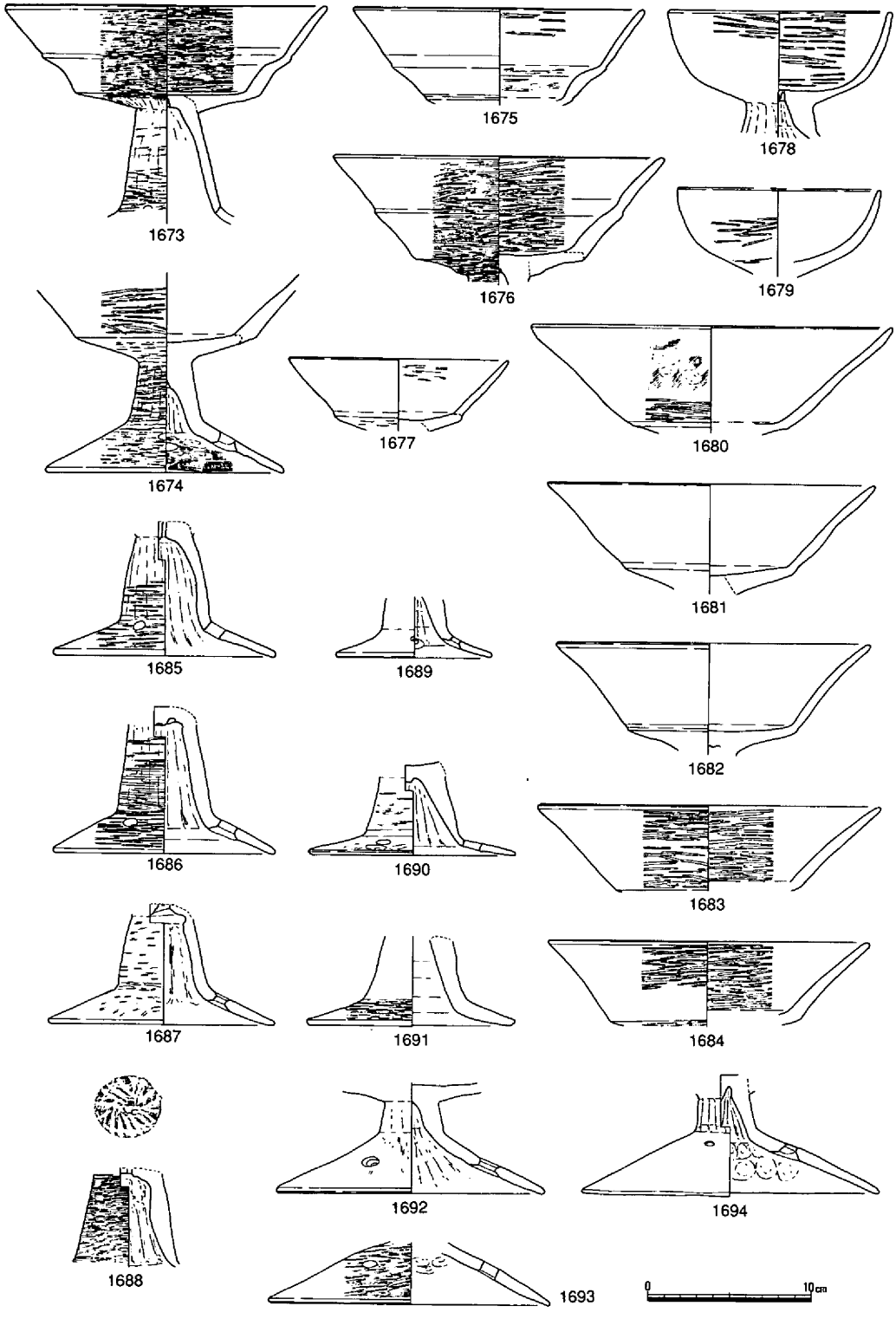


第331図　竪穴住居45出土遺物①（1/4）

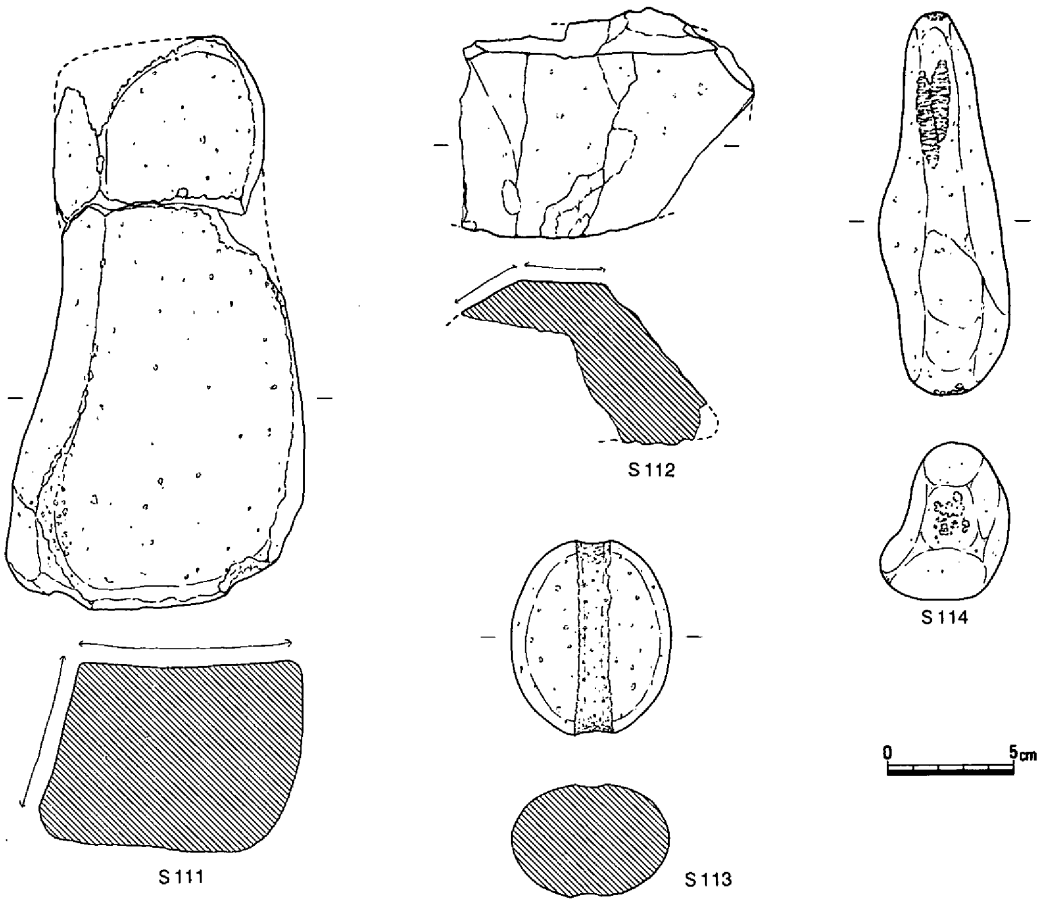
考えられる。杯部は他に２種類があり、口縁部に段を有する1673・1675・1676と、直線的にあるいは若干外反しながら斜め上方へ広がる1677・1680～1684がある。脚部の透かし穴は３孔のものが多く、長脚の脚柱部には中空化が認められる。1638・1644・1667等に古い要素をもつものの混入がみられるが、最終的な廃絶時期は、亀川上層式併行期に求められる。



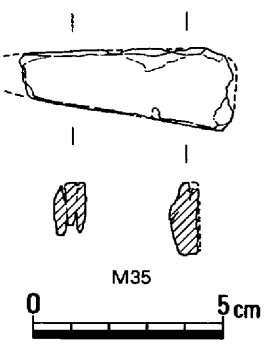
第332図　竪穴住居45出土遺物②（1/4）



第333図　竪穴住居45出土遺物③（1/4）



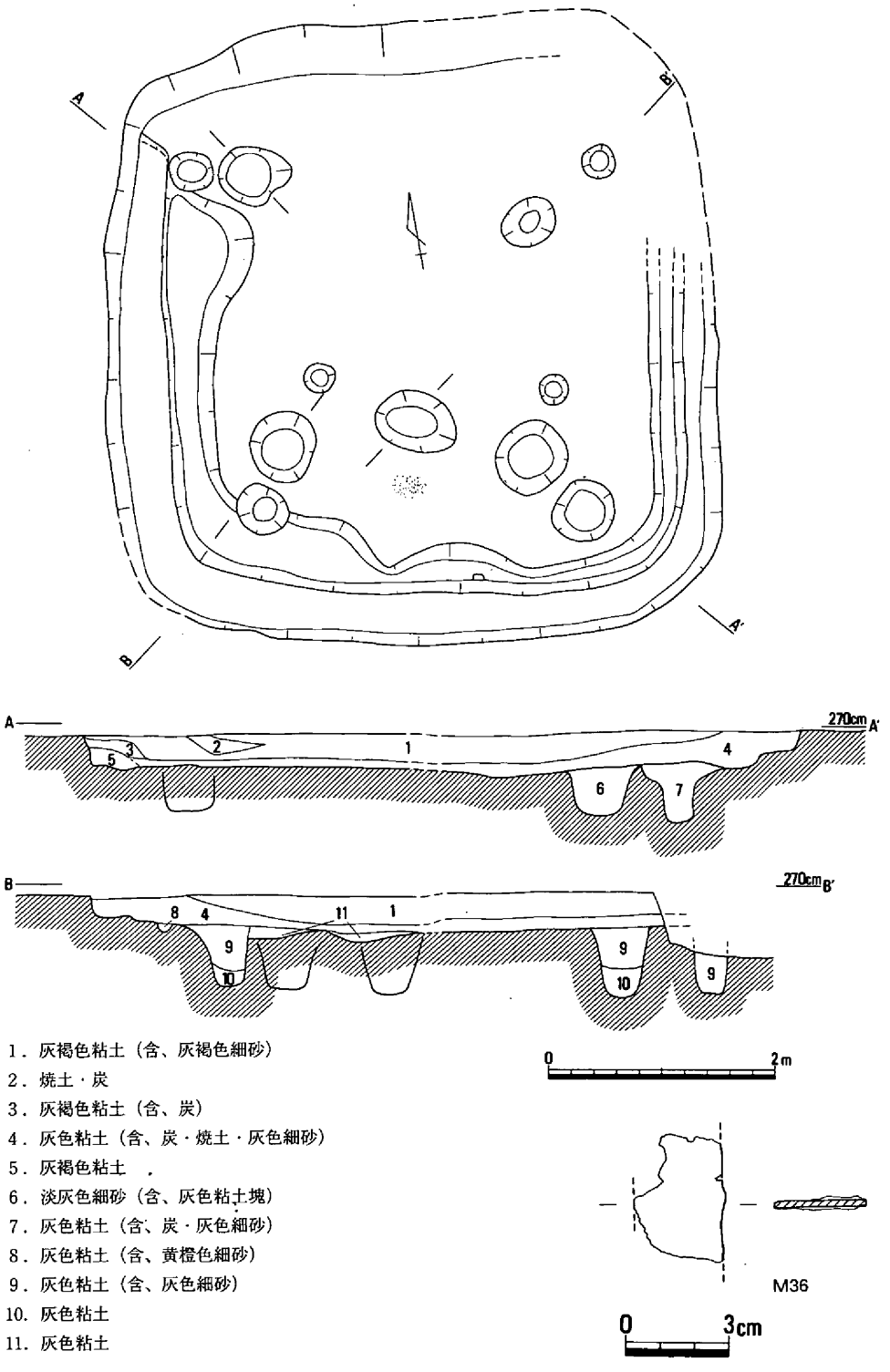
第334図　竪穴住居45出土遺物④（1/3・1/2）



竪穴住居46（第329・335～337図、写真図版67）

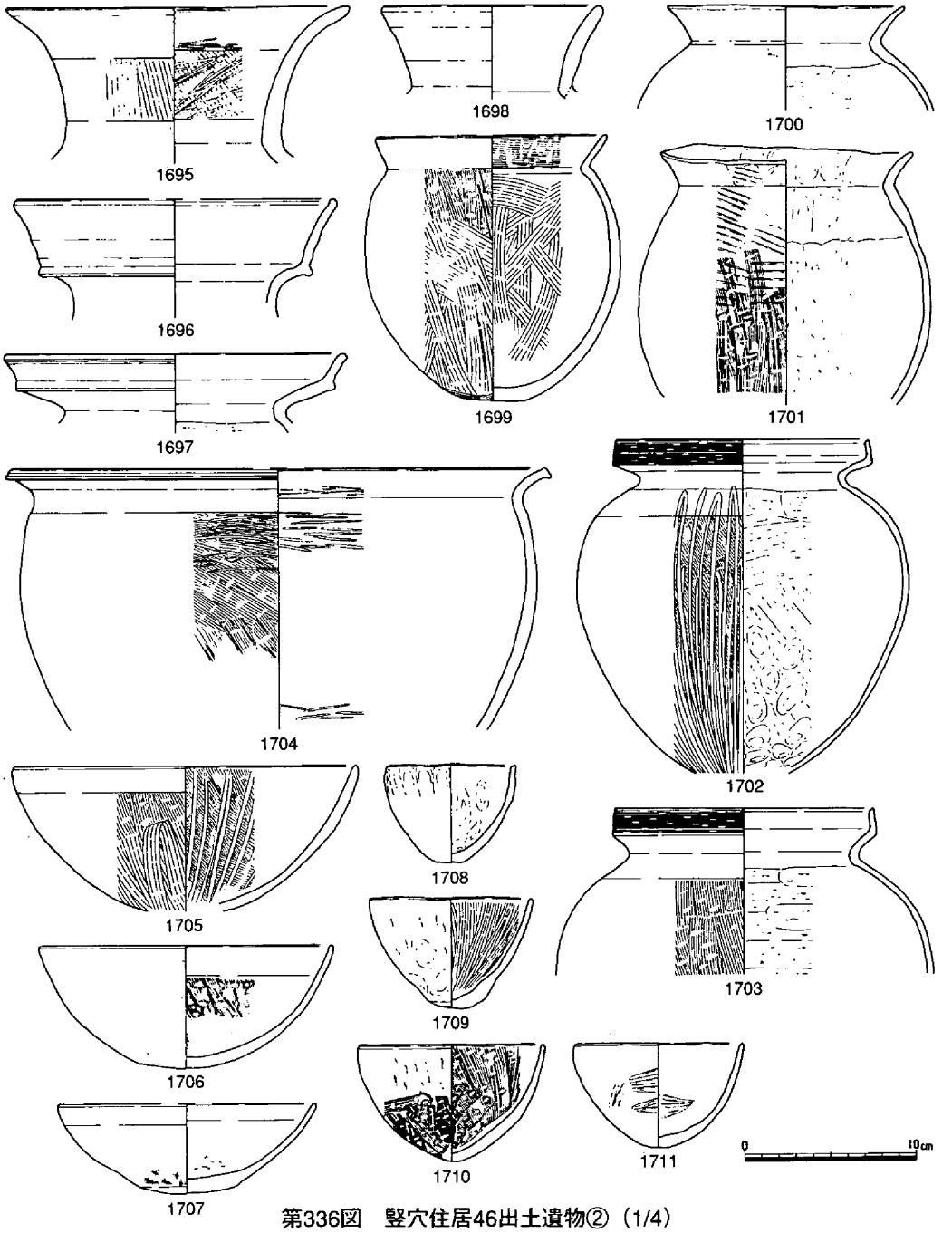
11Ｃａ区から11Ｃｂ区にかけて位置し、竪穴住居１、土壙56・57・145・168を削り、竪穴住居45に削られている。

北東隅を欠いているが、平面形は方形と想定され、南北長5.45m、東西長5.32mを測り、北辺で深さ30cmが残る側壁はほぼ直立し、床面積は23.1㎡に復元される。北辺を除いた３辺では側壁沿いに幅12～42cmのベッド状遺構が確認され、その内側では幅23～77cmと不規則な壁体溝を検出しているが、北辺では壁体溝も確認されていない。中央やや南寄りに、平面形が72×51cmの楕円形で深さ50cmの中央穴が位置し、その南側の床面には灰の掻き出しが認められる。柱構造は４本柱と考えられ、10本の柱穴の検出状況から１回の建替えが想定される。内側の４本は、柱間2.0～2.4mを測り、柱掘り方は長径50～73cmの楕円形で、深さ39～58cm、側壁との距離50～126cmで



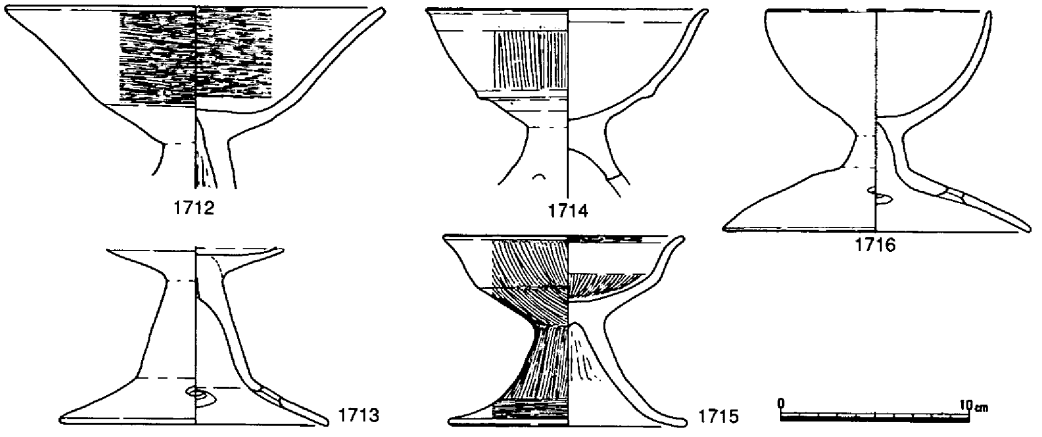
1．灰褐色粘土（含、灰褐色細砂）
2．焼土・炭
3．灰褐色粘土（含、炭）
4．灰色粘土（含、炭・焼土・灰色細砂）
5．灰褐色粘土
6．淡灰色細砂（含、灰色粘土塊）
7．灰色粘土（含、炭・灰色細砂）
8．灰色粘土（含、黄橙色細砂）
9．灰色粘土（含、灰色細砂）
10．灰色粘土
11．灰色粘土

第335図　竪穴住居46（1/60）・出土遺物①（1/2）



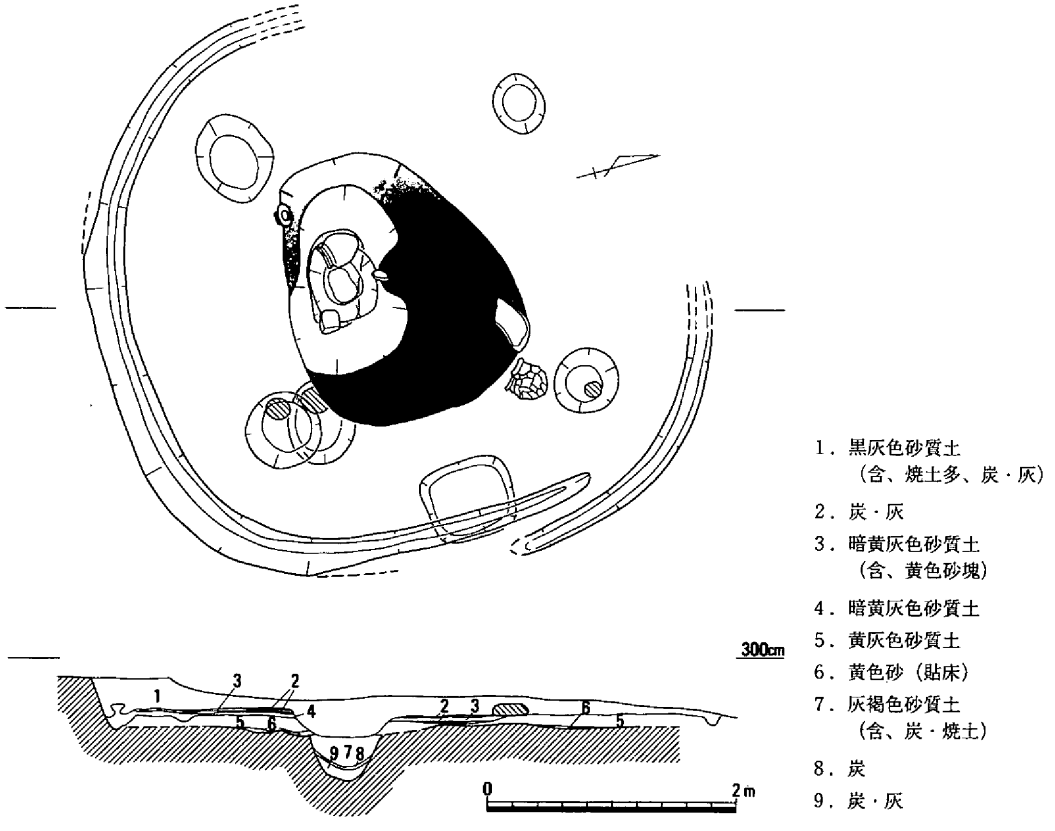
第336図　竪穴住居46出土遺物②（1/4）

ある。外側の４本は、柱間2.8～3.5mを測り、柱掘り方は長径28～56cmの長方形で、深さ48～58cm、側壁との距離30～80cmである。建替えは、ちょうどベッド状遺構の部分について拡張された可能性がある。住居埋没後、上層に土器溜り２が形成されている。

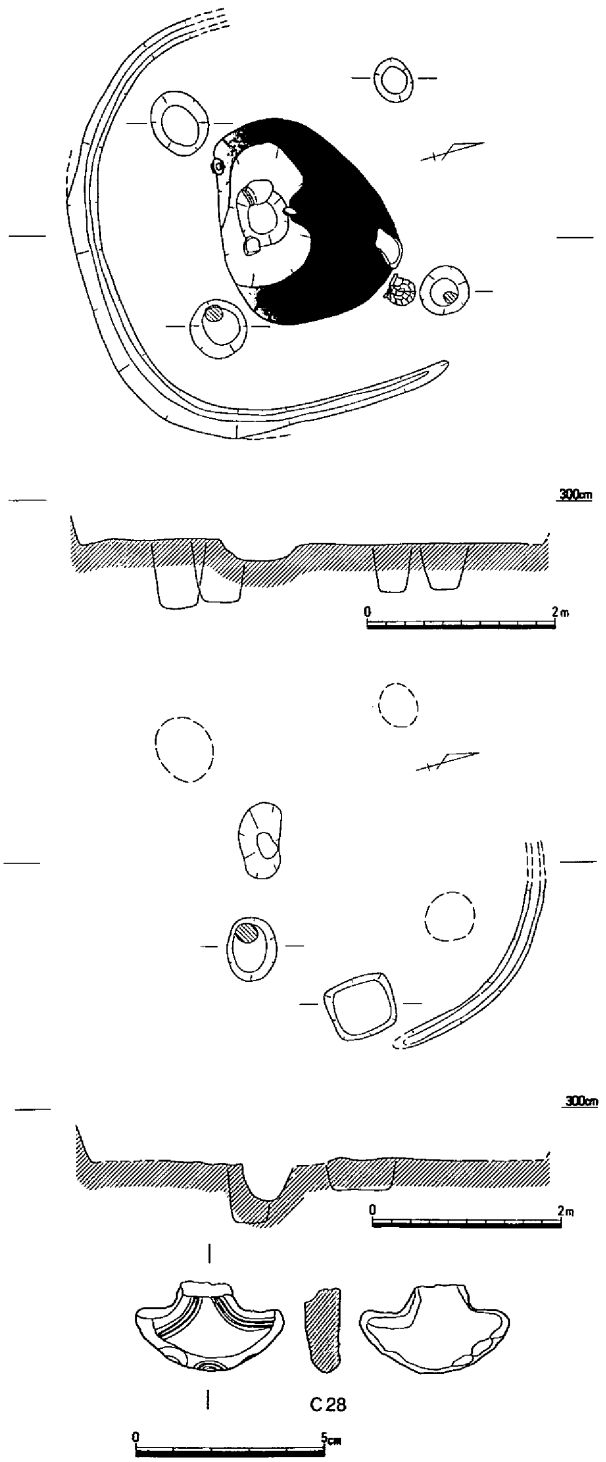


第337図　竪穴住居46出土遺物③（1/4）

出土遺物には、壺1695～1698、甕1699～1703、高杯1712～1716、鉢1704～1711等の土器の他に鉄器M36がある。1702・1703はやや内傾する口縁部外面に櫛描沈線が巡り、体部内面



第338図　竪穴住居47（1/60）



第339図　竪穴住居47Ａ（上）・47Ｂ（中）（1/80）・出土遺物①（1/2）

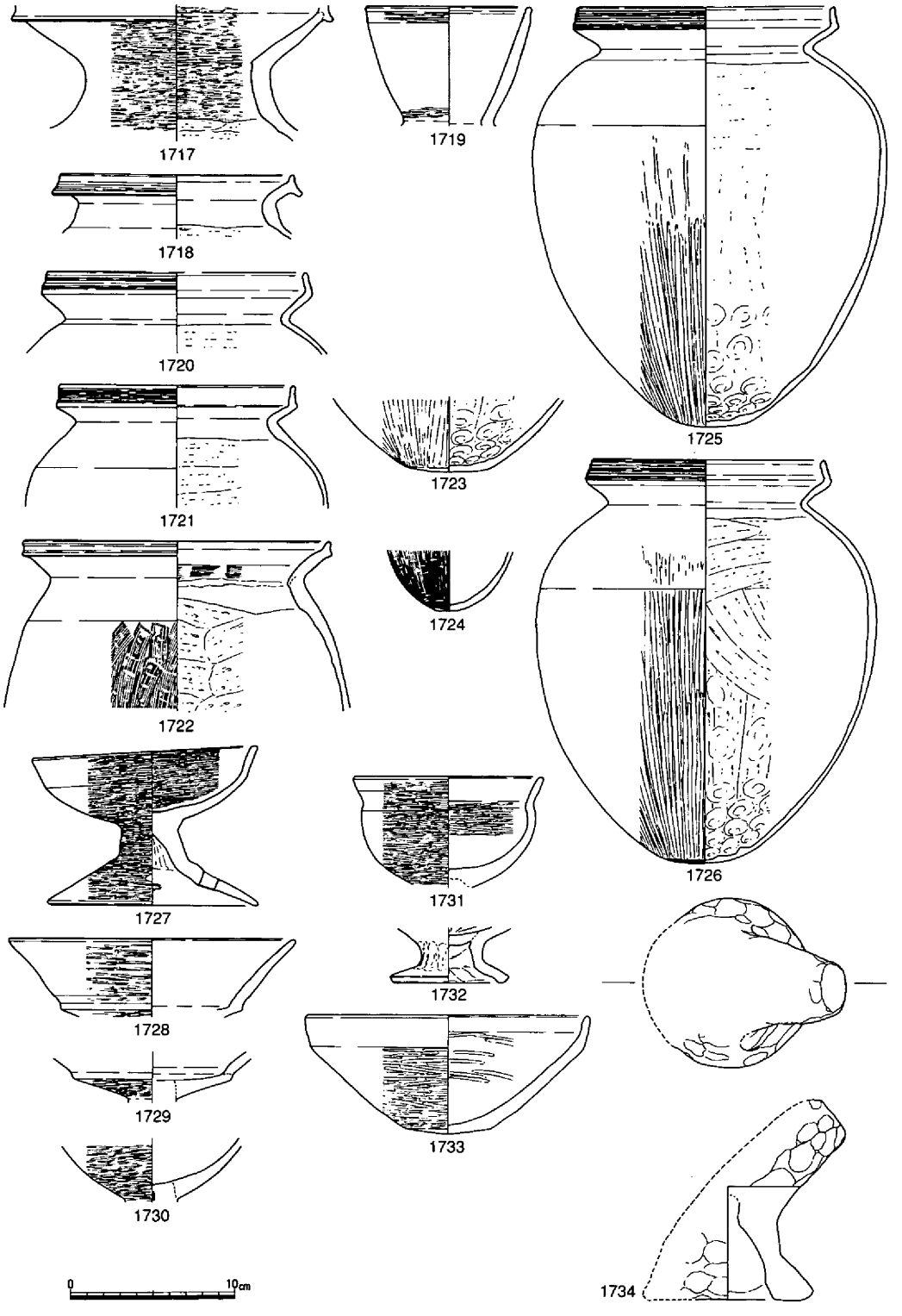
下半には指頭圧痕が残る。高杯には長脚と短脚があり、杯部にも３形態がみられる。鉢には平底が残り、深さをもつ。1704は弥生土器の混入とみなされ、時期は、下田所式併行期に比定される。

竪穴住居47（第329・338～340図）

11Ｃａ区に位置し、竪穴住居４、土壙58を削っている。第338図に示される状況で検出され、１回の建替えが想定される。以下、新段階を47Ａ、古段階を47Ｂとする。

竪穴住居47Ａは、北辺が不明であるが、平面形は隅丸方形と想定されて、東西長4.43ｍを測る。深さ29cmが残る側壁はやや外傾し、壁体溝が巡っている。複数回貼床された床面は海抜高2.54ｍを測り、ほぼ平坦である。４本柱のうち２本で柱痕跡を確認しており、柱間は2.0～2.5ｍと想定され、主軸を南北方向に置いている。中央やや南寄りに62×52×22cmを測る楕円形の中央穴が位置して、その北側を中心に2.0×1.8ｍの範囲で灰の掻き出しが見られ、その範囲の北東隅には台石がある。

竪穴住居47Ｂは、北東部の壁体溝により、平面形は隅丸方形と考えられるが、規模は不明である。床面は47Ａより10cm近く低く、海抜高2.45ｍで、中央部がやや高い。柱構造は４本柱と考えられるものの、南東の



第340図　竪穴住居47出土遺物②（1/4）

１本を除いて47Ａへの再利用を考えざるをえない。柱掘り方は67×52×60cmの楕円形で、柱痕跡が確認されている。中央穴は47Ａの中央穴の下層に位置し、80×43×38cmの楕円形を呈する。東辺の壁体溝から10cm内側では、71×63×30cmを測る方形土壙が検出されている。その他の住居内構造については不明である。

出土遺物には、壺・直口壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・ミニチュア甕・支脚等の土器の他に、分銅形土製品Ｃ28が混入しており、炭化米もある。1720・1721・1725・1726の口縁端部はやや内傾し、外面には櫛描沈線が巡る。胴部最大径は高い位置にあり、底部はほぼ丸底で、1723・1725・1726の内面には指頭圧痕がみられる。1717・1718・1722等に弥生土器の混入もみられるが、時期は下田所式併行期に比定される。

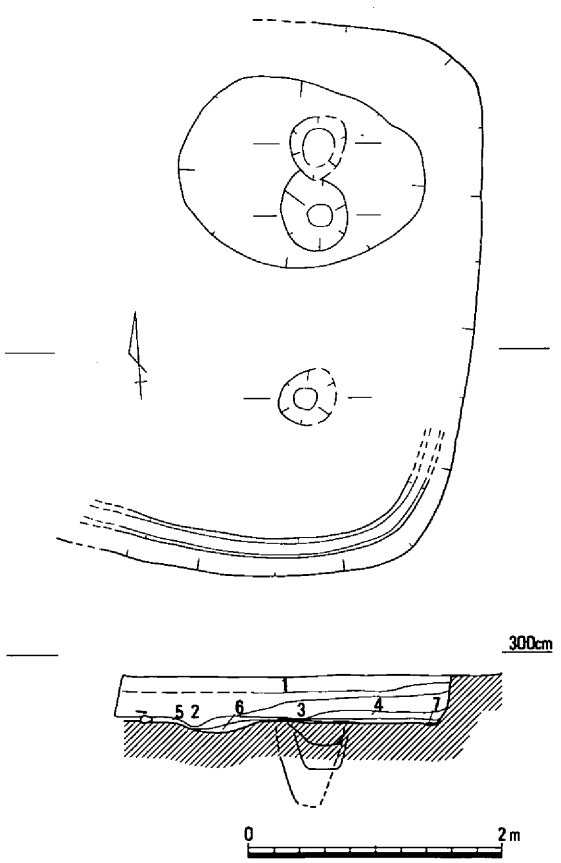
竪穴住居48・49

（第329・341～346図）

11Ｂ区東辺中央部に位置し、西端を調査区外に置いて、竪穴住居４・５・20、土壙11・73・74を削っている。

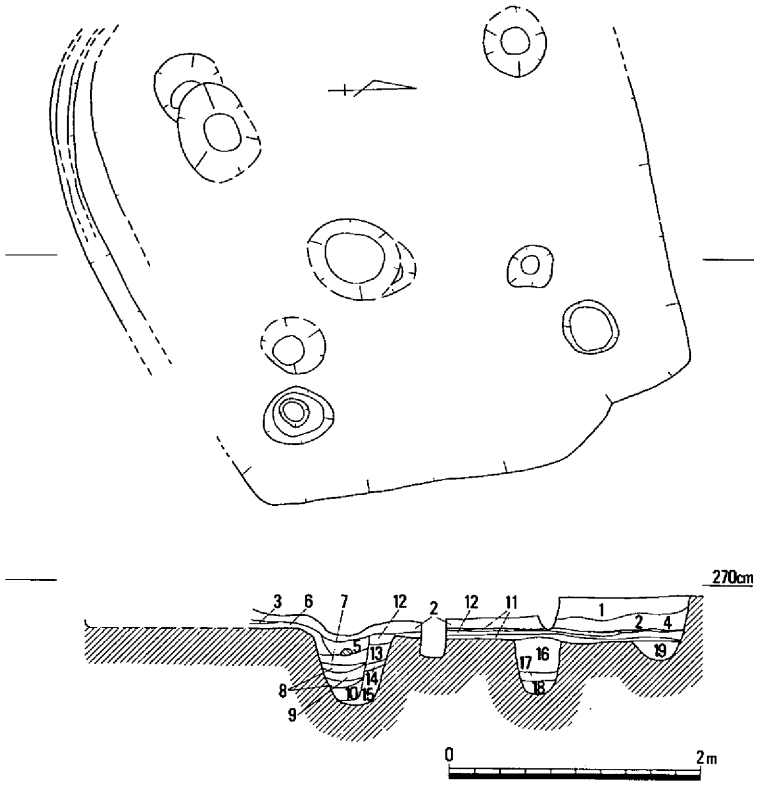
調査時には同一の住居として検討していたが、建替えというよりは建直しと考えられるに至り、第341図に示す状況を竪穴住居48、第342図を竪穴住居49として整理した。竪穴住居49については、さらに１回の建替えが想定され、新段階を49Ａ、古段階を49Ｂとする。出土遺物については、一部を除いて峻別できていない。

竪穴住居48は、平面形は方形ないし長方形と想定され、南北長4.42m、最大東西長2.7mを測る。深さ35cmが残る側壁はほぼ直立し、床面の海抜高は2.46m前後で、南辺では幅15cm程度の壁体溝を検出している。柱構造は４本柱と考えられ、可能性のある３本を検出しているが、南東の柱穴は浅い。中

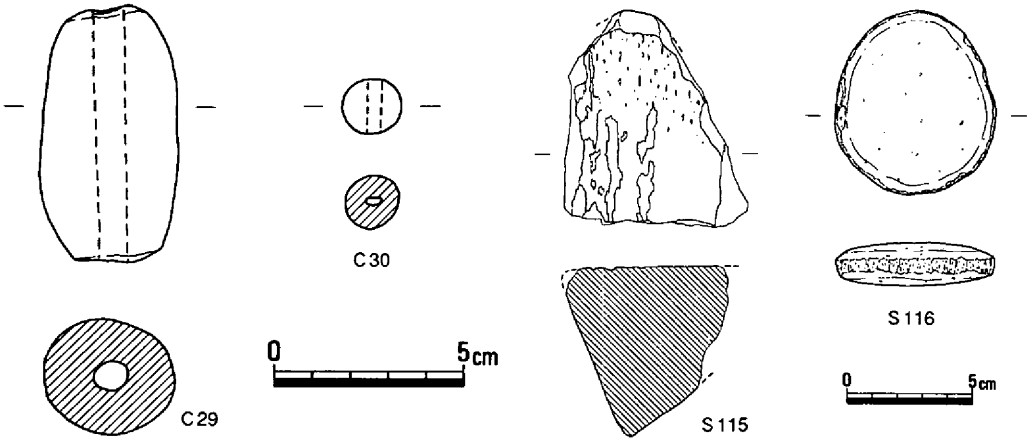


1．淡褐灰色砂質土（含、炭・焼土）
2．淡灰褐色砂質土（含、炭・焼土）
3．淡灰褐色砂質土（含、炭・灰・焼土多）
4．灰褐色砂質土（含、炭）
5．褐灰色砂質土（含、炭）
6．灰褐色砂（含、黄灰色砂質土多）
7．灰褐色砂質土

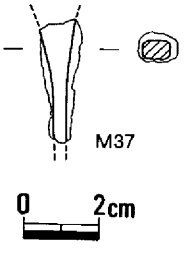
第341図　竪穴住居48（1/60）



1．淡褐色砂質土
（含、焼土・炭）
2．褐灰色砂質土
3．褐灰色砂質土
（含、黄灰色土多）
4．炭・灰
5．褐灰色砂質土
6．褐灰色砂質土
（含、黄灰色砂質土）
7．灰色粘質微砂（含、炭）
8．炭・灰
9．灰色微砂（含、淡黄灰色砂）
10．淡黄灰色砂
（含、灰色粘質微砂塊）
11．淡褐灰色砂質土
（含、淡黄灰色砂多）
12．褐灰色砂質土
（含、黄灰色砂質土塊）
13．褐灰色砂質土
（含、炭・黄灰色砂質土塊）
14．褐灰色砂質土
15．黄灰色砂（含、灰色砂）
16．灰褐色砂質土
（含、黄灰色砂質土・焼土）
17．褐灰色砂（含、炭）
18．淡黄灰色砂
（含、灰色砂質土・炭）
19．褐灰色砂質土

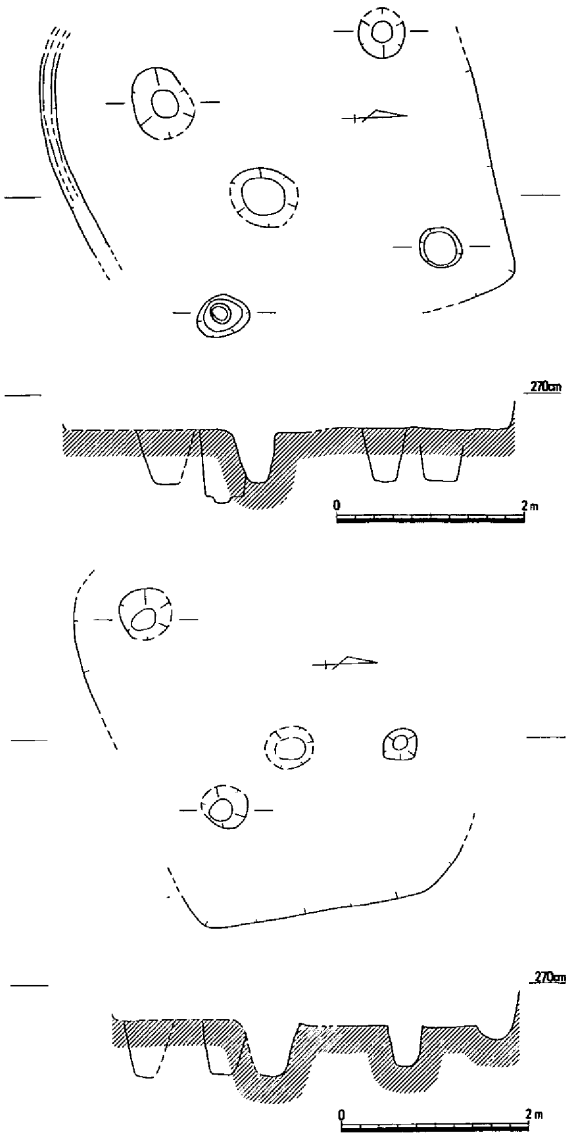


第342図　竪穴住居49（1/60）・竪穴住居48・49出土遺物①（1/2・1/3）



央穴その他の住居内構造については不明である。

竪穴住居49については、第342図の土層断面において、上層の第11層を貼床とする49Ａと、下層の第11層を貼床とする49Ｂとして捉えられ、中央穴が掘り直されている状況も見える。

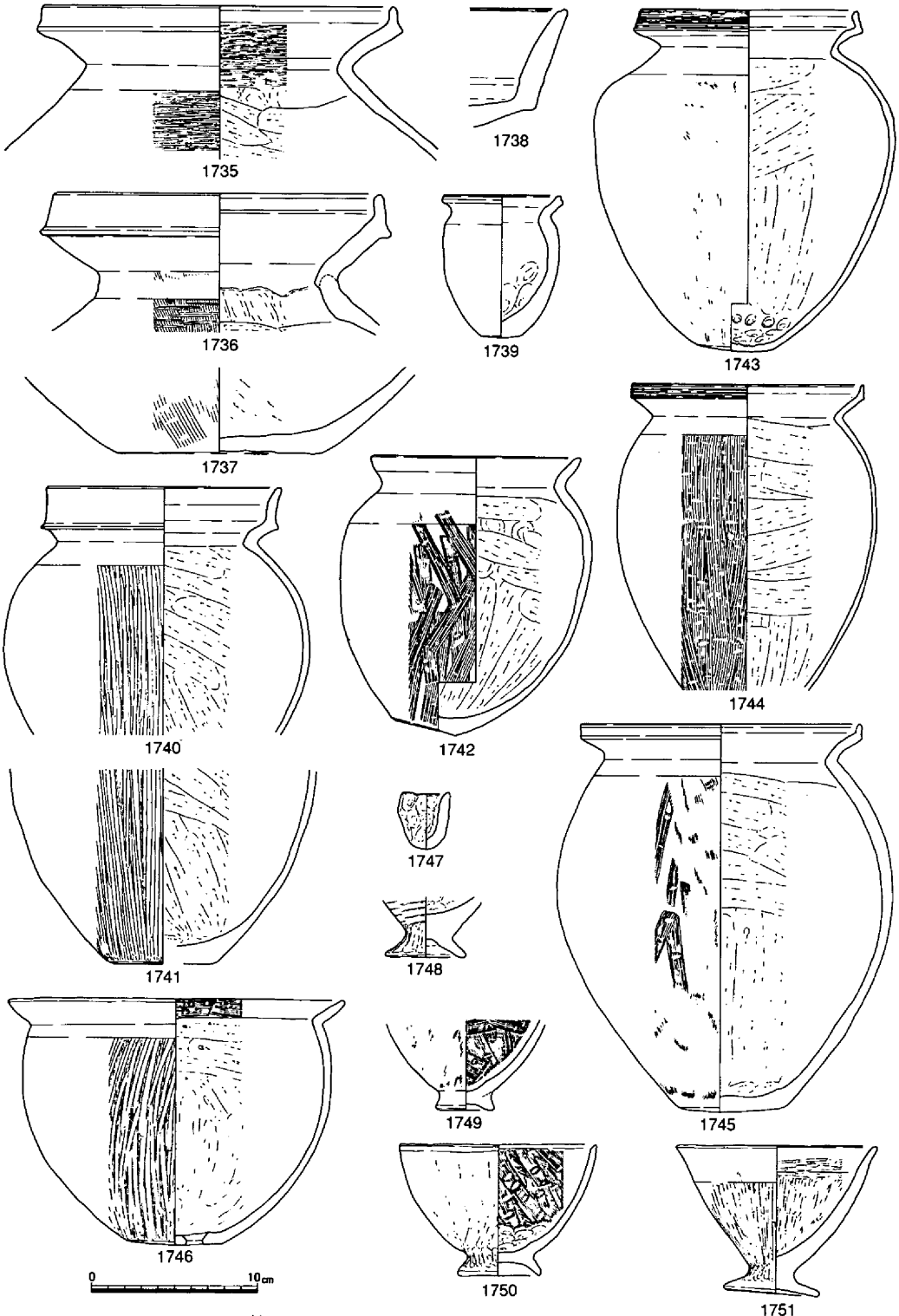


第343図　竪穴住居49Ａ（上）・49Ｂ（下）（1/80）

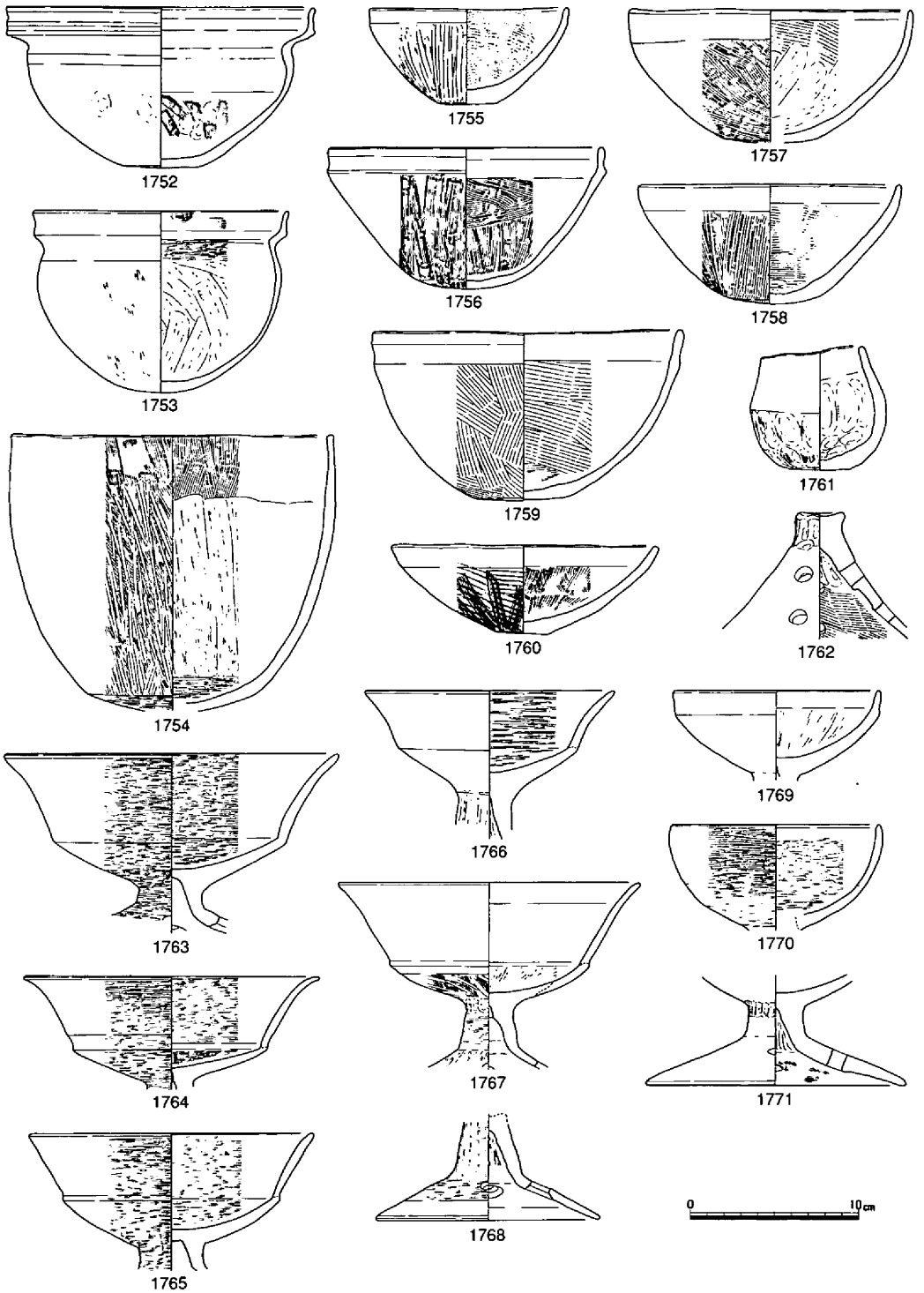
竪穴住居49Ａは、平面形は方形ないし隅丸方形と想定され、南北長4.47ｍを測り、床面の海抜高2.33ｍ前後で、南辺では壁体溝が検出されている。４本柱で、柱間は2.3～2.4ｍを測り、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は長径48～75cmの楕円形で、深さ58～79cmを測り、側壁との距離は40～90cmである。中央やや南寄りには、短径60cm、深さ54cmの中央穴が位置する。

竪穴住居49Ｂは、平面形は隅丸長方形と想定されるが、規模は不明である。床面の海抜高は2.26ｍで、壁体溝は平面的には確認されなかった。４本柱のうちの３本を検出し、北西の柱は49Ａより西側に所在する可能性がある。柱間は2.1ｍと2.2ｍで、主軸は東西方向である。柱掘り方は楕円形で、長径41～59cm、深さ42～60cmを測り、側壁との距離は50～100cmである。中央やや東よりに位置する中央穴は、深さ55cmを測る。図示できなかったが、東辺沿いに方形土壙があり、第346図に示す土器が出土している。

竪穴住居48・49の出土遺物には、壺・甕・小形甕・甑・高杯・鉢・台付鉢・蓋・製塩土器・手捏ね土器等の土器の他に、土錘Ｃ29・30、砥石Ｓ115、石錘Ｓ116、鉄鏃M37がある。甕のうち1743・1744は口縁部外面に櫛描沈線が巡り、1743・1745・1774では底部内面に指頭圧痕が見られる。高杯の杯部は椀形のものと口縁部が斜めに立ち上がるものに分けられ、後者にあっては口縁部がやや外反する傾向がある。脚部には短脚のものとやや長いものがある。鉢のうち1752・1753・1775は複合口縁で、口縁端部が上方に拡張されている。1740は山陰系土器と考えられる。時期については、古い要素が多くみられるが、1743により下田所式併行期に求められる。



第344図　竪穴住居48・49出土遺物②（1/4）

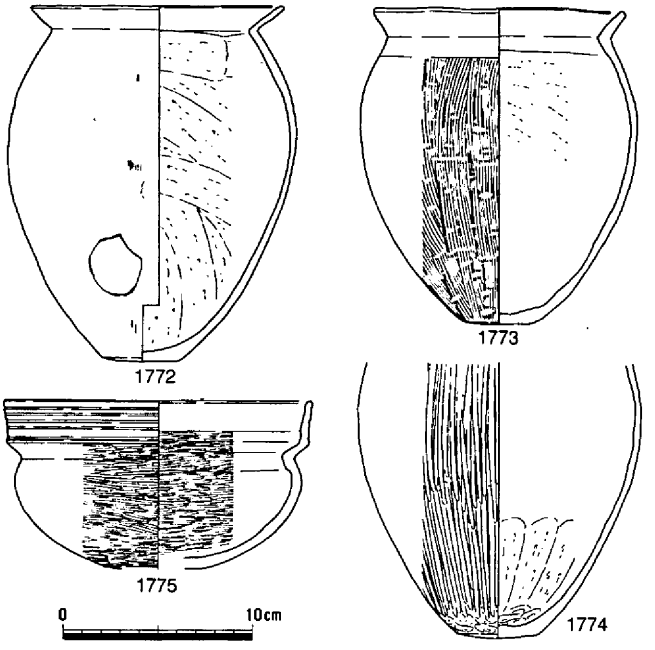


第345図　竪穴住居48・49出土遺物③（1/4）

竪穴住居50（第329・347～349図、写真図版68）

11Ｃｃ区から11Ｃｄ区にかけて位置し、竪穴住居２・６・８・19・51、土壙67～70を削っている。

平面形は長方形を呈して、長軸長4.67ｍ、短軸長4.26ｍをそれぞれ測り、床面積は約16㎡である。深さ30cmが残る側壁はやや外傾し、南辺を除いて幅20cm程度の壁体溝が検出されている。壁体溝はこれの15～40cm内側でも部分的に１条が検出されており、建替えの可能性がある。その際に復元される東西長は、3.62ｍを測る。柱構造は４本柱と考えられ、３本を検出している。柱間は1.7ｍと2.0ｍで、主軸を東西方向に置いている。柱掘り方は円形で、径15～32cm、深さ38～45cmを測り、側壁との距離は75～105cmである。中央穴は西の柱穴間に位置し、60×45×７cmの瓢形で、西側壁の一部に焼土面が見られる。東半において、径50cm、深さ７cmの円形の土壙を検出した他に、南辺に接して二つの方形土壙を検出している。それぞれ68×50×33cmと、56×36×41cmの規模で、西の方形土壙からは土師器の甕２点が出土している。この他に、台石と考えられる角礫３個が床面で検出されている。



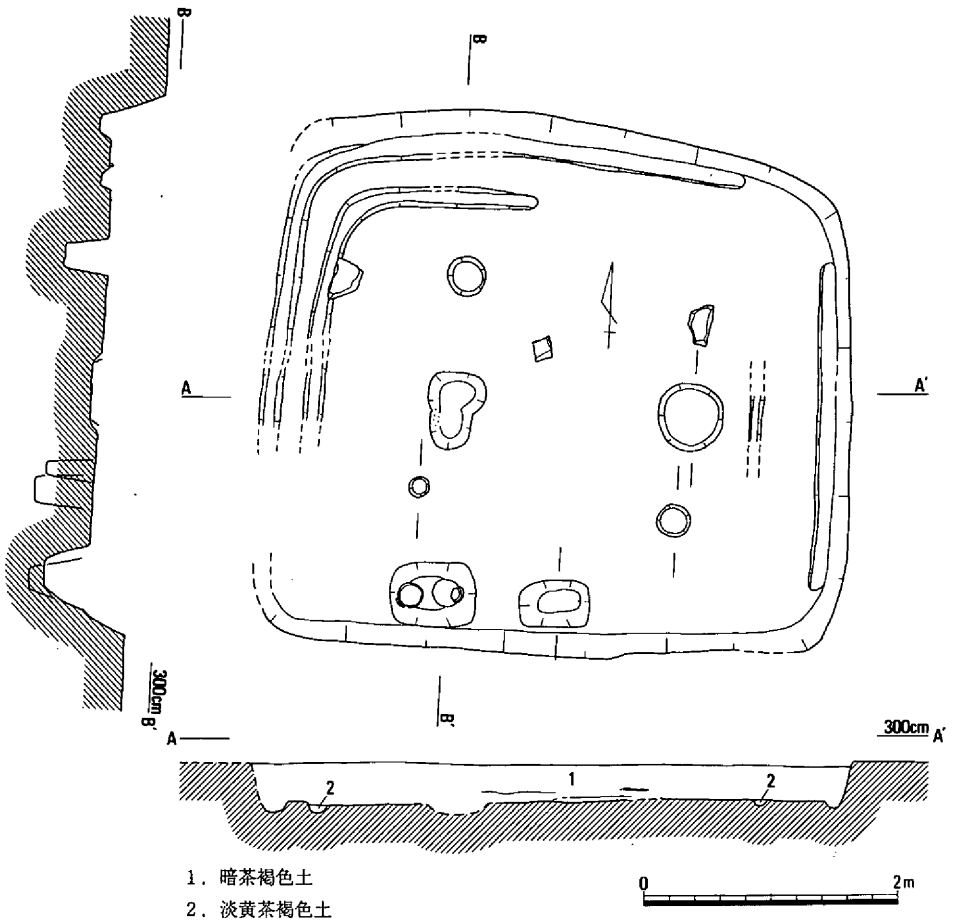
第346図　竪穴住居48・49出土遺物④（1/4）

出土遺物には、壺・直口壺・小形丸底壺・甕・高杯・鉢・製塩土器・ミニチュア（甕・高杯・鉢・蓋）等の土器の他に、鋪M38がある。1776・1777は複合口縁が外傾しており、頸部からの屈曲部は鋭くない。1785～1787・1789・1790の口縁部外面には櫛描沈線が巡らされており、丸底である。高杯には長脚と短脚があり、杯部にも２形態が認められ、1802の脚柱部は中空である。1808～1811は丸底で、浅くなっている。1778・1793・1813等の混入もあるが、住居廃絶の時期は亀川上層式併行期に求められる。

竪穴住居51（第329・350図、写真図版68）

11Ｃｃ区に位置し、竪穴住居２・４・５・19、土壙15・70を削り、竪穴住居50に削られる。

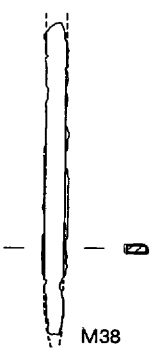
東半を失っているが、平面形は方形ないし長方形と想定され、南北長3.76ｍを測る。深さ32cmが残る側壁はやや外傾し、北辺の一部で壁体溝を検出している。柱穴は２本を検出したが柱



第347図　竪穴住居50（1/60）・出土遺物①（1/2）

構造は不明であり、この２本を生かせば２本柱と考えられる。床面の海抜高は2.5mである。中央穴その他の住居内構造については不明である。

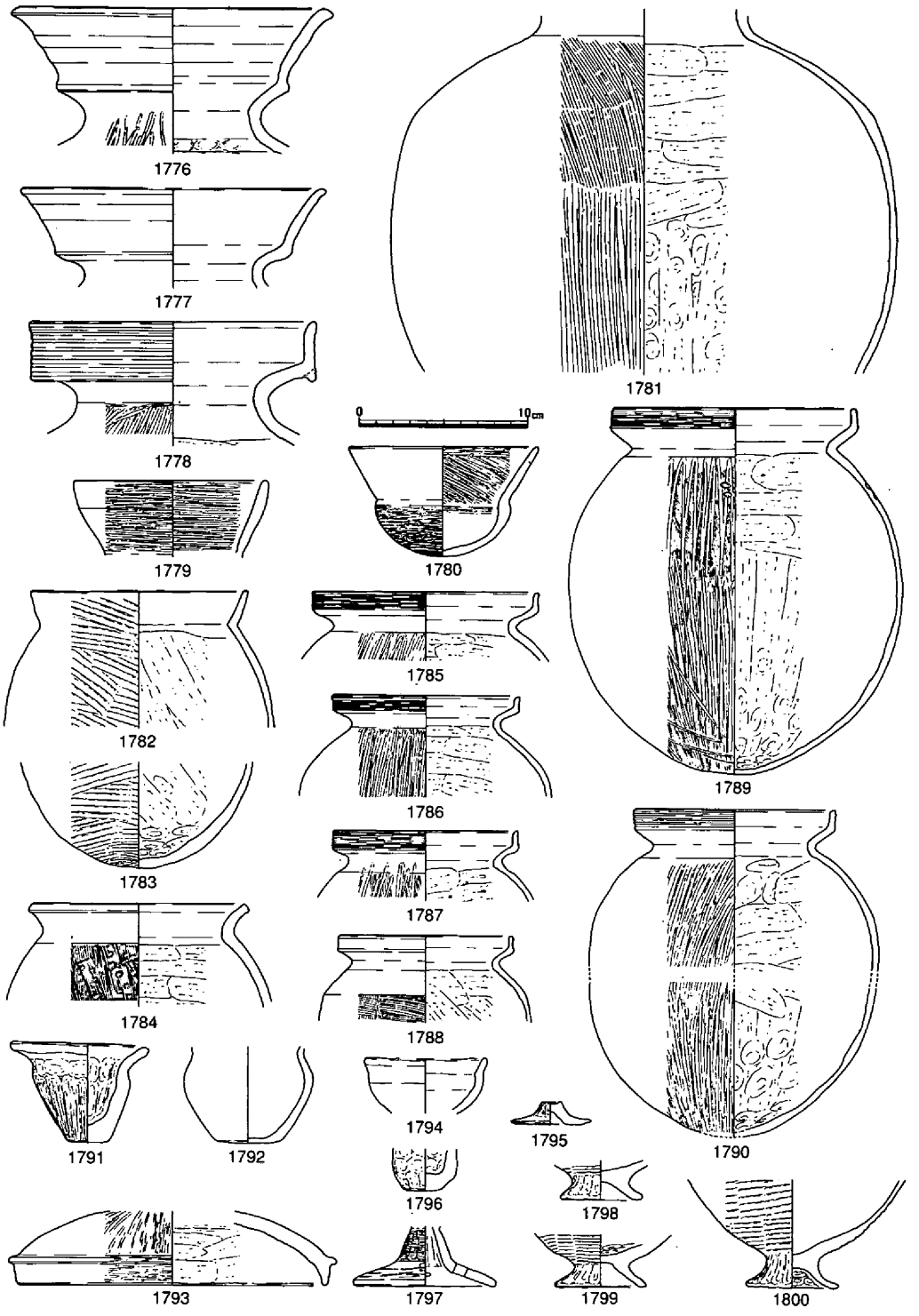
出土遺物には、壺1815、鉢1816がある。1815は水洗粘土で作られているが、細い頸部から口縁部が斜め上方へ開き、端部がさらに斜め上方へ拡張されており、非在地系土器である。1816は歪んで平面形が楕円形を呈し、底部外面はヘラケズリされている。1816の特徴と、竪穴住居50との関係から、時期は亀川上層式併行期に求められる。



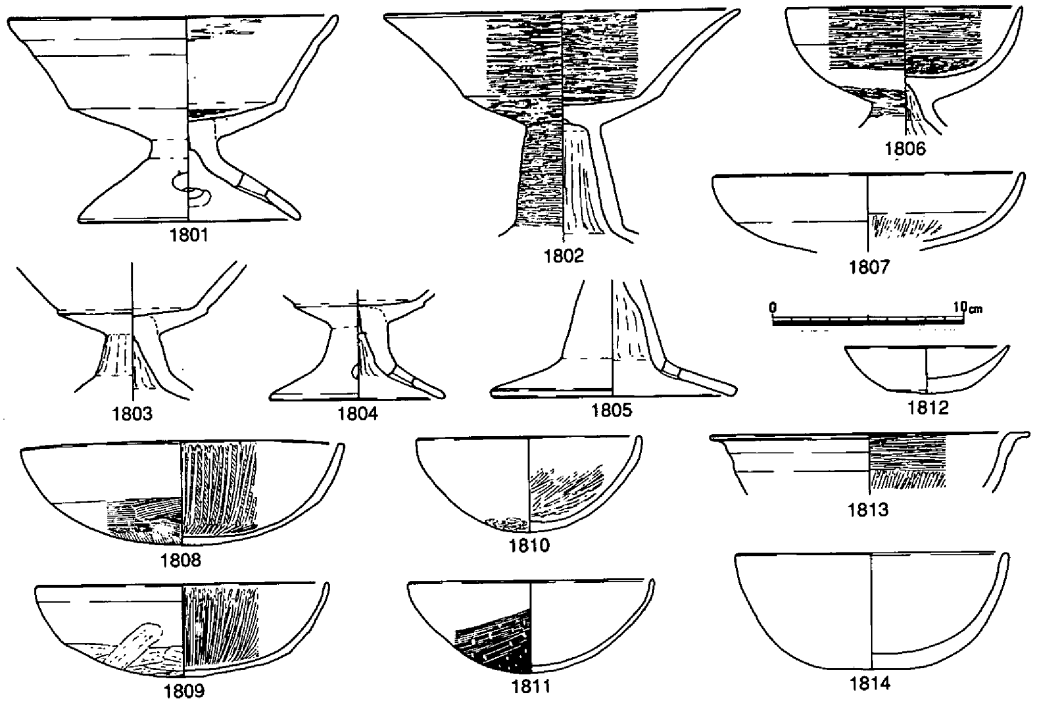
竪穴住居52（第329・351～353図）

11Ｃｃ区から10Ｃａ区にかけて位置し、竪穴住居19、土壙14・23・79・172・173を削っている。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸長4.6m、短軸長4.35mをそれぞれ測り、

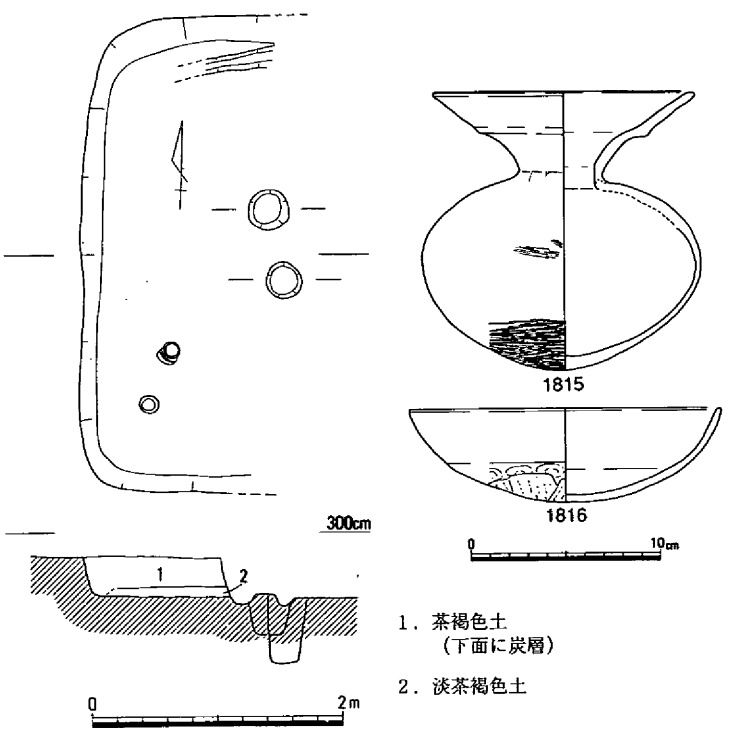


第348図　竪穴住居50出土遺物②（1/4）



第349図　竪穴住居50出土遺物③（1/4）

床面積は約15.2㎡に復元される。深さ28cmが残る側壁は、ほとんど直立しており、壁体溝は検出されなかった。西辺中央付近と、中央部南寄りで床面における段の肩が検出されており、南辺にベッド状遺構が存在した可能性を示している。これ以外の床面の海抜高は2.84m前後である。柱構造は４本柱で、柱間は1.7～1.9mと想定され、主軸は南北方向に置かれている。柱掘り方は、径32～



第350図　竪穴住居51（1/60）・出土遺物（1/4）

42cmの円形で、深さは60～68cmを測り、側壁との距離は95～140cmである。中央やや南寄りに位置する中央穴は、２段に掘られており、東西径1.0mの楕円形で緩く下がり、その中央が径30cm、深さ28cmに掘られている。埋土の上層には、炭・焼土が含まれている。

出土遺物には、壺1817・1818、甕1820～1823、高杯1824～1828、鉢1829～1832、台付鉢1833～1835、器台1836、手焙形土器1837、製塩土器1838～1844、ミニチュアの壺1819等の土器の他に、砥石Ｓ117・118、鉄器M39がある。高杯1824は、中実のやや短脚で、浅い杯部から口縁部がやや外反しながら斜め上方へ高く立ち上がるもので、1825～1827もやや短脚である。1837の鉢部外面はタタキメ調整され、開口部の端部は外側へ折り曲げられて上端は角状の突起となっている。

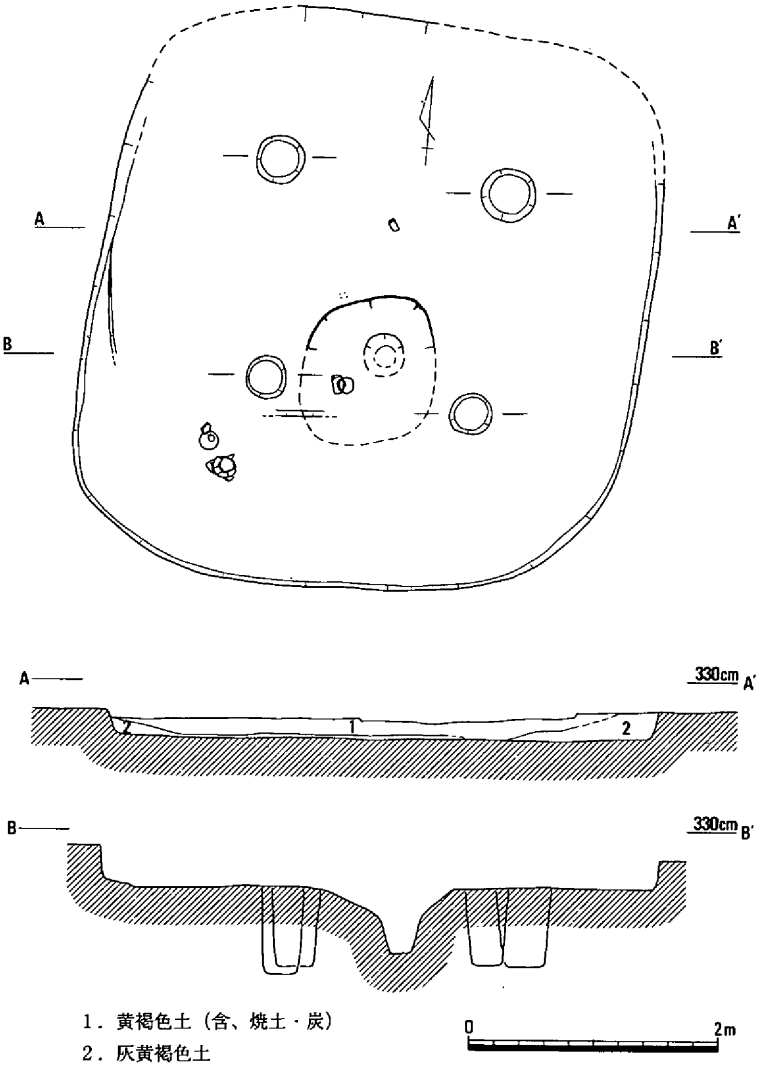
遺物の示す時期は古い様相が強いが、遺構の関係等から古墳時代初頭に属するものと考えられる。

竪穴住居53

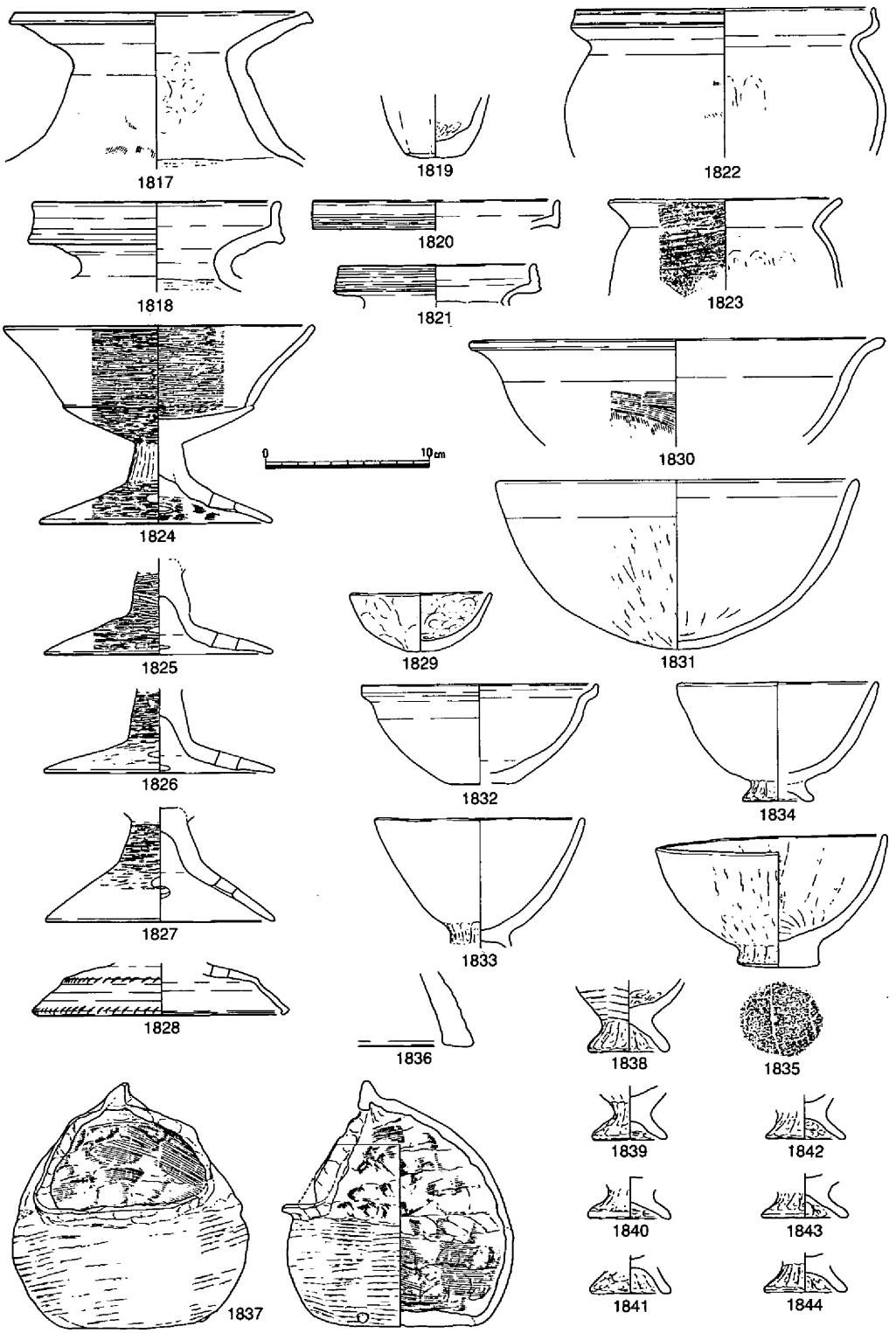
（第329・354・355図、写真図版67）

11Ｃｃ区南西部に位置し、竪穴住居４～６・19・21、土壙15・16・72を削っている。

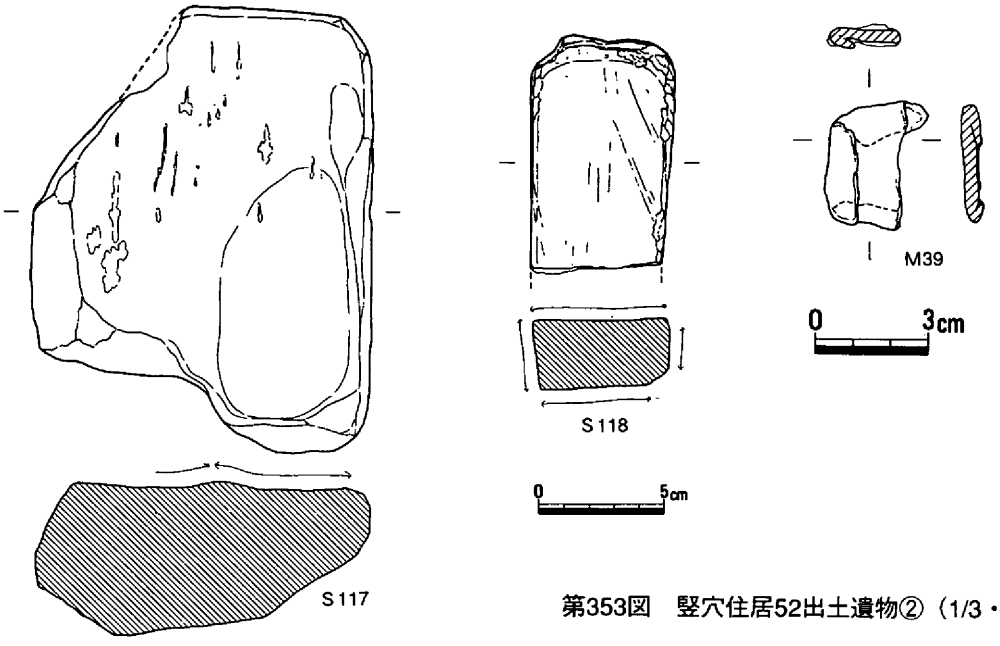
平面形は方形で、長軸長3.97m、短軸長3.75mを測り、床面積は13㎡に復元される。深さ15cmが残る側壁はやや外傾しており、北辺の一部では側壁から10cm程度内側で壁体溝を検出している。この部



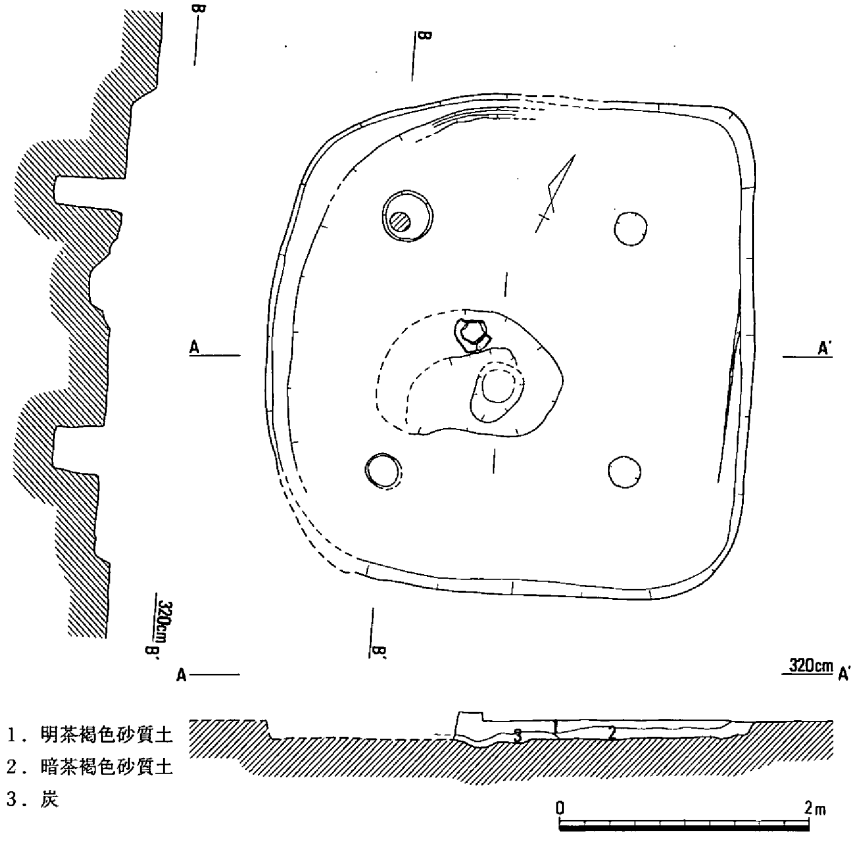
第351図　竪穴住居52（1/60）



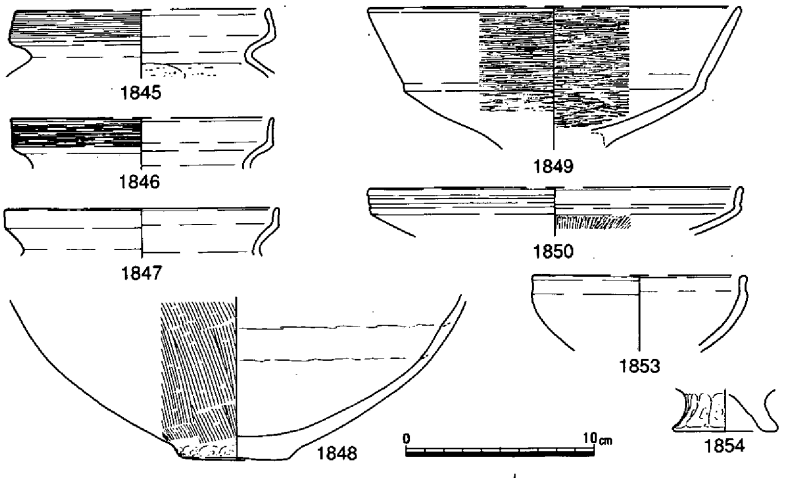
第352図　竪穴住居52出土遺物①（1/4）



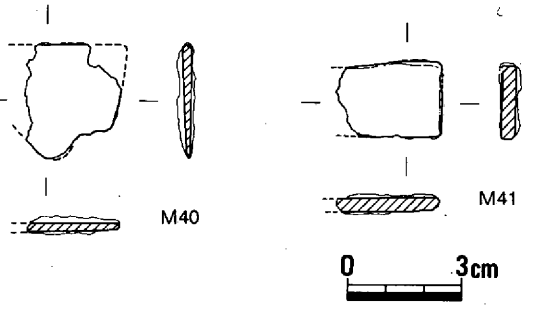
第353図　竪穴住居52出土遺物②（1/3・1/2）



第354図　竪穴住居53（1/60）



第355図　竪穴住居53出土遺物
（1/4・1/2）

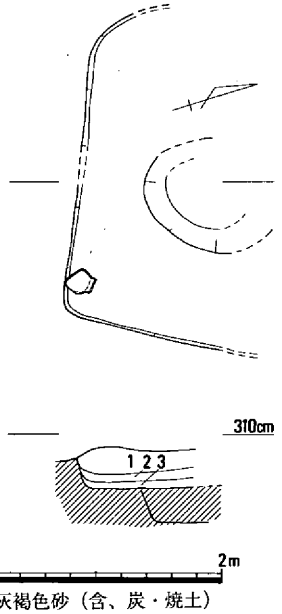


分から西辺にかけてと東辺の南半では、最大幅23cm程度の段が見られる。柱構造は４本柱で、北西の柱穴では柱痕跡を確認しており、柱間は1.8～2.0mを測って、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は、径25～40cmの円形で、深さ40～55cmを測り、側壁との距離は60～80cmである。中央施設は、最大長径110cm、短径98cmで不整な楕円形を呈する浅いくぼみの中央部に、48×37×15cmの平面形楕円形の中央穴が掘られるもので、上面には炭の堆積が認められる。

出土遺物には、甕・高杯・鉢・製塩土器等の土器の他に、鉄器M40・41がある。1845・1846の口縁部外面には櫛描沈線が巡らされており、1846の口縁端部はほぼ直立している。1849の口縁部は、外反せずに斜め上方へ拡張されている。1855等の弥生土器の混入もあるが、1845・1846により、時期は、古墳時代初頭に求められる。

竪穴住居54（第329・356図）

10Ｂｂ区北西部に位置し、竪穴住居55を削っている。北半の状況が不明であるが、平面形は方形ないし長方



1．灰褐色砂（含、炭・焼土）
2．灰褐色砂（含、灰色粗砂多）
3．灰褐色砂（含、黄褐色砂小塊多）

第356図　竪穴住居54（1/60）

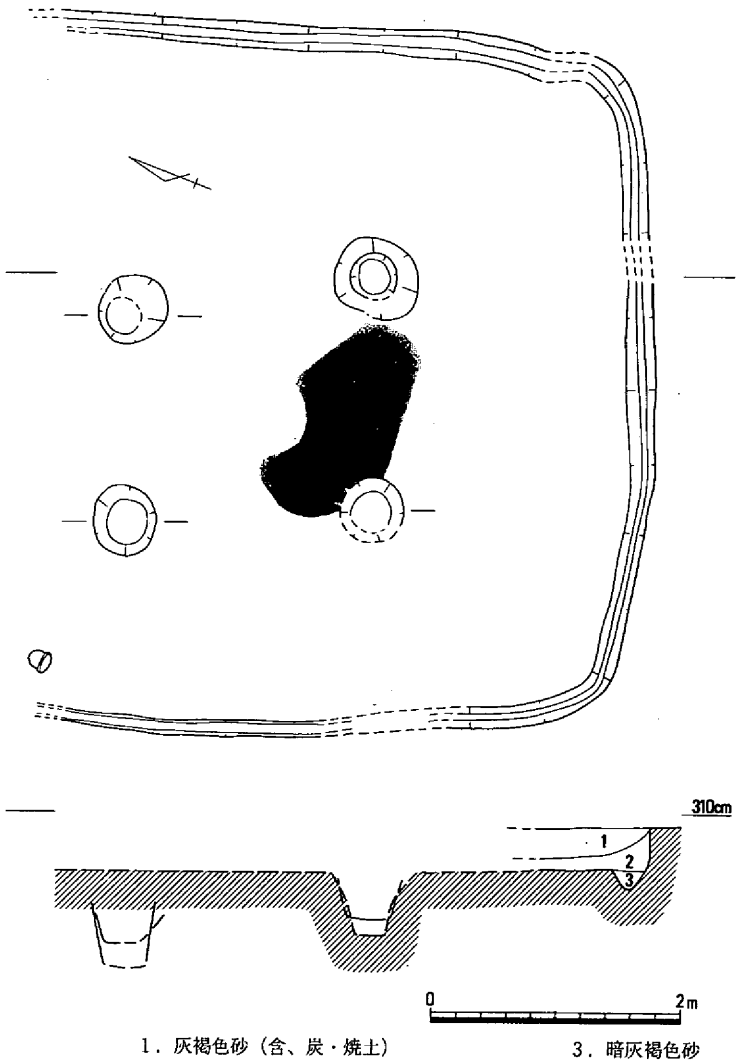
形と想定され、最大東西長2.45m、最大南北長1.3mを測りうるのみである。深さ22cmが残る側壁はほぼ直立しており、壁体溝は検出されていない。床面の海抜高は2.67mで、ほぼ平坦である。中央部には平面が楕円形と想定される深さ26cmの土壙が位置しているが、柱穴は検出されていない。中央穴その他の住居内構造についても不明である。３層に分けられる埋土のうち、第１層には炭・焼土が含まれている。

遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居55（第329・357図）

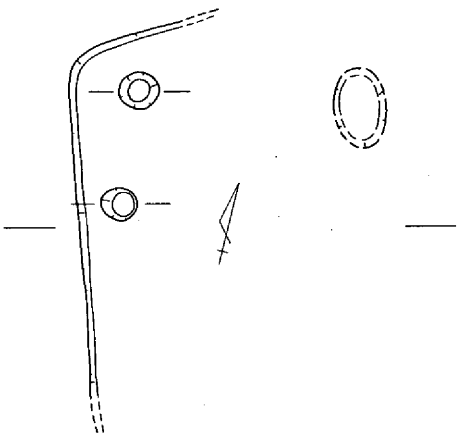
11Ｂｄ区から10Ｂｂ区にかけて位置し、竪穴住居３・22・56～59、土壙３・76・185を削り、竪穴住居54に削られている。

北辺が調査区の境に想定されるために不明であるが、平面形は方形ないし長方形で、東西長5.68m、最大南北長4.75mを測る。深さ34cmが残る側壁は直立しており、３辺とも幅10～23cmの壁体溝を検出している。床面の海抜高は2.66mである。柱構造は４本柱で、柱間は1.7～2.0mを測って、主軸は南北方向に置かれている。柱掘り方は長径56～67cmの楕円形で、深さ35～76cmを測り、側壁との距離は1.25～1.95mである。中央南寄りでは、1.7×0.9cmの楕円形の範囲で灰の掻き出しが



1．灰褐色砂（含、炭・焼土）
2．灰褐色砂（含、炭・焼土、上面に炭・灰層）
3．暗灰褐色砂

第357図　竪穴住居55（1/60）

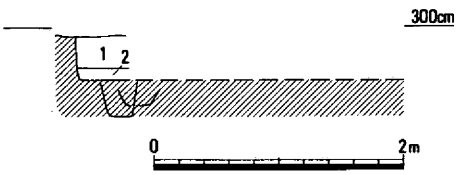


認められ、その北部に中央施設の存在が想定されるが、遺構としては確認されなかった。３層に分けられる埋土のうち、第１・２層には炭・焼土が含まれ、その境には炭・灰が面をなしている。

遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から古墳時代初頭に比定される。

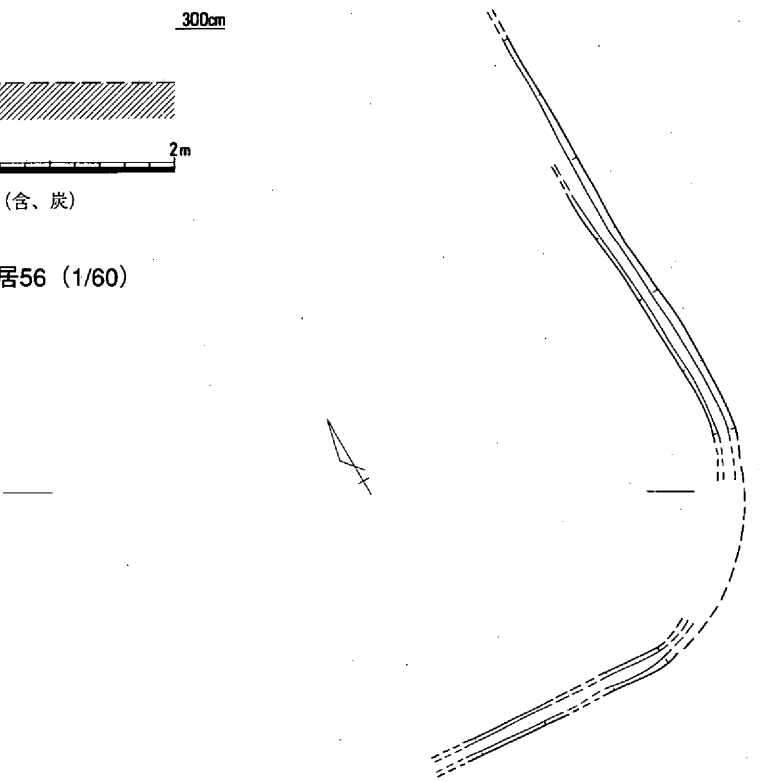
竪穴住居56（第329・358図）

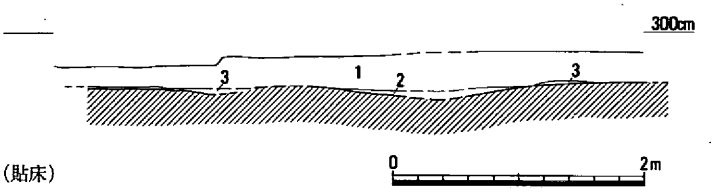
11Ｂｄ区南東部に位置し、竪穴住居３を削り、竪穴住居55に削られている。



1．淡灰褐色砂（含、炭）
2．灰褐色砂

第358図　竪穴住居56（1/60）





1．茶褐色土
2．炭
3．淡黄灰褐色土（貼床）

第359図　竪穴住居57（1/60）

北西部から西辺にかけてが検出されたのみで全容は不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定される。深さ35cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されていない。床面の海抜高は2.59ｍである。柱穴は床面で２本を検出したが、いずれも側壁に近く、柱を構成するものかどうか不確かであり、柱構造は不明である。西側壁から東へ２ｍの位置に、短径42cmの浅い楕円形の土壙が検出されているが、この住居に伴うかどうか不明である。

遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居57（第329・359図）

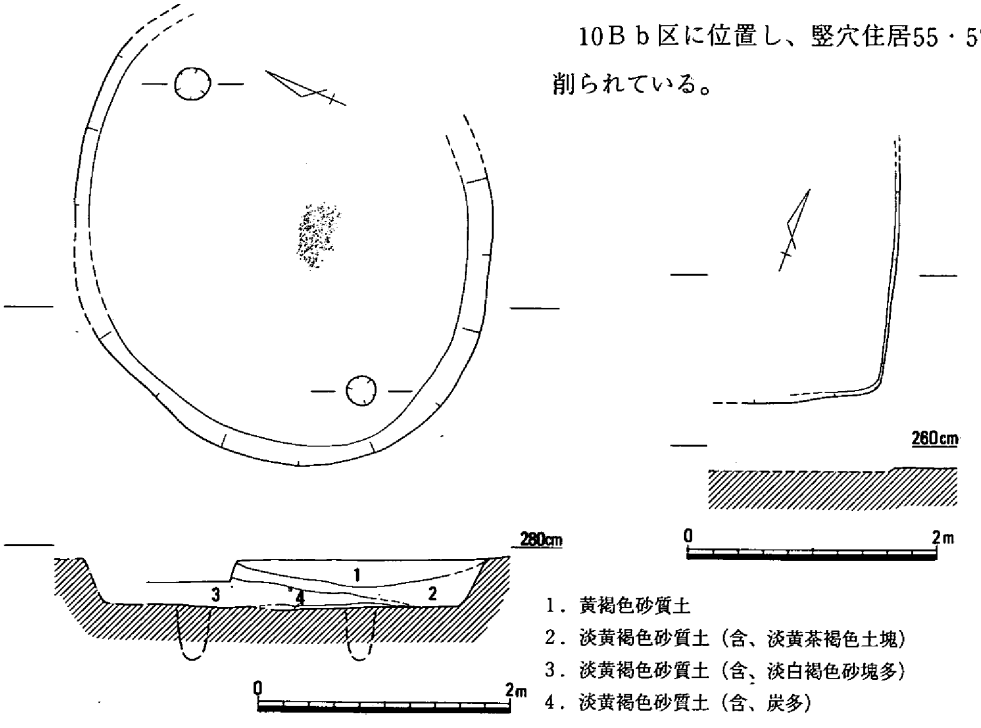
11Ｂｄ区から10Ｂｂ区にかけて位置し、竪穴住居３・58・59を削り、竪穴住居54・55に削られている。

東辺から南辺にかけてが検出されたのみで全容は不明であるが、平面形は隅丸方形と想定され、幅15cm前後の壁体溝を検出している。床面は海抜高2.57ｍ前後で貼床されており、断面観察によれば、南東隅から約２ｍ内側に浅くくぼんで炭が堆積する部分が認められるが、平面的には確認できていない。柱穴は検出されておらず、柱構造は不明である。前記の炭の堆積部分以外には中央施設その他の住居内構造は不明である。

遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居58（第329・360図）

10Ｂｂ区に位置し、竪穴住居55・57に削られている。



第360図　竪穴住居58（左）・59（右）（1/60）

東端が不明であるが、平面形は楕円形を呈し、最大長径3.65m、短径3.29mを測る。深さ37cmが残る側壁は外傾し、壁体溝は検出されていない。床面はほぼ平坦で、海抜高2.33mである。２本の柱穴を検出しており、柱間は2.75mである。柱掘り方は径25cm前後の円形で、深さ40～43cmを測り、側壁との距離は20～30cmである。中央部には60×30cmの範囲に炭の堆積が認められ、埋土の第４層にも炭が多く含まれている。これ以外には、中央穴その他の住居内構造については不明である。

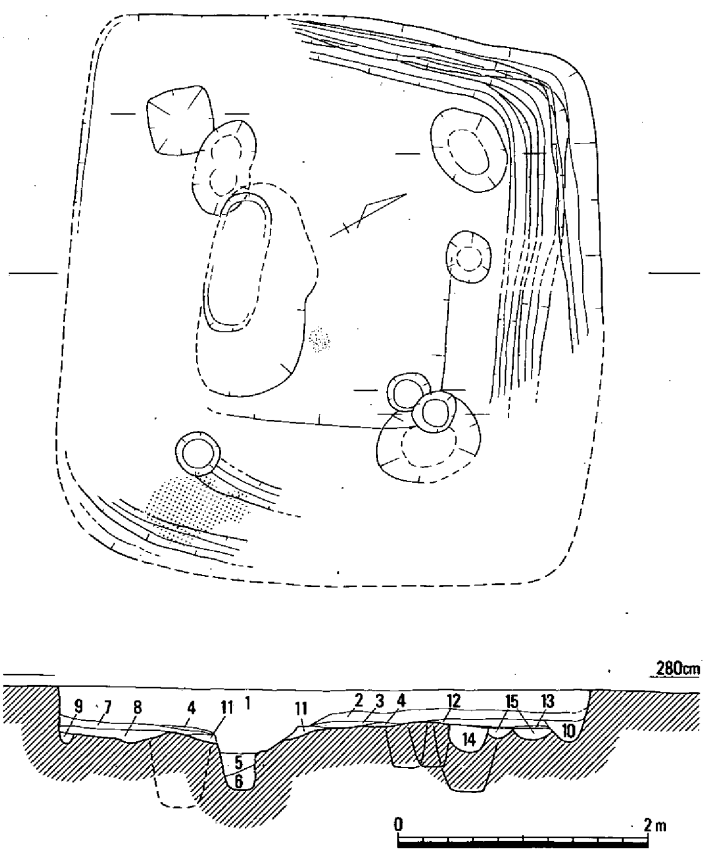
遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居59（第329・360図）

11Ｂｄ区南西部に位置して、竪穴住居３・22、土壙３・76を削り、竪穴住居55・57に削られている。

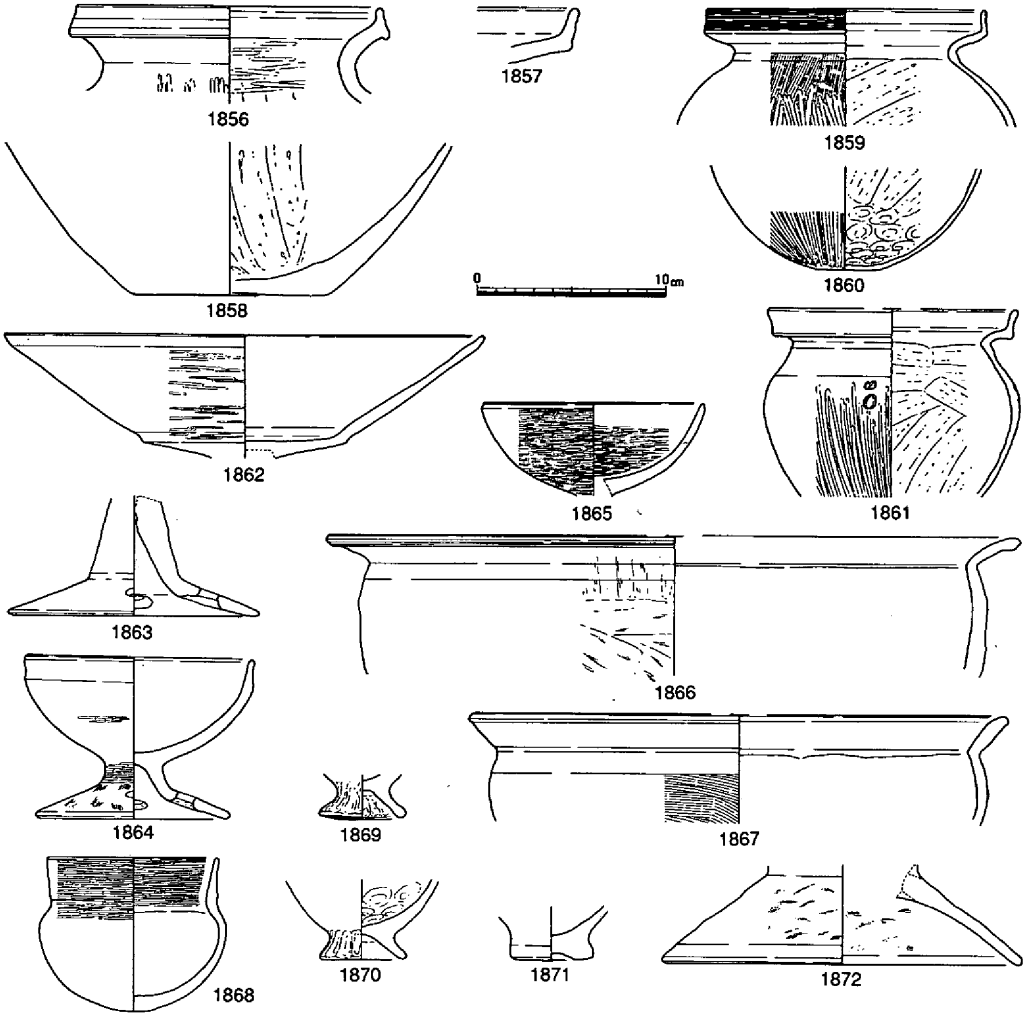
南東隅を検出したのみで全容は不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、最大南北長1.8m、最大東西長1.1mを測る。深さ３cmが残るのみで、床面の海抜高は2.4m前後と想定され、壁体溝は検出されていない。柱穴・中央施設をはじめとする住居内構造については不明である。

遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。

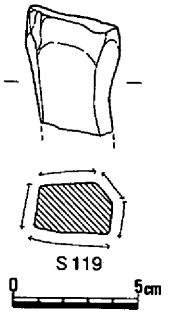


1．灰褐色砂（含、炭・焼土・灰黄色土小塊）
2．褐灰色砂（含、炭・焼土・灰黄色土小塊）
3．褐灰色砂（炭層を挟む）
4．灰色砂
5．炭・灰
6．炭・灰
7．灰褐色砂（含、黄灰色砂塊）
8．黄褐灰色砂質土（含、炭）
9．暗褐灰色砂（含、炭）
10．暗灰色砂（含、灰褐色砂塊）
11．暗灰色砂（含、炭）
12．褐灰色砂
13．灰色粗砂
14．灰色粗砂（含、灰褐色砂塊・灰）
15．暗灰色砂（含、灰褐色砂塊）

第361図　竪穴住居60（1/60）



第362図　竪穴住居60出土遺物（1/4・1/3）



竪穴住居60（第329・361・362図、写真図版69）

10Ｃｂ区に位置し、竪穴住居10・25を削っている。

東隅を調査区外に置くが、平面形は方形と想定され、長軸長4.32m、短軸長4.22mを測り、深さ29cmが残る側壁はほぼ直立して、床面積は16.6m²に復元される。第361図に示されるように、北隅部では壁体溝が重複しながら３条検出されており、南隅でも２条が検出されている。これにより、２回の建替えが想定されるが、柱穴等についてはそれを裏付ける状況を読み取ることができない。最終床面については、第１・２層下面がこれに相当するものと考えられ、海抜2.4～2.5mを測る。この面にあっては側壁から1.1m前後内側に直線的な段が認められ、この間がベッド

状遺構とみなされる。柱構造は４本柱と考えられ、７本を検出しているが、組合せを決めがたい。柱掘り方は、長径35～72cmの楕円形で、深さ35～52cmを測る。いずれにせよ、主軸方向は東西方向に置かれている。中央施設は中央南西寄りに位置し、170×88cmに復元される浅いくぼみの南が、110×45×30cmに復元される規模で掘られ、これに炭・灰が充填されている。また、南の柱穴の外側の床面には80×45cmの範囲で焼土面が認められ、西の柱穴の外側に52×50×58cmの方形土壙が検出されたほか、東の柱穴に削られる85×60cmの楕円形の浅い土壙も検出されている。埋土の第１・２層には炭・焼土が多く含まれる。

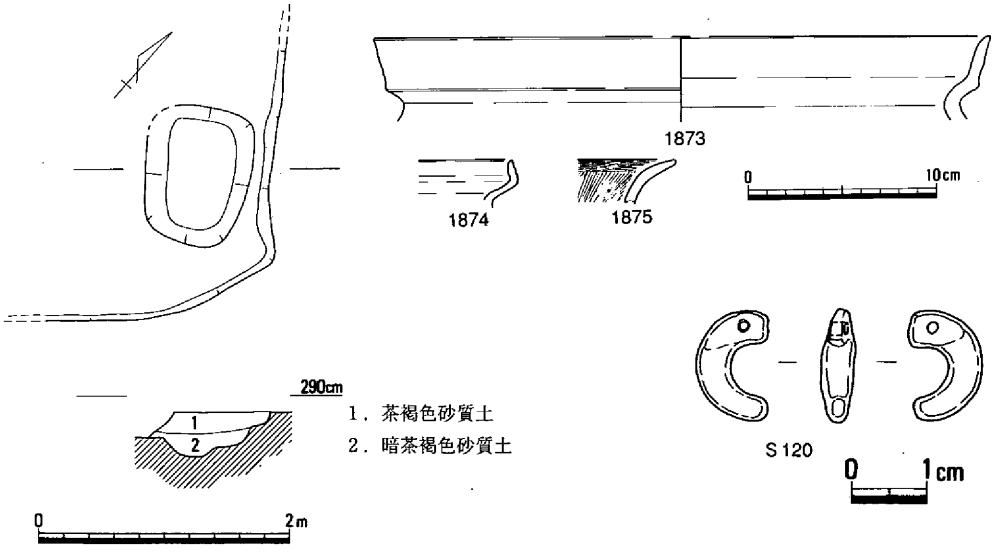
出土遺物には、壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・製塩土器等の土器の他に、砥石Ｓ119がある。1862は、小さく平らな杯部から口縁部が大きく斜め上方にのびている。弥生土器の混入もみられるが、時期は下田所式併行期に求められる。

竪穴住居61（第329・363図）

10Ｃａ区に位置し、竪穴住居62～64を削っている。調査手順の関係で東隅を検出できたのみであり、全容は不明であるが、平面形は方形と想定される。深さ10cmが残る側壁はやや外傾しており、床面の海抜高は2.57ｍで、壁体溝は検出されていない。北東辺から８cm内側で108×85×13cmを測る方形土壙を検出した他は、柱穴・中央施設をはじめとする住居内構造は不明である。出土遺物には、甕1874、高杯1875、鉢1873の他に、勾玉Ｓ120があり、1875は混入の可能性を残すが、時期は古壙時代初頭に比定される。

竪穴住居62（第329・364図）

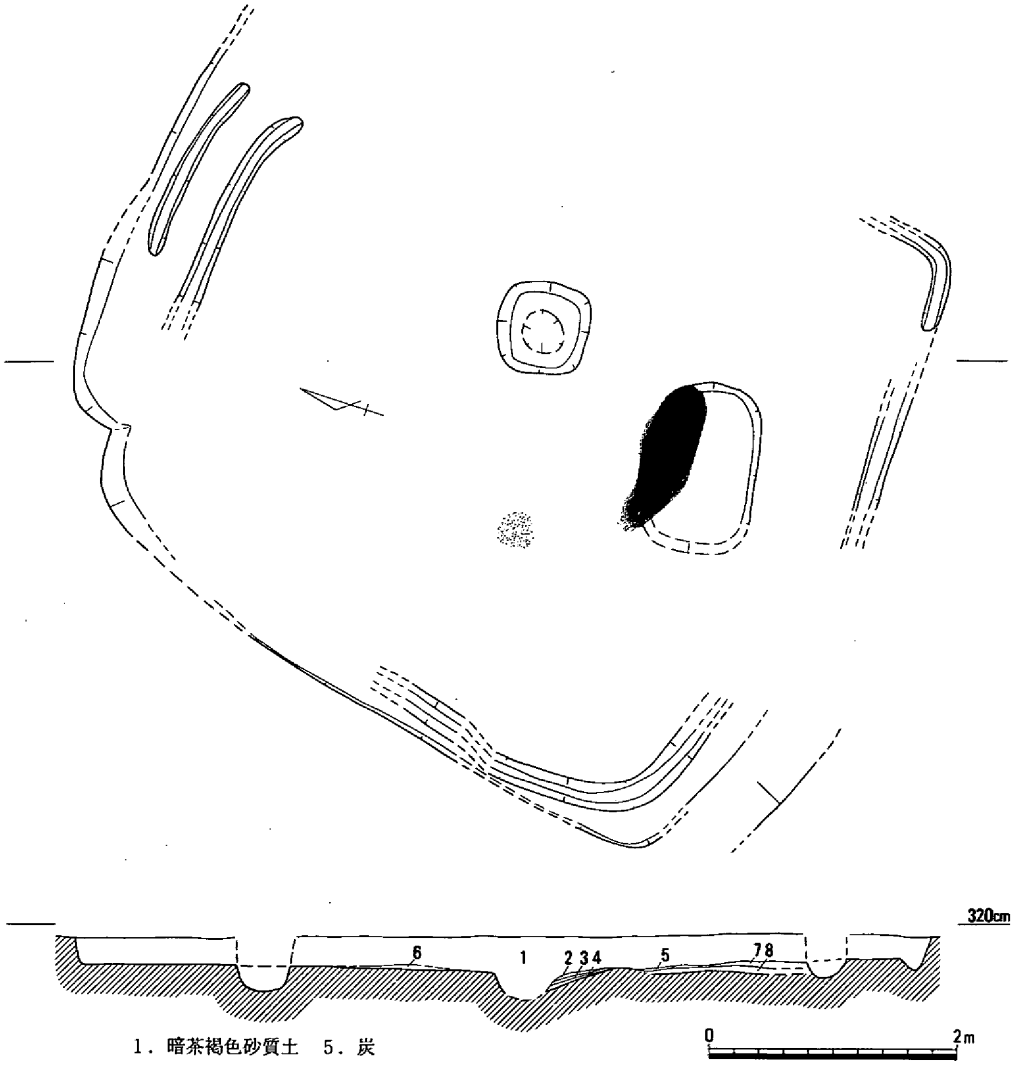
10Ｂｂ区から10Ｃａ区にかけて位置し、竪穴住居63・64、土壙25・27・88・89を削り、竪穴



第363図　竪穴住居61（1/60）・出土遺物（1/4・1/1）

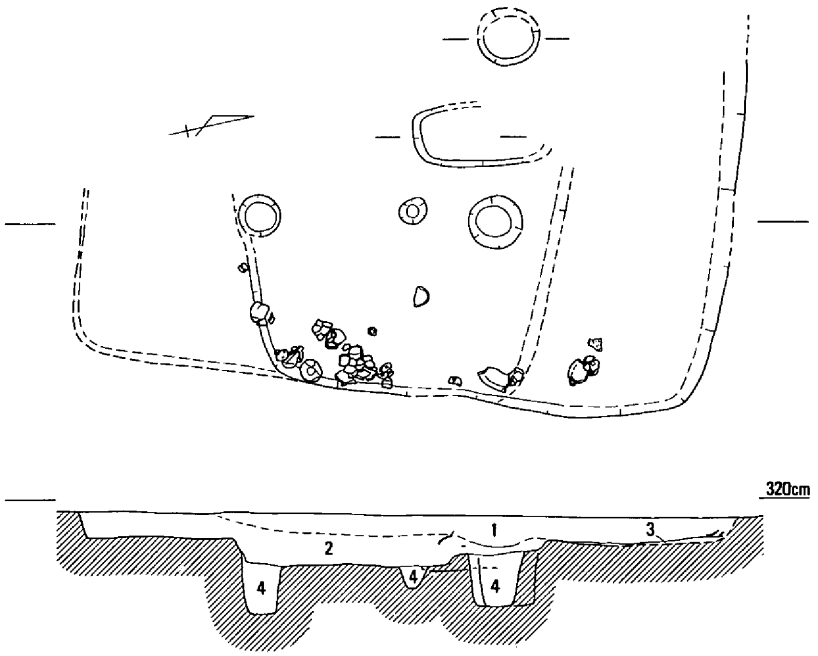
住居61・65に削られている。

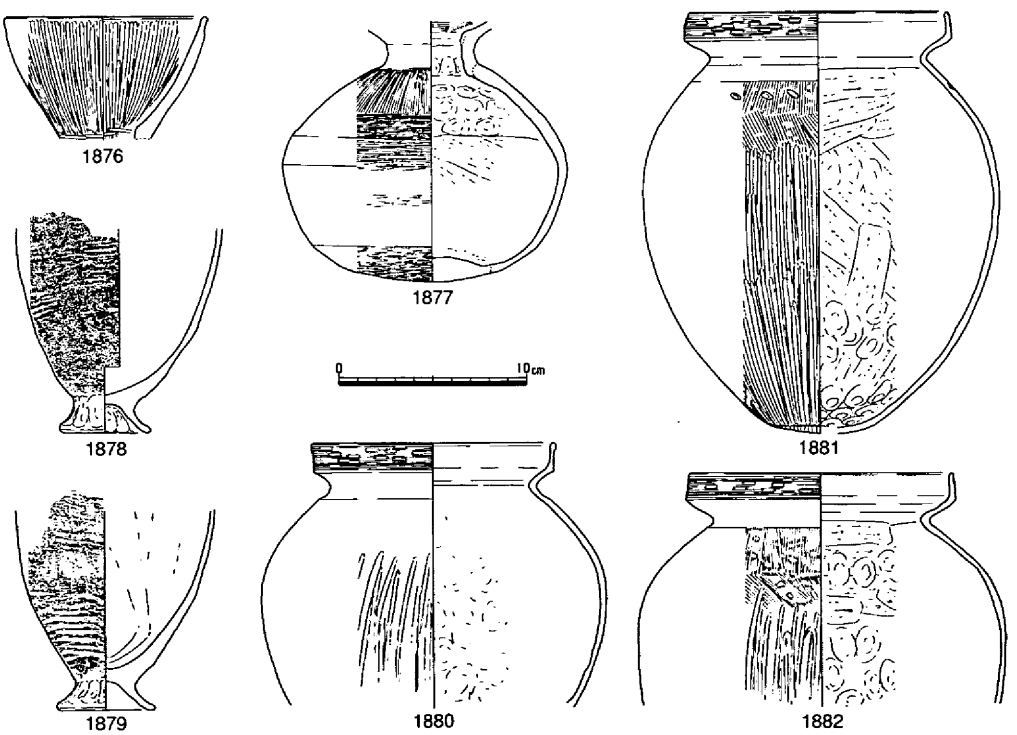
調査手順の関係で北東部が不詳であるが、第364図に示す状況で検出されており、1回の建替えが想定される。北側に位置する古段階の部分は、平面形は方形ないし長方形に想定され、最大東西長3.07ｍが知られるのみであり、海抜高2.87ｍの床面で部分的に壁体溝が検出された他は、住居内構造については不明である。新段階も平面形は長方形と想定され、長軸長5.73m、短軸長5.47ｍを測る。深さ21㎝が残る側壁はほぼ直立し、幅13～22㎝の壁体溝が巡らされて、



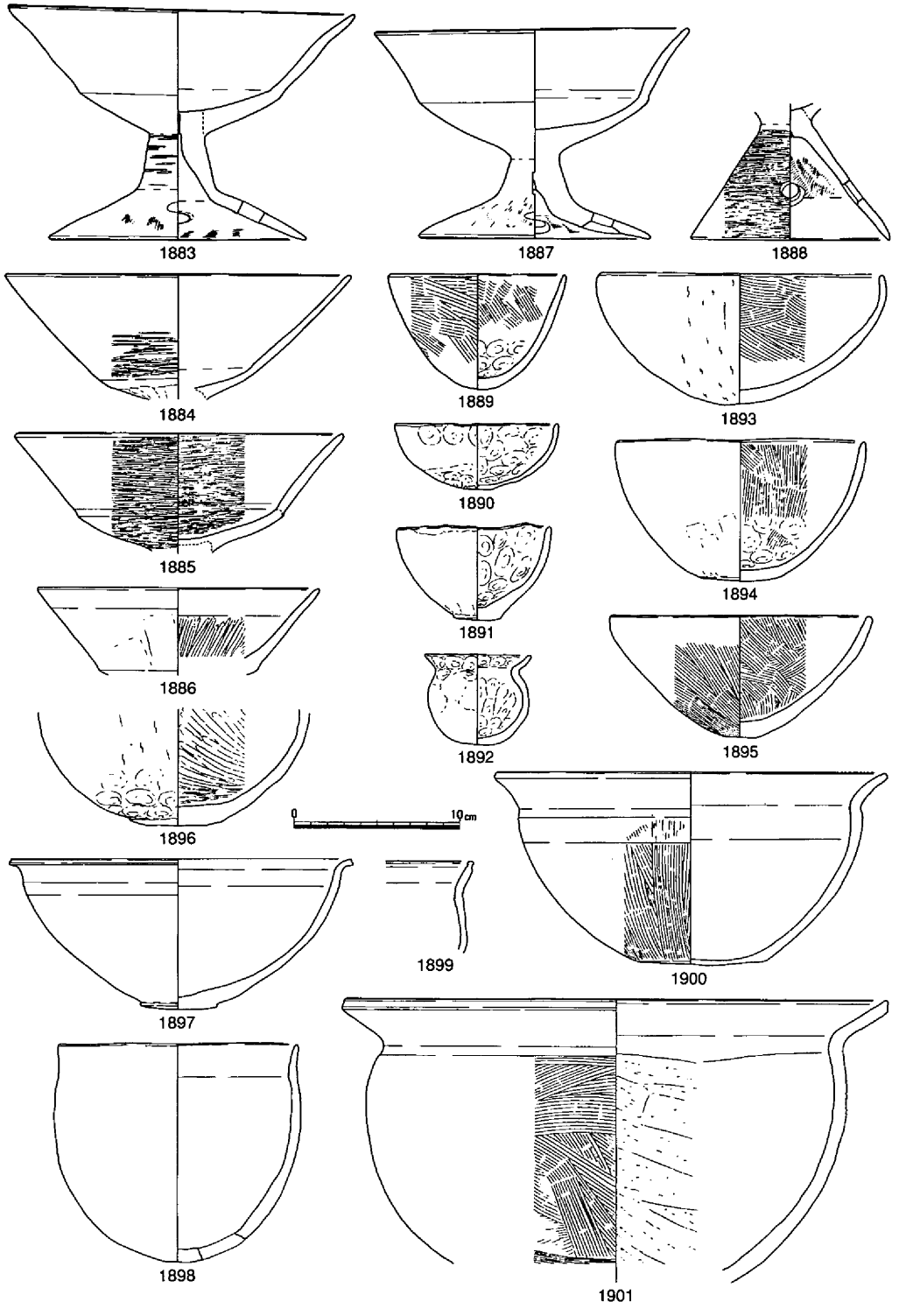
1．暗茶褐色砂質土　5．炭
2．炭　6．焼土（上面は床面？）
3．炭　7．灰褐色土
4．炭　8．黄灰色砂質土（貼床）

第364図　竪穴住居62（1/60）





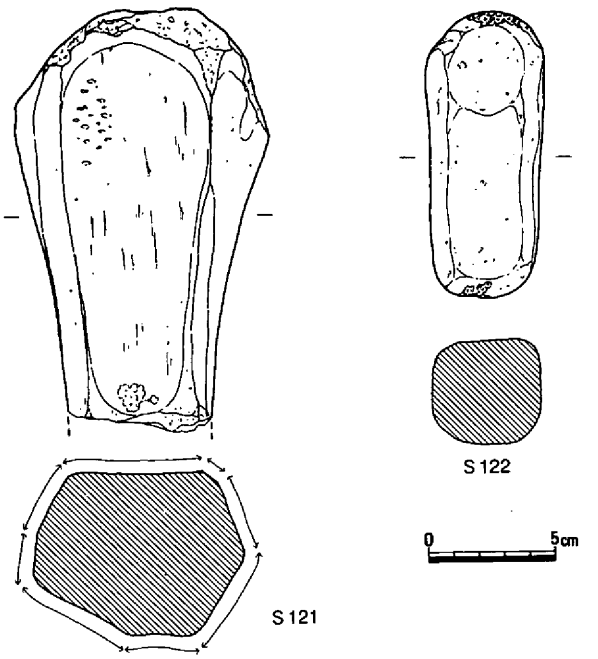
第365図　竪穴住居63（1/60）・出土遺物①（1/4）



第366図　竪穴住居63出土遺物②（1/4）

南半で貼床の認められる床面の海抜高は2.89ｍである。柱穴は検出されず、柱構造は不明である。中央やや東寄りに平面形が73×73cmの方形を呈する中央穴が深さ20cmで２段に掘られており、その南肩口には３層に分層できる炭の堆積が見られる。この中央穴の南1.3ｍには135×90cmの隅丸長方形を呈する浅い土壙があり、その北半にも130×40cmの範囲で炭の堆積が認められる他、中央穴の西1.1ｍで径25cm、北35cmで径80cmの焼土面が検出されている。

時期を明確にする遺物はないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に属するものと考えられる。



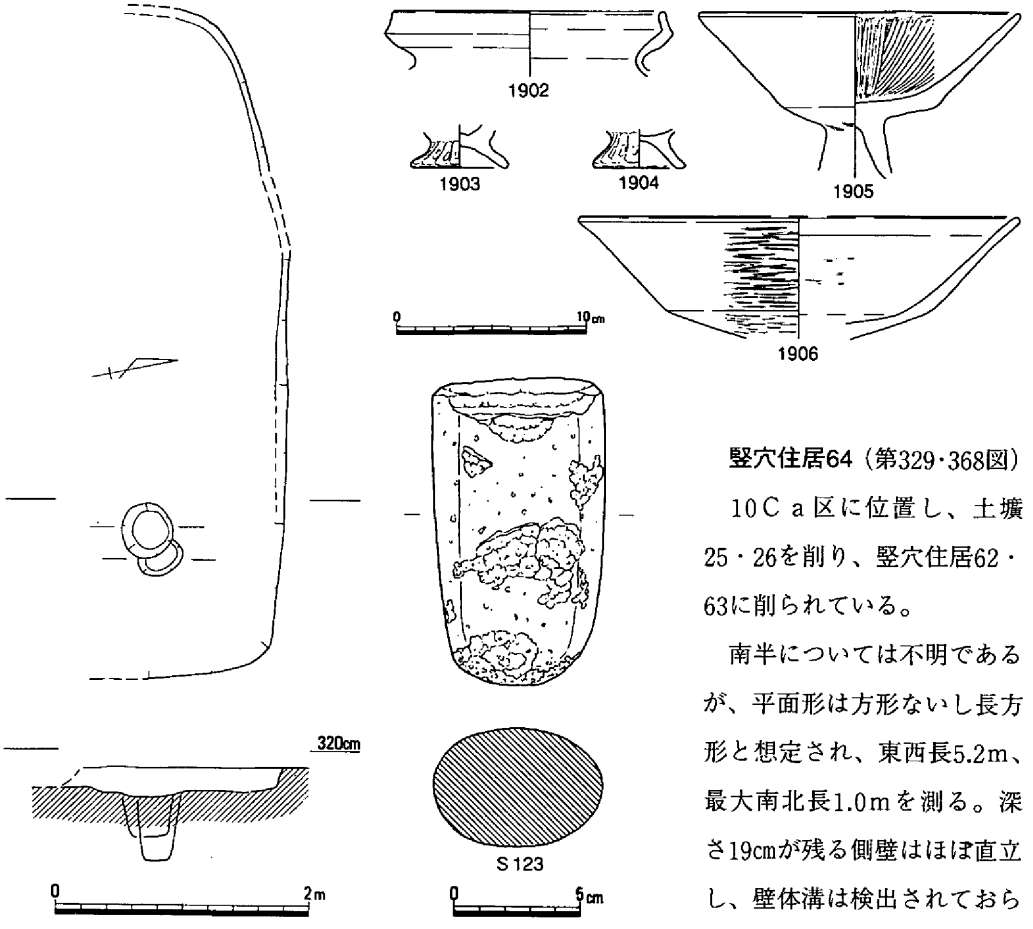
第367図　竪穴住居63出土遺物③（1/3）

竪穴住居63（第329・365～367図）

10Ｃａ区に位置し、竪穴住居64、土壙27・176を削り、竪穴住居61・62に削られている。

西半については不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、南北長5.1ｍ、最大東西長2.9ｍを測る。深さ21cmが残る側壁はやや外傾し、壁体溝は検出されていない。北辺と南辺にはベッド状遺構が伴っており、北辺で幅1.15ｍ、高さ15cm、南辺で幅1.3～1.45ｍ、高さ20cmをそれぞれ測り、中央部の床面で海抜高2.7ｍである。柱構造は４本柱と考えられ、ベッド状遺構の内側で３本を検出しており、柱間は1.4ｍと1.9ｍで、主軸は南北方向に置かれている。柱掘り方は径33～48cmの円形で、深さは40cm前後に揃っており、側壁との距離は90～150cmと想定される。北側の柱穴間では、短軸長50cm、深さ５cmを測る長方形の土壙を検出している。埋土のうち、第１層の下面で土師器の大形片がまとまって出土している。

出土遺物には、壺1877、直口壺1876、甕1880～1882、高杯1883～1887、鉢1889～1891・1893～1901、器台1888、製塩土器1878・1879、ミニチュアの甕1892等の土器の他に、砥石Ｓ121・122がある。1880～1882は口縁部外面に櫛描沈線が巡らされ、体部内面下半に指頭圧痕が見られる。高杯の口縁部は斜め上方に大きく拡張されており、1884では口縁部径は杯部径の２倍以上となって若干内反している。1877の底部は丸底で、厚い円盤となっている。古い要素をもつものも散見されるが、時期は下田所式併行期に求められる。



第368図　竪穴住居64（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居64（第329･368図）

10Ｃａ区に位置し、土壙25・26を削り、竪穴住居62・63に削られている。

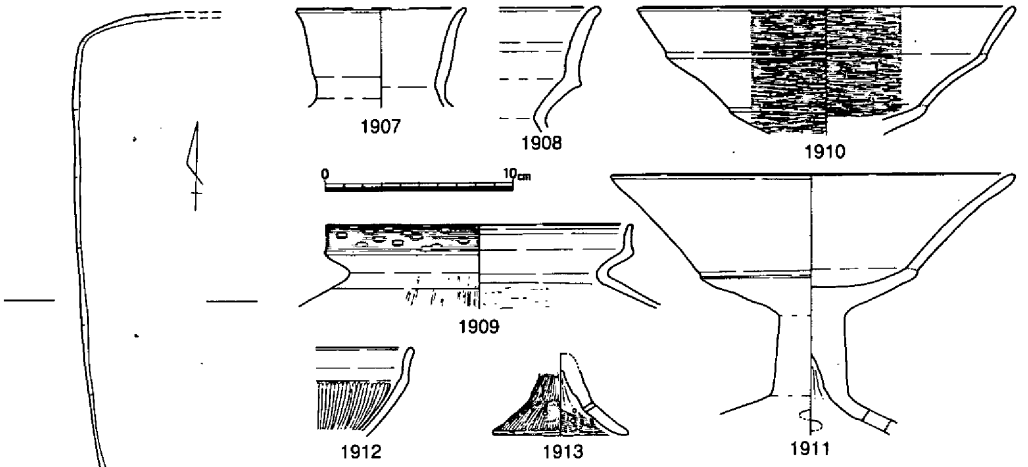
南半については不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、東西長5.2m、最大南北長1.0ｍを測る。深さ19cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されておらず、床面の海抜高は2.87ｍ前後である。柱構造は４本柱と考えられ、このうちの１本に相当するとみなされる２本の柱穴を検出しているが、建替えを想定する材料は他にはない。柱掘り方は長径35～42cmの楕円形で、深さ33cmと50cm、側壁との距離は70cmである。中央穴その他の住居内構造については不明である。

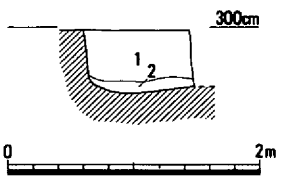
出土遺物には、甕1902、高杯1905・1906、製塩土器1903・1904の他に、磨製石斧片を転用した敲石Ｓ123がある。高杯の口縁部は直線的に斜め上方に拡張されている。これらの遺物と周辺の遺構との関係から、時期は下田所式併行期に比定される。

竪穴住居65（第329・369図）

10Ｂｂ区に位置し、竪穴住居62、土壙89・232を削っている。

調査手順の関係で東半について不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、南北長3.94m、最大東西長0.9ｍを測る。深さ49cmが残る側壁は直立しており、床面の海抜高は2.48ｍで、壁体溝は検出されていない。柱穴・中央穴等の住居内構造については不明である。





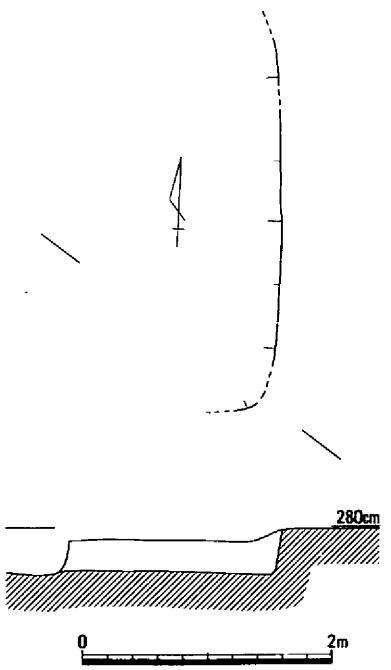
1．暗褐灰色砂（含、炭）
2．褐灰色砂（含、灰色粘土）

第369図　竪穴住居65（1/60）・出土遺物（1/4）

出土遺物には、壺・直口壺・甕・高杯・鉢・ミニチュアの高杯等の土器がある。1909の口縁部外面には櫛描沈線が巡らされ、1910の口縁部は２段に開く。時期は、下田所式併行期に比定される。

竪穴住居66（第329・370図）

10Ｃｄ区に位置し、竪穴住居26、土壙190を削り、竪穴住居68に削られている。東辺の一部と床面を検出したのみで全容は不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、最大南北長は2.9ｍを測る。深さ33㎝が残る側壁は直立し、床面の海抜高は2.45ｍである。壁体溝は検出されず、柱穴その他の住居内構造についても不明である。遺物は出土していないが、古墳時代初頭に属するものと考えられる。

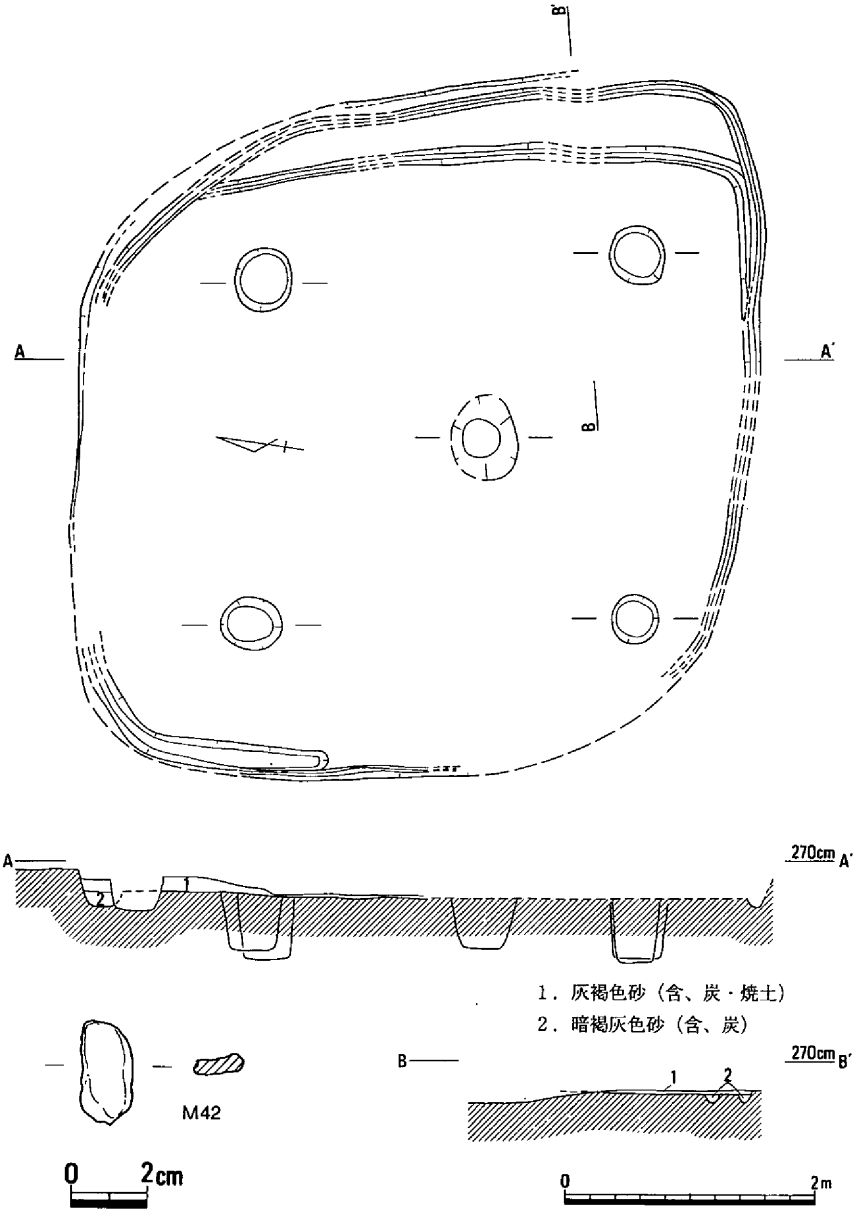


第370図　竪穴住居66（1/60）

竪穴住居67（第329・371図）

10Ｃｄ区北西部に位置し、竪穴住居27～29・69、土壙95～97・194・195を削り、竪穴住居68・70、土壙233に削られている。

平面形は不整な方形と想定され、２条検出された壁体溝から１回の建替えが考えられ、古段階が4.87×4.8



第371図　竪穴住居67（1/60）・出土遺物（1/2）

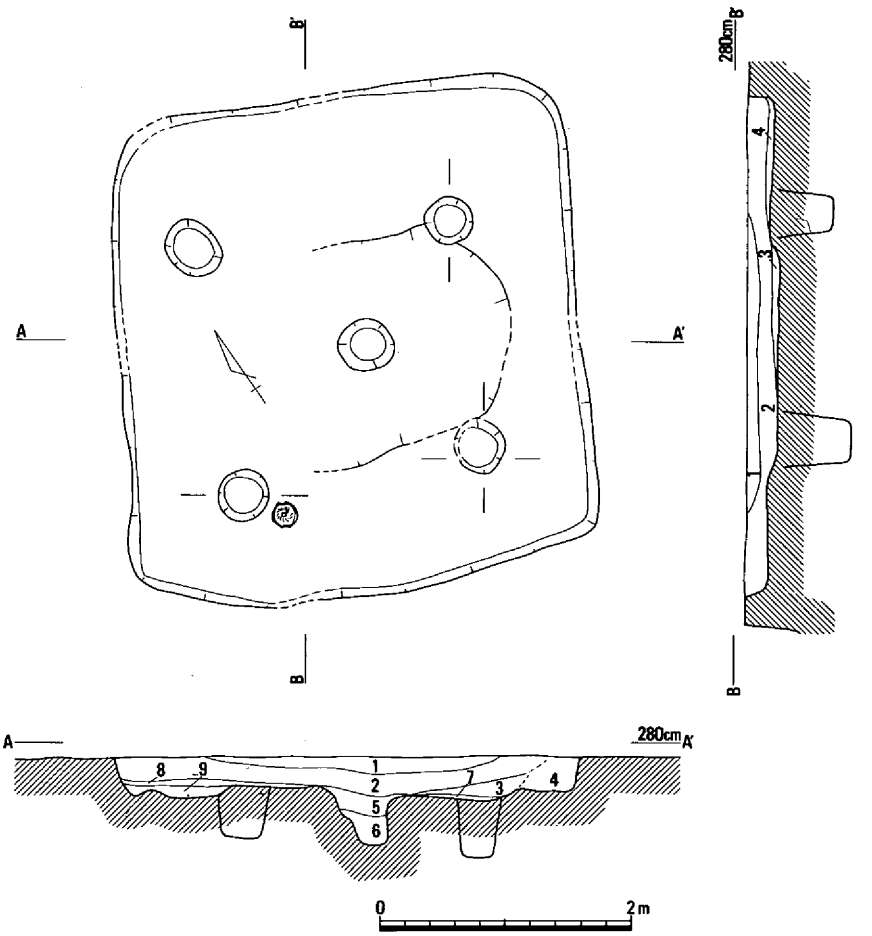
m、新段階が5.47×4.87mの規模に復元される。深さ15cmが残る側壁はほぼ直立し、床面の海抜高は2.47m前後でほぼ平坦である。柱構造は４本柱で、柱間2.8～3.1mと想定され、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は長径40～50cmの円形で、深さ43～50cmを測り、側壁との距離は30～90cmである。中央やや南に位置する中央穴は、楕円形に復元されて深さ38cmを測る。埋土には、炭・焼土が含まれている。

出土遺物には、鉄器M42の他に、口縁部外面に櫛描沈線を巡らせる土師器の甕が出土しており、時期は古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居68（第329・372～374図、写真図版69）

10Ｃ区東半に位置し、竪穴住居25・26・66・67、土壙94・192を削っている。

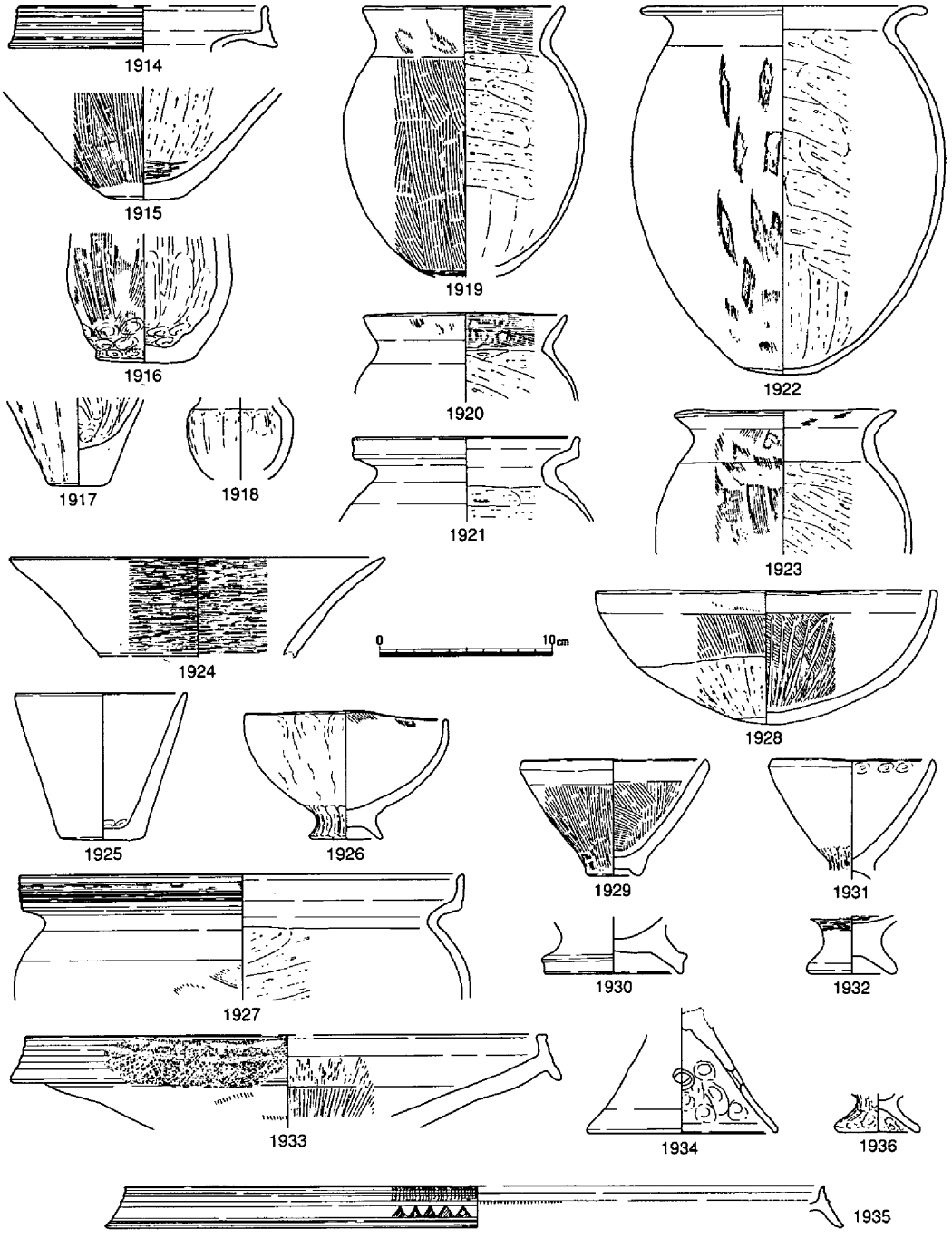
平面形は方形で、長軸長4.15m、短軸長3.69mをそれぞれ測り、床面積は13.2㎡である。深さ36cmが残る側壁は直立からやや外傾し、壁体溝は検出されていない。西辺を除く３辺では、側壁から45～110cm内側に段があり、この間がベッド状遺構と考えられる。床面の海抜高は、中央部で2.34m、ベッド上で2.55mである。４本柱で、柱間は1.8～2.0mを測り、主軸は東西方



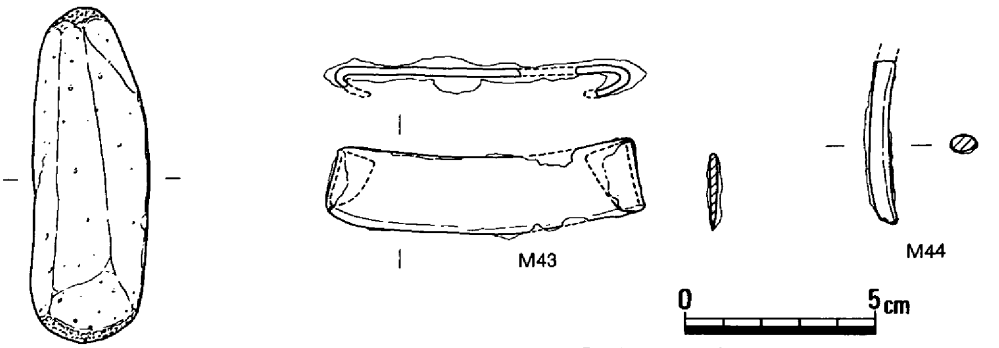
1．褐灰色砂（含、炭、下面に炭化物・焼土面）
2．暗褐灰色砂（含、炭）
3．暗褐灰色砂（含、灰色粗砂）
4．灰褐色砂（含、炭）
5．暗灰色微砂（含、炭・焼土多）
6．暗灰色微砂（含、炭・灰多）
7．炭・灰
8．暗灰褐色砂（含、褐黄色砂小塊多）
9．暗灰褐色砂

第372図　竪穴住居68（1/60）

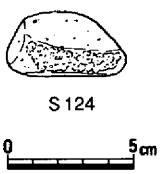
向に置かれる。柱掘り方は長径36～46cmの楕円形で、深さ43～57cmを測り、側壁との距離は35～85cmである。中央穴は45×40×45cmの楕円形を呈し、炭・灰・焼土で埋められていて、南側



第373図　竪穴住居68出土遺物①（1/4）



第374図　竪穴住居68出土遺物②（1/3・1/2）



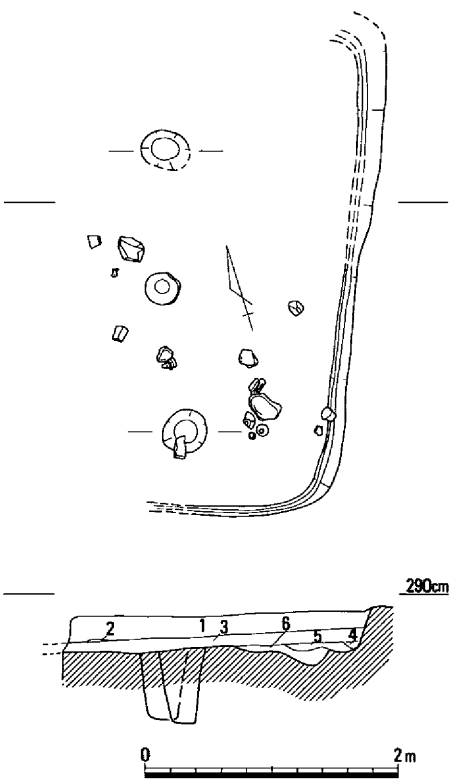
に炭・灰の掻き出しが認められる。埋土にも炭が多く含まれている。

出土遺物には、壺1915・1916、小形壺1917、甕1919～1923、高杯1924、鉢1925・1927・1928、台付鉢1926・1929～1932、器台1934、製塩土器1936、ミニチュアの甕1918等の土器のほかに、敲石Ｓ124、鎌M43、鉄器M44がある。1928はほぼ丸底で、深い体部外面下半をヘラケズリされており、1919・1922にはかろうじて平底が残っている。1914・1933・1935等の弥生土器の混入もみられるが、1928・1934・M34等により、古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居69（第329・375・376図）

10Ｃ区南部に位置して、竪穴住居27・29、土壙99・193を削り、竪穴住居67に削られている。

西半を橋脚によって失っており、全容は不明であるが、平面形は方形と想定されて最大南北長3.8ｍを測る。深さ28㎝が残る側壁はほぼ直立し、壁体溝が巡っている。床面の海抜高は2.66ｍである。柱構造は４本柱と考えられ、２

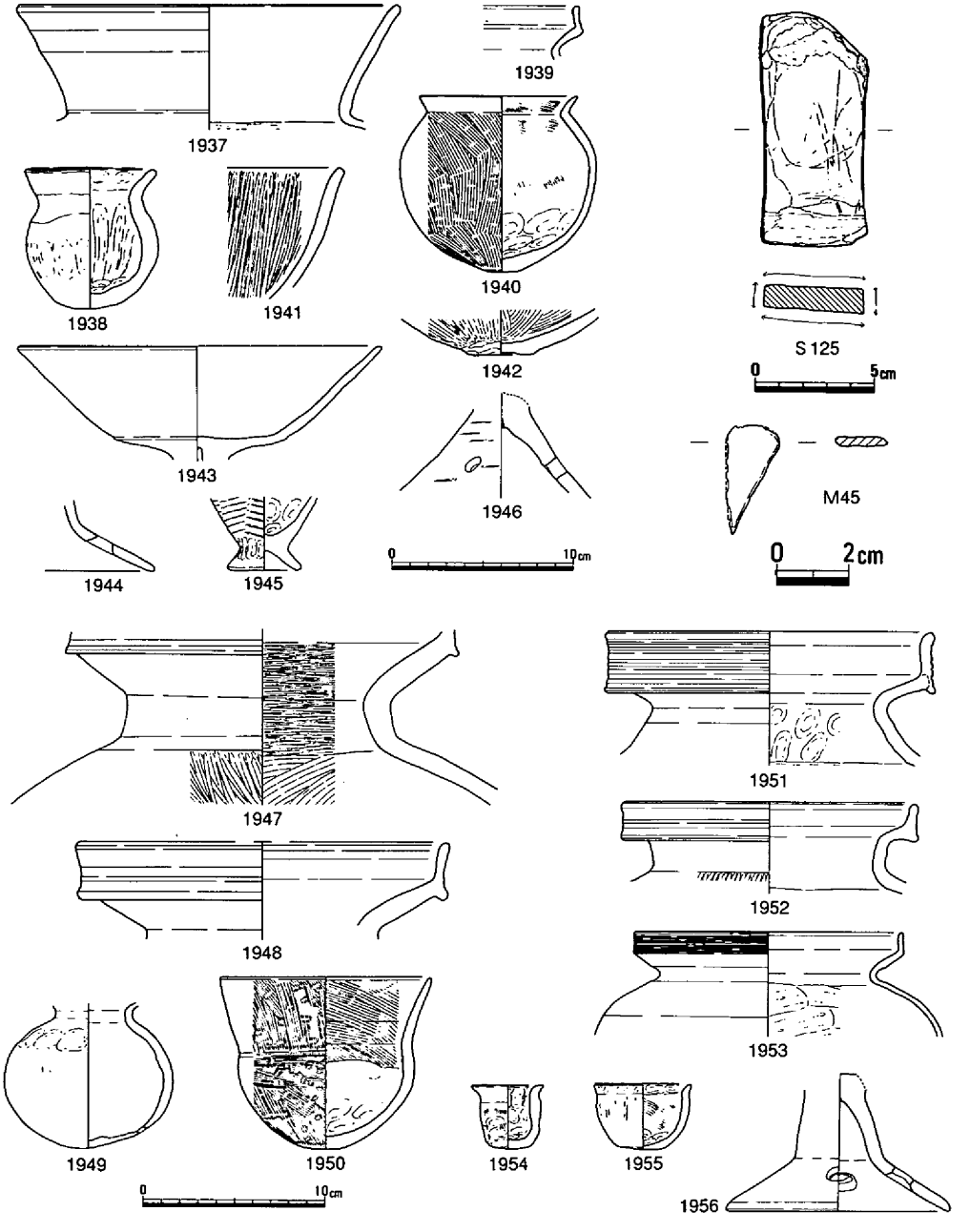


1．褐灰色砂（含、炭・焼土・礫）
2．炭化材
3．暗褐灰色砂（含、炭・焼土）
4．暗褐灰色砂（含、炭・焼土）
5．灰褐色砂（含、炭・灰）
6．褐灰色砂（含、炭・灰多）

第375図　竪穴住居69（1/60）

本を検出して、柱間は2.2ｍを測る。柱掘り方は長径35㎝の楕円形で、深さ55～60㎝、側壁との距離40～130㎝である。床面で台石と考えられる角礫を検出した他は、中央穴等の住居内構造については不明である。埋土には、炭・焼土が含まれている。

出土遺物には、壺・小形壺・甕・高杯・鉢・器台・製塩土器・ミニチュア（甕・鉢）等の土



第376図　竪穴住居69出土遺物（1/4・1/3・1/2）

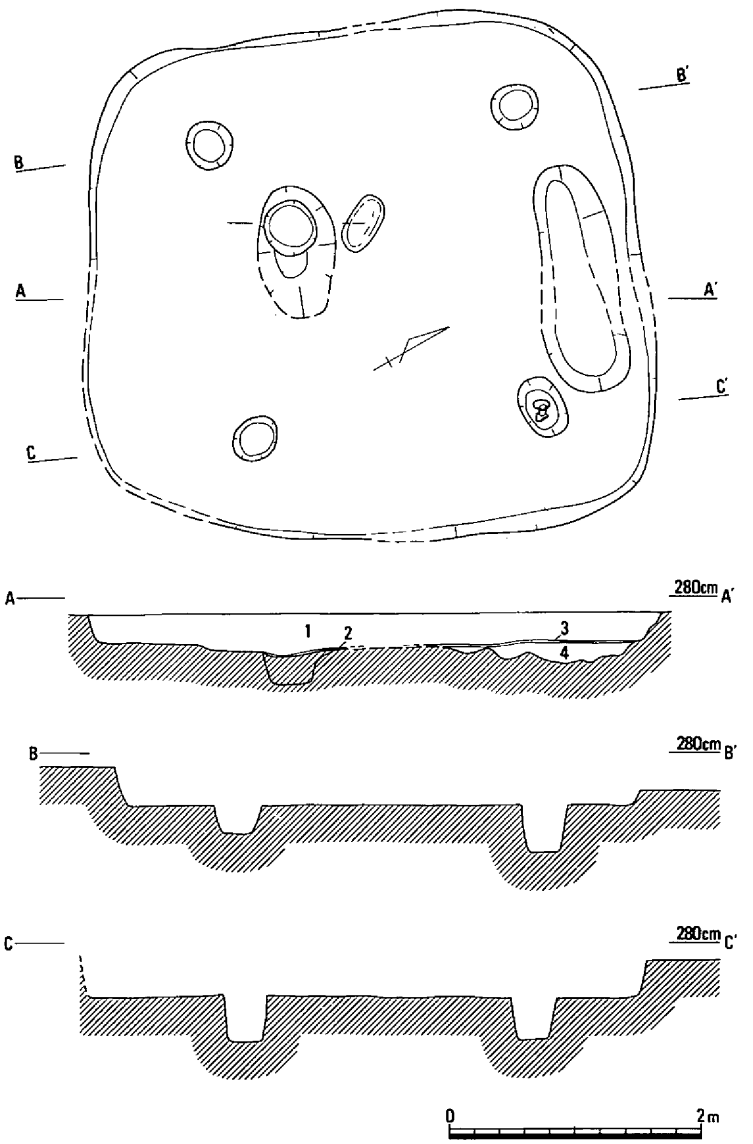
器の他に、砥石Ｓ125、鉄鏃M45がある。1937は頸部で屈曲した口縁部がそのまま斜め上方へのびており、畿内系土器かと思われる。1949は丸底で、胴部は球形を呈して下半には焼成後に穿孔されており、細い頸部から口縁部が開いている。非在地形土器と思われる。1953はほぼ直立する口縁部外面に櫛描沈線が巡らされていて、1950にはわずかな底面が残っている。高杯および1955には水漉粘土が用いられており、1943は平らな杯部から口縁部が大きく斜め上方へ開いている。1947・1948・1951・1952等の弥生土器が混入しているが、1943・1946・1950・1953等により、時期は古墳時代初頭に求められる。

竪穴住居70

（第329・377・378図、写真図版70）

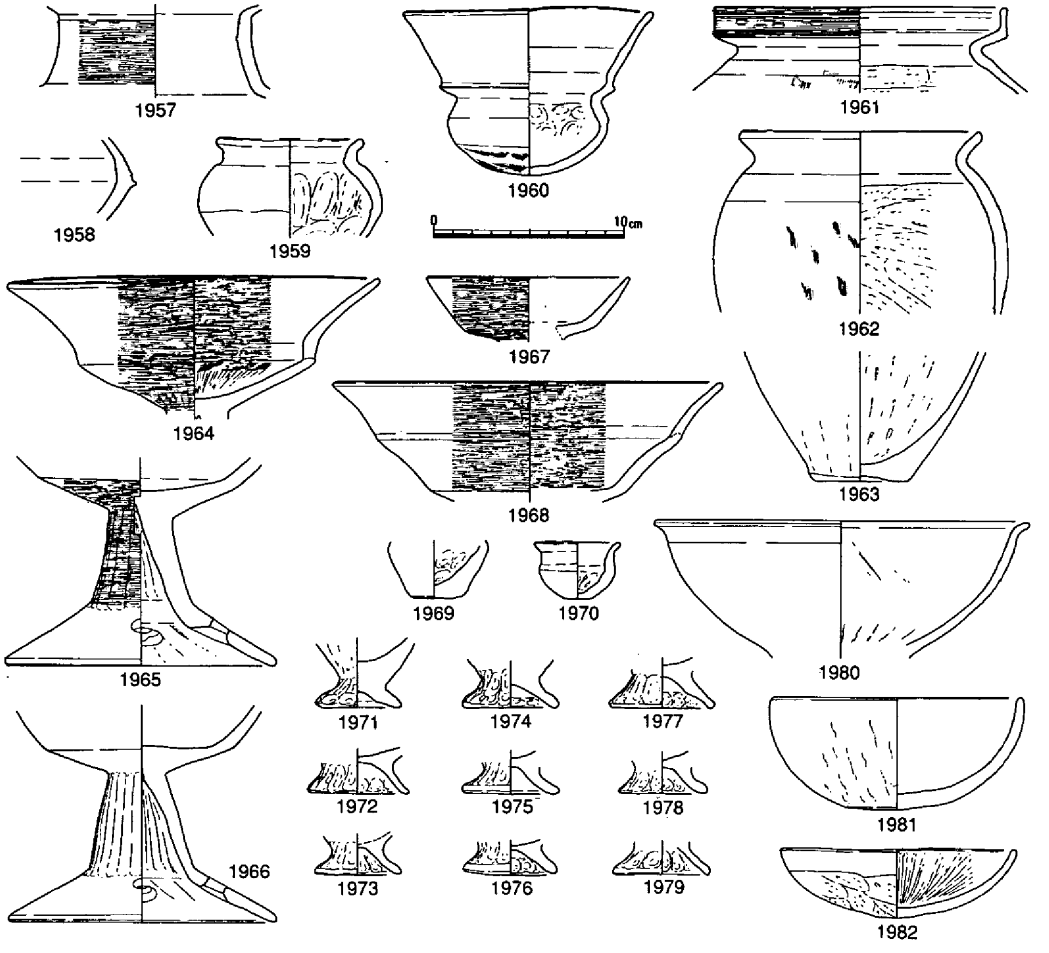
10Ｃａ区南東部に位置し、竪穴住居28・67を削り、土壙233に削られている。

平面形は隅丸方形で、長軸長4.39ｍ、短軸長4.01ｍをそれぞれ測り、床面積は15.7㎡となる。深さ24㎝が残る側壁はやや外傾しており、壁体溝は検出されていない。床面は南半がやや高く、北半では貼床されて、海抜高2.43ｍを測る。柱構造は４本柱で、柱間

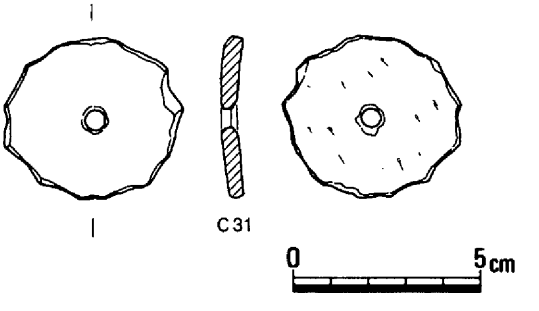


1．茶褐色砂質土
2．炭
3．黄色土（貼床）
4．灰黄褐色土（含、炭）

第377図　竪穴住居70（1/60）



第378図　竪穴住居70出土遺物
（1/4・1/2）



は2.3～2.5ｍを測り、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は長径38～49㎝の楕円形で、深さ22～36㎝を測り、側壁との距離は40～100㎝である。中央部やや南西寄りに位置する中央穴は２段に掘られており、105×62㎝の楕円形の西寄りが、さらに径40㎝、深さ15㎝に掘られている。その東側には炭・灰の掻き出しが広がり、北側には台石が位置している。また、北辺の側壁沿いには、180×65×15㎝の規模の楕円形の土壙があるが、上層を貼床されている。

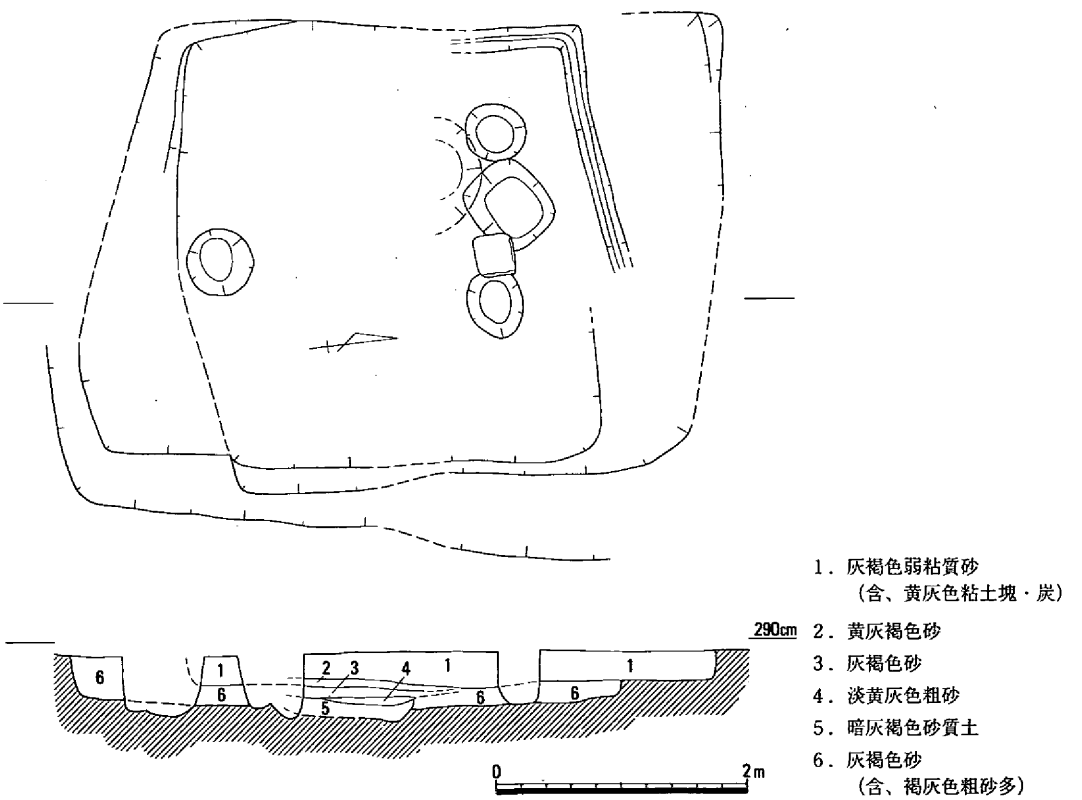
出土遺物には、壺・直口壺・小形丸底壺・小形壺・甕・高杯・鉢・製塩土器・ミニチュア（壺・甕）等の土器の他に、土器片転用紡錘車Ｃ31がある。1960は口縁部から稜をなして立ち

上がっており、体部外面下半には煤が付着している。1982は浅く、体部外面がヘラケズリされている。高杯は長脚で脚柱部外面に面取り痕がみられ、1964はややくぼむ杯部から口縁部が途中で屈曲して外反しており、他は杯部が平らで、1968の口縁部は２段に拡張している。時期については、1957・1958・1962・1963・1980等の弥生土器の混入を除いて、高杯からは下田所式併行に想定され、1960・1982は亀川上層式まで下る要素をもっている。

竪穴住居71（第329・379・380図）

10Ｂ区中央部に位置し、竪穴住居23・24・72、土壙197を削り、土壙135・136・235～238に削られている。第379図に示される状況で検出されており、これを第380図に示す２段階に整理し、新段階を71Ａ、古段階を71Ｂとする。

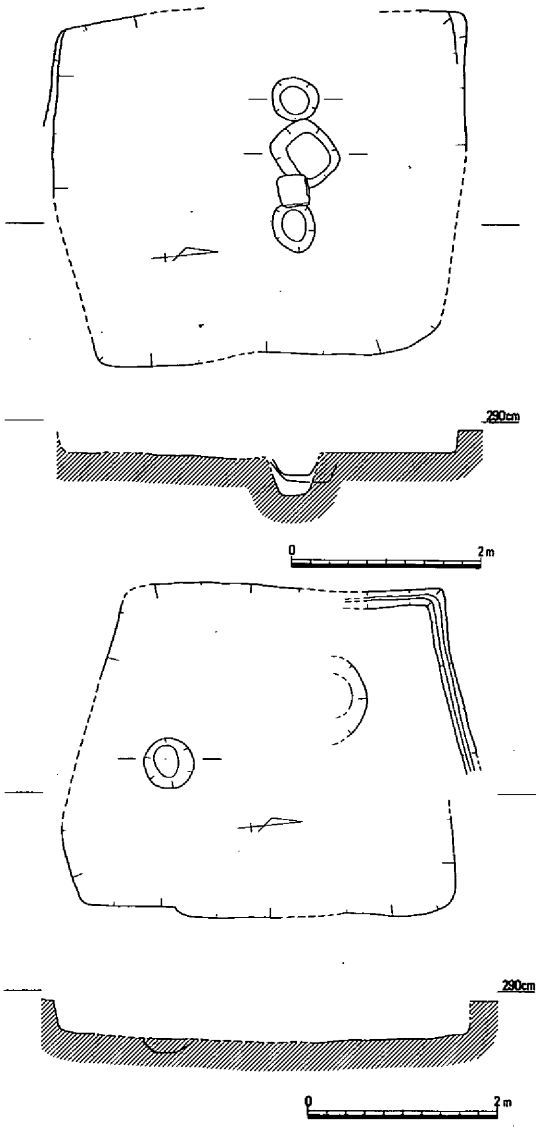
竪穴住居71Ａは、平面形は不整な方形に復元され、長軸長4.34m、短軸長3.7mを測る。深さ26cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されていない。床面の海抜高は2.54mで、南半がやや低い。柱穴は２本を検出しており、柱間は1.4mである。平面形の長軸と直行するが、この２本を利用した４本柱は設定しがたく、２本柱と考える。柱掘り方は長径48～56cm、深さ20

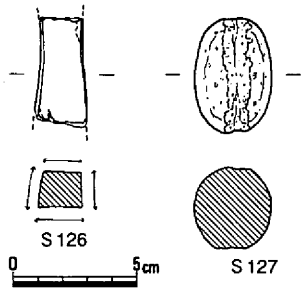


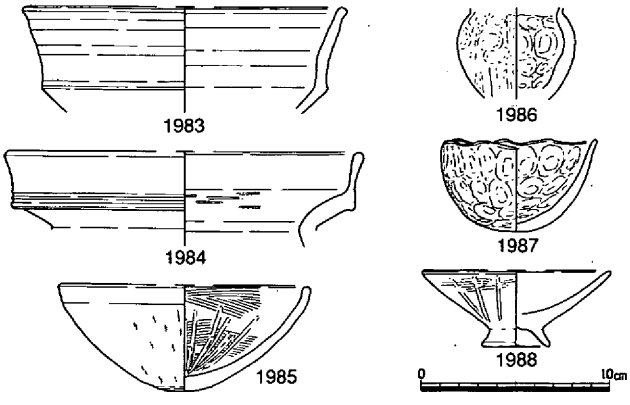
第379図　竪穴住居71（1/60）

～42cmの楕円形で、側壁との距離は1.0～2.25mである。柱穴間に64×61×30cmの方形な土壙が位置し、肩口で台石が検出されている。

竪穴住居71Ｂは、平面形は台形を呈して、長軸長4.1m、短軸長3.54mを測る。深さ35cmが残る側壁は直立し、北西部では壁体溝を検出している。床面はほぼ平坦で、海抜高2.39mである。柱穴は検出されず、柱構造は不明である。南側壁から約65cm内側で、径52cm、深さ13cmの円形の土壙が検出され、北西部でも平面形楕円形と想定される土壙が検出されている他は、住居内構造は不明である。

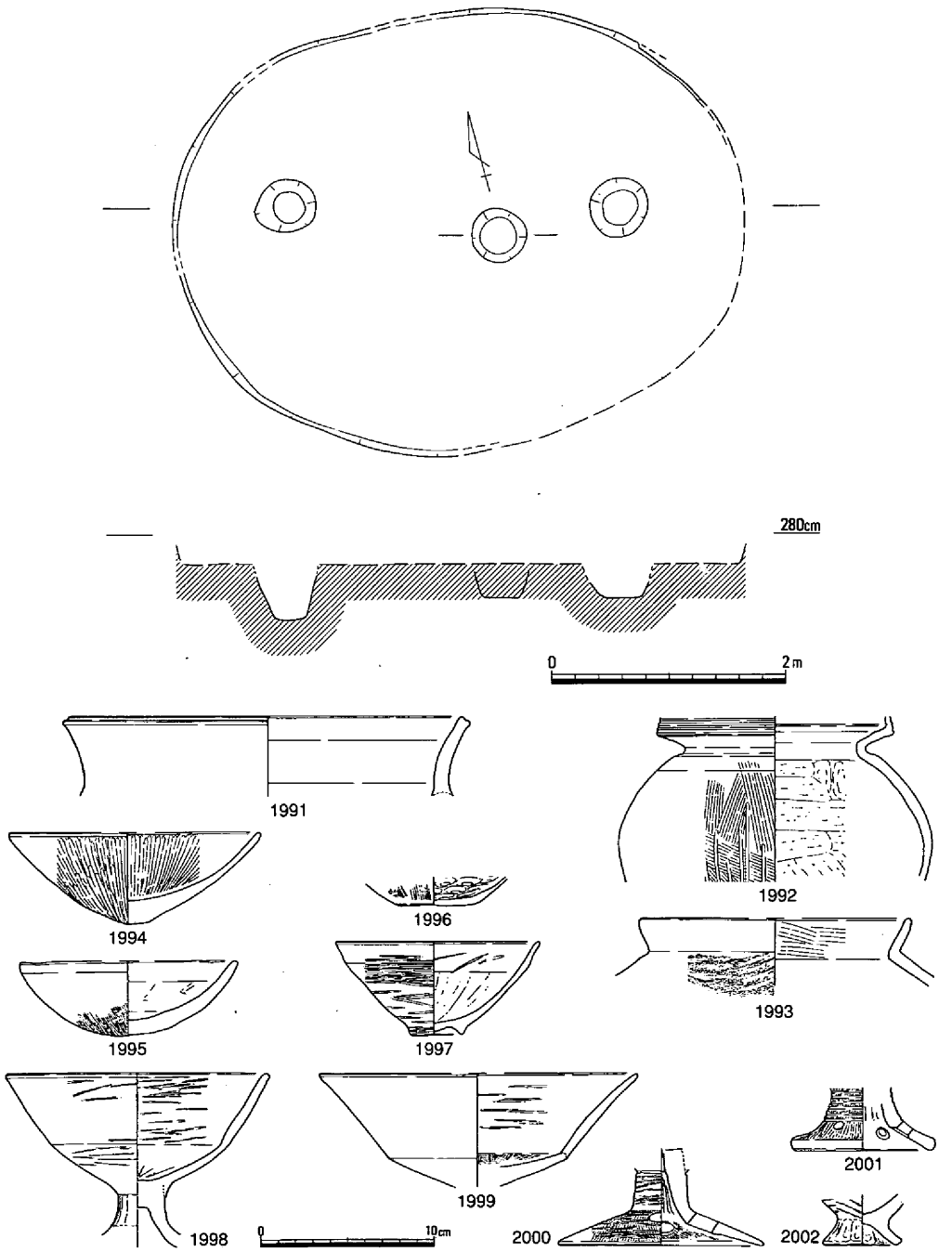




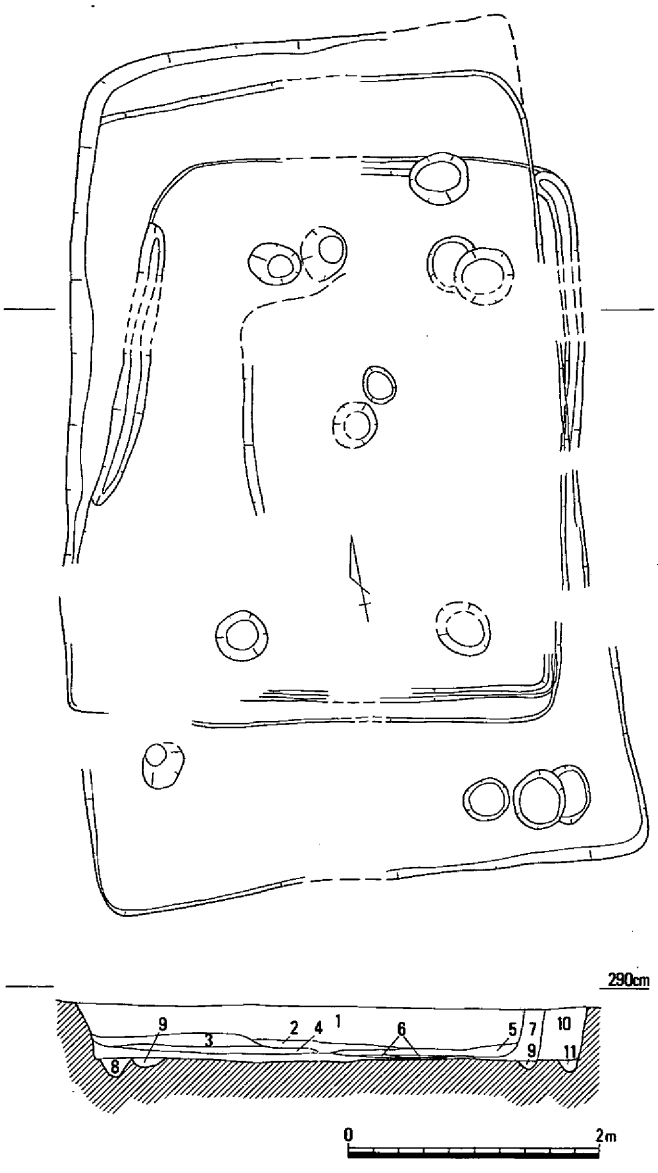


第380図　竪穴住居71Ａ（上）・71Ｂ（中）（1/80）・出土遺物（1/3・1/4）

出土遺物には、壺1983・1984、甕1989、鉢1985・1987・1990、台付鉢1988、手捏ね土器1986等の土器の他に、砥石Ｓ126、石錘Ｓ127がある。このうちの複合口縁をもつ1983と、周辺の遺構との関係から、時期は古墳時代初頭に比定される。



第381図　竪穴住居72（1/60）・出土遺物（1/4）



1．灰褐色砂（含、炭・褐黄色砂小塊）
2．褐灰色砂（含、炭多）
3．灰褐色砂（含、炭若干、褐黄色砂小塊）
4．暗褐色砂（含、炭・焼土）
5．暗褐色砂（含、炭）
6．炭
7．褐灰色砂（含、炭・焼土・褐黄色砂小塊多）
8．茶褐色砂（含、炭）
9．褐灰色砂（含、炭・焼土・褐黄色砂小塊多）
10．灰褐色砂
11．灰褐色砂

第382図　竪穴住居73（1/60）

竪穴住居72（第329･381図）

10Ｂ区中央部に位置し、竪穴住居11・23・24を削り、竪穴住居71、土壙135・136・235に削られている。

平面形は楕円形に復元されて、復元長径4.88m、短径3.8mを測る。深さ17cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されていない。床面は海抜高2.55m前後でほぼ平坦である。２本柱で、柱間は2.9mを測り、主軸を東西に置く。柱掘り方は長径53cmの楕円形で、深さ30～48cm、側壁との距離65cmである。中央やや東寄りで、径48cm、深さ27cmの土壙が検出され、中央穴と考えられる。その他の住居内構造については不明である。

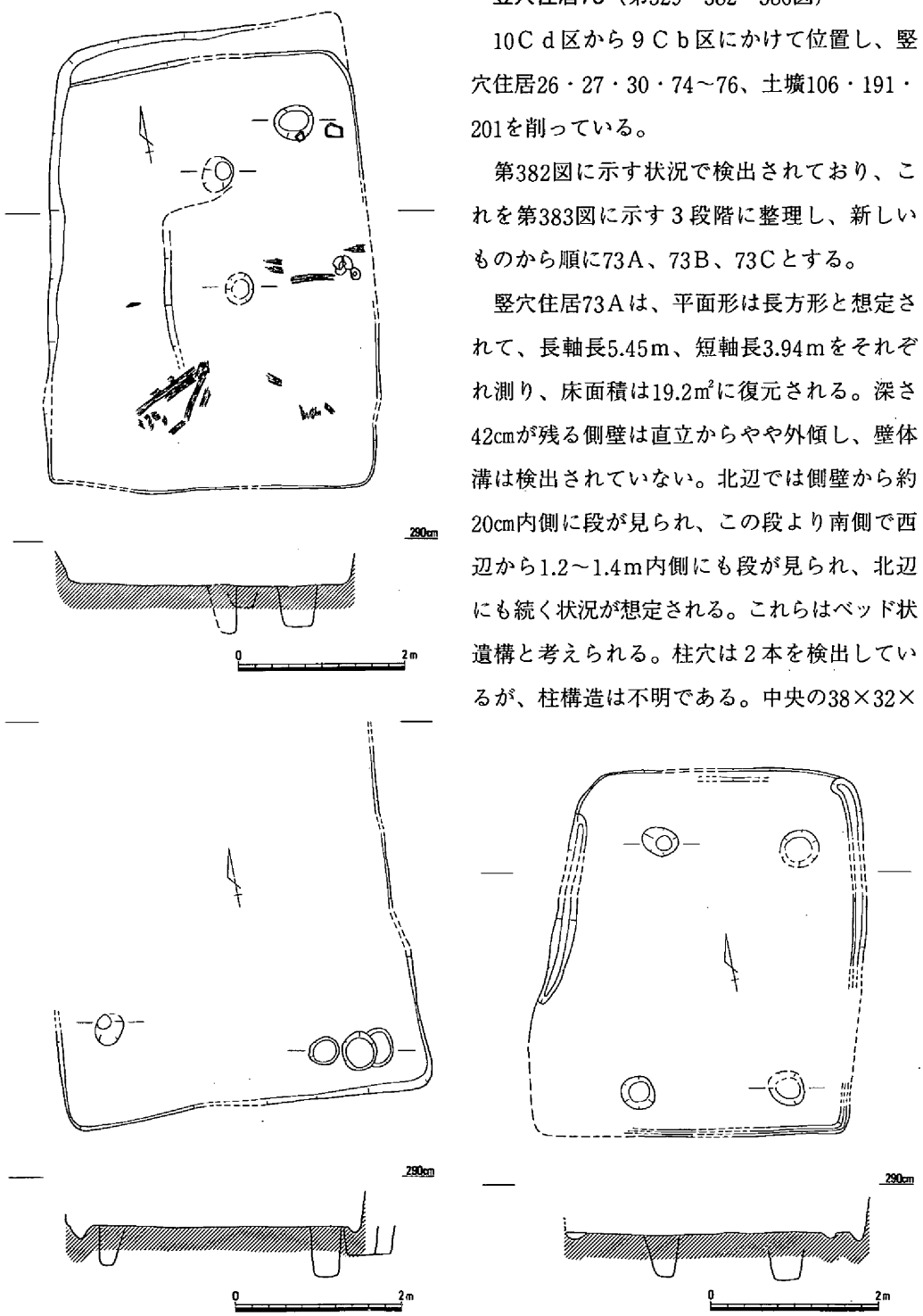
出土遺物には、壺1991、甕1992・1993・1996、高杯1998～2000、鉢1994・1995、台付鉢1997・2001、製塩土器2002等がある。1992は口縁部外面に櫛描沈線が巡らされて肩が張っており、1996の底部は平底で内面に指頭圧痕が残る。高杯はやや短脚であるが、杯部が深い。これらにより、時期は下田所式併行期に求められる。

竪穴住居73（第329・382～386図）

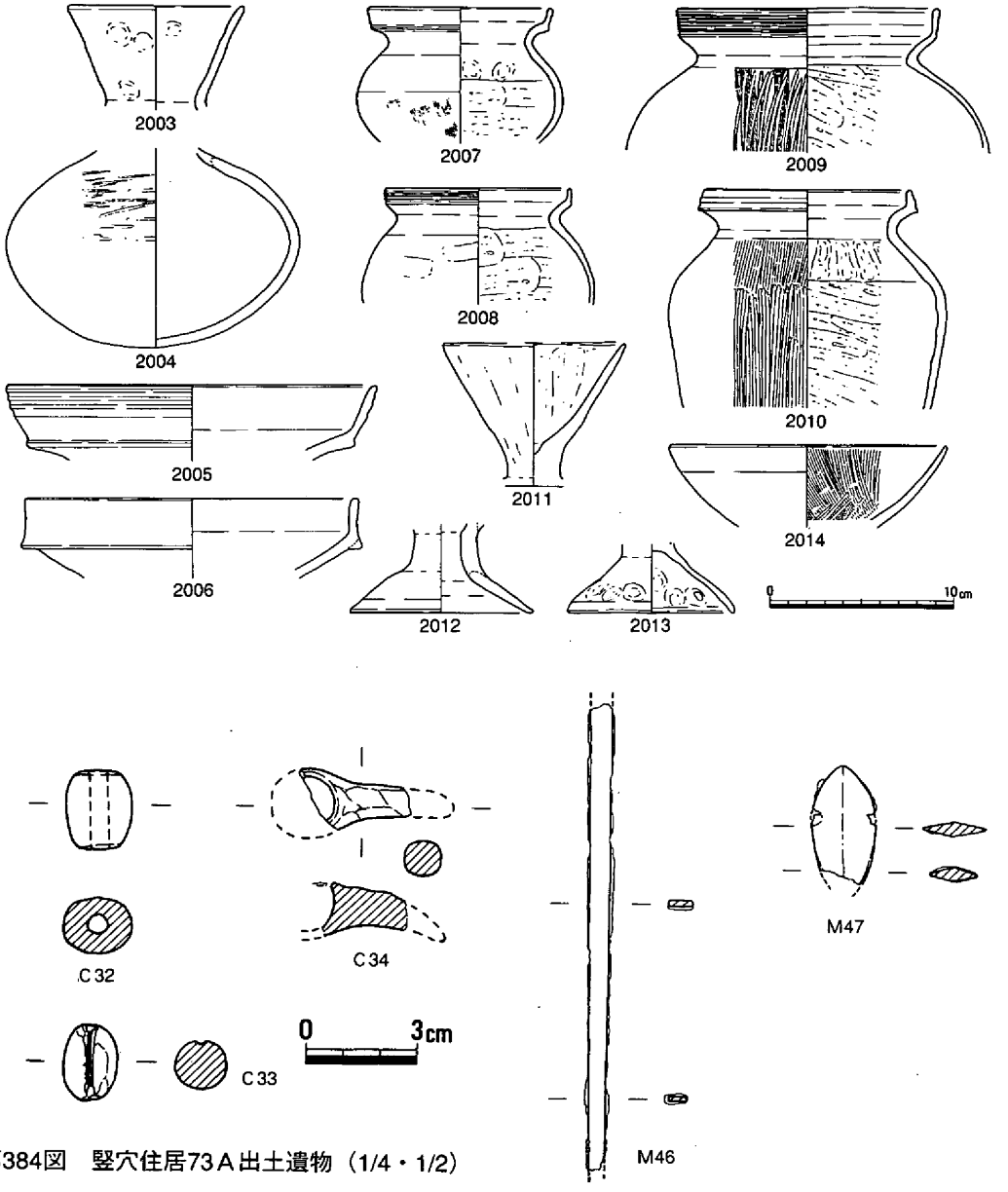
10Ｃｄ区から９Ｃｂ区にかけて位置し、竪穴住居26・27・30・74～76、土壙106・191・201を削っている。

第382図に示す状況で検出されており、これを第383図に示す３段階に整理し、新しいものから順に73Ａ、73Ｂ、73Ｃとする。

竪穴住居73Ａは、平面形は長方形と想定されて、長軸長5.45ｍ、短軸長3.94ｍをそれぞれ測り、床面積は19.2㎡に復元される。深さ42㎝が残る側壁は直立からやや外傾し、壁体溝は検出されていない。北辺では側壁から約20㎝内側に段が見られ、この段より南側で西辺から1.2～1.4ｍ内側にも段が見られ、北辺にも続く状況が想定される。これらはベッド状遺構と考えられる。柱穴は２本を検出しているが、柱構造は不明である。中央の38×32×



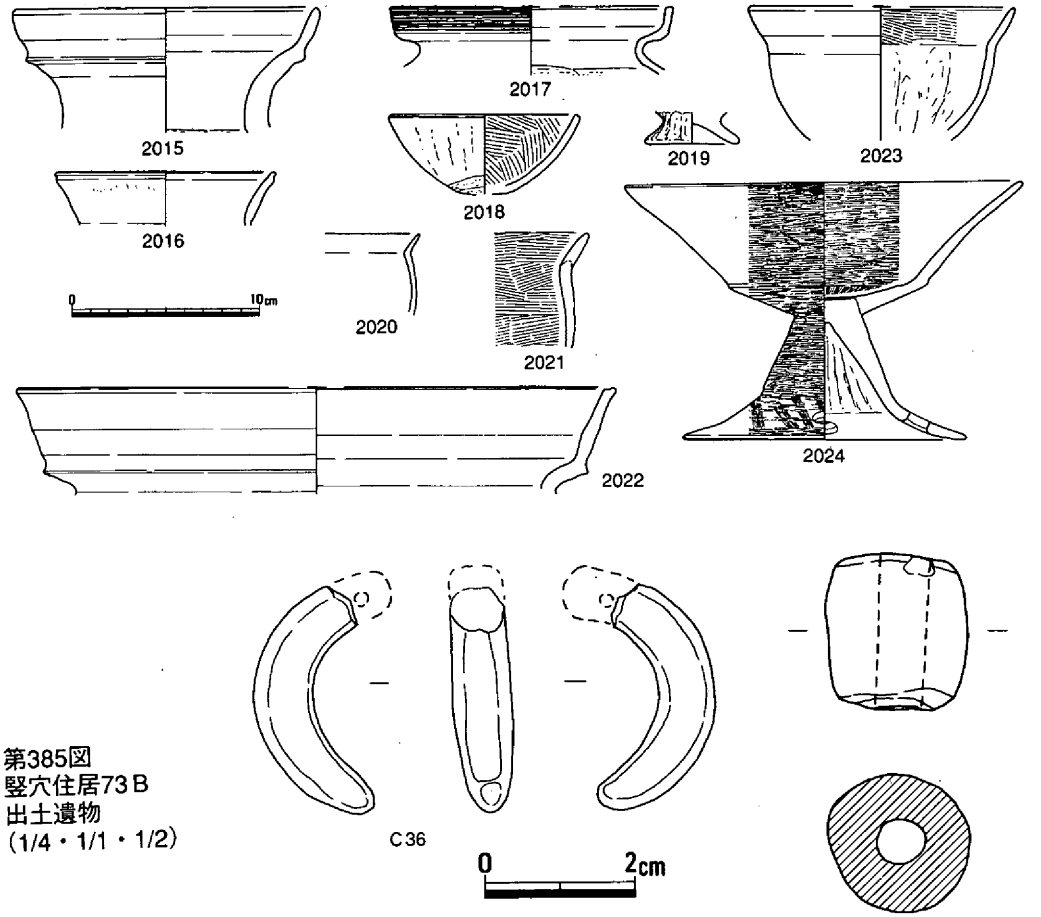
第383図　竪穴住居73Ａ（上）・73Ｂ（下左）・73Ｃ（下右）（1/80）



第384図　竪穴住居73Ａ出土遺物（1/4・1/2）

24cmの土壙は中央穴と考えうる。海抜高2.36mの床面には炭化材が残り、焼失が想定される。出土遺物には、壺2005・2006、直口壺2003・2004、甕2007～2010、鉢2014、台付鉢2011、脚2012・2013等の土器の他に、土錘Ｃ32・33、瓢形土製品Ｃ34、鉋Ｍ46、鉄鏃Ｍ47等がある。

竪穴住居73Ｂは、北半について不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、東西長4.34m、最大南北長4.1mを測る。深さ43cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されていない。４本柱と考えられ、可能性のある４本を検出して、柱間は2.6～3.3mである。中央穴そ

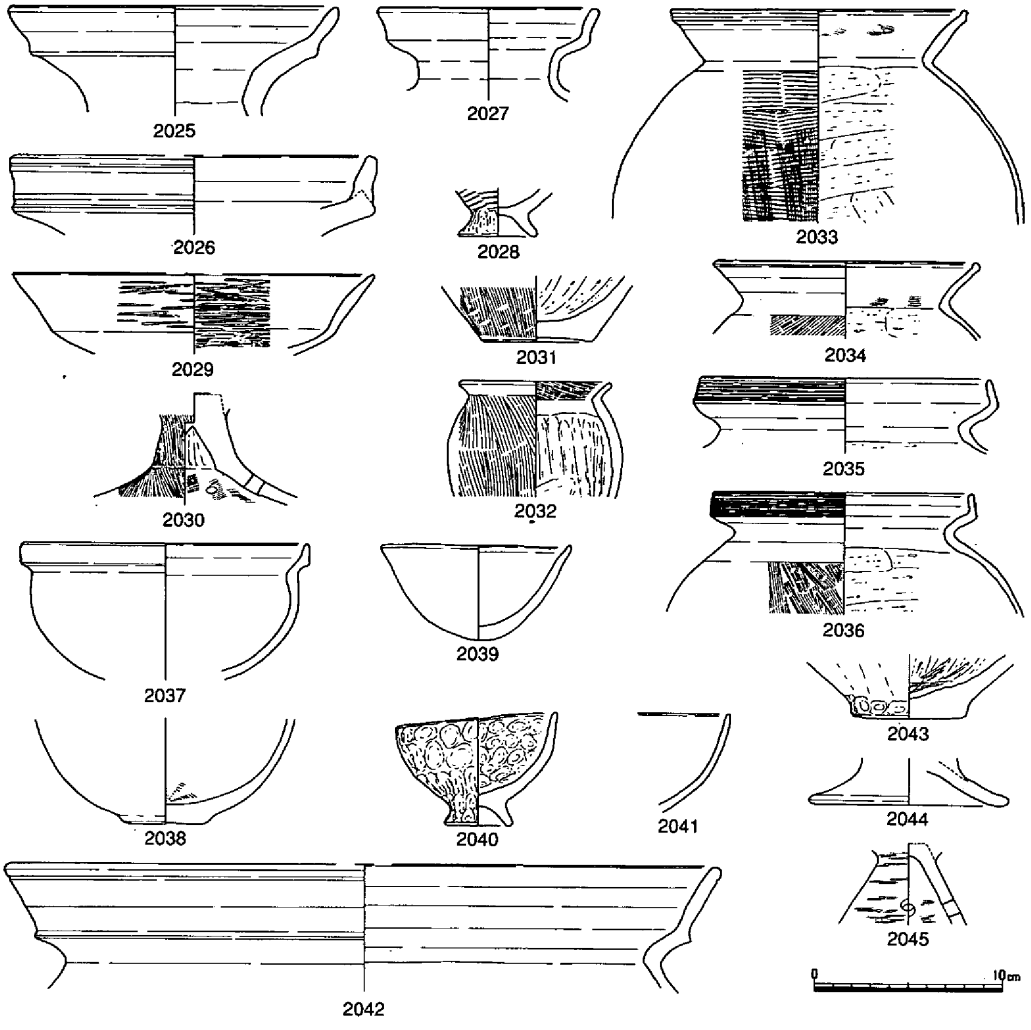


第385図
竪穴住居73Ｂ
出土遺物
(1/4・1/1・1/2)

の他の住居内構造については不明である。出土遺物には、壺2015、甕2016・2017、高杯2024、鉢2018・2020～2023、製塩土器2019等の土器の他に、土錘Ｃ35、土製勾玉Ｃ36等がある。

竪穴住居73Ｃは、平面形は不整な長方形を呈し、長軸長4.34ｍ、短軸長3.69ｍを測り、床面積は15.1㎡に復元される。深さ43㎝が残る側壁は直立し、各辺で壁体溝が検出されている。床面の海抜高は2.32ｍで、ほぼ平坦である。４本柱で、柱間1.6～3.0ｍを測り、主軸を南北方向に置いている。柱掘り方は長径45㎝前後、深さ49～58㎝の楕円形で、側壁との距離は25～60㎝である。中央穴その他の住居内構造については不明である。出土遺物には、壺2025～2027・2031、甕2032～2036、高杯2029・2030、鉢2037～2039・2041～2043、台付鉢2040・2044、器台2045、製塩土器2028等の土器の他に、土錘Ｃ37等がある。

各段階ともに2006・2010・2026・2029・2031・2037・2038・2043等の弥生土器の混入がみられ、2003・2004・2033等の畿内系の土器もみられるが、甕・鉢の口縁部を中心とする形態変化には大きな隔たりは認められない。



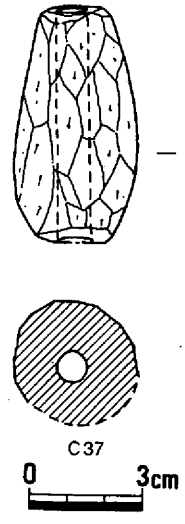
第386図　竪穴住居73Ｃ出土遺物（1/4・1/2）

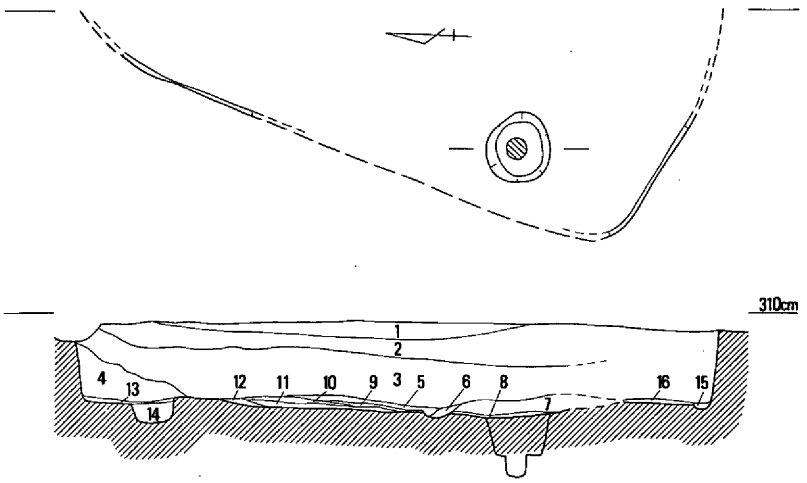
竪穴住居74（第329・387図）

10Ｃｄ区南東部に位置して、東半を調査区外に置き、竪穴住居75、土壙191を削り、竪穴住居73に削られている。

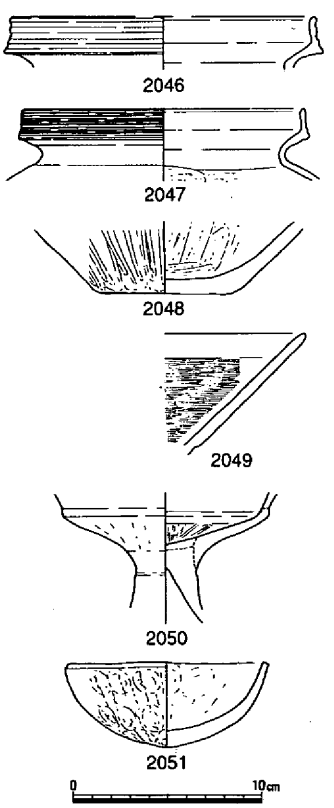
平面形は方形と想定され、最大南北長4.6ｍを測る。深さ75cmが知られる側壁は直立し、壁体溝は確認できなかった。４本柱と想定されるうちの１本を検出している。柱掘り方は、径45cmの不整円形で、深さ48cmを測り、柱痕跡を確認している。中央穴その他の住居内構造は不明である。埋土には、炭・焼土が多く含まれている。

出土遺物には、壺・甕・高杯・鉢等の土器がある。





1．暗灰褐色微砂（含、炭・焼土）
2．暗灰褐色微砂（含、炭・灰多、焼土）
3．暗灰褐色細砂（含、炭・焼土・黄褐色微砂小塊多）
4．暗灰褐色細砂（含、炭・焼土）
5．炭・灰
6．暗黄灰色砂
7．暗灰色粘質微砂（含、炭・焼土多）
8．炭
9．黄灰色細砂
10．暗灰色細砂
11．暗灰色細砂
12．灰色粗砂
13．暗灰色細砂（含、炭・焼土多）
14．褐灰色細砂（含、炭・黄褐色砂小塊）
15．暗灰褐色砂
16．灰褐色砂（含、黄灰褐色砂小塊多）



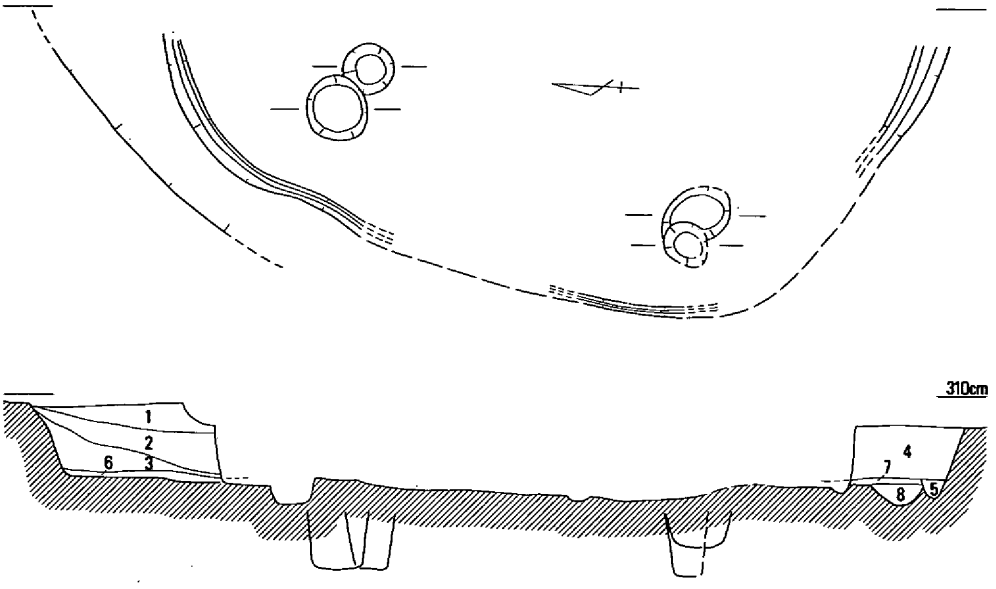
第387図　竪穴住居74（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居75（第329・388図）

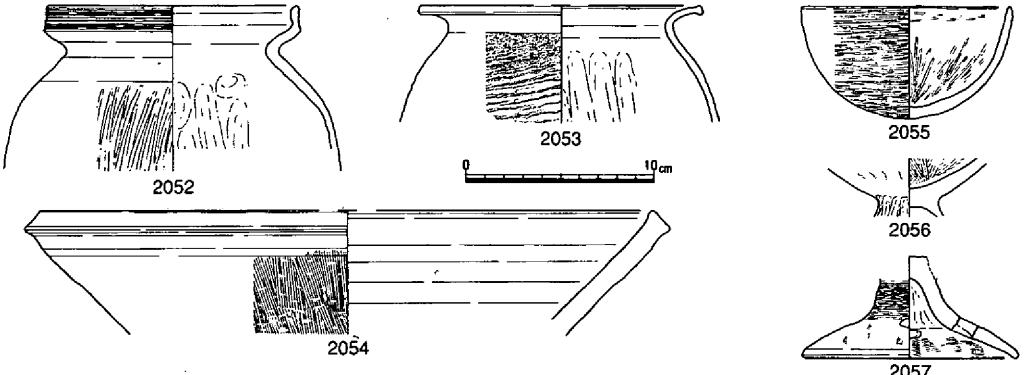
10Ｃｄ区南東部に位置し、東半を調査区外において、竪穴住居26・76、土壙93・191を削り、竪穴住居73・74に削られている。竪穴住居74と同一の住居で、その建替え前の状況とみなすこともできる。

平面形は隅丸方形と想定されるが規模は不明である。深さ63cmが残る側壁は外傾し、幅８～24cmの壁体溝が全周している。一部に貼床も認められる床面の海抜高は2.4ｍである。柱構造は４本柱と考えられ、そのうちの２本に相当すると考えられる４本がそれぞれ重複して検出されており、１回の建替えが想定される。柱間は3.0ｍを測り、柱掘り方は長径35～60cm、深さ28～45cmの楕円形で、側壁との距離は25～85cmである。中央穴その他の住居内構造については不明である。埋土には炭・焼土が含まれている。

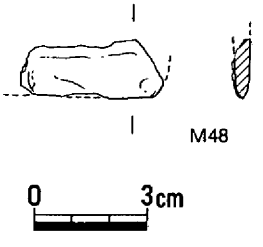
出土遺物には、甕2052・2053、高杯2057、鉢2054・



1．暗灰褐色細砂（含、炭・暗褐灰色細砂小塊）
2．暗灰褐色細砂（含、炭・灰褐色細砂小塊）
3．暗褐灰色細砂（含、炭・灰褐色細砂小塊多）
4．暗茶褐色砂（含、炭・焼土）
5．暗灰褐色砂（含、炭）
6．灰褐色砂（含、炭・暗黄灰色砂小塊）
7．暗灰褐色砂（含、灰色砂多）



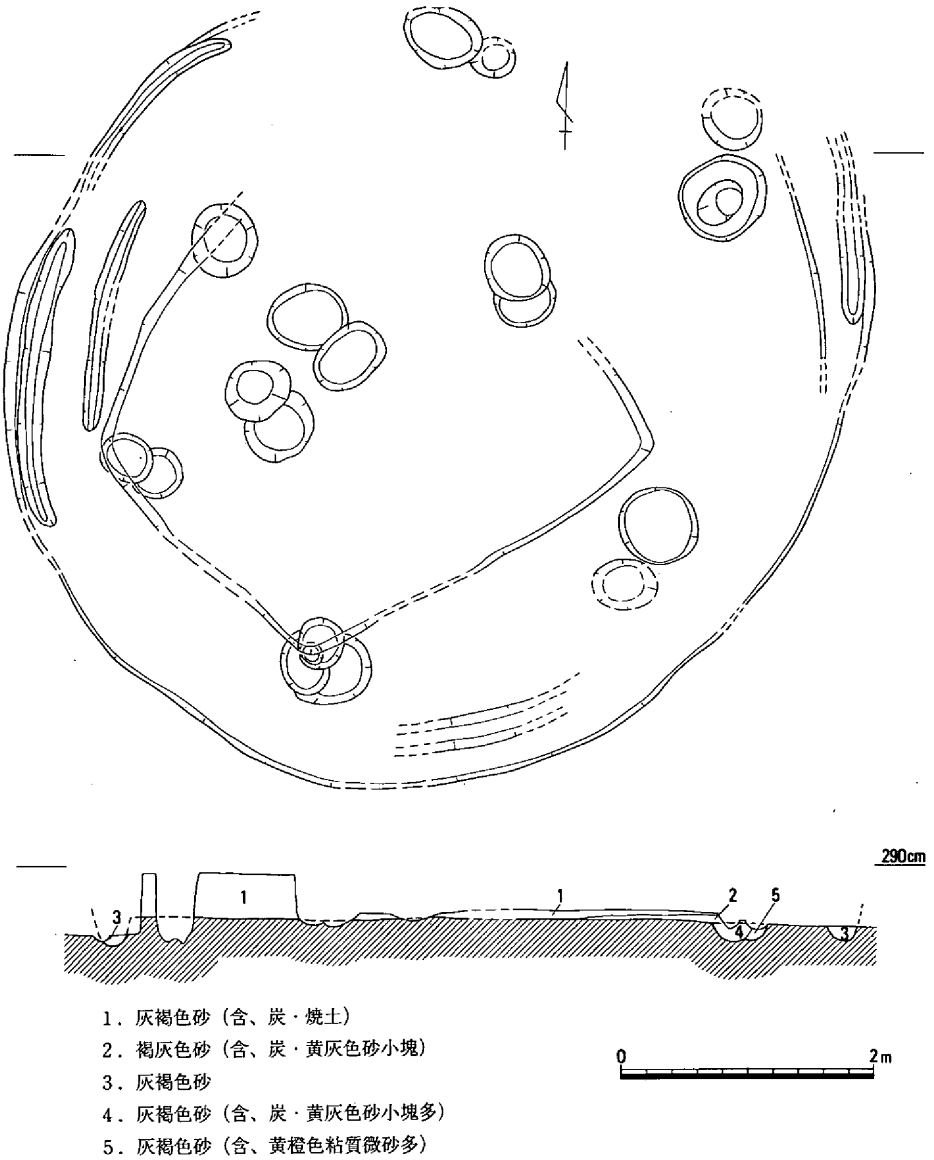
第388図　竪穴住居75（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）



2055、台付鉢2056等の土器の他に、鉄器M48がある。2052は口縁部外面に櫛描沈線が巡らされており、2053の体部外面はタタキメ調整されている。2054・2056・2057は弥生土器の混入とみなして、時期は古墳時代前半に比定される。

竪穴住居76（第329・389～392図、写真図版70）

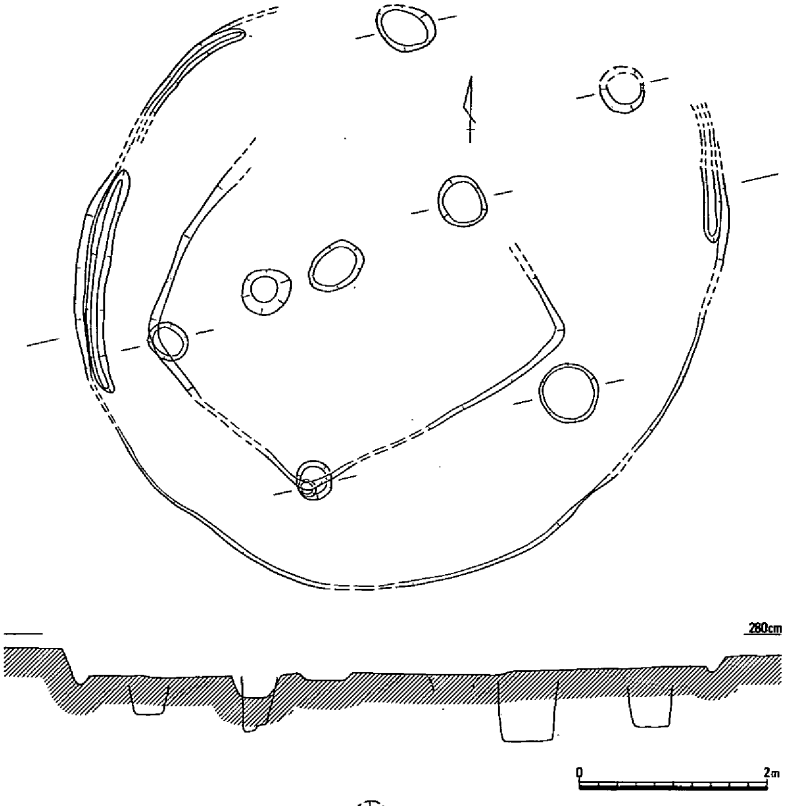
９Ｃｂ区北部に位置し、竪穴住居27・30・31・33、土壙106・108・201・203を削り、竪穴住居73～75、土壙248に削られている。第389図に示す状況で検出され、これを第390図の２段階

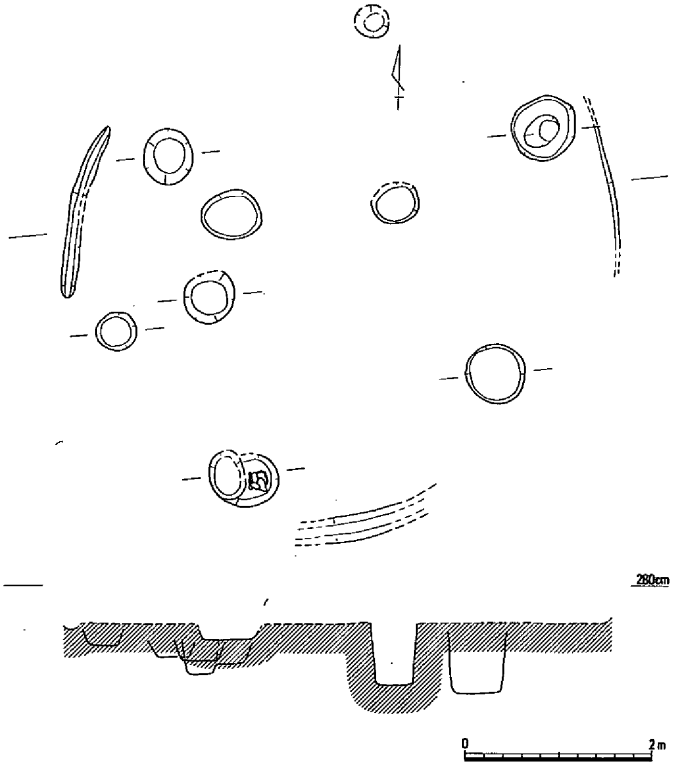


第389図　竪穴住居76（1/60）

に整理し、新段階を76Ａ、古段階を76Ｂとする。

竪穴住居76Ａは、平面形は楕円形と想定され、北端が不明であるが、最大長径6.5m、短径6.35mを測る。深さ30cmが残る側壁はほぼ直立し、北半では壁体溝が検出されている。南半では側壁から0.65～2.1m内側で、平面形が不整な方形を呈する段を検出しており、側壁と段の間がベッド状遺構と考えられる。床面の海抜高は、中央部で2.37m、ベッド上で2.45m前後である。柱構造は６本柱と考えられ、５本を検出している。柱間は2.2～3.4mで、主軸は北東から



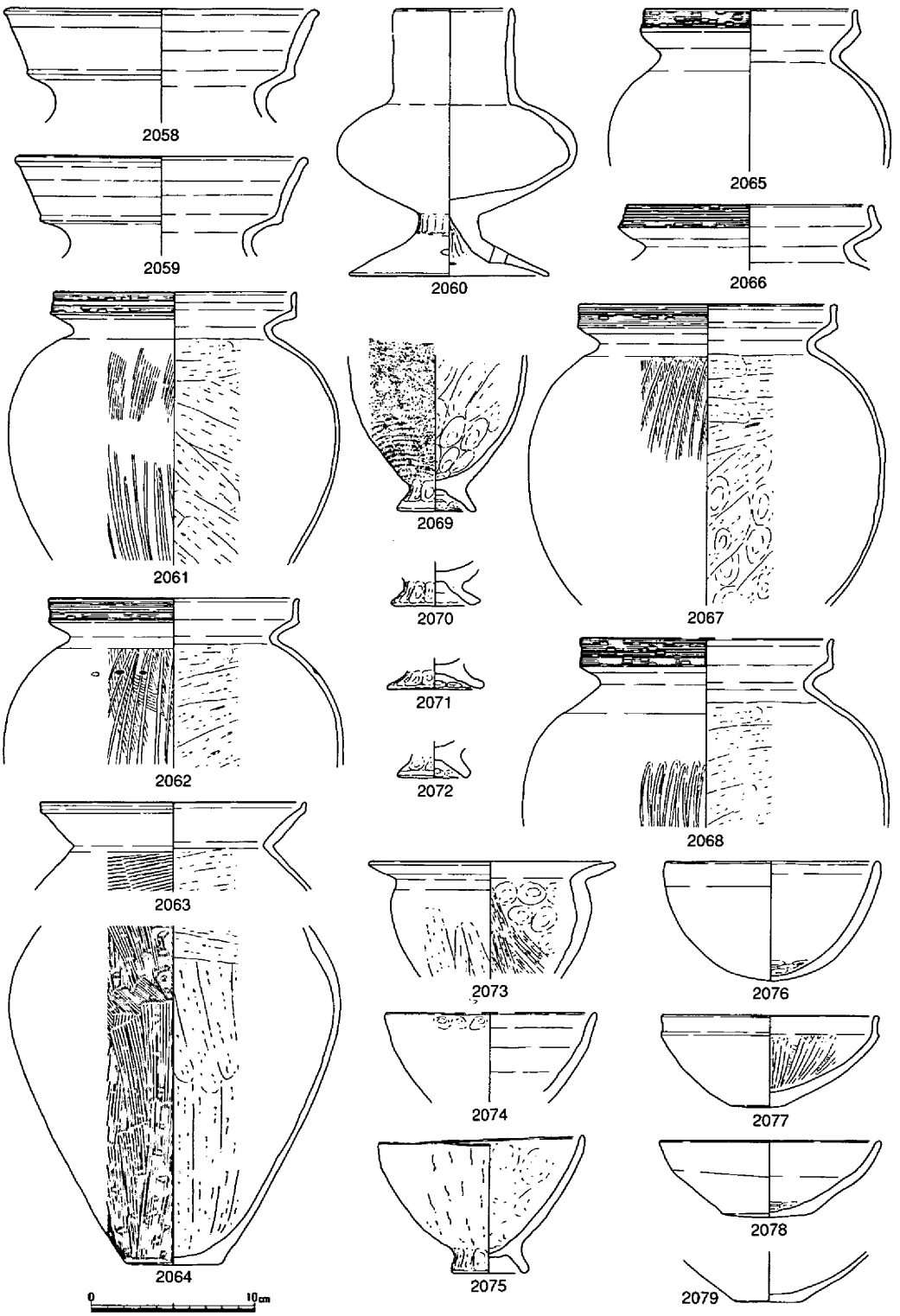


南西方向に置かれている。柱掘り方は長径32～64cmの楕円形で、深さ41～73cmを測り、側壁との距離は50～80cmである。中央部では、長径60cm前後の浅い楕円形の土壙３基を検出しているが、性格を決めがたい。埋土には炭が含まれている。

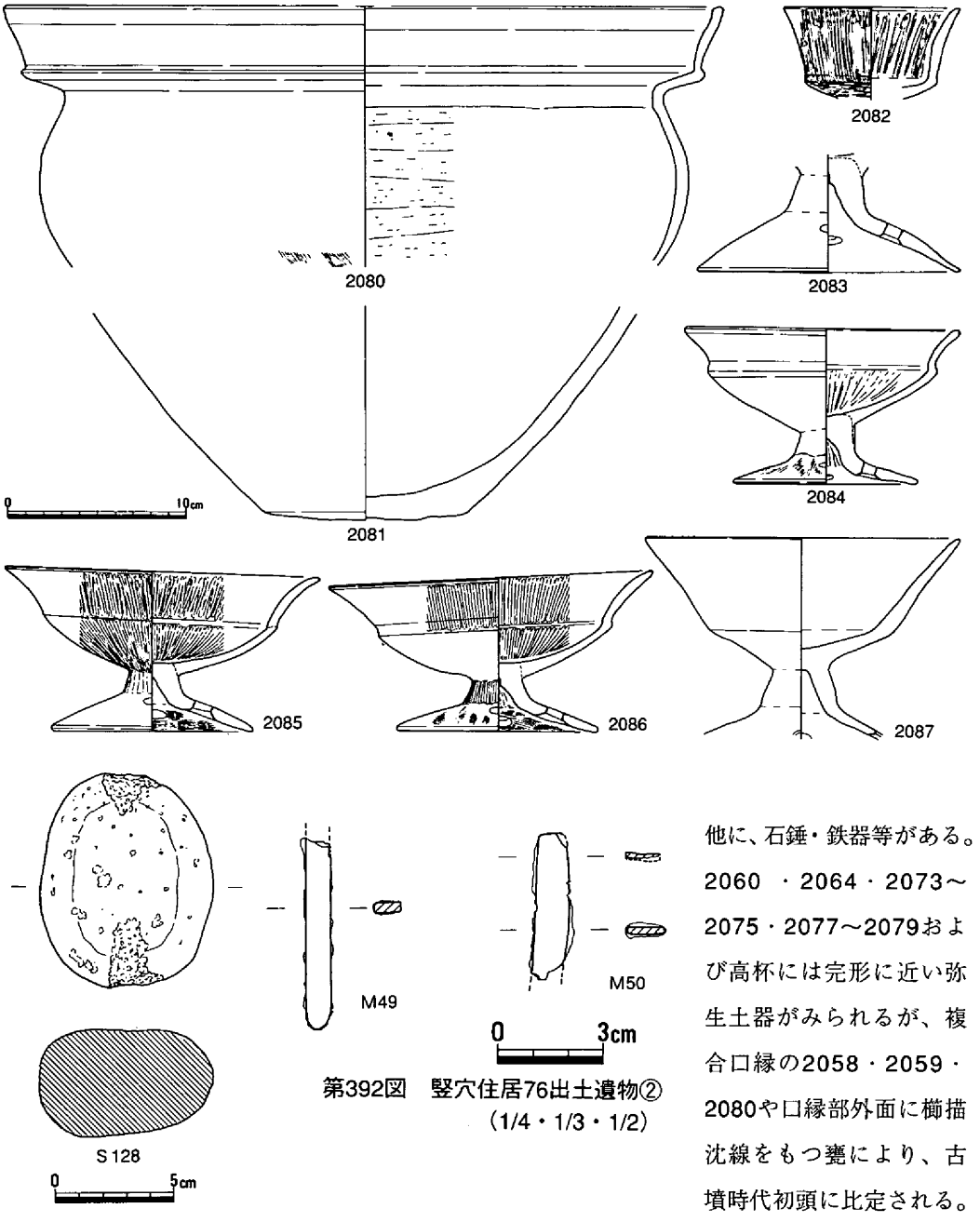
竪穴住居76Ｂも平面形は楕円形と想定され、東西径5.78ｍを測り、西辺と南辺で部分的に壁体溝が検出されている。６本柱で、柱間は2.0～3.1ｍを測り、主軸は76Ａと同様である。中央部では長径48～64cmの楕円形の土壙を検出している。その他の住居内構造については不明である。

出土遺物には、壺・脚付直口壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・製塩土器等の土器の

第390図　竪穴住居76Ａ（上）・76Ｂ（下）(1/80)



第391図　竪穴住居76出土遺物①（1/4）



第392図　竪穴住居76出土遺物②
（1/4・1/3・1/2）

他に、石錘・鉄器等がある。2060・2064・2073～2075・2077～2079および高杯には完形に近い弥生土器がみられるが、複合口縁の2058・2059・2080や口縁部外面に櫛描沈線をもつ甕により、古墳時代初頭に比定される。

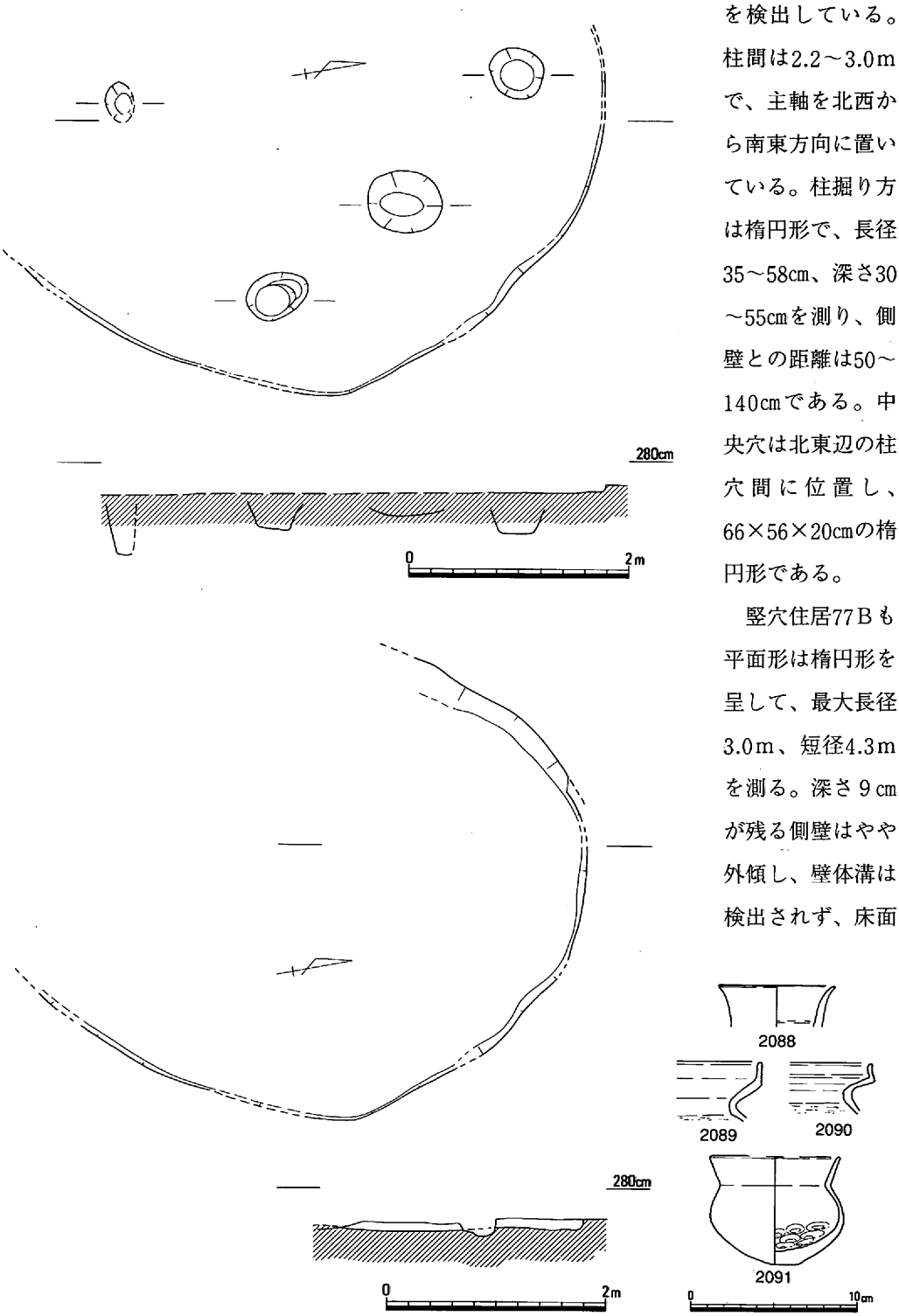
竪穴住居77（第329・393図、写真図版71）

10Ｂｃ区南東部に位置し、土壙164・165に西接し、竪穴住居78に削られている。１回の建替えが想定され、新段階を77Ａ、古段階を77Ｂとする。

竪穴住居77Ａは、平面形は楕円形と想定され、西半が不明であるが、最大南北長5.5ｍを測る。海抜高2.54ｍの床面では、壁体溝は検出されていない。柱構造は４本柱と考えられ、３本

を検出している。柱間は2.2～3.0ｍで、主軸を北西から南東方向に置いている。柱掘り方は楕円形で、長径35～58㎝、深さ30～55㎝を測り、側壁との距離は50～140㎝である。中央穴は北東辺の柱穴間に位置し、66×56×20㎝の楕円形である。

竪穴住居77Ｂも平面形は楕円形を呈して、最大長径3.0ｍ、短径4.3ｍを測る。深さ９㎝が残る側壁はやや外傾し、壁体溝は検出されず、床面



第393図　竪穴住居77Ａ（上）・77Ｂ（下）（1/60）・出土遺物（1/4）

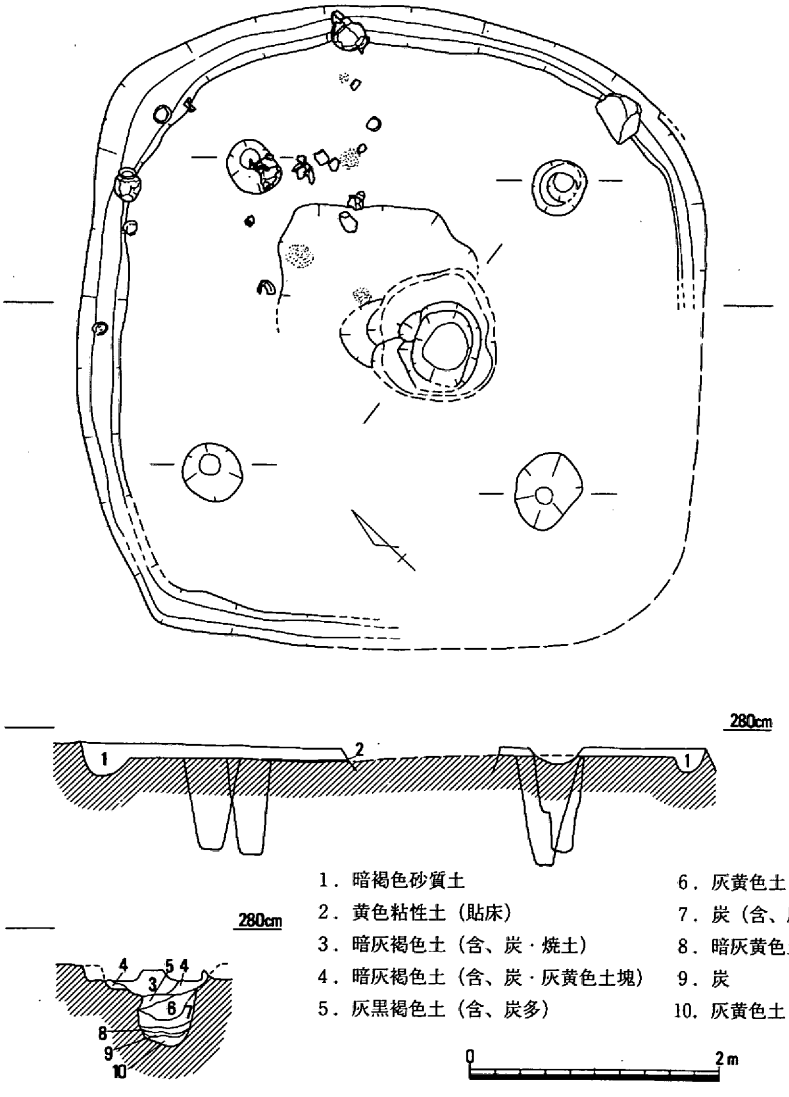
の海抜高は2.44ｍである。柱穴その他の住居内構造は不明である。

出土遺物には、直口壺2088、甕2089・2090、鉢2091等の土器があり、2089・2090の口縁部外面には櫛描沈線が巡らされている。

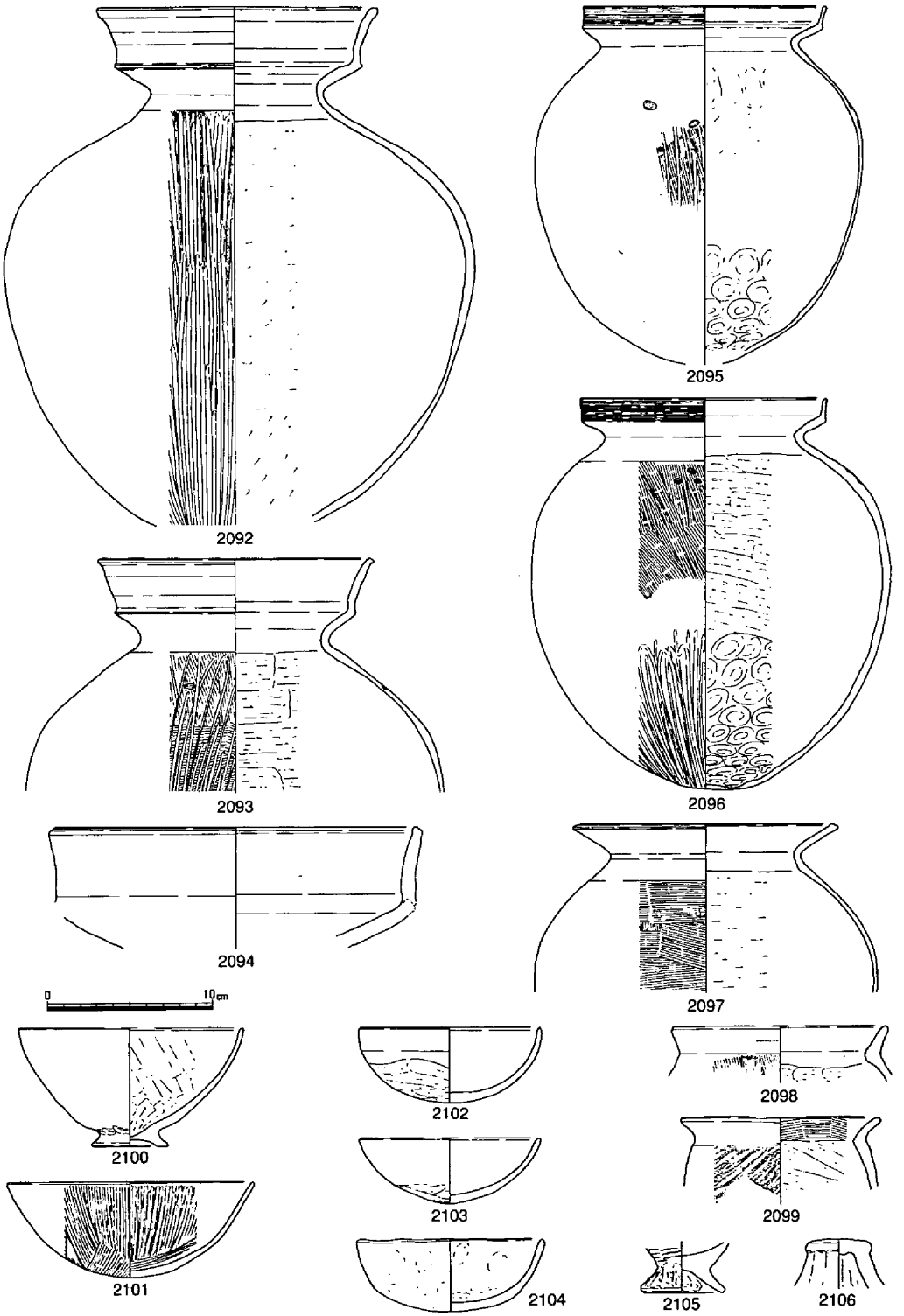
竪穴住居78（第329・394～396図、写真図版71）

10Ｂ区から９Ｂ区にかけて位置し、竪穴住居77・79、土壙138を削り、土壙144・252に削られている。

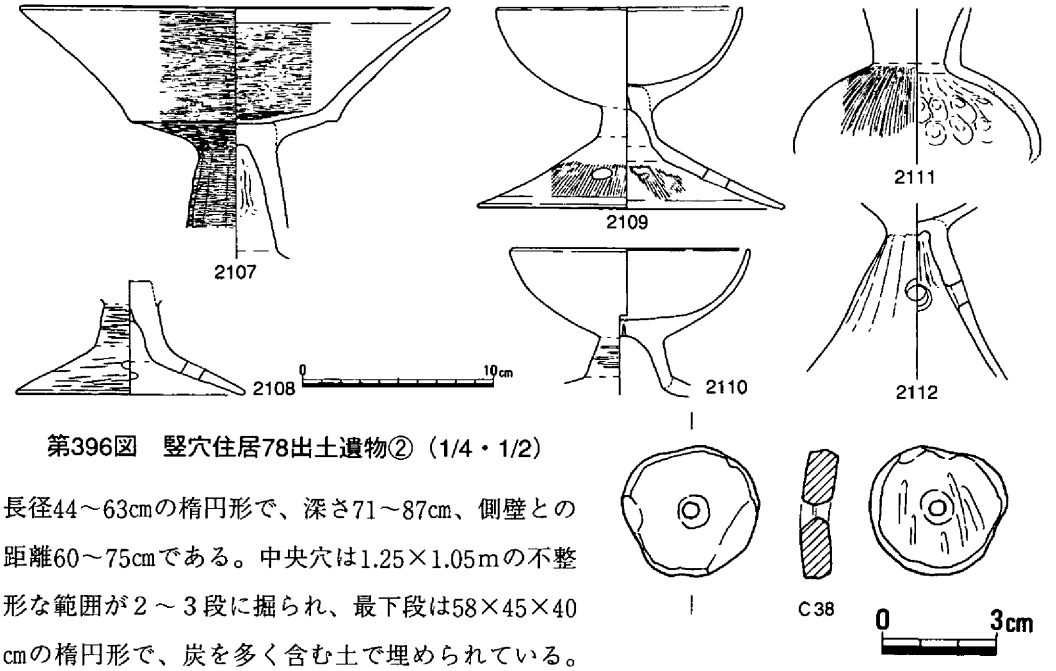
南隅を欠くが、平面形は隅丸方形に復元され、長軸長5.14ｍ、短軸長4.96ｍを測り、床面積は20.7㎡となる。深さ14㎝が残る側壁はほぼ直立し、壁体溝が全周している。部分的に貼床された床面の海抜高は2.53ｍであり、側壁から1.25～1.4ｍ内側の中央部北半には、高さ３㎝の段が見られ、側壁と段の間がベッド状遺構ともみなされる。４本柱で、柱間は2.45～2.65ｍを測り、主軸は北西から南東方向に置かれている。柱掘り方は



第394図　竪穴住居78（1/60）



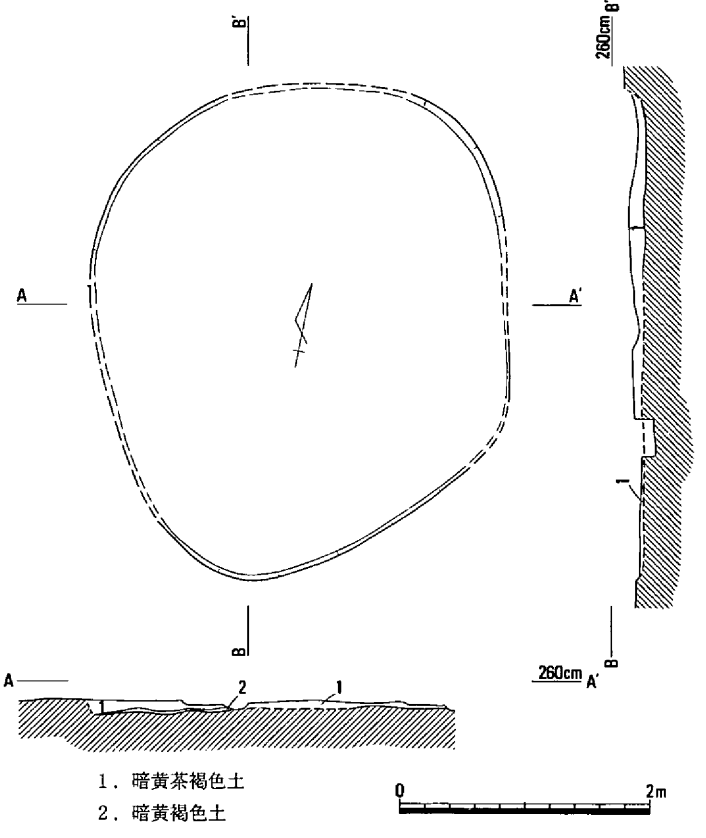
第395図　竪穴住居78出土遺物①（1/4）



第396図　竪穴住居78出土遺物②（1/4・1/2）

長径44～63cmの楕円形で、深さ71～87cm、側壁との距離60～75cmである。中央穴は1.25×1.05mの不整形な範囲が２～３段に掘られ、最下段は58×45×40cmの楕円形で、炭を多く含む土で埋められている。床面では、中央穴の北側で径８～20cmの焼土面４か所と、東側壁裾で台石を検出している。

出土遺物には、壺・直口壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・小形器台・蓋・製塩土器等の土器の他に、土器片転用紡錘車C38がある。2095・2096は丸底で、体部最大径は比較的高い位置にあり、杯部に２形態がある高杯の脚柱部は中空になっている。2098～2100・2111は弥生土器の混入とみなされ、時期は亀川上層式併行期に比定される。



第397図　竪穴住居79Ａ（1/60）

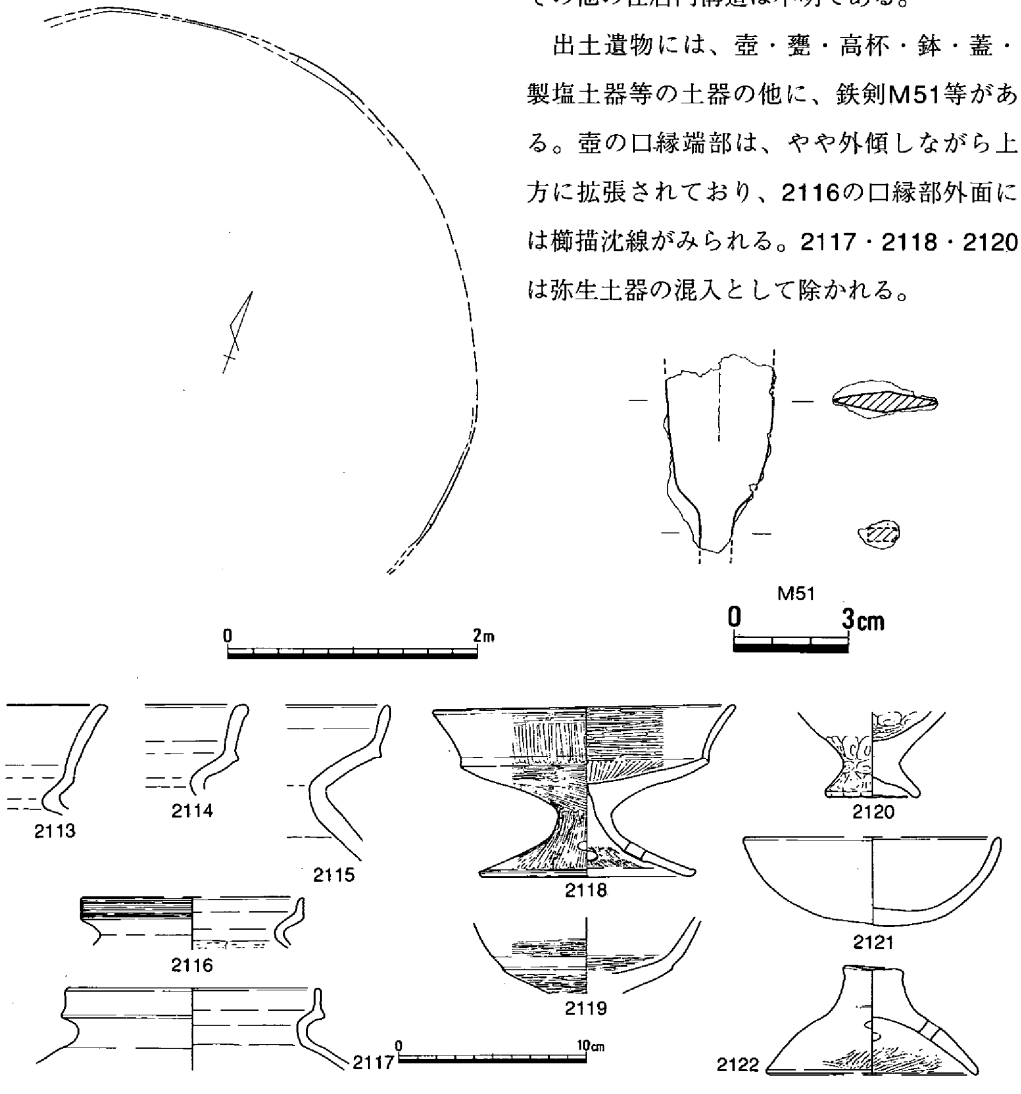
竪穴住居79（第329・397・398図、写真図版71）

９Ｂａ区北部に位置し、竪穴住居78・80・81、土壙252に削られている。１回の建替えが想定され、新段階を79Ａ（第397図）、古段階を79Ｂ（第398図）とする。

竪穴住居79Ａは、平面形は楕円形に復元され、長径3.8m、短径3.33mをそれぞれ測り、床面積は10.1㎡となる。深さ14cmが残る側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されていない。床面には若干の凹凸があるが、海抜高は2.4m前後である。柱穴その他の住居内構造は不明である。

竪穴住居79Ｂは、南半について不明であるが、平面形は楕円形と想定され、最大長径4.95mを測る。側壁はほぼ直立し、壁体溝は検出されておらず、床面は79Ａとほぼ同様である。柱穴その他の住居内構造は不明である。

出土遺物には、壺・甕・高杯・鉢・蓋・製塩土器等の土器の他に、鉄剣M51等がある。壺の口縁端部は、やや外傾しながら上方に拡張されており、2116の口縁部外面には櫛描沈線がみられる。2117・2118・2120は弥生土器の混入として除かれる。



第398図　竪穴住居79Ｂ（1/60）・竪穴住居79出土遺物（1/2・1/4）

竪穴住居80（第329・399図）

９Ｂａ区中央部に位置し、西半を調査区外に置いて、竪穴住居79・81を削っている。

調査手順の関係で南端についても不詳であり、全容を明らかにできないが、平面形は隅丸方形と考えられ、最大南北長3.1ｍを測る。深さ48㎝が残る側壁は、裾部が不明瞭に外傾しており、壁体溝は検出されていない。床面の海抜高は1.38ｍで、全体のなかでも最も低い床面となる。柱穴その他の住居内構造については不明である。

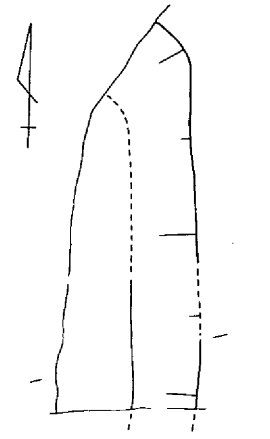
出土遺物には、壺2123、甕2124・2125、高杯2126等の土器があり、2126は短脚で裾部が大きく膨らんで開いている。

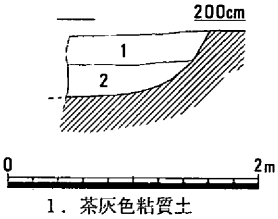
時期は、古墳時代初頭に比定される。

竪穴住居81（第329・400図）

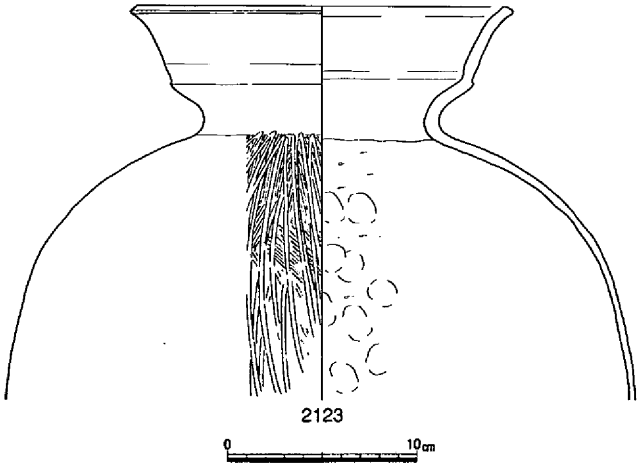
10Ｂｃ区から９Ｂａ区にかけて位置し、西半を調査区外において、竪穴住居79、土壙36を削り、竪穴住居80に削られる。

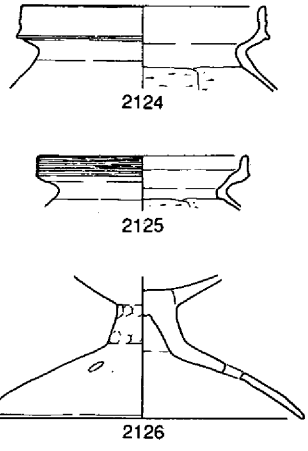
第400図に示すように、２回の建替えが想定されるが、いずれも全容は不明である。建替えの順は、先に南へずらし、その後やや北へ戻して少し西へずれている。各段階とも平面形は方形ないし隅丸方形と想定される。最大南北長は、3.9m、1.6m、3.0ｍをそれぞれ測り、壁体溝は検出されていない。床面の海抜高は2.1ｍから1.97ｍへと低くなっている。柱穴その他の住居内構造については、各段階とも不明である。



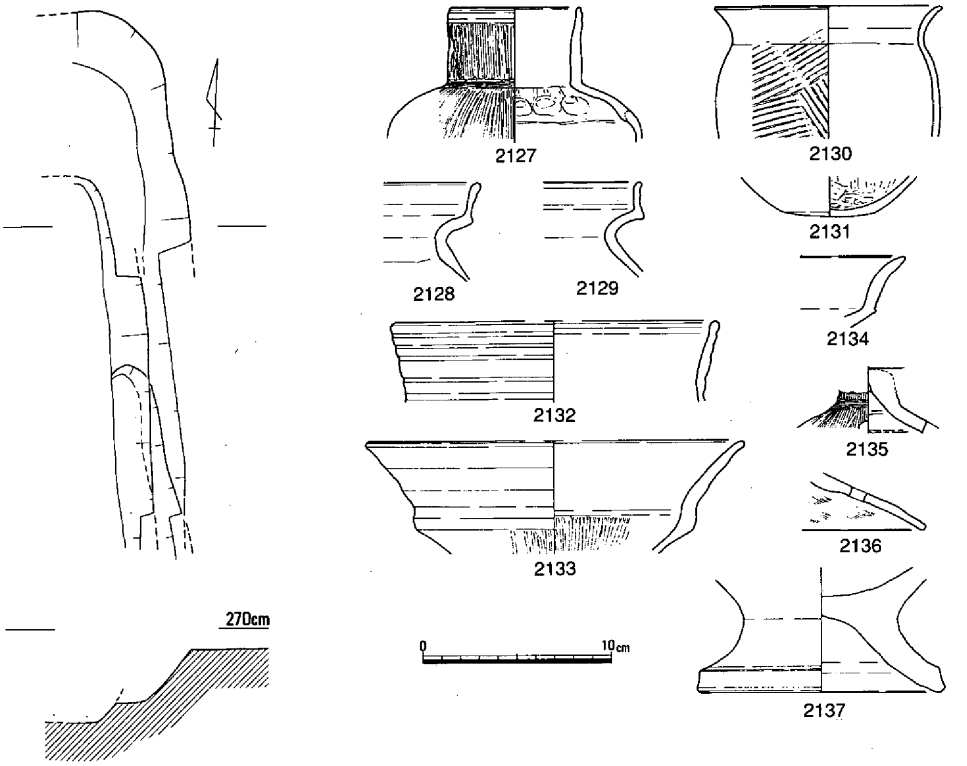


1．茶灰色粘質土
2．暗灰茶色砂質土





第399図　竪穴住居80（1/60）・出土遺物（1/4）



第400図　竪穴住居81（1/60）・出土遺物（1/4）

出土遺物として掲載したものはいずれも弥生土器として扱われるものであるが、周辺遺構との関係から、時期は古墳時代初頭に比定される。（光永）

竪穴住居82（第329・401図）

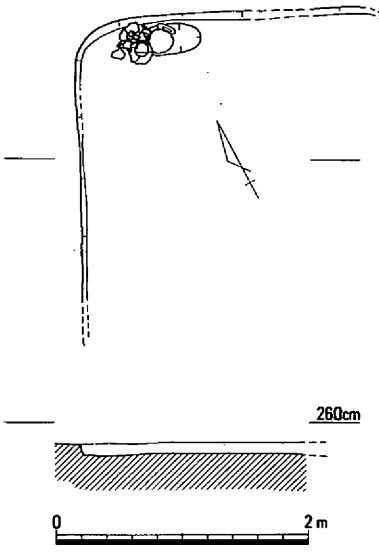
９Ｂｂ区において南側と東側を竪穴住居84と土壙139によって切られ、僅かに北西側のコーナー部分を中心に検出がなされた。海抜2.45ｍで新しい柱穴等で断続するものの直線的な肩口の存在が確認されたが、床面までは浅く比高差約10cmが計測されたにすぎない。住居の平面形は方形を基調とすることは明白であるが、規模等の詳細については不明である。床面からは北西隅で浅い楕円形の窪み状の土壙が見られ、土器の遺存が確認されたが柱穴・壁体溝等の関係遺構についてはまったく検出できなかった。

出土遺物は、甕３点が確認された。**2138**は、当該地域において普遍的に見られる器種で、体部内面ヘラケズリ調整によって薄く仕上げられ、口縁端部を長く上方へと拡張を見せる。型式的には才ノ町式併行に比定されるものである。肩部外面には性格不明な押圧痕跡が２点認められた。**2139**は、外面底部にタタキ痕跡を残し全体的にはハケメ・ミガキ調整が、内面はハケメの後ケズリ調整が認められた。胎土中には長石・石英に混じって角閃石の混和が見られた。

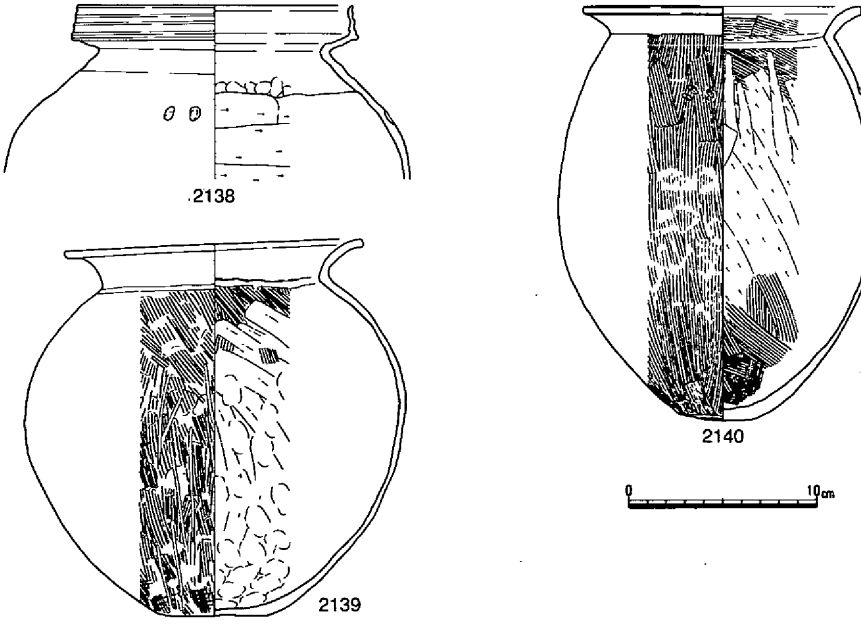
2140は、内面ハケメとケズリによる調整が見られ、2139と共に他地域からの搬入品の可能性を示唆させるが、外面肩部には2138に見られた押圧痕跡が３点確認され特異な様相を呈する。

竪穴住居83（第329・402図）

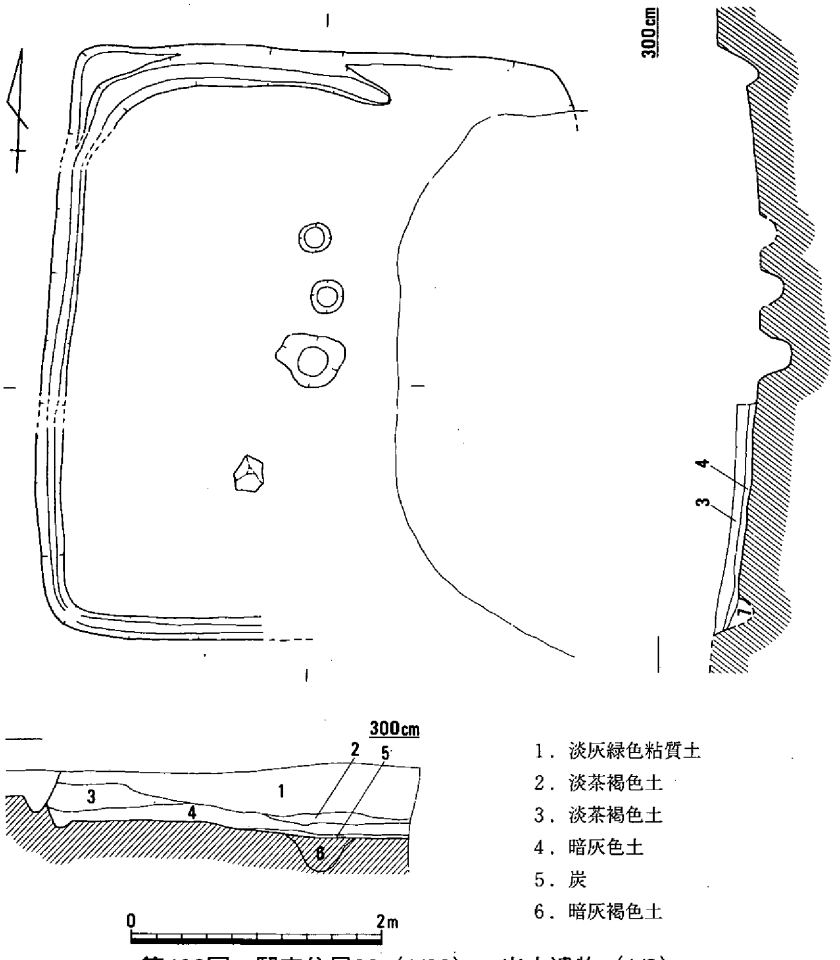
９Ｂｂ区の海抜2.80ｍにおいて東側を土壙250に、東側一部が竪穴住居84によって切られた状況で検出された。住居は、平面形が東西・南北方向を基調とした方形を呈し、南北4.65ｍ、東西4.00ｍの規模で、検出面から床面までの深さ約40㎝を測った。床面からは壁体溝と中央穴、さらには径25㎝前後の小穴が２本散見されたものの柱穴については精査を行ったにも拘らず確認できなかった。中央穴は、想定される住居対角線上の交点に位置するもので、径40㎝で深さ25㎝の規模を測った。中央穴の南西約70㎝の地点には砥石を転用したと考えられる石錘の遺存が確認された。



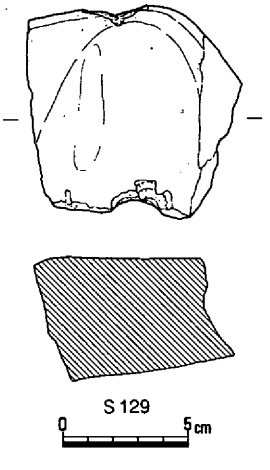
出土遺物には、図化出来なかったが径10㎝を前後すると考えられる甕と製塩土器が散見された程度であった。時期的には、僅かながら土器の型式とこの住居を切った竪穴住居84との関係により、およそ下田



第401図　竪穴住居82（1/60）・出土遺物（1/4）



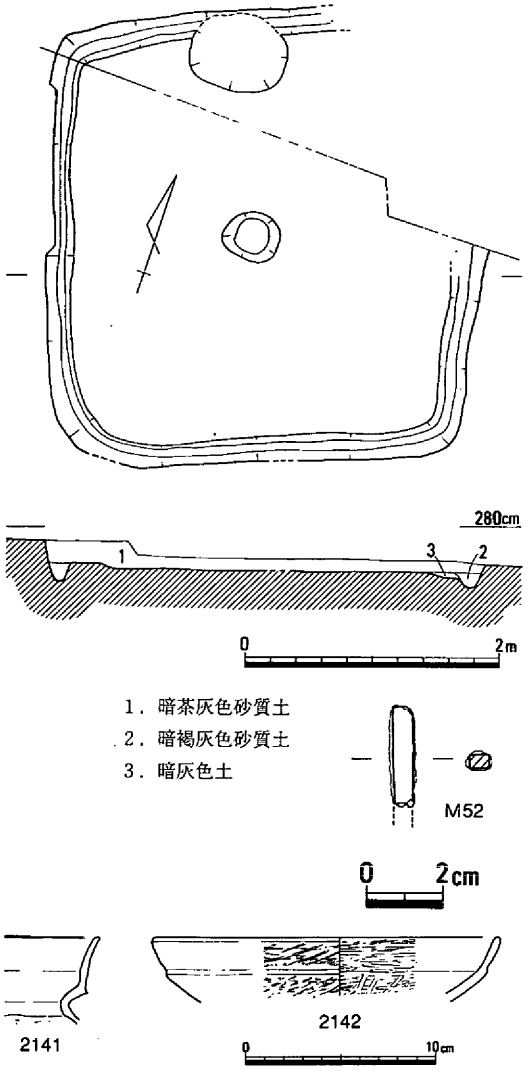
第402図　竪穴住居83（1/60）・出土遺物（1/3）



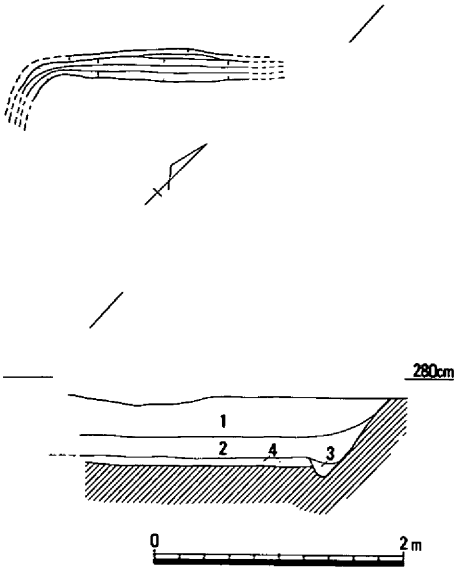
所から亀川上層の範疇に比定される。

竪穴住居84（第329・403図）

９Ｂ区において竪穴住居83の埋積後、これの西側一部を切り、重複した状況で検出された。基本的には東西・南北方向を基調とした平面形を見せるもので、南北3.60m、東西3.45m、検出面から床面までの深さ約20cmを測った。床面には、北辺側中央部に方形土壙と床面中央部の各コーナーの対角線の交点にあたる部分に覆土中に焼土と炭を含んだ中央穴の存在が確認された。ただし主柱穴となる柱穴の存在については竪穴住居83と同じく精査にも拘らず検出できなかった。本来柱穴を伴わない住居であった可能性も否定できない。方形土壙は長軸75cm、幅60



第403図　竪穴住居84（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）



1．暗灰褐色砂（含、炭・焼土）
2．暗灰褐色砂（含、炭・焼土・黄灰褐色小塊多）
3．暗灰褐色砂（含、黄灰褐色砂塊多）
4．黄灰色粗砂

第404図　竪穴住居85（1/60）

cmを測るものであったが、明瞭な状態での検出は出来なかった。

出土遺物には、甕と高杯が見られた。甕は口縁部が二重口縁をなし、外面稜線が鋭角的な特徴を有することで山陰地方との関係が示唆される。

時期的には、下田所段階に比定されるものであろう。　（島崎）

竪穴住居85（第329・404図）

９Ｃｄ区南東部に位置し、東半を調査区外に置き、土壙45・210を削っている。

平面形は方形と想定されるが、全容は不明であり、最大南北長2.5mが知られるのみである。調査区東側壁の観察によれば、深さ55cmが残る側壁は外傾しており、幅20cm、深さ15cm前後の壁体溝は平面でも確認されている。第４層を貼床とみなしうる床面は、海抜高2.1mを測り、埋土には炭・焼土が含まれている。その他の住居内構造は不明である。

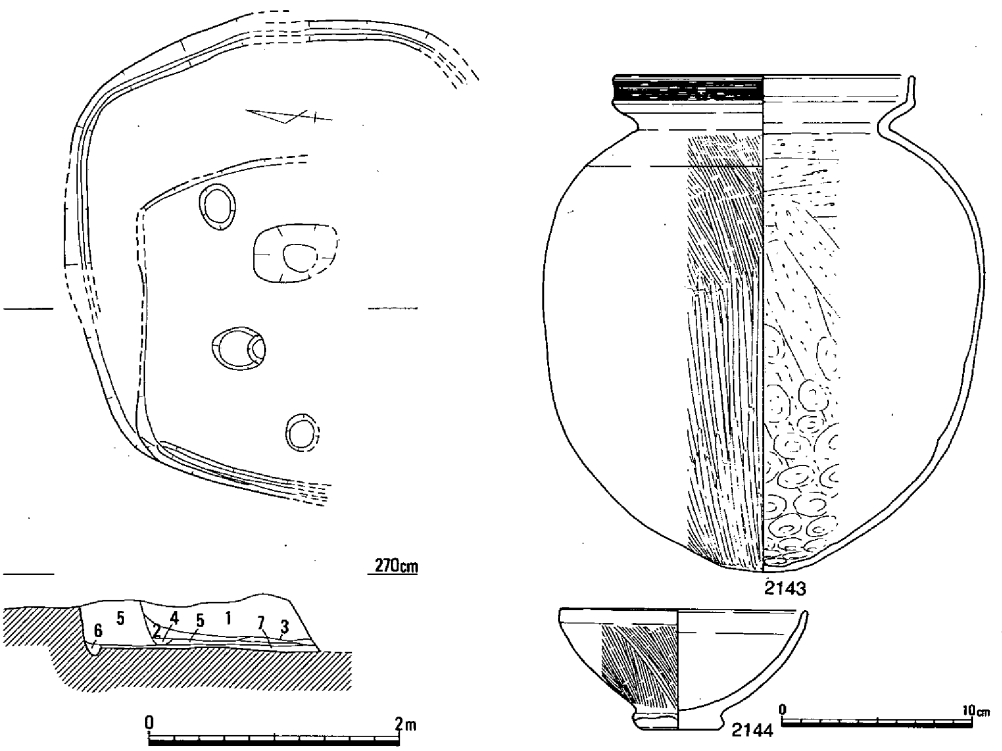
遺物は出土していないが、古墳時代初頭に属するものと考えられる。

竪穴住居86（第329・405・406図、写真図版72）

９Ｃｄ区に位置し、竪穴住居35、土壙45・213・214を削っており、調査手順の関係で、竪穴住居88・89、土壙215との先後関係は不明である。第405図に示すように１回の建替えが行なわれており、新段階を86Ａ、古段階を86Ｂとする（第406図）。

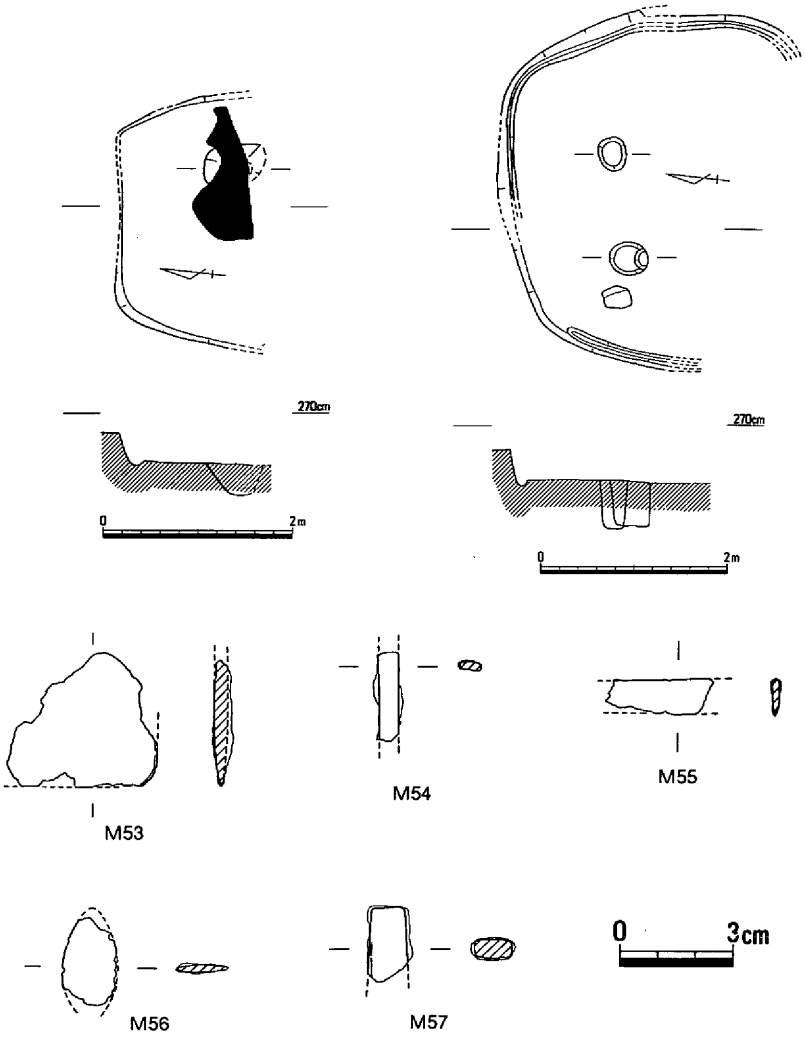
竪穴住居86Ａは、平面形は不整な方形と想定され、南半が不明であるが、東西長2.66ｍ、最大南北長1.5ｍを測る。深さ31㎝が残る側壁はほぼ直立し、断面観察では壁体溝が認められるが、平面では検出できなかった。床面の海抜高は2.17ｍで、東寄りに55×45×30㎝の楕円形の土壙が位置し、その周辺に炭・灰の掻き出しが広がることから中央穴と考えられる。柱穴その他の住居内構造は不明である。埋土には炭・焼土が含まれている。

竪穴住居86Ｂは、平面形は方形に復元され、東西長3.86ｍ、最大南北長2.9ｍを測る。深さ53㎝が残る側壁はほぼ直立し、北辺の西半を除いて壁体溝が検出されている。床面は貼床されており、ほぼ平坦で海抜高2.08ｍである。柱構造は４本柱と考えられ、２本を検出した。柱間



1．暗褐灰色砂（含、黄褐色砂小塊多、炭・焼土・礫）
2．暗褐灰色砂（含、暗黄褐色土小塊）
3．炭・灰・焼土
4．暗褐灰色砂
5．暗灰褐色砂（含、炭・焼土）
6．暗灰褐色砂
7．暗灰褐色弱粘質微砂（含、黄褐色砂小塊）

第405図　竪穴住居86（1/60）・出土遺物①（1/4）



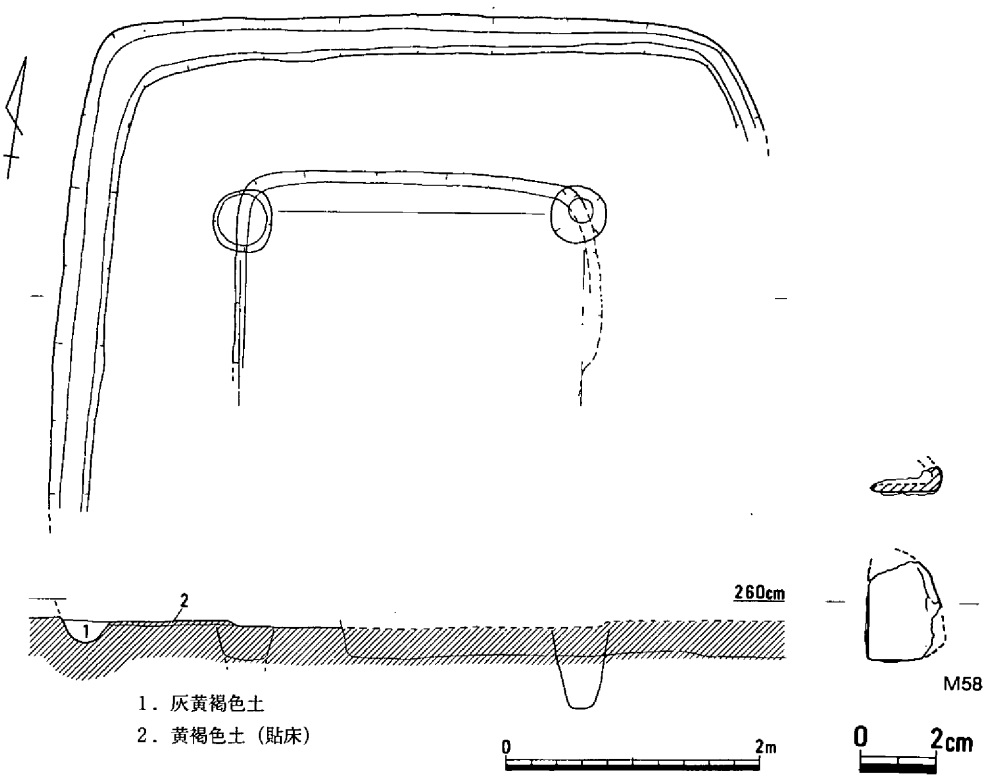
第406図　竪穴住居86Ａ（上左）・86Ｂ（上右）(1/80) ・出土遺物②（1/2）

は1.1mで、柱掘り方は長径35～40cm、深さ50cm前後の楕円形を呈し、側壁との距離は80～90cmである。床面で台石を検出した他は、住居内構造については不明である。

出土遺物には、甕2143、台付鉢2144の他に、刀子等の鉄器M53～57があり、2144は古い要素をもつが、2143により下田所式併行期と考えられる。（光永）

竪穴住居87（第329・407・408図）

９Ｃｃ・ｄ区において海抜2.45mで検出された。住居の平面形は東西・南北方向を基調とする方形プランであったと考えられるが、検出できたのは北側の約１／３程度の範囲でしかなく全体像については南側が調査区境であったり、弥生時代の竪穴住居の著しい重複等が障害となり検出できなかった。わずかに東西約5.50m前後の規模が推測されたにすぎない。床面は検出



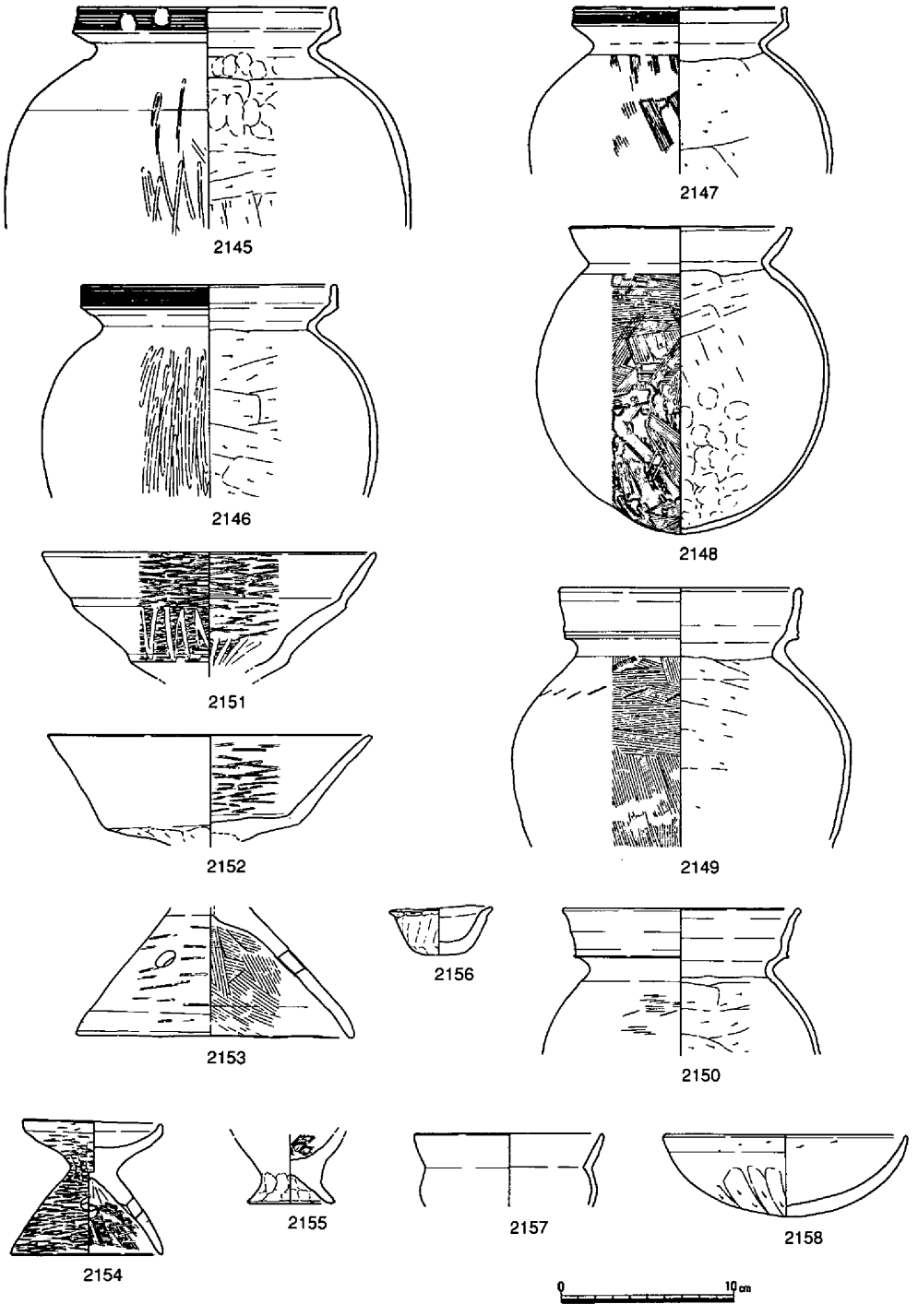
第407図　竪穴住居87（1/60）・出土遺物①（1/2）

面と同レベルにあり、壁体溝の検出によって範囲の把握がなされたと言っても過言ではない。床面からは、ベッド状を呈する床面低位部に対する高位部の存在と２本の柱穴が確認された。ベッド状遺構は住居の検出ラインからおよそ1.20～1.40ｍの距離をもって高位部と低位部との変換点を見せるものであるが、その比高は約２㎝程度とわずかであった。柱穴は、そのベッド状のコーナー部分にそれぞれ径50㎝前後で深さ約65㎝のものの存在が推測され、おのずと４本であったことが知られる。柱穴間の距離は、芯心で2.70ｍを測った。

出土遺物には、甕、高杯、鉢、器台等の土器の他、手鎌の折り返しと考えられる鉄器片M58が１点確認された。甕には口縁端部外面に櫛描沈線を施したもの2145～2147、二重口縁を有するもの2149・2150、「く」字状を呈するもの2148等があり、当該地域以外に山陰系の所在が認められる。時期的には、櫛描沈線甕の底部が見られないことで判然としない。胴部外面調整のミガキの省略化傾向と高杯脚部穿孔数の減少等新しい様相をみせるが、甕胴部の状況はまだ下田所の範疇で理解されるものである。

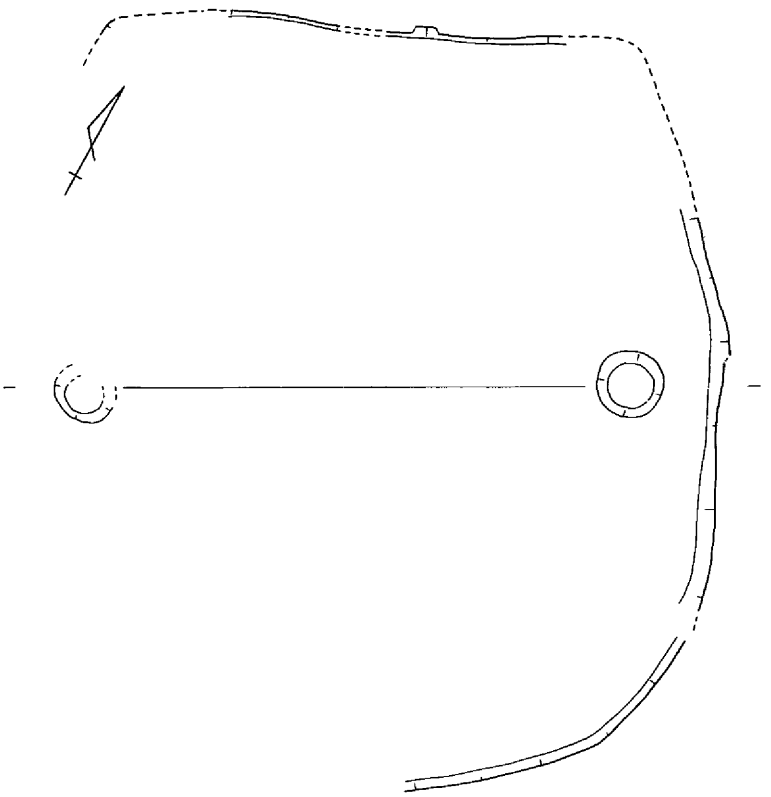
竪穴住居88（第198・329・409図）

９Ｃｄ区と８Ｃｂ区に跨がった位置に竪穴住居89・90等の埋没後、これを切って構築され



第408図　竪穴住居87出土遺物②（1/4）

た住居である。住居は、調査時の側溝、他の住居との切合い等により寸断され、平面の在り方については断続的に確認された肩口の復元作業によって認識されたもので、また検出高がそれぞれ異なることで基本的な平面形は隅丸方形であろうが若干変容した状態で検出された。この状況は床面についても



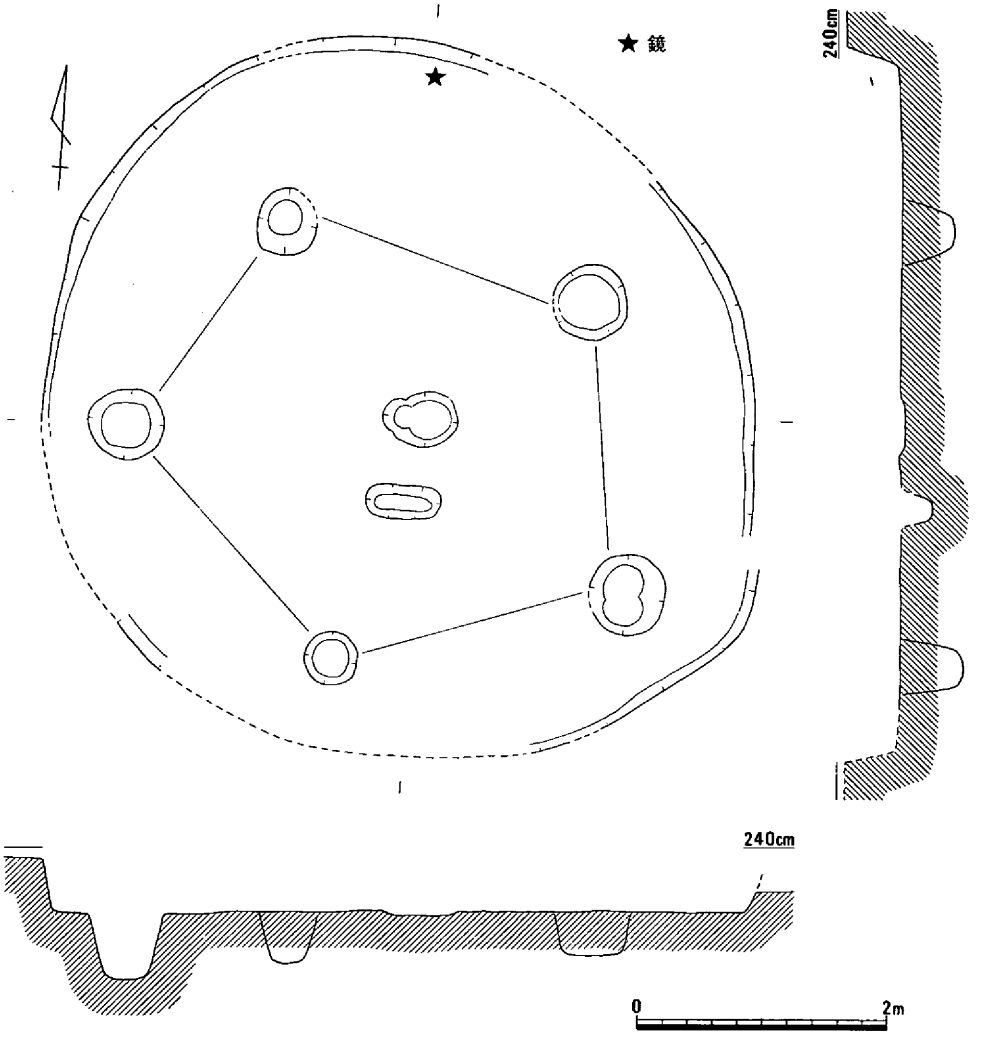
第409図　竪穴住居88（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）

同様で、必ずしも面として同一レベルで検出したものではない。わずかにその後の検討によって２本の柱穴が中央に北側肩口に平行する状況で検出されたにすぎない。

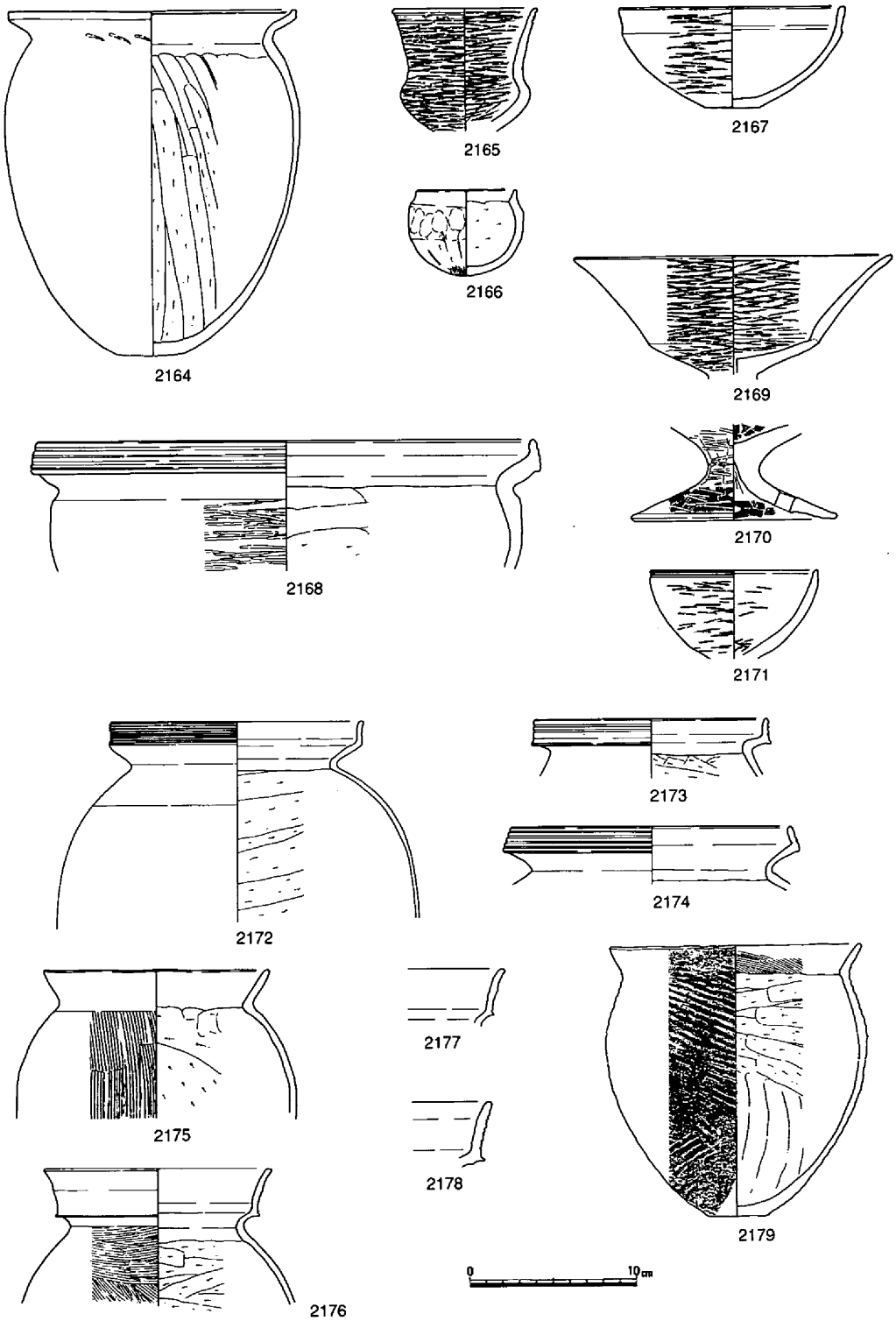
出土遺物には、１点の棒状鉄器の他、甕、鉢等の器種が確認された。甕は、2162が表面剥落して判然としないが、2159・2161と同じく口縁部に櫛描沈線をもったものと考えられ、この器種にあっては小型に分類される。2159での外面ヘラミガキの省略等の調整状況とあわせても型式的に下田所～亀川上層段階に位置づけて差支えないと考える。

竪穴住居89（第198・329・410～412図、写真図版73）

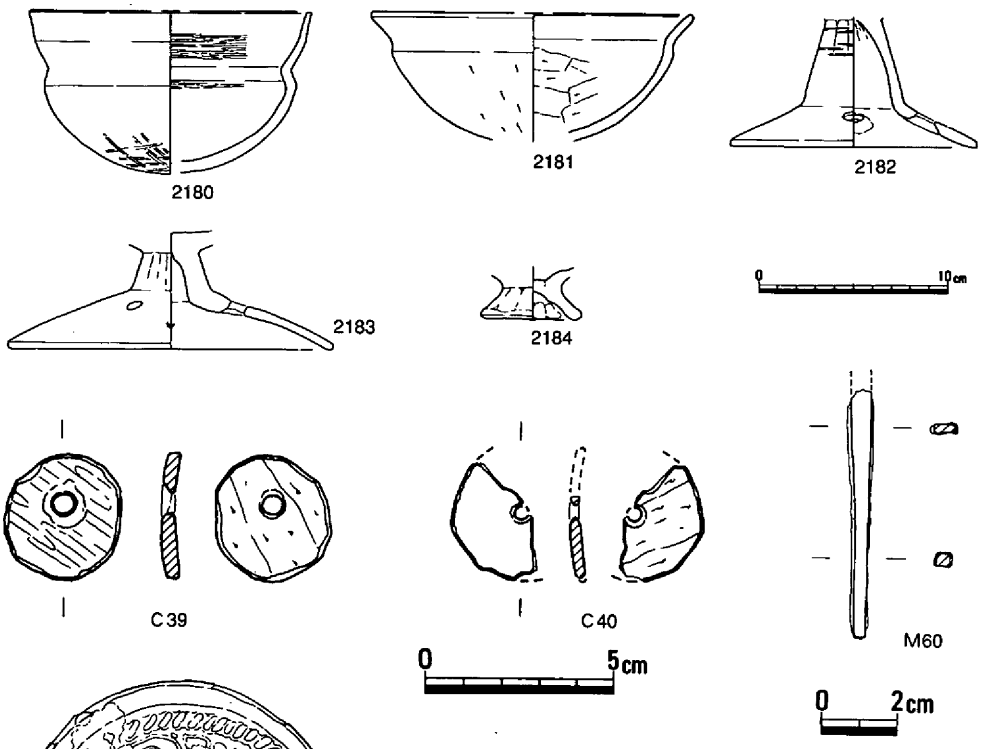
竪穴住居88・90の下層においてそれら住居と重複した状態で検出された。住居の複雑な重複と調査区境が住居中央部を横断したこともあって住居は各部分で分断され、面的な検出は困難



第410図　竪穴住居89（1/60）



第411図　竪穴住居89出土遺物①（1/4）



第412図　竪穴住居89出土遺物②
（1/4・1/2・1/1）

を極めた。しかし、調査後の再検討の結果平面の状況、時期等が判明するにつれて調査時の認識の変更を余儀なくされた。

住居は、検出段階での海抜高に地点毎の差異が存在したため平面形が判然としない形状を見せるものであったが、およそ長軸長5.50～5.60ｍを前後する円形住居であったと推測される。

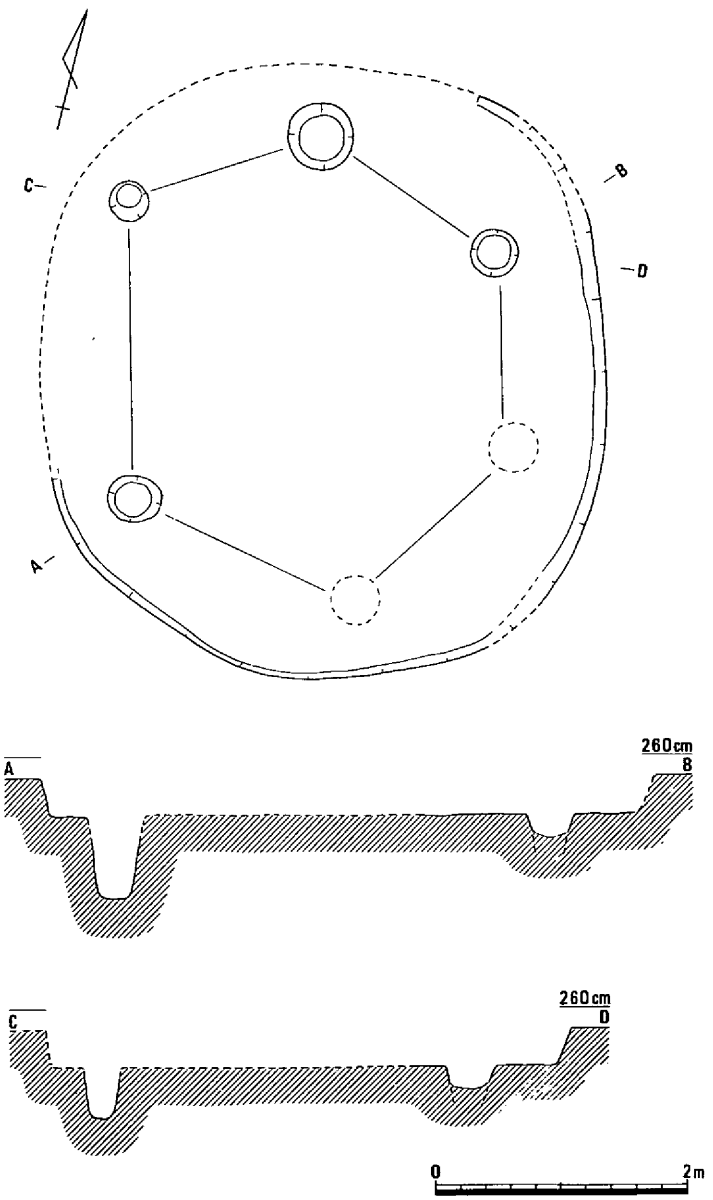
床面には、５本の柱穴が2.00～2.30ｍの芯心距離をもって見られ、その中央部には長さ60cm、幅27cm、深さ25cmを測る土壙とこれに付随した状態で深さ３cm程度の比較的浅い楕円形を呈する窪みが確認され、いずれの埋土中にも炭の包含と、前者からは骨片の存在も確認されている。

出土遺物には、床面直上に甕2164の遺存が確認された他、覆土中からも小片ながら多くの土器の検出がなされた。土器以外にも鏡が１点ほぼ完全な状態で、床面より約20cm上層の覆土中から出土し、注目された。鏡は、面径4.4cmで鏡背にはおよそ３㎜と狭い縁を有し、その内

側には斜行櫛歯文帯があり、さらに図文帯には蕨手状花文が配されていた。部分的に錆による欠損・剥落等が見られるが銅質は良好で白銅質を呈する。高倉洋彰氏の重圏文日光鏡系小形仿製鏡第Ⅰ型ｂ類に分類（註）され、朝鮮半島で製作されたと考えられるものである。

時期的には、出土した土器には弥生時代に属するものが散見され、調査時には弥生時代の範疇で理解していたが、その後の検討により甕2172、高杯2183がこの住居に伴うことが判明した。それらは亀川上層式の特徴を示すもので、さらに伴出の山陰系甕2176～2178とも矛盾がないと考えられることで、改めて古墳時代初頭への位置づけを行った。

（註）高倉洋彰『日本金属器出現期の研究』1990年　学生社



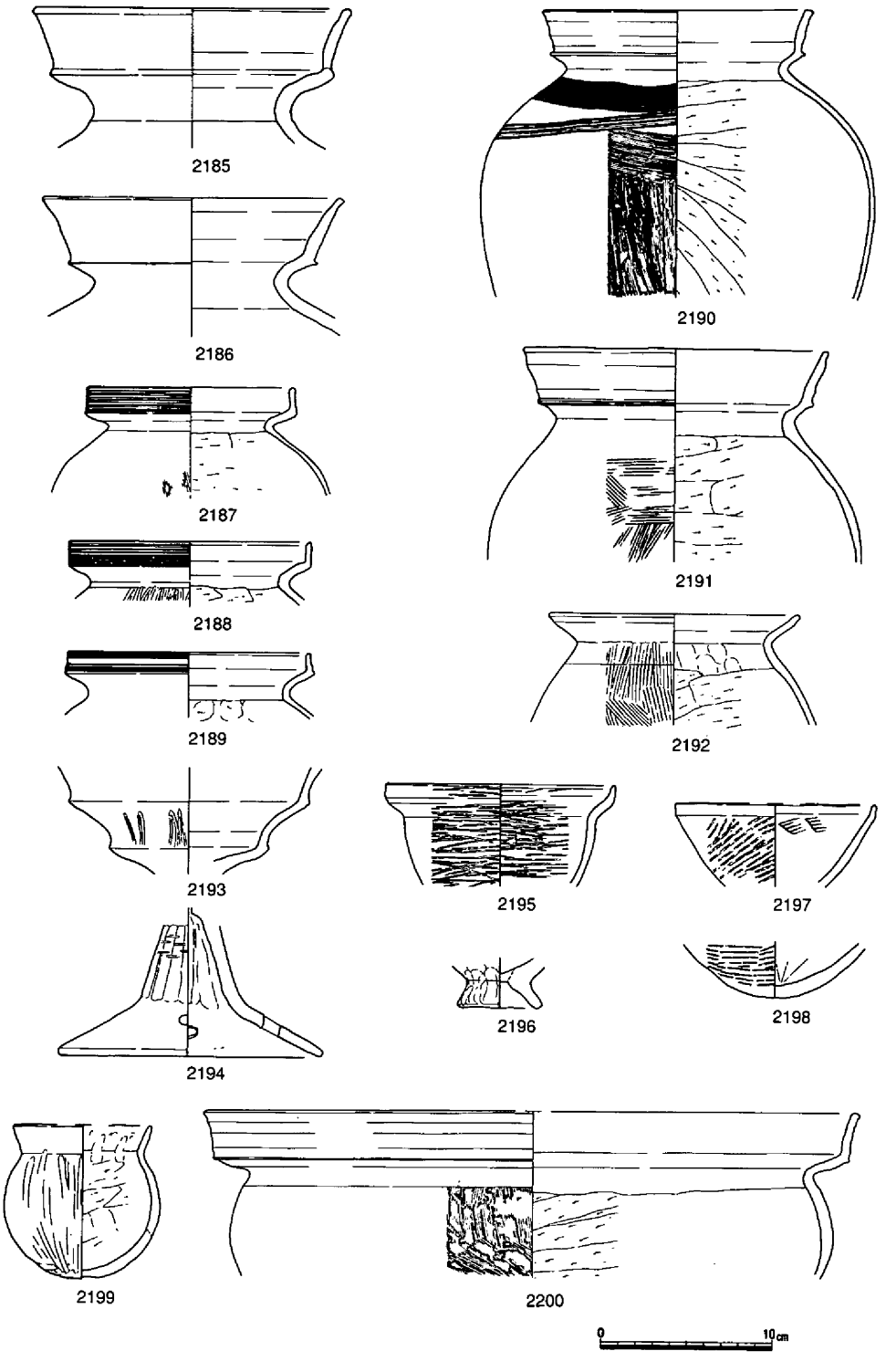
第413図　竪穴住居90（1/60）

竪穴住居90（第198・329・413～415図）

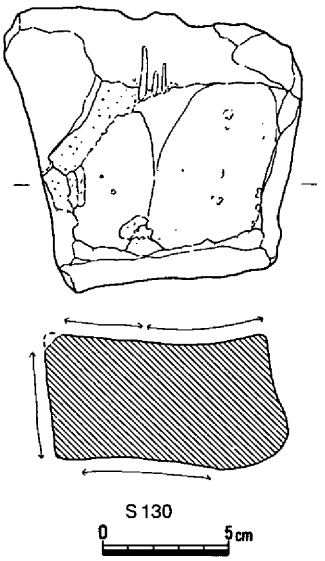
８Ｃ区において検出されたが、ここに集中する一連の住居と同様に側溝、住居の著しい重複等により、住居間の切合いをはじめとする詳細な検討は出来なかった。

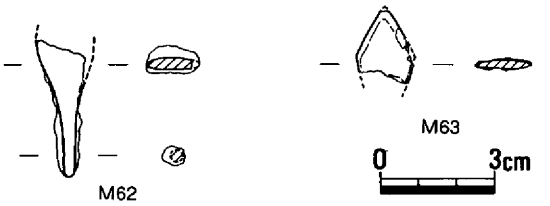
平面形は、検出部分ごとに海抜高が異なったことで不整形の感は否めないが、隅丸方形を基調とすることが窺われる。

床面は海抜約2.14ｍに見られ、径35～50㎝を測る柱穴４本がそれぞれに



第414図　竪穴住居90出土遺物①（1/4）



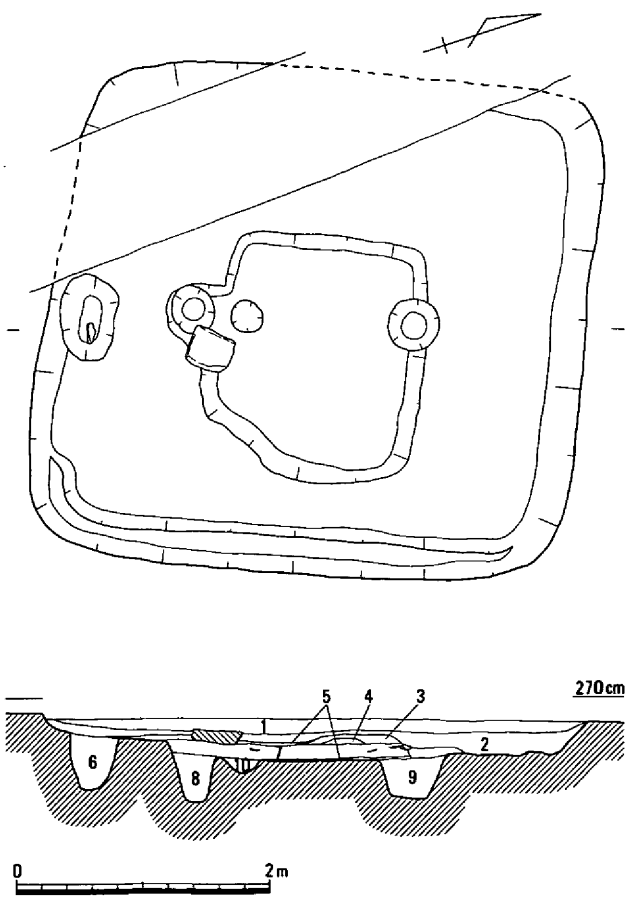


第415図　竪穴住居90出土遺物②（1/3・1/2）

1.60～2.30ｍの芯心距離をもって検出されたが、湧水もあって完掘は出来なかった。検出された４本の位置関係から考えると総計６本の主柱穴が想定される。床面からはその他の中央穴、壁体溝等の関連施設は確認されなかった。

出土遺物には、覆土中から壺、甕、高杯、鉢等の土器と砥石、鉄鏃等の石製品・鉄器が検出された。

壺2185・2186は、いずれも外方に長く拡張し二重口縁を呈するもので、頸部は短い。甕2187～2189は、口縁部外面に櫛描沈線を巡らせるが全体像が不明で型式については判然としない。2190・2191は、口縁部と肩部ハケメ調整の状況から山陰系を示唆させる。高杯2194は、脚柱部の内面が中空でなく亀川上層より古相を示す。



1．黄灰茶色土
2．灰黄茶色土
3．灰色土
4．暗灰色土
5．炭
6．暗灰色砂質土
7．暗黄灰色土
8．暗灰色砂質土（含、黄色粘土塊）
9．暗灰色砂質土（含、黄灰色土塊）

第416図　竪穴住居91（1/60）

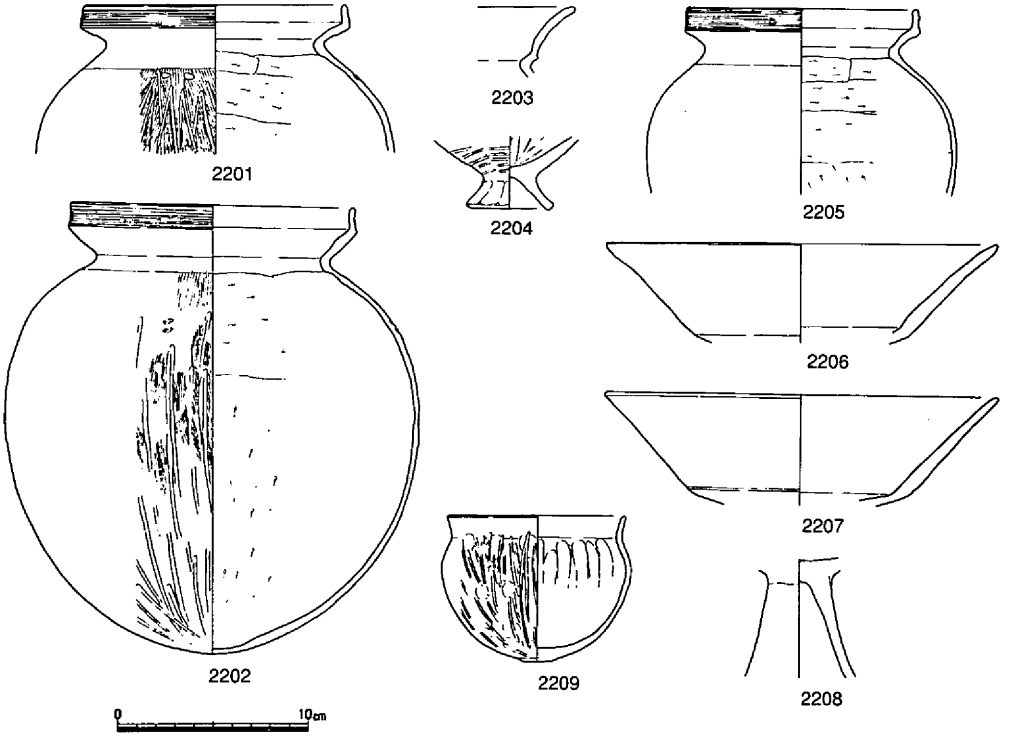
竪穴住居91（第329・416・417図、写真図版74）

９Ｃｃ区で西側の一部が調査区境の土手・側溝等により検出できなかったが、比較的基盤層の粘質が強いこともあって肩口は海抜2.60ｍで明瞭に確認され、およそ方形のプランが検出された。規模は、南北長が4.30ｍ、東西長が3.98ｍを、さらに検出面から床面高床部までの深さは約17㎝を測った。

床は、ベッド状の高まりを周沿に巡らすことで、中央部が一段低い状態を見せている。ベッドは、検出された肩口から0.7～1.3ｍの幅をもってみられるもので、壁との境には東側に段状の高まりは認めるものの壁体溝は確認されず、南辺壁際中央部に方形土壙の存在が、高床部との比高差10㎝を測る低位部からは柱穴２本の存在が検出されている。方形土壙は、長軸長68㎝、幅40㎝の楕円形を呈し、床面からの深さ40㎝と他の住居のものと比較して深い。柱穴は、住居の長辺に並行した状況で径40㎝前後の２本が芯心で1.80ｍの距離をもってみられた。深さは比較的浅いもので30～40㎝を測った。

なお、住居は中央低位部が埋められ高位部の高さに揃えられていたことが知られる。南側の柱穴付近で検出された石は床面上に置かれて作業台として使用されていたものと考えられる。

出土遺物には、床面に密着した状態で甕2202が１点と覆土中から甕、高杯、鉢等の存在が確



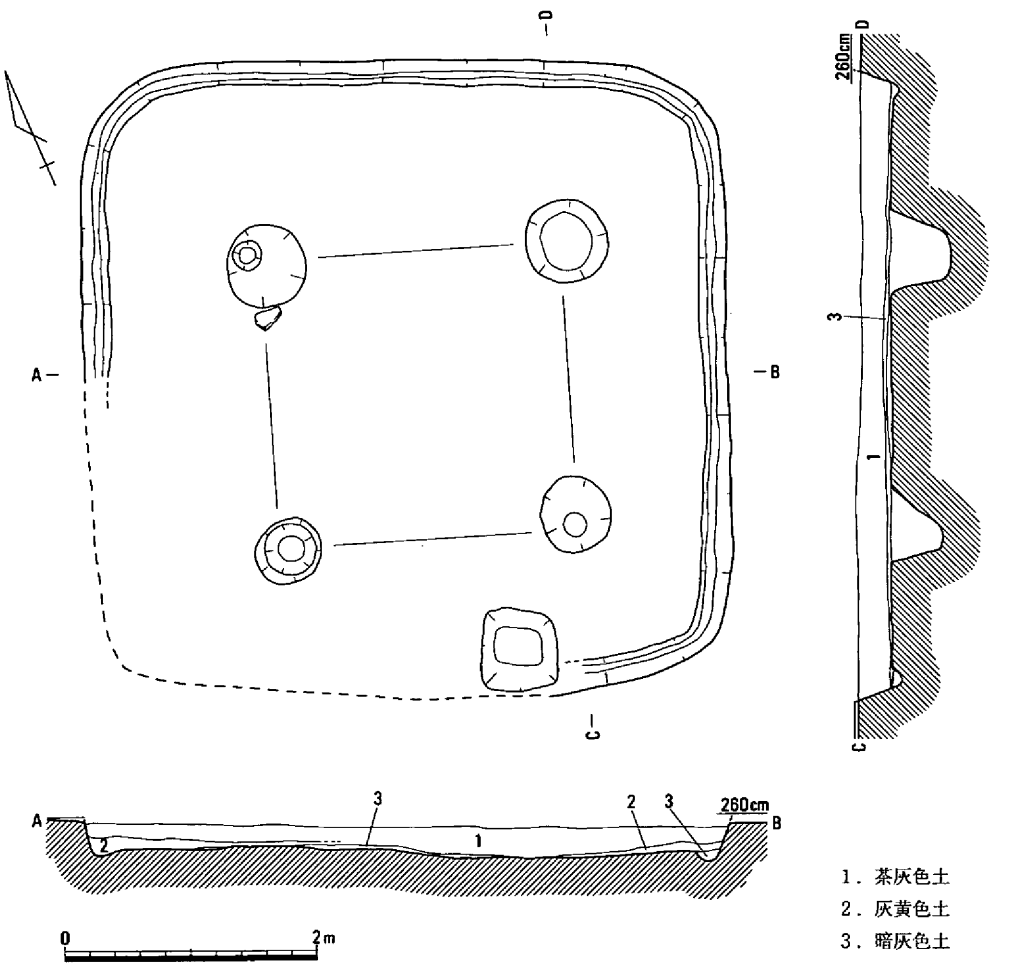
第417図　竪穴住居91出土遺物（1/4）

認された。甕は、2202に見るように胴部最大径が肩から胴部に移行した段階で、高杯は杯部と上方に直線的に伸びる口縁部との比率が前者と同じか低い位の状態で、また脚柱部内面もまだ中空でない段階にある。下田所式に比定されるものであろう。

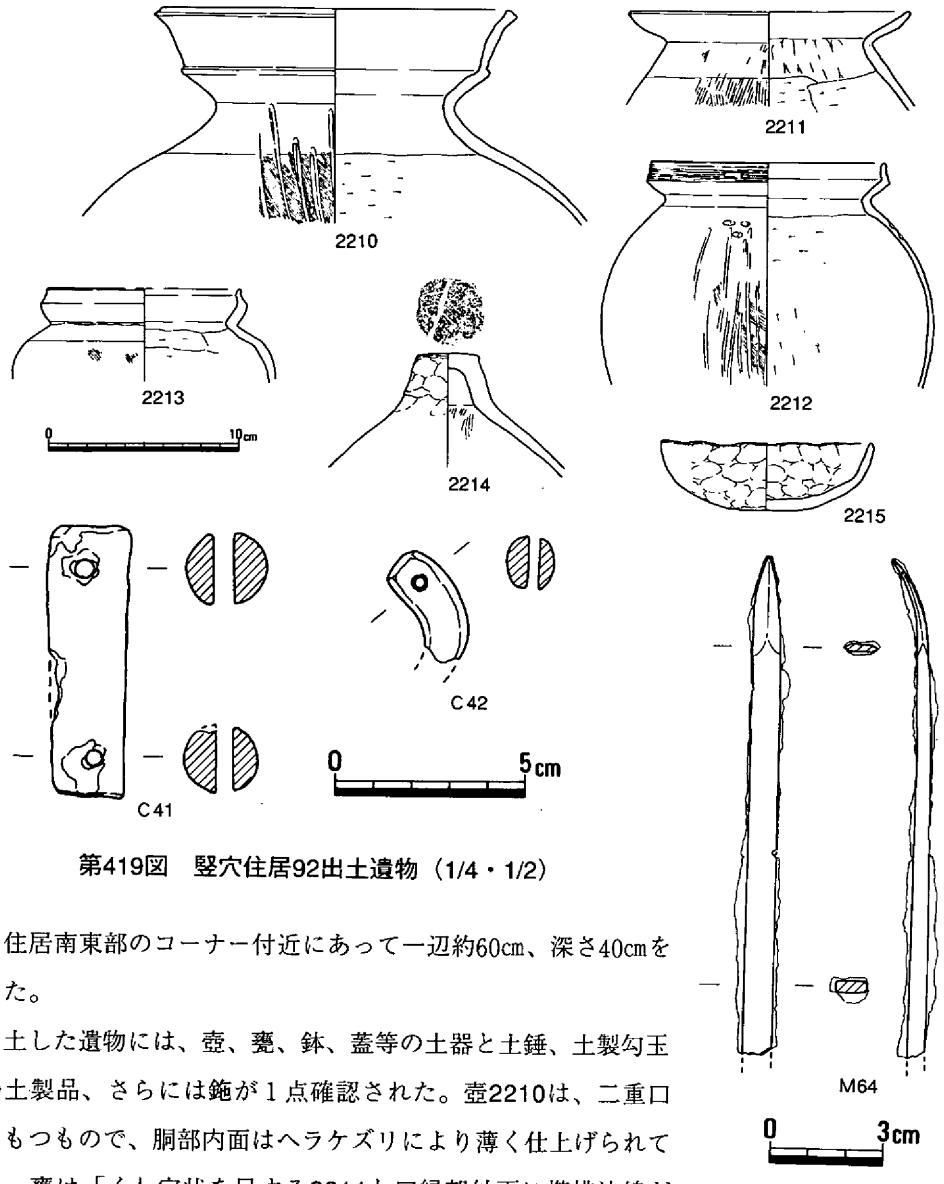
竪穴住居92（第329・418・419図、写真図版74）

９Ｃｃ区で竪穴住居91に南西部が切られ、北東部で竪穴住居93を切った状態で検出された一辺約５ｍを測り方形を呈する住居である。検出面は海抜2.60ｍで、これは竪穴住居91・93とも同じである。

床面は、西側が東側より最大10cm程高い位置にあり、検出面からの比高約15～25cmと一様でない。床面からは柱穴４本と壁体溝、方形土壙の存在が確認された。柱穴は、径60cmで検出面からの深さ40～50cm規模の掘り方を見せるもので、芯心距離2.20～2.50ｍを測った。方形土壙



第418図　竪穴住居92（1/60）



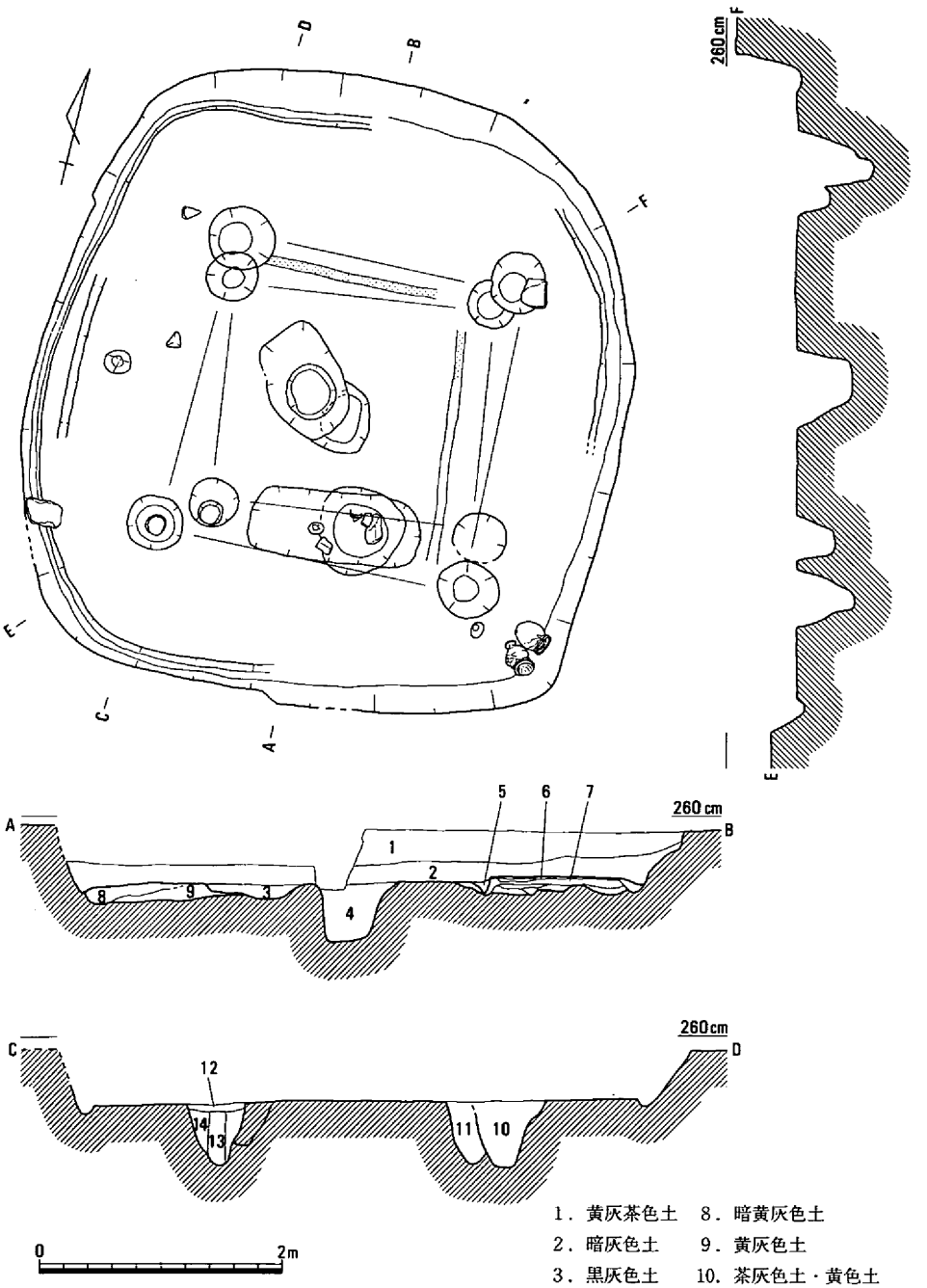
第419図　竪穴住居92出土遺物（1/4・1/2）

は、住居南東部のコーナー付近にあって一辺約60cm、深さ40cmを測った。

出土した遺物には、壺、甕、鉢、蓋等の土器と土錘、土製勾玉等の土製品、さらには鉇が１点確認された。壺2210は、二重口縁をもつもので、胴部内面はヘラケズリにより薄く仕上げられている。甕は「く」字状を呈する2211と口縁部外面に櫛描沈線が施された2212が見られ、後者外面には３点の押圧痕跡と縦方向のヘラミガキを見ることができる。型式的には、下田所の範疇で理解されよう。

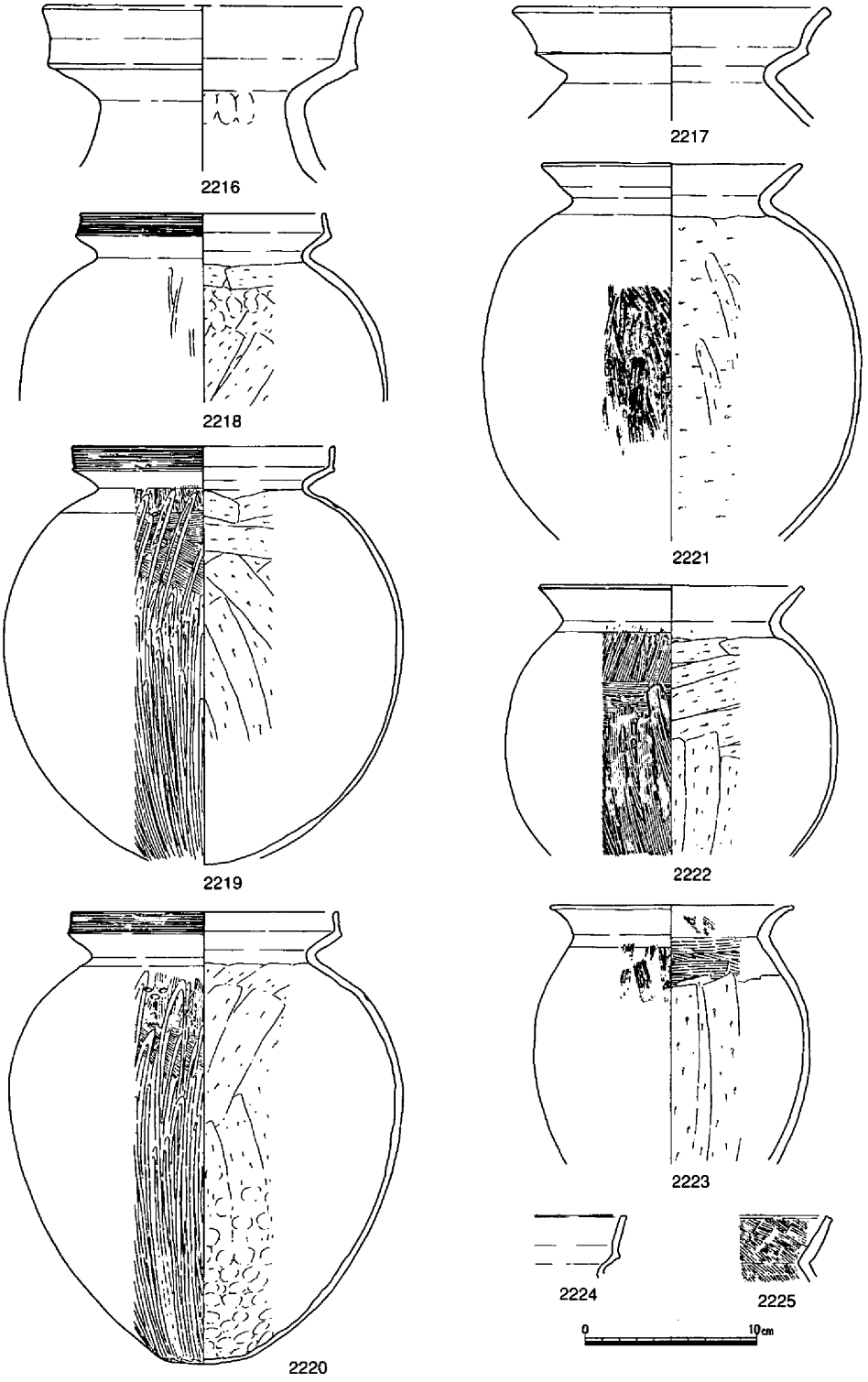
竪穴住居93（第329・420～423図、写真図版75）

９Ｃｃ区で海抜2.55mと前記竪穴住居91・92より若干深い位置で、竪穴住居92によって南東部分が切られた状態で検出された。平面的には、南と西側が直線的で北東部分が弧状を呈する不整形な隅丸方形である。床面は検出面から約40cmの深さにあり、ほぼ水平面を見せるが、柱穴と柱穴を結ぶラインに則して幅約７cm程の木質痕跡が直線的に北と東側において認められ、

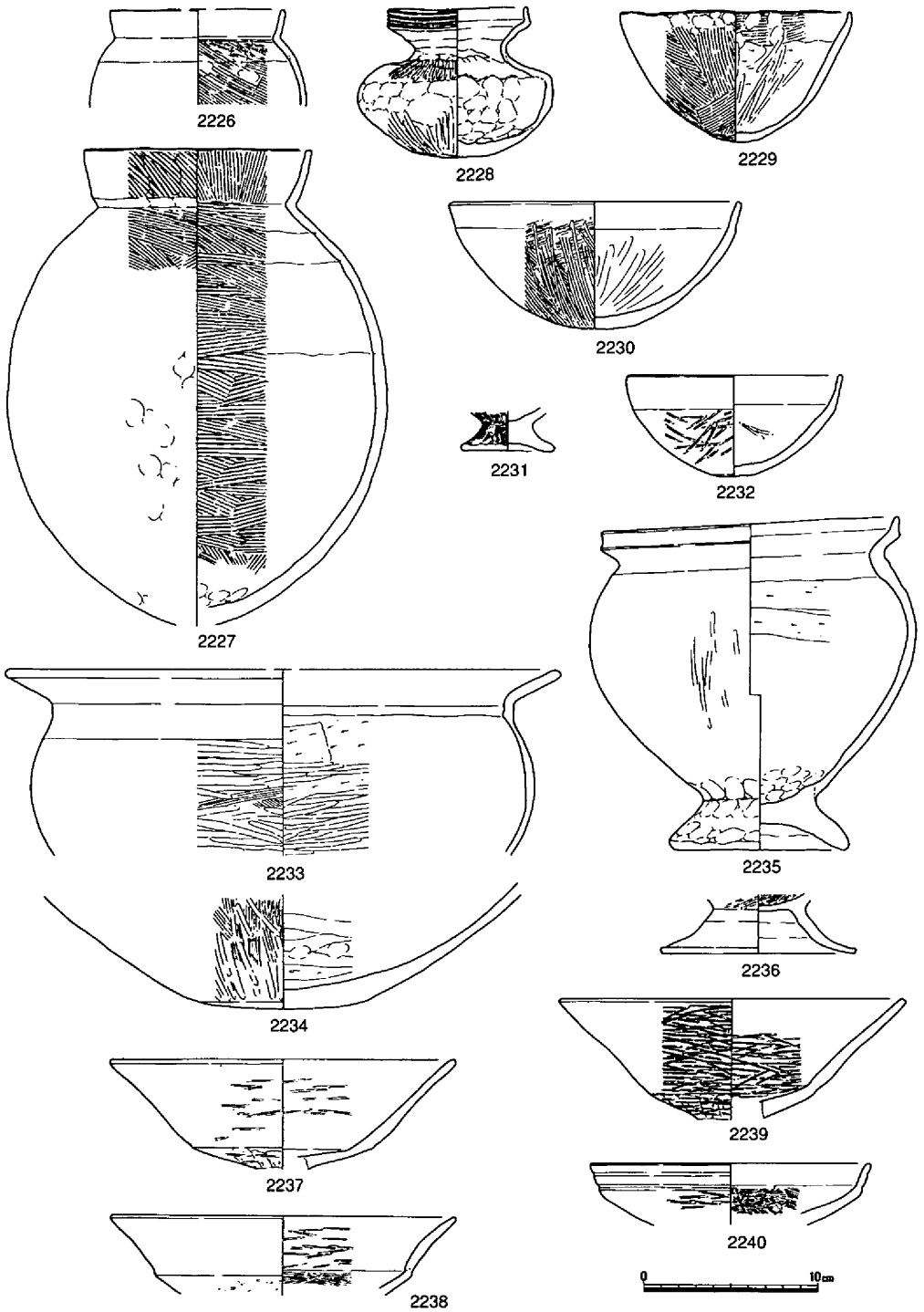


1．黄灰茶色土　8．暗黄灰色土
2．暗灰色土　9．黄灰色土
3．黒灰色土　10．茶灰色土・黄色土
4．黄灰色土　11．暗灰色土
5．木質痕跡　12．灰黄色土
6．黄色粘土　13．暗灰色粘土
7．黄灰色粘土　14．暗灰茶色土

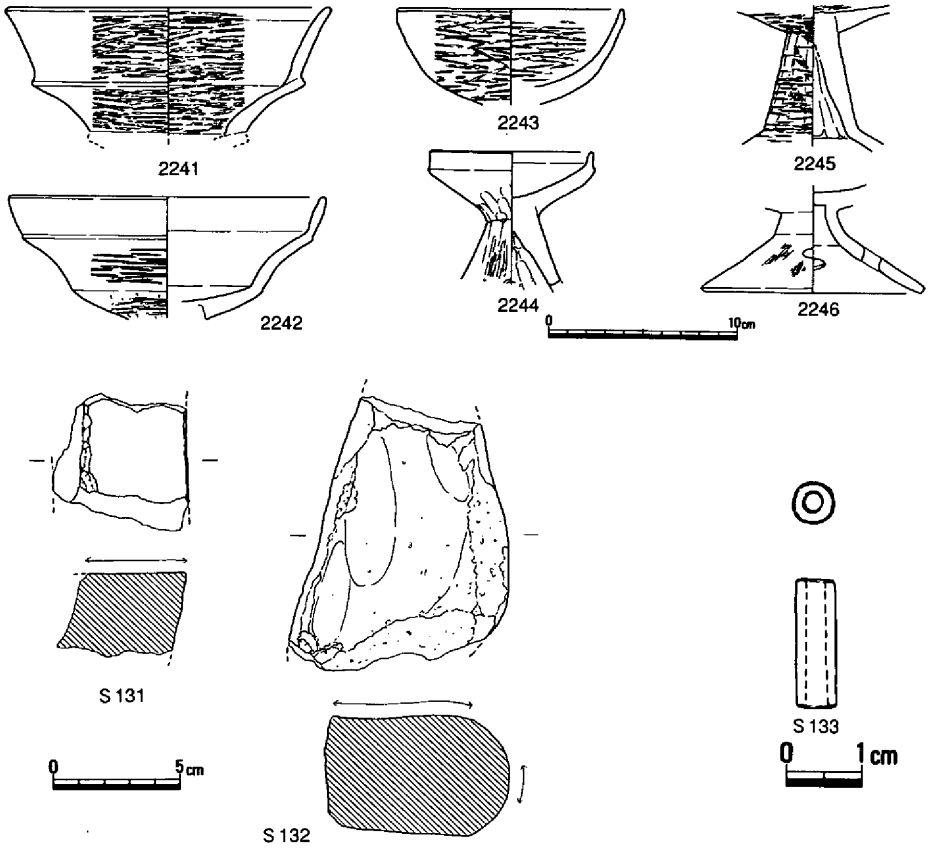
第420図　竪穴住居93（1/60）



第421図　竪穴住居93出土遺物①（1/4）



第422図　竪穴住居93出土遺物②（1/4）



第423図　竪穴住居93出土遺物③（1/4・1/3・1/1）

これを境に僅かながら高低の差が見られた。ベッドの存在を示唆するものと考える。

柱穴は、径40cmを前後するものと径50cmを前後する２者がそれぞれに住居コーナー近くで２本ずつがそれぞれに切合った状態で見られ、１回の建替えがあったことを知らせる。また、これに伴って中央穴にも中央部分と南側柱穴間に２通りの在り方がそれぞれ見られた。前者は深さ35～40cmの土壙２基が重複し、また後者も長軸長1.40m、幅57cm、深さ10cmを測る長楕円形のものと径70cm前後で深さ約50cmの土壙の重複した状況が見られた。柱穴は規模の大きいものと小さいもので切合い、前者が後者を切ることは確認でき、中央穴の土壙に関してもそれぞれ切合いがあり先後関係は理解された。これによると基本的に建替えは、住居規模を拡張しないで柱と中央穴の変更であったことが知られた。

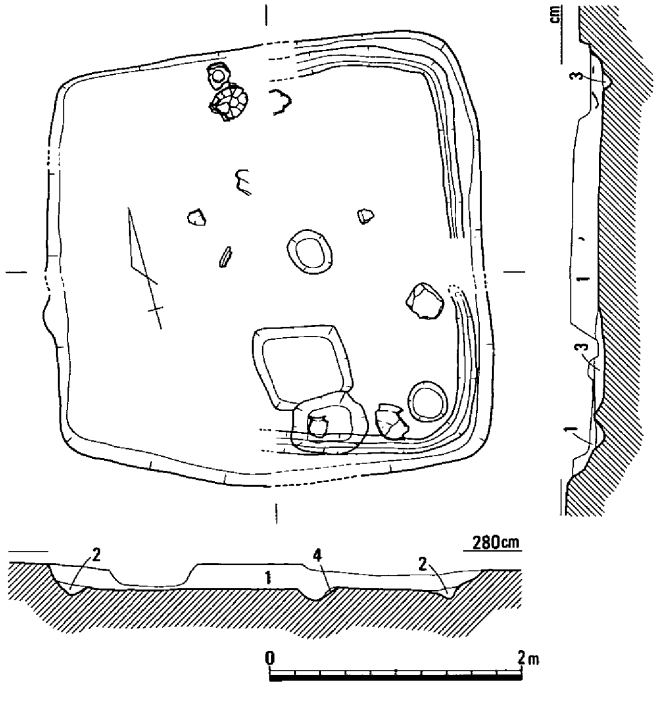
出土遺物には、床面南東隅にあたかも一括して置かれた状況で、甕2220、壺2228、鉢2229・2230、台付鉢2235がすべて完全な状態で重なりあって検出された。この中にあって2235は型式的には本来弥生時代の才ノ町式の様相を見せるが、共伴した土器がいずれも古墳

時代の下田所式に比定されることで、これについては伝世品として、あるいは下田所段階に一器種のみオノ町以降旧態依然とした形態が残ったもの、等の考え方もできようが、詳細についての言及はここでは可能性を示すのみで避けておきたい。

その他覆土中からも壺、甕、高杯、鉢、器台等の土器をはじめ砥石Ｓ131・132等が確認された。また、調査時床面直上の堆積土を採取後土壌の水洗を行った結果、管玉Ｓ133の他ガラス滓、さらには炭化した米、桃の種等各種自然植物遺体の確認もなされた。

竪穴住居94（第329・424・425図、写真図版74）

９Ｂ区のほぼ中央部、竪穴住居84の南側に隣接した位置に同じ海抜で検出された。検出された平面形は、基本的には東西・南北方向を基調とする方形を呈するものであるが、西辺と東辺では長さが異なる。床面は検出面から15～20cmの深さでみられたが、壁体溝については部分的に確認できた所もあるが存在すら明確にできない部分も存在した。柱穴は精査にも拘らず検出できなかった。わずかに中央において30×40cm、深さ40cmの規模の中央穴が東肩の部分に被熱面を伴って、また南側中央やや東寄りで長軸長60cm、幅約45cm、深さ18cmの規模の方形土壙が検出されたにすぎない。また東壁寄りの床面には作業台としての角礫が遺存していた。

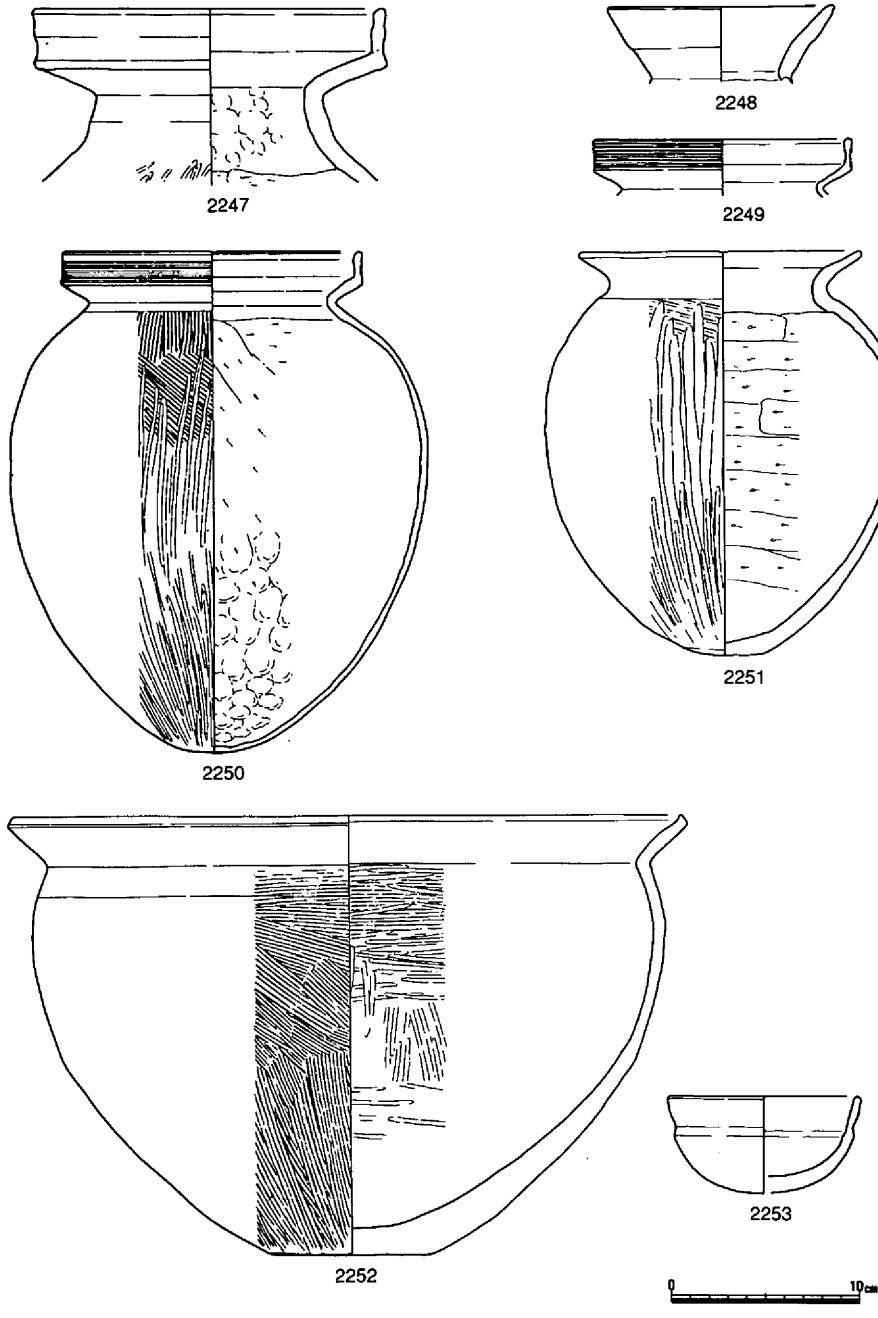


第424図　竪穴住居94（1/60）

出土遺物は、土器が床面につぶれた状況で遺存しているのが確認された。

土器には、壺、甕、鉢等の器種がみられた。壺は小型のもの2248と頸の長い二重口縁を呈するもの2247が、甕には口縁部外面に櫛描沈線が施されたもの2249・2250と「く」字状の口縁部をもち外面に整形時のタタキ痕跡を残すもの2251等がある。大型の鉢2252は、口縁部拡張をみせず底部に平底を残すが、小型の鉢は水漉粘土を胎土として用いたものである。

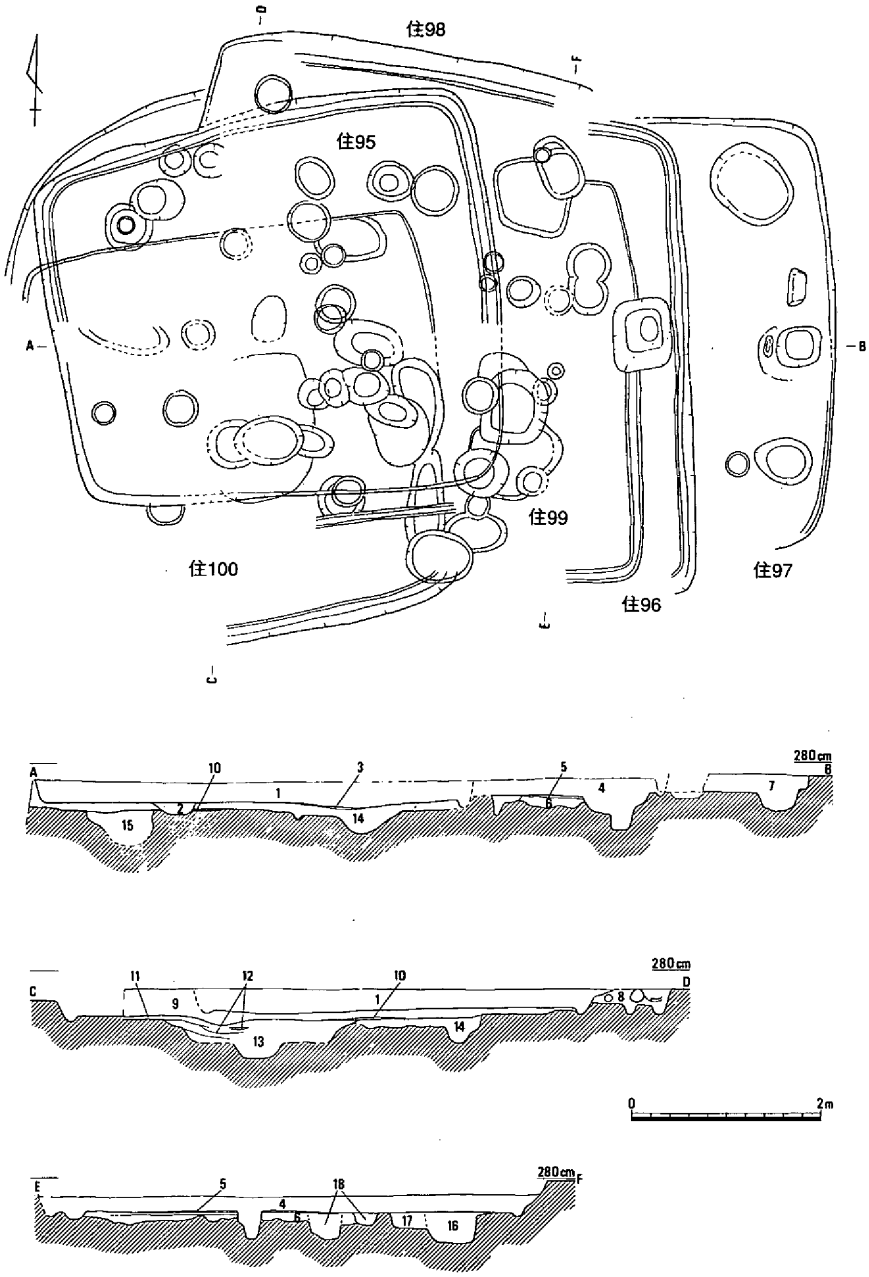
いずれも型式的に下田所式に比定されるものである。



第425図　竪穴住居94出土遺物（1/4）

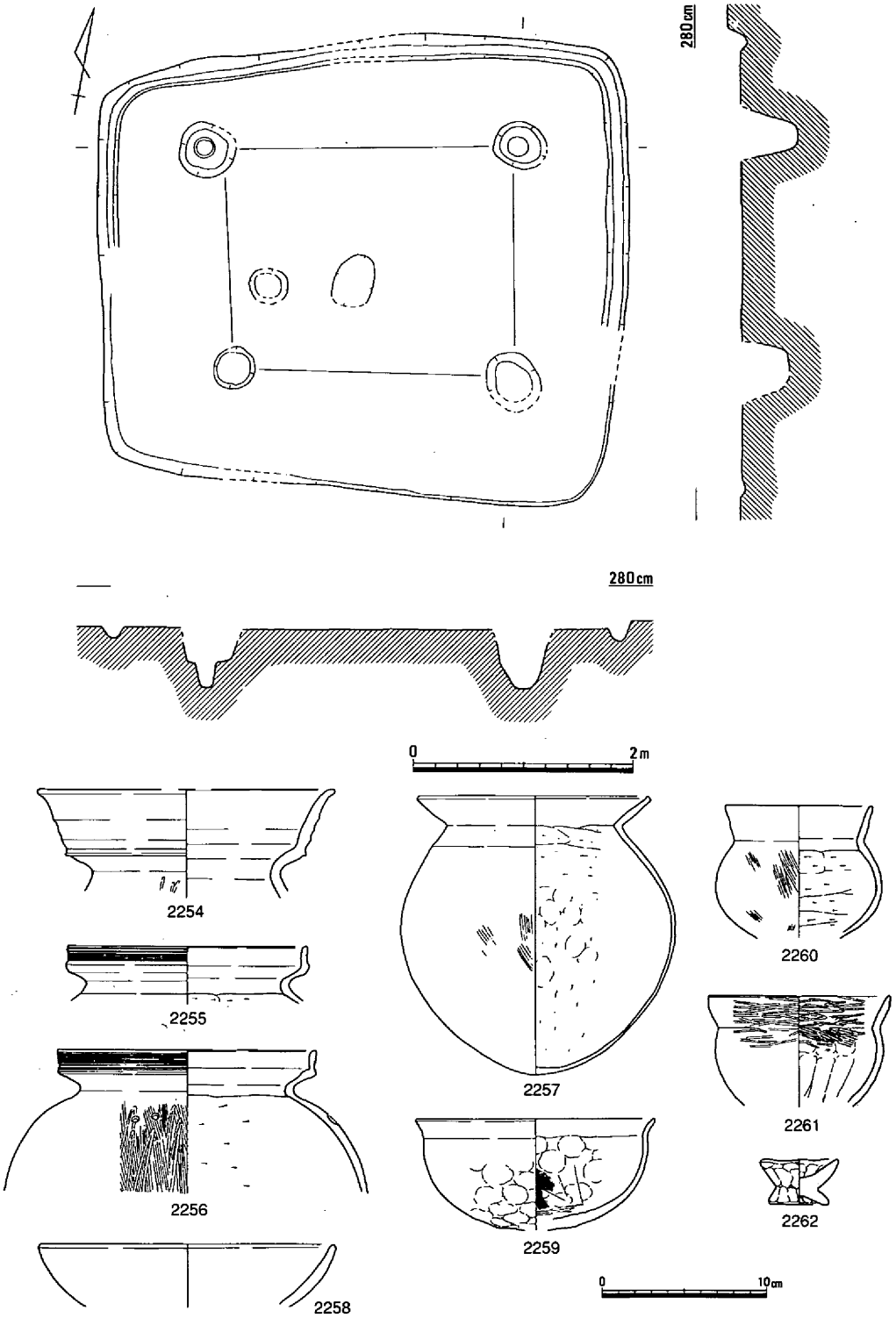
竪穴住居95（第329・426～428図、写真図版74）

９Ｂｃ区を中心としたおよそ東西９ｍ、南北７ｍの範囲内にほとんど土器１型式と限定された時期の範疇で６軒の竪穴住居の重複が見られた。

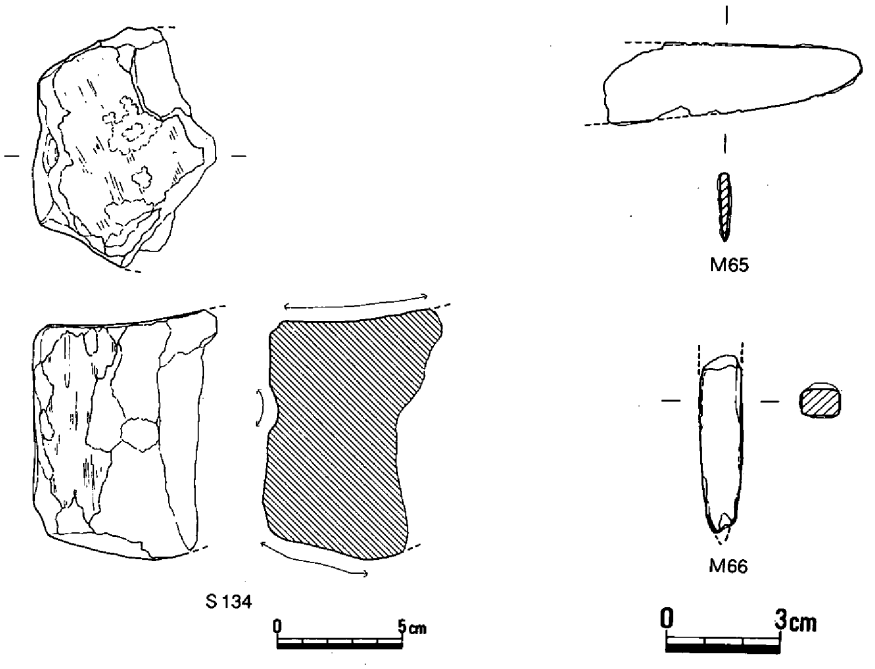


1．茶褐色土　　7．茶褐色土　　13．灰褐色砂質土
2．暗茶褐色土　　8．暗褐色土　　14．灰褐色土
3．黄色土（貼床）　　9．暗茶褐色土　　15．灰褐色砂質土
4．暗茶褐色土　　10．黄色土（貼床）　　16．灰褐色土・黄色土
5．黄色土（貼床）　　11．灰褐色土　　17．灰褐色土
6．灰褐色土　　12．炭

第426図　竪穴住居95～100（1/80）



第427図　竪穴住居95（1/60）・出土遺物①（1/4）



第428図　竪穴住居95出土遺物②（1/3・1/2）

竪穴住居95は、重複する住居の中にあって層序的にみて最も新しく位置づけられる住居である。平面検出面は、海抜2.60mにあり北約１mに近接する先述の竪穴住居94と同海抜といえる。

住居は、およそ東西・南北方向を基調とし、形態的には東西が4.76mで南北3.30～4.10mと、東西方向に長い構造が知られる。床面からは、壁体溝、柱穴、中央穴等の存在が確認された。壁体溝は北側は検出できたが南側については明確な状態での検出には至らなかった。柱穴は、各コーナー部分で径40～50cmの規模の掘り方が検出され、底からは柱痕の確認がなされた。それによると柱はおよそ15cm前後が推測される。中央部には、長さ50cm、幅35cm、深さ４cmの規模を測る楕円形の窪み状の土壙が見られ、炭の堆積が認められた。

出土遺物には、覆土中から甕2257をはじめ壺、甕、鉢等の土器類の他、砥石、鉄器等の存在が確認された。2257は、形態的には口縁部が「く」字状で胴部中央に最大径を有する。胎土中に角閃石の混和が顕著に認められ、その特徴から畿内生駒山西麓産と理解されるものである。在地の土器は、壺2254、甕2255・2256、浅鉢2258等があげられる。

時期は、甕2256の調整技法に縦方向のハケメ調整の後に縦方向のヘラミガキが施されていることで、下田所式の範疇にあるものと考える。

竪穴住居96（第329・426・429図、写真図版74）

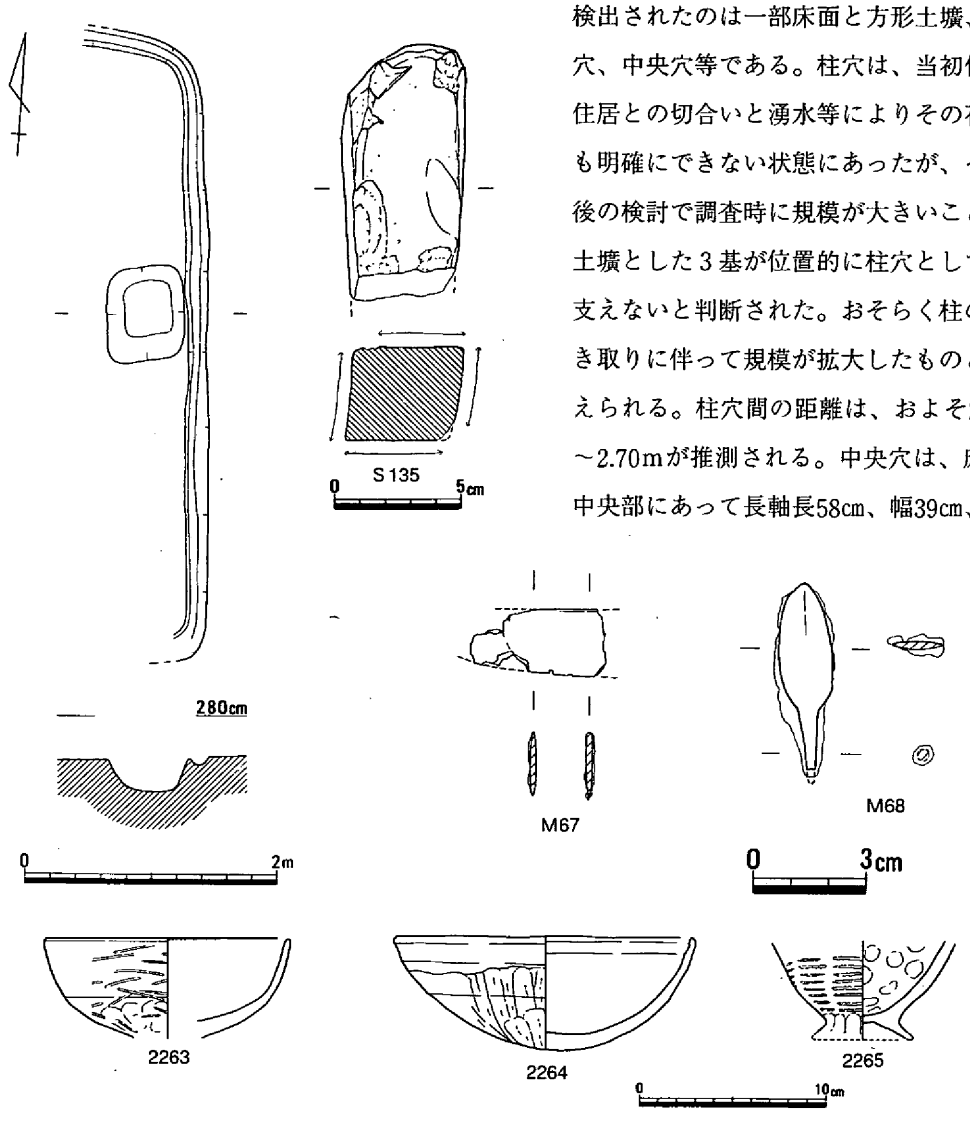
後述の竪穴住居97を切り、上記竪穴住居95によって切られた住居である。ただし検出できた

のは東側一部分のみで、西側部分については検出できなかった。したがって柱穴と中央穴については不明である。床面からはわずかに壁体溝の一部と東側一辺中央部に方形土壙が１基検出できたにすぎない。方形土壙は、長辺74cm、短辺60cm、深さ25cmを測り、平面長方形を呈した。

出土遺物には、高杯2263、鉢2264、台付鉢（製塩土器）2265等の土器と砥石、鏃と刀子状鉄器が散見された。2264を除く土器が小片なため明確性を欠くが、およそ下田所式に位置づけられると考える。

竪穴住居97（第329・426・430・431図、写真図版74）

重複する住居の中にあって最も東側に所在する竪穴住居である。竪穴住居96によって切られ、検出されたのは一部床面と方形土壙、柱穴、中央穴等である。柱穴は、当初他の住居との切合いと湧水等によりその存在も明確にできない状態にあったが、その後の検討で調査時に規模が大きいことで土壙とした３基が位置的に柱穴として差支えないと判断された。おそらく柱の抜き取りに伴って規模が拡大したものと考えられる。柱穴間の距離は、およそ2.50～2.70ｍが推測される。中央穴は、床面中央部にあって長軸長58cm、幅39cm、検



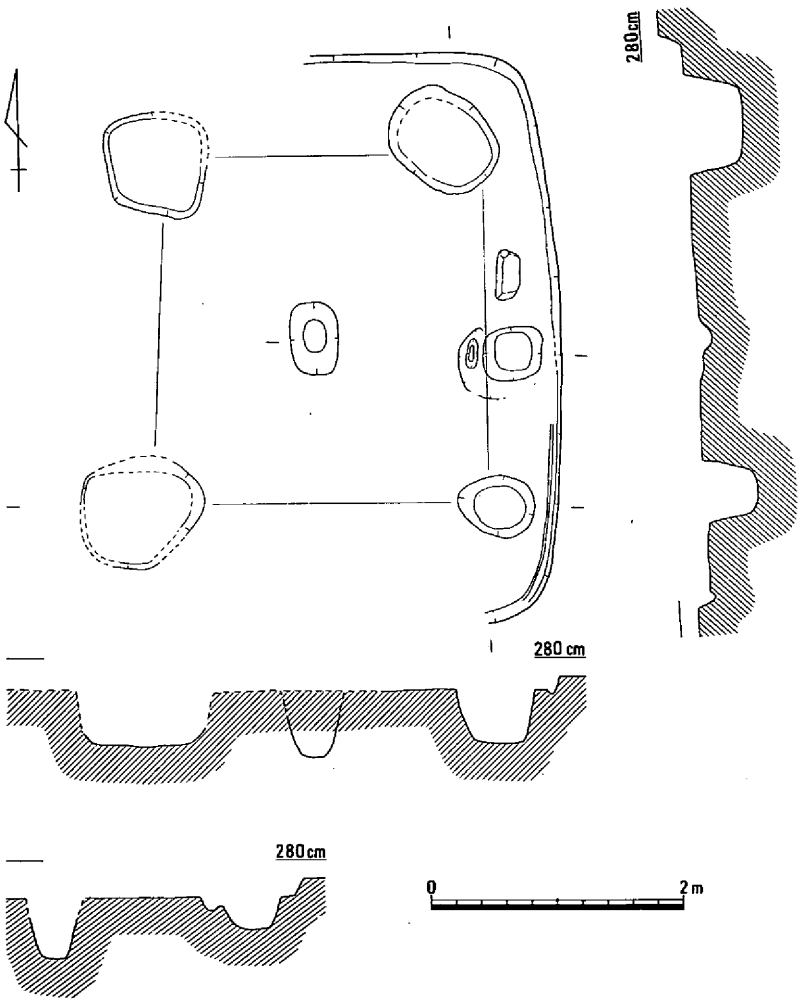
第429図　竪穴住居96（1/60）・出土遺物（1/3・1/2・1/4）

出面からの深さ45cmを測る平面隅丸方形を呈するものであった。方形土壙は、東側一辺ほぼ中央部に一辺約45cm、深さ23cmを測る平面方形を呈して所在をみせた。またその北隣には長さ40cm、幅28cmの河原石が住居内での作業台として置かれた状況で検出された。

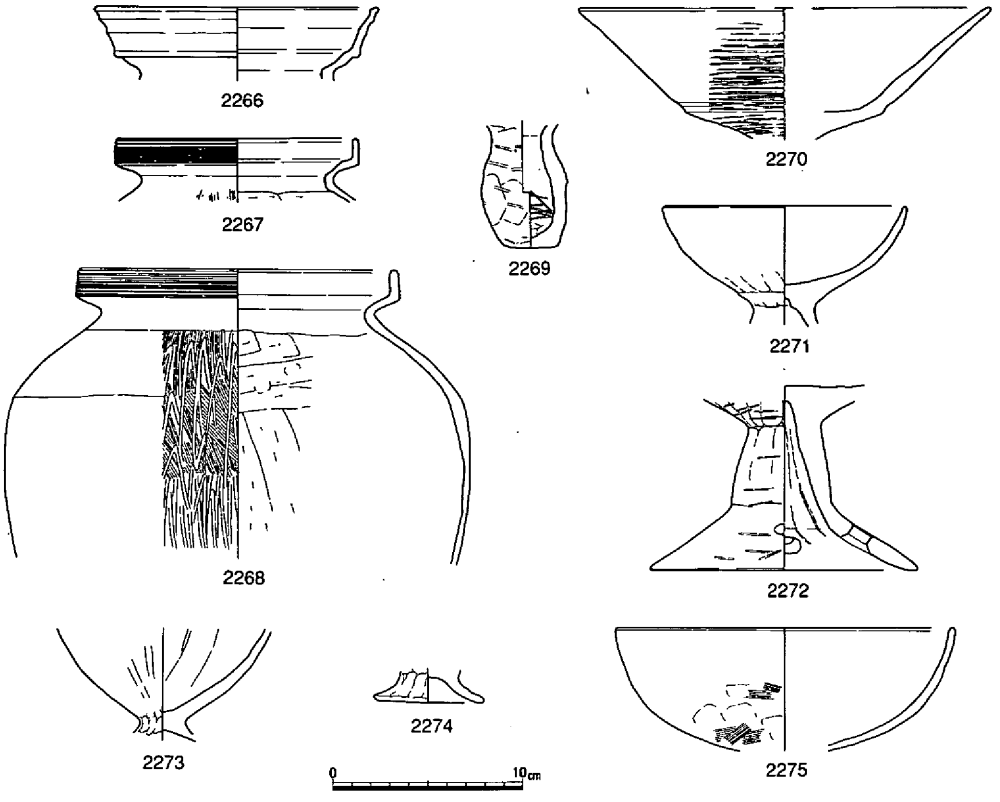
出土した遺物には、壺、甕、高杯、鉢、ミニチュア土器等が確認された。甕2268胴部外面には縦方向のヘラミガキが施され、高杯は杯底部に比較して直線的に外方へと伸びる口縁部のほうが長く、しかも脚柱部シボリメの存在等型式的に下田所に位置づけられる内容である。

竪穴住居98（第329・426・432図、写真図版74）

竪穴住居95によって切られ、他の住居との重複等により平面で検出できたのは北側肩の一部のみである。他は僅かに遺存が確認された床面から壁体溝が、床面下層から柱穴と中央穴が検



第430図　竪穴住居97（1/60）

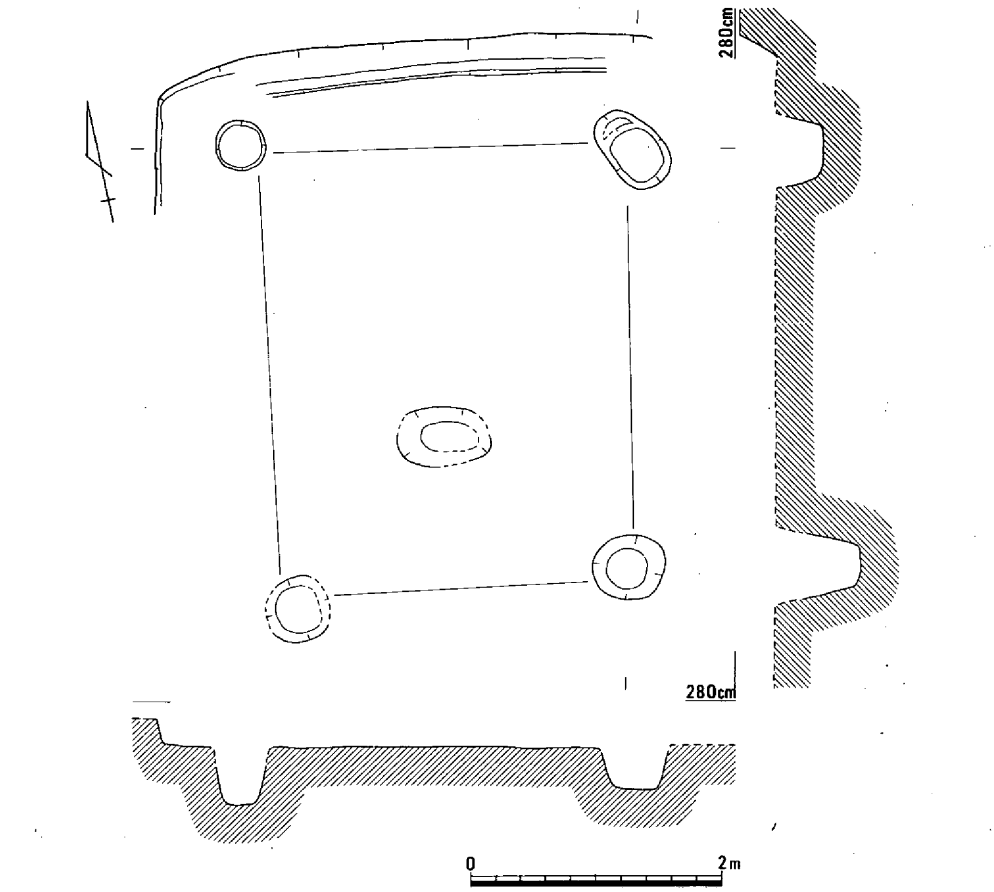


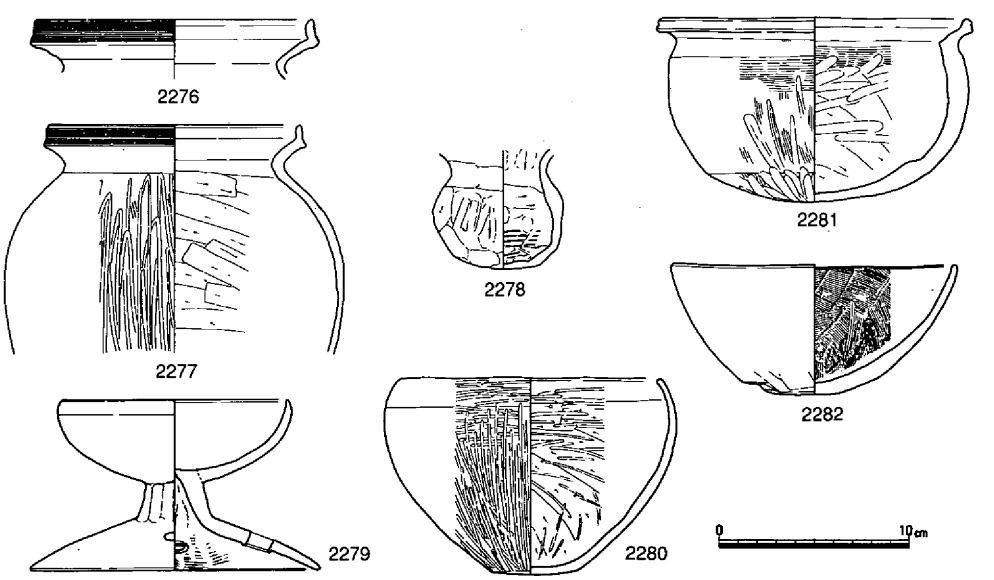
第431図　竪穴住居97出土遺物（1/4）

出されたにすぎない。平面的には肩、壁体溝、柱穴等の在り方から方形を基調としたものと考えられる。柱穴は、４本が平面円形から楕円形と不揃いながら40～60cmの規模で、東西2.70～3.00m、南北3.30～3.50mの芯心距離をもって見られた。中央穴は、４本の柱穴間のやや南寄りで長軸長75cm、幅45cmを測った。

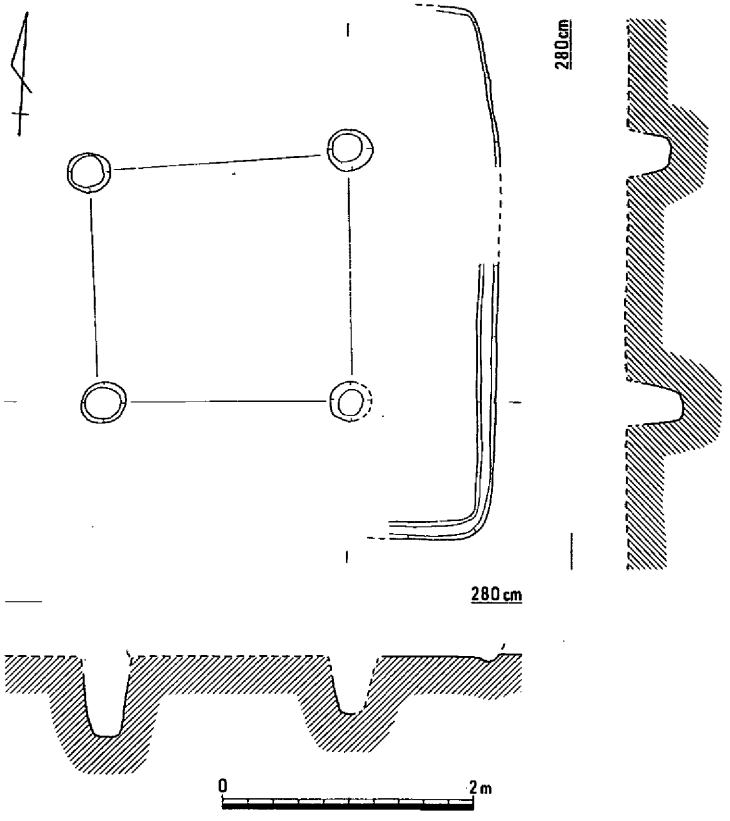
遺物は、僅かに遺存した北側床面を中心に甕、高杯、鉢、ミニチュア土器等が確認された。甕2277は、胴部最大径を上半部におき技法的にも縦もしくは斜め方向のハケメの後、縦方向に反復するヘラミガキ調整が施される。高杯2279は、椀状の杯部に短脚柱部で大きく外方に広がる脚部とからなるもので、脚裾部には４か所の穿孔が見られた。鉢には、体部から内湾気味に上方に立ち上がる口縁部を有するもの2280・2282と「く」字状口縁の端部を僅かに上方に拡張した手焙形の未製品2281等が見られる。いずれの底部も平底から丸底にいたる変換過程にあると考えられるもので、内面にはヘラケズリの後ほとんど例外がないといって過言でないくらいにヘラミガキ調整の存在が知られる。

時期的には、土器が下田所式並行に比定されることで、古墳時代初頭への位置づけが考えられる。





第432図　竪穴住居98（1/60）・出土遺物（1/4）



第433図　竪穴住居99（1/60）

竪穴住居99（第329・426・433図、写真図版74）

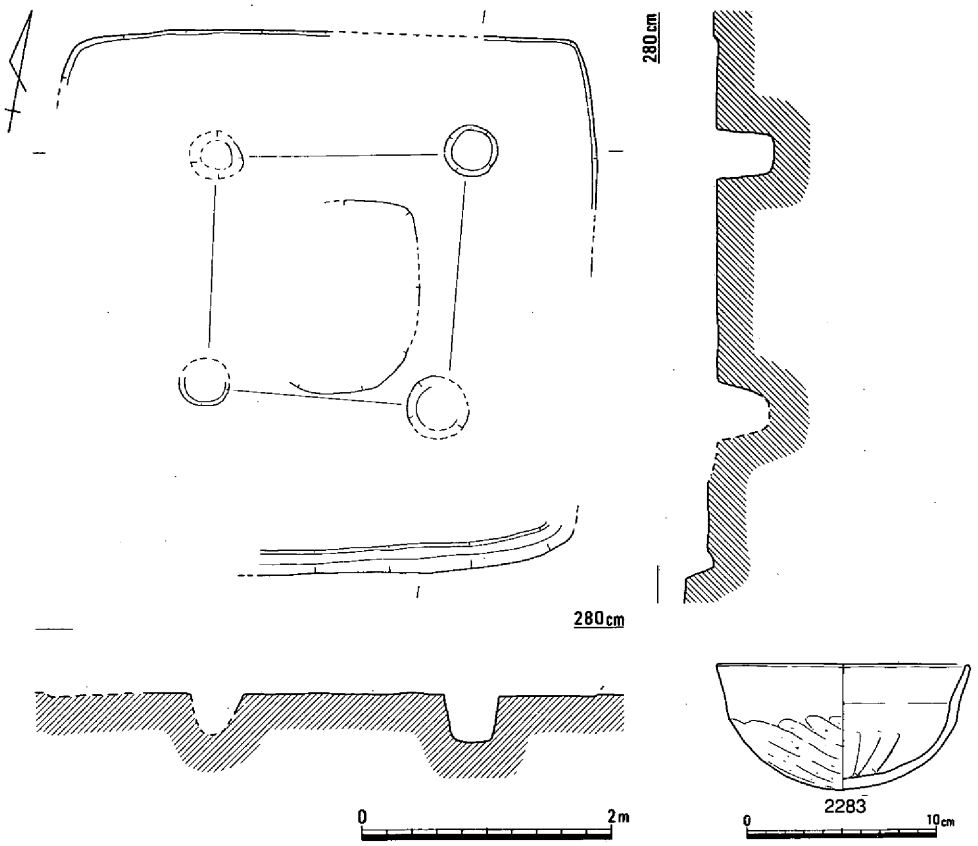
重複する一連の住居群の中にあって、直線的な壁体溝の存在を手掛かりに検討した結果確認された住居である。規模はおそらく一辺5.30mを前後する方形住居と推測され、想定される各コーナー部分に４本の柱穴の存在が認められた。ただし遺物としては、確認されたものは図化できない土器の小片のみであった。

時期は、これら一連の住居の在り方から古墳時代初頭への位置づけが推測されよう。

竪穴住居100（第329・426・434図、写真図版74）

重複する住居群の中で最も下層において検出された住居である。検討した結果平面方形に復元され、各コーナー部分には柱穴４本が径40～50cmの規模でそれぞれに芯心距離1.80～2.00mを測ってその存在が確認された。住居中央には住居平面プランに相似した状態の窪みが見られ、ベッドの存在を示唆していた。

出土遺物には、南側に比較的遺存状況が良かった床面から鉢2283が１点検出された。時期は、古墳時代初頭に比定されよう。

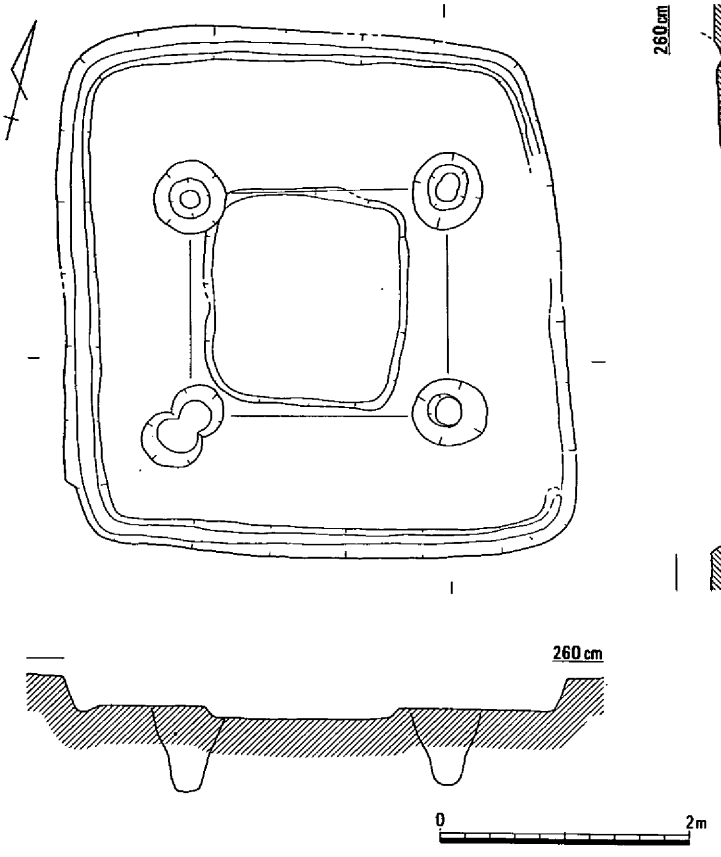


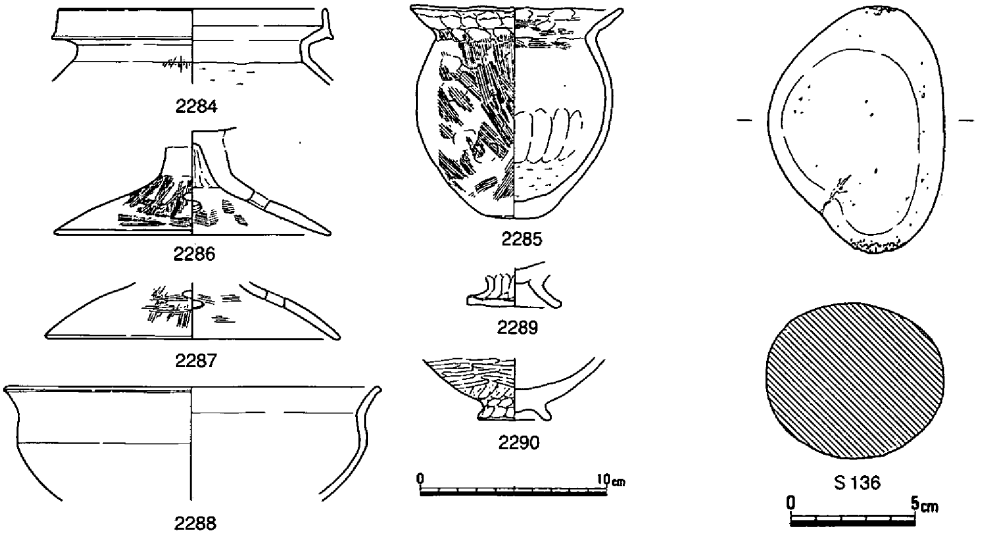
第434図　竪穴住居100（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居101（第329・435図、写真図版76）

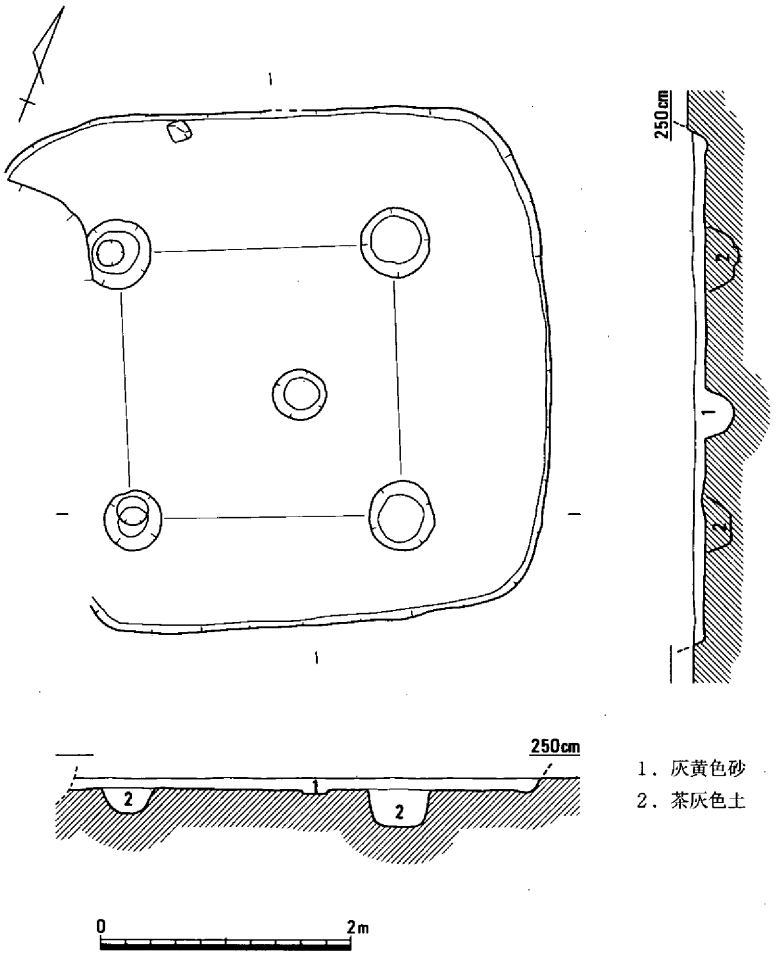
微高地南端部に近接した８Ｃ区中央部において海抜2.50ｍで検出された。およそ東西・南北方向を基調とした一辺４ｍ前後の規模の住居であるが、東西に比較して南北方向に長い平面形態を呈するものであった。検出面から約20㎝下層にはベッドとしての床高位面が約1.10～1.20ｍの幅をもって確認され、そこからは主柱穴４本が検出された。また、その柱穴間を結ぶかの状況で床底位面におちる肩口が住居のプランと相似した状況で認められ、その比高差約10㎝を測って床低位面の広がりが見られた。柱穴は、平面径50～60㎝とやや不揃いな円形から楕円形を呈するものが、約50～60㎝の深さをもって検出された。柱穴間の距離は、東西2.00ｍ、南北1.70ｍと住居の平面形態とは異なった在り方を示した。

出土遺物としては、甕2285以外はすべて小破片の状態で覆土中から検出されたもので、住居の時期を明確に示したものは少ない。2290は、製塩土器で外面にはタタキによる整形が認められ、型式的には古墳時代初頭に比定されるものである。





第435図　竪穴住居101（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）



第436図　竪穴住居102（1/60）

竪穴住居102（第329・436図、写真図版76）

竪穴住居101と同じく微高地下がり肩部に近い８Ｃ区中央部において竪穴住居101によってその西側の一部が切られた状況で検出された。一辺４ｍを前後する平面方形を呈する住居であった。ところが遺存状況は検出面から床面まで僅かに10cm程度と浅く、決して良好とは言えない状況であった。床面からは、柱穴と中央部において中央穴の存在が認められた程度で、壁体溝は確認出来なかった。柱穴は、径50～60cmの掘り方を有するものであったが、地下からの湧水の影響によるものか検出できた深さはおよそ20～30cmと浅く、本来の深さとは相当の格差が感じられた。柱穴間の芯心距離は南北2.10m、東西2.20～2.30mと概して東西方向の方が長く計測された。

時期は、床面から土器をはじめとする遺物が検出できなかったことで詳細については明言で

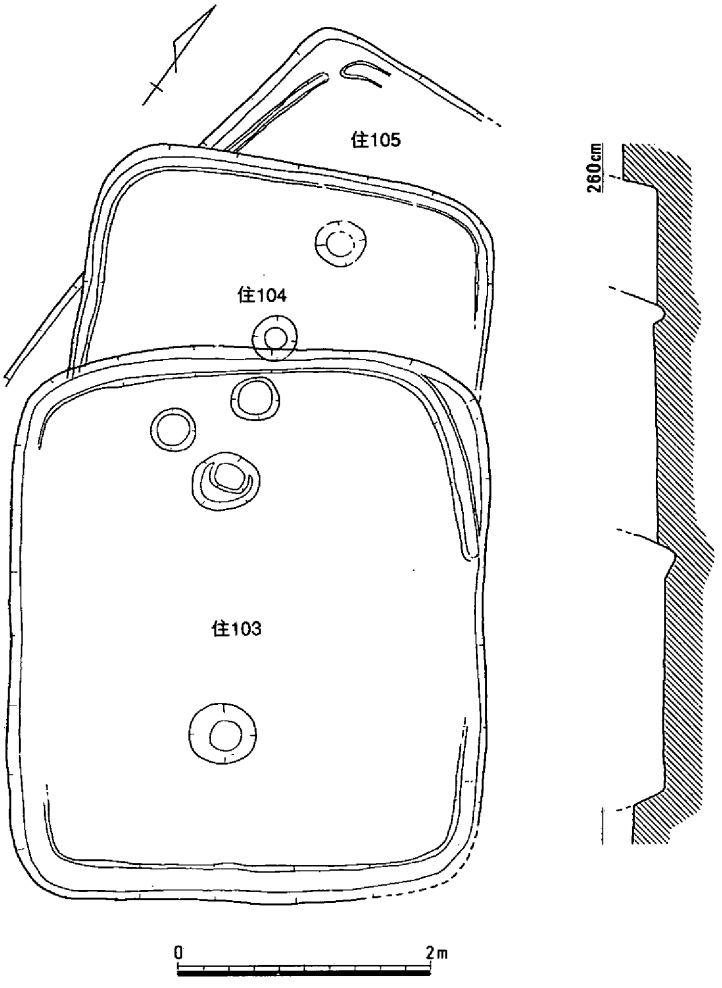
きない。しかし、切合い関係をもった竪穴住居101との関係、住居形態等からおよそ古墳時代初頭の範疇に位置づけて差支えないものと考える。

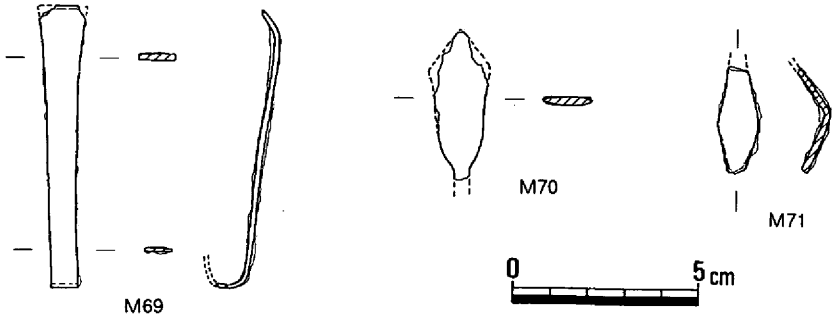
竪穴住居103（第329・437～439図、写真図版77）

竪穴住居101の北西側で海抜2.35～2.45mで３軒の竪穴住居が重複した状況で検出された。

竪穴住居103は、この重複の中にあって最も新しく位置づけられ、長辺4.40m、短辺3.75mを測る、平面長方形を呈するものであった。

検出面から約20cm下層で検出された床面からは壁体溝をはじめ柱穴が検出された。柱穴は、径50cm前後の２本が床面中央部に約２mの芯心距離をもって見られた。ただし、深さについては湧水により確認出来なかった。





第437図　竪穴住居103～105（1/60）・出土遺物（1/3）

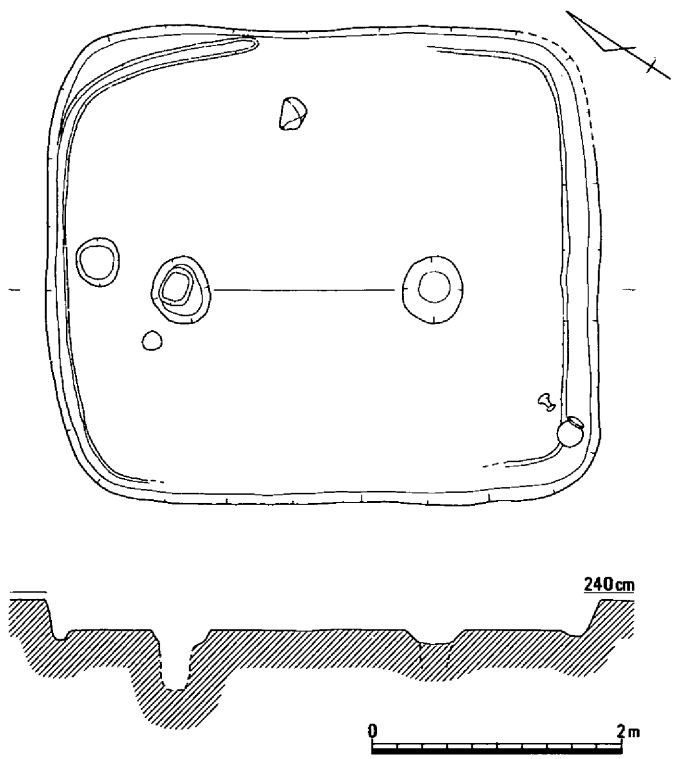
出土遺物としては、床面に遺存した状況で甕2293・2294、高杯2297、手捏ね2299、北西側の柱穴から壺2292が確認された他、覆土中からも土器、鉄器等の検出がなされた。鉄器は、M72が僅かに左右非対象を見せるが中央に鏑を有する剣である。その他３軒の重複のなかから毛抜きM69、鏃M70、不明鉄器M71等が見られたが、これらは全体の覆土中から検出されたもので個々の住居への特定は出来なかった。

時期的に見て、甕は胴部最大径が下半部分へと移行し、底部丸底化傾向が見られ、高杯脚部穿孔数も３か所となるなど型式的に亀川上層に比定される内容を呈している。

竪穴住居104（第329・437・440図）

竪穴住居103によって南側約１／２が切られた状況で検出された。平面的には一辺3.25ｍを前後する方形を基調とした住居と考えられる。検出面から約10㎝下層の床面からは、おそらく住居各コーナーを結ぶ対角線の交点に所在することで中央穴と考えられる径約40㎝、深さ60㎝と比較的深めの穴と壁体溝の存在が確認された。ただし柱穴については精査を実施したにも拘らず検出出来なかった。

出土した遺物には、壺2302、甕2303、高杯2305～2307、鉢2304等の土器と甕片を利用した土製紡錘車が１点確認され、壺は肩と頸部との境に粘土帯を添付し、その上をヘラ状の工具により「×」字状に刺突したもので胎土・製作技法からも西部瀬戸内地方からの搬入土器の可能性を示唆させるものとして注目される。

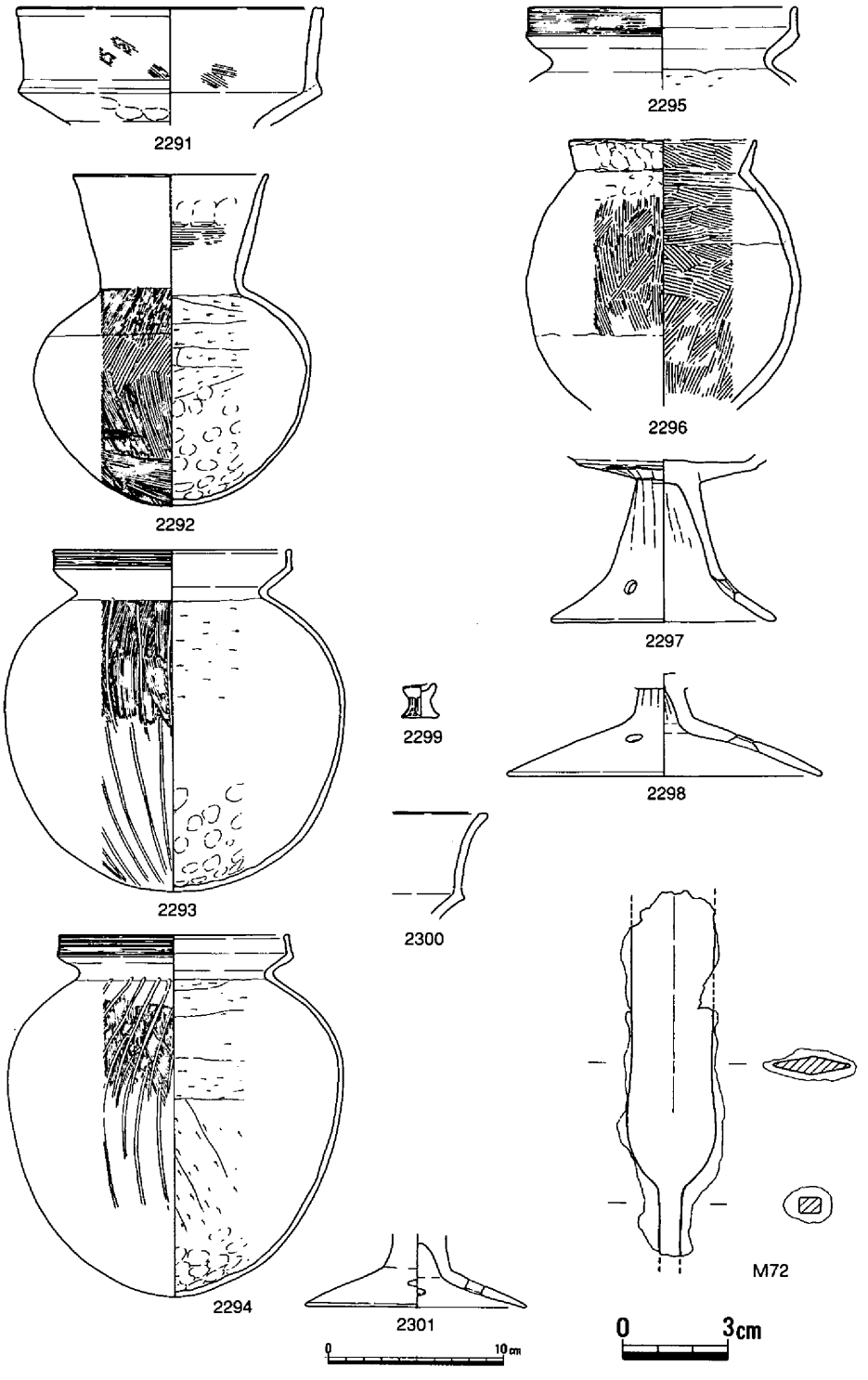


第438図　竪穴住居103（1/60）

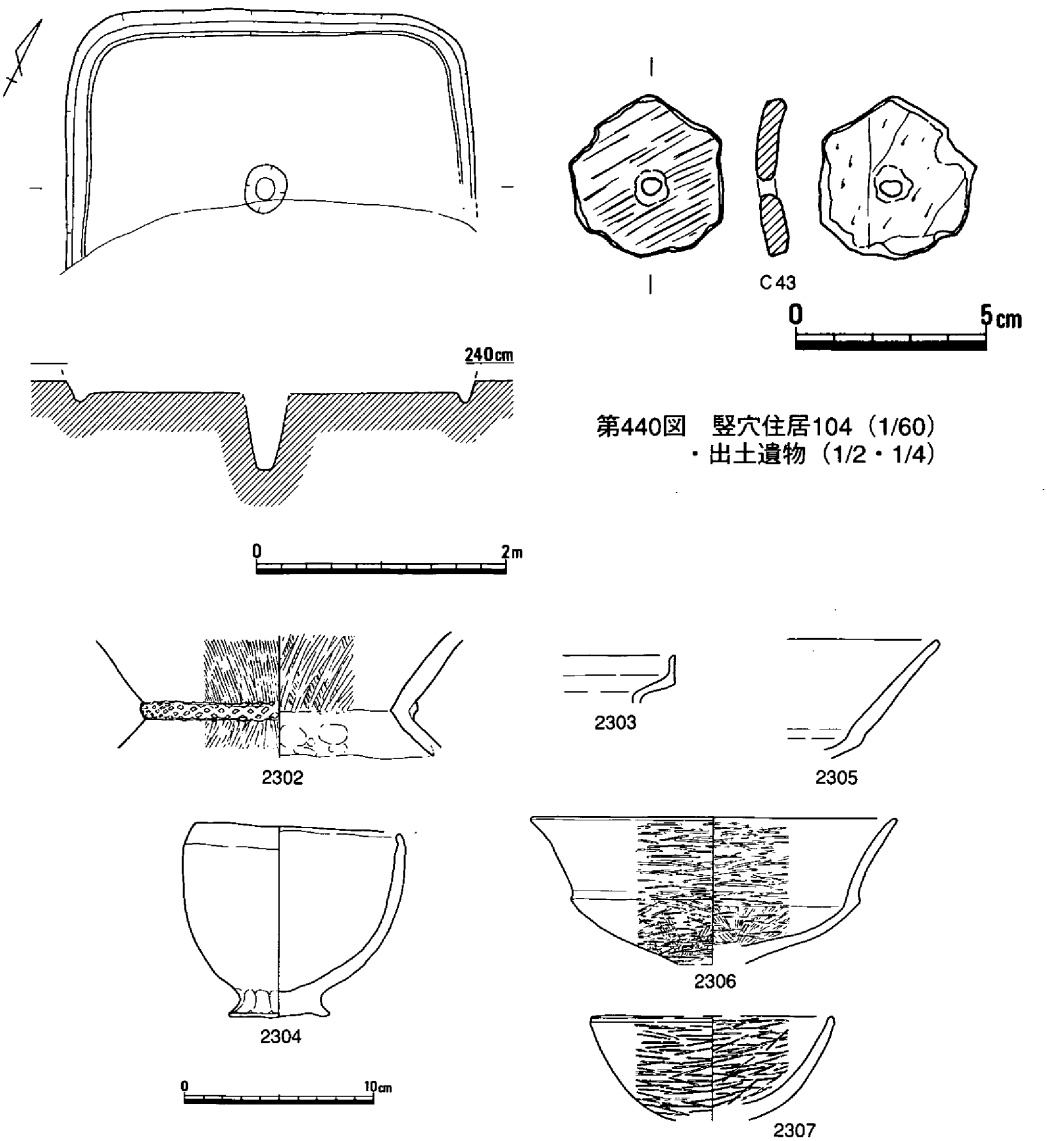
時期は、いずれも小片で詳細な検討が出来なく明確にできないが、切合い関係にある竪穴住居103・105との関係等から古墳時代初頭の範疇に位置づけて差支えないものと考える。

竪穴住居105

（第329・437・441図）



第439図　竪穴住居103出土遺物（1/4・1/2）



第440図　竪穴住居104（1/60）
・出土遺物（1/2・1/4）

竪穴住居104によって住居の東側の大部分が切られた状態で、僅かに北西部のコーナー部分と西側一辺の一部が検出されたにすぎない。規模等については、遺存するコーナーが１か所とあって具体的な数値はでないが、基本的に方形を基調としたプランが推測される。床面は、平面検出面から約25cmの比高差をもって確認された。床面からは、壁体溝と柱穴の一部が検出されたが、遺存状況は良くない。柱穴は、住居西肩口から約1.20～1.30mの間隔で２本がそれぞれに径35cm、深さ50～55cmの規模をもって検出された。全体的に西側に偏在することで本来４本であったものと推測される。

出土遺物には、甕2308・2309、高杯2310、台付鉢2311・2312が見られ、甕2308には外面

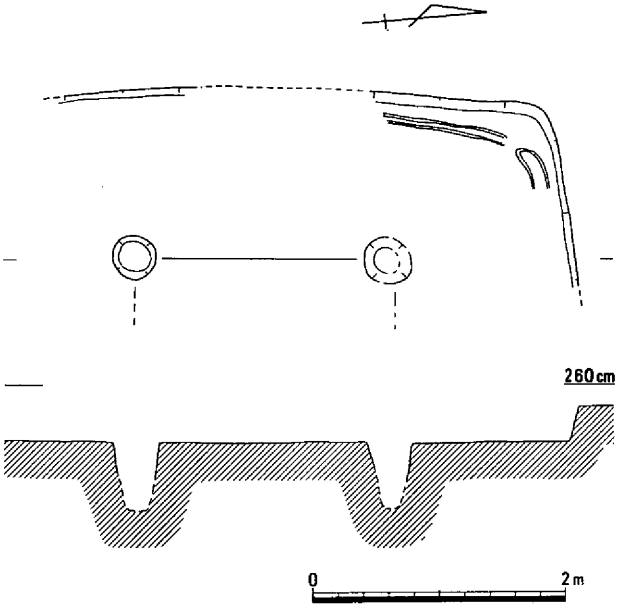
ハケメ整形の後ヘラミガキが認められ、高杯2310は脚柱部が細く穿孔数も４と、型式的に見て下田所式の範疇で理解されるものである。

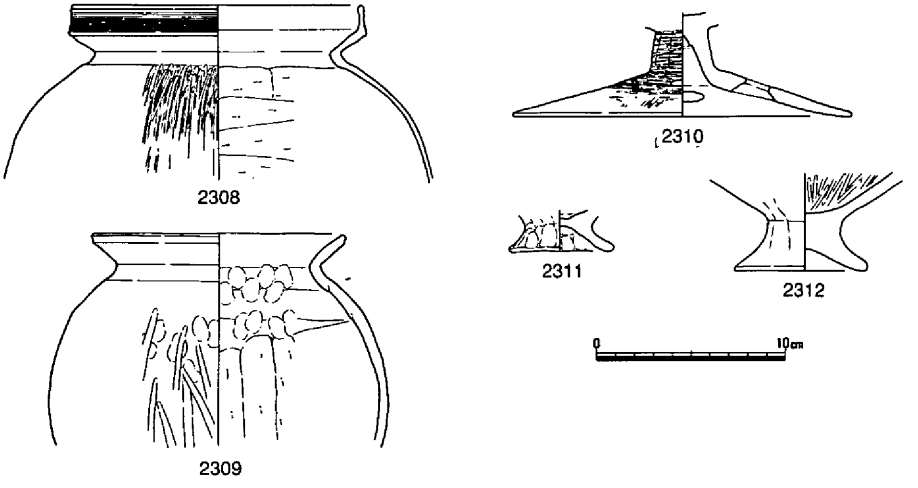
竪穴住居106（第329・442・443図）

８Ｂ区と８Ｃ区の調査区境において不鮮明ながら検出された住居である。床面にはベッドの存在が柱穴より若干内側にはいった位置で一辺約2.20m前後の規模で確認され、さらにその内側南寄りに中央穴の存在も見られた。柱穴は径35～50cmのものが４本、東西長約3.00m、南北長2.60～2.70mの芯心距離を測った。中央穴は、長さは不明ながら幅約52cm、深さ20cmを測る平面隅丸方形を呈するものであった。

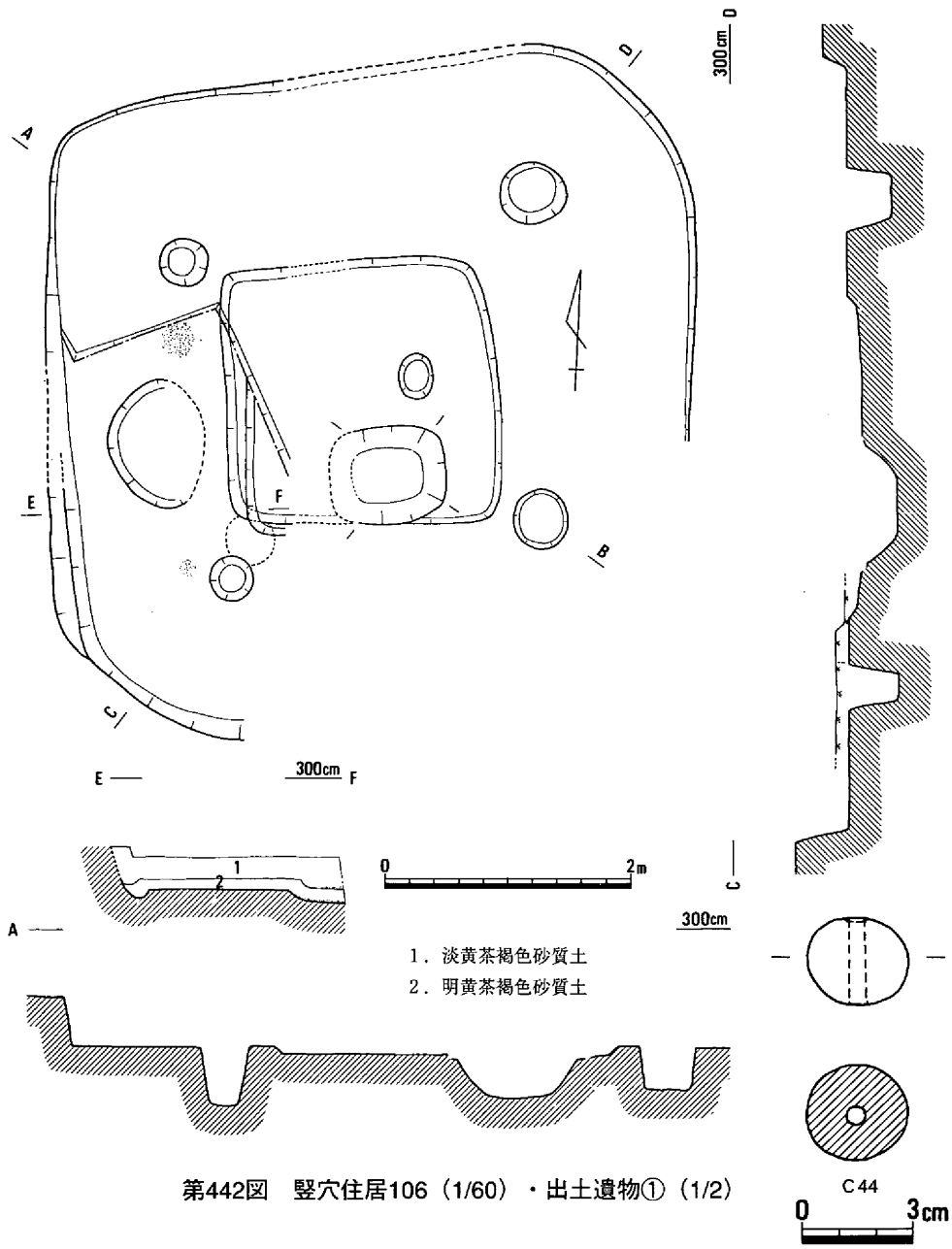
また、ベッド上面からは被熱した面が南西側と北西側の柱穴付近の２か所で径20～30cmの大きさで確認された。

出土遺物としては、壺、甕、高杯、鉢、器台等の器種が見られた。甕2316は胴部最大径が胴部上半にあり、高杯はいずれも脚柱部が長く口縁部の拡張も受部に対して長い傾向にあることで、時期的には下田所式併行に位置づけられよう。





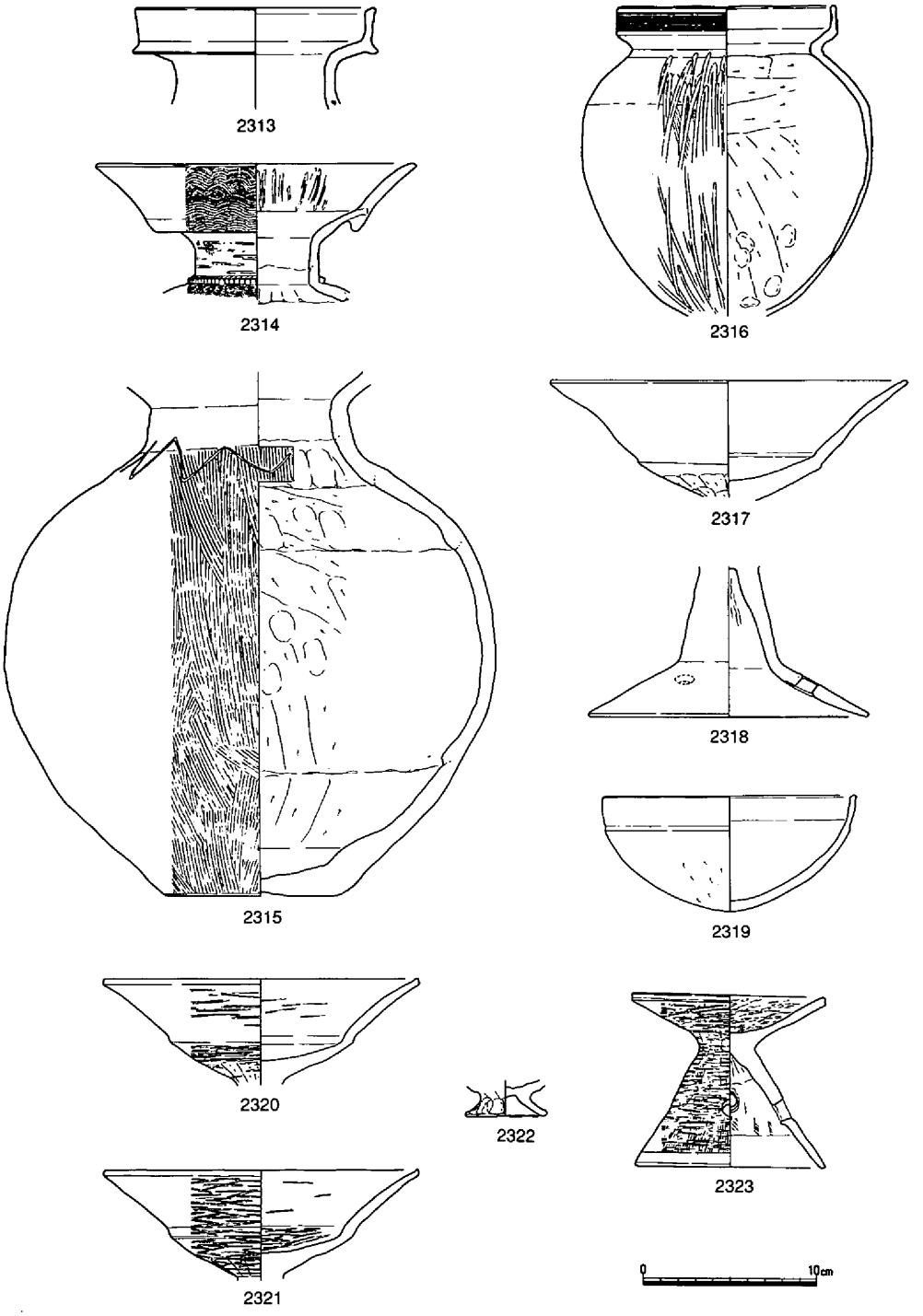
第441図　竪穴住居105（1/60）・出土遺物（1/4）



第442図　竪穴住居106（1/60）・出土遺物①（1/2）

竪穴住居107（第329・444・445図、写真図版77）

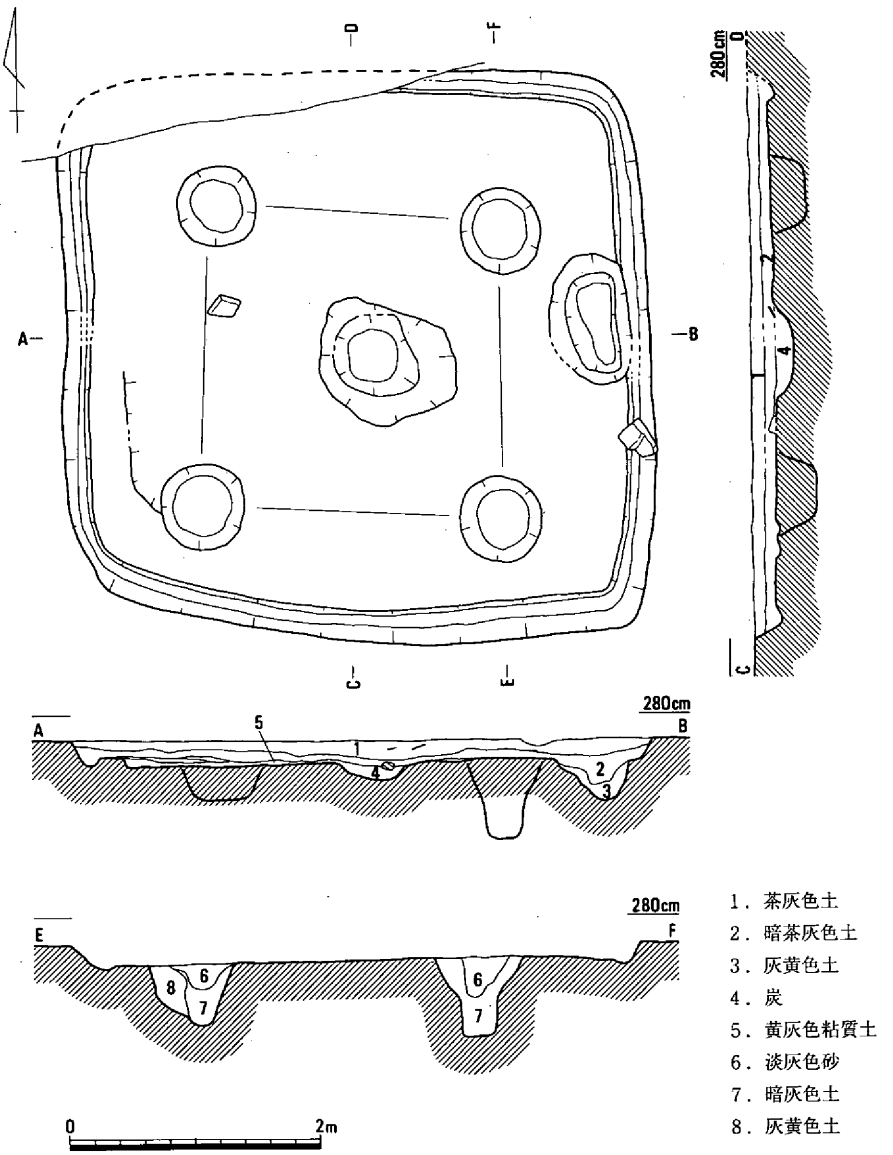
８Ｂａ区と８Ｂｂ区に跨がった位置に、竪穴住居95～100の重複した住居群との間隔約１ｍと近接した所在状況を見せる東西・南北方向を基調とした住居である。北西側が調査時の側溝によって切られ全体の検出には至らなかったものの、平面的には東西4.64ｍ、南北4.50ｍを測る方形を呈する住居であった。床面は、検出面から約15～20㎝と浅い位置に見られ、柱穴、壁



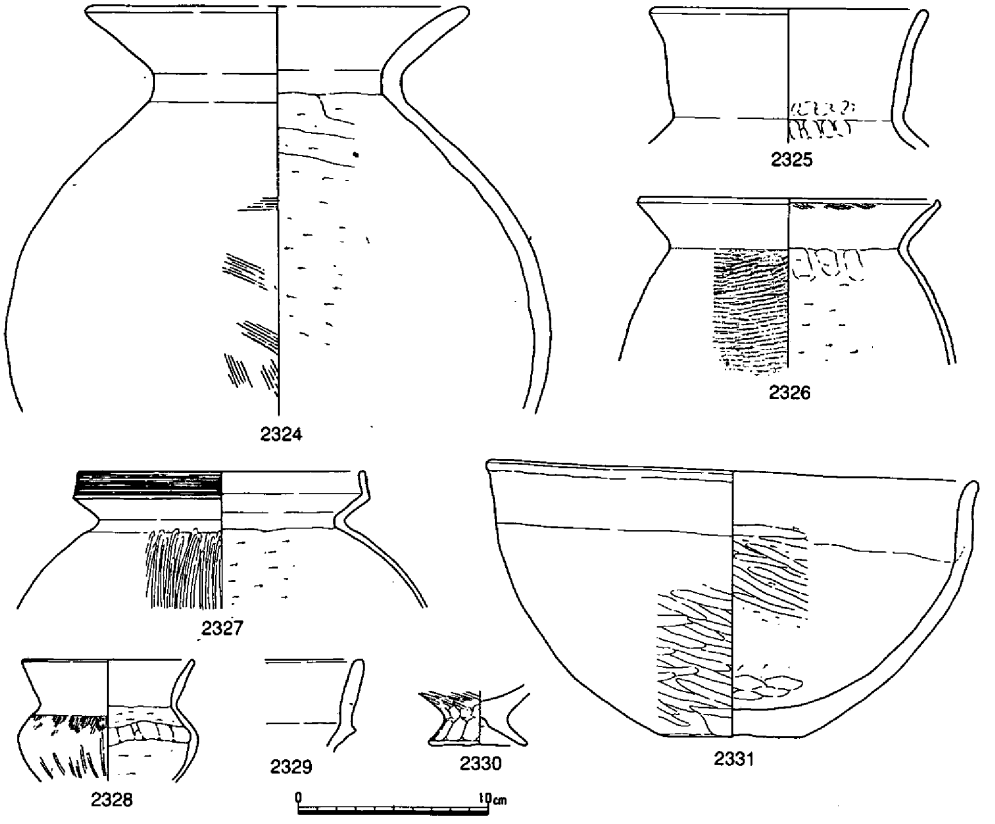
第443図　竪穴住居106出土遺物②（1/4）

体溝、中央穴、方形土壙等の検出がなされた。柱穴は、径60～70cm、深さ30～60cmの規模を有する４本がそれぞれに2.30mの芯心距離をもって見られた。中央穴は、住居中央部にあって、不整形で床面からの深さ約10cmと浅い窪み状を呈するもので、内部は炭の埋積が確認された。方形土壙は、東側一辺ほぼ中央部に長さ約１m、幅65cmの楕円形を呈して位置していた。出土した遺物には、土器の他、土製紡錘車、砥石、鉄器が見られ、中でもM74は頂部に截断痕跡を有し鍛冶関係遺物として注目される。

時期は、甕2327の調整技法等の在り方により下田所式併行に位置づけられよう。　（鳥崎）



第444図　竪穴住居107（1/60）

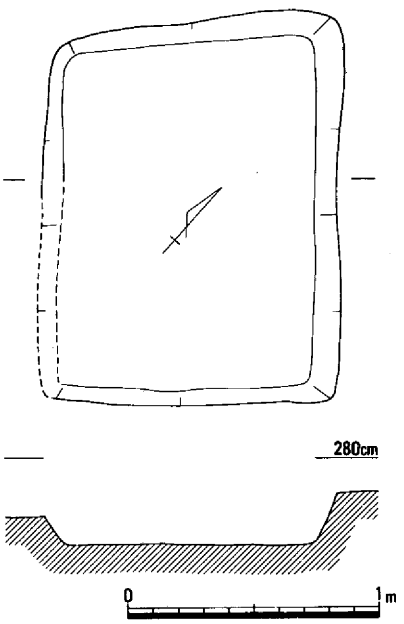


第445図
竪穴住居107出土遺物
（1/4・1/2・1/3）

(3)　土壙

土壙135（第329・446図）

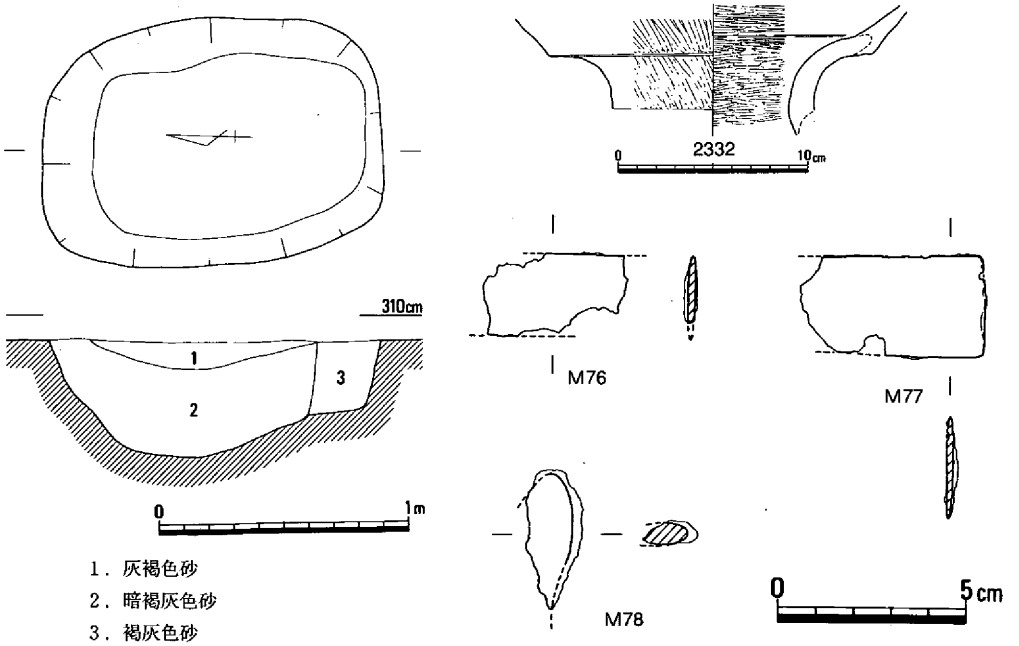
10Ｂｂ区南西部に位置し、竪穴住居23・71・72を削っている。平面形は長方形を呈し、長軸長1.51ｍ、短軸長1.17ｍをそれぞれ測る。深さ21㎝の側壁は外傾し、底面はほぼ平坦で、1.37×1.0ｍの長方形を呈し、海抜高は2.46ｍである。遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。



第446図　土壙135（1/30）

土壙136（第329・447図）

10Ｂｃ区に位置し、竪穴住居24・71・72を削っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長136㎝、短軸長99㎝をそれぞれ測る。深さ46㎝で、側壁は外傾している。底面は108×71㎝の隅丸長方形を呈し、北半が深く、海抜高2.55ｍである。出土遺物には、壺2332と、鉄器M76～78がある。2332は頸部から外反する口縁部の端部が斜め上方に拡張されている。時期は、古墳時代初頭に比定される。



第447図　土壙136（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙137（第329・448図）

10Ｂｃ区に位置し、土壙103・239を削っている。

平面形は楕円形で、長径63cm、短径57cmをそれぞれ測り、深さ12cmの側壁は外傾して、断面径は皿形を呈する。海抜高2.67ｍで平坦な底面は、53×46cmの楕円形である。

出土遺物には、甕2333・2334、高杯2335があり、2335は古い要素を示すが、甕の口縁部外面には櫛描沈線が巡らされている。時期は、古墳時代初頭に比定される。

土壙138（第329・449図）

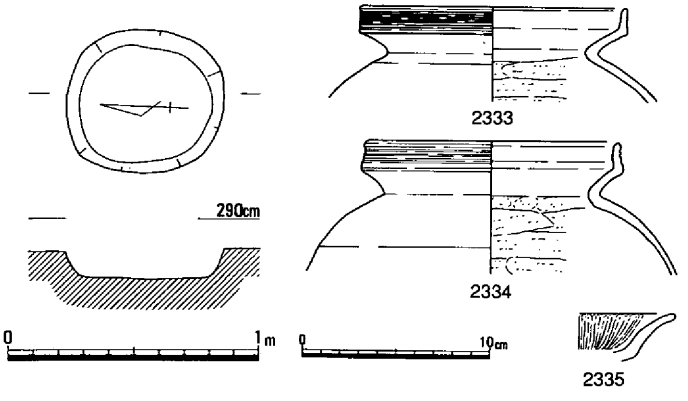
９Ｂｂ区に位置し、竪穴住居78・79に削られている。

平面形は楕円形で、長径79cm、短径41cmをそれぞれ測り、深さ21cmの側壁は東辺が直立し、他は外傾している。東に偏った底面の海抜高は2.21ｍで、46×23cmの楕円形を呈する。

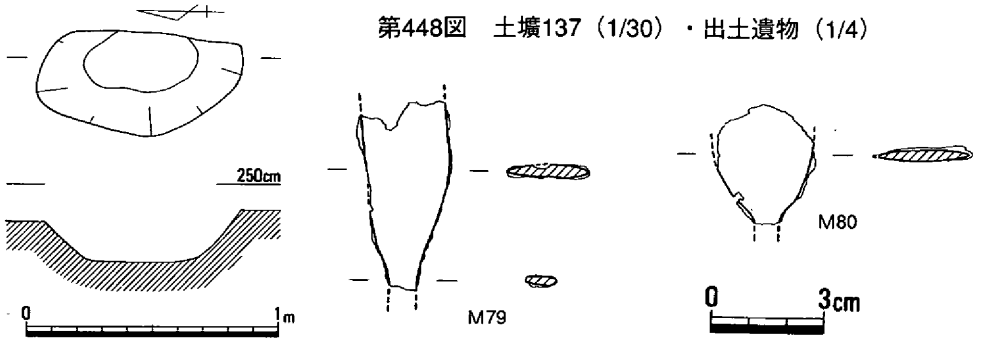
出土遺物には、鉄鏃M79、鉄器M80があり、土器は出土していないが、周辺の遺構との関係から、古墳時代初頭に比定される。

土壙139（第329・450図）

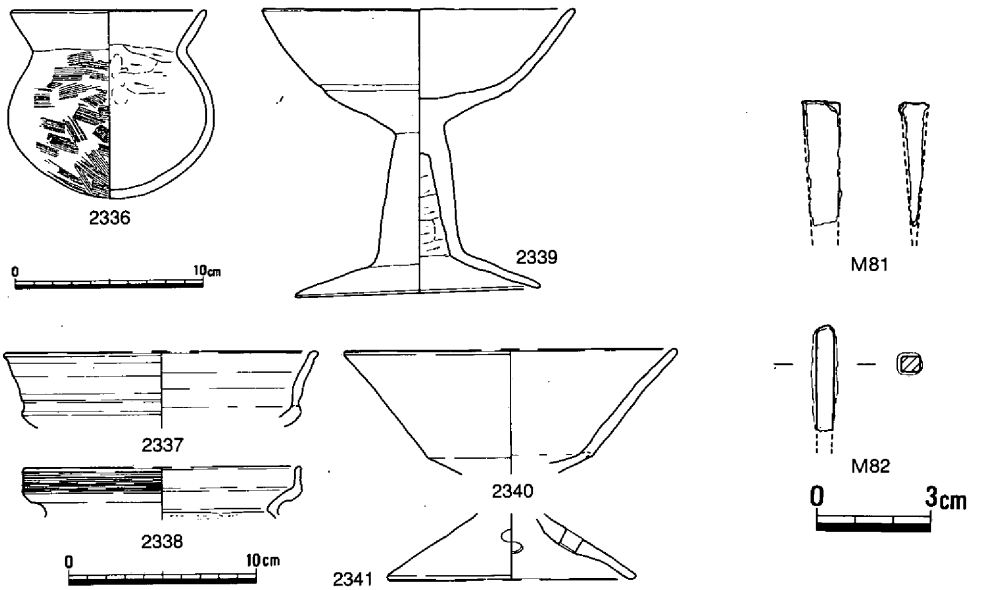
９Ｂｂ区南東部に位置し、竪穴住居82・83、土壙250を削っている。東端を橋脚によって失っているため全容は不明であるが、平面形は不整な楕円形と想定され、最大南北長5.9ｍ、最大東西長5.6ｍを測り、深さは５～10cm程度で浅く、溜り状を呈する遺構である。出土遺物には、壺2337、甕2336・2338、高杯2339～2341の他に、鉄鏃Ｍ82、鉄器Ｍ81等がある。2339は長脚で脚



第448図　土壙137（1/30）・出土遺物（1/4）



第449図　土壙138（1/30）・出土遺物（1/2）



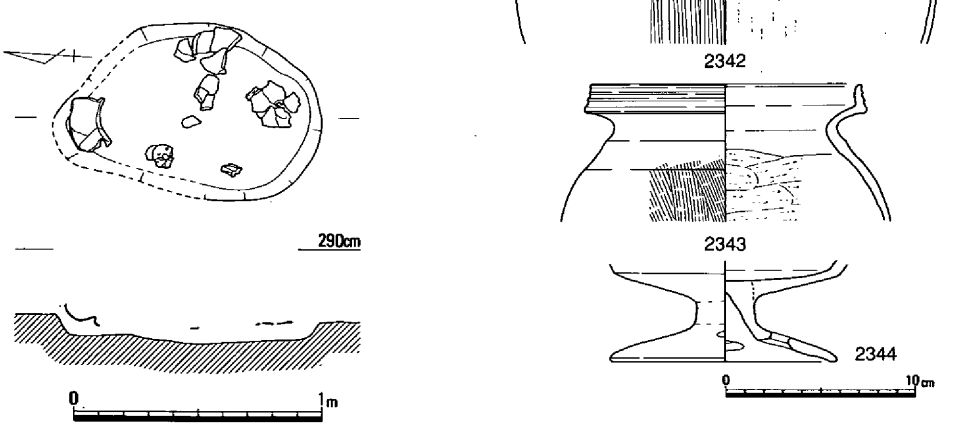
第450図　土壙139出土遺物（1/4・1/2）

柱部内面をヘラケズリされており、透かし孔は伴わない。2341に古い要素もみえるが、時期は、亀川上層式併行期に比定される。

土壙140（第329・451図）

９Ｃｄ区北東部に位置し、土壙208・209を削っている。

北端が不明瞭であるが、平面形は楕円形に復元され、復元長径106cm、短径70cmをそれぞれ測る。深さ11cmの側壁は外傾し、海抜高



第451図　土壙140（1/30）・出土遺物（1/4）

2.65m前後で若干凹凸のある底面は、97×55cmの楕円形を呈する。底面から５cm以上浮いた状態で、大形土器片が出土しており、弥生土器の甕2342・2343、高杯2344がある。遺物の示す時期は弥生時代終末であるが、検出状況から古墳時代に下る可能性を残している。　（光永）

土壙141（第329・452図）

９Ｂｄ区に所在した弥生時代後期後半の竪穴住居37の埋没後この覆土を掘開した土壙である。遺構は海抜2.40mで検出された。平面は東西方向に主軸を有し、長軸長1.85m、幅95cmの規模を測る長楕円形を呈し、壙底は検出面から最深で27cmを測った。ただし壙底は西側に高く東側に低いといった一様な面を有するものではなく、中央から西側にかけて段状に浅くなるもので、薄い炭の堆積を認めた。

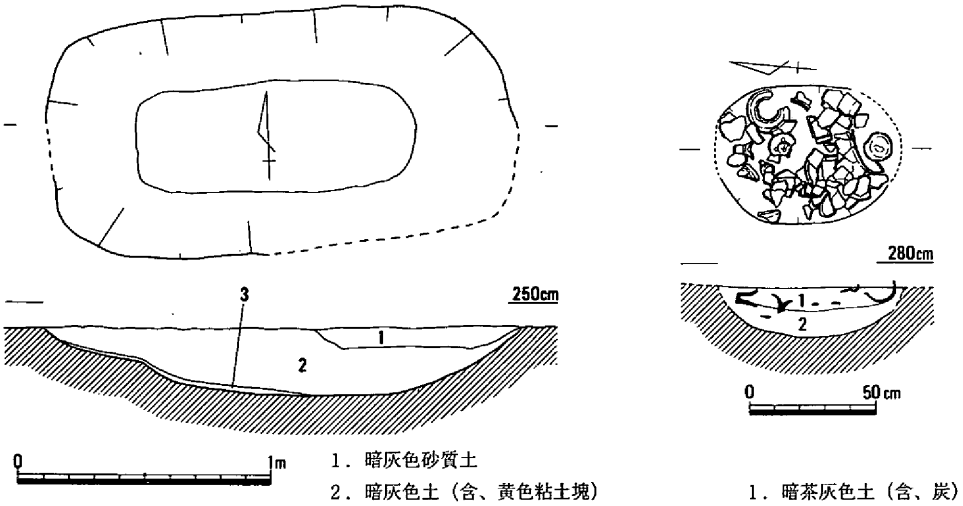
出土遺物が認められないことで時期の詳細については明言出来ないものの、周辺の状況とも照し合わせても古墳時代初頭への位置づけが妥当であろう。

土壙142（第329・452・453図）

土壙141と同じく竪穴住居37の覆土中に掘開され南北方向に主軸をもった土壙である。長軸長74cm、幅55cm、検出面からの深さ20cmの規模を測った。平面楕円形を呈し、壙内には比較的土器が充満した状況で見られた。

出土した遺物は、壺2345、甕2346・2347・2353、高杯2348～2352・2355～2359、鉢2354等の土器のみであり、他の鉄器・石製品等の器種は見られなかった。

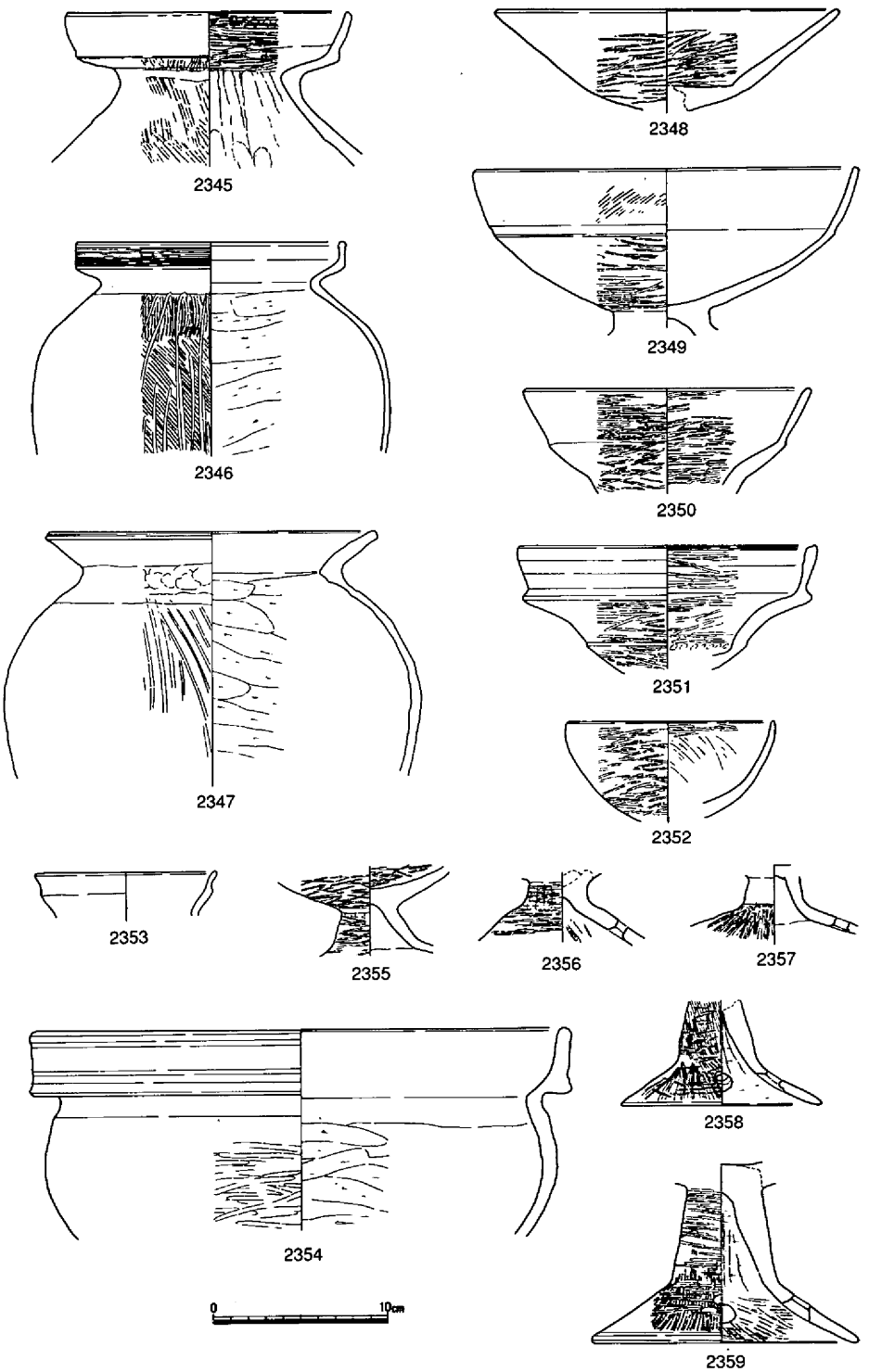
時期は、口縁部外面に櫛描沈線を有する甕2346の胴部最大径の位置が肩部近くにあり、高杯2358・2359も脚柱部が長く、内面中空状態でない等の特徴から下田所式併行



1．暗灰色砂質土
2．暗灰色土（含、黄色粘土塊）
3．炭

1．暗茶灰色土（含、炭）
2．灰茶色土

第452図　土壙141（左）・142（右）（1/30）



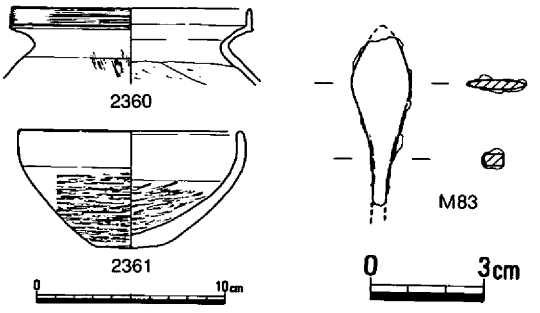
第453図　土壙142出土遺物（1/4）

と考える。

土壙143（第329・454図）

８Ｂｂ区と８Ｂｄ区の境付近に所在が確認された土壙である。

壙内からは、甕、鉢、鉄鏃の出土が確認された。甕は肩部以下を欠くため詳細な調整技法に関する検討が出来ないが、鉢はまだ平底をみせ、内外面に比較的丁寧なヘラミガキが施されたものであった。



第454図　土壙143出土遺物（1/4・1/2）

時期は、２点の器種の特徴によりおよそ下田所式に併行すると考える。（島崎）

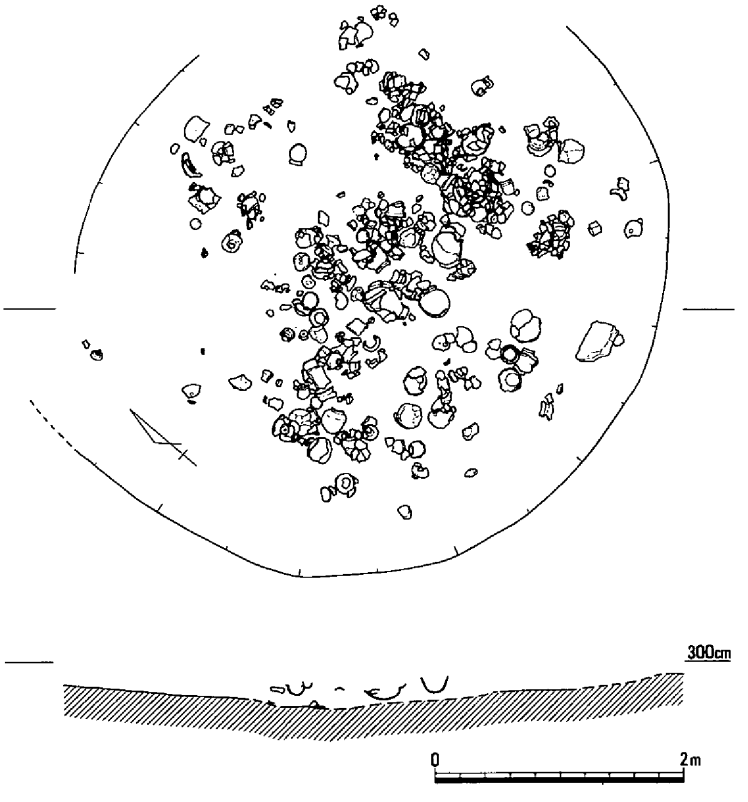
(4)　土器溜り

土器溜り２（第329・455～464図、写真図版78）

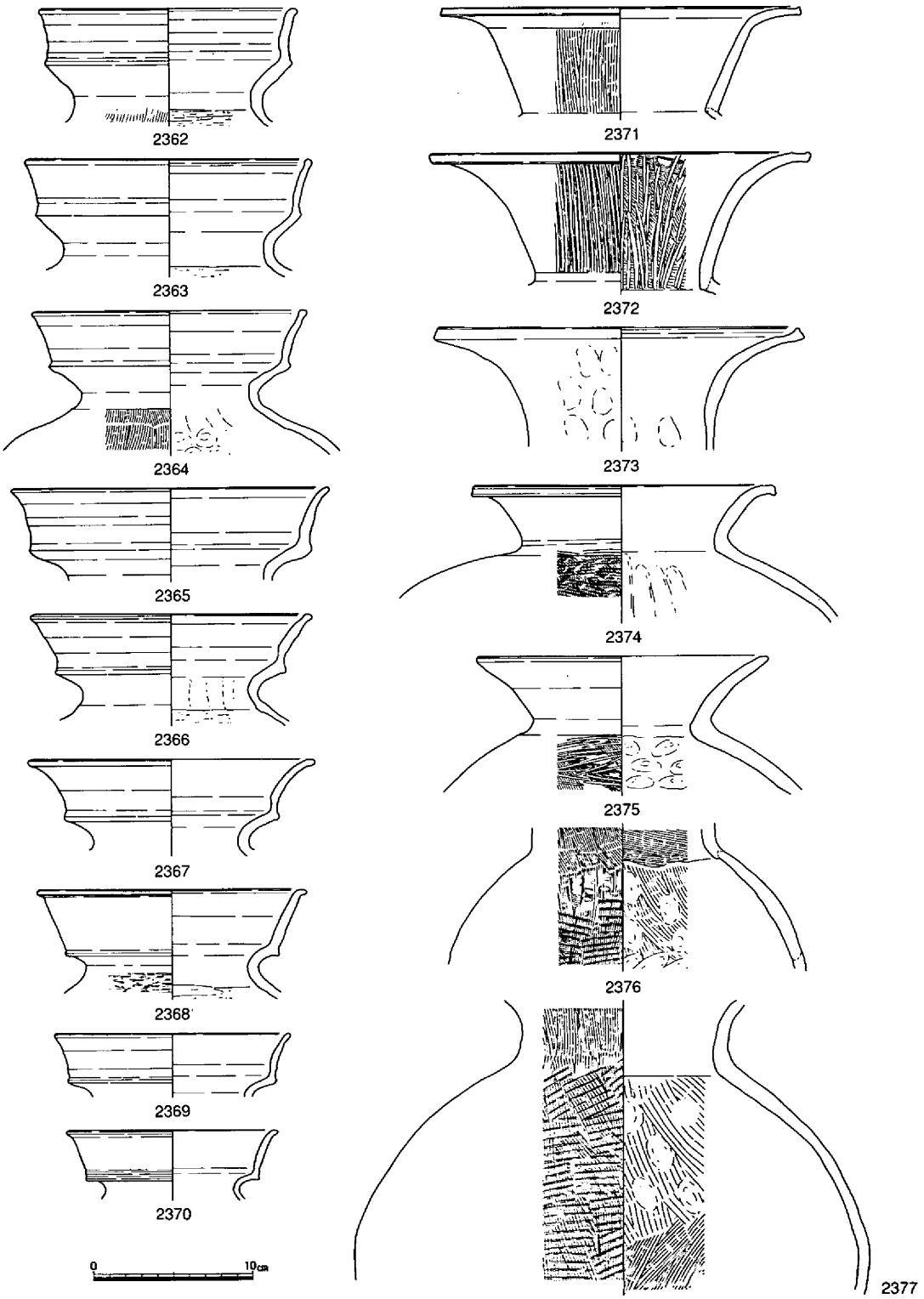
11Ｃ区に位置し、竪穴住居46の埋没後、その上層に形成されている。平面形は円形で、規模は南北径4.45m、東西径5.1mを測り、深さは25cm、中央部の海抜高2.65mである。

出土状況としては完形に近い大形片が多く、器種構成については、甕が多く、高杯が少ないようである。

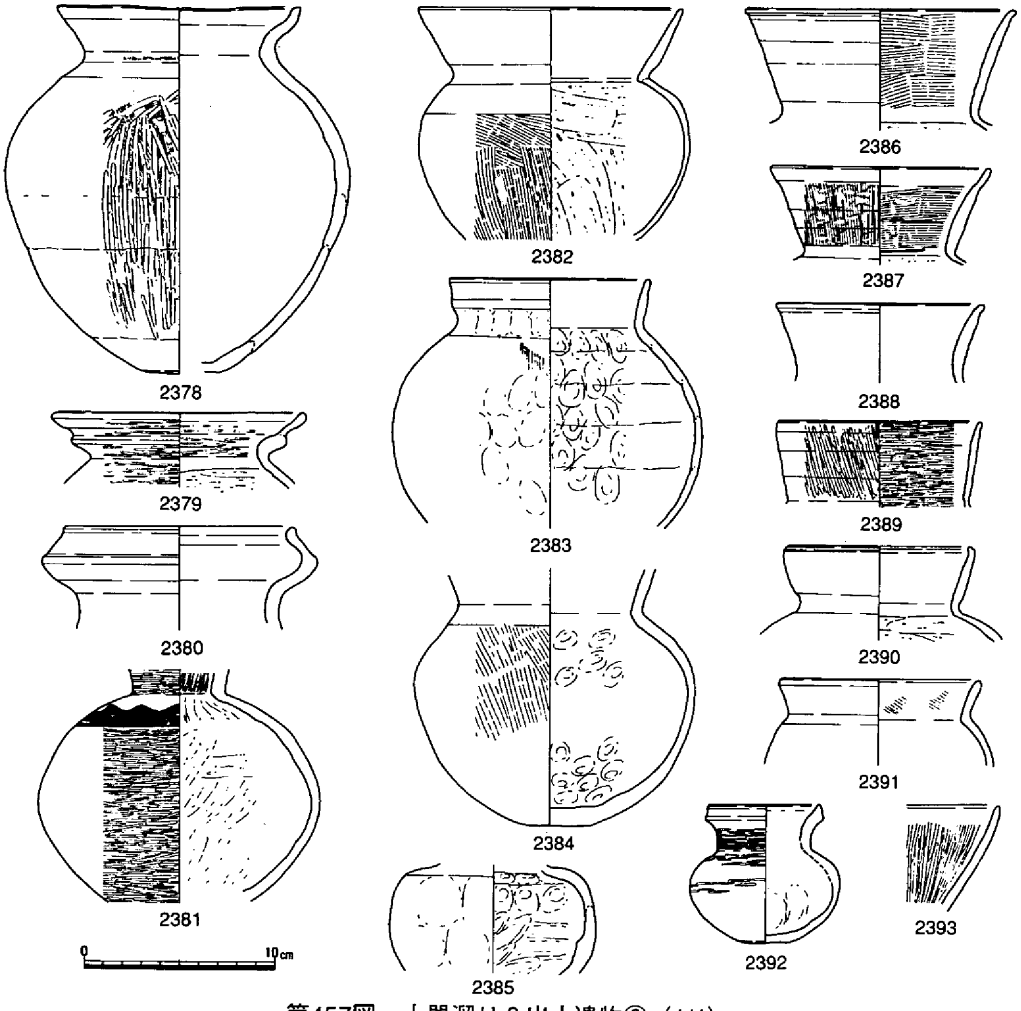
2362～2370は複合口縁の壺で、2365～2367には端部が屈曲して外反する傾向が見られる。壺2371～2375は口縁部が外反し、2371～2374では内面上端が押さえられて、端部に面をもつ。壺2382・2383・2386～2391は、口縁部が直線的に開く



第455図　土器溜り２（1/60）



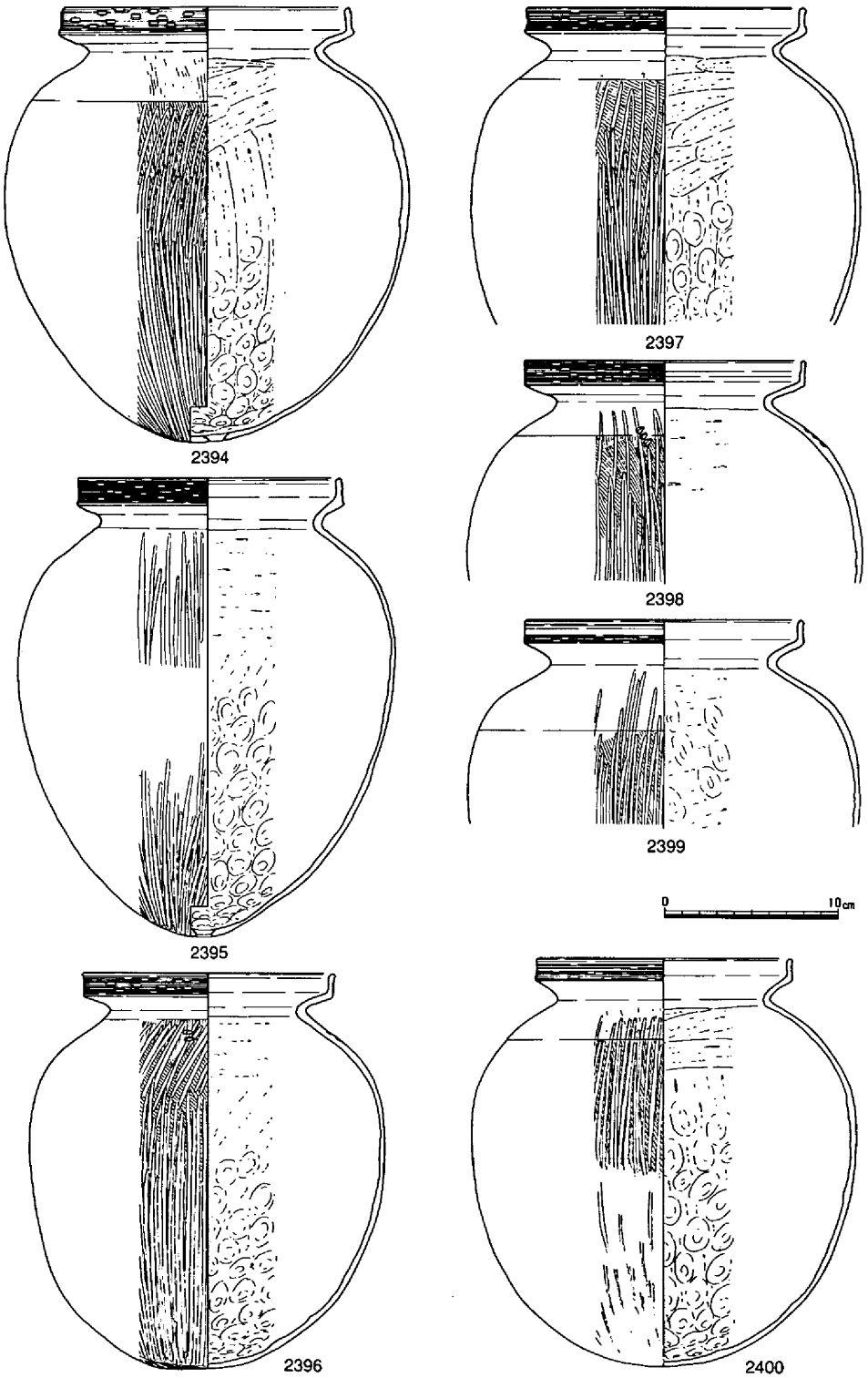
第456図　土器溜り２出土遺物①（1/4）



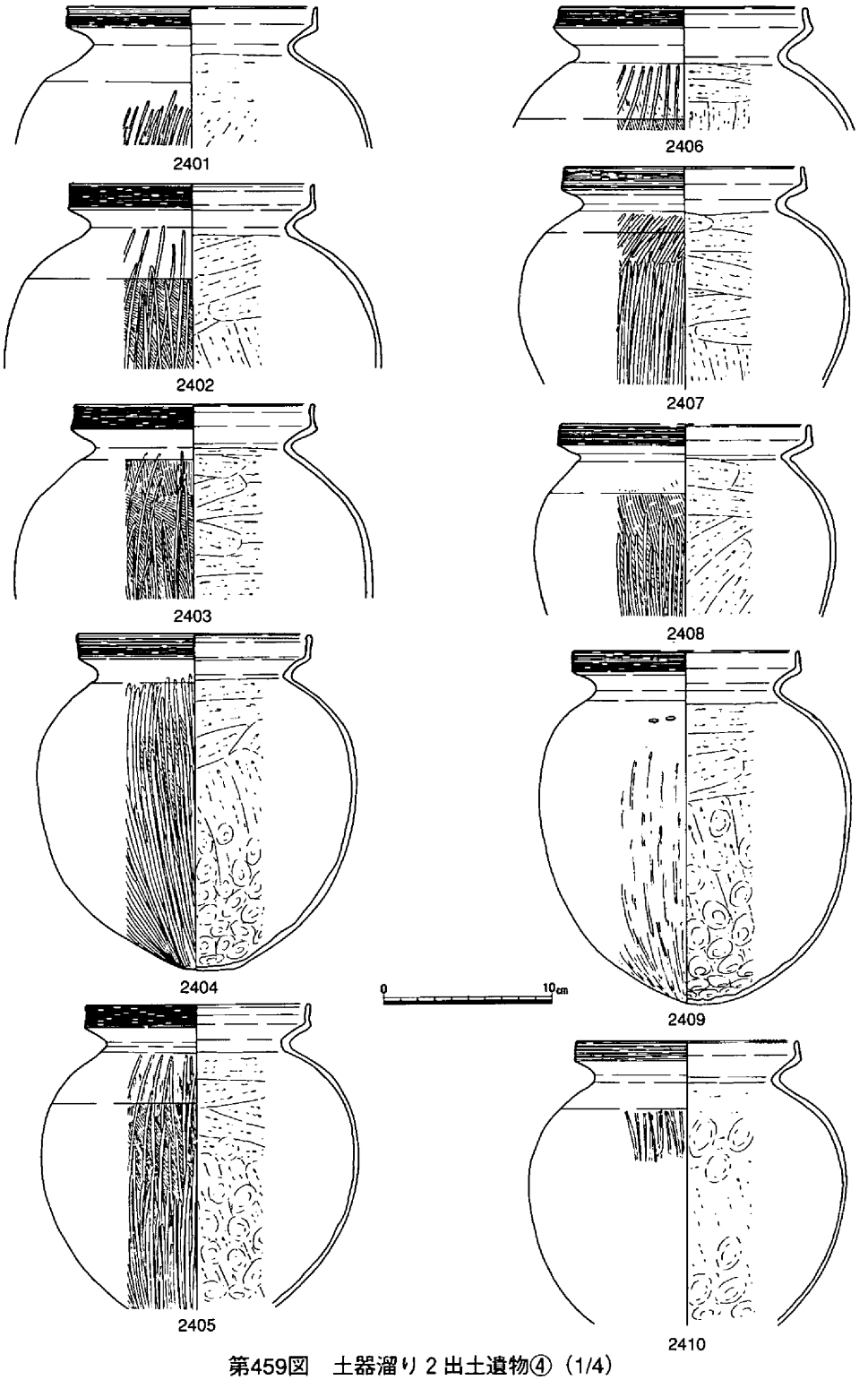
第457図　土器溜り２出土遺物②（1/4）

 もので、2389・2390の口縁部はほぼ直立している。2381の肩部には櫛描沈線による波状文が見られ、2393とともに水漉粘土が用いられている。小形壺2392は丹塗りされている。2374・2376・2377の体部外面はタタキメ調整され、2376・2377の内面にはハケメが残っており、2380とともに他地域からの搬入品と考えられる。

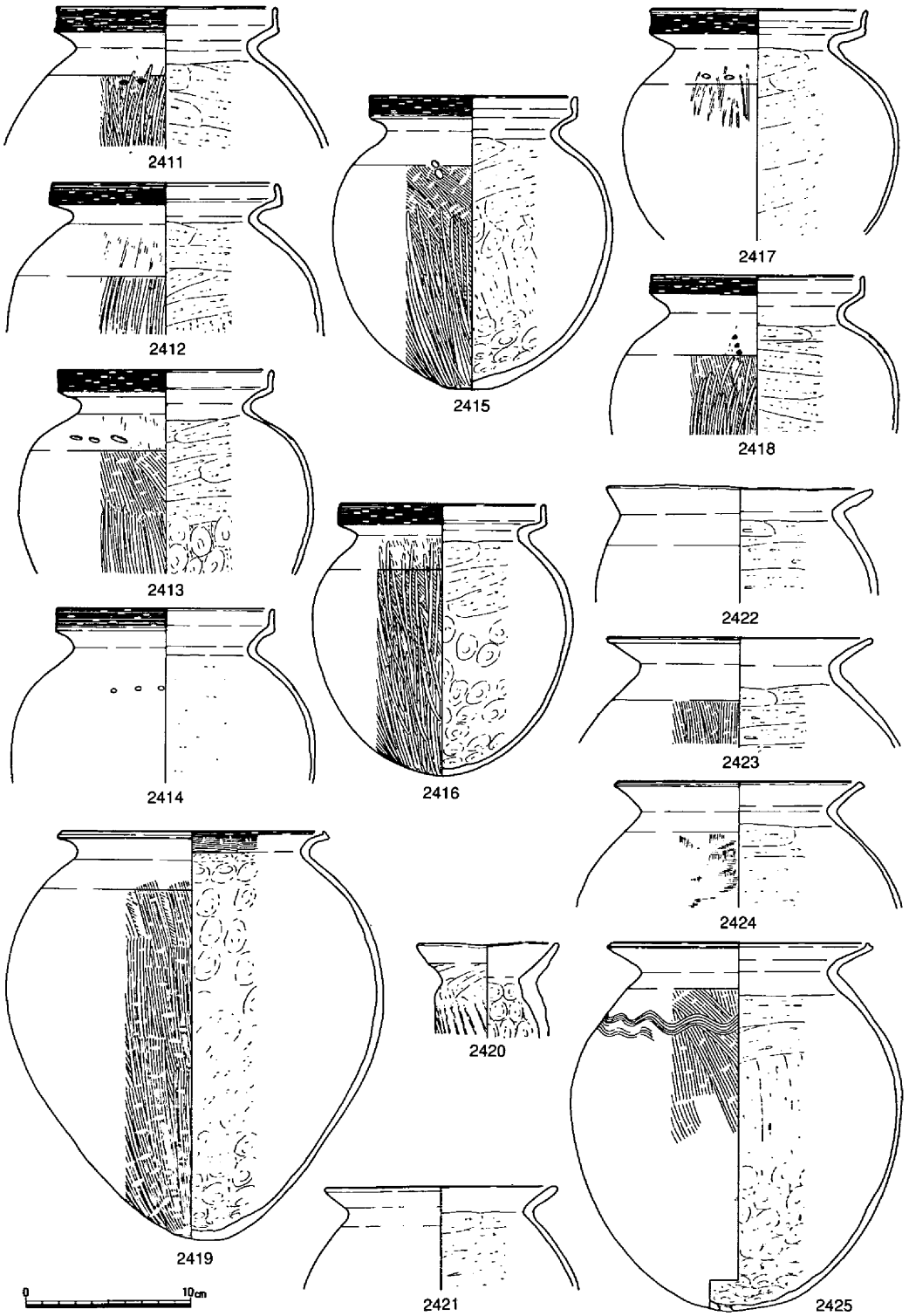
甕2394～2418は、ほぼ直立する口縁部外面に櫛描沈線が巡らされ、体部外面はハケメ後に縦方向にヘラミガキされて、内面下半に指頭圧痕を残すものである。2404・2415には若干の底部が認められるが、丸底化しており、2394・2395は焼成後に穿孔されて、甑として使用されている。2396・2398・2409・2411・2413～2415・2417・2418の肩部外面には、２～３個の刺突文が見られる。2419・2421～2426・2428・2429は口縁部が「く」字状に開くもので、2419・2424・2425では端部に面をもつ。2425は肩部外面に櫛描沈線による波状文が施され、焼成後に底部穿



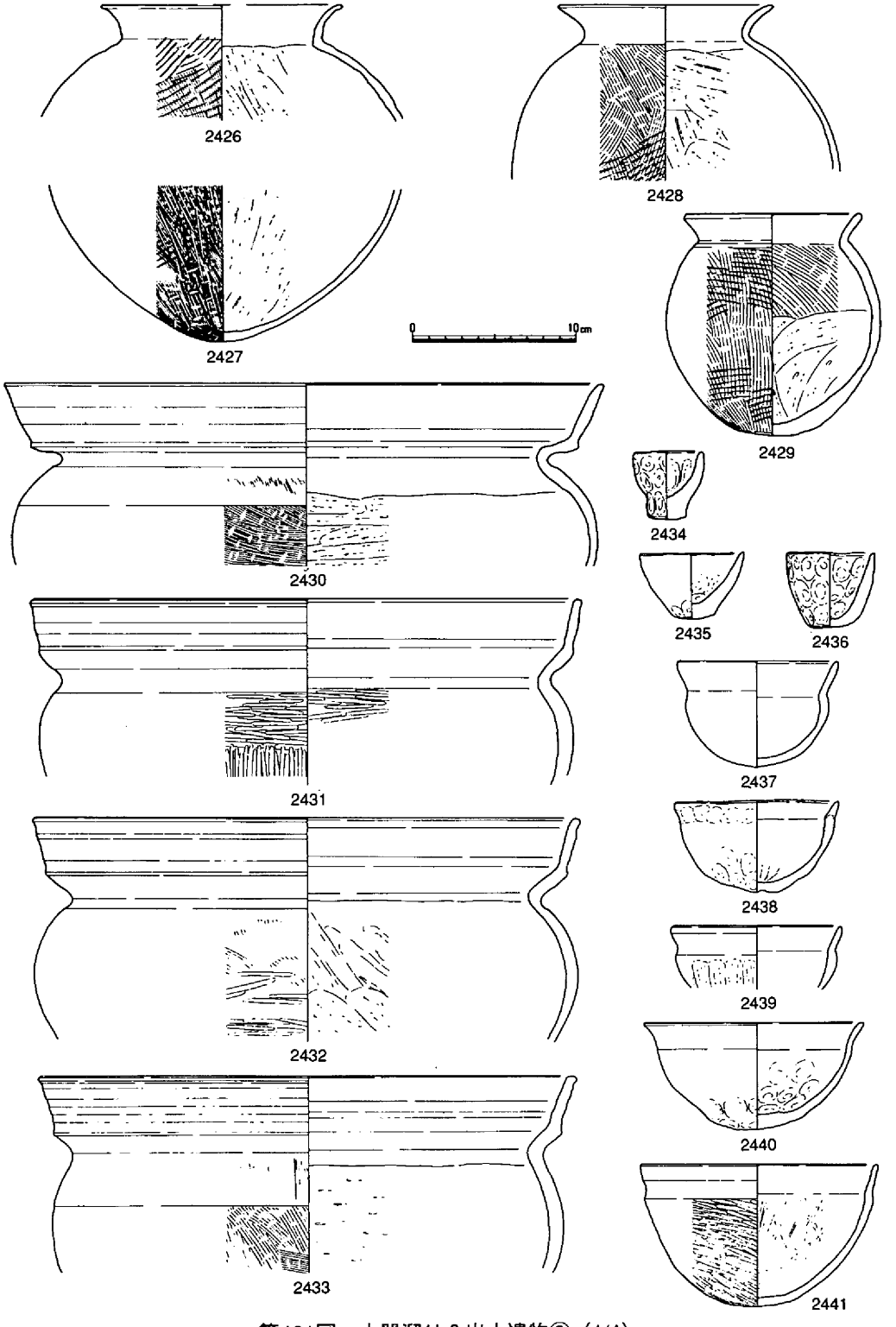
第458図　土器溜り２出土遺物③（1/4）



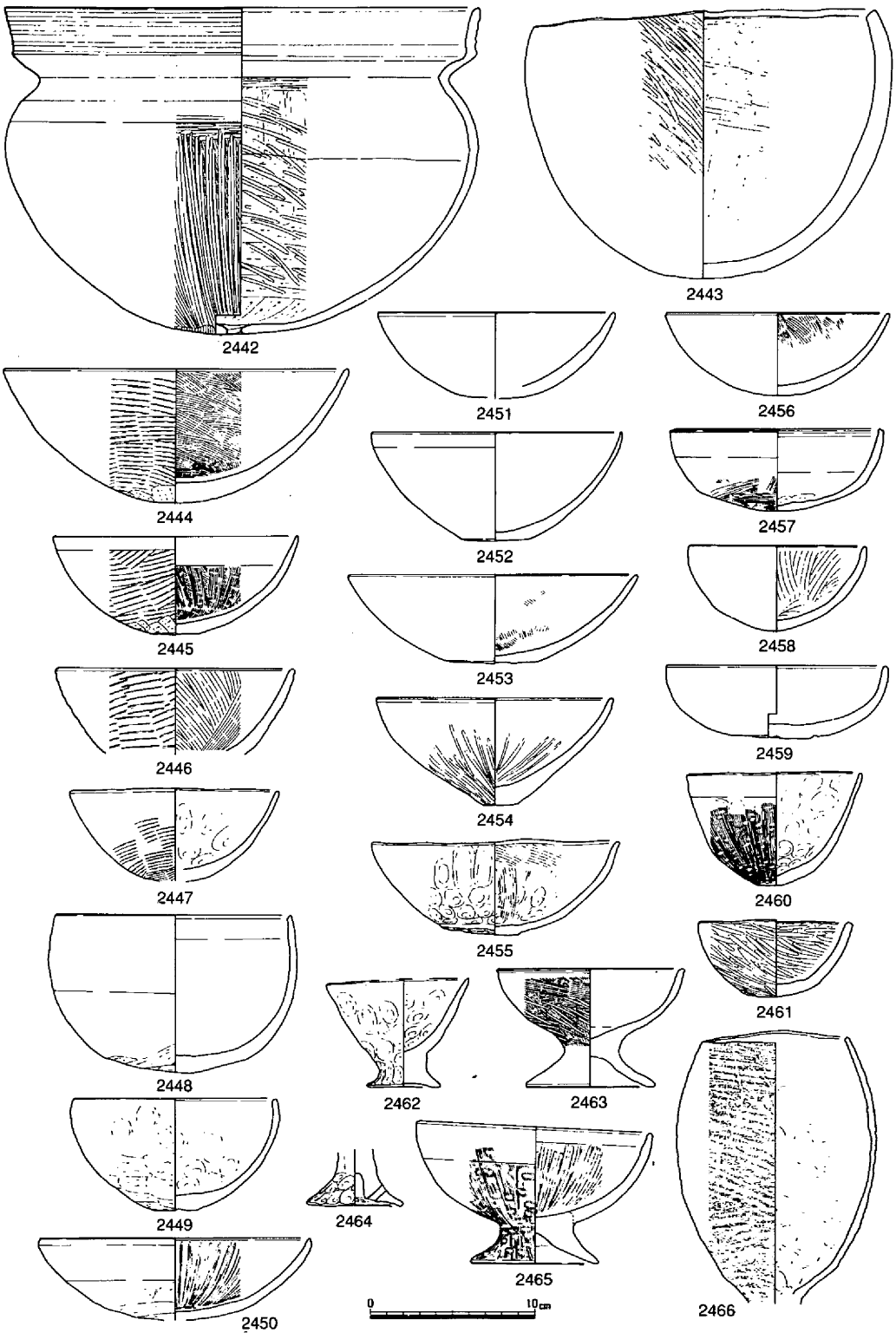
第459図　土器溜り２出土遺物④（1/4）



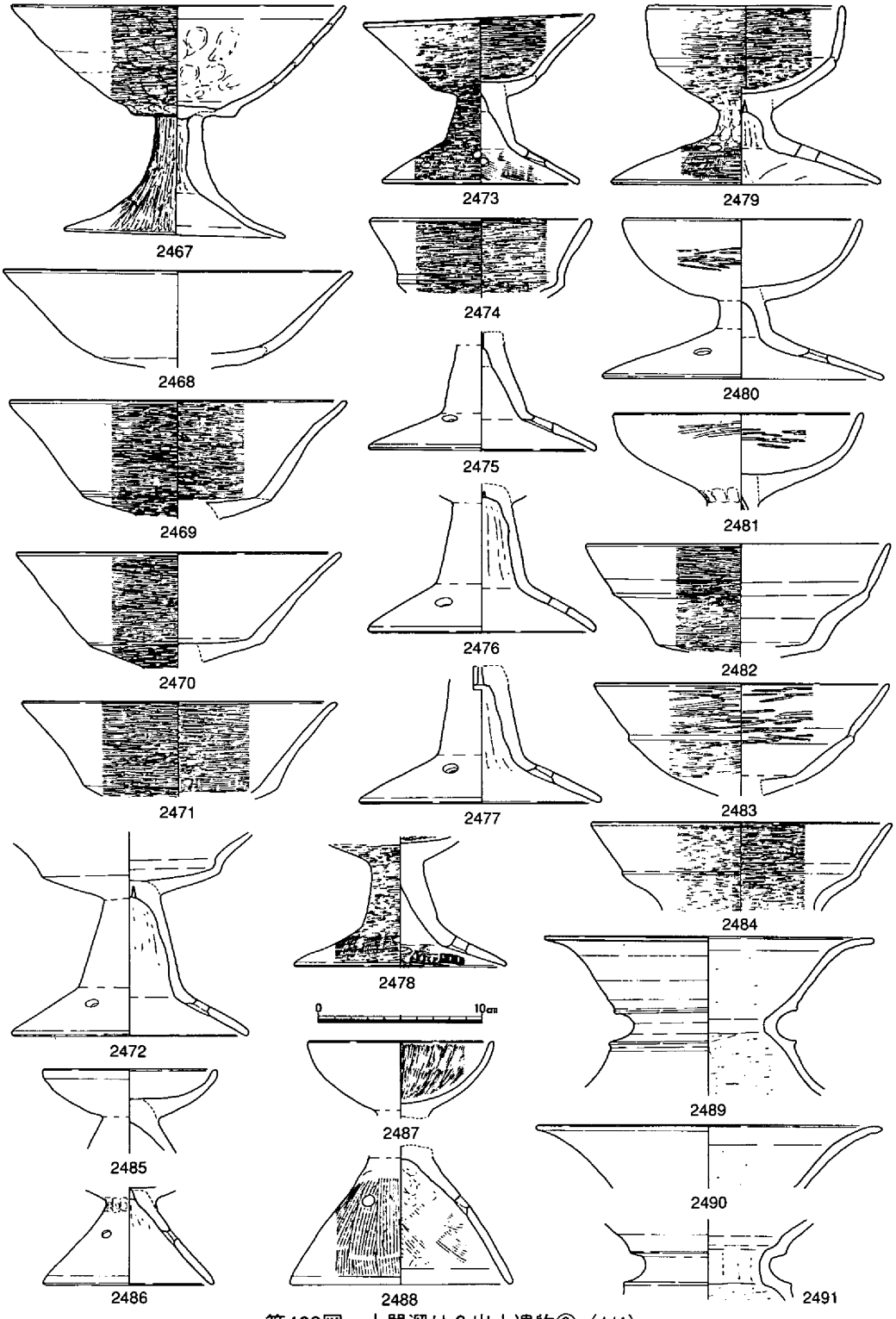
第460図　土器溜り２出土遺物⑤（1/4）



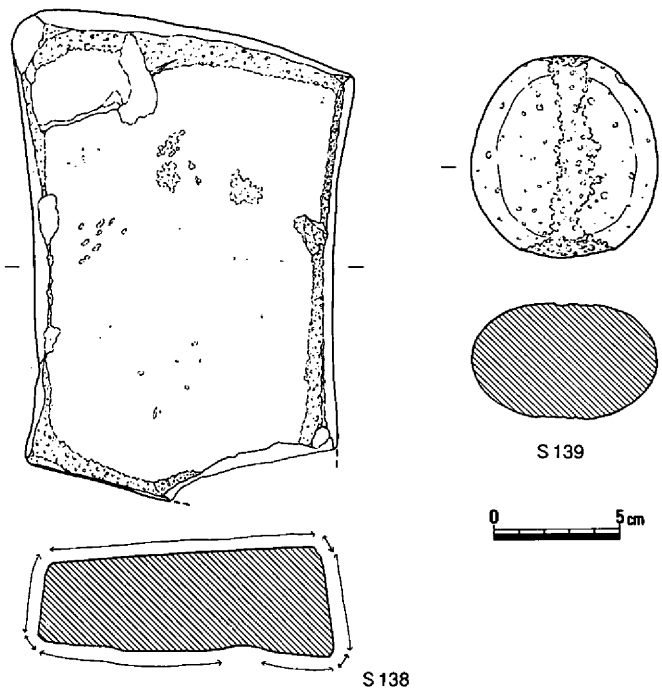
第461図　土器溜り２出土遺物⑥（1/4）



第462図　土器溜り２出土遺物⑦（1/4）



第463図　土器溜り２出土遺物⑧（1/4）



第464図　土器溜り2出土遺物⑨（1/3）

孔されて甑として使用されている。2426～2429の体部外面はタタキメ調整され、2429の内面上半にはハケメが残っている。

大形の鉢2430～2433・2442は複合口縁で、端部がやや外傾しながら立ち上がっており、2442の底部は焼成後に穿孔されている。小形鉢2444～2447の外面はタタキメ調整され、2444・2445の底部はヘラケズリされている。底部外面のヘラケズリは、2448～2450にも見られる。小形鉢にあっては、2437～2441の口縁部が屈曲して開くものは、2444～2461の椀形のものより少ない。2443は、壺の製作途上で鉢に変更されたものである。製塩土器2466は外面がタタキメ調整されている。

高杯は3種類に分けられる。2479～2481は、杯部が椀形を呈し、短脚である。2479では屈曲部に凹線状の段をもつ。2468～2473は、内面が平らな杯部から口縁部が斜め上方に開くもので、2474もこれに含めうる。2482～2484は口縁部が2段に開くもので、2483は杯部からの屈曲が少なく、2482・2484は稜をもって屈曲している。2482・2484にみられる口縁部下段の屈曲に着目すれば、2472もこの範疇に入る。後二者の脚部は長脚で、2478を除いて中空化している。2467は形態からは後二者に含まれるが、杯部と脚部の接合方法が異なり、脚柱部と脚裾部の境が明瞭でなく、透かし孔をもたないなど、異種である。透かし孔については、2473・2478が4孔である他は、器台も含めて3孔が主体である。器台2485～2488は小さな椀形で、裾が大きく開いている。鼓形器台2489～2491は、丹塗りされている。ミニチュアないし手捏ね土器としては、前述の壺2392の他に、甕2420、鉢2434～2436、高杯2464がある。

土器以外の出土遺物としては、安山岩製の砥石S138、ヒン岩製の石錘S131がある。

以上の出土遺物には、各器種ごとに諸要素を比較していけばある程度の時期幅が認められるが、全体としては古墳時代初頭の在り方を示すものである。（光永）

(5) **斜面堆積**（第329・465～477図、写真図版78・79）

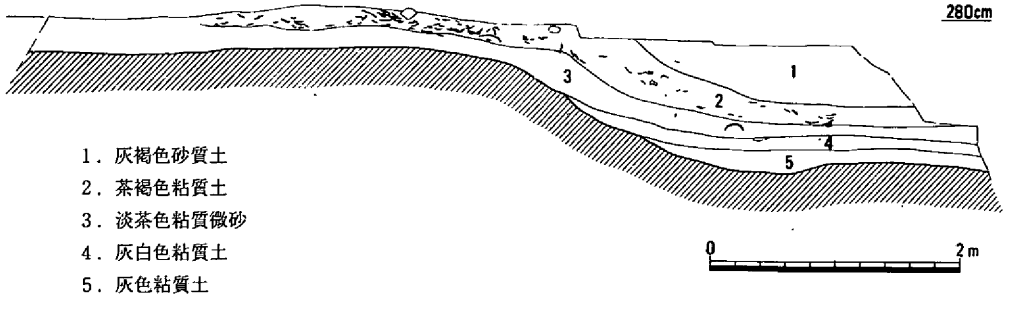
８Ｂ区から８Ｃ区中央部を結んだ東西方向のラインを境に微高地が南方向への傾斜を見せはじめる。こうした中、特に中央から東側にかけての長さ約25m、幅約５mの範囲内の斜面において整理箱約290箱相当の土器の出土が見られた。斜面は、微高地上面との比高差約１mをもって比較的緩やかな傾斜を見せるもので、土砂の堆積は基盤から平面検出面まで大きく５層に分層が可能で、その中で最も多くの遺物の包含が見られたのが第２層である。

出土遺物はほとんどが土器で、他には鉄器、石製品、ガラス滓等が確認されている。

土器は、形態的にみて在地産の器種が多く存在するが、他地域からの搬入を示唆させる土器も相当量確認されている。紙面の都合からここでは在地の土器の中でも特に最も普遍的な在り方を示し、一般に吉備甕と呼称される甕2518～2526を時期的な指標として抽出・掲載するにとどめ、主に形態的に特異な形状を示す土器について見てみたい。

先ず、吉備甕であるが、いずれも口縁端部を上方に垂直かやや内傾気味に拡張し、その外面には櫛描沈線がほとんど例外なく一気に巡らされる。胴部は、胴部最大径が中央よりまだ上位の肩付近にあり倒卵形を呈するもので、底部外面には僅かながら平底の痕跡と調整技法として平底を意識したかのような該当部分で完結するヘラミガキの存在を認める。外面は縦、もしくは斜め方向のハケメによる器面整形の後、口縁部ヨコナデを行い、さらにその後上下反復によるヘラミガキ調整が施される。内面は、頸部屈曲部以下はヘラケズリによる器壁の薄化が見られ、一方下半部には指頭によると考えられる押圧痕が多く見られた。甕は、大きさの違いによって細分されるが、こうした形態的特徴と調整技法は大きさには関係なく型式が変わらない限り普遍的に見られるものである。また性格は不明であるが、特徴の一つとして肩部外面には多くの場合長さ約５㎜前後の楕円形を呈する刺突圧痕が１～３個見られる。

以上の特徴は、いずれも下田所式の範疇で理解して差支えないと考えるものである。これと共伴した土器が以下に述べる壺、甕、高杯、さらに手焙形土器の一部で、これを形態的特徴から便宜上その都度分類し、特徴の記述を行う。



第465図　斜面堆積土層断面（1/60）

壺

先ず頸部の長短の状況によって大きくＡ・Ｂに分類が可能で、頸部の長いＡ類でも形状が「ハ」字状を呈するものをａ類、逆「ハ」字状を呈するものをｂ類、さらに直立するものをｃ類に分類する。また口縁部も外側上方に長く拡張するものを１類、長く直立するものを２類、内側上方への拡張を見せるものを３類、拡張を見せないものを４類と細分する。一方Ｂ類とした頸部の短いものについてもその形状の違いで肩部との屈曲部からただちに外反する口頸部をａ類、直線的に比較的長く緩やかに外反する口頸部をｂ類とし、さらにａ類では口縁部外側に拡張するものを１類、直立した拡張を見せるものを２類、拡張しないものを３類とした。

この結果、Ａａ１類（2492・2493・2514）、Ａａ３類（2508）、Ａｂ１類（2504）、Ａｂ２類（2495・2500）、Ａｂ３類（2505・2512）、Ａｂ４類（2506・2507・2517）、Ａｃ１類（2501）、Ａｃ２類（2494・2498）、Ｂａ１類（2502）、Ｂａ３類（2511・2513・2516）、Ｂｂ類（2515）等の分類が可能である。

壺Ａａ１類は、口縁端部を上方に長く拡張を見せる点において若干様相が異なるものの、口縁部以下の状況は弥生時代の上東式の長頸壺の直接もしくは間接的な系譜下に位置づけられ、その最終形態を提示するものと考える。この系譜下には足守川加茂Ａ遺跡（以下加茂Ａ遺跡）包含層出土の971が、さらに加茂Ａ遺跡竪穴住居21出土の275等が続くものと推測する。ただし、予想される2493は同じ系統ではなく、これはむしろ長頸壺に直接つながるものと見られ、まだ伝統的に平底状態を残している。以上在地的な壺について見たが、2514は比較的短く外上方に拡張した口縁部外面に丁寧な線刻による鋸歯文が施され、在地的な様相とはいえない。

壺Ａａ３類は、頸部を「ハ」字状にするため口縁部への移行は鋭角的で、屈曲してから口縁端部にかけては横方向へ長い口縁部を形成する。上面にはヨコナデにより凹線状の凹凸が幅５㎝の範囲で全周するものであった。なお、小型ながらこれに共通するものとして土器溜り１出土の1625がある。後述のＡｂ４類と共に讃岐地方の下川津Ｂ類土器に比定されるものである。

壺Ａｂ１類は、頸部上端部を外方に僅かに折り曲げた後、端部上面部分に粘土を貼付し、さらに比較的長い内湾気味の立上がりを形成する。2503と共に畿内系の壺として認識される。

壺Ａｂ３類は、一般的に2505に見られるように外面調整としてハケメの多用と、口縁拡張部外面への櫛描波状文・竹管による刺突等による加飾で特徴づけられる。2512は頸部以下を欠くため全貌は不明であるが、口縁部外面には吉備甕の口縁部外面に施された櫛描沈線が巡らされている。一般に西部瀬戸内地方で多く見られるものである。

壺Ａｂ４類は、比較的直線気味な頸部から緩やかに外反し、さらに直線的に延びる口縁部を見せるもので、僅かに端部を拡張させ、その外面にはヘラ描きによる鋸歯文が施されている。これに類似したものは加茂Ａ遺跡の竪穴住居21の307でも見られた。2517は、2506・2507よ

り頸部が短く、胴部外面にはタタキ痕跡を明瞭に残すことで様相が異なる。

壺Ａｃ１類は、円柱状の頸部から口縁部を直線的に屈曲させた後、その上端部にほぼ延長線状に延びるような拡張部を構成するもので、下端部にも粘土紐の貼付後ヨコナデ調整により口縁下端部が形成される。頸部は遺存しないが2499も同様に直立傾向の頸部をもつものであろう。

壺Ａｃ２類は、Ａｃ１類と類似するがＡｃ１類のほうが全体的に直線的である。2494にはヨコナデ調整後、内・外面に丹の塗布が認められた。

壺Ｂａ１類は、肩から急激に絞まり短く外反した口縁部にさらに上部に長く、下部に僅かな拡張口縁を形成したもので、拡張状況はＡｃ１類に共通する。

壺Ｂａ３類は、Ｂａ１類ほどの外反は見せず、また口頸部の長さはＢｂ類よりは短いといったもので緩やかに外反する。2516は、西部瀬戸内のなかでも土井が浜Ⅸ式に類例が見られる。

壺Ｂｂ類は、口縁部を2511・2513より長く直線的に外方に延ばし、ヨコナデ調整される。

甕

形態的には口縁端部が拡張するものとそうでないものでＡ・Ｂ類に大別され、Ａ類でも口縁部の拡張の度合いによって、短く直立気味に拡張するものをａ類、長く外反気味に拡張するものをｂ類、また技法的な観点によっても胴部外面にタタキを認めないものを１類、タタキを残すものを２類とし、一方、「く」字状を呈するＢ類にあっては口縁部の形態に大きな差が存在しないこともあって胴部外面へのタタキの有無により先ずａ・ｂに分類した。さらにタタキの遺存するａ類にあっても内面の全面がヘラケズリされるものを１類、全面ヘラケズリがみられるものの一部に押圧との切り合いを認めるものを２類、ハケメと押圧の両者が共存するものを３類、肩部にナデもしくは押圧、胴部下半にケズリが多用されるものを４類、ハケメとケズリの共存するものを５類、押圧の後のハケメ調整をよく残すものを６類と分類を行った。

この結果、Ａａ１類（2518～2526）、Ａｂ１類（2538）、Ｂａ１類（2529・2542・2545）、Ｂａ２類（2530・2534・2537）、Ｂａ３類（2536）、Ｂａ４類（2540・2544・2546）、Ｂａ５類（2527）、Ｂａ６類（2531）、Ｂｂ１類（2528・2539）が分類された。

甕Ａａ１類は、先述した吉備甕に該当するものである。内面は頸部以下ヘラケズリによる器壁の薄化が顕著に認められるが、肩部もしくは胴部下半にはこれと切り合った状態での押圧痕跡が認められる。

甕Ａｂ１類は、Ａａ１類の吉備甕にしばしば共伴して見られ、胎土も酷似した器種である。

甕Ｂａ１類は、ケズリの程度によってＢａ４類との混同があろうが、およそ肩と胴部の境付近での在り方で区分した。Ｂａ１類は頸部以下がケズリの対象となったものである。2529は、後述Ｂａ２類2530、竪穴住居94の2257と共に胎土中に角閃石を多く含み生駒西麓産といえる。

甕Ｂａ２類は、大きくはＢａ１類の範疇にあるものの胴部下半もしくは肩部に押圧痕跡がへ

ラケズリと切り合った状態で見られる。

甕Ｂａ３類は、当該期基本的に倒卵形が多い中、底部尖底気味で胴部径に対して器高が高い形状を見せる。類例は加茂Ａ遺跡竪穴住居21の332、同竪穴住居30の564等で散見される。いずれも内面ヘラケズリが部分的に見られるものの基本的にはハケメによる調整で、ハケメを最もよく残す。またこれは外面調整も同様でタタキの後縦方向のハケメ調整が施されている。

甕Ｂａ４類は、形態的には2544は撫で肩を呈し、斜め方向のナデをヘラケズリが切っている。一方、2546は肩から胴部への変換点が胴部最大径をなすもので、2546はケズリの後に縦方向のナデが施されている。

甕Ｂａ５類は、Ｂａ３類と形態的にもまた外面調整もタタキによる整形の後、ハケメ調整がなされる等酷似するものであるが、内面はハケメの後肩部下半がヘラケズリされ、頸部から肩の一部にハケメを残す点で相違点が見られる。

甕Ｂａ６類は、内面押圧後ハケメ調整が施されるが、外面タタキの後ハケメ調整が施設されない点でＢａ５類と相違する。

高杯

ここに提示した資料のうち2551・2552・2554以外については、いずれも当該地域で頻繁に見られるものではなく、むしろ他地域に類例を求めるのが妥当であろう。2553は、形態的にみて杯部の基本的な在り方は2556に類似するが脚部等僅かに差異を認める。2557は、杯受部から口縁端部にかけて大きく直線的に延びるもので、端部は「コ」字状を呈する。胎土中には雲母を多く含む。おそらく北九州の西新町式の中に比定されるものであろう。2259は、比較的深い椀状の杯部に「ハ」字状の脚部を持つもので、接合部には円盤充填が認められた。胎土中には角閃石を含み全体に淡黄色を呈する。摂津地域に散見される椀形高杯との類似性が注目される。

手焙形土器

近年畿内を中心とした資料の集積・研究成果が見られる中、吉備地方南部においても昭和55年の足守川矢部南向遺跡（以下矢部南向遺跡）の調査以降、出土が相次ぎ、この斜面堆積だけでも掲載資料９点、この他加茂Ａ遺跡、矢部南向遺跡等で遺構に伴った状態での資料16点、掲載できない資料を含めると本報告書で対象とした３遺跡からはおおよそ50点以上の数になると考えられ、北約１㎞の地点に所在する津寺遺跡からも20数点の出土が知られている。足守川遺跡群からの出土遺物の総数が4200箱を数える中にあって50数点の出土量の割合の高低については現時点では評価できないにせよ、これまでの全国的な傾向からは通常な在り方とは思えない。

従来手焙形土器については、分布の偏在および形態的特徴から畿内を中心とした性格づけがなされ、大阪府美園遺跡での報告[1]以降、さらに近年近江地方では口縁部の形態と接合方法が空間および時間的な推移を反映するものと理解され、これを基軸とした分類方法がなされ[2]、全国

的にも定着した感が強い。一方、当該地域の手焙形土器の場合は、これまでに畿内のものに比較して簡素さゆえの特性と資料数の僅少さからこれまで分類の主要な対象とはなり得なかった。ところが近年良好な一括した状態での資料が周辺を含めると約70点を越す現状に至っては、一瞥するに口縁部の在り方以上に全体を構成する鉢部と覆部の特徴差の方がより顕著であることが認められるようになってきたといえる。ここではその在り方に焦点を絞った分類方法を試みるものである。

鉢部には、甕あるいは鉢状のものがあり、形成過程で覆部の形成に時間的な隔たりを然程もたない一体化されたものをＡ類、一旦鉢を完成させてから覆部を形成するＢ類、さらに先ず皿もしくは浅鉢状の底部を作成した後、その端部上方に立上がりをもたせ鉢を完成させた後これに覆部を組合わせたものをＣ類とし、またそれぞれの製作技法にタタキの採用の有無で、採用されないものをａ類、採用されたものをｂ類、底部外面が最終段階でヘラケズリ調整されたものをｃ類に、一方覆部についても口縁部調整に際して端部に切り口を残すのみで加飾されないものを１類に、口縁端部上下に粘土紐を貼付することで口縁端部を拡張し装飾性が意図されたものを２類として細分した。なおここでは装飾化と理解し２類のなかに位置づけたが、１類と２類の間にはただ端部を押圧後その部分を僅かに外方に折曲げ面を意識したものも見られる。

この結果、Ａａ１類（Ｂ1440・矢726・矢1001）、Ａａ２類（該当なし）、Ａｂ１類（Ｂ1837・矢1302）、Ｂａ１類（Ａ620・Ｂ2281・矢667・矢1000）、Ｂａ２類（Ａ619・Ｂ2595・矢1669・矢1668）、Ｂｂ１類（Ａ621・Ｂ2596）、Ｂｂ２類（該当なし）、Ｂｃ１類（Ａ915・Ａ914）、Ｂｃ２類（Ｂ315）、Ｃａ１類（Ｂ2588）、Ｃａ２類（Ｂ2589・Ｂ2590・Ｂ2592・矢673）、Ｃｂ１類（Ｂ2591）、Ｃｂ２類（該当なし）、に分類が可能となる。(3)

Ａａ１類は、基本的には鉢もしくは甕状のものを製作する過程である程度まで形成した段階で粘土紐を一定方向にのみ水平位に高くなるように順次粘土紐の長さを短くしながら重ね、比較的小さめの口を確保する。加飾傾向は窺われないが1440は鉢部と覆部を意識してか全体を形成した後、タガ状突帯が１条巡らされる。傾向としては矢部南向遺跡726より新しい要素ともみられるが、共伴する土器は前者が上東・鬼川市Ⅲ式で後者が才ノ町式である。同類型の資料は足守川加茂Ｂ遺跡（以下加茂Ｂ遺跡）の東約500ｍに所在する西加茂遺跡からも見られ、それは甕を母体としたもので才ノ町式の土器と共伴し、現在までのところ時期的には上東・鬼川市Ⅲから才ノ町段階までの土器が共伴する。下田所段階のものは確認されていない。

Ａｂ１類は、基本的な在り方はＡａ１類に類似するが整形技法にタタキの採用がみられる。ただし全体的に作りが稚拙で、中には底部の確認すらできないものもある。覆部口縁は、口縁端部を押圧後上方に僅かに折曲げた程度のもので加飾化傾向の現れと考える。下田所式の土器との共伴が認められ、基本的にはＡａ１から派生したものと考える。

Ｂａ１類は、現在までのところ足守川遺跡群で最も古いものでは矢部南向遺跡の土壙72でＡａ１類1001との共伴が認められる。通常の鉢とは異なり口径に対する底径の割合が高くＡａ１類同様製作当初から手焙形土器を意識してつくられたもので、一旦鉢部を完成させ、ある程度の乾燥の後改めて覆部を粘土紐を一定方向にのみ粘土紐の長さを順次短く水平位に接続することで製作する。傾向として鉢部内面ヘラケズリの後ヘラミガキ仕上げが一般的な鉢の在り方であるのに対して、一部ケズリとミガキを残すものの全体的にはナデ・ハケで最終調整されたものが多い。技法的にも製作目標が手焙形土器であったことが窺われる。また、鉢部口縁部の在り方は端部を若干上部へと拡張したものがほとんどで、一見上東・鬼川市Ⅲ式から才ノ町段階のものに酷似する。しかし、口縁部の在り方が年代観と一致するものは上東・鬼川市Ⅲ式に比定される比較的古相を示す段階のものに限定され、下田所段階まで下がると共伴土器との間に格差を生じる。伝統の継続性の一端が看取される。

Ｂａ２類は、Ｂａ１類が一層加飾化傾向を増長したかのような状況で見られるものである。覆部口縁部は基本的に本来の口縁部の厚さに倍増させるかのように端部を押圧、外側への折曲げ、さらには上下端部への粘土紐の貼付により口縁部幅の拡張が図られ、その外面には線刻・浮文等による加飾化が見られる。鉢部口縁部の在り方は依然として上東・鬼川市Ⅲ式の伝統的な口縁形態を呈するが、実際に一括共伴土器の示す年代観は新しく下田所式段階までである。亀川上層式に共伴するのは矢部南向遺跡1668・1669でその他にも周辺の奥坂遺跡・矢部古墳群等で確認され、傾向として器形の小型化をはじめ口縁部は吉備甕状の比較的長く立ち上がるものとなり、底部は新しくなるにつれて丸底化と器壁の薄化現象を、また覆部と鉢部の比率も１：１と覆部の占める割合が高くなるようである。

Ｂｂ１類は、鉢部の形成にタタキが用いられたものを想定するが、現段階当該地方では未確認である。

Ｂｂ２類は、Ｂｂ１類の覆部口縁部の加飾化が一層強まったもので、鉢部形成後の覆部との接合は明瞭でない。一体化の感が強く、時間的な隔たりもＢａ１・Ｂａ２類に比べて少ないように見られる。覆部は一層高くなり、全体の約１／２近くに達する。

Ｂｃ１類は、基本的にはＢａ１類と形態的な相違点は見られない。調整段階で鉢部外面の器壁調整としてヘラケズリが用いられたものである。

Ｂｃ２類は、Ｂｃ１類の覆部口縁端部が上・下に拡張し、加飾化が一層顕著になったものである。ただし、加茂Ｂ遺跡315は鉢部口縁部の正面に伝統的な口縁形態を残すが、背面側覆部との接合箇所はそれが形成された状況になく形骸化傾向にあることも否定できない。

Ｃａ１類は、Ａ・Ｂ類の鉢部の作りとは様相がまったく異なり、皿状もしくは浅鉢状の底部を作成した後その端部に垂直もしくは斜傾気味の立上がりをもたせ鉢部を形成・調整した後、

粘土紐を水平もしくは斜傾した状態で鉢部に積み上げ覆部を形成したものである。口縁端部には加飾化傾向の現れである拡張帯が然程意識されない段階である。

Ｃａ２類は、Ｃａ１類の覆部口縁端部に粘土紐を下端および上・下両端に貼付け拡張帯が形成されたもので、その外面には線刻もしくは円形および棒状浮文による装飾が顕著に見られる。土器との共伴関係で見れば、１点矢部南向遺跡の竪穴住居37上層から才ノ町式から下田所式の幅の中にみられるが、いずれにせよその他の大多数は下田所式以降の土器との共伴関係にある器種である。

Ｃｂ１類は、基本的にはＣａ１類と形態的な相違点はないが、外面に形成の際タタキが用いられ、器表面にその痕跡を残すものを想定するが、現在確認されていない。

Ｃｂ２類は、これも基本的な形状はＣａ２類と形成段階でタタキの使用を示唆させる痕跡の遺存以外は何等相違点は見られない。

以上、従来の畿内を中心とした口縁部中心の分類とは異なり、手焙形土器を構成する主要要素である鉢部、覆部の形態的・技法的な側面から粗削りな分類を試みた。この結果、傾向としてその在り方は当該地方の土器編年と比較的よく合致することが判明した。そこであらまし吉備地方南部地域の手焙形土器の序列として次のような時期区分を行ってみた。

Ⅰ期　Ａａ１類とＢａ１類の一部が該当する。現在までに祖形的な資料は確認されていないが、既存資料は製作当初から既に手焙形が意識されて製作されたもので、鉢部内面にはミガキが施されずヘラケズリのみが施されるといった一般的な鉢、甕の製作・調整技法とは若干異なる。弥生時代後期後半の上東・鬼川市Ⅲ式に共伴する。

Ⅱ期　Ⅰ期に引き続きＡａ１類、Ｂａ１類の一部が該当する。Ⅰ期との型式的な相違点は現在までのところ資料不足もあって確認できない。Ａｂ１類、Ｃａ２類の一部資料の存在も知られるが、特にＣａ２類については遺構が年代幅をもった土器溜りであることで、さらに検討が必要であろう。弥生時代後期末のオノ町式に比定される。

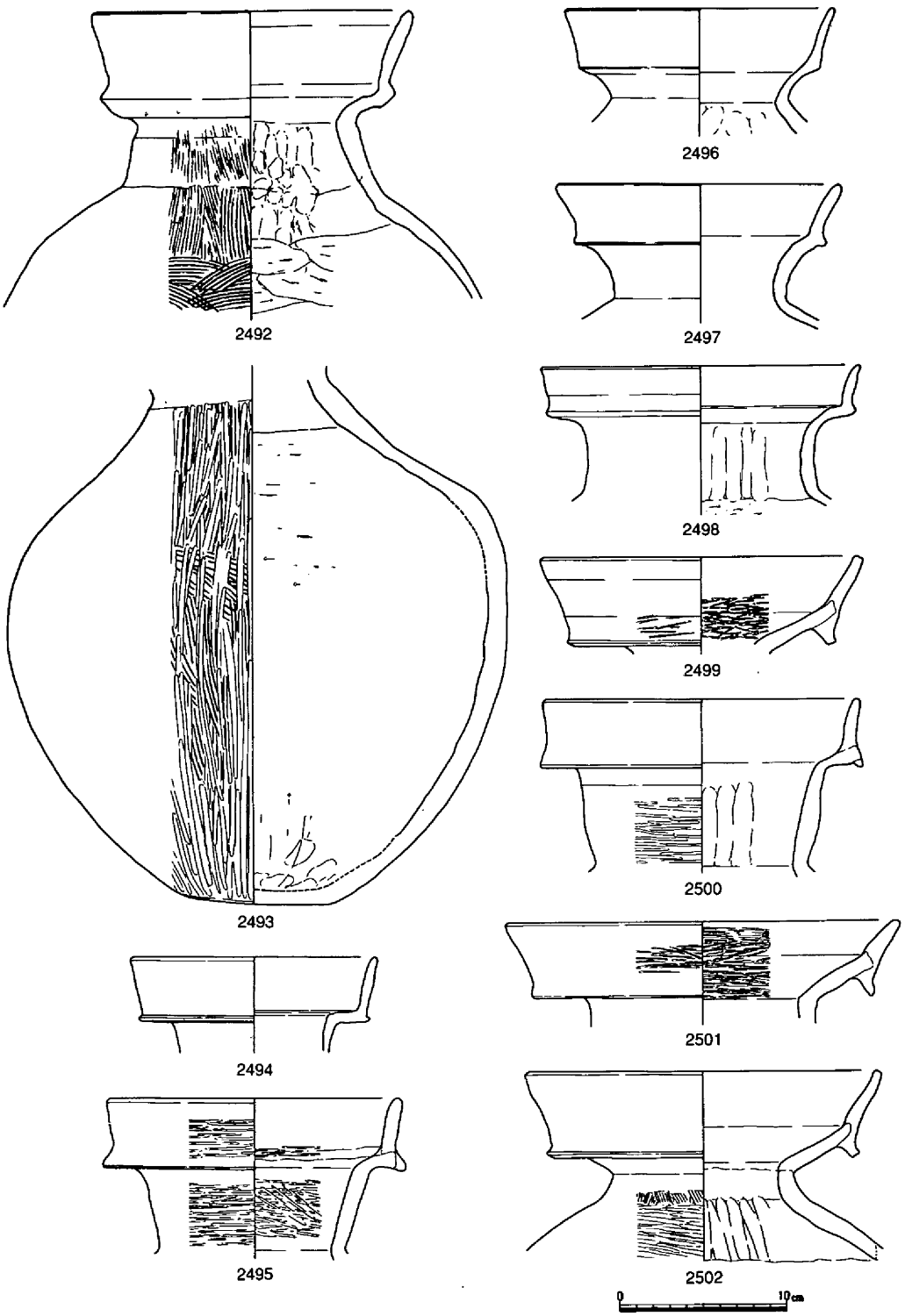
Ⅲ期　Ａｂ１類、Ｂａ１類は引き続き見られるがＡａ１類は姿を消し、新たにＢｂ２類、Ｂｃ１類、Ｂｃ２類、Ｃａ１類、Ｃａ２類、Ｃｂ２類が出現する。器種の増加と全体的に加飾化傾向が最も顕著となる段階である。その中にあってＢａ１類だけは依然と旧態を保持する。ただし内面ヘラケズリ調整は見られなくなり、ハケ・ナデが多い。

Ⅳ期　全体に小型化傾向が窺え、Ｂａ２類が量的に最も多く遺存する程度である。周辺地域からはＣｂ２類の存在が古墳の副葬品の中に僅かに認められるが、いずれにせよⅢ期との断絶は著しく、衰退現象を示すといえよう。亀川上層の土器との共伴が知られる。

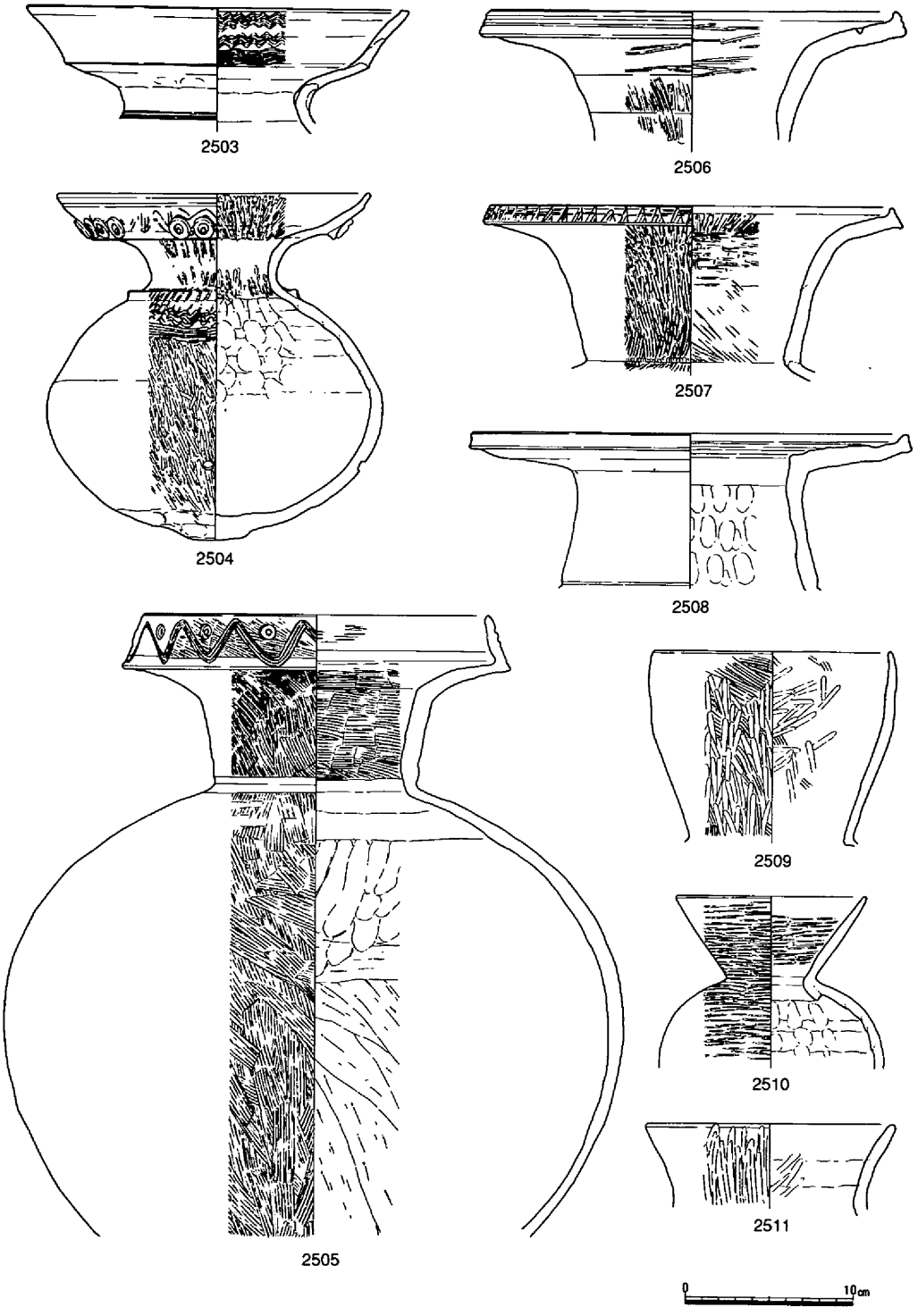
以上、紙面の都合でここでは加茂Ｂ遺跡の古墳時代初頭に位置づけられる斜面堆積出土の主要な土器を中心に簡単に見てきたが、これによると土器は下田所段階で畿内、山陰、四国、九

表１　手焙形土器編年表

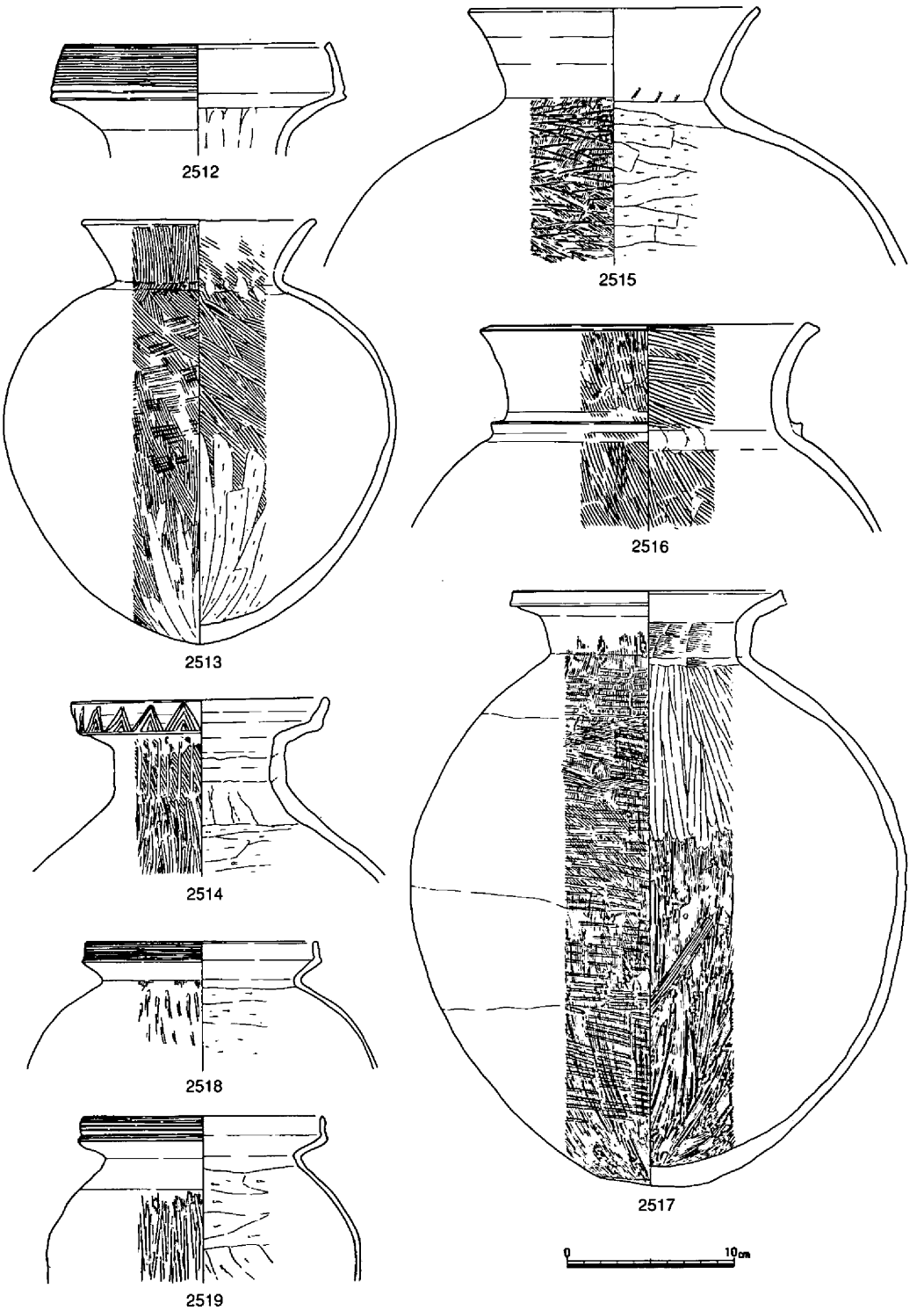
	Ａａ１類	Ａｂ１類	Ｂａ１類	Ｂａ２類	Ｂｂ１類	Ｂｃ１類	Ｂｃ２類	Ｃａ１類	Ｃａ２類	Ｃｂ１類
Ⅰ期	B1440		（百間川原尾島遺跡）							
Ⅱ期	矢726 矢1001	B1837	百・原79・83 矢1000 矢667							
Ⅲ期	矢1302 B2281 鹿田		A620 鹿田 A619 B2595		B2596 A621	A915 A914 百・原487	B315	鹿田 B2588 百・米田 百・沢田	矢673 B2590 B2589 B2592 天神原	B2591
Ⅳ期				矢1669 矢1668 矢部古墳群					A688 みそのお	



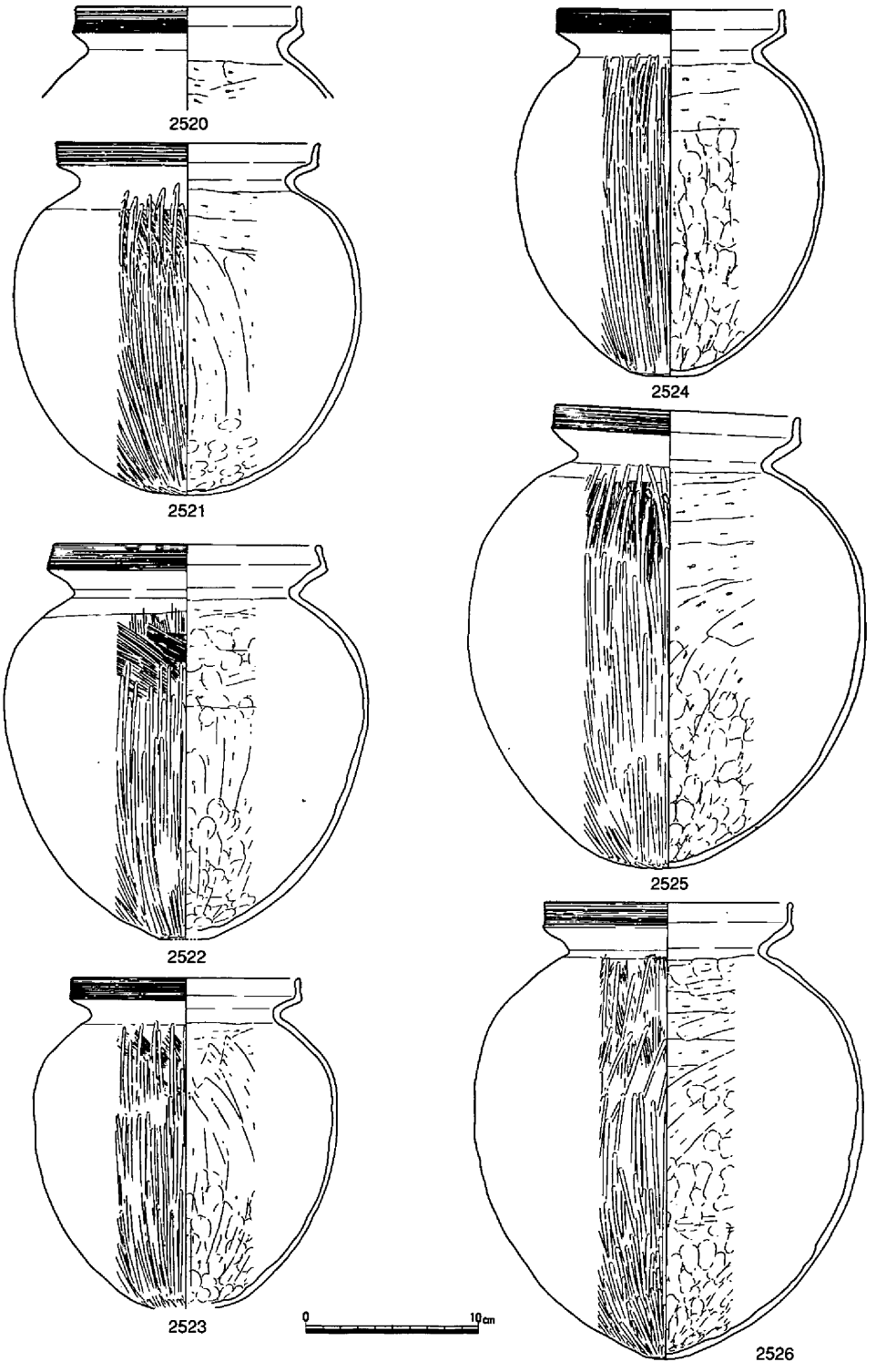
第466図　斜面堆積出土遺物①（1/4）



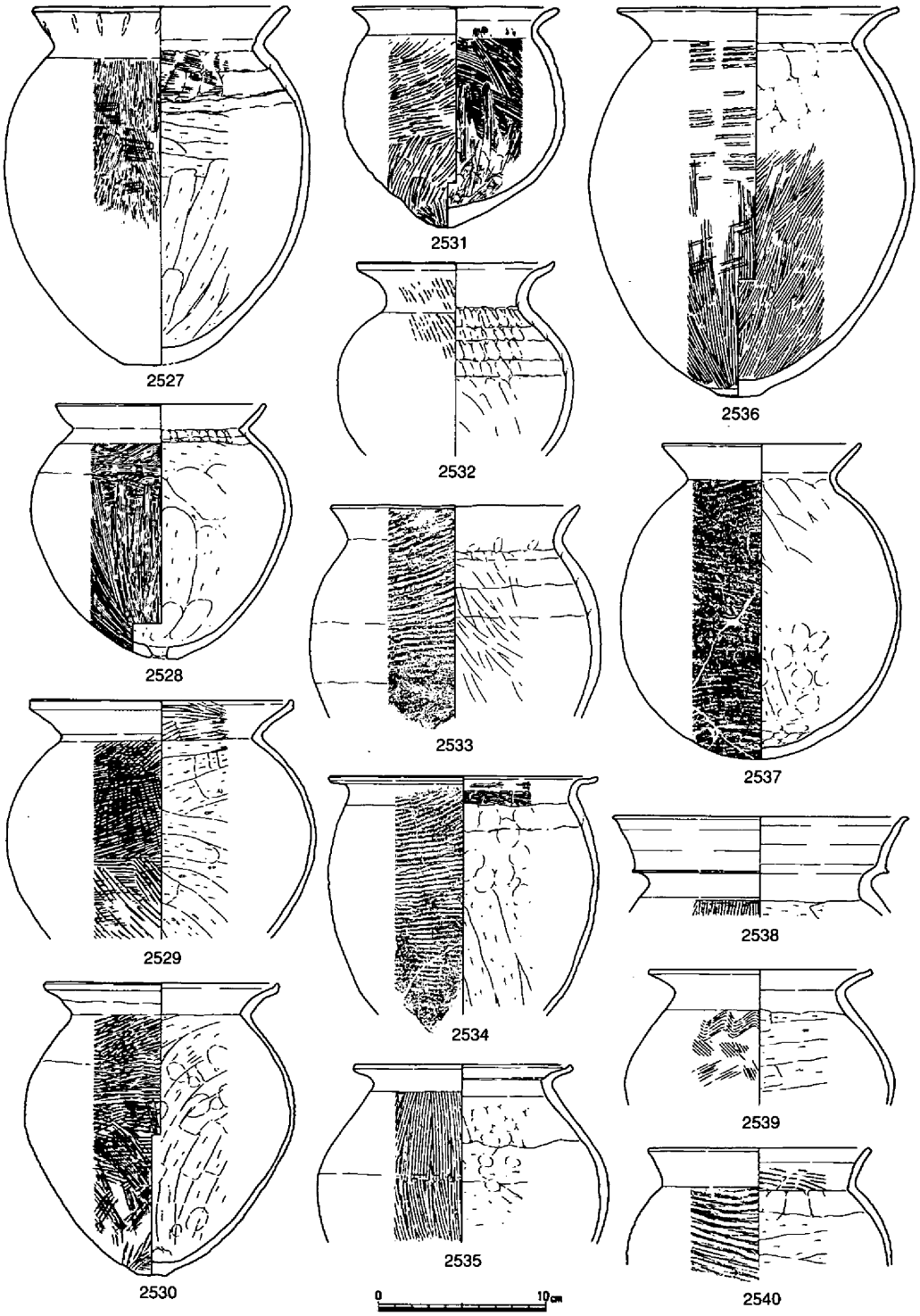
第467図　斜面堆積出土遺物②（1/4）



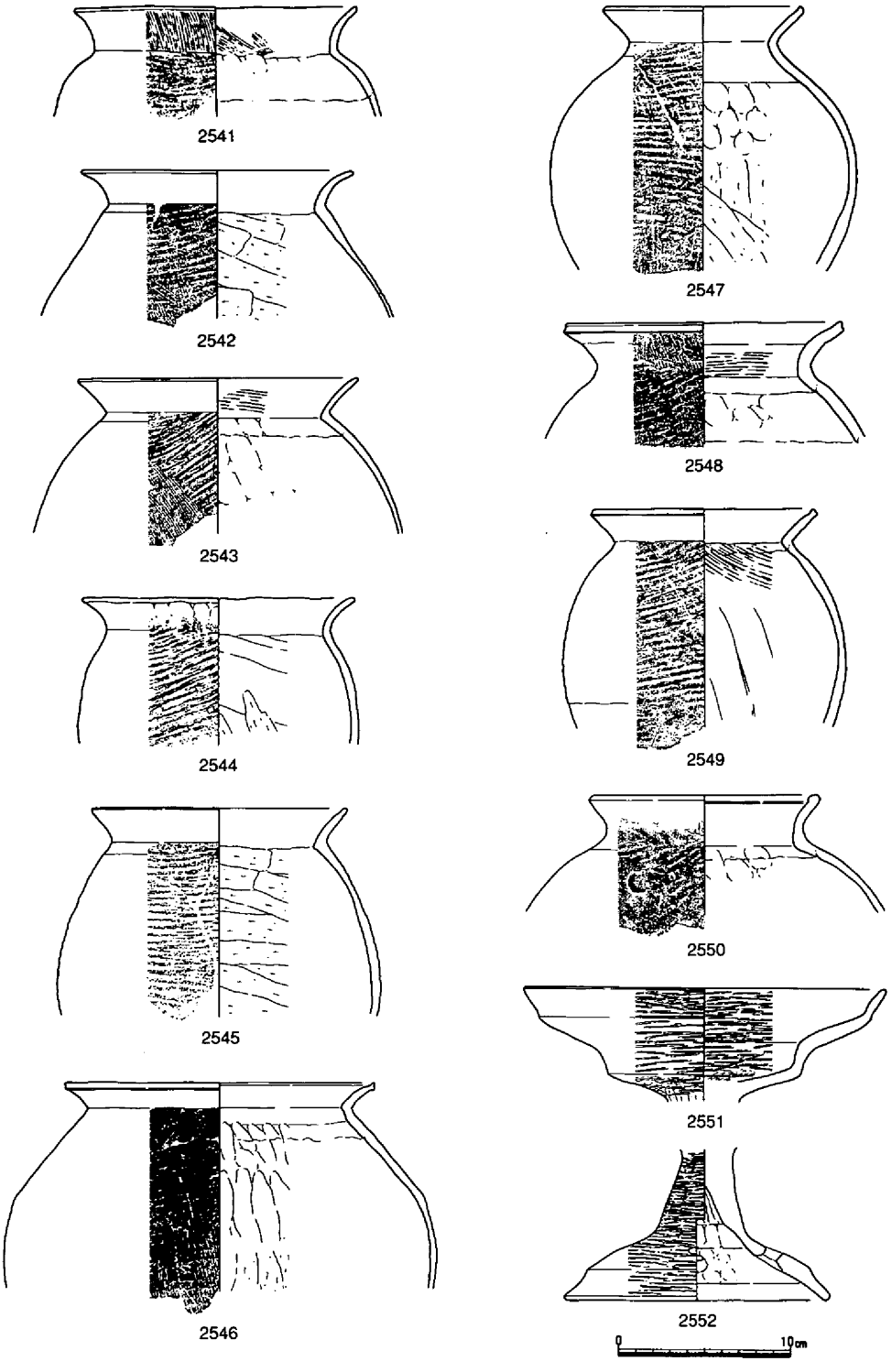
第468図　斜面堆積出土遺物③（1/4）



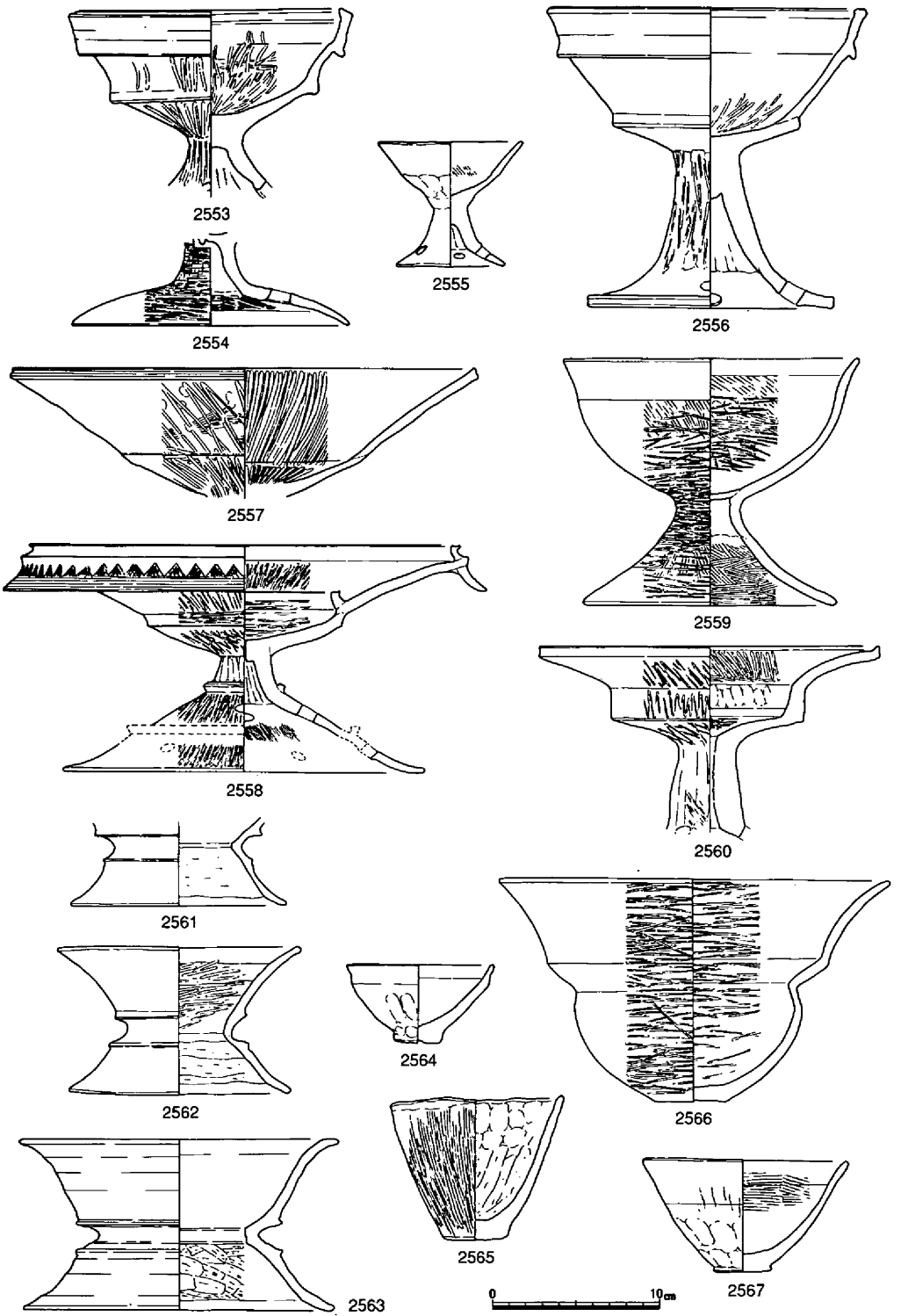
第469図　斜面堆積出土遺物④（1/4）



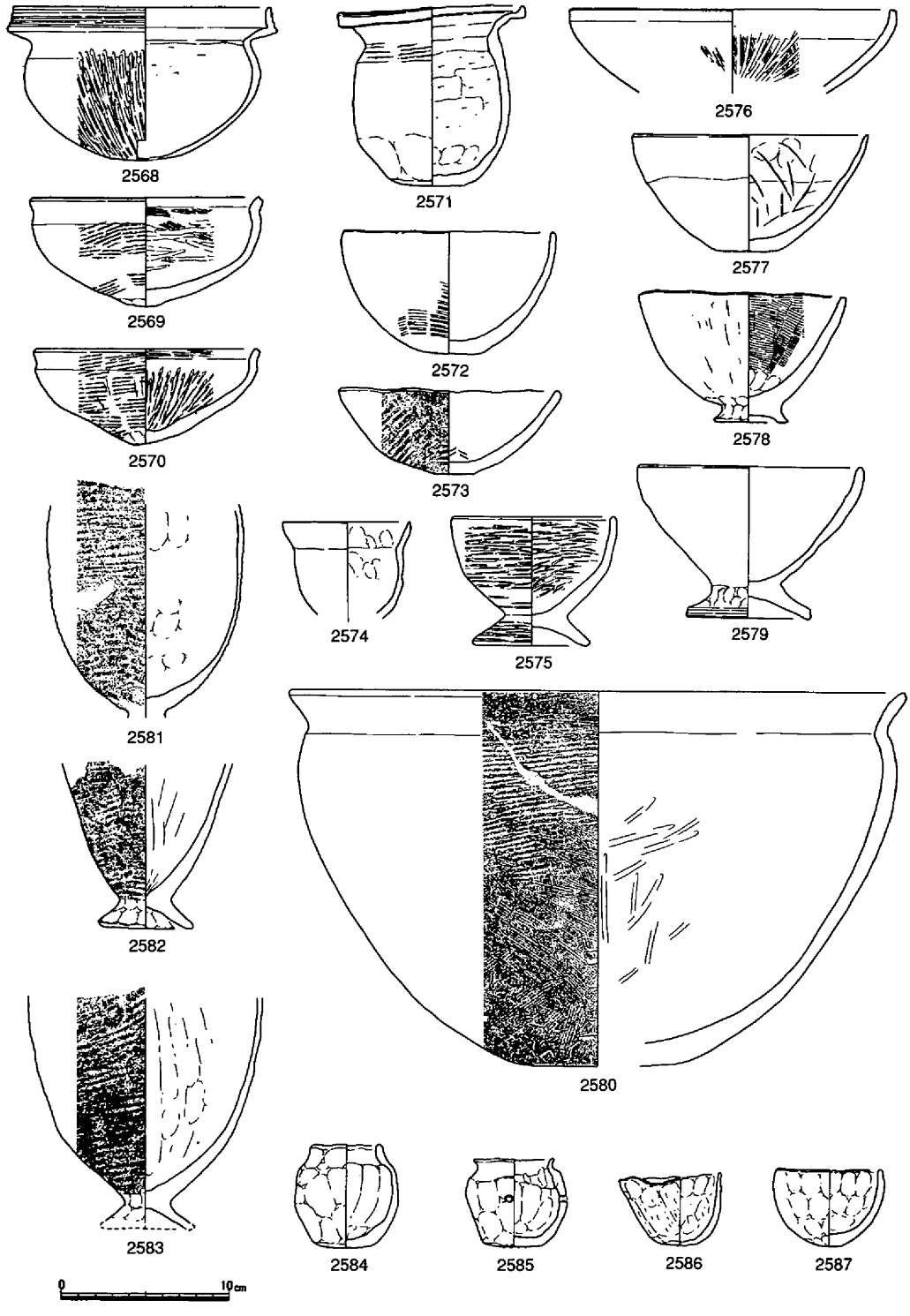
第470図　斜面堆積出土遺物⑤（1/4）



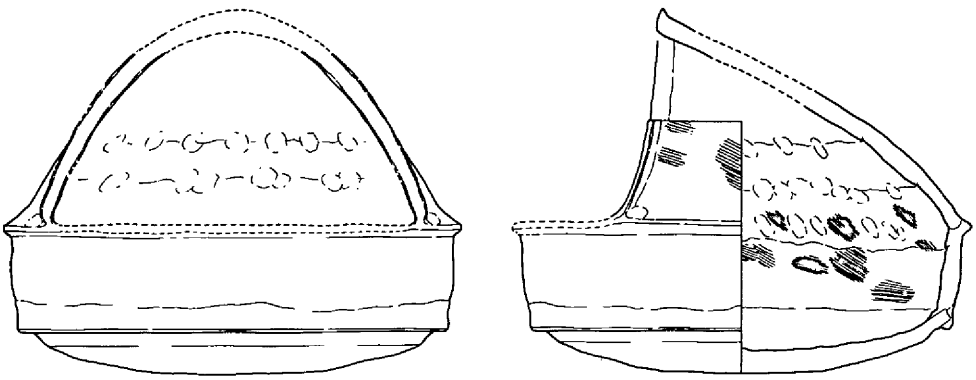
第471図　斜面堆積出土遺物⑥（1/4）



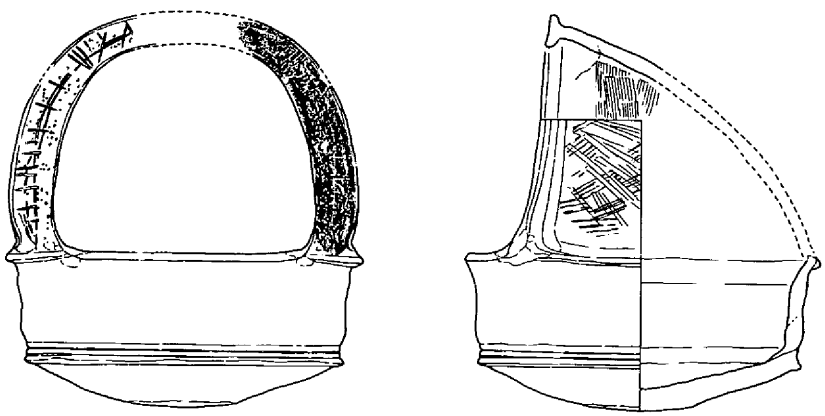
第472図　斜面堆積出土遺物⑦（1/4）



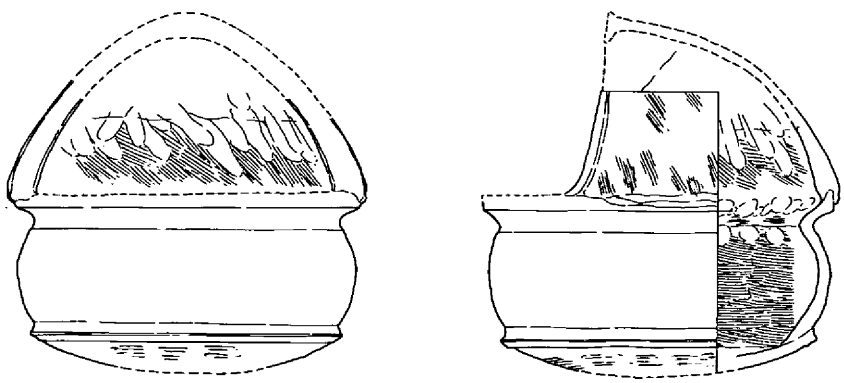
第473図　斜面堆積出土遺物⑧（1/4）



2588

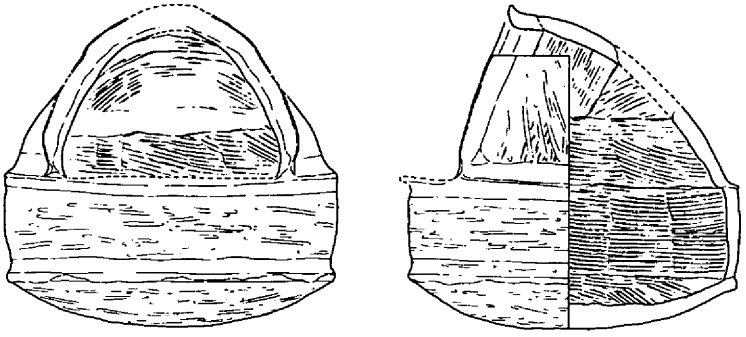


2589

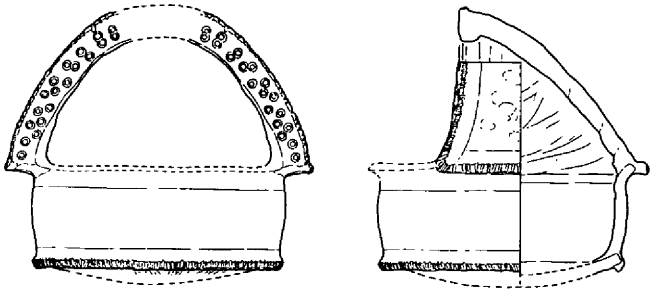


2590

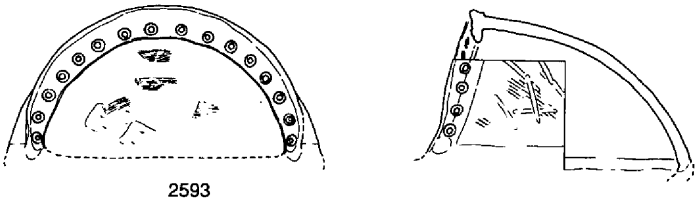
第474図　斜面堆積出土遺物⑨（1/4）



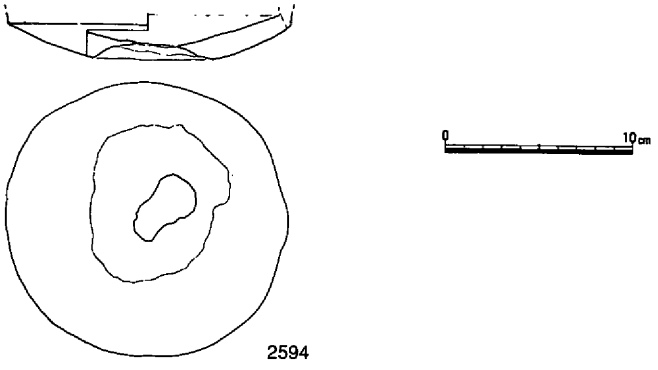
2591



2592

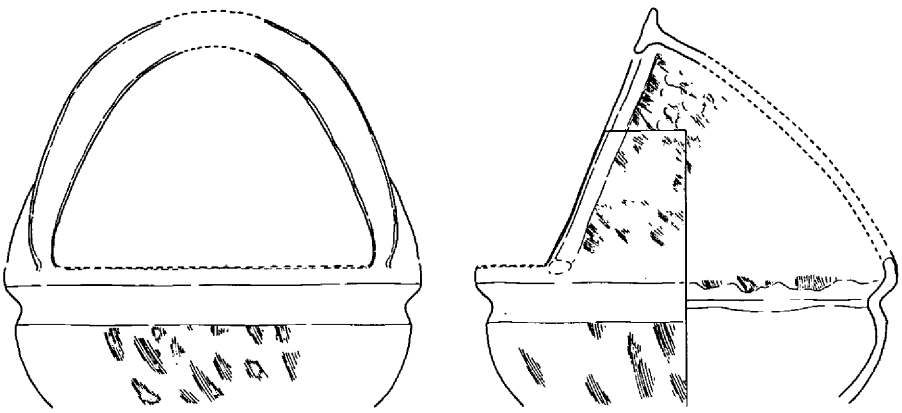


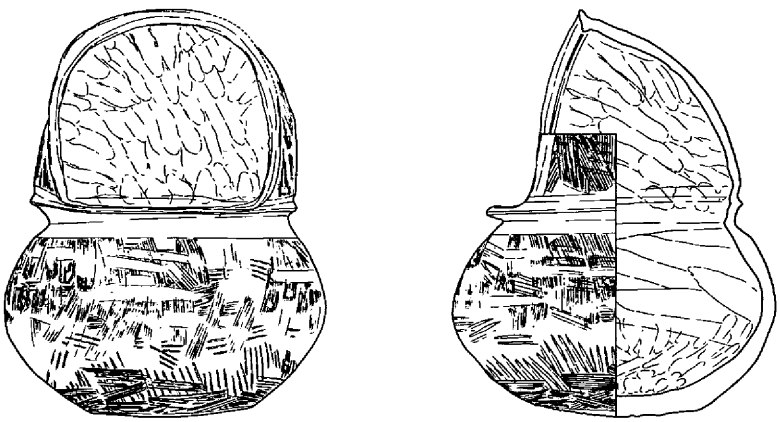
2593

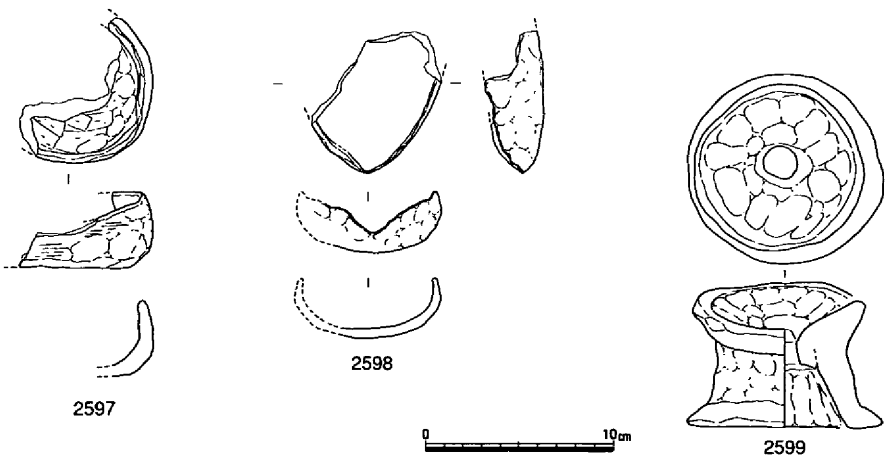


2594

第475図　斜面堆積出土遺物⑩（1/4）







第476図　斜面堆積出土遺物⑪（1/4）

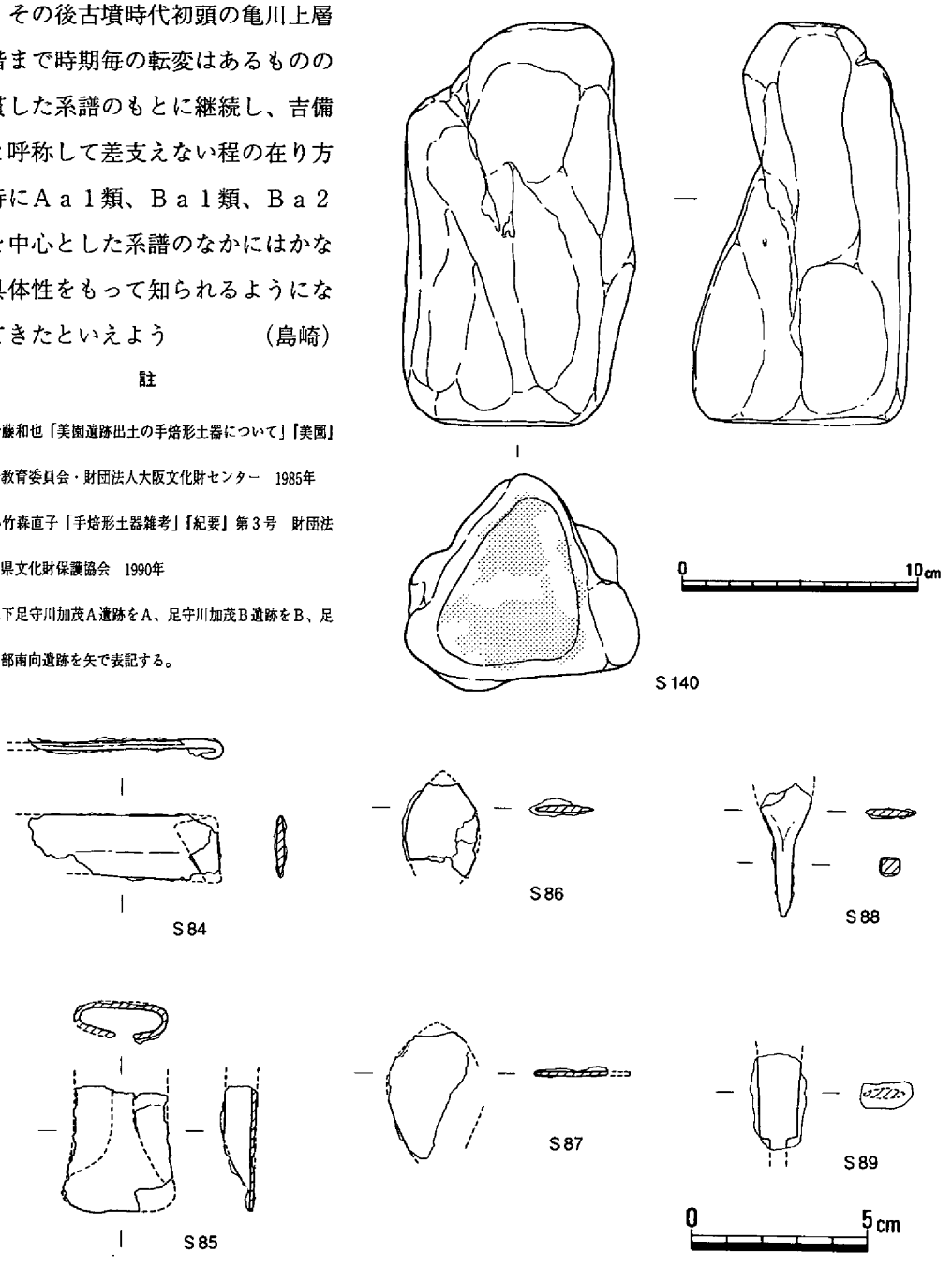
州さらには東海地方との交流を示唆させる存在が明らかとなった。さらに手焙形土器については従来の畿内を中心とした在り方とは異なった様相が判明した。則ち、吉備地方南部地域においても地域性を強く帯びたＡａ１類、Ｂａ１類が弥生時代後期後半には確実に複数出現しており、その後古墳時代初頭の亀川上層段階まで時期毎の転変はあるものの一貫した系譜のもとに継続し、吉備型と呼称して差支えない程の在り方が特にＡａ１類、Ｂａ１類、Ｂａ２類を中心とした系譜のなかにはかなり具体性をもって知られるようになってきたといえよう　　（島崎）

註

(1) 野藤和也「美園遺跡出土の手焙形土器について」『美園』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター　1985年

(2) 小竹森直子「手焙形土器雑考」『紀要』第３号　財団法人滋賀県文化財保護協会　1990年

(3) 以下足守川加茂Ａ遺跡をＡ、足守川加茂Ｂ遺跡をＢ、足守川矢部南向遺跡を矢で表記する。



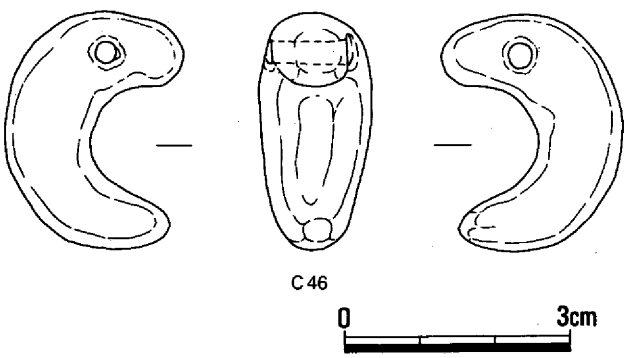
第477図　斜面堆積出土遺物⑫(1/3・1/2)

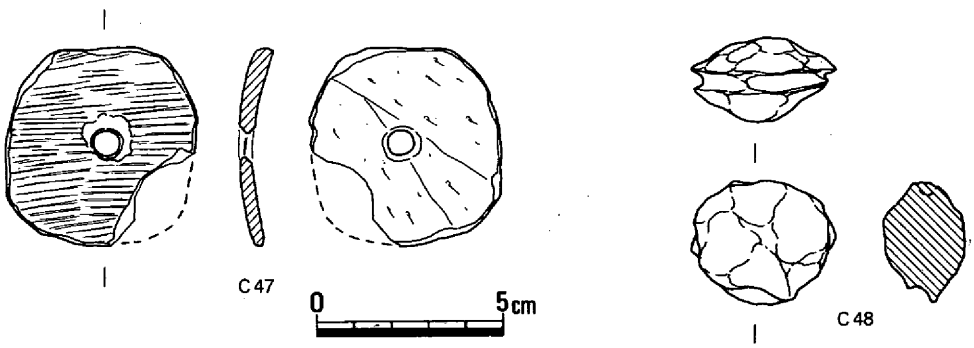
(6) 遺構に伴わない遺物（第478～484図）

ここで取り上げる遺物は、調査区を覆う古墳時代前半の包含層から出土したものの他に、建物としてまとまらなかった柱穴や、重複する遺構埋土の上層で個別の遺構との関係を限定でないまま取り上げられたものも含まれている。また、土器については、前項の斜面堆積に代表させることとして省略している。

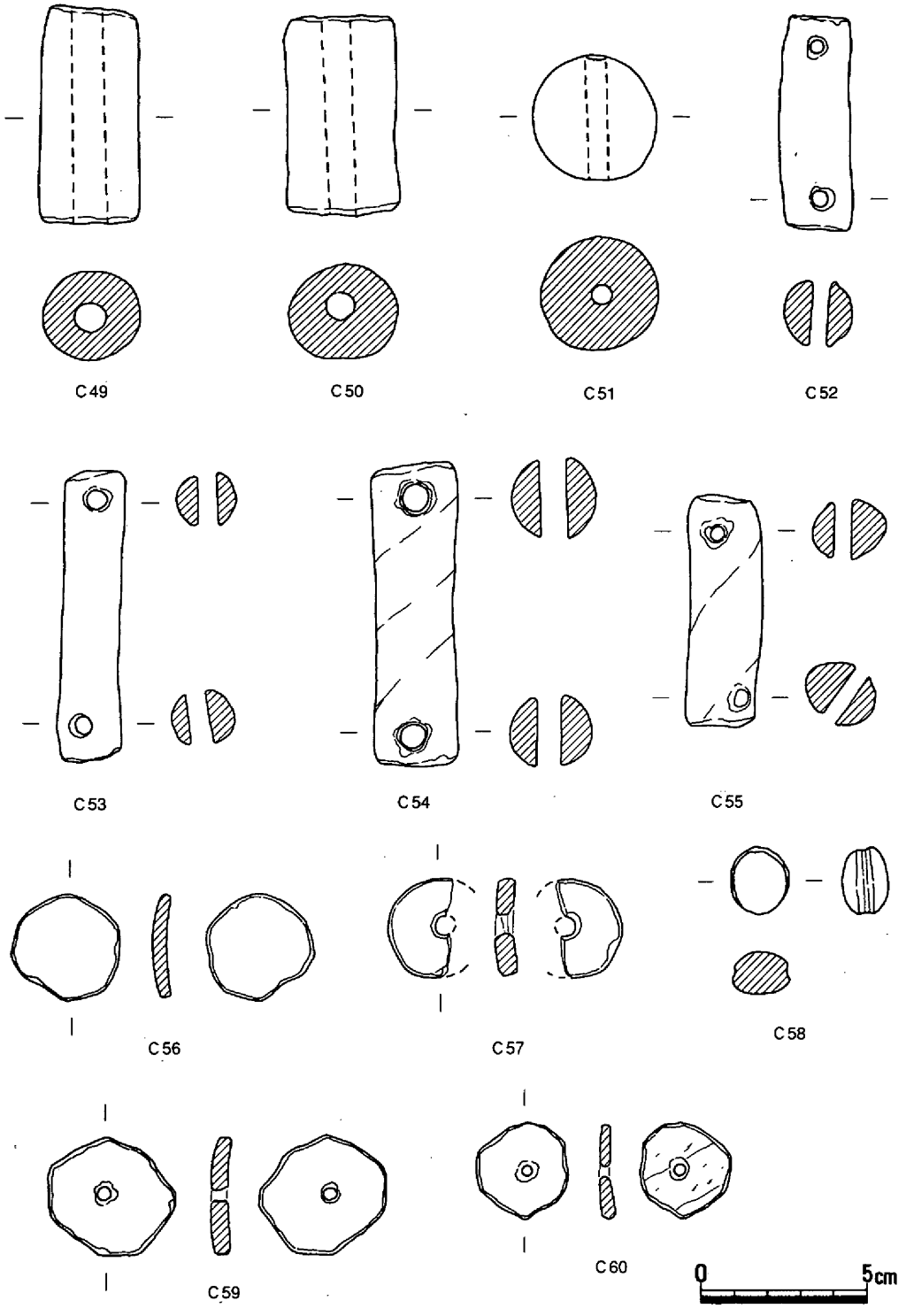
第478・479図は、土製品である。土製勾玉C46は、長さ31.6㎜の完形品である。C47・56～60は紡錘車で、C56は未製品である。いずれも土器片を転用しており、径３～５㎝の円形に近い形に整形し、両面から穿孔している。重量は３ｇ程度から13ｇまでの幅がある。C48～55・58は土錘である。C48・58は、側面に溝が巡るもので、C48は指オサエの痕跡を残したままである。C49・50は筒形を呈するもので、外径30～33㎜、長さ59～65㎜で、重量は69～77ｇである。C51は球形の中心部に貫通孔をもつもので、外径36㎜、長さ38㎝で、重量は52ｇである。C52～55は、円筒の両端に長軸に直行する貫通孔をもつもので、C55では二つの貫通孔の角度が異なっている。径19～25㎜、長さ65～91㎜で、重量は34～67ｇである。円筒形を呈する後二者に属する土錘は図示した以外に数多く出土している。

第480～483図には、鉄器50点を示している。器種としては、刀子・鉋・鑿・斧等の工具、鎌・鋤先等の農具、鏃・二又矛等の武具をはじめとして、鋏・責金具などがある。M90～95・98は、刀子と考えられるものである。M90は柄の部分で、蕨手となっている。M91では柄の長さは55㎜を測り、刃部は磨ぎ込まれて幅が狭くなっている。計測できる刃部幅は、７～29㎜である。先端部と考えられるM94

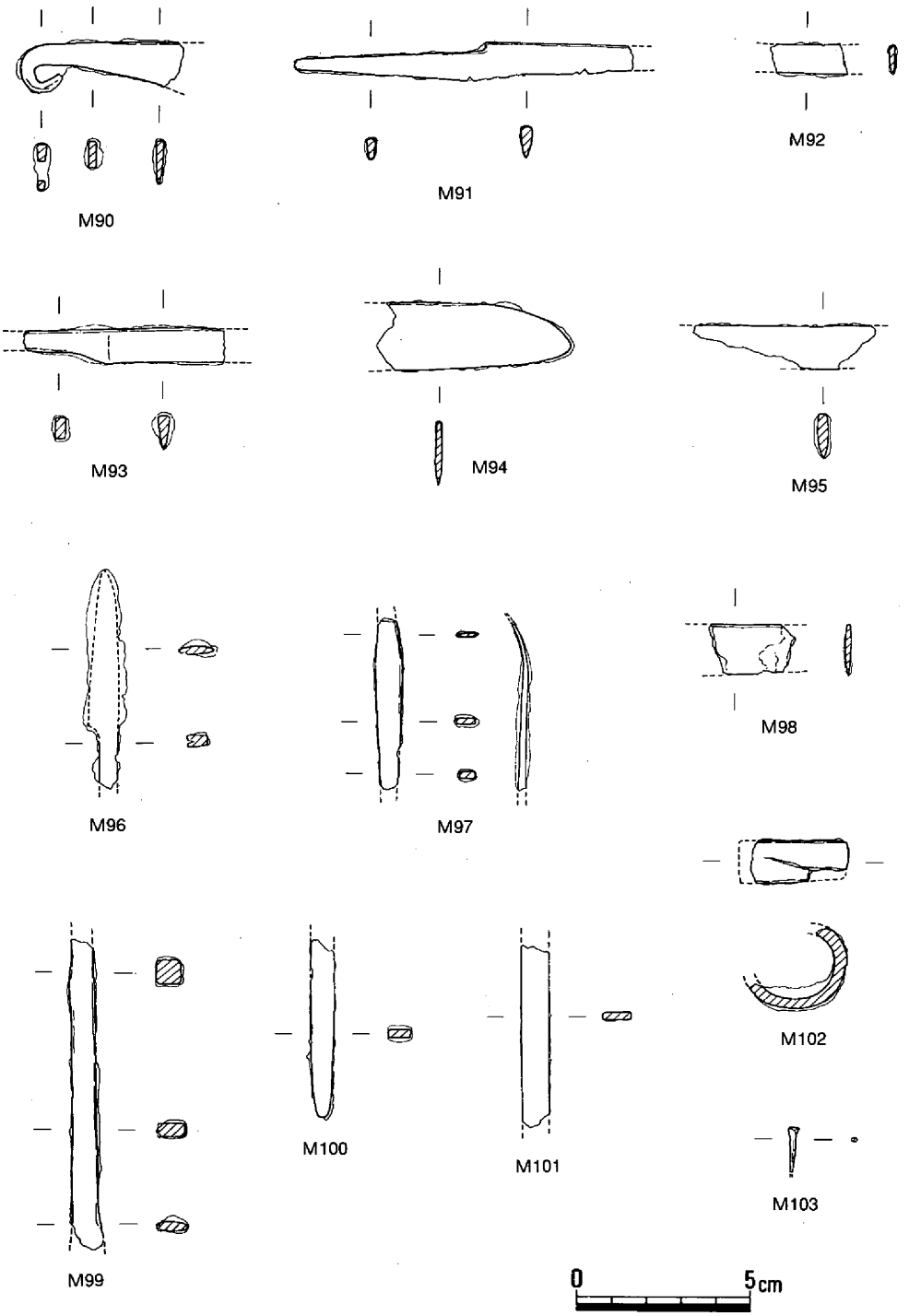




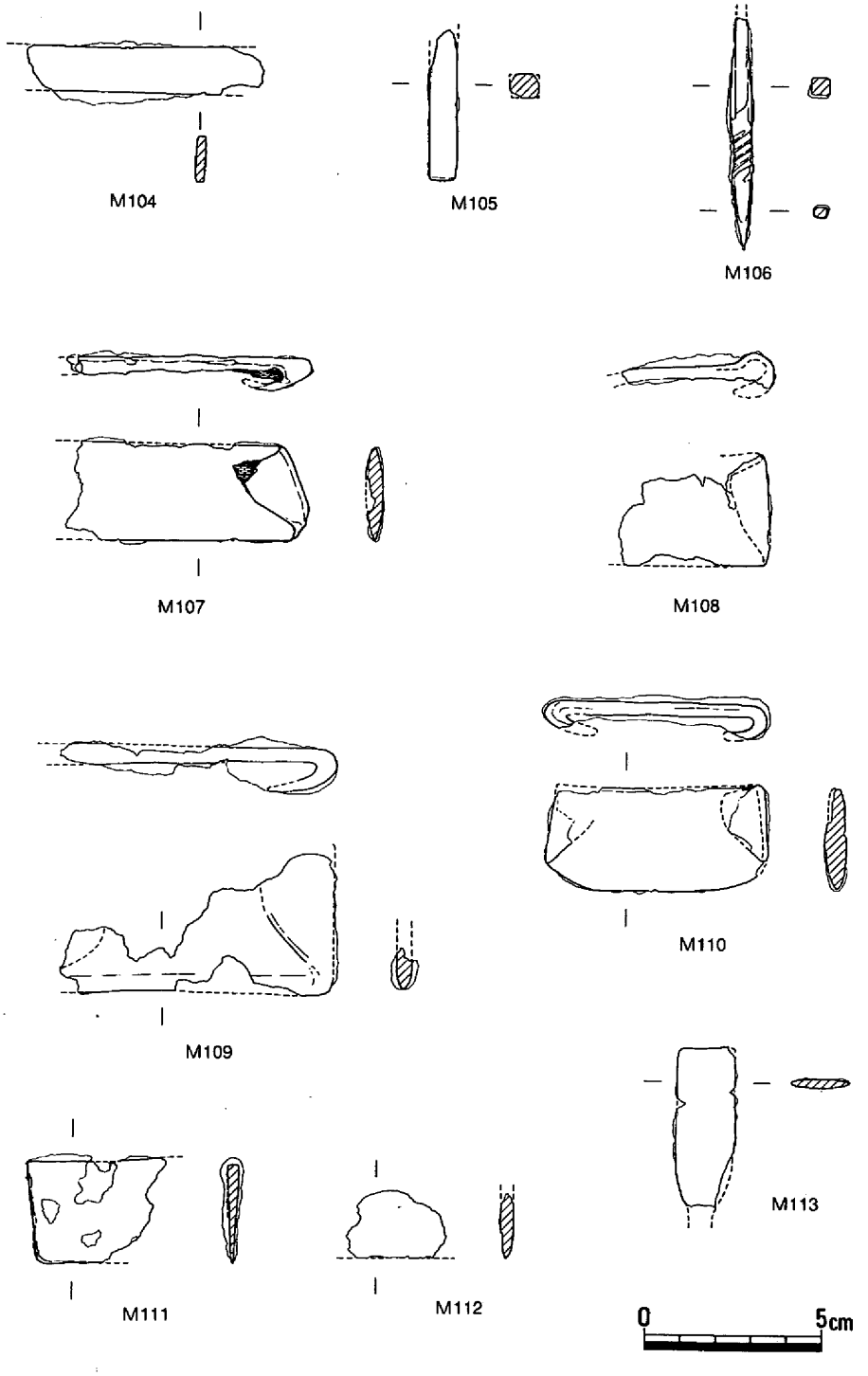
第478図　遺構に伴わない遺物①（1/1・1/2）



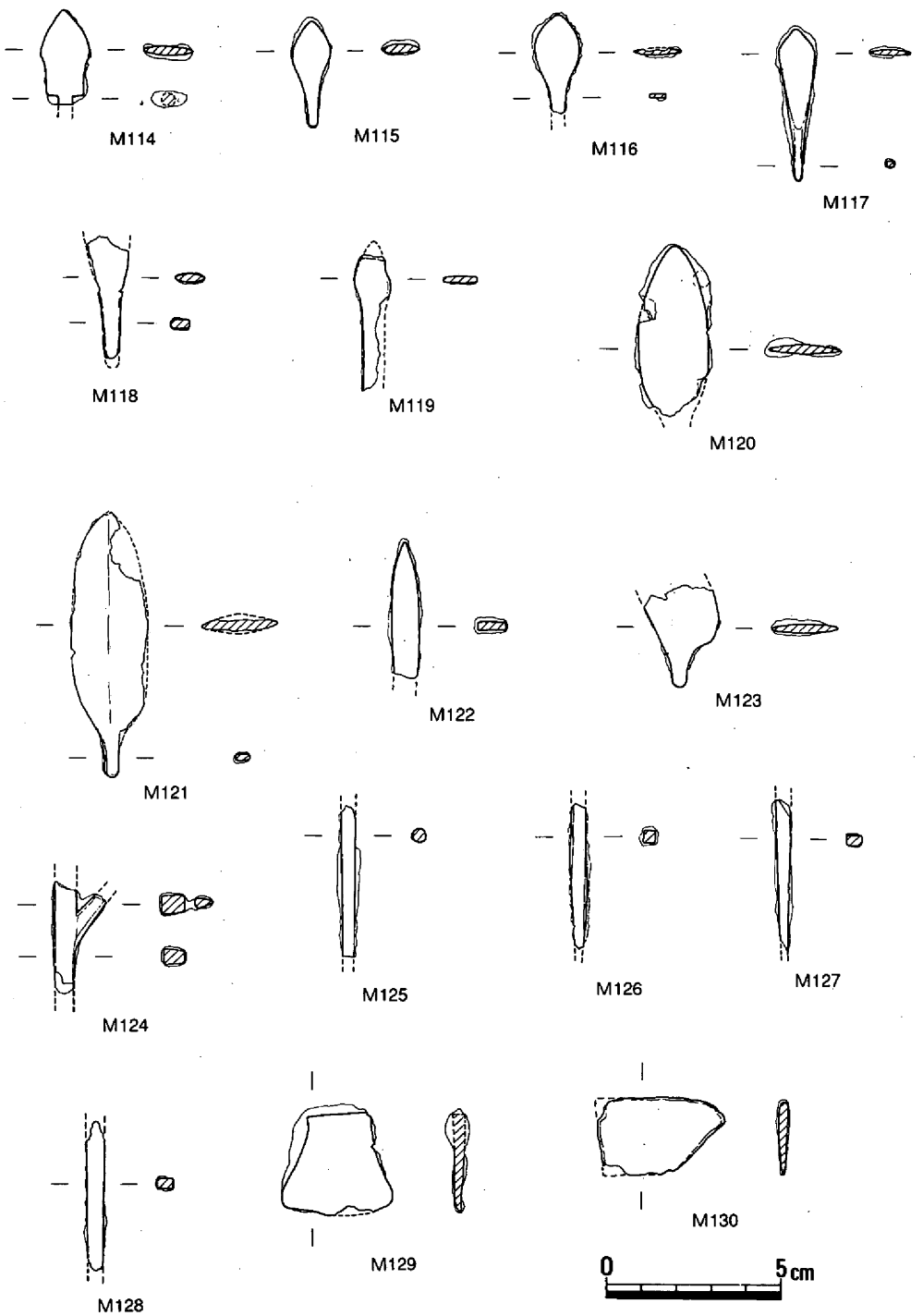
第479図　遺構に伴わない遺物②（1/2）



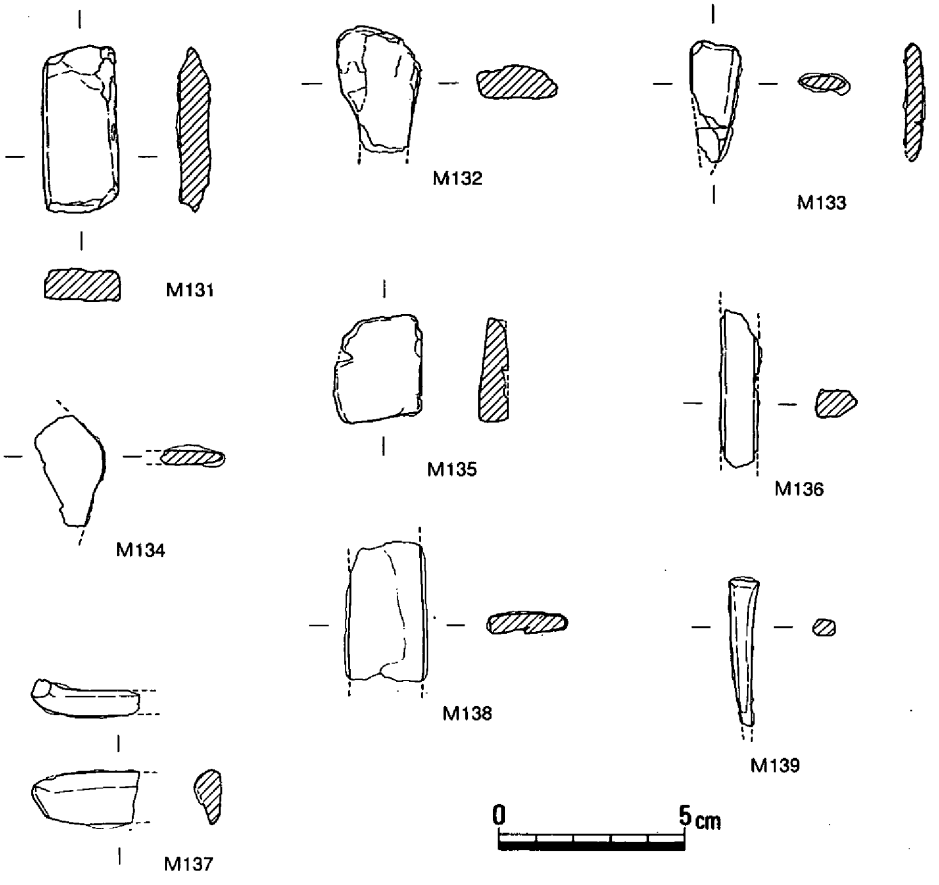
第480図　遺構に伴わない遺物③（1/2）



第481図　遺構に伴わない遺物④（1/2）

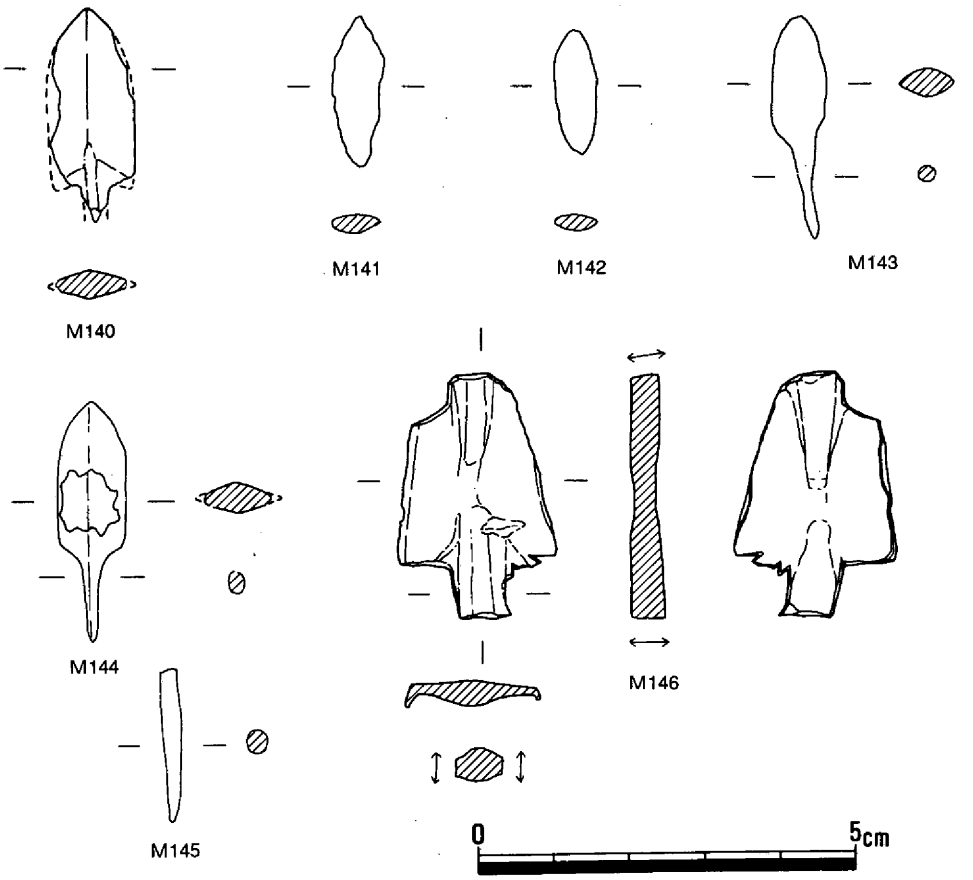


第482図　遺構に伴わない遺物⑤（1/2）

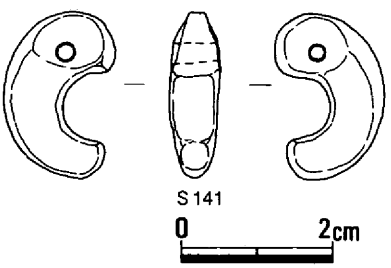


第483図　遺構に伴わない遺物⑥（1/2）

では、切っ先が下がっている。M97・101・119・122は鉋と考えられるものである。M119の刃部は鰻頭状であり、M97・122では柄部の幅から先端へ向けて幅を狭めている。M97では刃部が反る状況が見られる。M96は、X線写真により鋏の可能性が指摘されている。M99は方形断面を呈する柄の一端が鍛打されて幅を広げており、鑿と考えられる。M102は責金具で、内径は22㎜である。M106は１辺５㎜の方柱を４回転ほど捻って先端を尖らせたものである。M107・108は鎌と考えられるもので、いずれも一端を三角形に折り曲げており、M107では木目を刃部に平行させた木質が遺存していた。M109は斧かと考えられるもので、鎌と同じく端部を折り曲げているが、幅・厚さともに鎌を凌いでいる。M110は鋤先と考えられ、両端を折り曲げて長さ62㎜の外湾する刃部を作り出しており、厚さ６㎜である。M111・112も、これらに近しい器種を想定しうる形状を示している。M113～118・120・121・125～128は鏃と考えられるものである。M113が方頭式、M114が定角式、M117が圭頭式とみなしうる他は、柳葉状を呈し、M121に鏑が見られる他は、鏑が確認できない。M114・125の茎が断面円形を呈



第484図　遺構に伴わない遺物⑦（1/1）



する他は、いずれも断面方形である。M124は二又矛と考えられ、枝の部分は断面三角形である。器種を限定できない鉄器片の中には、M133・139のように、端部が切断された痕跡を示すものもある。

第484図のM140～146は銅鏃である。M146を除いて遺存状況が悪いが、M140が腸抉柳葉式とみなされる他は、逆刺をもたない柳葉式と考えられる。M140・144では縦一字鏑を見ることができる他は、鏑が明瞭でないが、十字鏑と考えられるものは無い。M146は貝塚上層での出土で、未製品であり、研磨を受けていない。

S139は、翡翠製の勾玉で、完形品である。（光永）

第５節　古墳時代後半の遺構・遺物

(1) 概要

足守川加茂Ｂ遺跡の微高地部分を覆う古墳時代前半の包含層より上層から掘り込まれた遺構は、第485図に示すとおりである。このうちで、古墳時代後半に時期を限定できる遺構としては、竪穴住居４軒があるのみである。３軒では造り付けの竈が確認されており、相互の距離は９ｍと26ｍを測り、やや離れている。古墳時代前半までの遺構密度に比べ、非常に希薄であるが、深さ10cm程度の遺存状況を考えれば、削平された遺構数も多いものと思われる。（光永）

(2) 竪穴住居

竪穴住居108（第485～487図）

10Ｂｂ区に位置し、竪穴住居109・110との距離約９ｍである。

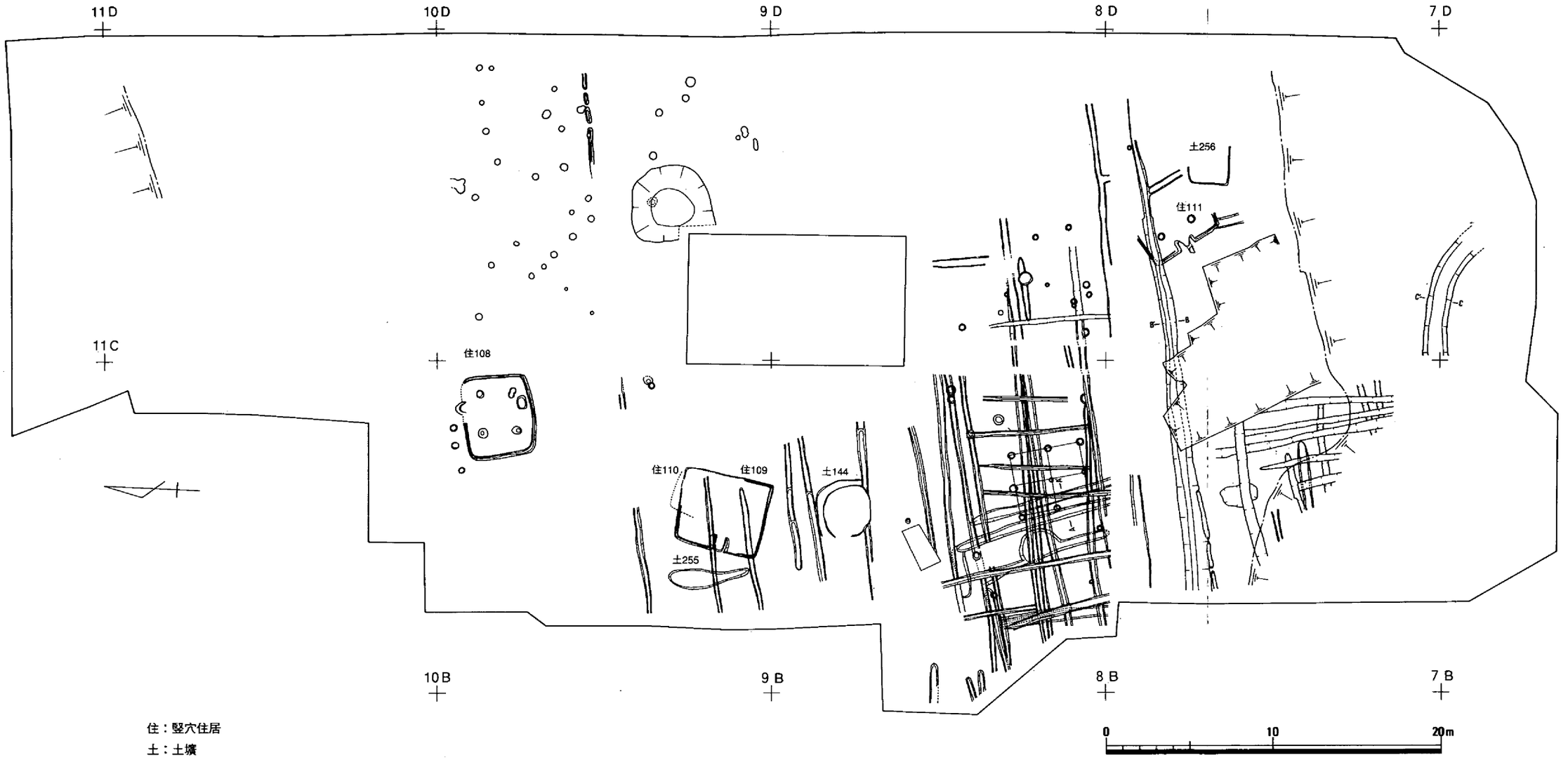
平面形は長方形で、長軸長5.03ｍ、短軸長4.3ｍをそれぞれ測り、床面積は18㎡となる。最大で深さ10cmが残る側壁は外傾しており、ほぼ平坦な床面の海抜高は3.4ｍである。幅13～31cmの壁体溝が巡るが、北東隅と北辺の中央部で途切れている。柱構造は４本柱で、南東の柱穴が重複している。柱間は2.0～2.4ｍで、主軸は東西方向に置かれている。柱掘り方は楕円形で、長径40～63cm、深さ45～60cmを測り、側壁との距離は70～120cmである。北辺の東から約1.5ｍに竈が造り付けられている。側壁の30cm外側から、長径155cm、復元短径97cm、深さ18cmの土壙が掘られ、これを第４・５層で充填すると同時に袖を造り付けたものと考えられるが、削平されて袖以上の構造は不明である。焼土の範囲から、燃焼部の幅は65cm程度と想定される。この土壙の南西肩口と西70cmの２か所で、それぞれ径35cmと45cmの焼土面が検出されている。竈に対峙する南辺添いでは、平面形長方形で、80×57×10cmの規模の土壙が検出されている。

出土遺物には、土師器の直口壺2600、甕2601、須恵器の壺2602、杯蓋2603～2605、横瓶2606の他に、鉄鎌M147、鉄鏃M148等がある。須恵器はいずれも小片であり、時期差もあるが、杯蓋2603から、６世紀後半の年代を考えておく。

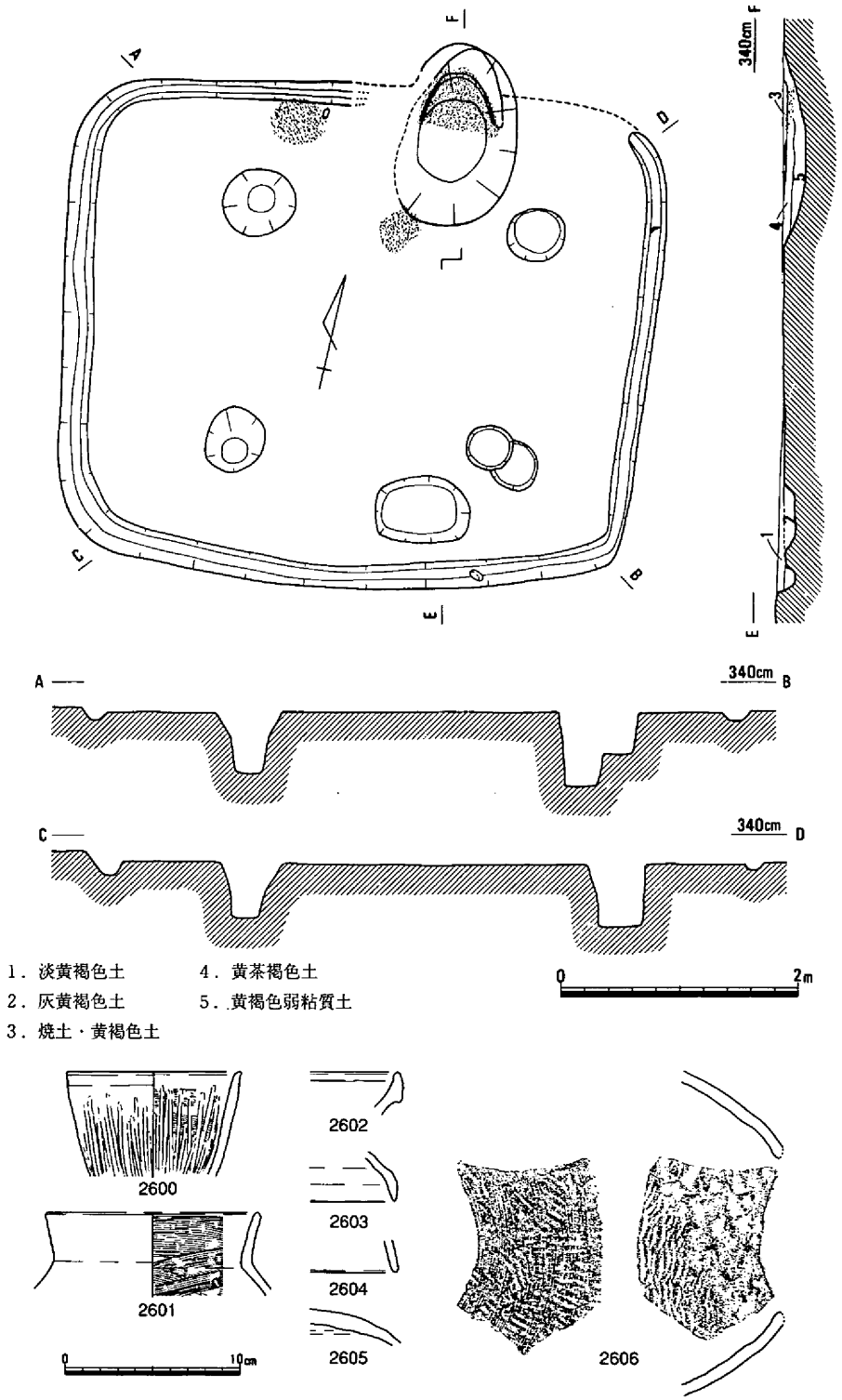
竪穴住居109（第485・488～490図、写真図版80）

10Ｂ区南部に位置し、竪穴住居110と東西方向の溝２条に削られている。

平面形は長方形で、長軸長5.31ｍ、短軸長4.63ｍをそれぞれ測り、床面積は22.2㎡である。深さ10cmが残る側壁はやや外傾し、北東部と竈周辺を除いて、幅10～18cm、深さ５cm以内の壁体溝が検出されている。柱穴は検出されておらず、柱構造は不明である。西側壁中央部には竈が造り付けられている。北側の袖は溝に削られて原状を損なわれているが、袖は高さ20cm、下幅30cmで側壁から85cm内側にのびている。燃焼部は幅50cm、奥行88cmを測り、底面への熱影響は深さ13cmにまで及んでいる。燃焼部中央には、土師器の高杯2613が支脚として倒位に据えられ



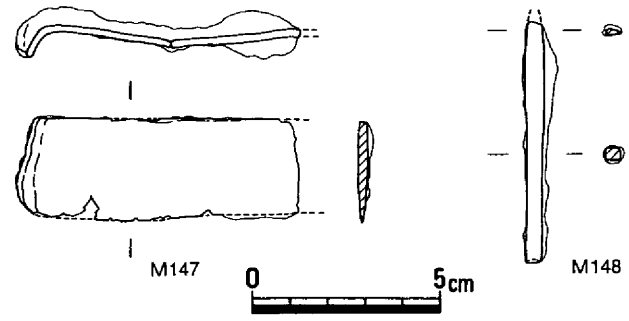
第485図　古墳時代後半以降遺構配置図（1/300）



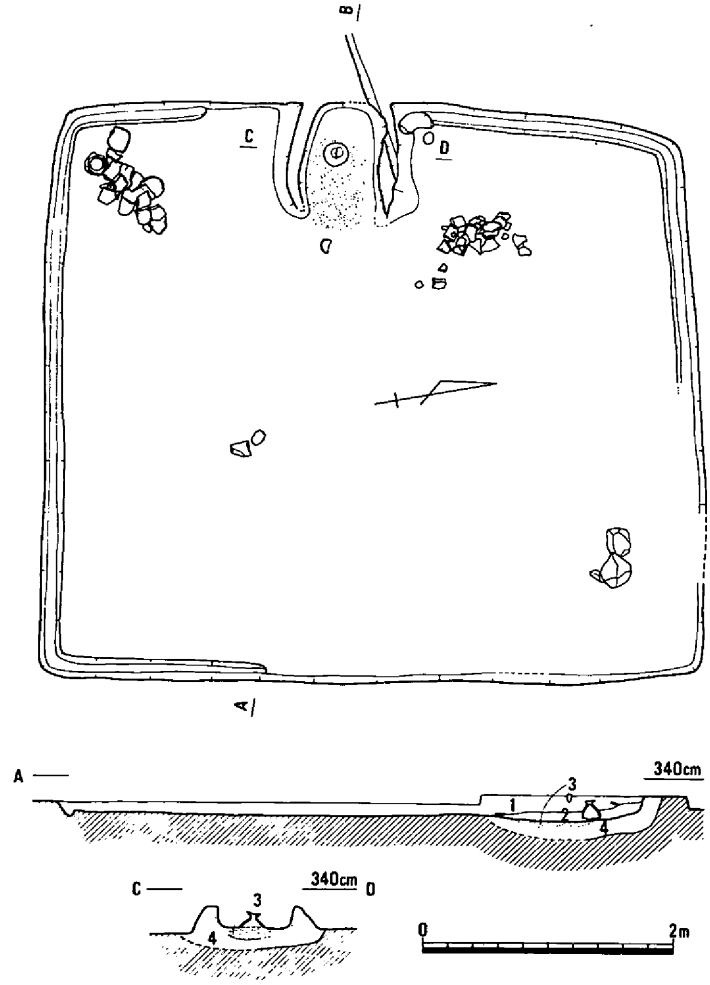
第486図　竪穴住居108（1/60）・出土遺物①（1/4）

ており、底面上には厚さ8㎝に焼土が堆積していた。床面はほぼ平坦で、海抜高3.08mである。この床面上では、竈の北西25㎝と南西隅の2か所で大形の土器片が集中する箇所が見られた他、竈北袖の外側付け根付近および床面北東隅と中央やや南寄りの3か所で、角礫が2～3個ずつ出土している。

出土遺物には、土師器の甕2607～2612、高杯2613、甑2614と、須恵器の杯蓋2615～2617、甕2618の他に、土器片転用紡錘車C61、滑石製の管玉S142、ヒン岩製の石錘S143等がある。土師器の甕は「く」字状口縁で、胴長である。高杯は椀形の杯部で口縁端部がやや外反し、中実の長脚から裾部が小さく開いている。甑は底部がなく、把手はやや上反する。須恵器杯蓋は三者三様であるが、時期は、2616により、6世紀前半に求められる。

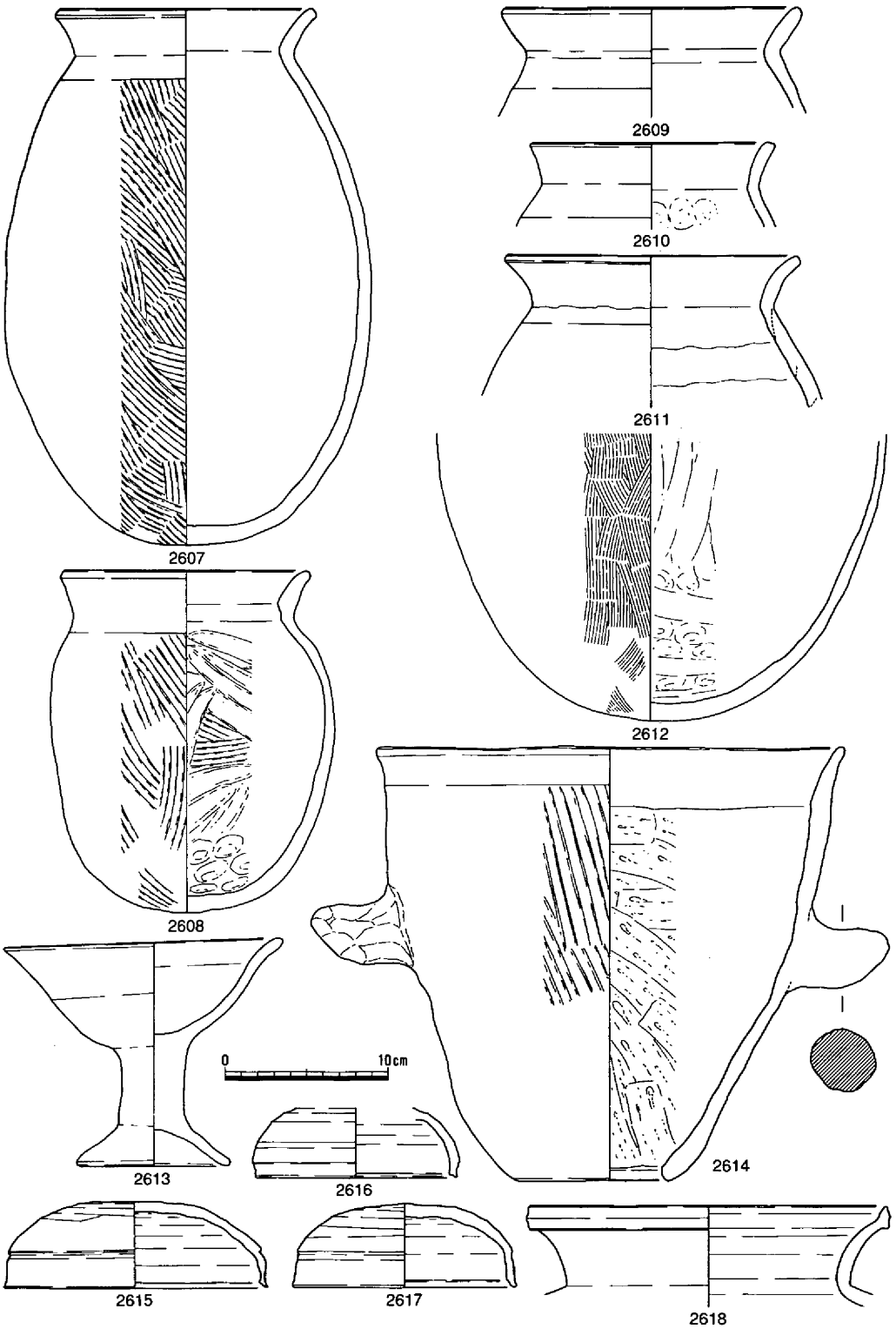


第487図　竪穴住居108出土遺物②（1/2）

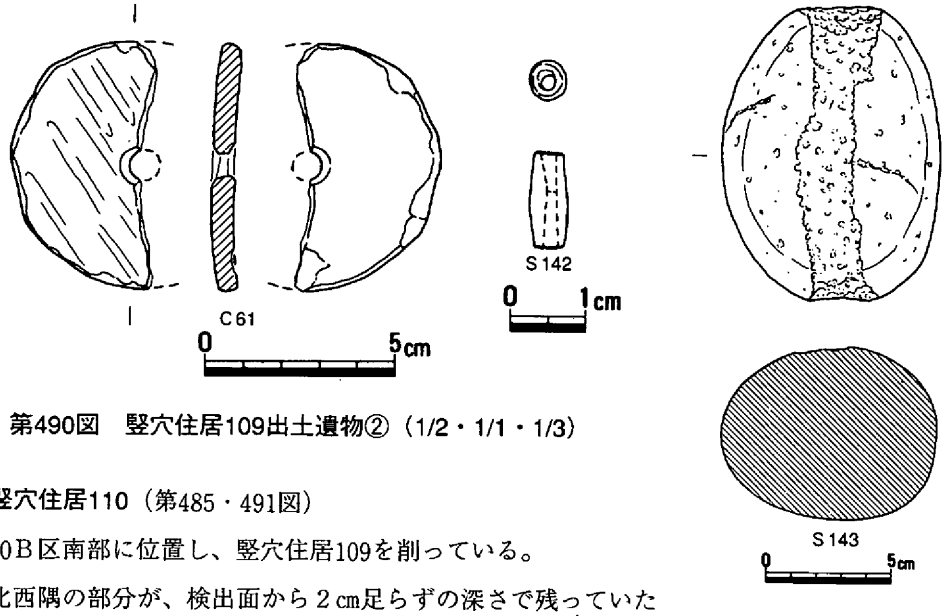


1．淡灰茶褐色土　　3．焼土
2．明茶褐色土（焼土）　4．茶褐色土（焼土）

第488図　竪穴住居109（1/60）



第489図　竪穴住居109出土遺物①（1/4）



第490図　竪穴住居109出土遺物②（1/2・1/1・1/3）

竪穴住居110（第485・491図）

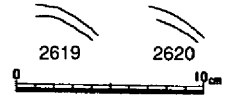
10Ｂ区南部に位置し、竪穴住居109を削っている。

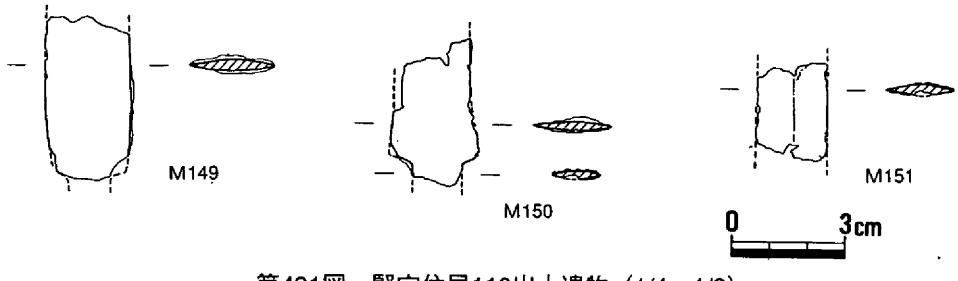
北西隅の部分が、検出面から２㎝足らずの深さで残っていたもので、全容は不明であるが、平面形は方形ないし長方形と想定され、最大東西長2.2m、最大南北長1.7mを測る。壁体溝は検出されておらず、床面の海抜高は3.38m以上と想定される。柱穴は検出されず、柱構造は不明である。竈あるいは中央施設を想定させるような焼土面も検出されていない。

出土遺物には、須恵器の杯蓋2619・2620の他に、鉄剣M149・151、鉄鏃M150がある。2619・2620はともに小片であり、時期を明確にすることはできないが、他の竈付きの竪穴住居が６世紀代に属することから、この住居についても同様に考えられる。（光永）

竪穴住居111（第485・492図、写真図版80）

８Ｃａ区と８Ｃｂ区に跨がった状態で検出された南西側に造り付けの竈をもった住居である。住居が位置する地点は調査時全体にグライ化がかなり進行しており、住居の平面形態の検出もままならない状況にあった。被熱面が検出されるに至ってはじめて竈をもった住居と認定されたもので、特に東側と

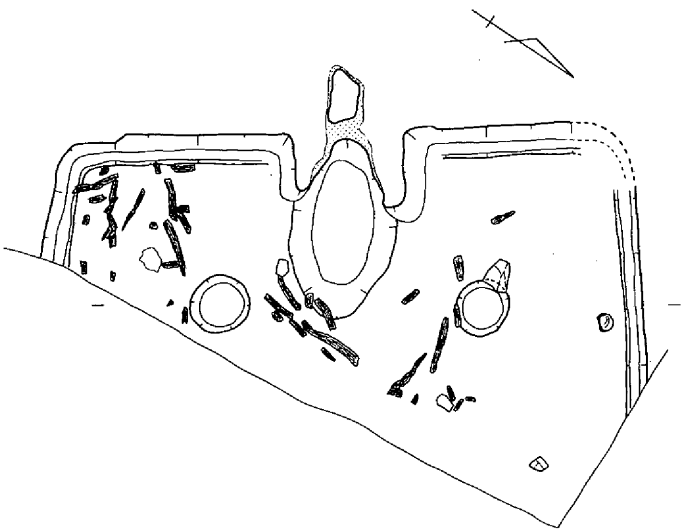


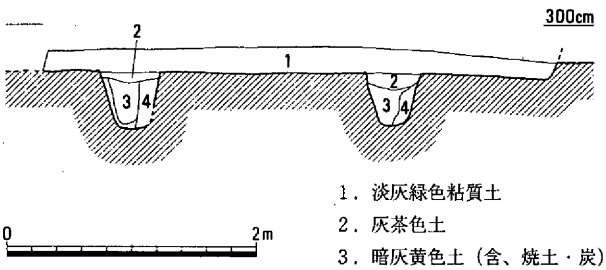


第491図　竪穴住居110出土遺物（1/4・1/2）

北側については未確認のまま包含層として掘り下げを行った。

竈を中心にその平面形態を検討した結果、住居は一辺4.78mを測る平面方形を基調とした平面形態が推測された。竈は、この中央部に壁から粘土によって左右の厚さ約30～50cmを測る袖が約80cmの幅をもって見られ、住居外への煙道の遺存状況も良好であった。煙道は、特に天井部分がよく被熱しており、内部の大きさは幅25cm、底から天井までの高さ約15cmを測る断面楕円形を呈するもので、下部には焼土塊を含んだ層が15cmの深さにまで見られた。こうした下部構造は、焚口についても同様で、一部住居外の煙道部分を含め長軸長約2.00m、幅85cm、深さ30cmの掘り方が認められた。また断面はレンズ状に灰と焼土塊の混和された層序が認められ、入念な除湿が図られていた。

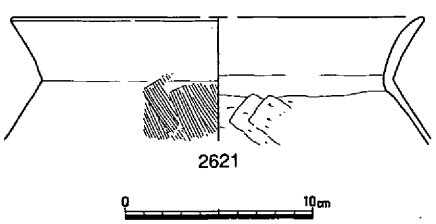


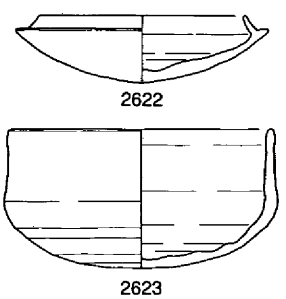


1．淡灰緑色粘質土
2．灰茶色土
3．暗灰黄色土（含、焼土・炭）
4．灰黄色土

床面には、２本の柱穴と炭化した建築材の遺存が認められ、多量の焼土塊の散在と相俟って火事による焼失を窺わせた。

須恵器の共伴で６世紀後半頃と考える。　（島崎）



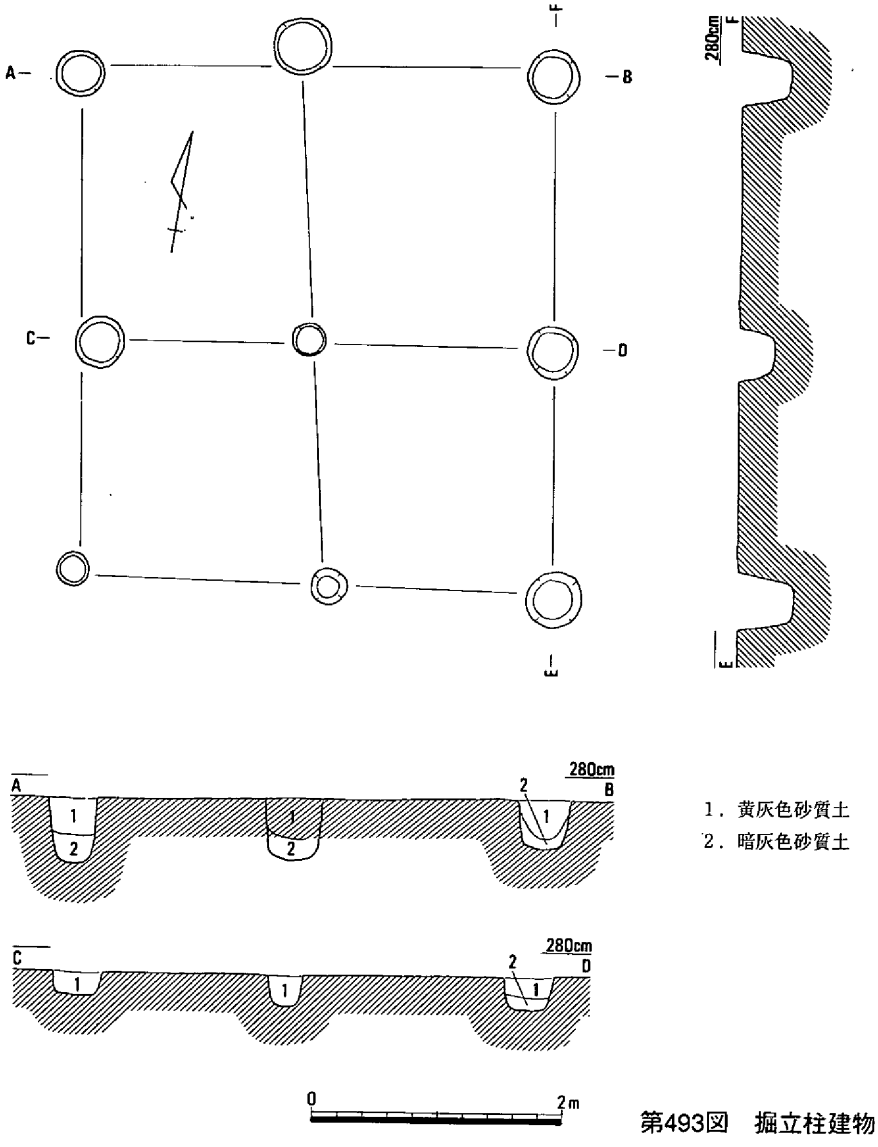


第492図　竪穴住居111（1/60）・出土遺物（1/4）

第６節　古代以降の遺構・遺物

(1) 概要

第485図に示す遺構のうち、竪穴住居４軒を除いたものが古代以降に属するものと考えられる。10Ｂ・Ｃ区から南で検出される溝群は、東西方向に並び、９・８Ｂ区では南北方向にこれと直行するものが見られる。10・９Ｂ・Ｃ区において散見される柱穴については、９Ｂ区において掘立柱建物１棟が確認できた他は、建物としてのまとまりを見せない。しかし、その集中度からは、10Ｃ区およびその東側の一帯に建物群が所在した可能性が残る。土壙としたものは



1．黄灰色砂質土
2．暗灰色砂質土

第493図　掘立柱建物１（1/60）

３基のみであるが、10Ｃ区南部にも大形のくぼみが所在する。８Ｂ・Ｃ区では、後世の粘土採掘によって、大きく削られている部分がある。

いずれにせよ、集落としての土地利用とは考えがたく、溝群も水田経営に伴うものと考えられる。この後埋没していく過程においても、各段階での水田利用の状況が調査区側壁の断面観察で知られている。（光永）

(2)　掘立柱建物

掘立柱建物１（第485・493図）

９Ｂｄ区に位置し、南西隅の柱穴は溝を削っている。

２×２間の総柱で、平面形はやや平行四辺形に近い。規模は、桁行4.3m、梁間3.8mで、床面積は16.3㎡となる。主軸は南北方向に置かれて、Ｎ－12°30′－Ｗを示している。柱間は、桁行で1.9～2.35m、梁間で1.75～2.0mを測り、北辺中央の柱がやや外側へずれている。柱掘り方は円形で、径26～47cm、深さ17～50cmを測り、埋土は１ないし２層で、柱痕跡は確認されていない。

時期を明確にできる遺物の出土はないが、溝を削っていることから、古代以降という捉え方にとどめたい。（光永）

(3)　土壙

土壙144（第485・494図）

９Ｂａ区から９Ｂｂ区にかけて位置し、溝群を構成する１条の溝と、下層の竪穴住居78、土壙165の一部を削っている。

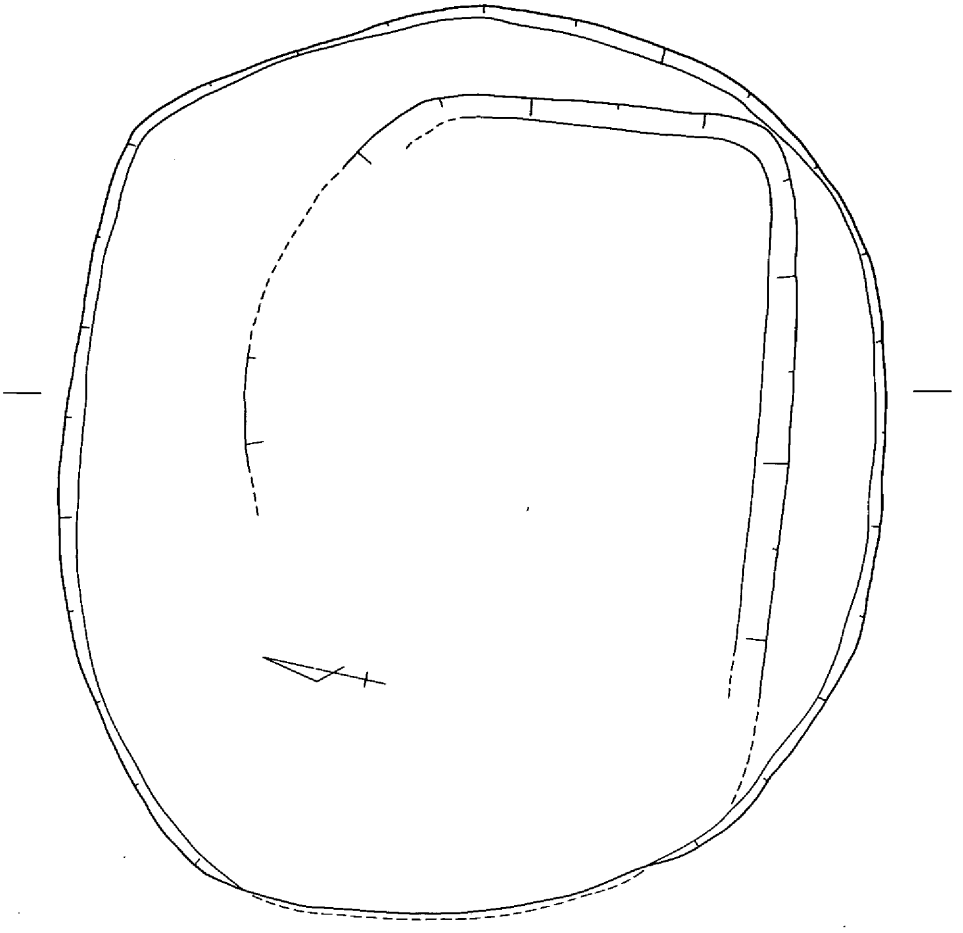
平面形はやや角をもつ不整な円形で、南北径6.52m、東西径7.2mを測る。深さ63cmが残る側壁はほぼ直立し、西辺ではやや内傾している。底面の南東半では、２段に掘られた状況を見ることができ、底面の海抜高は上段で2.25m、下段で1.95mを測る。底面上段の幅は３～85cmである。埋土は暗茶褐色土の１層である。

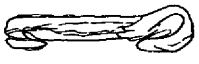
出土遺物には、斧かと考えられる鉄器M152の他に、弥生土器・土師器等があるが、遺構の関係から想定しうる時期を示す土器はなく、古代以降という枠で考えておきたい。（光永）

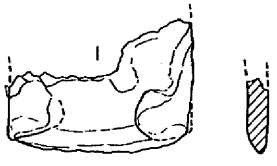
(4)　溝（第485・495・496図、写真図版81）

調査区の南半10Ｂ・Ｃ区から８Ｂ・Ｃ区にかけて、東西方向および南北方向に直線的にのびる細い溝が多数検出されている。これらは、個別の溝としての機能を考えるよりも、複数の溝の集合として捉えられるものであり、溝群として一括してみていくこととする。

溝群の北端に位置するものは、検出状況はとぎれとぎれであるが、10Ｂｃ区から10Ｃｂ区にまで続き、さらにそれぞれ調査区外へ続くものと考えられる。西端での規模は、幅40cm、深さ14～20cm程度で、断面形は逆台形を呈する。埋土は淡茶褐色土が１層である。これより南で東

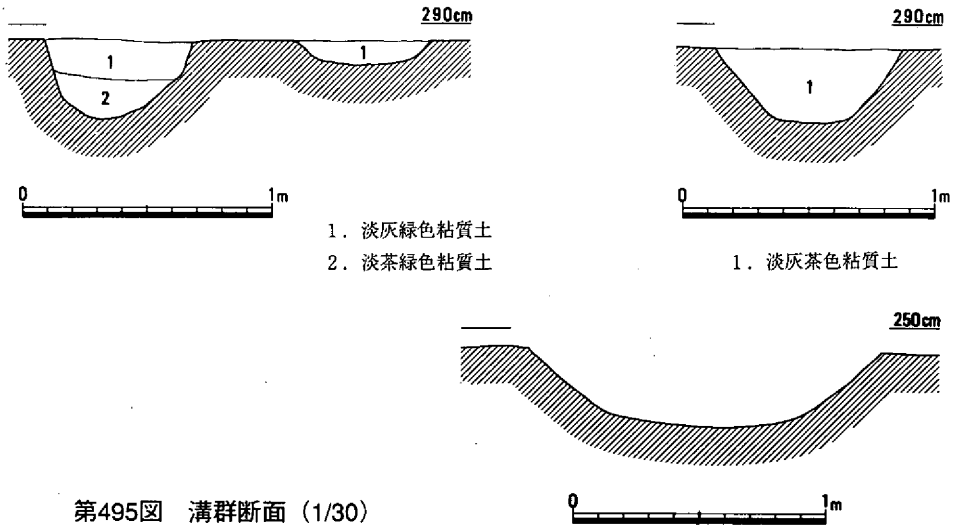






第494図　土壙144（1/30）・出土遺物（1/2）

西方向の溝は、延べ28条が検出されている。このうち、第495図にＢ－Ｂ’断面を示した８Ｂａ区から８Ｃｂ区へ続く溝は、他の溝に比べて規模が大きいものである。断面形は逆台形で、Ｂ－Ｂ’断面での幅73㎝、深さ29㎝を測り、西端では幅1.5ｍを超えている。北端の溝との距離は32ｍを測り、この間に位置



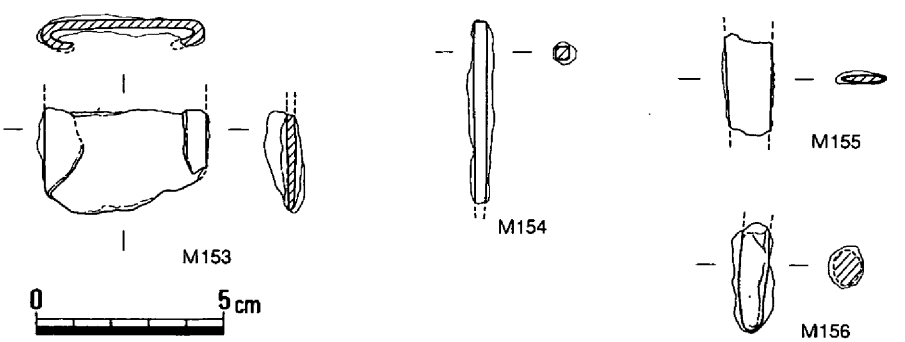
第495図　溝群断面（1/30）

する溝相互の間隔は、最大3.8mである。重複するものでは３条の重複までが確認できる。

９ラインより南では南北方向の溝が検出されている。延べ19条が確認でき、その方向性は基本的には直線であるが、やや東へ振れるものと西へ振れるものの２種類があるようである。第495図にＡ－Ａ’断面を示した２条は後者に属するもので、全体的に西へ振れるものは東へ振れるものよりも規模が大きいようである。前述の東西方向の溝群との先後関係については、西へ振れるものに古いものが多く、東へ振れるものは東西方向の溝群を切っている。

第495図にＣ－Ｃ’断面を示した溝は、上記の溝群とは異なっている。規模は幅140cm、深さ30cmを測り、８Ｃｃ区から７Ｃａ区にかけて、西から南東方向へ湾曲している。

溝群からの出土遺物には、斧M153、釘M154、鋲M155、不明鉄器M156の他に、弥生土器・土師器・須恵器等の土器片が出土しているが、時期を明確にすることはできず、竈付きの竪穴住居等との関係から、古代以降のものと捉えるにとどめる。　（光永）



第496図　溝群出土遺物（1/2）

第７節　結　　語

(1) 遺構について

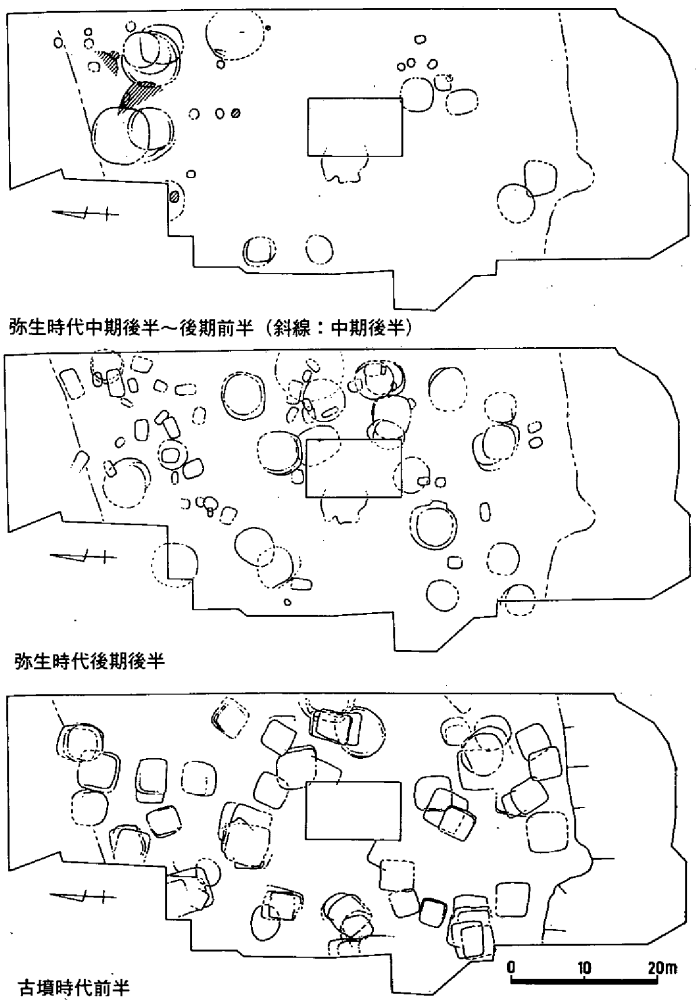
足守川加茂Ｂ遺跡に対する発掘調査は、約2,800㎡を対象とした。このうち微高地部分は、南北長65～70m、東西長23～41mの約2,070㎡である。この調査範囲は、東側へ広がることが想定される微高地に対して南北方向の試掘溝をいれたに過ぎず、その調査成果のみでは微高地上に営まれたであろう集落の全体像を知ることはできない。しかし、その限られた範囲の中にあっても、各時代ごとに特徴が認められ、それぞれの概要として述べてきた。ここでは、時代ごとの特徴を見なおす中で、集落の変遷を辿ってみたい。

最初に人の生活の痕跡が見られるのは、弥生時代中期後半である。竪穴住居２軒、土壙５基が検出されており、微高地北部の基盤が粘質の部分に立地している。竪穴住居は近接しており、同時に存在したとは考えがたく、１時期１軒という状況である。土壙のなかでは、貝殻で充満していたものが注目される。

続く弥生時代後期前半に属する遺構としては、竪穴住居14軒、土壙70基に加えて、土壙墓２基、土器棺１基および貝塚１か所が検出されている。竪穴住居は南部にも築かれ、平面形は楕円形から隅丸方形まであるが、規模の違いが顕著で、径８m級の大形住居３軒が北部に集中している。この３軒については同時併存は考えがたく、全体でも６軒までと考えられる。また、この時期に特徴的な遺構である袋状土壙は14基が検出されているが、その分布についても北部に集中しており、一部が南東区にまとまっている状況である。成人墓である土壙墓は北西部で検出され、小児墓の土器棺は南東部で検出されている。そして、これらに囲まれるようにして貝塚が形成されている。この時期の微高地範囲は確定しがたいが、少なくとも貝塚は南北方向における中央部に位置しており、斜面にはかかっていないことから単なるゴミ捨て場とは考えられず、卜骨の出土や、器台の多さに象徴される集落内の精神生活の中心としての位置付けがなされる。その際の主役が大形住居の住人であったとも考えられよう。

弥生時代後期後半に属する遺構としては、竪穴住居27軒、井戸１基、土器棺２基、土壙146基と土器溜り１か所がある。竪穴住居の平面形は円形ないし隅丸方形が主で、規模には顕著な差が見られないが、中央部東端に径８m以上に想定されるものが１軒所在する他、造出しをもつものも１軒ある。その分布は微高地全域に及び、それまであまり利用されていなかった中央部東半に集中するが、同時に存在しうるのは10軒までと考えられる。この時期に特徴的な遺構として、長方形土壙がある。今回長方形土壙としたのは、平面形が長方形で、長軸長２m以上、短軸長１m以上の規模で、0.5m以上に想定される側壁が直立し、底面が平坦な土壙である。規模がこれを下回る場合でも、小形の長方形土壙と称したものもある。これらを合わせると、

土壙146基中の43基が長方形土壙として扱われる。その分布は住居と同様に微高地全域に広がるが、北東部に集中する箇所が見られ、その範囲は前時代に袋状土壙が集中した範囲と重複することとなる。土器棺が南部の住居近くで検出されている他、南東部で井戸が検出されたことが注目される。井戸は各時代を通じてこの１基のみが検出されている。微高地を横断する形での線的調査という制約はあるものの、少ないと言わざるをえない。低位部を挟んで南に位置する足守川矢部南向遺跡においても、弥生～古墳時代の井戸は１基が検出されたのみで、同じ足守川の下流に立地し、同様に微高地を横断する線的調査がなされた倉敷市上東遺跡で多くの井戸が検出された状況とは異なった在り方である。前時代につくられた貝塚は手を加えられた痕跡もなく、住居の密集する地域に隣接してそのまま残されていたようである。



第497図　時期別主要遺構配置図（1/1,000）

古墳時代前半に比定される遺構は、竪穴住居63軒、土壙32基と土器溜り１か所である。竪穴住居の平面形は、切り合い関係において先行するものの中に、一部楕円形ないし隅丸方形のものが残るが、基本的には方形が主流となっている。その分布は微高地全域に及び、同時併存は12軒程度までと考えられる。古墳時代前半として想定される時間幅から考えると、住居の建替え、建直しが頻繁に行なわれたものと考えられる。

こうして、弥生時代中期後半以降、連綿と営まれ続けた集落を、古墳時代前半の遺物を含んだ灰褐色微砂が覆いつくすこ

ととなる。土質は微砂であるが、炭化物を多く含んで洪水砂とは考えられず、微高地上だけでなく南方向への下がりにも堆積し、その部分には特に大形の土器が多量に含まれていた。このような状況は足守川加茂Ａ遺跡・足守川矢部南向遺跡においては認められず、その成因については不明といわざるをえない。

いずれにせよ、その後古墳時代後半の竪穴住居まで、空白となり、以降の土地利用は集落域から水田域へと変化していく。（光永）

(2) 遺物について

足守川加茂Ｂ遺跡からの出土遺物は、整理箱2,000箱に及ぶ。しかし、既述のとおり遺構密度が非常に高い状況の中で、個別の遺構との関係を明確にできないままに取り上げられたものが多く、本報告書においてはその一部を掲載できたにすぎない。また、時期的に連続する中での遺構の重複のため、混入の見極めも難しく、いわゆる一括遺物として取り扱えるものも限られている。その中では、弥生時代中期後半の資料としては、竪穴住居１、土壙１などが好例である。同様に、後期前半では土壙６、貝塚１があり、後期後半では竪穴住居19・38、井戸１、土壙57・58・65・76・126が挙げられ、古墳時代前半では竪穴住居93、土器溜り２、斜面堆積などが、それぞれの中に時間幅を示しているとはいえ、量的なまとまりをもつ好資料となろう。また、他地域からの搬入品あるいは他地域の手法を用いた土器は後期前半から見受けられ、時期を追って増加しており、その範囲は西は九州から東は東海地方にまで及ぶ。

土器の他にも、注目すべき遺物は多い。一つには鉄器出土量の多さがある。古墳時代前半までの報告数は139点で、このうち64点は竪穴住居からの出土である。弥生時代中期後半の１例をはじめとして、後期前半には15軒中４軒から４点、後期後半には27軒中12軒から20点、そして古墳時代初頭には63軒中24軒から39点が出土している。その器種においては、鏃等の武器も見られるが、鉋・鎌などの農・工具が多い。青銅器も、鏡２点、鏃８点が出土しており、未製品の鏃１点が注目される。金属器の加工に関しては、古代以降と考えられる状況での鉄滓の出土はあるものの、弥生～古墳時代前半においては他に資料が無い。一方、弥生時代後期前半に作られた貝塚周辺をはじめとして、いくつかの土壙や斜面堆積からガラス滓が出土している。それぞれの量は少ないが、出土地点の数は多いといえる。

弥生時代中期後半に比定される土壙２をはじめとして、いくつかの土壙から貝殻が出土している。貝種については別稿に詳しいが、ヤマトシジミを中心とする汽水域の様相を見ることができる。これは貝塚においても同様で、その堆積状況は何層かに分層できるが、それぞれの量も多い。この貝塚において検出された７個の卜骨は、土壙35からの１点とともに、注目されるものである。この他、種子がいくつかの遺構から出土し、土壙10からの大量出土をはじめとして、炭化米も多く出土している。（光永）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂Ｂ遺跡

（本　　文）

１９９５年３月20日 印 刷
１９９５年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　岡 山 県 教 育 委 員 会
印刷　旭 総 合 印 刷 株 式 会 社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川矢部南向遺跡

１９９５年３月

岡山県教育委員会

3. 足守川矢部南向遺跡

第１章　遺跡の概要

足守川は前章Ⅲの第８図に示すように岡山市甫崎で大きく迂回をし、同黒住・加茂地内でほぼ南流するものの、倉敷市矢部で南東方向に流路を変える。足守川矢部南向遺跡は現状では東西に架かる新黒住橋と新矢部橋の河床に位置した。当遺跡の発見および調査の経緯は前章に詳述されているが、今一度略述を加える。

今回報告する足守川矢部南向遺跡は昭和55年度および昭和61～63年度の２度の調査によって明らかにされたもので、昭和55年度（旧調査）では主に左岸の護岸部分およびアバット部の調査を実施し、集落跡の所在の確認と弥生時代後期～中世にいたる高密な遺構検出状況の一部を把握した。主に旧左岸堤防下にあたる昭和61～63年度調査では、旧調査同様の数多くの集落に関わる遺構を検出するとともに遺跡の北端を把握することが出来た。

上記２度の調査によって、当遺跡からは弥生時代中期前半～18世紀代の遺物がコンテナ約1700箱出土し、竪穴住居74軒・掘立柱建物18棟・井戸１基・土壙墓８基・土器棺２基・炉２基・土壙202基・溝43状・柱穴約2000個などの遺構が検出された。これら遺構は単独で検出される例は希で、ほとんどの遺構は大小の差はあるものの著しく切り合う状況で検出され、さらに、２㎡あたり１箱の割合で遺物が出土するなど、このような状況を呈す遺跡は県内において当遺跡群以外に例をみない。

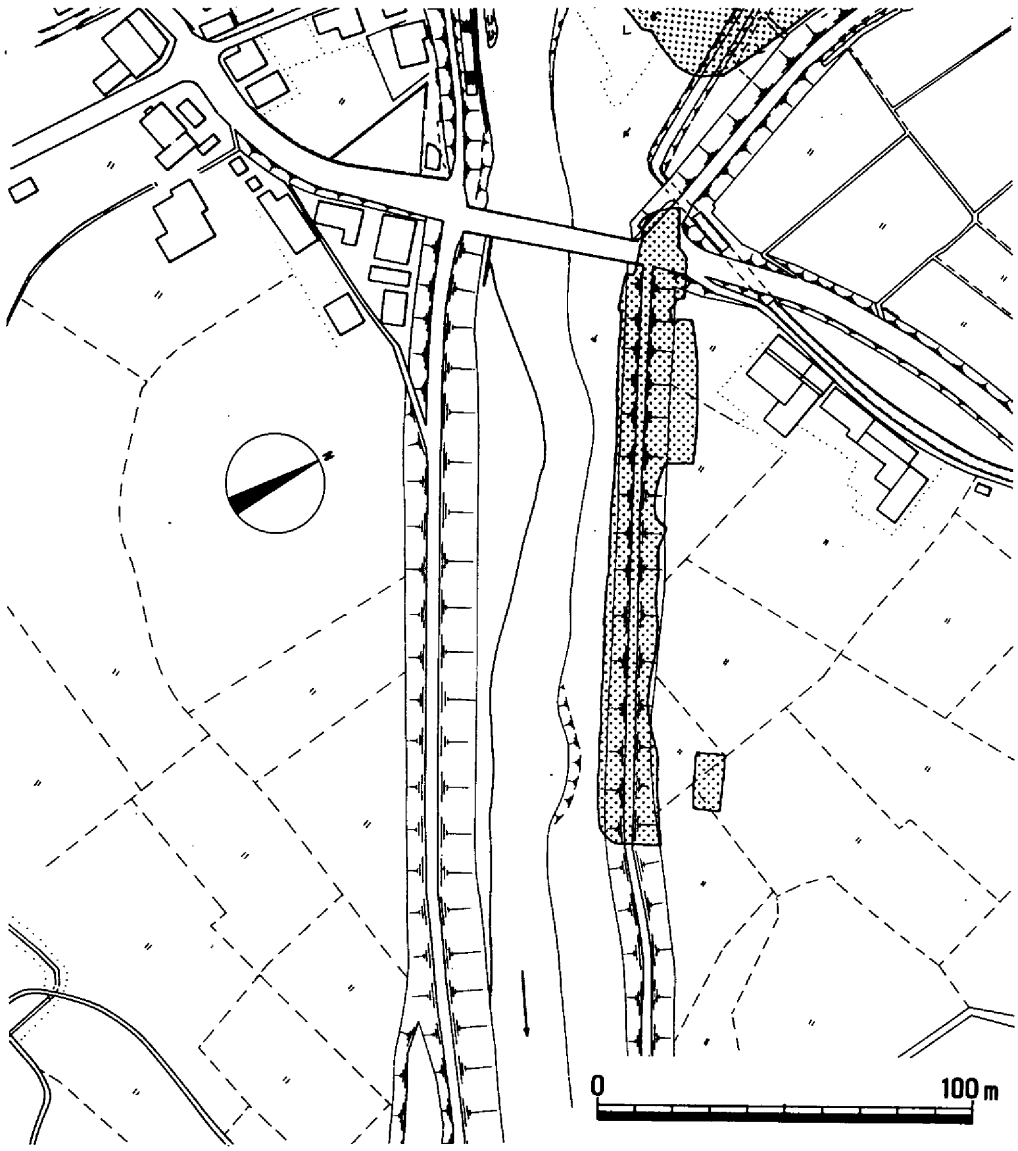
次に微高地の状況を記す前に調査区の設定についてふれておく。調査区は第２図に示すように、20mごとに１～10を、それに直交するＡ～Ｃを設定しており、１Ａ区あるいは４分割し、細かく５Ｂｄ区のように表記している。

当微高地の基盤は安定した粘質土で、第２図の遺跡縦断図に示すように４Ｂ区付近が最高所にあたる。ここから南方向に６Ｂ・８Ｂ区付近で小さな凹地状を呈しながら徐々に下がっており、調査区南端の10ラインで途切れている。また、微高地北端から４Ｂにかけてもわずかながら基盤が下がる傾向を示すとともに、北端斜面は抉られるように削平を受けており、前章の足守川加茂Ｂ遺跡の南端状況と合わせ考えれば、両遺跡間には幅約50mの南流する河道が所在したことを裏付けている。

次に、微高地北斜面を微細にみれば第４図に示すように、堆積層は３つに大別された。微高地基盤上に堆積する第９～11層を抉り取るように、洪水砂と思われる第５～７層が堆積していた。これら砂層からの遺物の出土はなかったが、基盤斜面に流れ込む第８層からは水漉粘土で作られた高杯片がみられ、弥生時代後期後半以降に埋没したものと考えられる。また、上層の

第３・４層においては堆積状況は下層に比べ緩く北へ傾斜していたが、下層と同様洪水の影響を受けたと推察される層で、第４層から７世紀後半と考えられる須恵器高杯の脚柱部片が出土しており、古代以降に堆積したものと判断される。さらに、第１・２層は下層と同様に急激に北へ傾斜する軟らかい粘質砂で、遺物の確認はされなかったものの近世以降の堆積と思われる。

一方、調査区横断の状況は、微高地の按部にあたり遺構密度も比較的粗な部分の第５図で説明を加える。図の右が河川外の水田側、左が河床部分にあたる。旧堤防は基盤上に中世溝を刻



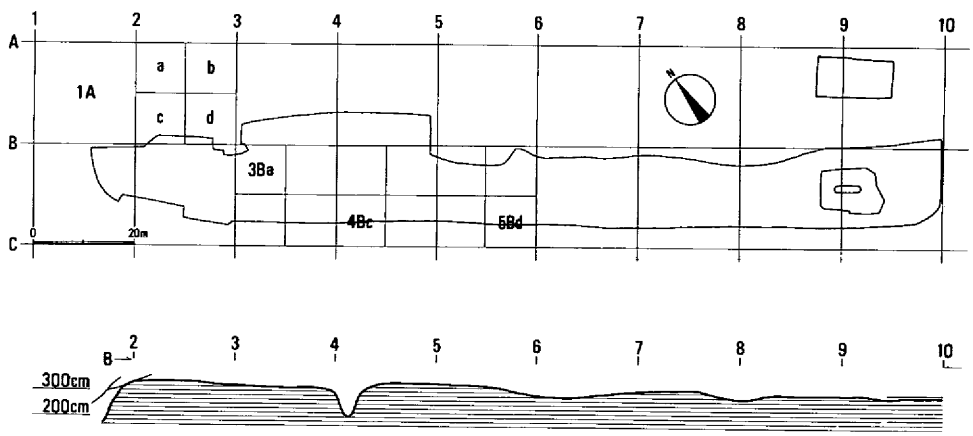
第１図　足守川矢部南向遺跡周辺地形図（1/2,000）

み、その上層は第20層の洪水砂によって覆われていた。第19層も洪水砂層であるが部分的に粘質土の土塊を含み、また、その上層の第16～18層においても良く締まった土塊を基本にした盛土層であった。さらに、第16層の河床側には第７～15層の、水田側には第１～５層の堤防を補強した状況が窺えた。なお、河床側の堆積土間には微砂層の薄層が確認される箇所もあり、河川の堆積あるいは築堤土か断定しきれないものの、水田側においては第４層から明らかなように、一時期築堤部を切り水田耕作のなされた跡が窺えた。

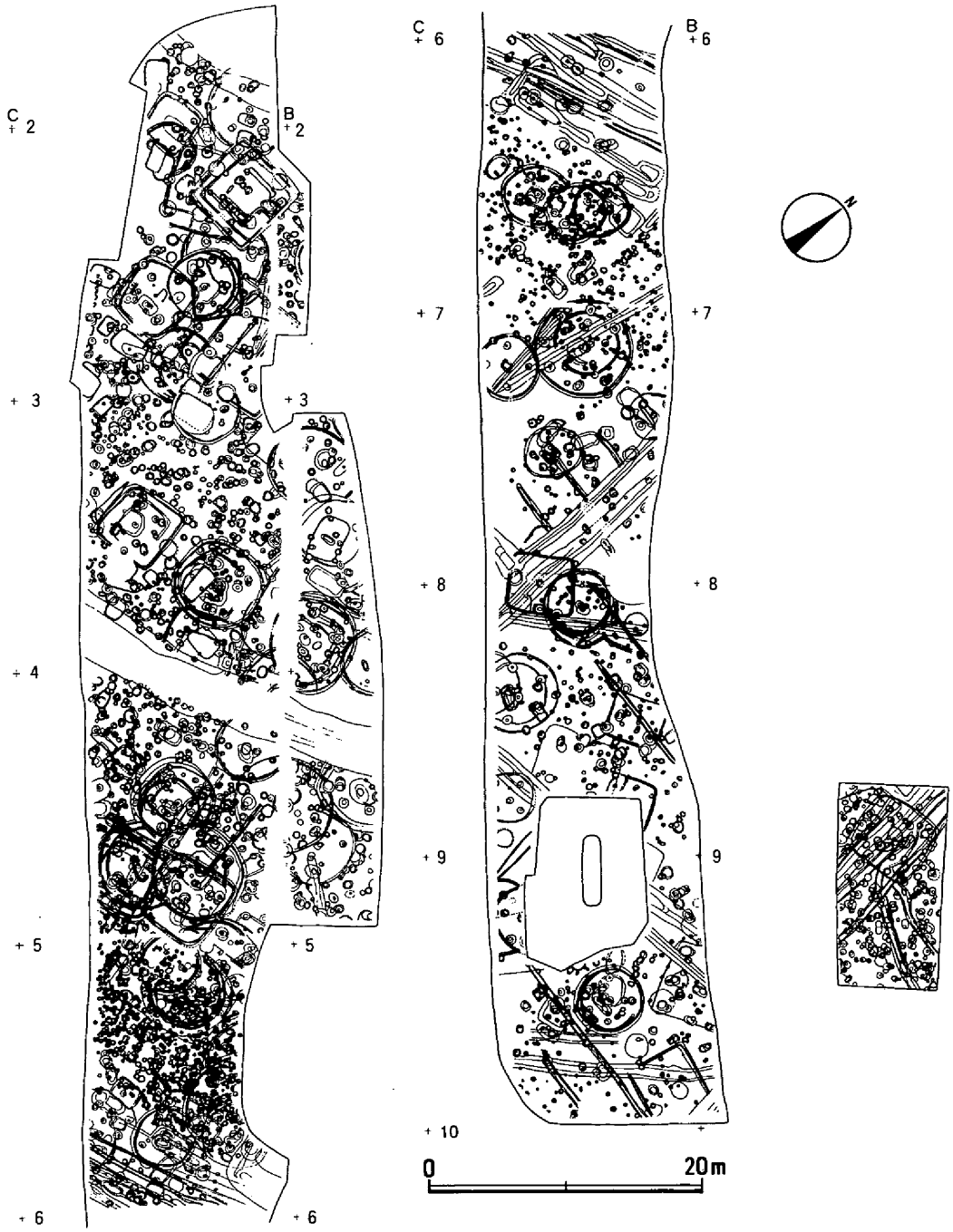
遺物は断面からは確認できなかったが下層遺構の状況から、当堤防は近世のある時期に底部幅約７～８ｍの築堤がなされ、その後両側が補強され、今回の改修前には図の右端に見える丸太から左端の第15層の間約14ｍを測るものに補強されていったものと考えられる。

以上、微高地および旧堤防の状況を説明したが、これを地形図の第１図に合わせれば、加茂Ｂ遺跡と矢部南向遺跡を隔てる北東～南西に流下する旧河道は、旧矢部橋西側で東に迂回し、現足守川に、あるいはそれを突き抜けて流走していたと理解され、ここから推定される微高地は東西約350m、南北約200m、面積約６万㎡を測る。そしてまた、今回の調査箇所は微高地の中央部にあたるとともに、現足守川は微高地の最高所を貫通していることが明らかになった。

なお、当遺跡からは弥生時代後期～古墳時代前半にかけての遺構遺物が大半を占めるものの、重要な問題として足守川の築堤がある。前述の如く、その時期については今回調査を実施した地点においては近世段階になされたものと考えられるが、当河川の岡山市岩崎～同市福富間は平安時代の妹尾兼康によって開設されたとする湛井12カ郷用水の一部をなしている。当河川は戦国の動乱に加え、江戸期の新田開発等の再開発に向けて幾度もの改修がなされたものと推考するが、今後検討を加えていく必要があろう。　（江見）

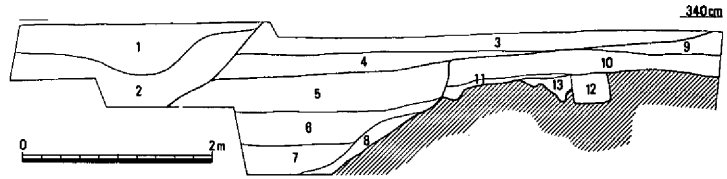


第２図　調査区設定および遺跡縦断図（1/1,500）

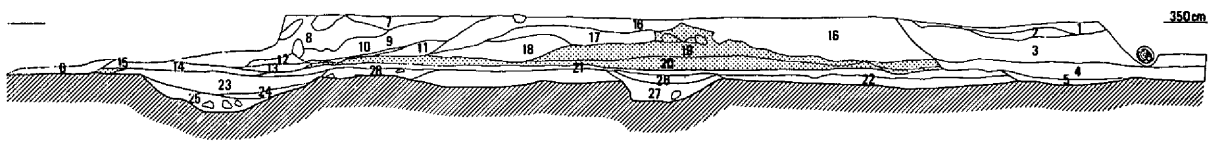


第３図　遺構全体図（1/500）

1．淡茶褐色粘質砂
2．青灰色粘質砂
3．淡茶灰色微砂
4．淡茶灰色微砂
5．淡茶褐色細砂
6．淡茶灰色細砂
7．淡青灰色細砂
8．暗灰褐色粘質砂（混、炭）
9．暗茶褐色粘質砂
10．暗茶灰色粘質砂
11．暗灰茶色粘質砂
12．暗灰茶色砂質土
13．暗茶色粘質土



第4図　微高地北斜面断面図（1/80）



1．暗灰色粘質土塊
2．淡茶灰色粘質砂
3．灰色粘質砂
4．灰青色粘質砂
5．暗青灰色粘質土
6．淡褐色砂
7．暗茶灰色粘質土塊
8．茶褐色微砂
9．暗茶灰色粘質土
10．淡灰色粘質土
11．灰色粘質土（混、褐色微砂）
12．淡茶灰色粘質土
13．暗灰色粘質土（混、褐色微砂）
14．灰色粘質土塊
15．褐色砂
16．暗茶灰色粘質土塊
17．茶褐色砂質土
18．灰色粘質土（混、褐色粗砂）
19．明灰色砂質土
20．灰色粘質砂・褐色砂の薄層
21．暗灰色粘質土
22．暗灰色粘質土（混、黄色粘質土）
23．暗灰色粘質土
24．暗灰色粘質土（混、粗砂）
25．灰色粘質土（混、礫）
26．暗青灰色粘質土
27．青灰色粘質土（混、礫）
28．灰色粘質土（混、礫）

第5図　6ライン横断面図（1/100）

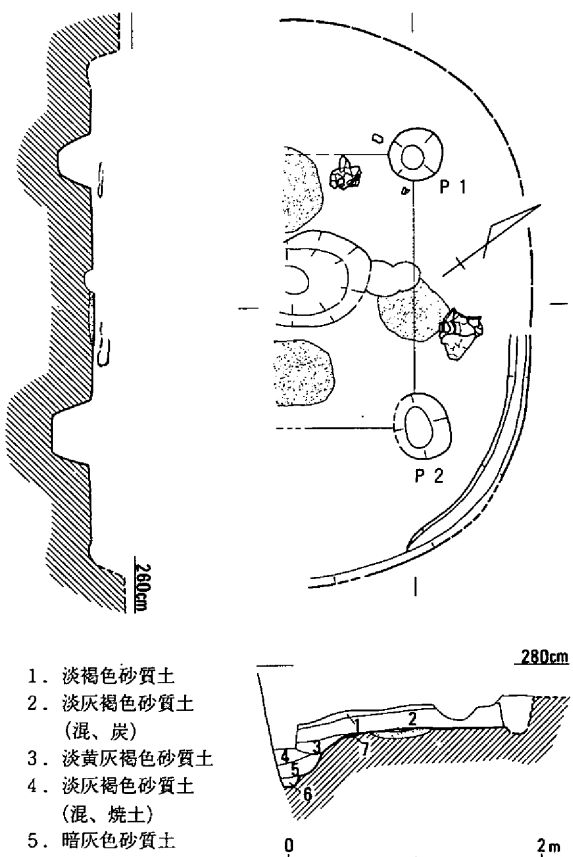
第２章　調査の概要

第１節　弥生時代中期の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

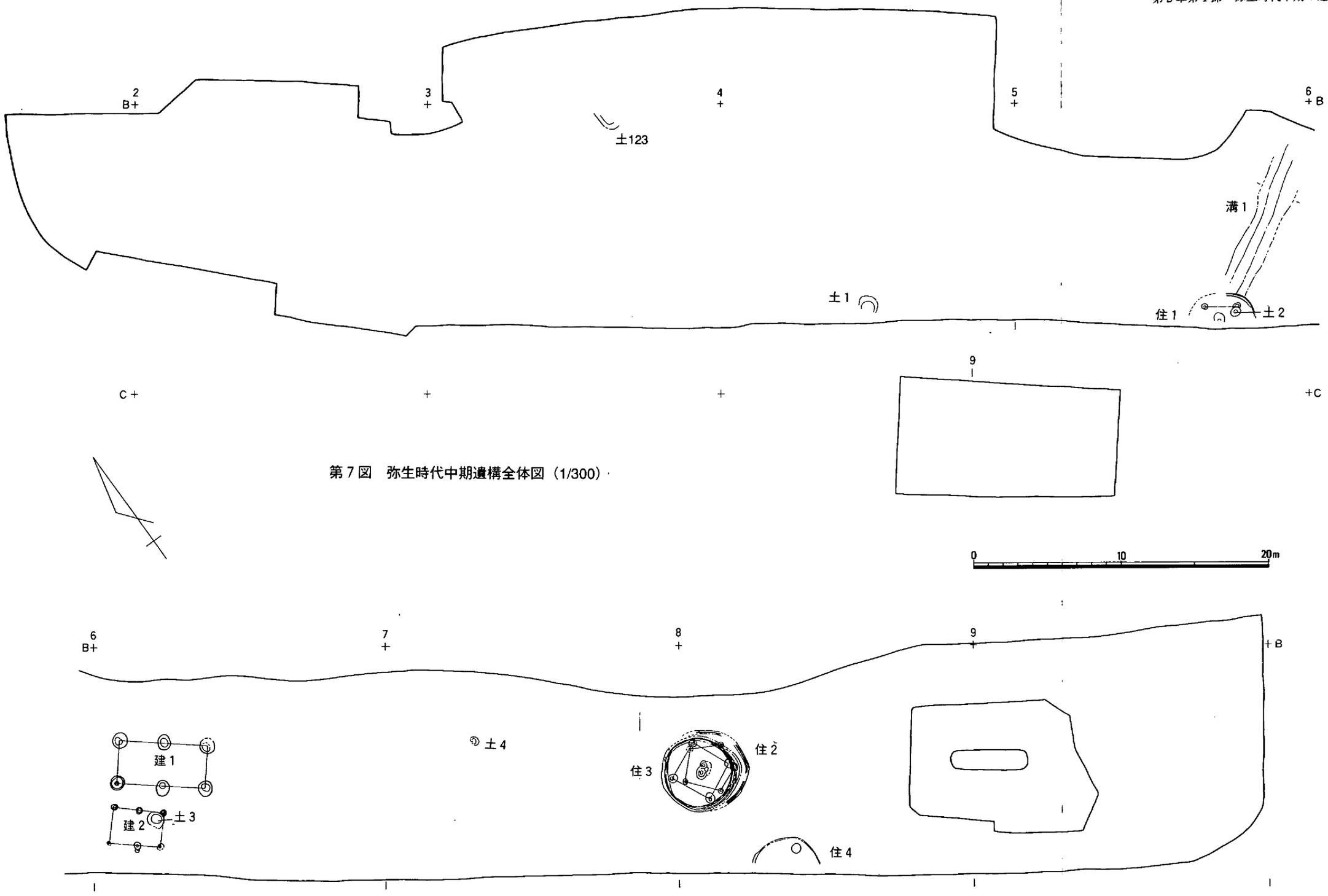
竪穴住居１（第６～８図、写真図版105）

５Ｂｄ区に位置し、上層には後述する弥生時代前半の竪穴住居20が所在し、また、弥生時代中期の溝１の埋没後、これを切って建てられている。住居は北東約半分を検出し、南東部は調査区外に延びていた。平面形態は北東部の掘り方及び主柱穴からほぼ円形を呈するものと考えられ、推定径約4.5ｍ、床面までの深さは約20cmを測る。覆土は２層に分けられたが、第１層は竪穴住居20の貼床部分にあたる可能性もある。主柱は住居の形態規模から４本と推定され、その内径約40cm、深さ約30cmの柱穴２本を検出した。中央穴は径約80cm、深さ約40cmを測り、埋土には炭および焼土粒が多く含まれるものであった。また、中央穴の周辺からは径50cm前後の焼土面が３か所確認されたが、覆土の状況からは火災にあったとは考えにくく、これら焼土面は住居使用時に生じたものと思われる。

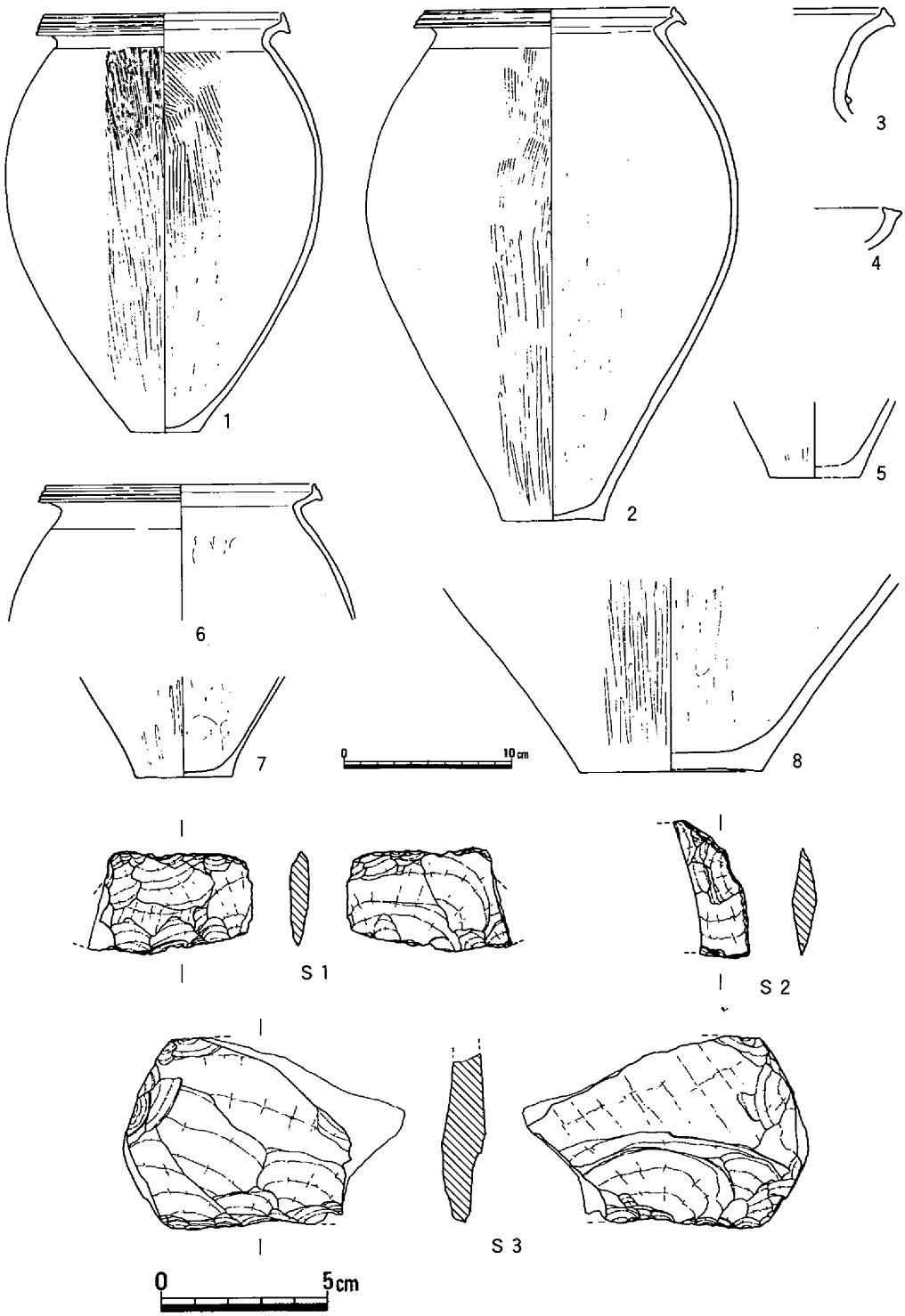


第６図　竪穴住居１（1/60）

遺物は床面から少し浮いて甕２点（１・２）が横転し、押し潰された状態で検出されたほか、３～５は覆土中から、６～８はＰ１から出土した。甕１・２・６はいずれも口縁端部に数条の凹線をもち、胴部外面は



第７図　弥生時代中期遺構全体図（1/300）



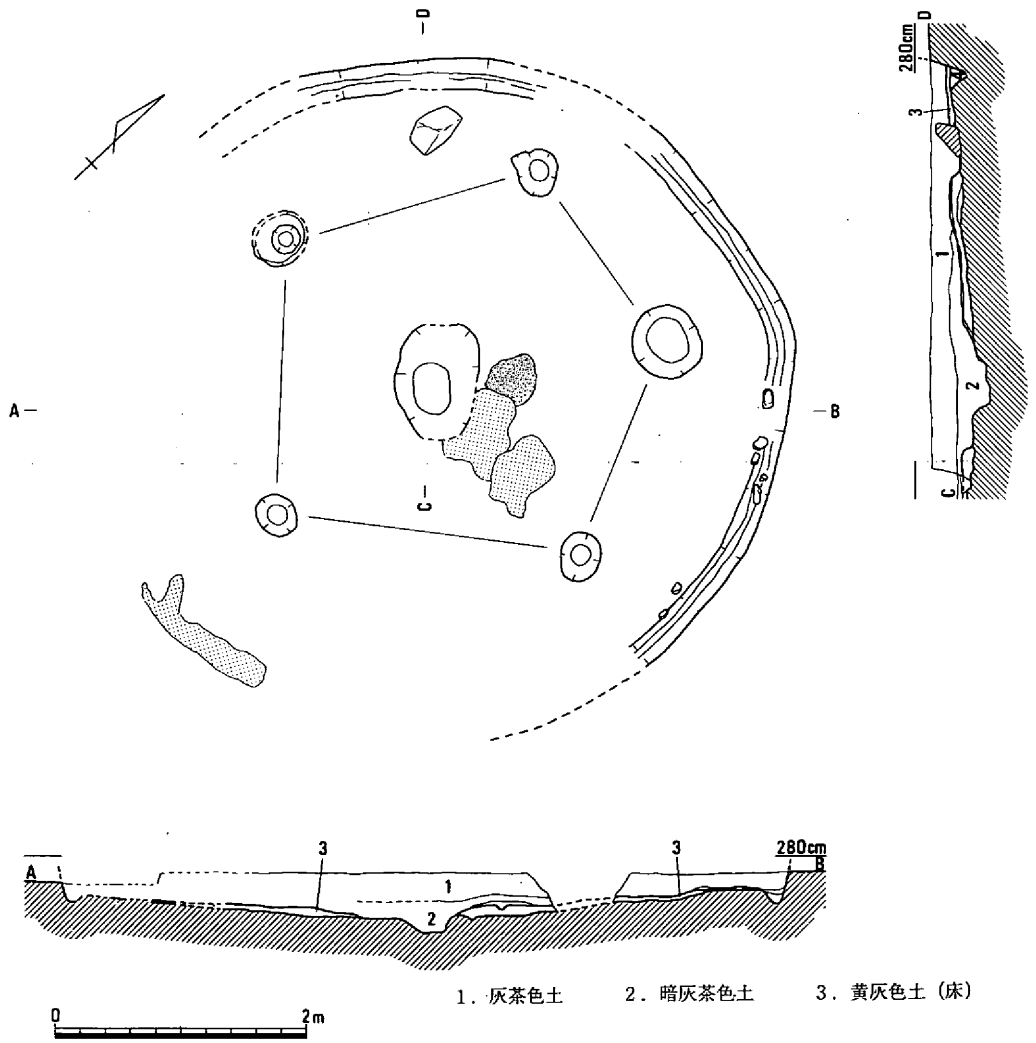
第８図　竪穴住居１出土遺物（1/4・1/2）

ハケメの後ヘラミガキ、内面は胴中位まで縦方向のヘラケズリを施している。特に2は口縁端部成形時の屈曲が著しく、内面に明瞭な稜線を残すものである。また、石包丁を転用したと思われるスクレイパーＳ１は覆土から、石包丁片Ｓ２はＰ２、石包丁？Ｓ３はＰ１から出土している。

以上、壺、高杯などやや古い様相を示すものの、住居埋没時に近いと考えられる甕の特徴から当住居は中期末、仁伍併行期に廃棄されたものと考えられる。（江見）

竪穴住居２（第７・９～12図）

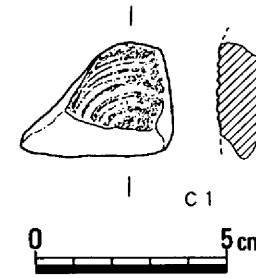
８Ｂ調査区において海抜2.70ｍで検出された。後述の竪穴住居３とほぼ同地点に重複して、竪穴住居３の埋没後、これを切る状態で構築されていた。

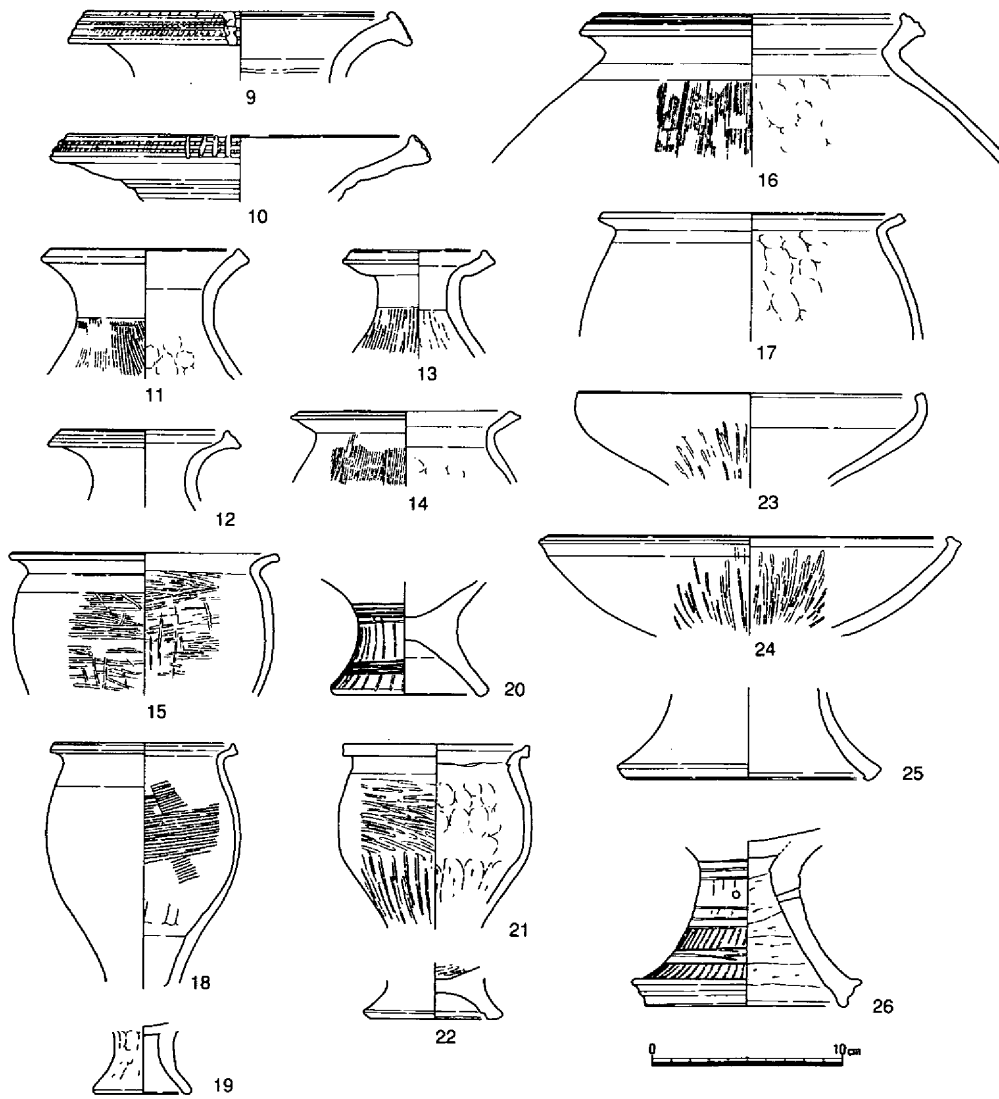


第９図　竪穴住居２（1/60）

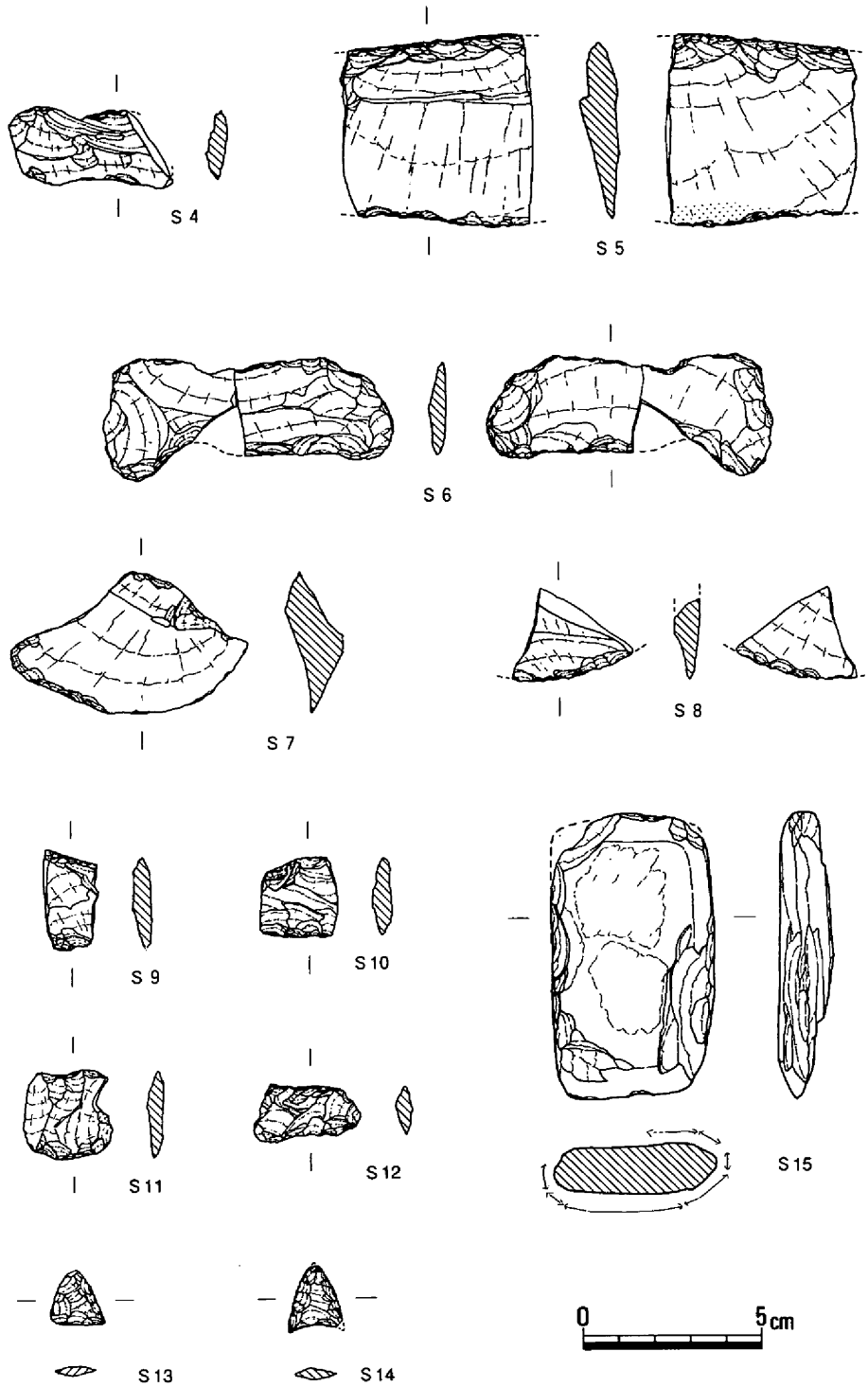
検出できたのは、床面から僅かに15cm程度とあって、南部分については検出できていないが、壁体溝部分への炭の遺存により、おおむね5.50m前後の規模にあることが判明した。

住居は、５本の主柱穴からなり中央部には長軸長90cm、幅65cm、深さ10cmの中央穴が、またこの中央穴に接して東側には40×40cmの規模に床面が被熱





第10図　竪穴住居２出土遺物①（1/2・1/4）



第11図　竪穴住居２出土遺物②（1/2）

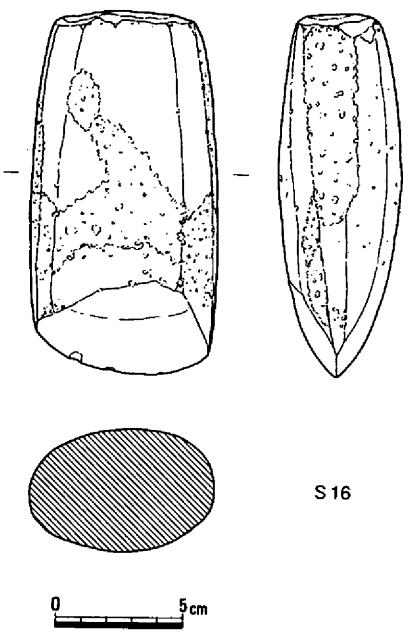
した箇所および炭・灰の広がりが認められた。また北西側の床面上には長さ43cmを計る石が作業台として置かれていた。

出土遺物には、１点の分銅形土製品をはじめ土器・石器等が見られた。

土器には、壺、甕、高杯が確認されたがいずれも小破片であった。

石器には、サヌカイト製の打製石器の他、緑色片岩製の片刃石斧Ｓ15、安山岩製の蛤刃石斧Ｓ16等が見られた。器種は、スクレイパーＳ４・８、楔形石器Ｓ９～12、石鏃、石斧などがあった。

時期は、上記した遺物の特徴等から弥生時代中期中葉～後半に比定されるものと考えられる。



第12図　竪穴住居２出土遺物③（1/2）

竪穴住居３（第７・13・14図）

８Ｂ区において竪穴住居２のほぼ下層で検出された。住居は、ほとんど床面を一にした状態での部分的な拡張がなされており、拡張前と拡張後の２軒に分類することが出来る。前者を竪穴住居３Ｂ、後者を竪穴住居３Ａとして以下に概要を説明しよう。

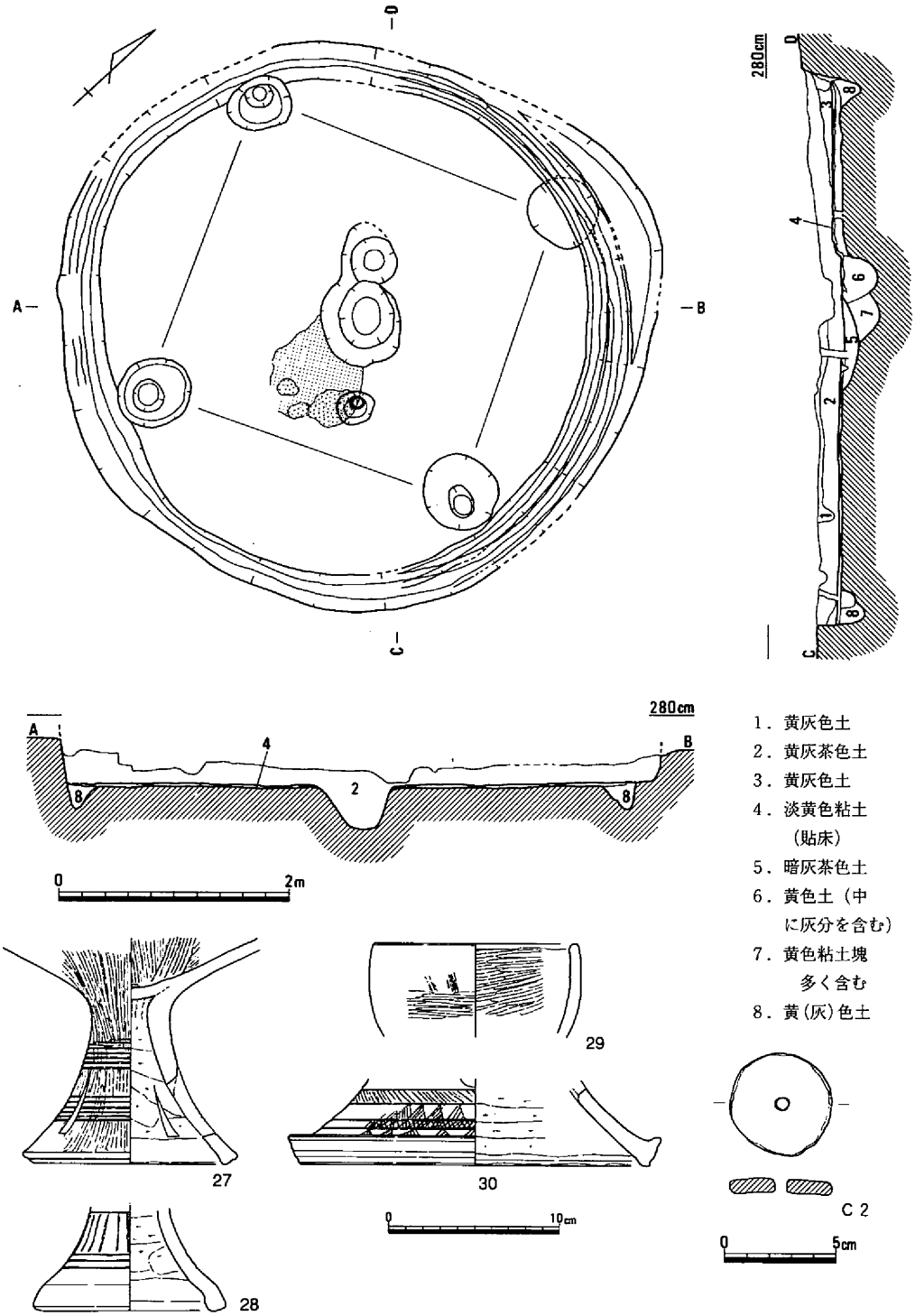
竪穴住居３Ｂは、竪穴住居３Ａの貼床面下で検出され、両者間には時間的な差はほとんどなかったものと考えられる。規模は、直径4.90mを測り円形を呈する。柱穴は、４本が検出され、おおむね東西・南北方向に近い棟方向をとるもので、それぞれに芯心距離が2.70～2.90mを測った。

竪穴住居３Ａは、竪穴住居３Ｂの一時居住中断後、それまでの住居の北東側の一部についてのみ約40cm程拡張したものであった。柱穴は４本のみの検出とあって、２者に共通しての在り方が推測される。また、中央部分にみられた合計３基の穴についても判然としないものの、おそらく柱と同じく共通しての使用が考えられる。

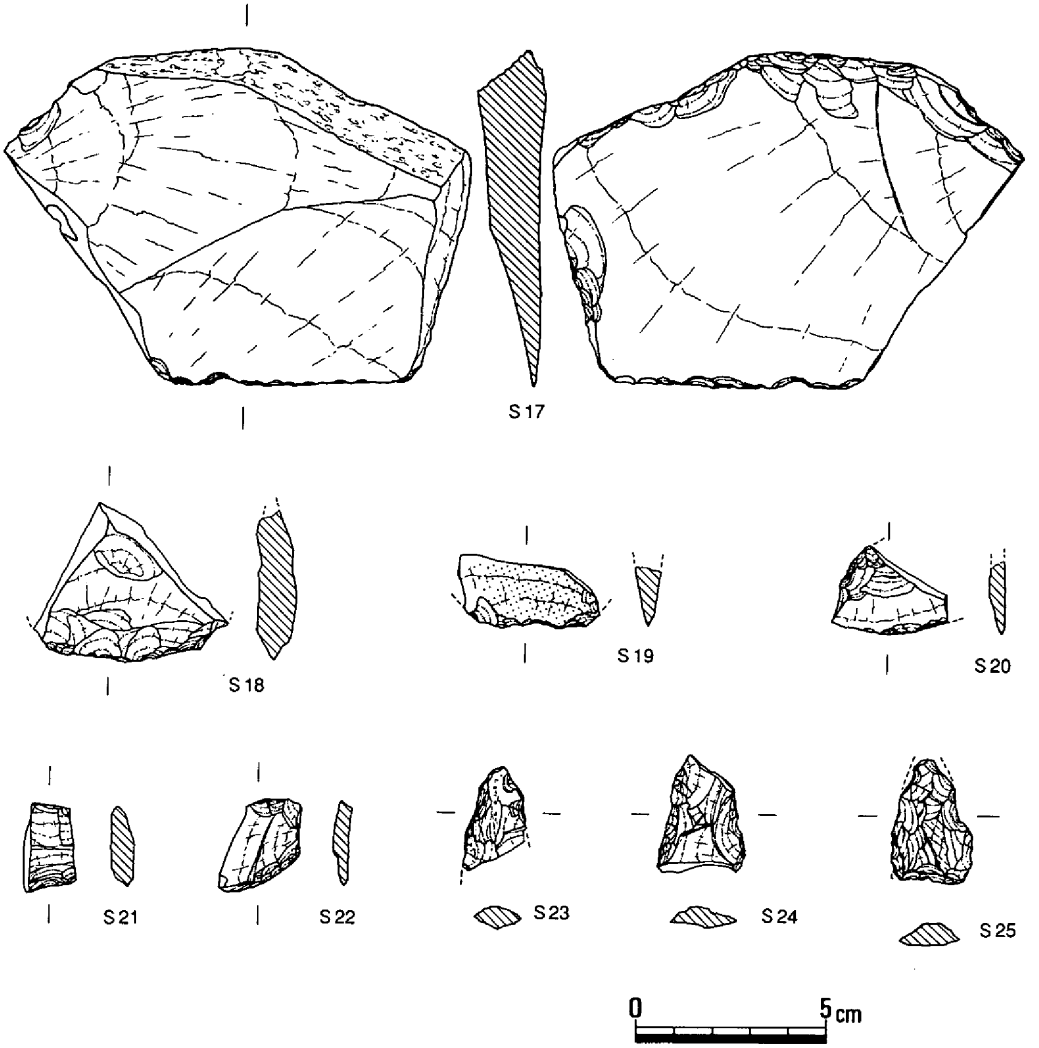
出土遺物としては、そのほとんどが竪穴住居３Ａとした床面、およびその覆土中からの出土品であった。しかし上記したように住居間に時間的な隔たりがほとんど感じられない状況からは、これを分離する必要もないし、またそれだけの数の遺物も出土していない。

出土遺物は、比較的多くの石器と少量の土器がみられた程度でけっして多いとはいえない。

土器は、高杯27・28、鉢29、器台30のみであった。高杯は、いずれも脚部の一部であった。



第13図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）



第14図　竪穴住居３出土遺物②（1/2）

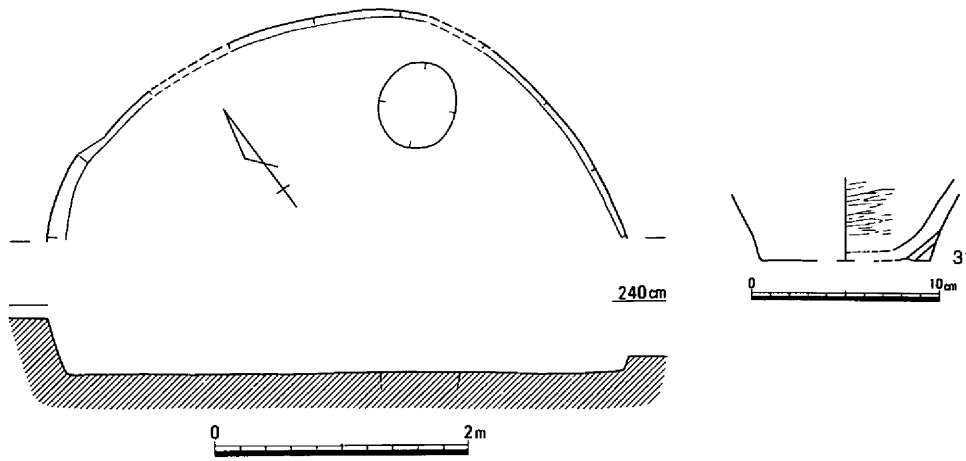
透かしは三角形で内面に貫通し、さらに外面には線刻による施文が見られた。これは器台においても同様な傾向が認められた。

石器は、スクレイパー、石包丁、石鏃、楔形石器等の製品の他、鏃の未製品を含む点に特徴づけられる。

時期は、土器により弥生時代中期中葉～後半に位置づけられよう。　（島崎）

竪穴住居４（第７・15図）

８Ｂｄ区、竪穴住居３の南約５ｍに位置し、南西半部は調査区外に延びる。また、住居は上部大半を弥生時代後期前半の竪穴住居26に削平を受けるとともに、地下水の高い位置にあたる



第15図　竪穴住居４（1/60）・出土遺物（1/4）

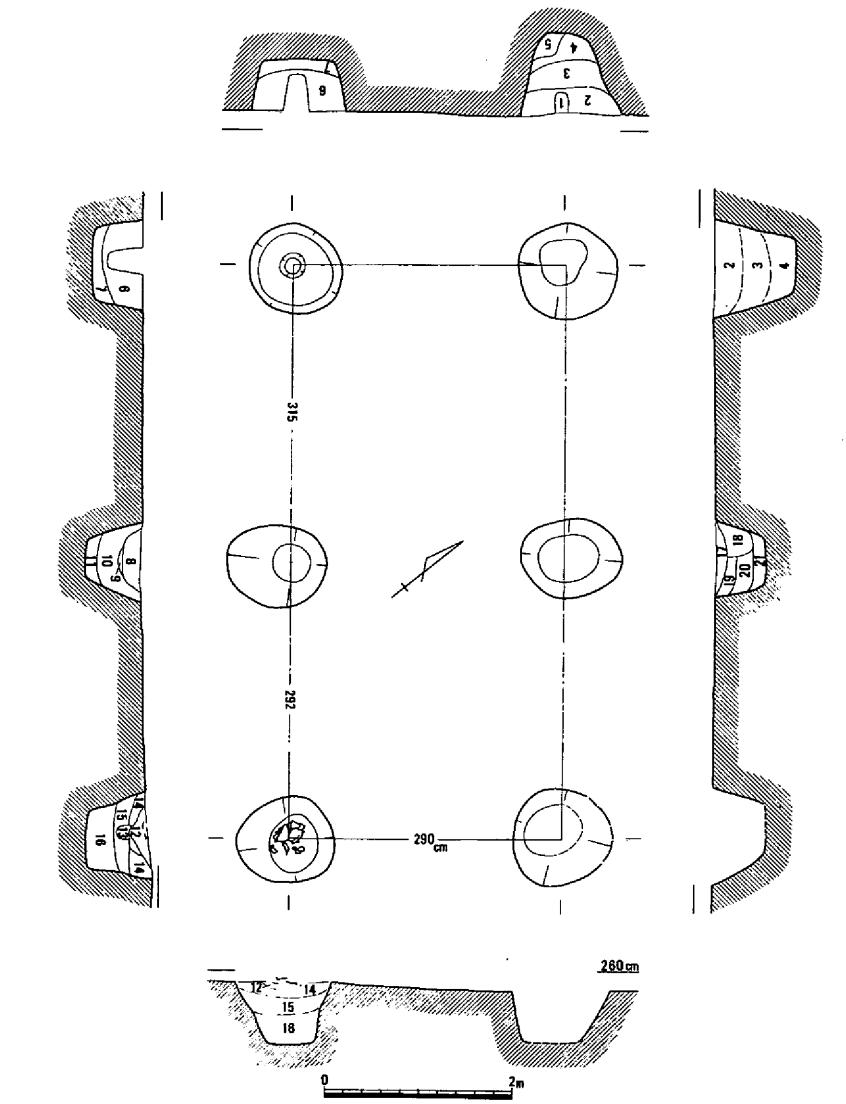
ため十分な調査は行い得なかった。平面形態は不整円形を呈し推定径約4.5ｍを測る。床面までの深さ約10㎝を残す。主柱穴は４本と推定されるが、北東部から径約60㎝を測る柱穴１個を検出したのみである。また、柱穴の深さは湧水のため明らかでない。遺物は覆土中から僅かに土器片が出土したのみで、図示し得た鉢？31も小破片である。31は橙色を呈し、外面は磨滅し判然としないが内面はヘラミガキが施され、底部には径３㎜程の円孔が穿たれており、中期にみられる深鉢形土器に類似することから、当住居は弥生時代中期の範疇に収まるものと考える。（江見）

(2)　掘立柱建物

掘立柱建物１（第７・16・17図、写真図版106）

６Ｂ区に位置し、上部は中世溝群により削平を受け、北東隅の柱穴は一部弥生時代後期土壙に切られている。主軸は北西から南東に向く２×１間の東西棟建物である。桁行約６ｍ、梁間南北約2.9ｍを測り、桁行の柱穴間の距離は北辺が約３ｍとほぼ桁行の半分であるのに対し、南辺は3.15ｍと2.92ｍと僅かに東側が狭い。床面積は17.6㎡を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、径約１ｍ、深さ50～80㎝を測る。柱は断面の在り方や調査中の所見から径20㎝前後の柱が建てられていたものと考えられる。

遺物は南東隅柱穴の柱抜き取り後堆積したと考えられる土器が出土したが、他の柱穴からはほとんど認められなかった。32はジョッキ形の深鉢で、胴下部には櫛状工具による、端部にはヘラ状工具による施文がなされている。甕35のように口縁に刻みを施す古い様相を示すものもあるが、高杯33は口縁部立ち上がりに稜線が入る浅い杯部をもつもので、弥生時代中期末には廃絶された建物と考えられる。

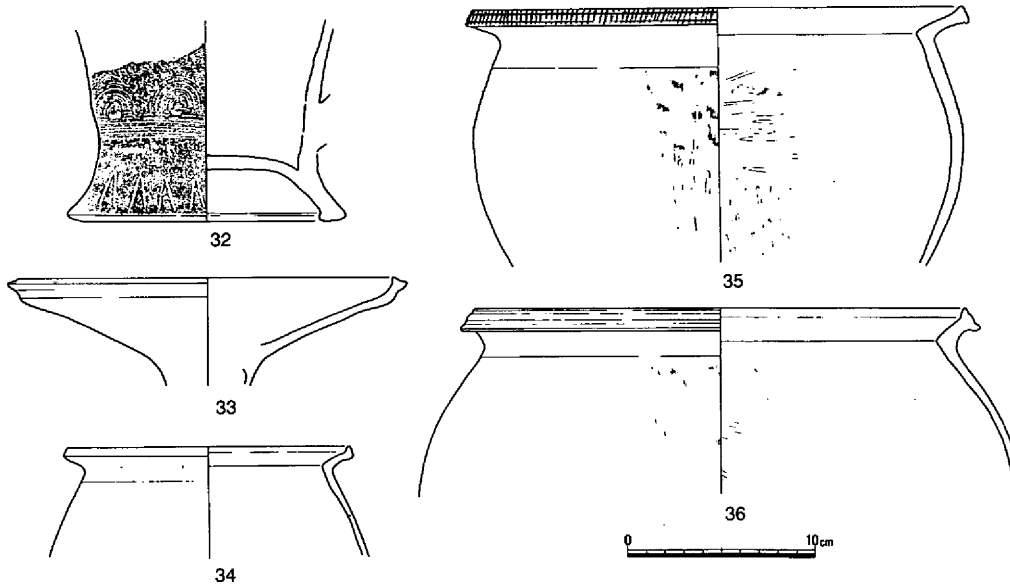


1．茶灰色粘質土
2．淡茶灰褐色微砂（混、灰色粘質土）
3．淡茶灰褐色微砂
4．明灰色粘質土
5．明灰色微砂
6．淡灰褐色微砂
7．淡黄灰色粘質砂
8．淡褐色粘質微砂
9．淡褐色粘質微量砂（混、焼土・炭）
10．淡灰褐色微砂
11．淡灰色粘質砂
12．暗茶灰色粘質土（混、焼土・炭）
13．茶灰色粘質土
14．茶灰色粘質土
15．淡茶灰色粘質土
16．淡茶灰褐色微砂
17．淡褐灰色微砂
18．淡茶灰色粘質土
19．淡褐色微砂
20．淡茶灰褐色微砂
21．明灰色粘質微砂

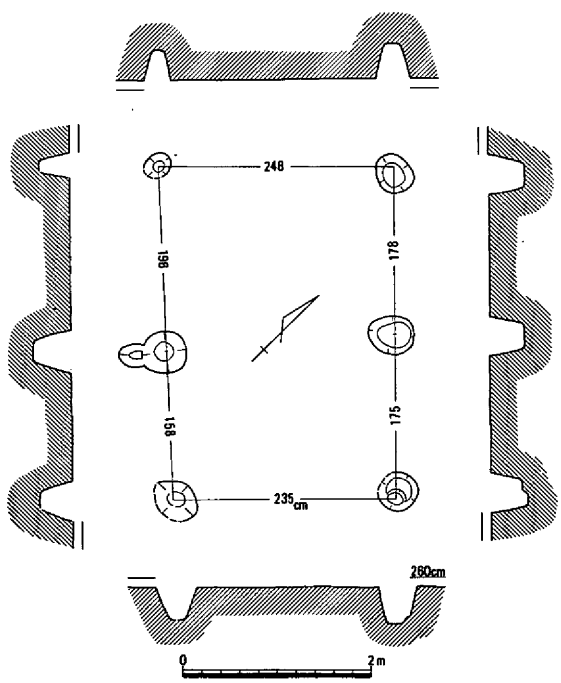
第16図　掘立柱建物１（1/80）

掘立柱建物２（第７・18図、写真図版106）

掘立柱建物１の南にほぼ並行して検出された、２×１間の東西棟の建物である。桁行約3.5



第17図　掘立柱建物１出土遺物（1/4）



第18図　掘立柱建物２（1/80）

mを測るが、梁間は西辺が約2.5m、東辺2.35mとやや西辺が長い。また、桁行の柱穴間の距離は北辺が約1.75m前後のほぼ桁行の半分の位置に柱穴が掘られているのに対し、南辺は西側1.96m、東側1.58mと掘立柱建物１と同様、東側が僅かに狭い。床面積は8.57m²を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、径・深さとも40cm前後を測る。

遺物は皆無であったが、北東隅の柱穴が後述の土壙３に切られていることや、上述の掘立柱建物１の主軸に対し、棟建物のそれは僅かに南に振るものの、西辺はほぼ直線上に並ぶことなどから掘立柱建物１と同様、弥生中期末の範疇のものと考えられる。

なお、上記１・２の建物間は1.5m程しかなく、同時に建っていたかは問題が残る。　（江見）

(3)　土壙

土壙１（第７・19図）

４Ｂｃ区において東側が側溝および調査区外にかかった状態で検出された土壙である。

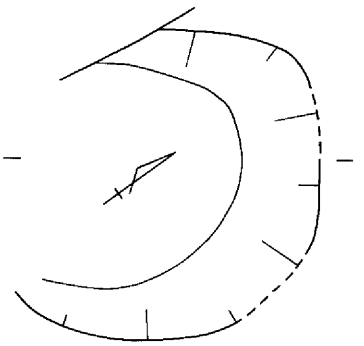
全体については判然としないが、計測可能な東西方向で幅1.22ｍを測ることでこれを前後する規模にあったことが推測できる。断面形は、肩口から比較的平坦な底まで緩やかな斜面を見せるもので、壙内への土砂の埋積状況も比較的水平に堆積したことを窺わせる。

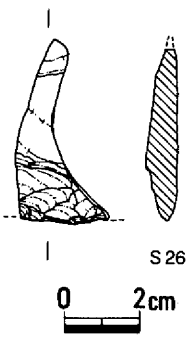
出土遺物は、甕、鉢等の土器の他、石包丁片を含む石器片が３点検出された程度である。

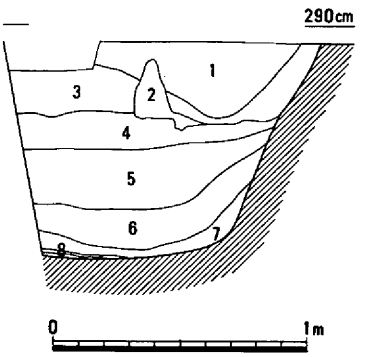
時期は、中期中葉に比定されよう。　（島崎）

土壙２（第７・20図）

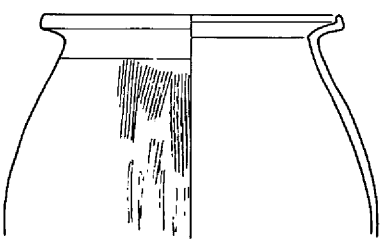
５Ｂｄ区に位置し、竪穴住居１を一部切っている。径71×58cm、深さ24cmを測る不整円形の土壙である。埋土に焼土・炭を多含し、土壙内から甕40～42、高杯43、スクレイパーＳ27、石包丁Ｓ28、楔形石器Ｓ29などが出土した。甕41の僅かに上方に摘み上げられた口縁端面には凹線が施され、胴内面は刷毛調整されている。高杯43の裾部には２条の沈線及び、刺突が巡らされており、これら土

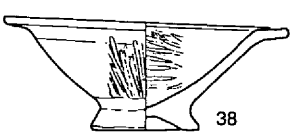


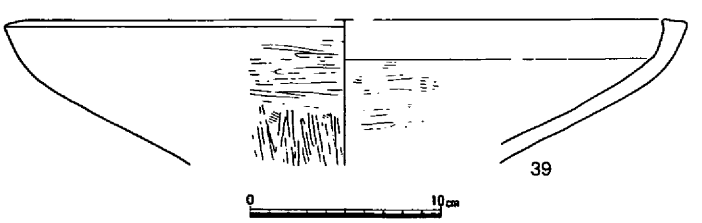




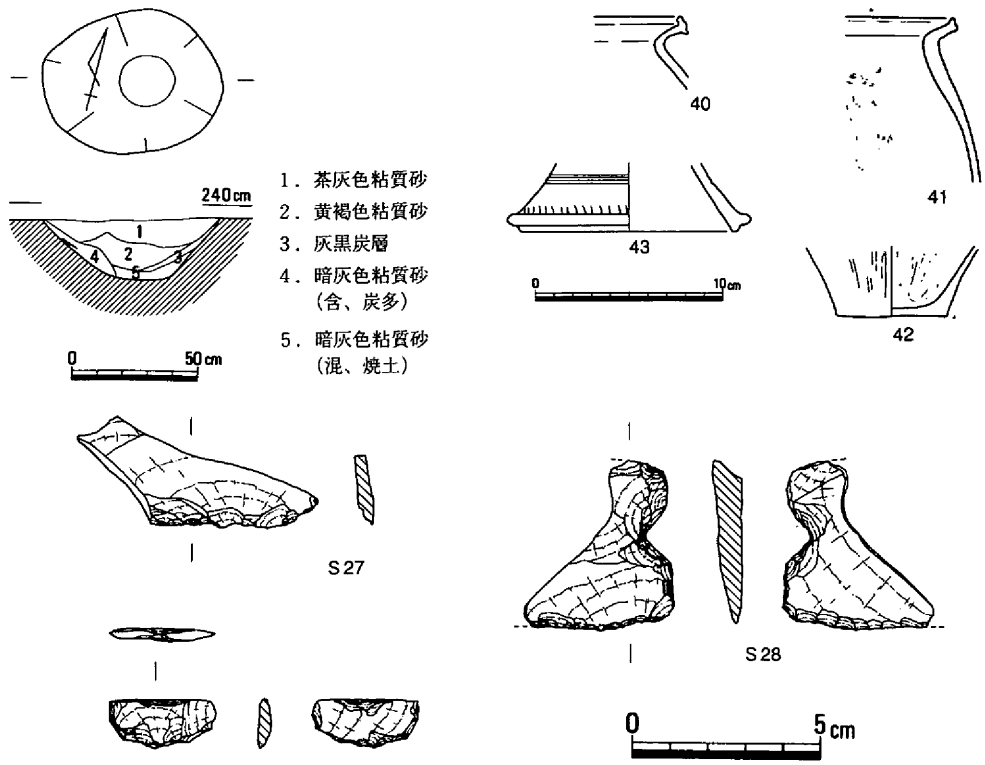
1．灰黄色土
2．灰色土
3．灰黄色土
4．黒灰色土
（炭層）
5．黄灰色土
6．灰茶色砂
（２～３㎜大）
7．黄灰色土
8．炭層







第19図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）

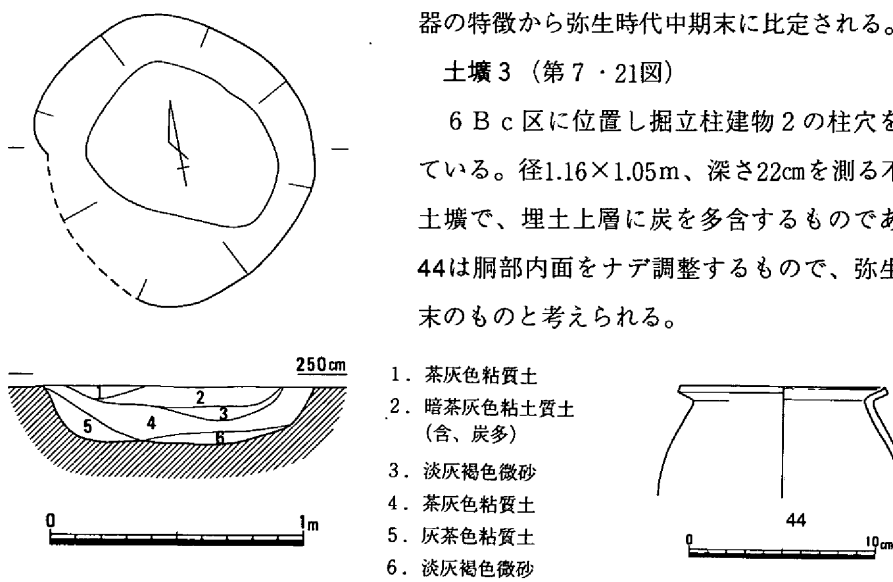


第20図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

器の特徴から弥生時代中期末に比定される。

土壙３（第７・21図）

６Ｂｃ区に位置し掘立柱建物２の柱穴を一部切っている。径1.16×1.05m、深さ22cmを測る不整円形の土壙で、埋土上層に炭を多含するものであった。甕44は胴部内面をナデ調整するもので、弥生時代中期末のものと考えられる。（江見）



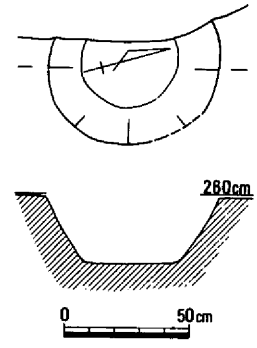
第21図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4）

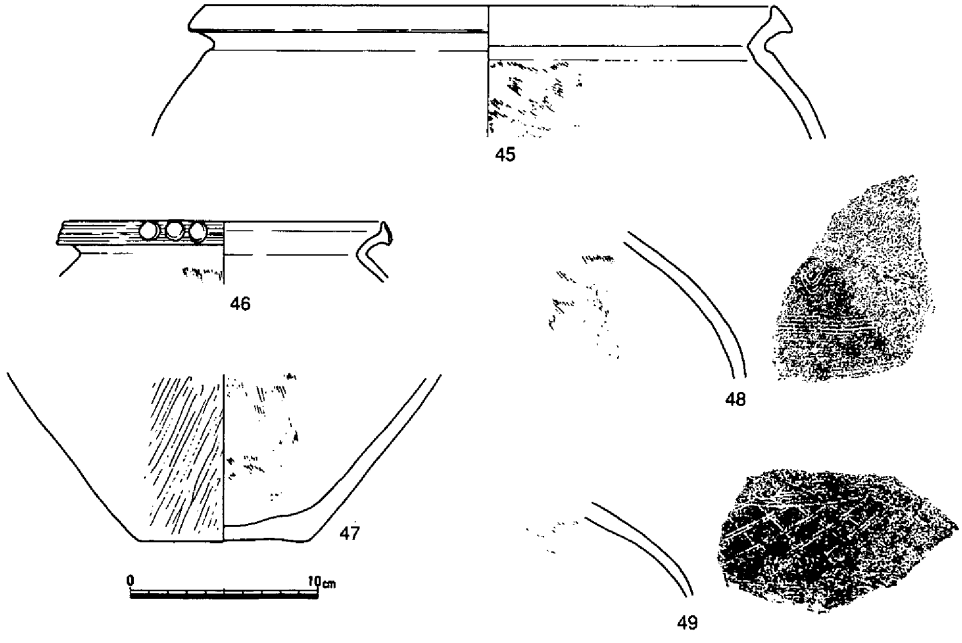
土壙４（第７・22図）

７Ｂａ区において弥生時代後期前半の竪穴住居22に東側の一部が切られた状況で検出された。

一部欠損しているとはいえ、平面円形を呈し、径68cm、深さ26cmを測る比較的小規模な土壙であった。

出土遺物は、壺、甕を中心とする土器片が検出された。時期は、弥生時代中期中葉頃に位置づけられよう。　（島崎）





第22図　土壙４（1/30）・出土遺物（1/4）

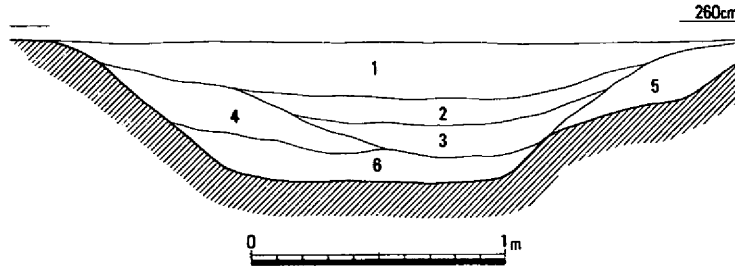
(4) 溝

溝１（第７・23図）

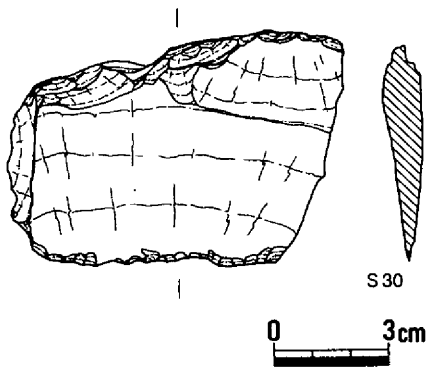
５Ｂｄ区南東側から５Ｂｄ区東側方向にかけて流走をみせる溝である。溝は、砂質土を基盤とする微高地上において海抜2.55mで検出された。溝埋積土は基盤層よりも粘質度が強く、この違いによって溝が基盤層より分離された。溝の規模は、最大幅2.70m、検出面からの深さ55cmを測り、断面逆台形を呈するものであった。性格は、他に関連する遺構が無く不明である。

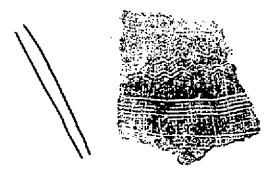
出土遺物としては、小片ながら土器と石器が確認された程度である。土器は、小片で器種が判然としないが甕が中心で50・51には多条化した櫛描波状文等の装飾が施されていた。

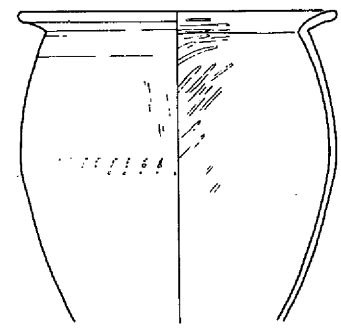
時期は、おおむね中期前葉もしくは中期中葉段階に位置づけられるものと考えられる。（島崎）

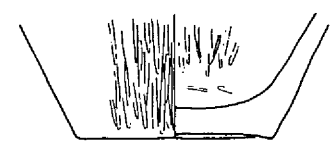


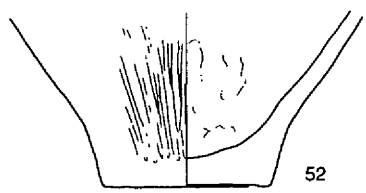
1．黄灰色粘質砂
2．灰黄色粘質砂
3．黄灰色土
4．黄色粘質土
5．黄灰色粘質土
6．淡黄色粘質砂



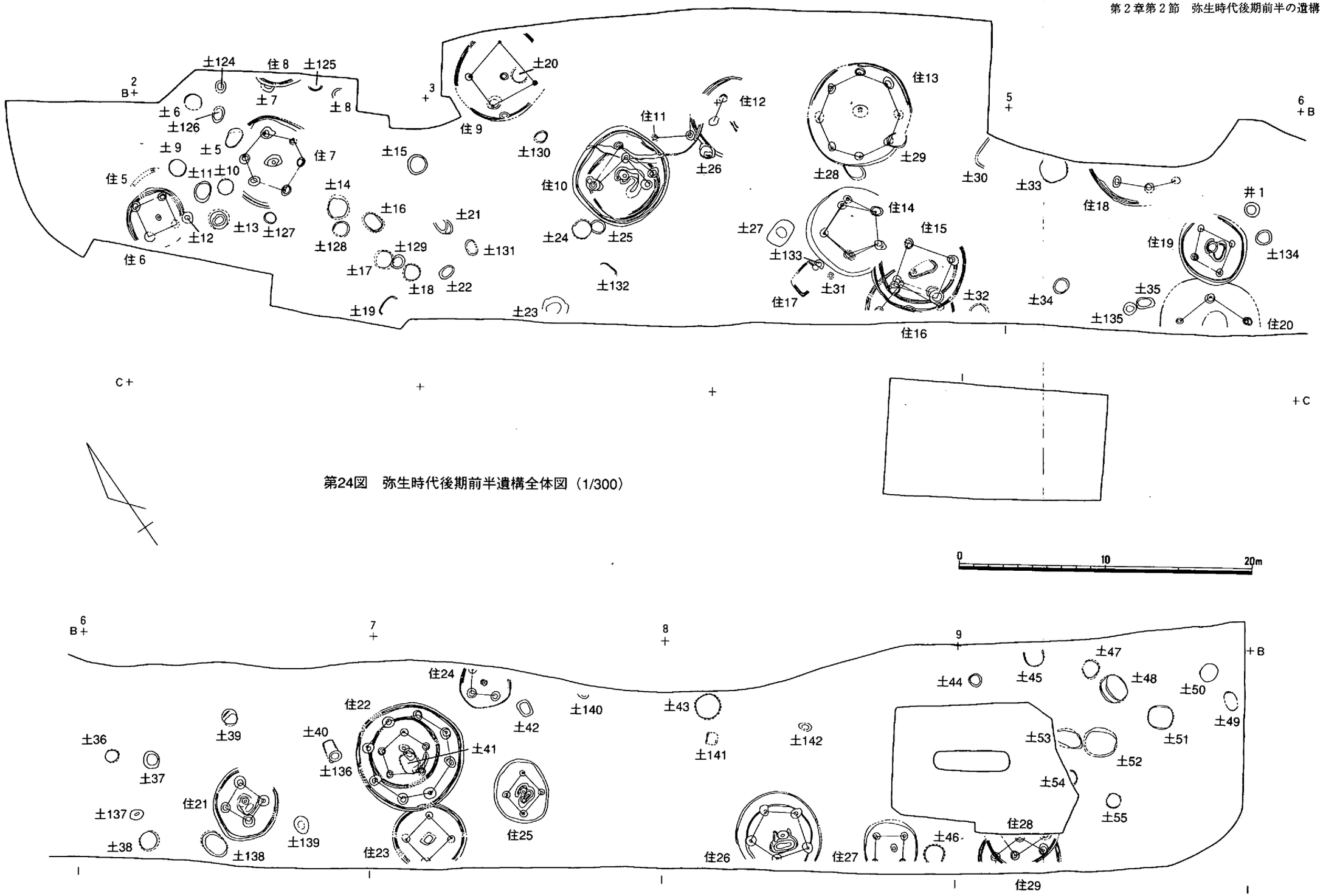








第23図　溝1（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）



第24図　弥生時代後期前半遺構全体図（1/300）

第２節　弥生時代後期前半の遺構・遺物

(1)　竪穴住居

竪穴住居５（第24・25図）

２Ｂ区において古墳時代前半の竪穴住居52・53および弥生時代後期後半の土壙59によってほとんどその大半が失われた住居で、検出できたのはわずかに壁体溝と一部床面にすぎない。したがって、住居の詳細については言及できない。

出土遺物としては、かろうじて時期判断の可能な土器の細片と分銅形土製品１点が検出されたにすぎない。これによって、住居には弥生時代後期前半への位置づけがなされよう。

竪穴住居６（第24・26図、写真図版107）

２Ｂ区において古墳時代前半の竪穴住居52・53および弥生時代後期後半の土壙60・145等との切り合い関係をもって検出された住居である。

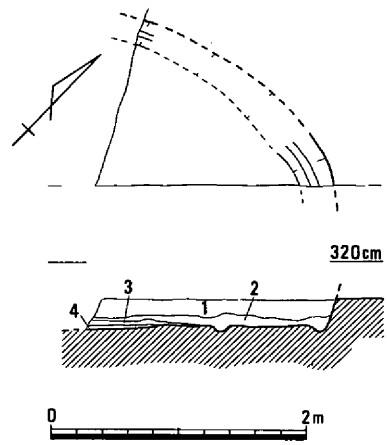
住居は、直径4.00ｍの円形を呈するプランで床面からは柱穴と中央穴の存在が確認された。

柱穴は、地下からの湧水・砂の吹き出し等により判然としなかったが、４本と推測された。ただし、柱穴の深度に格差が見られる等、明確ではない。

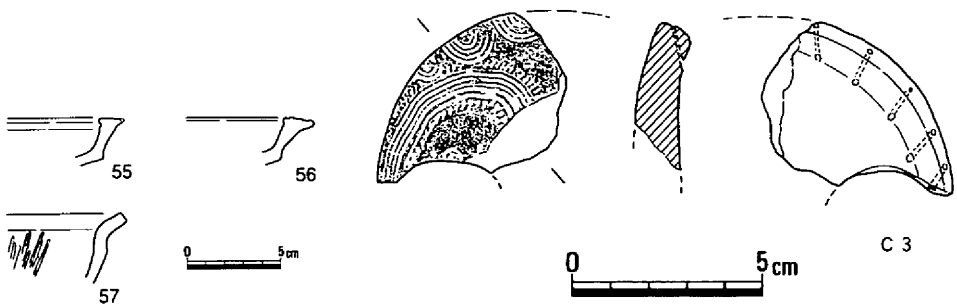
出土遺物としては、少量の土器片と石器が２点検出された程度である。

時期的には、土器が上東・鬼川市Ⅰ併行期の特徴を示すことで弥生時代後期前半に位置づけられよう。

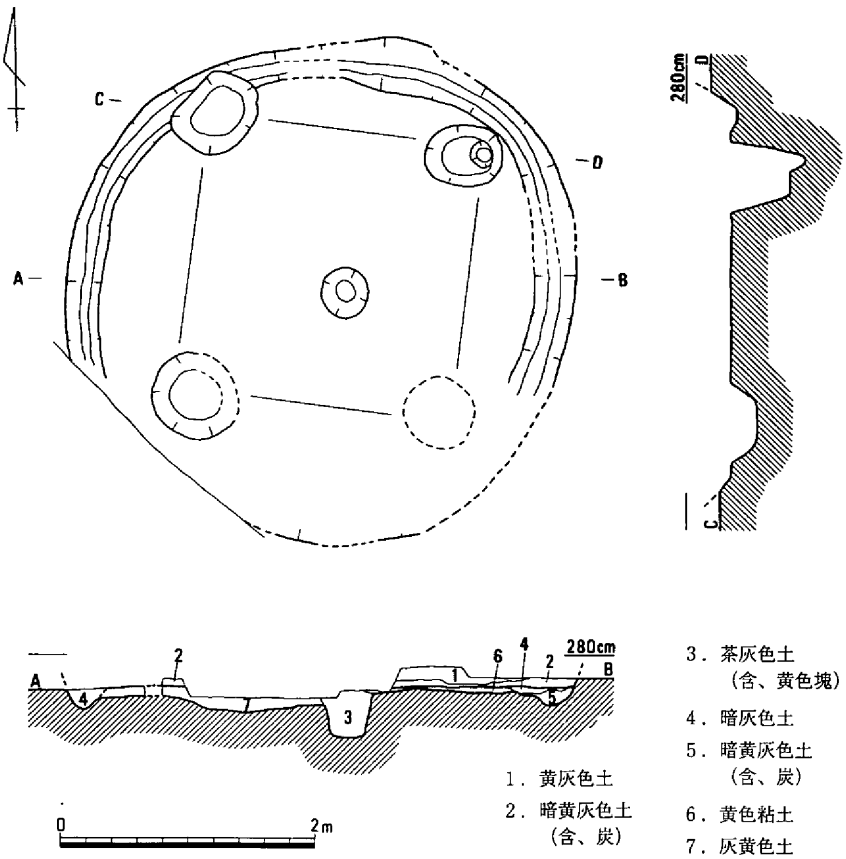
（島崎）



1．黄茶灰色土　　3．灰色土
2．茶黄灰色土　　4．淡黄白色粘土



第25図　竪穴住居５（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）



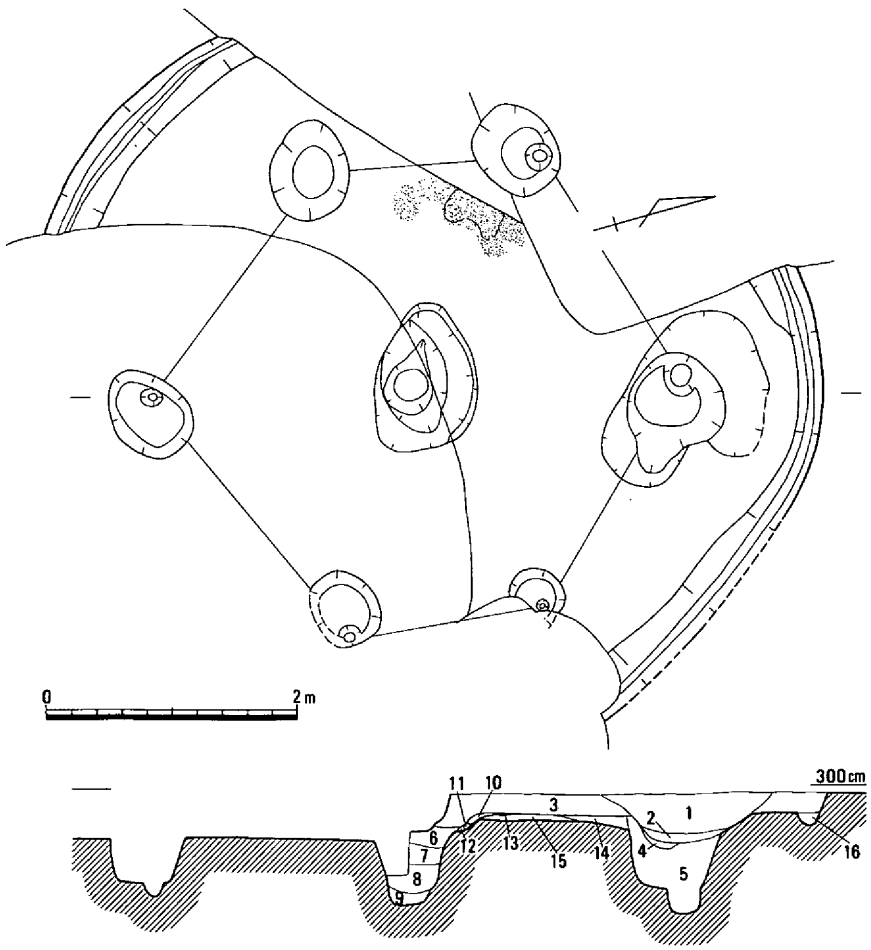
第26図　竪穴住居６（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居７（第24・27・28図、写真図版107）

２Ｂ区中央に位置し、北西部を竪穴住居51・52に、南東部を竪穴住居37・土壙62等に切られて検出された。主柱は６本で、平面形態は残存する柱穴の位置からほぼ円形を呈すものと考えられる。規模は径6.2m、深さ20cm、床面の海抜高は2.75mを測り、床面積は27.3m²と推定される。柱穴は径40～80cm、深さ約50cm

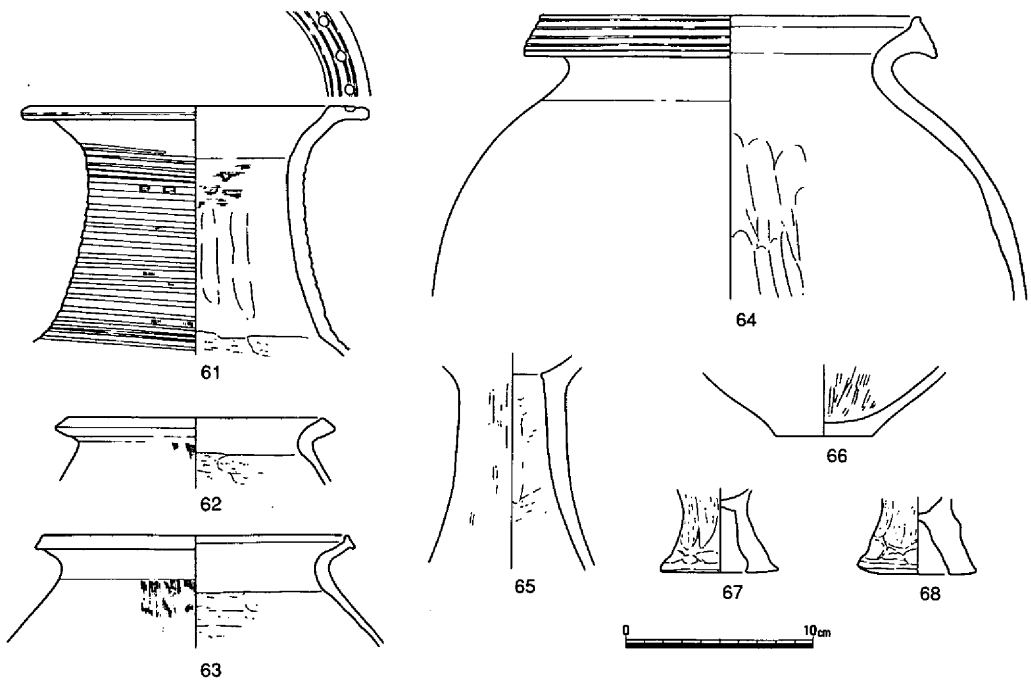
を測り、柱穴間の距離は南北の辺が1.5m前後、他は2.2m前後を測り、主軸はほぼ南北方向を示す。床面中央には径120×80cm、深さ約60cmの中央穴が穿たれ、その肩口には炭が貼り付き、穴内においても、埋土中には炭が含まれるものであった。また、住居北西部からは長さ約１m、残存幅約30cmの範囲に焼土面が認められ、その中央は赤黄褐色を呈し、特によく焼けていた。

遺物は床面から甕64が、他はいずれも覆土から出土した。長頸壺61は口縁端部が水平に引き出され、上端面には４条の凹線の後、刺突を巡らしており、頸部には螺旋状に沈線を施してい



1．茶褐色砂質土（混、炭）
2．黄色粘質土
3．暗茶灰色粘質砂
4．炭・焼土
5．暗茶灰色粘質土
6．暗茶灰色粘質土
7．灰黒色砂質土
8．茶灰色砂質土
9．暗灰色砂質土
10．暗茶褐色粘質砂
11．暗茶褐色粘質土
12．淡黄白色粘質砂
13．炭層
14．暗茶褐色粘質土
15．淡黄白色粘質砂（炭の薄層）
16．暗茶灰色粘質砂（混、黄色粘土小塊）

第27図　竪穴住居７（1/60）

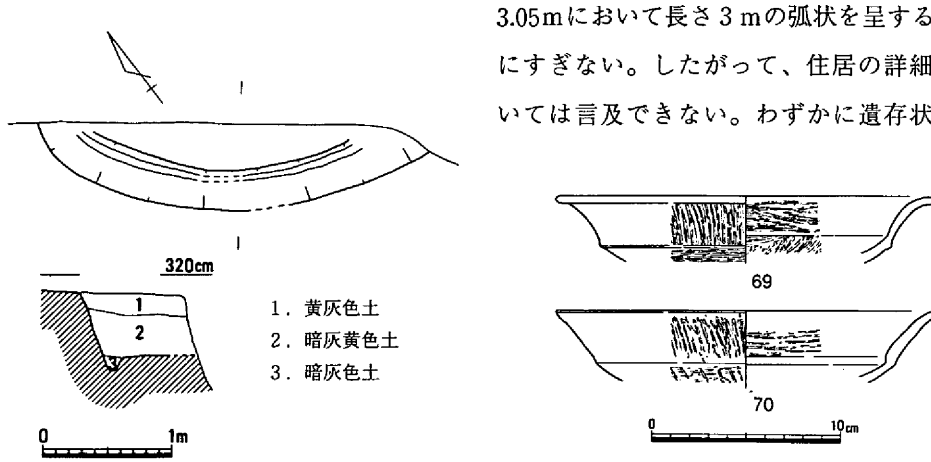


第28図　竪穴住居７出土遺物（1/4）

る。甕64は口縁部に５条の凹線が巡り、胴部内面はナデ痕跡が認められた。高杯65は長脚で円盤充填の作りとなるもので、製塩土器67・68は脚端径約６cmを測る底面がしっかりと密着するもので、これら土器の特徴は上東・鬼川市Ⅰ併行期のものと考えられる。　（江見）

竪穴住居８（第24・29図）

２Ａ区において検出された大半が調査区外にかかった住居である。検出できたのは、海抜3.05mにおいて長さ３mの弧状を呈する肩口にすぎない。したがって、住居の詳細については言及できない。わずかに遺存状況か

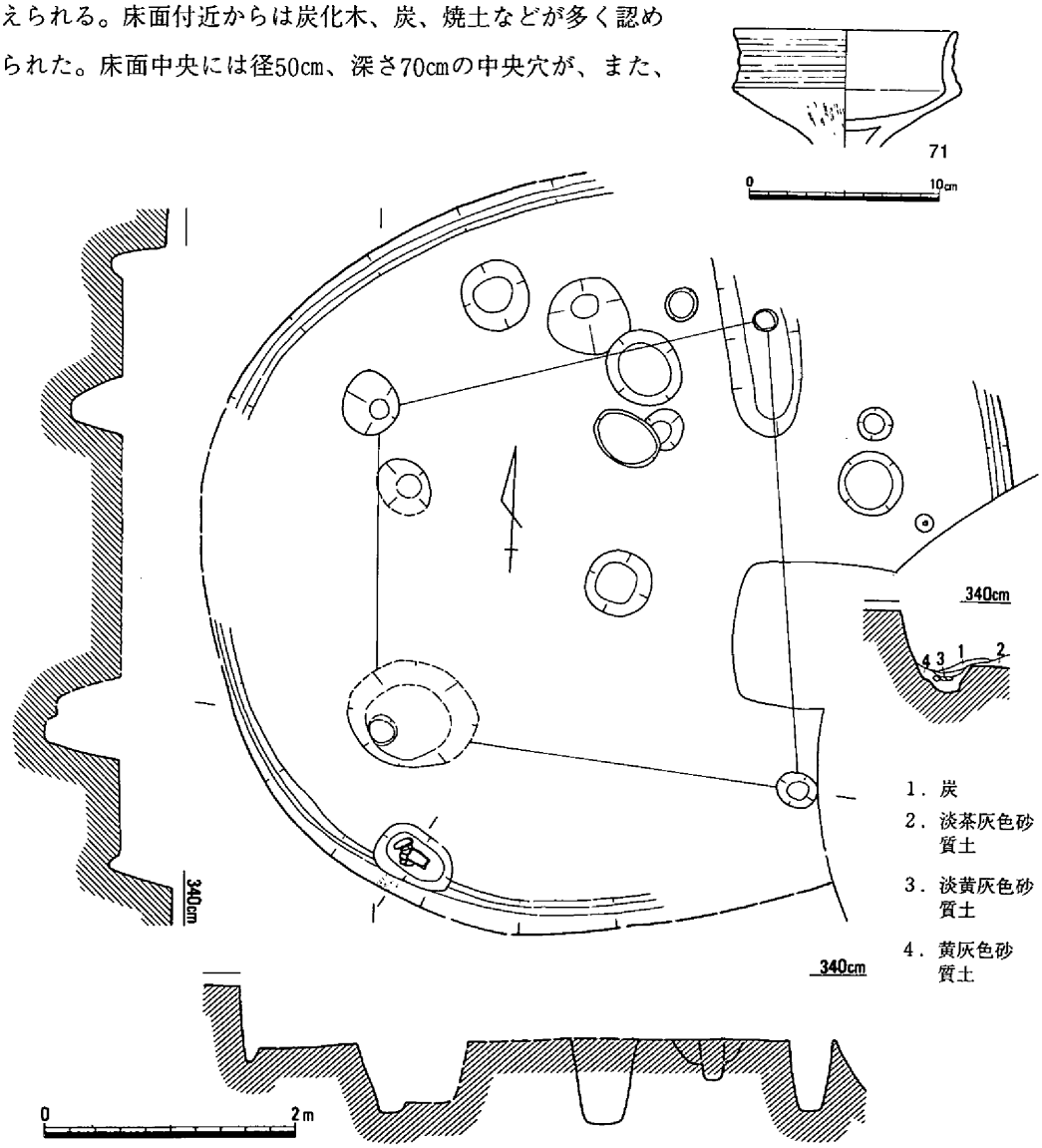


第29図　竪穴住居８（1/60）・出土遺物（1/4）

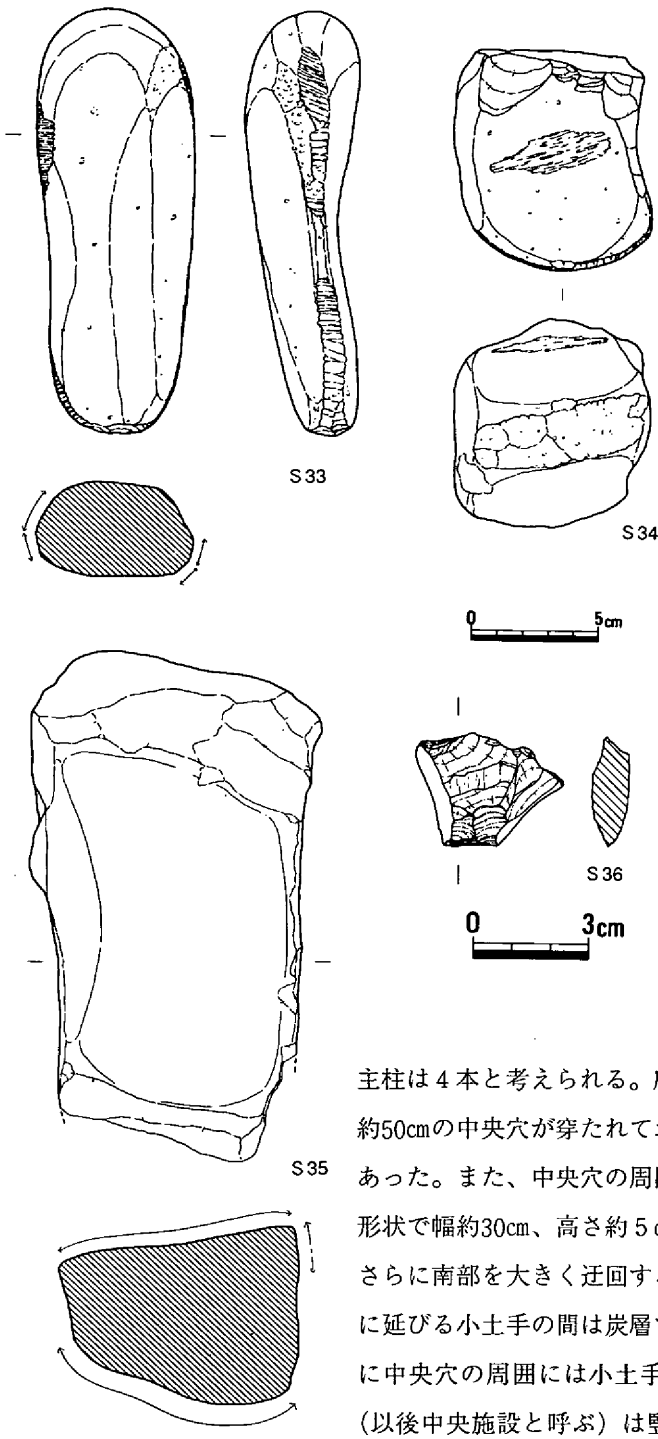
ら、平面が円形であることが推測されるにすぎない。出土遺物は、覆土中から高杯２点が細片ながら検出されたにすぎない。時期は、弥生時代後期前半に位置づけがなされよう。（島崎）

竪穴住居９（第24・30・31図、写真図版108）

３Ａ区南西隅に位置する火災を受けた住居で、南東部は竪穴住居35・土壙70に切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸6.45ｍ、短軸5.95ｍ、推定床面積37.6㎡を測る。検出面からの深さ約40㎝を残し、床面の海抜高は2.90ｍを測る。柱穴の規模は径20～100㎝、深さ40～60㎝と各々異なるが、住居形態からすれば図示した４本の主柱によって建てられたものと考えられる。床面付近からは炭化木、炭、焼土などが多く認められた。床面中央には径50㎝、深さ70㎝の中央穴が、また、



第30図　竪穴住居９（1/60）・出土遺物①（1/4）



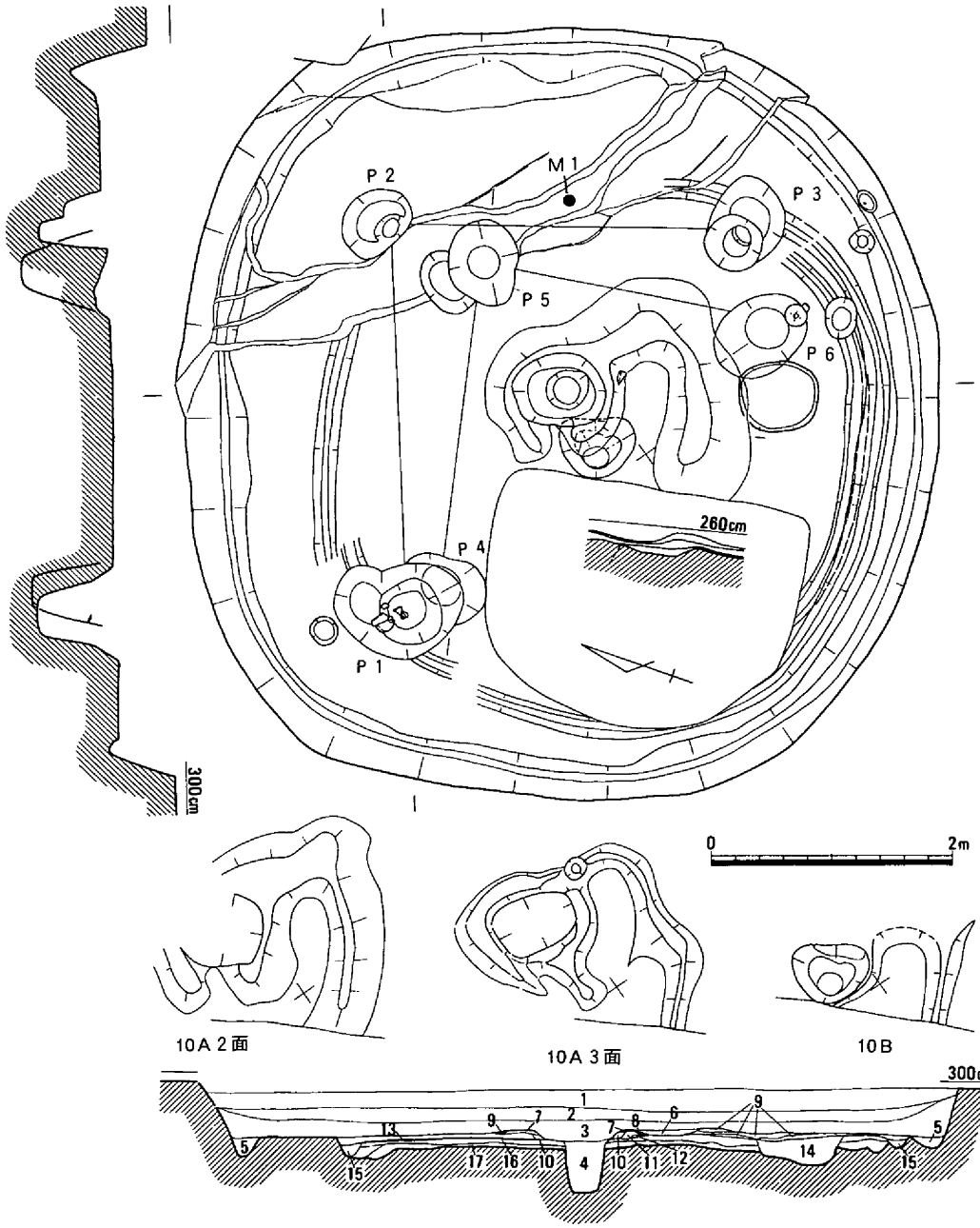
第31図　竪穴住居９
出土遺物②（1/4・1/2）

南西部には65×45cm、深さ約15cmの平面楕円形の浅い小土壙が検出された。遺物は床面東部から高杯71が、小土壙からＳ33～36が出土している。71は口縁外面に４条の凹線を施し、杯部中央は円盤充填されたものであり、当住居は上東・鬼川市Ⅰ併行期に焼失したものと考えられる。

竪穴住居10（第24・32～34図、写真図版109）

３Ｂｂ区に位置し、住居南西部を土壙77に切られ、北東部は地盤沈下によるズレが生じて検出された、２度の拡張による建て替えがなされた平面形態不整円形の住居である。最終床面を残す10Ａの規模は長軸6.4ｍ、短軸6.25ｍ、深さ35cm、床面積29.9㎡、床面の海抜高は2.52ｍを測る。主柱は４本と考えられる。床面中央には径約70×60cm、深さ約50cmの中央穴が穿たれており、埋土は炭を多く含むものであった。また、中央穴の周囲には西部が一部途切れるような形状で幅約30cm、高さ約５cmの低い土手が巡り、この土手はさらに南部を大きく迂回する事も確認され、中央穴から東西に延びる小土手の間は炭層で埋まる状況であった。このように中央穴の周囲には小土手によって画された何らかの施設（以後中央施設と呼ぶ）は竪穴住居10-A以前のＢ・Ｃにおいても認められた。

一方、竪穴住居10Ａの床面下からは竪穴住居10Ｂの壁体溝



1．暗茶褐色砂質土
（混、炭）

2．暗茶灰色粘質砂
（含、黄色粘土小塊多）

3．暗茶灰色粘質砂
（含、炭・黄色粘土小塊）

4．暗茶灰色粘質土
（含、炭・黄色粘土小塊）

5．暗茶灰色粘質土
（混、灰色粘質土）

6．炭層

8．黄色粘質土

9．灰色粘質土

10．暗灰色砂質土

11．淡黄褐色砂質土

12．黄色砂質土

7．淡黄褐色粘質土

14．淡黄褐色粘質砂

15．淡茶灰色粘質土

16．黄褐色粘質土

17．暗灰色砂質土
（混、炭・黄色粘質土塊）

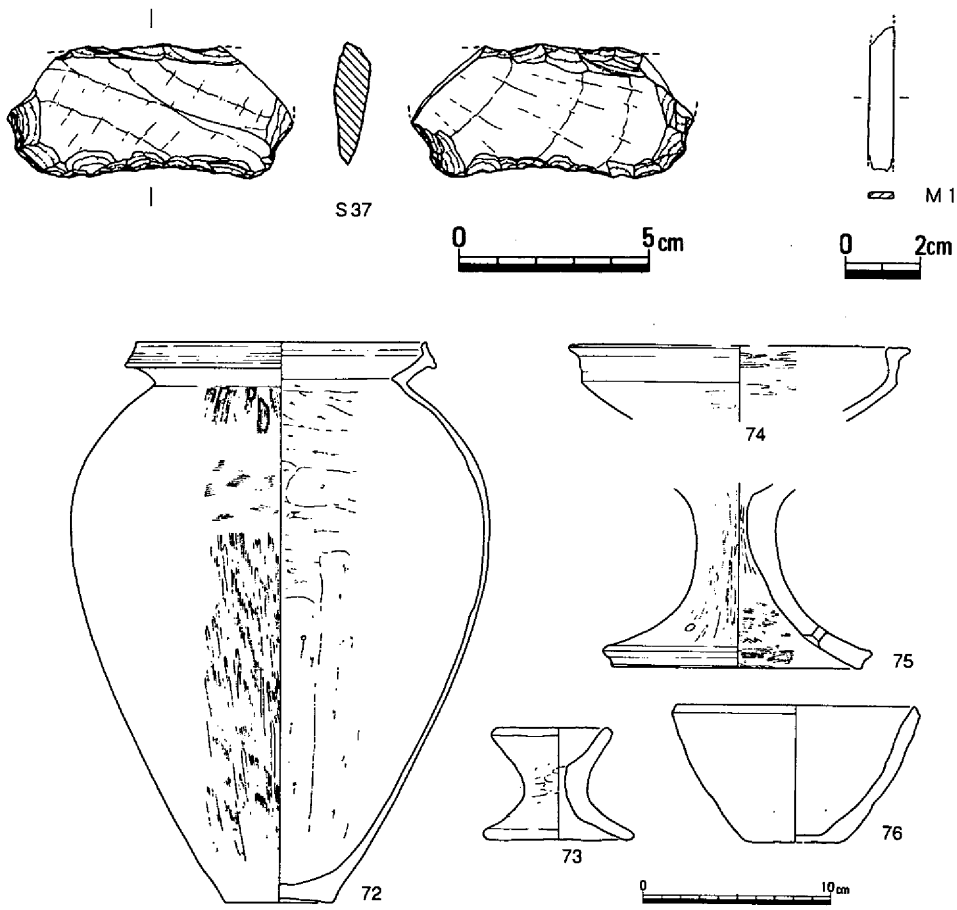
13．黄褐色粘質土

第32図　竪穴住居10（1/60）

および中央穴、柱穴３（Ｐ４～６）等、想定される主柱穴４個のうち３個を検出するとともに、中央穴の東壁には40×10cmの範囲に焼土面が認められた。竪穴住居10Ｃは壁体溝のみが検出されたが、中央穴および柱穴は10Ｂのそれと共有していた可能性が強い。

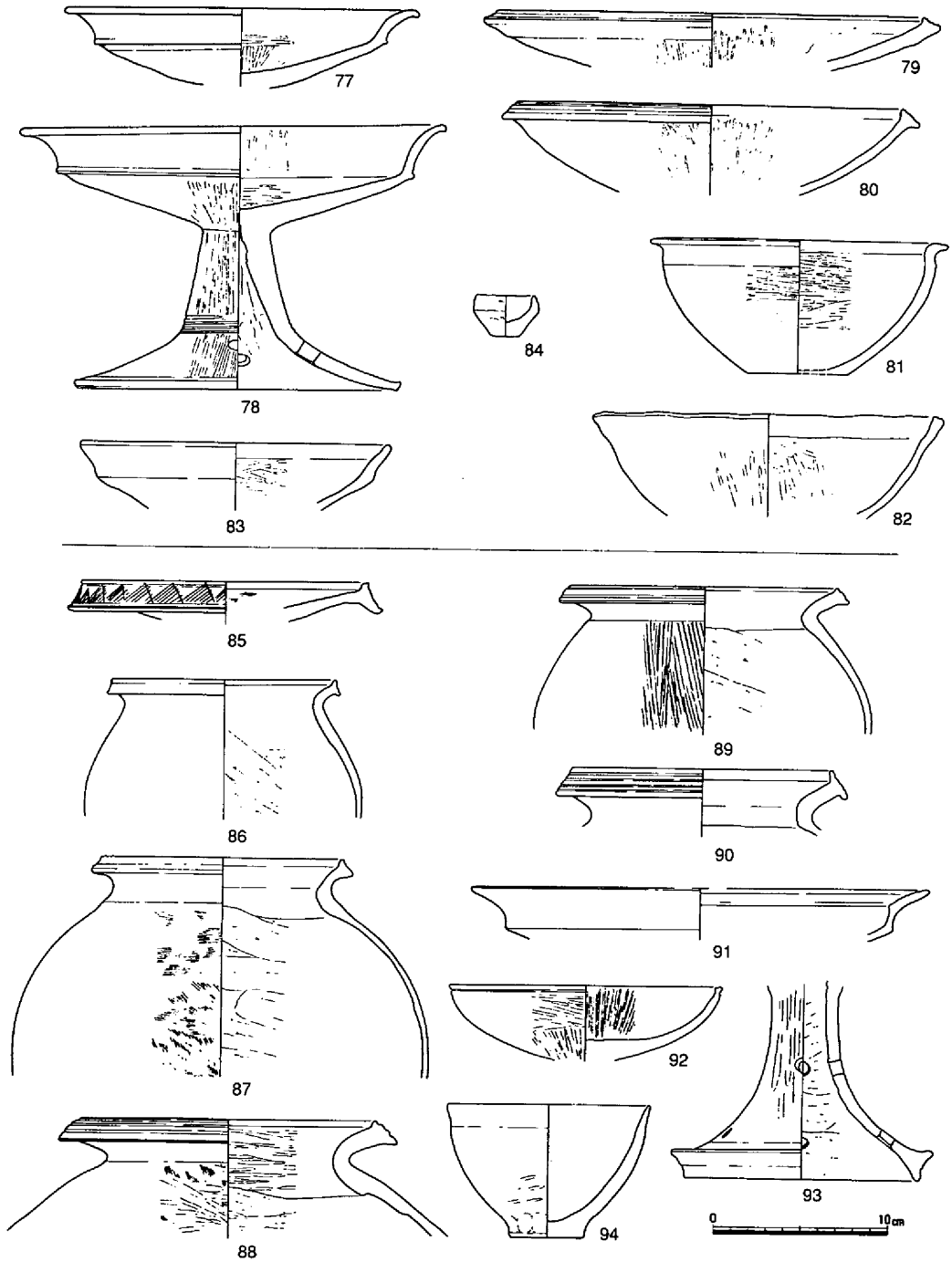
遺物は10Ａに伴うものは住居壁から床面にかけて77～82、覆土中から85～93および石包丁Ｓ37、砥石、Ｐ１の埋土中から72～76が出土している。甕72は内傾して立ち上がる拡張部に凹線が施設されており、底部はやや上げ底を呈す。73はやや雑な作りのミニチュア器台である。77・78は口縁が外反する長脚の高杯で、78の脚柱部端にはヘラ状工具による沈線が施されている。なお、Ｍ１は板状の鉄片で地盤のずれた部分からの出土したものであるが、床面に近い部分から出土しており掲載した。また、10Ｂあるいは10Ｃに伴う遺物はＰ６から高杯74の小破片が出土している。

以上、当住居は１度の建て替えと２度の拡張がなされたもので、出土遺物は上東・鬼川市Ⅰ



第33図　竪穴住居10出土遺物①（1/2・1/4）

～Ⅱの特徴をもつものである。(江見)



第34図　竪穴住居10出土遺物②（1/4）

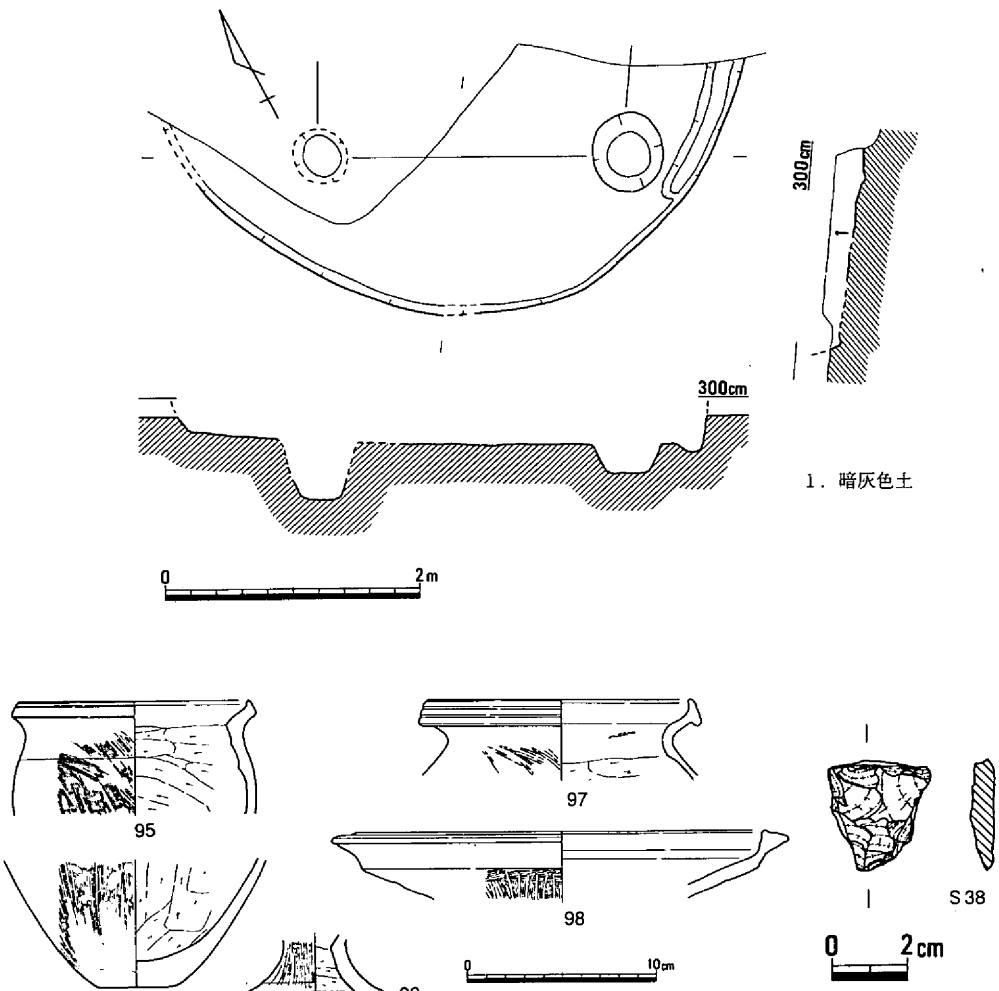
竪穴住居11（第24・35図）

３Ｂ調査区で検出された住居であるが、住居中央部を境に調査時期が異なったため北東側の約１／２は検出できなかった。検出されたのは、壁体溝の一部と柱穴の２本のみで、中央穴は調査範囲内においては確認されなかった。柱穴は、推測される径約５ｍの円形規模から勘案すると本来は４本柱であったことが窺われる。

出土遺物は、土器の小片と石器が１点確認されたにすぎない。土器は、甕・高杯等が上東・鬼川市Ⅰに併行するものである。時期は、後期前半に比定されよう。

竪穴住居12（第24・36図）

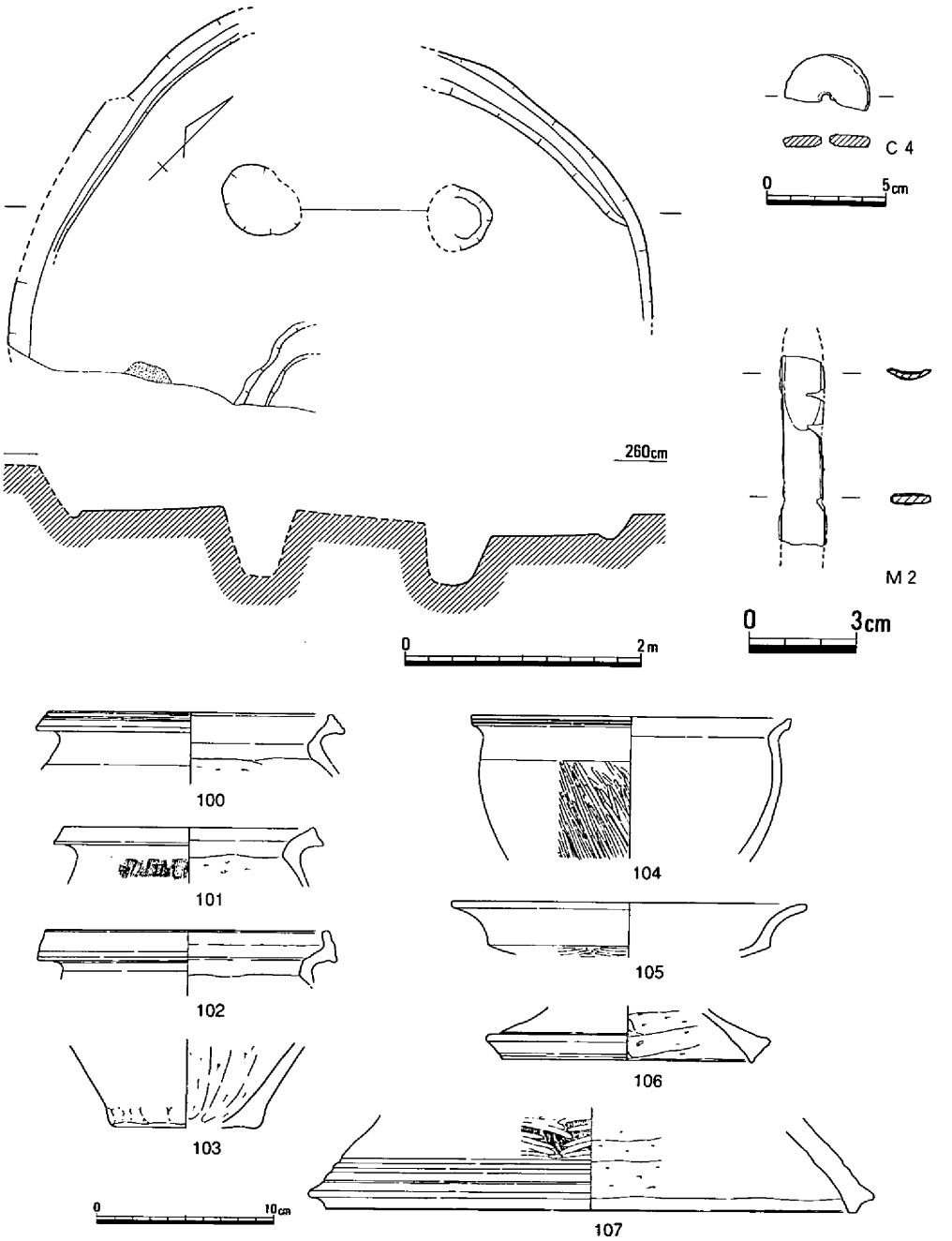
３Ｂ区において中世の溝等にその東半分および東西中央部分が掘削され、遺存する西側半分



第35図　竪穴住居11（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

の一部が検出されたにすぎない。

住居は、遺存する壁体溝・肩により直径5.90ｍが推測された。床面からは、２本の柱穴と中央穴に伴う土手状高まりの一部が検出されたのみで、住居構造を知るためには資料不足の感は



第36図　竪穴住居12（1/60）・出土遺物（1/3・1/2・1/4）

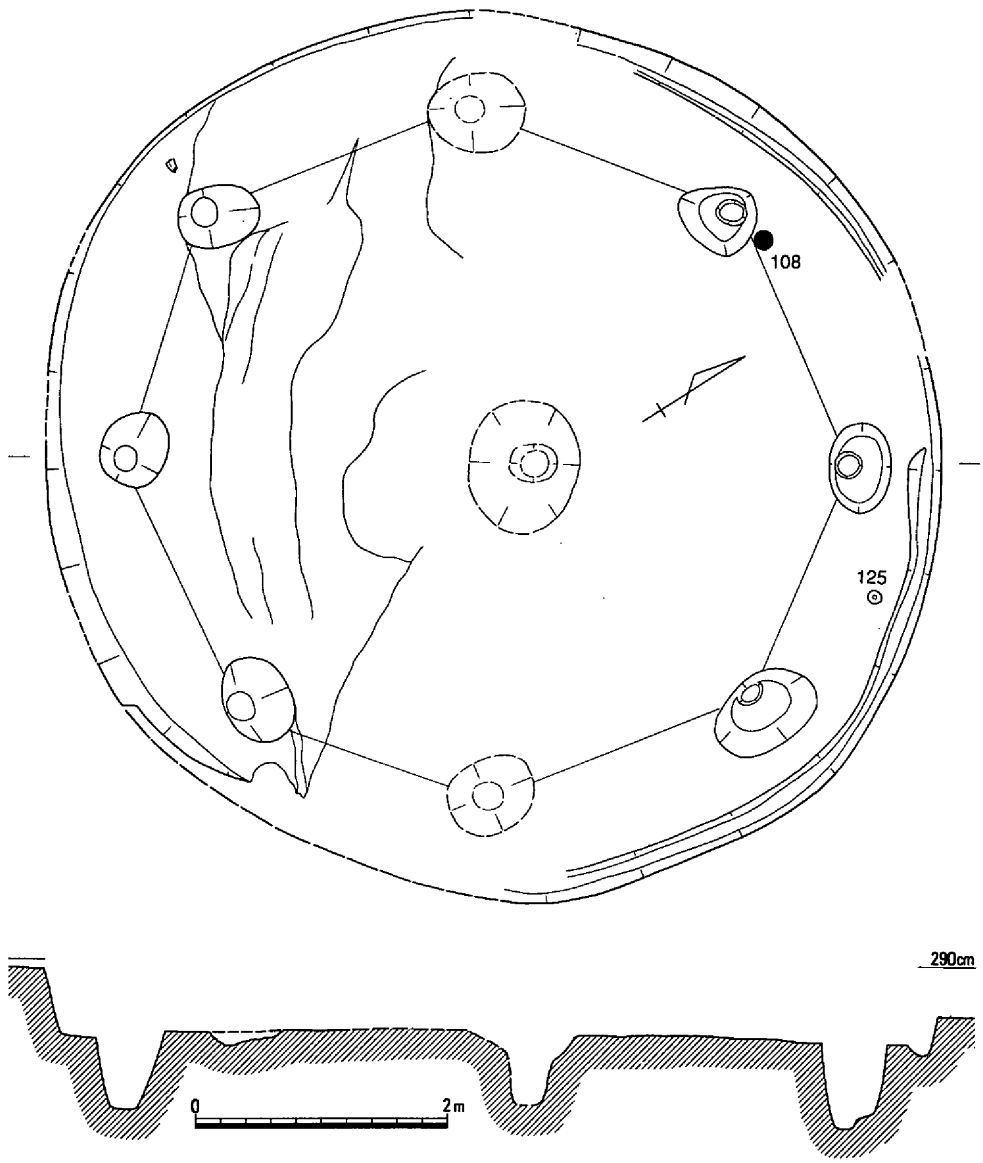
否めない。

出土遺物には、土器、土製紡錘車、鉄器が散見されたがいずれも小片であった。土器は、甕、鉢、高杯、器台がみられた。鉄器は、鏃である。

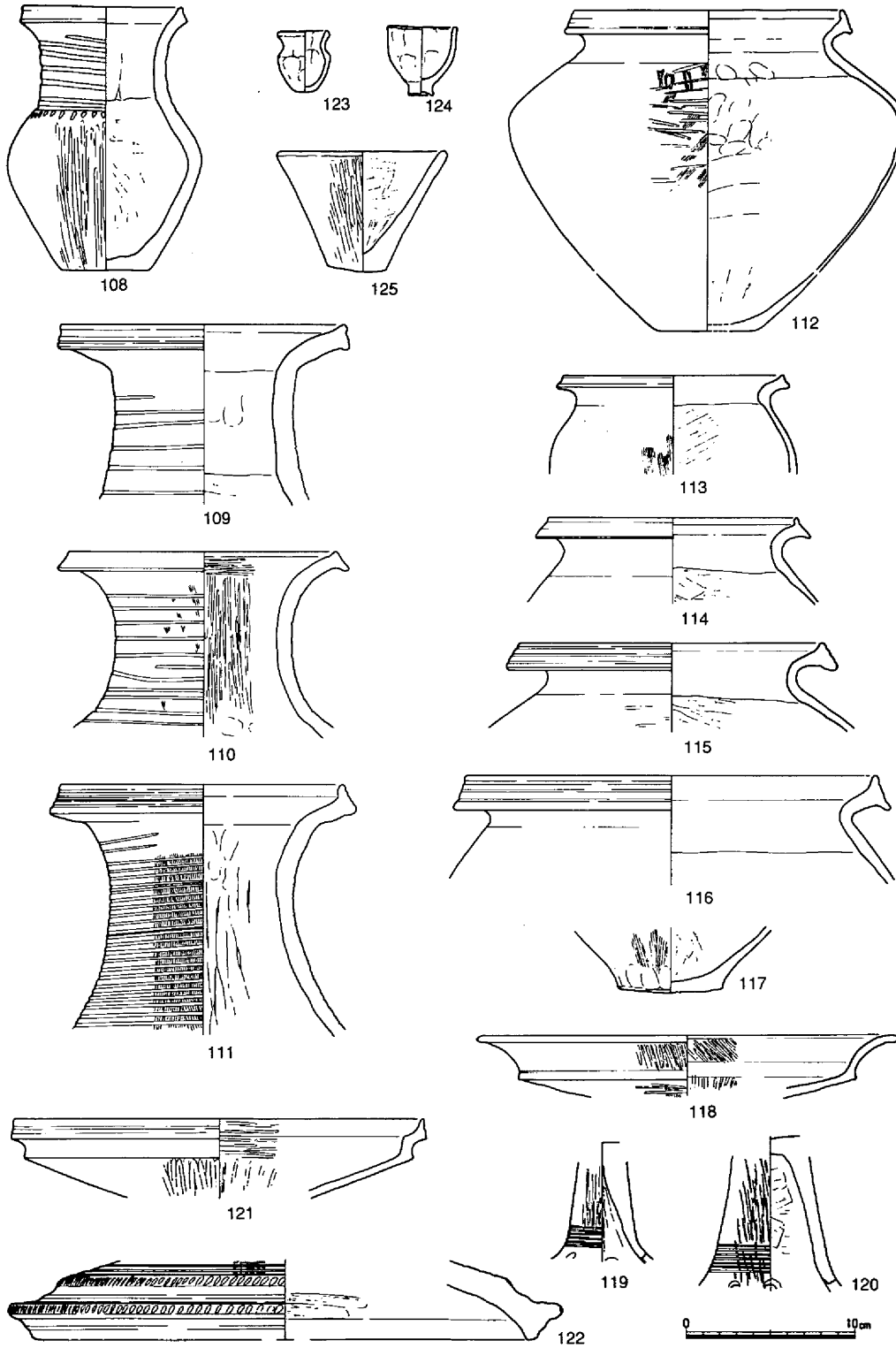
時期は、土器型式（上東・鬼川市Ⅱ併行）からおおむね弥生時代後期前半に比定されよう。（島崎）

竪穴住居13（第24・37～39図）

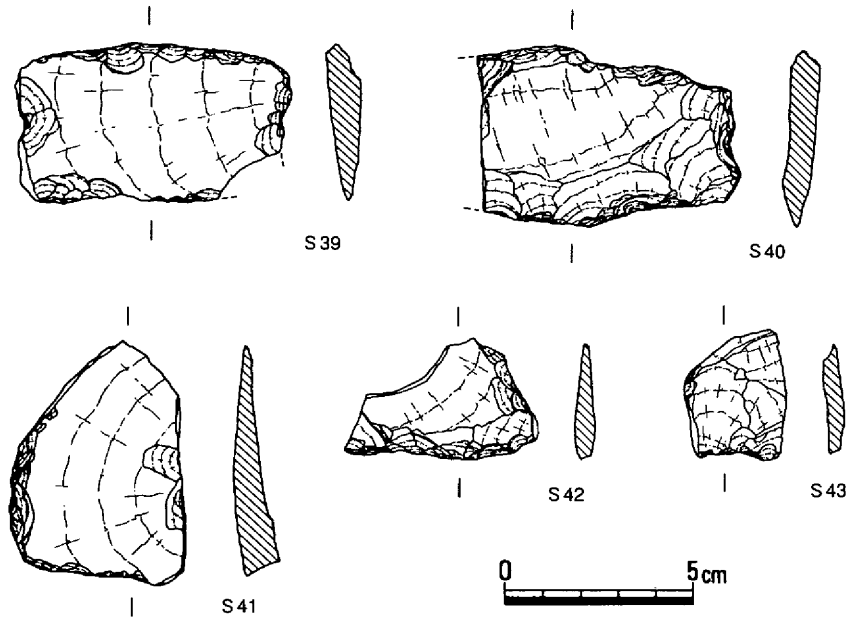
４Ａ～Ｂ区の新旧調査によって明らかになったもので、土壙29に一部切られ、住居南西半部



第37図　竪穴住居13（1/60）



第38図　竪穴住居13出土遺物①（1/4）



第39図　竪穴住居13出土遺物②（1/2）

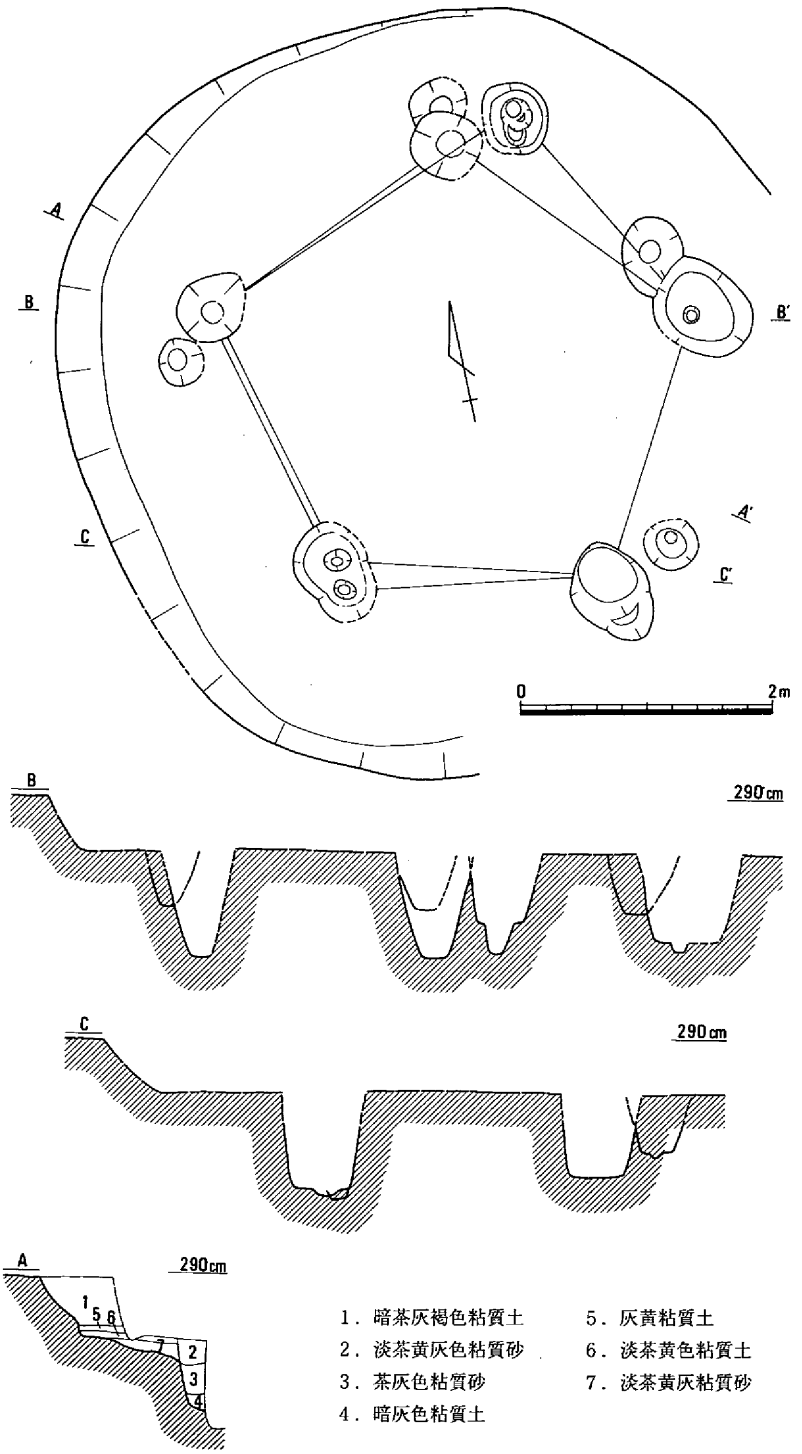
は地盤崩壊によるズレが生じている。平面形態はほぼ円形を呈す比較的大型の住居で、規模は長軸7.12m、短軸6.9m、深さ25cm、床面積38㎡、床面の海抜2.35mを測る。主柱は８本で径70cm前後、深さ60cm前後を測り、柱痕跡が認められる北側柱穴から、径20cm前後の柱が立てられていたものと推定される。中央穴は径105×85cmの楕円形を呈し、肩口から緩やかに下がり、半ばよりほぼ垂直に掘り込まれ、床面から深さ約60cmを測る。埋土は炭混じりの黄灰色粘質土が堆積していた。

遺物は小型の長頸壺108が横転、小型鉢125が反転した状態でいずれも床面から出土しており、他は覆土から出土したものである。長頸壺109～111はいずれも頸部に沈線が巡らされているものであるが、111の沈線は２度にわたって施紋し、その間隔を詰めている。甕112は口縁が内傾して立ち上がる拡張面をもつもので、最大径が胴中央上半に位置し、ほぼ直線的に底部に向かう。甕113～116には口縁端部に凹部を形成するのみの113から数条の凹線をもつ115・116などがある。高杯118～120は長脚をもつもので、口縁が外反するのに対し、121は口縁が直立し、さらに外に引き出され、立ち上がりに面をもつものである。112・121は備中西部～備後にかけてのものと考えられる。他に器台122やミニチュアの壺123・鉢124などが出土している。

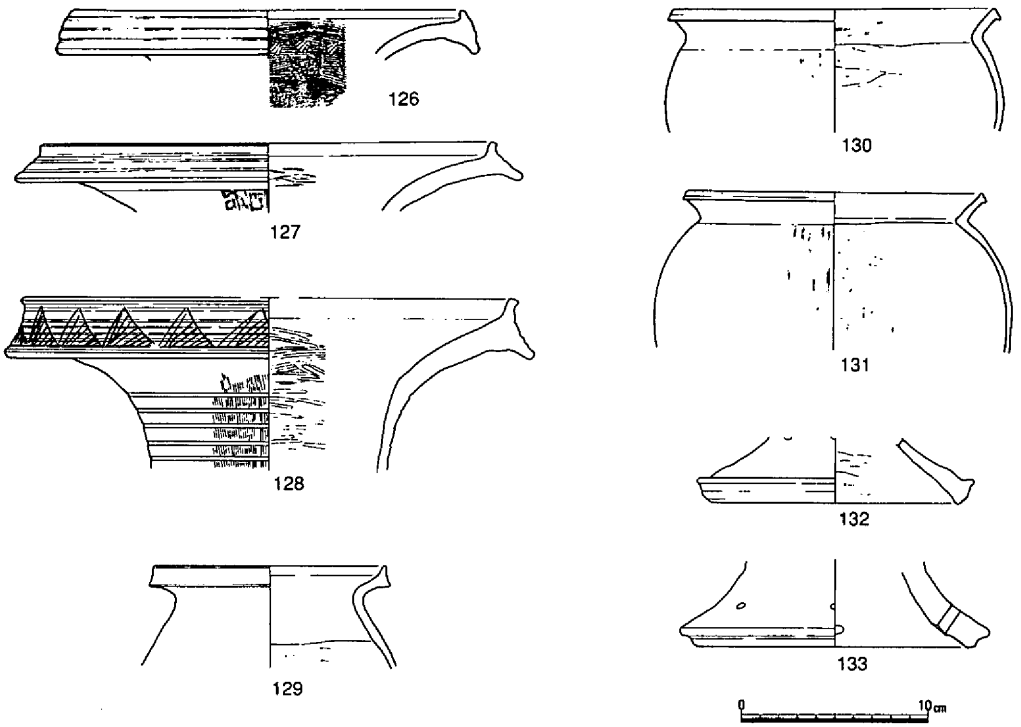
以上、当住居は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶されたものと考えられる。

竪穴住居14（第24・40・41図）

４Ｂ区の中央、竪穴住居13の南西に位置し、後述の竪穴住居15を一部切り、竪穴住居42に大



第40図　竪穴住居14（1/60）



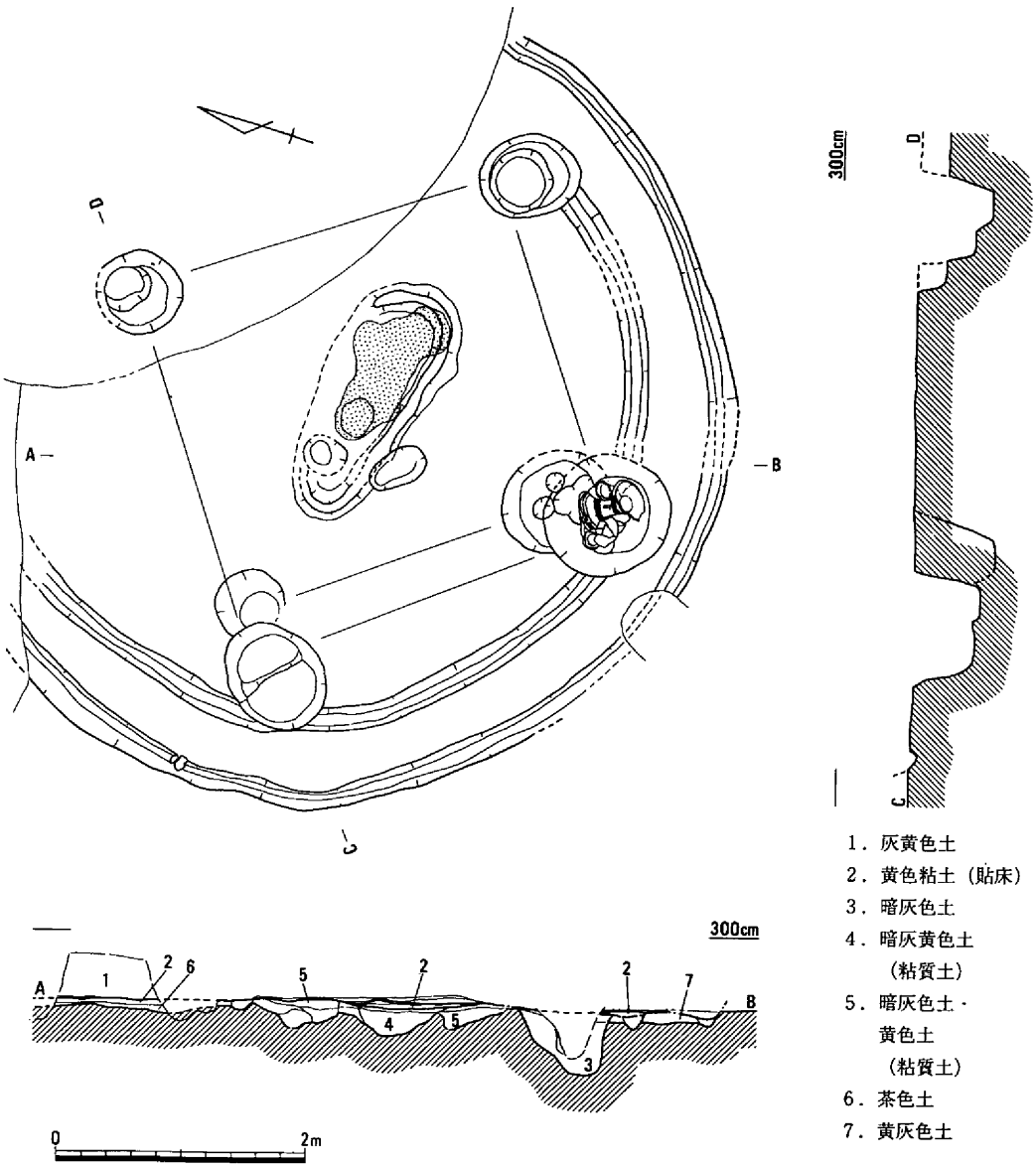
第41図　竪穴住居14出土遺物（1/4）

半が削平を受けており、覆土および床面の残存部は北西の一部にとどまった。平面形態は不整円形を呈し、規模は長軸6.1m、短軸5.9m、深さ40cm、床面の海抜高は2.45mを測る。主柱は５本と考えられ、部分的に建て替えがなされたようであるが、拡張・縮小の痕跡は残る平面・断面などからは確認されず、中央穴においても同様であった。

遺物は北東柱穴から甕129および高杯132が出土した他は、いずれも覆土中のものである。壺126は大きく開く口縁に、内傾して立ち上がる端部は上下に引き出され、端面には３条の凹線を施している。口縁内面は荒い刷毛調整の後、貝殻による施紋がなされているが、この部位の内面調整は当地方では見かけないものである。127・128は長頸壺あるいは器台の口縁部で、128の端面には凹線の後、ヘラ状工具による鋸歯紋が施されている。甕130・131は口縁が「く」字状に開き、端部は面をもつ。132は高杯、133は台付鉢でいずれも古い様相を呈しているが、他の土器の特徴から当住居は、上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶したものと考えられる。（江見）

竪穴住居15（第24・42～46図、写真図版109）

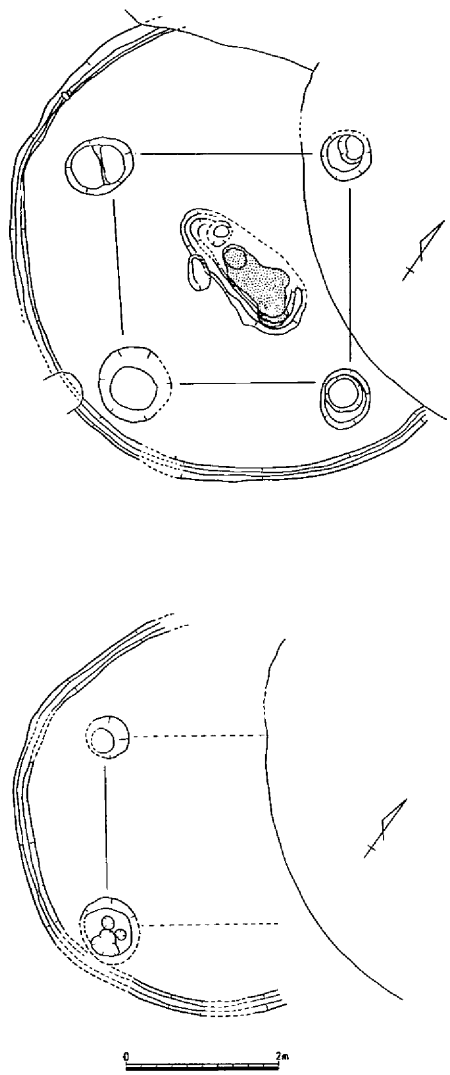
４Ｂ区南半部で古墳時代前半の竪穴住居63の床面下層において北西側が弥生時代後期前半の竪穴住居40によってその約１／３程度が、またそのさらに北側の一部が弥生時代後期前半の竪穴住居14によって切られた状態で検出された住居である。したがって住居の全貌についての詳



第42図　竪穴住居15（1/60）

細は判然としない。

住居は、当初直径6.60ｍの比較的規模の大きい住居１軒であると認識されていたが、床面直下にさらに壁体溝および柱穴の存在を確認したことにより２軒の重複であることが判明した。ただし、両者間にはほとんど同一に近いレベルでの床面を有することで然程時間的な隔たりはなかったものと考える。以下前者を竪穴住居15Ａ、後者を竪穴住居15Ｂとして概要説明しよう。



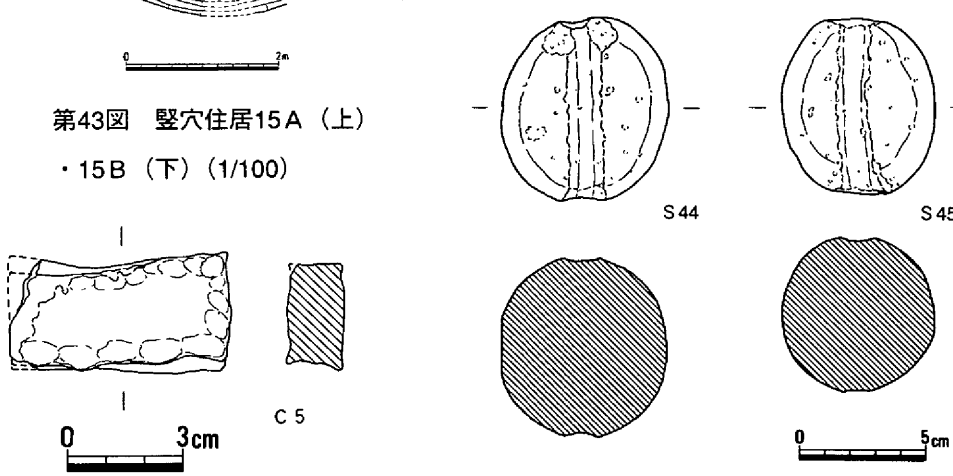
竪穴住居15Aは、平面円形で径6.60mを推測させるもので4本の柱穴と、床面中央部には長軸長2.10m、幅約90cmの平面楕円形の範囲に幅15～20cm、高さ3～5cm程の粘土帯を床面に貼り付け、その範囲内には炭の広がりが見えた。

柱穴は、すでに柱は抜き取られたと考えられ、埋積土断面に柱痕の存在はなく、南側の柱穴の中には器台142が入れられていた。

竪穴住居15Bは、竪穴住居15Aの床面直下で壁体溝と柱穴の存在で確認された。壁体溝の状況が竪穴住居15Aの壁体溝の内側約50cmにほぼ同心円状に検出されたことで、両者間には拡張前と拡張後の関係が推測された。柱穴については、2本のみ検出されただけで対となる柱穴については見られなかった。おそらく東側2本が竪穴住居15Aに共通して使用されていた結果とも考えられる。

出土遺物には、柱穴内に柱を抜き取った後に入れられた器台142をはじめ床面からは壺134・135、甕136・137、鉢139、高杯140、器台

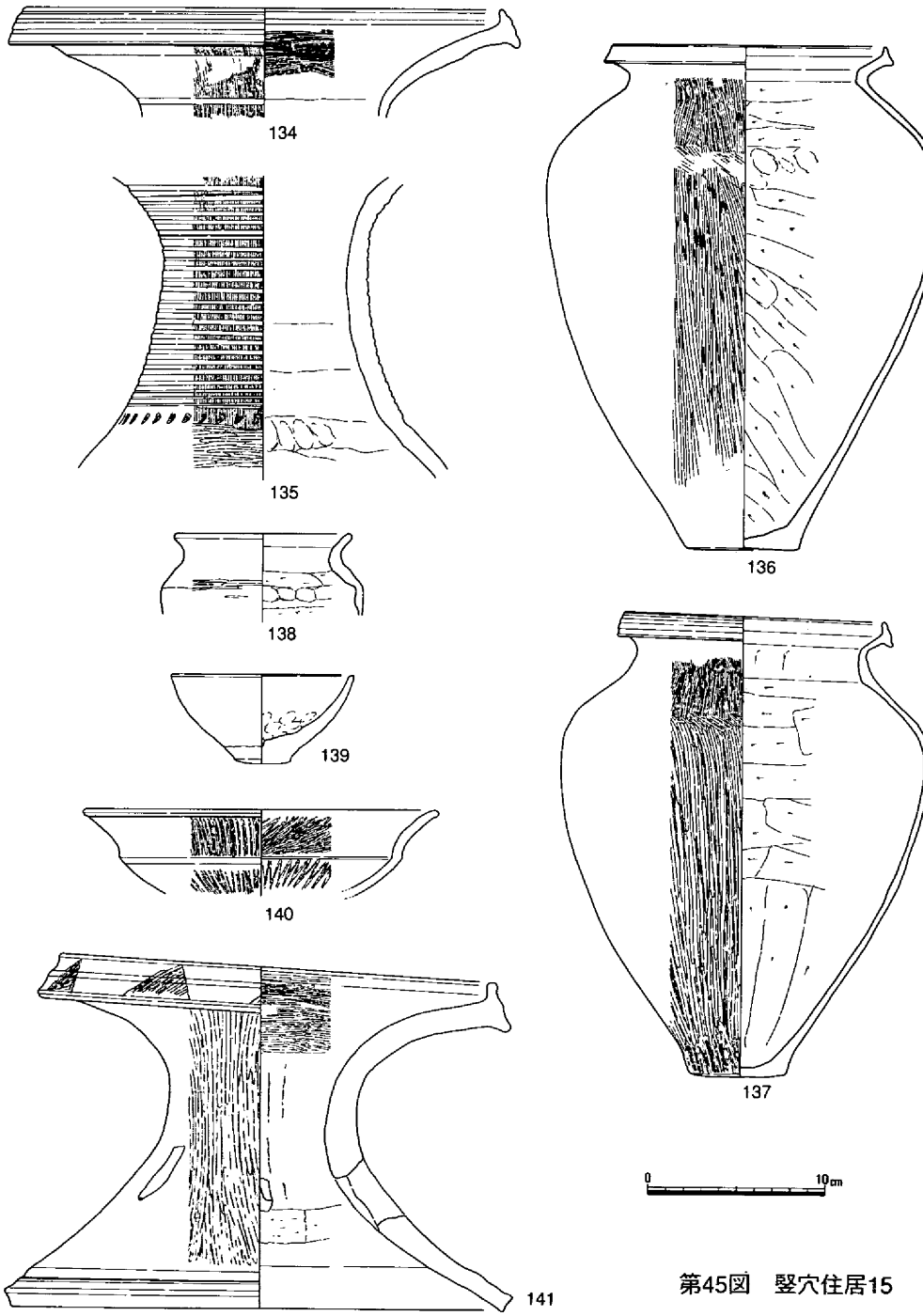
第43図　竪穴住居15A（上）・15B（下）（1/100）



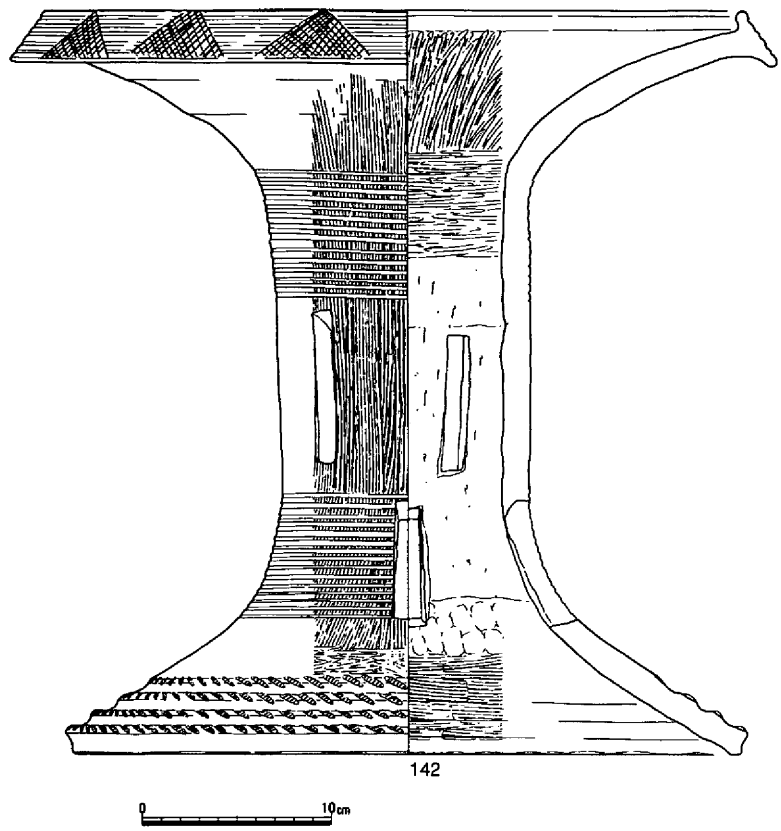
第44図　竪穴住居15出土遺物①（1/2・1/3）

141等の土器と土製品Ｃ５、石器Ｓ44・45が検出された。

壺は、長頸を呈するものである。また甕は口縁端部をわずかに上方へ拡張するものとそうでな



第45図　竪穴住居15
出土遺物②（1/4）



第46図　竪穴住居15出土遺物③（1/4）

いものの２者が認められたが、前者については当該地域にみられる地域色の一つであろう。高杯は口縁部が比較的長く外方に伸びた形式を示すが、胎土中にまだ砂粒を多く含む点において古相を示すものと考える。

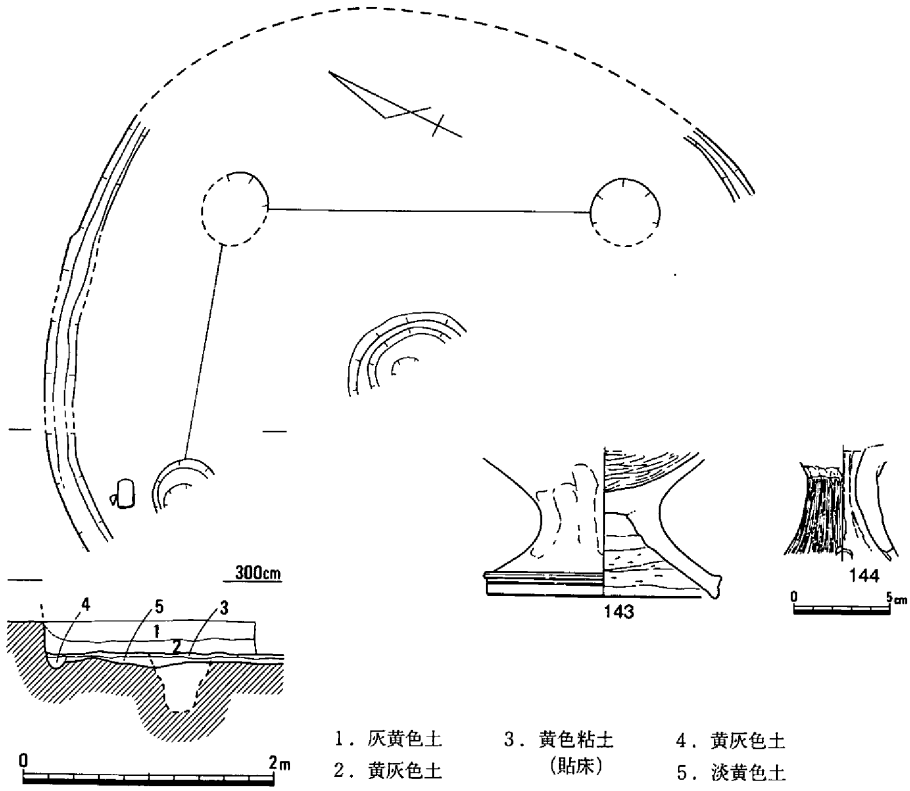
石製品は、長さ７cm程度の大きさの河原石の一部を溝状に敲打することにより作り出されたものである。

土器が上東・鬼川市Ⅱ併行と考えられることで、弥生時代後期前半に比定されよう。

竪穴住居16（第24・47図）

４Ｂ区南半部において北東側の一部コーナーを竪穴住居15Ａ、同15Ｂに切られ、また南西側は調査区外にかかった状態で検出された。したがって、南西側が未調査とあって住居形態等の全貌については明らかでない。

検出されたのは、状況から平面円形を推測させるもので、遺存する部分はおよそ住居全体の約１／２程度と考えられ、柱穴、中央穴などの存在が一部であるが確認された。ただし、検出された３本の柱穴のうち東側の２本については平面がかろうじて確認されたものの地下水の湧



第47図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物（1/4）

水および砂の吹き出し等により、掘り下げは困難をきわめ結局底部の検出は出来なかった。検出された３本の柱穴および中央穴の位置関係によれば主柱穴は４本と考えられる。

中央穴としては、貼床面の上に粘土を土手状に幅20cm、高さ約３cm程度の規模で、それをさらに円形に巡らしたと考えられるものの存在が確認されたが、その中央部もしくはその周辺に中央穴となる比較的深い土壙等深い土壙等の共伴の確認までは出来なかった。

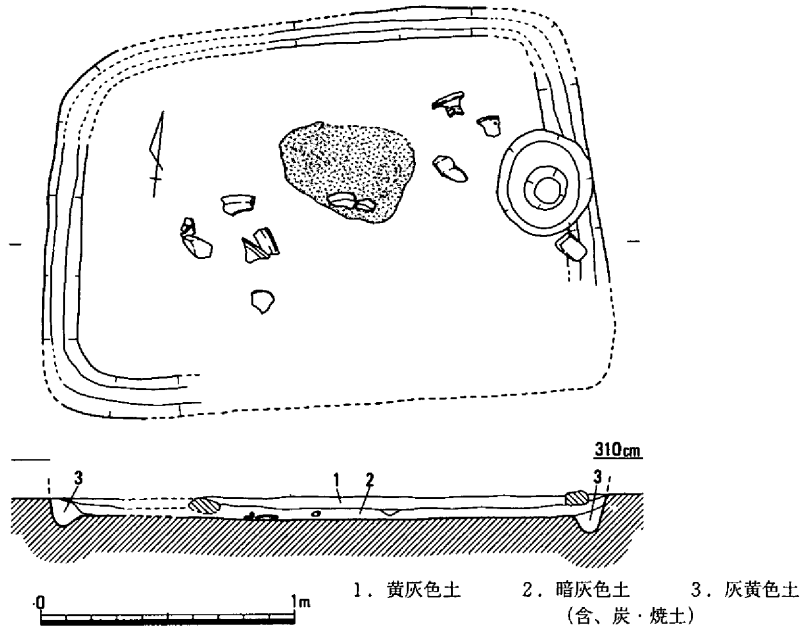
出土遺物としては、床面において台付鉢、高杯の破片が散見された程度で、時期判断の参考とするには資料不足の感は否めない。

時期は、出土遺物および住居形態および竪穴住居15との切合い関係等により弥生時代後期前半頃として差支えないものと考える。

竪穴住居17（第24・48・49図）

４Ｂ区南半部に位置する。竪穴住居14の西約50cmに近接するが、距離的にみても当然上屋構造を考えれば、本来両者間に共存関係は存在しなかったものと思われる。

住居は、海抜2.95mにおいて当初平面形態長方形を呈する土壙として認識された。しかし、



第48図　竪穴住居17（1/30）

床面が確認されるにおよんで、東西2.30m、南北1.55mと他の住居に比べて規模が小さいながらも住居であることが判明した。

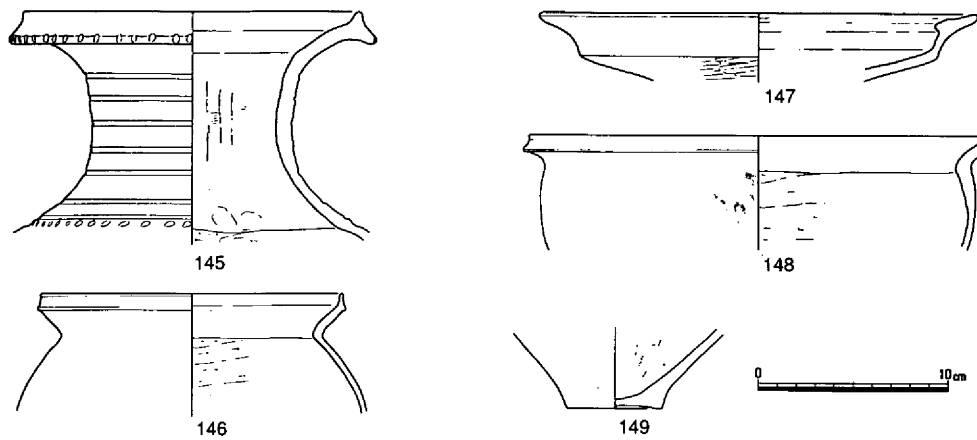
さらに床面からは、壁体溝、柱穴、被熱面等の検出されたことにより、小規模ながら住居としての条件を満足させるものであった。ただし柱穴については、１本ということと壁との距離があまりにも密接していることで、本来この住居に伴っていたものか否かについては明言できない。被熱面は、ほぼ床面中央部に長軸50cm、幅約35cm程の広がりを見せるものであった。

出土遺物には、床面直上で壺、甕、高杯、鉢等の土器が小片であるが遺存しているのが確認された。

時期的には土器がいずれも型式的に弥生時代後期前半に比定されることで、時期も弥生時代後期前半、上東・鬼川市Ⅱ併行期として差支えないものと考える。（島崎）

竪穴住居18（第24・50・51図）

５Ｂ区中央東寄りに位置し、住居の北部大半は調査区外に延びており、また、残存する住居南部も竪穴住居48に切られて検出された。平面形態は円形を呈し、推定規模は径約８mの比較的大型の住居と考えられる。深さは20cmを残し、床面の海抜高は2.5mを測る。柱穴は３個検出されたが、住居の平面形状からすれば７～８本の柱によって建てられたものと推定される。覆土は２層に分かれ、上層は茶灰色粘質土、下層は炭粒を僅かに含む暗茶灰色粘質土が堆積し

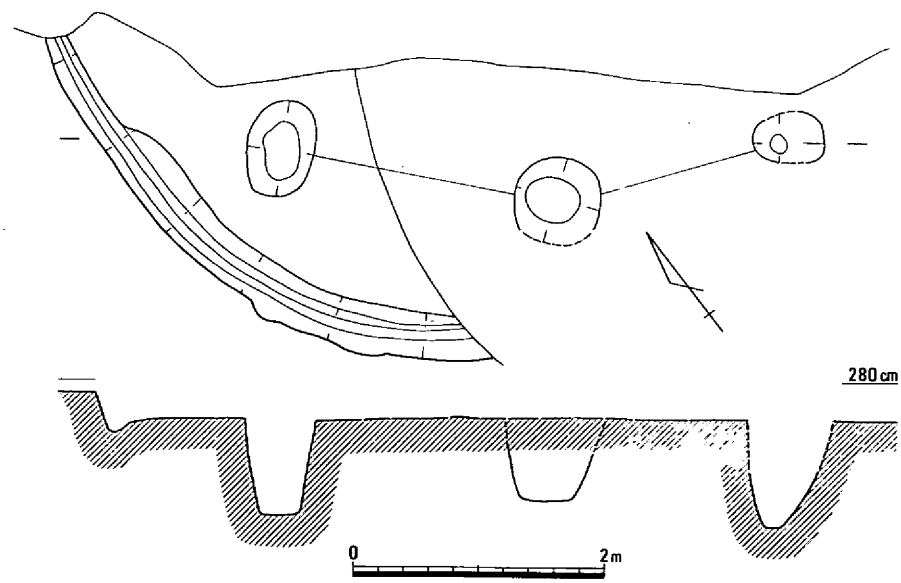


第49図　竪穴住居17出土遺物（1/4）

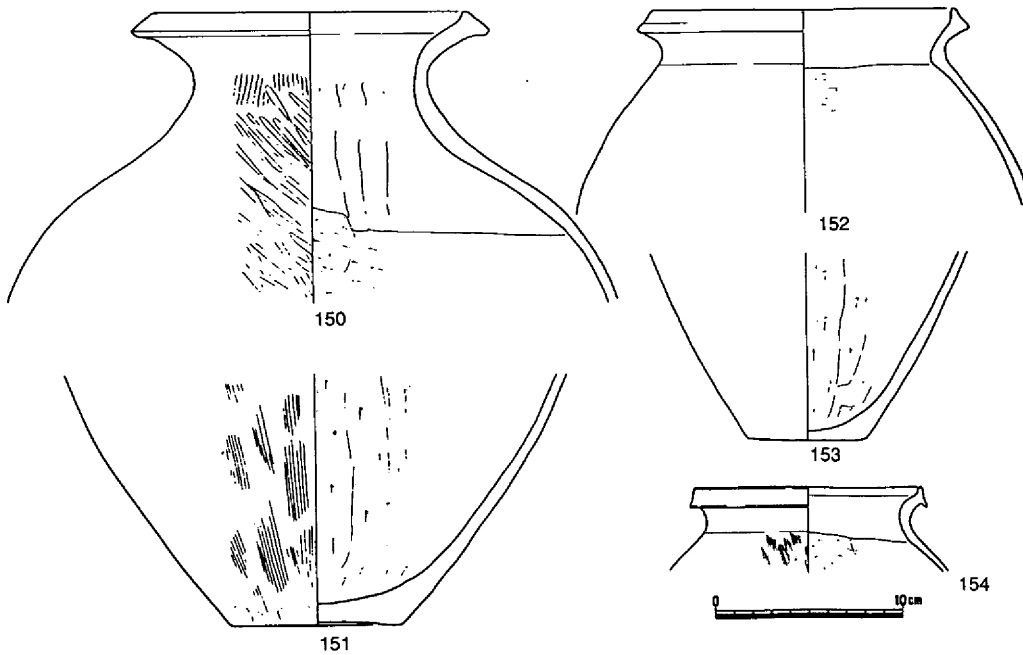
ており、壁体溝の内側床面には炭面が部分的に認められた。

遺物は覆土中から出土しており、壺150は口縁端部を斜め外方に肥厚し、内傾する端面を形成しており、頸胴部外面は刷毛調整の後ヘラミガキを、内面のヘラケズリは胴上半にとどまっている。甕152は口縁端部を上方につまみ出しているのに対し、甕154のそれは上下に僅かながら拡張させ、端面を形成している。

以上、土器の特徴から当住居は上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱ期に廃絶したものと考えられる。



第50図　竪穴住居18（1/60）



第51図　竪穴住居18出土遺物（1/4）

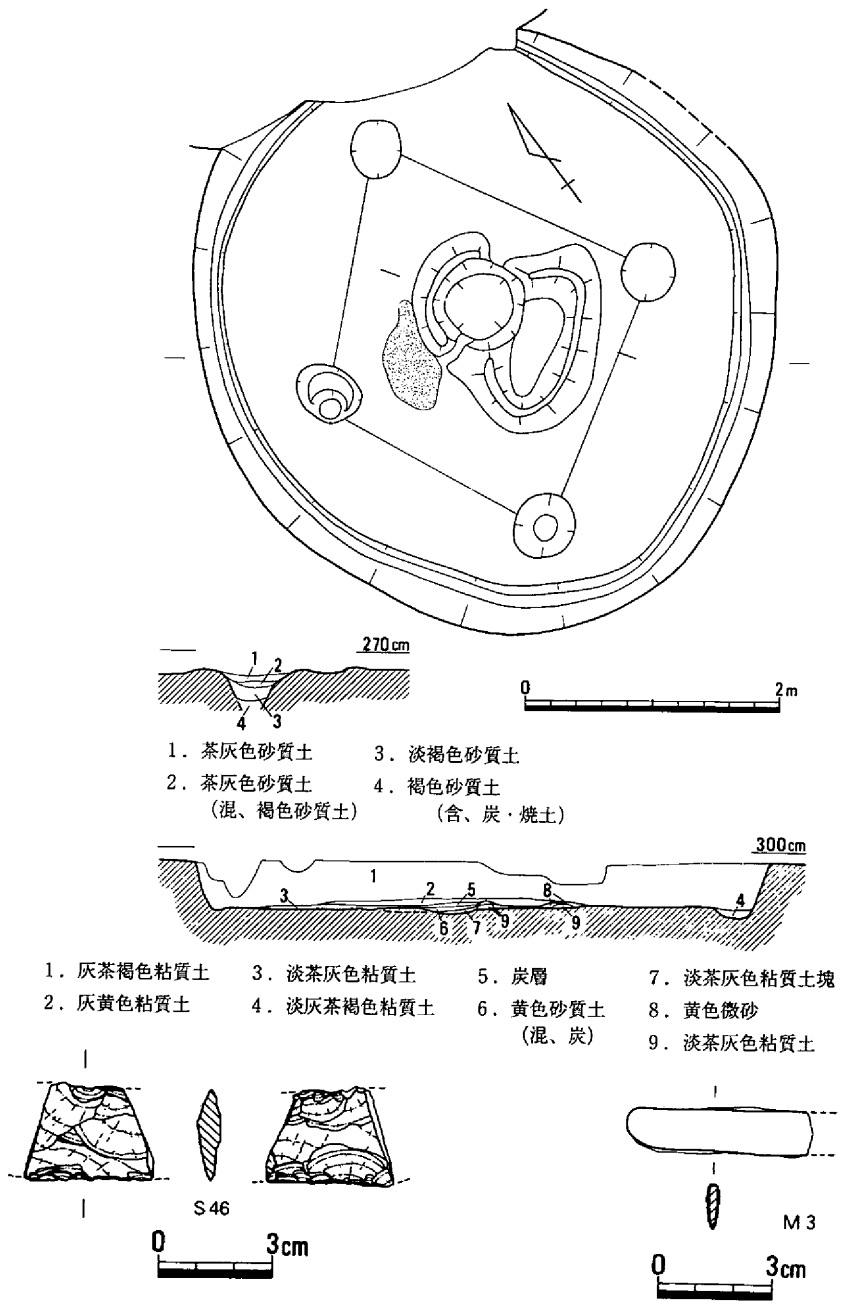
竪穴住居19（第24・52・53図、写真図版110）

５Ｂ区、竪穴住居18の南に位置し、竪穴住居48に切られ竪穴住居20を切って検出された、平面形態不整円形の住居である。規模は長軸推定５ｍ、短軸4.65ｍ、深さ35cm、床面積約15㎡、床面の海抜高2.55ｍを測る。主柱は４本で、南北方向の柱穴間の距離が東西のそれに比べ50cm程長く、ややいびつな配置を示しており竪穴の掘り方にも影響を与えているようである。柱穴は径約50cmを測り、深さは南西の柱穴が約60cmを測るものの他はいずれも湧水のため確認不可能であった。径約60cmの中央穴内の下層には炭、焼土粒が混じるものであった。また、中央穴の周囲には東西方向が一部途切れるものの高さ約５cmの土手が巡り、その南には同様の土手により、1.10ｍ×60cm、深さ約５cmの平面楕円形の浅い凹地を形成する中央施設が作られていた。さらに、中央穴の西からは90×45cmの範囲に焼土面の広がりが確認された。

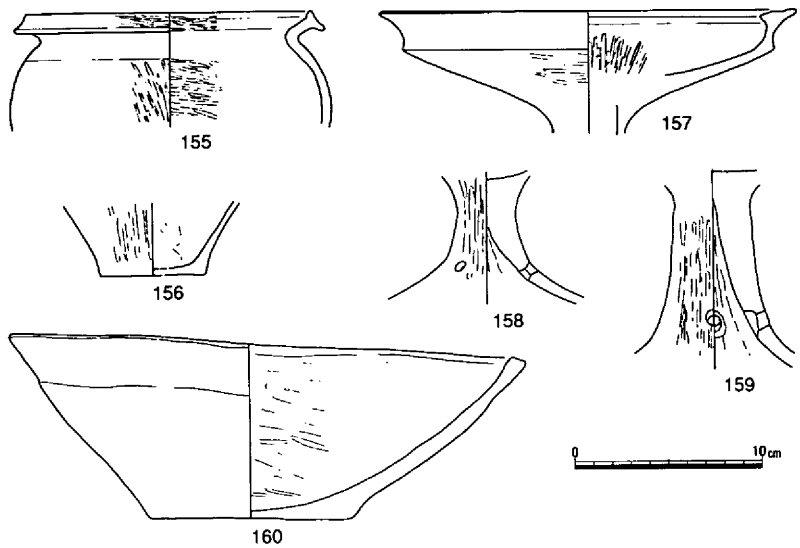
遺物はいずれも覆土中から出土した。スクレイパーＳ46は両端が欠損しており、刀子Ｍ３は錆のため不明瞭であるが切先は丸味をもつ。鉢155は口縁端部を上下につまみ出しており、形態的には甕とみられるが、胴部内面にヘラミガキがなされていることから鉢と判断した。高杯157の口縁は端部が外方に引き出され、上面に凹線が施されている。杯内面は縦方向の、外面は横方向のヘラミガキが施されている。高杯158・159の脚柱部はいずれも緩やかに広がる脚裾部をもち、３および４個の円孔を穿っている。鉢160は灰褐色を呈し、口縁端部に僅かに凹部を

もち、体部上半外面に鈍い稜線が走る。なお、覆土からはガラス滓も出土している。

以上、記載した土器の特徴は上東・鬼川市Ⅰ併行期のものが大半をしめるが、159の長脚高杯がみられることから、当住居は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶されたものと考えられる。



第52図　竪穴住居19（1/60）・出土遺物①（1/2）



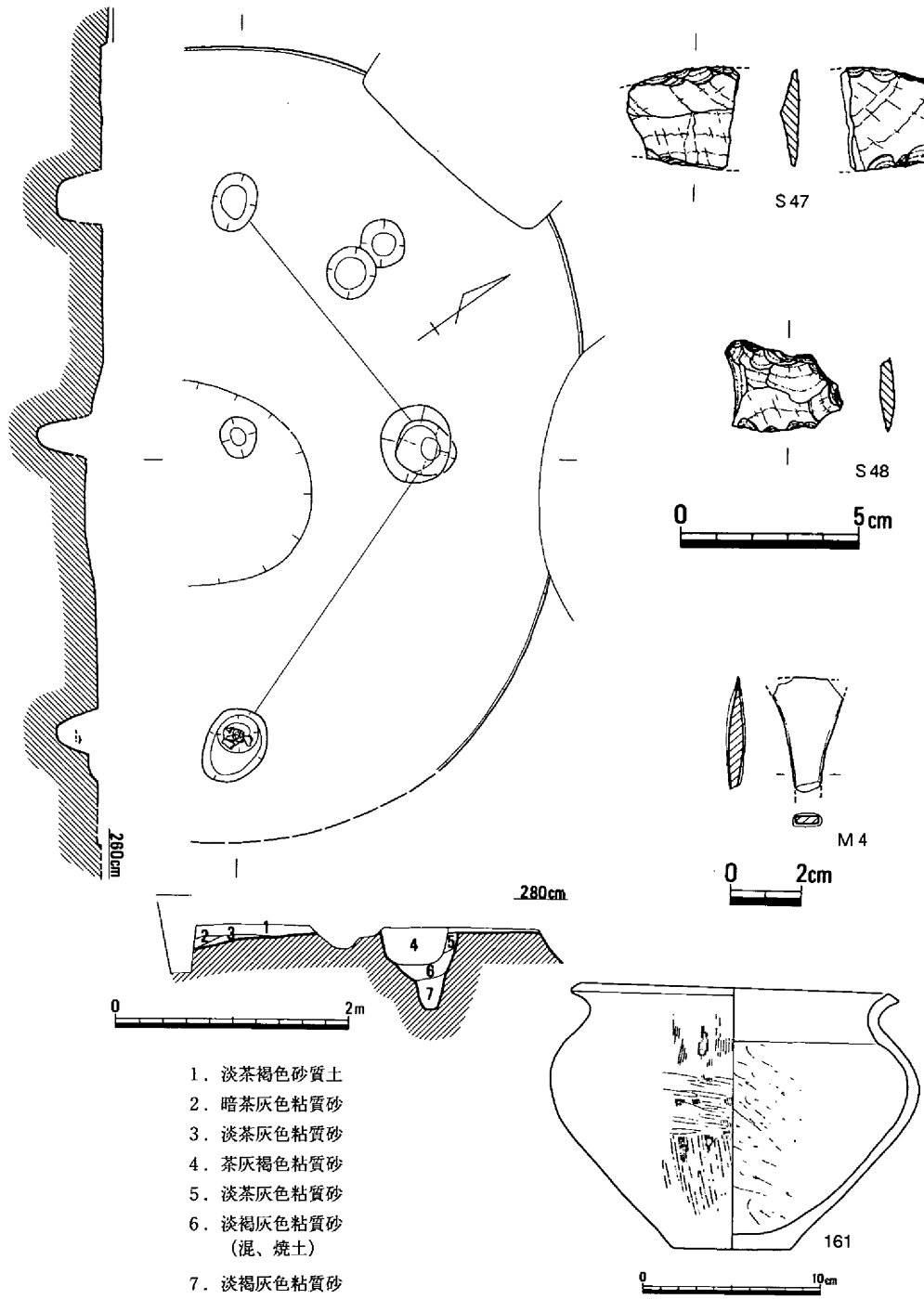
第53図　竪穴住居19出土遺物②（1/4）

竪穴住居20（第24・54図）

５Ｂ区、竪穴住居19の南西に位置し、住居南西半部は調査区外に延びている。また、住居北部は土壙89に一部切られる一方、住居下には竪穴住居１が所在し、当住居はこの下層住居の拡張建て替えがなされた可能性が高いものである。平面形態は円形を呈し、前述竪穴住居１の同心円上に約1.2m広がる径6.8mを測る。深さは上部を中世の遺構により削平を受けていたため５～20cmと浅い。床面は中央に向かい緩やかに下がり、中央付近でさらに傾斜が変換し、凹地状を呈するが、中央穴は確認されなかった。主柱は竪穴規模から５本と想定されるが、内３個を検出した。柱穴は径50～65cm、深さ40～60cmを測り、北東の柱穴では柱の抜き取り痕跡が観察された。また、南東のそれからは復元完形の鉢161が柱根部分の中位に埋められており、住居廃棄の際、柱を抜き取った後に土器を埋め、何らかの祭りがなされたものと想像される。

なお、住居内からの土器の出土はほとんどみられず、北東柱穴からスクレイパーＳ47が、覆土中から楔形石器S48など石製品４点および鉄鏃１点が出土するにとどまった。Ｍ４は両端を欠いているが方頭斧箭形式のもので、残存重量は4.18ｇを測る。鉢161は明褐灰色を呈し、緩く外反する口縁に端部は面をもつ。胴部外面は縦方向のハケ調整の後、下部を縦方向に、中位を横方向にヘラミガキしている。胴部内面はヘラケズリが顕著であるが、僅かながらヘラミガキが認められる。

以上、当住居は竪穴の形態および埋積状況から中期末の竪穴住居１が拡張建て替えがなされ、鉢の年代観から上東・鬼川市Ⅰ期に廃棄されたものと考えられる。（江見）



第54図　竪穴住居20（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）

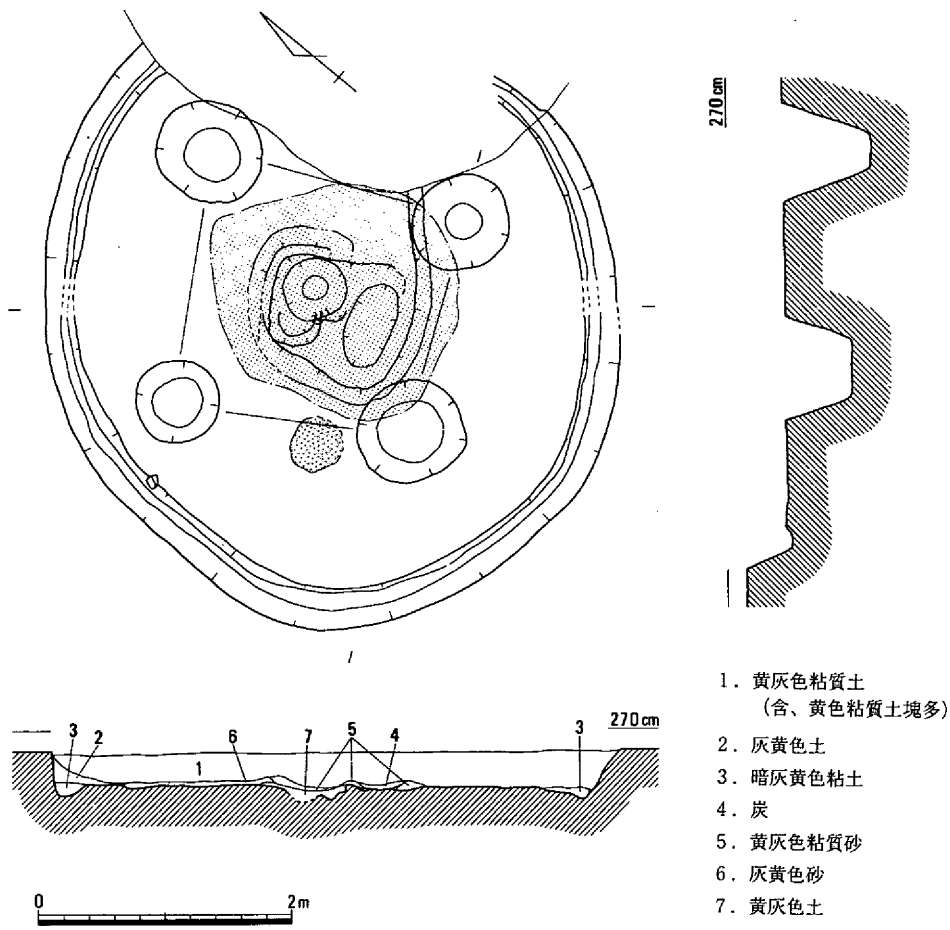
竪穴住居21（第24・55・56図、写真図版110）

６Ｂ区のほぼ中央部において検出された。当該区には同時期の住居の重複はなく、南約６ｍに竪穴住居22・23の存在が認められたにすぎない。

住居は、東側の一部が弥生時代後期の竪穴住居49・50によって切られていたため明確にできないが、平面形態は海抜2.55ｍ段階で長軸長が5.00ｍ、短軸長が4.50ｍを測ったことで、平面楕円形にあったことが推測された。

平面検出面から25～30cm下層で検出された床面からは、柱穴、壁体溝、中央施設等の存在が確認された。

柱穴は、いずれもが直径60cm以上の掘り方をみせるものであったが、すでに柱は抜き取られたと考えられ、土層断面に柱痕跡の確認はできなかった。



第55図　竪穴住居21（1/60）

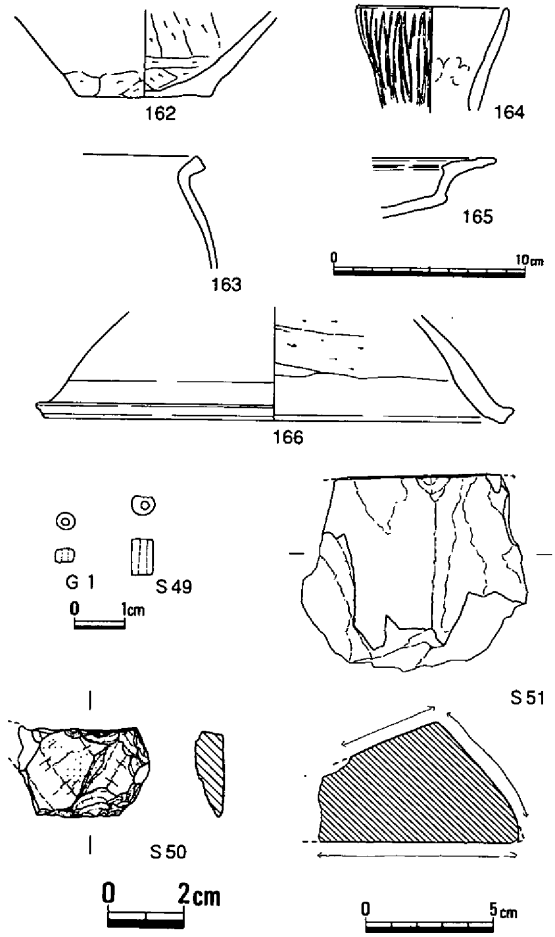
４本の柱穴に挟まれた床面中央部には、中央施設としての比較的浅い土壙とこれを中心に床面上には貼床粘土と同じ粘土で土手状に僅か比高差５cm未満の高まりが、一部これを取り囲むかのような状況で検出された。ただし、この範囲内には明らかに熱を受けたと思われる部分は確認されず、被熱面はその外側に45×40cmの円形に近い平面プランで検出された。

なお、これに伴うと考えられる炭、灰の広がりはむしろ中央部分に集中するのが認められた。

出土遺物には、僅かであるが土器片、ガラス製小玉１点、碧玉製管玉１点、砥石等が検出された。

時期は、弥生時代後期前半に位置づけられよう。

竪穴住居22（第24・57～62図、写真図版111）



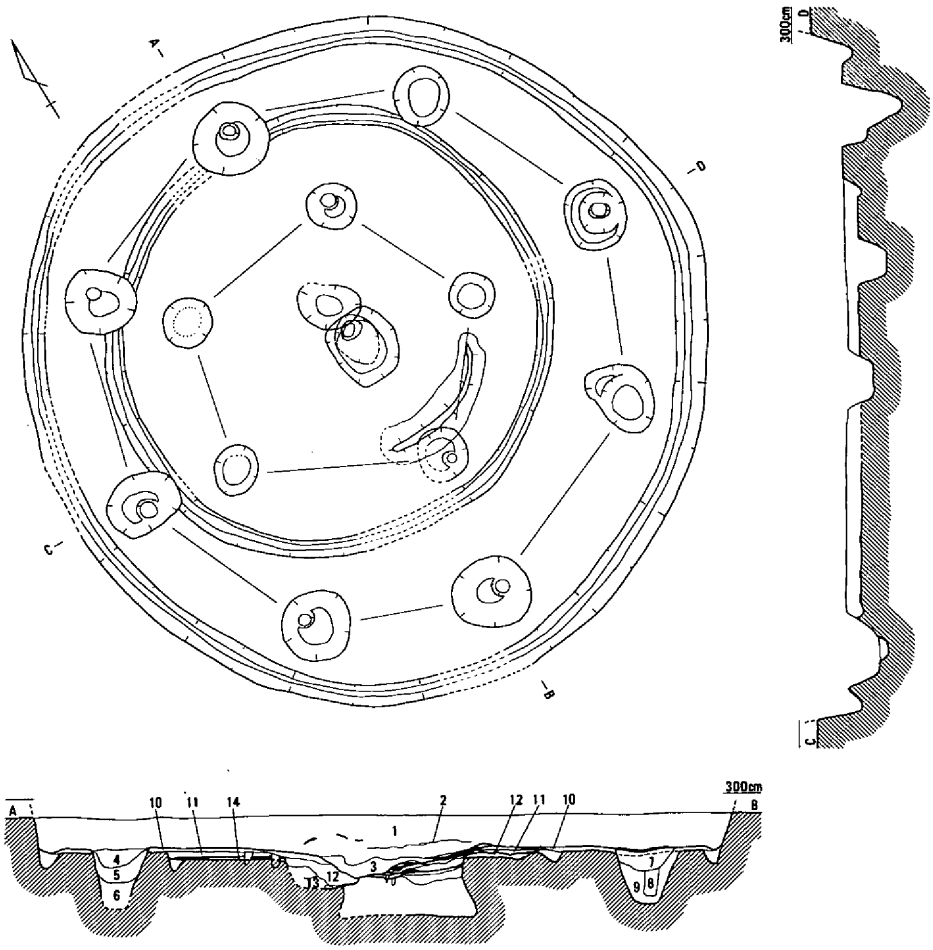
第56図　竪穴住居21出土遺物（1/4・2/3・1/2・1/3）

７Ｂ区北端部において検出された２軒の重複住居である。

住居は、最初のものを竪穴住居22Ｂ、これを拡張したものが竪穴住居22Ａとして以下に概要を説明しよう。

竪穴住居22Ａは、竪穴住居22Ｂの埋積後、これを拡張したもので、東西7.00m、南北7.30mの規模を誇り平面円形を呈する住居である。平面検出面から約35cm下層において床面が検出された。床面には、中央部に弥生時代後期前半の土壙があったことで、その部分が陥没し同一レベルでの把握に困難を極めたが、およそ柱穴８本と中央部に中央穴およびその南側には弧状を呈する土手状の高まりが長さ1.60mにわたって確認された。

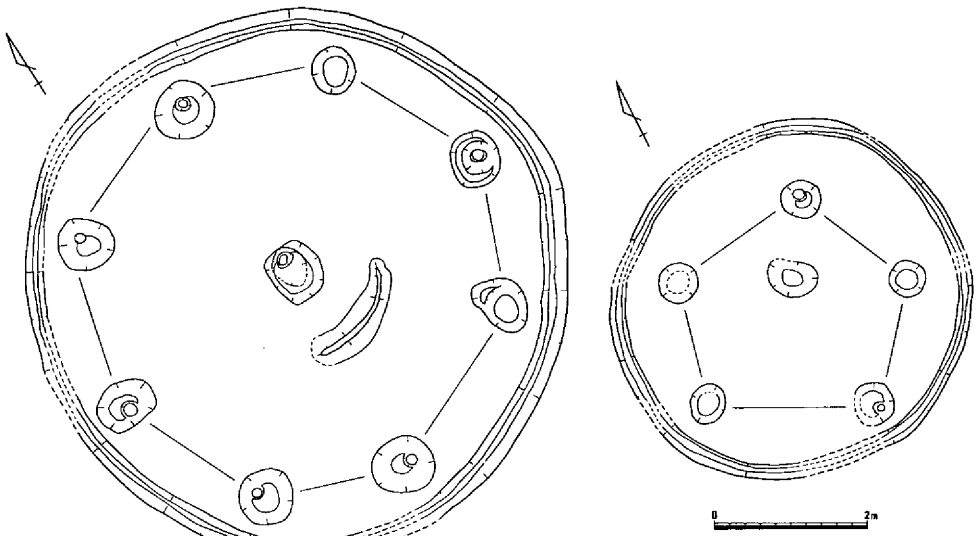
柱穴は、ほとんどが径60～70cmを計る比較的規模の大きいもので、断面には柱痕跡を残す柱穴と明らかに抜き取られたと考えられる柱穴が存在した。



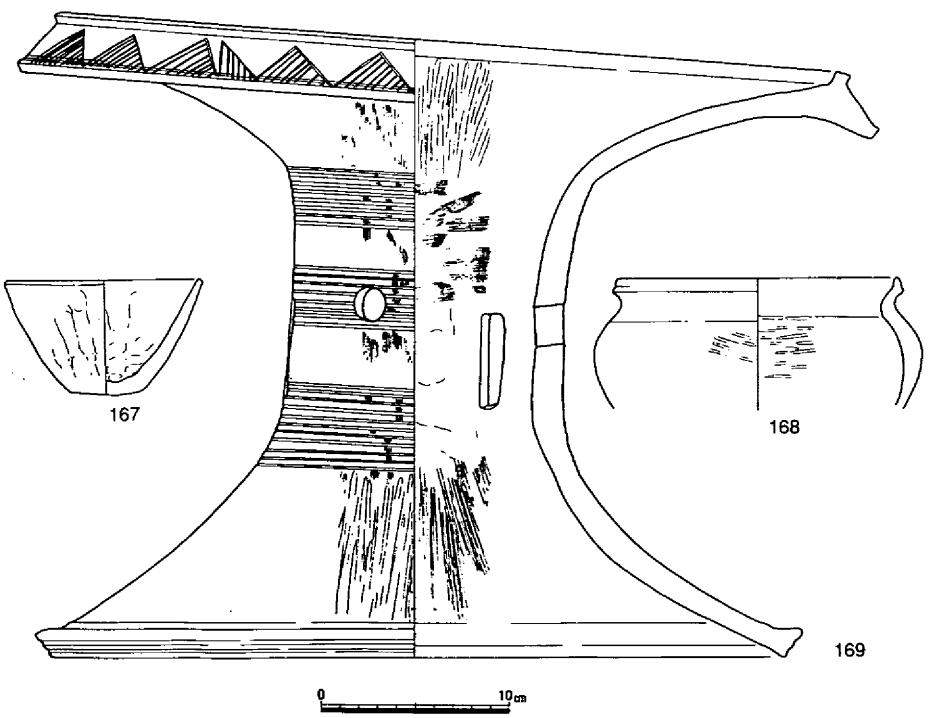
第57図　竪穴住居22（1/80）

竪穴住居22Bは、竪穴住居22Aの床面除去後、ただちに平面で肩口が検出された。規模は、東西5.10m、南北4.60mを測り、平面円形が確認された。床面からは、5本の柱穴とその中央部に長袖長70cm、幅43cmの中央穴が確認されたが、土壙との切り合いにより明確な状態でではなかった。

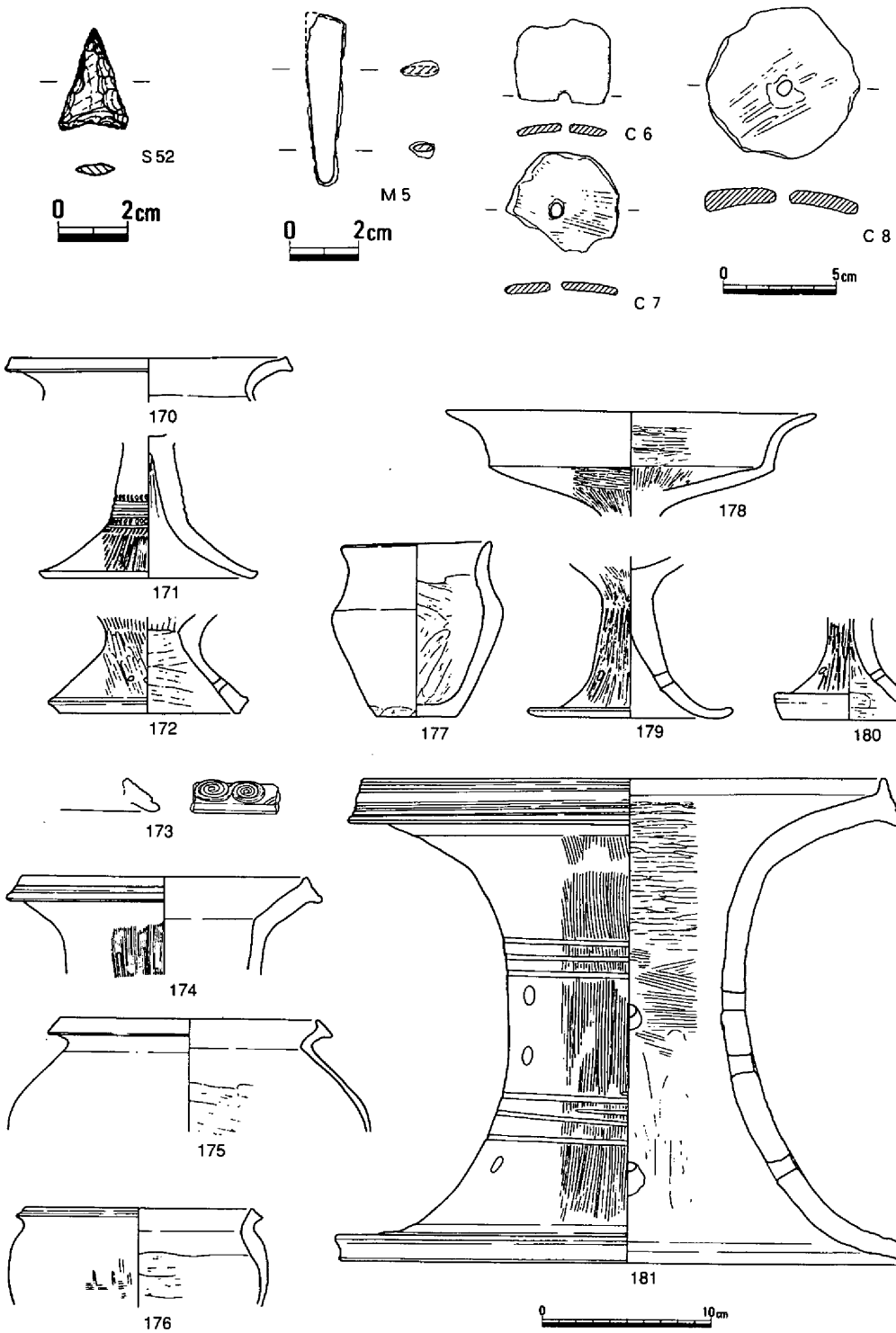
出土遺物は、おもに竪穴住居22Aの床面に近い位置で土器が面的な堆積状況を呈して検出された。検出された器種は器台が最も多く特徴的であるが、その他に壺、甕、高杯、鉢等も確認



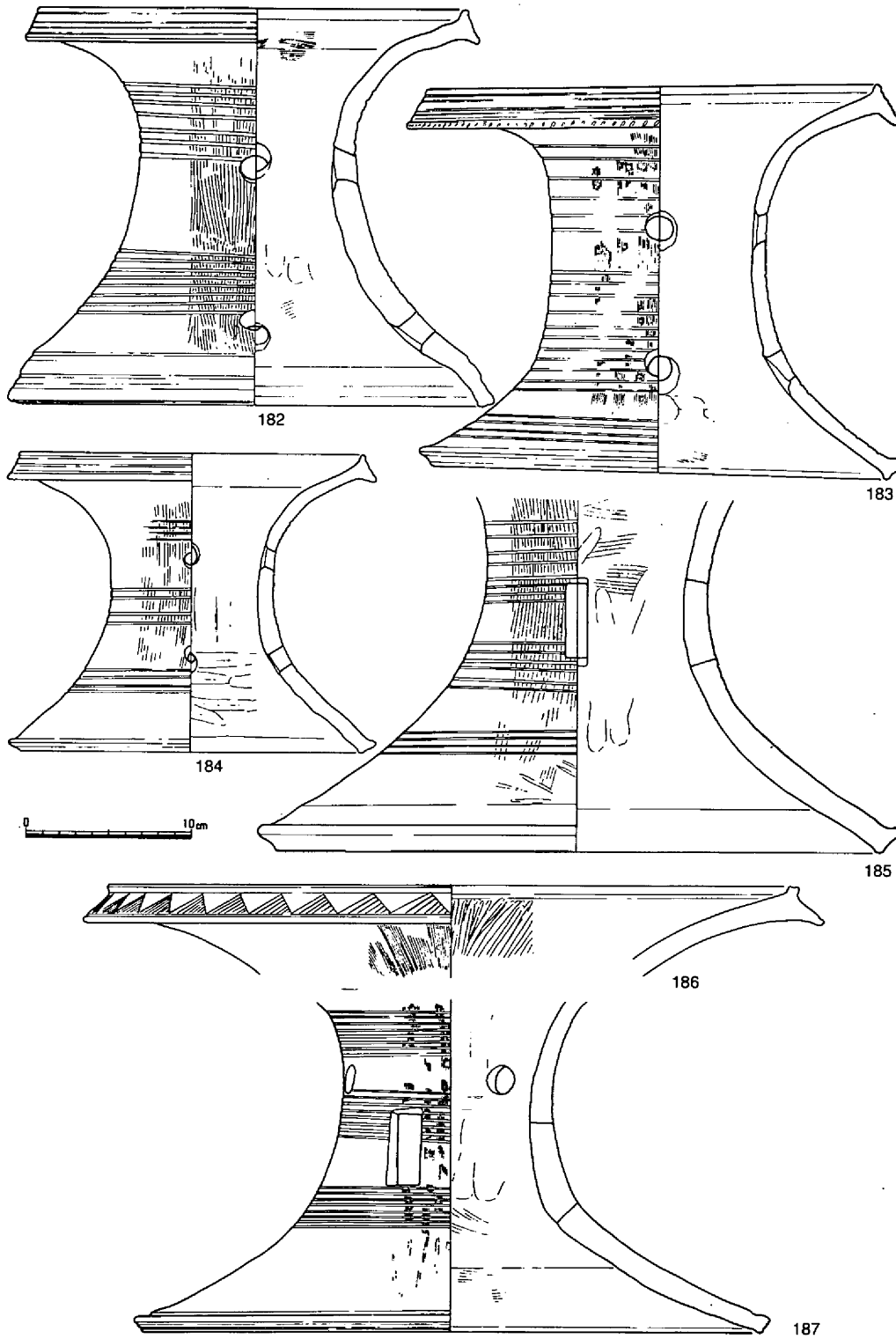
第58図　竪穴住居22Ａ（左）・22Ｂ（右）（1/100）



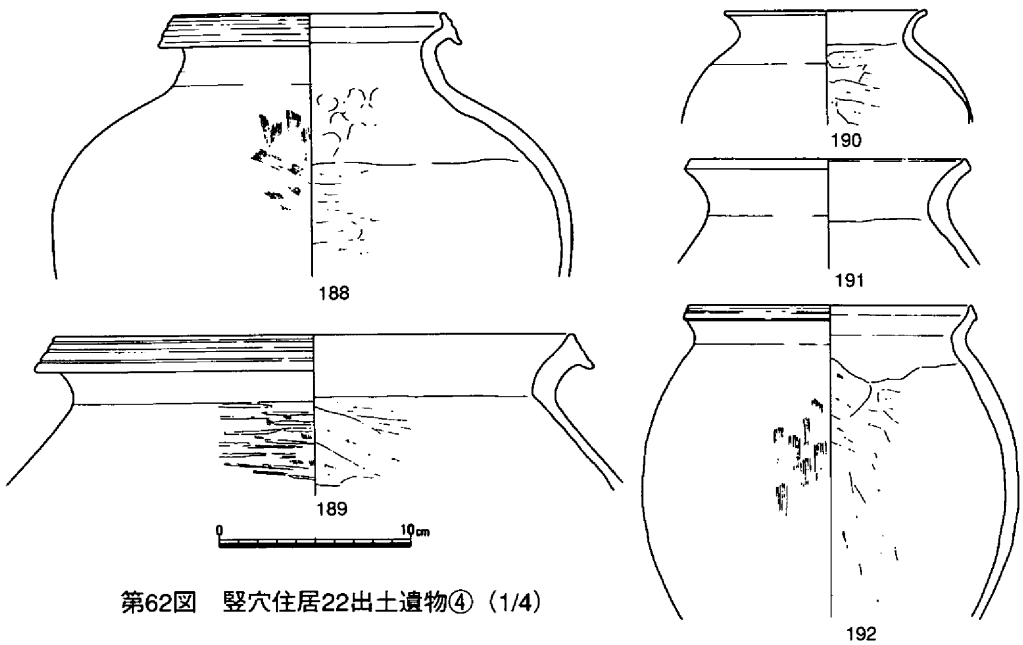
第59図　竪穴住居22出土遺物①（1/4）



第60図　竪穴住居22出土遺物②（1/2・1/3・1/4）



第61図　竪穴住居22出土遺物③（1/4）



第62図　竪穴住居22出土遺物④（1/4）

されている。また、土器以外にも石鏃、鉄器、土製紡錘車等があり、なかでも鉄器M５は製品とは考えられず未製品もしくは鉄器製作過程での廃鉄材の可能性も考えておきたい。

時期は、土器編年により弥生時代後期前半に比定されよう。

竪穴住居23（第24・63・64図、写真図版112）

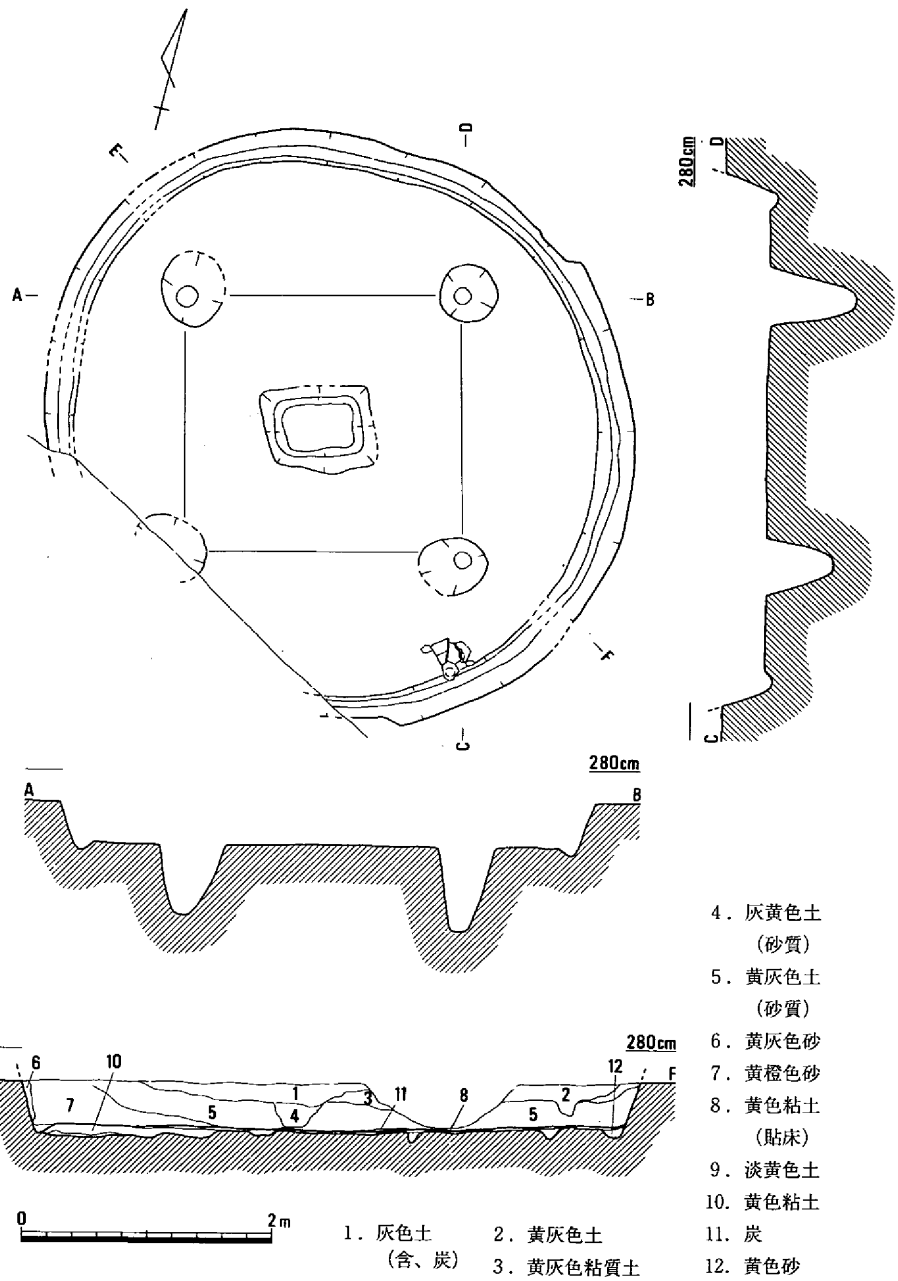
７Ｂ区において竪穴住居22Ａに北側の一部が切られ、南側は調査区外に一部がかかった状態で海抜2.55ｍで検出された。床面は、平面検出面から約40㎝下層において検出され、そこからは柱穴、壁体溝、中央施設等の存在が確認された。

柱穴は、４本が芯心距離2.20ｍをもって位置し、それぞれに径40～50㎝で深さ50㎝以上の規模を有するものであった。

中央施設としては、４本の柱穴のほぼ中央部にあって、柱穴に平行した状態での平面長方形を呈する土壙が１基検出された。規模は長軸長90㎝、幅70㎝を測った。ただし、この周辺において面的な状況での被熱および炭の広がりは確認されなかった。

出土遺物としては、床面から土器が少量と銅鏃が１点検出された程度であった。土器は、甕、高杯、鉢の器種が見られたが、いずれも小片であった。銅鏃はすでに面としては遺存せず、僅かに形状が推測される程度のものである。

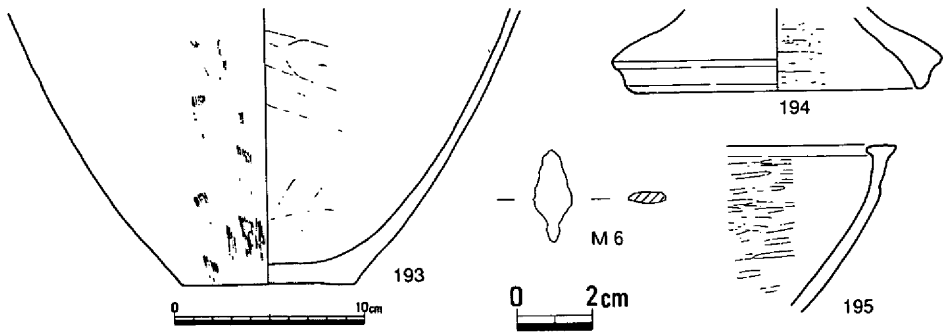
住居の時期としては、土器の特徴が上東・鬼川市Ⅱ併行期として理解されることで、弥生時代後期前半に比定して差支えないものと考える。（島崎）



第63図　竪穴住居23（1/60）

竪穴住居24（第24・65・66図）

７Ｂａ区、竪穴住居22の東に位置し、住居の北東部は調査区外に延びており、南西の一部を土壙92に切られている。平面形態は不整円形を呈し、規模は径3.45m、深さ15cm、床面の海抜高2.45mを測る。住居内には主に暗灰茶色の粘質土が堆積していたが、上層の暗茶灰色粘質土

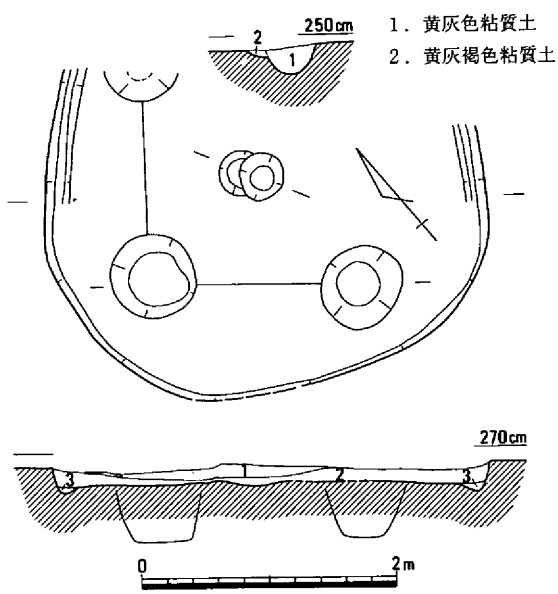


第64図　竪穴住居23出土遺物（1/4・1/2）

中には住居中央に土器溜りが形成されていた。壁体溝は住居北部で検出され南部においては判然としなかったものの、巡っていたものと推定される。主柱は４本と考えられるが、内３個を検出した。柱穴は径約70cm、深さ45cmを測り、住居の規模に対しやや大きく、また、住居壁に近接して掘られている。住居内には中央施設は確認されず、中央穴のみを検出した。中央穴は径35cmを測るが深さは約20cmと浅く、また、穴内に炭、焼土などが混入する堆積土はなく、他の住居のそれとは様相が異なっていた。

遺物はミニチュア鉢198が床面から、甕201が覆土下層から、他は上層土器溜りから出土している。長頸壺196は頸部がやや上方に開き、沈線は螺旋状に施されているもののその間隔は広い。甕は口縁端部に面をもつ201、肥厚し、凹部を形成する202、凹線をもつもの199・200などが出土している。また、203は器台と考えられ、204は大型のものである。

以上、当住居は床面遺物および上層遺物から上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶されたものと考えられる。

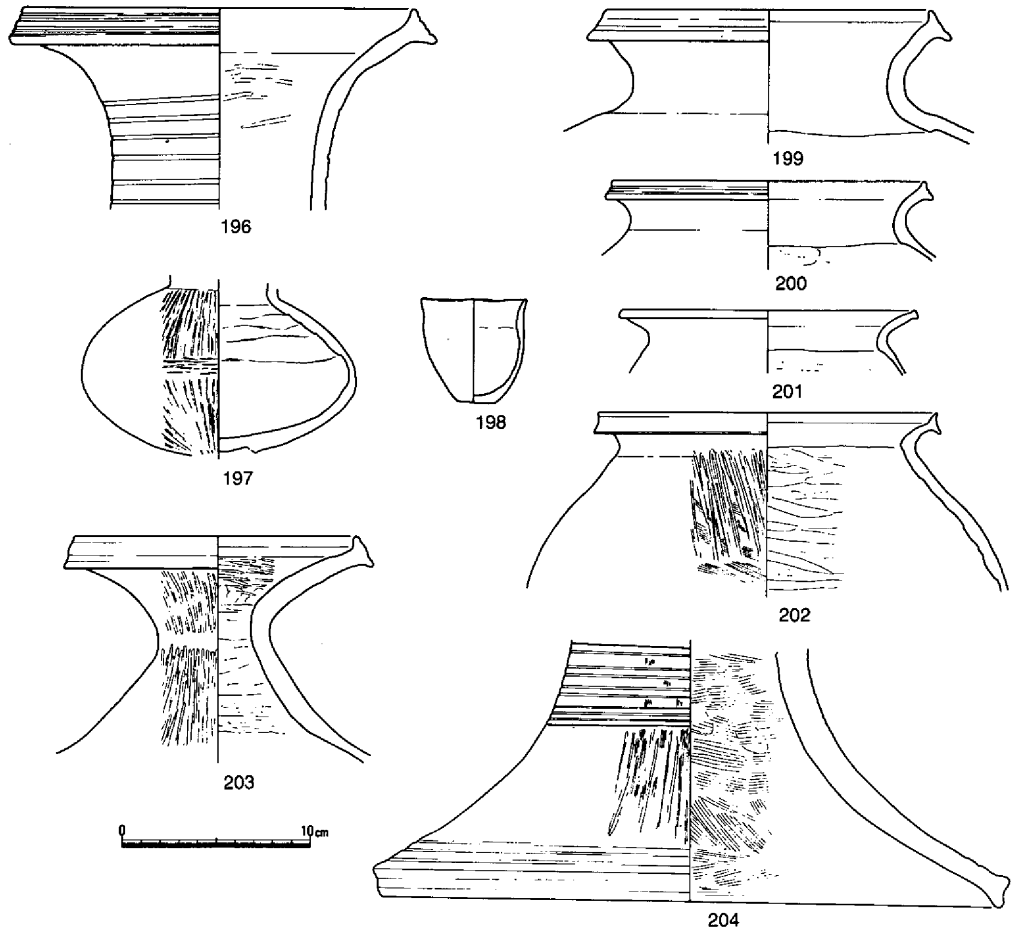


1．暗茶灰色粘質土　2．暗灰茶色粘質土　3．暗茶灰色粘質土

第65図　竪穴住居24（1/60）

竪穴住居25（第24・67図）

７Ｂ区の中央、竪穴住居23の東に位置し、住居の北部上面を土壙93・168に一部削平を受けている。平面形態は南北方向に長軸をもつ不整円形を呈す。



第66図　竪穴住居24出土遺物（1/4）

規模は長軸4.35m、短軸3.75m、深さ45cm、床面積10.8㎡床面の海抜高2.3mを測る。住居壁には断面から壁体溝の所在が確認されたが、平面的には検出し得なかった。主柱は４本で柱穴間の距離は南北2.9mに対し東西間のそれは約30cm短く、柱穴は菱形に配置されている。中央穴は径約40cm、深さ20cmを測り、前述の竪穴住居24同様小規模なものであるが底には厚さ数cmの炭が堆積していた。中央穴の周囲には西側が一部途切れる中央施設が作られており、楕円形の凹地には炭が堆積していた。なお、北西隅の小土壙は貼床直下から検出され、ここより転倒した甕209片の胴部が水平に切断された状態で出土したことから当住居はこれを削平し、建てられたものと判断される。

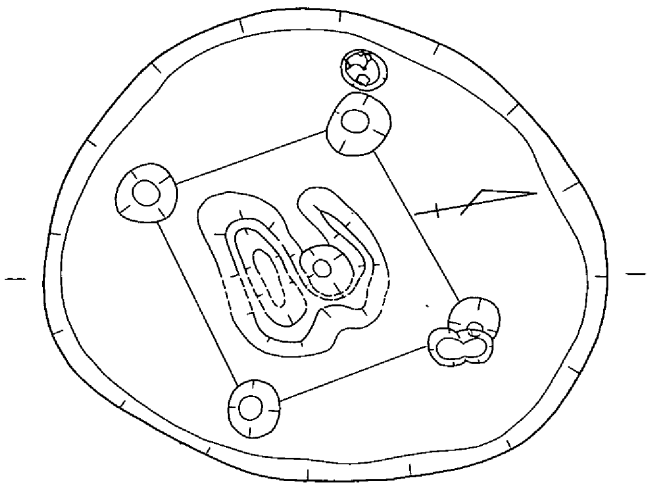
住居に伴う遺物205～208はいずれも覆土中から出土したもので、壺205の口縁端部は上方および下方に拡張し端面に凹線を施している。甕207は下方に、208は上方に口縁端をつまみ出している。甕209は口縁端部が僅かに肥厚し、凹みを形成しており、肩の張りのない胴部外面は細

かな繊維状工具による調整がされている。

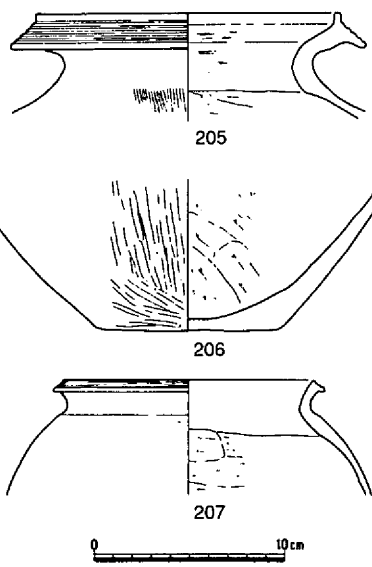
以上、当住居は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶したものと考えられる。

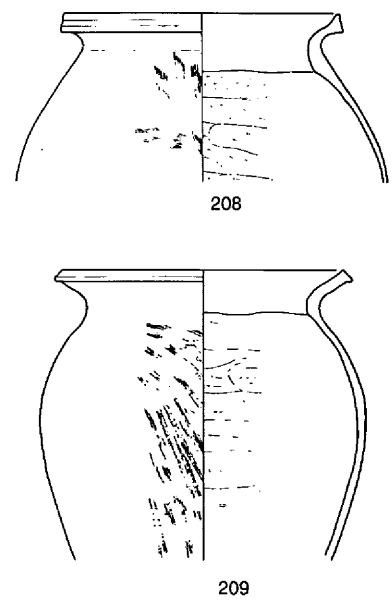
竪穴住居26（第24·68·69図、写真図版112·169·173）

８Ｂｄ区に位置し、一部掘立柱建物６に切られ、竪穴住居４を切って検出された、ベッドをもつ住居である。南東部は調査区外に延びているが、平面形態は楕円形を呈す。規模は推定６ｍ×5.7ｍ、深さ55㎝、床面積推定25.5㎡、床面の海抜高2.0ｍを測る。ベッドは幅45～80㎝、床面との段



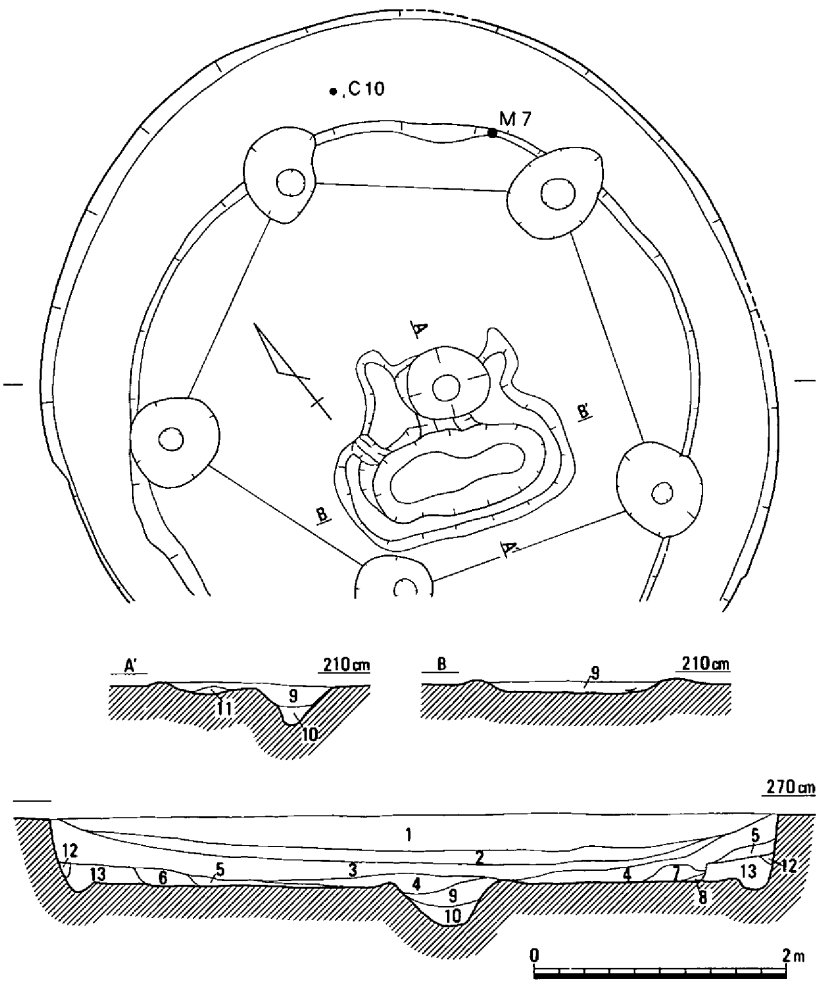
1．茶灰色粘質砂
2．淡灰茶色粘質土
3．茶灰色粘質砂（混、茶灰色粘質土）
4．茶灰褐色粘質土
5．黄灰褐色粘質土
6．淡茶褐色微砂
7．淡茶灰色粘質土
8．褐灰色微砂
9．灰褐色微砂
10．炭層
11．淡茶褐色粘質土
12．淡茶灰色微砂
13．淡茶褐色粘質土





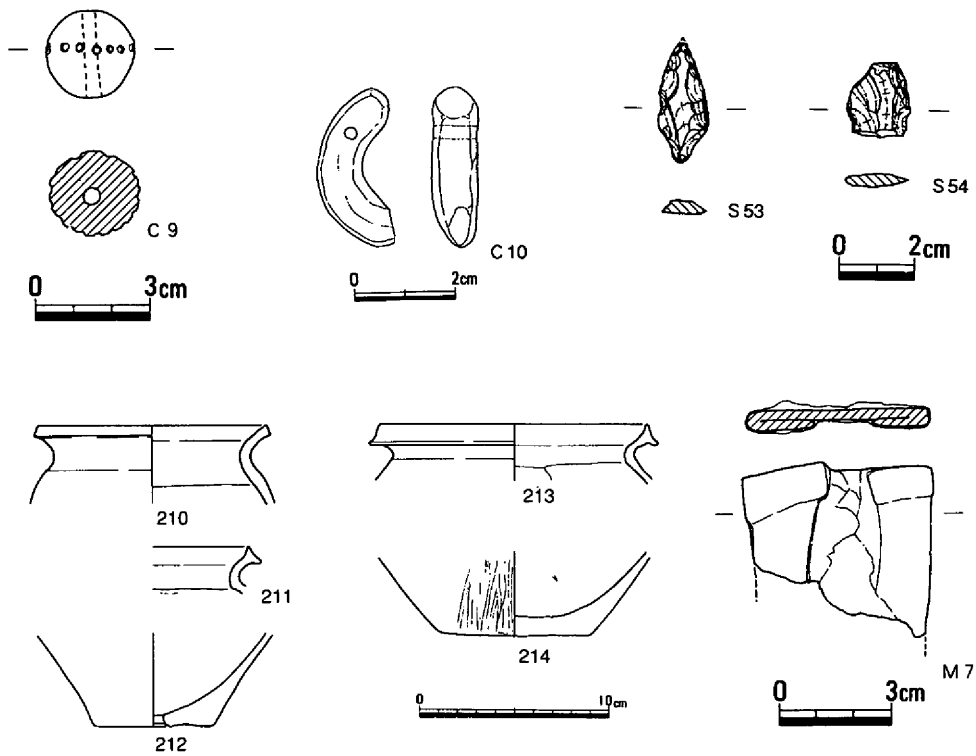
第67図　竪穴住居25（1/60）・出土遺物（1/4）

差は約15cmを測る。また、断面から明らかなようにベッドの壁際には壁体溝が確認されており、この堆積土には炭が多含することから、住居壁には板材が巡らされていた可能性が強い。主柱は５本で柱根部はいずれもベッド下端内側に配置されているが、南西隅のそれは想定されるベッド下端からかなり内側に入った位置になるものと思われる。中央穴は径60cm、深さ30cmを測り、肩口には炭面が確認され、10層内も焼土、炭が含まれるものであった。中央穴の南からは



1．淡茶褐色粘質土
2．茶褐色粘質土
3．灰茶褐色粘質土
4．茶灰褐色粘質土
5．黄灰色粘質土（混、炭）
6．黄褐色粘質土（含、炭多）
7．赤色焼土塊
8．灰色粘質土
9．暗黄褐色粘質土
10．暗茶灰色粘質土
11．暗茶灰色粘質土（含、焼土多）
12．暗灰褐色粘質土（含、炭多）
13．茶灰褐色粘質土

第68図　竪穴住居26（1/60）



第69図　竪穴住居26出土遺物（1/2・2/3・1/4）

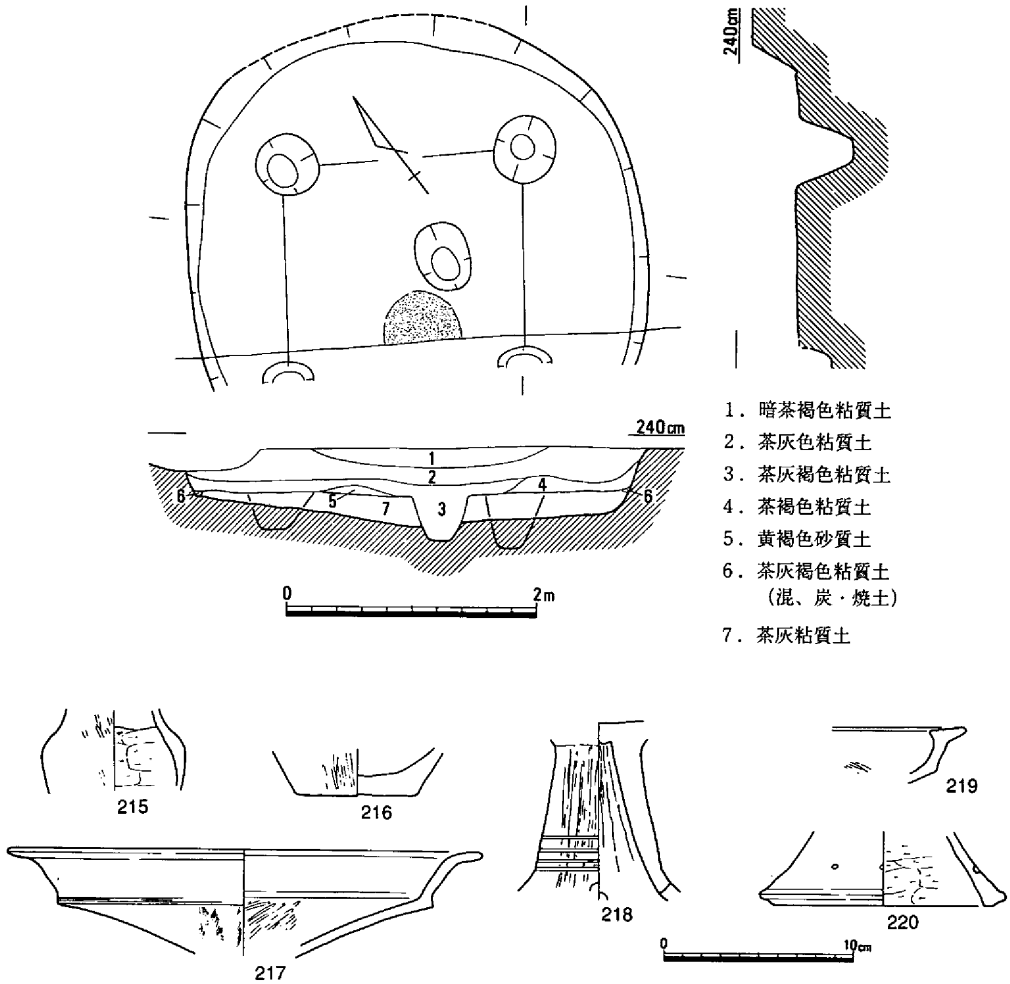
南辺の柱穴に平行して中央施設が検出され、楕円形の凹地面には炭が堆積するとともに、中央部約40×20cmの範囲に焼土面が確認された。

遺物は覆土上層から甕210、石鏃S53・S54、覆土下層から甕210・211、床面から勾玉C10、鉄製品M7、楕円形の凹地から壺214、北端柱穴から装飾付土玉C9が出土している。甕は口縁端部に面をもつ210と上下につまみ出された211・213があり、212は焼成後穿孔された甑である。214は壺底部で外面刷毛調整後ヘラミガキ、内面ヘラケズリされている。C9の中央には径2㎜弱の円棒状のものにより穿孔されている。最大幅5cmのM7は袋状鉄斧が押し潰された状態にも窺えるが、左右の折り目は明瞭で、頭部から幅約1cmは帯状にやや厚く作られていることや、折り曲げられた内側の稜線が内湾気味に走ることからも袋状鉄斧とは異なると思われる。器種は不明であるが工具類の一部であろう。

以上、当住居は上東・鬼川市Ⅱ併行期に火災を受け焼失したものと考えられる。

竪穴住居27（第24・70図）

8Bd区、竪穴住居26の南東に位置し、住居北部上層を中世溝に削平を受け、南東部は調査区外に延びる。平面形態は隅丸方形状の不整円形を呈す。規模は短軸3.65m、深さ40cm、床面積推定10.2㎡、床面の海抜高1.9mを測る。床面下には厚い貼床造成土（第7層）を確認すると



第70図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物（1/4）

ともに、住居床面隅には平面では図示し得なかったが、断面から小規模な壁体溝の巡っていたことが確認された。主柱は４本で、柱穴間の距離は1.7m前後を測る。中央穴は径55×40cm、深さ35cmを測り、埋土下層は炭・焼土が多含するものであった。また、中央施設は確認されなかったものの、中央穴の南東から径60cmの範囲に厚さ１cm余りの焼土面を検出している。遺物はいずれも破片で、高杯217・218が北西の柱穴から、他は覆土中から出土した。215はミニチュアの壺である。高杯217の口縁下端には凹線が走る。219・220は古い様相を示す高杯である。

以上、当住居は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶されたものと考えられる。　（江見）

竪穴住居28（第24・71図）

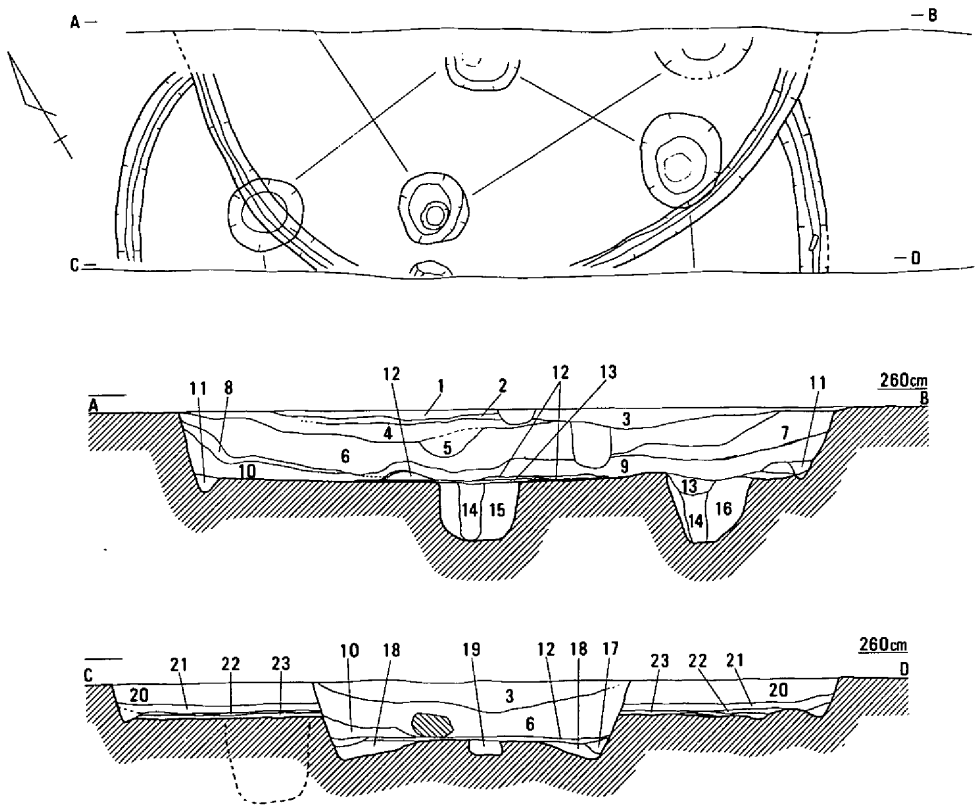
９Ｂ区南端部において北側が新矢部橋の基礎によって切られ、南側が調査区外にのびること

で検出できたのはわずかに幅２ｍの調査可能範囲内に遺存するのみで部分であった。

住居は、検出面から床面まで比較的残りの良いもので、深さ約50cmを測った。床面からは、柱穴２本と南側に作業台としての石の存在が知られたにすぎない。柱穴は、径60cm程度の掘り方を見せるもので、断面中からは柱痕の存在が確認された。

出土遺物としては、まったく検出できなかった。したがって、時期判断の根拠は住居の形態と周辺に所在する他の遺構との関係に委ねるしかない。これによると住居には、弥生時代後期前半への位置づけが妥当であると推考する。

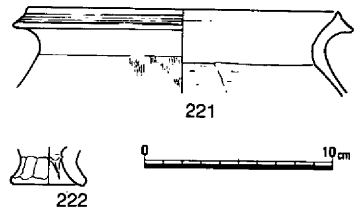
竪穴住居29（第24・71・72図）

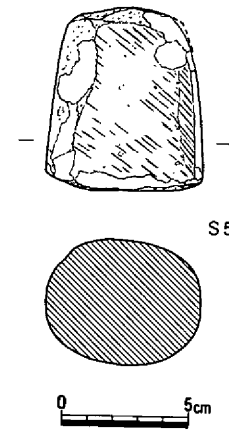


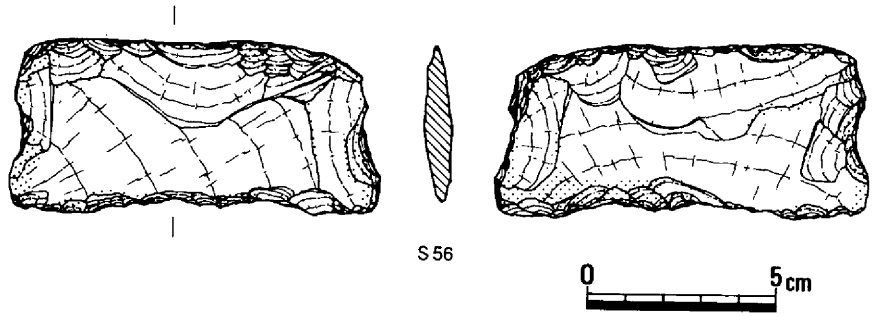
1．灰色土
2．緑黄色土（粘土）
3．灰茶色土
4．暗灰色土
5．暗茶色
6．暗灰茶色土
7．灰黄色土（含、黄色土塊・炭）
8．黄灰色土（含、黄色塊）
9．灰黄色土（含、炭、黄色土塊多）
10．灰黄色土
11．黄灰色土
12．炭層
13．焼土層
14．茶色土に黄灰色（含、粘土塊）
15．黄灰色粘土
16．黄色土砂質
17．灰茶
18．黄色粘質土
19．暗茶色土
20．茶灰色土
21．灰茶色土
22．茶色土
23．黄色粘土

第71図　竪穴住居28（上）・29（下）（1/60）

９Ｂ区において南側約半分が調査区外に、また北側を新矢部橋の基礎、さらに竪穴住居28によってほとんど切られた状態で検出された。床面には３本の柱穴の存在がかろうじて確認されたにすぎず、遺物も石包丁１点と蛤刃石斧を転用した敲き石１点の他、土器が２点小片で検出された程度である。したがって、住居構造の詳細については言及できない。







第72図　竪穴住居29出土遺物（1/4・1/3・1/2）

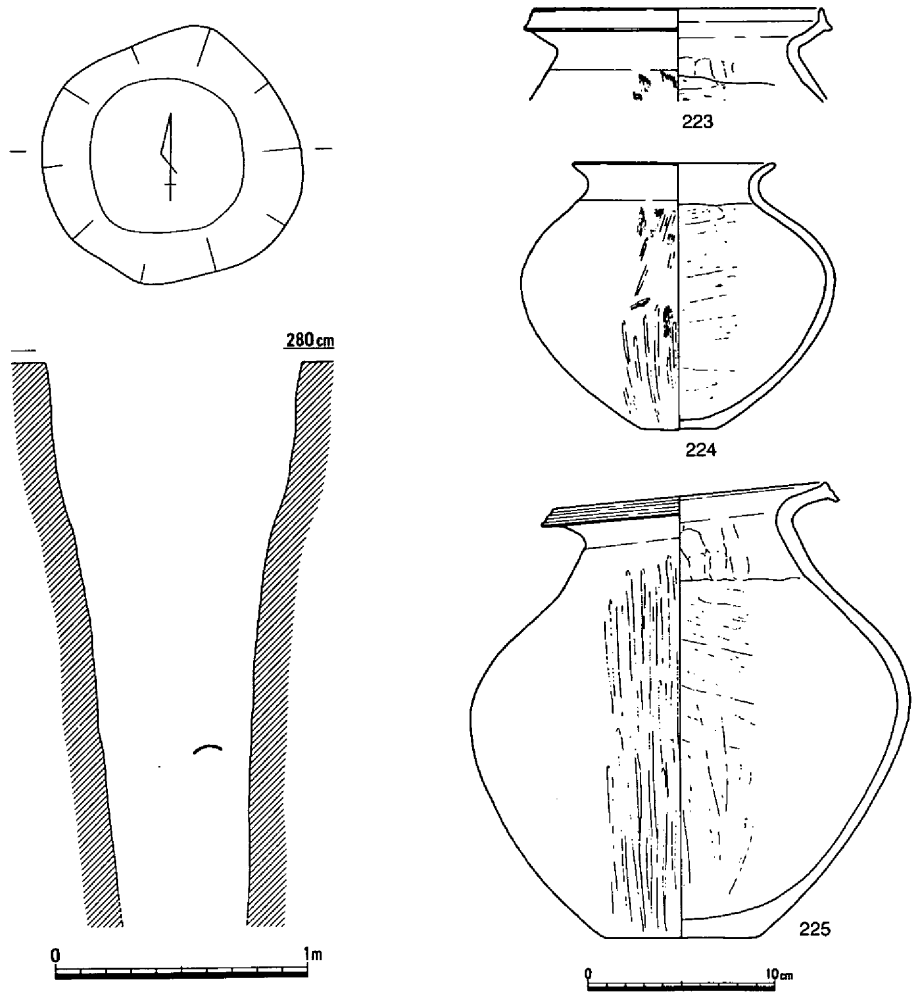
時期は、２点の土器から弥生時代後記前半に位置づけられよう。　（島崎）

(2)　井戸

井戸１（第24・73図）

５Ｂｂ区、竪穴住居19の東に位置する当遺跡では唯一の井戸である。平面形態は径約１ｍの不整円形を呈す。検出面から約60㎝程はやや内湾気味に下がり、以下底部に向かいほぼ直線的に掘り込まれ、徐々に径を減じさせている。埋土は茶灰褐色および灰色の上下２層に大別されたが、上層は基盤に近似しており僅かに炭粒が混入することでようやく判断できたもので、短期間に埋め戻されたものと推定される。なお、井戸は海抜0.6ｍまでを確認したが、それ以下は湧水のため明らかではない。

遺物は海抜１ｍ付近から出土しているが量的には少なく、また、壺224・225などは完形に復元されたもののいずれも破片である。口縁に凹線をもつ壺225に対し、口縁端部に凹部を形成し、上方にやや拡張される甕223はやや後出の可能性もあるが、いずれにせよ上東・鬼川市Ⅱの範疇に入るものと考えられる。　（江見）



第73図　井戸１（1/30）・出土遺物（1/4）

(3)　土壙

土壙５（第24・74図）

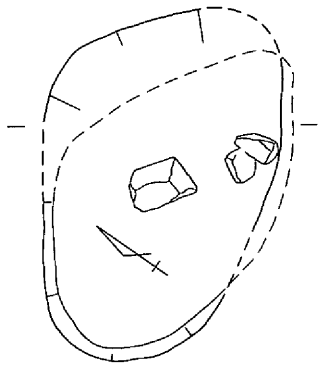
２Ｂａ区で検出された東西1.48m、南北1.00mを測り、平面不整円形を呈する土壙である。壙内断面不整形で、周辺に所在する袋状土壙とは異なり壙底も明瞭ではない。壙内からは、20～30cm大の角礫が検出されたが、出土遺物の共伴は確認されなかった。したがって時期的には、判断材料を欠くため明確には出来ないが、一応壙内への埋積土の状況等から弥生時代後期前半への位置づけがなされよう。

土壙６（第24・75・76図、写真図版113）

２Ｂａ区において古墳時代前半の竪穴住居51下層の海抜2.75mで検出された。長軸長1.26m、

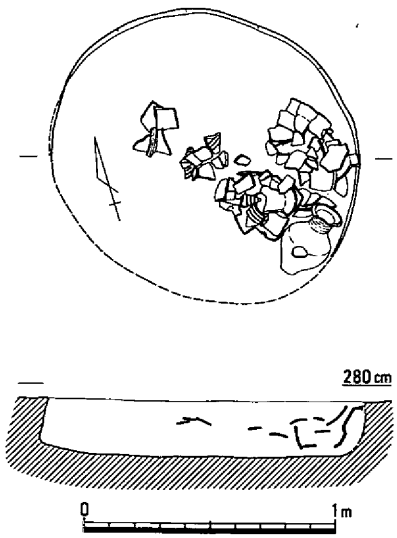
幅1.10ｍを測り、平面不整円形を呈する。土壙は、海抜2.75ｍでの平面検出面から約22㎝下層にほぼ水平面をもった壙底と、壁は垂直もしくは逆斜傾を有することで本来断面袋状を呈するものと推測する。

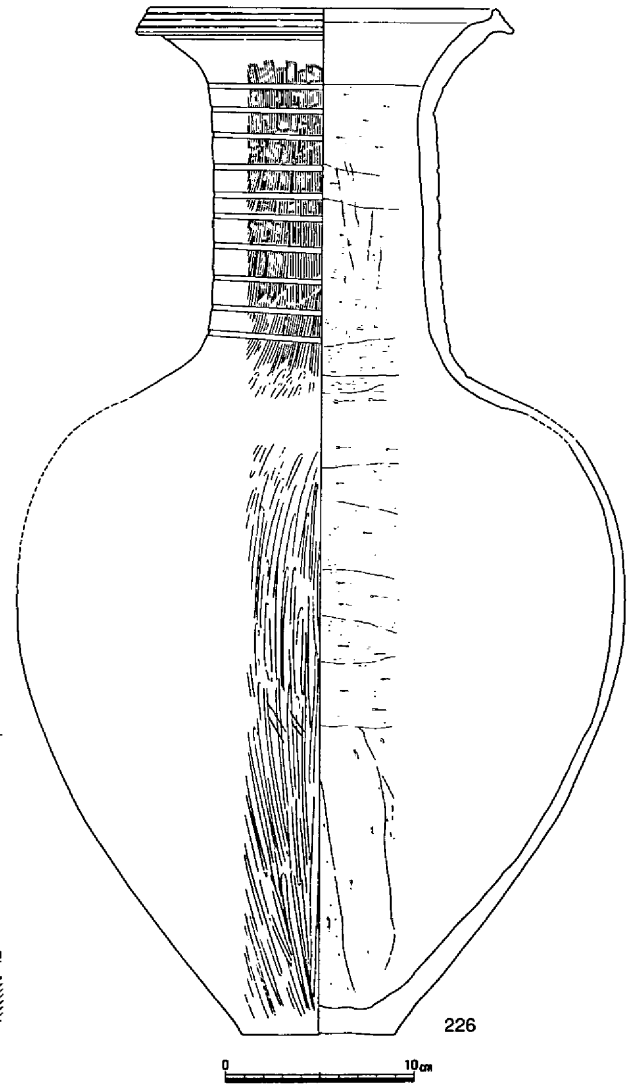
出土遺物には、壺、甕を中心に上東・鬼川市Ⅱ併行段階の土器が検出された。壺は、いずれも長頸で頸部は垂直もしくは逆「ハ」字形を呈する。甕231は、肩部外



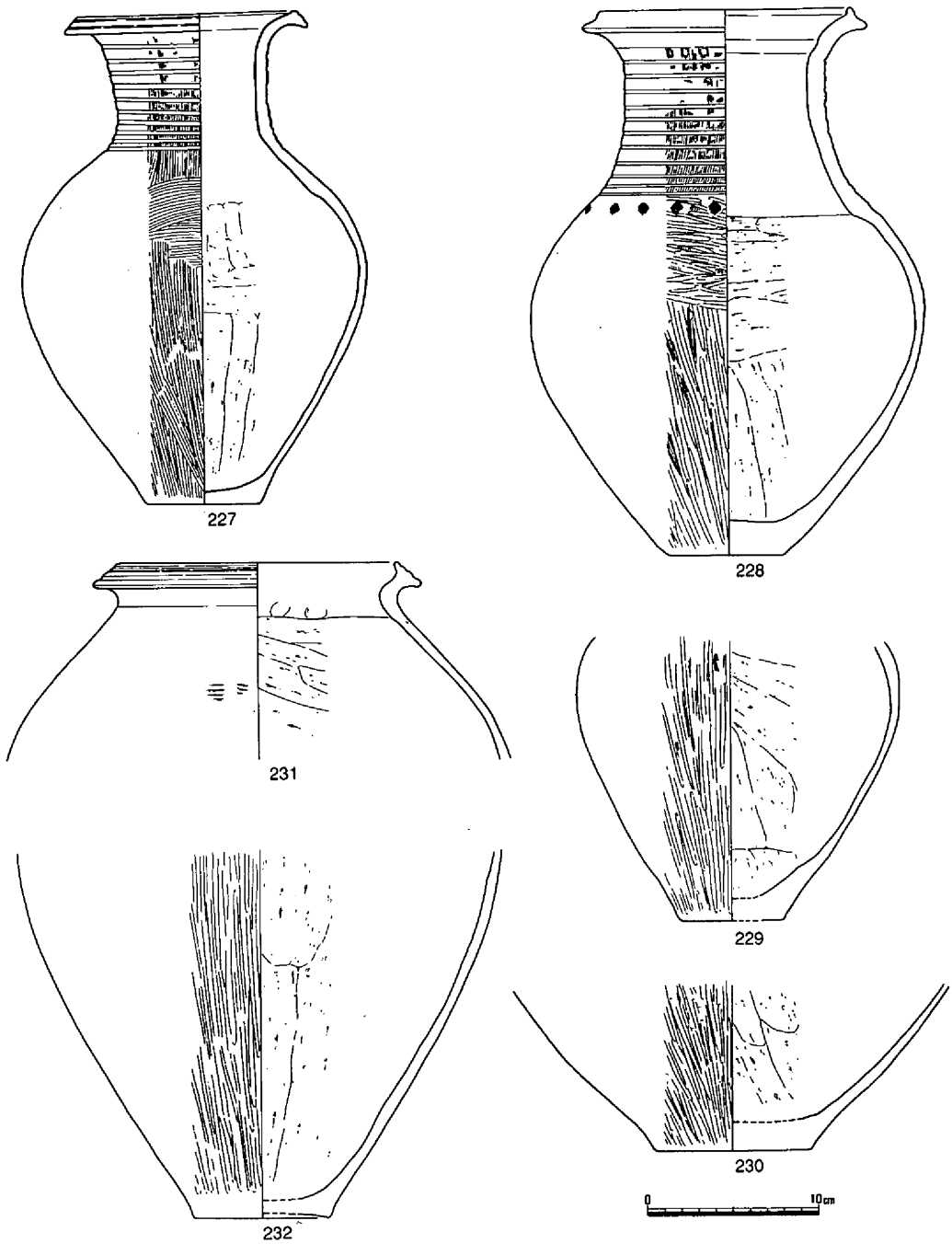
1．黄色砂質土　　4．灰黄色砂質土
2．黄灰色砂質土　5．黄色粘土
3．暗灰色砂質土　6．黄色粘土
（含、炭）

第74図　土壙５（1/30）





第75図　土壙６（1/30）・出土遺物①（1/4）



第76図　土壙６出土遺物②（1/4）

面に整形段階でのタタキ痕跡を残す。

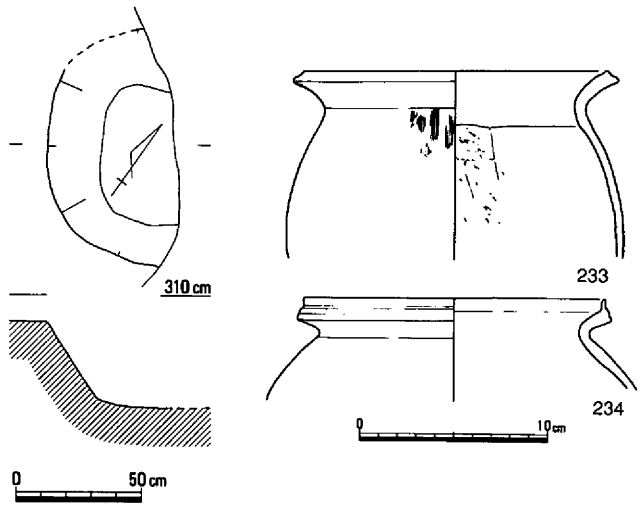
時期は、土器が上東・鬼川市Ⅱ併行期と考えられることで、弥生時代後期前半に比定されよう。

土壙７（第24・77図）

２Ａ拡張区において弥生時代後期前半の竪穴住居８によってその北東側約１／２が切られた状態で検出された。状況から平面円形であったことが推測される。

出土遺物としては、土壙埋積土中から、甕２点の土器小片が散見されたにすぎない。

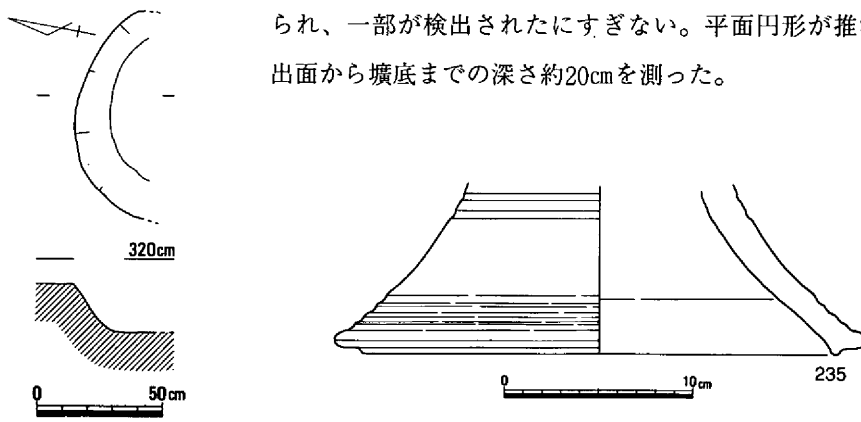
時期的には、弥生時代後期前半に比定されよう。



第77図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙８（第24・78図）

２Ａ拡張区に所在し、南側が古墳時代前半の竪穴住居56に切られ、一部が検出されたにすぎない。平面円形が推測され、検出面から壙底までの深さ約20cmを測った。

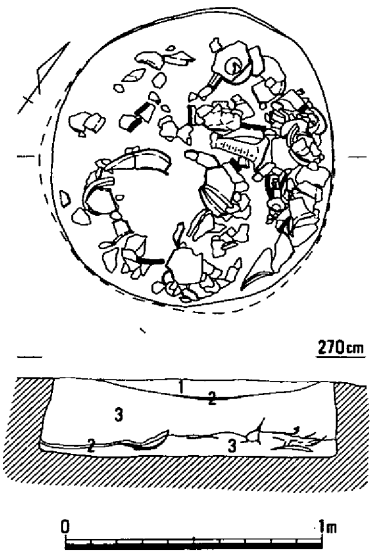


第78図　土壙８（1/30）・出土遺物（1/4）

出土遺物には、器台が１点検出されたのみで判然としないが、時期的には弥生時代後期前半の範疇に位置づけられよう。

土壙９（第24・79～81図、写真図版113）

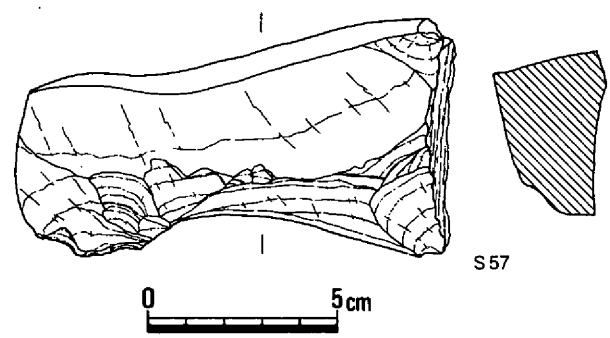
２Ｂａ区において古墳時代前半の竪穴住居51・52の下層、海抜2.65mで検出された。平面は、長軸長1.18m、短軸長1.09mの規模で円形を呈し、検出面からほぼ水平面を呈する壙底までの深さ約30cmを測った。壁は、断面垂直もしくは上位部にむけて胴部径を減少させるもので、本来は袋状を呈する土壙であったものと考える。

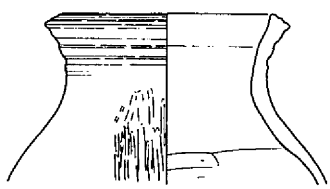


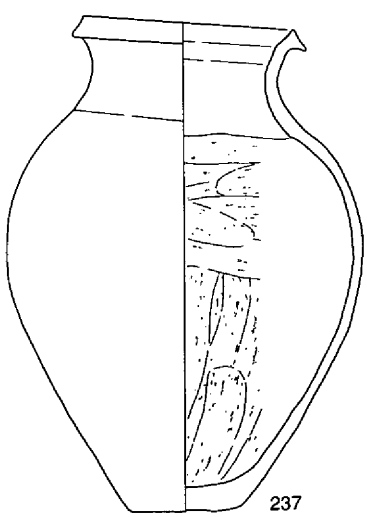
1．淡灰黄色土　2．炭層　3．灰黄色土

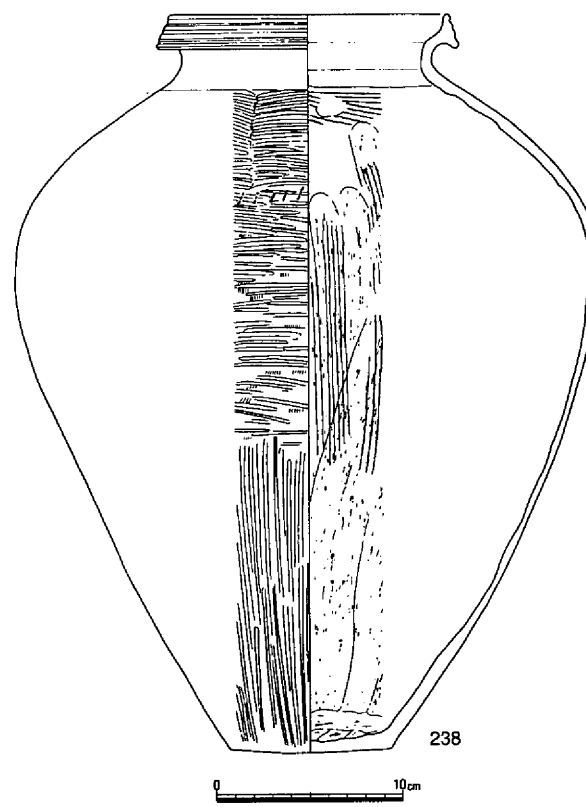
墳底には、比較的数多くの土器および石器の遺存が認められた。土器には壺、甕、鉢、高杯等の器種があり、いずれも上東・鬼川市Ⅰ併行段階に位置づけられるものである。

時期は、弥生時代後期前半に比定されよう。

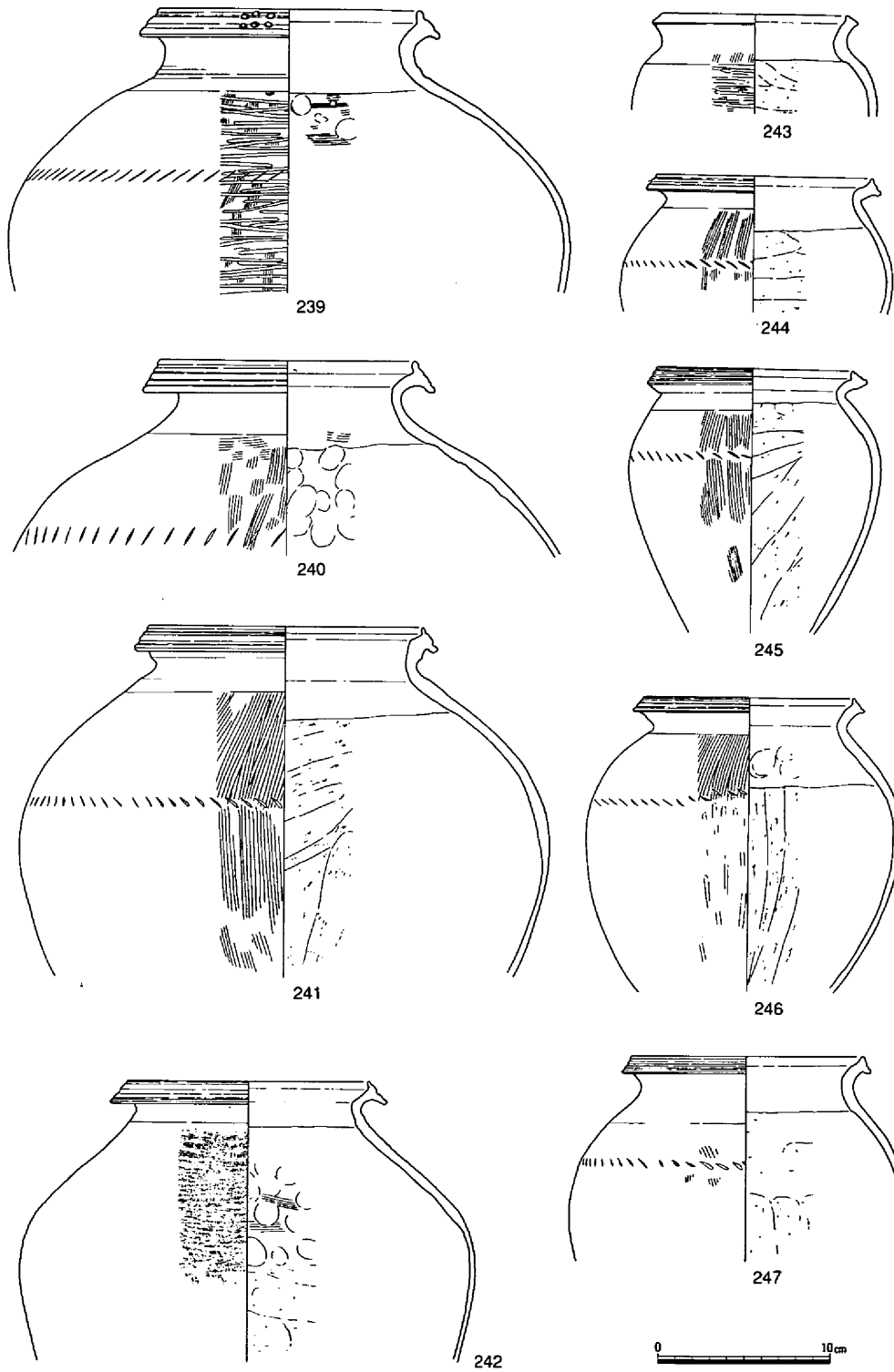




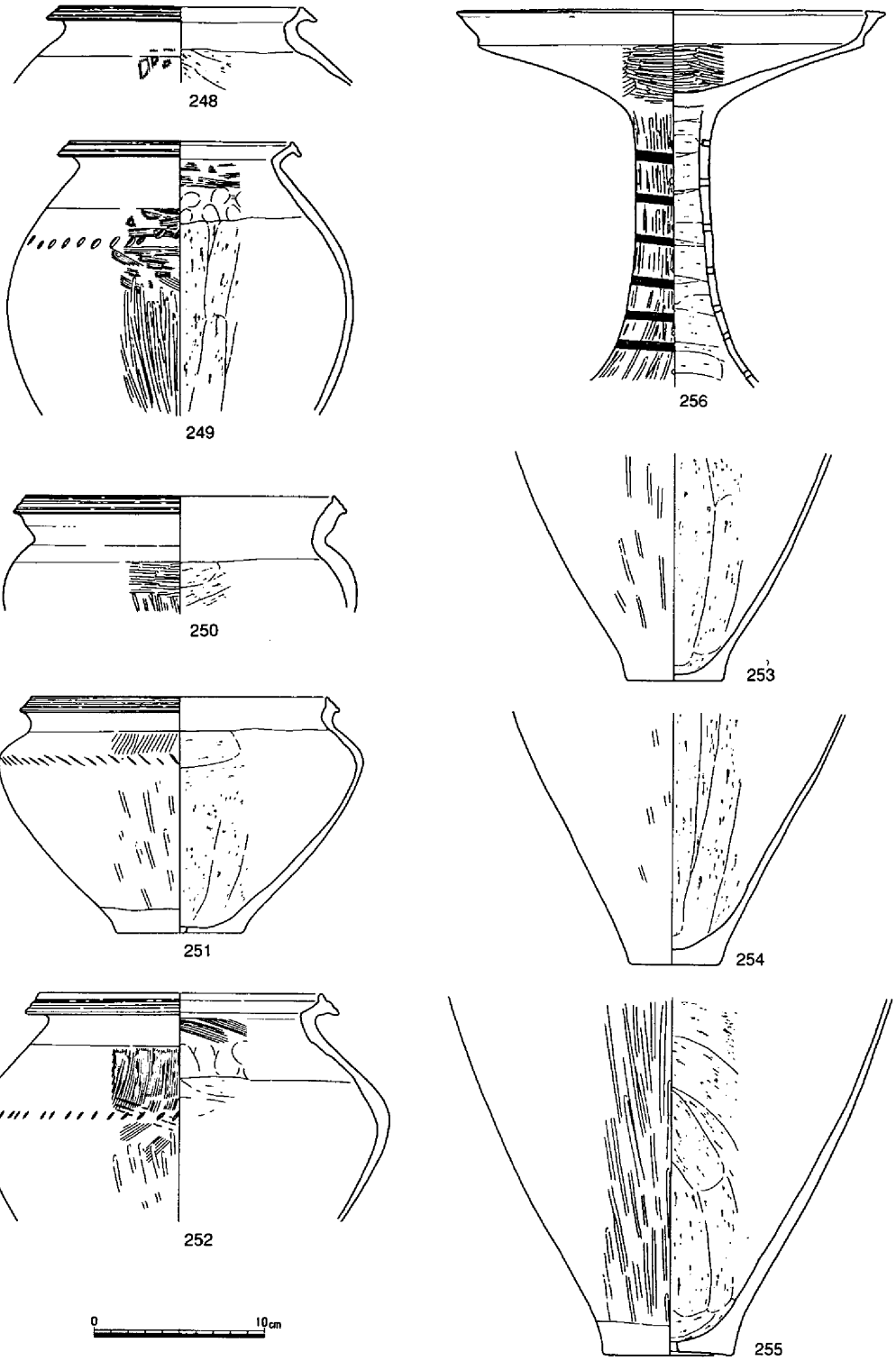




第79図　土壙９（1/30）・出土遺物①（1/2・1/4）



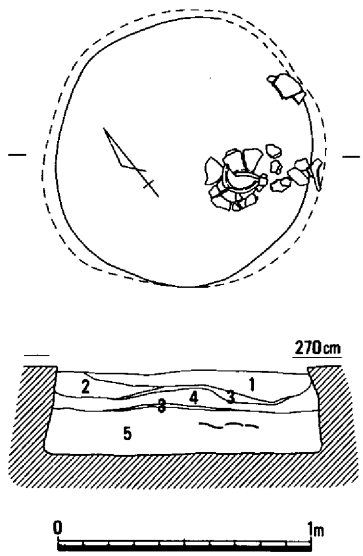
第80図　土壙９出土遺物②（1/4）



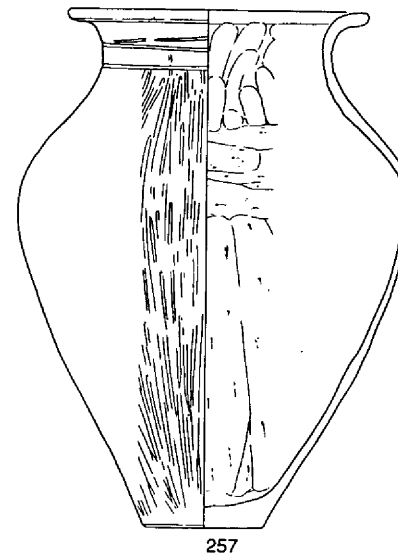
第81図　土壙９出土遺物③（1/4）

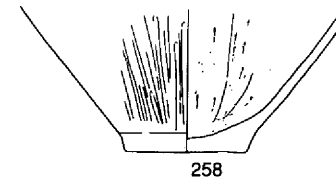
土壙10（第24・82～83図）

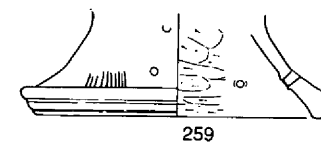
２Ｂａ区において古墳時代前半の竪穴住居51・52の床面下層の海抜2.65ｍで検出された。土壙は平面長軸長1.08ｍ、短軸長1.01ｍを測る円形で、検出面からの深さ31㎝と比較的浅いものであった。

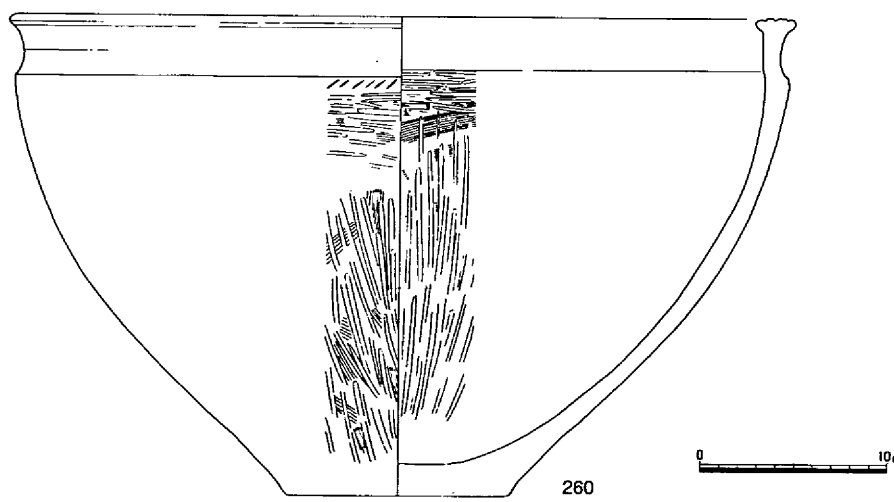


1．灰黄色砂　　4．暗灰茶色土
2．黄灰色砂　　5．灰黄色粘質土
3．炭層

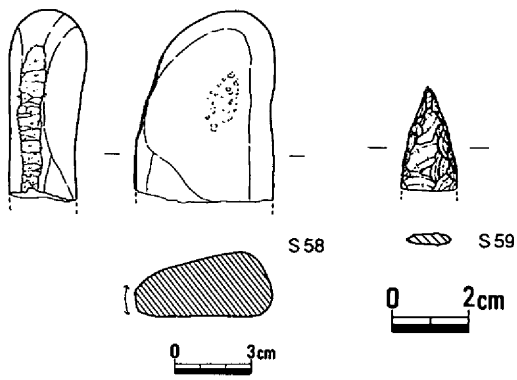




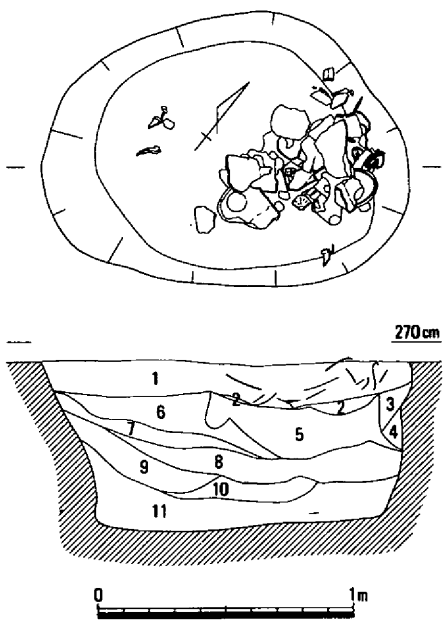




第82図　土壙10（1/30）・出土遺物①（1/4）



第83図　土壙10出土遺物②（1/3・1/2）



1．淡黄灰色砂質土
2．炭・焼土
3．黄灰色砂質土（混、灰色粘質土塊）
4．黄灰色砂質土
5．淡黄灰色砂質土（含、焼土・炭）
6．黄灰色砂質土（含、焼土・炭）
7．暗黄灰色砂質土（含、炭・黒灰色粘質土塊）
8．黄灰色砂質土
9．淡茶灰砂質土
10．淡茶灰砂質土（含、炭）
11．暗灰白色粘質土

第84図　土壙11（1/30）

土壙は、底部が水平で斜傾する壁を有する、本来断面袋状を呈する土壙であったことが知られる。壙内南東側の壙底近くには、土器の一括遺存が確認された。

土器は、少量ながら壺、甕、鉢等の器種が認められた。また、土器以外にも石鏃、敲石等の検出がなされた。

時期は、土器が上東・鬼川市Ⅰ式のものに類似することで弥生時代後期前半に比定されよう。

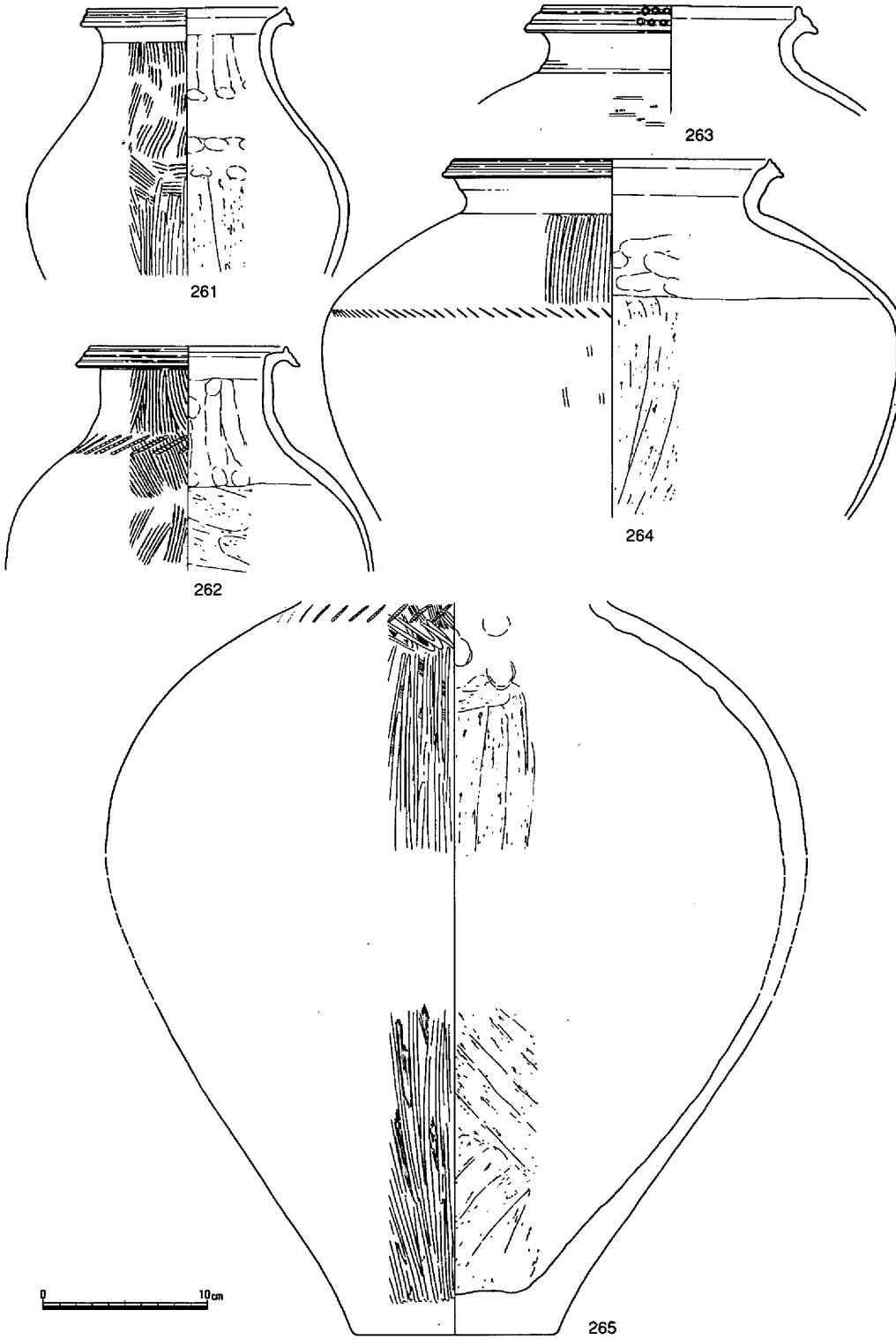
土壙11（第24・84～86図）

２Ｂａ区において上層が古墳時代前半の竪穴住居51・52によって切られ、土壙10の東約50cmに近接して所在した土壙である。

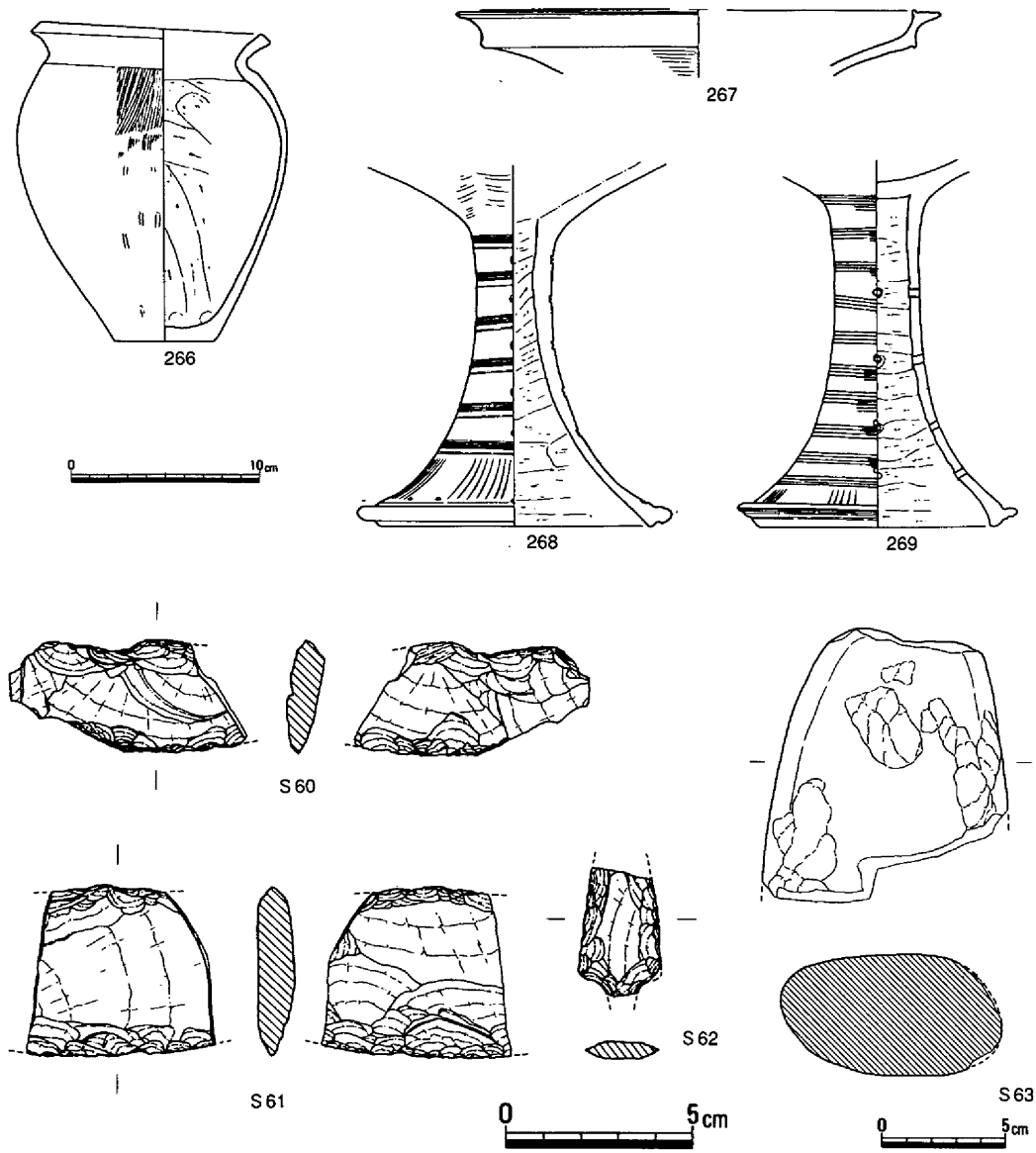
海抜2.65mで長軸長1.44m、幅1.09mを測る、平面不整楕円形を呈するもので、検出面から壙底までの深さ約67cmを測った。断面第１層には砂質土が比較的厚く堆積し、その下層の第２・５・６層には焼土塊および炭の包含が多く認められた。また第１層中の北東側には、一括して土器の堆積が確認された。

出土遺物としては、壺、甕、高杯等の土器の他に石鏃、石包丁、石斧等の石器類が見られた。壺は、長頸のものと短頸のものがみられ、長頸壺は頸部がおおむね垂直気味につくられ、またいずれの口縁部にも凹線文が施されていた。高杯は口縁端部が拡張傾向を僅かに示し始めた段階で、その脚部は長く内面へラケズリでしかも外面は線刻による沈線で文様が刻まれたものであった。

時期的には、上記した土器の特徴がいずれも上東・鬼川市Ⅰ式のものに類似することで、



第85図　土壙11出土遺物①（1/4）



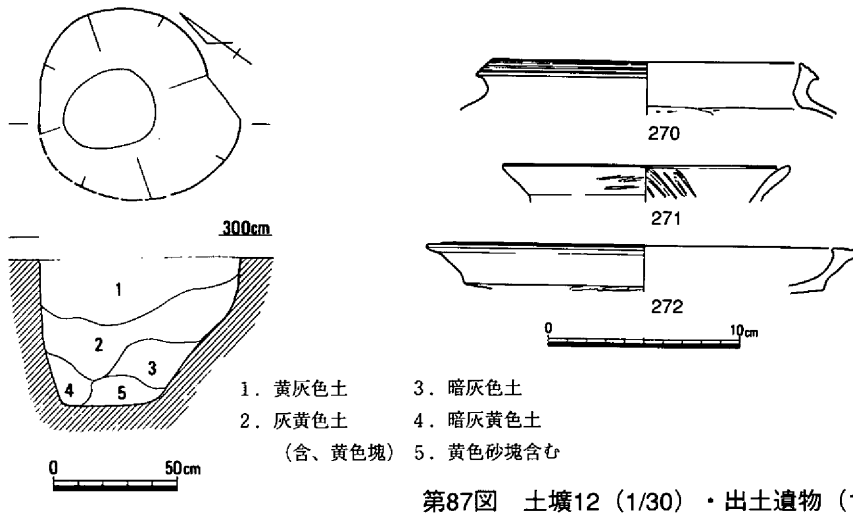
第86図　土壙11出土遺物②（1/4・1/2・1/3）

弥生時代後期前半の範疇に位置づけて差支えないものと考える。

土壙12（第24・87図）

２Ｂ区において弥生時代後期前半の竪穴住居６の南東部が切り合った状態で検出された。規模は、長軸長80cm、幅75cm、深さ55cmと小さく、一見柱穴との差はないものである。

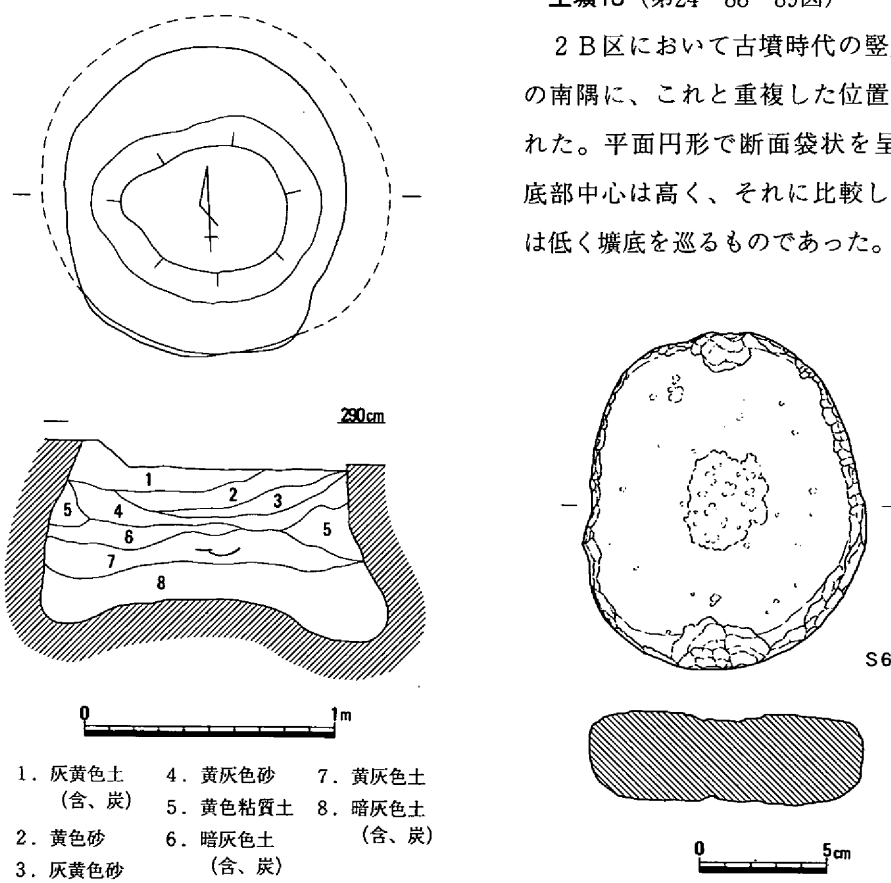
出土遺物は、小片ながら３点が図化された程度である。これによると中でも最も新しい土器271が上東遺跡・鬼川市Ⅱの特徴を有することで弥生時代後期前半に比定されよう。



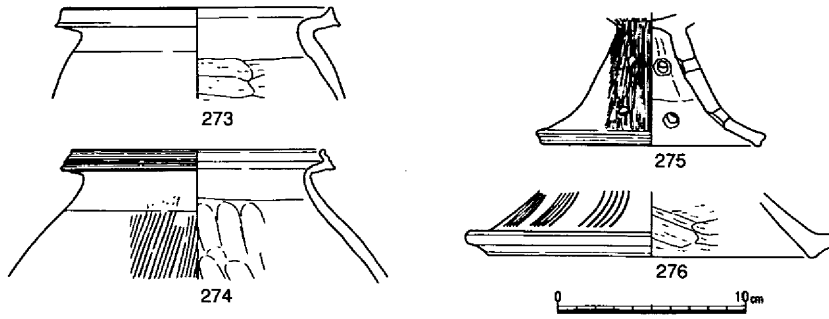
第87図　土壙12（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙13（第24・88・89図）

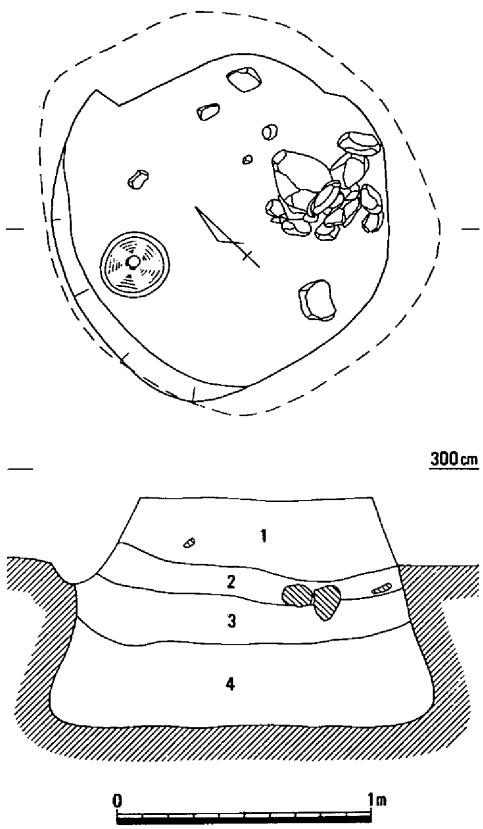
２Ｂ区において古墳時代の竪穴住居52の南隅に、これと重複した位置で検出された。平面円形で断面袋状を呈するが、底部中心は高く、それに比較して周辺部は低く壙底を巡るものであった。



第88図　土壙13（1/30）・出土遺物①（1/3）



第89図　土壙13出土遺物②（1/4）



1．淡茶褐色砂質土（含、炭僅少）
2．淡茶褐色炭混砂層
3．淡黄褐色砂質土（混、黄色粘土小塊）
4．淡茶灰色砂質土（混、黄色粘土小塊）

第90図　土壙14（1/30）

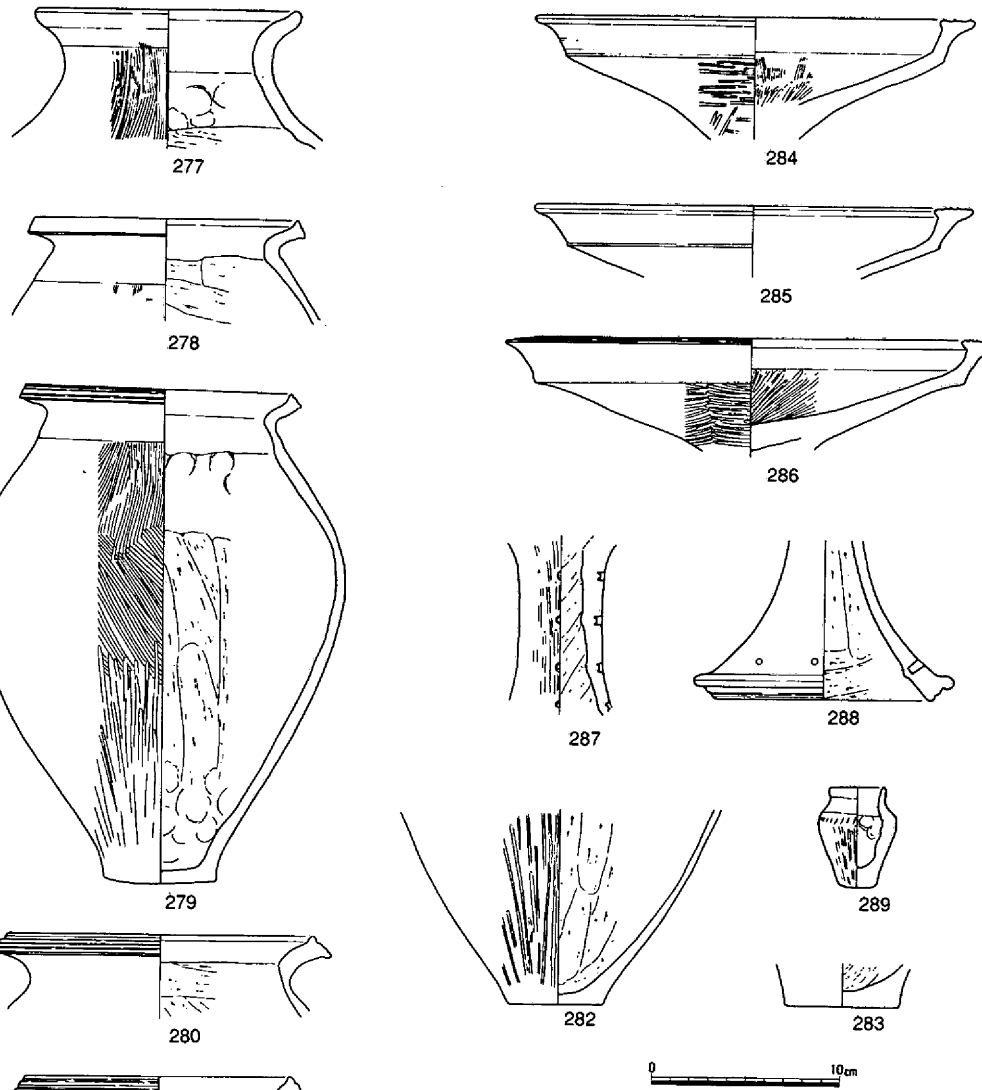
壙内への土砂の埋積状況は、上層（2・3・4）には砂が、下層第6と7層には炭を含むことが認められた。

出土遺物には、覆土中を中心にして甕2点、高杯2点の土器が検出され、それぞれの器種には新旧2相が認められた。ただし、土壙の時期としては上東・鬼川市Ⅰ併行期として差支えないであろう。（鳥崎）

土壙14（第24・90・91図、写真図版114）

2Bb区、竪穴住居7の南に位置し、竪穴住居30・32などに切られて検出された不整円形を呈す袋状土壙である。検出面から深さ約90cmを測る。床面はほぼ水平で、床面の規模は径約1.5m、床面積1.91㎡、床面の海抜高1.96mを測る。埋土には粘土の小塊の混じる層が多く、人為的に埋め戻された状況と判断される。遺物は第2～3層から礫とともに出土し、下層からはほとんど確認されなかった。

出土遺物は壺277をはじめ、甕278～283、高杯284～288、ミニチュア壺289などがある。甕279は底部が平坦で、内面ヘラケズリは胴部上半で止まっている。高杯の口縁



第91図　土壙14出土遺物（1/4）

端はいずれも拡張部上面に凹線が施されており、脚部の円孔は287は竹管状の289は円棒状の工具により施されているが、いずれも貫通はしていない。

以上、当土壙は遺物の特徴から上東・鬼川市Ⅰ併行期に廃棄されたものと考えられる。　（江見）

土壙15（第24・92図）

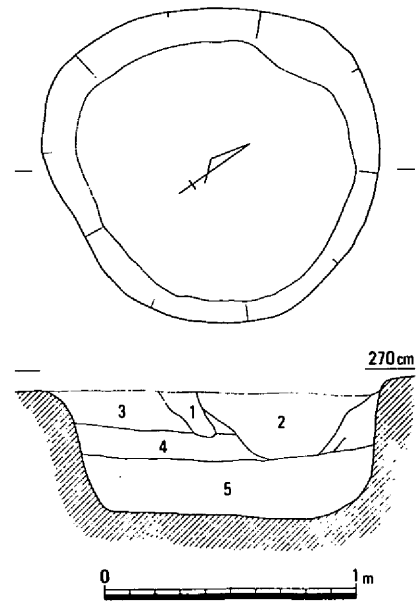
２Ｂｂ区において竪穴住居31にその上半を切られた状態で検出された土壙である。土壙は、

海抜2.65ｍで平面規模長軸長1.30ｍを測る不整円形であることが判明した。

出土遺物は認められず、土壙の時期については明確にできなかった。しかし、周辺に所在する遺構との関係等から勘案すれば弥生時代後期前半への位置づけが可能であろう。　（島崎）

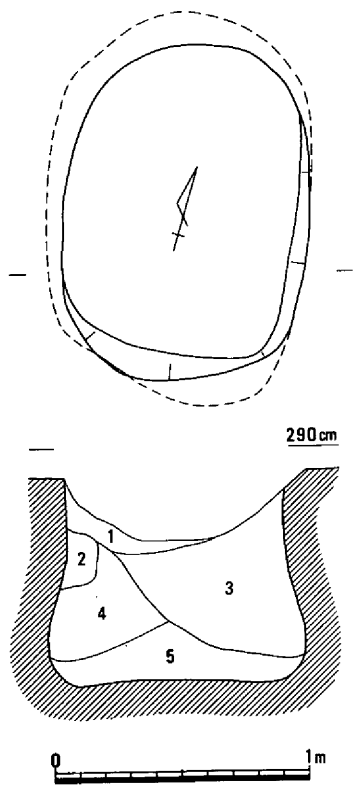
土壙16（第24・93図）

２Ｂｂ区、土壙14の南に位置し、上部は竪穴住居32に削平を受けた袋状土壙である。平面楕円形を呈し、深さ84cmを測る。床中央は僅かに高く、径1.55×１ｍ、床面積1.34㎡、床面の海抜高1.96ｍを測る。埋土下層は軟らかく、炭粒を含むものであったが、第３層はよくし締まった基盤層に似、壁面が崩落したものと考えられる。遺物は下層から鉢290が出土した。胴

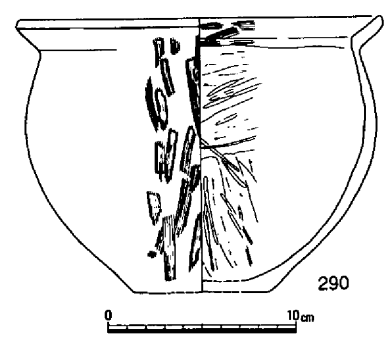


1．灰色粘土　　4．淡黄灰色土
2．淡灰黄色土　　5．淡灰黄色土
3．灰黄色土

第92図　土壙15（1/30）



1．暗茶褐色粘質砂　　4．暗灰褐色粘質砂（含、炭僅少）
2．黄色粘土塊
3．淡茶灰色粘質砂　　5．淡褐灰色粘質砂（含、炭僅少）



第93図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）

部外面および口縁部内面をハケ調整、胴部内面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキを施す。

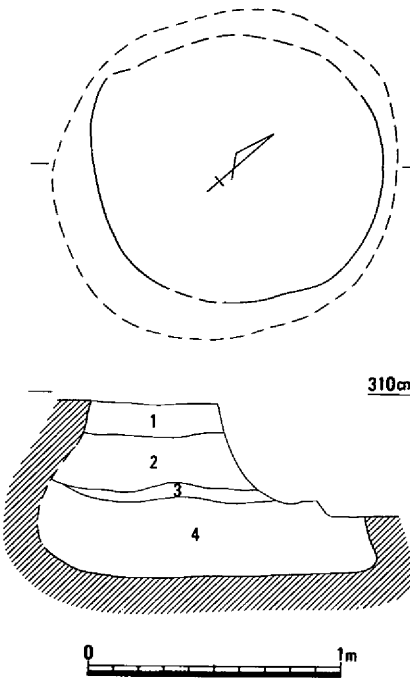
以上、当土壙は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃棄されたものと考えられる。

土壙17（第24・94図、写真図版114）

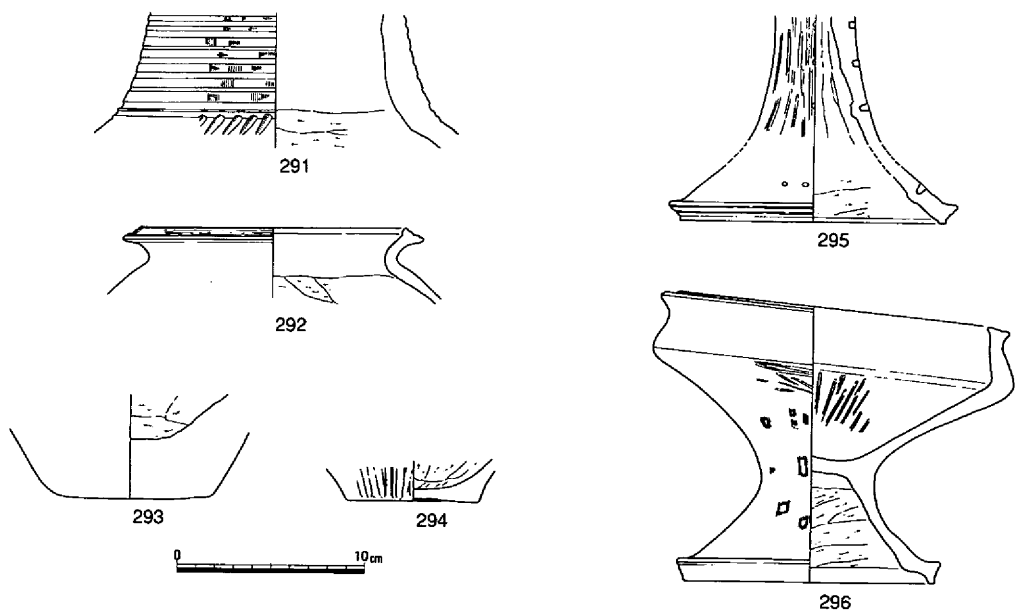
２Ｂｄ区、土壙16の南西に位置し、竪穴住居33・土壙66に一部切られて検出された袋状土壙である。平面ほぼ円形を呈し、深さ約70cmを測る。床中央は平坦で径約1.3m、床面積1.37㎡、床面の海抜高2.36mを測る。埋土は水平堆積を示し、第３層は炭を多く含むものであった。

遺物は長頸壺291、台付鉢296が上層から、他は下層から出土した。291の器壁は厚く、沈線もしっかりと深い。296は内傾気味に立ち上がる口縁に、端部は面をもつ復元完形の鉢である。

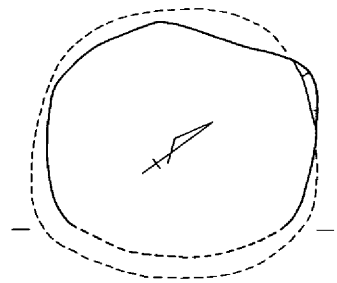
以上、当土壙は上東・鬼川市Ⅰ併行期に廃棄されたものと考えられる。

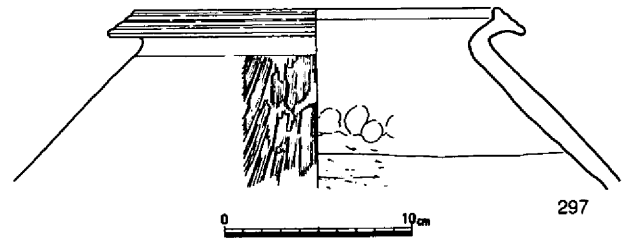


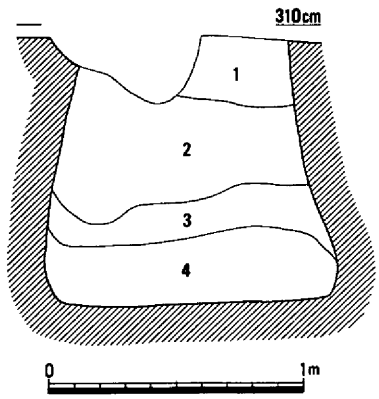
1．暗茶褐色砂
2．茶褐色砂（混、黄色粘土塊）
3．茶褐色砂（含、炭多）
4．淡茶灰色砂（含、炭少量）



第94図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/4）

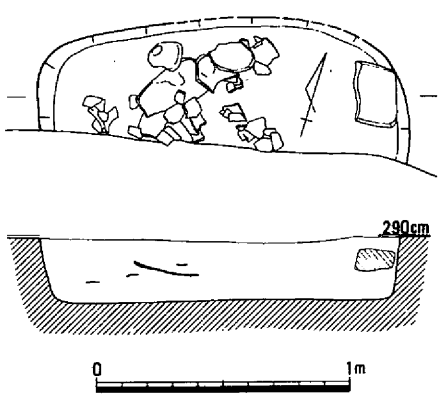






1．暗茶灰色砂質土
2．暗茶灰色粘質土
3．暗茶灰色粘質土
（含、黄色粘土塊多）
4．灰黄色粘質土

第95図　土壙18（1/30）・出土遺物（1/4）



第96図　土壙19（1/30）

土壙18（第24・95図）

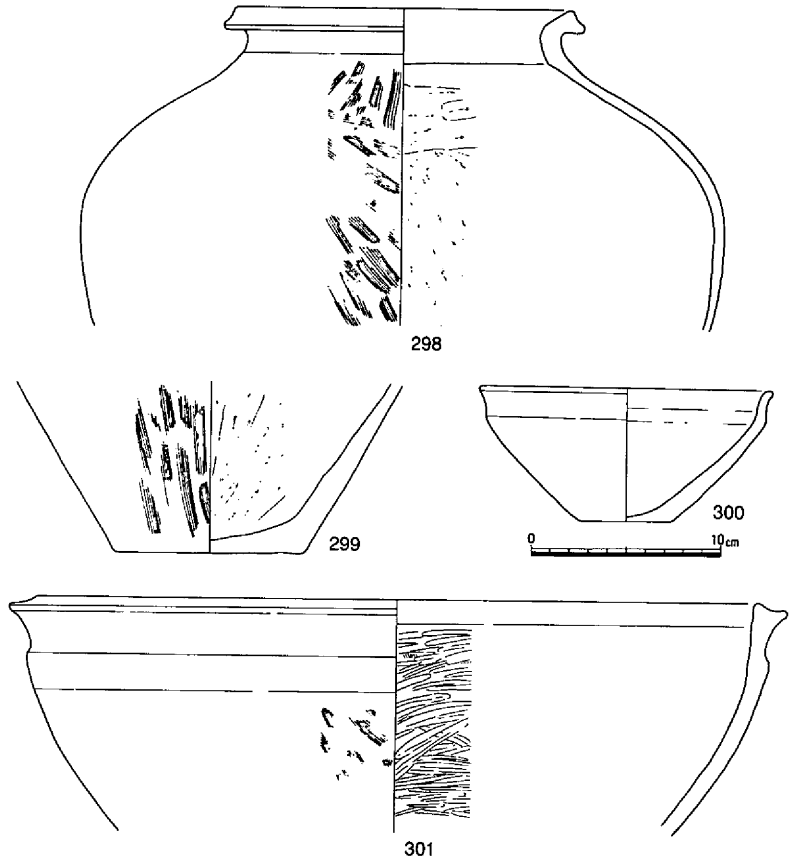
２Ｂｄ区、土壙17の南に位置する袋状土壙で、小土壙に一部切られている。平面不整円形を呈し、深さ約１ｍを測る。床中央は平坦で、径約1.1m、床面積0.94㎡、床面の海抜高２ｍを測る。埋土はほぼ水平堆積を示し、上層に粘土小塊が多含することから一気に埋め戻されたと考えられる。

遺物は下層から甕297が出土しており、当土壙はその特徴から上東・鬼川市Ⅰ併行期に廃棄されたものと考えられる。

土壙19（第24・96・97図）

２Ｂｄ区、土壙18の西に位置し、南部を土壙68に切られて検出された、平面不整長方形の土壙である。長さ1.45m、深さ約20㎝を測る。壁は垂直にちかく掘りこまれ、底部は平坦である。埋土は茶褐色砂質土に黄色粘質土の小塊が混じり、遺物は土壙中位から焼土塊とともに廃棄された状態で出土した。壺298の口縁は肥厚し、口縁端に凹部を形成するもので、肩がやや張り299のような直線的に延びる底部に向かうと思われる。小型鉢300の口縁は緩く外反し、端部は丸い。大型鉢301の口縁下には稜線が走り、口縁端部は肥厚し、上面に凹部を形成している。

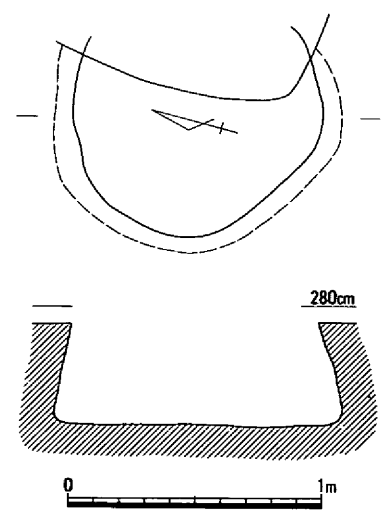
以上、当土塊は上東・鬼川市Ⅰ併行期に廃棄されたものと考えられる。



第97図　土壙19出土遺物（1/4）

土壙20（第24・98図）

３Ａｃ区、竪穴住居９の下層から検出された袋状土壙で、土壙70に一部切られている。平面不整円形を呈し、深さ40cmを測る。床面は平坦で径約1.1m、底の海抜高2.35mを測る。埋土は暗茶灰色粘質土で、遺物は皆無であった。検出状況および周辺遺構のあり方から、当土壙は後期前半の範疇ものと推定される。（江見）



第98図　土壙20（1/30）

土壙21（第24・99図）

３Ｂａ区において竪穴住居31に北側を切られた状態で検出された。遺存状況から平面は南北に長い楕円形であったと推測される。

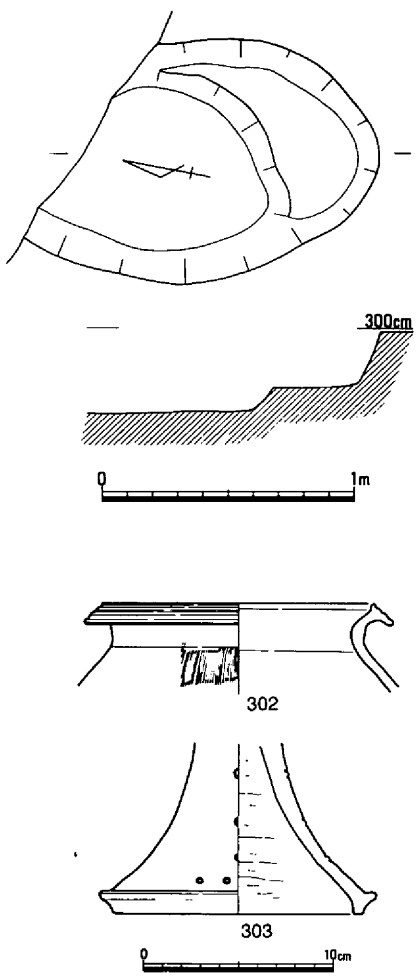
壙内からは、土器が散見されたが図化出来たのはわずかに２点にすぎない。土器はいずれも上東・鬼川市Ⅰ併行期として理解されるものである。（島崎）

土壙22（第24・100図）

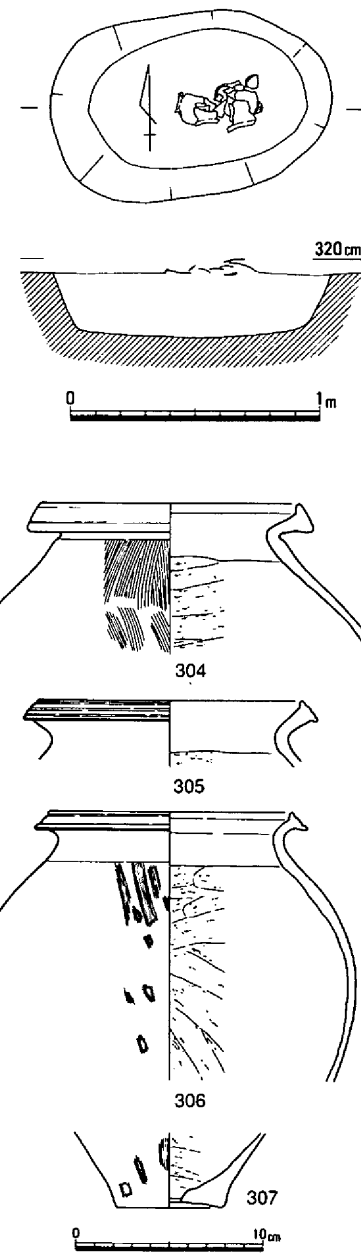
３Ｂｃ区、土壙18の南東に位置する平面楕円形の土壙で、約1.2m×約75cm、深さ25cmを測る。埋土は茶褐灰色粘質砂で、土壙検出面から廃棄された状態の土器が出土した。304～307はいずれも甕で307は甑として利用され、これらは上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱにかけてのものと判断される。

土壙23（第24・101図）

３Ｂｃ区の南方、一部は調査区外に延び、竪穴



第99図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4）

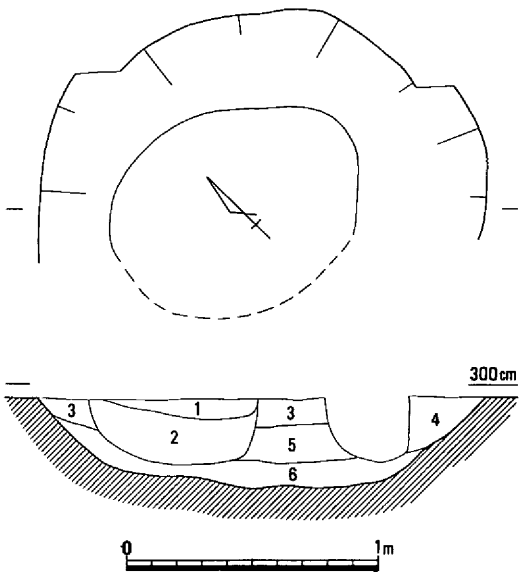


第100図　土壙22（1/30）・出土遺物（1/4）

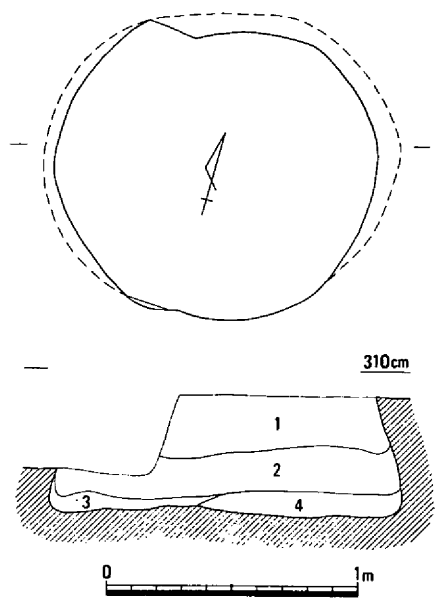
住居55、土壙155などに削平を受けている。平面は不整円形を呈し、壁が緩く傾斜する大型の土壙で、径約1.8m、深さ35cmを測る。蓋308の孔は１か所のみ残っている。また、当土壙からは甕309の他土器数点が出土しており、これら土器の特徴は上東・鬼川市Ⅰの特徴を示す。

土壙24（第24・102図）

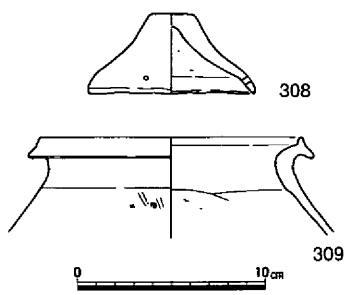
３Ｂｂ区、竪穴住居10の西に位置し、竪穴住居55に一部切られて検出された袋状土壙である。平面不整円形を呈し深さ約50cmを測り、床中央部が僅かに高い。床面径1.4×1.2m、床面積1.35㎡、床の海抜高2.53mを測る。遺物は僅かに甕細片310～312が出土するのみであったが、



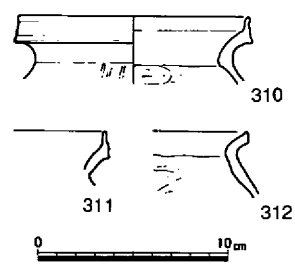
1．灰黄色粘質土　4．緑茶灰色粘質砂
2．暗灰色粘質砂　5．暗灰色粘質砂
3．暗緑灰色粘質砂　6．暗緑灰色粘質砂



1．暗茶灰粘質砂　3．黄色粘質土（混、灰色砂）
2．茶灰粘質砂（含、黄色塊）　4．黄色粘質土（含、灰色粘質砂僅少）



第101図　土壙23（1/30）・出土遺物（1/4）

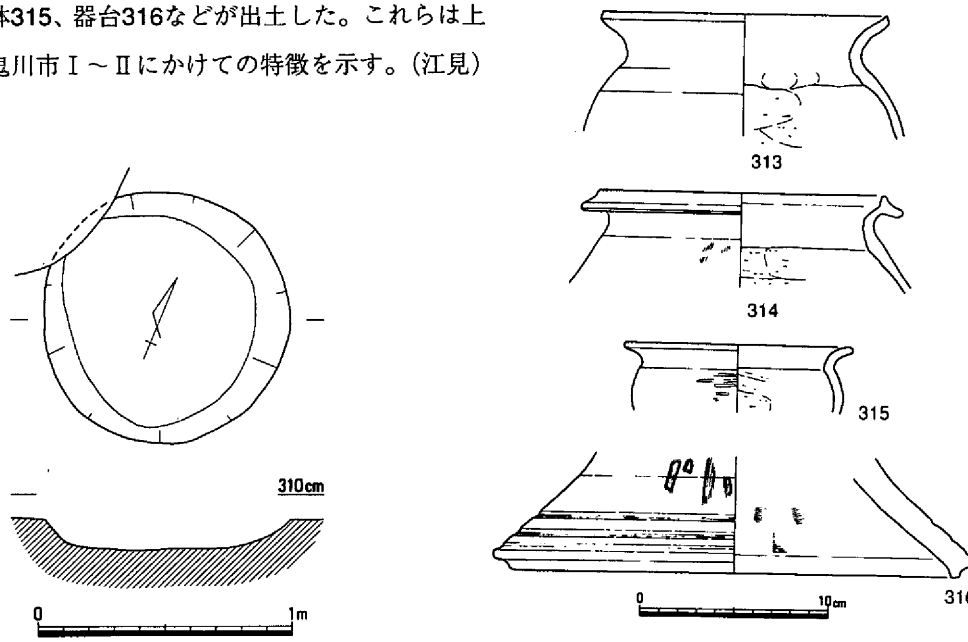


第102図　土壙24（1/30）・出土遺物（1/4）

その特徴は上東・鬼川市Ⅱ併行期のものと判断される。

土壙25（第24・103図）

土壙24の東に接し、これに切られ検出された平面円形の浅い土壙である。径約１m、深さ約10cmを測る。埋土は暗茶灰色砂で甕313・314、小型鉢315、器台316などが出土した。これらは上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱにかけての特徴を示す。（江見）



第103図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）

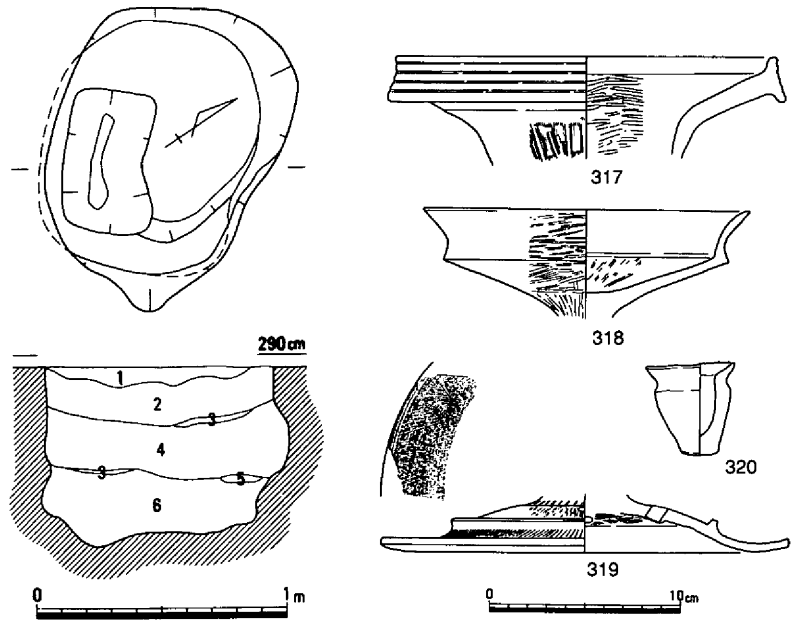
土壙26（第24・104図）

３Ｂｂ区にあって竪穴住居12の東側の一部を切った状態で検出された。平面は、およそ南北方向に長い不整円形を呈する土壙で、壁を垂直気味に壙底へと続ける。壙内埋積土は、大きく３層に分層され層境には炭の薄い堆積が認められた。

出土遺物には、壺、高杯、飾り高杯、ミニチュア土器等が見られた。いずれの土器も上東・鬼川市Ⅱ式の特徴に類似するものである。（島崎）

土壙27（第24・105・106図、写真図版145）

４Ｂａ区、竪穴住居14の北西に位置する平面不整長方形の土壙である。主軸を東西に向け、長さ約1.8m、幅約1.35m、深さ約70cmを測る。壁は東側が緩く下がっていくのに対し、西側は急に落ち込み、不安定な擂鉢状の底部になっている。土層は第２層までとそれ以下の上下２層に大別され、特に２層中からは、破損した状態の土器が拳大の礫とともにまとまって出土した。また、土器は上層に比べ少ないものの第６層からも出土している。下層からは胴部にタタキ痕跡を残す小型長頸壺？321をはじめ、口縁に凹線を施す甕323、長脚高杯330・331、裾端部に

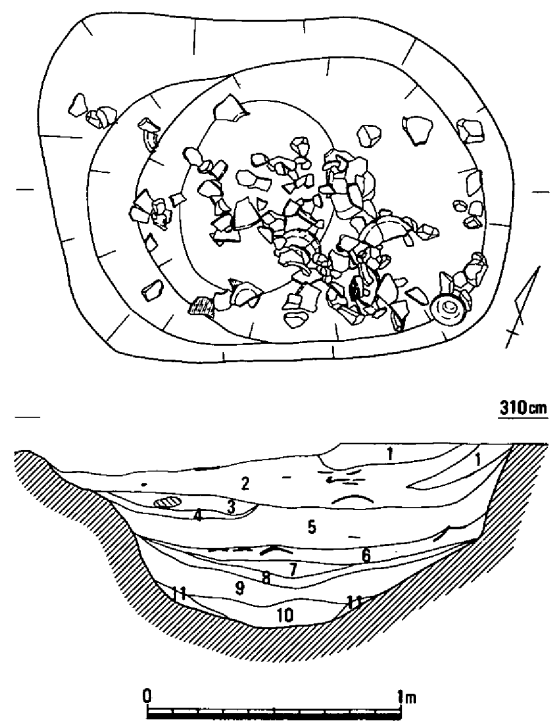


1．黒灰色土
2．黄灰色土
3．炭層
4．黒灰色土
5．黄色粘土塊
6．黒黄灰色土

第104図　土壙26（1/30）・出土遺物（1/4）

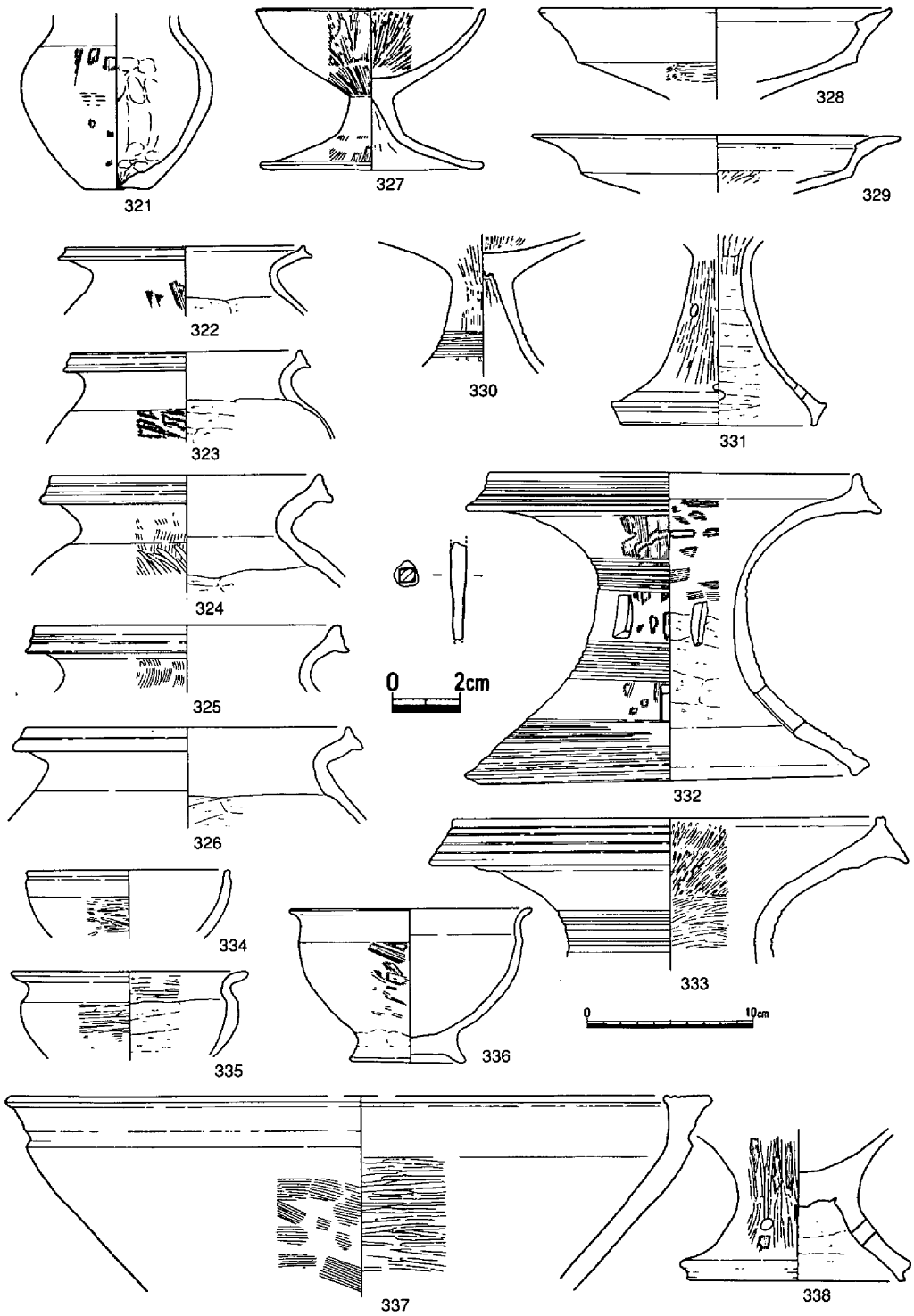
凹部を形成する器台332、口縁端部上面に凹線を施す鉢337などが出土しており、他は上層遺物である。さらに、上層からは鏃の茎と思われる鉄製品Ｍ８が出土している。

以上、土器の特徴は上東・鬼川市Ⅰ～Ⅱ併行期のものが含まれ、当土壙はこの期に廃絶されたと考えられる。

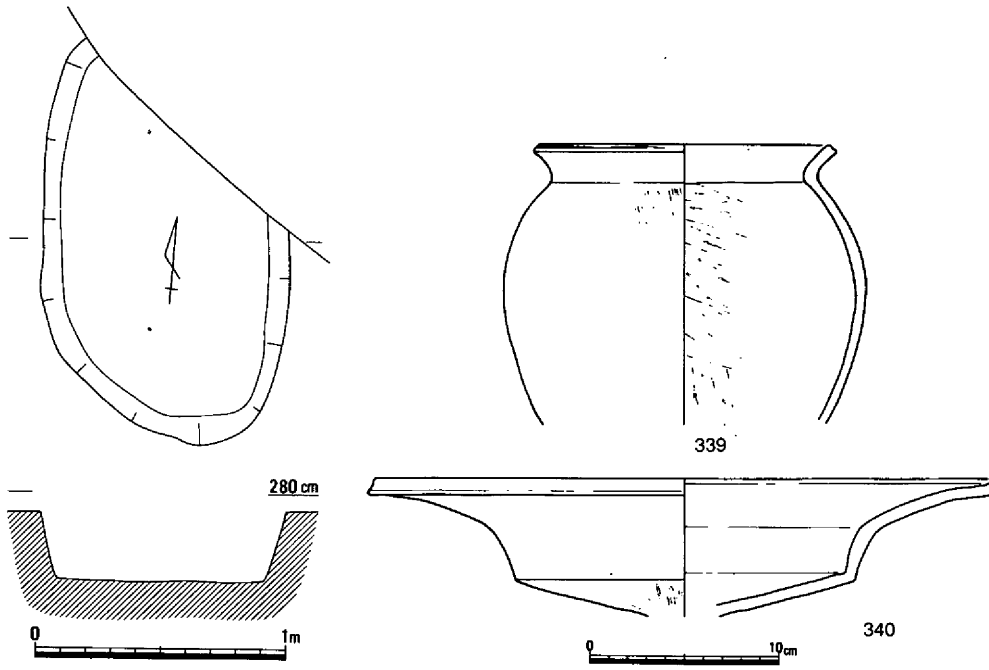


1．灰黄色粘質砂（含、炭）
2．暗灰色粘質砂（含、炭多）
3．茶褐色粘質土（含、黄色粘土・塊炭僅少）
4．暗褐色粘質砂（含、炭多）
5．茶灰色粘質土（含、黄色粘土塊）
6．暗灰色砂質土（含、炭多、土器多）
7．暗黄灰色粘質砂（含、炭僅少）
8．暗灰色粘質砂（含、炭僅少）
9．灰黄色粘質土
10．黄灰色粘質土（含、炭僅少）
11．淡灰黄色粘質土（含、炭僅少）

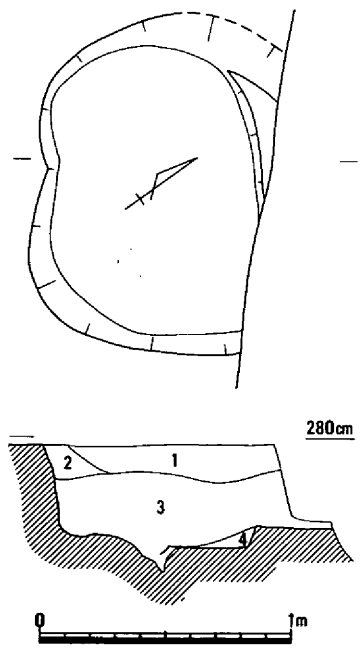
第105図　土壙27（1/30）



第106図　土壙27出土遺物（1/4・1/2）



第107図　土壙28（1/30）・出土遺物（1/4）



第108図　土壙29（1/30）

土壙28（第24・107図）

４Ｂｂ区、竪穴住居13の南西に位置し、これに一部切られた、平面楕円形の土壙である。推定長1.5m、幅約１ｍ、深さ30cmを測る。埋土は茶灰色粘質土に黄色粘質土塊が混入しており、土壙上位から遺物が出土した。340は白灰色を呈し、口縁は鋭く外反し端部に凹部を形成する大型の高杯で、甕339ともに上東・鬼川市Ⅱの特徴を示す。

土壙29（第24・108・109図）

４Ｂｂ区、竪穴住居13の一部を切って検出された袋状土壙で北東部は地盤のズレの影響で明瞭でない。平面不整円形を呈し、深さ約40cmを測る。床面北部には約10cm高い平坦面が検出され、床面径約1.2ｍ×80

1．茶灰色粘質土
（含、黄色塊多）
2．茶灰色粘質土
3．灰黒色炭層
（含、炭茶灰粘質土塊）
4．淡茶灰粘質土
（混、炭）

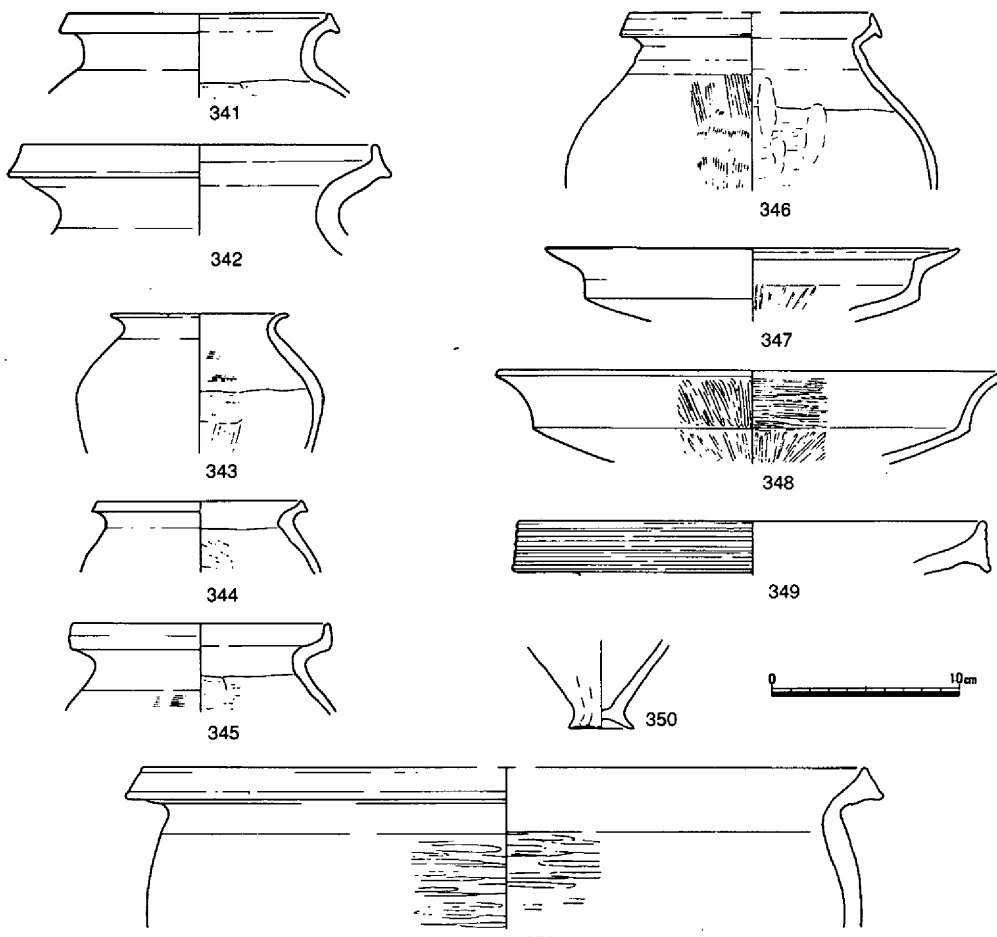
cm、床面の海抜高2.3mを測る。埋土には水平堆積を示す第３層に多くの粘質土塊が含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高い。なお、断面中央の窪みは地盤のズレによるものと判断される。

遺物は壺341・342、甕343～346、高杯347・348、器台349、鉢350・351などが出土しており、中に古い様相を呈す346・347などが含まれていた。

以上、当土壙は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶されたものと考えられる。

土壙30（第24・110図）

４Ｂｂ区に位置し、東部は調査区外に延び、南部は竪穴住居45に切られて検出された平面不整長方形の土壙である。長さ２m以上、深さ約20cmを測る。床面は平坦でなくやや凹凸がある。土壙内には上部に黄色粘質土塊の混入する暗茶灰色粘質土が、下部に茶灰黄色粘質土が堆積し



第109図　土壙29出土遺物（1/4）

ており、上層から土器細片に混じって復元完形の高杯352が出土した。橙色を呈し、口縁内面に稜線をもち、杯部には円盤充填を施す。脚部には３個の円孔を２段に穿っている。

以上、当土壙は上東・鬼川市Ⅱ併行期に廃絶されたものと考えられる。（江見）

土壙31（第24・111・112図）

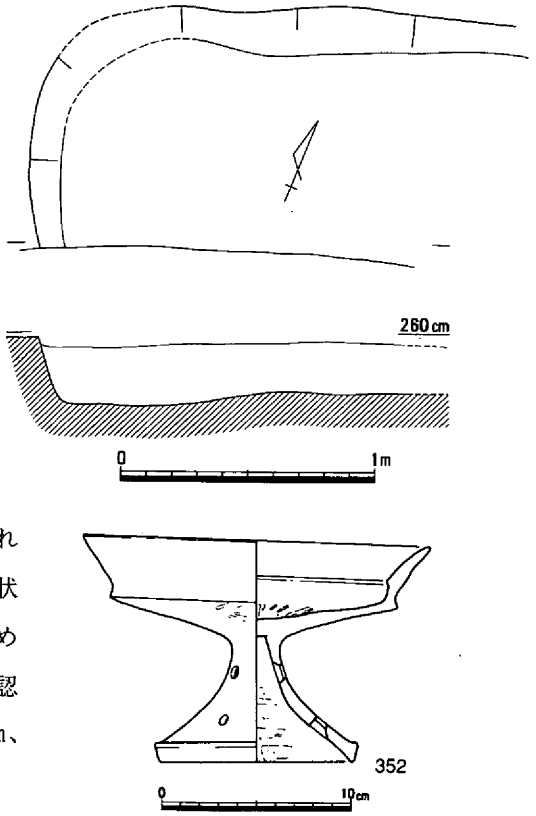
４Ｂｃ区において竪穴住居14および17に挟まれるかのように所在していた柱穴規模の土壙である。包含層掘り下げ途中海抜約3.00ｍ付近で先ず土器が検出され、これに端を発してさらに次々に完形品の密着した状態で検出される土器の在り方によって、はじめて土器を一括して入れた土壙としての性格が認識された。土壙完掘後の規模は、長軸長42㎝、幅28㎝、深さ17㎝を測った。

土器は、先ず甕353が入れられた後、鉢358・356、高杯354、最後に鉢357が入れられていた。甕は口縁端部が拡張を見せず、高杯も砂粒を多く含む胎土で、脚屈曲部にヘラ描きによる沈線が巡る特徴を有するものである。型式的には、上東・鬼川市Ⅱの段階に比定される。

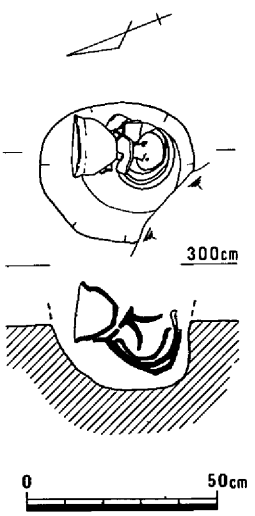
時期は、弥生時代後期前半の範疇で考えて差支えないと考える。

土壙32（第24・113～115図）

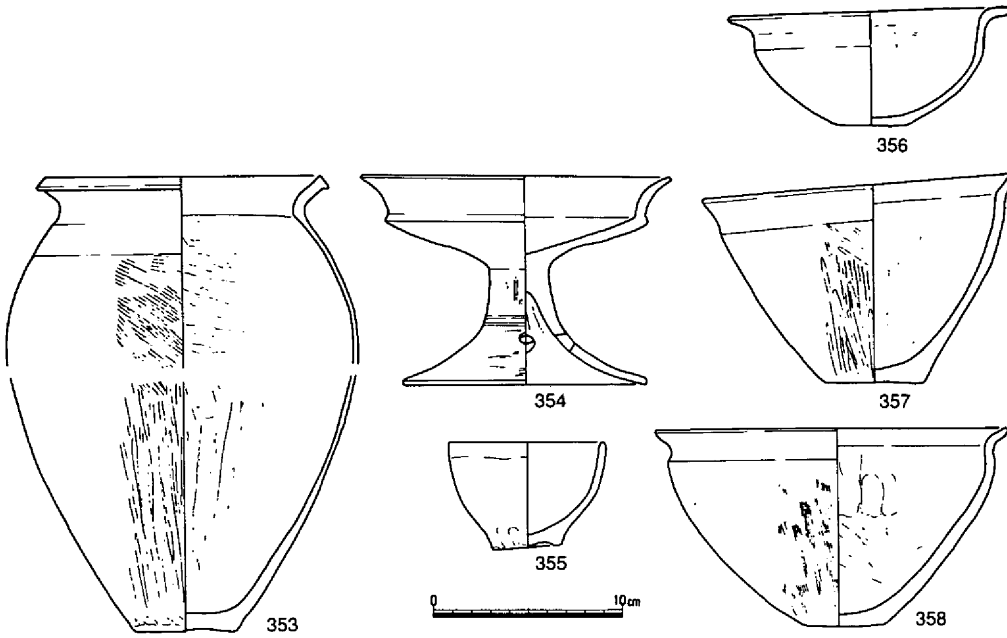
４Ｂｄに所在する土壙であったが、南側は調査区外にかかっていたことで全掘は出来なかった。海抜約3.60ｍで検出された平面は円形と推測され、壙底までの深さ1.20ｍを測った。断面形態は、最大径が壙底部分にあり上位方向に径を縮小することで袋状を呈していたものと考え



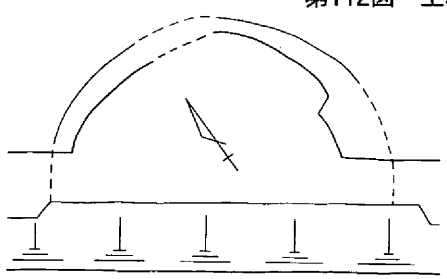
第110図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）

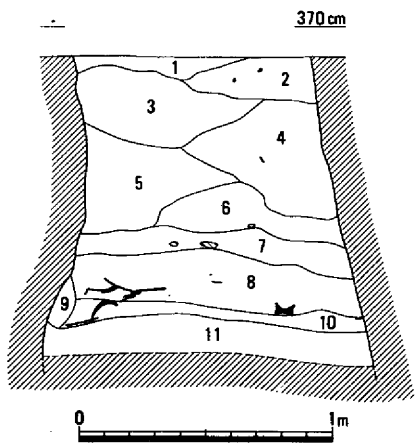


第111図　土壙31（1/20）



第112図　土壙31出土遺物（1/4）





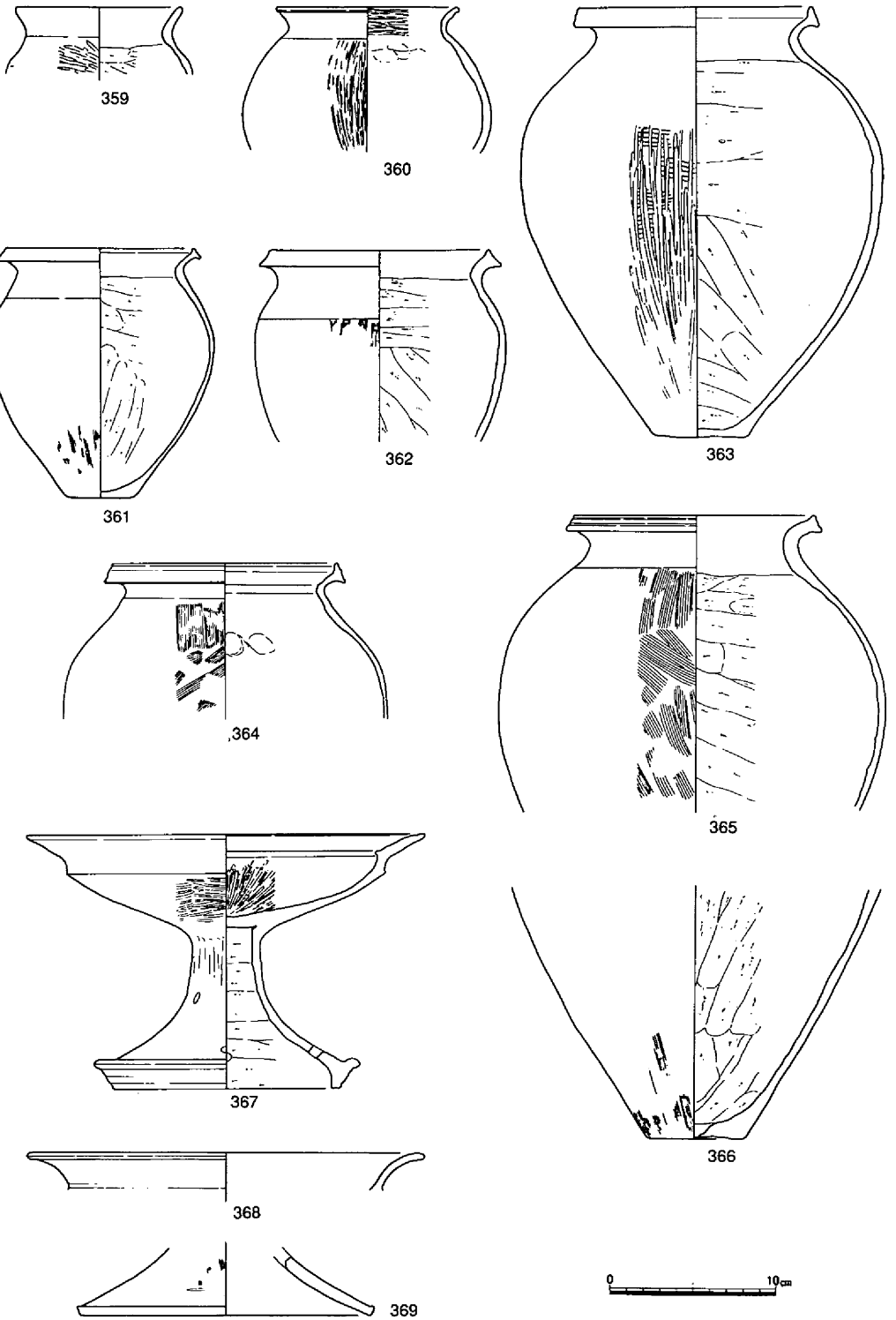
第113図　土壙32（1/30）

る。

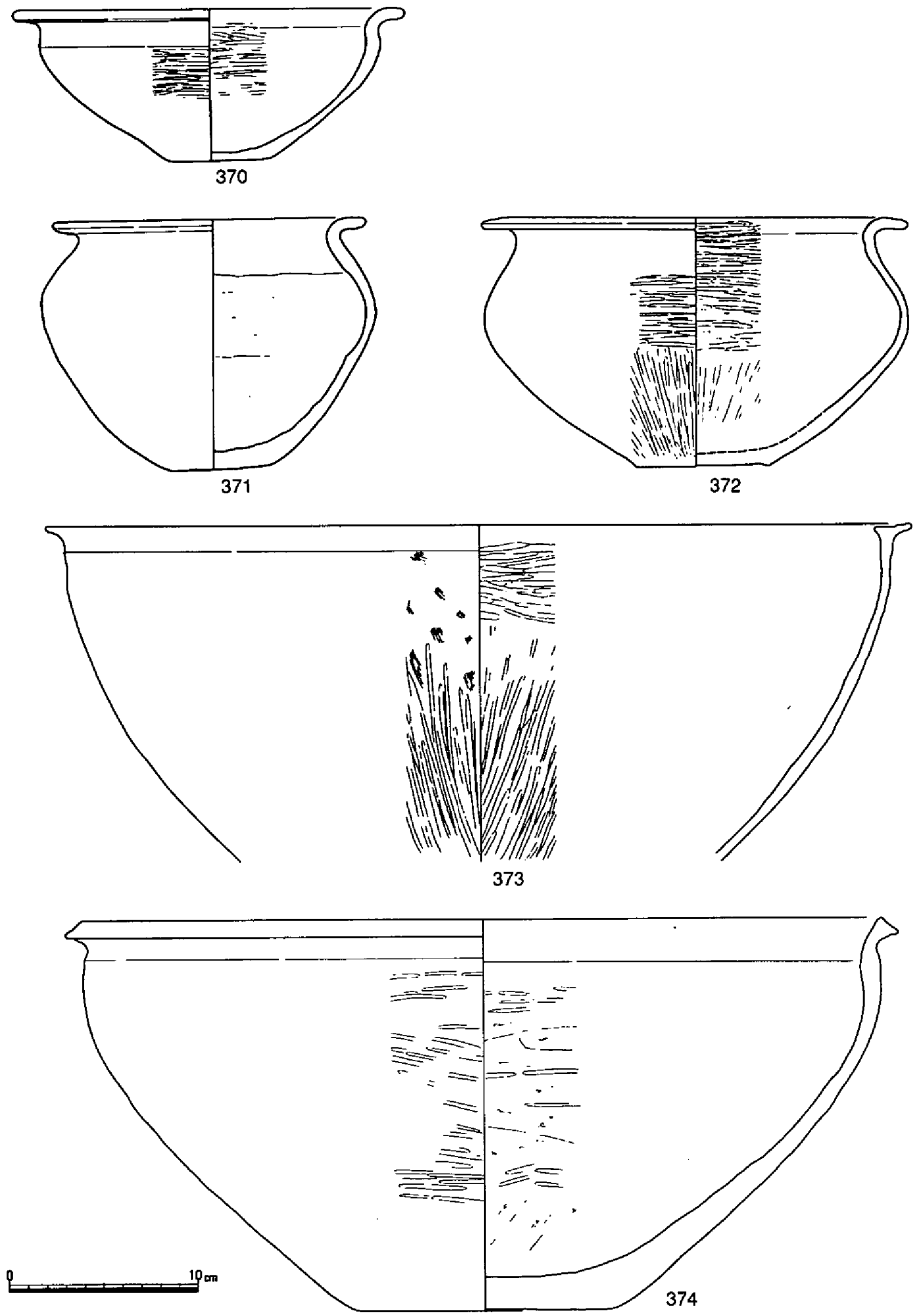
壙内は、第７層が粘質土による堆積をみせるだけで、それ以外はすべて砂質土によって埋没していた。

出土遺物は、壙底近くの第８・10層を中心に検出され、壺363・365、甕359～362・364・366、高杯367～369、鉢370～374の器種が確認された。土器は、一部に古い様相を有するものがあるが、おおむね上東・鬼川市Ⅱ併行と考えられ時期的には弥生時代

1．灰褐色砂質土
2．灰黄褐色砂質土
3．灰青褐色砂質土
4．淡暗青褐色砂質土
5．暗青灰褐色砂質土
6．黄褐色砂質土
7．暗青灰褐色粘質土
8．青灰色砂質土
9．淡暗青褐色砂質土
10．淡青灰色砂質土
11．淡灰黄褐色砂質土



第114図　土壙32出土遺物①（1/4）



第115図　土壙32出土遺物②（1/4）

後期前半に位置づけられよう。

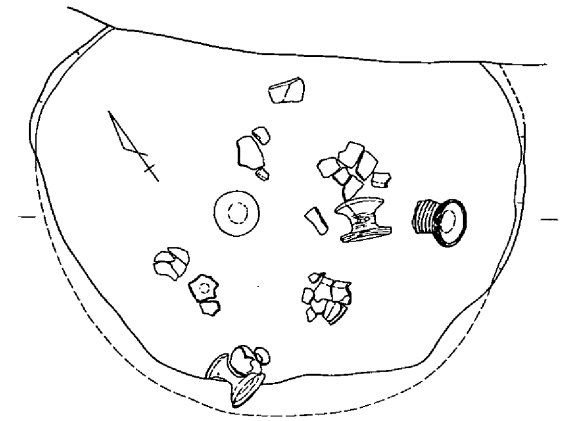
土壙33（第24・116・117図）

５Ｂａ区において北東の一部が調査区外にかかった状態で、海抜2.20mで平面が検出された。

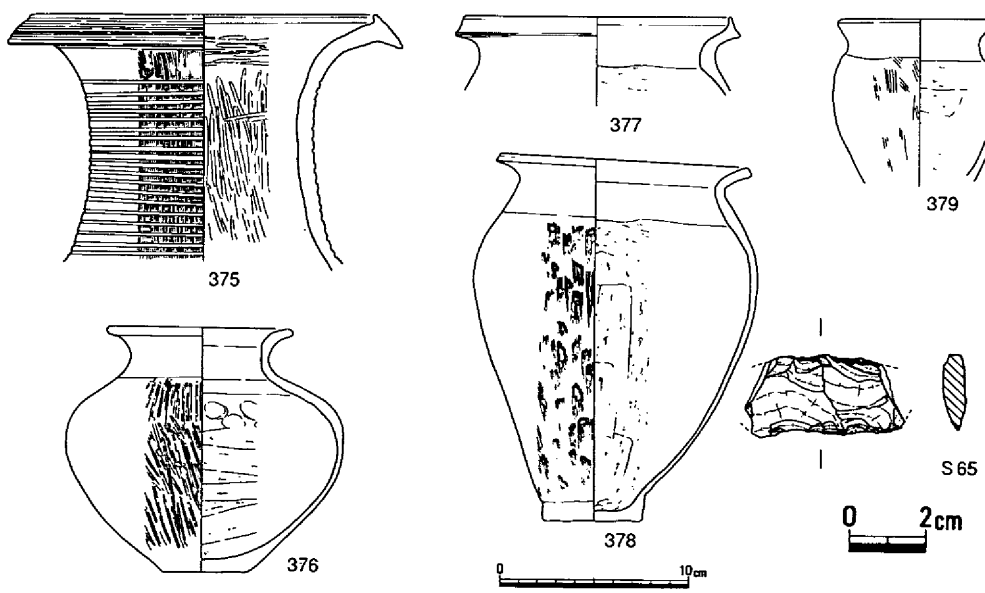
規模は長軸長1.95ｍを測り、平面円形を呈する土壙であった。検出面から床面までの深さは、およそ45㎝が計測された。ほぼ水平面を有する床面と周辺の壁が垂直に立ち上がる状況から考えて、本来この土壙は袋状を呈する土壙であったものと推測され、これが機能していた時点での出入り口はさらに高い位置にあったものと考えられる。

土壙断面は、先ず凸レンズ状に中央部が高く形成され、その周辺の低い部分に別の土が堆積していた。これは通常の土壙の埋没状況とは異なり、おそらく袋状土壙特有の埋積状況を示したものと考えられる。

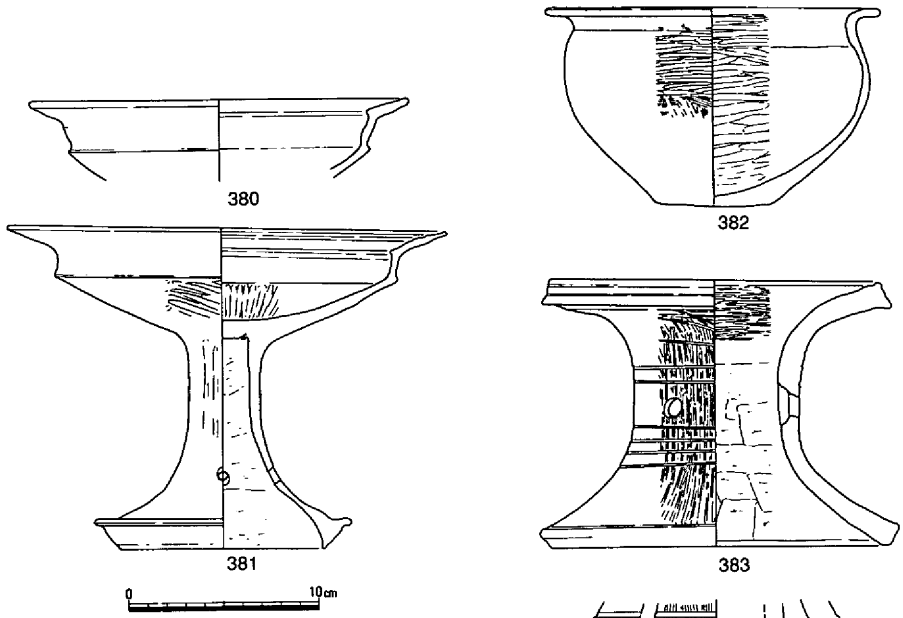
遺物は、ほぼ壙底近くに面的に見られるもので、土器と石器が検出さ



1．暗灰色土　　3．黄灰色土
2．暗茶色土　　4．灰黄色土



第116図　土壙33（1/30）・出土遺物①（1/4・1/2）



第117図　土壙33出土遺物②（1/4）

れた。

土器には、壺、甕、高杯、鉢、器台の各種が認められた。型式的にはいずれの器種も上東・鬼川市Ⅱの段階に類似例を有することで、土壙はおよそ弥生時代後期前半に存在していたことが知られよう。

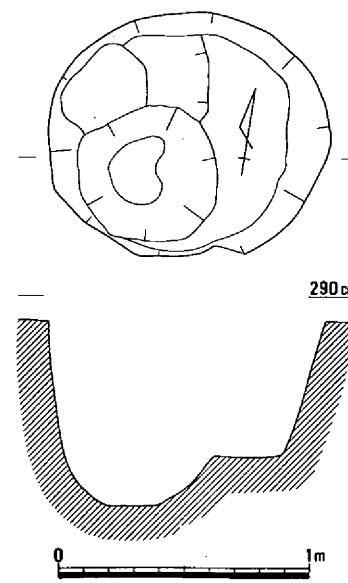
土壙34（第24・118・119図）

５Ｂｃ区において海抜2.80ｍで検出された、平面不整円形を呈する土壙である。

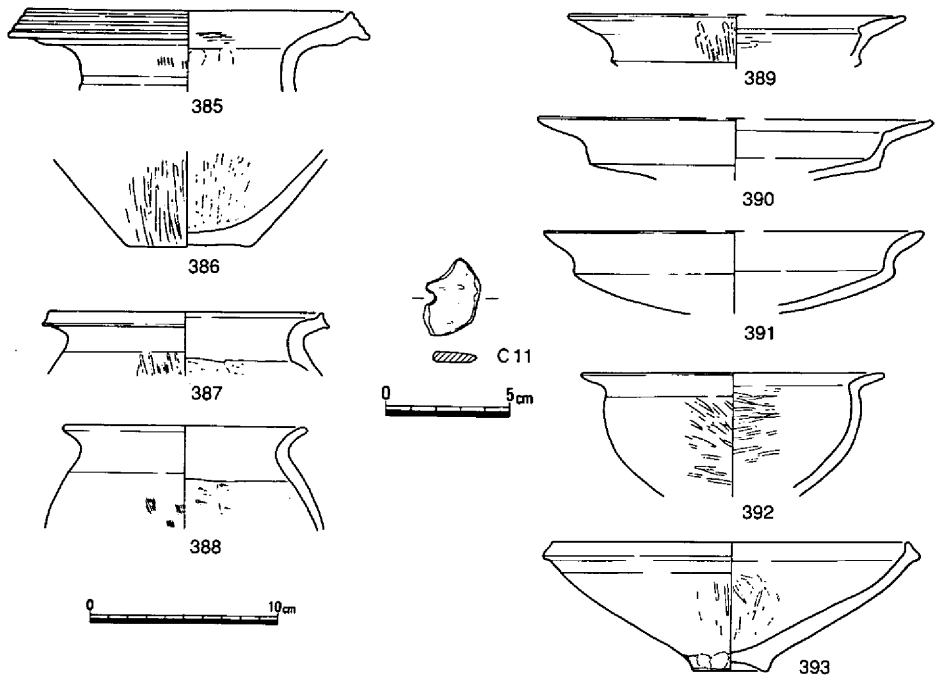
規模は、長軸長1.13ｍ、幅97㎝、平面検出面からの深さ最深部で73㎝、浅い所で54㎝を測った。

断面の形態は検出面から壙底に下がるに従い径を減少させるもので、周辺に多く所在する一連の断面袋状を呈する土壙とは形態的に異なった性格づけがなされるものである。

遺物は、壙内埋積土中から小破片ながら土器と土製紡錘車の検出がなされたにすぎない。



第118図　土壙34（1/30）



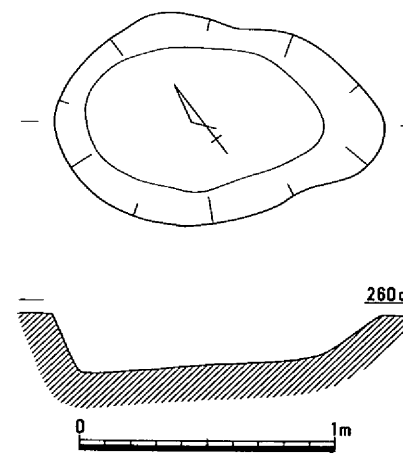
第119図　土壙34出土遺物（1/4・1/3）

土器には、壺、甕、高杯、鉢等の器種が認められたが、いずれも小片とあって詳細については言及できない。型式的には、上東・鬼川市Ⅱ併行として差支えないものと思われ、したがって時期は弥生時代後期前半に位置づけられよう。（島崎）

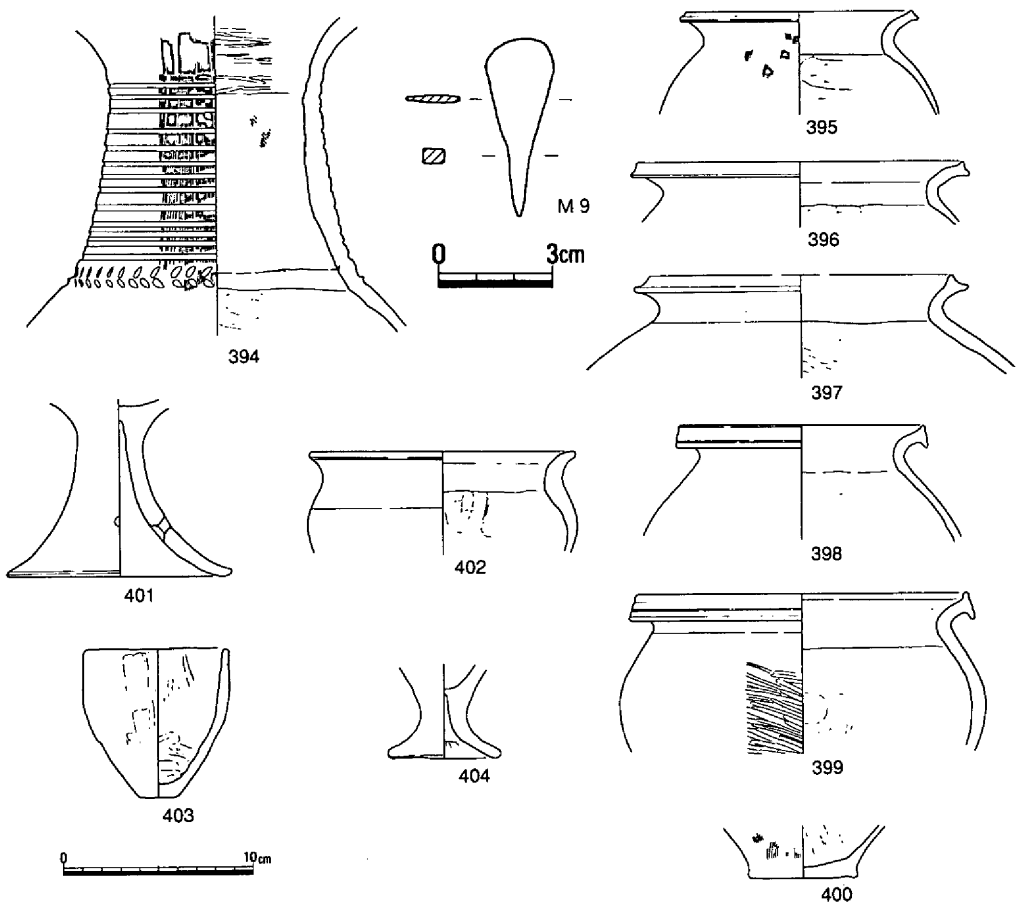
土壙35（第24・120・121図、写真図版146・172）

５Ｂｃ区、竪穴住居20の北に位置する平面不整楕円形の浅い土壙である。長さ約1.3m、幅80cm、深さ約20cmを測り、底部は西に傾斜している。土壙内には炭を多含する暗茶灰色粘質土が堆積しており、これに混じって土器片および鉄鏃が出土した。長頸壺394の頸部はやや下方に開き、甕395～398には口縁端部に凹部を形成するものが多く、高杯401のように古い様相を呈するものも含まれる。鉄鏃M９は先端が磨滅あるいは欠損しているが、方頭斧箭形式になるものと思われる。

以上、当土壙は上東・鬼川市Ⅱ併行期に埋没したものと考えられる。



第120図　土壙35（1/30）



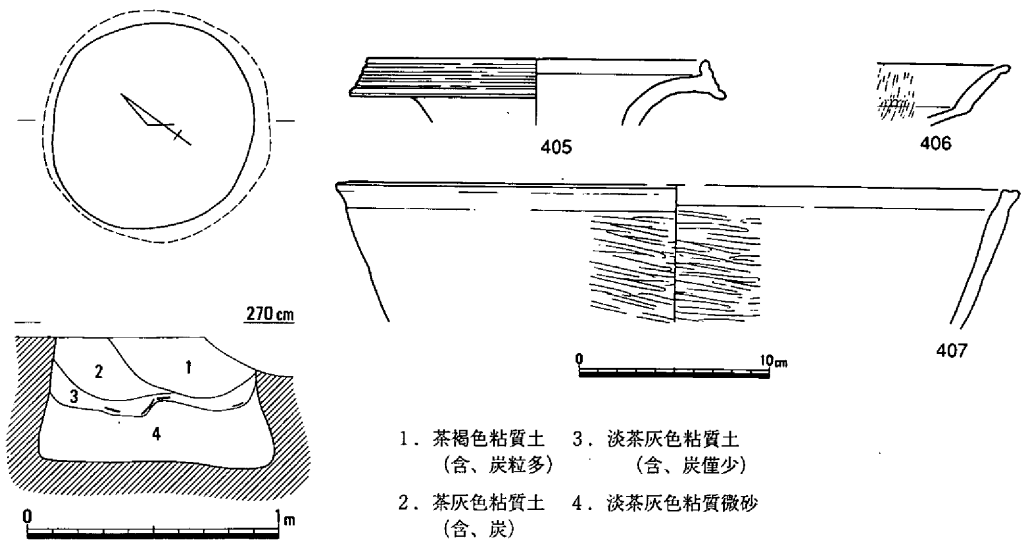
第121図　土壙35出土遺物（1/4・1/2）

土壙36（第24・122図）

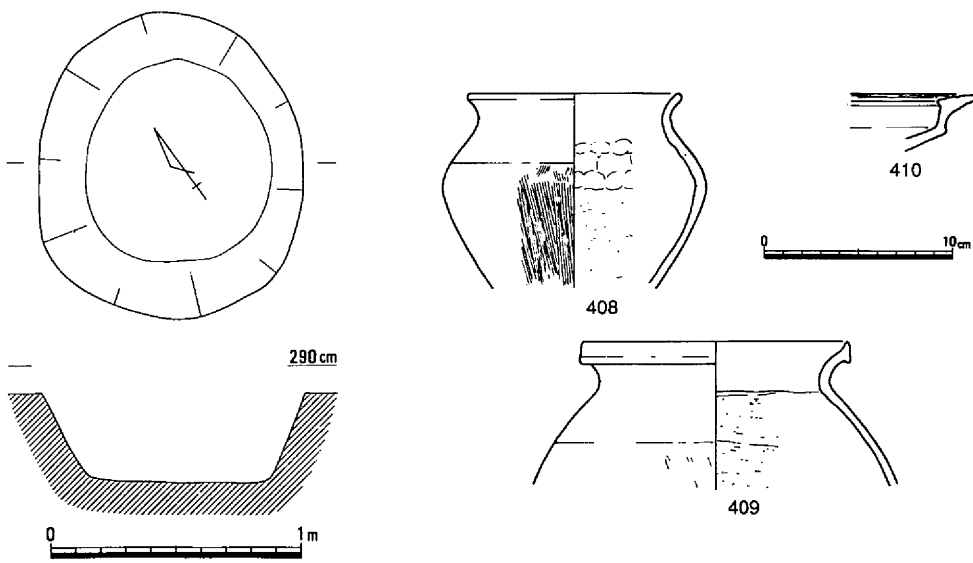
６Ｂａ区に位置する平面円形の袋状土壙である。深さ約50cm、床面径92×90cm、床面積0.66㎡を測り、袋状土壙の中では床面積が狭い。埋土は４層に分かれ、第３層に土器が含まれていた。また、第４層はよく締まった基盤に近似し、僅かに炭粒が含まれることで判断できたもので、一気に埋められた可能性が高い。遺物は壺405、高杯406や、口縁が斜め外方に直線的に延びる古い様相を呈す大型鉢407などが出土しており、当土壙は高杯の形態から上東・鬼川市Ⅱ併行期には廃絶されたものと考えられる。

土壙37（第24・123図）

６Ｂａ区、土壙36の南東に位置する平面不整円形の土壙である。径約1.2×１m、深さ35cmを測る。埋土は茶灰色土で、これより甕408・409、高杯410が出土した。小型の甕408は胴部内面のヘラケズリが上半で止まっており、口縁端部が外方におおきく拡張される410など、上



第122図　土壙36（1/30）・出土遺物（1/4）

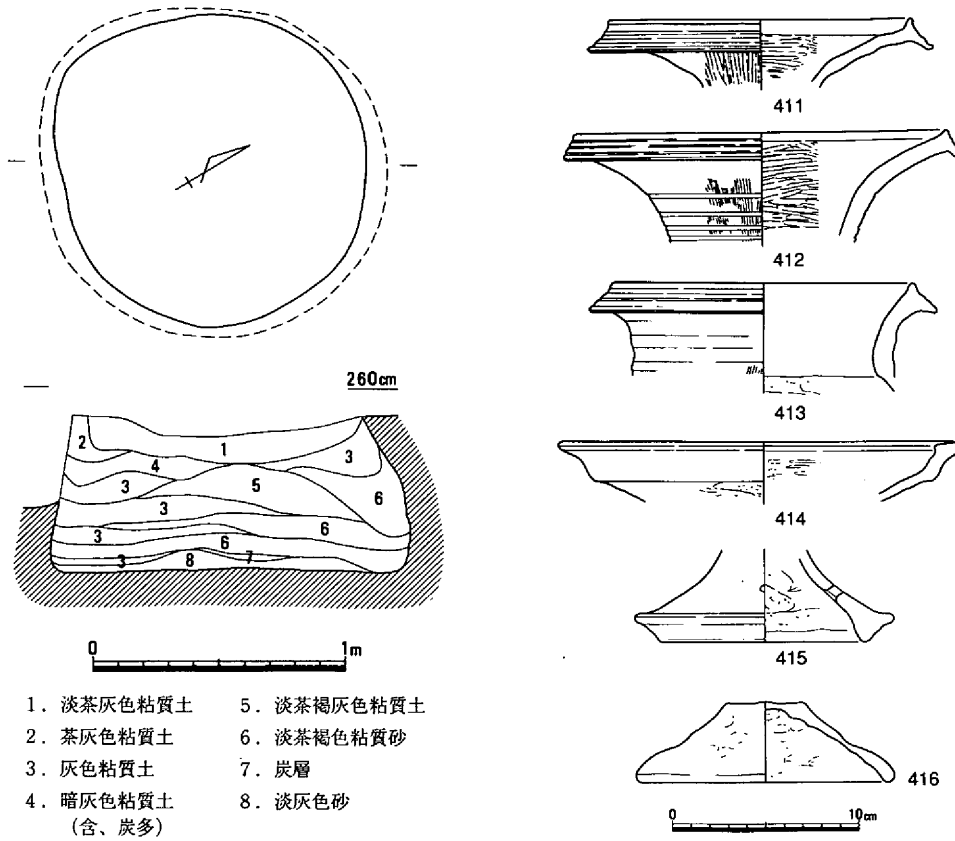


第123図　土壙37（1/30）・出土遺物（1/4）

東・鬼川市Ⅰ併行期の特徴を示しており、当土壙はこの期に埋没したものと考えられる。

土壙38（第24・124図、写真図版146図）

６Ｂｃ区、土壙37の南西に位置し掘立柱建物２の柱穴を一部切って検出された袋状土壙である。平面円形を呈し、深さ約45cm、床面径約1.3m、床面積1.45㎡、床面の海抜高1.66ｍを測る。



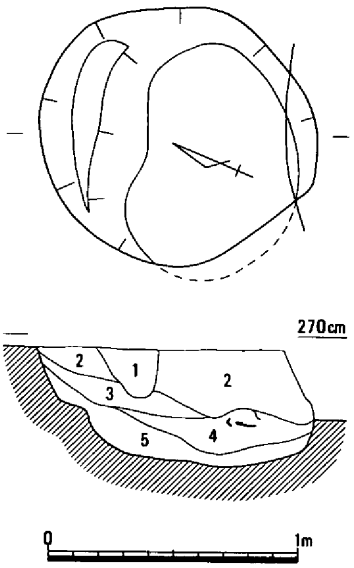
第124図　土壙38（1/30）・出土遺物（1/4）

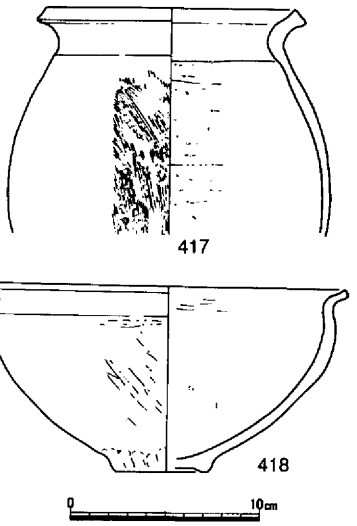
埋土は下部に灰色粘質土と淡茶褐色粘質砂が水平に近い堆積を示すものの、中位の第５層は中央が厚く堆積し、以後周囲に流れ込むように埋まっていた。

遺物は頸部が上方に向かって開き気味の長頸壺421、頸部に凹線を施す古い様相を呈す壺413、口縁端部上面が拡張する高杯414、稚拙な作りの蓋416などが出土しており、当土壙は上東・鬼川市Ⅰ併行期には廃絶されたものと考えられる。

土壙39（第24・125図）

６Ｂａ区、土壙37の東に位置し一部竪穴住居49に切られて検出された袋状土壙である。平面不整円形を呈し、深さ約45cmを測る。土壙北部に一段高い平坦面が認められた。また、底部は平坦ではなく緩く凹み、他の袋状土壙とは様相を異にしている。床面径約１ｍ×60cm、床面積0.63㎡を測り、計測できた当遺跡の袋状土壙の中でもっとも面積が狭い。遺物は第４層から、口縁端部が僅かに肥厚する甕417や、底部が上げ底になる鉢418が出土しており、これらは上東・鬼川市Ⅱの特徴を示す。（江見）





1．茶灰粘質土　　4．茶灰粘質土
2．茶灰褐色粘質土　　（含、遺物多、混、炭）
3．茶灰粘質砂　　5．灰褐色粘質土
（含、炭僅少）

第125図　土壙39（1/30）・出土遺物（1/4）

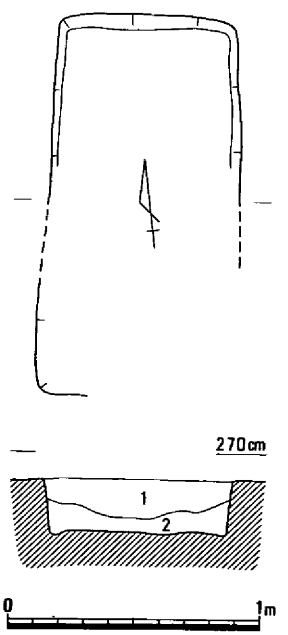
土壙40（第24・126図）

６Ｂｂに所在する竪穴住居22の東約１ｍの地点に近接し、土壙136によってその南側約１／２が切られた状態で検出された。

海抜2.60ｍで平面長方形を呈することを確認し、その平面規模は長軸長1.51ｍ、幅75㎝で、さらに検出面からの深さ約21㎝を測った。ところが、土壙136によって南側が切られていたため幅については判然としなかった。壙内は、検出ラインからほぼ垂直に落ち、定型化した断面形態を見せる。

埋積状況は、断面において上下２層に分層がなされたが明確なものではない。

遺物が出土しなかったことで、時期についての詳細な検討はできないが、およそ弥生時代後期前半に位置づけられよう。



1．淡灰黄褐色土　　2．黄灰色土

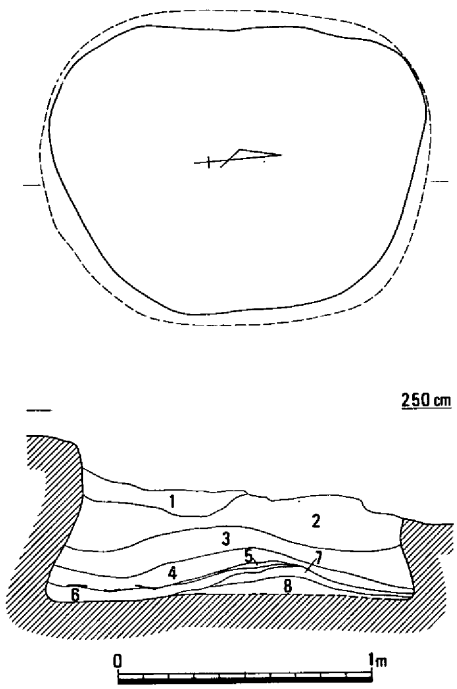
第126図　土壙40（1/30）

土壙41（第24・127図）

７Ｂａ区に所在する竪穴住居22のほぼ中央部において、竪穴住居22の床面除去に検出された土壙である。検出面から約60cm下層でほぼ水平面を有する壙底と、袋状を呈する断面形態が確認された。壙内の埋積土は、床面中央部で凸レンズ状に盛り上がり、袋状土壙特有の埋積状況を呈していた。出土遺物は見られなかったが、竪穴住居22および周辺に所在する一連の袋状土壙の在り方から、これも同じく弥生時代後期前半に位置づけられるものと考える。　（島崎）

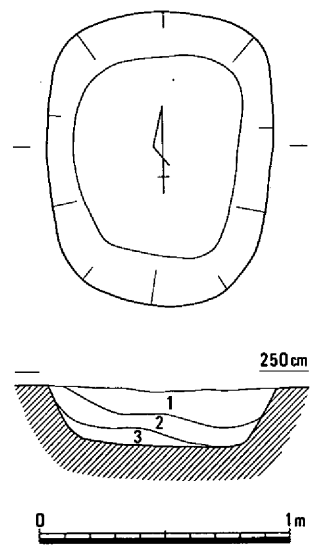
土壙42（第24・128図）

７Ｂｂ区、竪穴住居24の南から検出された平面不整長方形の土壙である。長軸が南北方向に向き、長さ約1.2m、幅91cm、深さ23cmを測る。壁の傾斜は緩く、平坦な底部にいたる。埋土は３層に分かれ、第１層には炭粒が僅かに含まれるものの、下層からは確認できなかった。また、第２・３層にはいずれも小土塊が混入するものであった。遺物は土器細片が僅かに出土したのみであるが、弥生時代後期前半の範疇に入るものと考えられる。　（江見）



1．灰黄色粘質土　　5．炭・焼土
2．黄灰色粘質土　　6．暗灰色土
3．黄色粘質土　　7．灰色粘質土
4．灰色土　　8．黄灰色土

第127図　土壙41（1/30）



1．茶灰色粘質土
（含、炭僅少）

2．茶灰色粘質砂
（混、茶灰色粘質土小塊）

3．褐灰色微砂
（含、灰白粘質土塊）

第128図　土壙42（1/30）

土壙43（第24・129～132図）

８Ｂａ区の北側側溝近くで検出された土壙である。検出面は、海抜約2.57ｍでほとんど正円に近いプランで確認された。検出面からほぼ水平面を有する壙底までは、断面形態が壙底に行くにしたがい径を拡大し、結果断面袋状を呈するものであった。

壙内の土砂の埋積状況は、途中第４層と６層の間で大きく２層に分層が可能で、それによると上層は粘質土で、下層は砂を基調とした土で埋没していた。また、土層中には炭、焼土塊、粘土塊等が特徴的に混在している。第５層は、炭と焼土の薄い堆積であり、第10層の粘土塊は第11層の焼土塊とともに壙底のほぼ中央部に密着した状態で検出された。

遺物としては、粘土、焼土塊を除いた第６～第12層の全体的に下層部分で比較的数多くの土器と石器、さらには鉄器の遺存が確認された。

土器には、壺、甕、高杯、器台の器種が認められた。

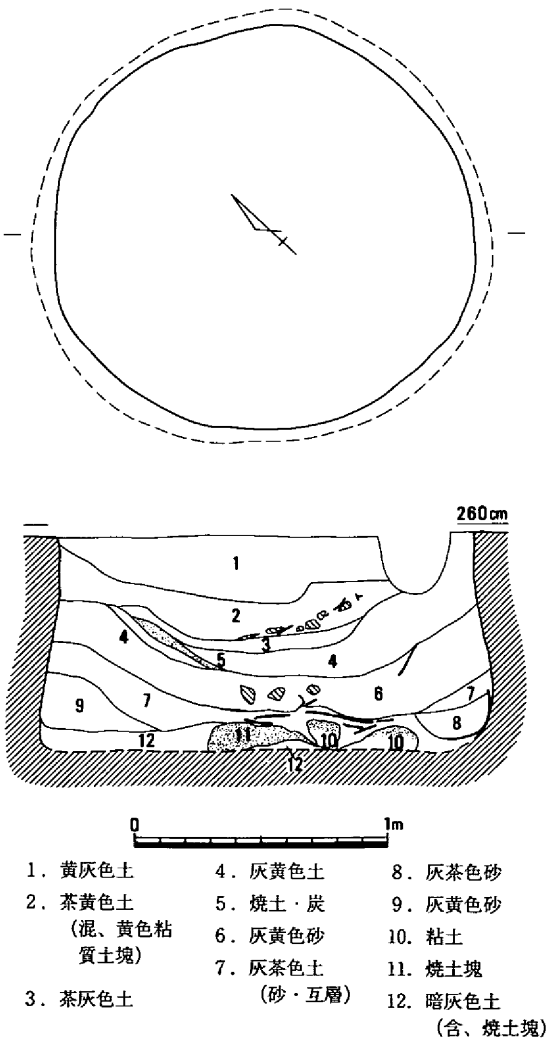
壺419は、大型のもので口縁端部には凹線文を巡らす。420は、甕との判別に困難をきたすが、全体および胴部最大径部分への加飾を根拠に壺と認識した。甕は、422～428が該当すると判断したが、いずれの器種も頸部が胴部より相当小さい傾向を示すことで一部の器種423・424によっては壺との判別が困難であった。

形式的には、高杯429を除くいずれもが上東・鬼川市Ⅰ式の範疇に属するものと考える。

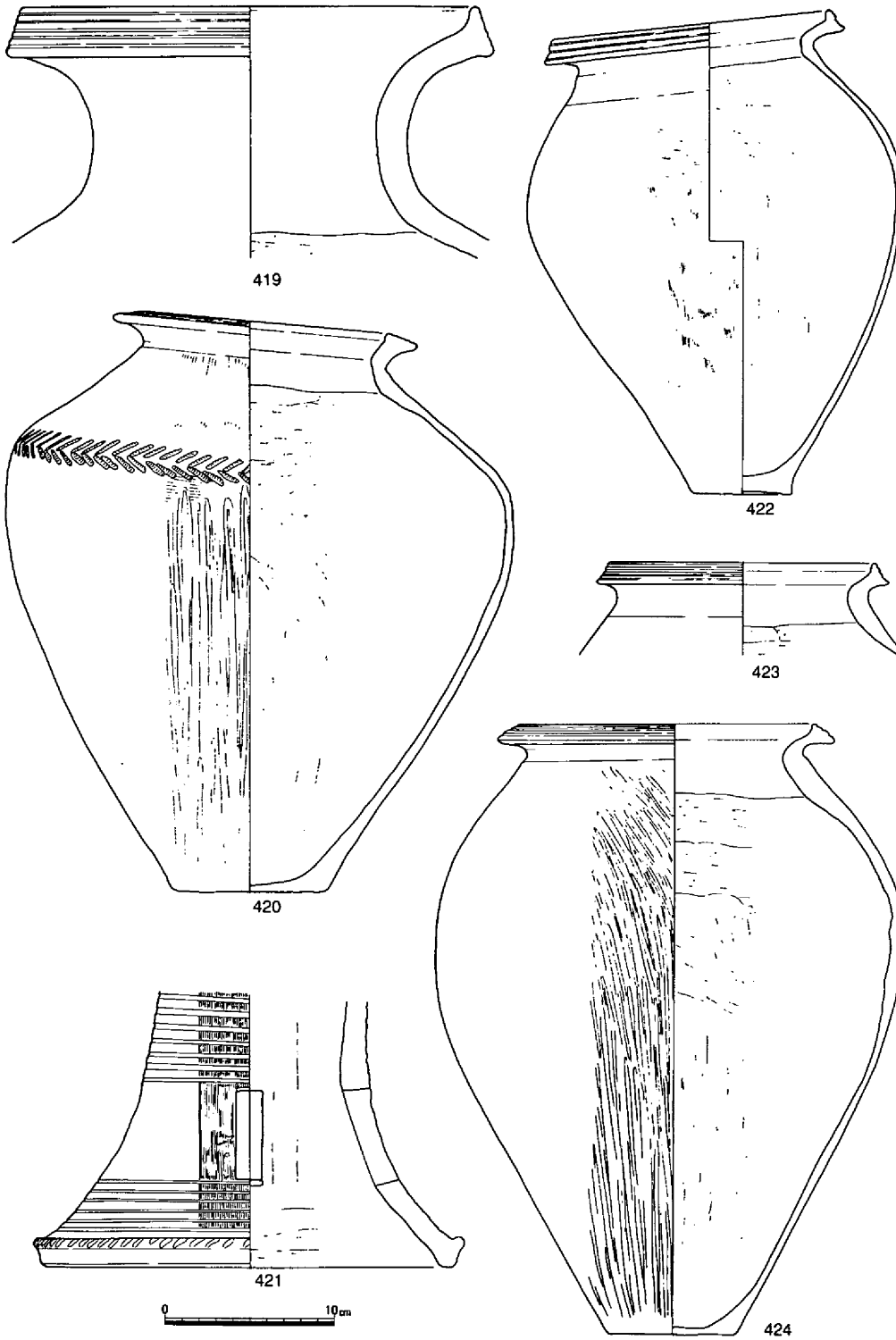
鉄器は、小片であるが断面等の在り方から鏃とした。

石器には、石包丁、石槍、石鏃、敲石が確認された。

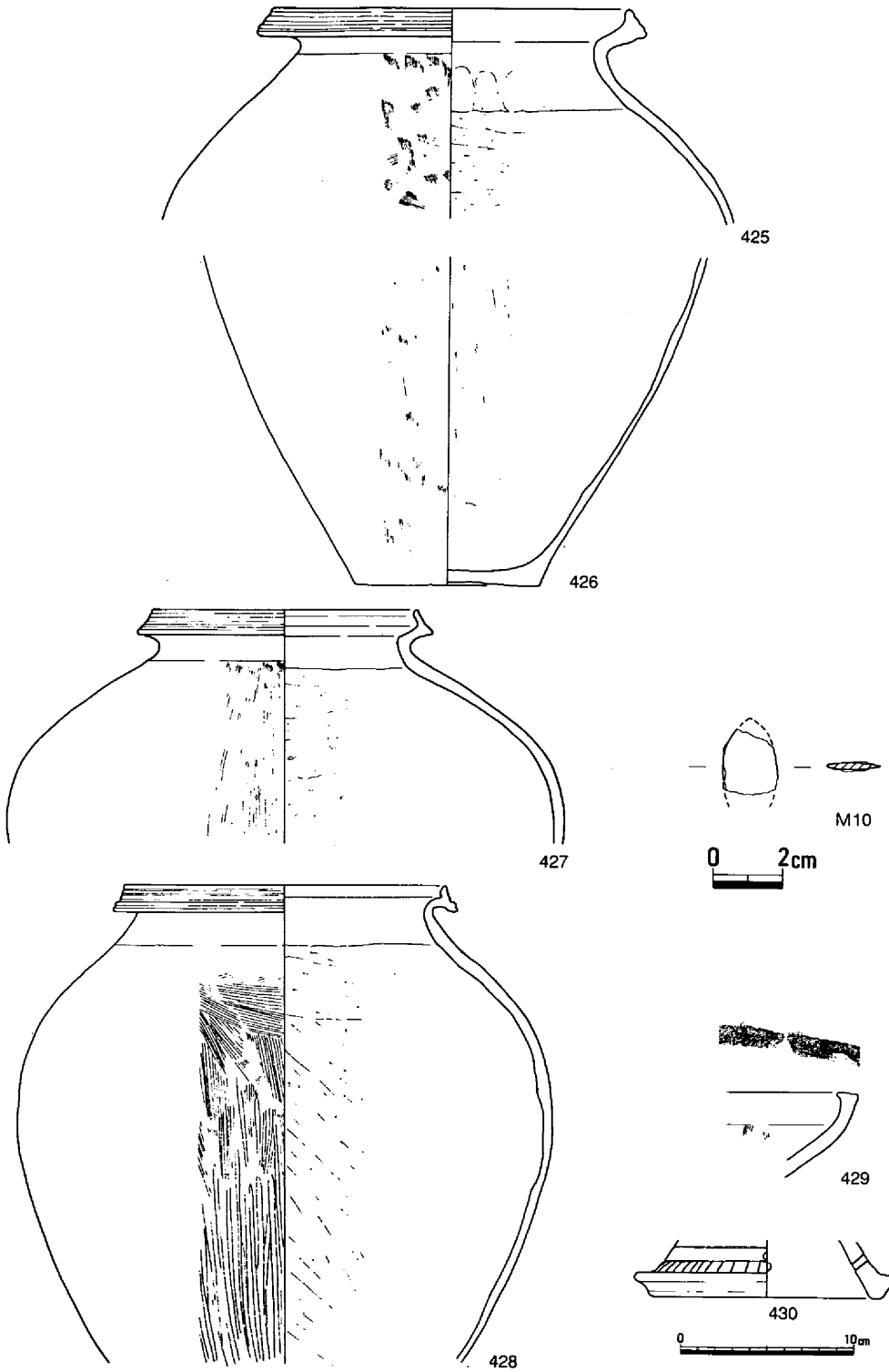
時期は、後期前半に比定されよう。



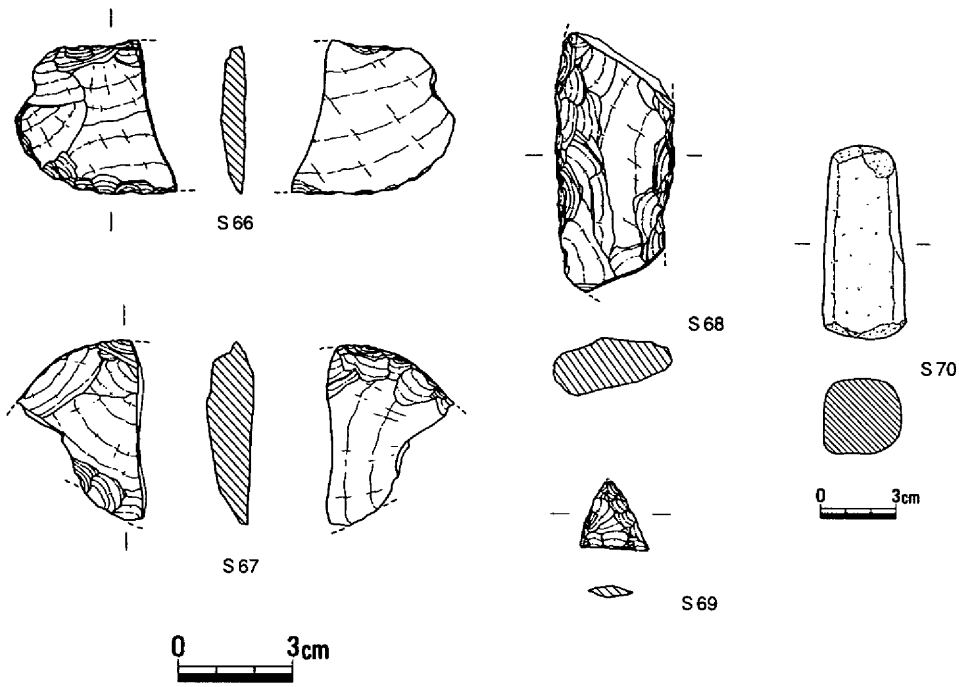
第129図　土壙43（1/30）



第130図　土壙43出土遺物①（1/4）



第131図　土壙43出土遺物②（1/4・1/2）



第132図　土壙43出土遺物③（1/2・1/3）

土壙44（第24・133図）

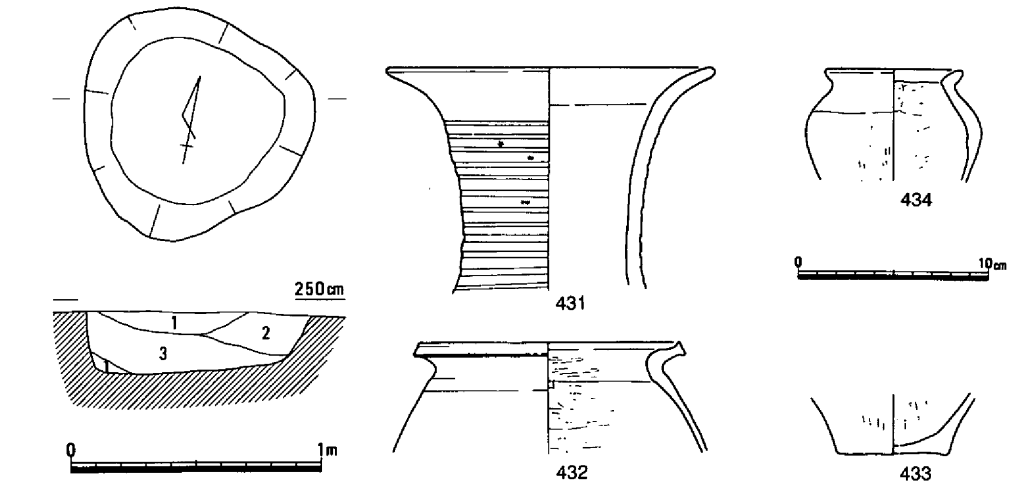
９Ｂａ区において検出された平面不整円形を呈する土壙である。海抜2.45ｍで長軸長92㎝、短軸長90㎝、検出面からの深さ約25㎝の規模であった。断面形態は、一連の袋状土壙のそれとは異なり、袋状土壙でなかったことが知られる。

出土遺物には、長頸の壺、甕等の土器片が少量検出されたにすぎない。型式的には、上東・鬼川市Ⅱ併行段階に比定される。

土壙45（第24・134図）

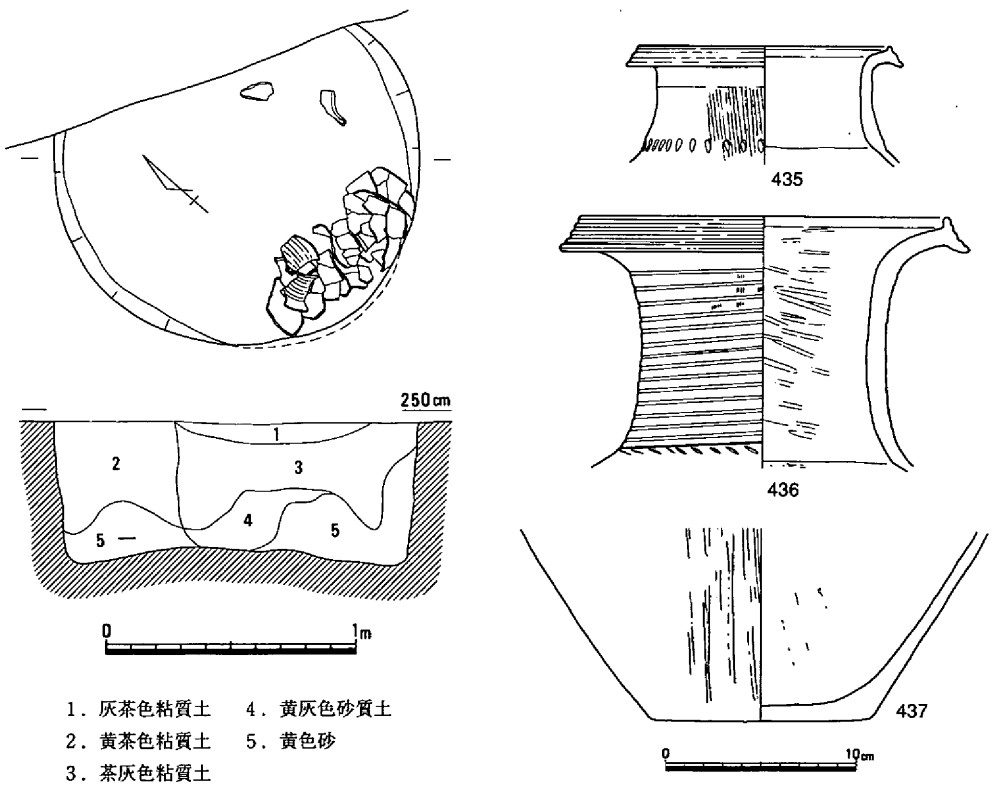
９Ｂａ区で北東側の一部が調査区外にかかった状態で、海抜2.45ｍにおいて検出された土壙である。平面的には円形を呈し、遺存部分で長軸長1.46ｍを測った。検出面からの深さは、壙底面が水平でないことで一様でない。中心部に比べて周辺部がゆるやかに下がるもので、中心部で約50㎝を測った。

壙内埋積状態は、上層の第１・２・３層に粘質土が、下層の第４・５層に砂および砂質土の比較的厚い堆積が見られた。この中において遺物は、壙底部南側に土器の集積が見られた程度であった。土器は、壺が３点図化できたにすぎない。これによると土器は上東・鬼川市Ⅰ段階に併行すると考えられ、時期的には後期前半の範疇に位置づけられよう。



1．灰色土　2．灰黄色土　3．暗灰色土

第133図　土壙44（1/30）・出土遺物（1/4）



1．灰茶色粘質土　4．黄灰色砂質土
2．黄茶色粘質土　5．黄色砂
3．茶灰色粘質土

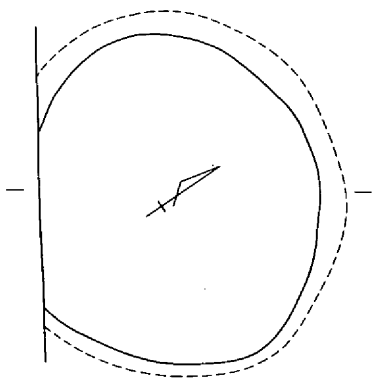
第134図　土壙45（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙46（第24・135図）

８Ｂｄ区において竪穴住居27の東約50cmの近接した状態で検出された土壙である。南西部が一部調査区外にかかっていたことで全貌の検出には至らなかった。平面的には東西約1.35m、南北1.25mの規模で楕円形を呈し、壙底は平面規模より大きく、断面袋状を示すものであった。壙底からは、最下層において炭の薄い堆積が認められたが、この性格については明らかでない。時期は、土器の遺存が見られなかったことで判然としないが、後期前半であろう。　（島崎）

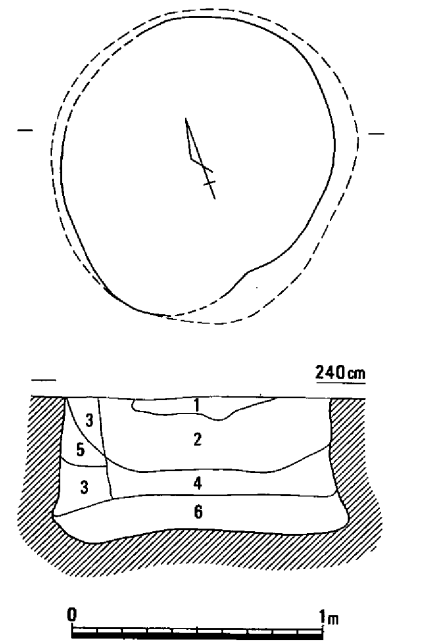
土壙47（第24・136図）

９Ｂａ区に位置し、上部を竪穴住居75および掘立柱建物８に削平を受けて検出された袋状土壙である。平面不整円形を呈し、深さ55cmを測る。床面は中央が僅かに高く、床面径1.25×1.15m、床面積1.18㎡、床の海抜高1.75mを測る。

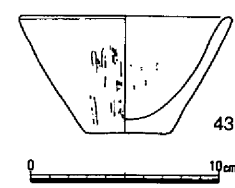


1．茶灰褐色粘質土　4．茶褐色粘質土
2．暗灰色粘質土　（混、暗灰色粘質土）
3．茶褐色粘質土　5．炭層
（混、灰色粘質土）

第135図　土壙46（1/30）



1．褐色微砂　5．淡茶褐色砂
2．灰色粘質砂　6．灰褐色微砂
（含、灰茶色粘質砂塊）　（含、茶灰色粘質土塊多）
3．灰茶色粘質砂
4．灰色粘質砂
（含、褐色粘質砂塊）



第136図　土壙47（1/30）・出土遺物（1/4）

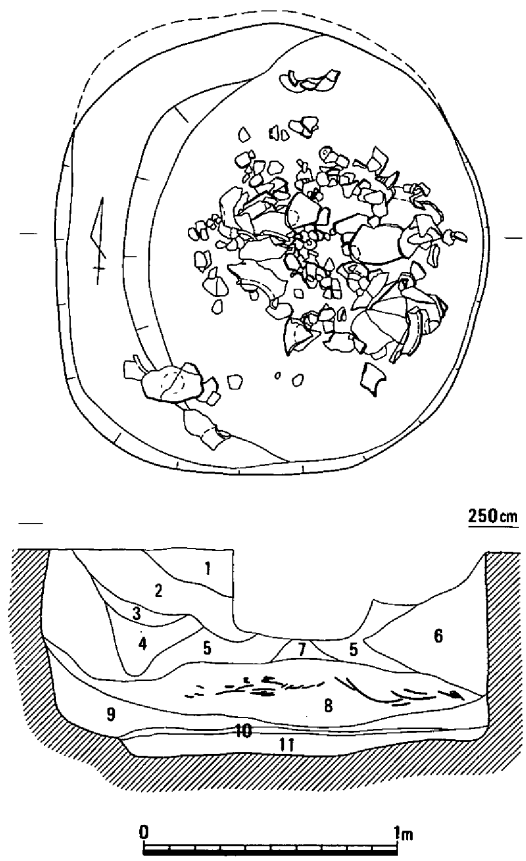
埋土は第２層下面の凹地状を呈す上層と、それ以下の２層に大別され、遺物は上層下部から主に出土している。なお、西側に不自然な層を確認したが、上部壁の崩落によって生じたものと思われる。

遺物は図示した小型鉢438の他土器細片が僅かに出土したのみであるが、上東・鬼川市Ⅱの範疇に入るものと判断される。

土壙48（第24･137～140図、写真図版115）

土壙47の南に位置し、上部を竪穴住居75および掘立柱建物８に削平を受けた袋状土壙である。平面は西および南がやや直線的に走る不整円形を呈し、深さ55cmを測る。壁は西から北部にかけて下部を抉り込んだ部分が認められたが、南東部ではほぼ垂直に掘り込まれた状態で検出された。床面は中央部が一番低く、南に向けて僅かに高くなる一方、床面西半部には壁に沿って幅約20cm、高さ約10cmの一段高い部分が検出された。床面径1.85×1.6m、床面積2.47㎡を測る、袋状土壙としては床面積の広いものである。床面の海抜高は1.75mを測る。

埋土は上層（１～７）、中層（８）、下層（９～11）の３層に大別され、第６層は上部壁の崩落したものと考えられる。中層からは中央やや東寄りを中心に土器がまとまって出土しており、これらには完形に復元されたものが多く含まれるものの出土状況から、破砕され廃棄されたものと推定される。なお、下層の第10層はほぼ水平堆積を示す炭層で面をなしており、第11層が比



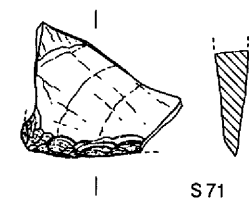
1．暗灰茶色粘質土（含、黄色微砂塊）
2．暗灰茶色粘質土
3．淡灰褐色微砂
4．暗灰茶色粘質土（含、微砂多）
5．淡灰褐色砂質土
6．淡灰褐色微砂（基盤層と近似）
7．暗茶灰色粘質土
8．茶灰褐色粘質砂
9．淡茶灰色粘質土
10．炭層
11．微砂（混、淡茶灰色粘質土）

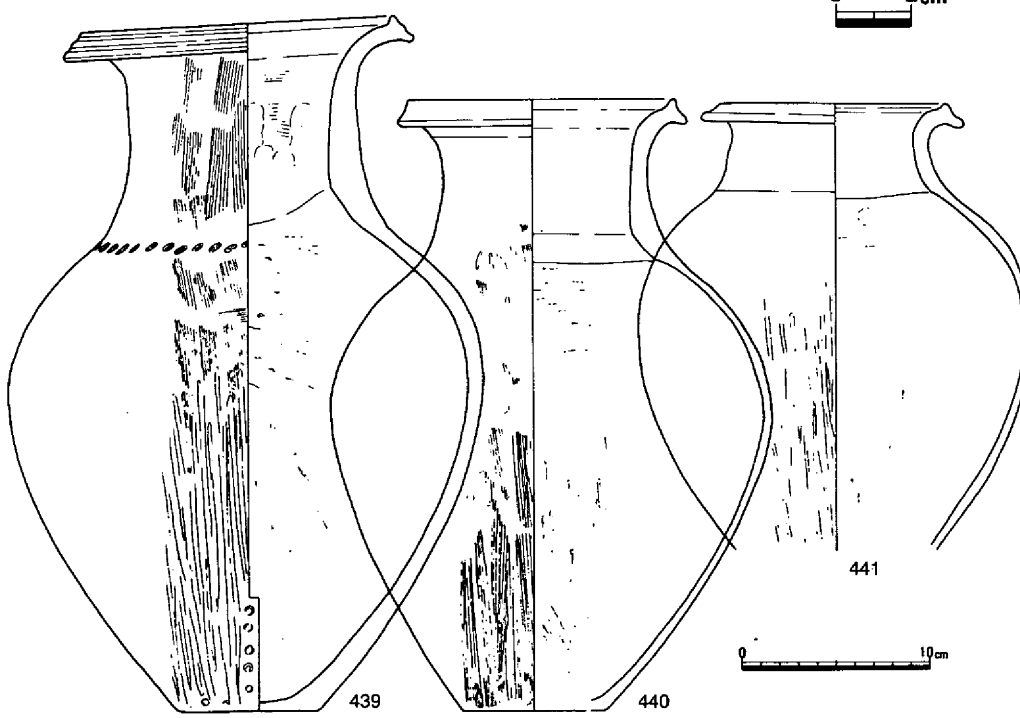
第137図　土壙48（1/30）

較的締まった微砂層であることから、10層下面が床面の可能性もあり得る。

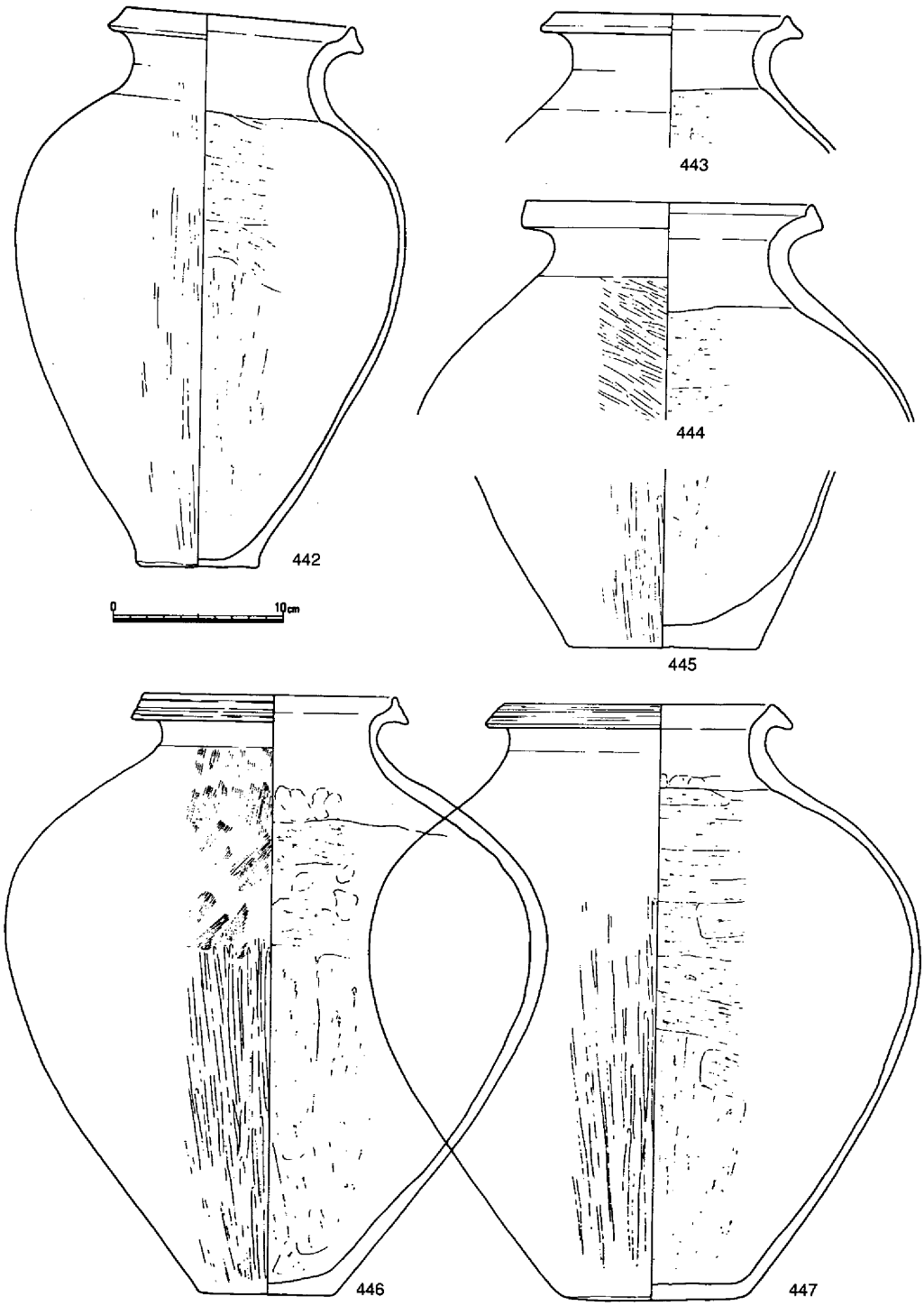
遺物は石包丁S71をはじめ壺、甕、ミニチュア土器などが出土した。壺は口縁端部に凹線をもつ439・446・447、端部が肥厚し凹部を形成する440・442・443、端部を外方に引き出す441、上方につまみ出す444などがある。胴部下半は439～441が緩く丸味をもって底部に達しているが、445～447は直線的にすぼまり、442は底部で逆反りしている。胴部外面調整はハケ調整の後ヘラミガキを施しているが、440はハケ調整で終了している。439の頸部下端には刺突が巡らされ、胴下半には竹管による浅い施紋が認められた。また、442は二次焼成による煤が胴部下半に付着していた。甕448～452においても口縁の整形は同様であるが、器表面は二次焼成により剝落しているものが多かった。451の胴部外面はハケ調整で終了しており、452は胴下半をさらにヘラミガキしている。453～455はミニチュアで、稚拙な作りながらも器台453の口縁部には凹線を施し、体部に浅い沈線を巡らせ、一対の円孔を数か所に穿っている。456の器表面はケズリおよび押圧ナデで調整された雑な作りで、蓋と思われる。

以上、当土壙は土器の特徴から上東・鬼川市Ⅰ併行期に廃絶したものと考えられる。（江見）

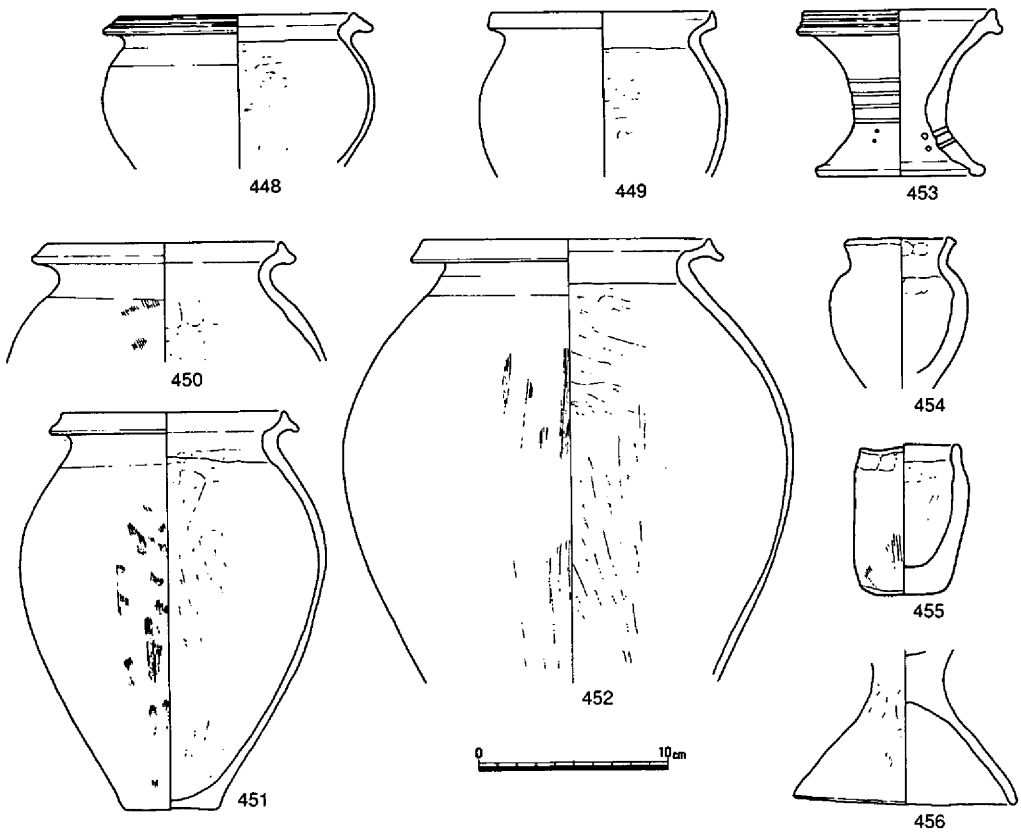




第138図　土壙48出土遺物①（1/2・1/4）



第139図　土壙48出土遺物②（1/4）



第140図　土壙48出土遺物③（1/4）

土壙49（第24・141図）

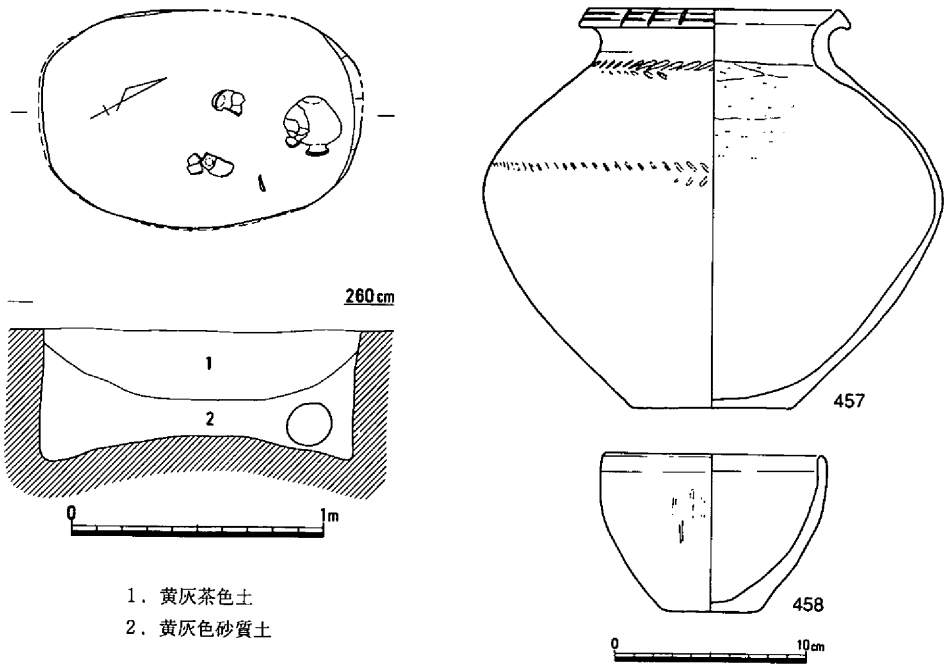
９Ｂｂにおいて検出された平面楕円形を呈する土壙である。海抜2.50ｍでの検出面での規模は、長軸長1.25ｍ、幅87㎝を測った。深さは、壙底断面が中央部で凸レンズ状に盛り上がった形状を示し一定でないが、最高部で検出面からの深さ40㎝を測った。

壙内埋積土は、大きく２層に分層され下層に砂質土の比較的厚い堆積が見られた。壙内遺存遺物は、この砂質土中において壺、鉢が検出された。型式的には、上東・鬼川市Ⅰ式に併行するものと見られ、およそ後期前半に位置づけられよう。

土壙50（第24・142図）

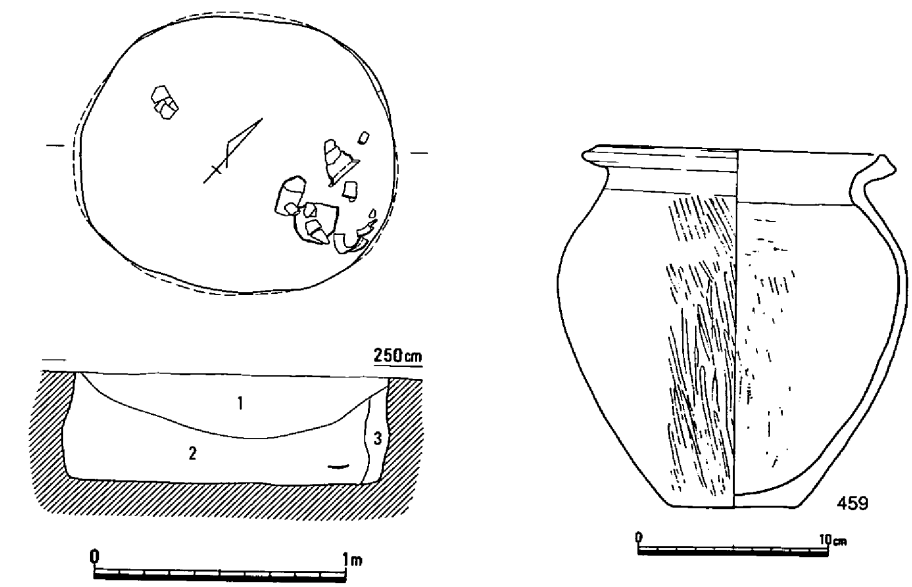
９Ｂｂ区において土壙49の北１ｍの位置に近接して、長軸長1.25ｍ、幅1.09ｍの平面楕円形を呈する土壙が検出された。検出面（海抜2.45ｍ）から壙底までの深さは、43㎝を測った。水平面を呈する壙底からほぼ垂直もしくは斜傾して上方に立ち上がる壁の状況から考えて、性格的には袋状土壙と考える。埋積状況は、土壙49と共通し、下層に砂質土の堆積が見られた。

時期は、出土した甕によって後期前半への位置づけがなされよう。



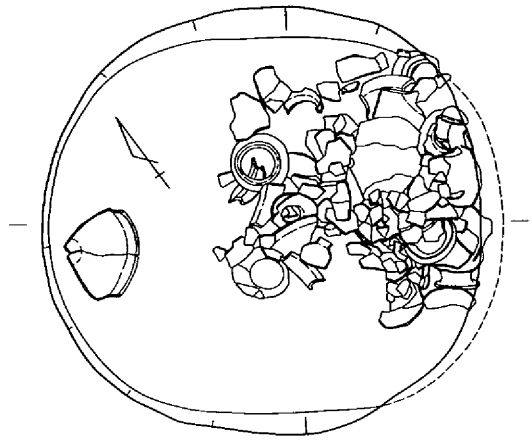
1．黄灰茶色土
2．黄灰色砂質土

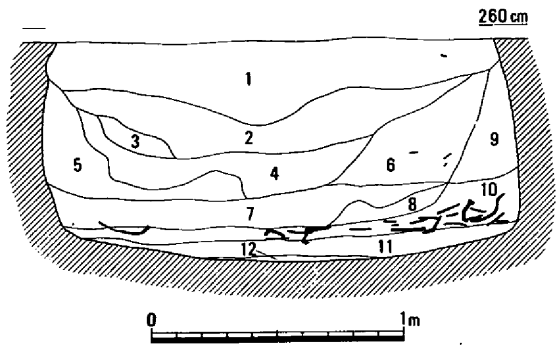
第141図　土壙49（1/30）・出土遺物（1/4）



1．暗灰黄色粘土　2．黄灰色砂　3．暗灰色土

第142図　土壙50（1/30）・出土遺物（1/4）



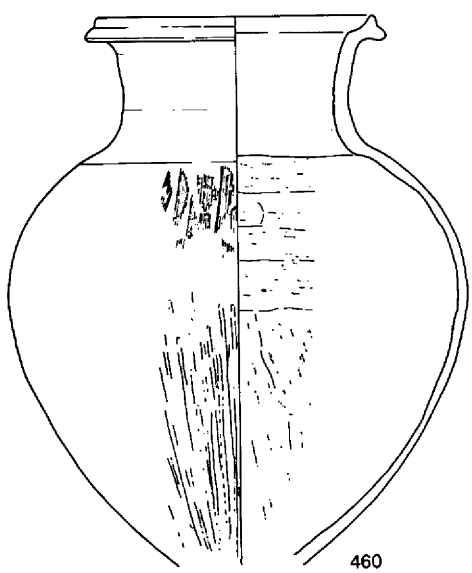


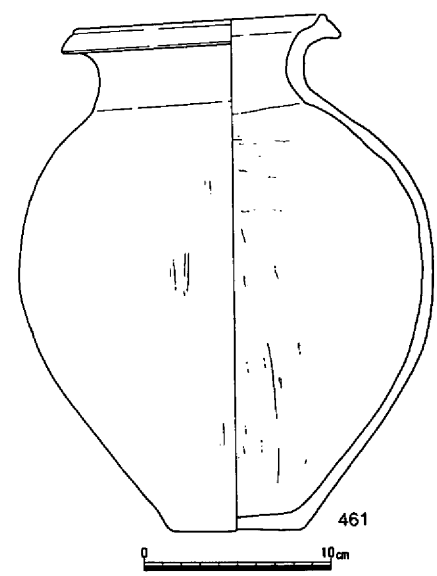
土壙51

（第24・143～146図、写真図版115）

９Ｂｂにおいて土壙50の東約３ｍの地点に所在が確認された。平面1.70～1.72ｍの径を有し、円形を呈するもので、検出面から壙底中央部までの深さ87cmを測った。壙内の埋積状況は、最下層に炭の薄い堆積が見られ、その上層第10層の粘質土中には数多くの土器の包含が認められた。また中間層とし

1．暗灰黄色粘質土
2．灰黄色砂質土
3．黄色粘質土
4．灰茶色砂質土
5．灰茶色粘質土
6．淡灰色砂
7．淡黄灰色砂
8．茶灰色砂質土
9．淡灰黄色土
10．灰色砂
11．茶灰色粘質土
12．茶灰色粘質土（含、炭粒多）



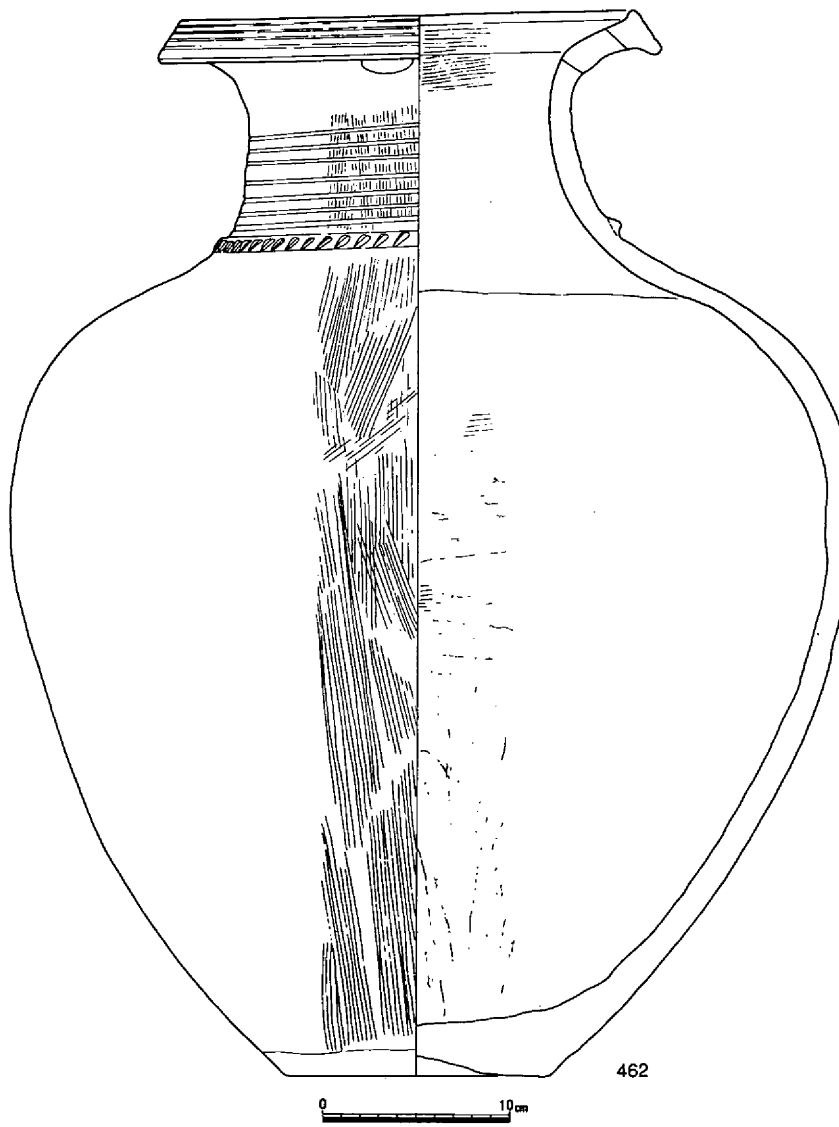


第143図　土壙51（1/30）・出土遺物①（1/4）

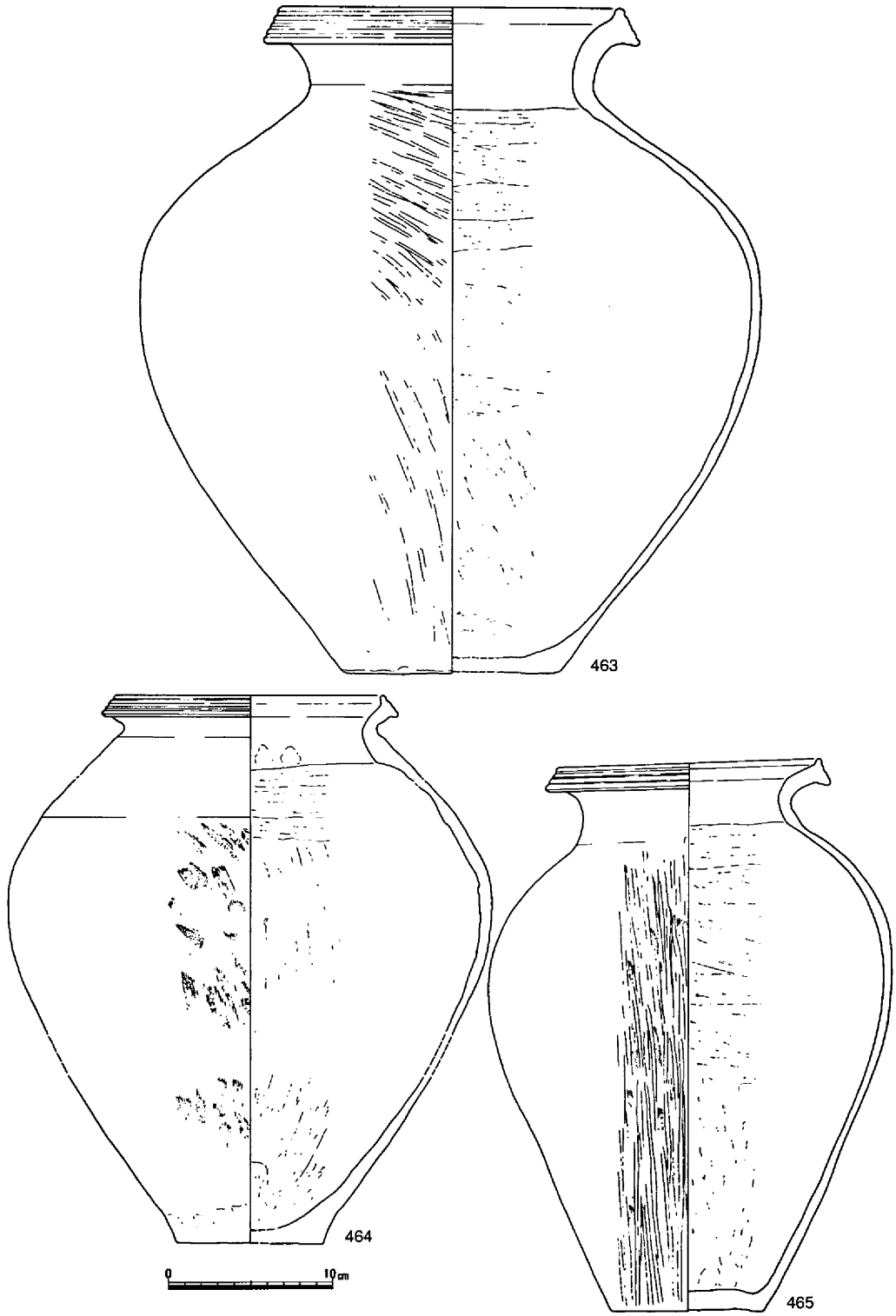
ての第６・７・10層には、砂の堆積が見られた。

出土した土器は、大型で口縁部近くに円形の穿孔された壺462を含めて比較的壺が多く、また他の器種としては甕466・467、高杯470、鉢468・469・471等が確認された。

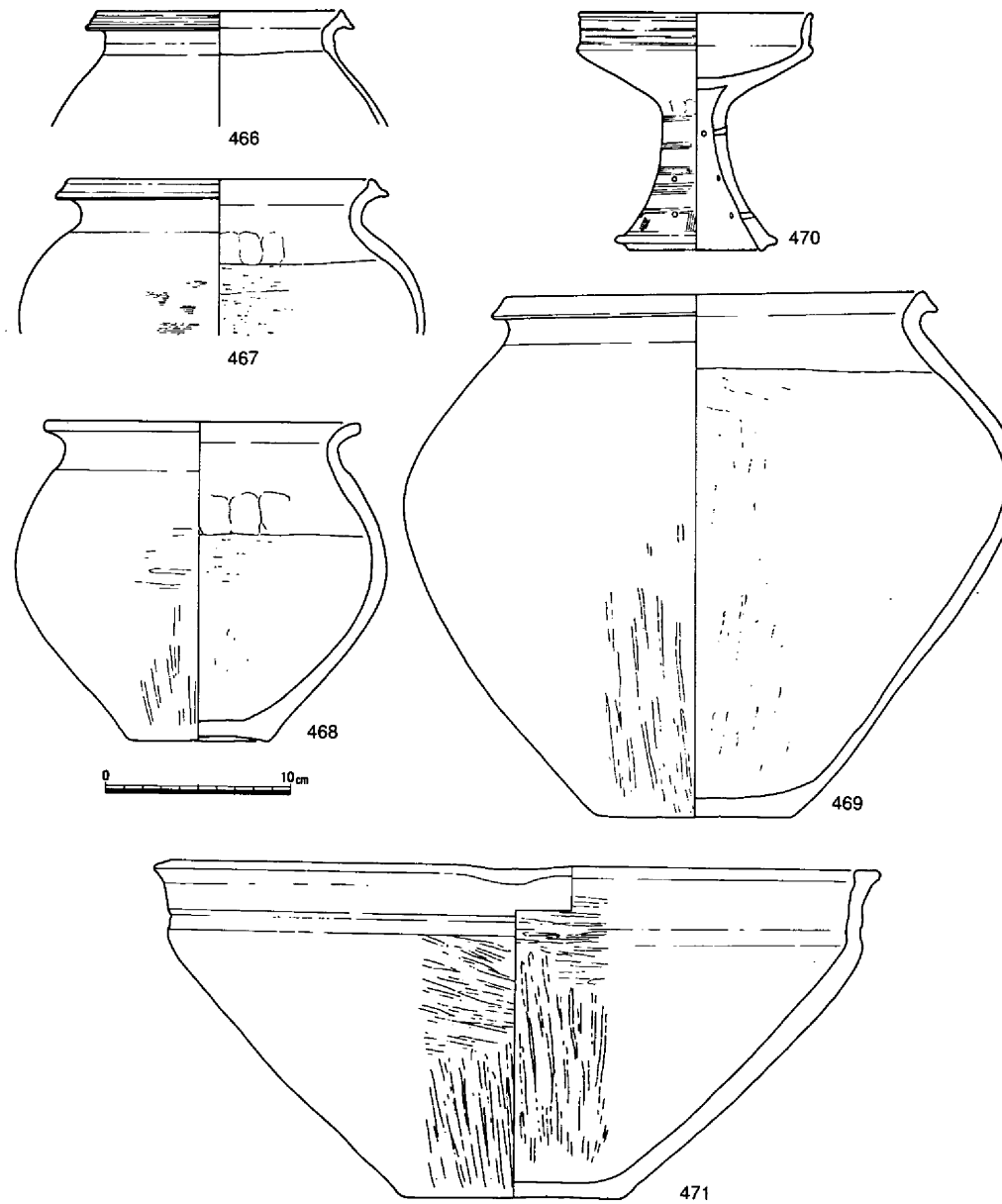
壺と甕の一部口縁部外面はわずかに上下に拡張を見せ、そこには凹線文が施されていた。高杯は、口縁部をほぼ垂直に立ち上げ、外面には凹線文が、また脚部外面にはヘラ描きによる沈線文と円形の穿孔とで加飾されていた。型式的には、いずれも上東・鬼川市Ⅰ式併行期に比定され、時期は後期前半に位置づけられよう。　（島崎）



第144図　土壙51出土遺物②（1/4）



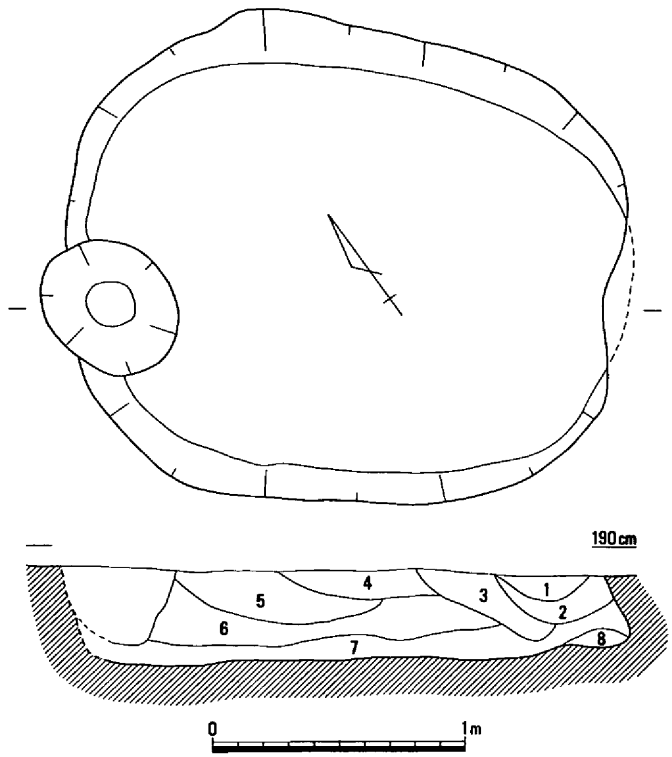
第145図　土壙51出土遺物③（1/4）



第146図　土壙51出土遺物④（1/4）

土壙52（第24・147図）

９Ｂａ区、土壙48の南西に位置し、上部を竪穴住居65に削平を受けて検出された袋状土壙である。東壁部分の検出で袋状土壙と判断されたもので平面不整楕円形を呈し、床面径2.15×1.6m、床面積2.77㎡を測り、当遺跡検出の袋状土壙としては最も広い床面積をもつ。床面はやや



1．灰褐色粘質砂　4．灰色粘質砂　7．明灰色粘質微砂
2．明灰色微砂　5．淡褐色微砂　8．明灰色粘質土
3．茶灰褐色粘質土　6．灰色微砂

第147図　土壙52（1/30）

凹凸があるもののほぼ平坦で、検出面からの深さ35cm、床面の海抜高1.44mを測る。

遺物は土器細片が数片出土しており、これらは弥生時代後期前半のものと思われる。

土壙53（第24・148図）

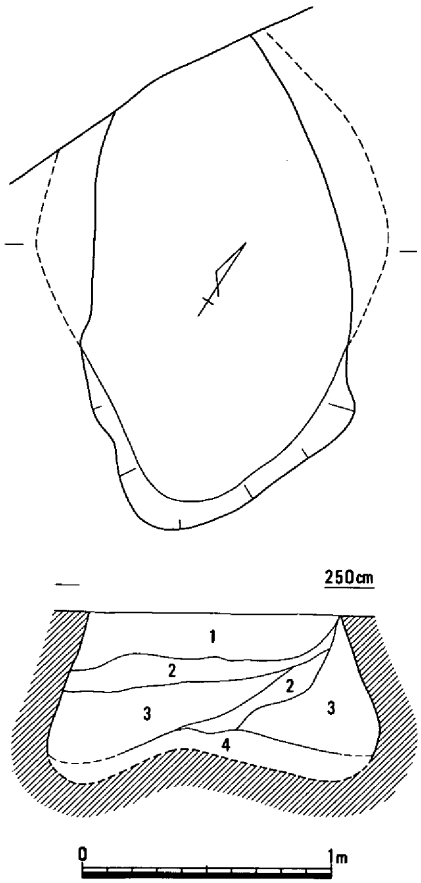
土壙52の北西に接して検出された袋状土壙で、一部調査区外に延び、上部は竪穴住居65に削平を受けている。平面不整楕円形を呈し、短径約1m、深さ54cmを測る。床付近は湧水のため不明瞭ではあるが、床面は中央が高く周囲が窪む状況を呈していた。

遺物は土器細片が出土しており、これらは弥生時代後期前半のものと思われる。

土壙54（第24・149図）

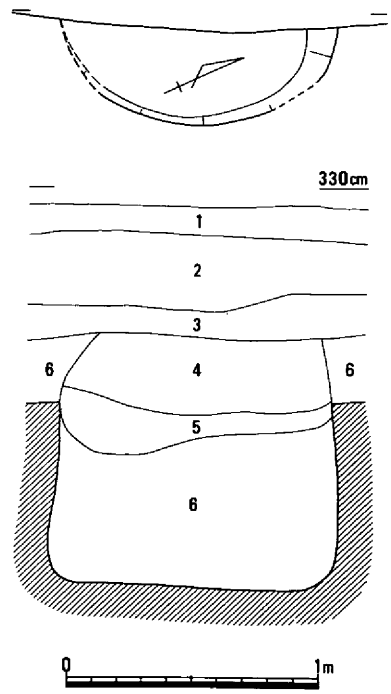
土壙52の西から検出された袋状土壙で、西半部が調査区外に延びる。平面円形を呈し、径1.1m、深さ約1mを測る。床面は平坦で床面の海抜高は約1.7mを測る。

遺物は土器細片が出土しており、これらは弥生時代後期前半のものと思われる。　（江見）



1．茶灰色粘質土（混、褐色微砂）
2．灰褐色砂質土（混、茶灰色粘質土）
3．灰褐色粘質土
4．暗茶灰色粘質土

第148図　土壙53（1/30）



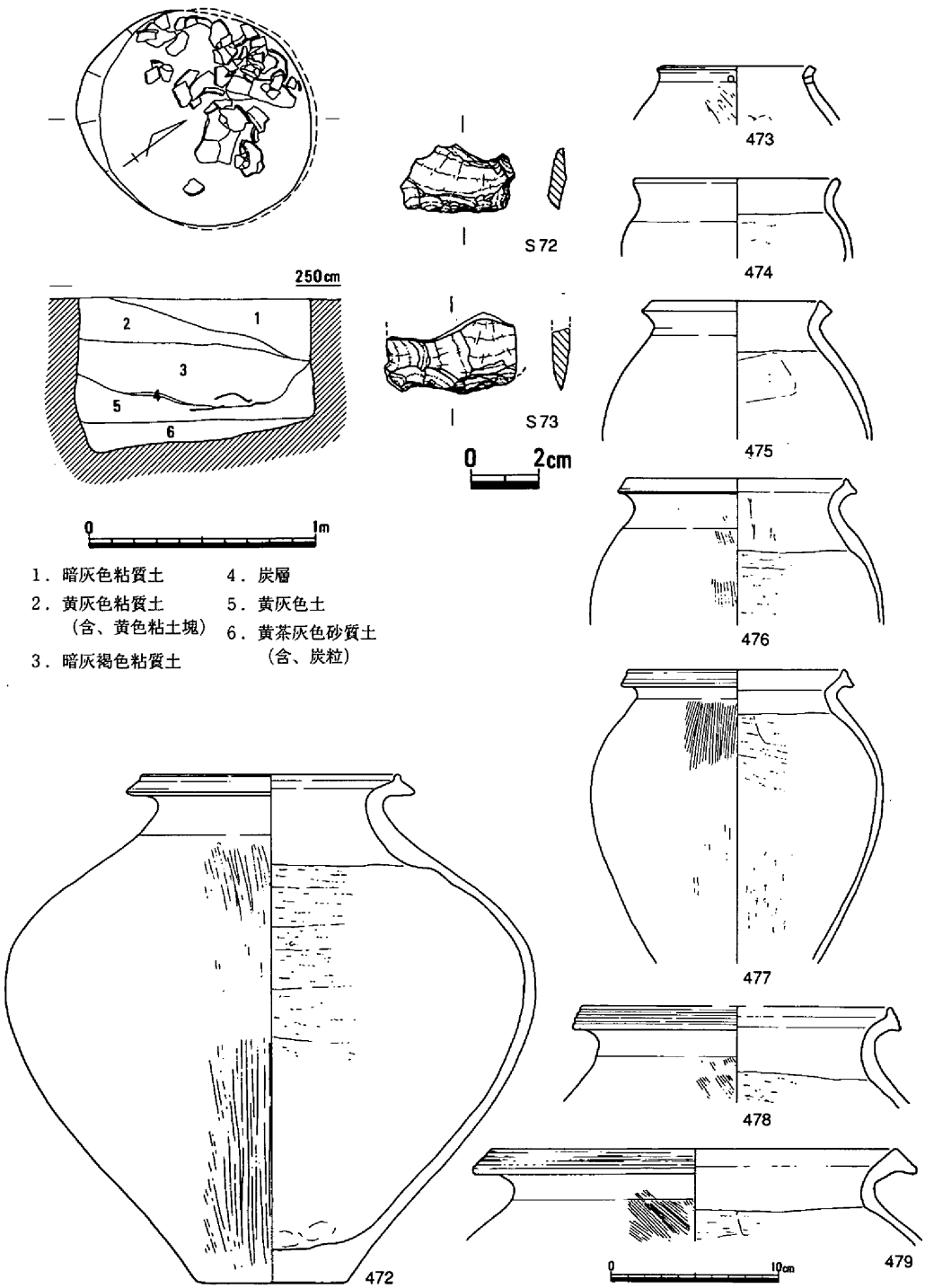
1．淡灰褐色粘質土
2．灰黄褐色粘質砂（中世？）
3．淡褐灰色粘質土（古墳？）
4．茶灰褐色粘質土
5．淡褐色微砂
6．茶灰色粘質砂

第149図　土壙54（1/30）

土壙55（第24・150図）

９Ｂｃ区において海抜2.45ｍで検出された土壙である。長軸長1.03ｍ、幅95㎝を測り、平面円形を呈する。断面形態は、検出面から約54㎝下がった所に壙底をもち、検出面肩口から壙底までは垂直もしくは斜傾する壁を有するもので、袋状を呈する。壙内は、基本的に粘質土で埋積しており、中間の第４層には炭粒の包含が認められた。また、壙底の下層第６層中にも炭粒が含まれていた。

出土遺物には、２点の石器と壺、甕等の土器が確認された。土器は、壺472を除いてはいずれも小破片で明確でないが、壺472から後期前半への位置づけがなされよう。　（島崎）



1．暗灰色粘質土
2．黄灰色粘質土
（含、黄色粘土塊）
3．暗灰褐色粘質土
4．炭層
5．黄灰色土
6．黄茶灰色砂質土
（含、炭粒）

第150図　土壙55（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

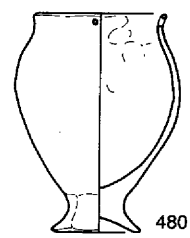
(4) 包含層遺物（第151～154図）

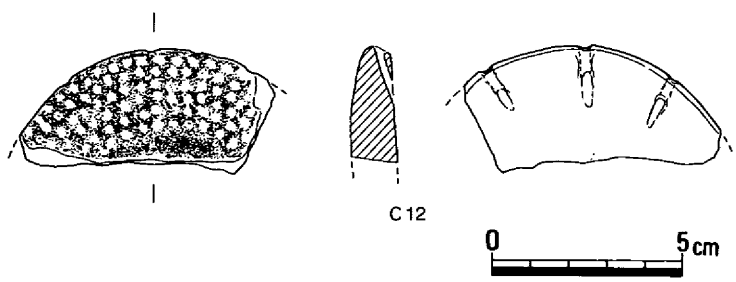
包含層遺物は各節末に記載しており、この項においても土器、土製品、石製品を掲載しているが、遺物によってはその所属時期の決定が困難なものも多く、別時期の遺物が掲載される場合もあることを最初に断わっておきたい。

ミニチュア土器480は５Ｂ区から出土した。褐灰色を呈し、倒卵形の胴部に指でつまみだして口縁部を作り、端部に左右一対の円孔を穿っている。器表面は剝落が著しく明瞭ではないが、ハケ調整の後指頭による押圧ナデで仕上げられているようである。弥生時代後期前半のものと考えるが、中期に遡る可能性もある。

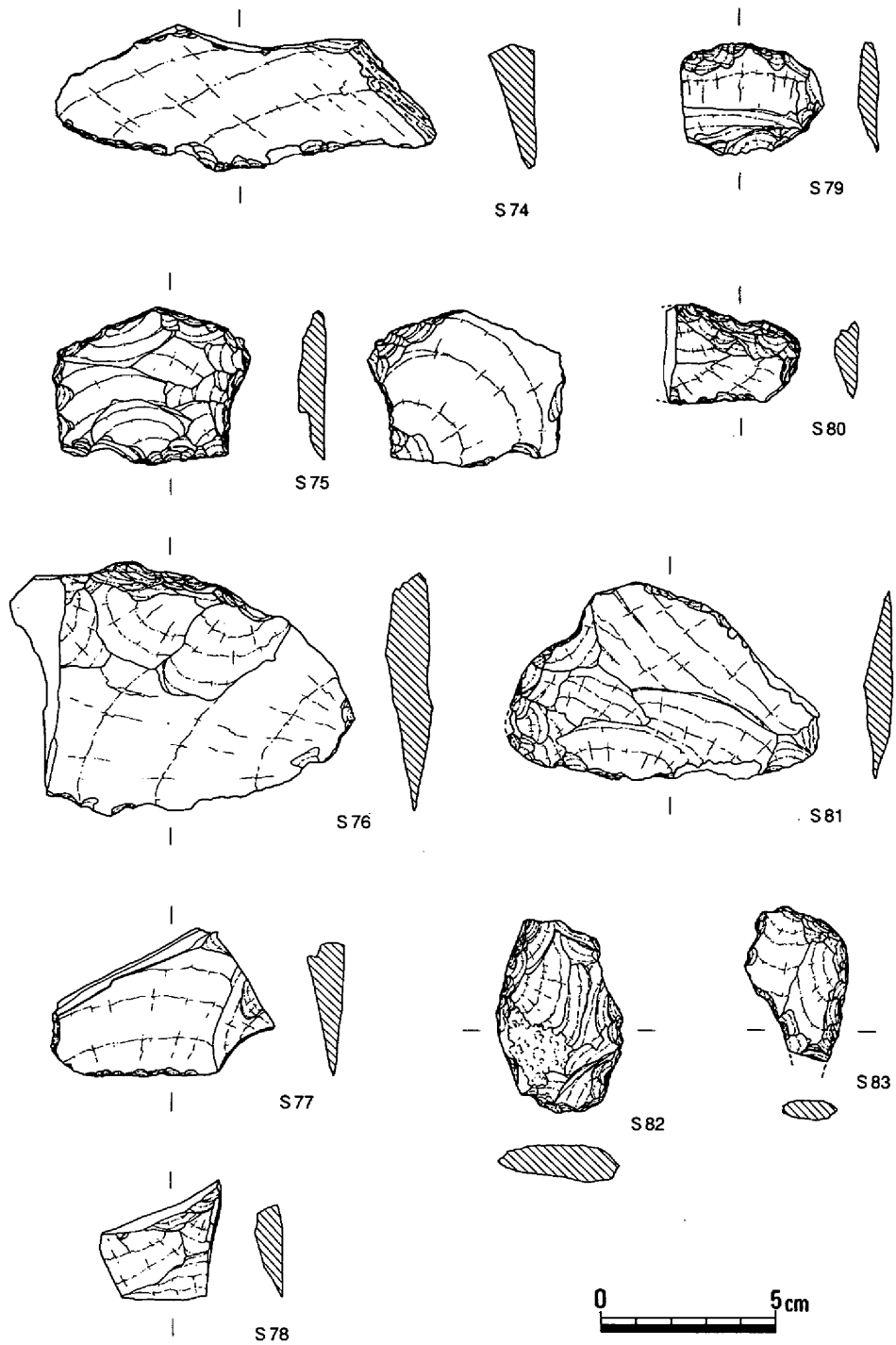
分銅形土製品Ｃ12は上半部を残すもので黄褐色を呈し、表面に竹管状工具による刺突が内側から外に向かって６列にわたって施されている。また、縁部中央から背面にかけて、３か所に円孔の貫通する部分が認められた。弥生時代中期～後期前半のものであろう。

石製品にはスクレーパーＳ74～82をはじめ、石包丁を転用した石錐Ｓ83、石包丁Ｓ84～89、楔形石器Ｓ90～94、石斧Ｓ95・96、石槍Ｓ98、石鏃Ｓ99～112、石鏃未製品Ｓ113などが出土している。これら石製品は大半がサヌカイト製の打製品であるが、石包丁Ｓ89、扁平片刃石斧Ｓ95、石斧Ｓ96は磨製品である。また、石鏃は凹基式Ｓ99～101、平基式Ｓ102～106、有茎式Ｓ107・109・110、凸基式Ｓ108などがあり、重さは0.61～5.74ｇを測る。なお、Ｓ99の形態は古い様相を示している。掲載図面の他、弥生時代中・後期前半と思われる各遺構出土の未掲載分を含めると、石錐１点、石鏃８点、敲石３点、砥石５点、Ｕ.Ｆ32点、Ｒ.Ｆ12点などが出土しており、当時期までの石製品は全体で170点余りにのぼった。（江見）

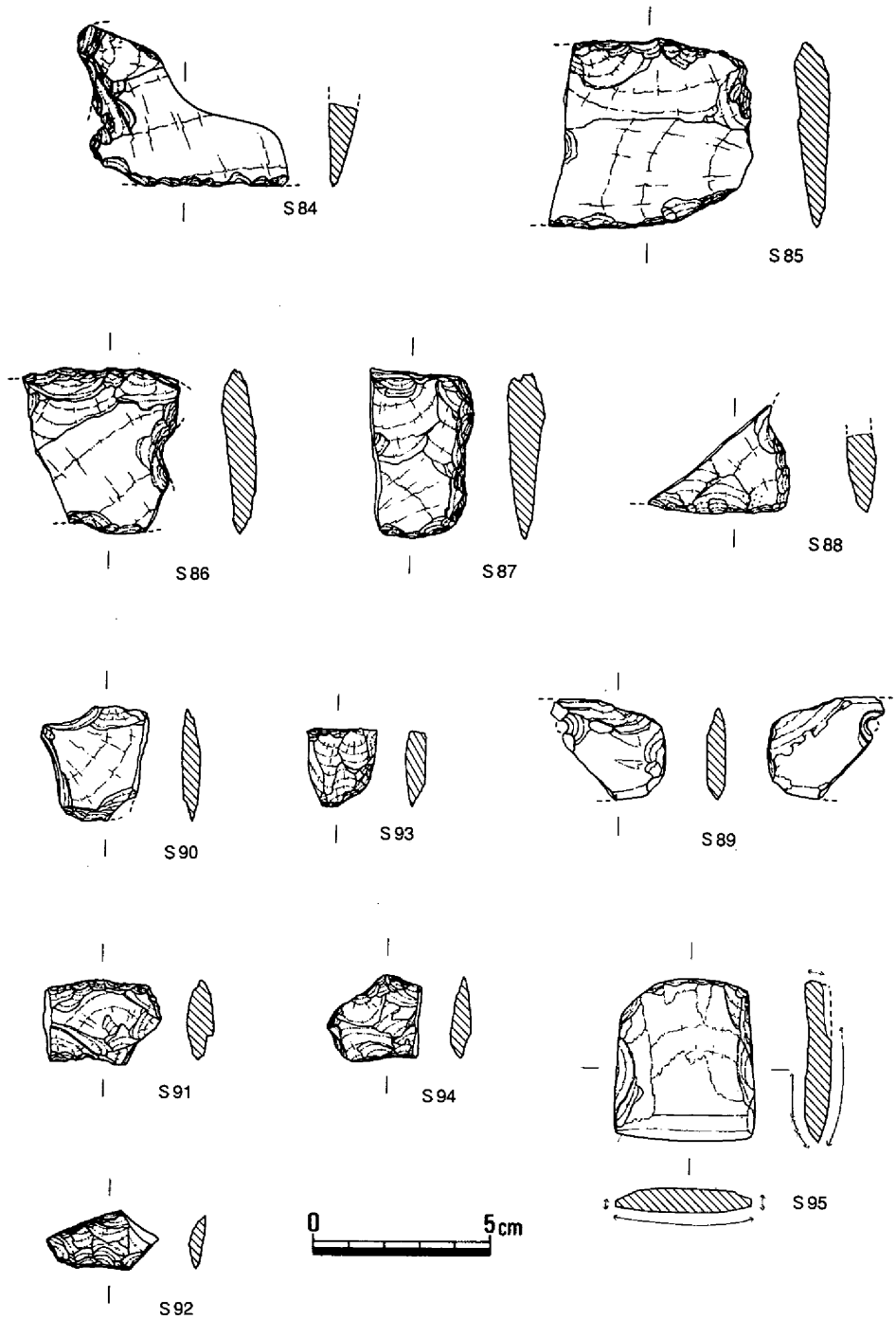




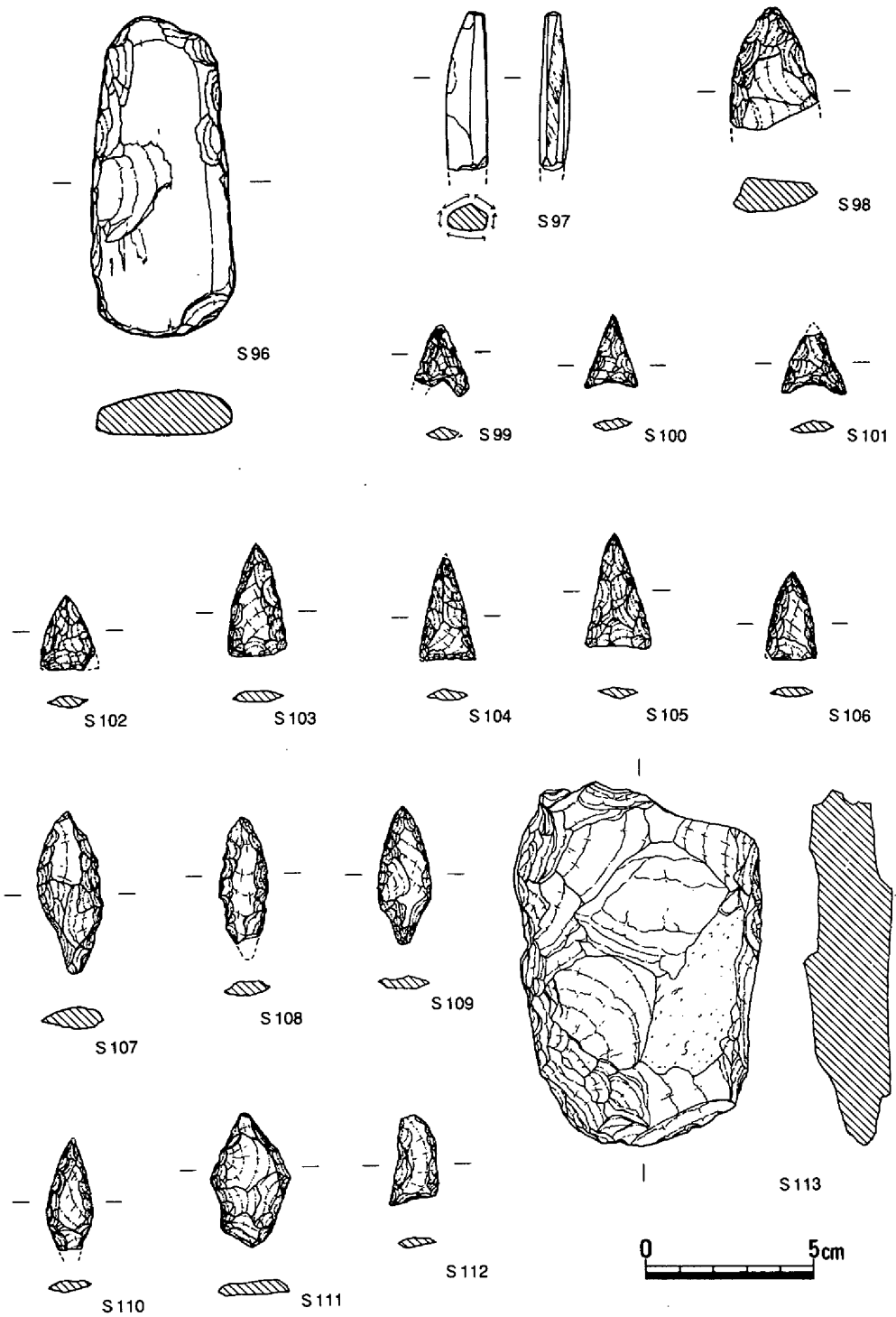
第151図　包含層出土遺物①（1/3・1/2）



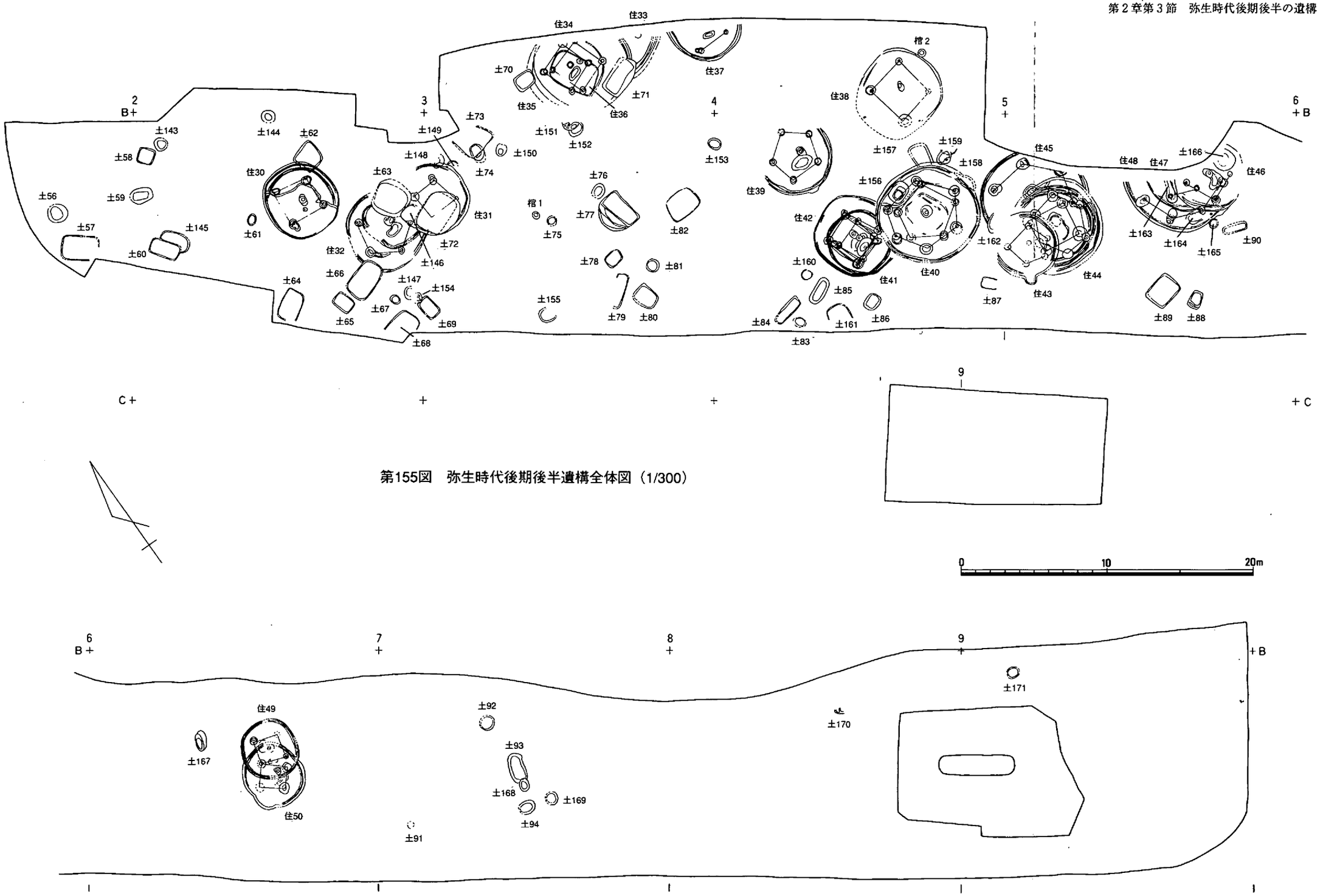
第152図　包含層出土遺物②（1/2）



第153図　包含層出土遺物③（1/2）



第154図　包含層出土遺物④（1/2）



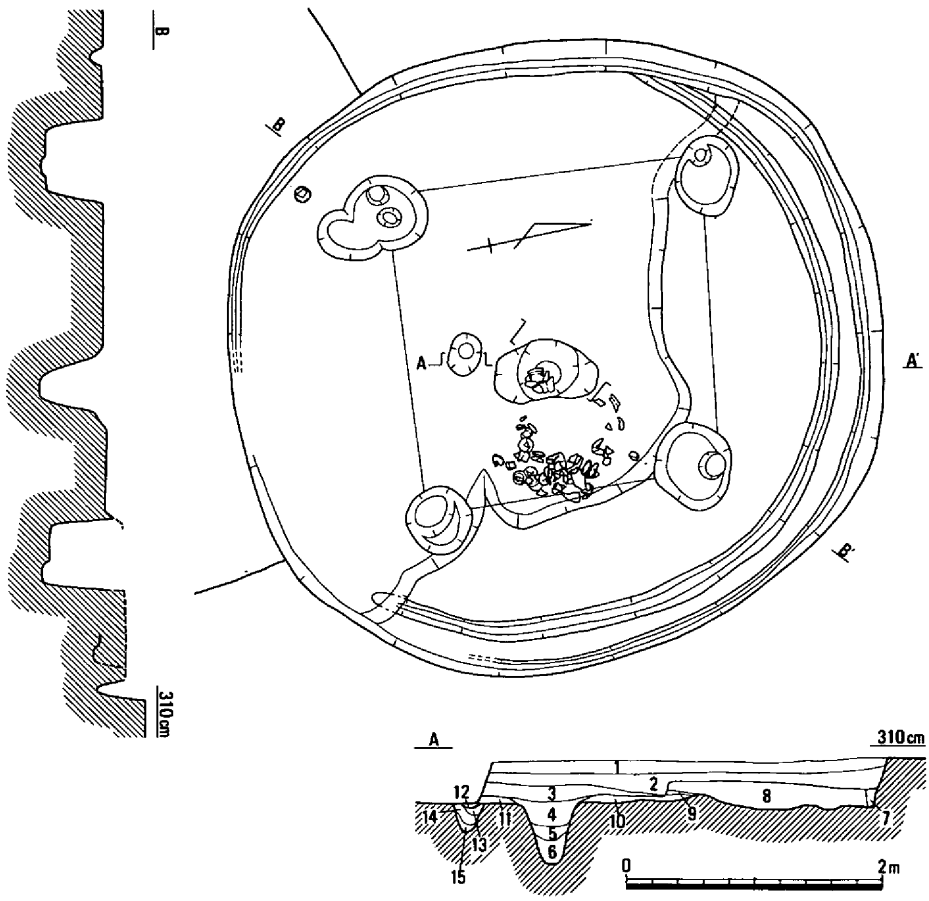
第155図　弥生時代後期後半遺構全体図（1/300）

第３節　弥生時代後期後半の遺構・遺物

(1)　竪穴住居

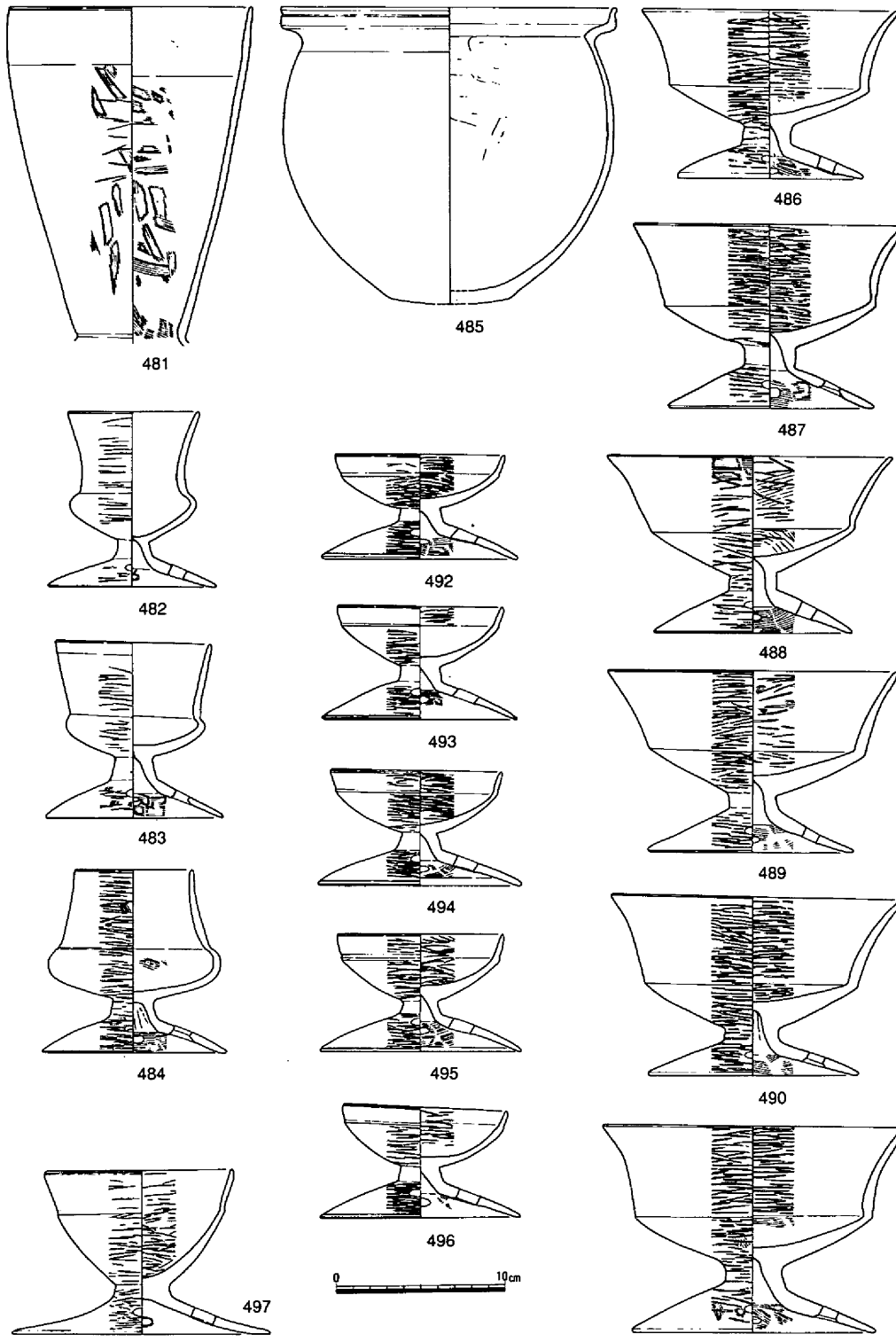
竪穴住居30（第155・156～158図、写真図版116・146・147）

２Ｂ区の中央に位置し、竪穴住居55に西部を切られ、土壙62を切って検出されたベッドをもつ住居である。最終床面をもつ竪穴住居30Ａの平面形態は南北方向にやや長い不整円形を呈し、規模は5.15×4.9m、深さ30cm、床面積20.5㎡、床面の海抜高2.7mを測る。主柱は４本で、ほぼ



1．茶灰褐色粘質砂（混、黄色粘土小塊）
2．灰茶色粘質砂（混、黄色粘土小塊・炭）
3．暗茶褐色粘質砂
4．暗灰色粘質砂
5．黄灰色粘質砂（混、暗灰色粘質土塊）
6．暗灰色粘質砂
7．茶灰色砂質土
8．淡茶灰色砂質土
9．暗灰色砂質土
10．黄色粘質土
11．黄色粘質土
12．炭層
13．灰黄色粘質土
14．炭層（混、黄色粘土小塊）
15．灰色粘質土

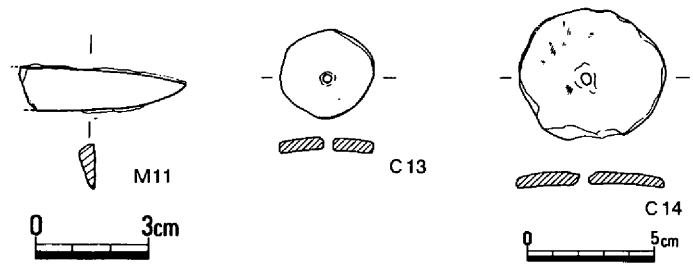
第156図　竪穴住居30（1/60）

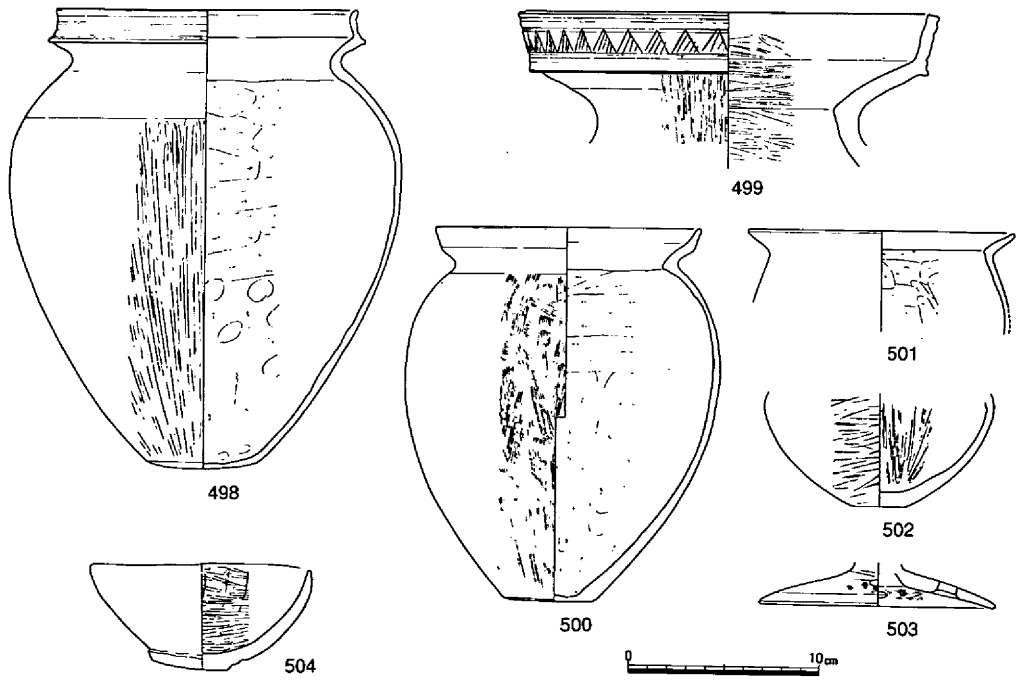


第157図　竪穴住居30出土遺物①（1/4）

方位に沿って位置する。南北に緩い下がりが認められる中央穴は、長さ80cm、幅45cm、深さ約50cmを測る。穴内は僅かに炭を含む埋土であったが、中央穴南部には炭の堆積する部分（第11層）が認められた。住居北東部には鉤状に幅1.1～1.5m、高さ約10cmのベッドを設置している。なお、床面下からは内側に半周する壁体溝および中央穴状の小土壙を検出しており（竪穴住居30B）、30Aはこれより拡張されたものと考えられる。

遺物は中央穴から498が、その南部床面から481～419が投げ込まれるような状況で出土しており、504は南西柱穴の西の床面下から、499～503および刀子M11、紡錘車C13・14は覆土から出土している。481は口径14.4cm、高さ20cmの異常に大きな口縁をもつ直口壺である。482～497はいずれも脚部内面や器表面に部分的にハケメが残り、横方向のヘラミガキで仕上げられたもので、裾部には円孔を４個穿っている。また、これらは水漉粘土で作られているが、脚付直口壺482～484、高杯492～496、脚付鉢497の色調は橙褐色を呈すのに対し、高杯486～491





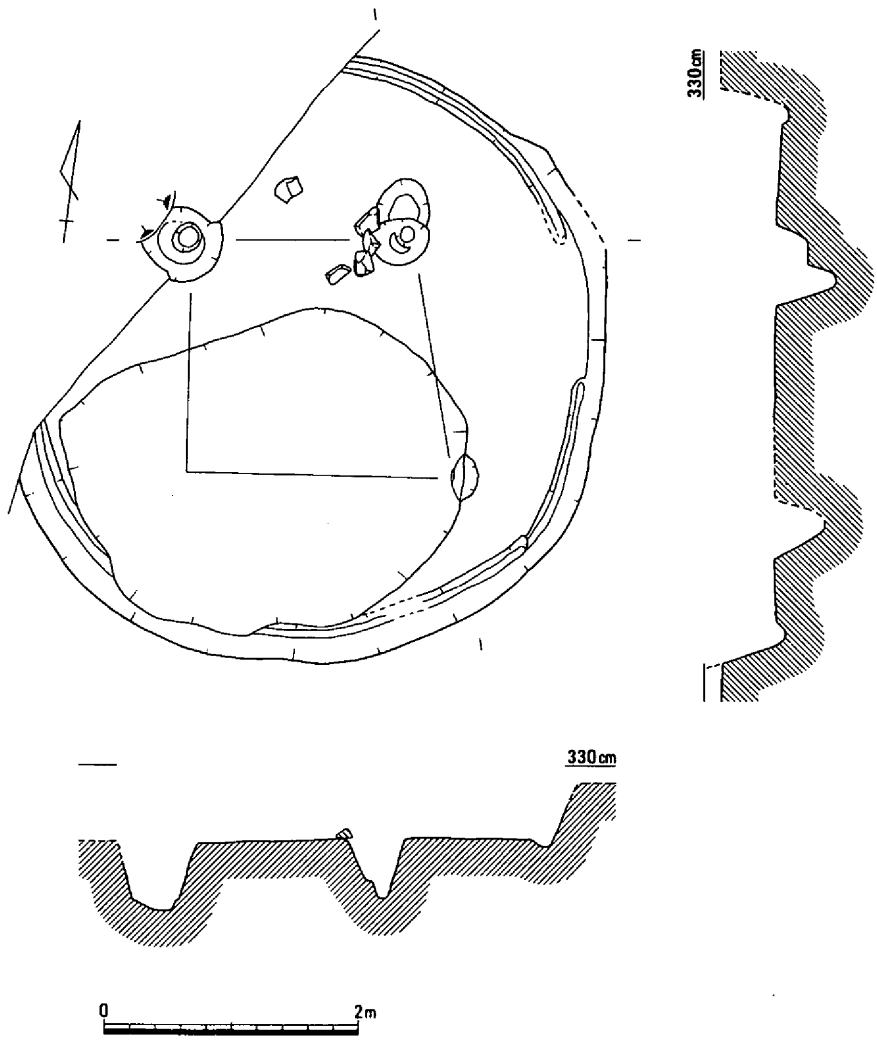
第158図　竪穴住居30出土遺物②（1/2・1/3・1/4）

はやや灰色を帯びた褐色を呈すものであった。甕485の口縁拡張面には凹線状の横ナデがされている。壺499の口縁拡張面には凹線の後ヘラ状工具による鋸歯紋が巡らされている。

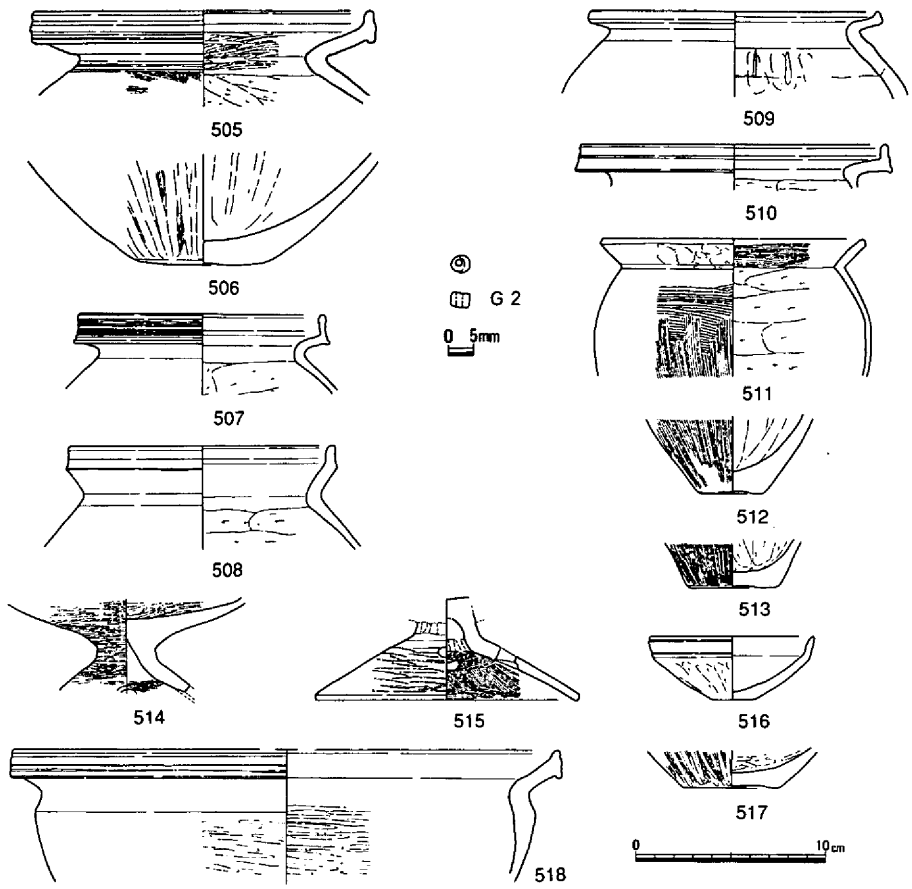
以上、当住居は土器の特徴からオノ町Ⅱ併行期に廃絶したものと考えられる。　（江見）

竪穴住居31（第155・159・160図）

２Ｂ区と３Ｂ区の境中央部に位置する。住居は、その埋没後土壙72および調査時の側溝により切られ、住居の約１／３程度が破壊された。したがって、平面規模約5.25mを測る円形を呈する住居としての認識は比較的容易であるが、床面の状況については判然としない。わずかに検出された３本の柱穴の存在により、４本柱であったことは知られるものの中央施設の存在については不明である。



第159図　竪穴住居31（1/60）



第160図　竪穴住居31出土遺物（1/4・2/3）

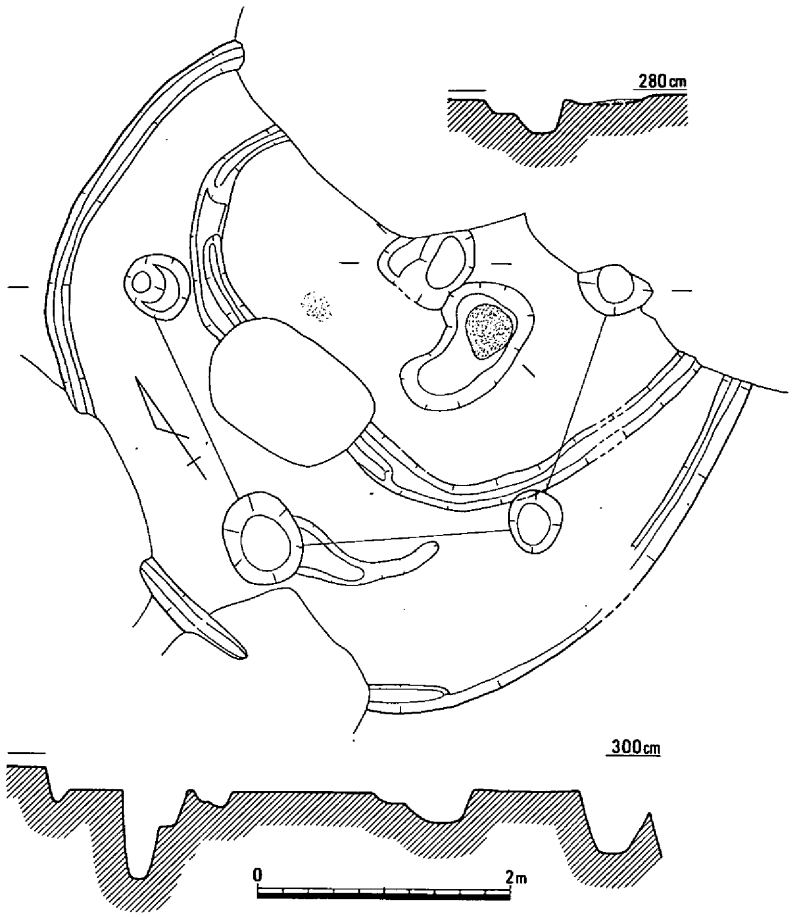
出土遺物については、ガラス製小玉１点の他小片ながら土器が少量確認された。土器は壺、甕、高杯等確認されたがいずれも才ノ町併行に位置づけられるものである。

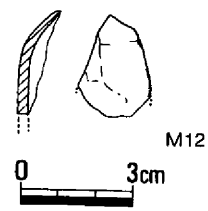
時期は、弥生時代後期後半へ比定されよう。　（島崎）

竪穴住居32（第155・161図）

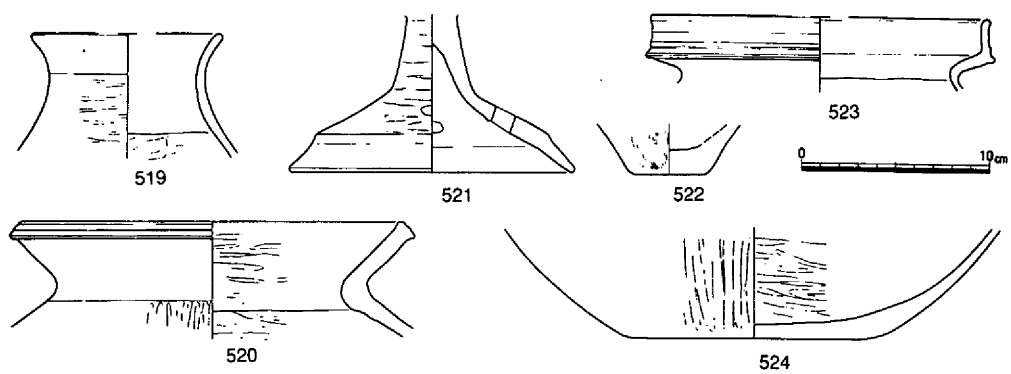
２Ｂ区に位置し、土壙63をはじめ多くの遺構に切られて検出された。平面形態は東西にやや長い不整円形を呈し、残存する短径は5.4ｍ、深さ20㎝、床面の海抜高2.7ｍを測る。主柱は５本で、ほぼ方位に沿って配置しているように思われるが、北端の柱穴は土壙によって切られていた。中央穴は住居中央北寄りに位置し、南に接して長さ1.2ｍ、幅約60㎝の浅い凹地状部分が検出され、ここより径約40㎝の範囲の焼土面が確認された。また、焼土面は中央穴の西からも確認している。なお、住居内側を巡る壁体溝から別住居の存在が窺えるが、施設はこれ以外確認できず、切り合い関係も明らかに出来なかった。

遺物519～524、鉋M12はいずれも覆土から出土しており、やや古い様相を示す甕520を含むも





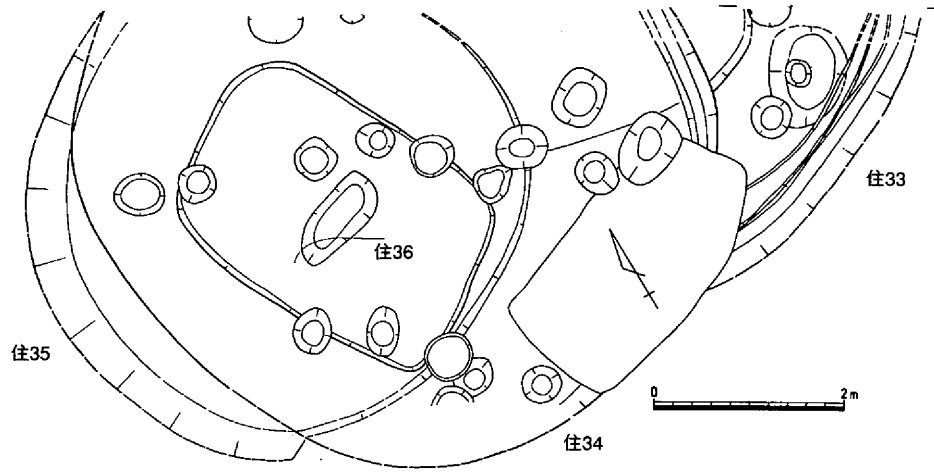
ののの、凹線状横ナデを施す甕523が含まれることから上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰ併行期に廃絶したものと考えられる。



第161図　竪穴住居32（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

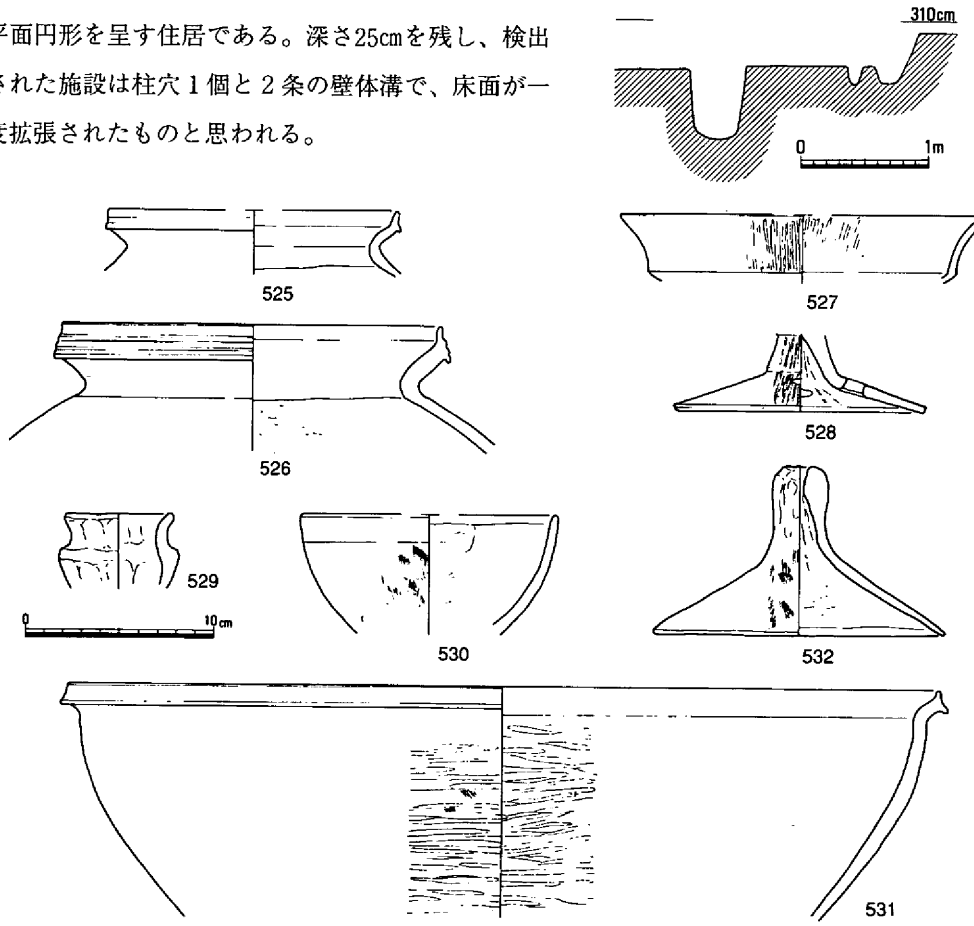
竪穴住居33（第155・162・163図）

３Ａ区に位置し、住居の大半が調査区外に延びるとともに竪穴住居34に切られ検出された、



第162図　竪穴住居33～36（1/80）

平面円形を呈す住居である。深さ25cmを残し、検出された施設は柱穴１個と２条の壁体溝で、床面が一度拡張されたものと思われる。



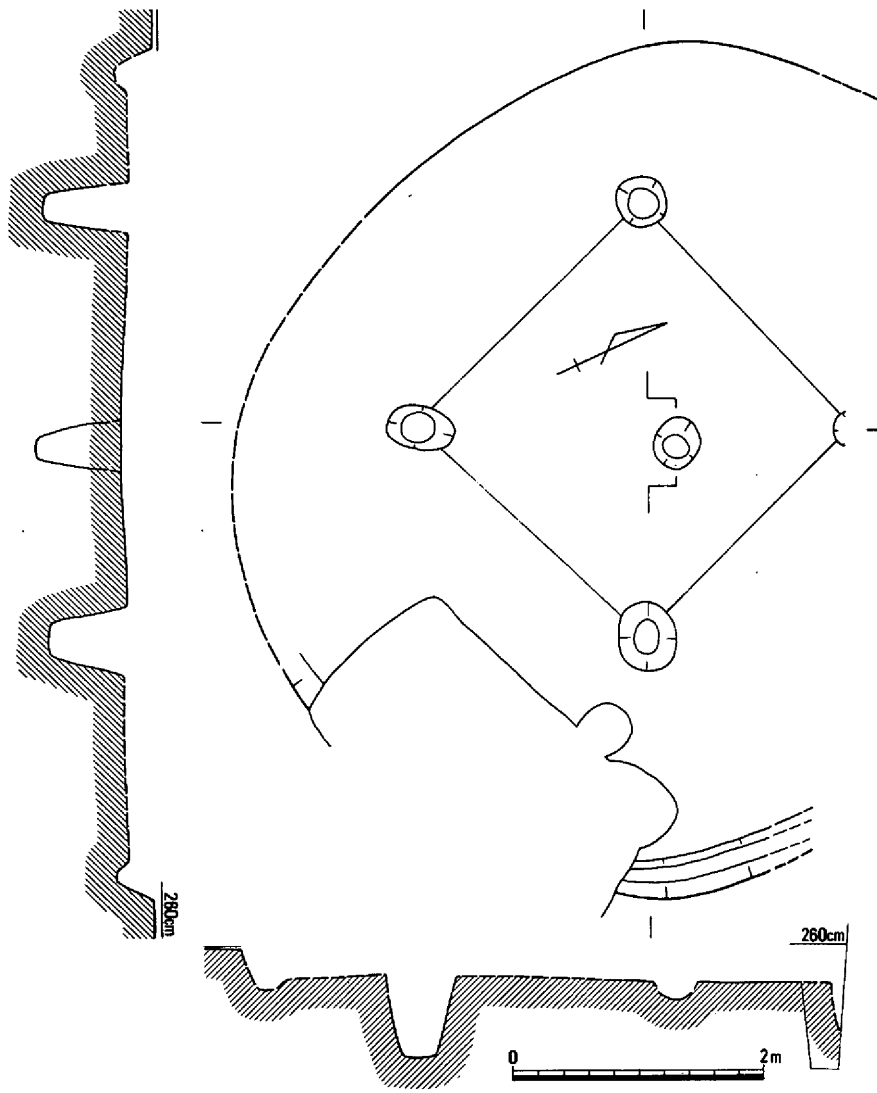
第163図　竪穴住居33（1/60）・出土遺物（1/4）

遺物525～531はいずれも覆土から出土しており、527を除く土器の特徴から、当住居は上東鬼川市Ⅲ併行期には廃絶されたものと考えられる。

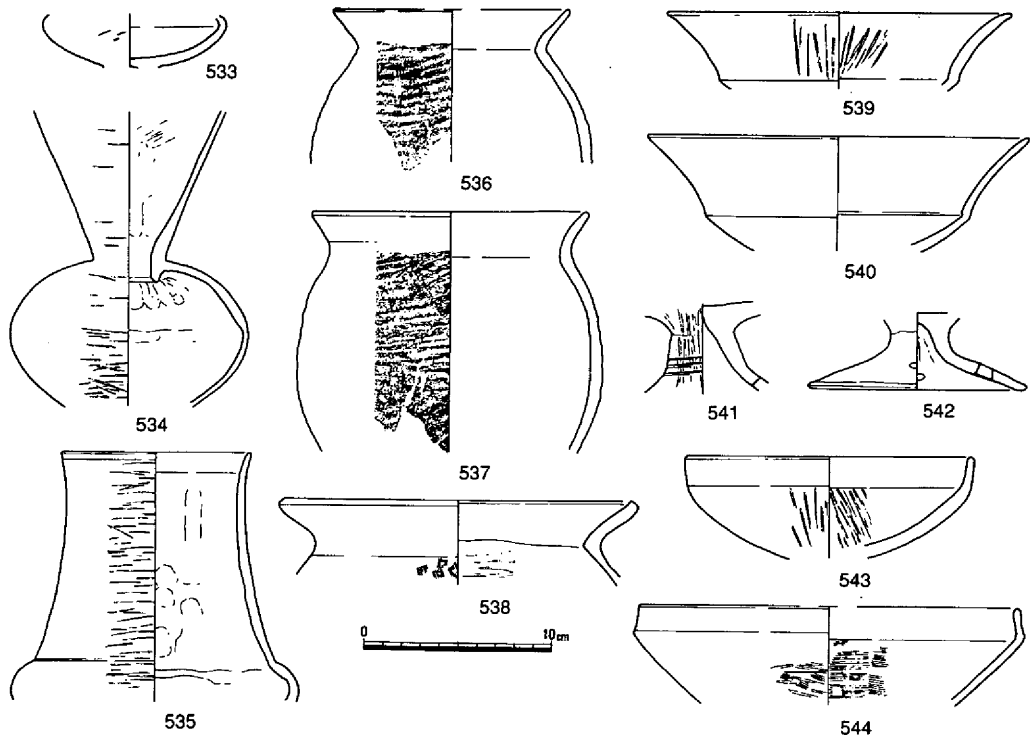
竪穴住居34（第155・164・165図）

竪穴住居33の西から検出され、北部は調査区外に延び、南東部は土壙71に切られている。平面は円形を呈す。規模は径6.6m、深さ15cm、床面の海抜高2.3mを測る。主柱は4本で、中央穴は径40cm、深さ約15cmで浅い。壁体溝は東部のみ検出されたが全周に巡ると思われる。

遺物はいずれも覆土から出土した。直口壺533～535をはじめ、外面粗いタタキ、内面ナデの甕536・537、短脚の高杯539～542、小型鉢543・544などがみられ、これら土器の特徴は上



第164図　竪穴住居34（1/60）



第165図　竪穴住居34出土遺物（1/4）

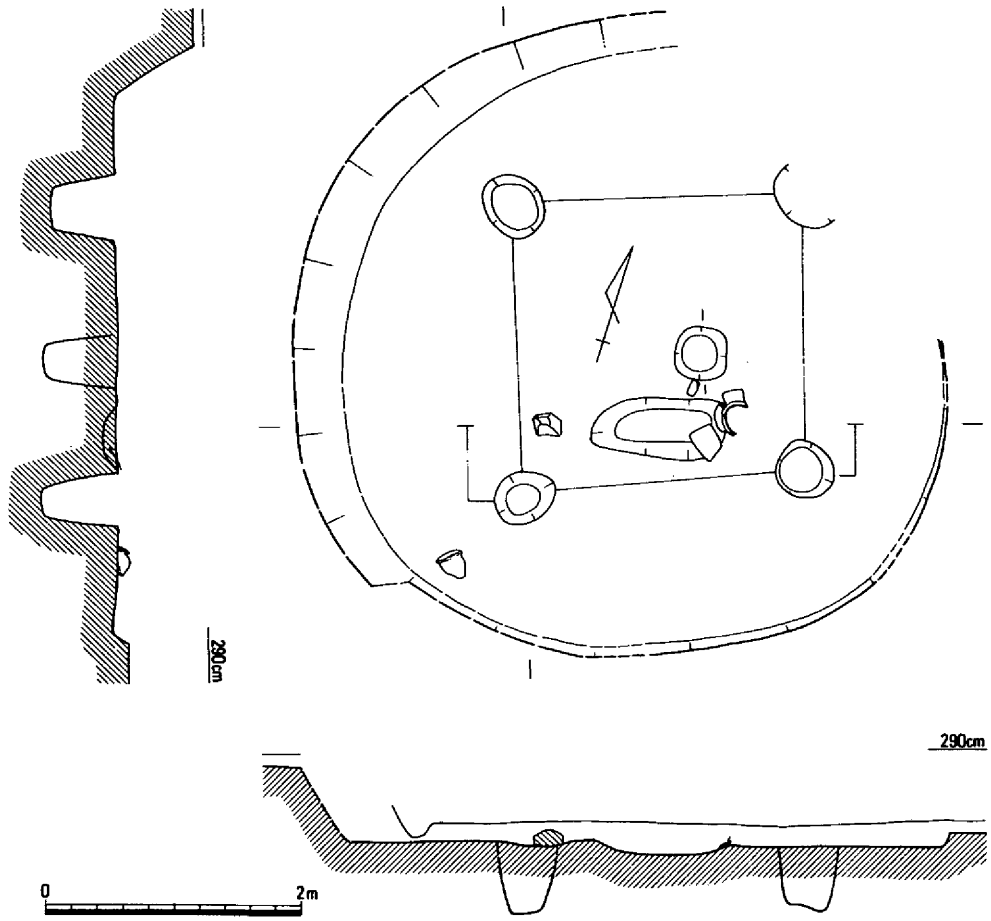
東・鬼川市Ⅲ～才ノ町Ⅰ期におさまるものと思われ、当住居はこの期に廃絶したと考える。

竪穴住居35（第155・166・168図）

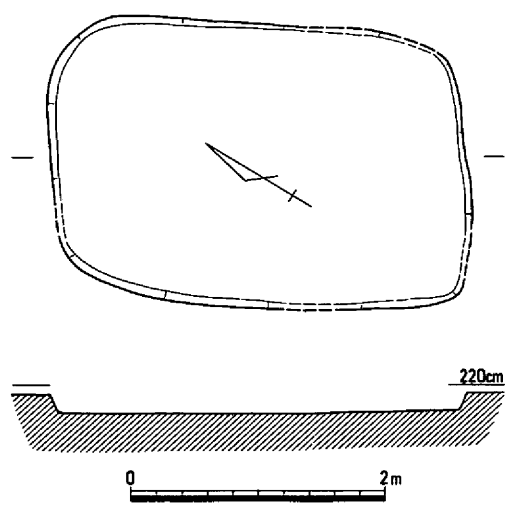
竪穴住居34に大半を削平された平面円形を呈す住居である。規模は径5.1m、床面の推定面積48.4㎡、床面の海抜高2.15mを測る。主柱は４本で、柱穴間の距離は2.2m前後のほぼ等距離を測る。中央穴は床面中央やや東寄りに位置し、径40cm、深さ60cmを測り、この南から東西方向に主軸をもつ長さ1.1m、幅50cm、深さ10cm余りの楕円形の凹地が検出された。なお、壁体溝は図示し得なかったが、住居西部壁に沿って部分的に確認されていることから全周していたものと思われる。

遺物は楕円形の凹地西から長さ20cm前後、高さ約10cmの作業台に使用されたと思われる礫をはじめ、凹地東部から545、住居南西隅から552が、他は覆土から出土した。壺545は直立する口縁拡張面に凹線状の横ナデがなされ、546は内外面丹塗りされている。甕552においても内傾し立ち上がる拡張面には凹線状の横ナデが施されている。高杯はいずれも水簸粘土で作られ、口縁が直線的に立ち上がる553と外反する554がある。大型鉢554も同様粘土を使用し、内外面を細かなヘラミガキを施している。

以上、当住居は土器の特徴から、上東・鬼川市Ⅲ併行期に廃絶したものと考えられる。



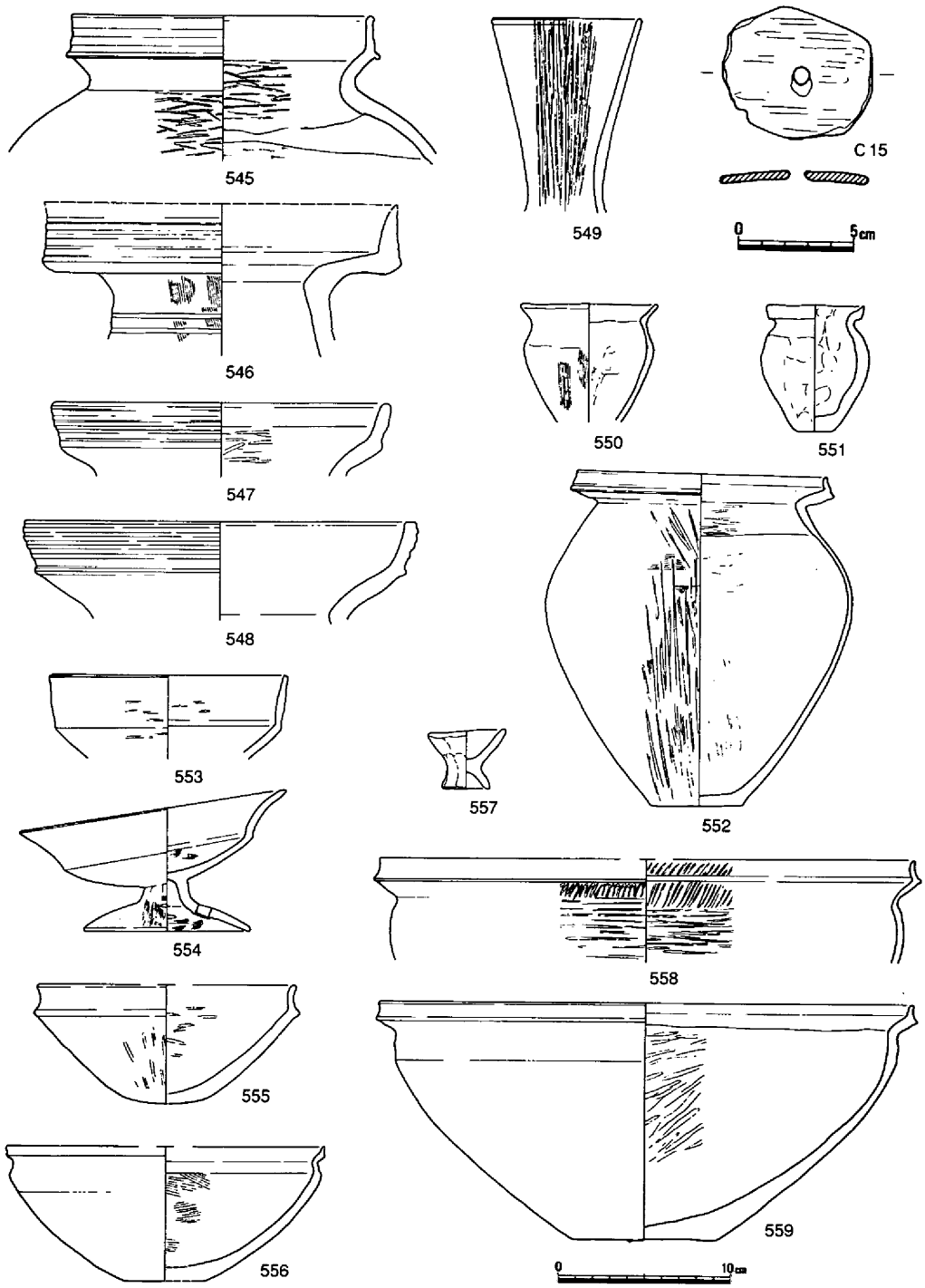
第166図　竪穴住居35（1/60）



第167図　竪穴住居36（1/60）

竪穴住居36（第155・167図）

竪穴住居35の下層から検出された、平面隅丸長方形を呈す住居である。南北方向に主軸をもち、規模は3.25×2.25m、床面積6.4㎡、床面の海抜高1.97mを測る。床面は硬く叩き締められ、上面に薄い炭層が認められたが、柱穴その他の施設は確認されなかった。遺物はなく時期不明で、住居としても問題は残るが、平坦で明瞭な床面を残すことから当項で扱った。（江見）

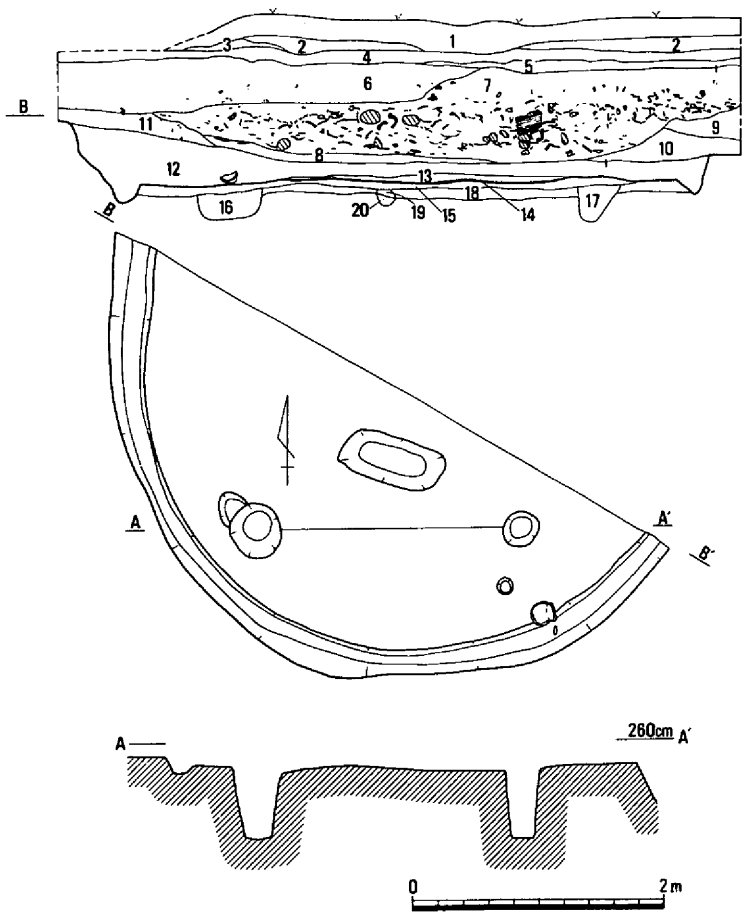


第168図　竪穴住居35出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居37（第155・169～182図）

この住居は３Ａ区と４Ａ区にまたがって検出された遺構で、約１／２程は調査区外となるが、平面形態は不整円形になると思われる。住居内には２本の柱穴、ピット、壁体溝が検出され、貼床は２面認められた。なお、検出された遺構レベルは海抜2.5ｍで、床面からの壁高は約５cmであるが、壁面においては、約50cm程が確認できた。

遺物は住居の廃棄後に投棄された状態で出土し、土器溜りの状況を呈していた上層遺物と床面出土遺物に大別される。投棄された上層遺物を除去後、住居床面からは鉢560～562、568、甕563、567、高杯564～566、土製紡錘車Ｃ16が検出している。563は「く」字状に外反する口縁部で、端部をわずかに上方に拡張する。高杯は脚柱が短く、裾部が「八」字状に開くものである。564の口縁部はゆるく外方に広がり、受部の浅い器種である。567は「く」字状に外反する口縁部で、端部を上、下方に拡張し、端面には３条の退化凹線がめぐる。568は床面に付着す

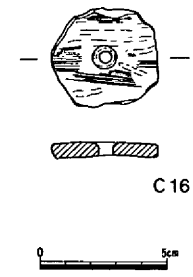


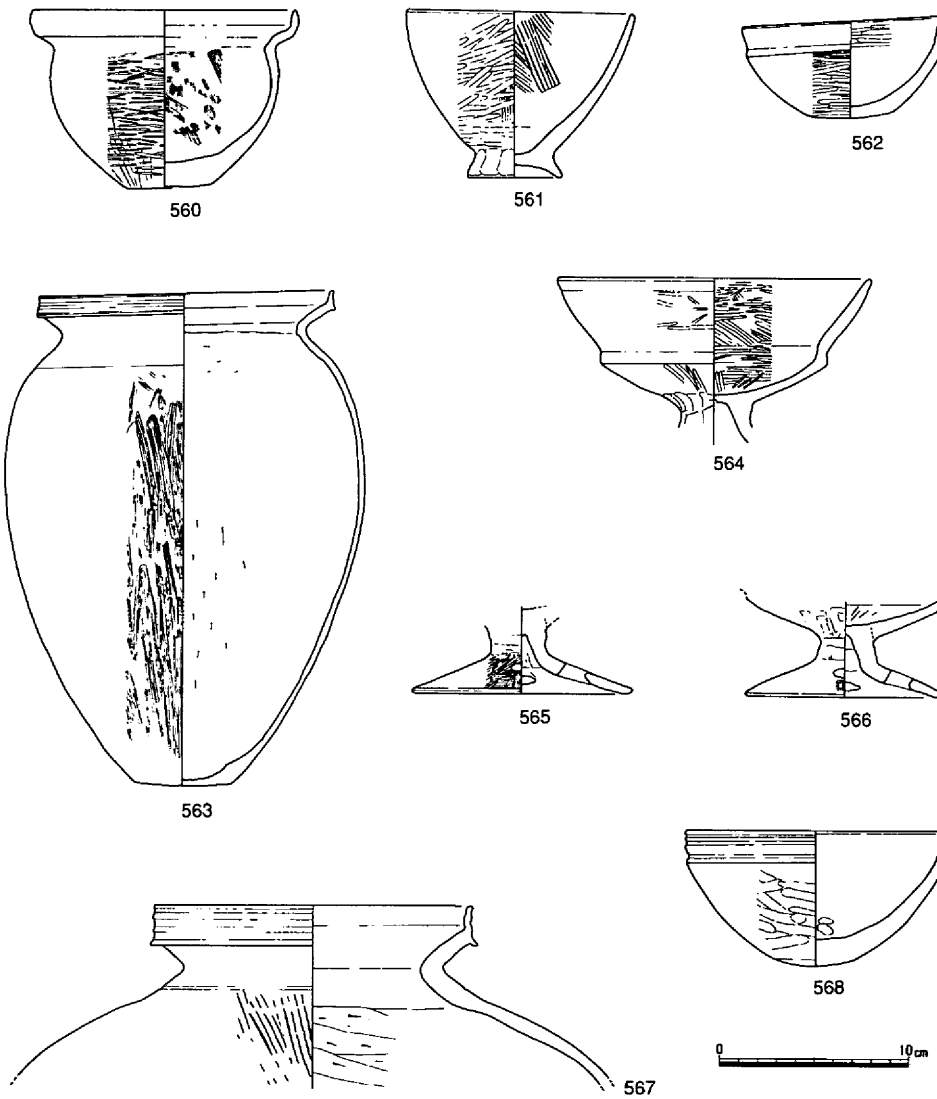
1．耕作土
2．黄褐色微砂層
3．灰褐色土
4．灰色微砂層
5．灰色粘質微砂土
6．茶褐色土
7．暗褐色土
8．黒色土
9．暗茶褐色土
10．茶褐色土
11．茶褐色微砂土
12．暗茶褐色粘質微砂土
13．黄色粘質土
14．炭層
15．黄灰色粘質土
16．暗灰黄色土
17．灰黄色土
18．黄灰色土
19．暗灰色土
20．暗黄灰色土

第169図　竪穴住居37（1/60）

る土器である。C16は重さ11.43ｇを測り、土器片再利用の紡錘車である。

上層出土遺物はコンテナ箱に約150箱出土しているため、主要な遺物を図示する。土器は壺570～582・586～593・596～600、甕602～612・671・672、鉢583・594・595・613～629・631・632・667～670、脚付直口壺630・664～666、高杯633～663、手捏土器584・585・674・675がある。土製品は土錘C17、紡錘車C18、分銅形土製品C19がある。





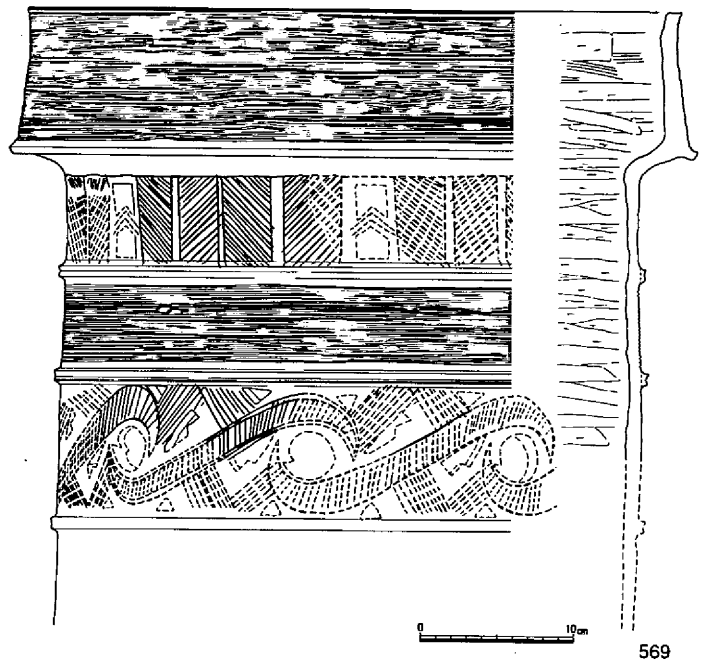
第170図　竪穴住居37出土遺物（1/4・1/3）

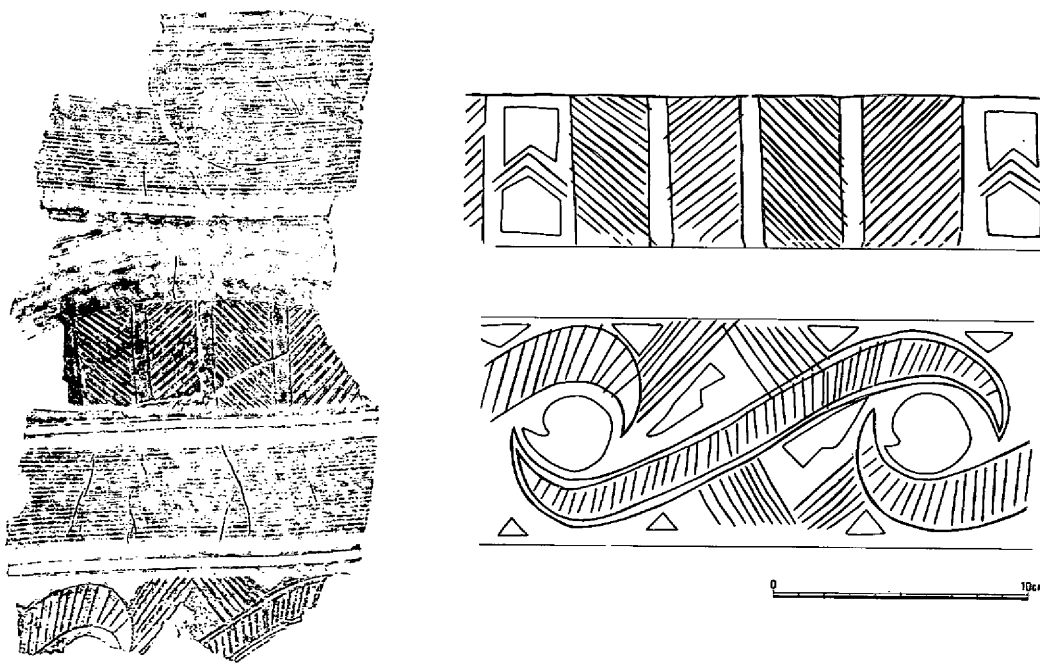
569は23個体に割れていたものを接合したもので、接合の結果、口縁部から筒部の第２文様帯までを復原することができたが、脚部の破片は出土していなかった。口縁部はやや内傾するが、口縁径は42.2cmを測る。口縁部の立上りは約９cmと高く、口縁受け部の幅は狭くなる。厚さは0.9cmを測る。口縁立上り部外面には板状工具によるハケメ状の平行沈線32条が、内面にはヨコナデと横方向のヘラケズリがみられる。筒部は上から第１文様帯、第１間帯、第２文様帯とすれば、第１間帯は幅1.1cm、厚さ0.3cm程の突帯を上下に貼り付けて形成され、その間には口縁立上り部と同様の22条の平行沈線がみられる。第１文様帯は「分割型」で、長方形の区画内に上下２個の透し孔をもつものと、縦に分割された区画内に斜線文を施すものがあり、透し孔と透し孔の間が１単位の文様構成と推察される。第２文様帯は「連続型文様」で、横方向に連続する「Ｓ」字状文様帯を基本に、巴形、三角形、略Ｍ字形の透し孔を配置する。Ｓ字状文様帯には斜め方向の沈線が充填され、その外側には平行沈線帯を配する。巴形透し孔はＳ字状文様帯とＳ字状文様帯の連結部に配され、三角形透し孔は突帯に接した部分に配されていたようである。筒部の厚さは約0.8cmを測り、内面には横方向のヘラケズリがなされている。丹塗りは、内面は口縁立上り部まで、外面は受け部に一部丹塗りが見られない他は、全面に施されている。なお、筒部直径は約45.6cmを測る。胎土内には石英、長石、角閃石、黒雲母などが含まれている。601は器台の受部である。ほぼ直立する筒部に朝顔状に開く口縁部をもち、端部は上下に著しく拡張する。口縁端面には櫛描波状文（６条）が描かれ、端部には２条の沈線が巡る。受部内面にはヘラ描きによる撥形の孤帯文が施されている。外面調整はヨコナデと指押えがみられるが、筒部はヘラミガキである。内面はヨコナデと横方向のヘラミガキ、筒部内面はヨコナデである。胎土内には長石、角閃石、石英と少量の雲母がみられ、外面はにぶい橙色を呈している。線刻文様は横方向のヘラミガキで調整した上に、ヘラ描きによる撥形の孤帯文が施文されている。文様は中央部の２本の沈線によって区画され、上部が撥形、下部が孤帯文となる。施文は、まず撥形を表現した後に、沈線を上下２条横走させるが、その間隔は約1.3cmで、下部の沈線は上の沈線のように一気に描かれたものではない。上の沈線から約0.5cmの間隔をおいて撥形に対応する孤帯文を描いた後、さらに１条の沈線を描いている。このように、上中２本の沈線で文様は区画されるため、下の沈線は文様構成において重要な意味を持つものではなかったと思われる。なお、撥形文の中心部はレンズ形になっている。壺は口縁端部が発達しないもの577・578と口縁端部が上下に拡張するものに分類できる。577は胴下半分から欠損するが、口径11.8cmのやや小ぶりの壺である。口縁部は頸部からほぼ垂直に立上がり、端部は丸く収める。外面は頸部がヘラミガキ、胴部はハケナデ、ヘラミガキ、内面はヨコナデ、押圧、ヘラケズリの調整がみられる。578は「く」字状に外反する口縁部で、端部がわずかに上方に拡張する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケナデ、内面はヘラケズリである。

胎土内には石英、長石、角閃石が多く含まれている。570～572・574・575・597は長頸壺であり、口縁部の内外面はヨコナデ、頸部外面は縦のハケメ調整後にヘラ描き沈線文が施され、内面はヘラミガキ、指ナデによる調整がみられる。599は口縁部が「く」字状に外反し、端部が上下に拡張する。端面には櫛描波状文と鋸歯文がめぐり、頸部と胴部の境には突帯を貼り、上面には刺突が施されている。外面は頸部がハケメ、胴部はハケナデ後にヘラミガキ、内面は頸部上面はヘラミガキ、胴部はヘラケズリである。胎土内には、石英、長石と少量の角閃石、金雲母がみられる。580は口縁部が「く」字状に外反し、さらに斜め上方に著しく拡張するもので、端面には櫛描波状文が施されている。口縁部の内外面はヨコナデ、頸部外面はハケメ、内面はヨコナデ、指頭圧痕がみられる。胎土内には石英、長石、角閃石、金雲母などがみられる。592の口縁部は「く」字に鋭く屈曲し、さらに斜め上方に著しく拡張し、端部に面をもつ。外面はハケナデ後にヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、頸部は押圧、ヨコナデ、胴部にはヘラケズリの調整がなされている。胎土内には石英、長石、角閃石が多く含まれている。586～591の口縁部は「く」字状に外反し、さらに上方に著しく拡張する。口縁帯はほぼ直立し、外面には13～29条の櫛描平行沈線文が施され、567のように頸部にも12条の櫛描平行沈線文をめぐらすものもある。頸部は長頸になるもの567と短頸のもの586・591がある。口縁部内面の調整はヘラミガキ、ヨコナデである。胎土内にはいずれも石英、長石、角閃石などが含まれるが、586・589・591には雲母が含まれていた。また、丹塗りは認められなかった。甕は口縁端部が上方に拡張するものとしないものに分類できる。603の口縁部は「く」字状に外反し、端部は平坦となる。胴部は卵形を呈し、底部は平底である。調整は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面はハケナデ、内面はヘラケズリ後にハケナデ、底部には指押え痕がみられる。口径12.3cm、底部径4.6cm、器高17.2cmを測る。なお、胴部全体に黒班がみられる。607は口縁部が「く」字状に外反し、端部は上方に拡張するが内傾する。端面には４条の沈線文が施されている。胴部は卵形を呈し、底部は平底である。調整は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、底部には指頭圧痕がみられる。口径14.0cm、底部径5.9cm、器高25.4cmを測り、胎土内には長石、石英、角閃石が多く含まれている。606・608は口縁部が複合口縁を呈するもので、胴部は卵形を呈し、底部は平底となる。調整は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面はハケナデ、内面はヘラケズリである。胎土内には石英、長石、角閃石、雲母が多く含まれている。606は口径14.8cm、底部径5.4cm、器高27.2cmを測り、丹塗りが外面には全面、内面は頸部まで施されている。609は口縁部が「く」字状に外反し、端部をつまむ程度拡張したものである。頸部内面には櫛描波条文が施されている。調整は胴部外面がハケナデ、内面は指押え痕がみられる。胎土内には石英、長石、角閃石、雲母などが含まれている。612は底部穿孔のある甕で、胴部外面には右下がりの叩き、内面にはハケナデがみられる。平底を少し残す小型の甕である。高杯は杯部

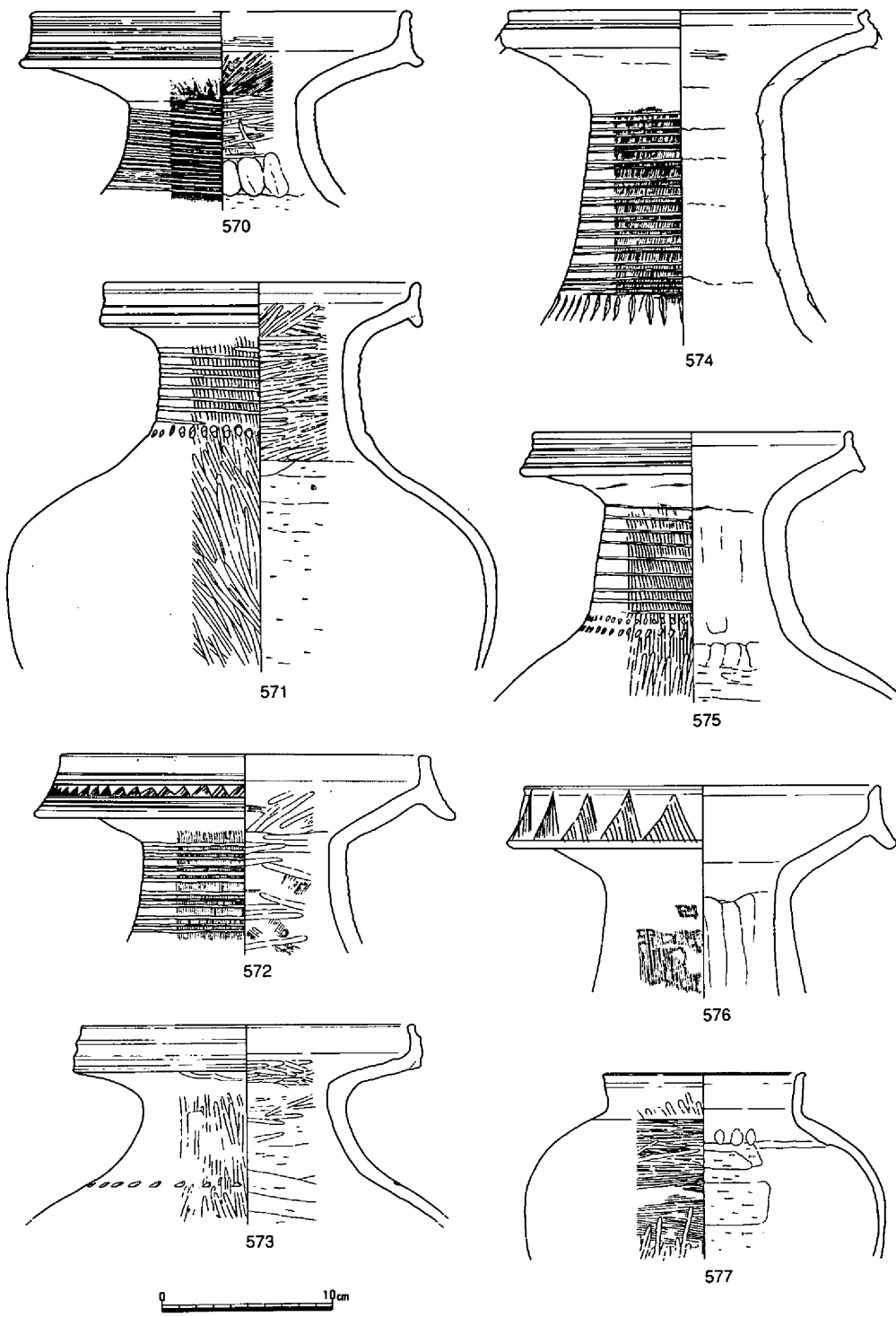
の形態からみて、椀形とやや浅い受部で口縁部が外反もしくは直立するものに大別できる。椀形は口縁部が直立し、端面に浅い凹線が入るもの636とやや斜め上方にのびるもの663がある。後者は口縁部が斜め上方に外反するもの644、反りをあまりもたずに斜め外方にのびるもの662、垂直にのびるもの640、内傾するもの635や639のように口縁部が斜め上方に外反し、さらに端部が上方に拡張するものもある。このように、各種の形態がみられるが、639を除いて口径はやや小さくなり、受部に比べて口縁部の長いものが多く出土している。脚柱は高さ１～２㎝の短脚で、裾部は屈曲して「八」字状に開き、円形の穿孔が４個みられた。調整は杯部の内外面は丁寧なヘラミガキ、脚柱、脚裾部にはヘラミガキやハケメが施されている。なお、脚柱には面取り状の痕跡、内面にはシボリひずみ痕がみられる。胎土はいずれも水漉し粘土を使用している。鉢は大型613・614・626と多種多様の小形583・594・595・615～625・631・632・667～670が出土している。ミニチュア土器には手捏と丁寧な作りのものに大別され、器種は杯627～629と脚付直口壺630がみられる。673は手焙形土器である。鉢形土器の上に覆部を持つものであり、底部を欠損する。鉢部は口径16.6㎝を測り、調整は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の内外面はハケメ調整がみられる。覆部と鉢部口縁の上端面はぴったり接し、接合部外面はヨコナデ、内面は指押えとナデが施されている。覆部の調整は外面がナデ、内面は指押え後にナデが施されている。その他に584・585・674・675などの手捏がある。584は摘まみの形状を呈し、585は把手の可能性をもつものである。674は一部欠損するが、土製の片口容器と思われる。基部端には把手部が斜め上方につくられ、把手は空洞となっている。恐らく、この空洞に木製の柄が挿入されていたと思われる。胎土内には雲母が少量含まれている。675は蓋形で、摘まみ部に紐穴を穿っている。胎土内には金雲母が少量含まれている。土製品には土錘Ｃ17、紡錘車Ｃ18、分銅形土製品Ｃ19などがある。Ｃ19は粘土を貼りつけて鼻を表現するものである。文様は上縁部に沿って３列の刺突孔（穴は貫通する）によって縁どりがなされ、中央部に幅1.3㎝、長さ2.2㎝、高さ0.9㎝の鼻が付けられ、下端には刺突による鼻孔が表現されている。最大長6.3㎝、幅5.8㎝、厚さ1.2㎝、重量67.07ｇを測り、両面とも丁寧なナデ仕上げがなされている。胎土内には少量の長石、角閃石が含まれ、焼成は良好である。

このように、上層から多量の遺物が出土したが、搬入品と考えられる609・612や山陰的な器形の608・609とともに特殊器台569の出土は注目すべき出来事である。この特殊器台は文様構成、間帯の製作手法等から「向木見型」の範囲内に含められるもので、その中でも（あたご山型）のグループに入るものと思われる。集落内での廃棄がどのような意味を持つかは今後の課題である。上層の時期は上東・鬼川市Ⅲ～亀川上層の遺物を含むが、大部分は才の町Ⅰ期と思われる。なお、竪穴住居37は上東・鬼川市Ⅲ～才の町Ⅰ期の時期に比定される。　（松本）

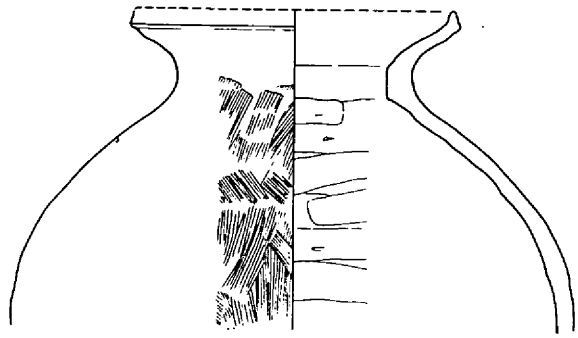


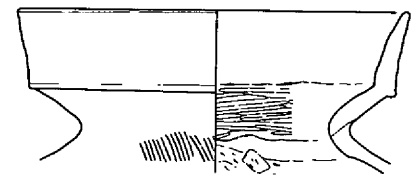


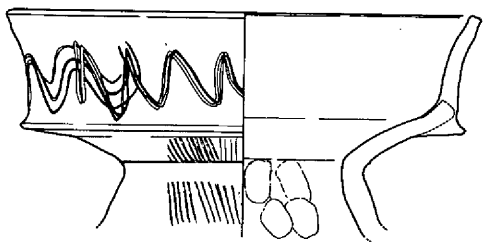
第171図　竪穴住居37上層出土遺物①（1/5・1/4・1/3）

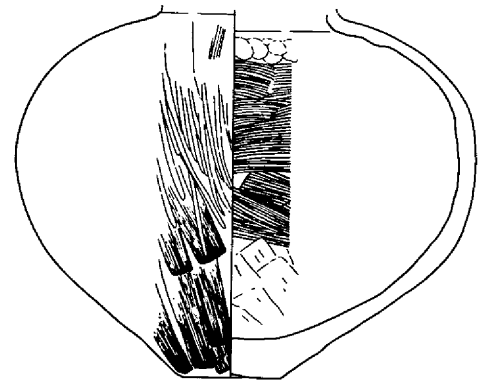


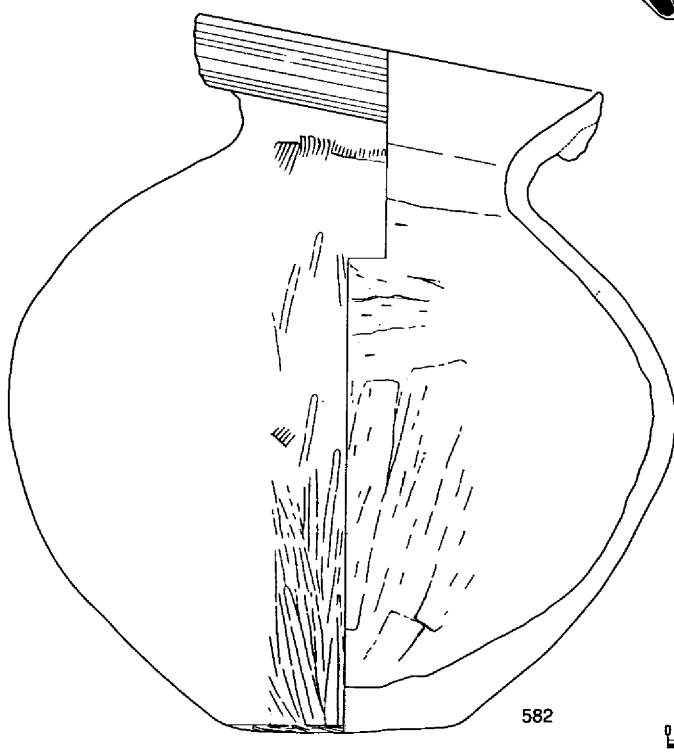
第172図　竪穴住居37上層出土遺物②（1/4）


578


579

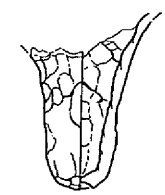

580


581

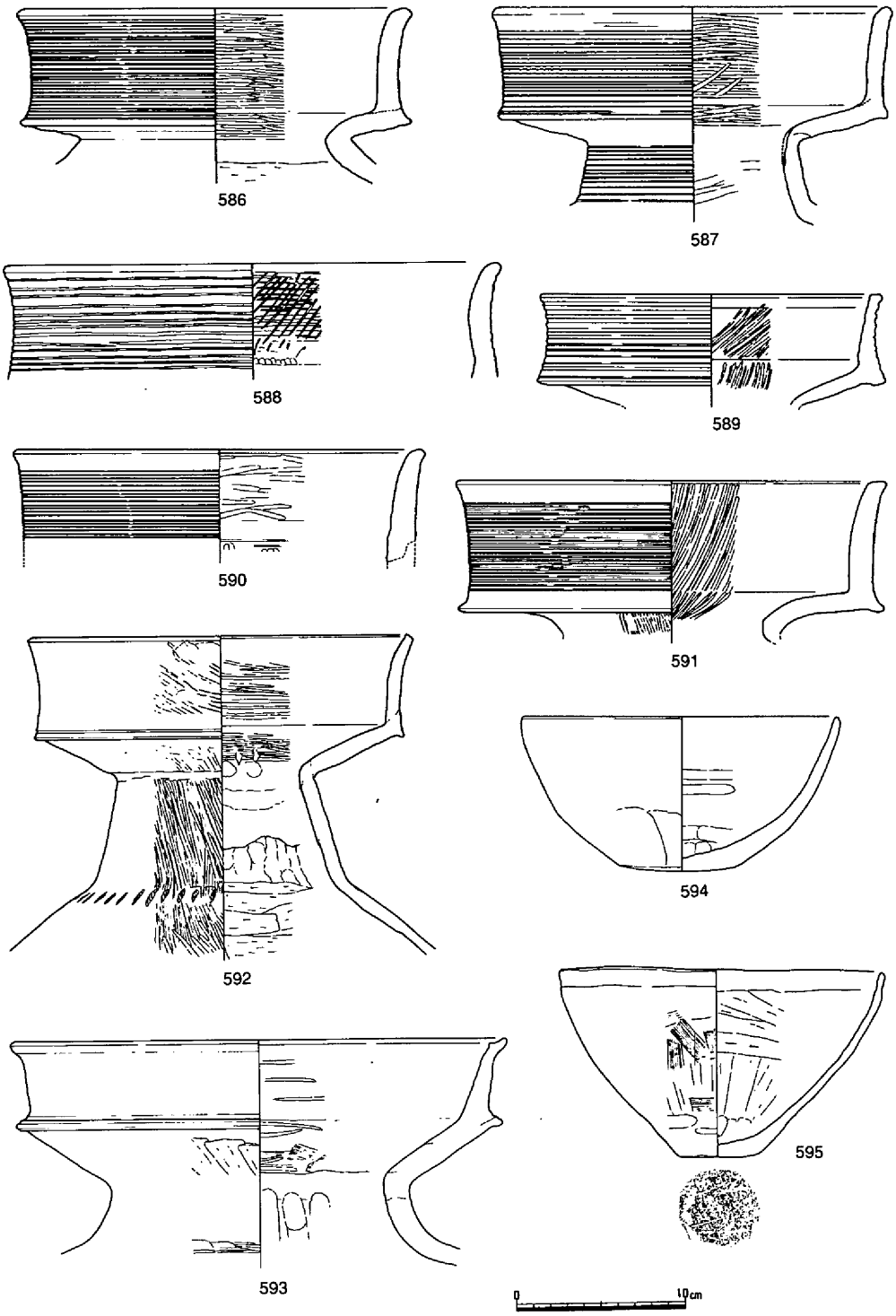

582

583

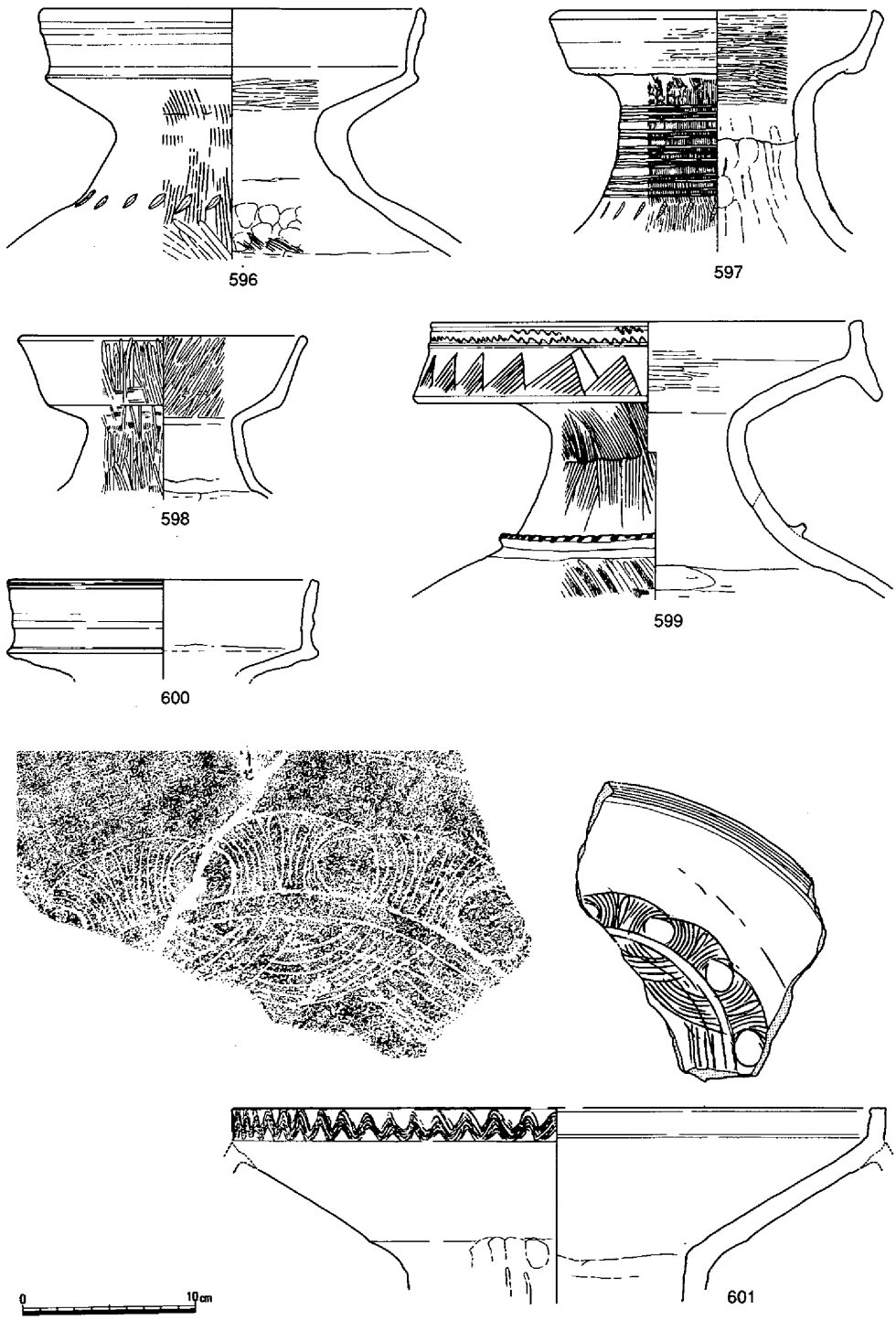
584


585

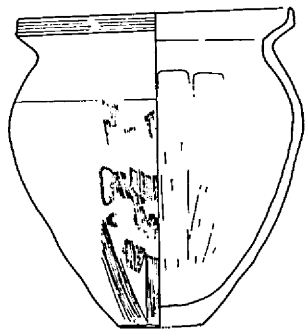
第173図　竪穴住居37上層出土遺物③（1/4）

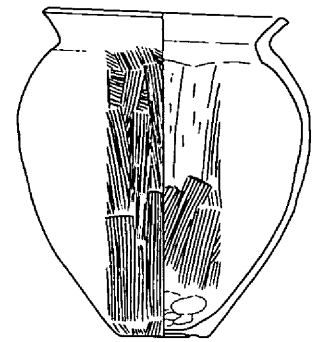


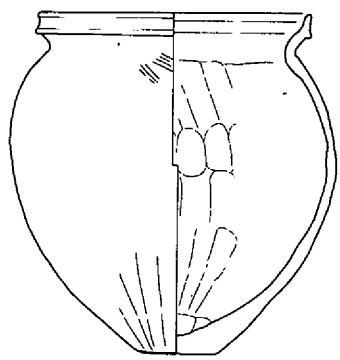
第174図　竪穴住居37上層出土遺物④（1/4）

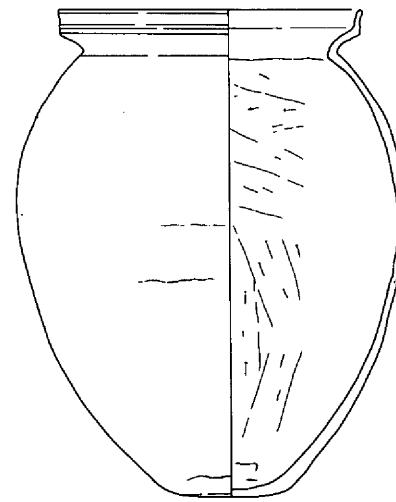


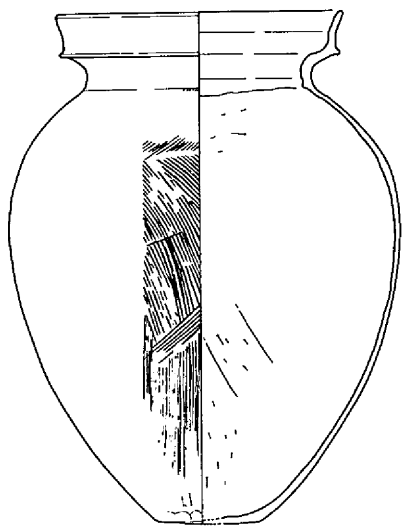
第175図　竪穴住居37上層出土遺物⑤（1/4）

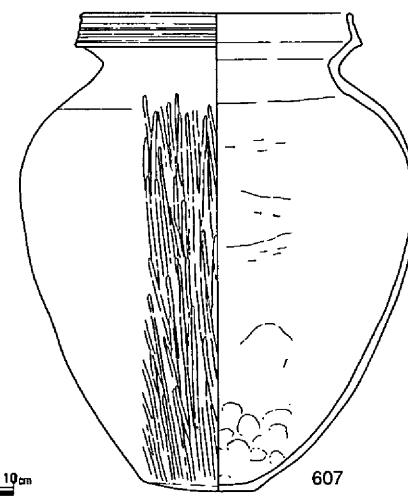

602


603

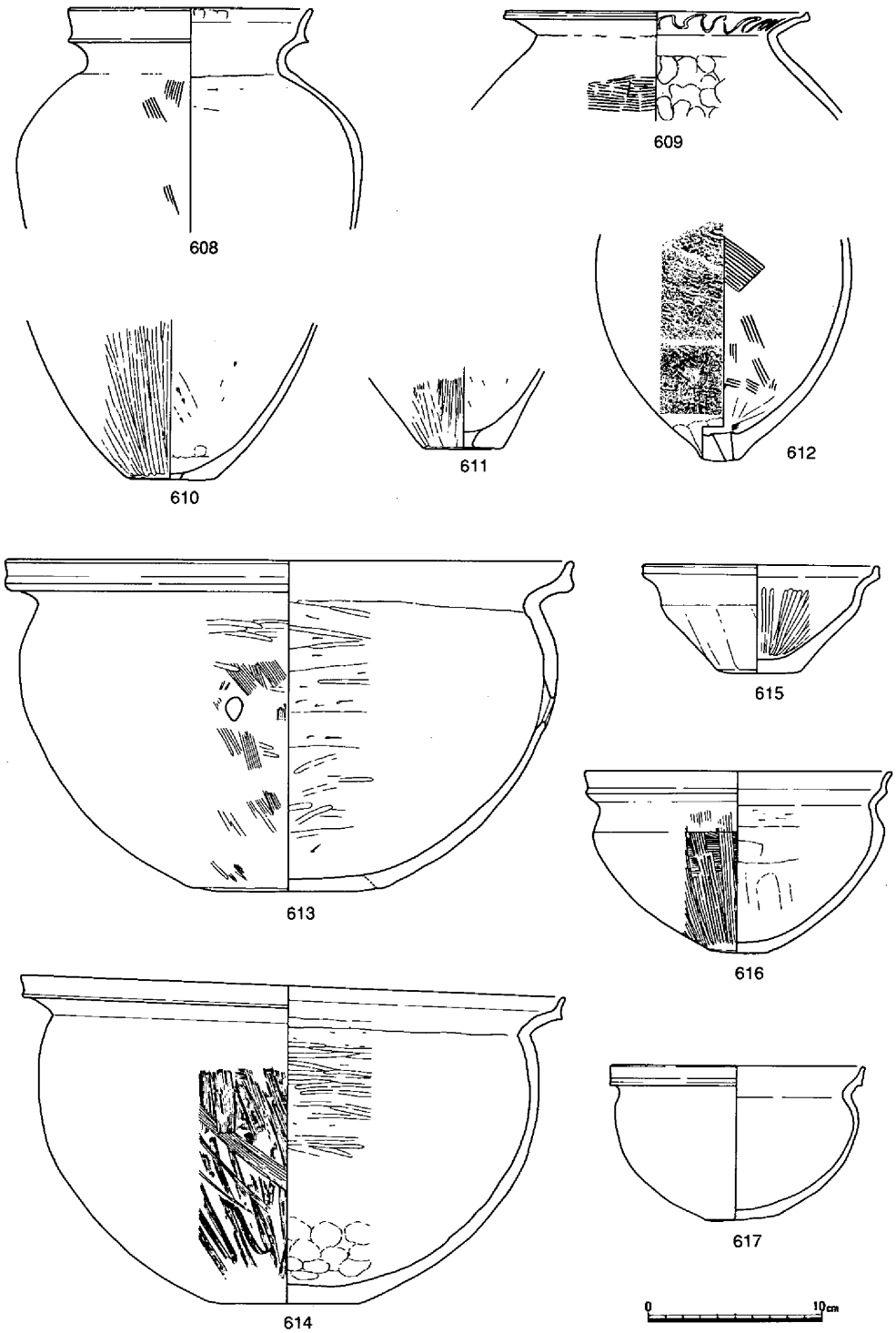

604


605

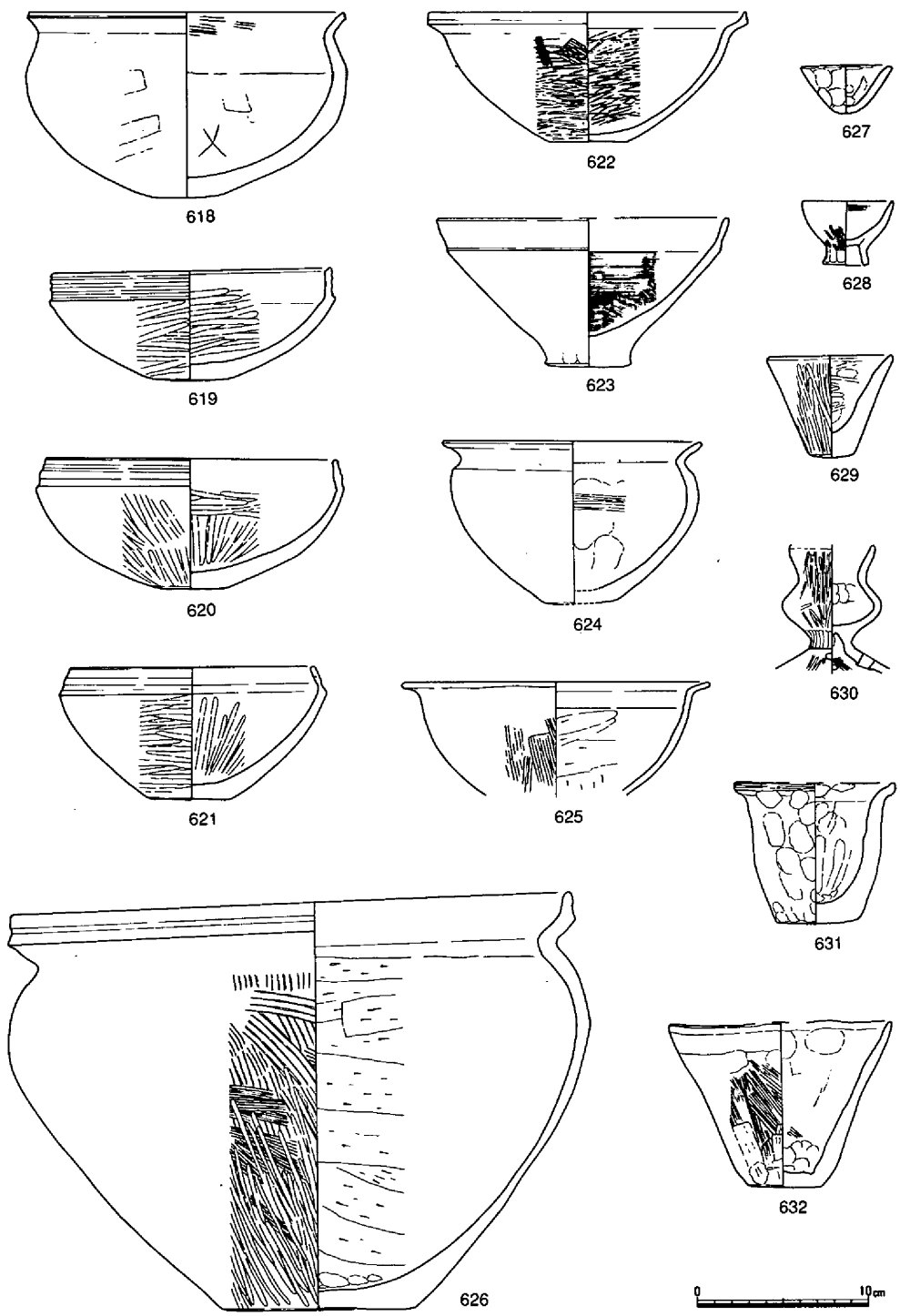

606


607

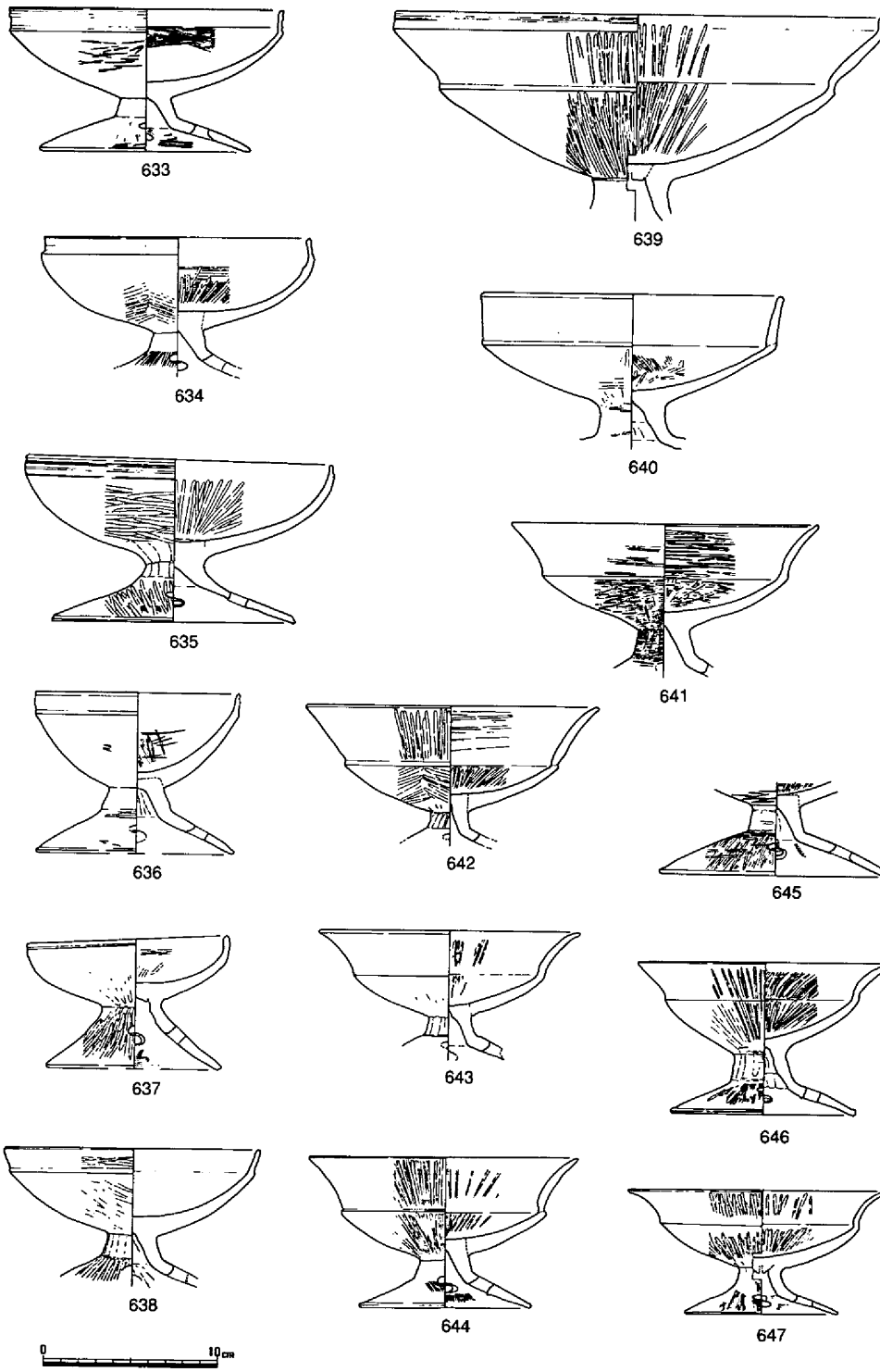
第176図　竪穴住居37上層出土遺物⑥（1/4）



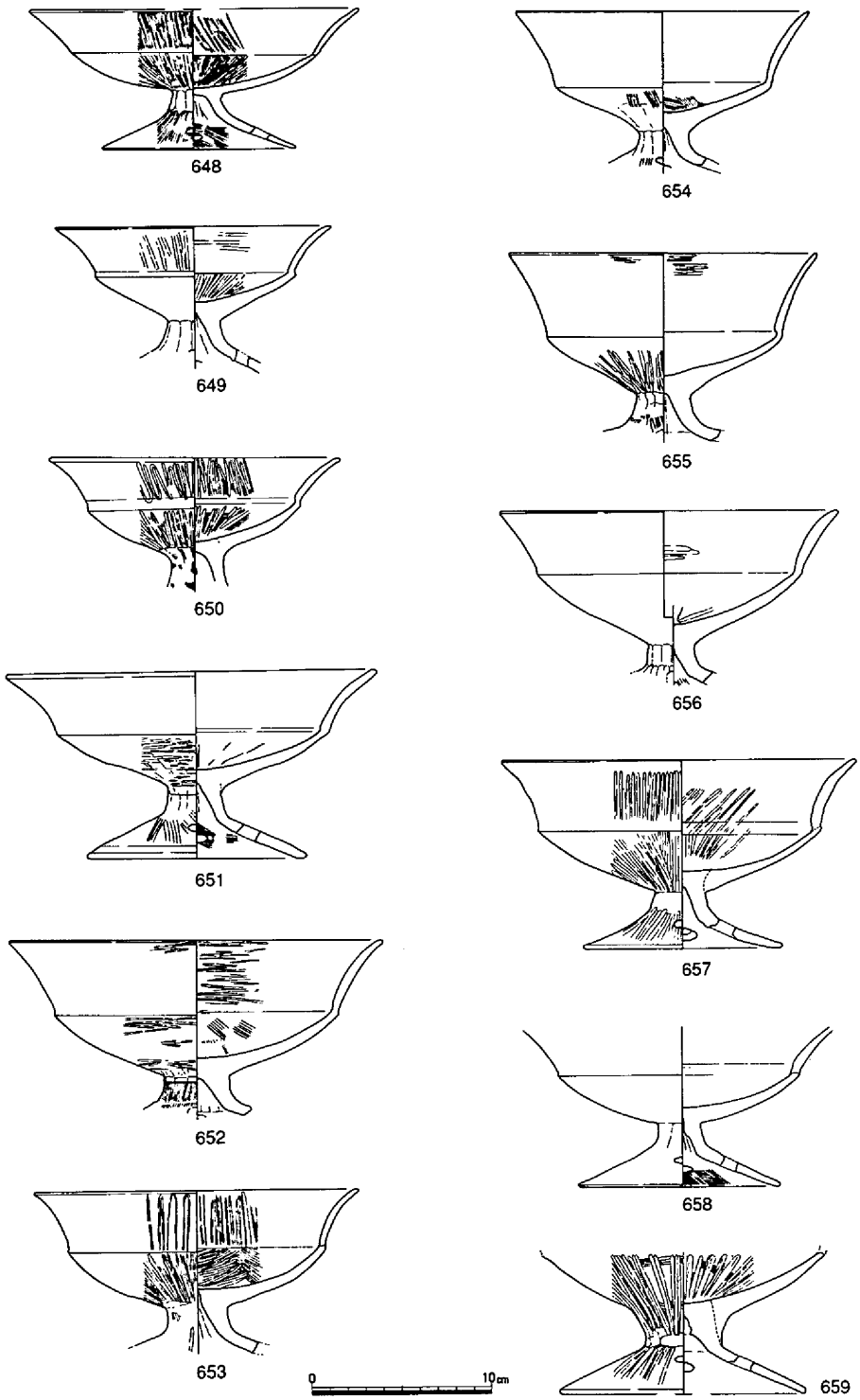
第177図　竪穴住居37上層出土遺物⑦（1/4）



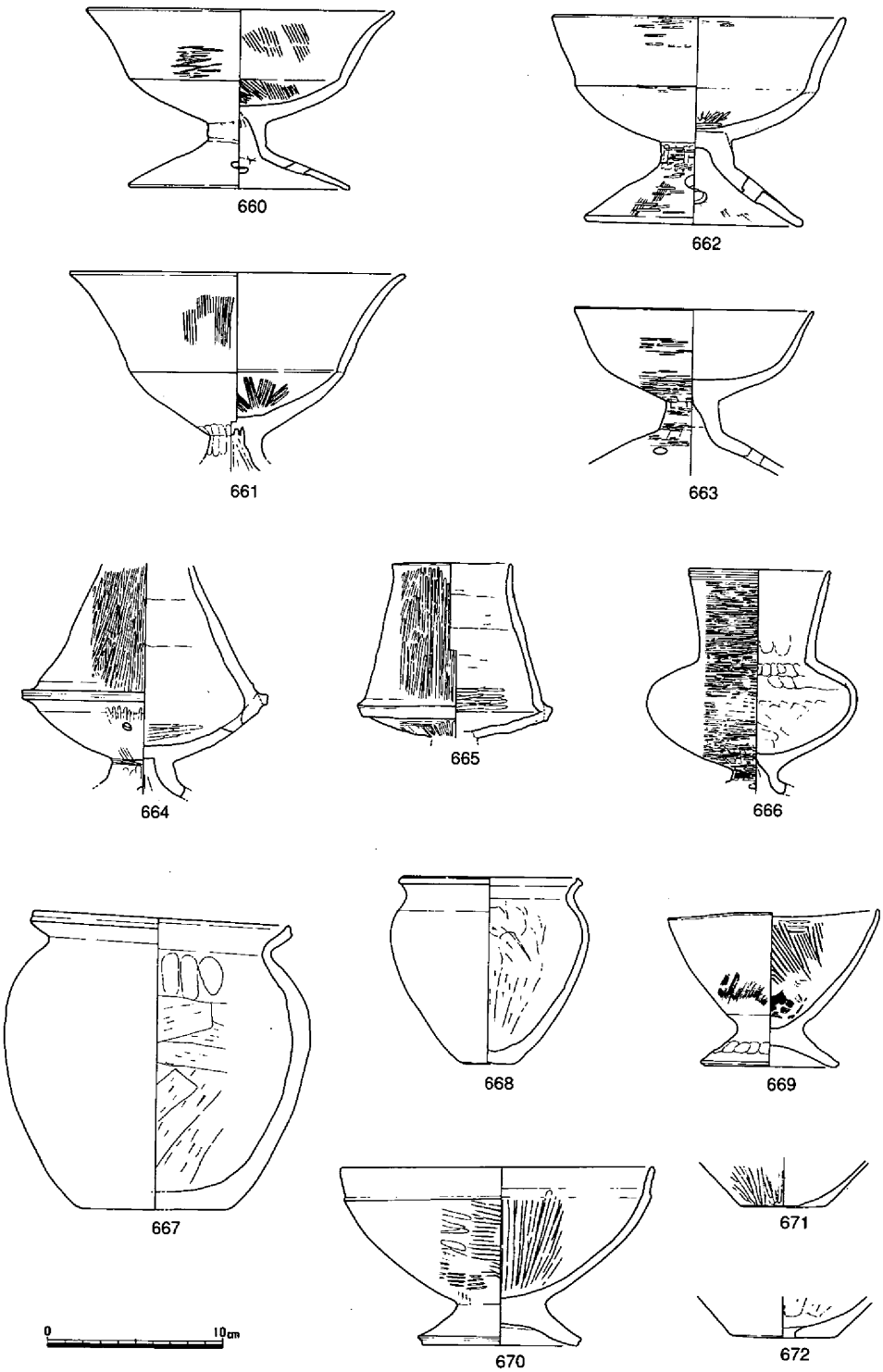
第178図　竪穴住居37上層出土遺物⑧（1/4）



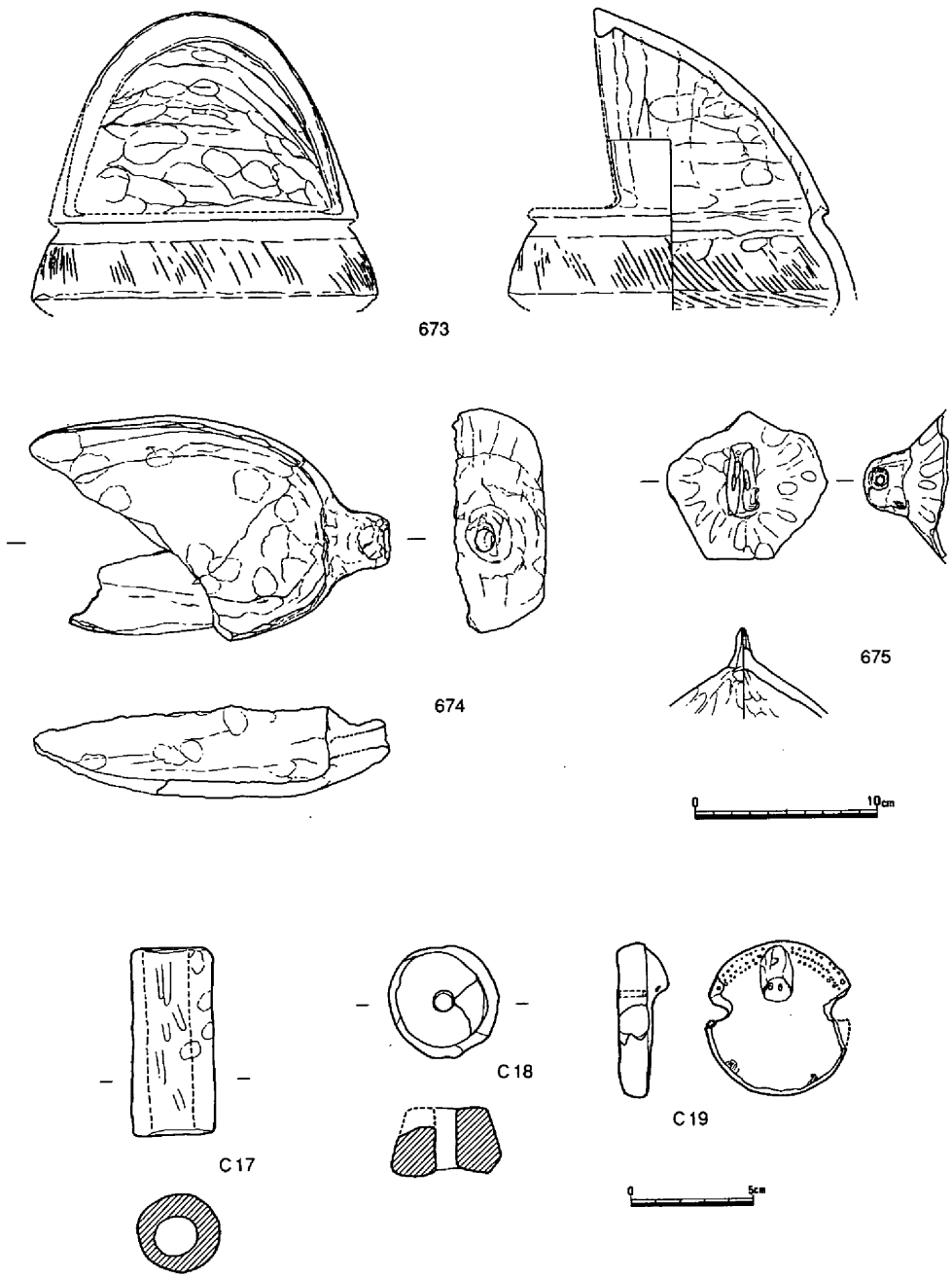
第179図　竪穴住居37上層出土遺物⑨（1/4）



第180図　竪穴住居37上層出土遺物⑩（1/4）



第181図　竪穴住居37上層出土遺物⑪（1/4）



第182図　竪穴住居37上層出土遺物⑫（1/4・1/3）

竪穴住居38（第155・183・184図）

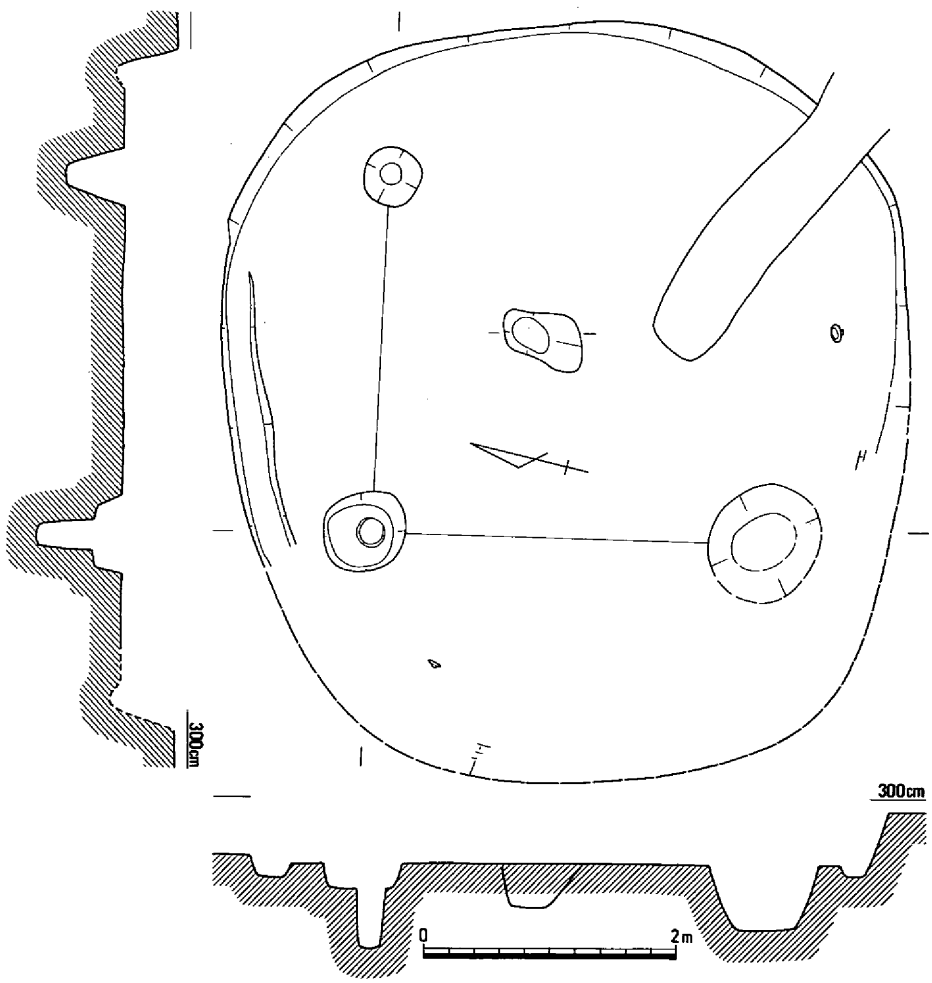
４Ａｄ区に位置し、平面形態が東西方向にやや長い不整円形を呈す住居である。住居南西部は部分的に壁体溝が確認され、柱穴位置から推定したものである。規模は長軸６ｍ、短軸5.4

m、深さ40cmを測る。床面推定面積は24.6㎡、床面の海抜高2.5mを測る。主柱は４本と考えられ、南東の柱穴は溝状遺構によって削平を受けていた。柱穴は径40～90cmと差があるが、深さはいずれも60cm前後を測る。長さ60×40cm深さ35cmの中央穴は床面中央やや東寄りに位置し、中央施設は検出されなかった。

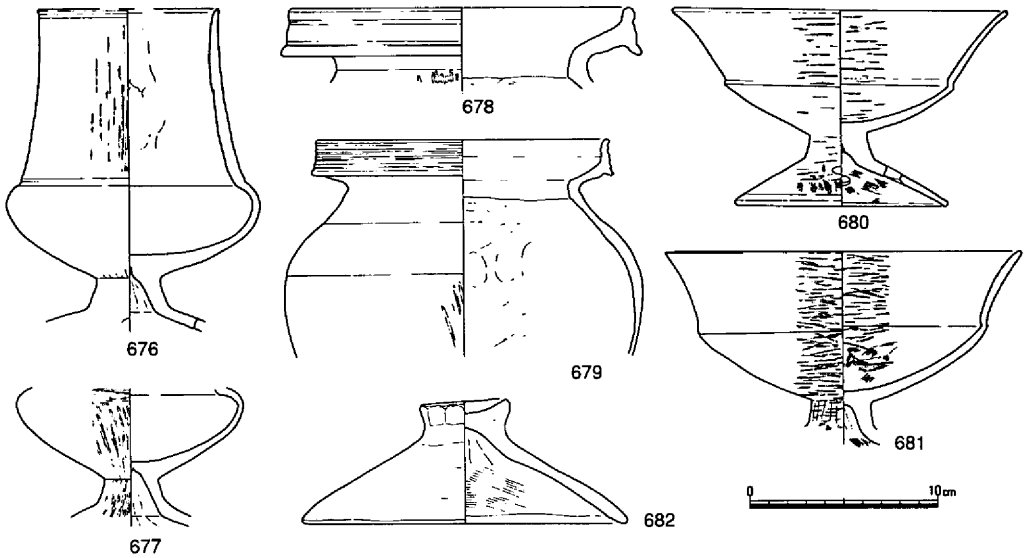
遺物は床面南部から脚付直口壺677、西部から高杯680の脚部、北東部から甕679が出土し、他は覆土からのものである。これら遺物の特徴から、当住居は才ノ町Ⅰ併行期に廃絶されたものと考えられる。

竪穴住居39（第155・185・186図）

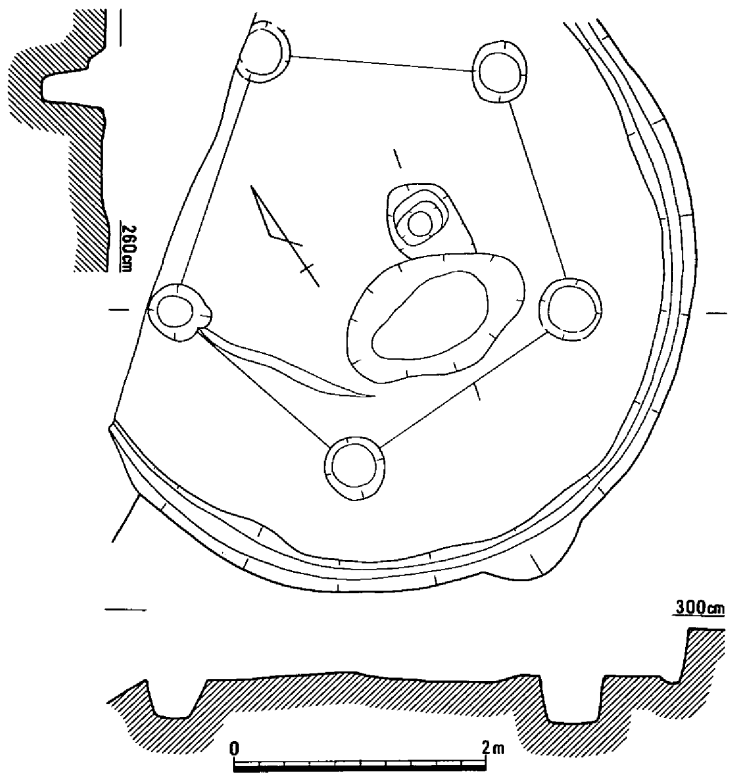
４Ｂ区、竪穴住居38の西に位置し、北西部は溝９に切られて検出された平面形態円形の住居である。規模は径5.2m、深さ35cm、床面推定面積20.3㎡、床面の海抜高2.55mを測る。主柱は



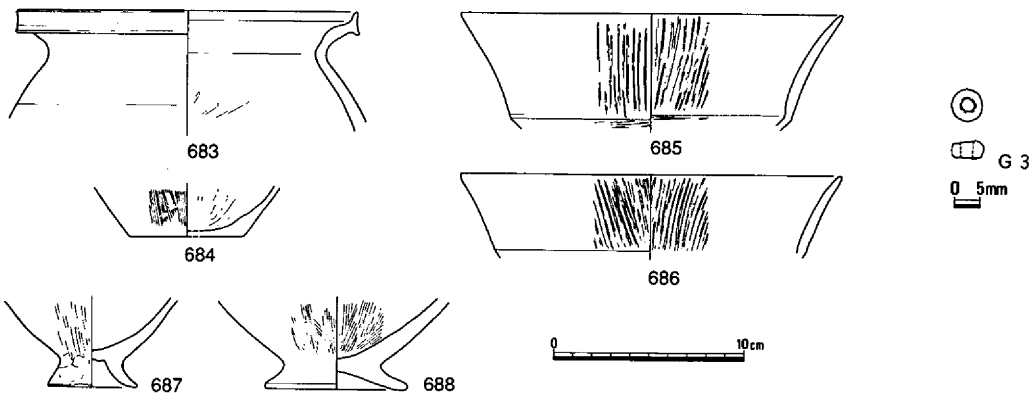
第183図　竪穴住居38（1/60）



第184図　竪穴住居38出土遺物（1/4）



第185図　竪穴住居39（1/60）



第186図　竪穴住居39出土遺物（1/4・2/3）

５本で柱穴間は北西の辺がやや距離があるものの２ｍ前後を測る。中央穴は床面中央東寄りに位置し、その南部には東西に主軸をもつ長さ1.5ｍ×80㎝、深さ約５㎝の中央施設が設置されていた。遺物はいずれも覆土から出土しており、やや古い様相を示す甕**683・684**が混じるものの、直線的に高く延びる口縁の高杯**685・686**がみられることから、当住居はオノ町Ⅰ～Ⅱ併行期に廃絶したものと考えられる。（江見）

竪穴住居40（第155・187・188図、写真図版118）

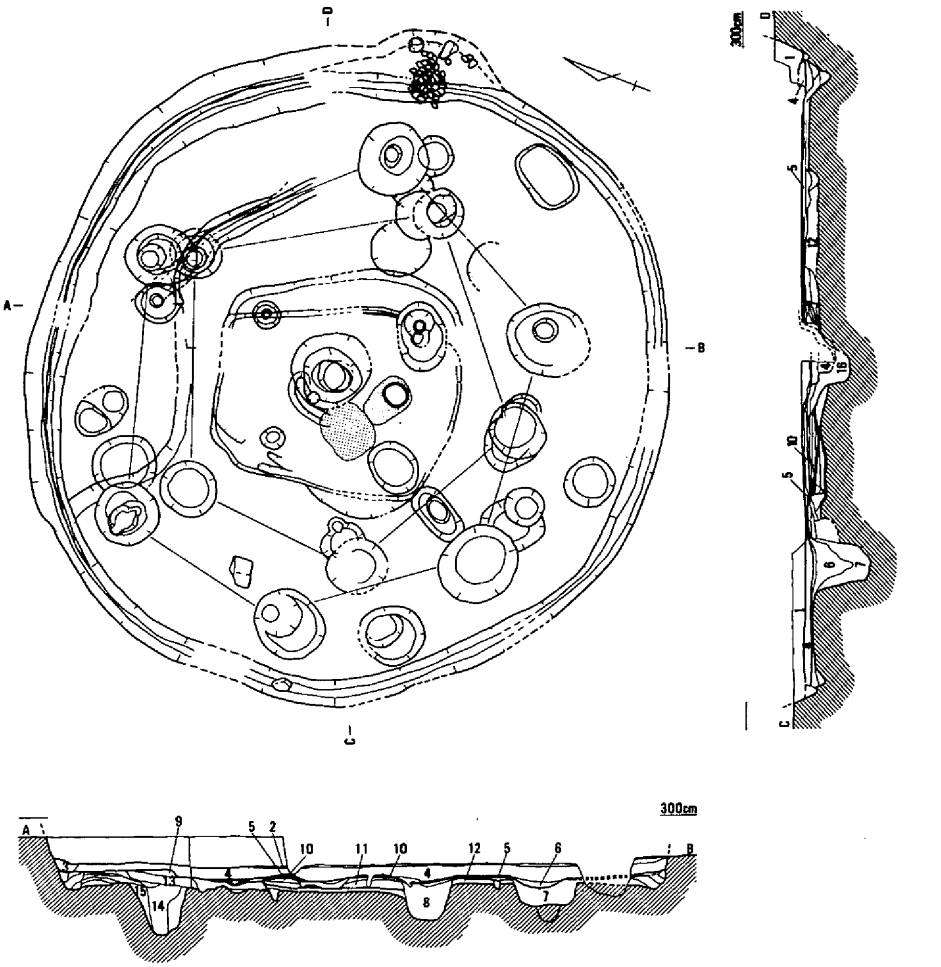
４Ｂ区のほぼ中央部において西側で竪穴住居41・42、南西側で弥生時代後期前半の竪穴住居15・16を切り、さらに東側においては古墳時代前半の竪穴住居62によって切られるという複雑な切合い関係のもとに検出された住居である。

住居は、海抜2.80ｍで当初平面円形を呈する住居として検出されたが、調査の進展につれて２軒の重複した住居であることが判明した。以下、この２軒の住居のうち新しい住居を竪穴住居40Ａ、古い住居を竪穴住居40Ｂとして概要説明しよう。

竪穴住居40Ａは、長軸長を東西方向に7.20ｍ、南北長6.80ｍを測り、平面楕円形を呈する住居であったが、さらに東の一部に緩やかな弧状を呈する張出しの存在と、その中に拳大から人頭大の石の集積を伴うことが確認された。

床面からは、柱穴６本と北側部分にベッドの状高まり、さらに中央部には中央穴１基等の存在が確認された。柱穴は、いずれも規模が径70㎝を越える掘り方を有し、断面中には柱痕の存在と柱穴の底には礎板痕跡が散見された。また中央穴の東側にはこれに接した状態で粘土の張り付けによる土手状の高まりが一部長さ約60㎝検出され、さらにこれを中心とした範囲に炭の面的な遺存が認められた。

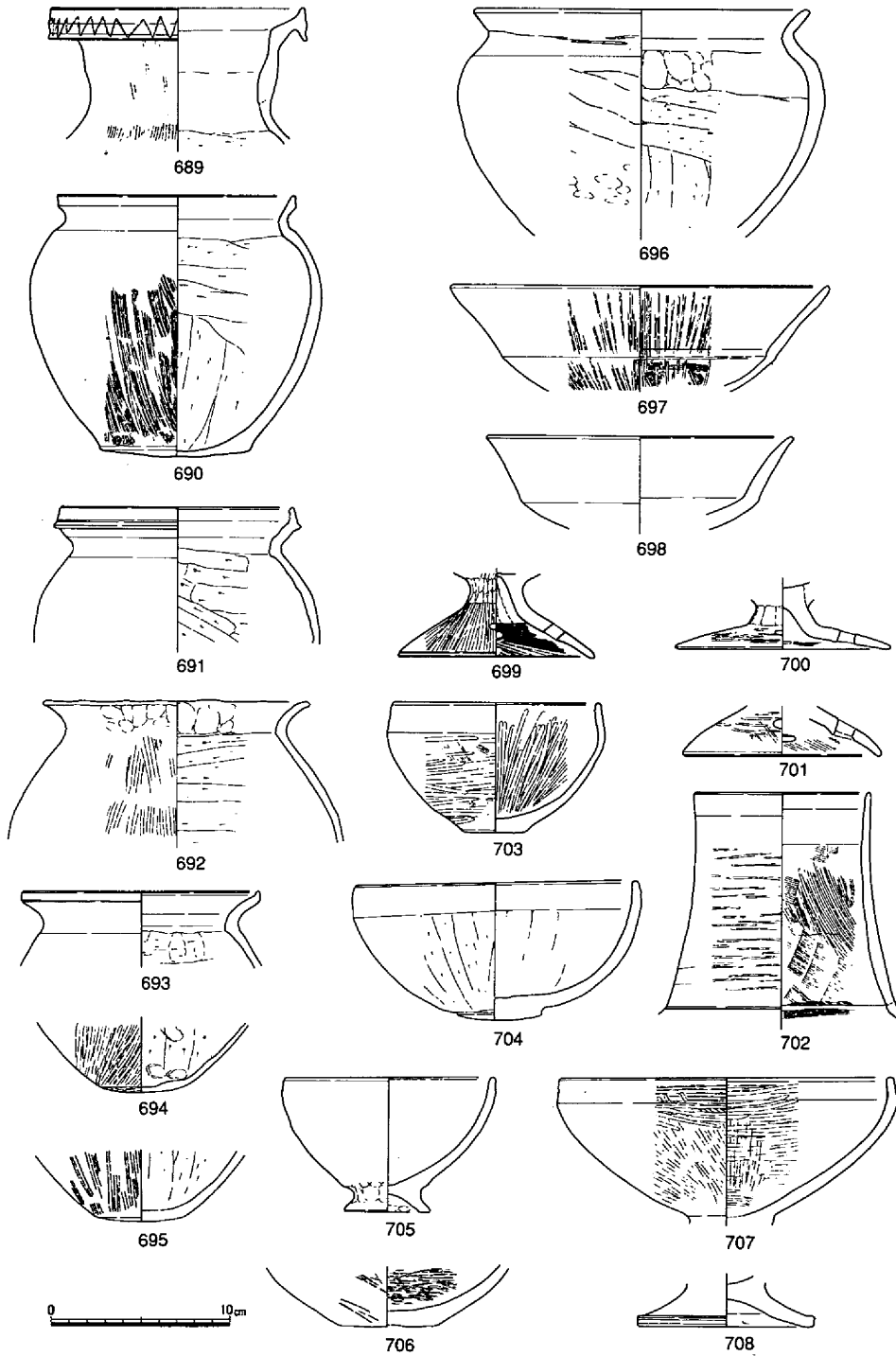
竪穴住居40Ｂは、竪穴住居40Ａの床面除去後検出された住居であるが、柱穴５本とベッド、



第187図　竪穴住居40（1/80）
・出土遺物①（1/2）

および中央施設の存在が確認された程度で明確な構造は判然としなかった。

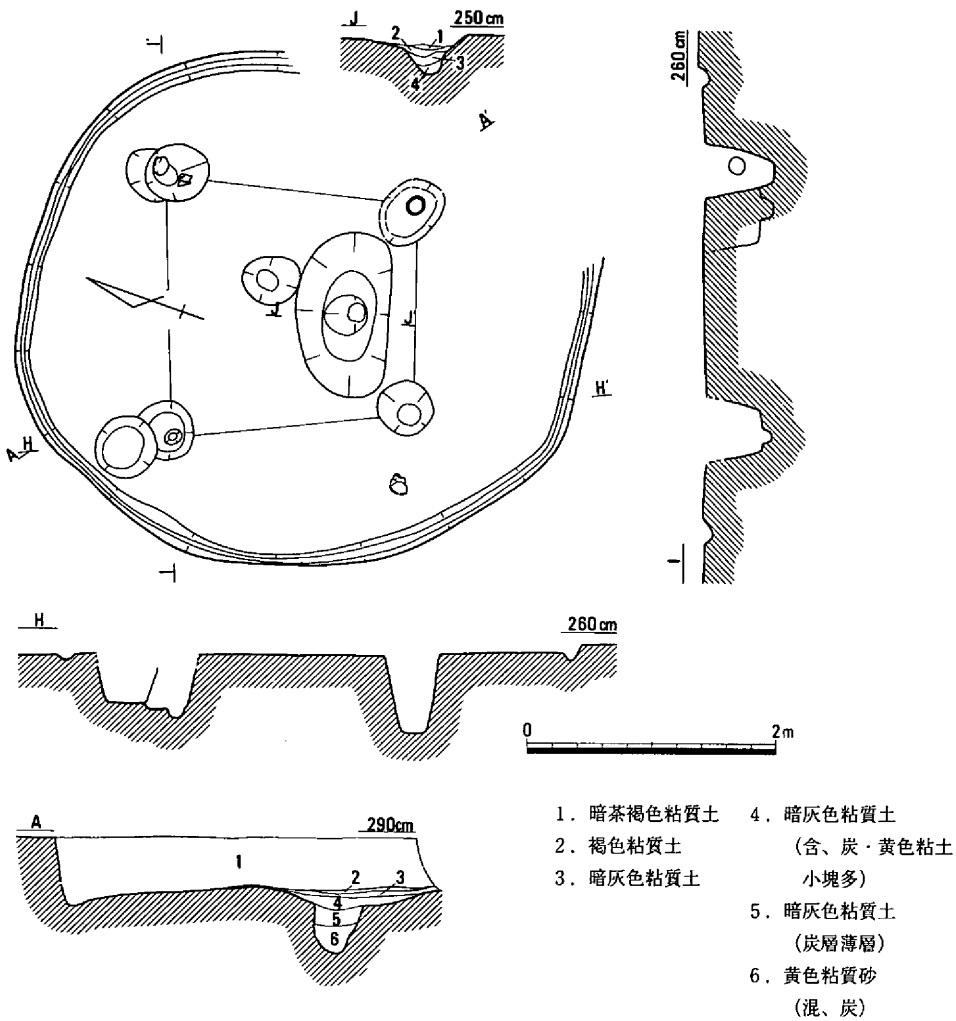
出土遺物には、少量の土器の他１点、手捏１点が検出された。時期は、特に高杯の在り方により、弥生時代後期後半に比定されよう。（島崎）



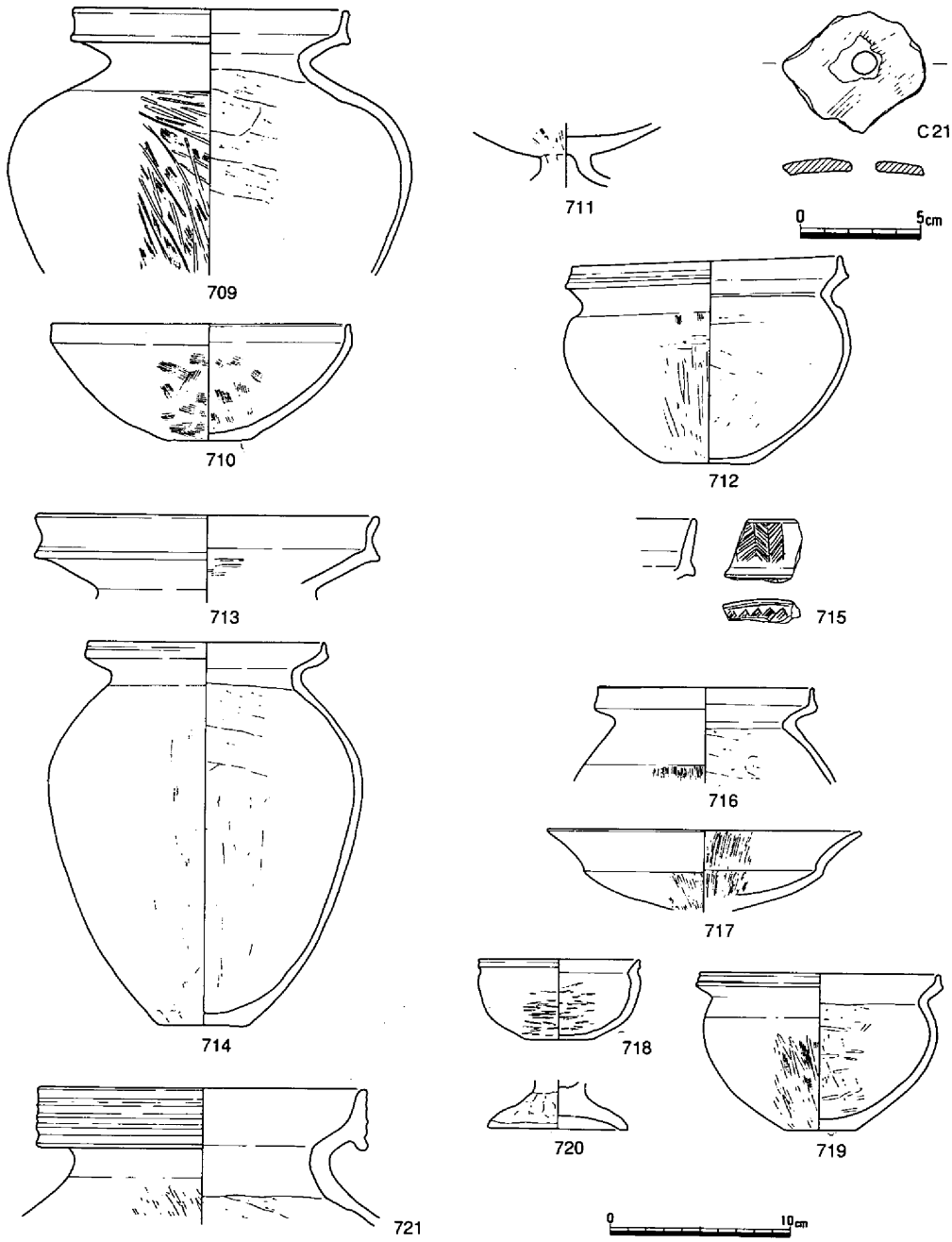
第188図　竪穴住居40出土遺物②（1/4）

竪穴住居41（第155・189・190図）

竪穴住居40の西に位置し、これに切られ竪穴住居42の上部から検出された、平面不整円形の住居である。規模は4.4×約４m、推定床面積14.5㎡、床面の海抜高2.45mを測る。主柱は４本で、南北間はいずれも1.9mを測り、東西間は北側が2.1mであるのに対し、南側は1.65mと短い。中央穴は床面中央北寄りおよび南側東西柱穴に沿って２個検出されており、前者（断面Ａ）には第２層の薄い貼床が認められることから、これから南へ掘り直されたものと考えられる。なお、南の新中央穴は長さ1.3m、幅75cmで緩く傾斜し、中央部分径約30cmが深く下がる状況を呈しており、旧の中央穴においても平面的には捉えなかったが、断面から明らかなように中央穴の上面周囲には緩く下がる部分があったものと推定される。



第189図　竪穴住居41（1/60）



第190図　竪穴住居41出土遺物（1/4・1/3）

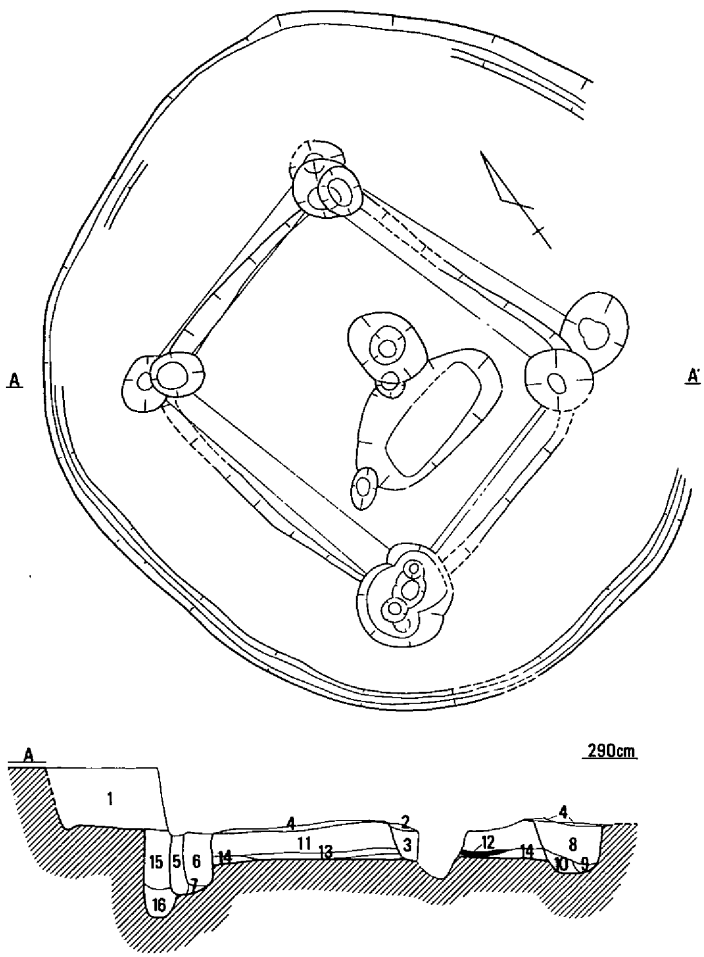
遺物は床面から甕709・小型鉢710、南西柱穴から高杯711、北東柱穴から小型鉢712、壁体溝南東部から線刻紋様の715が出土し、他は覆土からのものである。甕714は口縁端部を上方につまみ出し、横ナデされている。小型鉢はボウル状を呈す710と、口縁が「く」字状に開き、

拡張部に凹線状の横ナデを施す712・719がある。715は水漉粘土で作られた壺？で、反転し器台あるいは高杯などの裾にあたる可能性もある。

以上、当住居は上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰ併行期に廃絶したものと考えられる。

竪穴住居42（第155・191～193図）

竪穴住居14を切り、竪穴住居40・41に切られた住居である。平面形態は不整円形を呈し、断面の状況からベッドをもつ42Aから、平坦な床面をもつ42Bに建て替えられたと理解される住居である。規模はいずれも径5.3m、推定床面積21.4m²を測る。



1．暗茶灰褐色粘質土　6．暗黄灰色粘質土　11．暗灰褐色砂質土
2．暗灰黒色粘質土　7．暗灰色粘質土　12．炭層
3．暗灰色粘質土　8．暗灰褐色砂質土　13．淡茶灰色粘質土
4．暗灰色粘質土　9．暗灰色粘質土（混、炭）　14．淡褐色砂質土
5．暗灰色粘質土（混、炭）　10．暗灰色粘質土　15．黄灰色粘質砂
16．暗灰色粘質土

第191図　竪穴住居42（1/60）

40Aに伴う柱穴はA断面から明らかなように第5～10層がこれにあたる。これら2柱穴はいずれも40Bが埋められた後に掘り込まれていることや、切り合い関係から、当住居の主柱は内側に位置する4本と考えられる。柱穴間の距離は東西間1.2mに対し、南北間は1.5mとやや長く、また、東側の柱穴は僅かに住居中央に寄っている。

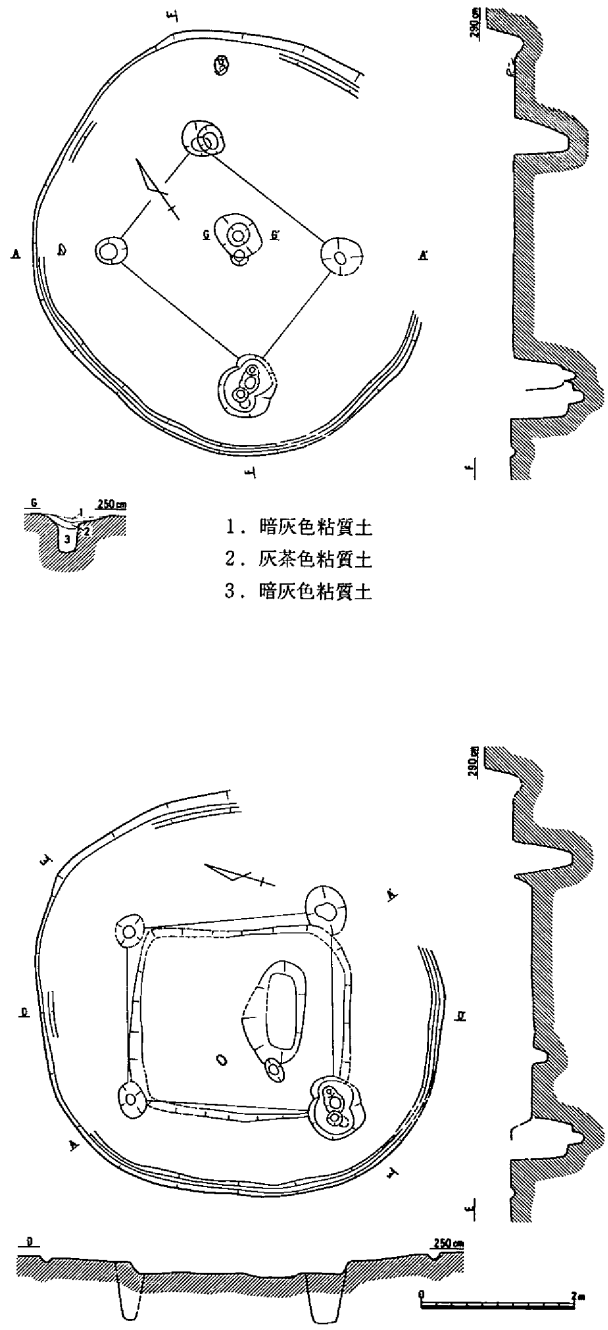
一方、床面中央からは旧の中央穴が、その北側から新の中央穴が検出され、中央穴の掘り直しがなされたものと思われる。

遺物は床面から高杯

723、手焙形土器726、中央穴から高杯722、覆土から高杯725が出土した。なお、726はほぼ完形で、土圧によって押し潰された状況で出土している。高杯724の口縁部にはハケ状工具の横ナデによる条線が施されたもので、725は混入の可能性もある。橙色を呈す726の作りは単純で、下半部は壺と同様に器壁が厚く、円錐形にすぼまる覆部に三角形に開口された端部は丸く収めている。内面はヘラケズリの後、部分的にハケ調整、外面はハケ調整が施されている。

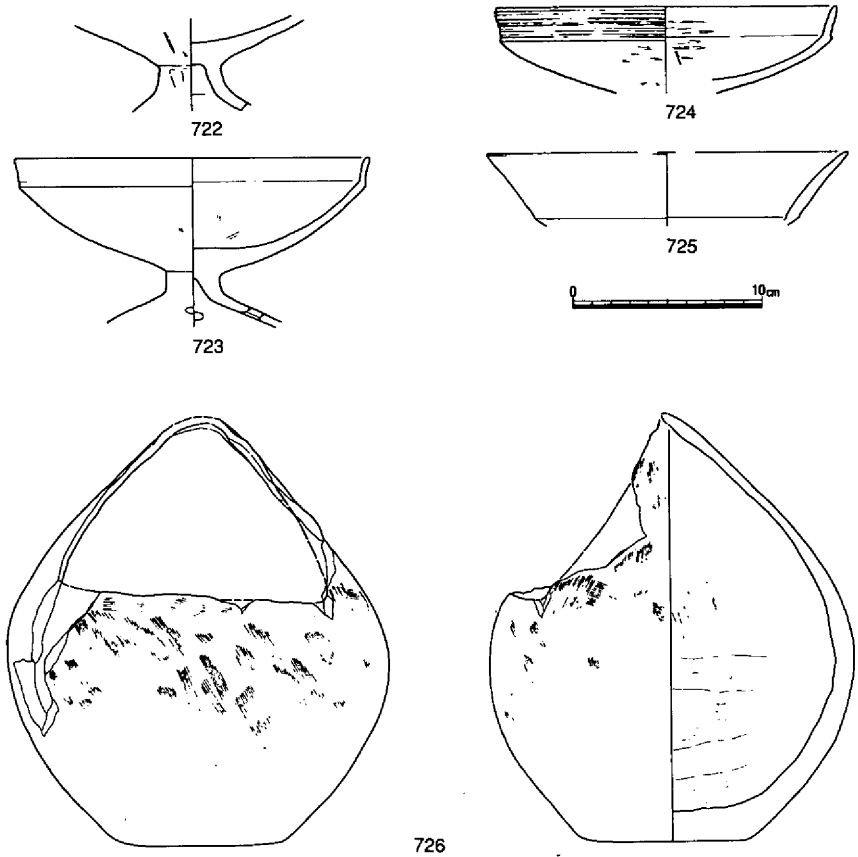
42Bは床面の周囲にベッドを巡らせたもので、床面から約25cmの高さに幅50～150cmの平坦面を矩形に巡らせている。主柱は４本で柱穴間の距離は東西間1.5m、南北間2.6mと40Aに比べやや長いものの、東西と南北の比はほぼ同様であった。

一方、中央穴は検出されなかったが、床面中央南寄りから、炭が堆積する、東西に主軸をもつ平面楕円形、長さ130×80cm、深さ約５cmを測る浅い土壙が検出された。なお、当住居に伴う遺物は皆無であった。



第192図　竪穴住居42A（上）・42B（下）（1/100）

以上、当住居Bからは遺物の出土をみなかったが柱穴配置や住居の状況から、上東・鬼川市Ⅲ併行期に建て替え、廃絶されたものと考えられる。（江見）



第193図　竪穴住居42出土遺物（1/4）

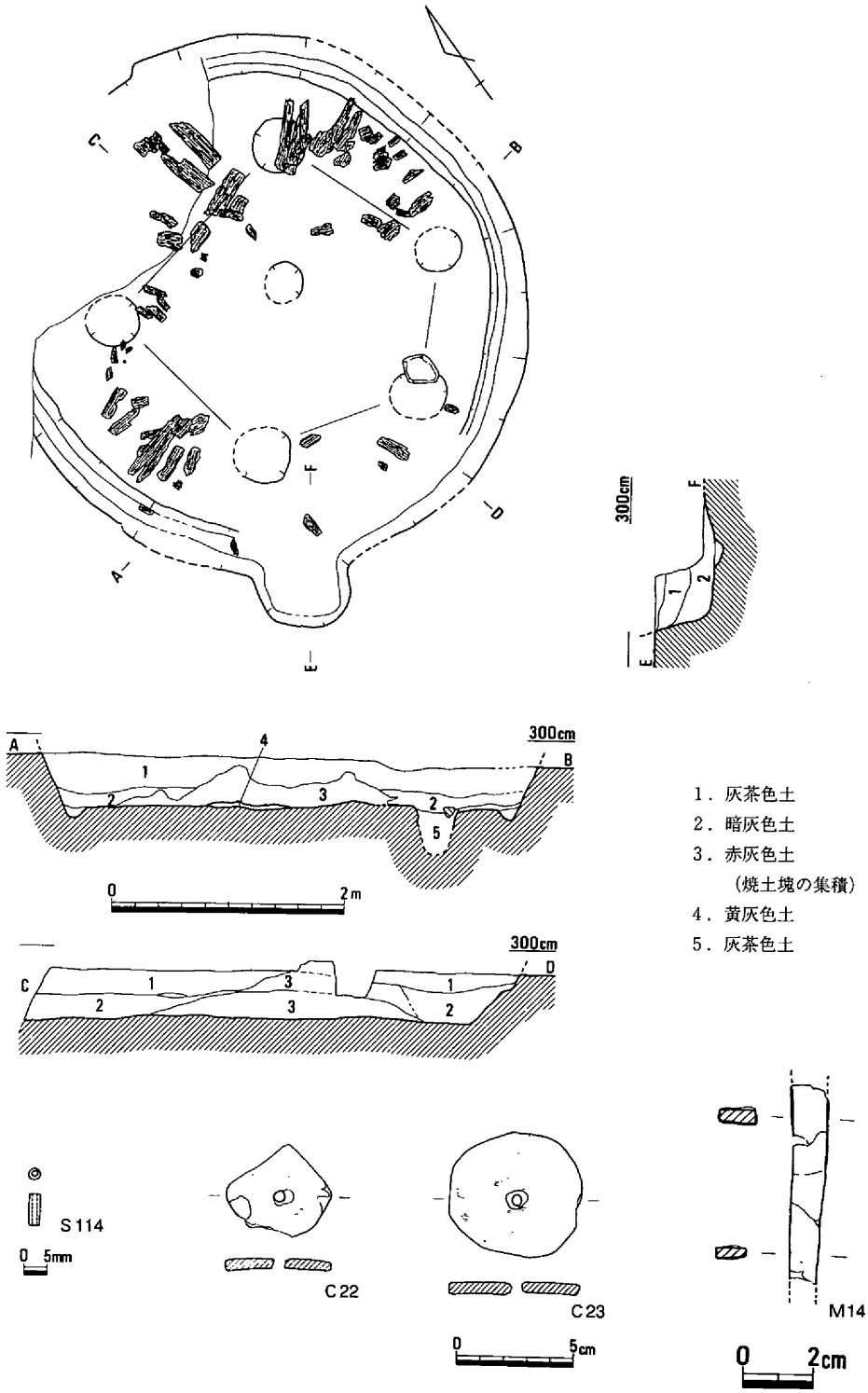
竪穴住居43（第155・194・195図）

５Ｂ区の北側において検出された南側の一部に張出しを有し、径およそ4.60ｍを測る住居であった。ところがこの住居は、床面の北側部分に地下水およびこれに伴う地面の陥没等が著しい所があり、柱穴等明瞭な検出はできなかった。

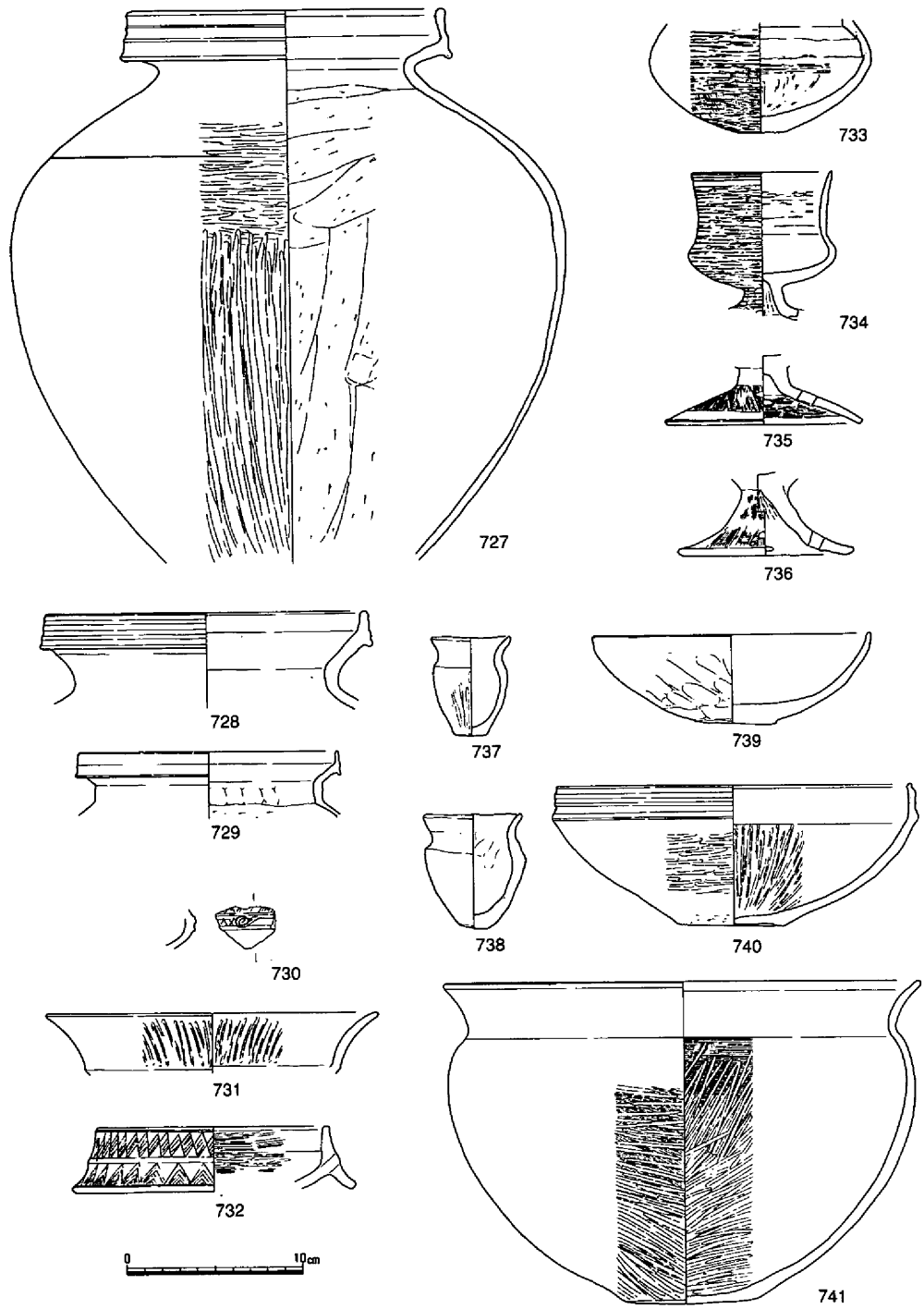
検出面は海抜2.85ｍで床面までの深さ約45cmを測る比較的遺存状態の良好な住居であったが、覆土のほぼ中央部には中心部が盛り上がった状況で最大厚約35cmもの焼土塊の集積が見られた。また、床面には、断片的ながら炭化建築材の遺存が確認され、火災を受けたことが窺えた。

柱穴のほとんどは、湧水等で完掘できなかった。したがって、平面で５本の存在が確認されたものの深さ等の詳細は不明である。南側の張出しは、壁体溝を伴わず堆積土も住居内と同様な堆積状況を見せていたことで、本来は住居と同一空間を共有していたものと推測される。

出土遺物には、少量の土器の他鉄器・管玉・土製紡錘車等が検出された。時期は、弥生時代後期後半に比定されよう。



第194図　竪穴住居43（1/60）・出土遺物①（2/3・1/3・1/2）

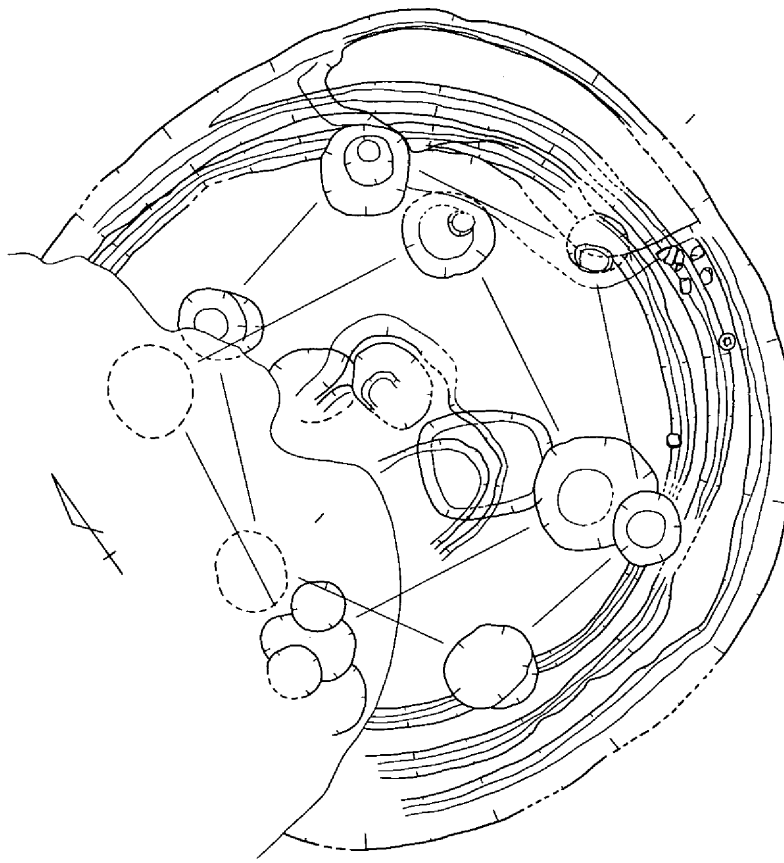


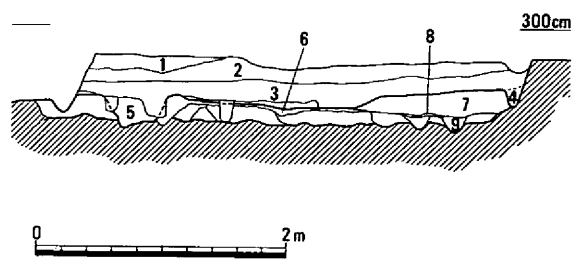
第195図　竪穴住居43出土遺物②（1/4）

竪穴住居44（第155・196～199図、写真図版118）

５Ｂ区において竪穴住居43にその西側が切られた状態で検出された。住居は、ほぼ床面を一にした状態での拡張が認められた。以下、竪穴住居44Ａ、44Ｂ、44Ｃと概要を説明しよう。

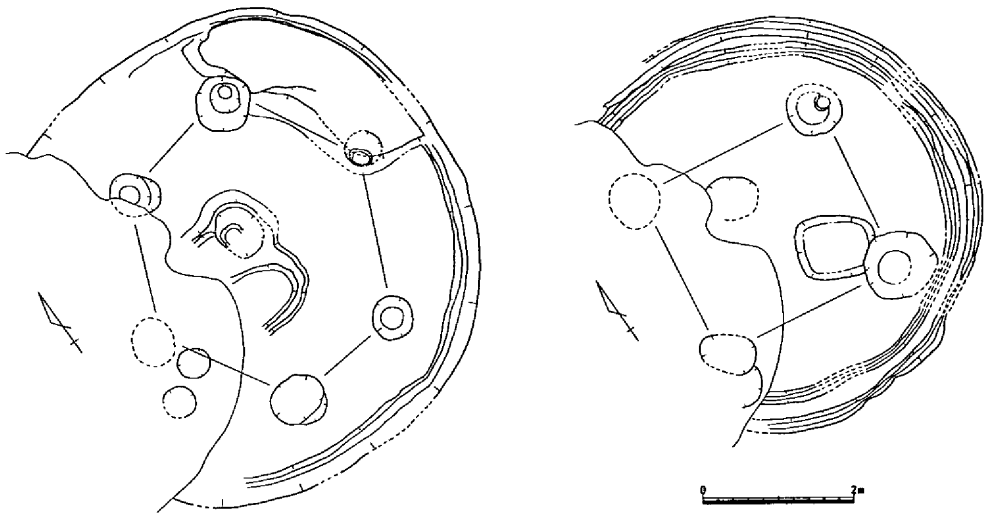
竪穴住居44Ａは、最初に検出された住居で、長軸長6.10ｍを測り、平面円形を呈する。床面には、６本の柱穴の存在が想定され、北東側２本の柱穴間にはこれを結ぶかのような範囲でベ





1．灰茶色土
2．灰黄色土
（含、黄色塊）
3．暗灰色土
4．暗灰色土
5．黒灰色土
6．黄灰色粘土
7．暗黄灰色土
8．黄灰色粘質土
9．灰黄色土

第196図　竪穴住居44（1/60）

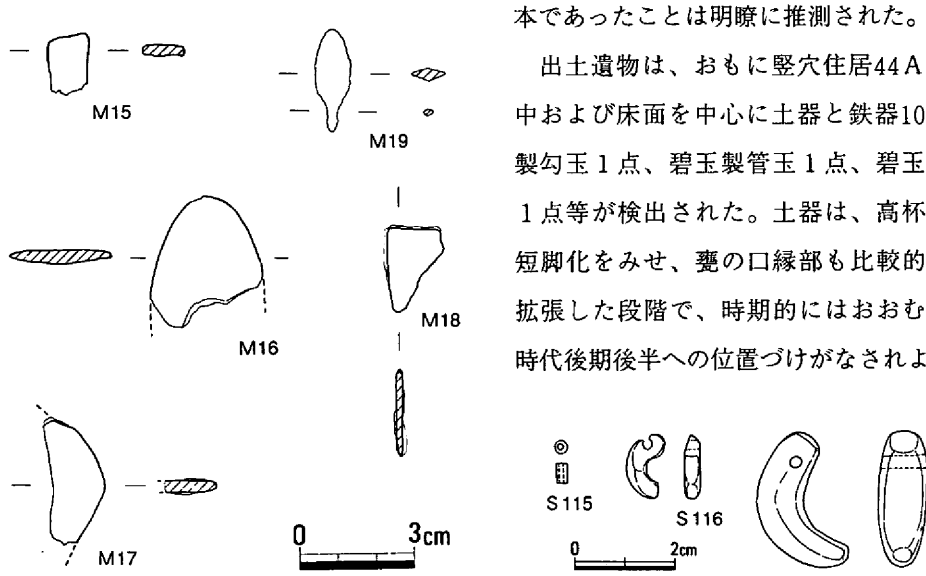


第197図　竪穴住居44Ａ（左）・44Ｂ（右）（1/100）

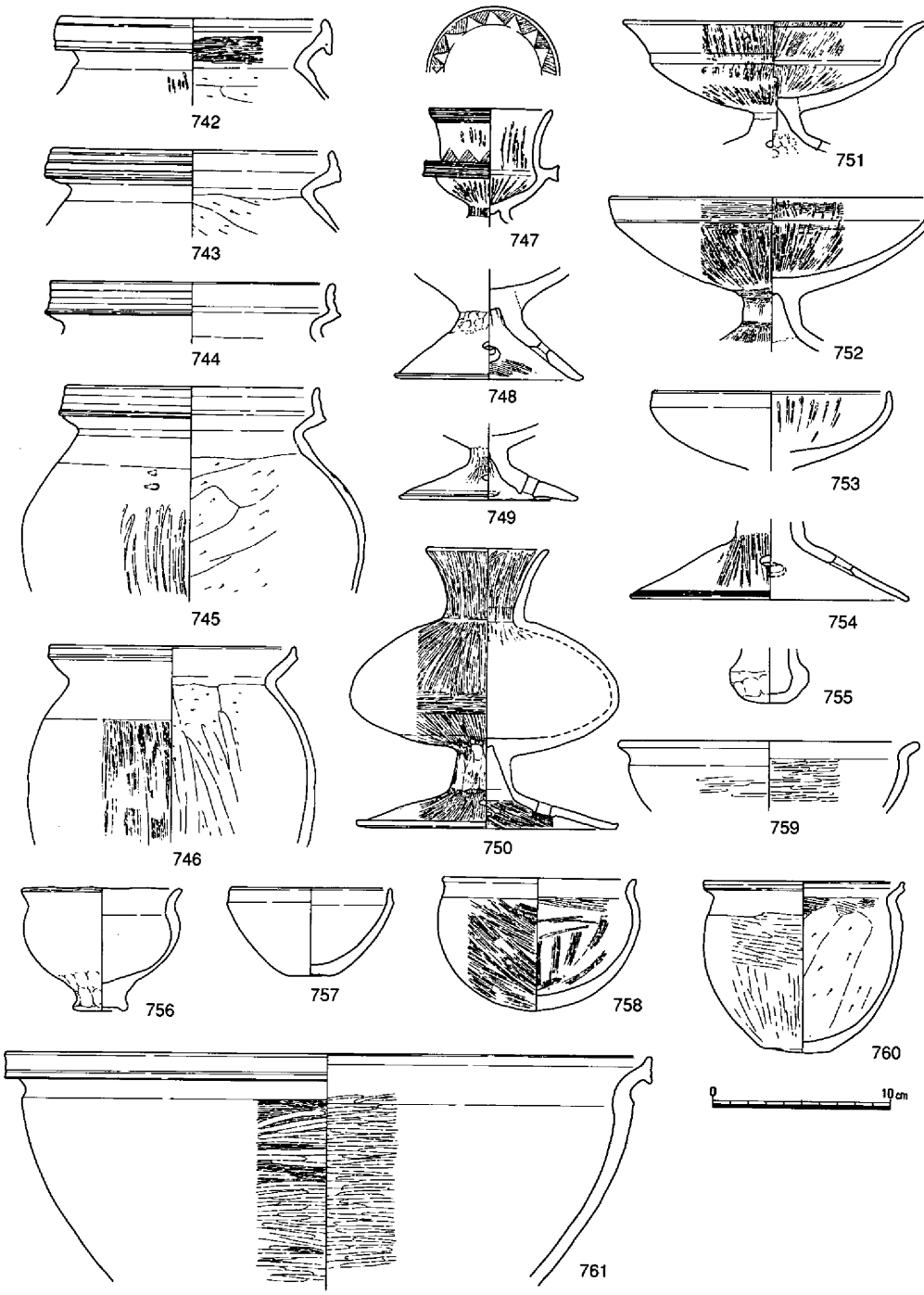
ッド状の高まりが存在していた。また、中央部分には粘土帯を土手状に貼付したものと比較的浅い土壙とがセットをなしているのが確認された。

竪穴住居44Ｂは、竪穴住居44Ａの床面を除去後ただちに検出された住居であるが、さらにその内側に別の壁体溝を１条有し、もう１段階古い住居の存在が窺われた。ただし、これに伴う柱穴等の遺構の存在は確認されなかった。住居は、東側が竪穴住居43に切られ検出されなかったが、平面規模径約5.50ｍで不正円形を呈するものであることが推測された。また主柱穴が４本であったことは明瞭に推測された。

出土遺物は、おもに竪穴住居44Ａの覆土中および床面を中心に土器と鉄器10点、土製勾玉１点、碧玉製管玉１点、碧玉製勾玉１点等が検出された。土器は、高杯の脚が短脚化をみせ、甕の口縁部も比較的上方に拡張した段階で、時期的にはおおむね弥生時代後期後半への位置づけがなされよう。



第198図　竪穴住居44出土遺物①（1/2・2/3）



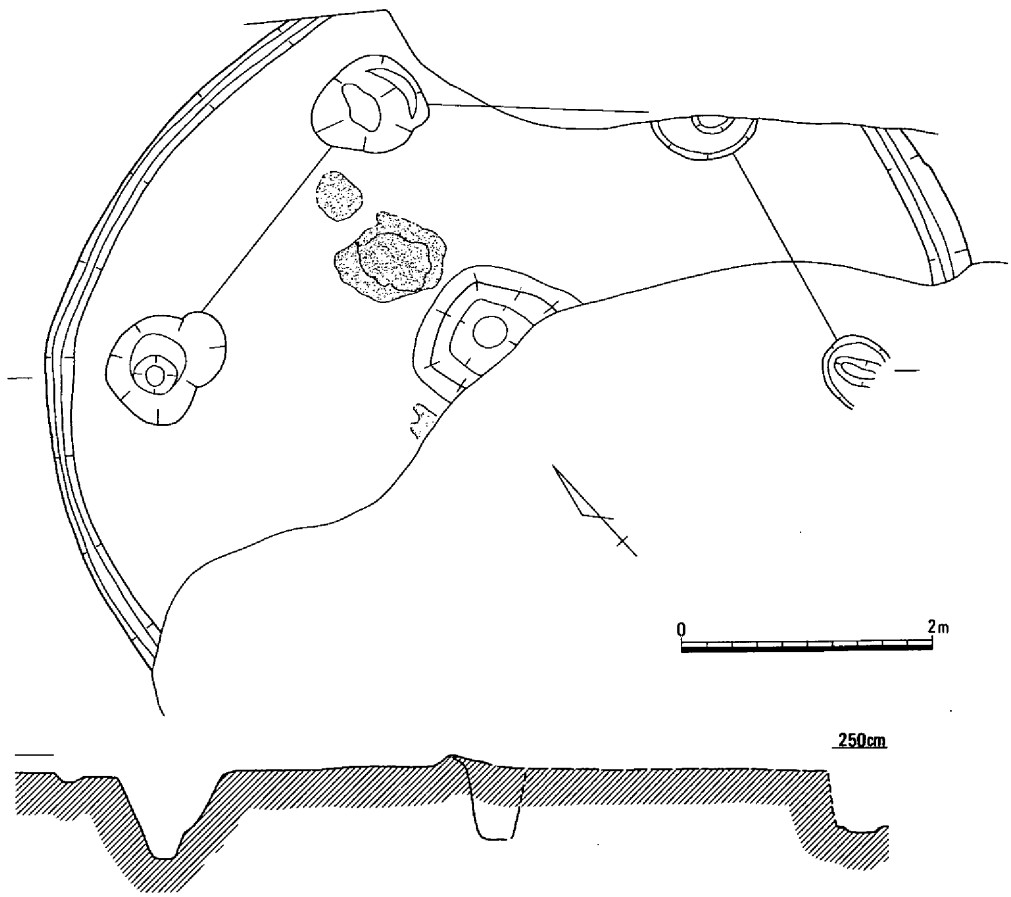
第199図　竪穴住居44出土遺物②（1/4）

竪穴住居45（第155・200・201図）

４Ｂｂから５Ｂａ区において東側は竪穴住居40が肩口を接して、また南側は竪穴住居43・44によって約１／２が切られた状態で、海抜約2.40ｍで検出された。床面に遺存する住居施設としては、肩口、壁体溝、柱穴、中央施設等であった。肩口および壁体溝の在り方により、およそ7.00ｍ前後の規模の円形住居が推定される。

柱は、検出された４本がそれぞれに2.50～2.70ｍの芯心距離を計測することで、本来６本の柱で構成されていたことが想定された。残りの２本については地下水の湧水等により検出不可能な状態であった。一部柱穴の底には、礎板痕跡を残すものも確認された。

検出面から約５㎝下層で検出された床面の中央部には、床面からの深さ約60㎝を測る小土壙の存在と、これを取り囲む状況で粘土帯が巡らされていた。また、周辺には被熱面の点在が確認された。

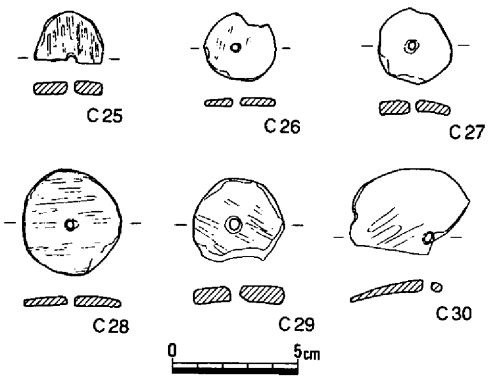


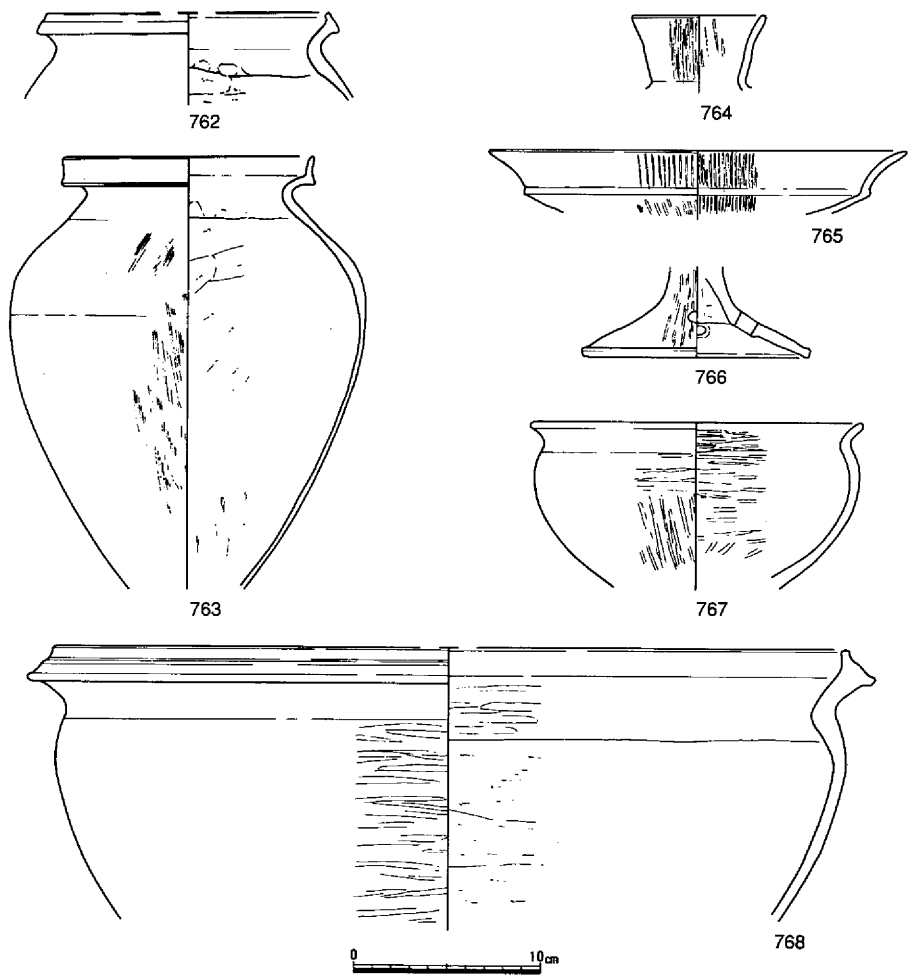
第200図　竪穴住居45（1/60）

出土遺物は、床面および覆土中から土器と土製紡錘車６点が検出された。

土器には、甕、脚付直口壺、高杯、鉢等の器種が見られた。甕763を除くいずれもが上東・鬼川市Ⅱ段階に近い様相を示すが、住居の時期としては上方に長く口縁端部を拡張する763に年代比定の根拠を置きたい。

時期は、上東・鬼川市Ⅲ併行として差支えないものと考える。　　（島崎）



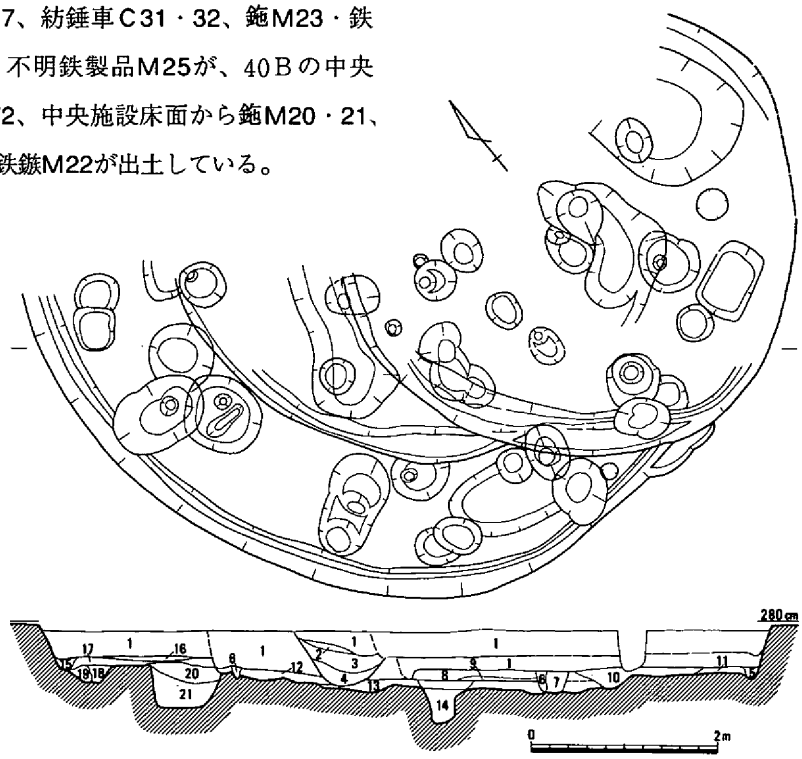


第201図　竪穴住居45出土遺物（1/3・1/4）

竪穴住居46（第155・202～204図、写真図版119・172）

５Ｂｂ区に位置し、竪穴住居47・48を切り、住居東部を土壙166・溝10などに切られて検出された平面形態円形の住居である。なお、北部は調査区外に延びている。住居は第202図の断面から明らかなように第１層下面（Ａ）、第８層上面（Ｂ）の２面の床を確認し、１回の拡張を経て廃絶にいたっていると理解されたが、平面的には、最上面の40Ａについては住居西部において硬く締まった貼床面を確認しただけで柱穴等は確認できず、40Ｂについてのみ明らかにし得た。主柱は４本で柱穴間の距離は南北間が東西間に比べ約40cm長い2.4ｍを測る。中央穴は径、深さともに約50cmを測り、中央穴の南部には深さ５cmの浅く凹地状を呈す中央施設が配置されていた。また、中央穴の北西および南からは径50～80cmの焼土面が検出されている。

遺物は40Ａ覆土から769～771、773～775管玉Ｓ117、紡錘車Ｃ31・32、鉇Ｍ23・鉄鏃Ｍ24・不明鉄製品Ｍ25が、40Ｂの中央穴から772、中央施設床面から鉇Ｍ20・21、覆土から鉄鏃Ｍ22が出土している。



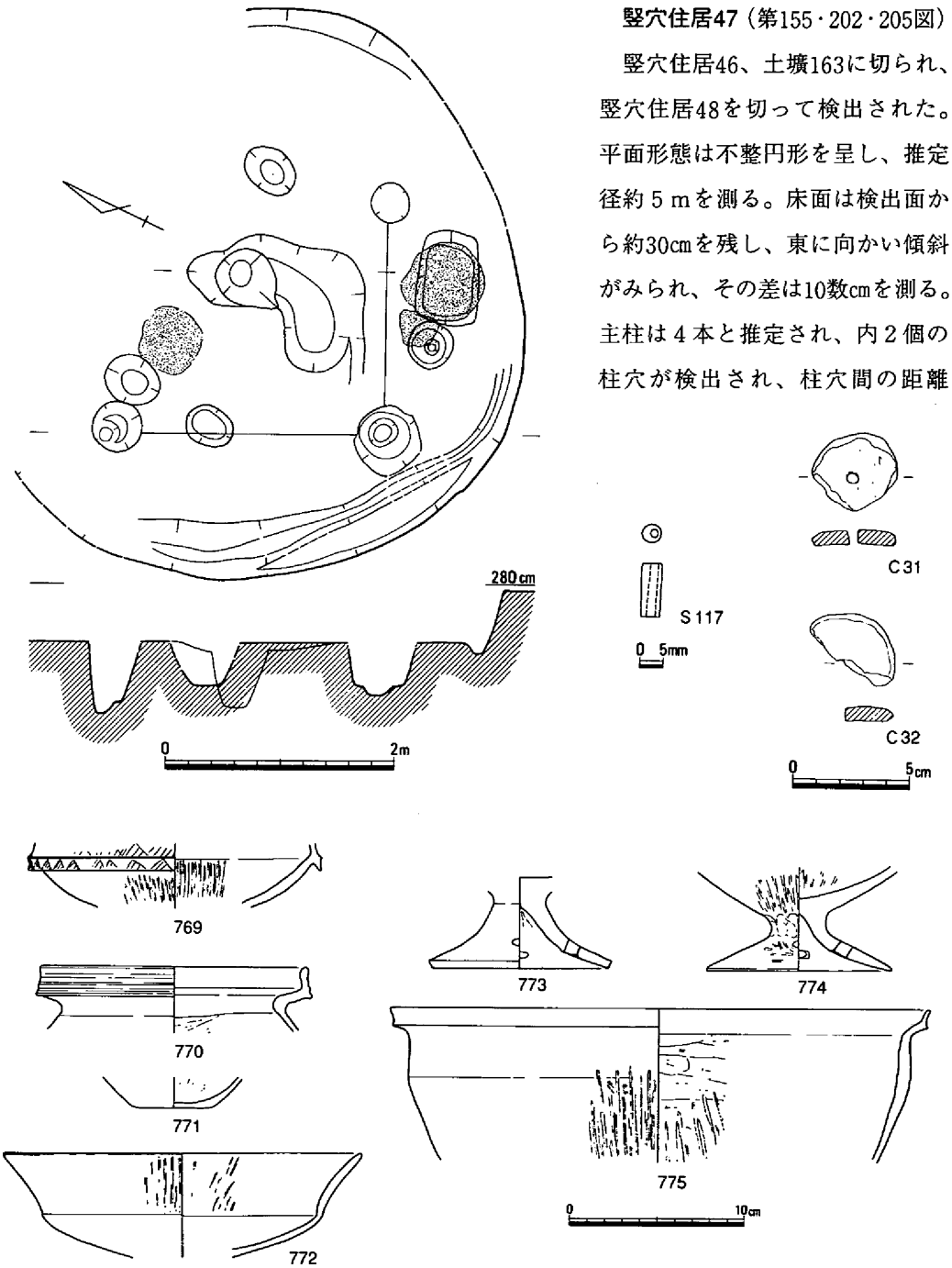
1．茶灰色粘質土
2．黄褐色粘質土
3．茶灰色粘質土
4．暗茶灰色粘質土（含、炭多）
5．暗茶灰色粘質土
6．暗灰色粘質土
7．暗茶灰色粘質土
8．黄褐色粘質砂
9．暗灰色粘質土
10．黄褐色粘質土（混、灰色粘質土）
11．灰褐色粘質土
12．黄灰褐色粘質砂
13．黄褐色粘質土（混、灰色粘質砂）
14．黄灰色粘質砂
15．茶褐色粘質土
16．黄褐色粘質土
17．茶灰色粘質土（混、炭）
18．茶灰色粘質土
19．茶灰色粘質砂
20．茶褐色微砂
21．褐色微砂

第202図　竪穴住居46～48（1/80）

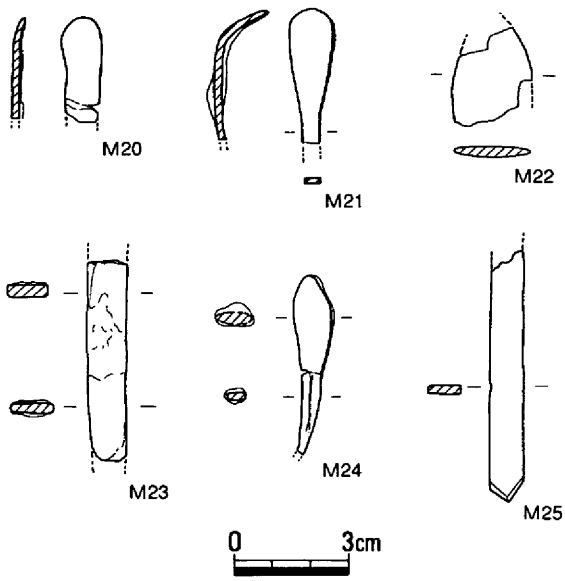
以上、高杯773、大型鉢775はやや古い様相を呈すものの甕、高杯の特徴から、当住居はオノ町Ⅰ併行期に廃絶したものと考えられる。

竪穴住居47（第155・202・205図）

竪穴住居46、土壙163に切られ、竪穴住居48を切って検出された。平面形態は不整円形を呈し、推定径約５ｍを測る。床面は検出面から約30cmを残し、東に向かい傾斜がみられ、その差は10数cmを測る。主柱は４本と推定され、内２個の柱穴が検出され、柱穴間の距離



第203図　竪穴住居46（1/60）・出土遺物①（2/3・1/3・1/4）



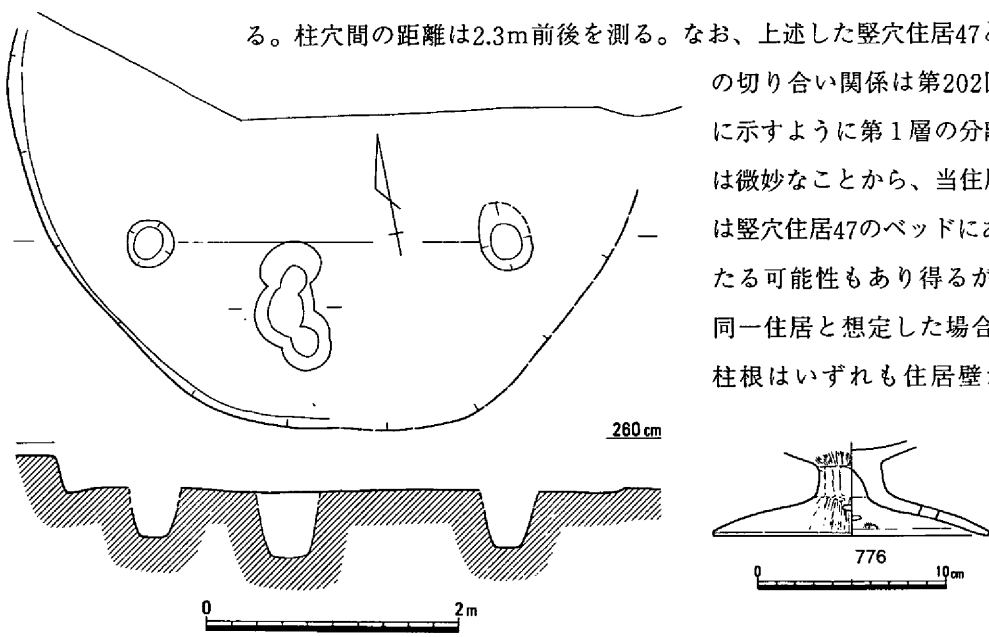
第204図　竪穴住居46出土遺物②（1/2）

は約2.8ｍを測る。なお、住居壁は床面より僅かに下がるものの明瞭な壁体溝は確認できず、後述する竪穴住居48の床面にあたる可能性もある。

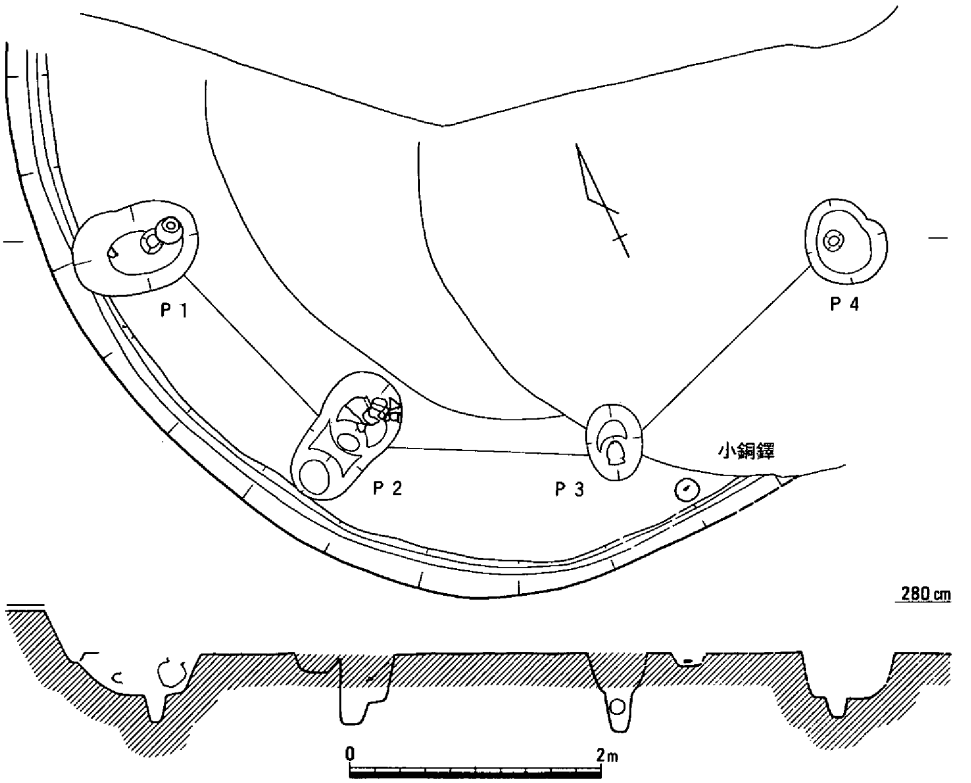
遺物は覆土中から高杯776が出土しており、オノ町Ⅰ期を示す。

竪穴住居48（第155・202・206～208図、カラー図版、写真図版119・147）

竪穴住居46・47および土壙163に切られ検出された住居で、その掘り方と柱穴位置から、推定径7.6～８ｍを測り円形の平面形態を呈す。深さ30㎝、床面の海抜高2.4ｍを測り、床面下には厚さ約10㎝の貼床が認められ、特に、床面直下の第16層は覆土と明瞭に区別されるものであった。主柱は８本と推定され、内４個の柱穴が検出された。径約60、深さ約50㎝を測り、柱根部分がいずれも柱穴底部からさらに10㎝前後深く沈み込んでいた。なお、Ｐ１、２は「８」字状の平面形を呈すもので、掘り下げ状況から、本来の柱穴と同規模の柱抜き取り穴が掘られたためと理解される。柱穴間の距離は2.3ｍ前後を測る。なお、上述した竪穴住居47との切り合い関係は第202図に示すように第１層の分離は微妙なことから、当住居は竪穴住居47のベッドにあたる可能性もあり得るが、同一住居と想定した場合、柱根はいずれも住居壁か



第205図　竪穴住居47（1/60）・出土遺物（1/4）



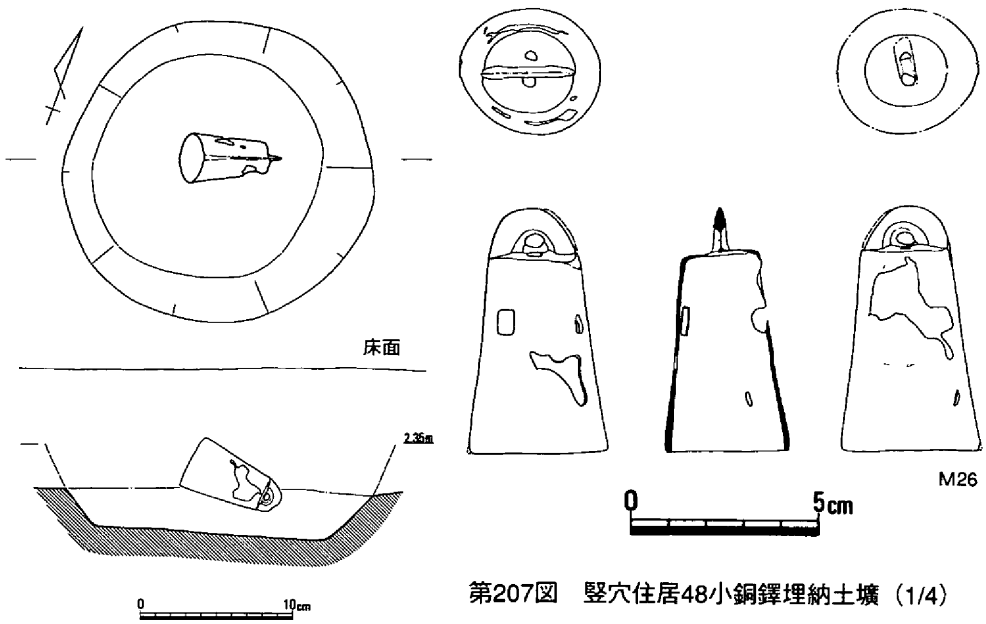
第206図　竪穴住居48（1/60）

ら内側60cm前後に位置しているのに対し、ベッドの内端からの距離はＰ１では約70cmを測るが、Ｐ３では約40cmと東に向かうにしたがって距離を減じているため個別の住居と判断した。

一方、貼床掘り下げ時に、住居の南端から小銅鐸M26が出土した。小銅鐸は淡褐色砂質土（微砂）の自然堆積層に掘り込まれた円形の小土壙から出土したもので、検出面での径約20cm、深さ約３cmを測る。土壙内には基盤層と近似する微砂層が堆積していたが、それに比べやや軟らかく、僅かながら灰色をおびるとともに、炭粒が認められた。小銅鐸は鐸身が東北東に向き、斜め下方に傾きながらも鈕を垂直に立てた状態で検出されており、その状況から意識的に埋置されたものと考える。なお、鐸身内からは土に混じって白い骨粉状のものが確認された。

遺物は床面下から小銅鐸が出土したのをはじめ、土器類は主に柱穴から出土しており、覆土からも甕・高杯片などが出土しているがいずれも細片であった。

小銅鐸M26の遺存状況は、鈕部分はややもろく取り上げの際その一部を欠損したが、鐸身のそれは比較的良好であった。淡青緑色を呈す。重量34.56ｇ、総高6.42cm、鐸身高5.24cm、鈕高1.18cm、舞2.4×2.11cm、底部3.77×3.2cmを測る。鈕は上方にやや長く延びる断面菱形を呈す。鈕孔下部には僅かながら甲張りが認められるとともに、鈕内側や鐸身の磨滅痕跡は顕著ではない。

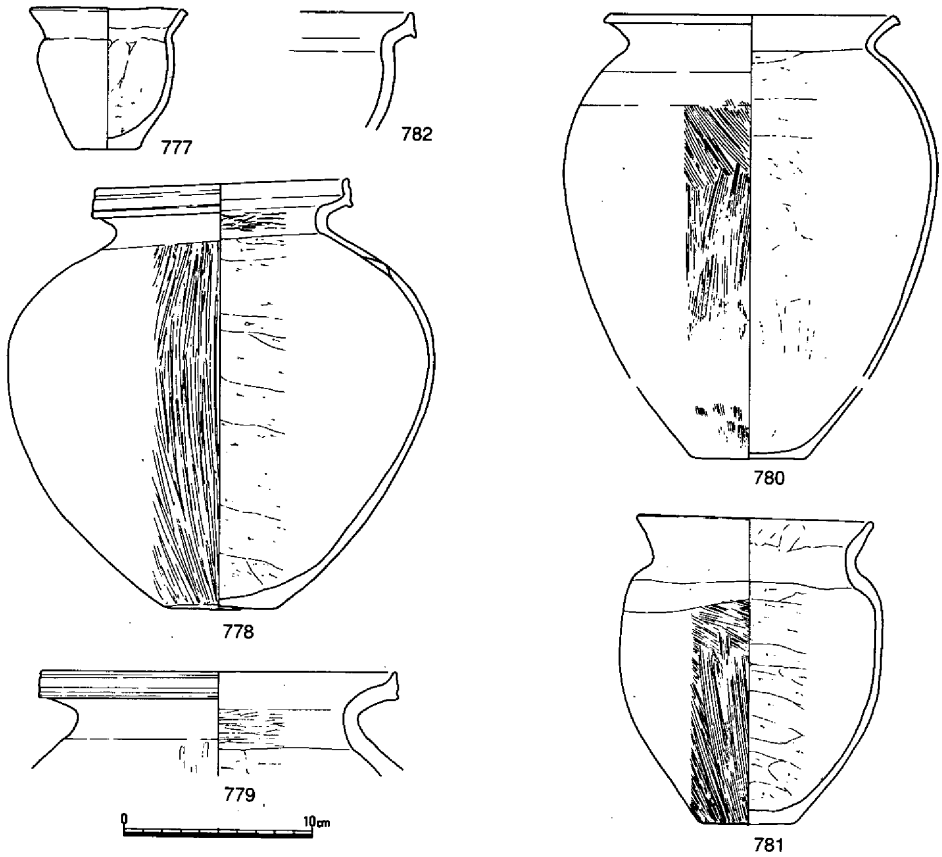


第207図　竪穴住居48小銅鐸埋納土壙（1/4）
・出土遺物（1/2）

鐸身は無紋で鰭はなく、断面は円形に近い。鐸身Ａ面右下方およびＢ面上半に大きな欠損部分が、また、Ｂ面下方には小孔が認められるが、これらはいずれも欠損端部が丸味をもつもので、湯まわりが悪かったためと観察される。鐸身の型持せは現状ではＡ面左上方に長方形の孔が１か所明瞭に残されるのみであった。しかしながら内面観察の結果、Ａ面右上方には湯がまわっているものの左同様の型持せ痕跡が認められ、Ｂ面ともに中型には４か所に型持せが作られていたものと考えられる。また、舞においても表面からは小円形の型持せが２か所あるかのように観察されたが、図にみられるように内面には約１×0.5cmの長方形の型持せ痕跡が認められ、本来、鈕に直交するように長方形に型持せ孔１か所をあけようと意図したものの、湯がまわったため２個の円孔を残したものと考えられる。さらに型持せ孔に湯がまわった原因は実測図から明らかなように、Ａ・Ｂ面は上下左右に僅かにずれており、鋳造時に外型が正確に組み合ってなかったために生じたものと理解される。なお、Ｂ面鐸身上方および中央付近に打圧痕が認められる。

土器はＰ１から777・778、Ｐ２から779・780・782、Ｐ３から781が出土した。特にＰ１の壺はその一部が柱根部分にかかる位置から、また、Ｐ３の甕は柱根部分から出土しており、これらは住居廃棄時に意識的に埋められたものと判断される。

壺778は口縁端の一部が欠損するもののほぼ完形である。口縁部は鋭く外反し、端部は僅かに内傾して立ち上がる拡張部をもつ。拡張面には浅い２条の凹線が施され、端部は丸く収めて



第208図　竪穴住居48出土遺物（1/4）

いる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部内面はヘラミガキ、胴部外面はハケ調整の後ヘラミガキ、胴部内面はヘラケズリしている。なお、胴部上半には焼成後の小孔が穿たれている。また、壺779は口縁端部を上方に肥厚させたもので、端面には前述同様の仕上げがなされている。甕780は柱穴中位から斜めに破砕された状態で出土したもので、「く」字状に外反する口縁に端部は僅かに肥厚し、面をもつ。胴部外面ハケ調整、内面ヘラケズリを施す。甕781は完形である。全体的にみてやや稚拙な作りの印象を与えるもので、口縁部は斜め外方に立ち上がり、端部は丸く納めている。口縁部内外面はヨコナデをほどこすものの内面には押圧根が一部残る。胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリされている。小型鉢777は胴部外面の一部が剥落した手捏土器で、大型鉢782は口縁端部が上下に僅かに拡張し拡張面には凹線状のヨコナデで仕上げられている。

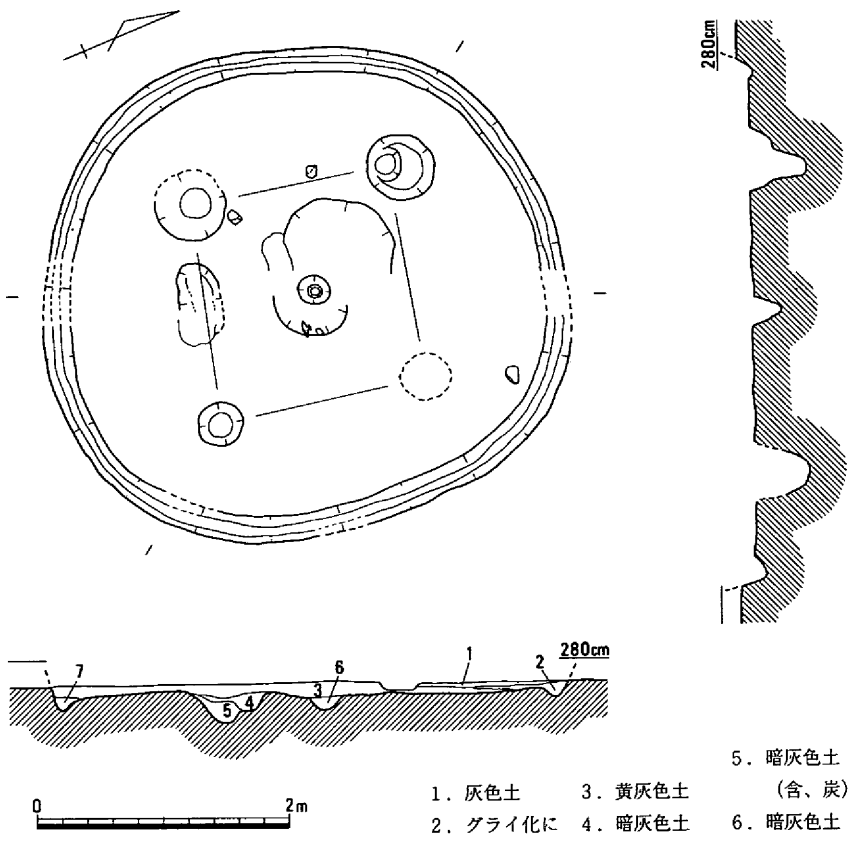
以上、当住居は遺物出土の在り方および遺構の切り合い関係から、オノ町Ⅰ併行期に建てられ、廃絶されたものと考えられる。（江見）

竪穴住居49（第155・209図、写真図版120）

６Ｂ区中央部において後述の竪穴住居50と切り合った状態で、海抜2.65ｍで検出された。住居は、平面不整円形を呈し、長軸長4.15ｍ、幅3.90ｍ、検出面から床面までの深さ約５～10㎝を測る遺存状況を示すものであった。

床面からは、柱穴、壁体溝、中央穴等が検出された。ただし、柱穴は４本が確認されたが東側の柱穴は湧水のため掘り下げ不可能であった。また、中央部分での中央穴および被熱面等の明確な状態での存在は検出できなかった。なお、南側に検出された２本の柱穴間に位置する長楕円形の土壙は、この住居の一施設と考えられ、古墳時代初頭段階の住居に見られるものと同様の在り方を示すものである。

時期については、床面および覆土中から土器の出土が確認されなかったことで判然としないが、住居形態および周辺に所在する他の住居との関係等により、ここでは住居の時期を弥生時代後期後半の範疇で理解しておきたい。

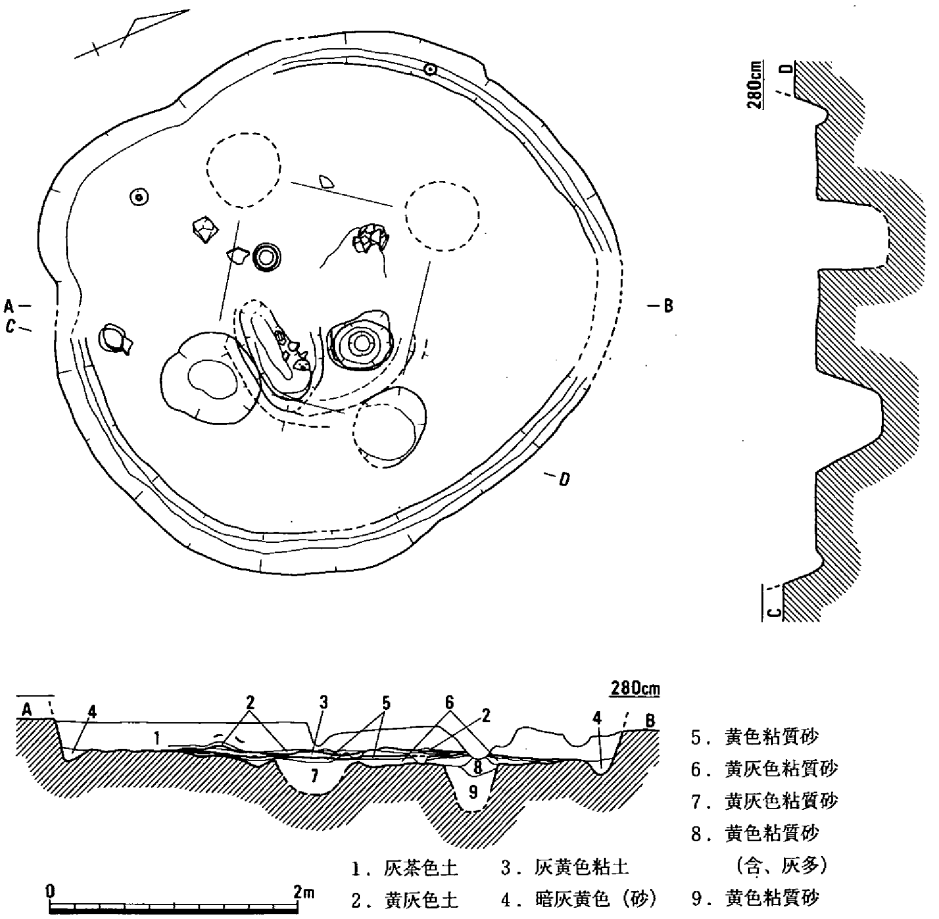


第209図　竪穴住居49（1/60）

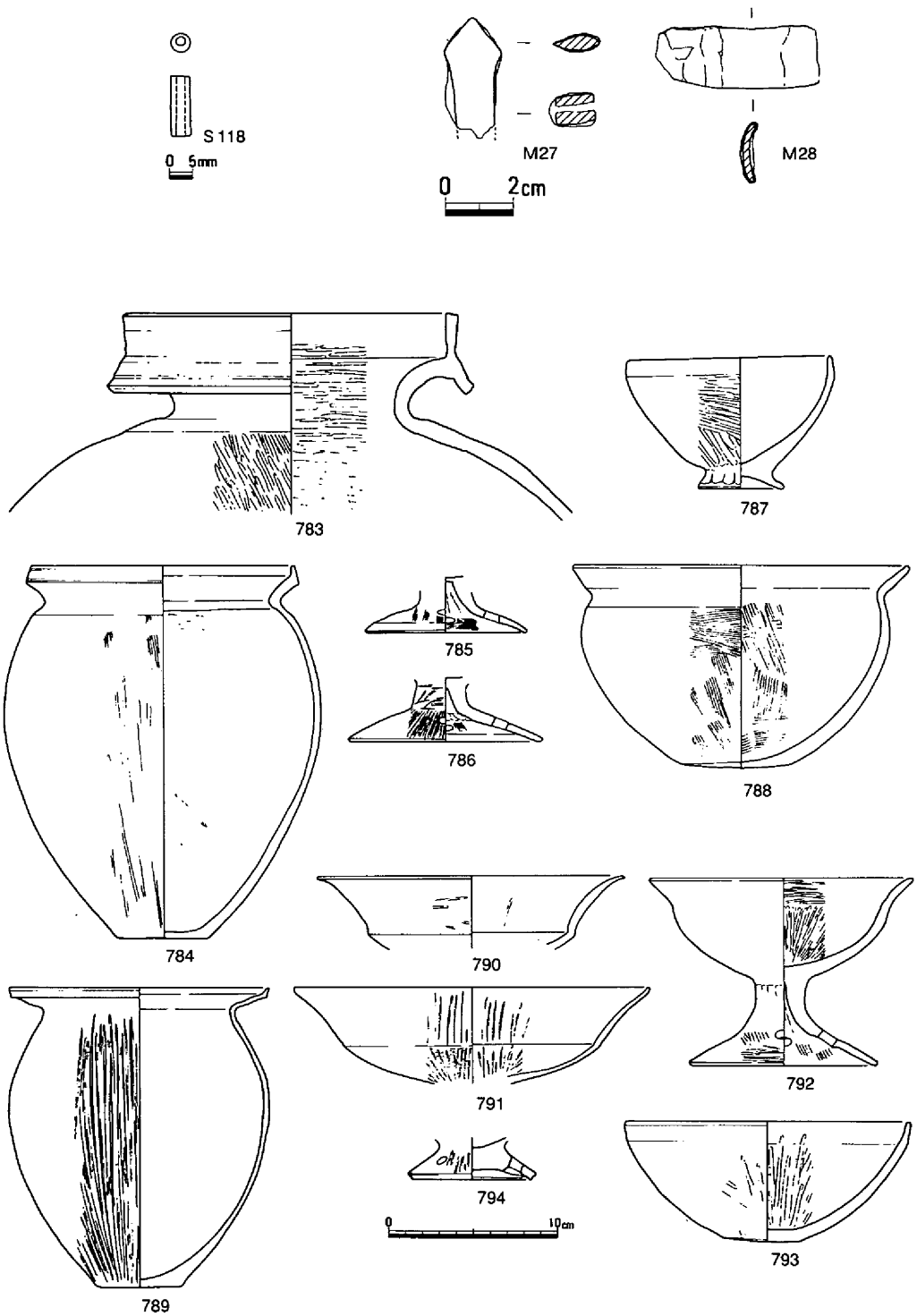
竪穴住居50（第155・210・211図、写真図版120）

６Ｂ区の中央部において竪穴住居49の下層において所在が確認された。住居は、竪穴住居49に北東側覆土の約１／２が切られた状態で、海抜2.60ｍで南西側に一部半円形の張出しを有し、全体的に不定楕円形を呈する住居として検出された。床面からは、柱穴とその中央部には粘土による貼床の存在が複数認められた。ただし、これは中央部においてのみ見られることで住居の拡張・建増し等を示すものではないと考える。また、床面上には粘土帯を土手状に巡らした部分が遺存しており、中央穴に付随して有ったものであろう。柱穴は、北側２本が湧水等により検出不可能であったが南側の２本の在り方から本来４本であったことが推測される。

出土遺物には、床面に遺存した土器の他に碧玉製管玉１点、鉄器２点等が検出された。土器は、壺、甕等口縁部を上方に若干拡張させ、高杯は脚部短脚化傾向を示すもので、時期的にはおおむね弥生時代後期後半に位置づけられよう。　（島崎）



第210図　竪穴住居50（1/60）



第211図　竪穴住居50出土遺物（2/3・1/2・1/4）

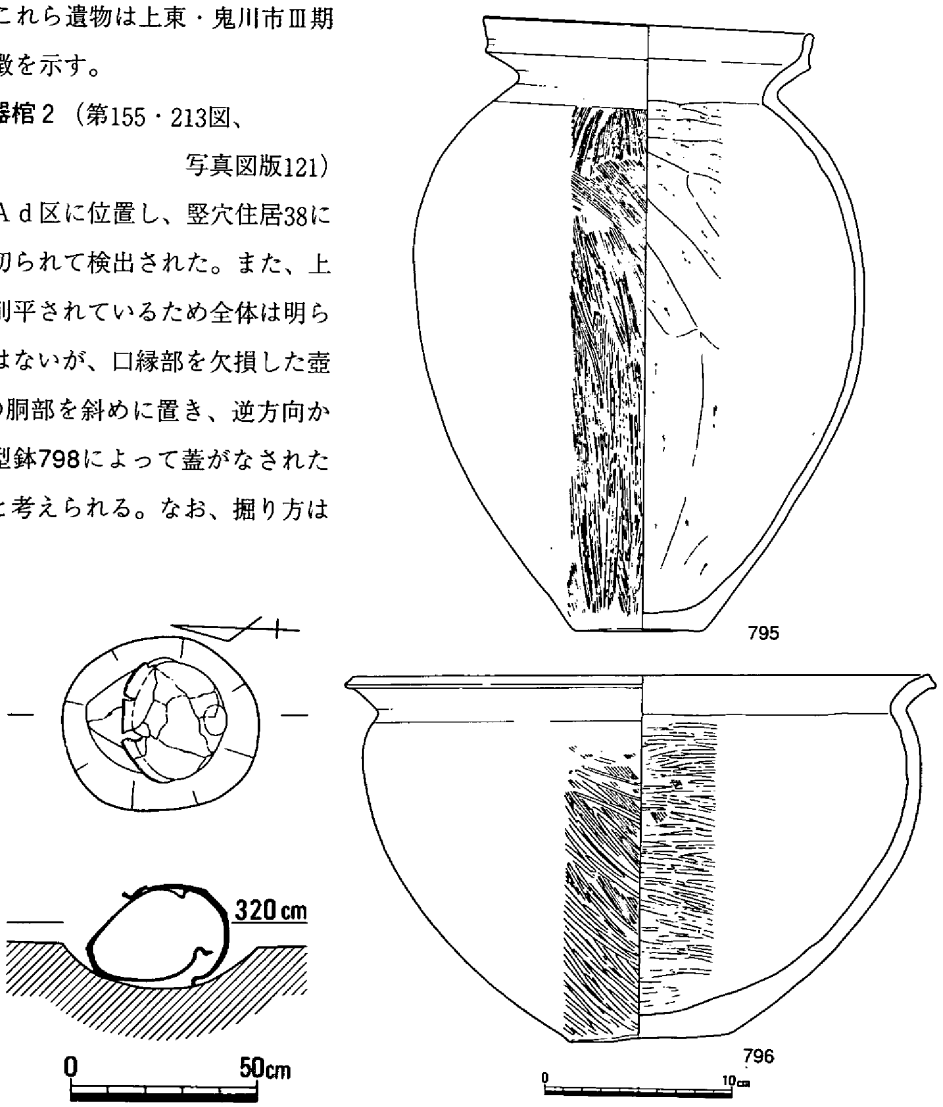
(2)　土器棺

土器棺１（第155・212図、写真図版121・147）

３Ｂａ区の南東に位置する。甕795を横位にするとともに口を南に向け、南からやはり横位に向けた大型鉢796によって蓋をされた状態で検出された。甕の中には下半に暗灰褐色土が溜まっていたが、遺物は確認されなかった。掘り方は検出面での径53×45cm、深さ約10cmを残し、土器との間は暗褐色粘質土が堆積していた。795の口縁部は上方に拡張しヨコナデされ、胴部は最大径に対し、器高がやや長く、直線的に下半がすぼまる。796は口縁端部が僅かに凹む。内外面ハケ調整の後ヘラケズリを施す。これら遺物は上東・鬼川市Ⅲ期の特徴を示す。

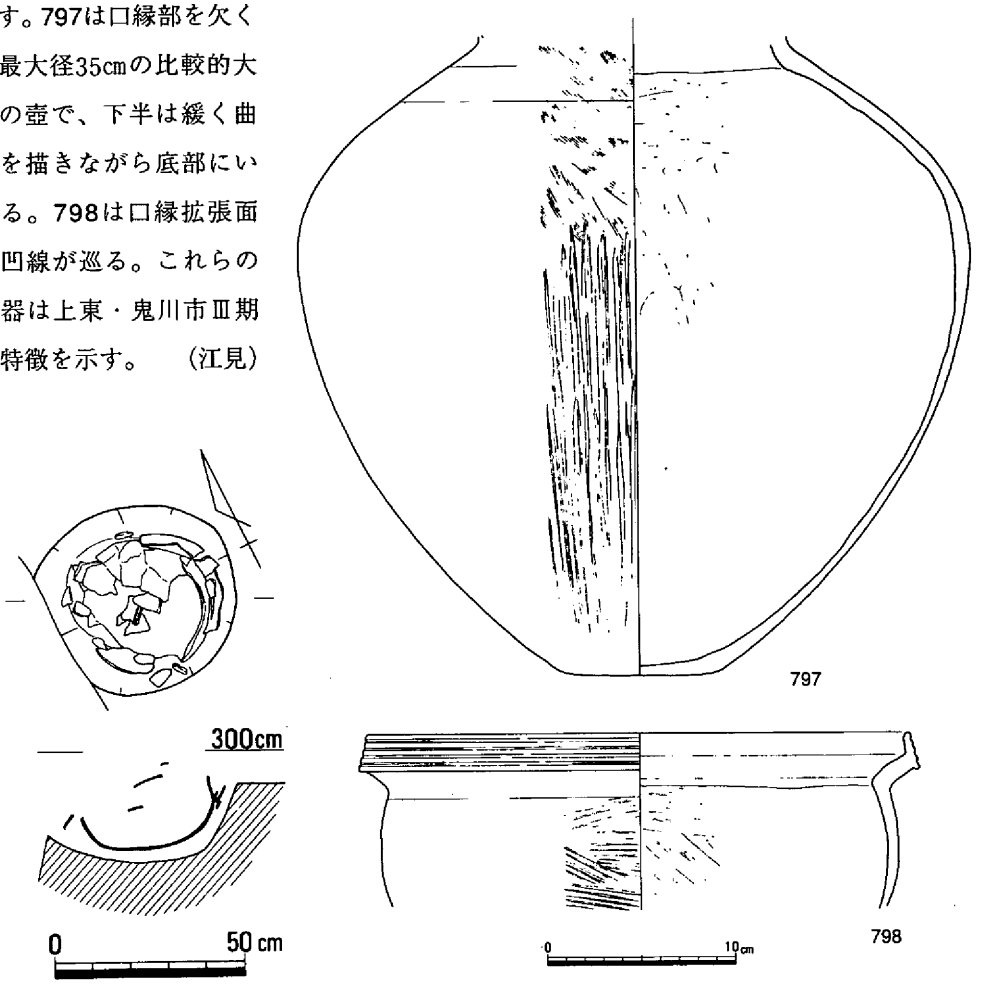
土器棺２（第155・213図、写真図版121）

４Ａｄ区に位置し、竪穴住居38に一部切られて検出された。また、上部を削平されているため全体は明らかではないが、口縁部を欠損した壺797の胴部を斜めに置き、逆方向から大型鉢798によって蓋がなされたものと考えられる。なお、掘り方は



第212図　土器棺１（1/20）・出土遺物（1/4）

径約50cm、深さ約20cmを残す。797は口縁部を欠くが最大径35cmの比較的大型の壺で、下半は緩く曲線を描きながら底部にいたる。798は口縁拡張面に凹線が巡る。これらの土器は上東・鬼川市Ⅲ期の特徴を示す。　（江見）



第213図　土器棺２（1/20）・出土遺物（1/4）

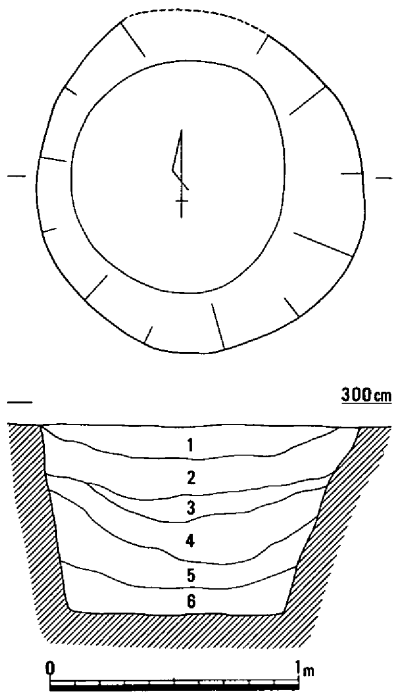
(3)　土壙

土壙56（第155・214図）

調査区北端近くの１Ｂｂ区において海抜約2.90ｍで検出された。平面は、長軸長1.35ｍ、幅1.28ｍ、検出面からの深さ約75cm円形を測り、おおむね円形を呈する。断面は、肩部から壙底に向けて斜傾するもので、逆台形を呈する。

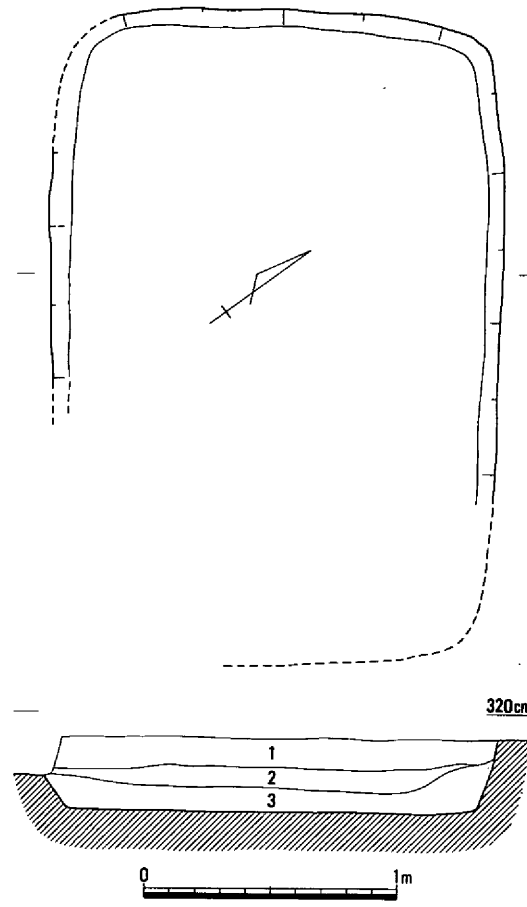
壙内への土砂の埋積は、最下層の第６層が粘質土のみで、他の第１～５層までは砂質土による断面レンズ状の堆積を見せるものであった。

時期は、出土遺物としての土器の存在が確認されなかったことで明確ではないが、周辺に所在する他の遺構との関係等から、おおむね弥生時代後期後半に比定されよう。



1．灰茶色砂質土　　4．茶灰色砂質土
2．茶灰色砂質土　　5．淡茶灰色砂質土
3．灰色砂質土　　6．灰茶色粘質土

第214図　土壙56（1/30）



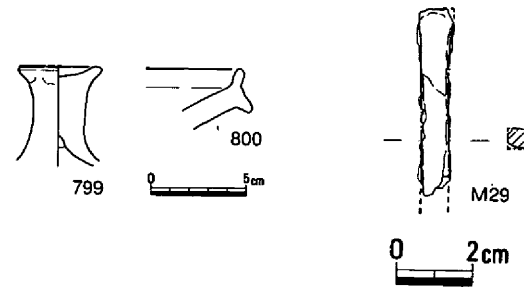
1．黄灰色土　　2．黄褐色土　　3．茶褐色土

土壙57（第155・215図）

１Ｂｂ区において南側が側溝および古墳時代の竪穴住居53によって切られていたことで規模等明確でないが、幅1.80ｍで長軸長およそ2.50ｍ以上を想定させ、検出面からの深さは30cmを測る断面逆台形を呈するものであった。

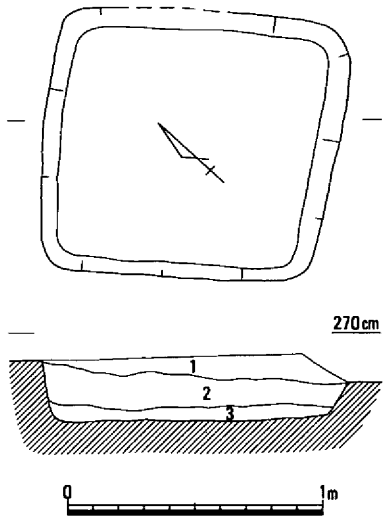
壙内への土砂の堆積は、褐色系統の土でなされており、３分層された。

壙内からは壺800と蓋799の土器の小片と鉄器が出土したにすぎない。



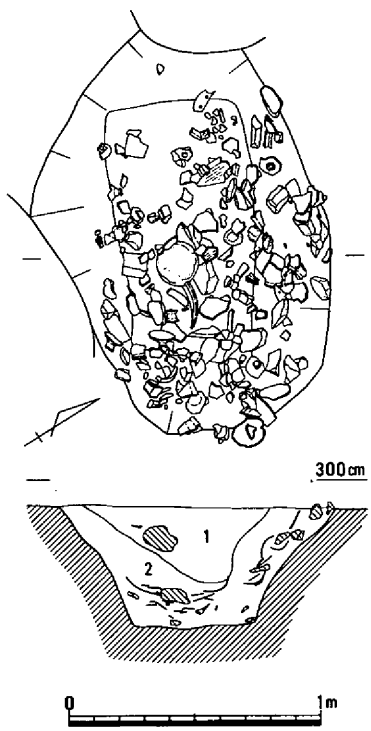
第215図　土壙57（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

時期的には、土器が小片で判然としないが、おおむね後期後半へ位置づけて差支えないもの



1．黄灰色土　　（含、砂粒）
2．黄色土　　3．明黄色土

第216図　土壙58（1/30）



1．暗灰色土　　2．灰黄色土（含、炭）
（含、炭・少量の
黄色粘土塊）

第217図　土壙59（1/30）

と考える。

土壙58（第155・216図）

２Ｂａ区で古墳時代前半の竪穴住居51・54の下層、床面除去後の海抜2.60mにおいて検出された土壙である。

平面方形を呈し、長軸長1.17m、短軸長1.07m、検出面からの深さ27cmを測った。

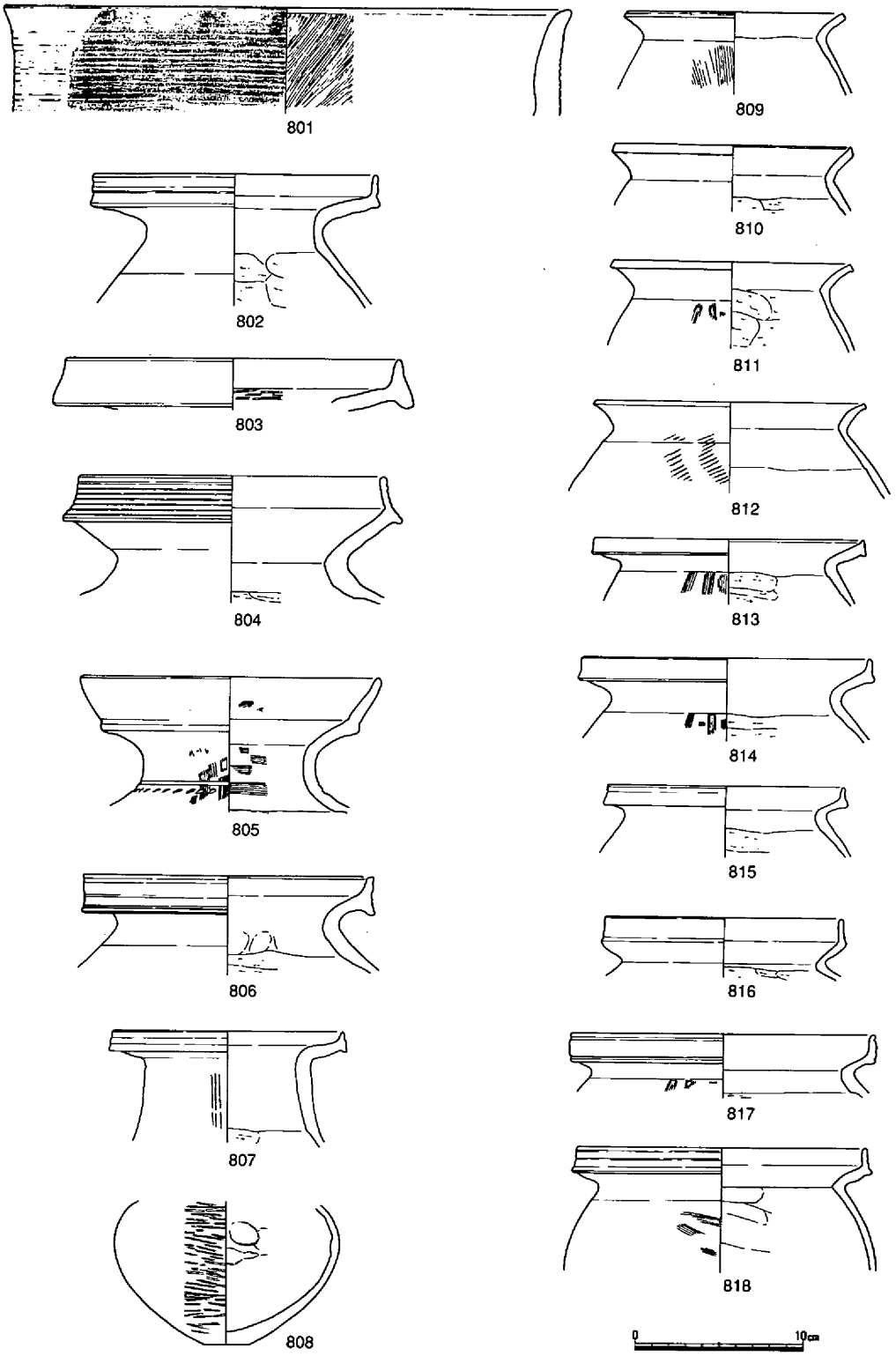
出土遺物は、床面および埋積土中のいずれからも検出されなかった。したがって、時期についての詳細は不明である。しかし、遺構の切合い関係および埋積土の状況等から推測して、およそ弥生時代後期後半への位置づけがなされよう。

土壙59（第155・217～219図、写真図版122）

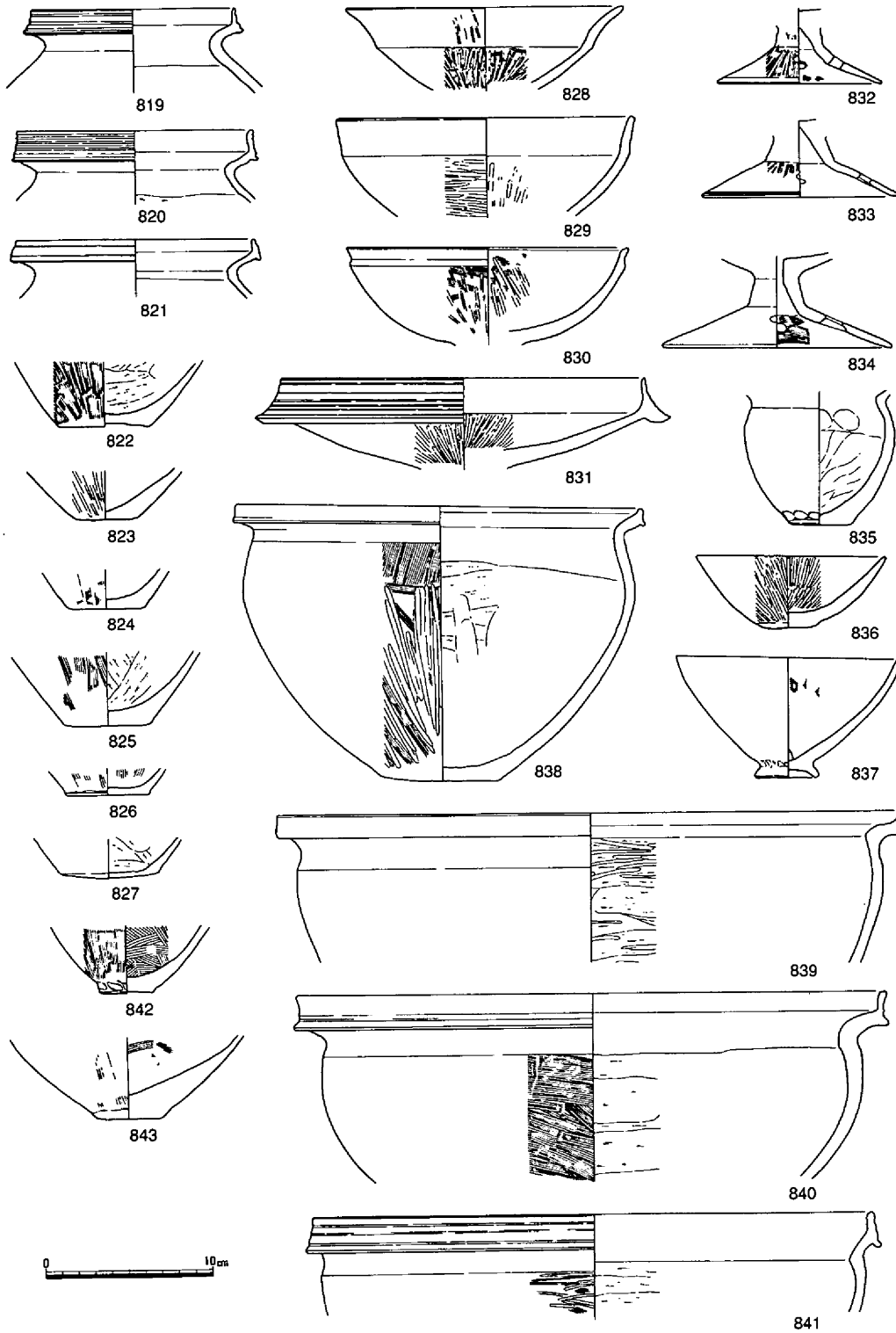
２Ｂａ区において周辺を古墳時代前半の竪穴住居52・53・54の３軒に挟まれ、一部が切られた状態で検出された。したがって、土壙の平面形態としては明瞭でなく、検出面では長軸長1.60m、幅1.15mを測る、不定形な長楕円形を呈するものであった。しかし、埋積土除去後の壙底の状況は、長軸1.90m、幅95cmを測る長方形を示したことで、本来は長方形にあったことが推測された。

土壙は、両面とも斜傾する面を有するもので、断面逆台形を呈する。壙内からは、小片ながら数多くの土器の出土が確認されたが、いずれも本来の状態にあったとは考えられず、土壙の埋没の過程で流入したものと推測された。当初平面および断面等の状況から土壙墓としての可能性も考えられたが結果判然としなかった。

土器には、壺、甕、高杯、鉢等の器種が確認されたが、この中には後期の範疇にあっても新旧の土器が混在した状況にあり、本来土壙の時期を示す土器は僅少である。およそ才ノ町Ⅰ段階に比定



第218図　土壙59出土遺物①（1/4）



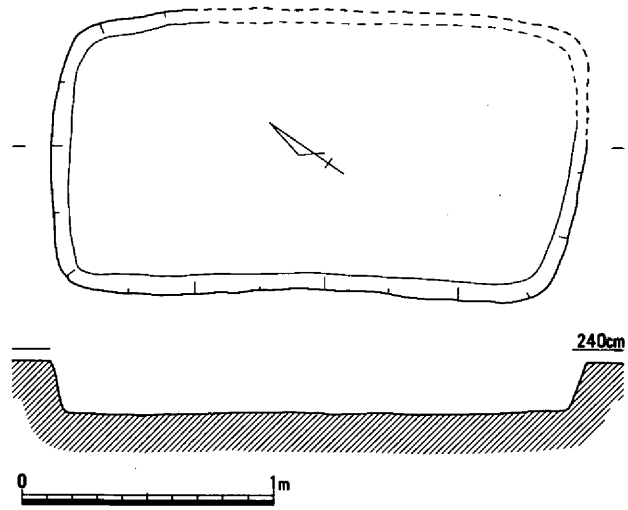
第219図　土壙59出土遺物②（1/4）

される。

土壙60（第155・220図）

２Ｂａ区で土壙145と切り合った状態で検出された。長軸長2.10ｍ、幅1.10ｍを測る平面長方形を呈する土壙である。検出面から壙底までの深さは、約20㎝と浅い。

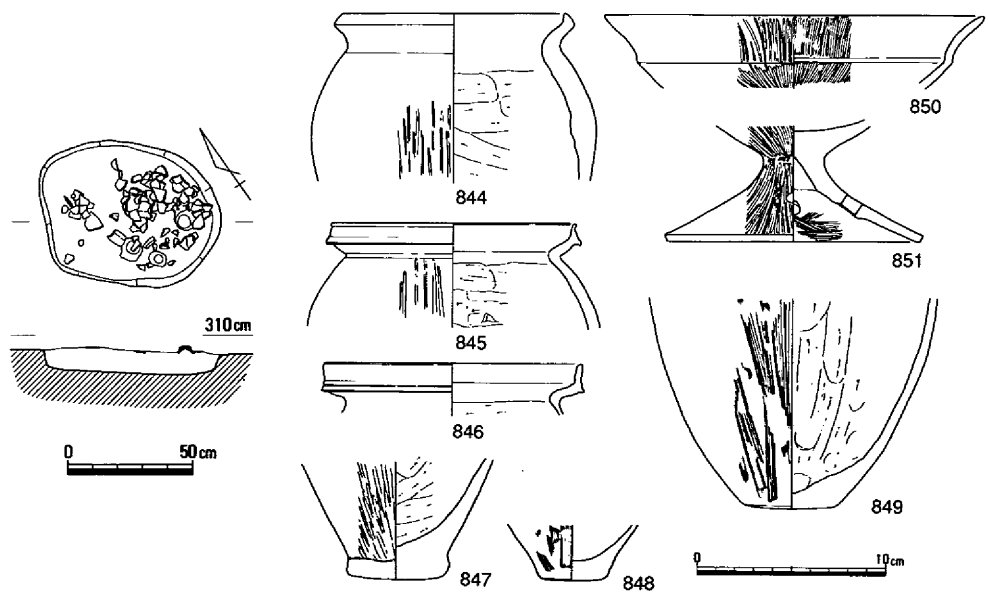
時期については、遺物が出土しなかったことで詳細については明確ではないが、周辺の遺構との状況から、およそ後期後半に位置づけられよう。



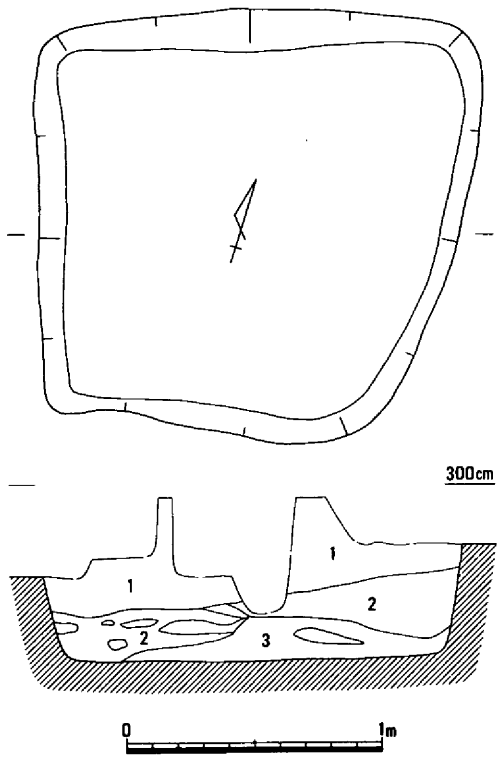
第220図　土壙60（1/30）

土壙61（第155・221図）

２Ｂａ区において竪穴住居30の西約１ｍの地点に所在が確認された。平面不整円形を呈した土壙で、検出面からの深さ約10㎝と浅いが、小片ながら多くの土器の存在が認められた。器種としては、甕、高杯が見られた。時期的には、甕の口縁部が上方への拡張を長く見せることでおよそ上東・鬼川市Ⅲ併行と推測され、後期後半へ位置づけられよう。　（島崎）



第221図　土壙61（1/30）・出土遺物（1/4）



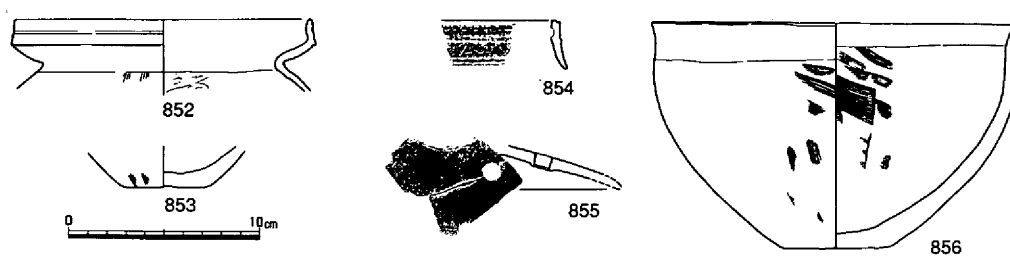
1．茶灰色粘質砂
（含、黄色粘土塊多）
2．暗茶灰色粘質砂
（混、炭・黄色粘土小塊）
3．黄色粘質土
（混、暗茶灰色粘質砂）

土壙62（第155・222図、写真図版122）

２Ｂｂ区の北西に位置し、上部を竪穴住居30・56などに切られて検出された、平面台形を呈す土壙である。土壙の壁は急で、底部は平坦な面をもつ。規模は長さ1.72m、幅1.65m、深さ46cm、床面積1.95㎡を測る。埋土にはいずれの層にも粘質土などの塊が混入しており、人為的に埋め戻された状況を示していた。

出土した遺物はいずれも破片で、埋土とともに廃棄されたものと考えられる。甕852は口縁端が上方に拡張し、拡張面は凹線状のヨコナデを施す。高杯854・855は高杯の口縁拡張面に上下２段に、また、脚端部にも細く浅い鋸歯紋がヘラガキされている。鉢856は短い雑な作りの口縁である。

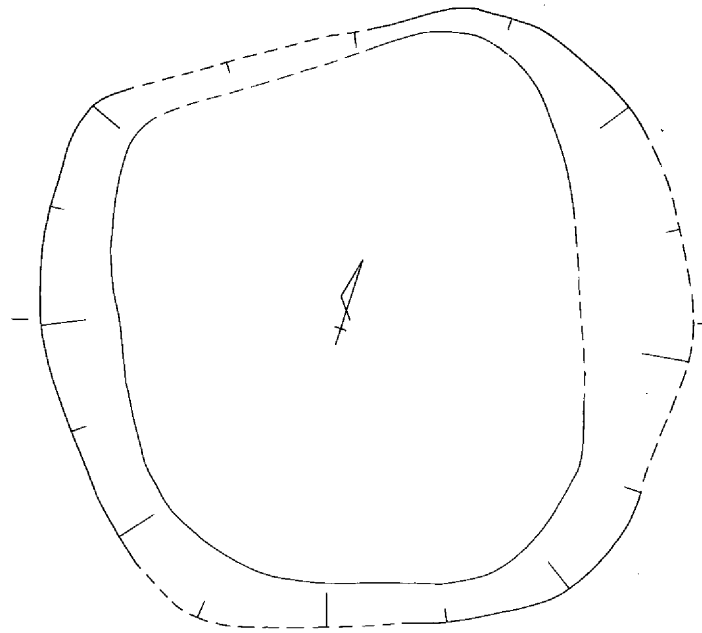
以上、これらの土器は上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰの特徴を示す。

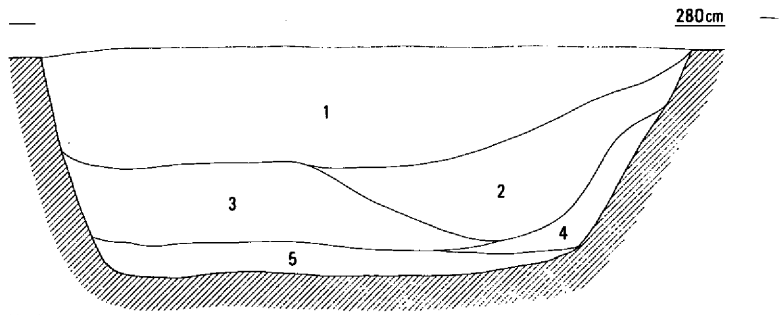


第222図　土壙62（1/30）・出土遺物（1/4）

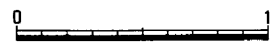
土壙63（第155・223図）

２Ｂｂ区南東に位置し、竪穴住居31・32を切って検出された、平面不整方形を呈す、比較的規模の大きな土壙で、長さ約2.6m、幅約2.3m、深さ90cm、床面積3.42㎡を測る。土壙は東西壁がやや緩く下がっているのに対し、南北壁は急であった。また、埋土の状況は下層の第４・５層が自然堆積を示すのに対し、上層にはいずれも土塊が混入していることから、土壙廃棄の

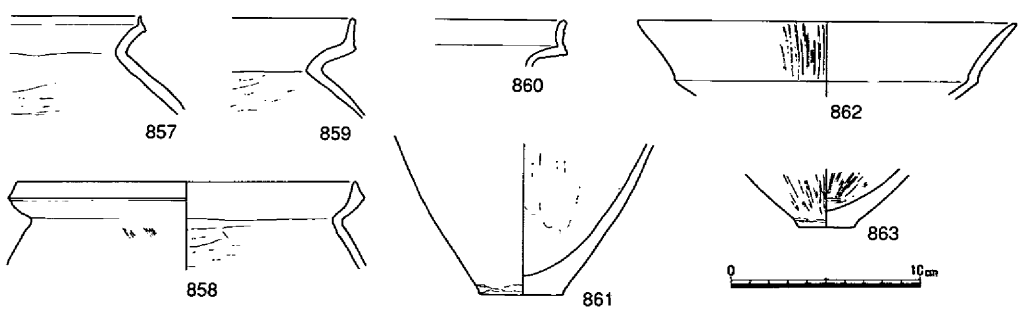




1．暗灰色粘質土
（混、黄色粘土塊）
2．黄色粘質土
（混、暗灰色粘土塊）



3．褐灰色粘質土
（混、黄色粘土塊）
4．褐灰色粘質土
5．暗灰色粘質土



第223図　土壙63（1/30）・出土遺物（1/4）

後、時間をおいて埋め戻されたと推定される。

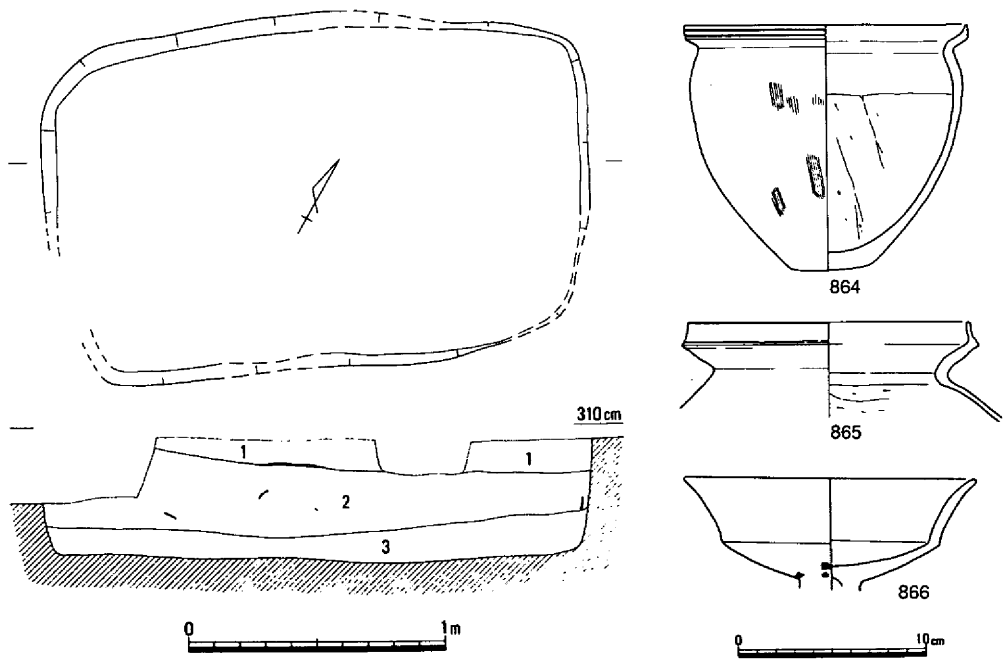
遺物はいずれも破片で、やや古い様相を呈す甕857・858・861などが混入するものの、甕859・860や高杯862、鉢863などはオノ町併行期のものと考えられる。

土壙64（第155・224図）

２Ｂｄ区北西に位置する平面長方形を呈す土壙である。壁は垂直に近く急な傾斜をもち、底部は平坦である。規模は長さ2.1m、幅1.4m、深さ約50cm、床面積2.5㎡を測る。埋土はほぼ水平堆積を示し、第１・２層間には炭層が認められた。埋土の状況は第２層下に土塊が混入しており、人為的に土器片とともに埋め戻されたものと考えられる。鉢864の口縁端部には凹線状の条線を残し、甕865のそれはヨコナデを施す。これら土器の特徴は上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰ併行期に収まるものと考えられる。

土壙65（第155・225図）

２Ｂｂ区、土壙64の南東に位置する、長軸が南北方向に長い平面長方形を呈す土壙である。長さ約1.4m、幅約１m、深さ約50cm、床面積約１㎡を測る小規模なものである。埋土は上述土壙と同様の堆積状況を示しており、僅かに出土した土器細片からも後期後半の中に収まるものと考えられる。



1．茶褐色砂質土　2．茶灰色粘質土（含、黄色粘土小塊多）　3．黄灰色粘質土（含、黄色粘土塊多）

第224図　土壙64（1/30）・出土遺物（1/4）

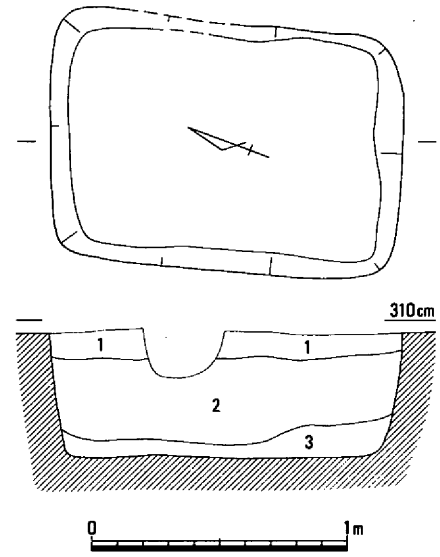
土壙66（第155・226図）

２Ｂｂ区、土壙65の東に位置し竪穴住居32を切って検出された。東西方向に長軸を向ける平面不整長方形を呈す土壙である。壁はほぼ垂直に下がり、底部は平坦な面をなす。長さ約2.7m、幅約1.7m、深さ約40cm、床面積3.5㎡を測る大型のものである。埋土は上記土壙と同様の堆積状況を示す。遺物は鉄鏃M30の他、僅かながら土器細片が出土した。高杯868はやや古い様相を示すものの、当土壙は上東・オノ町Ⅰ併行期には廃棄されたものと考えられる。

（江見）

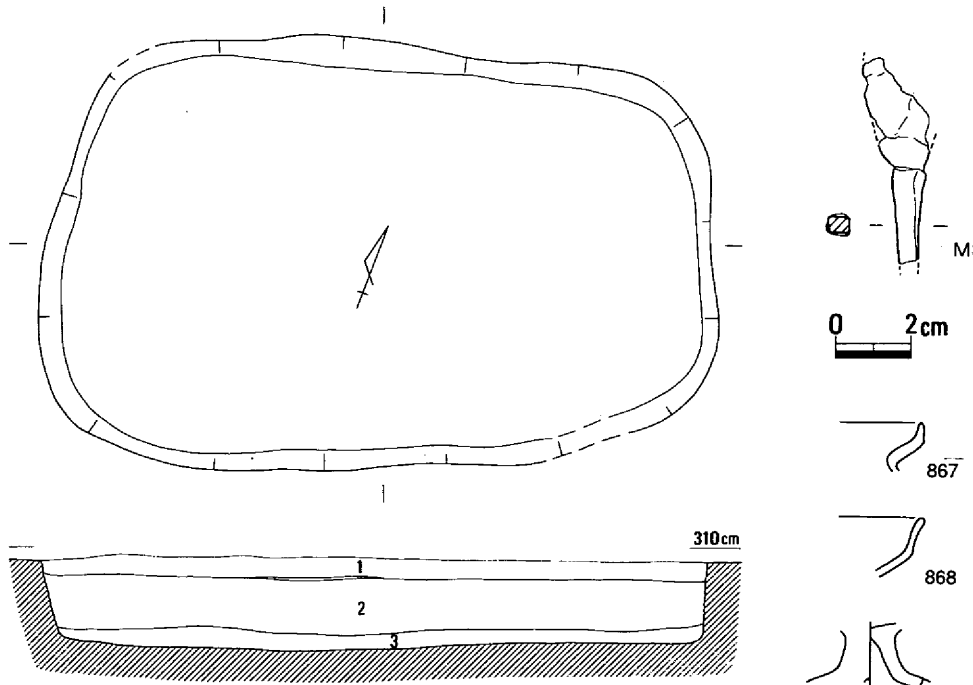
土壙67（第155・227図）

２Ｂｂ区で検出された平面規模南北70cm×東西62cmを測る小規模土壙である。壙内上層第



1．茶褐色砂質土
2．茶灰色粘質土
（含、黄色粘土小塊多）
3．黄灰色粘質土
（含、黄色粘土小塊多）

第225図　土壙65（1/30）



1．茶褐色砂質土
2．茶灰色粘質土
（含、黄色粘土小塊多）
3．黄灰色粘質土
（含、黄色粘土小塊多）

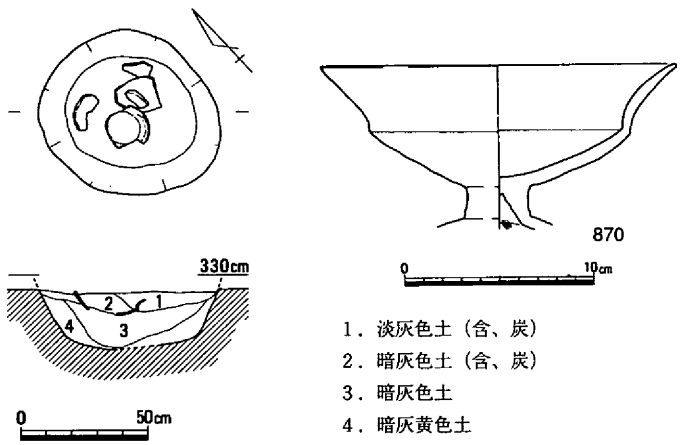
第226図　土壙66（1/30）・出土遺物（1/2・1/4）

1・2層には、炭の包含層と土器の遺存を認めた。ただし、下層の第3・4層には土器および炭の包含層は認めない。出土した高杯は、短脚で口縁部をやや長く外反するもので、型式的には上東・鬼川市Ⅲ併行と考える。時期は、後期後半に比定されよう。（島崎）

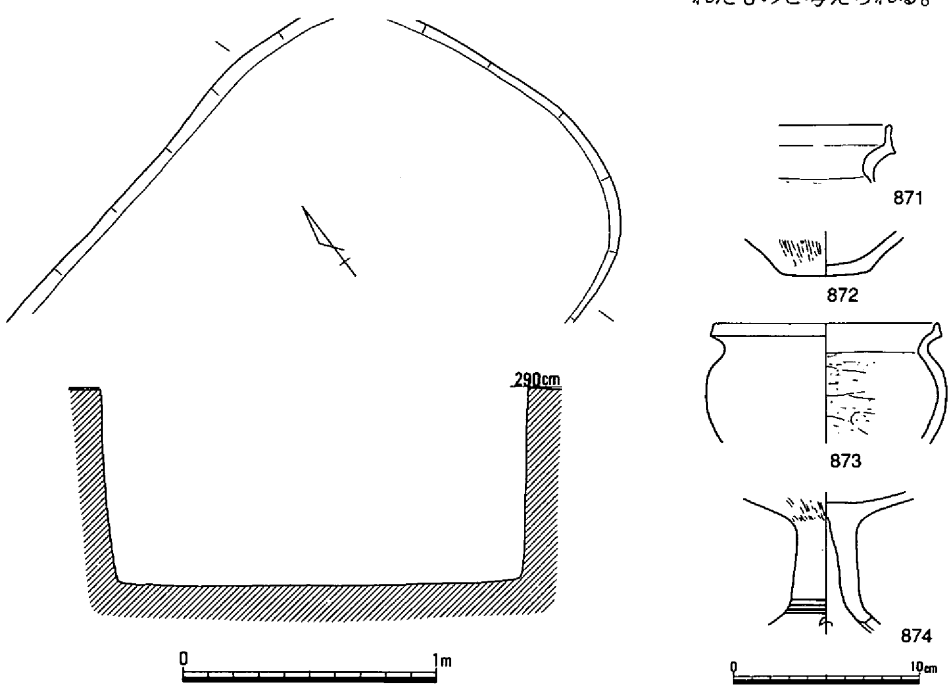
土壙68（第155・228図）

2Bd区の南東に位置し、土壙西半は調査区外に延びる。平面長方形を呈し、幅1.7m、深さ75cmを測る。壁はほぼ垂直に下がり、底部は平坦である。埋土には土器片とともに土塊および炭・焼土粒が含まれていた。

土器はいずれも細片であったが、甕871が出土したことから、当土壙は上東・鬼川市Ⅲ併行期には廃棄されたものと考えられる。



第227図　土壙67（1/30）・出土遺物（1/4）



第228図　土壙68（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙69（第155・229図）

３Ｂｃ区、土壙67の東に位置する平面長方形を呈す土壙で、長軸は南北方向を向く。長さ1.5m、幅約１m、深さ約50cm、床面積1.06㎡を測る。上記土壙と同様、壁はほぼ垂直に下がり、平坦な底部をなす。埋土においても、中層には土塊が混入するものであった。

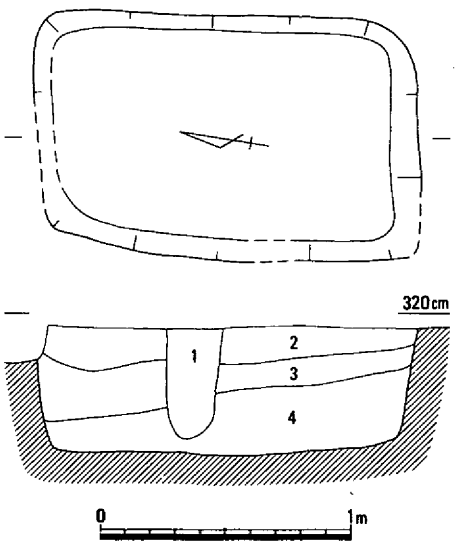
遺物は器台877や大型鉢878など古い様相を呈す破片もみられるが、水漉粘土で作られた高杯876が出土しており、当土壙は後期後半には廃棄されたものと思われる。

土壙70（第155・230図）

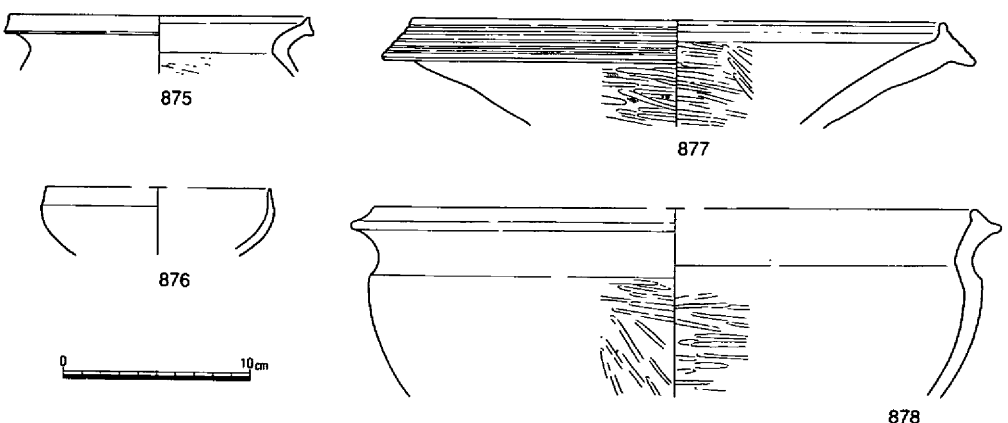
３Ａｃ区の南東に位置し、竪穴住居35を切って検出された平面長方形の土壙である。長軸は東西に向き、長さ約1.4m、幅約1.2m、深さ50cm、床面積0.97㎡を測る。壁の傾斜は急で、底部は平坦な面をなす。埋土は中位で炭・焼土を多く含むものであった。遺物はいずれも土器細片で、直口壺879や蓋882などが出土しており、これらの土器は上東・鬼川市Ⅲ期の特徴を示す。

土壙71（第155・231図）

３Ａｂ区に位置し、竪穴住居34を切って検出された平面長方形の大型の土壙である。長軸は東西方向に向き、長さ2.8m、幅約1.5m、深さ45cm、床面積2.1㎡を測る。土壙壁の傾斜は上記土壙に比べやや傾斜が緩いが、底部

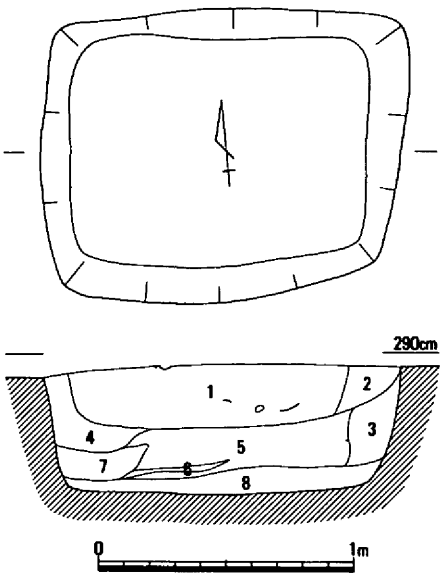


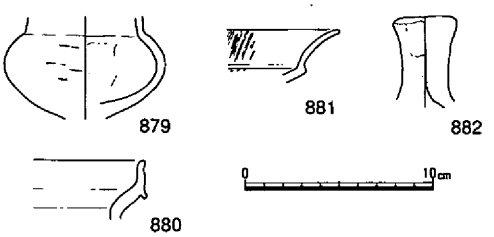
1．暗灰色粘質土（中世pit）
2．茶褐色粘質土
3．茶灰色粘質土（含、黄色塊）
4．暗茶灰色粘質土



第229図　土壙69（1/30）・出土遺物（1/4）

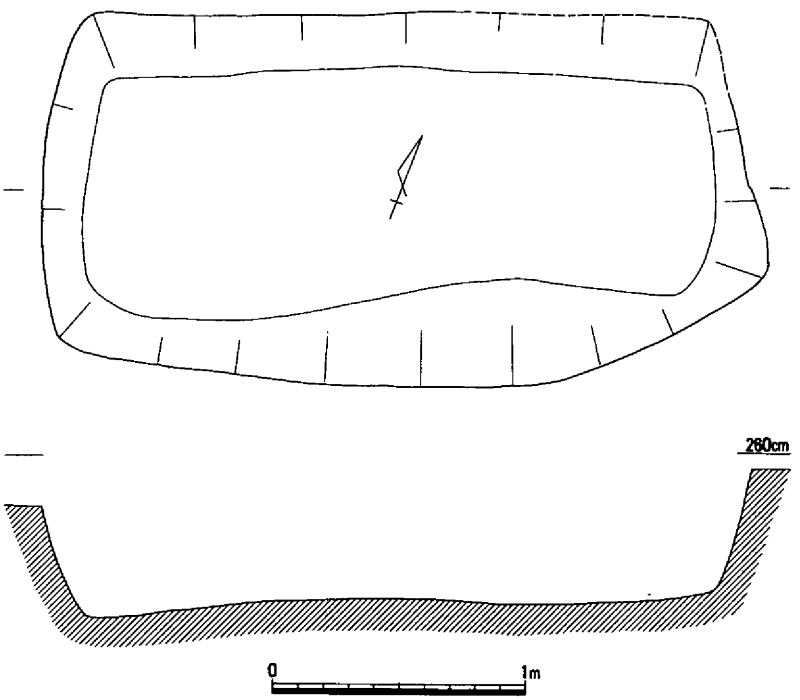
はほぼ平坦で、埋土に土塊が含まれる。遺物は弥生時代後期後半と思われる土器細片が数片出土するにとどまった。　（江見）





1．暗褐色砂質土（含、炭）
2．暗褐色砂質土
3．暗黄褐色砂質土
4．暗灰褐色土（含、炭・焼土多く）
5．暗黄褐色砂質土（含、炭・焼土）
6．炭層
7．焼土層
8．暗黄色砂質土

第230図　土壙70（1/30）・出土遺物（1/4）



第231図　土壙71（1/30）

土壙72（第155・232～254図、写真図版123・148～156）

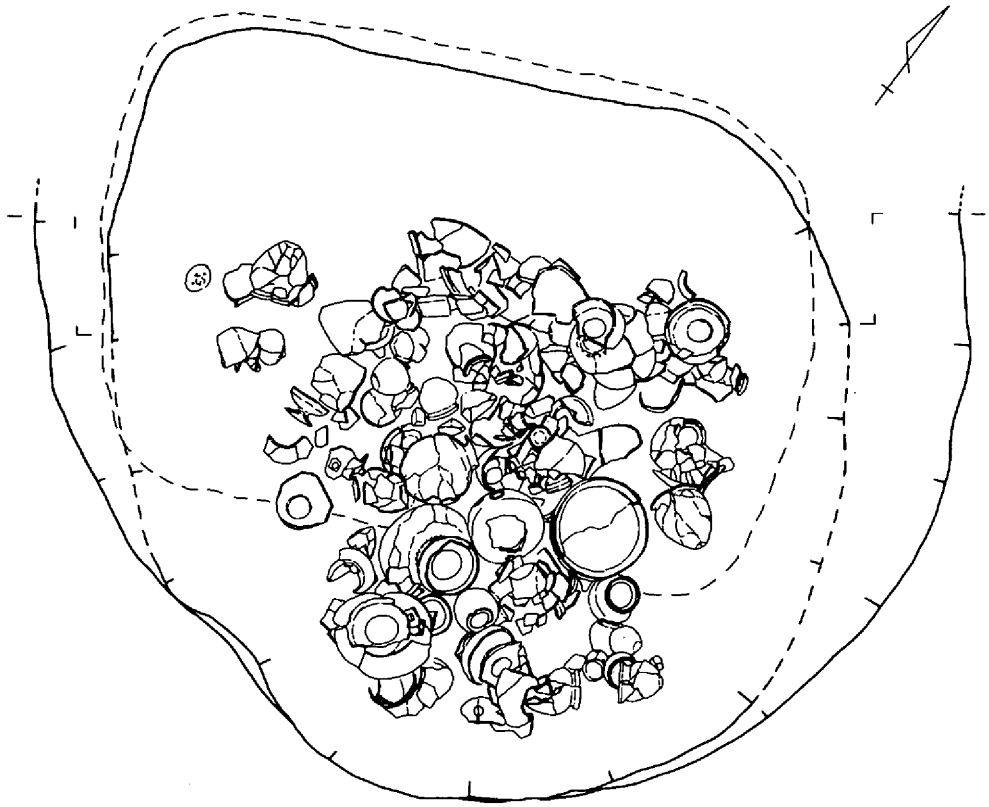
３Ｂａ区において竪穴住居31の埋没後、これを切る状況で掘開された土壙で、覆土上層に数多くの土器を伴って検出された。平面的には、海抜3.15ｍでの遺構検出面では東西方向の長軸長3.50ｍ、南北方向で2.90ｍを測る不整円形を呈するものであった。しかし、埋積土除去後の状況は、検出面から壙底までの深さ約1.50ｍを測り、北側の壁は垂直もしくは逆斜傾を、南側は比較的緩やかな斜面を見せるものであったが、底面がほぼ長方形を呈していたことで、本来は長方形土壙であった可能性が示唆された。南側および東西方向の一部斜面は、壁の崩落によって形成されたものと考えられた。壙内での土砂の埋積状況は、最下層の第18層に炭を含んだ粘土層が堆積を見せるが、その上第11～17層までの間約80㎝は砂による埋積が認められた。それより上層は、それまでの水平堆積とは異なり断面皿状に堆積し、第１～４層までは多量の土器の包含と平面的にあたかも置かれているかの整然とした状況での検出がなされた。（島崎）

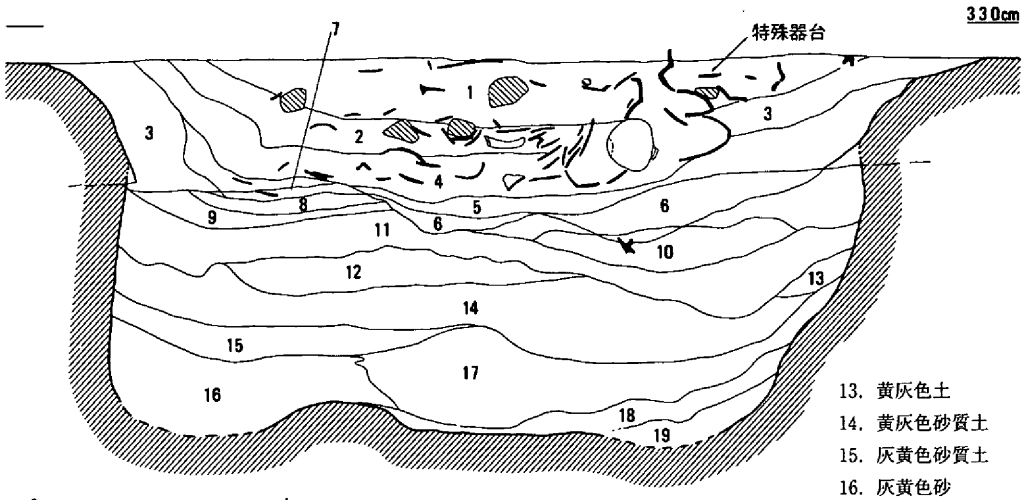
遺物は調査時点において横転・破損するものもみられたが、平面図からも明らかなように、本来完形の状態であっただろうと推測される土器が大半を占めており、また、壺892の胴部に１か所、889にも数か所に穿孔痕が認められるなど、下記する遺物の量と合わせ意識的に一括廃棄された状況を想起させるものであった。

遺物は特殊器台をはじめ、壺、甕、高杯、鉢、手焙形土器、製塩土器、ミニチュア土器など総数506個体分の土器が出土した。なお、壺、甕、鉢については底部、高杯については脚柱部、製塩土器については脚部の数から割り出したものであるため、個々の器種分類結果の数値とは一致しないことをあらかじめ断っておく。この結果、比率的には甕が215個体（約42％）と約半分近くを占め、高杯132個体（26％）、鉢75個体（約15％）の次に壺61個体（12％）が続く。

特殊器台883～885は土器溜りの範囲を検出作業中に出土したもので、886が断面の上部から出土したため、これら特殊器台片は当土壙上層に堆積したものと断定するに至った。883・884は口縁直下にあたる破片で、丹塗りされた上から上部に横方向に１条、2.5～３㎝の間隔で２条の縦方向の沈線が引かれ、その間を綾杉状の多条の沈線が施されている。885は筒部の間帯にあたり、幅約１㎝、高さ約５㎜を測る突帯は中央がやや凹む形状をなして貼り付けられており、下端は剝落している。間帯幅は約６㎝を測り、２㎜前後の条痕を残す板状工具により横方向の施紋がなされている。886は885と同様の間帯に文様帯が残されたもので、「Ｓ」字状の連続渦紋の端部と、それに向かう斜め方向に多条の沈線が引かれ、その結節点上部には逆３角形の透かし孔が穿たれている。また、渦紋上部は７㎜前後とやや広く、下部は狭い２条の線刻により画し、中には斜め方向の線刻よりなる。なお、下端には巴状と思われる透かしの一部が確認される。器壁はいずれも７㎜前後と薄く、裏面は横方向の丁寧なケズリが施されている。これらの土器はいずれも同一個体の破片と考えられるが、当土壙から東に約20ｍ離れた前述の竪

3．足守川矢部南向遺跡



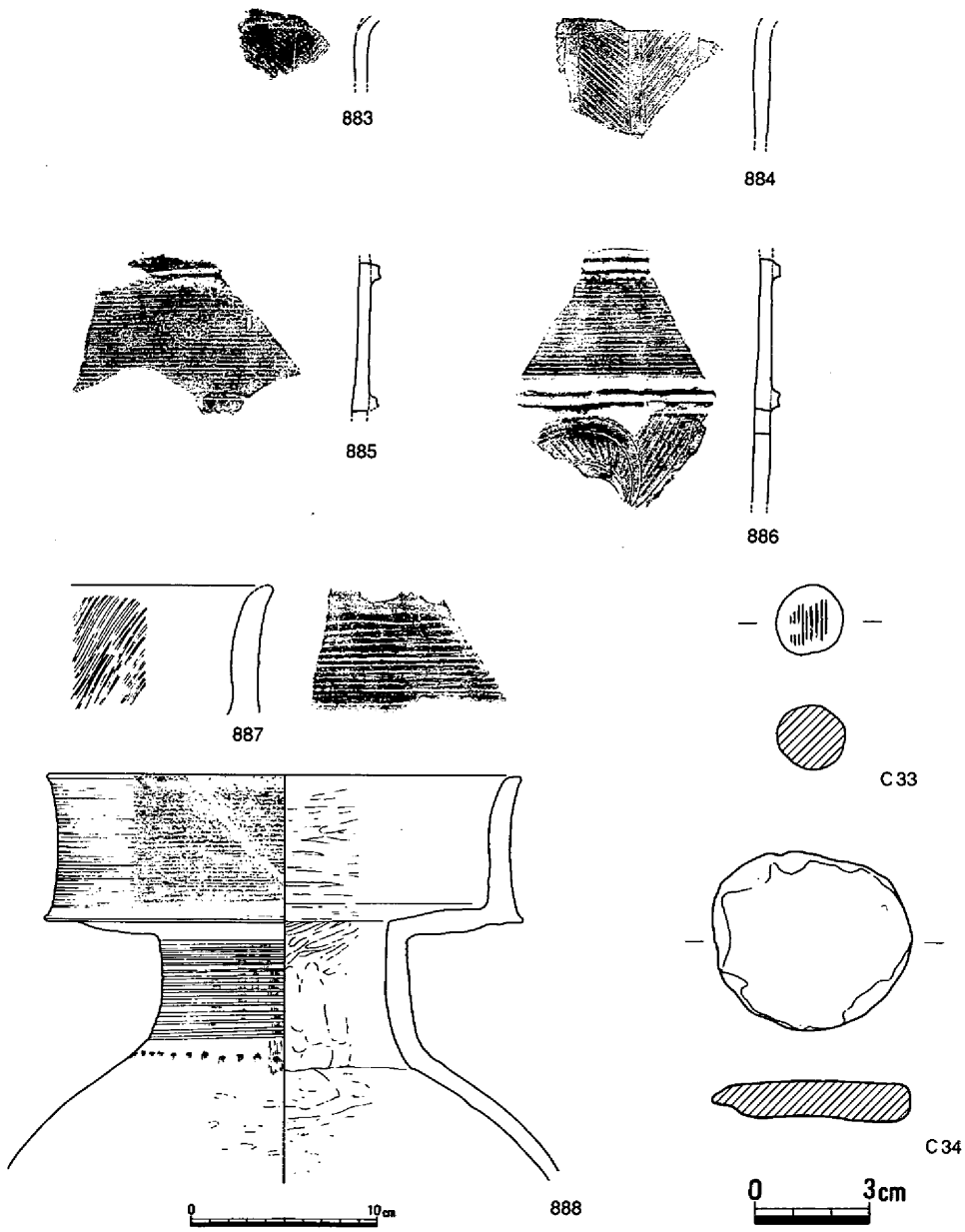


1．黄茶色土
2．灰黄褐色土
（灰色土と黄褐色粘土塊との混合）
3．黄灰色土
4．淡灰褐色土
5．（暗）黄灰色砂質土
7．淡灰色土（灰）
8．炭と粘土との混り
9．灰色粘土
10．黄灰色土
（含、黄色粘土塊）
11．暗灰黄色砂質土
12．灰黄色砂質土
13．黄灰色土
14．黄灰色砂質土
15．灰黄色砂質土
16．灰黄色砂
（含、炭多）
17．黄灰色砂
18．暗灰色粘土
（含、炭）
19．灰色粘土

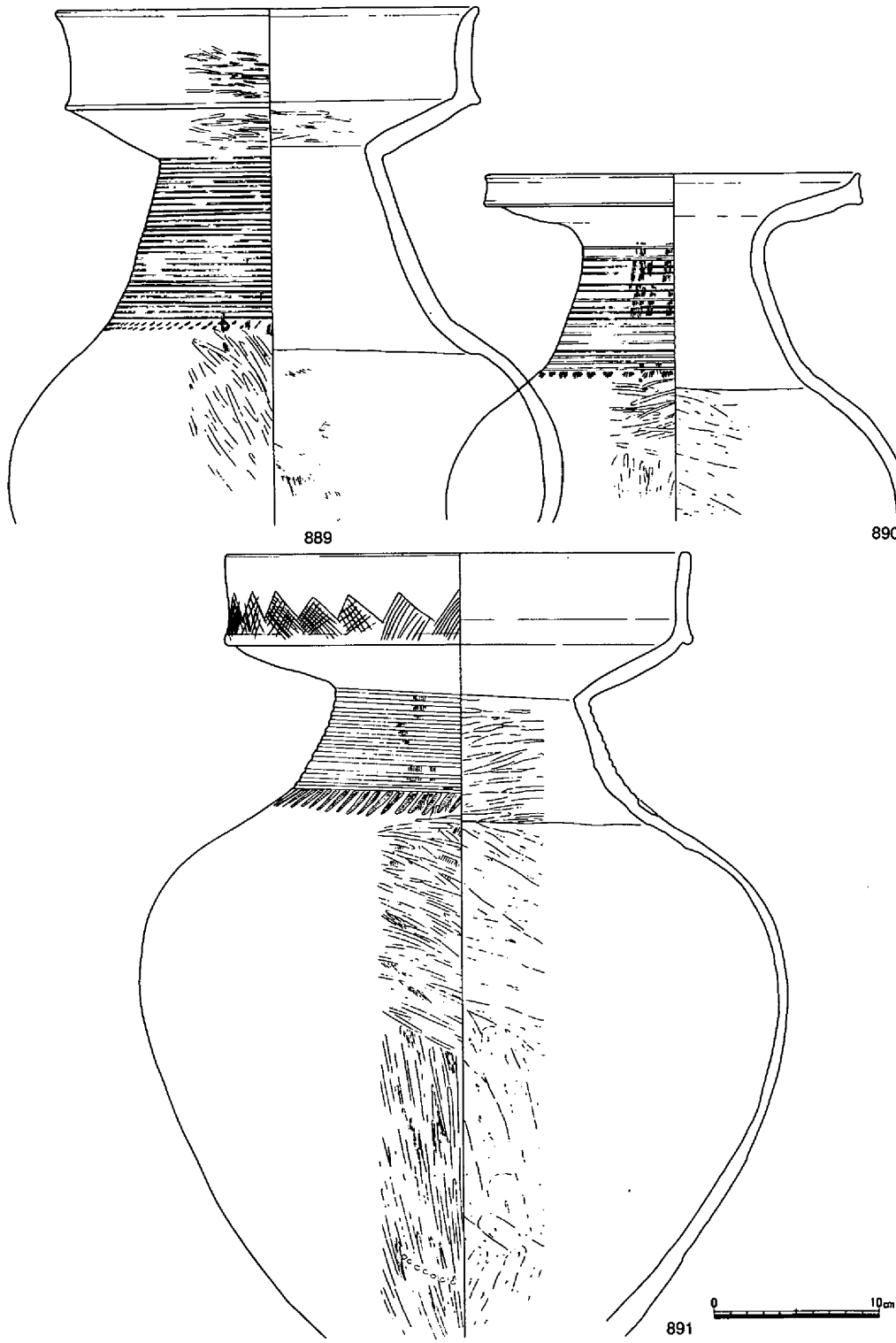
第232図　土壙72（1/30）

穴住居37上層出土の569とも同一個体の可能性が強いものである。

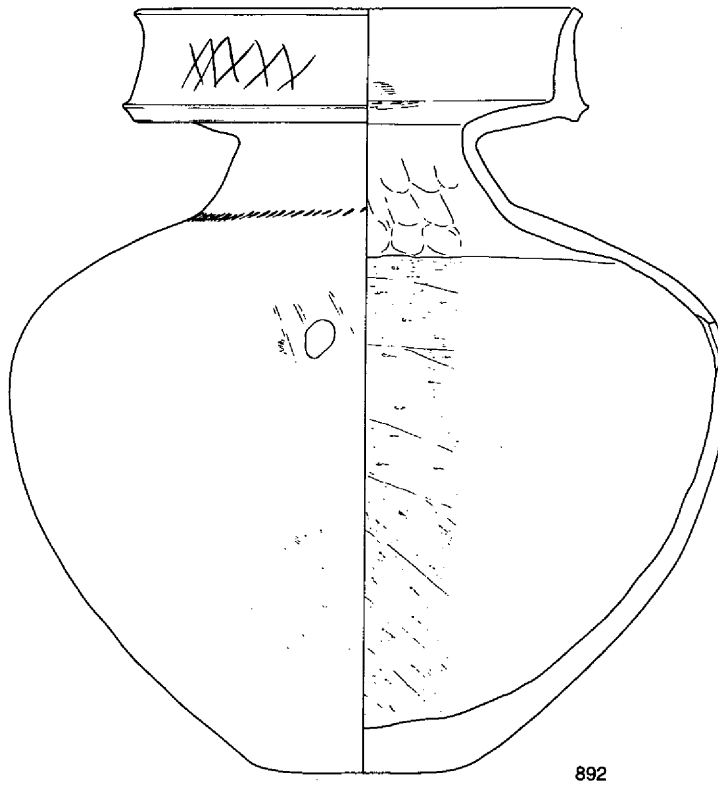
壺は特殊壺と同様の胎土の887をはじめ長頸壺の頸部に沈線を残す889～891、頸部が「ハ」字状を呈す892、形態は甕に似る906～911などの比較的大型のもの56個体と、直口壺912～914ほか小型のもの５個体が出土している。

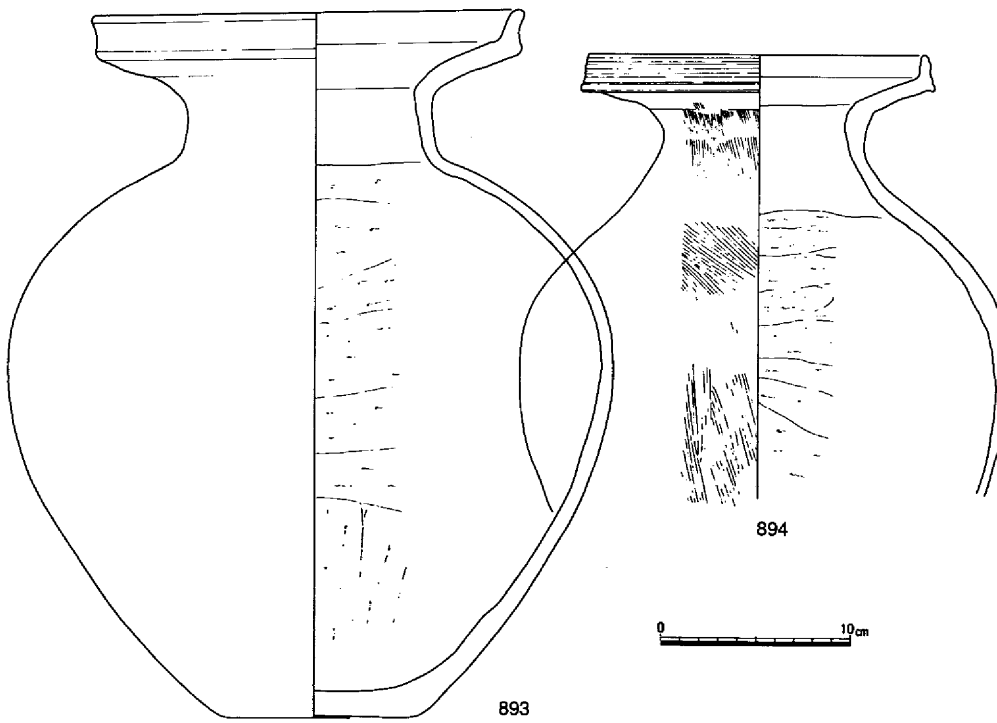


第233図　土壙72出土遺物①（1/4・1/2）

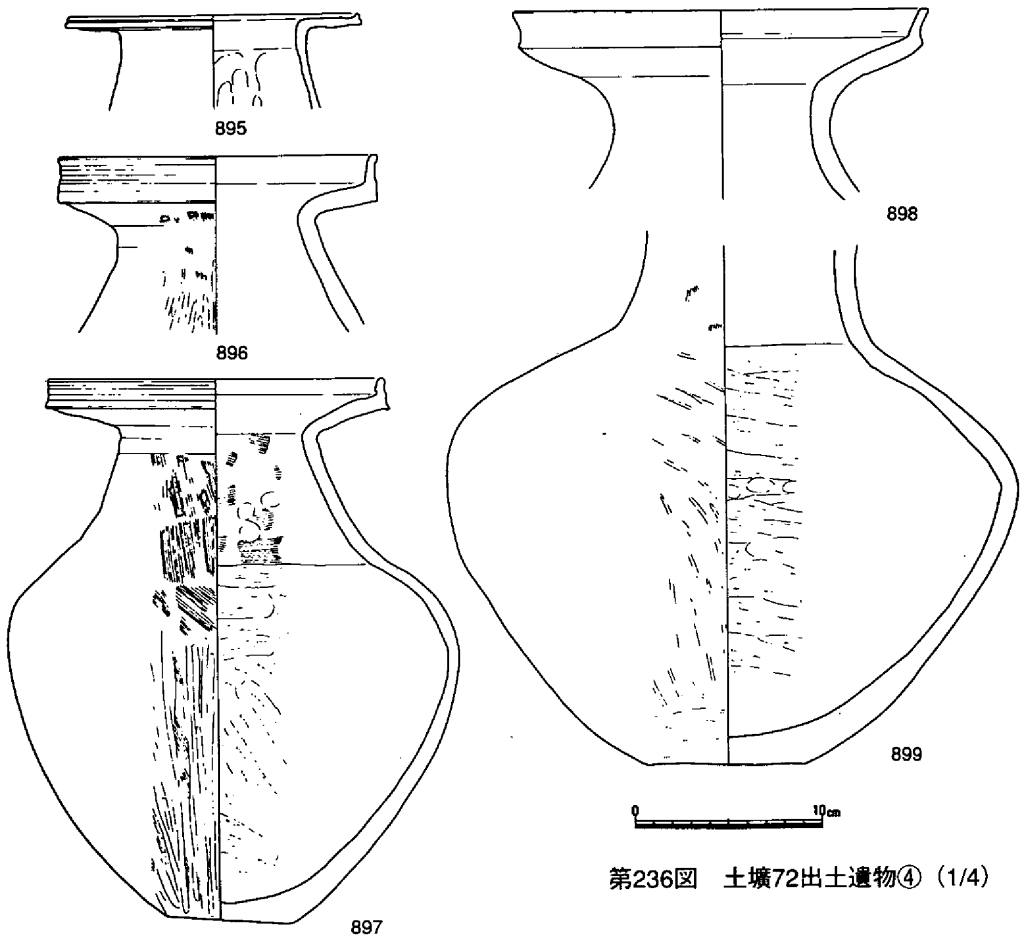


第234図　土壙72出土遺物②（1/4）





第235図　土壙72出土遺物③（1/4）

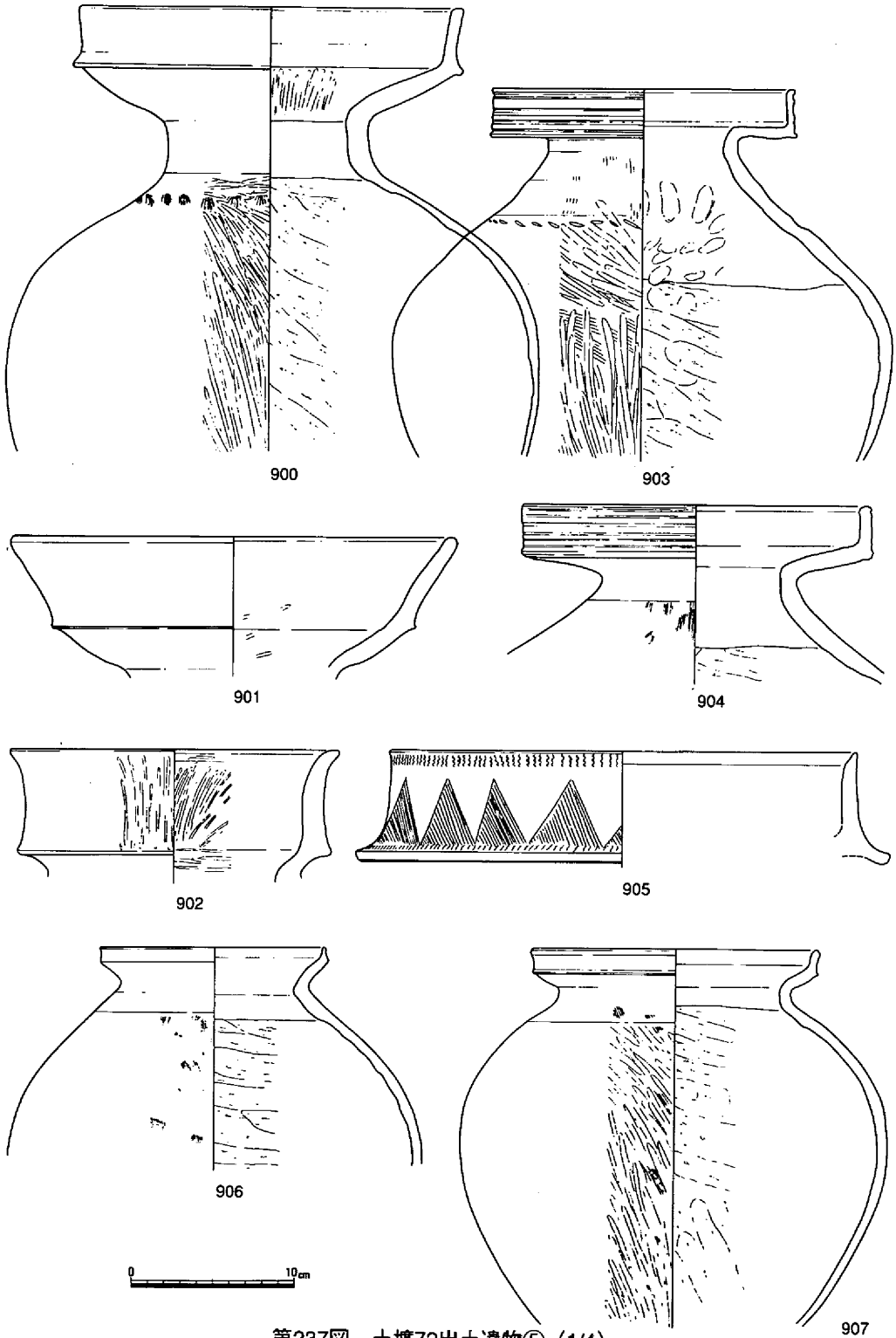


第236図　土壙72出土遺物④（1/4）

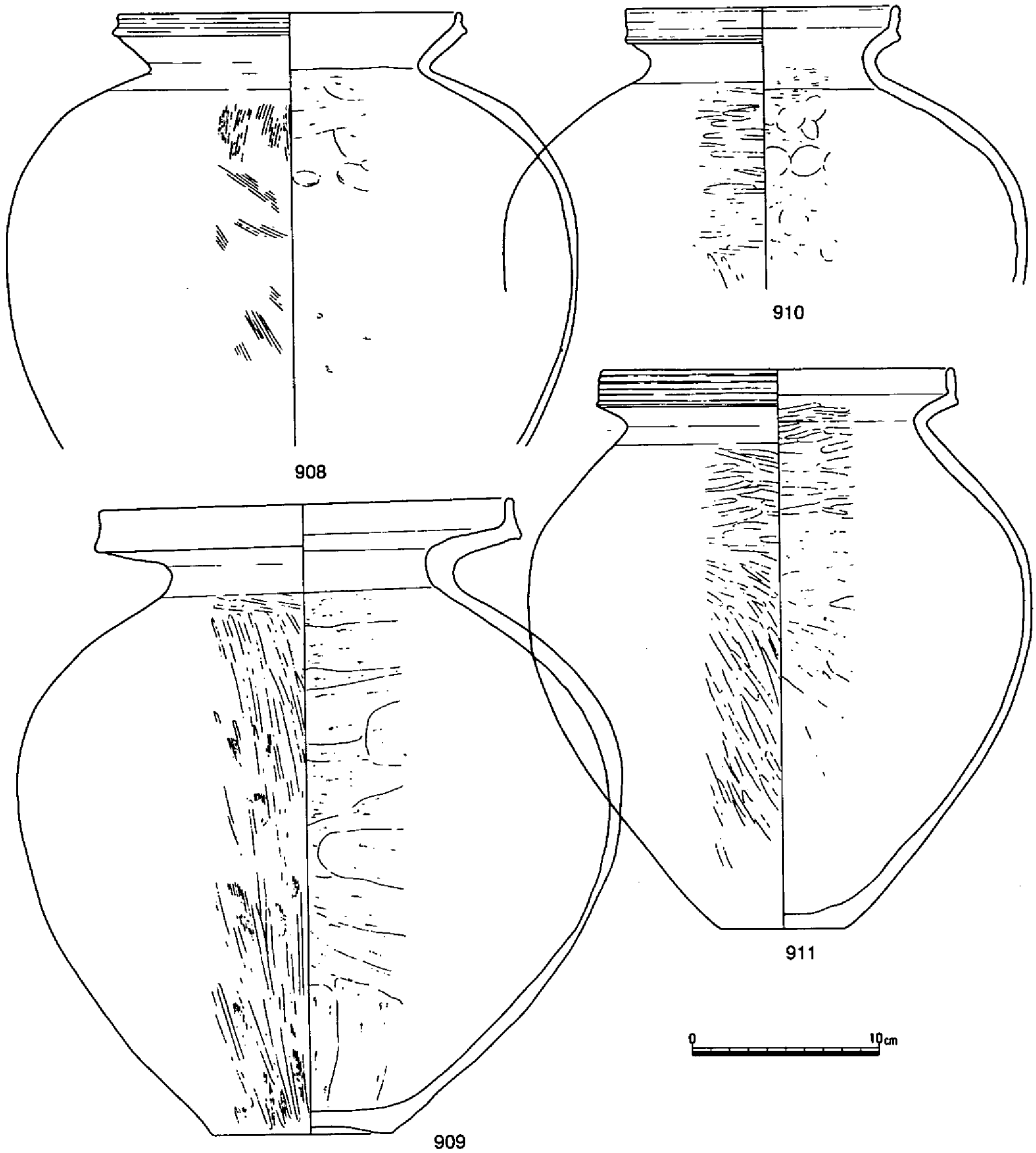
887の外面は板状工具による条線が巡らされ、内面は斜め方向にヘラミガキが施されている。胴部破片を確認できなかったため断定は出来ないが、胎土に角閃石を含む淡茶褐色を呈す特殊壺と同様の胎土のもので、器表面は丹塗りされている。一方、上記同様の口縁形態の888は黄褐色を呈し、胎土に長石・石英粒などを含む当地域の日常土器にみられるものである。

889・890の頸部の沈線はいずれも細く浅いもので、特に889はヘラミガキ状に繊細な細線である。また、891の沈線は太く、深く巡っているが、これらはいずれも上東・鬼川市Ⅲ式と比べ頸部径に対し長さがない。890の口縁部は端部がやや肥厚しヨコナデを施す古い形態を残すものの、889・891のそれは屈曲して開く口縁に、端部はほぼ直立する拡張面をもち、才ノ町Ⅰ式の特徴をもつものである。さらに、口縁拡張面の一部にヘラ描きされた892は長頸壺の系譜を引く新たな形態であるが、頸部端には刺突を巡らせ古い様相を残している。

他に口縁端部が大きく拡張する900～902・905や、口縁端部が鬼川市Ⅲ以来の立ち上がりを示し端面をヨコナデによる凹部を形成する893・898や、凹線あるいは凹線状の条線を巡らせ



第237図　土壙72出土遺物⑤（1/4）

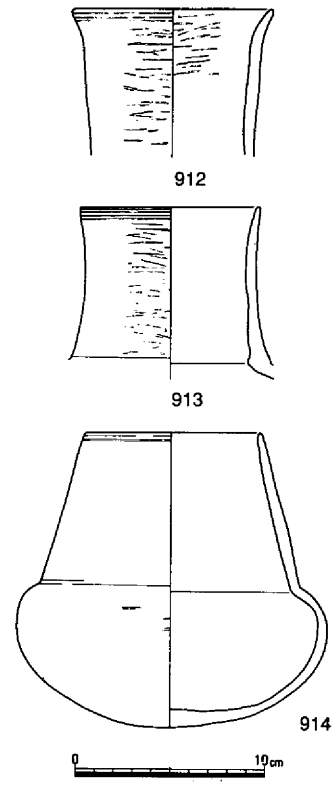


第238図　土壙72出土遺物⑥（1/4）

る894・903・904などがある。また、甕状の形態を呈す906～911においても口縁の調整は上記同様であるが、全体を通じて胴部の最大径は上東・鬼川市Ⅲ式に比べやや低い位置にあり、丸味が増している。なお、895は讃岐系のものである。

小型の壺はわずかに5個体出土したのみで、実測し得たのは直口壺3点であった。912は水漉粘土、913・914は砂粒が混じる精製粘土が使用され、口縁端部には数条の細い沈線が巡らされている。914は完形で底部は丸底である。

甕は215個体出土し、器表面をハケ・ミガキで仕上げているものと、口縁端部を丸く収め、タタキ目痕跡を残す形態に属すものとに大別され、前者は192個体、後者は23個体出土しており、甕全体からすれば後者は10.7%を占める。前者は口縁部の特徴から３分類した。ａ類は口縁端部が肥厚する915・916、上方につまみ出す917～923からやや拡張する925～927・934・935など、ｂ類は口縁端部が拡張し、拡張面に凹線紋をもつ954～963で、ｃ類はｂ類同様に口縁端部に拡張面をもつが、ヨコナデあるいは凹線状の条線を残す928～933・936～953・963などで、ａｂ両類間の漸移的な形態で、特に凹線状の条線を残すものについてはｂ類との判別が難しいものも多々あった。後者は器表面にタタキ目を残す畿内系の土器ｋ類969～975、口縁端部を丸く収めタタキ成形後ハケなどによりタタキ目を消している965～968などｄ類に分類した。その結果ａ類41個体、ｂ類29個体、ｃ類86個体、ｄ類19個体、ｋ類６個体に分かれ、形態の判る甕総数181個体中ｃ類が最も多く、甕全体の48%を占め、ａ類23%、ｂ類16%、ｄ類10%と続き、ｋ類は約３%の比率であった。なお、上記したようにｃ類には凹線状の条線



第239図　土壙72
出土遺物⑦（1/4）

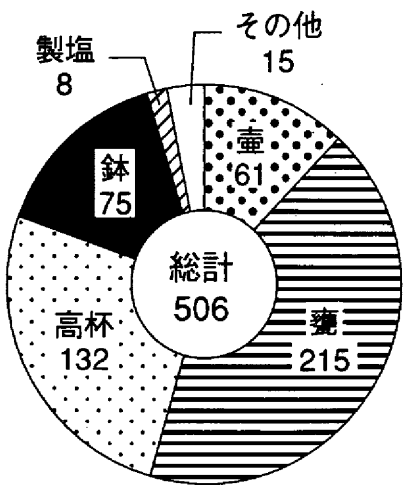


表１．器種別構成表

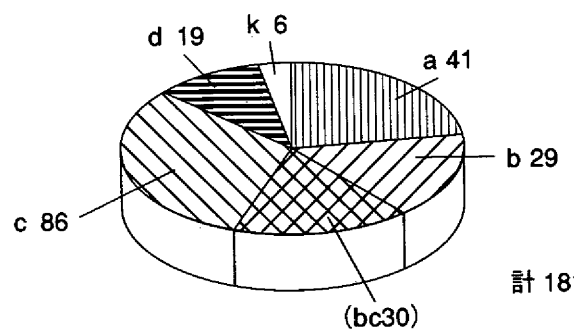
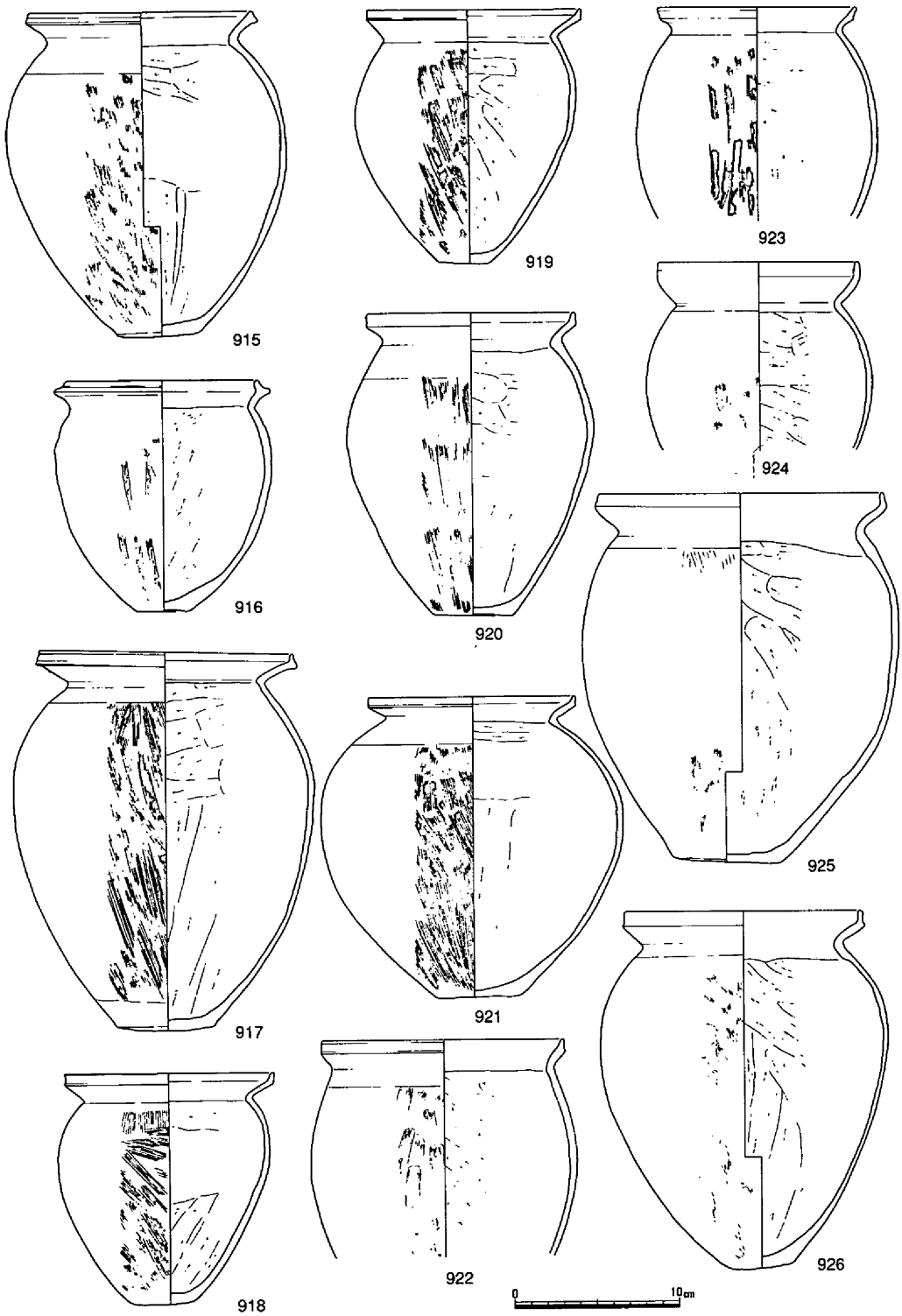
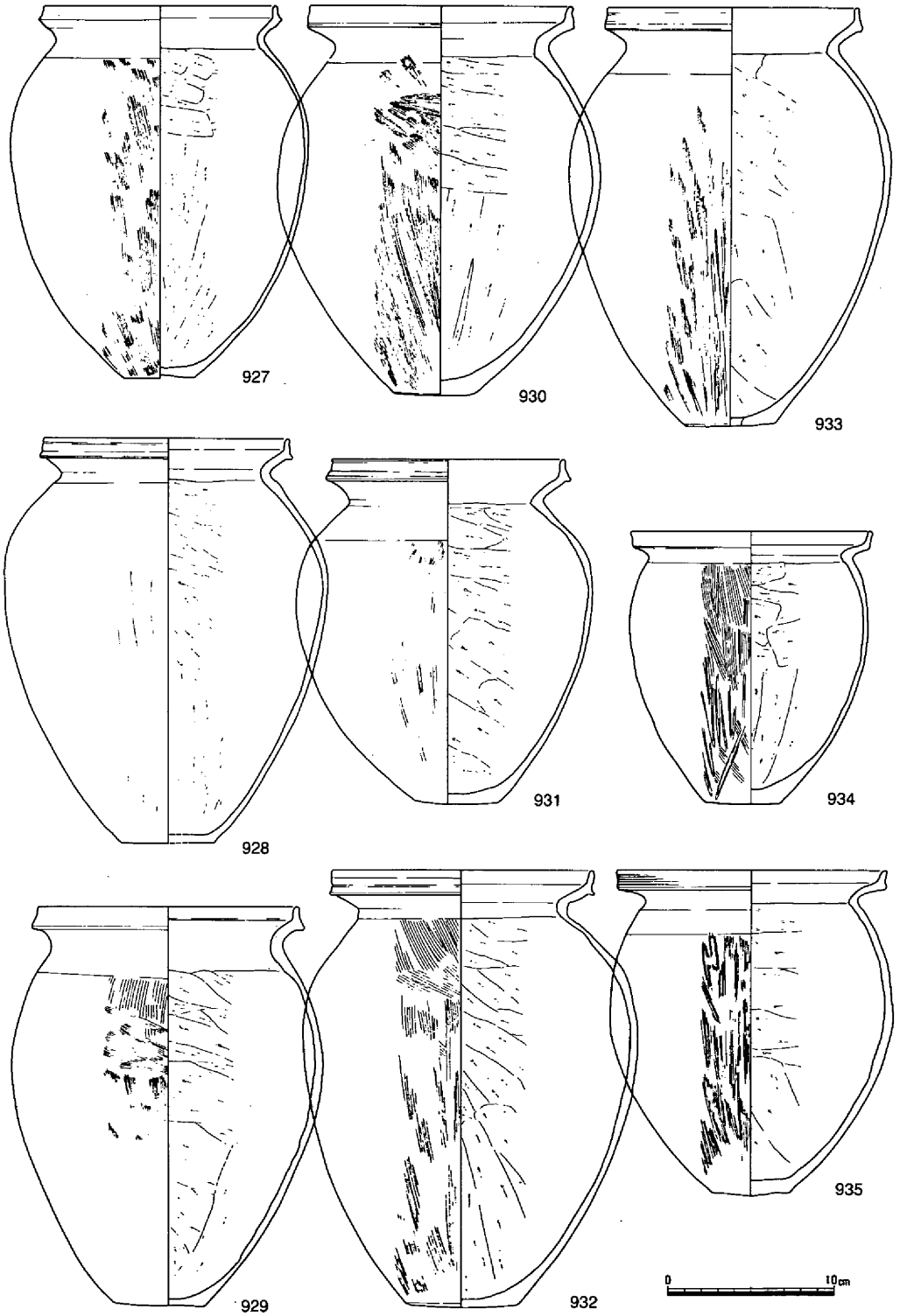


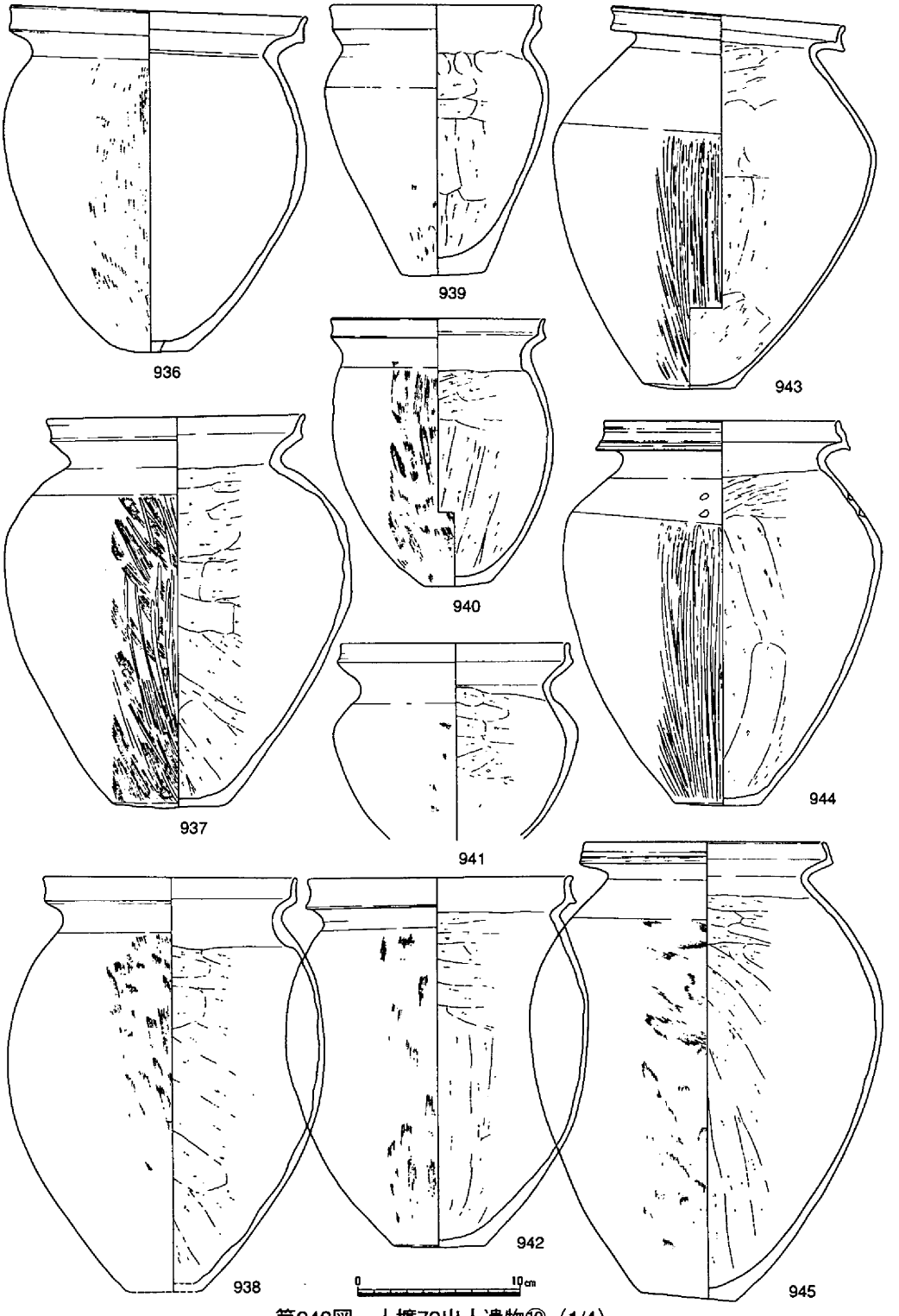
表２．甕分類表



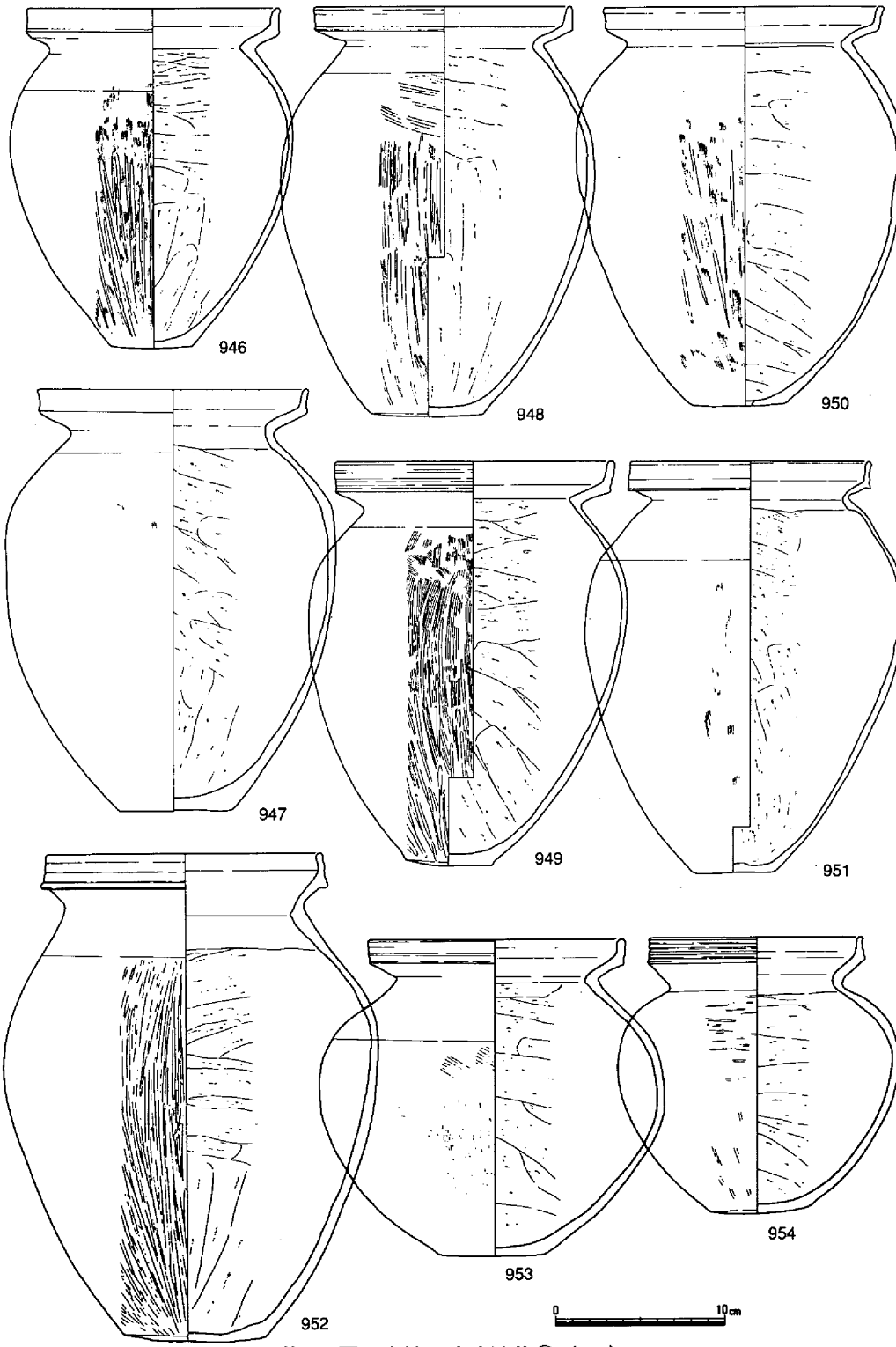
第240図　土壙72出土遺物⑧（1/4）



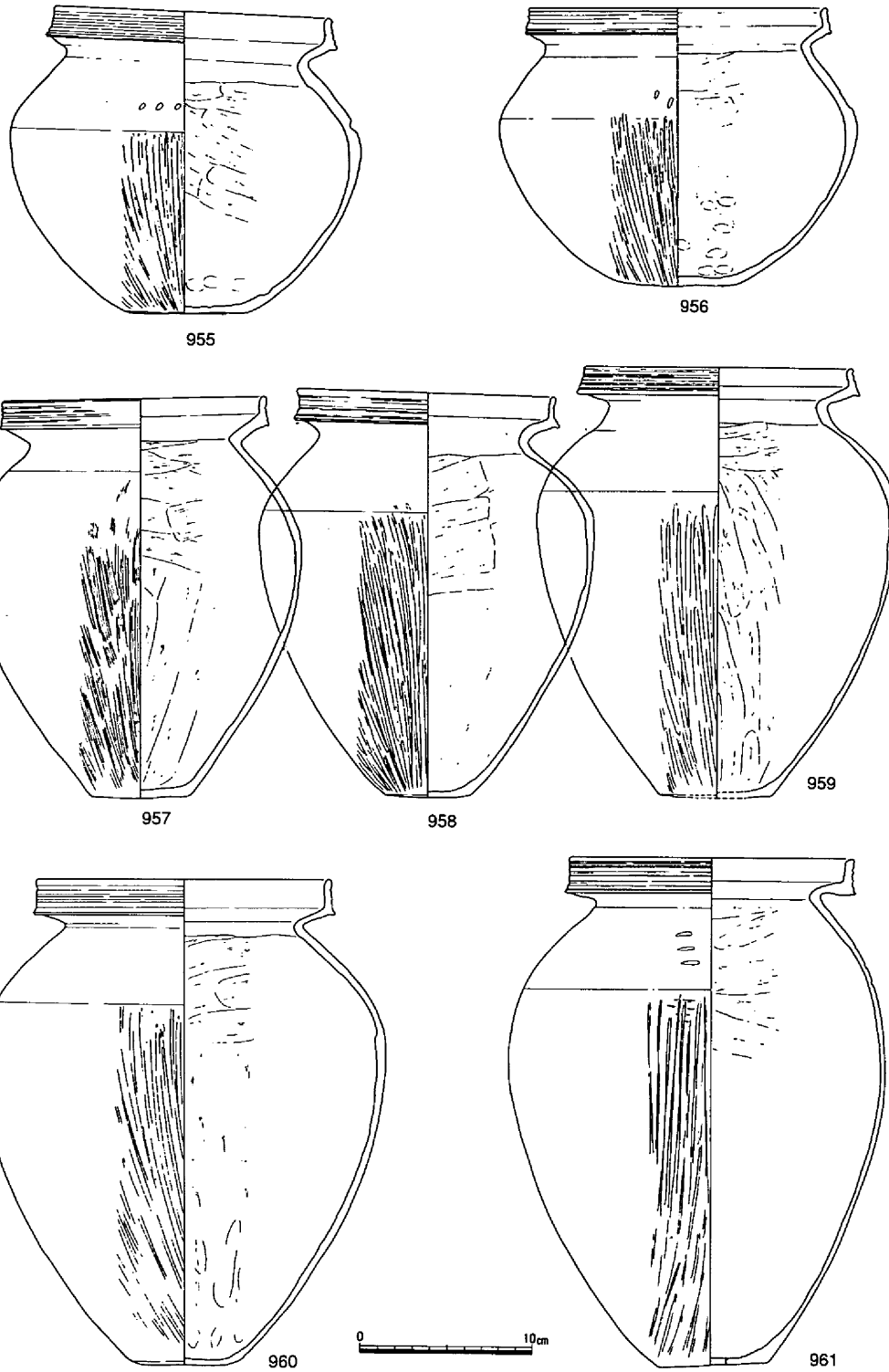
第241図　土壙72出土遺物⑨（1/4）



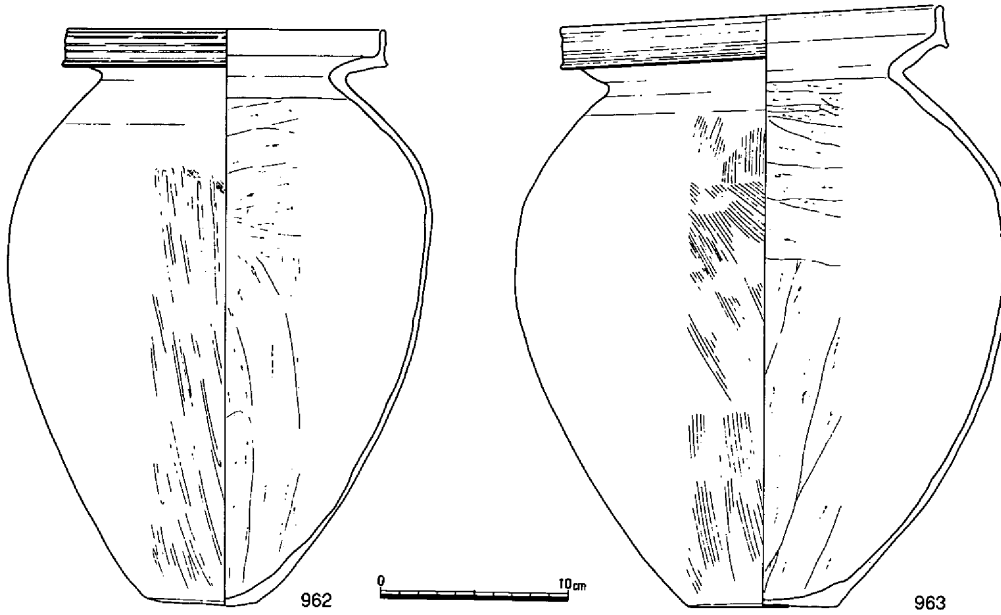
第242図　土壙72出土遺物⑩（1/4）



第243図　土壙72出土遺物⑪（1/4）



第244図　土壙72出土遺物⑫（1/4）



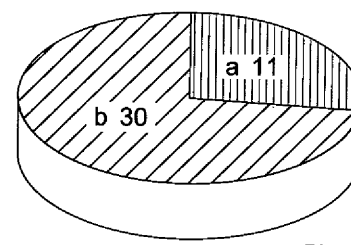
第245図　土壙72出土遺物⑬（1/4）

の走るものが含まれており、これらをｂ類に加えｃ類の再計算すれば、ｂ類59個体（約33％）、ｃ類56個体（31％）になる。いずれにしても口縁端部が拡張するｂ・ｃ類はそれまでのａ類に比べ３倍近く存在することと、畿内系の遺物は極めて希な遺物としてあることが理解される。

高杯は132個体出土し、杯部が椀状を呈すａ類993～999など、口縁部が外反あるいは外反気味に斜め外方に立ち上がるｂ類977～992などの２つに大別した。いずれも短脚の脚柱部をもち、裾部の穿孔は確認し得る限り４孔であった。また、大半が水漉粘土を使用したもので、一部に精製された粘土に砂粒が混入され、ａ類の999は１㎜前後の砂粒を含むものであった。

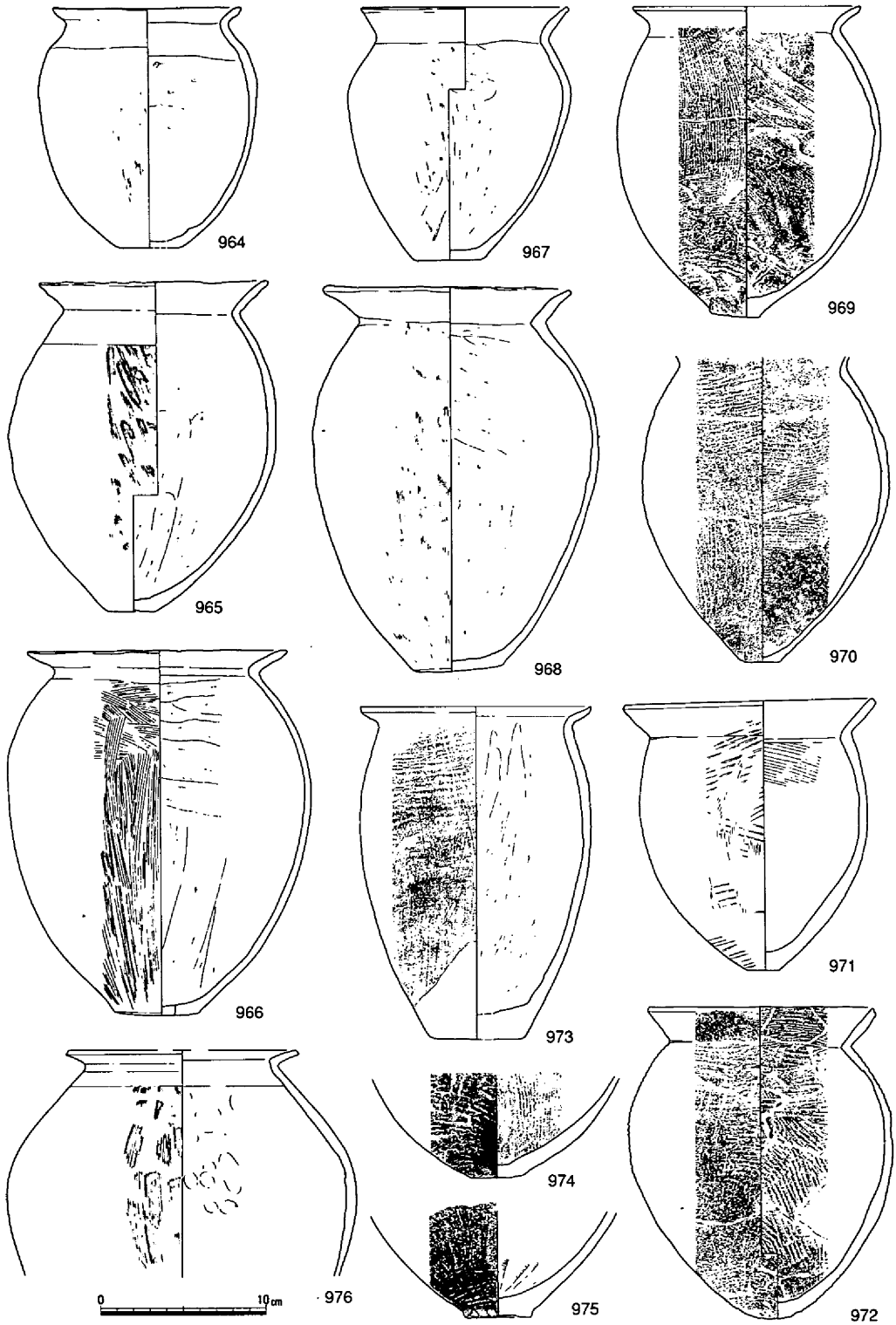
ａ・ｂ類の比率は杯部の存在率の良い資料を基にしたため、総数がやや低くなるがａ類11個体（27％）、ｂ類30個体（73％）でｂ類がａ類の約３倍を占めた。

ｂ類の中には図示しなかった口縁部が外反するものもわずかに含まれているが、大半は記載のように口縁部が外反気味に斜め外方に延びるもので、上東・鬼川市Ⅲ式にみられるものに対し、口縁部が高く、杯部容積の増加傾向が窺われる。一方、ａ類の変化は微細で



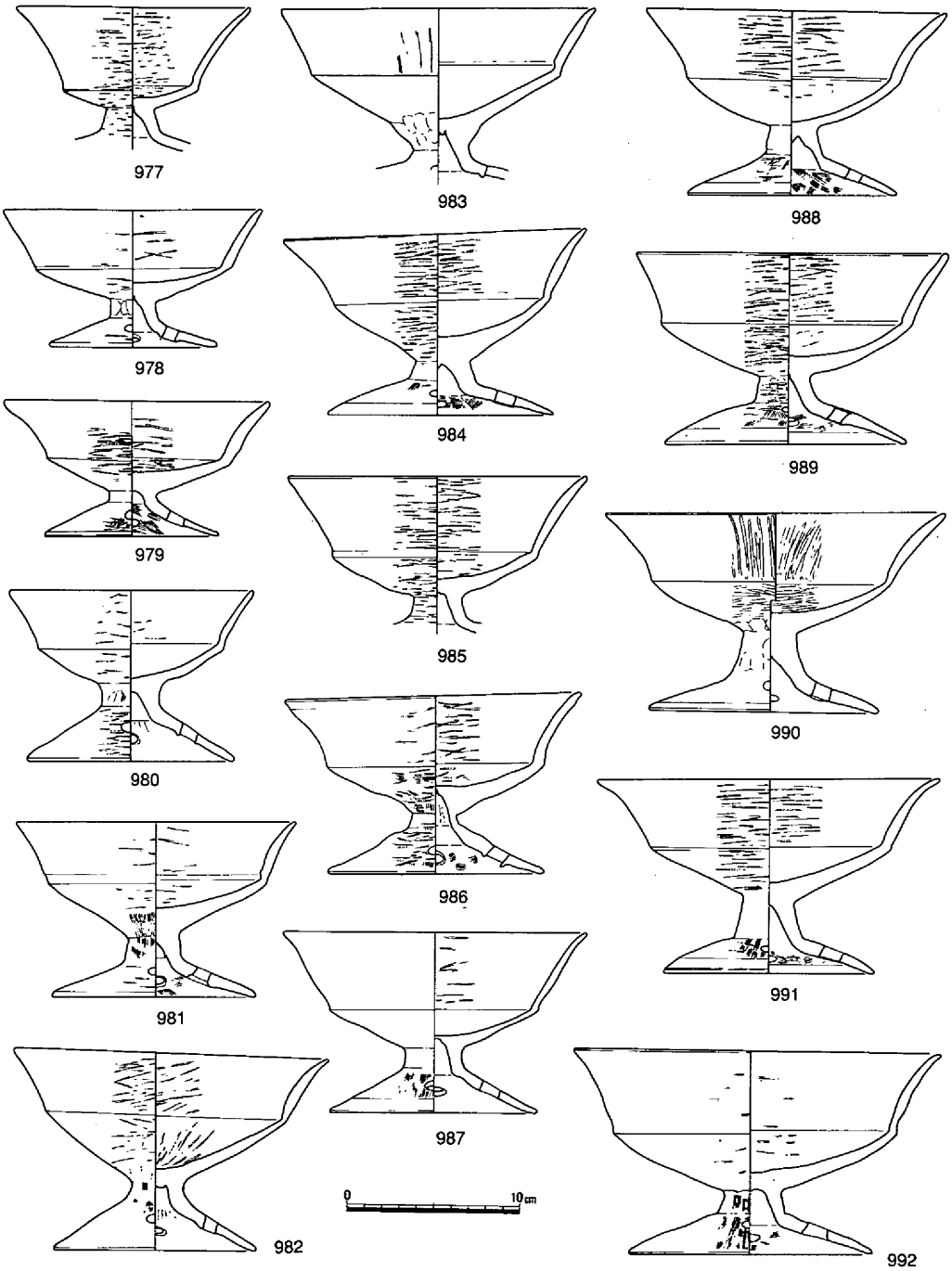
計 41

表３．高杯分類表

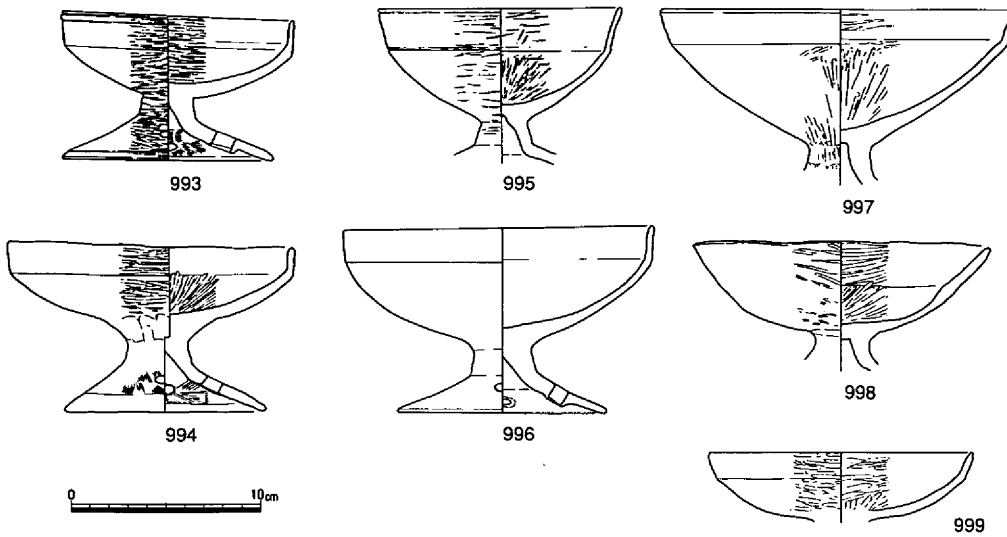


第246図　土壙72出土遺物⑭（1/4）

993にみられるように端部に沈線を巡らすなど、鬼川市Ⅲ式の影響を残すものの全体としては無紋様化の傾向を示す。なお、ｂ類の口縁部径は13.3～20.8cm、器高7.8～11.8を測る。ａ類のそれは12.2～19cm、器高7.8 ～20cmを測り、ａ類はｂ類に比べ総じて小型のものが多く、また、



第247図　土壙72出土遺物⑮（1/4）



第248図　土壙72出土遺物⑯（1/4）

杯部の深さにおいてもｂ類は4.2～７㎝を測るのに対し、ａ類は3.4～5.2㎝と浅い傾向がみられ、これから得られる杯部容積は、一部異なるものの口縁部径にほぼ比例するようである。

当土器溜りからは２個体の手焙形土器が出土している。1000は完形で、後述する中にはみられないがやや幅広の底部をもつ鉢状の下部に、覆部を接合させた形態をとる。外面はハケ調整およびヨコナデ、内面は下半はヘラケズリ、覆部は押圧およびハケ調整している。1001は鈍重で、稚拙な印象を与えるもので、広い底部に厚い器壁が立ち上がり緩い曲線を描きながら覆部に達している。ほぼ円形に開いた窓の端部はナデで仕上げられ端部は丸く収めている。外面はハケ、内面は下半をヘラケズリののち、覆部も含め押圧・ナデを施している。

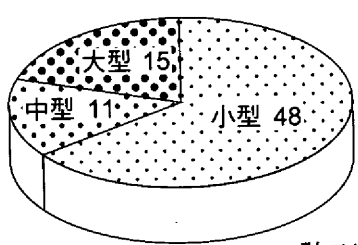
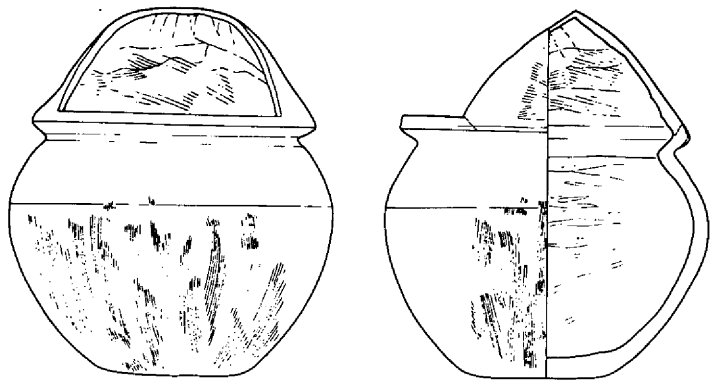
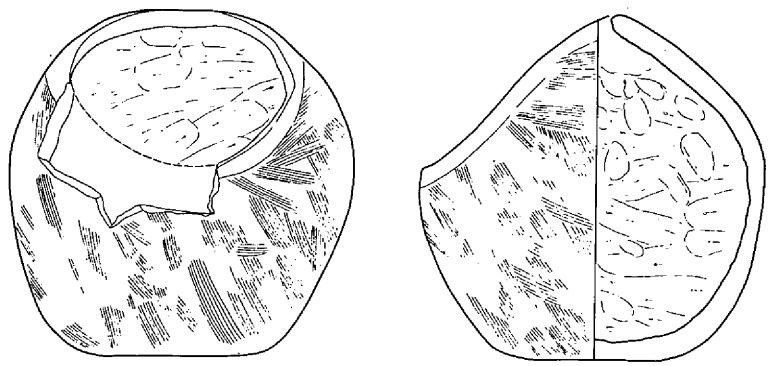


表４．鉢分類表

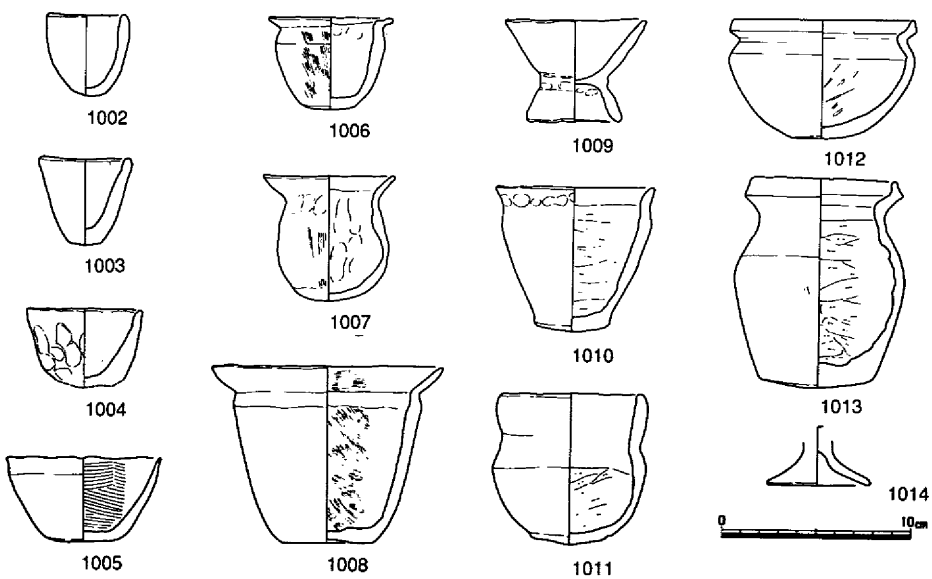
鉢類は75個体出土しており形態的にはバラエティに富んでおり、容量的にも小型48個体・中型11個体・大型15個体の３種類に分けられ、小型が圧倒的に多い。形態からすれば小型鉢はボウル状を呈すａ類1015～1025、ａ類に台が付くａ’類1045～1047、椀状に台が付くｂ類1027～1039、杯状を呈すｃ類1040～1044、口縁が屈曲し端部が肥厚あるいは拡張するｄ類1048～1058・1063、形態的には甕に似るｅ類1015などに分類した。なお、1048～1051は県北部系の、1055は備中西部から備後



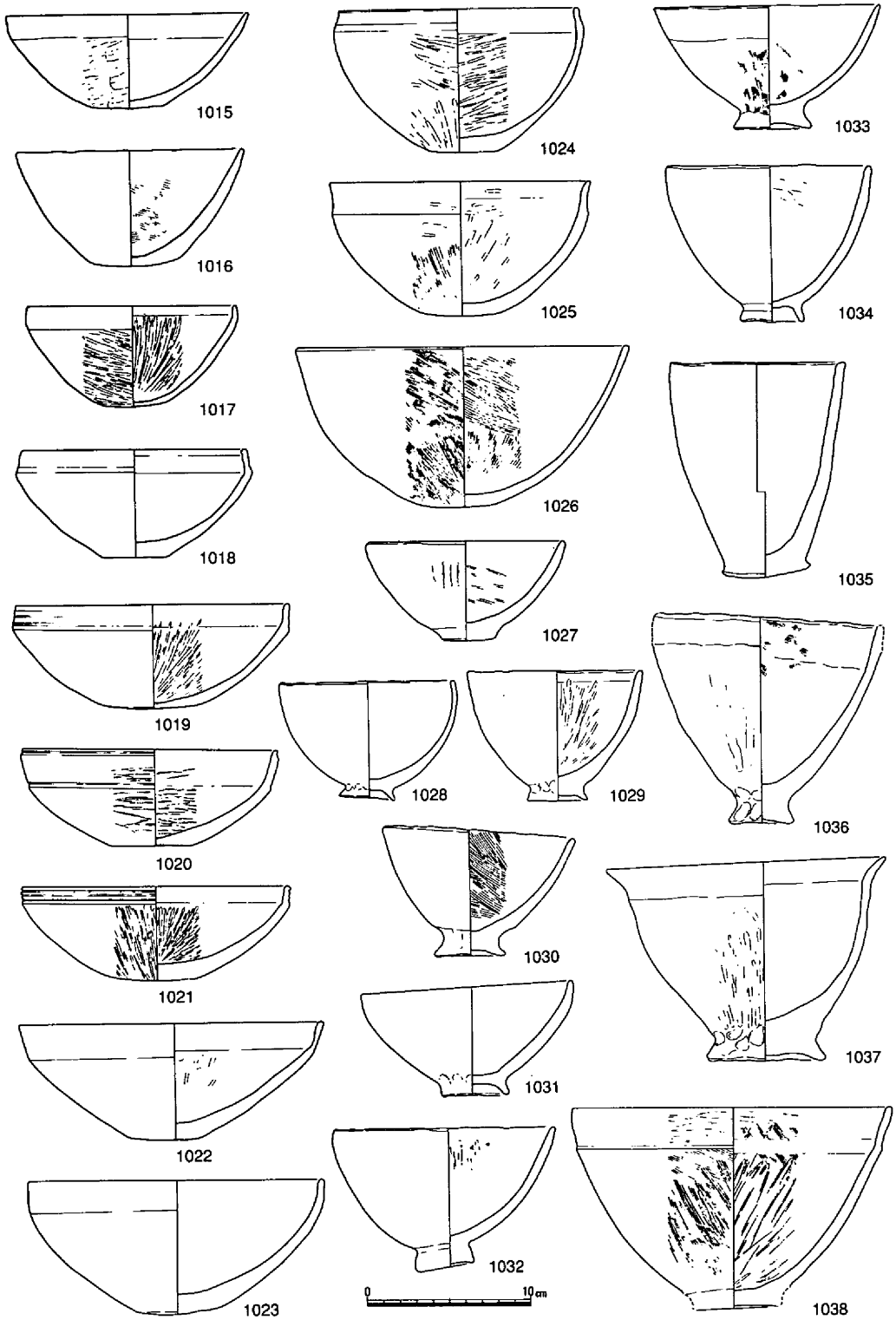
1000



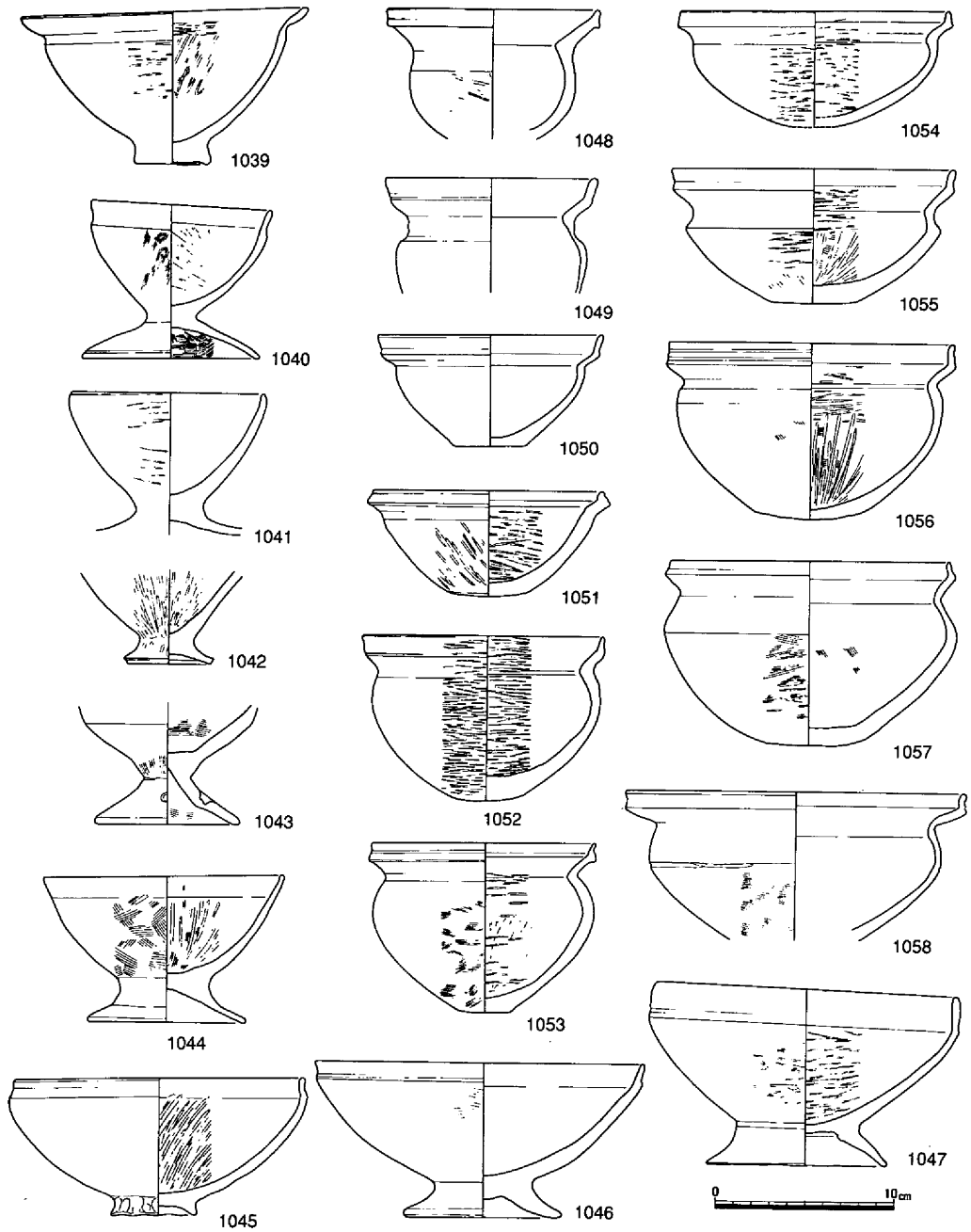
1001



第249図　土壙72出土遺物⑰（1/4）

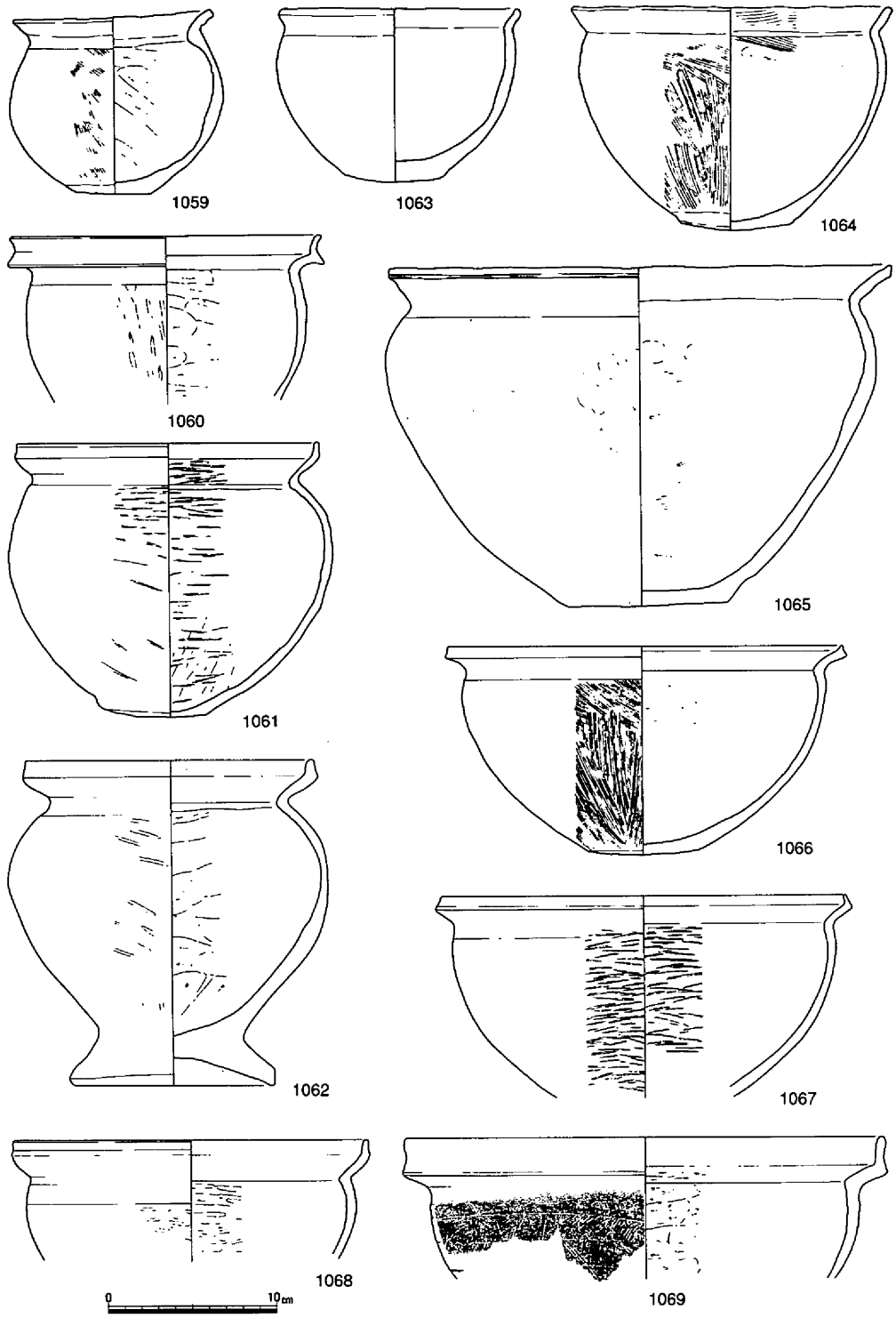


第250図　土壙72出土遺物⑱（1/4）

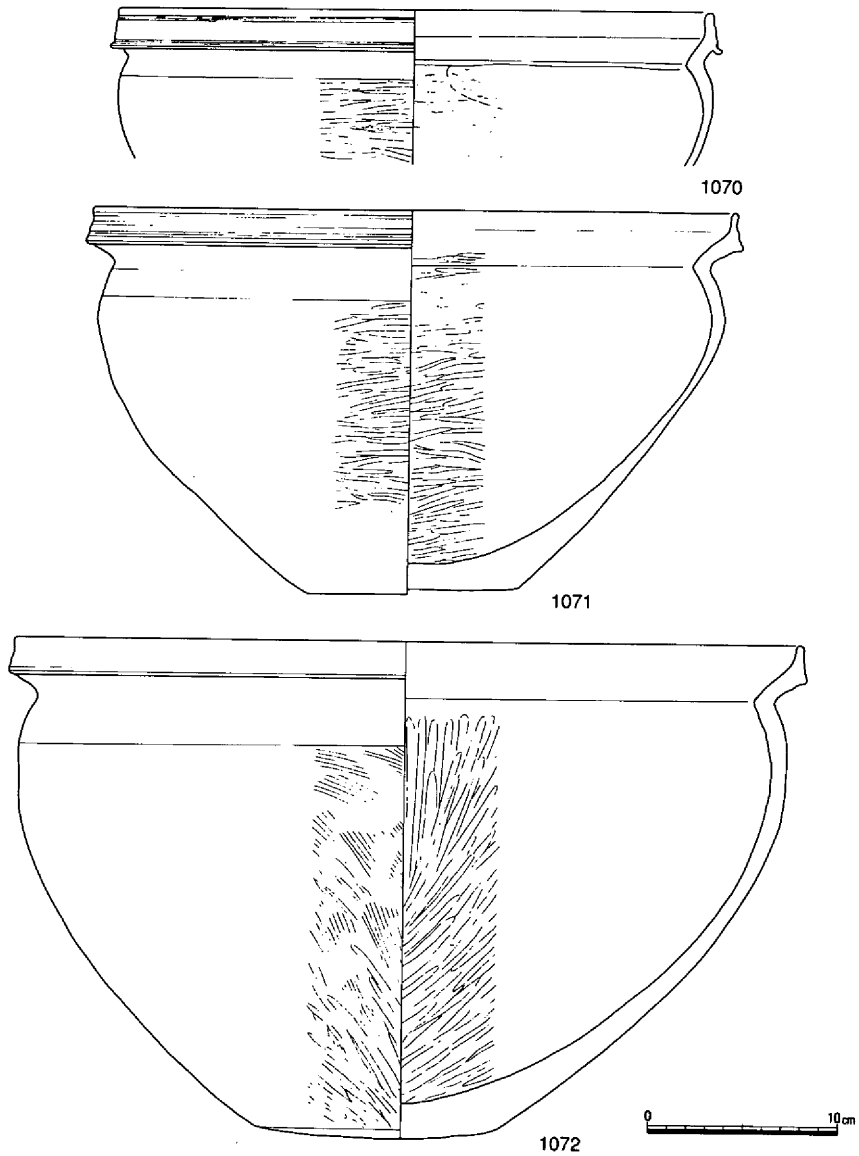


第251図　土壙72出土遺物⑲（1/4）

系の形態を示しているようである。中型鉢はａ類1026、ｅ類1060～1062、ｄ類1064・1066～1069などで、1069の胴部中央には雑な鋸歯紋の上下に平行沈線が描かれている。大型鉢はｄ類1065・1070～1074などで、口縁端部の拡張するものが大半を占めた。



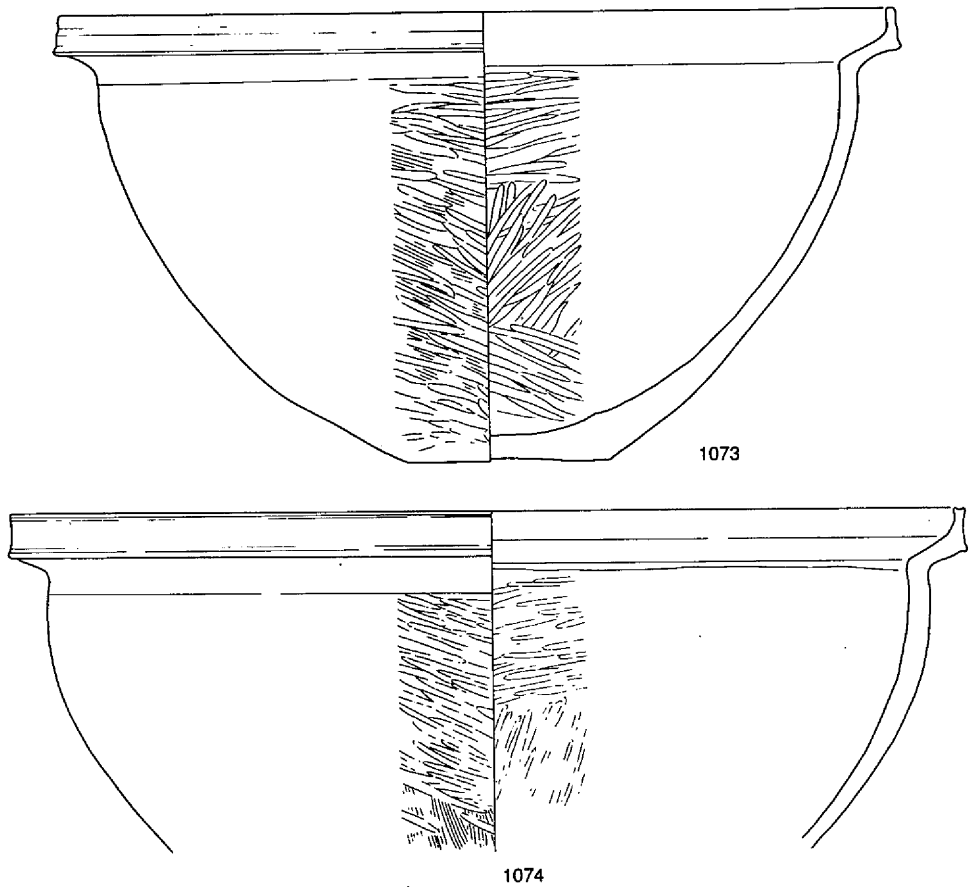
第252図　土壙72出土遺物⑳（1/4）



第253図　土壙72出土遺物㉑（1/4）

他にミニチュア土器1002～1014や、製塩土器1075～1080なども出土している。

以上、これら一群の土器は遺構の在り方から短期間に埋没したものと想起されたものではあるが、土器の示す特徴は才ノ町Ⅰ期の範疇で捉えられるものが大半を占めるものの、上東・鬼川市Ⅲ期の様相を色濃く残すものから、才ノ町Ⅱ期に下がる可能性をもつものまでを含む一群であった。そして、上層から出土した特殊器台の破片についてはこれら一群の土器と同時期、あるいはそれ以前に既に破砕した状態であったと考えるのが妥当と思われる。　（江見）



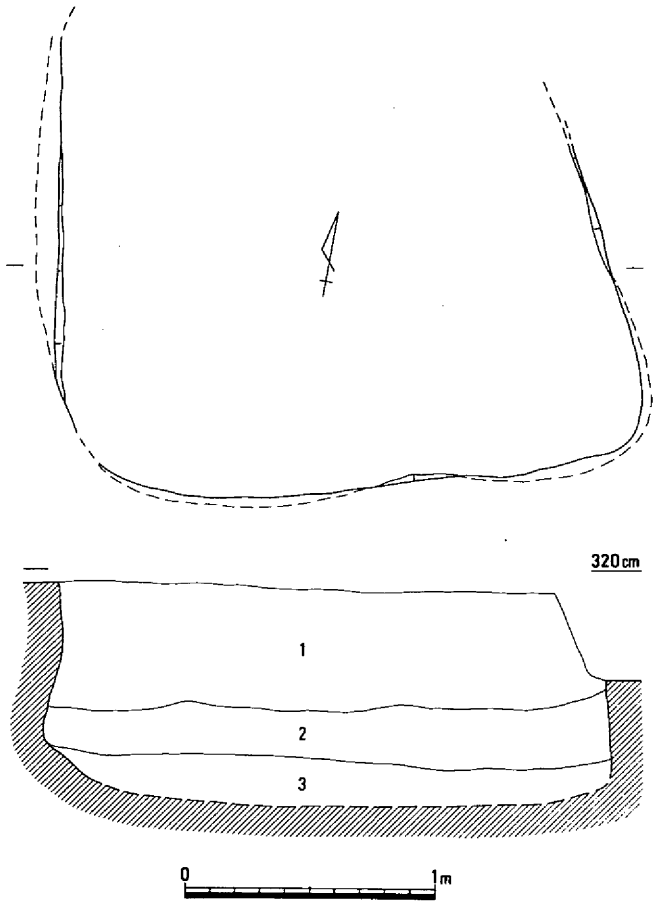
第254図　土壙72出土遺物㉒（1/4）

土壙73（第155・255図）

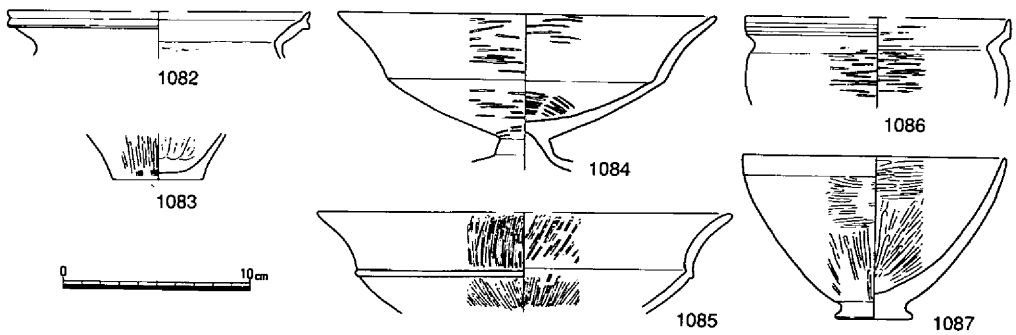
３Ｂａ区において北側が調査区外にかかった状態で検出された。東西方向での最長2.30m、最短で2.00mと平面台形を呈する土壙で、検出面からの深さ約85cmを測った。断面は、壁が垂直もしくは壙底に向けて逆に斜傾するものであった。

埋積土は、大きく３つに分層され上層に砂が、下層には炭・焼土の包含が確認された。

出土遺物には、甕、高杯、鉢等の土器が散見された程度であった。土器は、上東・鬼川市Ⅲに類似するものである。時期は、後期後半に比定されよう。



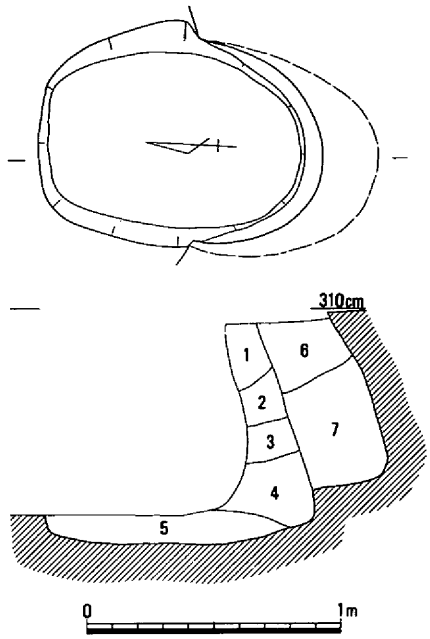
１．灰黄色砂質土　　２．黄灰色土（含、黄色粘土塊）　　３．明黄灰色土（含、粘土・炭・焼土）



第255図　土壙73（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙74（第155・256図）

３Ｂａ区において検出された土壙で、先述の土壙73によって北側約１／２が切られていた。



1．暗黄灰色土　5．灰黄色土
2．暗灰色砂　6．暗茶色砂質土
3．暗黄灰色粘質土　7．暗灰茶色砂土
4．暗黄灰色粘質土
（含、黄色粘質土塊多）

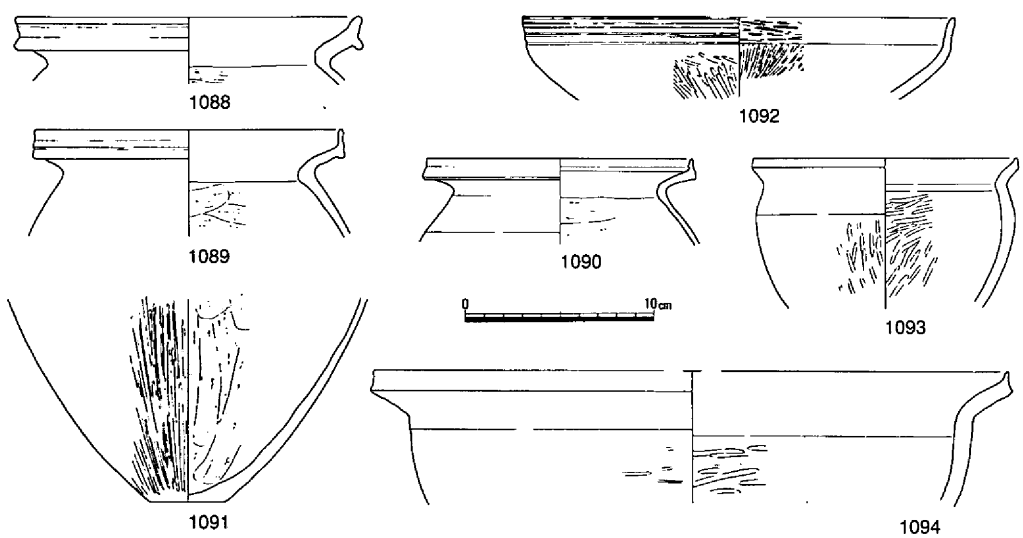
平面は、平面検出時点では明確ではなく、壙底でのその在り方によって本来南北方向に長い楕円形であったことが推測された。ただし、土層断面での在り方によれば袋状を呈する2基の土壙の重複の可能性も考えてよい。

出土遺物としては、甕、高杯、鉢の土器の存在が確認された程度で、他にはなかった。

時期は、土器が上東・鬼川市Ⅲに類似することで、後期後半に比定されよう。（島崎）

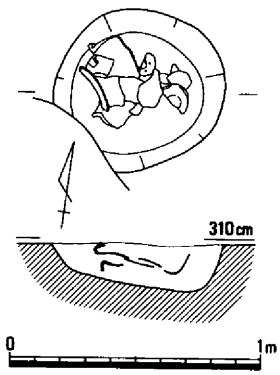
土壙75（第155・257図、写真図版124）

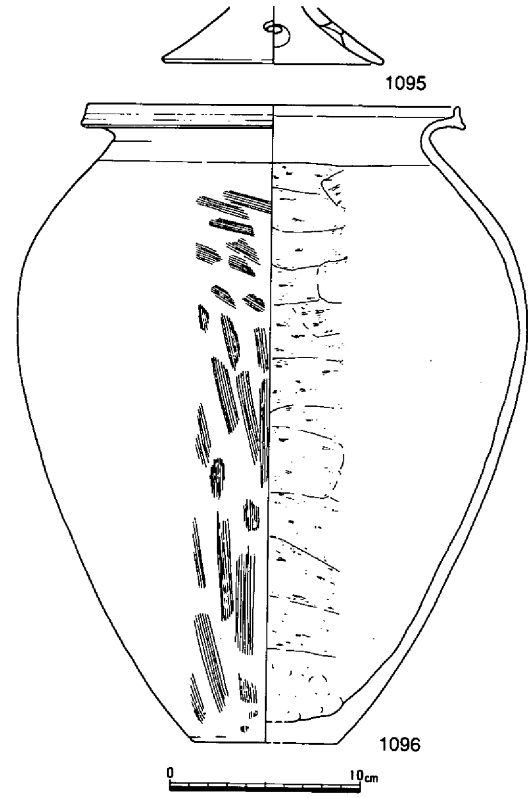
3Ba区、土器棺1の南東に位置し、竪穴住居57に一部切られて検出された、土壙である。平面不整円形を呈し、径約70×約65cm、深さ約20cmを測る小規模な土壙で、埋土の暗茶褐色粘質砂の中から口縁を西、底部を東に向けた甕**1096**が押し潰された状態で出土した。



第256図　土壙74（1/30）・出土遺物（1/4）

他に高杯片**1095**が土壙中央部から出土している。甕は土器棺に利用された可能性もあるが、蓋にあたる土器は確認されなかった。甕の口縁部端部は内傾し上部に拡張するもので、端面に





第257図　土壙75（1/30）・出土遺物（1/4）

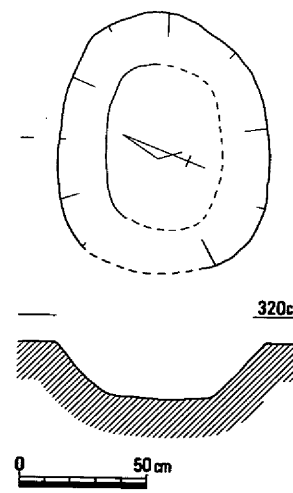
は凹線状の条線を残す。甕全体の形態特徴は上東・鬼川市Ⅲ併行期に収まるものと考える。

土壙76（第155・258・259図）

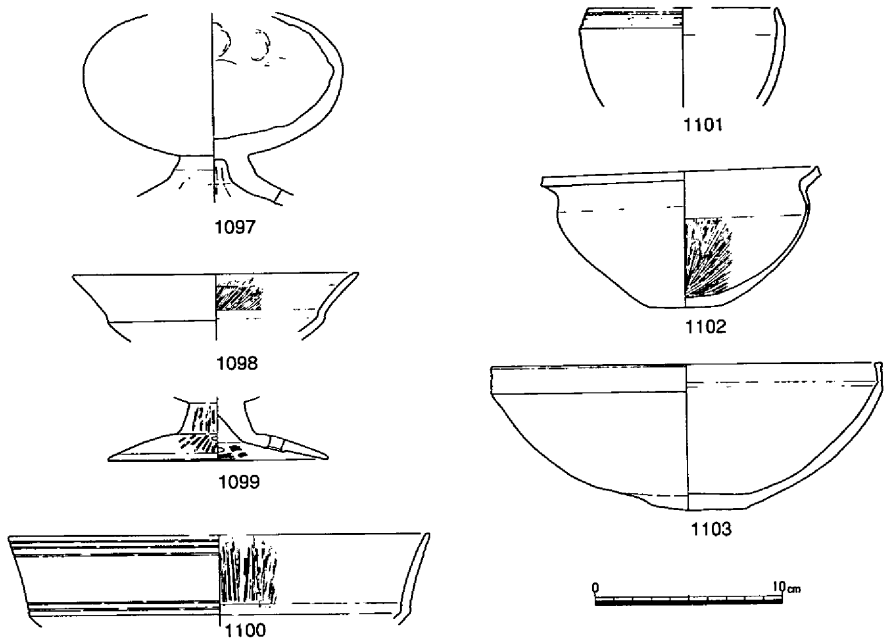
３Ｂｂ区の南西に位置する平面不整円形の土壙で、径約１ｍ×約80cm、深さ20cmを測る。壙内からは脚付直口壺1097をはじめ甕、高杯、鉢などが出土したが、いずれも破片であった。図示し得た遺物は1102を除き水漉粘土であり、これら遺物の特徴は、上東・鬼川市Ⅲ併行期に比定される。

土壙77（第155・260・261図）

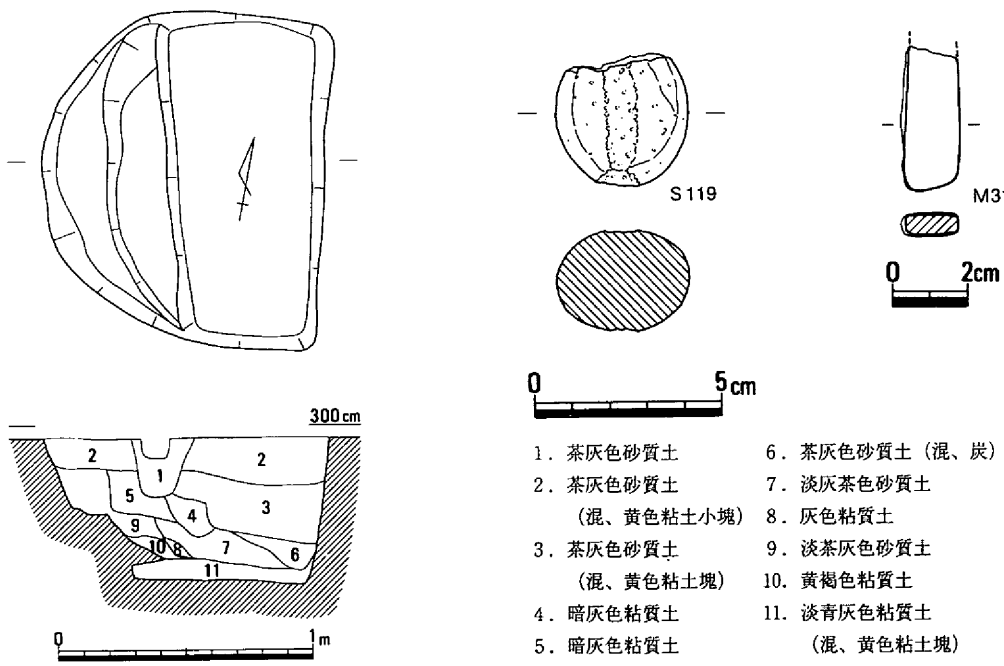
３Ｂｂ区の南西に位置し、竪穴住居10を切って検出された平面不整長方形を呈す土壙で、土壙西部は後世の基盤のズレによって生じたものである。規模は長さ約1.3ｍ、推定幅70cm、深さ約60cm、床面積0.76㎡を測る。土壙壁はほぼ垂直に下がり、底部は平坦な面をなす。堆積層の多くに土塊が混じり、これとともに石錐Ｓ119、刀子？M31をはじめ、土器片1104～1116が出土した。口縁が拡張する甕1104～1106や外反する高杯1111、短脚の高杯1114などの特徴から、当土壙は上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰ併行期に廃棄されたものと考えられる。



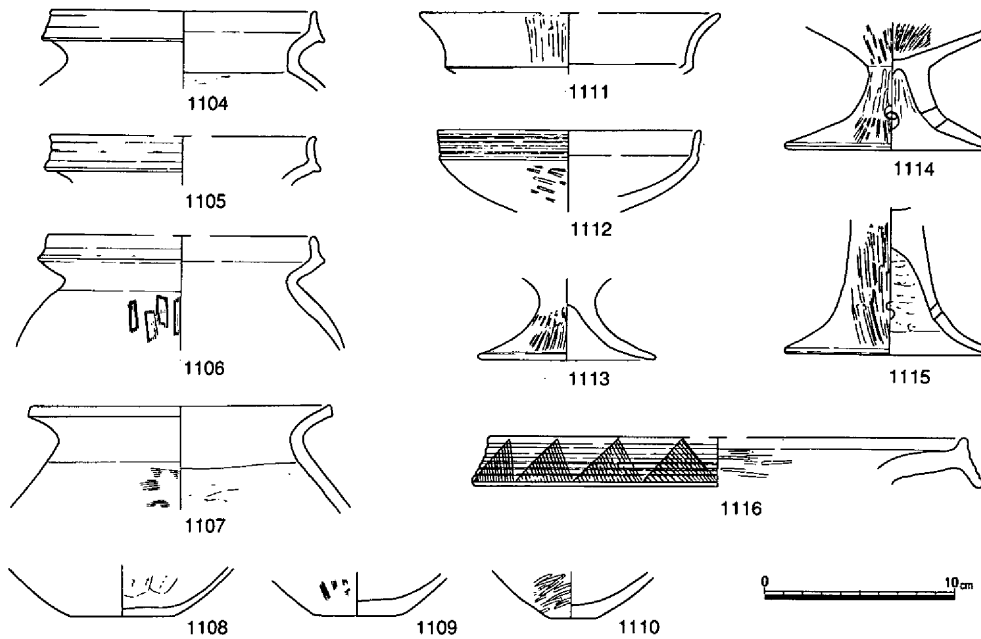
第258図　土壙76（1/30）



第259図　土壙76出土遺物（1/4）



第260図　土壙77（1/30）・出土遺物①（1/2）



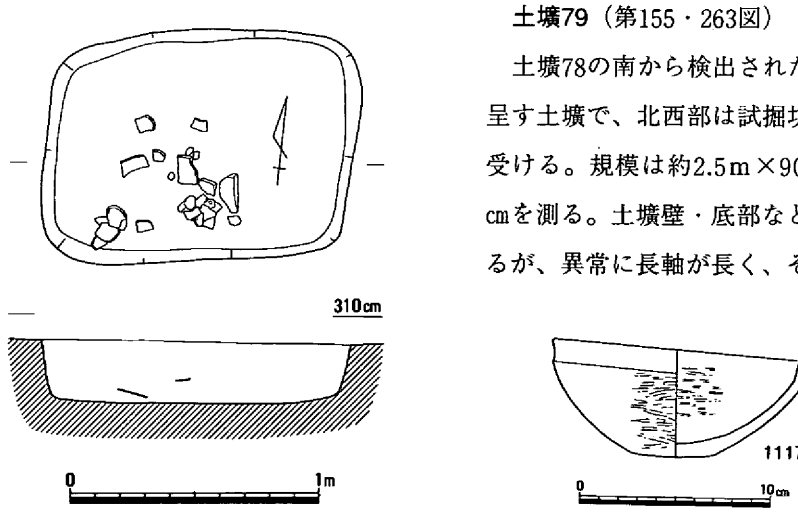
第261図　土壙77出土遺物②（1/4）

土壙78（第155・262図）

3Bd区、土壙77の南西に位置する平面長方形の土壙で、東西に長軸を向ける。規模は長さ約1.1m、幅90cm、深さ24cm、床面積0.88㎡を測り、この種の土壙としては小規模のものである。壁の傾斜は急で、平坦な面をもつ底部は貼床状に締まっていた。遺物は礫に混じって壺、甕、鉢1117などの破片が出土し、これらの土器は上東・鬼川市Ⅲ～才ノ町Ⅰの特徴を示す。

土壙79（第155・263図）

土壙78の南から検出された平面長方形を呈す土壙で、北西部は試掘坑による崩壊を受ける。規模は約2.5m×90cm、深さ約27cmを測る。土壙壁・底部など上記土壙に似るが、異常に長軸が長く、それらとは機能

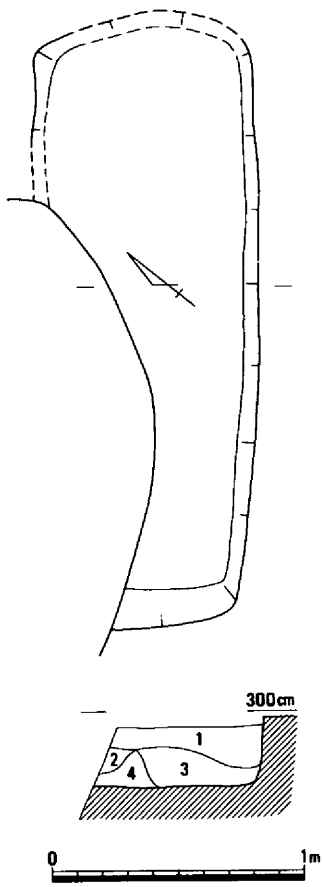


第262図　土壙78（1/30）・出土遺物（1/4）

を別にするものと思われる。遺物は土器細片が出土するのみであったが、弥生時代後期後半の範疇のものと思われる。

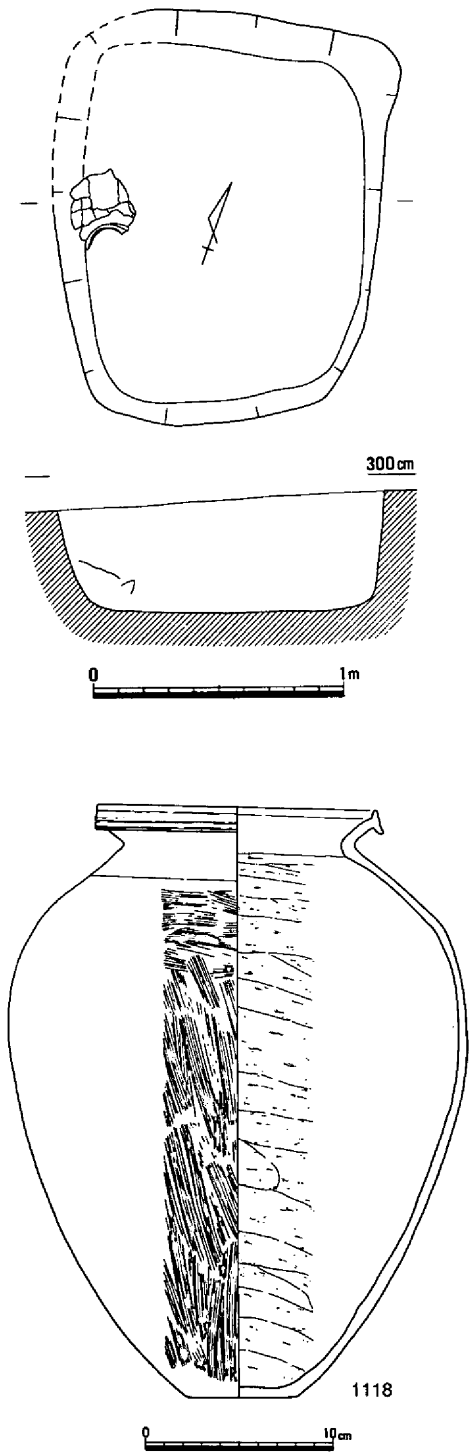
土壙80（第155・264図、写真図版124・157）

土壙79の南に位置する平面不整長方形を呈する土壙である。規模は長さ1.65m、幅1.3m、深さ45cm、床面積1.53㎡を測る。土壙壁の傾斜は急で、底部は平坦な面をなす。埋土は黄色粘質土塊を多く含む茶灰色粘質土であった。



1．暗茶灰色砂質土　3．暗茶灰砂質土
2．茶灰色砂質土　（含、黄色粘土小塊）
4．黄灰色粘質砂

第263図　土壙79（1/30）



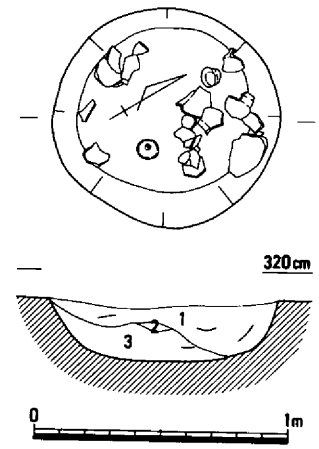
第264図　土壙80（1/30）・出土遺物（1/4）

遺物は土壙西壁際から甕1118が出土したのをはじめ、壙内からは高杯、台付鉢などが出土しているが、いずれも破片であった。甕は口縁端部が上下に拡張し、拡張面には凹線状のヨコナデを施す。胴部下半はやや膨らみ気味に底部にいたっている。上東・鬼川市Ⅲ～才ノ町Ⅰにかけてのものであろう。

土壙81（第155・265図、写真図版125）

土壙80の北西に位置する平面円形を呈す土壙である。径約90cm、深さ24cmを測る。埋土は上層に炭を、下層に土塊を含むもので、中位からは粘土塊を確認した。遺物は埋土とともに廃棄された状態で出土した。

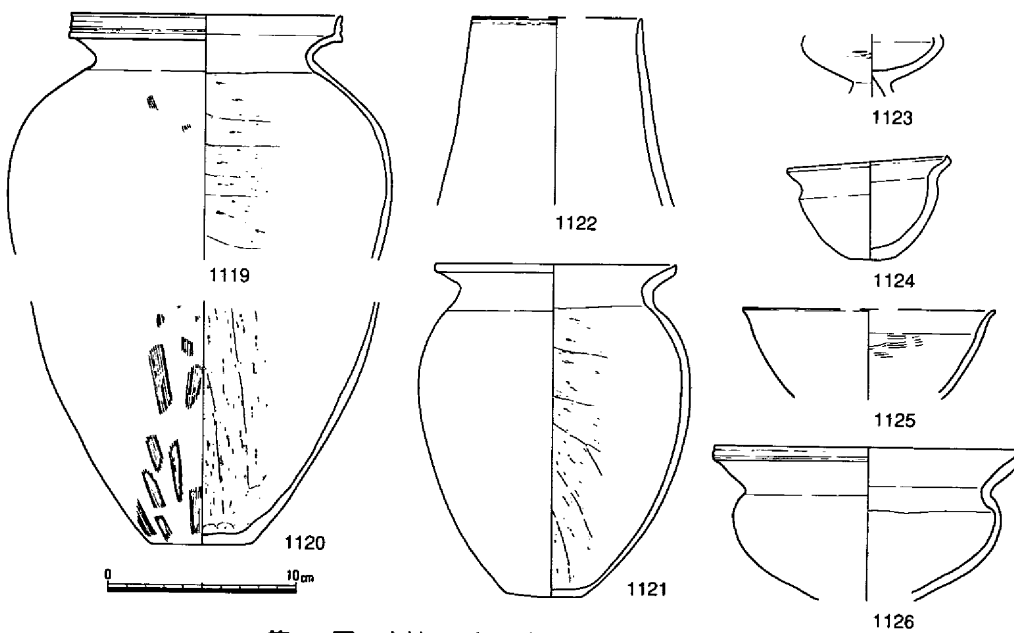
遺物は甕、直口壺、鉢などがあり、甕には口縁端部が上方に拡張する1119や、胴部下半が膨らみ気味に底部にいたる1121がある。これらの土器は上東・鬼川市Ⅲ～才ノ町Ⅰにかけての特徴を示す。（江見）



1．暗茶褐色粘質土
（混、炭）
2．灰色粘土
3．茶褐色粘質土
（混、黄色粘土小塊）

土壙82（第155・266図）

３Ｂｂ区において検出された長軸長2.18m、幅1.69mで検出面からの深さ約48cmを測る土壙である。断面は、検出面からほぼ垂直に落ちる壁を有するもので、長方形土壙と



第265図　土壙81（1/30）・出土遺物（1/4）

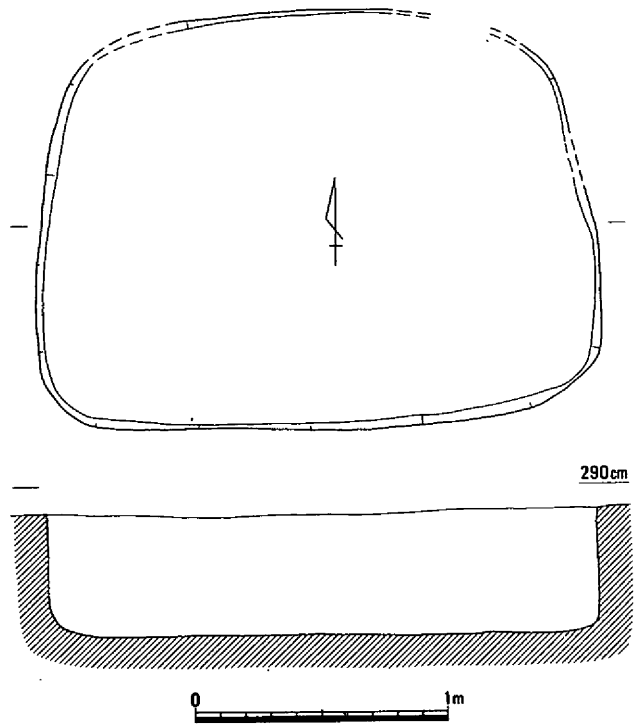
して認識される。

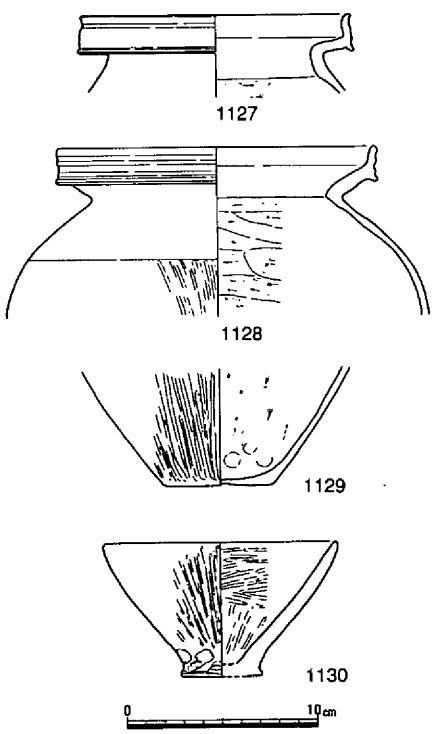
壙内は、複数の土層で埋積した状況でなく壙底から検出面まで同一の土砂による埋積状況が確認された。

出土遺物としては、覆土中から甕、鉢等土器の小片が散見された程度であった。

土器は、甕の口縁端部を長く上方に拡張させるもので、型式的にはオノ町Ⅰ併行段階と見られる。

時期は、土器の型式によっておよそ弥生時代後期後半へ位置づけて差支えないものと考える。



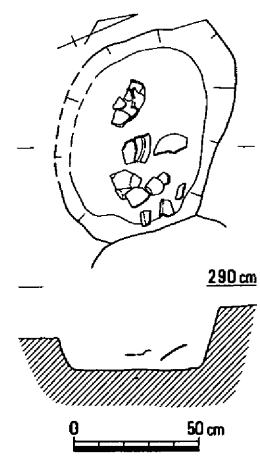


第266図　土壙82（1/30）・出土遺物（1/4）

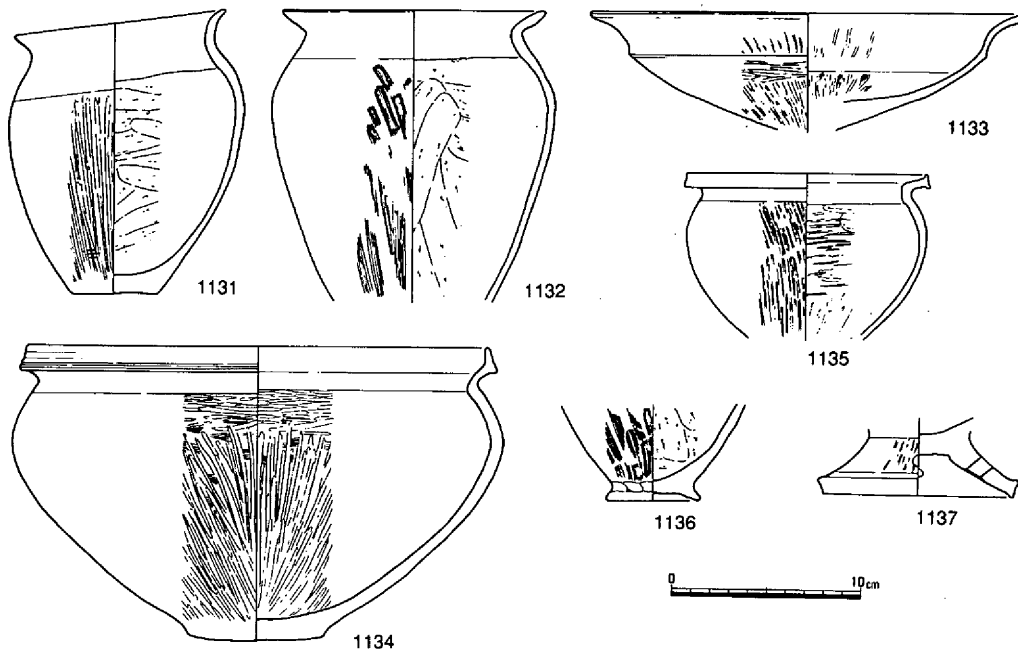
土壙83（第155・268図）

４Ｂｃ区において海抜約2.85ｍで検出された平面楕円形を呈する土壙である。

壙内からは、土器の出土が少量確認された。



第267図　土壙83（1/30）

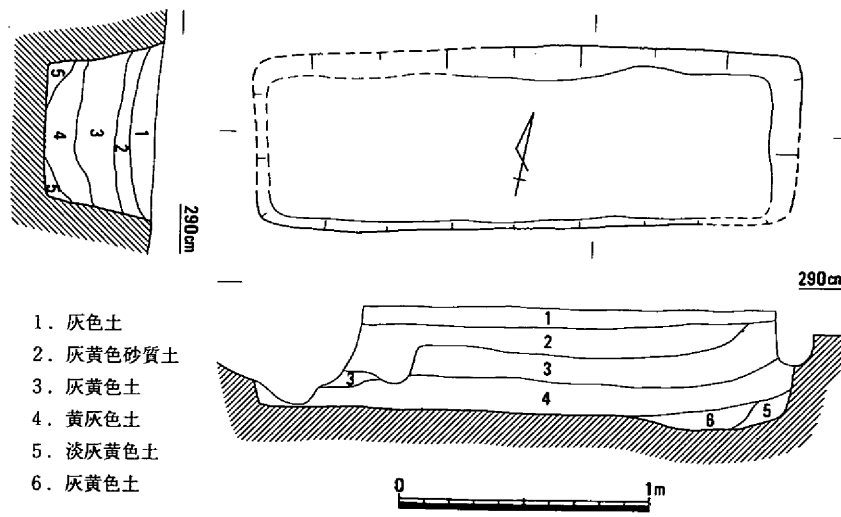


第268図　土壙83出土遺物（1/4）

土器には、甕、高杯、鉢等の器種が認められ、鉢1134の口縁部の在り方から、後期後半に位置づけられた。

土壙84（第155・269図）

４Ｂｃ区で土壙83の北約40cmの地点に隣接して所在する。長軸長2.16m、幅72cm、深さ44cm



第269図　土壙84（1/30）

の規模を測り、平面長方形を呈する土壙であった。壁は、肩から壙底までほぼ垂直気味に落ちるもので、断面逆台形であった。土壙の平面および断面等の形状から土壙墓としての可能性が推測されるが、壙内の形状および断面の状況等には木棺痕跡を物語るものは確認されなかった。

出土遺物が検出されなかったことで時期についての詳細は言及できないが、古墳時代前半の土壙100との切り合い関係等により、およそ弥生時代後期後半への位置づけが推測されよう。

土壙85（第155・270図）

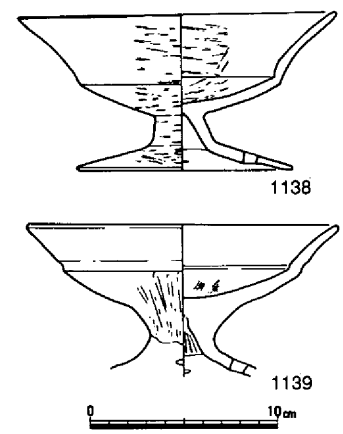
４Ｂｃ区において土壙84の東50cmの地点に近接して検出された。平面の長軸長1.95m、幅80cm、深さ25～30cmの規模を測る土壙で、平面形は長楕円形を呈した。土壙84同様にこれも土壙墓としての可能性が想起されるが、壙底および断面からは判然としない。

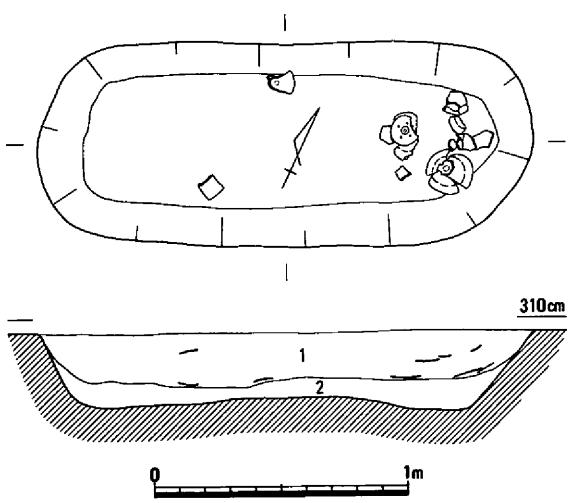
壙内は、大きく２層に分層され、上層に多く遺物の遺存が認められた。時期的には、才ノ町Ⅰ併行と推測され、後期後半に比定されよう。

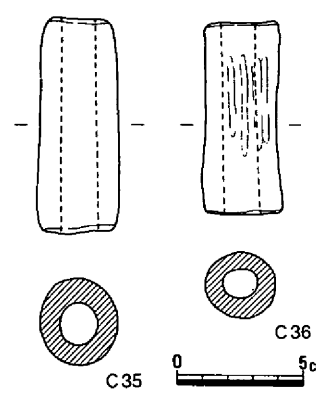
土壙86（第155・271図）

４Ｂｄ区で土壙85の南約３ｍに近接して検出された。東西1.16m、南北88cm、深さ13cmの規模を測り、平面長方形を呈する土壙である。

出土遺物は、少量であるが壙内西側において土器が検出された。細部の遺存状態が不良で判然としないが、壺の状況から後期後半の範疇に比定して差支えないものと考える。（島崎）







1．黒灰色土　2．灰黄色土（混、灰色土・黄色粘土塊）

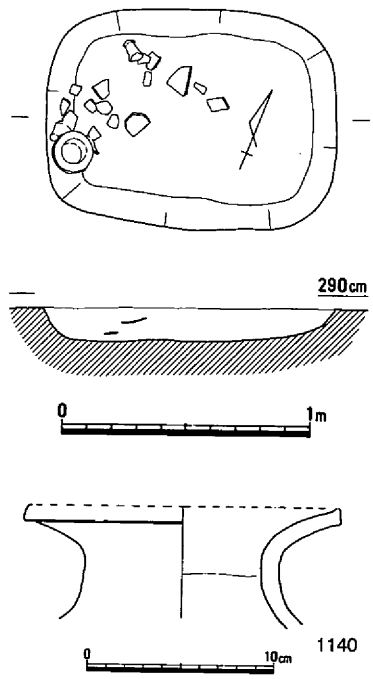
第270図　土壙85（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土壙87（第155・272・273図、写真図版125）

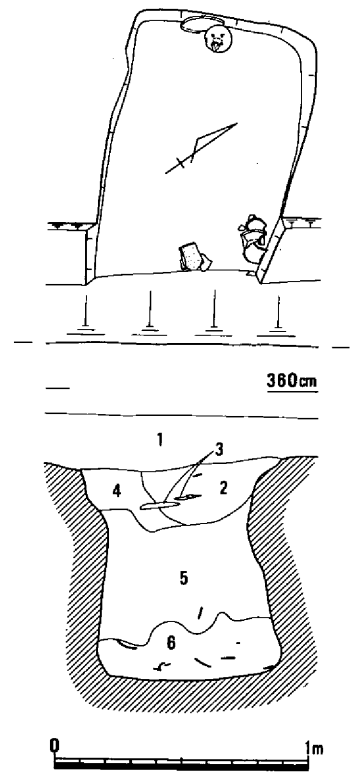
４Ｂｂ区、竪穴住居43の西に位置し、土壙南東部は調査区境にあたり、明瞭に出来なかった。平面長方形を呈し、推定長1.5m前後、幅約70cm、深さは断面位置で約90cmを測る。壁はほぼ垂直に下がり、特に断面位置においては上部が崩れるとともに、壁は後期前半にみられた袋状土壙のように、下半が抉られた状況が窺えた。埋土には多くの焼土塊・炭粒、土塊が混入していた。土器はいずれも破片で、主に底部付近から廃棄された状態で出土している。

出土土器には甕・高杯・鉢などがあり、甕1141は口縁端が上方に拡張するもので、高杯1143は口縁が外半し、1144のそれは直立し、外面に凹線を巡らしている。また、高杯の脚柱部も短脚の1145と、やや長い1146がある。なお、高杯はいずれも精製された粘土で作られており、水漉粘土ではない。

以上、当土壙は断面形態が袋状土壙に似るものの、底部の平面形が長方形を呈する例はなく、当遺跡に多くみられる長方形土壙の部類に入るものと判断されるとともに、その廃棄時は上東・鬼川市Ⅲ併行期と考えられる。

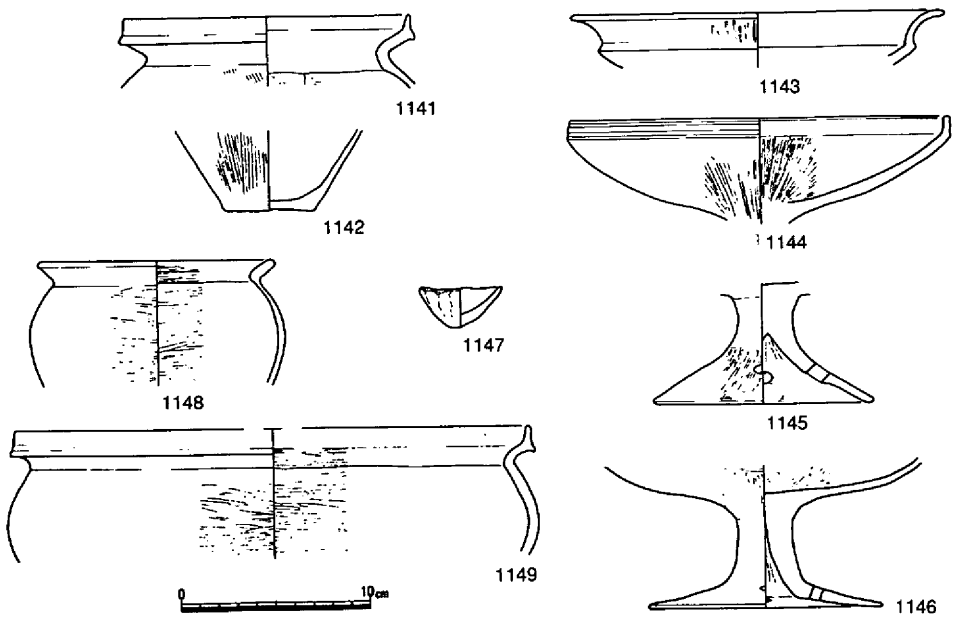


第271図　土壙86（1/30）・出土遺物

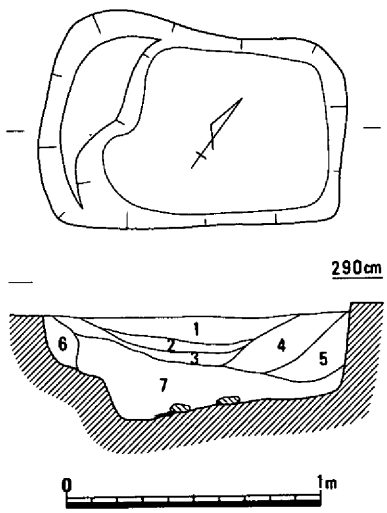


1．暗灰褐色砂質土
（含、焼土塊・炭粒）
2．淡暗灰褐色粘質土
（含、黄色斑・焼土塊・炭粒）
3．灰黒色炭層
4．暗灰褐色砂質土
（含、焼土塊・炭粒）
5．淡暗茶灰褐色粘質微砂
（含、黄色斑・焼土塊・炭粒）
6．黒灰褐色砂質土
（含、炭粒・焼土塊多土器多し）

第272図　土壙87（1/30）



第273図　土壙87出土遺物（1/4）



1．灰茶色粘質砂
2．暗灰色粘質砂（混、炭）
3．茶褐色粘質土
4．灰茶色粘質土（含、炭多）
5．黒灰色粘質土（含、炭多）
6．灰茶色粘質土
7．灰茶色粘質土（含、炭多）

第274図　土壙88（1/30）

土壙88（第155・274・275図）

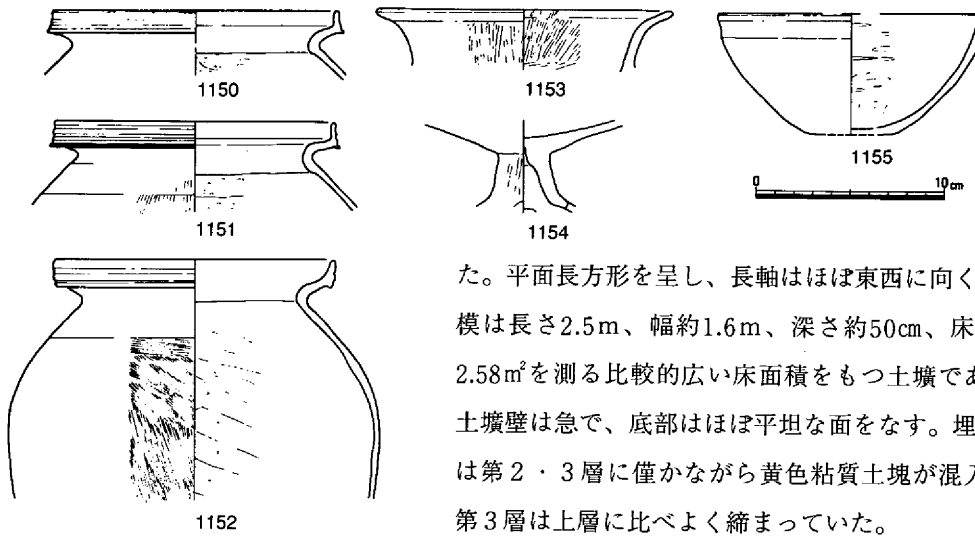
５Ｂｄ区の北西に位置する平面不整長方形の土壙である。長さ1.2m、幅75cm、深さ30～40cmを測る。土壙西部にやや平坦な段をなし、底部は西から東方向に傾斜している。土壙壁は西部を除きほぼ垂直に下がっていた。埋土には炭を包含する層が多く、遺物はこれらに混じって土器片および小礫が出土した。

土器は甕、高杯、小型鉢などが出土している。甕はいずれも口縁が上方に拡張するもので、1152はやや開き気味である。高杯1153の口縁は屈曲気味に外反する。

以上、これら土器の特徴は上東・鬼川市Ⅲの範疇のものと考えられる。

土壙89（第155・276・278図、写真図版126・157）

５Ｂｄ区の北端、土壙88の北に位置し、竪穴住居20を一部切り、中世の柱穴に切られて検出され

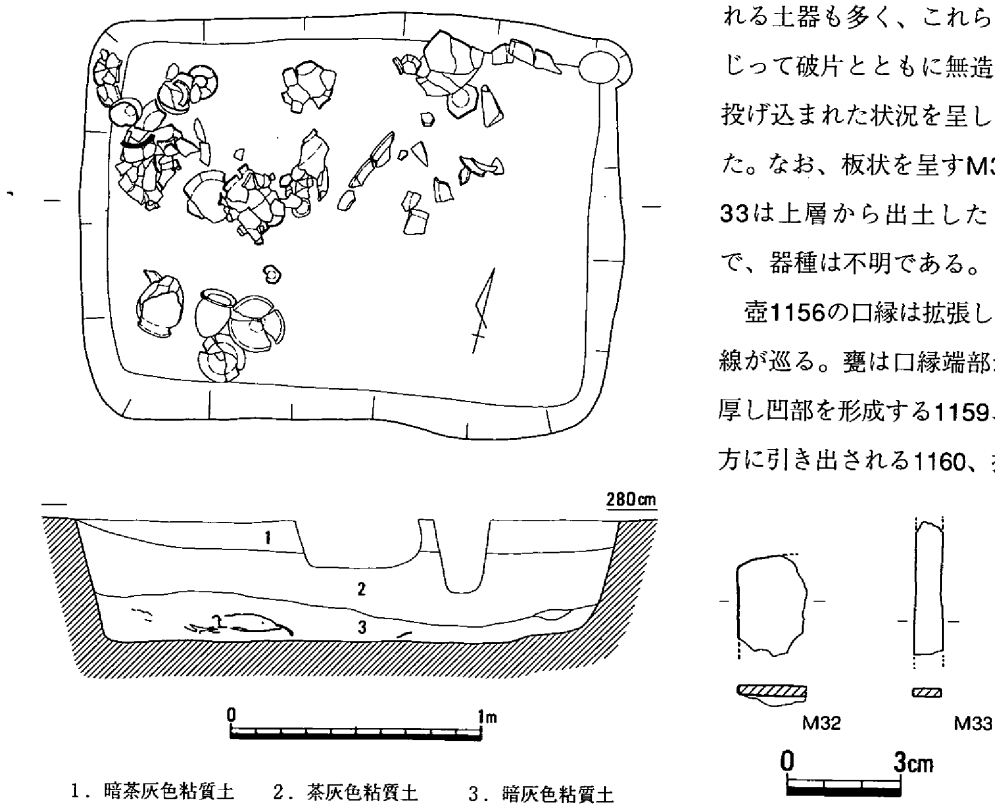


第275図　土壙88出土遺物（1/4）

た。平面長方形を呈し、長軸はほぼ東西に向く。規模は長さ2.5m、幅約1.6m、深さ約50cm、床面積2.58㎡を測る比較的広い床面積をもつ土壙である。土壙壁は急で、底部はほぼ平坦な面をなす。埋土には第２・３層に僅かながら黄色粘質土塊が混入し、第３層は上層に比べよく締まっていた。

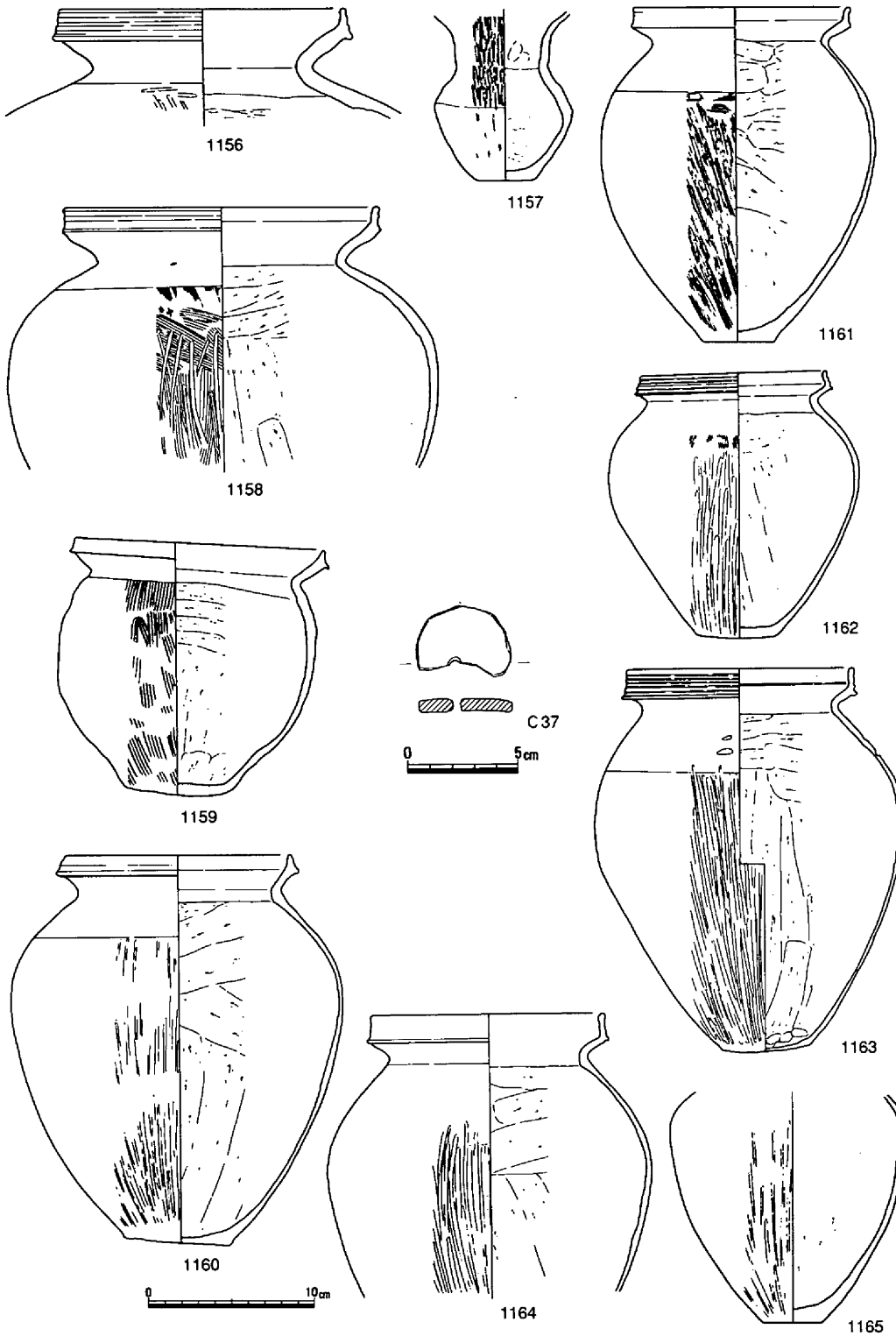
遺物は主に第３層下部から出土しているが、完形の甕1159をはじめ復元完形される土器も多く、これらに混じって破片とともに無造作に投げ込まれた状況を呈していた。なお、板状を呈するM32・33は上層から出土したもので、器種は不明である。

壺1156の口縁は拡張し、凹線が巡る。甕は口縁端部が肥厚し凹部を形成する1159、上方に引き出される1160、拡張

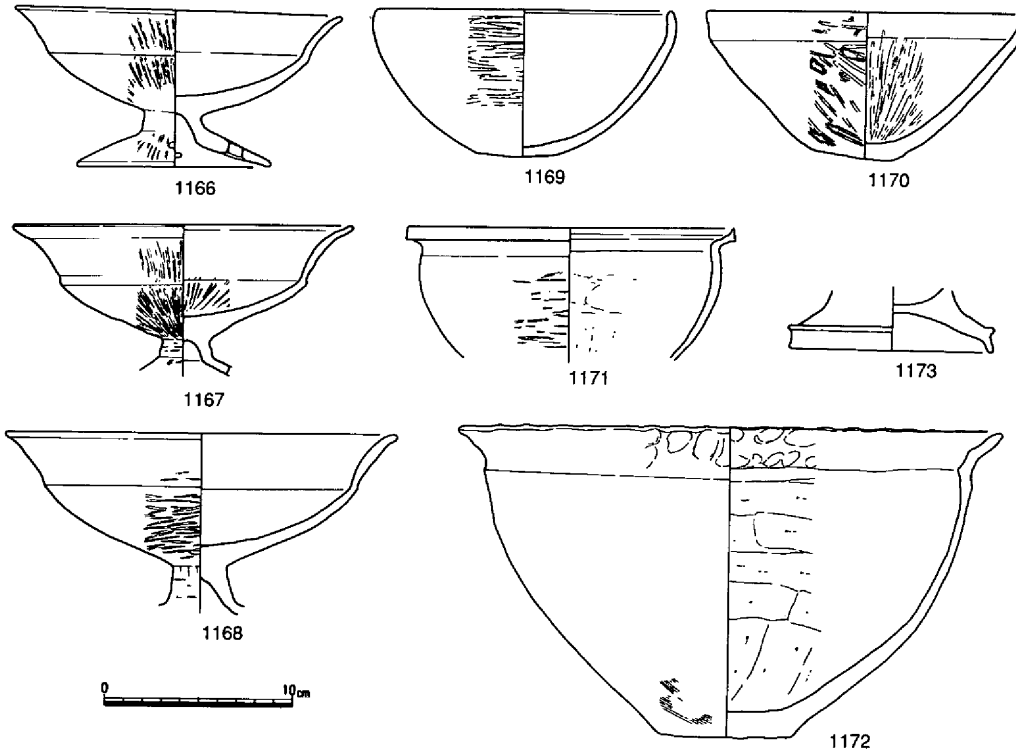


1．暗茶灰色粘質土　2．茶灰色粘質土　3．暗灰色粘質土

第276図　土壙89（1/30）・出土遺物①（1/2）



第277図　土壙89出土遺物②（1/4・1/3）



第278図　土壙89出土遺物③（1/4）

される1161～1164がある。また、1162・1163の拡張面には数条の凹線を巡らせており、1163の器壁は薄く、底部内面に指頭圧痕が残り、肩部には２か所に刺突がなされている。高杯はいずれも水漉粘土で作られており、口縁は外反し、やや深い杯部に短脚をなす。鉢は小型の1169～1171と雑な作りの1172がある。なお、下層からは紡錘車Ｃ37も出土している。

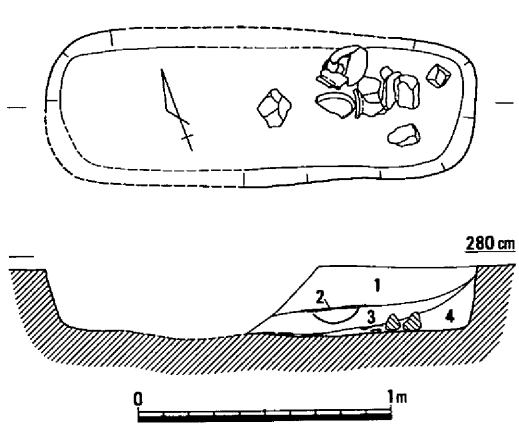
以上、当土壙は上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰ併行期に廃絶したものと考えられる。

土壙90（第155・279図、写真図版126）

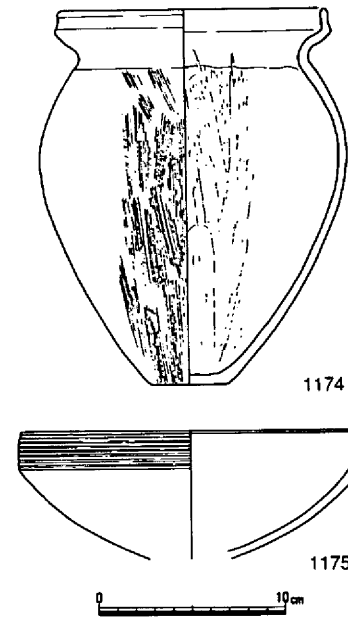
５Ｂｂ区、竪穴住居48の南に位置し、北西部を土壙113に切られて検出された平面長方形の土壙である。長さ1.7m、幅65cm、深さ27cmを測る。土壙壁は急で底部は平坦である。残存する東部床面からは10cm前後の礫が、やや浮いた位置から甕、高杯などが出土した。これらの土器は上東・鬼川市Ⅲ～オノ町Ⅰ期の特徴を持つ。（江見）

土壙91（第155・280図）

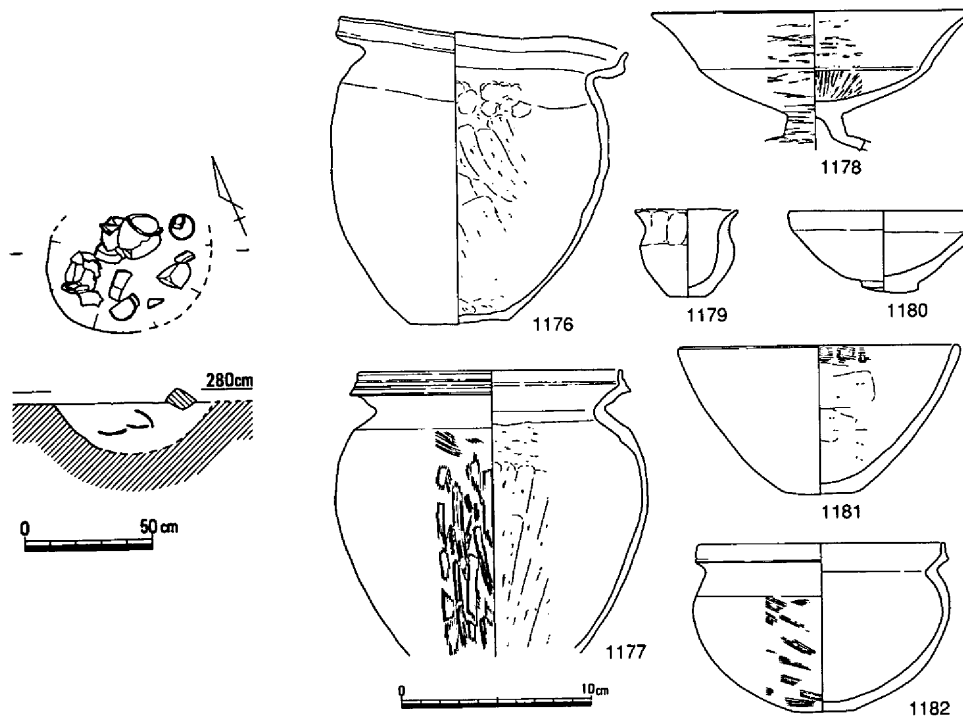
７Ｂｂ区において弥生時代後期前半の竪穴住居22・23によって挟まれるかのように、その北東および南東の一部が切られた状態で検出された。規模は、本来の形状が不明であるがおよそ東西70cm、南北60cm程が推測された。深さは、平面検出面から約20cmを測り、断面皿上を呈す



1．灰色土　　3．灰黄色土
2．灰黄色砂質土　　4．黄灰色土



第279図　土壙90（1/30）・出土遺物（1/4）



第280図　土壙91（1/30）・出土遺物（1/4）

るものであった。

壙内には、土器と自然石の遺存がみられ、土壙の規模に比較して土器の遺存率が高かった。

土器には、甕、高杯、鉢などの器種が確認された。型式的にはいずれの器種も才ノ町Ⅰ併行と考えられた。時期は弥生時代後期後半に比定されよう。（島崎）

土壙92（第155・281図）

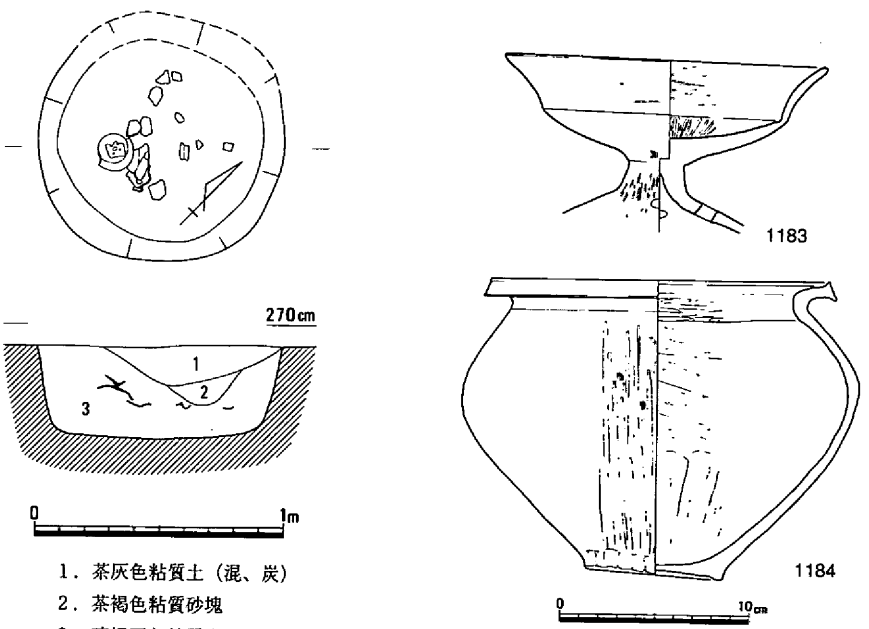
７Ｂａ区の南方に位置し、一部土壙196に切られて検出された平面円形の土壙である。径約１ｍ、深さ36cmを測り、下層から高杯・甕などの破片が出土した。**1183**は短脚で外反する口縁をもち、**1184**の口縁は端部が肥厚し、底部が上げ底を呈すものである。甕の特徴はやや古い様相を示すが高杯の形態から、当土壙は上東・鬼川市Ⅲ～才ノ町Ⅰ期に廃絶したものであろう。

土壙93（第155・282図）

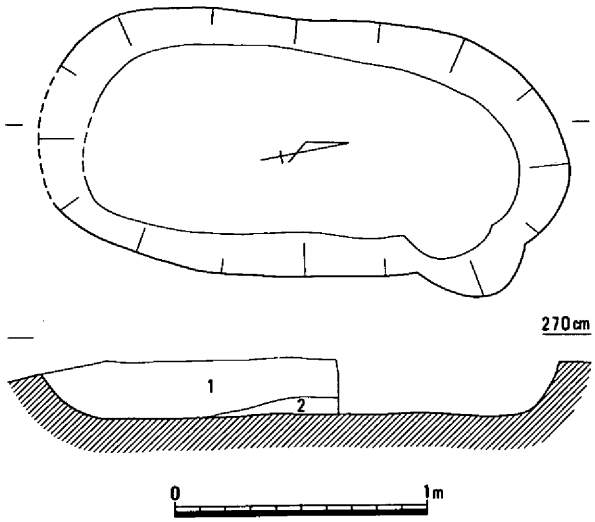
土壙92の南に位置する平面楕円形の土壙である。長軸は南北方向に向き、長さ約2.1ｍ、幅約１ｍ、深さ20cmを測る。壙内から後期後半と判断される土器細片が出土している。

土壙94（第155・283図）

７Ｂｄ区、土壙93の南に位置する平面楕円形の土壙である。長軸は東西に向き、長さ約1.2ｍ、幅約90cm、深さ40cmを測る。埋土に炭焼土が混入し、これらとともに後期後半と判断される土器細片が出土している。（江見）

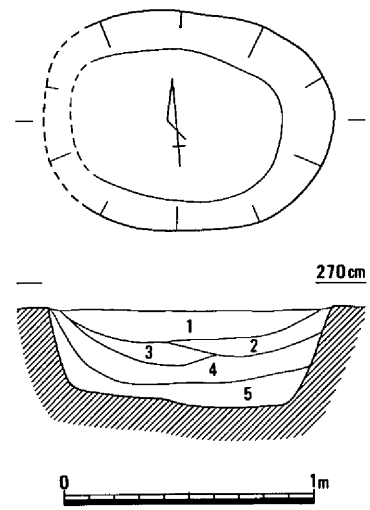


第281図　土壙92（1/30）・出土遺物（1/4）



1．茶灰褐色粘質砂
2．灰茶褐色砂

第282図　土壙93（1/30）



1．灰茶色粘質砂（炭粒含）
2．灰茶色粘質砂
3．黄茶褐色砂（焼土混）
4．茶灰褐色粘質土
5．灰茶褐色粘質土

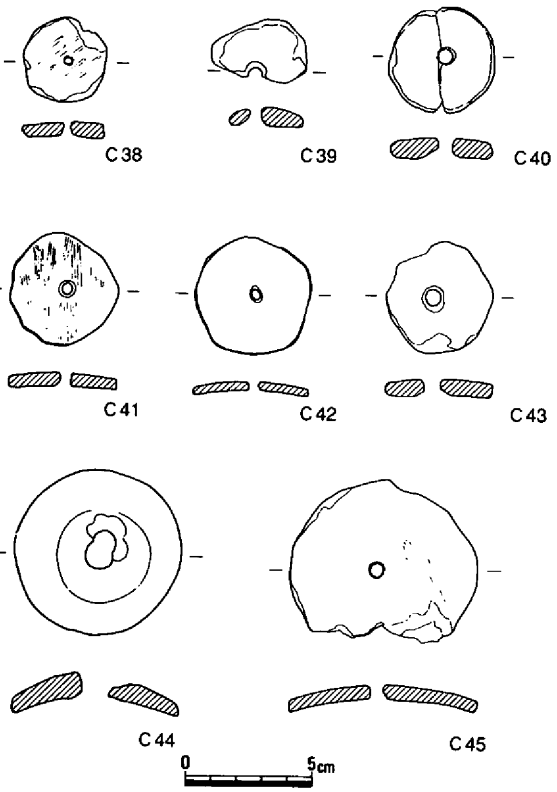
第283図　土壙94（1/30）

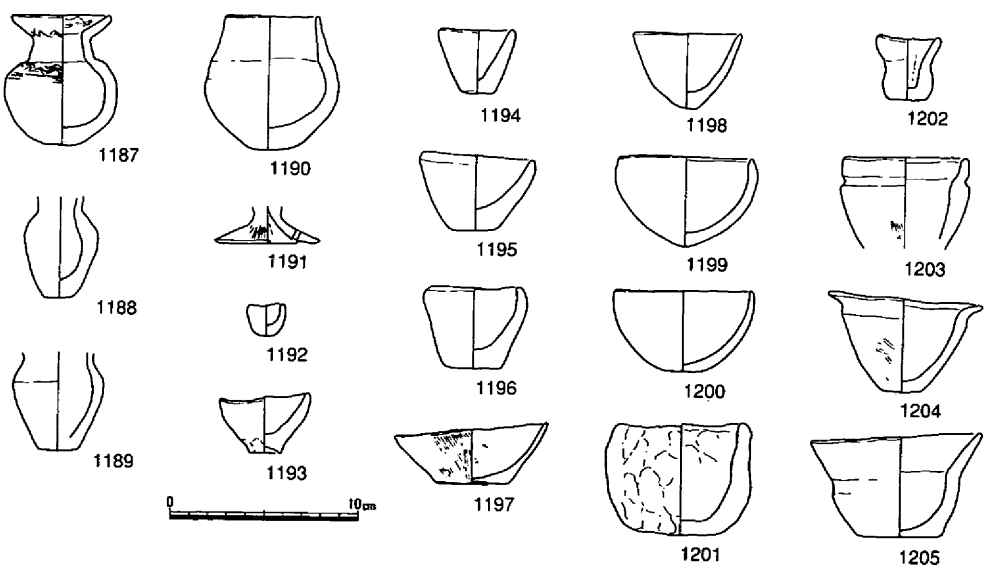
(4)　包含層遺物

蓋は遺跡全体から９点出土しており、その内訳は弥生時代後期前半２点、同後半６点、古墳時代前半１点である。1185は５Ｂｄ区から出土したもので、つまみから上半は指頭圧およびナデ、裾部をヨコナデしているやや雑な作りである。底部径は10.6cmを測り、これを被せる容器は比較的小型なものに限られるであろう。1186は２Ｂａ区から出土したもので、水漉粘土で作られたシャープな印象を与える。つまみの上部は凹み、全体の調整は器表面が磨滅しているため不明瞭である。底部径は17cmを測り、1185とは逆にこれに対応する容器は大型の器種でないと収まらないと思われる。

ミニチュア土器は遺跡全体から80点余りが出土しており、その内訳は弥生時代50点余り、古墳時代10数点、それに当項記載の弥生～古墳時代にかけての1187～1205の18点である。ミニチュア土器については小型・手捏などその理解に微妙な相違が認められ、当遺跡では容器としての本来の用途を果たさない小型のものや、作りが稚拙で、通常みられる器種形式から逸脱しているものをこれに当てた。なお、鉢類については特に判別しにくく、今後の判断に任せたい。ミニチュア壺1187は７Ｂａ区から出土した。水漉粘土で作られており、口縁内外面および肩部

に波状紋、その下に直線紋が巡らされている。1188・1189は弥生時代後期前半、1190は同後半の特徴を示す。1191は４Ｂｂ区から出土した。短脚の高杯をよく模倣しており、裾部外面はヘラミガキがなされ、４カ所に円孔を穿っている。ミニチュア鉢1193～1196・1203・1204は弥生時代、それ以外は古墳時代に含まれるものであろう。　（江見）





第284図　包含層遺物（1/4・1/3）

第４節　古墳時代前半の遺構・遺物

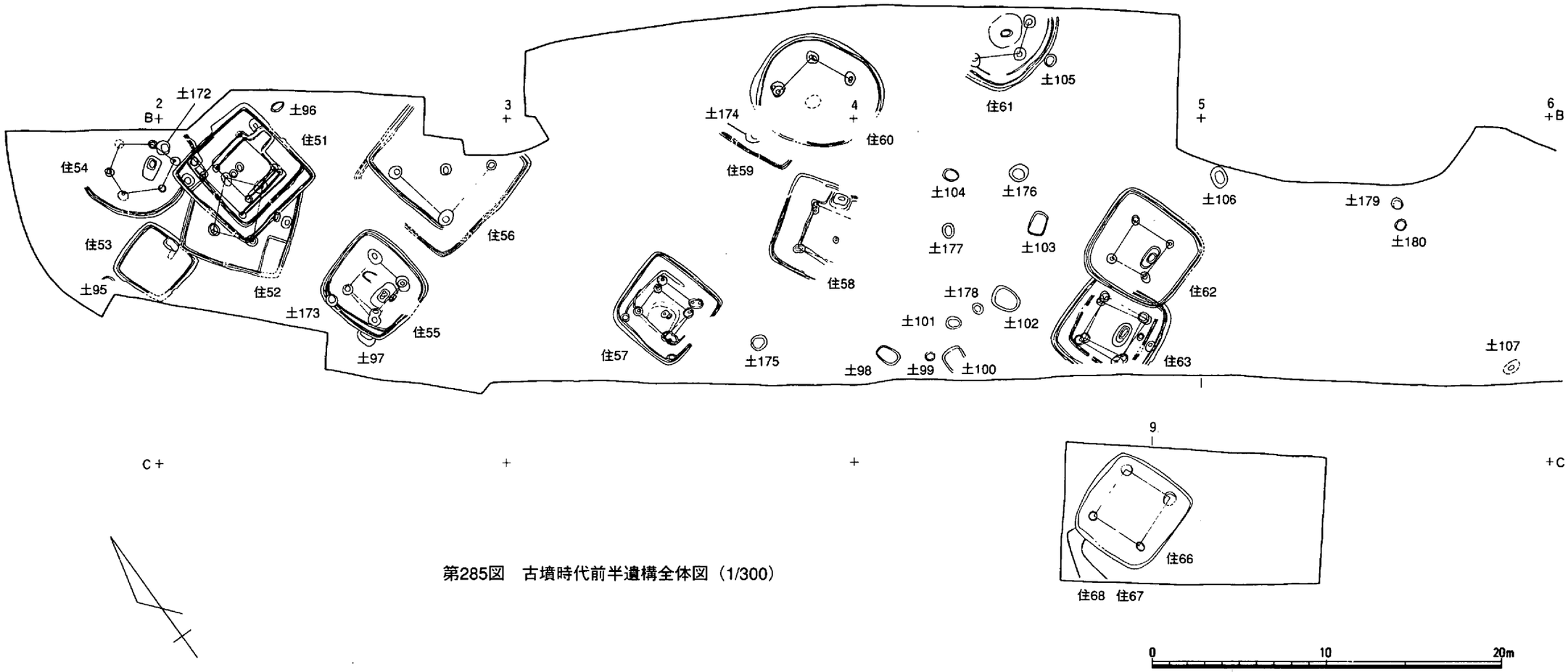
(1) 竪穴住居

竪穴住居51（第285・291図、写真図版127）

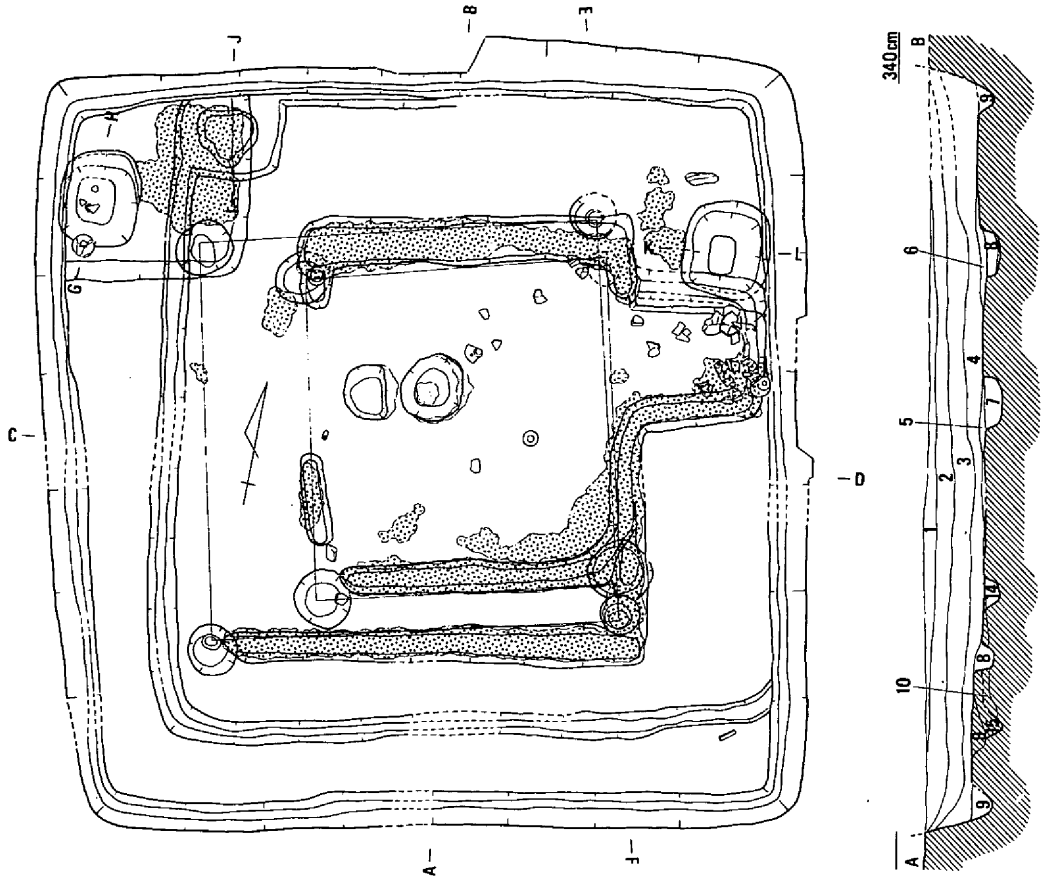
２Ａｃから２Ｂａ区にかけて海抜3.40ｍで検出された。平面は、東西・南北方向に主軸をもった方形プランを呈し、一辺の長軸長６ｍを越える規模を有するものであった。調査の結果、住居は１回建て替えがなされたことが判明しており、それら２軒の住居について以下建て替え前の住居を竪穴住居51Ｂ、建て替え後の住居を竪穴住居51Ａとして概要説明を行う。

竪穴住居51Ａは、長軸長が南北方向で6.30ｍ、短軸長が東西方向で6.10ｍを測る平面方形を呈する住居である。床面は、平面検出面の海抜3.40ｍから約65㎝の深さで検出された。床面には、微地形ながらベッド状の高まりおよびその高まりの変換点が東側と西側、さらに南側いずれも共通して壁体溝から約1.50ｍ前後の範囲でおよそ壁体溝に並行した状態で観察され、さらに東側においては上記３面とは若干異なり中央やや北寄りの地点に平面「コ」字状の区画の存在が確認された。床面精査後の状況としては、それら微地形の変換点には、これに呼応するかの状況で、西側は例外としていずれの部分にも貼床直下に幅約20～30㎝で深さ10㎝前後に掘られた溝状の区画がそれらに対応して検出され、さらにその溝状の中には比較的大きさの揃った約１㎝大程度の小石が砂を混えた状態で入れられてあった。状況から考えて住居内での排水もしくは除湿を狙った暗渠的な性格が推測されたが、この溝状遺構の住居外への伸びはまったく検出されなかった。また、床面北西部のコーナーでは、一辺約1.50ｍの方形範囲に床面より約５㎝程度低い面を形成した後、さらに壁際に南北80㎝、東西60㎝、深さ40㎝を測る小土壙をもった施設の存在が認められた。またこの平坦面には溝状遺構に充填されたのと同規模の小石と砂があたかも面を意識したかのような状況で固められて検出された。おそらく住居内での何等かの施設の一つであったことは間違いないであろう。また、これとは反対側に検出された「コ」字状を呈する高まりの落ちについても下層に砂利で充満された暗渠状の溝と、さらにその周辺においても砂利の面的な広がりの点在箇所も確認され、なおかつ北側にはほとんど溝と接するかの状況で、住居への入り口を推測させる方形土壙の存在が確認された。さらに床面からは、柱穴、中央穴の検出もなされた。柱穴は壁体溝から約1.00～1.50ｍの距離を保ったコーナー部分に４本が深さ50～60㎝の掘り方をもって、また中央穴は床低位面中央部で径45㎝程度のものが東側に被熱面を伴っているのが確認された。

竪穴住居51Ｂは、Ａの床面除去後に検出された住居である。Ａの西と南の壁体溝の内側約70㎝～1.00ｍの地点に壁体溝が検出され、平面規模長軸長5.60ｍ、短軸長5.20ｍを測った。平面的にＢとＡの住居には相似関係が認められた。状況からみておそらく両者間には時間的な隔た

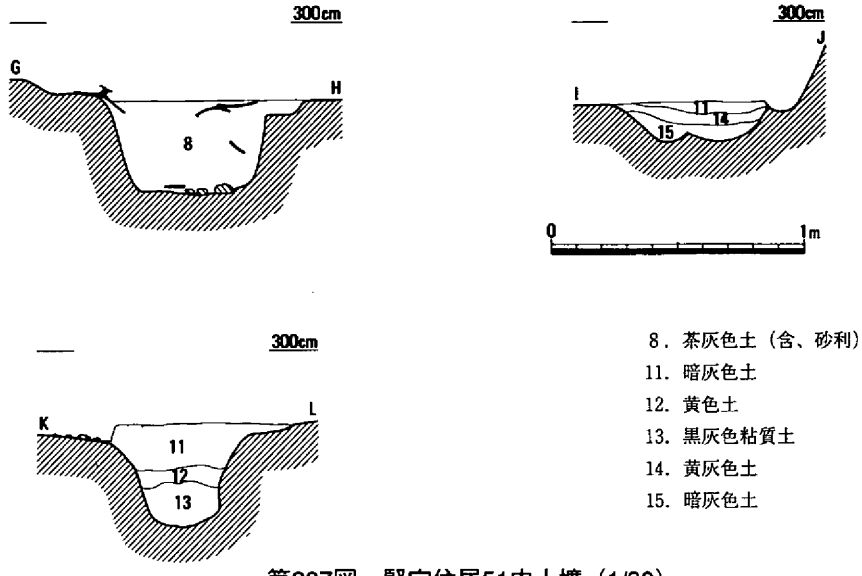


第285図　古墳時代前半遺構全体図（1/300）



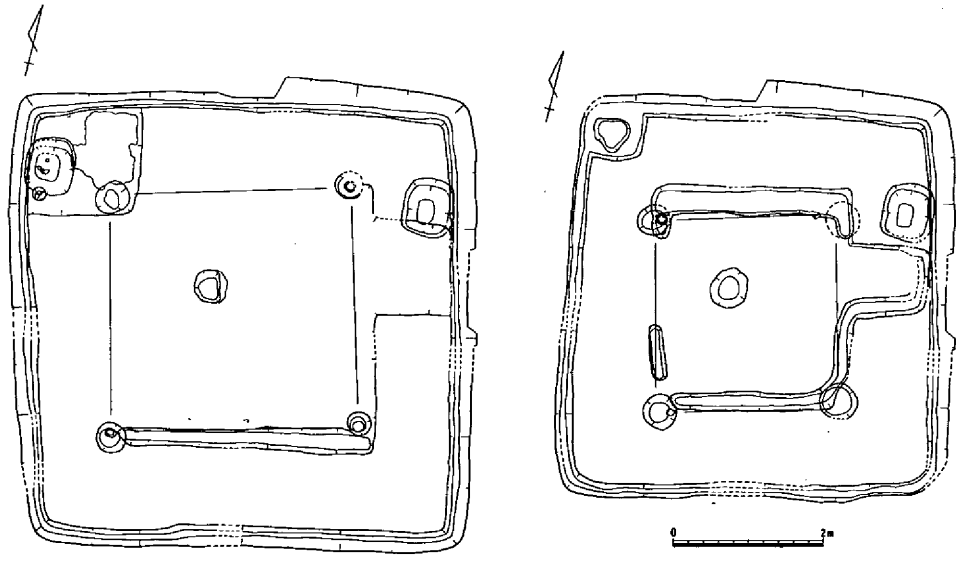
1．淡茶黄色砂質土
2．茶灰色土
3．暗灰茶色土
（含、黄色塊）
4．暗灰色土
（含、炭）
5．黄灰色土
（含、黄色土・焼土）
6．暗灰茶色土
7．黄灰色土（含、炭、
底部に焼土・炭）
8．砂利層、茶灰色土
9．暗灰色土
10．（暗）灰黄色土
（暗灰色土に黄色塊入る）
11．暗灰色土
12．黄色土
13．黒灰粘質土
14．黄灰色土
15．暗灰色土

第286図　竪穴住居51（1/60）

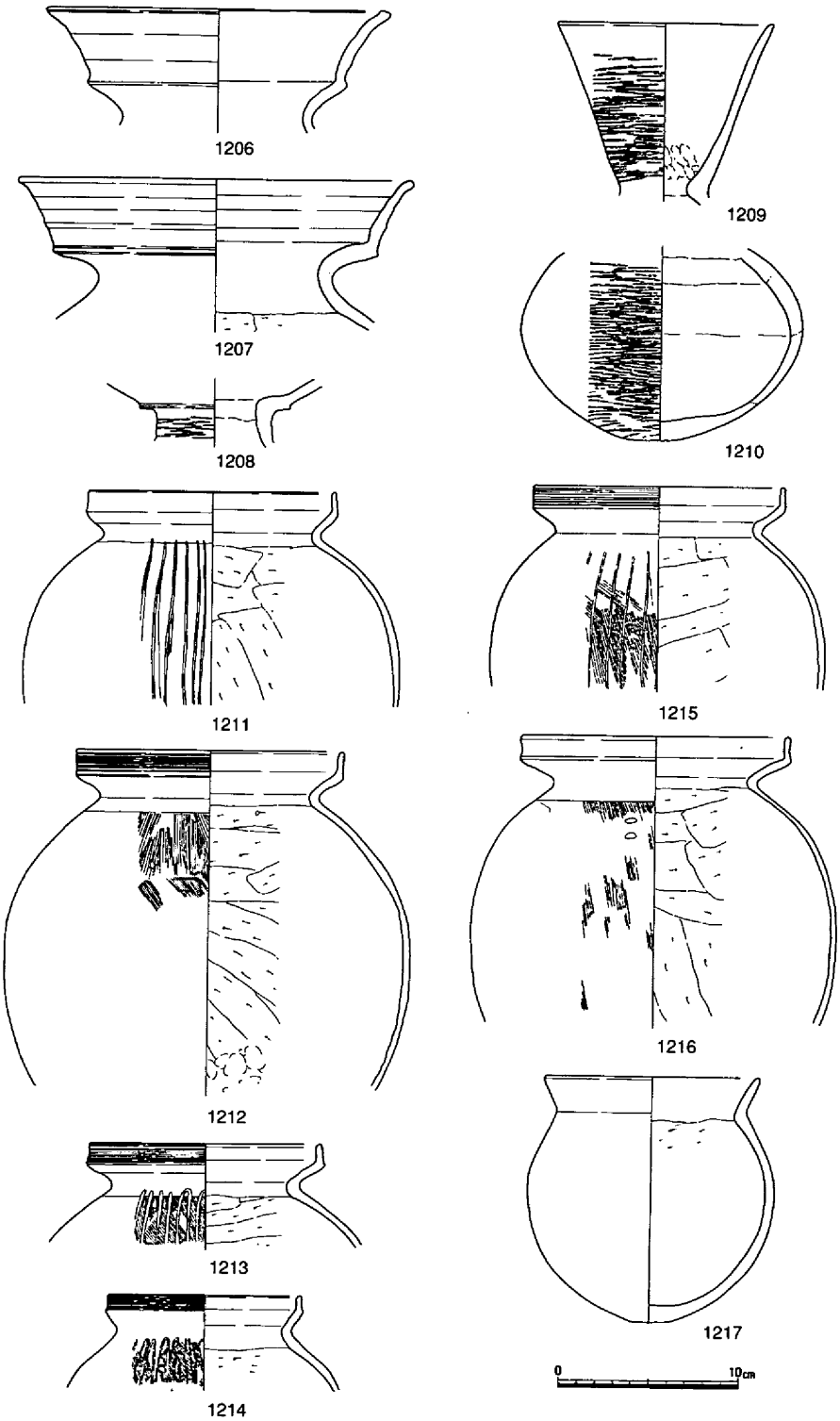


第287図　竪穴住居51内土壙（1/30）

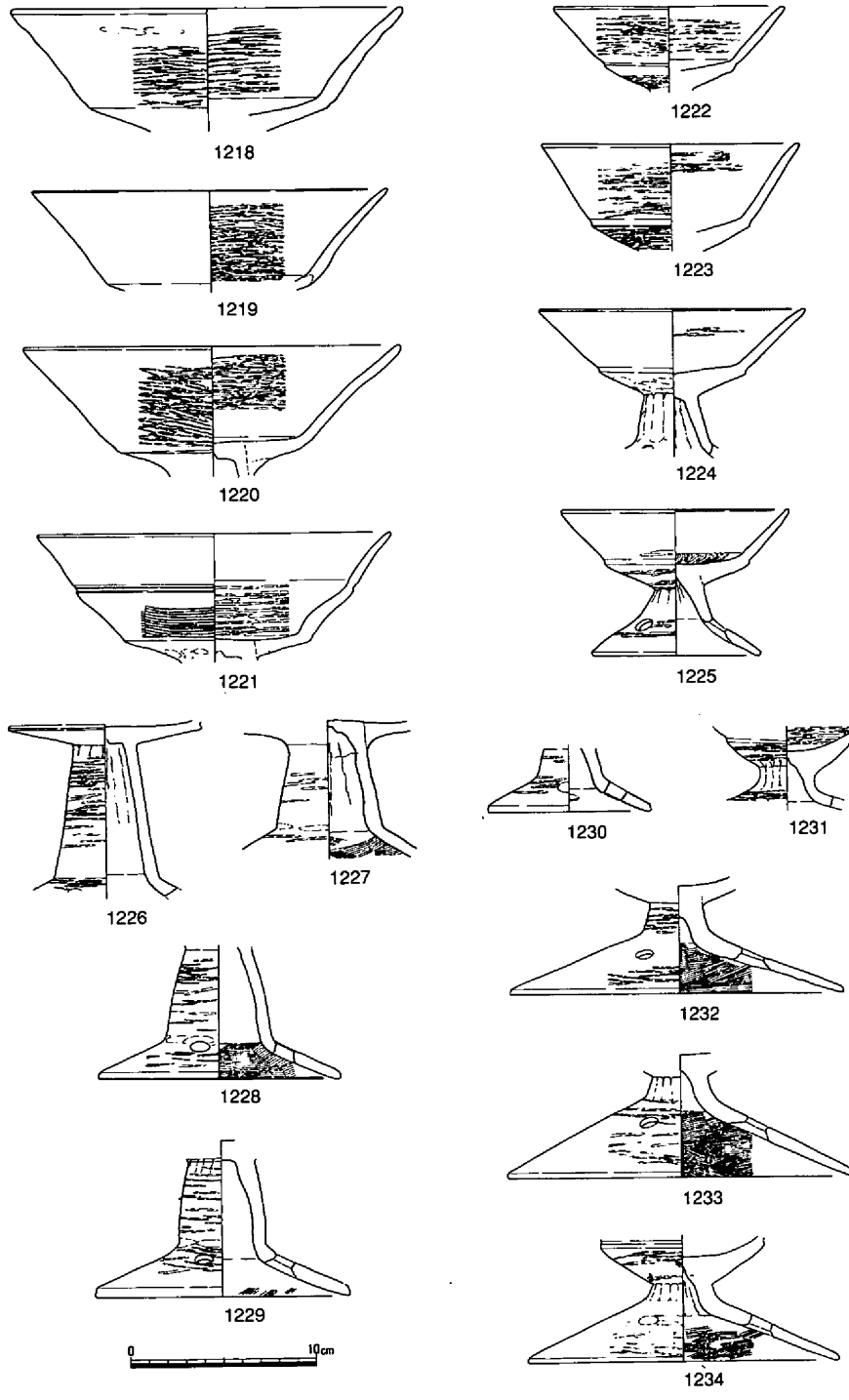
りはほとんどなかったものと推測される。すなわち、竪穴住居51Ａは、竪穴住居51Ｂの北東部分の方形土壙と「コ」字状部分、さらに北と東側の壁を活かした状態で西・南方向への拡張を行ったものとみられ、おそらく両住居に共通した施設と考えられる。また、柱、壁体溝、中央穴、砂利で充満された溝、北西隅の土壙等をはじめとする住居構造についても共有施設を中心



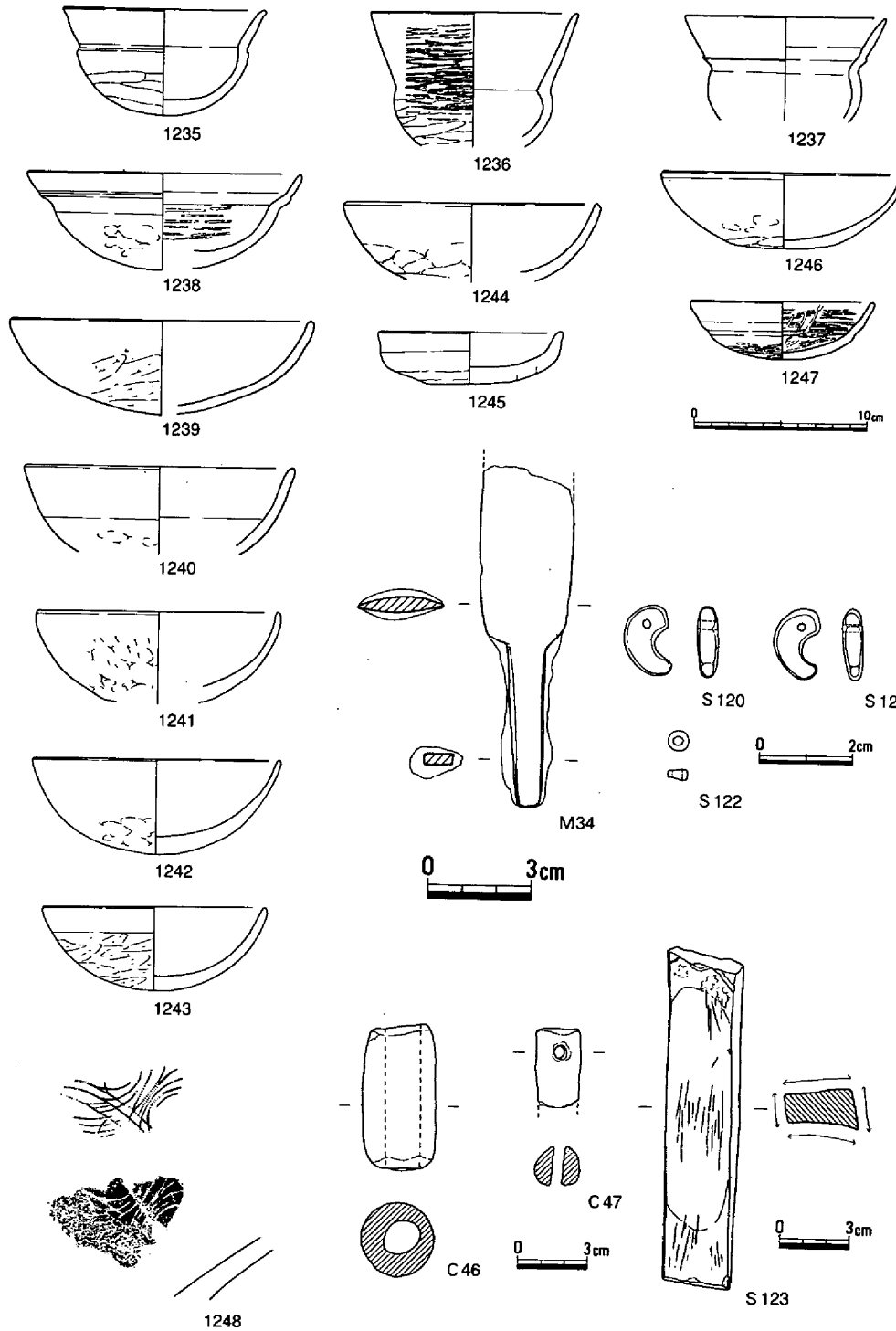
第288図　竪穴住居51Ａ（左）・51Ｂ（右）（1/100）



第289図　竪穴住居51出土遺物①（1/4）



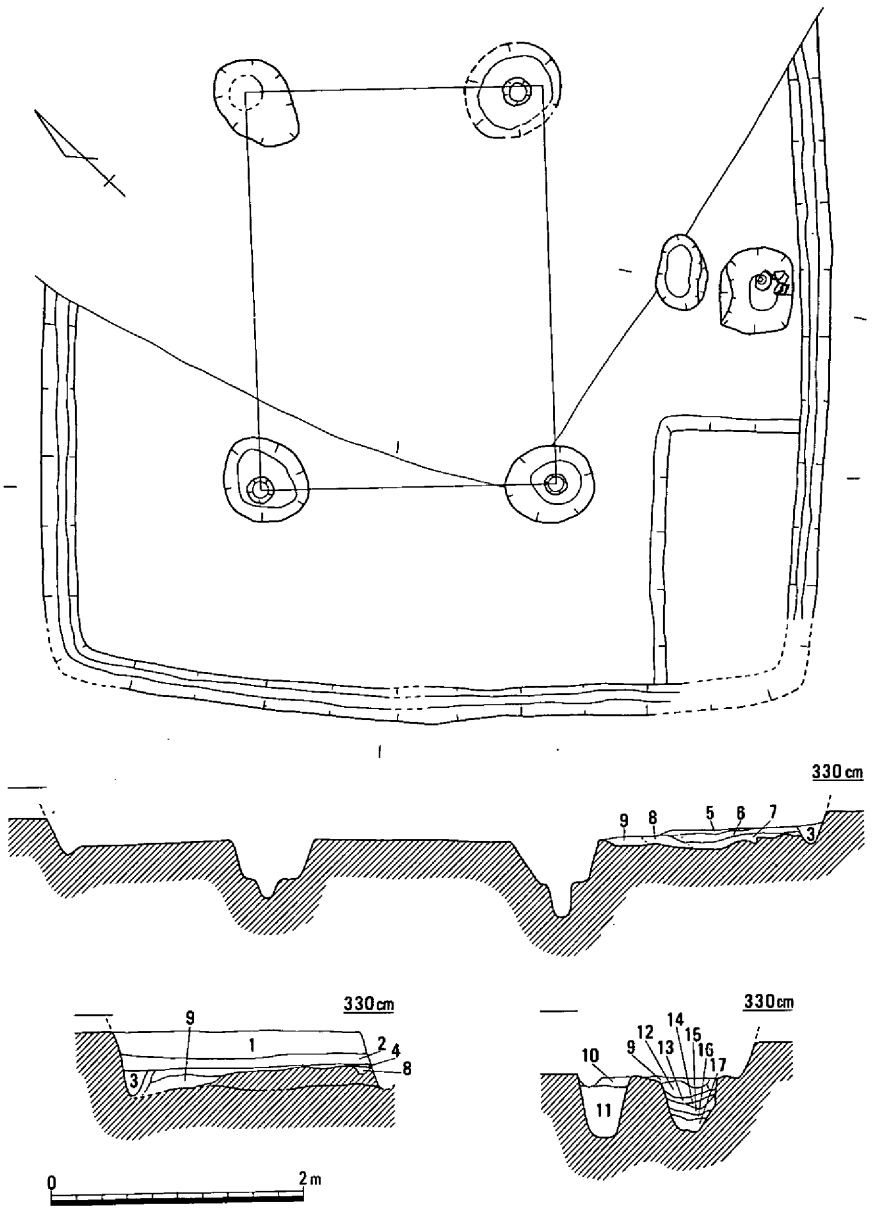
第290図　竪穴住居51出土遺物②（1/4）



第291図　竪穴住居51出土遺物③（1/4・1/2・2/3・1/3）

とした相似関係を示していることが理解されよう。

出土遺物としては、竪穴住居51Ａの床面に遺存していた壺、甕、高杯、鉢等の土器の他、鉄



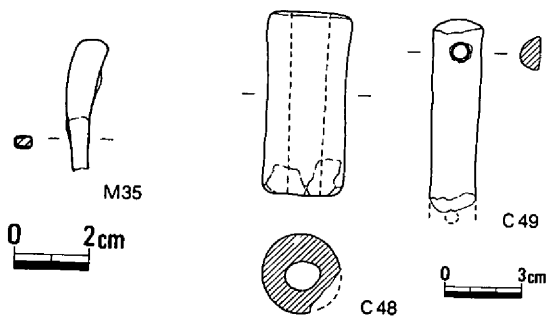
1．(暗) 灰黄色土
2．暗灰黄色土
3．黄灰色土
（含、黄色塊）
4．黄色粘土
（含、炭・灰）
5．黄灰色土
6．暗灰色土
（含、黄色塊・炭）
7．暗黄灰色土
（含、灰）
8．灰色
9．暗灰色土（含、炭）
10．灰黄色土
11．暗灰黄色土
（含、黄色塊）
12．灰黄色土
13．黄色土
14．黄灰色土
15．暗灰色土
16．黄色土
17．黒灰色土
（含、炭・黄色塊）

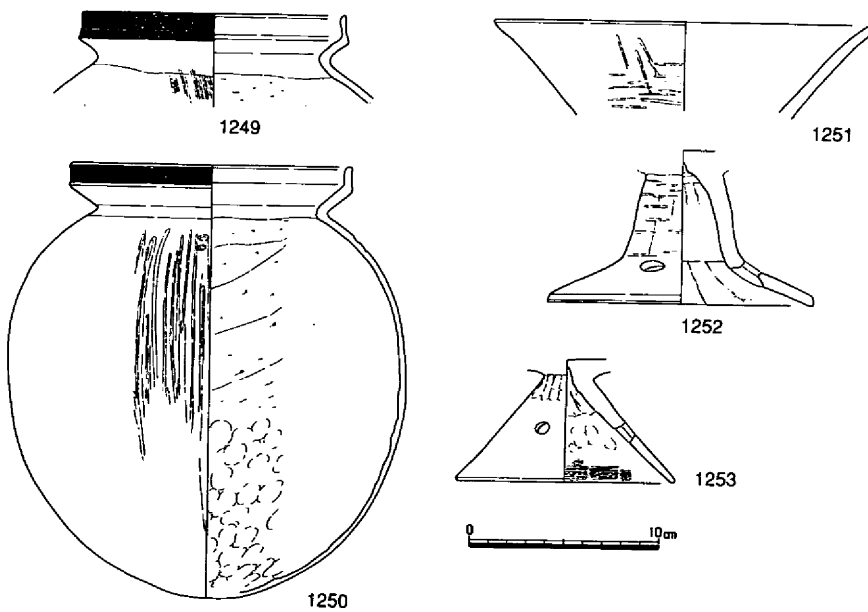
第292図　竪穴住居52（1/60）

剣、玉類、砥石、土錘等が検出された。甕は完存するものがなく、特に底部の詳細が判然としないことで明確ではないが、傾向として胴部最大径は肩より下にあり、外面調整も縦方向のミガキが省略された1212が見られることで、時期的には下田所段階まで遡らせることはないと考える。亀川上層の範疇で理解されよう。

竪穴住居52（第285・292・293図）

２Ｂａ区において北東側を竪穴住居51により切られた状態で全体の約１／２程度の遺存が確認された。おもに南西側がよく遺存し、その一辺は最長部分で6.25ｍを測るものであった。検出面から床面までの深さ20～30㎝を測り、床面からはベッド状の高まり、柱穴、方形土壙等の存在が確認された。ベッドは、南東隅にあって壁体溝に並行する状態で長さ約２ｍ、幅1.20ｍ、低位面は約５㎝の比高差をもって見られた。柱穴は、床面上において２本が、竪穴住居51床下において２本が確認された。いずれも径60㎝以上の掘り方を有するもので、柱穴間の距離は短辺で2.30ｍ、長辺で3.20ｍを測った。これによると住居の長辺は７ｍ前後の規模が、ひいては長方形の住居



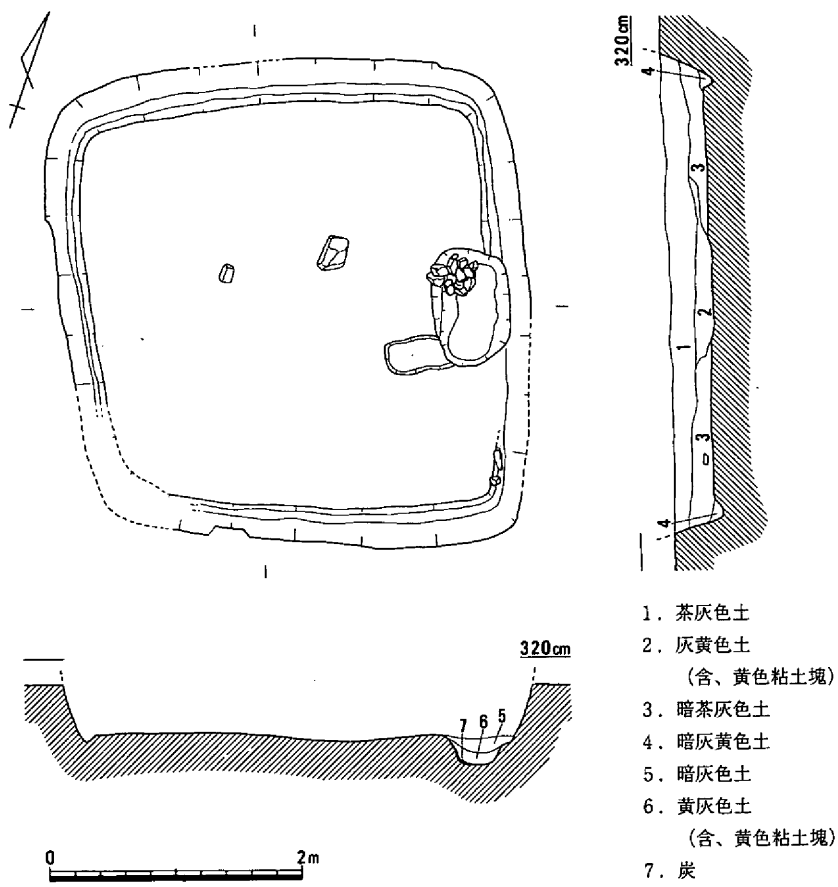


第293図　竪穴住居52出土遺物（1/2・1/3・1/4）

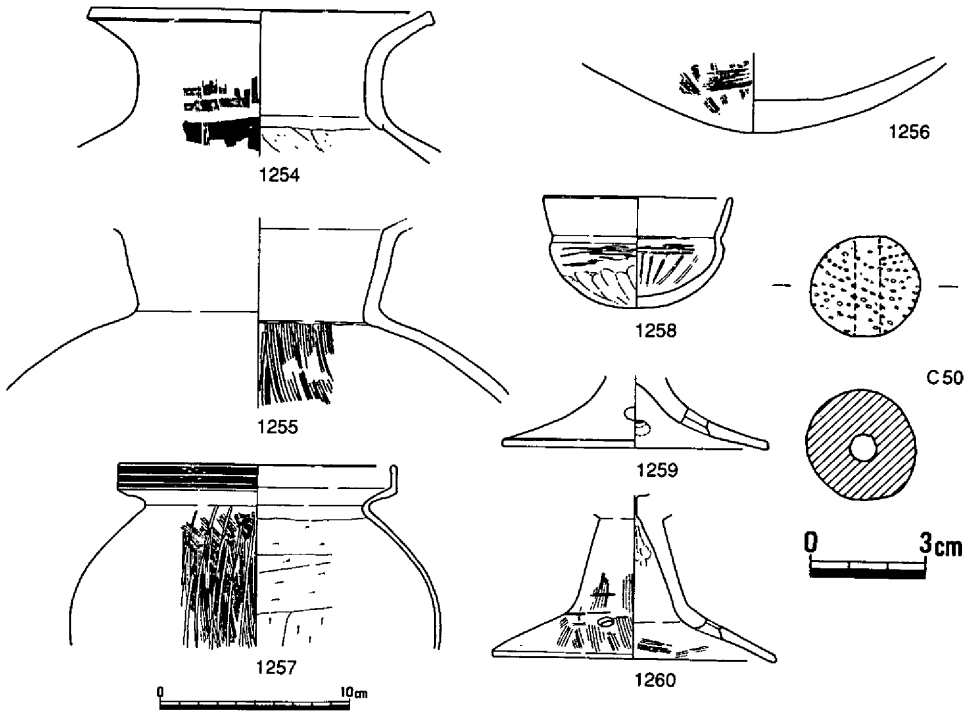
構造が推測される。方形土壙は、住居南東側の一辺に付設された状態で長軸長70cm、幅55cmで深さ45cmの規模をみせるもので、これには楕円形の土壙が近接して見られたが、性格については判然としない。出土遺物としては、甕、高杯、器台の土器の他に不明鉄器、土錘等が検出された。土器は、竪穴住居51出土のものと比較した場合若干の相違点が見られる。甕は、胴部最大径がまだ中央部にあり、外面はヘラミガキによる調整が窺えた。時期的には下田所併行段階とし差支えないものと考える。

竪穴住居53（第285・294・295図、写真図版127）

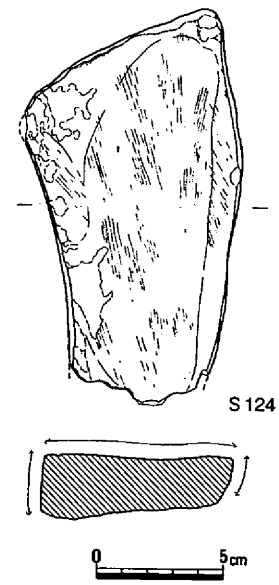
１Ｂｂと２Ｂａ区にかけて所在が確認された住居で、南東コーナー付近で竪穴住居52によって一部が切られた状態で、また平面は海抜3.00ｍで長軸長3.80ｍ、短軸長3.75ｍのほぼ方形を呈する住居として検出された。床面は、検出面から約30cmの比高をもって検出されたが、床面からは柱穴の存在は精査を行ったにもかかわらず確認出来なかった。わずかに東側壁の一辺中



第294図　竪穴住居53（1/60）



第295図　竪穴住居53出土遺物（1/4・1/2・1/3）



央部において方形土壙が１基検出されたにすぎない。規模は、長さ95cm、幅65cm、深さ約20cmを測り、壙内北側斜面には拳大の河原石の集積が認められた。

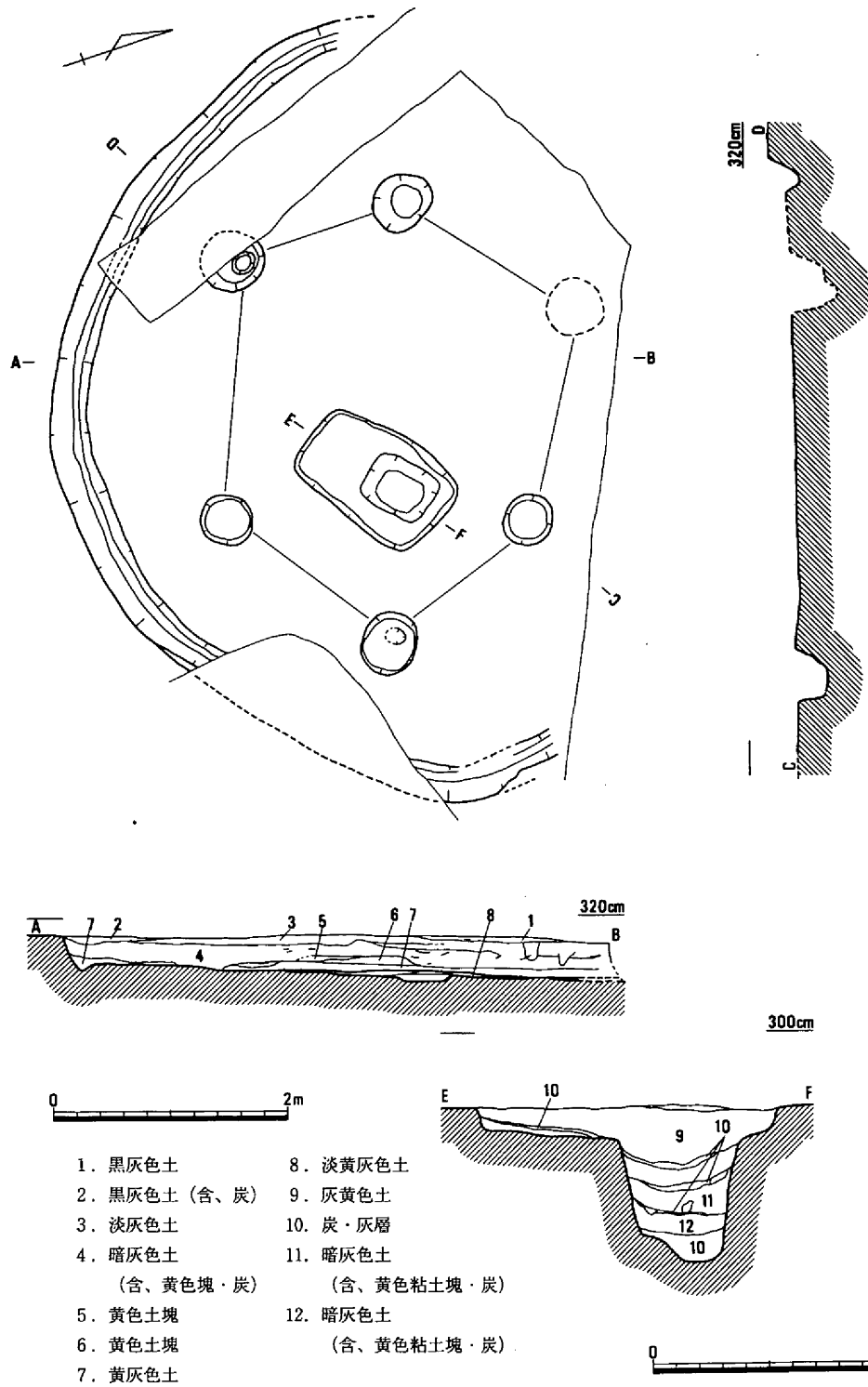
出土遺物としては、床面および覆土中から壺、甕、高杯、鉢等の土器と土錘、砥石が確認された。甕は肩の張りと外面ヘラミガキの在り方に竪穴住居51・52に比較して若干の古相を見せる。高杯の脚部穿孔数等の在り方には新しい要素を認めるが、時期的には下田所併行段階に比定されよう。

竪穴住居54（第285・296～289図、写真図版128）

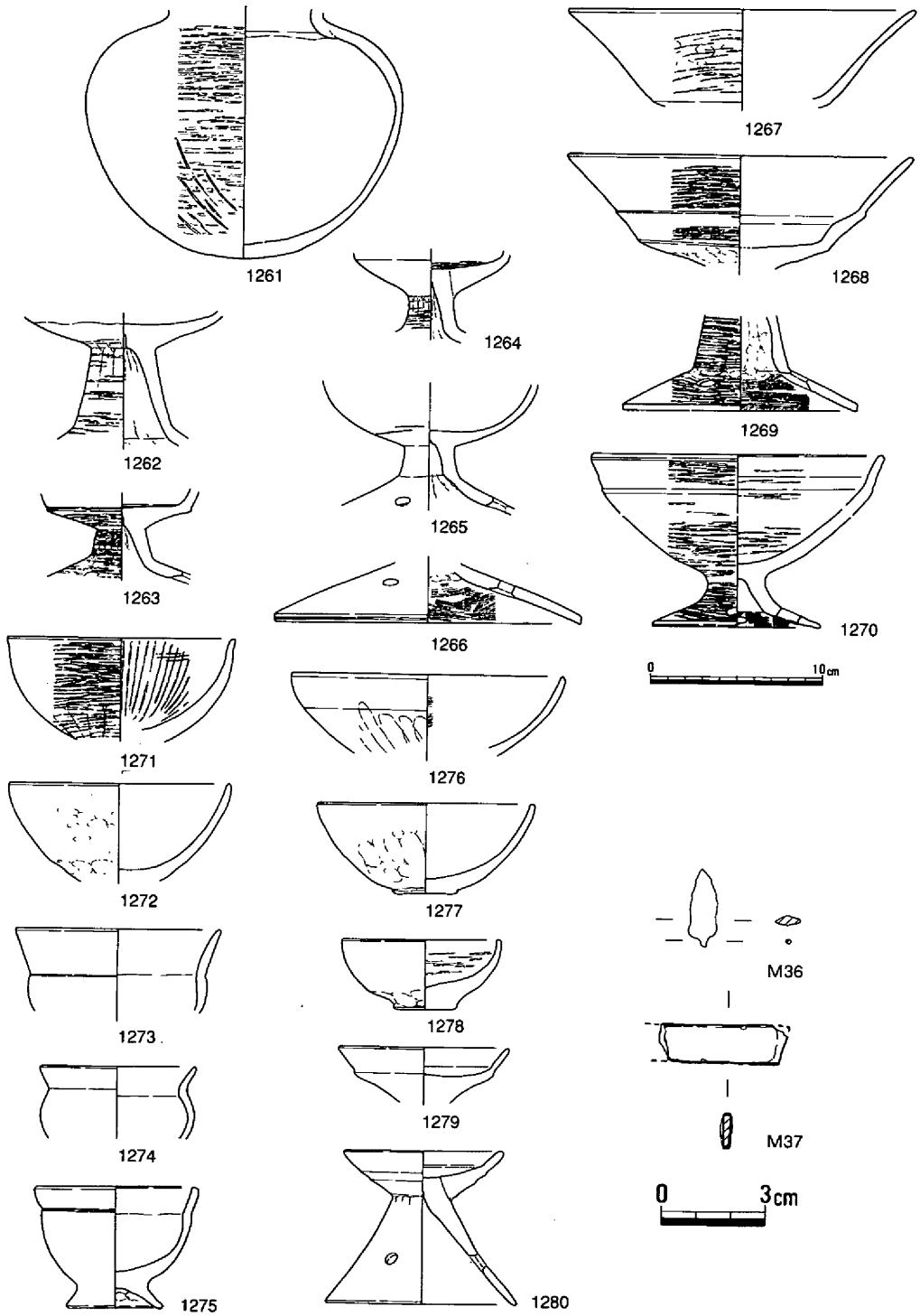
１Ｂｂから２Ｂａ区にかけて所在が確認されたものの、北側は中世段階の河道によって、また東側の一部は竪穴住居51によって切られた状況で検出された。

検出された住居は、長軸長6.80mを測る平面不整円形が推測されるもので、肩から床面までの深さ約30cmを測った。床面からは、壁体溝の他、柱穴・中央施設等の遺存が確認された。

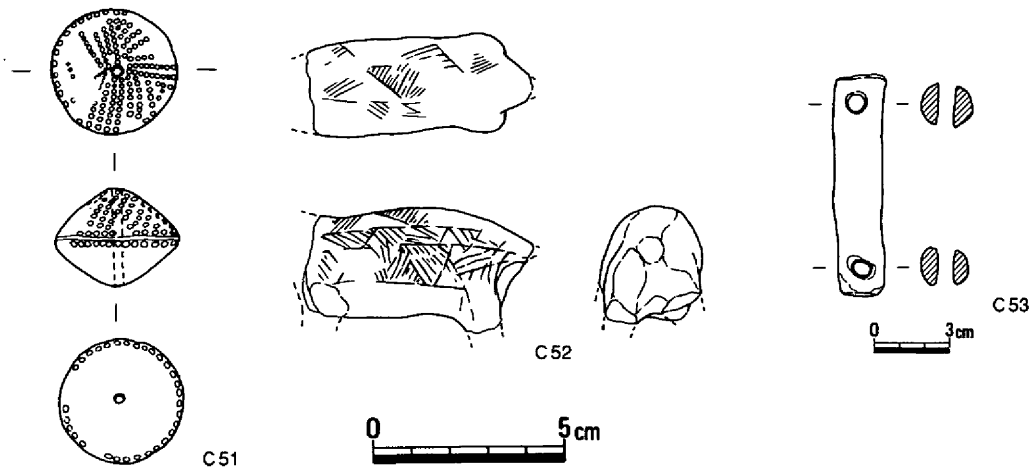
柱穴は、床面の状態があまりいい状態でなかったため明瞭な状態での柱穴の検出はできなか



第296図　竪穴住居54（1/60・1/30）



第297図　竪穴住居54出土遺物①（1/4・1/2）



第298図　竪穴住居54出土遺物②（1/2・1/3）

った。おそらく６本の主柱穴によって構成された住居と考える。

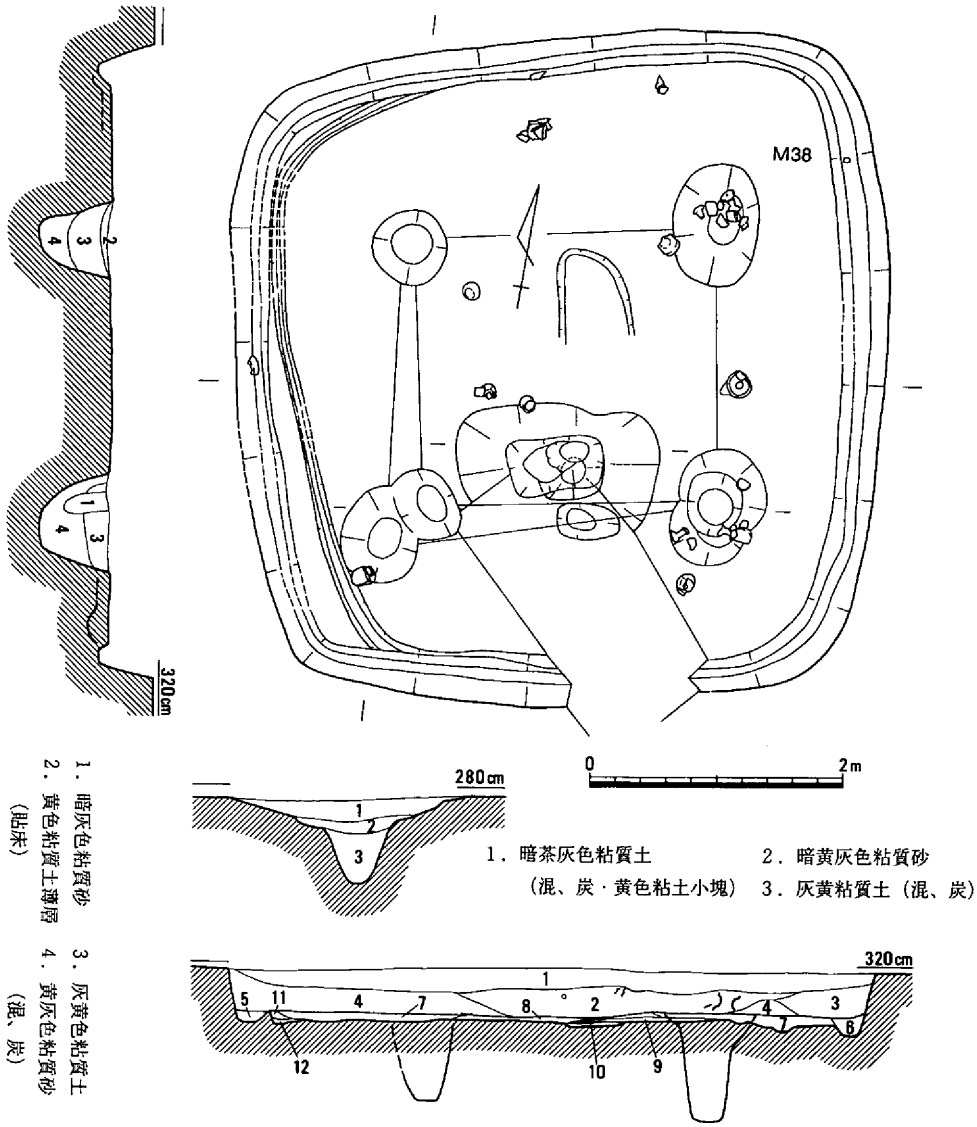
中央施設は、床面南側に若干はずれた位置におよそ東西方向に主軸をもった長方形土壙の存在が確認された。これは、長軸長1.30m、幅86cm、深さ約10cmを測る土壙内にさらにその中央やや東寄りに深さ50cm程の土壙を有するものである。この断面には、壙底に炭と灰を中心とする埋積と上層には黄色粘土塊を含んだ灰色土と炭層の互層が確認された。床面中央部に被熱面の検出は出来なかったものの、いずれにせよ火所に近接して機能していたことが推察される。

出土遺物には、壺、高杯、鉢、器台等の土器の他、銅鏃、鉄器、土錘、動物形土製品等が検出された。土器は、いずれも亀川上層段階に比定される特徴を有するものである。したがって住居の時期は、古墳時代前半に位置づけられよう。（島崎）

竪穴住居55（第285・299～303図、写真図版128・158・173）

２Ｂｄ区に位置し、土壙173および試掘坑により一部切られて検出された。平面形態は隅丸方形を呈し、一部に柱の建て替えおよび床面の拡張がなされている。最終床面をもつ竪穴住居55Ａはほぼ方位に辺を合わし、規模は5.3×5.15mを測りやや東西軸が長く、西壁が東壁に比べ短い。深さは40cm、床面積22.5m^2；床面の海抜高2.8mを測る。主柱は４本で柱穴規模は径50～80cm、深さ60～75cmを測り柱穴間の距離は南北間約2.2mに対し東西間は2.5m前後とやや長い。なお、南西の柱穴は内側から外側に掘り直されたものと考えられる。床面中央南よりからは東西に長軸をもつ平面隅丸長方形の中央穴が検出された。長さ1.6×推定幅1.2m、深さ65cmを測る。床面から緩く下がり平面長方形の傾斜変換点付近で僅かに平坦になり、中央が急に落ち込む状況を呈していた。

一方、床面下からは55Ｂが検出された。海抜高2.75mを測る床面からは、55Ａとほぼ重複す

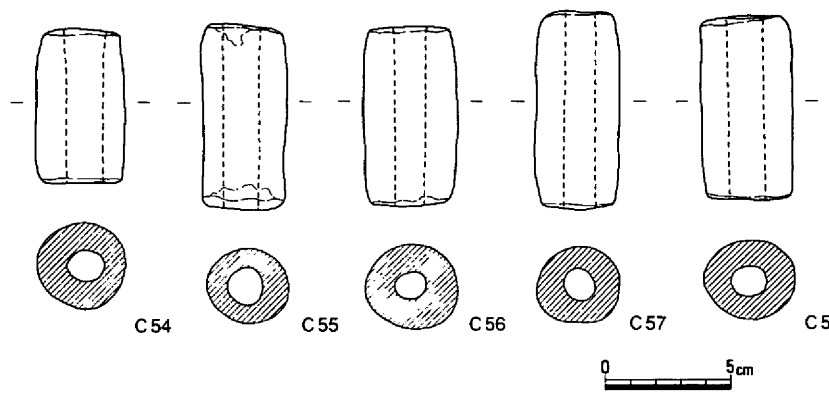


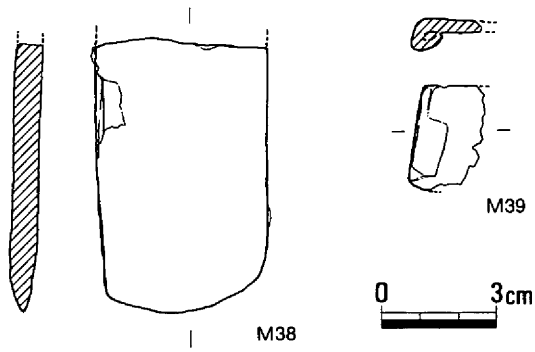
1．茶褐色砂質土
2．暗茶褐色砂質土（混、黄色粘土塊・炭）
3．暗茶褐色砂質土（含、土器多）
4．暗茶褐色砂質土（混、黄色粘土小塊）
5．暗黄灰色粘質土
6．暗茶褐色砂質土
7．暗褐色砂質土
8．黄褐色粘質土（上面床）
9．黄褐色粘質土（上面炭層）
10．炭層
11．茶灰色粘質土塊
12．暗茶灰色粘質土

第299図　竪穴住居55（1/60）

る位置に径50cm、深さ約60cmの中央穴が検出され、その北からは幅60cm、推定長１m程の南北に浅く凹む部分が確認された。また、床面西部からは壁体溝が一部検出された。

遺物は55Aに伴うものが大半を占め、55Bからは土器細片が僅かに出土するにとどまった。



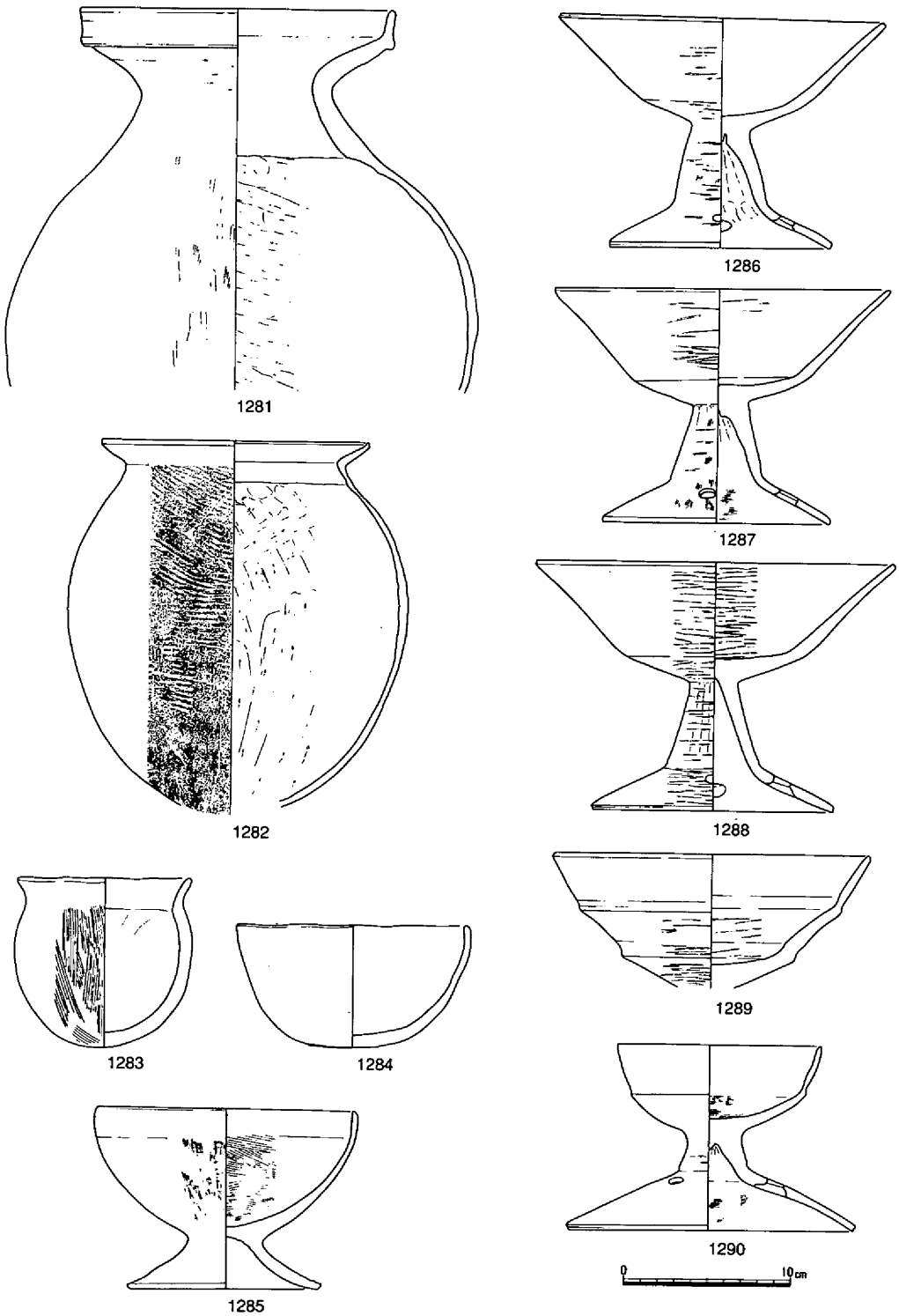


第300図　竪穴住居55出土遺物①（1/3・1/2）

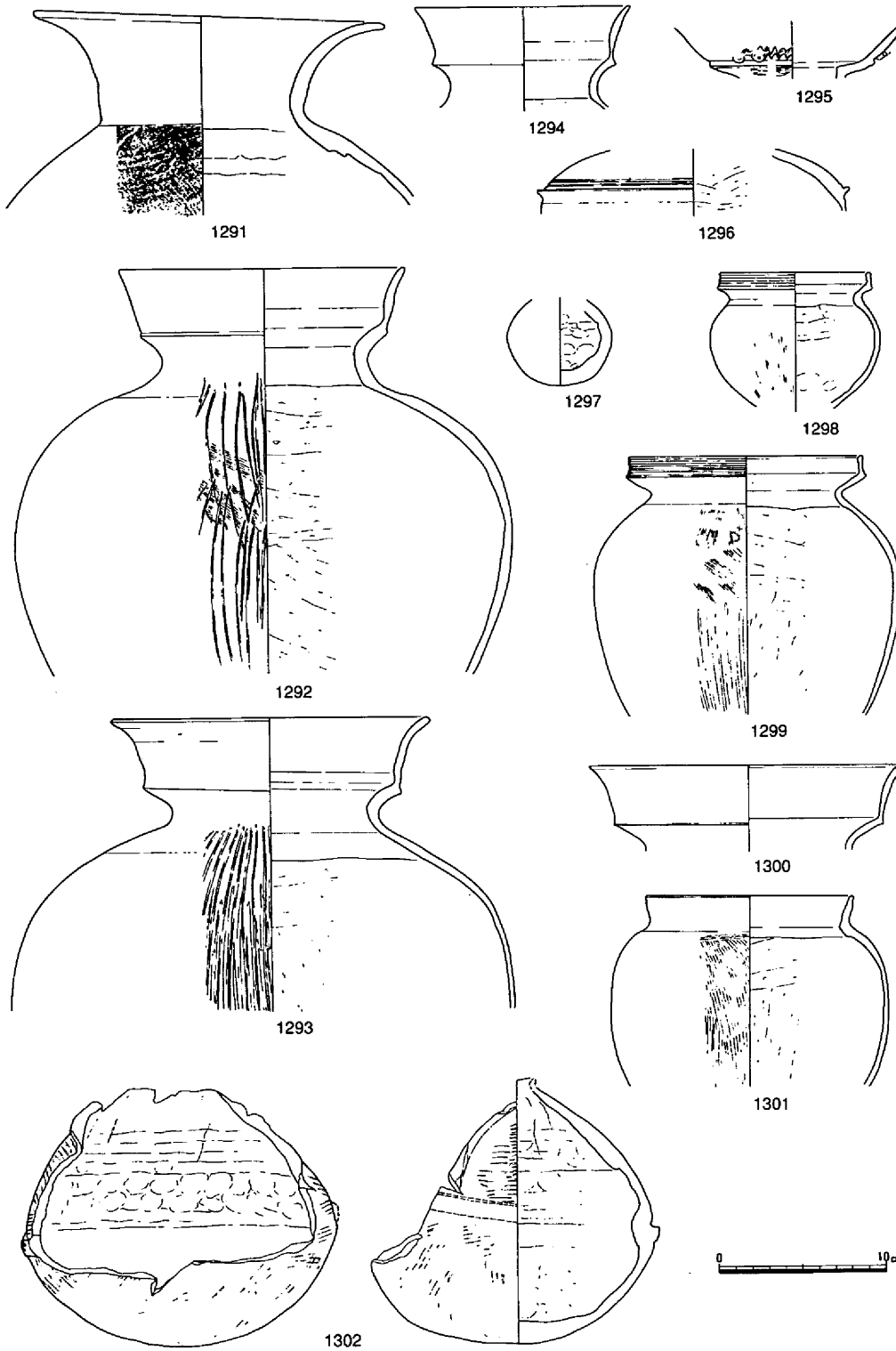
55A床面および直上からは1281～1290の壺をはじめ甕、高杯、小型鉢などが出土している。また、覆土中ほとんどの層に土器片は包含されていたが、特に第2層には多く、住居東部を中心に土器溜りが形成されており、これら上層および土器溜りからは1291～1320の壺、甕、高杯、手焙形土器、鉢などが出土した。なお、板状鉄斧M38は壁体溝の中から、手鎌M39は覆土上層から、土錘C54～58は土器溜りから出土している。

床面出土の甕1282は口縁が「く」字状に外半し端部を上方に僅かにつまみ出しており、胴部外面は粗いタタキの後、下半をヘラケズリしている。高杯は平坦な杯部に、斜め外方に直線的に延びる口縁をもつ1286～1288と、口縁が2段に拡張する1289、杯部が椀状を呈す1290がある。なお、裾部の円孔は1286・1288が4か所、1287・1290が3か所に穿たれている。上層および土器溜り出土の壺1291は胴部外面をタタキの後ハケ調整している。水漉粘土で作られた壺1295の口縁下端には波状紋の上に円形浮紋が付けられている。壺1296は丹塗りされており、数条の凹線が巡る。鈍い橙色を呈し不安定な丸底の手焙形土器1302は、粗いタタキおよび押圧で成形された、胎土も粗いものである。高杯は床面出土と同様3種あるが、確認し得た10数個の裾部の円孔はいずれも3か所であった。小型鉢には椀状を呈すものの他、皿状を呈し口縁端部に面をもつ1319があり、大型鉢1320の体部にはタタキがみられる。

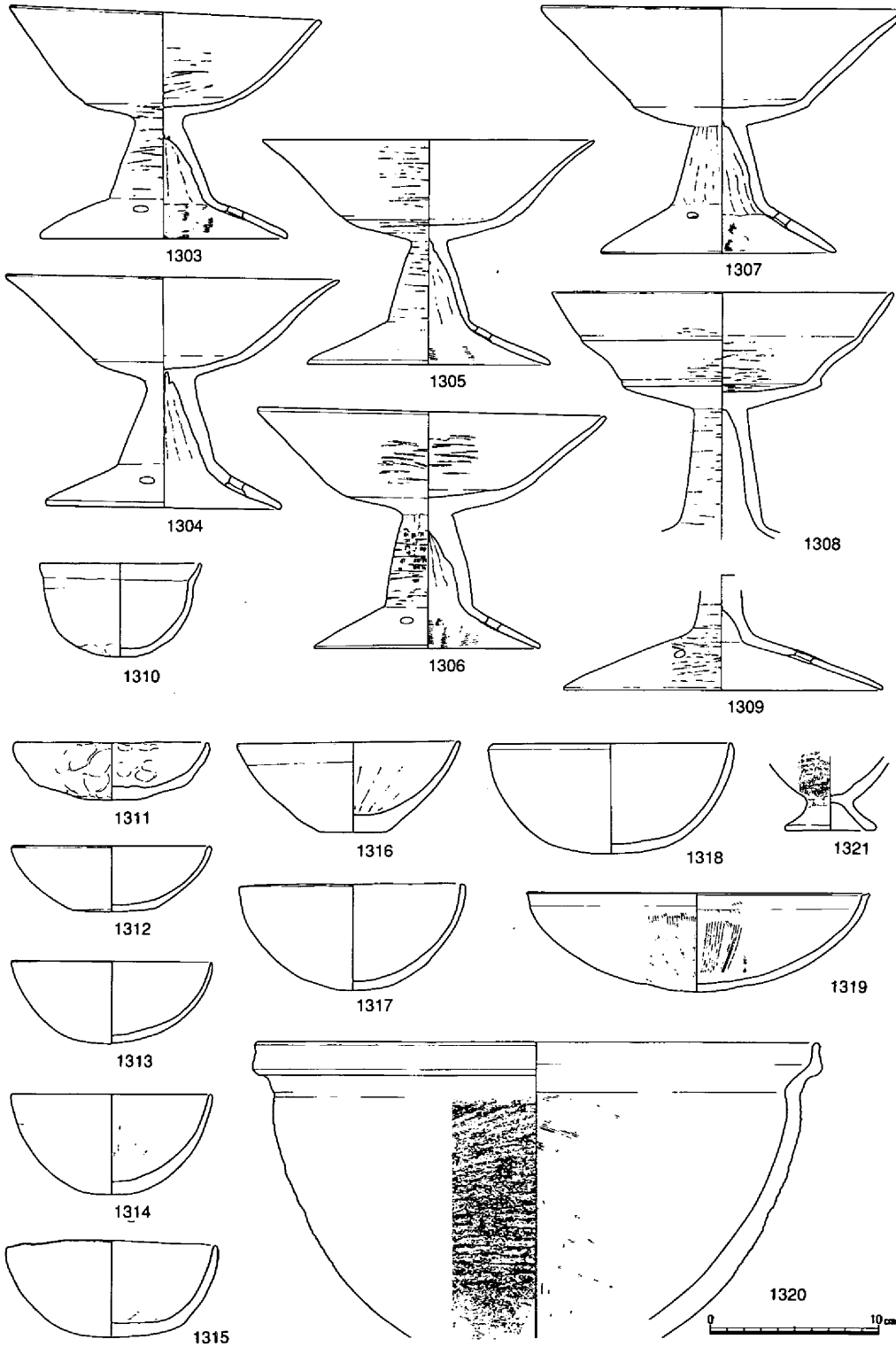
以上、当住居は廃絶期とその後の堆積が認められたが、土器の特徴はいずれも下田所併行期の範疇に収まるものと考えられる。



第301図　竪穴住居55出土遺物②（1/4）



第302図　竪穴住居55出土遺物③（1/4）



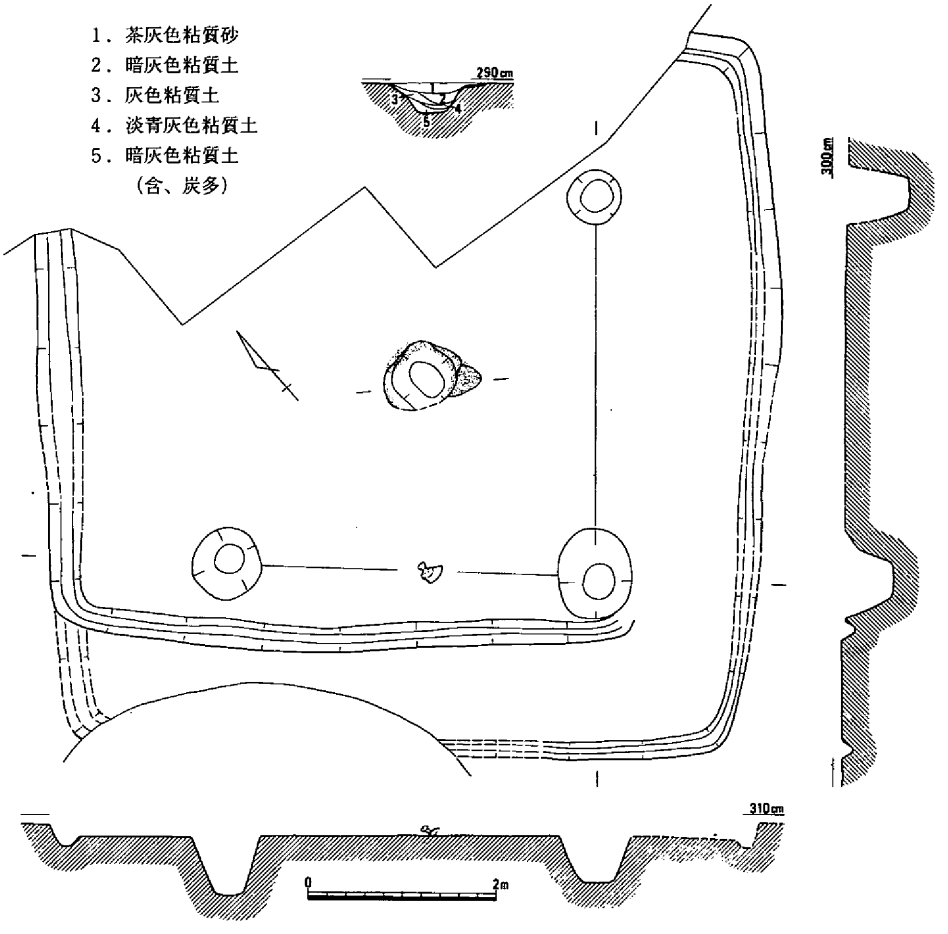
第303図　竪穴住居55出土遺物④（1/4）

竪穴住居56（第285・304・305図）

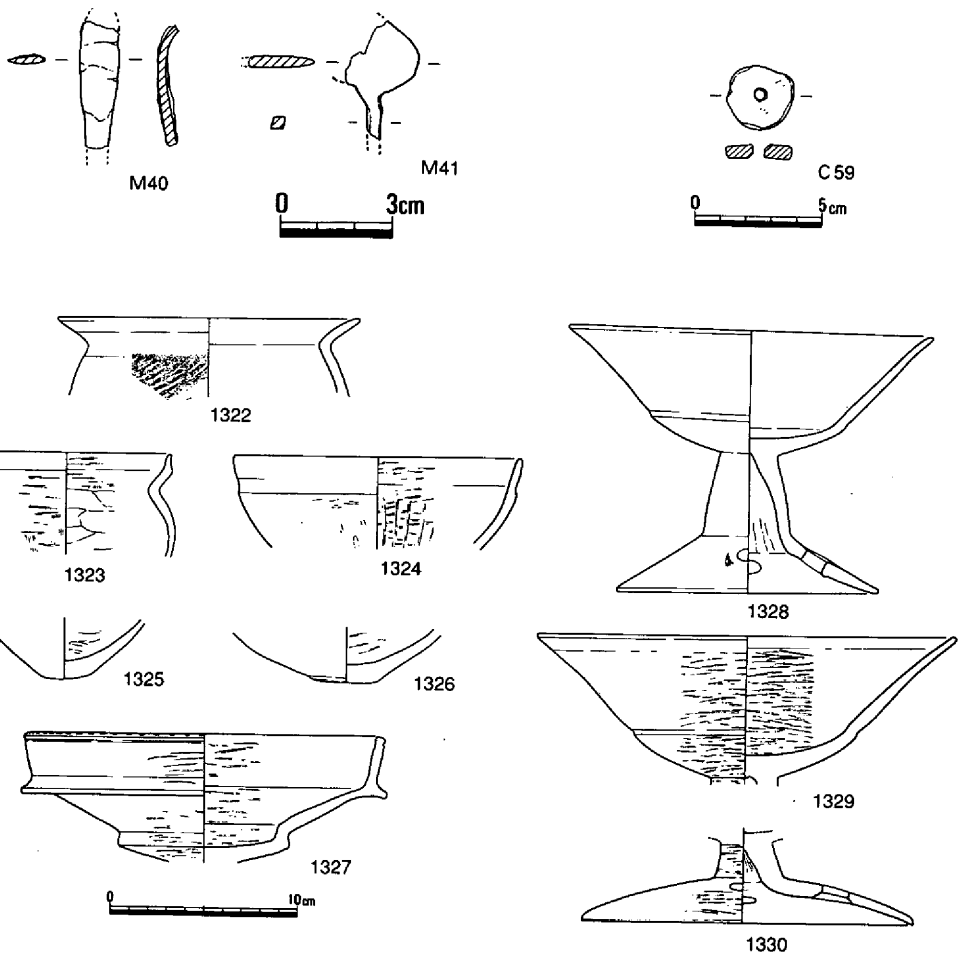
２Ｂｂ区、竪穴住居55の東に並行し検出された方形の大型住居で、北東部は調査区外に延びる。また、住居の南部および西部には弥生時代遺構が集中していたため検出は判然とせず、検出面のから床面までが残りの良いところでも15cm程であった。規模は一辺7.8m、推定床面積54㎡を測る。主柱は４本で、柱穴間の距離は約２ｍを測る。床面西部には壁から約1.2ｍの位置にも南北方向に壁体溝が掘られており、住居西辺から南辺には幅90cm余りのベッドの設置がなされていた可能性が高い。一方、中央穴は径約60cm、深さ30cmを測り、その周囲からは被熱による焼土面が検出された。

遺物は床面からは高杯1328が出土したのみで、甕、鉢、鉋M40、鉄鏃M41、紡錘車C59などは覆土中からのものである。

以上、当住居は土器の特徴から下田所併行期に廃絶したものと考えられる。



第304図　竪穴住居56（1/80）



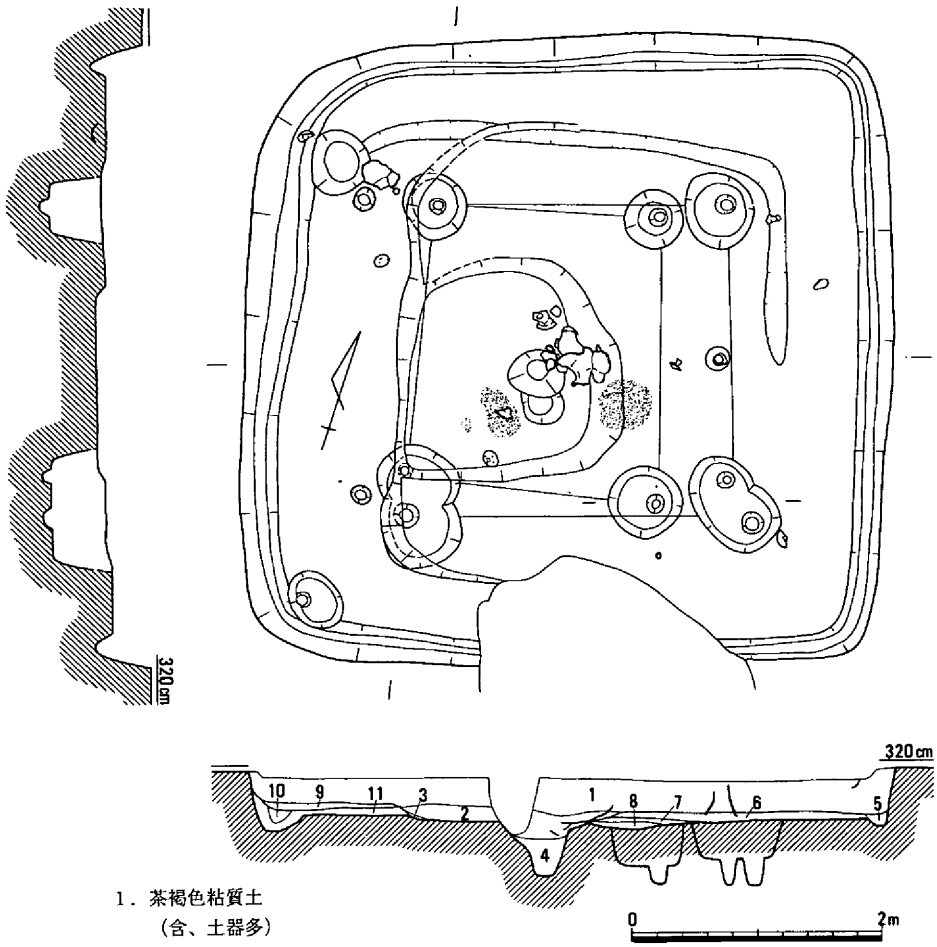
第305図　竪穴住居56出土遺物（1/2・1/3・1/4）

竪穴住居57（第285・306～308図、写真図版129）

３Ｂｃ区に位置する、平面形態が隅丸方形を呈す、ベッドをもつ住居に拡張建て替えられたものである。

57Ａの規模は5.13×５ｍ、床面積22.4㎡、深さ25cm、床面の海抜高2.8ｍを測る。住居西半部には幅約50cm～１ｍ、高さ約10cmのベッドが逆「コ」字状に巡る。主柱は４本で、柱穴間の距離は2.5ｍ前後を測る。なお、ベッドに接する西側柱穴の柱根位置はいずれも床面端にあたる。床面中央西寄りからはベッドから延びる1.8×1.7ｍ、深さ約10cmの不整方形を呈す浅い凹地状の部分がみられ、底部東寄りから、径約40cm、深さ40cmの中央穴が検出された。また、中央穴の南から焼土面が確認されている。

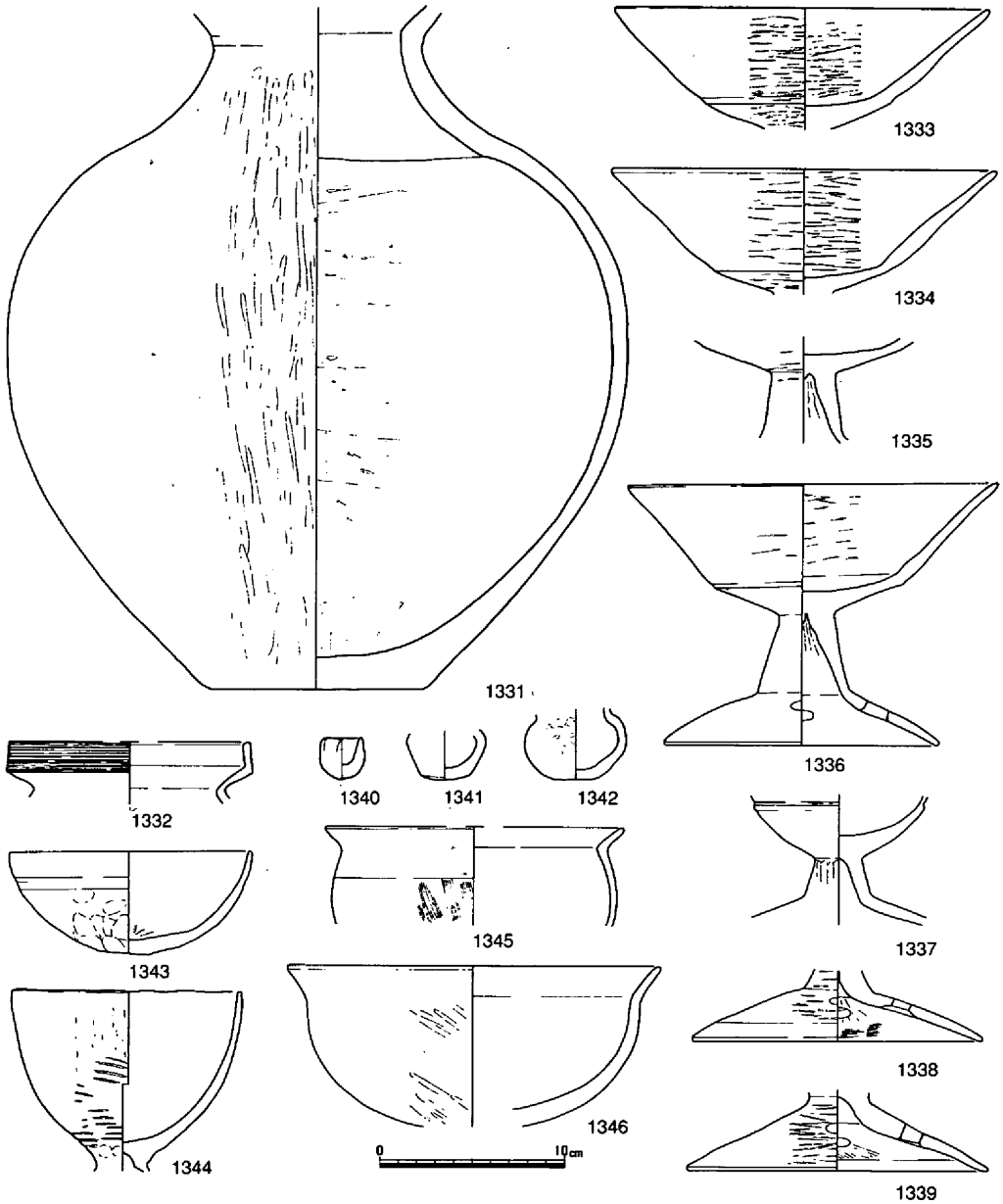
57Ｂは住居北部から削平された壁体溝の痕跡と、柱穴２個および焼土面を検出した。推定長



第306図　竪穴住居57（1/60）

約4.4×4.25m、推定床面積14.3㎡、床面の海抜高2.7mを測る。柱穴間の距離は東西方向が2.2m前後であるのに対し、南北方向は1.9m前後とやや短い。なお、北西柱穴は57Aと重複する。中央穴は57Aのそれの南から一部切られて検出され、その東約１mからは径40cmに広がる焼土面を確認している。

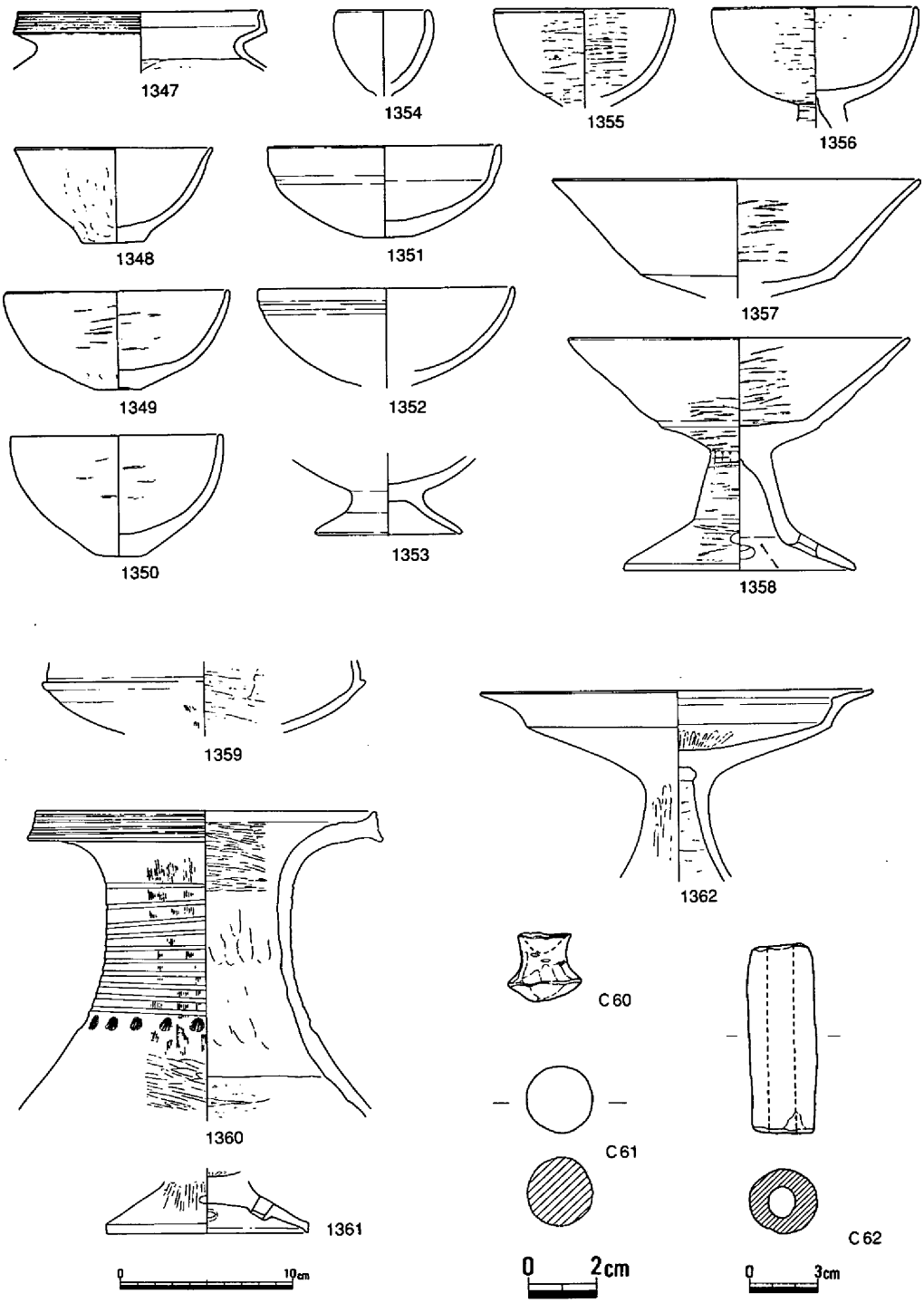
遺物は床面および中央穴周辺から1331・1332・1335～1338・1341～1344・1360・1361、中央穴から1340・1345、C60、北東柱穴から1333・1334、南西柱穴から1339が出土しており、他は覆土中からのものである。なお、高杯は口縁が直線的に外方に延びるものと椀状を呈



第307図　竪穴住居57出土遺物①（1/4）

す２種あるが、確認し得た裾部の円孔はいずれも４か所であった。また、住居からは弥生土器1360～1362が出土しており、特に、長頸壺1360は胴部上半でほぼ水平に打ち欠かれたもので、床面に接し出土しており、口縁は調査時では欠けていたものの、器台として再利用されていた可能性を窺わせる。

以上、当住居は土器の特徴から下田所併行期に廃絶したものと考えられる。

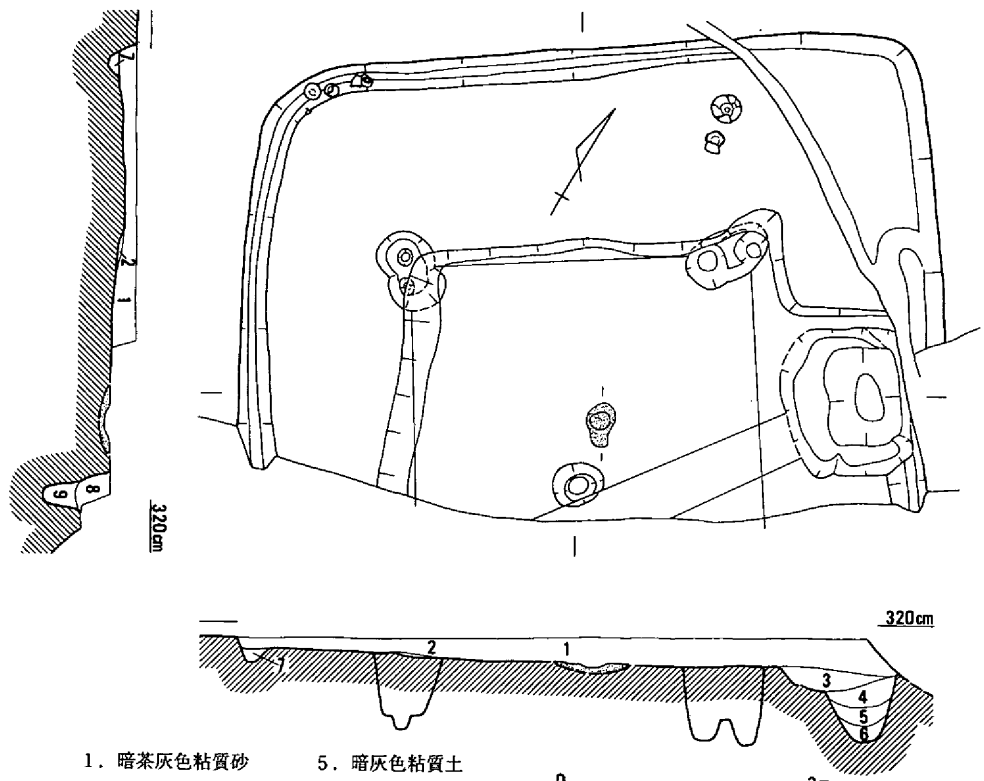


第308図　竪穴住居57出土遺物②（1/4・1/2・1/3）

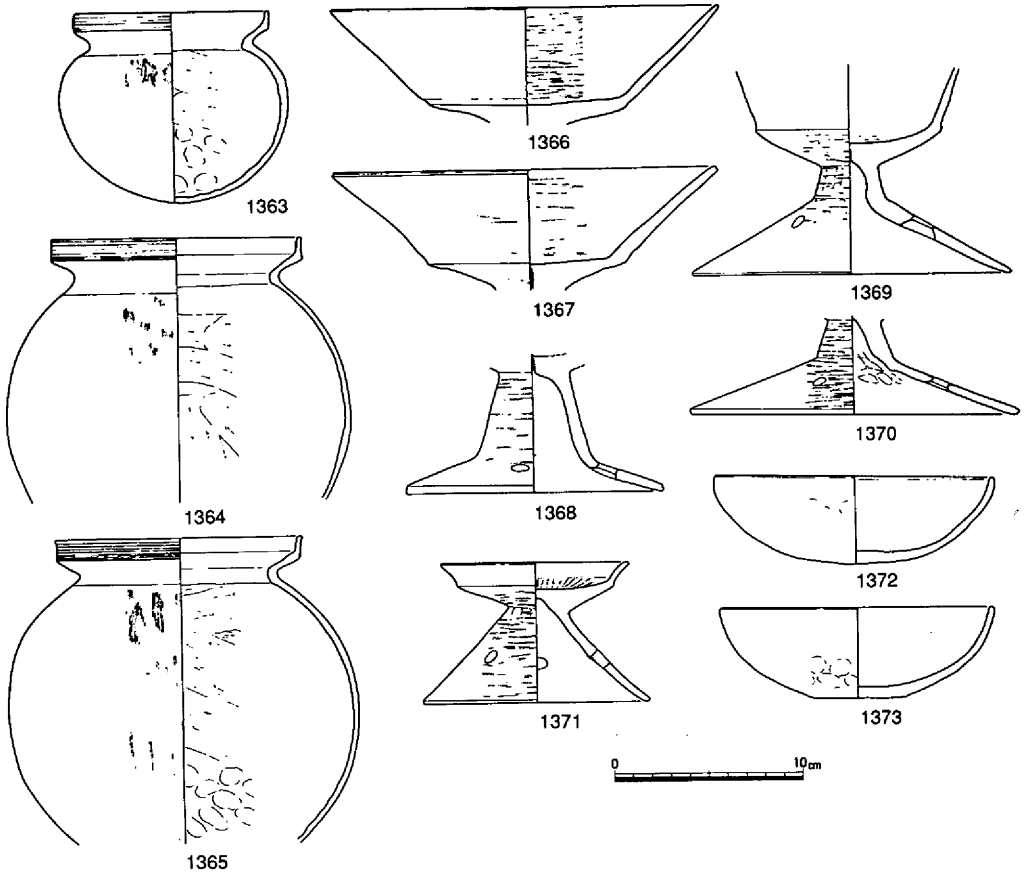
竪穴住居58（第285・309・310図）

３Ｂｂ区に位置し、住居東半は中世の溝９に切られ検出された。北東部は後世の地盤のズレによって下がっていた。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸5.6m、深さ20cm、床面の海抜高2.9mを測る。主柱は４本で、内２個の柱穴が検出され、柱穴間距離は約2.7mを測る。床面の周囲には東辺が土壙によって一部途切れるものの幅１～1.4m、高さ約５cmのベッドが北～西へと巡っていた。中央穴は径40cm、深さ50cmを測り、下層には多量の炭が堆積していた。また、中央穴の北からは中央が凹む焼土面が検出されたが、その厚さや形状から単なる暖をとる施設ではなく、鍛冶施設の可能性を想像させる。さらに、床面東部からは壁に沿って平面長方形の土壙が検出された。1.2×１m、深さ約60cmを測り、土壙西部に床面より一段低いやや平坦な面がある。なお、遺物は出土しなかった。

遺物は床面から1363・1366～1368が出土しており、他は覆土中からのものである。甕はい



第309図　竪穴住居58（1/60）



第310図　竪穴住居58出土遺物（1/4）

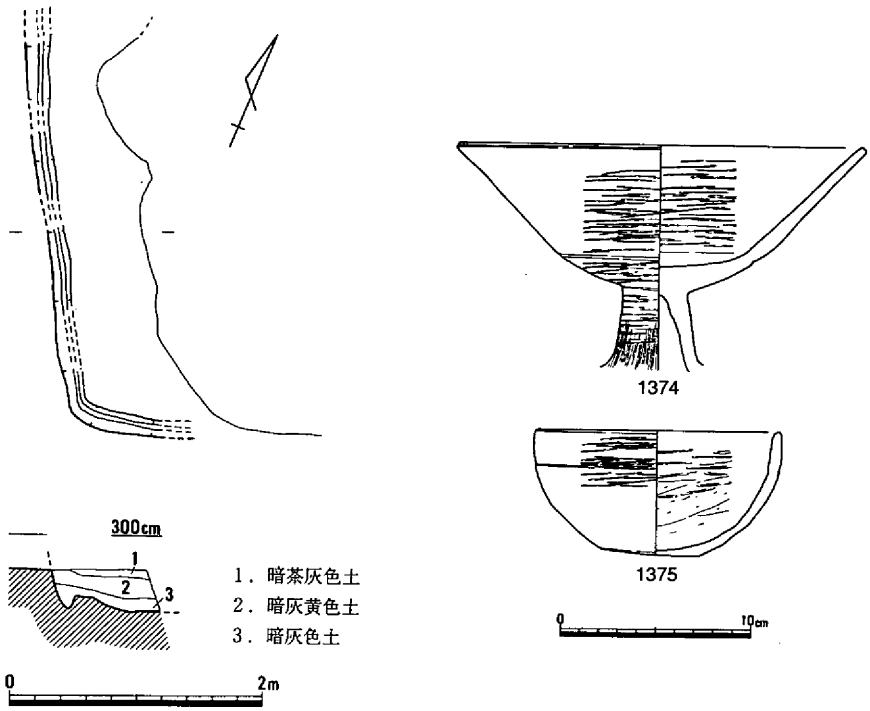
ずれも拡張する口縁に櫛状工具による沈線が巡り、1364・1365は肩が張らず、最大径がほぼ胴中央にある。高杯1366・1367の杯底部は平坦で、口縁部は斜め外方に直線的に延びる。椀状を呈す高杯1369・1370の脚部は杯部に対して異様に大きい。小型器台1371は外反する口縁をもち、内面は放射線状にヘラミガキされている。小型鉢1372・1373は外面に指頭圧痕の残る皿状を呈すもので、1373は僅かに平底が確認される。以上、当住居は土器の特徴はやや新しい様相を示すものの、亀川上層併行期に廃絶したものと考えられる。（江見）

竪穴住居59（第285・311図）

３Ｂｂ区で検出された住居であるが、北西側は地盤沈下等により住居の確認すら容易ではない状況にあった。検出されたのは、わずかに東側の一辺のみで、床面についても東側にゆくにつれて面が段々におちる状況を示し、床面本来の在り方は確認されなかった。

遺物もわずかに高杯と鉢の２点の土器が出土したのみであった。

時期は、古墳時代前半と考えて差支えないものと考える。（島崎）



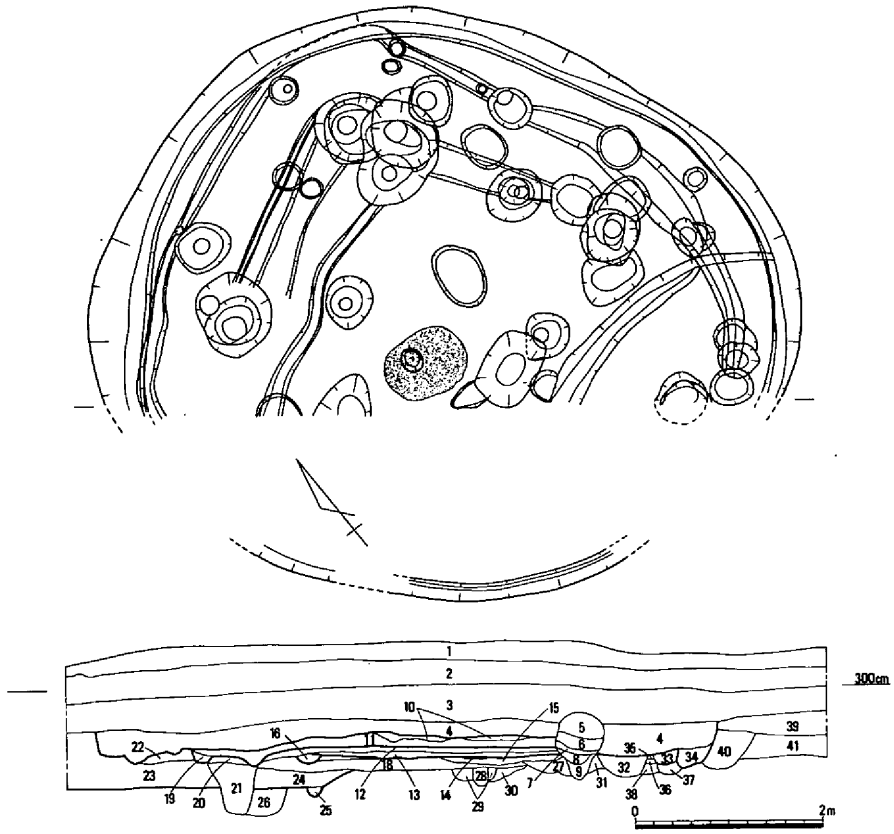
第311図　竪穴住居59（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居60（第285・312～322図）

３Ａ区と４Ａ区との境に位置し、竪穴住居59と切り合い関係をもつ。護岸工事による第１次調査において、遺構の大部分を調査したが、南コーナー部分は後年次対応となっている。住居は海抜2.8ｍで土器溜りとなっている状態を検出したため、平面での検出を実施した。その結果、住居廃絶後に投棄された遺物が土器溜りの状態を呈していたことが確認されるとともに、貼床層除去によって４回の建て替えを確認することができた。検出された最終時期の住居は長軸7.2ｍ、短軸5.9ｍを測り、平面形は不整円形を呈する。住居内には３本の柱穴、焼土面、壁体溝が検出され、貼床層は３面までは確認することができた。４本柱で構築された竪穴住居である。なお、検出された遺構レベルは海抜2.65ｍで、床面からの壁高は最も良好な所では約40cmを測り、壁体溝は幅10～25cm、深さ11～14cmを測る。床面のほぼ中央部の焼土面は長径90cm、短径65cmの楕円形を呈し、良く焼けていたため炉の機能を持つものと思われる。

遺物は上層、床面に付着する状態のもの、柱穴内、貼床層内出土の４つに大別されるが、その中でも上層の遺物が最も多い。上層の主な遺物としては、弥生時代後期の土器、古墳時代前半の土器、古墳時代後半の須恵器とともに土錘、砥石などが出土している。

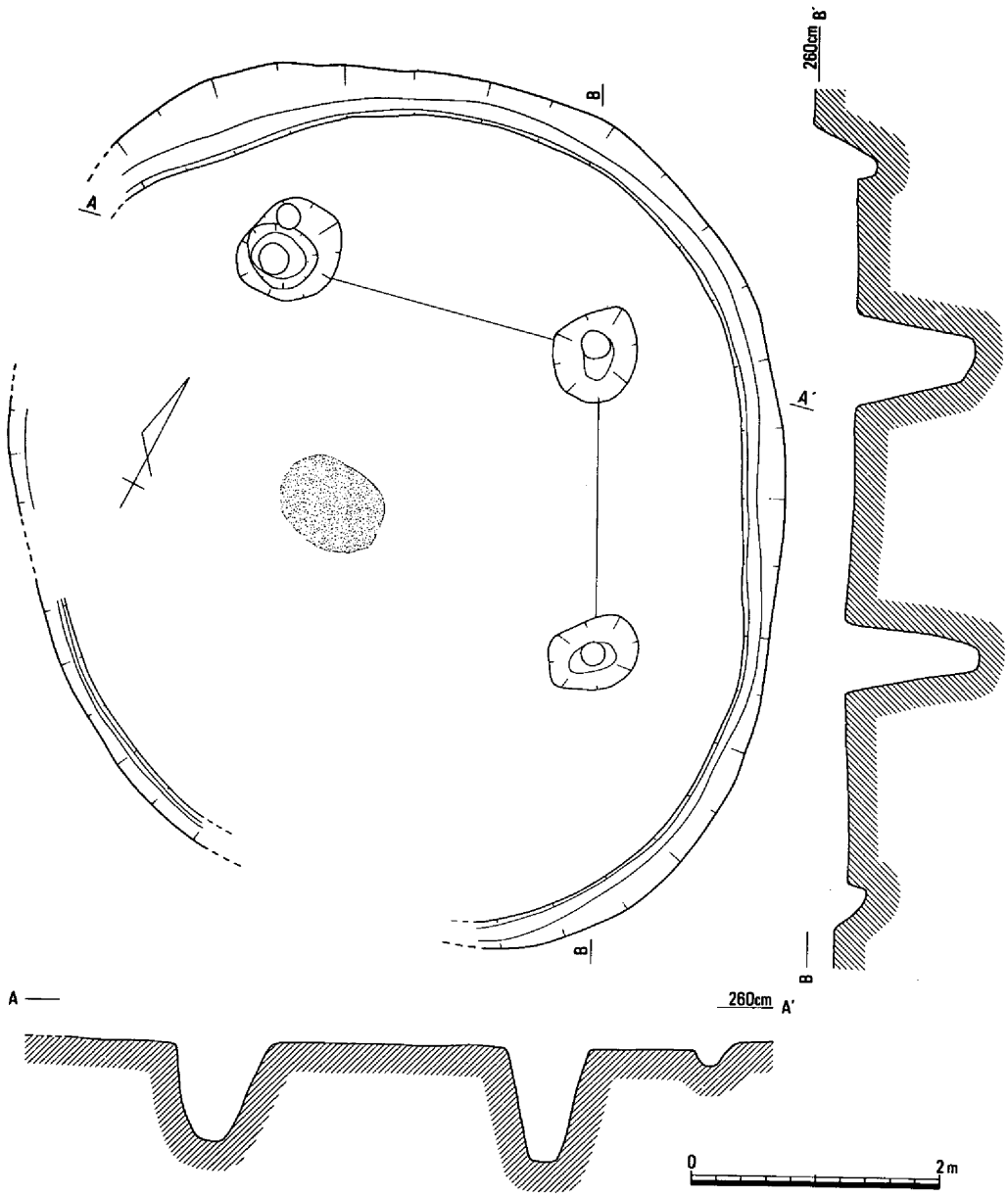
床面に付着する遺物（床面下層）は甕1442～1444・1446・1448、壺1445・1447・1449～



1．耕作土
2．黄褐色微砂
3．灰色微砂
4．黒色土
5．暗茶褐色粘質土
6．黒色土
7．暗灰色粘質土
8．暗灰色土
9．灰黄色粘質土
10．暗黄色土
11．黒色土
12．暗黄灰色粘質土
13．黒黄色粘質土
14．暗灰色粘質土
15．黄茶褐色土
16．暗灰黄色土
17．暗灰黄色粘質土
18．茶褐色土
19．暗褐色土
20．暗黄灰色土
21．暗灰黄色粘質土
22．暗黄灰色土
23．暗褐色土
24．灰茶褐色土
25．黄褐色土
26．灰黄色土
27．暗茶褐色土
28．暗灰色粘質土
29．灰茶色土
30．黄灰色土
31．暗黄灰色土
32．暗灰色粘質土
33．暗灰青色土
34．暗灰色粘質土
35．暗灰青色土
36．黄色粘質土
37．暗黄褐色土
38．灰黄色土
39．茶灰褐色粘質土
40．灰黄色粘質土
41．灰黄色粘質土

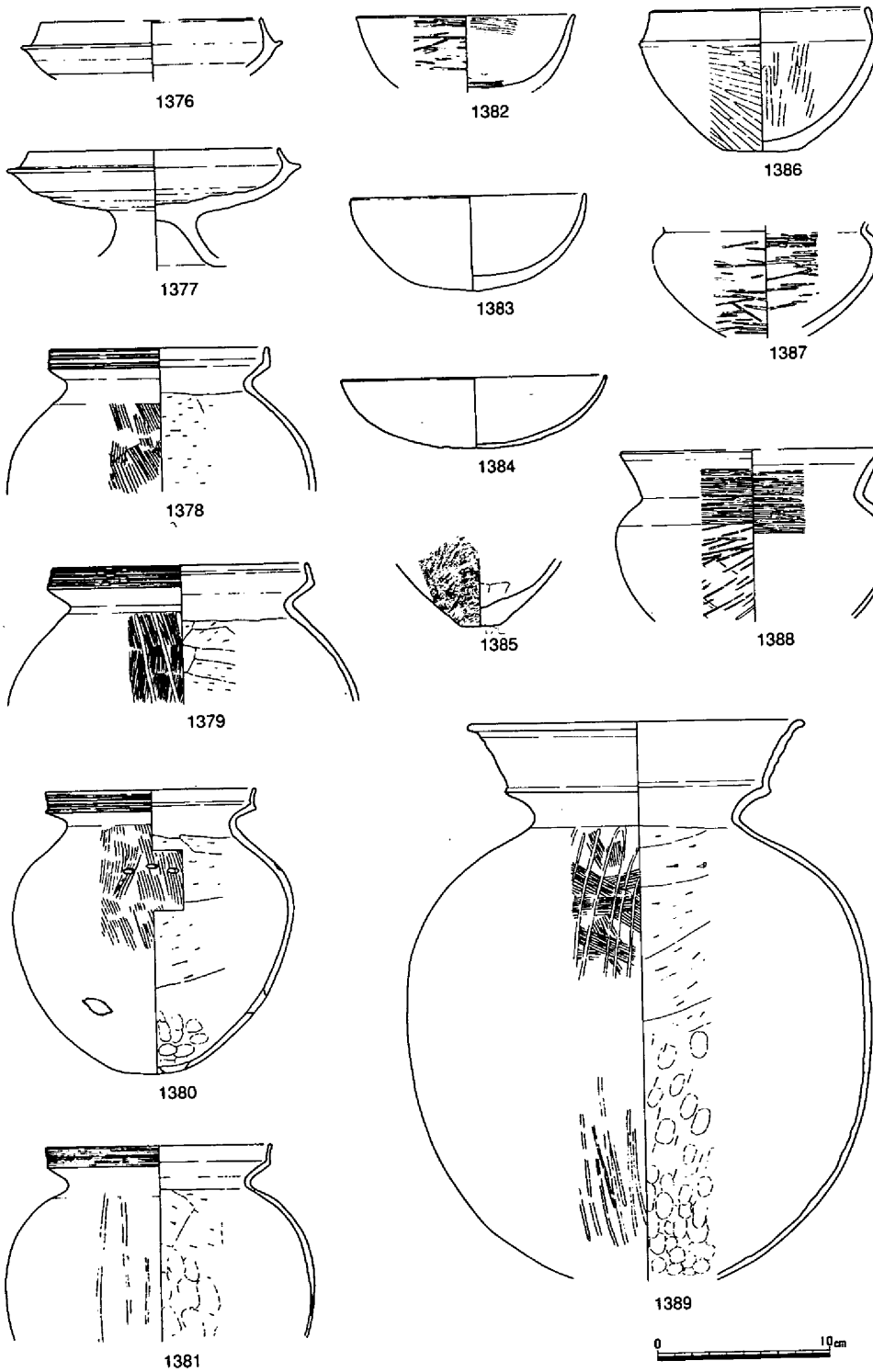
第312図　竪穴住居60①（1/80）

1451、鉢1452～1455・1458・1459、小型器台1456・1457・1460・1461、製塩土器中1462～1465、土錘C64、砥石S126などがある。甕は口縁部が「く」字に外反し、端部が上方にや

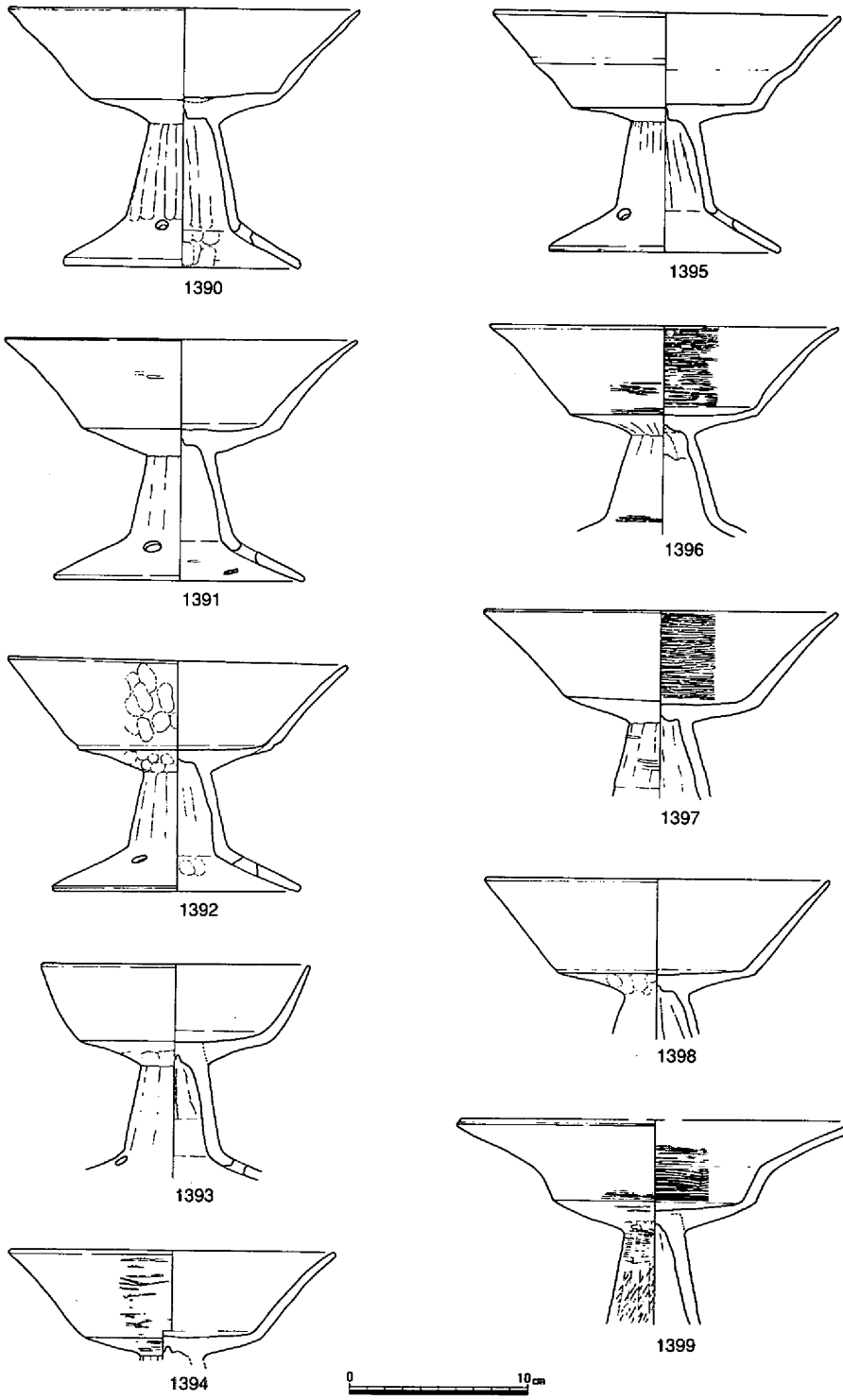


第313図　竪穴住居60②（1/60）

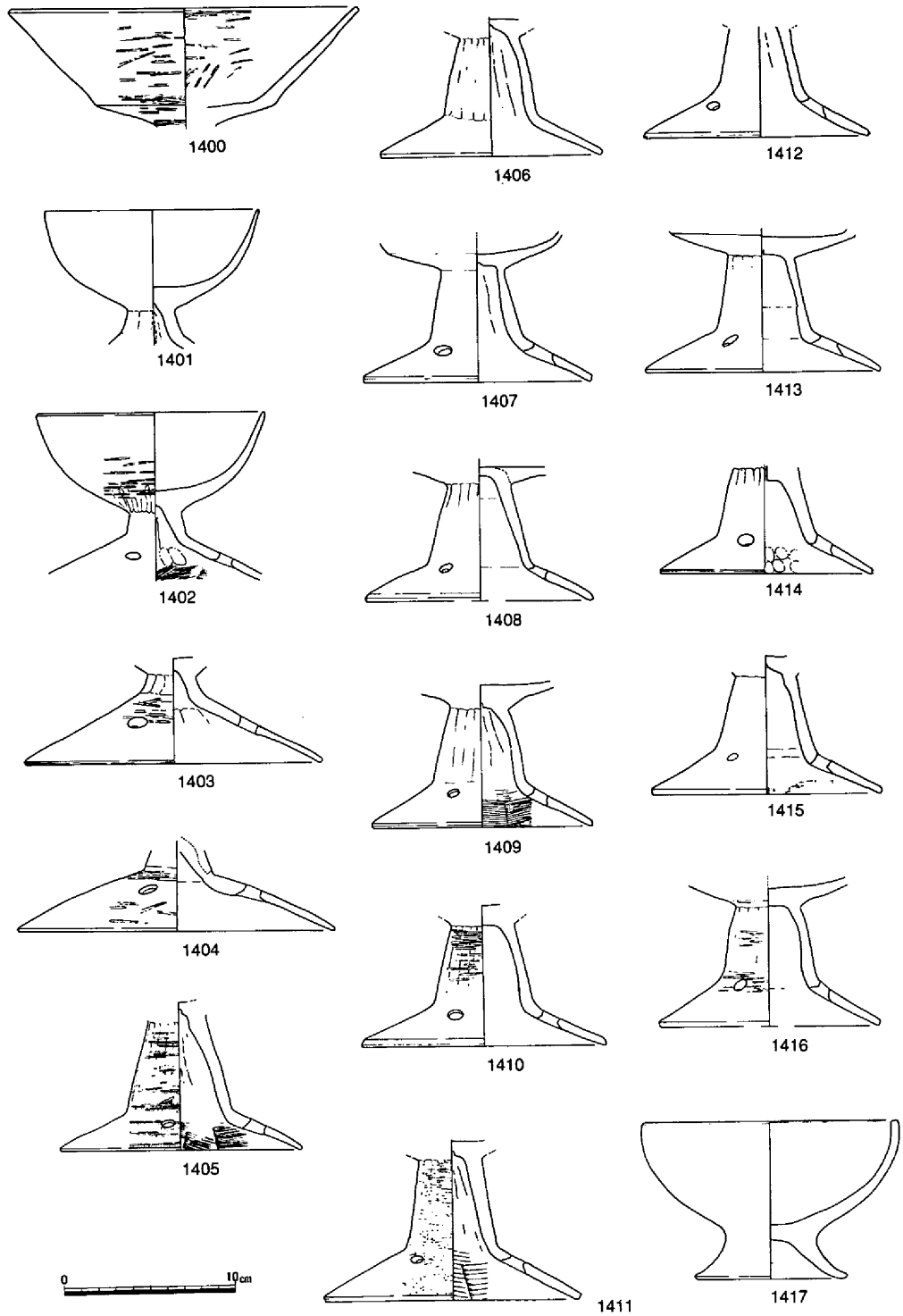
や内傾しながら立上る。端面はヨコナデと櫛描平行沈線がめぐるものがみられる。調整は外面がナデやハケナデ後にヘラミガキを、内面はヘラケズリ、ヘラケズリと指押え、ハケナデとヘラケズリなどがある。壺は小型の壺1445と比較的に大型のものに区分され、複合口縁を呈するものがみられる。1450は口縁部が内傾し、複合口縁を呈し、胎土内には角閃石、雲母が多



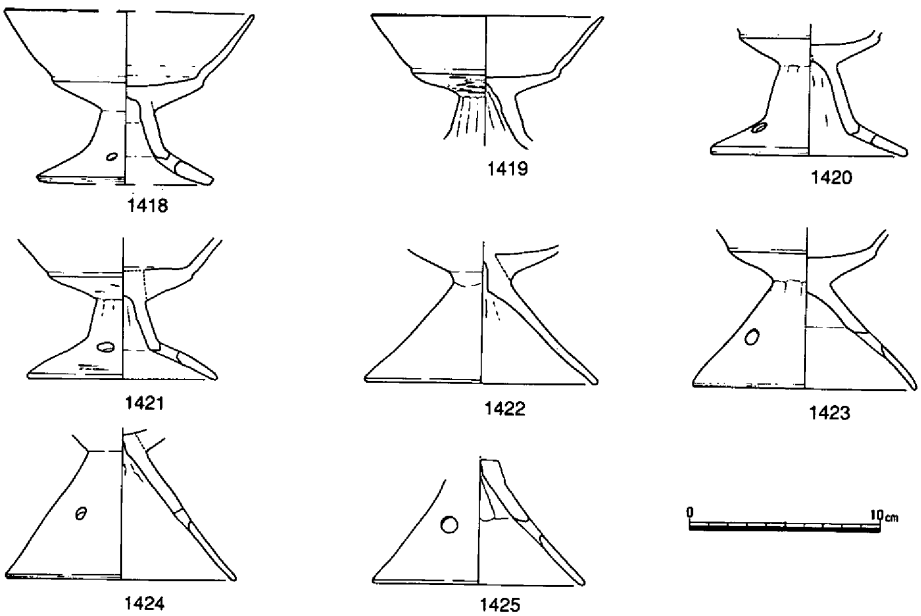
第314図　竪穴住居60上層出土遺物①（1/4）

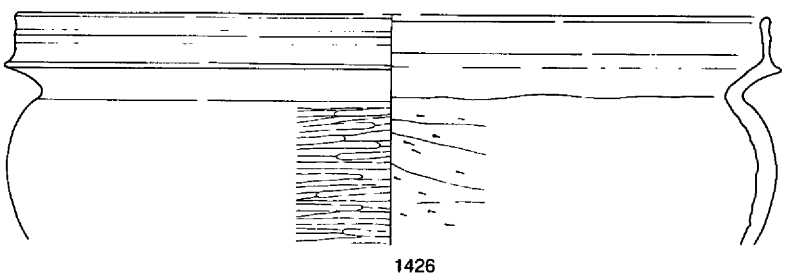


第315図　竪穴住居60上層出土遺物②（1/4）

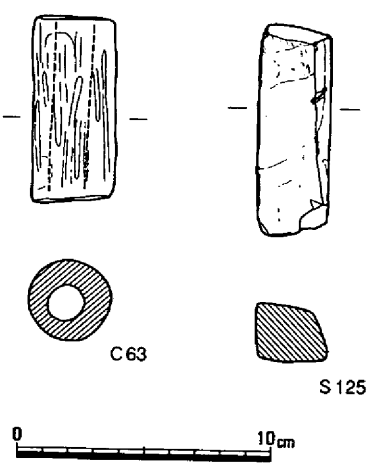


第316図　竪穴住居60上層出土遺物③（1/4）

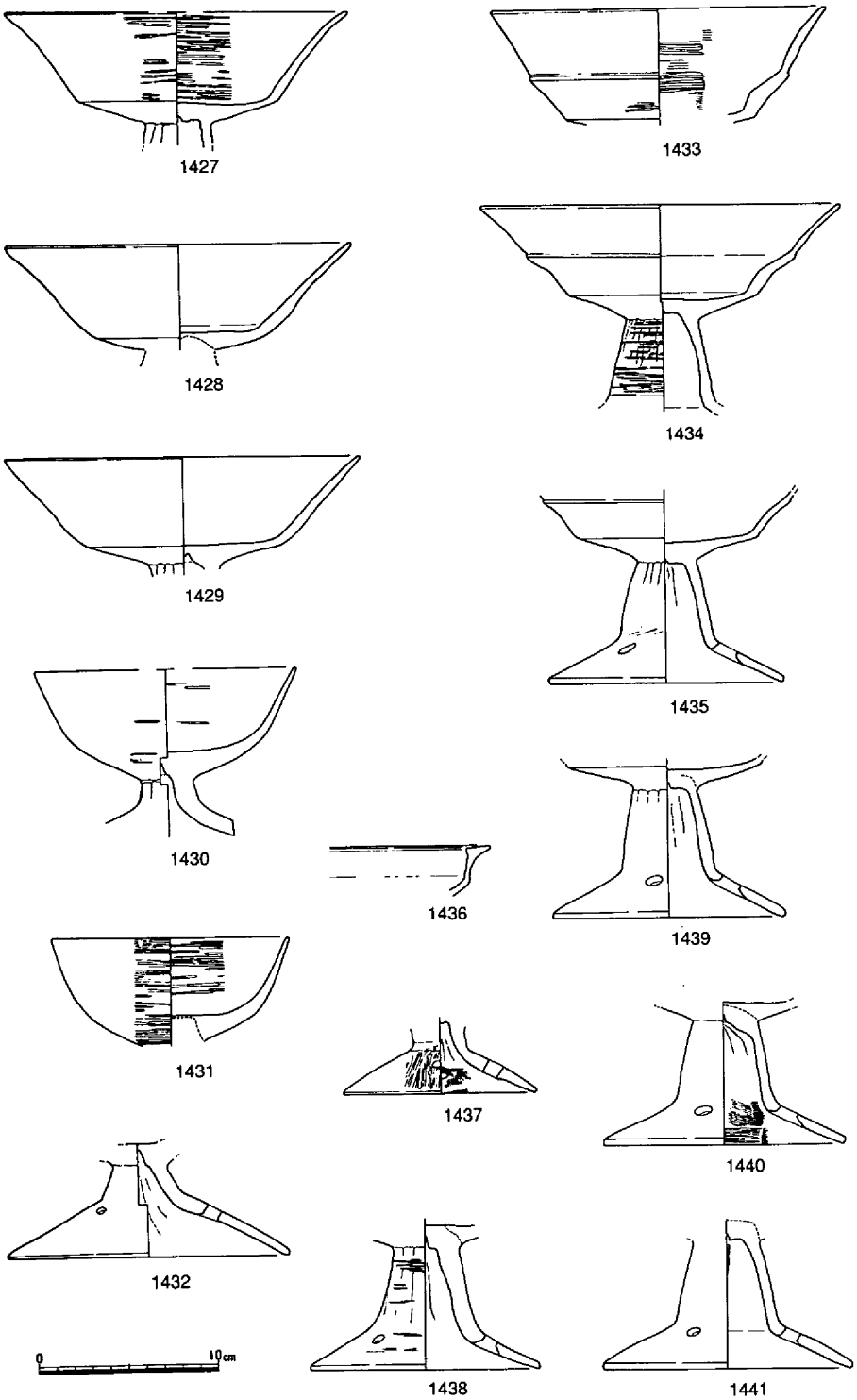




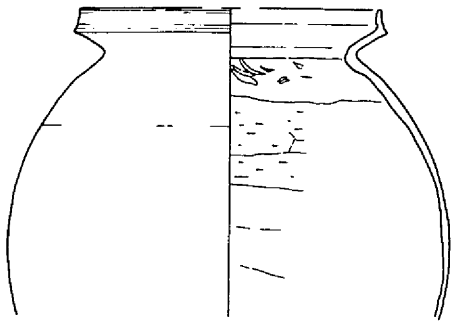
く含まれ、色調は橙色である。1451は複合口縁を呈し、口縁部の内外画に櫛描波状文が施されている。1450は四国系、1451は畿内系の搬入品と思われる。小型器台は受部中央が脚部へ貫通するか否かによって区分されるが、いずれも出土している。柱穴内からは土器は甕1466・1473～1476、高杯1467～1471、小型器台1472、土製品は土錘C63、石製品は砥石S127が出土している。甕は口縁部が「く」字状に外反し、さらに上方に端部が拡張するもの1466・1473・1474と「く」字状だけ1475・1476のものに大別できる。高杯は短脚で、脚柱がやや細い1470・1471とやや長脚で中太の1468・1469

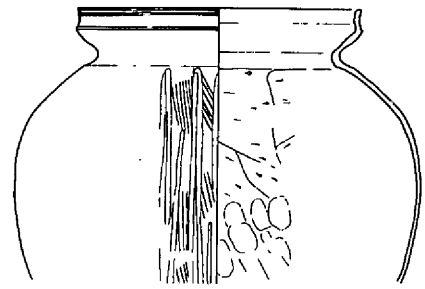


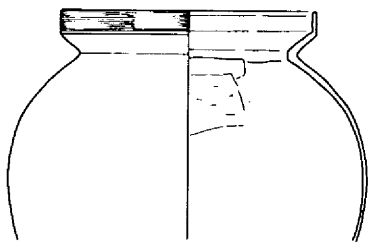
第317図　竪穴住居60上層出土遺物④
(1/4・1/3)

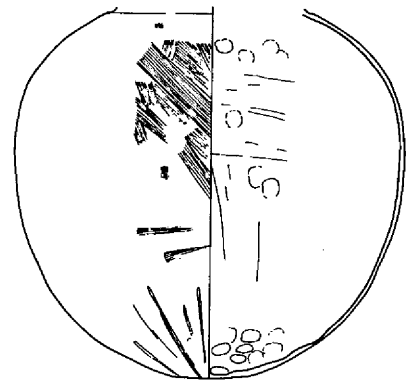


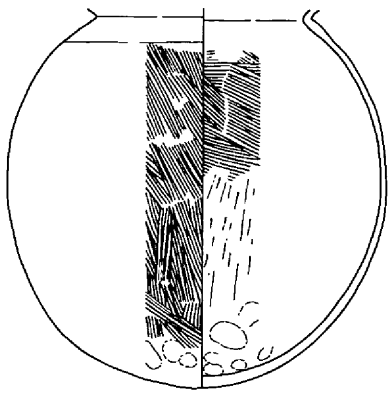
第318図　竪穴住居60上層出土遺物⑤（1/4）


1442

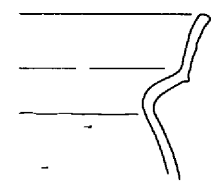

1446


1443

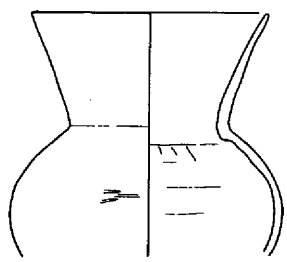

1447

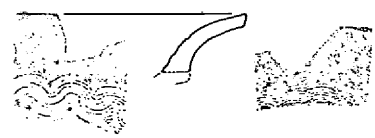

1444

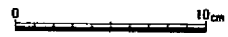
1448


1449

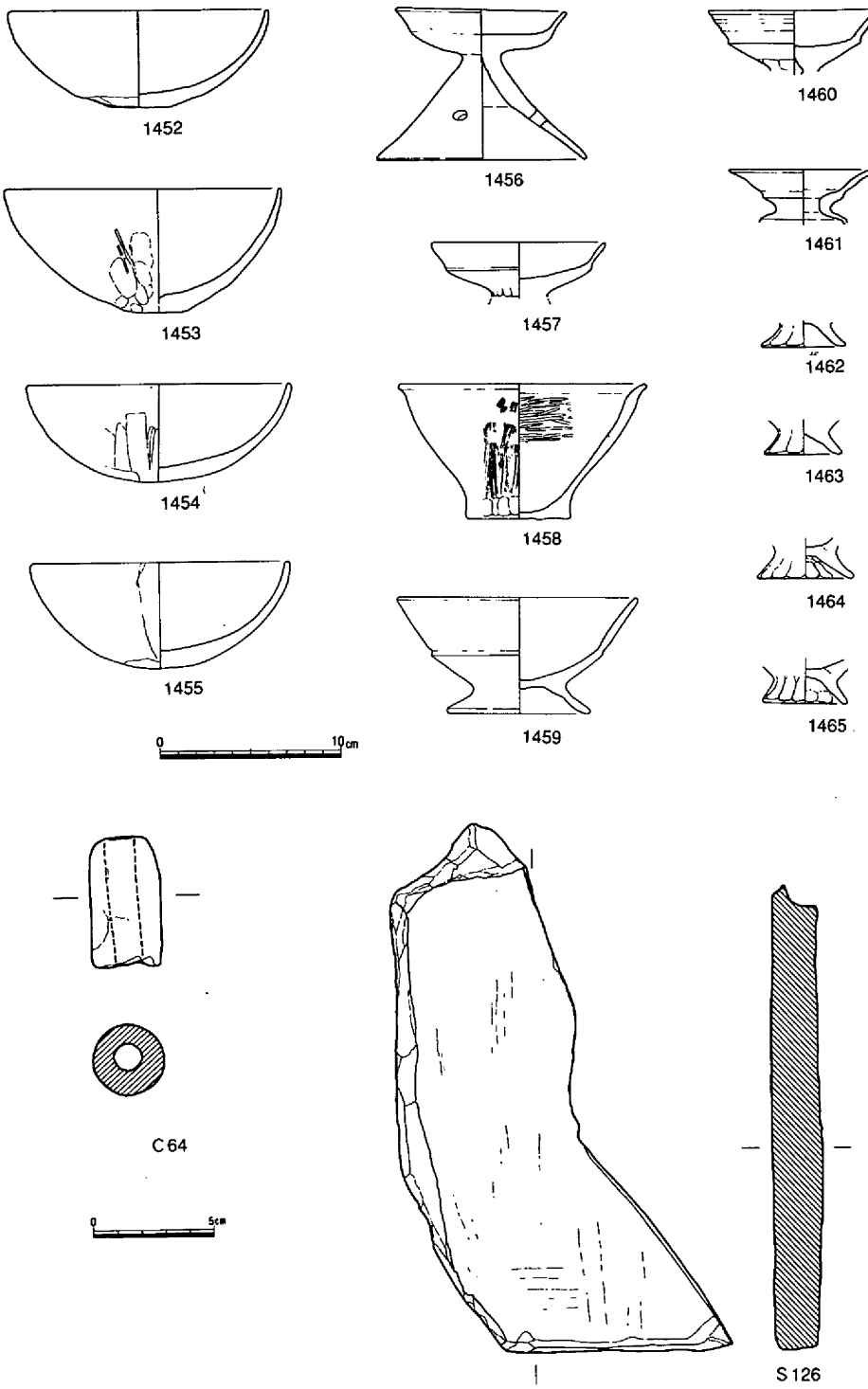
1450


1445


1451

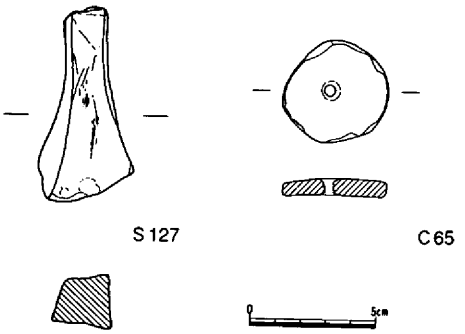


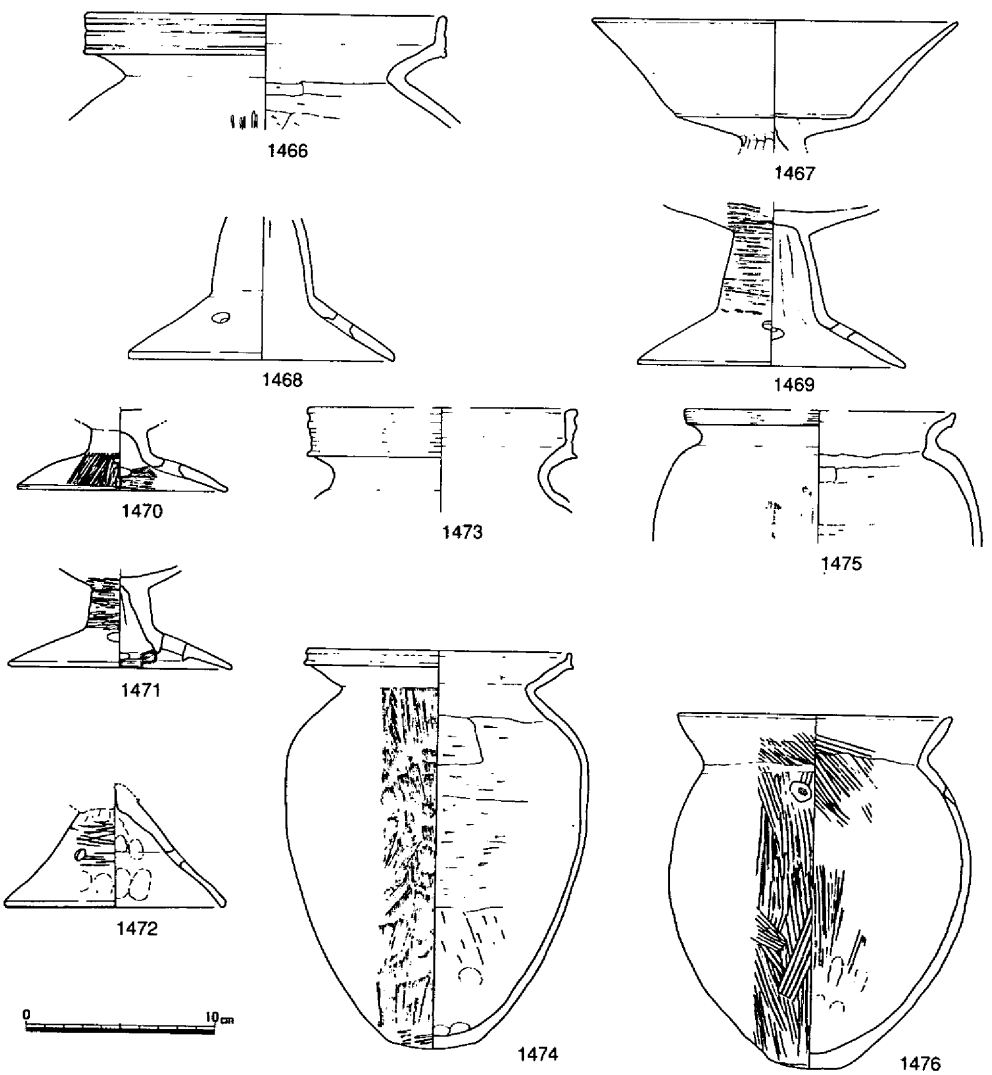
第319図　竪穴住居60下層出土遺物①（1/4）



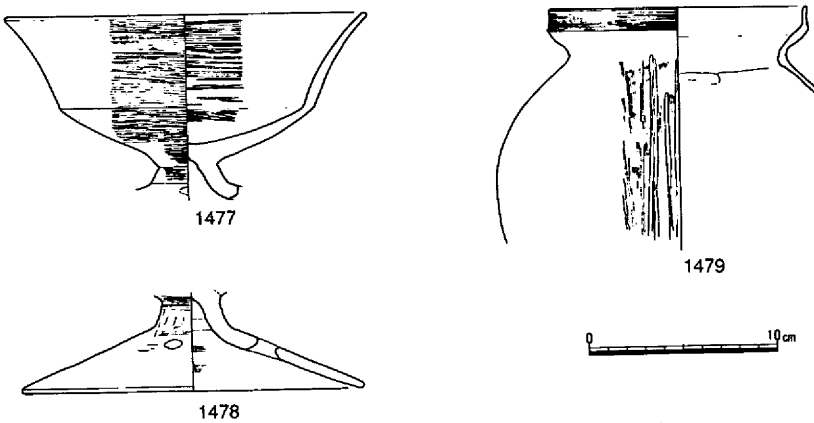
第320図　竪穴住居60下層出土遺物②（1/4・1/3）

がある。貼床層からは高杯1477・1478、甕1479が出土している。1478は短脚で、脚裾部は「八」字状に大きく開くものである。このように、竪穴住居60では多量の遺物が出土したが、廃絶後の土器、床面及び柱穴等の土器からみて、本遺構は下田所期の新相の時期に比定されるものと思われる。





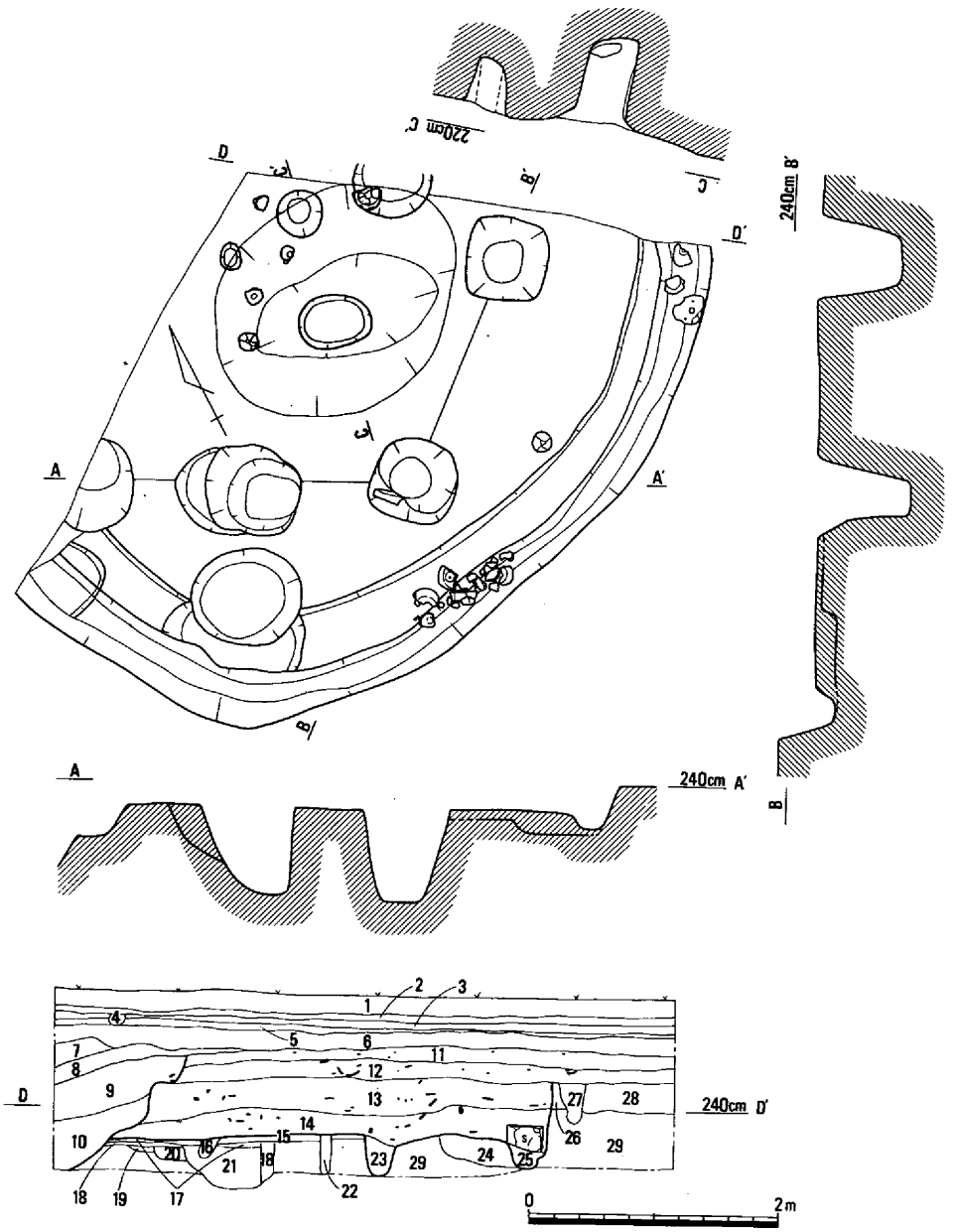
第321図　竪穴住居60柱穴および中央穴出土遺物（1/3・1/4）



第322図　竪穴住居60貼床出土遺物（1/4）

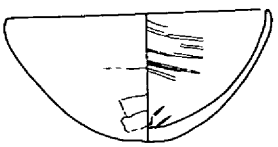
竪穴住居61（第285・323～325図）

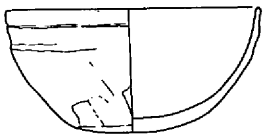
4A区のほぼ中央部に位置し、中世以降の大溝に大部分は切られているが、北部分は調査区外となる。遺構は海抜2.3mで検出され、平面形は不整円形を呈するが、遺構の規模は不明である。住居内には柱穴3、中央ピット、壁体溝が検出され、貼床層は2面確認でき、1回の建て替えがなされている。住居の規模は不明であるが、柱穴の配置から主柱は5本であったと考えられる。柱穴も切り合い関係が認められることから、建て替えが確認できた。柱穴掘り方は65×65cm、深さ72cmを測り、比較的に大形である。床面からの壁高は最も良好な所で36cmを測り、壁体溝は幅15～30cm、深さ10～12cmを測る。床面のほぼ中央部は長軸2.15m、短軸1.7m、深さ22.5cmの浅い二段掘りの凹みとなり、その中央には40×60cm、深さ68cmのピットが存在した。ピット内は炭で充填されているが、遺物も含まれている。遺物は主に覆土から出土しているが、床面、壁体溝、柱穴等からも出土している。床面からは鉢1480～1482、高杯1488・1484、石包丁S128が出土している。1483は杯部が椀形を呈し、脚柱は低脚で、裾部は「八」字状に大きく開き、円形の穿孔が3か所ある。1484は脚柱がやや長く、裾部は「八」字に開き、中太である。胎土はいずれも水漉粘土である。S128は一部欠損するが、磨製石包丁である。刃部は直線刃で、2個の紐孔がみられる。壁体溝からはかなりまとまって遺物が出土したが、廃絶後の遺物と考えられる。遺物は高杯1485～1489、鉢1490、製塩土器がある。高杯は杯部が3段に拡張し、脚柱は短脚で、裾部が「八」字状に大きく開くものである。なお、裾部には円形の穿孔が3か所ある。胎土はいずれも水漉粘土である。貼床層内からは甕1492、高杯1493が出土している。中央ピット内からはミニチュアの壺1494、土錘C66・67が出土している。1494は水漉粘土を使用している。C66は重量99g、C67は104.94gを測る。柱穴内からは甕、高杯、壺が出土しているが、この柱穴は本遺構に伴わないものである。

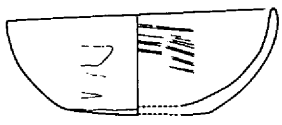


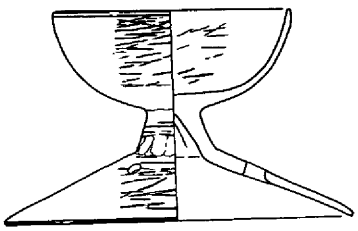
1．黒色土
2．灰色砂層
3．黄褐色微砂層
4．黒色土
5．灰色土
6．灰色微砂層
7．灰色粘質土
8．灰白色微砂層
9．暗灰色粘質土
10．暗灰青色粘質土
11．灰褐色土
12．茶褐色土
13．暗茶褐色土
14．黒色土
15．暗灰黄色粘質土
16．黒色土
17．黄色粘質土
18．暗灰色粘質土
19．赤色粘質土
20．暗黄褐色土
21．暗灰黄色粘質土
22．暗灰黄色土
23．黒色土
24．暗黄色粘質土
25．暗黄色土
26．茶褐色粘質土
27．暗褐色土
28．暗黄褐色粘質土
29．黄色粘質土

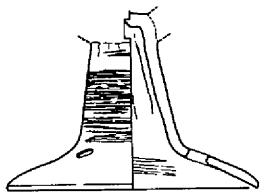
第323図　竪穴住居61（1/60）

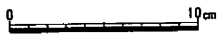

1480

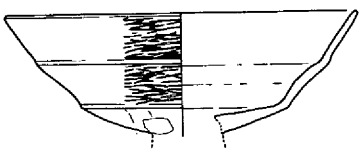

1481

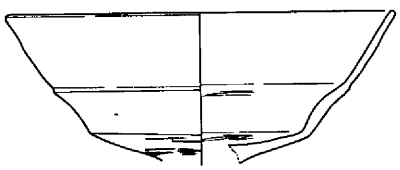

1482

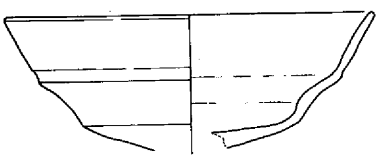

1483

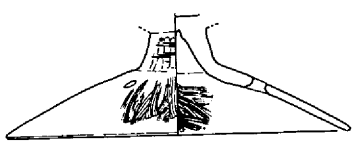

1484

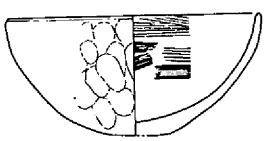


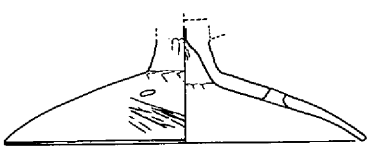

1485

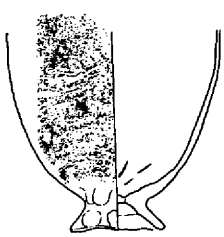

1486


1487


1488

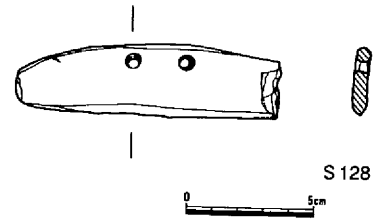

1490


1489

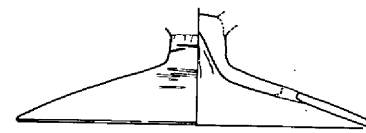

1491

第324図　竪穴住居61出土遺物①（1/4）

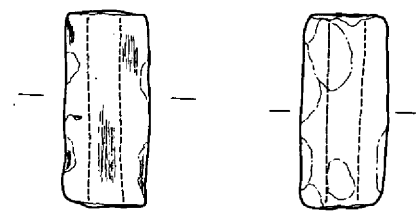
竪穴住居61の時期は、床面出土の遺物からみて、下田所期～亀川上層期と考えられる。また、廃絶は壁体溝内出土高杯の形態からみて、下田所～亀川上層期に廃絶したと考えられる。いずれにせよ、土器の形態からみて、あまり時期差がない、短期間の使用であったと思われる。　（松本）

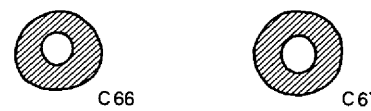


1492

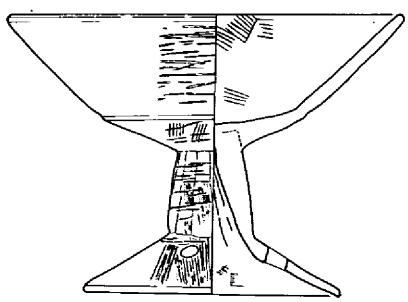

1493

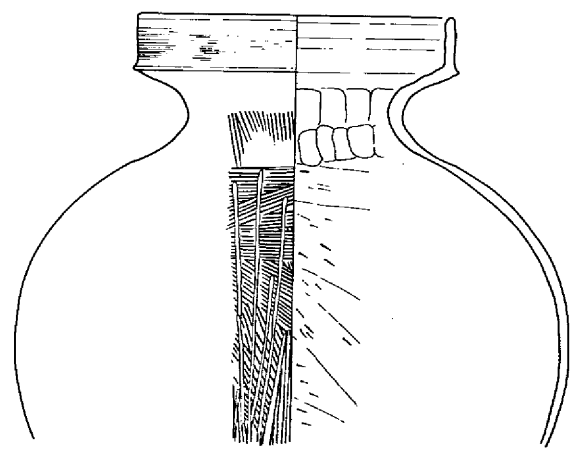
1494




C66　C67

1495

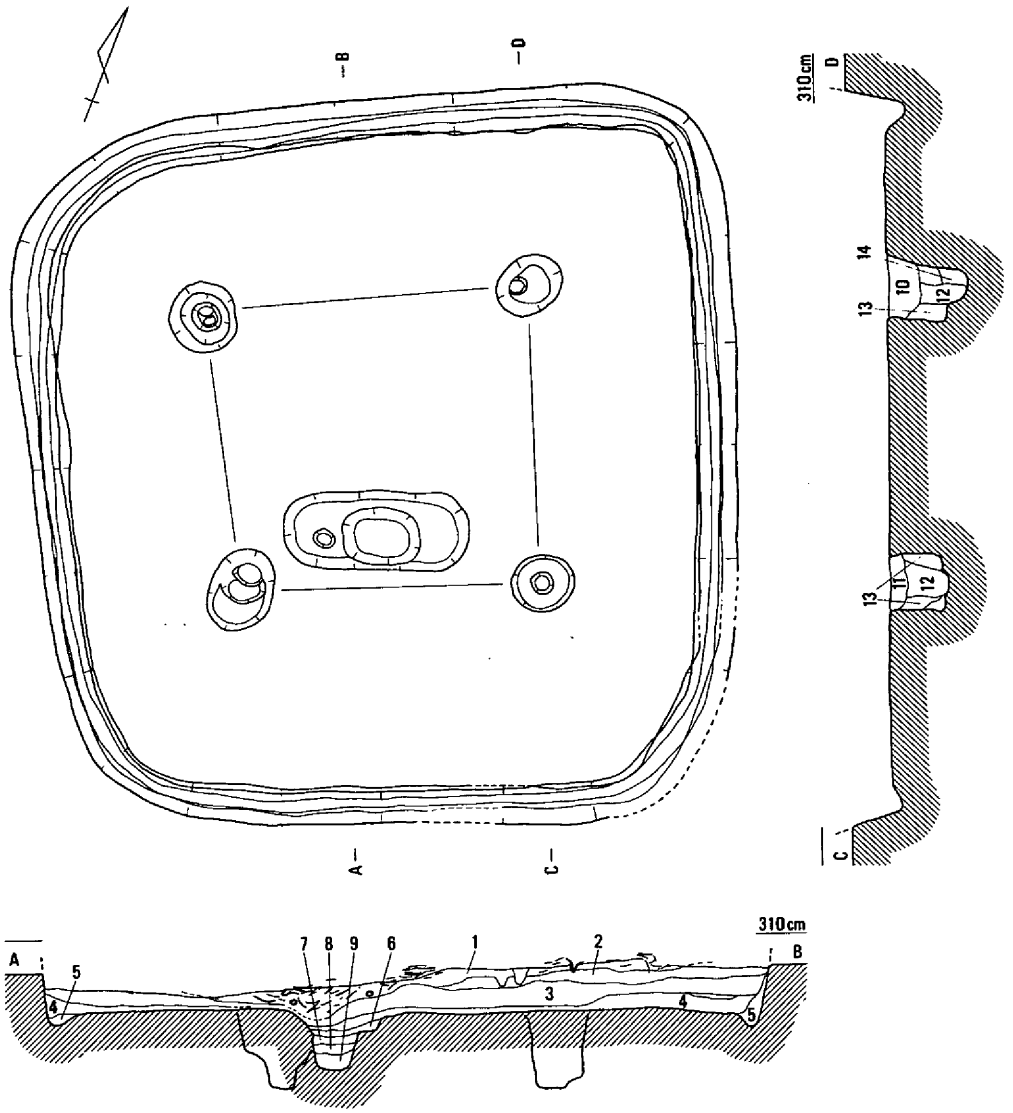

1496


1497

第325図　竪穴住居61出土遺物②（1/4・1/3）

竪穴住居62（第285・326～328図、巻頭カラー図版、写真図版131）

４Ｂｂから４Ｂｄ区にかけて所在が確認された住居で、当初夥しい土器の溜りとして認識された。住居としての確認は海抜2.85ｍにおいてで、隅丸方形を呈する平面形態が認められた。規模は、東西方向で5.30～5.70ｍ、南北方向で5.50～5.85ｍを測り、検出面から床面までの深さ



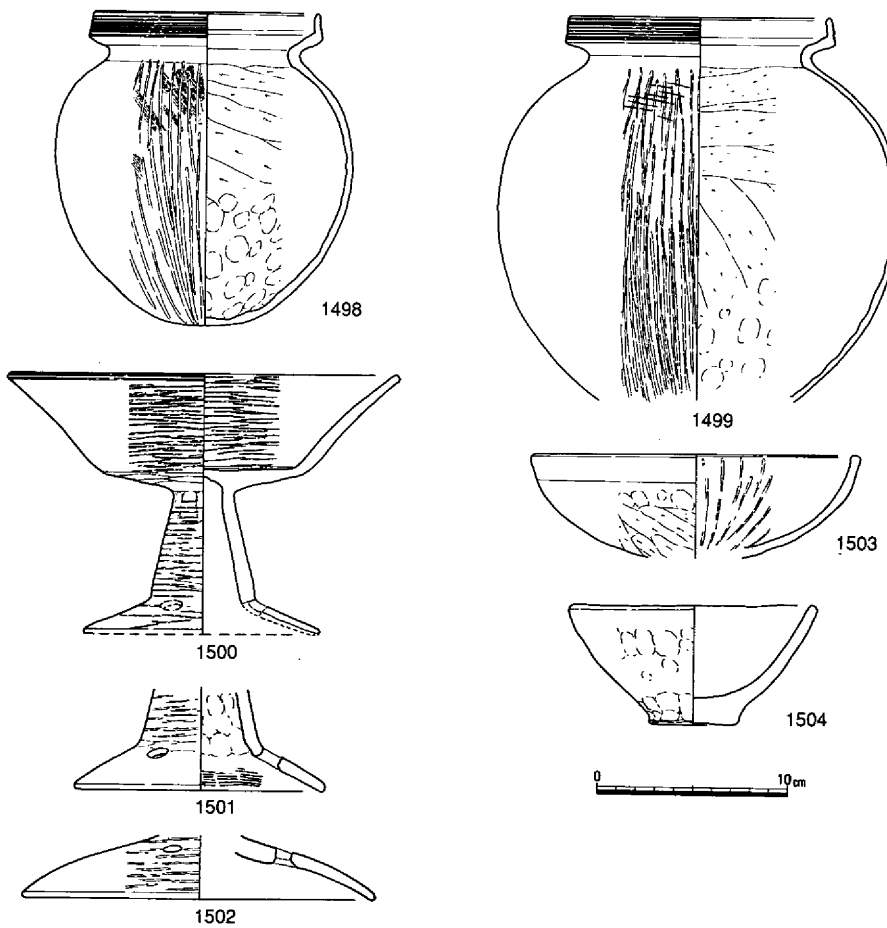
1．暗灰黄色土
（含、多量の土器）
2．暗灰黄色土
3．暗灰茶色土
4．暗灰色土
5．暗灰褐色土
6．灰黄色土
7．灰色土
8．黄灰色土
（含、黄色粘土塊）
9．黒色灰
10．暗灰黄色土
11．暗黄灰色土
12．暗灰黄色土
（含、炭・焼土）
13．灰黄色土、黄灰色土
（含、黄色塊）
14．黄灰色土

第326図　竪穴住居62（1/60）

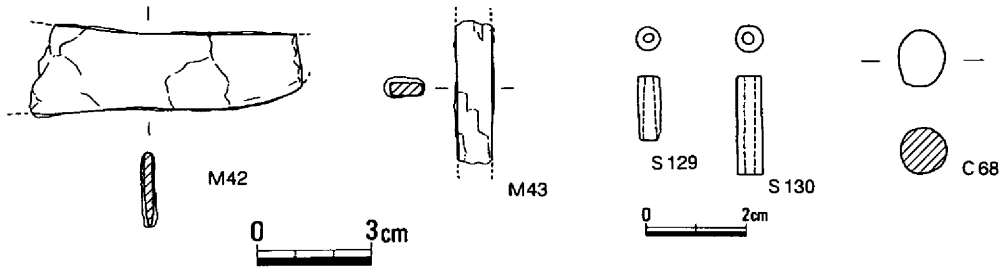
約35cmを測るものであった。

床面は、４本の柱穴と南側柱穴間に所在する中央施設、さらに壁体溝以外はほとんどが平坦な床面を認識させるものであった。柱は、床面のほぼ中央付近で径40～60cm、深さ50～60cm規模の柱穴が芯心距離、東西で2.30～2.50m、南北で2.10～2.35mを測って位置していた。なかには、断面および底部に柱痕を認めるものも見られた。中央施設としては、長軸長1.45m、幅65cmを測る長楕円形の土壙の存在が南側柱穴間中央部に認められ、さらにこの壙内中央部にはこれに並行した長軸長60cm、幅45cm、深さ約30cm規模の土壙の存在が確認された。埋積状況は、第９層の灰の堆積を上から包み込むかのような状況で基盤土壙の層的な堆積が見られた。周辺に火所としての被熱面の確認は出来なかったものの火所に関係した性格が窺われよう。

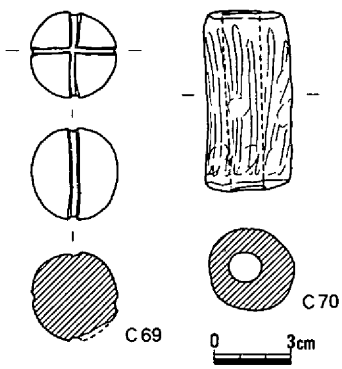
出土遺物としては、住居範囲に符合するかの状況で多量の土器が一部中央部で床面と接する状態で溜まりを形成していたが、床面に遺存した遺物としては少量の土器と鉄器２点、管玉２



第327図　竪穴住居62出土遺物①（1/4）



第328図　竪穴住居62出土遺物②（1/2・2/3・1/3）



点、土錘２点等が散見されたにすぎない。

土器には、甕、高杯、鉢等の器種が見られ、型式的には下田所から亀川上層の範疇で考えられるものである。

住居覆土中に多く見られた土器は、一部床面に接するとはいえ住居廃絶後の土砂の埋積過程での覆土中に堆積し、住居の埋没を一層助長させる役割を担った感がつよく、ここには直接住居との関係を示唆させる要素は存在しないと考える。（島崎）

上層遺物はまず平面的な出土状況の把握のため土器溜りの端から順次検出を行った。結果、全面に赤く発色した高杯類を主体に、予想をはるかに超える量の土器が隙間なく、折り重なるように密に詰まった状態で、足の踏み場もない状況に至った。

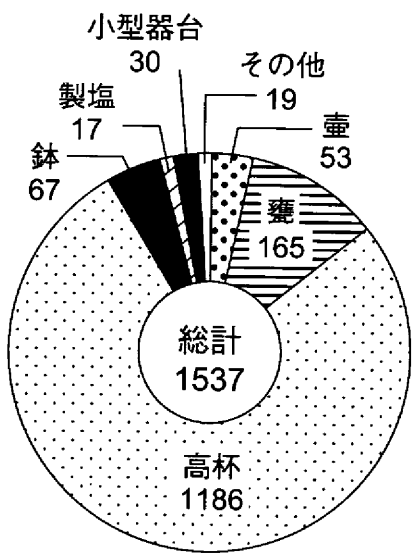
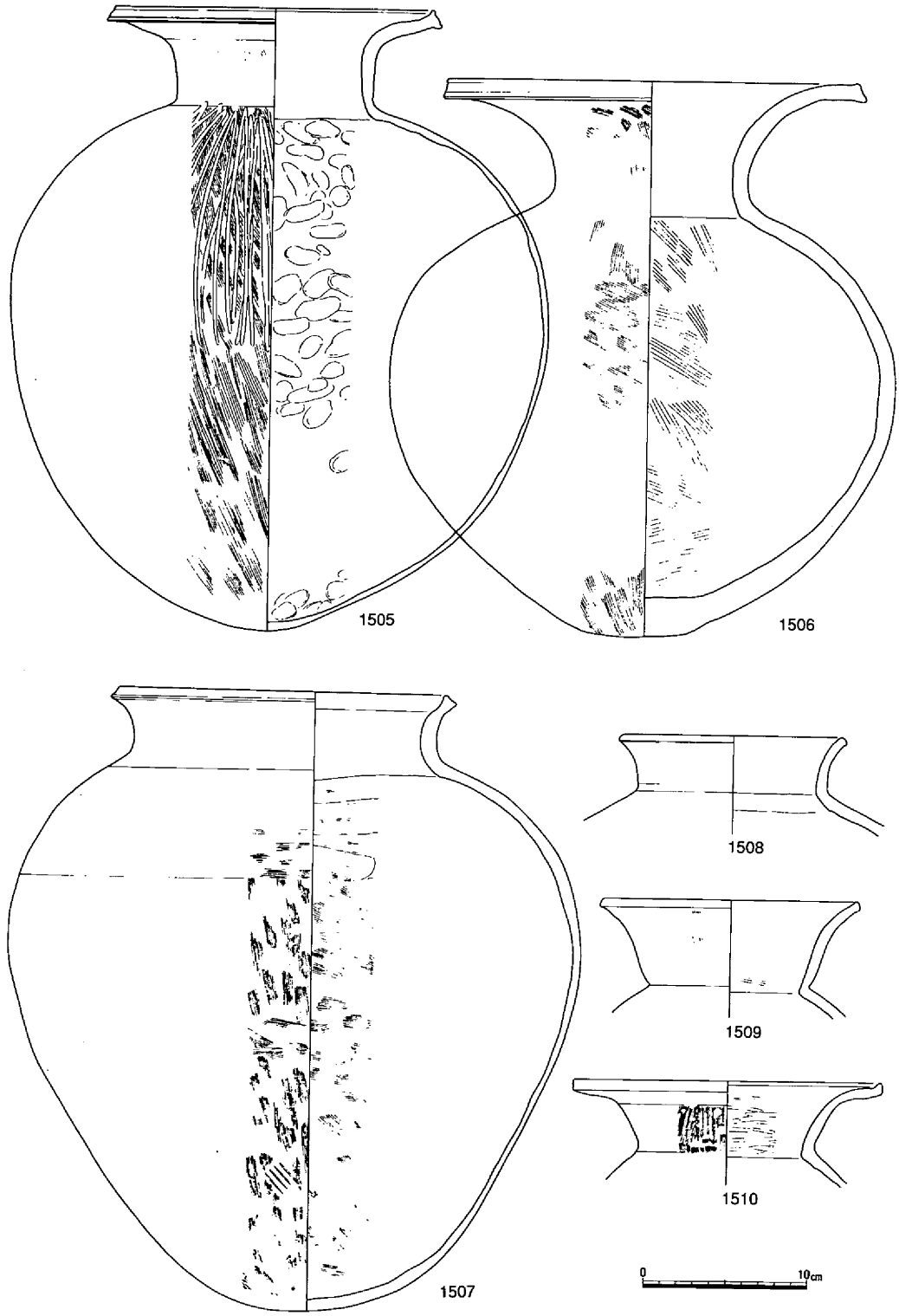


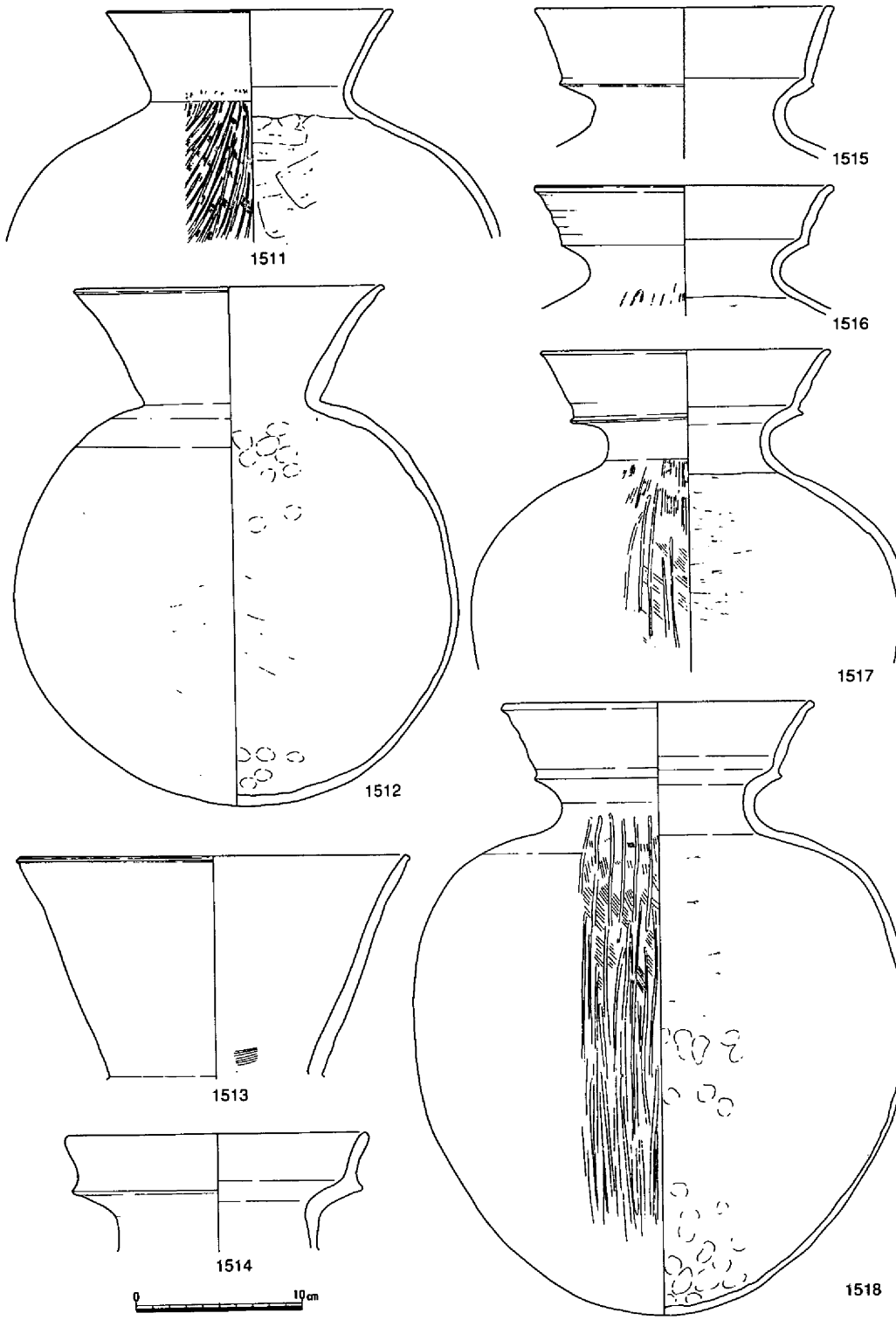
表５．器種別構成表

一方、断面から観れば、上層から第２層間に第１層が観察され、新旧差が存在するようにも見受けられるが、平面的には遺物は検出面から間断なく堆積しており、断面右に見える土器群は幾つか所在した部分的な凹みに堆積したものと考えられる。

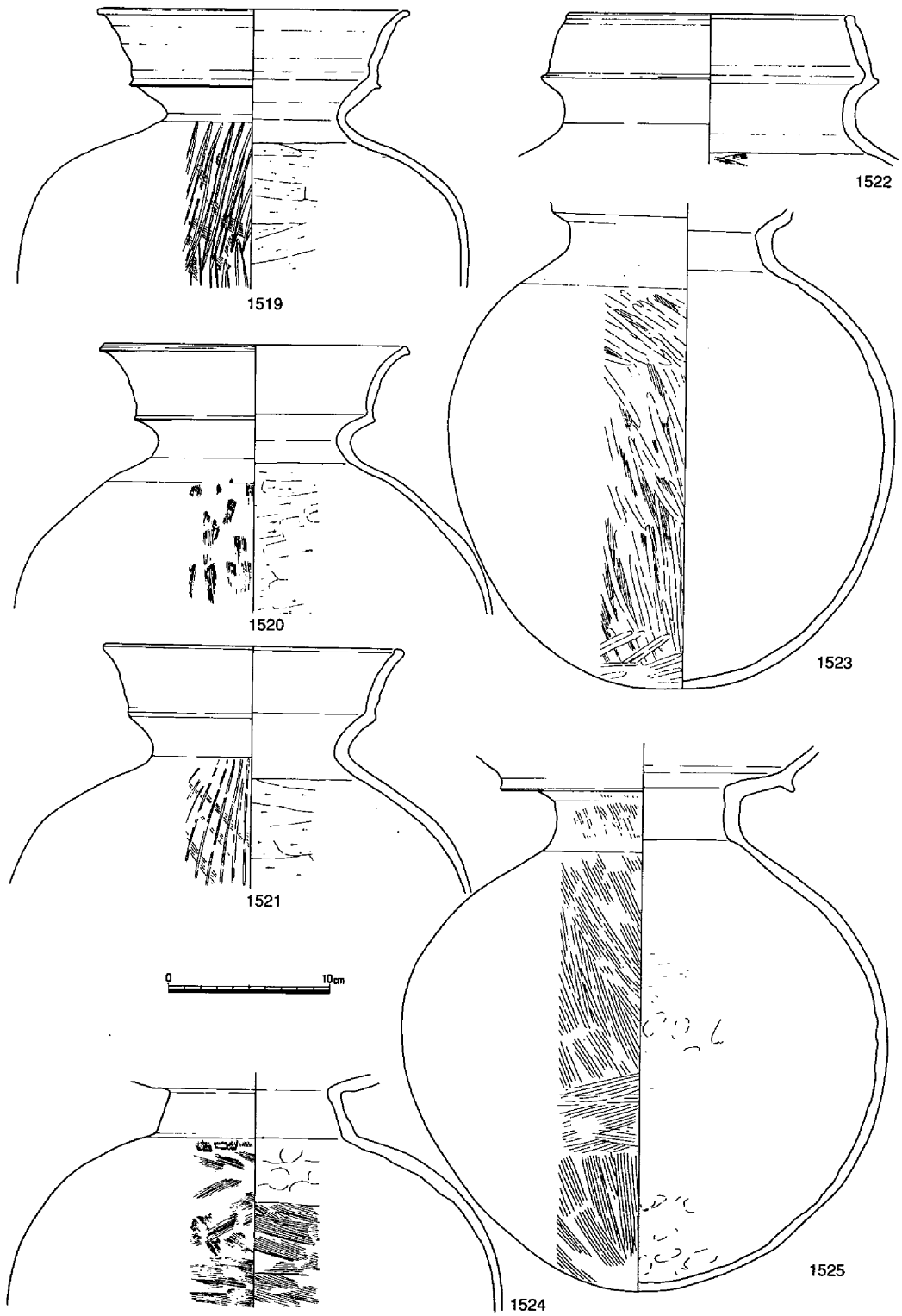
遺物は総数1537個体を数え、その77％にあたる1186個体もの高杯が出土しており、甕165個体（10.7％）、鉢67個体（4.3％）、壺53個体（3.4％）、小型器台30個体（1.9％）、ミニチュアおよび製塩土



第329図　竪穴住居62上層出土遺物①（1/4）



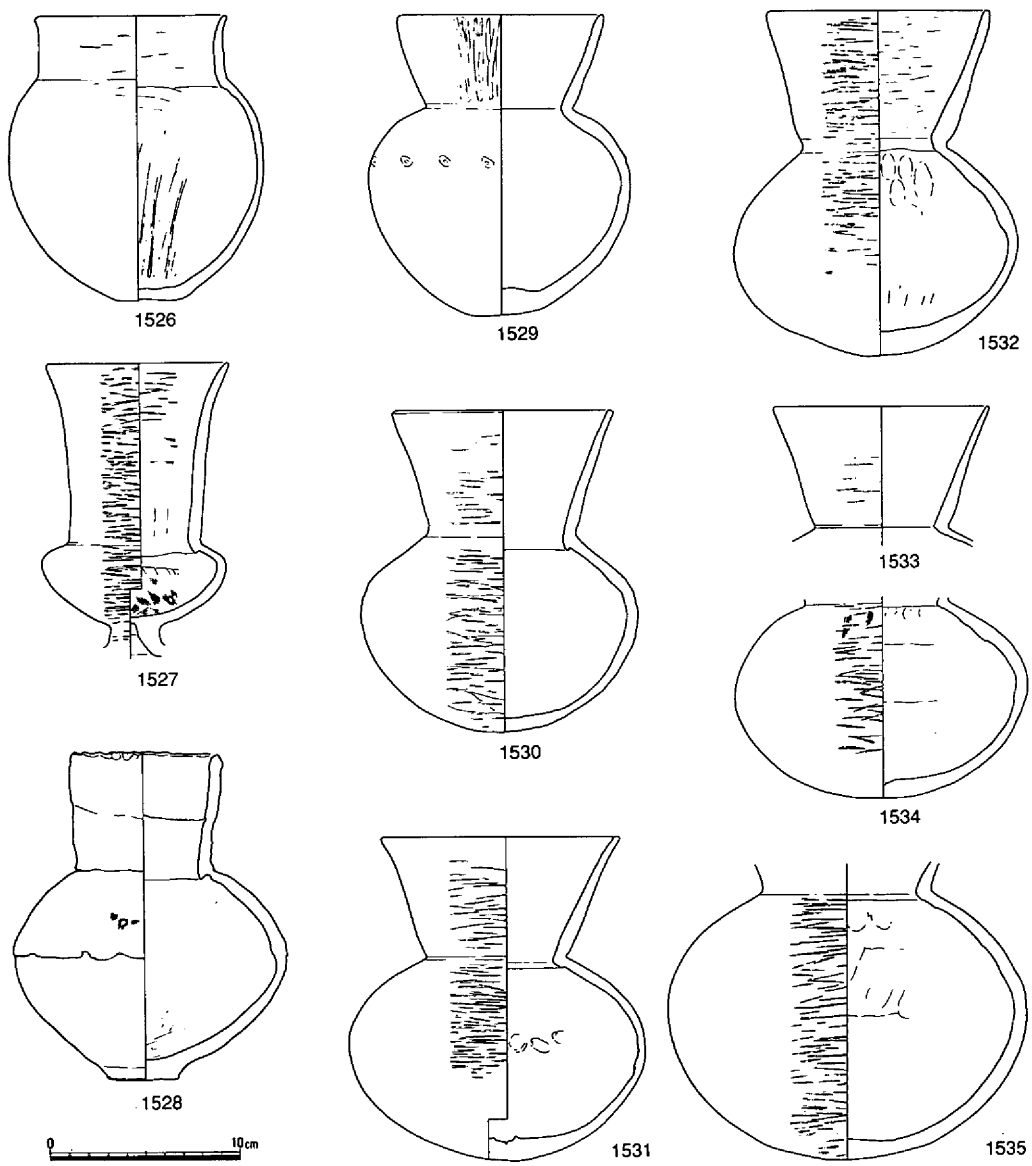
第330図　竪穴住居62上層出土遺物②（1/4）



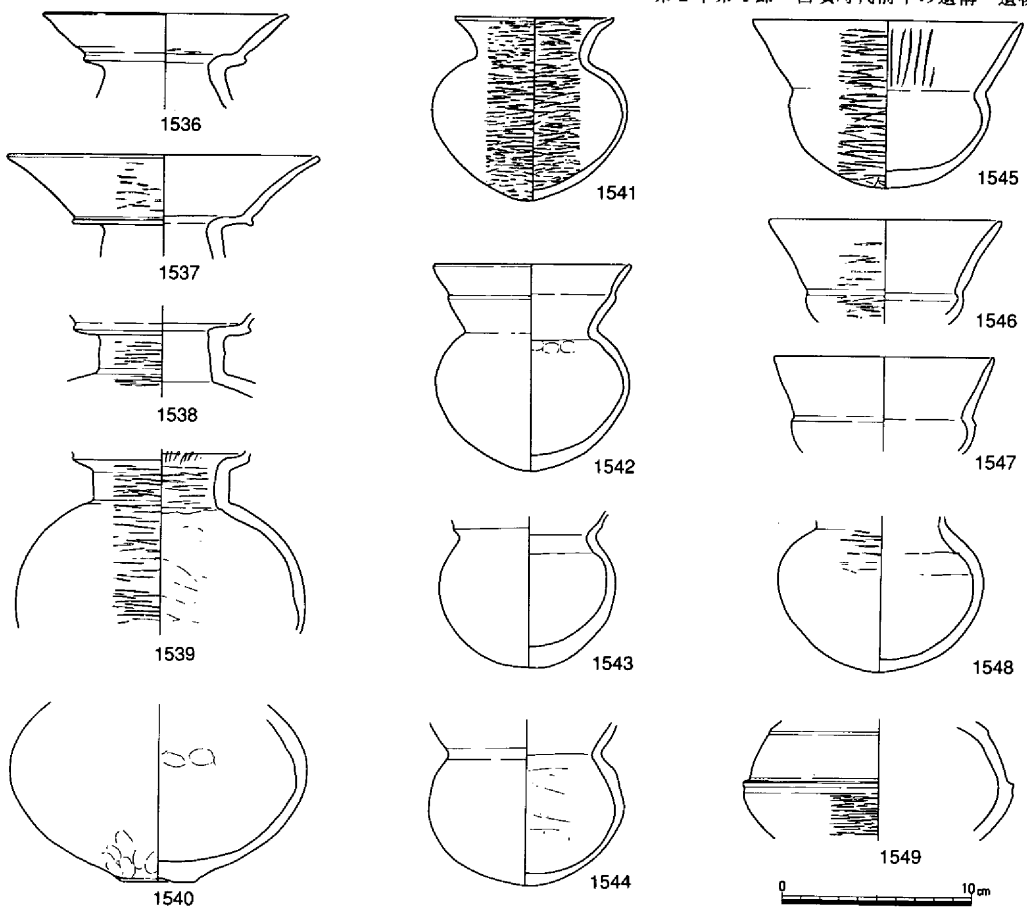
第331図　竪穴住居62上層出土遺物③（1/4）

器などが続く。

壺は容積的に大型の1505～1525、中型の1526～1540、小型の1541～1549に分けられる。大型の口縁部形態は直立する頸部から鋭く外反し、端部が肥厚する1505をはじめ、口縁が頸部から緩く曲線を描きながら外反する1506、甕状を呈す1507、口縁部が斜め外方に直線的に延びる1512など様々な形態がある中で、最も多くみられたのは1515～1521の口縁部が２重口縁を呈すものであった。また、土器の調整は1506が内面を下半をヘラケズリ、上半をハケし



第332図　竪穴住居62上層出土遺物④（1/4）



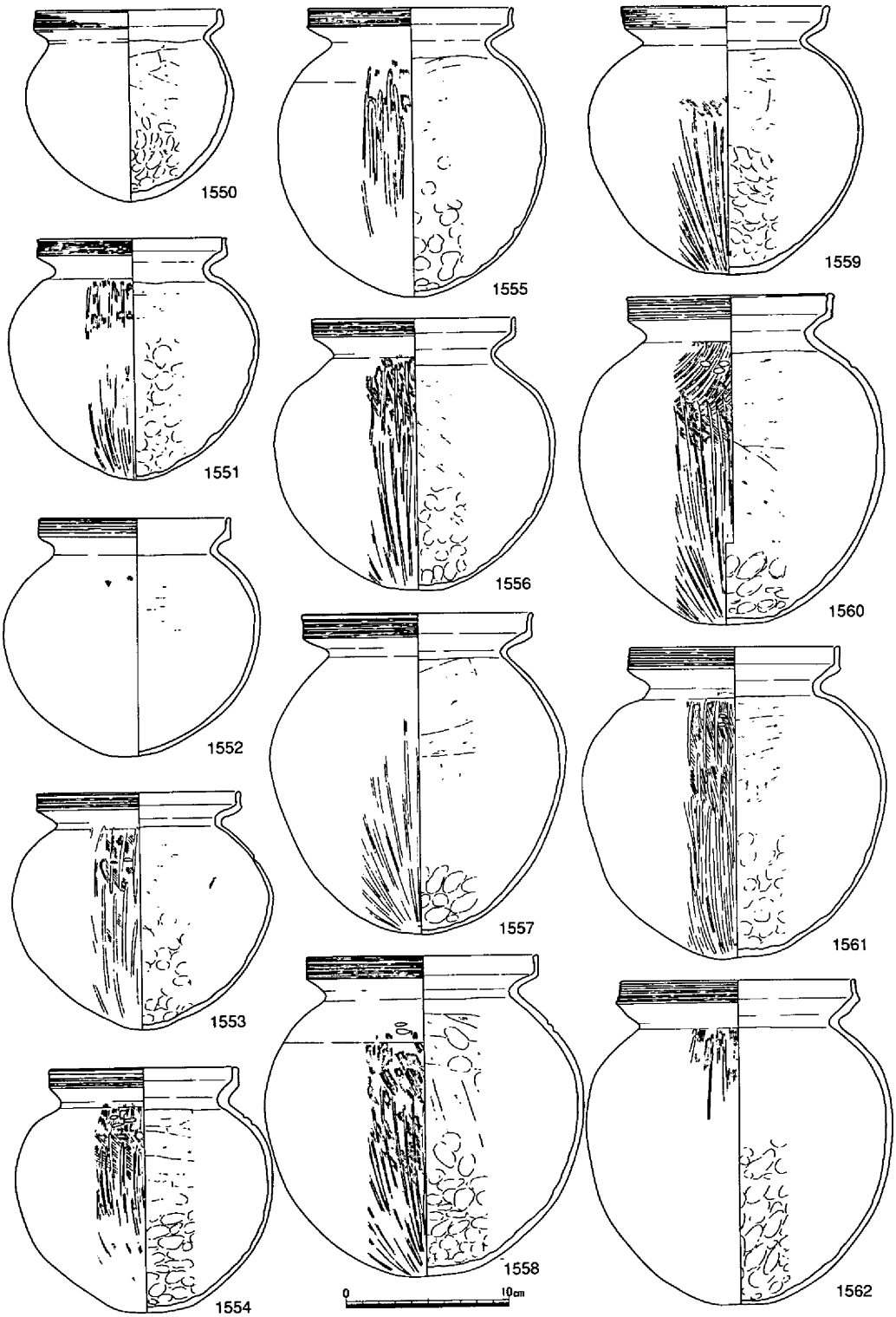
第333図　竪穴住居62上層出土遺物⑤（1/4）

ているものの器壁は厚く鈍重な感があるのに対し、1505は内面に無数の指頭圧が残り、器壁が薄い繊細な印象を与えるものであった。これと同様に器壁を薄く仕上げているものに1511および1515～1521の２重口縁壺が含まれる。胴部の形状は1507が中央やや上部に最大径をもち、1512は逆にやや下半に位置するものの、大半は中央に位置し、球形を呈すものが多い。

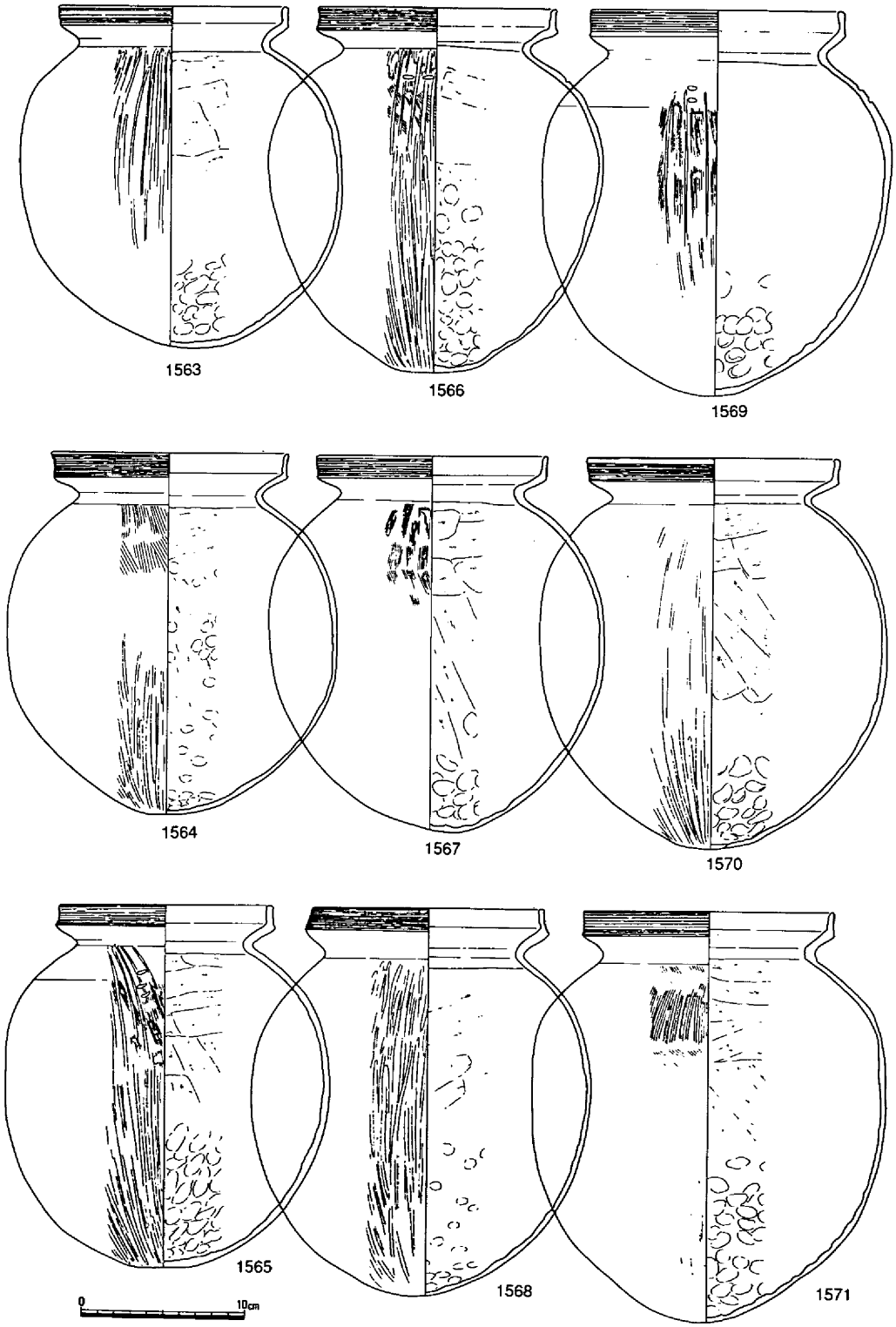
中型壺は直口壺1529～1535、２重口縁壺1536～1539などがあり、これらはいずれも水漉粘土を使用されたものである。他に、1526・1528があるが上記２種がほとんどで、直口壺が主体を占める結果となった。

小型壺は1527・1541～1549などがある。いずれも水漉粘土を使用したもので、壺の小型化した1541～1544、小型丸底壺1545～1547などがある。なお、1527は器表面が著しく荒れており、弥生時代の可能性を残す。

甕は165個体出土しており、器種別の比率は口縁端部が拡張し、櫛描平行沈線が施される1550～1574が最も多く147個体、約90％を占めるものであった。他に口縁が「く」字状に屈曲

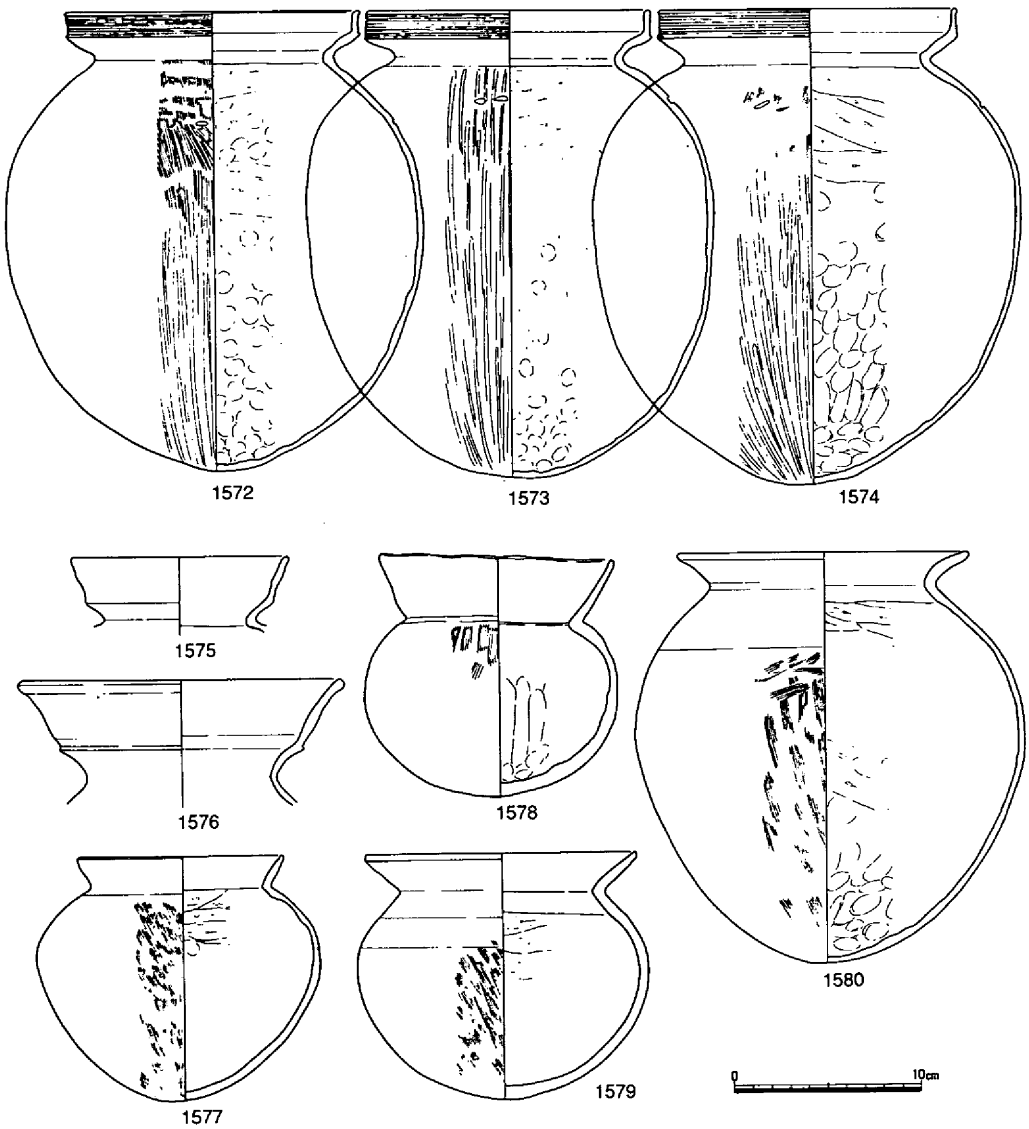


第334図　竪穴住居62上層出土遺物⑥（1/4）

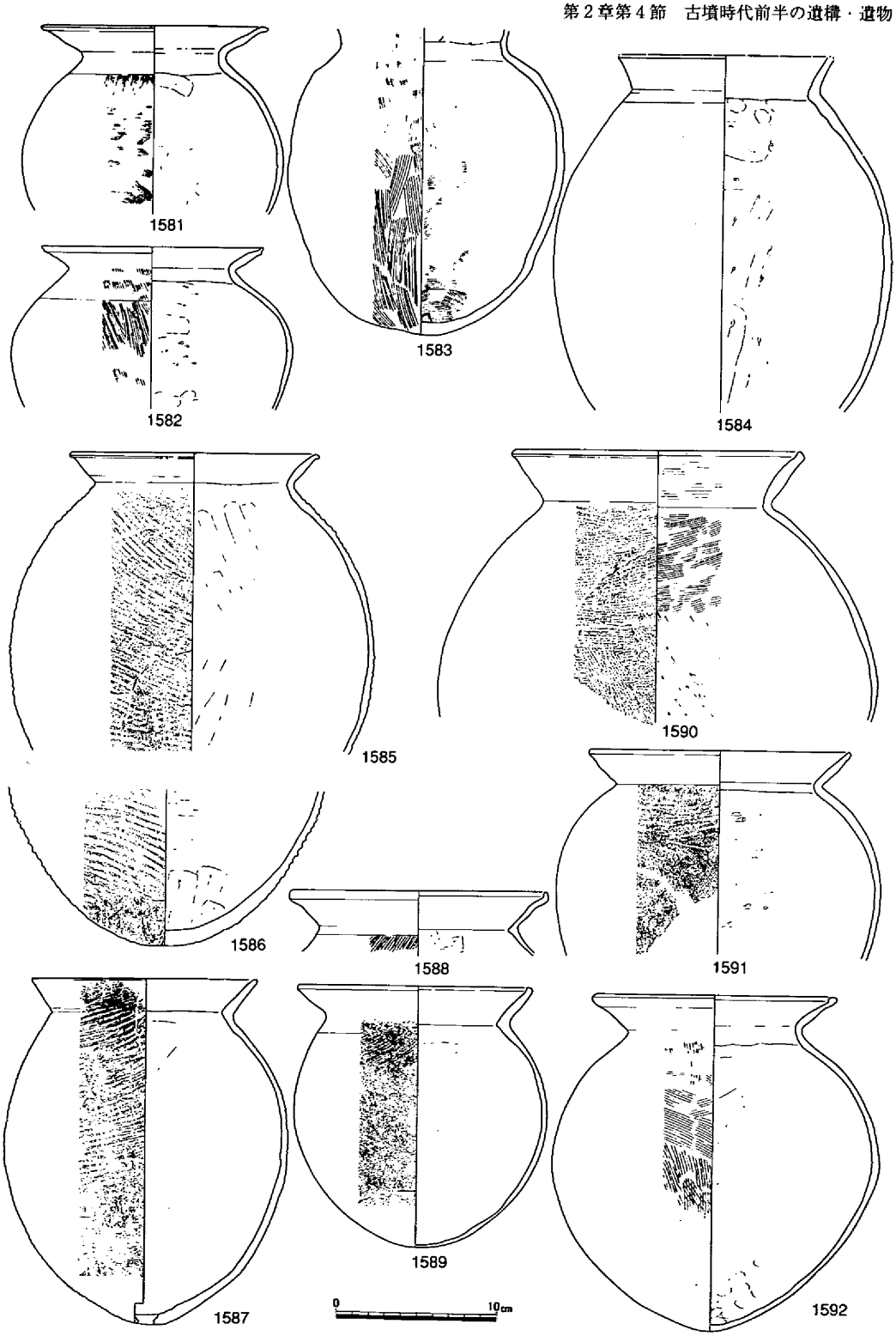


第335図　竪穴住居62上層出土遺物⑦（1/4）

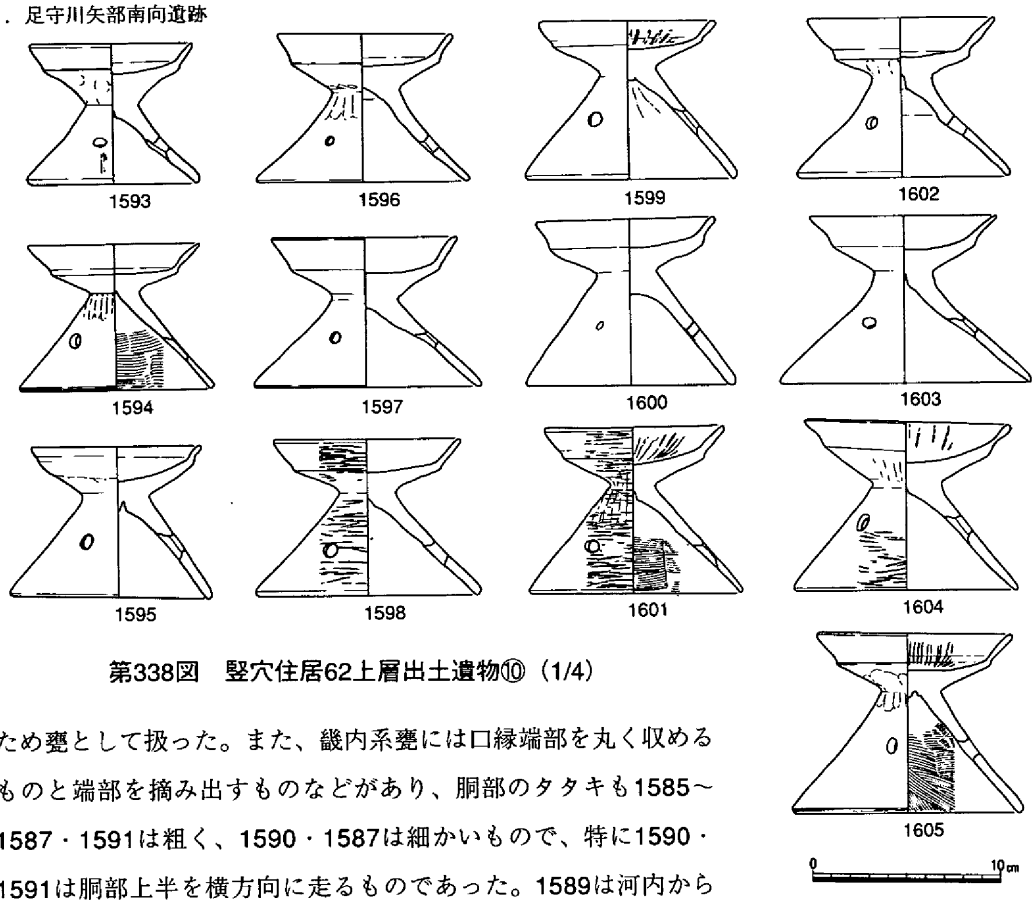
し端部を丸く納めている1580～1582や２重口縁を呈す1576ものなど４個体（２％）、小型の甕1575・1577～1579など４個体（２％）、畿内系の甕1585～1592など８個体（５％）であり、畿内系の甕は前述の土壙72と比較すれば倍近い割合に増えているものの、弥生時代からの系譜を引く口縁部拡張甕ｂ類の圧倒することが理解された。ｂ類は口径11.3cm、器高11.6の小型のものから、口径15.8cm、器高25.1cmの大型のものまであり、口縁部の櫛描平行沈線が浅く、消えかかっているものも散見された。また、胴部の形態はほぼ中央に最大径をもつものが大半で、最大径が中央より下がるものは皆無であった。なお、1577・1578は外面に煤が付着していた



第336図　竪穴住居62上層出土遺物⑧（1/4）



第337図　竪穴住居62上層出土遺物⑨（1/4）



第338図　竪穴住居62上層出土遺物⑩（1/4）

ため甕として扱った。また、畿内系甕には口縁端部を丸く収めるものと端部を摘み出すものなどがあり、胴部のタタキも1585～1587・1591は粗く、1590・1587は細かいもので、特に1590・1591は胴部上半を横方向に走るものであった。1589は河内からの搬入と思われる。

小型器台は30個体出土している。口径8.5cm、器高7.5cm～口径10.4cm、器高12.4cmのものまであるが、形態はいずれも「ハ」字状の脚部に、斜め外方に延びる口縁をもち、脚中央部３か所に円孔を穿つ。

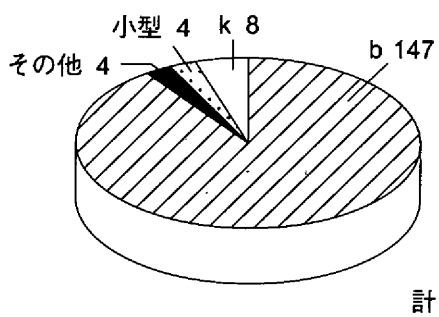


表６．甕分類表

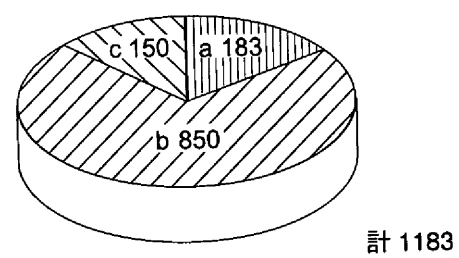
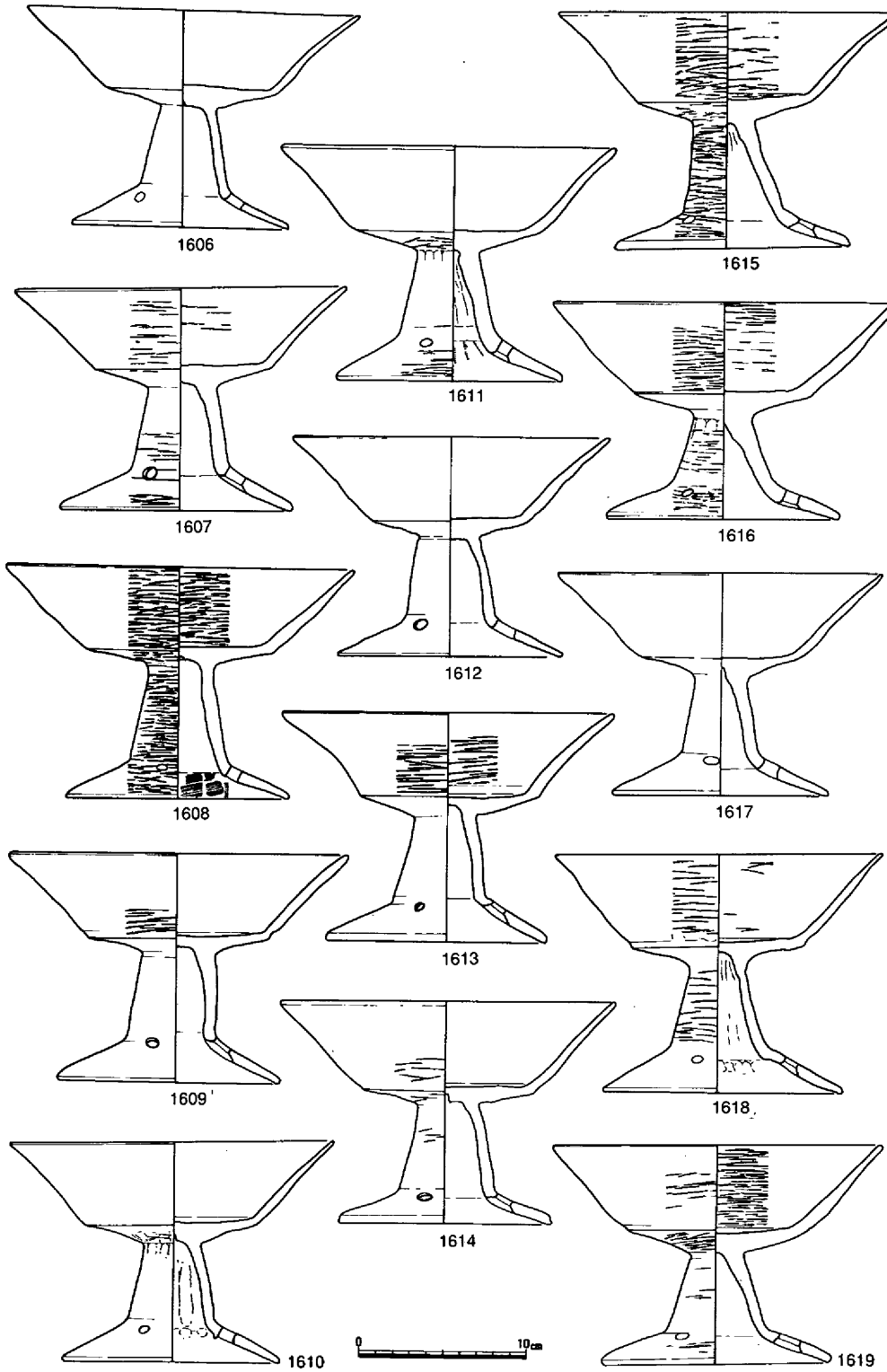
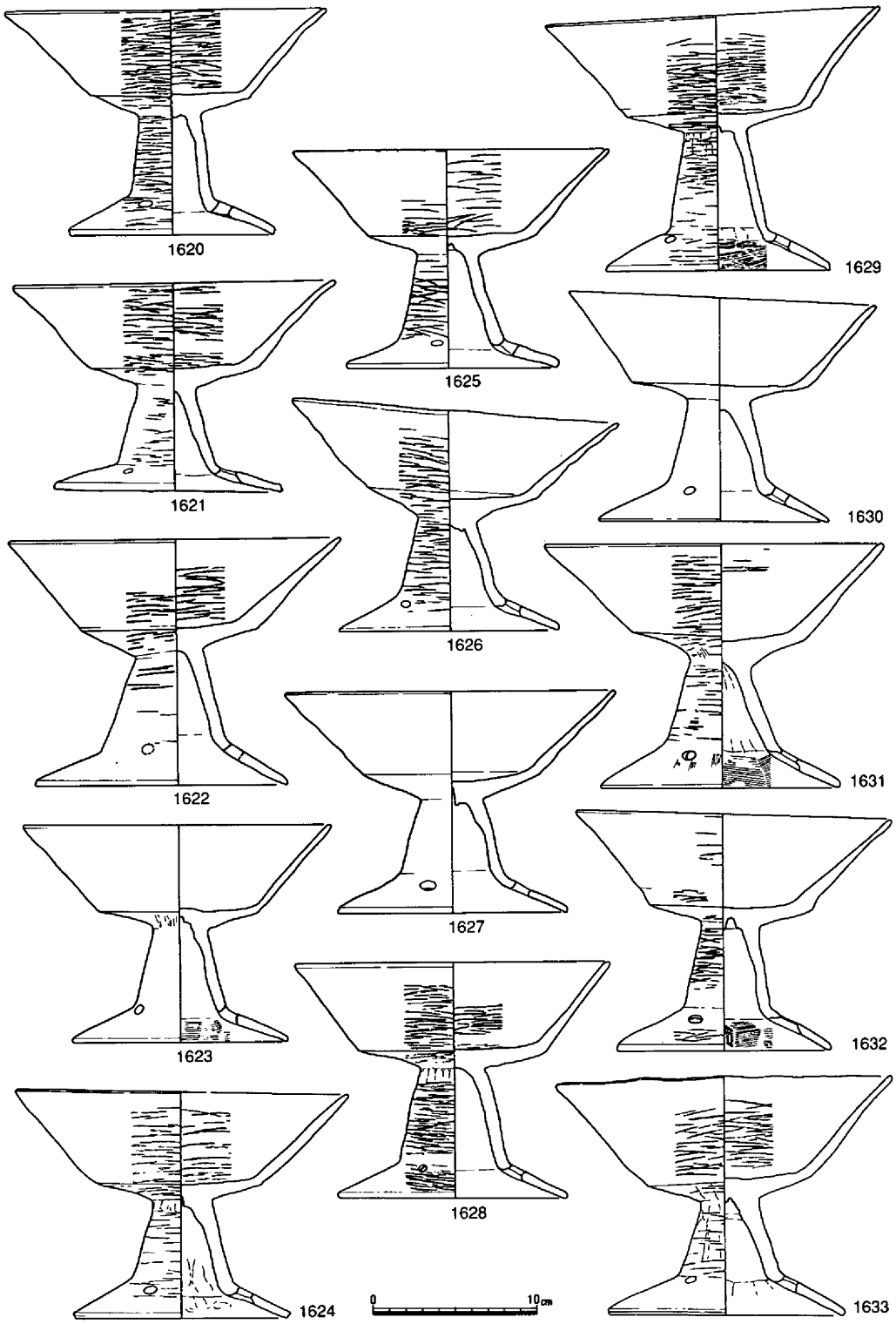


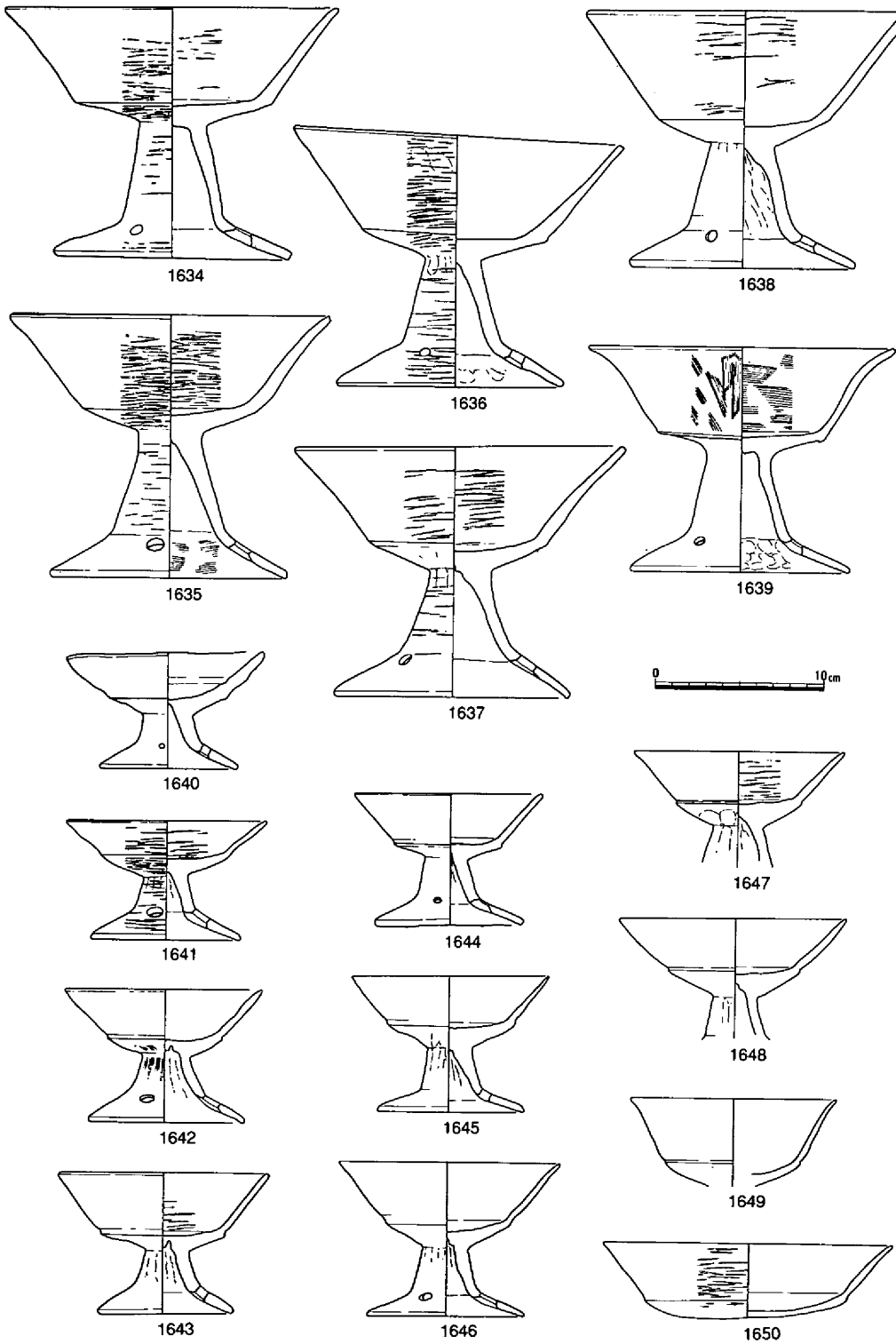
表７．高杯分類表



第339図　竪穴住居62上層出土遺物⑪（1/4）



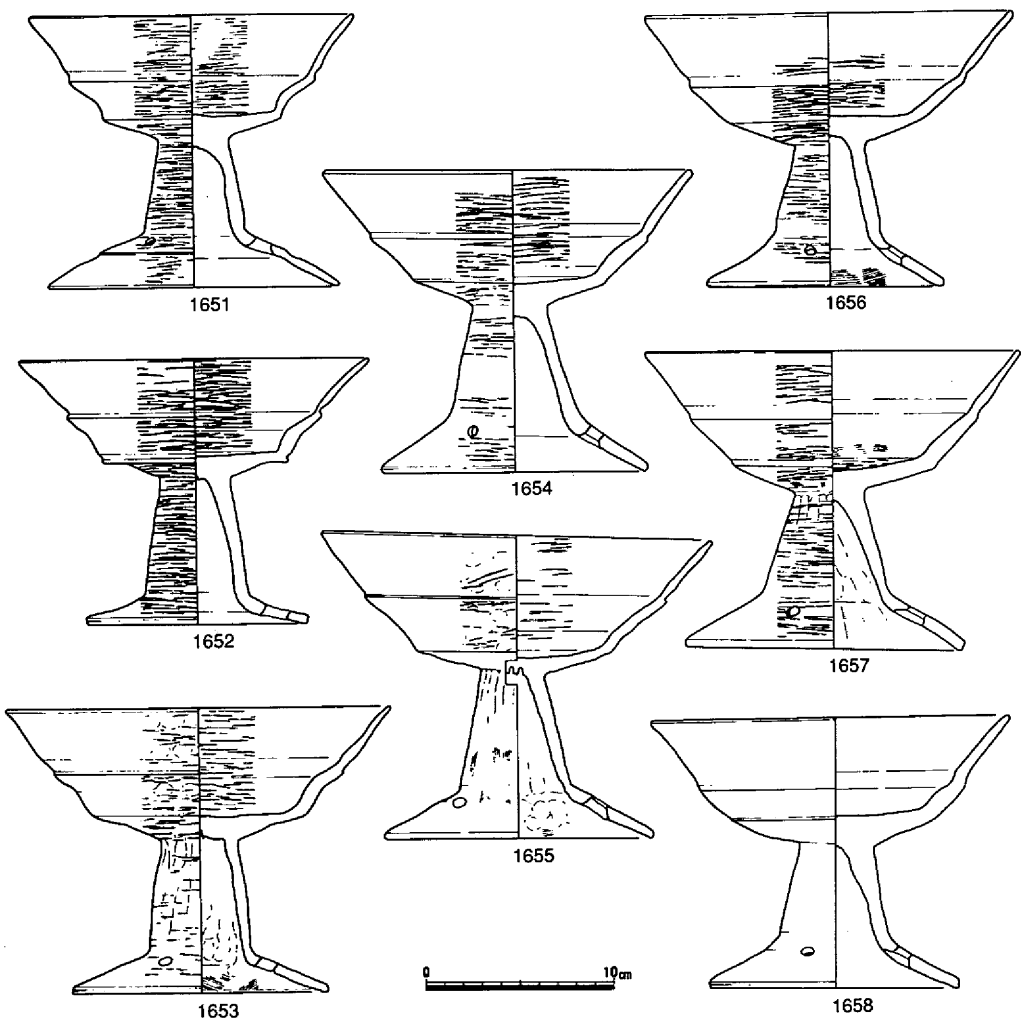
第340図　竪穴住居62上層出土遺物⑫（1/4）



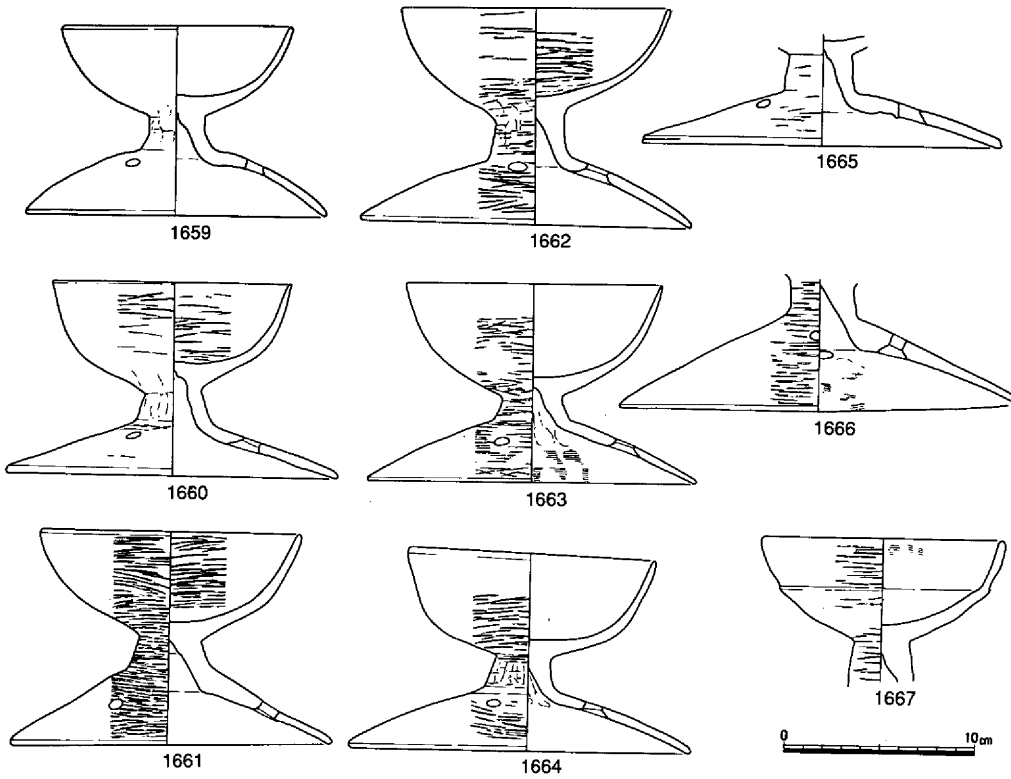
第341図　竪穴住居62上層出土遺物⑬（1/4）

高杯は長脚1003、短脚183の計1186個体出土した。長脚につく杯は斜め外方に延びる口縁のｂ類1606～1649および２段に延びる口縁のｃ類1651～1658に、短脚の杯は椀状を呈すａ類1659～1667に限られているため高杯全体の比率は表に示す結果となった。また、口縁形態から割り出したｂ・ｃ類の個体比は約8.5：1.5であることから、およそｂ類850個体（72%）、ｃ類150個体（13%）が所在したものと推定される。

ｂ類は1640～1649のような小型のものを含めたが、その量は少なく記載した10個体ほどで大半は口径20cm前後、器高13～15cm前後を測り、杯内面はほぼ水平で、脚裾部が屈曲して開く形態をもつものであった。ｃ類は杯部の段が不明瞭なものが多く、脚部はｂ類と同様のものが大半を占めるが、1651のように段をなすもの、1652のように脚裾部が極端に屈曲し、狭い端



第342図　竪穴住居62上層出土遺物⑭（1/4）



第343図　竪穴住居62上層出土遺物⑮（1/4）

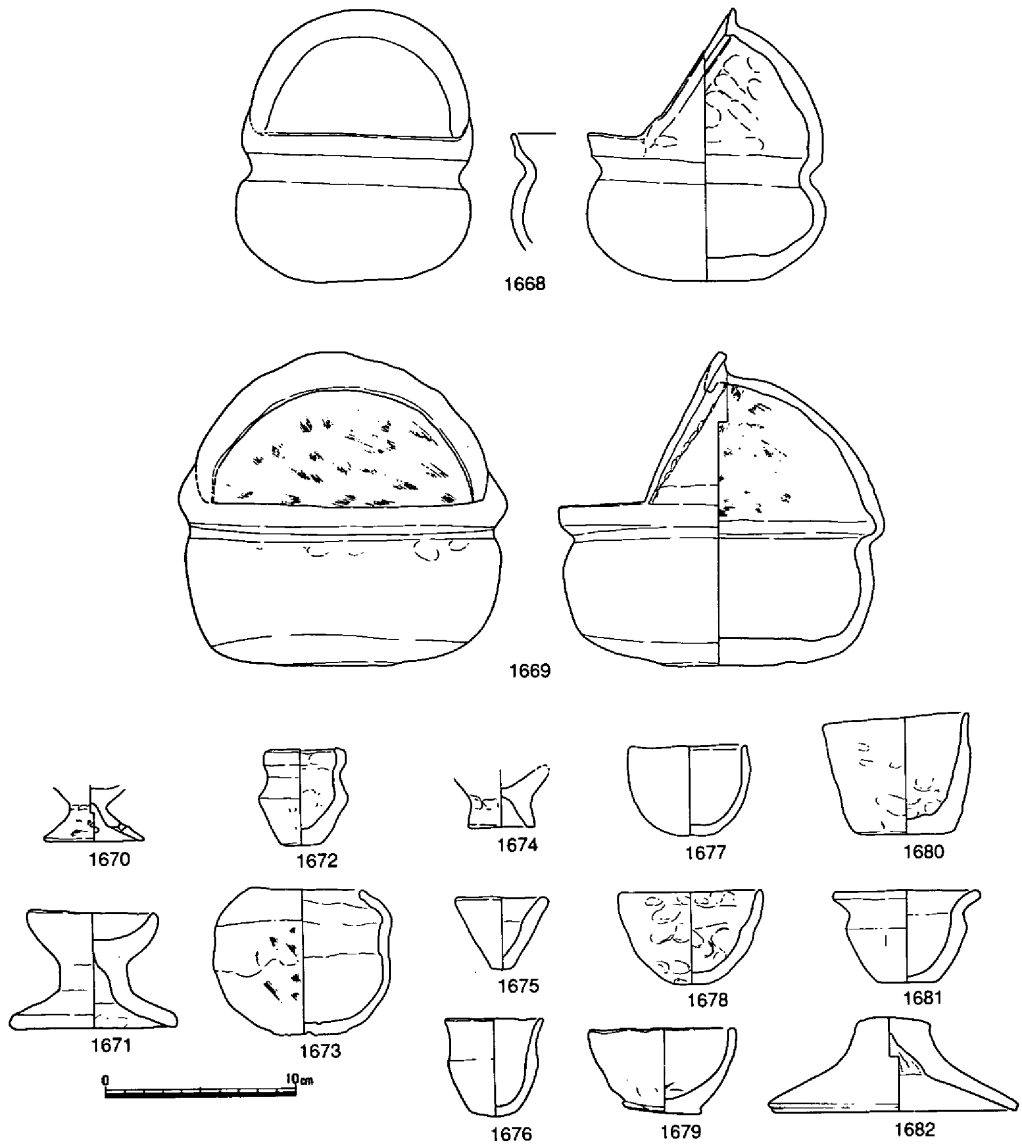
部径をなすものなどがある。

ａ類は183個体（15％）出土しており、1667のように稜線をもつものはわずかに２個体のみであった。

なお、高杯全体を通して脚裾部の穿孔は1666以外、確認できたものはいずれも３孔であった。

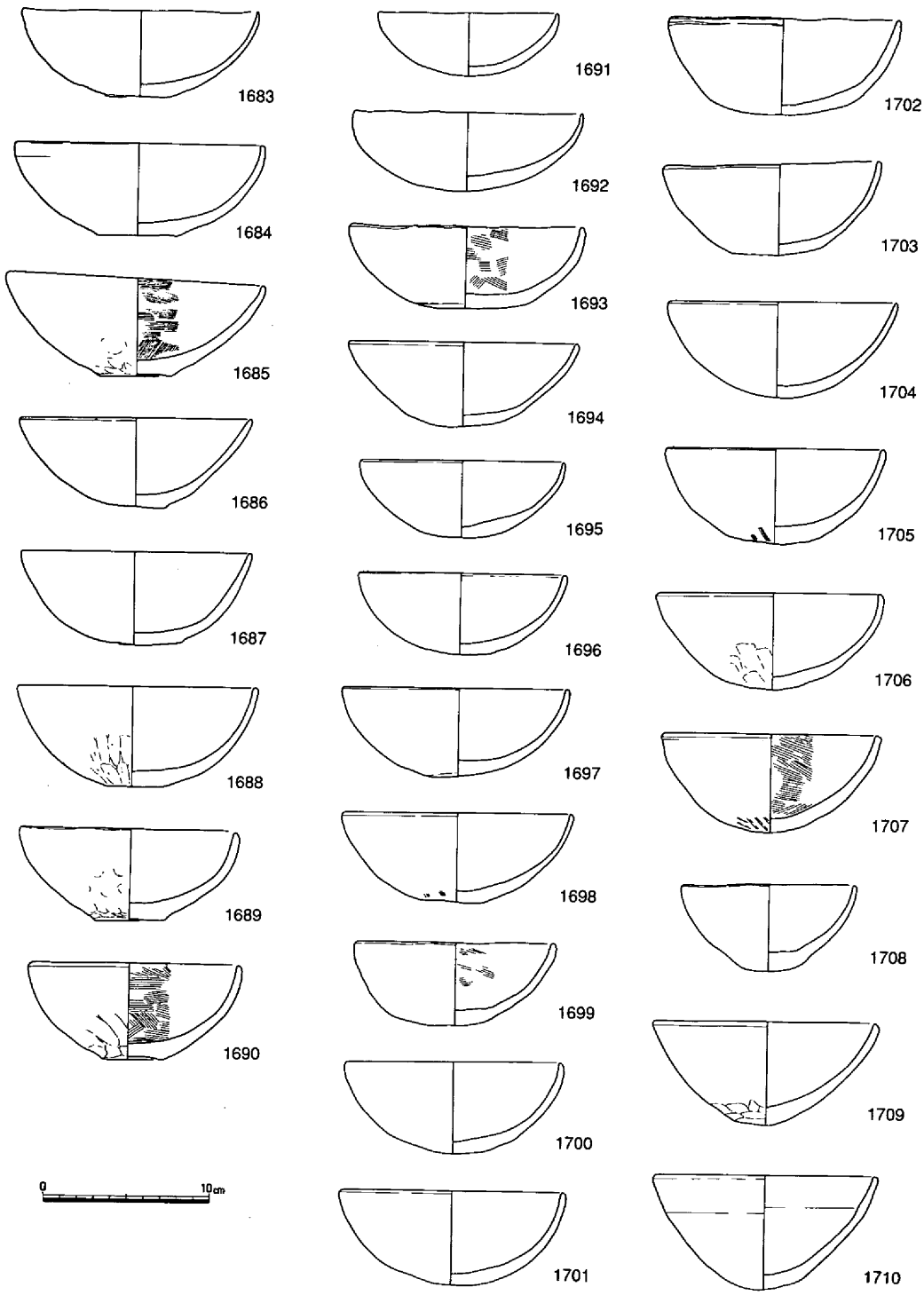
当上層土器溜りからは前述の土壙72同様に手焙形土器1668・1669、ミニチュア土器1670～1681に加え蓋1682なども出土している。1668は乳褐色を呈し、口径12.6、器高14.5を測る小型なもので、広い底部と口縁端部を拡張した鉢状の下半に、覆部が足されたもので、覆部端は外方に拡張され平坦な面をなす。器面は磨滅のため判然としないがナデ仕上げされているようで、覆部内面には押圧痕が残り、底部の内面中央は灰色を帯びた部分が認められた。胎土に砂粒を含む精製された粘土が使用されている。1669は口径17.5cm、器高16.6cmを測る。上記同様の作りであるが、水漉粘土が使用されている。

鉢は67個体出土しており、その内小型のもの60個体（90％）が大半を占め、大型は５個体（７％）で、中型は強いて分ければ1740および1741の２個体であった。小型鉢は弥生時代後期のボウル状を呈す鉢の系譜を引くａ類1683～1718が36個体（54％）と大半を占め、この中に

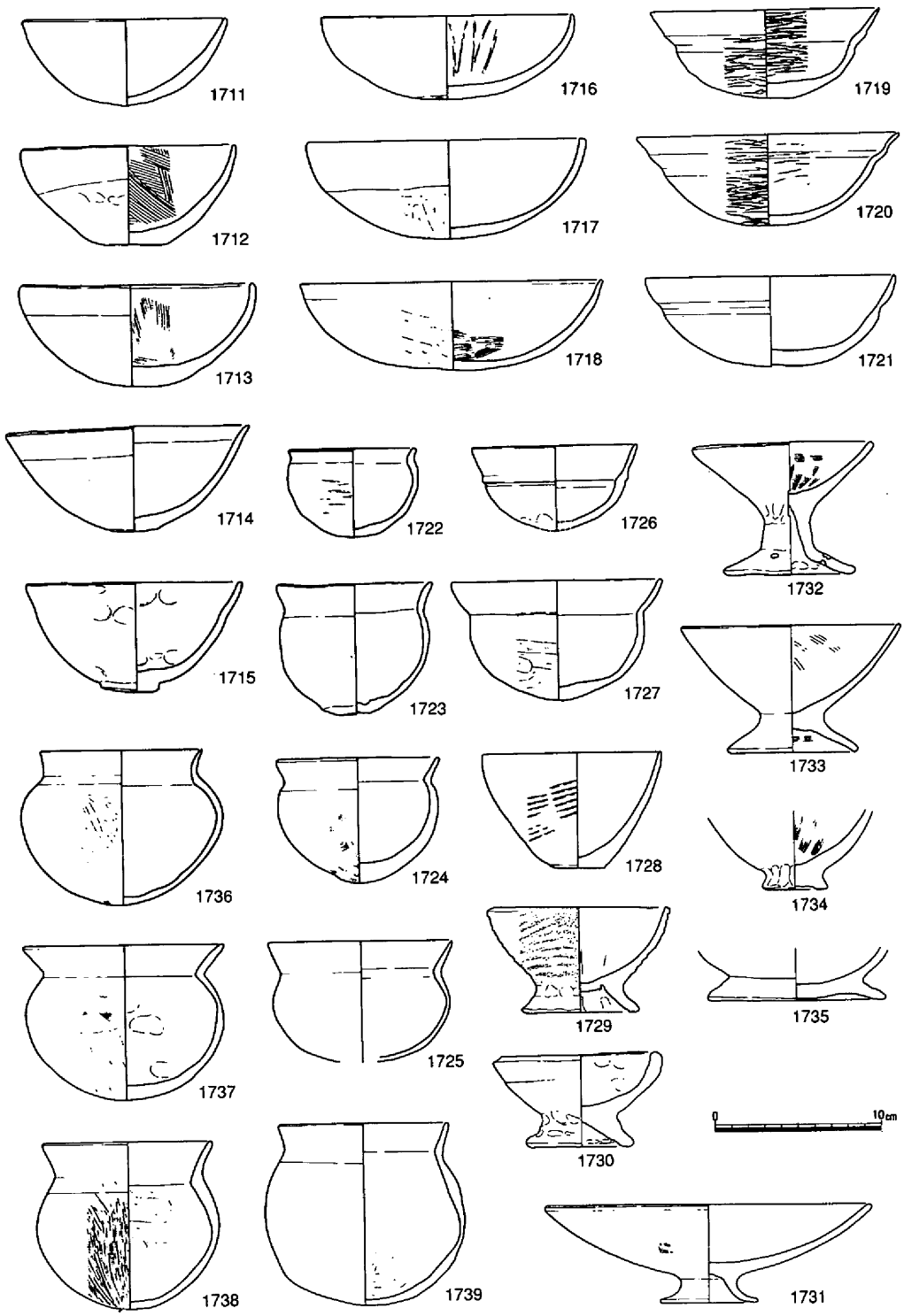


第344図　竪穴住居62上層出土遺物⑯（1/4）

は口径に対し、器高の高い、やや古い様相を示す1709・1710や、器壁をほぼ均一にし、下半をヘラケズリするもの1716～1718などが含まれている。また、2重口縁状に延びる1719～1721は口縁部の稜線が不明瞭である。このほか小型のものにはタタキ成形の1728・1729、山陰系のもの1731が出土している。中型鉢の1741は他に類例をみないものである。乳橙暗褐色を呈し、口縁部は短く外反気味に立ち上がり、内傾する体部上半から緩く曲線を描きながらボウル状の体部下半に続く。外面には口縁および体部を分ける凹線状の凹みが形成されている。



第345図　竪穴住居62上層出土遺物⑰（1/4）

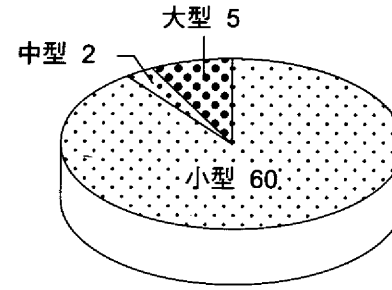


第346図　竪穴住居62上層出土遺物⑱（1/4）

外面は不明瞭であるが内面はヘラケズリされており、手法・胎土は当地域に該当すると思われる。大型鉢の口縁はいずれも２重口縁壺と同様の繊細な作りのものであった。

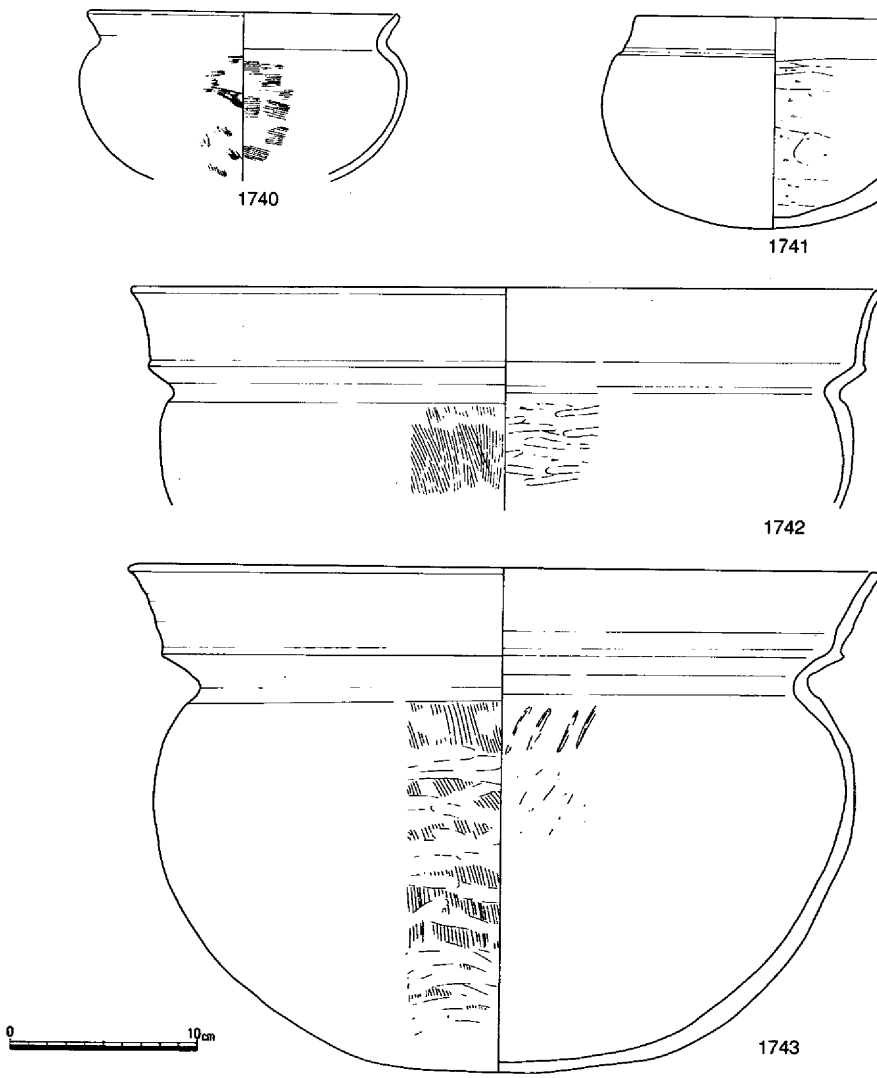
他に製塩土器17個体も出土している。

以上、当住居上層土器の特徴は下田所～亀川上層併行期に属すものであり、亀川併行期に一気に排棄されたものと考えられる。　（江見）

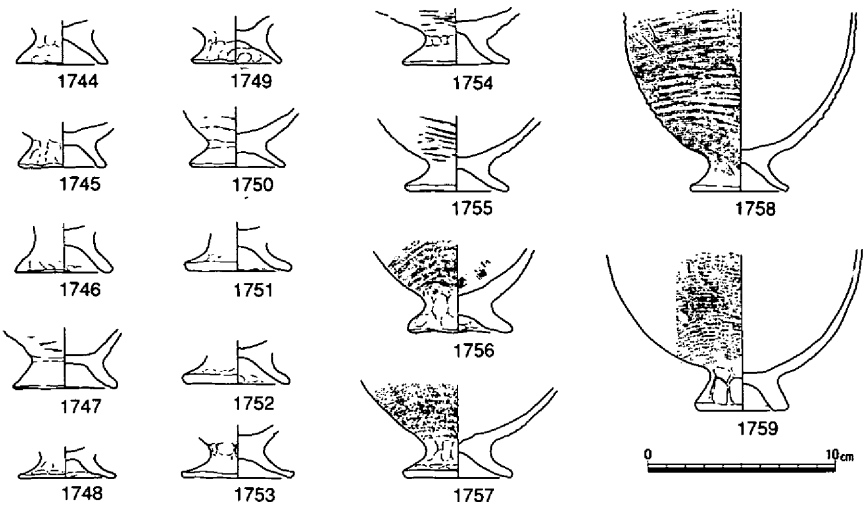


計 67

表８．鉢分類表



第347図　竪穴住居62上層出土遺物⑲（1/4）



第348図　竪穴住居62上層出土遺物⑳（1/4）

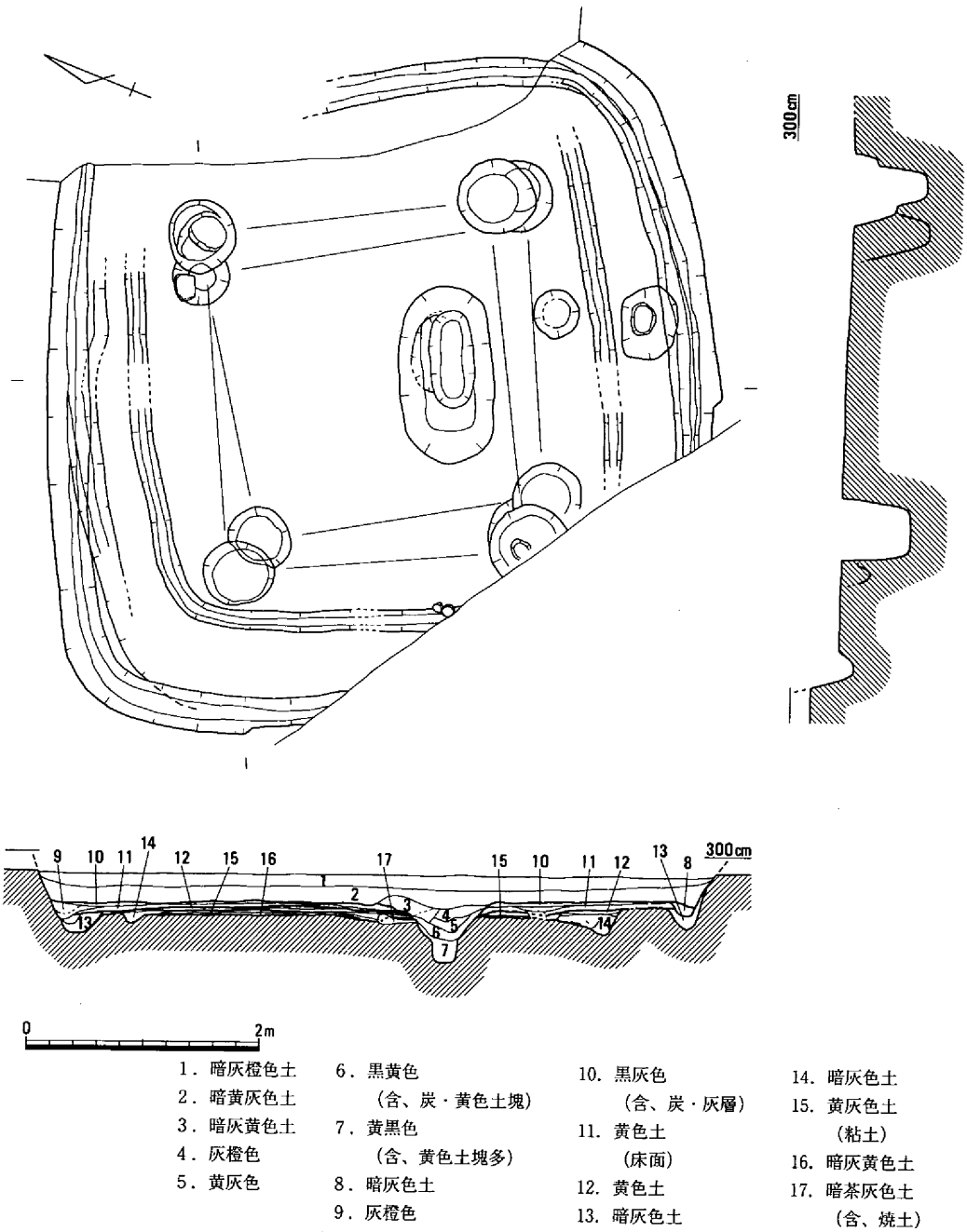
竪穴住居63（第285・349～352図、写真図版132）

４Ｂｂ区において竪穴住居62に東側の一部が切られ、西南側は調査区外にかかった状態で検出された。平面の検出は海抜2.85ｍにおいて、平面遺存部分で一辺5.75ｍを測る方形プランが確認された。住居方向は、竪穴住居62と主軸を同じくするもので、およそ東西・南北方向を基調とするものであった。床面が２面存在することで１回建て替えがあったことが知られた。

竪穴住居63Ａは、最初に検出された住居で、平面およそ一辺5.75ｍを前後する規模を有する方形住居であった。床面は、検出面から約25㎝覆土を掘り下げた地点で確認され、壁体溝、柱穴、中央施設、方形土壙等が検出された。柱穴は、住居のそれぞれのコーナーにおいて壁体から約１ｍ前後の間隔をおいて４本の所在が確認された。また、この柱穴間に取り込まれるかのように中央施設の一つと考える土壙が見られる。位置的には、中央部を避け南側に偏在した在り方を見せていた。平面規模は、長軸長1.90ｍ、幅80㎝を測るもので、この壙底ほぼ中央部にはさらに一段下がる土壙の存在が認められた。

出土遺物としては、床面および覆土中から土器と鉄器、土製紡錘車等が確認された。土器には、甕、高杯、鉢等が見られた。型式的には、下田所～亀川上層の範疇にあるものと考えられ、時期的には、古墳時代前半に位置づけられよう。

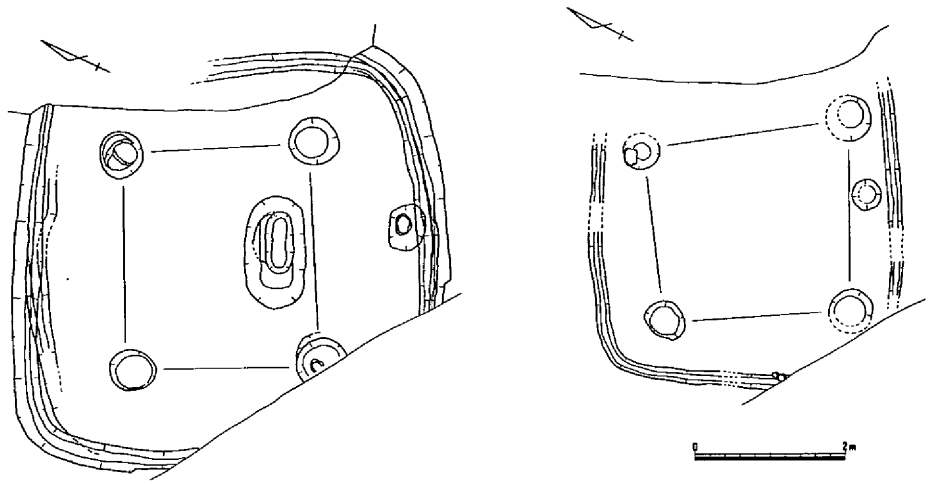
竪穴住居63Ａの床面を約10㎝程除去後に壁体溝、柱穴、円形土壙等の検出で確認された住居である。規模は、63Ａの壁体溝よりおよそ60～80㎝内側で壁体溝が見られ、これによって長軸長4.15ｍ前後のものが推測される。柱穴は、４本が63Ａの位置とほぼ同地点で検出された。中央穴についても明瞭な状態での存在は確認されなかったが、63Ａとの重複も十分考えられる。



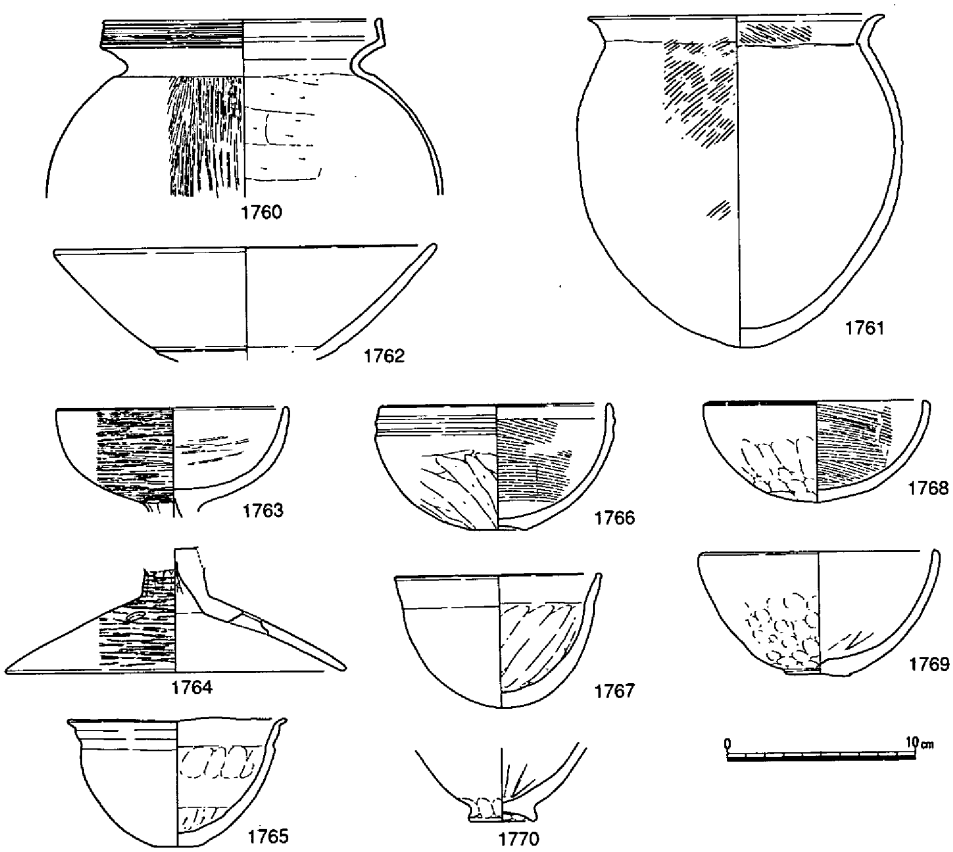
第349図　竪穴住居63（1/60）

時期的には土器の遺存が確認されなかったことで判然としないが、およそ63Aとは時間的な差がなかったものと考える。

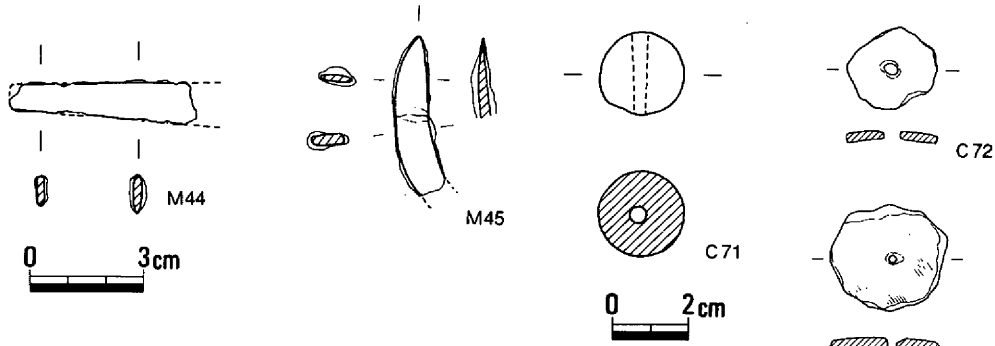
竪穴住居64（第285・353・354図）



第350図　竪穴住居63Ａ（左）・63Ｂ（右）（1/100）

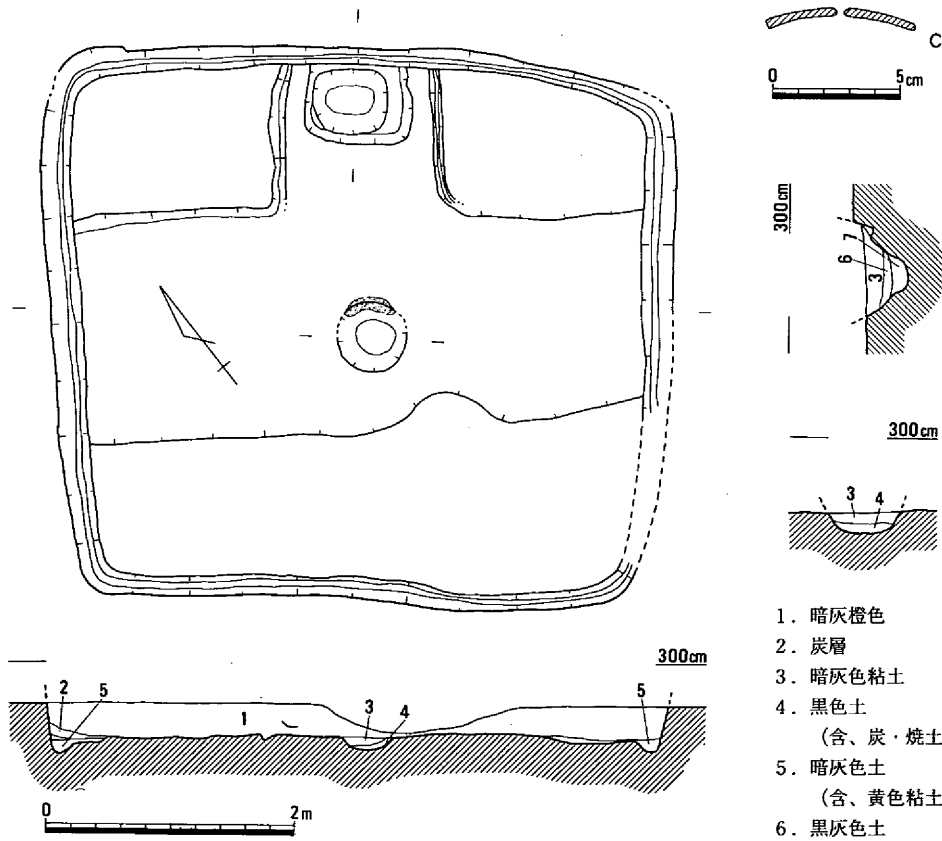


第351図　竪穴住居63出土遺物①（1/4）

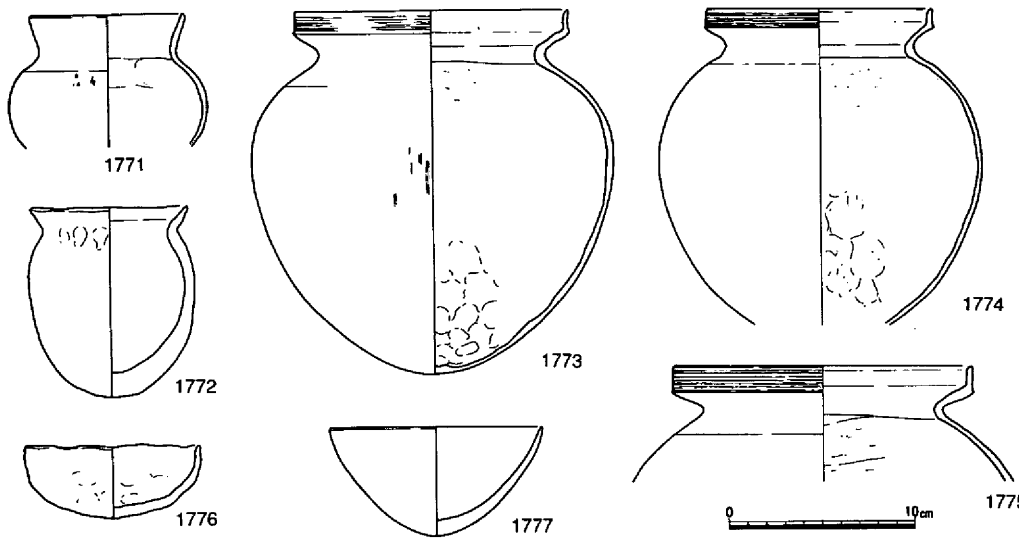


第352図　竪穴住居63出土遺物②（1/2・1/3）

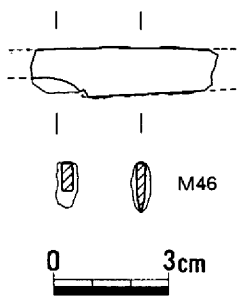
７Ｂから８Ｂにかけて海抜2.70ｍで平面が検出された。長軸長5.05ｍ、短軸長4.40ｍを測り、平面不整方形を呈する住居である。床面からは、ベッド状の高まり、中央穴、方形土壙などが検出されたが、柱



第353図　竪穴住居64（1/60）



第354図　竪穴住居64出土遺物（1/4・1/2）



穴については精査を行ったにも拘らず検出出来なかった。

ベッド状の高まりは、住居の長軸方向中央に1.60～1.80mの幅で低位面をつくり、さらにその低位面は中央部から北東方向の方形土壙に向けて伸び、平面「T」字状を呈する低位面が形成されていた。南西側に比べて北東側の方がその比高差が大きく、後者の一部には側板を入れていたであろう溝の遺存が確認された。

方形土壙は、北東の一辺中央部壁際に床低位面の中央に位置し、あたかも出入り口に相応した在り方を見せるものである。規模は、長軸が85cm、幅65cm、深さ約30cmを測った。中央穴は、床面「T」字状を呈する低位面のほぼ中央部において径55cm、深さ15cmの規模で見られた。また、中央穴の方形土壙方向の肩には一部被熱面が確認された。

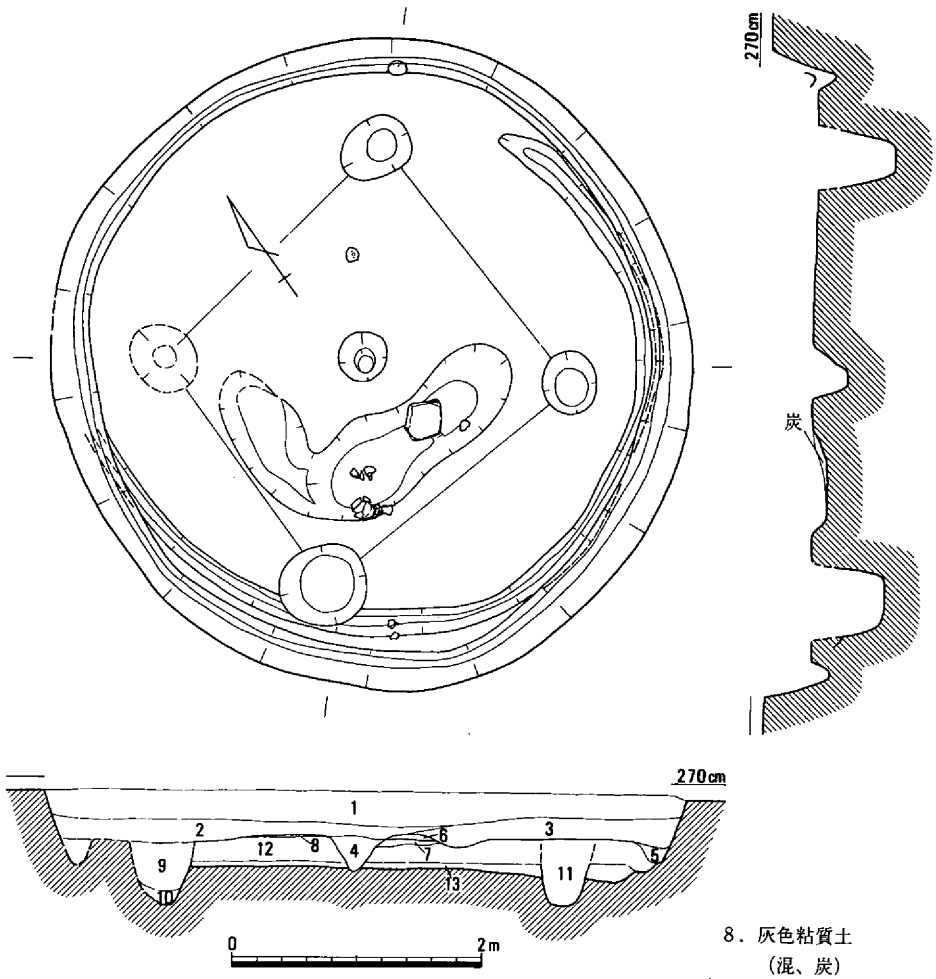
出土遺物としては、壺、甕、鉢等の土器の他に刀子状鉄器が1点確認されたにすぎない。

時期は、土器が下田所併行と考えられることで古墳時代前半に比定されよう。　（島崎）

竪穴住居65（第285・355・356図）

９Ｂｂ区に位置する、平面形態円形を呈す住居である。なお、住居は一度床面の拡張がなされているが拡張前の65Ｂについては壁体溝を検出するにとどまった。

65Ａの規模は径約５ｍ、深さ35cm、床面積19.4㎡、床面の海抜高2.25ｍを測る。主柱は４本で柱穴間の距離は約2.3ｍを測る。中央穴は径約40cm、深さ約30cmを測り、埋土には炭を含んでいた。中央穴の南には「Ｌ」字状に中央施設が配置され、特に東西部分の長さ約1.9ｍ、幅

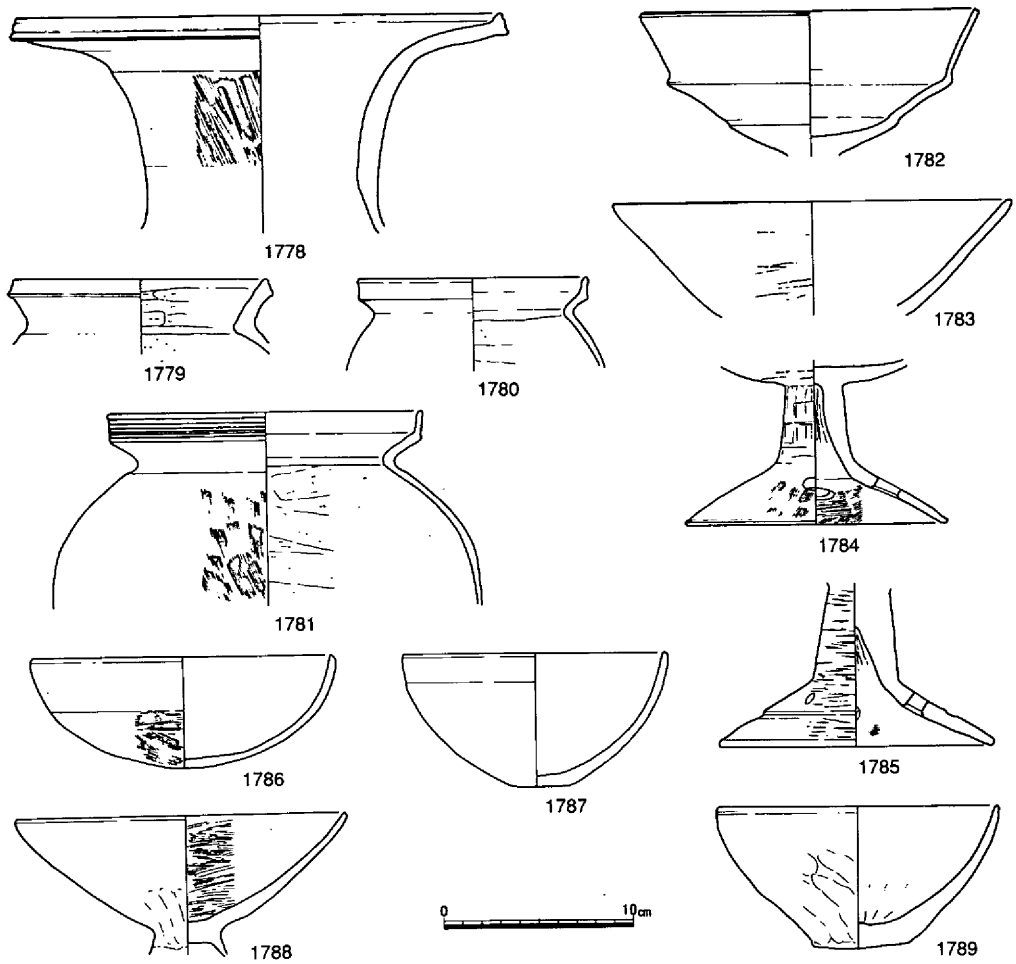


第355図　竪穴住居65（1/60）

幅約60cm、深さ約10cmの部分には底部に炭の堆積が認められた。

遺物は中央施設から作業台と思われる石をはじめ高杯1782・1783が、床面および床面直上からは高杯1785、甕1781、小型鉢1789などが出土しており、他は覆土からのものである。

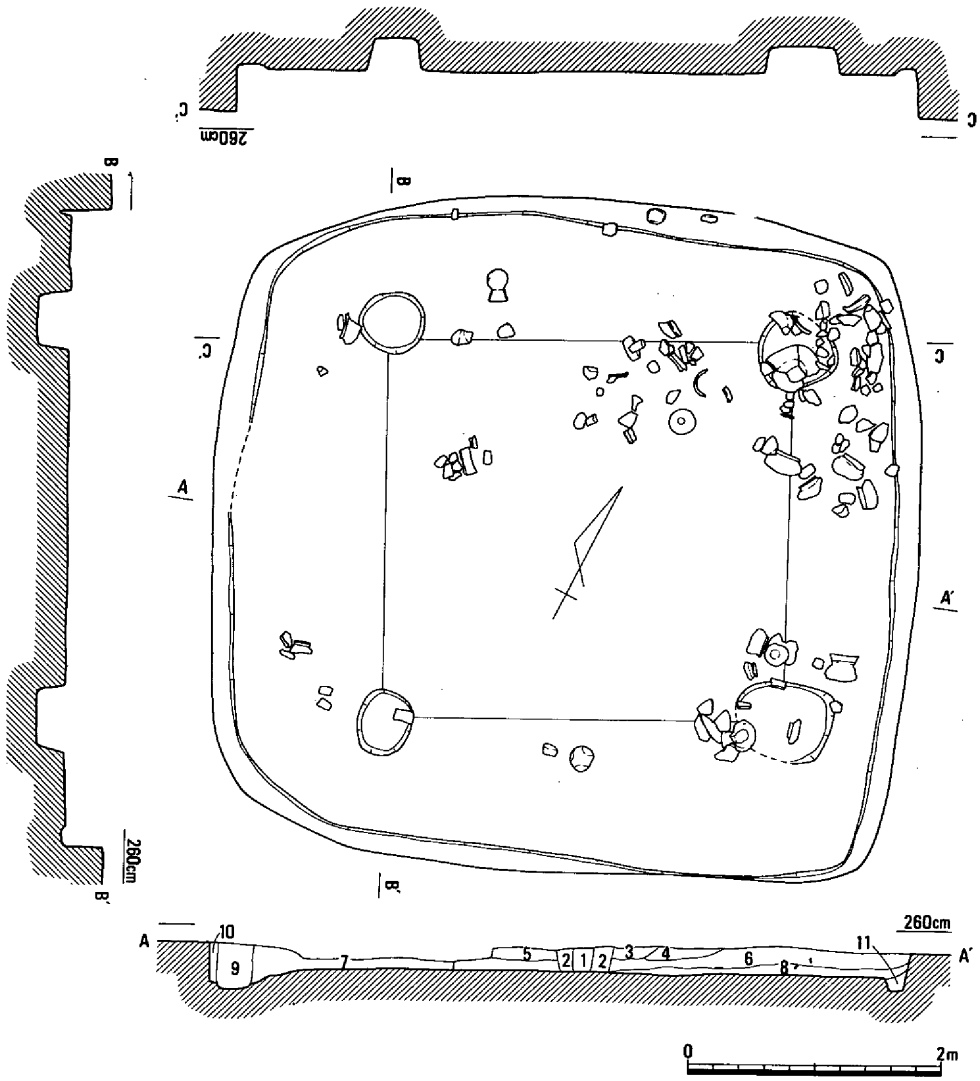
高杯の脚柱部は上方に向かい器壁の厚みを増し、1784の裾部は内湾気味に端部に向かう。また、小型鉢1789も雑な作りなものの平底を呈すなど、やや古い様相をもつものもみられることから、当住居は下田所併行期に廃絶したものと考えられる。（江見）



第356図　竪穴住居65出土遺物（1/4）

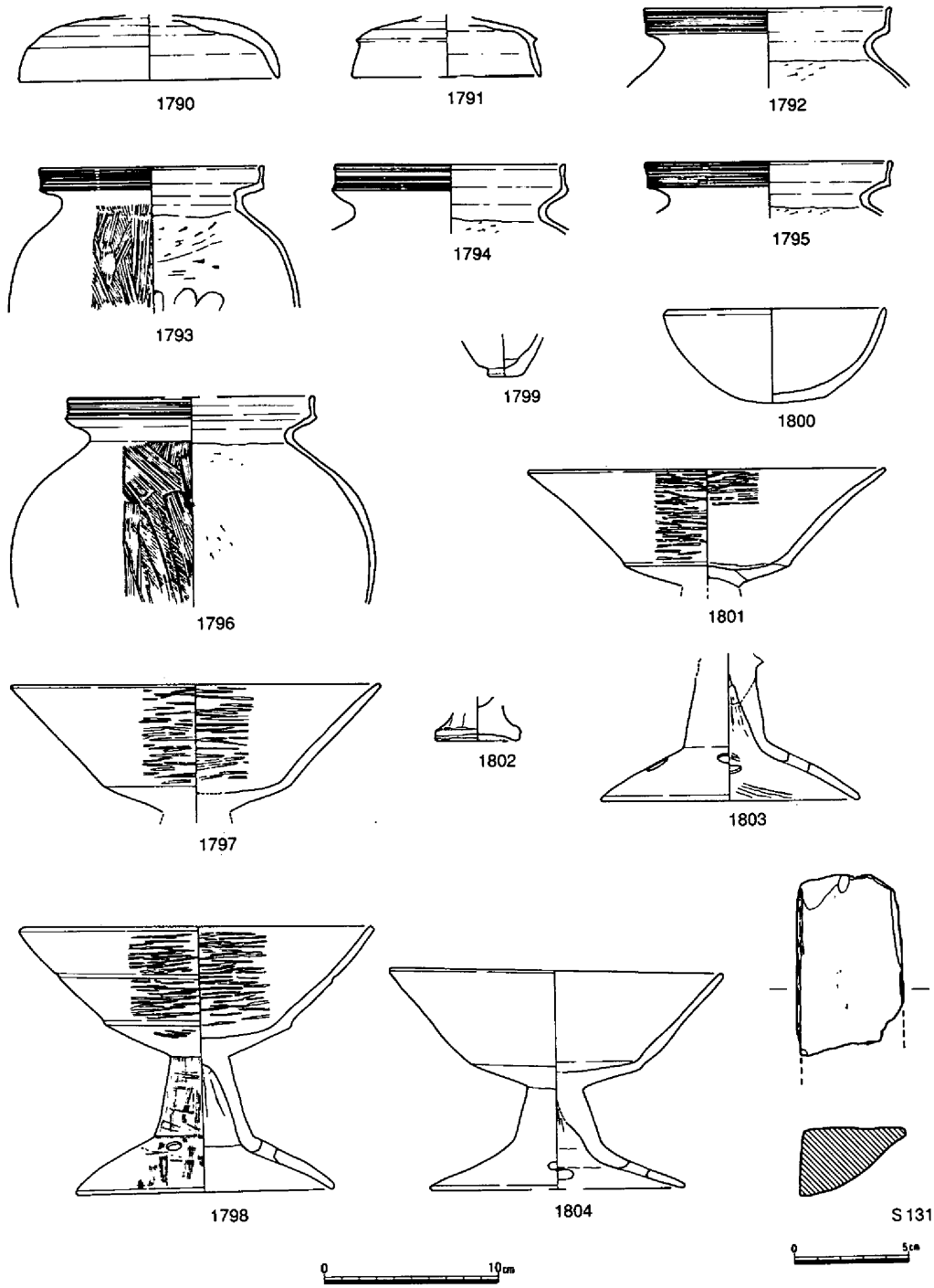
竪穴住居66（第285・357～361図）

８Ａ区、９Ａ区の境に位置し、竪穴住居67、68を切る住居である。遺構は海抜2.45ｍで検出され、平面形は隅丸方形を呈する竪穴住居である。遺構の規模は長軸5.5ｍ、短軸5.4ｍを測り、床面からの壁高は20㎝である。支柱穴は４本検出されており、掘り方は45～75㎝で、円形ないし楕円形を呈し、深さは20～25㎝と浅い柱穴である。壁体溝は幅10～20㎝、深さ５～10㎝を測る。遺物は床面上層（覆土）、床面下層（床面付着）、柱穴内、貼床層において出土したが、とりわけ、住居の北コーナー付近で、床面に付着する状態でかなりの遺物が出土した。上層からは古墳時代後期の須恵器（杯蓋）1790・1791、古墳時代前期の甕1792～1796、高杯1797・1798・1801・1803・1804、鉢1800、ミニチュア土器1799、製塩土器1802、砥石Ｓ131が出土した。下層では甕1805～1818、壺1819、高杯1820～1824・1827～1830、製塩土器1825・

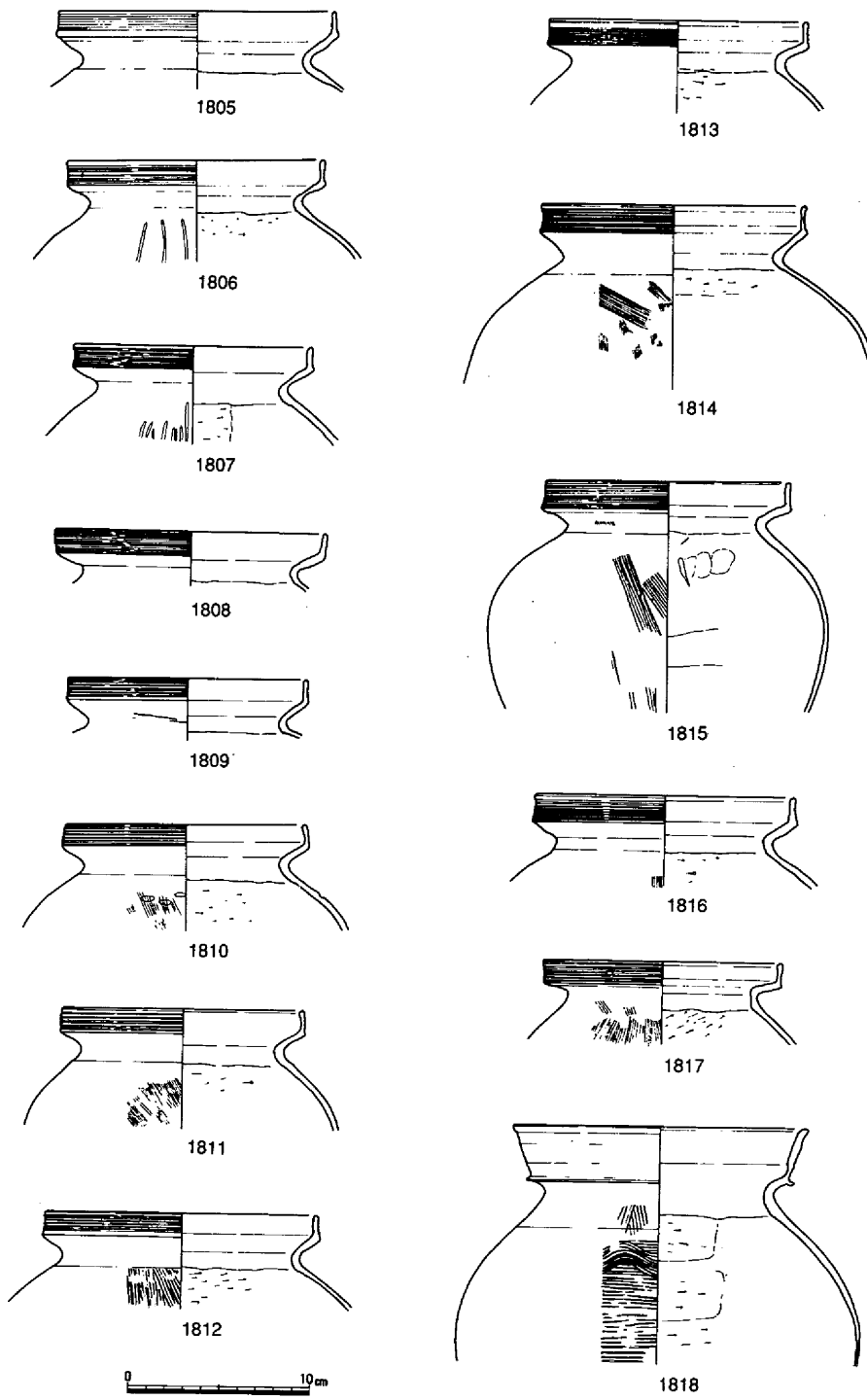


第357図　竪穴住居66（1/60）

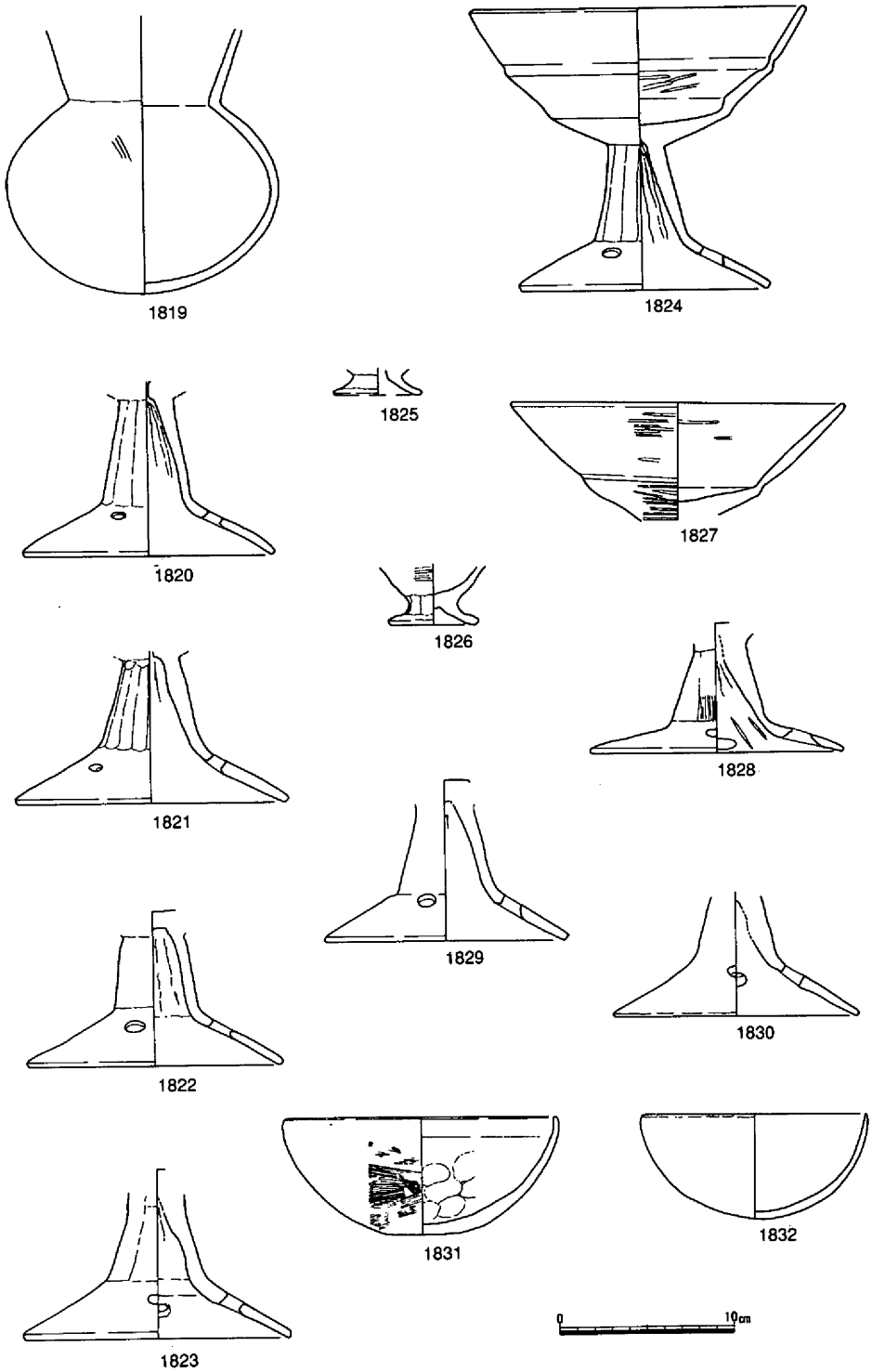
1826、鉢1831・1832が出土した。柱穴内からは甕1833～1836、高杯1837・1838、貼床層からは高杯1839・1940、甕1841～1844、鉢1845などが出土している。下層（床面付着）遺物における甕の特徴は、口縁部が「く」字状を呈し、さらに上方に拡張するもので、外面には櫛描平行沈線が施される、いわゆる「吉備甕」であるが、1818は山陰系の搬入品と考えられるものである。遺構の時期は甕、高杯などの特徴からみて、下田所期に比定されるものと思われる。



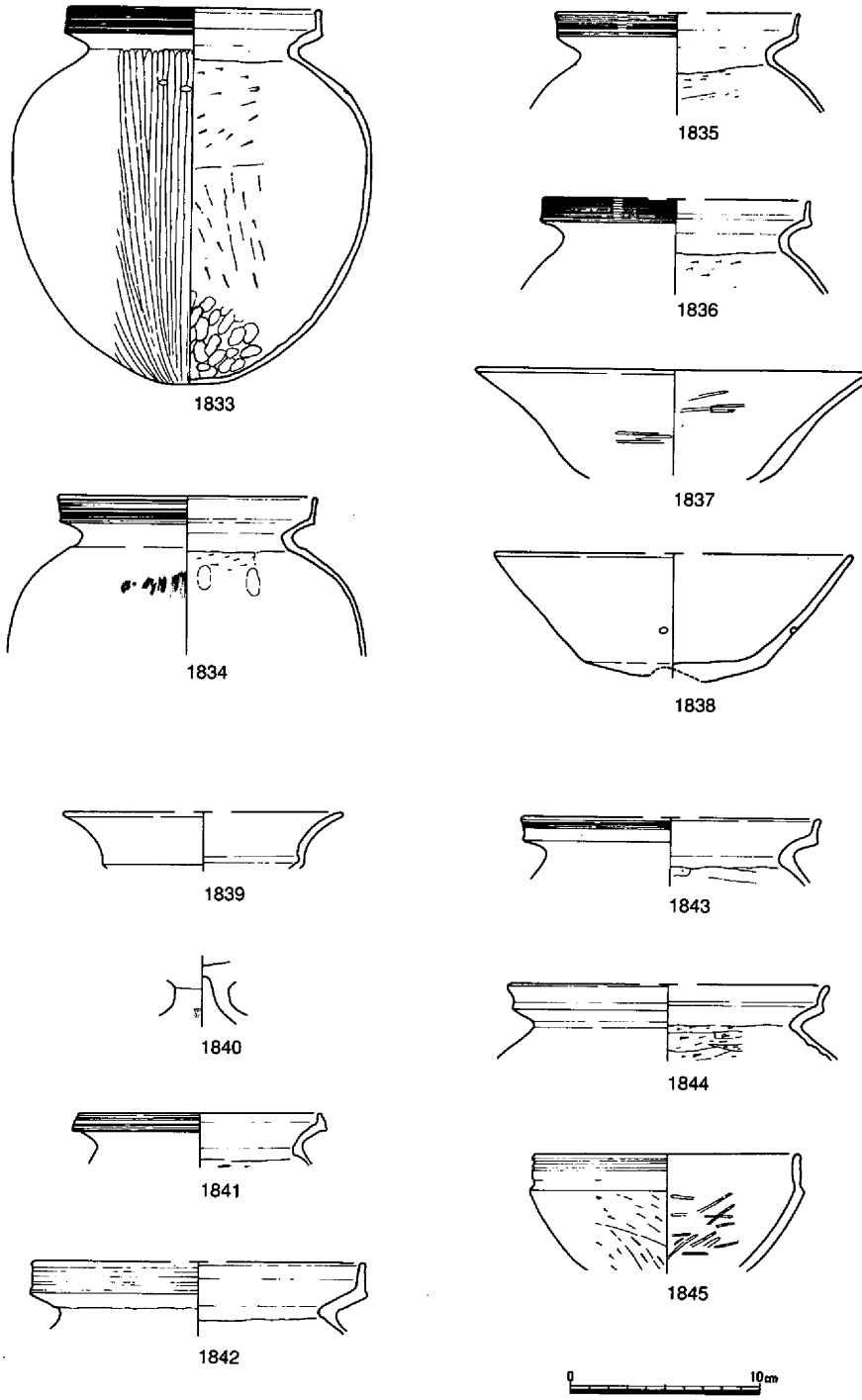
第358図　竪穴住居66上層出土遺物（1/4・1/3）



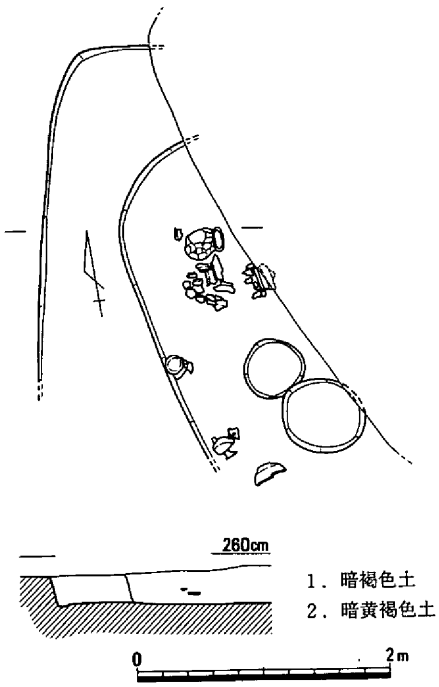
第359図　竪穴住居66下層出土遺物①（1/4）



第360図　竪穴住居66下層出土遺物②（1/4）



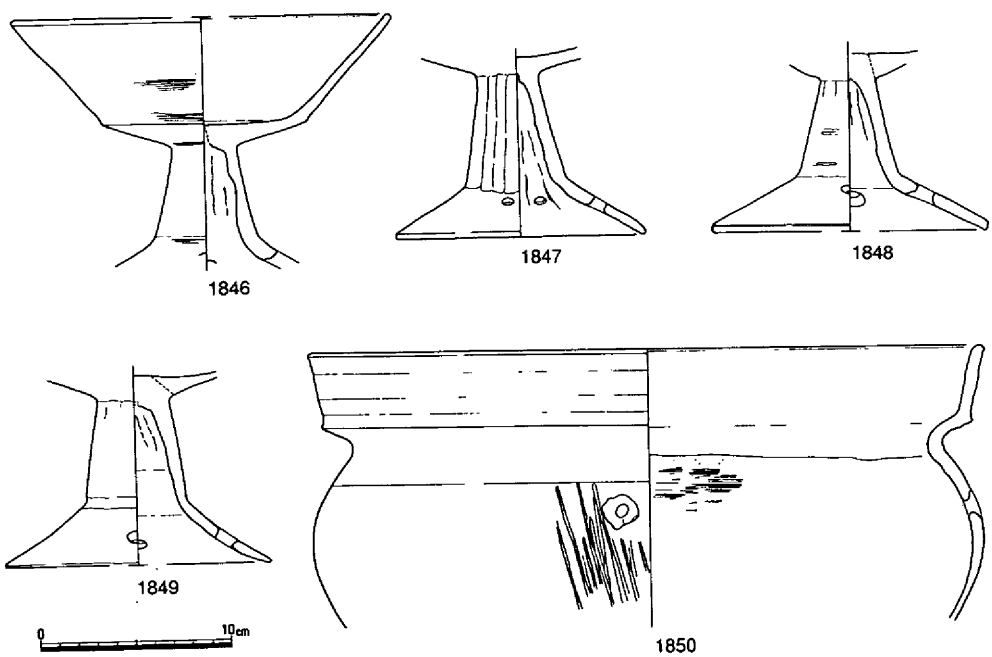
第361図　竪穴住居66柱穴および貼床出土遺物（1/4）



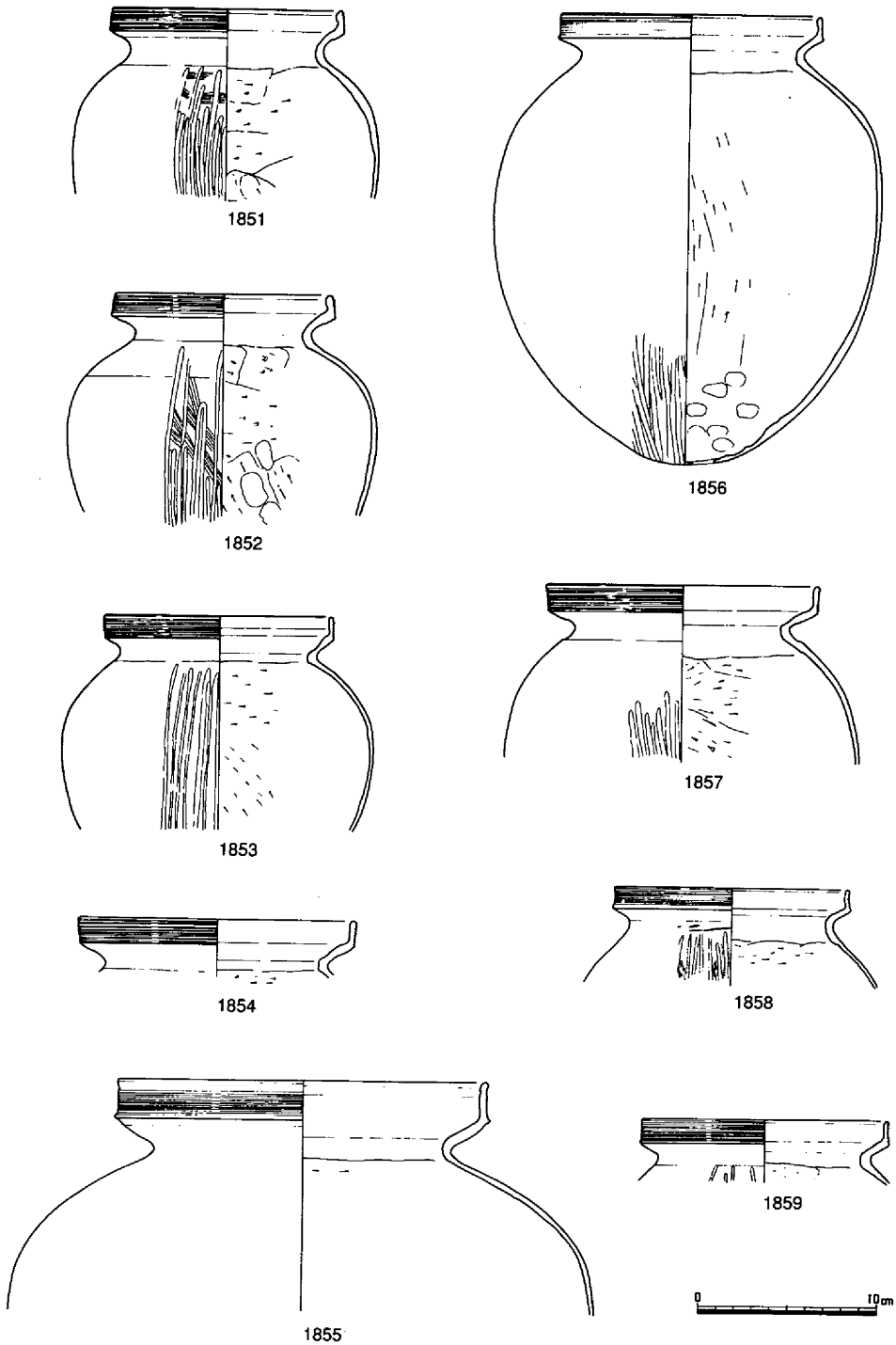
竪穴住居67、68（第285・363・364図）

８Ａ区に位置し、竪穴住居66に切られる状態で検出され、竪穴住居67は同68を切っている。遺構は海抜2.05mで検出され、平面形は67、68とも隅丸方形を呈するが、規模は不明である。床面からの壁高はいずれも約20cmで、壁体溝、貼床層は認められなかった。遺物は竪穴住居67において、床面に付着する状態で出土した。器種は高杯1846～1849、鉢1850、甕1851～1859などがみられた。高杯の杯部は浅い受部から外に大きく開く口縁部をもち、脚柱は長く、裾部は「八」字に開く。鉢は口縁部が複合口縁を呈し、胴部に穿孔が１か所ある。甕は口縁端面に櫛描平行沈線がめぐり、底部が丸底となっている。時期はこれらの遺物からみて、下田所期の遺構と考えられる。　（松本）

第362図　竪穴住居67（右）・68（左）（1/60）



第363図　竪穴住居67出土遺物①（1/4）

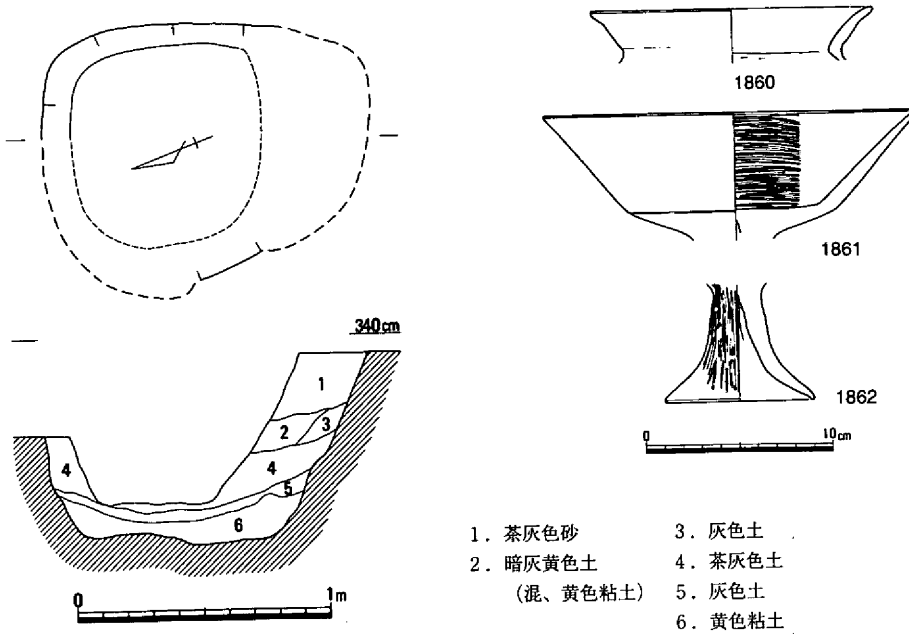


第364図　竪穴住居67出土遺物②（1/4）

(2) 土壙

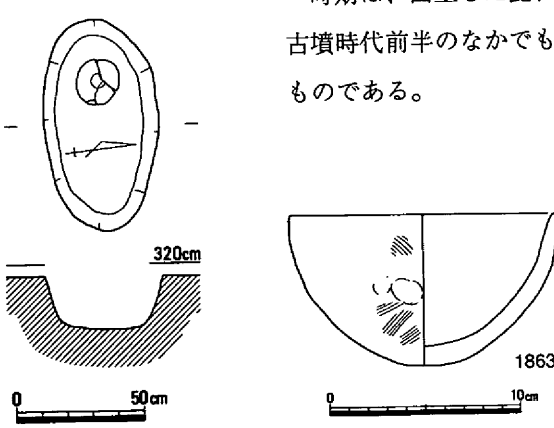
土壙95（第285・365図）

１Ｂｂ区に所在が確認された土壙であるが、地点が調査区境とあって側溝によりほとんどが切られ、わずかに平面および断面の状況が確認されたにすぎない。平面不整方形で検出面からの深さ約73cmを呈する。



第365図　土壙95（1/30）・出土遺物（1/4）

時期は、出土した甕、高杯、特に高杯は脚柱部の状況から古墳時代前半のなかでも古く、下田所併行段階に比定されるものである。



第366図　土壙96（1/30）・出土遺物（1/4）

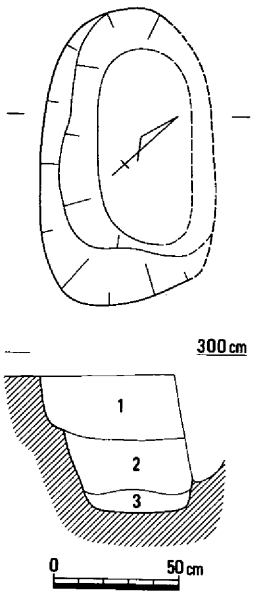
土壙96（第285・366図）

２Ａｃ区において竪穴住居51の東約50cmに隣接した状態で検出された楕円形を呈する土壙である。壙内からは、土師器鉢が１個体に近い状態で確認された。

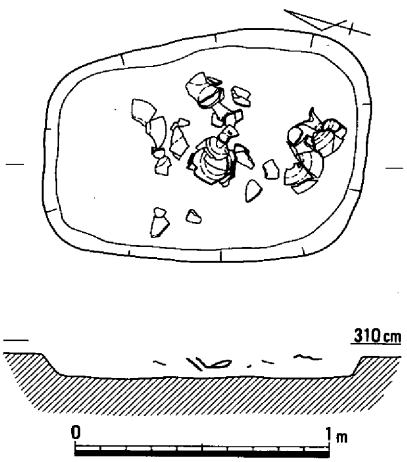
時期は、古墳時代前半に比定されよう。　（島崎）

土壙97（第285・367図）

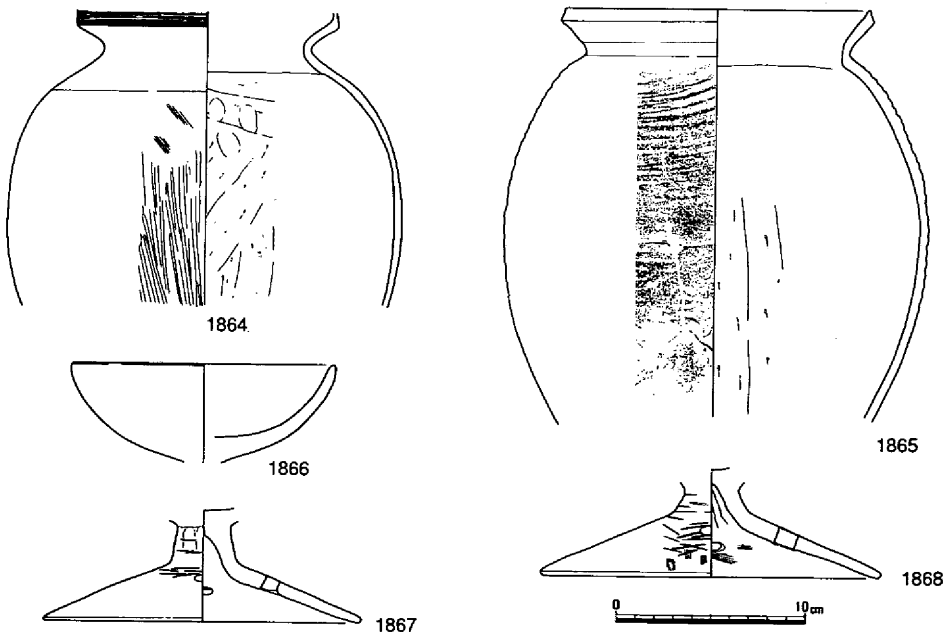
２Ｂｄ区、竪穴住居55に切られ検出された平面楕円形の土壙で、1.2m×58cm、深さ55cmを測る。遺物は第１層から甕、高杯の破片が出土した。**1864**は口縁に櫛描沈線を施し、**1865**は胴部外面タタキ、内面ヘラケズリしており、これら土器の特徴は古墳時代前半を示す。（江見）



1．暗茶褐色砂質土
（含、土器多）
2．茶灰粘質砂
（混、黄色粘土小塊）
3．黄灰色粘質砂



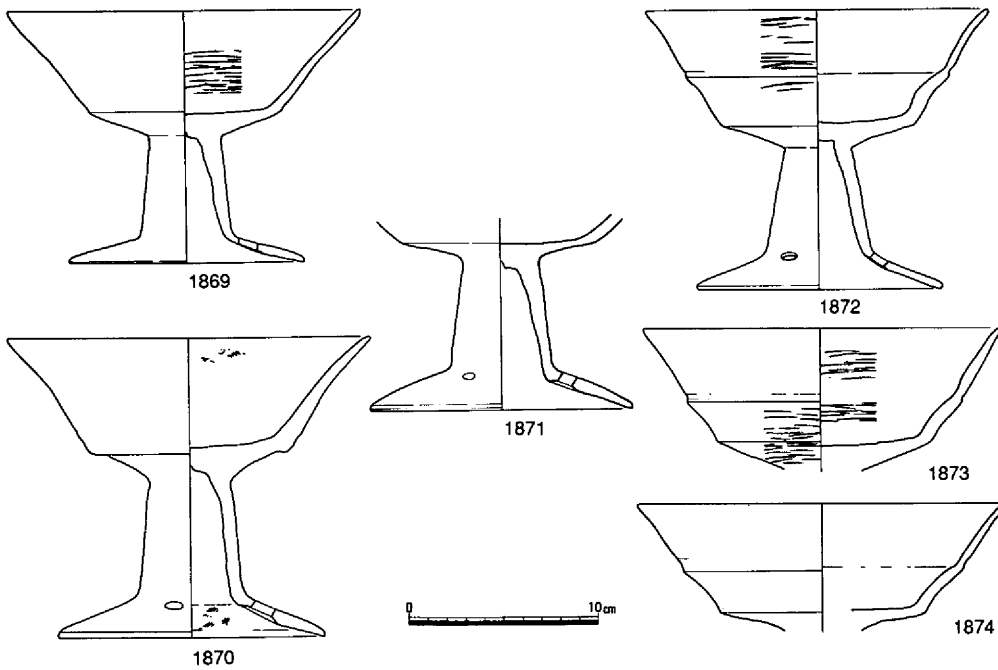
第368図　土壙98（1/30）



第367図　土壙97（1/30）・出土遺物（1/4）

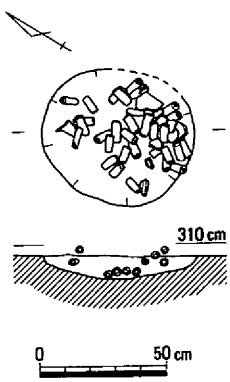
土壙98（第285・368・369図）

４Ｂｃ区において検出された土壙である。平面隅丸長方形を呈し、検出面から壙底までの深さ約10cmと比較的浅いものであったが、壙内には高杯を中心に比較的土器の遺存が多く確認さ



第369図　土壙98出土遺物（1/4）

れた。高杯は、口縁部に有段の1872・1873・1874と無段の1869・1870の２者が見られたが、脚柱部はいずれも中空で、しかも脚屈曲部に穿たれた孔は３方向と型式的に亀川上層段階に比定されるものである。

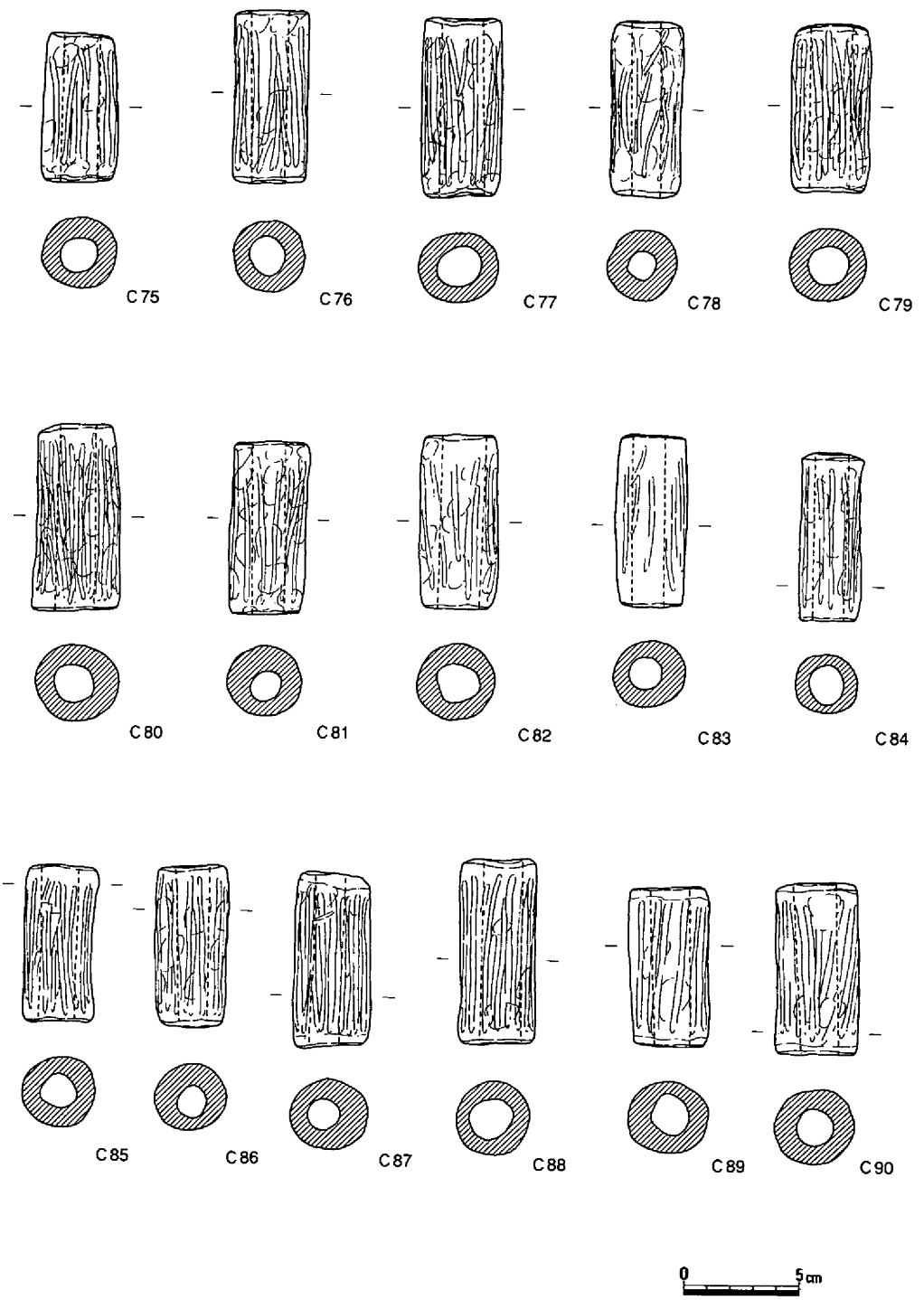


第370図　土壙99（1/30）

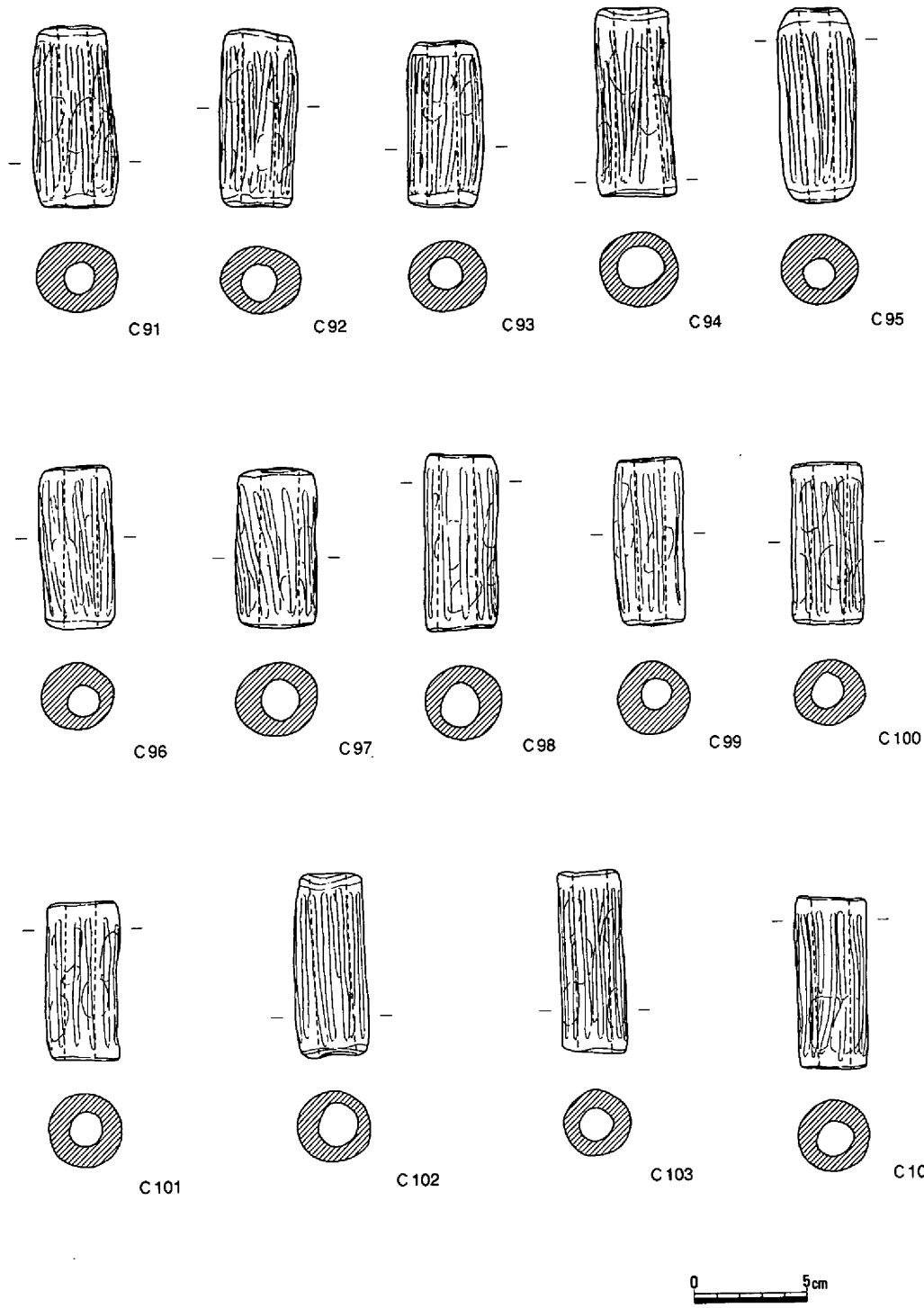
土壙99（第285・370～372図）

４Ｂｃ区で土壙98の南東約２ｍの近接した地点で、海抜3.05ｍにおいて検出された。平面楕円形を呈し、長軸長60cm、幅53cm、検出面から壙底までの深さ約10cmの規模を測る。壙内には長さ7.0～8.5cm、径2.5～3.5cmの円柱状で中心が中空状態の土錘が集中して遺存しているのが確認された。土錘の総数は約34点を数えたが、状況として２～３の土錘の並びはあったとしても全体としてそれらが紐もしくは網等により繋がった形跡は認められなかった。

時期は、土錘の型式により亀川上層併行と考える。



第371図　土壙99出土遺物①（1/3）

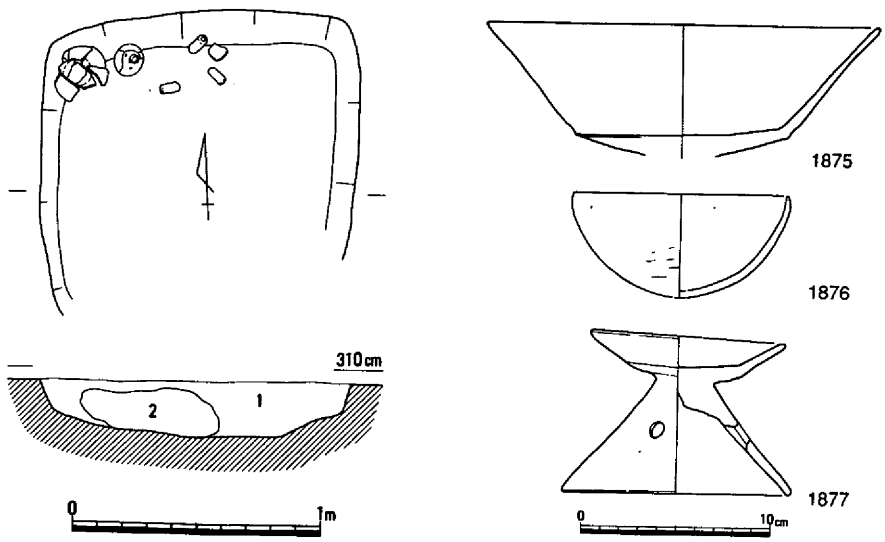


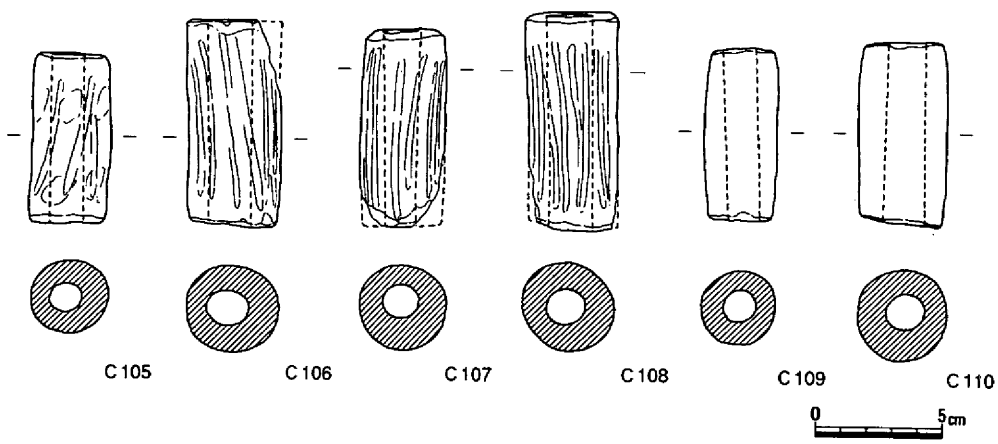
第372図　土壙99出土遺物②（1/3）

土壙100（第285・373図）

４Ｂｃ区において先述の土壙99と同じく海抜3.05ｍ付近で検出された土壙である。土壙は、南側が調査区外にかかっていたため全体についての詳細は判然としないが、およそ平面形も方形に近い状態であったものと推測された。壙内には北西隅に土器、土錘等の一括遺存が見られた。また、壙内埋積土中には黄色粘土塊が約20㎝近い厚さを見せていた。

土器には、高杯、鉢、小型器台等が散見された。これによると土壙の時期は、古墳時代前半と考えられる。

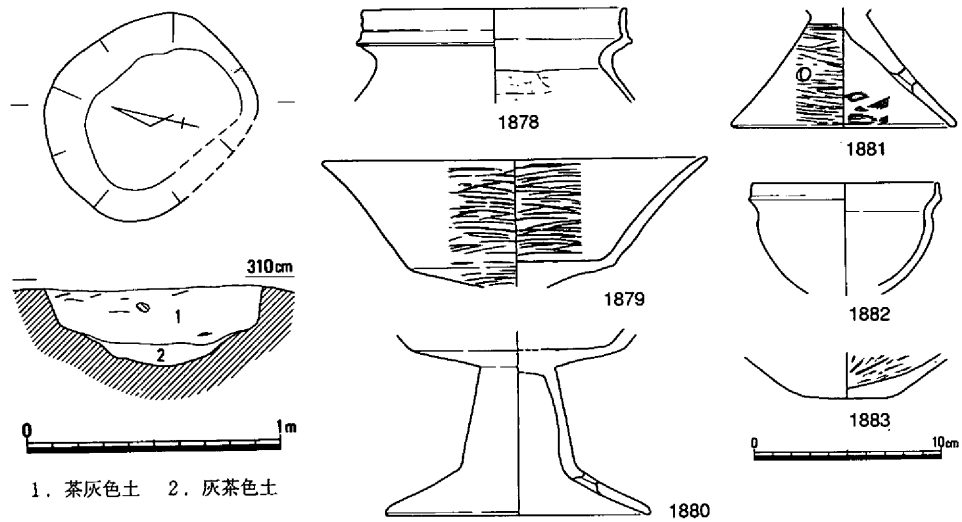




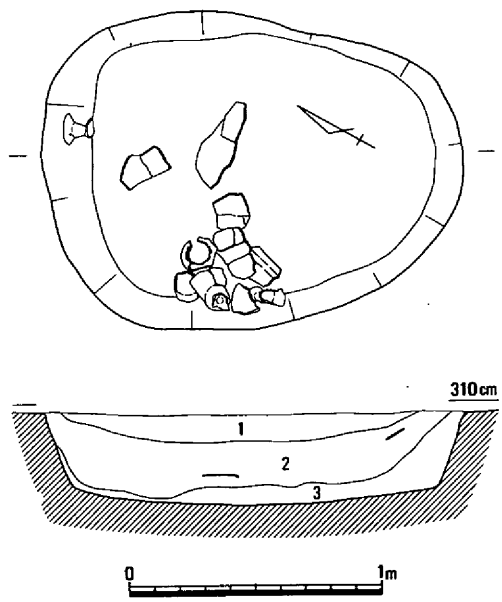
第373図　土壙100（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土壙101（第285・374図）

土壙100の北東約１ｍと近接して所在が確認された。長軸長83cm、幅70cmの規模を測り、平面不整方形である。検出面からの深さ中心部で約30cmを測り、壙内からは小片ながら土器の遺



第374図　土壙101（1/30）・出土遺物（1/4）



第375図　土壙102（1/30）

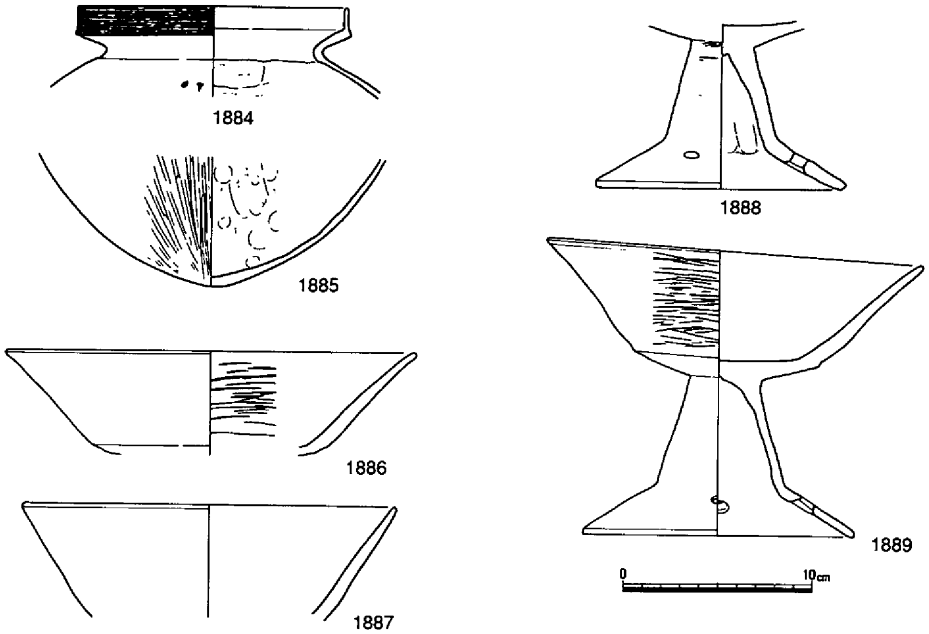
存が確認された。

土器には、甕、高杯、鉢等の器種が散見された。時期的には、高杯1879・1880、小型器台1881が該当するものと考えられる。いずれも古墳時代前半に位置づけられよう。

土壙102（第285・375・376図）

４Ｂ区で竪穴住居63の北約３ｍの地点に所在が確認された。平面検出面は、海抜3.05m付近であった。規模は、長軸長1.66m、幅1.26m、検出面からの深さ約35cmを測った。壙内からは、中心西側に偏在した状況で土器の遺存が検出された。

土器は、甕、高杯でなかでも高杯には１点脚部に４方向の穿孔が見られる1889

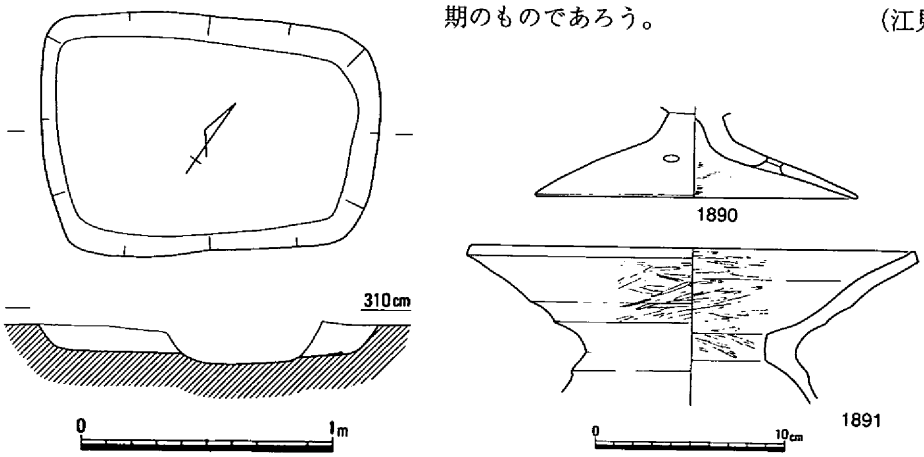


第376図　土壙102出土遺物（1/4）

もあり、型式的には下田所併行に比定されるものである。　（島崎）

土壙103（第285・377図）

４Ｂｂ区、竪穴住居62の北に位置する平面不整長方形を呈す土壙で、中世の土壙墓５に一部切られている。規模は1.34ｍ×91cm、深さ13cmを測る。埋土は茶褐色砂質土で中から高杯および鼓形器台が出土した。1890の円孔は３個穿っており、1891は口縁端部に面をもち、口縁下端、頸部との境が不明瞭である。亀川上層併行期のものであろう。　（江見）

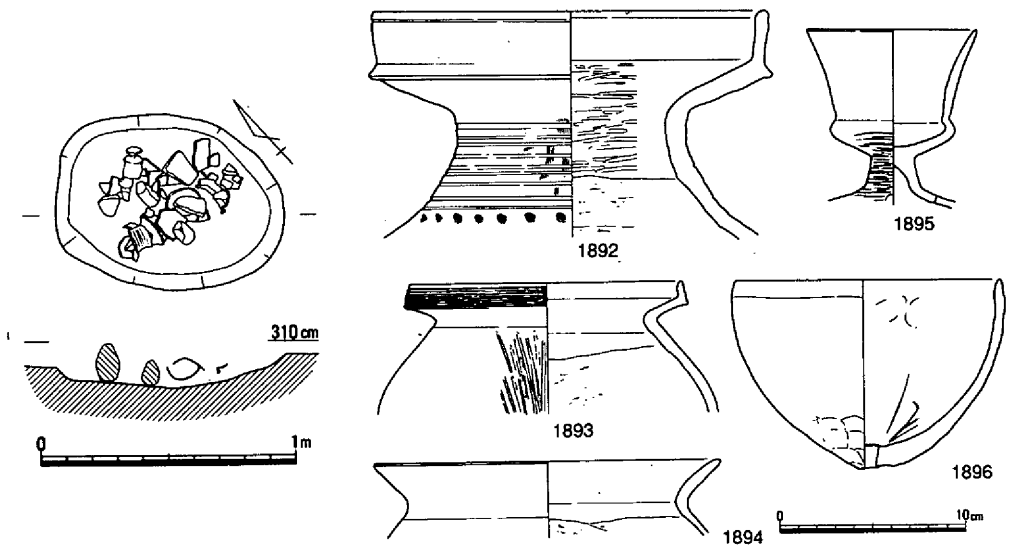


第377図　土壙103（1/30）・出土遺物（1/4）

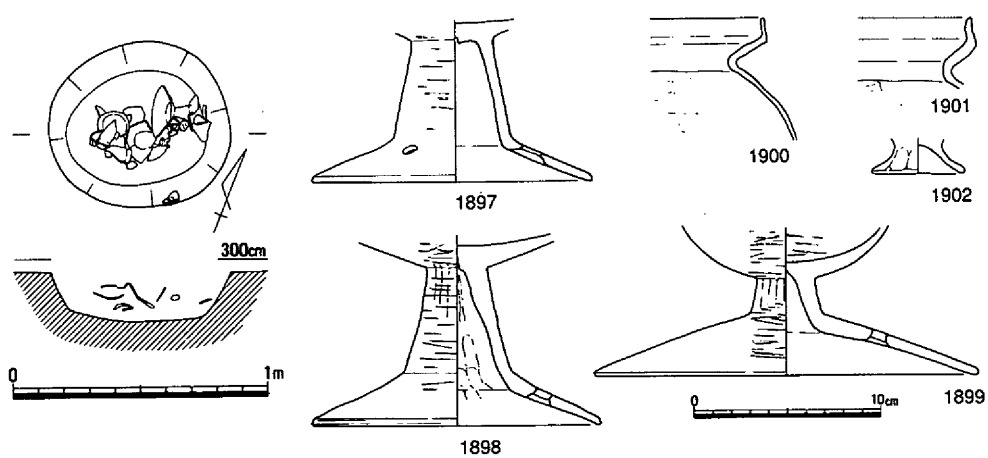
土壙104（第285・378図）

４Ｂａ区において海抜3.05m付近で所在が確認された。平面規模は、長軸長90cm、幅70cmで検出面からの深さ約10cmを測るもので、平面楕円形を呈する。壙内には土器片に混じって10～15cm大の川原石が断面浅い皿状を呈する面に立った状態で遺存しているのが確認された。

土器は、時期的に見て古いものも多く含まれるが甕**1893**、鉢**1896**が土壙の時期を示すと考える。鉢は、内・外面に押圧痕を残すもので底部には状況から焼成江によると考える穿孔が１か所見られた。時期は、判然としないが才ノ町もしくは下田所併行と考える。　（島崎）



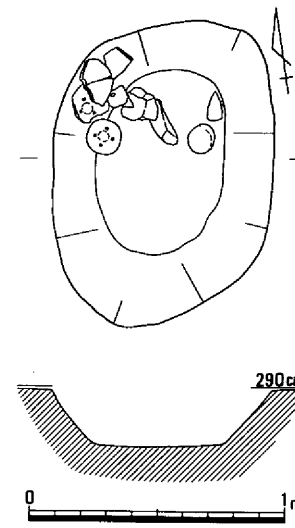
第378図　土壙104（1/30）・出土遺物（1/4）



第379図　土壙105（1/30）・出土遺物（1/4）

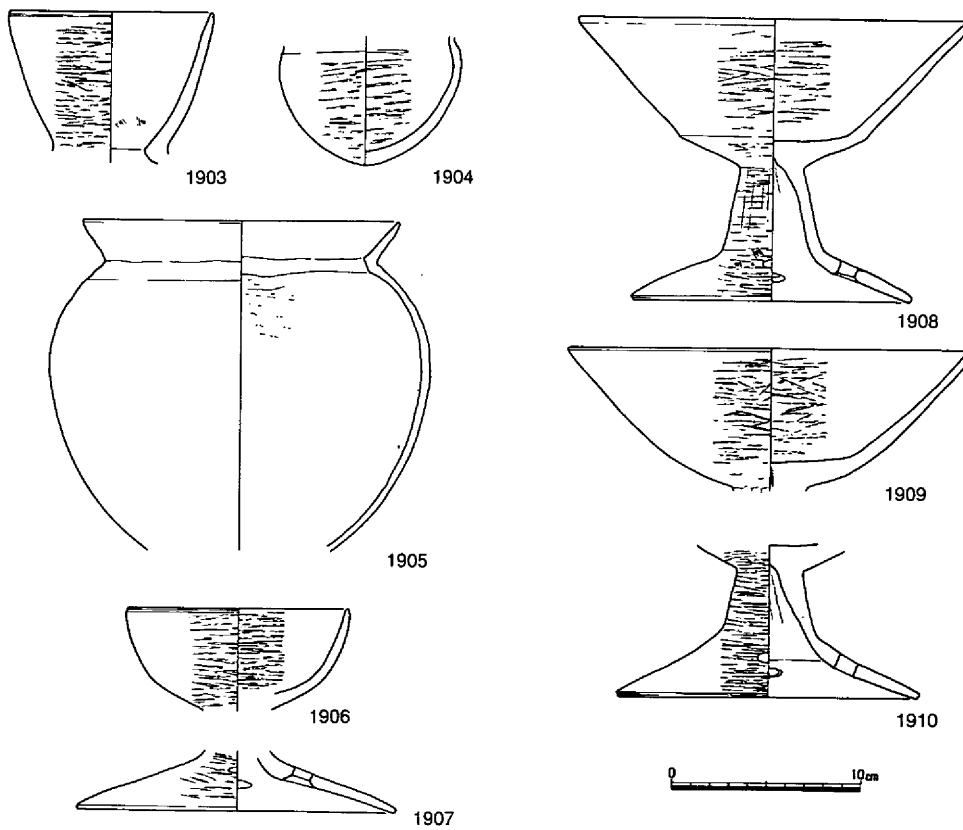
土壙105図（第285・379図、写真図版133）

４Ａｄ区、竪穴住居61の南に接して検出された平面不整円形の土壙である。規模は70×65cm、深さ18cmを測り土壙内から主に高杯が折り重なるような状況で出土した。高杯は脚部が長短の２種が出土しており、甕はいずれも口縁拡張面に櫛描沈線が巡るものである。他に製塩土器1902も出土しており、これらの土器は下田所併行期のものであろう。

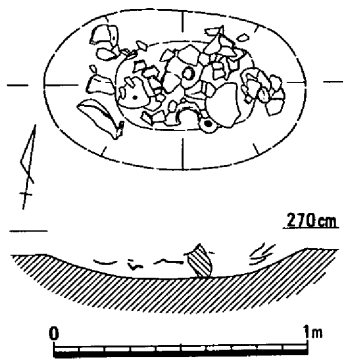


土壙106図（第285・380図）

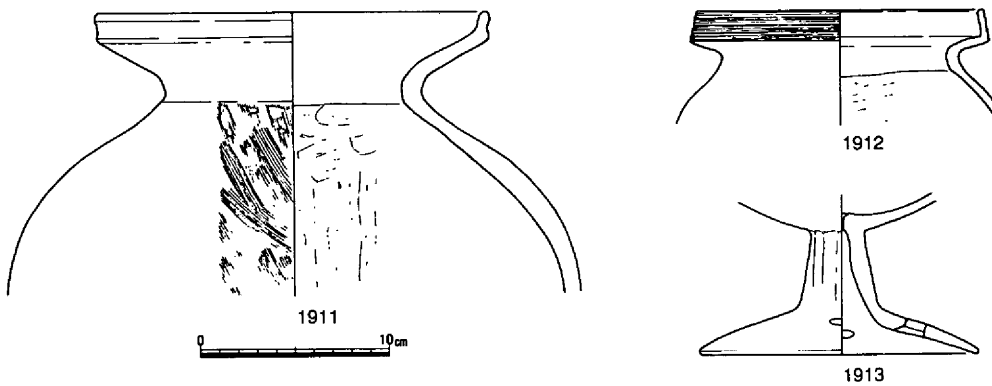
５Ｂａ区、竪穴住居62の東に位置する平面不整円形の土壙である。規模は約1.2m×86cm、深さ22cmを測る。遺物は主に土壙北部の壁から底部にかけて、礫とともに破損した土器が投げ込まれた状態で出土した。



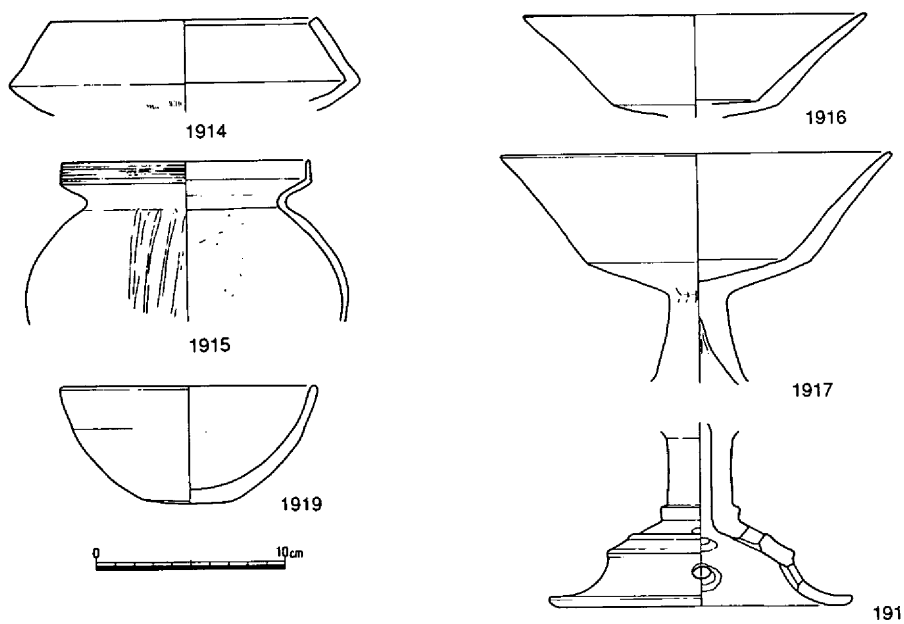
第380図　土壙106（1/30）・出土遺物（1/4）



土器には直口壺、甕、高杯、小型鉢などがあり、甕を除きいずれも水漉粘土で作られていた。1903の口縁は内湾気味に立ち上がり、端部に浅い沈線が巡る。1905の口縁は先に向かい厚みを減じており、端部は丸く収めている。最大径が胴部上半に位置し、高杯1910もやや古い様相を呈す。これらの土器は下田所併行期のものと考えられる。



第381図　土壙107（1/30）・出土遺物（1/4）



第382図　土器溜り1出土遺物（1/4）

土壙107（第285・381図）

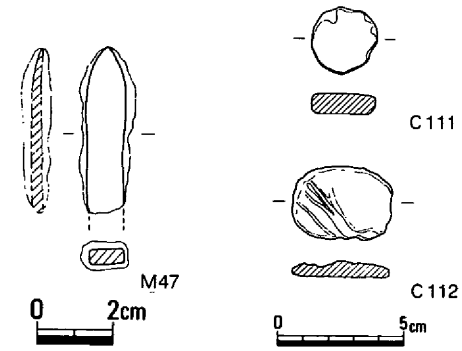
５Ｂｂ区の南方に位置し、上部を中世溝で削平を受けて検出された平面楕円形の土壙である。規模は推定約１ｍ×約65cm、深さ10cmを測り、断面皿状を呈す。埋土が暗褐色粘質土の土壙内からは小礫とともに破損した状態の土器が出土した。甕の口縁拡張面は内傾し立ち上がり、高杯の杯部はやや深く、裾部の円孔は４個と想定され、土器の特徴は下田所併行期のものと考えられる。（江見）

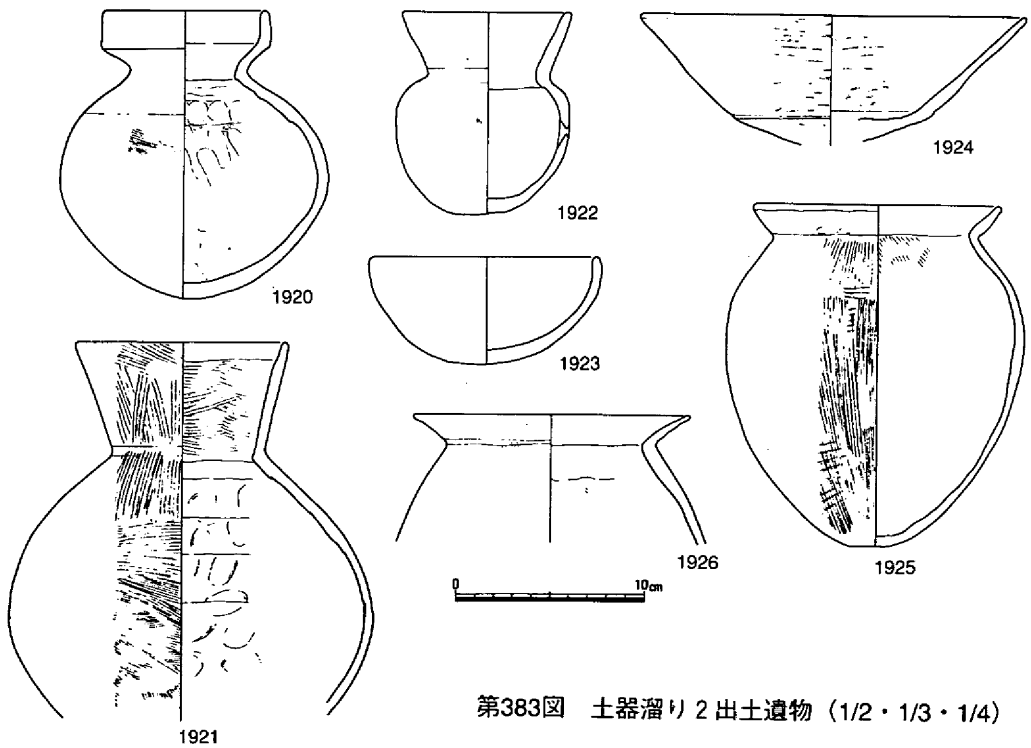
(3)　**土器溜り**

当遺跡から土器溜りは10数か所確認しており、その内のいくつかは竪穴住居あるいは土壙の項でも記載してきた。ここでは搬入土器を伴った溜りのみ取り上げた。

土器溜り１（第285・382図）

８Ｂｃ区、竪穴住居64の南方に位置する。径1.8×80cm、深さ10cm余りの小規模なものである。





第383図　土器溜り２出土遺物（1/2・1/3・1/4）

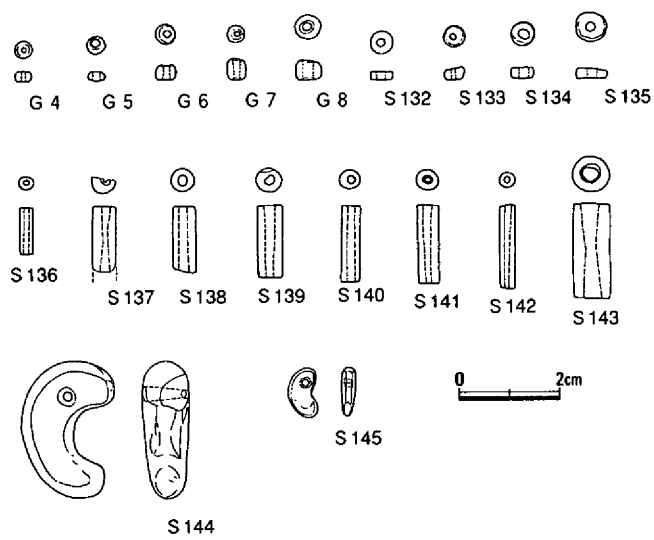
甕、高杯の特徴から亀川上層併行期と考えられる土器に伴って壺1914が出土している。灰白色を呈し、口縁部が「く」字の複合口縁で、端部は面をもつ。内傾する拡張部には横方向に部分的にヘラミガキが確認され、口縁下端から頸部にかけてハケ調整が施されており、瀬戸内西部からの搬入と思われる。また、高杯1918は胎土に砂粒を含む。形態的には古い様相を窺わせるが、脚裾中位に巡る段は低く、全体に稚拙で退化した状況を示していることから、当時期との隔たりはあまりないものと考える。

土器溜り２（第285・383図）

７Ｂａ区、竪穴住居24の上層から検出された径約1.5m×１m、深さ約10cmを測る土器溜りで、亀川上層（1293～1296）～大溝上層（1920～1922）併行期と思われる土器が出土した。1920は全体に鈍重な印象を与える器壁の厚いもので、直立する口縁拡張部に、胴部は球形をなす。胴部内面下半にヘラケズリが認められ、上半は指による押圧ナデで仕上げられている。県北部のものであろうか。1921は肩に張りのない胴部をもつ壺で、口縁部および胴部外面に粗いハケ調整痕が明瞭に残り、胴部内面は押圧ナデで仕上げている。1925は胴部外面をタタキの後ハケ調整を施し、内面は下半は不明であるが、上端付近はハケ調整される。　（江見）

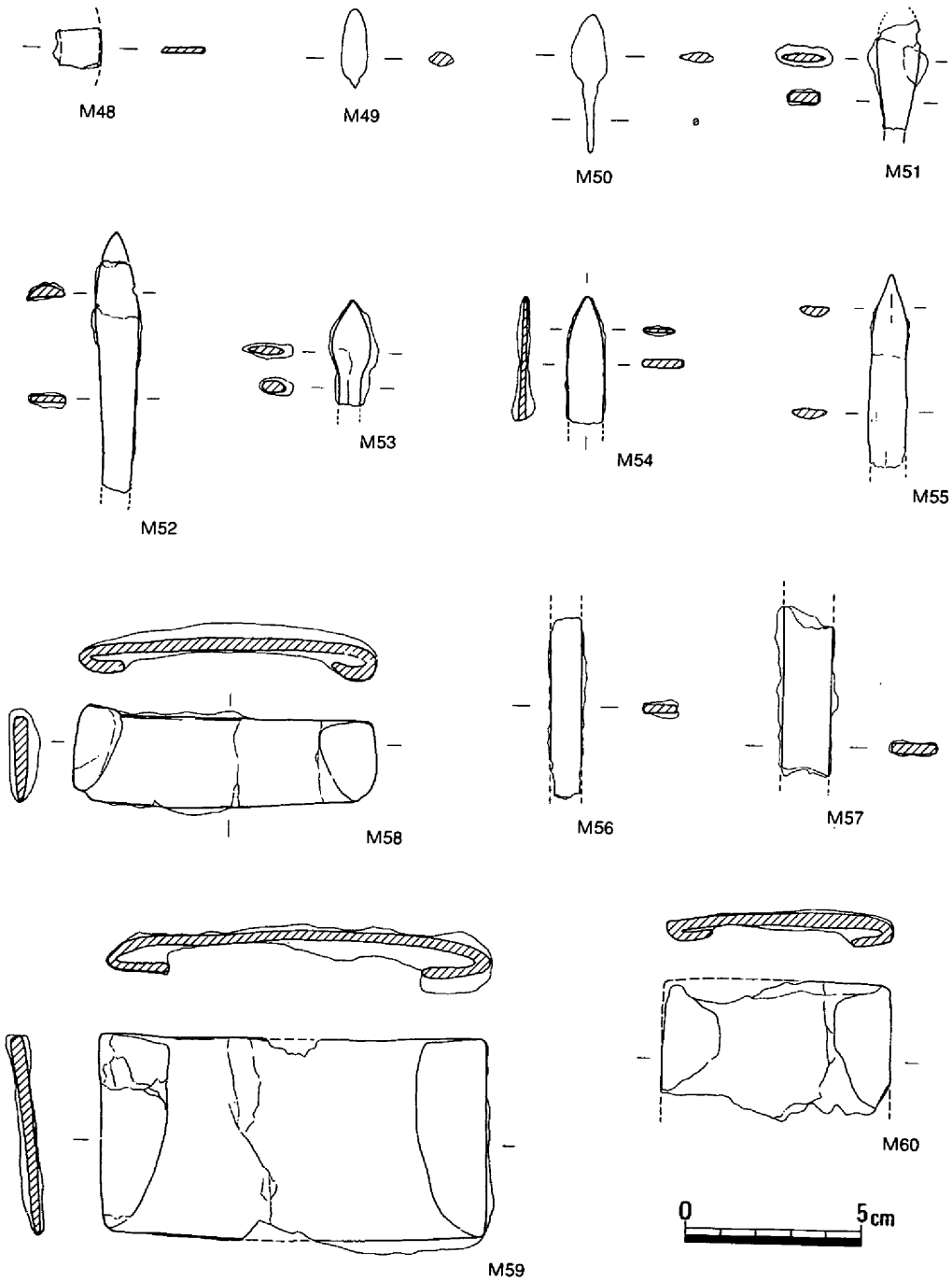
(4)　包含層遺物（第384～388図、写真図版170・173）

玉類は遺跡全体から44点出土しており、その内訳は石製の勾玉５点、管玉15点、臼玉５点、土製の勾玉２点、土玉９点、ガラス小玉８点である。第384図では包含層出土のガラスおよび石製のものを記載した。



第384図　包含層出土遺物①（2/3）

金属器類は鉄製品および青銅製品が出土している。鉄製品は鋤先１点、手鎌２点、斧１点、鉇22点、剣１点、刀子５点、鏃８点、不明鉄製品11点など、弥生時代後期～当時期にいたるまでの総数50点を数え、他の同時代の集落跡と比較し、調査面積の割合からも前章の加茂Ｂ遺跡と同様出土比率は異常に高い。一方、青銅製品においても弥生時代後期後半の小銅鐸１点をは



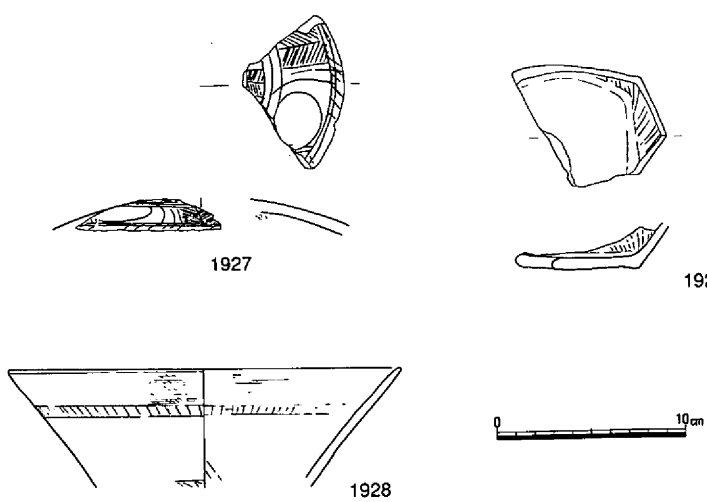
第385図　包含層出土遺物②（1/2）

じめ、鏡片２点、鏃５点など、当刻期まで計８点が出土しており、これら各遺構出土の青銅器および包含層出土のM48～50については、後章で分析・検討が加えられている。

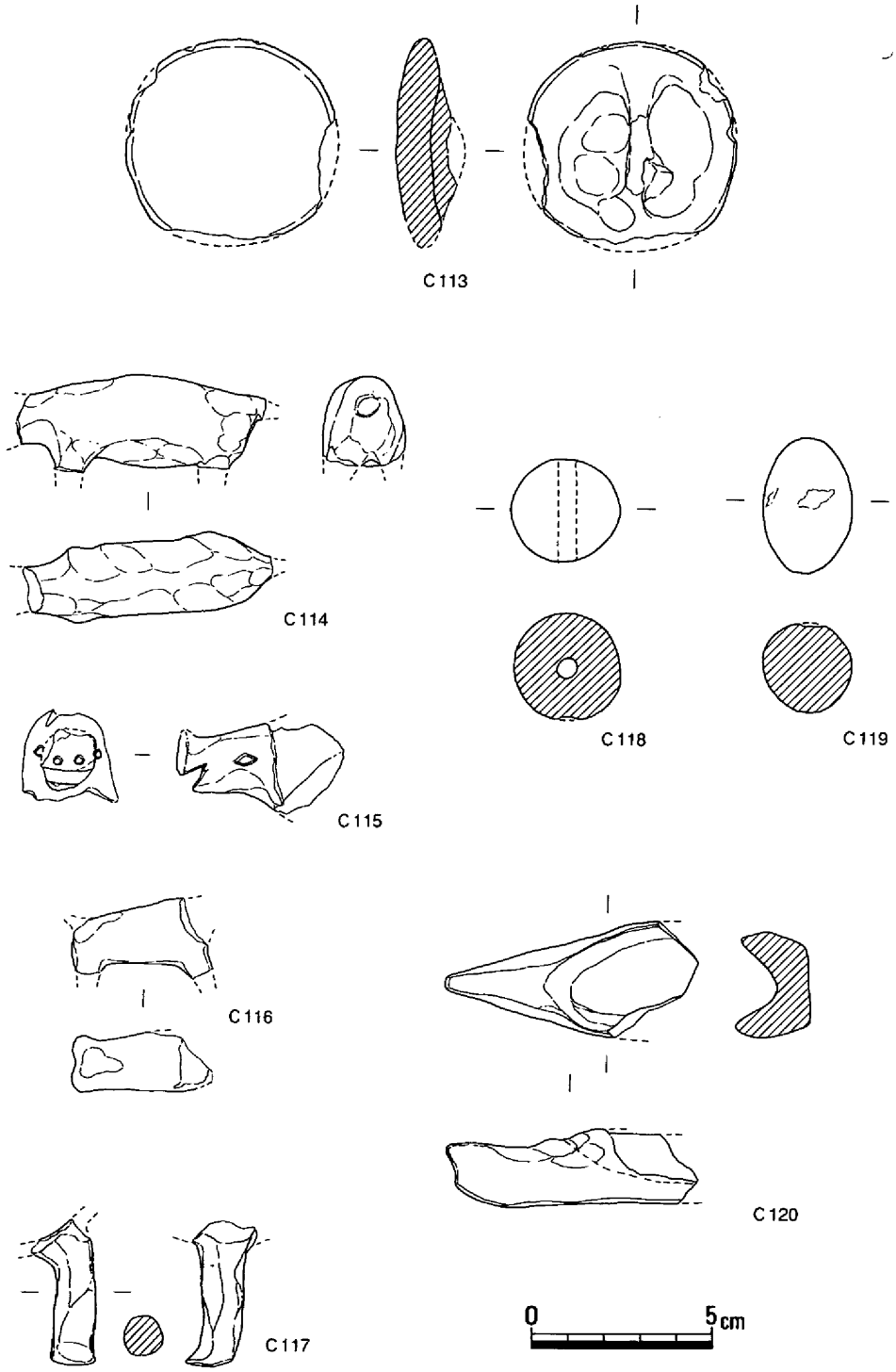
線刻土器は第386図以外にも数例出土しているが、水漉粘土で作られた３点にとどめた。1927は内面上端部にヘラミガキ痕が認められることから高杯の裾部と判断されたもので、上下に３本の直線を引き、その間を綾杉紋を配し、下段の綾杉紋の横には円および円弧を描いている。また、下方には円弧とは別の短い直線が３本の平行線と交差するように描かれている。1928は高杯あるいは直口壺の口縁と考えられるもので、内外面に平行線を引き、その幅約７㎜の間に斜めに線を入れており、外面の下端にも一部確認している。また、口縁下端の内外面には細くて浅い線が部分的に認められた。1929は平面が方形を呈すもので、立ち上がった口縁部内面には斜めに、外面には斜格子に前面から側面に引き続いて描かれている。

土製品は大半が土錘が占め、中でもC121～131のように円筒形を呈すものは遺構出土を含めると90個余りが出土しており、他の形態の土錘とは格段の差がある。

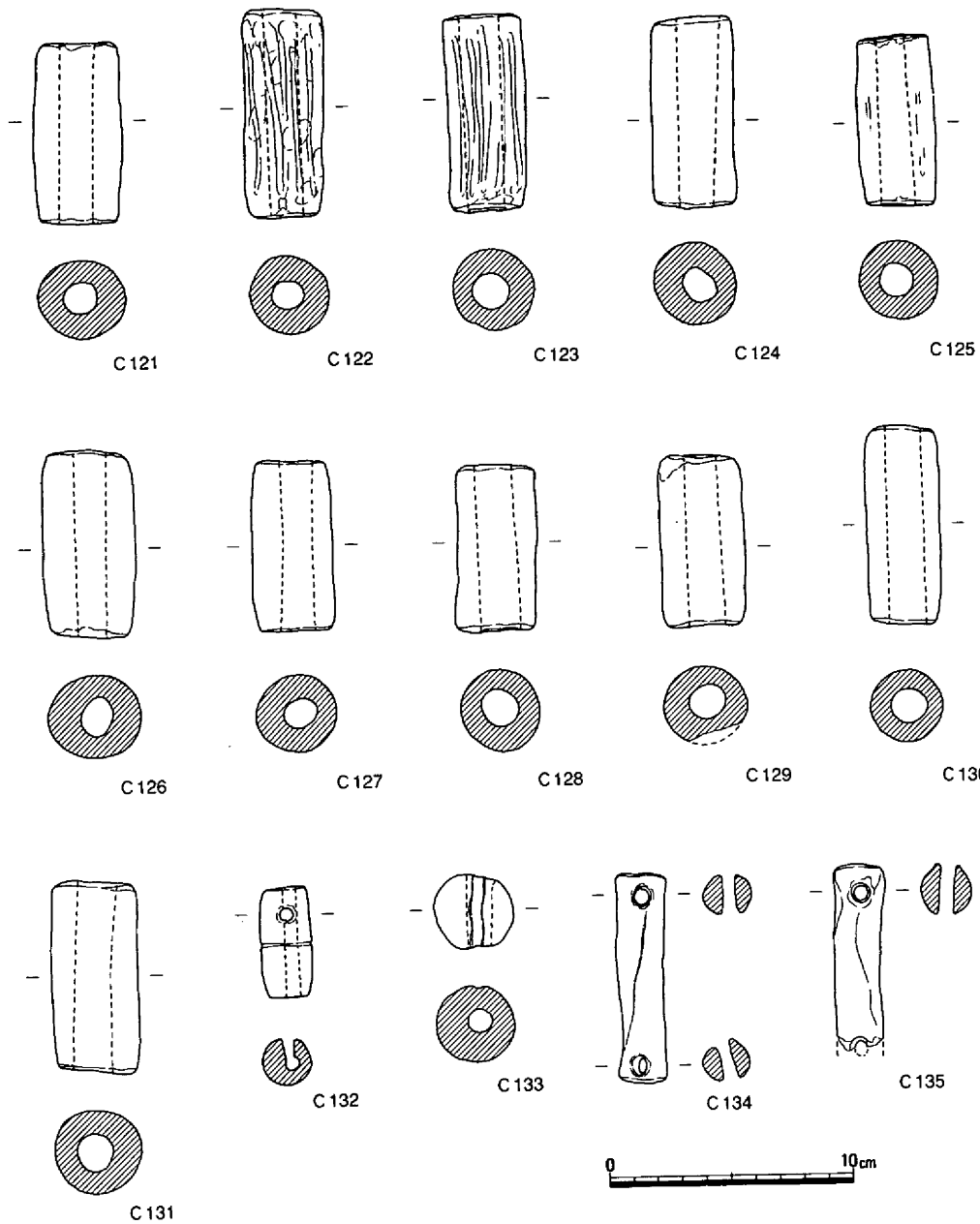
一方、土錘以外に鏡のミニチュアC113、動物形C114～117、土玉C118・119、舟のミニチュアC120などの土製品が出土している。表面採集のC117を除き、３～５Ｂ区から主に出土している。なお、C113は３Ｂａ区の土壙72付近から出土したもので、胎土には砂粒が混じる。凸面を呈し、鈕部分は欠損しているが孔を開けてはなかったようである。また、C120は竪穴住居62の近くの４Ｂａ区から出土した。水漉粘土で作られた舟のミニチュアと推定したもので、舳先部分にあたる。（江見）



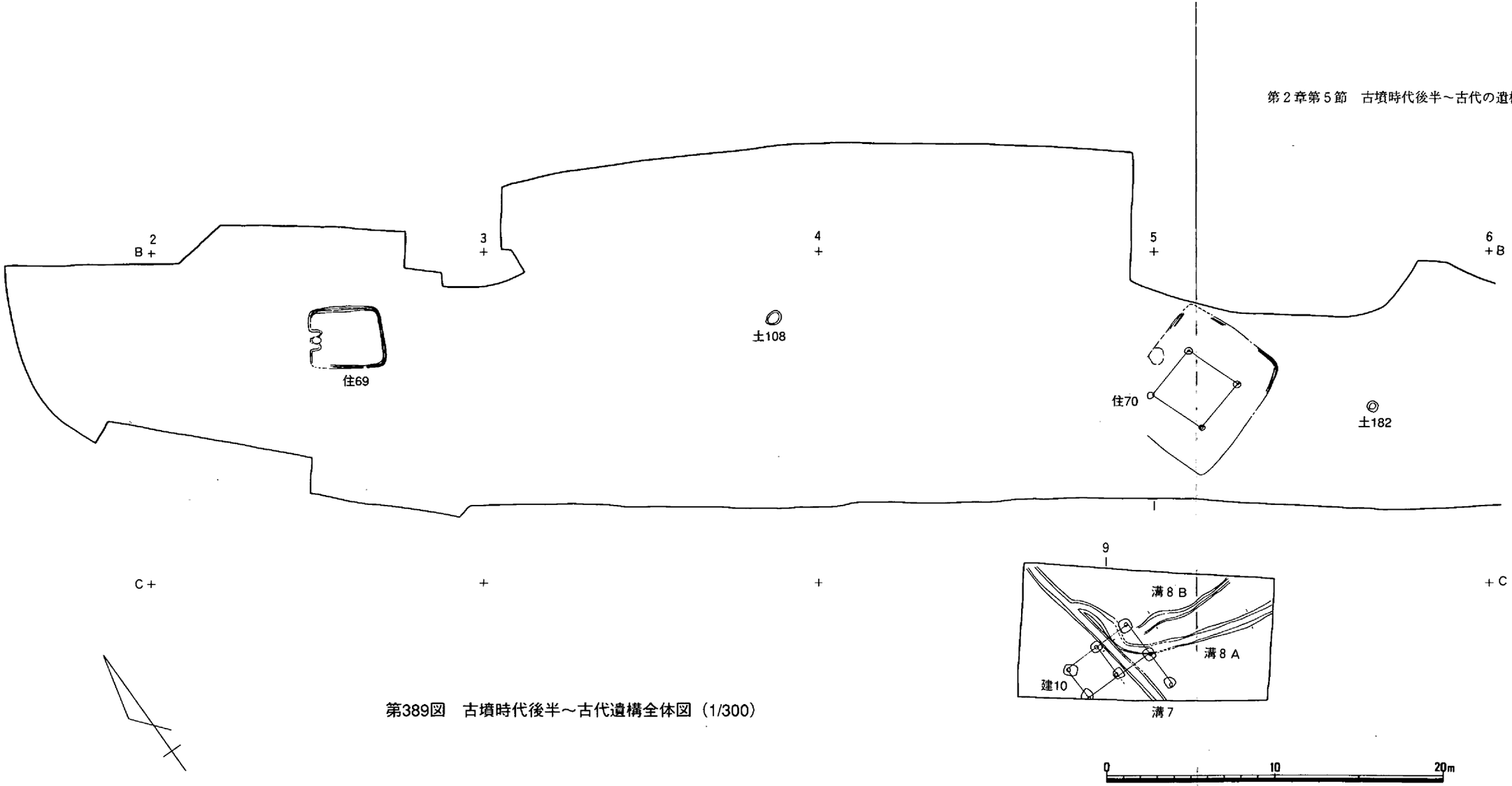
第386図　包含層出土遺物③（1/4）



第387図　包含層出土遺物④（1/2）



第388図　包含層出土遺物⑤（1/3）



第389図　古墳時代後半～古代遺構全体図（1/300）

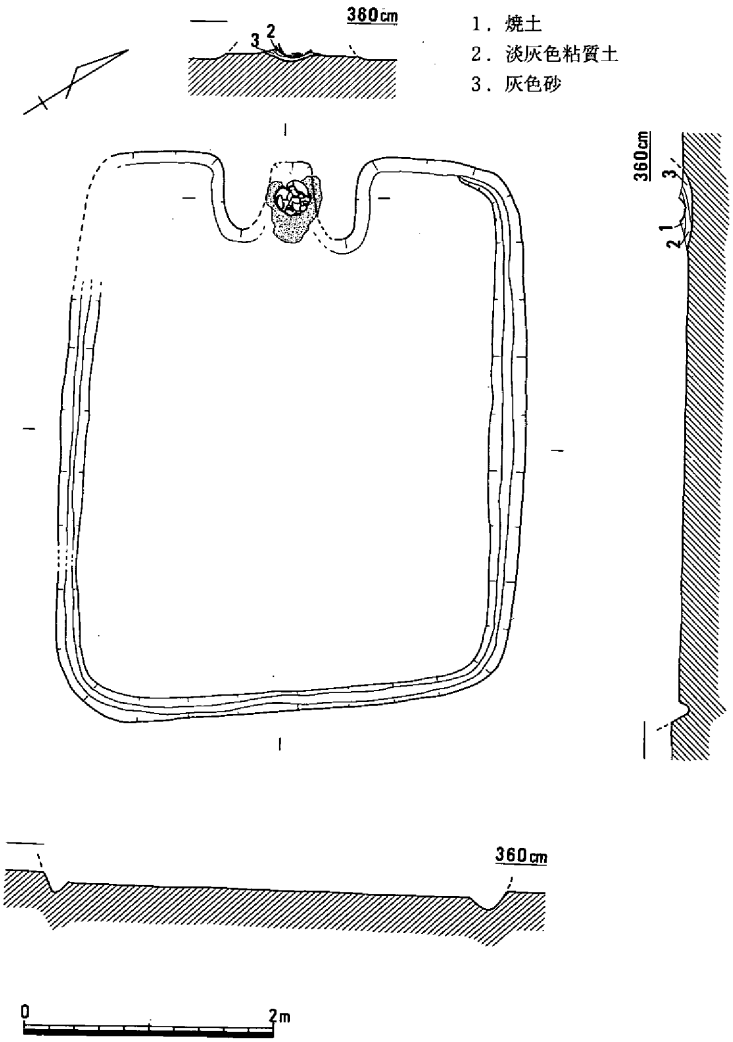
第５節　古墳時代後半～古代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

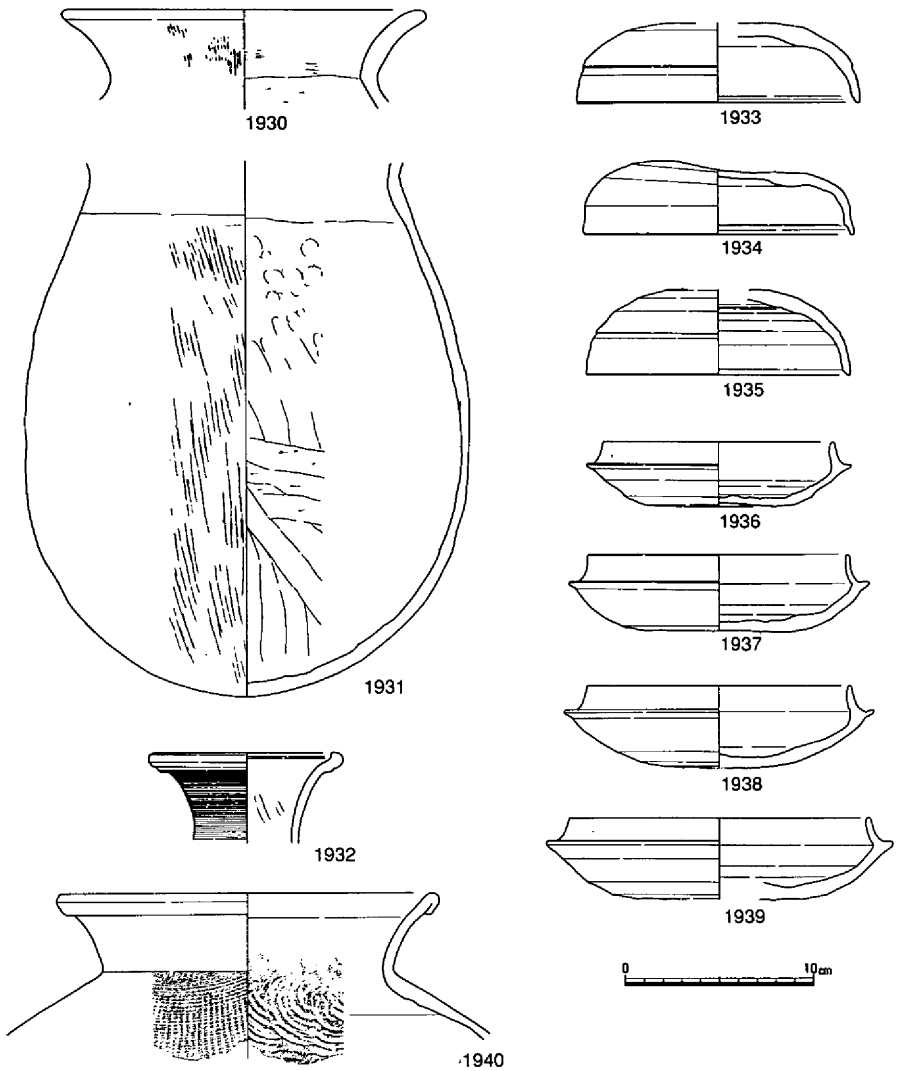
竪穴住居69（第389～392図、写真図版134）

２Ｂｂ区において海抜3.40ｍで検出された。後世の土地変革によって住居の上位ほとんどが削平を受け、遺存して検出されたのは検出面からわずかに５㎝程度であった。

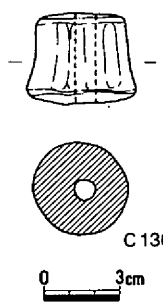
住居は、長軸長4.45ｍ、幅3.70ｍの平面不整長方形を呈するもので、長軸方向の北西側一辺中央部には造り付けの竈が見られた。そしてその中央には被熱面と使用時を彷彿とさせる土師



第390図　竪穴住居69（1/60）



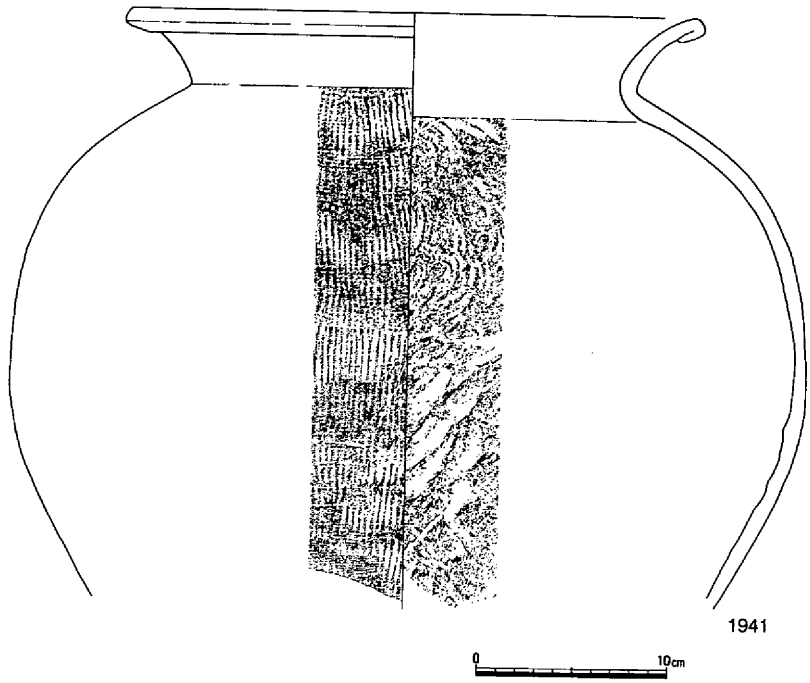
第391図　竪穴住居69出土遺物①（1/4・1/3）



器の甕1931の遺存が確認された。

床面からは、壁体溝が判然としないものの検出された程度で、その他柱穴等の検出は出来なかった。床面からは、わずかに須恵器、土師器、鉄滓、鞴羽口等遺物の遺存が散見された程度であった。鉄滓と羽口の出土は、この住居が鉄器製作に何等かの状態で関係していたことを示唆させるものである。

時期は、須恵器がおよそ6世紀前半の範疇で理解されることで、同時期に比定して差支えな



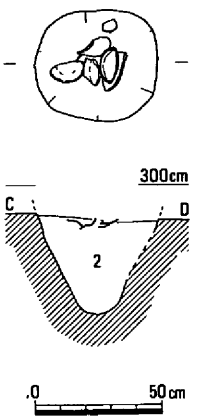
第392図　竪穴住居69出土遺物②（1/4）

いものと考える。

竪穴住居70（第389・393～395図）

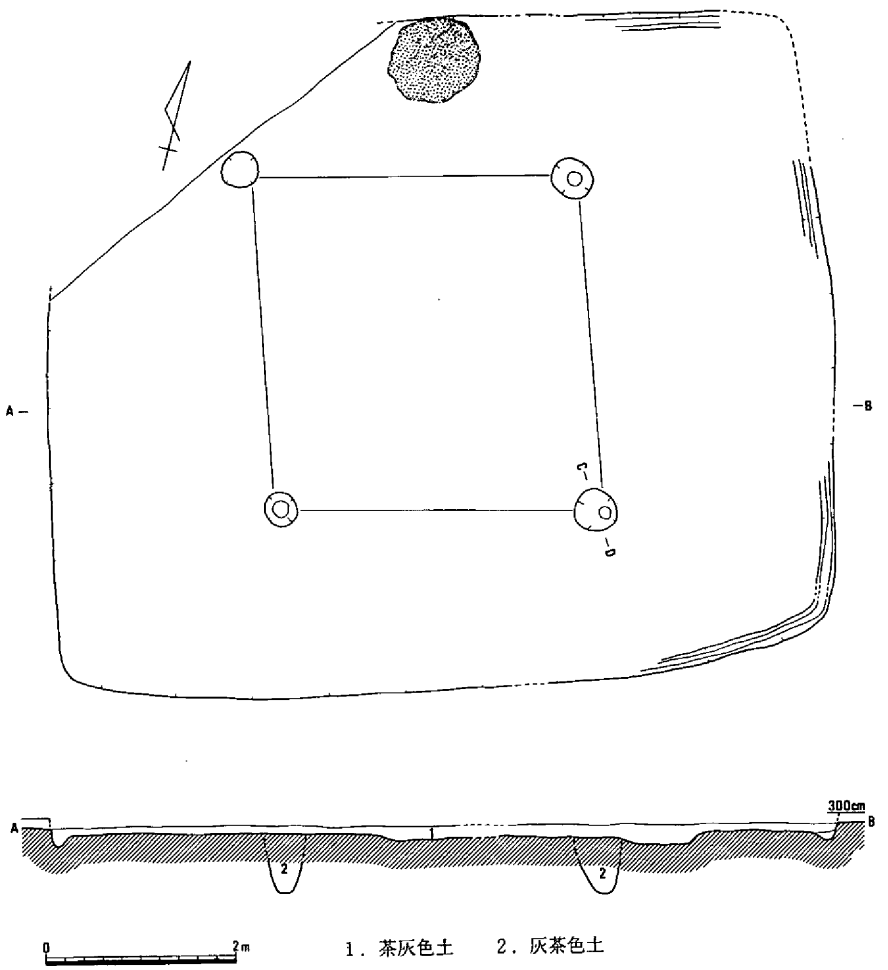
５Ｂａと５Ｂｃの両調査区に跨がった状態で検出された住居であるが、竪穴住居69同様に後世の土地変革によって上部構造の大部分が削平を受け、結果的に検出されたのは床面と検出面との比高が最深部でわずかに約10cm程度の遺存状況にすぎなかった。平面的には、北西方向のコーナーで一部未検出部分があるもののおよそ長軸長8.30m、短軸長7.10mと比較的規模の大きな不整長方形を呈する住居であった。床面からは、壁体溝の一部と柱穴、さらに住居北壁中央部付近の床面において直径約１mの規模の被熱面が検出された。壁体溝は、部分的に存在を認定した箇所もあったが、全体的に明瞭な状態での遺存は確認出来なかった。土層断面で確認されても平面での検出ができない部分が相当見受けられた。柱穴は、径40cm前後のものが４本住居中央部分でそれぞれに芯心距離3.50mをもって、深さ約60cm程の掘り方が見られ、南東部に位置した一本の柱穴からは須恵器の杯身、杯蓋のまとまっての遺存が確認された。被熱面は、当初上部構造が遺存しないことで判然としなかったが、住居の時期と所在位置等から勘案して本来的には竈が造り付けられていた箇所であることが想起された。

出土遺物としては、当初この住居が竪穴住居として認識されない調査段階において比較的多くの須恵器の出土が確認された。その後調査の進展に伴って竪穴住居の認識がなされ、その段

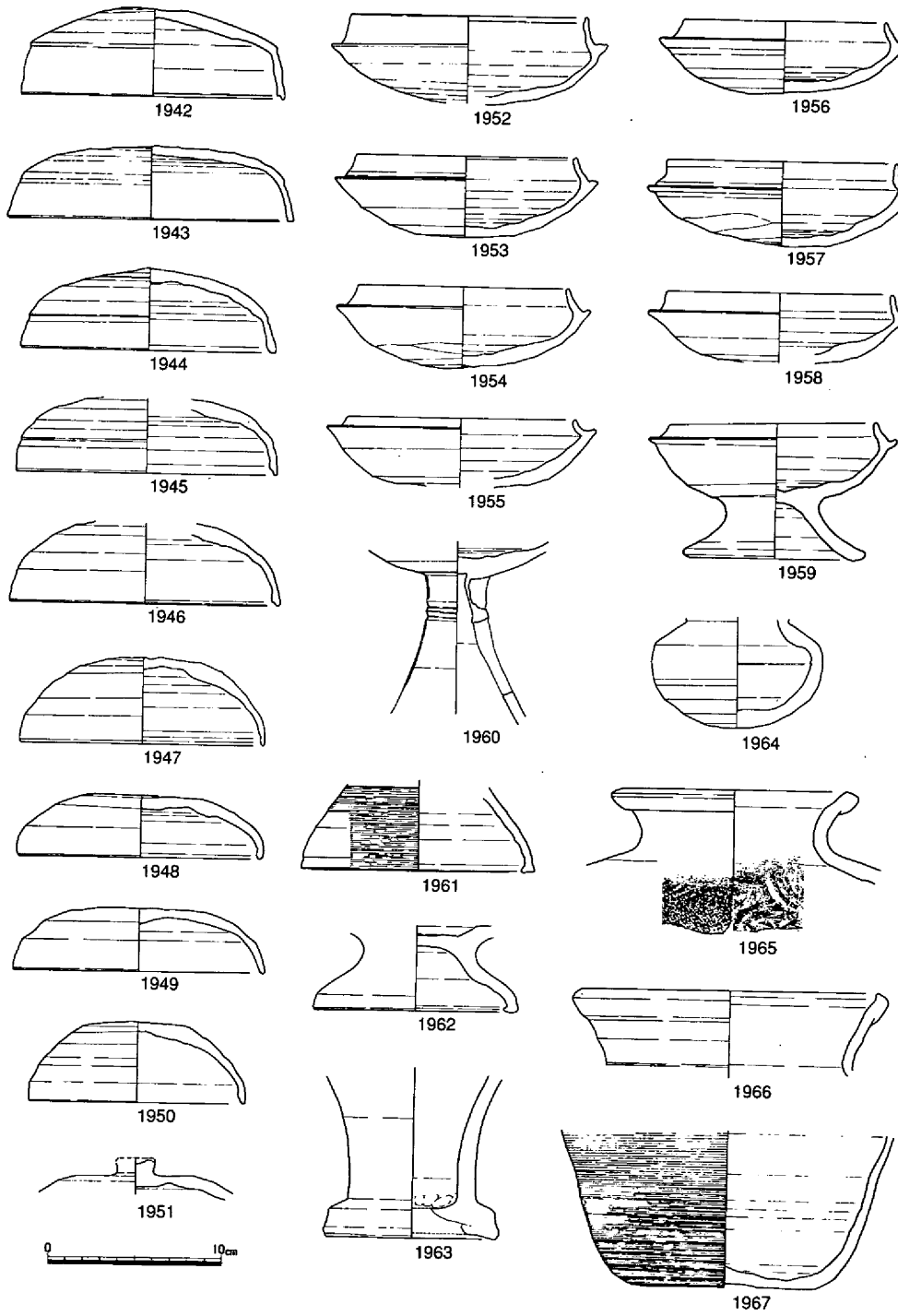


階でそれまで出土していた多くの須恵器が住居に伴っていたことが判明したのである。したがって、共伴が認定された須恵器の大部分は覆土中からの出土で、直接床面に伴った遺物として確認されたのは把手付鉢1971の１点と柱穴内に遺存が確認された杯蓋1942・1947、杯身1957の３点にすぎなかった。覆土中から出土したと考えられる遺物はすべて須恵器で、器種としては杯身、杯蓋、高杯、甕、壺、甕、把手付鉢、甑、横瓶等が確認された。なかでも把手付鉢1970・1971の存在と高杯1959は、朝鮮系の器種として、また胎土的に注目される土器といえる。

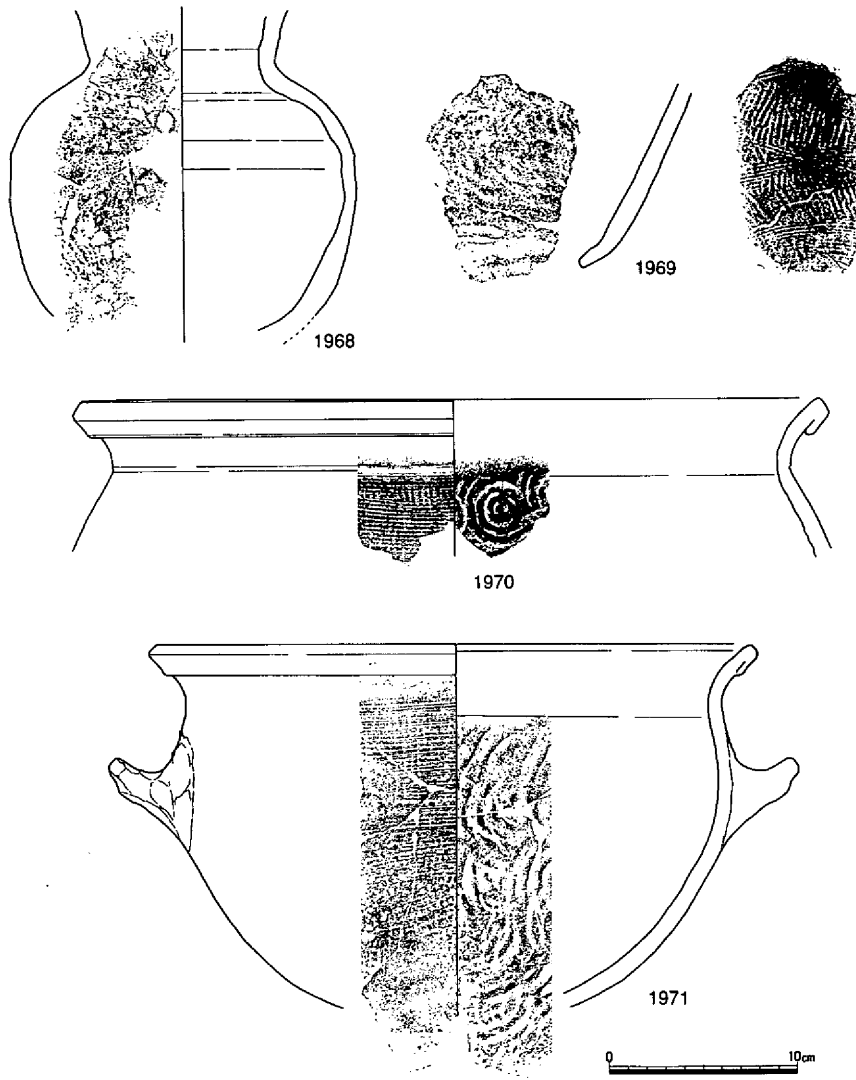
時期は、およそ６世紀前半の範疇で考えられよう。　（島崎）



第393図　竪穴住居70（1/30・1/80）



第394図　竪穴住居70出土遺物①（1/4）



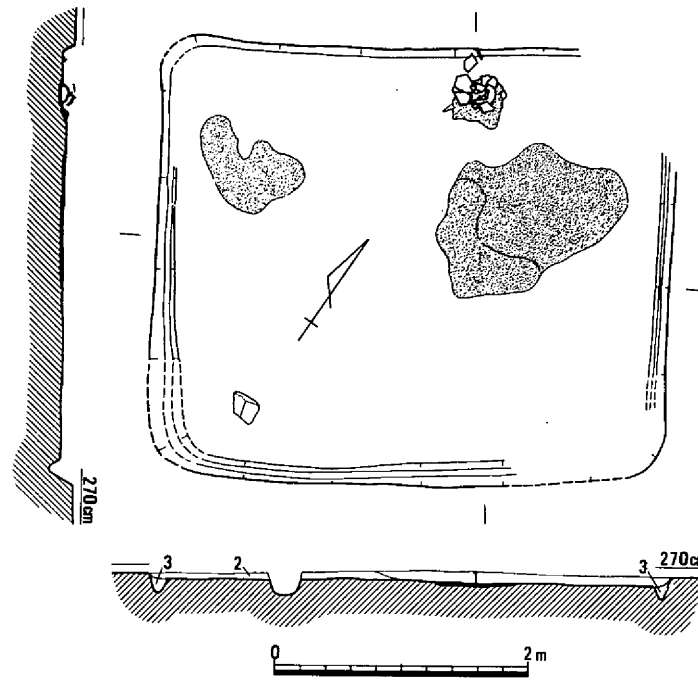
第395図　竪穴住居70出土遺物②（1/4）

竪穴住居71（第389・396図）

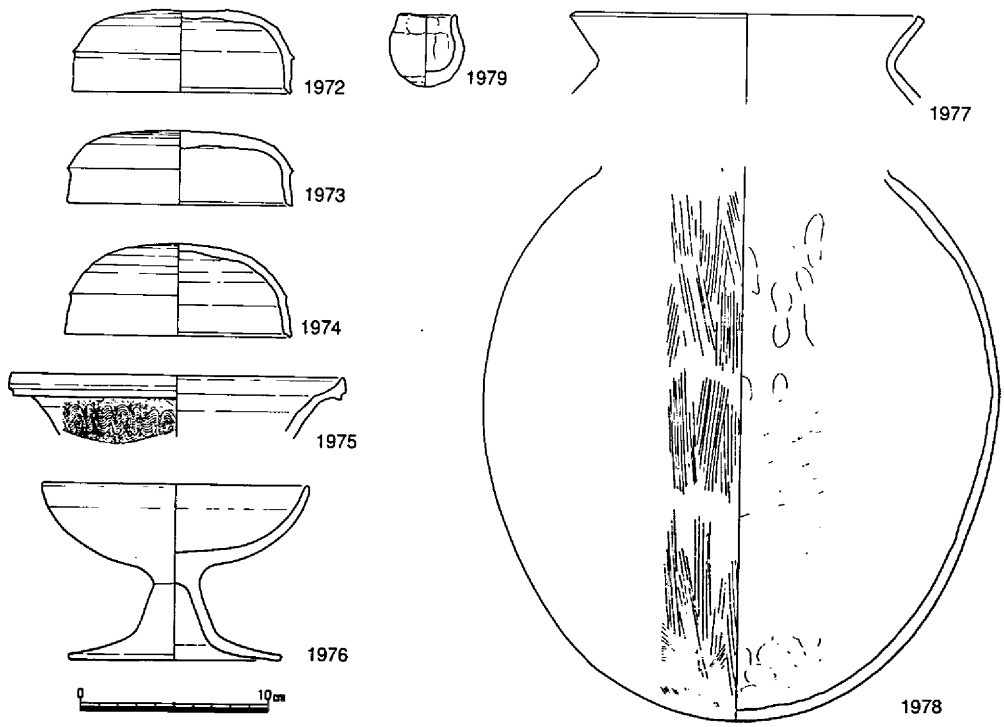
８Ｂ区の中央北寄りに位置し、東部および南部を掘立柱建物４・５に一部切られて検出された、平面形態長方形の住居である。規模は4.05×3.46m、深さ約10cmで床面に達し、床面積推定13.2㎡、床面の海抜高2.6mを測る。長軸は東西方向に向き、やや西に振る。火災を受けたためか、第２層には炭が多く含まれ、床面北部からは焼土面が検出された。柱穴は確認されなかったが、北壁の東寄りからは竈が検出された。竈の遺存度は悪く上部は削平されていたが、底部の焼土面中央には高杯1976が支柱として伏せられた状態で出土しており、その上部周辺に

は甕1978の破片が散在していた。覆土からは須恵器杯蓋1972～1974、広口壺1975、土師器甕1977、ミニチュア壺1979などが出土した。杯蓋はいずれも口縁端部の内側に稜線が走り、やや長胴の甕1978の内面はヘラケズリもみられるが、指頭圧による凹凸が顕著である。

以上、当住居は土器の特徴から、６世紀初頭には火災により焼失したものと考えられる。



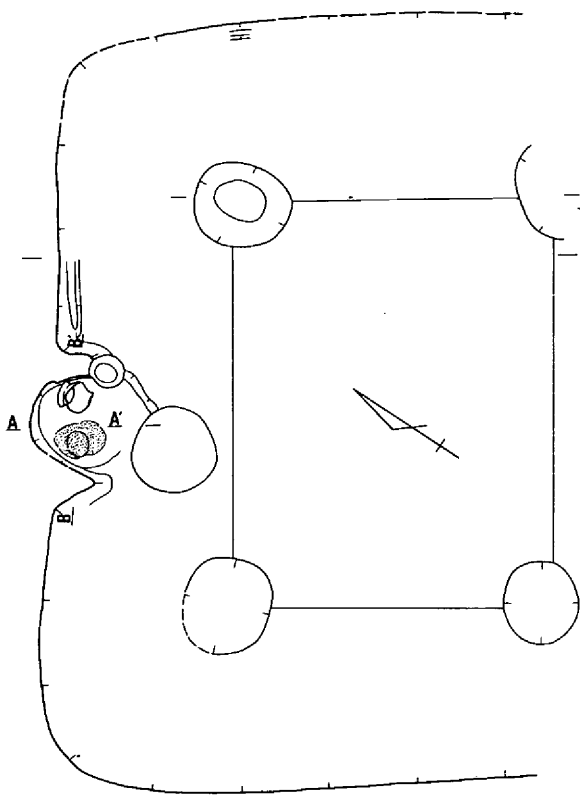
１．淡茶褐色粘質砂　２．暗茶褐色粘質砂（含、炭多）　３．灰茶褐色粘質土



第396図　竪穴住居71（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居72（第389・397・398図、写真図版166）

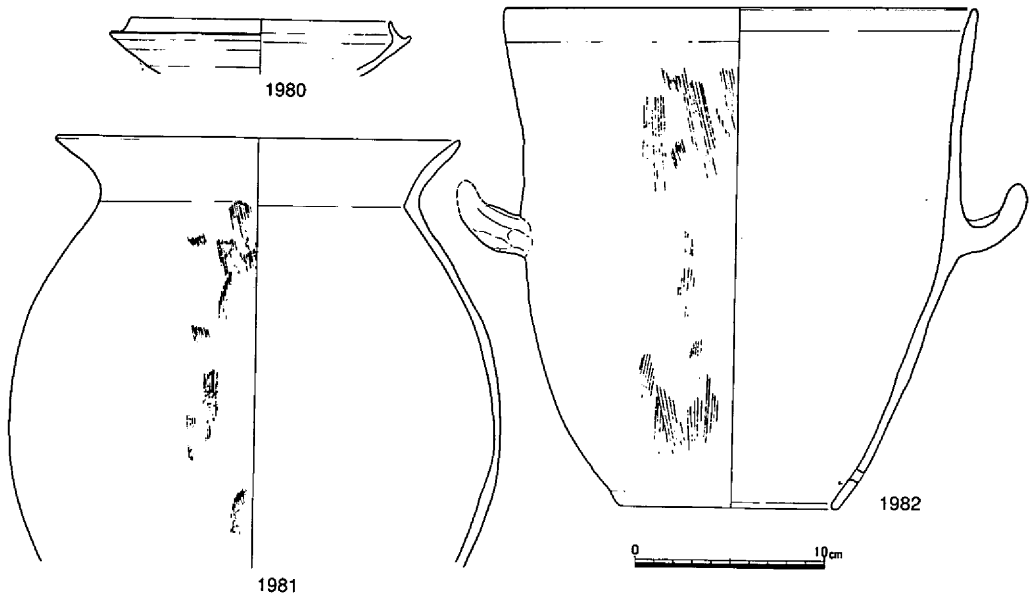
竪穴住居71の南に並行する位置から検出された平面形態隅丸長方形を呈すと推定される住居で、掘立柱建物４～６・溝33に部分的に、南東部は新矢部橋によって切られている。規模は東西方向6.1m、深さ25cmを測る。支柱は４本で柱穴間の距離は東西約3.3m、南北約2.5mを測る。北壁中央からは竈が検出された。竈は内径約80cmを測り、煙道に続く北側は住居北壁ラインより僅かに突出する。底部西寄りには明瞭な被熱面が残り、その東から出土した土師器甕1981は竈壁崩壊後に横転したものと思われる。遺物は他に覆土から須恵器杯身1980、土師器甑1982が出土しており、土器の特徴から、当住居は６世紀の後半には廃絶したものと考えられる。



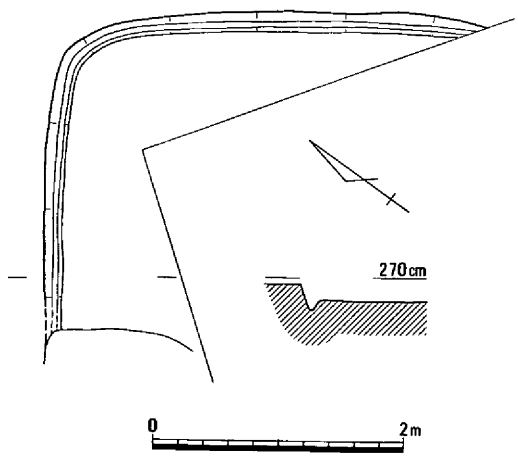
第397図　竪穴住居72（1/60）

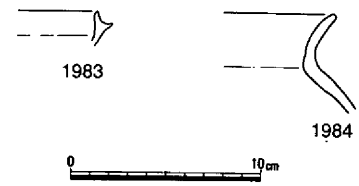
竪穴住居73（第389・399図）

竪穴住居72の北に並行して検出された平面形態隅丸方形の住居であるが、土壙109および新矢部橋に大半を切られ、僅かに壁体溝のみを検出したものである。検出面からの深さ15cm、床面の海抜高2.5mを測る。僅かに出土した遺物から、当住居は６世紀後半には廃絶したものと考えられる。（江見）



第398図　竪穴住居72出土遺物（1/4）



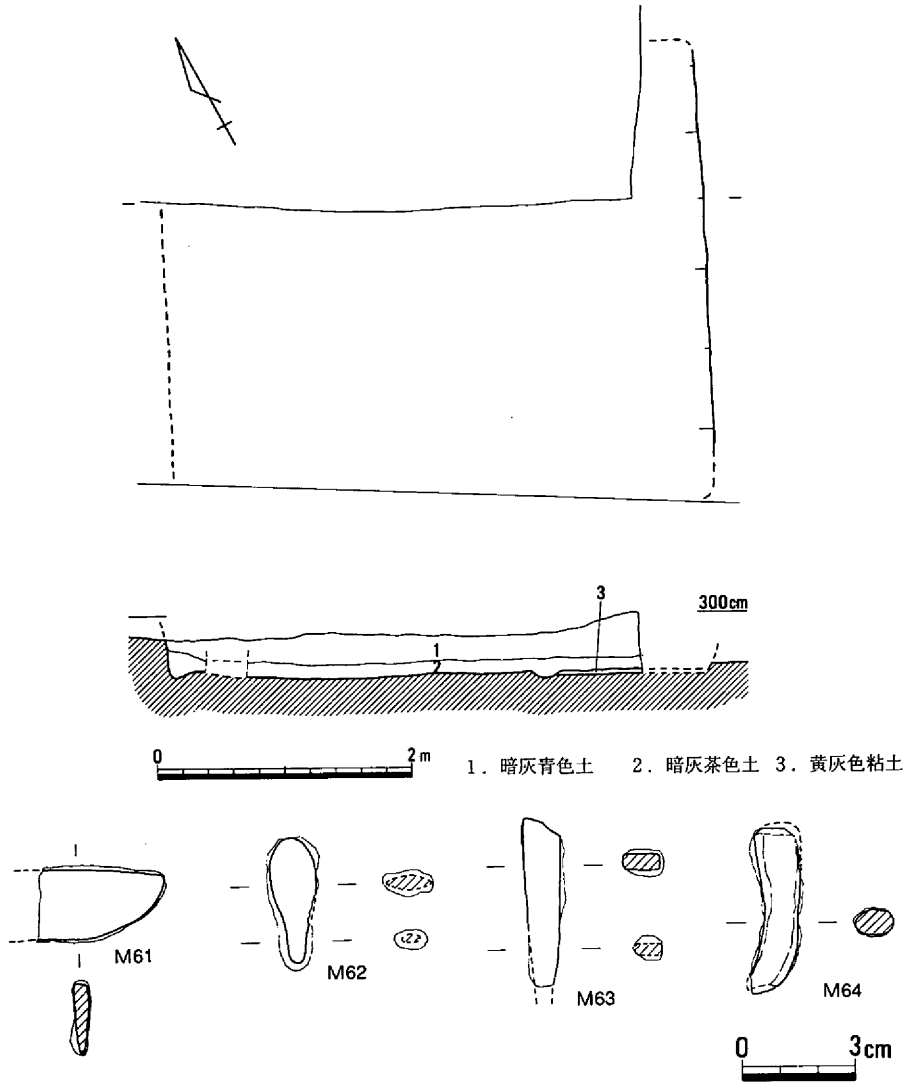


第399図　竪穴住居73（1/60）
・出土遺物（1/4）

竪穴住居74（第389・400図）

９Ｂ調査区の橋脚南西部において直線的な肩の一部と橋脚側断面においてその存在が確認された住居である。床面をはじめとする住居施設がまったく確認できず、わずかに断片的で不明確ながら一辺4.30mの規模で、平面が方形を呈していたものと推測されたにすぎない。

出土遺物としては、土器の遺存はまったく確認されず、鉄器４点の検出がなされた。鉄器は、



第400図　竪穴住居74（1/60）・出土遺物（1/2）

直刀M61、鏃M62の２点については器種の確認は比較的容易であった。一方、M63、M64については一般的にその類例は見られず、最近では鍛冶遺構に伴って検出される中にしばしばこれを確認することがある。いずれも端部に鏨によると考えられる截断痕跡を有するものである。

時期は、状況から古墳時代後半期の範疇に属すものと考えられる。（島崎）

竪穴住居75（第389・401図）

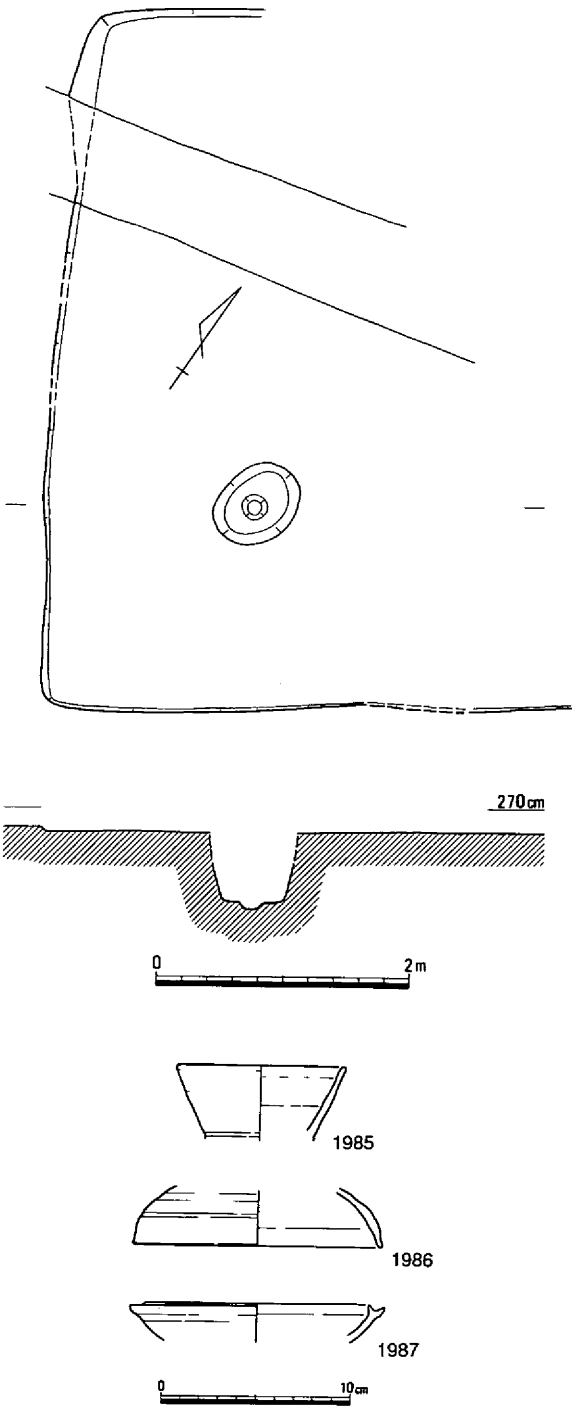
９Ｂ区の中央北寄りに位置する平面形態方形を呈す住居で、掘立柱建物８および溝36に切ら

れ、北半は調査区外に延びる。南北方向5.6ｍを測り、検出面からの深さは約５㎝、床面の海抜高2.5ｍを測る。唯一検出された柱穴位置から主柱は４本と推定される。遺物は覆土から平瓶および杯身、杯蓋が出土しており、これらの特徴から、当住居は７世紀初頭には廃絶したものと考えられる。

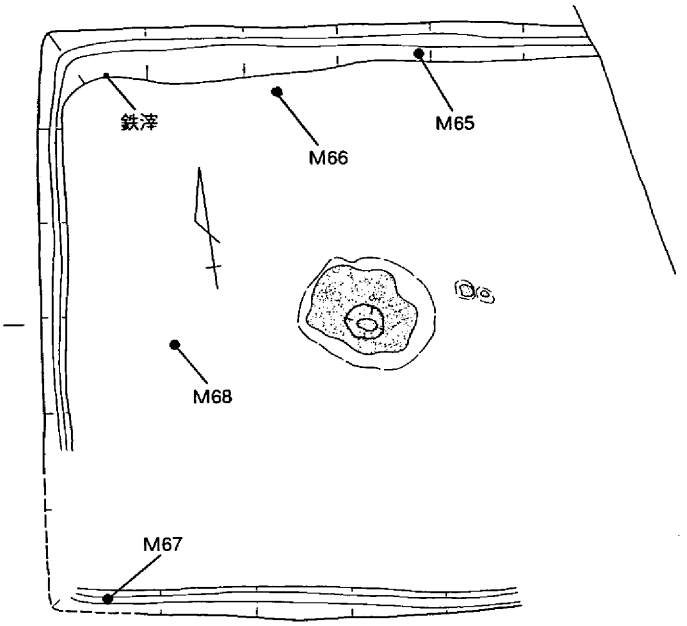
竪穴住居76（第389・402図、写真図版134・172・173）

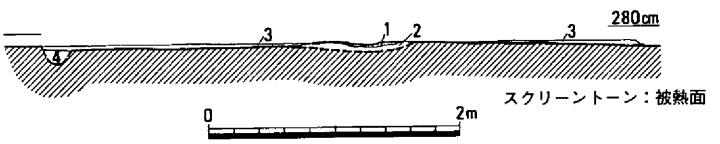
９Ｂ区の東端に位置する平面形態方形を呈す住居で、溝６を切り、住居東部は溝37に切られるとともにその南側は調査区外に延びている。南北は4.72ｍを測る。検出面から床面までは約５㎝と浅く、床面の海抜高は2.5ｍを測る。壁に沿う壁体溝は明瞭であったが、柱穴は確認されなかった。床面中央には径１ｍ余りの炉状を呈す被熱面が検出され、特に80×65㎝の範囲は硬く、その中央には径約30㎝、深さ数㎝の凹みがみられた。しかしながら、中には暗灰色の粘質土が堆積していたのみで、遺物は皆無であった。一方、床面からは鋤先M68および鉄滓が、覆土から耳環、鉄鏃、袋状鉄斧などが出土したが、土器は皆無であった。

以上、当住居は古墳時代後半以降に廃絶した、工房的な役割を果たした建物と考える。　（江見）

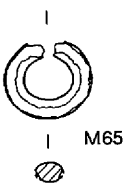


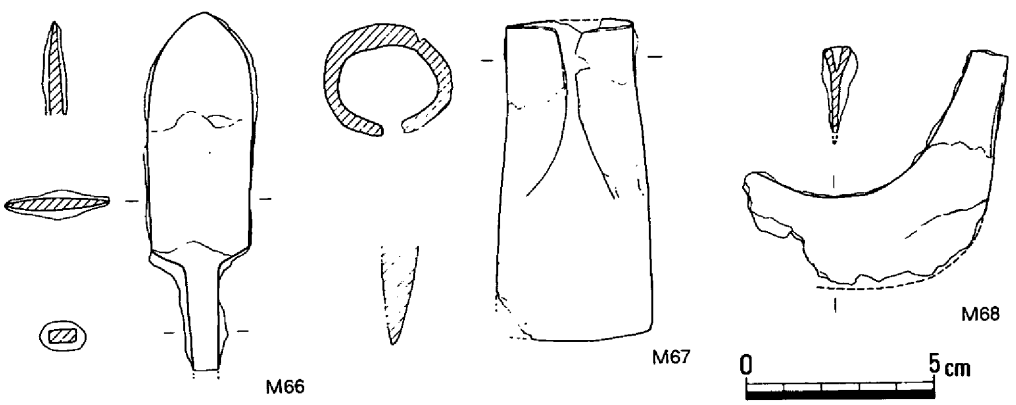
第401図　竪穴住居75（1/60）・出土遺物（1/4）





1．焼土（橙色）
2．焼土（暗橙色）
3．淡茶灰色粘質土





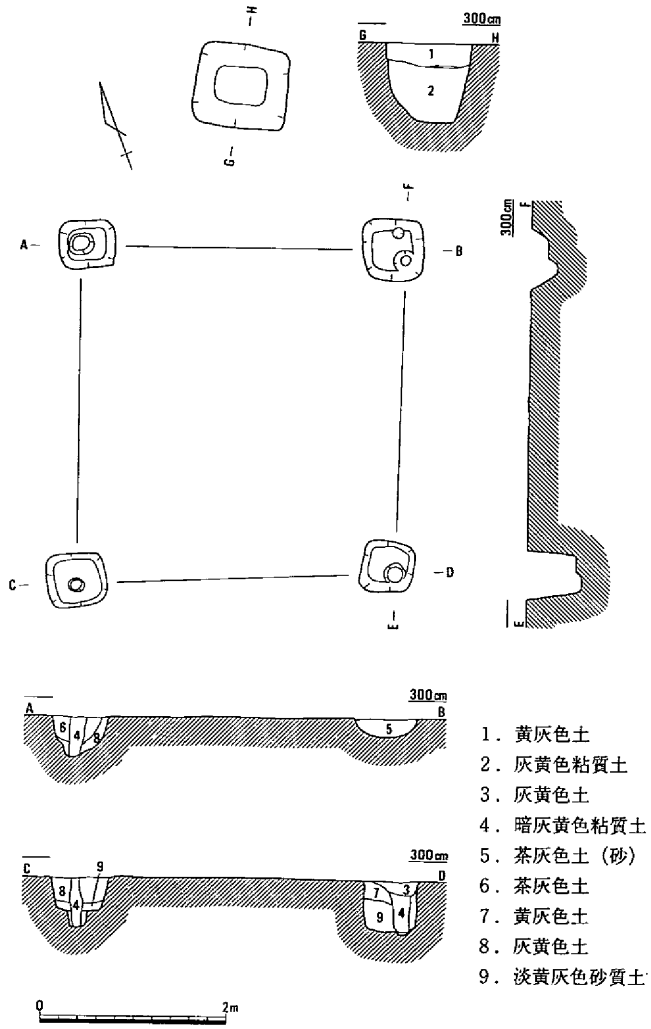
第402図　竪穴住居76（1/60）・出土遺物（1/2）

(2)　掘立柱建物

掘立柱建物３（第389・403図）

７Ｂ区のほぼ中央部において海抜2.80ｍで検出された方形の掘り方をもった柱穴４本で構成された建物である。建物規模としては、１間×１間と構造的には単調であるが、桁行3.35～3.65ｍ、梁行3.40～3.45ｍに窺われる規模の大きさは通常みられる同規模の掘立柱建物のなかにあっては例外といえよう。また、この建物の主軸の延長線上約1.20ｍには、長軸長1.00ｍ、幅90cm、深さ約80cmの規模の方形土壙が建物のそれぞれの柱穴掘り方方向に平行した状態で所在するのが確認された。隣接して同様の遺構の所在が認められなく、検出面、柱穴および土壙内での土砂の埋積状況が酷似する点において両者は本来共存していたものと推測された。

時期的には、遺物がみられなかったことで判然としないが、柱穴の掘り方が方形を基調とし、周辺に同様な掘立柱建物群が多く所在することで古代の範疇に属するものと考える。　（島崎）

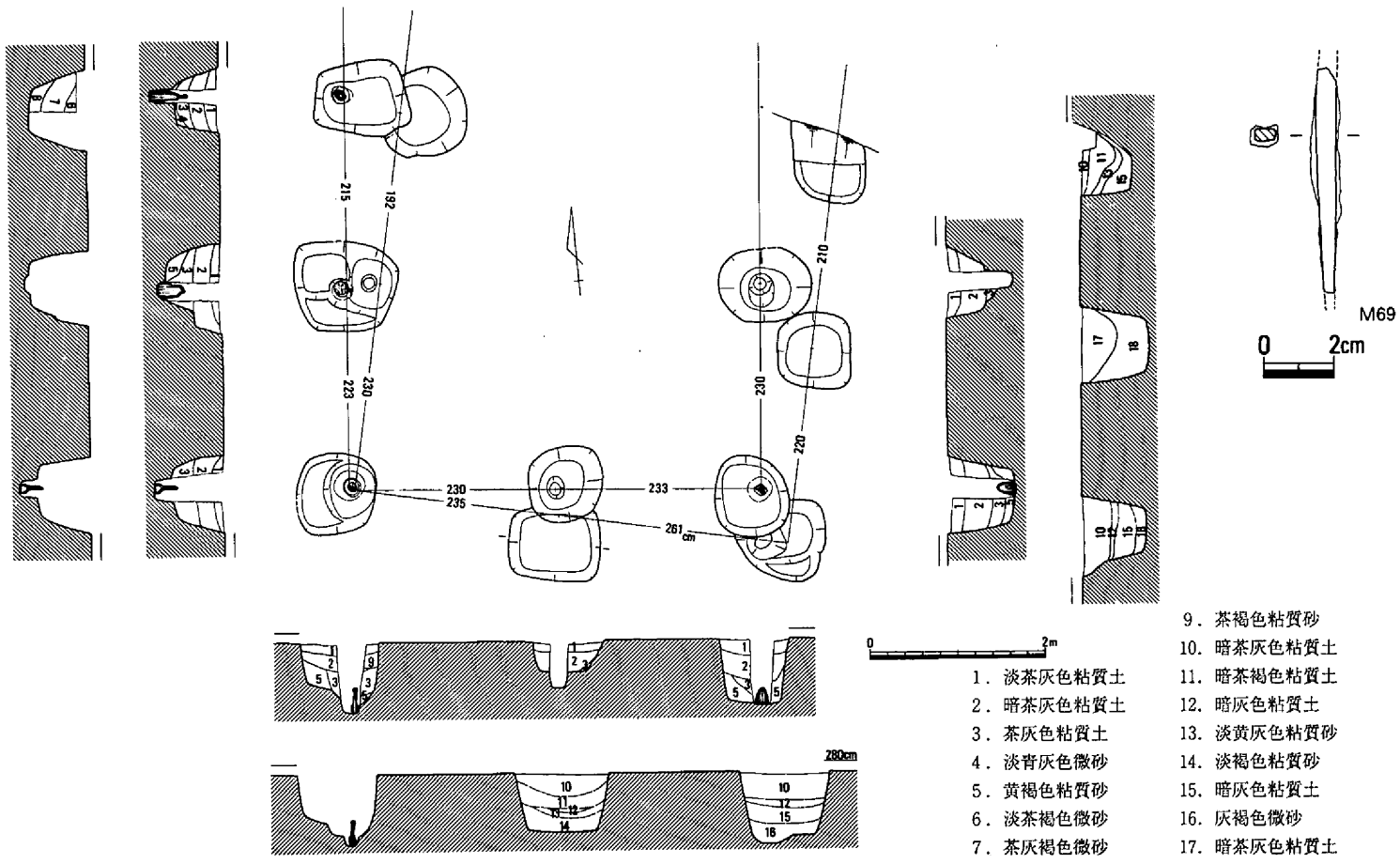


第403図　掘立柱建物３（1/80）

掘立柱建物４・５

（第389・404図、写真図版135）

８Ｂ区に位置する桁行２間以上×梁間２間の建て替えがなされた南北棟建物で、掘立柱建物６、竪穴住居72などを切っている。掘立柱建物４は建て替えられた建物で、主軸はほぼ真北に向き、桁行4.4ｍ以上、梁間4.63ｍを測る。柱穴の掘り方は方形を意識しているようであるが、やや丸いものもあり、径85cm～１ｍ、深さ30～70cmを測る。また、これら柱穴には柱根および柱痕跡が残っており、建物



第404図　掘立柱建物4（左）・5（右）（1/80）・出土遺物（1/2）

は径約20cmの丸太材で建てられていたことが明らかになった。遺物は北東の柱穴から釘と思われるM69が出土するのみで、土器は皆無であった。

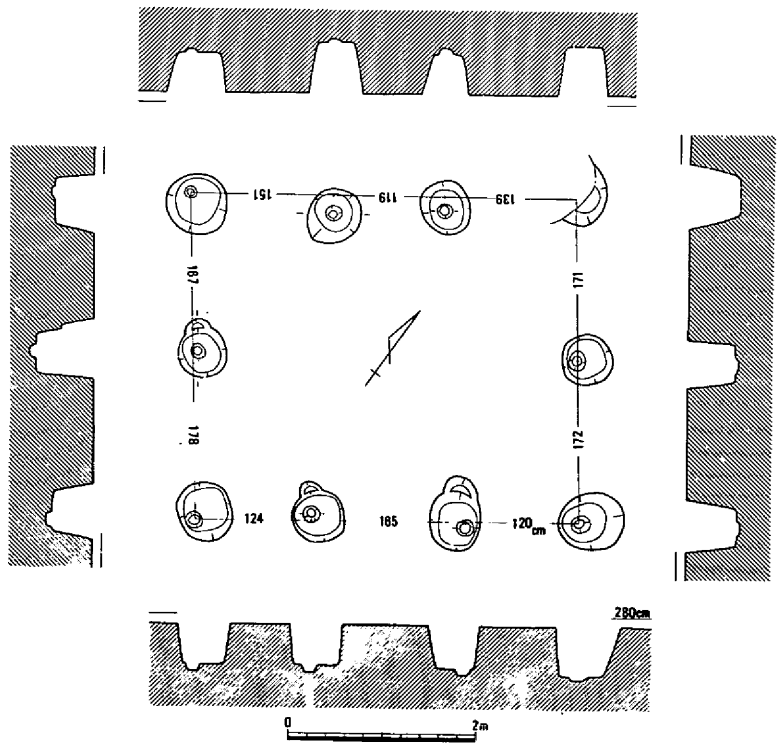
一方、掘立柱建物５の主軸は掘立柱建物４より東に約10°振り、南西隅の柱穴は共有していたようである。桁行4.3m以上、梁間約4.9mを測りやや前者に比べ梁間が長いが、柱根位置ではほとんど差違はない。柱穴の形状・規模においてもほぼ同様で、遺物は皆無であった。

以上、２棟の掘立柱建物は、遺構の切り合い関係から竪穴住居72よりも新しく、また、当掘立柱建物の西方約50mからは有機的な関係が想定される溝２が検出されており、その遺物の示す年代観は６世紀末から７世紀代であることから、これとあまり時期を隔てず建てられたものと推定される。

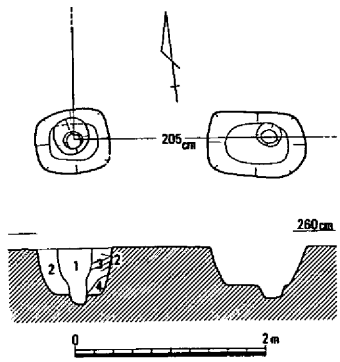
掘立柱建物６（第389・405図、写真図版135・136）

掘立柱建物４・５の南に位置し、これに切られ、竪穴住居72を切った状態で検出された桁行３間×梁間２間の東西棟建物である。桁行4.09m、梁間3.45mを測る。柱穴の掘り方は円形で径約60cm、深さ40～50cmを測る。柱根位置はほぼ軸線上に乗るものの、桁行北側中央の２柱穴はやや南にずれる。桁行の柱穴間は1.19～1.65m、梁間のそれは1.67～1.78mを測る。

以上、当掘立柱建物は遺構の切り合い関係から７世紀前半には廃絶したものと考えられると



第405図　掘立柱建物６（1/80）



1．茶灰色土　　3．黄色砂質土
2．黄・茶色粘質土混　4．茶灰色土

第406図　掘立柱建物７（1/80）

ともに、当掘立柱建物の西方数mには棟とほぼ同様の方向に流走する溝３・４が検出されており、有機的な関係が示唆される。（江見）

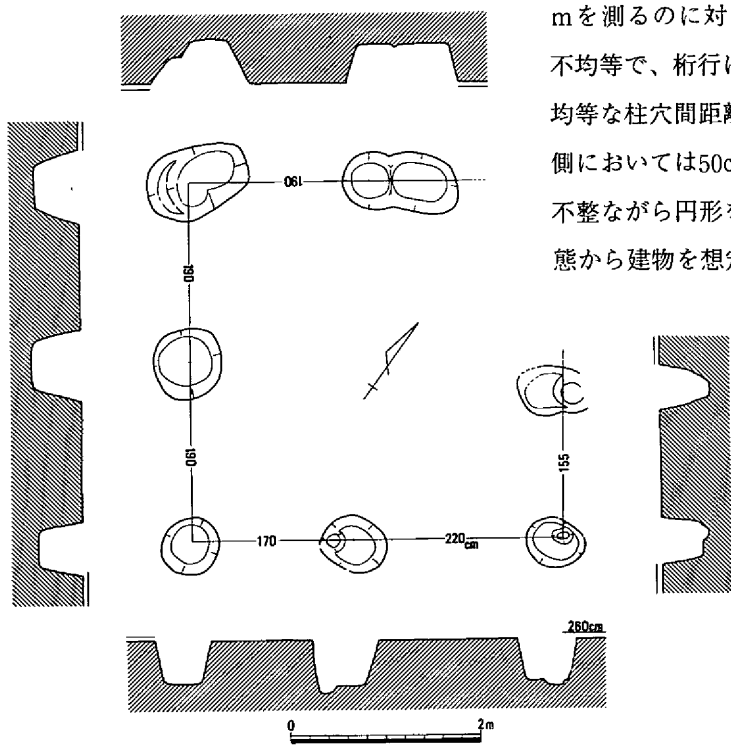
掘立柱建物７（第389・406図）

９Ｂａ区の橋脚北東部において検出された。建物の本体は北東部調査区外に所在し、調査区内では２本の方形を呈する柱穴が、柱痕間の距離2.05mを計測して確認された。時期は、土器が認められなかったことで判然としないが、古代に比定して差し支えないであろう。（島崎）

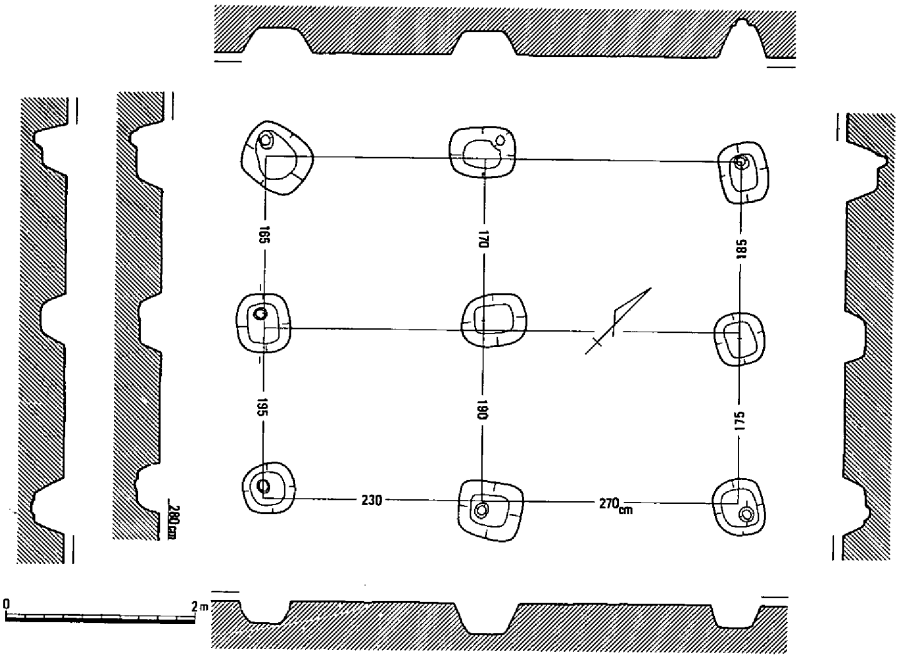
掘立柱建物８（第389・407図、写真図版137）

９Ｂ区に位置する桁行２間？×梁間２間の東西棟建物で、竪穴住居75を切っており、さらに北東柱穴は調査区外に延びる。桁行3.9m、梁間3.8mを測るほぼ方形を呈す建物で、総柱の倉庫も想定したが中央からの柱穴は確認されなかった。柱穴間の距離は梁間西側が半分の1.9mを測るのに対し東側は1.5mとやや不均等で、桁行においても北側はほぼ均等な柱穴間距離が推定されるが、南側においては50cmの差がある。柱穴は不整ながら円形を呈し、埋土および形態から建物を想定したが、桁行は数間広がる可能性もある。なお、遺物は皆無であった。

以上、当建物は遺構の切り合いから７世紀以降に建てられたもので、掘立柱建物６とほぼ同じ棟方向で、示唆的である。（江見）



第407図　掘立柱建物８（1/80）



第408図　掘立柱建物９（1/80）・出土遺物（1/2）

掘立柱建物９（第389・408図、写真図版137）

９Ｂ調査区において溝５・６の埋没後、これを切った状態で検出された建物である。柱穴の掘り方は、いずれも方形を基調としたもので、底部に柱痕跡の遺存が多く認められた。ただし、検出面から底部までの深さは20～40cmと浅く、相当上面が削平を受けたことが窺われる。

規模は、２間×２間の総柱の掘立柱建物で、性格的には倉庫と考える。

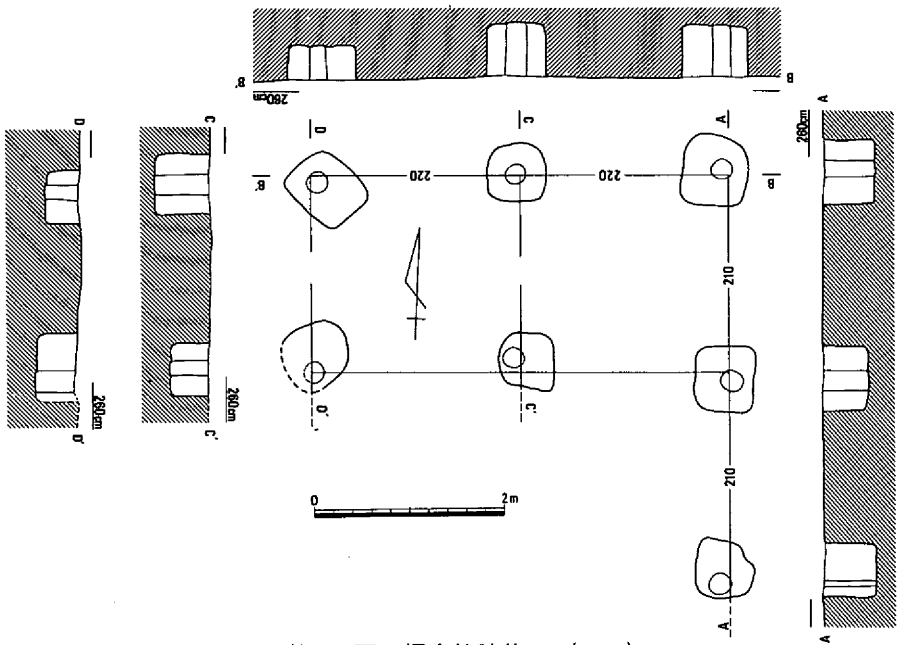
時期は、土器の出土が見られなかったことで明瞭ではないが、柱穴掘り方が方形にあることで、およそ古代の範疇に属するものとして差し支えないと考える。（島崎）

掘立柱建物10（第389・409図）

８Ａ区、９Ａ区の境で検出した２間×２間以上の総柱の掘立柱建物である。棟方向はＮ６°Ｗで、桁行は440cm（柱間距離220cm）、梁間420cm（柱間距離210cm）で、床面積は18.48㎡以上である。柱穴掘り方はほぼ方形で、１辺が55～75cmを測り、直径21～24cmの柱痕跡がすべてに認められた。柱穴の深さは、検出面から35～55cmを測る。

遺物は柱穴内に細片ではあるが、古墳時代後期の須恵器、土師器が出土している。８Ｂ区、９Ｂ区で検出された掘立柱建物４～９などと同規模である。掘立柱建物４とは同一の棟方向であり同時期の遺構とも推察されるが、７世紀前半頃の溝７、溝８Ａ・Ｂの検出時において、大

形の掘り方をもつ柱穴が確認されていなかったことからみて、この時期よりも年代が遡るものと思われ、6世紀後半から7世紀初め頃の掘立柱建物の可能性を持つ遺構と考えたい。（松本）

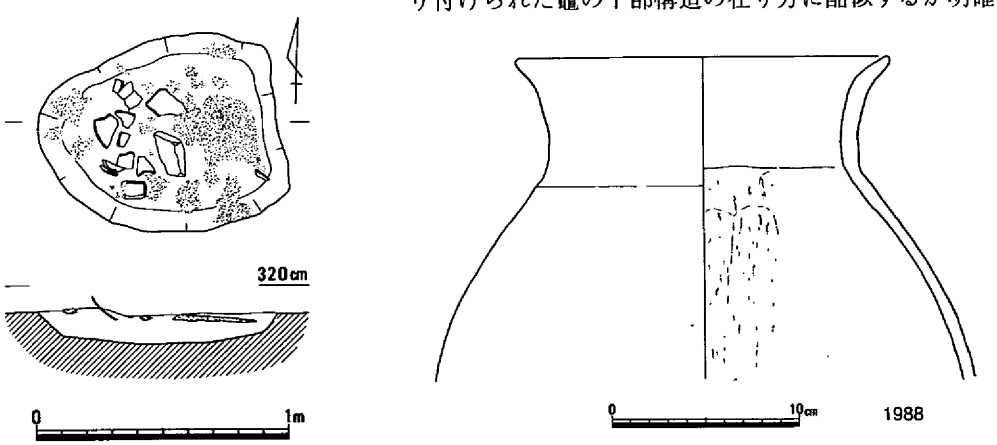


第409図　掘立柱建物10（1/80）

(3) 土壙

土壙108（第389・410図）

3Bb区において検出された土壙であるが、平面検出段階から壙内を中心として焼土塊および炭の広がり、さらには中央部分から角礫・土器片等の存在が確認された。状況から住居に造り付けられた竈の下部構造の在り方に酷似するが明確



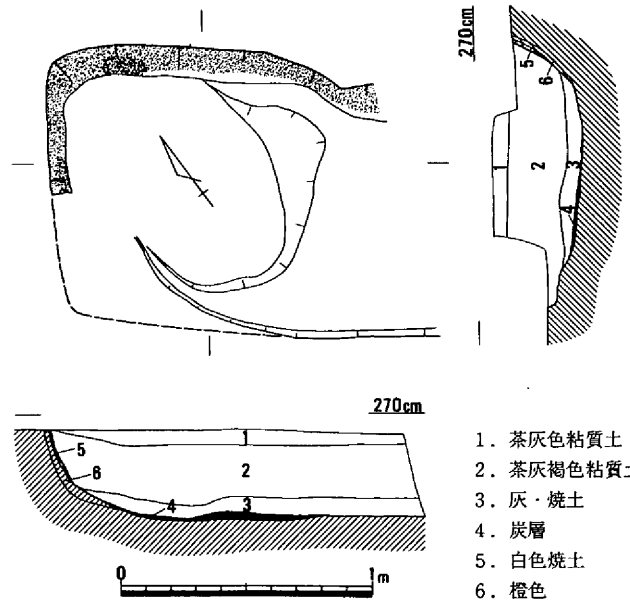
第410図　土壙108（1/30）・出土遺物（1/4）

ではない。

時期は、６世紀後半頃に比定されよう。　（島崎）

土壙109（第389・411図、写真図版138）

８Ｂ区に位置する、本来は長方形を呈すものと推定されるが、竪穴住居72に切られ、同73を切った状態で検出された焼土壙である。残存する北壁は白色化した焼土面が上部に見られ、底部に向かうにしたがい被熱度はやや下がる。底部は掻き出されたためか、やや凹む部分が検出されたが、焼土面は確認できず、炭層が堆積する状況であった。窯状の機能をもつものと考えられるが遺物の出土もなく、今後の事例を待ちたい。　（江見）

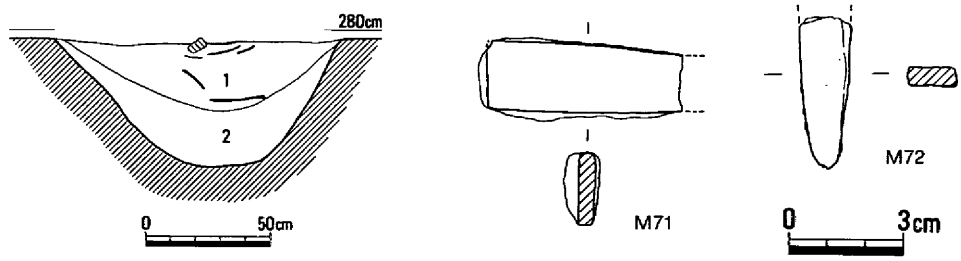


第411図　土壙109（1/30）

(4)　溝

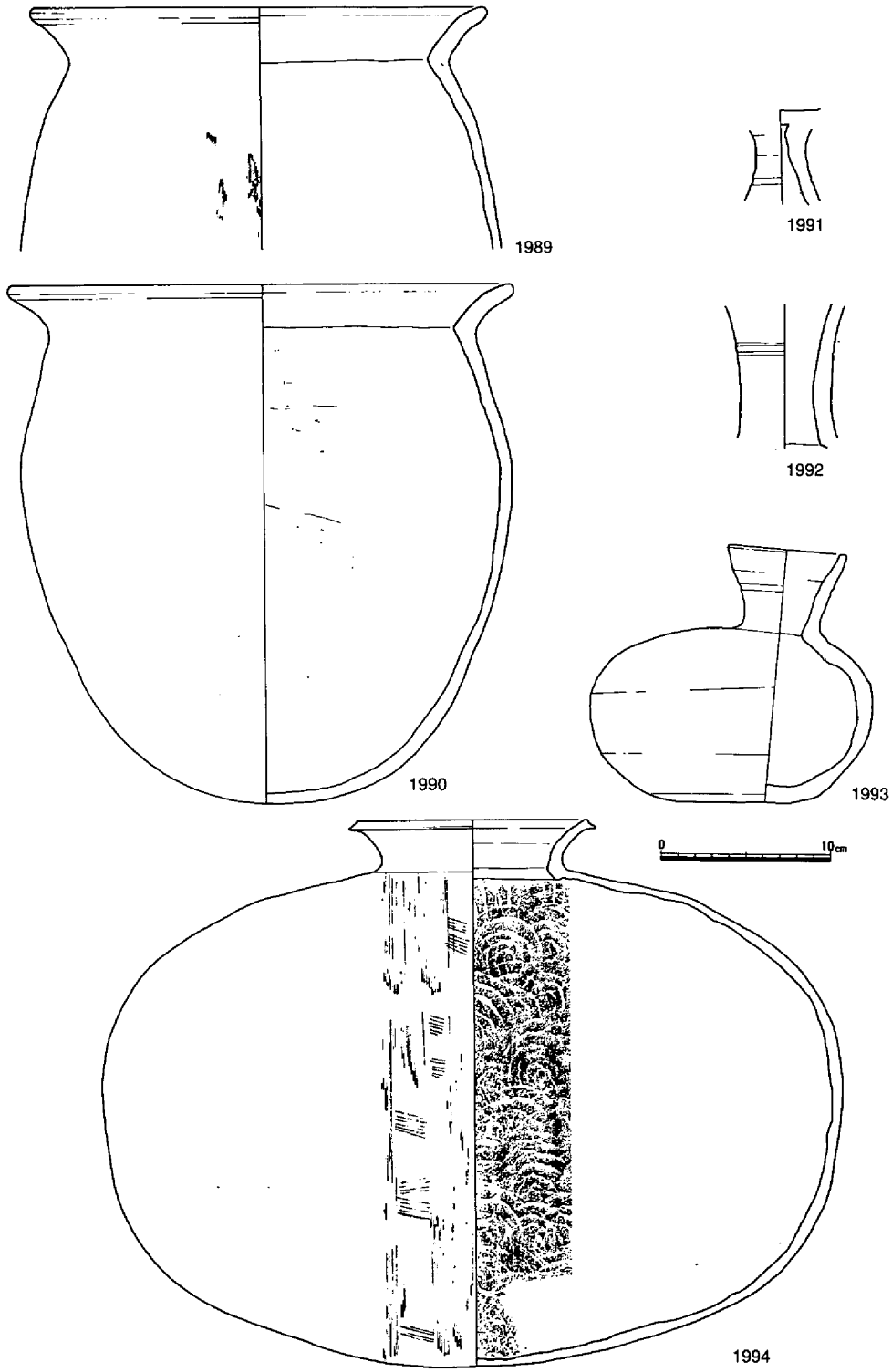
溝２（第389・412・413図、写真図版138）

６Ｂｂ区から７Ｂｃ区にかけて海抜2.75m前後で検出された。規模は、およそ幅1.10m、深さ50cmで断面逆台形を呈するもので、ほとんど同じ規模を維持しながら直線的な流走を見せる。中世段階で溝23によって南端部を切られるが、溝は下層に土器等遺物の包含をほとんどみせない暗灰黄色粘質土が、上層には淡灰色粘質土がレンズ状を呈した状況で堆積しており、この上層ほぼ中央部には土器の集積が帯状に検出面に表出した状態で検出された。



1．淡灰色粘質土　　2．暗灰黄色粘質土

第412図　溝２（1/30）・出土遺物①（1/2）



第413図　溝２出土遺物②（1/4）

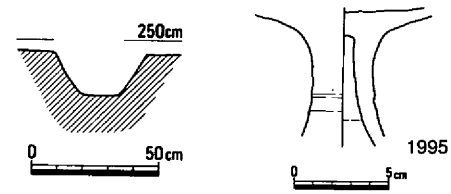
出土遺物としては、下層のほとんど溝底に近い状態で平瓶1993が１点遺存しているのが確認されたのみで、他はいずれも上層に堆積した土器であった。土器は、土師器の甕1989・1990の他はいずれも須恵器で、高杯、長頸壺、平瓶、横等の器種が見られた。なお、土器以外には20×18×15cmの大きさで重量3.9kgを計り椀形を呈する鉄滓の共伴がみられ注目された。

溝の性格としては、出土した土器が６世紀末から７世紀代に比定されることで、またこの溝を西限として以東の南東方向に多く所在をみせる掘立柱建物群、あるいはそれに付随すると考えられる溝等との位置関係からも、同様に掘立柱建物群との関係のなかで理解されよう。

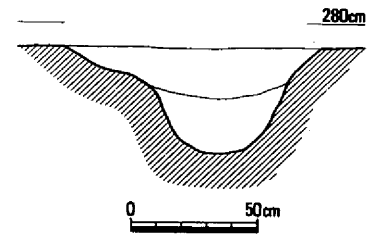
溝３（第389・414図）

８Ｂ区西隅に調査区境にほぼ平行した状態でその存在が確認されたが、北東部と南西部がそれぞれ中世の土壙119と溝29・30によって切られ、わずかに長さ２ｍ程度が検出されたにすぎない。また溝３は溝４とともに同時に存在が確認され、両者には規模の差こそあれ平行した状態で北東から南西方向への流走が認められた。

時期は、出土した須恵器の高杯が短脚化傾向を示すことでおよそ６世紀末から７世紀までの範疇で理解されよう。

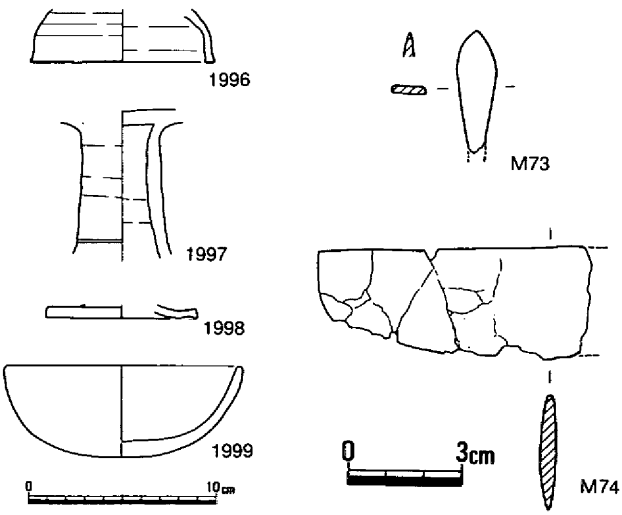


第414図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）



溝４（第389・415図）

溝３から約２ｍ東南方向で溝３と平行した状態で検出された溝である。溝は、幅１ｍ、深さ50cmで、断面形態は中心部が深い「Ｕ」字状を上半部が浅い皿状を呈するものである。溝内からはほとんど遺物の出土が見られなかったが、わずかに須恵器、土師器、鉄器等が検出された時期的には古代の範疇で理解されるものである。おそらく溝３とセット関係をなして前述の溝２



第415図　溝４（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

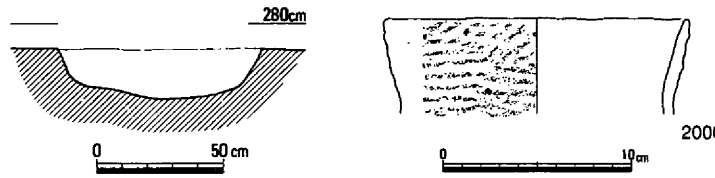
と同様南東に集中して所在する掘立柱建物群との関係が示唆される。

溝5（第389・416図）

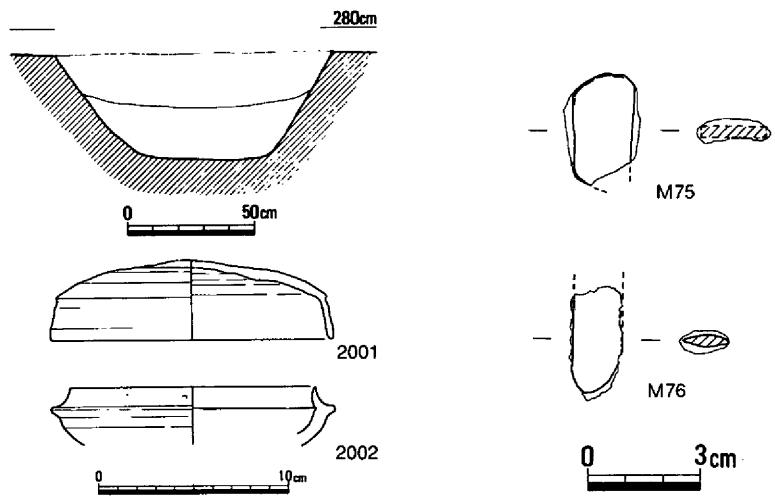
掘立柱建物9に切られ、後述の溝6と平行した状態で同時に検出された。溝3・4とは約30mの直線距離を間にもつもので同じく溝6とのセット関係をもって所在していた。溝5は、溝6に比較して小規模であった。埋積土中からは製塩土器が1点出土したにすぎない。

溝6（第389・417図）

溝5の東南約1.20m離れ、溝5に平行した流路を見せるが北東側で竪穴住居76によって切られていた。出土遺物は須恵器2点と鉄器が2点図化されたにすぎない。時期的には、出土遺物から6世紀末頃と判断される。また性格的にも掘柱建物群相互の切り合い関係もしくは掘立柱建物群の主軸に複数の方向性が看取されること等で特定はできないが、いずれにせよ7B区以東に所在をみせる多くの掘立柱建物群との有機的な関係が示唆される。（島崎）



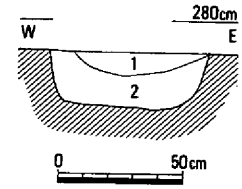
第416図　溝5（1/30）・出土遺物（1/4）



第417図　溝6（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

溝７（第389・418・419図）

８Ａ、９Ａ区で検出された、南北に走行する溝である。溝の幅は約70cm、深さ約21cmを測り、断面はＵ字形である。底面高からみて、北から南に流下する溝である。遺物は溝内から、弥生～６世紀末の土器、鉱滓が出土している。７世紀前半代に使用されていたものと思われる。



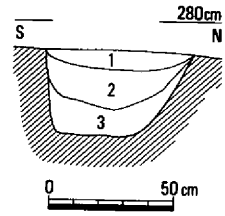
1．暗灰青色土
2．暗灰青色土（含、炭）

第418図　溝７（1/30）

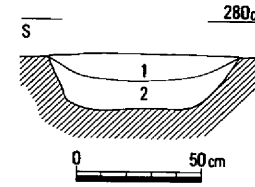
溝８Ａ・Ｂ（第389・419図）

９Ａ区に位置する。溝８Ａは溝７から分流する溝で、西から東に流下する。溝８Ｂは８Ａの北に位置し、ほぼ東西に走行するが、西端は溝42に切られている。溝８Ａに接続するものと思われる。

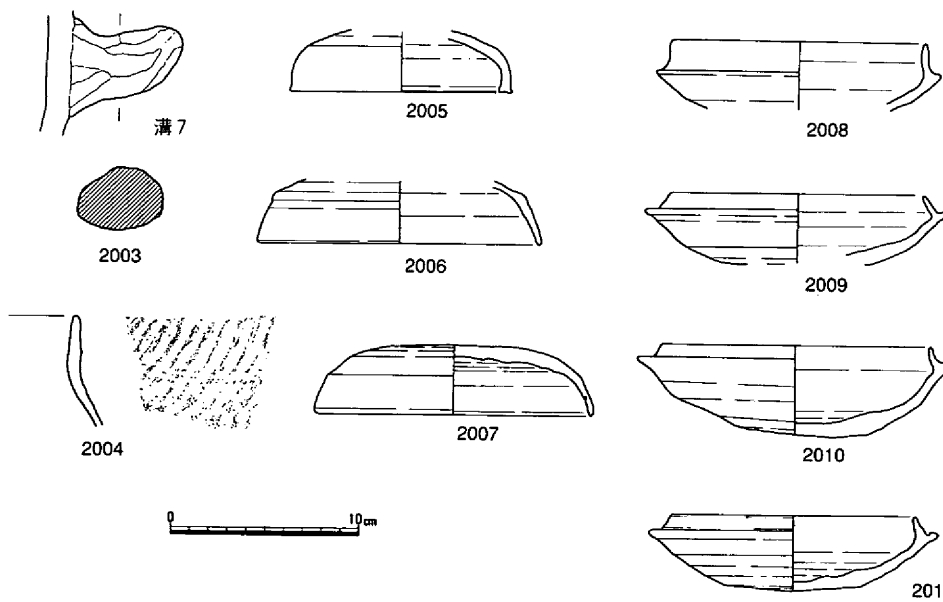
遺物は溝８Ａ・Ｂともに出土しているが、図示可能なのは溝８Ａの遺物であった。溝内の遺物からみると、６世紀末葉の遺物が下限となるが、調査区の東壁断面観察によれば、溝８Ａの掘り方は中世遺構面より下位の土層からの掘り込みを確認していることなどから、溝８Ａ・Ｂは７世紀前半に機能していたものと思われる。（松本）



1．暗茶褐色土
2．暗灰茶色土
3．暗灰褐色土



1．暗黄茶褐色土
2．暗黄青色土



第419図　溝８Ａ（左）・８Ｂ（右）（1/30）・出土遺物（1/4）

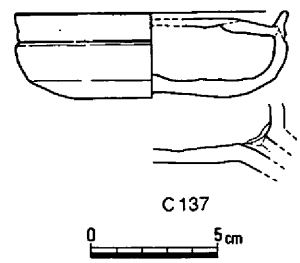
(5) 包含層出土遺物（第420～422図）

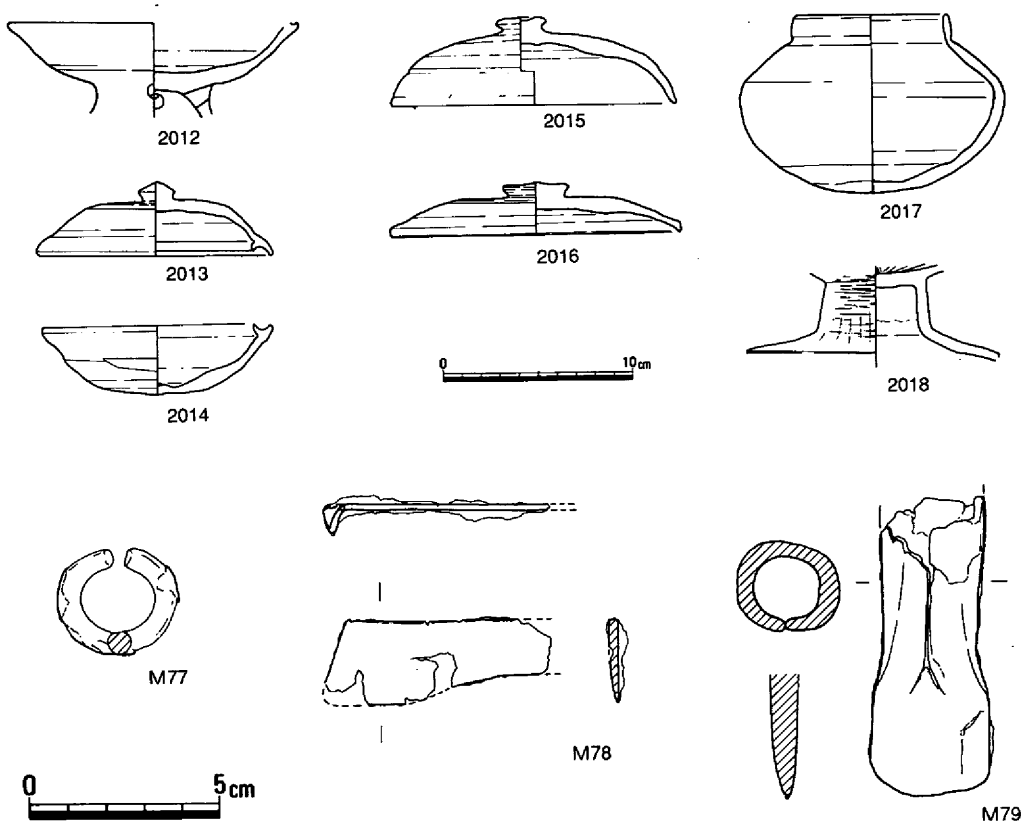
古墳時代後半から古代にかけての遺物として特に注目される資料には次のものが抽出される。

高杯2012は、胎土に特徴があり竪穴住居70出土の1959と酷似する。器形も個性的で在地産の可能性が高い。C137は、時期的には不明瞭であるが把手付円面硯として一連の掘立柱建物群との関係が示唆される。これに時期的な整合で取り上げられるのが杯蓋2013・2014である。

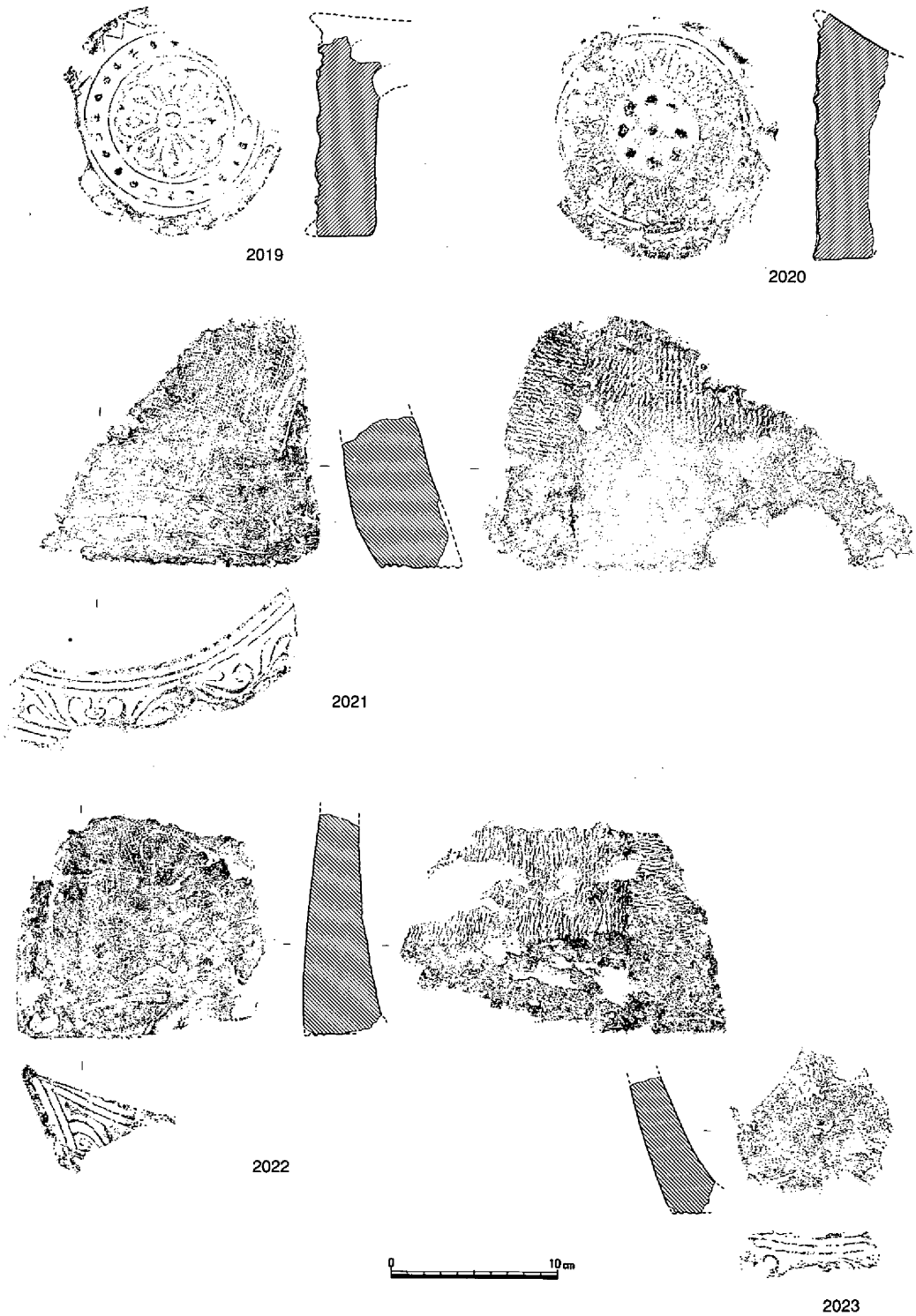
瓦は、包含層および中世の溝から出土したものが多く、性格については明確でないが本遺跡に近接する矢部廃寺との関係が窺われる。複弁蓮花文軒丸瓦2019は、二子御堂奥窯と矢部廃寺において、同じく2020も矢部廃寺からの出土品に類例が見られる。また軒平瓦2021～2027も軒丸瓦と同じ在り方を見せる。この瓦に伴うと考えられる須恵器が2016であるが、本遺跡においてこの時期の資料は他に見られない。

耳環M77と鉄鎌M78、袋状鉄斧M79は、竪穴住居76等に窺われる鍛冶に関係した性格が想起される。（島崎）

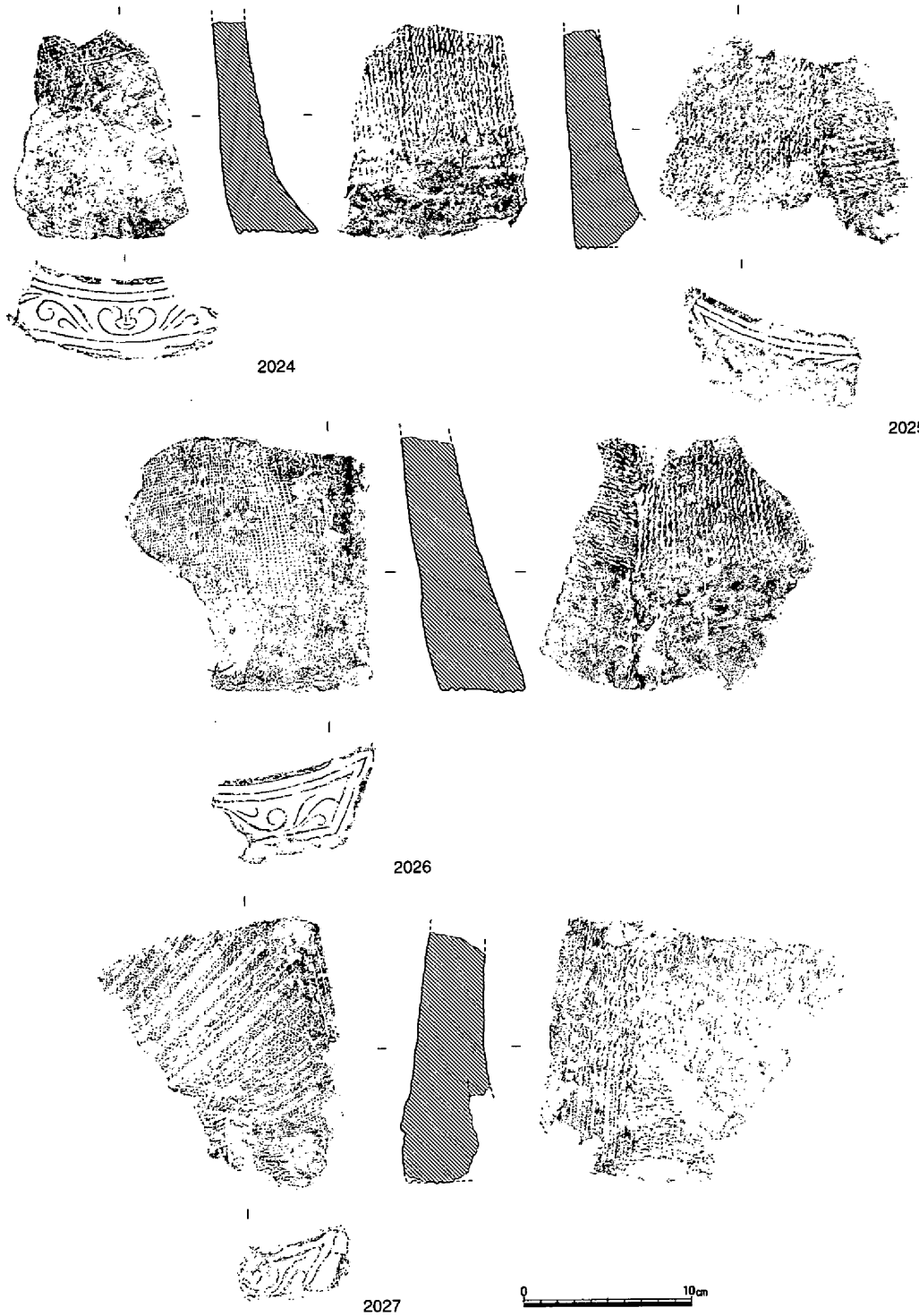




第420図　包含層出土遺物①（1/3・1/4・1/2）

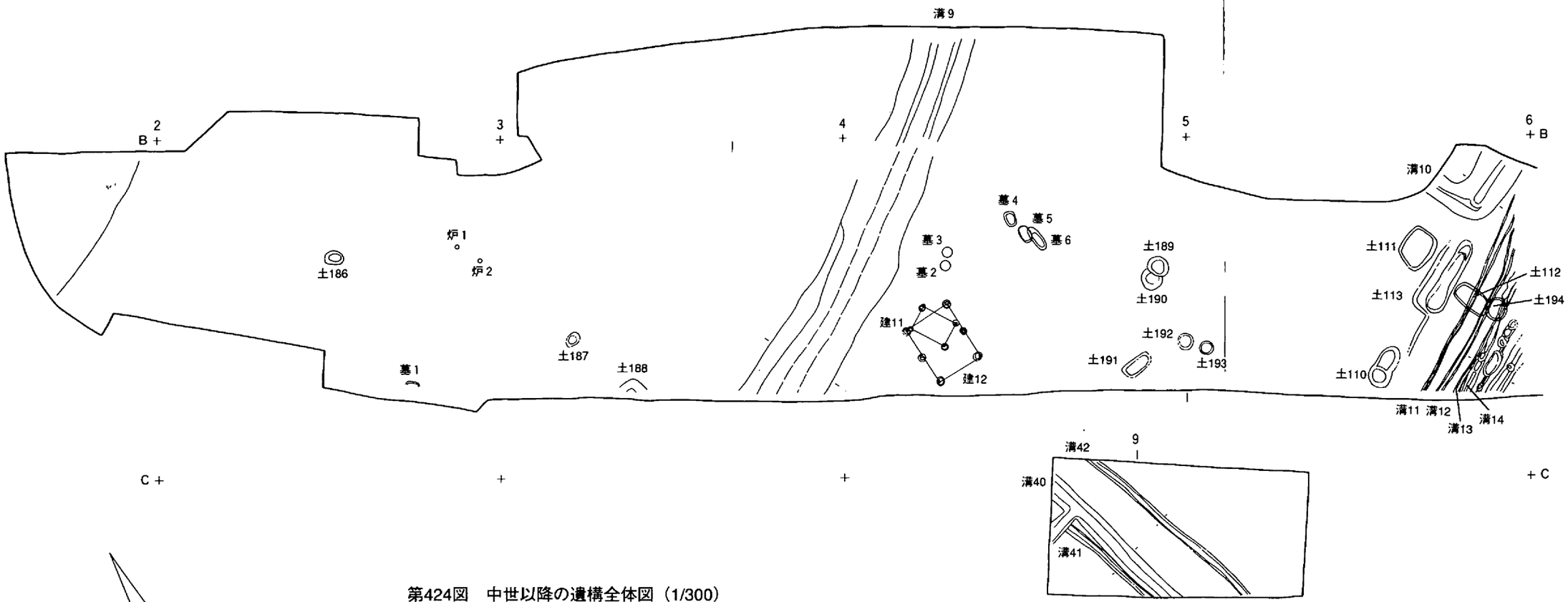


第421図　包含層出土遺物②（1/4）

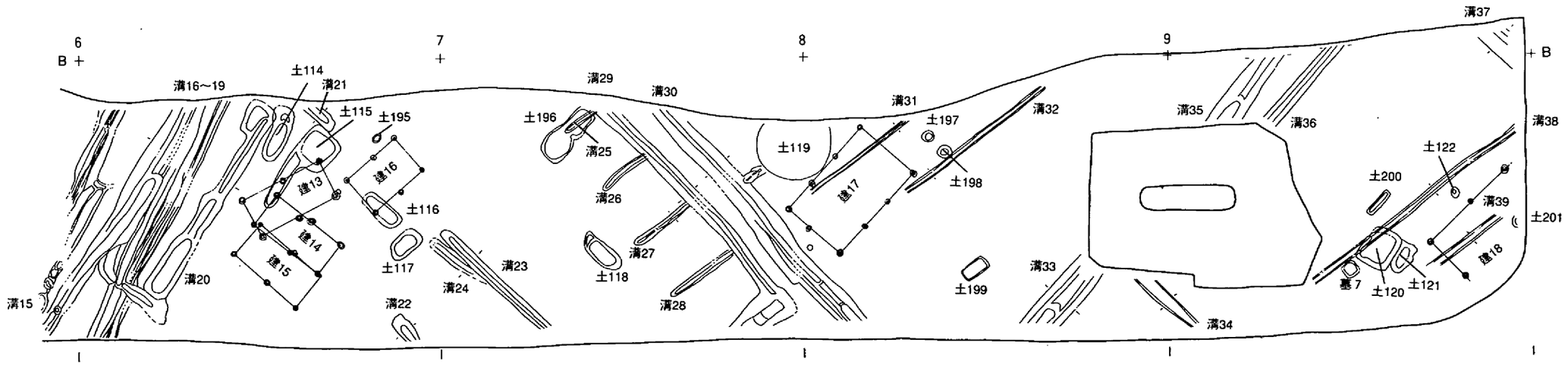


第422図　包含層出土遺物③（1/4）

第423図　中世以降の柱穴群（1/300）



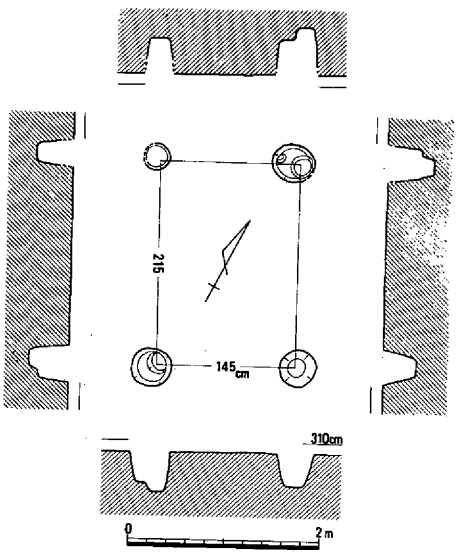
第424図　中世以降の遺構全体図（1/300）



第６節　中世以降の遺構・遺物

(1)　掘立柱建物

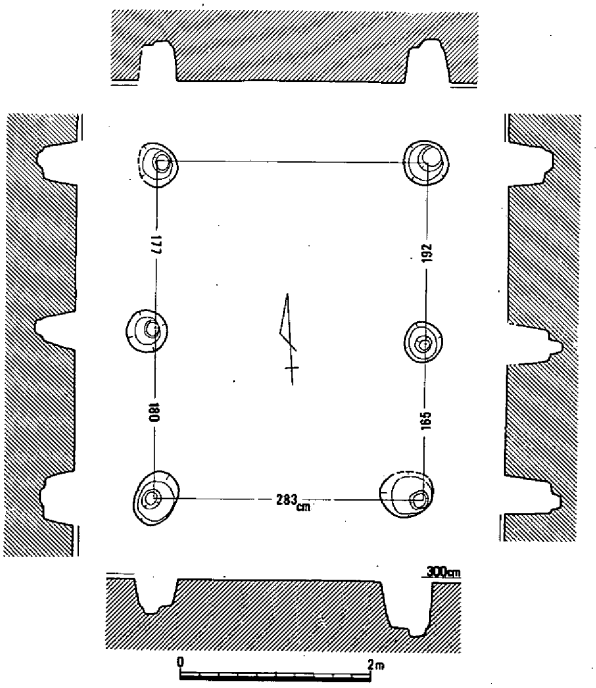
当遺跡からは今回の調査において2000個以上の柱穴を検出した。平面形態はいずれも円形で、径10cm前後から60cm余りのものまでがあり、特に30cm前後の比較的小規模な柱穴が多くみられた。また、柱穴は調査区のいたるところに所在したが、最も密集した５Ｂ区では、１㎡あたり10個近く検出される箇所もあった。こうした状況の中で建物復元の作業は困難を極め、調査時点において十分に検討する余地はなく、調査後の再検討の結果、方位の異なるいくつの建物を抽出し得た。当然の事ながらこの何倍もの建物が所在したことは自明であるが、これによって中世建物の在り方の一端を垣間みることが出来るのではないだろうか。



第425図　掘立柱建物11（1/80）

掘立柱建物11（第424・425図）

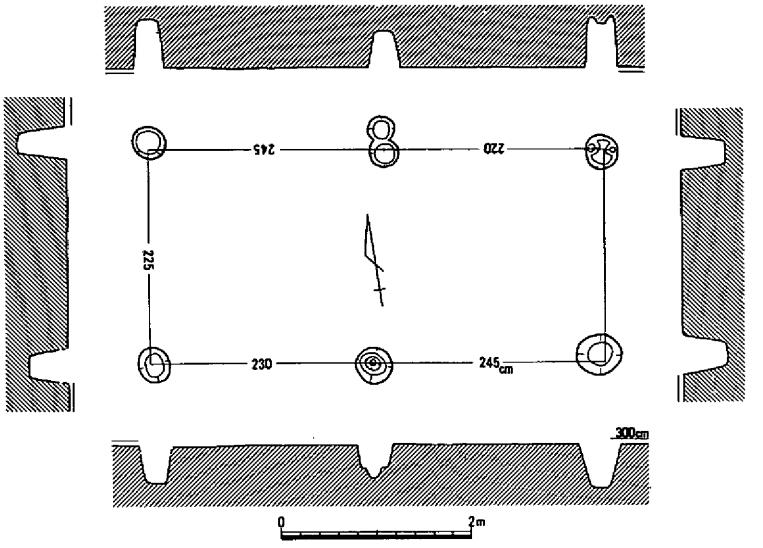
４Ｂｃ区に位置する１間×１間の南北棟建物で、長軸は西に振る。桁行2.15m、梁間1.45m、床面積約3.1㎡を測る小規模な建物である。北西の柱穴は後記する掘立柱建物12に一部切られている。柱穴からは吉備系土師質土器椀片が出土している。



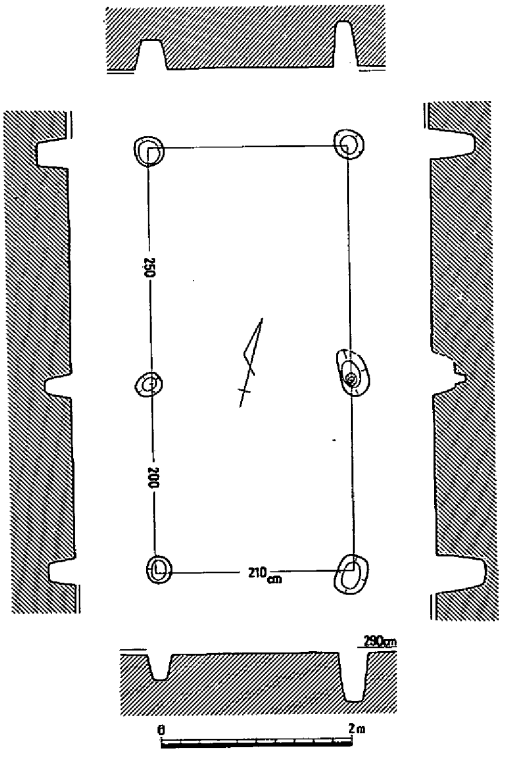
第426図　掘立柱建物12（1/80）

掘立柱建物12（第424・426図）

掘立柱建物11と重複する位置にある桁行２間×梁間１間の南東棟建物で、長軸は真北に近い方向を



第427図　掘立柱建物13（1/80）



第428図　掘立柱建物14（1/80）

示す。桁行3.57m、梁間2.83m、床面積約10㎡を測る。柱穴径は40cm前後を測り、出土した遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前半の土器片に限られたが、切り合い関係から上記建物より新しい。

掘立柱建物13（第424・427図）

6Ｂ区に位置し、土壙115を切って検出された桁行２間×梁間１間の東西棟建物である。短軸はほぼ真北に向く。桁行4.75×梁間2.25m、床面積約10.7㎡を測る。柱穴径約35cm前後と前記建物より僅かに小さい。

遺物は柱穴から備前焼擂鉢片、瓦質鍋片が出土している。

掘立柱建物14（第424・428図）

掘立柱建物13に交差する位置にあり、土壙115を一部切って検出された桁行２間×梁間１間の南北棟建物である。長軸

はやや西に振る。桁行4.5m、梁間2.1m、床面積9.45m²を測る。柱穴径は上記同様、総じて小規模であった。

遺物は柱穴から土師質椀片が出土している。

掘立柱建物15（第424・429図）

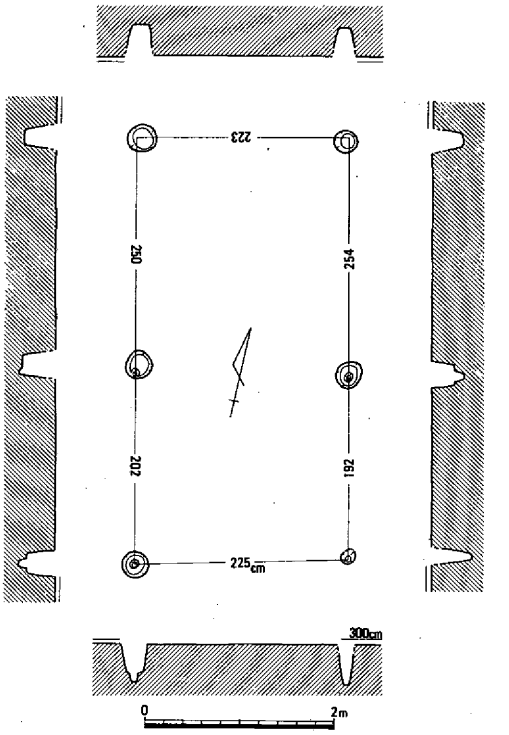
掘立柱建物14に南に接して検出された桁行２間×梁間１間の南北棟建物である。長軸は上記とほぼ同様であるが、それより僅かに東に振る。桁行約4.5m、梁間約2.25m、床面積約10m²を測る。柱穴径は上記と同様35cm前後を測る。

遺物は柱穴から瓦質鍋片が出土している。

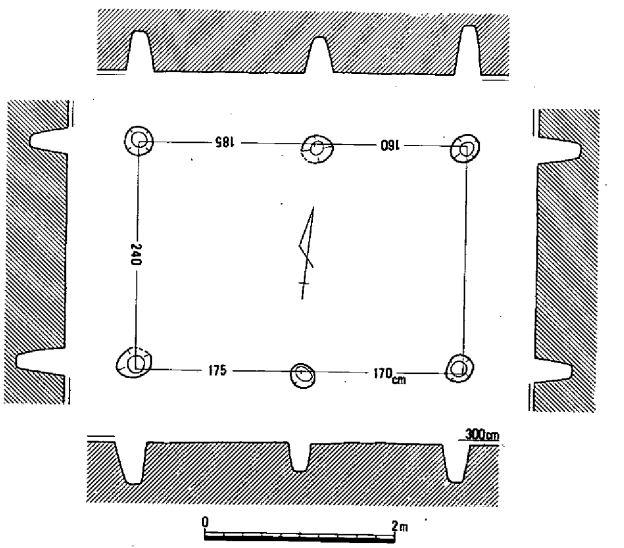
掘立柱建物16（第424・430図）

掘立柱建物13・14の東に位置する桁行２間×梁間１間の東西棟建物で、土壙116を切った状態で検出された。短軸は磁北よりやや西に振り、掘立柱建物15の東７mに直角に振った位置にある。桁行3.45m、梁間2.4m、床面積8.28m²を測る小規模な建物で、柱穴径も30cm前後と小さい。なお、桁行南側の中央柱穴がほぼ均等に配されているのに対し、北側のそれはやや東に寄った位置にある。

遺物は柱穴から平瓦および瓦質鍋片が出土している。



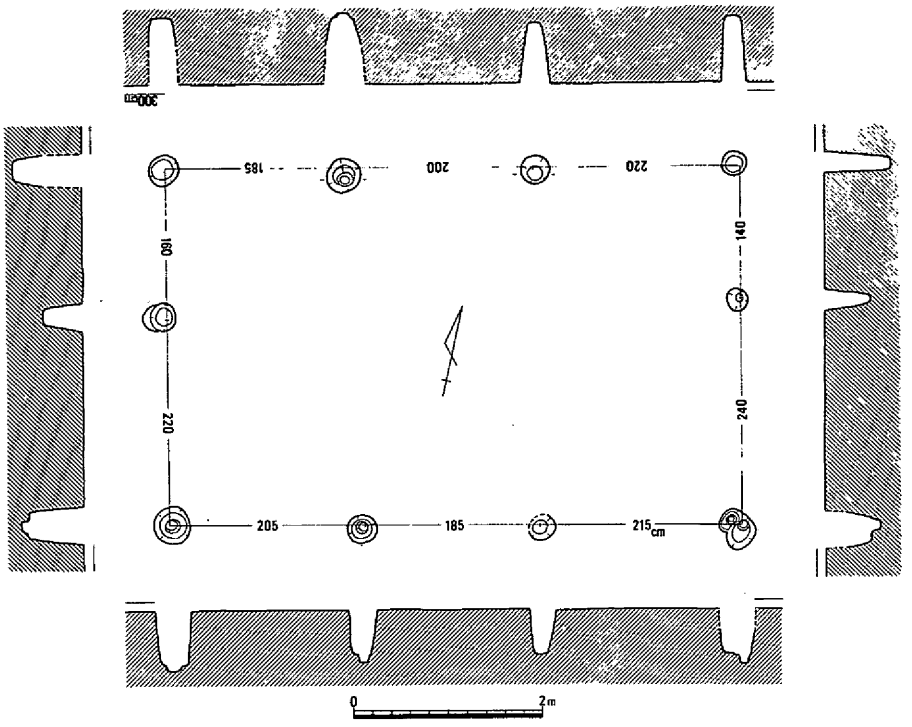
第429図　掘立柱建物15（1/80）



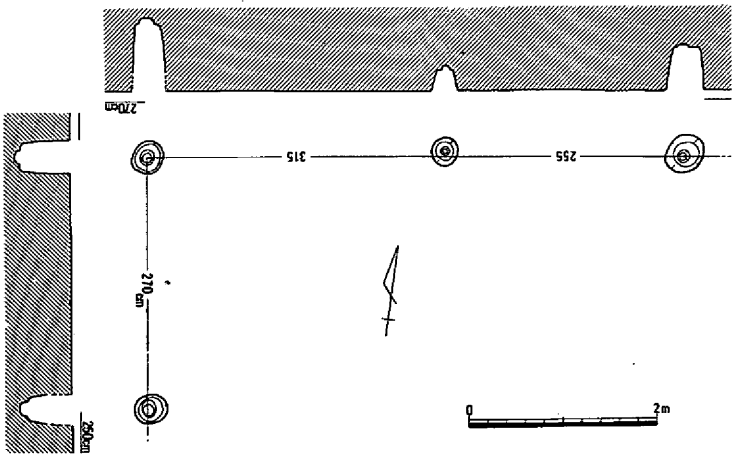
第430図　掘立柱建物16（1/80）

掘立柱建物17（第424・431図）

８Ｂ区、溝30の東側に位置する桁行３間×梁間２間の東西棟建物で、検出し得た当時期の建物としては最も規模が大きい。短軸は掘立柱建物16と同様にやや西に振る。桁行6.05m、梁間



第431図　掘立柱建物17（1/80）



第432図　掘立柱建物18（1/80）

3.8m、床面積約23㎡を測る。桁行の柱穴間距離は1.85～2.2mと様々で、梁間のそれは西側1.6m・2.2m、東側1.4m・2.4mとやや北寄りにずれている。柱穴径は30cm前後と小さい。

遺物は柱穴から土師器の皿片が出土しているが、埋土の状況から中世の範疇に入る建物と判断される。

掘立柱建物18（第424・432図）

９Ｂｄ区、調査区の最南端に位置し、建物の南東部は調査区外に延びる桁行２間以上、梁間１間以上の東西棟建物である。桁行5.7m以上、梁間2.7m以上を測る。柱穴は35cm前後を測り、中から吉備系土師質椀片が出土している。（江見）

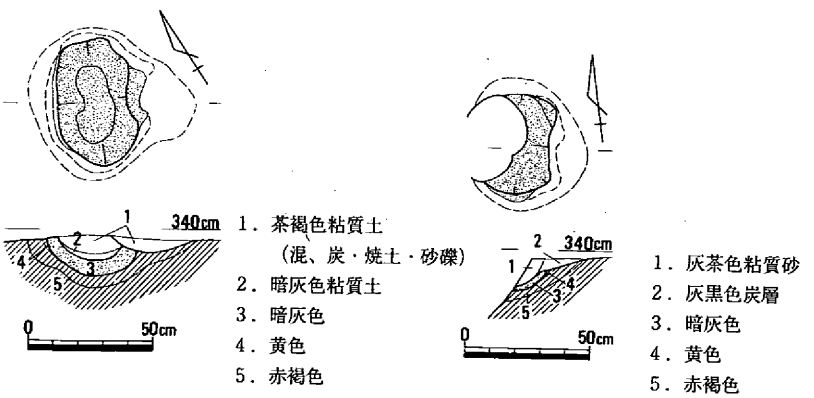
(2)　炉

炉１（第424・433図）

２Ｂｂ区の南方に位置し、周辺の中世柱穴群ともに検出された。上部はすでに削平を受け、炉の東部においても小土壙によって切られていた。平面不整楕円形を呈し、中央部50×20cm、深さ約10cmの範囲が凹む。凹みには上層に炭、焼土、砂礫などが混入していたが、薄い下層は何も含まない粘質土であった。炉の上面は高熱を受けたためその発色は暗灰色～灰色を呈し、厚みも６cm近く計測された。また、熱の影響を受けた第５層は断面から明らかなように東に延びており、本来当炉床は東部に僅かに高くなり、突出するように広がっていたものと推定される。遺物は皆無であったが検出状況から判断し、当時期に記載した。

炉２（第424・433図）

炉１の南約1.5mに位置し、炉の西約半部を中世の柱穴によって切られている。炉床は検出径約30cmの平面円形を呈し、中央に向かい下がっている。炉の上面は炉１と同様に暗灰色を呈していたが、その厚みは約３cmで薄い。炉内には２層の堆積土を確認したが、土器・鉄滓など出土しなかった。検出状況から判断し、当時期に記載した。（江見）



第433図　炉１（左）・炉２（右）（1/30）

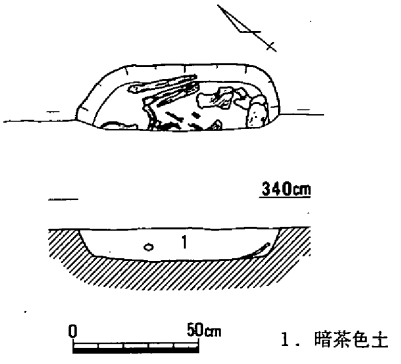
(3) 土壙墓

土壙墓１（第424・434図）

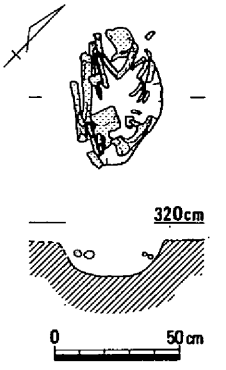
２Ｂｄ区において側溝によりその約１／２が切られて検出された。遺存する規模は長軸長80㎝、深さは検出面から約13㎝を測り、おそらくこれを若干上回る規模の土壙墓と考える。壙底付近には、頭を北にした状態の人骨が確認されたが、骨の保存状況は性別などを判断させる状態になかった。土器の検出が見られなかったことで、時期は判然としないがおおむね中世に比定して差支えないものと考える。

土壙墓２（第424・435図）

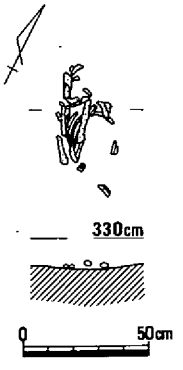
４Ｂａ区の海抜3.10ｍで検出されたが、土壙のほとんどは既に後世の地下げによる削平で消滅しており、わずかに人骨と壙底の一部が確認されたにすぎない。頭骨の位置は北西に位置す



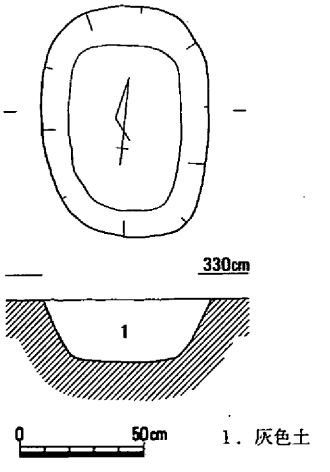
第434図　土壙墓１（1/30）



第435図　土壙墓２（1/30）



第436図　土壙墓３（1/30）



第437図　土壙墓４（1/30）

る。ただし遺存状況は良好ではなく性別等の推測は不可能であった。時期は、判然としないが埋積土等からおそらく中世と考えて差支えないであろう。

土壙墓３（第424・436図）

土壙墓２の北に隣接して検出された墓である。遺存状況が悪くわずかに人骨の遺存が確認されたにすぎない。

土壙墓４（第424・437図）

土壙墓３の東約４ｍの地点で検出された。長軸長90cm、幅67cm、検出面からの深さ約24cmを測るものであるが壙内埋積土中からは人骨の検出はなされなかった。しかし周辺に所在する土壙墓および壙内埋積土の状況により土壙墓と判断した。

土壙墓５（第424・438図、写真図版139）

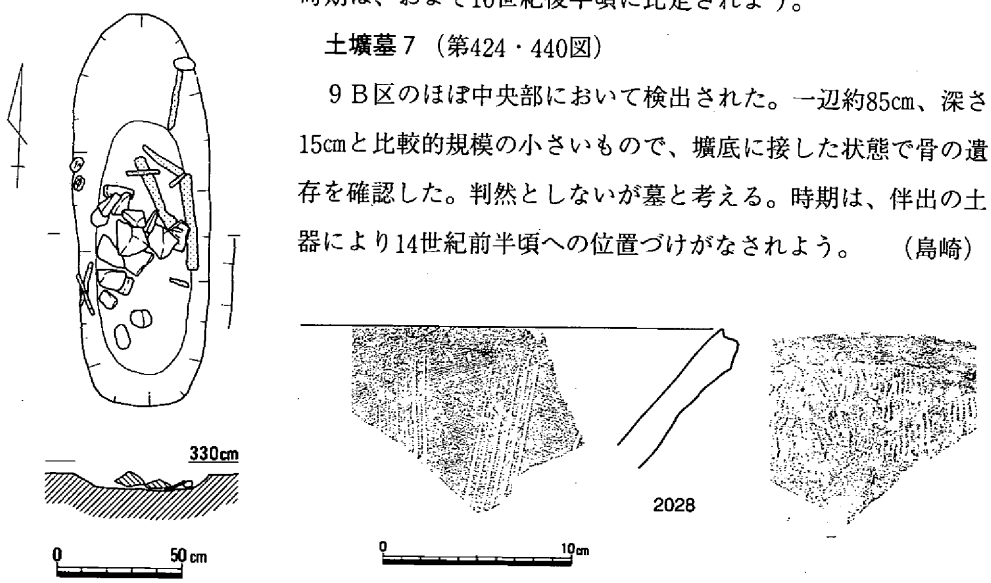
土壙墓４の南約１ｍに近接して所在が確認された。長軸長1.54ｍ、幅54cm、深さ５cmとわずかに壙底付近の遺存状況として検出された。壙内からは、角礫に混じった状態で人骨の遺存が確認されたが本来の姿を窺わせるものではなかった。時期的には、壙内から亀山焼きのすり鉢が１点出土しており、これによると中世末段階への位置づけがなされよう。

土壙墓６（第424・439図、写真図版139）

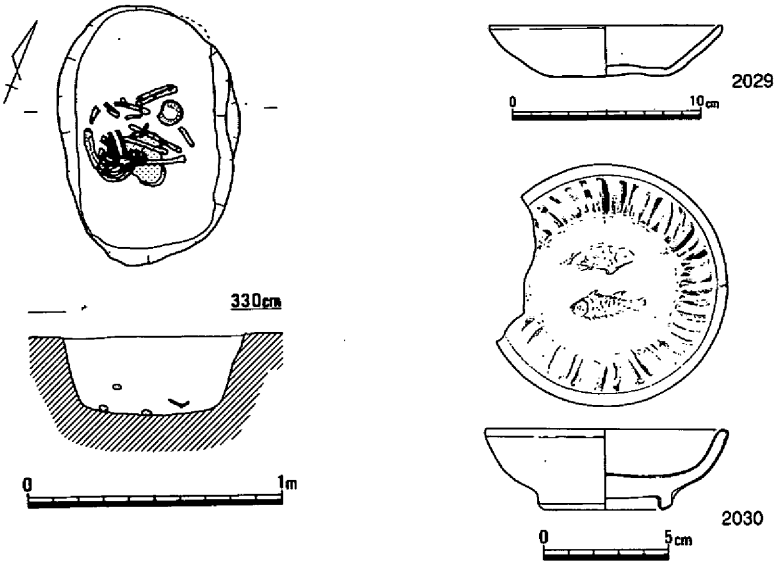
土壙墓５に南東部の一部が切れた状態で検出された。長軸長1.04ｍ、幅70cm、深さ40cmの規模で平面楕円形を呈する。壙底付近で足を折り曲げ屈葬を窺わせる状態での骨の在り方が認められた。遺物は、土師器の皿2029と青磁椀2030が副葬された状態で検出された。これにより時期は、およそ16世紀後半頃に比定されよう。

土壙墓７（第424・440図）

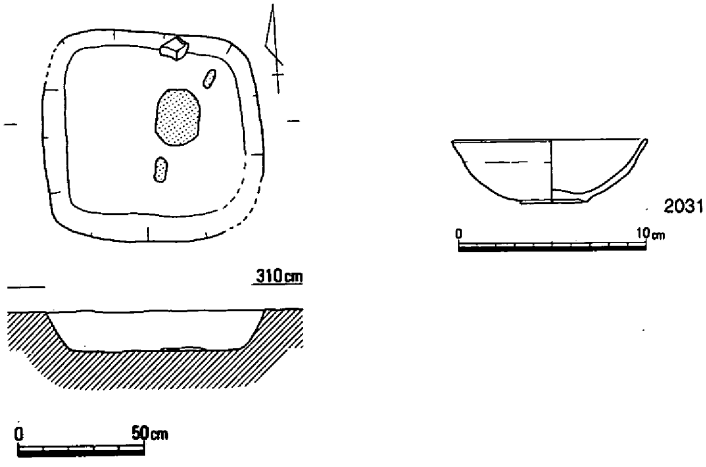
９Ｂ区のほぼ中央部において検出された。一辺約85cm、深さ15cmと比較的規模の小さいもので、壙底に接した状態で骨の遺存を確認した。判然としないが墓と考える。時期は、伴出の土器により14世紀前半頃への位置づけがなされよう。　（島崎）



第438図　土壙墓５（1/30）・出土遺物（1/4）



第439図　土壙墓６（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

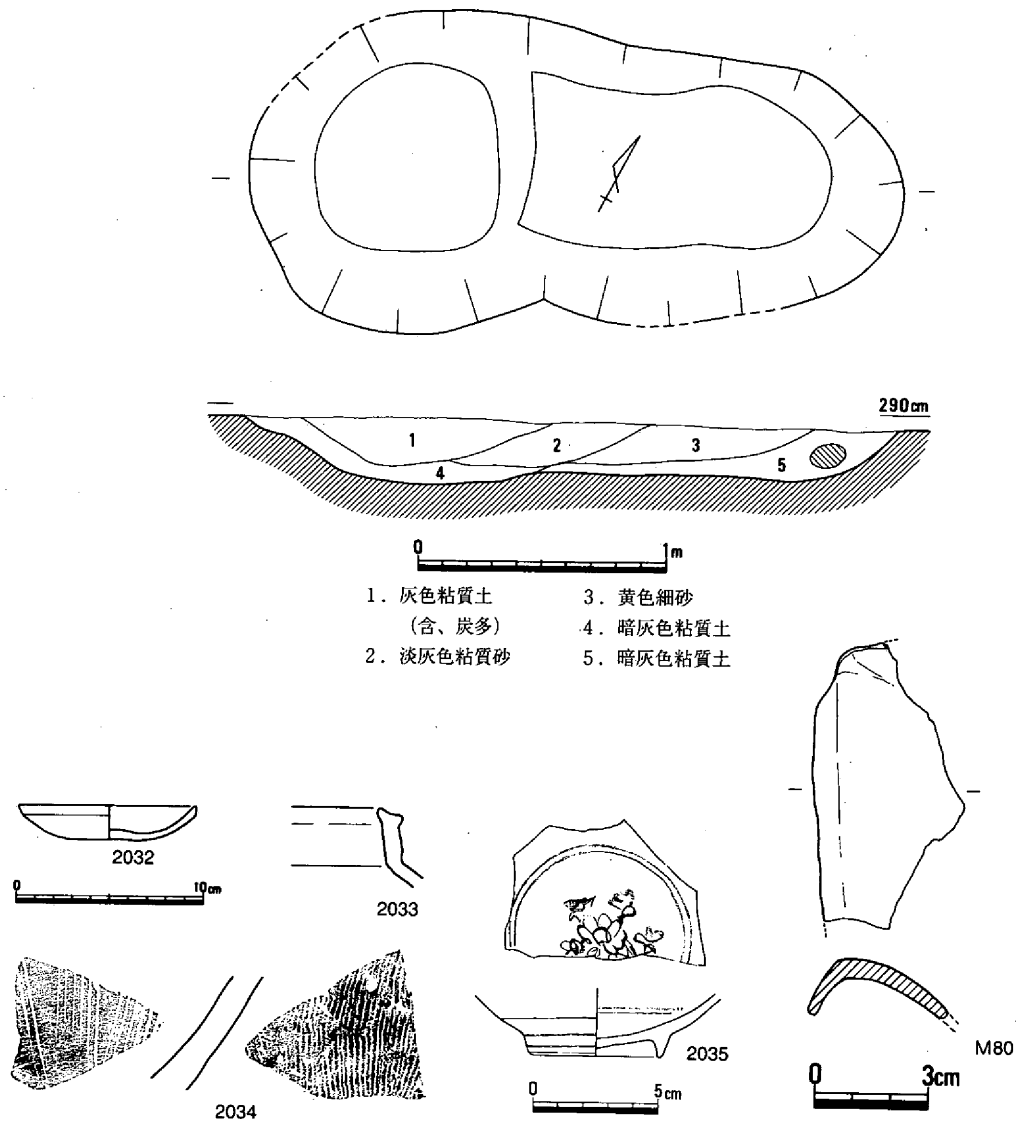


第440図　土壙墓７（1/30）・出土遺物（1/4）

(4)　土壙

土壙110（第424・441図）

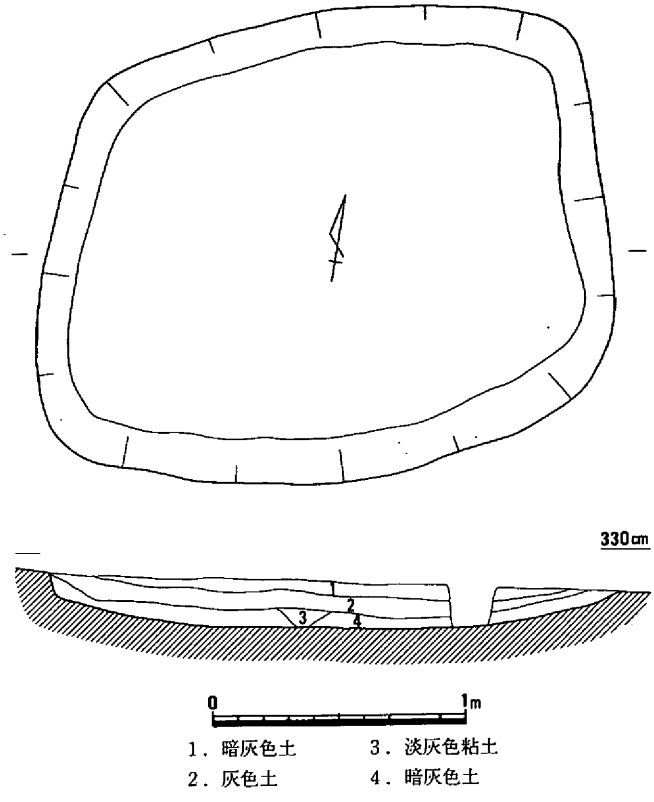
５Ｂｄ区に位置する平面が不整楕円形を呈す土壙である。長軸は東西方向に向き、長さ約2.6m、幅約1.15m、深さ19～25cmを測り、西側が一段深くなっている。埋土は東から西へ順次埋まっていった状況が確認されたが、第２・３層は洪水砂の可能性も考えられる。



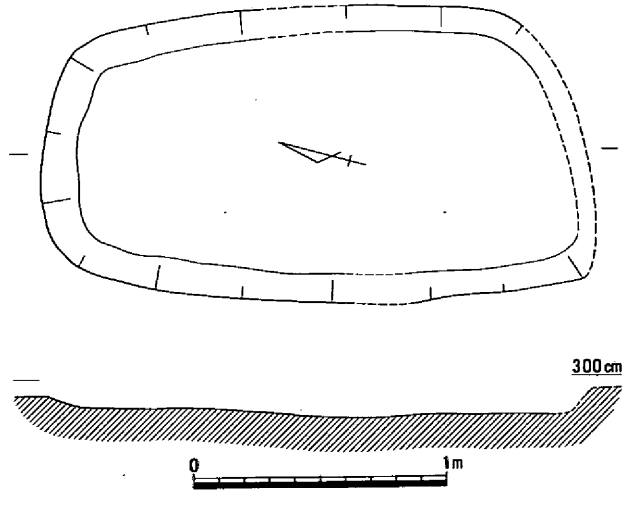
第441図　土壙110（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）

遺物は土師質小皿をはじめ、瓦質鍋、亀山焼擂鉢、染付碗、不明鉄製品などが出土した。2032は淡橙色を呈すほぼ完形の小皿で上げ底気味の底部をもつ。口径9.4cm、器高1.8cmを測る。2034は灰白～淡橙色を呈す亀山焼である。2035は素地が灰白色、釉は明緑灰色を呈す見込みに花卉文が配された、中国製のものである。M80は縁辺部が折り曲げた状態のもので、鋳物の可能性がある。

以上、当土壙は遺物の特徴から16世紀後半には埋没したものと考えられる。　（江見）



第442図　土壙111（1/30）



第443図　土壙112（1/30）

土壙111（第424・442図）

５Ｂｂ区において中世の遺構検出途中の海抜3.25m付近で検出された。

地形的には東側に多く集中する溝群にむけて平坦部から徐徐に下る地点変換部に所在した。

土壙は、下がりに平行する東西方向に長軸長をもった不整長方形を呈するもので、規模は2.30m、幅1.90m、検出面からの深さ18cmを測った。

壙内からは、土器等の遺物の検出がなされなかったことで時期についての詳細は不明である。しかし、検出状況・周辺に所在する他の遺構等から中世に比定して差支えないものと考える。

土壙112（第424・443図）

５Ｂｂ・ｄ区で土壙111の東約３ｍに位置する。

５Ｂ区から６Ｂ区付近に集中する溝群にかけて地形的に下がりを見せるが、土壙112はそのなかで比較的低位部に検出された。また、この土壙はおよそ東西方向を主軸とする溝群に対して直交した平面形態を見せるもので、先述の土壙111とも直交する。なお、

土壙は、溝11・12によって埋没後切られていた。

平面形態は、長軸長2.20m、幅1.20mと不整形な長楕円形を呈し、検出面からの深さ最深部で約10cmと浅かった。

時期は、遺物の検出が見られなかったことで判然としないが、おおむね中世の範疇で理解して差支えないものと考える。

土壙113（第424・444・445図、写真図版140）

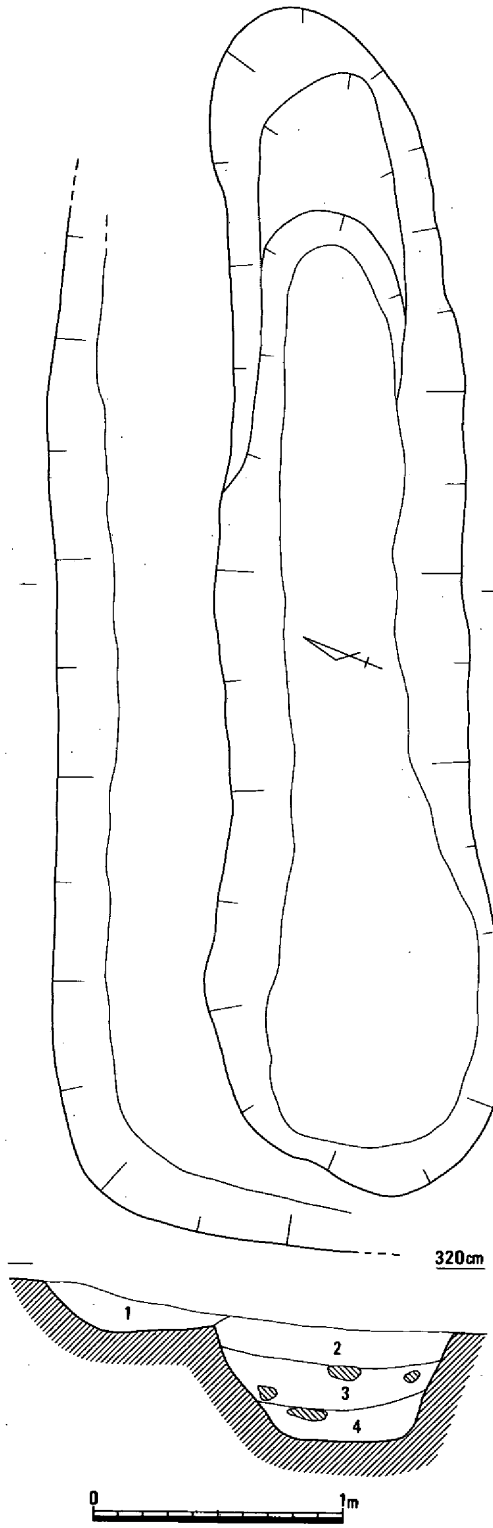
５Ｂｂ・ｄ区において土壙111と土壙112の中間に挟まれた状況で検出された。

地形的に高位部から溝群の集中する低位部にむけての緩傾斜面に所在することで、土壙の主軸はこれに平行する。

規模は長軸長4.70m、幅１m前後を測り、平面長楕円形を呈するものであった。深さ45cmを測る壙内には、図示は出来なかったが、比較的大きな角礫が部分的な偏在は見せるものの数多く入れられた状況で検出された。

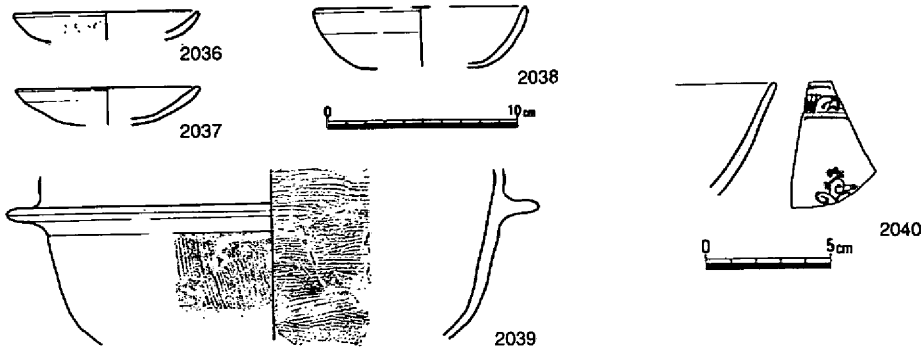
また、性格は不明ながらこの土壙の西側高位部には溝との関係を示唆させる状況でテラス状の平坦面が見られた。

時期は、遺物の出土が見られなかったことで判然としないが、埋積状況および周辺の遺構等との関係によれば中世に位置づけて差支えないと考える。　（島崎）

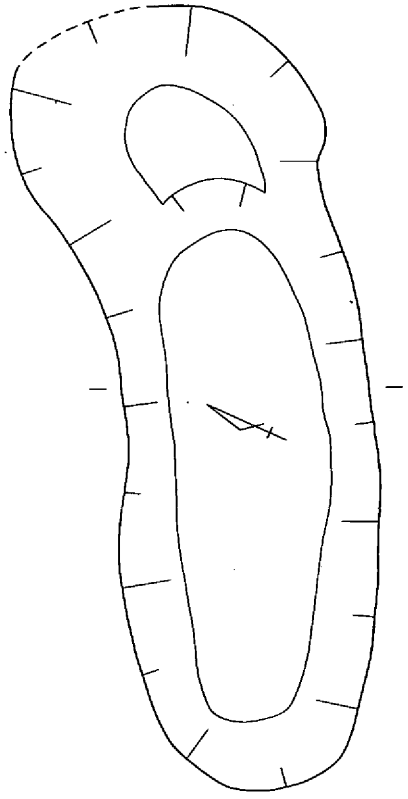


1．灰色土
2．黄灰色砂
3．灰黄色砂
4．灰色粘質土

第444図　土壙113（1/30）



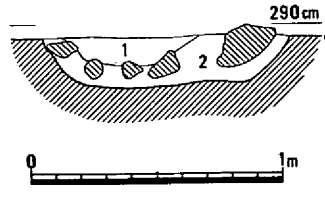
第445図　土壙113出土遺物（1/4・1/3）



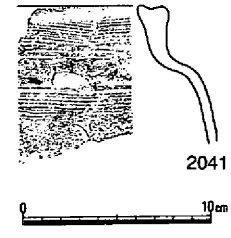
土壙114（第424・446図）

６Ｂｂ区に位置する平面がやや弧状に延びる不整楕円形を呈す土壙で、溝20と切り合い関係にあり土壙が古い。長軸は東西方向に向き、長さ約3.2m、幅約１m、深さ約20cmを測る。土壙の東部は約10cm高くなった平坦面がある。土壙内からは握り拳大から径20cm前後の礫を多く含み、これに混じって僅かながら土器が出土している。

2041は瓦質の鍋片である。口縁部外面は横方向のハケ、胴部はナデ調整され、内面は口縁から胴部にかけて横方向の粗いハケ調整がなされている。他に縄目タタキの丸瓦および平瓦片が出土するのみで時期判定は難しいが、16世紀代には埋没したものであろう。



1．淡緑灰色粘質土
2．暗灰色粘質土
（混、細砂）

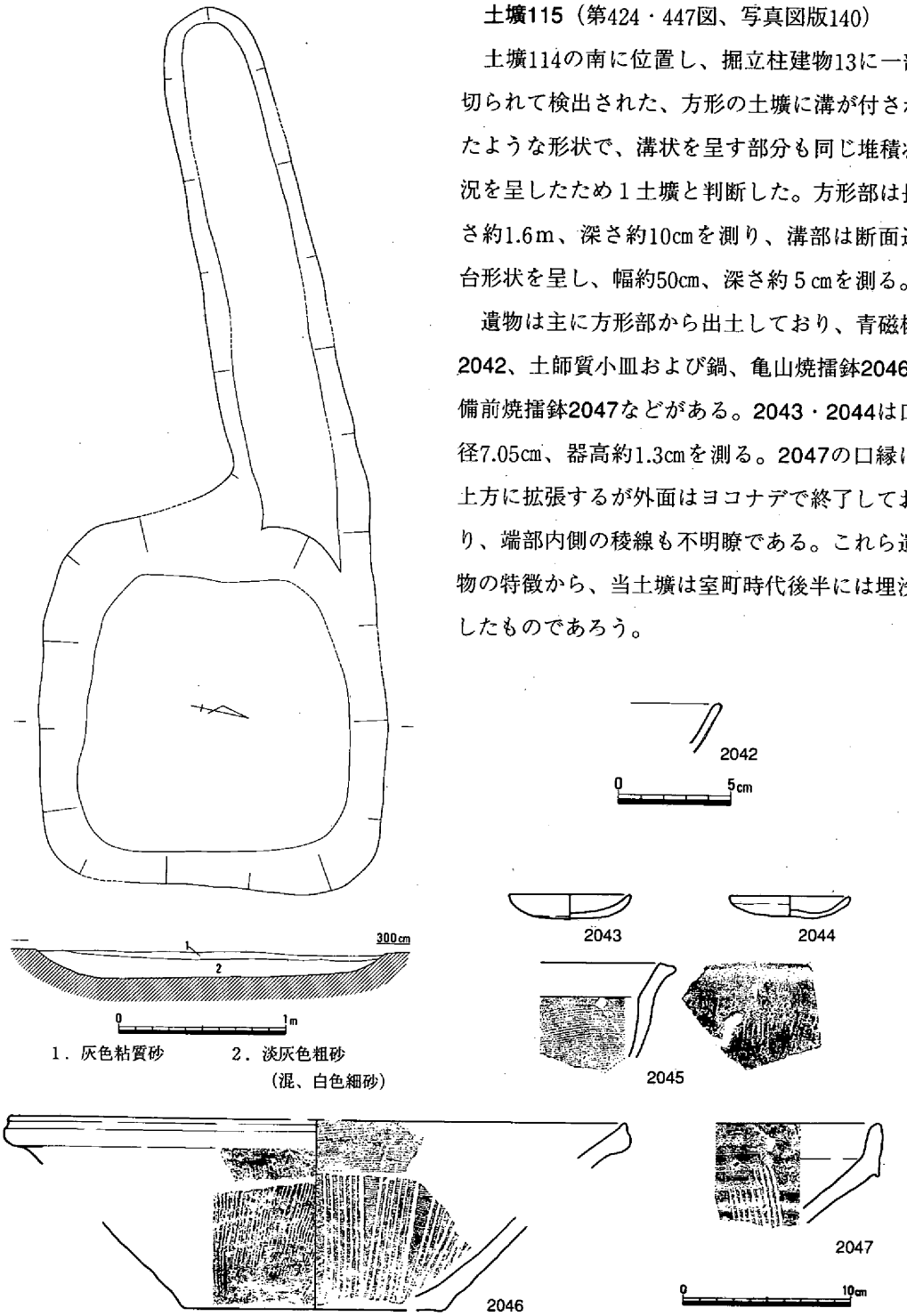


第446図　土壙114（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙115（第424・447図、写真図版140）

土壙114の南に位置し、掘立柱建物13に一部切られて検出された、方形の土壙に溝が付されたような形状で、溝状を呈す部分も同じ堆積状況を呈したため１土壙と判断した。方形部は長さ約1.6ｍ、深さ約10cmを測り、溝部は断面逆台形状を呈し、幅約50cm、深さ約５cmを測る。

遺物は主に方形部から出土しており、青磁椀2042、土師質小皿および鍋、亀山焼擂鉢2046、備前焼擂鉢2047などがある。2043・2044は口径7.05cm、器高約1.3cmを測る。2047の口縁は上方に拡張するが外面はヨコナデで終了しており、端部内側の稜線も不明瞭である。これら遺物の特徴から、当土壙は室町時代後半には埋没したものであろう。



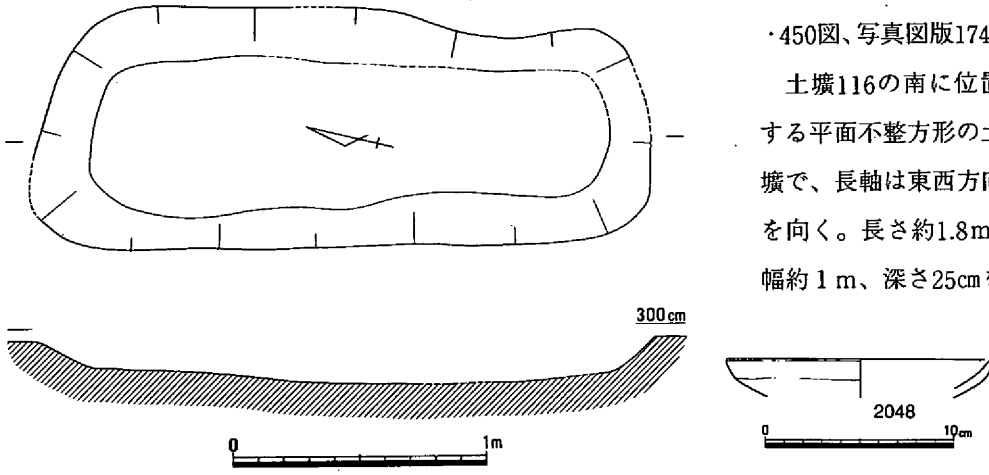
第447図　土壙115（1/30）・出土遺物（1/3・1/4）

土壙116（第424・448図）

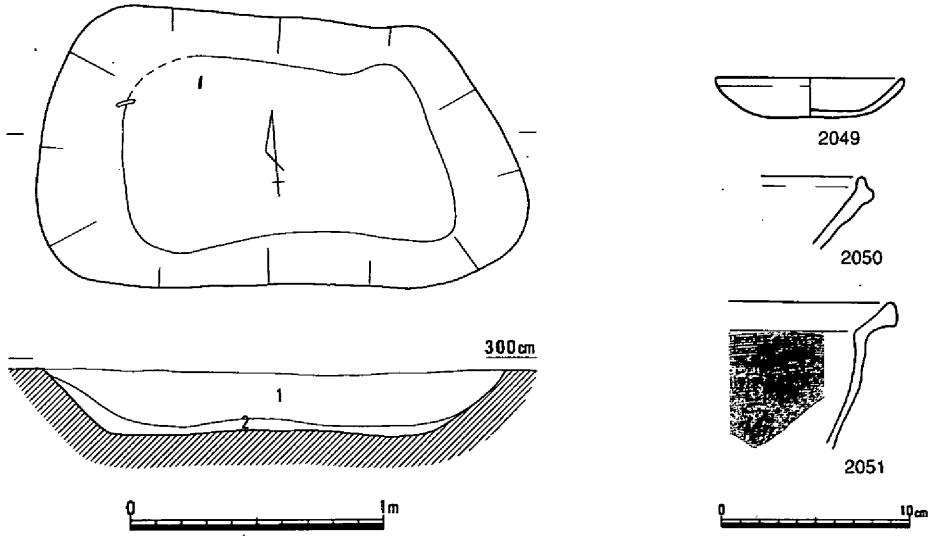
６Ｂｂ区の南方に位置し、掘立柱建物16に一部切られている平面長方形の土壙である。長軸はほぼ南北方向に向き長さ約2.4m、幅約１m、深さ約20cmを測る。暗灰色粘質土の埋土中から土師質皿2048が出土している。

土壙117（第424・449・450図、写真図版174）

土壙116の南に位置する平面不整方形の土壙で、長軸は東西方向を向く。長さ約1.8m、幅約１m、深さ25cmを



第448図　土壙116（1/30）・出土遺物（1/4）



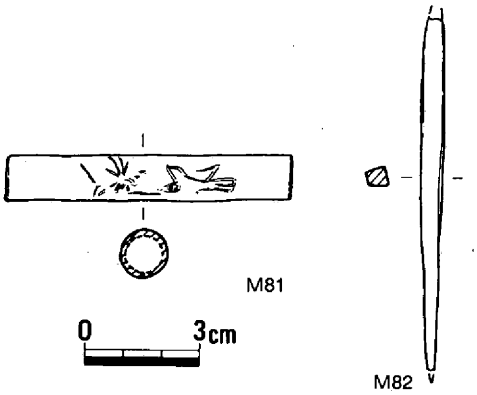
1．灰色粘質土
（含、炭粒・拳大の黄色塊）
2．灰色粘質土

第449図　土壙117（1/30）・出土遺物①（1/4）

測り、土壙壁は緩い傾斜をもつ。土壙内からは土師質小皿、瓦質の擂鉢？、土師質鍋とともに、金属製品M81・82が出土した。M81は管状の銅製品で、草および鳥の毛彫りがなされているようである

土壙118（第424・451図）

７Ｂ区の中央から検出された南北方向に長軸が向く平面楕円形を呈す土壙で、北部が一段高くなっている。長さ約2.5m、幅約１m、深さ23cmを測り、暗灰色粘質土の埋土から円盤Ｃ138が出土した。

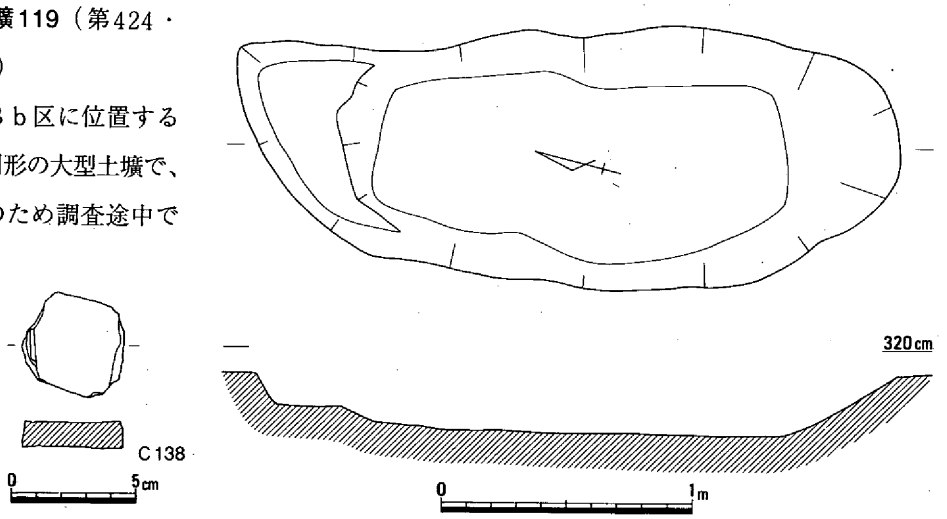


第450図　土壙117出土遺物②（1/2）

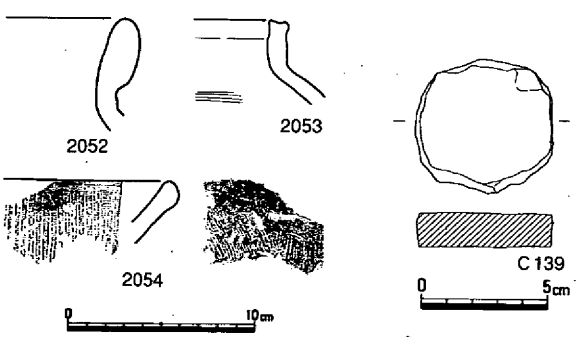
土壙119（第424・452図）

７Ｂｂ区に位置する平面円形の大型土壙で、湧水のため調査途中で断念したものである。径約４mを測り、検出面から約60cm、海抜2.4mで掘り下げを終了した。遺物は備前焼甕2052、瓦質鍋2053、亀山焼擂鉢2054、円盤Ｃ139などが出土し、これら土器の特徴から当土壙は室町後半には埋没したものと考えられる。

なお、土壙として取り扱ったが、井戸の可能性もある。　（江見）



第451図　土壙118（1/30）・出土遺物（1/3）

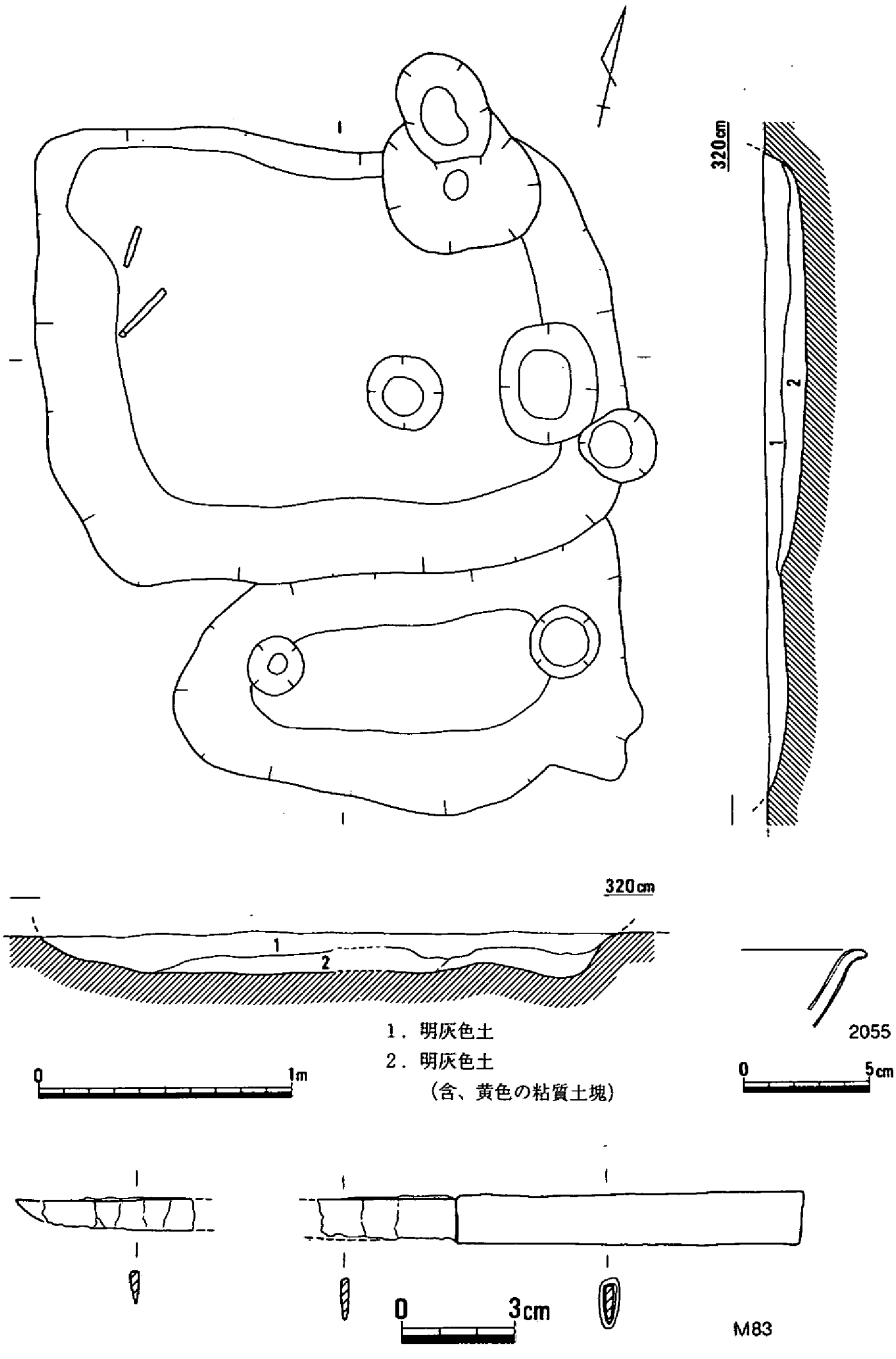


第452図　土壙119出土遺物（1/4・1/3）

3．足守川矢部南向遺跡

土壙120（第424・453図、写真図版141）

９Ｂｄ区において溝38に切られた状況で検出された。土壙121との峻別が困難な状態で、埋

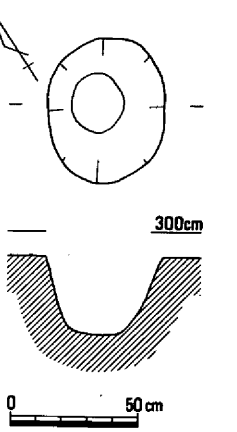


第453図　土壙120（上）・121（下）（1/30）・出土遺物（1/3・1/2）

積土上層は両者に共通するものである。

土壙は、不整方形の平面形態をみせるものでおよそ2.30×1.70ｍの規模を測った。また深さ約15cmと浅く、断面皿状であった。

出土遺物は、壙内北西部において刀子の遺存が確認された程度で、他には青磁の小片が１点見られたにすぎない。刀子は、刀身部が途中で折れていたため明確ではないが、およそ全長20cm位にあったものと推測される。



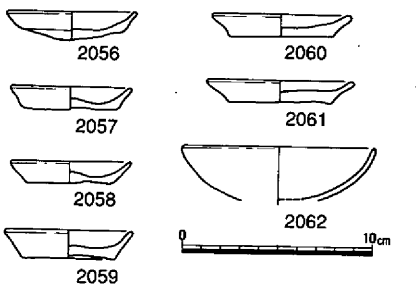
土壙121（第424・453図、写真図版141）

土壙120に接した状態でほとんど同時機能を果たしていた可能性が高い。

土壙122（第424・454図）

掘立柱建物18と溝38の中間に所在した柱穴状の規模の小さいものである。壙内からは土師器の椀と小皿がまとまった状況で検出され、状況は地鎮祭祀を彷彿とさせる。

時期は、14世紀前半に比定されよう。　（島崎）

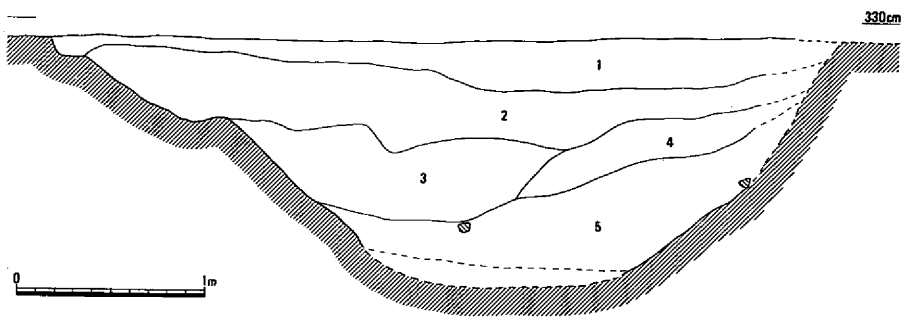


第454図　土壙122（1/30）・出土遺物（1/4）

(5)　溝

溝９（第424・455～457図、写真図版141）

４Ａ区～３Ｂ区にまたがって検出された大溝で、調査区全体からすれば旧地表面の一番高い部分にあたると思われる。溝は緩やかな断面逆台形状を呈す。幅約４ｍ、深さ約1.3ｍを測り、調査区北端の微高地斜面と同様の東北東～西南西

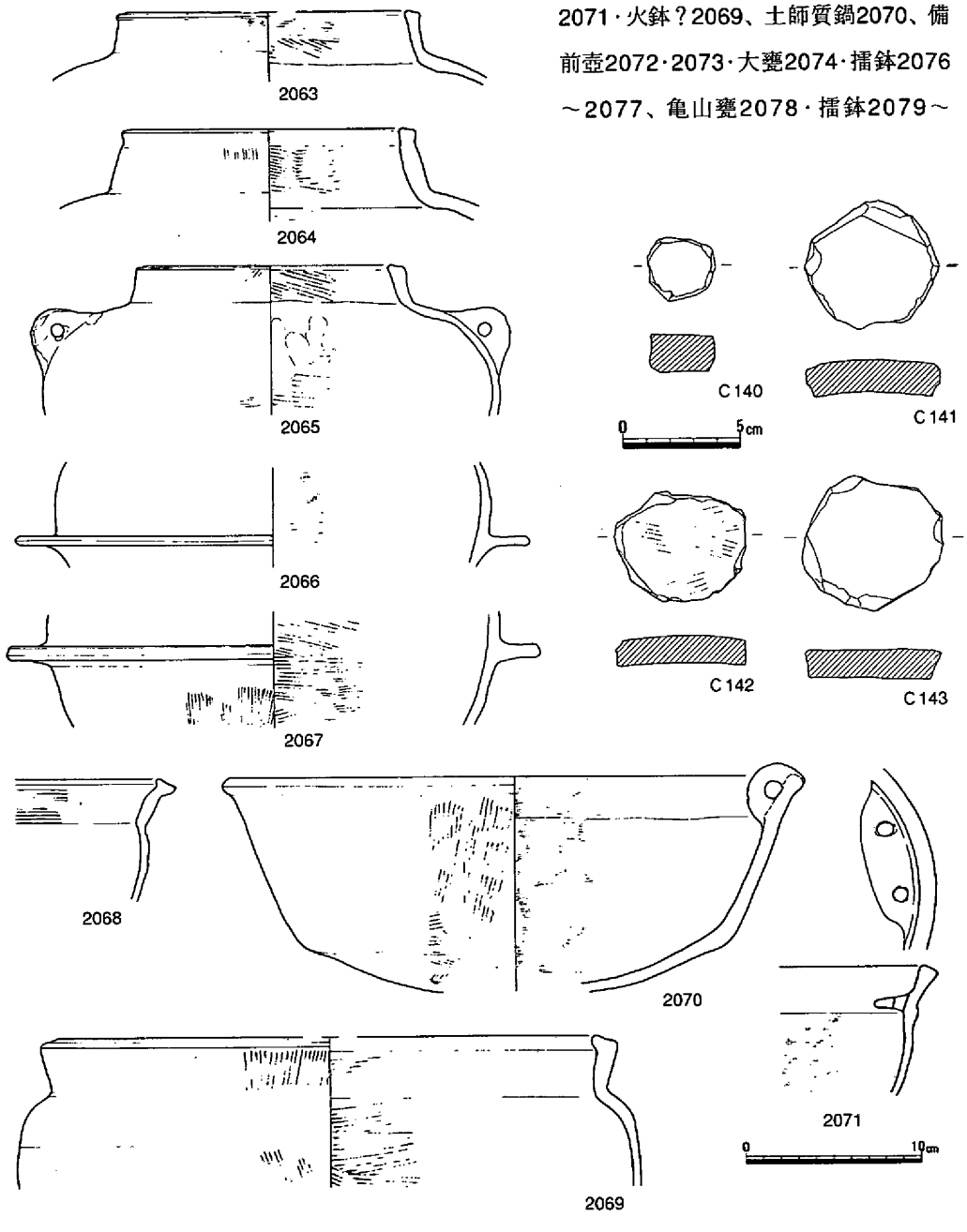


1．淡茶灰色粘質（含、マンガン・鉄分）　2．淡黒灰色粘質土（含、土器・鉄分）　3．淡黒灰色粘質土（含、土器）　4．黒灰色砂質土（含、土器）　5．黒灰色粘砂

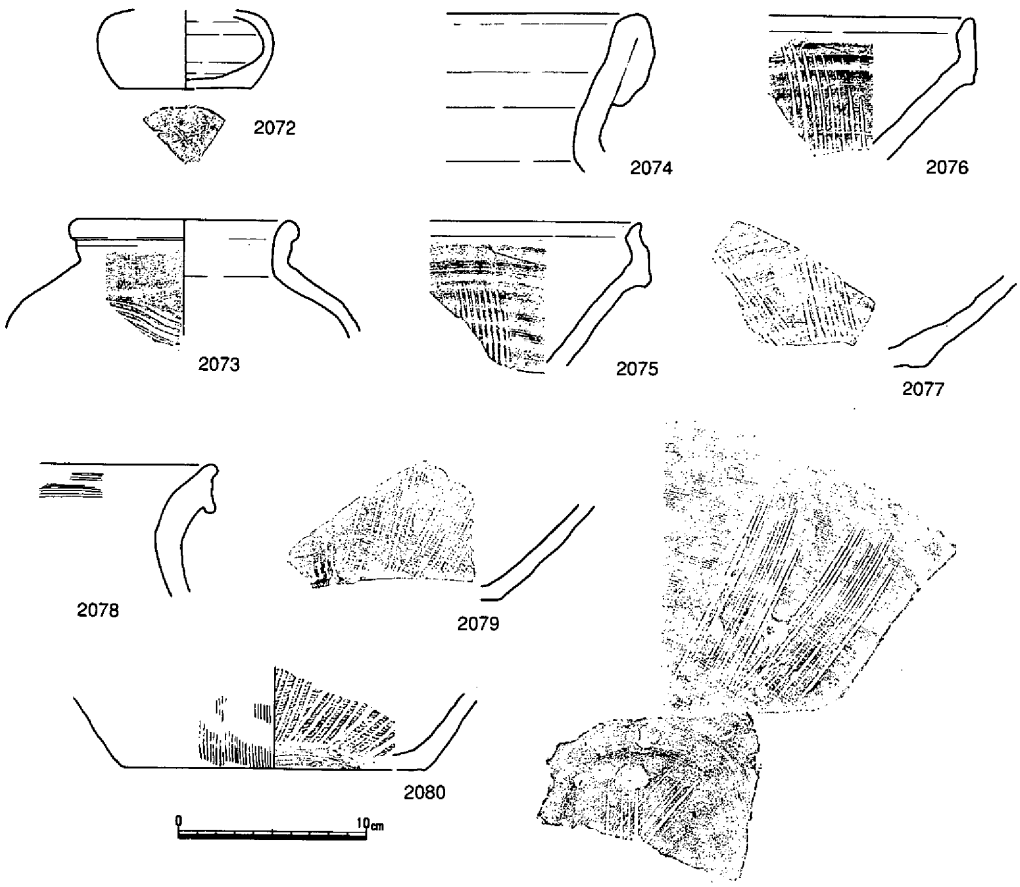
第455図　溝９（1/40）

に延びていたが、流れの方向は湧水のため明瞭には出来なかった。溝の埋土は軟らかい粘質土を主体としたものであり、遺物はいずれの層からも出土したが、特に第３・４層には多く含まれていた。なお、洪水層は確認されず徐々に埋没していったものと思われる。

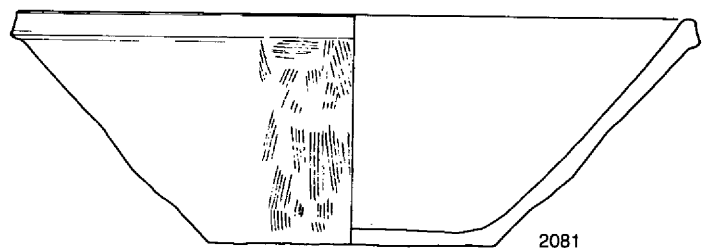
遺物は瓦器鍋・羽釜2063～2068・2071・火鉢？2069、土師質鍋2070、備前壺2072・2073・大甕2074・擂鉢2076～2077、亀山甕2078・擂鉢2079～



第456図　溝９出土遺物①（1/4・1/3）



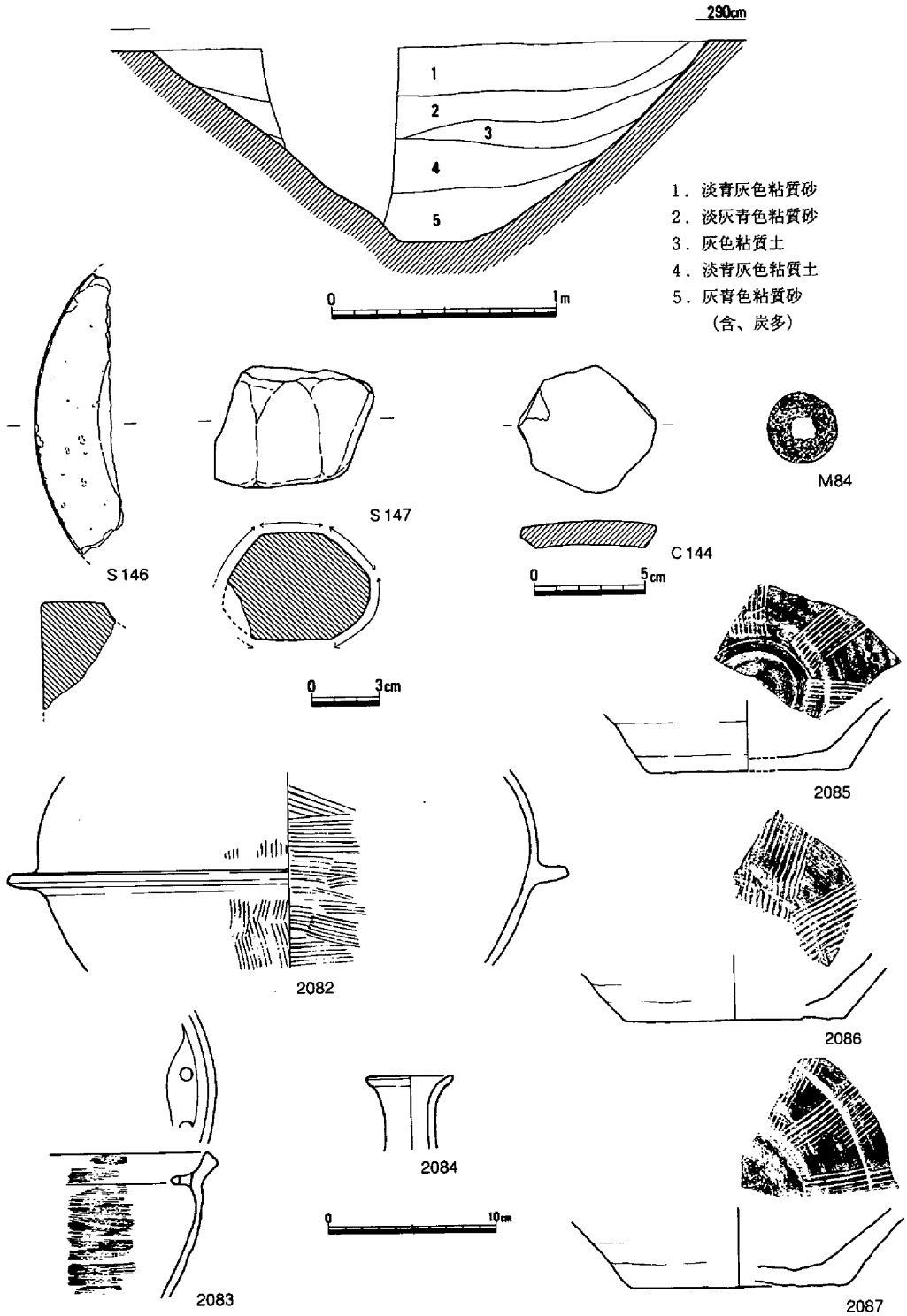
2081、円盤Ｃ140～143などが出土している。大甕2074や擂鉢2075・2076などの特徴から、当溝は中世末には埋没したものと考えられる。



第457図　溝９出土遺物②（1/4）

溝10（第424・458図）

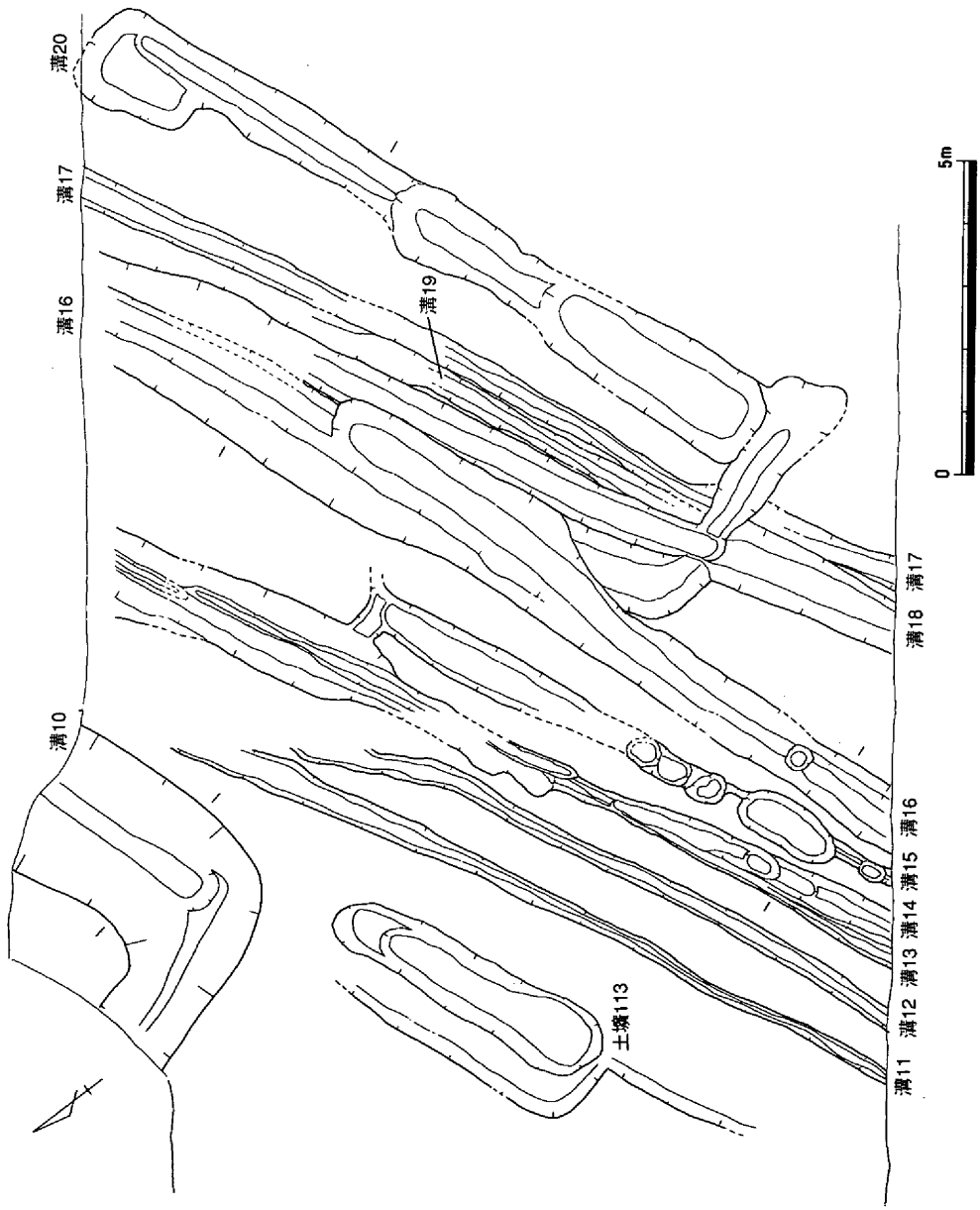
５Ｂｂ区に位置し、ほぼ方位に沿い矩形を呈す溝で大半は調査区外に延びる。断面Ｖ字状を呈し、幅約2.5m、深さは東西方向で約90cmを測るが、南北方向では底が約10cm高い。溝内は有機物を多く含み、第４層には泥化した貝類が確認されており、溝の形状および堆積状況から区画溝と考えられる。遺物は瓦器類2082・2083、備前壺2084・擂鉢2085～2087、茶臼Ｓ146、砥石Ｓ147、円盤Ｃ144、無文銭M84、鞴の羽口、砥石などが出土しており、当溝は中世末には埋没したものと考えられる。（江見）



第458図　溝10（1/30）・出土遺物（1/3・1/2・1/4）

溝11～20（第424・460～467図、写真図版142）

５Ｂｄから６Ｂａを中心として溝の集中する地区が約10数ｍの幅でみられ、地形的にも溝群の集中箇所が全体に低く、その両脇が高いといった状況に検出された。ただし、その比高は約40㎝前後と際立った差ではなく、全体の地形のなかでは僅かな変化といえよう。こうした中、溝は規模に大きな差はないが幅20㎝～1.2ｍの小規模で不揃いな溝状を呈するものが相当の重複を見せながら所在するのが確認された。小規模なため途中で溝の延長が確認出来ないものも



第459図　溝10～20（1/120）

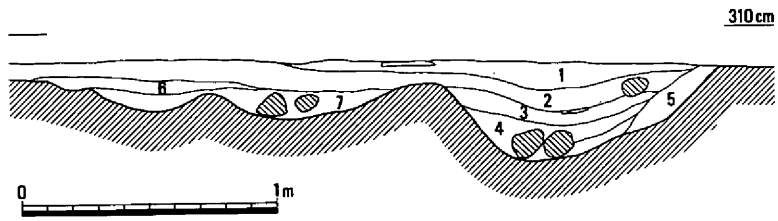
散見された。

検出された多くの溝は、状況として単独での流走をみせるものも一部見られるが、本来的に多くはたえず他の溝群と水の流量等で関係し合って機能していたようで、基本的にはそれぞれに平行した流路を形成しているように見られる。所々溝のバイパスの存在とさらに詳細に溝底のレベル差を観察すると一層具体性をもった水の流れが理解されよう。

溝11は、溝群のなかにあって最も西に位置するもので、規模を同じくする溝12とはおおむね平行して北東方向に流れる。いずれも深さは約５cm前後と浅い。

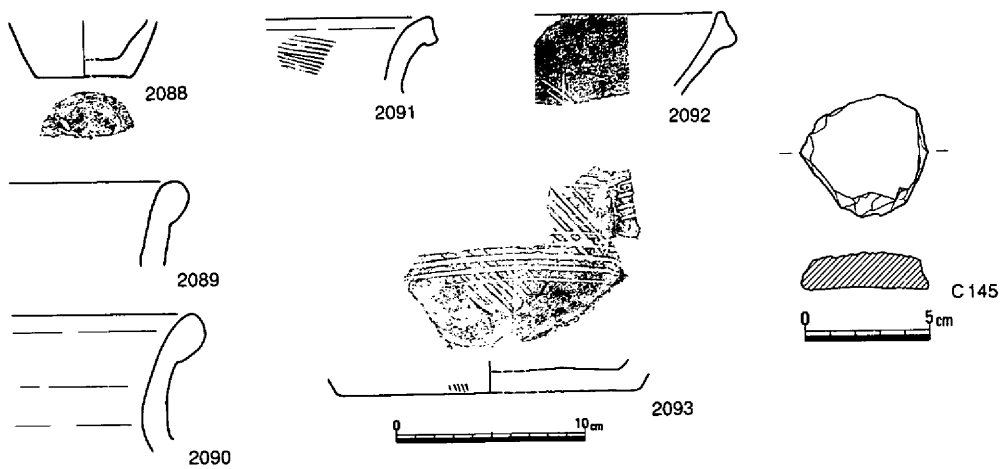
溝13は、溝14と部分的に切合い重複した状況でその存在が確認される程度のものであり、平面的な追及は出来なかった。溝底は溝14のほうが約10数cm深い。

溝14は、溝13の東側にあって幅・溝底の在り方に規則性は認められなかったものの、傾向としては南西部より北東部の方向に規模の拡大と溝底のレベルの深度の低下が認められる。



1．灰青砂
2．暗灰青砂、灰青色土
3．灰色砂
4．暗灰青色粘土
5．淡灰色砂
6．灰色土
7．暗灰色土

第460図　溝13～16（1/30）



第461図　溝15出土遺物（1/4・1/3）

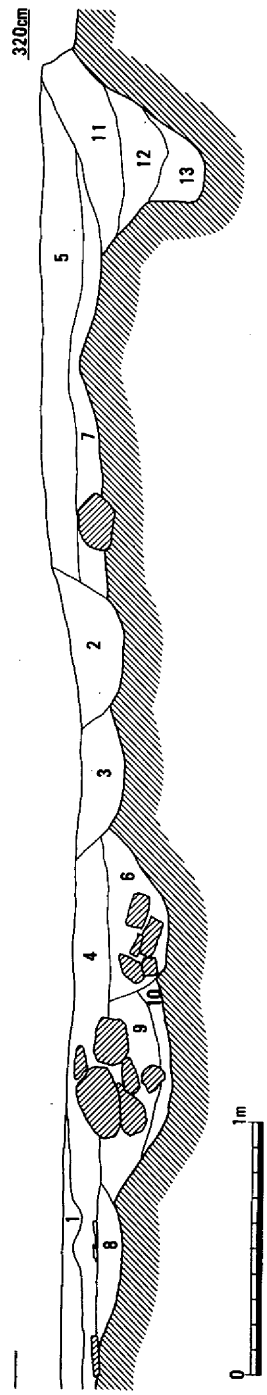
溝15は、南西部において窪地状の連続が、中央部で幅70cm程の直線的な溝が見られ、やがて溝14に直交気味に取付くものである。溝内からは小片ながら備前焼2088～2090、亀山焼2091～2093等の遺物が散見された。なかには古い時期のものも含まれるが、備前焼壺2088の存在でおよそ16世紀後半～17世紀のものと考えられる。

溝16は、ここに検出された溝群の中にあってほぼ中央部に位置し、規模・直進性共に幹線水路としての様相を見せるものである。水の流れを復元的に推測すれば、北東流して中央最深部に溜まった水は海抜1.55mを越せばさらに下流に流れ、水位が数cm上がれば溝20にバイパスを経由して通水が可能となるものと考えられる。増水が溝の肩を越えない限り下流域への分流が可能となり、ただし溝20は途中で流路が切れる堀状を呈するもので、保水あるいは水の統御を図った結果と考える。

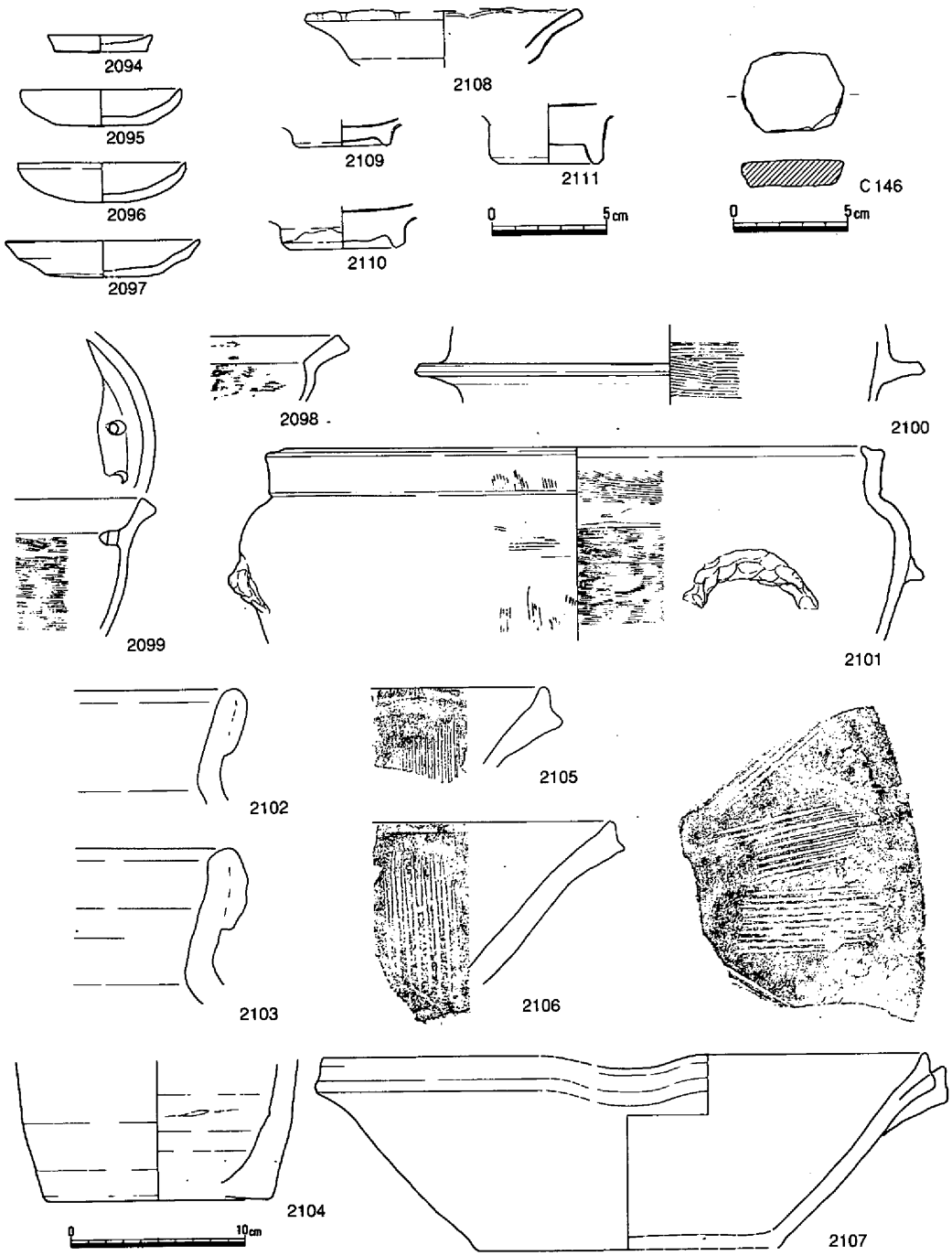
出土した遺物には、土師器小皿2094～2097、鍋2098・2099、羽釜2100・2101、亀山焼擂鉢2105～2107、備前焼壺2104、甕2102・2103、青磁碗2108～2111等の土器類の他、刀子　M85・86、砥石S148、茶臼S149・150等が確認された。中でも茶臼S150は、作りが丁寧で優品であった。

時期は、備前焼甕2103の口縁部玉縁が垂下傾向をみせることでおよそ16世紀後半～17世紀頃への位置づけがなされよう。

溝17は、溝18と共に一連の溝群の埋没後、新たに溝18が、その後溝17の順で掘開されたことが知られた。溝18からは、土師器小皿2113～2115、釜2116、鍋2117・2118、亀山焼擂鉢



第462図　溝16～20（1/30）

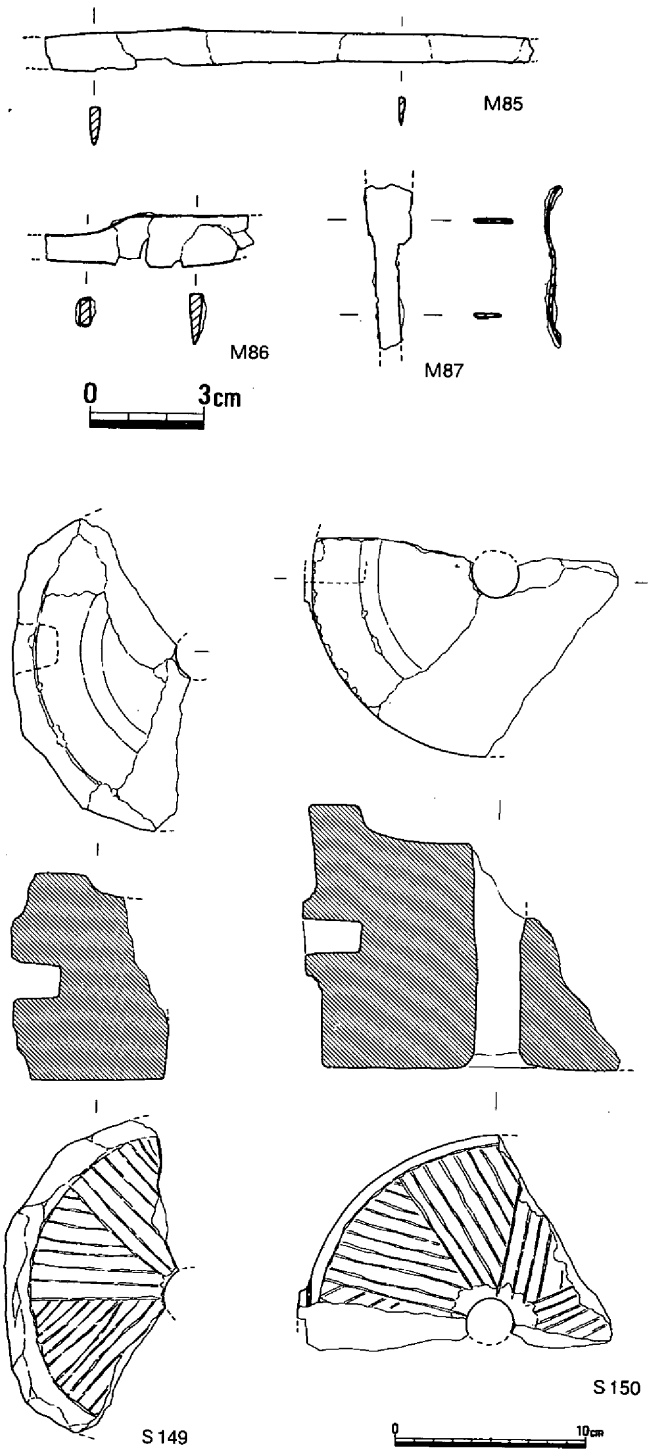


第463図　溝16出土遺物①（1/4・1/3）

2119、備前焼擂鉢2120、染付け碗2112・2122、皿2121、白磁碗2123等が検出された。

時期的には、16世紀代の染付け碗を含むものの、備前焼擂鉢の型式から17世紀頃まで下がることが知られる。

溝19は、溝17と溝18のほぼ中間点付近で、それらに挟まれた状態で検出された。切合い等明確に出来なかった。

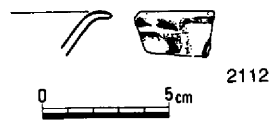


第464図　溝16出土遺物②（1/2・1/3・1/4）

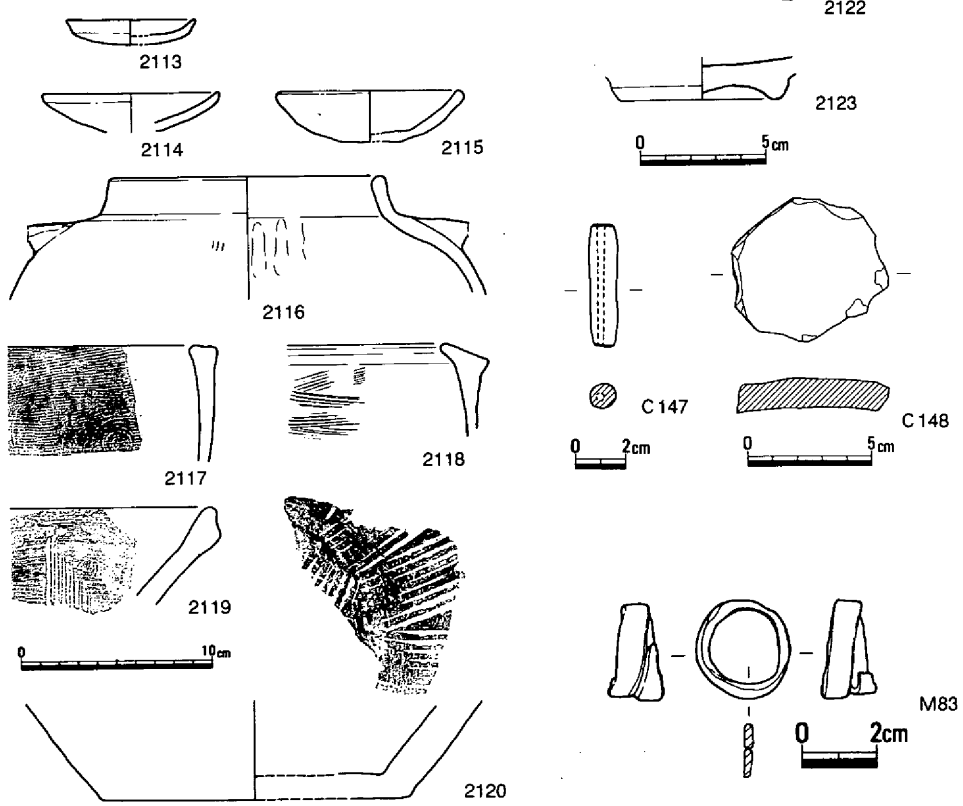
溝20は、当該地区に集中する溝群の中にあって最も南側に所在する溝状を呈するものである。全長約12mを測るが平面幅、深さ、形状等それぞれの部分で異なった在り方を見せ、一見規則性は感じられない。ただし、総体的に幅と深さには反比例した関係が窺われた。溝内からは、他の溝と同様に輸入磁器である染付け碗2124・2125、白磁碗2126・2127、皿2128～2130、備前焼擂鉢2131、土錘、鉄器等の検出がなされた。

以上ほぼ1か所に集中した溝群について個別に概要説明を行ったが、溝20を除く溝がいずれもグライ化の進行はあるものの比較的粗い砂によって埋没したことが知られ、溝として機能していたものと理解された。

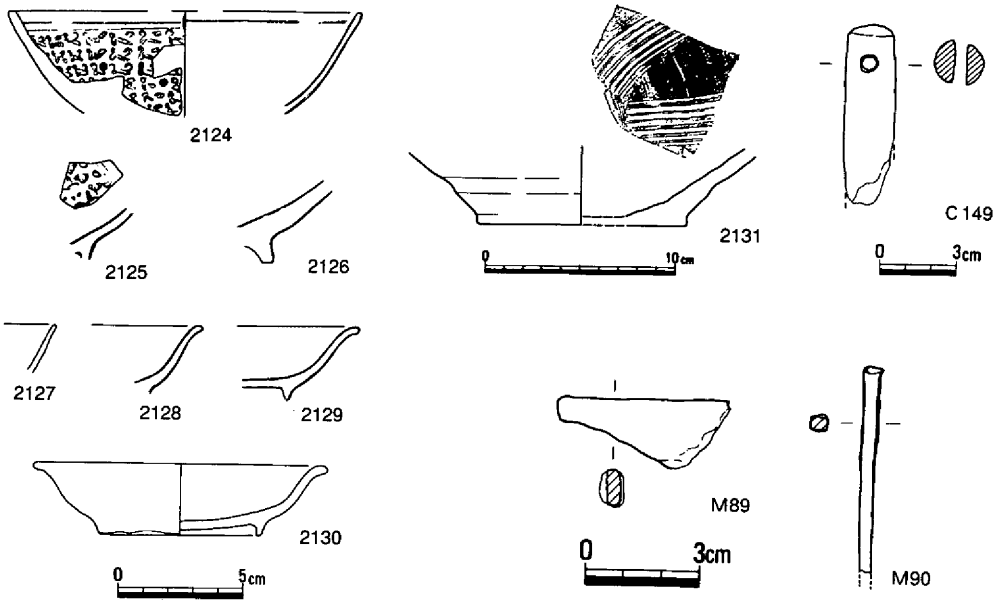
（島崎）



第465図　溝17出土遺物（1/3）



第466図　溝18出土遺物（1/4・1/3・1/2）



第467図　溝20出土遺物（1/3・1/4・1/2）

溝21（第424・468図）

６Ｂｂ区、土壙115の北東に接して位置する北へ延びる区画溝で、南端部を検出した。断面は傾斜の強い逆台形を呈し、幅65cm、深さ約50cmを測る。遺物は皆無であったが、他の同様の溝から中世末には埋没したものと考える。

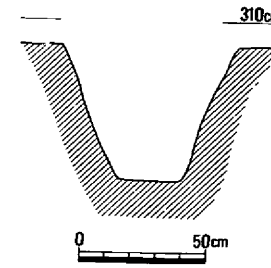
溝22（第424・469図）

６Ｂｄ区の南端に位置する南へ延びる区画溝で、北端部を検出した。断面は逆台形を呈し、埋土下層には礫が混入していたが、火を受けたと思われるものも幾つか見られた。上記同様、中世末には埋没したものであろう。

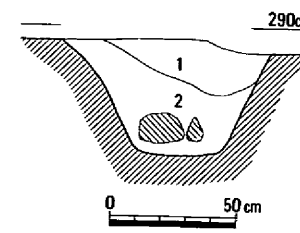
（江見）

溝23・24（第424・470図）

７Ｂ区において一部重複した状態で検出された。およそ南北方向への延びを見せるが途中で中断する。ここでは溝として挙げたものの状況から、また幅80cm、深さ45cmの規模からは区画溝的な性格を意識させる。北延長線

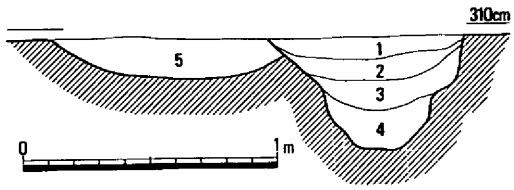


第468図　溝21（1/30）



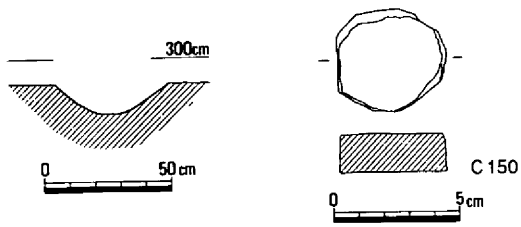
1．暗青灰色粘質土
2．暗灰色粘質土

第469図　溝22（1/30）

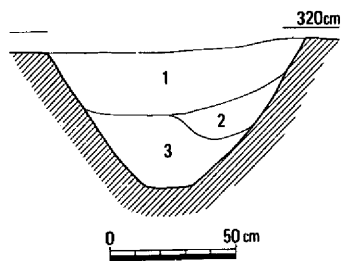


1．灰色土　　4．暗灰色土
2．灰黄色土　　5．淡灰色土
3．灰色土

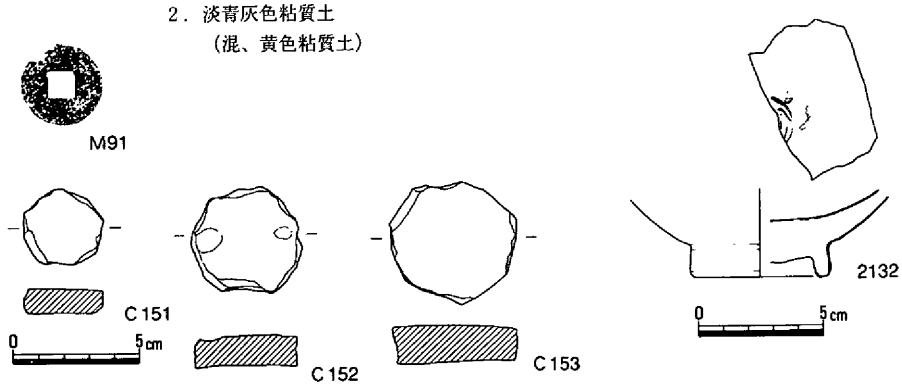
第470図　溝23（1/30）



第471図　溝27（1/30）・出土遺物（1/3）



1．淡青灰色粘質土　　3．淡灰色粘質土
2．淡青灰色粘質土
（混、黄色粘質土）



第472図　溝29（1/30）・出土遺物①（1/3・1/2）

上には溝21が見られ、同じ性格が推測される。

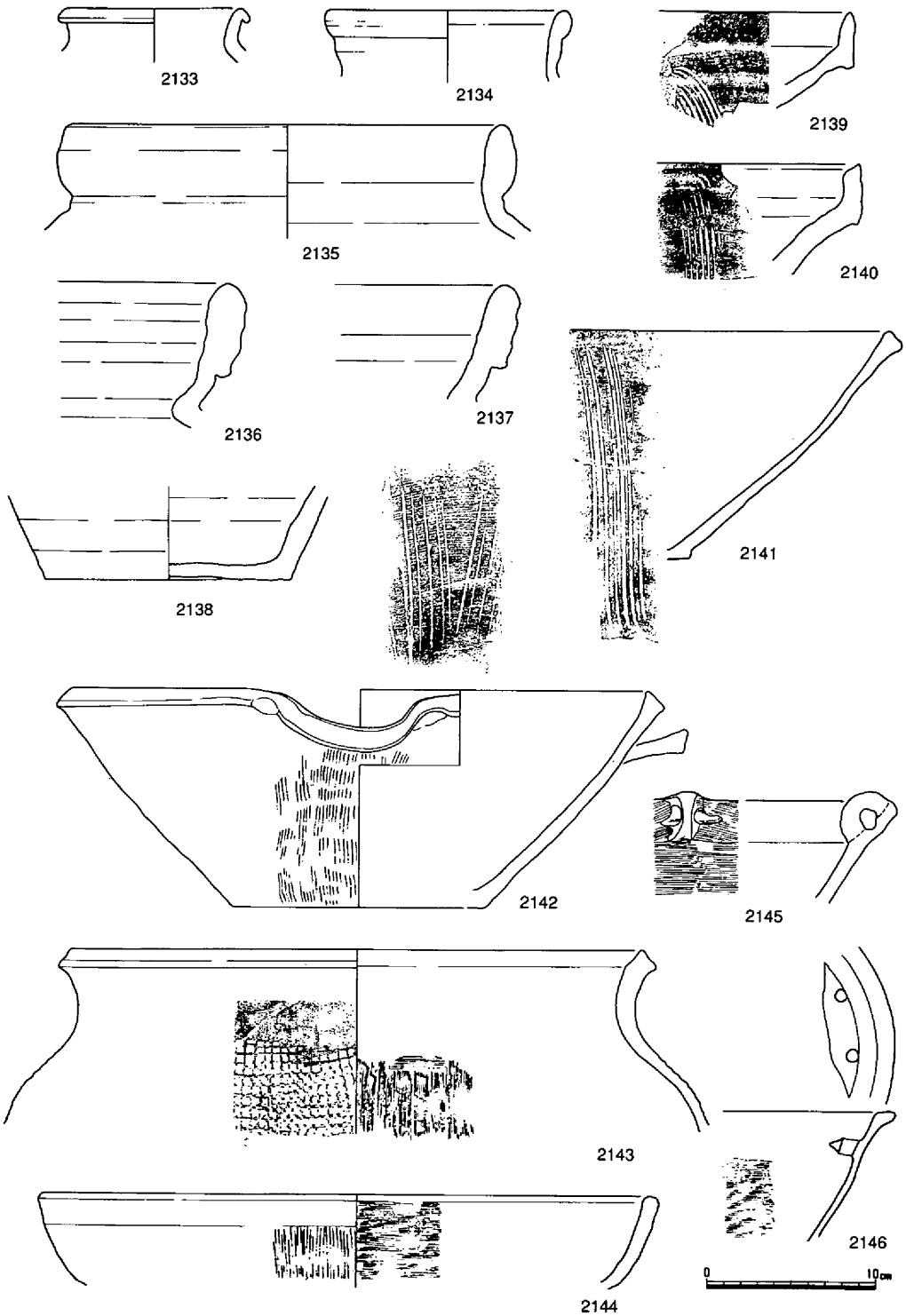
時期は、遺物の出土がなかったことで判然としない。　　（島崎）

溝25～28（第424・471図）

７Ｂ区の東半から検出された断面皿状の浅い溝で、いずれも東西方向に平行して延び、溝29で途切れている。埋土は淡青褐色砂で溝29とは相違するが、各溝間約3.5ｍの区画する溝として機能したものと推定される。

溝29（第424・481図、写真図版142）

７Ｂ区の中央を南北方向に走り、南端で西に矩形に曲がる区画溝である。断面はＶ字状を呈し、幅約１ｍ、深さ約55cmを測る。溝底の海抜は南北方向においてはほとんど変化はないが、東西部は約30cm低くなっていた。埋土はいずれも軟らかく遺物は火を受けた礫などとともに出土した。2132の見込み印花文の青磁碗をはじめ備前焼2133～2140、亀山焼2141～2143、瓦器2144～2146、円盤Ｃ151～

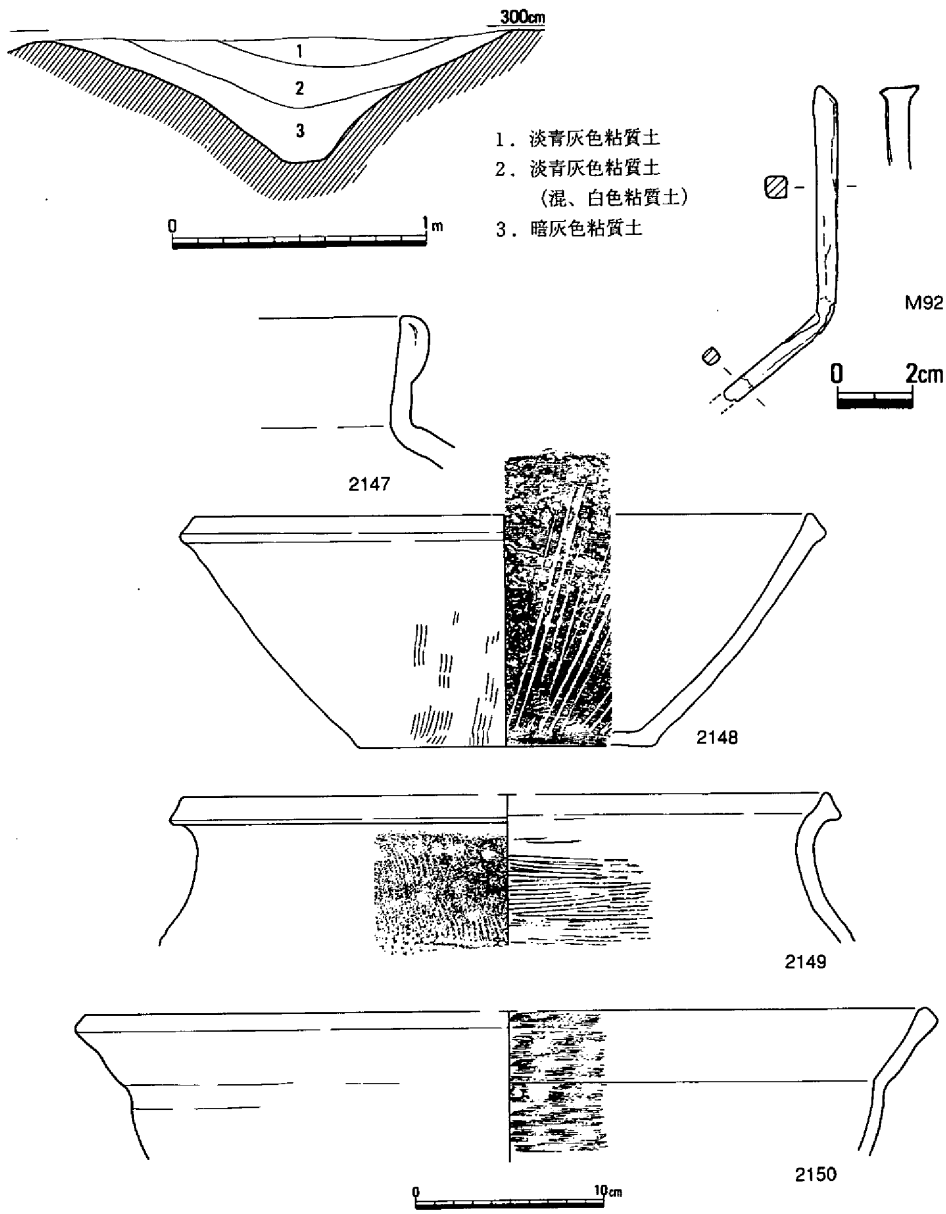


第473図　溝29出土遺物②（1/4）

153、判読不明の銭貨M91、鉄滓、砥石などが出土した。なお、亀山擂鉢2141は後記する溝30出土の破片と接合したものである。以上、磁器や壺はやや古い傾向を示すものの擂鉢や大甕の特徴から、当溝は室町時代後半には埋没したものと考えられる。

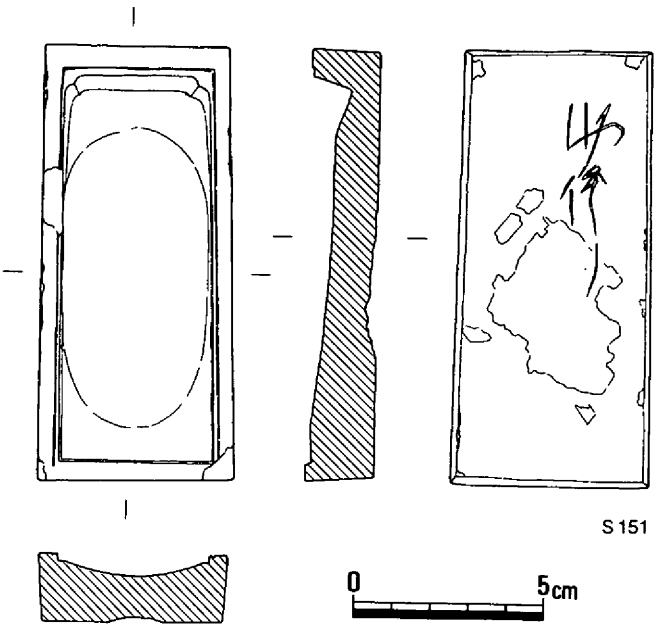
溝30（第424・474・475図、写真図版142・171）

溝29の東に平行して検出された区画溝で、断面Ｖ字状を呈す。幅約1.5m、深さ約50cmを測



第474図　溝30（1/30）・出土遺物①（1/4・1/2）

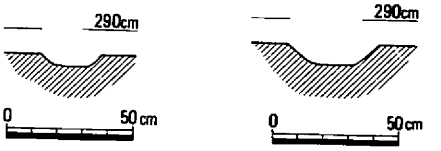
る。溝底は南方部で周辺より５cm余り高くなる箇所が確認されているが、北端で海抜2.85m、南端で2.45mを測り、全体としては南流する傾向が窺える。なお、溝の南部では掘り替えがなされている。埋土は溝29と同様に軟らかく、火を受けた礫なども確認している。出土した主な遺物は備前大甕2147、亀山擂鉢2148および甕2149、瓦器鍋2150、釘M92、硯Ｓ151、五輪塔の空・風輪などである。Ｓ151は頁岩製の短冊型を呈す。よく使い込まれ陸前面がかなり凹んでおり、縁辺に墨を残す。背面には金属状のもので、浅く文字が彫り込まれているが判読不明である。なお、当溝は調査時点において溝29より低い位置から検出されたもので、新旧関係も検討したが、前記溝29出土土器2141の在り方や出土遺物の特徴から、ほぼ同時期に埋没した可能性が高いと考える。



第475図　溝30出土遺物②（1/2）

溝31・32（第424・476図）

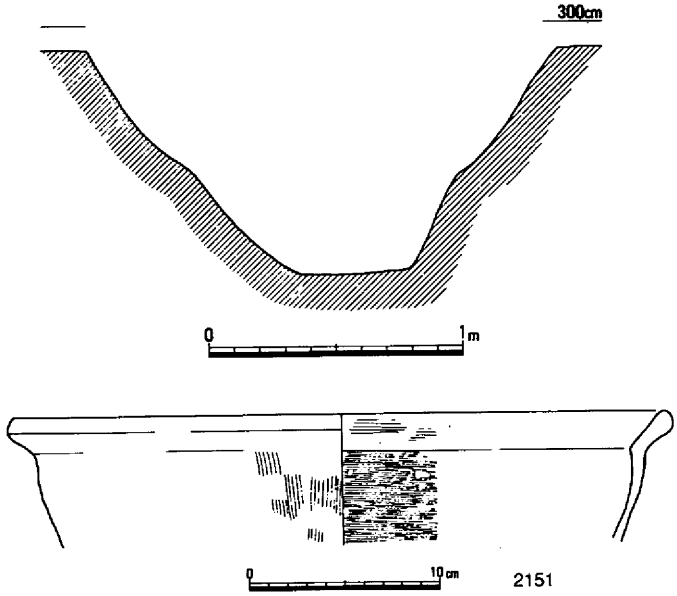
８Ｂ区に位置する東西方向に平行して延びる浅い溝で、断面皿形を呈す。平面的には前記溝25～28の延長部とも考えられなくはないが、埋土は暗褐色の粘質砂であったため別遺構として取り扱った。なお、遺物は皆無であった。



第476図　溝31（左）・溝32（右）（1/30）

溝33（第424・477図）

８Ｂｄ区に位置する区画溝で、東西方向に延びる部分を検出した。断面逆台形を呈し、幅約1.8m、深さ約90cmを測る。溝底は西端で約10cm深く下がる部分が認められ、海抜高は2.1mを測り、東から西へ僅かながら下がっている状況を示す。埋土の状況は溝30などと近似しており、遺物も少量であったが同時期と思われる瓦器鍋2151が出土するなど、両溝は調査区外で矩形につながるものと推測される。



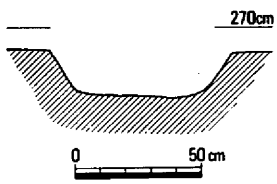
第477図　溝33（1/30）・出土遺物（1/4）

溝34（第424・478図）

溝33の南東から検出された、南北方向に延びる区画溝である。断面逆台形を呈し、幅約70cm、深さ約15cmを測り、溝底の海抜は2.4mでほぼ一定している。なお、遺物は皆無であったが、平面的に見て当溝は北端で東に曲がり、後記溝36につながる可能性が高い。

溝35（第424・479・480図）

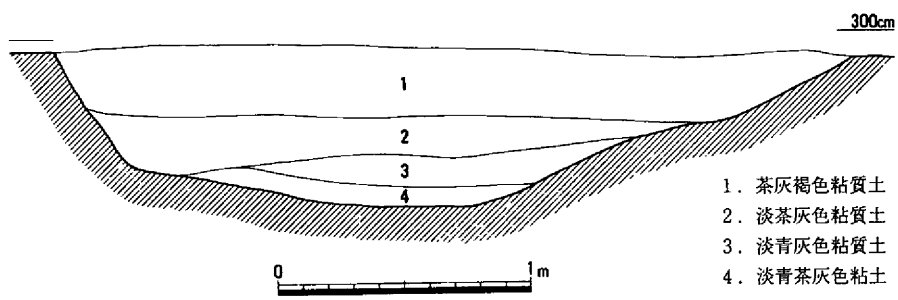
９Ｂａ区から検出された東西方向に延びる区画溝で断面逆台形を呈す。幅約1.5m、深さ約60cmを測る。溝底は西方で約10cmの段をもって下がり、西端部で海抜約2.15mを測る。なお、当溝は前記溝33に連続するものと推測される。遺物は備前壺2153・2154、大甕2155が出土しているが、2154は後記する溝36出土の破片と結合したものである。備前焼の特徴は室町時代後半のものであろう。



第478図　溝34（1/30）

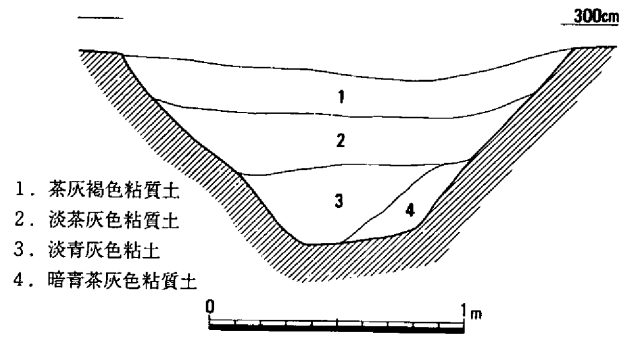
溝36（第424・480図）

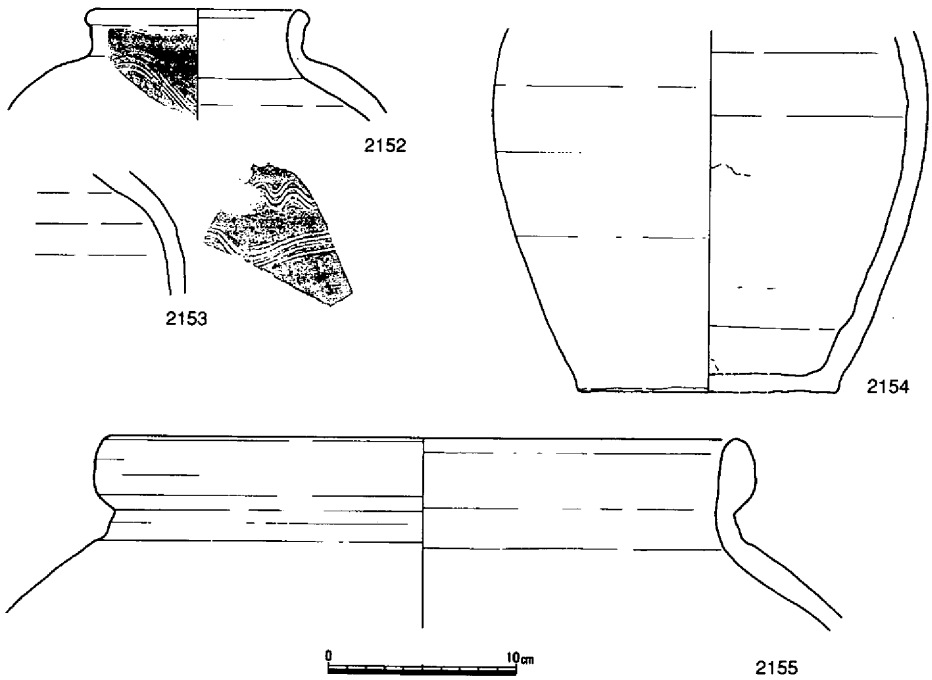
溝35の南に並行して検出された東西方向に延びる区画溝である。断面逆台形を呈し、幅約



第479図　溝35（1/30）

１ｍ、深さ約70cmを測る。溝底は西端で海抜約2.1ｍ、東端で約2.15ｍを測り、ほとんど差はない。また、前記溝34の溝底とも高低差はなく、矩形に掘削されていたものと推定される。なお、遺物は備前壺2152が2154とともに出土している。





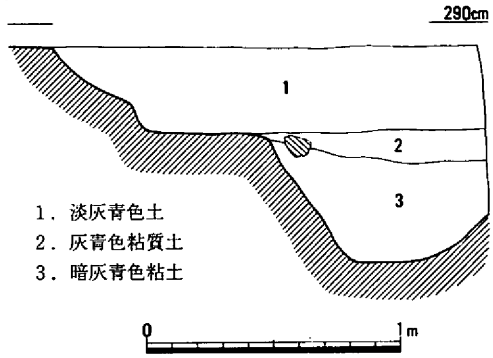
第480図　溝36（1/30）・溝35・36出土遺物（1/4）

溝37（第424・481図）

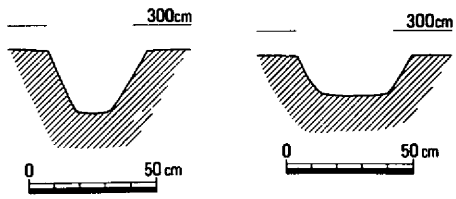
９Ｂ区の東端に位置する南北方向に延びる溝で、西肩部から底中央にかけての一部を検出した。出土遺物はみられなかったものの、埋土の状況や溝の方向から前述してきた区画溝の一部と推定される。

第38・39（第424・482図）

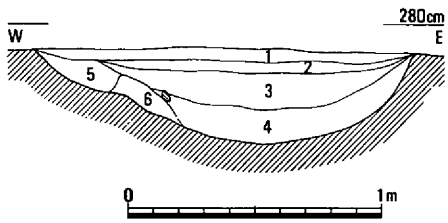
９Ｂ区に位置する、南北間約3.5ｍの間隔をもって東西方向に延びる２条の溝で、溝38は土壙120の上層から検出された。いずれも断面逆台形を呈すが溝38が溝39と比べ僅かに細くて深い。



第481図　溝37（1/30）

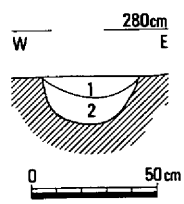


第482図　溝38（左）・溝39（右）（1/30）



1．暗茶褐色土　　3．暗灰色土　　5．暗灰色土
2．暗茶褐色土　　4．暗灰色粘質土　6．暗灰緑色土

第483図　溝40・41（1/30）



1．暗灰色土　　2．暗茶褐色土

第484図　溝42（1/30）

いずれにしても幅40cm前後の小規模なものであり、これら２条の溝の北方約20mには断面形状はやや差はあるが同様の小規模溝31・32が所在し、有機的な関連が示唆される。（江見）

溝40（第424・483・485・486図）

８Ａ区・９Ａ区で検出された南北に直線的に走行する溝があるが、北で西に直角に曲がる分流が認められる。本流の幅約1.2m、最大深35cmを測り、断面は浅いＵ字形を呈する。なお、分流の幅は本流に比べて幅約90cmと狭い。底面高からみて、北から南と西に流下している。遺物は土師器の高杯2156、須恵器の蓋2157、2159、杯身2158、青磁の椀2160、羽釜2161、土鍋2162・2177、平瓦2163・2164、亀山焼の甕2171・2172、擂鉢2166～2170、備前焼の擂鉢などが出土している。時期は16～17世紀代と考えられる。

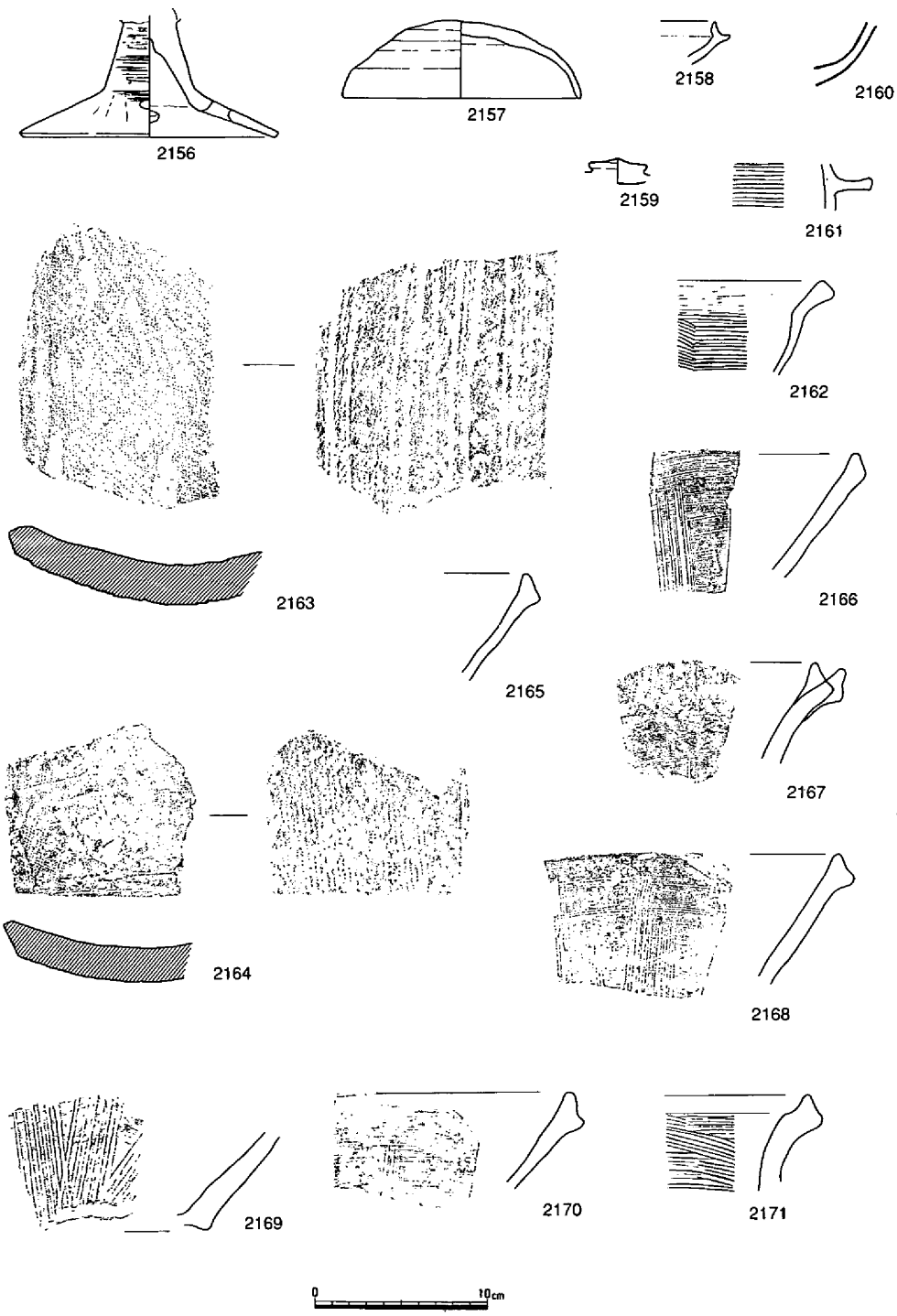
溝41（第424・483図）

溝40の西で検出された南北に走行する溝で、北端は溝40の分流に切られている。溝の幅は約40cm、深さ約15cmを測り、断面は浅いＵ字形を呈する。底面高からみて、北から南に流下する。遺物は弥生土器、土師器、亀山焼などが出土している。時期は14～15世紀代と考えられる。

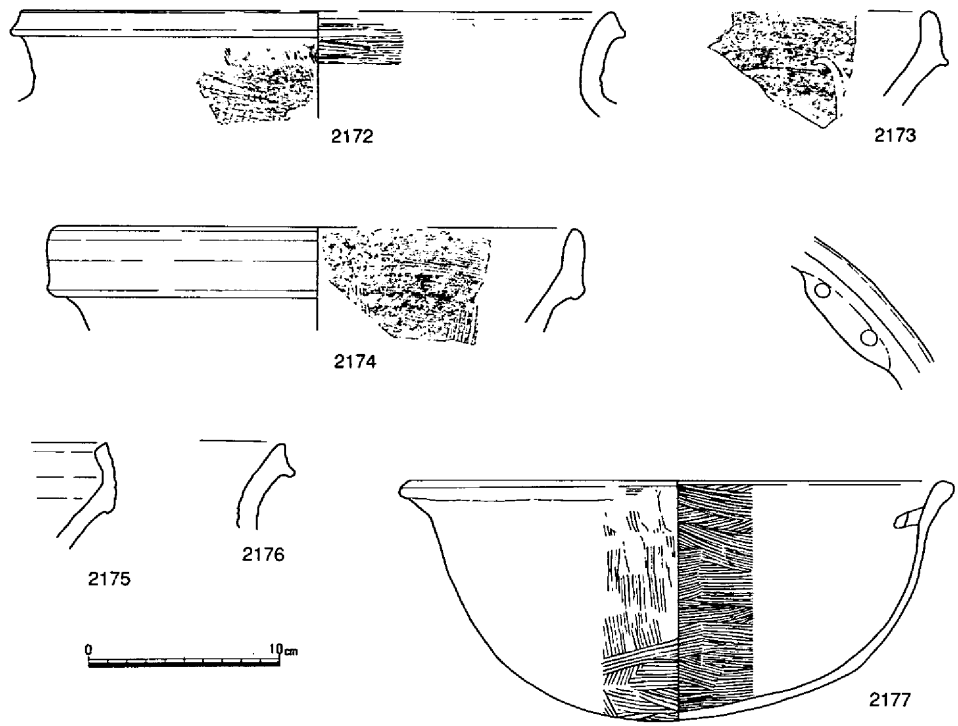
溝42（第424・484図）

溝40の東で検出された、南北に走行する溝である。溝の幅は約50cm、深さ約20cmを測り、断面はＵ字形を呈する。底面高はほぼ同じであるため、流れる方向は不明である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、亀山焼などの細片と鉄

滓が出土している。時期は14世紀代と考えられる。（松本）



第485図　溝40出土遺物（1/4）



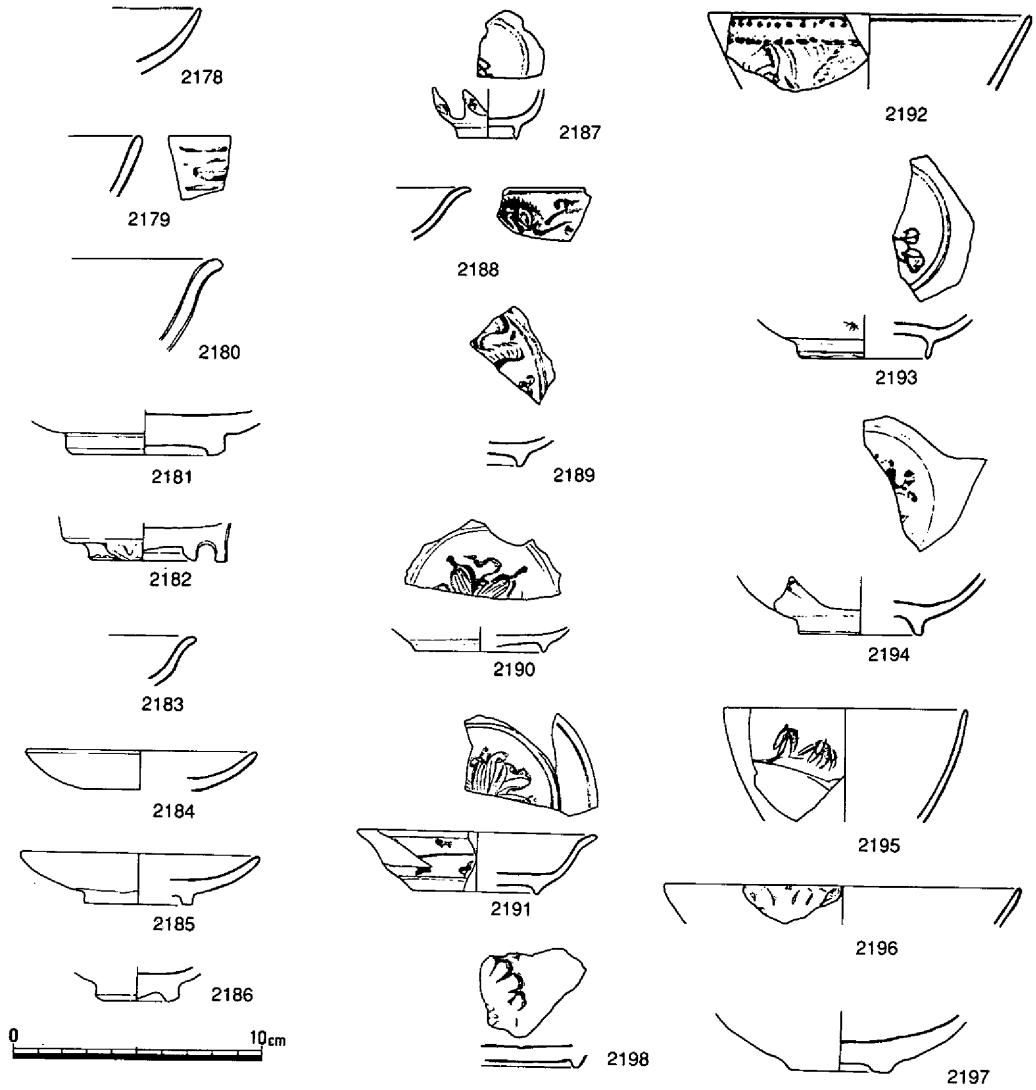
第486図　溝40・41出土遺物（1/4）

(6) 包含層遺物（第487～491図、写真図版174）

陶磁器は大小400片余りが出土しており、時期的には12～13世紀代の青磁椀2181から、17～18世紀前半の肥前染付碗2195まであり、大半は14～16世紀代のもので、中でも16世紀代のものが多く出土した。2178は明？の皿で、2179～2181は明前半の青磁椀で2179は雷文体をもつ。2182は14世紀末～16世紀前半の青磁香炉である。2183は白磁皿で、2184～2186は16世紀代のやや黄みがかった白磁小皿である。2187の染付小杯には唐草文が、15末～16世紀前半の染付皿2188・2189には玉取り獅子文が描かれている。他に16世紀代の染付皿2190～碗2194などがある。日本製の陶磁器は2195の他、肥前染付碗2196、皿2197、瀬戸美濃の灰釉陶器2198などがある。

土製品は備前焼、亀山焼を二次転用した円盤Ｃ154～161および硯Ｃ162が出土している。硯は４Ｂａ区から出土したもので淡茶灰色を呈し、よく焼き締まっている。残存する陸は後世の損傷もあるが荒れており、あまり使用されたようにはない。幅4.74cm、高さ1.5cmを測る。

一方、石製品でも６Ｂａ区から硯Ｓ152が出土している。海付近を残す破片ではあるが、残存する側面は丁寧に研ぎ出されている。溝30出土のＳ151と同様の頁岩製で、幅も5.07cmとほとんど変わらない規格のものである。石製品には他に石臼Ｓ153および、時期判定は困難であ

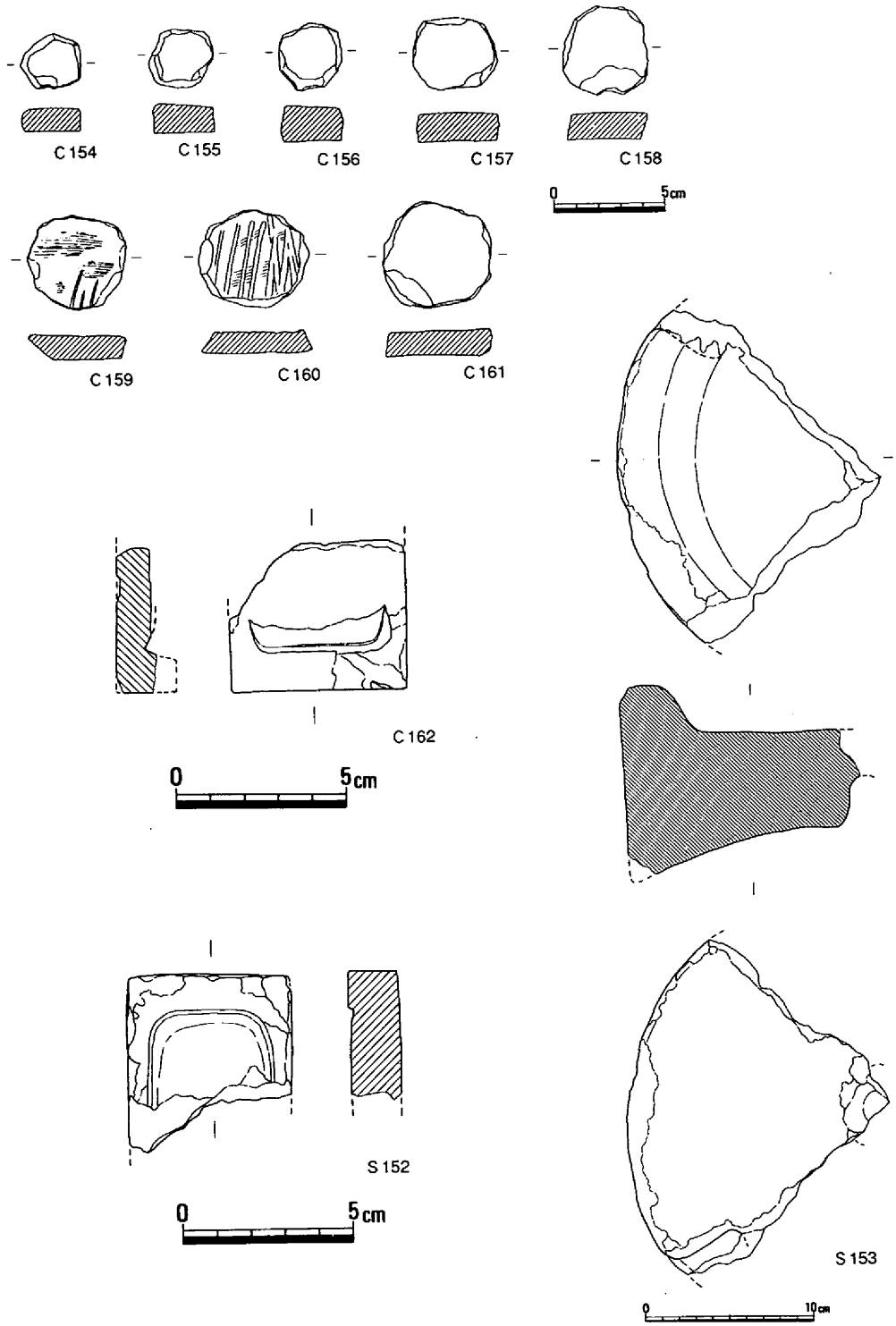


第487図　包含層出土遺物①（1/3）

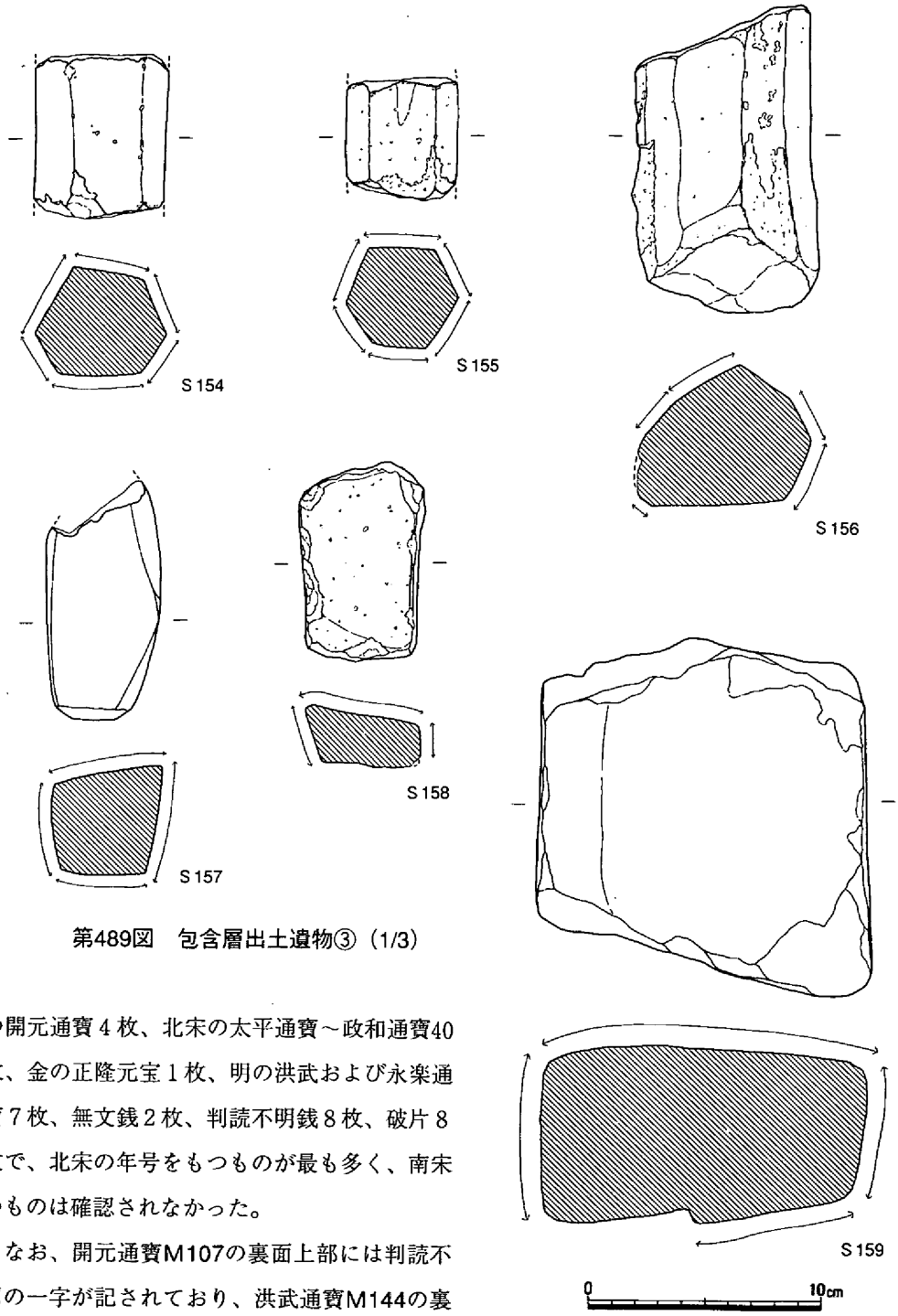
るが砥石Ｓ154～159などが出土している。

金属製品は釘40本余りをはじめ小破片を含め約150点出土しているが、形状の不明ものも多く、当項ではその一部を記載するにとどめた。鉄鏃M93～95、鉛の鉄砲玉M96・97、M100は用途不明の銅製品、止め金具M101、M102は小札？、鋤先M106などがある。なお、M105は鋳物のようである。

銭貨は総数70枚出土しており、そのうち、遺構に伴うものは溝10から無文銭、溝29から判読不明の私鋳銭が各１枚あり、残り68枚が包含層からのものである。総数の内訳は唐の年号をも



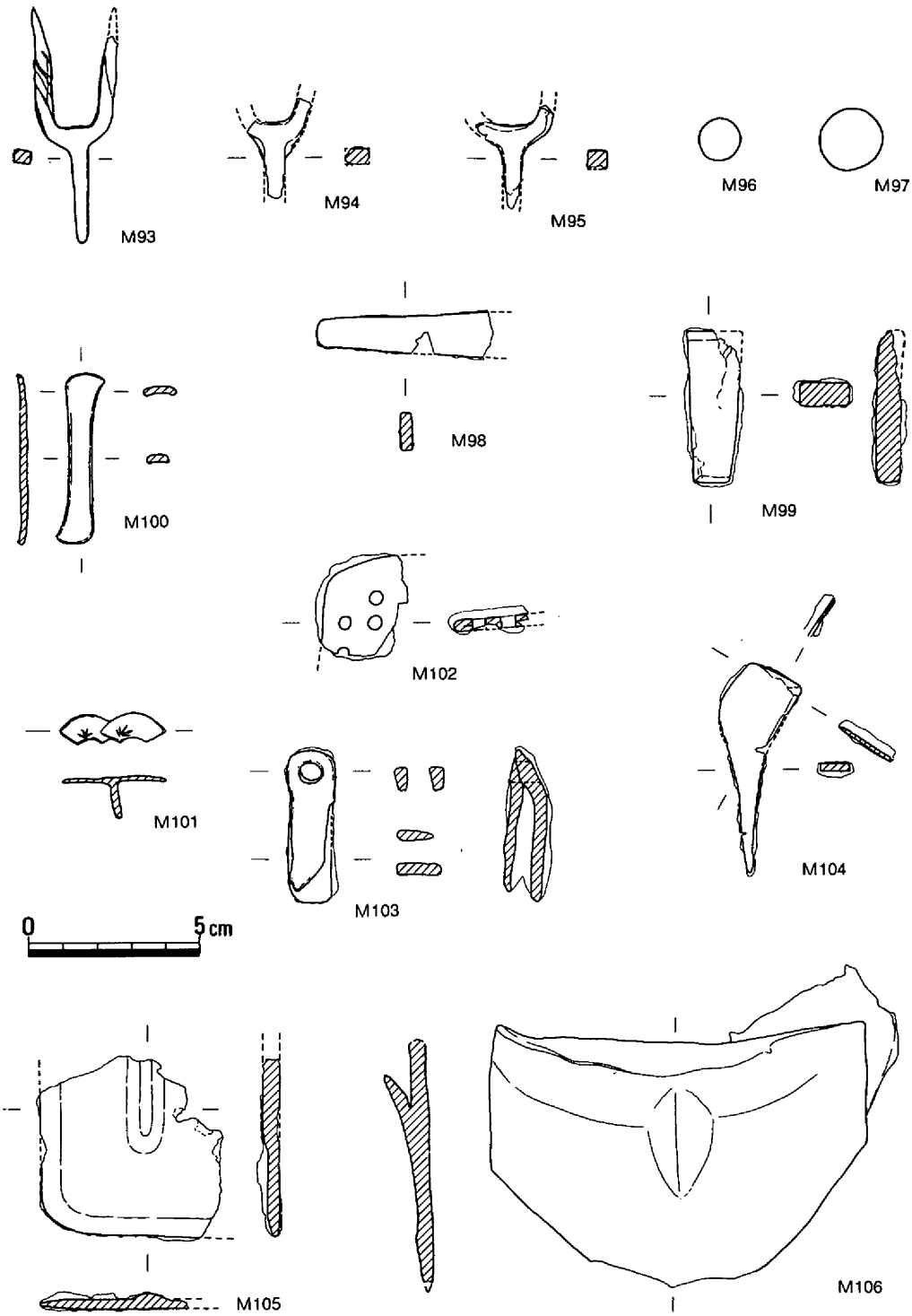
第488図　包含層出土遺物②（1/3・1/2・1/4）



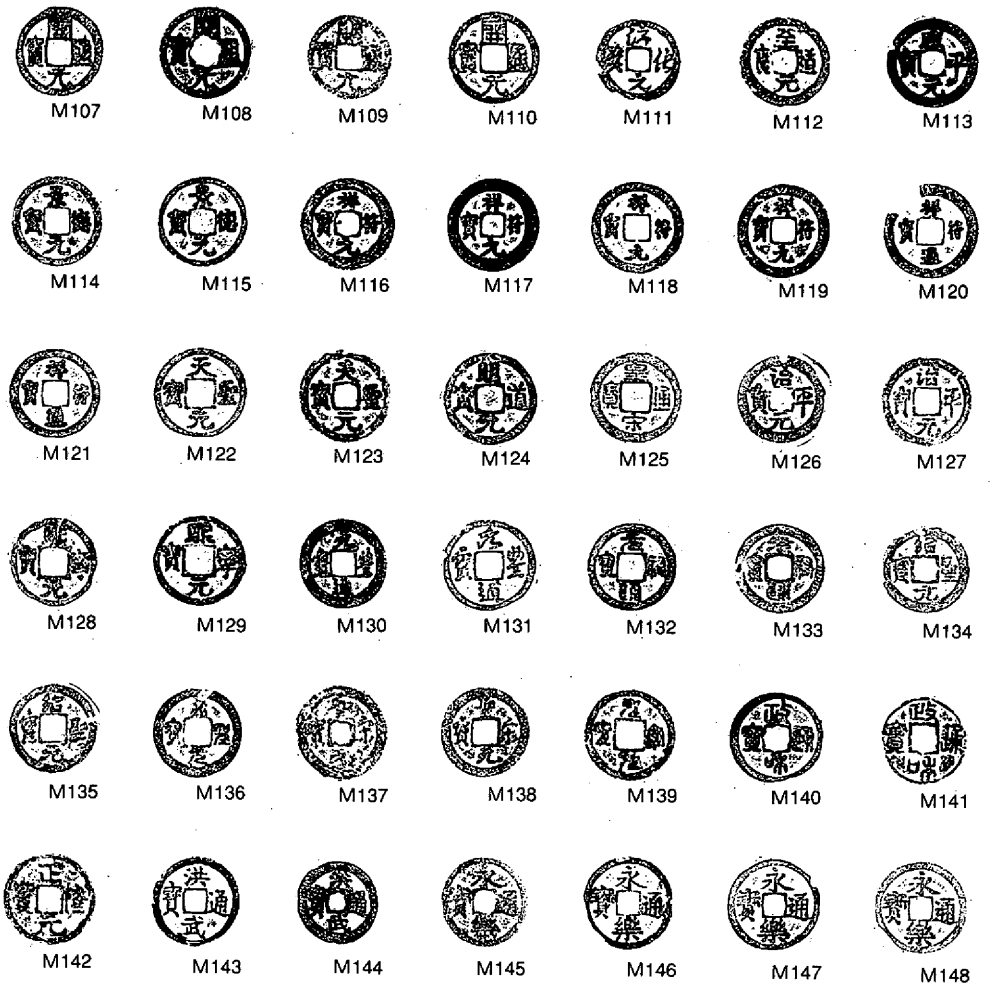
第489図　包含層出土遺物③（1/3）

つ開元通寶４枚、北宋の太平通寶～政和通寶40枚、金の正隆元宝１枚、明の洪武および永楽通寶７枚、無文銭２枚、判読不明銭８枚、破片８枚で、北宋の年号をもつものが最も多く、南宋のものは確認されなかった。

なお、開元通寶M107の裏面上部には判読不明の一字が記されており、洪武通寶M144の裏面右側に「錢」と記されており、今後の私鋳銭の検討を待ちたい。



第490図　包含層出土遺物④（1/2）



第491図　包含層出土遺物⑤（1/2）

最後に金属生産にかかる関連遺物の補足をしておく。

鉄滓は主に古墳時代後半以降の遺構から出土しており、溝２からは約４kgにおよぶ量が出土している。これを除き鉄滓は中世溝や包含層から約20kgが出土をしている。時期判定は難しいものの、鍛冶関連施設の所在したことは明らかで、他に輔の羽口や口径約10cmの坩堝と思われるものも数点も出土していることを記しておく。　（江見）

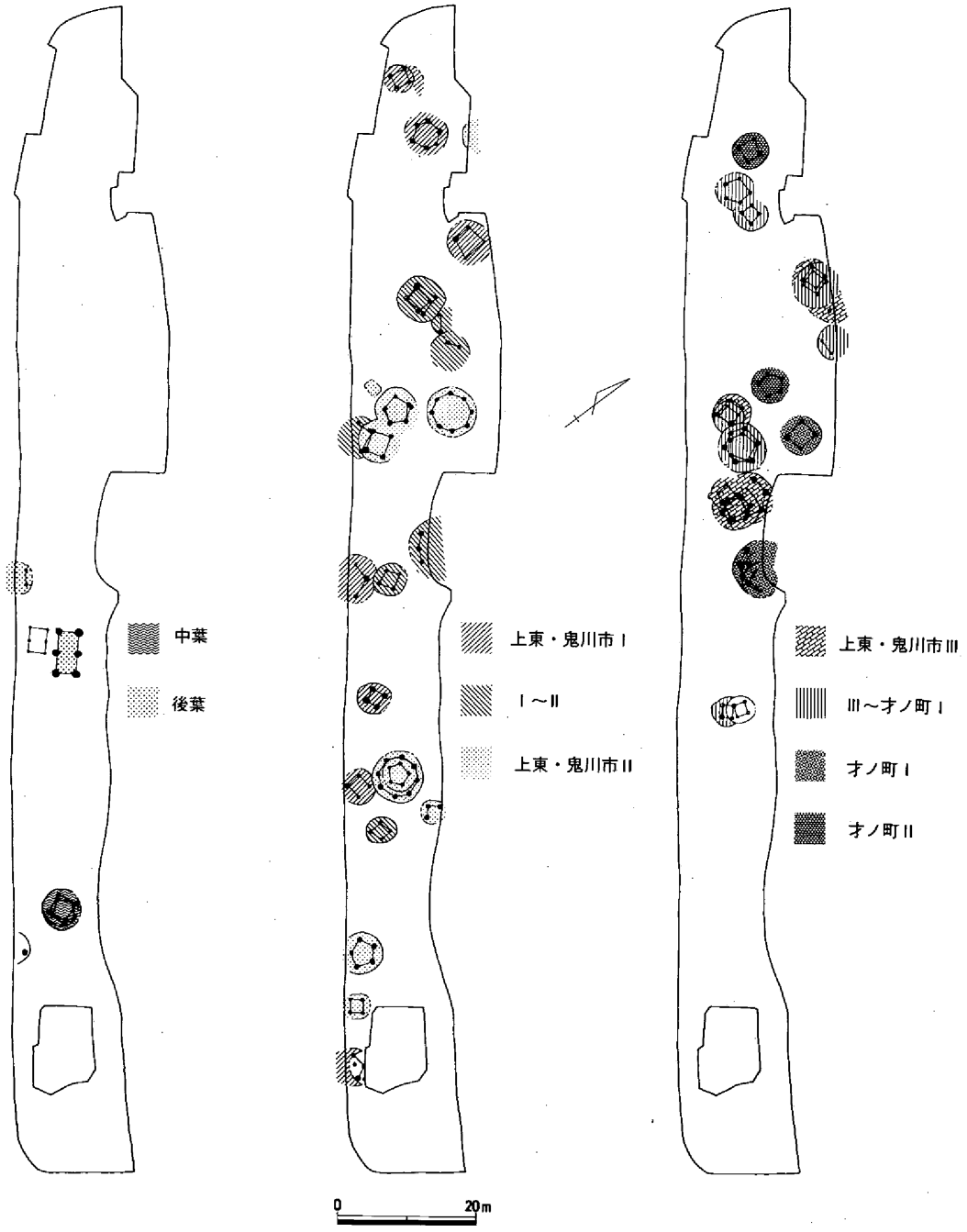
第7節　結　　語

今回の足守川矢部南向遺跡の調査では竪穴住居74軒をはじめ遺構総数約350が検出され、遺物総数約1700箱が出土し、それらを弥生時代中期から中世以降の6節に分け、各遺構・遺物の概略を記述してきた。各時期の遺構は切り合い関係をもつ遺構が多く、このことは調査において切り合い関係を明確に捉え、遺構の埋没状況および遺物の出土状況を微細に記録することにより、より詳細な時代の実態が遺構・遺物を通して理解されることは自明のことであった。しかしながら、旧堤防除去後の調査開始にあって、まず検出された遺構は中世を中心とした約2000個の柱穴群であり、古墳時代後半の残存率の低い住居跡であった。そして、これらとともにそれ以前の遺構群は間層を挟まないままに上下にも著しく重複を繰り返し、調査区ほぼ全域に連綿と続く状況を呈した。このため遺構の所在の判断から供伴遺物の確定に至る作業は予想をはるかに上回る困難なものと化し、調査上最も有効な新旧関係を知り得る機会を十分に捉えるには至らなかった。一方、当遺跡は第1章で記した如く遺跡の範囲は約6万㎡と推定され、微高地中央を貫通する今回の調査範囲はその約1／10程と細長くて狭い、さながら丼鉢に割り箸を一本渡した程度のもので、この調査結果をもって集落全体を想定・復原することは「木を見て森を見ず」の如く結末が予測されるものの、以下、いくつかの遺構・遺物において若干の所見を加えることで結語としたい。

遺構

住居跡は図に示すように各時代ごとの全体図にさらに新旧の判る範囲で時期ごとに区別をした。なお、上東・鬼川市Ⅰ～ⅡやⅢ～才の町Ⅰのように～を付しているか所は結果的に中間の時期に当たる場合もあるであろうが、ここでは単に新旧の土器が混合している状況を示しており、基本的には新相の要素をもつ時期に含むべきと思われる。しかしながら単純時期と捉えられる住居に返って混乱が生じる恐れから敢えて区別をしたものである。

弥生時代後期の竪穴住居は46軒検出され、平面形態は一部を除き円形を基本として建てられている。主柱は不明なものを除き4～6・8本で、7本からなるものは確認されなかった。床面積は最小10.8㎡（竪穴住居25）から最大38.4㎡（竪穴住居22）まであり、約11～25㎡の床面規模をもつものに集中する。また、床面積に対し主柱は増加する傾向があり、竪穴住居44は床推定面積が18.4→23.2→28.3㎡と拡張された住居で、主柱は後2者間で4→6本に建て替えられる。しかし一方で、竪穴住居10のように4本の主柱によって17.8→29.9㎡に拡張され、主柱6本の竪穴住居44・7を上回る面積をもつものや、床面積から見れば本来4本で事足りると思われるものの主柱5本の竪穴住居22B（16.4㎡）・竪穴住居43（14.5㎡）などがあり、一概に面積の増加と主柱の関係は比例せず、特に主柱5本の竪穴住居は建築部材や工法からではなく、



第492図　住居変遷図①（1/1000）

別の要因を考える必要があるのではないだろうか。

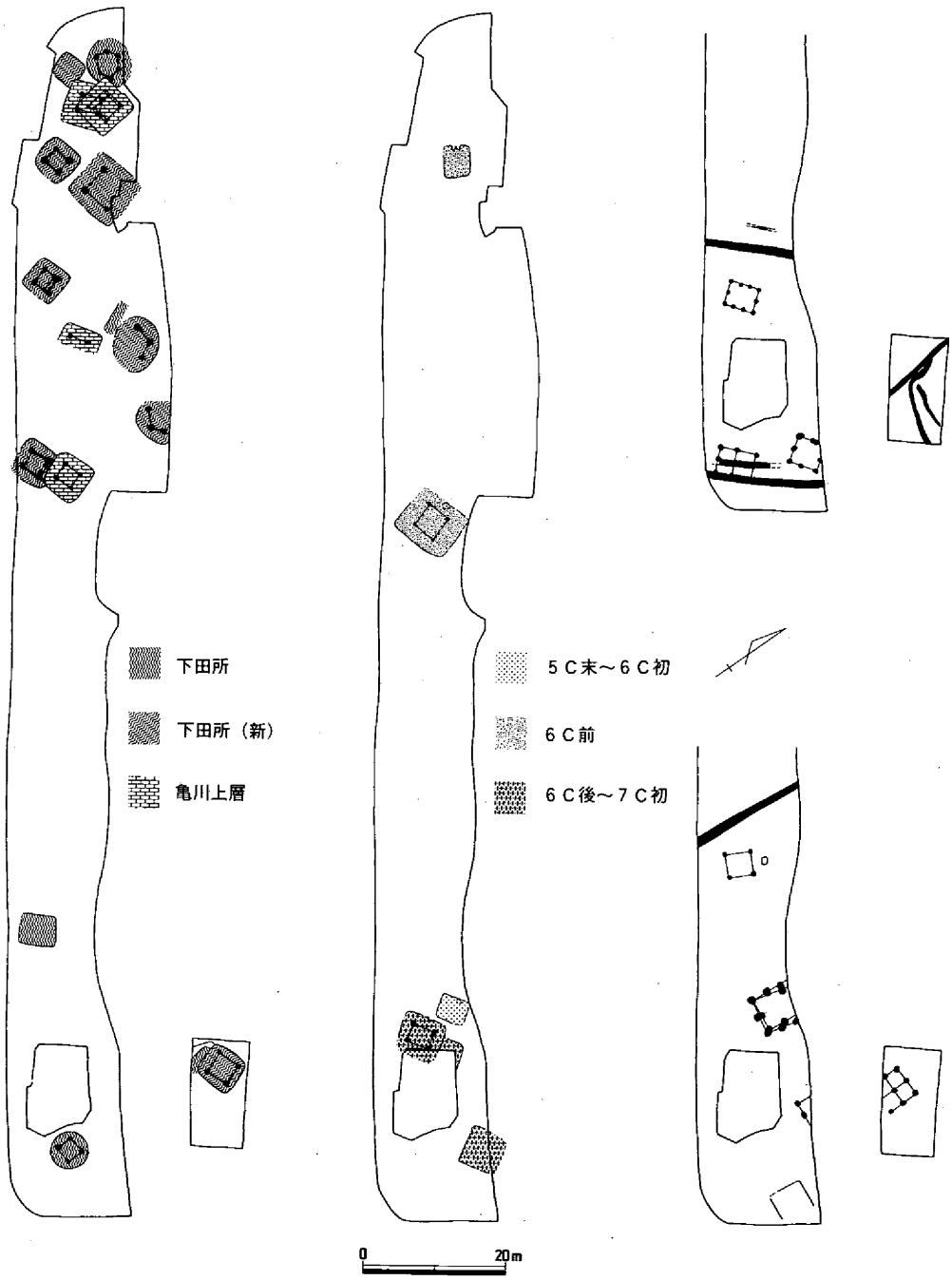
なお、平面形態隅丸長方形を呈す竪穴住居が２軒検出されている。主柱は確認されなかったものの竪穴住居17には壁体溝が巡り、竪穴住居36には竪穴住居と同様の貼床が検出されたため、いずれも竪穴住居として扱ったが、床面積が2.8㎡および6.4㎡と極端に狭く、今後の事例を待ちたい。

一方、住居の施設として中央穴は普遍的に認められていたが、今回の調査では新たに中央穴の周囲に低く土手状に土を盛り上げ、平面楕円形、断面浅い凹地状を呈す部分の所在する竪穴住居がいくつか検出されている。土手状に巡る箇所は主に中央穴からその南側にかけて検出される場合が多く、便宜上今回調査では中央穴を含めた部分を中央施設と仮称した。楕円形に形成された凹地部分には炭層の堆積がよく見られ、いくつかのそれを採取し洗浄を行ってみたが、肉眼では何ら遺物を確認することはできなかった。これと同様の施設は百間川遺跡群などでいくつか見られるが、当遺跡群のように明瞭に検出された例はあまりない。当遺跡での中央施設検出例は後期全般を通じて見られ、中央穴から中央施設確認の変化は中央穴のみならず凹地状部分とをセットとして、その機能および用途などを探る事が必要であるとともに、中央施設の占める範囲から、一住居内に居住し得る人数の検討にも考慮する必要があろう。

古墳時代前半の竪穴住居は平面形態が弥生時代以来の円形および、新たに隅丸方形を基本とする２者があり、前者は下田所併行期まで継続し、亀川上層期のものは確認されなかった。一方、後者においても下田所併行期には出現しており、また、これら隅丸方形を呈す住居の床面積が平均約23㎡であるのに対し、下田所併行期には推定ではあるが床面積約54㎡を測る住居（竪穴住居56）が検出されたり、規模はやや小さいものの鉄剣・玉類が供伴した亀川上層併行期の竪穴住居51のように、ベッド周辺床下に小礫を砂とともに押し固める地下構造をもつ、他の住居とは様相を異にしているものなどが見られた。

古代の建物については遺物からの時期決定は困難なものであった。しかしながら遺構の切り合い関係から、竪穴住居72→掘立柱建物６→掘立柱建物４・５となり、掘立柱建物６と棟方向を揃える掘立柱建物８・９が導き出された。これら建物の柱穴掘り方は掘立柱建物６は円形で、掘立柱建物８・９は方形を意識しているようでもあるがいびつな掘り方を呈すものであった。なお、これら建物群の棟方向とほぼ同じにする溝が検出されている。建物群の北側に大小２条、南側に一部接して同様２条検出され、出土遺物から見れば、６世紀末の南側溝→７世紀代の北側溝に移動しているようであるが、いずれにせよ、これらの溝は建物群を画するものと考えられる。

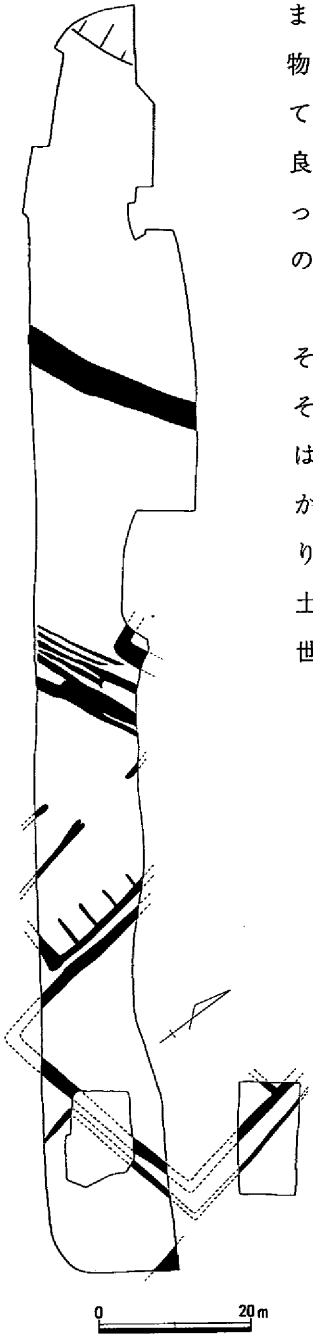
一方、掘立柱建物４・５の段階には方位に沿って建物が建てられており、これらと同様に棟方向をそろえる掘立柱建物７および10が東に位置し、さらにその南には工房的な様相が窺える



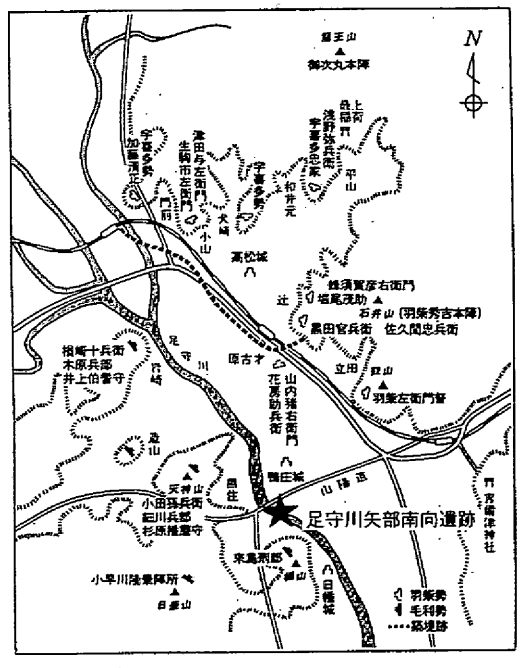
第493図　住居変遷図②（1/1000）

竪穴住居76が所在する。これら建物群の西には棟方向と平行する区画溝が流走しており、出土した遺物の年代観は下っても７世紀前半までに収まると考えられるものであった。また、同時期の包含層遺物として硯が発見されていることなどから、公的施設の一端と考えている。なお、上記建物群は調査当時、包含層中から発見された奈良時代遺物をもとに８世紀代の建物と漠然と予測していたものであったが、当該時期の遺物は全体からすれば極めて少なく、区画溝との関連からも７世紀代に遡って建てられたものと理解している。

中世の遺構で特筆されるのは大小合わせて34条に上る溝である。その内のいくつかは同一溝と推定されるものや合流するものなど、その数は減少するものの、中でも調査区南半部から検出された溝群は整然と方位に沿って屋敷地を区画するものであった。これらの溝からは備前焼をはじめ亀山焼・土師質土器・磁器などが出土しており、そしてその特徴は和気天神山城の関連遺物[1]や岡山城二の丸跡出土の最小層建物[2]とほぼ共通しており、そこから得られる年代観は16世紀後半であった。



第494図　中世溝（1/1000）



第495図　羽柴勢・毛利勢布陣図（註３文献より）

一方、当遺跡の北方約３㎞には天正10（1582）年、秀吉により水攻めされた高松城が所在し、その戦乱を記した『備中兵乱記』には、遺跡周辺にも羽柴・毛利双方の軍勢が割拠・攻伐したことが記されている。これを基に加原耕作氏は両軍の陣配置を復原[3]しており、南に位置する毛利軍の陣の一つである甫崎天神山城は、近年の発掘調査[4]により、当時期の郭や建物の一端をが明らかにされ、これを裏付けた。甫崎天神山城の南東には鴨庄城をはじめ、日幡城・楯山などに毛利軍が布陣しており、両軍の攻防に当遺跡が巻き込まれたと想像することは容易で、16世紀後半代の遺物群とともに焼けた角礫が多く出土した区画溝群は、この期に一気に埋没したものと推定される。なお、当遺跡は楯山から見下ろす位置にあたる。『備中兵乱記』には長州藪の地名が３か所に記載されており、その内２か所には楯山とともに記されている。実数の真偽は別として、来島刑部は3000余を率いて丘陵上の楯山と麓の長州藪に陣を布いており、今回の調査箇所がこの長州藪の一端にあたると推定すれば、遺構の在り方や溝出土の硯、包含層出土の鉄砲玉・鏃などの出土根拠がより明確に理解されるのではなかろうか。

土壙は201基検出され、中でも弥生時代後期の袋状土壙および長方形土壙は今まで県南の沖積地にあって確認されなかった遺構である。

袋状土壙は33基検出され、供伴遺物から大半が上東・鬼川市Ⅰ併行期のものであったが、鬼川市Ⅱにも見られ、Ⅲ併行期（土壙74）で終了している。平面形態は円形・楕円形・不整円形と様々であるが、いずれにせよ円形を基本にしているようである。床は平坦なものから中央部がやや高く、壁に向かってわずかに下がるもの、壁際が溝状にさらに深く下げられているものなどがある。床面の規模は計測できた範囲では最小0.63㎡（土壙39）～最大2.77㎡（土壙52）、平均1.4㎡を測り、１～1.5㎡の小規模なものが多いものの、２～2.5㎡の中規模のものもいくつか見られた。

次に、袋状土壙の大半を検出した後期前半の竪穴住居との関連を見たい。竪穴住居の床面は３Ｂ区の竪穴住居９が最も高い海抜2.9ｍを示し、８Ｂ区の竪穴住居27のそれは海抜1.9ｍであった。２Ｂ区の竪穴住居群は竪穴住居９程の高さは示さないものの、調査区全体を見れば２Ｂ～９Ｂ区の約140ｍの間で住居床面は、多少上下するものの徐々に下がっており、その高低差は約１ｍであった。また、袋状土壙の床面は２Ｂ区の土壙６が最も高い海抜2.5ｍを示し、８Ｂ区土壙52のそれは海抜1.44ｍで、その高低差は住居と同様に約１ｍを測るとともに、土壙群の床面高においても２Ｂ→９Ｂに向かい徐々に下がる傾向が確認された。そこで袋状土壙に近接する竪穴住居床面との比較を行えば、袋状土壙は住居床面とほぼ同一高を示すもの（土壙６・24・29・45・49・50）から、住居床面より袋状土壙床面が約50㎝低いもの（土壙14・16・18・33・41・52）などがあり、ばらつきのある竪穴住居床面と最も高い差を示す７Ｂ区の竪穴住居22Ａと土壙41とにおいても高低差は85㎝で、１ｍを越えるものは確認されなかった。

一方、長方形土壙においても平面形態が長方形・方形・台形・楕円形など様々であるが、これらの土壙はいずれも壁が垂直に近い傾斜を示し、底部が水平な形状を示す。供伴遺物から後期後半の上東・鬼川市Ⅲ併行期から見られ、古墳時代の遺構としては確認されなかったものである。底部床面の規模は計測できた範囲内では最小0.88㎡（土壙78）～最大5.06㎡（土壙72）、平均1.9㎡を測り、１㎡前後の小規模なものに加え、２～3.5・5.06㎡を測る大・中規模のものもいくつか見られた。

次に袋状土壙と同様の方法で後期後半の竪穴住居との関連を見れば、２Ｂ区竪穴住居30床面は海抜2.7m、６Ｂ区竪穴住居50のそれは海抜2.35mを測り、その間約80mで40cm余りの高低差が確認された。また、長方形土壙の床面と比較してみれば、住居床面よりやや高いもの（土壙57・70・77・87）、ほぼ同一高のもの（土壙64・66・88）、約50cmほど深いもの（土壙60・62）約１mの高低差をもつ土壙72などがあるが、１mを越えるものは袋状土壙と同様に確認されなかった。このように、長方形土壙は袋状土壙の規模および住居との床面比において、長方形土壙が袋状土壙に対してやや浅い傾向が窺われた。

ここで周辺の遺跡に目をやれば、当遺跡から約５㎞南の丘陵上に位置する奥坂遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居とともに袋状土壙が多数検出されている。調査にあたった高畑知功氏によると[5]奥・後・Ⅲ期に８基、奥・後・Ⅳ期に14基、奥・古・Ⅰ期に１基の総数23基を数え、Ⅲ期の床面積は約1.05～3.23㎡を測り、Ⅳ期は深いものが多くなり、それに比例して床面積も増加しており、大・中規模のものが定着する。そして奥・古・Ⅰ期では居住地区の移動、あるいは激減を予想された。足守川矢部南向遺跡のそれとは時期がずれるものの、Ⅲ期の床面規模は１～1.5㎡の小規模なものが多く見られ、Ⅳ期のそれは1.5～２㎡のものが多く、中には3.5㎡を測るものもあり、古墳時代のそれは約３㎡の規模をもつものであった。

以上のように、奥坂遺跡では古墳時代にまで袋状土壙が所在するものの、沖積地においては後期前半までに見られた袋状土壙は後期後半には袋状土壙と同一機能をもつ土壙として長方形土壙に移行すると理解すれば、奥坂遺跡で窺えた袋状土壙床面の大型化傾向と合致するのではないだろうか。

なお、当遺跡からは弥生時代後期前半の井戸が１基のみ検出されている。袋状土壙の機能が貯蔵穴と想定した場合、調査地点は地下水位の低い安定した場合であったことが想像され、このため当遺跡の井戸も海抜０m付近でも底に達し得ない深さであった。これまで県南の沖積地からは豊富な土器とともに井戸が多数検出されている。特に広範に調査を実施している百間川遺跡群からは150基を越える弥生～古墳時代の井戸が検出されている。しかしながら袋状土壙や長方形土壙と考えられるものの検出はいまだに見られず、鹿田遺跡、上東遺跡においても同

様である。このことは同じ沖積地にあっても調査地点の相違によることが自明で、当遺跡からも調査区外の適地には多数の井戸が所在するであろうと想像されるが、井戸の検討を加えた中野雅美氏によれば[6]、百間川遺跡群では古墳時代住居1軒に対し井戸1.5基の比率が示されるほどに多くの井戸が検出されており、このような在り方は、本来、水の必要な丘陵地からは当然のことながら発見されず、逆に水の豊富な沖積地にあってあまりに多く、袋状土壙・長方形土壙のみならず井戸をも含め、再検討していく必要があるように思われる。

遺物

遺物は約1700箱の土器とともに石製品約300点、土製品約260点、金属製品約450点が出土した。本報告では類似する遺物については細かく分類し、代表させた遺物での説明を行うようなことはせず、旧態依然として一括性の高い遺物から、各遺構時期の捉えられる遺物をできるだけ掲載する方法をとり実施してきた。しかしながら、著しく重複する遺構にあって、供伴関係を捉えられたものは全体からすれば少なく、遺物の掲載はその約半分以下に留まり、数多くの未掲載遺物を残した。

今調査において特に注目されるものは小銅鐸といくつかの土器群である。小銅鐸についてはかつて資料紹介しており[7]、それ以降、県下では総社市横寺遺跡[8]から、そして全国的にもいくつか報告されていたものの、その時点における認識との隔たりは基本的には変わらないことから割愛し、以下、土器について若干の所見を述べて項を閉じたい。

弥生時代後期前半の土器は比較的まとまった資料が袋状土壙から出土している。中でも土壙32・33の高杯は、かつて坪井清足氏が紹介した上東資料[9]と同様の形態をもつもので、柳瀬昭彦氏が上東鬼川市Ⅱ式の設定[10]の際、古相を呈す一群と理解していたものであったが、当時断片的には見られたものの、他の器種との供伴関係が十分につかめなかったものである。当遺跡群からは諸処に見られ、窪木薬師遺跡の土器溜り[11]からも出土するなどその例は増しており、備前との併行関係は既に高橋護氏が指摘する[12]如く、7－d（上東式古4）期の百間川原尾島遺跡の井戸16・17を中心にするものとの併行関係が窺えた。ただし、高杯のみについて言えば、口縁端部が肥厚するものから外方へ引き出される上東・鬼川市Ⅰのものと今回出土の口縁にはその差が大きく、今後の課題として残される。

弥生時代後期後半の竪穴住居37上層および土壙72からは大量の土器とともに、同一個体と考えられる特殊器台の一部が各々の遺構から出土している。頸部に沈線を巡らす長頸壺をはじめ、上部に大きく拡張する口縁部をもつものなど上東・鬼川市Ⅲの影響を残すものの、全体的には才ノ町Ⅰ期の範疇で捉えられるもので、時期的特徴を顕著に表すと考えられる高杯の在り方から察すれば、646・647など上東・鬼川市Ⅲ期に遡るものから986・987など才ノ町Ⅱ期に近いもの、そして、661・663の古墳時代前半にまで下がるものも一部含まれていた。

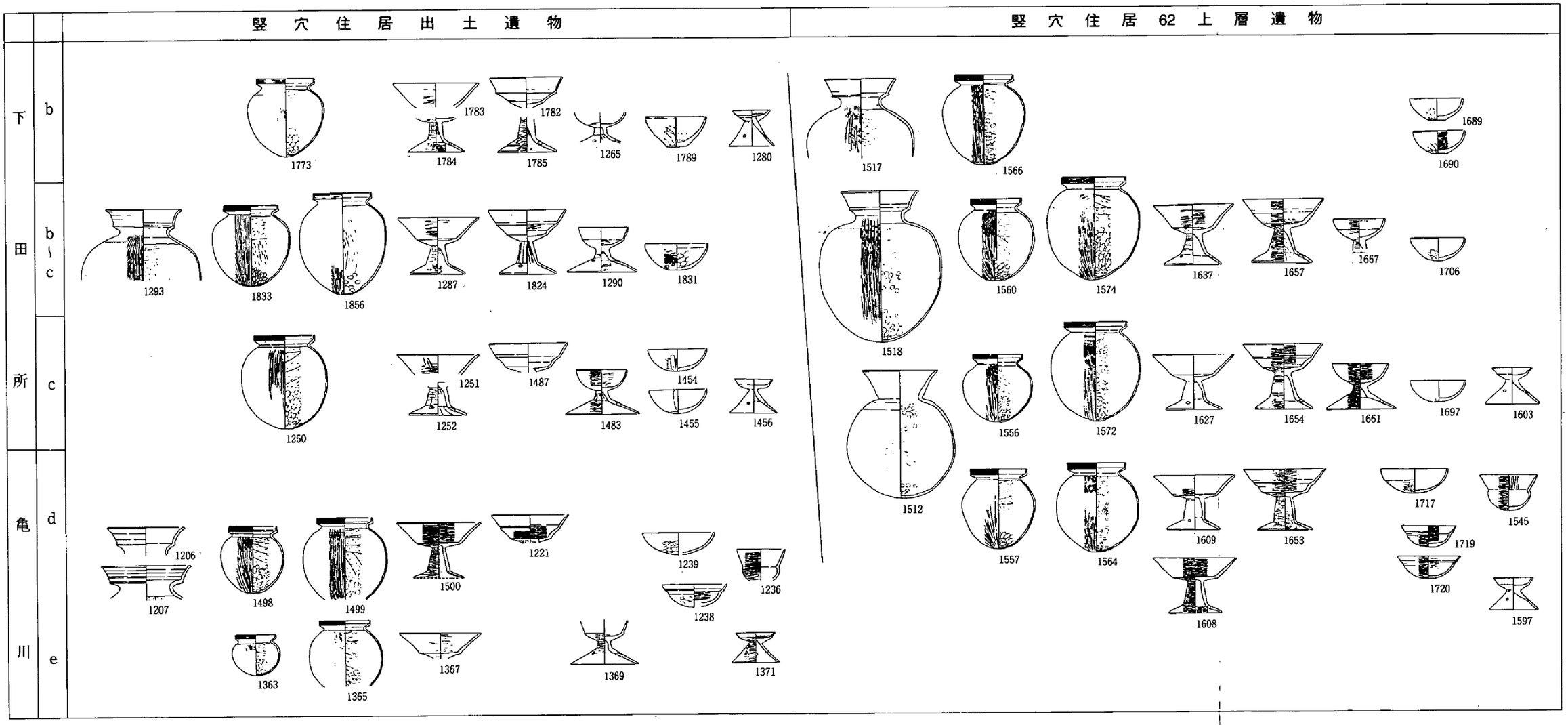
また、特殊器台とともに集落跡からの出土例を見ない壺類に586～591、887・888などがある。口縁端部を上方に大きく拡張し、外面に板状あるいは櫛状工具などにより条線を巡らすもので、これに類似するものは当遺跡の南西丘陵に所在する女男岩遺跡C溝から出土している[03]。女男岩のそれと比較すればやや後出的な印象をもつものであるが、ほぼその年代観は一致しており、特殊器台がこれら壺類と同時期と考えるならば、オノ町期の中で捉えられるものであろう。

古墳時代前半の土器は竪穴住居を中心に比較的良好な資料が出土しており、住居の切り合いを基に、高橋氏の細分[00]を参考に表を作成した。なお、表の左には住居出土土器の流れを、右には竪穴住居62上層遺物を掲げており、また、10－ａ期の土器はいくつか見られるものの、器種構成を十分に示し得るほどの資料はなく割愛した。

竪穴住居遺物の検討から10－ｂ～ｄ・ｅ期までの土器の流れを確認するとともに、高橋氏のｂ・ｃ期の間に、過渡期的な形態を示す一群を抽出し得た。氏の示されたｂ期高杯の形態は、脚柱部内面上部が絞りによって中実を呈すものであり、ｃ期のそれはやや太く、器壁をほぼ均一にするとともに中空を呈すものであった。これらｂ・ｃ期のものに対し、ｂ～ｃ期のそれはｂ期同様に細く絞られているものの明瞭な中実を呈さず、また、器壁は均一を示さず、上部から下方に向かって厚さを減じている一群である。これら高杯を表に組み込み変化を追ってみると、杯部椀状を呈すａ類においては相違を見いだすことは困難であるが、口縁が斜め外方に延びるｂ類および有段のｃ類は、杯部が深く杯底部が狭いものから、杯部が浅く杯底部が広いものへと推移することが明らかとなった。また、ｂ～ｃ間に見られた甕ｂはｂ期のものとさほど変化を示していないが、甕は倒卵形を呈し胴部がやや長くなるものに加え、やや小型のものに底部は残すものの胴部長に対し最大径の比率がやや高い、球形化の兆しが現れてくるようで、ｃ期にはやや大型の甕にも球形化を示すものが所在し、ｄ期においては良好な資料には恵まれなかったものの、高橋氏の指標とされる胴部下膨れの形態をもつものはほとんど認められなかった。

次に、上記遺物を指標に表右に掲げた竪穴住居62上層遺物をみてみれば、ｂ～ｄ期に至る遺物の所在することが明らかとなった。中でも特に注目されるのは甕ｂの在り方である。ｃ期には竪穴住居で確認されたと同様に、高橋氏のｃ期とされる胴部が直線的に延びるものは少なく、胴部最大径がほぼ中央に位置し、球形化傾向を示すものが大半を占めた。また、ｄ期の指標である外面下半を削る小型鉢や有段鉢、二重口縁が直線的に延びつつある傾向をもつ壺・甕などが所在する中で、この土器溜りにおいても明瞭に胴部下膨れの形態をもつ甕類は確認されなかった。

以上のように、甕ｂは当遺跡においてはｃ期には球形化を示すものが主体を占め、ｄ期併行と考える甕においても下膨れの甕が顕著でないことが明らかとなり、高橋氏のｃ・ｄ期の甕の様相とやや相違する形態を示した。ｃ・ｄ期に球形化傾向を示す甕は当遺跡群のほか、上東遺



第496図　足守川矢部南向遺跡古墳時代前半の土器（1/12）

跡Ｈ－２、亀川上層遺物[15]、川入遺跡井戸302[16]などに見られ、また、ｄ期の下膨れの甕は備中南部では現在の所あまり例を見ず、わずかに確認できた足守川加茂Ａ遺跡竪穴住居21や、総社市金井戸新田遺跡Ｈ－４[17]ではｅ期の土器とともに出土している。これらわずかな例から推測すれば、少なくとも備中南部において甕ｂは、百間川遺跡など備前南部とは様相を異にしており、ｃ期に現れる球形化傾向は、ｄ期を通して認められ、備前南部に顕著に現れるｄ期の下膨れ甕は、備中南部ではやや遅れて出現する可能性があるのではないだろうか。また、調査時点で廃棄された時期にあまり隔たりがないと考えられた竪穴住居62上層遺物には、10期ｂ～ｄにまたがる遺物が見られた。このことは、これら３期の示す形態変化の時期幅は非常に短いものと推定され、このような前提が肯定されるとすれば、形式的には追認される高橋氏の編年案にあって、竪穴住居など個々の出土遺物を取り上げると、必ずしも一致するものばかりではなく、前後する遺物の混入する状況が多く見られたことも理解できるのではないだろうか。

当稿を成すにあたって高橋護氏をはじめ、平井泰男、伊藤晃、柳瀬昭彦の各氏からは貴重な御教示を種々賜った。記して感謝の意を表します。　（江見）

註

(1) 高畑知功「田治部氏屋敷址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67　岡山県教育委員会　1988
(2) 宇垣匡雅他「岡山城二の丸跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』78　岡山県教育委員会　1991
(3) 加原耕作編著『新釈備中兵乱記』山陽新聞社　1987
(4) 高畑知功他「奥坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会　1983
(5) 「甫崎天神山城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　岡山県教育委員会　1994
(6) 中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会　1988
(7) 江見正己「岡山県倉敷市足守川矢部南向遺跡出土の小銅鉾について『考古学雑誌』第73巻第４号　日本考古學會　1988年
(8) 武田恭彰「横寺遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』４　総社市教育委員会　1994
(9) 坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式時集成・資料編』　弥生式土器集成刊行会　1958
(10) 柳瀬昭彦「川入・上東遺跡出土の弥生式土器及び古式土師器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977
(11) 島崎　東他「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　岡山県教育委員会　1993
(12) 高橋　護「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究（上）』　山陽新聞社　1992
(13) 間壁忠彦他「女男岩遺跡」『倉敷考古館集報　第10号』　倉敷考古館　1974
(14) 高橋　護「土師器と須恵器　３中国・四国」『古墳時代の研究』第６巻　雄山閣出版株式会社　1991
(15) 「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　岡山県教育委員会　1974
(16) 「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　岡山県教育委員会　1974
(17) 「金井戸新田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』３　総社市教育委員会　1994

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川矢部南向遺跡

（本　　文）

１９９５年３月20日 印 刷
１９９５年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　岡 山 県 教 育 委 員 会
印刷　旭 総 合 印 刷 株 式 会 社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂A遺跡
足守川加茂B遺跡
足守川矢部南向遺跡

（表・付載・写真図版）

１９９５年３月

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂A遺跡
足守川加茂B遺跡
足守川矢部南向遺跡

（表・付載・写真図版）

１９９５年３月

岡山県教育委員会

足守川加茂 A 遺跡
足守川加茂 B 遺跡
足守川矢部南向遺跡
(表・付載・写真図版)

1．足守川加茂A遺跡遺構・遺物一覧

1　竪穴住居

弥生時代後期前半

遺構番号	地　区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出　土　遺　物	備　　考
1	第1調査区					38		2.40					

弥生時代後期後半

遺構番号	地　区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出　土　遺　物	備　　考
2	第1調査区	円形？	(2)			40		2.45					
3	第1調査区	円形？	(1)			35		2.50					
4	第1調査区					(40)		(2.50)					
5	第1調査区					32		2.75					
6	第1調査区					25		2.80					
7	第1調査区	円形	4	360	(310)	55		2.35	○				
8	第1調査区	円形	(1)	330	330	50		2.40					
9	第1調査区					30		2.55					
10	第1調査区	円形	4	430		40		2.30	○				
11	第1調査区	方形？				20		2.80					
12	第1調査区	隅丸方形？	(1)	350		15		2.30					
13	第2調査区					20		2.10					
14	第2調査区	隅丸？	(1)	(400)	(350)			2.25				線刻土器1	
15	第2調査区	隅丸？				45		2.05				銅鏃1	
16	第2調査区	(方形)				35		2.48					
17	第2調査区	隅丸(方形)				50		2.30				土製紡錘車1	
18	第2調査区	(隅丸方形)	(1)			25		2.22					
19	第2調査区	隅丸方形	(3)	545		25		2.26					
20	第2調査区					15		2.40					

古墳時代前半

遺構番号	地　区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出　土　遺　物	備　　考
21	第1調査区	隅丸方形	(1)	485		35		2.60				石杵2、砥石1、軽石1	
22	第1調査区	方形(？)	(1)	390		37		2.45	○			土製支脚1	
23	第1調査区	方形(？)	4 (2)	570		55		2.40		○		水晶多数	
24	第2調査区	方形(？)		400		50		2.30				土製紡錘車1	
25	第2調査区												床面のみ遺存
26	第2調査区	方形？		495		35		2.55				石杵1;土製支脚1	
27	第2調査区					60		2.40					
28	第2調査区	(円形)	(3)			45		2.50				管玉1	

足守川加茂A遺跡

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
29	第2調査区	(方形)	4 (2)			15		2.35				敲石1	
30	第2調査区	(円形)?	5 (4)			15		2.45				土製支脚、石杵他石製品	
31	第2調査区	方形	(2)			40		2.45					
32	第2調査区	方形	4 (3)	530		30		2.45				鉄器2	
33	第2調査区	(方形)	4	670		45		2.25	○	○			
34	第2調査区					26		2.00					
35	第2調査区					28		2.00					

2 土　壙

弥生時代後期前半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	第1調査区	楕円形	135	105	80		
2	第1調査区	隅丸長方形	(206)	(115)	50		
3	第2調査区	不定形	138	101	70		

弥生時代後期後半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
4	第1調査区	(円形)	(90)	82	30		
5	第1調査区	楕円形	63	52	72		
6	第2調査区	不定形	128	86	65		
7	第2調査区	不定形		90	15		
8	第2調査区	楕円形	105	68	50		
9	第2調査区		210		95	石器1、管玉1	貝層上層
10	第2調査区	楕円形?	90	70	50		
11	第2調査区	不定形?	80	70	30		
12	第2調査区	楕円形	(100)	80	50		
13	第2調査区	円形?	(80)	70	80		
14	第2調査区	方形?	(80)	(80)	50		
15	第2調査区	不定形	(168)	(67)	40		
16	第2調査区	隅丸長方形?		80	28		
17	第2調査区	楕円形	90	80	20		
18	第2調査区	楕円形?		110	30		

古墳時代前半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
19	第1調査区	長方形	125	40	20		
20	第1調査区	楕円形	120		34		
21	第1調査区	(長)楕円形	256	90	18		

遺構番号	地　区	平面形態	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備　考
22	第1調査区	楕円形	112	90	35	管玉1	
23	第1調査区	不定形	128	104	24	石製品1	
24	第2調査区	方形？	230		32		
25	第2調査区	(長)楕円形	126	56	14		
26	第2調査区	不定形	145	100	80		
27	第2調査区	不定形	120	40	18		
28	第2調査区	円形	80	80	18		
29	第2調査区	隅丸長方形	105	74	18		
30	第2調査区	方形？	135		40		
31	第2調査区	(円形)	100	80	25		
32	第2調査区	隅丸長方形		52	24		
33	第2調査区	楕円形	100	90	10		
34	第2調査区	不定形		88	20		
35	第2調査区	円形？	140	120	30		

古墳時代後半

遺構番号	地　区	平面形態	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備　考
36	第1調査区	楕円形	130	65	16		

中世

遺構番号	地　区	平面形態	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備　考
37	第1調査区	円形		66	23		
38	第1調査区	隅丸方形	68	65	6		
39	第1調査区	長楕円形	70		10		

3　石器・石製品

遺物番号	地　区	遺構名	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	材　質	特　徴
S1	第2調査区	包含層	スクレイパー	92.0	59.0	11.0	63.40	サヌカイト	
S2	第2調査区	包含層	石包丁	94.0	34.0	11.5	44.80	サヌカイト	
S3	第2調査区	竪穴住居19	敲石	118.0	64.5	23.0	227.70	花崗斑岩	
S4	第2調査区	竪穴住居19	石錘	80.0	75.0	59.5	502.90	細粒閃緑岩	
S5	第2調査区	竪穴住居19	石錘	82.0	71.0	61.0	464.90	花崗閃緑岩	
S6	第2調査区	土壙9	石鏃	114.0	35.5	11.0	62.10	サヌカイト	
S7	第2調査区	土壙9	管玉	31.0	8.5		4.39	碧玉	
S8	第2調査区	包含層	石錘	79.0	75.0	54.0		細粒閃緑岩	
S9	第2調査区	包含層	石錘	53.2	49.0	38.0	137.40	花崗岩	
S10	第2調査区	包含層	石錘	53.5	37.5	44.0	134.20	溶結凝灰岩	
S11	第2調査区	包含層	敲石	111.0	77.2	63.5	922.50	安山岩	
S12	第2調査区	包含層	敲石	117.0	104.0	62.0	1116.10	安山岩	
S13	第2調査区	包含層	敲石						

遺物番号	地　区	遺構名	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	材　質	特　徴
S14	第1調査区	包含層	敲石	107.8	54.0	34.5	277.30	流紋岩	
S15	第1調査区	包含層	磨製石包丁	88.0	52.0	10.0	70.30	古銅輝石安山岩	
S16	第2調査区	包含層	敲石	162.0	67.5	25.5	463.70	安山岩？	
S17	第1調査区	包含層	敲石	98.0	46.5	29.0	175.80	砂岩	
S18	第1調査区	包含層	敲石	145.0	62.5	46.0	352.90	流紋岩質凝灰岩？	
S19	第2調査区	包含層		171.0	106.5	102.0	1795.50	玄武岩？	
S20	第1調査区	包含層	磨製石包丁	55.5	45.0	9.0	34.40	変質流紋岩	
S21	第2調査区	包含層	砥石	81.0	77.5	60.0	(382.70)	流紋岩	
S22	第2調査区	包含層	砥石	78.0	39.3	22.2	98.80		
S23	第1調査区	包含層	砥石	43.0	22.2	20.0	18.40	凝灰岩	
S24	第1調査区	包含層	投弾	62.2	29.5	25.0	53.90	斑岩	
S25	第1調査区	竪穴住居21	石杵	184.0	131.0	64.0	2006.70	花崗岩	朱付着
S26	第1調査区	竪穴住居21	石杵	90.2	44.0	42.2	242.90	斑岩	朱付着
S27	第1調査区	竪穴住居21		61.0	68.0	4.8	51.90	軽石	
S28	第1調査区	竪穴住居21	砥石	107.8	40.2	23.5	117.20	凝灰岩	
S29	第2調査区	竪穴住居26	石杵	83.0	58.0	37.0	178.60	細粒閃緑岩	朱付着
S30	第2調査区	竪穴住居28	管玉	7.9	3.5		0.18	碧玉	
S31	第2調査区	竪穴住居29	敲石	69.0	56.2	53.4	175.90	流紋岩	
S32	第2調査区	竪穴住居30	砥石	81.0	56.0	31.0	256.10	流紋岩	
S33	第2調査区	竪穴住居30	石錘	111.0	100.2	47.5	977.10	花崗岩	
S34	第2調査区	竪穴住居30	石杵	123.0	113.0	70.0	1433.30	角閃石ヒン岩	
S35	第2調査区	竪穴住居30		84.0	68.0	57.0	72.60	軽石	
S36	第2調査区	土壙22	管玉	31.0	7.5		3.56	碧玉	
S37	第1調査区	土壙23		4.1	1.8	1.8			
S38	第2調査区	土器溜り	管玉	7.8	2.9		0.11	碧玉	
S39	第1調査区	包含層	(刀子状)	65.0	22.0	12.0	28.20		

4　金属器

遺物番号	地　区	遺構名	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	材　質	特　徴
M1	第2調査区	竪穴住居15	鏃	22.0	11.0	4.5	3.10	青銅	
M2	第2調査区	竪穴住居20	鏃	88.0	26.0	4.0	15.78	鉄	
M3	第2調査区	竪穴住居31	斧	40.0	20.0	8.0	10.91	鉄	袋状
M4	第2調査区	竪穴住居32	鎌		27.0	2.0	11.17	鉄	
M5	第2調査区	土器溜り		36.0	28.5	2.0	3.98	青銅	
M6	第2調査区	土器溜り	剣	27.1	32.5	3.0	154.83	鉄	
M7	第2調査区	包含層	鎌	115.0	34.5	2.0	42.82	鉄	

5　土製品

遺物番号	地　区	遺構名	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	特　徴
C1	第2調査区	竪穴住居17	紡錘車	50.0		4.0		
C2	第2調査区	竪穴住居19	土錘	35.0	48.0			

遺物番号	地　区	遺構名	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	特　徴
C 3	第１調査区	竪穴住居22	支脚					外面タタキ
C 4	第２調査区	竪穴住居24	紡錘車	27.5	25.0	4.5	3.77	
C 5	第２調査区	竪穴住居26	支脚					外面タタキ
C 6	第２調査区	竪穴住居30	支脚					外面押圧
C 7	第２調査区	土器溜り	紡錘車	55.0		4.5		未製品

6　玉　　類

遺物番号	地　区	遺構名	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量（g）	材　質	特　徴
S 7	第２調査区	土壙９	管玉	31.0	8.5		4.39	碧玉	
S30	第２調査区	竪穴住居28	管玉	7.9	3.5		0.18	碧玉	
S36	第２調査区	土壙22	管玉	31.0	7.5		3.56	碧玉	
S38	第２調査区	土器溜り	管玉	7.8	2.9		0.11	碧玉	

２．足守川加茂Ｂ遺跡遺構・遺物一覧

１　竪穴住居

弥生時代中期後半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備　考
1	11C	隅丸方形？	(1)			8		2.46					
2	11C	円形？	8 (6)			25		2.10				石器１、鉄器１	

弥生時代後期前半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備　考
3	11B	円形？				33		2.20			台石		焼失
4	11C	隅丸方形	8	778	775	42	42.0	2.15				土製品３、鉄器１	建替１回
5	11C	隅丸方形？	4？(2)			39		2.19		○			
6A	11C	隅丸方形	4 (3)	592		39		2.02	○			土製品３、石器１	
6B	11C	隅丸方形	4 (3)		499	24		2.00	○				
7	11C	円形	4	530	489	26	17.3	2.18			土壙、台石	石器２	焼失
8A	11C	楕円形	6			11		2.36				土製品２	
8B	11C	不整円形	5	(735)	(691)	11	37.5	2.36					
8C	11C	円形	8	784	(749)	11	40.6	2.36					
9	11C	隅丸方形	4	571	525	38	23.0	2.07				石器２、鉄器１	
10	10C	円形？	6？(5)	786		35		2.43			台石？	土製品１	建替１回
11	10B	不整隅丸方形	4	428		7		2.51	○	○	台石？		焼失
12	10B	楕円形	4？	377	347	25	9.3	2.42	○		台石	鉄器１	

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
13	９Ｃ	隅丸方形	4	495		53		1.80	○			石器３	
14	９Ｃ	隅丸方形	(1)										床面焼土
15	９Ｃ	楕円形	(2)		323	10		2.20	○				床面焼土
16	８Ｂ	楕円形？	5 (4)	540		15		2.05	○			土製品１	
17	８Ｂ	不整隅丸方形		486	455	20	16.7	1.98					

弥生時代後期後半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
18A	11C	円形	(2)	435		45		2.60	○				
18B	11C	円形	(2)	403		13		2.48					
19	11C	隅丸方形	4	420	390	40	11.2	2.35				石器4	焼失
20	11C	不整円形	4	607	573	32	24.4	2.28	○				
21	11C	不整円形？				32		2.37	○				
22	11B	円形	8？(3)			32		2.22	○	○	台石	石器１、鉄器１	
23	10B	不整円形	4	530	477	30	20.8	2.67	○		焼土面	鉄器２	
24A	10B	不整円形？	4					2.36					
24B	10B	隅丸方形	4					2.36					
25A	10C	不整円形	6		590	41	27.1	2.24	○			土製品2、石器4、鉄器2、玉1	
25B	10C	不整円形	4	530	524	6	21.8	2.13	○				
26A	10C	円形？	9？(7)			24		2.34	○		台石		
26B	10C	円形？	4					2.34	○				建替２回
27	10C	円形	7？(5)	592		26		2.25	○			土製品2、石器1、剥製器1、鉄器2	建替１回
28A	10C	不整円形	6	603		32	27.7	2.38	○			土製品１、石器１、鉄器２	
28B	10C	円形	4	535				2.38	△				建替１回
29	10C	隅丸方形	6？(3)			26		2.22					建替１回
30A	９Ｃ	不整円形	4	520		10	19.9	2.08				石器１	
30B	９Ｃ	隅丸方形？	4			10		2.08					
31	９Ｃ	隅丸方形？	4 (3)	487		46		2.11	○			土製品１、石器２	
32	９Ｃ	隅丸方形？	2			57		2.05					
33	９Ｃ	隅丸方形	4 (3)		534	46		2.00	○		台石		焼失？
34A	９Ｃ	隅丸方形	4 (2)		432	62		1.98		○		石器１	
34B	９Ｃ	隅丸方形？											
35A	９Ｃ	隅丸方形？	6？(4)			54		2.00	○		土壙	鉄器１	
35B	９Ｃ	隅丸方形？	4					2.00					
36	９Ｃ	円形	4 (3)	493		26		2.04	○			土製品1、鉄器1、炭化米、骨	
37A	９Ｂ	円形	5	662	577	38	29.3	2.24	○	○	造出し	土製品１、鉄器５	
37B	９Ｂ	円形	4				19.5	2.02	○				
38	９Ｂ	楕円形	4	440	382	25	12.1	2.22	○	○	台石	鉄器１	
39	８Ｃ	隅丸方形？	4					1.79					
40	８Ｃ	隅丸方形	4 (3)	(455)				1.89				鉄器１	
41	８Ｃ	隅丸方形？										鉄器１	
42	９Ｃ	隅丸方形	4 (2)		436	50		1.97	○			鉄器１	
43	８Ｂ	隅丸方形	4 (3)	(422)				1.96	○		台石		
44	８Ｂ	円形？	(2)			20		2.17	○				

古墳時代前半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m^2)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
45A	11C	隅丸長方形	4	602		51	20.8	2.30				石器4、鉄器1	
45B	11C	隅丸方形	4	475		58	15.6	2.22	○				
45C	11C	隅丸方形	4	486	478	74	17.5	2.06					
46	11C	方形	4	545	532	37	23.1	2.31	○	○		鉄器1	建替1回
47A	11C	隅丸方形	4		443	29		2.54	○		台石	土製品1、炭化米	
47B	11C	隅丸方形?	4 (1)			38		2.45	○		方形土壙		
48	11B	方形	4 (2)	442		35		2.46				土製品2、石器2、鉄器1	
49A	11B	方形?	4	447		31		2.33	○		方形土壙		
49B	11B	隅丸長方形?	4 (3)			38		2.26	○				
50	11C	長方形	4 (3)	467	426	30	16.0	2.50	○		方形土壙、土壙、台石	鉄器1	建替1回
51	11C	方形?	2?(1)		376	32		2.50					
52	10C	隅丸方形	4	460	435	30	15.2	2.84	○	○		石器2、鉄器1	
53	11C	方形	4	397	375	15	13.0	2.70	○			鉄器2	
54	10B	方形?				33		2.67			土壙		
55	11B	方形?	4		568	34		2.66	○				
56	11B	方形?				35		2.59			土壙?		
57	11B	隅丸方形				27		2.57					
58	10B	楕円形	2?		329	37		2.33					
59	11B	方形?											
60	10C	方形	4	432	422	29	16.6	2.40	○	○	方形土壙、土壙	石器1	建替2回
61	10C	方形?				21		2.57			方形土壙	玉1	
62	10B	長方形		574	547	21		2.89	○				建替1回
63	10C	方形?	4 (3)	510		21		2.70	○	○	土壙	石器2	
64	10C	方形?	4 (1)	520		19		2.87				石器1	
65	10B	方形?			394	49		2.48					
66	10C	方形?				33		2.45					
67	10C	不整方形	4	547	487	15		2.47	○			鉄器1	建替1回
68	10C	方形	4	415	369	36	13.2	2.34	○	○		石器1、鉄器2	
69	10C	方形?	4 (2)			28		2.66			台石?	石器1、鉄器1	
70	10C	隅丸方形	4	439	401	24	15.7	2.43	○		土壙、台石	土製品1	
71A	10B	不整方形	2	434	370	28		2.54			土壙、台石	石器2	
71B	10B	台形		410	354	35		2.39			土壙		
72	10B	楕円形	2		380	17	14.0	2.55	○				
73A	10C	長方形	?(1)	545	394	42	19.2	2.36	○	○		土製品3、鉄器2	焼失
73B	10C	長方形?	4?(2)		434	43		2.31				土製品1、玉1	
73C	10C	不整長方形	4	434	369	43	15.1	2.32				土製品1	
74	10C	方形?	4?(1)			75		2.26					
75	10C	隅丸方形?	4 (2)			63		2.40				鉄器1	建替1回
76A	9C	楕円形	6 (5)		635	35		2.37	○	○	土壙	石器1、鉄器2	
76B	9C	楕円形	6		578	35		2.50	○				
77A	10B	楕円形?	4?(3)			8		2.54	○				
77B	10B	楕円形			430	9		2.44					
78	9B	隅丸方形	4	514	496	14	20.7	2.53	○	○	台石	土製品1	
79A	9B	楕円形		380	333	14	10.1					鉄器1	
79B	9B	楕円形?											
80	9B	隅丸方形?				48		1.38					
81	9B	隅丸方形?											建替2回

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
82	9B	方形				8		2.35			土壙		
83	9B	方形		473		45		2.28	○			石器1	
84	9B	方形		360	345	20	22.6	2.45	○		方形土壙	鉄器1	
85	9C	方形？				55		2.10					
86A	9C	不整方形？			266	31		2.17	○			鉄器2	
86B	9C	方形	4 (2)	386		53		2.08			台石	鉄器3	
87	9C	方形	4 (2)		540	5		2.38		○		鉄器1	
88	9C	隅丸方形？	(2)			13		2.03				鉄器1	
89	9C	不整円形	5	564	553	45	23.8	1.90	○			土製品2、鉄器1、青銅器1	
90	8C	隅丸方形？	6 (4)	491	441	40	16.9	2.14				石器1、鉄器2	
91	9C	方形	2	430	398	34	13.2	2.19	○	○	方形土壙、台石		
92	9C	方形	4	507	502	23		2.27			方形土壙	土製品1、鉄器1、玉1	
93	9C	不整隅丸方形	4	512	479	40	19.3	2.07	○	△	区画溝	石器2、玉1、ガラス滓、鉄滓、鉄片	建替1回
94	9B	方形		343	345	20	10.2	2.50	○		方形土壙、台石		
95	9B	長方形	4	476	410	13	17.5	2.37	○			石器1、鉄器2	
96	9B	方形？				26		2.20			方形土壙	石器1、鉄器2	
97	9B	方形	4	454		16		1.49	○		方形土壙、台石		
98	9B	方形	4			28		2.48	○				
99	9B	方形	4										
100	9B	方形	4	422	410	22	17.4	2.34		○			
101	8C	方形	4	411	398	33	14.6	2.13		○		石器1	
102	8C	方形	4		408	8		2.22	○				
103	8C	長方形	2	440	375	20	14.6	2.10			土壙、台石	鉄器1 鉄器3	
104	8C	方形			325	10		2.16	○			土製品1	
105	8C	方形	4 (2)			27		2.16					
106	8C	隅丸方形	4	534	530	41	25.2	2.05	○	○	土壙	土製品1	
107	8B	方形	4	464	450	20	18.2	2.43	○	○	方形土壙、台石	土製品1、石器1、鉄器3	

古墳時代後半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
108	10B	長方形	4	503	430	10	18.0	3.40			竈(北)、土壙	鉄器2	
109	10B	長方形		531	463	10	22.2	3.08			竈(西)	土製品1、石器1、玉1	
110	10B	長方形？										鉄器3	
111	8C	長方形？	4 (2)		478	20		2.60			竈(南西)		焼失

2 土　壙

弥生時代中期後半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	11C b	楕円形	132		60		袋状土壙？
2	11C c	楕円形	154	57	45	貝殻多量	
3	11B d	隅丸長方形	152	126	41		

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
4	10C a	円形	113	112	37		
5	10C b	円形	51	50	37		

弥生時代後期前半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
6	11C b	楕円形			40		袋状土壙
7	11C b	円形	105	103	30		袋状土壙
8	11C b	円形	104		90		袋状土壙
9	11C b	楕円形	141	126	60		袋状土壙？
10	11B b	長方形？		125	62	炭化米多量	長方形土壙？
11	11C c	不整長方形	198	75	22		
12	11C d	円形	130		50		袋状土壙
13	10C b	楕円形	150	115	40		
14	11C c	隅丸方形	121		33	石包丁1、貝殻	袋状土壙？
15	11C c	円形			25		
16	11C c	楕円形	89	76	50		
17	11B d	不整楕円形	188	135	43		
18	11B d	楕円形	123	99	24		
19	10B b	方形	51	48	44		
20	11B b	隅丸長方形	105	85	47	分銅形土製品1、貝殻	袋状土壙？
21	11B c	楕円形？			41	石鏃1、管玉片2、ガラス玉4、ガラス滓	
22	10C b	不整円形	106	102	7		袋状土壙？
23	10C a	隅丸長方形	135	93	52		
24	10C a	楕円形	140	91	75		袋状土壙
25	10B b	隅丸方形？					
26	10B b	楕円形	90	63	10	貝殻	
27	10B b	隅丸長方形	190	161	34	手焙形土器1	
28	10B b	円形	71	69			
29	10B a	楕円形	85	81	48		
30	10B a	不整円形	100		45		
31	10B a	楕円形	110	91	44		
32	10B a	楕円形	74	53	21		
33	10B a	楕円形	193	173	10		
34	10B a	隅丸長方形	71	64	17		
35	10B d	楕円形	85	74	28	卜骨1	
36	10B c	不整楕円形			25		
37	9B a	楕円形？				鉄器1	
38	9B b	不整円形	124		33		
39	9C b	円形	110	106	7		袋状土壙？
40	9C b	円形	119	104	84		袋状土壙
41	9C d	隅丸長方形	157	99	42		袋状土壙
42	9C d	楕円形？			23		
43	9C d	不整円形	123	112	54	石鏃1	袋状土壙
44	9C d	楕円形	119	96	13		袋状土壙？
45	9C d	円形？					
46	9C d	楕円形？				砥石1	

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
47	9Cc	隅丸方形	129	109	37		
48	9Cc	隅丸方形	180	162	28		
49	9Cc	円形			27	ガラス滓、炭化米	
50	9Bd	不整楕円形	190	155	85		
51	8Bb	隅丸長方形	290	218	16	敲石1	
52	8Bb	円形	87	82	48		
53	8Bb	楕円形	144	74	19		
145	11Ca	円形？			28		
146	11Cd	円形？	82		27		
147	11Cd	隅丸長方形			26		
148	11Cd	楕円形？			23		
149	10Cb	楕円形		65	23		
150	10Ca	円形	82	75	18		
151	10Bb	楕円形		93	13		
152	10Bb	楕円形		82	17		
153	10Bb	楕円形		68	22		
154	10Bb	楕円形		80	26		
155	10Ba	長方形	58	48	11		
156	10Ba	不整楕円形	97	82	28		
157	10Bd	楕円形	106	84	40		
158	10Bd	楕円形	78	69	18		
159	10Bd	楕円形			19		
160	10Bd	楕円形	89	77	39		
161	10Bc	楕円形	104	76	33		
162	10Bc	楕円形	89	38	30		
163	9Bb	楕円形？			37		
164	9Bb	不整楕円形	77	48	35		
165	9Bb	不整円形	56	52	25		
166	8Ca	楕円形			48		

弥生時代後期後半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
54	11Cb	長方形	398	205	80	敲石1	長方形土壙
55	11Cb	長方形	373	190	45		長方形土壙
56	11Ca	楕円形		107	15		
57	11Ca	隅丸長方形	144	105	35		長方形土壙？
58	11Ca	隅丸長方形		165	38		長方形土壙
59	11Ca	長方形	223	110	13		長方形土壙
60	11Cd	長方形	261		90		長方形土壙
61	11Cd	不整長方形	190	101	20		長方形土壙
62	11Cd	長方形	185	135	55	鉄鏃1	長方形土壙
63	11Cd	隅丸長方形		135	50	スクレイパー1、敲石1	長方形土壙
64	11Cd	楕円形	92	81	36		
65	11Cd	長方形		75	31		
66	11Cd	不整楕円形	155	120	49		

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
67	11C c	長方形	273	180	62		長方形土壙
68	11C d	長方形	205	103	71		長方形土壙
69	11C c	長方形	295	152	61		長方形土壙
70	11C c	隅丸長方形	235	192	45		長方形土壙
71	11C c	隅丸長方形	270	210	44		長方形土壙
72	11C c	隅丸長方形		83	18		長方形土壙？
73	11B d	楕円形	95		15		
74	11C c	楕円形		78	19		
75	11B d	長方形？	126		46	分銅形土製品1	長方形土壙
76	11B d	楕円形					
77	10C b	不整楕円形		140	64		
78	10C b	楕円形	172	93	33		
79	10C b	隅丸長方形		160	50		長方形土壙
80	10C a	楕円形	87	67	22		
81	10C a	楕円形	103	74	28		
82	10C a	楕円形	61	57	25		
83	10C a	楕円形		61	40		
84	10C a	楕円形	92	77	36	銅鏡1	
85	10B b	隅丸方形	195	178	58	石槍1	長方形土壙
86	10B b	隅丸方形	125		30		長方形土壙？
87	10B b	隅丸長方形	116	63	40		長方形土壙？
88	10B b	不整長方形	232	194	42	砥石1、炭化米	長方形土壙？
89	10B b	楕円形	196	175	55		
90	10B b	楕円形	100	78	22	貝殻	
91	10B a	円形	85	84	48		
92	10B a	円形	88	84	63	鏃1	
93	10C d	長方形	140	88	58		長方形土壙
94	10C d	長方形	315		29		長方形土壙
95	10C d	不整長方形	182	97	31		長方形土壙？
96	10C d	隅丸長方形	227	98	27		長方形土壙
97	10C d	長方形		163	11		長方形土壙？
98	10C d	楕円形	114	54	14		
99	10C d	楕円形		74	22		
100	10C d	楕円形	71	57	12		
101	10C d	長方形		62	49		長方形土壙？
102	10C c	長方形	185	157	54		長方形土壙
103	10B c	長方形	279	147			長方形土壙
104	10B c	長方形	83	63	34		長方形土壙？
105	10B c	不整長方形			32		
106	9C b	不整長方形	183		17		長方形土壙？
107	9C b	長方形	86	70	34	土錘1	長方形土壙？
108	9C b	不整長方形	241	164		鏃1	長方形土壙
109	9C b	楕円形	62	53	23	手焙形土器1	
110	9C b	長方形？			35		長方形土壙
111	9B b	楕円形	77	70	45		
112	9B b	楕円形	103	85	49	石包丁1	
113	9B a	楕円形	210	156	30	小玉2、ガラス滓	
114	9C d	円形	65	64	48		袋状土壙
115	9C d	楕円形？				石包丁1	

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
116	9Cc	長方形	154	94	14		長方形土壙？
117	9Cc	方形	130	125	42		長方形土壙
118	9Bd	楕円形	101	86	42		
119	9Bd	隅丸方形	100	80	81	鉄器1、種子	袋状土壙
120	9Bd	楕円形？	104	93	16	炭化米	
121	9Bd	長方形	238	121	42		長方形土壙
122	9Bd	不整形	210	197	22		
123	9Bd	楕円形	222	83	20	土製紡錘車1	
124	9Bd	円形	78	71	12		
125	9Bd	長方形？	175		60	石錘2	
126	9Bd	隅丸長方形	190	151	80	ガラス滓、炭化米、種子	長方形土壙
127	8Ca	長方形	171	115	39		長方形土壙
128	8Ca	隅丸方形	173	131	13		長方形土壙？
129	8Bb	楕円形	110	97	25		
130	8Bb	隅丸長方形	91	60	27		
131	8Bb	楕円形	113	67	21		
132	8Ba	楕円形	149	93	41		
133	8Ba	楕円形	148	128	29		
134	8Cd	隅丸長方形	173	50	29	特殊器台、種子	
167	11Cb	隅丸長方形	190	130	11		長方形土壙？
168	11Ca	不整長方形			35		
169	11Ca	楕円形	88	67	20		
170	11Ca	隅丸方形					
171	11Bd	方形？		51	17		
172	10Ca	隅丸長方形	130	105	17		
173	10Ca	隅丸方形	70	68	42		
174	10Ca	隅丸方形	90	75	22		
175	10Ca	楕円形	89	84	46		
176	10Ca	楕円形	117	80	18	種子	
177	10Ca	楕円形	82	67	6		
178	10Bb	隅丸長方形	87	60	25		
179	10Bb	不整円形	83	77	28		
180	10Bb	楕円形	119	101	41		
181	10Bb	楕円形	92	66	47		
182	10Bb	楕円形	81	59	34		
183	10Bb	楕円形	135	89	32		
184	10Bb	楕円形	105	63	23		
185	10Bb	楕円形	100	78	31		
186	10Bb	楕円形	103	78	33		
187	10Bb	楕円形	85	67	31		
188	10Ba	楕円形	77	66	42		
189	10Ba	楕円形	78	63	22		
190	10Cd	隅丸長方形					
191	10Cd	長方形			43		長方形土壙？
192	10Cd	楕円形	223	143			
193	10Cc	隅丸方形		64	23		
194	10Cd	長方形	112		20		
195	10Cc	楕円形	88	52	20		
196	10Cc	隅丸長方形	87	64	15		

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
197	10Bd	不整楕円形		112	40		
198	10Bc	楕円形	73	60	30		
199	10Bc	楕円形	138	123	30		
200	9Cb	方形	64	61	46		
201	9Cb	楕円形					
202	9Cb	長方形	98	58	8		長方形土壙？
203	9Cb	方形	57	55	50		
204	9Cb	不整円形	78	73	30		
205	9Bb	楕円形	65	54	31		
206	9Bb	隅丸方形	83	76	31		
207	9Bb	不整形	132				
208	9Cd	円形？			64		
209	9Cd	隅丸方形？		73	34		
210	9Cd	長方形		70	27		
211	9Cd	楕円形	85	66	34		
212	9Cd	楕円形	88	68	46		
213	9Cd	楕円形	91	71	10		
214	9Cd	隅丸長方形			12		
215	9Cd	楕円形？					
216	9Cc	楕円形	100	58	34		
217	9Cc	長方形？		83	41	ガラス滓	
218	9Cc	楕円形		67			
219	9Bd	楕円形	125				
220	9Bd	楕円形	117		16		
221	9Bd	楕円形	129	91	10		
222	8Cb	長方形？					
223	8Cb	円形？	80	80	36		
224	8Cb	隅丸長方形	113	69	25		
225	8Ca	楕円形？		66			
226	8Ca	楕円形					
227	8Ca	楕円形		68	36		
228	8Ca	楕円形	134	110	44		
229	8Ca	隅丸方形	139		30		
230	8Bb	楕円形	84	70	16		
231	8Ba	楕円形	122	112	50		

古墳時代前半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
135	10Bb	長方形	151	117	21		
136	10Bc	隅丸長方形	136	99	46	鉄器3、種子	
137	10Bc	楕円形	63	57	12		
138	9Ba	楕円形	79	41	21	鉄鏃2	
139	9Bb	不整形				鉄鏃1、鉄器1	
140	9Cd	不整楕円形	106	70	11		
141	9Bd	隅丸長方形	185	95	26		
142	9Bd	隅丸方形	60	60	14		

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
143	８Ｂｂ	隅丸方形	136	128	68	鉄鏃１	
232	10Ｂｂ	楕円形	89	53	12		
233	10Ｃｃ	方形	133	131	39		
234	10Ｂｄ	楕円形？					
235	10Ｂｄ	楕円形	111	89	34		
236	10Ｂｄ	不整台形	180	85	39		
237	10Ｂｄ	隅丸長方形	130	103	21		
238	10Ｂｃ	長方形	86	61	19		
239	10Ｂｃ	楕円形	84	75	35		
240	10Ｂｃ	楕円形	63	57	19		
241	10Ｂｃ	円形	63	62	32		
242	10Ｂｃ	不整方形	85	64	37		
243	10Ｂｃ	楕円形	103	56	31		
244	10Ｂｃ	長方形	72	49	33		
245	10Ｂｃ	長方形	104	85	31		
246	10Ｂｃ	方形	85	84	41		
247	10Ｂｃ	長方形	76	54	31		
248	９Ｃｂ	長方形		64	35		
249	９Ｃａ	楕円形	140		22		
250	９Ｂｂ	楕円形	60	54	17		
251	９Ｂｂ	不整楕円形					
252	９Ｂａ	楕円形	105	75	12		
253	９Ｂｄ	楕円形	73	54	19		
254	９Ｂｄ	楕円形	83	58	26		

古墳時代後半以降

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
144	９Ｂｂ	不整円形	720	652		鉄斧１	
255	10Ｂｃ	不整楕円形					
256	８Ｃｂ	方形	136	126	4		

3　石器・石製品

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
Ｓ１	11Ｃ	竪穴住居２	石包丁	67.0	42.5	10.0	34.92	サヌカイト	
Ｓ２	11Ｃ	竪穴住居６Ａ	楔形石器	35.0	31.0	10.0	8.47	サヌカイト	
Ｓ３	11Ｃ	竪穴住居７	砥石	170.0	55.0	34.0	422.20	古銅輝石安山岩	
Ｓ４	11Ｃ	竪穴住居７	砥石	123.0	55.0	51.0	460.90	流紋岩	
Ｓ５	11Ｃ	竪穴住居９	敲石	201.5	76.0	60.0	1227.70	ヒン岩	
Ｓ６	11Ｃ	竪穴住居９	石包丁	88.0	45.5	14.0	62.74	サヌカイト	珪酸付着
Ｓ７	９Ｃ	竪穴住居13	石匙	49.0	41.0	9.0	13.36	サヌカイト	
Ｓ８	９Ｃ	竪穴住居13	石鏃	53.5	13.5	6.5	3.89	サヌカイト	
Ｓ９	９Ｃ	竪穴住居13	石包丁	66.0	40.0	8.5	25.20	サヌカイト	珪酸付着

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
S10	11C	土壙14	石包丁	48.0	53.0	9.8	31.65	サヌカイト	珪酸付着
S11	11B	土壙21	石鏃	43.0	19.0	5.5	3.39	サヌカイト	
S12	9C	土壙43	石鏃	41.0	22.5	6.0	4.12	サヌカイト	
S13	9C	土壙46	砥石	84.0	47.5	29.0	145.90	流紋岩	
S14	8B	土壙51	敲石	73.5	62.5	29.0	200.10	安山岩	
S15	10C		スクレイパー	78.0	47.5	18.3	46.79	サヌカイト	
S16	10B		スクレイパー	47.5	33.5	8.3	14.11	サヌカイト	
S17	11C		スクレイパー	31.0	47.0	7.0	9.00	サヌカイト	
S18	10B		スクレイパー	50.0	46.0	7.0	14.13	サヌカイト	
S19	10C		スクレイパー	50.5	51.0	5.5	18.69	サヌカイト	石包丁転用、珪酸付着
S20	10B		エンドスクレイパー	49.0	29.0	6.1	8.98	サヌカイト	
S21	10B		スクレイパー	39.0	38.0	8.0	11.22	サヌカイト	
S22	11C		石包丁	42.5	35.5	7.5	7.39	サヌカイト	珪酸付着
S23	10C		石包丁	62.0	39.0	8.5	19.58	サヌカイト	珪酸付着
S24	10C		石包丁	69.0	46.0	11.0	35.10	サヌカイト	珪酸付着
S25	10B		石包丁	43.5	45.0	9.0	27.04	サヌカイト	珪酸付着
S26	10B		石包丁	43.0	40.0	10.0	14.31	サヌカイト	珪酸付着
S27	11C		石包丁	96.0	50.5	10.0	46.45	サヌカイト	珪酸付着
S28	10C		石包丁	54.0	57.0	9.5	45.03	サヌカイト	珪酸付着
S29	9B		石包丁	73.5	49.5	7.9	38.09	サヌカイト	珪酸付着
S30	11C		石包丁	27.0	47.5	10.7	18.25	サヌカイト	珪酸付着
S31	10C		石包丁	46.0	41.5	11.5	19.24	サヌカイト	
S32	10C		石包丁	42.5	55.5	6.5	18.93	サヌカイト	珪酸付着
S33	10B		石包丁？	37.0	50.0	10.5	18.19	サヌカイト	
S34	9C		スクレイパー	34.0	24.5	5.5	4.00	サヌカイト	
S35	10B		石包丁	33.5	32.0	10.0	13.27	サヌカイト	
S36	10C		石包丁	47.0	24.0	6.2	8.00	サヌカイト	
S37	10C		石錐	39.0	27.0	5.0	4.35	サヌカイト	
S38	9B		石錐	54.0	19.0	9.0	9.97	サヌカイト	端部使用痕
S39	11C		石槍？	36.0	28.5	7.0	8.08	サヌカイト	
S40	10C		石槍	64.0	27.0	6.5	12.24	サヌカイト	
S41	10B		石鏃	48.0	15.0	4.3	4.24	サヌカイト	
S42	9C		石鏃	46.0	17.0	4.5	4.22	サヌカイト	
S43	9B		石鏃	29.0	23.0	3.9	2.42	サヌカイト	
S44	10B		石鏃	22.5	15.0	2.7	0.75	サヌカイト	
S45	10B		石核	92.5	49.0	17.2	80.51	サヌカイト	
S46	11C		小形石斧	60.0	24.5	8.8	15.17	緑色片岩	
S47	8C		石鉞	131.0	77.5	12.4	137.63	緑色片岩	
S48	9B		蛤刃石斧	207.0	76.0	52.0	1429.29	安山岩	
S49	8B		蛤刃石斧	65.0	62.5	38.5	229.90	変斑糲岩	
S50	10B		砥石	248.0	125.7	48.5	1906.15	流紋岩	
S51	9C		砥石	132.8	130.0	31.0	715.90	流紋岩	
S52	9B		石錘	56.0	41.5	36.0	114.91	石英斑岩	
S53	11C		石錘	62.5	54.0	38.0	178.92	花崗岩	
S54	9C		石錘	77.0	60.0	40.0	258.99	石英斑岩	
S55	10C		石錘	69.0	65.0	44.0	274.59	花崗閃緑岩	
S56	9B		石錘	79.5	65.5	48.0	327.67	斑岩	
S57	8B		石錘	90.0	76.5	50.5	464.98	花崗岩	
S58	8B		石錘	83.5	75.0	50.5	463.51	石英斑岩	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
S59	9C		石錘	84.0	85.0	59.0	700.47	閃緑岩	
S60	8B		石錘	99.5	71.0	66.0	641.80	花崗岩	
S61	8B		石錘	89.5	72.0	66.0	594.00	石英斑岩	
S62	8B		石錘	74.0	72.5	46.5	341.96	花崗岩	
S63	8B		石錘	80.0	68.0	48.0	317.10	角閃石安山岩	
S64	9B		石錘	80.5	67.0	43.5	308.73	角閃ヒン岩	
S65	10B		石錘	78.0	60.0	60.0	422.00	花崗岩	
S66	8B		石錘	67.0	56.5	44.0	233.40	角閃石安山岩	
S67	10C		石錘	82.5	69.5	58.0	468.22	粗粒砂岩	
S68	9C		石錘	85.0	78.5	50.0	423.19	ヒン岩	
S69	8C		石錘	61.0	50.5	33.0	157.45	安山岩	
S70	9B		敲石	74.0	42.0	32.0	167.23	流紋岩	
S71	8C		敲石	161.0	35.5	20.0	172.90	古銅輝石安山岩	
S72	8C		敲石	113.5	46.5	39.0	324.30	ヒン岩	
S73	8C		敲石	130.0	73.5	28.0	366.40	砂岩	
S74	10B		砥石	147.0	59.0	53.5	756.73	流紋岩	紐通し穴1孔
S75	11C		石斧	192.0	67.0	50.0	585.00	安山岩	
S76	9C		砥石	87.5	86.0	59.0	540.36	半花崗岩	
S77	8C		砥石	65.0	30.0	9.0	23.12		
S78	8B		敲石	82.0	61.0	50.0	387.40		
S79	8C		敲石	92.0	80.5	36.0	409.10		
S80	11C	竪穴住居19	石包丁	36.5	35.5	8.7	13.99	サヌカイト	珪酸付着
S81	11C	竪穴住居19	スクイパー	56.0	38.0	13.5	27.24	サヌカイト	
S82	11C	竪穴住居19	石包丁	35.5	41.5	5.9	11.43	サヌカイト	珪酸付着
S83	11C	竪穴住居19	敲石	76.0	60.0	40.0	219.70	半花崗岩	
S84	11B	竪穴住居22	石杵	70.5	72.5	37.0	253.00	細粒閃緑岩	側面朱付着
S85	10C	竪穴住居25	石槍	36.0	22.5	5.3	4.83	サヌカイト	
S86	10C	竪穴住居25	敲石	61.3	38.7	37.0	121.10	安山岩	
S87	10C	竪穴住居25	石錘	85.0	85.0	55.0	642.30	閃緑岩	
S88	10C	竪穴住居25	敲石	76.0	74.0	42.0	379.60	花崗岩	
S89	10C	竪穴住居27	エンドスクレイパー	59.0	64.5	24.0	69.42	サヌカイト	
S90	10C	竪穴住居28	敲石	148.0	67.0	42.0	592.40	安山岩	
S91	9C	竪穴住居30	砥石	95.0	53.5	24.0	219.90	玄武岩	
S92	9C	竪穴住居31	石錘	39.0	30.0	24.0	34.60	安山岩	
S93	9C	竪穴住居31	石錘	38.5	31.3	22.0	39.70	頁岩	
S94	9C	竪穴住居34	石錘	59.0	41.0	40.0	117.30	砂岩	
S95	9B	井戸1	勾玉	13.6	6.8	4.8	0.60		
S96	9B	井戸1	管玉	9.5	3.0		0.15	碧玉	
S97	9B	井戸1	臼玉	3.5	4.3		0.08	滑石	
S98	11C	土壙54	敲石	94.5	70.0	30.5	268.80	ヒン岩	
S99	11C	土壙63	スクレイパー	49.5	52.5	6.5		サヌカイト	
S100	11C	土壙63	敲石	103.0	55.5	27.0	251.10	安山岩	
S101	10B	土壙85	石槍	20.0	29.0	6.0	5.03	サヌカイト	
S102	10B	土壙88	砥石	125.6	53.0	21.7	261.70	玄武岩	
S103	9B	土壙112	石包丁	47.5	49.0	11.4	33.14	サヌカイト	
S104	9B	土壙113	臼玉	3.2	4.8		0.10	滑石	
S105	9B	土壙113	臼玉	3.3	5.2		0.12	滑石	
S106	9C	土壙115	石包丁	91.0	44.0	14.0	83.44	結晶片岩	
S107	9B	土壙125	石錘	66.0	62.0	44.0	262.00	花崗斑岩	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
S108	9B	土壙125	石錘	46.5	39.0	33.0	99.50	閃緑岩	
S109	8B	土器溜り1	砥石	153.0	81.5	33.5	746.30	砂岩	
S110	8B	土器溜り1	敲石	71.0	59.5	44.0	289.40	砂岩	石斧転用
S111	11C	竪穴住居45	砥石	226.0	118.5	74.0	2511.50	花崗岩	
S112	11C	竪穴住居45	砥石	92.0	117.0	65.0	536.90	流紋岩	
S113	11C	竪穴住居45	石錘	76.5	63.0	44.0	322.90	ヒン岩	
S114	11C	竪穴住居45	敲石	151.0	47.7	62.0	562.20	砂岩	
S115	11B	竪穴住居48・49	砥石	84.0	72.0	69.0	437.00	流紋岩	
S116	11B	竪穴住居48・49	敲石	72.5	63.5	16.0	117.80	砂岩	
S117	10C	竪穴住居52	砥石	175.0	130.0	70.0	2052.70	閃緑岩＋花崗岩	
S118	10C	竪穴住居52	砥石	94.0	57.0	31.0	294.10	花崗岩	
S119	10C	竪穴住居60	砥石	47.0	38.0	30.0	63.30	凝灰岩	
S120	10B	竪穴住居61	勾玉	16.3	4.8	4.5	0.62	メノウ	
S121	10C	竪穴住居63	砥石	166.0	100.0	86.0	1661.20	砂岩	
S122	10C	竪穴住居63	敲石	113.5	43.0	41.0	365.60	細粒閃緑岩	
S123	10C	竪穴住居64	敲石	123.0	70.0	48.0	682.80	ヒン岩	石斧転用
S124	10C	竪穴住居68	敲石	133.0	46.5	25.5	230.20	珪岩	
S125	10C	竪穴住居69	砥石	98.0	45.0	13.5	86.45	頁岩	
S126	10B	竪穴住居71	砥石	43.0	20.5	16.9	22.60	流紋岩	
S127	10B	竪穴住居71	石錘	45.5	30.5	33.0	61.40	半花崗岩	
S128	9C	竪穴住居76	石錘	91.6	71.0	45.5	444.80	花崗岩	
S129	9B	竪穴住居83	石錘	84.0	85.5	48.5	493.52	細粒閃緑岩	砥石転用
S130	8C	竪穴住居90	砥石	114.0	115.5	50.0	1092.46	半花崗岩	
S131	9C	竪穴住居93	砥石	55.0	53.5	42.0	114.33	流紋岩	
S132	9C	竪穴住居93	砥石	109.5	87.0	49.0	597.90	流紋岩	
S133	9C	竪穴住居93	管玉	17.5	5.5		0.68	碧玉	
S134	9B	竪穴住居95	砥石	95.0	73.0	99.0	734.50	流紋岩	
S135	9B	竪穴住居96	砥石	97.5	45.0	39.0	289.65	凝灰岩	
S136	8C	竪穴住居101	敲石	98.5	60.0	62.0	553.03	ヒン岩	
S137	8B	竪穴住居107	砥石	83.0	49.0	48.5	129.95	凝灰岩	
S138	11C	土器溜り2	砥石	194.5	136.0	49.0	2020.50	安山岩	
S139	11C	土器溜り2	石錘	80.0	73.5	41.2	400.70	ヒン岩	
S140	8B	斜面堆積	石杵	176.0	97.5	92.0	2162.00	細粒閃緑岩	使用面朱付着
S141	11C		勾玉	22.1	9.0	6.5	2.47		
S142	10B	竪穴住居109	管玉	12.8	4.9		0.44		
S143	10B	竪穴住居109	石錘	116.5	87.0	69.0	1059.90	ヒン岩	

4 金属器

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
M1	11C	竪穴住居2	鏃	(52.5)	(17.0)	(3.2)	5.44	鉄	未製品？
M2	11B	竪穴住居4		(46.0)	7.4	2.0	1.99	鉄	
M3	11C	竪穴住居9	鏃	(53.0)	11.0	(3.5)	4.44	鉄	
M4	10B	竪穴住居12	鏃	(58.3)	(5.5)	(4.0)	5.64	鉄	
M5	9B	土壙37		(14.0)	12.0	6.0	2.42	鉄	
M6	11B	竪穴住居22		(26.3)	(12.0)	(2.5)	3.21	鉄	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
M7	10B	竪穴住居23	鏃	50.5	14.5	(3.0)	4.99	鉄	
M8	10B	竪穴住居23	鉇	(51.5)	16.8	(3.0)	5.45	鉄	
M9	10C	竪穴住居25		(63.5)	(12.0)	(10.5)	19.75	鉄	
M10	10C	竪穴住居25	鏃	(48.0)	(17.5)	(3.0)	5.58	鉄	
M11	10C	竪穴住居27	鏃	40.5	10.2	4.5	3.24	青銅	
M12	10C	竪穴住居27	鉇	(99.0)	(10.0)	(1.8)	11.74	鉄	
M13	10C	竪穴住居27		(27.7)	(21.0)	(1.2)	5.48	鉄	
M14	10C	竪穴住居28	鉇	(54.0)	13.0	2.0	4.01	鉄	
M15	10C	竪穴住居28		(39.0)	(18.0)	(4.3)	3.73	鉄	
M16	9C	竪穴住居35	斧	(54.0)	(31.5)	(8.6)	27.06	鉄	
M17	9C	竪穴住居36	鉇	(52.0)	18.5	3.0	7.33	鉄	
M18	9B	竪穴住居37	鉇	(38.0)	9.0	(3.0)	4.99	鉄	
M19	9B	竪穴住居37	鑿先	(37.0)	15.6	9.0	9.28	鉄	
M20	9B	竪穴住居37		(39.0)	(13.0)	(2.8)	4.29	鉄	
M21	9B	竪穴住居37	鏃	(19.8)	3.5	3.5	0.51	鉄	
M22	9B	竪穴住居37	鏃	(37.5)	11.0	3.0	1.70	鉄	
M23	9B	竪穴住居38		(52.0)	13.0	4.5	6.72	鉄	
M24	8C	竪穴住居40	鉇	(46.5)	7.5	2.0	2.09	鉄	
M25	8C	竪穴住居41		(21.0)	12.0	(2.0)	2.33	鉄	
M26	9C	竪穴住居42	鉇	(40.0)	(11.0)	(1.5)	4.64	鉄	
M27	11C	土壙62	鏃	(42.0)	12.0	(2.8)	3.47	鉄	
M28	10C	土壙84	鏡	75.0		6.5	32.57	青銅	仿製鏡
M29	10B	土壙92	鎌	(25.3)	(24.5)	(2.0)	12.33	鉄	
M30	9C	土壙108	鎌	(45.6)	27.3	(3.0)	13.82	鉄	
M31	9B	土壙119		(42.5)	16.2	4.0	5.30	鉄	未製品
M32	9B	土器溜り1	刀子	(44.0)	14.0	4.0	5.62	鉄	
M33	9B	土器溜り1	鏃	(55.0)	18.0	3.0	5.65	鉄	
M34	9B	土器溜り1		(47.5)	11.3	2.0	5.07	鉄	
M35	11C	竪穴住居45		(55.0)	(21.0)	(8.3)	17.34	鉄	
M36	11C	竪穴住居46		(35.0)	(27.0)	(2.8)	4.86	鉄	
M37	11B	竪穴住居48・49	鏃	(32.0)	(9.0)	(4.2)	3.06	鉄	
M38	11C	竪穴住居50	鉇	(82.5)	(5.5)	(2.0)	3.92	鉄	
M39	10C	竪穴住居52		(34.0)	(20.0)	(5.5)	10.18	鉄	
M40	11C	竪穴住居53		(31.0)	(25.0)	(2.0)	1.74	鉄	
M41	11C	竪穴住居53		(28.0)	(21.0)	(3.5)	5.73	鉄	
M42	10C	竪穴住居67		(27.0)	(13.5)	(4.8)	2.65	鉄	
M43	10C	竪穴住居68	鎌	84.0	20.5	(2.0)	16.93	鉄	
M44	10C	竪穴住居68		(43.0)	(6.0)		2.75	鉄	
M45	10C	竪穴住居69	鏃	(30.0)	(14.5)	(3.0)	3.06	鉄	
M46	10C	竪穴住居73A	鉇	(126.5)	(7.2)	(2.0)	6.24	鉄	
M47	9C	竪穴住居73A	鏃	(30.5)	17.2	4.0	3.90	鉄	
M48	9C	竪穴住居75		(38.2)	16.5	4.0	2.94	鉄	
M49	9C	竪穴住居76		(54.0)	7.0	3.2	4.72	鉄	
M50	9C	竪穴住居76		(42.3)	9.5	3.3	3.44	鉄	
M51	9B	竪穴住居79	剣？	(50.0)	28.0	5.0	23.19	鉄	
M52	9B	竪穴住居84	鏃	(27.2)	5.0	4.0	2.46	鉄	
M53	9C	竪穴住居86B		(40.0)	(35.0)	(5.8)	10.92	鉄	
M54	9C	竪穴住居86B		(23.8)	6.5	2.0	1.25	鉄	
M55	9C	竪穴住居86B	刀子	(25.5)	9.5	2.5	1.80	鉄	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
M56	9C	竪穴住居86A		(23.3)	14.0	2.8	1.25	鉄	
M57	9C	竪穴住居86A		(20.5)	10.0	(4.0)	4.03	鉄	
M58	9C	竪穴住居87		(26.7)	19.6	(2.0)	4.64	鉄	
M59	9C	竪穴住居88	鏃	(42.0)	(6.5)	(4.0)	2.38	鉄	
M60	9C	竪穴住居89	鉋?	(66.0)	5.5	3.0	3.98	鉄	
M61	9C	竪穴住居89	鏡	44.5		10.0	10.24	青銅	仿製鏡
M62	8C	竪穴住居90	鏃	(34.0)	12.0	(7.7)	3.43	鉄	
M63	8C	竪穴住居90	鏃	(17.0)	(15.0)	3.0	0.82	鉄	
M64	9C	竪穴住居92	鉋	(133.0)	8.0	3.5	17.18	鉄	
M65	9B	竪穴住居95	刀子?	(68.0)	19.0	2.0	9.16	鉄	
M66	9B	竪穴住居95	鏃	(47.0)	10.5	7.5	9.88	鉄	
M67	9B	竪穴住居96		(36.0)	18.0	2.0	2.85	鉄	
M68	9B	竪穴住居96	鏃	(48.5)	(14.0)	(2.5)	7.43	鉄	
M69	8C	竪穴住居103~105	毛抜?	(74.0)	12	1.8	2.46	鉄	
M70	8C	竪穴住居103~105	鏃	(39.0)	13.6	2.6	3.26	鉄	
M71	8C	竪穴住居103~105		(28.0)	11.4	1.6	1.33	鉄	
M72	8C	竪穴住居103	剣	(104.0)	25.5	(5.0)	57.89	鉄	
M73	8B	竪穴住居107	刀子	(44.0)	19.0	3.0	8.87	鉄	
M74	8B	竪穴住居107		(25.0)	4.5	3.5	1.28	鉄	
M75	8B	竪穴住居107	鏃	(20.5)	16.0	3.0	0.62	鉄	
M76	10B	土壙136		(38.0)	(20.5)	(3.0)	4.94	鉄	
M77	10B	土壙136		(49.8)	(27.0)	(3.0)	10.07	鉄	
M78	10B	土壙136		(37.0)	(15.0)	(5.0)	5.88	鉄	
M79	9B	土壙138	鏃	(49.0)	22.0	3.0	7.47	鉄	
M80	9B	土壙138	鏃	(32.0)	25.0	3.5	4.24	鉄	
M81	9B	土壙139	釘?	(32.7)	8.0	4.6	4.72	鉄	
M82	9B	土壙139	鏃	(28.0)	5.0	4.0	2.23	鉄	
M83	8B	土壙143	鏃	(44.0)	16.0	3.0	5.32	鉄	
M84	8C	斜面堆積	鎌	(52.0)	18.5	(2.0)	5.40	鉄	
M85	8B	斜面堆積	斧	(35.5)	29.0	9.0	10.30	鉄	
M86	8B	斜面堆積	鏃	(26.0)	21.5	2.5	3.49	鉄	
M87	8B	斜面堆積	鏃?	(34.0)	(21.5)	(2.0)	2.89	鉄	
M88	8B	斜面堆積	鏃	(36.0)	9.0	4.0	5.10	鉄	
M89	8B	斜面堆積	鏃	(26.3)	(12.5)		6.50	鉄	
M90	11B		刀子	(47.0)	13.2	(3.0)	6.64	鉄	蕨手刀子
M91	8B		刀子	(97.5)	10.5	3.5	8.03	鉄	
M92	10C		刀子	(21.0)	8.0	(2.0)	1.73	鉄	
M93	9B		刀子	(67.7)	10.0	3.0	9.10	鉄	
M94	9B		刀子	(55.0)	19.5	3.5	6.61	鉄	
M95	9C		刀子	(52.0)	13.5	3.0	7.64	鉄	
M96	9B		鉄?	(63.0)	(12.5)	(3.5)	4.97	鉄	
M97	9C		鉋	(49.2)	(9.0)	3.5	2.93	鉄	
M98	9B		刀子	(23.4)	14.5	2.0	2.24	鉄	
M99	9C		鑿?	(88.0)	(9.0)	(8.5)	13.68	鉄	
M100	9C			(51.0)	7.0	(2.5)	3.68	鉄	
M101	9C		鉋	(52.0)	8.4	2.5	2.76	鉄	
M102	9B		貨金具	(28.0)	13.0	3.2	4.57	鉄	
M103	9B			(13.0)	2.0	1.8	0.11	鉄	
M104	9C			(64.0)	13.0	2.7	17.81	鉄	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
M105	9B			(42.0)	8.3	7.0	8.57	鉄	
M106	9B			(63.4)	(6.0)	(5.0)	4.71	鉄	
M107	9B		鏃	(65.0)	27.0	4.0	18.88	鉄	
M108	9B		鏃	(31.0)	43.7	4.0	11.15	鉄	
M109	9C		斧？	(78.0)	(39.4)	(13.8)	30.86	鉄	
M110	9C		鏃先	63.0	29.0		20.17	鉄	
M111	9B			(39.0)	30.2	4.3	10.60	鉄	
M112	9C			(27.5)	17.8	3.5	10.92	鉄	
M113	9C		鏃？	(44.0)	17.0	2.8	4.39	鉄	
M114	10B		鏃	(27.0)	14.0	(3.0)	2.37	鉄	
M115	9C		鏃	(30.0)	12.0	2.5	2.47	鉄	
M116	10B		鏃	(29.0)	(14.5)	(2.0)	1.58	鉄	
M117	10B		鏃	(44.0)	12.0	2.0	3.29	鉄	
M118	10B		鏃	(34.5)	(11.0)	3.0	1.63	鉄	
M119	10B		鉇	(38.5)	10.5	(3.3)	2.72	鉄	
M120	9C		鏃	(49.0)	(22.0)	3.0	10.34	鉄	
M121	10C		鏃	(75.0)	22.0	(3.0)	11.89	鉄	
M122	9C		鉇	(37.0)	(8.0)	2.5	3.39	鉄	未製品？
M123	10B		鏃？	(29.5)	(20.0)	3.5	3.81	鉄	
M124	8B		二又矛	(31.0)	15.0	5.5	5.07	鉄	
M125	9B		鏃	(42.8)	4.3	4.1	2.37	鉄	
M126	9B		鏃？	(41.2)	4.0	4.0	2.93	鉄	
M127	9B			(41.0)	4.5	3.5	3.99	鉄	
M128	9C		鏃	(42.6)	5.0	3.0	2.29	鉄	
M129	9B			(29.7)	32.0	(3.0)	10.36	鉄	
M130	11B			(36.5)	(22.0)	(2.7)	7.14	鉄	
M131	9B			(44.0)	20.0	8.2	22.42	鉄	
M132	9B			(33.2)	22.0	9.3	2.55	鉄	
M133	9B			(31.5)	13.0	(4.0)	3.42	鉄	
M134	9C			(29.2)	16.5	4.0	4.44	鉄	
M135	9C			(27.0)	(23.0)	(7.5)	10.11	鉄	
M136	9B			(41.6)	11.0	7.5	6.15	鉄	
M137	10B			(27.5)	14.5	(7.0)	6.39	鉄	
M138	9B			(37.0)	20.0	5.8	10.04	鉄	
M139	9B			(40.0)	8.3	(4.5)	2.33	鉄	上端截断面
M140	9B		鏃	28.2	11.4	3.6	1.98	青銅	
M141	9B		鏃	19.8	6.8	2.3	1.01	青銅	
M142	9C		鏃	16.3	5.9	2.0	0.67	青銅	
M143	9B		鏃	29.0	7.5	3.6	1.72	青銅	
M144	9C		鏃	32.0	9.0	3.5	3.11	青銅	
M145	10C		鏃	20.0	3.0	3.0	0.74	青銅	
M146	10B		鏃	32.3	21.4	4.2	7.93	青銅	未製品
M147	10B	竪穴住居108	鏃	(74.5)	27.0	2.0	23.63	鉄	
M148	10B	竪穴住居108	鏃	(64.3)	(4.0)	(3.0)	5.84	鉄	
M149	10B	竪穴住居110	剣？	(43.5)	(22.0)	3.2	8.13	鉄	
M150	10B	竪穴住居110	鏃	(37.0)	(22.5)	(3.0)	5.05	鉄	
M151	10B	竪穴住居110	剣？	(26.0)	(19.0)	(3.4)	2.21	鉄	
M152	9B	土壙144	斧	(31.5)	48.0	5.6	20.94	鉄	
M153	8B	溝群	斧？	(26.5)	43.0	7.0	18.32	鉄	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	材質	特徴
M154	9C	溝群	釘?	(48.0)	(3.0)	(3.0)	3.75	鉄	
M155	9B	溝群	鏃	(25.5)	12.5	2.5	2.72	鉄	
M156	9B	溝群		(26.5)			7.54	鉄	

5 土製品

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	特徴
C1	11C	竪穴住居4	鳥形土製品	81.0	40.0	16.0	35.41	
C2	11C	竪穴住居4	紡錘車	45.3		6.2	7.07	土器片(甕)転用
C3	11C	竪穴住居4	動物形土製品	47.0	21.5	31.0	20.89	
C4	11C	竪穴住居6	土錘	28.8		24.0	19.40	
C5	11C	竪穴住居6	土錘	31.2		28.9	28.22	
C6	11C	竪穴住居6	土錘	26.0		24.5	16.79	
C7	11C	竪穴住居8	紡錘車	69.0	66.0	8.8	40.66	土器片(甕)転用
C8	11C	竪穴住居8	土錘	20.0		15.0	6.21	
C9	10C	竪穴住居10	紡錘車	44.9		5.0	10.83	土器片(壺?)転用
C10	8B	竪穴住居16		48.0	64.0	11.0	33.77	
C11	11B	土壙20	分銅形土製品	23.0	43.0	7.2	8.75	
C12	10B		分銅形土製品	58.3	46.0	11.0	27.00	赤色顔料
C13	11B		分銅形土製品	44.5	42.5	12.0	21.64	
C14	10B		分銅形土製品	45.0	78.5	17.3	63.46	赤色顔料
C15	9B		分銅形土製品	43.5	79.2	15.0	48.62	
C16	10B		分銅形土製品	44.3	70.5	18.0	51.73	赤色顔料
C17	10C	竪穴住居25	紡錘車	34.0	31.5	4.8	5.88	土器片(甕)転用
C18	10C	竪穴住居25	土錘	17.5		12.6	3.09	
C19	10C	竪穴住居27	紡錘車	86.0		8.2	43.06	土器片転用
C20	10C	竪穴住居27	紡錘車	30.7		9.0	4.11	土器片(高杯?)転用、焼成前穿孔
C21	10C	竪穴住居29	紡錘車	38.6	22.7	10.0	9.35	焼成前穿孔
C22	9C	竪穴住居31	紡錘車	59.2	52.8	8.0	27.84	土器片(壺?)転用
C23	9C	竪穴住居36	紡錘車	32.7	29.7	5.7	6.51	土器片転用
C24	9B	竪穴住居37	紡錘車	49.5		4.0	6.00	土器片(甕)転用
C25	11B	土壙75	分銅形土製品	61.5	70.5	13.0	60.09	赤色顔料?
C26	9C	土壙107	土錘	29.0	24.0	26.0		
C27	9B	土壙123	紡錘車	33.0	33.0	7.2	7.99	土器片(高杯?)転用
C28	11C	竪穴住居47	分銅形土製品	23.7	40.0	9.8		
C29	11B	竪穴住居48・49	土錘	68.3	36.2	30.0	84.83	
C30	11B	竪穴住居48・49	土錘	10.2		13.6	3.17	
C31	10C	竪穴住居70	紡錘車	48.8	43.0	4.8	11.30	土器片(甕?)転用
C32	10C	竪穴住居73A	土錘	21.3	19.0	15.7	6.26	
C33	10C	竪穴住居73A	土錘	20.5	15.0	8.0		
C34	10C	竪穴住居73A	鳥形土製品	30.7	16.8	13.0	4.00	
C35	10C	竪穴住居73B	土錘	41.5	39.0	36.0	67.90	
C36	10C	竪穴住居73B	勾玉	29.0	8.2	7.8	2.56	
C37	10C	竪穴住居73C	土錘	62.3	34.2	31.5	55.34	
C38	9B	竪穴住居78	紡錘車	37.0	35.5	8.2	10.61	土器片(高杯?)転用
C39	9C	竪穴住居89	紡錘車	33.3	31.0	4.0	4.37	土器片(甕)転用

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	特徴
C40	9C	竪穴住居89	紡錘車	32.0	20.2	4.1	2.30	土器片(甕)転用
C41	9C	竪穴住居92	土錘	71.9	22.0	19.5	37.03	
C42	9C	竪穴住居92	勾玉	21.5	17.2	15.0	6.74	
C43	8C	竪穴住居104	紡錘車	43.0	40.5	6.0	11.90	土器片(甕)転用
C44	8C	竪穴住居106	土錘	27.5		23.8	15.89	
C45	8B	竪穴住居107	紡錘車	38.7	35.0	5.0	7.82	土器片(甕？)転用
C46	9B		勾玉	31.6	12.2	14.5	8.22	
C47	11C		紡錘車	53.0	51.0	5.0	13.56	土器片(甕)転用
C48	9C		土錘	38.0	33.0	22.7	17.93	
C49	9C		土錘	65.3	29.3	26.7	68.76	
C50	9C		土錘	59.4	32.8	28.4	76.87	
C51	10B		土錘	37.5	36.0	34.0	51.82	
C52	9C		土錘	64.8	20.8	20.0	36.72	
C53	9C		土錘	86.0	19.2	16.8	34.04	
C54	9C		土錘	91.0	25.0	24.2	67.31	
C55	9C		土錘	68.0	22.0	18.2	36.03	
C56	9C		紡錘車	33.0	32.0	4.1	5.23	土器片転用、未製品
C57	9C		紡錘車	30.0	19.0	6.5	3.87	土器片転用
C58	9B		土錘	20.0	18.0	14.0	4.81	
C59	9C		紡錘車	38.0	36.0	5.3	8.11	土器片転用
C60	9C		紡錘車	29.0	28.0	4.4	3.30	土器片(甕？)転用
C61	10B	竪穴住居109	紡錘車	65.5	35.0	5.8	17.41	土器片(壺？)転用

6 玉 類

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	特徴
S95	9B	井戸1	勾玉	13.6	6.8	4.8	0.60	(石)	
S96	9B	井戸1	管玉	9.5	3.0		0.15	碧玉	
S97	9B	井戸1	臼玉	3.5	4.3		0.08	滑石	
S104	9B	土壙113	臼玉	3.2	4.8		0.10	滑石	
S105	9B	土壙113	臼玉	3.3	5.2		0.12	滑石	
S120	10C	竪穴住居61	勾玉	16.3	4.8	4.5	0.62	メノウ	
S133	9C	竪穴住居93	管玉	17.3	4.3		0.68	碧玉	
S141	11C		勾玉	22.1	9.0	6.5	2.47	(石)	
S142	10B	竪穴住居109	管玉	12.8	4.9		0.44	碧玉	
G1	11B	土壙21	小玉	2.8	3.8		0.03	ガラス	
G2	11B	土壙21	小玉	2.7	3.5		0.02	ガラス	
G3	11B	土壙21	小玉	3.2	3.3		0.04	ガラス	
G4	11B	土壙21	小玉	2.9	3.1		0.02	ガラス	
G5	10C	竪穴住居25	小玉	5.1	5.6		0.14	ガラス	
C36	10C	竪穴住居73B	勾玉	29.0	8.2	7.8	2.56	土	
C42	9C		勾玉	21.5	17.2	15.0	6.74	土	
C46	9B		勾玉	31.6	12.2	14.5	8.22	土	

3．足守川矢部南向遺跡遺構・遺物一覧

1　竪穴住居

弥生時代中期後半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m^2)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
1	5B	不整円形	4 (2)	450		20		2.30				石製品6	
2	8B	不整円形	5	550		25	(22.1)	2.40				石製品21、分銅形土製品1	
3A	8B	不整円形	4	530	510	40	18.3	2.15				石製品22、土製紡錘車1	床面一部張出
3B	8B	円形		490			17.6	2.10					
4	8B	不整円形	(1)			15		1.85					

弥生時代後期前半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m^2)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
5	2B	円形	?			35		2.70				分銅形土製品1	
6	2B	円形	4 (3)	410	400	15	(11.4)	2.55				石製品2	
7	2B	円形	6	620		20	(27.3)	2.75				砥石2	
8	2A	円形	?			50		2.55					
9	3A	楕円形	4	645	595	40	(37.6)	2.90				石製品5	焼失
10A	3B	不整円形	4 (3)	640	625	35	29.9	2.52	○			石包丁1、砥石1、鉄製品1	
10B	3B	不整円形	4 (3)	470	470		17.8	2.48	○				
10C	3B	不整円形	?	435	(310)	20		2.43	○				
11	3B	円形	4 (2)			20		2.60				楔形石器1、砥石1	
12	3B	円形	(2)	590		20		2.30				土製紡錘車1、錘1	
13	4B	円形	8	712	(690)	25	38.0	2.35				石製品6	
14	4B	不整円形	5	610	590	40		2.45					
15A	4B	円形	4	660		5		2.40	○			石錘2、土製品1	
15B	4B	円形	4 (2)	540				2.45					
16	4B	円形	4 (3)			25		2.45					
17	4B	長方形		230	155	20	2.8	2.85					
18	5B	円形	(3)			20		2.50					
19	5B	不整円形	4	(500)	465	35	(15.0)	2.55	○			スクレイパー1、刀子1	
20	5B	円形	5 (3)	680		5		2.50				石製品4、鉄鏃1	
21	6B	楕円形	4	(500)	450	30	(15.6)	2.25	○			楔形石器1、砥石1、玉類2	
22A	7B	円形	8	730	700	30	38.4	2.40	○			石製品2、土製紡錘車3、鉄製品3	
22B	7B	円形	5	490	455	5	16.4	2.35					
23	7B	円形	4	495		40	(15.9)	2.15				銅鏃1	
24	7B	不整円形	4 (3)	345		15		2.45					
25	7B	不整円形	4	435	375		10.8	2.30	○				
26	8B	楕円形	5	(600)	570	55	(25.5)	2.00	○	○		石鏃2、土製品2、鉄製品1	焼失
27	8B	不整円形	4		365	40	(10.2)	1.90					
28	9B	円形	4 (2)			55		1.95					

足守川矢部南向遺跡

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
29	9B	円形	(3)	560		25		2.15	−			石斧1、石包丁1	

弥生時代後期後半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
30A	2B	不整円形	4	515	490	30	20.5	2.70		○		土製紡錘車2、刀子1	
30B	2B	不整円形				15							
31	3B	円形	4 (3)	525		40	(17.1)	2.75				ガラス小玉1	
32A	2B	不整円形	5 (4)		540	20		2.70				鉇1	
32B	2B	不整円形	?						○				
33	3A	円形	(1)			25		2.70					
34	3A	円形	4	(660)		15		2.30					
35	3A	円形	4	510		60	(18.4)	2.15	○		台石	土製紡錘車1	
36	3A	長方形	?	325	225	15	6.4	1.97					
37	3A	不整円形	5 (2)			5		2.00	○			土製紡錘車2、土錘1、分銅形土製品1	
38	4A	不整円形	4 (3)	600	540	40	(24.6)	2.50					
39	4B	円形	5	520		35	(20.3)	2.55	○			ガラス小玉1	
40A	4B	楕円形	6	520	500	35	35.5	2.55		○		砥石2、土製品1、鉇1	
40B	4B		5			5				○			
41	4B	不整円形	4	440	405	5	(14.5)	2.45				土製紡錘車1	
42A	4B	不整円形	4	530	530	5	(21.2)	2.40					
42B	4B	不整円形	4	(530)	(530)	5	(21.2)	2.15	○	○			
43	5B	円形	5		440	40	(14.5)	2.40				砥石1、土製紡錘車2、鉄製品2、管玉1	床面一部張出
44A	5B	円形	6 (5)	610		35	(28.3)		○	○		金属器7、玉類3	
44B	5B	円形	4 (3)	550			(23.2)						
44C	5B	不整円形		490			(18.4)						
45	5B	円形	6 (4)			5						土製紡錘車6	
46A	5B	円形				20		2.45				土製紡錘車2、金属器10、管玉1	
46B	5B	円形	4 (3)	(490)		10		2.30	○				
47	5B	不整円形	4 (2)	(505)		30		2.20					
48	5B	円形	(4)			30		2.40				小銅鐸1	
49	6B	不整円形	4 (3)	415	390	10	12.4	2.50	○				
50	6B	不整円形	4 (2)	450	400	20	13.1	2.35	○			鉇2、管玉1	床面一部張出

古墳時代前半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
51A	2B	方形	4	630	610	45	32.5	2.75		○	土壙	砥石1、土錘2、玉類3、鉄剣1	
51B	2B	方形	4 (3)	560	520		24.8	2.70		○			
52	2B	方形	4 (3)		625	20		2.85		○		砥石1、土錘2、鉄製品2	
53	1B	隅丸方形		380	375	30	11.1	2.60				砥石1、土玉1	
54	1B	不整円形	6	(680)		30		2.75	○			土製品3、金属器2	
55A	2B	隅丸方形	4	530	515	40	22.5	2.75				土錘5、鉄斧1、手鎌1	
55B	2B	隅丸方形	(4)	(530)	(470)	5	(20.7)	2.80	○				
56	2B	方形	4 (3)	(780)		15	54.0	2.85				土製紡錘車1、鉇1、鉄鏃1	
57A	3B	隅丸方形	4	513	500	25	22.4	2.80		○		土錘1、土玉1、土製品1	

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
57B	3B	隅丸方形	4	(440)	(425)	10	(14.3)	2.70					
58	3B	隅丸方形	4 (2)	560		20		2.90		○			
59	3B	方形				35		2.40					
60	3A	不整円形	4 (3)	(720)	(590)	30	(32.0)	2.50				砥石3、土錘2、土製紡錘車1	
61	4A	不整円形	(3)			15		2.45				石包丁1、土錘2	
62	4B	隅丸方形	4	580	560	35	28.4	2.50				土錘12、鉄製品2、玉類3	
63A	4B	隅丸方形	4		570	25	(27.0)	2.55				土錘7、土製紡錘車3、鉄製品2、土玉1	
63B	4B	隅丸方形	4		415	10		2.45					
64	8B	不整方形		505	440	25	19.4	2.45		○		刀子1	
65A	9B	円形	4	510	495	35	17.9	2.25	○		台石		
65B	9B	円形		440		10		2.05					
66	8A	隅丸方形	4	550	540	20	25.3	2.45				砥石1	
67	8A	隅丸方形				25		2.40					
68	8A	隅丸方形				25		2.40					

古墳時代後半

遺構番号	地区	平面形態	主柱穴	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	床面積(m²)	床海抜高(m)	中央施設	ベッド	その他の施設	出土遺物	備考
69	2B	不整長方形	4	45	370	5	(14.6)	3.30			竈(西辺中央)	土錘1	
70	5B	不整長方形	4	830	710	10	(54.9)	2.80			竈(北辺中央)		
71	8B	長方形	?	405	346	10	(13.2)	2.60			竈(北辺東寄)		焼失
72	8B	隅丸方形	4	610		25		2.45			竈(北辺中央)		
73	8B	隅丸方形				15		2.50					
74	9B	方形	?		430	30		2.50				鉄製品4	
75	9B	方形	4 (1)		560	5		2.50					
76	9B	方形	?		472	5		2.65			中央に炉	金属製品4	

2 掘立柱建物

弥生時代中期

遺構番号	地区	規模(間)	桁(cm)	梁(cm)	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m²)	棟方向	柱穴掘り方
1	6B	2×1	292−315	290	607	290	17.60	北西・南東	円形
2	6B	2×1	158−196	235−248	354	248	8.60	北西・南東	円形

古代

遺構番号	地区	規模(間)	桁(cm)	梁(cm)	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m²)	棟方向	柱穴掘り方
3	7B	1×1	335−365	340−345	365	345		北西・南東	方形
4	8B	?×2	215−230	230−233		463		南北	方形
5	8B	?×2	192−230	235−261		496		北西・南東	方形
7	9B							南西?	方形

足守川矢部南向遺跡

遺構番号	地区	規模(間)	桁(cm)	梁(cm)	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m²)	棟方向	柱穴掘り方
8	9B	?×2	170−220	190		380		南西・北東	円形
9	9B	2×2	230−270	165−195	500	360	18.00	南西・北東	方形
10	8A	2×2	220	210	440	420	9.70	東西	方形

中世

遺構番号	地区	規模(間)	桁(cm)	梁(cm)	桁行(cm)	梁間(cm)	面積(m²)	棟方向	柱穴掘り方
11	4B	1×1	215	145	215	145	3.10	北西・南東	円形
12	4B	2×1	165−192	283	357	283	10.10	南北	円形
13	6B	2×1	220−245	225	475	225		東西	円形
14	6B	2×1	200−250	210	750	210	15.80	北西・南東	円形
15	6B	2×1	192−254	223−225	452	225		北西・南東	円形
16	6B	2×1	160−185	240	345	240	8.30	東西	円形
17	8B	3×2	185−220	140−240	605	380	23.00	南西・北東	円形
18	9B		255−315	270−				東西？	円形

3 土　壙

弥生時代中期

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	4Bc	不整円形		122	86	石包丁1、U.F2	
2	5Bd	不整円形	71	58	24	石包丁1、他2	
3	6Bc	不整円形	116	105	22		
4	7Ba	円形	68		26		
123	3Bb				40		

弥生時代後期前半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
5	2Ba	不整円形	148	100	51		袋状土壙
6	2Ba	不整円形	126	110	22		袋状土壙
7	2Ac	円形	90		35		
8	2Ad	円形	80		20		
9	2Ba	円形	118	109	31	石核1	袋状土壙
10	2Ba	円形	108	101	31	礫石1、石鏃1	袋状土壙
11	2Ba	不整楕円形	144	109	67	石製品8	
12	2Ba	円形	80	75	55		
13	2Ba	円形	124	112	64	凹み石1	袋状土壙
14	2Bb	不整円形	135		90		袋状土壙
15	2Bb	不整円形	130	130	48		

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
16	2Bb	楕円形	135	98	84		袋状土壙
17	2Bd	円形	114	106	68		袋状土壙
18	2Bd	不整円形	100	90	105		袋状土壙
19	2Bd	不整長方形	145		22		
20	3Ac	不整円形	93		40		袋状土壙
21	3Ba	楕円形		95	30		
22	3Bc	楕円形	112	73	25		
23	3Bc	不整円形	177		35		
24	3Bb	不整円形	128	115	47		袋状土壙
25	3Bb	円形	100		10		
26	3Bb	不整円形	118	84	65		袋状土壙
27	4Ba	不整長方形	183	134	73	鉄鏃1	
28	4Bb	楕円形		98	28		
29	4Bb	不整円形	135		41		袋状土壙
30	4Bb	不整長方形			21		
31	4Bc	円形	42	28	17		
32	4Bd	円形	106		117		袋状土壙
33	4Ba	円形	195		45	スクレイパー1	袋状土壙
34	5Bc	不整円形	113	97	73	土製紡錘車1	
35	5Bc	不整楕円形	129	82	21	鉄鏃1	
36	6Ba	円形	86	81	49		袋状土壙
37	6Ba	不整円形	122	105	35		
38	6Bc	円形	131	125	62		袋状土壙
39	6Ba	不整円形	111	102	44		袋状土壙
40	6Bb	長方形	151	75	21		
41	7Ba	不整円形	141	111	75		袋状土壙
42	7Bb	不整長方形	117	91	23		
43	8Ba	円形	164	159	85	石包丁2、他4、鉄鏃1	袋状土壙
44	9Ba	不整円形	92	90	24	石斧1	
45	9Ba	円形	146		50		袋状土壙
46	8Bd	楕円形	130		69		袋状土壙
47	9Ba	不整円形	118	108	40～55		袋状土壙
48	9Bb	不整円形	179	170	75	石包丁1	袋状土壙
49	9Bb	楕円形	125	87	55		袋状土壙
50	9Bb	楕円形	125	109	43		袋状土壙
51	9Bb	円形	172	170	87		袋状土壙
52	9Ba	不整楕円形	215	190	35		袋状土壙
53	9Ba	不整楕円形		103	54		袋状土壙
54	9Ba	円形	110		100		袋状土壙
55	9Bc	円形	103	95	54	スクレイパー2	袋状土壙
124	2Ac	円形	85	80	20		
125	2Ad				20		
126	2Ba	楕円形	110	80	35		
127	2Ba	楕円形	75	60	20		
128	2Bb	不整円形	110		25		
129	2Bd	不整円形	100	85	10		
130	3Ba	不整円形	95	75	30		
131	3Bc	楕円形	110	75	10		
132	3Bd				15		

足守川矢部南向遺跡

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
133	4Bc	円形	70		35		
134	5Bb	円形	110	100	30	鏃1	
135	5Bc	不整円形	95	80	35		
136	6Bb	楕円形	90	70	25		
137	6Bc	楕円形	91	67	22		
138	6Bd	楕円形	195	120	50		袋状土壙
139	6Bd	不整円形	125	105	40		
140	7Bb				20		
141	8Ba	長方形	105	75	15		
142	8Ba	楕円形	85	55	20		

弥生時代後期後半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
56	1Bb	円形	135	128	75		
57	1Bb	長方形		180	30	金属器2	長方形土壙
58	2Ba	方形	117	107	25		長方形土壙
59	2Ba	長方形	160	110	47	石錘1	
60	2Ba	長方形	210	110	20		長方形土壙
61	2Ba	不整円形	70	57	10		
62	2Bb	台形	172	165	46		長方形土壙
63	2Bb	不整方形	259	233	90		
64	2Bd	長方形	210	141	48		長方形土壙
65	2Bd	長方形	138	97	49		長方形土壙
66	2Bd	不整長方形	265	169	37	鉄鏃1	長方形土壙
67	2Bd	不整円形	70	62	22		
68	2Bd	長方形		170	75		長方形土壙
69	3Bc	長方形	150	98	48		長方形土壙
70	3Ac	長方形	143	116	50		長方形土壙
71	3Ad	長方形	280	148	45		長方形土壙
72	3Ba	不整円形	300	290	150	土製品2	長方形土壙
73	3Ba	台形	230		85		長方形土壙
74	3Bb	楕円形	112	80	90		袋状土壙
75	3Ba	不整円形	68	64	18		
76	3Bb	不整円形	104	83	20		
77	3Bb	不整長方形	134	111	57	石錘1、刀子1	長方形土壙
78	3Bd	長方形	112	90	24		長方形土壙
79	3Bd	長方形	247	89	27		
80	3Bd	不整長方形	165	130	45		長方形土壙
81	3Bd	円形	90	87	24		
82	3Bb	不整長方形	218	169	48		長方形土壙
83	4Bc	楕円形	98	64	25		
84	4Bc	長方形	216	72	44		
85	4Bc	長楕円形	195	80	25	土錘2	
86	4Bd	長方形	116	88	13		
87	4Bd	長方形		68	89		長方形土壙
88	5Bd	不整長方形	120	75	35		長方形土壙

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
89	5Bd	長方形	215	161	49	土製紡錘車1、金属器3	長方形土壙
90	5Bb	長方形	170	65	27		
91	7Bc	不整円形	70	60	20		
92	7Ba	円形	98		36		
93	7Ba	楕円形	209	103	20		
94	7Bd	楕円形	116	87	40		
143	2Ba	円形	94	92	41		
144	2Ba	不整円形	90	85	22		
145	2Ba	楕円形	220		53		長方形土壙
146	2Bb	長方形		125	40		長方形土壙
147	2Bd	円形	105		30		
148	3Ba	円形	90		20		
149	3Ba	円形	85		25		
150	3Ba	楕円形	85	75	25		
151	3Ba	円形	115		15		
152	3Bb	不整円形	100		15		
153	3Bb	楕円形	50	30	25		
154	3Bd		70		15		
155	3Bc	楕円形		100	10		
156	4Bb	長方形	150	120	40		
157	4Bb	長方形		120	40		長方形土壙
158	4Bb	楕円形	110	85	15		
159	4Bb				40		
160	4Bc	不整円形	80	75	10		
161	4Bc	不整方形		78	69		長方形土壙
162	4Bb				15		
163	5Bb	楕円形		65	15		
164	5Bb	不整楕円形		65	10		
165	5Bb	不整円形	65	65	20		
166	5Bb			80	60		
167	6Ba	楕円形	135	65	40		
168	7Ba	不整円形	90	69	9		
169	7Bd	円形	85		25		
170	8Bb				20		
171	9Ba	不整円形	90	75	10		

古墳時代前半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
95	1Bb	不整方形	127	106	73		
96	2Ac	楕円形	85	45	20		
97	2Bd	楕円形	120	58	55		
98	4Bc	隅丸長方形	125	90	10		
99	4Bc	楕円形	60	54	10	土錘37	
100	4Bc	方形	126		21	土錘7	
101	4Bc	不整方形	84	81	31		
102	4Bc	不整円形	166	126	35		
103	4Bb	長方形	134	91	13		

足守川矢部南向遺跡

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
104	4Ba	楕円形	100	70	14		
105	4Ad	不整円形	70	65	18		
106	5Ba	不整円形	118	86	22		
107	5Bd	楕円形	103	63	10		
172	2Bb	方形	82	77	51		
173	2Bc	円形	75	65	50		
174	3Bb				10		
175	3Bd	不整円形	164	131	49		
176	4Ba	不整円形	115	96	30		
177	4Ba	不整円形	85	70	30		
178	4Bc	不整円形	99	85	36		
179	5Bb	不整円形	65	60	25		
180	5Bb	不整円形	65	60	10		
181	9Bc	不整円形	65		20		

古墳時代後半

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
108	3Bb	不整方形	94	78	11		
109	8Bb	長方形		110	35		焼土壙
182	5Bb	不整円形	70	64	18		
183	9Bb	不整円形	95	80	20		
184	9Bb	楕円形	90	50	40		
185	9Bb	楕円形	140	105	15		

中世

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
110	5Bd	不整楕円形	259	113	19	砥石1、鉄製品1	
111	5Bb	不整長方形	222	189	18		
112	5Bb	不整長楕円形	215	118	10		
113	5Bb	不整長楕円形	471	98	63		
114	6Bb	不整長楕円形	315	100	20	砥石1	
115	6Bb		400	155	13	鉄製品1	
116	6Bb	長方形	243	97	21		
117	6Bd	不整方形	183	106	25	銅製品1、鉄製品1	
118	7Bc	楕円形	254	101	23	円盤1	
119	7Bb	円形	400			円盤1	
120	9Bd	不整方形	225	178	14	刀子1	
121	9Bd	楕円形	177		9		
122	9Bb	不整円形	58	46	30		
186	2Bb	楕円形	115	80	15		
187	3Bc	楕円形	120	90	25		骨片有り、土壙墓の可能性有
188	3Bc		225		77		
189	4Bb	不整円形	150	135	7		
190	4Bb	不整円形	155		10		

遺構番号	地区	平面形態	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
191	4Bd	長方形	180	90	15		
192	4Bd	不整円形	140		30		
193	4Bc	円形	80		20		
194	4Bd	不整円形	135	120	15		
195	4Bb	楕円形	60	40	20		
196	4Ba	不整楕円形	345	120	5		
197	8Ba	不整円形	65	60	25		
198	8Ba	不整円形	87	71	26		
199	8Bc	長方形	154	75	11		
200	9Bb	長方形	165	45	15		
201	9Bd	円形			30		

4　石器・石製品

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
S1	5B	竪穴住居1	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	48.5	30.3	6.7	10.07	サヌカイト	石包丁転用
S2	5B	竪穴住居1	石包丁	22.5	40.0	8.0	5.40	サヌカイト	
S3	5B	竪穴住居1	石包丁？	78.8	57.2	14.0	76.77	サヌカイト	
S4	8B	竪穴住居2	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？	44.5	23.0	6.1		サヌカイト	
S5	8B	竪穴住居2	石包丁？	53.5	53.8	13.5	40.94	サヌカイト	刃部付近珪酸付着
S6	8B	竪穴住居2	石鏃？	79.5	34.0	5.9	16.29	サヌカイト	
S7	8B	竪穴住居2	R.F.	65.0	39.0	15.5	23.15	サヌカイト	完形
S8	8B	竪穴住居2	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	32.5	26.1	7.6	4.65	サヌカイト	
S9	8B	竪穴住居2	楔形石器	15.0	28.0	5.3	3.08	サヌカイト	
S10	8B	竪穴住居2	楔形石器	21.5	22.0	5.5	3.45	サヌカイト	
S11	8B	竪穴住居2	楔形石器	24.0	25.0	4.8	3.23	サヌカイト	截断面有、やや欠損
S12	8B	竪穴住居2	楔形石器	29.5	16.0	5.1	2.23	サヌカイト	
S13	8B	竪穴住居2	石鏃	15.0	15.1	3.0	0.60	サヌカイト	ほぼ完形
S14	8B	竪穴住居2	石鏃	18.5	14.9	35.0	0.75	サヌカイト	やや欠損
S15	8B	竪穴住居2	石斧	79.7	45.6	15.2	92.44	黒色片岩	
S16	8B	竪穴住居2	石斧	144.0	74.4	47.8	845.59	安山岩	ほぼ完形
S17	8B	竪穴住居3	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	123.2	88.5	19.0	196.18	サヌカイト	ほぼ完形
S18	8B	竪穴住居3	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	51.5	41.5	11.2	22.41	サヌカイト	
S19	8B	竪穴住居3	石包丁orｽｸﾚｲﾊﾟｰ	37.0	19.0	7.0		サヌカイト	
S20	8B	竪穴住居3	石鏃？	30.5	23.5	4.5		サヌカイト	
S21	8B	竪穴住居3	楔形石器	14.0	23.5	6.5		サヌカイト	截断面有
S22	8B	竪穴住居3	楔形石器	22.0	24.5	6.5	3.12	サヌカイト	
S23	8B	竪穴住居3	石鏃	27.5	16.5	6.3	2.33	サヌカイト	未製品
S24	8B	竪穴住居3	石鏃	31.0	22.5	6.0	3.55	サヌカイト	未製品？
S25	8B	竪穴住居3	石鏃	33.0	21.0	5.8	3.84	サヌカイト	
S26	4Bc	土壙1	石包丁	25.0	49.0	9.2	7.44	サヌカイト	
S27	5Bd	土壙2	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ？	62.5	29.0	7.0	7.81	サヌカイト	
S28	5Bd	土壙2	石包丁	40.0	45.0	7.6	11.14	サヌカイト	
S29	5Bd	土壙2	楔形石器	13.0	28.0	3.2	1.62	サヌカイト	
S30	5Bb	溝1	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	87.5	62.5	10.5	64.31	サヌカイト	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
S31	2B	竪穴住居6	スクレイパー	62.5	47.0	11.0	29.05	サヌカイト	
S32	2B	竪穴住居6	石包丁	39.0	28.5	11.8	9.03	サヌカイト	
S33	3A	竪穴住居9	敲石	168.5	61.5	42.0	624.80	安山岩	完形
S34	3A	竪穴住居9	敲石	87.5	77.5	83.0	797.13	安山岩	ほぼ完形
S35	3Ba	竪穴住居9	砥石	203.0	113.5	96.0		砂岩	
S36	3Ba	竪穴住居9	楔形石器	38.0	30.0	10.5	11.63	サヌカイト	
S37	3B	竪穴住居10	石包丁	74.0	35.0	9.5	33.10	サヌカイト	やや欠損
S38	3Bb	竪穴住居11	楔形石器	27.5	29.5	6.0	6.00	サヌカイト	
S39	4B	竪穴住居13	石包丁	72.0	42.5	9.0	32.50	サヌカイト	
S40	4B	竪穴住居13	石包丁	68.5	47.5	8.5	41.48	サヌカイト	
S41	4B	竪穴住居13	スクレイパー?	64.5	45.5	11.5	35.57	サヌカイト	完形
S42	4B	竪穴住居13		50.0	32.0	5.3	8.10	サヌカイト	石包丁転用
S43	4B	竪穴住居13	R.F	27.0	34.5	5.6	6.40	サヌカイト	
S44	4B	竪穴住居15	石錘	68.7	68.6	63.7	480.58	閃緑岩	
S45	4B	竪穴住居15	石錘	69.0	61.0	59.0	350.06	花崗岩	完形
S46	5B	竪穴住居16	スクレイパー?	33.7	25.8	6.2	6.04	サヌカイト	
S47	5B	竪穴住居20	スクレイパー	32.6	29.0	5.0	4.95	サヌカイト	
S48	5B	竪穴住居20	楔形石器	33.0	26.0	5.1	4.06	サヌカイト	
S49	6B	竪穴住居21	管玉	7.1	4.2		0.20	碧玉	
S50	6B	竪穴住居21	楔形石器	35.0	24.5	7.7	7.50	サヌカイト	完形
S51	6B	竪穴住居21	砥石	73.7	80.0	55.0	455.03	流紋岩の溶岩	
S52	7B	竪穴住居22	石鏃	29.9	19.7	3.3	1.50	サヌカイト	ほぼ完形
S53	8B	竪穴住居26	石鏃	31.5	13.2	4.2	1.53	サヌカイト	
S54	8B	竪穴住居26	石鏃?	19.5	17.0	4.0	1.56	サヌカイト	
S55	9Bc	竪穴住居29	敲石	73.0	62.0	49.0	369.68	安山岩	磨製石器に転用
S56	9Bc	竪穴住居29	石包丁	98.5	46.5	11.0	55.70	サヌカイト	ほぼ完形
S57	2Ba	土壙9	石核	115.0	62.0	32.8	260.51	サヌカイト	
S58	2Ba	土壙10	敲石	77.0	55.0	30.0	190.06	安山岩	
S59	2Ba	土壙10	石鏃	27.0	15.0	3.5	1.30	サヌカイト	
S60	2Ba	土壙11	スクレイパー?	62.5	30.0	10.0	18.60	サヌカイト	
S61	2Ba	土壙11	石包丁	49.0	45.5	10.0	35.72	サヌカイト	
S62	2Ba	土壙11	石鏃	34.6	22.0	5.7	5.30	サヌカイト	
S63	2Ba	土壙11	敲石?	113.0	95.4	52.4	803.77	安山岩	
S64	2Ba	土壙13	凹み石	134.0	111.0	36.0	875.21	安山岩	完形
S65	2Ba	土壙33	スクレイパー?	42.0	22.0	6.5	6.67	サヌカイト	
S66	9Ba	土壙43	石包丁?	41.5	42.0	7.0	12.15	サヌカイト	
S67	9Ba	土壙43	石包丁?	48.0	34.0	12.0	18.24	サヌカイト	
S68	8Ba	土壙43	石槍状石器	69.0	32.0	13.8	42.34	サヌカイト	
S69	8Ba	土壙43	石鏃	19.0	18.0	3.1	0.81	サヌカイト	ほぼ完形
S70	8Ba	土壙43	敲石	77.0	33.0	32.0	128.00	砂岩	
S71	9Bb	土壙48	石包丁	42.5	36.0	9.0	12.69	サヌカイト	
S72	9Bc	土壙55	スクレイパー	33.0	20.5	5.7	3.28	サヌカイト	
S73	9Bc	土壙55	スクレイパー?	39.0	24.0	5.5	5.82	サヌカイト	
S74	5Bb	包含層	スクレイパー	106.0	41.0	14.5	46.76	サヌカイト	やや欠損
S75	8B	包含層	スクレイパー	55.3	44.6	8.5	20.29	サヌカイト	
S76	5Bd	包含層	スクレイパー	95.0	71.5	13.0	89.57	サヌカイト	
S77	1Bb	包含層	スクレイパー	61.5	41.5	11.0	20.50	サヌカイト	
S78	5Bd	包含層	U.F	33.5	33.0	8.0	7.74	サヌカイト	
S79	6B	包含層	スクレイパー	40.5	31.5	6.8	10.51	サヌカイト	石錐か?

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
S80	8B	包含層	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	38.5	28.5	7.0	8.86	サヌカイト	
S81	8Bb	包含層	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	88.0	56.0	8.0	38.20	サヌカイト	ほぼ完形
S82	6Bb	包含層	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	54.5	36.0	10.9	23.86	サヌカイト	
S83	6Bc	包含層	石錐？	44.0	29.0	6.0	7.17	サヌカイト	石包丁転用
S84	5Bb	包含層	石包丁	59.5	44.5	10.0	20.44	サヌカイト	
S85	3Ba	包含層	石包丁	56.0	53.0	10.0	36.64	サヌカイト	
S86	1Bb	包含層	石包丁	44.5	46.5	9.5	23.70	サヌカイト	
S87	3B	包含層	石包丁	47.5	29.0	11.0	19.10	サヌカイト	
S88	8B	包含層	石包丁	39.0	30.5	9.5	7.45	サヌカイト	
S89	4Bb	包含層	磨製石包丁	32.5	28.5	5.2	5.90	粘板岩	
S90	5B	包含層	楔形石器	30.5	32.0	6.5	7.78	サヌカイト	
S91	3B	包含層	楔形石器	31.0	23.5	7.5	6.48	サヌカイト	
S92	8Bb	包含層	楔形石器	31.5	16.5	4.5	2.04	サヌカイト	
S93	5Bd	包含層	楔形石器	20.0	22.0	6.5	3.65	サヌカイト	截断面有・完形
S94	7B	包含層	楔形石器	27.0	24.5	6.0	3.97	サヌカイト	
S95	6Bd	包含層	扁平片刃石斧	45.5	38.0	7.0	21.30	黒色片岩	完形
S96	6Ba	包含層	磨製石斧？	95.0	42.0	13.0	90.81	緑色片岩	
S97	6Ba	包含層		46.5	12.0	8.5	6.82	頁岩	
S98	2Bb	包含層	石槍	36.0	26.0	10.5	9.94	サヌカイト	転用
S99	2B	包含層	石鏃	21.5	16.0	3.7	0.90	サヌカイト	
S100	7B	包含層	石鏃	51.5	15.5	3.8	0.61	サヌカイト	完形
S101	5Ba	包含層	石鏃	18.0	19.0	3.5	0.87	サヌカイト	
S102	5Ba	包含層	石鏃	22.0	16.0	3.9	1.03	サヌカイト	
S103	2B	包含層	石鏃	33.0	17.0	4.0	2.30	サヌカイト	ほぼ完形
S104	8Ba	包含層	石鏃	30.5	16.0	3.5	1.37	サヌカイト	ほぼ完形
S105	5Bd	包含層	石鏃	34.0	19.5	5.3	2.05	サヌカイト	ほぼ完形
S106	3Ba	包含層	石鏃	26.0	15.0	3.0	1.20	サヌカイト	ほぼ完形
S107	5Bb	包含層	石鏃	48.0	18.5	6.5	5.74	サヌカイト	ほぼ完形
S108	3B	包含層	石鏃	37.0	14.5	4.6	2.54	サヌカイト	
S109	2Bd	包含層	石鏃	40.0	16.0	4.7	2.52	サヌカイト	ほぼ完形
S110	9Bc	包含層	石鏃	33.0	13.5	3.7	1.51	サヌカイト	
S111	6Bd	包含層		39.0	23.0	5.0	4.26	サヌカイト	有茎鏃の未製品か？
S112	8Ba	包含層	石鏃	26.5	14.5	3.2	1.13	サヌカイト	未製品
S113	9B	包含層	石鍬	107.5	73.0	26.5	285.16	安山岩	未製品
S114	5B	竪穴住居43	管玉	6.4	2.3		0.05	碧玉	
S115	5B	竪穴住居44	管玉	3.8	2.1		0.02		
S116	5B	竪穴住居44	勾玉	12.7	4.6	2.9	0.32	蛇紋岩	
S117	5B	竪穴住居46	管玉	11.8	3.8		0.24		
S118	6B	竪穴住居50	管玉	13.5	4.2		0.25		
S119	3Bb	土壙77	石錘	34.8	34.8	26.5	46.45	安山岩	
S120	2B	竪穴住居51	勾玉	15.6	7.0	4.2	1.05	蛇紋岩？	
S121	2B	竪穴住居51	勾玉	15.4	6.4	3.7	0.80	蛇紋岩？	
S122	2B	竪穴住居51	臼玉	2.3	4.3		0.05	蛇紋岩	
S123	2Ba	竪穴住居51	砥石	145.6	31.0	19.0	137.43	流紋岩質凝灰岩	工具痕跡明瞭、ほぼ完形
S124	1Bb	竪穴住居53	砥石	156.0	85.5	38.5	537.04	流紋岩の溶岩	やや欠損
S125	3A	竪穴住居60	砥石	84.0	28.0	25.0	98.60		
S126	3A	竪穴住居60	砥石	190.0	95.0	21.5	891.54		
S127	3A	竪穴住居60	砥石	76.0	32.0	31.0			
S128	3A	竪穴住居61	石包丁	103.0	29.0	6.0		一部欠損	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
S129	3B	竪穴住居62	管玉	12.5	4.6		0.33	碧玉	
S130	4B	竪穴住居62	管玉	20.0	5.2		1.00	碧玉	
S131	8A	竪穴住居66	砥石	77.0	46.0	28.0	127.20		
S132	5Bb	包含層	臼玉	11.5	4.3		0.04	蛇紋岩	
S133	7Bc	包含層	臼玉	2.0	3.9		0.04	黒色片岩	
S134	7Ba	包含層	臼玉	2.1	4.3		0.05	蛇紋岩	
S135	7Ba	包含層	臼玉	2.0	6.4		0.11	碧玉	
S136	3Ba	包含層	管玉	9.5	2.2		0.10	碧玉	
S137	6Ba	包含層	管玉	12.9	4.5		0.26	碧玉	
S138	7Bc	包含層	管玉	13.3	4.4		0.44	堆積岩？	
S139	7Bb	包含層	管玉	15.0	5.1		0.67	碧玉	
S140	8B	包含層	管玉	15.0	3.4		0.38	碧玉	
S141	4Ad	包含層	管玉	16.3	4.1		0.50	碧玉	
S142	4Bd	包含層	管玉	16.4	2.8		0.17		
S143	8B	包含層	管玉	19.6	7.0		1.54	碧玉	
S144	6Bd	包含層	勾玉	27.5	10.6	10.4	5.06	碧玉	
S145	2B	包含層	勾玉	9.8	4.4	2.4	0.22	蛇紋岩？	
S146	5Bb	溝10	石臼	128.0	56.2	31.6		砂岩	破片
S147	5Bb	溝10	砥石	55.0	63.0	49.0	268.40	泥岩	
S148	6Ba	溝16	砥石	117.5	82.5	66.6	816.82	流紋岩の溶岩	
S149	6Ba	溝16	石臼					安山岩	約1／4強残存
S150	6Ba	溝16	石臼					砂岩	約1／4弱残存
S151	7Bb	溝30	硯	114.6	52.4	18.0	204.06		
S152	6Ba	包含層	硯	43.5	51.0	14.0	44.93		
S153	7Bc	包含層	石臼					安山岩質凝灰岩	約1／4弱残存
S154	6Bb	包含層	砥石	68.6	55.4	55.0	321.26	半花崗岩	
S155	6Bb	包含層	砥石	49.0	47.4	42.8	181.33	砂岩？	
S156	6Bc	包含層		128.9	77.0	59.6	815.89	流紋岩の溶岩？	
S157	5B	包含層	砥石	77.0	42.0	30.0	101.61	流紋岩の溶岩？	
S158	9B	包含層	砥石	85.0	54.0	29.0	160.46	流紋岩質凝灰岩	ほぼ完形
S159	5B	包含層	砥石	144.5	143.0	77.0		半花崗岩	
S160	8B	竪穴住居3	石槍	56.4	32.4	9.3	15.71	サヌカイト	

5 金属器

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大幅(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
M1	3B	竪穴住居10	(板状)	40.0	8.0	3.0	1.27	鉄	
M2	3B	竪穴住居12	鏃	54.0	13.0	4.0	4.21	鉄	
M3	5B	竪穴住居19	刀子？	49.0	13.0	3.0	4.16	鉄	
M4	9B	竪穴住居20	鏃	33.0	20.0	7.0	4.81	鉄	
M5	7B	竪穴住居22	鏃	52.0	11.0	6.0	4.70	鉄	
M6	7B	竪穴住居23	鏃	24.0	10.0	3.0	0.99	青銅	
M7	8B	竪穴住居26	鏃？	46.0	52.0	9.0	28.11	鉄	
M8	4Ba	土壙27	鏃	29.0	8.0	8.0	2.01	鉄	
M9	5Bc	土壙35	鏃	47.0	18.0	5.0	3.96	鉄	
M10	8Ba	土壙43	鏃	18.0	15.0	4.0	1.63	鉄	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大幅(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
M11	2 B	竪穴住居30	刀子	45.0	13.0	5.0	5.77	鉄	
M12	2 B	竪穴住居32	鏃？	27.0	19.0	7.0	4.16	鉄	
M13	4 B	竪穴住居40	鏃	30.0	12.0	6.0	2.51	鉄	
M14	5 B	竪穴住居43	鏃	57.0	11.0	4.0	3.86	鉄	
M15	5 B	竪穴住居44	鏡？	15.8	11.0	3.0	1.10	青銅	
M16	5 B	竪穴住居44	鏃	35.0	28.0	5.0	5.55	鉄	
M17	5 B	竪穴住居44		34.0	14.0	4.0	3.51	鉄	
M18	5 B	竪穴住居44		23.0	16.0	4.0	1.65	鉄	
M19	5 B	竪穴住居44	鏃	27.5	10.0	4.0	2.07	青銅	
M20	5 B	竪穴住居46	鏃	36.0	12.0	4.0	2.53	鉄	
M21	5 B	竪穴住居46	鏃	28.0	10.0	3.0	1.27	鉄	
M22	5 B	竪穴住居46	鏃	54.0	11.0	6.0	6.47	鉄	
M23	5 B	竪穴住居46	鏃	48.0	11.0	7.0	3.40	鉄	
M24	5 B	竪穴住居46	鏃	26.0	20.0	3.0	1.84	鉄	
M25	5 B	竪穴住居46		67.0	9.0	4.0	6.86	鉄	
M26	5 B	竪穴住居48	小銅鐸	64.3	37.7		34.56	青銅	
M27	6 B	竪穴住居50	鏃	35.0	17.0	10.0	8.14	鉄	
M28	6 B	竪穴住居50	鏃？	49.0	20.0	4.0	5.16	鉄	
M29	1 B d	土壙57		49.3	9.0	6.0	8.80	鉄	
M30	2 B d	土壙66		54.0	16.0	7.0	5.34	鉄	
M31	3 B b	土壙77	鏃？	39.0	16.0	7.0	9.11	鉄	
M32	5 B d	土壙89		20.0	26.0	7.0	4.40	鉄	
M33	5 B d	土壙89		36.0	8.0	3.0	1.94	鉄	
M34	2 B	竪穴住居51	剣	100.0	28.0	12.0	33.66	鉄	
M35	2 B	竪穴住居51		35.0	9.0	4.0	1.42	鉄	
M36	1 B	竪穴住居54	鏃	22.5	9.0	3.0	1.49	青銅	
M37	1 B	竪穴住居54	刀子	37.0	11.0	5.0	4.02	鉄	
M38	2 B	竪穴住居55	斧	73.0	47.0	10.0	115.14	鉄	
M39	2 B	竪穴住居55	鎌？	28.0	18.0	10.0	5.30	鉄	
M40	3 B	竪穴住居56	鏃	33.0	11.0	4.0	2.18	鉄	
M41	2 B	竪穴住居56	鏃	31.0	19.0	3.0	1.42	鉄	
M42	4 B	竪穴住居62		70.0	25.0	6.0	14.47	鉄	
M43	4 B	竪穴住居62	鏃	38.0	10.0	6.0	3.48	鉄	
M44	4 B	竪穴住居63	刀子	51.0	12.0	6.0	3.93	鉄	
M45	4 B	竪穴住居63	鏃	43.0	11.0	7.0	5.00	鉄	
M46	8 B	竪穴住居64	刀子	49.0	13.0	6.0	6.83	鉄	
M47	7 B a	土器溜り2	鏃	44.0	15.0	8.0	7.85	鉄	
M48	5 B c	包含層	鏡	11.6	14.0	2.0	0.79	青銅	
M49	3 B a	包含層	鏃	22.2	8.0	4.0	1.90	青銅	
M50	7 B c	包含層	鏃	38.7	10.0	4.0	2.12	青銅	
M51	3 B a	包含層	鏃	31.0	17.0	6.0	3.33	鉄	
M52	3 B b	包含層	鏃	66.0	14.0	5.0	7.74	鉄	
M53	3 B a	包含層	鏃	30.0	14.0		3.72	鉄	
M54	5 B d	包含層	鏃	36.0	11.0	7.0	2.74	鉄	
M55	5 B c	包含層	鏃	56.0	12.0	4.0	2.76	鉄	
M56	9 B b	包含層	鏃	51.2	9.0	3.0	5.26	鉄	
M57	5 B b	包含層	鏃	40.7	14.0	3.0	7.58	鉄	
M58	4 B b	包含層	鎌？	30.0	89.0	16.0	60.88	鉄	
M59	3 B a	包含層	鋤先	62.0	112.0	18.0	124.19	鉄	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
M60	5Ba	包含層	鋤先	40.0	65.0	12.0	40.30	鉄	
M61	9B	竪穴住居74	刀子	34.0	21.0	8.0	7.01	鉄	
M62	9B	竪穴住居74	鏃	36.0	13.0	7.0	4.51	鉄	
M63	9B	竪穴住居74	刀子	45.0	11.0	8.0	5.60	鉄	
M64	9B	竪穴住居74	鉋	45.0	13.0	9.0	8.34	鉄	
M65	9Bb	竪穴住居76	耳環	23.0		7.0	9.34	銅	
M66	9Bb	竪穴住居76	鏃	95.0	29.0	10.0	28.14	鉄	
M67	9Bd	竪穴住居76	斧	86.0	42.0	14.0	129.63	鉄	
M68	9B	竪穴住居76	鋤先	32.0	66.0		28.36	鉄	
M69	8B	掘立柱建物4		63.0	9.0	7.0	5.16	鉄	
M70	9B	掘立柱建物9	鉋	29.0	12.0	4.0	2.40	鉄	
M71	7Ba	溝2	刀子？	54.0	22.0	10.0	19.78	鉄	
M72	7Ba	溝2	鉋その他	41.0	14.0	6.0	4.77	鉄	
M73	8B	溝4	鏃	32.0	11.0	5.0	2.06	鉄	
M74	8B	溝4	包丁？	72.0	30.0	4.0	15.31	鉄	
M75	9B	溝6	鉋	27.0	21.0	7.0	7.05	鉄	
M76	9B	溝6	鉋	29.0	14.0	7.0	4.52	鉄	
M77	9B	包含層	耳環	32.0		6.0	17.11	銅	
M78	9B	包含層	鎌	58.0	22.0	2.0	13.47	鉄	
M79	9Bb	包含層	斧	79.0	33.0	12.0	65.29	鉄	
M80	5Bd	土壙110		75.0	40.0	5.0	30.85	鉄	
M81	6Bd	土壙117		75.2	123.0	12.0	23.30	青銅	
M82	6Bd	土壙117		94.0	7.0	7.0	9.73	鉄	
M83	9Bd	土壙120	刀子	178.0	15.0	3.0	32.06	鉄	
M84	5B	溝10	銭貨	21.1			1.08		無文銭 完形
M85	5B	溝16	小刀	128.0	10.0	3.0	5.32	鉄	
M86	5B	溝16	刀子	54.0	14.0	4.0	5.12	鉄	
M87	5B	溝16	(鉄板)	44.0	13.0	2.0	1.25	鉄	
M88	6B	溝18		26.0	26.0	4.0	6.87	鉄	
M89	6B	溝20	刀子	19.0	46.0	9.0	7.73	鉄	
M90	6B	溝20	釘	46.0	5.0	5.0	2.56	鉄	
M91	8B	溝29	銭貨	21.1			0.80		判読不明 破片
M92	7B	溝30	釘	83.0	9.0	7.0	7.73	鉄	
M93	6Bd	包含層	鏃	70.0			7.96	鉄	
M94	8B	包含層	鏃	31.0			2.71	鉄	
M95	8B	包含層	鏃	30.0			3.64	鉄	
M96	8B	包含層	鉄砲玉	13.0			12.56	鉛	
M97	9B	包含層	鉄砲玉	19.0			22.00	鉛	
M98	5Ba	包含層	刀子				13.00	鉄	
M99	5Bc	包含層	釘				1.52	鉄	
M100	5Bb	包含層	飾り金具？					銅	
M101	4Bd	包含層	金具					銅	
M102	4Ba	包含層					8.88	鉄	
M103	6Bb	包含層					79.21	鉄	
M104	2Ba	包含層	鏃				6.80	鉄	
M105	5Bb	包含層		54.0	54.0	7.0	30.40	鉄	
M106	6Ba	包含層	鋤先	73.0	121.0	10.0	195.26	鉄	
M107	6B	包含層	銭貨	24.2			3.51		開元通寶 完形 初鋳621
M108	6B	包含層	銭貨	25.0			3.03		開元通寶 完形 初鋳621

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
M109	7Bb	包含層	銭貨	22.5			1.79		開元通寶 完形 初鋳621
M110	9B	包含層	銭貨	24.7			2.17		開元通寶 完形 初鋳621
M111	1Bb	包含層	銭貨	22.8			1.72		淳化元寶 完形 初鋳990
M112	6Bb	包含層	銭貨	24.1			2.73		至道元寶 完形 初鋳995
M113	6Bb	包含層	銭貨	24.3			2.43		咸平元寶 完形 初鋳998
M114	6Bb	包含層	銭貨	24.1			2.90		景徳元寶 完形 初鋳1004
M115	6Bb	包含層	銭貨	24.0			2.71		景徳元寶 完形 初鋳1004
M116	4Bd	包含層	銭貨	25.0			2.97		祥符元寶 完形 初鋳1008
M117	5Ba	包含層	銭貨	25.2			3.12		祥符元寶 完形 初鋳1008
M118	5Ba	包含層	銭貨	24.5			3.17		祥符元寶 完形 初鋳1008
M119	5Bc	包含層	銭貨	25.0			3.22		祥符元寶 完形 初鋳1008
M120	5Ba	包含層	銭貨	25.5			2.95		祥符元寶 破片 初鋳1008
M121	6B	包含層	銭貨	24.5			2.95		祥符元寶 完形 初鋳1008
M122	5Bc	包含層	銭貨	24.7			3.03		天聖元寶 完形 初鋳1023
M123	6Bb	包含層	銭貨	25.1			3.10		天聖元寶 完形 初鋳1023
M124	5Ba	包含層	銭貨	25.0			2.27		明道元寶 完形 初鋳1032
M125	5Ba	包含層	銭貨	24.9			3.64		皇宋通寶 完形 初鋳1039
M126	9B	包含層	銭貨	24.1			2.66		治平元寶 完形 初鋳1064
M127	9Bd	包含層	銭貨	24.4			2.62		治平元寶 完形 初鋳1064
M128	5Ba	包含層	銭貨	23.7			2.05		熙寧元寶 完形 初鋳1068
M129	5Bc	包含層	銭貨	24.4			4.00		熙寧元寶 完形 初鋳1068
M130	5B	包含層	銭貨	23.9			2.90		元豊通寶 完形 初鋳1078
M131	8Bb	包含層	銭貨	25.0			2.33		元豊通寶 完形 初鋳1078
M132	5B	包含層	銭貨	23.8			2.88		元祐通寶 完形 初鋳1086
M133	5Bc	包含層	銭貨	24.2			2.59		元祐通寶 完形 初鋳1086
M134	8B	包含層	銭貨	24.0			2.44		紹聖元寶 完形 初鋳1094
M135	8Bd	包含層	銭貨	24.0			2.16		紹聖元寶 完形 初鋳1094
M136	9B	包含層	銭貨	24.2			2.74		紹聖元寶 完形 初鋳1094
M137	4Bd	包含層	銭貨	25.3			2.44		聖宋元寶 完形 初鋳1101
M138	6Bb	包含層	銭貨	24.2			2.96		聖宋元寶 完形 初鋳1101
M139	7Ba	包含層	銭貨	24.4			2.17		聖宋元寶 完形 初鋳1101
M140	6Bb	包含層	銭貨	24.5			3.77		政和通寶 完形 初鋳1111
M141	6Bb	包含層	銭貨	23.9			3.54		政和通寶 完形 初鋳1111
M142	4B	包含層	銭貨	25.0			3.20		正隆元寶 完形 初鋳1158
M143	5Bd	包含層	銭貨	23.5			2.81		洪武通寶 完形 初鋳1368
M144	5B	包含層	銭貨	22.6			3.55		洪武通寶 完形 初鋳1368
M145	5Ba	包含層	銭貨	24.2			2.66		永楽通寶 完形 初鋳1408
M146	5Ba	包含層	銭貨	24.7			2.65		永楽通寶 完形 初鋳1408
M147	5Ba	包含層	銭貨	24.8			3.47		永楽通寶 完形 初鋳1408
M148	8Bb	包含層	銭貨	25.0			2.95		永楽通寶 完形 初鋳1408

6 土製品

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C1	8B	竪穴住居2	分銅形土製品					破片
C2	8B	竪穴住居3	紡錘車	45.0	43.4	5.3	15.05	完形
C3	8B	竪穴住居5	分銅形土製品					破片

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
C4	3B	竪穴住居12	紡錘車	35.8	20.4	3.8	4.36	破片
C5	4B	竪穴住居15						完形
C6	7B	竪穴住居22	紡錘車	42.0	36.2	3.3	8.32	破片
C7	7B	竪穴住居22	紡錘車	48.3	39.0	4.0	10.50	破片
C8	7B	竪穴住居22	紡錘車	69.7	62.5	5.1	27.57	完形
C9	8B	竪穴住居26	装飾付土玉	22.4	22.7		11.76	完形
C10	8B	竪穴住居26	勾玉	32.2	9.6	8.4	3.55	
C11	5Bc	土壙34	紡錘車	32.6	22.0	3.1	2.54	ほぼ完形
C12	3Bb	包含層	分銅形土製品					破片
C13	2B	竪穴住居30	紡錘車	36.6	35.0	3.5	7.06	完形
C14	2B	竪穴住居30	紡錘車	58.0	51.6	5.0	18.84	完形
C15	3A	竪穴住居35	紡錘車	67.0	55.0	4.2	17.76	
C16	3A	竪穴住居37	紡錘車	42.0	37.0	3.0	11.43	完形
C17	3A	竪穴住居37	土錘	77.0	34.2			完形
C18	3A	竪穴住居37	土錘	45.8		27.0	49.38	一部欠損
C19	3A	竪穴住居37	分銅形土製品	63.0	56.0	20.0	67.07	一部欠損
C20	4B	竪穴住居40	笛？	33.5	44.0			完形
C21	4B	竪穴住居41	紡錘車	58.3	51.2	4.9	15.64	完形
C22	5B	竪穴住居43	紡錘車	45.0	37.6	4.1	7.20	ほぼ完形
C23	5B	竪穴住居43	紡錘車	55.3	51.9	4.0	17.67	完形
C24	5B	竪穴住居44	勾玉	28.0	9.2	10.0	3.50	
C25	5B	竪穴住居45	紡錘車	27.4	19.1	4.0	3.45	破片
C26	5B	竪穴住居45	紡錘車	30.4	28.2	4.3	4.47	ほぼ完形
C27	5B	竪穴住居45	紡錘車	27.6	26.4	2.6	4.52	ほぼ完形
C28	5B	竪穴住居45	紡錘車	42.8	38.8	2.5	6.45	完形
C29	5B	竪穴住居45	紡錘車	36.6	30.3	6.0	9.13	ほぼ完形
C30	5B	竪穴住居45	紡錘車	50.7	35.2	4.1	9.17	破片
C31	5B	竪穴住居46	紡錘車	36.5	31.3	6.8	9.24	ほぼ完形
C32	5B	竪穴住居46	紡錘車	41.6	22.8	4.7	5.74	破片
C33	3Ba	土壙72	土玉	17.9	17.2		5.40	完形
C34	3Ba	土壙72	紡錘車？	52.1	47.3	10.2	29.85	ほぼ完形
C35	4Bc	土壙85	土錘	84.5	34.2		104.41	完形
C36	4Bc	土壙85	土錘	75.5	31.0		73.01	完形
C37	5Bd	土壙89	紡錘車	42.8	25.6	6.2	10.26	ほぼ完形
C38	2B	包含層	紡錘車	33.6	33.0	4.8	7.46	破片
C39	5Ba	包含層	紡錘車	38.0	23.7	6.8	7.34	破片
C40	6Bb	包含層	紡錘車	43.2	41.1	5.5	12.83	ほぼ完形
C41	4Bb	包含層	紡錘車	44.7	42.9	3.8	9.87	完形
C42	4Bd	包含層	紡錘車	46.8	46.4	2.5	8.02	完形
C43	6B	包含層	紡錘車	44.1	42.7	5.3	12.55	破片
C44	2Bb	包含層	紡錘車	67.5	64.0	9.0	41.40	完形
C45	5Ba	包含層	紡錘車	76.1	60.3	5.0	32.60	ほぼ完形
C46	2B	竪穴住居51	土錘	61.4	33.4		70.12	完形
C47	2B	竪穴住居51	土錘	35.0	19.5		13.82	破片
C48	2B	竪穴住居52	土錘	73.0	33.0		82.01	ほぼ完形
C49	2B	竪穴住居52	土錘	76.0	18.5		27.73	破片
C50	1B	竪穴住居53	装飾付土玉	25.9	29.8		21.17	完形
C51	1B	竪穴住居54	装飾付土玉	25.3	32.6		20.54	完形
C52	1B	竪穴住居54	動物形土製品					

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C53	1B	竪穴住居54	土錘	89.0	20.5		37.78	完形
C54	2B	竪穴住居55	土錘	61.3	35.4		86.10	完形
C55	2B	竪穴住居55	土錘	73.0	33.0		81.63	完形
C56	2B	竪穴住居55	土錘	71.0	36.5		109.66	完形
C57	2B	竪穴住居55	土錘	78.0	33.0		89.56	完形
C58	2B	竪穴住居55	土錘	73.0	35.5		98.00	完形
C59	2B	竪穴住居56	紡錘車	26.2	25.8	5.0	4.30	完形
C60	3B	竪穴住居57		20.0	21.0			
C61	3B	竪穴住居57	土玉	19.0				完形
C62	3B	竪穴住居57	土錘	82.5	29.0		77.27	完形
C63	3A	竪穴住居60	土錘	73.0	32.0		102.18	完形
C64	3A	竪穴住居60	土錘	50.0	29.5			一部欠損
C65	3A	竪穴住居60	紡錘車	41.0	41.0	7.0	11.83	完形
C66	4A	竪穴住居61	土錘	78.0	34.0		99.0	完形
C67	4A	竪穴住居61	土錘	77.0	35.0		104.94	完形
C68	4B	竪穴住居62	土玉	15.0	11.8		2.14	
C69	4B	竪穴住居62	土錘	36.6	35.0		44.84	完形
C70	4B	竪穴住居62	土錘	69.7	32.9		91.00	完形
C71	4B	竪穴住居63	土玉	22.2	22.1		11.24	完形
C72	4B	竪穴住居63	紡錘車	35.6	31.7	3.5	4.34	完形
C73	4B	竪穴住居63	紡錘車	44.5	42.4	6.7	19.57	完形
C74	4B	竪穴住居63	紡錘車	58.8	40.4	5.0	13.90	破片
C75	4Bc	土壙99	土錘	64.7	33.0		74.81	完形
C76	4Bc	土壙99	土錘	73.2	32.6		85.56	完形
C77	4Bc	土壙99	土錘	76.7	33.8		93.50	完形
C78	4Bc	土壙99	土錘	76.6	31.2		81.51	完形
C79	4Bc	土壙99	土錘	71.7	34.3		87.27	完形
C80	4Bc	土壙99	土錘	79.8	37.8		126.50	完形
C81	4Bc	土壙99	土錘	74.7	33.2		97.47	完形
C82	4Bc	土壙99	土錘	75.1	34.0		93.03	完形
C83	4Bc	土壙99	土錘	74.5	30.3		80.85	完形
C84	4Bc	土壙99	土錘	73.0	27.5		59.20	完形
C85	4Bc	土壙99	土錘	68.0	30.5		76.44	完形
C86	4Bc	土壙99	土錘	69.5	33.0		82.50	完形
C87	4Bc	土壙99	土錘	77.0	34.0		100.45	完形
C88	4Bc	土壙99	土錘	80.0	34.0		116.20	完形
C89	4Bc	土壙99	土錘	69.5	35.0		92.95	完形
C90	4Bc	土壙99	土錘	76.0	35.0		114.95	完形
C91	4Bc	土壙99	土錘	79.0	35.0		114.50	完形
C92	4Bc	土壙99	土錘	78.0	33.5		83.86	完形
C93	4Bc	土壙99	土錘	73.5	34.0		88.91	完形
C94	4Bc	土壙99	土錘	83.0	34.5		106.12	完形
C95	4Bc	土壙99	土錘	85.5	33.5		109.04	完形
C96	4Bc	土壙99	土錘	71.5	31.5		76.43	完形
C97	4Bc	土壙99	土錘	70.5	35.5		88.84	完形
C98	4Bc	土壙99	土錘	78.0	34.5		88.40	完形
C99	4Bc	土壙99	土錘	73.5	31.5		90.13	完形
C100	4Bc	土壙99	土錘	71.5	32.0		72.94	完形
C101	4Bc	土壙99	土錘	70.0	32.5		89.20	完形

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
C102	4Bc	土壙99	土錘	80.5	32.5		89.85	完形
C103	4Bc	土壙99	土錘	81.0	30.0		89.85	ほぼ完形
C104	4Bc	土壙99	土錘	76.0	32.0		86.80	ほぼ完形
C105	4Bc	土壙100	土錘	66.1	30.8		72.42	完形
C106	4Bc	土壙100	土錘	80.5	36.3		109.23	ほぼ完形
C107	4Bc	土壙100	土錘	75.9	32.8		80.52	破片
C108	4Bc	土壙100	土錘	82.0	36.2		94.72	ほぼ完形
C109	4Bc	土壙100	土錘	66.3	28.1		63.70	完形
C110	4Bc	土壙100	土錘	71.9	32.9		98.67	完形
C111	7Ba	土器溜り2	円盤	26.0	24.0	7.0	6.45	土器 ほぼ完形
C112	7Ba	土器溜り2	土板?	39.3	28.4	6.3	8.02	ほぼ完形
C113	3Ba	包含層	鏡ミニチュア	59.0				ほぼ完形
C114	4Ba	包含層	動物形土製品					
C115	5Ba	包含層	動物形土製品					
C116	4Bd	包含層	動物形土製品					
C117		包含層	脚					
C118	5Ba	包含層	土玉	28.3	30.0		24.90	完形
C119	7Bb	包含層	土玉	37.6	24.8		22.92	ほぼ完形
C120	4Ba	包含層	舟ミニチュア?					
C121	2Bb	包含層	土錘	74.0	35.0		97.61	完形
C122	4Bc	包含層	土錘	84.1	32.0		103.40	完形
C123	4Bc	包含層	土錘	52.1	30.3		38.05	破片
C124	4Bb	包含層	土錘	76.4	35.0		105.43	完形
C125	4Bd	包含層	土錘	68.8	31.4		85.34	完形
C126	4B	包含層	土錘	76.5	37.0		111.96	完形
C127	4B	包含層	土錘	69.8	33.4		88.00	完形
C128	4Ba	包含層	土錘	68.5	34.5		82.43	完形
C129	4Bc	包含層	土錘	70.5	35.0		91.24	完形
C130	4B	包含層	土錘	81.3	30.1		72.76	完形
C131	5Ba	包含層	土錘	77.8	35.2		107.57	完形
C132	3B	包含層	土錘	44.8	20.9		20.60	ほぼ完形
C133	5Ba	包含層	土錘	29.8	32.3		28.70	完形
C134	2Bb	包含層	土錘	85.6	20.7		35.70	完形
C135	2Bb	包含層	土錘	74.1	21.0		37.10	破片
C136	2B	竪穴住居69	土錘	35.5	43.0		61.21	完形
C137	8Bd	包含層	硯	105.0				須恵器
C138	7Bc	土壙118	円盤	40.3	37.5	11.5	26.35	備前焼 完形
C139	7Bb	土壙119	円盤	52.0	51.4	13.8	60.24	備前焼 完形
C140	3B	溝9	円盤	29.7	25.0	160.0	17.24	備前焼
C141	3B	溝9	円盤	57.0	49.5	14.0		備前焼
C142	3B	溝9	円盤	62.5	53.5	12.2	57.35	備前焼
C143	3B	溝9	円盤	55.5	45.0	12.0	41.64	備前焼
C144	5B	溝10	円盤	56.1	54.5	11.1	47.35	備前焼
C145	5B	溝15	円盤	51.1	46.0	13.5	38.49	瓦
C146	6B	溝16	円盤	43.8	33.4	11.5	25.93	備前焼
C147	6B	溝18	土錘	48.3	11.6		6.60	完形
C148	6B	溝18	円盤	62.9	51.8	11.0	55.77	備前焼
C149	6B	溝20	土錘	71.5	20.0		27.34	破片
C150	7B	溝27	円盤	42.2	36.7	16.5	41.44	備前焼 完形

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
C151	7B	溝29	円盤	32.0	28.4	10.0	13.74	備前焼
C152	7B	溝29	円盤	43.5	40.2	12.5	32.11	備前焼
C153	7B	溝29	円盤	50.0	46.0	14.3	50.76	備前焼
C154	8Bb	包含層	円盤	26.3	22.5	9.5	8.10	備前焼　完形
C155	9B	包含層	円盤	30.8	27.6	11.0	16.92	備前焼　完形
C156	9B	包含層	円盤	27.9	24.4	12.7	11.35	備前焼　完形
C157	4Ba	包含層	円盤	36.4	29.0	12.0	22.76	備前焼　完形
C158	4Ba	包含層	円盤	41.5	40.0	11.9	27.20	備前焼　完形
C159	4B	包含層	円盤	42.1	39.6	11.2	22.10	亀山焼　完形
C160	4Ba	包含層	円盤	51.1	46.1	12.1	34.96	亀山焼　完形
C161	4Bd	包含層	円盤	48.9	42.0	11.8	28.88	亀山焼　完形
C162	4Ba	包含層	硯	52.0	48.0	15.0	44.07	

7　玉　類

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
G1	6B	竪穴住居21	小玉	2.2	3.3		0.02	ガラス	
S49	6B	竪穴住居21	管玉	7.1	4.2		0.20	碧玉	
C9	8B	竪穴住居26	装飾付土玉	22.4	22.7		11.76	土	完形
C10	8B	竪穴住居26	勾玉	32.2	9.6	8.4	3.55	土	
G2	3B	竪穴住居31	小玉	3.1	3.2		0.03	ガラス	
G3	4B	竪穴住居39	小玉	3.3	6.6		0.33	ガラス	
S114	5B	竪穴住居43	管玉	6.4	2.3		0.05	碧玉	
S115	5B	竪穴住居44	管玉	3.8	2.1		0.02	石（不明）	
S116	5B	竪穴住居44	勾玉	12.7	4.6	2.9	0.32	蛇紋岩？	
C24	5B	竪穴住居44	勾玉	28.0	9.2	10.0	3.50	土	
S117	5B	竪穴住居46	管玉	11.8	3.8		0.24	石（不明）	
S118	6B	竪穴住居50	管玉	13.5	4.2		0.25	石（不明）	
C33	3Ba	土壙72	土玉	17.9	17.2		5.40	土	完形
S120	2B	竪穴住居51	勾玉	15.6	7.0	4.2	1.05	蛇紋岩？	
S121	2B	竪穴住居51	勾玉	15.4	6.4	3.7	0.80	蛇紋岩？	
S122	2B	竪穴住居51	臼玉	2.3	4.3		0.05	蛇紋岩	
C50	1B	竪穴住居53	装飾付土玉	25.9	29.8		21.17	土	完形
C51	1B	竪穴住居54	装飾付土玉	25.3	32.6		20.54	土	完形
C61	3B	竪穴住居57	土玉	19.0				土	完形
S129	4B	竪穴住居62	管玉	12.5	4.6		0.33	碧玉	
S130	4B	竪穴住居62	管玉	20.0	5.2		1.00	碧玉	
C68	4B	竪穴住居62	土玉	15.0	11.8		2.14	土	完形
C71	4B	竪穴住居63	土玉	22.2	22.1		11.24	土	完形
G4	4Bc	包含層	小玉	1.9	3.2		0.01	ガラス	
G5	7Bb	包含層	小玉	1.7	3.4		0.01	ガラス	
G6	7Bd	包含層	小玉	2.5	3.4		0.03	ガラス	
G7	6Bb	包含層	小玉	4.0	3.4		0.05	ガラス	
G8	6Bb	包含層	小玉	3.7	4.8		0.10	ガラス	
S132	5Bb	包含層	臼玉	1.5	4.3		0.04	蛇紋岩	
S133	7Bc	包含層	臼玉	2.0	3.9		0.04	黒色片岩？	

遺物番号	地区	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	備考
S134	7Ba	包含層	臼玉	2.1	4.3		0.05	蛇紋岩	
S135	7Ba	包含層	臼玉	2.0	6.4		0.11	碧玉	
S136	3Ba	包含層	管玉	9.5	2.2		0.10	碧玉	
S137	6Ba	包含層	管玉	12.9	4.5		0.26	碧玉	
S138	7Bc	包含層	管玉	13.3	4.4		0.44	堆積岩？	
S139	7Bb	包含層	管玉	15.0	5.1		0.67	碧玉	
S140	8B	包含層	管玉	15.0	3.4		0.38	碧玉	
S141	4Ad	包含層	管玉	16.3	4.1		0.50	碧玉	
S142	4Bd	包含層	管玉	16.4	2.8		0.17	石（不明）	
S143	8B	包含層	管玉	19.6	7.0		1.54	碧玉	
S144	6Bd	包含層	勾玉	27.5	10.6	10.4	5.06	碧玉	
S145	2B	包含層	勾玉	9.8	4.4	2.4	-0.22	蛇紋岩？	
C119	5Ba	包含層	土玉	28.3	30.0		24.90	土	完形
C120	7Bb	包含層	土玉	37.6	24.8		22.92	土	ほぼ完形

付載1．足守川加茂A・B遺跡、足守川矢部南向遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

1．はじめに

この分析では、以下の点について検討した。

（1） 足守川加茂A・B遺跡出土土器で時期、器種により、胎土差がみられるか。

（2） 以前分析した古墳時代初頭の総社市窪木薬師遺跡[1]、岡山市百間川原尾島遺跡[2]の甕（ボウフラ）と、足守川加茂A・B遺跡出土古墳時代初頭土器との比較。また、これに加えて、周辺地域の遺跡で足守川矢部南向遺跡との比較検討。

（3） 足守川矢部南向遺跡出土弥生時代後期後半の土器で器形・技法・調整などが讃岐系、畿内系といわれている土器と、在地で生産されている土器の間に差異があるかどうかの検討。

（4） 足守川矢部南向遺跡の同じ時期の土器で器種ごとに胎土に差がみられるかどうかの検討。

2．分析結果

分析方法は、蛍光X線分析装置により、測定方法、条件、資料の作製などは現在までおこなっている分析方法である[3]。

また、分析した資料は表1の35点および表2の62点の土器である。

この分析の結果、(1)の足守川加茂A・B遺跡内出土土器で時期差による胎土の比較では、第1図K/Ca-Sr/Rb、第2図K/Ca-Fe/Tiの各散布図から、弥生時代中期中葉（B竪穴住居1）と中期後葉（B土壙1）の間で差がみられた。しかしながら器種ごとによる差は、資料点数の少なさから十分に検討できなかった。資料点数を増やして検討する必要がある。

足守川加茂A遺跡土器溜り出土の古墳時代初頭の土器は、第1図K/Ca-Sr/Rb、第2図K/Ca-Fe/Tiの散布図で資料番号12～22、30、32、35のAグループと資料番号23～29、31、33、34のBグループの二つに別れた。このうち、Bグループには甕（ボウフラ）が6点含まれている。そして、Bグループの土器は、肉眼観察から色調が褐色で、胎土中に角閃石を含んでおり、甕以外の資料番号28、31の壺と29の高杯にもこの胎土が使われていた。このように、足守川加茂A・B遺跡出土の古墳時代初頭の土器のうち色調が褐色を呈し、胎土の砂粒に角閃石を含む土器は、ある程度のまとまりをもつようである。一方、Aグループとした一群も一応、大きなまとまりをもち、別のグループをつくっている。ただ、このAグループの14点の土器の内訳は

壺（12、13、15、19、32）、甕（35）[4]、高杯（14、16、17、18、21、30）、鉢（20）、鼓形土器（22）で、甕はわずか1点である。[5]

次に、(2)の課題である百間川原尾島遺跡（弥生時代後期～古墳時代初頭）、窪木薬師遺跡（古墳時代初頭）、足守川矢部南向遺跡（弥生時代後期後半）の各遺跡との比較では、第3図K/Ca-Sr/Rb、第4図K/Ca-Fe/Tiの散布図から足守川加茂A・B遺跡のBグループと百間川原尾島遺跡（古墳時代初頭）、窪木薬師遺跡（古墳時代初頭）、足守川矢部南遺跡（弥生時代後期後半の在地産）の土器がほぼ一つのグループにまとまった。

(3)の課題である讃岐系、畿内系と在地の土器との比較では第5図K/Ca-Sr/Rb、第6図K/Ca-Fe/Tiの散布図から、表1の資料番号8、29の讃岐系と22、24、25、27、28の畿内系の壺・甕は、在地の壺・甕と識別が可能であった。ただ、壺(6)・甕(20)のように在地と畿内の分布範囲の中間にプロットされるものもある。

また、高杯・鉢の中には在地の壺や甕がグループをつくる範囲内に入るものと、それ以外にプロットされるものがみられる。後者の例は高杯では30、32、34、38で、鉢では43、50、53である。そして、これらのグループ以外の土器の分布を細かくみると、6、20、32、34、38のまとまりと30、40、43、50、53のまとまりがあるようにみられる。この二つのグループを器形、技法、胎土などで他のグループと比較する必要がある。

(4)の器種ごとに胎土に差異があるかどうかでは、第5・6図散布図から在地産の壺・甕がほぼ一つにまとまった。また、鉢も19点中16点が在地の壺・甕の分布範囲に入った。しかし、高杯に関しては、散漫な分布をし、まとまらなかった。そして、特殊器台（1、2、61、62）は、ほぼ一つにまとまる結果となった。

3．まとめ

以上の分析結果をまとめると、

（1） 足守川加茂A・B遺跡出土の弥生時代中期中葉と中期後葉の土器の間で胎土に差がみられた。しかし、資料点数の少なさもあり、今後の資料蓄積を待って改めて検討する必要がある。

（2） 足守川加茂A・B遺跡出土の古墳時代初頭の土器のうち、肉眼観察から褐色の色調を呈し、胎土に角閃石を含む土器は、ほぼ一つにまとまる傾向を示した。

また、百間川原尾島遺跡、窪木薬師遺跡、足守川矢部南向遺跡出土土器との比較では、百間川原尾島・窪木薬師の甕（ボウフラ）および弥生時代後期後半の足守川矢部南向の在地産土器（壺、甕、鉢）が足守川加茂A・B遺跡のBグループと一つにまとまった。

（3） 足守川矢部南向遺跡の資料では讃岐系、畿内系の土器が、在地の土器と胎土的に差がみられ識別できた。[6]

(4) 足守川矢部南向遺跡出土土器で器種ごとに差がみられるかどうかでは、在地の壺、甕、鉢がほぼ一つにまとまり、同じ胎土と推測された。また、高杯は分布範囲が非常に散漫で一定のまとまりをつくらなかった。これは、高杯に使用されている粘土が精製されたものもあり、このことが分析値に影響しているのかもしれない。また、足守川矢部南向遺跡および鯉喰神社採集[7]の特殊器台はほぼ一つのグループをつくったが、これら特殊な土器に関しても資料を増やして、どのような分布をなすのか検討していく必要がある。

今回、足守川加茂A・B遺跡の資料を中心に周辺地域の遺跡出土土器との比較をおこなったが、古墳時代初頭の甕（ボウフラ）の胎土がほぼ一つにまとまり、以前報告した[8]結果と同様になった。つまた、分析値からの検討ではボウフラに使用されている粘土はほぼ同じものが使用されているようである。また、時期は異なるが足守川矢部南向遺跡（弥生時代後期後半）の在地産土器と古墳時代初頭の甕（ボウフラ）がほぼ重なり分析からはほぼ同じ結果となった。このことから、まだ周辺遺跡との比較データの少なさもあるが、足守川加茂A・B遺跡および足守川矢部南向遺跡を中心とした地域にこれら土器の粘土採掘壙が存在した可能性が十分に考えられる[9]。今後も分析資料のデータ蓄積をおこない検討しなければならない。

弥生時代後期後半の一遺跡内での一時期の資料の分析では讃岐系・畿内系・在地産の土器が、はっきり別れた。しかし、在地産の器種別によるまとまりでは、壺や甕ではまとまったが、高杯は散漫な分布を示し、まとまらなかった。今後の検討課題として、器種による粘土の使い分け、混和材（砂粒など）混入および別種の粘土を混ぜるなどのことも十分考慮して分析する必要がある。

なお、この報告をおこなうにあたり、亀田修一先生には終始ご教示頂いた。また、資料の収集その他では松本和男、江見正己、島崎　東の各氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にお世話になりました。記して謝意を表します。

註

(1) 白石　純「窪木薬師遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86　窪木薬師遺跡』岡山県教育委員会 1993.3.

(2) 白石　純「百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88　百間川原尾島遺跡3』岡山県教育委員会 1994.3.

(3) 白石　純「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」『蒜山研究所研究報告』第12号　岡山理科大学 1986.

(4) この35の甕は、時期的に新しくなり、古墳時代時代前半頃と考えられる。

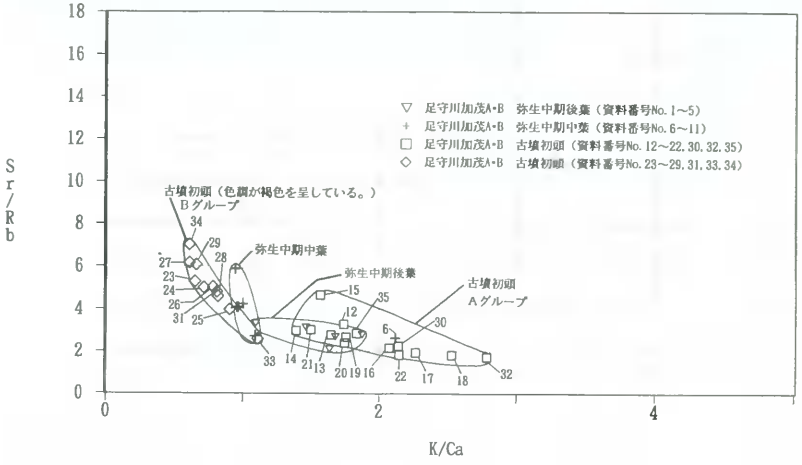
(5) 器種により素地の使い分けをしていることも十分考えられるが、詳しくは検討していない。

(6) 註(2)では、讃岐系土器が岡山県内の土器と、はっきり識別できたが、今回も同じ結果となった。今後、香川県内の土器と比較する必要がある。

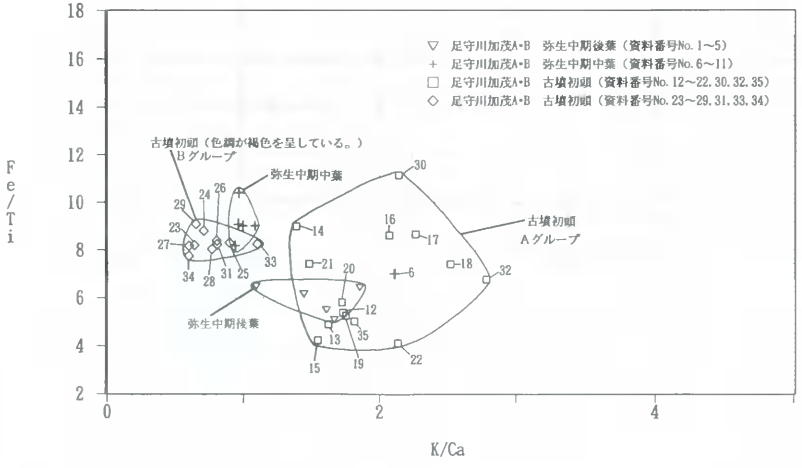
(7) この鯉喰神社採集の特殊器台は柳瀬昭彦氏採集資料を提供していただいた。

(8) 註(2)の分析では、百間川原尾島遺跡と総社市窪木薬師遺跡の古墳初頭の甕（ボウフラ）がほぼ同じ分析結果となったことを述べた。

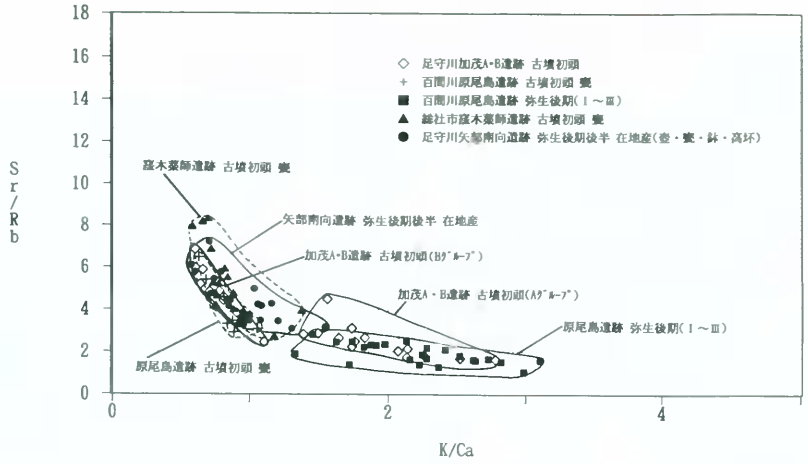
(9) 高畑知功・内藤善史他「矢部奥田遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82』岡山県教育委員会1993.3.では、粘土採掘壙が確認されており、採掘粘土は、黒色～漆黒色のきめの細かい粘性のあるもので、採掘時期は古墳時代前半期（下田所期）を中心とした時期が考えられている。また、これらの採掘壙からは弥生時代中期後半と後期の遺物も出土している。そして、今回胎土分析した足守川加茂A・B遺跡とこの採掘壙が確認された矢部奥田遺跡とは、直線距離にして約1kmしか離れておらず、今後これらの粘土の分析も含めて検討しなければならないが、この遺跡を含めた周辺遺跡での粘土採集、土器生産が想定されよう。



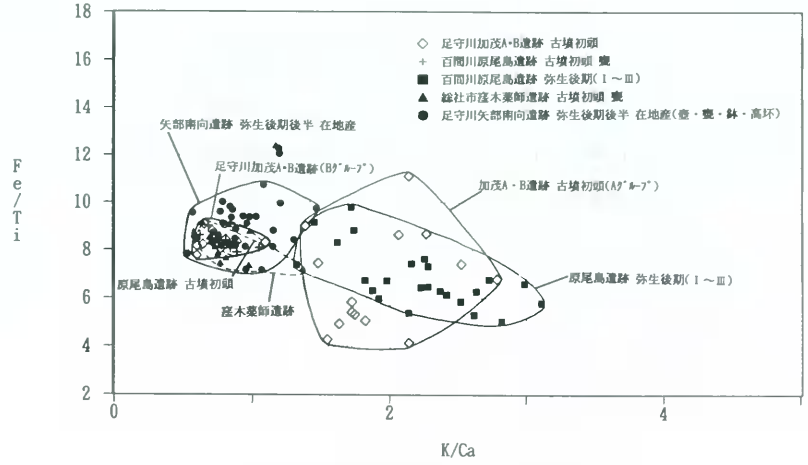
第１図　K/Ca-Sr/Rb散布図　足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡　時期ごとによる比較



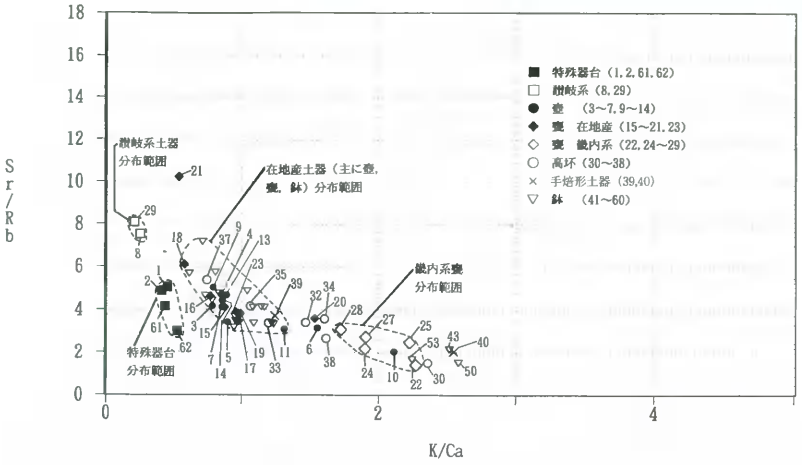
第２図　K/Ca-Fe/Ti散布図　足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡　時期ごとによる比較



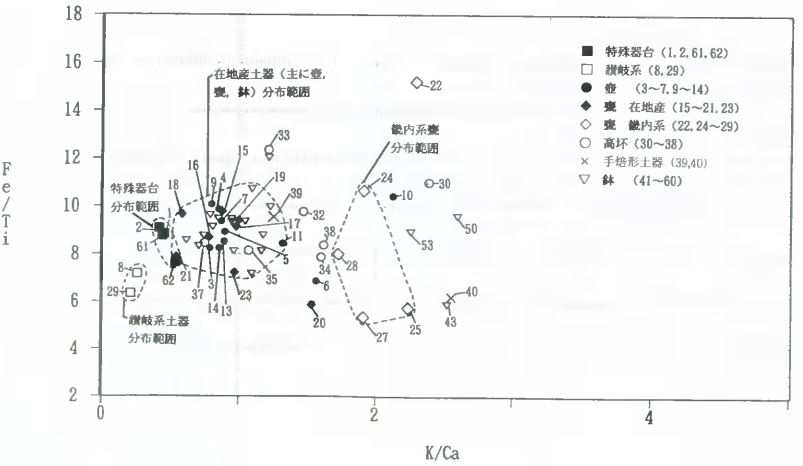
第3図　K/Ca-Sr/Rb散布図　各遺跡ごとの比較



第4図　K/Ca-Fe/Ti散布図　各遺跡ごとの比較



第５図　K/Ca-Sr/Rb散布図　足守川矢部南向遺跡出土土器の器形、技法による胎土の比較



第６図　K/Ca-Fe/Ti散布図　足守川矢部南向遺跡出土土器の器形、技法による胎土の比較

表1　足守川加茂A・B遺跡胎土分析一覧表

資料番号	遺構名		器種	時期
1	加茂B土壙1	20	高杯	弥生中期後葉
2	〃	14	壺	〃
3	〃	13	壺	〃
4	〃	17	甕	〃
5	〃	—	高杯	〃
6	加茂B竪穴住居1	3	壺	弥生中期中葉
7	〃	6	甕	〃
8	〃	10	鉢	〃
9	〃	8	高杯	〃
10	〃	9	高杯	〃
11	〃	—	鉢	〃
12	加茂A土器溜り	842	壺	古墳時代初頭
13	〃	814	壺	〃
14	〃	899	高杯	〃
15	〃	894	壺	〃
16	〃	901	高杯	〃
17	〃	905	高杯	〃
18	〃	927	器台	〃
19	〃	931	壺	〃
20	〃	822	壺	〃
21	〃	924	高杯	〃
22	〃	916	鼓形	〃
23	〃	840	壺	〃
24	〃	920	鼓形	〃
25	〃	885	甕	〃
26	〃	851	甕	〃
27	〃	883	甕	〃
28	〃	951	壺	〃
29	〃	867	高杯	〃
30	〃	868	高杯	〃
31	〃	836	壺	〃
32	〃	837	壺	〃
33	〃	796	甕	〃
34	〃	797	甕	〃
35	包含層	989	甕	〃

表2　足守川矢部南向遺跡胎土分析一覧表

資料番号	遺構名		器種	時期	備考
1	土壙72	883	特殊器台	弥生後期後半	
2	〃	884	特殊器台	〃	
3	〃	885	特殊壺？	〃	
4	〃	886	壺	〃	
5	〃	889	壺	〃	
6	〃	891	壺	〃	
7	〃	892	壺	〃	
8	〃	895	壺	〃	讃岐系

資料番号	遺構名	器種	時期	備考
9	土壙 72 897	壺	弥生後期後半	
10	〃 913	直口壺	〃	
11	〃 914	直口壺	〃	
13	〃 903	壺	〃	
14	〃 909	壺	〃	
15	〃 915	甕	〃	
16	〃 926	甕	〃	
17	〃 932	甕	〃	
18	〃 944	甕	〃	
19	〃 949	甕	〃	
20	〃 961	甕	〃	
21	〃 963	甕	〃	
22	〃 965	甕	〃	畿内系
23	〃 966	甕	〃	
24	〃 969	甕	〃	畿内系
25	〃 970	甕	〃	畿内系
27	〃 972	甕	〃	畿内系
28	〃 973	甕	〃	畿内系
29	〃 976	甕	〃	讃岐系
30	〃 977	高杯	〃	
32	〃 983	高杯	〃	
33	〃 987	高杯	〃	
34	〃 989	高杯	〃	
35	〃 992	高杯	〃	
37	〃 997	高杯	〃	
38	〃 998	高杯	〃	
39	〃 1000	手焙形土器	〃	
40	〃 1001	手焙形土器	〃	
41	〃 1021	鉢	〃	
42	〃 1023	鉢	〃	
43	〃 1026	鉢	〃	
44	〃 1030	鉢	〃	
46	〃 1038	鉢	〃	
47	〃 1047	鉢	〃	
48	〃 1048	鉢	〃	
49	〃 1050	鉢	〃	
50	〃 1051	鉢	〃	
51	〃 1052	鉢	〃	
52	〃 1055	鉢	〃	
53	〃 1056	鉢	〃	
54	〃 1057	鉢	〃	
55	〃 1058	鉢	〃	
56	〃 1064	鉢	〃	
57	〃 1065	鉢	〃	
58	〃 1069	鉢	〃	
59	〃 1072	鉢	〃	
60	〃 1073	鉢	〃	
61		特殊器台	〃	
62	鯉喰神社表採	特殊器台	〃	

※ 備考欄の讃岐系、畿内系などの観察は、資料提供者による。

付載２．　足守川遺跡群出土青銅器の鉛同位体比について

作陽短期大学　　馬淵久夫
東京国立文化財研究所　平尾良光
榎本淳子

１．はじめに

青銅器の原料産地を推定するための手段として、国際的に定着した方法に鉛同位体比法がある[1][2]。鉛は質量の異なる４種の同位体 ^{204}Pb、^{206}Pb、^{207}Pb、^{208}Pbの混合物であり、その混合比（同位体比）は鉛鉱床の性格と生成年代によって異なるので、産地の指標になり得る。筆者は、1970年代後半からこの手法の応用に取り組み、その結果、弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器について、時代によって青銅原料の出所が変っていくことが明らかになった[3]-[8]。

今回、足守川河川改修に伴って行われた発掘調査[9][10]で出土した銅鏡・銅鏃などの青銅器について、鉛同位体比を順次測定したので、その結果に若干の考察を加えて報告したい。また足守川遺跡群ではないが、岡山市雄町から出土した銅鐸についてもこの紙面を借りて併せて報告する。

２．測定

現在、同位体比を測定する機器である質量分析計は極めて高感度になっているので、本法はほとんど非破壊法と言って差し支えない。出土青銅器に必ず生じている錆の微量を採取すればよい。同位体比は化学反応の過程でほとんど変ることがないので、錆の中の鉛を使って測定すればよい。筆者らは、測定用の試料を無益に必要量以上採取することがないよう、一定の基準を設けて試料収集の目安としている。測定条件は下記の通りである。

ａ．試料の量

・弥生時代・古墳時代の青銅器の場合には錆１mg程度。

ｂ．化学分離：電着法

ｃ．質量分析計（固体用表面電離型、東京国立文化財研究所に設置）

・日本電子社製 JEOL-05RB（稼働：昭和52年４月～平成元年９月）

・VG Isotope社（英国）製 VG Sector（稼働：平成元年10月～現在）

ｄ．鉛装着量

・JEOL-05RB：１μｇ

・VG Sector：0.2μg

ここで報告する試料のうち、足守川加茂B遺跡出土の小形仿製鏡2面と銅鏃1点、足守川矢部南向遺跡出土の小銅鐸、雄町遺跡出土の銅鐸はJEOL-05RBで、その他の資料はVG Sectorで、それぞれ測定された。両方の機器のデータが一致することは実験によって確かめられている。[11]

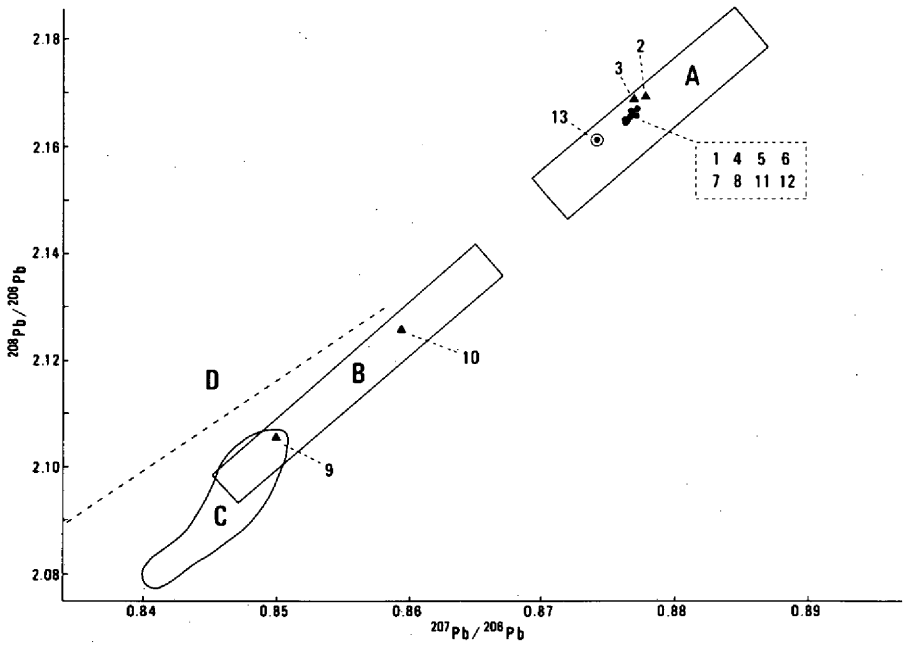


図1　日本出土青銅器の鉛同位体比分布および足守川遺跡群出土青銅器の鉛同位体比

領域A：前漢鏡

領域B：神獣鏡、画像鏡など後漢中期から三国・晋の鏡

領域C：日本産の鉛鉱石

ラインD：多鈕細文鏡・細形銅利器のような朝鮮系遺物

図中の番号は表1の試料No

□ は近畿式・三遠式銅鐸の集中する位置

3．日本出土青銅器のグルーピング[12]

筆者らが確立した、日本出土青銅器に対するタイプ別の鉛同位体比の分布範囲を図1に枠で

囲って示した。この図は $^{208}Pb/^{206}Pb$を縦軸に、$^{207}Pb/^{206}Pb$を横軸にプロットしたもので、最も標準的な図示法である。日本出土青銅器を舶載品と仿製品で分けて考えると分かりやすい。

まず、舶載品から述べると、Aの範囲は弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置である。Bは神獣鏡、画像鏡など後漢中期から三国・晋の時代に作られた鏡の占める範囲である。方格規矩鏡、連弧文鏡（内行花文鏡）、細線式獣帯鏡のように後漢の早い時期から作られていた鏡は、AとBとに分れる。Cは日本産の鉛鉱石の大部分が入る領域である[8]。Dは多鈕細文鏡・細形銅利器のような弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。

つぎに、国産青銅器について言うと、弥生時代では早い時期の銅鐸・銅剣・銅矛などはラインDに載り、それより遅い時期の銅鐸・銅剣・銅矛さらに小形仿製鏡・銅鋤などはAに入るという、はっきりした傾向がある。古墳から出土する仿製鏡・巴形銅器などの大部分はBに入る。国産青銅器については、AとBの区別が弥生時代と古墳時代の区別になっているようにみえることが顕著な結果である。

A、B、Dに分布する鉛の産地が地理的に何処に当たるかを正確に言うことは難しい。今までに測定した鉛鉱石から推察すると、大ざっぱにAは中国の北部、Bは中部から南部ということができる。中国の中部から南部、つまり黄河より南で長江を含有する広大な地域は、地質学的に均一で、鉛同位体比が似たりよったりの値になる。Bは複数の地域の鉛が重なり合っている可能性があると筆者らは考えている。舶載鏡の鉛同位体比からみて、前漢時代は北部の原料（A）で鏡を作っていたが、後漢のある時期（中期）から中部・南部（B）の原料に変ったと推測される。

Dはミシシッピバレー・タイプと呼ばれる特殊な鉱床の鉛であるが、鉛鉱石の測定によると、現在の韓国の南西部地域（忠清南北道、全羅南北道）と推定される[8][12]。

4．結果と考察

測定結果を表1にまとめた。これらを資料の種類別に見ることにする。

(a) 小形仿製鏡

直径4.4cmの蕨手状渦文鏡（No 2）は、高倉洋彰[03]によると、韓国の慶尚北道漁隠洞遺跡で出土した鏡群（11面のうち1面を除く）や大邱市坪里洞遺跡出土鏡4面と同類で、重圏文日光鏡Ⅰbに属する。このことから、山磨康平・島崎東は朝鮮半島で製作されたと考えている[14]。一方、直径6.7cmの櫛歯文鏡（No 3）は重圏文日光鏡Ⅲbに属し、この種の鏡は瀬戸内～近畿で独自に鋳造されたと高倉洋彰は述べている。

鉛同位体比の結果は、図1でわかるように2面とも領域Aに入り、中国の鉛を含むと解釈さ

れる。この結果は一見、高倉や山磨らの見解と相反するように見えるが、必ずしもそうではない。

表1　足守川遺跡群出土青銅器および雄町出土銅鐸の鉛同位体比

No	資料名	出土地	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
足守川遺跡群						
1.	銅鏃	足守川加茂A遺跡　M1	17.740	0.8762	2.1648	15.544
2.	小形仿製鏡（蕨手状渦文）	足守川加茂B遺跡　M88	17.682	0.8778	2.1691	15.521
3.	小形仿製鏡（櫛歯文）	足守川加茂B遺跡　M28	17.742	0.8769	2.1697	15.558
4.	銅鏃	足守川加茂B遺跡　M147	17.749	0.8760	2.1639	15.548
5.	小銅鐸	足守川矢部南向遺跡　M26	17.737	0.8757	2.1641	15.532
6.	銅鏃	足守川矢部南向遺跡　M36	17.740	0.8770	2.1663	15.554
7.	銅鏃	足守川矢部南向遺跡　M49	17.752	0.8762	2.1651	15.546
8.	銅鏃	足守川矢部南向遺跡　M19	17.745	0.8761	2.1640	15.741
9.	銅製品（鏡？）	足守川矢部南向遺跡　M15	18.519	0.8500	2.1056	15.654
10.	銅製品（鏡？）	足守川矢部南向遺跡　M48	18.217	0.8593	2.1261	15.572
11.	銅鏃	足守川矢部南向遺跡　M50	17.762	0.8767	2.1671	15.553
12.	銅鏃	足守川矢部南向遺跡　M6	17.751	0.8762	2.1649	
岡山市雄町遺跡						
13.	銅鐸（扁平鈕式）	岡山市雄町の水田	17.805	0.8741	2.1611	15.563
		測定誤差	±0.005	±0.0002	±0.0002	0.005

すでに、1982年の銅鐸論文[4]で指摘し、その後の多数の青銅器の測定で確かめられたように、朝鮮半島では紀元前から自前の鉛（多分、銅・スズも）を使って細形銅剣や多鈕細文鏡を鋳造していた。その材料は、あるいは素材で、あるいは銅剣・鏡のような製品として日本列島に流入し、初期の国産青銅器の鋳造に使われた。しかし、前108年の楽浪郡設置以後は漢の製品と原料が日本列島に入るようになり、朝鮮半島産の原料に置き換っていった。

小形仿製鏡は漢鏡に倣って製作したものであるから、初期の段階から中国の原料が使える状態にあったと考えられる。流入ルートは朝鮮半島経由であるから、朝鮮半島で小形仿製鏡を鋳造する際に中国の原料を使うことは十分可能であっただろう。勿論、朝鮮半島産原料を使う場合もあったかもしれない。恐らく、それは朝鮮半島か九州かといった製作地によるよりも、中国原料が少なかった初期の段階に起ったというような時間的関係によったのではないだろうか。筆者らが過去に測定した小形仿製鏡のデータをまとめると表2のようになる。

表2　小形仿製鏡の鏡式と原料産地＊

鏡式（高倉洋彰による）	中国産原料		朝鮮半島産原料	
	測定数	備考	測定数	備考
内行花文鏡Ⅰb	1	対馬タカマツノダン遺跡出土		
内行花文鏡Ⅱa	8			
内行花文鏡Ⅱb	9	久留米市西屋敷遺跡出土鏡は華中・華南の鉛		
重圏文日光鏡Ⅰb	2	1面は本研究の蕨手状渦文鏡	1	福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土
重圏文日光鏡Ⅱ	1	佐賀県上峰村五本谷遺跡出土		
重圏文日光鏡Ⅲb	1	本研究の櫛歯文鏡		
四蛇鏡			1	熊本県合志町木瀬住居址出土
不明	1	福岡県筑紫野市隈・西小田出土		

＊　表中の資料の鉛同位体比は文献（6）・（18）に報告されている。

結局、25面のうち2面だけが朝鮮半島産の原料で作られており、1面は足守川加茂B遺跡出土のものと同じ漁陰洞系の重圏文日光鏡Ⅰbに属することが注目される。このような製作地と時代と原料の関係は、将来、漁陰洞遺跡や坪里遺跡で出土した鏡を測定すればもっと明らかになるであろう（次項も参照のこと）。

(b)　銅鏃

3遺跡から出土した計7点を測定した。これらの鉛同位体比は図1からもわかるように、すべてが誤差の範囲内で一致している。1982年の銅鐸論文[4]の中（p53）で、筆者らは近畿式・三遠式銅鐸18鐸が

$^{207}Pb/^{206}Pb = 0.8763 \pm 0.0008$

の範囲内に収まってしまうことを述べた。その後、九州から関東に至るまで全国の弥生後期の遺跡から出土する銅鏃・銅環・銅鋤・小銅鐸・小形仿製鏡の多くがこの特徴的な鉛を含むことを確認した。今回測定した7点の銅鏃がすべてこの範囲に入ることは明らかである。足守川加茂B遺跡出土の2面の小形仿製鏡[40]のうち、蕨手状渦文鏡がこの範囲から外れ、櫛歯文鏡（No.3）がこの範囲に入ることは、後者の製作時期を遅くみる高倉の編年と一致しているので興味深い。

(c) 小銅鐸

筆者らは過去に下記で出土した小銅鐸を測定している。

イ）静岡県沼津市開峯[4]

ロ）栃木県小山市田間[4]

ハ）福岡県宇佐市別府（朝鮮式小銅鐸[15]）

ニ）神奈川県海老名市本郷遺跡[16]

ホ）福岡県福岡市西区今宿五郎江遺跡[17]

ヘ）福岡県糸島郡前原町浦志遺跡[18][19]

これらの結果を見ると、まず、宇佐市別府出土の朝鮮式小銅鐸（ハ）は他の小銅鐸と全く違った産地（恐らく朝鮮半島）の鉛を含み、型式のみならず材料の点でも明瞭に区別される。

つぎに、残りの5資料は、弥生時代後期の国産青銅器に共通に含まれる中国華北の“前漢鏡タイプ”の鉛を含むことがわかった。さらに、これら5資料のうち、今宿五郎江遺跡出土のものを除くイ）ロ）ニ）ヘ）は、前節で述べた近畿式・三遠式銅鐸の数値をとり、“前漢鏡タイプ”の鉛の中でも最も時代が下るものと推定される。

今回測定した足守川矢部南向遺跡出土の小銅鐸は、表1からわかるように、近畿式・三遠式銅鐸の数値と誤差の範囲内で一致し、多くの小銅鐸と同じ材料であることがわかった。このデータと出土地点からみた小銅鐸の時代との関係については江見正己が詳しく考察している[20]。

(d) 銅製品

足守川矢部南向遺跡からは2点の銅製品（M15、M48）の破片が出土している。一般的には、種別の明確でない資料を分析しても意味ある情報にはならないが、M48については鏡ではないかという所見があるので、鉛同位体比でそれを確認することは可能かもしれない。このような意図で測定してみた。結果は図1に示したように、両者とも領域Bに入り、以下に述べるように幸運にも資料の種別を推測できるデータになった（№9のM15は領域Cと重複するが、^{204}Pbを使う図では明らかに領域Bに入るので日本産鉛ではない）。

まず2点の銅製品が弥生時代の遺物であるとすると、過去の測定の結果からは、領域Bに入る弥生時代の遺物は舶載の漢式鏡だけということになる。弥生時代の国産青銅器は、本研究の小形仿製鏡や銅鏃や小銅鐸をみてもわかるように一般に領域Aに入り、領域Bに入るものはない。ただ一つの例外は久留米市西屋敷遺跡2号石棺墓出土の小形仿製鏡[18]であるがこれは当時の北九州が中国の文物が流入する玄関口のために、弥生時代末期に中国から入り始めた華中・華南の新しい材料をいち早く使った例外的物件と考えられるので除外して考えてよい。

第２に、２点の銅製品が舶載鏡だとしてどのような鏡式が可能かを考えてみよう。弥生時代の青銅器の分布は地域差があるので、厳密には中国地方の出土例でみる必要があるが、残念ながらデータが少ない。そこで、九州の例をみると、弥生時代遺跡出土で領域Ｂに入る鏡としては、連弧文鏡・方格規矩鏡・浮彫式獣帯鏡・線彫式獣帯鏡・夔鳳鏡が測定されている。２点の銅製品はこれらの鏡式のいずれかである確率が高い。

第３に、M15とM48が同一の鏡の破片ではなく、別々の鏡であることは鉛同位体比値から明らかである。

(e) 銅鐸（岡山市雄町出土）

足守川遺跡群ではないが、昭和60年４月に岡山市雄町の水田から出土した扁平鈕式袈裟襷文銅鐸の鉛同位体比測定結果も付記しておきたい。

図１に示したように本銅鐸の鉛同位体比は領域Ａに入り、しかも1982年の銅鐸論文[4]で明らかにした扁平鈕式の分布範囲に収まっている。つまり、菱環鈕式（朝鮮半島の鉛）→外縁付鈕式（朝鮮半島の鉛あるいは中国の鉛）→扁平鈕式（中国の鉛）→突線鈕式（中国の鉛、ただし近畿式・三遠式は画一的同位体比をもつ中国の鉛)、という原料の推移についての考察を裏付けるデータが一つ加わったことになる。

本稿を執筆するにあたり、種々ご教示を賜った古代吉備文化財センターの河本清氏、江見正己氏に厚くお礼申し上げたい。

註

(1) 馬淵久夫・富永健編『考古学のための化学10章』東京大学出版会（1981）

(2) 馬淵久夫・富永健編『続考古学のための化学10章』東京大学出版会（1986）

(3) 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370号 P4～12（1982）

(4) 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』 第68巻1号 P42～62（1982）

(5) 馬淵久夫・平尾良光「古代東アジア銅貨の鉛同位体比」『考古学と自然科学』15号 P23～39（1982）

(6) 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比による漢式鏡の研究(2)」『MUSEUM』 382号 P16～30（1983）

(7) 馬淵久夫・江本義理ほか「鉛同位体比による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定」『古文化財の科学』 28号 P65～69（1983）

(8) 馬淵久夫・平尾良光「東アジアの鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』 第73巻2号 P71～82（1987）

(9) 山磨康平・島崎 東「足守川河川改修工事に伴う発掘調査」 『岡山県埋蔵文化財報告』16 P88～89（1986）

(10) 江見正己「足守川遺跡群の発掘調査終了」 岡山県古代吉備文化財センター所報『吉備』第6号 P1～3（1989）

(11) 平尾良光・馬淵久夫「表面電離型固体質量分析計VG Sectorの規格化について」『保存科学』 28号 P17～24（1989）

(12) 馬淵久夫「青銅器の鉛同位体比の解釈について－北九州および韓国南部出土青銅器を例として－」『古文化談叢』第30集（下） P1143～1154（1993）

(13) 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』 第70巻第3号 P94～121（1985）

(14) 山磨康平・島崎 東「岡山県足守川加茂B遺跡」『日本考古学年報』37 P327～331（1984）

(15) 馬淵久夫・平尾良光「宇佐市別府出土朝鮮式小銅鐸の鉛同位体比」『古文化談叢』第12集 P153～157（1983）

(16) 馬淵久夫・平尾良光「本郷遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比」『海老名本郷』富士ゼロックス株式会社本郷遺跡調査団 P99～101（1985）

(17) 馬淵久夫・平尾良光「今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について」『福岡市今宿五郎江遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集 P199～202（1991）

(18) 馬淵久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』第75巻4号 P1～20（1990）

(19) 柳田康雄「鉛同位体比法による青銅器研究への期待」『考古学雑誌』第75巻4号 P21～36（1990）

(20) 江見正己「岡山県倉敷市足守川矢部南向遺跡出土の小銅鐸について」『考古学雑誌』第73巻4号 P101～114（1988）

付載3．足守川遺跡群出土の石杵と土器に付着の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　本田光子
宮内庁正倉院事務所　成瀬正和

はじめに

足守川遺跡群出土の石杵及び土器に付着している赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察およびX線分析を行い、若干の考察を試みた。

出土赤色顔料についての現在までの知見に寄れば、赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛Pb_3O_4を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。

今回の資料5点の石杵のうち4点はその形状から見て朱専用のL字状石杵と考えられ、土器は赤色顔料の付着状態等から朱専用の内面朱付着土器と考えられる。これらに付着している赤色顔料は朱である可能性が強いが、ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

試料の一覧、分析結果とそれに基づき推定される赤色顔料の種類を表1に示した。

試　料

赤色顔料の付着残存部分は挿図の通りである。全資料とも実体顕微鏡で観察を行い、状態の良い部分から針先に着く程度の量を採取し検鏡用プレパラートを作成した。X線分析には全資

表1　試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類

No	遺跡	遺構	遺物	蛍光X線		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	挿図
				鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
1	足守川加茂A	竪穴住居30	L字状石杵	＋	－	?	－	ベンガラ	ベンガラ	S34
2	足守川加茂A	竪穴住居21	L字状石杵	＋	＋	－	＋	朱	朱	S25
3	足守川加茂A	竪穴住居26	L字状石杵	＋	＋	…	…	朱	朱	S29
4	足守川加茂B	竪穴住居22	L字状石杵	＋	＋	－	＋	朱	朱	S84
5	足守川加茂B	斜面堆積	石杵	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	S140
6	足守川加茂A	土壙9	内面朱付着土器	＋	＋	－	＋	朱	朱	202

…：未測定　＋：検出　－未検出　?：不確定

料ともそのままの状態で赤色顔料付着部分を測定した。

顕微鏡観察

検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により経験的に見極めがつく。今回は全資料が朱関連遺物と考えられるので、特に使用痕と赤色顔料の状態を注意した。

No１　磨面には長側辺に平行な擦痕がほぼ全面に認められる。赤色顔料は先端部と末端部の擦痕凹部に付着残存し、その他の部分には極めて僅かしか認められなかった。赤色顔料としてはベンガラ粒子を認めたが、顕著な朱粒子は認められなかった。ただし、微粒のものについては、判断できなかった。また、ベンガラには管状粒子は見い出せなかった。

No２　磨面には長側辺に平行な擦痕がほぼ全面に認められるが、顕著な敲打痕はない。赤色顔料は磨面と左側面の全面、右側面の下部、握部の上部、前面下部の凹部に付着残存していた。握部前面と右側面の中央部分には極めて僅かしか認められなかった。赤色顔料としては朱粒子を認めた。磨面凹部の朱粒子の最大径は約30μｍであった。

No３、４　磨面には長側辺に平行な擦痕がほぼ全面に認められるが、外観は研磨されたように平滑である。この擦痕は、岩石中の軟らかい部分が消滅し硬い部分のみが摩滅して残った痕跡である。赤色顔料は磨面以外のほぼ全面凹部に付着残存しており、ほぼ５μｍ以下の細かい朱粒子である。磨面には少数の凹部の底に僅かに朱と思われる赤色顔料が認められるが、今回の検鏡では赤色顔料の種類を確定できなかった。

No５　磨面はほぼ平らで方向性のある擦痕はない。赤色顔料は磨面の全面に付着し、ベンガラであり、磨面以外にはほとんど認められない。朱粒子は認められなかった。

No６　土器片内面全体にミガキが認められ、赤色顔料が付着している。赤色顔料はほぼ５μｍ以下の朱粒子で、器面の凹部に残存している。

蛍光Ｘ線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。石杵の測定位置はNo１、２、５は磨面であるが、No２、３については磨面の赤色顔料付着量がきわめて微量のため、側面の赤色顔料付着部分である。理学電機工業㈱製蛍光Ｘ線分析装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（２θ）；10～65°、走査速度；２θ８°／分、時定数；0.5秒の条件で測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としてはNo.1、5から鉄が、No.2、3、4、6から水銀と鉄が検出された。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、これらはみな主として石杵本体、土器胎土及び付着の土砂に由来するものと考えられる。ただし、鉄は石、土器、土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として、理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4㎜、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～90°、走査速度2θ4°／分、時定数；2秒の条件で測定を行った。測定位置は蛍光X線分析とほぼ同じである。

赤色の由来となる鉱物として、No.5に赤鉄鉱（Hematite酸化第二鉄）が、No.2、4、6に辰砂（Cinnabar赤色硫化水銀）が同定された。No.1は顕著な赤鉄鉱のピークを確認できなかった。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として石杵本体、土器胎土、付着土砂に由来するものと考えられる。

結　果

検鏡及びX線分析の結果から各資料に付着した赤色顔料の種類と状態は次のように考えられる。蛍光X線分析で水銀、X線回折で辰砂あるいは検鏡で朱が認められたものは朱、蛍光X線分析で鉄のみ、X線回折で赤鉄鉱あるいは検鏡でベンガラが認められたものはベンガラである。

現在、資料に付着している赤色顔料は以上の通りであり表1に示したものであるが、これらの赤色顔料の種類と付着残存状況の関係から以下の興味深い事実がわかった。

No.1　形状・使用痕ともにL字状石杵であるが、赤色顔料はベンガラである。磨面付着のきわめて微粒な赤色顔料粒子についてはその種類を判断することができなかったため、本来は朱専用であったものがベンガラ用に転用されたかどうかについては不明である。ただし、握部等には微粒のものも含めて赤色顔料そのものの付着がほとんどなかったので、（朱専用石杵は肉眼では見えなくとも握部にも朱が付着残存している）当初よりベンガラ専用である可能性も高い。

No.2　形状・使用痕・赤色顔料の種類と付着状況のすべての点で典型的なL字状石杵であり、次のNo.3、4とは異なり使用中のものと考えられる。

No.3、4　形状・使用痕・赤色顔料の種類からL字状石杵であるが、磨面には赤色顔料以外

の物に使用した擦痕が認められ、状況から皮革等の軟らかいものの「磨石」として転用した可能性が高い。

No5　形状・使用痕・赤色顔料の種類からみてL字状石杵ではない。しかし、磨面が平で、擦痕も一定ではないが、握部を意識した点で通常のベンガラ用の磨石（各地で出土しているベンガラ用の磨石には「定型」がない）とは異なる可能性は捨てきれない。

No6　土器内面に擦り込まれたように付着している赤色顔料は朱であり、器面の調整から見て明らかに「内面朱付着土器」である。

考　察

L字状石杵について

表2　L字状石杵出土土地名表

	遺跡名	出土遺構	時代・時期	特記	文献
1	伝滋賀県高島郡高島町鴨稲荷山古墳	採集		朱が付着	1
2	滋賀県守山市酒寺遺跡	竪穴住居	弥生後期	朱が付着	2
3	大阪府和泉市観音寺山遺跡	竪穴住居	弥生中末～後期	赤色顔料が付着	3
4	大阪府和泉市観音寺山遺跡	竪穴住居	弥生中末～後期	赤色顔料が付着	3
5	大阪府高槻市芝谷遺跡	竪穴住居	弥生後期初頭		4
6	大阪府高槻市古曽部遺跡	環濠	弥生後期初頭		5
7	兵庫県神戸市伯母野山遺跡	採集		赤色顔料が付着	6
8	兵庫県加古川市溝之口遺跡	竪穴住居	弥生後期	使用痕なし、赤色顔料なし	7
9	福岡県行橋市下稗田遺跡	竪穴住居	弥生後期	赤色顔料が付着	8
10	福岡県福岡市比恵1号墳	周溝	古墳前期初頭？	朱が付着	9
11	福岡県福岡市那珂遺跡13次	竪穴住居	古墳前期初頭	朱が付着	10
12	伝福岡県甘木市小田茶臼塚古墳	採集		朱が付着	11
13	福岡県朝倉郡三輪町大竹遺跡	竪穴住居	弥生後期終末	朱が付着、内面朱付着土器が共伴	12
14	福岡県山門郡瀬高町藤ノ尾垣添遺跡	竪穴住居	弥生後期後半	朱が付着、内面朱付着土器が共伴	13
15	福岡県浮羽郡田主丸町	採集	弥生後期	朱が付着	14
16	福岡県浮羽郡田主丸町	採集	弥生後期	朱が付着	14

表3　磨面にカーブを持つ石杵

	遺跡名	出土遺構	時代・時期	特記	文献
1	大阪府八尾市亀井遺跡	土壙	弥生前期	朱	15
2	徳島県徳島市名東遺跡	竪穴住居	弥生中期末	赤色顔料が付着	16
3	徳島県徳島市名東遺跡	竪穴住居	弥生中期末	赤色顔料が付着	16

表2にL字状石杵の出土一覧を示したが、これ以外に未報告資料が大阪府1、兵庫県1、愛媛県1、福岡県2、佐賀県1の計6例がある。愛知県郷中遺跡出土の長靴状の石器もこの範中

に含まれるかも知れない[17]。また、磨面にカーブを有する点でL字状石杵と大きな関わりを持つと考えられる石杵を表3に示した。

L字状石杵は、磨面にカーブを有し、磨面と垂直方向に握部を持つ磨石で、ほとんどの例に赤色顔料特に朱が付着する。ただし、兵庫県溝之口遺跡出土例のように磨面がない（使用痕がない)、つまり使っていない、そのため赤色顔料も付着していない「かたち」だけのL字状石杵もある。溝之口例は実見して確かめたが、例えば高槻市古曽部遺跡例は「赤色顔料の付着は認められない」と報告にあり、本遺跡出土例のように「転用」のために赤色顔料が残っていないのか、「かたち」だけのためなのか興味のある所である。なお、L字状石杵は磨面の状態から見て「臼」に当たるものはいわば薬研のような状態かとも想定できるが、まだ出土例はない。

従来の例に本遺跡出土資料が加わり、L字状石杵の使用痕及び赤色顔料付着状況を次のように整理することができる。

① 長側辺に併行な擦痕、磨面には朱が付着するもの

② 長側辺に併行な擦痕、磨面にはベンガラが付着するもの

③ 磨面は極端に摩滅、磨面には朱がほとんど残っていないもの

④ 曲面に整形してあるが磨面はない（使用していない)、赤色顔料が認められないもの

①はいわゆる典型的L字状石杵であり、②の存在は今の所、今回のNo1が唯一の例である。③については、従来は「大きな時間差のない転用」を積極的に評価せずに、後世の転用あるいは埋蔵環境やあまりに器面が平滑なため付着残存しにくいものと消極的に考えていた。例えば、福岡県犬竹遺跡例は磨面が上下にあり、当初の下部磨面は砥石にでも転用されたかのごとく完全な平面になっているが、上部の磨面はカーブを有し朱が残存している。これについては5C代の住居跡出土からその時期での転用を想定した。ところが、今回のNo3，4は、上下の磨面が時間的に近接あるいは同時進行の可能性もあることを考えさせ得る資料である。近接した位置からの出土したNo3と「丹塊」がほぼ同時期に属するからである。単純に「転用」と考えるのではなく、「磨る」「相手」が変わったために、使用中（直後）であっても赤色顔料が残らなかったとも考えられるかもしれない。

内面朱付着土器について

分析により確かめられた内面朱付着土器の福岡県内出土一覧を表4に示したが、これ以外に分析されたものとしては巨摩廃寺遺跡[18]と纒向遺跡出土土器[19]にその可能性がある。他に未分析および未報告資料が兵庫県、徳島県、香川県、愛媛県、佐賀県で出土している。

足守川加茂A遺跡では他に片口鉢が2点出土しており、朱であることが確かめられており、器面調整なども共通することから、いわゆる内面朱付着土器であろう。

内面朱付着土器とは以下の特徴を持つ土器である。

表4　福岡県内出土の内面朱付着土器

	遺跡名	出土遺構	器種	赤色顔料	時期	特記	文献
1	行橋市辻垣長通	溝5区	広片口三耳鉢	朱	弥・後・中		20
2	行橋市辻垣長通	溝5区	広片口三耳鉢	朱	弥・後・中		〃
3	行橋市辻垣長通	溝5区	広片口三耳鉢	朱	弥・後・中		〃
4	行橋市辻垣長通	Ⅲ区	広片口三耳鉢	朱	弥・後・中		〃
6	行橋市辻垣長通	溝5区	片口鉢	朱	弥・後・中		〃
7	行橋市辻垣長通	溝4区	片口鉢	朱	弥・後・中		〃
8	行橋市辻垣長通	Ⅲ区	鉢	朱	弥・後・中		〃
9	行橋市辻垣長通	溝5区	鉢	朱	弥・後・中		〃
10	行橋市辻垣長通	溝5区	鉢	朱	弥・後・中		〃
11	行橋市辻垣長通	溝5区	鉢	朱	弥・後・中		〃
12	行橋市辻垣長通	溝5区	鉢	朱	弥・後・中		〃
13	行橋市辻垣長通	Ⅳ区	鉢	朱	弥・後・中		〃
14	行橋市辻垣長通	溝5区	鉢	朱	弥・後・中		〃
15	行橋市辻垣長通	Ⅲ、Ⅳ区	鉢	朱	弥・後・中		〃
16	行橋市辻垣長通	溝5区	甕	朱	弥・後・中		〃
17	行橋市辻垣長通	溝4区	甕	朱	弥・後・中		〃
18	春日市須玖永田	1号井戸	壺（小破片）	朱	弥・後・中	他に60点余りの	21
19	春日市須玖永田	1号井戸	甕（小破片）	朱	弥・後・中	広片口三耳鉢や	〃
20	春日市須玖永田	1号井戸	甕（小破片）	朱	弥・後・中	大型片口鉢の破	〃
21	春日市須玖永田	1号井戸	甕（小破片）	朱	弥・後・中	片がある	〃
22	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	5号住居覆土	甕（小破片）	朱	弥・後・後		22
23	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	5号住居覆土	甕（小破片）	朱	弥・後・後		〃
24	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	5号住居覆土	甕（小破片）	朱	弥・後・後		〃
25	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	12号住居覆土	甕（小破片）	朱	弥・後・後		〃
26	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	13号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・後	L字状石杵出土	〃
27	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	13号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・後		〃
28	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	13号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・後		〃
29	山門郡瀬高町藤ノ尾垣添	13号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・後		〃
30	福岡市野方中原	A溝	片口鉢	朱	弥・後・中		23
31	福岡市野片中原	7号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
32	福岡市野片中原	71号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
33	福岡市野片中原	71号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
34	朝倉郡三輪町大竹	表採	甕（小破片）	朱	弥・後・末		24
35	朝倉郡三輪町大竹	3号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
36	朝倉郡三輪町大竹	5号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
37	朝倉郡三輪町大竹	9号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
38	朝倉郡三輪町大竹	16号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末	近接住居跡から	〃
39	朝倉郡三輪町大竹	16号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末	L字状石杵出土	〃
40	朝倉郡三輪町大竹	16号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
41	朝倉郡三輪町大竹	16号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
42	朝倉郡三輪町大竹	16号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
43	朝倉郡三輪町大竹	24号住居	甕（小破片）	朱	弥・後・末		〃
44	小郡市津古片曽梨1号墳	東南側墳居	高杯	朱	古・前・初		25
45	福岡市博多遺跡群50次	945号竪穴	片口甕	朱	古・前・初	棒状石杵出土	26
46	福岡市博多遺跡群59次	41号住居	小形丸底壺	朱	古・前・初		27
47	福岡市博多遺跡群59次	41号住居	小形丸底壺	朱	古・前・初		〃
48	福岡市博多遺跡群59次	48号住居	甕	朱	古・前・初		〃
49	福岡市博多遺跡群65次	706号土壙	鉢	朱	古・前・初		28
50	福岡市博多遺跡群65次	730号土壙	甕	朱	古・前・初		〃

① 土器は主として内面に朱（硫化水銀HgS）が残る

② 現時点で確かめられている時期は、畿内では弥生中期末に、北部九州では後期中頃に出現する。終わりは古墳時代初頭である。

③ 弥生土器では完形に復元可能のものと、甕等の小破片がある。いずれも断面にも朱が付

着する場合が多い

④ 朱は粉状あるいは塗膜状で付着しているのではない

⑤ 朱は擦り込まれたように密着し光沢があるものが多い

⑥ 朱が土器のヒビ等胎土深くに染み込み、外面までしみでたものが多い

⑦ 土器の外面には著しくススが付着することが多い

⑧ 甕、鉢には片口が付くことが多い。

⑨ 朱専用の定型の石杵（L字状石杵、棒状石杵c類）と共伴することがある

岡山県内では百間川原尾島遺跡で福岡県辻垣長通遺跡例と同じ広片口三耳鉢が出土しているといわれており、時期は後期の前半という。東大阪市巨摩廃寺遺跡では、吉備産の土器がまとまって出土した沼状遺構上層から内面朱付着土器小破片が1点、同下層からは広片口三耳鉢を思わせる内面（ヘラミガキ）に朱、外面に黒色塗抹物が付着した異形の内面朱付着土器が出土している。桜井市纒向遺跡では、分析調査が行われている赤色顔料付着土器は11点であり、そのうち3点が朱によるのもとされている。纒向石塚古墳南側周溝出土の鉢辻地区土壙1の高杯、辻地区土壙7の鉢、東田地区北溝下層の片口鉢、辻地区土壙4上層の鉢である。徳島市名東遺跡からは中期末に比定される広片口三耳鉢に類する土器が出土し磨面にカーブを持つ石杵と共伴している。

内面朱付着土器は朱の残存状態や外面の煤及び注ぎ口を持つこと等から、彩色による装飾あるいは単に塗料としての朱の製造・精製・貯蔵に関る土器であるとは考えられない。生産地関連遺跡では二次的に水簸に用いた可能性も否定できないが、通常は土器に朱を入れて外側から加熱したのではないだろうか。朱を塗料として用いるならば、漆等に混和することが最適であり、その場合熱は不必要である。しかも朱は高温（580℃）になると昇華する。液状の朱を入れた土器を加熱して何をしていたのか？単なる朱の精製容器ではなく、中国の煉丹術との関連で捉える必要があると考えてはいるが、今は時期比定の可能な資料の分析例を増やすことが先決であろう。

ま と め

吉備地方の朱関連遺物については今回を含め3遺跡しか調査していないが、今の所北部九州との関係は次のようになる。大田茶屋遺跡出土朱は北部九州の前漢鏡を伴う甕棺墓出土朱の粒度とほぼ同じタイプとなり、楯築遺跡出土朱は後漢鏡を伴う墳墓出土朱の粒度に見合う。今回の典型的L字状石杵（№2）に残存する朱には約30μmの粒子が含まれており、北部九州では後期前半以降のものと判断できる。L字状石杵、内面朱付着土器ともにまだまだ資料集成の段階ではあるが、今回の調査によりL字状石杵は使用痕と赤色顔料の種類で分類が可能であることがわかった。

L字状石杵と内面朱付着土器の出土状況から見て、朱関連遺物の出現には東瀬戸内地方が大きな関わりを持つことは明かである。特に吉備地方での朱関連遺物については朱の粒度も含め、近畿や北部九州との関わりの中で基本的調査が行われることに期待したい。

註

1 白井順子 「石杵の新資料」『滋賀考古学論叢』4 1988

2 守山市教育委員会 「酒寺遺跡の調査」『乙貞』69 1993

3 森浩一他 『観音寺山弥生集落調査概報』観音寺山遺跡調査団 1968

4 森田克行 「芝谷遺跡」『弥生時代の石器』埋蔵文化財研究会 1992

5 宮崎康雄 『古曽部遺跡発掘調査概報』高槻市教育委員会 1993

6 若林秦他 『伯母野山弥生遺跡』神戸市教育委員会 1963

7 加古川市教育委員会『溝の口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告10 1992

8 下稗田遺跡調査指導委員会『下稗田』行橋市文化財調査報告書17 1985

9 横山邦継 『比恵遺跡・遺物編』福岡市埋蔵文化財調査報告書130 1986

10 杉山富雄他 『那珂2』福岡市埋蔵文化財調査報告書130 1990

11 柳田康雄 『小田茶臼塚古墳』甘木市文化財調査報告書4 1979

12 石山 勲 『犬竹遺跡』三輪町文化財調査報告書4 1985

13 田中康信 『藤の尾垣添遺跡の調査』Ⅱ瀬高町文化財調査報告書5 1989

14 柳田康雄他 『田中幸夫寄贈品目録』九州歴史資料館 1982

15 西村尋文 「石器」『亀井』大阪府教育委員会、㈶大阪文化財センター 1989

16 氏家敏之 「名東遺跡」『埋蔵文化財年報』徳島県埋蔵文化財センター 1993

17 豊川市教育委員会 『郷中・雨谷』 1989

18 ㈶大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』 1981

19 関川尚巧他 『纒向』桜井市教育委員会 1971

20 柳田康雄 『辻垣畠田・長通遺跡』 1994

21 平田定幸 『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告7 1987

22 二宮忠司 『野方久保遺跡』Ⅱ福岡市埋蔵文化財調査報告書348 1993

23 文献12に同じ

24 文献13に同じ

25 宮田浩之 『津古片曽葉遺跡』小郡市文化財調査報告書78 1992

26 大庭康時 『博多21』福岡市埋蔵文化財調査報告書249 1991

27 山口譲治 『博多36』福岡市埋蔵文化財調査報告書328 1993

28 小畑弘己他 『博多37』福岡市埋蔵文化財調査報告書329 1993

付載4．岡山県足守川加茂A・B遺跡出土の動物遺体と骨角製品

金子浩昌

I　はじめに

岡山県足守川加茂A・B遺跡（以下加茂A遺跡・加茂B遺跡）はこの地方では数少ない弥生、古墳時代の貝塚が検出された遺跡である。貝塚は河川の改修工事の際の発見で、今回の調査によってはじめて其の内容が明るみにでるものであった。弥生期の貝塚それ自体の調査としても興味深いものがあるが、この貝塚からほど遠くない地点に縄文時代中期の貝塚が形成されており、それについては既に詳細を報告している。それ以後旧児島湾奥部入り江の環境変遷の進むなかで貝塚の動物相にどのような変化がみられるか、そこに住んだ人々の生活が反映されている貝塚の動物遺体の比較研究は、興味ある問題を提供しよう。両貝塚の動物遺体は単に環境変化によって動物種が変わるということではなくて、人々の新しい活動の跡を知ることができるであろう。

本文の記述に先立ち種々お世話になった岡山県古代吉備文化財センターの山磨康平氏に御礼申し上げたい。また動物遺体の写真撮影には、那覇市教育委員会文化課の栗山初美、比嘉君子氏の御協力をいただいた。併せて御礼申し上げたい。

II　出土した動物遺体の種名表

軟体動物門　Phylum Mollusca
　腹足綱　Class Gastropoda
　　原始腹足目　Order Archaeogastropoda
　　ニシキウズガイ科　Family Trochidae
　　ヘソアキクボガイ　Chlorostoma argyrostoma
　　リュウテンサザエ科　Family Turbinidae
　　スガイ　Lunella coronata
　　アマオブネガイ科　Family Neritidae
　　ヒロクチカノコガイ　Dostia violacea
　　中腹足目　Order Mesogastropoda
　　タニシ科　Family Viviparidae
　　オオタニシ　Cipangopaludina japonica
　　カワニナ科　Family Pleuroceridae
　　カワニナ　Semisulcospira bensoni
　　チリメンカワニナ　S. b. reiniana
　　ウミニナ科　Family Potamididae
　　カワアイ　Cerithideopsilla djadjariensis
　　フトヘナタリ　Cerithieda rhizophorerum
　　シマヘナタリ　C. ornata
　　ウミニナ　Butilla mulutiformis
　　タマガイ科　Family Naticidae

ゴマフダマガイ　Paratectonatica tigrina
ツメタガイ　Glassaulax dydyma
新腹足目　Order Neogastropoda
アクキガイ科　Family Muricidae
アカニシ　Rapana venosa
レイシガイ　Thais bronni
レボニシ　Thais clavigera
二枚貝綱　Class Bivalvia
フネガイ目（糸鰓目）　Order Arcoida (Filibranchia)
フネガイ科　Family Arcida
サルボウガイ　Scapharca subcrenata
ハイガイ　Tegillarca granoza
イタボガキ科　Family Ostreidae
マガキ　Crassostrea gigas
イシガイ目　Order Unionoida
イシガイ科　Family Unionidae
・マツカサガイ　Inversidens japanensis
マルスダレガイ目　Order Veneroida
シオサザナミガイ科　Family Psammobiidae
フジナミガイ　Soletellina boeddinghausi
マテガイ科　Family Solenidae
マテガイ　Solen strictus
フナガタガイ科　Family Trapeziidae
ウネナシトマヤガイ　Trapezium liratum
シジミ科　Family Corbiculidae
ヤマトシジミ　Corbicula japonica
マルスダレガイ科　Family Veneridae
ハマグリ　Meretrix lusoria
オキシジミ　Cyclina sinensis

脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA
軟骨魚綱　Class Chondrichthyes
サメ目　Order Lamniformes
科、属不明　Fam. et gen. indet.
エイ目　Order Rajiformes
トビエイ　Holorhinus tobijie
硬骨魚綱　Class Osteihthyes
ニシン目　Order Clupeiformes
ニシン科　Family Clupeidae
ヒラ　Hisha elongata
コイ目　Order Cypriniformes
コイ科　Family Cyprinidae
コイ　Cyprinus carpio
フナ　Carasius auratus
ナマズ目　Order Siluriformes
ギギ科　Family Bagride
ギバチ　Pseudobagras aurantiacaus
ウナギ目　Order Anguilliformes
アナゴ科　Family Congridae
アナゴ科の一種　Congridae gen. et sp. indet.
ハモ科　Family Muraenesopcidae
ハモ類　Muraenesox sp.
ボラ目　Order Mugiliformes
ボラ科　Ffmily Mugilida
ボラ　Mugil cephalus
スズキ目　Order Perciformes
スズキ科　Family Serranidae
スズキ　Lateolabraxa japonicus

ニベ科　Family Sciaenidae
ニベ　Nibea mitsukurii
タイ科　Family Sparidae
マダイ　Pagrus major
クロダイ　Acanthopagrus schlegeli
サバ科　Family Scombridae
サバ科の一種　Scombridae gen. et sp. indet.
フグ目　Order Tetraodontiformes
カワハギ科　Family Aluteridae
カワハギ科の一種　Aluteridae gen. et sp. indet.
マフグ科　Famlyr Tetraodontidae
マフグ科の一種　Tetraodontidae gen. et sp. indet.
カサゴ目　Order Scorpaeniformes
カサゴ科　Famiiy Scorpaenidae
カサゴ科の一種　Scorpaenidae gen. et sp. indet.
コチ科　Famiiy Platycephalidae
コチ　Platycephalus indicus
カレイ目　Order Pleuronectiformes
ヒラメ科　Family Bothidae
ヒラメ　Paralichthys olivaceus
カレイ科　Famiiy Pleuronectidae
カレイ科の一種　Pleuronectidae gen. et sp. indet.

両生綱　Class Amphibia
無尾目　Order Anura
アカガエル科　Famiiy Ranidae

爬虫綱　Class Reptilia
カメ目　Order Chelonia
イシガメ科　Famiiy Emydidae
イシガメ　Clemmys japonica
有鱗目（ヘビ亜目）　Order Ophidia
ナメラ科　Famiiy Co;uburidae
ナメラ科の一種　Co;uburidae gen. et sp. indet.

鳥綱　Class Aves
ガンカモ目　Order Anseriformes
ガンカモ科　Famiiy Anatidae
ガンカモ科の一種　Anatidae gen. et sp. indet.
キジ目　Order Galliformes
キジ科　Famiiy Phasianidae
キジ　Phasiani colchicus

哺乳綱　Class Mammalia
食虫目　Order Insectivora
モグラ科　Family Talpidae
モグラ　Mogera wogura
ドガリネズミ科　Family Soricidae
ジネズミ　Crocidura dsinezumi
齧歯目　Order Rodeutia
ネズミ科　Family Muridae
アカネズミ　Apodemus speciosus
クマネズミ属の一種　Rattus sp.
ハタネズミ亜科の一種　Microtinae sp.
食肉目　Order Carnivoa
イヌ科　Famiiy Canidae
イヌ　Canis familiaris
偶蹄目　Order Artiodactyla
イノシシ科　Famiiy Suidae
イノシシ　Sus scrofa
シカ科　Famiiy Cervidae
ニホンジカ　Cervus nippon

III　動物遺体の記載

1．加茂B遺跡貝塚1の貝類

検出された貝の87％はヤマトシジミCorbicula japonicaによって占められていた。このことから本貝塚の形成が貝塚の面する河谷あるいは低地域のラグーン化と関わることはいうまでもない。これに伴うマガキCrassostrea gigas、ハイガイTegillarca granozaのような湾奥棲の貝種の量が10％程であるところをみると、こうした貝を採るための条件もごく限られていたのではないかと思われる。旧児島湾内奥部のラグーン化は縄文時代前・中期に既にみられるようになり、先にそうした貝塚の一つである矢部奥田貝塚を報告して貝類相の特徴を述べた。矢部奥田貝塚は加茂A・B遺跡の西750m程の地点にあり、同じ足守川谷の貝塚である。二つの貝塚の貝類相を比較すると主体貝種の上では大きな差異はなく、マツカサガイなどの淡水系の貝種が弥生期の貝塚にみられるものの、ヤマトシジミなどは縄文貝塚の方が比率が高く、殻形も小さい。貝の捕採率がより高かったからなのであろう。

表1　加茂B遺跡（貝塚1）の貝類の出現率表

種　類	数　量	%	重量(g)	%
ヤマトシジミ	43086(RLイズレカ)X1/2=21548	86.9	36699	63.7
マ　ガ　キ	R2003　L1900	8.1	10182	17.7
ハ イ ガ イ	R709　L680	2.9	9634	16.7
カ ワ ア イ	224	0.9		
フトヘナタリガイ	66	0.3		
オオタニシ	37	0.1		
カ ワ ニ ナ	26	0.1		
ス　ガ　イ	23	0.1		
ウ ミ ニ ナ	20	0.1		
チリメンカワニナ	13	0.1		
ア カ ニ シ	9	+	544	0.9
シマヘナタリ	8			+
レ　イ　シ	6	+		
イ ボ ニ シ	2	+		
ツメタガイ	2	+		
ヒロクチカノコガイ	2	+		
ゴマフタマガイ	1	+		
ヘソアキクボガイ	1	+		
オキシジミ	R44　L53	0.2		
ウネナシトマヤガイ	R17　L9	0.1		
マツカサガイ	30(RLイズレカ)X1/2=15	0.1		
ハ マ グ リ	R7　L7	+	527	0.9
フジナミガイ	3(RLイズレカ)X1/2=1.5	+		
サ ル ボ ウ	R1	+		
マ テ ガ イ	1(RLイズレカ)=X1/2=0.5	+		
合　計	24795個	100	57586	99.9

＊整理箱46箱のうち6箱（13％）の計量。数量の多い貝種をはじめにあげ、その他を腹足、斧足、綱の順に表示した。

2．加茂B遺跡の脊椎動物遺体

本遺跡の脊椎動物遺体は弥生時代後期に属するものとされている。次に動物遺体各種の主要標本について述べる。文中の計測値は特に記してない限りmmで現

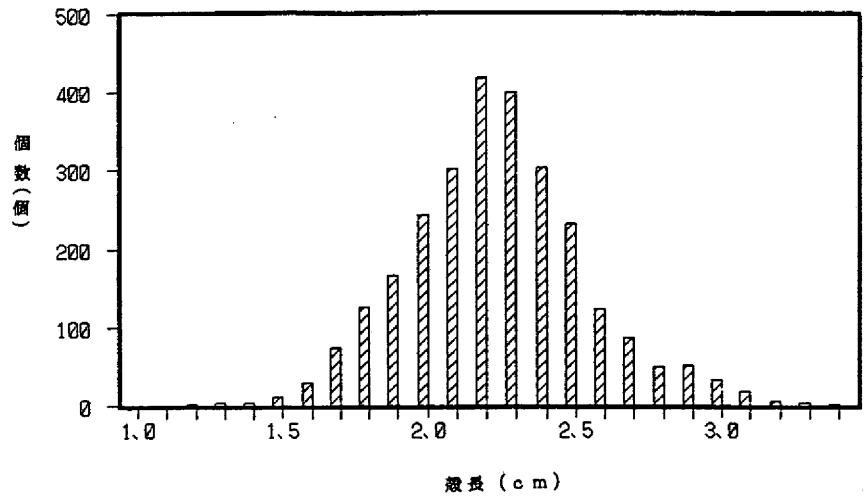


表２　加茂Ｂ遺跡貝塚１出土ヤマトシジミ殻高分布　＊計測数量の６％

す。

Ａ．魚類　PISCES

サメ目　Order Lamniformes

椎骨が１点検出されたのみである。椎体長6.49、椎体径5.06。沿岸棲のドチザメTriakis scylliaではないかと思われる。

エイ目　Order Rajiformes

出土した骨はトビエイHolorhinus tobijeiの分割された歯板数片と、やや多い椎体、尾棘数片が確認されているのみである。椎体は大きなもので径12.0前後になるが、この程度の大きさになる標本は少なく、６～8.0位のものが多い。エイ類の椎体は一個体で数も多く、個々の歯板片も上下合わせると数が多い。その割で考えると埋存していた個体数も余り多い数ではなかったように思われる。

ニシン科　Family Clupeidae

ヒラ　Hisha elongataが検出されている。主上顎骨、耳骨、歯骨、角骨などが標本として確認されている。おそらくこれらの部分が保存され易かったためであろう。椎骨も幾つか検出されているが、まだ標本の分類が完全ではない。骨質が薄いために完存する標本はないが、歯骨の左右連合する近心部の高さは8.6あった。標本には体長30cm位になる比較的大形の個体のが多かった。

コイ科　Famiiy Cyprinidae

コイ　Cyprinus carpio、フナ　Carasius auratusが知られるがコイの方が多いようである。

コイ科の標本は咽頭骨が両種を区別するのに的確であるが、前上顎骨、歯骨、主鰓蓋骨片などが確認されているが破片が多く、それらの骨によるとおよそ中型までの標本である。前上顎骨長14.0、歯骨長12.6。

ギギ科　Family Bagride

おそらくギバチ属の仲間であろう。検出されている標本は鋸歯をもつ鰭棘数点と鎖骨があるが標本は小さい個体のもので、その数も少ない。胸鰭棘長15.8。

ウナギ目　Order Anguilliformes

アナゴ科の一種　Congridae gen. et sp. indet.は主上顎骨、鎖骨、椎骨が検出されている。標本の点数は少ないが、検出例の少ない種類である。主上顎骨長17.0。

ハモ類　Muraenesox sp.は大きな歯骨と上顎骨を各1点と椎骨を検出している。他に断片のようなかたちで検出することもなかった。椎骨は採集されている各地点のブロック中に数点乃至その前後の数が含まれていた。椎体の大きさはどれもほとんど同じであった。椎体長が4.0前後である。主上顎骨は近心部に近い半分を残すのみの標本であるが、推定される全長は60.0であるが、個体としてははるかに大きなものであったはずである。歯骨長65.0前後と推定される。

ボラ目　Order Mugiliformes

ボラ　Mugil cephalus

主鰓蓋骨、椎骨が主たる標本である。本遺跡ではやや多い遺骸の出土をみた魚種であったと思われる。主鰓蓋骨、椎骨でやや大形の個体のものと思われる標本がある。椎骨長で11.0前後がもっとも大きい。標本はこれよりも小さいものが多く、全体としては小振りの標本が多いことになる。

スズキ目　Order Perciformes

スズキ　Lateolabrax japonicusは本遺跡の主体魚種の一つであって、遺骸の検出部位、数量共に多かった。また標本からみる漁獲個体の大きさにも変化が見られたことは他の魚種によるよりも顕著であった。このことは、この魚の漁獲に恵まれた条件が遺跡に近い水域にあったからであろう。

検出された骨は比較的保存条件のよい歯骨を主として、前上顎骨、主上顎骨、鎖骨などが多くみられた。歯骨連合部の高さの計測によると13.0前後が大型の標本であるが、このような大きさの標本は少なく、多くはそれよりも小さいもので、2～4.0位のものが多かった。これは本遺跡のスズキの特徴になる点であろう。

ニベ類　Family Sciaenidae

ニベ　Nibea mitsukurii

確認されたにはただ1個の尾椎骨である。この椎体は焼けて灰白色に変化していた。神経、血管棘は焼けた後に折れたようである。椎体全長220.0位になるもので、大型である。この椎体の形態は全体がやや細長めであって、表面に見られる骨の細かい皺はブリなどのかたちにも似るが、ニベ科 Family Sciaenidae、ニベ Nibea mitsukurii にもっともよく似た形状をもつ。椎体の近位部の左右横部にやや隆起する部分がみられ、これがみられるのが第一の椎骨数えて20、21番目にみられるので、この標本も同じ位置にくる椎体であったろう。現生標本で同位置の尾椎体長11.0で、体長420.0になるので、出土の標本は500.0になる体長であったと思われる。この大きさの椎体は今回の調査で出土した魚類椎骨のどの標本よりも大きいものであった。

タイ科　Family Sparidae

マダイ　Pagras major

タイ科のなかではクロダイ Acanthopagrus schlegeli とともに主体となって採られていた魚種である。大型の標本があるが、クロダイよりも一般的に大きい個体が含まれるようである。内蔵骨標本は主上顎骨、前上顎骨、歯骨を主とし、普通よくしられる前頭骨はまり大きくない1点があったのみである。大型の標本で前上顎骨は全長45.0、小さい標本で25.0前後とみてよいと思われる。

クロダイ　Acanthopagrus schlegeli

マダイ Pagras major よりも多くの標本が出土している。内蔵骨のには主上顎骨、前上顎骨、歯骨、口蓋骨などがよくのこされていた。これはこれらの骨が比較的厚みのある骨で保存され易い形であることによるものなのであろう。前上顎骨で全長25.0前後というのが大型のものになる。最小のものは13.11であった。

フグ目　Order Tetraodontiformes

カワハギ科の一種　Aluteridae gen. et sp. indet.

この種の標本はごく少ないが、この地域での検出例としても珍しいのではないかと思われる。標本はこの科特有の細かい鋸歯をもつ第一背鰭棘、腰帯の各1点と前上顎骨である。腰帯は大きく別個体のようである。主上顎骨長9.5。

マフグ科の一種　Tetraodontidae gen. et sp. indet.

本遺跡におけるフグ類の出土は標本数の上ではタイ類に次ぐ数になるであろう。ただ、標本は比較的小さい個体のものである。内蔵骨も比較的よく残されていた。

前上顎骨長（エナメル質部分）小型の標本で11.0、やや大きくて15.0前後。歯骨もほぼ同じ標本がある。

カサゴ目　Order Scorpaeniformes

カサゴ科の一種　Scorpaenidae gen. et sp. indet.

数は少ないが、大型の標本が出土している。前上顎骨長40.0に近い標本があり、方骨にもこの大きさに近い個体の標本がある。体長350.0位であろう。

コチ　Platycephalus indicus

標本の出土は少ない。歯骨長45.0前後（歯骨近心部高4.7)、体長350前後と推定。他の標本も同じ程度の大きさの個体が推定される標本である。

カレイ目　Order Pleuronectiformes

ヒラメ科　Family Bothidae

ヒラメ　Paralichthys olivaceus

左右の主上顎骨があり、同じ個体ではないかと思われる程の大きさである。右主上顎骨長35.0、体長260～270位。左口蓋骨は復元全長が50.0になる。当然体長はいっそう大きく45.0になるだろう。この魚の内蔵骨関係の骨はごく限られた部位を検出するのみであった。

カレイ科　Famiiy Pleuronectidae

カレイ類でも内蔵骨関係の骨では口蓋骨が主たる標本であった。口蓋骨は全長10.0程度の小さい標本が多かった。

B．爬虫綱　Class Reptilia

カメ目　Order Chelonia

イシガメ　Clemmys japonica

検出された標本はごく僅かなものであった。意図的な捕獲ではなかったのであろう。

ヘビ類　ナメラ科の一種　Co;uburidae gen. et sp. indet.

採取された各ブロック土中に１乃至数個の椎骨が含まれることは稀ではなかった。椎骨全長4.0程度のが普通であるが、１点のみ8.0になる大形の椎骨があった。おそらくこれは別種の大形ヘビと考えられる。アオダイショウ　Elaphe climacophora がそれに近いと思われる。

C．鳥綱　Class Aves

ガンカモ科　Famiiy Anatidae

中形のカモ類があるが、確認された部位、標本の数ともに少なかった。

キジ　Phasiani colchicus

中手骨１点がある。ニワトリ（白色レグホン）に比べると華奢で小さくキジのタイプである。第３中手骨の外側面遠位骨端から延びる細い溝の顕著なこともキジ的な特徴である。

全長34.8

D．哺乳綱　Class Mammalia

食虫目　Orden Insectivora

モグラ　Mogera wogura、ジネズミ　Crocidura dsinezumi

モグラ類の大型の上腕骨、ジネズミの下顎骨が出土している。ジネズミは川床の草原、水田の畦などに穴居するので、近くに棲息していたものであろう。遺跡からの下顎骨などの出土はめずらしい。

齧歯目　Order Rodentia

数種のネズミ類の遺骸が知られている。下顎骨や四肢骨が遊離した状態で出土するが、捕食したものかどうかはなお明らかではない。

偶蹄目　Order Artiodactyla

イノシシ　Sus scrofa

上顎骨片１、下顎骨片１、四肢骨は橈骨２、尺骨２、距骨と踵骨が各１程度の出土で全体的に少ない。歯の残留が少ないので、年令などについての特徴を知ることはできない。

ニホンジカ　Cervus nippon

イノシシと同様に残されている遺骸は多くないが、下顎骨（破片を含めて）３点があり、幼獣から成獣までを含んでいた。角座骨部分を残す前頭骨、角座骨、角冠部などが各１点であるが残され、それぞれに切断した跡がみられた。四肢骨はやはり少なく、肩甲骨関節部分２、脛骨１というのが目立ったものであった。

３．加茂Ａ遺跡の脊椎動物遺体

この遺跡の動物遺体は加茂Ｂ遺跡よりもやや新しい時期に属するものと考えられている。ここでの動物遺体は獣骨を中心とするもので、加茂Ｂ遺跡とはかなり様相がちがうようである。

Ａ．魚類　PISCES

サメ目　Order Lamniformes

椎骨のみであるが小型のドチザメ　Triakis scylliaではないかと思われる。

エイ目　Order Rajiformes

椎骨と尾棘各１点。

ヒラ　Hisha elongata

主上顎骨、角骨が少数あり、加茂Ｂ遺跡の標本と似た大きさである。

ギギ科　Family Bagride

胸鰭の棘３点がある。大型の棘は体長30cm位になる個体のものである。

スズキ　Lateolabrax japonicus

多くの骨が残されている。中型から大型の個体のものを含んでいる。

ハタ類　Serranidae gen. et sp. indet.

僅か２点の標本であるが検出されている。この時期の特徴になって漁獲されるようになった

魚種かも知れない。

ニベ科　Family Sciaenidae

やや多い標本がみられる。小さい個体のものである。

マダイ　Pagras major

もっとも多くの骨を出土している。前頭骨、前上顎骨、前鰓蓋骨、歯骨の出土が多く、大小の個体を含んでいる。前頭骨幅44.0、前上顎骨長44.81というように大形の個体のものである。

クロダイ　Acanthopagrus schlegeli

本種の骨の出土も多い。大型の個体の標本もあるが、小さい個体の標本もある。

サバ科の一種　Scombridae gen. et sp. indet.

確認されたこの科の魚類の骨は僅かに1点の椎骨があったのみである。

フグ目　Order Tetraodontiformes

1点のみであるが、大型の前上顎骨がある。

カサゴ科の一種　Scorpaenidae gen. et sp. indet.

前上顎骨、主上顎骨など内蔵骨など3点。

カレイ科　Famiiy Pleuronectidae

標本は多くないが口蓋骨4点はすべて別個体のものである。

B．哺乳綱　Class Mammalia

イノシシ　Sus scrofa

右上顎骨片1点がある。P^3からM^2までとM^3の歯槽部を残す。M^3は脱落して歯槽中にないが、萌出して間もない状態であったと思われる。この標本は頭蓋を縦に二つに割り、更に上顎部と頭蓋部とを分断したものの一部なのであろう。このような解体法は当時よく行われたのである。なおこの上顎骨は次に述べる下顎骨とは別個体である。

下顎骨片1点がある。下顎枝の部分のみの破片である。M_3遠心部の残欠があり、その部分で下顎を打ち折ったものである。エナメル質が咬耗によって大きく孔をあけている。下顎枝幅60.0であるのでやや小さい下顎骨である。下顎枝の基部に横走する短い切り傷が付くが、この切痕は下顎枝に付く咬筋を切断するための加工である。

ここに述べた上顎骨片と下顎骨片は別々の個体のものであるが、頭蓋の分配、分断の方法を推測させるものとして興味深い。上述したようにこの下顎骨はM_3の中央不で割れていて、その状態は先にのべた上顎骨片のM^3歯槽中央からの割れと同じである。もし頭蓋の分断が同じ方法で行われたものとすると、頭蓋は下顎骨の付いたまま、先ず縦方向で左右に分断し、これが最初の分配になったのであろう。次に頭蓋を横にして上顎・下顎部と頭蓋部とを分けるように割り、最後に頭蓋部からそこになお付いている下顎枝部分を、咬筋を切断して取り外すとい

った手順であったということになる。

他に左踵骨１点があり、成獣骨、食肉獣による咬み跡が多数みられる。

ニホンジカ　Cervus nippon

角座骨部分２点がある。１点は左前頭骨の一部を残して角座骨、角座と第一枝分岐部までを残すもので、第一枝分岐部ぎりぎりのところで切断している。切断に金属製の鋸が使われていることはその切り口から明かである。角座骨部分左右径31.5、角座直上部左右径32.6。

他の１点は右角座骨部分であるが、あまり保存状態がよくない。角座骨部分は細い。

左角冠部があり、角幹部、枝部が切断されている。切断には金属製品が使われている点は上記加工品と変わらない。

下顎骨２点がある。１点はdm 4をつける下顎骨（M_3は脱落している）、１点はM_3まで完全萌出のもの。

他に左踵骨１点がある。成獣。

Ⅳ　加茂Ｂ遺跡貝塚1脊椎動物遺体の特徴

次に本遺跡の動物遺体について貝塚形成時の環境と動物の生態的な条件から当時の採集、漁猟の活動を示唆するものがどのようにみられるかをのべてみたい。

１．加茂Ｂ遺跡における動物遺体について

魚類

加茂Ｂ遺跡においてもっとも多く出土した。この地区は貝と魚の処理場であったが、また別にのべるような卜骨などの出土しているところから近くには祭祀に関わる場所もあったと推測される。

どのような魚が捕られていたのであろうか。

エイ類：トビエイが確認されている。浅海砂泥底の海に多く棲息する魚であり、捕獲する機会はあったのであろう。数個体はあったと思われ、そのうちには全長７～80cmになるような個体もあったらしい。

ヒラ：やや多くの個体を残していた。この遺跡のニシン科の魚として特徴的な魚種の一つにあげてよいであろう。この魚も泥底質の海に棲み、この頃の児島湾内に多い魚であったろう。

コイ・ギギ類：本貝塚から知られた淡水系の魚である。当時の児島湾奥部に注ぐ河川水域で漁獲されたのであろう。漁獲量は鹹水魚に比べて少ない。

ハモ・アナゴ類：この魚も本貝塚を特徴着ける。この地方の海に多棲する魚であったと思われるからである。しかし、貝塚からの出土量は特に多くはない。

ボラ：内湾奥部の貝塚魚類の代表的な魚種の一つであり、漁獲量も多かったと思われる。

スズキ：本貝塚でもっとも多くの漁獲があったと考えられる魚である。内湾が形成され、この魚の棲息に適するような水域の環境があったことを示すものであろう。漁獲されている魚体が小さな個体を含むことから、この旧児島湾あるいはそれに近い水域で産卵、ふ化のあったことが推測される。

マダイ・クロダイ：マダイは外海の魚であり、この魚の漁獲には外海域への漁獲活動の拡大を考えなければなるまい。内湾内に入ることがあっても其の数は限られると思われるからである。こうしたことからマダイ漁獲の意義がいろいろ考えられてくるであろう。クロダイは内湾の魚であり、したがって漁獲はスズキに次ぐ。大きな個体も捕られている。

フグ類：この魚の漁獲も多かった。クロダイと同程度になるのである。

カサゴ類、コチ：漁獲は少ないがカサゴ類など大形の個体が捕られている。外海の魚であり、マダイなどと同じ条件下で捕られたのであろう。コチはむしろ砂底内湾の魚である。

ヒラメ・カレイ類：底棲の魚であり漁獲の条件には恵まれていたであろう。小さい個体が湾内に進入していたのを漁獲していたらしい。

2．縄文中期矢部奥田貝塚の魚類相との比較

矢部貝塚において確認された魚類種10種に対して、加茂B遺跡では17種があり、種類の増加していることが注目される。しかし、矢部奥田貝塚の魚類を特徴付けているのはエイ類、ボラ、スズキ、クロダイ、コチであり、更に主体的な種類と量差はスズキを主としてクロダイ、ボラ、コチの順である点は、加茂B遺跡貝塚1のそれと基本的に変わらないと言えそうである。また主体種以外の魚種にしても例えばナマズ、ギギ類、コイ、カサゴ類が少量づつ伴っている点にも共通した在り方が認められる。つまり縄文後期以降河谷の埋積などによる海岸線の変化はあったものの、旧児島湾内の環境に基本的な変化は無かったということなのであろう。

ところで加茂B遺跡貝塚1において追加された魚種のうちヒラ、マダイ、フグ類、カレイ類は上記の主要種に及ぶものではないが、それに次ぐ重要魚種であったとすることができるもので、漁労活動の上でこの時期に至って新たな展開がみられたのではないかと考えられる。マダイはより外海においての漁獲であり、ヒラのような河口域で産卵する魚の増えているのはそうした環境の広まりと関係があろう。またアナゴ類、ハモ、カレイのような底棲魚の増えている点は漁獲技術上の改良があったのであろう。

加茂A遺跡の魚類遺体は、加茂B遺跡とほぼ同じ種類が検出され、マダイ、スズキ、クロダイなどを主体とする点も共通するものがあった。しかし、各種の骨の出土総量、最小個体数などを両地点の魚種で比較すると、加茂B遺跡でもっとも多かったスズキはマダイ、クロダイの次位になり、ボラ、コチ、フグ類なども減少している。クロダイを除く内湾種が減少している

ようである。ただしフグ類は１点であるが、加茂Ｂ遺跡ではみなかった大型の前上顎骨があった。おそらくこうした変化は、この時期に至っていっそう外海的な漁労が盛んになることを示唆すると思われる。

鳥・獣類

加茂Ｂ遺跡貝塚１での鳥・獣類遺体の出土はきわめて限られ、種類を確認する以上のことを述べることはあまりできない。また特別の種類を検出することもなかった。しかし、占い・祭事と関係のある骨製品「卜骨」の出土の状況をみると、こうした骨素材を得るために狩猟もまた欠かせない仕事であったに違いない。この地点での獣骨の少ないのは、解体が別の場所で行われた可能性がある。加茂Ａ遺跡ではイノシシ、ニホンジカの遺骸が多かった。シカの角の第一次加工品とみられるものもあった。鹿角の加工が盛んだったことを示して興味深い。しかし、顎骨を除く四肢骨は少なく、鳥獣類の解体は住居地区などの別の場所で行われたのであろう。

なお、加茂Ａ・Ｂ遺跡共にイヌ、タヌキ、アナグマなどの中型獣の遺骸はほとんど検出することができなかった。矢部奥田貝塚においても少なかった。これを棲息個体数の問題とするか、狩猟の生業における問題があるかも知れない。これについては更に別の事例と考えあわせねばなるまい。

Ⅴ　加茂Ａ・Ｂ遺跡出土の骨角製品

Ⅰ．卜骨

加茂Ｂ遺跡出土の卜骨

(1)　No64、ニホンジカ、左肩甲骨（図版４－１、第138図Ｂ３）

肩甲骨の外形のほぼ全体を残す。内側遠位骨端から頚部にかけての一部が削られ、海綿質が露呈し、平らな面ができている。柄部としての加工であろう。

外面の肩甲棘は残るが、その上端は10㎜程度割り取ったようで、そのために低くなっている。この加工は肩甲棘を中途で折り取ることを目的としたのであろう。この卜骨の灼痕で現在確認できるのは、内側のほぼ中央に縦方向３か所接して並ぶのが認められるのみである。

(2)　No55、イノシシ、右肩甲骨（図版４－２、第138図Ｂ４）

大型の肩甲骨である。現在では遠位骨端とそれに近い部分を残すのみである。外面にある肩甲棘は低く削られ、痕跡程度にしかみることができない。

灼痕は外側「棘上窩」に縦に２点、「棘下窩」に３か所、内側中央に縦に３点、それぞれ10～15㎜の間隔を置いて並ぶ。

肩甲骨関節部29.0～41.0、肩甲骨頚部最小幅26.4

(3)　No34、ニホンジカ、左肩甲骨（図版４－３、第139図Ｂ５）

小さな肩甲骨である。遠位骨端部のみであるがほぼ形を残す。肩甲棘は高く残るが、その上端には削り痕が顕著で、金属刃で水平方向に遠位骨端方向に向けて削っている。

灼痕は外側「棘下窩」に２点、内側では肩甲頚縁に沿って６か所が並び、更に２か所が平行する。間隔は縦の並びで５㎜前後であるところが多い。灼痕は淡く茶色に焦げ、中央が黒く点をなして焦げる。亀裂もよく観取され、ほぼ中央部を縦に通るのが普通である。

肩甲骨関節部32×22.0、肩甲骨頚部最小径17.9

(4) No12、ニホンジカ、左肩甲骨（図版５－４、第139図Ｂ６）

遠位骨端を完存する。肩甲棘は近位方向から削られた痕跡がみられる。ただし、この部分の「肩峰」部は折れ、加工の状況は不明である。

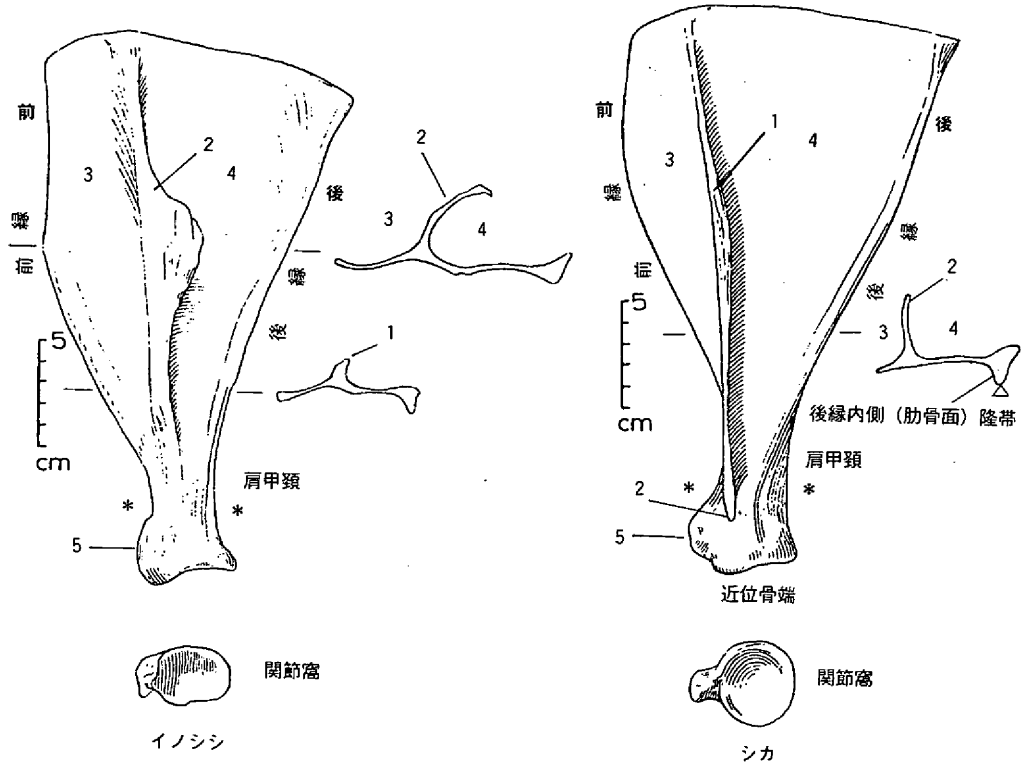


図１　イノシシ、シカ肩甲骨（左側）部位名称図
（骨格図を E. Schmid〈1972〉より）

１．肩甲棘　　４．棘下窩
２．肩峰　　５．関節上結節
３．棘上窩　　＊肩甲頚
△外側後線の隆起帯（肋骨面）

灼痕は外側の「棘下窩」に1か所、内側に肩甲頚部の縁に沿って4か所、それに並んで1点がある。灼痕の間隔は6㎜、灼痕の形状、亀裂の入る具合は前例とほぼ同じである。

肩甲骨関節部36.0×23.75、肩甲骨頚部最小径21.3

(5) No14、ニホンジカ、左肩甲骨（図版4－5、第139図B7）

遠位骨端を完存する。肩甲棘の遠位端は折れるが、一部に削ったような痕跡のみられる状態は上記の例によく似る。灼痕は「棘下窩」に1点、内側に肩甲頚縁に沿って4か所が並び、さらに1か所が入る。灼痕間隔は6～8㎜。焦げる具合は上記標本と変わらない。

(6) No6、ニホンジカ、左肩甲骨後縁部分（図版5－6、第139図B8）

後縁部分を残すのみの断片であるが、残されている部分から推定してこれまでにみた肩甲骨よりもはるかに大きなものであることがわかる。（図版5－7、第85図B1）

外側後縁の隆起帯に沿って灼痕が2か所、内側の隆起帯に平行して2か所が認められる。この卜骨についた灼痕跡は大きく、また焼けが深い。そのために内側面の灼が外側面までをこわしている。

(7) No63（土壙18）、イノシシ、右肩甲骨（図版5－7、第85図B1）

遠位骨端部を欠くが、近位部分はほぼ完全に残る。肩甲骨は小さく、若い個体のものである。おそらく生後1年未満ではなかろうか。

外側の肩甲棘は残っている。「棘下窩」に3か所がある。「棘上窩」に2か所の穿孔が認められるのは内側面からの灼のための貫通である。内側には前縁に沿って3か所が並び、後縁に沿うように4か所、さらにその間に1か所づつ計9か所に灼痕が認められた。

(8) No37、ニホンジカ、左肩甲骨（図版5－8、第140図B9）

大型の肩甲骨である。遠位骨端部を残す。肩甲棘の遠位骨端は高く残るが折れて完存しない。近位骨端側は削り痕がみえる。内外両側の一部に擦痕あるいは削り面がみられるが、この肩甲骨には灼痕が見られないので、それとの関係が不明である。

肩甲骨関節部幅31.6、肩甲骨頚部最小径25.3

Ⅱ．鹿角の加工品（図版6、第137図B2）

左側鹿角を加工したものである。全面を削り、元の鹿角がかなり細くなっているものと思われる。基部に隆帯がみられるが、その部分は鹿角の角座部が残されているものと思われる。角幹部は湾曲しながら角冠まで延びる。角冠の第三枝は基部から切断され、切断部は面取りの加工がされ、それより先の角先端部も8面をつくるように面取り加工がされている。基部つまり角座に近い部分の後面に細長い幅の切り込みの溝がつけられている。この溝には別のものがはめこまれたと考えられるが、現状からはそれがどのようなものであったか判定し難い。

全長（直線径）288.0、最大径16.0

Ⅲ．加茂Ａ遺跡の卜骨

ニホンジカ、左肩甲骨（図版５－Ａ）

大破はしているが全体の形をもっともよく残しているものである。また、全面に器面調整のための特徴的な加工をみることができる。外側面では、肩甲棘部分をその基底部から削り取り、肩甲骨の全体を関節部のみを別にして平たい板状のものに仕上げている。頚部にはこのために付いた深い切り込みが顕著である。内側の骨面の加工として、後縁に沿って付く高い隆起帯を削り、さらに全面に削りをいれた痕跡－擦痕－が付く。

灼痕は、外側では上にのべた肩甲棘の削り跡に縦に並ぶように３か所が確認され、さらに「棘上窩」に１か所、「棘下窩」に２か所認められる。このうち主になるのが肩甲棘跡につく３か所の灼痕で中央が黒く焦げ、強く焼かれたことがわかる。この面が焼灼する方の面であって、この反対面つまり肩甲骨の内側の面には擦り痕がみられ、外側の焼灼部に対応させて骨壁を薄くするように加工するのである。この面が卜占の兆しである亀裂の現れる面になる。遺物ではこの部分は破損して孔が開いているが、亀裂の痕跡を一部にみる。このように灼く面と兆しをみて占う面を区別しているのである。

なおこの卜骨には、さらに内側面に肩甲骨前縁に沿って近位骨端寄りに３箇所、ほぼ中央位置に２か所が確認される。近位骨端寄りの３か所の場合は焼灼面が肩甲骨内面であったらしいことが骨の焦げの濃さから推測される。この他にさらに多くの灼痕があった可能性もあるが、この卜骨の中央部が大きく破損しているので現状ではわからない。

加茂Ａ・Ｂ遺跡出土の卜骨の特徴

１．加茂Ｂ遺跡の卜骨について。

比較的狭い貝塚部分から８点もが出土したことは、この種の製品の出土例としては異例のことではないかと思われ、このことからも本貝塚の特殊性がうかがえるのである。

この地点で出土した卜骨の大部分はシカの肩甲骨が素材とされ、それも比較的若い小さい個体のものが使われていた。１例のみイノシシの肩甲骨が使われ、その肩甲骨は成獣のかなり大きな個体のものであった。

卜骨に使われる肩甲骨は、大体自然の形そのままがつかわれてきたはずであるが、残存しているところで見る限り肩甲棘を削るという加工が唯一あったのではないかと思われる。

焼灼は外側では「棘下窩」といわれる部分の範囲が広いので、その部分に主として行われたようである。肩甲骨の幅広い近位骨端部の残されることがほとんどないので、どの程度の数の焼灼が行われるのが普通であったかよくわからない。おそらく幅の狭い部分では１乃至２か所、広い部分で数列は行われたのであろう。

内側（助骨面）では肩甲頚部の幅の狭い部分では１列に３か所位、その先で２列になり更に

列、数の増えたのであろう。

イノシシの肩甲骨が使われている場合、外側では肩甲頚部で肩甲棘の両側が広いので、1列づつ焼灼が行われ、先に行ってさらに数列になるのであろう。内側はシカの場合と同様のようである。

2．加茂A遺跡の卜骨について。

1点が出土しているのみであるが、その形態には明らかに加茂B卜骨とは異なるところがみられた。肩甲骨素材を平らな骨板に整形するような加工は弥生期にはなく、新しい時期に入って行われるようになった技法とみられる。本例に近い加工法を示す資料として石川県金沢市畝田（うねた）遺跡出土の古墳時代前期（4世紀）のシカの肩甲骨を素材とした卜骨がある。また中期の例では宮城県山王遺跡から知られた資料があり、焼灼の方法に変化のみられることが確認されている。

畝田例もシカの左側肩甲骨が使われ、外側の肩甲棘が削られ、平らな面がつくられる。その加工は更に入念で、肩甲骨頚部には肩甲棘を削った痕跡はほとんど残されていない。しかし、肩甲棘の跡に焼灼痕が縦に並ぶので、この場所が焼灼に意識されているのであろう。

要　約

加茂A・B遺跡から卜骨が採取された。岡山県におけるこの種の資料の初めての検出であるという。二つの遺跡の貝塚はそれぞれ時期を異にして形成されている。卜骨もまたその時期の特徴を示すものであった。すなわち加茂B遺跡のは弥生期に例のみられる「灼面卜面一致型」で、加茂A遺跡のは「灼面卜面分離型」といわれる古墳時代に属するものとされるが、本遺跡においても年代的には矛盾はないようである。本資料が卜骨のさらなる研究に寄与するところは大きいであろう。

Ⅵ　骨鏃

1．加茂B遺跡の骨鏃（図版6，5）

ニホンジカの中手もしくは中足骨を素材。片面に骨表面の湾曲面が残る。偏平な板状のものがつくられ、柄部をやや細く尖らす。全体には縦方向に削り面が付くが、全面に横方向に走る刃物の削り痕が残る。

全長（現存）60.0㎜、最大幅8.2㎜、最大厚5.2㎜

2．加茂A遺跡の骨鏃と刺突具

4点が出土している。素材の多くはニホンジカの中手もしくは中足骨。

1）全長61.0㎜、最大幅9.2㎜、最大厚5.6㎜（図版6，1、第154図B3）

もっとも長いもの。柄部との切り込みは比較的明瞭。均整のとれた形がつくられている。全

面に縦方向の擦痕で整形されている。体部は偏平に加工されるが、断面は左右均等ではない。

2）全長44.3㎜、最大幅8.0㎜、最大厚3.8㎜（図版６，２、第154図Ｂ４）

短い作りであるが完存する。柄部をやや細く加工。縦方向に擦痕がつく。

3）現存長23.6㎜（図版６，４、第154図Ｂ６）

表面に３面、裏面に自然面と加工面２面があり、面取りが明瞭。きわめて偏平なことと加工の形が違うので、骨鏃であるかどうか問題である。

4）現存長32.0㎜（図版６，３、第154図Ｂ５）

刺突具先端部の小片。片面は円形の断面で反面には深い切り込みが入る。素材はシカの中手もしくは中足骨といったものではないかも知れない。また製品も鏃とするよりも漁労用の刺突具ではなかったかと思われる。

要　約

加茂Ｂ・Ａ遺跡の骨角器は卜骨を除くと種類も出土量も少なかった。僅かに骨鏃があったが、出土量では古墳時代前期の方がはるかに多く、獣骨の出土もまた多かった。獣骨と骨角器との対応に時期差の見られる興味ある一例であるが、さらにこれを魚骨にみられた外海への拡大を重ね合わせるならば、古墳時代前期における狩猟や漁労がいっそうの積極さをもって展開していたことがうかがえるのである。今回こうした予測を貝塚の動物遺体からなし得たことは、この地域における考古学研究の興味ある成果の一つといえよう。

参考文献

邑久町教育委員会：岡山県邑久郡邑久町大橋貝塚発掘調査報告書－長谷川県営砂防工事に伴う調査－ 1979．3

平井　勝：縄文時代、地域考古学叢書「岡山県の考古学」、吉川弘文館　1987．8　p.73

神澤勇一：呪術の世界－卜骨のまつり、石川日出志編「弥生人とまつり、考古学ゼミナール、六興出版 1990．5

神澤勇一：古代の占い、亀卜と鹿卜、別冊太陽「占いとまじない」No.73　1991．5

金子浩昌：矢部貝塚出土の動物遺体、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82、山陽自動車道建設に伴う発掘調査６　1993．3

橋本澄夫他：畝田遺跡、石川県立埋蔵文化財センター　1991．3

菅原弘樹他：山王遺跡Ⅰ－仙塩線道路建設関係遺跡発掘調査報告書－、古墳時代中期遺物包含層編　1994．3

動物遺体出土量表

加茂B遺跡魚骨出土量表（採取位置、左岸北東：A、南東：B、北西：C、南西：Dを現す。）

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton											脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上頭後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓・蓋間骨 subimop		腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
サメ類	A	r															1				6	6.49×5.06
		l																				椎体長×同径
トビエイ	A	r						2														
		l						歯板														
〃	D	r						1														
		l						歯板														
計		r						3									1					
		l						歯板														
エイ類	A	r															13					尾棘片 3
		l																				
〃	B	r															6					尾棘片 6
		l																				
〃	C	r															8					
		l																				
〃	D	r															6					
		l																				
〃	E	r															4					
		l																				
〃	左岸	r															8					
		l																				
〃	貝塚・貝層	r															15					
		l																				
	計	r															60					尾棘片 9
		l																				
ヒラ	A	r						1	3								3					
		l							3													
〃	B	r							1								*					*印：第1椎骨
		l							1								1					
〃	C	r				4			1													耳骨3
		l				1			2													
〃	D	r							1													
		l						2	1													
〃	左岸	r															3					耳骨2
		l																				

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton											脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓蓋間骨 sub imop		腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
ヒラ	貝層	r							2								7					
		l							1													
	計	r						1	8								16					
		l						2	8													
コイ	B	r			1																	
		l																				
〃	左岸	r																				咽頭骨 1
		l																				咽頭骨 4
〃	貝層	r		蝶形																		咽頭骨 3
		l		1	1			2														咽頭骨 3
	計	r		蝶形	2																	咽頭骨 4
		l		1				2														咽頭骨 7
フナ	A	r																				咽頭骨 1
		l																				
ナマズ	A	r						1														
		l																				
ギギ	A	r																				
		l																				胸鰭 1
〃	B	r																				胸鰭 1
		l																				
〃	D	r																		1		
		l						1														胸鰭 1
〃	E	r																				胸鰭 1
		l																		1		
〃	左岸	r						1														胸鰭 1
		l																				
	計	r						2												2		
		l						1														
アナゴ類	A	r				1											7			1		
		l																				
〃	B	r																				
		l																				
〃	D	r				1																
		l						1														
〃	E	r															3					
		l																				
〃	左岸	r																				
		l															2			1		

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton											脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上後頭骨 supofro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓蓋間骨 subimop		腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p.tem	上擬鎖骨 s.cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
アナゴ類	貝塚	r				1																
		l															5					
	計	r				3														1		
		l						1									17			1		
ハモ類	A	r																				
		l																				
〃	B	r														2	4					
		l																				
〃	C	r			1											2						
		l																				
〃	D	r														3	4					
		l				1																
〃	左岸	r														2	4					
		l																				
〃	貝層	r														2	2					
		l																				
	計	r			1											11	14					
		l				1																
ダツ		r						1														
		l																				
ボラ	A	r											3				3					
		l																				
〃	B	r															2					上篩骨 1
		l																				
〃	D	r																				
		l											1									
〃	左岸	r											1			1						眼前骨 1
		l				1							1									
〃	貝層	r											1			1	2					
		l											1									
	計	r						1					5			2	7					
		l				1							3									
スズキ	A	r	1		2	5		5	2	1			2									腎鋸棘 1
		l			1	4		6		1								1		2		
〃	B	r						3	2							2						血管間棘 2
		l				1		1	1	2			1						2			
〃	C	r			3	1						1								3		血管間棘 2
		l				4		2		2			1					1				外翼状骨 1

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton											脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上後頭骨 supofro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓・蓋間骨 subimop		腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p.tem	上擬鎖骨 s.cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
スズキ	D	r			1	2		1		1						* 2				2		*第1椎骨
		l				1		2	1										1			腎鰭第2棘1
〃	E	r																				
		l				1												1				
〃	左岸	r						1		1		1	1			* 1						*第1椎骨
		l	1		1	1		2		1		3	1			1			1	2		腎鰭第2棘1
〃	貝層	r		蝶形	1			2		1		1							3			
		l		2				2		2			1									
	計	r			7	8		12	4	4		3	3			*3			3	3		*第1椎骨
		l			2	12		16	2	8		3	4			3		3	4	6		
ニベ	(北)	r															1					
		l	1																			
クロダイ	A	r				1	1			1												
		l								1												
〃	B	r					1			1	1							1				
		l																				
〃	C	r			1			1														
		l				1		2	1													
〃	D	r							1													タイ科血管間棘1
		l						1		1												
〃	E	r				1																腎鰭第2棘1
		l																				
〃	左岸	r			1			1														腎鰭第2棘1
		l			1		1									2	4					角舌骨1
〃	貝塚	r			1		1				1					*	1					角舌骨1
		l			1			1	1				1			1						腎鰭第2棘1
	計	r			3	2	3	2	1	2	2					*1	5	1				*第1椎骨
		l			2	1	3	4	2	2			1			2						
マダイ	A	r			2	2	1				1	1					1		1			腎鰭第2棘1
		l			2	1		3	3										1			
〃	B	r										1					1					腎鰾第2棘1
		l						1														血管間棘1
〃	C	r								1								1				
		l			1	3		3			1		3									
〃	D	r			1								1									
		l		1							1							1				
〃	E	r														1*						*第1椎骨
		l														1				1*		*タイ科

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton											脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓蓋間骨 sub imop		腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
マダイ	左岸	r				1		3				1				1						角舌骨 1
		l			3					1		1						1				角舌骨 1
〃	貝塚	r				1	1		1		1		2*				1					血管閉棘 1
		l		1									3									角舌骨 1
	計	r			3	4	2	3	1	1	2	3		1		1	1	1	1			*第 1 椎骨
		l		1	6	4		7	3	1	2	1	6			1		2	1	1		
フグ目	A	r							1	1			1				3					舌骨 1
		l						1					1									
〃	B	r			1		1	1	1		1		1				2			3		舌骨 1
		l			3		1	1	2	1	2		1									
〃	C	r			1	1											5					
		l			1					2												
〃	D	r			1			1														
		l				1																
〃	左岸	r			1			1			1						4					舌骨 1
		l			1	1																
〃	貝層	r			1	3																
		l						1														
	計	r			5	4	1	3	2	3	2		2				14					
		l			5	2	1	3	2	1	2		2									
カワハギ類	B	r																				腰帯 1
		l																				
〃	C	r			1																	
		l																				
〃	左岸	r																				腰帯 1
		l			1																	背鰭第 1 棘 1
	計	r			1																	
		l			1																	
カサゴ類	A	r														7*						*同一個体
		l																				
〃	B	r																				
		l				1		1		1												
〃	C	r			1			1														
		l																				
〃	D	r			1															1		
		l																				
〃	左岸	r						1														
		l								1												

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton											脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓蓋間骨 sub imop		腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
カサゴ類	貝塚	r																				
		l			1						1											
	計	r			2			2														
		l			1	1		1		2	1						7					
コチ	A	r									1											
		l			1				1	1						1	3					
〃	B	r																				
		l						1	1													
〃	C	r				1																
		l																				
〃	左岸	r										1										
		l				1																
〃	貝層	r				2																
		l																				
	計	r				3					1	1				1	3					
		l			1	1		1	2	1												
ヒラメ	C	r																				
		l																				
〃	貝層	r				1				1												
		l				1																
	計	r				1				1												
		l				1																
カレイ類	A	r					1										6					
		l								1												
〃	B	r								1							8					
		l																				
〃	C	r																				
		l					1															
〃	D	r															4					
		l					1															
〃	E	r															1					
		l																				
〃	左岸	r					1										14					
		l					1															
〃	貝層	r															5					
		l					1															
	計	r					1										24					
		l					4															

加茂B遺跡鳥骨出土量表

種類	採取位置	r/l	椎肋骨骨 vert rib	烏口骨 cora psd	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	橈骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 pel psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	腓骨 fib psd	距骨 ta	踵骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他 ①完
ガン・カモ	A	r										1						破片1
		l																
〃	C	r						1										
		l						1										
〃	D	r																
		l						1 1										
〃	貝層	r	V5															烏口と尺骨は別
		l		①				1										
	計	r	V5					1				1						
		l		1				3 1										
キジ		r							①									
		l																

加茂B遺跡哺乳類出土量表

種類	採取位置	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	椎肋骨骨 vert rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	橈骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 pel psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	腓骨 fib psd	距骨 ta	踵骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
アカネズミ	A	r		1			1					1		1					
		l		2			1		1		2		1	1					
ハタネズミ亜科	B	r		1									1						
		l																	
〃	C	r																	
		l		1															
アカネズミ	D	r		1							1								上顎切歯
		l		1					1*				1						*クマネズミ属
〃	E	r																	上顎切歯
		l																	
〃	左岸	r			胸椎														上顎切歯
		l			1														上顎切歯
〃	貝層	r	max1	3	尾椎1		1	1	1			1	1						
		l		2	V. 2	at 1	1	1	1		2	2	1						
	計	r	1	6			2	1	1		1	2	2	1					
		l		6		at 1	2	1	3		4	2	3	1					
モグラ	貝層	r					1												
		l																	
ジネズミ	貝層	r		1															
		l		1															
イノシシ	D	r													1		1*		c̲♀、c̄♀、P 2
		l	口蓋♂							Ⅲ						1	*		i_2、*mc/mt
〃	左岸	r																	
		l																	
〃	貝塚	r			椎体*													(幼)1	*R/L
		l							1	Ⅱ/Ⅴ*	1								中心足根1

種類	採取位置	r/l	頭蓋骨 cra	下顎骨 md	脊椎骨 vert rib	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	橈骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 pel psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	腓骨 fib psd	距骨 ta	踵骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
イノシシ	〃	r																	I_1、I_2
		l																	
〃	〃	r																	
		l																	
	計	r			1										1				
		l	1						1		1					1			
ニホンジカ	B	r																	
		l		1*															* (P_2~M_3)
〃	D	r		1*															* (M_3)
		l																1(基)	
〃	貝塚	r			頚椎		1									1			
		l		1		2												(基)2	
	計	r		1	1		1									1		3	
		l		2		2													

加茂A遺跡貝層魚骨出土量表

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder gir dle				その他
			鋤骨 vo	前上頭後骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓・蓋間骨 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
エイ目	北半	r														1					尾棘片1
	灰褐色	l																			
エイ類	北半	r														1					尾棘片1
		l																			
サメ類	北半	r														8					
		l																			
ヒラ	北半	r				1			1												
		l				1			2												
ギギ	北半	r																			胸鰭1
		l																			2
ハモ	北半	r						1													
		l						2													
ボラ	北半	r											1								*眼前骨
		l																			
スズキ	北半	r			4	5		3	2				1								臀鰭第2棘1
		l			1	4		1	2	1			1								
スズキ	北半	r																			臀鰭第2棘1
	灰褐色	l						1													
	計	r			4	5		3	2				1								
		l			1	4		2	2	1			1								

種類	採取位置	r/l	頭骨 skull		内臓骨 visceral skeleton										脊椎骨 vertebra		肩帯 shoulder girdle				その他
			鋤骨 vo	前上後頭骨 supo fro	前上顎骨 prem	上顎骨 max	口蓋骨 pal	歯骨 den	角骨 an	方骨 qu	舌顎骨 hyo	前鰓蓋骨 preo	主鰓蓋骨 ope	下鰓蓋間骨 sub imop	腹椎体 abd	尾椎体 cau	後側頭骨 p. tem	上擬鎖骨 s. cl	擬鎖骨 cl	肩甲骨 sc.	
ハタ類	北半	r																			
		l			1			1													
マダイ	北半	r		1	1							1									鰭棘1
		l		1	1			1				1	1								角舌骨1
〃	H−2 覆土	r																			
			1																		
マダイ	北半	r		6	4	2		6	2			4									
		l		2	5	2	2	6	2		1	2	1								角舌骨1
	計	r		7	5	2		6	2			5									
		l	1	3	6	2	2	7	2		1	3	2								
クロダイ	北半	r			4	1		6							1*	1					*第1椎骨
		l			3	1	2	4	2												
クロダイ	北半	r													1*	1					*第1椎骨
		l					2														
	計	r			4	1		6							2	2					
		l			3	1	4	4	2												
サバ類	北半	r														1					
		l																			
サバ科	北半	r														1					
		l																			
ニベ科	北半	r			3	2															
		l			1	1		2													
フグ類	北半	r																			
		l		1																	
カサゴ科	北半	r													7*						*別個体
		l			1	1					1										
カサゴ科	北半	r													7*						*別個体
		l		2	1	1			1		1										
コチ	北半	r			2																
		l																			
カレイ類	北半	r					3														
		l					1														

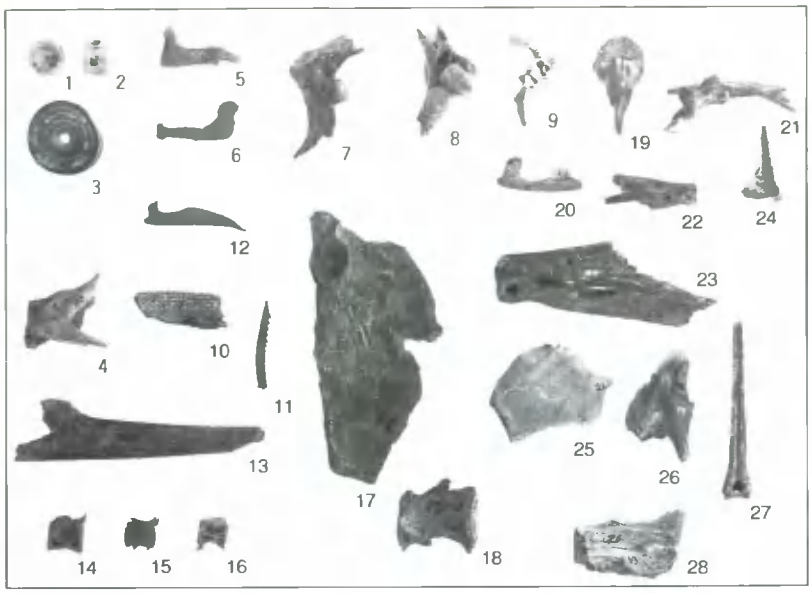
加茂A遺跡貝層鳥骨出土量表

種類	採取位置	r/l	椎肋骨骨 vert rib	烏口骨 cora psd	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	橈骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 pel psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	腓骨 fib psd	距骨 ta	踵骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
イシガメ	北端貝層	r				1												
		l																
ガン	北半貝層	r																
		l		1														
カモ類		r																
		l						1 1										

加茂A遺跡貝層と加茂B遺跡土壙イノシシ、ニホンジカ　歯牙、骨格出土量表（ep：骨端）

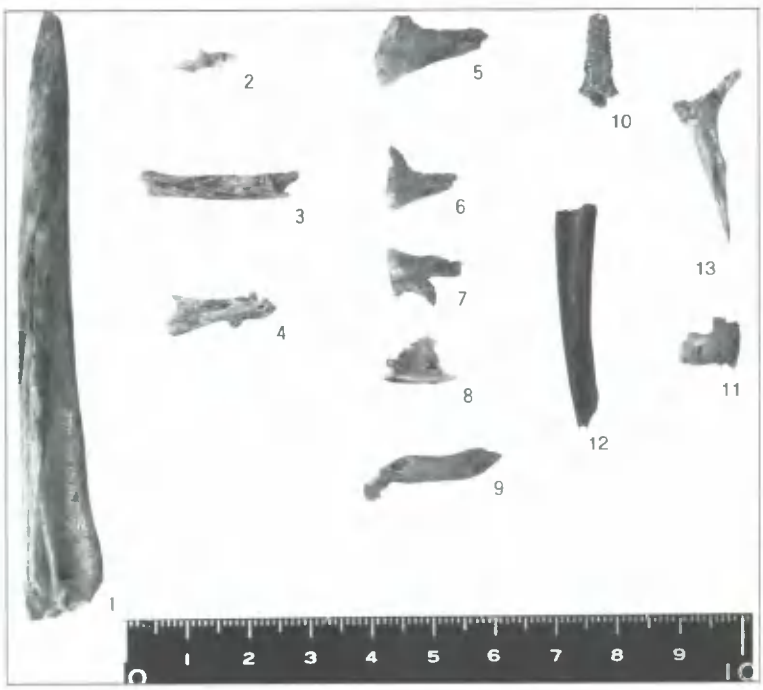
種類	採取位置	r/l	椎肋骨骨 vert rib	烏口骨 cora psd	肩甲骨 scap psd	上腕骨 hum psd	橈骨 rad psd	尺骨 ul psd	中手骨 mc psd	寛骨 pel psd	大腿骨 fe psd	脛骨 tib psd	腓骨 fib psd	距骨 ta	踵骨 ca	中足骨 mt psd	指骨 dig psd	その他
イノシシ	貝層	r						1	1					1				c̲♀、c̄♀、P^2
	(北半)	l							Ⅲ～						1			i_2
〃	〃	r																R/L mct Ⅱ/Ⅴ 焼
	(北半)	l		1*														＊（M_3）
〃	貝層北半	r	1*															＊（P^3～M^2）
	(H−21)	l																中間手根骨
	計	r	1					1	1					1				
		l		1					1						1			
ニホンジカ	貝層	r		1*														鹿角片
	(北半)	l		枝1								1(ep)						＊（dm_3～M_2）
〃	〃	r																角坐骨
		l																角冠部
〃	〃	r																
		l	1*	1(枝)														＊前頭骨+角坐骨（切断痕）
〃	〃	r																
		l		1*														＊（P_2～M_3）
	計	r		1														
		l	1	3														中間手根骨1
イノシシ		r																
		l																M_1
	土壙35	r																
			1															
イノシシ		r				1*												＊ 若獣
		l																

図版 1



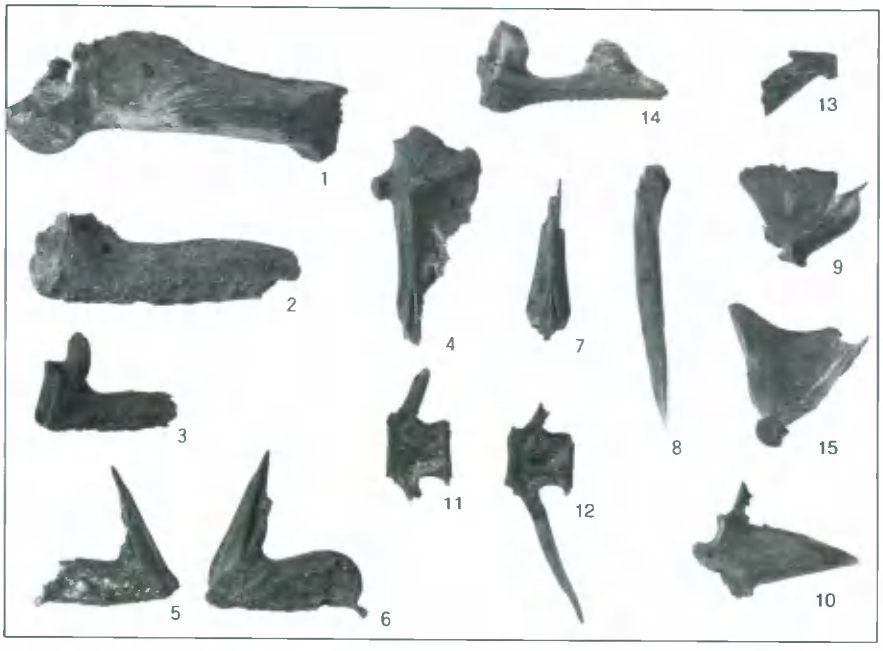
（スケールは別掲と同じ）

1～3　エイ類相体
4　ヒラ左歯骨
5　コイ科左前上顎骨
6　コイ科左歯骨
7　コイ右咽頭骨
8、9　コイ左咽頭骨
10　ナマズ右歯骨
11　キギ右胸鰭棘
12　ウナギ右主上顎骨
13　ハモ類右歯骨
14～16　ハモ類尾椎骨
17　ボラ右主鰓蓋骨
18　ボラ尾椎骨
19　スズキ鋤骨
20　スズキ右前上顎骨
21　スズキ右主上顎骨
22　スズキ右歯骨
23　スズキ左歯骨
24　スズキ右方骨
25　スズキ左主鰓蓋骨
26　スズキ右後側頭骨
27　スズキ臂鰭第２棘
28　ホンニベ腹椎骨



1　ハタ類臂鰭第２棘
2　コチ右主上顎骨
3　コチ左歯骨
4　コチ左方骨
5、6　マアナゴ科左前上顎骨
7　マアナゴ科左歯骨
8　マアナゴ科右角骨
9　マアナゴ科左口蓋骨
10　カワハギ類背鰭棘
11　カワハギ類右前上顎骨
12　カワハギ類腰帯片
13　スズキ左外鼻状骨

図版 2



（スケールは別掲と同じ）

1　マダイ
左主上顎骨

2、3　マダイ
右前上顎骨

4　マダイ
右舌顎骨

5　クロダイ
左前上顎骨

6　クロダイ
右前上顎骨

7　クロダイ臀鰭血管間棘

8　クロダイ臀鰭棘

9　マダイ左方骨

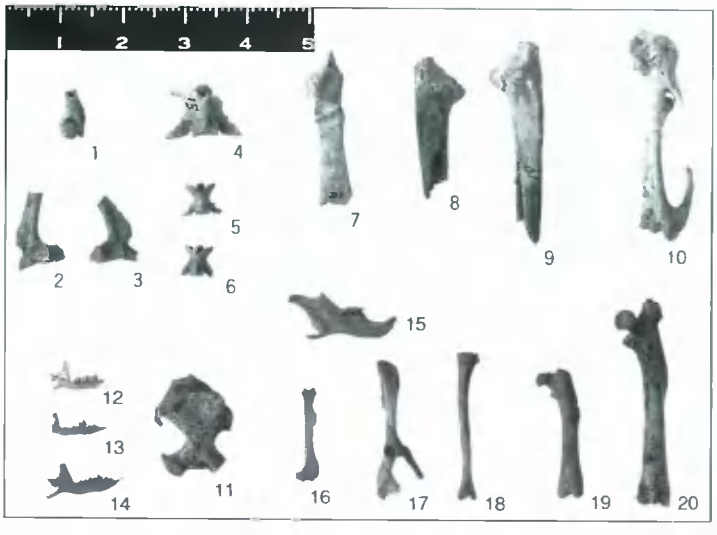
10　マダイ右角骨

11、12　タイ科尾椎骨

13　メバル右歯骨

14　カサゴ類右前上顎骨

15　カサゴ類左方骨



1　カエル類左上腕骨

2　カエル類右寛骨片

3　カエル類左寛骨片

4　ヘビ類椎体

5、6　ヘビ類椎体

7　カモ類左烏口骨

8　カモ類左尺骨

9　カモ類右尺骨

10　キジ右中手骨

11　モグラ類右上顎骨

12　ヒミズ左下顎骨

13、14　ヒミズ左下顎骨

15　アカネズミ左下顎骨

16　アカネズミ左上腕骨

17　アカネズミ右寛骨

18　アカネズミ右腓骨

19　クマネズミ属左大腿骨

20　クマネズミ属右大腿骨

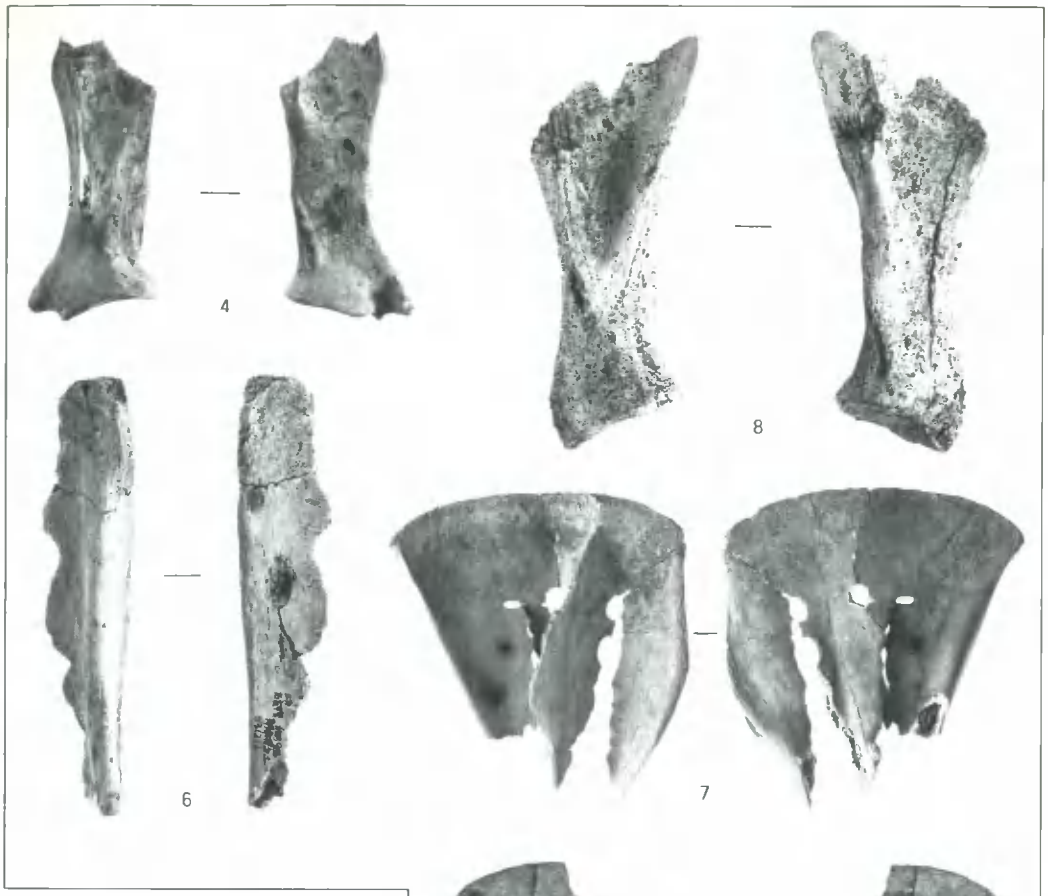
(1/3)

1 a b　イノシシ右上顎骨
2 a b　イノシシ左下顎骨
3　イノシシ左踵骨
4　ニホンジカ左鹿角（鋸による切断痕）
5 a b　ニホンジカ左前頭骨と角座部（鋸による切断痕）
6 a b　ニホンジカ左下顎骨（P$\overline{2}$～M$\overline{3}$）
7 a b　ニホンジカ右下顎骨（P$\overline{2}$～M$\overline{3}$）
8 a b　ニホンジカ右下顎骨（dm$\overline{3}$、$\overline{1}$M$\overline{1}$、$\overline{2}$）
9　ニホンジカ右踵骨

図版 4

1　(No64) ニホンシカ左肩甲骨　　2　(No55) イノシシ右肩甲骨

3　(No34) ニホンシカ左肩甲骨　　5　(No14) ニホンシカ左肩甲骨



4 〔No12〕 ニホンジカ
左肩甲骨

6 〔No6〕 ニホンジカ
左肩甲骨、後縁部分

7 〔上18〕 イノシシ
右肩甲骨

8 〔No37〕 ニホンジカ
左肩甲骨

A 〔無茂A〕 ニホンジカ
肩甲骨

図版 6

加茂Ｂ遺跡貝塚１出土鹿角加工品

加茂Ａ・Ｂ遺跡貝層出土骨鏃

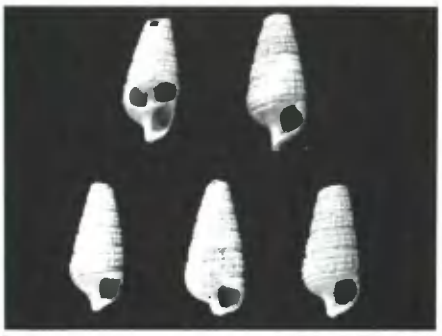
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

1 スガイ　2 ウミニナ　3 ゴマフタマガイ　4 オオタニシ　5 ツメタガイ

6 カワアイ　7 コトヘナタリ　8 イボニシ　9 チリメンカワニナ　10 レイシ

図版 8

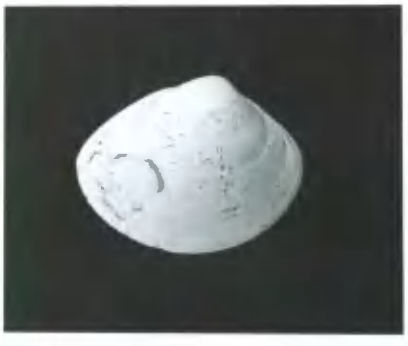
11

14

15

16

12



17

13

18

11 マガキ　12 ヤマトシジミ　13 オキシジミ　14 ウネナシトマヤガイ

15 マツカサガイ　16 サルボウ　17 ハマグリ　18 ハイガイ

1．第2調査区遠景（北から）

2．第2・3調査区遠景（北から）

１．第１調査区調査前状況（北から）

２．第１調査区全景（北から）

1．第1調査区全景（南から）

2．第1調査区東壁土層断面（北西から）

1．第２調査区全景（北から）

2．第３調査区全景（東から）

1．竪穴住居2（南東から）

2．竪穴住居2 床面据え置き壺検出状況（南から）

1．竪穴住居７・８（東から）

2．竪穴住居10（南西から）

1．竪穴住居11（南西から）

2．竪穴住居13（北東から）

1．竪穴住居17・18・19・32（北から）

2．竪穴住居17 埋土状況（東から）

1．竪穴住居21（南から）

2．竪穴住居21 覆土上層遺物堆積状況（東から）

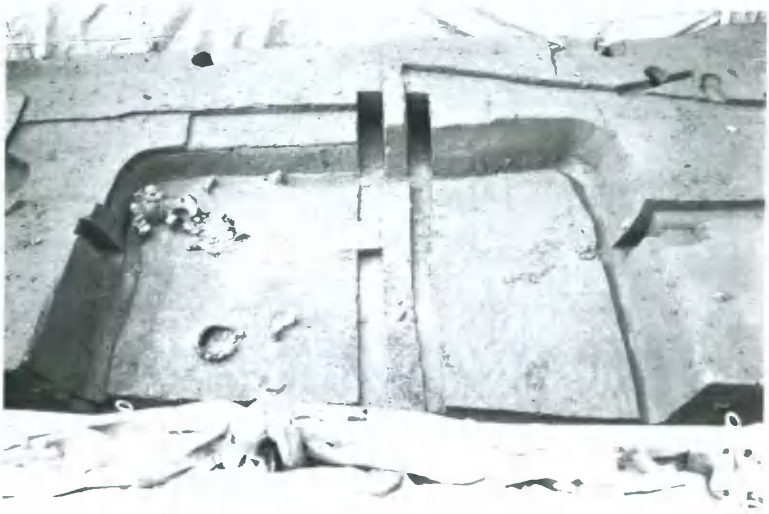
1．竪穴住居21 覆土上層遺物検出状況（北から）

2．竪穴住居21 覆土上層遺物検出状況

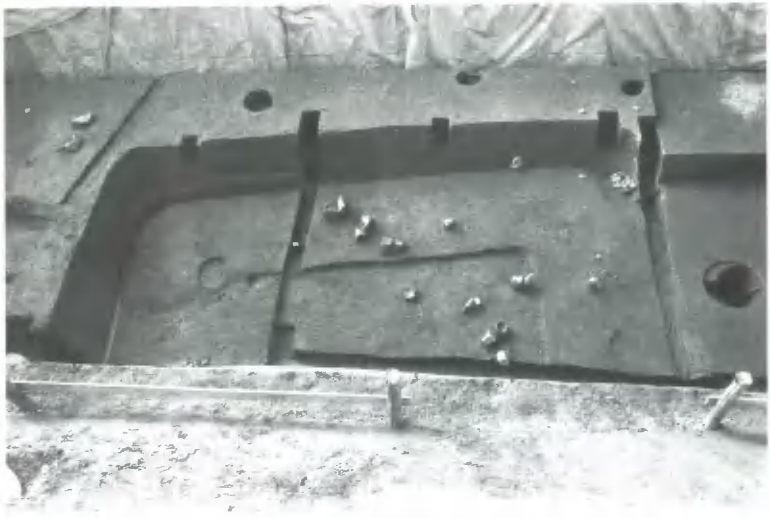
1．竪穴住居21 土層断面（西から）

2．竪穴住居22・23（南から）

1．竪穴住居22・23 土層断面（西から）



2．竪穴住居22（東から）



1．竪穴住居23（東から）

2．竪穴住居24（東から）

1．竪穴住居25・26（東から）

2．竪穴住居25 遺物出土状況（東から）

1．竪穴住居14・29・30・31（南から）

2．竪穴住居14・31（西から）

1．竪穴住居27（南東から）

2．竪穴住居30（南から）

1．竪穴住居30（西から）

2．竪穴住居30 遺物検出状況（北から）

1．竪穴住居31（南西から）

2．竪穴住居32（南西から）

1．竪穴住居33（北西から）

2．竪穴住居33内土壙 遺物検出状況（南から）

1．竪穴住居35 検出状況（北から）

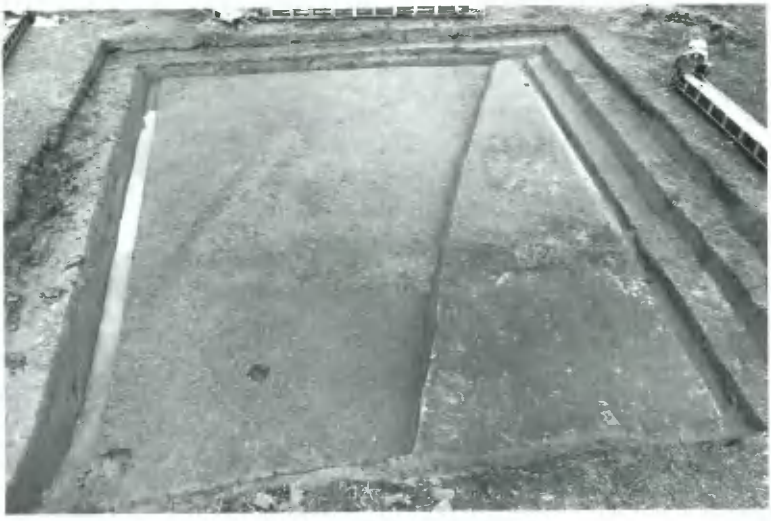
2．貝層 検出状況（南から）

1．土器溜り 検出状況（西から）

2．近世水田 検出状況（南から）

1．近世水田 畦畔検出状況（西から）

2．近世水田 検出状況（南から）



1．近世水田 検出状況（南から）

2．第3調査区土層断面（北から）

1．第1調査区調査風景（北から）

2．第2調査区調査風景（南から）

1．第2調査区調査風景（南西から）

2．第3調査区調査風景（南から）

20

101

189

194

202

出土遺物 1　弥生土器

262

466

467

580

583

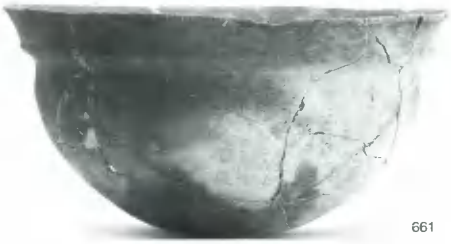
出土遺物② 弥生土器・土師器

622

623

647　　648

出土遺物 3　土師器



661

662

758

808

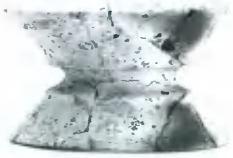
出土遺物4　土師器

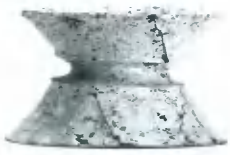
827

845

848

887


919


920

出土遺物5　土師器

918

976

927

929

出土遺物⑥ 土師器

S 1

S 2

S 5

S 4

S 6

S 9

S31

S24

S12

S 8

S33

出土遺物 7　石器・石製品

S25

S34

S27

S29

S26

S21

S28

S32

S39

出土遺物8　石製品

M6

M2

M3

M7

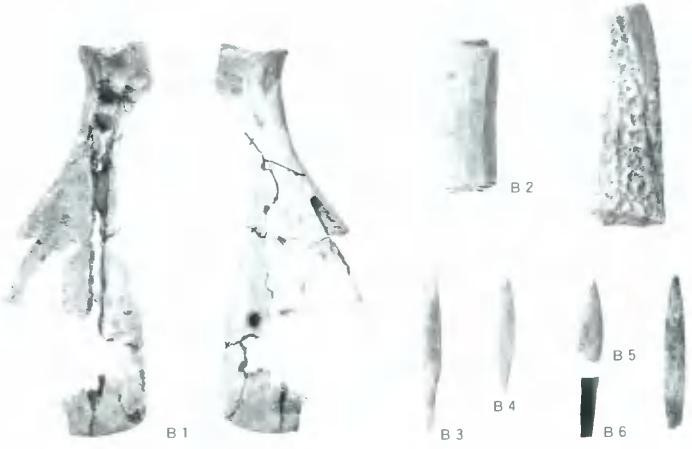
M5

M1

M4

出土遺物9　鉄器・青銅製品

1．竪穴住居23 出土水晶



2．貝層 出土骨角器

1．足守川加茂B遺跡 遠景（南西から）

2．調査前の状況（南から）

１．８Ｂｃ区調査風景（北東から）

２．８Ｂｃ区調査風景（南東から）

1．土壙1　断面（東から）

2．土壙2　貝殻検出状況（北西から）

1．竪穴住居６　遺物出土状況（南から）

2．竪穴住居７　炭化材検出状況（東から）

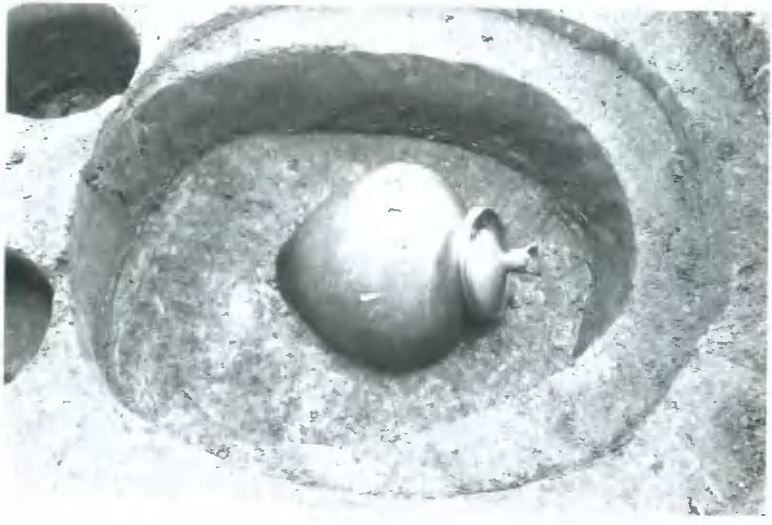
1．竪穴住居７・８・９（東から）

2．竪穴住居12（南から）

1．竪穴住居13 遺物出土状況（北から）

2．竪穴住居13（北から）

1．竪穴住居16（南西から）

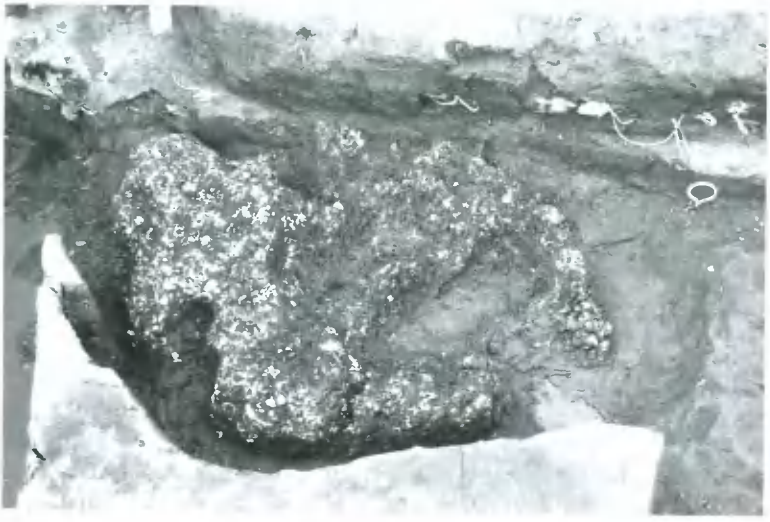


2．土器棺1（北から）

1．土壙墓1　頭骨近景（東から）

2．土壙墓2　人骨検出状況（西から）

1．土壙6　遺物出土状況（南西から）



2．土壙14　貝殻出土状況（南東から）

1．土壙33 遺物出土状況（西から）

2．土壙41（東から）

1．土壙43（東から）

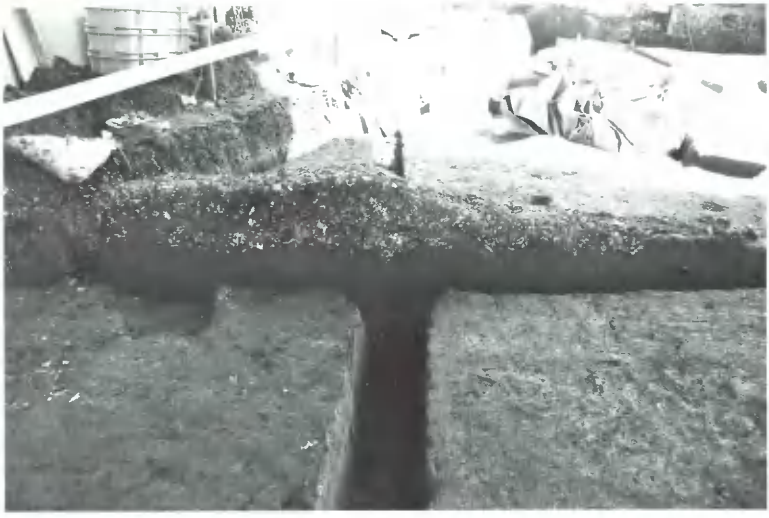
2．土壙50 遺物出土状況（南東から）

1．貝塚1（西から）

2．貝塚1（南東から）

1．貝塚1　遺物出土状況（北西から）

2．貝塚1 卜骨（B 3）出土状況（北西から）



1．貝塚1　東西断面（北から）

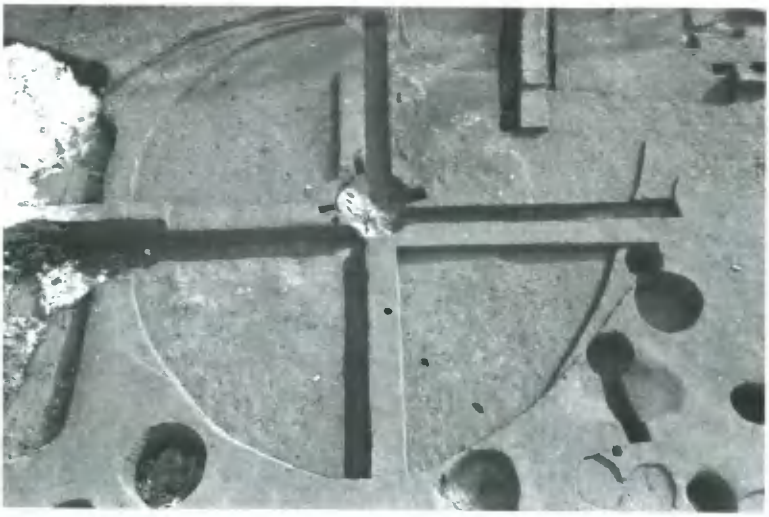
2．貝塚1　南北断面北半（西から）

1．貝塚1　南北断面南半（西から）

2．貝塚1　南北断面南半土器検出状況（西から）

1．竪穴住居18（西から）

2．竪穴住居19 遺物出土状況（北東から）



1．竪穴住居23（北から）

2．竪穴住居25（南東から）

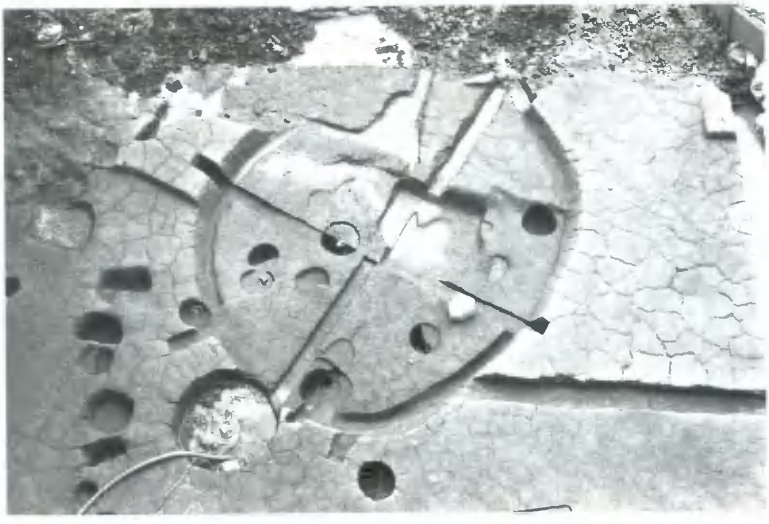
1．竪穴住居27（西から）

2．竪穴住居28（南から）

1．竪穴住居30・31（南東から）

2．竪穴住居35（北西から）

1．竪穴住居36（北から）

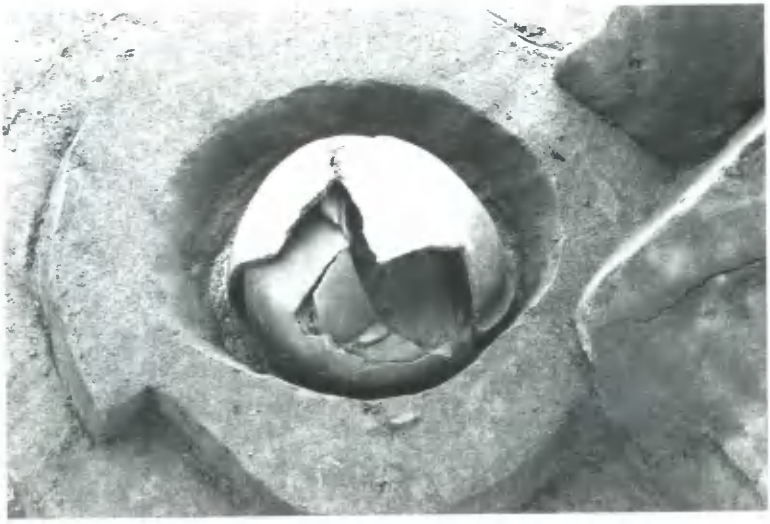


2．竪穴住居38（北西から）

1．竪穴住居37A　床面検出状況（北から）

2．竪穴住居37（北から）

1．井戸1　遺物出土状況（南から）



2．土器棺2（南東から）

1．土壙55（東から）

2．土壙57 遺物出土状況（北東から）

1．土壙58 遺物出土状況（北東から）

2．土壙59 遺物出土状況（北西から）

1．土壙64 遺物出土状況（東から）

2．土壙65 遺物出土状況（北西から）

1．土壙67（東から）

2．土壙68（南東から）

1．土壙69（南東から）

2．土壙70（南から）

1．土壙71南半 遺物出土状況（北から）

2．土壙74 遺物出土状況（北西から）

1．土壙84（北から）

2．土壙84 鏡（M28）出土状況（北東から）

1．土壙90 貝殻検出状況（北東から）

2．土壙109 遺物出土状況（東から）

1．土壙126 遺物出土状況（南から）

2．土器溜り1 遺物出土状況（北東から）

1．竪穴住居46（西から）

2．竪穴住居53 東半（南西から）

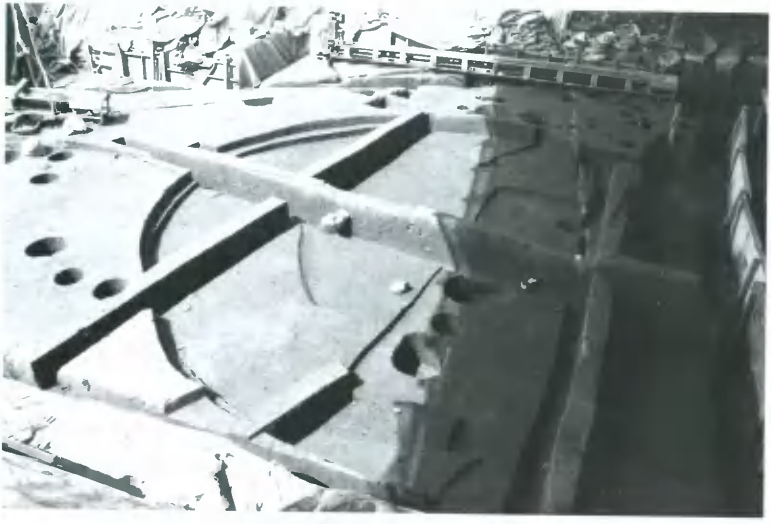
1．竪穴住居50・51（東から）

2．竪穴住居50方形土壙 遺物出土状況（北から）

1．竪穴住居60（南東から）

2．竪穴住居68 床面検出状況（北東から）

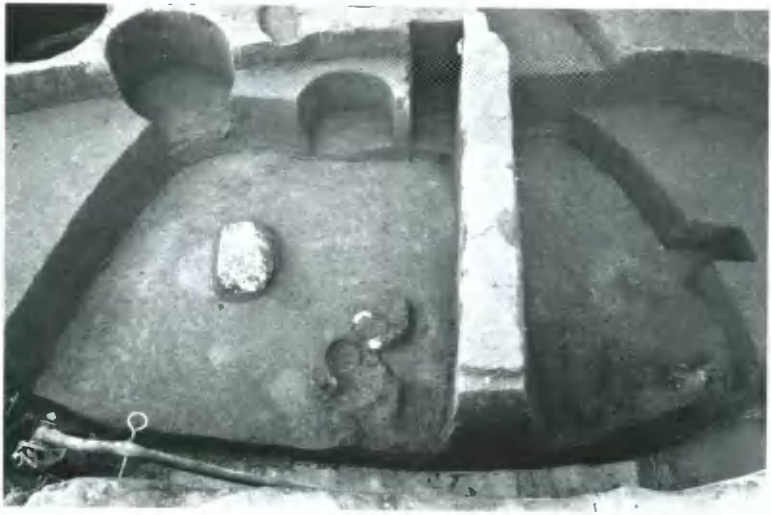
1．竪穴住居70 床面検出状況（南西から）



2．竪穴住居76 床面検出状況（北東から）

1．竪穴住居78（北東から）

2．竪穴住居77・78・79（北東から）

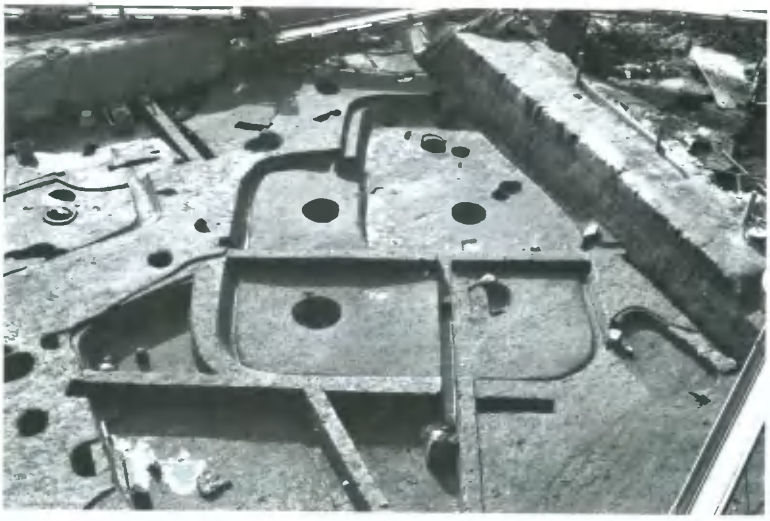


1．竪穴住居86A（南から）

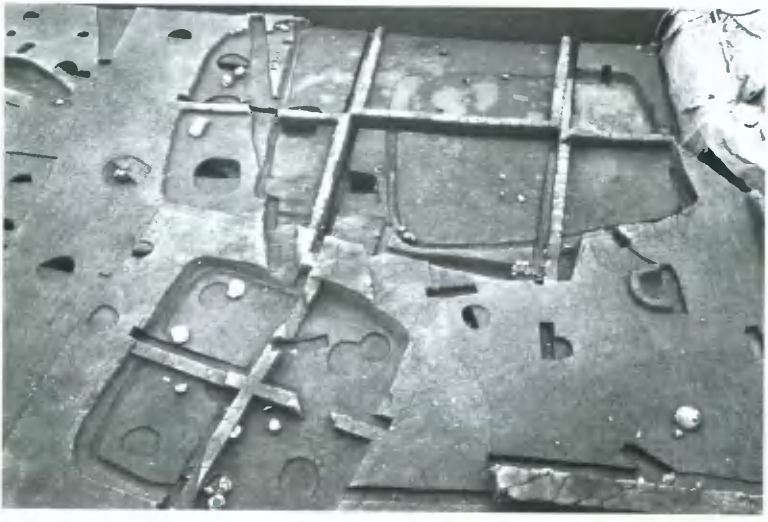
2．竪穴住居86B（南から）

1．竪穴住居89（東から）

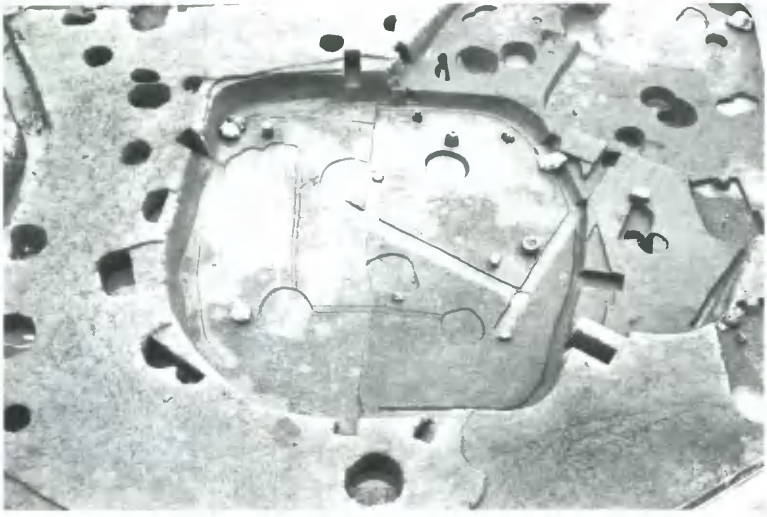
2．竪穴住居89 鏡(M60)出土状況（南東から）



1．竪穴住居91・92（北東から）



2．竪穴住居94～100（北から）



1．竪穴住居93 床面検出状況（北から）

2．竪穴住居93（北から）

1．竪穴住居101（西から）

2．竪穴住居102（北東から）

1．竪穴住居103（北東から）

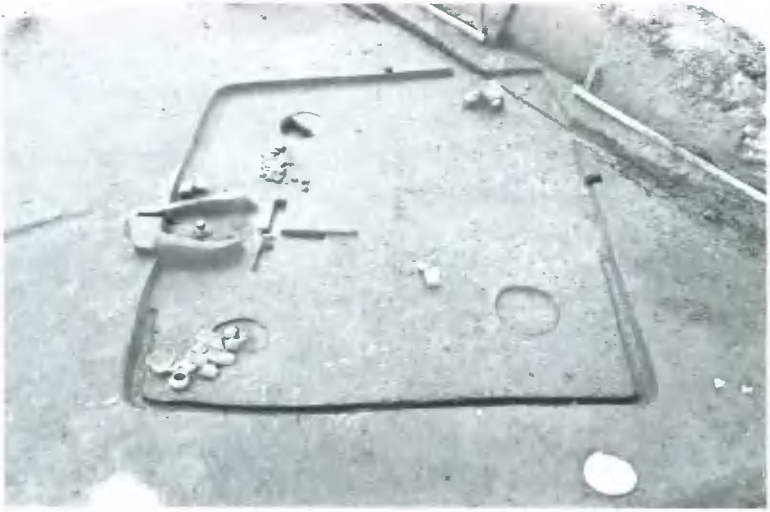
2．竪穴住居107（西から）

1．土器溜り2　遺物出土状況（南東から）

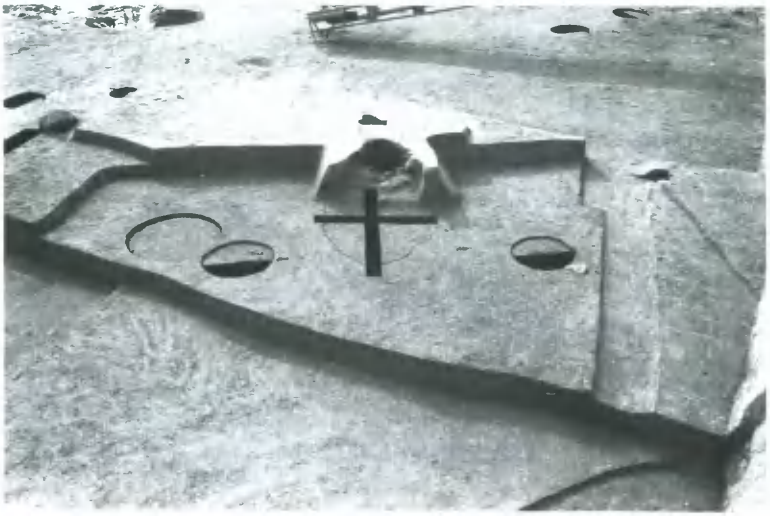
2．斜面堆積　遺物出土状況1)（南から）

1．斜面堆積 遺物出土状況(2)（西から）

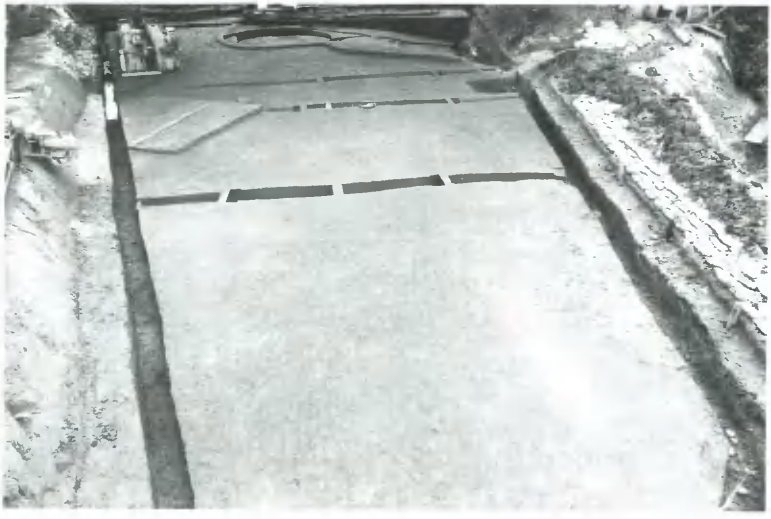
2．斜面堆積 遺物出土状況(3)（南東から）



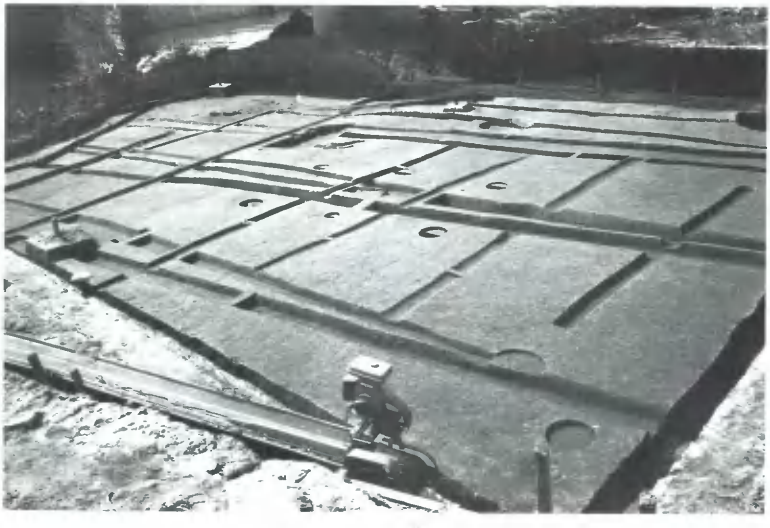
1．竪穴住居109 床面検出状況（南から）



2．竪穴住居111（北東から）



1．10C～9C区 溝群（北から）



2．9C区 溝群（南東から）

357

1537

1538

230

1596

出土遺物1　弥生土器

16

26

1433

232

1067

547

出土遺物2　弥生土器

1540

1051

242

1563

1570

1561

1452

1565

出土遺物 3　弥生土器

28

246

243

244

出土遺物4　弥生土器

1400

187

1066

1551

1710

1548

969

1212

970

出土遺物5　弥生土器

2505

2504

2514

2292

出土遺物6　土師器

2553

2220

2250

2294

2526

2202

2293

出土遺物7　土師器

2251

2257

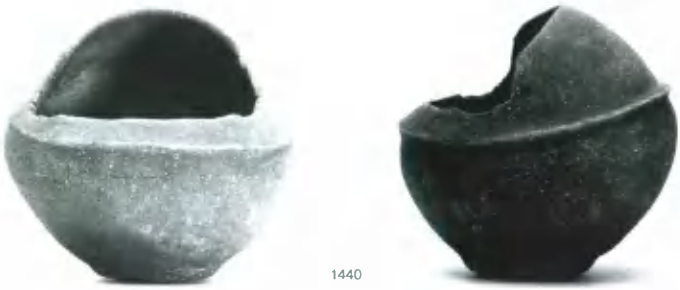
2573

2230

2530

2580

出土遺物 8　土師器



1440

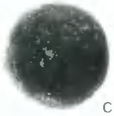
2596

315

出土遺物9　手焙形土器

C 3

C26


C51

C39

C23

C45

C43

C50

C49

C41

C54

出土遺物10　土製品

C12

C14

C13

C25

C16

C15

C46

S141

S135

S95

S95

S96

S102

S103

G1

G3

G2

G4

出土遺物11　分銅形土製品・玉類

S 7

S 27

S 24

S 9

S 29

S 2

S 106

S 28

S 46

S 44

S 43

S 42

S 8

S 41

S 40

S 47

出土遺物12　打製石器

S71

S51

S32

S135

S130

S109

S140

S134

S84

S74

出土遺物13　石製品

S48

S56

S55

S108

S54

S57

S107

S58

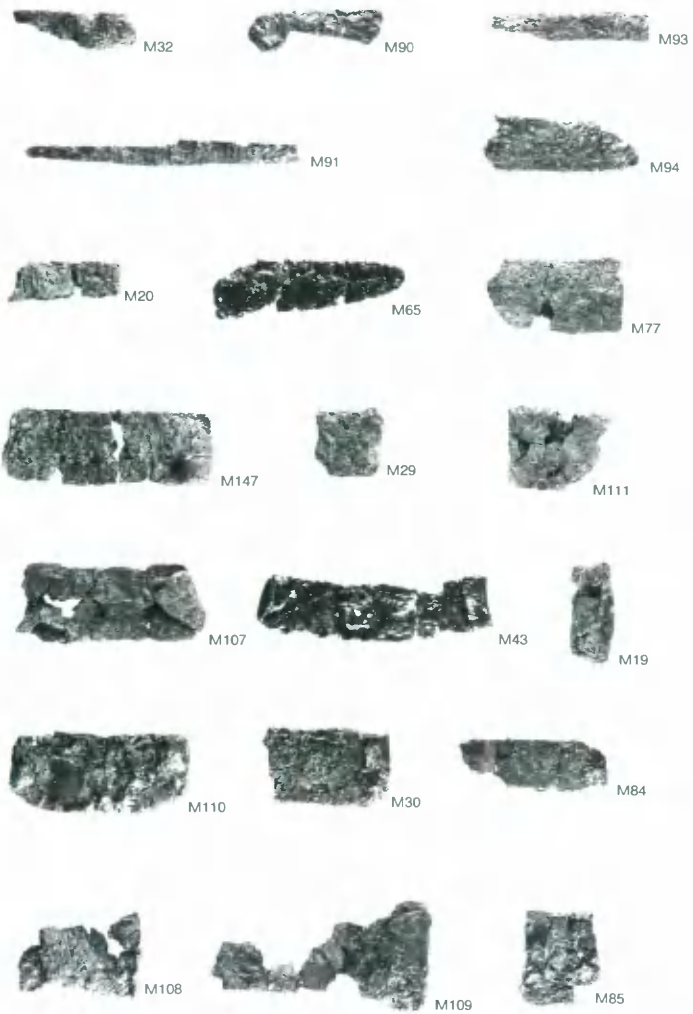
S14

S79

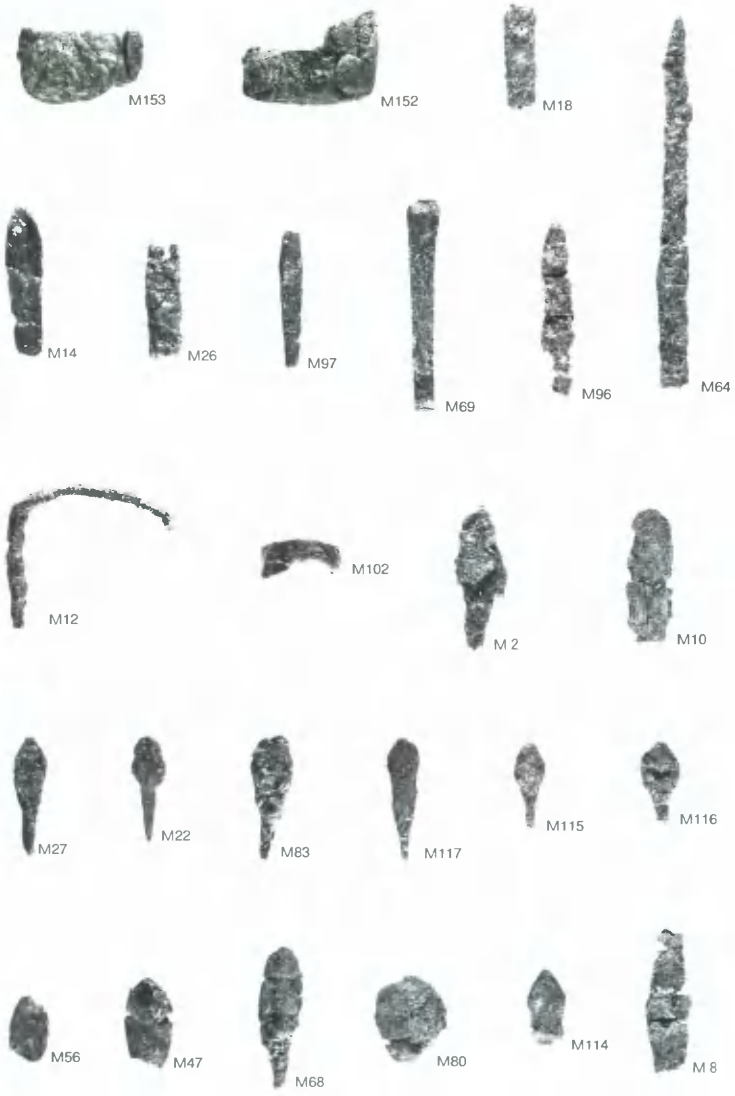
S13

S101

出土遺物14　磨製石器・石製品


M32
M90
M93
M91
M94
M20
M65
M77
M147
M29
M111
M107
M43
M19
M110
M30
M84
M108
M109
M85

出土遺物15　鉄器


M153
M152
M18
M14
M26
M97
M69
M96
M64
M12
M102
M2
M10
M27
M22
M83
M117
M115
M116
M56
M47
M68
M80
M114
M8

出土遺物16　鉄器

M149

M150

M151

M33

M120

M121

M79

M51

M106

M72

M124

M66

M16

M131

M135

M138

M41

M34

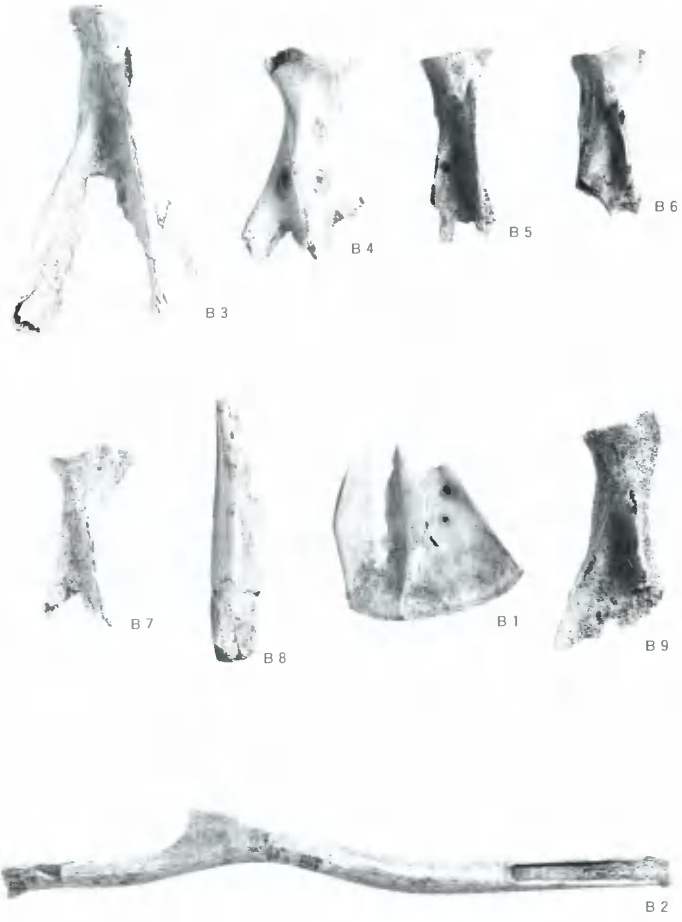
M45

M35

M104

M39

出土遺物17　鉄器



出土遺物18　卜骨・角器

出土遺物19　卜骨・角器

1．遺跡遠景（南から）昭和56年撮影

2．遺跡遠景（北西から）昭和61年撮影

1．８Ａ区調査開始（北西から）

2．３Ａ区全景（北西から）

1．3B区全景（南東から）

2．5B区全景（南東から）

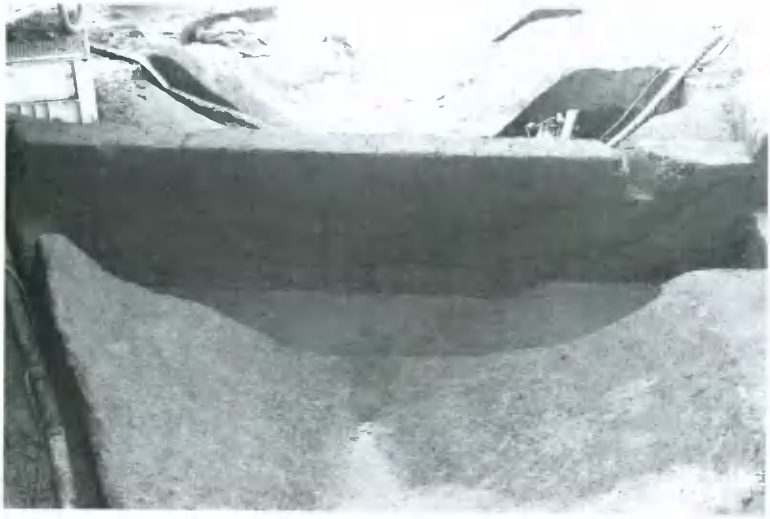
1．７Ｂ区全景（南東から）

2．８Ａ区全景（南東から）

1．竪穴住居１（北東から）

2．竪穴住居２・３（南西から）

1．掘立柱建物１・２（南東から）



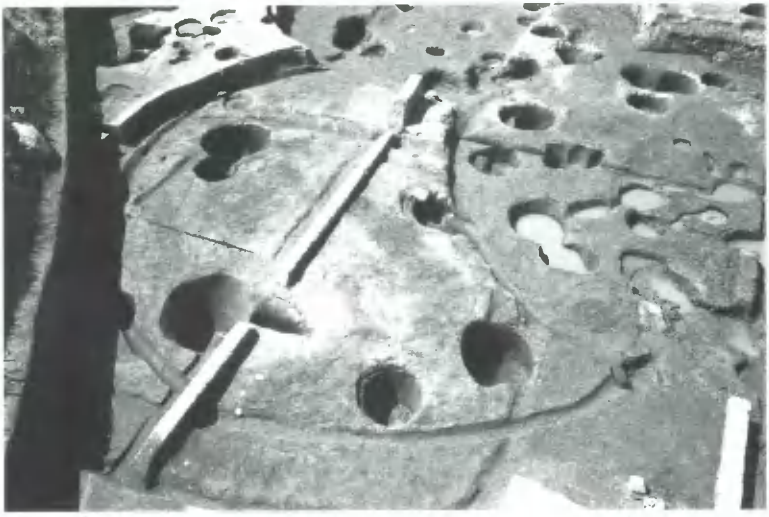
2．溝１（西から）

1．竪穴住居６（南から）

2．竪穴住居７・左上 竪穴住居30・右 竪穴住居56（南東から）

1．竪穴住居９　南部床面検出状況（南西から）

2．竪穴住居10（西から）



1．竪穴住居15（南から）

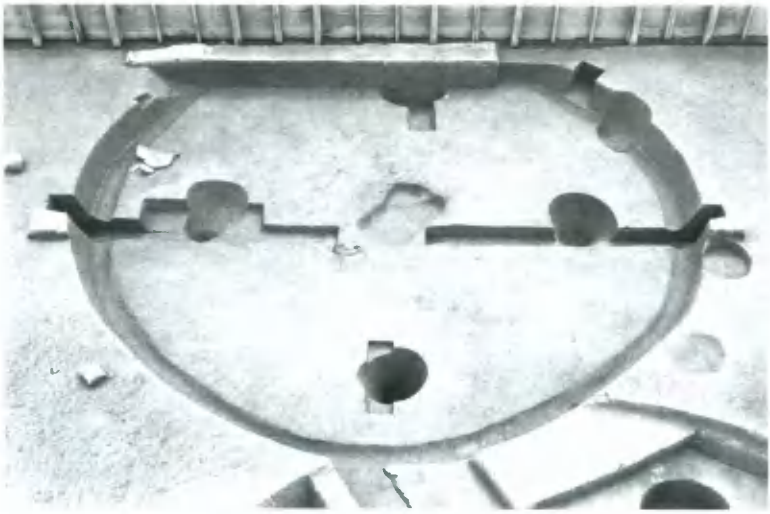
2．竪穴住居15 柱穴遺物出土状況（南西から）

1．竪穴住居19（西から）

2．竪穴住居21（南から）

1．竪穴住居22 遺物出土状況（東から）

2．竪穴住居22（東から）



1．竪穴住居23（北東から）

2．竪穴住居26（北東から）

1．土壙6（南西から）

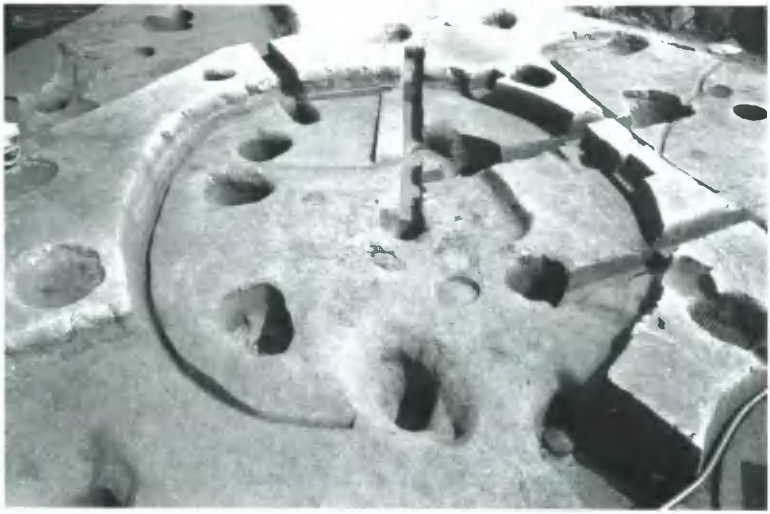
2．土壙9（南から）

1．土壙14（北東から）

2．9B区 土壙群（東から）

1．土壙48（西から）

2．土壙51（北西から）



1．竪穴住居30（南から）

2．竪穴住居32（北東から）

1．竪穴住居37 上層遺物堆積状況（南西から）

2．竪穴住居39（南から）

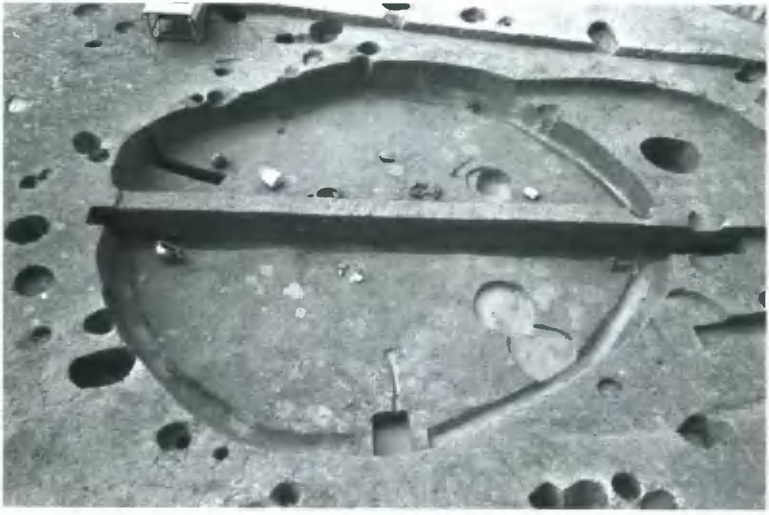
1．竪穴住居40（南から）

2．竪穴住居44（東から）

1．竪穴住居46～48（北西から）

2．竪穴住居48 小銅鐸出土状況（北から）

1．竪穴住居49（東から）



2．竪穴住居50（南東から）

1．土器棺1（西から）

2．土器棺2（北西から）

1．土壙59（南東から）

2．土壙62（南から）

1．土壙72 遺物出土状況（南東から）

2．土壙72 堆積状況（南東から）

1．土壙75（北から）

2．土壙80（東から）

1．土壙81（北西から）

2．土壙87（南西から）

1．土壙89（南から）

2．土壙90（北東から）

1．竪穴住居51（南から）

2．竪穴住居53（西から）

1．竪穴住居54（北西から）

2．竪穴住居55（南から）

1．竪穴住居57（東から）

2．竪穴住居57 床面遺物出土状況（南東から）

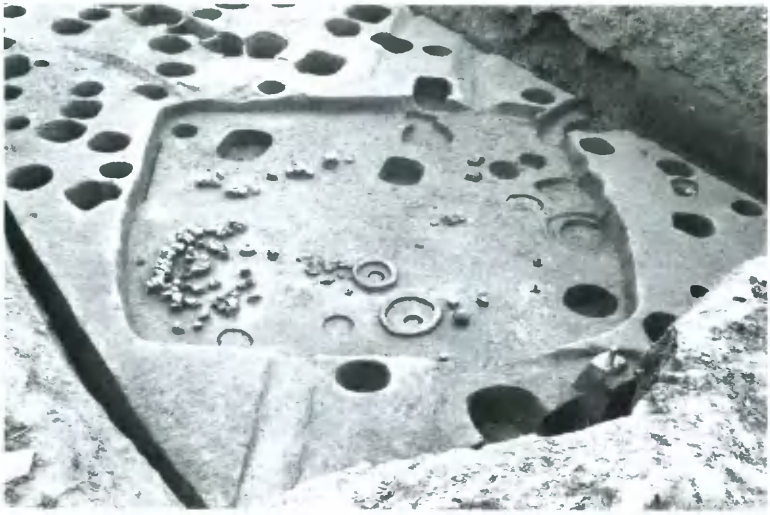
1．竪穴住居58（南東から）

2．竪穴住居60（北東から）

1．竪穴住居62 遺物堆積状況（東から）

2．竪穴住居62（西から）

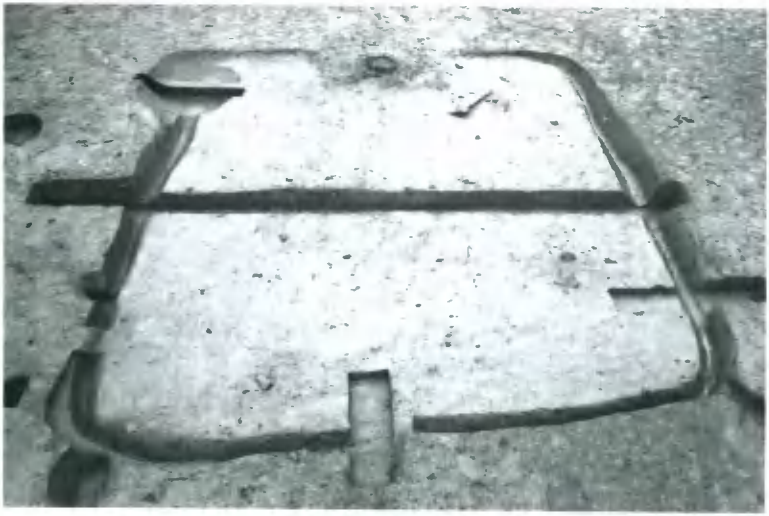
1．竪穴住居63（東から）



2．竪穴住居66（北から）

1．土壙99（西から）

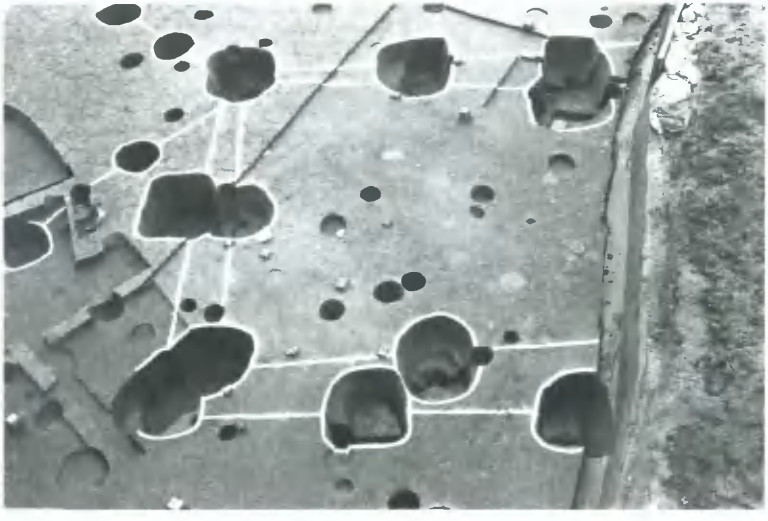
2．土壙105（北西から）



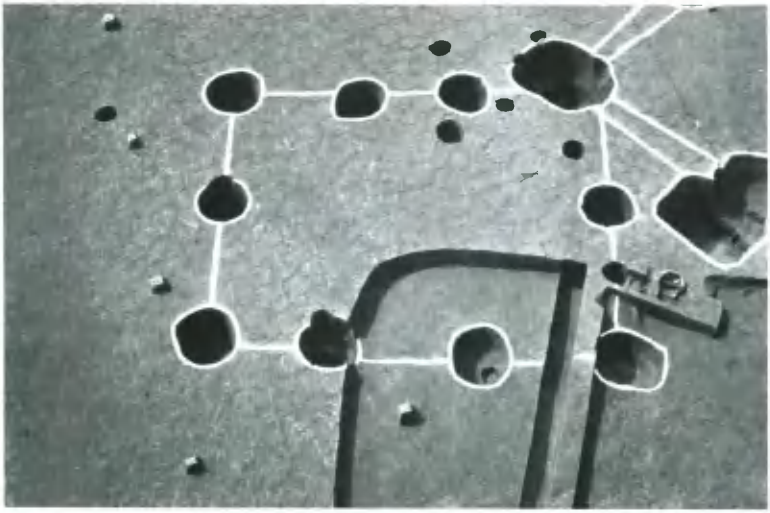
1．竪穴住居69（北東から）

2．竪穴住居76（南から）

1．掘立柱建物４～６ および溝４（南東から）

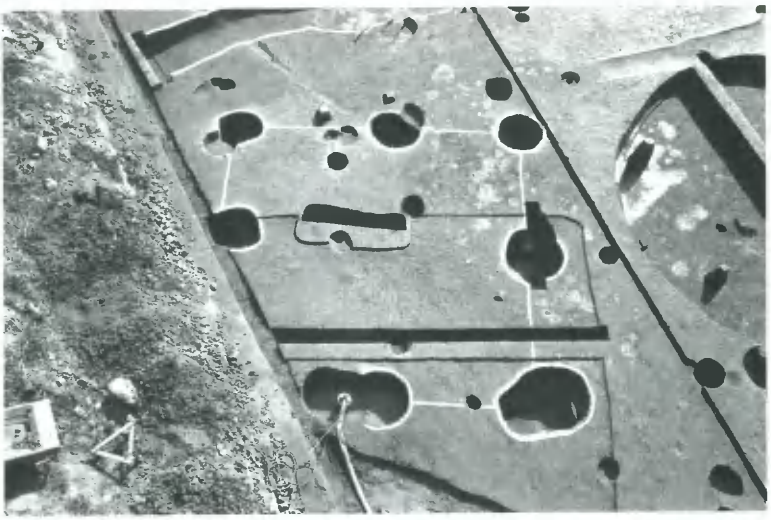


2．掘立柱建物４・５（東から）

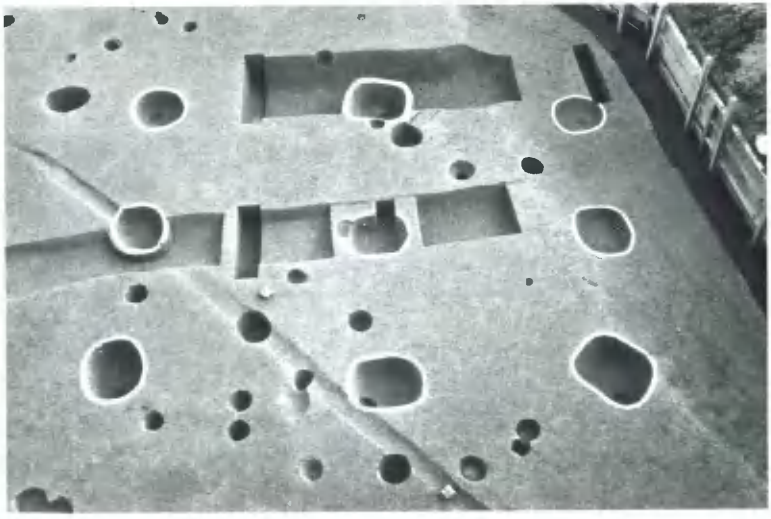


1．掘立柱建物６（南東から）

2．掘立柱建物８・９ および溝５・６（北東から）



1．掘立柱建物８（北東から）



2．掘立柱建物９（北西から）

1．土壙109（南西から）

2．溝2（北から）

1．土壙墓５（南から）

2．土壙墓６（南東から）

1．土壙113（西から）

2．土壙115（東から）

1．土壙120・121（西から）

2．溝9（北東から）

1．６Ｂ区中世溝群（東から）

2．溝29・30（南から）

1．４Ｂ区住居群調査風景（南東から）

2．４Ｂ区竪穴住居62 調査風景（北西から）

142

227

251

257

296

竪穴住居15・土壙6・土壙9・土壙10・土壙17 出土遺物

279

332

376

378

382

381

383

土壙14・土壙27・土壙33 出土遺物

403

416

481

492

493

482

483

484

487

488

491

土壙35・土壙38・竪穴住居301　出土遺物

497

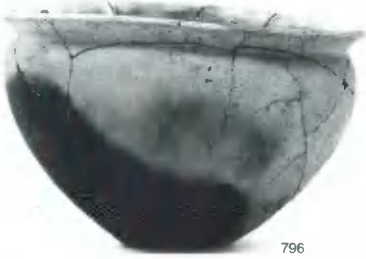
499

778

777

781

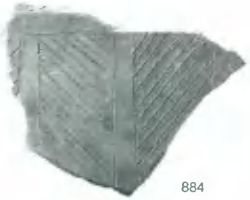
795

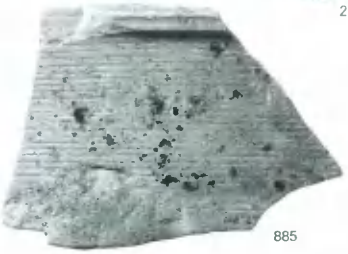

796

竪穴住居302・竪穴住居48・土器棺1　出土遺物

883

2 B包含層

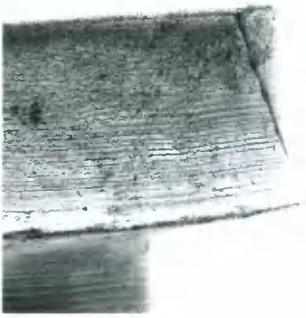

884


885

886

表採

888



土壙721 出土遺物

889

892

891

914

土壙72② 出土遺物

917

919

921

926

929

932

土壙723 出土遺物

933

934

940

937

944

945

土壙72-4　出土遺物

948

949

952

953

954

958

土壙725　出土遺物

962

963

965

968

969

971

972

土壙726　出土遺物

977

978

979

981

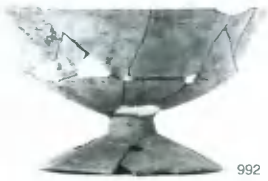
982

984

988

990

989


992

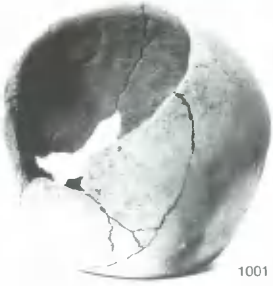
993

994

996

土壙727　出土遺物

1000


1001

1004

1010

1012

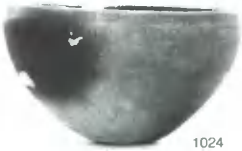
1006

1009

1011

1013

1015


1024

1028

土壙728 出土遺物

1040

1044

1048

1051

1052

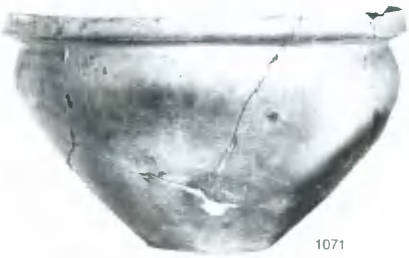
1056

1045

1066

1059

1063


1071

土壙729　出土遺物

1087

1103

1131

1118

1157

1166

1170

1176

1162

1160

土壙73・土壙76・土壙77・土壙80・土壙89・土壙91 出土遺物

1282

1290

1298

1316

1283

1284

1285

1302

竪穴住居55 出土遺物

1505

1506

1507

1512

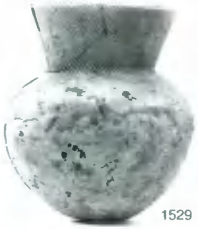
1526

1527

1518

竪穴住居上層1　出土遺物

1528


1529

1530

1541

1542

1545

1550

1553

1554

1558

1561

竪穴住居上層2 出土遺物

1568

1569

1570

1574

1577

1578

1579

竪穴住居上層③ 出土遺物

1580

1587

1589

1592

1594

1600

1605

1640

1642

1646

竪穴住居上層4　出土遺物

1606

1610

1626

1629

1655

1658

1660

1663

竪穴住居上層5　出土遺物

1668

1669

1673

1677

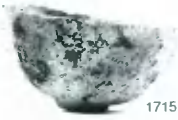
1682

1691

1710

1718

1708


1715

1719

1702

1716

1721

竪穴住居上層⑥ 出土遺物

1724

1736

1737

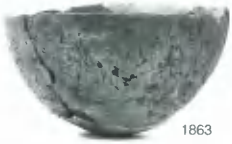
1729

1739

1741

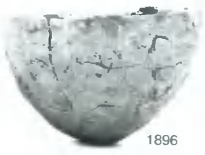
1731

1743


1863

1877

1895


1896

竪穴住居上層7・土壙96・土壙100・土壙104 出土遺物

1959

1982

1993

1990

1994

竪穴住居70・竪穴住居72・溝2　出土遺物

S30

S85

S82

S17

S74

S6

S56

S37

S39

S89

S10

S11

石器 1

S16

S15

S95

S160

S96

S99

S100

S101

S13

S14

S103

S105

S104

S109

S107

S44

S45

S97

石器②

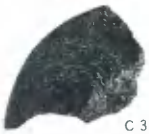
S 123

S 155

S 154

S 148

S 156


C 3

C 12

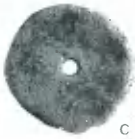
1248

G 2

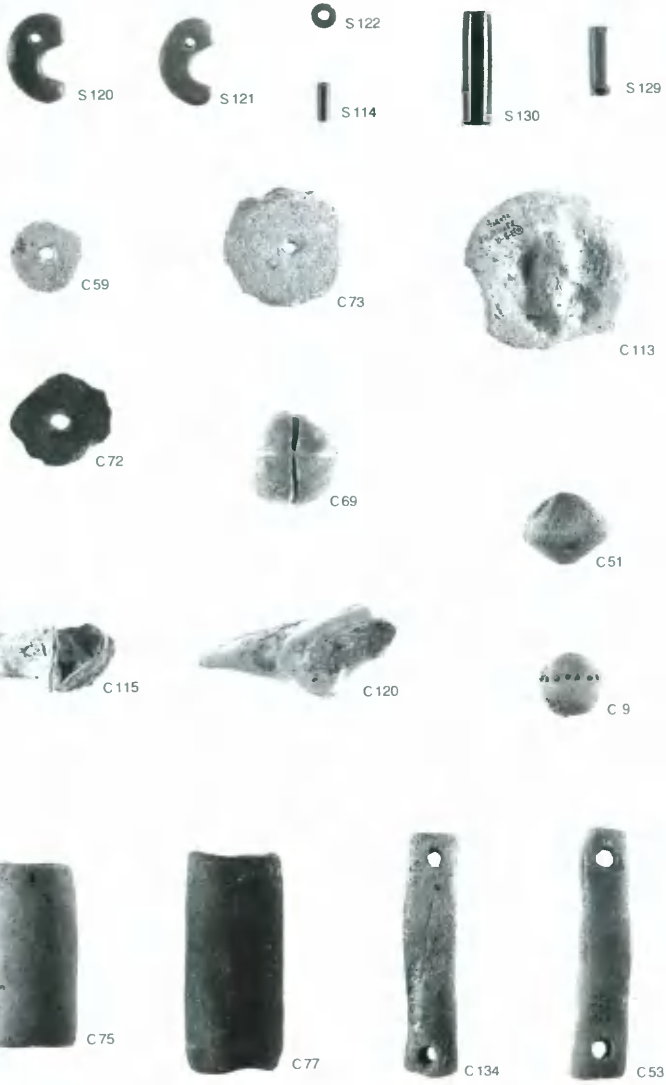
G 3

C 118

C 10


C 2

砥石・土製品①・玉類①


S 120
S 121
S 122
S 114
S 130
S 129
C 59
C 73
C 113
C 72
C 69
C 51
C 115
C 120
C 9
C 75
C 77
C 134
C 53

玉類2・土製品2

2019

C137

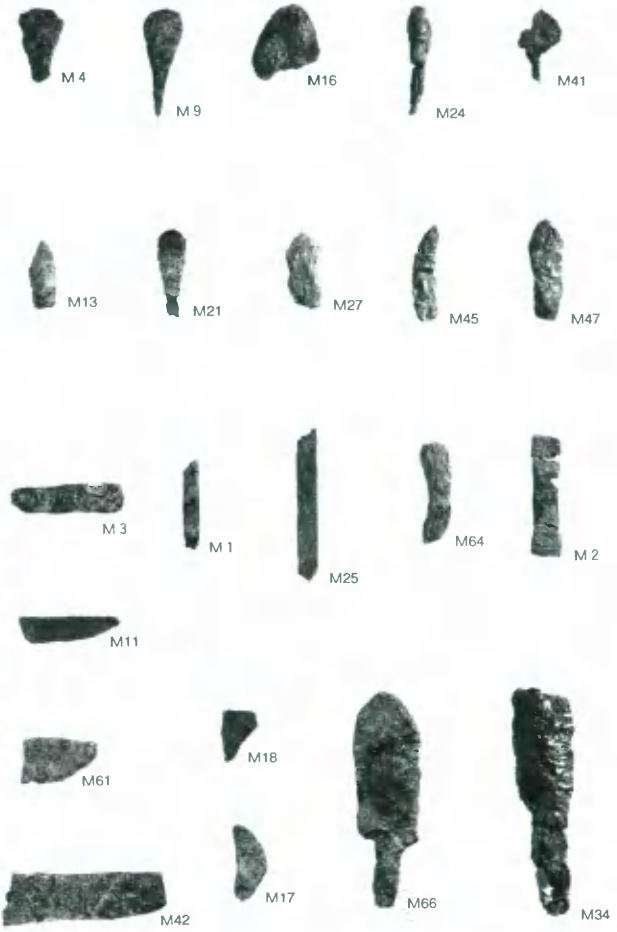
2021

S151

C162

S152

瓦・硯


M 4
M 9
M16
M24
M41
M13
M21
M27
M45
M47
M 3
M 1
M25
M64
M 2
M11
M61
M18
M17
M66
M34
M42

金属器1

M 6

M19

M36

M49

M50

M15

M48

M65

M77

M 7

M38

M79

M67

M58

M39

M78

M59

M68

金属器 2

M93

M94

M95

M96

M97

M83

M81

M88

M102

M80

M105

M104

M99

M106

報告書抄録

ふりがな	あしもりがわかもえいいせき　あしもりがわかもびいいせき　あしもりがわやべみなみむかいいせき
書名	足守川加茂A遺跡　足守川加茂B遺跡　足守川矢部南向遺跡
副書名	足守川河川改修工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	94
編著者名	河本　清　松本和男　山磨康平　江見正己　島崎　東　光永真一
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－01　岡山県岡山市西花尻1325－3
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2－4－6
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
足守川加茂A遺跡	岡山県岡山市加茂	201		34度 40分 05秒	133度 49分 25秒	198201～198203	850	足守川河川改修に伴う事前調査
足守川加茂B遺跡	岡山県岡山市加茂	201		34度 39分 55秒	133度 50分 30秒	198208～198508	2,800	足守川河川改修に伴う事前調査
足守川 矢部南向遺跡	岡山県倉敷市 矢部南向	202	20－833	34度 39分 51秒	133度 50分 33秒	198002～198005 198604～198812	3,700	足守川河川改修に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
足守川加茂A遺跡	集落	弥生 古墳 中・近世	竪穴住居　35軒 土壙　39基 柱穴　多数 溝　7本 水田　1面	弥生土器・土師器 須恵器・鉄器 石器・石製品 玉類・骨角器	
足守川加茂B遺跡	集落 貝塚 墓	弥生 古墳 古代 中世	竪穴住居　111軒 掘立柱建物　1軒 井戸　1基 土壙墓　2基 土壙　114基 貝塚　1基 柱穴　多数 溝　多数	弥生土器・土師器 須恵器・石器・石製品 青銅製品・鉄器 玉類・骨角器・ガラス滓 炭化米	
足守川 矢部南向遺跡	集落 墓	弥生 古墳 古代 中世 近世	竪穴住居　74軒 掘立柱建物　18軒 井戸　1基 土壙墓　2基 土壙　201基 柱穴　2,000本 溝　51本	弥生土器・土師器 須恵器・石器・石製品 青銅製品・鉄器 玉類・骨角器・ガラス滓 炭化米	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査

足守川加茂A遺跡　足守川加茂B遺跡　足守川矢部南向遺跡

（表・付載・写真図版）

１９９５年３月20日 印刷
１９９５年３月31日 発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　岡山県教育委員会
印刷　旭総合印刷株式会社